
INVISIBLE - インヴィジブル -

Lizreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INVISIBLE — インヴィジブル —

【Nコード】

N8234J

【作者名】

Lizreel

【あらすじ】

西暦二〇〇七年、陽春。現代をひっそりと生きる軍神が、日本の中国地方の山村に配属される。新居は神社ではなくプレハブの社務所。村人に正体を暴かれ翻弄された挙句、気が付けば小学校教師まで引き受ける羽目になり、土地神として慕われることに。やがて彼は、ある不登校小学生との出会いによって、隔絶された山村に秘められた謎と、世界規模で進行してゆく陰謀の存在に気付く。

先の大戦において人々の生命を剥奪し、人に負い目を持つ軍神が、過去の代償として自らの存在と生命を賭し人々を守る為に立ち上が

る。

自然科学と人生の岐路に立つ全ての人々に捧ぐ、人類、文明、科学、生命への讃歌。科学系世界終末阻止モノ。神々と人々と地球の行く末を描く群像劇です。

登場人物紹介（初期設定）

●登場人物紹介です●

特設ページを作りましたが、携帯から見えにくいので改めて書きました。

初期設定です。はじめての方は読み飛ばしていただいて結構です。
 どんどんステータスが変わってゆきますのでご注意ください。

■藤堂 恒 (とうどう こう)

不眠症の天才不登校小学生

【年齡】
10歲

【性別】
男性

【毛髮／瞳色／身長】濃藍媚茶・藍媚茶・158cm

【生物種】人間（？）

【所属】
小学校5年生

本編の主人公。風岳村の小学生。村の子供たちのリーダー的存在。図書館に閉じ込められる悪夢のせいで不眠症となり、不登校。母親は原因不明の難病で隣村に長期入院中。IQは203。写真記憶を可能とし、数千冊の書籍を暗記する。身体能力も驚異的。性格は子供ながらに冷静で理知的。感情を表に出さない。根はやさしいが、誰かを庇って人を欺くこともしばしば。仲間の為にはずすんで濡れ衣を着るので、子供たちの犯した悪事は大抵彼の仕業ということになっている。村人からの評判はすこぶる悪い。

【生物階での資格】 教員免許（小学校・中学校）、理学修士、理学博士

小学校教師。恒のクラスの担任。不登校児の恒をなんとか学校に登校させようと躍起になっている。恒に関する誹謗中傷が絶えないことに、心をいためている。恒を救えないことを不甲斐なく感じ、辞表を提出しようとしたこともあった。学生時代は事象の地平に関する物理学的研究をしていた。理系教科を担当。性格は生真面目で思いやりがある。独身、彼氏なし。趣味は天体観測。村人や保護者の間に多くのファンを持つ。

— — — — —
— — — — —

■豊迫 巧 （とよさこ たくみ）
運動バカ一代

【年齢】 11歳

【性別】 男性

【毛髪／瞳色／身長】 黒・黒・157 cm

【生物種】 人間

【所属】 小学校5年生

恒の幼馴染みで親友、一番の理解者。皆勤賞を目指して登校をしており、ソフトボール部のキャプテンとして部活動にも励んでいる。スポーツ万能だが勉強はあまり得意ではない。主に連絡帳や課題を持って帰っては恒に渡していた。登校してもしないのに大抵のことは何でもできる恒に憧れる反面、彼の孤独と苦痛をよく理解している。

— — — — —
— — — — —

■石沢 朱音 （いしざわ あかね）

恒の幼馴染み

— — — — —
— — — — —

■ 藤堂 志帆梨 (とうどう しほり)

原因不明の難病に冒された悲劇の母親

【年齢】 31歳

【性別】 女性

【毛髪／瞳色／身長】 焦げ茶・焦げ茶・160cm

【生物種】 人間

【所属】 なし

【生物階での資格】 調理師

恒の母親。男性経験のないまま20歳頃に突然、妊娠の兆候が現われ、処女懐妊を果たす。もともと母親はなく父親にも勘当される。妊娠をさせられた相手の顔も名前もわからないという悲劇の母親。恒を出産し、その直後から10年にもわたり不治の病の床に臥すこととなる。母親として恒を深く愛しているが、恒が一体誰の子なのかと頭を悩ます。自分に自信がなく、奥手な性格。趣味は料理で、のちに創作料理屋を営む。

— — — — —
— — — — —

■ Wiz Walter (ウィズ ウォルター)

宇宙の真理を司る闇の最強チート

【置換名】 荻号 要 (おごう かなめ)

【年齢】 不明

【性別】 なし (男神)

【毛髪／瞳色／身長】 銅色・空色・180cm

【生物種】 神

【所属】 陰階第4位 闇神

【神具】 相間転移星相装置 (SCM-STAR)

【生物階での資格】 医師 (外科・精神科・内科・脳外科・放射線

万能の天才として知られる、最強神。宇宙の運行を司る闇神。出自等、年齢すら一切不明。全知全能に最も近い神と謳われる。性格は実直で飾り気もなく、多くの支持者を集める。神医、精神科医、物理学者、化学者、生物学者などなど、その経歴と業績は枚挙に暇がない。ほぼ不死身。彼のマインドブレイクはどんな者の思考をも看破し、マインドギャップは決して看破されない。陽階神は彼を最重要注意人物として警戒している。A D A Mに潜入していた恒に興味を持つ。

軍神下20万名を率いる白翼の第一使徒

【性別】
男性

【生物種】
使徒

【翼色】
純白

軍神下第一使徒、響以御。ユージーンの御する22万名の使徒のうち第一位の格を持つ使徒。髪の毛や瞳は色素が入っているが、翼だけアルビノで白翼という珍しい特徴を持つ。第一使徒は位神の秘書官のような役割を果たし、位神とほぼ同等の職権を以って位神の留守をあずかる。軍神補佐、軍事参謀のような性質を帯びている。ユージーンに厚く信任されている。短気で、すぐに甘日になだめられる。宝塚系の派手な容姿。

[illegible]

■川模 廿日 (かも はつか)

ユージーンの右腕にして補佐官

【年齢】
652歳

【性別】
女性

【毛髪／瞳色／身長】
薄茶・茶・170cm

【生物種】
使徒

【所屬】軍神下第二使徒

【翼色】
ごまだら

軍神下第二位の使徒。ユーゾーンが執務室を離れる際には代わりに以御が執務することになっていたので、地上には次に身分の高い彼女が遣わされる事が多い。物腰も柔らか、口調もおっとり、容姿端麗。まさしく天使のイメージを地で体现する。性格正反對の夫、紫檀葡萄がいる。歌が得意。女性らしく、すぐ情にほだされる。

[illegible]

■**Mephistophores II**
(メファイストフェレス)

軍神下影の最高位使徒、ゲ－テを知る魔女

【年齢】
1324歳

【性別】女性

【毛髪／瞳色／身長】
黒・黒・164cm

【生物種】
解階住民特權階級

【所属】伯爵子女・軍神下第0位使徒

軍神下第0位の使徒。軍神下影の最高実力者。解階の貴族階級にある貴女。父親メファイストフェレスⅠはゲーテの戯曲「ファウスト」に登場する悪魔のモデル。生物階では魔女と呼ばれている。ユージーに命を助けられたことで軍神下使徒として志願する。父親、娘ともに解階では権威ある人類心理学者。プライドの高さは折り紙つき。ユージーンの後任の小学校教師としても活躍する。なにかと人

[illegible]

生命を掌握する盲目の死神

【年齢】
634歳

【毛髪／瞳色／身長】
濃茶・濃茶・193cm

【所属】
陰階第9位
死神

【生物階での資格】 ネットワークスペシャリスト（NW）・システ

[illegible]

人々の信仰を禁じた最高位神

【年齡】
2024歲

10

【年齢】
21歳

性別
男性

m 【毛髪／瞳色／身長】
アッシュゴールド（染毛）・黒・176cm

【生物種】
人間

【所属】
大学院生

【生物階での資格】
危険物取扱者（甲種）

大坂大学大学院理学研究科錯体研の大学院生。三度の飯よりパチスロが好きでギャンブラー大学院生。連敗街道まっしぐら。ギャンブル運お守りを持っているが、効果はからきし。研究の結果もパチスロの結果も出ないことで教授に叱られるが、まったくこたえていない。しかし機器分析の腕は確か。成績は学科内でも下から数えたほうが手っ取り早い。関西弁。金髪頭を教授に叩かれることしばしば。基本的に陽気だが、やや繊細な面もある。

[illegible]

■長瀬
くらら
(ながせ
くらら)

破天荒秀才大学院生

【年齢】
21歳

【性別】女性

【毛髪／瞳色／身長】濃茶（染毛）・黒・162cm

【生物種】人間

【所属】
大学院生

【生物階での資格】
危険物取扱者（甲種）

大坂大学大学院理学研究科錯体研の大学院生。築地とは違い、学科内いち優秀。天然キャラで、おさがせ。怖いもの知らず。ひとつこい。無機合成が得意で、教授にもかわいがられている。築地に合コンで紹介してもらったシゲルと付き合っているが、オーストラリアでカンガルー研究をしているため遠距離恋愛で寂しい思いをし

クし続けている。性格は生真面目で、温和、演説のプロ。整理整頓で
きれいな好き。ヴィブレイスミスに極陽を譲位する前は、主神として
多大な影響力を及ぼし人々の倫理基盤と人権の礎を造った有史以来
最大の功労者。最近英語を好んで用い、携帯電話もパソコンも
使いこなす。

プロローグ―過疎村にひょっこり軍神降臨（前書き）

●はじめに●

現時点で100話のストックがあり、150万字超の大長編SF小説です。

ファンタジーのノリで読めるハードSFのつもりです。

もっと人と自然と科学を好きになれる、そんな一作にしたいと思います。

既存の宗教の神々（キリストなど）が登場しますので、熱心な宗教家の方はご注意ください。

※拙作ヘヴンズアンダーコンストラクション（HUC）を先に読まれた方へ↓HUCの世界観のベースとなった作品ですが、HUCより科学要素がマニアックでギャグなしですのでご注意ください。ほのぼの↓殺伐としていきますが、最後まで読んでいただければ救いはあります。設定はHUCより細かいです。

また、5年前からの作品ですので文章も拙いかと思われませんがご容赦ください。

前知識なしで試し読みをされる場合・・・外伝？、外伝？がおススメです。

【文体】 三人称神視点

【地雷】 インフレ展開・微グロ・キャラ死亡↓死んでも生き返る・次元と時間超越的厨二戦闘・憑依

※様々な登場人物が死にますが最後はハッピーエンド（最少不幸）にする予定です。

プロローグ―過疎村にひょっこり軍神降臨

西暦2007年 5月12日、世界標準時9時24分。

人類においては前人未踏の座標軸上で、ひとつの重大な勅令が、地上の誰しもが決して仰ぎ見ることを許されぬ人物から厳かに発布された。

彼が受けたのは生物階、すなわち地球降下の勅旨。彼が派遣されるのは……

日本。

中国地方は広島県西伊辺郡の「風岳村」なる人口3500人の村。

任務は五年間、ただかの地に滞在するだけ。何をするわけでもなく、それだけ。

「ただ、滞在するだけ。ですか」

何故だと問い質すことすら躊躇われる絶対的権威者を前に、どう返答したものかと思案し、裏に隠れた真意を反芻する彼は青黒く冷やかな硬質の床の上に裸足で座し、まだ少年の面影すら残る、それでいて精悍な顔つきをした金髪の若者だ。

古代ローマ時代のそれを彷彿とさせる純白の衣を纏い、鍛え上げられた左腕の付け根には黄金色の刺青モチーフを刻んでいる。そして彼の肌は暗闇の中照明光ではなく、彼自身の持つ輝度によって仄かな光をたたえていた。

それにしても五年間は長すぎだ。

ただでさえ諸事情の不安定な繁忙期なのだ。恨み言を言いたい気持ちをもぐっと抑えて、何かこの理不尽かつ無目的な任務を固辞する口実になる材料はないかと探る。

「はい。ですが当該期間、平和維持活動（PKO）への支障が懸念されますが。大規模紛争も頻発しておりますし」

青年が対峙する相手は、昏い玉座の座主にして世界の至高者。

それを証す青い蛍光色の二本の環が、ネオン環のように彼の腰のあたりに二本、折り重なって眩く浮遊している。直接的に拝顔することすら不敬にあたるが、記憶が確かならば鳶色の毛髪と瞳が印象的な、理知的で温和な佇まいの壮年の男が、青年が着用しているものと同様の純白の衣を着て座している筈だ。

「差し詰め私には太平の世と見受ける。それとも第三次世界大戦規模の開戦の火種でもあるのか」

挑発的な言葉を投げかけられ、青年は閉口した。大戦への火種があると青年が肯定することは彼自身の無能を露呈せしめる。いずれにしろ固辞する理由にはならないだろう、という暗黙の意図を突き刺すように強く、肌を感じる。

「いえ」

この異動命令は実質的な左遷なのだろうか。

彼がそう勘ぐったときだ。玉座の座主の口元がいやらしく綻ぶ。

男と青年との関係を絶対的に決定付けた伶俐な一言が放たれた。

「これは左遷なのか、と？」

平伏しながらもじわり、と彼は気色ばみ、動揺と後悔を喉の奥に

押しやる。

滅相もない。

とは答えられないのだ。何故なら鎌かけでも当てずっぽうでもなく核心をついた指摘。否定するのは愚の骨頂。偽りの鎧は赤裸にされ、真実のみが看破された。

「極陽。きょよう G－CAMの当該地区における行使をお許し願えますか」

最高権力者、極陽アルティメイト・ポジティブとの諍いは無用のこと。賢明な青年は早々に懐柔されたふりをして退出した。

＊

「今言ったとおりだ。すぐに発つよ」

広大な敷地を有する高高度飛行場。枢軸専用、7番ポートのタラップを登る金髪の青年は、先ほどの古風でどこか神秘的なでたちとはうってかわって漆黒のスーツに身を包み、現代風のどこにでもいる青年と何ら遜色ない。

「何かあったらいつでも連絡をしてくれ」

旅立ちのときを迎えて、心境穏やかにはいかなかった。

突然の異動話をタラップの下に控える優秀な部下に相談ひとつしなかったことで、秘書官の機嫌を損ねるはめになっている。秘書官は肩まで届く長いウェーブのかかったブロンドを颯爽と風になびかせて、ロングコートと黒いマフラーを巻いた軍人然とした男だ。

気骨ある面持ちで、気が強く口が悪い。彼の年下の上司にずけずけと口汚く苦言を呈する。敬語も敬意もへったくれもない。

「五年で長すぎだろ！ 何で仕事さぼって田舎暮らしなんだ！ 手

詰まりのアフガン情勢もどうすんだよ！ 懲罰環までつけられて！」

懲罰期限は明日正午までと定められている。

確かに懲罰環を填められると一切の実力行使ができなくなり、彼固有の能力の殆どを物理的に奪われる。何に対する懲罰を受けるのかというと、期日までに生物階への降下を申請しなかったことに対する懲罰だ。実にくだらない。青年は秘書官の言葉を聞き流すと、居住まいを正しタラップに立ち、右手を高々と掲げた。

それを目印に、空港滑走路に居並ぶ係官が、懐中電灯サイズの青いランプを大きく振り管制塔へ連絡する。

” 枢軸権限における優先テイクオフを受理しました！”

場内に響き渡るアナウンスの直後、ウー、ウー、と爆音でサイレンが鳴る。

空港には枢軸専用便の割込テイクオフを受け入れる体勢となり、空港全便が彼のために離発着禁止となる。着陸しようとしていた便は上空で待機、まさに離陸しようとしていた便もその場で足止め。

青年は空港職員らに最大限の敬意を以て迎えられる。

「まあ、その場所からわたしにできることといえば……ちよつと待てよ。本当に何もないな」

彼は彼のために騒然とする空港を悠々と見下ろし、真剣な面持ちでとぼけたことをのたまう。一応、村に着いたらメールで指令は出すから。そんな言葉を付け加えたが、秘書官の怒りに火に油を注いだだけだ。

「ねえだろ何一つ！ この役立たず！ 遊んで暮らすつもりか！」

秘書官が苛立ったように畳みかけても、呑気な上司にはあまり効果がない。秘書官の隣で茶色の髪と瞳をした、青いワンピースを着た細身の女性が、二人のやり取りを見て困惑したように微笑んでいる。秘書官が上司にあれやこれやと噛みついて、上司は適当に受け流す。

これもいつものことだ。

「少なくとも北朝鮮あたりがミサイルでも撃ってきたら全力で迎撃する。G—CAMか素手で」

青年には危機感もない。

世界大戦の惨禍を経験した彼にとっては、世界大戦時こそが最大の繁忙期といえた。

「日本でそんなの滅多にねーだろ！ このクソ忙しいときにとんずらしやがって！ 死んでしまえ！」

いつにも増して口の悪い秘書官を上司はたしなめず。知らず悪態をつく相棒を見下ろし、ビリヤードのキュー（玉突き棒）ほどの長さの、G—CAMと名付けられた一振りの細身の杖を握り、思い出したように言い返す。

「いいのか死んでも？ お前の仕事が増えるぞ。言い忘れていたが、これは極陽からの勅令だ」

ブザーが鳴って七番ポートのタラップから先の敷地に、コンクリートの滑走路を穿孔する数十メートル大の巨大な穴が突如として出現する。穴の下から風速40メートルもの冷たい風が吹き上げ、く貫かれた風景は青空へと繋がっている。青年は躊躇もなくタラップからひらりと穴をめがけて飛び降り、大空へと飛び出してゆく。

ひゅうつと、彼の体が風を切る音が聞こえた。

この空中空港で離陸する際にはホールをくぐって空港の下側に飛び降り、空中待機している飛行機に搭乗するのだ。危険極まりないテイクオフだが、乗客が飛行機に乘れず墜落死が起こった事例はまだ一度たりともない。

「勅令なら致し方ない」

秘書官は納得したように口の中でごによごにと言う。

それならそうと、早く言えがいいのに。と、もうひとつ腹をたてることを忘れなかったが。

「あの方はいつも、口下手だから。一言足らないの」

あなたはいつも一言多いけどね。と、秘書官に次いでNo. 2の権力を持つ彼女は楽しそうに微笑む。

「……」

「……？」

彼らは顔を見合わせた。そういえば離陸完了のサインが出ず、穴は開口したままだ。青年が飛行機に乗ることができなかったのだろう。彼らは安全柵の内側から、巨大穴の中の青空を覗き込む。テイクオフのタイミングが合わず、墜落してゆく青年の姿が秘書官の目に入った。

なぜ、そんなことに。

懲罰環によるアトモスフィアの無効化を、忘れていたのでは？

懲罰環を填めている限り、彼は力を奪われ飛翔できないということ
を忘れている。

「ざまあ——！！！」

彼は墜落する青年を心配するでもなくげらげらと指をさして大声を出し、腹をよじらせて笑った。つられて美女もくすりと笑い、それが不敬だと気づいて笑顔を引っ込める。

やがて急浮揚してきた飛行機……いや、飛行体は全長数十メートルもあるシロハヤブサだ。

ハヤブサの背に乗った彼は隼の翼を返しくりと旋回させると快晴の空を滑空して消えた。ゴウン、ゴウンと重厚な音がして七番ポートの吹き抜けの穴が閉ざされ、一般離発着禁止シグナルが解除となる。

「爆笑したの、まさかあいつに聞こえてたか？」

少し笑いすぎたかと聞けば、美女は大きく頷く。

「聞こえてましたよ。あんなに大きな声で下品に笑えば。ムツとしてらっしゃいましたよ」

彼の上司が秘書官を不敬罪にしたい気持ちは、また一段と高まったことだろう。

「まあいいや、指揮官交代といきますかね」

日常の光景を取り戻した空港を見つめる二人に、伝令使が駆け寄った。

「アフガニスタン独裁政権の軍事作戦最高司令官が、ヘルマンド州での戦闘で死亡との報告です」

「1044を以て紫檀したんの部隊を投入。被害を最小限に抑えてください。それと、犠牲者は最小限にするよう、きつく申し渡してください」

女性は緊迫した面持ちとなり、きびきびと伝令使に命令を飛ばす。彼女の夫、紫檀を戦地に介入させる指令だ。

「それから米空軍の追撃ミサイル発射条件を厳格化させろ。アフガン軍とNATO軍もだ。あいつら最近誤爆が多すぎるぞ」

シロハヤブサの背に乗り飛び立っていった青年に代わって指揮全権を掌握した秘書官が、ついでに要請を出す。

「はい、本日も誤爆により警官七人死亡です。第八使徒、横井を迅速に手配しNATO軍作戦指揮系統に介入させております」

「爆撃機の兵装の詳細な情報を」

「しかし、極陽は何をお考えなんだろうな」

彼は空港を去りながら、青年を地上に遣わせた最高権力者の意図をとうとう理解できなかった。

「軍神を日本の過疎村なんかを送って」

第1節 第1話 その村の外国人

まただ。また見られている。先ほどからずっと。

それも、決して好奇心の範疇でとはいえない眼差しでだ。

歳の頃にして、十歳かそこらだろうか。一日にわずか六本しか運
行されない府川線途中の鹿又かまた駅から乗車したが、その時にはまだ乗
っていなかった筈だ。察するにそれ以降の駅から乗車して、切り離
された車両から、四両列車の先頭車両までやってきたのだろう。

車両の対角線上からの少年の視線がわかるぐらいだから、先頭車
両には殆ど客が乗っていなかった。

ユージン・マズロー (Eugene Mazrow) は、手に
持っていた英字新聞を読む振りをしながら、少年の投げかけてくる
異常な視線に戸惑っていた。

”やけに見てくるな、あの子”

アンティークの皮のスーツケースをひとつ足元に置いて、漆黒の
スーツ、襟元にはうす汚れた金茶色のネックレスといういでたちは
それほど派手だとは思えないし、島国日本では幾分外国人が目立つ
ものだという事を差し引いても、あれほど凝視されるのは気持ちよ
いものではない。

外国人から何か嫌な仕打ちを受けたことがあるのだろうか。トラ
ウマめいたものを感じさせた。普段なら気にする事ではないのだろ
うが、これから赴く任地へ何一つでも不安を持ってゆきたくはない。

候は初夏。まだ冷たく、しかし焼け付く太陽が少年に静かに影を

落としている。

一時間経ってとうとう乗客が二人きりになっても、少年は降りようもしない。

少年は腰を下ろしたかったらしく、スポーツバッグのような大きな荷物を下敷きにして座っていた。

”まだ見てる……何で見てくるんだろう。今は看破かんぱもできないし困ったな”

彼が”看破”ができなくなっているということは、懲罰環をつけられたときから分かっていたことだ。

列車が快速で次々と鄙びた無人駅を通過する間、彼は時折ユーージンに怯えきった視線を投げかけてくることを忘れなかった。その間に三つの車両が切り離されやがて一両になったが、心なしかスピードを上げて草原の中を切るように駆け抜けてゆく。

JR府川線、終点にして目的地の風岳村ふがくへは、ここから三つの駅を停車せずに通過する。ユーージンの嫌な予感が確信に変わっていた。少年は風岳村の村民なのだ。これではまずいことになる。少年だってユーージンにあまりよい印象をもっていないのだろうが、ユーージンはユーージンで困惑した。

「こんにちは」

彼はしっかりと少年を見つめて、驚かせないように気を配りつつ腰を浮かせてやや体を前傾させ、丁寧な日本語で声をかける。たった二人きりの車両の片隅にいた少年は逃げ場を失っておどおどと、目礼だけ寄越した。

「風岳村に行くの？」

こくり、と愛想笑いを浮かべながら頷くが、肩が小刻みに震えて

いる。どんなに取り繕っても子供だ。不自然さを隠せていない。

「外国人は珍しいかい？」

「ご、ごめんなさい」

「よろしくね、わたしも風岳村に行くんだ」

少年の大きな瞳に、さあっと絶望の色が浮かんで泳いだ。少年の恐怖を察したユージーンは、咄嗟にこんな事を言ってしまった。

「よければ、村役場まで案内してくれないかな」

むろん村役場に用などなかった。この少年がユージーンに向ける不自然な態度を、探り出す必要があると感じたからだ。少年が返事に困って俯いていると助け舟を出すかのように、終点到着のアナウンスが車内に鳴り響いて、彼にとっては一瞬の隙が出来た。

ドアが開くと同時に、少年は荷物を慌てて引つつかみ、弾丸のように飛び出して、高い段差のあるプラットホームを鹿のように飛び跳ねて降りると、あっという間に見えなくなっていた。ここは無人駅なのだ、切符を改められることもなかった。

” えー……そりゃないよ ”

困ったものだ、そう思いながらユージーンは少年を見送るしかなかった。最近の子供は皆あのような態度を取るもののだろうか？ 最初は、二人きりになった車内で英語で話しかけられるのを恐れているのかと思っていたが、どうもそうではなかったようだ。

彼のような子供がこの村にいては、仕事に支障が出かねない。ユージーンとしては村民から何らかの興味を持たれる事で特に困ることはないのだが、怯えられるのは都合が悪かった。

彼は怪訝そうな顔で運転室からこちらを見ている車掌に会釈をし、ゆっくりと足元に置いていたトランクを担ぎ、今しがた少年の去っていったプラットホームに降り立った。

律儀に切符を錆びたブリキの回収箱に入れ、土ぼこりを被って崩れかけた石階段を下りていると、脇の草むらに黒い小さなものを見とめる。遠目から見てもわかる、つややかな皮の財布だ。その軌跡から、少年がプラットホームを飛び降りたまさにその時に落としたのだということは、疑う余地もなかった。

しかしいくら少年の持ち物とはいえ、立派な財産だ。見て見ぬふりも出来ず、少年に届けなくてはならないだろう。少年は特に特徴的な容貌を持っているでもなく、ただ黒いシャツに短パンをはいただけの典型的な日本人の少年。

ユージーンは何を思ったか、財布を拾い上げたその右手の手首にある、薄汚れたブレスレットを睨みつけるように目を落とす。例の懲罰環だ。

”まったくこれのおかげで、随分と不自由をさせられる”

そうひとりごちてもどうにも仕方のない話で、今は警察に届けるほかないだろう。落し物が財布である以上、他の拾得物のように目立つところに置いて少年が取りに戻るのを期待するのも非常識だった。金額的にはいくら入っているのかなど、確認するのも億劫。

”まあ、こんなときは警察だ”

ユージーンはぶらりと駅から小道に入った。

警察の所在地はどこだろう、そう思いかけて苦笑する、このような田舎ではせいぜい駐在所だと気づいたからだ。彼は警察の所在地を村の中心部と推測していたが、駐在所だとすれば必ずしも中心部

にあるとは限らない。どうも裏目裏目に事が運んでいるような気がした。

このツキのなさは一体どうしたものだろう。

しかも駐在所は大抵、留守である場合が多いのだ。おもむろにポケットから携帯電話を取り出し、電話をかけるでもなくウェブボタンを押す。通話圏外の表示が画面の左端に小さく出ている。

彼に限って言えば、携帯電話は肝心なときに役に立たない事が多かった。それほど小さな村ではないし日本の携帯電波事情はかなり改善されている筈なのでずっと圏外だとは考えにくいのだが、たまに電波が悪かったのだろう。

ユージーンがほとほと困ってため息をつきながら携帯の裏の電池パックに手を伸ばしたとき、横の畦道からまたもや十歳ばかりの少女が自転車に乗って飛び出してきた。少女はユージーンに気づかぬまま、ペダルを力強くこいで風のように十字路を通り過ぎてゆく。ユージーンははっとしてトランクを放り出すと、彼女の視界に入ってもいないのに大きく手を振りながら叫んだ。

「ちょっと、まって！」

ユージーンは20メートルほど通過していつてしまった少女に、走って駆け寄った。背後から突然声をかけられて驚いたのか、急ブレーキをかけるちゃちな音がして、彼女は畦道の上でややバランスを崩したが、もちなおして足をついた。笑顔で振り返ってくれたのが、冴えない事続きのユージーンには唯一といってもよい嬉しい出来事だ。

少女は水色のワンピースを着て、髪の毛を肩のあたりに切りそろ

え、茶目っ気たつぷりの瞳でこちらを見ている。子供から向けられるのがいつもこういう視線なら、有難いのだが……。

「あー！ 外人さんですか？ 初めて見たー！ 日本語大丈夫ですか？」

「日本語でいいよ、こんにちは。ちょっと道がわからなくて、警察に行く道を聞きたいのだけれど」

「じゃあ……道を聞きに行くのに警察に行くのに、道をきいてるんですか？」

少女はその言葉の滑稽さに、自分でそう言って思わず噴きだしてしまっただけだった。ユージーンからすればそれほど面白いとは思えないのだが、箸が転んでもおかしい年頃のようなのである。ユージーンは彼女のペースに持っていけないように、淡々と話を続ける。

「財布を、拾ったんだ。男の子の財布なんだけど、警察に届けなきゃね」

「あ！ これ！ 見たことある。恒君こうのかもしれないです。ほら、これ、恒君ですよ」

少女は例の少年と面識があったのか、財布を覚えていたようだ。何の変哲もない皮財布だが、少女には区別がつくのだろう。もしくは子供の持ち物としてふさわしくないほど、変哲のない財布だったためかもしれない。親の財布をそのままもらったような、あまりにもオーソドックスで落ち着きすぎたデザインだ。

「私、明日届けておきましょうか」

「いや、財布だから。今頃困っているだろう。持っていくから、申し訳ないけれど家の場所を教えてください、一緒に来てくれないかい？」

彼女は左腕のかわいらしいピンク色の腕時計を見遣り、時間を気

にした。

「私、今からピアノに行くんで、今からはちよっと。恒君の家なら、この道をまっすぐ行って、あの坂を上ったところにあります。木でできた古い家で、藤堂って書いてありますから。でも漢字、読めます?」

「藤堂、ね。読めるよ、大丈夫。ところで……君は恒君の友達なんだね」

「あ、はいそうです」

山村の子供達は、横の繋がりが期待できる。恒の先ほどの態度について、彼女が何か知っているかもしれないとユージーンは考えた。ユージーンは妙に彼の事が気になっていた。少年少女には懐かれる事こそあれ、怯えられた経験など、皆無に等しかったからだ。

「先ほど見かけたとき、何か様子が変わったけれど。いつもあんなのかな」

「あんなのってどんなのですか?」

「恥ずかしがりやとか、怖がりとか」

「? あの子は村一番のガキ大将なんですよ。学校にも行っていないのに、頭だけはすごくいいんです。何でも知ってるのに家には一冊も本がないの、変でしょ? だから皆は天才なんだって言ってます。頭のよさを、悪だくみにばかり使ってしまったて……怖がりだなんで、ありえないです」

彼女はまくし立てるように話すと、面喰ったユージーンを見て体裁が悪そうに微笑んだ。聞かれていないことまで喋ってしまったからだろう。

「そ、そう。気のせいみたいだね。では、行ってみるよ」

「ありがとうございます。日本語、とてもお上手ですね。発音も完

壁でびっくりです」

少女はそう言うと、自転車のカゴからはみ出しかけたピアノの楽譜を力任せに詰め込みながら、手を振ってよこした。ユーージンも愛想よく手を振り少女の後姿を見送りながら、投げ出したスーツケースを取り上げ、轍のついた畦道を歩き始めた。

日本語を誉められたが、逆に気をつけなければならないと思った。あまり流暢に話しすぎると、かえって不自然なものだ。外国人は片言と相場が決まっているのだから、場面に応じてそうしなければならぬ。あまり目立つのはよくないのだから、と彼はそう自身に言い聞かせた。

田植えを終えたばかりの稲の上を澄んだ青い風が撫で付け、じりじりと腕を焦がす太陽が痛いほどに注いでいる。ここ、伊辺郡風岳村は高山盆地で、この地形に特有の光景が広がっていた。南北に風岳川が流れ、周囲を日真山脈、伊辺山脈らがぐるりととり囲み、のどかな田園風景がふもとの景色を彩っている。高山から吹き降ろすよい空気を胸いっぱい吸い込み、深呼吸をして心を落ち着かせる。

そうだ、何も心配はいらない。これから少年に財布を届けて、少し話しをすればよいだけだ。

手間ではあるが、彼にとってここまでは予定通りだった。

＊

藤堂 恒の家は、険しい山道を行った先にあった。

少女の説明した通り、古い大きな農家で、よく使い込まれた昔の農具などが無造作に置かれている。広い畑がすぐ傍にあって、トタンでできた鶏小屋が隣に見えた。

保護者が出てくれる事をわずかながらに期待しつつ、ユージーンは日に焼けてボロボロになったプラスチックのインターホンを鳴らす。インターホンが鳴るとすぐに、奥の方から足音がした。返事の声はない。彼が足音を注意深く聞いていると、すぐ間近にやってきて、ガラガラと立て付けの悪い玄関をこじ開けるようにして少年がおずおずと顔を出した。ユージーンは愛想よくひらりと手をふってみた。

「やあ」

どんな反応を向けられるかは分っていた。恒の表情は凍りつき、すぐさま扉を閉めようとしたので、ユージーンも閉められてなるものかと無理やり手を挟み込んだ。恒はそれを見て分かっているも赦なく閉めたので、ユージーンはしたたかに指を挟みこまれた。ガツン、という形容しがたい鈍い音がした。

「閉めるなんて酷いな。君の財布が落ちてたんだ。財布を渡すから、ここを開けてくれないか、藤堂 恒くん」

恒はしぶしぶといったように、立て付けの悪い玄関扉を半分ほど開いた。ユージーンは挟まれた左手の指をさすりさすり、まず財布を渡してやると、今度は扉を閉めようとはしなかった。いくらなんでも、大事な落とし物を届けてくれた恩人をすぐに追い返してしまうことはできなかったのだろう。

ユージーンは恒を根本的に性根の悪い子供だとは、どうしても思いたくはなかった。彼は何か理由があって自分を怯えているのだと、ユージーンは彼自身に言い聞かせる。この年頃の子供は扱いが難しい。

「ありがとう」

「どういたしました。……君は、過去に外国人に酷いことをされたことでもあるの？　いきなり手を挟むなんて」

「……ごめんなさい。上がって下さい。お詫びにお茶を入れます」

ユージーンは用心もせず、ありがたくお邪魔して上がり込んでしまった。重い荷物を抱えて上ってきたので、一息つかせてほしかったのだ。障子の間からは殺風景な和室ばかりが連なっているのが見えたが、しばらく使われてはいないようだ。ここには、少年以外に人の気配がない。どうやら家族は留守だったようだ。

「ご家族の方がいないときにお邪魔して、悪かったね」

「いつもいないから、平気」

共働きで仕事が忙しくて、留守がちなのだろうか。その言葉の意味をあまり深く考えることもなく、ユージーンは通された和室に腰を下ろした。恒はお茶を煎れるからと言って、襖を必要以上にしっかりと締め切ると、奥の間に消えていった。

恒は襖を閉めると、茶を出すといった先ほどの様子とはうってかわって必死の形相で、唐突に筆筭からありったけのものを手早く、しかし音を立てず引っ張り出してはぶちまけた。音の出ない衣類から順に、郵便物なども座敷にあらん限りぶちまける。冷静さを失った彼自身を客観的に振り返っているのか、暫くの間肩で息をしながら狼狽していたかと思うと、大きく息を吸い込んだ。

そして何やら覚悟を決めたように台所に駆け込み、まな板の上に置きっぱなしにしてあった出刃包丁の柄を、腹部のシャツを巻きつけた手で掴み、左腕にざっくりと創傷をつくったのだ。

彼の行動は狂気じみていたが、彼は至って真剣だった。悲鳴を上げるか気を失ってしまいそうになるのを懸命にこらえながら出血をタオルで抑え、勝手口から音を立てずに出ると、彼は血痕を滴らせ

ながら裸足のままひた走りに走った。萱で足を切ったり、石ころに躓いたが、あまり気にならなかったようだ。それよりも経験したこともない痛みに、彼の意識は千切れ飛びそうだった。

できるだけ傷口を見ないようにしつつ坂道を石ころのように駆け下り、ふもとの民家の勝手口に転がり込む。家の中には遠いお隣さんの、兼橋かねはし 佳代子かよこが糠漬けの漬物樽の上に漬物石を置いたところだった。突然勝手口から現われた恒にまず驚き、苦悶の表情と、赤黒く真つ赤に染まったタオルを見て、佳代子は何を言わずとも異変を察した。

「恒ちゃん！ どうしたの、その怪我！」

「おばちゃん！ 家に、ご、強盗が！ 切りつけられて……早く通報して！」

佳代子は喘ぐようにうなずくと、すぐさま110番と119番に通報した。恒の傷は深く、血がどくどくとあふれ出してくる。

「も、もしもし！ 今、ご、強盗が入ったんです。けが人もいます。すぐ来てください！ 住所は……」

佳代子は真っ青になって受話器を握り締めながら、へたり込んでガタガタと震えていた。どうして？ ……いつもそうだった。この子ばかり、どうしてこの子ばかりが……？ そんな事を呟きながら――。

警察も消防も、普段事件らしい事件がないことも、村の交通が至って単純であることも手伝って、どこぞの大会の緊急出動の模範のように、驚くほど早く現場に到着した。

この村は、小規模な村でありながら、交番でも駐在所でもなく警察署があり、ユージーンの見込みはずれていた。西伊辺郡風岳村

警察署の管轄区域は、西伊辺郡南部の伊辺町、風岳村、松澤村、中州江村、雨龍村の1町4村である。

警察署が設置されているのが、管内のほぼ中央に位置する人口およそ3500人の風岳村というわけだ。管轄の位置的な問題だけで、風岳村の人口がとりわけ多いだとか、伊辺町を差し置いて伊辺郡の中心的な役割を果たしているという理由からでもない。

いかにも地方予算で立てましたといった小粋な外観の、村に似つかわしくないほど立派な警察署は、屋根に赤瓦を載せた平屋建てが多いこの村でも異彩を放っていた。彼らが仕事らしい仕事をしているのを、村民の殆どはパトロールか隣町への出動以外に見たことはない。

そんな田舎の警察でも自営業の主人が店に出ていて留守だった佳代子にとって、彼らの到着がどれほど心強かったことか分らない。ショック症状の出ないよう恒の体を毛布でくるんで温め、励ましながら一緒に救急車に乗り込んだ。恒には、助けを求めるべき保護者が傍にいないのだ。消防士が、警察は犯人を捕まえたようだと報告してくれた。犯人はただちに現行犯逮捕され、風岳署に護送されたとのことだった。恒はその話を聞いて、どこかほっとしたように頷いた。

＊

一方のユージーンは風岳署の取調室2の椅子に座らされていた。手首には手錠がかかっており、腰紐で椅子にくくり付けられている。恒がいつまでも戻ってこないと思っていたら、いつの間にかけたたましいパトカーのサイレンの音が近づいてきて、藤堂家の前で止まるのだ。

彼が何事かしらと思うより先に、武装した警官が降伏して出て来いというので、事情も分からぬまま丸腰で出てゆくと即座に取り押さえられ、現行犯逮捕だとかでパトカーに詰め込まれ、今に至るといわけだった。

「わたしが一体何をしたというのです？」

これは白を切っているのではなく、日本語が理解できないというのではなく、彼は本当に何故現行犯逮捕されたのかが何度説明されても理解できなかった。

「ふてぶてしく、しらばっくれるな。強盗に入った上、男の子の腕に15センチの傷をつくってくれたな。危うく殺されるところだったそうだ」

「子供を殺そうなど、恥かしいと思わんのか。室内には荒らされた形跡があり、凶器も見つかっている！ 逃げられんぞ！」

二人の刑事にかわるがわる責めたてられ、凶器といわれる血のべっとりついた出刃包丁も見せられたが、一体何をどうコメントしてよいのかユージーンには分らなかった。知らないものは知らないと言ってやりたかったが、よく状況を見てから答えたほうがいいな、と彼は言葉を飲んだ。逮捕など生まれてこのかた経験したこともなかったが、全ての発言はそのまま不利益になりかねないからだ。

「あのな。現行犯逮捕なの。お前さんの国ではどうかしらんが、日本でシラを切れると思うなよ。今から指紋を照合してやるからな。ここに指をつくんだ！」

すっかり犯罪者扱いされ有無を言わずスタンプに全ての指を押し付けられ、特殊な台紙にまたぐりぐりと指を押し付けられたが、そこにはのぺっとしたインクの黒い指型がついただけだった。その指には10本が10本とも、指紋がない。ユージーンはしまったと

いう顔をしたが、それを見た刑事の顔色が変わった。

「なんだ、これは……さては、悪質な常習犯だな。指紋を消してやる」

「国際指名手配犯かもしれないな、照会してみる必要があるだろう」指紋がないことはそれほど珍しいことではなかったのかと、ほっとしたのもつかの間、これはいいよ、大変なことになってしまったのかもしれない、とユージーンはようやく事の重大さに気付かされた。

一体どうしてこんな誤解が生じたのかもわからないし事実はどうなのかも分からないが、ここで犯人扱いされてしまっただけは真犯人を見つけない限り、この村に滞在することなどできよう筈もない。そして少年の虚言が証拠として挙げられてしまっている以上、身の潔白を証明する事も難しいだろう。更にユージーンはどこから見ても外国人であったし、田舎ではよそ者に対して偏見というフィルターもあるに違いなかった。

よそ者、外国人、強盗殺人の容疑、どれをとっても彼には不利だ。今回の任務は開始一日もたたないうちに頓挫してしまった。ユージーンはそれを受け入れるまでに、警官たちの怒鳴り声を聞きながらいささかの時間を要した。

＊

「恒くん。これは痛かったなあ……。犯人は酷いことをする」

「はい……」

「命からがらだったのに、犯人が憎くないのかい？」

「え、ええ……」

搬送先の上島医院の処置室にて恒は12針を縫ってもらい、包帯をきつく巻かれた。麻酔を打つての処置だったが、大怪我をしたので表情がさえないのか、恒はどこことなくうわの空だった。常勤外科医にして院長の医師 上島 肇が、恒の処置にあたってくれた。彼はひと仕事を終え、縫合糸と針をメディカルボックスに破棄して、診察台に腰掛けた。

「いかなな、恒くん。いかんよ……」

「……」

「嘘をついちゃいかん」

「え？」

恒は思わず尋ね返した。恒は巧妙に状況証拠をつくり上げ、誰にも見破られない自信があった、それなのに上島は簡単に見破ってしまった。

「他のもんは騙せても、わしの目は騙せん。これは、切りつけられたような傷じゃないんだ。ゆっくりと、じわりと切った傷だ。だからほら、傷がいびつに歪んでためらい傷になった。……そんな、ありえるか？ 犯人がゆっくりと、逃げ惑う恒君を傷つけることができるかのう」

「……」

「それに、シャツの腹の部分が不自然に切れとる。これは、柄を内側に持ってこなければ、できんと思うんじゃがな。……何があったがしらんが、人を犯人に貶めちゃいかん。最低の人間のすることだぞ」

冷房が苦手で白衣を二枚も着込んだ上島は、黙々と余った包帯を巻きながら、目を合わせることもなくぼつりとつぶやいた。看護師に任せず一人での処置だったので、会話を聞いた者はなかった。処置中だと言って兼橋を別室に行かせて人はらいをしたのは、恒の傷

を見てすぐに不自然さに気付いた為だ。

「若いおまえさんの道を誤らせないためにも、真実を話さなければならぬ。わしが警察に行つて、事情を説明してきてやろう。本当のことを、言ってもいいな？」

「……」

「行つて来るぞ、いいな」

「駄目です！」

「駄目か。お前さんも辛かっただろうが、こうしている間にもその人は、警察で取り調べを受けているんだ。無実の罪でだぞ。何故、その人を陥れたりしたんだね」

上島は穏やかに、だが厳しく問い質した。恒の表情は以前の彼からすれば別人とも見間違えるほどに怯えきつていた。上島は恒のこのような顔を、記憶にある限り一度として見たことはない。

「だったら先生、普通に言つて信じてくれますか？ あいつ、人間じゃないつて！ 最初は見間違いかと思つたんです、でもよく見ると、まったく別の生き物が人間の恰好をして、涼しい顔して電車に座っているのが分かりました。しかも乗客の誰ひとりも気付いていないんです。俺は霊が見えるとか、オカルト好きなんかじゃありません。ただ、人間じゃない何かが人間のふりして、この村にやつてきたんです！ 奴を何とかこの村から追い出したかった。嘘をついて濡れ衣を着せてしまつたけど、間違つてはいません！ 俺の自作自演だったと先生が警察に言つたりしたら、奴は釈放されるでしょう。でも、奴をこの村に野放しにしてもいいんですか？」

上島はそれには答えず、恒の真剣なまなざしに、尚更心を痛めた。恒は現実主義者でいつも冷静だったというのに、どんな誤解をしてしまったのだろうか？ それにしても子供じみて荒唐無稽、酷い誤

解だ。彼の身体にこれほど大きな傷を入れてまでも訴えねばならなかった事なのだろうが。

「局所麻酔をうって痛み止めも飲んでいるから、痛みもないだろう。わしと共に署に行こう、彼が人間かそうでないかを、確かめてやろうじゃないか。そしてもし人間だったなら、恒君はきちんとなすべき事をするんだよ」

「……解りました。行きましょう。兼橋のおばちゃんには、大丈夫だから帰ってくださいといえます」

恒はようやく納得をした。

第1節 第1話 その村の外国人（後書き）

■挿絵（絵師様の）アドレス／ユージン||マズロー・藤堂 恒
http://lizreel.web.fc2.com/ltobira/ltobira-narrow.html

■挿絵ページ（絵師様と筆者の・まとめ）アドレス
http://lizreel.web.fc2.com/picture-narrow.html

第1節 第2話 神との遭遇

万年穩やかだった風岳署は、久しぶりの凶悪犯罪に色めき立っていた。

既に噂を聞きつけやってきた野次馬達を避けるように、恒は上島の車で裏口から乗り付け、署に到着した。容疑者の罪状は強盗殺人未遂なのだろう。殺人未遂の現行犯逮捕なので、これからの刑事手続きは取り調べを経て留置所か拘置所に移される。そうなればこの村から強制的に連れ出される、というシナリオを恒は想定していた。いや、白状すれば初めから狙っていたというわけではない。傷の痛みに気が動転しながらも、早熟すぎるその頭脳はあるセオリーを紡ぎ出していった。そのいづれかの段階で、彼が人ならざる者だという事が発覚すればもう、自分の仕事はそこで終わりだと恒は思っていた。

担当の刑事の一人が慌てて二人を迎えにきた。いつも恒が世話になっている刑事だ。世話になっていっていても勿論悪い意味でのであって、彼からかけられた嫌疑は、両手では数え切れないほどある。そのたびに恒は少年鑑別所に収容されそうになっては、あわやというところで口八丁手八丁で命拾いをしてきた。もう片方の刑事は他の警官と、そして被疑者とともに取調室にいる。普段なら犬猿の仲と言うにも相応しい、刑事と村一番の悪童である恒の顔合わせだったが、今日ばかりは同情の言葉を投げかけた。

「怪我は大丈夫か？ 酷い目に遭ったな。犯人の顔を見るのは辛いだろうから、今日は来なくてよかったんだぞ」

「麻酔が効いているので、しばらくは大丈夫です。接見はできますか？」

「？ 何を話すことがあるんだ」

「ちよつとですから」

「わしからも、お願いします」

上島は有無を言わずごり押した。上島医院は村内唯一の病院施設であり、刑事といえども患者である事には代わりないため、院長の風格には気圧されしてしまう。この刑事は月末には胃薬を処方してもらっていて、上島とは顔見知りだ。

「はあ、わかりました」

「被疑者はどんな様子ですか？ 犯行を認めていますか？」

「いやいや、認めるどころかこれは長丁場でしょうよ。すつとぼけていましてね。指紋が全部削られているんでどうやら常習犯のようですよ。海外マフィアの線もありますしね。まだ身元は割れていません」

刑事も海外マフィアがこんな僻地にやってくる筈がないと内心分かっていいのか、とってつけたような事を言って皮肉な笑いを浮かべる。ミステリー小説を愛読する刑事も、傷害とはいえ久々の刑事事件に、少々興奮気味ではあった。上島と恒を取調室の前に案内すると、刑事は恒に念押しした。

「本当に、会うのか？」

「……は、はい」

刑事がゆつくりと扉を開くと、中にはもう一人の刑事に詰め寄られて、憔悴しきって顎が前に出てしまった被疑者がいた。それはそうだ、彼の側からしてみれば訳も分からず犯人に仕立て上げられ、不当な取調べを受けているのだから。だが恒はほんのかけらほども気の毒だという気になれなかった。

「被害者が来たぞ。こんな少年に怪我をさせて、申し訳ないとも思わないのか」

「恒くん、だったな。君に言いたいことは山ほどある。けれど、今

わたしを保釈できるのは君しかない。真相を話してくれ、お願いだから」

恒は容疑者の必死の訴えにも答えず、黙って俯いていた。上島は恒を後ろに隠すように進み出て、少し離れた場所からまじまじとユージーンを見つめた。その好奇の視線に辟易したように、ユージーンも上島を見上げる。手錠がかけられ、腰紐で椅子にくくりつけられていた。疲れているのが分かるぐらいで、その容貌には、恒の主張するように何か着目すべき点は見当たらなかった。

「ところで、身体検査はしましたか」

上島の意外な言葉に、ユージーンは細い金色の眉をしかめた。どこか優しげで、端正な顔立ちではある……一見して犯罪者とは疑えない。だが見た目と本性は違うということを、上島はその長い人生のうちで厭というほど知ってきたのだ。外見に騙されはしない。不穏な言葉に、手帳を見ながら首を揉んでいた刑事が顔を上げた。

「凶器などはないようでしたが。何かお気づきの点が？」

「全裸になってはいないのでしょ？」

「ここは警察署ですので、拘置署のような事は人権に関わりますので、はあ」

「着衣のままでもいいので、わしが確認してもいいですか」

どうしてもそう言ってきたかないので、刑事は承諾した。被疑者に何か渡す恐れがあるので、上島のボディチェックが刑事によって先に行われる。恒は固唾を飲んで見守っている。上島は臆することなく彼に近づくと指の腹で脛をめぐって調べ、目にライトを当て、口を開けさせ、椅子にくくりつけられたままの彼を肩や腕を掴み、腰骨のあたりをさぐっていた。最後に頸動脈のあたりに触れ、そのまま静止する。手慣れた動作から、ユージーンが彼の職業に気づいた時にはもう遅かった。上島は大きく深呼吸をして、ぎりっと睨みつ

けると、ユージーに詰問口調で語りかけた。

「あなたは一体、どこから、何のためにここに来たんだ？」

何も知らない刑事たちが警察手帳に何かを書き付けながら首を傾げる。取調室の格子のついた窓から漏れた光が、刑事の手元に優しく影を落としていた。

「どういう事です？」

「脈がなく、瞳孔もなく、骨もデタラメな構造をしている。腰骨だって欠けている。喉仏もない、肩甲骨もない、これが発育異常や障害で片付けられるレベルか？ この男は少年のいうよう、人間ではない。ならば何だ？」

「あの」

ユージーは言葉を選ぶことができないまま慌てて弁解をしようとした。二の句も継げないうちに、手ひどい指摘をする。これが医者の本質だと言わんばかりに、事実だけを残忍なまでに的確に押さえられている、言い逃れなど出来そうにもなかった。

「脈もない人間がどこにいる。それを説明できるのかね」

刑事たちはおそろおそろ彼の脈をとり、とびさがった。

「な、何だこれは！ 先生、本当ですか？ こんな病気とかではないんですか？」

「血圧ならすぐ測れるが、血液検査でもしてみるかね？ DNA検査でもMRIでもいい。代わりの医者を百人呼んでも同じ事を言うだろう。あなたは人間ではなく、哺乳類ですらないんだ」

「しかし、これをどうすればいいんだ。おい、お前は何なんだ？ 人間の皮をかぶった宇宙人の類か？」

「正体を吐かないか！」

真剣な取調べが途端に稚拙になってしまったが、そういった疑い

もかけざるをえなかった。医者が人間ではないと言っているのだから、大事件だ。あまりにも衝撃が大きすぎて、もはや刑事たちは何のために彼を逮捕したのか忘れてしまっていた。当然のごとく、刑事達は手を引きたがった。この男に逆恨みをされても困るし、釈放する事など尚更の事ではしない。本庁に送ってしまうのが一番無難だと考えた。

「これは……本庁に送った方がよくないか。手に余る代物だぞ」

「……おい、さっきからカメラが立て続けに壊れてるのもまさか……」

「待ってください。わたしは貴方がたに何もしてはいません！」

「子供に斬りかかっておいて何を言う！」

刑事は脅しをかけるように、わざとに大きな音を立てて彼の前の机を拳で殴りつけたが、彼は怯む様子はなかった。日本人が凄んだところで、あまり迫力はないのだ。

「何かの間違いです。わたしは、その子を傷つけてなど……」

「彼の言うことは事実だ。この子があなたを警察に捕まえてもらうためにうった、自作自演だそうだ」

「わたしを、陥れたのか？」

わずか十歳そこらの子供に、そんな芸当が出来るものかとユー・ジーンは驚愕した。しかし今更冤罪が明らかになったところで、もはや釈放などしてもらえそうにない。彼は凶器を持っていないことをアピールしなかったのだが、迂闊に脈など取らせるべきではなかった。上島は村医者だったのだ。とてもそうは見えなかった。

「正体を吐かなければ、明日にでも処分しなくてはならないぞ」

それがただの脅しではない事は、刑事の口調からも明らかだった。釈放をすれば報復が怖い、彼らはそう考えている。騒動にしない為には殺してしまうのが一番安全ではある。

「村民の安全を守るためだ。お前に人権もないんだからな、害獣駆除と一緒にしろ」

「本当に何もやましい事はありませんし、悪意ありません。信じて下さい。お願いします」

彼はそう訴えかけたが、その訴えに耳を貸す者はなかった。上島は腕組みをしたまま、値踏みするように彼を見下ろしている。

「悪意どうこの話じゃなく、お前が何であるか、そこが重要な点だろ！」

「あなたがたのお役に立つべくこの村に来たのです。恒君、こちらに来て」

思いがけず呼びつけられた恒は慌てて上島の陰に隠れて、顔も見せずに上島のジャンパーを握りしめて拒絶した。

「あなたの傷を癒すから……」

上島は苦し紛れに口から出たであろう、その言葉に少しだけ興味を持った。いったいどうやって治すつもりだろう、恒に危害が及ぶのでなければ見てみたい気もした。上島の好奇心が、結果的に彼の命を救う事となった。

「恒君、やってもらいなさい。お前さんのためにもなるし、彼も殺されたくはないんだろう。包帯を解いて」

怯える恒を引っ張り出すように前に押しだし、上島は取調室の机の上にまだ痛々しく生々しい傷口をあらわにさせた。ユージーンはほっとしたような顔を見ると、手錠に繋がれた両手を、恒の傷口の上に持ってきた。上島が震える恒の腕を、非情なまでの的確さで机の上に固定した。刑事たちも興味深々といった表情でいて、特に注意をしなかった。

「自分の腕を切らなければならぬほど、怯えていたのか……」

ユージーンは深い傷口を見て、そう呟いた。その場に頭を突き合わせるようにして取り囲んで見ていた全員が、恒の生傷がみるみる

塞がってゆくのを目撃した。その過程は、自然治癒力で傷が塞がる様子を、早回しで見ているようなものであった。肉が盛り上がり、かさぶたを形成し、すうっと痕がなくなってゆくのだ。上島は興奮のあまり、机の上に置いていた診察道具の入った鞆を肘で小突いて、落としてしまった。狐につままれたような顔をした刑事達が、遠慮がちに恒の腕をなで回すが、普通の皮膚に、縫合糸が食い込んでいるだけだ。

「治しやがった!」

「これは素晴らしい力だ……!　だが正体を名乗らない限りやはり生かしてはおけない。今のに免じて、明日まで待ってやる。明日白状しないなら、処分だからな」

「……そ、そんな……」

渾身の力で恒を癒したその見返りは、充分ではなかった。

「人間じゃないんだから、少々乱暴に扱っても大丈夫だろ」

刑事たちは犯罪者の人権とやらの過分に配慮して、わずかばかりに巻かれていた腰縄を解いて、今度は全身にこれでもかといわんばかりに縄を打った。留置所に移送するのも危険だと判断したのだろう。逃げられないよう、手錠を机の脚に繋ぎ、半ば蹴飛ばすように床に転がすと、取調室の外から容赦なく鍵をかける。冷たく重い音が廊下に響き渡った。一枚の掛け布団も与えてくれる様子はない。家畜だって敷布の一枚でももらえるとこのに、まさに家畜以下の扱いだ。ユージーンはコンクリートの床から染み渡る寒さに心底情けなくなりながら、ぐっと唇を噛みしめた。去り際に採血や毛髪を取っていった上島と、結局何を考えているのか窺い知る事のできなかった恒も刑事達によって外に追い出されたが、まだ彼らは帰る気配もなく、なにやら暫くの間話し込んでいる様子だった。耳を澄ますと、話し声は漏れ聞こえてきた。

「村長にも、連絡をしておいた方がいいだろうな?」

「一応な、知らせないで後でぐだぐだ言われても困る」

……あれよあれよという間に、どんどん話が大きくなってしまったようだ。

それでも明日の朝までの時間は、先ほどユージーンが盗み見た刑事の腕時計の時間から察するにそう長いものではない。刑事が泊まり込みで見張っているらしく時折扉の方から目だけが覗く。「おい」という声がかかる度に少し首を持ち上げると、中に入ろうともせず去っていった。ユージーンは任務を優先すべきか、法制遵守を優先すべきかの選択を迫られていた。そして勿論、彼自身の命を優先するかどうかも。彼は一個の生物ではあれど、決して不死の存在ではない、やはり命は惜しい。

ユージーンは気を紛らわせるように、手錠に絡みつく、右手首のうす茶けたブレスレットの感触を左手の手の甲で確かめていた。金属類を全て外された中でこれだけは繋ぎ目がなくはずせなかった為に、さし当たりという事で取り上げられなかったのだ。ここに毒を仕込んだり、何か細工をしたりする可能性があるというのに、あまりにも薄汚れていたために注意されなかったのだろう。手首に張り付くように窮屈そうなそれを、刑事は随分不審がった。うんと子供の頃に手首に填めて、大人になるまで外さないという事でもしないかぎりこのような状態にはならないからだ。刑事たちは首長族みたいな奴だな、などと言っていたが、1ミリの隙も無く填め込まれたこれこそが、ユージーンにとっては明日の正午までの枷だ。これがある限り、今は子供ほどの腕力も出ない。普段ならこのような失態などありえないのに、これがあるがためにユージーンにとって最悪の事態を招いてしまった。

正体を名乗るべきか、名乗らざるべきか。

ユージーンは頭を痛めていた。彼の身を縛るものは決して手錠や

腰縄ばかりではなく、風岳村に着任した瞬間から、いくつもの厳密な制約が課されていた。今この状況下で適用される条件がどれで、それは何に該当するものかを一つずつ、できるだけ心を落ち着かせながら思い出し精査する。何度考えても同じ結論にいきついた。最優先しなければならぬ事は風岳村に留任する事であり、それに伴い自らの生命を守ることだ。重大な掟を破る事になるが、勅令を簡単に放棄することは尚更あつてはならなかった。

ユージーンは暗いコンクリートの床の上にうち捨てられた木切れのように横たわりながら、朝日が差し込む頃には、決して後戻りのできない決断をしていた。

＊

「あとかたもなくなっているな。どこに傷があつたのかと思うくらいだ」

深夜の処置室で、上島は感心しきりだった。夜の病院は薄気味悪いが、恒にとってここが一番安心できる場所だ。奇妙な状態で絡まっている縫合糸の抜糸をしてもらった後、上島にどうしてもとお願ひして、病院に泊めて貰うこととなった。とてもではないが、あんな怖ろしい事があつた後で、自分の血まみれの家に帰る気になどなれなかったからだ。血のにおいに噎せ返っている、とまではいかないが自宅とはいえ不気味であらうことは容易に想像がついた。

恒はストレッチャーのベッドを貸してもらって横になってはみたものの、上島はまだせわしく働いている。先ほどユージーンの血液を抜いて帰って、毛髪も何本か引っこ抜いてきたのだ。周到な上島は、頬の内側の細胞を取る事も忘れていなかった。DNA分析を行う為だ。装置にサンプルをセットし、プログラムを開始する。医学博士という肩書きが待合室の振り子時計に書いてあるぐらいだから、研究者としての顔も持っていた。診察室の奥には、簡単な実験器具

が整然と並べられている。恒の視線は上島の背を追っているだけだった。

「上島先生は、眠らないんですか」

「ああ、結果を見てからだな」

その隣では、遠心分離機で血清分離を行っている。恒は習っていないのに、それが何をする機械なのか分かっていた。デジャビュというのだろうか？ 恒はおよそ実生活では見ることすらできないものを、見覚えのあるものとして認識することが多々あった。睡眠が浅いせいなのだろうと、彼は思い込んでいた。そして誰にも言えなかった、理由があった。

日中も夜中も、とにかく睡眠に引き込まれて意識が無くなるたびに恒は悪夢を見た。恒は決まって巨大な図書館の中に閉じ込められていて、そしてその図書館の本を手に取り、読まなければ夢から覚めることはできない。恒は現実に戻るために、生きるために読書を続けるしかなかった。このまま本を読み続けなければ、いつか現実世界から消されてしまうのではないか、という絶望感が、常にあの悪夢の図書館には漂っていた。皮肉な事に、恒が必要とする知識は殆どがそこに揃っていた。書籍は一度読むと決して内容を忘れることができない。恒はそういう事情で、幼少期に母親に読み聞かせてもらった絵本以外には、一冊も実際の本を読んだことがなかった。彼は記憶の引き出しから実験機器の取扱いについての項目を引っ張り出してきた。

「先生、遠心分離機、もう少し回転数が高い方がいいと思います。その血、普通と違うでしょ？ すごく透明で、ただ赤いだけです。血小板がないのかもしれない、もっと回転数を上げないと何も分離できないと思います」

「ほう、言われてみれば確かにそうだ。しかし何故、どこで得た知識だね？ 小学校では習わないと思がのう」

上島は恒の言葉に違和感を感じた。なぜこれが遠心分離機で、それが血液から血清を分離できるものだと知っているのか。小学5年生の少年が、どこで知識を得たのか？ この村にはこの病院以外に、遠心分離機を置いている施設は一つとしてないというのに。

「本で、読んだことがあります」

「そんな専門書を？ 何のために」

恒は上島がそう訊ねてくれたので、勇気を出し、思い切って打ち明ける事にした。母親にすらも話したことのない、恒の人生を狂わせてきた、かねてからの悩みを――。

「こんなこと、信じてもらえるかわかりませんが、ついなので思い切って言います。悪夢を見るんです。夢の中で目覚めると、いつも図書館にいます。果てが見えないほど広くて、迷宮のように連なる本棚には分厚い本がきれいに整頓されて並べられています。出口を探しても、見つかったためしがありません。そこから出る方法はただ一つ、本を読む事だけなんです。一冊の厚さは幅10cmほど。それを一ページずつめくって、順繰りに最後のページまで読まなくてならず、飛ばし読みすると出られないんです。どういう事なのかすべて日本語で書かれていて、一度読むと一字一句理解でき、しかも何一つ忘れることができないんです。表紙には何も書かれていないから、内容を選ぶ事はできません。一度手にした本は最後まで読みます、早くそこから出たいから。毎晩毎晩毎晩、眠るたびにそんな事の繰り返しです。先生、俺の頭はどうなってしまうんでしょう！ 人間は意識と無意識のバランスが保たれていて、眠っている間に調節されるはずですが、でも俺には無意識の部分がありません！ 睡眠も浅くて、いつも体がだるいんです」

この話を一度も医師である上島に相談したことがなかったのは、上島を信じなかったからではない。ただ、こんな妙な状態が続いて

いるのだと打ち明けてしまえば精神病患者扱いをされ、どこかの精神病院へ連れていかれてしまうのではないかと恐れたからだ。上島には殆ど、精神科領域の心得はない。だが恒の抱える問題を、受け流して放っておいてはならないような気がした。

「だから学校に行かないのか？」

「学校で学ぶ程度の事は、もう頭にあるんです……一日で十センチの厚さの本の情報が頭にこびりつくんですから……もう医学専門書だって読めます」

不登校の理由はそれだけではなかった。恒は慢性的な不眠症に陥っており、昼も夜もなく、常に意識が朦朧としていた。他人に辛そうにしている姿を見せたくはない彼は、友人からも大人たちからも離れて、一人になる時間が必要だった。恒は学校に行かず、日中は一人で自宅の裏山に上って辛い一日一日をようやくの思いで過ごしていた。

「学校は、勉強だけを学ぶところではない。賢い君ならわかっているだろう？　ちなみに、君は覚えていると思っっているかもしれないが、人間の頭は全てを記憶できはしない。絶対にどこかが抜けている。だから無意識や意識の狭間がどうか言って、心配する必要はないと思うがね」

「そうでしょうか」

「そりゃ、そうだ。じゃなきゃそりゃ、人間じゃないだろうさ」

「こんな時に、止めてください！　縁起でもありません。あいつ、今どうしているでしょうか」

彼もまた、眠れない夜を過ごしているに違いないと恒は思った。

上島はコーヒーを飲み、茶化するように鼻を鳴らす。

「今頃、風邪ぐらいはひいているかもな」

「それで、さっきの話ですが、図書館の床には等間隔に紋章のよう

なものが彫り込まれています。それが、あいつの持ってた皮のスーツケースの端っこに、彫り込まれてあったんです。だから怖くなりました。遂に現実の世界にまでやって来たのかと思ったから」

「そうか……怖い思いをしたなあ。だが、ならばこそ彼の正体を聞きだして、その紋章が何を意味するのかを知らなければならぬ。ひょっとすると、その図書館の事だって……」

「そうですね」

恒はひとしきり話すと、安心したのかうとうと眠りについた。

悪夢を見ているのか、時折魘されるが目を覚ます気配はなかった。恒の話だと本を読まなければ目を覚ますことができないというのだから、暫くは起きることすらままならないのだろうなと上島は思った。本当かどうかはわからないが、とにかくこの少年はすでに医学知識をすら備えているのだ。そうでなくて的確に静脈だけを選んで自傷することができたのだろうか？ 上島は全く疑ってかかるという訳にもいかなかった。

解析結果が出るのを待つまでもなく、上島はユージーンを人間だとは見なししていなかった。データは取るが、発表のためではなく好奇心に突き動かされてのことだ。そして何より村人の安全を護るためにでもある。これを間違っても学会に発表して公にしてはならない。この秘密は墓場まで持ってゆく覚悟だ。

午前四時半になって、上島はすっかり温くなったコーヒーを飲み干した。

「くそ！」

人間でも哺乳類でないとしても、地球上にいるかぎり、その肉体は大いなるドグマに縛られている。1958年に生物学者フランシス・クリックの提唱した遺伝子のセントラルドグマ（Central Dogma）だ。DNAまたはRNAは肉体の設計図として規則正しく折りたたまれ、細胞の中に居座っているものだ。その地図

を分子生物学というツールを用いて読み解き、系譜をたどれば、どの生物からどの時期に進化したのかすら分かる時代だ。それなのに、彼の細胞から核酸は検出されなかった。これはとりもなおさず、生体分子のデバイスである、タンパク質が合成されていないという事を意味した。

しかしそんなことがあるのだろうか、上島は残りの毛髪を透かし見た。美しい金糸のような毛だ。毛根もきちんとある。だが、その暗号はエニグマ（Enigma）となって、解読されることを拒絶している。上島は不意に日常にぽっかりと開いた、果てしない深淵を垣間見たような気がした。この世界はいつの間に、このように悪意に満ちていたのだろうか。

上島は忌々しげに、まっさらの研究ノートに、普段の意味合いとは違うニュアンスを帯び始めたこの言葉を書きなぐった。

——検体不適正。

＊

翌日はよく晴れた日曜だった。上島は恒を連れて警察に舞い戻ってきた。彼は食事すら出してもらえず、昨日の状態のまま床に転がっていた。排泄だってさせてもらえなかったのだろうが、刑事曰くそれでも平気だったという。失禁をしている様子もないし……どうなってるんだ、と上島は仕方なく傍らに膝をついて語りかける。彼は昨日とは違いすっかりとしていて、何か重大な決意を秘めているようだった。相変わらず、見た目には普通の青年だ。

「おはよう、よく眠れたかね。こちらはあなたのお陰で寝不足だ。あなたのその身体、何でできているんだ。核酸がなかったぞ」

「……勝手に調べて、苦情を仰るのですか」

「まあその話はいいい。あなたは昨日、何でも力になると言ったな。早速役に立ってもらおう」

「解放して下さるなら、の話です」

「それを決めるのはわしらではないんでね。だがあまり印象を悪くするのは得策ではない、違いますか？」

「何です」

彼はどのみち、話に応じるしかなかった。

「あなたが持っていたスーツケースについている紋章、あれは何だ」
「紋章？」

「あれとまったく同じ紋章のある図書館に閉じ込められる悪夢を、恒君は繰り返し見るんだそうだ。それで慢性的な睡眠障害に悩まされている」

ユージーンは困惑したように眉をひそめたのだろうが、上島から見たその表情は、妙なことを言われて困惑しているという類のものではなかった。彼は上島の口から意外な言葉が出て驚いているように見えた。恒は何か知っているかのような彼の表情に、一縷の希望を見出すことが出来、ようやく上島の背後から顔を出した。

「それは、A D A M (アダム・Anti-Dimension A
the neum and Mind-library)、抗界心層
図書館でしょう。まさかと思うけど、そこに入ったことがあるの？」
「やっぱり知ってたんだな！ 毎晩、毎晩だ！ 眠るたびにそこに
いる」

「……アダムの知識は膨大だ、子供が受け入れられるものじゃない」
ユージーンは恒に同情する気持ちが僅かにでてきた。道理で、と
納得もいく。

彼の正体を見破る事ができ、あのような姑息な手を使ってでも逃げなければならなかった。それを思うと彼がユージーンにしたこと

も、ユージーンを謀ったその度量も至極当然のように思えてきた。逆に何故彼を救ってやれなかったのだろうと悔みさえする。ユージーンは縛られたまま上体を起こしたので、上島が手伝ってやった。コンクリートに触れていた半身は、冷たくなっている。山間部の夜は寒かっただろうな、と上島は少々気の毒になった。

「そこは一体何なんだ！ どうやったら俺はその夢を見なくなる！」
「ログインコードとポートは？」

「はあ？」

「分からないのか。では不正アクセスだ。誰かがポートを開いている。ログインコードが解らないと対処のしようがないけど、出る方法なら知っているよ」

「教えろよ！ 本を読まないで出られないんだ」

恒は彼を怯えていた事も忘れ、彼にしがみ付くようにして揺さぶった。いつの間にか入ってきていた刑事が迂闊に触れるなど止めたが、八年分の苦痛から解放されるかもしれないというときに、そんな言葉を聞き入れるものではない。刑事たちは恒を止めず、彼らのやりとりをビデオで記録していた。

「あなたがたはわたしを解放してくれそうもないけれど、苦しめられているなら、言い惜しむものでもない。検索拒否、再検索拒否、退館申請。その三つの言葉を、夢の中で言っただけ。本が読めるってことは意識は自由になるんだろ？ 日本語でいいから、落ち着いて、間違えないように言うんだ。君の意識のリンクは外れ、目が覚めるだろう。本当の意味でね。君は今でも起きたまま眠った状態にあるんだ」

「何のことだ？ 何の話をしている？ アダムとは一体……」

静かに記録していた刑事も、話がどんどん理解できない方向に行ってしまったのでついに口を挟んだ。上島と恒が黙っているという

ようにきつい目つきで振り返ったので、口を押さえる。ユージーンは刑事の方を見上げて、はっきりとこう言い切った。

「正午まで待ってくれませんか？ 名乗る覚悟はできましたから」

「何故、今ではいけない？ 村長も忙しい中来て下さっているんだ。待たせる訳にもいかないんだ」

「どうしてもお待ち下さらないなら今お話しますが、正午までは誰にも信じていただけないでしょう」

「正午になれば、何があるんだ？ まさか爆弾をしかけたとか？」

「物騒なことは何も起こりません。でもそれも含めて、お話しますから」

恒は正午までの間、ユージーンにずっと付き添っていた。刑事たちは、休日だというのに呼び出された挙句1時間も待つはめになった村長の接待に追われているらしかったし、話すと言っているのだから詰め寄ることもないかと考えたらしい。下手に刺激をして、口を閉ざしてしまっただけは元も子もない。

「俺、何となくあなたがそんな悪い奴じゃないんじゃないかと、思いはじめて。ごめん、何もしてないのに、こんな目にあわせて。正体だって、本当は言っちゃいけないんだろ？」

恒はようやく素直になって心から謝罪した。上島は恒とユージーンを二人きりにしてくれた、とは言っても一人だけ警官が見張っていたが。上島は恒に、苦しめられていた自分の運命を克服するようにとだけ言い残して出て行った。ユージーンはそれを見送りながら、大きなため息をついた。恒を責めているのではなく、ただとても疲れたようだった。

「もういい。何故わたしを憎しみ畏れたのかがわかった今、責める気は毛頭ないよ。寧ろ、こちらが謝らなければならぬ。君が夢に見る場所はアダムというオンライン図書館だ。君はログアウトがで

きず、ログインしたままになっているから、睡眠のたびにリセットされてそこに戻るんだよ。ログインを続けたままだと、神経系がそこに割かれてしまい、昼間でも身体が覚醒できない。君は学校に行っていないらしいけど、そんな状態で学校に行くのはまず無理だろうね」

「そうだったのか」

そうは言ったが、恒は恒の身に何が起こっていたのかを理解などできていなかった。眠るだけで繋がるオンライン図書館が存在するとは考えがたい、だが現に恒はそこに閉じ込められていた。

「もしも君がわたしを信用してくれるなら、わたしに触れながら眠ってみるがいい。君の意識に侵入し、ログインコードとポートを割り出してみよう。誰がそんな事をしたのか調べるためにだ。正午までまだ時間があるから、眠ってさっきの言葉を使ってログアウトし目覚めるには充分だ。先ほどのキーワードは覚えているかい？」

「あなたを、信じてみるよ。ちゃんと言葉も覚えてる」

恒は言われるがままユーザの背中に寄り掛かり、目を閉じた。彼のコンクリートに触れていなかった体側の体温は、熱があるのかと思うほどに温かった。睡眠を我慢してできるだけ眠らずにいるのだから、眠るのは簡単だった。それに今日はすぐ図書館から出られるから怖くもない。意識が完全に落ちてしまうなり、極彩色のノイズとともに恒の目の前に、忌ま忌ましい本棚が無限に広がる。恒は今日はそれを一冊も取ることなく、しっかりと心に留めておいた言葉、迷わず吐き出した。

『検索拒否、再検索拒否、退館申請』

ピピッと恒の頭の中で電子音が鳴った。他愛もない電子音だったがそれは心地よく、まるで音楽のように聞こえた。

” 認証。ログアウトしました”

優しい女性の声が、恒の脳裏に響き渡った。フツン、とテレビの電源が落ちたような音がして、恒は目覚めた。彼は本当の意味で覚醒したのかもしれない。恒の意識は冴え渡り、身体の怠さも嘘のように消えていた。壁掛けの時計を見ると、眠っていたのはたったの十分。恒はいつの間にか泣き出しながら、彼を本当の意味で救ってくれたユージーンに飛び付いて揺さぶった。ユージーンはまだ眠っているのか、反応はない。

「ありがとう！ うまくいったんだ！」

ユージーンはまだ目覚めない。まさか、代わりに彼が閉じ込められてしまったのではないかという嫌な予感がした。恒はいつそう強く揺さぶった。後ろで見ていた警官が、よしなさい、と手を出しかけた時、ようやく彼の意識も戻ったようだ。

「おい！」

「聞こえてるよ。少し手間取った。君のログインコードとポートを割り出して封鎖した。コードはAMG9527。ポートは154・27・163・472・008・468だ。もう眠っても、その夢を見ることはないだろう」

「ありがとう。あなたの言った通りにやったら出られたんだ。ありがとう！ 本当にありがとう！ 身体が嘘みたいに軽いんだよ！」
「そりゃそうだろう。どういたしまして」

*

「そろそろ時間だ」

接待に疲れた刑事たちとともに村長が取調室の中に入ってきたが、いささか失望気味だった。何が異形の者だ。普通の外国人ではないかと、村長がそう思っていたのはそれほど長い時間ではなかった。ユージーンは取調室の椅子に座ったまま、おもむろに切り出した。時計の秒針が正午を指すと、繋ぎ目のなかったブレスレットがガシ

ヤンと床に落ちた。一瞬の事だったのでよくは見えなかったが、刑事達は、あれは外せなかった筈だと不思議がった。実際どうやっても外れなかったのを、彼らは取り調べの前に、自身の手で確認していた。継ぎ目がないブレスレットだったというのに……。

「さあ、約束通り喋ってもらおうか」

「わたしは神です」

彼は冗談ではなく、大まじめだった。恒は、こんなに真剣な顔をして今時子どもでも恥ずかしくて言わないような事を、いい図体をした大人の口から聞くことになるとは思わなかった。しかし、この部屋には彼の告白を笑う者は誰もいない。

気がふれている事をアピールして、犯行の際の心神耗弱状態を主張し、責任能力を回避しにきたかと、刑事達は警戒した。だが、上島の耳を疑うような指摘によって既に、彼が犯罪を犯したかどうか、その点について議論すべき段階ではなくなっていた。彼が何をしたか、よりも、彼が何であるかを、どうしても彼の口から吐かせなくてはならなかった。

「もっとほかにマシなことは言えないのか。さんざ待たされてこれか」

彼は呆れ返ってしまった全員を冷静に見渡して、まるでマジシャンがマジックの前に道具をあらためさせるようなしぐさで、手錠を見せびらかした。彼がふっと息をふきかけると、手錠はわけもなく飴のように溶け落ち、腰縄も糸屑のように切れて床に落ちた。一見すればつまらないマジックのようだったが、手錠が本物であると分かりきっていた刑事達は血相を変えた。

そして彼らが手錠に気をとられている一瞬の間に、ユージーンはどうやったのかしなやかな素材の白い装束を纏っていたのである。

それは無縫製で、金糸の刺繍が施されていて、その姿は淡く光に満たされ、頭上には光でできた環状の冠のようなものがある。

仮にイリリュージョニストであつたとしても、厳戒中の警察署の中に、このような衣服が持ち込まれる筈もない。それにその光はどうやって説明をつけるのか？　ここは密室なのだ、トリックを仕掛ける事も出来なかった筈だ。その場にいた全員が、タネのないマジックに怯え、身体をのけぞらせてあどずさつた。

彼は椅子から立ち上がり爪先だちをすると、そのままゆっくりと足を折り曲げ、中空に静止した。この場所だけが宇宙空間になつたかのように足が床についていない。恒はいつのまにか床の感触が消え、その場にいた全員が宙に浮かされているのに気付いた。助けを呼ぶ声も封じられていた。重い風邪をこじらせたように、声がまろきり出なかつたのだ。

逃げる事もできず足をばたつかせたが、あまり意味がないことは分かつていた。きっと彼はその気になれば何だつてするのだろう。中からカーテンをしていたので、外にはこの光景は見えていないし、戸を叩くこともままならない。一瞬の間に、全員が金縛りにあつていた。

「信じてもらえますか？」

はっと目を見張ると、いつの間にかまた、どこから出したのかわからないビリヤードのキューほどの長さの棒切れを握っている。恒はようやく悪夢から解放されたと思ったら、こっちの方が大変な悪夢だと思った。いつからか、夢と現実の狭間に迷い込んでいたのか？

「……………！！」

何のために出した棒きれなのか分からないが、それで殴られなければいい。刑事は何とか気力を振り絞って銃を構えたが、それもズブズブと燻っては溶けて水銀のような水玉を散らしながら床に滴つ

た。黒い水滴がぼとぼとコンクリートの床に染みを作って汚した。

「恒君に見破られてしまって、こうせざるをえなくなりました。名を、ユージーン＝マズローと言います。大声を出さないなら、声を自由にします。声を出せば、署全体に金縛りをかけます」

村長は目を白黒させながらあうあう、と頷いた。喉のいがらっぽさが消え、声が自由になったのだとわかったが、誰も声を出さなかった。これでは命の保障だってありはしない。金縛りにされたまま、喉を握りつぶすだけで殺されてしまうのだから、誰も妙な気を起こしたりは出来なかったのだろう。

恒は宙に浮かされたまま、彼が正午まで待てと言ったのは、力を発揮できるようになる時間帯に差し掛かったからだろうと推測した。正午まで待たずに殺していればこんな事にはならなかったのかもしれないが、今のところ彼が敵なのか味方なのかすらも判断できない。村長の玉屋だけが勇気を振り絞って話しかけた。

「ご無礼の段、申し訳ありませんでした！　ですから、この村から出ていってください！」

「そうはいきません。解放されたいがために姿を顕したのではないのです。わたしをこの村に住まわせて下さい。永遠にとは言いません。しばらくの間です。あなたがたに力を貸しますから、どうかここに置いてください。このとおりです」

自称、神はぬかづいて、杖を床に置き懇願するような姿勢を見せた。そんなことをする必要などないのに、彼は何の躊躇もなく低く頭を下げたのだ。一同は顔を見合わせて、彼が一体何をしているのか理解に苦しんだ。美しい純白の装束についている装飾具が音を立て、確かに床についている。最近の神はこんなに腰が低いのだろうか、などと拍子抜けしてしまった村長が口を尖らせた。

「百歩譲ってあなたが神様だとしたら、何故神様ともあろう方が姿を顕して、我々に頭を下げ許可を求めるような屈辱を？　そうまでして、何の目的があつてこの村に留まりたいのですか？」

「異形として畏れられ、虐げられながらでは、任務に支障をきたすのです。任務とはこの村を庇護する事です、あなたがたにとつても損はないと思います」

「わかりました。この村にご滞在ください」

「そ、村長！」

一体何を言い出すのか、と刑事たちは青ざめた。だがその頃には村長のみならず、全員がその身をもつて理解していた。もし断れば、この力で何をしだすか分かったものではないと。自分たちのみならず、全村民に迷惑がかかるし村全体が壊滅なんてことも十二分にあるうる、そうも考えた。それよりは、最低限の条件をつけて留まることを許可した方が得策だ。対処は後で考えればよいのだから。とりあえずこの場を切り抜けなければ……村長は結論を先送りにしたかった。

「ただし条件があります。まず、村民を傷つけないこと。そして、正体を全村民に明かして下さい。ここはただか三千人ほどの村で周囲から孤立しており、村民の口も固い。大騒ぎになってテレビが来るような風土ではありません。それに信じる信じないは個人の自由です。腕のたつマジシャンだと思う人もいるでしょう、私もあなたを信用する事はできませんしね」

「はい、そうでしょうね」

彼は自身の胡散臭さをあっさりと肯定した。

「あなたの身体の構造だって医者でなければ見た目は普通なのですから。だが、知らないということはお互いにとってよくない。村で何かあれば我々は真っ先にあなたを疑わざるをえないし、あなたが秘密を知る我々を抹殺するかもしれない。それよりは村の神様として、親しまれた方が任務とやらもやりやすいでしょう？　それに既

に村はあなたの悪い噂でもちきりですよ。いかがですか、私が一席設けますから、そこで挨拶をされては」

「……」

ずいぶんと無茶な条件を突きつけたものだ、上島は村長の度量に驚かされた。こんな訳のわからない男にでも、ただでは屈しない。そうであるからこそ、この村の村長に選ばれたのだろう。

「気がすすみませんか」

「いえ……何故かわたしに不利な気がしないでもないですが、わかりました」

交渉成立ということで、一同はようやく地に足をつける事が赦された。生きた心地がしない、とはこのことだと恒は思った。

第1節 第3話 神様、小学校教師になる

村で唯一の寄り合い場、風岳集会所でユージーンの簡単な紹介が行われるのは、通知が行き渡っていないということもあって、翌々週の日曜日になった。

だがそれまでの2週間というものの、村議会にひっきりなしに引っ張り出された彼は、ひたすら神であるという事を証明するために様々な奇跡を行わざるをえなかった。むやみやたらに力を使う事は法制に反するのだが、そうも言っていられる立場ではない。

風岳に留任することと法制を破る事を天秤にかけると、やはり勅令である風岳留任の方に傾いてしまった。

彼は大勢の人間に面と向かって、神として接することが極端に苦手だ。神として信じられない、という以前に人間としても信じてもらえていない、という事は彼自身よく分かっている。胡散臭い男だと思われるのが関の山だ。

最悪、こういう営業をしているマジシャンとしてもいいから早く馴染んでもらって、あまり物珍しげに見ないで欲しいとは願えど、既に噂と疑惑は爆発的な勢いでもって広がっていった、今や道を歩いていても、嘲りの念を込めてなのか親しみの念を込めてなのか、気軽に神様と声をかけられる始末だ。まさか本当に信じてくれている訳ではあるまい、と思っていたが、どうやら信じる人間もいたようだ。

村人の反応は日が経つにつれて、子供を中心にではあるが良好だった。もともと土着の風土として土地神や氏神が多く祀られており、

それに関連した神話も多く残されているものだから、神という存在への違和感が薄いのだそう。勿論実物を見たのは初めてだろうが、そんな事もあるって村人に馴染んでもらうためにもうけられる二週間後の宴席など、今更必要ないかのようにも見えた。

この間ユージーンが最も心をくだいたのは、各宗教方面への配慮だった。この村には仏教、キリスト教、神道など雑多な宗教が根付いている。最初はどの宗教家にも、はなから相容れない存在として突っぱねられたが、力を示し、自分は神という生物種であるだけで宗教とは無縁の存在であり、これまでの宗教を否定するものではないと言って丁寧な話をするのと分かってもらえた。

これを各宗教の代表者と宗教サミットのように延々3時間も4時間も話しあった末、酒の酔いも手伝って意気投合した神主が総代会にかけあって、社務所をユージーンの仮の住まいとして貸し与えてくれることになった。その代わり、参拝に訪れた村人たちに力を貸して欲しいという条件がちゃんと付いていた。

「短い間ではありましたが、お世話になりました」

「おう、近々賽銭持って参拝に行かせてもらおうよ。孫が七五三なんだ、達者で暮らせよ」

警察署長が、花束など渡しながらそんなことを言った。

「わたし、祭祀とかできませんけど」

そういうのは宮司にお願いしてもらいたいものだ、とユージーンは思った。

「いいって、いいって」

ユージーンはようやく、決して居心地がいいとは言えない警察署の保護室から引っ越して、生活道具と寝具の一式が揃っている社務所に腰を落ち着けることとなった。藤堂 恒はこれまでの態度を悪いと思っただけ、役立つものから下らないものまで毎日のように

差し入れを持ってやってきて、暫く嬉しそうに雑談をしては帰っていった。

そんな日々が続いていたある日のことだ。ユージーンは話疲れた恒が帰ってゆくのを見送ると、ウェブが圏外となっている携帯を掴んだ。手馴れた動作で電池カバーを開け、電池パックを裏返して挿入する。そのまま再起動すると、GLネットワーク ポータブルという鮮やかな起動画面に切り替わった。更にディスプレイに指紋のない指を押し付ける。これは個別認証システムではあるが、彼の指紋を読んでいるのではなく彼の身から発せられるアトモスフィア（A t m o s p h e r e…化学的環境）を認証しているのだ。

この化学的環境は神によって構成も色も違うので、指紋に代替するものとして神々の社会、神階しんかいで一般に用いられていた。先程は何の変哲もないD o C a M o製の最新携帯だったはずだが、画面の中は似ても似つかない複雑怪奇な構造になっている。

ID確認を終えると、携帯画面の右上に電波圏内にいる事を示す接続中という文字が表示された。アクセスエリアは風岳村との文字が点滅しており、陽階ようかい 7位 ユージーンⅡマズローと認識された。

こういう一連のしち面倒くさい手続きを踏む事で、不正に誰かが利用できるようなシステムになっている。ユージーンはアドレスに登録されたS n F O 2 G I Eという暗号を選択し電話をかけた。通話の相手を推測されないよう、名前も暗号で登録しているという周到ぶりだ。

彼は職業柄、それは用心深い神だった。

電話の相手は響ひびき 以御いおんという男だ。彼はユージーンの雇用する大勢の使徒達のうちでも、秘書官のような役割を果たす、第一使徒と

呼ばれる責任ある立場にある者だ。

ユージーンは神だとふれたが、それに伴い使徒、広く知られた言葉では天使も大勢所有しており、その数は22万名にも上る。何故彼の所有する使徒数が一つの市の人口にも匹敵する数になってしまっているのかは後に説明するとして、とにかく以御という使徒は、その中でもとりわけ秀でた才能と十分な実力を持つ者達、十大使徒のうち第一位を務める者だ。

第一使徒は神の代理者として、神が不在の際の一切の任務を引き受ける。今回の風岳への着任とともに、以御も彼の代わりに執務室の椅子に座り、彼とまったく同等の職権を以って仕事をこなしている筈だ。以御はすぐに電話を取った。彼は三コール以内に電話に出る。

執務机に座っているという証拠だ。

『俺だ。ユージーンか？ あんた早速法務局から違法通知が出てるぞ』

「そうだろうね。正体を明かしたんだから。まったく、散々だよ」
しかし村民に正体を明かす以外に方法があったかというところ、なかったといえる。ユージーンは警察に逮捕されて今にも殺されそうだったし、ブレスレットのおかげで力も出せなかった。

『予定をいい意味で裏切りこそすれ、失態などなかったあんたがまた、珍しいな。まあ違法通知は極陽が握り潰してくれたから心配するな。しかし今回の任務の目的は何なんだ？ 任期終了日まで風岳村の警備だと？ 過疎村に枢軸を降下こうかさせてまで、一体』

「それを自分で調べよと仰るのだろう。早くも不自然な点が出て来た。今から言うログイン情報をADAMで調べて欲しいんだ。ナン

バーは……」

『それがどうかしたのか？ 何故他神のアクセスコードを取得してるんだ？ おい、また違法かよ！ やらかしてくれたな……どうしたんだ！ しっかりしろ！』

以御が慌てるのも無理はない。彼が気色ばむ様子が、受話器越しに伝わってくるようだ。アクセスコードは一柱につきひとつ割り当てられている。他の番号を知っているというだけで、ハッキング行為を行ったという証明になるからだ。以御の脳裏では今、他神のアクセスコードのハッキングによってユーザーがくらう量刑を考えていることだろう。

「違う、このIDは神のものでも使徒のものでもないんだ。これは人間の少年が8年前に強制ログインさせられていたものだ。それ以来少年はずっとログインの状態にあった。こんな残酷な事をした者を突き止めたい」

『ADAMの知識を人の子が8年間も受け続けただと？ そんな事ができるのか？』

「少年は生きるために受容してきた。可哀相に……一冊で人間の一生分の脳領域を使うというのに。わたしはこれを行った者を許さない」
『本当か？』

「何が」

ユーザーは片手で社務所のポットの湯を沸かしはじめた。村人からの差し入れもあって、生活に不自由することは今のところ何もない。今日も恒たちが必要以上に茶を飲み干して、湯がきれてしまった。しかし不登校児として有名なあの子は、まだ学校に行っていないのだろうか？ 今日はまだ木曜日だったはずなのだが、とユーザーは恒が心配になる。

夜になると、恒の仲間の少年少女たちが毎日毎日すし詰め状態になって押し掛けてきた。ユージーンが最初に出会った少女もやってきた。石沢^{いしざわ} 朱音^{あかね}と言って、恒のクラスメイトだということも判明した。子供達は一生のお願いですとか調子のいい事を言いながら、明日が提出だという期限の差し迫った宿題ばかりを持って来るので、仕方なく教えている。

毎日一生のお願いだと言っているのだから、今度日本語の使い方を教えてやらなければならない、などと思い、教師でもないのにと苦笑する。ユージーンがよそ事を考えているのを察した以御は、珍しく生真面目な彼が任務以外の雑事に気を取られているという事に驚いていた。

『その子供は人間なのか？ 不可能だ。使徒は勿論、神でも持て余す量だ。となるとその子供にはファイルの圧縮か削除の技術があるんだろう。だが習得もせずそんな事は人間にはできない。絶対にだ』
「以御。わたしが少年を人間かそうでないかの区別もつけられないと思うのか」

『そうは言っていないだろ。でもあんたは テトラ・スパイラルシーケンサ (Tetra Spiral Sequence…四極螺旋解析装置) で調べた訳じゃない。神の中には稀にだがアトモスフィアの薄い方もいるぜ』

テトラ・スパイラルシーケンサというのは、遺伝子を司る神、岡崎^{おか} 宿耀^{しゅくよう}の所有する遺伝子解析装置だ。人間の遺伝情報を瞬時にして読み取り、その遺伝的優位性、欠陥、疾患や性格、病歴に至るまで全ての情報を暴き出す。

「現実的ではないな。彼が神か使徒なら何故神階が把握しないんだ。それに、万が一にも使徒の線はない。神が傍らにいないくらいも

生き延びられるのか」

『どうかな。俺ならその子供、只の人間じゃないと思うけどな。普通に考えてだ。まあアクセスの件は調べておくとするよ』

電話は勝手に切れてまたDoCaMo製の画面表示に戻った。一回の通話ごとに、セキュリティロックがかかっている。神の携帯電話の番号が周知されるという事は、絶対にあってはならないことだ。一回通話することに通話記録は暗号化され、再ダイヤルすらできないように設計されている。面倒だが、必要なことだとユージーンも思っていた。

それにしてもあの少年は人間だと断言してみたものの、以御にそう言われると自信がなくなってきた。使徒の線はまずない、そう言えるのは使徒という生物種がその生来の特性として、身体の重要なシグナル伝達物質を欠損しているが、まさにその物質は神体で大量に合成され、アトモスフィアの中に浮遊している。つまり神の傍らにいれば、半月とて生きてゆけないというわけだ。二択で単純化するのはいさかい事だが、だとしたら彼は神なのだろうか。

この数日でユージーンはよく分かったが、彼の身体能力は確かにずば抜けているし、知力も話した限りでは相当のものだ。

でも……そんな筈はない。

そんな馬鹿な事があつてたまるか、とユージーンは首を横に振る。

藤堂 恒が神であつて神々に気付かれる事なく人間社会に紛れ込んでいる、そんな馬鹿げた事が発生する確率は、宇宙から隕石が落ちてきて、それが一人の人間に二つも当たってしまうほどあり得ない。だが、何故彼は神々の図書館に監禁されていた――？ 疑問は残る。恒は悪夢から解放されたが、それは本当の意味で解放した事にはならない。犯行を行った者を突き止め、法の審判を受けさせる

までは。

……頼んだぞ、以御。

彼は無責任にも、心の中で最も信頼のおける第一使徒を激励した。

＊

ユージーンはそんなもってもらしい事を考えながらも、日中ぶらぶらしている訳にもいかなかった。

人たちは日に日にユージーンを信じるようになってきて、お祈りだといって参拝には来てくれたし、恋愛相談や人生相談をもちかけてきたが、具体的に何か力になってくれと頼みにくることはなかった。

彼らはユージーンを土地神か何かだと思っているようで、あまり霊験を期待していないという、がっくりくる理由もあった。

唯一絶対の神という概念は、西洋やアラブ系の文化だ。

この村の人間にとって、神とはもっと身近で非力なのもしれないな、とユージーンはひしひしと感じている。参拝に来てくれるのもきつと、神は人々の信仰によって力を得るものであって、人間が毎日お参りをしてやらないと力が出ない、という昔ながらの発想に基づくものだ。

村人たちはユージーンに何の力も期待していないというのもあったし、力を必要とする場面がないというのもあった。この村は平和で、何もわざわざ神の厄介になるような事などなかったのだ。だが彼は村人の力になると約束してしまった以上、何もせずニートの真似事などではしなかった。

今日も恒がやってくる前に、簡素な私服に着替え、デニムを穿いて首にタオルを巻いて田舎風のいでたちに着替えた。

ユージーンがやってきたのは果樹園を営む近くの農家だ。腰の曲がった老婆がほっかむりをして、丁寧な雑草を取っている。老婆はユージーンの姿を認めると、すっかり顔なじみのように手を振った。

「あの。お手伝いしましょうか。雑草とりでも」

「や、神様。草むしりですか？ 間に合ってるかといいたいけれど、それじゃかえって困るんでしょう」

老婆はユージーンのおかれた状況をよくわかっている。

「はい。皆様のために力をお貸しすると、約束しましたから。でも、あまりにも依頼がなくて」

「神様が人間をどう思っているかはわかりませんがね、人間が神様の力を借りたくなるような事ってのは、一生のうちに何度もないものです。人間の欲望は果てしないと思っていましたか？ ふふ……：……そうですか。特にこの村の人間は、あまりがめつくもなくて、のんびりしているんですわ」

この老婆は、ユージーンが神だと心の底から信じているのだろうか？ 信じなくていい、とユージーンは素直にそう思う。彼は神であるとな乗れそう扱われることを、どこことなく恥ずかしく思っていた。この村で人間のふりをして生きてゆけるのなら、その方が断然よかったとすら思う。

人々が期待しているほどに、神々は全能ではなく、また人々が期待しないほどに無能でもない。要するにこの中途半端さを詳らかにしなければならぬことが、ユージーンはたまらなく嫌だった。老婆の畑仕事の手伝いをするこぐらいが、今できる最大限のことな

のだ。

「このまま仕事がなくては、ただの厄介者です」

ユージーンが傍らで人々の無欲を嘆いているので、仕方なく老婆は軍手をよこした。

二人はなかよく並んで、時折会話をしながら雑草をむしっている。

村長、玉屋と村の参事が、遠くに着けた車の中から草むしりをしているユージーンと老婆の姿を見つけた。村に留まらせてほしいと懇願してただけに、どう暮らしているのか気になってしまつて、毎日社務所の周囲を必要以上に通っている。彼は村人達とうまくやっているのだろうか、とてもそうは思えなかった。

「神様がまた、草むしりしていますね」

「……さすがに気の毒になってくるな。何かしかるべき仕事はないのか？ この村は自営ばっかで、人手もいらないし、やっぱり果樹園やなんかの手伝いになるんだろうなあ」

彼の性格は朴訥としていて、よく話してみると謙虚で素直だ。

長期間滞在するというのなら、もっとよい仕事をさせてやりたい、と玉屋は考えていた。村役場の仕事はただでさえリストラが叫ばれているのにこれ以上定員は増やせないし、かといってこんな山村では農業以外には、これといった職業も成り立っていない。見るからに若ぶりのユージーンは体力がありそうだし、真面目に働いてくれそうなのでそれなりの仕事があればよいのだが……。

「実は、いい仕事がありました」

「本当か!？」

「小学校の臨時採用教師というのはいかがでしょう」

「戸籍もない神様が、文部科学省管轄の小学校にだなんて笑える話だ」

本当にふざけた依頼だった。うかつに彼に話しても、教員の資格がなくがっかりするのが目に見えている。

「教諭補佐ということのなら、臨時採用のアルバイトでもいいでしょう」

「へえ、空きがあるのかね」

「吉川先生が担任をやめたいと言いつ出したそう。ほら、あの藤堂恒の受け持ちクラスの若い担任ですよ。その点、恒にも一目置かれていてる神様なら、適任でしょうし。雑草とりよりはましかと」

玉屋は担任の吉川をよく知っていた。村で噂の美人教師だ、人柄もよく子供達にも慕われている。

「ふむ。悪くはない。だが気に入って下さるかどうか」

「実はこの話があったのは、小学校側からなんです。子供達が神様の話ばかりしているからと言って。それに、夜は勉強を教えてもらっているですよ。この村、塾がないから塾がわりになつてるんじゃないでしょうか」

塾というより、狭い社務所の中にぎゅうぎゅう詰めになっている様子はまるで寺子屋のようだった。夜遅くまで子供達が押しかけて、彼も大変な思いをしていることだろうと常々思っていた。

「どうか。塾だなんていつて、堂々と夜遊びできる場所になつているんじゃないか？ まあ、神様だという事を考えなくても、日本語が流暢に話せる外人だからなあ。子供達に人気も出るだろう。小学校か……打診してみようか。村人への紹介が終わったら、着任していただくということ」

ユージーンはいかがわしい神通力を使うこともなく、地道に彼の手で丁寧な雑草を取り終わると、老婆がねぎらいの麦茶と、タッパ―に詰めた煮物を渡してくれた。かえって気を遣わせてしまったかなと彼は反省するが、彼ができる村人への手助けは、今はこのぐら

いしかない。

「そんなに気を落とさないように、ね。これ、お豆！ 持って帰って下さい」

「ありがとうございます。また、雑草が生えたら呼んでくださいね」
老婆の営むこの果樹園は、無農薬が売りなのだそうだ。これから夏も本番となるし、雑草はまたすぐに生い茂るだろう。老婆はここにこと見送った。

「お疲れ様」

老婆と別れ、不意に後ろから呼び止められたユージーンは振り返り、へこつ、と小さくお辞儀をした。 実は村長とは毎日のように電話で話している。

何か必要なものを用立ててくれたり、便宜を図ってくれているのも彼だ。思えば彼がいなければ、この村に受け入れられ、留まることすらできなかったかもしれない。全村民に正体を明かすという条件さえつけられなければ、とは思うが、彼には頭が上がらないといったところだ。

「こんにちは」

「どうですか。村の暮らしは。スローライフもなかなかいいと思うんですが、さえないお顔をされていらっしゃるようですね」

さえないというか、困惑顔だった。

「あまり、仕事をいただけないものですから。当然だとは思いますが」

よろず屋もいいが、何しろ仕事がない。この調子で本当に仕事がないというなら、彼は当初の予定通り村の測量と地質調査をしようと思っていた。何をするでもなく村でぶらぶらしているわけにもいかない。風岳村の地盤は脆弱で、地震が起こるとすこぶる弱い。防災のための補修工事や、各民家をまわっての耐震調査などの基礎的

な資料を作り、自治体に提出しようと考えていた。もちろん、ボランティアでだ。

彼は定期的に、神階に提出するための活動報告書を作らなければならない。とにかく、ボランティアでも何でもいいから、何か仕事をしなければならぬのだ。

「ちようどよかった、小学校教師をしませんか？」

「え？ 教師ですか？」

「教員免許なんかは気にしないでいいですから」

資格がなければ教壇に立つてはならないものだが、この大らかな村にはそんな事を気にする親もいなかった。

「持っています、日本の教員免許。小、中、高校の。でも……」

「本物ですか？」

何故そんなものを取得する必要があったのか、よりによって日本の教員免許だなんて、という疑問は玉屋には起こらなかった。神なのだから、きっと何でも持っているのだろうと納得した。もつとも、戸籍だけは捏造しているに違いないが。

「はい。四半世紀前にとったので49歳だということになっていますが」

「そういえば失礼ですが、年はおいくつで。二十歳かそこらにしか見えませんか……」

「正直に申しますと、181歳になります」

「えっ！」

玉屋は信じられないと思ったが、この場でそれを問いただすのも不毛だ。彼が何歳であっても、人智を超えた力と身体を持っていた、神だと名乗っている事実が変わりはない。何歳でも不都合はなかった、書類上では49歳ということになっていても、戸籍上未成年だ

ということになっているのでなければ。

「そうですか。ところで例の件……」

「お引き受けします。皆様がそれでよろしいなら。でも」

先ほどから彼は逆説をつけたがる。何か躊躇するような懸案があるのだろうか。玉屋は顎を突き出し、口を尖らせた。仕事を斡旋しただけでも感謝して欲しいところだ、何か注文をつけるつもりなのだろうか。

「でも？」

「学校とは信頼できる教師に子供を預ける場です。わたしのような者が、よいのでしょうか。保護者の方も心配なさるでしょう」

石を投げられても不思議ではない。大事な生徒を預かる学校に自称神様教師など、これほど怪しい男はいないと、彼も客観的によくわかつている。

「問題になれば、検討すればよいでしょう。あなたの手腕で何とかして下さい。神様なんでしょう？」

「チャンスを下さってありがとうございます。わたしは差し当たり五年の任期がありますので、仕事をただけて嬉しいです。勿論無償でご奉仕させていただきます」

玉屋は苦笑する。

「無償なんて、何のために仕事を紹介したんだか。きっちり仕事をしていただければ、正当な賃金をお支払いいたしますよ。いくら神様でも、生活費の工面もありますでしょう」

彼にとって仕事とは、どうやら生計を立てるためのものではなかったようだ。彼は、金ならそれなりに貯金があるのだと言った。

「本当に無償でかまいません。皆様のご厚意で住むところまでいただいたのですから、何かご恩を返さなくては」

「へえ。義理堅いんですね。とにかく、今はお耳に入れただけです。

正式に着任していただくのは、村人への紹介が終わった後になります」

どうせ手が空いているのだから、小学校教師も悪くないかもしれない、とユージーンは少しだけへこたれていた背筋をしゃっきりと伸ばした。

＊

ユージーンの紹介の宴席はあれよあれよという間に参加希望者が千人を越え、風岳集会所の中には収容できず、いつの間にか大掛かりな祭の規模にまで発展してしまった。

当日は出店屋台も出て振る舞い酒もあるそうだから、人手の予想がつかないといったものだ。村外には口外無用の回覧板を廻してはいたが、この盛り上がりようである。村外の親戚などの係累から、少しずつ話しが漏れはじめているかもしれない。当日は花火などの騒々しい演出は押さえなければならなかった。祭りばやしなどもつてのほかである。

ユージーンは彼の上司から、もし任務に差し支えるようなら、その枢軸権限においてしかるべき措置をとることを許可するという神具起動の承認を受けていた。神具しんぐというのは、文字通り神々の行使する特殊な道具である。人々の自然な営みに神が積極的に干渉する事はあまり好ましくはなかったが、時と場合による、致し方ないとユージーンは腹を決めた。

このままの勢いで噂が広まるようでは、神具の起動は避けられなくなっている。日が経つと共に事の重大さに気づいてきたユージーンは、風岳村の地図をインターネットからダウンロードして、深刻

な面持ちで睨み付けた。村長が提示した滞在の条件はこの村の全村民に正体を明かす事だが、村外の住民にまで明かす義務はないのだ。

彼は地図の縮尺を定規とコンパスではかり、複雑な計算式をパソコンにプロットし、それを例のビリヤードのキューのような形をした杖の端っこに繋いだ。たつぷりと1時間をかけ入力したのは、村外に出ると自分の事をすっかり忘れてしまうという広範囲マインドコントロールプログラムだ。

神階では慣用的に、省略してMCF（マインドコントロールフィールド・Mind Control Field）と呼ばれている。ユージーンの仕事の性質上、エリアを指定してマインドコントロールをかける事は多々あったが、複雑な地形をこれほどきっちりプログラムしたのは初めてだ。

ユージーンのアトモスフィアと神具を媒介とし、特殊な電磁波で人の神経系を制御するMCFシステム自体は、人体に何かしらの害があるものではない。携帯やパソコンの発生させる電磁波より微弱で安全なぐらいだ。日本の厚生労働省の何倍も融通のきかない神階の厚生労働局によって厳密にシステムは審査され、足かけ二十七年で認可されたのだから、その安全性には定評がある。

よって、ペースメーカーを埋め込んでいる人がどうこう、という問題にはならないしまった試しもないが、やはり神が人の心を操るようでユージーンの心情的にも気持ちのいいものではなかった。彼は今日何度目かになる、深い溜息をついた。

" 本意ではないが、あの日にやるしかない "

*

約束の日曜がやってきて、風岳村夏季親睦会という適當過ぎる程適當な名前がつけられて、夏祭りのようなその宴会は始まった。

寄付金が大半だが村の予算を使うのだから、報告する際に間違っても神様歓迎会などとふざけた事は書けないのだ。玉屋はあとあとの事も考えて、村おこしも兼ねたこの会を開催していた。そんな玉屋の配慮も知らず、子供たちはずらりと並んだ屋台の食べ物に夢中だし、普段から酒びたりの青年会がすでに出来上がってしまったている。

会場となった公園の入口には村の役員が入念な入場制限をかけていて招待葉書をチェックし、一人たりとも村外の間人を入れないように監視していた。ユー・ジーンも勧められるままに日本酒をいただくながら、村人たちの挨拶に応じていた。お神酒だとかいって注がれる酒だが、もう何升飲まされたことだろう。

「まあまあ、もう一杯だけ、いいじゃないですか！　飲みっぷりが悪いと、この村には馴染めませんぜ」

「この清酒なんてどうです？　これはとても珍しい銘柄で」
蘊蓄が長々と続くのに負けた。

「はあ……ではもう一杯だけ頂戴します」

酒自体で酔うことはないが、水っ腹になってしまわないかとユー・ジーンは心配だった。彼はどんなにその人と面識がなくとも、直接会って顔さえ見れば、どこに住んでいる誰の誰べえなのかぐらい分かった。

そうとは知らない村人は、続々と列を作って自己紹介の挨拶にやってくる。どこを見渡しても人ごみだったが、今日の人出はやはり千人を超えるそうだ。今のところ、村外の者の顔は見えない、村役場の役員たちに感謝といったところだ。7時になると、まず舞台に

上がった村長が開会の挨拶をし、ユージーンを紹介をした。

「こちらが、先週から当村に着任されましたユージンさんです。あれ？ 着任って何の着任でしたっけ？ まあ、まあ、いいです。細かい事はまたにしましょう。このお方は、既に皆さんご存知かもしれないませんが、神様です。信じる信じないは皆さんにお任せしますし、信じなくても構わないそうです。当面の間、風岳神社社務所にてお住まいになられます。今日こうして神様を紹介させていただいたのは、皆さんに神様の本当のお姿を知っていただき、決して畏れ奉るような方ではなく、とても気さくな方だと分かっていただきたかったからです。どうぞ親睦を深めていただければと思います」

ユージーンはマイクを渡され、壇上に上がった。既にどよめきと拍手が沸き起こっているなか、深々とお辞儀をした。

「こんばんは。高いところから失礼致します。突然お邪魔致しまして申し訳ありません。本日はこのような会を催していただき、恐縮の限りでございます。わたしはユージンⅡマズローと申しまして、若輩ながら神を名乗っております。とは申しまして、見た目もこの通り人となんら変わるものではありませんし、どうぞお気遣いなさらずお気軽にお声をかけてください。わたしは全能でこそありませんが多少の力があり、皆様のお力添えができるかと思いますので、お騒がせいたしますが以降この村に滞在させていただくこと、平にご容赦ください」

ユージーンは丁寧すぎるほど丁寧な挨拶で締めくくると、また深々とお辞儀をした。日本人を馬鹿にしているわけではないが、日本に滞在しているときは特に、なにかにつけ礼をするよう心がけていた。拍手と歓声は夜空に響き渡り、暫く鳴りやまなかった。

「神様は偶然にも教員免許をお持ちとの事で、来月一日より、風岳

小学校にご勤務いただきます。本当、何で持っていらっしゃるんですかね？ ……まあそういう事情で、担当のクラスは5年2組になるそうです。村民を代表いたしまして、どうぞ児童たちのご指導のほどお願いいたします」

ユージーンのクラスに当たった子供たちが文字通り飛び上がって喜んだのは言うまでもない。

知り合いがテキ屋を出しているということで誘われやってきた吉川 皐月は、まさにその話を聞いて驚き、酒の酔いも手伝って、後先も考えず舞台袖に駆け寄った。吉川は普段のぴしとしたスーツではなくラフなジーンズを穿き、サンダルにデザインTシャツという素朴ないでたちだ。栗毛色の髪の毛をアップにしてトップにおだんごをつくり、赤いフレームのメガネをかけていた。

吉川 皐月、彼女こそが5年2組の現クラス担任である。

運営スタッフ達は皐月のことをよく知っていたので、特別にユージーンの控え室に通す。控え室といっても、おんぼろの仮設テントなのだが。

「あ、あのっ」

皐月は壇上から降りてきたばかりのユージーンと面と向かうと急に怖気づいてしまったが、声をかけてしまったので今更後にはひけない。ユージーンは誰かにリクエストされて着ているのか、自分で用意したのかわからないが、いかにもといった白衣を着ており、それが見間違いではないとはっきりわかるほど、暗い中でも明るい光を湛えていた。

スポットライトが当たっているのではない。

皐月は国立大学の理系学部出身で、この世のあらゆる現象はその原理を理解することができると思っていた。だが人が発光するとい

う現象は、科学の常識では考えられない。つまりそれは、可視できるまでのエネルギーを持っているという事だ。物体は励起されると発光するが、この人は何に励起されて発光しているというのだろうか。

皐月はこのイベントをただのマジックショーぐらいにしか聞いていなかった。村をあげて大々的に神であると公認し、後任にまでなるなどとは初耳だ。

「はじめまして。吉川皐月先生ですね」

皐月は名前を名乗ったことも面識すらもなかったので、あっさりと知らない筈の名前を呼ばれ、尚更恐ろしくなった。きゅっと肩をすぼめたので、ユージーンは申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめんなさい。驚かせてしまいました。お顔を拝見すれば、お名前はわかるのです」

「そ、そうですか」

皐月は驚いた後で少し冷静になって考えた。このタイミングで会いに来る、この年代の女という手がかりから吉川 皐月という名を推測したに過ぎないのではないか。何のことはない、他愛もないことだ。

それにしても、まだ辞表を出した訳でもないのに、こんなに早く後任が決まってしまうって、あろうことか自称神様の変人を雇ってクラス担任を任せようとしているだなんて。いくら彼が教員免許を持っているからといってもあんまりだ。よほど自分が頼りないからかしら、皐月はそう思い詰めた。何を言いに来たのか、皐月は自分でも分かっていなかった。その代わり口をついて出てきたのはこんな言葉だ。

「私がいなくなっても、生徒たちを、よ、よろしくお願いします。」

皆とてもいい子で」

皐月はもうやけになって、涙ぐみながらユージーンの手を取って握り締めた。温かで大きな手だ。発光しているのだから熱いのかと思ったが、体温は人よりだいぶ温かいぐらいで、熱いとは感じない。どうなっているのだろう。この人は、夜光塗料でも全身につけているのだろうか。ユージーンは皐月の言葉が意外だったのか一瞬絶句し、思わせぶりに首を振った。

「わたしはあなたの補佐、副担任として着任して欲しいと言われているのです。あなたが担任なのですよ。どういう意味ですか」

「えっ」

「至らないと思いますが、よろしくお願いします。吉川先生」

ユージーンは村長に呼ばれたので、皐月とまた握手をすると、そくさと舞台上が上がって行った。皐月は優しく握られた手をぼんやりと見つめた。

一体、何だったの？ 副担任なんて、小学校にはなかったはずだ。……あの変人が神様である筈はないけれど、本当の神様が私の今の状況をなんとかして下さるために、この試練を課したのかもしれない。

皐月はそう思いながらその手を自分自身の決意で、きつく握りしめた。そうと決まればできるだけ早いうちに、化けの皮を剥がしてやらなければならなかった。そうでなければ子供達がヘンな宗教に勧誘されてしまったり、何かと悪影響が出かねない。

この世界は秩序という美しい物理法則に則って営まれているものであり、決してこのような変人が神を名乗ってはならないのだと証明しなくてはならない。どんなトリックを使っているのかしらないけど、必ず見破ってあげるわ、と彼女は再びステージに上がった彼を見上げながら、そう意気込むのだった。

＊

恒はその頃、あれほど楽しみにしていた祭りに出かけることもなく、身の整理をしていた。荷物はそれほどなかったし愛着のあるものもなかったので、荷造りに時間がかかることはないのだが、無益な考え事ばかりしていて結局だらだらと時間を無駄にしている。

荷造りをしているのは、隣村にいた母親が、神戸の親戚のもとに身を寄せることになり、それに伴い、恒も親戚に厄介になることになったためだ。母親の病がいつこうに回復しないことを心配した親戚が、巷で話題の名医を紹介してくれるとのことだ。

彼の母親の病には病名すらつかず、悪化の一途を辿っていた。自己免疫性疾患の一種なのだそうだが、どの疾患にもカテゴライズされない難病なのだという。ADAMの叡智を受けた恒とはいえ医者ではないから、母親に対して出来る事など皆無に等しい。恒の出産直後に母親の侵されたその病が、いつも恒の良心の呵責となっていた。

母さんは俺を産んだばかりに、病気になったんだ……。

自分など、生まれてくるべきではなかったと思わない日はなかった。だから自分はその罰として、いることが絶望でしかない図書館に閉じ込められ、そして眠ることすらままならなかったのだと、恒は強引に結論付ける。恒には父親もいない、望まれていない子供だということも百も承知だった。恒は賢明であるがゆえに彼の命の価値というものを見出すことができなかった。夢や希望にあふれていべき少年時代を、彼は絶望のうちに過ごした。

”死んで母さんが助かるなら、死んでもいいかな”と、そんなことを考えた夜もある。自分は決して救われてはならないのだと、彼はそう思った。そうでなければ、この絶妙なタイミングで神戸への転居の話などくるものか。失う事しか知らなかった恒に希望をくれたあの青年から、かくも早く引き離されてしまうのもきつとそうだと思い詰めてすらいる。

もう少しだけ。例えば一ヶ月でも二ヶ月でもユージーンと共にいたかった。

まだ知りたいことや学びたいことがたくさんあった。そうは思えど、母親の病気が折角治る機会があるかもしれないのに、我儘を言っただけで一人、村に留まるわけにもいかなかった。急な話だったのでかえのない仲間達にも、何も告げずに去ってゆくのがいいだろう。

どんな顔をして別れを告げればよいのか判らないし、引き止められるのが分かっているので仲間には会わずに行きたい。それでももう一度だけ、ユージーンには会ってから行こう。神だと言っているのだから、夜分に訪問したぐらいでどうこう思いはしないはずだ。もうすぐ祭りが終わる。そうしたら、行くんだ。

彼はそう決心した。

＊

祭りも深夜を過ぎ、村人たちは三々五々帰途について、ユージーンは村人たちに挨拶をして帰途につくそぶりを見せながらも社務所ではなく小高い丘の上に登っていた。そういえば、恒の姿が見えなかったな。などと思いつながら土産にもらった饅頭を口の中に放り込む。恒の分ももらったから、明日にでも届けてやろう。

村人から恒についての話も耳にした。

恒はうまれてこのかた、悪童として村人から疎まれていたそうだ。頭はとても切れるが言動が不可解で、およそこの世の全てに向けられているかともいうようなやる瀬のない失望感からか、大人というものをも全く信じようとせず、子供達を率いては非行のかぎりを尽くしてきたのだという。

……非行とはいっても、小学生のすることだから結局大した事ではないが、恒に影響された少年少女たちが門限を守らない、無断外泊をするなど、この年頃の子供を持つ親としては頭の痛い問題を撒き散らしてきたそうなのだ。

おまけに恒は万年不登校児で、恒の真似をして不登校になる子供もいたりいなかったりした。更に悪い事に、彼には学校に行けと叱ってくれる親らしき存在がいないのだ。親がいないのはともかく、ユージーンからしてみればA D A Mとの接続が切れない為に心身的不安定になってしまった者に多く見られる現象だと思うのだが、そんなフォローもできはせず、話だけ聞いておいた。

今や恒はA D A Mとの接続を切られて正気を取り戻し、それ以来特に非行少年のようには見えない。

優しい子なのだという事もわかってきた。ユージーンとしてはたった十歳の子供が不断の苦痛に苛まれてきたのだから、普通に生き延びてきただけでも誉めてやりたい。

ともあれ恒のためにも、彼のあまりにも失墜しきった信頼というもの回復し、村人から白い目で見られることのないようにしてやらなければと思った。恒はA D A Mから得た知識を活用して、学者か医者になりたいと言っているが、このまま不登校を続けているようでは学歴もなく、夢も叶わなくなってしまうだろう。

やはり彼を学校に行かせなくてはならないらしい。
それが彼にとってどれほど退屈な場所であろうとも。

そんなことを考えているうち、丘の上まで登りきった。

この丘は村の北東にあつて、下の集落からは見えにくくなっている。夜空には星がくっきりと見えるような快晴の夜空で、喧騒から解放されて丘の上の新緑の草木を撫でる風が心地よい。人目につかない場所がよいと思って、この場所を起点に入念に行われた全てのシュミレーションを完成させてきた。

今日どうしても実行しておこうとしたのは、人間が心身ともに疲労している時ほどマインドコントロールが効果を発揮しやすいからだ。体調のよい時より、今夜のように酒気を帯び、夜更かしをして疲労困憊となっている時の方が効果的なのだというデータがある。それも村の半数以上の人間が疲れきっているという日など、今日において他はない。いつものように愛用の杖をどこからともなく取り出すと、ユージーンは集中を高めた。最初のコマンドワードを冷静につむぎだす。

”Grasp the context by analytic
algorithm (G-CAM)・Open.”
(分析的宇宙 依拠 現象把握機構 G-CAM、展開)

ユージーンは小声でつぶやくと、例の長い杖が淡い光を放ち始めた。

彼が事あるごとに握っている杖のような物体は、神具と呼ばれるものの一つだ。神具は通常、基空間と呼ばれる広大な空間に格納しており、必要に応じて自在に出し入れする。

殆どの神具はエネルギーを増幅して異なる能力に変換するチェン

ジャーのような機能を持ち、神々はその職務に応じて能力の異なる固有のものを各々ひとつずつ持っている。個々の神のアトモスフィアの質によって神具の適合不適合が決まるので、所有する際には繊細な調整が行われており、ひとつとして同じものではなく、他神のものとは性質が合わず扱えない。

ユージーンの固有の神具、彼がG-CAMと呼んだこの杖は、ビリヤードのキューとほぼ同じ形状と大きさで、広帯域MCFの展開や戦域シュミレーション、核爆発を上回るエネルギーの吸収と放散などを可能とする。

彼は軍事スペシャリスト、平たく言えば軍神として任じられており、戦争開始点の特定とその抹消、また開戦の折には犠牲者を最小限にとどめ、すみやかに終戦へと導くことが責務とされる。そのための戦局操作などを目的としてこの神具を用いてきた。

二度の世界大戦が核戦争に発展することで北半球の殆どの国々が滅亡する、というシナリオだった筈の歴史を、G-CAMにより戦局を傾かせ被害を最小限にとどめた功績が認められ、当時89位軍神であった彼は7位へと推薦され、史上最年少枢軸神として陰陽階に名を馳せることとなった。半世紀以上も前の話である。

” System console , program
No, 446. Access.”

(システムコンソール展開、プログラムNo, 446 接続)

静かに、あらかじめインプットしておいた広帯域マインドコントロールシステムを起動する。

これから電磁フィールドをこの村の形そのままに展開するのだ。結局、ありのままの人々の生活に干渉したくはなかったので、MCFはこの村を出入りする時にのみ発動するように最小限に設定した。

この村を退出しようとする者は神の存在を忘れ、この村に引越してきた者以外で一時的に滞在する者は、どのような現象を見ても神の存在を信じられないという内容だ。

つまり定住している一般村民の殆どには影響しないプロトコルだといえる。

このプログラムの展開時間は、長くてもコンマ数秒で終わる筈だ。同心円状に電磁波は放出されて、近くに住んでいるものから順にマインドコントロールが影響してゆく。村人全員、つまり三千人強の人間に同時に浸透するのだ。いや、正確には全村民ではない。たまたま村外に外泊している者などもいることを考慮して、日を改め、数回にわけてこの作業を行わなくてはならなかった。

にしても、ほぼ全村民だ。

神具起動の代償として、ユージーンの体から凄まじい量のアトモスフィアが奪われてゆくのがわかった。痛みなどはないが、明日は一日中身体がきついことだろう。一過性ではなく長期的なMCFだったから、それだけ消費するアトモスフィアの量も少々では済まされない。

＊

その時、荷造りをしたダンボールにガムテープを貼っていた恒は、体の正中線上を何か矢のような冷たいものが駆け抜けていったのを感じた。何だ、この感じ。目に見えないが、放射線でも当てられたかのような、このおぞましい感じは――。心地よいものではなかった。恒は窓の外からざわめく庭の雑草のあたりを、ぼんやりと眺めていた。

「……やっぱり俺には、わからないことばかりだ」

＊

疲れ切ったユージーンが戻ってきたのは、もう白々と夜の明け始めた頃だった。

日本の朝焼けは空気が澄み切って情緒があるな、などと思う余裕も、残念ながらわずかにもなかった。社務所の前に、何があったのか恒がひとり待っている。もうくたくただが、待っていたのだろうから追いつくわけにもいかない。

「どうしたの、恒君。こんな時間に」

「ごめんなさい、こんな時間に」

「いいんだ、とにかく中に入って」

ユージーンは熱い番茶と、先ほどの饅頭を出してやった。恒は身体が冷え切っていたらしく、すぐに湯のみを持って手を温めた。初夏だとはいっても、山間部の夜は冷える。ユージーンもこの村に来て、まず最初に思い知らされたのでよくわかる。

「折角眠れるようになったのに、まだ夜更かしかい？」

「あなたこそ、どこに行っていらいちゃったのですか？ お祭りはもう終わっていたでしょう」

鮮やかに切り返されたので、ユージーンはばつが悪そうに茶をすすった。だが理由など何とも思いついた。

「酔い覚ましに散歩をしていたんだ。で、何の用？」

「どうしても、聞きたい事があって……ひとつ、教えて下さい。あなたはどうかやって、世界を創ったのですか？」

ユージーンはたった一言の問いかけに、答えることができなかった。ユージーンは自らを神だと明かすにあたって、根本的にそれが間違いだと自認していたからだ。確かに人間とは比にならないほど優れた能力を持ち、重力と光により時間や空間をすら操ることができる。だがそれでも、神の神たる所以である創世の能力がいにし

えの神々にあつたかというところではなかっただろう。

真の意味での神とはいったいかなる宗教でも、現空間と大宇宙を最初に創造した存在、あるいはそれを為しえた力だ。それは絶対かつ無機的なものであって、断じて有機的なものではない。何故なら有機物であるというそれだけで、創世後の副産物であるという事を露呈している。

それでも殆どの宗教での神はある程度擬人化されているがために、人々の前に顕現するたび神と呼ばれて信仰され、宗教的な意味でもそうならざるをえない状況に追い込まれてきた。そして神という絶対者の存在が、人々の心の拠所となり、平和維持の一端を担った事でなおさら、壮大な詐称は後戻りできなくなってしまったのだ。付け加えるなら、神が信仰にたえるだけの能力を持っていたのもそうなってしまった理由だ。神であるとはいえ肉体を持ち、死から逃れられない生物に過ぎない。

そもそも神々自ら冠した”神”という名詞は、ヒトやサル、鳥や魚のように生物種名を現す名詞に過ぎなかった。決して人間や動物の支配者であり造物主などを意味するのではなかったのである。神は動植物の進化の歴史をそつと見守って、求められれば力を貸してきただけだ。何のためにかはわからないが、健気に直向きに生きる動植物、自らの姿に似た人という存在をいみじく感じたのだけは間違いないだろう。

それがいつの間にかあたかも創造主であるかのように、神は人々を欺いてしまっている。例えば原始時代の人間にとって、人社会の現代文明があたかも神の世界のごとく高度に感じられるように、神々の能力があまりにも勝っているがために、人が神々を創造主だと錯覚しているに過ぎないのだ。

ユージーンはそういう理由もあって、神として人に接する事が得意ではないのだ。

他の神々は抵抗なくできるそうだが、どうしても受け入れられない。神は自らが一個の生体に過ぎないという説明を疎かにして、宗教上の造物主という都合のよい立場におさまっている。そんなのはあまりにも不遜で無責任だ、そんな思いが過ぎって、ユージーンはまた気取られぬよう小さな溜息をつくのだった。

こんな些事に縛られているのは徒労だ。

神として人を助け導くと割り切る、その方がどちらにも幸福であり、神階上層部と知らない衝突をすることもない。もっと賢く生きると、第一使徒の以御にはいつも心配されるが、彼は割り切れないままでいた。若い故の葛藤なのだと分かってはいても、狡猾な生き方を身につけたくはないものだ、とユージーンはまた思いを巡らせる。

一方、創世をなした力、肉体を持ち生死を繰り返す神とはおよそ対極にして真に原始の力は、可視者（Visible）に過ぎない神とは区別され、不可視者（Invisible）と呼ばれているうちにINVISIBLEが名詞化した。"者"などではありえないのだが、神が唯一畏れる全能の力として様々な異名で呼ばれている。

ユージーンは哲学者や物理学者、考古学者ではなかったから、その力の実体がどのようなものであるかを追究する必要はなかった。それでもそれは、長い歴史の中でたった二度だけその存在を証明したことがあったのだ。

はじめは、今からおよそ三十万年も前だ。神の寿命は三千年ばかり

りあるので、百世代以上前の時代にある。神の総個体数は現在の千倍ほどあり、神とその守護者の栄光は全宇宙に及んでいた。しかしその時代に突如として現れたたったひと柱の神により、半数が大虐殺された。

かの無名の神の力は圧倒的で、誰として及ぶ事ができなかったことから、絶対不及者ぜったいふきゆうしゃと呼ばれ神々を震え上がらせた。絶対不及者は空間と時間を意のままに操り、空間創出能を持っていたという。神の総個体数を僅か半数にまで削り込むというおぞましい大虐殺を終えると、あとかたも遺さず消滅してしまった。

絶対不及者という言葉は、憑依された者を指す言葉であって、INVISIBLEの本質を示してはいない。INVISIBLEは宿主を転々と変えながら、自らの存在をその名の通り不可視にして、その器となるべきものを絶対不及者に変えては破棄してゆくのだ。

この伝承には不明な点も、故意に改ざんされた点も削除された点もあるが、このとき無名の神の姿を借りて現れた何かが、現時点ではINVISIBLEであろうと言われている。絶対不及者となったその神は、生まれてよりINVISIBLEに憑依されるまで、何らかの特徴を備えてもいなかったし、とりわけ力があったという訳でもなかった。過去何百回も研究され尽くした彼の出生簿を見る限り、至って普通に神として生まれ、成体となって間もなくINVISIBLEにとりつかれたのだそうだ。

……それから十万年を経ても、神の総個体数は一向に増加しなかった。

それもそのはず、神には生殖能力がないのだ。INVISIBLEの神への粛正はまたいつ行われるともしれない、だからこそ神階

は総力をあげ、INVISIBLEへの対抗策を練り続けていた。

INVISIBLEは予期した通りまたしても現れた。

十万年間の努力が実ったのか、当時の神々は絶対不及者を拘束する事に成功する。その媒介となった神の特徴を、予め研究していたためだ。しかし真の意味で肉体など持たないINVISIBLEの拘束は一時的なものでしかありえなかったし、意志疎通の手段を持たない彼の意図するところも何一つといって解らなかった。

それでも神々はINVISIBLEを畏れるあまり忠誠を誓い、天帝として奉じたのだ。もっとも、INVISIBLEが神々の忠誠を望んでいたとも思えなかったのだが。

このとき腕に覚えのある神々の一派は何の意図も持たぬその存在を主として奉じる事を是とせずINVISIBLEへの叛逆を試みた。INVISIBLEからの解放を旗印に立ち上がった神々が神階を二分した。彼等によって一度は拘束されたかに思えた絶対不及者は、神々に再度の圧倒的肅正を与える事となる。

こうして神々の総個体数はかつての千分の一にまで落ち込み、絶対不及者の姿を借りて現われたINVISIBLEを奉じた陽階とINVISIBLEからの解放を目指した陰階いんかいの二階制の基盤が形づくられたのである。

神の歴史は、創世者との戦いの歴史だった。

INVISIBLEが創世者であるという可能性がなければ、神々は体制を二分するまでに揺れなかっただろう。力の横暴というだけであつたならどんな手段を講じて、対抗したはずだ。だがそれが創世者であるという可能性があまりに高すぎたために、陽階はINVISIBLEの支配に屈してしまった。

ところで陰階に所属する神々は創世者に戦いを挑んだことを、今でも後悔している気配はない。創世者に怯えながら生きながらえるより、万に一つの勝機に賭け、主権を取り返すべきだと考えているらしかった。思想的な教育を施されているからであるともいえない事もないのだが、陰階神の殆どはそういうスタンスでいる。一方陽階では、創世者を支えるのが神々の責務だと教え込まれている。陰階と陽階は今でこそ和解が進んでいるが、根本的な精神はなんら変わっていない。

ユージーンは陽階が掲げる、支配に甘んじてでも避けられる絶滅を回避すべきだという考えも共感できるし、陰階の掲げる、INVISIBLEの支配から破滅のリスクを負ってでも脱したいという精神にも共感できた。INVISIBLEはいっ現れるのかわからないが、決まって破壊しかもたらさない。ちなみに神階の対極にあるいまひとつの世界、^{げかい}解階やここ地球を指す生物階には、これまでのところ無害だ。

だからといって、うかうかしてられない、とばかりに解階でもまた有識者たちを中心にINVISIBLEへの対策が練られているようだ。甚大な被害を受けた神階はINVISIBLEのおかげで、あまりにも力を失ってしまった。神階、生物階、解階を含む三階のうち神階という存在だけが創世者の理に反しているからなのだろう、ユージーンはそう思う。とはいえその理はお世話にも道徳的なものではないし、決して甘受するわけにはいかないのだろうか――。

「あの。ごめんなさい、こんな失礼なことを聞いて」
恒が目の前にいることも忘れて、しばらく回想にふけてしまっていた。しばらくといっても1分も経ってはいないのだろうか、つ

まり恒の問いかけはそれほど核心をついていた。言葉につまったようだったので、恒は青ざめた顔をしてひたすら謝った。人目を避けてから質問してくれたのは、恒の優しさからだったのかもしれない。

「いや、そうじゃないんだ。少しぼうっとしていた。君は重要な事に気づいたんだね。そう、わたしたちにはそんな力はない」

「よかった。俺、とても失礼な事を聞いてしまったから」

「気にしないでいいんだよ、事実そうなんだ」

ユージーンは少しも不快だとは感じなかった。むしろ彼に器量を見抜かれているということ、少し安堵した部分もあったのだ。

「あなたは肉体を持っているから、そう思っただけです」

「何故、神と名乗るのか、と」

いっそ〇×星からきた宇宙人だと名乗った方が、村人達に対して誠実で健全な説明なのではないか。とユージーンですらそう思うのだ。神だと名乗ることは間違っている。それは人々の敬虔で歴史ある宗教感情を裏切ってしまうからだ。

「でも何となく、分かるような気がします。人が神様を望んだんだ。あなた方はそれに応えざるを得なかった。あなたが人と関わる姿を見てそう思いました」

恒は素直に白状した。ユージーンは的を射ない。

「？」

「それはとても立派だと思いますし、尊敬します。俺だったら耐えられないから」

「神という言葉は生物種名を表すものであって、もともと宗教的な意味ではないんだ」

この子には。真実を話しておきたいと、彼はそう思った。

「それでも俺は、あなたを神様だと思います」

「……ほう、どうして」

あるいは挑発的ともとれる言葉に、ユージーンの身が引き締まる。
「あなたが人をわけへだてなく、慈しんで下さるからです。たとえ俺のような子でも……。お茶とお饅頭、ごちそうさまでした。お答えが聞けたので、もう帰ります」

去ってゆこうとする恒を、慌てて呼び止めようとして、ユージーンは言葉がつまった。再び沈黙してしまったのは頭がのぼせて、何も考えられなかったためだ。

この子供は、自分をひどく誤解しているようだ、と彼は後ろめたくなった。人と関わることに罪悪感を感じるばかりで正面から向かい合えなかったユージーンの心を、救ってくれたのは彼なのかもしれない。勝手な都合で、目の前で救いを求めてもがいている者の手を、踏みにじってしまうところだった。

神として望まれているのなら、その役割を果たさなくてはならない。それが世界の創世者に対して、どのような冒瀆となろうとも……ユージーンは言葉が出ないまま、取り繕うように恒の手を取った。こんな自分でも、この子は神だと思ってくれているのだから……。応えなくてはならない。それが神という責任ある名を名乗った対価だ。

「……恒君。学校に来てみないか？」

「俺のクラスの副担任になるってお聞きしました」

ガキ大将であった彼には子供たちからの情報がいち早く届き、学校に通わずとも耳が早い。

「そうなんだ」

「それは出来ません。俺、来月から神戸に行くことになったんです」「え、何故、突然」

「丁度いい機会だったんだと思います。悪夢から解放していただき

て。自業自得で、もともと居場所もない村でしたし……五年はここにいらっしゃるんですね。またお会いしにきます。そうすれば」
また、いつか会いにくることが出来るから。これがお別れではない。恒は彼自身にそう言い聞かせてこの地を離れようとしていた。しかしユージーンからは意外な言葉が返ってきた。

「それはできない。この村を出たら、わたしの事は忘れてしまうだろう。君は友達と会うためにこの村に帰ってくるだろうけど、その時にはわたしを見てももう初対面のように感じるだろうね。そして賢い君は、神だなんて信じはしない」

「どうしてそんな」

「お互いのためにさ。その方が幸福だろう。差し出がましいようだけど、何故突然引っ越すのか教えてくれないかな。ひょっとして、わたしの責任なの？」

十中八九、それしかないとユージーンは確信している。

「いいえ、母が決めた事なんです。病気が治らないから、病院をかけるんだって決めて」

恒は村の子供達の前では一度も、母親の病を口にしたことはなかった。母親が病気だったとは初耳だった。

「君のお母さんは病気だったの。何の病気？」

「それが、よく解らなくて。自己免疫疾患かもしれないという事なんです。詳しい事はなにも」

ユージーンはやや考え込んで、次にまっすぐ恒の瞳を見据えた。

恒は直視され、思わず視線をはぐらかした。何故だか無償に、悲しくなってしまったのだ。恒は同級生と比べて、あまり感情が豊かな方ではないながらに、はつきりと分かっていた。ユージーンと別れたくはないのだと。だがこうする以外に方法がないのなら、我俣を通すわけにもいかない。恒は自分の感情を押し殺していた。そんな思いも、彼にはすっかり見通されているに違いない。

「診てみようか」

「診ていただけるんですか？　でも、あなたはお医者さんじゃ……」

胡散臭いという以前に、恒はそこまで全能を演じなくてもいいのに、と彼を慮った。神だと名乗るからには、周囲から全能を期待されるということだ。信用してもらうために、医者のふりもしなければならぬのだろう。しかし、彼ひとりにそんなに何でもかんでもできるわけがない。不治の病と診断された母親の治癒を試みるだなんて、その気持ちは有難いが無茶をしないでほしいと思いつつも、ひよっとして、という思いも勿論ある。

「一応これでいて内科医なんだけど」

彼はさらりとそんな事をいった。教師の次は内科医ときた。彼の資格マニアぶりには恐れ入る。

「どこの国のですか？」

「日本医師会にも在籍してるよ、嘘だと思うなら調べればいい。でも医師かそうでないかはあまり関係なく、問題は治してあげられるかどうかだ。まずは診てみないとわからないけど、何もしないよりはいいと思う」

「そんな事ができるなんて」

恒は半信半疑だ。まさか母親の弱みにつけこんで靈感商法なんてやらないだろうな、と少々は警戒しつつ。変な壺を買わされそうになったら断ろう、ということだけは決意した。

「治せるかは正直解らない。お母さんを連れてきてくれるかな。わたしはこの村を出てはいけなから」

＊

翌々日、恒は母親の病院で一時外出の手続きをとると、手際よく介護タクシーを手配して、彼の母、藤堂とうどう志帆梨しほりを連れて帰ってき

た。ユージーンは恒からの連絡を受けて、すぐに恒の自宅に駆けつけた。彼が志帆梨の病を治せるとは、恒はさらさら思っていなかった。彼がいくら神であるとはいえ、病を治せるとは思っていなかったのだ。それでも恒にできることは、一縷の希望にすぎることだけだ。ひよっとすると、何か病氣の手がかりとなるようなことを知っているのかもしれない。それが分かるだけでも価値がある。診察だけでもしてもらいたい。

白いTシャツと楽なジャージを着た藤堂 志帆梨は痩せた色白の美人母で、31歳だといった。艶やかな黒髪と意志の強そうな眉、そして力強い目元からは病人のように見えないが、頬は少し落ちているような気がする。闘病生活が長いということは、一見してうかがえた。

「これは……」

ユージーンはろくすっぽ診察らしい事もせず、あやふやながらに診断をつける。二人の顔が、いっしんに彼に向けられている。よく似た親子の顔が大接近しているのを見てわずかにのけ反りながら、ユージーンは目を泳がせた。その様子に一抹の不安を感じた恒は、縫るように尋ねた。

「治りますか？」

「あ、ああ。大丈夫、治るはずだよ。でも、これは酷い。バイタルが何者かによって根こそぎ奪われている。普通の治療じゃだめだ」

「バイタルって何ですか？ バイタリテイのバイタルですか？」

「そう、生命力みたいなものだよ」

怪しい話になってきたが、恒にはおもしろいあたるふしがある。

「何者かって、やっぱり俺が生まれた時に……」

「それはない。人が生まれる時には母親から多少のバイタルを奪う

のだけど、さすがにこれほど奪うなんて有り得ないよ。バイタルは奪われてもゆっくり回復するものだけど、ある程度の閾値がないと回復できないんだ。志帆梨さん、あなたが奪われたバイタルは双子、三つ子どころか百つ子が産まれた時に奪われる量以上に相当します。実際に百つ子なんて産まれたりはしないから、ありえない事だと言ったんです。こんなことが出来るのは人間ではない。わたしと同類の何者かです。人間である恒君のせいなんかじゃない」

そう言いながら、ユージーンはこの家族に起こった悲劇に思いを巡らせた。藤堂 志帆梨がもし、神階のなんらかの事情に巻き込まれて十年もの間犠牲になったというのなら……恒に出会ってよかった。恒がユージーンと出会わなければ、この悲劇は終わらなかった。そして彼らは運命の無慈悲を嘆きながら、それほど遠くない将来、ひっそりとこの村で息絶えたにちがいない。そんなことは断じて起こってはならない。

「やっぱり俺、呪われてるんじゃないでしょうか。あの夢の事とい……」

「君に非はないのだし気に病まないで。あの件は今、部下に調べさせている。どちらにしろ、著しくわたしたちの倫理に反する事だ」

恒と母親は不安げに顔を見合わせた。そんな事を言われても、どうしたらいいのかわからない。どちらにしろそんな事が原因なら、神戸に引越しの件は白紙撤回になってしまう。恒は神戸に行ってしまう前に彼に志帆梨を診せてよかったと思った。

「今は母さんを治してやってください」

「よろしくお願いします」

ユージーンは流しをかしってもらって手を洗うと、用意していたと思われるタオルと剃刀を持ってきた。まさかここで手術でもおっぱじめようとしているのではないかと、志帆梨は青ざめる。

「何を……」

「いえ、あなたを切るのではありませんのでご心配なく。あなたは、もし病が癒されたら、この家にまた元のように住まいますか？」

「ええ、必ず。恒と二人で暮らしたいのです。それが叶えばどんなにうれしいか」

もう志帆梨がすっかり諦めていた、些細な夢だった。ユージーンはその答えを聞くと、とある決意をした。彼女がこの村に留まるという答えが重要だった。もし病気の治癒いかにかわらずこの村を出ていくというのなら、ユージーンは彼女を治癒できなくなる。彼が力を行使してもよいのはこの村内だけで、村外は管轄外なのだ。

「わかりました。ではあなたもわたしが守るべき村民の一人です。わたしのバイタルは人の一万倍以上あります。計算上ではわたしの肉体50gを摂取すれば十分なバイタルを回復できます。血液50ccほどでいいでしょう。これから血を流しますから、気持ち悪いでしょうが我慢して飲んで下さいますか」

ユージーンは勿論、当初はできうる限り現代医学を用いて治療にあたるつもりだった。しかしこれは現代医学では対処できない領域の問題なのだ。手首から直に血液を飲ませる……志帆梨の心情を慮ればグロテスクなことをさせなくなかったが、バイタル欠損だとすればそれ以外に治療方法が思いつかなかった。そして幸い、あらゆる病人の病を癒す治癒血（ちゆけつ…ヒーリングブラッド）という珍しい体質を持つユージーンには、まさにど真ん中での治療適応症例といえた。

「血を、ですか？」

志帆梨は困惑する。恒から、腕のよい医師が現れたと聞いていたものだから、民間療法を通り越して宗教じみた眉をひそめる行為とみえた。

「母さん、今はそうするしかないよ。助かるかもしれないんだから」

志帆梨が戸惑いながらも同意をしたのを見て、ユージーンは手首に剃刀を宛てすつと刃を引くとまるでインクのような赤透明な液体が流れ出てきた。それは随分と透き通っていて、人の血液のどす黒い感じとは明らかに違う。

母親は恐ろしくなって身震いしたが、彼を信じろと言った息子の言葉がいよいよ信憑性を帯びてきた。口の前に手首を差し出されると、逡巡したのち恐る恐る口をつける。志帆梨は口に広がる謎の味に違和感を感じて顔をしかめたが、そのうち喉を鳴らして飲み始めた。

50ccは人間の血管から飲むのならそれほど多い量ではないが、ユージーンは循環器系が血管に支えられていないので血液の漏出が遅く、やはり時間がかかる。三分程飲ませてからもういいでしょうと言って離れた。

「どう？ 母さん」

母親は酒を飲んだ時のように胃がかつと熱くなるのを感じていた。嫌な熱さではない。よく血が出るように深く切ったようだ。しかもリストカットだ、人間なら死ぬ可能性もあるほど危険だが、彼は気にしている様子はない。志帆梨が何か感想を言う前にユージーンはタオルで止血をしながら補足した。タオルが真っ赤に染まっていた。

「何も変化はないでしょう、今は体に入っただけですから。これから徐々に吸収されてあなたのバイタルを補っていきます。拒絶反応もなかったようで何よりです」

「拒絶反応があったらどうなったのですか？ 死んでしまったりと

か」

人間や動物の血ならなんということはないが、彼の血は人体にと
って異物だ。まさか毒が含まれていたり……などとも考えてしまう。

「身体が受け付けずに吐くだけです。とにかく明日の朝までは大
事をとって安静にして、寝ているのがベストでしょう。ではわたし
はこれで。明日の朝また様子を見に来ますから」

「あの、ありがとうございました」

「まだ治っていませんから、お礼はまだです」

ユージーンはしっかりと傷口にタオルを押し付けたままだ。

「血が、止まらないんですか？　ずっと押さえていらっしやいます
が」

「丈夫だからそうそう傷つかないかわりに、一度血が出るとなかな
か止まらないんだ」

「俺の傷は簡単に治して下さったのに。あの時のようにできないん
ですか？」

「むやみに力を使ってはならないんだよ。特に自分のためにはね」

「神様なのに……」

ユージーンは少し困惑したように微笑んで、恒の言葉には答えな
かった。何故自分の傷をすら癒せないのか、存在をまた疑われてい
るように感じてしまったのだろうか。恒は失言だったと唇を噛んだ。
「では、また明日ね」

ユージーンはいそいそと玄関から出たので、恒は見送りに行こう
としてついて出た。別れの挨拶をしようとしたのだが、今の今玄関
を出た筈の彼の姿はもうなかった。

走って帰ったのだろうか。恒は仕方なく諦めて、相変わらず建て
つけの悪い玄関の扉をギシギシといわせながら閉めると、母親のい
る部屋に戻って来た。母親は感極まって天井を見上げている。しか

し今までのようにどこか諦めきったような表情ではなく、しっかりとした面持ちでだ。彼は恒を救ってくれたように、母親も救ってくれたのだ。例えば治らなくても、恒は久しぶりにしっかりとした表情の母親の姿を見ることができただけで胸がいっぱいだった。

「母さんは信じる？ ユージーンさんが神様だって」

恒は母親におしぼりを出してやった。血のついた口元を拭うためだ。ユージーンの血が彼女の体内を満たしているのか、気持ちほど顔色がよくなってきたように思える。またそれを、彼女も実感しているようだ。身体の中から、何か熱い力が込み上げてくるのだと言った。

「それはわからない。でも信じられる、そんな気がしたわ」

＊

翌日、ユージーンはけたたましく社務所の窓ガラスを叩く音で目が覚めた。

眠たい目をこすりこすり、カーテンを開けるその手首には、大きな絆創膏が貼られていた。結局止血はできたものの、すぐには治らない。彼は昨日晩、持ってきていた縫合糸を取り出し自分で数針縫って手当てした。恒は信じなかったが、彼は実際にアメリカの有名大学で医師免許を取得しており、生物階においても正真正銘の医師だ。

アルミサッシつきの窓ガラスの向こうには、恒と志帆梨の二人の笑顔があった。社務所の入り口が開いていなかったで、いつもベツドの置いてある窓の方に回り込んだのだ。電話が設置してあるから、かけてから来てみればいいのに、と思えど、そんな事も考え付かなかったか忘れていたのだろう。ユージーンはともかくほっとし

て窓ガラスを開ける。

「おはよう。治りましたか」

「おかげさまで！ もう十年以上も床に臥していましたが、嘘みたいで！ 今朝目覚めたら、なんとなく歩けるような気がしたんです。それで、走ってここまで来ました」

「ありがとうございます！ 本当に！」

病は気からというが、彼女の場合は根本的に治癒できたようだ。バイタル欠損という世にも珍しい病気にかかっていた彼女のバイタルをユージーンの血液が補うことによって、彼女の身体はまたたき間に生命力を取り戻した。

「よかったですね。暫くは無理に動かず、リハビリをした方がいいと思いますよ。急に動くとしじを痛めたりしますからね」

「本当にありがとうございます。私はどうお返しをさせていただけばいいのか……治療費をお支払させてください」

いくらと言うのか、恒は気になった。ここぞとばかりに数百万も吹っかけてきても、母子家庭では実際のところ払えない。しかしそれほど金額は払ってもよいと思っていた。恒が将来働いて返せばよいことだ。

「はは、薬も使っていないのに。実費なんてないですよ」

ユージーンは朗らかに笑う。

実費といえば、傷を手当したときの絆創膏と消毒代ぐらいのものだった。

「ですが、血をいただいて……」

「お金を取るようなものではありません。あなたがこの村を出てゆなくてよくなり、恒君は学校にちゃんと来てくれれば、何よりのお返しです」

「は、はいっ！ ありがとうございます」

志帆梨は午後から、退院手続きに行くつもりだという。

そういえば、と、ユージーンは恒に視線を戻した。明日はユージーンの着任の日であると同時に、恒のここ数年ぶりの登校日となるだろう。恒自身の不眠と志帆梨の病の治癒。彼が不登校になっていたとみられる二つの要因を取り除いたのだから、これでまだ学校に来ないと言うならそれは説教ものだ。

「で、恒君は明日からちゃんと学校に来るんだろうね」

ユージーンは恒を学校に来させるために副担任に任命されたようなものだ、と、玉屋から聞いている。肝心の恒が登校しなければユージーンは教師をするにしても遣り甲斐がない。

「あ……そうでしたね」

「では改めてよろしく」

志帆梨と恒は顔を見合わせ、晴れ晴れとした顔で微笑んだ。

第1節 第4話 5年2組の日常とスパイ疑惑

臨時教師ユージンⅡマズローが風岳小学校教師として就任したまさにその日の事だが、事もあるうに交通事故に遭遇した老人の怪我を癒して遅刻寸前となってしまった。これは自分の為ではないからと言いつつ聞かせながら瞬間移動で体育館裏に突然現れたユージンが懐中時計を見ると、職員朝礼のわずか十分前だ。

ひらりと高いフェンスを飛び越えて来賓玄関から入り、きよろきよろと挙動不審な外国人は職員室をさがす。すぐ見つかると思っていたのに、建物の構えも、生徒数も意外に大きな学校であって困惑する。校門から入れば分かる事だったが、体育館裏から来たユージンには学校の間取りがよく分からなかった。

この小学校は中学校と建物の一部を共有しているのでグラウンドも設備も、武道場までも完備してある。設備は立派だが、教師が少ないのがネックだった。ようやくのことで職員室を見つけると、既に職員朝礼の最中であつた。ガラガラと扉を開けて遅刻気味に入ってきたユージンを知らない教師はもういない。窓側の手前の席で皐月が控えめに手を振っている。教員は大体五十名ほどだろうか。

「おはようございます。遅れまして、申し訳ありませんでした」

個性的な顔をした校長と思しき人物がまちかねたといった態度でひよいひよいと駆け寄ってきて、横に立って紹介した。

「こちらは、本日から5年2組の副担任をおひきうけ下さいました、ユージンⅡマズロー先生です。先生は日本語に堪能でいらつしやうて、国語、社会、体育を担当して頂きます。また、先生は医学にも明るく、重大な怪我がありましたら、医務室でなく先生に連絡してくださいよう」

なんて事だ、どこから聞こえた話なのか、医者までやらされるらしい。ユージーンは今聞かされたという表情を微塵もせずに、いちいち愛想よく頷いていた。遅刻をしたのだから、ふてぶてしくできるわけもない。

「至らないところも多々あるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願いします」

いつものように丁寧すぎるお辞儀をすると、惜しめない拍手が送られた。教員たちは、神（のような教師）がやってくると聞いていたので、どんなにかめしい老人がやってくるのかと思っていたらしかったが、ユージーンが存外若くて腰が低いのでひとまず胸をなでおろした。彼らは村人たちからユージーンが起こした数々の奇跡について聞くには聞いていたが、とてもこの頼りなげな若者が神だとは思えず、彼とは普通の教員とかかわらず接しようとしていたし、校長もユージーンとは教師としてかわるようにと釘をさしていた。欧米人は口がうまいのと自己主張が激しいので、村人たちは適当な方便といかさまに騙されてしまったのだらうと、大半の教職員がその程度に思っただけで拘らなかつた。

一時間目は道德で、皐月はユージーンに名簿を手渡し、クラスの皆に自己紹介をして下さいと言った。出席簿を見ると男子17名、女子14名の計31名のクラスだ。山村の学校にしてはなかなかの生徒数である。そしてクラスは四組まであるのだという。ひと学年120人、六学年で700人ぐらいか。人口三千五百人ちよつとだと言っていたので、この村がいかに子供が多いのかが分かる。農民がほとんどをしめるので、田畑の働き手として子供を使っているらしい。この国の少子化対策は、この地域に限っては必要ないのかもしれないと彼は暢気にそんな分析をした。

皐月はユージーンの就任の記念なのか、農家で買ったスイートピ

ーの花束を持ってきていた。花束を小脇にかかえながら手帳をめくっている。恒が久しぶりに登校してきたということを、クラスの児童から聞いていた。

「三時間目は国語を教えてください。四時間目は社会。一組二組合同で、五時間目は体育、今日はマツト運動と鉄棒です」

花などを持ってきていても、皐月は少々不機嫌だった。あわや辞表を出す決意をしかけたほど、恒はどんなに皐月が心をくだいても手に負えない子供だったというのに、僅か数週間前にやってきたユージーンにはすっかり懐いているのが腑に落ちない。恒は賢い子であるから、神だと名乗る胡散臭いこの男など相手にしないと思っていたのに。こんな男の、何がいいというの？ 彼女はそんな不満をいなく。

「それから……あの、この際ですからはっきりさせておきたいのですけれど、教室で神様だと名乗るのはやめてください。ここは教会でもカルト教団でもありません。学校なんです。あなたの凝ったマジックだかイリュージョンもいりませんし、普通に授業をしてください」

皐月は厳しい顔つきでユージーンを見据えた。どうして校長はこんな男を雇って、そして日本という国は何故こんな男に教員免許を与えたのだろう。彼の教員免許を見せてもらったとき、他資格の証明書もファイルにごっそりと数え切れないほど入っていた。医師、弁護士、教師、なんでもござれだ。果ては美容師なんてものもある。取得年齢もまちまちだった。六十年代や七十年代に取ったことになっている資格もある。

しかも彼は四十九歳なのだという事になっているが、どう見ても20代前半だ。どこからか免許をかってきたところだろう。ユージーンは疑われていることは重々承知していた。皐月

の目は受け入れようともしていないし、睨まれているのも知っている。

「吉川先生、言うまでもなく、この場では教師として働かせていただきます」

「大体四十九歳だなんて、そういうごまかしがいつまでも通用すると思うのですか」

「四十九歳というのは確かに嘘です。これには深い事情があります。でも教師として、あなたに信用していただけるよう努めます」

四十九歳が嘘だというのは、それより若いという意味では決まらなかったのだが、皐月は嘘と認めたことにひとまず満足して教室に入ろうとしたので、ユージーンは待ってとどめた。そっとドアから見えるテグス糸を指差す。

「手荒い歓迎があるようです。先に入りますね」

ユージーンは皐月の持っていた花束をもらうと、わざとにテグス糸を踏んで教室のドアを開けた。その瞬間カチリと音がして上から水の入った金属の花瓶が落ちてきた。彼は慌てず騒がず花瓶の口をつまむと、水を一滴もこぼすことなく受け取り、皐月の用意していた花束をその場で生けて教壇の上に置いた。続いて教壇の下に隠れていたテグスをひざで引っ掛けると、赤いチョークがスピーカーの横から飛んできた。ユージーンは後ろを見ることも無く飛んできたチョークをひつつかんだ。

鮮やかな身のこなしは見ている分には申し分なく素晴らしいが、皐月はドアの外から、あれほどイリュージョンはいいといったのに、何も分かってくれないと溜息をついた。おーっ！ と拍手が沸き起こり、皐月も半ば呆れながら教室に入ってきた。ユージーンはどつと教室を沸かせるだけ沸かせておいて、教壇を皐月に譲った。

「だ、誰ですか！　こんないたずらしたのは」

誰と聞くと、皐月にはもう犯人の目星がついていた。恒がおもし

ろくなさそうに片肘をついている。半年ぶりに座った彼の特等席だ。恒をこの席につかせるために、皐月がどれほど心を痛めたか、この子供はわかっているのかしら、と彼女は腹が立つ。

「藤堂君、あとで話がありますからね」

皐月が睨み付けると、恒は自分じゃないと手を振った。

「先生、俺じゃありません。皆がユージーン先生を信じないので、じゃあ試してみたらと言っただけです」

恒は手を貸さなかったらしい。ガキ大将の恒を頂点とする少年グループは脱クラス・脱学年的に遊んでいて、その子供達は大抵社務所に押し付けてきたので、ユージーンもクラスの四、五人ほどとは面識があった。だが残りの子供達は神様先生がやってくると聞いて信じられなかったのは言うまでもない。大体、先日の祭りではユージーンは何も奇跡じみたことは見せてはくれなかったので物足なかったところだ。

ユージーンはむやみに力を使つてはならないという大原則があるため、滅多やたらに力を使いたがらない。社務所で遊んでいた子供達も、恒がそう言うのだから信じているだけで、何か確証があつて神だと信じたのではなかった。ユージーンはざわめく児童たちに背を向けチョークをとると、黒板にユージーン・マズローと片仮名で書き、教壇を譲ってもらった。児童たちは固唾をのんで見守った。

「皆さん、はじめまして。ユージーンⅡマズローといいます。このクラスの副担任として、国語、社会、体育を担当させてもらいます。よろしくお願ひしますね。それから、今のような悪戯でわたしを知ることができませんし、わたしもあなたがたの事を知りたいのです。これから学校生活を通じて、少しずつお互いに理解しあっていきましょう」

どこからともなく、一人、また一人と拍手が沸き起こった。誰が

指示したわけでもない。恒でもない。ひよつとすると……子供達に必要とされているのは自分ではなく彼なのかもしれない、と皐月は驚きをもって見つめていた。

＊

「一体、どういう事なの」

恒はひとりぽつんと、皐月のデスクの前に立たされていた。二時間目が終わって大休憩の時間である。ユージーンは子供達に誘われて運動場にドッジボールをに連れて行かれた。一緒に飛び出そうとする恒の首根っこを捕まえて、誰もいない教室で個別指導だ。恒は明らかに以前の表情とは違う。なんというか生き生きしていた。そんな変化がまた、皐月には理解できず納得がいかない。彼に何を吹き込まれてそうなったのだろう。

「どういう事ですか？」

「どうして突然学校に来る気になったの」

「学校に来てはいけないんですか？」

この生意気で人をくったような態度。これが藤堂という少年だ。皐月はつくづく、もし一休さんが現代にいたとしたら、藤堂少年と知恵比べをしてほしいとすら思う。恒は一枚も二枚も上手だと、確信を持って言えた。彼のすべての言動には裏があり、なかなか本心を見せようとはしない。

「そうではなくて！ ……藤堂くん、ユージーン先生と毎日会っているって話だけど？ 先生に学校に行くように言われたから？」

「そうです」

あっさりと肯定する恒にできるだけ苛立ちを感じ取られないよう

に、引きつった笑顔を引っ込めながら、皐月はメモをとる。恒は何を思ったか突然正座をし、潔く頭を下げた。ユージーンが取調室でやってみせたあれだ。先手必勝とばかりに謝った。

「ごめんなさいっ！」

「と、藤堂くん……！」

「俺、今までどうかしていました。先生にも村の人たちにもいっぱい心配かけて……ごめんなさい。でももう大丈夫です。これから毎日学校にもきますし、子供じみた悪戯もしません。俺のせいで先生が辞職ようとしていたんだって、皆から聞きました。俺、自分のことばかりで、先生の気持ちなんて考えた事がなかったんです」

「藤堂君は昔から何か思いつめていたものね。でもそれが何故なのかを、先生には遂に教えてくれなかった」

「ごめんなさい。誰にも分かって貰えないと思ったから」

恒は頭を上げて、皐月を傷つけてしまったかどうかいっしんに彼女の顔をうかがった。案の定、皐月は深く傷つけられたという顔をしていた。つまりそれは、皐月を信用できないと言っているも同然だ。言葉のあやでそうなってしまったが、恒はこれまで誰をも信じなかったわけではない。自分が体験してきた苦痛を誰も理解できないと思ったただけだ。

「そう……私より信用できる人、それが、ユージーン先生だったの？」

皐月はこんなに素直な藤堂少年を初めて見た。いや、誰も見たことがなかったに違いない。彼は性格がすっかりかわってしまったている。あのひねくれて、どことなく諦めきってしまったような、小賢しい少年の姿はどこにもない。

「いえ、あの……そうです、はい」

「大学生レベルの頭脳を持つ藤堂くんのことだからそんな筈はないと思うけど、神様だなんて思っているわけじゃないわよね」

「思っています」

彼は即答した。

「藤堂君が見たものは、マジックやイリュージョンの類なの。どこ
のマジシャンだってやっていること。空飛んだりするマジックもい
くらでもあるわ。神様なんて、科学的に考えてありえることではな
いのよ。変な思想に毒されないで」

「マジックで一瞬にして傷を治した人を、十年も病気だった母を癒
してくれた人を知りませんが。先生も俺も、科学で説明できない
存在なんてないと思い込んでいる。俺は今でもそうです。あの人の
不思議な力も、宇宙物理学的に考えると、少しも不思議なものでは
ないんです」

「何故そういいきれなの？」

恒は驚くべき事に大卒レベルの、いや実際はそれ以上の頭脳を持
っているのだが、論理的な話ができるので皐月もついつい大人とし
て扱ってしまう。子供のように甘やかすことができず、やや詰問す
るような口調になってしまつて、皐月はすぐに反省する。心は子供
なのだから、全否定するのは宜しくない。

「上島先生がDNA検査をした結果、あの人からは核酸が見つから
なかったんです。どんな生命も、核酸なしには生きていけない。こ
んな事を考えたことはありませんか？ この世界は、まだ謎に満ち
ています、人間だけが知的生命ではない。彼はどこから来たのかわ
かりませんが、人ならざる何かです。そのこと自体オカルトではあ
りえないでしょう。人より優れた力と知力を持ち、太古から人々を
見守ってきた存在、それを人は神と呼んだのではないでしょうか。
彼は控えめに神と名乗ったけれど、それはきつと唯一絶対の存在だ
と言いたかったわけではありません。ただそういう名前の生命なん
です。そして彼のような存在を、人々は昔から信仰してきた」

「藤堂君、それは……」

「あなたの信奉する宇宙物理学に、何か俺は矛盾したことを言いましたか？」

皐月の大学・大学院時代の専攻は宇宙物理学で、”事象の地平”の理論的研究をしていた。ブラックホールの境目、宇宙最速として認められる”光”すら抜け出せなくなるポイント、そこでは時間が止まり、何者も逃れられない。しかし、皐月は計算を続けているうち、いつも疑問に思っていたことがあった。”もしも光より早い何かがあれば、事象の地平を抜けて異なる空間を行き来できるのだろうか、そして既に何者かは、それを成し遂げているのだろうか。それは、人類史上観測すらできたことはなかったが……。絶望的なほど非常に低い確率でしか、この宇宙に知的生命体は生じないことになっている。まして人間に近い姿をした生命体などありえない。人類はこの宇宙の中で、この惑星の上でいつまでも孤独だ。だからこそ人は尊いものだ、そう思っていた。

だとしたら、ユージーンは異なる宇宙から事象の地平を通ってやってきて、まったく異なる進化体系を経て、人と同じ姿に行き着いたのだろうか。人とは異なる能力を持って……。恒はそうやって彼の世界観を揺るがすことなくユージーンを信じたのだとしたら……。。

「あの。ユージーン先生が神様だとかそうじゃないとか、ここでは関係ないと思うんです。だから、教師として接してあげてください。なんか皐月先生、ユージーン先生に怒っているように見えるから。彼も居心地が悪そうですし」

何故子供からそんなことまで指摘されなければならないのか、皐月はいよいよ苛立ったが、無理に笑顔をつくるしかなかった。恒と話していると、どちらが大人やら子供やらわからなくなってくる。

温厚な教師として評価されていた自分らしくもない、カルシウムでも足りないのかしら、と皐月は平常心を取り戻そうと努める。

「わかったわ。とにかく、藤堂君が学校にきてくれて嬉しい。今はそれだけで満足よ、もう怒ったりしないから」

「ありがとうございます」

＊

大休憩終了のチャイムが鳴って、ユージーンが教室に戻ってきた。子供達とはもうすっかりうちとけたようで、既に大人気である。三時間目は国語だった。指導要領は一週間前に渡していた。この題材は、小学五年生の最も典型的な題材であり、必ずといっていいほどの出版社の教科書にも出てくるものだ。皐月はお手並み拝見とばかりに教室の後ろに腰掛けて眼鏡をかけた。

そもそも、見た目はまるきり外国人だというのに日本語が不自由なく読み書きできるというのだからまず驚きである。漢字検定なども1級を持っているらしい。そこまでして資格を取ろうとする、必要性がわからない。資格を取得しまくるのが趣味なのか、学生時代にそんなサークルにでも入っていたのだろうか。

”大造じいさんとがん” タイトルと作者名を縦書きの楷書で丁寧、しかしすばやく書き付ける。その漢字の文字の美しさに、皐月は息を呑んだ。日本人ではないのにこんなに美しい字を書くなんて。字は心の美しさをあらわすというのは、それなりに誰もが知っていることだ。

ユージーンはまず今日の範囲を、すらすらと音読しながら、教室ひとりひとりの生徒を回っていった。今まで見たこともない光景だが、恒も熱心に勉強している。もっとも、小学生の国語など今更勉

強する必要もなかったからなのだろうが……。ユージーンの声は優しく、子供達を安心させるような朗々としていい声だと思った。彼の声は皐月の深いところに響き、切々と訴えかけるものがあつた。

少し偏見が過ぎたが、彼を正当に教師として評価しなければならぬ、と皐月は考えを改めた。この題材の授業は3週ほど進めてあつたから、ユージーンは中盤からまとめの担当となる。先週配布しておいたプリントに、この題材を読んだの感想を書かせていた。ユージーンはそれに目を通していたから、それをもとに授業を進めるはずだ。授業をしやすいよう、お膳立てはしておいた。あとは彼の手腕を正当に評価したい。

「この物語では、残雪に対する大造じいさんの思いが徐々にかわつてゆく事がわかります。最初、大造じいさんにとって残雪はいまいましいやつであり、憎しみをもっており、なんとかしとめてやろうとしていました。ですが……」

ユージーンは簡単にポイントを整理して黒板に書きつけながら、情景描写のイメージを膨らませられるようにしてやった。

「最後はライバルとして、がんの英雄よと呼びかける場面があります。敵としての相手から、ライバルへとかわっていったのです。このとき大造じいさんは、どのような気持ちだったのでしょうか。来年もまた仲間を連れてやってきてほしい、そう考えたのは、大造じいさんの中に、残雪に対する尊敬の念がでてきたからです」

なかなかのものだ。教師としては、確かに四十九歳ほどの貫禄があるといえなくもなかった。恒はぼんやりと物語を読みながら、いつか皐月先生が大造じいさんが残雪を尊敬し認めたように、ユージーンを認めてくれればいいのにと願いながら、教科書の挿絵にせつせと落書きを追加していた。

*

ユージーンの授業はわかりやすく、面白いということ子供たちの支持を集めていた。ユージーンは皐月や教職員に認めてほしかったわけではないが、妙な事をして信頼を失いたくはなかったようだ。彼は神通力、皐月のいうところのマジックやイリュージョンの類はどれだけ子供からせがまれても一切行わなかった。こうなるといくら疑われていても、力を使わないのだから検証のしようがない。疑いはいつまでも晴れなかったが、結果的に皐月との約束を守る形となったため、皐月も無碍に接するわけにはいかなかった。

皐月は皐月で、彼の人格が気に入らないとか、鼻につくなどの不満は持っていなかった。ユージーンはよい教師だ。妄想、虚言僻さえなければ彼を好きになれそうだとさえ思う。その根本的かつ子供じみた嘘を改めさせ、教師として再スタートを切ればよいのにと、勿体無く思う。嘘を見破るにはどうすればよいか……脈がないという噂もあったが、見た目に男性だということですすがに触れて確かめるのは難しいし本人も警戒するに違いない。

この数日でその他に分かったことといえば、彼がおそろしく学識のある人物だということ、そして身体能力がずばぬけているということぐらいだ。そういう、マジックではどうにもイカサマ出来ないことは、いくら皐月でも素直に認めざるをえない。この才能があれば詐欺まがいなことをしなくても充分食べていけるだろうに、理解に苦しむ。日本に来て長いのか日本の事情にも詳しく、その見識は日本人と遜色ないほどだ。

皐月はユージーンと校庭に面した渡り廊下を歩きながら、彼の正体を勘ぐっていた。彼がどういう経歴を経て今に至るのか、皐月はまだほんの1%ほど突き止めてはいない。ユージーンは特にやま

しげな態度を見せることもなく、バカ正直、愚直なまでに淡々と日課をこなしてゆくだけだった。必要な事は全て知っているようだったし、皐月が何を言いたいのかも聞く必要がないといった風だった。

そんなわけで、皐月は今日も会話の手掛かりを失ってしまふ。皐月は彼に対して、いつも質問をしてしまっていることに気付いていた。一体この人は何者で、何のために村に留まろうとしているのだろう、それを聞き出すために、もうどれほど質問を重ねたことか。彼の答えはいつもの確なようでありながら、とても受け入れられるようなものではなかった。この日もその手の会話になっていたところだ。

「先生、私はあなたを尊敬しています。わざわざ分かりやすい嘘をつかなくとも、あなたはお若いのに素晴らしい見識と才能がおりになるのに、いつまでご自分を偽るのですか。もうそろそろ、お話下さってもいいじゃないですか」

「あなたのお気持ちもよくわかります。しかしわたしはそれを証すことをしません。ただでさえ信用下さらないと、嘘の経歴を上塗りしてあなたを騙したくはないのです。これはせめてもの誠意とお受け取り下さい」

「誠意だなんて、からかわないで下さい。私はただ、あなたと正直に接してゆきたいだけです。いつもはぐらかして」

「……わたしは教師を辞めた方がよいのでしょうか。このままではあなたを傷つけるだけです。この村のお役にたちたいと思い引き受けましたが、これでは本末転倒です。わたしは本当の事を正直に申し上げております。これ以外の答えは、それこそ嘘をつくことになります」

つまりそういう遣り取りに終始するのだった。皐月はもういつそ彼がこういう精神の病気にかかっていると思った方が楽になるのか、

とすら思いつめた。とても嘘をついているような顔ではないが、有り得ない事を平然と言っているのだ。病気なら仕方がないが……。

「辞めるだなんて。そんなつもりじゃ……」

たとえ精神病患者でも、恒を学校に引っ張って来たのは彼だ。恒を学校に来させることがどれほど難しい事か皐月は身をもって知っている。あの子を説き伏せ、信頼させ学校に連れてきた。皐月には不可能な三つの事をやってのけたのだ。彼は恒の信頼した、ただ一人の人間に違いなかった。皐月に彼の代役が務まるとも思えない。辞めるなどと言われるとまた心細くなってくる。

詐欺師だなどと思いながら、こんなに彼に依存する、自分はなんて弱い人間だと皐月は思う。この変人を辞めさせずになんとか更正させたい。それには彼の嘘を暴いてはつきりさせなければ――。

皐月は意を決して、突然彼の左手首を握り締めた。ユージーンはびくっと肩をこわばらせ、驚いて立ち止まる。

「はつきりさせましょう。ごめんなさいね、脈をとらせて下さい。よろしいですか？」

「は、はあ」

まさか脈のない人間なんて……皐月は必死に拍動する血管を捜したが、まったく見当たらなかった。上島ですら騙したというのだ、手に細工をしているのかもしれない。皐月はひょいと手を延ばし、頸動脈のあたりをまさぐった。皐月より随分身長の高いユージーンは少し腰を落としてかがむ。

「どうですか？」

上島と違って、皐月は脈の正確な位置を知らない。必死に探しているが、人間のそれだとしてもかなりずれている。皐月は自らの頸動脈の位置を確かめて、それをそのままユージーンの頸にあてはめる。彼はこそばゆさを感じながら、彼女の納得のゆくまで、ありもしない頸動脈をさがさせる羽目になった。

「低血圧とか貧血、じゃないですよね？」

いくらさがしても見つからなかった皐月は、そんなことを訊いてみた。彼の顔は貧血とは思えないほど血色がよい、その線はありえないか。と皐月も諦める。

「ちがいます」

あまりにもお粗末な質問だとは思っていた。ユージーンは呆れたのだろうか、それ以上何も言わなくなった。気まずい空気が流れはじめたその時、廊下のかどを回ってやってきた女子生徒二、三人とばったり出会ってしまった。皐月はまだ諦めずにユージーンの首筋に手を回していたものだから、彼女らが誤解したのは仕方がないことだ。

「ちょ！ で、できてる！」

「えー！ この二人、もうできちゃってる！？」

「ち、ちがうのこれは……！ 本当に」

「いやー！ できてるー！ 皐月先生に彼氏ができたよー！」

「できちゃった婚だー！」

そう無責任にわめき散らし冷やかしながら、彼らは逃げるように走り去っていった。ユージーンは厄介な事になったと思ったが、せいぜい囁し立てられるぐらいで深刻な問題にはならないだろう、と思いついたし、不仲説よりはよほどましだ。

皐月が思いがけない失態に顔を真っ赤にしていると、彼のポケットからバイブ音がした。学校でおおっぴらに携帯を身に帯びているのは、彼ぐらいだ。画面で表示を確認すると、皐月に会釈をし、人目を避けるように外に出ていった。彼には村長や村人たちから社務所を経由した転送電話が入ってくるというので、携帯を持たせてもらっている。事実、上島から急患の知らせが入り、駆けつけたこともあった。救急隊じゃないのだから、そんな事に首をつっこまなけ

ればいいのに……と思っているのは皐月だけのようだ。上島からは何度も連絡が入るようになった。つまり上島は彼を当てにしている、上島より治療ができるということなのだろう。使えない応援を呼びはしない。となると、彼の持つ医師免許は本物なのだろう。

いったいどの資格が本物なのか。医師免許？ それとも弁護士？ 教師は偽物ではないのか、などと疑い出せばきりがない。彼の若さからして、それほど大量に資格が取れるはずがないのだから、どれかだけが本物の資格であとは全て偽物なのだろう。彼の言動は全て怪しい事ばかりなので、立ち聞きしてはいけないとわかりつつも皐月は壁の影に隠れて聞いてしまう。ユージーンは辺りを慎重に見回し、受話ボタンを押した。ここでじっと見ているというのに、用心深いんだか、無用心なんだか掴めない。

「わたしだ。何かあったのか？ ああ。なるほど。そうか……わかった。そうか、やむを得ないだろう。エドマーム Stafy を殺せ。今？ 仕事中だ。ああ、わかった。それでいい、そうしてくれ」

エドマーム Stafy？ 皐月には聞き覚えのある名だった。何をした人物だったかのかは忘れてしまったが、殺せとは、本気で言っているのだろうか。ふざけているようににはとても見えないが……。携帯を切ると、なにくわぬ顔でこちらに戻ってきたので皐月は逃げるようにその場を離れ、職員室に戻った。ユージーンは職員室には戻らず、また子供たちに誘われて外に遊びに出ていったようだ。校庭をかけずり回っているのが、職員室の窓からよく見えた。殺せなどと言った直後だというのに平然と子供と遊ぶ様子には、なんの疚しさも感じられない。物騒な言葉だ。聞き違いならよいのだが……。

＊

皐月は午後の授業を終えて家に帰り、パンプスを脱ぎ捨てストッキングを洗濯機の中に放り込む。一息つく間もなくパソコンを起動し、検索エンジンクoogle（Coogle）に入った。こんな事をして調べたところで、まさか名前が検索に引っかかるとは思わない、皐月の記憶にあった名前を捜してみるだけだ。検索によって引っ掛けた最新ニュースにエドマールムスタフィ、脳梗塞により死去と報じてあった。記事を見て思い出したが、ムスタフィは中東の独裁国家の首相だ。

皐月の脳裏にムスタフィを殺せと命じたユージーンの声がこびり付いて離れない。脳梗塞という話だが、暗殺なのではないかという勘繰りも働く。後に皐月をそれと確信させたのは、殺害を指示した時刻と死去の時刻が同じだという事だ。だとしたら彼は暗殺を生業とした組織の一員なのだろうか。確かにその国家は軍による圧政を敷いていたし、国連制裁決議も決まっていた。

まさか……いくらなんでもそんな……。彼はスパイか何かだというのだろうか。今もこの村に来て、何かの工作を行っているのだろうか。最悪の場合、テロだって企てているのかもしれない。こう考えると、この村に強引なやり方でも留まろうとすること、大量取得された資格の謎や、指紋や遺伝情報が出ない理由も分かる。全てが一つに繋がったような気がした。まるでマジシャンのような立ち回りは、その筋の人間なら心得ていることなのかもしれない。医学に明るいのも、戦闘が日常化している環境にいたのなら不自然ではない。

……そうなの？ あなたは人殺しのスパイやテロリストなの？

風呂上がりの濡れた長い髪の毛をそのままに、皐月は頬杖をついた。

正体がわかったなら、ずっと一緒に仕事したいと、彼女は少しだけ思えそうだった。だが……これでは無理だ。

第1節 第4話 5年2組の日常とスパイ疑惑（後書き）

挿絵（筆者絵注意） 吉川 皐月・ユージーン・藤堂 恒

<http://lizreel.web.fc2.com/gallery/physics/class.html>

第1節 第5話 大規模全ヒトゲノム解析（ジェネティック・アナリシス）

同日。

ユージーンは社務所で遅い夕食を済ませると、ノートパソコンを起動させた。パソコンの外見はパナソミック（Panasonic）のレッツノートの最新モデルだが、メーカー標準より圧倒的な速度で起動するもので、起動からわずか5秒で使用できる状態になる。パナソミックにこんなパソコンが開発できたら、ぼろ儲けのことだろう。USBスロットにカードリーダーを接続すると、GL・ネットワーク・ポジティブ（Network Positive）という画面に切り替わる。

ユージーンは皐月の勘ぐったように確かに諜報活動をしているし、一国の首相の命を実質奪ったのも事実だった。このことから、彼の皐月の予想もあながち間違いはなかったといえる。ユージーンは頬杖をつきながら、自らの第五使徒、紫檀したん 葡萄ぶどうが響の指示を受けて間違いなくムスタフィを殺害したのを、ネットワーク上で確認した。今日の今日、の仕事だというのに、もう誇らしげな報告書が10ページにもわたって綴られている。

紫檀は暗殺が得意な使徒で、実際好きでもあるのだろう。彼は病死を捏造して完全犯罪にすることにとりわけ長けている。任務に忠実であれば言う事は何もないのだが、いつも指定した人数より余計に殺してくる。まったく、とんでもない奴だと思う。ユージーン自ら動いて暗殺をする事はなく、手を下すのは各地に赴任している工作部隊だ。昼は教師、夜は本業をこなす彼は、うんざりしたように画面を見つめながらダウンロードした音楽ファイルを開いてボリュームを上げた。

平常時は報告書を読み、法務局に提出する文書をひたすら作る。世の中が平和な時ほど工作部隊の仕事は減り、報告書のページ数も減るものだ。世の中が平和だとユージーンも人間社会もうれしい。だが平和な世の中を維持することは簡単な事ではないし、暇にしていってよい筈もなく常に監視を続けている。こんな事ばかりを、もう八十年も続けてきた。人々の平和のために捧げてきた仕事とはいえやり口は犯罪と紙一重だと、わかっている。大義のためにはやり方にこだわってなどいられない。

……大義とは何だろう？ と、最近考えるようになってきた。

神の正義が、必ずしも生物階全体の利益になっているとは断言できない。もし人間が真に滅びるべき運命だというのなら、自然淘汰に敗れているということだ。故意に淘汰圧をかけてはならないのではないか、そんな事をも考えるようになる。昔は考えもしなかったのに、歳のせいだろうか。

世界の平和を維持するため、悪の萌芽を未然に防ぐ。そう言えば格好がつくが、実際には危険分子を暗殺するということだ。どのタイミングで、どの人物を殺せばよいのかということは、代々の軍神の経験や勘に基づいている。

つまりそれって、適当と紙一重だ……

と思いかけては頭を振る。こんな事を考えた時点で、危険思想の持ち主として弾劾され、神階から排除されてしまう。神階、法務局の監査官たちが偵察衛星の向こうでつきっきりでユージーンに監査を入れているはずだから、下手なことを考えていて独り言になってしまったら破滅だ。

神として未熟だからか、神に向いていないのかもしれない、と最近はずますそう思うようになってきた。廃業できるものなら、教師一本に専念したい。人の子は思ったより面白い行動をし、興味深く思う。しかし結局、人々を戦争の脅威から守らなくては、教師でだっていられないというジレンマに襲われる。

彼は社務所に集まった子供たちが見ていた夕方のアニメを、主に石沢によって強制的に見せられていた。今も昔も、子供たちは正義の味方が好きだ。時代は移り変われど、勧善懲悪のコンセプトは昔からそれ程はかわっていないらしい。内容はくだらない、子供たちが助けを求めるとなるとかマンが颯爽と登場し、悪を打ち滅ぼし世界平和を守るといったものだ。

”世界の平和を守ってるのって、何とかマンじゃなくて実はわたし達なだけだな”

そんな事もぼやきたくなる。かといってユージーンのやり方をテレビで放映してしまったなら、アニメでありながら泣き出す子供続出、PTAでは有害番組に指定、放送局に抗議の電話が殺到、もう考えたくもない。そこで彼は、自らを神だと称す以外に、子供達にも教員にも余分な情報を与えてはいなかった。自らが戦争を司る神で、世界の平和を維持してゆく立場にあるということなど、必要ない情報だ。そしてその平和維持活動の方法に至ってはもう、筆舌にも尽しがたいものがある。

やはり日陰者は日陰で生きていくべきで、村の神様として親しまれているようなのは、本当は柄ではない。そんなことをいっても、もう後戻りはできないのだから仕方がない。五年間の我慢、我慢……などと思いつつ、教師を楽しんでいる自分がいる。教師は情熱をもって人を育むことができ、殺したり騙したり、裁いたりする必要

もない。実に清しく気持ちのよい職業だ。

こんな自分を慕ってくれる子供たちなど、この村をおいてはほかにないだろう。さて、明日の指導計画をたてないと、と頭の片隅で思いながら、300通以上もある受信トレイの中からメールを順にチェックしてゆく。眠らなくても平気な身体であるが故に、夜と昼の二重生活を続けてゆける。だが疲労を知らない身体を持つ事と、疲労を知らない精神を持つ事は全く違う。彼は精神的には疲れきっていたのかもしれない。メールの283通目に、待ちわびていた以御からの報告がきていた。ユージーンはいつもの癖で顎をつきだし、身を乗り出した。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

No, 283 MIS46t3からのメール

「件名」藤堂恒の調査の件

「サブジェクト」調査結果。ログイン情報、ログアウト情報なし。ポートおよびコード、過去20年にわたり該当なし。不使用IDになっっている。監査も入っていないようだ。以上。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

ログインもログアウトも、されていない？ 恒はどうやってログインさせられたというのだろう？ 入れられなければ、閉じ込められることなどない。一体どうやって？ と、ユージーンはますます分からなくなってしまったが、八方塞りという訳ではなかった。誰も語ってはくれないのなら、恒自身に語らせるしかない。ログイン

されたその瞬間、彼の身体は全てを体験していた。それを引き出す
ほかないだろう。

「テトラ・スパイラルシーケンサ（四極螺旋解析装置）か……厄介
なものを借りることになりそうだな」

＊

それから数日後の事である。ユージーンは気配を察して反射的に
跳び下がって数メートルも避けた。彼の背後には恒が農作業を終え
た姿のまま立っていた。後ろから肩をたたいて驚かそうとしていた
らしい。行き場をなくした右手が宙に浮いていた。

「そんなに必死に避けなくても、ぽんってやろうとしただけです。
でもすごいですね、気付くなんて」

「急に触れないでもらえるかな。悪いけど」

ユージーンはふざけてなどいない、真顔だ。恒は彼の逆鱗にふれ
てしまったのかと、真っ青になった。

「ご、ごめんなさい。また失礼なこと」

「や、違うんだ。そうじゃなくて」

ユージーンは恒の手をとり安心させるように握る。恒の手は、土
いじりをして荒れた手だ。かさかさ乾燥していた。この子供は、
想像を絶する苦勞をしてきた。それが彼の手に如実に現われている。

「ごめんなさい、馴れ馴れしかったですね」

「違うんだ、触れないでと言っているんじゃない。君には白状しよ
う、理解してくれると思うから。わたしの周囲には物理的な損害か
ら身体を守るバリアのようなものが無意識的に展開されている。こ
うやってわたしがきちんと認識して触れているときはバリアは君を
受け入れる。このバリアは速度と破壊力をもって、貫通しようとす

るものを破壊する。バリアを解く事はとてもエネルギーを消費し、コンマ数秒だが時間を使うことだ。だから急に触れられると、バリアを解くのが間に合わない。バリアはとても危険なんだ。相手をひどく傷つけてしまう。内臓がズタズタになってしまいうだろう。そうならないように気をつけてるけど、万が一の事があっちゃいけない……」

言い訳をするように説明しているユージーンは、恒の目にはどことなく辛そうに見えた。そんな危険な力を内包しているなんてこと、誰にも知られたくなかったに違いない。恒は迂闊な事をするべきではなかったと悔やんだが、今後こういう事態がないと言い切れるだろうか。悪気もなくごく日常的に起こることだ。

「でも、背中を叩いたり驚かそうとする子はほかにもいると思います」

「今の事で、そう思ったよ。人の子は予想外の事をするものだね。こないだも吉川先生が同じようなことをしてきた。いつもバリアを解いているしかなさそうだ」

「したら、疲れるんじゃない」

「人命にはかえられない」

「ホントにそんなことになるんですか？　ちよつとそこに立っていて下さいよ」

恒は農具を放り出すと、家の裏にあった古いほうきを持ってきた。目で見えるまでも信じられるものではない。何事も実験を試みなければ、恒はそんな性格の持ち主だった。

「速度と、そして破壊力ですよ。これで殴ったらどうなりますか？」

「それ、壊れても大丈夫なもの？」

それを聞いた恒が容赦なくボロほうきを構えると、ユージーンは待つて、と留めた。やはり怖いのだろうか、と思い恒はほくそ笑む。できないなら、言わなければいいのに。

「試すのはいいけど、投げ付けた方がいいかもしれない。君の手まです巻き添えになるから」

やめてくれというのかと思いきや、意外な言葉だった。恒はやや手加減をしつつ投げ付けると、箸は彼の身体に触れる前に文字通り粉々になって音もなく砕け散った。凍結粉碎でもしたかのように、きらきらと陽光を浴びて箸くずが足元に小山を作る。恒はさすがに今度ばかりは、彼の力を恐ろしいと感じたのだった。箸くずを払い落とし、ユージーンは恒の肩をぽんと優しく叩いた。

「そんな顔、しないでくれよ。寂しいじゃないか」

「俺がふっかけてたから……俺が悪いんだ。あ、そう、家に上がって下さい。何か御用があつていらっしゃったんでしよう？ お茶いりますか？ 今度は本当に出しますから」

「そうなんだ、君達に話があつてね」

「達？」

藤堂 志帆梨は、夕飯に煮物を作つて、コトコトと煮込みながら味付けをみていた。こんにゃくと畑でとれた人参、牛肉の煮物だ。少し味付けが薄すぎたかしら、と醤油と隠し味の唐辛子を入れたところだった。病気でブランクがあつたが、彼女は料理が得意で何より作ることが好きだった。藤堂家の食卓は、一気に豪華になってしまっていた。おすそわけをユージーンに持っていくのが、恒の日課となっている。ユージーンはまだ、自分で食材を買いに出たことがないはずだ。全ての食材は村人からのおすそ分けでまかなわれていると言つても過言ではない。

「母さん、今神様がいらっしゃつてて、お話があるって。ちょっと

火を止めてきてくれない？」

志帆梨はすぐに火をとめ、湯を沸かして緑茶を煎れる準備した。茶菓子はちょうどせんべいを買ってきていたところだ。恒はユージーンを座敷に通しているところだった。最初に来た時に通されて、ユージーンがまんまと嵌められた座敷だ。今度はそんな事にはならないことは分かっていたので、彼は少し安心している。

「こんなあばら家に、恥ずかしいことです。汚くしております」

「お構いなく。どうも、ありがとうございます」

「お話とは、どういったことでしょう」

しなやかな手つきでお茶を出す彼女を、ユージーンは医師のように冷静な観察眼でもって見つめた。あれから志帆梨はすっかり回復して、日常生活を送るには充分健康のようだ。最近では畑仕事もするようになったと言っていた。藤堂親子とユージーンは机を挟んで向かい合った。一口茶をすすってから、ユージーンが居住まいを正すと、つられて二人も同じ動きで正座をしておした。

「あなたがたにお聞きしたいこと、それは、恒君の出生に関わることです。お聞きしてはならないことは存じております。しかし、今はわたしを信じてお話を聞かせてください。あなたの夫、つまり恒君の父親はどなたで、どういう方だったのですか？」

二人は息を吞んだ。ユージーンの口調は真に迫っていて、冷やしや興味本位で聞いているのではないと、すぐに察したからだ。何か重要なことが起こっているのだ。それも、自分たちの力ではどうしようもないことが。母親はしばらく啞然としていたが、そのうち机の上に置いた指を一本ずつ折れたたみ、ぐっと力いっぱい握り締めた。

「ずっと、ずっと不思議だったのです。……私の夫は誰なのでしょ

う」

恒は途端、頭が真っ白になった。そんな！ 父親は離婚をしても居場所がわからないと聞かされていた。そう話して聞かせてくれた張本人である母親が、一体何を言っているのか、わからない。いやだ、言わないで欲しい、と思う反面、真実を知りたいという心もどこかにはある。

「恒君、話してもらってもいいか？」

恒はお茶を一気に飲み干すと、力強く頷く。半ばやけくそになってしまった。この空気で、話さなくてくれという事などできなかった。何より志帆梨が話したがっている、というか尋ねたがっているのだから。

「いいよ。どうせ、いつか知ることなんだろう？」

「ありがとう、恒」

母親は申し訳なさそうな顔をし、悪びれた。

「二十歳を過ぎた頃、私は急に妊娠の症状が出まして、入院することとなりました。父にはそのことで勘当されましたが、当時、お付き合っている方などいませんでしたし、子供ができるような事はなかったと思うのです。先生も少し懐妊の兆候が違うということで、想像妊娠だろうと仰いました。ところがお腹にはしっかりと小さな生命が、息づいていたのです。子供は無事に産まれました。結局、私の夫は誰なのか未だに分からないのです」

「そ、そんな……そのあと、母さんは病気になってしまったというの？ 俺のせいじゃないか！ やっぱり、俺のせいだったんだ！ 俺が生まれてさえこなければよかった！」

恒は耐えられないといったように、顔を上気させ狼狽した。それを宥めるように、母親は強い力で恒の腕を掴む。

「恒君、そうじゃない。……辛いお話しをさせてしまいまして、申し訳ありませんでした。それをお聞きして、改めまして提案させていただきます。恒君を、調べさせてはいただけませんか？ 了承さえいただければ、一瞬で全ゲノムを解析させていただきます。恒君も、志帆梨さんも、それで安心なのではないでしょうか。あなたがたを次々と襲った災厄、その元凶が恒君にあるというわけではありません。何者かの意図を感じるのです。その何者かが恒君のうちに何を見出したのかを、調べさせていただきますたいのです。識ることが、あなたがた自身を護る事となります」

どうやら、これが本題のようだった。以御の報告により、恒をアダムにリンクさせ志帆梨に通常では考えられない不治の病を背負わせた者を、ユージーンの力ではこれ以上追求することができなかった。人間の個人情報も洗っても、出てくるものは僅かだ。しかし人間の歴史以上に、遺伝子は雄弁に彼の歴史を語るだろう。ユージン固有の神具G-CAMを質に入れる形で、遺伝子を司る神、アマデュールパズトリー（Amadew Paztori）、またの名を岡崎おかざき宿耀しゆくやくという神からテトラ・スパイラルシーケンサ（四極螺旋解析装置）を借り受けてきていた。

神具の貸し借りはありえることではないが、ユージーンは岡崎と懇意にしていたため、ユージーンの手に合わせて調整して貸してくれたのだ。岡崎がプログラムを組んでくれたおかげで、簡単な操作で複雑なゲノム解析ができるようになっていた。データは岡崎のもとに転送され、片手間に解析をしてくれるとのことだ。陰階の神々が同じ目的のもと陽階神に協力するということは、そうそうあることではない。このままでは何の罪もない人間が犠牲になり続けるから、というユージーンの説得に、岡崎が折れたというのが実際のところだ。

この装置は、ヒトゲノムを一瞬で解析し、その個体の特性や能力、寿命、趣向にいたるまで、全ての情報をはじき出す。恒の脳がアダムにリンクされた記憶も、きつとどこかにあるはずだ。ユージーンは神に翻弄され続けてきた哀れな家族を、解放してやりたかった。「……怖いです。知ることがこんなに怖いなんて。でも、お願いします」

恒は唇が震えていた。踏み出さなければ、きつと何も変わらない。

*

ユージーンが岡崎から借り受けて用意していたテトラ・スパイラルシーケンサ（四極螺旋解析装置）は、熟練した技術がなければ到底扱えない神具である。ついでにアトモスフィアの質もまったく違う陽階神が手にすると、神具自体が拒絶反応を起こす。神と神具との関係は抗体と抗原のようなものだ。神具は抗原提示をしていて、間違った抗体を受け付けない。こればかりはいかに所有者が調節しようとしてもない反応である。

それでも、プログラムによって抗原の形を少しでも甘く変えてやる事はできる。だが完全に一致してはいないから、やはり神具は多少の拒絶反応を起こす。ごくごく稀に全ての神具に対する抗体を持つ神もいるが、稀すぎてすぐには思い当たらない。拒絶反応は神具によってまちまちだが、発熱反応や過電圧であることが多い。

手袋をして手を守ればいいではないかと考えるがそれも無理な事で、神具は素手でしか扱えないように設計されている。付け加えると、異なるアトモスフィアで起動しようとした場合、展開できるのは本に例えればそのわずか1ページ目だけだ。今回は岡崎の厚意でその1ページ目にプログラムを設定してくれているので、力わざで何とかなる。神具を持つユージーンの手は凄まじい熱が加わり、見る間に焼け爛れてゆくだろう。それでも、やらなくてはならない。

彼は覚悟を決めてきた。

岡崎の神具は名刺サイズのカードのような形状で、半透明のケースの中におさめられていた。白茶けて飾りっ気もないが、錆びた鎖が申し訳程度についていた。恒の目には、あまりありがたい装置のようには見えない。だが見た目に反して、それを取り出した瞬間からユージーンの手がみるみる熱に焼かれていくのを見て、恒はそんな得体の知れないものに触れようという気も起こらなかった。取扱説明書を読んだユージーンによると、この神具でゲノムを解析するためには、対象者がカードを咥えなくてはならないのだそうだ。唇が焼けどでタラコのように腫れ上がるどころか、口が焼けて裂けてしまう。そんなリスクの大きい事を、小学生にさせないでほしいと恒は逃げ出したくなった。

「できません、そんなの！」

「君はこうはならない、拒絶されるのはわたしだけだ。だから早く」
「でも！」

「恒、早くなさい！」

母親に強く言われ、恒は仕方なくくわえ込むと、ユージーンの手をいまでも火傷させているそれは、意外と冷たく感じた。何だろう、痛みはないが身体の中を電磁線が駆け抜けてゆく感じがする。ユージーンは時計を見ながら、正確に時間を測っていた。たったの10秒だが、解析するには充分な時間だ。口腔内細胞DNAを鋳型にして大規模遺伝子解析を行う、岡崎の神具を介したハイスループット解析テクニク。

細胞内DNAを解析用に酵素系で断片化し、カード状のミクロな溝の上で微小酵素反応系を構築し約10秒で迅速解析、全ヒトゲノムを解読し、専用の端末に送信する。生物階のテクノロジーでは次

世代シーケンサにおいて短時間の全ヒトゲノム解析が可能だが、大掛かりな装置が必要である。

カードはデータを転送しきってひと仕事終えたらしく、ペカペカとテカって金色の光に包まれている。先ほどのみすばらしさは見る影もない、下品でケバケバしい金色になった。

「よく頑張った」

ユージーンは恒の口からカードを引き抜くと、やっこの思いでケースにおさめたのだった。恒の家の机をよごさないよう、真っ赤にやけただれた手をハンカチで包んだが、すぐにじわじわと血が青いハンカチを染め上げてゆく。あまり手に注目してほしくない、というように、彼はまっすぐ視線を上げて説明をはじめた。藤堂親子の視線も彼につられて、ひよいと向き直る。

「転送されたデータはすぐに解析されるはずです。明日には結果が出るでしょう。データは個人的なもので、わたしと解析者以外には知られることはありません。この情報は適切に管理され、出回るということは一切ありませんから、安心してください」

「それより手、大丈夫ですか。ぐちゃぐちゃになって……」

「仕方ない、持ち主が違うから。それでもだいぶ、ましな方だよ」

「しばらく、チョークも持てませんね」

いざとなれば、板書をしないでいいパワーポイントで授業しよう、とでも考えていたのだろうか。恒は妙に思ったのが、なかなか怪我をしないという割にユージーンの傷の治りはそれほど早くないということだ。だから箒をも粉碎するような強度を持つバリア、フィジカルギャップ（Physical Gap）のような生体防御反応があるのだろう。傷の治りの早い遅いは代謝の問題だ。より大きなより長命の生物ほど代謝は遅くなる。しかし彼の身長は普通の外国人ほど。彼の身体は矛盾だらけだ。こんなへんてこな生き物が人の

顔をして喋っているのだから、恒はどうしても興味を抱かずにはいられない。

「大丈夫、わたしは左ききだから」

「また皐月先生に怪しまれますね」

「そうだなあ」

皐月は何かにつけて、ユージーンに疑いの目を向けるのを忘れないう。皐月はひどく彼を誤解していると、恒は思う。

「皐月先生、あなたの事を信じてないから。あなたがご自分を傷つけてまで俺のためになるようにしてくれてるって、解ってくれたらいいのと思います」

「何を見たって、信じられない人は信じられないさ。そして吉川先生はとても頭がいい。受け入れられはしないだろうね」

彼は皐月の手ごわさを感じていた。彼女は、こと教養面に関しては充分ユージーンと渡り合えるほどに賢い女性だ。

「そんなの」

「それでいいんだ」

「ごめんなさい、俺がおおごとにしたから」

本当に、恒がもっと彼の話に聞く耳を持って、大騒ぎしなければ彼も村の神様として苦勞することはなかったのに、と思うと申し訳ない。早とちりで大騒ぎをしてしまって、彼は5年間も人々に好奇と疑いの目に晒されなければならなくなった。

「何事も、勉強だね」

「？」

「わたしはこれまで、人と関わる事を極力避けてきた。この村にきて君たちと関わる機会をもらって、よかったと思う。君のおかげだ」

「それ、皮肉ですか」

間髪を入れず指摘する恒もまた、鋭い子供だ。

「半分はそう。でももう半分は、本心だ。わたしは人の事がよくわからなかった。けど、君たちに会って、少し見る目がかわったよ。君達が幸福になる権利も、不幸になる権利も君達のものだ。決していびつな力で歪められてはならない。神には人の主権を守る責務がある」

「その気持ちって人間がチンパンジーやオランウータンを保護してると同じじゃないんですか」

この子供はやはり何かが違う。ユージーンはカウンターをくらったボクサーのように、うまく答えられなかった。志帆梨が恒の頭を結構きつくぶっていたが、事実その通りだった。

「いいんです、あなたがどういうお気持ちでも。あなたがいなければ俺は、もうダメになっていたと思います。諦めるようになっていたんです。本を読み終える事を。このままずっと目覚めなくてもいいかなと思った事もありました。あなたがたとえ俺達をチンパンジーやなんかとそれほど変わらない目で見ているとしても、それでもいいです」

「そうじゃない。保護するとか支配するとかいう関係ではなく、助けない、理解しあいたいという意味であって……」

確かに人は、猿に必要とされていない。だが神は人に必要とされてきた。それは、彼のような神がいたからかもしれないと恒は思ったのだが、ユージーンは恒の言葉で深く彼の発言を恥じた。彼は人を馬鹿にしたり奢った事は一度だってなかったと思っていた。しかし人の側からすればそう聞こえるのだろう。神は生物階のあらゆる命を尊重し、慈しんできた筈だ。長い進化の歴史の果てに人類が現れたとき、神のうつしみのような姿をしたその生命に格別の親近感を覚えたという歴史には記されている。

しかし人は理性を持ち愛し合う半面、その本能として、破壊的衝動を持っていたがため、わずか数千年という期間での絶滅は必至の理だった。神は人類の絶滅を避けるためやむを得ず宗教上の造物主として姿を顕し、人の破壊衝動を押さえ込めなかった。それ以来陽階神は人の歴史に幾度となく介入を行い、ともすればよろめき倒れようとする人類を導いてきた。そのために彼もどつぷりと手を血に染めることとなったが、ひたむきに生きる大多数の人間を理由もなく殺したことはない。それでも結局、それらの行為は神々の欺瞞に過ぎなかったという事なのだろうか。

＊

翌日、ユージーンははじめて欠勤をした。有給休暇の使い方を知らなかったのか、律義に欠勤届を出して欠勤になってしまっている。連絡は校長に入ったらしい。先週きついことを言ったから、恒のかわりに不登校先生になってしまったのかしら。そんな不安が込み上げてきて、皐月は自分の担当でない二・三間目の音楽と体育の時間で、自転車をこいで社務所に向いた。引きこもるにしても、どうせそこしかないのだから、居場所はわかつている。

皐月はほんの僅かばかり、これまでの彼に対する冷たい言動を振り返った。不登校にしてしまったとしたら、自分のせいに違いない。そう、彼は教師としては完璧にこなしていたし子供達からの人望もあつかった。それなのにひどい事ばかりを言って……。そう思っていたから、社務所の入口を突然開けてしまった。まさか鍵がかかっていないとは思わなかった。

ノックぐらいすればよかったが、中にはユージーンの姿はなかった。代わりにいたのは、モデルのようなスタイルの外国人女性だ。青いワンピース一枚でユージーンのベッドの上にだらしなく寝てい

る。だがそれよりも驚いたのは、彼女の背中にある巨大な物体だ。何の冗談だというのか、彼女の背中からは茶色いごまだら模様の翼がよっきりと生えていたのだ。

パーティーの出し物かなにかしら？ 皐月はそう思ったが、そんなちやちなものではない。質感も大きさもリアリティ満点だ。背中からこんなものが……皐月は翼の付け根を見たが、真っ白の皮膚にしっかりと繋がっていた。皐月は思わず翼に触れてしまった。ふわふわとした羽毛の感触だ。触れればぴくりと反応するこれは、偽物などではない。皐月の頭の中をあるイメージが駆け抜ける。

天使、なのかしら……。

そんなものがいれば、だが。深みのある茶色い長髪を無造作に肩に散らせて、彼女はすやすやと寝ている。顔立ちは整っていて鼻筋も通っており、香水なのかもとの香りなのか、その肢体からは花のようなよい香りがする。これは一体何なの、皐月は混乱しながら携帯電話を取り出すと、動画撮影モードにして構えた。だが寝顔の彼女を撮影するのも気の毒で、そのボタンを押せなかった。彼女は皐月の気配を察したのか突然目を覚まし、眠たげな瞳で皐月を見上げた。

皐月はしどろもどろになり、あとずさった。

「見ましたね」

ゆっくりと起き上がった華奢な女性を、見てなおさら驚いた。彼女の翼は飾りではなく自律的に動かす事ができるようだ。

「何ですか、それ」

「どれ？ これですか？ 見たままの、翼です」

「翼って……」

「それとも、角や足に見えるのでしょうか」

彼女は至って真面目に、ふざけた事を口にする。彼女は律儀な性格なのだろうが、皐月はどうか彼女自身がその非常識さに気付いて欲しいと思う。彼女は背中につけた大きな翼が、自分の身体の一部であると主張している。

「何故、あなたがここに？」

「主の代理で参りました。主は神階しんかいにお戻りになられているから」
「主？」

「ご存知ありませんでしたか」

「ユージーン先生は一体どこにいますのですか？ 女性を寝室に連れ込んで欠勤だなんて、教師でありながら、無責任にも……」

「吉川皐月さん、そうではないのです」

彼女は慌てたように直立した。すらりとして長い四肢、そのうえ身長は皐月を軽く上回っている。皐月が惚れ惚れと見とれてしまいそうになるほど美しく、人間離れしているという表現が妙にあてはまる。

「何故、私の名を？」

「失礼しました、お会いすれば分かるのです」

彼女は控えめにそう言ったが、その声ですら高潔だった。

「とにかく、主は現在不在でいらっしゃいます」

「主ってユージーン先生の事ですか？」

「わたくしの申します主とは、陽階神 ユージーンⅡマズローその方に他なりません」

「これは何の悪ふざけですか。いい加減にしてください！ 二人して人を小ばかにして！」

皐月は気付くと、感情を抑えきれず一喝していた。彼女は面食らったようだが、声を荒らげられてもどこことなく精神的な余裕を感じさせる。年の頃は皐月と同じ年のように見えるのに、その茶色の深

いまなごしは同い年とは思えないほどの、よく熟した気品を漂わせている。

「悪ふざけではありません。私は主の第二使徒、川摸^{かも} 廿日^{はつか}と申します。主は早ければ今夜にもお戻りになるでしょう」

「ありがとうございます。ではもう失礼します。授業があるので」

こんな危ない女に関わっている時間はないわ。早く授業に戻らないと。皐月は時間を無駄にってしまったことを悔いながら、ひたすら学校に戻る事だけを考えて。

「おや、教師なのですね」

「さようなら、もうこんなのはたくさんです」

「お待ちください。送って差し上げましょう」

「え？」

「せっかくご足労下さったのです。このくらいはさせてください」

彼女はほっそりとした白い指で皐月の手を無理なく引っ張ると、社務所の外に導きだした。先ほどまで当たり前の風景だった社務所のドアの外は、小学校の女子トイレに繋がっていた。そしてドアの向こうはやはり、社務所に繋がっている。はっとして後ろを見ると、廿日は先ほどと同じくおっとり微笑んでいた。この微笑はどこからくるのだろう、人間ではない、……そんな荒唐無稽な直感を、皐月は信じる事ができた。自分でも不思議なくらいに。

「理解していただけましたかしら」

信じられない現実が、皐月の前に横たわっていた。

第1節 第5話 大規模全ヒトゲノム解析（ジェネティック・アナリシス）（後

科学的解説があったほうが読みやすいとのご指摘をうけたので、随所補足をはさんでいきます。現代科学で存在する概念、あるいは将来的に実現可能なシステムを【現】、作中のシステムを【作】と入れて解説入れていきます。

【作】テトラ・スパイラルシーケンサ：遺伝子解析装置。装置をカードサイズにまで小型化すれば現代科学においても数十年以内に実現可能です。その能力的には【現】次世代シーケンサと殆ど遜色なく、次世代シーケンサはヒトゲノム（人間の全遺伝情報）を数分で解読します。ですがいかにせん現代のそれは装置が大型なのとコストパフォーマンス（1回につき約50万円）が高すぎるのが問題です。

第1節 第6話 人間失格、教師は及第点

「ま、待ってください！ 自転車があるんです。このまま帰れませんかっ！」

そんな口実を作って、皐月はまた社務所側の空間に戻してもらった。そちら側に行ってしまったら、もう二度と戻ってくる事が出来ないような気がしたからだ。皐月は混乱してしまって、正常な理解が追いつかない。だが一ついえるのは、信じられない現象が確かに自分の目の前で、しかも夢などとは思えない形で起こっているということだ。ちらりとドアの外を見ると、まだぼんやりと残像のように学校の女子トイレが見える。ゆらゆらと、蜃気楼のようにそこに非日常の断端が残っていた。

「何がどうなっているの？」

「ご自分でお分かりの筈です。あなたは賢明な女性だと主よりお伺いしております」

「あなたは天使で、ユージーン先生は神様だっているのですか？
ありえない！ ありえることじゃないです」

「ありえない、そう思われるのも無理はありませんね」

廿日は皐月のあまりの動転ぶりに、穏やかな声で相槌をうった。甘い声が皐月の耳元をくすぐるようだ、声質が軟らかく耳に心地よい。皐月はまるで下に見られている、彼女はすこぶる慇懃だが、はなから相手にもされていない。皐月は気がつく、また彼女の背から生えている翼をじろじろ見てしまう。廿日は彼女が興味を持っているのを知って翼の羽根を一本抜き、皐月に見せた。

まるで鷹の翼のような斑紋をした、しかし鷹の翼よりもっと巨大

な羽根だ。1 mほどある。どこから羽根を拾ってきて背中にひっつけたのだとしても、こんな大きな翼を持った鳥がいるだろうか？ いや、いない。皐月は羽根をもらって、裏返してみたり振ってみたりしたが模造品などではありえないリアルな感触だった。根元には少し、引きちぎられたことで血がにじんでいたりする。

「科学的に考えて、ありません。でもこれは本物みたいです。それにさっきの、学校に繋がる空間は……」

「時間と空間が歪められるということは、人の子でも数学的に証明がついているかと思われませんが」

皐月が無知だと見くびられてそんな事を言われているのではないと知っていても、廿日はどこかピンとがずれている。皐月だってそんな事は知っているのだ、数学的に証明はつく。だが数学的に証明できる現象を、必ずしもその目で目撃できるとは限らない。皐月はいつの間にか、虚数界に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚えた。

「あなたのその質量で、空間を捻じ曲げるエネルギーが生まれる訳がないもの」

「あなた方の科学は、観測に基づいています。つまり、見たことがないものは計算ではじき出すしかないのです。この世界にはあなたが知らない法則や概念も存在していて、私達はそれを理解し、扱っております。それだけのことです。ゼロの発明が、人の歴史にとってどれほど重要だったでしょうか？ そこにあるけれど、気づかない事象がまだたくさんあるのです」

相手が質量とエネルギーの話をはじめると、本来は皐月の得意分野だ。だが皐月はまったく反論の糸口を見出すことができなかった。「そういわれると、少し納得できます」

「人のいう科学は、まだ哲学の域を出ておりません」

「……頭がおかしくなりそう」

「そうですね。主に、お伺いしてみることです。あなたにふさわしい説明を下さるでしょう。主は、誠意あるお方です。あなたが主を信じていらっしやらないことを、咎めたりはされないでしょう？ あのお方には偉大な御力があり、それをあなたにお見せすることはたやすい。しかしそれをされません。信じないという自由を、尊重していらっしゃるからです。あなたがこの先どのようにお考えでも、主は必ずあなたのお考えを尊重なさるでしょう。そして求められればそつと手を差し伸べてくださるはずですよ」

廿日はおつとりとそう話すと、社務所の壁際の花瓶に生けてあった花束を皐月に与える。大ぶりの花束で、両腕で抱えてやっと持てる大きさだ。宗教画に出てくる天使そのままに、彼女は優しく佇んでいた。確かに百歩、いや千歩ほど譲ればの話だが、この人物は天使のように見える。だがユージーンはまるきり神のようには見えない。自分より年下の若者のようにしか見えないから信じられないというだけなのかもしれないが、彼女がそこまで尊敬しているのだ、話は本当なのかもしれない、と皐月は思い直した。

「私が育てておりましたものです。形よく咲きましたので、是非、教壇に飾ってください」

彼女が皐月にプレゼントしたのは、きらきらと虹色に偏光する見たこともない色彩を持つ花束だった。形は百合のようだが、花卉の質感がまるでガラスのようだ。そして彼女の全身を包んでいる花の香りは、この花の香りだったのだとすぐに気付かされる。この花だって、幻や造花などではありえない。見たこともないものだから信じられないだけで、そのつくり、花卉、がく、茎、それらを見ればこれが確かに生花だということはわかる。あるのだろうか、皐月の知らなかった世界が。それは決して気味の悪いことでも、いかさまでもないのだろうか。皐月を含む殆どの者が、ただ知らなかっただ

けだったとしたら――。

「あなたは、天使さんなのですよね？」

「そう自認はしておりませんが、古来より、人にはそう呼ばれておりますね」

彼女はどことなく照れくさそうだ。

「そんな風に、なんとなく見えてきました。でも、ユージン先生はとても神様のように見えません」

「そうでしょう。主は人間を装っていらっしやいましたから。どこぞの少年に見破られたと嘆いていらっしやいましたが……たいした少年です」

そういえば、ユージンの神らしい行動を見たことはない。その姿も人間のようであり、話す内容も至って常識的だ。教育論について一時間ばかり討論した時も、少しも人間として不自然ではなかった。文部科学省がどうだのこうだの、現代教育における教師の役割がどうだの、不登校児童に対する接し方がどうだのこうだの、決して熱っぽくはないが、教育に対する堅実な考え方が覗えた。それらは全て計算づくであったということなのだろうか。そうだとしたら、皐月は最初から手玉に取られていたということになる。廿日は複雑な表情の皐月に、優しく声をかけた。

「本当に送って差し上げなくてよろしいのですか？」

「学校まで、10分もあれば着きますから」

「そうですか。道中お氣をつけて」

「あの、ありがとうございます。私、あなたにお礼を言わなきゃ」

「花のことなら、よいですよ。私が育てたものですから」

廿日という使徒は花をこよなく愛する女性で、どんな部屋にでも花を飾りたがった。それで彼女がユージンの留守の間ほんのひと時を過ごす社務所にも、無意識的に花束を持ってきたのだった。そ

れは元々皐月のために持ってきたのではなかったが、教壇に飾って生徒達に喜んでもらえるのならそれでよいと思っただけだった。

「私、あなたにお会いできなかったら、ユージン先生の事、ずっと信じられなかったんです。だってちっとも納得いくよう説明してくださらないから。でもようやくわかりました。私の前にある現実が。あなたが教えてくださったんです。これから理解しようと努めます」

「ふふ、信じない自由というのもありますからね。けれどもそれはよかった、あなたと主のお役にたてたようで。さようなら、あなたに主の加護と祝福があらんことを」

皐月は名残惜しいと思いつつも、花束を自転車のかごいっぱいに入れて、腕時計を見た。皐月の受け持ちの算数の始業開始まであと25分だ。まっすぐ教室に帰らなければいけない。皐月は久々に清々しい気分になることができた。不登校の恒に悩まされていたのがようやく解決したかと思えば、今度はユージンが来てからずっと彼の事が信じられず、不安だったからかもしれない。皐月の頭を悩ませる心配事は何もうなくなった。砂利道の上で軽快に揺れる自転車に乗って、皐月は風のように駆け抜けながら、思わず鼻歌をうたっていた。名も知らぬ古い童謡だ。夏の太陽が、新緑の田畑からからと注いでいた。

＊

翌日はきちんと、副担任のユージンは小学校に出勤して職員室に入ってきた。火傷を負った右手は以御に治してもらって、すっかりよくなっていた。チヨークも持てた。何も不安はないはずなのに、また皐月に何か言われるに違いない、と気に病んでいる。皐月を見つめる視線が伏し目がちになる。皐月は彼の姿をみとめると、思い

がけず先に挨拶をした。

「おはようございます」

皐月から挨拶をしてくれたことは初めてだった。詐欺師だと思われているのだからそうなのだろうがユージーンはいつも先に挨拶をし、へこりと頭を下げてきた。もっとも最近は、皐月も少しずつ積極的に近づいてくれるようにはなったものの……警戒を解いてくれたことはない。今日の皐月はいつもと雰囲気が違う。

「おはようございます。吉川先生。先日はおやすみをさせていただきましてご迷惑を」

「先日、川模さんにお会いしたんです」

「えっ、社務所にいらしたのですか？ 廿日が何か失礼を致しましたでしょうか」

ユージーンは皐月の心が読めるのだという。迂闊に隠し事もできない。ユージーンは彼女と皐月が鉢合わせしていた事に気付いていないし報告もしていないようだが、黙っていてもいずれ分かる事だろうからと、皐月は考えたのだ。一方のユージーンは、今日はやけに距離が近いな、と思いつつ、皐月のフィジカルギャップへの進入を許容した。フィジカルギャップの圈内、つまり半径1メートルに入ってきた事などなかったので、職員室ではギャップを解くのを忘れていた。

「とても素敵な天使さんを部下にお持ちなんですね。それから私のこれまでの数々の無礼を許してください」

「天使って。吉川先生、どうしちゃったんですか？ そういう類のものは、信じないのでは？」

皐月は照れ臭そうにそう呼んで、もじもじとうつむいた。逆に心配になってしまふ、頭でも打ったのか、怪しい宗教に入ってしまった

たのだろうか。

「私、あなたの事を、まるっきりわかっていなかったみたいです。でもこれからは改めて、よろしくお願いしますね」

「……！ ……？」

ユージーンはぼかんとして、廿日が余計な事を言って皐月を錯乱させたのでなければいい、とだけ頭の片隅で思ったが、それ以上に思うところはなかった。素敵な、というが廿日はそれなりに年期もあり気品もあり、温厚かつ聡明な使徒だ。わざわざ鉄砲玉のような（つまりそれは紫檀のことなのだが）無礼な使徒を遣わせていたわけではないから、印象は悪くなりようがなかっただろう。だが廿日と出会って皐月の何が変わってしまったというのか、ユージーンにはさっぱりだ。まあ、悪い方に転んだのではないし放っておくかと、彼は悩む事も廿日に報告を求める事も諦めた。

そんな事など、といっては申し訳ないが正直、皐月の心境の変化などどうでもよかった。彼の悩みはどちらかというと、恒についての事だ。そんな事情は億尾にも出さず、ユージーンははにかみながら握手を求める皐月に応じた。これまではまるで汚いものでも見るような様子で触れようとしなかった手を、握ろうとしてくれる。

「は、はあ、こちらこそよろしく願います」

ユージーンはよそ事を考えながらも、朗らかに皐月に手を差し出した。皐月の指先は冷え切っていて、じつとりとしていた。緊張しているなら握手なんてしなければいいのに。とは思えど、和解の握手のつもりなのかもしれないな、と少々困惑しながら皐月を眺めていた。

＊

そのユージーンの悩みの種、藤堂 恒は1時間目の体育の時間、

何を気にするという様子もなく、他の子供に混じって課題のマット種目を黙々とこなしている。今日の課題は倒立前転だ。

「合格。よく出来たね」

クラス名簿の藤堂 恒の欄の、倒立の項目には一番はじめに丸がついた。子供たちはなかなかできず四苦八苦していたが、恒だけは練習をせず何の苦労もなくできる。運動神経に限らず、器用なタチなのだろう。出来た子から、右端のマットで自主練習をしていなさいとユージーンは指示していたので、一度でできた恒は合格をもらってさっさと誰もいない新しいマットに引っ越すと、ロイター板を持ってきてマットの手前に据えた。誰もいないマットで何をする気だろうかと、ユージーンは他の子供を指導しながら興味深く眺めていた。

「恒くん、何か大技をするの？ あれやってよ、倒立開脚前転」

クラスメートの宝田が、期待しながら耳打ちする。恒が授業に出たことなど数えるほどしかないのも、自然と注目されてしまうのだろう。倒立開脚前転などわざわざやらなくとも出来ることがわかってきっていた恒には、挑戦したい技があった。

「それはやだ。やった事はないけど、試してみたいのがあって。恥ずかしいから見ないでな」

宝田は頷いたが、クラスの大半の目がこちらに向いている。恒はあとに引けず、仕方なく踏み出した。ロイター板の位置が合ってくればよいと思うのだが、ちょうど真ん中で右足で踏み切った。ロンダート、後転とび、後方抱え込み宙返り、着地は体軸がややずれたが、成功とっていいだろう。わっと子供達から歓声が上がリ、ユージーンはそれを見て、やはりそうなのかと目を疑った。

「なに今の！ テレビでしか見た事ない！」

「何の必殺技！？」

「恒ってマットはじめてだよなあ。学校きてなかったしさー。練習

なんてしたことないだろ？」

「一回でできたってか？ やっぱり出来る奴は何でもかんでもできるもんだよな。ありえね」

ユージーンはこれが普通の子供にできる範疇の限界かもしれない、と唇を噛み締めた。幼少期から体操の教育を受けてきたなら、何とか今のような事ができる子供はいらるだろう。だが恒の場合経験もなくやってのけたのだ。熱心に練習をすればするほど、そのうち天才などの言葉では片付けられなくなるし、本人も自らの能力に怯えはじめる。希代の選手と見込んで教育を施すあらゆるトレーナーも彼の底知れない力に恐れを抱く事だろう。

恒には、彼を取り巻く環境の全てが窮屈そうだ。十人並みの指導者、十人並みの友達、十人並みの生活。恒は彼の才能を持て余す事しか知らない。力を持て余し、道を踏み外せば……大変な事になってしまう。ユージーンはそう思うと心がひどくいたむ。今ならまだ間に合う……だが、まだ早かった。

「今の技、なんての？」

「何だろう？」

「ロンドアート、後転とび、後方抱え込み宙返り、だよ。とてもきれいに決まった」

「ロンドアート？」

「そうか、知らないでやってたんだな。後転系の導入技だよ。後転というのは、後ろ回りじゃないよ、後方転回といって……」

副担任の蘊蓄を、一蹴してしまったのは豊迫だった。

「先生も大技やってくださいよ！」

「君達の授業であって、わたしの授業時間ではないからね。うーん、あ……そうだ、では恒君は次これを練習してみて。今の技の少し応用だから」

ユージーンはロイター板もマットも使わず軽く踏み切ると、体育館の床上でロンドアート、後転とび、後方伸身宙返りをしてみせた。子供達は驚いて顎が外れそうだ。

「国際大会でB難度の技だ。ちなみにこれがスーパーE難度の後方伸身宙返り二回ひねり、伸身の新月面という技だ。参考だからやってもいいね？」

ユージーンは恒の演技を見てうずうずしていたのか、言った通りの事をやってみせた。しかも着地にも一切失敗などしない。その身のこなしは、まるで映画やオリンピック中継をみているかのようだ。しかもそれを目の前で実演するのだから子供達にとっては刺激的だった。

「それができたらオリンピック？」

「出られるよ」

「何で先生出ないの。メダルとってよ」

「はは、考えてもみなかったな。わたしはほら、人間じゃないから失格だよ」

「先生は人間失格だね」

「うまい事いうねえ」

「じゃあ人間代表の恒がオリンピック行ってメダル取れよ！ 俺達応援にいくから！」

恒は気分が乗ってきて練習したが、伸身は屈伸と比べても格段に難しい。何度もバランスをくずしてはマットにのびてしまう。こうやって難しい事など何も考えずに、他の子供達に混じって授業を受ける日が来ようとは、恒は夢にも思わなかった。彼はようやく失われた時間を、取り戻すための努力を始めたのだ。

「俺もそれやってみたい！」

「恒すげえ！」

「では早く倒立前転を合格することだ。更に、バック転と宙返りが

できるようにならないとね」

恒は子供たちのやる気に火をつけたらしく、次々と倒立前転の項目に丸印がついた。バック転を成功させる子も何人かいた。一番乗りはスポーツ万能、勉強はからきしな豊迫とよさこ巧たくみだ。巧は成功したので調子に乗って、連続のバック転に挑戦しはじめた。ユージーンは無茶をはじめた子供達の為に厚いマットを敷き詰めて怪我のないように対策をうつと、一番左端のマットにやってきた。

「さて、わたしが見るのは君達だ」

「先生、できないのー!」

「すごいー、男子。いーなーあんなのできて」

「練習すれば男の子でも女の子でもできるよ。頑張ってやろう」

ユージーンは一人ずつ倒立を支えてやって、ゆっくりと前転へともっていった。指導を待つ残りの生徒は壁で練習している。こつさえ掴めば、うまくできるもので、ぱらぱらと合格した。

たまたま廊下から通りがけに体育館の中を見た皐月は、恒がまるで体操選手のようにきりきりと回転とびをしているのを見て興奮したが、中に入っではいけないと思い、我慢して窓から見ていた。ユージーンは時折恒のもとにやってきて、オリンピック選手レベルの技を実演して恒に教えている。

やっぱりあの人は、神様なんだわ。ただの人間があんな難しい事できないし、もしできたら小学校教師なんてならないもの。選手として大会に出されるに決まっている。それに追いついてくる恒も恒だが、あの子はとてもセンスがよかった。教わったことなんてないから、スポンジのようにすぐ吸収できるんだわ。皐月がそんな事を思っているうち、授業が終わって子供たちがぱらぱらと体育館から出てきたので、彼女は急いでその場から離れた。最近、暇ができると彼らのことを覗き見しているような気がする。これではストーカー

ーと大差ない。改めよう、と彼女は反省した。

「先生。もっと難しいのを見せてよ」

恒は授業が終わっても残って、ユージーンに話しかけた。皆で片付ければいいのに、一人でマットを片付けている。少し授業が遅れて終わってしまったので、次の授業までに体操服の着替えが間に合わないだろうから、片付けないで先に帰ってよいと言ったのだ。

「さっきいくつか見せただろう。早く帰らないと、次の時間遅刻だよ」

「さっきのは、本気じゃないんでしょう。あなたは神様だから、もっと難しい技ができる筈です。俺はそれを見せてもらいたくて」

「恒君。わたしは学校では神じゃない、君の先生だ」

彼は恒をたしなめるように拒絶した。彼は見事なまでに小学校教師としての一線を引いている。

「ちょっとぐらい、いいじゃないですか」

「できない。それが吉川先生や村のひととの約束だから。約束も守れない神なんて、神失格だろう？ 人間失格のうえ神も失格になったら、どうしようもないよ」

「そうですか……残念です。でも先生の授業、すごく楽しいです。

先生は誰も教えてくれない事を教えてくれるから。もっと知りたいんです。もっともっと!」

「必要ないよ」

ユージーンは聞き取れないほど小声で呟いた。あまり彼が小声で話す事などなかったというのに、明らかに雰囲気が変わったように窺えた。恒は小さすぎるその声が、まったく聞き取れなかった。何か疚しい話でもしているのだろうか、身構えてしまう。

「え?」

「これ以上見てはだめだ。人として一番難しい技はさつき見せた。これ以上できてしまうと、もう人間じゃなくなってしまう。それとも君は、人間じゃなくなってもいいのかい？」

「え、意味がわかりません。俺はどんな事ができても、あなたみたいにになれる訳じゃありませんから。俺は学者になって薬の開発を……」

「たとえばの話だよ」

ユージーンは悲しげに恒を見つめていた。どうしてそんな質問をして、しかもそんな寂しげな顔をするのだろう、何かを試されているようだ。恒は何の打算も迷いもなかったので、何も捻らず素直に答えることにした。例えばというあり得ない事柄を想定した話は、現実主義者の恒は苦手だった。

「いいえ。俺は学者になるんです。あなたを見てみると大変そうですし」

「そう。それは安心だ。君は思う存分学者を目指すといい。その素質はあるし、君ならよい学者になれるだろう」

「ありがとうございます。なのでいろんなものを見ておきたいんです。いろんな事を知りたいし。もう俺はA D A Mには行けないから、あなたに色々教えてほしいんです」

「恒君は偉いな、感心したよ。なら今日、一緒にA D A Mに行ってみないかい？ ゲストナンバーをあげるから」

恒にとっては一度はトラウマになってしまった忌々しい場所ではあったが、自由に出入りができ、自由に知識を引き出す事ができるというのなら再び行ってみたいような気もした。一人では怖いのが、彼と一緒に安心だ。

「ゲストにしてくれるんですか？」

「そう。A D A Mの本の読み方を教えてあげるよ。きちんとした読み方をね。学者になるなら、調べたい事や知りたい事もあるだろう。利用するといい」

「人間がログインしても大丈夫ですか？」

これまで散々ログインしてきて、寧ろ出られない事に迷惑していたのだが、そういえば人間が神々の図書館に入る事に違法性はないのだろうか、と恒は考えた。違法なことは遠慮したい。

「わたしが認めた人間だから、咎められはしないだろう」

「ユージーンさんて、神様の中では偉いひとなんですか？　なんかそんな感じがします」

「そんな事ないよ、若輩者だ。とにかく今日眠りにいたらADAMにいるだろう。もう、怖くはないね？」

「大丈夫です」

「じゃあ、夢で会おう」

始業のチャイムが、遂に鳴ってしまった。恒は約束を取り付けたことに満足すると、体操着の袖から腕を抜きながら、急いで教室に走っていった。

第1節 第7話 抗界心層図書館（A D A M）へのログイン

「改めて、A D A Mへようこそ。恒くん」

恒との約束の時間丁度、極彩色のノイズの果ての図書館で、ユージーンは待っていた。教師としての普段の姿とは違う、神としてのユージーンの姿で。恒が地上で見た姿とも違う、凝った装飾の純白の装束を着て、恒が迷子にならないよう目印となってくれているのか、いかにもというように眩い光を纏っていた。頭上にはうっすらと環状の光も見える。夢の世界だからだろうが、恒はそのあまりの美しさに見とれてしまいそうになりながら、立ち上がった。

ん？ 立つことができる。恒はすぐに、これまで見ていた夢の状態とは違う事に気がついた。恒の身体は、恒の目にはっきりと映っていた。これまでは意識だけで漂っているような状態で、透明人間のようにさまよっていたのに……。恒は自分の手や足を見回して不思議がったが、今日はユージーンが正式な客として招いてくれたから姿が見えるのだろうと疑問を自己消化した。

「お迎えに来てくれたんですか！ この図書館に誰かがいたの、初めてだから……すごく新鮮です」

「ここは確かに、閲覧者が少ない場所なんだよ。限られた神しか入れない制限区域だ。そして……」

ユージーンは懐から取り出したネックレスのような身分証を、恒の首にかけた。カードは銅版のような金属でできていて、しっかりとした固いものだ。そこに刻印された小さな文字はどの言語とも違って、恒には読めない。

「わたしのゲストだという証。これをなくさないでね」

ユージーンは恒がついてきているのを確認すると、歩きはじめた。

見渡すかぎりの本棚、以前は絶望の象徴でしかなかったそれは少しずつ希望に変わってゆくのだろうか。ユージーンは暫く歩くと、ある書棚の前で止まった。その書棚には本がまったく陳列されていないかわりに、書棚の上にはカードと同じ文字が書かれている。

「この図書館の利用のしかたを教えよう。まず、欲しい本を探すところから。とはいえ、表紙は君が見てもよく分からないだろう」
「全然です」

何も書かれていないとばかり思っていた表紙は、ミミズの這ったような字というより複雑な紋様で埋め尽くされていた。これが文字であり、タイトルがきちんと書いてあるのだそうだ。恒は表題の自力での解読を諦めて、検索機能に頼る事にした。

「では、検索のクエリを入力するんだ。ここで発した言葉は全て司書の監視下にあるから、音声入力が可能なんだよ。実際にやってみよう。恒君の欲しい本は？」

「え、じゃあ、日本の鎌倉時代の文化について書いてある歴史書です」

どうして小学生がそんな時代の文献を調べようとするのだろうか、ユージーンは訝ったが、意外と歴史マニアなのかもしれないと思う直す。

「まず、君のゲストナンバー、そして欲しい本のキーワードを言うんだ。PAA-07-GT1、これが君の番号だ。繰り返して」

「PAA-07-GT1」

「日本、鎌倉時代」

「日本、鎌倉時代」

すると、ユージーンが指定した空っぽの本棚に、ずらりと赤い表紙のついた本が並べられた。どれだけ並んでも、書棚がいっぱいになることはないだろう、きちんと全ての本が並びきっていた。圧

縮されて、表紙が薄くなっている。延髄に響くような音声案内が、どこからともなく聞こえてきた。

” 13895冊の該当があります”

「該当する書籍は赤いブックカバーを付けられて陳列される。ここが君の書棚だよ。今並べられたものの全てが、君の欲しい本だ。とはいえ、膨大な量になってしまったな。更に絞りたい時は、キーワードを続けるといい」

「後鳥羽上皇」

” 294件の該当があります”

マニアックな人物にしてしまったので、300の書籍に絞られ、随分と少なくなった。誰が並べてくれるのか、整頓されて一瞬のうちに並べられる。恒は驚きのあまり、目を見張ってジャンプした。書棚が高すぎて、手が届かない。ユージーンがはしごを寄越してくれたので、上って一番上の本を取った。

「すごい、こんな事ができるなんて！ 手にした本は、読むしかないと思っていました。好きな本を選べるなんて！」

「好きな本を選べない図書館なんてないよ。システムを理解すれば、どんな情報でも手に入る。インターネットの検索エンジンと同じシステムだね。もう数年前からこのシステムが導入されている。さあ、欲しい本が見つかったね。でも、これでもまだ膨大だ。ここからは、本の読み方を教えよう」

ユージーンは適当に一冊の本を手にとった。10cmほどの厚みの本だ。こればかりは以前と変わらない。この内容を全部読まなければならなくなると、恒では数時間を要する。ところが彼は恒に無茶なことを告げた。

「速読術を身につけよう。漠然と、ページを見るだけで、内容が理解できるようになる。だから……」

ユージーンはぱらぱらと全てのページを繰りながら、最後のページまでめくっただけだった。およそ10秒ぐらいの時間でしかない。

「今の本には、後鳥羽上皇時代の町民の生活の歴史の変遷が書いてあった」

「嘘！ 読めたんですか！」

「君にもできるようになるよ」

「そんなの、できませんよ！ からかわないでくださいよ」

「まあいきなりは、無理だろうね。でも冗談なんかじゃないよ。人にだって、速読ができる人はいるじゃない。というか鎌倉時代の歴史なんて興味あるの？ 渋い小学生だね」

恒は小学生にはミスマッチな検索を指摘されたからか、少し視線をはぐらかしたかのように思われた。ついでに話題もすりかえる。

「こんなに早く、読めるわけありませんよ。しかも見てないページもあったと思うし」

「いや、全ページ覚えているよ」

「写真記憶ってやつですか？」

「だから、ちゃんと読んだってば」

恒は本を貸してもらってパラパラめくると、ほとんど読んでいないようにも思えた後半部分、1194ページ目を見た。ユージーンは本を恒に取り上げられても、どこか余裕を感じさせる。どこを訊かれても大丈夫だというのだろうか？ 彼は一夜漬けをした学生のように、どこでも暗記しているから訊いてみると言うのだ。

「じゃあ、1194ページ目は何ですか？」

「定 今堀地下掟の事 合 延徳元年十一月四日 ひとつ、惣より屋敷請候て、村人にてなき者 置くへからざる事。ひとつ、よその

人を地下に請人候はて置くへからさる事。ひとつ、」

「え！ 何で分かるんですか！」

「覚えているんだよ。君もゆっくりなら全てを覚えておけるって言うていただろう」

「すぐく時間をかけてならできますけど、すぐくですよ？ でもあんな、読んだか読んでないかわからないようなめくり方で」

まったく、かなわないな、と思う。こんな事ができるのだから、やはり神と名乗るのは伊達ではないのだろう。恒は何度かユージーンとともに検索方法を練習して、思い通りの本が手に入るようになった。恒の自主性を尊重して、ユージーンは最大限の便宜をはかってくれたようだ。そうやって検索している間、通路から見える人影もなく、誰にも会わなかったので遠慮がなかった。

「上手に搜せるようになったね。もう、一人で来ても大丈夫だよ」

「本当ですか！ ありがとうございます」

「恒くん」

「はい？」

「勉強もいいけど、ほどほどにね」

「はいっ」

ユージーンは恒を信頼しているようだ。それにしても、どうして急にADAMにアクセスさせてくれるようになったのだろうか？ 勘ぐってはならないと思うが、恒はどうも腑に落ちなかった。

＊

「なんであんな速さで読めるんだよ！ 信じられねー！」

恒はひとりごちながら、連日のようにADAMにログインして検索を続けていた。本を急いで読む必要性などないと思っていた。だ

が、これほど膨大な資料の中から、本当に欲しい本を手にするためには、その分厚い本の内容を一瞬にして理解する能力が確かに必要不可欠だ。恒は自分の読解のペースというものを掴みながら、少しずつ無理をせずに本を読んでいた。

自分の興味ある本がある程度絞り込めるようになったおかげで、恒はADAMにすっかり夢中となってしまうた。しかもメリハリをつけてログインとログアウトをするので、睡眠時間が邪魔をされず学校でも眠たくなならない。睡眠時間もちゃんと確保でき、嘘のように安眠できるようになった。

「あれ、この本ないぞ」

検索にはヒットするのに、肝心の本が手に入らない事も多々あった。ユーージンも言っていたが、ADAMの書籍は帯出もできるのだという。だが帯出ができるのは、ごく限られた神々だけだ。恒などが貸りられる道理もなかった。どうしても欲しい本が、その書棚からぽっこり抜けていた。恒は諦められずに司書に問い合わせた。

「PAA-07-GT1. 問い合わせです。コードAB2295の書籍は帯出中ですか？」

”帯出中です。本日中に返却となります”

神々の文字が満足に読めない恒は、他の利用の仕方も教わって、検索クエリを使いこなしていた。それによると、誰かが帯出しているが、延滞手続きがないので今日中には戻ってくる予定だという。また明日出直してきたら、手に入るだろうな、などと思いつながら、今日は切り上げることにした。ログアウトの手続きを踏もうとしたそのとき、恒の真横に誰かがふっと煙のように現われた。これがADAMのログインの瞬間だ。恒もこうやってふっと現われて、ログアウトの瞬間には煙のようにかき消えているに違いない。

現われた人物が神なのか何なのかというのは、正直よく分からなかった。彼は白衣を着ていなかったし、黒いTシャツに、白いパンツ、頭にはゆるめの帽子を被って、どこかで見たようなファッションだがいまいちよく分からない、妙な格好をしていた。民族衣装のようでもあり、ダンサーかクラバーのようにも見える。よく見ると、帽子の上にかすかに後光があったから、辛うじて神だと気づいたぐらいだ。格好に似合わず勉強家らしく、書籍を何十冊も抱えていた。皮のベルトで束ねて、分厚い書籍を圧縮して持っているようだ。一礼し、すぐに顔をそむけて遠ざかろうとしたが、運悪く呼び止められた。恒はこの制限区域内で、ユーージン以外の神と出あったことがなかったので、呼び止められでもしたら緊張してしまう。

「おい。子供が、何故ここに？」

「は、はじめまして」

恒は緊張してお辞儀をした。彼は恒の身元を確かめるため無言で恒の首にぶらさがっているプレートを取り上げると、プレートの文字を読んだ。突然接近されて、恒は首をすくめた。神がみなユーージンのように親切で温厚だとは限らない。プレートをチェックすると、彼は手を離れた。

「ユーージンの客か。……ふー、ん」

彼は納得したように唸った。このたった一枚のプレートによって、ひよっとすると恒は不要なトラブルを避けられたのかもしれない。

「ごめんなさい。人間がここには、いけないのでしょうか」

「人間？」

彼は眉をしかめて、何か不満そうに唇を突き出した。変なことを言ったのだろうか。それとも、恒が人間だという事実気づいていなかったのだろうか？ 彼は銅色の髪を肩まで伸ばし、空色の瞳をした欧米人風の容姿をした神だった。どこか人形のように、端正だ

が無機質な容貌だ。にこりもしないのでどう思われているのかわからない。

「なるほど……ユージーンはいい奴だからな。法的には誰を招待しようが問題ない。さ、学べよ、少年」

彼は恒に一冊の本を渡す。それは恒がまさに捜していた本だったのだ。どうしてこの本が必要だと分かったのだろうか。この辺りで探索をしていたから、それが漏れたのだろうか。

「どうしてこの本を？」

「顔に書いてある。この本が欲しかったってね」

「あなたも、人の心が読めるのですね」

恒は若干腰が引けながらも納得した。しかしどうやって心を読んでいるのだろうか、本当に顔に書いてあるのだろうか。一度でいいから、人の心の中を読んでみたいものだな、と恒は読心術に憧れる。

「神なら誰だってできることさ。俺やユージーンだけじゃない。ここで会ったのも何かの縁だな。俺は荻号^{おごう} 要^{かなめ} というんだ。お前は藤堂 恒、だろ」

欧米風の顔立ちをしているが、日本由来の神だったのかと思うと、何となく親近感が沸く。

「え？ 日本の神様ですか？ 荻号 要って日本の名前……」

「いやいや、そうじゃない。ウィズウォルター（Wiz Walter）ともいうが、神には置換名^{ちかんめい}という名もあるんだ。置換名というのは発音不可能な本名を表意文字である漢字に置き換えた名前で、1000年ぐらい前から始まったシステムだ。それ以前は違う表意文字を使っていた。ユージーンにだってあるんだぜ。流矢^{りゅうし} 布^ふ輝^きってのがな」

「知りませんでした」

名前なんて、一つでいいじゃないかと恒は思ったが、そうすると神には三つの名前があるということだ。本名、通り名、そして置換名。ややこしいなあ。どうしてこんなにややこしい世界なんだろう、などと思いつながら、目の前の神にすっかりそれが読まれてしまっていることに気づき、愛想笑いを浮かべた。しまった、余計な事を考えて失敗だった。冷や汗が出てきたような気がする。

「俺も、一つに統一すればいいと思うぜ。そうだ、これから茶でも飲まないか」

「お茶、ですか！」

恒でなくとも心の躍る響きだ。

「カフェに連れてってやるよ。行ったことないだろ」

「で、でも」

「信用ならないってか？」

彼には悪いが正直、そうだ。名前を名乗ってくれたとはいえ、見ず知らずの者についていってはいけないという事は、小学生でも習う。もし何か悪いことに巻き込まれてしまったら、ユージーンはこのこ見知らぬ神についていった自分に呆れるだろう。そしてADAMにすらログインさせてくれなくなるかもしれない。天国の喫茶店に行ってみたいような気もするし、そのコーヒーを飲んでみたいとは思ふ。けれど、この得体の知れない神についてゆくのは危険だ。ついて行くとしたら、この荻号という神が何の神で、そして安全なのかを一度戻ってユージーンに聞いてからだ、恒は子供ながらに用心深くそう思った。

「今日はもう戻ります。明日また来るかもしれません」

彼の気を悪くさせないように、刺激しないようにと気をつける。

「そうか、残念だな」

「明日もいらっしゃいますか？」

「明日はいないよ」

「じゃあ、もうお会いできないんですね」

「そうだな」

それ以上引き止めることを諦めた荻号は、あっさりと踵を返して去って行こうとした。これからどこへ向かうのだろうか、一人でカフェに向かうのだろうか、それとも仕事に戻るのだろうか。恒は何も考えず呼び止めた。名残惜しい気がしたからだ。

「待ってください！ 行ってみたいです、カフェ。でも……」

「ユージーンに怒られるかもしれない、そう考えているんだろ」

読心術をおさめているだけあって、既に恒の考えはお見通しだ。

「そうです」

「じゃ、聞いてやろうか」

荻号はそう言うと、美容師が腰からぶらさげているようなシザーケースの中から、ごそごと携帯電話を取り出した。ユージーンはスーツを着てきちっとしたフォーマルな格好をしているが、この神はお世辞にもちゃんとしているとはいえないし、服装だってどこことなくだらしく見える。サンダルをペタペタいわせて歩いているのだから、権威もなにもあったもんじゃない、と恒は思う。そしてそういう格好で歩いているのは、ユージーンよりよほど格下だからだろうと決め付けて納得した。

「よう、ユージーン。俺だ俺」

オレオレ詐欺のような口調で荻号は電話を切り出す。本当にユージーンに繋がっているのだろうか。怪しいな、と思っていると、ちらりと荻号は恒を見下ろした。あとで代わってやるから、そんなアイコンタクトのように思えた。

「子供を送り込んでただろ。警戒してるんだが、ちょっと茶をしてくてもいいかな。何故って？ 子供をこんな場所に一人で放置したお前が悪いんだろ。ああ？ ああ、分かってる、言わないよ。ほら、

いいってよ」

荻号は恒に通話中の携帯を恒に寄越した。人の使うそれより薄くて、持っても殆ど重さなど感じない。洗練されたデザインは、ユージーンの持っているDoCaMoに偽装した携帯とは違う、まさに神の持ち物だ。それにしても、何を言わないといったのだろうか？ 何かユージーンと約束をしているかのような最後の言葉は気になる。受話器を握ると、やあ、という軽いユージーンの声があってほっとした。恒はユージーンの優しい声色が好きだ。

「ユージーンさん、行ってきてもいいですか？」

『まあ、今日は連れていってもらったらどう？ 折角お誘いくださいっているのだから。あと、失礼のないようにね。その方は神として最高の智と力を持つお方だ』

「え、お偉い方だったんですか！ どうでしょう、俺言葉遣いとかマナーとかなってなくて」

『誘ってくださるくらいだから、少々言葉遣いぐらいは大丈夫だよ。じゃあ、よろしくお伝えしてね』

ユージーンのお墨付きをもらったので恒はすっかり安心して、荻号のあとをトコトコとついていった。図書館から出るには、ログインとログアウトの形式しか知らなかった恒だが、ちゃんと出入り口はあるのだという。荻号はどこをどう歩いたのか分からないが、いつの間にか貸し出しカウンターを横目に見て、大きな門をくぐって図書館から出ていた。

図書館の外には、白く壮大な建造物がいくつも立ち並んでいた。それらは見たこともないつくりで、立体的で複雑な構造をとっていた。空中に浮かんだ回廊などが、幾重にも折り重なって見える。装飾品も洗練されていて、ごてごてとはしていないが特徴があり、存在感がある。広場には巨大な魚をかたどった噴水が涼しげな音を立

てて水しぶきを散らし、さらさらと流れてゆく。恒は首が折れるほどに見上げるばかりだ。

「ここ、天国ですよね」

「そうだよ」

荻号は適当に相槌をうつ。

「人間なんかが、天国に来ちゃったなんて、信じられなくて」

「なあ、お前それ本気で言ってるんだろ？」

「何をですか？」

「ふーん、知らないみたいだな。まあそれは俺が喋ることでもないか、ユージーンに任せよう」

「？」

「何食べたい？ 俺の一押しは紅茶の専門店。あと、コーヒーの専門店もあるし、ジェラート屋やケーキ屋もある」

恒は頭の片隅に嫌な影が落ちるのを感じたが、すぐに忘れてしまった。荻号は口調のせいかわつぽく、親しみやすい雰囲気を持っていた。最高の智と力を持つ神というユージーンの説明がいまいちわからなかったが、要するにユージーンよりよほど偉いのだろう。口のきき方には重々気をつけなければならない。

「天国って実際、どこにあるんですか？ 夢の中の世界なんですか？」

「まさか。こりゃ現実だ。お前のいる生物階から見ると、全く違う次元がこの世界だよ。ログインとログアウトは時空間操作能を持つ限られた神に許された特権であって、本来は正面玄関から行儀よく入るもんだ。ユージーンの前ストナンバーがなければ、お前は実体でここに入ることすらできないからな」

荻号はユージーンが自分にかみくだいて説明してくれたように分かりやすく話してはくれず、聞き手がうまく解釈しないとさっぱり何を言っているのかわからない。分からないなりにようやく理解し

た恒は、そういうことだったのか、だから昔は自分の姿が自分には見えなかったのだと思った。つまり精神体のようなものでログインしているのだろう。

恒は気分的にはコーヒーが飲みたかったが、彼が一押しという紅茶が飲みたいと気を遣ってそう言って、ケーキセツのある専門店の連れて行ってもらった。中に入って驚いたのは、座席がガラス張りの板のようになって、しかも吹き抜けの店内に規則正しく宙に浮いていることだ。通路から足を踏み外すとずっと下まで落ちてしまう構造でぎよっとしたが、荻号に支えてもらって何とか席につくことができた。メニューは神語で書いてあり読めないのも、荻号がかわりに注文してくれた。注文の品が来るまで時間があつたので何気なく尋ねてみる。

「ユージーンさんって、結構有名な神様なんですか。特権階級って」

「まあ有名っちゃ有名だな。軍神としては異例の出世だ」

「ぐ、軍神てなんですか？」

恒はあまりの驚きに、最初に運ばれてきた水を思わず噴き出しそうになった。荻号は頬杖をつきながら携帯をいじっている。

「戦争を司る神だよ」

「ええっ！ ええっ？ ユージーンさんが戦争を？ そんな、いい神様だと思っていたのに！ 嘘です！ 嘘だといってください！」

恒はよほどショックだったのか、目を白黒させている。神は神なのだと、恒は勝手にそう思っていた。だが山の神、海の神、土の神など、ゝの神という概念は確かに古来よりあって、軍神という単語も確かに存在しない訳ではない。それでも温厚そうな彼がよりによって、軍神だとは思ってもみなかった。恒は彼の職業を嘆かずにはいられなかった。

「おいおい、軍神が戦争を起こしている訳じゃないぞ。軍神の仕事は、いかに避けられない戦争を回避し、短縮させるかということころ

だ」

「今世紀の戦争は、短くできたんですか？　たくさんの人が犠牲になって、とても長い戦争だったと」

「こんな事いわれちゃ、ユージーンも報われないな。短い犠牲も少なかった方だぜ。人類は滅亡する予定だったんだから」

「人類滅亡？　そんな、そんな事ありません！」

「お前は平和な時代に生まれたからな。人間ってのは、そういう生き物なんだ。神はことあるごとに人の歴史に介入してきた。滅亡を防ぐために、幾度となく策を講じたよ。そうして、今のお前達がある。誰も気づいてないんだろうがね」

「広島と長崎に原爆を落としたの……」

まさか、違うと言って欲しい。だが荻号はようやく運ばれてきた紅茶を恒に勧めながら、否定などしてはくれなかった。

「ユージーンだ。当時の科学者に原子爆弾作製の知識を授けた事で、歴史を動かした」

ああ、聞きたくなかった。

「……ひどい。何も罪のない人たちを」

「そう思うかもしれないけど……滅亡を避けるため、何としてでも戦争を終わらせなければならなかった。核の力を使ってでもな」

「だからって、命をあんなに犠牲にするなんて……」

「これも神が泥をかぶる仕事だ。大戦が終わった後、何度ユージーンが罪悪感にかられて自殺を図ったことか。たくさんの人間を殺してしまった、自分は罪を購わなくてはならないってな。ユージーンを責めたきや責めるがいい。だが、お前ならどうする？　全人類滅亡のシナリオを、指をくわえて看過するのか？　ユージーンを選択があったからこそ、お前達は生きている。それをどう考えるのかは、お前達次第だ」

責められるはずがない、恒は安易な考えで彼を心の中でなじった

自分を恥じた。だが同時に、やはり生まれたばかりの乳飲み子や、何の罪もない一般市民だって巻き添えになっている。核は全ての人々に無差別攻撃をしかける。それが神の粛清だというのか、ユージーンは決して望んでそれを選択したわけではないだろうが、もう少しうまくできなかったのだろうか。全ての人間が平和に、手を携えながら大団円となるような結末を導けなかったのだろうか。神にできないことなのだから、人である自分が考えたってそれ以上の結果を得たとは到底思えない。だが、神の正義は必ずしも正しくはないのだということを、恒は荻号の言葉により、まざまざと知ってしまった。

「それは、誰が導いても同じ結果となったのでしょようか？」

恒の問いかけは、ある危険な可能性を示していた。荻号はその風体に似合わず、紅茶にミルクと砂糖をたっぷりを入れて匙でかき混ぜていた。恒は砂糖は入れずにいただく主義だ。

「んー、そうだな。方法がないことはないな」

「ユージーンさん、あなたのことを最高の智と力を持つ神様だって仰っていました。あなたなら避けられましたか？」

「ん？ ああ」

あっさりとよくも、言ってくれたよ、と恒は彼の人格を疑ってしまふ。ならどうしてユージーンに知恵を貸してやらなかった？ 助言を惜しんだというのか、何十万名もの犠牲者を見殺しにして……。ユージーンと荻号には何らかの敵対関係があるのか？

「なら、どうして」

「どうしてって、俺は陰階神だからな。生物階、つまり人間世界には関与れない。現代の陽階神が導いた結果、それがお前達の未来となる。だがユージーンの導いた結果も、間違いじゃないんだぜ？」

「俺が神様として生まれついたなら、もっとよく考えたと思います」

「お前が神なら、ねえ……冗談のつもりか？」

荻号は先ほどから、妙な独り言を繰り返している。恒はそんな独り言を聞いて、何となく薄気味が悪かった。妙な神もいるものだ。精神病なのだろうか。

「？」

恒はつくづく荻号と話がかみあっていないと思った。

第1節 第8話 恒の正体と束の間のモラトリウム

「カフェに連れて行ってもらったのかい？」

早朝、早起きのユージーンはいつものようにきちっと着替えを済ませて、庭先の花壇に水をやっていた。昨日荻号から聞いたことは、ユージーンに訊いてはならない気がしたので、恒は普段どおりに振舞うことにした。

「はい、紅茶をごちそうになりました。おいしかったです」

「そう。荻号様が陽階にいらしていたんだね。あの方は陰階神だから、そうそうはお会いできないんだ」

「いんかいしん？」

聞きなれない言葉に、恒は漢字変換できない。

「そういう組織があってね。わたしは陽階という組織に属している。A D A Mは陽階にあるんだ。仕事かなかで、いらしていたんだらう」

「感じのいい神様でした。メアドも教えていただいたんです。困ったことがあったら連絡してこいって！」

「へえ、それはまた……」

荻号は早くも、恒の中に何かを見出したのかもしれない。そうではなくて万能の天才、荻号要が子供と接触するだろうか、とユージーンは懸念した。この状況下であまり恒と接触を持たれるのは困る。恒をA D A Mにリンクさせ、志帆梨を病におとしめた神が誰なのかを突き止めるまでは、他の神と接触をさせないほうが賢明だと思っていた。

あるいは、荻号なのか？ 人格者として知られる荻号がまさか。とは思えど、絶対などという保証はない。仮にも彼は陰階神だ。何

を考えているのか分からない。そもそも、ユージーンの手持の番号だって、荻号に教えた覚えも公開した覚えもない。先日通話があったとき、荻号側の携帯電話の番号を逆探知しようとしたが、しっかりとファイアーウォールが張り巡らせてあった。噂にたがわぬ要注意人物だ、ユージーンはそんな事を考えていた。恒が荻号に傾倒しては困る。

「でも恒君。少し慎重にしておいた方がいい。誰が君をそんな目に合わせたのか、まださっぱりわからない時期なんだ。メールは控え方がいいよ」

「俺、携帯もパソコンも持っていないから、実際にはメールなんてできません」

「そう、なら安心だ」

「荻号さんを、疑っていらっしゃるんですか？」

ユージーンと荻号の関係を恒は知らないが、少なくとも荻号の飾らないあっさりとした性格には好感が持てた。

「違うとは思うけど、ありえないとは言いきれないからね」

「あの、ユージーンさん！」

「ん、なに？」

恒は思わずあのことを訊いてしまいそうになった。だが口の中から出なかったその言葉を、すんでのところであみ込んだ。しかしそんな恒の思いも、ユージーンには筒抜けだった。

”君が言いかけて飲み込んだ言葉は、ちゃんとわたしに届いている。わたしは軍神で人殺しだ。君のっているわたしも、軍神として核を賣したわたしも、心の底では誰も犠牲になることのない平和な世界を願っている。だがそう導けない、そうは導けなかったんだ。人に出来ることは限られている、人は無力であるがために、恐るべき行為をしなくてすむんだ。大いなる力を持つ者は、大いなる犠牲を強いる事となる。神とはそういうものだ。君にはそうなってほしく

ない。無力だが正しい事を貫ける人間であって欲しいんだ。君は学者になって、薬を開発したいんだと言った。それは正しい事だ。君の中の正義に矛盾する事は何もない、手を汚さなくてすむ。だったらそうやって欲しい。この事実を、どうやって君に話せばいいだろう。君には道を選ぶ権利がある。わたしなどの意思によって、君の生きる道を歪められてはならないのかもしれない”

”そして恒くん。君は神だ”

ユージーンは苦しそうに顔を歪めた。藤堂 志帆梨は神の仮腹にされたのだ、それで予想外の重篤な病を患うこととなった。すなわち、恒のはじめの推測通り、志帆梨のバイタルは恒が奪い尽くしたというわけだ。その量、人間のおよそ百倍以上。神が人の腹から生まれてくるのだから、そのぐらいのバイタルを奪っても不思議ではない。

テトラ・スパイラルシーケンサの答えはすぐに弾き出された。迅速なる解析の結果、神であるという可能性が50%。何度も試算したが結果は変わりようがない。これは神と人のあいの子であるということを示す。ユージーンを戦慄させるには十分な値だった。岡崎宿耀はこのことを絶対に口外しないしデータは破棄すると言ったが、半神の非凡さは隠しとおせる事ではないぞと警告された。

そうだ、あいの子とはいえ神が人間社会で平穏には暮せない。いつしかその非凡なる才能をもてあまし、道を誤ればその強大なる力は人間社会にとって凶器と変わる。恒はどんなに遅くとも20歳を過ぎると、それ以上老いることはなくなるだろう。これは純血の神であろうが半神であろうが同じことだと思われる。老化も成長もしない、それが神だ。人間として暮してゆけるはずがない。また、彼は家庭を持つ事も出来ない。生殖器はあるのだろうが生殖能力がま

まったくなく、子供をもうけることも赦されない、先天性の不能だ。不能の人間はたくさんいても、老いない人間などいない。

こんな人生が、恒にとって幸せなのだろうか。そうは思えない、だからできるだけ早く神階に上げろ、と岡崎が助言するわけだ。いつまでも人間社会で教育を施されることもなくぶらぶらしていたら、神として生きることにも間に合わなくなってしまう。半神であるとはいえ、彼の寿命は恐らく一千年以上はあるはずだ。人間として生きるなら、つまりそれだけの長い時間を、老いずに過ごさなくてはならないという事だ。何世代もの人間との出会いと別れを繰り返しながら……。

定住ができず戸籍を失う以上、安定した生活はまず望めない。各地を転々としながら、才能をもてあまし、いつ訪れるとも知れない死を、延々と待ち続けることとなる。それはひどく孤独だろう。だがそれでも、ユージーンは彼の人間としての一生を、諦めさせたくはなかった。人として幸福な人生を歩んで欲しいと願う一方で、A D A Mへのゲストナンバーを与えたりとユージーンの行動に一貫性がないのは、ユージーン自身が迷っていたからだ。

神として生きる義務。

人として生きる権利。

どちらの権利も尊重しなくてはならない。ユージーン はひとまず、恒に神としてふさわしい教育を風岳在任中の5年間の間に施そうと思った。恒が自らを神だと悟ることなく、ごく自然に様々な事を教えてやる、今はそれでいい。そして在任期間が終わってユージーンが神階に戻らなくてはならなかったら、恒の正体を明かし、恒自身にこれからの生きる道を選ばせたいと思っていた。恒は16歳となっているだろう。決して大きな人生の決断をするのに、十分な年齢だとは思えない、だがそれでも今よりはいくらかましだ。

それまでの間に、判断できるだけの精神力は身につけさせてやろうと思う。不治とも思われた病から回復した母親と、今は幸福な時間を過ごせばいい。神として生きると決めたなら、母親と離れ離れになり、そして一生会えなくなるかもしれない。彼の大切な仲間だっそう、二度と会えないかもしれない。今そんな事するのは残酷だ、だから絶対に今、この事実を恒に告げてはならない。

藤堂 志帆梨を仮腹にして、恒を人間社会に産み落とし、更にA D A Mへと監禁した神は罪深い。そしてこれら3つの罪を行った者はおそらく同一人物であり、恒の父親、それが答えだ。荻号がわざわざ恒に近づいてきたということは、荻号なのだろうか？ 安易な考えが先に逸る。

”恒君、君のお父さんは神だ。しかし、彼はよい神ではない”

「そうだ。ユージーンさんにお土産。紅茶です。目がさめたら枕元にありました。荻号さんが下さったんだと思います。一緒に飲みませんか？」

「……有名な銘柄だ。さっそく、お茶にしようか」
さすがにここで一服盛られているということもないか、とユージーンは念のためにおいをかいでみた。紅茶のよい香りがするだけだ。

恒はそわそわと落ち着かず、ユージーンが紅茶を煎れるのを見ていた。一対一で話し合う機会をできるだけ引き伸ばそうとしているのか、ユージーンは何かを考えている。時折手つきがぎこちなくなるのだった。明らかに以前とは違い、彼は何かを悩んでいる。子供にすら見破られるのだから、相当のことに違いない。それはきつと、自分のことだ。

恒にとってユージーンは、兄のような、父親のような存在であっ

た。母親の病が治ってからというもの、母親と過ごす時間が増えたせいか社務所に来る回数は減ったが、それでも相変わらずのように通ってしまう。いくらユージーンを尊敬し、親しみを持っているからといっても、今日の答えはどうしても訊かなくてはならない。どうしてもだ。正式な作法で紅茶をそいで手前に置かれたのだが、恒が口をつけようとしたところでカップの上に手をかざされた。

「ちょっと待って。先にわたしが飲む」

「え？ 毒が入っているとかですか？」

「大丈夫だ。おいしい」

「そりゃ、そうでしょう。そこまで疑わなくとも。そんなに荻号さんが危険なんですか？ 今日改めてうかがったのは、検査の結果を知りたいからなんです。もう結果は出ていますよね。何となく、分かるんです。あまりよくない結果だったんじゃないですか」

「いや、問題はなかったよ。君は至って正常で健康だった」

「俺の父は誰だったんですか？」

「それはわからないよ。遺伝情報が半分だから、父親まではわからないよ。遺伝子解析とはそういったものだ」

「神様の力でも分かりませんか……」

うなだれてしまったので可哀相だとは思うのだが、神の遺伝情報は装置などでは読めない。つまりシークエンサーで読めるものは志帆梨の情報だけだ。母親を特定することはできるが父親はできない。ユージーン的能力では無理だ。所有者が生物階降下をして、調べれば別だが、今のところ岡崎 宿耀は通常任務に服務している。生物階降下は認められていない。

「でも、俺の出生の時になにが起こったのかぐらいはわかりませんか？ 遺伝子からではなくて、歴史を遡れば。何か過去を見る方法はありませんか？」

「恒君。それは……」

恒はユージーンが大事な事をさっぱり話すつもりがないことを見抜いていた。その証拠に、彼は何か話をはぐらかす材料を考えているに違いない。目が少し泳いでいるように思える。これ以上居座るのは時間の無駄だ。

恒は紅茶を飲み干し、一礼すると、もう帰りますと行って社務所を飛び出し、学校にまっすぐ向かった。インターネットぐらい、学校のパソコン室でできる。アドレスはフリーメールで取得できる。ユージーンが伝えるにいいことでも、荻号なら力になってくれそうだと思ったのだ。パソコン室のドアを開けると、ユージーンが既に手前の座席に座っていた。恒はあっと思ったが、観念して中に入ってきた。

「残念。わたしを出し抜けると思ったのかい？ 荻号様にかいあおうとしたんだろ。ゲストナンバーを剥奪する。今後二度とわたし以外の神と接触できないように。君のためだ、わかってくれ」

「どうして隠すんですか！ 察するに、あなたは俺の秘密を知っているんでしょう！ だから荻号さんと連絡させまいとしてる！」

「君は荻号 要という神を知らない。あの方は闇の神だ。闇と夜を司り、権謀術数に長けた最強神……その素顔は謎に包まれている。君のような子供が迂闊に近づいてはいけない」

「神様でも悪魔でも、俺は真実が知りたいんです！ 誰でもいい！俺に真実を見せてくれるなら！ それにあなたはどうなんですか！ あなたはいい神様なんですか！？ あなたは……！」

軍神で、そのうえ人殺しじゃないか。心で思った事が、そのまま彼には聞こえている。ユージーンは悲しそうに目を伏せると、ゆっくりと恒に近づいてきた。彼の秘密を知ってしまったために、殺されはしないだろうか、危惧しなかったといえは嘘になる。

「ご、ごめんなさい！ 俺なんて酷いこと！」

「いいんだ、確かにわたしは軍神、人殺しだよ……。今も昔も、殺し続けてきた。だがそうしなくてよいときは、できるだけたくさんの生命と財産を守りたいと思っている。君もそのひとりだ。時が来れば全てを話す。隠したりはしない、だから今は諦めてくれ」

「時って……いつですか。何故今じゃ駄目なんですか」

恒には理解できない。

「君はとても利口で、考えも大人だ、あらゆる知識がある」

「なら！」

「でも、だ。受け止められない、今は。幼すぎる」

どんなに訴えても、彼は10歳の少年でしかない。

「決め付けないでください！」

「わたしを鬼だと思うならそれでもいい、だが今はこらえてくれ」

どんなことにも笑顔で応じてくれたユージーンが、これほど頑なだった事はない。何を言っても、説得はできないだろうと恒は察した。彼のいう”時”とやらは、きっとあと5年後だ。できるだけ引き伸ばそうとするに違いない、つまりそれほど重いことなのだ。保護者である志帆梨にすら話そうとしない、つまりこれは、恒の人生を変える出来事に他ならない。

”そんな大事なことを、どうして話してくれないんだ、この、わからず屋”

＊

その夜、恒は夢の中でさまよっていた。いつものようにADAMには繋いでももらえない。アクセス権がないため締め出され、暗闇の中に放り投げられていた。いつまで歩いても光が見えないのは、夢の中にいるからだ。足元はふわふわとしていて、暖かった。恒は歩きつかれて暗闇の中に大の字に寝そべった。

『しょげかえってんなあ』

暗闇の中からペタペタとサンドルの音が聞こえたかと思うと、闇の中に荻号が立っていた。恒は夢の中ながら、よほど荻号と会いたいと思っていたがために夢に見てしまったのだらうと思った。

”お、荻号様？ どうしてここに？”

『ユージーンの奴がゲストナンバーを封鎖してたな。気になって見に来たらこれだ』

”どうして夢の中に？ ああ……俺が勝手に見た夢か”

恒は荻号が出てきた夢を見ているのだと錯覚した。その証拠に、彼はスパSPAと葉巻の煙草を吸っているが、少しも煙たく感じない。

『お前、ここが夢だと認識してやがるのか。たいしたもんだな。俺は闇の神、夜を司っているんでな。こういう事は得意なんだ。ここは夢だが、俺が言っている事は本当だよ』

”あなたなら真実を教えて下さいますか？”

『いいだろう。だが俺はお前にとって、優しい神ではないぞ。それにひきかえユージーンはいい奴だ。本当にお前のためを思い、お前にとって最善となるよう考えている。お前は奴を罵倒したようだが、軍神とは戦争を終局させ、平和を司る神だ。それでもそのユージーンを裏切り、真実を知る覚悟があるなら教えてやる。お前が泣きわめこうが、知った事ではないしな』

脅すように、彼はそう言った。

”泣きわめく？”

『いいんだろ？ それともなんだ、興味本位で訊こうとしていたのか？』

恒は自信がなくなってきた。ユージーンだけならまだしも、これほど脅されるとは……。それにユージーンが調べなくてはわからなかったことを、何故一回会っただけの彼が知っているのだらう？

やはりここは夢で、彼は幻だったのだろうか。

” やっぱいいです ”

『時がきてお前の心の準備ができたら、ユージーンに教えてもらえ』
荻号はどこか安堵したように優しく微笑んで、彼は試されていたのだと分かった。神はよく人の子を試すんだな、と恒は心の中で愚痴る。例え知りたいと言っても教える気などなかったのだろう。荻号のまなざしが温かくなったので、恒はそう確信した。

『それと引き換えといっちゃなんだが、俺のゲストナンバーをやるよ。ADAMはこれまで通り使えるだろう』

荻号のゲストカードは漆黒で、重厚だった。ユージーンがくれたカードは現実にも存在していて、それを首からかけて寝たときだけADAMにリンクすることができた。つまり目が覚めたときにこの漆黒のカードが首にかかっていたなら、現実だったということだ。

『そのカードはこないだのカードより格上だから、機密エリアや制限区域まで行けるぜ。今まではユージーンが閲覧制限をかけていたからな。それも奴なりの慈悲なんだろうが、ともかくこれまではどう調べても神の知識を知る事はできなかったはずだ。だが俺のカードは全てを見せる、よいもの、悪いもの。真実に自分で辿り着けたなら、その時はもう大丈夫だ。全てを受け止める事ができる。なら今は、学ぶことだな』

” 神の知識……確かにこれまでは、アクセス禁止と言われていました ”

『まあ、善し悪しだがな。学校でも有害サイトは見るなど言われているだろ？ ユージーンはお前の為を思って制限をかけていた。親心ってやつだな。それでもお前の知的好奇心を少しでも啓いてやりたいたって、ADAMへの扉を開いてくれたんだよ』

” あなたは、ユージーンさんのお気持ちも読めるのですね ”

『推測したまでだ。小僧の考えそうなことだからな』

”小僧！？　あなたはおいくなんですか？

『忘れた』

あら、と拍子抜けすると、荻号は思い出したように時計を見た。銀色の懷中時計で、年期の入ったものだ。彼の首にかかっている大振りのネックレスにもよく似ている。彼は闇に紛れるようにきびすを返し、闇の中に向かって歩き始めた。

『そろそろ行くぜ。お前の睡眠を妨げるのもあれだ』

”ありがとうございます”

恒は胸元をかきむしるような仕草をしながら目覚めた。天井の板の目を凝視し、次にその視線を自分の胸元に落とす。重厚な黒いカードが、確かに胸の上に載っていた。恒は小躍りしながらカードを放り投げ、天井にぶつかって落ちてきたそれをしっかりとキャッチした。

「荻号さん、ありがとうございます！」

このカードは、ユージーンには見せない方がいい。彼をまた悲しませることになるから。荻号のおかげでユージーンがいかに自分のためを思ってくれているかを知り、できるだけ彼のいう事を聞き分けよく聞いたほうが自分にとってよいのだろうと恒は考えた。だが好奇心は抑えられない。

＊

「先生、ちょっといいですか」

放課後、皐月が帰りの支度をするユージーンを呼び止めた。

「何でしょう」

「授業、凄かったようですね。生徒達の評判もよかったですよ」

そういつて帰りの会での今日のよかった事のところに軒並みユージーン先生がすごい、授業がわかりやすいと書かれたメモを大量に

見せる。

「はあ」

褒められなれていない彼は、そのような紙を見せられても何と反応してよいのかわからない。その上臯月にばつちりと目を合わせられると困ってしまう。

「ところで先生。放課後はご予定がありますか？」

「曜日によってはありますが、大体放課後は暇ですよ」

まさか臯月は仕事とプライベートを混同しはしないだろう。しかしそれを聞いた臯月は、それが暗に毎日暇なのだと言っているように聞こえたのである。放課後と聞いたのは今日の事で、別に今日だけでもよかったのにそんなことを言うものだから、思い切ってお願ひしてみることにした。忙しければ断るだろう。

「よかった！　でしたらクラブ活動の顧問を試してみませんか？　この学校の教員はひとクラブずつ顧問になるものなんです。小中一緒のクラブですから、面白いと思いますよ」

「……どんなクラブがあるんですか？」

とりあえず話だけは聞いてもいいかもしれない。しかし日本の学校のクラブ活動は軍隊並の厳しさと上下関係があり、ぴりぴりしているのだと思っていたので、あまり顧問をするという気乗りはしない。

「いま顧問がいないのは、陸上部なんです」

各クラブにひとりの顧問というのなら、教師は小中あわせて100名以上いるのに、余っているようにも思える。何か問題でもあって敬遠されているのだったら、慎重になったほうがよかったのかもしれないな、とユージーンは話に耳を傾けた事を後悔した。

「どうして顧問がいないんです？」

「走るのが好きな子たちなんです、弱くてコーチに見放されてしまったんです。私が仮顧問をしているんですが……」

弱いからといって見放すとは大人げないと思うが、説得したとしても戻ってはこないだろう。その教師は、中学校の生徒が立ち上げた新たなクラブの顧問になったのだそうだ。ユージーンはしばらく考え込んでいた。自分の予定を照らし合わせて、皐月の顔を見る。皐月はすがりつくような目つきをしていた。そんな目つきにユージーンは弱い。皐月も何度も陸上部に関しては心を痛めてきたが、ESSの顧問をしているし、運動音痴の自分では指導もできないのだ。そんな皐月の思いもユージーンにはすっかり見通されていたのだが。「それは毎日でなくても、いいんですか？」

あまりに皐月が顔を近づけてきて、その息遣いが聞こえるようで、どきまぎしながら答えた。照れているのではない、人間に不用意に近づかれると拒絶反応のようなものが出る。

「勿論です！ ユージーン先生も、神様としてのお仕事があつて大変でしょうし」

「お引き受けしましょう」

といって営業用の笑顔でにつこりと微笑む。皐月はそれが嬉しかったのか、とっておきの白あんの饅頭を出してくれる。あの日以来、随分仲良くなったものだと思う。

「今から一緒に行ってみませんか？」

ユージーンはまたシャツを脱いで黒いTシャツになり、皐月と共に校庭に出てみた。

「あの子たちです。おそろいの赤いシャツを着ている……」

赤いTシャツに白いロゴで部名と名前の入った陸上部は皐月とユージーンを見つけると、手をふってきたが、中でも一番驚いていたのは2組の久留米くるとめ了と保科ほしな 壺恵ひとえであった。ランニングをしていたのか、皆びっしりと汗をかいている。どの子も、辛い練習にも負けず、その表情は生き生きとしていた。走るのが好きで好きでた

まらない、そんな顔をしていた。

「ユージーン先生！信じられない！」

皐月がピーツと笛を吹くと、子供達が目を輝かせて集まってきた。すでにユージーンの話は中等部にも聞こえていたのであろう。中等部の子供達は少し遠巻きに、期待に満ちた熱い視線を送ってくる。にわかにグラウンドが活気付いた。

「ちえ、陸上部かよ。サッカー部に来てくれよな」

サッカー部の子供達が練習の手を止めて恨めしそうに見つめている。

「こらーっ！休むなー」

サッカー部顧問、5年3組担任の小泉^{こいずみ} 岳^{がく}である。ぎろり、と睨むのでユージーンは小さく頭を下げた。そんな彼らの遣り取りに気付かない皐月が早速部員達に紹介する。

「みんな、すばらしい先生が来てくださいました！ 今日から陸上部の顧問をやってくださいさるそうです。お名前は……」

そこまで言っただけで自分で紹介してもらおうと皐月は思っていたのだが、子供達は口をそろえて競うように大きな声を出した。

「ユージーン先生！」

「みんなの方が知っているみたい」

「先生！一緒に走ろうよ！先生は足はやいの？」

「馬鹿、神様に何て事いうんだ。運動神経抜群なんだぜ」
久留米が後輩のすべりかけた口を抑える。

「速いといえば速いし、速くないと言えば速くないかな」
神としては遅くはないが、決して速い方とはいえない。上には上がいる。トップスプリンターはやはり荻号で、本業でもないのに彼の記録は驚異的だ。陽階ならばトップは荻号の弟子である比企^{ひき}かもしれない。

「100メートル何秒かかる？ 今から測るから、走ってくれろ？」

小さな身体でぴょんぴょん跳ねながら、走りが見たくてたまらないというようにストップウォッチを振り回しているのは中等部のキヤプテン、小笠原であった。小笠原は短距離ならば部内一だ。一緒に競争しよう、という小笠原にユージーンはくすり、と笑った。

「多分、それじゃ測れないよ。もっと特殊な装置がないと」

皐月はそれを聞いて背筋を凍りつかせた。ストップウォッチを圧すのが間に合わないというのだろうか。まさか、スピードガンを用意しろとでも言うのだろうか。

「どういう事？」

「本気を出せばマッハ100くらいで3時間は走れるんだ。地上にはその速さで走れる場所はないだろうけどね」

それをきいてシーン、と静まり返った部員達の中で、その本当の意味に気付くものは少なかった。

「マッハ100ってどんくらい？」

保科が久留米をつつく。久留米は保科の手をぎゅっとにぎりしめた。久留米は言葉が出ないのだ。

「秒速36000m、100m走なら0.00278秒よ」

皐月が代わりにひそひそと保科に告げる。

「どうやったらそんなに走れるの？」

「どうやってといわれても、身体づくりが違うんだよ。わたしと同じように走れないだろうけれど、速く走るコツくらいなら教えるよ」

すぐに話を脱線したがるひょうきん者の梅田が、手を上げた。

「はい、はいはい！身体づくりがちがうって、先生は男なんですか？噂では胸のない女の子じゃないかって」

就任からいくらかも日が経っていないというのに、どこから流れてきた噂なのだろう、と思う。子供の噂は忘れられやすいが、伝わる

のは驚くほど早いのだ。

「わたしって言うし、何となく女っぽいよな」

新井が聞こえよがしに隣りの後輩に呟くと、五年生の子も頷いていた。そこまで言われると、困惑してしまう。そして男ではない事が、もっと誤解をうんでしまうだろう。小学生は残酷だ。

「……確かに、男ではないよ」

それを聞いた子供達は、何ともいえないショックをうけたような顔をした。ネタで言ってしまったが、ユージーンの姿かたちはどうみても男なのだ。

「うそ！ あの噂本当だったんだ」

保科は口を抑えて興奮した。

「ちよつと先生！」

皐月は男だと言っておけばよいのに！ と呆れてしまった。

「どっちでもない」

ユージーンは赤らめた頬をぼりぼりとかく。

「どっちでもなくないよ！」

「どっちでもなくないだろ？」

「どっちでもなくなくない、だとどっちでもあるになるんじゃないの？」

子供達は、やあやあ言っている。

「性別がないんだよ。そういう点は、堪弁してくれ」

そういうところが堪忍ならないのが、子供というものである。

「じゃあトイレはどっちにいくのさ？」

そういえばユージーンがトイレにいつているのを、皐月は行動と共にしていたのに見なかった。誰もみていない。いや、実際トイレには行っていないのだ。取り込んだ食物の代謝の効率がよいので、神々は排泄をしない。水を飲めばすべて汗にしてごくゆっくりと体

外に発散し、食物は身体の一部にしてしまう。

「こら！ 先生を困らせないの！」

皐月が梅田の頭を軽くパチンと叩いた。梅田は大げさに痛がってみせる。ユージーンは伸びをして、屈伸運動をはじめた。

「練習をはじめよう」

下らない話はまたにしてもらいたい。折角引き受けたのだから、夕陽が沈む前に、きちんとクラブ活動をしておきたいとユージーンは思った。

「先生が走るところが見たい！」

小笠原がどうしても、といって譲らないし、ユージーンは別に見せるのを惜しむつもりはないので、100メートルレーンにクラウチングスタートで構えた。

「どうぞ」

笛を持っている皐月に、地に手をつけたユージーンがスタートを促した。小笠原と副キャプテンの西沢が隣りに並ぶ。小笠原は特に隣りのレーンにつけてユージーンにライバル心を剥き出しにしている。部員達は、その走りを見ようと、ゴール地点に集合して思い思いの位置に陣取った。ごくろ、とつばをのみ、緊張の汗がそれぞれの額から滴り落ちる。

よいい、といって皐月は笛をふいた。スタートした、という瞬間はわかったものの、次の瞬間にはユージーンはもう子供達の目の前にいた。何をどう走って100メートル地点に立っているのか、まったくわからない。後ろを見ると、小笠原が懸命に走っている。小笠原がゴールを踏んだのは、それから12秒後だった。彼の自己ベストである。つまり、ユージーンに関しては、公言した通り100メートルに1秒もかからずに走っていたのだ。

「先生、すげー！ 全然見えなかった！」

梅田は夢ではないかと眼をこすっている。

「ほんとに走ったんだよね？ あっというまにこっちに着いちゃったよ」

子供達は沸き返った。その走りを見ていたサッカー部、テニス部、バスケット部の子供達も呆然としている。実は気になってちらちら見ていた小泉も、思わず息を飲んだ。陸上部のくせに、うちのサッカー部より遅い部員たちばかりだと、陰ながら馬鹿にされてきた陸上部の新たなコーチが、いまでもない実力を垣間見せたのだ。まさに神業である。

「2組のユージン先生が普通でないという噂は本当なのか？」

実は独身の小泉は、密かに皐月に思いを寄せており、副担任として就任したユージンの存在は気になっていたのだ。クリスチャンである彼は、二人が親密な仲になっていなければいいと、一日に何度もお祈りを捧げていたくらいだ。

「なんでも、本物の神様だそうです」

サッカー部のキャプテン、前崎が忌々しそうに教えてくれた。皐月ならば、惚れることはない。小泉はそれを聞いてにんまりとした。宇宙物理学を専攻していた彼女が、受け入れられるべきものではないのだ。どちらかというところという言葉にアレルギー反応を示すのが彼女というもので、小泉が熱心なクリスチャンだと知ったときも、どこことなくがっかりしたような眼差しを投げかけられたのを覚えている。あの時は屈辱的だったが、もしも、もしもユージンが本物の神だったとすれば……皐月は信じるのだろうか。

彼女は真実しか受け入れない。彼がもし真の神だった場合、それを証明した場合、皐月は案外すんなりと受け入れてしまうのかもしれない。皐月は誰にも渡さない、そんなありったけの思いを込めて小泉の蹴り上げたサッカーボールが、グラウンドの隅にまで飛んでいった。

「ねえ、俺たち、先生に教えてもらえば速くなれるかなあ！ 強くなれるかなあ」

もうヘタレ陸上部とは言わせない。グラウンドを使うのだって、肩身が狭く隅に追いやられる事もなくなくなるかもしれない。そう、ユージーンの指導で強くなり、大会でよい結果を残せれば。

「なれるかどうかは判らないけれど、手助けはできるはずだよ」

「本当かなあ」

世界が違う、と言って同じく副キャプテンの馬木が疑う。

「小笠原君はいま自己ベストをだしたろう」

そうさらつと言われて気付いた。ユージーンの速さに圧倒されて見逃されそうになっていたのだが、彼の記録はユージーンと走っただけでベストを2秒も縮めていたのだ。皐月もようやくもたもたと100メートル走ってやってきた。そして息を切らせてこう言うのだ。

「決まりですね、陸上部顧問」

彼女と子供達の長くなった影が飛び上がった。夕焼けの空に響いた皐月の声は、晴れ晴れとしていた。その日は軽い走りこみをして、子供達の走るフォームをみてやり、練習を5時半で切り上げた。「本当は部活は6時までなんですよ」

「皆一生懸命練習したので、もうへとへとに疲れています。これ以上やっても明日の練習に差し支えます。集中して、短時間でやるのがいいんですよ」

ユージーンはだらだらと練習するのは効率が悪いと指摘をする。その意見には皐月も何もいえなかった。それが尤もだと思われたからである。

＊

子供達を家に帰して顔をあらったユージーンの、職員室の机の上に、

小さなメモ用紙があった。取ってみると、担当のクラスの天野あまの 凜りんである。

「美術室で待ってます」

時計を見ると、既に6時になっている。まさか生徒は残っていないだろう。そう思いながらも足は自然と美術室の方に向かっていった。木造の美術室からは、長い間に染み付いた油絵の具の匂いがした。開いている窓をきちんと閉めながら、真っ暗になった美術室のドアを開けた。外れかけた立て付けの悪いステンドグラスが音を立てる。
「あ」

天野は待ちくたびれたのか、デッサンをしながら机の上のスケッチブックに伏して眠っていたのだ。スケッチブックの中には、窓から見える校庭の景色が写しとられている。風邪をひかないようにと、陸上部でもらった新品のバスタオルをかけてやると、その感触に天野はびくっとして起きてしまった。天野はだらしなく寝ていた姿を見られて驚いた。こそつとよだれをぬぐう。

「せ、先生」

「ごめん、出かけてたからメモに気付かなくて」

「先生、校庭にいたね。見えたの」

言い訳をしようとするユージーンを、天野の一言が留めた。陸上部の指導をする自分をずっと見ていたのだろうか。いや違う、次のページには陸上部部員の上級生のデッサンが、緻密に写し取られていた。お目当てはそちらの方だ。

「どうやら見えてたみたいだね。絵が上手なんだな、驚いたよ」

素直に褒めると、凜は思いがけずに絵を見られて恥ずかしがった。
「それで、わたしに何か話したい事があるのかな」

わざわざ美術室にまで呼ばなければならなかった理由は何だろう。手伝いをしてほしいというのだろうか、自分でなければならぬのだろうか。既に陽はとっぷりと暮れて、早く帰宅させなければなら

ないのだが……。ユージーンはそんな事を思いながらひとまず話を聞いてみることにした。

「うん、あ、でも……今日はいいです」

「遅くなったからね。じゃあ明日ならどう」

彼女の家族が心配するだろう。学内に公衆電話がない事を考えると、遅くなる、という連絡もしていないに違いない。

「今日、先生これから暇ですか？」

美術室がほの暗いので、ユージーンはポケットから自前のレトロな懐中時計を取り出して灯りをつけた。普通の蛍光灯以上の光度が室内に灯り、彼女の表情がにわかに明るくなり、珍しそうに時計をみた。その時計はアナログの一週間時計だったのだ。どこにも市販はされていなさそうだった。

「今日は暇だよ。どうして？」

ちらり、と凜が時計を確認したのが分かった。凜は、準備室から大きな油絵を出してきた。彼女の背丈ほどもある大作だ。顔を真っ赤にして見せてくれたその絵には、静かな夜の森と川の景色があった。その構図は独特だが、腕は確かだ。デッサンを毎日続けているのだという、パーツの狂いも何もない、完全な風景画だった。

「すごいな。……上手だ」

ここ、といって月光の当たる森の木陰を指差す。

「ここにあった部分、消したんです。コンクールに出す予定だったんですけど」

確かに、その部分だけ不自然に黒く塗り重ねられている。油絵なので重ね塗りがきくのだ。コンクールに出そうと思っていたものが、気に入らなかつただけなのだろうか。

「どうして？」

「私の知らない間に、誰かが描いたのか……おばけの絵が描いていたの」

天野の唇は、いつの間にか青ざめて震えていた。

第1節 第9話 死者蘇生、そして胎動

天野からの思いがけない一言に、ユージーンは首をかしげた。あまりにも話の流れが唐突だったから。同時に、これは生徒からの嫌がらせをうけていることを打ち明けられたのか、それとも怪奇現象について相談されているのか、一気に方向性を見失ってしまったからだ。

「おぼけの絵？」

「そうなんです。私、さっきみたいによくうとしながら絵を描くことはありますけど、あんな怖い絵を描いた覚えはありません。だからといって他の子も、描けないと思います。だって……写真を撮ったみたいに、本物っぽい絵だったんです。あれは私が描いたんですか？ それとも……。神様の力なら、誰が描いたのかわかるかと思って」

凜は彼女の過去をユージーンに見てもらいたいと思って相談したのだ。

「たしかに過去を見ることはできるけど、それを知ってどうするの」「気になるだけです」

「わかった。ではわたしの目を見ていてね」

「まばたきしても？」

「いいよ」

凜に自分の目をしっかりと見るようにと促し、ユージーンは彼女の視線に腰をおとし頭を両手で軽く支えて、マインドブレイク（心層看破術・Mind Break）をかけながら凜の瞳の奥を覗き込んだ。このマインドブレイクというテクニックは、対象にまったく気づかれずに相手の心を読むことができる。彼女は自分に目を覗き

込まれているようにしか思わないだろう、怖いことなど何もしていない。マインドブレイクをかけなくても、現在の彼女が考えている事なら少し目をあわせればすぐに見通せる。だが、過去の出来事となると、やはり心層看破を使って凝視しなければならない。

ユージーンは神としては若く、まだ精神的に未熟であるために、マインドブレイクがあまり得意な神ではない。それに引き換え万能の天才である荻号は心理学者でもあり、どんな人物の過去も未来も見通すことができる看破術を身につけている。これとは逆に、荻号の心層を看破したものはいない。それが陰陽階の第一位の神であってもだ。荻号のマインドブレイクは神であっても人間であっても、更に対象が認識していない事も見通す。だから恒と出会っただけで特に調べずとも、恒の出生の秘密を看破し、興味を持ち近づいたのだろう。ユージーンはまさかA D A Mに荻号のような重要人物が来ていて、しかも恒と出会うというような事を考えなかったので、事態をややこしくしてしまった。荻号は陽階神にとっては最も注意すべき対象だ。荻号ほどの能力があれば、恒の父親を看破し、逮捕し、そして容易に法の裁きを受けさせることができただろうに……。ユージーンは対象が認識していない事は見通すことができない。これは訓練ではどうしようもないことだ。才能と、経験がものをいう。

ユージーンは凜の瞳の奥に見える、凜の過去を順繰りに追っていた。凜は毎日規則正しい生活を送っているようで、注意していないければ何日前の過去なのかわからなくなるぐらい、同じような毎日の繰り返しだった。それでも、ユージーンの授業の内容と、絵画制作の進捗状況から、現在何日目の過去を見ているのかわかる。凜がおぼけの絵と形容したいたずら描きは、ちょうど一週間前に突然出現していた。ユージーンはスロー逆再生をかけながら、それを誰が描いたのかを見破る。

凜はその前の夜、ふらふらとパジャマのまま、学校にやってきて筆をとった。そしておもむろに、手が勝手にというべきだろうか、薄気味悪い絵を書き上げてゆくのが凜の瞳越しに見えたのだ。いったい何をモデルにして描いているのか、筆を休めては時々窓の外を見つめる時間がある。凜は何かにとりつかれたようにわずか1時間ほどでその絵を書き上げると、またふらふらと家路についていた。ユージーンは今度は順再生をかけて、それがどんな絵なのか検証した。抽象画とは違う、何かを見て描いたような絵だ。それは何というのだろうか？ 怪物のような面であった。ユージーンとてこんな生き物は見たことがない。想像の産物でなければ、あるいは……。凜が続けてまばたきをしたので、ユージーンはそこで打ち切った。

「見えましたか？」

「見えたよ。君が確かに描いていた。夜、学校に来て描いていたんだ」

凜は驚いて目をまんまるにしてみせた。

「やっぱり、私だったんですか！ 私のタッチに似ていると思ってたんです。でも、記憶がまったくなくて」

「寝ぼけているようだったよ。怖い夢でも見ていたんじゃないかな。気にしないでいいよ。夢に出てきたお化けだろう」

「よかった……。誰が描いたのか、気になったから。なんだかお腹がすいてきました。一緒にごはん食べますか？」

「君の家に押しかけるのかい？ それは遠慮するよ」

教師就任からまだいくらもたたないうちに浮ついた事をするべきではない。保護者から問題視されるだろうし、ついこの前まで強盗犯と間違えられていたような自分が家に押しかけでもすれば、何より保護者が驚くし、学校に連絡されれば校長の立場がない。

「いいえ、安くておいしい定食屋さんがあるんです。」

ユージーンは一瞬考えた。まさか家が定食屋なのだろうか。ここ

は譲るわけにはいかない。大体下校時間を過ぎているだけで本当は問題なのだ。

「家でごはん食べないの？ 家の人心配するよ。きちんと家に帰りなさい」

すると凜は言いづらそうに家庭の事情を述べる。

「わたし、お母さんいないから……ごはんは自分で作っているんです。今日はお父さんも出張だし、家に帰っても誰もいないから」

ああ、なるほど、とユージーンはようやく合点がいった。家庭事情までは調べなかったが、クラスには二人ほど離婚で片親になった子供がいると臯月が言っていた。そのうちの一人なのだろう。母親に甘えられない寂しい思いを、絵を描く事で紛らわせているのだとしたら……。

「よし、じゃあ先生がごはんをおごるよ。その定食屋さんにいこう」
大した金はないが、子供に一食おごる位なら充分な金額は支給されているはずだ。

「やった！」

というわけで、凜とユージーンは村で一番安いが大盛りで旨いと評判の定食屋に揃ってでかけた。食事どきを外してしまったので、メニューはおまかせ、日替わり定食しかなかった。今日の定食は、ひじきの炊き込み御飯とアサリの味噌汁、豚の生姜焼きに、きゅうりと蛸の酢の物、デザートにあんみつで、550円。日本の物価にしては、この量で550円ならば安いものだ。でっぷり肥えた主人がメニューを運んでくる時にユージーンを見て驚いたが、顔なじみの凜と一緒になのでいくらか安心したようだ。

「今日は、こういう連れ合いよ？」

主人は凜にこっそりと訊ねる。ユージーンが日本語を話せないと思っっているのだ。凜は胸を張って自慢した。

「あたしのクラスの先生なの」

「凜ちゃんの先生は皐月先生だろうに」

皐月のファンは学校の関係者いかんを問わず意外に多い。彼もそのひとりだった。

「担任は吉川先生ですが、副担任になったんです」

ユージーンは自分で説明した。喋れないものと思っていた主人は体裁が悪い。主人はユージーンを直接は見たことがないようだった。先ほど驚いたのは、ただ外人だというだけだろう。基本的にこの食堂は年中無休で、例の祭りには行かなかったのだ。ユージーンも、彼と面識がないという事を心得ていた。

「ユージーン先生っていうのよ」

店主はつくづくユージーンを見つめて、突然のけぞった。

「ユージーン？ 知ってるぞ！！ うそ！ まじで？——そうか、あんたか。本物の神様だっていうんだろう。村長が泡くってたもんなあ。玉屋だけに、タマもちぢんだって話だ。……でも、それまじ？」

一応感心はしたが、彼はまだ受け入れられないようだ。

「神様も、見た目は普通の人間と変らないんだなあ」

「そうでしょうね。ごはん、おかわりしてもいいですか？ とてもおいしいです」

ごはん、おかわり自由の張り紙を見たユージーンが茶碗を差し出すと、主人がぱんぱんに張った丸い笑顔で、凜と彼に風呂吹き大根と付け合せを一品サービスしてくれた。

帰りの夜道を、一人と一柱でぶらぶらと。凜はできるだけゆつくりと歩こうとしていたので、彼は付き合って歩調を合わせた。もうすぐその曲がり角を曲がれば、彼女の家だ。家の前まで送ってゆかなくては危ないので、付き合ってやるつもりだ。凜はのろのろと歩いていたがついに足がとまる。

「ありがとう、先生。ごちそうさま。……あーあ、帰りたくないなあ、家に。だって、誰もいないんだもん。今までは恒君と夜中に遊んだりしたけど、恒君、どうやらずっと眠れなかったのが急に眠れるようになったみたいだし、お母さんも元気になって家に帰ってきたみたいで。最近は遊んでくれないんです」

「そうか……」

「でも、帰りますね。もう、遅いし」

「寂しくなったら、いつでも社務所に来ていいから。おぼけの絵は、やっぱり君の寂しい気持ちが無意識的に現れたものだと思うんだよ。夜中でもいつでも、眠れなかったら来ていいから。わたしは殆ど寝ないし」

「ありがとう！ 先生！」

凜の表情がぱあっと明るくなった。

玄関に向かう凜を見送りながら、恒は子供たちに信頼され、好かれていたのだな、とユージーンは思い知らされた。人に信頼される才能があるとしたら神としての素質は十分だ、あるいは自分より神にふさわしいかもしれない。だがそれは強制されてなるものではない。彼の肩にのしかかっていたものを、代わりに負って、何もしがらみのない状態にしてゆかなければ……彼は幸福になれない。今彼は人間としてあたりまえの幸福を取り戻しつつある。たとえ今だけでも、幸福に生きてほしい。

そう思った。

*

恒が荻号からカードを受け取った件は、ユージーンには発覚しなかった。荻号は確かにユージーンより格上の神のようで、ゲストナンバーの検索がかけられないように機密化されているようだ。

また、A D A Mの書籍を調べて分かったことだが、荻号は陰階の参謀とのことだ。恒は検索クエリから苦勞して日本語変換辞書という書籍を見つけたし、それを使って陰陽階叙階表というものを捜し当てた。神々に関する記述は基本的に神の言語で記載されているので、この辞書機能は重宝する。

これにより、ほとんど全ての書籍を読み解く事ができるようになった。これは陰陽階の神々一年ごとの叙階が表にまとめられているものだ。神々は陰陽に100柱ずつ在籍しているらしく、その他にも神はいるが、世界の運営に関与しているのはこの200柱だという。そしてこの200柱に叙階されるのは全神のおよそ5パーセント、つまり神の人口は4000柱ほどということだ。それに対し使徒の人口は億単位だそう。

4000、この数が多いのか、少ないのか、恒にはよくわからない。能力的にはかなり優れているしそうそう絶滅はしないのだろうが、生物種としてみるとかなり少ないと思う。もともと、神を生物種としてみるかどうかなのだが。叙階一覧で下位から順に指でたどっていくが、ユージーンの名は見当たらない。トップ10に入ったとき、恒はもう見逃してしまったのだろうと決め付けたが、視界のはじめに7位に彼の名前が見え、重い書籍をとり落として足に直撃しそうになった。

"ユージーンさん、若いのにエリートなんだ……。じゃあさらに格上だと言っていた荻号さんは……"

陰階神を今度は上位から検索してゆくとすぐに見つかり、荻号は陰階4位の神として任じられていた。そして二柱は決定的に相いれない組織に所属している。陰と陽だ。

一覧には名前と順位ばかりではなく、個神データも差し支えない範囲で記載されている。荻号要は年齢不詳、そのフィジカルレベル（Physical Level）はさらに測定不能と出ている。フィジカルレベルとはどうやらその神の持つ純粋なポテンシャル、力量そのものを示す値のようだ。ユーザーや他の神々はきちんと測定できているというのに、彼だけはどの年を調べても測定不能である。参謀職だから機密なのかとも思ったが、陽階の参謀はきちんと測定済みだ。本当に測定できないのだとしたら彼は最強神というか別格だ。ユーザーがただの人間である自分を近づけたくないのもわかるな、と恒は思った。

しかしそうであればいいよ、恒は普通ではないのだといい加減認めざるをえないだろう。そうでなくてふた柱の神がこれほど気にかけてくれるだろうか？ ユーザーは心配してくれているのだろうし彼との出会いも偶然だった。だが荻号は違う。荻号は調べなくても恒の内の真実が見えていて、それに興味を持っているだけだ。人間として自分に何か魅力があるとも思いたい。それに……ユーザーは大切な事を隠している。16歳の誕生日に明かされるであろうことは、恒に覚悟と決断をうながすものだ。荻号が神の記述を閲覧することを解禁してくれたのはそれに何らかの関係があるのだろう。でも神々の世界に、恒が何の関係があるのか？ あるいは恒もまた神か使徒の眷属なのだろうか。

思えば上がりも甚だしいと、恒は思う。自分には彼等のような力はないし、どこからどう自分を見てもま人間だ。志帆梨なんてなおさら人間以外の何かではありえないし、自分が神か使徒の血をひくなんてこと。……でも、父親はわからない。そうだ、イエスキリストの母マリアは処女懐妊によって……、いや処女懐妊なんて嘘だ。マリアとヨセフは夫婦だったのだ。恒はすぐに思考をたてなおす。一度も子作りをしていないなんてあからさまな捏造だ、よほど無理が

ある。後付けに決まっている。それと同じで母親も何かの間違い、あるいは同意のうえ自分を身籠ったのだ。

だったら何故ユージーンは、母親の嘘を見抜けない？ ユージーンが遺伝子解析を行ったのは、母親の話を聞いた後だ。その気になれば心の中を読め、その人の人生すら見通すユージーンが、母の嘘に気付かないわけではない。では母はあの時点で本当に父親を知らなかったのだ。だとすると可能性は無意識の状態でレイプされたか、あるいは……。

恒はそこまで一気に考えてしまうと、どっと疲れが出た。母親の過去を詮索するのは嫌なものだ。母親を信じたい、だが信じれば信じるほど禁忌の結論へとたどり着く。自分は人間なのだろうかという事すら、証明できそうにないのに。あるいはまったく、別のもの……？ 自分は他人を不幸にしている。例えば悪魔のような……。ありえる、神がいるのだから悪魔もまたしかりだろう。

" 上島先生に、検査をしてもらおう "

＊

そうはいうものの恒は、上島の検査で真実がわかるとはさらさら思っていなかった。ひとまず普通の遺伝情報が出るか否かが解ればいい。上島病院を訪れ、血液や毛髪のサンプルを提供して、母親の毛髪も併せて提出した。父親のものはわからないが、今回は母親のものだけだ。上島は検査に快く応じてくれた。検査キットは高価なはずだが、恒の知的好奇心のためなら、と無料で引き受けてくれた。

それに、上島はユージーンを神だと見破った恒に、ある意味感謝していた。恒が見破らなければ彼は普通の外国人技師として、測量

関係の仕事にきたと偽り、人間のふりをしてこの村で5年間を過ごすつもりだったのだという。上島はユージーンの社務所を訪れ、彼の医学的知識と技術を学んでいた。上島の受け持っていた末期がんの女性患者を彼の血液だけで完治させたことすらある。また、上島の手には負えないような出血を超絶的な技術でたちどころに止めてみせたり、脳腫瘍の患者の腫瘍を卓越した手技で摘出したりもした。

上島にとって彼は医術の神でもあったのだ。そんな事が学べるのも、もとはといえば恒のおかげだった。上島は恒を少年ながら高く評価していた。恒は上島の作業を注意深く見守りながら、期待に胸を躍らせていた。随分待ち時間があって、上島は排出されたデータを凝視している。上島は何も答えてはくれない。待ちかねて、答えを促した。

「どうですか？」

「恒くん、お前さんの遺伝情報は半分だ」

上島はコーヒーを、恒にはオレンジジュースをすすめた。恒は手をつけない。

「どういう意味ですか？」

「父親がたの遺伝子がないんだ。遺伝情報が半分の状態で生まれる事はできん。装置の不調だろう。コントロール（対照群）をつけて再測定だな。ユージンさまの遺伝子解析をやったおかげで、おかしくなっちまったのかもしれない」

そんなに都合よく、装置が不調になるだろうか？ 言いながら上島も、そんなはずはないと思っっているに違いない。眉間のしわがいつそう深く刻まれ、二枚重ねの白衣のうち一枚を脱いだ。

「上島先生、俺の体は普通の人間と同じですよね？」

「何を言ってるんだ？」

「ユージンさんみたいに異常じゃないですよね？」

「ユージーンさまはあれで正常なんだ。おまえさんは遺伝子解析がおかしかっただけで、血圧、心拍数、血液型、レントゲン、全て正常だったじゃないか。遺伝子解析がうまくいかなかったからって、君が人間以外の何かじゃないかと心配することはない」

「そうですよね」

解析にはまた半日ほどかかるというので、もう納得したのでいいです、どうもありがとうございます、とだけ言ってその場は切り上げた。上島はそれでももう一度検査しようとは言わなかった。検査キットは高価で、あまり何度も使いたくないのだろう。無料でやってくれたのだから、これ以上負担をかけたくはない。

というわけで、恒は納得して引き下がったわけではなかった。それどころか手がかりを掴んだとさえ思っていた。恒はこのあたりで荻号にかまをかけてみたくなった。荻号のメールアドレスは分かっている。あとはメールのできるネット環境さえあれば……だが学校はユージーンの目があるのでだめだ。しかも、ユージーンにパソコンの設定をいじられて、荻号のアドレスに送信できないようにされている。メール、メールができる所……そう思って、巧が携帯を持っていたのを思い出した。

最近、恒の少年グループと、めっきり遊んでいなかった。彼自身考える事も調べる事も多く、母親との時間も大切にいたため、学校が終わると家に直帰して勉強していた。そういえば巧は今日、学校を休んでいた。風邪で熱でも出たのだろうか。メールの件は今日は無理だとしても、見舞いぐらい、行ってみるかな……と、恒は手頃なフルーツを買って、巧の家に見舞いに行った。インターホンを鳴らしてしばらくして出てきた巧の母親が、申し訳なさそうに応じた。

「せっかくだけど今、寝てるわ」

「風邪ですか？」

「昨日から頭がふらふらするって言い出してね。ずっと寝てるの。熱もないみたいだし、貧血かしら。明日は行くと思うから」

恒は追い出されるようにして、しぶしぶ帰途についた。巧の不調については、特に何も考えることはなかった。子供がかかる風邪など、どうせ大したことにはならない。

＊

翌日、恒の楽観的な予想は見事に裏切られた。巧の席は、始業時間になっても空席だった。仲のよい石沢 朱音や堤 隼人などが心配している。保健委員の波多野 雫も落ち着かない様子だ。恒はさすがに心配になってきた。

「豊迫君は今日もおやすみ？ 何か聞いてる人いない？」

皐月が心配そうに出席簿をながめる。ユージーンも脇に控えて、神妙な面持ちをしていた。巧は皆勤賞をもらった事もある健康児として有名だったし、本人も出席することにこだわりがあった。貧血で、二日も休むというのはおかしい。恒はもと不登校児でありながら、巧が学校に来られないのは相当だと心配した。その時、ユージーンの携帯がバイブで鳴った。ポケットから取り出し発信先を確認すると、急いで廊下に出てゆく。しばらくして、ユージーンが血相をかえて中に入ってきて、皐月に耳打ちした。皐月もつられたようにさあっと真っ青になった。

「吉川先生、わたしが行ってきます。先生は平常通り授業を」

皐月が小刻みに震えながら頷くと、ユージーンは自ら学校では力を使わないと禁じていた力を解禁し、瞬間移動で消えてしまった。まだ誰も見たことのない、彼の神通力だ。まるで空間が勝手に歪んで彼を隠してしまったかのように、波紋を残して黒板の背景が歪ん

でいた。あとに残された皐月は、啞然としていた。ユージーンが消えた事に驚いたのではない。豊迫巧が、亡くなったのだという。死因はわからない。上島がユージーンに連絡してきたのだ。何かがおかしいので見に来てくれと。教え子が亡くなったというのに、このまま授業をしていてもよいのだろうか？ この事実をどうやってこの子たちに伝えればいい？

皐月は、今すぐ弔問に行きたいが、教師として軽率な行動をつつし、校長の指示を仰ぐべきだと思った。皐月が硬直してしまったので、子供達も不安そうだった。

「先生、巧の事でしよう」

「巧がどうしたの？」

しかし今のやり取りを見ていた生徒たちは、納得がいかない。ユージーンの行動は明らかに不自然だ。そして震えのとまらない皐月は、出席簿を持った手をがたがたと震わせていた。

「ユージーン先生が学校で力を使うってことはよっぽどです。巧に何があったんですか？」

恒がクラスを代表して質問した。皐月はもはやこれまでと思い、口を開いた。嘘については、あとあと子供たちを傷つける。

「みなさんに、悲しいお知らせをしなければなりません」

子供達は固唾を飲んで皐月を見上げている。

「豊迫君が、先程亡くなりました」

クラス全員から、一斉に絶望の悲鳴が上がった。

もしかして、また俺が？ 俺のせいで！

恒は無我夢中で教室を飛び出していき、生徒たちもあとに続いた。居てもたつてもいられない、巧のもとに駆け付けなければ！子供たちの思いはひとつだった。皐月は止めようとしたが、我慢できなくなって彼らを追い掛けた。何故、巧が？

＊

ユージーンは瞬間移動で上島医院の病室に現れた。上島と看護師数名、そして巧の両親が驚いて彼の浮いている中空を見上げる。ユージーンはばつが悪そうに病室の床に降り立った。

「どうしても死因がはっきりせんのです。釈然としないことも多すぎますし」

「……」

上島が申し訳なさそうに状況を説明する。ユージーンは上島の渡してくれたデータを見ながら、まさに冷たくなりはじめた豊迫 巧のなきがらをいたわるようにそっと撫でてやる。上島が開示したデータから疑われる所見はない。解剖を試みないとわからないが、巧の両親が納得してくれないそうだ。そして上島も彼が死んでいる事を理解できないでいるようだった。生体反応はなく、瞳孔も開ききっている。ユージーンはしばらく考え込むように沈黙した。

上島や豊迫の両親が固唾を飲んで見守っている。彼らは何も言わないが、無言の期待がユージーンに伝わってくる。彼の亡骸は穏やかな死に顔をしていた。死後30分ほどだが、もう冷たくなりかけている。上島が診断をつけられなかったように、何かがおかしい。ユージーンは異様な気配を感じとった。彼が死んでいるとすれば、当然行われるべき死の手続きがなされていない。死の手続きとは、上島が死亡診断書を書いたり、霊安室に移送したりすることではない。

本来なら死の直前に駆け付ける、死神の使徒がまだ来ていない。死神の使徒は光学迷彩能や空間歪曲能を持つ衣を纏い、人には見えない。彼らは死の瞬間に立ち合い、死亡時刻を記録し、微弱な精神電位を脳から回収し、その精神活動を解析し記憶を神階で再構成す

る。人の生涯の記憶はこのようなにして巨大なデータベース化され、EVEとよばれるソウルデータベース（Soul Database）に登録・保管されている。人の死に際に死神の眷属が立ち会うことと記憶を持ち帰ること、それはどんな例外も宗教や人種の別もなく全ての人間に対して行われる事だ。

だというのに、死神の眷属がきた形跡もなく、さらには巧の中には記憶がそっくりそのまま遺されている。こんな死に方……ありえない。

人の一生はつまるところ記憶の集合体だ。人が生きた証であるところの記憶は、死神の使徒により回収され神階で再構築されて仮想現実の中に保護される。仮想空間の中を天国と感ずるか地獄と感ずるかは生前のライフスタイルや個々の人生観による。よほどの悪事を働かないかぎり他者の記憶にアクセスしあう事ができ、自由にコミュニティを作る事も可能だ。あらゆる世代の人間の記憶が時間を超えて交流することができるので、長すぎる死後の時間を持て余す事もない。仮想空間にはあらゆる時代と場所、環境が用意されているので、余暇を楽しんだり趣味に打ち込んだり、学んだりもできる。

それらの行動学を神々はまるで複雑系のシミュレーションモデルのように研究している。人々が肉体という枷から解放され、時間も空間も超越することができれば、どのような精神活動を行うのかという研究に役立てられている。そして実際、人類行動学的に生物階の運営に役立つ。こうやって人類の記憶のライブラリを作っているのは神々の研究のためでしかないのだが、人道的に十分に配慮された環境が整っており、人の死後には平穏があるといえる。こうしたシステムから成る死は平等であり、辿り着く場所も同じだ。神の介入がなければ自然の摂理として記憶は死体の中で消滅する。

そして、死の先にあるもの、それは無だ。

これは物理的にはごく当然のことである。だから神の介入によって記憶が死後の世界で記憶だけでも安らかに永遠を過ごすということは、人々にとって幸福なことだろう。

巧に訪れようとしているのは、完全なる無だ。彼は神の支配を逃れて束縛なき真に自由な死を迎えることになるだろう。神のものさしではかった押し売りの幸福を与えなくてはならないという道理はない。

何千億分の一かの確率で死神がたまたま死を見逃した。彼の自我は自然に無へと帰るだけだ。目の前で死にゆく教え子。神の前にいるというのに救われもせず、死因だって定かではないのにこのまま見捨ててよいのだろうか。……いや、死神は死を見逃すことはない。駆け付けるのが間に合わなかったという線もない。死はバイタルレベル0値の自動検出システムによって監視されている。巧にはまだバイタルがあるのだ。バイタルを持ちながら死んでいる、これはやはり変だ。誰かに不当に命を絶たれているとみて間違いないだろう。彼は死すべき運命になかったということだ。

不審な死を見過ごし、彼の記憶を無の境地へと還してやるか

この死を不当として、再び生きる権利を与えるか……

それはユージーンの判断にかかっていた。いくら彼が神と呼ばれていても、さすがに生殺与奪の権限などもってはいない。いや、思い出せ、とユージーンは深呼吸した。

”わたしの任は、風岳という村を5年間守りきることだ。風岳で今

起こっている一連の不自然なひっかかり、彼の死もその一環だとしたら、彼を助ける事は自らの職責にかなう。わたしにはこの子供を蘇らせる権利はひとかけらも与えられていない…… だが、それだけの能力はある――”

看護師達の制止を振り切って、巧のクラスメート達が病室になだれ込んできた。

「巧ー！」

「待って、近づかないでくれ！ 今神様が調べていらっしやるから」
上島が生徒たちを近づけないように注意してくれた。

「何かわかりましたか？」

「……」

ユージーンは駆けつけた生徒たちを振り向くと、生徒たちは前のめりになって見守っている。ユージーンは巧を彼自身の身に沿わせてしっかりとだき抱えると、きつくそのまま抱いて動かなくなった。横顔から、温和な彼の表情が消え、いつになく集中しているのがよく分かった。巧の小さな心臓に、神のアトモスフィアによって生じる電磁パルスを与え、同期させているのだ。巧の身体をアトモスフィアで満たしたから、心臓が動けば何とかなる。上島も電気ショックを試みたようだが、単なる外部からの電気ショックでは蘇生は難しい。

彼のアトモスフィアは巧の内部から生きる力を呼び起こす。脳に酸素が長時間送られなかったことで、やや脳障害が残るかもしれないが、それは後から治療すればいいことだ。今は蘇生が先決、血液が凝固するまでの間が勝負だ。死神ならば蘇生も簡単だろうが、あいにく蘇生はユージーンの専門外だ。回復までには時間がかかった。

「温めているの？」

「何かしてるんじゃないか？」

真っ青だった巧の指先が、不意に赤みを帯びてきた。巧はそのうち指を動かしはじめ、ユーージンにしがみついた。巧の両親はもう何も言えず、涙を流してその光景を見守っている。

「生き返った！」

「嘘だ！」

「神様って、死んだ人間も生き返らせられるのか？」

巧は息をふきかえし、胸が上下に動くのを全員が確かめた。

「上島先生、酸素を。心拍数も確認してください」

ユーージンは冷静だった。すぐさま酸素吸入器が運ばれてくる。クラス全員がわっと巧の周りに集まった。彼はまだ意識こそ戻っていないが、頬に赤みがさし、寝顔にかわった。喜びの声があがるなか、ユーージンは逃げるように病室をあとにした。恒は親友の寝顔を見てほっとすると、すぐにユーージンを追う。廊下の壁にもたれかかるように立っていたユーージンは、天井を見上げていた。いや違う、彼は天をあおいでいるのだ。死者の蘇生は重罪だと、恒は神々の法である陰陽階法について少しばかりかじっていた。

何故そんなものを学ぼうとしたのかというと、恒のせいで彼に法律を犯させてしまったという罪悪感からだ。あまり地上で罪をつくと強制送還となったり、罰を受けてしまいうらしい。それは枢軸とよばれる高位身分の者でも、例外なく適用されるものだ。できるだけ長く地上にいてももらいたいから、法にふれる事をこれ以上は敢えてさせたくはなかった。神が故意に死者を蘇らせる事は、重罪……量刑は覚えていないが、結構な罰が下されるはずだ。それでも罰を顧みず巧を助けてくれた。ユーージンには頭が上がらない。

「ユーージンさん……ありがとう。俺、また人を不幸にしたんですか？ また俺が……」

「君のせいじゃない」

「気休めは言わないでください」

「……しいて言えば、君がとか、そんなレベルじゃなくてこの村全体が、だね。早く原因を突き止めなくては君たちの命にかかわる。村の人たちには言わないでくれ、不安にさせるから。わたしはこれから全力で、この村で進行しているものを突き止める。君たちは気づかないかもしれないけれど、この村には……」

「皆、気づいています。でも口に出して話さないだけです」

「どういう意味だ？」

「この村、昔から……」

恒は何度も唾を飲み込んでようやく決心してこう言ったのだ。

「鬼が来る村」と言われていたんです。伝承でもありますし、A D A Mで調べたことがあります。鎌倉時代からずっと続いていることなんです。文献にも残っていました。この村全体が、昔から……」

恒が鎌倉時代の文献を熱心に調べていたのは、このことだったのか。とユージーンは理解した。

半神である藤堂 恒のいる不可解、藤堂 志帆梨の処女懐妊、天野 凜の異様な行動、豊迫 巧の不当な死、……それらは恐らく恒の父親にあたる神によって行われているものだと思いつけていた。だが、この土地の風土として昔からこのような怪奇現象がたえなかったのだという。ユージーンは今まで、たったひと柱の神によって起こっているものだと思い込んでいたために、本質を見逃していた。

鬼が来る村、その過去を、そしてそこから導き出される真実をつきとめなくてはならない。でなければ、村人達の命にかかわる。

まだこの村に滞在することが、できればだが……。

第1節 第9話 死者蘇生、そして胎動（後書き）

【作】 死者蘇生：死体の条件が悪くなく、肉体が細胞死を起こす前で、脳死状態でなければ現代医学においても可能。脳死状態に陥っていれば蘇生と脳機能回復は困難。

【作】 マインドブレイク、EVEの構築：【現】ブレイン・マシン・インターフェイス（脳波マウス）は既に開発されている。人間の記憶をリアルタイムに解析しデータベース化すること（EVE構築）は将来的に可能な見通し。ただし、リアルタイムではなく過去の記憶を再現することは当面不可能。

第1節 第10話 首刈峠へのガイドライン

恒とユージーンのふたりは巧の様子が気になってすぐに病室に戻った。上島が自ら生命維持装置を取り外している。自発呼吸ができるようになったので、酸素ボンベのみに切り替えているのだ。生徒たちはじっと巧の周りを囲んだまま動けずにいた。上島は、30分以上も脳に酸素が送られなかったことで起こる麻痺や記憶障害などが出て、ソフトボール部のエースである巧の前途に陰りがでなければいいと願うだけだった。

「呼吸、脈拍、血圧、脳派、安定してきました」

「そうですか。今日はまだ予断を許しません。しっかり見ておいてください」

「はい」

ユージーンは的確に指示を出した。医者である上島は彼の指示を素直に受け入れた。上島よりユージーンの方が高い治癒能力を持っているということ、上島はいやというほど思い知らされてきたからだ。それどころか、上島は一度完全に死者になった者の蘇生を初めて見て、ある種の感動を隠し切れていない様子だった。さっき彼がやってのけたことを、上島にも出来ればどれほど多くの患者の命を助けることができただろう。

ユージーンは、彼自身が使う不思議な治癒能力を上島に科学的に説明してくれ、医学的に応用できるならばと薬の組成なども教えてくれていた。だが今回ばかりは完全に彼の力だけで蘇生させたので、応用するのは無理そうだ。まったく……この神様にはいつも驚かされる、と上島の口元は綻んでいた。

「あの……!」

ユージーンが後ろを見ると、巧の両親と、たった今駆けつけたらしい小さな妹弟である螢と颯^{けい}たちが、一樣に病室の床に正座をしている。ふたりは今年小学校に入ったばかりの年子で、まだあどけない幼児の顔をしていた。両親に倣^{なま}って跪いている。これが生まれて初めての土下座だということを、彼らが知るよしもないだろう。生徒たちの見ている前でも、躊躇なくそんなことをしている。もうなりふり構わないといった風だった。

「ありがとうございます。うちの巧を、生き返らせていただきまして……何とお礼申し上げたらよいか」

「できることはしましたが、まだ危ない状態です。意識が回復するまで、傍についてあげてください。上島先生、また容態が悪化したら携帯にご連絡を。飛んできます」

「お願いします」

ユージーンは巧の様子をしばらく見守っていたが、まだ豊迫一家は床に平伏したまま顔を上げようとしないので、困惑した。ユージーンはいつまでたってもこういう場面に慣れない。確かに彼らから感謝されることをしたのだろうが、法制をまた犯してしまった。これでよかったのだ、とすっきりと思えない彼自身がいて、その後ろめたさを抱えたまま彼らに向かい合うことが、また罪深きことだと思われたのである。

「みんな、豊迫君は安静にしておかなければいけません。静かに休ませてあげるためにも、もう学校に戻りましょう」

生徒達を病室から追い出すと、上島と豊迫一家に一礼をして、ユージーンは巧の手を握り締めて離さない皐月の肩をそっと叩いた。病室のドアの隙間から恒が、名残惜しそうに巧のいるベッドを見つめていた。

「吉川先生も、帰りましょう」

「わかりました……。豊迫君、頑張るのよ……。また夕方来るから」
病院からの帰り道、子供達は飛んだりはねたりしながら巧の復活を喜んでいた。だが恒だけは、ユージーンの心中を察して、なるべく彼から子供達の注意をそらすように、わざとおどけてみせたりしていた。懸念すべきことのあまりの多さに肩を落とすユージーンは、とぼとぼと子供達に追従している。

すると、そんな彼を元氣付けるかのように、皐月は彼の力なく垂れ下がった手を、今度こそしっかりと取った。また驚いて立ち止まるが、今度は皐月に敵意は感じられなかった。ユージーンは前回の経験から、皐月と一緒に歩いているときは、もうフィジカルギャップを展開しないことにしていたが、それはどうやら正解だったようだ。曲がりなりにも男の姿をしている手を、こんなに突然握ってくるのだから、日本の女性も積極的になったものだ。とユージーンは思う。わずか半世紀ばかり前は、男性に声すらもかけられなかったような日本女性が……。しかも自分は神だと知っているのに……。などと簡単に女性文化の歴史を振り返りながら、ユージーンは首をすくめた。

「よ、吉川先生……」

「……あなたは、たいへんなお力をお持ちなんですね」

皐月の手は、わずかに震えている。ユージーンが見せた真実を受け入れようとしているのだろう。

「はぁ……。まあこのぐらいはできます」

「神様なのに、何を悩んでいらっしゃるの？」

「何というか、その」

「この村で、何かよくない事が起きているようですね」

皐月もこの村で起きている異変に、気付いていたのだ。小学校教師としてわずか2年ちょっとしかキャリアのない彼女でも、ここ最近村に起こり始めた異変には疑問を抱いていた。そして、それを

当たり前のように受容する村の風土にも……。この村は昔から何かが起こっていて、そして村人達は何かを隠している。この村ではおぞましい事件が起こり続けてきた。皐月はその気配だけをいつも感じていた。

「わたしたちに出来ることは、今は子供達から目を離さないことです」

皐月は返事のかわりに、いっそう強く彼の手を握り締めた。そのあまりの握力の強さに、ユージーンはまたぎよつとした。人間とはいえ異性に免疫がないのは、彼女より160歳ほども年上の自分の方なのだな。とユージーンは反省した。

恒はその二人のやりとりを遠目に見ながら、こんなシナリオを考えた。

皐月先生が無意識にとはいえああやって積極的に神様に近づいて、神様も皐月先生を気に入って付き合ってゴールイン、なんてことになったら、もっと滞在期間が延びるに違いない。まだどちらも好きだとかそういう恋愛感情はないのだろうが、ぜひとも皐月先生には頑張ってもらいたい、などと無責任な事を思っていた。

＊

学校に戻ったユージーンは3時間目から、通常どおりの授業をはじめた。その冒頭で、巧についての状況説明を簡単にしてやった。巧は生き返って一命をとりとめたばかりなので、お見舞いは自粛すること、巧に応援の手紙を渡したい場合は、放課後までに自分に持ってきて預けるように、との内容だった。ユージーンは先週行った国語のテストを返却しながら、ひとりひとりに声をかけていた。親友の死とその復活を目の当たりにして、混乱したりトラウマになっってしまう子供がいらないか、彼なりに心配だったようだ。恒の番に

なってテスト用紙を受け取ると、恒はびくつとして目を見張った。
点数に驚いたのではない。

今日の放課後、時間が空いていたら社務所にくるように。

との内容が、ポストイットに書かれて張り付けられていた。ユー
ジーンを見上げると、目配せをしているように見える。恒はしっか
り頷くと、いそいそとテストの答案を丸めて席についた。いつもの
ように、恒のテスト用紙には大きな、100という赤字がでかでか
と踊っていた。

放課後になって、バッグの中に子供達からの手紙をいっぱい詰
め込みながらユージーンは社務所で恒を迎えた。巧の話はクラス外
にも聞こえていて、他クラスの子供たちからの手紙も預かることと
なってしまったので、この量になったのだ。

「来てくれてありがとう、今から巧君のお見舞いに行く。その前に
……君に力を貸して欲しいんだ」

「力を？ 俺に何ができますか？」

「君がADAMで得た風岳村の歴史についての知識をもらってもい
いかい？」

「いいですけど、お話したらそれこそ何10時間かかることか……」
「そうだろうね、だから、君の記憶を覗かせてもらう」

恒はそう言われたが、それだけではできないと表情をこわばらせた。
というのも、荻号からゲストカードをもらって毎晩のようにADAM
Mの上層にアクセスしているということは、どうしてもユージーン
には知られてはならないことだ。荻号に迷惑をかけることになるし、
悪夢から救ってくれた恩神であるユージーンを裏切っているという
ことが明らかにされてしまう。

恒が躊躇している様子を見て、不審に思ったユージーンが少し首を傾げるようにすると、恒は無意識にあとずさった。何か、うまくごまかす方法はないだろうか？ 何か適当な理由は……

「で、でも、記憶を覗かれるのって何か怖くて……」

「巧君の意識が回復していたら、巧君の記憶と君の知識を照らし合わせて風岳村で今起こっている事を予測するつもりだ。記憶を覗くといっても痛みなんかはないし、怖い事はなにもしないと約束する。わたしが神階に戻ってADAMで風岳村の歴史について検索することはもうできない。罪を犯したからね。それに、この村の住民である君の記憶にも価値があるんだ。協力してくれ。この謎を解かなければ、殺されると思ってもいい。時間がないんだ」

この謎を解かなければ、殺される――？

恒はその言葉に戦慄した。体中が総毛立つのを感じ、頭を打ち碎かれたかのように感じた。何を自分の都合ばかり考えていたのだろう、という罪悪感も込み上げてきた。荻号には悪いが、今尊重すべきだとしたら風岳村村民の人命だ。それに荻号はカードを与えてくれた事を、ユージーンに言うなと口止めしていなかった。仕方ない、この場合はユージーンの言うとおりにするしかない。

「わかりました。お願いします」

ユージーンは恒のこめかみのあたりを両手で押さえ、ぐっと瞳の奥を覗き込んできた。空色の瞳が、自分の脳に蓄積された記憶を精査しているのがわかった。レム(Rapid Eye Movement・REM)睡眠中の人の目の動きのように、眼球が痙攣しているようで不自然だ。トランスしているのだろうか？ どうやって記憶を見ているのかわからないが、はったりなどではないだろう。彼は自分の記憶をあますところなくコピーしようとしているに違いなかった。

恒にとっては長い時間が経過していた。既に10分ぐらいは経っただろうか。確かにA D A Mの書籍の量は膨大であるから、恒だっ
て読むのには随分時間がかかった。それを恒の記憶からダウンロー
ドしようとしているのだから、いかに神とはいえそれなりに時間は
かかるのだろう。ずっと目を見ていと言われているが、集中力も
きれてくるし首も痛い。まだかな、早くしてよ……。そんな恒の心
のつぶやきが聞こえたのだろうか。ユージーンはようやく全ての記
憶をダウンロードしたらしく、瞳を閉じた。集中が切れたらしく、
何度も目をしばたかせる。まばたきひとつしなかったので、目が乾
いたとみえる。

「ありがとう。終わった」

「全部、出せましたか？」

「ああ、完璧だ。ありがとう、怖くはなかっただろ」

「しいていえば、あなたの目の動きが怖かったですけど……」

「え？　そこかー」

そんなことを言って頭をぽりぽり掻いている。あれ？　おかしい
な。荻号さんのカードの事言ってこないんだな……。恒はてつきり
怒られると思っていたのだが、どうやらその事には触れる様子はな
かった。もしかして、関係ない記憶は引き出さなかったのか？　い
いや、そんな筈はない。そんな期待は楽観的すぎる。彼ならば全
ての記憶を引き出した上、精査していることだろう。このまま黙っ
ているのも悪いと思ったので、恒は躊躇ったあげく自ら切り出した。

「その、ごめんなさい」

「どうした？」

「あれほどダメだと言われてたのに、荻号さんからカードもらって
いたから」

「自分から申告してくるとはね。でもそのおかげで、こうして役立

った。閲覧制限のかかっている書棚からの記憶も随分あったね。それに……カードをもらう事は罪ではない。これから使うといいだろう。なんか癪だけど、君のもらったカードはわたしのより格上だから、随分な知識が身につくだろう」

「あ、ありがとうございます。ずっと後ろめたかったので、すつきりしました。あなたがカードを封鎖した直後に、下さったんです」

「結果的に、よりよいカードが手に入ったわけさ……まったく……」

ようやくユージーンが微笑んでくれたので、恒は恥ずかしそうに鼻を鳴らした。わだかまりが取れたところで、これからふたりで、謎を解いてゆかなければならない。ひとりでは無理だろう、だがふたりでならきつとできる。恒はユージーンが身近にいてくれるということが、彼の存在がたまらなく心強かった。彼はそんな恒の気持ちを知ってか知らずか、ついと目を泳がせた。

「それは正解だったよ。わたしのカードはどちらにしても使えなくなるどころだった」

ユージーンは急に真剣な顔つきになった。恒は思いがけないことを突然告げられて、身体が硬直するのを感じ、手足に冷感がきた。

「わたしはもうすぐ裁かれる。死者の蘇生は重罪だ。それをやってしまった以上、裁かれなければならない」

「したら、あなたはこの村からいなくなってしまうのですか？」

「どんな処分が下されるかはわからない。いつ裁かれるのかも……。神階では審議がはじまっているだろう。だからこそ、今できるだけの事はやっておきたい。わたしがいなくなってしまうても、君ひとりで謎を解いてゆけるようにね」

「できません！ そんなの……」

恒は急に突き放されて投げ出されてしまったように感じた。そんな……どうしてもこの村で5年間は服務する必要があると言ってい

たではないか。あの約束はどうなったのだろうか？ それともまた代理の使徒などがやってくるのだろうか？ いや、彼の口調では代理なども含めて、この村から引き揚げさせられるという含蓄がある。恒ひとりの力でこの村の謎を解いてゆけるとはとても思えなかった。

いやまて、そもそもこの村の謎って何だ？　いくら鬼の来る村と呼ばれていたって、単なる偶然が続いているのだとしたら、謎などあったものではない。ただ不運な村だというだけだ。あるかないかもわからない答えを、自分ひとりで探せというのか？　この神様は……。恒は心細さに押しつぶされそうだ。

「恒君、これは偶然ではない」

彼はいささかの言い逃れも赦してくれそうになかった。

＊

上島医院の3階の角の病室……305号室。恒とユージーンがそこを訪れると、巧はぐっすりと眠っていた。遠目からでも眠っているということがわかるぐらい、彼は大きないびきをかいていた。こんな状態で起こすのは、あまりよくないことだ。身体が睡眠を欲しているということは、やはりそれなりに体力を消耗しているのだろう。上島がつきつきりで様子を見ていたようで、豊迫一家はちょうど遅い昼ご飯を買いに行ったところだとユージーンは教えられた。

ともあれ、豊迫一家がいなかったということは、ユージーンにとつてありがたかった。これなら無理やり起こしても咎められはしない。無理やり起こすといっても揺さぶったり大声を出すつもりはないのだが、ユージーンのアトモスフィアを与え、寝ていられないほど元気な状態にし、自然に目覚めさせてやるだけだ。巧は気絶しているのではなく寝ているだけと分かっていても、恒はまだ意識が回復しないのかと、心配そうに巧の手を握っている。

ユージーンはそっと巧のまぶたに触れると、脳から彼のアトモスフィアを注ぎ込み、脳をじわじわと暖めて活性化させてやった。巧はすぐに反応し、まぶたをぴくぴくと動かしはじめた。上島は彼が明らかに巧に何か施術を行っているという事に気づいたが、それを見咎めなかった。悪いようにしてはいないだろう、という安心感がユージーンの行為を疑わせなかった。巧はしばらくむずがるような仕草をした後、ぱちぱちと瞬きをしてゆっくりと瞳を開いた。

「あ……」

「巧！」

恒がいてもたってもいられず大声を出すと、上島に腕を掴まれて止められた。巧は恒の声のした方をちらりと見やり、頷いたのが見えた。実際には見えているのか見えていないのか分からないが、恒はほっとした。

「先生……俺どうなったんですか？」

「喋らなくていい。今はゆっくり休むんだ。君は頭がふらついていてずっと寝ていた、そうだね」

「……そうです」

「え、お前は」

恒は、彼が一度死んで再び生き返ったのだということを巧に告げない事を疑問に思ったが、上島は逆に告げない方が正解だと思った。この幼い子供の精神年齢で、自分が死んでいて、生き返らせてもらったと知ったら、いったいどんな混乱をきたすだろう。これでいいのだ、体調が悪くて、病院に運ばれていた。それだけ知っていれば十分だ。

「いつも元気だった巧君が、って、皆心配してね。手紙を預かってきた。もう少し落ち着いたら読めばいい。学校にはしばらく来なくていいから、体調が安定するまでしっかり休むんだよ」

「え、俺、学校何日休んだんですか？」

「まだ2日目だ。気にしないでいい、それより君の体調の方が心配だ」

「皆勤賞、狙ってたのに……それに部活も出てないなんて」

学校の成績は悪くとも、巧は意外と真面目な生徒だ。成績はよくとも不登校児だった恒とは真逆の立場にある。

「俺なんかどれだけ出席が足りないと思ってるんだ。学校とかいいから、ちゃんと休めよ」

「はは、ごめんな。心配かけて……」

「頭はまだふらつくかい？」

「いえ、もう大丈夫です。まだ眠たいですけど」

ユージーンは機を見計らって本題を切り出そうとしている。恒はもう少し巧を休ませてやって欲しいと思ったが、彼の急ぎようからすると、一刻の猶予もないし、一刻の時間も惜しいのだろう。彼は巧の頭を撫でてやりながら、心配するようなそぶりを見せ、巧の目を覗き込んでいた。巧も訳が分からず、何か言いたい事でもあるのかとユージーンの瞳を凝視する。また記憶を読み取る時の独特の目の動きをするかと思えば、ユージーンはいつまでたっても巧を優しく見つめたままだ。あれ、やらないのかな？ と恒が首をかしげていると、ユージーンは病室の机の上に手紙をどっさりと置き、ベッドから離れた。

「これはまた後で読んでね。さて、恒君。もうわたしたちは切り上げよう。巧君を疲れさせてはいけない」

「は、はい。じゃあな、巧。俺だけじゃなくて、皆お前を心配してるから。早く元気になって学校こいよ。でも焦ってくるなよ」

「上島先生、それではお願いします」

「はい、お見舞いありがとうございます」

病室を出てすぐ、恒はユージーンに手を引かれ、瞬間移動で社務所に戻ってきた。恒ははじめて瞬間移動を経験したが、あっという間で、何が起こったのかよくわからなかった。ただ、周囲の景色が瞬間的に変わったただけだ。これが奇跡ってやつか！と感動する恒を尻目に、ユージーンは深刻そうな顔つきになって社務所の椅子にかけた。今はそれどころではないのだな、と空気を読んで、恒も隣に座る。

「ユージーンさん、巧の記憶を読みましたか？」

「ああ、読めたよ。でも、ますます分からなくなってきた……」

「何を見たんですか？」

「巧君は、村のある場所に行ったんだ。その場所に行ってから、すぐに調子が悪くなって死んでしまった。わたしはてっきり、誰かの陰謀によってこの村に起こる謎が引き起こされているのだと思っていた。これは自然現象だというのか？　もうわからない」

「ある場所ってどこですか？」

くびかりとうげ
「首刈峠だ」

首刈峠——。忌まわしい伝説の残る峠である。風岳村の北東（鬼門）に位置し、現在は封鎖された峠道だ。学校でも家でも、とにかく風岳村に住んでいる子供なら、何度もそこにだけは絶対に近づかないようにと言われて育ってきた。そこに行くとか、どうなるのか？それは誰も行った事がないのでよく分からない。たったひとり、巧を除いては……。戦国時代より、首のない死者が出る場所だとA D A Mには記されている。それが夜盗などによる仕業なのか、刑場だったという意味なのかは定かではない。だが、古来より死者が出るといういわくのついた場所……疑わずにはいられない。

「そこが、霊界との境目とかなんでしょうか？」

恒は核心をついたつもりでいた。これで少しでも、謎がとけたのではないかと得意げに微笑んでいる。だがユージーンはその発想に失望したという風だった。彼はその持論を聞いてはじめて、まじった10歳の子供と話していたのだという事を思い出した。

「恒君、この世界には、霊界なんてものはない。肉体と記憶は滅ぶだけだ。物理的に考えてそうだろう？ 地縛霊の仕業だとか、そういう線はないんだ。だいたい魂なんてものも存在しない。だから心霊現象なんて仮説は、たてないでくれ」

「ごめんなさい。でもあの場所なら、霊の仕業だと、普通は考えてしまいます」

「そうだな……悪かった。君はとて多くの知識を持っているから、ついつい大人のように接してしまう。首刈峠といういわくつきの場所に行つて死んだら、普通はそう考えるだろうね」

ユージーンはおとなげない、と思いつつ恒をあまりにもあてにしていた彼自身を不甲斐なく思った。この子はいくら半神とはいえ、正当な教育も受けていない子供だ。期待したり、失望したりしてよいはずがない。やはり自分が何とかしなくては……法務局に断罪され、罰を与えられる前に……彼はそういう思いを新たにした。審議は通常なら、7日はかかっていると思われる。だが前科のあるユージーンの場合、法務局は冷徹な法の権化、ゲイル・リンクスワイラー（Gale Linxwiler）を担当に充ててくると考えられるから、彼ならば証拠を的確に挙げ、迅速な裁判を進めてくるだろう。

ゲイル・リンクスワイラーは法務局のトップエリートの監察官で、手がけた事件はどんなに遅くとも48時間以内に解決する。被疑者の証拠隠滅や逃亡を防ぐため、あるいはゲイル自身のプライドをかけて、可及的速やかに裁きが下ると考えなければならぬ。今日調

査ができないならもう明日しかない。今日行ってしまうか？　とも彼は思ったようだが、さすがにまったく土地勘のない場所に行く上に、暗くて見通しが悪いのでは不利だ。行っても何も分からず、無駄死にするだけだ。

「明日の放課後、首刈峠に行って調べてくるよ。今日はもう暗い」
「俺も行きます」

「ダメだ。わたしでさえ自分自身を守れるのかもわからないのに、君を連れてゆく余裕はない」

「足手まといってことですか？」

「そうだ。君の力を借りる場面は他にある」

ユージーンの口調から、本当に余裕がないのだと察する事ができた。そして時間もないのだということも……。そんなに切羽詰っていても授業だけは休まないのだな、と恒は少々呆れてしまった。今にはじまったことではないが、このひとは、何を考えているのかわからない。まるで宇宙人を相手にしているようだ。無論、彼は事象の地平を越えてやってきた、ある意味宇宙人のような存在なのだということはわかっていたが……。

ユージーンはまるきり逆のことを考えていた。切羽詰っているからこそ、学校に出勤するのがいい。何故なら、法務局監察官はできるだけ人間の目に触れないようユージーンを逮捕したいだろうし、それが責務であるとされている。それでいくと学校にいる間は、手出しできないと考えてもいい。学校内から、授業の合間を縫って、瞬間移動で首刈峠に行けば追跡は攪乱されやすい……。そしてまた戻ってきて授業ということを繰り返す。これだけでユージーンを受け持ち時間の半分、正味4時間は首刈峠での調査の時間が確保できるはずだ。この間に、何とかするしかない。そして恒も学校に来てくれているれば、恒と話をする時間もあるだろう。

うまくゆくかはわからないが、逮捕されるまでの最後のチャンス
を諦めるわけにはいかない。ユージーンは久しぶりに武者震いをし
た。

「恒君……。明日は、長い一日になるぞ」

第1節 第11話 赤い鉄塔と昭和初期のリンケージ

翌日、ユージーンは通常通りの時間に出勤して、美化委員会とともに校内清掃を手伝い、朝の校門前挨拶運動をして、いつものように授業をした。何も変わらない、彼の日常の風景である。彼の受け持ちの体育、今日はバスケットボールだったのだが、その間に首刈峠の地図を見ていたようだ。授業が終わると次の一時間は予告どおり首刈峠に出掛けてしまった。更にその次の時間、つまり3時間目のはじめだが、恒はおそろおそろ職員室を覗きに行った。彼は何事もなかったかのようにプリントを作っている。恒はほっと胸を撫で下ろした。

「先生、無事でしたか。てっきり死んだかと……」

「やあ、恒君。また会えて何よりだ」

彼はどことなく上の空のように見えた。まるで別人のような、そんな感じだ。

「何か感じましたか？」

「いや……頭の中が混乱してくるんだ」

「おっしゃる意味が分かりません」

「つまりなんてのかな、頭がふらついてぼーっとしていたような気がする」

「そんなことって……。お体は大丈夫ですか」

その土地に何か異常が起こっているのだろうか。恒は彼の身が心配だ。

「身体には異変はないよ、ありがとう。ただ眠いだけだ」

「あ、でも！ 巧も死ぬ前に同じ事を言っていました。巧の母さんがそう言ってたんです、頭がふらついて眠いって。ユージーンさん、

死ぬんじゃないですか？」

「そうか……。わたしは死ぬのか」

「しっかりして下さい！」

何かがおかしい、彼はボケている。普通に考えれば181歳とは人間ならボケてもおかしくない年齢ではあるが、いや、死んでいるべき年齢だが、彼に限ってはありえない。神における181歳とは人における二十歳かそこの年齢だそうだ。とすると、これは死の兆候なのだろうか？ 何日か後には死んでしまう運命なのだろうか。首刈峠で彼に何が起こったのだろう、行くと頭がやられるのだろうか？ 例えば放射性物質が何かに被曝したのだろうか。それなら先に巧に同じ症状が出た時、クラス全員が二次被曝しそうなものだが。皆元氣だ、その可能性はない。それに被曝したというなら、巧は生き返ってもすぐにまた衰弱して死ぬだろうし……。巧はまだ死んでいない。

恒はせわしく頭を働かせた。ここでユージーンが崩れてしまっっては、一体どうすればよいのかわからない。恒が何か役に立ったとも思えないが、せめてひとりで行かせるんじゃないか……と後悔しても仕方のない話だ。もっと心強い味方、例えば最強にして最高の智を持つと謳われる荻号などに助けを求めていればこんなことにはならなかったのかもしれない。彼は若い神なのだ……。いくら恒からは完全のように見えても、未熟な点もたくさんあるのだろう。もっと経験も知識もある誰かに相談をしなければならなかったのかもしれない。このままどんどん衰弱していつて、死んでしまったらどうしよう。恒は齒の奥からの震えが止まらなかった。

次の授業の冒頭、恒はユージーンが教壇に立つことが出来ないだろうと心配し、自習と黒板に書いて彼を保健室に連れて行って寝かせた。保健室にたどり着くまでの間、段々と恒に寄りかかるように

力がなくなってきた。指先はだらしなく伸びきって、顔にもなんとなく生気がない。保健医はどう診察をしていいのかわからず、ただ氷枕だけを用意する。

念のため熱をはかったが、45度もあるので目をまるくした。体温計が壊れたのかしら、と体温計をケースから出したり入れたりして振っている。保健医の名は佐々木^{ささき}和子^{かずこ}、縁厚のメガネにくるくるパーマ、このみち20年のおばちゃん先生である。

「まあ、やっぱり45度？ 沸騰しそうな大熱じゃないの」

隣のベッドで38度の大熱を出して寝込んでいた下級生の女の子が心配そうに、そして恥ずかしそうにカーテンを開けた。自分より熱を出している生徒が来たのかと思ったのだろう。恒は愛想笑いをして、ちゃんと寝ておいで、と言いながらカーテンを締めた。

「これ多分、平熱です」

それを聞いていたのだろうか、またシャツ！ とカーテンが開いた。45度が平熱だとすれば、自分は一体どうなるのかと、後ろめたく感じたようだ。佐々木は苦笑しながらカーテンを締めてやった。

「前島さんはちゃんと熱があるんだからね、平熱じゃないから。こっちの人は気にせず寝てなさい」

「先生はもととすぐく温かいので、顔も赤くないし、熱は出てないと思います」

「こんな珍しい事もあるんだね」

「そうなんです……」

「ところで藤堂君。今授業中じゃないの？」

恒は授業に戻りなさいと、授業の抜け出しに気付いた佐々木に怒られ、仕方なく自習中の教室に戻った。ユージーンは一日休職した以外にも、欠勤したり自習にすることはなかったので、クラスの子

供たちは何があったのかと様々な憶測を巡らせていたらしかった。やれ、皐月と駆け落ちしたんだ、だの、風邪をひいて帰っただの、下らないことばかり聞こえてきたので、恒はそういえばと思い出して職員室に戻り、彼が直前まで作っていたプリントを取り上げた。

” 社会実力問題集 日本地理 プリントNo. 3 ”

あった。プリントは3枚あって、完成していた。見ると、今日の日付と3時間目との文字がある。ユージーンはどちらにしてもこの時間は自習にして、このプリントをやらせるつもりだったのだ。おそらくまた首刈峠に出かけるつもりだったのだろう。とすると、いつもの彼の精悍な顔つきからするとボケているように見えたが、あれで一応理性はあったのだろう。恒は印刷室で大急ぎでコピーをとると、廊下をドタバタと走り、全部で100枚近くもののプリントを教室に運び込んだ。バカ話に花をさかせていた男子が配るのを手伝う。

「恒、先生はどうしたんだ？」

「先生いないんなら外でサッカーやろうぜ」

「知らね。このプリントをやってろってさ。あ、これ今日中に提出だかな。ちゃんとやれよ。先生は忙しいんだろ、きっと」

恒はうつむきながら適当にそんな話を作った。恒は今、何を優先すべきなのかわからなかった。ユージーンはこのまましばらく眠っているしかない。かといってこのまま眠らせておいて、回復するという保証もない。それでもユージーンの一大事を知ったクラスメイトが保健室に殺到すると彼にとっても彼らにとってもよくない。徐々に衰弱してゆく彼の姿を、クラスメイト達には見せたくない。

皆ユージーンが大好きだった。彼を止める機会がありながらあ

なに危険な場所に行かせてしまった。何故止めなかったのかと、責められるだろう。いや、責められたっていい。それで彼が助かるのなら。彼からたくさんの救いをもらったのに、自分には彼を救う力がない。どうすればいいんだ、今自分にできることは何なんだ、と恒は苛立ちを必死でこらえながらプリントを回していた。

＊

一方、保健室のユージーンはしだいに正気を取り戻してきた。恒がもう少しつきっきりで見ていればわかったのだが、彼は身体を横たえる事によって少し楽になったようだった。懐中時計を取り出し、ぼんやりと眺める。時計を逆さに見ている事に気づき、ひっくりかえした。1時間かは寝ていない。ユージーンはここが保健室であるということを確認すると、カーテンをちらりと開けて、佐々木の様子をうかがった。

保険医の佐々木は背を向けながら、ガーゼをアルコールに浸している。隣のベッドから、少女が彼を見つめていた。ユージーンは彼の唇に人差し指をあてると、少女はこくりとうなづいた。熱で真っ赤な顔をして、のぼせている。彼はベッドから抜け出しかけたが、思い出して、少女の額に優しく手を当て、さらっと撫でてやると、彼女の熱はひいたようだった。少女の表情は明るくなって、ありがとうと言いかけたが、彼がしーっとやるので約束を守って、口をつぐんでいた。彼はベッドから降り、靴を取り上げた。そして中庭に繋がる窓から、音も立てずに出て行った。

＊

恒は給食の時間、配膳を終えて席に着くところを臯月に呼び止められた。

「恒くん。ユージン先生がいらっしゃらないの。何か知らない？」

「え、それが……」

「3時間目までは、保健室にいらっしゃったんですって。佐々木先生からお聞きしたわ。でもその後、忽然と消えてしまったらしいの」

「俺、知りません」

ユージンは意識を取り戻し、保健室から脱出したのだ。ひとまず無事だと分かって嬉しいが、また首刈峠に行ってしまったということは明白だった。こうなると、もう恒にはどうにもできない。できるのはただ、学校で待つ事だけだ。

結局彼は、放課後まで帰ってこなかった。時間にして、4時間以上になる。恒はこれ以上学校で待つのは諦めて、あれほど自粛するようにと言われていた巧の見舞いに出かけた。首刈峠には近づけないのだから、巧との会話から手がかりを得るしかない。

巧はベッドの上で起きていて退屈そうに、皆からもらった手紙を読んでいた。一日でもソフトボールの練習をさぼるのが嫌な巧のことだ。暇をもてあますだろうということはわかりきっていた。

「よう。恒、来てくれたか。もう、暇で暇だよ」

「先生には来るなって言われてるんだけどな」

「さっき石沢と波多野、それから天野も来たぞ」

「あ、あいつらー！」

女子三人で、抜けがけして。これではこっそり一人で来た自分が馬鹿みたいだと恒は悔しがった。見ると、巧の好物のうまい棒が1ダースほど病床に飾られていた。巧は自分の短い髪の毛をじよりじより撫で回しながら、手紙を読んでいた。ほら、食うか、といって親戚からの見舞いの品であるサクラamboをすすめてくれた。巧は口いっぱい頬張っている。恒も一ついただいた。旬の果実の味が口一杯に広がり、恒の心の葛藤を和らげてくれたように感じられた。

巧は学校の事をしきりに気にしている様子だったので、今日も何事もなかったと報告する。

「なあ、恒。俺って死んでたの？」

「へ？」

「いや、あいつらもそう言ってたし、手紙にもそう書いてあるんだよ。ユージーン先生に生きかえらせてもらってよかったな、って。皆の手紙だけなら信じられないけど、あのクソ真面目な隼人とかもそう書きちゃってるしさあ。俺ホントに死んでたの？　なんで？」

なんで？　と聞かれても困る。

こっちが聞いてやりたいぐらいだ。それが分からないから、彼は命を賭けてその謎に挑もうとしている。恒は安全な場所で帰りを待っているだけだ。巧もユージーンも命の駆け引きをしてきたというのに、自分だけ何もしないのは卑怯だ、と恒は思いつめていた。自分は荻号やユージーンに格別に目をかけてもらって、A D A Mにアクセスする権利を有している。そこで得た知識を、今直面している事態に生かさなくては、何の為に神々の知識を学ばせてもらっているのかわからない。

恒が得た知識は、恒のものではない。類稀なる偶然によって神から人に授けられたこの奇蹟的な贈り物は、人間社会のために最大限に活用されなくてはならない。恒に今できることは、それをを用いて考えることだけだ。自分はA D A Mの歴史書を読み解く事によって、誰も知らなかった風岳村の正史を知っている。巧との会話から、手がかりを引き出すんだ。

「お前さ、首刈峠に行った覚えはないか」

「は？　首刈峠？　ばっかおめ、あんな所誰が行くかよ」

恒は大事な事をユージーンに言い忘れていた。巧は怖い話マニア

でありながら、異常なまでの怖がりだ。心霊スポットと呼ばれる場所には詳しいが、決して一人で行ったりはできない。毎年恒例の、村の肝だめしでも一人だけ最後まで出発しない。とうとう出発したかと思えば女の子に引っ張られて帰ってくる有様。根っからの怖がりだった。

「お前、覚えてないのか？」

ユージーンが記憶を読み間違えたのではないとすると、巧は無意識にそこに行ったのだ。首刈峠で巧が何に襲われたのかは、恒は非常に感心がある。行けば死ぬかもしれないという可能性さえなければ、行って調べてみたい。あの峠に行くと死ぬ。あの峠に行くと……。そう考えている隣で、巧はたと手を打った。

「思い出した。夢の中で森みたいなところに行ってた。嫌だなー、って思っていたら目が覚めた。それがここだった」

そういやそうだった、と巧は呟いた。恒は若干興奮してきた。

「お前、その夢を見る間に首刈峠に行ってたんじゃないか？」

「え？ 俺夢遊病ってこと？」

恒は高まりはじめた興奮が一気にさめてゆくを感じた。それがわかったからどうだというのか。ますます謎が増えてゆくばかりだ。そして逆に危険だ。巧は夢うつつのまま何者かに首刈峠に導かれた可能性がある。

「その森に、何か変わったところがなかったか？」

「俺あれ、首刈峠だとは思えないんだけどなあ。……赤い大きなものがあつたのを覚えてる。鉄橋みたいな、鉄塔みたいな？ 東京タワーみたいな形したやつ？ すぐでかいやつだ。あんなの風岳にはなかっただろ？ だから、違うと思うんだ」

赤い、鉄塔か鉄橋？ すぐに目を泳がせ、恒は記憶の引き出しか

ら手がかりを手繰り寄せた。……あった、知っている。昭和初期まで風岳にあった軍事用の鉄橋だ。付近に武器工場があったついでで敵機の標的にされ、何年だったかは定かではないが、崩落している。東京タワーみたいな形とっていたのは、鉄橋の橋脚の部分だろう。もし巧がその事を言っているのだとしたら、巧がいくら記憶をほじくりかえしても、今はそんな鉄橋はない。村の年寄り連中は知っているかもしれないが……。それで、首刈峠は途中から峠道がぷつぷつりと途切れている。工場のあった付近の峠道が、爆発により崩壊したからだ。今は突然断崖絶壁になる、危険な峠道が残されているだけだ。鉄塔などない。

巧は赤い鉄橋の見える昭和初期の時代の風景を見ていたのか？彼の言うよう、それは夢なのだろうか。だが現実だったとしたら、とても信じられない。巧は昭和初期のかの時代に行って、戻ってきたということになる。

ユージーンはこの不自然な話を、巧の記憶の中から引き出したのだろうか？ 巧が何を見、何を感じたかということまで彼が読み取る事ができていたならそんな心配はないだろうが、A D A Mから得た恒の記憶と照合して、巧の行動と比較していた彼には、この赤い鉄橋の光景に注目していなかった可能性がある。巧は夢の中で森をさまよっていたとしか認識できていないのだから、巧の心の機微までは察していないのかもしれない。ただ巧の身体がどこを通過して現場まで行って、どこを通過して帰ってきたかというような類の事だけが見えていたのかもしれない。

だとしたら、これは大変だ。今頃、ユージーンはひとりで首刈峠に行っている。彼は無事なのだろうか……。？ 彼がいくら力を持つ神だとはいっても、死から逃れられないという事は彼がこの村にやってきたその日にはつきりしている。だからといって恒が応援に行

ったところで何か役立つとは思えない。むしろ足手まといだ。そこに行ったら死ぬかもしれないと分かっていると言いついて行くと言いついて行くのだから、相当力には自信があるのだろうし、枢軸叙階一覽にも武闘派を示すA Aという略号がついていた。フィジカルレベルが優れているということも文献を読んで知っている。つまり彼は神々の中でもとりわけ強い神だということ、それもよく分かっている。それでも、いまひとつ安心できない。

この問題は、どれだけ力や身体能力が優れていようとも、まったく意味をなさない種類の問題のような気がする。

もしも時空間的な異常があつた付近で起こっているのなら、それはもう不可抗力だ。巧が現代にわざわざ戻ってくるのができただけでも奇蹟といつていい。まさかもう、ユージーンはこの世から消えてしまつて……恒はユージーンが心配だった。

「どうしたんだお前。暗ーい顔して」

「そうか？ 別に暗くないけど。お前を心配してただけさ」

自分は根っからの嘘つきだな、と恒は思った。親友である巧の事はもちろん心配だった。だがそれより危険な事態に追い込まれているのはユージーンの方だ。知識ばかりあつても自分は何の助けにもならない。頭でっかちとはこのことで、ふがいないほどに無力だと恒は思う。

もしも恒の考えている物理法則がこの世の全てを支配しているのなら、過去に遡上するなどということはありえない。物理的に可能なのは、未来に行く事だけだ。それも、光の早さよりうんと早い速度で移動することができたという条件がついている。タイムスリップ、これはありえない。だが……もしも恒の知らない物理法則がこの世を満たしていたとすれば、ありえないとも言いきれない。

「おい、恒！」

巧は急に低い声を出した。あまりにも突然だったので、あるいは疾しい気持ちがあったのか、恒は肩がびくつと震えた。

「行って確かめようなんてするなよ。お前がの悪い癖だ。行かなければ死にはしないんだろ？」

まるで考えを見透かされたようで胸がすいた。巧は時々こういう鋭い指摘を的確に与えてくれる。恒はいつでも巧の事を、第一の親友だと思っている。自分の悪いところを分かってくれていて、耳の痛い事を言ってくれるのは巧だけだ。

「ありがとう。お前がそう言ってくれなかったら、俺もふらふらーって行ってたかもしれない」

「お前はいつもそれだ。頭がいいんだか悪いんだかわからん」

巧はほっとしたようにサクランボをつまんだ。夕方の病室に、真っ赤な西日が差し込んでくる。ユー・ジーンが首刈峠に行ったと思われる時間から、既に6時間が過ぎようとしていた。

「で、なんで首刈峠に行こうと思ったんだ？」

巧はしばらくサクランボの茎をいじっていたが、真面目な顔で切り出してきた。ここは個室なので会話が外に漏れ聞こえる事はない。首刈峠という言葉が発せられる事そのものが、病院内では忌み嫌われるものだ。首刈峠という言葉は、村の多くの者にとって死のメタファーだった。口に出して話題にするような事ではない。

「それを行っただお前が言うかー？」

「俺は別に、行こうと思って行った訳じゃねーもんなあ。俺は行っただから死んだんだろ？ てか、死んでた覚えもないんだけどなあ。三途の川も見えなかったし。まあ皆が死んだっていうから死んでたんだろう。じゃあ逆に、行かなかったら死にやうがないって事だ」

「だろーうな」

「首刈峠に行かなきゃいけない理由でもあるのかよ」

巧は恒がまた行ってしまわないかと訝しんでいるのか、眉根を寄せている。巧は記憶障害などはないし意識もはっきりしているが、まだ時々血圧が下がったり心拍数の乱れがあるので退院には慎重になっているのだそうだ。巧の指先には心拍数を監視するセンサーがまだ取り付けられていて、それはナースステーションにモニターされていた。点滴だか注射だかの痕や、小さなテープも腕について痛々しい。

あまり巧に心配をかけてはならないという事は、分かり切っていた。皐月やユージーンの言うよう、見舞いも自粛すべきだったしそんな配慮のない自分は人として最低だ、それでも、巧から聞いたことは貴重な情報といえる。なにしろ巧の主観の入った夢の光景は、ユージーンが巧の記憶中に見いだしたであろう現実の風景と違っている。

” 巧、ごめんな……。俺は親友であろうとしてくれているお前に対して、いささかばかりも誠実ではない。でもお前が命と引き換えに教えてくれたこの手掛かりを、決して無駄にはしないから……”

恒は確かこんな言葉を心の中で繰り返していた。

どこに行けばよいのか、何をすればよいのかわからないが、とにかく恒は長居できなかつた。巧には絶対に首刈峠には行かないという事だけ約束すると、澄み切った清流の魚のような心を持つこの親友は満足そうな顔を向ける。

「おや。お前さん、もう学校は終わったのかね」

背後から声がしたと思えば、上島が回診にやってきたところだった。恒は上島の顔を見て、ようやく張り詰めていた思考回路が少しだけ緩んだような気がした。少しもほっとしている場合ではないの

に、だらしなく白衣を二枚着て、鼈甲のふちのある老眼鏡をずらし
て恒を見下ろす上島が目飛び込んできたとき、急に力が抜けてし
まっている自分がいた。

上島ならば全てを聞いてくれ、そしてどうすればよいのかを親身
になって考えてくれそうだ……そんな事さえ思ってしまったのだか
ら、恒の精神は不断のストレスと不安によってもう一人で考える事
も限界だったのだろう。荷をともに負ってくれる誰か……それが幼
い恒には必要だった。

恒は迷わず上島に相談することに決めた。巧には何も気取られぬ
ようようわざと明るく別れの挨拶をし、回診の終わった上島につい
てそそくさと病室を出た。上島は恒が何か打ち明けたい様子でいる
ので、カウンセリング室に恒を連れ込んで鍵をかけ、外から人が入
らないようにしてくれた。

「上島先生、ど、どうしましょう。神様がおひとりで首刈峠に行っ
たまま帰ってこないんです。巧の死の原因を調べると仰って……で
も、巧はそこに行ったから死んだんです！何かあったのではない
でしょうか」

一気にまくしたててしまうと、まったく脈絡のない説明になって
しまっていた。自分らしくもない、と恒は思う。早く、早く何とか
しなければ、という思いだけが空回りしているような気がする。上
島は混乱する患者に接するように、できるだけ恒を落ち着かせるよ
うな口調と物腰で、粘り強く話を聞いていくれた。村の大半の人
間にこんな話を話しても理解してはくれないだろうに、上島は怖ろ
しく早い頭の回転で、いくつもの事を同時に理解した。この村にお
ぞましい何かが起こっていること、それは村人の生命と安全を脅か
すものであり、その禍の起点は首刈峠である可能性が高いというこ
と。恒とユージーンはその禍の謎を突き止めるために行動しようと

していたこと。ユージーンは一度死んだ巧を蘇らせた罪で、近日中に逮捕され天国に連れ戻されるかもしれない、そうなれば、もう風岳村に戻ってくる事はできないであろうということ。ユージーンはこの村での滞在は今日が最後になるかもしれないということ。彼は最後に残された時間で手がかりをつかむため首刈峠にひとりで乗り込んでいって、一度はかろうじて戻ってきたが、意識が朦朧としていたようだった、再びそこに行ったまま、まだ帰ってこない――。

上島は大筋の話を理解すると、病院内だというのに携帯電話を取り出し、ユージーンに電話をかけた。静まり返った室内にくぐもったように響く呼び出し音。上島の口がいつまでも動かない。彼は通話圏外にいるようだった。山中にいる筈なのだから圏外なのは当然なのかもしれないが、恒は他の可能性を考えてしまう。ユージーンの携帯は見かけは普通だが、改造されている。素直に圏外だとは思えない。

ユージーンの携帯電話は圏外になることがない。上島はそう聞かされていたし、普段の間に連絡を取るときも、圏外になったことなどなかった。彼は緊急の事態が起こったら自分に連絡するようにと言ってくれていた。この番号はホットラインのように、電池切れで通じないことも圏外になることも決してない特殊なシステムの携帯電話につながっているからと教えてくれた。

『現在電波の届かないところにいます』

この案内は根本的におかしい。上島はあきらめて電話を切ると、神経質そうに舌を鳴らした。恒が言っている事が事実なのだとすると、ユージーンの身に今現在、何かが起こっている。携帯電話が繋がらない原因は、電池切れでも圏外でもない。だとすると、何だ？「駄目だ、繋がらない」

「やっぱり……」

「妙だな。一体どこにいらっしやっている。この番号にかけて、圏外という事はあるえないんだ。首刈峠じゃないんじゃないか？」

恒は気違いじみていると思われるかもしれないが、上島には自分が感じた予感を素直に告げた方がいいと思った。それがどんなにありえない事でも、その可能性が低くとも、ゼロではない限り言うべきだと感じた。口にしたその時点で否定されるとは思うが……。

「上島先生、神隠しってあるじゃないですか……あれに遭遇してるんじゃないでしょうか？巧はぼんやりと、死の直前の記憶、首刈峠に行った時の事を覚えていました。その記憶の中に、赤い鉄橋が印象深く残っていたそうです。首刈峠から見える赤い鉄橋、これは昭和初期の風岳だと思うんです。荒唐無稽かもしれませんが、俺は巧も神様も、首刈峠に行くことによって、昭和初期の風岳に飛ばされているんじゃないかと思うんです。未来にいる存在が過去に行くこと、これは物理的に矛盾しています。このパラドクスをどう解決するか……だから現代に戻ってきた巧は、その存在矛盾に耐えられず、死んだんじゃないかと思います。そう思えてならないんです」

「そんな事があるのか？でも、神様は一度学校に戻ってきた時には、まだ生きていらっしやったんだろ？」

「神様は現在、181歳だそうです。昭和初期に飛ばされていたとしても、その時代には100歳頃でいらっしやるはずで、存在していないというパラドクスは起こらないと思うんです。だから巧のように死に至るほどの存在矛盾にはならなかったのでは……」

上島は恒の話に同意しかけたが、また何かを思い出したように舌打ちをした。

「いや……そうだとすると、矛盾が起こっているのは神様の方じゃないのか？過去に自分自身が二人存在しているという逆説が起こ

っておる。巧君とは異なる影響が出ているのかもしれない……戻ってこれないということは、より深刻な状況だと思う。亡くなっているから戻ってこれないのではないだろう。携帯電話の圏外通知が不自然だから。風岳のことを思っただけ無謀な事をしてくださったのだろうが、法律違反で逮捕された方が神様にとってはよかつただろうに……」

過去のユージーンと未来のユージーンが同時に存在する世界があるとすれば……それはもう、明らかに矛盾している。法務局の監察官は、首刈峠のユージーンを見つけてくれるのだろうか。そしてきちんとならぬ法に則って逮捕し、断罪してくれればいい。彼がまだ、無事であるならばだが……。

「これはもう、我々の手に負える問題ではない」

「でも！ ユージーンさんを見捨てるんですか？」

「誰か見識のあるしかるべき人物に、すぎるしかない。たとえばその法務局の神様だ」

見識のあるしかるべき人物……。ユージーンは、枢軸神である自分の逮捕に充てられるであろう人物は法務局最高の業績を誇るゲイルリンクスライターであり、彼を手ごわい切れ者だと評価していた。聡明なゲイルならばユージーンを助けてくれるというのだろうか、いや、まだ見ぬ神を酷評するようで申し訳ないが、ミイラ取りがミイラという事態になりかねない、犠牲者が増えるだけのような気がする。

安心してとはいかないが、唯一希望を持つてすることができるとしたら、最高の智と力を併せ持つと絶賛され、陽階神が恐れる最強神、陰階参謀 ウィズウォルター、つまり荻号 要しはいない、恒はそう思った。ただし今必要な能力は力でも知識でもなく、経験と直観力だ。荻号にはそれがあろうだった。ユージーンは荻号を

警戒していたが、恒にとって彼は悪い人物のように見えなかったし、それどころかとても気さくで鷹揚な性格だと感じた。彼が最適のような気がする。

彼が恒の話に、耳を傾けてくれるのならだが……。

「上島先生、その携帯からメールが打てますか？ おひとりだけ、力になっていただけそうな神様のメアドを知ってるんです」

「神様のメールアドレスを？ お前さんという奴は……」

上島はすぐさま荻号にメールを打ってくれた。文面はこうだ。上島にはよく分からない内容だったが、とにかく言われるままに打った。

【宛先】 wizwalter4@first.negative
-states.ddmin.org

【メッセージ】

荻号様、ごぶさたしております、藤堂恒と申します。ADAMの件ではお世話になっております。大変ご多忙のところ申し訳ありませんが、実はご相談したい事があります。陽階神 ユージーンⅡマズロー様が、風岳村の首刈峠という場所に行かれたきり、帰っていらっしゃいません。御身に何かあったのではと思い、心配です。なにとぞ、お力をお貸し願いたいと存じます。

＊

荻号 要は13時間のサミットを終えて、会議室から出てきた。どこぞの脳外科医の手術時間のような長時間だが、これが神々の会議というものの平均時間だ。表向きには陰階神第4位閻神、その職務はよく知られていない。公的にも私的にもだ。彼の正体を知るものはひとりもなかった。彼は謙虚だが卑屈になることはなく、最高

神であることを少しも鼻にかける事もなく、ただ野に吹く一陣の風のように飄々としていた。だが彼はいつも生きる事に疲れきっていた。

煙草ケースから手製の麻薬入り煙草を取り出し、ライターで火を付けた。ふかり、と猛毒の煙が重たく陰階の回廊に垂れ下がる。じつとりと湿気を含んでいて、暗鬱な空気だ。彼はこの数百年間というもの、一睡もしていなかった。神だって一個の生物なのだから、ある程度の睡眠は必要だし、あまりにも睡眠不足だと疲労する。例えばいくら昼は教師、夜は軍神の二重生活を続けていたユーージンだって週に一度は寝ているし、他の神々は多忙でなければ毎日寝る。荻号がいつ寝ないことを決めたのか、何故寝ないことにしたのかは誰にもわからない。だがその事が彼の異常なまでの能力の高さに、何か関係がありそうだと思う者は少なかった。彼は常に神体を覚醒状態にしておくために、この麻薬入り煙草が手放せない。荻号はけだるそうに大きな息をついた。

荻号が喫煙場所とする外回廊は、年中霧が立ち込めている。霧の下には生物階が見えるかというところではない、生物階と神階は物理学的な”事象の地平”という物理学的境界によって完全に隔てられている。下に見えるとしたら宇宙空間、つまり星空だ。だが実際にはそれが見える事はなく、何十万年も前から未だに建設が続いている巨大な建造物が視界を塞いでいる。神階はまるで内側に閉塞したひとつの迷宮だ。そこには何ら希望も見出されない。

神階は終わっている、と荻号は思う。不変である神々の世界……それは生きながらにして死んでいるも同然だ。それに引き換え、生物階は常に命が芽吹いて、生命活動が盛んに行われ、進化が絶え間なく続いている。羨望のようなまなざしで、いつからか生物階を見下ろしていた。つくづく思うに、神には向いていないのだろう。荻

号は今日もそんな事を考えていた。

その時、シザーケースの中で携帯電話が暴れるのを感じ、煙草を口に咥え、メールをチェックした。荻号のメールアドレスは、ごくごく限られた者にしか教えていない。誰かメールを送ってきたような人物がいたかと訝り、恒だと確認すると少しだけ興味を持ったようにその場で開いた。メールを開いてその内容を読み、荻号はひどく落胆した。

”遂に、動き始めたか……盲目の時計職人（ブラインド・ウォッチメイカー…Blind Watchmaker）の意図も汲まず”

荻号はこういう面倒をしなければならぬぐらいなら、もう一秒だって生きていたくないと思った。死ぬ事ができるというのなら、今すぐに死んでしまいたかった。今日も、俺は死ねない……。荻号の顔には積年の疲労がこびりついていた。メールアドレスから推測される電話番号をダイヤルする。

＊

上島の携帯電話がけたたましく鳴った。着信音はバッハの”主よ人の望みの喜びよ”だ。通話圏外から電話がかかっている。恒は荻号がかけてきたのだと確信して、その電話を取らせてもらった。

「はい、もしもし。藤堂 恒です」

『俺だ。大変な事になっているようだな』

「助けて下さい、ユージンさんが死んでしまいます」

『お前の言うユージンさんがユージン＝マズローのことなら、心配はいらんだろう。奴はああ見えて……』

「過去に飛ばされたとしても、ですか？」

『過去？』

「首刈峠という場所は、時間と空間の流れがおかしくなっている可能性があります。ユージーンさんがとても優れた神様だという事は存じ上げています、でも、時間と空間が歪んでいるとしたら、とても太刀打ちできるとは……」

恒はユージーンを助けて欲しい一心で、まだ確信も持てない事をさもそうであるかのように力説した。荻号の興味を引きそうな、効果的でインパクトのある言葉をちりばめる。恒はこういうはったりが得意だ。電話向こうの荻号は相槌を打つ事もなく、何か口をさしはさむこともなく、ただ聞いていた。

『だから、何だ』

「死んでしまわれます」

『お前は、死んでほしくないのか』

「え？」

つまり荻号は、ユージーンを見殺しにしろと言っているのか？

荻号は陰階の所属で、敵対する陽階に所属するユージーンを快く思っていないのかもしれない。だがそれでも、時と場合によるのではないか。そんな言葉を投げかけるなんて、思いやりがなさすぎる。恒は唾然としてしまったが、ここで受話器を切るわけにもいかなかった。

「あなたがユージーンさんをどう思っているのかはわかりませんが、本当に優しく思いやりのある神様です。人に優しくしてください、ご自分は傷ついて……今だって命の危険を顧みず、この村のために謎を解こうとして下さっていたんです。俺はあの方を助けたいと思います、でもそのための力がありません……もしもあなたが助けて下さらないというなら、俺が行くしかありませんね」

恒はできるだけ哀れで無力な人の子を演じながら、荻号の同情心

を駆り立てる作戦だった。隣で聞いている上島も、固唾を飲んで見守っている。この子は、神を相手に交渉をしているのだ、気が引けてしまっているだろうが、しっかりとした口調で神と話している。その度胸はどこからくるのだろうか、到底真似はできない、と上島は思った。

「そうやって俺を挑発してるのか焚きつけてるのか知らないがね、助けなんていらなと思うぜ。神ってのはな、長く生きただけ人より生命に対する執着が薄い。たとえ死んだって、奴は後悔なんてしないだろう。このたびのユージーンの失態は、ユージーン自身に責任があるように思えるしな。それに、ユージーンという神は危険だと分かっている何も考えずに行く様な馬鹿じゃない。奴は若いが周到で、計算高い」

『とてもそうとは……何も考えずにふらふらと行ってしまったんじゃないかと』

「まあもう半日待て。それでユージーンが帰ってこないようだったら、そちらに行こう」

『今すぐではダメなんですか？　こうしている間にも……』

「ぐずっている訳ではない。陰階神が生物階に降下するには、手続きが厳しくてな」

＊

馬鹿らしい、と荻号はうんざりした。ここで荻号がしゃしゃり出て行ったら、恐らく極秘裏に勅令を下した陽階第一位神の面目が丸つぶれだ。陽階にも有難くない事だろう。生きている事すら面倒なのに、無意味な仕事を増やすなんてばかっている。ずば抜けた能力を持ってしまった荻号にとってこの世界はたまらなく窮屈だった。たかだか時空間歪曲の現場に居合わせたぐらいで、あれほどの大騒ぎをする。ユージーンだってきつと無事だ。何故なら……

「ユージーンは、絶対に死なん。約束したっていい」

どこからくるのか、荻号には確信があった。

『わかりました。ではもう半日だけ待ちます。今日本時間の午後6時35分です。今から6時間後にユージーンさんが戻られなかったら、ご連絡します』

「ああ、そうしてくれ」

＊

半日って、6時間だったよな、12時間じゃないよな、などと思
いながらも、恒は荻号に強く圧されて引き下がった。上島に電話を
返すと、上島は無言でポケットにそれをおさめた。話はまとまっ
ていないということは、恒の表情を見て分かった。恒に悩みが増えた。
荻号のあの自信はどこからくるのだろうか？　そして何故荻号はあ
んなにユージーンを買いかぶっているのだろう。恒はユージーンの実
力がよくわからないし、彼が力行使する姿をまともに見たことも
ない。荻号はユージーンの何を知っているのだろうか？　ユージーン
ならば大丈夫だとも言いあげだった、荻号は何を知っていて、そ
してこの村で何が起きているのか？　恒にできる事は、ただ待つ
事しかないのか。どうやらそのようだった。恒はひとり、社務所に
戻って待つ事にした。

＊

一方の荻号はその場で執務室へ電話をかけ、自身の第一使徒であ
る鐮^{かぶら}二岐^{にき}に命じて、生物階降下の手続きをさせた。どうせ無意味
な書類を書かせる事になるのだろうが、幼い恒の勇敢さに報いる為
だ。ふと手元を見ると、煙草の火が消えていた。彼は名残惜しそう

に見つめた後、それを携帯灰皿に詰め込むと、軽い失望感と疲労を感じて、なんととはなしに腕組みをした。黒いシャツの下に、つまり胸元の辺りで指に金属が当たったので、ようやくその存在を思い出した。

”さすがに、これを使うまでではないだろう”

荻号は久しぶりに懐に入っていた首のネックレスのチェーンを持って、トップを聖衣の外に引っ張り出した。鈍い銅色の薄汚れた金属、月と星の不気味なレリーフが3本の環の中におさまっている。もしもこれが雑貨屋に売っていたとしたら、気味が悪くてまず買おうという気にはならないだろう。この不気味なアクセサリーにはちゃんと由緒正しい名前がついている。相間転移星相装置（SCM—STAR System of Correlative Mobile Star）、荻号はもっと短縮して相転星と呼んでいる。このたった8cmのペンダントトップが、現在最強の神具として認定されている。

それが創出されてから荻号の手に渡るまで、代々の持ち主候補を即死させてきた。荻号が最後にそれを手にし、その龍のごとき荒ぶる力を捻じ伏せて、完全に自らのものとした。禍々しい雰囲気を身に纏っている。荻号の首に、それはあまり丁寧に扱われる事なく、ただぶら下がっている。この数百年というものの、起動することなかった。

相転星——その神具が内包する能力は一万ほどあるが、特徴はといえばたった一つだけだ。だがこの一点の為に、決定的に他の神々の持つ神具と異っていた。

時間と空間を統御する能力。それはこの世界の創世者、名もなき至高の力……それが存在者である他者と絶対者である自らを分かっ、

原始の能力とされていた。この神具は唯一絶対の能力を持つ存在によって生みだされた。最初は時空間統御能を持った一片の金属だったという。それを練成して、様々な機能を付加していったものがこれだ。その金属は誰のものであったか……言うまでもないだろう。

INVISIBLEである。

第1節 第11話 赤い鉄塔と昭和初期のリンクージ（後書き）

第11話付近挿絵アドレス

（藤堂 恒・荻号 要・織図 継嗣・メファイストフェレス・吉川
皐月）

[http://lizreel.web.fc2.com/2to
bira/2tobira-narou.html](http://lizreel.web.fc2.com/2to
bira/2tobira-narou.html)

第1節 第12話 魔女メファイストフェレスIIが地雷を踏んだ件

恒は母親に電話をかけていきさつを報告し、ご飯はいらないからと言うと、ひとりで社務所に戻り、湯をわかした。上島もユージーンの安否を気にしてはいたが、今日は当直医がないので病院を離れられないと、申し訳なさそうにそう言った。上島は重症患者をユージーンに送ったりしていたから、彼にとっては久々に気の抜けない夜になるのだろう。上島をあてにするのはお門違いだ。

「まだ、お帰りにならないの」

突然声がして振り向くと、皐月が中に入ってきていた。あれからユージーンが学校に戻らないので、心配して見に来たのだろう。今日は陸上部の部活の日だったのだが、顧問がいなかったので生徒達も不審がっていた。皐月はESSの指導が終わったあと、巧の見舞いに寄って、一度アパートに戻り、今朝がた鍋にあった肉じゃがを持って、すぐにこちらにやってきたのだそうだ。

「藤堂君、今日豊迫君のお見舞いに行ったでしょう」

「あ、ごめんなさい。ばれましたか」

「豊迫君が言っていたわ。首刈峠にだけは、行かせないでくれって……何を言っているのか分からないけど、そこに何かよくないものがあるのね。それをユージーン先生は調べに行かれたまま、帰ってこない、そうなの？」

「……そうです」

「……とにかく、藤堂君が無事でよかったわ……」

皐月は心が晴れないまま、そう呟いた。作ってきた肉じゃがを冷蔵庫に入れると、皐月は恒を気遣った。恒は学校でずっと塞ぎこんでいた。休憩時間は明るく振舞っていたが、授業中の気の抜けたような様子を見て心中を察していたのだ。

「藤堂君、今日はもう家に帰るといいわ。ユージーン先生なら大丈夫よ」

「俺は、大丈夫じゃないと思います……」

「だからってここで何ができるの？」

皐月にだって何もできないのだ。

「皐月先生だって、ここで待つつもりじゃないんですか？」

「待つわ……先生がちゃんと待っているから、藤堂君は帰りなさい。こんな場所で一人で待っていたら、危険だし……心細いでしょ」

「では、一緒に待ちましょう。そうすれば、心細くありません。ここには布団もあるし、夜を明かす事もできます。ここに一緒に泊まりましょう」

「明日は学校があるのよ？」

「では、一緒に学校に行けばいいでしょう」

皐月は冷蔵庫の中の肉じゃがを再び取り出し、社務所にあるレンジにかけて。白米はないが、二人分の夕食には十分な量がある。

「夜は長いわ。まずは身体に何か温かいものを入れましょう」

皐月の手製の肉じゃがは、疲れ切った恒の胃袋を温めながら落ち込んでいった。口の中いっぱい、皐月の愛情が広がってゆく。遅い夕食を終えると、恒と皐月は風呂をいただいた。社務所は村長のはからいで増築されていて、シャワールームがあり、湯が出るようになっていいる。疲れを癒してほしいということで、浴槽も設置されていた。恒は無駄に社務所に来ては風呂を借りていたので、勝手は知っていた。ボディークリーム、シャンプー、洗顔料などがある。というか、恒が揃えてやったものだ。彼は冷水で沐浴をすることが多い。皐月は躊躇したようだが、一泊させてもらうのだからと、仕方なく風呂を借りる事にした。皐月のアパートまで戻ると、恒をこんな一軒屋に一人にさせてしまっって危険だからだ。

シャワールームからは、水音が聞こえてくる。村人達が聞けばうらやむような状況だが、恒はこの間にも落ち着かなかった。神が今朝まで寝泊まりをしていた室内は、まるきり生活感がない。冷蔵庫の中にも恒が置いておいたウーロン茶以外には、何もなかった。彼の荷物はといえば、ベッドの横にある古い革のトランクだけだ。そのトランクの鍵が開いていた。無用心なのか、何も貴重品がないから開いているのか。もしくは、留守中に社務所に入る者などいないと安心してゐるのだろう。恒は社務所のドアをピッキングで開けていたから、立派な不法侵入だ。

不審者は不審者らしく、ということで恒は手持ち無沙汰な事も手伝って、中を覗かせてもらった。期待した程には、殆ど何も入っていない。パソコンと、顔を拭くのか銭湯に行くのか何枚かのタオルがあった。洗顔道具に、手帳、筆記用具に、ハードディスクなどの記録媒体。神語で記された書籍。計算式がびっちり書かれたノート。下着を身につけていないのか、着替えの下着などもない。私服はわずかながらにベッドの上に置いてあった。そして丁寧に折り畳まれた一着の白衣、彼の一張羅だ。神の装束らしく純白で、金色の透かし模様が入っている、しなやかな素材である。こういう装束を見ると恒は彼が神であったと思ひ出すが、そうでなければ気さくな外国人であり、優しい教師だ。明日彼が失踪したと知れば、生徒たちはどんなにか悲しむだろう。

恒は特に目をひくものが何もなかったのがっかりして、それらを元のようにしまい込んだが、白衣の下から思いがけないものが出てきた。それは小さなコインのように見えた。部分的に赤い錆のようなしみがついて汚れている。恒はそのコインの染みが白衣を汚しては大変だと思ったので、コインを流しきれいに洗った。鉄錆びのような汚れを洗い流してゆくと、コインの色は真っ黒だという事がわかった。

一体、何に使うのだろうか？ 恒は妙にこのコインの事が気になっていた。神階には貨幣がない。だから神階で彼が普通に使っていたとは考えられない。だからといって、こんな黒い貨幣を使う国が地球上にあるとも思えない。これはユーージーンのお守りか何かだろうか？ それにしては汚れていたし……あまり大切にしてはいないようだ。

恒は困っていたが、ふとコインがはめられそうな場所を捜しはじめた。きつとこのコインは、どこかに嵌まるはずだ……不思議な直感だった。鍵ならば鍵穴を捜しただろうが、コインを見てコインの穴を捜しはじめたのは恒ぐらいだ。だとすればユーージーンが置いていったもので、コインの対となるものはこのトランクのどこかに入っているのだろう。恒は彼の物を勝手に物色するのは悪いとは思いつながらも、必死になってそれを捜しはじめた。彼のトランクにはたくさんポケットがあるが、慌てず落ちついて一つ一つあらためた。

何でもいい、気がつく事は全てやってみよう。こういう直感はあるだけ大切にした方がいい。他に方法が思いつかないのなら、結果はどうなるのかわからないが、何もしないよりましだ。恒は自分にそう言い聞かせながら、何やら怪しいものを見つけた……それはマッチ箱ほどの小さな黒い箱だ。だがその表面には、コインが一つ嵌まるほどの窪みがある。恒は意を決して窪みにコインを嵌めこむと、思いがけず一回転振って奥に嵌め込む事ができた。恒はあまりにもすんなりとそれが嵌まり込んだので、期待して暫くそれを凝視していたが、何かが起こる様子もない。マッチ箱のような黒いそれは金属でできており、小さい割にはずっしりと重かった。

一体何に使うものだろう。コインを嵌めたあと、何かをしなければならぬのだろうか？ だとしたら、もう少し考えが足りなかつ

たようだ。ユージーンが何の意味も機能も持たないオモチャのような物を持ち歩いているとも考えにくいが、これまでのところ何も起こらない。恒が諦めてコインを抜き取ろうとした時、社務所の窓から視線を感じた。

はっとして振り向くと、窓の外には真っ黒な衣装を身に纏った背の高い女が音もなくこちらを見ていた。彼女は整った顔立ちで美しかったが、深淵のような双眸が、異質な何かを感じさせた。目深に被ったスエードの帽子が季節外れだが、夏だからか、真っ白い肌をこれでもかと露出している。スタイルはモデル並、惜し気もなく露出された腹部、女豹のような腰つきが官能的でもあった。見るからに人間ではないと解ったが、恒はぼつちりと目が合ってしまったので、目をそらすこともできず、窓を開けるしかなくなった。彼女が会釈したので、警戒しながらも先に挨拶を試みた。

「こんばんは」

「こんばんは、おちびちゃん。変ね。主に召喚されたと思ったのだけど」

「主ってどなたですか？」

「ユージーンⅡマズローという方よ。おちびちゃんは知らないかもしれないわね」

「藤堂 恒といいます。あなたのお名前は？」

「名乗る必要があるのかしら。妾はメファイストフェレス（あたしMephistopheles）、軍神下第0位の使徒なの」

軍神下第0位使徒、と言ったのだろうか。彼女はウェーブが丁寧につけられた髪の毛をくるりと指に巻き付けた。彼女は恒の手の中にコインがはめ込まれた小さな箱をみとめた。

「ああ、それ、おちびちゃんが嵌めたの。それは妾を呼び出すため

の発信装置だから、用がなければいたずらに呼び出さないでね。今日は特別に許してあげるから」

メファイストフェレスとは変わった名だ。まるでゲーテの代表作、ファウストに出てくる悪魔のような名前だ。使徒ということは天使であろう彼女が、悪魔の名を戴いている。名付け親の趣味が悪いとしか言いようがない。恒はそれを敢えて訊くのは失礼かと思ったが、彼女がユージーンユージーンの第0位使徒だというなら、そんな無礼ぐらいで腹を立てたりはしないだろう。それより、今は気になったことを全て解消したほうがよい。

「メファイストさんて、変わったお名前ですね。まるでゲーテのファウストに出てくる……」

「それは別に見当外れではないわ。ゲーテのファウストに出てくるメファイストフェレスメファイストフェレス（メフィストフェレス）とは、妾の父の事だものね。有名すぎて困るわ」

「え？　じゃああなたは」

「魔女、と呼ばれる事もあるわね」

これが何かの冗談でなければ、神が魔女を側近に仕えさせている……しかも第0位ということは最上位使徒だ。使徒は上位になるほど優れているという事になっている。軍神下第一使徒は響ひびき、以御いおんであるということは分かっていたし、通常、神々は第0位使徒など定めない。あまりよくない気配がする。表立っては最高位として任命できなかった使徒ということだろう。ユージーンユージーンの影の切り札といってもいい、恐らくはそんなポジションだ。恒はもう、何がなんだかわからなくなってしまった。荻号おぎごうのいうよう、彼は確かに周到で、計算高い神なのかもしれない。彼の闇を見たような気がした。

「でも……魔女なんて、いると思う？」

メファイストフェレスは優しく微笑みかけた。その微笑は例える

なら、モナリザのように謎を含んでいて、かつ穏やかだった。彼女は自らを魔女と呼びながら、そんな事を言う。恒は彼女の意図を理解しかねた。この女がユージーンの最高位使徒なのは間違いないだろう、彼が持っていたコインによって呼び出されたのだし、恒を害しようとしてはいない。無駄に呼び出されたことにもそれほど腹を立ててはいないようだ。ただ、赤子のように見くびられている。

「今あなたにお会いするまでは、いないと思っていました」

「それでいいのよ。世界の果ては象が支えている。神が世界を創った。錬金術で金ができる。悪魔や魔女が実在する……これらは無知からくる妄想。お前は賢くありなさい。妾は魔女と呼ばれる事もあるけど、それが正しくないという事は、お前には理解できるようなね。本質を見抜く目は、いつでも研ぎ澄ましておくことよ」

恒はユージーンが彼女がたった今説明してくれたように、自分は神と呼ばれるが神ではないと話していたのを思い出した。彼女も恐らく、そういうことだ。人智の及ばない能力を備えていて、そうであるが故に魔女として畏れられてきたのだろう。恒はこの見た目はいかにも怪しい妖艶な女が、至って常識的で聡明だという事に感心した。

「わかりました」

「間違って召喚したのなら、戻るわね。主にもお会いせずに帰るわ」
「待って下さい！ あなたの主が、大変なんです！」

「今、何と言ったの？」

メファイストフェレスはそれを聞いて、明らかに狼狽しているようだった。

シャワールームの水音が止まり、脱衣場で着替えをして、皐月が丁度風呂から上がってでてきた。ほかほかの湯気の立つ皐月の肌を見ることもなく、恒はメファイストフェレスを見上げていた。

＊

メファイストフェレスは話を真剣に聞いてくれたので、恒は心強かった。真っ黒で光を吸収するような双眸も今はどことなく優しくに見える。風呂上がりの皐月も話のこしを折るような事をせず、化粧水を塗るのも忘れて、恒の話に耳を傾けた。皐月は訊きこそしなかったが、彼女が人間ではないということは察していた。

ここで、メファイストフェレスについて、少しだけ触れておく。

解階——^{げかい}。

混沌の階層（カオティックフロア…Chaotic Floor）と呼ばれ、混沌と暴力が法であるという世界。弱者に一切の生存権を認めないかの世界は、不変の神階、生命のゆりかごである生物階と比して、変化と進化の著しい世界だ。万物は流転するという自明の理を、早回しで観察することができる。解階は生物階より下の階層に位置し、生物階では地獄と混同されている。

解階の住民は自然淘汰と進化が著しいために、グロテスクな形態をとるものの中にはいる。それは生物階でも突然変異体としてしばしば見られる現象だが、ずっと頻度が高い。だが彼らは異形の怪物でも悪魔でも鬼でもない。核酸とタンパク質に基づいた肉体を持つ、DNA、RNAワールドの住民である。彼らの遺伝情報は人の遺伝情報と同様に、DNAシーケンサーで解読する事すらもできる。ひよつとすると解階とは、現在の生物階の何百万年、何億年後かの世界を暗示しているのかもしれない。

メファイストフェレス、正確には父親と区別して”ⅠⅠ”がつく

のだが、彼女は解階の皇アルシエル Ⅱジャンセン（Alsie I Jansen）の膝下^{しづか}に暮らす解階の特権階級の貴女である。

女と言っても、解階の住民は生物学的な意味ではもう殆どが女性だ。性別を決定するY染色体はとうの昔に滅んでいた。これは現在の生物階にもいえる事だが、Y染色体は遺伝子として対合する事のできない孤独な染色体だ。何千回と繰り返された遺伝子コピーは、対合しエラー修復をするということができず、ジャンクのようになった。実際に人のY染色体も、現在では性を決定する以外にはわずかにしか機能を持たない。あとは広大な遺伝子の残骸であり、人類においても男性の滅亡は避けられない宿命とされている。

生物階よりずっと進化速度の速い解階でも、男性は滅亡していた。代わって現れたのが、性決定の遺伝子をX染色体上に持つ生物、それがメファアイストフェレスを含む特権階級である。彼女らのうち半数は、雄型の表現型^{ひょうげんけい}を発現し、X染色体を持ちながら、男性の役割を担う事ができる。見た目にはまったく完全な男性でありながら、彼らの染色体は女性である。それでも慣習に倣い、男性型表現型を持つ者は男として扱われている。

さて、メファアイストフェレス親子は父（母でもあるが）、娘ともに権威ある人類心理学者で、父は研究のため生物階に滞在し、その際に出会ったひとりの作家に影響を与えることとなった。作家ゲーテによるファウストの物語である。解階の住民は感情に乏しいため、父親は人に対してかなり冷淡だ。冷淡ではあるが、冷静で無口な研究者タイプの父親がどう間違っ^{まちが}って、お喋りで狡猾な悪魔メファアイストフェレスのモデルにされてしまったものか、メファアイストフェレスIIはゲーテの著作を読みながら首をかしげたものだ。

人の感情というものは理解しがたく、また複雑で興味深い。いつしか娘も人類心理学者として父と同じ道を歩むようになっていた。解階から生物階への出入りは統治者アルシエルの管理する解階の門

(Hell's Gate)により厳しく制限されていたが、人類研究者という肩書を利用して彼女は生物階への出入りを頻繁に繰り返した。これを見咎めたのが神階である。

神階と解階は互いに、生物階への介入と出入りを最小限にするよう協定を結んでいた。生物階という階層が、ちょうど神階と解階の中間に位置するためだ。神階と解階は対立していたが、全面戦争は無益だし、解階も神階の支配や領土拡大を望んではいなかった。そういう理由で、生物階は神階と解階の緩衝地帯として、できるだけ介入のないように制限しておく、と神階と解階は協定を結んでいた。そして生物階の平和を維持してゆくための最小限の干渉は、アルシエルの意向も反映した上で、神階が行う、とも。

神階では、一度に生物階に降下できる神の定員を20柱までと定めている。神が生物階に降下する際にはまず法務局に届け出て、20柱の定員に入るよう手続きをしなくてはならない。定員オーバーだと、定員があくまで待たねばならないこととなる。これに対し解階も20名までだ。特権階級にある者は解階の中でもとりわけ強い力を持ったため、生物階に与える影響は甚大であり、最低でも定員2名分と換算される。メファイストフェレスが管理局である解階の門を経由せず、頻繁に生物階への出入りを繰り返した事が神階の法務局に通達され、危険因子として掃討されることとなった。この時彼女の討伐に充てられたのが、攻撃的神具を所有し、かつ高い戦闘能力を持つ軍神、ユージーン・マズローだったというわけだ。神階は違反通知を解階に提出し、アルシエルの検印によりメファイストフェレスの処罰が申し付けられた。

メファイストフェレスはユージーンと解階の刺客にすんでのころまで追い詰められ、手負いにさせられた。彼女はもはやこれまでと死を覚悟したが、ユージーンはとどめをさす事ができず、法務局

に討伐の証として彼女の血を提出し、傷を癒して解階に戻してやったのだった。解階では父親の嘆願が聞き入れられ、アルシエルからは軽い罰で済んだ。

慈悲という行為に初めて触れた彼女は、命を救ってくれたユーージンに何か報いたいと考えるようになった。それには使徒として召し抱えてもらい、彼のために働くのがよいだろうと考え、そう申し出た。彼は正式な書類にて丁重に断ってきた。神と使徒の関係は相利共生に基づく特別なものだ、だから解階の住民であり何の利害関係もないメファイストフェレスとはうまくいくとは思えない、それにメファイストフェレスは既に殺した事になっているので神階から隠れているべきだ、付け加えて使徒にするには実力不足だ、と。

メファイストフェレスはせっかく解階の貴族というプライドを投げ捨てて申し出たのに相手にしてもらえなかったのが悔しかったらしく、その後の10年間でがむしゃらに力を求めた。特権階級の貴族としてはそれほど力もない学者であった彼女だが、解階の連綿と受け継がれて来た優秀な遺伝子にも助けられ、めきめきと力をつけた。

10年が経ち、ユーージンがメファイストフェレスを忘れかけた頃、彼女は再び使徒となる事を申し出た。ユーージンは困って適当にあしらおうとしたが、今度はそうもいかなかった。何と彼女はたった10年の間にユーージンをも遥かに凌ぐ力を手に入れていたのである。ユーージンはこてんぱんに打ち負かされ、さらに彼女のひたむきさにも負けて、非公式に使徒として認めた。

神は生物として成長する事ができない、不完全な存在だ。たとえばユーージンや他の神々が10年間メファイストフェレスと同じ訓練を積んでも、神体はもともと完全な個体であるがゆえに、成長す

ることができないのだ。つまり訓練により強くなることができない。ユージーンはいつまでたってもメファイストフェレスに追い付く事はできない筈だ。ユージーンは神という生物の脆弱さをよく知っていた。メファイストフェレスは鍛えれば鍛えるだけ強くなれる……使徒として認めたのは彼女の将来性があったからだ。

軍神下第0使徒、メファイストフェレスⅠはこうして誕生したのである。とはいえ、法務局の目もあり、神階に常駐させる事もできないし、結局は力を貸して欲しい時に呼び出すからという形でメファイストフェレスは解階に戻された。それでも、ユージーンは見識と実力を備えた彼女を頼りにしてはいたようだ。彼はメファイストフェレスを解階から召喚するための発信機とそのキーを常日頃から持ち歩いていた。この発信機を作動させると、解階の門に連絡を入れたうえで、定員にあきがあれば彼女を生物階に召喚できる。

＊

恒はその発信装置を見つけて召喚し、しかも丁度よく解階の門の定員が空いていたというわけだ。目の前にメファイストフェレスがいるのは、いくつもの偶然が重なった結果だった。

メファイストフェレスは恒の話を理解すると、席を立ち上がった。彼女は一度も表情を緩めることなく、きりつとした眼差しで窓の外を見つめる。恐怖など知らないかのようなその表情は、生物階の女性のそれとは異なっている。

「とにかく、行ってくるわ」

「早まらないで下さい。被害が増えてはいけません！ 荻号様を待ちましょう」

本当に、早まらないでほしかった。か弱そうな女に何ができる……と、何もできない恒だってそう思うのだから。

「平気よ。何故なら、それほど遠くない場所に主の気配を感じるもの」

「ユージンさんは、まだ首刈峠にいらっしゃるんですね?!」

皐月と恒は立ち上がって喜んだ。まだ彼はこの時間の首刈峠にいる、それだけ分かって幾分心が落ち着いていた。

「時間がかかっているのは、何かを調べているからじゃないかしら。でも確かに、少し混乱していらっしゃるようね。気配が乱れている」

「そんな事まで、分かるんですか?」

「急いで行ってくるわ。油断はしないから」

「待って下さい! 危ないです、荻号様が来るまでは……」

メファイストフェレスはその言葉に何かを感じたらしく、恒を真っ直ぐ見据えた。険しい目つきだが、思いやりのある深いまなざしだと思った。

「そうやって何かを待っているばかりでは、何も救えないし、何もできないわよ。他力本願はやめることね。お前は救われる立場ではなく、これから多くの者を救わなければならない立場になるのよ。幼いとはいえ神の端くれなのだから、よく考えなさい。では、主をお連れして戻るわ」

メファイストフェレスはそう言い残すと、最後にひらりと手を振って外に出ていった。恒はひと言も返す事ができなかった。途中までは同意できた、だが最後のあたりの言葉がよく聞き取れなかった。恒はむしように心細くなって、皐月にすぎるように尋ねた。

「皐月先生。今、メファイストさん、最後に何て言いましたか? 俺、ちよっとよく聞こえなかったんです。何を言いましたか?」

恒は皐月の表情が凍りついてのを見て、さらに啞然として、いつまでも窓際を見ていた。隣でしっかり聞いていたはずの皐月も

答える事ができない。皐月はそれほど集中して彼女の話を聞いていたわけではないが、あまりにも自然にそう言ったので、思い出さなければ聞き流してしまっていただろう。彼女は確かこう言ったと思う。

神のはしくれなら――と。

恒の中で、時間が止まってしまったかのように感じられた。

第1節 第12話 魔女メファイストフェレスIIが地雷を踏んだ件（後書き）

挿絵（筆者絵注意）メファイストフェレス

<http://lizreel.web.fc2.com/gallery/physics/mef.html>

第1節 第13話 ウィグナーの友人と闇神、荻号 要の開眼

メファイストフェレスは地図で確認した首刈峠という場所に直行した。夜空を疾風のように翔けながら、彼女は右手に髑髏のついた笏杖のような物体をにぎりしめている。魔女と呼ばれる彼女だが、箒に乗って空を飛んだりするようなメルヘンなものではない。彼女が手にする小さな笏杖は魔法の杖などではなく、解階の科学力の粋を集めて造られた多機能装置だ。この装置が斥力を発生させ、握るだけで飛行を可能としている。ゴシックな髑髏のデザインは彼女の趣味であろう。

" 高度250JTW、座標423・112・34、接近しています "

カタカタと気味の悪い歯音をたてながら、髑髏は彼女にナビゲーションをしてくれる。メファイストフェレスはナビゲーションされた付近の地形を見た。谷合いの風景に、糸のような峠道が敷かれている。だが……光が吸い込まれているかのように、周囲が暗い。月も出ているというのに……。暗闇は好きだけど、度が過ぎるのは気に入らないわ、とメファイストフェレスは気丈にもそう呟いた。その時、握りしめていた笏杖についている髑髏がカタカタと音を立てた。驚いて髑髏を睨み付ける。

" 時間および空間歪曲率、Level 5645、5646、5647 上昇中 "

「何ですって!? 止まりなさい!」

メファイストフェレスは咄嗟に叫んで中空に静止した。髑髏はエマージェンシーを示す赤い光を吐き出している。メファイストフェレスを躊躇させた理由、それは時空間歪曲という言葉だ。この周囲

にユージーンの気配が残っていたので油断していた。メファイストフェレスはそこに近づく前に、少しばかり熟考すべきだったと悔やんだ。

時空間歪曲は、神階や解階でごくごく一般的に用いられている技術だ。局所的に自らの存在確率を変化させるものであり、これにより瞬間移動が可能となる。だが、それが適用できるのは時空間歪曲装置を使用した場合において、しかも対象は装置を所有している者に限られる。つまり対象は生物であったり、小さな物体であるわけだ。これは同じ時間と空間の中を座標が移動しているだけで、空間全体の時間の流れは変わらず、ただ対象の空間認識の在り方が変わるだけだ。

今この場で起こっている現象は、解階や神階所属者が行使する時空間歪曲と似ているようで根本的に異なる。広範囲の地域が、装置の使用もなく、自然的に空間歪曲を起こしている。これが問題だった。何故かという、自律行動できない"場所"というのは、周囲の時間の流れから切り離して転位させる事ができないからである。「こんな事が……神階にこんな事の出来そうな装置が一つだけあるそうだけど……発動者が不在だわ。自然現象でこんな事がありえるの?」

メファイストフェレスはとてもではないが、信じられなかった。彼女は千年余りを生きてきたが、こんな前例はない。そしてユージーンはこの歪みの中心にいる。恒に偉そうな事を言った手前、二の足を踏むのは癪にさわるが、この中にまともに飛び込んでゆくとしたら、勇敢どころか、かけらほども賞賛には値しない。末代まで愚か者のレッテルを貼られるだろう。

"時間および空間歪曲率、レベル 5679、5678、5676
低下中"

メファイストフェレスは演算中枢である王冠髑髏、マクシミニマ（Maxi・Minima）が故障してしまったのかとさえ思った。マクシミニマの言いたい事はつまり、この一帯の不自然な歪みが胎動するかのように拡大と収縮を繰り返しているということだ。まるで宇宙が膨張から収縮に転じるように、だ。

メファイストフェレスはマクシミニマに自律知性をセットしておらず、この装置が恣意的にもの思うような事はない。高度な判断力というものは機械には求められない、それをセットすれば性能がガタツと落ちる。メファイストフェレスがマクシミニマを信頼して愛用してきたのは、最終判断を自らが下すようにしてきたからだ。メファイストフェレスは今、首刈峠に開かれた真っ黒な深淵を目の前に、判断を下す事ができないでいる。

” 愚かな……考えなさい、メファイストフェレス。解階屈指の学者が聞いてあきれれるわ。目的は主をお救い申し上げるだけ。今はそれだけでいいんだから ”

「マクシミニマ、3秒ループで妾の代謝固定を行いなさい」

代謝固定とは、自らの生体時間を固定して進ませない事だ。首刈峠の時間の流れは狂っている。周囲の環境の時間の流れがどのようなにしても、自身の生体時間を停止させておけば、生体が時間的な影響（老化や若返り）を受けない。しかし実際に生体時間を止めてしまうと動けなくなるので、彼女は3秒間だけの生体時間を切り取り、それをループさせる事で動けるようにするというのだ。

メファイストフェレスは髑髏を見つめながら思い出す。ユージーンはG-CAMという神具を持っている。それには生体時間を一時的にだがループさせるような機能があった筈だ、更に神具というの

は解階のツール（Tool…多機能装置）よりずっと高度な機能を持つので、ユージーンはそのくらいの対策はうってここに来ただろう。自分が敬愛する主は間が抜けてはいたけれど、馬鹿ではなかったと思う。

メファイストフェレスは髑髏を大きく振りかぶると、歪みの中心へと潜っていった。彼女はふわりと森の中に着地した。履いていたピンヒールが腐葉土に食い込む感触が妙に気持ち悪く、すぐに足を離し、地上から10センチばかりの距離をとった。露出している肌も、森の空気に触れるだけで鳥肌がたつ。ふわふわと浮かびながら、ユージーンの姿を捜す。生体時間をループさせているので何も感じないが、生身のままここにいたら、どうなってしまうかわからない。そう思うとぞっとした。

森の中はひっそりと静まりかえっており、夥しい虫や鳥、獣の死骸が散乱して殺伐としていた。不思議な事に、乾燥はしているがどの死体も腐っていない。どうやら腐敗バクテリアまで死んでいるとみえる。現在首刈峠にいる生物は異常な時間の流れに耐えられず、全て死んでいると考えた方がよいだろう。メファイストフェレスは木々を見上げ、表面に触れ、コンコンと叩いて感触を確かめた。葉は萎れているが、まだ腐ってはいないようだ。とすると、この異常は何年も前から始まった訳ではないのだろう。数ヶ月、二週間、いや、一週間以内の変化だ。余計な事は後で考えるとして、こんな場所からは一刻も早くおさらばしたい。早くユージーンを見つけないで。

「主よー、どこにいらっしゃるのですかー？」

彼女の呼び声が空しく死者の森に吸い込まれてゆく。メファイストフェレスは不安にかられた。ユージーンの気配が弱くなってきて

いる。気配のある方へと進んでいるが、段々とよくわからなくなってきたのだ。彼女は髑髏に命じて、生体反応の座標特定をさせようとしたが、今はメファイストフェレスの生体時間をループさせている最中だ。タスクの増加はシステムを不安定化させる。メモリは充分なはずだが、ループが万が一フリーズしてしまったら？ たった一度の判断をたがえただけで、いつでも自分は足元の死骸に追加されてしまうだろう。

結局は肉眼でユージーンを捜さざるをえなかった。だが彼女がいくらも捜さないうちに、暗い繁みの中から、明らかに彼のものと分かる足がによっきり出ているのが目に飛び込んできた。メファイストフェレスは心臓を早鐘のようにうち鳴らしながら、思いきって繁みの中を覗きこんだ。いた！ ユージーンは木に神体をもたせかけて、意識を失っていたが、一振の杖だけは両手で握りしめていた。彼の固有の神具であるG-CAMが、せわしく明滅を繰り返している。彼のアトモスフィアを極限まで奪い取り、解析が行われている。ユージーンは生体時間のループにメモリを割くことをも放棄し、全メモリとアトモスフィアを空間異常解析につきこんでいた。

「主よ。あなたはどのような馬鹿だったのね。この異常を突き止めたって、帰ってこれなければ意味がないじゃない」

彼の生命をかけて行われている解析はまだ続いている。ここで救出して帰っては、彼のしたことが無駄になる。メファイストフェレスはユージーンに寄り添いながら、髑髏にループをかけさせた。

”対象者解析中。対象者の生体代謝時間、こうしん昂進中。＋454年、455年、昂進中です”

今この場所ではどうやら、時間の流れが早くなっているらしい。彼はわずかの時間に450年も年をとっている。少し外見が老けて

見える。彼は彼の身が181歳の若い神である事を見越して、生体時間のループを断念したのだ。神の寿命は3000年ほどあるので、肉体が老化していても、死に至るような歳までにはならないと考えたのだろう。彼は今現在、637歳の肉体年齢になっている。メファイストフェレスはいたたまれず、すぐにループをかけてやった。解析は殆ど終わっているようだ。あと一息なら、こちらのメモリも彼のアトモスフィアももつだろう。彼は一気に齡をとってしまったことで、筋肉が衰えていた。450年間も体を動かさずに座っているのと同じ現象が、彼の神体に起こっているからだ。

「あの子の言うとおり、大変なことになっていたわね」
メファイストフェレスはすっかりやつれて冷たくなったユージーンを、離さず抱きしめていた。

＊

皐月は、あれだけ頭のよかった恒が茫然自失としたまま、まったく何も考えられなくなってしまっているのを見て、幼い彼の受けた衝撃を慮った。皐月の方は、恒が神だと言われても心の底では納得できた。彼は普通の子供と明らかに違っていた。皐月是不登校児だった恒を学校に連れてくるために、どれだけ恒と駆け引きをしたかわからない。その中で、恒は他の子供にはないカリスマ性と無限の可能性を持っている、その事に厭でも勘付いていた。この子には無限の才能と可能性があるのに、自分と向かい合うことができないでいる、と。

皐月はかつて彼女の恩師が、彼女を宇宙物理学への道に誘ってくれたようには、恒を導く事ができなかったのだと心をいためていた。いろいろな事件があり、恒が人間ではないということも明らかになったが、自分自身と向かいあわせるとしたら今しかない。皐月は恒

を奮い立たせるしかなかった。

「藤堂くん。もしあなたが神様だったとしても、ここでくじけてしまわないで。私はあなたの味方だから」

「……皐月先生、俺……どうすれば」

「メフアイストさんがユージン先生を助けに行ってくれているでしょ。彼女を信じて、私たちが今しなきゃいけないことは何なの？ それをしましょう、一緒にね。あなたは一人じゃないわ。時間と空間が歪むって、藤堂君はさっきそう言ったわね。それをもう一度説明して」

「何をするんですか？」

「何が起きているのか、解を導き出すの。やってみせるわ」

皐月の瞳の奥が、まるで星空のように輝いていた。恒はもともと皐月をあてにしていなかったが、それは大きな間違いだ。時間と空間に対する解釈なら、これほど頼りになる人物はいなかった。

2年前、理論宇宙物理学界に彗星のように現れた若き天才が、科学雑誌の権威ともいえるサイエンス誌に、この10年間で最も美しいと評価されたある証明を掲載した。著者は名だたる業績を持つ著者達の中にたった一人、何の業績もない日本人の女子大学院生、その名を吉川 皐月といった。

かの証明は時間と空間の在り方に新たな解釈を与えた。彼女の理論を応用する事によって、行き詰まりかけていた他の理論は命を注ぎ込まれたかのように大発展を見せた。物理学分野から大いなる期待を寄せられながらも、彼女は二度と論文を出すことはなく、かねてより夢であったという小学校教師として今は教壇に立っている。

村人はこんな輝かしい業績を知らないが、恒はユージンから聞いて知っていた。インターネットからダウンロードした彼女の論文

を読んだが、はじめの1ページ目で挫折した。恒は彼女の学説が難解すぎて、まったく理解できなかった。読めなかったのだから評価をする事ができず、そのまますっかり忘れていた。付け加えて、恒がサイエンス誌の価値を知らなかったというのもある。

「臯月先生がいくら天才物理学者でも、初期値も実際の現象も仮定できないのに、どうやって……」

「おおざっぱだけど、仮説くらいならたてられるわ。構想だけを考えるしかないけれどね」

「そんなの無茶だと思います。臯月先生は理論系です。ならばしかるべきシュミレーションができるような環境がないと論は組み立てられない。例えば大学の研究室です」

「神様ともあろう方がそんなに簡単に諦めるの？ あなたの事よ、藤堂君」

「からかわないで下さい。俺、神様になる予定なんて全然なかったんです！ 人間の研究者になりたかっただけで」

「そう、研究者になりたいの。なら、未来の研究者となる藤堂君の最初のテーマは、これを考えることよ。研究者はどんな分野においても、医学、化学、生物学、物理学、文学から考古学に至るまで、たった一つのことを解き明かそうとしているのだから」

「一つのこと？」

「そうよ。たった一つのこと。この世界は、どう在るのか？ 世界の姿はどうあるのか、それを暴こうとしているの。藤堂君、諦めないで考えるのよ。神様だってまだ、この謎を解けないでいるに違いないわ」

臯月の探求心と真っ直ぐに伸びた剣のような頭脳は、2年のブラントの間に少しも衰えてなどいなかったのかもしれない。そして臯月は、今日この日を迎えるためにこの村に導かれていたのかもしれない

ないと感じていた。

「恒君、今、ユージーン先生は生きているのかしら？」

皐月は怖ろしいことをさらっと口にした。皐月は今、おそらくユージーンを物体Aぐらいにしか思っていない。それは彼女が非道だというのではなく、科学者としての冷静な仮定だ。恒は彼女を心の中で批判しかけて、思いとどまった。彼女は、すでに初期値を求め始めているのだろう。

「そんな事を聞くんなんて……」

「ユージーン先生はメフアリストさんが確認するまで、生きても死んでもいないわ、そう、彼女が彼を発見した瞬間に、波動関数は収束するの」

「シュレーディンガーの猫、ですか？ 波動関数の話なら……」

これは比較的有名な話であり、恒も知っている。量子力学の先駆者、エルヴィン・シュレーディンガーの時間の認識のしかただ。猫を箱の中に入れる。その箱には放射性物質が入れており、その放射性物質が α 粒子を出すと毒ガスが箱の中に放出され、猫が死ぬ仕掛けだ。ただし、その放射性物質が一定時間後に α 粒子を出さ出さないかは確率の問題であるとする。一定時間が経過した後、箱の中の猫はどうなっているのか？ 箱の蓋を開けてみるまで生きているのか、死んでいるのかわからない。では、猫はいつ死んだと分かるのか。……それは対象を観測者が観測した瞬間である。それまでの間、猫は生きているともいえるし、または死んでいるともいえる。一匹の猫が、生きている状態と死んでいる状態が同じ時間軸上に重なり合っているのだ。皐月はその仮定を持ち出している。

「藤堂君。ユージーン先生は、観測者が観測をした瞬間に、生きているという現実につながるのよ。それまでは、ユージーン先生は刻まれた Δ 《デルタ》ユージーン先生、つまり生きている状態と死んでいる状態が無限に続いている、おかしい状態になっているの」

「コペンハーゲン解釈ですね。観測者の存在が、実在を決定するといふ……」

「つまり、メファイストさんがユージーン先生を確認しに行かなければ、彼は死んでいたかもしれないわ」

「……皐月先生は哲学者に転向したんですか？」

「まずは構想が必要なの。証明は後から行うものよ。藤堂君がさっき話してくれた現象は、それまでこれと決められていなかった時間の解釈を、いくつか潰したわ」

時間論に関する解釈は、山のようにある。だが、恒の説明はそれらのうちいくつかの矛盾を一瞬にして暴いてしまった。検証するとしたら、それほどの学説は残っていない。皐月はまったく新しい学説を立てようとしているのではなかった。今あるツールを用いて、最も確からしい学説を導き出す。最初から証明をしようとしていたら時間が足りないし、大体、時間に関する真実がわかったところで、それを活かす術は彼女にはない。

「時間は既に、首刈峠から分岐しようとしているの。その場所は、 Δ 時間の状態になる。時間の末端と末端、線分Aと線分B、つまり豊迫君の見た昭和初期の時間から、現代という間の時間までが、 Δ 時間になろうとしているのよ。豊迫君があの場合に迷い込んだ時、彼の生きている確率と死んでいる確率は揺らいでいたはず。そして観測者によって、彼の死が決定されたの。藤堂君、観測者は、どこに存在しているのかしら……」

皐月はこれまでのやり方とはまったく違って、パソコンを一切使わずにこんな事を考えた。

「歴史的な時間の流れが、変わろうとしているわ。そこはきつと、修正された唯一の正しい歴史。平行世界などとは考えないで……観測者が観測した瞬間、私達の時間は固定されるのよ。つまり、私達

は存在しなくなるかもしれないわ。時間の流れと真実は常に一つしか選ばれない」

「臯月先生は、怖ろしいことを考えますね……でも、観測者って誰なんですか？ それは人間ではないし、神様でもありえないと思います」

「シュレーディングアの猫の入った箱を観測している私達がいる空間（部屋）の、ドアが開くわ。観測者がドアを開けてこの空間（部屋）に入ってこようとしているのよ。猫は死んでいたのか、生きていたのか、もしも観測者が死んでいたという現実を決定したとすれば、ドアは開かない。つまり私達は存在しなくなるわ。観測者によって選ばれた歴史がその瞬間、唯一の歴史となるの……私達は今、△時間の中にいるのよ」

「だとしたら、観測者は何を観測しにくるんですか？ 死んでいた猫とは、生きていた猫とは、一体何を指しているんですか？」

「死んだ猫、生きた猫というのはあくまでも例えよ。実際には観測しにくるわけじゃないわ。真実の時間を決定するのよ。密室に閉ざされた私達から見て、そのドアは開くのかしら？」

恒は途中から臯月が何を言っているのかわからなくなったが、臯月らしくもない哲学的思考だと、一笑に付す事ができなかった。

臯月が言っているのは、”ウィグナーの友人”のパラドクスをさすのだろう、と恒は思った。

シュレーディングアの猫の生死を観測している部屋に人がいて、密閉されていたとする。実験が終わった頃に、その密室を訪ねてくるよう予め友人に申し伝えておく。もし中の猫が死んでいるという現実が密室の外の人によって選択されたなら、密室の中にいて猫が生きているという現実と直面している人はどうなるのか。消えてし

まうのだろう。もしくは猫が生きているいう現実^ニに直面している密室の中の人からみれば、密室から外に繋がるドアはいつまでたっても開かない。この場合は、密室の外の人が消えてしまったということになる。これは密室の中の人と外の人が観測者として対等な立場の人間である場合だ。

だが、真の観測者が密室の外にいる場合にはどうなるのだろう。消えてしまうのは密室の中の人間だ。この現象が、首刈峠で起こっているという仮説を、皐月はたてている。シュレーディンガーの猫とこの時間と空間の歪みを結び付けてしまう皐月の頭脳と才能を、恒が軽んじてよいはずがなかった。

恒は最近ちらっと読んだADAMのある文献が、頭の中を掠めていった。

神階の歴史において、空間創世者というエネルギーが、観測されているらしい。創世者^{インサイジブル}といっても、知性を持って考える存在ではないし見えないので、INVISIBLEと呼ばれている。それは創造と破壊に転じる純粋なエネルギーであり、エネルギー保存の法則に基づいて、消失したりすることはない。エネルギーは収縮すれば放散される。シュレーディンガーの猫が死んだり生きたりするのと同じように不確定な確率によって、創造と破壊が決定されている。

INVISIBLEの確率的な選択によって、この世の全てが決められているというのだ……。それが、神々の現時点での創世の解釈だった。

INVISIBLEが無慈悲な確率というまったくの偶然によって、△時間の扉を開こうとしているのか、もしくは永遠にその扉は、開かないのか？

「臯月先生、首刈峠は局所的にΔ時間化しているのでしょいか？」
「……違うと思うわ。ここは基点なのよ、首刈峠には禁断のドアがあるんだわ。それが開いた瞬間、もしくは開かないと決定された瞬間、この世界全体が滅亡すると思うの。私達の歴史は切り捨てられるのよ、何者かによって」

……INVISIBLE……それは、観測者なのだろうか？

*

荻号はもう一度懐中時計を見直した。日本時間で12時半だ。恒から電話がかかってこないという事は、ユージーンは無事だったのだろうか。第一使徒である鎬 二岐が、生物階降下の書類を用意して手続きをしてくれていた。荻号ほど強い神だと、生物階に降下できる神の定員のうち13柱分のカウントとなり、法務局に迷惑がられる。原則として生物階に干渉してはならない陰階神がそれだけの定員を占める事となれば、それだけ陽階の任務を妨げるので当然お咎めもある。

現在、生物階降下中の神はユージーンを含め3柱だそうだ。ユージーンは4柱分の定員を占めるので、荻号が降下すれば残りの枠は3柱分しかない。とすると必然的に降下中の残りの2柱は潜在的に定員2柱以上のカウントを割く枢軸神ではない非枢軸神だろう。厳密に言えば恒も神だから、カウントされなくてはならないが、法務局が認識していないので仕方がない。とにかく、そんな面倒な事になるので荻号は滅多な事がない限り、生物階降下ができなかったし彼自身も億劫だった。生きているのも億劫な彼の事である。

それに、荻号が生物階降下を厭がるのは他の理由もあった。生物階降下中の神は法務局によりガチガチに監査を受ける。自由である

うとしてきた荻号はこれも不満だった。二岐はそういう訳で、事実久しぶりに生物階降下の申請書類を書かされる事となった。

「珍しいじゃない。主が降下するなんて」

「まだそうと決まったわけじゃない。降りなくて済むもんなら御免願いたいものだな」

「陽階神も、落ちぶれたものね。ご自分の尻もふけないっていうの？」

「まあそう言うな。ユージーンが要請してきた訳ではない」

二岐に書かせた書類には、降下理由を空間異常の矯正としておいた。実際にはユージーンを助けようとしているのだが、陽階神が陰階枢軸に助けられるということは、ユージーンの不始末であり陽階上層部に大目玉をくらう。そこは配慮をしておいてやりたいところだ。恒が荻号を必要としていないのなら、生物階降下は中止したかった。荻号は待っているよりは連絡をした方が早いかと、携帯をとった。さきほどかけた携帯電話の番号は、借り物なので、と恒から連絡先である社務所の電話番号を教えられていた。

＊

深夜の社務所で、黒電話が鳴った。恒が時計を見ながら受話器を取る。そういえば、約束の時間を10分も過ぎていた。こんな夜中にかかってくる電話のことだから、出る前から相手がわかっていた。皐月と一緒に紙とペンを取り出して、方程式をたてている最中だったので、忘れていた。

『おい、俺だ。連絡がないが、ユージーンは帰ってきたのか？』

「ごめんなさい、ちよつとたてこんでまして」

『生物階降下の手はずは整った。で、どうなんだ？』

「それが……まだなんです」

『わかった。今そこにいく。瞬間移動はできないから、ちよつと時

間をくうがね』

「できない？」

『瞬間移動ってのは、自分の記憶にある場所にしか行けないものさ。ユージーンだって最初は交通手段で来ただろ？』

確かに。ユージーンはこの村に電車に乗ってやってきた。だから恒と出会うことになったのだ。あの時恒が電車で彼に会わなかったら、今のこの状況はない。これもまた、波動関数の収束のいたずらなのだろうか、などと思いつながら時計を見る。ユージーンの趣味らしい、アンティークな茶色の時計が柱にかかっていた。一体何の時間を刻んでいるのかわからない時計の針が5つもついているが、一番長い針と一番短い針がこの村の時間だ。何かの交通手段で来るとしたら、タクシーぐらいしかない。だが、神階から生物階まで、どれぐらいの距離があつて、どれぐらいの時間がかかるのだろうか？

「どのくらいで着きますか？」

『そうだな……10分つてとこだ』

「え！ そんなに早く？ 何で来るんですか？」

『タクシーだよ』

「わかりました。では、お待ちしています」

恒はさっぱり理解できないので、それ以上つっこむのをやめることにした。荻号がどんなタクシーで来るかを考えるより、波動関数の収束についての議論を皐月とやっていた方が有意義だ。皐月は少しも手を動かす事をやめないまま、紙に猛烈なスピードで計算式を書き付けていた。

皐月のいう、“構想が浮かんだから次は証明”、という段階なのだろう。パソコンも専用のソフトもないが、皐月にはあまり関係がないらしかった。恒も手伝える演算は分担しようと、席についた。彼女の頭の回転数は、車のタコメーターでいうと7000回転ぐら

いだろうか？　などと馬鹿な事を思った。目の前にいる皐月は、学校で見る教育者としての皐月とはまったく違う表情をしている。皐月先生は能ある鷹だったんだなあ……と、恒は知っていた筈なのに今更のように思う。ひよっとすると自分は足手まといなのではないかとすら思えてくる。皐月は恒の視線に気づいて顔を上げた。それでも、指先は止まらない。

「藤堂君、誰がくるの？」

「違う神様です、お名前はウィズ・ウォルターさんで……半日前に救出を要請していたんです。メファイストさんの方は俺が偶然呼び出しちゃったらしくて」

「その神様に、現場に連れて行ってもらうことはできるのかしら？」

皐月は、誰が来ようがどうでもいいといった顔をしていた。ただ、彼女は目で見たことしか信じられない主義だ。現場がどのような状況になっているのか、それを確かめようとしている。おそらく彼女の命に代えても……研究者はたったひとつのことを解き明かそうとしていると力説していたぐらいだから、世界の在り方がどのようなであつたのか、それを目の当たりにする事ができるチャンスの代償が、彼女の死だったとしても躊躇はしないだろう。皐月を、ついて行かせてはならない。

その時、社務所の外の本々が激しく揺れた。風速は60mほどあるのではないだろうか？　風岳神社の鈴が、ガラガラと鳴り響いている。強風が吹いているのだ。こんなプレハブ住宅、吹き飛ばされてしまう……恒と皐月は台風風のようなその風に驚いて、社務所を飛び出した。

こんな時期に台風が来たのではなかった。恒と皐月は、月夜に浮かぶ真っ白な鳥を見た。それは何の偏見もなく見れば、白いフクロ

ウのように見える。だが、サイズが違う、桁外れだ。通常の白フロウの何十倍もある。翼長だけでも15mはあるのだ。フロウの目玉だけでも、マンホールの蓋ほどある。吹きすさぶ強風は、その巨鳥の羽ばたきによって生み出されているらしい。フロウの首の付け根あたりに、人影があった。一度会っていたので面識はある、荻号要だ。それを見ても、これが荻号のタクシーだったのか、と気づくまでにしばらくの時間を要した。

荻号は10m近くの高さから飛び降りて、フロウは地上に降りることもなく、そのまま飛び去っていった。あとに残ったのは荻号だけだ。

「よ、お疲れさん」

陰階神第4位、闇神にして陰階参謀、最強神の荻号 要は、また今日も権威とはかけ離れたような実にはだらない格好で伸びをした。皐月は初対面ながら、こんな格好をしている男は趣味ではない。彼はあいかわらず黒いシャツを着て、だらしなく髪を伸ばし、擦り切れそうな古いパンツをはいている。首には趣味の悪いネックレス、腕や首にはこれまた趣味の悪い紐を巻きつけている……本当に陰階の権威なのかと疑わしくなるほど、何とも頼りがいのなさそうな風貌だ。

だが彼を知る者なら、指をくわえて羨んだだろう。荻号要と直々に会うことができて、そして彼が願いを聞き届けてくれるのだとしたら、それは奇蹟だと。皐月はとにかく、自己紹介しておくことにした。こんな柄の悪い神様が、あてになるのかしら、などと思いがら。

「あー、自己紹介はいい。それより簡単な話と、現場はどこなのか教えてくれ」

「でも、自己紹介ぐらい……」

礼儀もへったくれもあったものではない、皐月はこういうだらしない男は嫌いだった。第一印象は最悪だ。荻号は少し無礼だったかと、気づいたようだ。恒とは面識があるが、皐月とは面識もないし、しかも一般人だ。あまり神が無礼な事をしていると、陽階の評価にも響いてくる。法務局の査定も悪くなるだろ。

「そうだな、名前も名乗らないのは酷いな。俺は荻号 要、こんな風体だが一応神だ。で、お前さんは藤堂 恒、あんたは吉川 皐月、小学校教師だ。ん？ 恒は自分が何者であったかを、ようやく理解したようだな」

「はい、ショックでしたけど……」

「まあそれは今考える事じゃない、お前が陽階神として叙階されるのはまだまだ先だし、ゆっくり考えるといいさ。それより、ユーージンのことだ」

荻号は社務所の中に自分から入っていった、勝手に皐月の飲みかけの茶をすすりはじめた。荻号は皐月が途中まで書き付けていた計算式をぴらりと手に取り、眺めていた。皐月はどぎまぎしたが、荻号は彼女の動揺に構わずペンをとり、続きを書き始めた。すらすらと、荻号の手が難解な計算式を紡ぎだしてゆく。

その紙を返してくれないかしら、めっちゃくちゃにされたら、今頭にあることが台無しになるじゃない、などと思ったが、皐月は口に出せなかった。2分後、荻号は紙面の裏まで書き付けると、皐月に紙を戻してくれた。皐月のしようとしていた事が、難解な計算式が単純な仮定に置き換えられてすつとばされていた。代わりに立てられたものは、とても簡潔で神業ともいえるまでに芸術的な証明だ。皐月ははっとして目を見張った、外見に惑わされてはいけない。この神様はこんな格好だけど、もの凄く頭がいいんだわ、と皐月は感心した。

「なかなか、冴えた頭をしているな。あんたのお陰で、その場所では何が起こっているか、少し分かったような気がする」

「神様、”ウィグナーの友人”が開こうとしている密室の中の、シユレーディングアの猫は、どうなってしまうのでしょうか？」

皐月は彼をはじめて神と認めた。まだ恒はいきさつを説明していないが、皐月のたてた計算式だけでそれを読み取ったのだろう。凄まじいまでの理解力と直観力だ。

「さあな、そのドアを開かせなければいいんじゃないか？」

「ドアが開かないと、この時間は切り捨てられてしまうかもしれないんですよ？」

「そこにドアがあったことを、”ウィグナーの友人”に忘れさせてやるのさ」

「どういう事です？」

「”ウィグナーの友人”が、観測できないようにしてやるってことだ」

荻号は余裕綽々、といった様子ではないがどこか余裕を感じさせる。その不敵な様子が、恒にはたまらなく頼もしかった。

「ええっ！ 観測者を消すのですか？ そんなこと……」

「それができるんだよ」

「どうやって！」

「どうやって！」

皐月と恒は同時に尋ね返した。時間と空間、そして確率をも変化させることのできるものがこの世に存在するとはとても思えない。

「こいつでだ」

荻号は首に掛かっていた趣味の悪いネックレスを、チェーンの付け根を持つてつまみ上げた。3つの環の中に、不気味な月と星が入っている。よく見ると月には顔が描いてあり、その目が皐月にぎょ

ろりと向けられていた。

「相関転移星相装置（SCM—STAR）、こいつが600年ぶりに働いてくれるだろう。この世で唯一、時間と空間を統御する神具だ」

「私も、連れて行ってください」

「そりゃできないな。お前らはここで留守番してろ」

「行きたいんです！」

「吉川さんよ、俺達神はいつだって人を幸福にしてやる義務がある」

「あなたは！ 帰ってこられますよね」

恒はこれが荻号の最後になるのかもしれない、と不安だった。だが荻号はまるで全てを知り尽くした者のように、一片の迷いも恐れもないらしかった。荻号という神は何故これほどまでに優れているのか、いつから生きているのか、何故代々の所有者候補を即死させてきた最強の神具を、いとも簡単に身に帯びているのか、彼の出自の謎は霧のように深く誰も彼を知らないという。恒はだからこそ彼を信じられる、と思った。闇には闇、謎には謎をもってしか、迎え撃てないのかもしれない。

彼はこんがらがった謎を、いとも簡単な値に変換することができ。彼はあらかじめ世界の仕組みを知っていて、それを思い出しているだけなのかもしれない。単純な計算式ほど、真実の姿に近づく。残念ながら、天が自らに与えてくれなかった能力だ、と皐月は負けを認めた。

「帰ってくるさ」

荻号は二人を安心させるように力強く頷くと、社務所の扉を開け、

静かに闇に紛れていった。

第1節 第13話 ウィグナーの友人と閻神、萩号 要の開眼（後書き）

挿絵（筆者絵注意）萩号 要

<http://lizreel.web.fc2.com/gallerypics/10.htm>

【作】 生体時間の停止：代謝を限りなく0に近づくまでに遅延させること。現代科学において代謝を遅延させることは低温条件下、薬剤投与条件下など、ある程度可能だが、0に近づける事は不可能。代謝スピードが0になるということは死を意味する。

メファイストフェレスはユージーンに寄り添ったまま、G-CAMの解析終了を今か今かと待ちわびていた。彼のアトモスフィアはもういくらかも残ってはいない。アトモスフィアが完全に尽きてしまえば、神具は駆動できない。せっかく命がけで解析をしたというのに、データの圧縮が終わらないままにシステムが停止してしまったら、それこそ無駄に終わってしまう。ユージーンはG-CAMの全ての機能を犠牲にして、解析速度を3倍速にまであげていたようだった。もうすぐ終わる筈だ……。その時、杖の先端から末端にまで一すじの赤い光が宿り、明滅して解析が終了した事を知らせていた。

「主よ、しっかりしてください。解析が終わりましたよ」

ユージーンから返事はないし、意識もない。本当に、このまま力尽きてしまいうさだ。メファイストフェレスは彼の持ち物である重さ60kgもあるG-CAMを黒いスエードのスカートで巻いて焼かれないように握りしめ、マクシミナを足で踏みつけて、ユージーンを肩に担いだ。

「あなたは馬鹿だったようだけど、よくやったわ……」

メファイストフェレスは彼を担いで夜空に舞い上がった。ところが、いくらかも飛ばないうちに、凄まじい力で押し戻されている。足で操っているマクシミナが、ガタガタと歯音を立てて、悲鳴を上げています。ユージーンやG-CAMが重くて飛べないのではない、首刈峠に引き戻されている。ずるずると、高度が下がってきた。

”重力レベル上昇中、120.5G 130G 140.2G 上昇しています”

「何とかなさい！」

彼女の忠実な髑髏にいくら言葉で鞭うっても、高度はどんどん下がってゆく。彼女は何かに縋るようにひたすら上空を見上げたが、蜘蛛の糸を天上から差し伸べてくれる釈迦もないようだ。地獄の底に吸い込まれてゆく。

” 高度15JTW、失速しています ”

「わかってるわよ！」

メファイストフェレスは鳥肌が立つのを感じていた、だが、ここで堕ちてしまつては二度と這い上がれないような気がする。ここまですり上げたのに、諦めるわけにはいかなかった。気は逸るが、身体は思うように動かない。空間の歪みから生じる重力に、身体中の臓器が引き絞られるかのようだ。

「ぐううっ——アああっ」

メファイストフェレスから、声にならないうめき声が漏れた。もう一秒も耐えられない、眼を閉ざしそう思った瞬間、ふっと身体が軽くなり、彼女は腕を掴まれたのを感じた。はつとして目の前を見ると一柱の神が中空に佇んでいる。

「軍神下腹心の魔女ともあろうもんが、だらしないな」

「誰……？」

「お前らのケツを、まとめて拭いてやる。できるだけ遠くに行つてろ、消し飛ばさず」

彼は200Gもの重力をものともせず、涼しい顔で浮かんでいる。彼はメファイストフェレスを上空に放り投げるように押し上げた。彼女とユージーンの身体はまるで地上からロケットが重力を断ち切って宇宙へ放り出されるかのような恰好で一気に500mほど放り出され、異常重力圏内を抜けた。下へ下へと向かうベクトルを断ち切り、その反対のベクトルへと解放してくれたかの者は、メファイ

ストフェレスの長い生涯にも記憶にはない。ユージーンも異常圏内を抜けた事で意識を取り戻した。

「メファイストフェレス……何故お前がいる？　ここは……！」

「あの者に助けられたのです、おそらくは神だと思います」

ユージーンはメファイストフェレスからG-CAMを受け取るとそれを起動し、彼女の背から離れてひとりで夜空に浮かんだ。眼下を見ると、荻号が彼の首からネックレスを外そうとしていた。

「助けに来てくれたのか。ありがとう……だが、誰がお前と荻号様を呼んだんだ？」

「藤堂という少年神です」

「恒君が……」

荻号はネックレスを外し、トップを3つの環を垂直に組み合わせ、平面だったそれを立体に組み立てた。それが起動するところをユージーンは見たことがなかったが、その神具の伝説だけは聞いたことがある。3つの環は、現在、過去、未来の時間と空間を操る環だ。反応中心にある月と星は超速演算装置……相転星が起動しようとしている。発動者の周囲にある物体の存在する確率が変わられ、生きとし生ける者は無に帰すであろう。荻号は前駆動を行っているのだ、これから複雑な演算式をプロットし、相転星は600年ぶりに禁断の咆哮を上げる。神階最強の神具、そしてINVISIBLEの能力を受け継いだ三階最強のツールでもある。ユージーンは神階の至宝とも呼ばれる相転星が、今にも起動しようとしているのを見て震え上がった。

「あれは……相転星！　なんてことだ、メファイストフェレス！

ここから離れるんだ！　消し飛ばされる！」

「何が起こるのです？」

「早くどこかないと、このままゆくぜ……」

荻号はユー जीवनに不敵な笑みを浮かべると、それを察したユー
ジーンはメフアリストフェレスの首根っこをひつつかまえて、そこ
から2 kmほど離れた森の上まで瞬間移動をかけた。荻号はユージ
ーンとメフアリストフェレスが避難したのを確認すると、相転星を
しっかりと握り締め、最後の安全装置を外して垂直交差していた外
環を動かし、ギリギリと組み替えはじめた。ガチ、ガチ、ガチ、ガ
チと軋むような、呻くような金属音が、規則正しい金きり声のよう
な音を紡ぎ出してゆく。

X, Y, Z軸を定める組み換え角度の数列と音声コマンドで、自
由自在にプログラムを組んでゆく。荻号はその場を支配している空
間法則を解き放ち、時間と空間を支配下に置くことによって、首刈
峠全体の時間の流れを変えようとしている。

”微小な可逆条件においては ϕ 、 ψ 、 θ 時間に移行し、不可逆条件
においては σ 時間に固定する。位相 $\Delta\omega$ の熱量収束は $P_{a-l n P}$
 $b(-\mu c-\mu d)\parallel 0$, $R t\parallel (l n P c+l n P d/\dots$ ”

荻号を中心に放たれた歪みの巨球は、まるで太陽がプロミネンス
を吐き出すようにうねりながら首刈峠を包んでいた。あれは、相
転星の力学作用フィールド……ユージーンは真の神というものものの姿
を、垣間見たような気がした。彼が放散しているのは、純粹な暴力
とエネルギーの塊だ。神具は彼の力の媒介に過ぎない、つまり今見
ている現象は彼自身の能力に他ならない。彼は時間と空間を統御す
る、三階で唯一の存在だろう。彼の力は例えれば皺くちやになった
空間に、熱、つまり彼自身のエネルギーでアイロンをかけて矯正い
るようなものだ。荻号は相転星のスペックだと言うが、本当は彼自
身の能力だということは一目瞭然だった。

” 相間転移せよ……”

荻号は発動の鍵となるコマンドを宣告した。その瞬間、相転星の作用フィールドにおける演算は完成し、まるで波紋のような空間のねじれが決定され、荻号の小手先で吹き飛ばすようなしぐさにより放射状に放たれた。ユージーンとメファイストフレスの眼には僅かに観測されたが、人間の目には観測できなかったであろう。さきほどの巨球の地獄絵図が嘘のように水を打ったように静まり返り、夜の静寂が首刈峠の森の木々を浸透していった。

荻号は深呼吸をし、目を閉じた。

生ぬるい夏の風が、ユージーンとメファイストフレスの頬を撫でながら、駆け抜けていった。荻号は月夜に濃いシルエットを残し、風を感じるように両手を僅かに広げていた。相転星はまた平面へと丁寧に折りたたまれ、そのチェーンがだらしなく右手にぶら下がっていた。

彼は何の苦労もなく、” ウィグナーの友人 ” が訪問するであろうドアを、消し去ったのだ――。

本当に彼は神なのだろうか？ 彼は神の姿をした何者かではないのか？ ユージーンはそんな事をさえ考えたのである。荻号はぼやぼやしていなかった。彼は一仕事を終えると、すぐにこちらに向かつて瞬間移動をしてきた。ユージーンとメファイストフレスは荻号に賞賛の言葉を贈る間もなかった。

「荻号様……」

「寝ぼけてる場合か！ おい、ゲイルⅡリンクスワイラーが来るぞ」

「そうでした」

「そうでしたって、むぎむぎ捕まる気か？」

荻号はゲイルの気配がすぐ傍に迫っていること、ユージーンがこれから受ける罰を知っていた。ユージーンにはもう一刻の時間もなかった。量刑によっては、永遠に生物階降下が認められなくなるかもしれない。法務局からの圧力がかかればいくら極陽の勅令を受けての事といっても極陽からの法務局への嘆願も聞き届けられないだろう。

たかが一人人間を生かした、とはいえ人間の予定運命を捩じ曲げる事は、複雑系理論カオスに基づき展開される生物階の運営に、予測できない初期値をほうり込む事となる。これはとりもなおさず、数学神ファティナⅡマセマティカ(Fatina Mathematica)が行っている正確な複雑系シュミレーションを不安定化させ、もしくは潰してしまうという事になるのだ。抑止力として、死者蘇生の量刑はことさら重く設定されていた。

「わたしは陽階神です。罪を犯したからには裁かれ、罰を受けなくてはなりません」

「お前、量刑を分かって言ってるんだろ？」

「分かりませんが、想像できます。……荻号様、一つお願いがあります」

「嘆願を出せっか」

「違います。これを解析していただきたいのです。先程まで起こっていた空間異常の解析データがあります。わたし以外にこのデータに触れられるのは、全神具適合性を持つあなたしかいません。そしてこのデータを読み解けるのも……」

「いいのか？ 神具は神の心臓だ。生体年齢を犠牲にしてまで必死こいて取ったデータだろ。俺なんかに託すのか」

「刑が執行されている間は、受刑者は神具を握る事ができなくなります。もしくは刑によっては神具剥奪も追加される可能性があります。拘束される前の神具の譲渡は法的に問題ないでしょう。一刻も

早くこれを解析してください！　あなたしか出来ないんです」

「そうか。では預かった」

荻号はむっちりとデータの詰まった重いG・CAMをしっかりと受け取った。神具が自らの手を離れたので神具の斥力による浮遊力を奪われ、ユージーンは仕方なく視床下部下垂体の付近にある自らの斥力中枢での飛翔に切り替えた。神は神具などなくともともと飛行ができる。メファイストフェレスは荻号の手が焦げつくかと思つて蛾眉をひそめていたが、彼女の思つたようにはならなかった。

全神具適合性という体質を持つ荻号は、他神の神具を手にしても焼灼されるという事がない。彼は風貌と口のきき方さえ気にしなければ、人類が求め信仰する全知全能の神に限りなく近い存在だろう。彼の存在はこの世界のあらゆる謎の扉をいとも簡単に開閉するマスターキーのようだ、とユージーンは思う。彼は陰階神だが、今は陰陽言っている場合ではない、同じ神どうし協力しなくては。

荻号は今の今までユージーンの神具だったそれを軽く小脇に抱えて彼のアトモスフィアで支配し、服従させはじめた。G・CAMはかつての主の事など忘れて、荻号に尻尾を振るかのように青い基線の明滅を繰り返していた。しかもユージーンが操るより何倍もスムーズだ。軽油からハイオクにシフトチェンジされた車のように滑らかな駆動をしている。ユージーンは頬の裏にわずかな屈辱を噛み締めたが、自らが申し出た事だ、仕方がない。ユージーンは先程から控えていたメファイストフェレスを振り返った。彼女は疲労しきっていたが、まだ従順なまなざしでユージーンを見つめていた。そういえば彼女が召喚されたのは10年ぶりだ、彼女はユージーン知らない間にまた強靱になっている。自分が刑を受けている間にこの村を守れるとしたら、彼女しかない――。

「それからメファイストフェレス。お前は”解階の門”が赦せばこの村に常駐し、できなければ川模廿日を喚べ。わたしはこの村にはもう戻ってくる事ができないかもしれない。指示は刑を終えてから出す、留守を、頼んだぞ……」

「了解いたしました」

荻号はふたりのやりとりを怪訝な顔をして観察していた。神と魔女のコンビ、悪くはないが、見た目には変だ。荻号はそれを見ながら、ある提案をしてやろうと思った。ユージーンを助けられる権力を持つとしたら、彼ほど適した者はいないと考えたのだ。何しろ荻号の声は神階の女帝、極陰をすら動かす。極陰は法務局への影響力を持つので、その気になれば刑を撤回させることだってできるだろう。

「陰陽階神法は一度決定されればいかなる例外も認めない。お前の刑罰は位神復帰いしんを考慮され、短時間で終わる苛酷な体罰、あるいは拷問となるだろう。それに加えて神具剥奪や左遷は微妙なところだな。若くてもしんどいものを……その齡での拷問は骨身にしみるぞ。本当に俺が恩赦の嘆願を出さなくていいのか？ 司法取引に持ち込めば勝算がないわけじゃない。うまく立ち回る事ができれば」

「仕方ありません。わたしの責任ですから受け止めます」

「……少しでも辛い思いをしたくないなら、せめて若い身体で拷問に耐えるんだな」

荻号は相転星を再び起動すると、右手にそれを持ち左手をユージーンの胸のあたりに押し当て、相転星とリンクさせた。荻号の手を通してユージーンの生体時間が取り戻され、彼の外見年齢はすぐに以前の通りとなった。若さ、それは実感こそしなかったが、必要なもののだとユージーンは改めて思い知らされた。嘘のように神体は筋力を取り戻し、先ほどから続いていた息苦しさも消えてきた。

「ありがとうございます」

「まあ、あれだ。生きてりゃそのうちいい事もあるだろうさ。死にたくなっても、死ぬんじゃないぞ」

「耐えてみせます」

普段は死にたいとばかり思っている荻号の口から、柄にもない言葉が出てきた。法務局など消えてなくなればいい、そう願ってやまない荻号はその長い生涯においてありとあらゆる刑を執行された経歴を持ついわば受刑のエキスパートであり、もうこれ以上の苦痛はないという境地にまで到達してしまった。

実は神階の刑罰は体罰と懲役、拘束の三種から選択できる。懲役100年、禁固1000年などというふざけた刑も存在するが、位神の場合執務できない状況が長く続くと免職となるので、たいいの神々は否応なしに体罰を選ぶ。神階には死刑がないかわりに、死んだ方がましだと思ふような凄惨な苦痛を味わう拷問が延々と行われる。荻号はあまりにも酷い拷問を受けすぎて、痛覚が麻痺してしまった。ユージーンはこれまで従順な法の遵守者であったが、初めて拷問を受ける事となるだろう。豊迫 巧という、たったひとりの人の子を生かしたがために……。荻号はG-CAMを手なずけると、基空間のアーカイブにG-CAMを隠匿し、メファイストフェレスはゲイルが降下する前に社務所へと戻った。

ほどなく法の番人、ゲイルⅡリンクスワイラーが図ったようなタイミングで降下し、荻号の目の前で逮捕状をすらすらと読み上げた。荻号はまったくの無関心を装いながら、神の力を無効化し激痛を齎す縛鎖できつく戒められてゆくユージーンを見下ろした。それを見て、表情の伺えない若き監査官、ゲイルは荻号がユージーンと行動をともにしていたことを疑問に思っただけだった。

「ところで、何故陰階神と陽階神が共にいるのですか？　今まで共にいらしたのですか？」

「いや、今来たところだ。陽階神の逮捕なんて久々だし、野次馬に

な。ユージーンⅡマズロー、陽階の若き新星か…いいぞまだ。若いのに調子に乗っていると、そんな事になるんだぜ。これに懲りたらいちから出直してくるんだな」

荻号はゲイルに怪しまれぬようぺらぺらとユージーンを蔑む言葉を投げかけると、ゲイルはそれ以上追及してこようとはしなかった。こいつに捕まったら、蛇のようにどこまでも付き纏われる。荻号は最後にユージーンの様子を見てほっとした。

ユージーンの時には後悔の色など映ってはいなかったからだ。

＊

風岳村は平穏な日常を繰り返そうとしていた。あの後、恒は生還したメファイストフェレスと荻号にいきさつを聞いて、やり場のないもどかしさを感じた。そしてまた嫌な予感が頭にこびりつく。ユージーンはもうこの村には戻ってこれないのではないかと――と。

ユージーンの時を受けてメファイストフェレスが代わりに社務所に詰めることになったらしい。もっとも、重い罪を犯してしまった彼が最後にメファイストフェレスを遣わせたのは、もはや任務必達の使命感からくるものではなく彼が人々に向けた純粋な優しさだと恒は思っていた。彼は巧を蘇生させたばかりに法務局に拘束され、拷問にかけられるのだそうだ。

彼の腹心であるメファイストフェレスはそのことを少しも歎きはしなかった。解階の住民はもともと情にあつくはないが、彼女はユージーンの時を信じているようだ。彼女は彼女でなすべき事があり、荻号は荻号でやるべき事があった。荻号はユージーンから託されたデータを解析するため、今度は怪鳥のタクシーも呼ばず陰階に戻っていった。どうやら送り専門のタクシーようだ。皆それぞれの

荷を負い、日常に戻る……。

恒は皐月とともにしらじらと明るみはじめた東の空を見上げた。いつの間にこんなに時間が経ったのだろう。荻号の取り戻した日常、霧の中の黎明が、恒と皐月に生きている実感を取り戻させてくれた。昨夜はもう、二度と朝など来ないような錯覚に陥っていたが、それでも朝はやってきた。闇と夜を司る神である荻号が去るのを待っていたかのように、霧の中を満遍なく陽光が満たしてゆく。二人とも何を言うでもなく、ただ淡い朝の日差しの中を屹立していた。

「お前たちも、少し寝なさい。特にお前は今日授業があるのでしょ
う？ 寝ぼけ眼で教壇に立つつもり？」

メファアイストフェレスはアルミサッシの窓をガラガラと開けながら外のふたりに呼び掛け、自分はユージーンの床に居座ってひと寝入りしようとしているらしかった。大事にしているらしい帽子を、ベッドの傍のデスクに置いているのが外から見えた。無鉄砲に見えるが、それでも皐月たち二人を心配してくれているのだろう。何しろ昨日は色々な事があった。恒は昨日ほど長い一日を、A D A Mの中でだって体験したことはなかったと思う。

「メファアイストさん……ユージーンさんの言った通り、今日は長い
一日でした……」

「今日？ 生物階の一日は24時間じゃなかったのかしら？ 今日
はまだ始まったばかりじゃない。どんな事があっても新たな一日は
やってくるものよ。腐ってる暇が惜しいわ、早く寝なさい」

「でも、こうしている間にもユージーンさんは拷問を受けていらっ
しゃるんですよね……」

「こうなる事が解っていて、主が決めた事なの。彼の覚悟に^{あたし}妾たちが
水をさしてはいけないわ。むしろこの間にも、主の刑は終わりに
近づいているという事を喜ぶべきよ」

魔女だというのに根暗でもなくポジティブな性格だなど、皐月は彼女を見直した。もつとも、サディストであるメファイストフェレスがさほど拷問に悪いイメージを持っていなかったというのもあるのだが……。

「俺、皆に頼ってばかりで何もできませんでした。ユージーンさんや荻号さんと、曲がりなりにも同じ神様だっていうのに」

「藤堂くん。あなたはよくやったわ」

「出来なくて当然じゃない！ 何かできる事があるなんて思わない事ね。神は神として生まれつくものじゃなく、血を吐くような努力をしてなるものなの。主やあのロン毛の神みたいになろうなんて思ったら、ほんの1%も可能性がないわ。解ったら早く寝なさい」

皐月のフォローを鮮やかな切り伏せ方で台無しにしてしまうと、メファイストフェレスはボタンとベッドに臥せ、また何かを思い出してまたガバツと起き上がった。彼女は化粧を落したり歯磨きをしないのかと、皐月は下らない事が気になった。こんな時にこそ、くだらない事が気になるものである。そんな皐月の眼差しを真っ黒い大きな瞳で見つめ返しながら、彼女は思い出したようにこう尋ねた。

「皐月。妾の担当の授業は何時に始まるの？」

昨日会ったばかりなのに、もう皐月呼ばわりだ。皐月は呼び捨てにされた事より、彼女が今の今口にした言葉が気になった。彼女の担当の授業など、あったたまるものか。ユージーンの担当の授業は、皐月が全部こなせばいいことだ。だいたい小学生なのだから、本来は担任教師が全教科を持つべきであって、分担している皐月のクラスが特殊なのだ。校長が勝手に決めた事なので文句も言えなかったが、メファイストフェレスがしゃしゃり出てくる余地はない。しかもこんなに高飛車な態度で……。

「え？あなたが授業を？」

「何よ。悪いの？ 主の代理を仰せつかっているのよ。当然でしよう」

さすがに彼女は教員免許を持っている様子はないが、やるというたらしかないだろう。この村の小学校は、神に魔女が先生になって……よっぽど人手が足りないみたいじゃない。もともとは副担任なんて制度、小学校にはなかったのに……。とは思えど、断る事も難しそうだったので、皐月はしぶしぶ答えてやった。

「8時45分からです」

「じゃあ起こして」

起こさなければよいのではないか、いやむしろ、起こさない方が彼女と生徒のためなのではと皐月は頭の隅で考えた。彼女はそのまま窓を開けて寝てしまったのだが、ただ眠たいので寝たという訳ではなかったのだろう。皐月は現場での彼女の活躍を知らないが、想像を絶する修羅場になっていたのだろうな、ということは容易に推測できた。自己という存在をはなからなかったかのように消されてしまうという危険性を内在した時間と空間の歪みの中に、何の躊躇もなく飛び込んでいった彼女は勇敢だ。そして彼女はきっと、皐月の知らないありったけの力をからっぽになるまで使い果たし、疲れ切っている。

波動関数を収束させ、シュレーディンガーの猫は死んではいなかったのだということを、彼女という観測者は観測してくれたのだ。今は感謝の気持ちにたえない。

「藤堂君、私達も寝ましょう。彼女の言うとおりでわ」

「皐月先生……俺、決めました」

「え……何を？」

恒は眼が焦げるのではないかというぐらい、瞬きもせず朝日をまっすぐに見つめていた。その先に何かがあるのかと、皐月も思わず恒の視線を追ったが、見え始めたのは霧に覆われた新緑の小径だけだった。

「俺、神様になります」

霧に紛れてしまいそうに頼りなげな言葉だった。皐月は恒にどんな言葉をかけてやればよいのかわからない。恒の横顔から窺える瞳は、涙をいっぱい溜めているように見えた。この子は何故泣いているのか、皐月は恒のこんな表情をはじめて見て、おろおろと口ごもった。先ほど皐月が”神なら”などと余計な事を言ってしまったからだろうか、と絶句する。

「な、何を言っているの？ 藤堂君は、人間でもあるわけでしょ？」

お母さんもちゃんといらっしゃるんだし……」

「俺はユージンさんや荻号さんみたいになれる自信はありません。でも、そうになりたいと思います。この村でこんな得体の知れない事件が起こっているのに、小さくなって怯えている事しかできないなんて、何もしていないのと一緒にです。俺はこの村があまり好きではありませんでした。でも不思議です。今はこの村を何とかしたいと思うんです、ただその力がない……なら……」

「何を言っているの。もう終わったのよ、私達は助かったの！ ウィグナーの友人は、もう扉を開けてくることはないのよ。怖い事が続いたから混乱しているんだわ、あなたの将来は、何もこんな時に考えなくてもいいじゃない。もっと腰をすえて、落ち着いて考えるべきよ」

「そうでしょうか」

恒は俯いた。涙がこぼれてしまったので、泣き顔を見られなくな

いのだ。皐月はたまらず、彼女の生徒をきつく抱きしめてやった。どうしてこの子は、どんどん自分を追い詰めていってしまうのだろう。たくさんの思い出とともに笑顔で過ごすべき少年時代を、彼の心はいつも囚われて陽が差し込んでこなかった。ようやく見え始めた陽の光を、この子はまた見失ってしまうのだろうか？ 皐月はひどく不安になった。

「火のないところに煙はたたない。うおの目は何度でも同じ場所に行けるし、雑草だってどれだけ取っても同じところに生えてきます。何を言っているかわからないと思いますが、原因があるから首刈峠はあんな事になったんです。過去から現在に至るまでずっと……ずっとです。きつとまた、同じ事が起こると思います。皐月先生はこれで終わりだと思いましたか？ 誰も終わったなんて思っていないんです、ただそれを口に出すのが怖いだけで。――これは始まりです、先生だって本当は分かっているでしょう？ 俺が子供だと思って、それを言わないでいる」

聞くにたえない言葉だった。

「もうやめてっ！ 藤堂君は、子供なのよ……自分では忘れてしまっているのかもしれないけど、ねえ、何がいけないの？ あなたは子供なの！ この先は、ユージン先生やさっきの神様みたいな、特別な力を持った人たちに任るべきなの。メファイストさんも言っていたじゃない、何かが出来るなんて思わない事だって。じゃないと藤堂君だけ、あなたただけどんどん不幸になってしまう！ 人には幸せに生きる権利があるの！ あなたのお母さんの事だって、考えたことある？ あなたが神様になってしまったら、お母さんはどう思うの！ あなたは全てを知っているけど、幸福であることを、一番大切な事を知らないのよ……」

皐月も途中から涙まじりになってきた。こんな事になっているの

に、どうして逃げてはならないような気がするのだろうか？ 恒はいつでもこの村から引越して、新たな生活を手に入れる事だってできる。なのにどうしてこんな小さな子供が震える足で立ち上がって、彼の全てをなげうって立ち向かわなくてはならないような気がするのだろうか？ 彼の幸福の全てをなげうって、神になるとまで言わなければならなかったのだろうか？

この謎は、”存在のありかた”そのものを問いかけてくる謎だ。彼や皐月が生きてきた人生は、果たして本当に”在った”のか？ 世界はそこに”在る”のか？ この謎は、まるで暗い夜の海のようにのっぺりとして静かで、底が見えない。

この世界は驚くほど悪意に満ちたものであり、そして世界を根こそぎ失わせるものは無慈悲で無機的であり、どうやっても立ち向かいようがないものだ。

——存在確率の変化が、世界を滅ぼす。

逃れられない巨大な刃が、今にも彼らの上に落下せんとして迫っているのが、皐月には見えたような気がした。

「それでも俺は、神様になります……なるんです！」

それ以上何も言わせないう、皐月はいつそう強い力で恒を抱きしめた。

第1節 第14話 時空間歪曲神具・相間転移星相装置（SCM－STAR）

挿絵（筆者絵注意） 荻号 要

<http://lizerel.web.fc2.com/graphics/10-1.htm>

【作】 時空間歪曲神具・SCM－STAR：創世者INVISIBLEの残した金属を鍛えて造られた時空間操作系神具。X，Y，Z軸の3軸座標入力によりコマンド受付。熱量、重力によって空間を加熱、強烈に歪曲させ相対性理論と大統一理論を破り時間軸を開放する。原則荻号にしか扱えない。

第1節 第15話 49日間連続虐待刑の受難

皐月と恒は結局一睡もできず社務所からそのまま登校して教室に入ると、巧が登校してきていた。子供たちに興味本位で死後の世界の事をあれこれ聞かれてとり囲まれているらしかった。三途の川がどうだとか、霊界や天国はどうなっていたのかとか、子供ならではの話題だ。ちょうど季節がらこの手の怪奇現象や神秘体験の特番が組まれはじめていたということもある。恒は巧の元気そうな顔を見てほっとしたが、そんな話には興味が持てなかった。恒にはこれから考えるべき事が山積みだった。

神になると決めた以上、彼らといつまでも一緒にはいられない。彼らと同じ生活をし、苦楽を共にして歩む事ができるのは今だけだ。すぐにではないが自分の人生は終わりに近づいている……ならば人生最後の日々を彼らのような、よき親友たちと過ごせる幸せを噛み締めるべきだ、と恒は思った。

物心がついた頃から、彼らとはずっと一緒だった。村には娯楽が少ないので誰からともなくつるんでは野山を駆け回り、大自然の中を心身ともに成長してきた。学校にいる連中は殆どが友達であり、それ以上にかけがえのない仲間だ。彼らと別れなければならぬということは、心を引き裂かれるように感じられる。

それでも、神々の世界に行かなくてはならない。彼らを守りたいから、などとは思っていない。ただ、行かなくてはならないと駆り立てられているだけだ。神としての道を歩むという勝手を、彼らもいつか分かってくれると信じるしかない。今は何を言っても分かってくれない、仮に事情を話したとしても、昨日起こった出来事の1／10も理解してはくれないだろう。彼らを見下しているのではないが、それが正常な発育段階にある10歳の人の子だ。何も期待し

てはならないのだと分かっている。恒は彼らの輪の中に加わった。

「よ、恒。やーっとの事で病院抜けてきた。昨日は見舞いにきてくれてサンキュな」

「元気そうだな」

「だろー、なのに上島先生が帰らせてくれなくてよ。融通きかねーよな、あのメガネのオッサンだけは。昨日も夜から事故した怪我人が二人も来たらしくて、夜中3時ぐらいまで処置やってたのに俺の病室に来て、俺が寝てるか確認してるでやんの。まったく、医者っていつ寝るわけ？」

ついこの間まで死体だったというのにこの饒舌ぶりはどうだろう。死人に口無しとはいうが、生きているからこそその事だな、と思う。恒も少しは巧のバイタリティと底抜けの明るさを見習った方がよいのだろう。巧の話で、上島は上島なりに昨日は大変な一夜を明かしたようだということがわかった。石沢や波多野などのクラスメートも加わって、くだらない話に花を咲かせる。彼らには何も話すことはできなかったが、彼らの笑顔を見るだけで久しぶりに恒の心は癒された。

教室には笑い声が響き、皐月はたまったテストの採点に勤しむ、ユージーンがいない事を除けば何もかもが元通りの朝の光景であった……はずだった。突然、廊下をピンヒールのカツカツという音が響き渡り、こちらに近づいてきたかと思うと、勢いよく教室の黒板側のドアが開け放たれた。ドアに貼り付けられた掲示物が、何枚かパラパラと床に落ちた。

「ちょっと！ 皐月に恒！ どうして起こしてくれないの！」

そうだった！ この女がいたのだった。恒と皐月は彼女を社務所に置き去りにしてきていた。声の主には一斉に視線が向けられ、あ

れほど騒がしかった朝の教室が静まりかえる。メフアイストフェレスは仁王立ちになっていた。

「ご機嫌よう、おちびちゃんたち。今日から妾が副担任代理の教師よ。そうね、メリー先生とでも呼んでもらえるかしら」

何がメリーだ、「メ」しか本名と一致してないじゃないか、と恒はあいた口が塞がらない。それより何より児童たちが目のやり場に困ったのは、彼女の派手な私服だった。深緑色の斑模様のある黒いビロードの帽子を目深にかぶり、紅い紐のような素材が織りかさなったものが首の位置で束ねられている。胸も露になり、腰もきゅっとくびれて惜しげもなく露出されている。子供たちには刺激が強すぎるわ、と皐月は慌てて彼女を廊下に連れ出した。

「メフアイストさん、困ります！ そんなへそ出しの胸の谷間も見える服で、帽子までかぶっていらっしゃっても。授業は私が全部やりますから、間に合っています」

「解らないわね。何がいけないっていうの？ 授業がやりたいの。やらせて頂戴」

「ここは文科省管轄の教育機関なんです。資格を持った教師が……」
「面白半分でやりたいって言ってるんじゃないわ。妾は人類心理学者なの。小学生の心理に興味がある、学問的な意味でよ」

「心理学者？ あなたが？」

「そうよ」

皐月にはとてもそうは見えなかったが、彼女は真剣だった。教室の中から、子供たちが様子をうかがっていた。ありとあらゆる窓の隙間から、子供達の真っ黒な目が覗いていた。中ではきゅきゅと騒ぐ声が聞こえてくる。この格好で教室に入れるわけにはいかない。「じゃあせめて、教師らしい格好をしてください」

皐月は彼女がどうやら格好はともかくやる気だけはある様子だっ

たので、取り敢えずやらせてみることにした。皐月はロッカーに代えのスーツを持っていたので、それをメファイストフェレスに寄越した。教師は子供相手の商売なのでとにかく服は汚れるし汗もかく。替えのスーツを1着はロッカーに入れるようにしていたのが役立ったようだ。彼女は渋々、といった顔で着替えはじめる。

「この服……サイズがあわないわ」

「でも丈はあってますし」

「胸がきつい」

人の服を貸りるだけでも有り難いと思っほしいところなのに、そんな愚痴を付け足す。胸がありやいってもんじゃないわよ、と皐月は心の中で言い返してやった。メファイストフェレスのスタイルは抜群だった。くびれた細い腰、豊かなバスト、長い脚にはほよく添えられた筋肉が引き締まっている、その体脂肪率は10%もないだろう……まるでスーパースモデルのようだ。日本人体形の皐月と比べるとまるで人形のように均整がとれている。

「あら、ごめんなさいね、悪気はなかったの。貸してくれてありがとう」

メファイストフェレスはシャツのボタンを上から2つ外すと、ポーズをとってみせた。はいはい、似合うから、と皐月は頷いた。まだ胸が見えているが先程よりはいくらかましだ。

メファイストフェレスは再び颯爽と教室に入ってきた。5分も遅刻をしてしまったが、一時間目は社会だ。長い爪のついた指で、気取って教科書を開いた。彼女にまともな授業ができるのだろうか……そんな心配は無用だったようだ。彼女は皐月が懸念したような非常識な事は何一つなく、そつなく授業をこなしたので、最初はその強烈なキャラクターに面食らっていた児童たちもすぐに馴染んだ。この村の子供たちの適応力はすさまじいし、もう大概の事には驚か

なくなっているようだった。

＊

「どうしても、気になる点がひとつだけある」

ゲイルⅡリンクスワイラーは腕組みをし、神経質そうに口元をいじった。ユージンⅡマズローは陰階と陽階のちょうど中間にある法務局に移送され、裁判が始まっていた。壮麗な外観の法務局は第二種公務員である57柱の神々と、法務局に在籍する3000名の使徒から成っている。刑の執行の前には形式ばかりの罪状認否が行われ（万が一にも可能性はないが）、事実と異なっている場合には釈放されるが、故意に否認すれば更に刑罰は重くなる。

法務局は犯行の現場を録画して押さえてから拘束するので、いくら涙ながらに否認してもあまり意味を成さない。弁護士もいないので、自分の弁護は自分でするしかない。口の立つ者はうまく裁判官をまいて保釈されることもあるようだが、ユージンは口下手で、お世辞にも口が立つほうではない。ユージンは拘束されたまま後ろ手に廻されて、被審議者として壇上に立たされていた。

ゲイルは監察官であるため横の監察官席に座り、正面の席には裁判官が裁判長を含めて26名座っていた。枢軸神の裁判など久しぶりなので、同情も半分、物珍しさも半分といったところだ。枢軸神の裁判といえば陽階より陰階神の方が件数が多く、荻号が常連組だ。彼は46回も犯罪を犯して、極刑も8回受けている。これでよくクビにならないと思うが、極陽も極陰も荻号の存在を重視していたがために、100位には左遷されるものの追放はされず、彼の首はいつも皮一枚で繋がっていた。彼は100位に降格しては、またたつた一度の位申戦を経て4位に復活してくる、起き上がり小法師のよくな神だった。何十回も罪を重ねる事がなければ、とつくに極陰に

なっていた器だといわれている。荻号にとって実力制という神階のシステムは都合がよかったことだろう、彼はいくら左遷されてもまた彼自身の力で地位と権力を取り戻すことができた。

……陰階にはそんな例があるとしても、陽階神は滅多に法をたがえる事はなかったし、罪を犯す事は神として最も恥ずべき行為だという共通の認識があった。ゲイルはユージーンの経歴に目を通していたが、品行方正で絶対に法を犯すような事はしてこなかった彼が、今回は一体どうしたというのだろうか？ 神が人の子を蘇らせるなんて……こんなケースは長い神階の歴史においてもはじめてだ。

「短絡的であり衝動的というか……この者は行動に一貫性がない。軍神として任じられてより数十万からの人間を躊躇なく殺してきたというのに、たかだか少年ひとりのために、何故突飛な行動を？」

「監察官、我々は彼の罪を裁かなくてはならん。余計な尋問はするな」

ユージーンに問い詰めようとするゲイルを裁判官がたしなめた。裁判長が書類に目を通しながら、今度はユージーンを見遣った。判決は4時間の審理の末に、今にも下されようとしていた。生物階でなら許されない、スピード判決だ。

「被疑者は何か申したき事があるか？」

「いいえ、ありません。罪を犯してしまい、深くおわびいたします」

ユージーンは自らの弁護も、情状酌量をしてもらうための弁明も一切しなかった。鎖に繋がれたまま、ただ彼は全ての起訴事実を肯定しただけだ。そんなに簡単に認めていいのかと、ゲイルが不安になったぐらいだ。ユージーンが判決を待っているようだったので、裁判長は結審した。

「では判決を言い渡す。主文、被告は懲役165年、禁固122年、

身体罰49日のいずれかの刑に処す。また、神具剥奪、位階の降格は陽階極位神の意向により免除された」

ユージーンは迷わず体罰を選んだ。神は圧倒的な力を持つため、一つの罪が各方面にもたらす影響がはかりしれない。犯罪を水際で防ぐのが法務局だが、生物階降下中の神に対してはどうしても犯罪を未然に防ぐということが難しい。したがって生物階降下中の犯罪は量刑が重くなる……妥当な判決といえよう。本当は身体罰は50日の規定だが、1日分は情状酌量で減っている。ユージーンは判決には満足だった。

ゲイルは退廷後、判決の下ったユージーンの頸を鎖で繋ぎ、刑場にまで連行すると、次々と枷を嵌め込んだ。これでいかに彼が力を振るおうとしても無効化され、抵抗ができなくなる。虐待に耐え兼ね、暴れ狂うのを防ぐために彼の神体には33の枷が取り付けられた。その鍵は法務局の金庫に保管され、刑を全うするまで外れる事はない。第一種公務員の枢軸神が、格下の第二種公務員にこんなことをされて屈辱的だろうが体罰を選んだ以上、これより先は彼には何の権利もない。これから49日間の虐待が始まる。想像を絶する苦痛を与える事により、もう二度と犯罪に手を染める事のないようにトラウマとなるまで叩き込む。

受刑服を着せられ、最後にヘッドギアのような目かくしをされた。自らに虐待を加える者の姿を見ないようにしなければ、刑期が終わった後に逆恨みの対象となりかねない。監察官ゲイルⅡリンクスワイラーの仕事はここまでだった。それにしても……と余計なことを考えていて、とつくに慣れたはずの拘束の過程がもたついてしまう。最初の虐待は、過電圧からはじまる。神経が焼ききれる限界の電圧を、10時間もかけ続ける。彼にブリーフィングをして早く退避しなければ、巻き添えをくってしまう。ゲイルはユージーンが犯した罪が、とうとう最後まで理解できなかった。

「たかが人間一人のために、こうなる事を望んだのかね」

「よいのです。後悔はしていません」

ユージーンは頑ななまでの決意があったようだった。そしてゲイルが知りたいような事など何も語る意思がないのだと、わざわざマインドブレイクをかけなくとも推測することができた。ゲイルは諦めるしかない。

「ではもう何も言うまい。私もこれが仕事でね……悪くは思わないでくれ。では刑罰の内容を説明する。あなたはこれから24時間かたときも休む事なく、49日間の虐待を受け続ける。他の百年単位の刑罰に相当するのだから、それぐらい苛酷なのは当然だ。枷にはセンサーが組み込まれていて、意識が失われるとブザーが鳴る。刑は意識を失っている間は執行中と見なされない。あなたには余さず苦痛を感じていただく。意識を失えば失う程刑期は延長されてゆくから、早く解放されたければ気を確かに持つことだ。脳派は常時測定されていて、苦痛を感じていないと見なされれば虐待はエスカレートしてゆくだろう。また、刑の執行中はあなたの神体を著しく傷つけるため、大量の失血が見込まれる。瀕死になれば医療班が責任を持って処置にあたるが、輸血が必要となるだろう。普段から自己輸血用に定期的に採血しているものを使用する可能性があるのも、その件は了承してもらいたい。ああ、それから心配しないでもらいたい。刑を全うした暁には受刑中にできた創傷を跡形も遺さず治療すると約束する。説明はこのぐらいだ、何か質問は？ なければ了承したと見なす」

ゲイルは何度となく言い聞かせてきただろう口上を淀みなく延べ聞かせる。

「了承しました」

「では、執行官に刑の執行を付託するものである、よいな」

「はい」

「ユージーン!! マズロー……辛くても、自殺だけはするなよ」

ゲイルは最後に僅かばかりの憐憫の眼差しを向け、枷を巨大な環の中に鎖を連結して彼を宙吊りにすると、環状の拘束器に拘束されたユージーンはまるでレオナルド・ダ・ヴィンチの人間のデッサンに描かれているような状態だ。ゲイルは更に全ての鎖を弛みなく引き絞った。吊された彼を見上げながら、珍しい神がいるものだと思った。神がたった一人の人間のために自らをこれほどまでに犠牲にするような事は珍しい。荻号も何度かこの手の罪を犯したが、彼の犯行動機は明確で、理路整然としていた。もしユージーンの性質が生れつきのものとすれば、どうしてもひっかかる……。

それは、自己犠牲の精神……。一見、全ての神々がそうであるように見えるが、根本的に違う。神は首尾一貫した行動をとるものであり、衝動的な行動に及ぶ事はない。陰陽階神法で義務と定められていない事で自らの不利益となるような事を敢えてはやらないものだ。付け加えるなら、一人の人間を救うより、一人の人間を見殺しにしても大儀のために働こうとする。ゲイルは監察官だ。心理学的にどのような葛藤が起こり、そして衝動的な行動に結び付いたのかどうしても引っ掛かった。そのような特徴を持つ神などいなかった。彼に会うまでは……。

彼のやっていることといえば、群れから離れた一匹の蟻が重いブルドーザーなどの下敷きになろうとしている時に、蟻を轢き潰すなら自分を轢きなさいとわめきながら飛び出してって、事実轢かれてしまうのと同じだ。

そんな馬鹿な話があるものか！

誰もそんなことはしない。そんな事をしていたら本質を見失ってしまう。蟻は何匹か轢き潰されたとしても、蟻という種は維持され

ているのだから気にすることはないし、それよりも残った蟻の群れのためにそっと角砂糖を置いておくべきだというのが、一般的でかつ健康的な神の思考回路であるのに、ユージーンはかなり病的な思考回路をしている。

どうしてもこの点が気になる。この神は、誰かに似ている。ゲイルの知る誰かだ。とてつもなく嫌な予感がする…… だとしたら一体誰だろう……？ そんなゲイルの懸念を妨げるように、処刑の開始時刻を告げるサイレンが鳴り響く。いつもはそんな事など思ったことはないのに、今日はひどく不吉に聞こえた。

この神は一体、神々の、そして人々の未来に何を齎そうとしているのか――？

彼はきつく戒められたまま、ぎゅっと口を結んで吊り下げられている。杞憂だと自らに言い聞かせ、足早に刑場を後にした。

＊

「何、これ……」

藤堂 志帆梨は小さな声をあげた。立て付けの悪い藤堂家のドアを修理するため、街の西急ハンズに行こうとしていた。街の銀行のATMで、現金をおろしていたところだった。街に出るのは久しぶりだ……10年ぶり、とまではいかないが、入退院を繰り返していた志帆梨にとって、病院に関係のない場所を自由に歩けるという事はもう数年はなかった。通帳に記帳をしていたが、なかなか通帳が出てこない。恒には100万ほど、生活費を入れた口座を作っておいてやったから、恒はその口座から生活費をおろして一人暮らしをしていた。

志帆梨の口座は自分のものだ、もう数年間も出納をしていない。

だから、記帳してもこんなに時間がかかるとは思えないのに、志帆梨の通帳は8ページも記帳して出てきた。志帆梨は信じられないと叫びだしてしまいそうになりながら、通帳を握り締めた。最も新しい記録は、つい3日前だ。7月8日に50万の入金。その前は6月1日に50万の入金……志帆梨はペラペラとページをめくっていった。毎月、50万ずつの入金……3年前からだ！　つまり……残高、総額　2570万3922円！

この残高の中には、志帆梨自身が貯金していたものも含まれているが……2000万以上は振込みによるものだ。志帆梨は頭を冷やして考え直すために、一度ATMから出た。宝くじの3等か4等でも当たった気分だ。これは何の間違いなのかしら、とトイレに駆け込み、もう一度中で通帳を開く。入金をしてくる相手はいつも決まっている。

”株式会社　レイメイ”……こんな会社、聞いた事ない。この会社は誰かと間違えて、志帆梨の口座に入金してきているのだと思えない。……後で問題になったら困る。志帆梨は仕方なく銀行に戻り、入金をしてきた会社の電話番号を問い合わせしてみた。……電話番号は架空のもので、繋がらない。これではその会社に連絡もとれない。どんな会社なのかは分からないが、経理や事務職の社員が間違えて振り込んできているのだとしたら、会社に2000万の損失をもたらすこととなる。やはり連絡しなくてはならない。しかし、どうやって？　志帆梨は新規口座開設をして、もともと自分が貯金をしていた300万円をそちらに移し、残りの金は、元の口座に残しておいた。風岳警察署に届けなくてはならない。

折角街に来たのだから、ちゃんと買い物はして帰ろう、そう思っ
て新規口座から5万だけ引き出して、西急ハンズで日曜大工道具を
買い、恒の下着を買ってやって、久々に自分の服を買った。志帆梨

は街の中をぶらぶらとショッピングをし、3時にはアフタヌーンコーヒーでコーヒーを飲み、シフォンケーキを食べた。こんな生活が送れるのも、風岳村の神様が不治の病を治してくれたからだ、と彼女は一日一度、おやつの時間に、彼に感謝して祈りをささげるようにしていた。この日もシフォンケーキを口に運ぶ前に、にわかなクリスチャンのようにお祈りの言葉を忘れなかった。

”神様、ユージーンさま。私はあなたのおかげで、今日も元気です。このような贅沢なシフォンケーキを食べられます幸せを、お許してください”

ペロリと食べ終わると、恒とユージーンに土産のケーキを買い、店を出た。

店を出てすぐのデパートの地下に食品を買いに行くと、兼橋 佳代子の姿があった。

「あら！ 藤堂さん！ 早くしないとなくなるわよ！」

「はい、あと1分となって参りましたよー！ そのお母様も、お早くお買い求め下さい。はい、国産牛肉霜降り、国産牛肉が今だけこのお値段！ お急ぎ下さいよー！」

見ると、タイムセールで国産牛肉の叩き売りが催されていた。主婦たちが血相をかえて手を伸ばしている。肉はついこの間夕食で出したからいいわ、と志帆梨は遠慮した。一人1パックの激安卵もあったので、佳代子の分もとってやった。息子はいるが主婦暦が短いので、どうしても他の主婦たちのたくましさと比べると貧弱だ。帰りの電車で、やっとこさ席についた二人は、一息ついた。佳代子が買いこんでいたらしい1本54円の缶入りオレンジジュースをくれた。この主婦は、買い物上手だ。見習わなくてはならない。

「藤堂さん、もうすっかり元気そうね」

「ええ、おかげさまでこの通りです」

「恒ちゃんも、学校に行き始めたんだってねえ」

「そうなんです。これまでは恒が皆様にご迷惑をおかけしていたみたいで。入院中だったもので、学校行っていないとか、悪さばかりしているとか、そんなことを全然分かってなくて……親として恥ずかしいです」

志帆梨は、恒が不登校児だったということも、そして村人に迷惑をかけていたということも何一つ気づかなかった。彼女の周囲は彼女の病状が悪化しないようにするために、気をつかってそのような情報をシャットアウトしていたのだ。隣村の病院の医師を含めてである。村には上島医院があるが、病床数も少なく、医師ひとりという事から高度医療は期待できない。隣村の総合病院に入院していた事が、このような奇妙な事態をもたらしていた。育児放棄とのしられても仕方がないところがある。おまけに、恒は自活できるといって、施設にすら入りはしなかった。自分が病気だったとはいえ、息子には随分迷惑をかけた。

「仕方がないじゃないの、あなたも色々あったんだしねえ。……でも、私は恒ちゃんがいい子だってこと、分かっていたつもりよ」

「ええ、兼橋さんにはお世話になっていたみたいで……これからもお世話になります」

「何を言っているの、遠いお隣さんどうし、助け合いましょう！

私だってお世話になると思うわ。それに今年は火星人十が大殺界の年なのよ。もう私、気が気じゃなくなってるさあ」

「占いですから、気にされなくても」

「藤堂さんは、芽吹き之年ね、きつと」

佳代子は志帆梨の空き缶を小さなレジ袋にしまいながら、しみじみとそう言った。

「ねえ、再婚するつもりはないの？ あなたはまだ若いし、父親の存在は恒ちゃんのためにもなるわ。すぐには考えられないかもしれない

ないけど、あなたの将来の事もあるし……」

「再婚？」

佳代子は志帆梨に夫がないということは知っていたが、何故いないのかはあえて聞いた事がなかった。離婚したぐらいにでも思っているのだろう。志帆梨には夫などいない……誰が夫なのかわからないのだ。再婚という選択肢など、考えた事もなかった。結婚した事などないから初婚なのだが、つまり結婚など考えた事もなかった。恒は新しい父親がやってきた方が喜ぶのだろうか？

「でも……恒は神様のことを、父親のように思っているようです」

「社務所の神様？ あの方、面白いわよねえ。普通は神様っていえば神社にいるものなのに、社務所にいらっしやるだなんて」

しめ縄を神社と社務所のどちらにまけばよいのか、そういえば総代会が困っていた。

「恒は毎日会いに行ってますし、恒に色々な事を教えて下さっているようです。最近の恒はどこか満たされているように感じるんです。恒は恒なりに、父親の代わりを見つけたんじゃないでしょうか」

「でも……じゃあ、藤堂さんの老後はどうなるの？ あなたが大財閥の令嬢だったらいけど、そうじゃないでしょ？ あなたが今から仕事を見つけて、定年まで病弱な身体で働くわけ？ 主婦は楽よー、気兼ねがないわ」

佳代子のオバサン丸出しの打算的な言葉の影には、志帆梨への同情が見え隠れする。2000万の金が、ふと頭の中をよぎった。あれだけあれば……。いやいや、あれはきちんと警察に届出なくてはならない。だいたい、あのような大金をもらえる覚えなど、ひとかけらもないのだ。——しれっと懐にしまっはならない。

第一そんなことをしても、神様にはお見通し。お金にがめつい人

間をわざわざご自分を傷つけてまで助けたなど、思いたくもないでしょうに……。これからどうやって生きてくか。すぐにはないが、ぼんやり考えてもいられない。就職先を見つけて、そして結婚はどうしよう……。風岳村行き列車は志帆梨の不安など気にも留めず、いつものように軽快な音を立てながら草原の中を駆け抜けていた。

＊

その数時間前、小学校では掃除の時間にさしかかっていた。メフアイストフェレスは給食を大盛りで平らげ、残りのプリン争奪戦にも加わっていた。まったくおとなげがない、と皐月は思うが、彼女は無邪気で子供のように子供達と接し子供の視線に立って遊ぶので子供達には人気が出たようだった。昼休憩が終わり、掃除の時間がやってきた。メフアイストフェレスはしゅろ箒を持って、中庭の塵を掃いている。なかなか丁寧な仕事ぶりだ。それにしても彼女はさすが魔女というだけあって、箒がよく似合う。大きな帽子を片手で押さえながら、そのまま箒にまたがって飛び去ってしまいそうだった。窓を開け放った理科室の中から、クラスの子供達の声が聞こえてきた。

「理科準備室のそうじ当番、誰ー？」

「あそこやだー、変な標本とか置いてあって気持ちわりーの。巧行けよ、ホラー好きだろ」

「えー、俺？ 俺こないだもだったじゃん」

「しょうがないね、男子がやらないんなら私がやるよ」

石沢が手を上げた。男子はなんとなく体裁が悪い。

「じゃあ俺がやる」

手を上げたのはクラスいちの長身の坂下さかした実だ。みのるそれを見た巧は、なんとなく悔しかった。坂下は石沢に思いを寄せているライバルの

ひとりだ。巧としてはおいしいところを譲るわけにはいかない。

「じゃあ俺も！」

「どうぞどうぞ」

巧が手を上げた途端、手を上げていた二人はさつと手を引つ込めて巧に譲った。どこかで見たお笑い芸人トリオのネタだ。これで前回も巧がひっかかった。狙ってもできないのに、素でひっかかってしまうので、巧は馬鹿だ。狙ったって合わせられないタイミングを、ドンピシャの間合いでフリにあわせてくる。巧は将来ソフトボール日本代表を目指しているらしいが、難波グランド花月あたりが就職先だろうな、そして売れるだろうな、と誰もが思っていた。

メファイストフェレスと皐月は理科室の外の中庭で、ちりとりを持って掃除の仕上げをしていた。皐月は手際よく塵取りを差し出しながら、ユージーンの前打教師としての彼女を評価しはじめていた。これなら、ユージーンの前不在の間、安心して副担任を任せられるかもしれない。メファイストフェレスはきついからといって、3つめの胸ボタンを開いた。胸の谷間が顔をのぞかせている。子供達は掃除を終えて、教室に戻っていった。中庭には人気がなく、中庭の池の鯉が口をあけて、ぱくぱくと餌をねだっていた。さきほど子供達が中庭で取れた野ミミズをたくさんやったのに、まだ腹がへっているとみえる。メファイストフェレスは箸を両手で握り締め、何かを考えたが水面を見下ろしていた。皐月も掃除を終えて、声をかける。

「メファイストさん、お疲れさまです。あなたは子供達に人気ですね。でも、プリンは生徒に譲ってあげてください」

「皐月、この村はどうなっているのかしら」

「どうしたんですか？」

メファイストフェレスは胸の谷間からマクシミニマを取り出した。この前フリだと胸の谷間から取り出すだろうと思った。はいはい、

もう胸が大きいのはわかったから、と皐月は冷静なツツコミを心の中であけてやった。この杖は警棒ほどの長さで短く、どこにでも仕込めそうだった。

「これはマクシミニマといって、多機能装置よ。こいつのお陰でわかったわ」

「何がですか？」

「神階に上げなければならぬ子供がいるの」

メファイストフェレスが給食の間、口いっぱいにパンを頬張りながらも子供達の顔をつぶさに観察しているように見えたのは、こんな事を思っていたからだろうか。皐月は何のことを言っているのか、しばらく考え込んだ。つまりそれは恒のことだ。今更何を言っているのだろうか？

「藤堂くんの事ですすよね？ 神様だから」

「違うわ、恒は神にならないという選択肢も用意されているの。神はどこでだってひとりで生きてゆける存在よ。でもその子は違うわ。使徒なの。使徒って知ってる？ お前達という天使のことよ。使徒は、神の傍らにいないければ飢えて死んでしまうわ。地上では生きてゆけない。今は恒に生かされているようなものだけど、恒が神になると決めて神階に上がったら、その子は死んでしまうわ。つまり絶対に神階に上げなければならぬ子なのよ。妾の滞在もずっとではないから、今言っておいた方がいいと思ってね」

「え……」

「それも、第二次成長期が終わるまでに上げなくてはならないわ。今は子供だからそうでもないけれど、成長しきって翼が生えはじめてしまうと、もう無理ね。見た目にもそうだけど、莫大な神のアトモスフィアを必要とする。恒みたいに人間でもあり、アトモスフィ

アの貧弱な神のもとでは生きてゆけないのよ。主も長くはこの村に滞在しないでしょうし。アトモスフィアの供給はいずれ断たれる」

「そ、そんなことが、この村でまた……偶然にでしょうか？」

「偶然なんかじゃないわ。何者かが偶然の姿を借りて、周到に組まれた計画の通りにやっていることよ。神が神階の目を逃れて生物階降下させられているというだけでもありえないことなのに、その傍らに偶然、使徒がいるなんてありえないわ。恒を神として覚醒させ、何かをさせようとしている。使徒の子供は利用されているのよ。この事を恒が知ったらどう思うと思う？ その子の命を守る為に”神として”強くなってるわ。その子が人間社会で生きてゆけないのなら、自分も神階に上がってその子を助けようとするでしょうね。つまり、恒を神階に手繰り寄せて何かをさせようとしているのよ。そのため、主をこの村に派遣させ、神という存在をちらつかせた……温厚で、尊敬に値する神をね。神という存在に憧れさせるために、故意によ。とても卑怯なやり方だわ、断じて許されない。妾の美学にも反するわ、勿論、利用された主の美学にも……」

メファイストフェレスは悔しそうに、ぎりっと歯を食いしばった。丁寧ケアされた真っ白な歯が印象的に、ぷっくりとした真っ赤な唇の間から見えた。鯉はメファイストフェレスに餌をねだるのを諦めて、向こうに泳いでいった。水紋が無神経に彼女の姿をかき乱した。皐月の黒いスーツの背中が、直射日光を吸収して痛くなってきた。

「そ、それは誰なんですか？ その、天使の子は」

「恒と親しい子よ。言ってもいいのかしら？」

皐月は鳥肌が立つのを感じながら、小刻みに首をふって頷いた。

豊迫 巧なのではないか、皐月はそんな予感がした。彼らは幼少期からずっとかたときも離れた事がない。お互いに無二の親友と認めているらしい。

「豊迫君ですか？」

「使徒は、生まれつき高い知性を持つわ。成績優秀、容姿端麗、冷静沈着な子といえば、このクラスには一人しかいない。そうでしょ」
皐月の脳髓に、稲妻がはしったように思考回路が痺れた。

「石沢 いしざわ 朱音 あかね——それが使徒の名よ」

皐月の予想通り、メファイストフェレスの口からは少女の名が伝わがれた。

水紋はまだ午後の強い日差しを照り返しながら、ゆらゆらといつまでも揺れていた。

第1節 第16話 陽階枢軸・準中枢臨時議会の開会（前書き）

このページは、もくじページ下の枢軸叙階表（初期）を参照しながら読まれると便利です。

第1節 第16話 陽階枢軸・準中枢臨時議会の開会

――陽階枢軸、準中枢臨時議會。

神階では、世界の運営に関する陽階枢軸と呼ばれる上位10名、準中枢と呼ばれ審議権を持つ10から20位までの神々が一堂に会する会議が開かれようとしていた。

主神として崇められる極陽を中心に螺旋状にぐるりと取り巻く枢軸神の議席は水晶の石のような素材でできており、空中に浮いて固定されているが、その軌道はまるで衛星のように周回している。宇宙の闇に配座された太陽系の惑星のように無機質な、しかしどこか懐かしい構造だ。上位神ほどその軌道は極陽から近く、下位神ほど遠い。とはいえ、ここに参集することのできる神々は陽階の主軸であり中枢である。出席してきた神から順に議席に備え付けられたシアン色の鮮やかなランプを点す。会議場の照明はそれだけしかなく、あとは厳粛な闇に包まれている。

定時になってもユージーンの席には出席を知らせるランプが点かず、誰もがまんじりともしない気持ちでその空席を見ていた。会議場に一番にやってきて熱心に資料に目を通し、先輩神たちを出迎えてくれたユージーンが定時になっても来ない理由は周知のところだ。GLネットワークというウェブサイトのニュースヘッドラインに、軍神ユージーンⅡマズロー逮捕との見出しがでかでかと踊っていた。新聞のない神階では、オンラインニュースが主な情報源であったため、殆どの神々が閲覧していたのだ。

ユージーンは史上最年少枢軸神であり、枢軸はもちろん準中枢のうちでも最も若い。日本の国政でたとえたと大学生が国会議員になり、幹事長や官房長官をやっているようなものだ。優秀であり温和

な性格だからこそその枢軸神への拔擢だったが、精神面の未熟さを指摘する神もいた。やはりこうなったかと溜息をつく神々も多い一方、陰ではほくそえむ者もいる。

陽階には政党などはないが、穏健派である極陽、ヴィブレイスミス（Vible Smith）、置換名^{にいみ}新未^{れいめい}黎明を支持する神々と、急進派の第2位神である比企^{ひき}寛三郎^{かんさぶろう}を支持する神々とに二分され、勢力はほぼ拮抗している。

陽階神第2位、比企 寛三郎は本置一致（通名と置換名が一致する神）の名を持ち、立法を司る神である。若手の部類に入るのだが、次期極陽の器とも噂されており、その名に恥じぬ圧倒的な力を持つ。この強さを手にした背景には、荻号の影響が多分にある。

また荻号の名が出てきたが、どうやら荻号はかなりの先見の明を持っていらっしゃるらしく、陰陽階神のうち直接にも間接にも荻号と関わる事となった神は、いかに無名であっても大出世を果たす傾向にある。枢軸を語る際には荻号を抜きにしては語れない。荻号は比企を弟子として育てていたが、何しろ荻号は天才であるがゆえに、全てにおいて異端であった。弟子は師の異端ともいえる思想についてゆけず、また罪を重ね続ける事に耐えかねた末、陽階神として転階し、荻号と袂を分かった形となった。陽階に入った比企は荻号が唯一弟子と認めた器だけあってすぐに頭角をあらわし、荻号譲りの能力と力で最下位から第2位まで上り詰め、100年を経ずして極陽を脅かすまでになった。

比企は陽階神による生物階の絶対法治を掲げていた。陰階神を認めず陽階神のみで生物階を統治するという発想だ。現代の極陽が主神として即位して以来、神の存在を生物階から隠しありのままの営みを見守るという政策をとってからというものの、生物階では長らく

神なき時代が続いていた。近年の生物階の科学の進歩は目覚ましく、人は神を必要としなくなり高度な文明が発展する一方で飢えや貧困はよりいっそう加速され、いつまでたっても公平な幸福はやってこなかった。比企は神が姿を顕す事で生物階を直接統治し、誰もが平等な幸福を分かち合う社会を実現させようとしたのである。

この政策は急進的でもあり、古典的でもあった。だが構成要員の個々の能力では陰階に劣り、生物階に対する断固とした権力も示せず消極的だった陽階神を奮い立たせたのは事実だった。陽階神の間で比企を極陽に推す勢力がしだいに拡大し遂に半数を占めるようになった頃、比企は極位をかけ位申戦で主神に挑んだ。結果、比企は重力操作系神具、懐柔扇^{かいじゅうせん}を以ってしても極陽に敗北した。敗因は極陽の精神攪乱性生体神具、FC2・Mind cube (FC2・マインドキューブ…心層立方体)の性能と極位たる者が重ねてきた経験の差だった。その潜在能力はほぼ同格……比企は一度は諦めたそぶりをしながら、機をうかがっていた。

さて、このような背景のなかでユージーンがどちらの派閥に属していたかという点、極陽派だと見なされていた。ユージーンは自らが神であるという事すら受け入れられないのに、神が生物階を支配するという思想に迎合できはしなかった。極陽についていたというわけではないが、神が生物階に介入すること自体を受け入れられないと打ち明けた時から、極陽派だと見なされていた。

比企にとってこの度のユージーンの失態はこのうえなく都合良かった。若いユージーンを手駒にして極秘に生物階に降下させ、不穏な動きをさせて利用していたということが明らかになるのだ、今回の件で神々の心は極陽から離れてゆくことだろう。ユージーンの失態を責める者はなく、未熟な彼を生物階降下させた極陽の責任を問う声が大きくなるだろう。極陽側は自分から尻尾を出す形となったわけだ。

極陽、新未 黎明は人間でいえば壮年の顔付きをしていて、焦げ茶色の毛と瞳をしている。深く刻まれた細かい皺には積年の労苦がこびりついていた。人間でいうと50歳ほどの年齢だ。複雑な模様のある白いジャケットとパンツに身を包み、しなやかな革靴を履いていた。

極陽の周囲は青い光の環がふたつフラフラのように取り巻いている。この環は極陽のアトモスフィアを安定化システムに転送するものであり、転送されたアトモスフィアは宇宙空間に浮遊する陽階を一箇所に繋ぎ止めておくアンカーの役割を果たすのだった。極陽は常にアトモスフィアを奪い取られているため使徒数は少なく、わずか8000名である。ただし極位となる際に数十万名いた使徒はリストラされ厳選されて、スーパーエリートだけが残っている。

陽階の支配者たる証の二つの光の環、それで在位中かたときも休まず拘束され続ける事は、極陽が神々の長として絶対の権限を誇示するために今も昔も変わらない事だ。彼の身は陽階の化身であり、彼に叛意を抱く事は陽階全体に対する謀反だと、神々は否応なく認識させられていた。全ての神々が着席した後、極陽は中央の最も高い席に座し、傍らには比企が控えた。定時が来て、極陽が議長から開会の合図を受けて立ち上がった。

「それでは開会する」

「諸君、多忙の中での参集、大儀である」

極陽、ヴィブレリスミスは厳かに開会を告げた。遙か下方では、書記官が律義に速記をはじめ。機密会議の様子は通常の会議と異なり、録画されてはなかった。

「本会の議案が提出されておらぬのだが、予想はついておる。比企の要請にもとづき開会の運びとなった事より察するに、7位軍神ユ

ージーンⅡマズローの犯罪に関するものであろう。彼は生物階降下中に陽階神の自覚を忘れ、重罪を犯した。その罪は正当に断罪されておる」

「しかし未熟なユージーンを生物階降下させ、かような事態を招いたその責任は極陽、あなたにあるのではないか？」

第3位智神、叡智を司る女神、リジーⅡノーチェス（Lizzy Norches）、置換名 彌月^{みつぎ} 天鵬^{てんほう}が鋭く弾劾した。淡いクリームティー色の髪の毛と瞳で、肌は真っ白、人形のようにあどけない容貌をしていながら、お世辞にもあどけなくはない指摘をする才女だ。美しい装飾のついた白衣を丁寧に着付けている。言うまでもなく彼女は比企を信奉する女神だった。先制をかけたリジーⅡノーチェスに比企が続いた。

「極陽、我々は懸念致しております。あなたが隠密に、なんぞ不穏な動きをしているのではないかと。生物階への介入は極位の一存にて決められるものではありません。あなたが生物階にてユージーンにさせようとしていた任務、その内容を説明する義務があるのではないですか」

比企は話し口調も静かで艶のある白髪と灰色の瞳が儚げだが、したたかな策士だ。比企は強い眼差しを極陽に向けた。極陽は受けて立つといわんばかりにその冷徹なまなざしを全身で受け止め、よく通る低い声でこう答弁した。

「軍神たるユージーンが彼の職責に遵いて生物階降下を行った上での不祥事だ、関知するところのものではない」

この言葉には4位音楽神、ケイルディシャーⅡムジカ（Kaldisher Musica）、置換名 安佐^{あさ} 春輔^{しゅんすけ}も耳を疑った、彼ひとりに罪を押し付けようというのだろうか、と。ムジカは極陽

と親しい神であり、今度のユージーンの生物階降下の件は、極陽の勅令に遵ったものだと思っていた。このとき彼は極陽を卑怯だと感じた。比企はユージーンに同情を寄せるそぶりをしてこう付け加えた。

「ユージーンは法務局に断罪され、49日間の身体罰に服役しているそうです。死すら希望のように感ぜられる不断の苦痛に苛まれ続けています。あなたは彼の彼に何を報いた」

「それもユージーンが降下していた場所というのが、グラウンド・ゼロ（Ground 0）だったというではないか。あなたはひた隠していたようだが、法務局がユージーン拘束場所を発表したので明らかになったのだ。ユージーンがグラウンド・ゼロをわざわざ選んで降下したとはとても思えん」

「三位殿、グラウンド・ゼロとは一体？」

リジー||ノーチェスによって発せられた耳慣れない言葉を聞き、神々は動揺をみせた。それまで頑ななまでの無表情だった極陽はその言葉が発せられた瞬間、僅かな困惑の色を見せ、立ち上がりリジーを黙らせようとした。

「さて三位。それはならん！ ならんぞ」

「陽階神のうちグラウンド・ゼロとその座標を知る神々は現在4柱。私と、極陽、そして比企殿、師崎殿のみだ。極陽がそれを禁忌としてきた深慮はお察しする。しかしあなたが無知なユージーンを極秘に降下させた事により、賽は投げられた。グラウンド・ゼロへの干渉と知れば、陽階神として黙っておくわけにもいかん」

リジー||ノーチェスは着実に極陽の逃げ道をつぶしていった。神々は静かに耳を傾けていた。しんと静まり返った中、今にもリジーが話し出そうとした時、静かな声がそれを妨げた。

「待つのだ。それを告げて汝はなんとする、その知識が我々に何の利をもたらずというのか。幾千年にもわたり代々の極位の上に口承されてきた門外不出の口伝を不当に暴いた上それを公にすること、甚だ罪深き事だ。智神としての職務を取り違えた汝が不徳を恥じよ」

こう艶のある声で厳しく語りかけたのは、茶色の優しげな髪と瞳を持つ壮年の神、第10位倫理神、ジーザス・クライスト（Jesus Christ）、置換名 師崎しきざき 灯陽とうようだ。

現在三大宗教として生物階で多数の信者を持つ、キリスト教創始者イエス・キリストそのひとである。彼が2000年前にキリスト教を創始した頃には、極陽として在位していた。つまり彼は先代極陽であり、その在任中に生物階にて新たな倫理観を説くため人の子に身をやつして生物階降下して人々を教え導き、最期に十字架に磔られるという壮絶な生涯を遂げた。彼は葬られて3日の後、再び人々の前に姿を顕しよく教えを守るようにと言い残して神階に戻った。死者復活のからくりは単純だ。神は十字架にかけられたり脇腹を槍で突かれたぐらいでは死なない。それがキリストの死体から鮮血が流れ落ちた理由だ。

先代極陽という経歴からか、世界を代表する大宗教のキリスト教創始者だという畏敬の念からか、ジーザスは極陽派でも比企派でもないにも関わらず、現代極陽に譲位してからもあらゆる陽階神に一目置かれている。リジー・ノーチェスは先代極陽にそのような事を言われて真っ白な顔を赤らめた。怒りからなのか、恥じ入っているからなのかはわからない。ジーザス・クライストはそれにも構わず言葉を重ねた。

「グラウンド・ゼロとは、禁忌の地区だ。ユージーンをそこに遣わせた事については極陽に非がある。だがかの座標に関する一切の情

報を我々に与える必要はない」

「ではどうせよとおっしゃるのですか」

「今までの如く、グラウンド・ゼロは不可侵であるべきだ。今後、ユーージンを含めあらゆる神々の降下を禁ずる、これでどうだね。この度のユーージンの件に関して、若き彼を巧みに欺いて陥れた事、よくよく心に留め置くがよい」

「了解した。では以後、わたしの命によりかの地区に神を遣わす事は自粛する」

極陽はジーザスⅡクライストの仲裁で、風岳には以後神を降下させないという誓いを立てさせられた。こう締め括られてはもうどうしようもない。極陽と比企の泥仕合になるところを、まるでジーザスは鮮やかな手並みで一件落着にしまった。極陽は神々の顔を見渡した。ユーージンへの同情と、極陽への不信感を与えたという事はわかりきっていた。まったく、計算違いだったな、と極陽はため息をついた。5位 光神 レディラムⅡアンリニア (Redirum Unlinear)、宮本 みやもと 系暝 けいめい はまた眠っているのか起きているのか分からないような顔で腕組みをしていた。

どんな形で決着したとはいっても、グラウンド・ゼロという響きが多くの人々にとって不穏な言葉に聞こえたのは言うまでもなかった。今回の一件は神々の間に嫌な亀裂を残したままだった。

「以上で閉会を宣言する」

極陽派である9位数学神、女神ファティナⅡマセマティカ (Fatina Mathematica)、置換名 くりす 栗栖 きじら 寄蘭は閉会の宣言を受けながら、ファティナの神具であるスーパードコンピュータールーム、ヘクス・カリキュレーション・フィールド (Hex Calculaton Field) 六方魔方陣演算

空間）に荻号が以前より居座っていて、しかも昨日からはユージーンの神具 G-CAMを持ってなにやら演算が続けているという事は、ここで告げない方がいいし、極陽にも知らせない方がいいと思った。

神々の退席を示すランプがひとつ、またひとつと次々と消えてゆき、深い闇が議場を満たしていった。

＊

藤堂 志帆梨は家に帰ってケーキを冷蔵庫に入れると、今度は自転車に乗って風岳警察署に滑り込んだ。すっかり日差しもきつくなってきた、ハンカチで拭いても拭いても、汗がじつとりと浮かんでくる。警察署の扇風機に向かって顎を突き出しながら、受付に警官が戻ってくるのを待っていた。婦警が一人、麦茶を持ってきてくれた。まだ若い婦警で、新谷という名前のプレートをつけている。

「どうも、こんにちは」

「こんにちは。何か御用ですか？」

「ちよつとどこの課にご相談したらいいのか分からないんですが……」

「私がお聞きしますよ」

志帆梨はありがたくお茶をいただいて、婦警に話し始めた。

「よかった。私、長期間入院してしまって、このたびやっと退院したんです。それで、長期間銀行のお金を預けっぱなしにしていたんですが……今日、身に覚えのないお金が振り込まれているのが分かりまして……2000万円もなんです」

「入金してくる相手の名前は分かりますか？」

「株式会社レイメイという会社です。私は聞いた事がなくて……」

「レイメイですか？　もしかして、あの会社じゃないですか？　製薬会社ですよ、ほら、CMでも時々出てますよ。朝のCMとかでよ

く出てますよ。レイメイーレイレイーレイーメイ♪ってあれですよ。ちよっとお待ちくださいね、調べてきますので。その会社だったらいんですが……」

婦警はメモをとりながら聞いていたが、会社に聞き覚えがあったらしく、鼻歌を歌いながら志帆梨の通帳を奥に持っていつてしばらく帰ってこなかった。

志帆梨はいつまで待てばよいのかと思いながらも、扇風機に当たりながら麦茶を飲んでいた。すると、何やら騒がしい話し声が聞こえて二人の刑事が通りかかった。ユージーンを逮捕した二人の刑事だが、志帆梨とは面識がない。二人は志帆梨に会釈をすると、そのまま通り過ぎて行った。志帆梨はこれでよかったのだ、と思った。自分のお金でもないのに溜め込んでしまっただけは、いつか暴かれて手が後ろに回る。この2000万のお金が、落し物だったら自分にも何割かもらえたかもしれないのに、と思いかけて首を振る。真っ当な生き方をしていないと、神様は全てをご存知だわ、と。志帆梨が寝こけかけたとき、婦警が戻ってきた。志帆梨は立ち上がる。

「私が振込みをして、お返しした方がいいんでしょうか」

「違うんですよ。レイメイ側と連絡がとれまして、その入金はどうやら正当なお金のようにですよ。その会社の会長が以前あなたと婚外子をもうけたそうですね、名前を恒君というんですよ。そうですね？　でも理由あって結婚できなかった、……あなたを深く傷つけてしまったから、といってその慰謝料と養育費を振り込んでいたらしいんです。ですから全てあなたのお金ですって、社長がそう仰っていましたよ。会長はあなたを驚かせたくなくて名前を明かさず会社の名義で振り込んでいたらしいんですが、実際は会長のポケットマネーだそうです」

「レイメイという会社の会長が、私の夫？」

「そうですよ！ あなたの元婚約者です。忘れたんですか？」

「……その会社の連絡先、教えていただけますでしょうか」

「よかったですね、養育費を振り込んでいただいて。これからも月はじめに振り込んでくださるそうですよ」

志帆梨には切れかけた細い糸が見えた。とっくに切れていたと思っていた糸が、繋がっていたのだ。彼女と夫、そして恒を結ぶ謎の糸が……。正真正銘の神、ユージンⅡマズローですら見抜けなかった謎の意図でもあった。

レイメイという会社の会長が夫だと？ 2000万の大金を手にした事よりも、夫を名乗る者が現われたという事の方が衝撃だった。帰り道は、色々考えていたおかげであつという間だった。空は気持ちいいほど晴れて、畦の向日葵も咲き始めたところだったが、志帆梨はうわのそらだった。

家に帰ると丁度恒が帰ってきたので、紅茶を煎れ、ケーキを食べた。恒がどんな学校生活を送っているのかも、どんな友達がいるのかも、志帆梨は知らなかった。昨日だって突然社務所に泊まってくるといったきり、帰ってこなかった。親子のコミュニケーションは、うまくいっているのだろうか？ 志帆梨はあまりにも恒のことを知らなすぎた。志帆梨は息子への無関心を反省し、子供だからと見くびらずに、今日の一連の出来事を恒には言っておくべきだと思った。

「あの」

「ねえ」

二人が同時に声をかけてしまった。恒は恒で、実の母親にだけは言わなくてはならないことがあった。昨夜外泊した間にユージンが逮捕され、受刑中だという事ではない。それよりももっと、根本的なことだ。自分の人生に関わる……。

「なあに？」

「母さんから言ってよ」

「恒の話を聞きたいわ」

恒は少しのけぞり、口に残っていた紅茶を飲み込んだ。志帆梨は特にせかす様子もなく、またいそいそとカップに紅茶を注ぐ。夕方のニュースが流れていたテレビの電源を、恒は切った。

「母さん。今から言う事は受け入れ難いと思う、でも本当の事だ。……俺は母さんに、迷惑ばかりかけてきたよね。俺の周りではいつもおかしい事ばかり起こって……。母さんも病気になって」

「そんなの、お前のせいじゃ……」

「俺のせいだったんだ、全て！ 母さんを病気にしたのも俺だったんだ」

「ど、どういう事なの？ ユージン様はそんなこと、仰せにならなかったじゃない」

志帆梨の言う事はもっともだ。ユージンが見破れなかった事なのだから、とそれにしがみ付いているようだった。恒の口調が段々と強くなってきた。恒はいつも取り乱したりなどしないが、こうやって葛藤を自分の内に爆発させることはある。それは多くが自己存在に対する憎しみ、自分など生まれてこなければよかった、などのものであったが、今日はどうも語調が違うように思う。志帆梨は恒が何を言い出したのか分からず、おろおろと困惑するばかりだった。

「母さん……俺の半分は母さんの息子なんだ。それは間違いない、でも同時に……残りの半分は神様でもあるんだ」

「な、何を言っているの？」

「本当なんだよ……」

「違うわ。今日、母さんの口座に2000万が振り込まれていたの。レイメイという製薬会社。そ、その会長さんがお前の父よ。会長さんがそう言っているのよ、わ、私には身に覚えがないけど、会社

がそう言っているの。本当じゃなくて2000万も振り込んでくる？ お前の父は神様なんかじゃないわ。どうしてそんなことを思いつめてしまったの？」

母親も自分の息子が神であつたと聞いて動揺しているのだろうが、つまりながら、どもりながら母親が言い訳のように吐き出したその言葉に恒は耳を疑った。

「……レイメイ？ 会社？ 会長？ その会長の名前は？」

「え？ 新未 黎明、だそうよ」

母親の口から、彼女が絶対に知りえない筈の名前……陽階極位、主神ヴィブレissミスの置換名が出てきた。恒の身体は稲妻に打たれ、荒波に岸壁に叩きつけられ、そして岩に踏み潰されたように感じられ、打ちひしがれるには十分だった。

「母さん……確かに、そのヒトは俺の父さん、そして母さんの夫なのかもしれない」

「そうでしょ？」

「陽階神第1位、主神、ヴィブレissミス。創造を司る神様であり、別名を新未 黎明という……。しかも、最高位の神格を持つ神様だ……そのヒトが、俺の父さん……だったなんて……」

恒の頭には、覚えようと思わなくともヴィブレissミスの置換名、新未 黎明という名が刻み込まれていた。主神の名だ。忘れるわけがない。神である恒を志帆梨を媒介に生物階へと降下させ、志帆梨を病ませ、恒をADAMへと監禁した神は主神、ヴィブレissミス。恒はこれから父親に会うとしたら、その歩むべき道のりの遠さに眩暈がし、卒倒しそうになった。天上の玉座で、神の視点から蔑むようにほくそえんでは恒と母親を見下ろす、忌むべき姿が見えたような気がした。恒は少しも彼が慈悲深き父親のようには思えなかった。恒にとって彼はまるで帝国に君臨するヒールのようなうだ。そんなイメ

ージが浮かんでは消えた。しかもご丁寧に、製薬会社まで経営している。神々の知識で創薬したものを、生物階で売りさばいているのかと思うと、もう神の風上にもおけない。

「母さん、俺は天上に上がる。そして、父さんを引きずってきてもここに連れてくる。母さんと俺をこんな目に合わせたこと、これまでの事を全部謝らせてやるんだ！　そうしなきゃ気がすまない！」

しかし同時に、恒はそう言いながら気づいていた。極陽に会える身分になるには、何十年も修行をして最難関と呼ばれる第一種公務員試験を受験し、少なくとも準中枢と呼ばれる上位20名までには入らなければならない。それ以外の神々はいかな例外があろうとも謁見はかなわない。つまり自分が神として力をつけ、20位までに入らなければ、実の父親にさえも会う事が赦されないのだ。母親に父親を引き合わせる事ができるのだろうか？　母の墓前に連れてくる事になるのだろうか？　恒には後者のように思えた。

いや、第一種公務員だって一生かかったって受からないかもしれない。何しろ恒は全てが神というわけではないのだ。人間の血が混じっている、力も知力も純血の神からすれば劣ることだろう。その恒が上位20位のうちに入る事など、絵空事にも等しい。

でも……だとしたら、母の人生とは、何だったのだろうか？　神によって狂わされた人生。好きな人と結ばれる事もなく、レイプまがいの妊娠をさせられ、産みたくもない子供を身ごもり、出産直後から10年もの間病床に臥す。一体何の権利があって神がこのように人を苦しめるのだろうか？　ユージーンは、そして荻号は言っていた。神はいつだって、人々の幸福のために生きている――と。恒はそんな神々に憧れ、尊敬だっただけ。それでもよりによつ父親たる神、主神として崇められている彼が、最も踏み外してはならない道を違えてしまっているらしい。殴ってやるとしたら、1発や2発では済

まされない。たとえ彼のフィジカルギャップで恒の拳が粉碎されたとしても、恒は極陽、ヴィブレルスミスを殴らなければ気がすまない。と歯を食いしばった。

「そんなこと、どうだっていいわ！」

恒が決意を新たにした時、志帆梨から思いがけない言葉が発せられた。志帆梨はわなわなと震えていた。怒りからなのか、不安からなのかはわからない。

「お前がたとえ神様だったとしても、天上に上がるとか、父さんを連れてくるとか、父さんが誰だとか、母さんちつともそんなこと興味がないの。それよりもお前が人間らしく、まっとうな人間になって大きくなってくれる方がいい。そんなこと、考えないで！」

「母さん……」

「お前はどうしたいの？ 父さんへの怒りだけで、そんなことを口走って！ お前は神様になんてなれる器じゃないわ、それよりもちゃんとした社会人になりなさい。お前は本当は何になりたいの！ じっくり考えてみなさい」

「何になりたいのって……」

「お前の中には何もないのよ。じゃあお前は何の神様になりたいのか言ってみなさい」

「……そんなの……」

「馬鹿な事は言わないで。お前の言っている事が本当なのか嘘なのか分からないけれど、母さんはお前が神様になるなんてこと、少しも誇りに思ったりはしないのよ。ユージーン様は立派だわ。とても優しく、大変なお力を持っていらして……、でも生まれつきそうだったとは思えない。想像を絶する苦勞をされているのよ、お前があの方のようになれるとは思えない」

恒は答えられなかった。一体何のために神になりたいのか、ひと言も答える事ができなかった。そうだ、実際自分は父への怒りや、風岳村で起こっている不条理に飲み込まれる事への拒絶だけで、神を目指すと言っていたのだと気づかされた。ユージーンや荻号のように自分を犠牲にしてまで人々を救い導く、その使命を微塵も考えずにはいなかった。自己中心的な考えだけで口走った言葉は、稚拙で薄っぺらだ。

「それに、私にはユージーン様が幸せだとは思えない。いい、恒。親はどうやってでも、子供を幸福にしてあげたいものの」

「でも！ 母さんだって父さんに、会いたいだろ？ そりゃ、憎い奴だけど……」

「会いに行つてはならないわ、恒」

「どうして！」

「お前は、新末 黎明 という神様に、おびき寄せられているのよ……そんな気がするわ」

「おびき寄せられている？ そんな！ 確かにそうかもしれないけど、それは自分の息子だからであつて……」

「タイミングが、おかしすぎるじゃない。まるで気にしてくださいと言わんばかりの入金、新末黎明という名前をあっさり出す事。それをお前がユージーン様に聞いたりなんかして、知っている事も推測済み。それらが全て計算ずくだったら？ お前は利用されようとしているのよ」

恒はそれを聞いて、自分の洞察力と警戒心のなさにぞっとした。怒りで頭が沸騰してしまっていたが、志帆梨の言うとおりで。

”、ンポーン、ピ、ンポーン”

二人の会話が途切れたときを見計らったかのように、インターホンが控えめに鳴った。このインターホンも壊れかけていて、壊れた

玩具のような音がする。

恒は母親に、自分が出るからと目で合図をして、玄関の鍵をあけにいった。夜間の客は来ないので、そういえば外灯もつけていなかった。パチンと外灯をつけると、ぽつと大きな影が玄関扉のガラスに映った。どうしよう、大男の影が映っている。恒は開けるべきかこのまま開けないべきか迷ったが、こじ開けてこられても困る。

方なく半分だけ開けて顔を出すと、彼は真っ黒な装束を身に纏っていた。目の前には真っ黒な手が見えた。その色は恒が初めて目にする色だ。日本人のそれではない、明らかに黒人の手だ。上を見上げると、やはり予想通り背の高い黒人の顔があった。彼は恒が目の前にいるにも関わらず、何故かずっと目を閉じている。首をすくめながら恐る恐る会釈をした頃には、メファイストフェレスに電話でもなんでもSOSを送ってから、ドアを開けるべきだったと後悔し始めていた。

「こんばんは。あの、どちら様でしょう」

彼はようやくまぶたを開いて恒を見下ろした。その目は大きくて真っ黒、でもどこか変だ。まったく瞬きをしない。恒はちよつとしたことでも不気味で、腰が引けてしまった。藤堂家はインターナショナルな係累はない。志帆梨がホームステイ先でお世話になった気のいい黒人の兄さんでも、街に行ったときに知り合ったクラブのDJでもない。だとしたら誰だ？ 彼も彼自身の怪しさに、気づいていない訳ではなかったようで、すぐに声をかけてきた。

「突然すまん。怪しいもんじゃないんだ」

「俺は藤堂 恒です。あなたのお名前は？」

「俺は織図^{おりと} 継嗣^{けいし}っていうんだ。はじめまして、だな」

また瞬きをせずに、低い声でそう挨拶をしてくれた。怯えさせまいとしておっとりと話してくれているようだが、恒は震えが止まらない。陰陽階叙階表を、上位20柱までは暗記しておいてよかったと思った。そうでなくては、とても心構えができなかっただろう。生きながらにして、死神と見えることとなるとは……！

「陰階神第9位、死神、ダグラスニーヴァー(Daglass Niever)、置換名 織図 継嗣……様。何故……？」

「そうだ、荻号さんの頼みで来た。以後、この村に降下できる神は、日常的に生物階降下を繰り返し、生物階での生と死を司る死神、つまり俺しかいなかったの……」

——満点の星ふる夜の藤堂家に、闇を纏った死神が訪問した。

第1節 第17話 数学神 ファティナⅡマセマティカの憂鬱

陽階神第9位、数学神 ファティナⅡマセマティカ (Fatima Mathematica) は臨時議会の閉会后、そこに用があつてもなくとも、思いつく限りありとあらゆる処に寄つてぶらぶらと時間をつぶした。たとえばお気に入りの洋品店のウィンドウショッピング、花屋の前を意味もなく通つてみたり、私書箱に自分宛の郵便が来ていないかチェックに行つたり、美容院に行つて髪を切つたりもした。

そうやって頑張つても、半日も時間はつぶれなかった。いつもは忙しすぎてそんなことをしている暇などないのに、いざ暇になると、余暇をどう有意義に過ごしてよいのかわからなくなるものだ。ファティナは諦めて、陽階から手当てのついた自分の部屋に戻るため、とぼとぼと帰途についた。

やっぱり、あの居候には出て行つてもらわなくてはならない。身分上格上だから気が引けるが、絶対に負けてはならないんだから、と気合いを入れなおす。

ヘクス・カリキュレーション・フィールド (六方魔方陣演算空間 Hex Calculation Field)、そこは六方形の部屋の中に設置されたスーパーコンピュータールームであり、ファティナの神具だ。この神具は陰陽階に現存する神具を含めても最大の大きさを誇る。コンピュータールームといっても、それらしいキーボードもディスプレイもあるわけではない。幾重ものパーソナリティチェックを受けてシステムのコアとなる、コンソールの部屋の中に入る。この中はファティナしか入れない……筈だった。

コンソールは薄暗く冷え切っており、黒曜石のような質感の壁面や床はファティナから発せられるアトモスフィアの光をうけて、鈍い反射をみせている。ファティナは靴音をたてながら更に奥の部屋に入ると、ごしごしとポケットに入っていた懐炉を擦ってかじかんだ白い手を温めた。ほう、と息を吐くと白い湯気がたつ、室温は4度だ。ファティナが椅子のようなコンソール台を見ると、専用のグローブとゴーグルをつけた荻号がでんと横たわってのさばっている。正確に言えば荻号の抜け殻、本体だ。荻号はこのコンソールから神体を電子化させて仮想空間に転送し、仮想空間の中で超速演算を行っているようだ。

ホログラムのモニターの中には、仮想空間に潜行中の電子化された荻号の姿が、緑のグリッドの間に極彩色のノイズにまみれて映っている。電子の化身のような姿になって、荻号はファティナの進入に気づいているのか、指先だけデータに集中しながら、モニターに顔を向けた。これが現実空間と仮想空間をつなぐ唯一の窓だ。声も聞こえるし、こちらの姿も見え、会話もできる。

” どうしてお前は、浮気者なの ”

荻号だけが持つ特異体質、” 全神具適合性 ” を知っていても、彼女は神具をなじらずにはいられなかった。長年連れ添った夫のような神具がファティナを差し置いて他神にいいように扱われているのであるから、かなりの屈辱だ。大体、神具というのは本来の持ち主の手の内にあっても、扱えるようになるまでにかなりの年月を要するものだ。てこずるのは当然だし、力を暴発させて大怪我をすることも稀ではない。取り扱い説明書だって何十冊もついている。

それなのに荻号は説明書など見ることなく、彼自身の圧倒的なアトモスフィアで神具の持つ触性抗体をねじ伏せ、簡単に従えてしま

う。しかも腹が立つことにただ力で支配するばかりではなく、その機能も予め知っていたかのように、持ち主よりも性能を最大限に引き出して使う。ファティナはオーナーだということも忘れて、これはもともと彼の神具だったのではないかと思ってしまうほどだ。ファティナの知らなかった機能やシステムが荻号によって大量に発掘されている。ファティナは自信を失っていた。彼女は咳払いをすると、踊るように鮮やかにデータの波を操る彼に、勇気を振り絞って声をかけた。

「あの、荻号様。非常に申し上げにくいのですが、そろそろ神具を返していただけないでしょうか」

「占拠して悪いな、ファティナ。もう少しだけ使わせてくれ」

「これ以上は、私の仕事にも差し支えます」

「あんたの仕事？ ああ、大丈夫。ちゃんとメモリを確保して走らせてるから」

「あなたが、私の仕事を？ 複雑系シミュレーションですよ？ 分かるのですか？」

「ああ、全部やってるよ。間違ってる箇所があったから修正コマンドも入力しておいた。29890時間までやってる。これでも邪魔はしていないつもりだぜ。あんたもたまには休んだ方がいい……俺の本体のポケットにポイント貯めてもらったカフェの無料券があるから、ケーキセツでも食ってこいよ」

29890時間だ！？ ファティナの処理だとせいぜい178時間といったところだ、つまり彼の情報処理能力はファティナの何倍だ？ 160・8倍！ たった半日で、29890時間分ものシミュレーションをやってくれているのだから、もういっそ荻号に任せの方がよいぐらいだ。仕事の効率にして換算すると、ファティナの1週間分ぐらいの仕事が片付いてしまっていることになる。

荻号という神は何者なのだろう？ 陰陽階はINVISIBLEの研究などに力を入れるより、どちらかというと荻号自身の研究をした方が有意義ではないのか。彼がいつから生きていて、どんな過去を持っているのか、神階に真実を知るものはない。齡3000歳を超える神階最長老の神ですらも彼がいつからいたのか分からないという有様だ。かの長老が物心がついた頃から荻号は既に神階にいて、今とまったく同じ姿をして既にこの調子だったという。

荻号は一体どのぐらい生きているのだろうか？ 3000年は生きていたことになる。だが、荻号の外見は人間で言うところの二十歳代にも見えるし、神として少しずつ老化をしていくという中で微塵も老化をしていないようだ。彼は生体時間を止めながら生きているのだろうか。そしてどうやって、彼がこのようにずば抜けた能力を得たのかということも疑問だ。彼は神の皮をかぶったまったく違う生き物のように思われる。

たとえば牛の群れの中に、牛の着ぐるみを着た何者かが紛れ込んでいるような具合に。一体どんな生き方をすれば荻号のようになれるというのだろうか。いや、誰も彼のようになれはしない。それが分かっているからこそ神階は、これほど素性の分からない荻号を虎の子のように後生大事にしてきたのだ。彼ならばINVISIBLEが現れたとしても、いつものように飄々としていて、何とかしてくれそうな気がする……些少の希望が、神々をINVISIBLEに對する無力感から救ってきた。

だからといって荻号が神々の味方なのかというところも疑問だ。一般的に成熟した神が2-3層という中で、荻号のマインドギャップは3層もあり、看破しようという気力さえ奪われてしまう。誰も彼の心を看破できず、下心を読むこともできない。ファティナは

荻号が何を考えているのかをマインドブレイクで看破しようとはなから思わなかった。

ファティナの横には、意識を仮想空間に転送し自我を失った荻号の神体がある。これだけ近い距離にいるのに、何もわからない。ファティナは荻号の腰のあたりにあるポケットから、言われたとおり無料券を取り出した。

「これは、ありがたく頂戴しておきます。でも、見学をさせていただけませんか？」

「ん？ いいけど寒いだろ、そこ」

「あなたの解析結果を、私も陽階神として見届ける義務があります」
「まあこれはユージーンのものだしな、別にガメた訳じゃない。解析が終わればちゃんと返してやるつもりだ」

現実空間にある荻号の抜け殻は、一振りの杖を抱えていた。ユージーン マズローの固有の攻撃的神具、G-CAM（分析的宇宙依拠現象把握機構…Grasp the Context by Analytical Microcosm）である。荻号はこの中にぎっしりと詰め込まれたデータを解析するためにファティナの神具を使っている。荻号の神体は、ヘクス・カリキュレーション・フィールド、G-CAM、相転星、そして慎刀^{しんとう}。合計4つもの神具を帯びてコントロールしていることになる……化け物だ。

荻号がG-CAMを持ってヘクス・カリキュレーション・フィールドに現れた時、ファティナは丁度仮想空間から出たところだった。ファティナの上司であり、後輩でもあるユージーンの手にはなく荻号の手にそれがあるのだから、ユージーンが死んでしまったのかと気が動転してしまった。つまり、陽階神である彼が陰階神である荻号に、死のいまわにまで所持し続けるであろう神具をどんな形であれ明け渡した事は、それほどの意味を持っていた。しかもユージ

ーンから預かったのだと聞いて、彼がどれほど逼迫した状況下にいるかという事が窺えた。それでファティナは自らの仕事もとりあえず、荻号に快く神具を貸したのだ。

仕事の遅れはないそうだから、とりあえず文句も言えない……それにしてもいつまで占拠するつもりだろう。ファティナの仕事1週間分もついでといって片付けてくれた彼が解析しているのだから、一瞬ですみそうなものだ。いや、スーパーコンピューター並みの頭脳を持つ荻号なら、わざわざこのような神具など使わなくとも暗算できそうなものなのに。……それほどの、難解な、あるいは膨大なデータなのだろうか？ G-CAMの中には、何が入っているのだろうか？ 尋ねなかったからかもしれないが、荻号はいつこうに教えてくれようとはしなかった。

また、今回の一件でユーザーは法務局に拘束され処刑中だというのだから、尚更不審なデータだ。中を窺い見てやりたいが、荻号はきれいにデータと痕跡を消しながら解析を行っている。ファティナが後で解析ログを辿っても、永遠に手がかりなど見つかりはしないだろう。心理戦をやるよりは、直接聞いてみたほうがいくらか可能性はあるかもしれない。単刀直入に、ファティナは尋ねてみた。

「荻号様、そのデータは何ですか？」

「ああ、これ。空間異常が起こっていた地区の時空間歪曲状態の観測データだ。ユーザーが必死こいてとってきた」

「それは、生物階ですか？」

「そ」

荻号はあっけらかんと答える。嘘なのだろうか？ それとも、本当の事など言わないだろうと疑われることを見越して、本当のことを言っているのだろうか？ どちらが本当なのか分からない。この神と付き合っていると精神的にも肉体的にも消耗をする。彼がたと

え何も考えていなくても、不必要に勘ぐりばかりをしてしまうからだ。

「これまでのデータからいえるのは、再びその地区に異変が起こるだろうって事だ」

「グラウンド・ゼロの事ですか？ そうなんですね？」

荻号はファティナが何も知らないと思って歯に衣着せた物言いをしてくるのだろう、だが今日の議題で聞いた言葉、”グラウンド・ゼロ”との関連を疑ったファティナは、すかさずつつこんでみた。

「そうだな。もう一度行って、調べてみるべきなのかもな」

「残念ですが、それはできませんよ」

「何故？」

「今後、グラウンド・ゼロには陰陽階所属の全神が介入禁止との勅令が出ています」

「いつ」

「本日付けです」

「それは、極陽が決めた事じゃないだろ。比企が炊きつけ、誰かが圧した」

——鋭い。ジーザスⅡクライストが極陽に強いて通した命令だ。

極陽はユージーンをうまく動かして、グラウンド・ゼロへの介入を望んでいた。比企と極陽のいざこざ、ジーザスの仲裁、そんな構図が彼には一瞬に見えたことだろう。荻号は少しも動じている様子はない。ファティナには口が裂けても言えないような事が、次々と彼には理解できているに違いない。

「まあいいさ。陰陽階所属の神は、だろ……？」

他にあてがある、そんな顔をしていた。陰陽階所属でない神……ファティナも確かに思い当たるふしがあった。陰階神第9位、死神、

ダグラス＝ニーヴァー(Douglas Never)、置換名
織図 継嗣だ。確かに死神である彼なら、陰陽階所属者として勅
令に縛られる事はない。彼は便宜的に陰階に所属しているが、人間
や動植物の生死を司る彼が利権争いなどに巻き込まれず中立である
ために、彼の身分は陰陽階から独立していた。しかも法務局の監査
対象外という特権を持っている、その彼がグラウンド・ゼロに行く
のは合法、言うなら完全犯罪だ。荻号は織図と懇意にしている、織
図も断りはしないだろう。織図をグラウンド・ゼロへと遣わせて、
何をするつもりなのだろう。

「荻号様！ 誰を代理に立てたにしても、神階の意思に反します」
「このままあれを放置しておく、人死に出るぞ。神階の意思と
やらに、無実の人間を巻き込みつもりなのか？ いや、人死にだけ
では済まされない。いずれあの綻びから……」

「そんな……そんなに、大変な事が起こっているんですか……？
グラウンド・ゼロとは、何を基準にした 0 ですか？」

「大体、グラウンド・ゼロっていうのは、震源地みたいなものだろ
？ 大事故が起こった場所にも名づけられる……まあまだ起こって
いないのだから、起こりそうな場所ということだな。神階にとって
の大事件であり大事故、それは何だ？」

神階にとっての大災厄、それはINVISIBLEの介入しかあ
りえない……。荻号が最後まで言わずとも、すぐにそれが結びつ
いた。ファティナはこの話を、聞かなければよかったと後悔した。
INVISIBLEとは原始のエネルギーであり、空間創世を成し
遂げた力……。それが今、何の目的を持ってか、あるいは何の目的
も持たないままに生物階に介入しようとしているのだろう。

宇宙の創造と破壊はどこでも起こりうる。それがたとえば、教
室の中であっても、トイレや引き出しの中からであっても……確率

的にはどこでだって起こりうる。缶ジュースの中からだって、原理的にはブラックホールが生まれもする。宇宙はどこからはじまっているのか、空間はどこにあるのか。神々も人々も、自らが宇宙の中に漂っている塵芥であるということを忘れている。グラウンド・ゼロを基点に起ころうとしている事は、誰にも想像などつかない。この空間にある者は均しくこの空間での思考に縛られているので、新たな宇宙と接する境界面ではどんな空間法則が支配しているのかもわからない。しかしひとつだけはっきりしている事がある。……それは破滅だ。INVISIBLEからの介入が入るという事は、この時点で起こっている何かを変えようとしている。

「ブラインド・ウォッチメイカー（盲目の時計職人）がグラウンド・ゼロで何をするつもりなのか……。どうやら奴は、何度それを消し去っても、開くべきか迷っていた扉を忘れるつもりはないらしい……時計職人は一体、この世界の何が気に入らないのか……」

モニターの中で電子のノイズはとぐるを巻き、火炎の嵐のように荻号を灼いていた。

神々は来るべきINVISIBLEの介入に、十分に備えてきたのだろうか――？

＊

天野 凜はパジャマ姿のままスケッチブックをかかえ、とぼとぼと夜道を歩いていた。街灯がないせいか、風岳村の夜は他の村と比べて深い。のっぺりとした深淵がまとわりついてくる。夜風が田畑を撫でるざざりという音でさえも、臆病な凜を震え上がらせる。一瞬でも気を抜けば闇に引きずり込まれてしまうような危うさ、それを振り払うようにして、歩道もついていない車道を歩いていた。時折車のヘッドライトがぱあっと凜の影を浮かび上がらせたが、それほど勇気付けられはしない。やはり、彼に会うまでは……。

クラスの副担任でもある神様は、寂しくなったら夜中でもいつでも社務所をたずねてくればいいと言ってくれた。またしても父親の出張で一人ぼっちの自宅を飛び出し、逸る気持ちを抑えて走ったり歩いたりを繰り返しながらここまでやってきた。ユージーンは今日は欠席だったが、夜まで社務所にいないということはないだろう。彼は社務所をからっぽにして留守にしたことがなかったからだ。きっと社務所には誰かがいる、それが神様でないにしても、きっと誰かがいてくれる……凜にとって社務所は灯台のように、どんな闇の中でも光が点っている場所だった。

凜が顔を上げたとき、風岳神社入り口のバス停が見えた。一日に5回しかバスのこないバス停だ。深い杜の中にある神社、その傍らの風が吹けば飛ばされてしまいそうなプレハブが社務所だ。砂利道を踏んで参道に入る。虫や蛙の鳴く声が聞こえた。湿った玉砂利が、つつかけの裏にゴリゴリとした感触を伝えた。真っ暗な参道の奥には、白熱灯の光が優しく点っていた。神様は平日は寝ないらしいので、ここは交番のごと、24時間営業だ。寝るのは土曜日だけと決めているのだそうだ。凜はほっとして、社務所の中に駆け込んだ。

時間にしてその少し前だが、メファイストフェレスと皐月は社務所に戻ってきていた。メファイストフェレスはユージーンが残っていたパソコンを開くと、コンセントを繋いで電源を入れ、それと同時にファンクションキーのF10を押した。ユージーンのアトモスフィアを認証して起動するこのパソコンは、メファイストフェレスでは起動できない。だが、持ち主以外が強制的に起動させることのできる、強制コードというものがある。セキュリティのため1年毎に更新される強制コードの番号はユージーンに教えられていたし、法務局のゲイルに逮捕される前に、必要ならばこのパソコンを起動してもよいとの許可をもらっていた。このパナソミック製のレ

ツツノートは神の持ち物であり、神々の叡智が詰め込まれている。複雑な暗証コードを素早い操作で入力すると、制限モードでパソコンが起動する。これは持ち主以外のログインを認めたもので、プライバシーの保護のため、メールなどは閲覧できないモードになっていた。

皐月はぼんやりと、石沢 朱音のことを考えていた。あの子が、天使だったなんて……。それを言うなら、藤堂 恒が、神様だったなんて……。というのもある。今後皐月は教師として、彼らにどのような進路指導をすべきなのだろう？ 人間として生きる事ができるなら、そうさせてやりたいものだが……。メファイストフェレスの話を聞く限り無理なようだ。こんな悩みを持つ教師は、世界中にきつと皐月しかない。

昨日から今日にかけて、あまりにも多くの事が起こりすぎた。皐月は混乱する頭をかかえながら、ひたすらにすっかりしなくては、と心の中で繰り返した。どちらも大切な生徒のことだ。担任である自分がすっかりしなくては、子供たちを護れはしない。人間である皐月には何の力もないし、ユージーンや彼女のように誰かを護れるなどとは思っていないが、真実を知る事が身を護る事になる。智は力なり、先人はよく言ったものだ。何か解る事があれば、少しずつ謎を解いてゆくしかない。あまりにも解らないことが多過ぎた。

ふたりは並んで腰掛け、ふたりでモニターの視界を分かち合った。昨日会ったばかりなのに、もうすっかりこのふたりは仲良しだ。真剣な面持ちでパソコンに向かうメファイストフェレスに、皐月は控えめに尋ねてみた。

「パソコンで、何をするんですか？」

「とりあえず、神階の動きをさぐることね。敵を知り、己を知れば、百戦危うからず、よ」

「敵って……神様たちが？」

「そうよ、ここまで証拠が挙がっているんだもの。主は何者かにハメられたのよ。恒も、ついでに朱音もね。この村で何が起こっているのかは分からないけれども、でもそれを見越して主を、恒を、朱音を利用しようとした者が神階にいる。彼にはわかつている筈よ……この村で何が起ころうとしているのか……」

「でも、ここで神様たちの動きをどうやって……」

「これよ」

メファイストフェレスはインターネットを立ち上げ、アドレスを打ち込んだ。でも、何か変だ。普通はhttpで始まるアドレスが、g t p pになっている。こんなので、アクセスできるのかと思ったが、パソコンからチャッ、という接続音が聞こえ、しっかりと目的のアドレスにリンクされた。皐月の目の前に現れたのは、何語で書いてあるのかも分からない、夥しい文字列だ。これは何の言語なのだろう。象形文字のようにも見える。

「お前には読めないでしょうね。これは神語といって、神階で用いられている表意文字なの」

メファイストフェレスはこれだけは皐月が唯一読めた、ページの【E n g l i s h】と書いてあるボタンをポチッと押した。すると、ホームページの内容が全て英語に変換され、皐月でも読めるようになった。やっと人間らしい言語になってくれた。

「英語ぐらいいは、読めるでしょうね」

「大丈夫です」

皐月が見たのは、G L ーネットワークという文字だった。神階情報連絡網（G o d s L i n k a g e N e t w o r k）と横のほうには小さく正式名称が出ている。官公庁のホームページのように用いられている、神々の公的なウェブサイトのようだ。法務局から

の通達という欄に、陽階7位枢軸 軍神 ユージーンⅡマズロー、死者蘇生の罪により逮捕との見出しがついていた。かなり大きな取り扱い、ヘッドラインだ。

「軍神って……何ですか？」

「面倒くさい質問はまたにして頂戴。戦争と平和を司る神のことよ」
メファイストフェレスはそれ以上は説明してくれようとはしなかった。皐月は神は神というものののだと思っていた。神話や伝承には確かに軍神という言葉もあるけれど、なんとかの神、という前置詞があるとは思わなかった。軍神……ということは、戦争の神なのかしら……皐月の心は一気に暗くなった。脳裏に、エドマームスタフィを殺せと言っていたユージーンという言葉がまざまざと蘇る。

あれはやはり、やはりというか間違いなく、殺害指令だったのだ。教室をうるさく飛び回っていた蠅をも、殺さず外に逃がしてやっていた彼が人殺しだなんて……。戦争犯罪人を裁いてゆくのが彼の仕事なのだろうか。それとも、戦争を起こす事が彼の仕事なのだろうか……。余計な事を考えている暇はなかった。ユージーンが帰って来た時に、直接聞いてみよう、そのことであれこれ思い煩うのは時間が勿体無い、こんな脱線をしている場合ではないわ、と皐月は首を小さく左右に振った。

死者の蘇生は重罪。法務局がユージーンに下した処分が掲載されていた。身体罰、49日……。メファイストフェレスはそのヘッドラインに目を細めると、さっさと読み飛ばした。死んだほうがましだと思われるような刑を24時間、延々と49日も課せられるのは気の毒だが、ユージーン自身が決めたことだ。口出しをするつもりはない。しかも執行猶予などというものはないから、もう既に刑を受け始めている頃だろう。

「フィジカル・パニッシュメント、49日間って、何ですか？」

「神階の刑法は選択式刑罰なの。主は最も短期間で済む身体罰を選んだのでしょうね、49日間、24時間の虐待のことよ。ちょっと質問はしないでと言っているでしょう」

嫌味を言いながらも、メファイストフェレスは丁寧に答えてくれる。

「虐待だなんて……本当に？！ 信じられない！ それをするのも神様たちなんでしょう？」

「そうね、考えられる限りのありとあらゆる虐待が行われるわ。古典的なものから、現代的なものまでね。神々が博愛に生きるもんだと思ったら、大間違いよ。そんなことより……これはどうということなのかしら」

メファイストフェレスがコツンとディスプレイを指した、記事は赤字で書かれていた。読めと言われているのだと思って、臯月も顔を近づけて読む。英語は論文で読みなれているが、神々特有の専門用語が多くてこずる。まったく和訳になっていないな、と思いつつも苦勞して訳してみた。

「ええと……アルティメイト・ポジティブの勅令、により、今後オীগニックフロアのエリア8936にはポジティブ・ネガティブにかかわらず、全ての神が介入禁止。……私にはさっぱり」

「下手糞な和訳ね。エリア8936とは、この村のことよ。そこにどんな神であれ今後は一柱も立ち入ってはいけないと、書いてあるのよ。神々の最高位にある者アルティメイト・ポジティブ(Ultimate Positive・極陽)の勅令でね」

これは一体、どういうことなのだろう。確かユージーンをこの村に派遣したのは極陽だということだった。自分で下した勅令を、自分で否定するなんて……。あるいは、彼か？ 極陽がユージーンを

はめたのか？ メファイストフェレスは渋い顔になった。だとしたら、太刀打ちできない……。極陽は主神（Lord of Gods）、神階で最も権力を持つものだ。実力だって神々の長たるものに相応しい……。

急に彼女がしかめっつらをして黙り込んでしまったので、他に手がかりはないものだろうかと、皐月は皐月で別の記事を見ていた。こうなってくると、何から考えていいのかわからない。メファイストフェレスもさすがに参ったといった顔をして、長い髪の毛を神経質そうにいじっていた。

メファイストフェレスは突然はっとして、胸の谷間のマクシミニマを取り出した。

「何かひらめいたんですか？」

「違う！ たった今、この村に神が降臨したわ。どういうことなの？ 神はこの村に介入禁止と、ここに書いてあるじゃない。誰が来たの？ マクシミニマ、特定しなさい」

メファイストフェレスは神々の気配を察することができる。いや、マクシミニマが胸の谷間でバイブしていたから気づいただけだ。彼女はマクシミニマを哨戒モードにしており、この村に起こる異変を観測させていた。皐月もすっかり見慣れた髑髏が、緑色の光を吐き出しながらカタカタと歯音を鳴らす。

” 個別照合できません ”

何故解析できないのかメファイストフェレスはすぐに思い当たった。光学迷彩だ。マクシミニマは光学情報を基に解析をしている、光学サーチモードが攪乱されているとしたら、光学迷彩を身にまとっているからだろう……。すると降臨したのは陰階神だという証拠だ。陽階神は光学迷彩能のある聖衣など着ない。このタイミングで、陰

階神が来るとは……。彼は味方なのか、敵なのかすらわからない。面倒な事になったな、というのは皐月も察知した。

メファイストフェレスが、ちっと小さく舌打ちをした時、ガラガラと社務所のドアが開いた。メファイストフェレスは反射的にマクシミニマをそちらに向ける。髑髏の目が赤く輝き、敵味方判別を行っている。入ってきたのは、パジャマを着た少女だった。

「天野さんじゃないの」

皐月がそう声をかけ、メファイストフェレスも面識があった。そう、天野 凜が社務所を訪ねてきたのだ。皐月は立ち上がって、彼女を招き入れた。天野は皐月を見てほっとしたような顔をしていたが、すぐにきよろきよろと辺りを見渡す。ユージーンを捜しているのだという事ぐらい、すぐに見当がついた。ここに住んでいるのは彼しかいない。明かりがついているので、彼がいても思ってたのだろう。

「どうしたの？」

条件反射から敵意をむきだしにしていたメファイストフェレスもとりあえずはマクシミニマを胸の谷間にしまって、天野が座するための椅子を寄越した。それでも副担任代理だ。一般人の子供を怯えさせてはならないと、さすがの彼女も心得ていた。

「ユージーン先生、まだ帰らないんですか？」

「え？ ええ、ちょっとしばらく出張に出かけているらしいわ。それより、どうしたの？ 私達でよければ、話してくれない？」

この一大事だというのに、という思いは億尾にも出さず、皐月は優しく彼女に語りかけた。それよりも悩みだか用事だかを訊いて、早く帰ってもらわなくては。こんな夜更けだから、自宅まで送っていかなくてはならないかもしれない。ユージーンがいないので、凜は話すことを渋っているようだった。

「……うーん」

「妾達には、話にくいような事？ 何でも言ってくれていいのよ、力になるから」

メファイストフェレスはパソコンをスタンバイモードにして閉じてこちらの件に集中し、彼女の顔を覗き込んだ。ユージーンの代理を任されているのだから、彼の代理となるよう務めなくてはならないと思っているようだ。メファイストフェレスがこんなに優しい声を出しているのを、皐月は彼女と出会ってから初めて聞いた。その声に天野は安心したのだろうか、脇にしっかりと抱えていた緑色のスケッチブックを取り出した。

「前もなんですけど、無意識のうちにおぼけみたいな、鬼みみたいな絵を描いていて……でも、全然記憶にないんです。ユージーン先生なら、何か分かるかと思ってきたんです」

「とりあえずそれを、見せて頂戴」

凜はスケッチブックを、できるだけ自分では見ないように目をそむけながら、社務所のテーブルに置いてページを繰った。メファイストフェレスと皐月はそれらを一つずつ見ていった。皐月はそのスケッチのような絵を見て、信じられなかった。凜はこんな絵を描くような子ではなかったのだ。美しい自然の風景や、幻想的で抽象的なイメージを、独特の鮮やかな色彩で表現する子供だった。それがどのページを見ても怪物じみたおぞましい顔を描いている。メファイストフェレスは頬杖をついて、ページを繰りながら一つずつ見ていた。凜は震えながら二人の様子をうかがった。

「ど、どうですか？」

「どうして、こんな絵を？ 全然、覚えていないの？」

皐月は問いたしたが、凜は何も知らないと言を振るばかりだった。メファイストフェレスは凜のために一杯の熱いお茶を煎れ、お

かきを皿に入れて、凧の前に置きながらこう言った。

「どうして、この絵を鬼だとかお化けだとか思ったの？ 妾にはそうは見えないわ」

「だって、どう見たって鬼みたいじゃないですか。この子は怖がっているのに、そんな言い方……」

皐月が震える凧の肩を優しくさすってやりながら、代弁してやった。するとメファイストフェレスは最初のページに描かれたこの世のものとも思えない異形の絵を、真っ赤なマニキュアで丁寧に塗られた長い爪のついた指で指した。

「よく見てごらんさい。ここ、ここも、ここも……」

そしてその指をつい、と凧の方に向け、どこから取り出したのかも知れない黒い小さな手鏡を渡した。

「この怪物はとても詳細に描いてあるから、細かい部分がよく分かるわ。鏡でよく見てごらんさい。ここに書いてある黒い点と、あなたの顔のほくろの位置と、まったく同じよ。先入観は時に、人の目を狂わせる。これは怪物や鬼なんかじゃない、天野さん自身の姿よ。自分がこんな顔をする筈がないと思っ込んでいるから、自分の脳が判断できなかっただけでしょうね」

鏡を見て気づいた凧はもう既に恐怖のあまり、大声で泣き出していた。皐月は必死で凧を抱きしめてやるしかなかった。何も知らない筈の人間が、自分の未来の姿をこのように描いている……偶然だとは思えなかった。危険がすぐそこまで、迫ってきているのだ。

「よく、この絵を持ってきてくれたわ……。自分をこんな顔に描く事は、ありえないものね。怖かったでしょうに」

メファイストフェレスは、また一枚ずつ絵をめくっていった。皐

月はティッシュを凜に渡すと、凜は盛大に鼻をかんだ。

「これは、阿鼻叫喚の地獄に遭遇している、あなた自身の絵よ。人間だって生き物だからね。危険を察知する本能が残っている。その本能が、未来を予知しているのかもしれないわ。ここから逃げろと繰り返し警告している。よくわかったわ、これは急がないといけないわね。人間達にも影響が出はじめている。荻号という神が空間を補正したけれど、これで終わりではなかったようね。皐月、妾はちよっと出かけてくるわ」

「私も行きます！」

「その子を置いてゆくつもりなの？」

メファイストフェレスは一応、凜を気にしてくれているらしかった。どこに行くと言わなくとも、メファイストフェレスが風岳に降臨したという神のもとに行くという事はわかりきっていた。ひとつずつ、少しずつ解らないことから片付けていくしかない。ひよっとするとその神が、何かを知っているのかもしれないと思ったのだろう。情報交換に行くのか、それとも偵察に行くのかは状況によるだろう。

皐月は教師として、凜の傍から離れないのが正解だと思った。

第1節 第18話 死神、織図継嗣の来訪

恒は玄関に立ちふさがったまま頑として譲らず、彼を一步も家の中に入らせようとはしなかった。彼は相変わらず吸い込まれそうな黒い瞳で、瞬きもせず見下ろしている。そんなに大きな目なのに目が乾かないかな、と思いかけて恒は彼の目が見えないのではないかと思った。確かに、恒を見下ろしているが、ピントが合っていない。焦点も虚ろだ。盲目の死神……それでも、恒の家を突き止めてやってきたのだから大したものだ。それにしてもここに、何をしにきたのだろう。恒の想像力では一つしか思い当たらなかった。

「織図 継嗣様、俺か、母を迎えに来られたのですか？」

「迎え？ 何の迎えだ？」

「あなたは死神です、ならば迎えというの一つしか」

「死神ってのは、命を取りにこなきゃいけないもんなのか？ 大体

死神は、無意味に人の命などとったりはしない。お前もあの口か？

なんとかノートの見すぎか？ 言つとくが俺は、名前を書けば人

が殺せるノートなんて持ってないからな。人の命をとらなかったか

らといって、死神大王に怒られるようなことは、ない！」

ユーモアのある死神だな、と恒は噴きだした。彼が言っているのは、巷で流行っているらしい漫画のことだろう。恒はそもそも漫画など読んだ事がないが、巧がはまっている。生物階のサブカルチャー事情にも詳しいようだ。

「ごめんなさい、勘違いでした」

「わかればよろしい」

「荻号様の頼み、と仰っていましたが……」

「頼まれたのも、今日の今日の話だしな。荻号さんが言うには、と

りあえずお前さんと会って、神として一人前にしてやってくれ、だ
とよ」

「神として、一人前に？」

日本語がおかしい。神として一人前？ 一神前という言葉がない
ので仕方がないのだろうか。狙って言っているのだとしたら、つっ
こんだ方がいのだろうか。陰階神というのはどうもちゃらけてい
るように見える。生真面目な陽階神のユーザーしか、恒の思いつ
く陽階神の例はないが、荻号といい、織図といい、格好もだらしな
いし、言葉もくずれている。

「そう、一人前にだ。まったく、昔からあのヒトの考えている事と
いったら、突拍子もない事ばかりだ。俺だって結構、忙しくしてる
んだぜ？ それがどうしてお前さんみたいな子供に、こんなしち面
倒くさい事をしなきゃならん」

「俺が聞きたいくらいです。どうしてこんな時に、そんな事を……
？」

「荻号さんは最低でも、お前さんにマインドギャップを身につけて
ほしいそうだ、今すぐ。ほれ、今すぐだとよ」

マインドギャップのことは知っていた。神々の行う読心術と、そ
れに対する防御術。神々は日常的にマインドブレイク（心層看破術）
を行っていて、マインドギャップのない相手の思考を看破できる。
マインドギャップとは、思考看破をさせないための心の防御壁だ。
荻号はこんな一大事に、何を考えているのだろうか？ そろそろ、ユ
ーザーが命がけで取ってきたG-CAMのデータを解析した頃だ
ろう。その答えが、これなのか？ 恒と織図がしようとしている事
は、家が火事だというのに黙々と家にこもって、煙に巻かれながら
筋トレをはじめのようなものだ。普通は火事を消火するか、逃げ
るかだろ。世界一の智力を持つとされる荻号が、たまらなく馬鹿に

思えてしまった。

「つか今、荻号さんの事、馬鹿だと思っただろう」

「あっ！」

「俺もそれは賛成だ。まあこういう具合に、お前の心の中は俺に筒抜けだ。お前が今何を考えているのか、今日何を食べたのかだって分かるぜ。こういう無防備な状態から、お前の考えを見透かされないようにするために、マインドギャップを作れてこった」

「でも、どうして俺がそんなことをしなきゃいけないんですか？
どうして、俺なんかが？」

「お前、極陽の息子だろ。荻号さんがそう言ってたぞ」

「え！　そ、そうみたいです」

恒は既に結論が出ていた事を駄目押しのようにそんな事を言われて、素直に認めるしかなかった。もうどうにでもしてくれと思った。荻号はきつと最初に出会った時からそれを見抜いていて、それで興味を持って接触していただけた。馬鹿だと思ってしまっただけで申し訳なかったが、あの神は抜かりがない。

「その事と、何か関係があるんじゃないか？　荻号さんがお前に作れと要求してきたマインドギャップの数……それは10層だ。これってのは、極陽のそれと同じなんだよ」

「極陽と同じだけの、心の壁を……？」

「ま、筋金入りの引きこもりになれってこった」

織図はけらけらと笑うが、彼自身のマインドギャップは5層だという。自分だってできていないくせによくそんなことが言えるな、と恒は睨んでやった。

「大体、読心術の原理はどうなってるんですか？　それが分からないと、防御のしようありません」

その時、恒がなかなか帰ってこないの、奥の方から心配した母

親が出てきた。母親は織図の姿を見て、ぎょつとして立ちすくんでいた。彼は見るからに怪しい黒いローブを纏って、しかも人種からして違う。彼女は黒人を（実際は黒人ではないのだが）、初めて見たのだ。織図はへこりとお辞儀をして、淡い光環のついたドレッドの頭を下げた。

「こんばんは、奥さん。怪しい者じゃござんせん」

「母さん、この方も神様なんだ」

母親は頷きながらもまだ怯えているので、織図はちょっと失礼、といって玄関から出て、すぐにまた玄関を開けて入ってきた。何時の間に着替えたのだろうか、黒い聖衣を脱ぎ、真っ白のジャケットとパンツの私服で現代風の装いとなった。これならば母親もテレビなどでよく見る黒人の姿だ。母親はようやく生きた心地がして、片手を差し出す織図と握手をすることができた。

「恒の母です。息子がお世話になります」

お世話になります、と言ってしまったが、本当はお世話になりましたなどなかった。恒にはま人間になってほしい、それなのに早速神様がやってきて、恒をどうするつもりなのだろうか？ まさか恒を連れにきたのではあるまいな、と疑いの目を向けてしまう。

「とりあえず、お上がり下さい。こんなあばら家ですが」

「は、では遠慮なく」

蚊が入ってきたので、このままもたたとここに突っ立っていてドアを開けておくこともないな、と恒も思った。蚊取り線香を玄関口でたいて、恒は織図を中に招き入れた。玄関扉を閉めたとき、織図は恒を守るように背中側に隠して、どこから出したのか分からない巨大な物体を取り出し、玄関扉に向けた。それは枠の中に収められた、縮小版ギロチンのような物体だった。状況から考えると、織図の固有の神具、死神の鎌といったもののなのだろう。ぬらぬらと青

く輝く切れ味の鋭そうな刃先が、的確に外の人影に向けられている。

織図は目が見えない分、気配には敏感なのかもしれない。その人影はいつ現われたのだろう、恒は母親を振り返った。既に居間の方に茶を準備しに行ったようだった。とりあえず、この光景を母親に見られなくてよかった。病弱な彼女ならば血圧が急に下がるか上がるかで、倒れてしまっただろう。一体何がいるというのだろう、恒は織図の影から、首を出した。それを織図はぐいっとまた背中に押し戻す。

「おい、いるのは分かっているんだぜ……カオティックフロア・レジデント（解階の住民）さんよ。俺と一戦やりにきたのなら……後悔する事になるぞ」

解階の住民、そう聞いて、恒はあっと思った。メファイストフレスじゃないのか、そう思って声を出そうとしたが、織図は恒の口を押さえた。もごもごと口ごもる。そうこうしているうちに、勢いよく玄関扉が開いた。威風堂々と、メファイストフレスの登場だ。これは大変な事になる！ 恒は織図の腕から逃れようともがいた。

「そっちこそ、命は惜しくないんでしょうね？」

「残念だったな。俺は普通の神とはちよつと違ってね、手こずる事になると思うぜ？」

「やめてください！」

恒はなんとか織図の怪力を振り払って、織図と彼女の間に立った。マクシミニマがべったりと戦闘モードになって、赤黒い光を放っている。織図の持つ大鎌が、頭の上を掠めている。死神と魔女の世紀の一戦、見てみたい気もするが、よそでやってほしい。ここは古いしがたがただとはいえ、愛着のある我が家だ。

「どきなさい、恒」

「織図様も、メファリストさんもやめてください」

「メファリスト、お前、魔女メファリストフェレスか？ ユージーに殺された筈じゃ……」

「もうやめてください！ 今はこんな事をしている場合じゃありません、それにここは、俺の家です！ やるんなら外に行って下さい！」

恒の必死の言葉に、ふたりはしぶしぶ互いの得物を収めた。織図が先制をしかけたのは、間違いではなかった。解階の住民は基本的に、神々に無関心だ。それがわざわざ近づいてきたのだから、一戦やりあおうとしているのだ、と織図が思ったのは無理もない。メファリストフェレスは相手が神具を抜いているのだから、マクシミニマを構えもする。恒が止めなければ既にこの辺り一体は黒こげだ。

「まったく、ユージーの詰めめのは甘さは神階一だ。腕に展戦輪（Circle Of War）の御璽など入れて、すっかり奴の飼犬か。おい、これは法務局に連絡しておいていいんだろうな？」

「おかげさまで、どうも。軍神下第0位使徒として奉職しているわ。法務局にチクるなら、ぶっ殺すわよ。それに、陰陽階全神はこの村に介入禁止の筈だけど？ あらやだ、法律違反？」

「あいにく、俺は法令適用外なの、言ってみりゃリベロだ、わかる？」

「ふたりとも、そこで罵り合うか、奥でお茶を飲むか、どっちがいいんです」

「そりゃ、勿論、お茶を飲むわ」

「おじゃまします」

お茶を出すというと神でも魔女でも人間でも、おとなしくなるものなのだな、と恒は最近心得てきた。我が家にこんなにキャラの濃いのが、ふたりも！ 恒は上品で品行方正なユージーの帰りが待

ち遠しかった。しかし、何日かは分からないが、彼がしばらくこの村に帰ってくる事はない。恒は少し鼻の奥からじんわりときた熱いものを、しゅんと鼻をすすって、無理にまた奥に押し込んだ。

＊

ゲイルリンクスワイラーは、刑場に吊るされたユージーンを見上げていた。まだ1日目も終わっていないのだが、既に彼の神体は血まみれだ。10時間の電気地獄の後、古典的な鞭打ち刑だった。それも普通の鞭ではない。刃物が埋め込まれた鞭で、何千回も打ちのめす。最初は強固なフィジカルギャップがあるので傷つかないが、千回を超える頃にはようやく神体に傷が入る。ざっくりと皮膚を刃物が切りつけてゆく。普通はうめき声の一つも上げそうなものなのに、彼はまだ一声もあげてはいない。意識を失っているのかと脳波を監視するが、しっかりと意識はあって苦痛に耐えている。

ゲイルは神のみならず、使徒も裁いてきた。身体刑を選んだ使徒はあまりの苦痛に耐えられず、懲役刑に変更してくれと懇願するものが続出した。身体刑に耐えられないと判断した場合は仕方なく懲役刑に変更となる。位神も身体刑を受けた者がいたが、なんとか最後まで耐えたものの、狂ったように声を上げ、泣き叫ばない者はなかった。それほど残酷な刑罰だ。

彼の受刑の様子は、明らかに他の神々とは一線を画していた。まるで荻号を処刑しているかのように、刑場は静かだ。もっとも、罪を重ねる事が常連だった荻号は神経ブロック、つまり神経切断をして苦痛をまったく感じないようになっていた。神経が切れているのだから、苦痛を与える事はできない。そんな卑怯な手を使っているわけではないのに、彼の受刑態度は尊敬に値する。若いのに大した神だ、いや、この精神力があってこそその枢軸神なのかもしれないな。

ゲイルは刑場の見える監視部屋から、書くべきか迷っていた書類に、たつぷりとインクをつけた羽根ペンを走らせ始めた。優良受刑者、減刑のための嘆願書だ。ユージーンを受刑態度は賞賛に値する。法務局の古参の判事たちはこの光景を見ていないから分らないだろうが、彼にはこのたびの犯罪を行うにあたり、強い信念があったに違いない。決して衝動的な犯行ではなかったのだと、ゲイルは気づかされたのだ。彼にはなすべき事があって、社会復帰に向けての意欲が、この過酷な刑罰に彼自身を臨ませている。ゲイルがこの書類を書くことになるのははじめてだ。減刑の嘆願が聞き届けられれば、刑期は1／3、つまり16日前後になる。この特例措置は、神々や使徒には明かされていない。刑期の減少を狙って、わざとに受刑態度をよくする者が出てくる可能性があるからだ。

「ユージーンⅡマズロー、あなたには何か成し遂げなければならぬ
い事があるようだ。ならば私も、あなたの力になろう」

冷徹な法の守護者、監察官ゲイルⅡリンクスワイラーは書類を書き上げると、血判をついた。この書類は、受刑後一週間を経ないと提出できない。受刑態度は1日や2日で判断できるものではないからだ。しかしゲイルは、一週間後もユージーンが同じような姿勢で刑に臨んでいると信じて疑わなかった。ゲイルは血飛沫の飛ぶ刑場で嬉々として鞭を振るう執行官に冷や水をかけるかのように、輸血と処置の指示をした。これ以上の失血は意識レベルが低下する、手当てをし、輸血をしてからまた刑を執行する。なんという残酷な刑罰だろう……しかしそれでも、これがゲイルの仕事だ。

「やはりあなたは、誰かににている……誰なのだろう？」

ゲイルにはまだわからない。

＊

石沢 朱音はバレエのレッスンから帰って遅い夕食を食べ、”渡る世間に鬼ばかり”を大笑いしながら見終わると、自分の部屋で宿題を済ませ、就寝前の楽しみであるネットサーフィンで、5ちゃんねるをROMしていた。BGMは小学生のくせに洋楽。渡鬼好きでオバサンくさい事をのぞけば、朱音は至って普通の現代っ子である。まずはニュースヘッドラインを見ると、お気に入りの記者が頑張っている。記事は掲載している。彼は24時間、365日記事を書き続けている。記者はいつ寝ているのだろう、などと思いながら「この速さならぬるぽ」と書いてあったので、反射的に「ガッ」をしてしまう。更に1行ほどのレスをつけて、もう飽きたらしく、お目当てのスレッドを捜しはじめる。

メニューの下の方へスクロールしてゆくと、まちBBSという掲示板がある。以前は別のスレッドの住民だった朱音だが、最近はこの板（掲示板のこと）に入り浸りだ。この板には、朱音の住む伊辺郡のスレ（スレッドのこと）もある。

ここに来るようになったのは1週間前からだ。親友の天野 凜が、このところずっと暗い顔をしていた。内向的な性格なのでもともと思いつめる方なのだが、このたびは思いつめ方がいつもと違った。何かあったのかと聞いても、首をふるばかり。朱音は凜のお気に入りのおやつで釣ったりして、何とか悩みを聞きだすことに成功した。凜は、毎晩毎晩、無意識のうちに鬼の絵を描いているのだという。おそらく寝ている間だと思われるが、スケッチブックに毎日一枚ずつ追加され、しかもそれがずっと止まらないのだと。確かに、そんなことがあっては顔が暗くもなる。

親友のこの悩みをどうしたものかと、5chで相談を試みたの

だ。凜と同じような経験をした人がいないか、捜してみた。何かにつけて問題にはなるが日本一の情報量を誇る巨大掲示板だ、何か手がかりがあるかと思った。罵倒を浴びせられたり、メンヘル板（メンタルヘルス掲示板）に誘導されたり、オカルト板に誘導されたりもしたが、一件だけそれらしいURLが載せてあった。このURLのスレ住民が、皆そんなことを言っている、と。誘導されたURLを見て驚いた。そこは伊辺郡を含む、朱音の住む県の板だったからだ。スレッドを全て開いてみる。

それは、一件や二件の書き込みではなかった。数十件規模だ。鬼という言葉ではないにしろ共通しているのは、なにかしら怪物のようなものが毎晩夢に現れるというものだった。板の住民（閲覧者）は皆匿名、ななしさんばかりなので、ひょっとすると1人が自作自演で数十件の書き込みをしているのかもしれない。と、朱音は用心深くIDをチェックする。書き込みをした人につけられるIDである。これで、同一のパソコンから書き込んだか、違うパソコンから書き込んだかがわかる。同じ日に書き込まれた書き込みを見たが、自作自演はなかった。

この村で、何かが起こりつつある……朱音にはわかっていた。書き込みには、風岳村からの書き込みと思われるものもあった。「首刈峠の呪い」「鬼の来る村」そんな言葉がネット上で飛び交っている。巧が死んだのも、これに何か関係があるのだろうか？ 朱音は後ろ寒くなってきた。朱音はそれらを順に見ていったが、ふとこんな書き込みを見つけ、口元を綻ばせた。

「何があるうと、ネ申降臨中のため、無問題」

ユーザンがいれば、きっと大丈夫だ。そんな思いが村民にこのような書き込みをさせたのだろう。5ch上では神という言葉はそれほど目を引く言葉ではなかった。5ch管理人、優れた人、伝説を作った人、ぬるぼしてガッされなかった人、時には馬鹿にしたり

する言葉にも使われる。だが風岳にいるのは本物の神だ。

「そうよね、大丈夫よ。神様が降臨中なもの」

パソコンをそのままにベッドにごろんと転がって、ぴんと足を伸ばしてつま先をきゅと曲げる。今日のバレエ教室の復習を家でも怠らない。両腕で腰を支えて両足をあげたとき、ベッドに押し付けた背中からごりつと音がしたような気がした。それは僅かだったが、明らかな違和感があった。あれ、……と思いながらゆっくりと足を下ろす。柔らかな関節は、背中にまで指が届く。朱音は腰の下から腕を廻し、指先で背中をまさぐった。ピンク色のパジャマの下から、そっと背中に手を伸ばす。

「えっ！」

薄い皮膚の下には小さな骨が肩甲骨の付け根から出っ張って、指に触れていた。

＊

志帆梨は入ってきた客がいつの間にか一人増えている事に気づいたが、何も言わずお茶の用意をした。志帆梨は同席して話を聞いていいものかどうか知らない。ふたりとも明らかに恒に用事があったて来たといった風だった。神々が息子に何の用事があるのかは知らないが、彼らは自分の同席をどう思うだろう？ 志帆梨は遠慮してうかがった。

「私は、席を外した方がよろしいでしょうか」

「いや、奥さん、あなたの旦那と息子の事ですから、あなたにもご同席願います」

「私、旦那を持った記憶はありません」

「そうでしょうね。極陽、新未黎明さんは一歩だって神階から出ていないはずですから。あなたと関係を持つ事も、ありえないとい

うわけです」

「では、旦那だなんて……」

「創造神というのは、生命を作り出す事もできるわけです。……こういうとミステリアスですが、実際は遺伝子技術により妊娠させられたのでしょうな」

「じゃあ、俺は作られたという事ですか？」

「作られた子、そうだな。極陽に、いのように設計されたというべきだな。極陽はおそらく、自分の生体情報を元に恒、お前の設計を行い、奥さん、あなたの遺伝子と融合させて半神の子を作った。こういうところでしょうな」

極陽の生体情報をベースに、神階のクローン技術で創られた……神が、そんな事をしてもいいのか？ 恒はなおさら怒りが込み上げてくる。自分が人工的に造られた存在だったなど受け入れられるものではない。更にいうなら、極陽の生体情報といったって、核酸がないとのことなのに、どうやって遺伝情報を志帆梨のそれと融合させるというのか。そんな説明では恒は納得できなかった。

一方、志帆梨はクローンなどの話についていけず、黙ってきよろきよろとそれぞれの顔を見渡し、最後に織図に視線を定めた。

「一つ、お聞きしても」

「ああ奥さん、もちろんだ」

「どうして私が、選ばれたのですか？」

「あなたが運悪く、この村にお住まいだったからでしょう。で、妊娠に適した年齢だった。この村に神の子を産み落とす事が、彼の目的だったからです」

織図は志帆梨の気持ちを慮りながら、低い声で真面目にそう告げた。要するに志帆梨が選ばれたのはただの偶然だ。天上から地上を見下ろしていた最高位神に、見初められたというようなロマンチックな話ではなかった。現実是非情だ。極陽が恒に何をさせるつもり

だったのかまでは分からないだろうが、恒はそれだけでも十分に腹が立つ。家にはクーラーもないからだ、手の内がじっとりと汗ばんでくる。ふと指先が冷たいものに触れた。志帆梨の白い指先だった。恒はシヨックのあまり冷たくなってゆく母親の手を握りしめながら、織図に問いかけた。

「それは、本当なんですか？」

「荻号さんがそう言ってただけだ。俺に食いつかれても困る」

「だったら、間違いかもしれないですね？」

「そりゃ、ないだろうな。なにせ、神ってのは子作りをして誕生する事ができない生物なんだ」

「え？」

志帆梨と恒は同時に声を上げ、首をかしげた。

「俺達神は、生まれることができないんだよ。お前さんほど出自がはっきりしてるって事は、誰かに創られたって証拠なんだ」

「じゃあ、あなたはどうかやって生まれたんですか？」

「わからんね」

織図は自分がとんでもなく愚かしい事を言っていると、気づいていないのだろうか。恒は耳を疑った。恒ばかりではない、志帆梨も、メファイストフェレスもだ。何故そんなことも分からない？

「え！ 神階にいる神様達、どうやって生まれたんですか？」

「神の出生の瞬間を、誰も見たものはいないんだよ」

「じゃあ、何ですか？ ある日突然キノコが生えるみたいに、ぽこっと現われるもんなんですか？ 何もないところから湧いて出てくることですか」

「それに近いものがあるな」

「お前達、全員馬鹿の寄せあつめなの！？」

黙って聞いていたメファイストフェレスも、あいた口が塞がらな

いというか窄まってしまったようだ。どうやって生まれたか、わからないだと？　それで納得しているのか、神々は……。恒に人間の血が入っているからなのかもしれないが、人間というものは自分のルーツが気になるものだ、と思う。だから考古学が発達した訳で、家系図が暈の端から端までつらつらと何代にもわたって書かれるわけだ。進化論だって自分のルーツを知りたいという、そういう発想からうまれた学問だ。自分の親が分からなければ、テレビにだって出て全国的に大搜索をしてもらう、これが人間の本質だ。

自分がどのような系統をたどって生まれたかという事は、人間なら誰でも気になること、これがよりによって神々が全く気にならないなんて変だ。しかも何代も前の話をしているのではない、神々自身の出生の事だ。恒がA D A Mを介して垣間見た神階の科学力は凄まじかった、あれほどの科学力を持っていながら何故気にしないのか？　調べる術がないとは言わせない。

「しいて言えば、橋の下で赤子が棄てられてるのが突然見つかるって感じだな。どこかで生まれるんだろうが、その瞬間を見た者は誰もいないのさ。棄てられているのが、神階で発見される。俺も一回見た事あるぜ、執務室の中に、神の赤子がぼんと置かれていた。執務室は密室なのにな、不思議な話だ」

「いや、不思議な話だ、じゃなくって！　そこ！　そこが気にならないんですか！？　誰が赤子を、置きに来るんですか？」

何故神々をもっとその点を必死になって追求しないのだろうか。そこに重要な、根本的な謎が隠されているような気がする。恒はまだ自分の父親と母親がはっきりわかっていましただと思った。自分はまだ幸せだ。母親がいるし、……でも神々は、誰が父親なのか母親なのかも分からないままに育つという事だ。親も兄弟も親戚もない、他者ばかりの世界。それはさぞかし悲しい世界だろう。

「誰が置きに来るか？ 考えた事もなかったな」

「どうして！ 俺ならまずそこが気になります！」

「さあなあ、誰も気にしないからな」

「誰が赤子を置きに来るのか、それを気にしてはならないというような暗示でもかかっているんじゃないの？ 誕生の瞬間がわからないだなんてそんなの、生物だなんて言わないわ」

「じゃあ、俺らは何だ？ ん？」

メファイストフェレスがまた織図にくってかかろうとするが、今回ばかりは恒も同じ気持ちだ。首根っこを持って問いただしたい。自分が誰からどうやって生まれたのかを、その何百年か知らない生涯のうちで、一度でも気にした事もなかったのかと。神々は怖ろしく賢明だが、肝心なところが間抜けだ。この妙な生き物を、どう見なせばいいのだろう。

神はどうやって生まれて、何のために生きているのだろうか？

脱線をしているようにも思えるこの問いかけ、これもまた謎をつなぐひとつのキーワードだ。神はいつから存在していて、生物階の管理者のような事をしはじめたのか。違う宇宙空間に漂う生物階を、何故執拗に観察し続け、介入し続けてきたのかにも繋がってくる。自分達の住んでいる世界を棚上げにして、生物階に夢中になっている。神は生き物なのか？ それとも……システムなのか。

「神様だって、誰かに造られたんじゃないんですか？」

藤堂家に、なんともいえない空気がながれはじめた。

「あなた方は、最も見落としてはならない問題を、見落とし続けてきた。まるでそれを見落とさなくてはならないと、誰かに強いられるかのように。何故あなたがたは神として、生物階に姿を現し、そしてまるで創造主のように振舞ってこなければならなかったんで

すか？ ご自分の出生すら、分かっていないのに」

「盲目の時計職人、つまりINVISIBLEが、存在するからだろうな。この世界の現象を、偶然を装って自分の思うままにくみ上げてゆく、一件盲目のように見えながら緻密に意図された意思が、働いているからだよ」

盲目の神は、一言だけそう答えた。

「ブラインド・ウォッチメイカーの支配から、逃れることはできないんですか？ そしてどうしてあなたは、INVISIBLEのことをブラインド・ウォッチメイカーというんですか？」

「何故時計職人と言うかって？ INVISIBLEというのは、偶然とか確率によって世界を創り上げたものであって、そこには意思などないというのが定説だ。それは人間社会でも物理学では定説だろ？ お前らはビッグバンだとか、好き勝手言ってるが。でも、荻号さんは違うんだよ。INVISIBLEは意思を持っていると信じている。ある目的があって世界を創り上げたんだと。INVISIBLEは姿が見えないから、まるで盲目の時計職人が時計を作り上げてゆくように、全ての物事があるひとつの美しい形に収斂してゆくように見える。人がどうやって進化をしてきたかを考えてみる、偶然と時間、自然淘汰のみで、こんなに複雑な形になるか？ 無理だ。この世界にある全てのものは、ブラインド・ウォッチメイカーの意思のもとにあるんだと、荻号さんはそう思っているわけさ。それで漠然として何の意思ももたない偶然にして原始の力、INVISIBLEとは区別して、盲目の時計職人と言っている。ある生物学者の言葉を借りてるんだろうな」

神も人も、解階の住民でさえも、緻密にデザインされたあるひとつの形に、向かわざるをえなかったのではないか……。メファイストフェレスは、ようやく戦うべき相手が誰なのか、分かったような

気がした。

それは決して本質の见えない、世界の創世者だ。

第1節 第18話 死神、織図継嗣の来訪（後書き）

挿絵（筆者絵注意） 織図継嗣

http://lizreel.web.fc2.com/graphics/original

第1節 第19話 二極間対談とあの日のヒロシマ

とにかく、今は何を話していても無駄だった。全ての仮定や推測は、所詮推測の域を出ていない。恒はこれから織図の言葉、つまり荻号の目論見どおりに、陽階神としての道を歩み始めてよいのかを考える必要があった。もうこうなっていると、一体誰が敵で味方なのかわからなくなってくる。いや、敵でも味方でもいい。今一番大切なことは何だ？ 村人たちの安全であり、大風呂敷を広げるならば、世界の安全だ。自分の事など二の次三の次だ。

「織図様、首刈峠はしばらく大丈夫ですか？」

「ああ、今のところはだな。ここに来る前、オフイシャル・バード光獣でちよつと見てきたんだ。簡単な時空間解析をこいつにやらせてみたが、異常はなかったぜ」

「では今は、時計職人は動いていないということですね。今後の事を考えて荻号様はそう仰っているんですね？」

「そういうことになるな」

「じゃあどうして何もないところに、死神様が出張ってくるわけ？ 恒に何をさせようとしているの。恒の父親も恒を利用して何かをさせようとしているのでしょうか。お前たちの目的は何なの、白状なさい」

メファイストフェレスは恒を心配してくれているのか、恒の母親の心情を心配しているのか、織図をにらみつけた。自身の母親を幼い頃に亡くしたメファイストフェレスは、母親の心理というものに非常に興味があった。母親はもう口を差し挟めずに、しょんぼりと黙ってしまっている。彼女が遠慮をして何も主張できないでいるからこそ、彼女の大切な一人息子を、神々の駒として利用されてはならないと思った。

「だから！ 荻号さんの頼みで来ただけで、俺は何も知らないんだ」
「お前も利用されているかもしれないとは、どうして考えられないの！」

「俺と荻号さんは、そんなじゃねえよ」

織図は死神であるため、命を奪われるだとか、不吉だといわれのない差別を受けてきた。彼を蔑む神々を見返すために、盲目であるというハンデを克服し血のにじむような努力をして枢軸神となった。枢軸となっても、差別と偏見は続いていた。神々すらも死から逃られないという恐怖、その恐怖が織図を遠ざけたのだろう。彼のありのままを評価してくれ認めてくれたのは、荻号だけだった。荻号は孤独と自由を愛する神であったが故に、他の神々のどんな媚びへつらいにも応じず、関わりを持つとうとはしなかった。

織図が枢軸となった頃から荻号は唯一といっていいほど彼に目をかけてくれ、お互い対等に接してきた。荻号と親交を持ってからもう何百年にもなる。織図は唯一荻号が友として接する神でもあったので、その事が彼に対する差別や偏見から守る盾となってくれた。最初から織図に利用価値があると踏んで荻号が近づいてきたとはどうしても考えられなかった。

「次にINVISIBLEの介入が入る時に備えて、どうして荻号も極陽という神も恒を利用しようとしているのか聞いているの。いい？ 神とはいえ、ただの子供なのよ？ 神はもともと神として生まれつくわけじゃない。神は、あらゆる事を学んで、力をつけて努力してなるものなの。お前もそうしてきたでしょう、織図。枢軸となるまでに何百年もかけて、学んで、鍛えてきたのでしょうか」

織図は煙草が吸いたくなったらしく、煙管を用意して口にくわえたが、火をつけず引っ込めた。一応、ここは民家で人間がいる。神の煙草は猛毒のかたまりのようなものだ。荻号のように麻薬を仕込

んではないが、恒の母親には危険だ。

「普通に考えたら、使えない、だろうな。だが、極陽は創造神だ。故意に能力を上げてやることもできたってわけさ。多分お前は何百年も努力をしなくても、俺らのようになれる。お前の親父がお前を、そうデザインしたからだ」

デザインしたとは、何と不躰な言葉だろう。恒は織図が悪気があってそう言っているわけではないという事を重々承知していた。しかしそれは、自分にはともかく、母親に聞かせる言葉ではない。彼女はお腹をいためて恒を産んだのだ、神々に利用されるためだけに、堕胎をすることもなく、周囲の反対を押し切り、強い意志で子供を産んだわけではなかった。呪われた子だと言われながらも、どこに潜んでいるかもしれない病魔と闘いながら、病床でいつも恒を愛してくれていた。その母親が目の前にいるのだ、母はいたたまれなくなって、ぽろぽろと涙をこぼしながら部屋を出て行った。恒は中座して、母親を追った。織図の話聞かなければいけないと思ったが、母親の気持ちを踏みにじるような事はできなかった。

「おい、恒」

「行かせてやりなさい。お前は神として言うてはならない事を彼女に聞かせてしまったわ。それがたとえ事実であったとしても、人の子の気持ちを慮りなさい。同じ神でも、妾の主とは大違いね」

「すまなかつたな。俺はあまり生身の人間に姿を見せたり話した事がないんでね。あんなに脆いとは思わなかった」

「次から気をつけなさい。ところで、恒はINVISIBLEとの戦いの戦力になるような子供なの？ 神々の長は何の目的があつてこの子を創ったの。戯れに創ったとは言わせないわよ。お前たちのせつつき方は、この10歳の子供が、ただの神の子というだけではない何かを持っていると、大声で暴露しているようなものじゃない」

「まあ俺は陰階神なんでそんな事情は知った事じゃないんだが、た

だの子供じゃないんだろうな。だが極陽はある程度使えるようにしてきたみたいだせ……ADAMに閉じ込めて、強制的に知識を詰め込んだ」

「その使える、使えないという言葉が彼女を泣かせたのに、どうしてわからないの。お前には妾の”人類心理学特論”という講義を100時間ほど聴講してもらう必要があるわね」

「悪かったって」

「神は人の子を支配していながら、人の子の気持ちがまったく分からない。何と愚かしい。とりわけ恒の父は最悪だわ。ADAMに閉じ込めたのもそうだけど、あの子の親友が使徒だったの……本人は知らないけど。恒に仕えさせるために、父親がそうしたのよ。恒は力をつけなければ、親友を殺してしまうことになるわ。恒のアトモスフィアは、もうじき成熟した彼女を養うには不足しはじめる。恒がごく普通の人間として生きる道を、最初からつぶす狙いだったの。神として利用するために、10年前から周到に計画されていたことよ」

母親を慰めて風呂に入らせ、戻ってきた恒は、襖の陰から漏れてきた声に足をとめた。朱音が、自分に仕えさせるために極陽により宛がわれた使徒、だと？ 恒はもう、彼らが何を言っているのかわからなくなつて、耳が聞こえなくなればいいと思った。しかし恒の進むべき道は、これから恒がひとりで決めてよいという道でもなくなつたらしかった。使徒は神のアトモスフィアを糧として生きる生物だ。恒は自分にアトモスフィアがあつたなどとはついぞ知らなかったが、ユージーンがこの村に来るまでの間、朱音の命をつないでいたのは自分だったという事ぐらいわかった。恒が神としてアトモスフィアを身にまとわなければ、朱音を殺してしまう事になると、メファイストフェレスはそう言っている。ユージーンほどのアトモスフィアがあればよいのだろうか、彼はもうこの村に帰ってこれるかという事すらわからない。

いつも明るく優しい朱音の笑顔が、ぽうつと恒のまぶたの裏に浮かんだ。彼女を使徒として、使役する事などではしない。だが他の神々の使徒として彼女を、神々の奴隷として貶める事もしたくはなかった。自分と供に、朱音は歩んでくれるのだろうか。主従などという関係ではなく、いつまでも彼女とは親友でいたい、それはもう叶えられない事なのだろうか……。そして朱音を想う豊迫巧を置き去りにしてしまわなければならない時が、いつかやってくるのだろうか。自分が神となり、朱音が使徒になるとはそういうことだ。自分はどれだけの犠牲を周囲に強いてきたのだろう、恒はたまらなくなつてうつむいた。

” ユージンさん、もう一度あなたに会いたい……あなたなら、何と言つてくれるだろう”

恒は夜の深まる窓の外に向かつて、ぽつりとそう漏らした。

＊

「おい、廿日^{はつか}。これは何て山だ？」

男の目の前には、今の今運び込まれてきた大量の書類が、高々と積み上げられていた。もう少し積み重ねれば荷崩れがおきそうだ。

「そうですね、クレームの山、標高は1mというところですよ」

「さすがの俺でも、この山にばかりは登れない」

軍神のみが座することを許された執務室の大きな椅子には、ブランドを肩までのぼした、紫の瞳の伊達男が無愛想に座っている。応じているのは青いキャミソールを身にまとった上品な女性だ。軍神下第一使徒、響^{ひびき} 以御^{いおん}と第二使徒、川模^{かも} 廿日^{はつか}である。うんざりした顔の響のやる気を取り戻させるため、廿日は澄み切った美声で、
Climb Every Mountain (全ての山に登れ)

という生物階のミュージカルの挿入歌を歌うのだ。そのあまりに美しい歌声に以御は一瞬、怒りを忘れたが、彼女が歌い終わるとまた沸々と怒りがこみ上げてくる。

「お前の歌はなかなかだ、だがユージーンと奴ときたら……」

「主には深いお考えがあったのでしよう」

「お前はいつもそれだ、二言目には主は深いお考えがうだ。奴が深いお考えをしていたためしがあったか？ 人間の蘇生だと？ ばからしい、俺たちがどれだけの人間を犠牲にしてきたと思っている。奴は真性のマゾヒストだったってんじゃないだろうな、身体罰50日というのが分かっていて、なんでやるかね」

以御は彼の行動がまったく理解できなかった。どうして彼はこう、ありえない問題をいつも引っさげてくるのか。以御と廿日の声は、寂しく反響した。

執務室はおよそ数百ヘクタールはあり、ふたりで使うには広すぎるのだ。ここは日常生活もできるほか、軍神が執務するのに必要なありとあらゆる機能がそろっている。最先端のパソコンが何台も設置されており、各地で起こる紛争をモニターするための巨大スクリーンもある。もちろん、内装も凝っている。高価な調度品がセンスよく備え付けられ、執務室の中央には室内だというのに小さな噴水があり、丁寧に入入れをされた涼しげな観葉植物が揺れていた。噴水の下小さな泉には、赤や青の観賞魚が泳いでいる。キッチンも冷蔵庫もあり、風呂やサウナもあるし、ソファやベッドもふかふかで柔らかく、どれもホテルのスイートルームのような贅沢なつくりだ。ここにはユージーンと以御のそれぞれの部屋と繋がっていて、普段はふたりで使っている。

ユージーンと以御は365日間、何十年もここで暮らしてきた。それでも以御は彼の考えや哲学に至るまで、まったく解っていないか

ったということだ。それは腹も立つだろうな、と廿日も同情する。第一使徒は婚姻が禁止されている。それは生涯伴侶をめとることもできない神を、ある意味伴侶として支えるためにだ。生活を共にすることによって神の代理者としての自覚を持ち、神の考え方を理解でき、神の望むように振舞う事が出来るようになる。神は擬似性別という外見上の性別はあるが、生殖器がなく生殖による繁殖ができないため、異性に対する恋愛感情がまったく持てない生物だ。だから男神であるユージーンのパイオが、男性使徒である以御でも問題ないわけだ。

神と第一使徒の組み合わせはさまざまなものがある。荻号と鏑のような男神と女使徒の組み合わせ、ファティナ・マセマティカと森山^{やま}弥生^{やよい}のような女神と女使徒の組み合わせ、そして極陰^{めく}と柏木^{かしわぎ}允^{まこと}のような女神と男使徒の組み合わせ……。神は恋愛にまったく興味がなかったので、稀に使徒が一方的に想うような構図になる以外は、過ちなど起こりようはずもなかった。

以御は仕事に生きるタイプの使徒だったため、第一使徒としての道を選んだし、ホモセクシャルでもないで、外見はどうみても男性のユージーンを愛しいだとか、好きだなと思った事は一度もない。だが、少なくとも他のどの使徒よりも彼の卑近にいる以上、そして他のどの使徒も得られない彼のアトモスフィアを給料として、希釈なしに直接もらっている以上、その恩に報いるため他のどの使徒よりも彼を理解したいとは思っていた。それをあっさりと裏切られた気分だ。

「でも人を殺したのは、任務のためだったでしょう。戦争とは関係のないところで、不条理に人が死ぬのは許せない」と主は仰せでした」「そのセリフは、お前の旦那にそっくりそのまま言ってきたせいでやれ」

「毎日申しておりますのに」

「じゃ、嫁の教育が悪いんだろう。まあこの際お前の旦那のことはいい。今日もどこかで元気に殺人をしているだろうからな。問題はユージーンのことだ。お前はいつもユージーンを信じているが、俺は奴が何を考えているのか、さっぱり分らない」

悪態をつきながらも、以御はクレーム処理の判をついていた。この判は以御しか押せないのだ。手伝ってやることもできず、廿日はせっせと判を押した書類を仕分けしてくれている。

「陰陽階の全神が、風岳村に介入禁止になったな。ユージーンは何をやらかしてきたんだ？」

「さあ、私には何も……調べてまいりましょうか。私は一度あの村に降下したことがありますから」

「神が介入禁止なのに、使徒が行くってのか？ お前なあ、神の違反と違って使徒の量刑は容赦ないぞ。お前もマゾなら行って来るがいい」

廿日はそう言われて諦めたようだった。同じ轍を踏むような事だけはしてはならない。廿日もわかりきっていた。それにしても以御のいい草は酷い、主はマゾヒストなんかであるはずがないのに。どうして何か事情があってそうせざるをえなかったと、考えてはみないのだろうと思う。廿日は以御に書類を渡してやりながら、ふと電報が届いているのを見つけた。文面をみると、とんでもない内容だった。

「あ、これ、弔電ですね。このたびの訃報に際しまして……間違えて、陰階神が送って来られたようです」

「おいおい、縁起でもねえな」

以御はぺたんぺたん判をつきながら、忌々しそうに書類をさばいていった。しかし第一使徒である以御だけは知っていた。軍神ユージーン＝マズローの神体はどんな危険に見舞われても、決して死ぬ事はない。

いや、死ぬ事ができないのだ、と――。

それはユージーンが、神階にもふた柱とはいらない特別な神だからだ。だからこそ御は彼を理解したいと思っていた。彼が生贄としてあるべき場所に捧げられる前に、彼の生きた証を繋ぎとめておきたいと思ったのだ。彼は何と美しく、そして悲しい存在だろう……以御は廿日に気づかれないう目を伏せた。

”こんな心配も、必要ないのかもしれない……奴は俺たちとはすれちがってゆく存在で、俺たちにはそれを止めるすべもないんだ”
以御は寂しそうに判を朱肉につけた。

＊

「こんな処に呼び出して、何のつもりだ」

「それが陽階の長に対する口の利き方か……まったく、お前は変わらん」

荻号は片膝を床につけることもなく、そして平伏する事すらもなく、軽く腰に手をあてがって、まっすぐ玉座の極陽を見上げた。謁見をする荻号の足元は一枚のクリスタル製の板が中空に浮いているだけでその下は空洞になっている。そのはるか底からは、どこから伸びてきたかもわからない大樹のような質感の柱が、まっすぐに一本通って、荻号の立っている場所を通り越して20メートルほど上に伸びている。

神々の叡智を授けるユグドラシルの樹とも呼ばれる大樹は黒く硬質で、その頂上に極陽はいる。この幹は陰階にまで繋がっており、そしてその双極には陰陽の極位が座しているという構図だ。頂上にある極陽の上からは、木漏れ日のような窓がひとつあり、そこから光が一筋、暗闇に向かって投げかけられている。スポットライトを浴びているようにも見え、下から見上げる者は逆光で極陽の顔を見

る事はできない。しかし荻号は二つの吸収環にアトモスフィアを奪われながら座する、陽階の長の姿がしっかりと見えていた。

「あいにく俺は、権威に敬意を払うたちではなくてね」
わかっているだろう、といわんばかりの開き直りだ。

「まあよい、お前が最近何かと怪しい動きを見せているというので呼び出したのだ」

「牽制というわけか、だが怪しい動きならお互いさまだと思うがね」
「お前に下手に動かれては、うまくいくものもううまくいなくなってしまう。隠匿するよりは、協力を請う方が得策だと考えたまでだ」

「ほう……協力ね、内容によるな。煙草を吸っても？」

「構わんさ」

荻号はシザーケースから煙草入れとライターを取り出すと、そのうち1本を軽く口に咥え、荻号の御璽、真空斑（Vacuum Supergranules）のついた黒いライターに火をつけ、それを宙に放って、再び手に落ちてくる間に火をつけた。明るい光跡が、闇を切り裂いて弧を描いて闇の中の荻号の姿を浮かび上がらせた。ファティナの六方魔方陣演算空間に引き籠って演算を続けていると、極陽から呼び出しがあったのだ。しかも連絡先は誰にも知らせていないにも関わらず、ちゃんとファティナのところに来た。演算を中止させることが目的だったのか、何だったのか。荻号は仕方なく出頭したというわけだ。

「それで、何の相談だ」

「INVISIBLEを……空間創世者を拘束したい」

荻号は折角火をつけた煙草を吸うのも忘れて、反射的にはるか上空の極陽を仰いだ。

「何だと……INVISIBLEを天帝として公認したのは、陽階じゃないか。それにINVISIBLEは拘束などできない、よく

分かっている筈だ」

「間接的に、拘束するという方が正しいな。絶対不及者を拘束する」
INVISIBLEはエネルギーであるため、エネルギー保存の法則に基づいていつもどこかに存在しているが、絶対不及者は、いつも存在している訳ではない。INVISIBLEが神に宿った姿、物理的に不死で無敵の存在、それが絶対不及者として知られている。いや、神に宿るものとも断定できない。過去2度現れた際に、たまたま神に宿っていたというだけだ。解階の住民にだって、人間や動植物にだって宿る可能性がある。

「何を言っているんだ？ 絶対不及者は今は存在しないし、仮にいたとしてもだ、INVISIBLEは絶対不及者から離脱してまた空間を漂い続ける。無敵を誇った過去2柱の絶対不及者は、INVISIBLEに殺され、INVISIBLEはまた不可視者へと戻っていった。その歴史を学ばなかったのか？ INVISIBLEを捕らえる事も、そして目には見えないエネルギーを捕捉する事も不可能なんだ。あんたが、分かっているはずはない」

荻号はできの悪い学生に言っけきかせるように、主神に向かって何度も彼が確認したであろうINVISIBLEの性質と行動について、いちから説明してやった。しかし極陽は荻号を馬鹿にしたように眉を眇めて、はるか高みから見下ろしている。その態度を見て今度ばかりは荻号も、マインドブレイクをかけてやろうかと思った。荻号要をして、思考看破のできない者はない。思考看破ができないよう、つまり目が合わせられないよう逆光から強い光が差し込んでいるのだが、荻号にとってはあまり意味を成さない。いいぜ、そっちがその気なら……と、荻号が極陽の目を的確にとらえた、極陽は受け流すかのようにふ、っと目を閉ざしてしまった。彼はそのまま口を開く。

「そうせかさずとも、全て話すつもりだ。お前のいう事は理解している、だがINVISIBLEが絶対不及者から離脱できなくなるとしたらどうだ。INVISIBLEはエネルギーだ。拡散と収束を繰り返す。その収束期にあたるとき、それは絶対不及者の中に宿る事がわかつている。……絶対不及者はINVISIBLEの宿った肉体だ、拘束できる。以前もそれができたしな」

「絶対不及者の中に、INVISIBLEはひとつの空間を成して彼の神体に宿る。絶対不及者は神体の中に宇宙を持っているんだ、肉体に宿っているという単純なものではない」

INVISIBLEのエネルギーは、一つの神体の体積の中に格納できるものではない。だとすると、絶対不及者を動かしているのがINVISIBLEのうちほんの一部のエネルギーだという事なのか、それか絶対不及者自身の中に極小の宇宙を創っているかのどちらかだ。神々は絶対不及者が確認された期間中、宇宙空間に設置された全ての観測所からエネルギー下降が観測されていたので、後者が正しく、絶対不及者の中には空間創世に使われる全てのエネルギーが収束されているのだろうという仮説をたてていた。

「それでも構わん。いかに内部に宇宙がひとつあろうと、肉体の中に宿ったままINVISIBLEは身動きがとれなくなる。そうなれば、老いず、死なぬ絶対不及者を永遠に拘束する事ができよう」
荻号はすぐさま反論にうって出る。

「そんな発想は誰にでもできる。だがどうやってINVISIBLEを絶対不及者の中に閉じ込めて外に出さないようにするとうんだ。そこが問題だろう、そんなことができるなら俺ら陰階神がとつくにやっている」

前回の絶対不及者の出現時には、神々は絶対不及者を拘束することに成功している。しかしそれは一時的な事であってすぐに逃れ、絶対不及者は大虐殺をして、そしてINVISIBLEは絶対不及

者を殺し彼の神体から離脱した。つまりこういうことだ。拘束の方法は技術開発によりいくらでも可能となるだろう。だが、INVISIBLEは絶対不及者から脱離するので、いつまでたっても捕まえる事ができない。INVISIBLEを絶対不及者の神体から脱離させないようにさえできれば、それを拘束しておくことはそれほど難しい事ではない。例えば分子運動を許さない絶対零度で永久凍結しておく、そんなことでもいい。方法はないわけではなかった。INVISIBLEが絶対不及者の中に留まっていってくれるならば。

「それを明かすわけにはいかん……だが、お前には傍観を決め込んでもらいたい」

「傍観しているだけでいいのか？」

「お前が手出しをしないということほど、重要な事はない」

これはまさにその通りだった。荻号は罪を犯すことを躊躇しないし、彼が一度こうしようと決めたことはかならず遂行してしまう。彼にはそれだけの実力があつた。それで極陽は、荻号に計画を明かさざるをえなくなってしまったのだ。荻号が計画を阻止しようとするれば、どんな方法を用いても阻止されてしまうだろう。

「計算によると、収束期と予想されるのは今からざっと1万年後というところだ。つまり絶対不及者となる受け皿はまだ現われていない。今の話だとまるで、絶対不及者の目星がついているというような言い草だな。そうだろう、そうでなければ、拘束などできない。大体、INVISIBLEがいつも神に宿るとも決め付けられないしな」

「目星ならとつくについている」

「ほう、それはまた勝気な発言だな」

荻号は盛大に煙を吐いた。極陽はさきほどから軽く手を組んだまま、玉座の上で微動だにしない。そうは言うものの、荻号にもその目星とやらは想像がついていた。誰がふさわしいかと聞かれたら、

間違いなく彼しかない。それは荻号の目からみても明らかだった。

「私がそれを確信したのは1945年のことだ。日本の広島、長崎に原子爆弾が投下されたな」

「ああ、間違いない」

「その時、生物階降下を乞い原子爆弾炸裂点にまで行って、放射能の拡散を身をもってとめようとした大うつけ者がいただろう」

「ああ、いたな」

1945年、敗戦の濃厚だった日本は、一億総玉碎の覚悟で本土決戦の準備へと突入していた。長期化する戦争を早期終結させるため、連合軍は広島、長崎に原子爆弾の投下を行った。そのときの話だ。

「彼は核爆発に生身でぶつかっていったのだ、熱線と放射能被害から人々を守ろうとして……」

荻号はあたかも卑近から見えていたかのように過去を語る。

「結果的に奴のとった行動は、成功ともいえるし失敗ともいえる。

奴は原爆を不発弾にするつもりだったが、間に合わなかった。神具で核分裂エネルギーを80%ほどはカットしていたようだが、残りのエネルギー量は、奴の未熟な力では吸収できなかった。原子爆弾には60kgものウランを使用したのに、実際に核分裂反応を起こしたのは1〜2%だったようだ。アメリカの科学者たちは失望した事だろうが、それこそが奴の仕業だ。だがそれでも大勢の人間を殺してしまったな」

「私はそれを見たとき、彼の行動が到底理解できなかった。核という禁断の力は彼が人間に与えたものだ。抑止力として用いさせようとしていたのだが、まさか同じ人間相手に使うとは思っていなかった。それで焦ったのだろうな。それにしてもだ、彼は私達神の考え方はまったく違う思考回路を持っている。INVISIBLEは過去2度にわたって、そのような自己犠牲的思考回路を持つ者を選んで

きたのだ。陰陽階では位神になった者に適性テストという名目で定期的に性格判断を行ってきた。お前も100年ごとに受けておろうな。彼は若くして叙階されたため、100年ごとに行われるこのテストを受けていなかったのだ。最新のテストは15年前に試行された、結果が待ち遠しかった。彼の適性率がどのような数値になっているのか。その結果だ、彼の絶対不及者としての適性率はなんと9・53%。他の神々がどうだったかを教えてやろうか？ この何万年集めてきたデータの平均値といってもいい。わずかに3%、エラーバーを読んでもわずか±1%だ」

「統計上の話か？」

荻号は苦笑する。たったそれだけでは決め手になどなりようがない。

「それだけではない。私は陽階全神の背を確認した」

「背中に、何があるってんだ」

「INVISIBLEは、憑依しようとする神に目印をつけておる。これは歴史には記されておらんがな、陽階極位にのみ口承されてきたことだ。その神の背部には、確かに徴があったよ。存在確率の鍵と呼ばれる、特殊な聖痕（Stigma）だ」

極陽はそこで話を止めて、荻号の意見を聞きたがった。極陽が黙ってしまったので、荻号は仕方なく結論を口に出した。

「どうも話がオカルトめいてきやがったな。俺は科学では解明できないことは、信じない主義でね。あんたが言いたいのはつまり、ユニゾンⅡマズローが、絶対不及者になると……？」

「これは私の直感であり、賭けだ。私はINVISIBLEの介入が見込まれるグラウンド・ゼロに彼を送り、彼の中にINVISIBLEが収束するのを待っていた。ところがこのたびの奴の失態とお前の余計な手出しで、陽階にこれが明らかとなり、迷惑している」

「ほう、俺が空間異常を矯正したからな。INVISIBLEが現

われるための足場を消し去ってやった、そしてユージーンもグラウンド・ゼロを離れた。あんたの計画は振り出しに戻ったというわけか」

「いかにもそうだ。また体制を建て直し、グラウンド・ゼロへの戒厳令が解除されるのを待たねばならなくなった。今度は手出しは無用のことだ」

すぐにではないが、これ以上は荻号に動かれてはならなかった。

極陽は全ての計画を明かし、荻号の動きを牽制してきたのだ。陰階神はINVISIBLEを滅ぼすために日夜研究を続けている。その目的が一緒だと理解できたなら、荻号もこれ以上妨害してくることはないと考えたからだ。荻号はしばらく煙草の灰を携帯灰皿に押し付けながら、沈黙していた。

”どうだ、荻号。これならお前の目的にかなう筈だ、お前の返事はわかってる”

返事は絶対にひとつだ、と極陽はほくそえんでいた。

「断る」

荻号はあっけらかんとそう言い切った。彼は陰階神としての自覚に欠けていると見える。極陽は彼が何を言ったのか、もう一度聞き返したくなった。

「何だと？」

「ぺらぺらと喋ってくれたから聞いていたが、俺はその計画には賛成しかねるし、手を貸してやるつもりもない」

「何故だ、次に絶対不及者が現われたなら、神々の滅亡は避けられんぞ。それはひいては人類の滅亡にもかかってくる。それを防ぐのが陰階神の使命だった筈だ」

「INVISIBLEが殺戮しかもたらさないとは、どうしても思えない。奴の目的は何だ？　そこをよく考えるんだな。奴の目的は

空間を維持し続ける事だ、つまり家が大切なのだろう。家族のことなど気にしてはいない。前回の出現時も、前々回の出現時も、神々は家に手を出しはじめていた。リフォームだか改築だかわからんがな。だから粛清をしたんだろうと思うぜ。今回、神々は空間に手を出すことなく慎ましやかに暮らしている。粛清する必要はない」

荻号の言い草は、INVISIBLEをあたかも意志ある存在として擬人化しているようなものだ。何故、そんなことをする必要がある。荻号はINVISIBLEの何を知っているのか？ 極陽はその発言が引かなかった。目的などない、彼は物理学的な現象であり、意思疎通などできる筈もない、……これは神階、いや解階においても通説だ。

「INVISIBLEは振動を繰り返すエネルギーの集塊だ。それだけでしかない、物理学的で無機質なものだ。INVISIBLEは収縮した後、急速に放散を必要とする。物理学的には当然の事だろう。それだけのことで神々の総個体数は1／1000にまで削り込まれたのだ、違うか。奴に目的など、ない！ 奴はいかなる交渉や譲歩にも応じない、だから恐るべき敵なのだ」

「へえ。まあそりゃそうだ、だがあんたのさっきの言葉と矛盾するな。ではINVISIBLEは物理学的現象の範疇において、存在確率の鍵とやらの目印を気に入った神の背中につけるものなのか？」
荻号は煙草をしまうと、今度は自身の腕についた紐をいじくった。どうも手持ち無沙汰のようだ。荻号の神体に13本も巻かれている白い紐は、制紐せいぢうと言って、彼の力を押さえつけるためのものだった。それは直径4mmほどの単なる白い紐でありながら、荻号の腕や胴に巻かれて彼の力を制御している。遙か昔に、自分でそうしたのだということだ。ただ巻いているだけだと紐がよれて落ちてしまうのだで、荻号はそれで自らを縛る際に、皮下に紐の一部を縫いこんでいた。この状態で彼は毎年フィジカル・レベルを測定しており、毎回のようにカウンターストップで測定不能と出る。力を解放するとき

には、その紐を一本ずつ切ってゆくだけでいい。彼が自らに課した13本の紐を解ききったとき、一体彼にはどれほどの力が蘇るのだろうか。あるいは、INVISIBLEに対抗する力となるのではないか……？ 極陽が最も恐れているのは極陰でも陰階神でもなく、事実陰階神の中でも彼一柱だけだ。

「敵と決め付けるから、問題がこんがらがらんじゃないか？ 奴は曲がりなりにもこの空間というゆりかごを創り、その中で様々な生命を育んできたんだ。おい、これじゃどっちが陽階神でどっちが陰階神かわからなくなってくる。まあ俺のスタンスとしては、絶対不及者が現われてそして彼が今回はどのような行動をとるのかを見てから手をうつべきだと思うがね。まだ奴が何もしていないうちから先手を打つのは、それこそ奴の逆鱗に触れると思うぜ。まあ……、今はあんたも動けんだろう。あんたの計画は、他言しない。これで満足だろう、俺のマインドギャップを破る奴はいないだろうしな。じゃあな、もう帰るぜ」

極陽は、彼にこの話をすべきではなかったかと後悔しはじめた。彼は一度決めたことを、覆したことはない。対話法も心得ており、どんなに言葉巧みに説得をしても、それが効果があったためしはない。下手に長く話してしまうと、逆にマインドコントロールをされてしまいかねない。荻号は踵を返して、もう話すことはないと考えたらしく、そのまま退出しようとした。意見は決裂をしたままだ。「お前はグラウンド・ゼロで、観測データの詰まったG-CAMを譲渡されたそうだな。中には何が入っていたんだ？」

「それは言えないな。ユージーンとの約束でね」

極陽は荻号の足を止めさせるために、わざと挑発的な言葉を背後から投げかけたが、鮮やかにかわされてしまった。

「まったく、お前は食えん奴だ」

「知っていて、話したのだろう。それに食えないというなら……あんたの方だ。藤堂恒という少年神と出会った、あんたの息子にな。彼を使って絶対不及者を拘束するつもりなのだとしたらあんたは……最低の外道だ」

「何とでも言え」

「恒を、あんたの駒にさせるつもりはない。誰がそうしようとしても、俺が許さない。よく覚えておけ……それから、ユージーンは自分が絶対不及者になるぐらいなら、自ら命を絶つだろう。あいつはそういう奴だ」

「自殺などさせんさ……彼には永遠に生きながらえてもらわねばならん」

荻号はその言葉に、心底怒りがこみ上げてきた。極陽はユージーンを生身のまま、彼の意識を残したままなんとしてでもINVISIBLEに憑依させるつもりでいる。ユージーンの運命を考えると、もう目も当てられない。彼はその意識を持って神体を拘束されたまま永遠を生きることとなるのだ。荻号は文献で、絶対不及者となった者の記録を読んだ。それによると、INVISIBLEはごく僅かの間、定期的にだが絶対不及者の神体を支配していない時がある。その間、憑依された神の元々あった意識が蘇ってくるそうだ。絶対不及者となつてからは言葉を話すことが一切できなくなる、言葉を失ったその神は涙を流しながらばくばくと口を動かし、殺してくれと泣き叫んでいたそうだ。そうなったユージーンは何を思うだろう、荻号は耐えられなかった。この計画は、何としてでも阻止しなければならぬ。

「絶対不及者となつたまま永遠にか。神々に裏切られ、INVISIBLEをその身に宿し、永遠に拘束したまま生きながらえさせるのか、それが陽階の長のすることか」

博愛と慈悲を至上とする極陽が、だ。

「それで三階が救われるのならば、むしろ光栄と思ってもらわねばならん。救世の主となるのだらう、彼には過ぎた栄誉だ」

「あんたは、心を知らなすぎる」

荻号はそう言い放つと、今度は振り返りもせず至聖所、天奥てんのうの間から退出していった。

＊

「石沢さん、石沢朱音さん」

ユージンがいなくなって、女教師メリーがやってきてから数日後、朱音は看護師に呼ばれ、母親とともに診察室に入っていた。土曜の朝から上島医院にやってきて、レントゲン写真を3枚も撮った。上島は鼈甲のメガネをはずしたりかけたりしながら、レントゲン写真をペン先で示してくれた。あれから、朱音は背中にゴリゴリとした出っ張りがあることを母親に相談してみた。母親は朱音の学校と自分のバイトが休みの土曜日に、上島医院に連れてきたのだ。院長、上島はユージンがいなくおかげで忙しい日々を送っているようで、病院の待合は10人ほどの患者が待っていた。そのほとんどが腰や膝の痛みを訴える老人だ。診察室に入るなり、母親はすぐのように上島に尋ねた。

「先生、娘の背中はどうなっていましたか」

「娘さんのいうとおりですよ。ここと、ほらここに、2cmほどの長さの骨ができています。スリガラス状の形状ではなく、しっかりとしたものですから、骨棘とでもいいましょうか。これから伸びてゆくかもしれませんし、このまま伸びないかもしれません。もし伸びてゆくようなら手術をした方がいいでしょうな」

そんなヘンテコな病気が、あっていいものだろうか。母親は娘が何という病気にかかってしまったのかと、気が気でないようだった。

朱音の母、石沢^{いしざわ} 嘉子^{よしこ}は、美人で品のよい婦人だった。週に3回、村の花屋でバイトをしており、夕方からは華道の先生をしている。朱音はそんな母が大好きだった。

「これは何という病気ですか？」

「病名はつかないでしょう。成長期に、間違った骨が出来てしまうものです。こういうのは膝に出来ることが多いんですがね。一度にふたつも出来るのは珍しいですが、日常生活に支障がない限り、深刻なものではありません。身体の筋肉が骨になってゆくような難病があつて、10歳ごろから発症するんで、それかと思つたんです。でもこれは筋肉に沿つてできているわけではないようなので、それでもないようです。この形を見ると骨肉腫でもないですし……成長期に稀に起こる症例でしょうな」

「そうですか、大病ではないということなら安心ですが……ランドセルを背負うのに、痛いと言つておりまして」

「でも、手術は怖いです……」

おろおろとレントゲン写真を見ていた朱音は、はじめて自己主張をした。骨が伸びてゆくようなら困る、だが手術となると遠慮したところだ。ランドセルはもう5年生なので、背負わなくてもいい。5年生からは、手提げかばんに荷物を入れて登校していいということになっていた。バレエをしている朱音は、どちらか片方の肩に負荷がかかることで姿勢が悪くなつてはいけないと思つてランドセルにしていただけだ。これからは手提げかばんにすればいいことだ。

「そうでしような、差し当たり、経過観察ということではいかがですか？ もし手術をするようなら、この病院にはオペの設備がありませんから、隣村の病院に紹介状を書きますが」

上島はメガネをはずし、カルテをつけた。上島の専門は循環器外科だ。整形外科には明るくない。だが、一般病院にも勤務していた

事があるので、ある程度整形外科領域の勉強もしている。悪性所見はないと思うのだが……朱音はがつくりとうなだれている。母親の首もがつくりと、朱音と同じ角度で傾いている。その姿を見て、上島は励ますように優しい声をかけた。

「そう怖がる事でもないよ、このままずっと伸びなければ、手術はしなくても大丈夫だ。なんだったら、遺伝子検査でもやってみるかい？」

「うーん」

「じゃ、神様にお聞きしてみるといい。それで安心だろう」

「ユージーン先生、いえ、神様、帰ってきませんね……」

「恒君は天国に帰ったと言っとなるがね、まあそのうちお戻りになるだろう」

上島も、朱音も彼女の母も、彼の帰りが待ち遠しかった。

第1節 第20話 マインドギャップとマインドブレイク

恒は皐月の体育の授業中、ろくすっぽメファイストフェレスの話を聞きもせず、朱音をばかり見ていた。これから彼女は、そして自分はどうなっただろう……。神階とはどんな世界なのだろう、と恒は思いを巡らせた。神々の世界は地球とは異なる宇宙にある。天国は雲の上にあると思っていた。でもいくらなんでも雲の上すぎだろ。つまり自分は宇宙人になる覚悟をしないといけないわけだ。ただ宇宙に生きている生物だというだけなら神も人間も対等だ。決して人を見下したり蔑むべきではない。神々はそれを忘れて崇拜の対象のように振る舞っているが、そうではないのだという事を忘れてはならなかった。

朱音は体育の時間、いつものように大記録を作っては女子たちとハイタッチをして喜んでいた。恒は彼女に異変がないか、いつも気を配ってやらなくてはならなくなった。激しい運動をするほど彼女は体力を消耗する。そうなれば空腹になる。お腹がすくといつても、ご飯を食べれば満腹になるというものではない。恒のアトモスフィアをそれだけ必要とするということだ。アトモスフィアの与え方は対象に触れるだけでいいのだと織図から聞いた。

今までは朱音とは毎日のように遊んでいたから、ふざけあって軽く叩いたりして、何日かに一度は触れる機会があったといえ、そんな何気ない行動が彼女の命を繋ぎ止めてきたのだそうだ。しかしそのうち、恒の貧弱なアトモスフィアでは賄いきれなくなる。朱音は最近バレエのレッスンを週2日から4日に増やしたのだと話した。それを聞いた時、恒は絶望的な顔をしてしまったが、彼女は笑って

「やあね、そんな顔しなくても、皆と遊ぶ時間はちゃんとあるから。ここだけの話よ……私ね、バレエダンサーになるのが夢なの。もっ

と練習して上手にならなきゃ、だから分かって、恒くん」
そう言ったのを思い出す。

” 朱音、その夢は絶対に叶うことはない ”

恒は体育の時間、彼女の背中に語りかけた。恒はもやもやとした気持ち振り払うように、思い切り走って幅跳びをする。記録は4メートルは出た。朱音が喜んでハイタッチをしにくれた。その時恒は一瞬の間に集中して朱音の掌に自らのありったけのアトモスフィアをねじ込むように触れた。もちろん気合いだけだ。

” これで何とか、命を繋いでくれ。俺はもっと強くなって、お前にひもじい思いをさせないようにするから ”

バレエのレッスンを増やし、朝のジョギングも始めて運動量が増えてしまった朱音を餓えさせないために、恒はこうやって何かと偶然を装いながら彼女に触れる必要があった。あまりおおっぴらに触れるとクラスの子供たちに変な噂をたてられてしまうので気をつかう。恒は夜な夜なADAMに通い、必要な知識を身につけていた。夕方になると闇を纏ってどこからともなく現れる織図からマインドギャップの作り方を学んでいた。とはいっても、まだ本題には入っていない。禅問答のような答えの出ない一問一答を繰り返して、雑談をした後、帰ってゆくだけだ。

昨日は何だっけ、カルネアデスの板という命題について、恒の考えを聞いてきた。恒は人生経験が少ないぶん、こういう答えの出ない類の問題は苦手だった。ぱつきりと答えの出る数学的な問題なら大歓迎なのだが……恒がどう答えたとしても、それは正解ですらない。カルネアデスの板というのはこういう話だ。紀元前2世紀のギリシャで、船が難破し、乗組員は全員海に投げ出された。ある男が

命からがら、一片の板切れにつかまったが、そこへもう一人、同じ板に掴まろうとする者が現れた。しかし、二人も掴まれば「板が沈んでしまう」と考えたその男は、後から来た者突き飛ばして、おぼれさせてしまった。彼は正しいかということだ。

恒は答えられない。でも恒ならまず自分が手を離して、二人で助かる方法を考えてと思う。織図にはこうやって答えの出ない難しい問題を考える事でまずは心を鍛えるのだと教わった。人間でもある恒は神として半人前で、武型の神ではなく知識を重視する文型の神になるのだそうだ。織図いわく知識に長けた文型の神はXX、武力に長けた武型の神はAA、文武両道の神はAXと表されるそうだが、恒は間違いなくXXだろうと織図は断言した。XXを自称するからには、XXの神に位神戦を挑んで勝ち上がってゆかなければならない。

XXの試合というのはなんというか、知恵比べのようなものだ。ひとつの専門的命題について相手を論破した方が勝ちとなるらしい。つまりマインドギャップを十分に備え、マインドブレイクの能力を身につけ、さらにこういう哲学的なバックグラウンドがあって多面的に物事が考えられるようにならないと、太刀打ちできないのだ。織図からは不向きな事より、向いている事を身につけた方が出世できるし楽だ、とのアドバイスを受けた。恒の場合は力を身につけるより知識を身につけ心を鍛えるのが優先だということだ。だが恒は自分のアトモスフィアの量を増やすため、知識を身につけながら、体力づくりも始めていた。それはもちろん朱音の為にだ。

神階でどこからともなくわいて出た、もしくは捨てられていたところを保護された神は、5歳ごろから神階の運営する教育機関に入られ、神としての教育を受け始めるそうだ。恒も本来なら今すぐ神階に上がり、学校に通わなければならぬところだ。神々の知的

発達 は 著 しい が、成 体 と な っ て か ら は ほ と ん ど 成 長 も 老 化 も し な い
ら しい。肉 体 年 齢 も、力 も 知 力 も ほ ぼ 100 歳 に な る ま で に 頭 打 ち
に な る。100 歳 ま で に い か に 心 身 を 鍛 え る こ と が で き る か が 鍵 と
な っ て い た。成 長 の 著 しい こ の 時 期 に は わ ず か 1 年 の 教 育 の 遅 れ が
大 き な 差 を 生 む。恒 も 神 を 目 指 す な ら、も う 学 び は じ め な く て は な
ら な い。だ が 朱 音 は ま だ 地 上 を 離 れ ら れ な い。ユ ー ジ ー ン が 恒 に 真
実 を 隠 し た 気 持 ち が 痛 い ほ ど わ か っ た。こ ん な 事、将 来 の 夢 の 実 現
に 向 か っ て 燃 え る 彼 女 に は 言 え な い。彼 女 は そ の 瞬 間 に、人 生 を 奪
わ れ る の だ か ら……。

" だ か ら、そ ん な に 走 ら な い で く れ、お 願 い だ。今 の 俺 じ ゃ お 前 に
た ら ふ く 食 わ せ て や れ な い ん だ "

ピ ー ツ と 笛 の 音 が 聞 こ え て き た。ジ ャ ー ジ 姿 の メ フ ア イ ス ト フ
エ レ ス が 指 導 用 の 笛 を 吹 い た の だ。

「 石 沢 さ ん、あ な た さ っ き か ら は し ゃ ぎ す ぎ。授 業 中 は 静 か に な さ
い」

朱 音 は 小 さ く 舌 を 出 し て、は ー い と や っ た。メ フ ア イ ス ト フ エ
レ ス が う ま く 彼 女 を な だ め て く れ た よ う だ。

上 島 医 院 に 行 っ た あ の 後、朱 音 は 皐 月 と メ フ ア イ ス ト フ エ レ ス に
彼 女 の 背 中 の 件 を 打 ち 明 け た。メ フ ア イ ス ト フ エ レ ス は 自 分 を 名 医
だ と 偽 っ て 診 察 を し、ま っ た く 心 配 し な く て い い し、手 術 を し な く
て も い い と 偽 太 鼓 判 を 押 し た の だ。そ れ 以 来 彼 女 は す っ か り ご 機 嫌
で、こ の 調 子 だ。手 術 を し な く て も よ い と 聞 い て、安 心 し た の だ ろ
う。だ が 皐 月 も メ フ ア イ ス ト フ エ レ ス も 朱 音 の 体 調 に、気 を つ け て
や ら な け れ ば な や な っ た。彼 女 の 背 中 に は 翼 が 生 え よ う と し て い
る。第 二 次 性 徴 期 か ら 始 ま り、徐 々 に 生 え て く る そ れ を 切 除 す る こ
と は で き な い。大 切 な 太 い 血 管 が 翼 を つ く る 骨 の 周 り を 取 り 巻 い て
い る し、も し う ま く 切 除 で き た と し て も、使 徒 に と っ て 翼 は 大 動 脈

のようなものだ。

翼を失った使徒はひとりとして生きてはゆけなかった。神階には翼を不可視化する装置があり、使徒たちはいつもそれをつけている。翼を見えなくする事で社会生活を送る事はできる、だがいずれにしても神のアトモスフィアをもらわなくては生きてゆけないというところは解決できない。使徒という生物はこの脆弱性のために、過去何億年にもわたり神に従属するしかなかったのだ。そう急ぐこともないかもしれないが、悠長に構えてはいられない。彼女には真実を話すしかなくなる。それがいつなのか、誰が話すべきなのか、恒にはわからなかった。

体育の授業が終わり、次は社会の時間だ。6時間目だという事かなのか、朱音は窓に近い日の当たる席でうとうとと眠りこけている。恒はその時間を黒板の上の時計で計っていた。もうすぐ15分……。恒はわざと机から筆箱を落として地理資料集について何か解説しているメファイストフェレスを振り向かせた。朱音がずっと寝ていると、指を指す。

「じゃあ、輪中で有名なここ、ここは何県でしょうか。はい、石沢さん」

メファイストフェレスは手を挙げている他の子供に目もくれず朱音を指した。朱音は気付かない。メファイストフェレスはヒールをコツコツいわせて奥の席までやってくると、ちょんちょんと彼女の肩をたたいた。ぐらりと朱音の顔が机に転がった。メファイストフェレスは慌てず、恒を呼んだ。

「石沢さんが、気分が悪いみたいね。藤堂くん、保健室に連れて行ってあげて」

「先生、私が保健委員です」
保健委員の子供が手をあげている。

「あら、そうね。でも石沢さんはぐったりしているし背が高いから、あなたじゃ負えないわよ。藤堂君は背が高いから、藤堂君に頼みましょう」

俺の方が背が高いのに、と朱音をひそかに想う坂下実が悔しがった。恒は朱音を背負うと、保健室とは逆の方向に走り出した。家庭科準備室だ。どうすればよいのか、恒にはわかっていた。とにかく急いで……。恒は準備室の中から鍵をかけると、意識のない朱音をありったけの思いを込めて抱きしめてやった。夏の湿気で、じっとりとふたりの肌が汗ばむ。

「朱音、朱音……目を覚ましてくれ」

恒は彼女に囁きかけた。しかし、いくら抱いても彼女の意識は戻らない。足りない、恒のアトモスフィアでは成長しつづける彼女の代謝量を補いきれない。さっきあんなに走ったからだ、朝のジョギングだって、バレエの練習だってやりすぎだ……。恒はそう思いながらも、わかっていた。彼女の心は普通の女の子だ。心を、奪ってはいけないんだ、と。

恒は悔しくて、自らが不甲斐なく唇を噛み締めた。俺はどうして、彼女を助ける事ができないんだ、これのどこが神様なんだ、自分には何の力もなく彼女を飢えさせている。誰が彼女を助けられるのだろうか？ それは残念ながら自分ではない。恒は辺りを見回した。準備室の壁には、電話が一本かかっている。恒は大事に朱音を横たえようと、受話器をとり、ダイヤルを回した。相手は決まっている。番号を覚えていてよかった。

「もしもし？」

「織図さん、助けてください」

「こらまた、情けない言葉だな。自分で何とかしやがれ、神なんだろう？」

「俺にはどうにもならないんです！ 助けたいけど」

「お前の他に誰か困ってる奴がいるのかい」

「そうです！　お願いします、来てください。学校の、ここは」

「家庭科準備室、だろ」

後ろから声がした。密室を破って織図が真っ黒な聖衣を纏ってそこにいた。

「瞬間移動では来た事のない場所には、来れないのでは？」

「俺は目が見えないんでね、場所を覚えていても意味がない。お前の気配をたどって来ただけさ。追跡転移というやり方だ。陰階でこれができるのは俺と荻号さんだけだ」

また荻号に騙されたが、今そんなことを言っている余裕はない。織図は盲目の瞳でゆっくりと朱音を見おろした。織図は仕事でたったらしく、フードのついた黒衣を着て巨大な鎌を持ったままだ。その姿はまさに死神そのもので、威厳があり恐ろしい。彼は朱音を抱き起こすと、ゆっくりと自らの胸に抱いて黒衣で包んだ。朱音はしばらくすると気持ち良さそうに伸びをしたので、織図は彼女をそつと恒に引き渡し、光学迷彩能のある黒衣を着込んで姿が見えなくなった。朱音は瞼を開いた。目の前には恒がいて、自分を抱きかかえている。彼女はぱあっと頬を赤らめた。

「や、何。恒君……」

「あつ」

「ここ、どこ？　こんな所に私を連れ込んで……どうするつもり」

「や、これは違うんだ、もうひどい誤解で」

「……ひどい誤解なの？」

朱音はじわっと目を潤ませると、鍵をあけて走っていった。織図のアトモスフィアを分け与えてもらったのだから、走ろうが飛ぼうが構わない。

「おいおい、お前も隅におけないな。あいつ、お前にちよい惚れじ

やないか」

織図はフードをとったが、あとは光学迷彩で隠れているので首だけ浮いているように見える。隼人の家で見たファンタジー映画で、たしかこんなのがあったな、何だっけ、透明マント？ と恒は心の中で思っていた。

「ありがとうございます」

「しかしだなあ、お前の使徒ぐらいちゃんとお前が養えるようになるよ。しかもひとりだろ？」

「俺の使徒とか、そんなんじゃないやありません。朱音は俺の友達です」
「強情なのもいいが、果たしていつまでそうしてられるかな。もうお前のアトモスフィアは足りなくなってるんだぜ。女の成長は男よりずっと早いからな。精神的にも肉体的にもだ。ちゃんと言うことを言って運動なんかを控えてもらわないと、お前の力じゃ養いきれんぞ」

「確かに、俺には無理です。お願いできますか？」

「お前がいいってんなら、俺のを分けてやってもいいが、不甲斐ない。あの子はお前に惚れてるってのに、本望じゃないだろうぜ」
「いいんです、それでも。ひもじい思いをさせたくないから。でも俺もっと、もっと強くなります」

「そんなにすぐに強くなれたら、こちらら商売あがったりだ」

風岳村に織図がいる間は、朱音は織図にアトモスフィアをもらった方がいい。彼は179、552名の使徒を従えているそうなので、今更ひとり増えたところでどうというものでもない。それと較べ、恒はひとりの使徒をも養いきれない。どちらが朱音にとってよい事なのかは、明白であった。だが織図はいつもこの村にいるという訳でもなさそうで、夕方になるとどこからともなく現れ、朝になると帰ってゆく。そりゃ、忙しいだろうな、と恒もその事情がよくわかった。

朱音はその後も、なんとなくそっけなかった。声をかけようとしてもタイミングを失ってしまう。それはそうだ、人目のないところに連れ込まれて押し倒された上、あの言葉だ。恒はしかし友達と帰ってゆく朱音をじっと見送りながら、なんにしろ命が助かってよかったと思うのだった。部活の終わった豊迫 巧や堤 隼人らとしばらくキャッチボールで遊んでいた。校庭から見えるメファイストフエレスは陸上部の顧問まで律儀にこなしている。もっと足あげるー！ と、檄が飛んでいた。案外、ユージーンの代理どころではなく彼女が教師をやった方がいんじゃないかなと、恒はぼんやり考えた。織図は大体7時ごろになって現れる。恒は6時半には放課後の学校を出た。

家に帰ると、志帆梨が机の上いっぱい、彼女が新しく開店する店のたたき台の設計図を広げている。恒もつられてそれに目を落とす。志帆梨は家や自分の事など気にせず、恒の進みたい道を選びなさいと言ってくれた。志帆梨は恒が母を置いて神となる道を選んだ場合に彼の足枷とならないよう、極陽が振り込んでくれた慰謝料を使って、村の真ん中の小さな商店街の一角で小料理店を営む事にしたらしかった。織図によると、この慰謝料の出どころは極陽が株を転がして挙げた利益なのだそうだ。だから遠慮なく使っても構わないだろうとのことだ。

それで志帆梨は思い切って店を出すことにしたのだ。観光客も稀にしか来ないが、村にはそういった料理店がないので村人の憩いの場になるだろう。息子が母を置いて行く事になっても、安心して自分の道を貫いてほしいという親心からだ。「創作惣菜屋 しほり」の間取りを考える母親を横目に、恒は玄関から入ってきた織図を出迎えた。志帆梨はもう慣れたもので、さっさと図面を片付けると、こしらえておいた夕飯の支度をし、テーブルについた織図に大盛りのごはんをよそう。

「いつもすまんね、奥さん。これは何という料理だ？」

「特製田舎汁と、鯖の味噌煮です。小松菜のあえものもありますよ」
「うまそうだ。いただきます」

「織図さんって、いつも思うんですけど、目、まるで見えてるみたいですね。ちょっと焦点が合っていないぐらいで」

恒はいつも不思議だった。彼はごはん粒をこぼしたためしがない。味噌汁もだ。織図は器用に箸を使ってごはんつぶを食べ、豆をつまむ。普通に豆をつまむのだって難しいのに、彼は簡単にやってのける。彼は熱いお茶を飲むと、答えてくれた。

「蝙蝠がどうやって飛ぶか知ってるか？ 奴は目なんてほとんど見えてない。目が見えなければ、他の感覚野がその機能を補おうとするのさ。音とか、空気とか、あとは電気の流れや微妙な温度の差、目は見えなくともお前がどんな顔をしているかだってわかる。書類だって読めるぜ。今日はお前に、脳の話をしてやろう。奥さん、あなたの料理は日に日に精彩を放っているな。この柚子を入れてるところなんて、センスが感じられる。あなたの店は流行るだろう」
「ありがとうございます。励みになります」

「あなたの料理はすばらしい。開店したら、常連になるからそのつもりでいてくれよ」

織図はしきりに味をほめ、そんなことを言っていた。神は食べ物など食べなくても生きていけるというのに、毎日夕飯時になると律儀にやってきて志帆梨の手料理を欠かさず食べようとするのは、おいしいからだろうな、と恒は思った。志帆梨は毎日やってくる織図のために、毎日新しいレシピを考え出し、店のメニュー候補に加えていった。人生に絶望することしかできなかった志帆梨がはじめて自分の力で何かをやってみようと思ったのだ、新たな人生を再スタートするために。それが極陽の援助によるものであったとしても、

そんな彼女を、織図も応援しているらしかった。

織図と恒は夕食後、ふたりで皿を洗って食器をしまい、それが終わるとごろんとテレビの前に寝転がった。織図と川の字というか二の字になって寝転んでテレビを見ている姿など、夕食後の親子か兄弟のようだ。人種が違うが。

志帆梨はまたテーブルに色々な広げて設計図を見ている。織図は母親の横で、こうやって寝転がりながらも恒と雑談していた。母親はもう織図が鎌をもってこようが、聖衣（黒衣）で来ようが気にしなくなっていた。志帆梨はちゃんと織図が死神だという事を理解できたようだ。織図が大きな鎌を畳の上に放り投げているので、神具に焼かれないようちゃんと手に軍手をはめて、軟らかい布できゅっきゅつと磨いてやっていたのを見て織図とふたりで驚いたものである。母は強しとはこのことだな、と恒は思った。織図はただ飯のお礼と鎌を磨いてくれたお礼で、志帆梨が死んでEVEに来た時には、とっておきのサービスで何でもしてやる、と言っていた。人間の場合は織図に生前親切にしておく、死後によいことがあるといううだった。恒は神なので、生物階の記憶データベースであるEVEには入れないのだと教わった。母と同じ場所には逝けないということだ。神の死は物質的な死以外に何も残らない。記憶と神体はそのまま滅ぶだけだそうだ。

織図は服装と持ち物が死神らしいという事以外は、その話口調も何もかも、まるで人間の黒人のようだった。唯一死神らしいことといえば、織図には全ての死の記憶があることだ。古今東西、過去から現在に至るまで。一体どうやって覚えたのかと思うが、死神はそれに特化して記憶領域を使うので、できるのだという。なので志帆梨の母、恒の祖母がいつどうやって死んだのか、何月何日の何時何分に死んだのかも詳細に覚えていた。そして彼は死者と生者を繋ぐ事ができた。仮想空間EVEでの志帆梨の母の記憶を、織図の持つ

専用のPSPほどの大きさのDAAインディケータ(Dead of Alive Indicator)携帯用端末に転送し、テレビ電話のように会話をすることができた。

志帆梨はここ数日、織図にこの端末を貸してもらって、志帆梨の母の記憶と話していた。志帆梨が彼女の母、つまり恒の祖母に、自分の病気を治してもらった事、恒の成長の様子、恒が神になるかもしれないこと、自分は小料理屋を出すことなどを一生懸命画面の中に報告しているのを見て、恒は涙が出てきた。母にはこれから、もっともっと幸せになってほしい。必要ならば、自分に構わずよい伴侶を見つけて欲しいと思う。そして自分も、今のところは彼女のたったひとりの息子なのだから、神となっても母を見捨てて去るのではなく、盆と正月ぐらいは彼女のもとに何とか帰れるようにしようと誓った。

織図に聞くと、生物階降下はそう簡単には認められないのだそうだ。やはり上位の神々から定員の枠を使うので、下位でいる限りは生物階降下のチャンスは巡ってこないのだということだ。織図はもとと定員にカウントされていない。それは特殊任務従事者として神階と解階から認められているからだという。どうしてもというなら、枢軸神のユージーンにでも枠を取ってもらって降りればいいと言ってくれた。たまに余計な事を言うが、何だかんだいって織図は親切だった。恒はそんな織図と打ち解けていった。

「この女優、最近出てなかったよな」

「え、歯磨き粉のCMとかに出てましたよ。こないだの月9とかにも」

「うそ、俺それ見てない」

「ふたりとも、もう9時ですよ。お勉強はどうしました?」

志帆梨がテレビにかまけているふたりを呼んでくれた。うっかり

していると、すっかり普通の会話になってしまふ。恒は正直、月9のドラマを見ている死神なんて想像したくない。織図はドラマを見るために、民家に忍び込んで勝手にテレビをつけたりしているのだそう。はつきり言って、光学迷彩の使い方を間違っている。恒の家に入りますようになって、織図は好きなドラマを見る事ができるようになった。見るとはいつても、盲目なのでどのように感じているのかは分からないが……織図は普通とは違ったやり方で光を感じる事ができるらしい。なので、テレビにしっかり顔を向けて、女優の批評までする有様だ。

織図はいかんかんと思ひ直したらしく、リモコンでテレビの音を15メモリぐらいに小さくした。恒を一人前の神として育てる事が、荻号との約束なのだそう。サボってはいけけない。

「さて、そろそろやるかな。なんだっけ、今日は脳の話をするって言ったな」

「そうです。俺、いつになったらマインドギャップができるんですか？」

織図は思ひ出したようにいきなり、ぱちぱちと拍手をして、いよつ、とやって恒をおだてた。

「おめでとう、喜べ！ お前にはもともと1層だけマインドギャップがある！ これはすげーことだぞ」

「え、1層ですか？」

「バツカ、おめ、1層できるってのがどんだけ凄い事か！ 俺だって何百年も生きているのに5層なんだぞ。たった10歳で1層あるだけでも御の字だ」

「俺、いつできたんでしょ」

「お前が自活していた頃だろうな」

志帆梨はふむふむと、彼らの会話を聞きながら果物をむいていた。織図はこそそと恒をどこかに引っ張っていつて教えることはしな

かった。彼女の息子に何を教えているのか、ちゃんと聞かせた方が彼女も安心するだろうと思ってくれたようだ。なので、神々の秘密がおおっぴらに明かされる中、母親はマイペースに家事をする日々が続いていた。志帆梨はこれはこれで、恒の父親がひとり家にやってきたようで悪くはないと思っていたらしかった。それで織図によってくれるのだ。食後のデザートとして、果物の盛り合わせをふたりの話す机の上に置いて、さっさと引っ込んだ。

「どうも、奥さん。ここで奥さんも講義を聞いていくかい？ 今日
は脳の話だから、いくぶん分かりやすいと思うぜ」

「いえ、難しいので結構です。どうぞお構いなく」

志帆梨は遠慮して、風呂に入りに行った。

「そろそろ、教えてくれませんか。どうして、何事にもさきがけて
マインドギャップを作る必要があるんですか？」

「どうしてと言われても、それが基本だからだよ。マインドギャップ
を作ること、マインドブレイクを身につけること、そしてマイン
ドコントロールができるようになること。これが神となる前の準備
段階で最低限できなくてはならないことだ。これが出来ない限り、
神々の世界に入ることはできん。だってお前、どうする？ 会う神
会う神に考えが筒抜けなんだぜ、サトラレみたいなもんだろ？
：サトラレ、懐かしいな。あれ俺好きでさあ、DVD買った」
織図はすぐに脱線してしまう。彼はドラマや映画好きのようで、
生物階に降りてはDVDを買ったり映画を見ているそうだ。神階に
はあまり娯楽がないのだという。

「織図さん、脱線、脱線してます」

「ああ、すまんすまん。まずは心で何を思っているかを相手に悟ら
せないこと、これは初歩の初歩、イロハのイだ」

「マインドギャップを作るとはどういう事ですか？」

「いいだろう。そもそも相手の心を読む、読心術は、誰にでもでき

ることだ。例えばごくごく簡単な例でいこうか、ケーキがあつて、それを子供がじつと見ている。子供は何を考えている？」

「ケーキを食べたいと」

バカにされているかと思つてしまうほど簡単な例えだ。本当にこの程度なら誰にでもできる。サラリーマンが平日に公園でぶらぶらしている。リストラされて妻に言えない。こんな感じだ。これは読心術というより、推理でもある。

「そうだ。これが人間にも出来る読心術であり推察だ、行動学的に状況から推し量るということだ。これも読心術のひとつだろ？　だが神の行ふ看破術、マインドブレイクは違う」

「マインドギャップの話はどこに？」

「黙つて聞いてな。話が繋がってくるから。どんな人間でも動物でも神でも、脳を使って考えるだろ、思考するとはどういう現象だ？」

「シナプスで繋がった脳細胞間で情報をやりとりする事です、よね？」

「その情報とは究極のところ何だ」

「活動電位です」

「そうだ。思考回路は、電気信号が神経細胞を伝わったか伝わっていないか、究極のところ0と1の組合せだ。それが複雑にやりとりをして脳領域を活性化させる。神の行ふマインドブレイクとは、精神活動電位を読み、どこの脳領域がどの細胞と情報を交換しているかを読み解く技術だ。そしてマインドギャップとはそれを読ませない技術。オフエンスとディフェンスだよ」

「技術！」

恒は気が抜けてがくつと肩が下がってしまった。マインドブレイクは神通力のひとつだと思つていた。それを学ぶのだろうと思つていたので気が抜けたのだ。

「なんでそこでがつくりくるかな。この世には魔法も奇跡も呪いも、

んなもんはない！ お前が目にしてきた全ての奇跡は、神が己を鍛えて身につけた技術であり、そうでなければ培ってきた科学的知見によるものだ。神になれば手をかざすだけで不思議な力が使えると思ったか？ そりゃ残念でした！」

ユージーンは手をかざすだけで恒の怪我を癒してくれたが、あれも何かタネがあったのだろう。神は決して仕掛けを見せないマジシヤンのようだ。恒が控え目に頷いたので、織図はかーっ、と大袈裟に額に手を当てて馬鹿にした。

「怪しい宗教団体みたいだな、おい。んなことがあるか。この世のあらゆる現象は全て科学で説明できる。マインドギャップというのは、精神活動電位を推測しようとするマインドブレイクを防御するために、神が故意に思考回路を攪乱する電氣的、化学的シールドだ。マインドギャップはどうやって作るか、それはお前の脳をお前自身がコントロールする事によってだ。脳をどうやってコントロールするか、それは、心を鍛えることだよ。俺がお前に今日まで問いかけてきたような問題は、全て同時に2つ以上の事に思いをめぐらせる事ばかりだ。昨日の例なら、板を奪って助かった男が正しいとする場合と、奪われた方が助かるべきだったという場合の二つの場合がある。二律背反だな。どちらも真である、あるいはどちらも偽であるという結果におわる。そういう命題に取り組むお前の思考回路を見ていた。お前は独立に考え、それを最後に組み合わせ、結局結論を出せなかった。お前のマインドギャップはちゃんと機能してる、より複雑な思考を組み立て思考の層を増やしてゆくことが課題だ」

織図は一気に喋って喉が渴いたらしく、自分で急須に茶葉を入れてポットに湯を注ぎに行った。織図の言いたい事はつまりこうだ。マインドギャップとは、傍流演算のようなもので、脳の表面に複数の電位を発生させて、本来の思考回路で発生してしまう電位の流れを攪乱することだ。実際に複数の電位を発生させるにはどうしたら

いいのか。それは同時に二つ以上の事を考えればよい、この状態がマインドギャップ（心層）が一層以上あるという状態だ。

同時に二つ以上の事を自我のある状態で考える事は人間にはできない。勿論、人間は無意識下で様々な身体機能の調節を行っている。呼吸をし、心臓を動かすのは無意識の反応だ、これは一度に複数の事を考えているとは見なされない。何故なら、身体の反射や調節で使用する脳領域は分かり切っているので、そこで電位が発生していても無視すればいい。看破されるのは自我を持って思考する脳領域だけだ。自我を持って考える間、脳では複雑なクロストークが起きている。だから人間は一つの事しか考えられない。あれこれと物事に思いを巡らせているようでも、実際の思考の対象は一つだけで、意識も一つだけだ。何かよそごとを考えようとする時には、必ず前に考えていた事を一瞬止めてからよそごとを考え、よそごとを考え終えるともと考えていた事に戻る。これが人間だ。だが神は二つ以上の意識を持って独立に物事を考える事が訓練次第で可能となる。恒は織図の見たところ二つの意識を持っているそうだ。マインドギャップはコンピューターがメモリを少しずつ割いて同時に独立の計算をすることに似ている。

「さあ、今日は第三の思考回路を必要とする命題だ」

マインドギャップとはあらゆることを同時に多面的に考えることだな、と恒は理解した。だとしたら、こうやって織図との雑談の中でこそ学んでゆくことなのかもしれない。死神、織図、継嗣と雑談をしながら、毎夜毎夜、恒は複雑な思考を組み上げてゆく訓練に勤しんでいた。

＊

” 1555522, 1555523, 1555524……”

ユージーンは薄暗い処刑場で、身も引き裂かれそうな苦痛の中、時折何かを呟いていた。執行官は彼がずっとこんな事を呟いているので、気でも狂ってしまったのだろうかと顔を見合わせていた。枢軸神が精神を病んでしまったのだとしたら、陽階にとっては痛い損失だ。法務局は陰階にも陽階にも肩入れをしているわけではないが、神階と生物階を動かす神々としてどちらかというと陽階神の方が重要視されていた。

「刑期満了だ、釈放して差し上げろ」

違う足音が聞こえてきて、ゲイルリンクスワイラーが執行官に指示を飛ばすのが聞こえた。あらゆる虐待を受け続けてきたユージーンの神体は血まみれで、今は太い鉄の杭が何本も穿ちこまれている。血も流れては乾き、乾いてはまた傷つけられて、人型をした真っ赤な塊になってしまっているといった方がよいかもなかった。彼は一瞬も意識を失うことなく、延々と耐え続けていた。

「あなたは刑期を全うされました。これから釈放の手続きに入ります。まず、ICUで傷を治療させていただきます、傷が癒えれば公務復帰となります。傷が癒えるまでは入院となります」

「わたしはまだ1556601秒しか受刑をしておりません。何故釈放なのですか」

ユージーンは刑が執行となってから釈放となるまでの時間を、目隠しをされたまま数えていたのだ。彼は強い意志を持って、刑が終わる瞬間を待ち望んでいた。ゲイルはちらりと時計を見やった。

「正確には1556020秒ですよ、少し狂いましたね。超法規的措置がとられました。私があなたを優良受刑者として減刑を求める嘆願書を提出しました。そして、二柱の陽階枢軸神、更に一柱の陰

階神も減刑の嘆願書を出しておられます。これらの嘆願が聞き届けられ、あなたの刑期は1／3に短縮されました。釈放します」

「ゲイルさんが……？　そして、三柱の神々とは……」

「一柱は主神で、もう二柱のうち陰階神は荻号様です。あとの一柱の御方はお見舞いにいらしてますよ。ICUにご案内しましょう」

「ゲイルさん……本当に、お世話になりました」

ユージーンは拘束されたまま深々と頭を下げた。ゲイルはそれに応えることができなかった。ユージーンは50年間保存してきた自己輸血用の血液を55%以上も使ってしまうほどに失血していた。完膚なきまでに痛めつけられた彼は、そんな極限状態でもゲイルに感謝することを忘れてはいなかった。やはりこの神は何かが違う……ゲイルは彼に敬意を表して静かに黙礼した。

法務局は嘆願を出したゲイルを諫めてそれを取り下げさせようとしたが、陰陽枢軸神の三柱がゲイルの嘆願に相乗りして嘆願を出してきた上、その三柱がまた錚々たる面々だったので軽視することができなくなったというわけだ。そこで刑期の短縮が認められ、しかも異例の速さでユージーンは釈放となった。頭の硬い法務局の連中とゲイルとの壮絶な駆け引きの結果がそこにはあった。

ユージーンは安心したように意識を失うと、そのまま拘束器から降ろされ、集中治療室に運ばれていった。集中治療室では創傷の縫合が行われ、神階で医神により開発された傷薬が塗られていた。それでも全治3日以上はかかるということだ。ゲイルは心配をしているらしく、多忙の中を暫く付き添っていた。ユージーンの回復力は平均的な神々の回復力よりも目に見えて遅く、通常は薬を塗った瞬間から癒されてゆくはずの傷がなかなか塞がらない。

その頃になると彼はようやく目がさめて、医師達の話をぼんやりと聞いていた。目が覚めたといっても、瞼は腫れてしまって開かな

かった。失明しているのではないから、安静にしていればいいのだ
が……。

「妙すな、やはり回復が際だって遅い。これでは退院のめどがた
ちません」

担当となった医師は点滴を打って、損傷の説明するとまた後で回
診に来るといつてそのまま去っていった。点滴の痛み止めが処方さ
れているので先程の意識が千切れ飛びそうな痛みはもうない。

ユージーンはともかく今は何も考えず寝ようと思った。風岳村の
事も気になるが、今は意識が朦朧として考えられない。意識を失っ
たことはあったが、もう25日もまともに寝ていない。しかし彼の
そんな気持ちをまったく考えず、また誰かがやってきたようだ。顔
を少し上げて、近づいてきた足音の主を見上げた。そういえば、嘆
願を出してくれた枢軸神がICUに見舞いに来てくれたと言ってい
たっけ……すっかり忘れていた。

「汝は受難によく耐えた」

彼はユージーンの血のこびりついた真っ赤なタワシの固まりのよ
うな髪の毛をまるで犬の頭でも撫でるように撫でる。ユージーンの
目が見えるならば、陽階神第10位、先代極陽、ジーザスⅡクライ
スト(Jesus Christ)がそこにいるはずだった。

第1節 第21話 救世主イエス・キリストから軍神への忠言

ジーザス・クライストは世界的に彼の名として知られていながら、本名ではありえない。ジーザス・クライスト、ヘブライ語では Yhoshuah ha-Mashiah（香油を注がれた者であるイエシュア）という名は通名だ。彼の秘蹟は2000余年という歴史を様々な言語で伝えられてきた。2000年前の人物だというのは、世界にも彼ほどその名と略歴を知られている人物はそうそういないだろう。だが彼は生物階において何度も名が変えられてしまい、彼自身はもう名前についてついぞ執着しなくなってしまった。それで、英語であるジーザス・クライストという呼称を受け入れて、今ではそれを名乗っているようだ。

最近の彼はアラム語・ヘブライ語に加え、英語も好んで話すようになった。その方が生物階降下をした際に何かと便利だからだろうだ。彼はよく生物階に出入りをしていて、教会でイエスキリストに祈りを捧げる人々の横に座って彼らの祈りを聞いている、などという事も冗談ではなく本当にあった。パソコンを使いこなし、携帯電話を持っているイエス様など、誰が信じるというのだろう。彼の名もライフスタイルもすっかり変わってしまったものの、いずれにしろ彼が世界三大宗教であるキリスト教創始者であり、生物階の歴史において最も重要な人物のひとりであり、更に先代極陽であり神階、および生物階の重鎮であるという事実には間違いがない。

彼は彼自身が生物階に降誕したとされる日から始まった西暦にして1300年頃まで極陽を務めた後、当時第2位であった現代極陽のヴィブレ・スミスに極位を実質譲り、するすると10位にまで降格して、枢軸神としての立場を守りつつ、隠居生活のような事をしていた。彼が今も昔も人を深く愛し、人に救いを与えてゆくその為

には、生物階への降下が極度に制限される極位という地位は邪魔だったのだろう。

その彼が、ゲイルリンクスワイラーの嘆願書に自らの嘆願を重ね、絶大なる影響力で法務局を動かし、結果として予定より随分と早く刑期を終える事となったユージーンのもとに見舞いにきてくれたのだ。身分上はユージーンより下位の神だが、ただ隠居暮らしをしているというだけで、その器量は青二才のユージーンと比するものではない。

「ジーザス・クライスト様、このたびは嘆願を頂戴いたしました事、深く御礼申し上げます」

「わたしにのみならず、極陽と荻号、そしてゲイルリンクスワイラーにも左様に伝えるがよい。それに……汝の受難は、聊か不当なものと思えられた」

「いえ、偏にわたしの不始末にございます」

あくまでもそう言い張る彼を憐れむように見下ろすと、ジーザスは基空間から右手に金属製の杯を呼び寄せた。ジーザス・クライストの固有の神具、聖杯（The Grail）である。彼はアラム語で何かをつぶやいていた。

” u t e t h m r a t h a a t w a t h a a n t h e y m n
u w n l a t e k h z u w n l a ”

（汝は徴や奇跡を見なければ信じることはない）

すると彼の言葉を受けるように、空っぽだった筈の聖杯は液体をたたえはじめ、やがて聖杯を溢れて零れはじめた。聖杯は特殊なコモンドにより、毒薬から薬に至るまでありとあらゆる組成の水溶液を作り出す神具だ。ジーザスは聖杯を傾け、ユージーンの口もとに持っていった。それが何たるかを知っているユージーンは、ありがたくいただいた。まだ滾々と湧き出てくる聖水は、彼の傷口に少し

ずつ零すと、薬では癒されなかった傷が嘘のように癒されてゆく。

「ありがとうございます」

「これはよい。だが汝は大きな苦難を負ってゆかねばならぬ身にある。これはわたしからの忠告だ、かの地には二度と降下するな」

「……？」

「これはわたしが以前極陽を務めた身であるからこそ心得ておるところだ。わたしは汝を不憫に思う、避けられるものならば汝を運命から逃してやりたいのだ」

「しかし、戻らねば……それがわたしの任務です」

「かの地には戒厳令が布かれた。極陽の名での発布だ。汝はもはや降下はできぬ」

「罪なき人々が、理由もなく殺されてゆくかもしれないのです。あの村を災厄から守らなければ……」

「汝が降下すれば、更なる犠牲を強いるであろう。汝が災厄を齎すのだ」

ジーザスは厳かにそう断言した。ジーザスのひとつひとつの言葉はいつも重く、難解だが、今度ばかりはユージーンはその真意がわからない。彼は何を言っているのだろう。今の今、風岳村が災厄に見舞われていたというのに、それがまるでユージーンが原因だとも言いたげだ。

「わたしが、あの村に災厄を齎すと仰せなのですか？」

「そうだ。汝は誰に促されようと、暫くは神階を離れてはならぬぞ」

ジーザスはユージーンの一切の疑問を解消することなく、会話を打ち切った。そして次に、彼は両手を静かに併せ、ゆっくりと瞳を閉じ片膝をICUの床につけた。何だ、これは……ユージーンはジーザスに癒されて腫れの引いた臉をもたげ彼の姿を見守った。彼は

聖印を切り送っているのだ。誰にそうしているのだろう、とユージーンは思わず背後を振り返ってしまう。

背後には点滴とワゴンがあるだけだ。ジーザスは彼が後ろを向いている隙に、ユージーンの背中に目を凝らした。ジーザスの慈悲深いまなざしはユージーンの血まみれの背の上をゆらゆらと泳いでいたが、やがて何かを認めたようにただ一点を凝視し、ひとつため息をついたのだ。ユージーンは背後に何もないとわかってまた振り向いた。ジーザスは先ほどとは違って、目を見開いていた。

聖印とは最高敬礼のようなもので、贈る相手に至上の敬意を表し、それぞれの神に固有の動作がある。神は敬うべき者がいないので、聖印が定められていても誰かに切り送る機会はなく、その行為は形骸化している。聖印を贈る相手は極位でさえもないからだ。位神と極位の関係は上司と部下の関係であって、主従ではない。

聖印を切り送る対象は、神を超越したものだ……。黙してユージーンの前で最高敬礼を切り送ったジーザスに戦慄した。思慮深い彼が意味もなくこのような行為をするとは思えなかった。これは隠喩だ。この光景は、決して見てはならない禁断の行為だ。彼は何をしたのだろう、ユージーンは確かにジーザスの上司ではあるが、このような事をされる道理はない。ユージーンは不安が津波のように押し寄せて、流されてしまいそうになった。

「な、何を、わたしに何を……なさったのですか？」

ジーザスは答えず、何事もなかったかのように立ち上がると、ゆっくりとICUを出て行った。

「ジーザス様！ お待ちください！」

彼を引き止めて、今の行為について説明を求めたい、だがユージーンは点滴に繋がれて動けなかった。

*

「主任。ザドキエルが死んだと、UK（英国）の研究所から連絡がありました」

「わかった、ありがとう。こんな時間までご苦労、正岡君」

秘書の報告を受けた中年の男は、何十台ものパソコンモニターをひとつひとつ丁寧にチェックしながらそうぼやいた。男は腕時計を見て、21日間とメモをとり、その回りをぐるぐると赤いペンで徒に囲んだ。男の目は充血し、疲れ目用の目薬の空き箱が彼のデスクに散らかっていた。

「やはり、こんなやり方ではだめだ。これでは貴重な検体を無駄死にさせている」

男の名は早瀬^{はやせ}雄大^{ゆうだい}。IEIIIO（国際知的生命研究機関…International Extraterrestrial Intelligence Investigative Organ）、日本支部の主任研究員である。

現在、日本時間で夜11時。UKでは昼過ぎということだろう。彼はもう3日もろくに寝ていない。千葉にある研究所の窓から、朝日を何度見た事かわからない。日本各地から転送されてくるデータを細やかにチェックする事もまた、彼のグループに課せられた大きな仕事であった。何度も繰り返され失敗に終わってきた結果を、UK支部のグループは増やしたに過ぎなかった。

1942年、第二次大戦中、ナチスが行った非人道的犯罪を暴く為ナチスの負の遺産の調査が行われていた。とりわけユダヤ人に対する生体実験で裁判にかけられようとしていたナチス親衛隊の医師の研究室内の調査をした際に、夥しい胎児の奇形や動物の死骸のホルマリン標本の中に紛れ込む形であるものが見つかった。それは翼を持つ痩せた女のまるごと一体のホルマリン標本であった。調査員

の日記にそれを見つけた時の驚きと興奮が記されている。

"それは私のあらゆる高慢なる知見を覆し、懐かしく純然たる感情にたちかえらされた……すなわち、信仰である"

非人道的として知られたかのドイツ人医師は人外の者にも非人道的であつたらしく、研究ノートには彼女を入手してから一ヶ月後に彼女が息たえるまでの観察が克明に記載されていた。研究ノートからは次のような記述が見つかっている。

医師はナチス軍の歩兵部隊から戦地に奇妙なものが転がっていたので調べてほしいとの依頼を受け、件のサンプルを入手した。それは腹部を負傷した若い女のものであったが、背部に鳥のように大きな翼を持っていた。この翼は飛翔するためのものではないらしく、女の体重を支える程の揚力は得られないと計算されている。腹部の傷を処置した後、優性学を修めていた医師は彼女を希少な変異個体として猛獣の檻の中で飼育しはじめた。彼女には十分な水と食事が与えられたが一ヶ月後、痩せ衰え、餓死してしまった。標本つきの研究ノートがあるので、調査員たちも信じない訳にはいかなかった。そのひとつの標本によつてはじめて、翼を持つ、人間ならぬ者の存在が明らかになったのだ。

彼女はその印象的な姿から"天使^{ラファエル}Raphael"と名付けられた。現代になって、発達した遺伝子解析技術と画像解析技術をもつてしても、ラファエルからは核酸とタンパク質の類が検出されず、複数の研究者の間で地球上の生物ではないとの結論が繰り返し導き出された。傷ついた"天使"なるものはその後も大規模戦争や紛争が起こるごとに、それに巻き込まれる形でたびたび発見された。ベトナム戦争、中東戦争、イラク戦争などを経て、ラファエルに^{ウリエル}Uriel、^{ミカエル}Michael、^{ガブリエル}Gabrielらが発見され、まったく戦地とはいえないような場所からもある法則性を持って天使達

は捕獲された。天使の数は五十体以上にも及び、捕獲された彼等はいつも決まって衣服や持ち物に家紋のような紋章を帯びていた。研究者たちはこの紋章に注目し始めた。

現在までに見つかっている紋章は十種類。最も多いのが車輪型、次が植物型、そして剣型と続く。天使たちはその紋章を旗印とした何らかの各組織に所属しているのではないか、という仮説がたてられた。紋章の種類によって、天使の分布する場所が異なっていたからだ。例えば車輪型と分類された紋章を持つ天使は、戦争や紛争の起こっている地区で必ず見つかる。流れ弾などに当たって負傷するため、傷ついて捕獲される個体が多いということだ。植物型の紋章を持つ者は山間部で多く見つかるし、剣型のものは海岸沿いで発見される事が多い。彼等は役割を与えられていて、それに従って分業して何かをしているのだ。だとしたら一体、何をしているのか……。研究者の中でも、早瀬のような社会学者はそのような関心を持っていた。

彼等は高度な知性を持ち対話が可能でありながら、行動学的な研究は一向に進まなかった。どんなに人間さながらに手厚く保護、飼育をしても、高カロリー輸液やビタミン剤の補給を行っても、全ての個体が痩せ衰えて餓死し、1ヶ月以上の飼育はできなかったためである。暴れてジタバタ動き回った者ほど早く死んだ。彼らは死の間際に、

”主よ、わたしは渴く”、

”主よ、わたしをお見捨てになられるのですか”

といった有名な聖書のくだりを様々な言語で口々に叫んでは息たえる例が殆どだった。

彼等の求める主とは何か、そして彼等はどこからやってきて、何

を糧にしていたのか……彼等は結局、死の間際にまで彼等の正体について口を割ることはなかった。決して歴史の表舞台には現れる事のなかったこのひそやかな現実、人類に課せられた大いなる謎のままとなった。

このような謎に包まれた知的生命体の実体を解明するため、国際的、学際的な研究機関が1978年に国際連盟の下部組織として設立されていた。それがIEIO（国際知的生命研究機関）である。IEIOは世界中に87の支部を持ち、日本にも千葉県の某所に日本支部が存在する。

「井村君」

早瀬は同じく隣のデスクで、早瀬と同じようにモニターを見ていた井村という部下に呼びかけた。早瀬よりほんの少しだけ若く見える井村という男は、あまりに長時間モニターを眺め過ぎてもう頭痛がしているらしく、頭を抑えながら話は聞いていると手を振ってよこした。

「井村君。我々は社会行動学者だ。こんな事をする為に、この研究所にやってきたわけではない」

「主任……もう僕、限界です」

井村という男も、かなり熱心な研究者だった。その彼が弱音を吐かなければならないほど、彼等はもう煮詰まってしまった。IEIOの全職員に与えられた課題は、現代科学のあらゆるツールを用いても、解決するには難解すぎた。早瀬はIEIOが設立以来まったく成果を上げられない事を思い起こしているうち、あることに気付いた。3歳になる愛娘とも、もう2ヶ月も逢っていない。

そんなこんなで精神的にも荒みきって、研究が進まない事に対するフラストレーションを募らせていた。今回のUKのグループの報告で、早瀬の中の何かが吹っ切れた。先ほどの報告をもって、IE

IIOの保管する天使の死体は、記念すべき60体目を数えたこととなる。

「そう、私も限界だ。やはりアプローチが間違っている。IEII Oが血眼になって彼等を次々と捜して、捕縛するのは間違いだ」

「まあ、生物屋さんはそうするでしょうね。採集しなければ、材料にならないわけですから」

何を当然のことを、と井村は早瀬に顔を向けようともせず、鼻の頭をいじくっている。この男がもうじき狂ってしまわなければよいのだが……と懸念しつつ、早瀬は彼に語りかけた。

「2万人という研究者が日夜研究に勤しんでいながら、誰もそれが間違いだと気付かなかったのかね」

「それは、僕達も含まれているんですよ」

「そうだ！ 井村君。私はこれまで通り彼等を捜す」

早瀬は何か得意げに、大声を張り上げて胸を張った。その異様な姿に、井村はばりばりと頭をかいた。伸び放題の髪の毛は、もう半年も切っていないわ二日洗ってないわで……。井村は膨らみかけた希望が、急にしぼんでゆくを感じた。

「今までと同じじゃないですか」

「それが違うんだ。彼等を見つけてももう捕獲はしない」

「それじゃ、研究になりませんよ」

職員は天使を発見し次第、特殊部隊に命じて捕獲しなければならなかった。職務にも違反してしまうこととなる。

「逆転の発想だ。捕獲して1ヶ月も生き長らえさせる事ができないのなら、彼等をまず先に見つけて、それを観察すればいい。彼等が何を食べどうやって生活をしているのかを、彼等の言う”主”とい

うものが何なのかを、観察していればいいじゃないか。捕獲するか殺してしまうんだ」

「……！ おお！ なるほど……！」

立ち上がった井村は、蛸足コンセントに足をとられて派手にずっこけた。そのついでに、ペン立てに無造作に詰め込まれたボールペんにシャーペン、定規などが彼の頭からあらんかぎり降りかかる。コンパスの針が、彼の指先に刺さってしまった。それにも構わず早瀬は続ける。

「私は思うに、彼等が普段は主と呼ぶ者と相利共生をしているんじゃないか？ だとすれば、彼等を殺す事なく彼等が生活している姿が解明できる、そして彼等の目的も……」

「天使は一体、何を食べて生きているのでしょうか」

「それを、調べるんじゃないか。主とやらと共生している天使を捜し出すんだ、何としてでも！」

早瀬は徹夜で血まなこになってしまった彼の瞳に、最後の一滴の目薬を与えてやった。

＊

陽階、上層部枢軸位執務棟、ユージーンは明るくだっぴろく、そしてひたすら長い回廊をとぼとぼと歩いていた。

陽階の11290階は軍神に割り当てられたフロアになっていて、執務室、使徒階第一層、軍神の居住区や会議室、ホール、訓練所などがある。このフロアにいる神はユージーン一柱だけで、あとの全員が彼の使徒だ。ここには3万名の使徒が働いている。それで、彼の帰還はこっそりというわけにはいかなかった。執務室に戻る回廊のどこを歩いても使徒がいて、心配そうにあれやこれやと話しかけてくる。特に身体罰の直後なので、ユージーンの体調や精神的疲労

を慮ってのことだ。悪気はないのだろうが、うるさく話しかけないでほしいと思いながら、彼は足早に歩いていった。

「主よ、身体罰による傷はいかがでございますか」

「お疲れ様でございました」

「ありがとうございます、お前達には心配をかけたな」

どの使徒たちも執務室に戻るユージーンに口々に気遣いの言葉をかける。刑期短縮が発表されはしたが生物階での犯罪を犯した後すぐ逮捕され、執務室に戻る間も顔を見せる間もなかったので、顔を見るまで心配だったのだろう。長い闘病生活の末退院した芸能人のように、彼はパパラッチのような彼の使徒達に取り囲まれながら歩いていた。

ジーザス・クライストの治癒を受けたユージーンはすっかり傷を癒され、釈放されたその日のうちに公務復帰を望んだ。これからどうすればよいのか、自分がなすべき事は何なのか、ユージーンは方向性を見失っていた。極陽からの勅令を完遂する事もできず、風岳村も見放してきてしまった。

自分は未熟者だ、何一つ満足にできはしない。そんな後ろ向きな思考回路にもなる。

多くの使徒のねぎらいの言葉や花束、千羽鶴などの貢物を受け取りながら執務室に入ると、彼の最も信頼する右腕、第一使徒の響以御が軍神のみに座る事の許された椅子にでんとふんぞり返っていた。ユージーンの恙無い様子を見てほっとしてから、椅子を彼に譲った。

「おつとめ、ご苦労だったな」

「お前にも苦労をかけたな、以御。クレームが凄かっただろう」

「ああ、ハンパなかったぜ。俺は名登山家だから、踏破してやった

けどな。クレームばかりじゃなかったぜ、見舞いの電報や激励の手紙なんかも届いていた」

ユージーンは以御に荷物を預けると、倒れこむようにして執務室の椅子に腰掛けた。彼は疲れきっていた。シャワーを浴びてこびりついた血は落としたようだが、まだ傷口から滲んでくる血のせいで、聖衣に血痕がついている。以御は襟についた血をごしごしと拭う。こいつ、こんなにボロボロになってまでよく耐えたな、と以御はねぎらってやりたかった。

「少し寝ろ。くたくたじゃないか。傷口もまだ乾いていない、フィジカル・パニッシュメントの後にすぐ働こうとする奴がいるか」

「確かに、噂には聞いていたがこの世のものとは思えない虐待だったな。寝てなどいられない、すぐに極陽に報告に行かなければならない。荻号殿にも御礼を述べなくては」

嘆願を出して刑期を短縮させてくれたのは錚々たる面々だ。返礼を怠ってはならない、それを彼は重々承知していた。それに、荻号にはG-CAMを預けたままだ。神具は神の命の次に大切なものだ、一刻も早く返してもらいたい。

「嘆願を出してくれたようだからな。しかし、優良受刑者の刑期短縮なんて措置があったんだな。陰陽階神法にはそんな記述、一言もなかったぜ。史上初の適用だろ？ あんたは史上初だらけだ、そのうちレコードホルダーになるぞ」

冗談めいた彼の言葉を聞いているのか聞いていないのか、ユージーンは以御の言葉に乗っかってこう言った。

「極陽に謁見のアポイントメントを取ってくれ」

「わかった。だがそれは明日だ」

「……急いでくれ、以御、頼むから」

「極陽にお見えするのに、体調を万全にして行かない奴があるか！ あんたのマインドギャップはただでさえ足りないんだ、看破で破

られるぞ」

厳しい口調でたしなめられたが、以御の言うとおりだ。極陽は精神攪乱系の神具FC2—マインドキューブを持ち、看破能力に長けている。風岳村での事が彼に筒抜けになってしまうのは構わないが、恒と志帆梨のことは伝えたくない。どこに敵がいるか、分からないからだ。今日のこの会いに行った所で、彼の思う壺だ。恒と志帆梨の事などすぐに見破られてしまうことだろう。

「それから、荻号殿から連絡が入ってるぞ。戻ったらまず自分の携帯に電話でいいから連絡をくれと、番号も教えて下さっている。あなたの方にはあれほど迂闊に近づくなど口すっぱく言っていた筈だが、どうしたことだ？ まったくあんたは、やっちゃいけないという事を敢えて、ご丁寧にやってきてくれる。このたびの逮捕にしたって俺には理解ができない。たかだか一人の人間を蘇らせて、ご自分が痛い思いをしたっていう神経もな。だがそれも明日にして、少し寝ろ。話はそれからだ」

以御は口では厳しい事をずらずらと並べ立てながらも、温かいおしぼりを与える。頬に滲んだ血を拭いながら、ユージーンは先に荻号に電話で連絡をとる事に決めた。直接対面しない電話でなら、マインドギャップを破られる心配はない。G-CAMを返還してもらい、ついでにデータの結果も聞きたいところだ。先ほどジーザスの謎の行動の意味も、ひよっとすると彼なら分かるかもしれない。陽階の長たる極陽に挨拶をするより先に陰階神の荻号に連絡をとるのはどうかと思ったが、電話ぐらいなら勘弁してもらいたい。

ユージーンはメモとペンを用意し、アナログな執務室の電話を取ると、22桁の荻号の番号に電話をかけた。3コール目に受話器が取られ、口を開きかけたところで意外な声が聞こえてきた。

「もしもし、ユージーン様ですか？」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、柔らかな口調のファティナ「マセマティカの声だ。荻号ときたら携帯を落としてファティナに拾われてしまったのだろうか、まずいな、これではファティナに荻号と通じていることがばれてしまったな、とユージーンは額を押さえた。陰階参謀である荻号と通じる事は陽階では固く禁じられている。咄嗟の事だったのでうまい言い訳も出てこなかったユージーンをフォローするように、受話器むこうのファティナの声が慌てて早口になった。

「この番号にあなたから連絡があったら取り繋いでくれと荻号様に申し付けられているのです。荻号様は私の神具内にいらっしやいます。今御呼び立てしますのではしお待ちを……あの、ユージーン様。お怪我の方はいかがですか」

「ご心配ありがとうございます。もう大丈夫です」

なるほど、そういう事情だったかとユージーンは胸を撫で下ろした。しかし荻号はファティナの神具ヘクス・カリキュレーションフィールドまで使っていたのだろうか。一つでさえも持て余す神具を、一度に4つも帯びる事ができるなんて……やはり彼は別格だ。

その彼がG・CAMの中に何を見出だしたのだろう。ユージーンは受話器を持ったまましばらく待った。演算空間にダイヴをしていたのなら、意識を仮想空間から実体に戻さなければならぬ。それには少しばかり時間がかかる。

そう思っていたとき、まったく予想外の場所から、ユージーンの目の前にふっと荻号が現れた。

以御が驚いてとっさにユージーンを庇うように前に立つ。この部屋に荻号を通した事は一度もなかったから、追跡転移というやつを使ったのだろう。ユージーンはしてやられたといわんばかりに受話

器を置いた。以御は怯まずずっと前にでしゃばった。荻号は壁のように立ちはだかった、彼より随分背の高い以御を見上げて涼やかな瞳で見つめる。以御はきわめてビジネスライクだ。

「畏れながら、以後アポイントもなしのご訪問はご遠慮いただきました」

慇懃無礼は、以御の得意とする分野だ。荻号はでかい壁が何か話しかけてきやがったな、という顔をしただけで、歯牙にもかけなかった。

「ああ、次からそうする。お前の主に用がある、そこをどきな」

「以御、外してくれ」

荻号ほどの相手だと、体調のよいときならマインドギャップが万全か、などみみっちいことを考えても詮無きことだ。彼にはいつだってどんな状況でだって100%看破されている。ユーザーはもう綻びかけていたマインドギャップを立て直す事を諦め、腹を決めた。思考看破をされないよう、できるだけ余計な事を考えないようにしなければならない。抵抗する術はないのだから、無心の境地にいるしかない。以御は荻号を警戒してなかなか退出を渋っていたが、もう一度ユーザーに強く言われて出て行った。

「そんなビビってんじゃねえよ。話す気も失せてくる」

荻号はげんなりだ。

「この度は嘆願を戴きまして、感謝の言葉に絶えません」

「お前は俺と違って虐待されりや痛えだろうし、神階で最も治癒能力のある治癒血を無駄にするのもあれだからな。そのくらいの事はしてやるさ。さて、社交辞令はここまでにして本題を話すぞ」

荻号はG・CAMの中の解析データをステイックメモリーに詰めてユーザーに手渡す。中にデータが入っていることを察したユーザーのパソコンで結果を見たいところだが、あいにく彼のノート

パソコンは風岳に置いてきたままだ。荻号は仕方なく彼の真っ黒な薄型ノートパソコンをどこからともなく出した。

荻号自身が組んだプログラムによる解析ソフトが立ち上がり、解析したデータをディスプレイ上に示す。膨大なデータファイルが解凍され、結果を表示するための高速演算がはじまった。彼のパソコンはカスタマイズにカスタマイズを重ねて、枢軸神の持つ並のパソコンの数万台分の計算能力を持つ。結果の表示までにかかった時間はわずか1秒にも満たなかった。ユーザは食い入るように見つめていた。

「結果から先に言おう。お前とメファリストがいた場所、首刈峠、いわゆるグラウンド・ゼロには今後、連続的にINVISIBLEの介入が見込まれるだろう。次回の周期は一万年以内に217回の臨界値に達する。その臨界値に達したときにグラウンド・ゼロに絶対不及者候補がいれば確実にINVISIBLEは彼の中に収束することになるだろう。最初の臨界点はわずか3年後だ。次のオリンピックが来る前にINVISIBLEの最初の収束が起こるだろう」

オリンピックって……冬季だろうか、夏季だろうか？ などと訊くような無粋なまねはしない。4年を待たずして、という意味だ。荻号は彼のノートパソコンに解析データを移し、それを示しながら説明してくれた。そのシュミレーションは簡潔で、無駄や誤差が一切といていいほどなかった。荻号は乱数を発生させヘクス・カリキュレーションフィールドを陣取って綿密な計算を繰り返していた。およそ189兆通りの乱数の中から得られたシュミレーションだ、美しいスペクトルになっている。

「それから、お前にひとつ言っておかなければならないことがある。隠し切れないと思ったんでな。本人ももうそれを受け入れているし、

お前だけ知らないのもあれだ」

「え、はい、何でしょう」

「藤堂恒は極陽の息子だ。もともと、極陽は彼を息子だとも思っていないのだから。ある目的のためにグラウンド・ゼロに送り込んだアーティフィカル・クリチャー（模造生命）だよ」

荻号はユージーンが最も知りたかったであろう事実を簡単に明かす。

ユージーンは彼の言葉がとても信じられなかった。恒をADAMに閉じ込め、一般人である藤堂志帆梨を処女懐妊させ、彼女の人生を10年にも渡り奪っていたのが、人々を正しく教え導く事が使命である筈の陽階の長の仕業だったとは……。

嘘だ、信じられない！　とは思えなかった。

荻号は謀略を生業とする陰階の策士であったが、彼の言うことは不思議と信じられる。彼は些細な事ならいくらでも嘘をつくが、悪意のある嘘はつかない人物だ。それが陰階のうちに絶大なる人気を誇り、尊敬を集め、陽階から最も警戒されてきた理由だ。それに恒はどことなく極陽に似ているような気がしないでもない、

幼い彼の中にある深慮、そして優しさ、駆け引きの巧みさ、何事にも動じない信念、それらは確かに極陽の中にあつたものであり、彼が受け継いだもののなのだろう。だが、もし荻号の言うことが真実だとしたら、ユージーンは極陽を許せそうにもない。ユージーンは昂る心を鎮めながら、呻くように尋ねた。

「その目的とは……何ですか」

ユージーンは茫然自失としている場合ではないと思い、あらゆる

感情を心の奥にぐいと押しやった。彼のいう事が本当だとすれば、ユージーンは極陽の思うが儘に彼の駒として動かされていたということになる。極陽はユージーンに何をさせたかったのだろう……。荻号はユージーンの感情の整理などには付き合ってくれず、デイス・ブレイを眺めたまま、話を続けた。

「恒……コウ、それは抗体を意味する名だ、極陽はとあるものに対する抗体として彼を創りだしたのだろう。そして藤堂志帆梨の母胎に完璧に設計された彼を授けた：母親が無意識的にコウと名づけたのは、彼女が極陽から夢の中でも聞いた抗体という言葉の僅かな記憶によるものだろう。抗一絶対不及者抗体（Anti-ABNT Antibody）、それが彼の存在理由だ、極陽からはそれ以上の役割も、それ以下の役割も求められていない。恒に求められているのは、グラウンド・ゼロに現れるかもしれない絶対不及者を、彼の能力を以ってして封じる事だ」

絶対不及者に対する抗体、一体どんな方法で絶対不及者の能力を封じるのかは全く解らないが、恒にそんな事をさせるのかと思うとユージーンは絶句してしまふ。相手は神ですらない、存在ですらない、ただのエネルギーの集塊であり、不死の超越者だ。仮にそんな役割を押し付けられたとしても、恒の今の精神力ではそれを成し遂げられる筈もない。

「ちょ、ちょっと待ってください……恒君で、絶対不及者の力を押さえ込もうとしているのですか？ そんなことが！」

「それが出来るらしぜ、創造神ってのはよ」

「……なんという、怖ろしい……し、しかし、絶対不及者を、恒君の力でですか？ 絶対不及者はまだ現われていませんし！ とても現実の事とは思えません！」

そうだ、絶対不及者はまだ現われていない。現われていない、こ

れは事実だ。だがそう思ったところで、ユージーンは突如殴りつけられたように迫りくる不安に襲われた。荻号は事実を立て続けに明かされて混乱する、ユージーンの反応を無言でうかがっていた。冷静に。だがじつくりと。

ユージーンの一挙一投足が観察されている。ふと、先ほどのジーザスの行動が彼の意識の奥から煮え立つように蘇ってきた。

用意されていた必然が、荻号の姿を借りて降臨したという、言ってみればただそれだけだった。それはいつでも、何をするでもなくただ其処にいて、時間という名の永遠の川の流れに静かに打たれて水の飛沫のごとき事象を観過し、流れの中で佇み無言を貫いていただけで、神々は不遜にもINVISIBLEがあたかもそこに居ないかのように錯覚していた。

歴史は暗黙のうちに闇に閉ざされ、過去へ遡る事でしかそれを推測できず、一度未来へ向けて手を差し伸べ必然の時間がただ動き始めただけであるにもかかわらず、沈黙により根拠のない怯えと絶望、勝手なる様々の推測がINVISIBLEの存在意義を引き上げて、だから創世者は沈黙しているだけでよかった。彼らの空想だけで自らを正当化することができるという点においては、この事こそがINVISIBLEの残虐性なのだと思う。かの沈黙が破れるまでの時間を待つのはその膝下にある者にとって、常に耐えがたい重圧を強いて、およそこの世界に住む者たちは彼の創った快適な家に蔓延る黴によく似ていた。

光が強ければそれだけ落ちる影も色濃く見えるものでありながら、ユージーンはかくも愚かな日々を漫然と生きていた。

その怠惰な時間に、終止符が打たれるときが来たのだ。聖印は神を超越した者に対する敬意の動作だ、それが他の誰でもない。ユー

ジーンに送られたということは、一つの意味しか持たない。

「荻号様……まさか、まさかそんな……!……」

荻号は何に対しても解らないまま、ただ穏やかに、ゆっくりと頷いた。

「ああ、そうだ。お前が、INVISIBLEの器、絶対不及者になるんだ」

荻号は以前よりユージーンの持する若さや、快いまでの純粹、温和な性格が誰よりも新鮮に眩く見え、そういった生の気配に満ちていながら時折見せた憂いの仕草にどこか儚さが同棲して、真摯な生に垣間見える儚さに、何度かはっとさせられた事があった。INVISIBLEがそんな彼を好んで選び、その仮の宿としたのは、ある意味真理だったのかもしれない。

彼の頭上には鋭く研ぎ澄まされた巨大な金無垢の刃物が落下せんとして迫っていて、神々はその刃物を傍らから見れば怯えていたのに、彼は頭上を見ようとはせず、神々も空を仰げとはいわなかった。そうする事で恐怖を味わわないでいられたが、知ってさえいれば切っ先が自分の身体を縦に貫く事が無いように避ける事が出来たやもしれなかった。彼は生贄としてとりわけ鮮烈な色彩で輝く血を、桃色の臓物を晒すこととなった。まるでそれが彼の生きた証であったかのように、生をその手に捕らえて掲げた。

この一柱の神によって放たれる不可思議な光芒に眩耀させられながら、世界は、果て無き死の旅へと連れ去られようとしているに違いない。

「ユージーン、可能性は常に一方向にのみ用意されているものでは

ない。三年後にお前がグラウンド・ゼロに行くのか行かないのか、それはお前自身が選ぶ事だ。極陽やジーザスに強いられる事ではない。絶対不及者となって世を破滅に導き最後にはINVISIBLEに殺されるか、創世者の気まぐれに賭けてみるか、それとも極陽の秘策に賭けて恒に封じられ、拘束されたまま永遠を生きるか。お前はそのどれをも選ぶ事ができ、また選ばない事もできる。未来が三択である筈がない。どんな結末になっても全て俺が後始末をつけてやる」

「恐れるな。世界を導くことを」

荻号は突き放したようでありながら、まだユージーンを見捨ててはいなかった。

第1節 第21話 救世主イエス・キリストから軍神への忠言（後書き）

挿絵（筆者絵注意） ジーザスⅡクワイスト

<http://lizeel.web.fc2.com/gallerypics/jes-1.htm>

第1節 第22話 立法神、比企 寛三郎の懸念

メファイストフェレスはその日の朝、職員室で皐月を見かけるなり、ひしつと抱きついた。

着任以来皐月に密かに想いを寄せる体育教師、小泉 岳がその様子を眉を顰めて見ている。

恋敵のユージーンがいなくなったと思ったら、最近はメリーだとかいうお姐系の女教師が彼の代打にやってきて皐月の傍を離れようとしな。小泉はそのおかげで、ずっと前から買っていた新作映画のペアチケットを渡しそびれていた。もうすぐ映画も公開終了となってしまうというのに。

「おはようございます、メリー先生。どうされましたか？ あ、また朝顔が咲きましたか？ たくさん咲いたんですか？」

メファイストフェレスはこの時期毎日のように社務所に咲く朝顔の花を楽しみに育てていた。今日はいくつ咲いた、何色がいくつだと皐月に報告するのが日課のようになっていた。和の情緒を楽しむ心があるのだから、魔女と言われる彼女も日本人顔負けといったところである。

彼女は社務所を模様替えして、村の雑貨屋で買った涼しげなガラスの風鈴を軒先にぶら下げ、日差しが入らないよう窓には簾をかけていた。そんな彼女と一緒に、皐月は社務所でそうめんなどを食べたりして夜の時間を過ごす事が多くなった。夜になるといつの間にか、スケッチブックと宿題を持って天野凜もやってくる。凜がどうしても一人で寝るのが怖い夜は、社務所でメファイストフェレスと一緒に寝ているようだ。すっかり彼女も村に馴染んでしまった。

そういえば先ほどからハグされていても彼女の腕力は強いので、ギブギブ、とやらなければ皐月は窒息してしまいそうだ。

「違うわ、皐月。主の刑期が短縮されて釈放となったの。GLーネットワークのヘッドラインに出ていたわ」

「え、ユージーン先生が！」

皐月の顔が綻んだのと対照的に、その言葉をこっそりと聞いていた小泉の顔に影が差す。やはり、噂どおり彼等はできていたのだろうか。彼がいなくなったからといって、小泉には出る幕などなかったのかもしれない。

彼は告白する前から玉砕して、しゅんと項垂れて出席簿を脇に挟み、職員室を出て行った。

「でも、ユージーン先生はもうこの村には戻って来れないのですよね」

「そうね、今この村に降下できるのは織図 継嗣という神だけよ」
皐月はメファイストフェレスに聞いて、恒が織図の教育を受け始めたという事を知っていた。織図にはまだ一度も会った事はない。

なんでも藤堂家に夕方に来て、朝には帰ってゆくのだそうだ。恒は神としての道を選び、それに向けて歩み始めた。皐月がどう諭しても、もう止める事はもうできないのかもしれない。だがユージーンなら彼の凝り固まった決意を解きほぐし、恒を止めてくれそうな気がした。

ユージーンにもう会えないというのだろうか。巧のことが原因で逮捕されてしまったとはいえ、これでお別れなんて、あまりにも勝手すぎる。

「もう二度と、ユージーン先生にはお会いできないのでしょうか。」

皆待っているのに、子供達も……」

「そうね……主の携帯電話はあの日を境に繋がらなくなってしまったわ、あれだけの空間異常が起こっていたのだから、壊れたのでしょうね」

皐月はこのままずっと彼に会うことができないのだけは納得がいかなかった。子供達だって皆彼の帰りを待っている。口に出しては言わないが、どの子供達もふとした拍子にユージーンの名が出たとき、寂しそうな表情を見せていた。そんな中で恒だけは、ユージーンの話の口に出さない。彼は地上で彼の帰りを待とうとは思っていないようだ。

天上から降下できない彼を、迎えに行くとしてもいうのだろうか。恒は織図の教育を受けるようになって、日ごとに精悍さを増してきたように思える。本人は何も語らないが、恒は少しずつ、神としての力を身につけているようだった。

皐月は放課後、そそくさと帰ろうとする恒を引き止め、校庭の見える高台のベンチに呼び出して二人で腰掛けた。160cm近くもある恒はまた更に背が伸びて皐月を追い越して、以前より逞しく見えた。この小さな子が、神様になるというのだから……と思っていたが、どうやら恒は皐月の思った以上に心身ともに成長していたようだ。恒が喜ぶと思って、皐月はこのニュースを一番に彼に伝えた。

「お話って何ですか」

「ユージーン先生が釈放になったみたいなの」

「え！ ……そうですか」

「嬉しく、ないの？」

恒は少し困ったように俯いた。嬉しくないはずがない、だが恒が考えている事は感情を超えたもので、もっと複雑な事情だ。

「でも……彼はもうこの村には戻って来れません。帰ってきたら相

談したい事が、たくさんあるのに」

「相談したいこと？」

恒はこの悩みを、皐月には素直に話すことにした。朱音は彼女の生徒でもあるのだから、話しておいた方がいいと思ったのだ。

その後の朱音のことだが、織図は恒を通じて上島に小さなアンブルを1ダースほど渡していた。これは下位の使徒に支給される神のアトモスフィアを希釈した栄養剤だ。

黒いアンブルには織図のアトモスフィアが希釈されて溶液に溶かされていた。上島はその成分が何かも知らないまま、骨形成を押さえる神階での特効薬だと言われて、朱音を定期的に外来に呼び出しでは容量を守って注射をすることになった。恒は彼女に少しとはいえ痛い思いをさせて可哀相だと思ったが、もう恒のアトモスフィアでは彼女を養いきれないし、まだ朱音とは面識を持っていない織図と接触させるのは難しかった。これが朱音にとって一番よく、自然であり、誰もひやひやせずに済む方法だ。アンブルは月に一度、1ダースということは一年分が用意されていた。

このアンブルが彼女の命を繋ぐ秘薬だというなら、もっと大量にこれをもらえば彼女は天上に上がらなくてもいいのではないかと恒は安易に思ったが、そうではないのだと織図に叱られた。使徒が長く地上に留まる事はアトモスフィアの問題だけではなく、かなりのリスクを伴う事なのだという。

それはある国連下部組織の存在があるのだそうだ。使徒の存在は太古より知られてきた。宗教画に出てくる天使や、天狗として人々は昔から使徒を目撃していたのだ。それらは神秘現象として片付けられていたが、とうとう科学が神秘にメスを入れ始めた。

使徒を生け捕りにした一人の研究者によって、使徒の実在が明ら

かとなり、この数十年間で六十名もの怪我をして衰弱したような使徒が研究のため彼等に囚われたのだそうだ。

単純に年間一名以上が捕まっている計算となる。

そうやって捕らえられた使徒を神階は切り捨て、救出には乗り出さない。神と神階の存在は現代の主神によって秘匿されているからだ。囚われた使徒はアトモスフィアの供給を断たれ、飢え死にする運命だ。彼等は強い忠誠心に支えられ、彼らの正体を決して明かさずに絶命する。

そうやって死んでゆく検体を生きた状態で確保するため、使徒たちの搜索と捕獲が日常的に行われているのだそうだ。その組織は、分子吸光度の違いを利用した人間と使徒を区別する装置を開発していて、いくら翼を不可視化しても見つかってしまうという。つまり朱音が地上で人間として暮らす事は不可能なのだ、と。織図はそう言った。

こんなド田舎まで、研究者がわざわざやってくるものかと恒は思ったが、監視装置は世界中のあらゆる都市に各国の国家予算を投じて設けられており、例えば朱音が修学旅行に行っただけでも複数の監視装置に検出され発見されてしまうのだという。

しかも風岳小学校の修学旅行は来年で、場所は京都だ。主要都市から設置されはじめたという監視装置は、まず設置されているといい。朱音は新幹線や飛行機に乗った事がないと言っていたので、これまでは大きな都市に行った事がなかったために見つからなかったのだろう。

最近では大都市のみならず、市町村にも監視装置の設置を始めているらしい。人間以外の知的生命体が人間社会で暗躍していて、し

かも何をしているのか解らないとあっては、国としても放ってはおけないのだろう。文部科学省の大きな予算がついて、使徒を燻り出すためのローラー作戦は国家によって大規模に、だが極秘裏に行われていた。

そのうえ、朱音の血液型は確かO型だ。織図がそう指摘したとき、恒は彼が何を意図しているのかわからなかったが、しばらく考えていてはっと思い至った。

O型という血液型は、A型の抗原もB型の抗原もないというだけで、それが直接人間であるという証拠にはならない。

つまりO型の人間は人間でない可能性がある。

Rh型の検査も行われているのだろうが、恐らく抗原を持たない朱音は（一）だ。

その組織は人間と使徒とを区別する為に、O型Rh（一）を持つ血液型に注目して、健康診断と銘打った血液検査のデータを集める事によって、人間社会に紛れ込んだ使徒をいぶりだしているのだという。O型の人間を調べるだけでも、随分とソートがかけられる。

人間である母親の血を半分受け継いだ恒の血液型はA型で、精密検査の対象にはならないだろう。だがO型Rh（一）の血液は精密検査が行われる。使徒の血液成分は人のそれとはまったく異なるため、精密検査ではれるのは一瞬だ。監視装置か血液検査、どちらかにより朱音はかならず捕らえられる。こんな背景の中、国家が血眼になって捜している使徒である朱音を地上に置いてはおけないだろう、と織図は言うのだ。

さらにだ、彼女はま世界で一例もサンプルのない翼の生えていない子供の使徒だ。人間ではないのだから人道的配慮もないだろうし、

動物愛護団体でしゃばる場面でもないとしたら、研究者が手に入れたくならない筈がない。皐月は恒から聞かされた事の深刻さに、途中からひどい頭痛がした。

「どうでしょうか。俺、最近の悩みはずっとこれです」

「藤堂君。あなたはいつも何かに悩んでいるのね。確かにこれは、とても難しい問題だわ。でも私は石沢さんを守りたいし、その為なら何だってしたい。修学旅行は違う行き先を提案してみるし、もし血液検査があれば血液をすりかえてもいいわ。私もO型だもの」

「ありがとうございます、助かります。でもいつかは、知らせないといけない時が来ます。それはいつなんでしょう、俺には決められません」

恒は時間がきたといってベンチから立ち上がった。強い日差しが差し、彼の表情は見えなくなった。

約束をしていた時間に巧と隼人が恒を迎えに来たので、皐月は彼を見送った。恒は彼等には悩みを抱えている顔を微塵も見せず明るい表情に戻った。子供とは思えない、大人顔負けの精神力だな、と皐月は感心した。

皐月は誰もいない放課後の教室に戻ると、デスクの中からピンクの花柄の便箋を取り出し、さらさらとペンを走らせはじめた。美しい楷書体で、彼女は「ユージン先生へ」と宛て、手紙を書き始めたのだった。一枚だけと思っていた手紙は10枚にもなり、教室の中がすっかり暗くなって手元が見えなくなった頃、彼女は最後の行に吉川 皐月と署名をして終えた。外ではメフファリストフェレスが陸上部の練習を終える号令を発していた。

皐月は残った職員に挨拶をして帰りの支度をする、ピンクメタリック色の自転車にまたがって夜道を走った。目指すは風岳村のはずれ、山の中腹に位置する一軒家、藤堂家だ。皐月は坂道の下に自転車を置いて、徒歩で坂道を上っていった。山道は真っ暗だが、皐月は迷う事はなかった。

恒が不登校だった時期に、毎日のように通った山道だ。むしろ懐かしくすらある。最後のヘアピンカーブを曲がると、外灯が暗闇の中を明るく照らすように点っている。皐月は志帆梨によって修理された新しいインターホンを押した。建てつけの悪かったドアは修理されていて、すぐに恒がドアを開けて出てくる。夕飯の準備をしていたのか、香ばしい匂いが皐月の鼻をくすぐる。

「どうしたの、先生、わざわざ」

「ごめんなさいね、突然お邪魔して。神様にお会いできる？」

「え？ はい。いらっしゃいます。お会いしますか？ お入り下さい」

皐月は志帆梨が戻ってすっかり生活感のある部屋になった居間に通された。皐月が来たというので志帆梨が驚いて出てきて、その節はどうも、とやるのだった。

皐月も志帆梨とは病室で会ったきりだったので、彼女の元気そうな様子を見て安心した。恒は今、神として自身を鍛えながらも、母親と幸せに暮らしているのだとわかってほっとする。居間のテレビの前には、魔法使いのような黒い衣を纏って寝転んでいる織図という神がいた。

皐月は荻号に会った際に、神の实力は必ずしも見た目で判断してはならないのだと了解していたので、フレンドパーク2を見てニヤ

ニヤしている神を見ても、もう驚かなかった。織図はいつもと違う
気配がしたのを感じたようだが、ぴくりと耳を動かしたただけだった。
このあたりは流石に、堂々たる振る舞いをする。

「織図さん、俺の担任の吉川先生がお会いしたいそうです」

「ん？ ああ」

織図は今気付いたというそぶりで身体を起こすと、ゆっくりと振
り返って臯月を見上げた。

「はじめまして。吉川 臯月と申します」

臯月は謙って、畳の上に正座をして丁寧にお辞儀をした。こいつ
も、神を見ても畏れないんだな、と織図は逆に驚いて首をすくめた。
「そうだろうな、確かに吉川臯月だ。間違いなく、完璧に。さらに
独身なうえに、彼氏もないときた」

それ以上喋らせないためにはどうしたらいいのか、と臯月が赤面
する。

「神様にお願いがあって伺いました」

「そりゃいいが、俺あ死神だ。それでもいいなら聞いてやるが、昔
から死神に何かを願うなんざ、ろくな内容じゃない」

少なくとも織図は、死の今際に人々が願うことといえば、寿命の
延長と命乞い以外の願いを耳にしたことはなかった。

「大変不躰で厚かましいのは承知しております。この手紙を、ユー
ジーン様にお届けしていただけませんか？」

恒はあっ、と吃驚した。

どうして思いつかなかったのだろう。こういう方法でなら、いく
らでもユージーンと連絡をとることができただろうに。さすが、臯
月は目の付け所が違うな、と黙って様子を見守っていた。

「よりによって死神に使いを頼むとは、いい度胸だな」

聊か無礼にあたるかもしれない。

「ご無礼の段は平にご容赦下さい、しかしあなた様にお頼り申し上げるしかないということもお察しいただきたいのです」

「俺は郵便配達じゃないからな、無償でというわけにはいかない。そうだな……何をいただこう」

織図はわざとなのか、素の顔なのか底意地の悪そうな顔をしてみせた。皐月は彼が死神だということで、当然何か代償を取られるとしたら当然、自分の寿命なのだと思っていた。これはどんな物語でも伝承でも必ずといっていいほど記述されているお約束だ。死神と取り引きをする時には、自分の命を削らなくてはならないと、皐月はそんな覚悟でやってきていた。そうやって皐月の命を縮めてでも、この手紙だけは彼に届けて欲しかった。

志帆梨はらはらとして、両者の顔をきろきろと見守っている。皐月の顔色は青ざめて緊張しているが、たじろがなかった。

「私の寿命でも何でも、好きなものをお取り下さい、しかしその手紙だけは」

「先生……後悔しますよ」

恒が横から口を挟む。

「藤堂君は黙っていて。後悔なんてしません！　お願いします」

恒は呆然と皐月を見つめた。織図の欲しいものは決まっている。

よいのだろうか。皐月は大変な後悔をすることになるだろう、そして織図は一度約束を取り付けたら反故になどさせない。

皐月にはその覚悟があるのだろうか？

「そうだな。決めた。渡鬼（渡る世間に鬼ばかり）のDVD BOXを全話、耳をそろえていただこうか」

皐月はあいた口が塞がらなかった。志帆梨もほっとして、後ろで

くすくす笑っている。そうだ、織図 継嗣という神はドラマや映画のDVD収集に余念がない。恒はどうせその類の事を要求するのだと思っていた。しかも短編ではなく、より手に入りにくいシリーズものだ。

「だから後悔するって、言ったのに……何十本買わなきゃいけないんですか。一本一万円ぐらいするのに……皐月先生のお給料がぶつとびます」

「いーんだよ、馬鹿、おめ、公務員だぞ？ 天下無敵の公務員が月いくらもらってると思ってるんだ。独身貴族は金貯めてんぞ」

織図は地方公務員をひどく誤解している。国家公務員の話なのではないだろうか。

「……………！……ちゅ、中古でもいいですか？」

「中古？ それが手に入らないから言ってるんだろ」

何を取られるのかと緊張して固まっていた皐月はやはり後悔しながらも、少しはほっとして織図に手紙を託した。

＊

「……猶予はあと3年、確かに3年あるのですね」

「確かにそうだ。俺の演算でもそうだし、お前が極陽から与えられた勅令からいえることだ。極陽は3年以上の滞在を命じなかったか？」

ユージーンはあまりにも重大な局面に際して、逆に自分の思考が冷静になってゆくを感じていた。何だろう、波立っていた水面がすうっと引いてゆく、穏やかな気分だ。全ての謎が解消され、恐るべき事実が告げられた。荻号の話は一貫していて、少しも疑うべきものではなかった。確かに極陽から与えられた任期は5年間だ。特

にこれといって何をするでもなく、風岳を守りながらその村に5年間の間、滞在し続けること、それが彼の職務だった。

全ての謎の答えがこんなに近くにあった、それがユージーン自身だったとは……。彼はあらゆる事をいくつも同時に理解し、短かった彼の生涯が走馬灯のように流れた。やはり、そうするしかないのだと、何度も彼は彼自身に問いかけ、確認した……。

「極陽はお前と恒を引き合わせ、お前が恒に強靱な精神力を身につけさせることを望んでいた。そうして3年をお前と共に過ごした後、恒は全てを飲み込む理解力と、お前を封じる事を受け入れるだけの精神力を備えた状態でグラウンド・ゼロにいる、そんなシナリオができていたのだろう。あとはINVISIBLEがお前の中に収束するのを待ってればいい。……お前にはあと3年の猶予がある、その間にお前自身が世界をどう導くか、よく考えるんだな」

荻号はできるだけ早く事実を告げ、ユージーンに与えられた短い猶予期間のうちに、彼に考える時間をやりたかった。彼に全てを押し付ける事になってしまいが、それがあるべき未来へと向かう一番自然な形だ。INVISIBLEに選ばれたユージーンが誰に強いられる事もなく、彼の決断した通りにそうすることが重要だ。たとえその結果が、三階の滅亡であっても、どれだけの物が滅んでも、滅びは必ずINVISIBLEの意思によって再生へと繋がるだろう。荻号はありのままの世界を受容すべきだと考えていた。

「もう決まっています……荻号様、わたしのとるべき道は一つです」

「お前、ちつとは考えろよ。世界の存亡に関わる問題なんだぞ」

荻号はマジかよ、と舌打ちを隠さない。彼の決断する事がINVISIBLEの意思の代弁であることは間違いないのだろうが、そ

れにしてももう少し悩んでくれたっていいのではないか、と。しかしユージーンはきつく唇を結び、背を正して凜として、もう何を言っても説得に応じそうにはない。

「わたしは、命を絶ちます」

荻号に全てを告げられてから僅か10分後、第四の選択肢を見つけたユージーンはもう自らの運命を決して、選択肢を全て放棄してしまった。荻号は彼の答えを聞いて、何で早まったことを言い出さかな、と額を押さえた。そしてコメントする。

「ユージーン、それは……愚かだ」

「よいのです、あなたは先ほど、どんな結末を選んだとしてもそれを受け止めて下さると仰いました。わたしの決断を尊重してください」

荻号はとんでもない決断を下してしまったユージーンを引きとめようとした。何にも考えず、そんな事をされては困る。

「だがな……」

「命の価値は平等です、誰かだけを特別だと思った事はありません。多くの犠牲を人々にも使徒達にも強いてきました。わたしが死ぬ事で三階が救われるというなら、躊躇する理由などありませんか。もう決めました、後悔などはしません。ですが……少しだけ生を振り返る時間を下さい。ほんの数日でもいいのです、逃げ出したり隠れたりはしませんから」

彼は真に優しく、真に賢明で芯の強い神だな、と荻号は見せ付けられた。絶対不及者としてINVISIBLEにより選ばれた彼の潔さはとても死の淵にあって喉元に刃を突き立てようとする者のようではなかった。彼は人々を殺してきた、使徒を犠牲にしてきた、その罪を忘れてはいなかったのだ。

自分の命を差し出す機会が来たら、いつでもそうしようと思っていたに違いない。彼は最後まで公益のために生きる公僕であろうとした。しかし満足な最期を迎えるため、彼は自らの存在と向かい合うためのほんの僅かな時間を欲したのだ。彼が命を賭けて下した決断を、荻号は尊重してやらなければならなかった。そしてそれに荻号が口出しをするのもひどく無粋だった。

「そうか、では俺はもう何も言うまい、じゃあ、な。ユージーン。残念だ」

「荻号様、今まで本当にありがとうございました。あなたのような偉大なお方と今生の出会いができましたこと、わたしは深く光栄に思います」

彼は立ち上がり、荻号に向かって今生の別れを惜しむように深々と金色の頭を下げた。荻号はもう何も言わず、振り返りもせず執務室を出て行った。

荻号は丁寧にドアを閉めると、ふと足を止めた。

執務室のドアの裏には、以御が張り付いて何もかも、全てを聞いていた。荻号はそれをも最初から知っていたかのように、以御の胸の辺りに、とんと彼の手の甲を当てて声を潜めた。

「聞いたか、そういう事だ」

「……………しかし……………」

「最後まで、やりたいようにさせてやれ」

荻号は薄く微笑むと、以御の腕の辺りをぽんぽんと叩いて、そのままどこへともなく歩いていった。ユージーン帰還の知らせを受けて出張から飛んで戻り、参内をしようとしていた廿日が、思いがけず訪問していた荻号に深く一礼をしているのが視界の端に見えた。

廿日は荻号の姿がすっかり見えなくなるまで微動だにしない礼をして見送ると、立ち尽くした以御の傍に駆け寄ってきた。廿日は以御の置かれている状況をまったく理解できていないが、一つだけ解ったことがある。

「何があつたか知らないけど、荻号様は、全てをご存知のようね……」

「……昔いまし、今いまし、荻号要という神は全ての事をご存じでいらつしやる」

「荻号様は、一体何者なのかし……」

廿日がそう言いかけたところで、以御はその口を塞いだ。神階にはそれに触れるだけで消されてしまうという、三大タブーというものがある。それに触れるだけで血が出るといわれる近代日本の三大タブーといえば、菊、菱、鶴であるが、神階の三大タブーはINVISIBLEに関する事、神々の出生に関する謎、そして荻号の正体だ。その謎に迫ろうとした者は、消されてしまう。誰もその謎を解いた者はいない――。

「その謎を、解いてはならない」

以御は荻号の姿がない事を確認してから、やっとそれだけ言った。

＊

「では、私はこれで……」

皐月は織図にまた深々とお辞儀をして、いとま乞いをしようとした。食事どきなので、これ以上お邪魔をしていたら迷惑だ、と思ったのだ。

「吉川先生、どうぞお夕飯を食べて帰ってください」

当然、志帆梨がそういった気をきかす。

「いえ、もう私はこれで失礼します。ご飯どきに上がりこんでお邪

魔してしまい、申し訳ありませんでした」

「構いませんよ。さ、こちらへ。ね、織図様もよろしいですよね？」

「んー、ここは俺んちじゃないからな、奥さんがいいんなら俺がどうこう言う権利はない」

皐月は志帆梨に強く勧められ、多少遠慮をしながらもテーブルについた。案内されて食卓を見ると、会席料理のような豪華なご馳走が並んでいる。野菜の炒め物、天ぷらから、季節の酢の物、手作りの豆腐、手作りの漬物、くずもちのデザートまである。志帆梨の料理の腕はなかなかのもので、料亭に出しても恥ずかしくないような上品な盛り付けだった。

恒がここのところ、思い出したようにすくすく成長しているように感じられるのは、この料理を食べての事なのだろうな、と皐月はほほえましく思った。箸を付け、天ぷらからいただく、さくっ、ふわっ、と皐月の口の中で料亭の味がした。

「お母様、とてもお料理がお上手ですね。お店に来てみるみたいです」

「実はですね、お恥ずかしながらこの冬から、村の商店街に創作料理の店を出そうと思っています」

「ええっ！ おめでとうございます！」

皐月は志帆梨の報告を聞いて、自分まで嬉しくなって小さく拍手をした。恒と、その母親はそれぞれの人生を歩み始めているようだ。皐月と志帆梨は雑談をしながら二人で食事をとった。恒と織図は先に食事をしていたのだという。皐月は料理好きだったので、二人でレシピを交換したり教えあったりして意気投合していた。

「吉川先生よ、食べ終わったらちよっと面白いものを見ないか」

織図に呼ばれ、志帆梨がどうぞどうぞ、とやるので、皐月はすす

められるがまま織図の隣に座った。

「教え子の鍛錬の成果を見てけよ」

「え？」

「恒、おさらいだ。吉川先生の今朝食べたものを全部当ててみる」

皐月は織図の軽い調子の言葉を聞いて、背筋がぞっとした。皐月は恒の実験台にされているのだ。恒は皐月の目を凝視しているが、これから何をされているのだろう……。恒が、こんな得体の知れないことをするなんて……！ 表情のこわばった皐月に困惑して、恒は安心させるようにへらっと微笑みかけた。こんな笑顔を見ると、彼がたった10歳の子供だったのだなと思ひ出す。

「そんなに怖がらなくても大丈夫です」

恒は皐月が頷くのを見るなり、これ以上ないほどに集中した顔を見せた。

皐月の目を見ているのか、頭や髪の毛のあたりを見ているのか解らない。だが確かに、覗き見られている。皐月の頭の中をだ……。恒には見えているのか？

訓練により、それができるようになったのか？ 透視のできる人間は、よくテレビの未解決事件に投入される元FBI捜査官のように、確かにいるのだらうと思っていたが、こんなにも身近な子供が透視をするとは。恒の透視が外れて欲しい、と皐月は密かに手を組んで何かに祈った。しかしそれも無駄だったようで、恒はよっし、と短い声を出すと、にっこりと微笑む。

「わかった。今朝の先生の食事は、ベーコンエッグ、納豆、ヨーグルト、トマトのサラダ、そしてフランスパンだ。すごくバランスのとれた食事ですね」

「と……と、藤堂君！」

皐月は自分の朝食が何だったかをすら、もうすっかり忘れてしまっていた。恒の言葉によって思い出された。皐月すら重い出せなかったことを、この子はあっさりと見破ったのだ。これはいんちきではありえなかった。朝食は皐月のアパートで一人で食べた。いや、性格にはニユースキャスターと食べた。キャスターと台所に置いているサボテン以外には、誰も皐月の朝食を知る者はない。

「今やったのがマインドブレイクです、先生。マインドギャップが3層になって、遂に昨日できるようになったんです！」

「ふふ。私も何度実験台にされたことか」

志帆梨が、食器を片付けながらそんなことを言っている。少し見ない間に、こんな事が、訓練によりできるようになるだなんて……やはり恒は神の血を引いているのだと思い知らされてしまい、皐月はもの悲しくなった。彼の教師でいることすら、もうじき許されなくなるのだろう。彼は神々の世界に近づきつつある。自分は神になる、ならなければならないのだと泣いていた、何の力もない無力な人の子であった恒と迎えたあの朝が、もう遠い日のように感じられた。

「それから、ちょっとだけですけど」

恒は跳ね起きると、両手を広げて片足立ちをし、それから片足で爪先立ちをし、最後に畳から離れた。

皐月は絶句した。

少年の顔を何度も見たが、確かに恒だった、恒は宙に浮いているのだ。

よくある映画の合成のようにわざとらしいものではなく、どこかの写真で座禅をしたまま飛んでいると言い張っていた元教祖のよう

でもなく、皐月は確かに恒の足先が床から離れて宙にいるのを目撃したのだった。織図はぼんやりと恒を見上げて、確認するように手をかざした。先ほどからこの織図という神の視線は、焦点が合っていないように思える。

「おい、また右側が集中できてないぞ」

皐月には長く感じられた時間はものの5秒ほどだったが、恒は確かに浮遊している。皐月の目の錯覚でなければ、だが。

彼女は思わず首筋の辺りに手をやって、皮膚を少しつまんでつねってみた。やはり痛……、そう思った時、織図のわめく声が聞こえる。恒はバランスを崩して織図の上に墜落していた。

「あたた、痛えぞ！」

「あ、ごめんなさい。見ました！？ 皐月先生、俺、飛べるようになったんです」

「それは飛べるうちに入らねって、10秒もできねーんだからよ。はー、やっぱりお前は純血の神じゃねえから、なんつーの？ センスが悪いっつか？ その分、マインドギャップはタケノコみたいにすぐできるし、精神面はずば抜けてるんだらうけどよ。能力の偏りが、もっと均一にならなかったものかね」

「藤堂君……あなた、本当に藤堂君なのよね？」

「そうです、先生。何か変わりましたか？」

「……いいえ。あなたはあなたね」

皐月は恒を様々な角度からじっくりとよく見つめてみた。何度見つめても恒は恒のままだった。鍛えられ、学び、常識では考えられないような事が次々とできるようになっても、恒は恒だ。皐月はそれだけ確認し、神の手でもある恒の両手を彼女の両手で包み込んだ。

恒の手は、そのままの彼の手であった。

「あなたは、きっといい神様になれるわ、藤堂君。もう、止めないから」

恒は絶対にそうなってみせる、と力強く頷いた。

＊

陽階第3位、智を司る女神、リジー＝ノーチェス、置換名 彌月みつぎ
天鵬てんほうは切れた細糸をたぐりよせて検めた。

彼女の神具、漂泊者の豎琴（Wanderer Silverlyrar）の弦が切れたのだ。陽階参謀である彼女の漂泊者の豎琴は銀色の豎琴型の神具であり、あらゆる情報を同時に記憶し把握する諜報機能を持つものだ。人々や神々の行いを識ることが彼女の職務である以上、この諜報行為は合法だった。

彼女は一度生物階降下をした折から、絹索によって衆生を見守る不空絹索観音として生物階には知られている。だがその姿は、仏像などに表現されているような多面多臂だったりはずらず四肢は一对のみだ。

観音としての姿は彼女がそれだけ膨大な智を一度に統べる事ができるという比喻であろう。彼女はミルクティ色の緩いウェーブのついた髪の毛を腰まで伸ばして、純白のウェディングドレスのような聖衣を身に纏う、フランス人形のような美しく愛らしい女神だった。

リジーはインフィニティ・ストリング（果て無しの弦）と呼ばれる豎琴の弦を陽階や生物階に張り巡らせて諜報活動を行っていた。先程から繰り出していた弦が、何本か切られて豎琴が不協和音を奏

でている。ユージーンとファティナの執務室に繋げておいた弦だ。荻号はここ最近陽階に滞在しているらしく、彼が存在しているだけでその強大なアトモスフィアで弦に負荷がかかり、ブチブチと彼の足跡をたどるように切れるのだった。その弦を張り替えるのに、どれほどの時間と労力がかかると思っているのかと、リジューは荻号の首根っこを捕まえて言っただけだった。

「おのれ我が神具を、糸くずのごと、いとも簡単に切ってくれ」少女のような顔をして言い草はまるで武将のように猛々しい。ゆったりとしたソファに腰掛けた彼女の隣で分厚い本を読む白髪の男は陽階第2位、立法神、比企 寛三郎だ。彼は静かにリジューをたしなめた。物腰の柔らかな神だ。

「やめておけ、荻号はお前の手に余る」

「もう少しでユージーンとの会話を盗聴できましたものを」

リジューは切られた弦を繕いながら悔しがっていた。彼女の手に携えた弦は、まるで糸電話のように遠い場所の音声を拾う事ができる。彼女が漂泊者の豎琴を起動している時には、盗聴器を無数に仕掛けられているような状態だ。比企はそんな彼女を見遣る事もなく、手にした分厚い本を読み耽っていた。

彼の聖衣はまるで日本の宮司のような和服だが、着付けるのに時間がかかるのと動きづらいので、今日は簡素な私服を着ている。ここは陽階上層部第142階にある比企の執務室で、比企を慕うリジューはまるで日課のごとく彼のもとを訪問していた。リジューがいつ訪れても彼は読書家で、常に何か分厚い本を読んでいた。仕事の書類だったり、資料だったりした。彼はいつも何がしかの本を読み、24時間働いていた。

「荻号に盗聴など不可能だ」

「気付かれるからですか」

「そうではない。荻号は発音をしていない、盗聴できる筈がないのだ」

比企は穏やかにつぶやいた。リジーは切れた弦を繕う事をやめ、比企の話に耳を傾けた。

ここで比企の略歴を記しておく。彼はもともと陰階神で、荻号が唯一認めた弟子だった。比企は荻号のもとで半世紀あまり学んだが、ある日突然陰階神を辞し、陽階神としての叙階を希望した。このことで実質、陰階神である師の荻号とは袂を分かった形だ。

だが何故彼が誰もが羨む最強神、荻号の弟子という立場を自ら放棄してしまったのか誰も知る者はなく、彼も荻号に関して口を開いた事はなかった。荻号の謎は、三大タブーに触れることだ。比企と最も懇意にしているリジーですら比企は口を閉ざしていた。比企はリジーより随分年下だったが、彼女は心から比企を尊敬していた。比企がこんな話をしたのは初めてだ。

「今、何と？」

「荻号は声を出さずに話すのだ。彼は相手の脳に彼の意志を直接送り込んでおり、声は出しておらぬ。声を聞く事は如何なることか？」

其は脳への電氣的入力であろう。荻号は口を同時に動かすので発音していると錯覚するのだが、荻号は言葉を話せぬ哑者だ」

完全なる身体を持つ神といえども、障害を持つ者はいる。

織図は発見された当初から盲目だったそうだし、耳の不自由な神も少ないが確かにいた。だが神は他の能力に長けているので、それはまったくハンディキャップとはならない場合が多い。織図は視覚

に頼らない物事の捉え方をしているし、耳の不自由な神はちょっとした空気の流れや振動を肌で感じる事で、健常な者と遜色ないほど音を感じる事ができた。

荻号は声の出せない神なのだろうか、それを補う為に、思念を直接脳に伝えるという方法を編み出したのだろうか……どちらにしろ、リジーは初耳だった。比企はどうしてこんな事を話してくれる気になったのだろうか。確かに荻号が動き始めたからという事はあった。荻号はこの何百年も、全くといっていいほど何もしなかった。それがグラウンド・ゼロの問題が起こり始めたこのタイミングで、これまでの彼としてはありえないほど積極的に活動を始めたのだ。それを比企は警戒しているのだろうか。

彼は敵対しながらも、荻号という謎に神階で最接近できた神だった。

「そういう、障害ですか？」

「いや、……故意にだ。意味などないのかもしれん。だがそれが荻号という存在だ」

「……やはり、謎多き神ですね」

「神？ 彼は神などではない」

「神ではないと？ あなたは彼の弟子だったのでは？ 神ではない、とはどういう事ですか？」

「汝は歴代の極陰の名を少し挙げる事ができるか？ そこに書いてみるがよい」

リジーⅡノーチェスは、比企に手渡されたまっさらのメモ用紙に、まだ生物階に人間がいなかった頃、つまり置換名も通名もなかった時代の極陰の名を20名ほど神語での名を書いて挙げてみた。比企はずらりと並んでゆく名前のうち半分ほどの名前に、赤ペンで○をつけはじめた。おかしい、○がつかなかった名前は違っているとい

うのだろうか。記憶は確かだ、そうでなくて智神など務まらない。不服に思いつながらも、比企には不快感を露にしない。

「それ以外は間違っている、ということですか？」

「いや、そうではない。己が印をつけた名を持つ極陰、それは全て同一人物だ」

「……ま、まさか！」

比企は深く頷いた。

「そう、彼は記録に残るだけでも8万年以上前から神階を暗躍し支配している、名もなき怪物だ。己は神階と生物階を、かの者から我々の手に取り戻したい。彼は神ではないのだ。誰かが怪物を屠るべきだ」

リジーは比企が、荻号をいつか殺すつもりなのだと震え上がった。最強と謳われ続ける荻号と、彼の唯一認めた弟子である比企との間の、最強の師弟間での壮絶な謀略と殺し合いが。

これから行われると知ったから。

第1節 第22話 立法神、比企 寛三郎の懸念（後書き）

挿絵（筆者絵注意） 比企 寛三郎・リジール・チエス

<http://lizreel.web.fc2.com/graphic>

<pics/hiki2.htm>

<http://lizreel.web.fc2.com/graphic>

<pics/lizzy.htm>

第1節 第23話 5年2組副担任、ユージーンの帰還

ユージーンは誰かに肩を叩かれたような気がしてぼんやりと目を覚ました。

執務室のデスクの上に臥せてずっと寝ていたらしい、どのくらい寝ていたのだろうかと腕時計を見る。執務室に戻ってきたのは夜だったのに、12時間が経過していた。

中庭の見える窓から陽は射してこないが、昼間である事を示す照明がついて世界標準時が日中であるとわかる。中庭には模造生命の青い鳥や栗鼠たちが、餌をついばんでいるのが見えた。

それはもう何十年も見慣れた光景、だが今日はまた新しくより美しく見える。平凡な日常が愛おしい。これが死者の視点から見た世界なのだろうな、とユージーンは感じた。

ともあれ荻号と約束した7日間という死の期限まで、ユージーンに残された時間はわずかに6日半となってしまった。もうすぐ嫌というほど寝ることになるのだから、睡眠時間が惜しい。ユージーンは腕時計の跡のついた頬をこしごとにする。荻号に猶予期日をわずか数日と約束したのは、決心を鈍らせないためにだ。それに、ユージーンが死を選ぶと知って各方面から引き止めが入らないとも限らない。

単に引きとめが入れば嬉しい、というだけなのだが。

しかしそう決めた以上、僅かな時間の間にしなくてはならない事はたくさんあった。

次代軍神への業務引き継ぎは以御が手落ちなく行ってくれるだろう。

だがユージーンが崩御してから次期軍神が任命されるまでの間、生物階の治安維持業務は完全に止まる。現在、大きな紛争や戦争は起こっていないが、世界中に展開させている軍神下使徒への指示を予め発しなければ以御の権限だけでは殺害司令が出せず行動ができない。

ユージーンが懸念しているのは、過去に実際にあったようなケースだ。

崩御した先代軍神ミネルヴァと現代軍神ユージーンとの引き継ぎの期間（1930年代前半）に、以御はその権限で暗殺すべき対象に暗殺の司令が下せず、ファシストの台頭を許し、最悪の世界大戦へと発展させてしまったのだ。

即位後すぐに窮地に陥ったユージーンは人類に核の知識をもたらし、多くの犠牲を出しながらも終戦を迎えた。今は平和とはいかないが、比較的世界は安定している。北朝鮮問題を進展のないまま遺してしまったのが気になるが、核抑止力がある以上はもう世界大戦に発展したりはしないだろう。

仕事は中途半端なまま決して満足のゆくものではなかったが、平和な世界を遺して逝ける事を誇りに思う。

ユージーンは次代軍神が着任するまでの間、全ての権限を以御に付託するとの書類を書くこうとして用紙と羽根ペンを取ろうと手をついた時、美しく整頓された透明なファイルボックスの中に、神階では見慣れない材質の封筒とメモを見つけた。

このメールボックスはユージーンが不在の間に来たプライベートな書類を保管しておくためのものだ。一体誰からだろうと取り上げ、封筒を見て驚いた。封筒の裏には、吉川皐月と書いてあるのだ。

彼は心なしか慌てて、封筒に貼り付いていたメモを見ると以御の字だ。

死神、織図 継嗣がアポイントを取ってきたので応対した以御が、ユージーンは寝ているから面会は明日にしてほしいと言うと、早く渡してやりたいからと言って、この手紙だけ届けに来たのだそうだ。ユージーンは何故織図が皐月の手紙を預かったのかを考える前に、風岳に残してきた人々の顔が次々と頭に浮かび、胸をいためたのだった。

"もうすぐだ、わたしが死ねば風岳の人々は助かる……"

ユージーンはそう思うと辛くなって、皐月の思いや村の様子がたくさん綴られているであろう手紙を開封すべきか逡巡した。死の決心が鈍ってしまったのだろうか、そう考えたのだ。

彼は封筒を開封せず机の端にそっと置き、羽根ペンを取って以御に権限を譲渡する書類にペンを走らせはじめた。

すると外からノックの音がして、返事も聞かないまま以御が入ってきた。ユージーンは書類を手早く隠した。以御にこんな遺書じみたものを見られてしまつては、死ねるものも死ねなくなる。

「起きたか。人間からの手紙を織図様が届けて下さったが、読んだか？」

「まだ読んでいない」

「手紙ぐらい、すぐに読んでやれよ」

以御が開封するのを待っているようなので、封を切るしかなかった。手紙など速読術を以ってすれば1秒もあれば読むことができるが、彼が一枚目を読み終えるのにしばしの時間を要した。

手紙には、恒が神として生きる道を選び自らの足で歩み始めたこと、村の様子、メファイストフェレスのこと、皆寂しがつっていると、クラスの子供たちの様子、それらが皐月の繊細な筆力と

豊かな表現力によってありありと目の前に浮かぶようだ。

恒は十分な決断力もないわずか10歳という若さにして人生を終えてしまった。皐月は彼の悲運を嘆いているようだった。もしユージーンが恒と会えるのなら、恒に遭って何か言ってやって欲しいと書いてある。

5枚目を読み終えたあたりから、ユージーンは驚いて手紙に顔を近づけた。

何と、石沢朱音が使徒だったというのだ。

朱音にはまだ事実を知らせていないが、誰がいつどのように告げているのか分からない。そして朱音が天上に上がることなく、人間として生きる道はないのだろうか、誰に聞いても無理だというのがユージーンの見解を聞きたいとのことだった。

ユージーンが地上を離れた間に、風岳村では深刻な事態となっていたようだ。

彼らを置き去りにして神階で処刑されていた間に、彼らは彼らで過酷な現実に向かって足掻いていた。自らを悲劇の主人公のように思っていたが、自分ばかりが辛かったのではないな、とユージーンは猛省する。

皐月の手紙の最後は、たとえ全ての神々がユージーンの行為を非難したとしても、皐月は豊迫巧を救ってくれたユージーンの勇氣と深い慈悲を忘れない、という言葉で締めくくられていた。ユージーンはその言葉を嬉しいというより、切なく感じて表情を曇らせる。

以御は無言で、つぶさにユージーンの表情を観察していた。手紙を盗み見るつもりもないが、その手紙を読んで様々な表情を見せる彼の主を、彼が囚われた運命からできることなら解き放ってやりたかった。以御は普段どおり何食わぬ顔をしているが、荻号と彼

の間で12時間前にかわされた会話を盗み聞きして全てを知っていた。こんなユージーンを見なければならぬのは苦痛だ、彼のしようとしている事ははっきり言って痛々しい。

「読んだか、ユージーン。極陽への謁見のアポイントをどうするか、念のため聞いてから手続きをしようと思ってな」

あれほど直ぐに謁見をしなければと急いていたのに、それを一旦後回しにした方がよいとの思いがもちあがる。一旦といっても、時間などほとんどないのだから、永遠にだ。

恒と志帆梨を長年に渡って苦しめていたのは、ユージーンの上司にして神々の長、ヴィブレ・スミスだった。ユージーンは陽階神であり、極陽の勅令は完遂せねばならなかった、しかし何の因果か、任務が頓挫し失敗に終わってユージーンは真実を知った。

極陽がユージーンをどのように利用しようとしていたのかもわかった、そして彼の息子である恒の人生を極陽は躊躇することもなく断ってしまったのだ。ユージーンはこれまで尊敬してきた極陽が、恒にした行為を許すことができない。極陽の思惑通りに動いてやるつもりはさらさらない。

ユージーンは自らの死をもって最後の抵抗を見せようと決めた。

「いや、少し待ってくれ。任務の報告はあとにさせてくれ」

「やらなければならないことがあるなら、そちらを優先すればいい。俺が嘆願の提出に関する正式な礼状は出しておいた、身体罰の後だ。静養していると言え、報告が遅れても構うことはないだろう」

以御はそれだけ確認すると、さっさと退出していった。

以御が去った後、ユージーンはもう一度風岳村に戻ることを決意した。戒厳令のさなかに、勅令を無視してグラウンド・ゼロへと降

下する事は違法だ。だが、もうそんなことは関係ない。ユージーンを待っていてくれる人々を蔑ろにして、彼らと二度と会うこともなく永遠の別れとなってしまおう方が罪深い。

荻号の計算だとまだ猶予は3年ある。INVISIBLEが収束するまでにはまだ時間がある。

ならばもう一度風岳村に戻り、ユージーンを待っていてくれる全ての人々に胸中で別れを告げ、地上を去らなければならない時が来たと言明してから死にたいと願った。

再びゲイルがユージーンを逮捕しにかかるかもしれないが、逮捕される頃にはもうユージーンはこの世にはいない。

陳腐なシナリオだが、それでいい。

それで充分だ。

生物階降下の正式な手続きはもうしない。法も徹底的に破ってやる。

神階ヘヴンズ・ゲートの門に直接申請して、以御を介さずに手続きをし、風岳に光獣ほうの鳳で行こう。だが一度風岳に降下すればもう神階には戻って来ることができないだろうから、そのために今日は書類を作る日に充てる。

ユージーンは再びペンを執った。

＊

石沢朱音は算数の授業中、週末に大好きな洋楽のアーティスト達の集う野外コンサート行くことで頭がいっぱいだっただ。

福岡にいる従兄弟の姉が、野外コンサートのペアチケットが当たったから一緒に行こうというのだ。朱音の好きな歌手も来るとい

うことで、誘われた。洋楽邦楽を問わず、知っている有名歌手ばかりを招いた、豪華なラインナップだという。

新幹線の駅まで朱音の母親が見送って、博多に着いたら従兄弟が新幹線の前まで迎えに来てくれるというので、一人旅でもよいと朱音の両親も納得した。新幹線に乗るのははじめてだし、父親が本家の長男であり、母親もこの村の出身だということもあって、県外への旅行自体が初の試みである。

博多に行ったら何をしよう！

と、昨日はそればかり考えてほとんど眠れなかった。キャナルシティに行きたいし、スペースワールドにも行きたい。屋台のラーメンを食べてみたい。ラーメン店めぐりもしたい。でもそんなにラーメンばかりはお腹がいっぱいで食べられないだろうし、何かは我慢しないといけないのだろうな、ああ、どれも捨てがたい。

そんな幸せなことばかりを考えていた。

先日、クラスでは4ヶ月ぶりに席がえがあって、恒は朱音の2つ前の席になっていた。

朱音の事をいつも観察していたかった恒は皐月とメファイストに席を替えて欲しいと要請したが、恒だけ特別にというわけにもいかなかった。目が悪いので席を前にしてほしいという要望なら不自然ではないが、席を後ろにして欲しいという理由は特に思いつかない。皐月とメファイストフェレスは朱音から目を離さないと約束したので、恒はしぶしぶ前列の席に座っていた。

その日、授業の終わりに、皐月は久しぶりに抜き打ちの実力テストを実施した。恒は彼らが手こずっている問題を誰より早く解き終わって、彼の更に前の席に座る巧の後頭部を見ていた。別にカンニ

ングをしているとか、巧の後頭部が禿げているから見えているわけではない。巧の単純な思考回路が、恒の訓練された目にはありありと視覚化された。頭蓋骨の裏に目を凝らし、わずかに走る活動電位がどこに局在して、どの細胞と連結してどんなネットワークを作っているのかを解剖学的な知見から読み解く。これがマインドブレイクの手順だ。まるで線香花火のような、巧の弱々しい思考回路が見える。それでも脳を活動させて考えているのかと疑いたくなるほど、巧の思考回路は雑然としている。

問題が解けていない証拠だ。

”……巧、2問目がわからないんだな。そこの答えは3だ。”

恒はあらゆる人間の心が読めるように、毎日クラスメイトでマインドブレイクの練習をしていた。人間はマインドブレイクを邪魔するマインドギャップがないので、この時点で全ての人間のマインドブレイクができなければ、神に対しての看破など絶望的だと織図は説明していた。

恒はできるだけ多くの人間の考えを、できるだけ短時間で看破することが課題となっていた。恒はだんだんと、それほど凝視しなくても相手の考えを読めるようになった。それはマインドギャップ（心層）が形成されてゆくのに対応するかのように、相手の考えを看破するのが楽になっていった。

だから恒がこの時振り向いてさえいれば、朱音の思考を看破し、福岡という大都市に行こうとしているという事を止めることができたかもしれないのだ。早く終わった人から提出して休憩を取っているというと臆月に言われて一番にテストを提出し、朱音を振り返った時には、もう朱音は算数のテストの最終問題に集中していただけだった。

＊

メファイストフェレスは職員室でテストの採点をしながらも、そわそわとして落ち着かなかった。もうすぐ夏休みがやってくる。学期末には通知表を出さなくてはならないので成績評価が大変だが、そんなことでそわそわしているのではない。

生物階の暮らしも、ようやく軌道に乗ってきたところだった。職員たちとも打ち解けてきたし、クラスの子供達もあれやこれやと懐いてくれて、かわいらしい。ユージーンの代理を務める陸上部の指導も順調だ。もうすぐ夏休みで、陸上競技の大会も目白押し。選手達のタイムも上がってきたし、予選通過タイムも何人が突破している。陸上部は目に見えて強くなってきた、今年はいける、そんな実感があった。彼らの今後を見届けたい。しかし、こればかりはどうしようもなかった。

今朝、マクシミニマの電報機能を通じて、メファイストフェレスの父にあたるセルマーから連絡があったのだ。セルマーは解階の権威ある人類心理学者で、これまでも何度か生物階に入階した娘を心配した、やや過保護でお節介じみた連絡はあった。

生物階は神々や使徒がうろついていて危ない場所だし、ユージンに殺されたことになっているメファイストが神々に見つかれば命はないのだから、早く帰ってきなさいと父親は何度も電報で連絡をしてくる。毎日ではないが、結構な頻度でだ。朝の電報チェックは、メファイストフェレスにとって段々と億劫なものになってきていた。また、電報かしら。

”チチ キトク カエレ”

ぐらいじゃないと、帰ってあげないんだから。そんなことを思いながら、すっかり住み慣れた社務所のトースターでトーストを焼き、ミルクをレンジにかけつつ電報を読んで、彼女は愕然とした。

解階の統治者であり女皇 アルシエルⅡジャンセンが本日付けでメファイストフェレスを召喚しているのだという。帰っておいで、ではなく、帰らなくてはならないというものだった。

この呼び出しは”チチ キトク カエレ”にも匹敵する、詔勅だ。しようちよく

彼女の主であるユージーンの命令を破ってでも、彼女が真に仕えなければならぬ勅令に従い、帰らないわけにはいかなかった――。

”アルシエル様は何をご懸念されていらっしゃるのかしら――”

メファイストフェレスには思い当たる節など、何一つとしてなかった。

＊

比企は50枚にもおよぶ書類の作成におよそ一日を費やしてしまった。比企の普段の仕事のペースからすると断然遅いのだが、この書類の作成にはそれなりの時間をかけねばならなかった。

この書類を提出する時期をいつにするべきか、実はかなり以前から躊躇していた。絶好の好機。とはいかないが、やはり今において機は巡ってこない。

INVISIBLEがらみの事がなければ腰を上げようとした

い彼の師、荻号 要がここまで起動を封印してきた相転星を敢えて起動し、陽階で動きを活発化させているということは、INVIS I B L Eがそれほどの猶予もなくグラウンド・ゼロに介入してくる可能性が高いということだ。比企は水晶製の卓上カレンダーに目をやり慶日や忌日がない事だけを確認し、揃えた書類の全てにサインをし、血判、御璽印を捺し厳封して、彼の第一使徒である響 寧々《ひびき ねね》にそれらを託した。この女使徒は軍神、ユージーンの第一使徒、響 以御の姉にあたる白翼の使徒だ。

寧々は弟と違って完全なアルビノ（白化個体）であり、髪の毛や肌は雪のように白く、瞳は白ウサギのように赤い。白化個体は遺伝子欠損症であるというDNAワールドの常識に反し、使徒の白化個体はとりわけ優秀な知性と強靱さを併せ持つ最高の血統として知られており、他の使徒と比較した際の偏差値は90を超える。第一使徒に白翼の使徒が多いことは、彼らの血脈の際だった秀逸性を証明している。白化個体を産んだ親使徒は、一人っ子政策をとる神階の掟の中で特例として多くの子を残す事が許されていた。響三姉弟、長女寧々は完全白化、長男以御は翼だけ白化、次男覚さとしるも翼だけが白化している。三姉弟の中でも最も優秀で容姿も美しい白化個体である寧々は比企の右腕として彼を長きにわたり支えてきた。

「主よ、やや時期が尚早かと窺われますが」

彼女は一度比企が決断したことに対して決していらぬ口を差し挟んだりすることはなかったが、今度ばかりは違った。彼が本気だというのなら引き止めはしないが、もう一度彼の真意を聞いてみる必要があると思ったのだ。

「時期は今をおいてはない。荻号が動き始めている、もう少し猶予があるかと思っていたが、そうもいかなかった」

「勝算はございますか？」

「分からぬ事を申すな」

「比企様。どうしてあなたは、極位に固執なされるのですか？」

彼女が手渡された書類は、主神に位申戦を挑むための正式な書類だった。比企は再び極陽の座を獲んとして、極陽、ヴィブレルスミスに挑もうとしていた。これが二度目の提出となる。何故、今でなくてはならないのか。極位に対する位申戦は陰陽階に激震をもたらす。ユージーンの不祥事により極陽の責任が問われ、逆に比企の支持率は順調に上がってきているが、まだ磐石の布石とはいかない。時期尚早だ、と寧々は思っていた。

「己は極位に固執しているのでも、極陽に恨みがあるのでもない。だが、極位を狙うからには対外的に分かりやすいモチベーションが必要であろう。己の為すべきことは荻号を殺す事のみだ。今の極陽は荻号の傀儡となっておる。極陽の権限は事実上神階の意思だ、得体の知れぬ怪物に、いびつに歪められたままではならない。己は極陽となり、どんな手を尽くしてでも荻号を殺す。なすべき事はそれだけだ。したがって極位の獲得は手段であり、目的ではない。歴史を我等の手に取り返さなければならぬ」

彼女の主は、いつも荻号の殺害を画策している。

だが、法の裁きを畏れずに彼を殺そうとしたとしても、最強神荻号を殺すことなど無理だ。彼は力に偏っても智力に偏ってもいないAX（文武型）と呼ばれる均整の取れたバランスをしており、しかもフィジカルレベルも測定不能、謀殺も実力で殺すこともできないときている。

さらに百歩譲って荻号を殺したところで、比企には何のメリットもない。ユージーンのあとに続き、罪に問われて厳罰を受けるだけだ。法を違えるということは、法を司る神にあるまじき行為だ。は

つきり言つて馬鹿げている。寧々は比企が荻号の名を口にするたび、またその事か、とうんざりするのだった。彼の成そうとしていることは、不死とも思われる荻号を殺そうとすること、天地を覆そうとしているようなものだ。

「何故、極位を獲らなくてはならないのですか。あなた様は表向きには、生物階の直接統治を旨とされていらっしやいます。急進派として極位を狙う事は、現代極陽を支持している大多数の陰階神を刺激します。適切な時期をお選びになられて、またの機会になさっては」

寧々は穏やかに進言した。思いとどまってくれとは思わなかったが、あれでも考え直してくれるのではないかと思ったからだ。

「己は極陽の生物階不干渉政策について、特にどう思うところはない。だが彼の荻号に対する姿勢が気に入らない。もし彼が荻号にしかるべき態度で臨むというなら、己が極位を狙う必要もないのだ。荻号は陰階において絶大なる支持を集めている。今の己の地位のままでは、喻え荻号を殺すことができたとしても、第二位とはいえ陽階の一神が陰階参謀を弑逆しぎやくしたとあっては、かかる後に陰階と陽階との全面戦争になりかねない。極陽は陰陽階の統括権を持ち、戒厳令を発布できる。荻号を殺した後の混乱が少ないのは後者の方だ。理解したら、手続きを進めてくれ」

「あなたは、荻号様の何を、知ってしまったのですか……」

それほどまでに比企が畏れなければならぬ荻号という存在。比企はもともと荻号を尊敬して弟子となった筈だった。弟子であるが故に知ってしまった荻号の謎……それは比企しか知らないことだ。慶祝日や忌日がないので、これからおそらく数日以内に、陽階の長を決する大決闘が始まるだろう。

極位に挑む位申戦は特殊な形式をとる。文型、武型の両側面からの勝負で優劣をつけるのだ。通常の位申戦は知恵比べか力比べで決着がつくのに、極位をかけた位申戦では競い合う項目が10項目にも及ぶ。というのは、XXの神はXXの神にしか挑めないという掟を守ると、極陽がXXだとAAの神は挑めないし、逆に極陽がAAだとXXの神は挑めないという事になってしまうからだ。

神々の長、極位たるものは文武両道に優れた者でなくてはならない、だからたとえXXの神でも極位に挑む際には、武力での力比べをしなくてはならなかった。そこで極位は自然とAXを名乗る神から多く輩出された。位申戦は1年以上間隔が開けば、何度申し込んでも構わない。だが、位神の体面にも関わるため、ほとんどの神々は勝算がなければ挑まないものだ。

前回の位申戦から300年が経ち、比企は格段に力をつけた。それでも、まだ極位を手にするに充分だとは思えない。主神 ヴィブレイスミスはそれほどに強力な相手だ。

「一体、どうなってしまふのかしら」

勝敗の行方など何一つ分からないまま、寧々は渡された書類を大事に両手で掲げ持って、位申戦を取り仕切る総務局に提出するため執務室から出て行った。

＊

上位使徒と偽った偽の身分証を持って使徒階8層にオフィシャルバード（光獣）を取りに行くまでの間、光獣番役に擬装した白いフードを顔がかくれるようにすっぽりと着たユージーンは道すがら、全員に別れは言えないまでも、出会う全ての使徒に声をかけた。

彼らは顔の见えない誰かに声をかけられたと思って特に気にも留めないだろうが、それでいい。

彼等はすぐに新しい軍神に仕え、その姿を見る機会には見舞われないだろうから。下位の使徒にとつては軍神が誰であっても、彼等の給料であるアトモスフィアを支払ってくれさえすれば気にしないのだ。アトモスフィアバンクには他の神々の余ったアトモスフィアが保管されているだろうから、使徒たちが飢え死にすることも無い。

ユージーンは血液バンクからありったけの自己血を引っ張り出して、大きなバッグに詰めてきた。50Lはあるだろう。上島に渡して、不治の病に苦しむ人々や進行癌患者の治療、創薬研究の為に使ってもらふつもりだ。

神階随一の治癒能力を持つ血液を輸血用のバンクで眠らせておくのは勿体ないにもほどがある、と彼は自身ことながらそう思う。彼のアトモスフィアを希釈したアンプルも持ってきた。これは朱音のためにだ。アトモスフィアは放射性物質で絶えず壊変、崩壊してゆくため消費期限は半年だが、安定剤入りのアンプルは凍結しておけば3年は使える。

文型神である織図のアンプルをもらっているようだが、身体能力の優れた武型神であるユージーンの方がアトモスフィアの質がよく、長く代謝を補えるので、織図のアンプルに加えて渡すつもりだった。それで彼女が人間社会で暮らす事のできる時間、タイムリミットを延ばせるだろう。

お土産というには味気ないが、彼らにとって菓子折りやアクセサリなどよりずっと必要なものだ。上島に土産を渡して最後に社務所に行き、全てのデータを以御のパソコンに転送すればもうやり残した事はない。あとは気に入った場所で死ぬだけだ。どうやって死ぬかを考えたが、物理的な死に方では誰かに見つかった場合、傷を

癒され蘇生されてしまう可能性がある。荻号は黙って死なせてくれるかもしれないが、医神で外科医である紺上が助けてしまうかもしれない。

確実に死ぬためには秘策があった。ラピッド・デス・アクセラレータ（RDA-92）を持ってきた。このRDA-92は、服用すれば一秒もかからず即死する毒薬だ。ユージーン自身おかざき しゆくようが岡崎 宿耀と共に暗殺すべき人物を出来るだけ苦しめずに殺すために開発した。

この毒薬には解毒剤などないし、胃洗浄などをしても全く無駄だ。しかも生体時間を戻しても不可逆的な壊死により蘇生は不可能である。体に入った瞬間から細胞を破壊し、まず神経を切断して次々と臓器を出血させ、脳を破壊する。血流に入ったが最後、助かる手段はない。この毒薬は神であろうと人であろうと使徒であろうと瞬殺される。自分で開発したのだからその効果は知っている。間違いく死ぬるだろう。それを飲んだ直後に、予めプログラムしておいたG-CAMで脳を木っ端みじんに吹き飛ばす。これで完璧だ、いかに紺上が天才外科医でも絶対に蘇生などではしない。

ユージーンは第8層のゲートを通過し光獣の檻までやってきた。光獣番役が不在だったのでほっとして、檻を開け放ち巨大な白隼の鳳の背に乗った。

「さあ、鳳。最後の務めを頼むぞ」

白隼はピーツと汽笛のようなさえずり声を上げると、快晴の空に舞い上がった。

＊

皐月はメファイストフェレスの様子がおかしいことに気付いていた。

どうしよう、彼女は何かを隠している。

その証拠に、彼女は自習と黒板に書き、プリントを配ったまま、2時間目の国語をすっぽかしていた。皐月は久しぶりに国語の授業をするため、教壇に立った。皐月が敢えて教壇に立とうとしたのは、メファイストがもういなくなってしまうのではないかと、そんな予感がしたからだ。もともと一人でこなしていたのだから、副担任であるユージーンとメファイストフェレスがいなくなったからといって、授業をするのに困るわけではない。だが彼等の存在は、子供達の大きな心の支えとなっていた。暗くなってしまった子供達の顔を見渡しながら、皐月はわざと微笑んでみせた。

「それでは、今日は私が授業をします。今日は文法をしましょう。53ページを開いてください」

「あの、先生！」

「何？」

「え、いえ、何でもありません……」

子供達はメファイストフェレスがどこに行ってしまったのかを聞きたかったようだが、皐月が授業を始めてしまったので黙って諦めた。皐月は久しぶりに縦書きの板書をしながら、教科書を脇にかかえた。

日常が戻ってくるのだ、ユージーンもメファイストフェレスもいなかった頃の日常が……。寂しいなんて思いもしなかったのに、寂しくてやりきれない。

彼等はここにいるべき存在ではなかったのかもしれない。皐月は少し涙ぐんで声が震えたが、鼻水をしゅんとすすると、わざとらしいほど大きく声を張り上げた。授業中もメファイストの行方を気に

していた恒は、何に気付いたのか大きく目を見開き、ふっと廊下
首を向けて……授業中にも関わらずゆっくりと立ち上がった。

恒が何に気付いたのか、後ろに座っていた子供達はつられて廊下
の方に目を向けた。

大きな皐月の声に紛れて、小さな足音が教室に近づいてくる。

教室の前の扉が、ゆっくりと、そして静かに開くのが見えた。全
ての子供達がそちらに注目し、皐月も遅れて左側の扉を振り返った。
そこに立っていたのは、黒いスーツを着た金髪の男だ。

「国語の授業を、しましょうか」

クラス中の子供達という子供達から、割れんばかりの歓声が上が
った。

「静かに。長い間留守にしまして申し訳ありません。授業を始
めます。静かに、さあ、席について」

ユージーンは両手をかざしてストップ、とやったので子供達は飛
びつきたい衝動を抑えるのにやっとだった。授業が終わって休憩時
間になったら飛びつきに行けばいいことだ、今は我慢するしかない。
皐月は全身が感動に震えるのを感じた。天上に手紙を送ってから、
わずか2日後の帰還だった。

「お帰りなさい、先生」

「ご心配をおかけしました。お手紙、ありがとうございました」

皐月はユージーンに教壇を譲り、後ろの席に行って静かにハンカ
チで目もとと鼻を拭っていた。恒も他の子供達と同じように彼との
再会を喜びたかった。彼が風岳村に戻ってくることができたという
ことは、極陽による発布の戒厳令が解除されたのだろう。ユージー

ンには話したいことがたくさんある、そして自分の神としての成長を見て欲しい――。

教室は先ほどの様子とはうってかわって一気に私語が多くなり、がやがやと賑やかになった。ユージーンは臍月から渡された教科書を閉じ、予め刷っておいたプリントを配り始めた。神階で暢気にプリントを作っていたのかと思うと、恒は気が抜けてしまった。プリントに印刷されていたのは、英語の童話の翻訳だった。恒はこの話を知っていた。どうして、復帰一発目の授業で、こんな題材を扱うのだろう……。

「今日は教科書はやりません。この話をしたくて、プリントを用意していました。The Giving Tree（大きな木）。シエル・シルヴァスタインという外国人が書いた童話です。Once there was a tree: and she loved the:」

昔、大きなりんごの木があった。りんごの木は毎日のように木の傍にやってくる少年を深く愛していた。ある時は少年の遊び場となり、心地よい木陰やおいしいりんごを与えた。少年を喜ばせる事は、木にとって大きな喜びだった。やがて少年が成長してゆくに連れ、少年の願いは段々と大きなものになっていった。

それは木にとって大きな代償を要求するものだった。少年が家が欲しいと言ったときには、自分の枝を切ってゆくように提案する。そしてボートを作りたいと言った少年に対し、木はもうあげられる枝はないから、自分を切り倒してボートを作ってはどうかと提案する。少年は木を切り倒し、木は切り株だけになった。それでも木は幸福だった……果たして木は、幸せだったのか。こんな話だ。

小学生である恒のクラスメイトには解らないだろう、この本の著者は自己犠牲に対して大きな問題提起をしている。どうして、こんな話を持ってきたのだろう……この木はまるで、無償の愛を人々に与えるユージーンそのひとの生き方だ。

恒は震えながら、教壇のユージーンを見上げた。彼はまだ英語と翻訳をかわるがわる読みながら、時折生徒達の顔を見ている。恒は意識をユージーンに集中した。どうして、どうしてこんな話をはじめたんだ……それは恒にとって無意識の事だった。だが不思議と、それがすんなりとできた。恒は二、三度首を振り、涙が込み上げてきた。

「ユージーンさん、どうして……自殺するって、どうして……」

そのわずかな声を、言葉を聞いたユージーンが弾かれたように恒を見つめ、5層ある彼のマインドギャップを展開し、恒のマインドブレイクから彼の思考回路を守った。そして逆に恒のギャップに対してマインドブレイクをかけているのがわかる。二柱の神々の静かで、しかし激しい攻防は一瞬のうちに行われ、その結果、どちらの思考も看破できなくなった。ユージーンはまさか恒が心層看破を習得しているとは思わずに、心層^{マインドギャップ}を作っていなかったのだ。

恒はユージーンの強い思いを看破した。神の思考回路を読んだのは、これが最初だった。

彼は、この授業が終わったら、すぐに自殺をしようとしている――
|。

第1節 第24話 りんごの木は幸福だったか

”恒くんが……マインドギャップを3 層とマインドブレイクを習得している……”

ユージーンはさすがのような目を向けてくる恒を直視できなかった。ユージーンはまだ恒を非力な人間として見なしていたので不覚をとってしまったのだ。主神、極陽の息子である恒を、侮ってはならなかったのかもしれない。

ユージーンは恒の成長が嬉しい反面、恒の将来を決して見守る事ができないことが心残りだった。恒を、そしてこの村を守りたいと強く願う。恒の成長を見届け、神としての道を歩むのか人として生きるのか、その決断を見届けたかったし、尊重してやりたかった。

それでもどうやら、叶わないようだ――。

ユージーンは授業を終えると、子供たちが席を立つのと同時に逃げるように消えてしまった。

子供たちは彼を見失って啞然としていた。学校でのんびりするつもりがないという事はマインドブレイクにより看破していたので、恒は授業を終えたら逃げるだろうとは思っていた。恒は意識を研ぎ澄まして彼の気配を探る。

授業中に、彼がどこに消えても追跡できるようにユージーンのアトモスフィアの質感は覚えた。彼のアトモスフィアは明るく鮮やかで、穏やかだ。彼本来の性格がアトモスフィアに滲み出る。死神織図の重厚でこくのある感じとは違う。

近い！

しかもまだ校内にいる。どこだ？　すぐ上だ、六年生の教室のまだ更に上、屋上だ。屋上には鍵がかかっている、出られない事がわかっていたので、屋上に走る事はしなかった。

恒はきつ、と天井を睨み付けた。屋上で辞世の句でも詠んでいるのなら、ぶん殴ってやりたいところだ。皐月とクラスメイトはユー・ジーンを外に捜しに行つて、教室に残ったのは恒だけだった。恒は誰もいない教室の窓を開け放ち、外に乗り出して上を見上げ、下を見下ろした。

腰の下を強い風が吹き抜けている。

ここは3階だ。相当の高さがあり、落ちたら大怪我どころでは済まない。嫌な予感を振り払うようにぶるぶると顔を左右にふり、真っ直ぐ上を見上げると、体を更に乗り出して窓を右足で蹴り付けた。恒の身体は空中に投げ出され、ふっと腹のあたりが軽くなる。

空気音が耳鳴りのように響き、足の下には中庭が小さく見える。

恒は両手を広げ、ふわりと空に舞い上がった。人間には持ちえない、飛翔能力は確かに恒に備わっていた。視床下部にある斥力中枢を強い精神力でコントロールし、揚力を生み出す。毎晩の訓練で、何度もおさらいした手順だ。

恒は昨日、家の屋根ぐらいの高さまでようやく飛べるようになったので、ここ、校舎の三階から屋上まではたった二階分。体調もよいので、いつも通りにやれば届かない距離ではない。恒は両手をぴんと上に伸ばしてぐんぐんと迫ってくる屋上を見逃さないように、目を見開いていた。速度のコントロールがきかないので、しっかりと前を見ておかないと行き過ぎてしまい、屋上に落ちてケガをする。恒は目の前に見えて、すぐに通り過ぎそうになった屋上の手摺りを

つかんだ。

手すりにぶら下がりながら屋上を見渡すと、やはりユージーンはそこにいて風岳の景色を見つめていた。恒が手摺りからずり落ちそうになってジタバタしているのを見つけて、彼は少し困ったような顔をしながら恒を屋上に引き揚げる。ようやく生きた心地がして、固いコンクリートの床にがつくり膝をついた。

「ユージーンさん！ まさかここで死のうってんじゃ、ないですよね！？」

「君は成長が早いね。マインドブレイク、マインドギャップを3層も作り、そして飛翔ができるようになったんだね。織図様の教育もあるのだろうが、君自身の努力もたいしたものだ。君はわたしなどより、素晴らしい神になれるだろう」

恒はユージーンが自殺できないよう腹のあたりにしがみついて抵抗する。切腹でも何でもできるものなら、やってみろといったものだ。恒は身長が伸びたが、まだまだ彼と比べると小さいと感じられた。

「どうして死のうなんて思ったんですか！ あなたはりんごの木になろうとしているんですか？ あなたは途中で授業を終えたけど、あの話には続きがあります。りんごの木は死んだわけじゃない、切り倒され切り株ともなってもちゃんと生きていて、年老いて帰ってきた少年の腰掛けとなるんです。あなたに何があったのかは解りません、でも死なないください！ 死んだら何も残りません！ 切り株ですらも！」

ユージーンはしがみついて離そうとしない恒の頭に、ぽんと彼の大きな手を置いた。何気なく置かれたその手は重く、熱い。

「恒くん、わたしは犠牲となるために死ぬのではない」

ユージーンは穏やかにそう述べた。彼の心はもうかなり以前決まっていた、そのための覚悟は出来ているようだ。彼は天上で過ごした間に、何を知ったのだろう。そして誰が、何が彼に死を強いているのか……。恒はマインドブレイクをかけていたが、もう彼は恒の接近に警戒していて看破できない。恒はもはや自身のマインドギャップを解除した、こちらはありのままをさらけ出しているのに。

彼が恒を人間ではなく、一柱の神として見なして油断なくいることに深く傷ついた。こんなの、酷いじゃないか……。恒はユージーンに、ただ会いたかっただけなのに。

「俺はあなたが何を考えているのかわかりません。あなたがしようとしていることは間違っている！ 俺はあなたに会うまでは、自分なんて死んでもいいと思っていました。でもそれが間違いだって、あなたが教えてくれたんです！ どんなに辛くても生きなきゃいけないって、あなたが教えてくれたんじゃないですか！ どうして死にたいんですか！」

「わたしが、わたしであるために死ぬんだ。Then, she was happy（そして木は幸福だった）……皆のため、そればかりではない。わたしが幸福であるためにも」

「あなたを悩ませている問題を、俺にも聞かせてください。力になりたいんです！ 俺はもう、以前の俺ではありません！」

ユージーンは言葉につまり、恒を抱きしめる。黒いスーツが、真夏の太陽の光を受けてことさら温かく感じた。恒は彼を引き留めることができないのではないか、そんな予感が沸々としてくる。最後に顔を見せにきてくれてありがとう、本当はそう言った方が彼は幸福だったかもしれない。駄々をこねて嫌だ嫌だとしがみついて、

それでも恒は彼を失いたくなかった。

「生きるということは、満足に死ぬ事でもある。恒くん……君の行く道は決して平坦なものではないだろう。君は極陽の息子だったそうだね。でもその事に捉われずに、君の周りの人々の事もよく考え、そして君自身がどうありたいかを考えて歩むんだ。人として、そして神として……。さあ、わたしの選択も尊重してもらおうか。この手をはなしておくれ」

恒はしがみついたまま小刻みに首を振った。絶対に離してやるつもりはない。彼が呆れて、自殺を思いとどまってくれるまでは、手が千切れても離さない。

「恒くん、マインドブレイクを習得した君に、君の先生として最後に教えてあげよう。これはマインドコントロールといってね……対象の神経回路を、神のアトモスフィアで書き換える術だ。距離が近いほど、施術には有利なんだよ」

恒の手は意思に反して、ギリギリとユージーンから離され、そのまま手を突き出した形で硬直してしまって動かなくなった。いくら抗おうと思っても、ユージーンの強大なアトモスフィアにやられて、もう身動きがとれない。アトモスフィアを駆使する事に長けた武系枢軸神と、神と名乗るにもおこがましい子供との格の違いを見せ付けられている。恒はもう一生力が使えなくなってもいいから、身体よ動け、動いてくれと祈った。

恒の無責任な祈りはきつと、天には届かない。

「さよならだ、恒くん。君と会えてよかった」

ユージーンは最後に微笑んで瞬間移動で消えてしまった。彼が消えると同時に、恒はすぐに彼のアトモスフィアを探る。彼は強力な

アトモスフィアを備えているので生物階にいる限りは探知できる。恒は織図から生物階に降下している神のアトモスフィアを探知する訓練を受けていた。ユージーンのアトモスフィアは現在、生物階に降下している神のうち最も強大なものだ。最も強い気配として感じる事ができる。四方を見渡して彼のアトモスフィアを辿ると、僅かに感じる事ができる。かなり遠くにいるが、生物階にいた。だが、それは海をひとつ隔てた場所、日本ではない……。恒はああ、と絶望的になった。今からこの気配を辿って追いかけても、着いた頃には彼はもうこの世にはいないだろう。

彼の気配は感じるのに、そこにたどり着く事ができない。織図から追跡転移を教えてもらっていればよかったと思った。……いや、待てよ、織図は確か探偵ナイトスクープを見ながら面倒くさそうに説明してくれた筈だ。追跡転移のやり方、恒は全神経を使って記憶の糸を手繰り寄せる。

『追跡転移なんてなおめ、まず無理だぞ。やり方は簡単なんだがな、え？ 教えろって？ 相手のアトモスフィアを感じたら、自分のアトモスフィアを相手のものと同調させる。同調ってのは、アトモスフィアの組成を変えるってことだ。同調したら、あとは瞬間移動をするときと同じだ。場所、この場合は場所じゃなくて対象だな、それを思い浮かべて転移するだけだ。だがお前はまず瞬間移動が出来ないんだから、無理だ』

恒は瞬間移動の方法を知らない、だが場所を思い浮かべて転移するという言葉は織図からもユージーンからも、荻号からも聞いた。願うだけで叶うとは思わない、それでも、イメージをするというのは大切な事だ。不可能とも思えるあらゆる事を可能とする。恒はどこに何を集中しているのか分からないまま、彼のアトモスフィアを見失わないように意識を研ぎ澄ました。彼のアトモスフィアを追跡

して、転移するんだ！

”……俺がもしあなたの息子であり創造物だというのなら、せめて出来損ないにはしなかっただろ？”

恒はまだ見ぬ父親に語りかけた。恒は極陽の創造物に過ぎない、だがわざわざ彼の手によって恒を創ったのなら、決して悪いようには設計しなかっただろう。その証拠に、恒には普通は10歳では決して備わることのないマインドギャップを3層も持っている。これは自分の実力だというよりは、極陽がそういうスペックで設計したからだ。恒は憎むべき父親が、せめて出来損ないに設計したのではないことを祈るしかなかった。瞬間移動という技術は元来危機回避の技術だったそうだ。危険な状況に置かれたとき、本能的にできるようになるのだと、織図が教えてくれた。

”使えないモノを創っても仕方がない、そうだろう。俺は追跡転移が、できるよな。強い意志があれば――！”

恒は咆哮し決心すると、屋上の柵を飛び越え、屋上からまっさかさまに転落した。

”俺の中の本能、目覚めろ！ 今お前は危険に晒されているんだぞ！ 転移するんだ、ユージンさんのところまで！”

恒の頭が中庭の岩に激突しそうになった瞬間、恒の姿は消えていた。

中庭で鯉に餌をやっていた生徒が、驚いて彼女のメガネを池の中に落としてしまった。

＊

恒の身体は空間を越え、やはり中空に突然現われて墜落した。

ドスン、としたたかに頭をぶつけたが、その感触は岩に当たったようなものではなかった。どの国に飛ばされたのかは解らないが、ここは山中で、腐葉土の上に落ちたおかげで怪我もなくすんだ。初めての間移動が成功したのかどうかは、彼の姿を見るまでわからなかった。彼の姿を見るまでは、追跡転移が成功しているという保障もない。恒は目に入った土をごしごしと拭いながら彼の気配を探した。彼のアトモスフィアは確かにここにある、追跡転移は成功し、手を伸ばせば彼の身体に届きそうだ。だが、彼のものにしては弱い。

恒はようやく土を目からかきだして、立ち上がった。

「ユージーンさん!!」

恒は倒れた彼の足をまず見つけた。生きていてくれ、と思いながら這いつくばって顔を見ようとして、恒は膝から崩れ落ちた。

安否を確認しようとして見ようとした彼の顔は、そこにはもうなかった。

そこにあったのは、頭を粉々に吹き飛ばされた、彼の亡骸だった。したがって脳下垂体から分泌されるアトモスフィアは急速に失われ、頭のない死体は無言で蒼白となった恒の前に、ふかふかで暖かな腐葉土の上に、ただただ物質として横たわっていた。

こんなものを見るために、恒は屋上から飛び降りたわけではない。彼を死の淵から引き上げるために追いかけてきたのに——!!

たった今だ。恒がユージーンを追跡転移するまで、おそらく1分もはかかっていないだろう。秒殺とはこのことだ。彼は全ての手はずを整え、死に場所を選び、転移をしてここで息絶えた。恒が最も敬愛した軍神 ユージーンⅡマズローはたった今、誰にも看取られないまま、誰の目からも隠れて、自殺により崩御したのだ。

” あなたは、幸福だったはずがない——! ユージーンさん!!”

恒は慟哭し、嗚咽した。

＊

恒は携帯電話を持っていなかった事を死にたくなるほど悔いた。

恒ひとりで止めに行かずに、織図が荻号を呼ぶべきだった。ユー・ジーンを思いとどまらせるとしたらどちらかというと、実力行使のできる荻号の方がよかっただろう。恒は脳を吹き飛ばしたこの状態で助かるものではないとは百も承知だったが、あらゆる手段を尽くさず後悔をしないように、こんな状態だからこそ誰か見識のある神を呼ぶべきだと思った。

恒は追跡転移ができるようになった、生物階に降下しているほかの神々の気配をたどって転移することはできる。だが彼、あるいは彼女が枢軸神ではなかった場合、できる事は限られている。

織図の気配は生物階にはなかった。彼は昼間は神階にいて、夜になると恒を教育するために生物階に降りてくるという気ままな生活を送っている。織図が降りてくるまでは、あと8時間以上はある、これを待っていたら間に合わない。織図からもっと様々な事を学んでおけばよかったと思った、だがそんな事を言っても仕方がない。

彼を助けない、恒の気持ちはそれだけだった。はっと、思い出したように、胸に手をやる。ADAMから精神体でログインして陽階に入り、荻号に連絡を取る事はできないだろうか。荻号のゲストカードは確かに恒の首から架かっている。いや、だめだ、だめだ。荻号は陰階参謀という特殊な立場で、そうそう会えるものではないのだそうだ。連絡を取ろうとするだけで半日はかかるし、下手をすれ

ば不審者で逮捕だ。それよりはまだ、どこの外国なのかわからないが民家に入って電話を貸してもらって荻号の携帯にかけた方がいくらかましだ。だがユージーンが最期に選んだ死に場所は、どうやらまったく誰にも発見されなくてよいようにしていたらしく、どこを見渡しても木しか見えず、集落が近くにあるとは思えなかった。

恒はユージーンの亡骸とともに山中に取り残された。恒は自宅の電話台まで瞬間移動を試みようとして思い留まった。瞬間移動は追跡転移の下位術だ、もう恒は記憶にある場所なら世界中どこでも行ける。だがこの場所に帰ってこれるのだろうか。ユージーンは追跡転移ではなく普通の瞬間移動をしてここに来たのだから、この場所の特徴はどうかすれば覚えられるのだろうか、それができるといふ確信が持てなかった。この場所を見失ってしまうぐらいなら、ここから動かない方がよい。

恒はここから荻号が呼べないものかを考えるしかなかった。彼の持ち物に何か携帯電話のようなものが入っていないかポケットをあらため、顔のない神体を裏返して、彼が何か持っていないかを必死で探した。彼は手ぶらで来たようで、いつもなら肌身離さない携帯電話も何も持っていなかった。彼の持ち物といえば、軍神固有の神具、G-CAMだけだ。亡き主の命令を待ち続けるG-CAMは、主の亡骸に寄り添っていた。恒はできる筈がないが、これしかないと思ってそれを睨み付けた。

「今の俺には、もうこれしかない」

アトモスフィアの性質の異なる神具を扱うと、酷いやけどを負ってしまう。それはユージーンが恒のDNAシークエンスを試みた際に、岡崎 宿耀から借りた神具がひどく彼の手を傷つけていた事から学んでいた。素手で他神の神具に触れると焼けどをする。これは

恒でも知っている常識だった。だが恒はその常識を一旦忘れてしまいう事にした。先入観なく触れれば、G-CAMも恒のアトモスフィアを受け入れてくれるのではないだろうか。

神具はアトモスフィアの増幅、そして力学変換装置である。フィジカルレベルが一桁台の恒のアトモスフィアでは、とてもこの神具を扱うには足りるものではない。この神具に触ればどうなってしまうのか、余計な事はこの際考えないようにするしかなかった。この神具を扱えるのかどうかもわからない、99%無理だ。

それでも、やらなければ確実に何も起こらない。

恒はユージーンの手に握られている神具にそっと手を翳した。G-CAMは馬鹿にしたようにか細く青い明滅を繰り返す以外は、何も反応を示さない。弱すぎて笑われているのだろうか、と恒はくじけそうになった。

”それでも俺は、お前の力を借りたいんだ。お前の主を助けたいんだよ！ 頼むよ……”

恒の手はG-CAMの赤い柄の部分に触れた。焼け付くかと思っ
た手は、神具の柄をしっかりと握り締めていた。恒は体中の汗腺からどっと汗が噴出すのを感じ、冷や汗が額から鼻先を伝って腐葉土の上に滴り落ちた。

”全神具、適合性――？”

恒は憎しみしか向けられなかった父親にこのときばかりは感謝する。

父親はどうやら、恒に全神具適合性をオプションとして付けてお

いてくれたようだ。これがなければ、起動することはおろか、神具に触れる事すらできない。神具に触れる事ができ、アトモスフィアの型が一致すれば、神具は基本的にいう事をきくものだ。今G-CAMは、主ではない恒の手に渡ったという事に気付かず、ユージーンが大怪我を負うか何かでアトモスフィアが最小になっているものと錯覚している。G-CAMをうまく騙して、荻号と連絡をとる。そこまでできれば、それさえできれば――。荻号ならきっと、何とかしてくれるものだった。恒はユージーンの手を外すと、足を広げて踏ん張って、恒の体重より重いG-CAMを持ち上げた。触れる事ができれば、あとはあの機能に頼るだけだ。織図について学んでいてよかった！

「システム、ナビゲーションモード、オープン。音声コマンド入力を許可してください」

これはどの神具にもついている音声コマンド機能だった。織図の神具、16 von Louis（ルイ16世の鎌）を眺めて色々質問をしていたお陰だ。はじめて神具を手にした神は、神具の使い方が解らない。取扱説明書もついているが、紛失した時の為に音声ナビゲーションモードがどの神具にもデフォルトでついていると織図が教えてくれていた。ナビゲーションに従って操作すれば使えるようになる筈だと教えてくれた。織図は恒が少し疑問に思っ質問した事に何でも、面倒くさがりながらも必ず答えてくれた。織図がいなければ、自分はこの瞬間も教室でユージーンの姿を捜しているしかできなかっただろう。

”System console, accept.”
（システムコンソール 了解しました）

恒はG-CAMが恒の言葉を受け付けたことで、もう飛び上がった

て喜びたかった。だがそんな事をしている場合ではない。G-CAMのどこからともなく聞こえてくる英語の音声は女性の合成音声で、柔らかな口調だ。

「神具間連絡機能をナビゲートしてください。連絡対象は相間転移星相装置です」

” Accept.”

（了解しました）

恒のアトモスフィアでは到底足りない筈だが、ユージーンの亡骸の傍にまだ漂っているアトモスフィアが駆動を手助けをしてくれているのだろう。G-CAMは全神具適合性を持つ恒とユージーンのアトモスフィアの残りかすで、恒をユージーンだと錯覚している。G-CAMの基盤が頼もしく脈打つように光り、演算をしているのがわかる。恒はがつくりと膝をついた。何という重さだ、肩が抜けてしまいそうだった。

” Creating a connection with the System of Correlating Mobile STAR……connected.”

（相間転移星相装置と接続中……接続しました）

荻号はユージーンの危機に気付いて、必ず来てくれるだろう。

恒は力尽きてその場にぐったりと倒れ込んだ。ユージーンの隣に倒れて異国の夏草が口の中に入りながら、生物階に強大なアトモスフィアが突如現われたのを感じた。アトモスフィアを感じる事ができるようになって、初めて感じた荻号のアトモスフィアは強大といったものではない。もう他の位神の気配が吹き飛んでしまうほどの巨大な気配の塊だ。

それが恒の頭上に現われた時、恒は疲労困憊で意識を失ってしまった。

＊

どれほどの時間が経っていたのだろう。意識がブラックアウトしていた恒は、ふかふかの布団の中で目を覚ました。瞼をぎゅっと閉ざしたまま感じるのは僅かに漂う古い本の匂い。このまま何もかも忘れて眠ってしまいたかった。だが、何かを忘れているような気がする……決して忘れてはならない大切な事を。

「ユージーンさん！」

恒は思い出して、ガバツと布団から起き上がった。古い洋館のような部屋の奥のソファーに、織図と荻号が座ってお茶を飲んでいた。図書館の中にいるのかと思うほどの聳え立つ本棚の下に、二柱はくつろいでいる。ここは生物階ではない、ということはずぐにわかった。織図や荻号の気配のみならず、無数の神々の気配が恒の周囲を360度取り巻いて存在感を放っている。恒は二柱の顔を見てほっとして、しかしすぐにベッドから跳ね起きた。織図は大きな両手を払って恒が飛びついてくるのを待っていたので、遠慮なくいかせてもらった。

「よう、恒。お疲れだったな。さすが俺の弟子だ、G-CAMを使って荻号さんと呼びやがった」

見慣れた織図の顔がこれほど、懐かしいとは思わなかった。織図は仕事着である黒衣を纏っていて、恒をまるごと包む。急速に冷たくなってゆくユージーンの体温を感じていた恒は、織図の温かさにほっとした。

「よしよし、怖かったな」

「織図さん、あなたから教わった全ての事を尽くしました……それでも、ユージーンさんを止められませんでした」

織図は褐色の手で頭をぐりぐりと撫でる。この子は、たったひとりでいくつもの奇跡を起こし、よく頑張った。神は奇跡を待つものではない、自らの努力と鍛錬により奇跡を生み出す存在だ。織図の黒衣の間から見えた荻号はいつもの冷静な表情で、生物階からG-CAMを拾って持ってきていた。恒はどんな経緯でここにたどり着いたのかは想像もつかない、だが荻号が迎えに来てくれたことだけは確かだ。

「ユージーンさんは……自分で頭を吹き飛ばして」

「ああ、G-CAMに自殺プログラムをセットし、彼自身が開発した猛毒を服用したようだ」

荻号は紅茶など飲んで本を読んでいる。

それはないんじゃないか、と、恒は思った。

一柱の神が自殺により崩御したというのに、その態度はないだろう。沈痛な面持ちの織図に比べ、荻号には彼の死を悼む様子はない。荻号は長く生き過ぎて、感情が麻痺してしまっているのか？ 恒はどうしても尋ねなくてはならないことを見失うことなく、荻号に尋ねた。

「ユージーンさんは、やはり亡くなられたのですよね」

「死んでみないと、納得しないだろうからな。勝手にさせたまでだ」
味気ない口調の荻号をたしなめるように、織図が恒をいたわる。
荻号の寛ぎようからすると、ここはどうやら荻号の書斎のようで、古い洋館のような間取りに、アンティークな家具類が取り揃えてセンスよく配置されていた。恐ろしげな絵画や、書棚には医学書や物

理学書、心理学の本、あとは辞書類が所狭しと並んでいた。彼は確か勤勉な読書家だ。闇を好むようにカーテンを締め切り、薄暗がりのランプの下には、ページがめくれたまま置いてある分厚い本があった。

「荻号さん、面白がって恒を不安がらせるのはやめてくれ。こいつは十分に絶望している。恒、大丈夫だ。ユージーンは死んでいない。爆発した脳みそも残らず持って帰って、さっき荻号さんが処置をしたから。毒も奴自身の自然治癒力で解毒しやがるだろうし、安静にして回復を待っていれば百万回死んでもまた蘇る」

荻号は外科医だというが、脳を吹き飛ばした状態でどうやって手術をしたというのだろう。相転星の機能を駆使すれば不可能ではないのだろうか。恒は零れ落ちそうになっていた涙を、また目の中に押し戻した。

「え？」

「ユージーンは不死身だからな。いかんせん、それを知らなかった」

恒はその意味を反芻して考える事もなく、へなへなと力が抜けて織図に再びしがみついた。荻号は彼が百万回死のうと試みたとしても、全く興味がなさそうだった。荻号には最初から、ユージーンが決して死ぬ事ができないという事が分かり切っていたのだろう。自殺をしたければさせてやればいい、その程度に思っていたようだ。

つまりりんごの木は、決して切り倒す事のできない木だったということだ。

第1節 第25話 極位への位申、頂上決戦前夜

やっぱり、そうだった。5年2組の副担任は突然のようになくなってしまふものと相場が決まっている。

代わりに職員室の皐月のデスクの上に置かれた二通の手紙と、採点の終わったテストを見つけた。一通は風岳小学校の封筒、もう一通の封筒は真っ白で赤い蠟の封、それぞれメファイストフェレスとユージンから皐月に充てた手紙だ。

まずはメファイストフェレスの手紙を開くと、大きな字でこんな事が書いてある。

” 実家に帰らせてもらうわ。また戻ってくるから、あとはよろしくね”

実家に帰らせてもらいます、とはまるで夫と喧嘩をして家を出た嫁のようだ。皐月は封筒の中をごそごそまさぐって、中を覗いてみた。

それ以外には何も入っていない。ひとりで思い詰めて家出したのではなく帰省をしただけだから、心配ないか。まさか彼女の父親が危篤だというのではあるまい。彼女の父親はかの有名な大悪魔だというのだし……と、皐月は気分を落ち着かせる。帰らせてもらうと言われても何日休むかもわからない。まだ有給休暇は消費しきっていないが、長く休むのならそれなりに問題となる。彼等の籍は置いてほしいので、産休扱いにでもしとけばいいのかしら、と皐月は困惑した。

そういえばユージンはどうしたのだろう。

彼が戻って来たから交代でメファイストフェレスが実家に帰った

のかもしれない。

彼は一体どこにいったのだろう、と皐月は二通目の手紙を広げる。ユージーンの手紙は簡潔で、味気なかった。どうしてもやり遂げなくてはならない事があって、学校にはもう戻れないということ。わずかな時間ではあったが世話になったということ。子供たちと別れなくてはならないのは辛く、彼等の教師としてつとめを果たせなかった事が心のこりだということ。クラスの子供達、恒と朱音を頼むとのこと、風岳に起こる異変はもうじき解決するだろうということ。皆が幸福になってほしいということ。それだけだ。

え、それだけ？

「何なの。成し遂げなきゃいけない事って何なのー!？」

皐月は窓を開けて天国に向かって叫んでやりたくなる。二人して、この村からいなくなるなんて……。そして恒も先ほどの混乱に紛れて消えていた。皐月はたった一人ぼつりと取り残されてしまったような気になる。彼等は特別な存在で、すれ違ってゆくのだと心のどこかで理解していた。それでも彼等とともに歩む事で皐月にも何かができる事があるのではないか、と思って今日までやってきたのに。所詮は彼等に何の期待もされていなかったのだな、と思い知らされた気分だ。

＊

「明日と明後日、学校休みだろ？ 今日明日はここに泊まっていけ。母親には電話をかければいいから」

「それで、ここはどこですか」

「陰階にある俺の部屋だ。お前を家に配達してやるのも手間だったんでそのまま連れてきた。そこは俺のベッドだがもう何百年も寝ていないのでな。使わんから遠慮はいらんよ」

翌日が土曜なので、荻号はそんな事を言う。何百年寝ていない……というのがつつこみポイントなのだろうが、それを気にしていは話が進まない。

ユージーンは死体にも等しいので、回復するまでは当面面会謝絶だという。恒は今回の経験と反省から、神々から学べる事はできるだけ吸収しておきたいと考えた。

見聞を拡げておけば、いつかそれらの経験をきつと生かせる時がくる。ましてそれが荻号から学ぶとなると、自分のあるかないかも分からないが、潜在能力を飛躍的に引き出すためにこれほどの好機はなかった。

恒はたとえ帰れと言われてもここに留まるつもりだ。

陰階だとか陽階だとか、そんなことはもうどうだっていい。ここが生物階か神階か、そんなこともだ。あんなに情けない思いをするのは、今回かぎりでない。

ユージーンを救うことができなかった。これ以上大切な誰かを守れないであたふたするのは、もうたくさんだ。

「ユージーンさんはいつになったら回復しますか」

恒の最大の関心事はそれだ。

「まあ、そう急くなよ」

荻号はそう言うが、何しろ頭のない彼の姿しか恒の記憶にないのだから、彼の容態が心配だった。

彼らはそんなことより煙草を吸いたいのを我慢しているようで、

荻号の前の灰皿には前日あたりに吸った大量の吸い殻が小山を作っていた。

織図は色艶のよい木の煙管を持っているが、恒の家ではそれをペン廻しのようにして持て余すばかりで、決して吸おうとしない。

今も煙管でペン廻しをして、小指から人差し指にひょいっと飛ばした。

なかなか器用だ、……などと思っている場合ではない。荻号も喫煙を遠慮している。彼の手製の煙草には麻葉が仕込まれているそうだ。荻号はヤニが切れて体がしゃきつとしないのか、だらり、と腰をソファーに落としてインターホンで二岐という第一使徒を呼び、恒にティーセットを持ってくるよう命じた。

不機嫌そうにやってきた二岐を見て、名前は誰だったか忘れたが、恒が最近見た映画に出てきた女優によく似ていると思った。

「ユージンかあ、さあなあ。明日治るのかもしれない、十年以上かかるかもしれない」

「そんなアバウトな、あなたは何だってご存知かと！」

「荻号さんにもわからん事もあるさ」

織図は地上にいる時に輪をかけて、何がおかしいのかけられらとよく笑う。織図はお笑い好きだったが、お笑い番組を見ている時は大抵、恒がてんで理解できないツボで大爆笑する。

今もそんな感じのツボではまっているようだった。

荻号とはいつもつるんで一緒にいるというが、恒が想像していたより親しい間柄だったようだ。

恒は二岐によい香りのする紅茶と、クッキーを出してもらったので会釈をした。

二岐は気取って微笑むと、何も言わず退出する。恒は何かを口に

するような気になれなかったが、荻号に勧められたので一口だけ口をつけた。飲んだから、質問をしていいだろう、と言わんばかりに恒は荻号に尋ねた。

「ユージーンさんは本当に、死んでいないんですね？」

「ふ、そんな：簡単に死：ようなら、俺も：つくに死ん：いる」

「え？ 何ですか？」

荻号は皮肉な薄い笑いを浮かべながら口の中で何かぶつぶつと呟いていたが、恒には聞き取れなかった。

初めてA D A Mで遭遇したときと同じだ。この神はやはりどこか変わっている。天才と変人は紙一重、という言葉もあるが、まさにそれを地でいっている。彼が最強で全能に最も近いという実力を持つていなかったただの変態だ。だがこんなどうしようもない変態でも、学ぶ事は山ほどある。彼のマインドギャップは33層、他の神々の追隨を許さず、恒の11倍もあるのだから。

「あなたを信じて、いいんですね？」

「俺を信じられても困る。奴が蘇るまでの間、奴を匿ってやることはできる。情報を漏らさないことも含めてだ。だが復活に時間がかかるようなら軍神は崩御したと見なされる。すみやかに次期軍神が任命され奴は神階での居場所を失うだろう。居留守を使う以御の手腕次第だな。以御の姉貴あたりが気付くかもしれないが、うまくやれば全て元通り、運が悪ければユージーンは根無し草だ」

恒は以御という使徒に会った事がないので、姉貴の話をされてもわからない。織図は笑い疲れたのかソファアにぐったりと伸びていた。このふたりは、もう、だらしないな！ ちゃんと起きて話をしてくれよ、と恒は少タイラつとくる。

「神階を出た神ってのは、聞いた事がないんだがなあ……：そうならざるをえんかもしれんな。不死身であるという事は神にとっては脅

威だ。神じゃないんだからな。必ず追放されるだろう」

「神じゃないって！ ユージンさんはどうして不死身なんですか？ ユージンさんは誰なんですか！」

答えにくい質問だからか、これには荻号が答えず、織図が答える。

「俺が地上で話したろう。神はどうやって誕生したのかを知らない。神の中には、稀にそういう不死身の身体を持つのが生まれてくるんだ。ユージンが誰なのか、それは誰にもわからない。だが俺達神とは異質な存在だ。彼はそれを知らなかったんだけどな」

「……どうして、俺にそんな話をしてくれるんですか？ ユージンさんが復活したら、マインドブレイクでユージンさんにバレてしまいますよ？」

「お前がマインドギャップを最低限にでも備えたからだ。じゃなかったら話さんよ。そういう話をして、他の神に筒抜けにはならないだろう？ 3層あれば、ユージン程度にマインドギャップが破られることはない」

最低限必要な事というのはそういう意味だったのか、と恒はがっくりと肩を落とした。

神階は伏魔殿のような場所だ。壁に耳あり、障子に目あり、権謀術数に長けた者のみが生き残る。マインドギャップを備えていなければ、相手に考えが筒抜けで蹴落とされるのだ。荻号はそれ以上は口を閉ざした。彼は恒にこんな話をするために、地上に戻るのを引き止めた訳ではなさそうだった。

「恒。お前は全神具適合性を持っていたようだな」

荻号は唐突に話を変えた。荻号が話題を変えると決めた以上、いくら駆け引きをして話を聞きだそうとしても、彼はそれ以上を喋っ

てくれる気配はないだろう。恒はとりあえずは引き下がることにした。荻号は首筋からチェーンをたぐりよせて胸元から相転星を取り出す。チェーンを首から外し、掌に載せている。三環の中の鈍色の月が、ぎよろりと恒を睨んでいた。

「触れてみる」

荻号がとんでもない事を言いだした。神階最強の神具を目の前にして、更にそれに触れてみるというのだ。恒は困って織図に助け舟を出して欲しいと思って彼の顔をちらちらと見た。織図は大げさにぎよっとした顔をしていたが、押し黙ってしまつて、フォローをしてくれようとしなない。織図でも荻号には敵わないのか……と、恒はますます警戒心を強める。

「い、嫌です。できません」

「G-CAMならできて、これはできないのか？」

「G-CAMは火傷ぐらいで済むと思っていました。でもこれは、即死するって……織図さんもそう仰っていたじゃないですか」

「継嗣や他の神々が触れば死ぬだろうさ。だが、お前ならできる」
何の確信があつてそんなことを。

荻号は決して、恒の手を取って無理やり……といったふうではないが、その声はとてつもない強制力を持っていた。恒は指先だけを出しかけてひっこめた。こんなところで無駄死にをしたくない。もしも死んでしまったら母親に何と弁解すればよいのか、こんな事で死にたくない。恒は無理無理、と首を横に振って拒絶する。荻号は恒の行動をつぶさに観察している。荻号は勇気を試しているのではないか、と恒は気付いた。

ここで触れられなければ、荻号に見放されてしまうのかもしれない。はったりでもいいから、触れるふりはするべきだ。もし本当に危険なものならば寸前で止めてもらえる。荻号は恒の緊張の糸で張

り詰めてしまった恒に、優しく語りかけた。

「やってみろ。大丈夫だ」

恒はその言葉に暗示にかけられたように、ふらふらと手を近づけて指先だけ触れてみようとした。相転星の中の月は、恒の指先を流し目で見守っていた。相転星のその表情は、触れるのか、触れてもいいのか？ と恒に尋ねているようにも見える。気がつくど震える指先が、星のレリーフの部分に触れていた。

「あっ！」

「できただろ」

「おー、すげー。お前、本物だな」

恒は荻号から相転星を受け取って両手に包み込んでみる。最強の神具と呼ばれるそれはほんのりと温かく感じられた。

噛み付かれるかもしれないとは思ったが、触れたことが嬉しくてそれを目の前に近づけてみる。相転星の月は、ぱちぱちと瞬きをして、ハトが豆鉄砲を喰らったような顔をしていて愛嬌がある。荻号以外の持ち主の手に触れて、驚いてあっけに取られているようにも見える。

得体の知れない凶器として怖れられているが、こうして手にしてみるとかわいいもんだ。と恒は思わず顔を綻ばせた。そんな恒の様子を見ていた荻号は……

「お前に、神具をかしてやろうと思うんだが……相転星はさすがに無理だ。お前のアトモスフィアではびくともせんだろう。お前、ルービックキューブはしたことがあるか？」

ルービックキューブ？ いきなり話がぶち切れてしまったが、現代っ子である恒も知っていた。おもちゃ屋でたまに見かけるぐらい

の80年代の香りがする、一世を風靡したおもちゃだ。恒は朱音が手こずっているのを一回だけ解いたことがある。朱音は恒ができてしまったので急に面白くなくなって、そのまま部屋に放っているのだそう。

「やったことはあります。一回だけでしたけど」

「解けたか？」

「はい、そんなに苦労はしなかったと思います」

「じゃ、やってみせろ」

荻号はポケットからごそごそと小さなルービックキューブを取り出した。

織図は横で興味深そうにそれを見ていたが、手にとってみようとはしなかった。ここでは、織図は恒の師匠という立場を荻号に譲っておとなしくしているらしい。オーソドックスな配色ではなく、白、黒、銀色、赤、灰色、銅色の6色の面を持ち、10cmほどの大きさだ。

少しでかいのかな、と思っていたと、荻号は面の揃ったそれを、一瞬でばらばらに崩してしまった。それをにやにやと底意地の悪い顔をしながら恒に渡すのである。

恒は仕方なく受け取ると、真面目にコチコチと少しずつ面を合わせはじめた。それほど真剣に取り組まなくても、1分後には全ての面を合わせる事ができる。コツは知っているのだ。それほど苦労はしなかったと言った手前、手こずる様子を晒したくなかったので若干むきになったというのはある。完成したキューブを荻号に返すと、荻号はずいっと恒の手に戻した。こんなもの、いらないんですけど、困ったように荻号を見上げる。

「それを使ってみろ。それは俺がずっと以前に当時の極陽にもらった神具でな。珍しい機能がついていて、アトモスフィアの充電がで

きる。つまり駆動をするたびにアトモスフィアを奪われるという事がない。お前ごときでも楽に駆動ができるだろう。俺が満タンまで充電しておいてやったから、どんなに酷使しても10年はもつ」

「……神具があれば便利だと思いますけど、俺なんかにも扱える練習用ですか？」

初心者用、ちびっこ神用の神具なのかな、と恒はそれをくるくると抹茶茶碗をあらためるように手の中で回して様々な面を見ながら尋ねた。荻号はふっと鼻で笑う。明らかに馬鹿にされているが、実力差がありすぎるので嫌な気にはならない。

「神具に練習用などあるものか。それはな、FC2(Fundamental Control Double)ーメタフィジカル・キューブ(形而立方体)。お前の父親の持つ神具FC2ーマインドキューブ(心層立方体)の、プロトタイプだよ。レンタルだけにしようと思ったが、扱えそうなので決めた。それをお前にやる」

恒はただのルービックキューブにしか見えなかったこのサイコロのような物体が、まさか極陽の神具の兄貴だったと知って、放り投げ取り落としてしまった。

＊

上島は冷蔵庫にせっせと血液パックを詰め込んでいた。この血液の在りかを誰にも知られてはならない、ということではんのひとパックだけを手元に残し、詰め込み作業を終えると、その上からさらにA、B、Oなどのシールの貼ってある本物の輸血用血液パックを積み重ねてカモフラージュをしてみた。木を隠すなら森、血を隠すならここだ。これで例のブツを掘り出すような事はないだろう。

ひと仕事を終えて軍手を投げ捨て、診察台の上に寝そべった。外来を終えて、あとは入院患者の回診に行かなければならない。だが、

これで最後だったのか、と思いながら愛用の老眼鏡を外す。ユージンがついさつき、あわてふためきながらやってきて、自らの血液をどっさりとバッグに詰めて渡し、朱音に2ヶ月に一度打ってやってくれ、自分はもう戻って来ることができないからと言い残すと、また大慌てで消えていったのだ。彼の血液は、あらゆる患者の病を癒すのだろう。これでこのうらぶれた上島医院は医者要らずだ。よく朝刊の広告欄に載っている、”これを飲めばがんが治った！”というような本を書いて、血液を高値で売ることができる。

だがこの血液は、公益のために捧げたい。

キリストの血を受けた聖杯だけでも、インディ ジョーンズが血眼になって捜しにいったのだから、神の血が実在すると知れたら、この病院がどうなってしまうのか目に見えている。泥棒、政治家、医者、研究者、それらが一丸となって奪いに来るだろう。彼からもらった血は一滴も無駄にしてはならない。必要なら、スイスあたりに金庫を借りて冷凍庫ごとぶちこんだ方がいいかもしれない。最近ではスイス銀行も信用ならないんだったな、と上島は苦笑したが。

上島は診察台の上でこの血をひとパックだけ、上島の大学時代の親友である相模原 さがみはらのりお 紀夫という男に送ってみようと思った。相模原は信用のできる男で、今は理学研究科の化学科の教授だ。自らが助教授まで上り詰めた、大学病院の研究室に依頼するのではなく、化学屋にこの血を成分分析してもらおうと思った。

おあつらえむきなことに錯体研究室であるので、この血の中に何が含まれているのかあらゆる手段を尽くして調べてくれるだろうし、それが神の血だということさえバレなければ、よい薬が見つかったといつて、化合物の組成を論文に発表すればいいだけだ。

世界中にいる難病患者の灯火となり、なおかつ相模原の退官前の最大業績になるだろう。無論、ノーベル賞だって夢ではない。その

組成が完全に再現できれば、あらゆる動物モデルの疾患を癒す事ができ、その偉業は科学雑誌の権威に掲載されてもまだ足りない。ユージーンはきつと、上島医院で使うためだけに血液を50リットル以上も分けてくれたのではないだろう。やはりそれだ、それがいい。

＊

極陽、ヴィブレイスミスは闇の中の玉座で、ユージーンが帰還報告に來ない事を訝しんでいた。

彼の性格なら真っ先に報告をしてきそうなものだが。正式な書類にて嘆願書提出の礼を述べてきたが、それは彼の第一使徒の仕事だっただろう。ユージーンが直接報告にこないのは、あるいは……

”まさか、もう荻号の手が伸びたわけではあるまい”

そんなことを考えていると、静寂の中から無機質な足音が聞こえ、一般には知られていない極陽の第一使徒、灰寄かいぎき 傑すぐるが参内した事に気付いた。極位の第一使徒はその姿が公の目に触れてはならないという理由で陰陽問わず仮面の着用を義務づけるしきたりが以前はあったが、極陽はとある一件から旧習を廃し素顔で執務させることを法務局に求め、灰寄は初の条項改正により素顔のまま執務していた。とある一件とは、音楽神であるケイルディシャー・ムジカを第一使徒として20年間も伺候させていたという珍事件だ。ムジカは警備のセキュリティのために仮面をつけられていた上、アトモスフィアを放散するのではなく体内に蓄積してしまう体質だったので、極

陽といえども彼が神だと気付かなかった。

仮面をつけた第一使徒は、極陽が位申戦に敗れて降格した場合、降格と同時に殺される習わしがあったが、現在では違う。使徒の基本的な市民権の確立は極陽が打ち立てた業績だ。彼は神と使徒は生物学的な見地から、本来対等な立場にあってしかるべきだと考えており、使徒たちからは絶大なる支持を得ていた。

しかし極位の警護を一身に預かる第一使徒は、テロリストや造反者に標的とされないよう極力露出を控えるべきだという声は根強く残っていて、灰寄はまだ他の位神の前に姿を現した事はなかった。極位神の秘書官の役割は第二使徒の八雲やくも 青華せいかわという女使徒が担っており、こちらは通常の位神の第一使徒と同じく極位の代理者として対外的に露出していた。

灰寄がわざわざ顔を見せにきたところを見ると、何か大事が起ったというのだろう。

灰寄はアクション俳優のように身長が高く筋肉質だが、脳みそまで筋肉でできてはいない。堅実な思考力で、ムジカの後任として極陽を影で支えていた。彼は心から屈従の姿勢を見せ典雅な礼を切り送ると、早速本題に入ってきた。竹を割ったような性格の彼は前置きというものが苦手だった。

「極陽、本日の受付であなたに位申戦いしんせんを申し込んだ方がおられます」
位神の上位階級申請手続きである、位申戦という言葉は極陽は久しぶりに聞いた。

陽階では数十年前に、第11位 ナターシャⅡサンドラがユージ

ーンやレディラムⅡアンリニアに挑んでいた以外は、最近では位申戦などといわれ行われていなかったからだ。

最近の位申戦を思い出せと言われても、少し考えてしまうぐらいだ。それにしても位申戦を申し込みくるとは、荻号に手を打たれたか？

と勘繰ったがそれにしては陽階で駒にできる刺客が思い浮かばない。独自の判断で動いている者がいるのだろう。だとしたら……彼しかない。

「比企か？」

灰寄は畏まって一礼をした。比企がこのタイミングで仕掛けてくるとは……比企と荻号は反目している。荻号が比企に通じる事はない、となると何の思惑があつての事か。

極陽は玉座の上で足組みをし、半伽思惟のような体勢で溜息をついた。極位獲りは神階を二分する下剋上の様相となるだろう。関ヶ原の合戦のごと、天下分け目の大戦を敢えてこの時期に起こすか、などと比企に恨み言を言っても仕方のない話だった。位申戦は慶日、忌日がない限り必ず受けて立たなければならないという取り決めがあるからだ。

位申戦を延期するだけで支持率を落とす結果となる。極陽は果たし状を受け取った。

「致し方あるまい。位申戦の要請を受諾する」

「は、畏まりました。ではかよう総務局に返答し、開示いたします。主にご武運のあらんことを」

「もう少し待っておれば譲位したものを。今退くわけにはならんだ」

極陽は彼の神具を確かめるように、頸部をゆつくりとまさぐった。生体神具、FC2ーマインドキューブは彼の頸椎に埋め込まれて、触れればやっと解るほどの僅かなでっぱりを作っていた。

＊

「あー?! 比企が極陽に位申戦を挑んだー!？」

織図は荻号の部屋に居座って、GLーネットワークのヘッドライ
ンニュースを見ていた。

極陽という言葉聞いて、恒もそちらに気を取られて顔を向けた。恒は神具を使って何かをする前に、おもちゃの5×5×5のルービ
ックキューブを荻号から貸してもらって、神具を扱う際のコツをを
つかんでいた。一面一面の色、模様がコマンドを意味する神具を、
ガチャガチャと下手に組み替える事は危険なのだというので、まず
はこちらで練習だ。恒は赤い面の中に白いダイヤを作る練習をして
いた。荻号は本物のFC2ーメタフィジカル・キューブを使って遊
んでいるのか何かをしているのか、いじくりまわしている。恒はそ
っとおもちゃのルービックキューブを置いて、織図のしている画面
を覗き込む。

「お前のパパが、位申戦を挑まれているって話だ。こんなお日柄の
悪い時に、何でやるかね」

織図が記事を要約する。さすがにまだ神語は読めなかったので、
些細な事だが配慮が嬉しかった。

恒には位申戦のありがたみというのがよくわからない。そんなに
織図が大声を上げて驚くような事なのか、ということも。

「それは、どのくらいの事件なんですか？」

「暗黒面におちたダースベイダーが暗黒卿に……」

「いや、そういう喻えじゃなくて」

織図はもう少しそのくだりをやりたかったらしいが、恒はすぐさま話の腰を折った。

「比企と極陽は300年前に一回、やり合ったつきりだ。結果はパパの辛勝、比企はNo.2に落ち着いたわけだ。それが300年ぶりにもう一回、やるっていつてんだよ。負ければパパは降格だ」

「父が……」

織図はその言葉を聞き逃さずに、恒の背中をばしっと叩いた。

「お、お前初めて父って言ったな。殴りたいほど憎んでいるんじゃないのか？」

「……よくわかりません。父は酷いと思います。それでも、認めなければいけないのかもしれない。どんなに酷くても、父が俺を創って母を不幸にしたとしても、父がいなければ俺は生まれてこなかったから」

「俺らには、よくわからん感覚だな」

織図はひよいと振り向いて荻号の同意を求めたが、彼は全くの無関心だ。織図は相手にしてもらえなかったので肩を大げさに上げ下げすると、貧乏ゆすりをはじめた。神はそれ自身で生まれてくる。親も兄弟も子供も、そんなものはいない。親との関係についてあれこれ思い煩って、センチメンタルな気分になることもない。親族がいないことで世襲制度がなく、完全実力制であることもまた、神階の異常なまでの安定性の一助となっていた。織図は思い出したように付け加える。

「位申戦は、ネット中継が入るぞ。陽階の頂上決戦だからな、リアルタイム動画が放映される。来週あたりにおっぱじめるだろうから、パパの勇姿を拝めるかもしれないぜ」

「え！ 本当ですか？ でも俺んち、ネットないから……見れないかも」

「そのノートパソコンをかしてやるから、差し支えなければ母親にも見せてやれ」

「ありがとうございます！ いいんですか！」

荻号の配慮が恒には嬉しかった。GLーネットワークに接続できるパソコンは、どこの電気屋に行っても秋葉原に行っても、売っているものではない。彼の弟子の位申戦のニュースを受けても、どこかうわのそらのように見えた。弟子が華々しく……というときに師匠は何を考えているのだろうか、と織図はちらりと荻号を見やった。

父親が勝っても負けても、恒にはどちらでもよかった。会えなくなっでは困るから、命を落としてしまわなければいい。その程度だ。それより極陽がどんな姿をしていて、どんな戦略で荻号の一番弟子に挑むのかを、しっかりと目に焼き付けておきたかった。

父親は自分に、似ているのだろうか？

いや逆だ、自分は父親に、似ているのかだ。織図は似ている似ていると言っているさかったが、自分で確認するまでは認められない。

恒はふん、と鼻息を荒くすると、またソファーに戻ってコチコチとルービックキューブの組み換えに勤しんだ。

父親は恒が手にする神具と同じ種類の神具を持っていて、それを扱うのだ、と意識しながら。

*

「じゃあ、忘れ物ない？ 何か忘れても財布と切符だけあれば、大丈夫だからね」

「大丈夫よー。博多通りもんを5箱ね？ちゃんと買ってくるから」

「ひよこも1箱よ」

さりげなく要求する母親に、彼女は引き笑いを浮かべる。

「はは、持てるかなあ。じゃあね、父さん、母さん、明後日には帰るから」

石沢 朱音はその頃、何日旅行に行くのかと思うぐらいの大荷物を大きなリュックに背負って、JR新幹線口のプラットホームで、両親の見送りを受けていた。福岡に滞在するのはたった2日だけだ。それでも、小学生の朱音にとっては初めての旅行だった。

朱音はこの日のためにだけに携帯電話を買ってもらって、ご機嫌だ。朱音の背中に骨ができていた件で、朱音が随分悩んでいるようだったので、普段は厳格な両親もたまにはいいだろう、ということに甘やかしてやったのかもしれない。

出発まであとわずかとなった新幹線に、朱音は後ろの乗客に押し込まれるようにして乗り込んでいった。

第1節 第26話 女皇アルシエルⅡジャンセンの無茶振り

藤堂 志帆梨は、村の中心部の商店街を歩いていた。

恒は天国で外泊しているというが、もうあれこれと気にはならなかった。彼は親が思っているよりずっと大人なので、あまり心配しすぎるのも彼の負担となるのだろうという思いもどこかにある。織図 継嗣という神にも信頼がおけた。織図が一緒だといっているから、心配する必要はないと自分に言い聞かせる。勿論、母親としてまったく息子の行動を心配していないというわけではないのだが。恒は彼女の息子であるとともに、人々を救うことが使命の神である、そこを理解して割りきらなければならないと思つてのことだ。

恒は恒の人生、そして志帆梨は志帆梨の人生を掴まなければならぬ。

商店街の顔なじみの店主達に声をかけ、ここの一角で小料理屋を営む事になるからといって挨拶回りをしていた。この商店街には鉄板焼きの店や激安ラーメン店があつても、小料理店はなかったので、競争相手の同業者に疎まれることもなかった。

どの店の店主も歓迎してくれて、仕事終わりに一杯やりに行くから、と気を遣つてそんなことを言ってくれる。どの店にも怠らず挨拶をしたが、わけても”創作料理 しほり”の両隣とお向かいさんには手作りの抹茶ロールケーキを持って行って念入りに挨拶をした。商店街の全ての人々に挨拶をして、あと挨拶をしていないのは店舗の右隣だけだ。右隣の店は、ミカサのサカナという逆さ文字のような店名の魚屋だ。鄙びた店内を外からのぞくと、店主が刺身を作っているようだったので、カラカラと引き戸を開けて中に入らせてもらった。

「あい、いらっしやい」

「こんにちは。わたくし、左隣の空き店舗で小料理屋を出そうかと考えております、藤堂志帆梨という者です。本日はご挨拶に参りました。これ、つまらないものですが、お近づきのしるしに。手作りのロールケーキです。お口に合えばいいのですが」

店主はイカ刺を作っていた手を止め、おしぼりで手を拭って店の奥から出てきた。背の高い、よく日焼けした、30代頃の爽やかな青年だ。志帆梨はこの村にこんな青年がいたかしらと心の中で思ったが、志帆梨の顔を凝視してくる彼に、いつも居る白髪混じりの店主は今日はお休みなのかしら、どうしようと少し照れくさくなってもじもじとした。

「へえ、どうも。今日は三代目の親父が魚の買い付けに行っていて、俺でよければ。四代目店主、三笠^{みかさ かずなり}和成です、こちらこそよろしく、これは結構なものを」

志帆梨は彼の笑顔を見て、屈託がなく素敵だなと感じる。

彼はイカ刺しを放り投げたまま志帆梨と30分ばかり世間話をした。大きな声で、よく笑う男。控えめな性格の志帆梨は思えば20歳にして妊娠、出産を経験したもので、こんな風に異性と長々と立ち話をしたことはなかった。この気持ちの昂ぶりは何かしら、まだ初対面の相手なのに、と志帆梨は顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。

「ところで、お店はお一人でやるんですかい？」

「はい、私一人で。まだ従業員なんかは考えておりませんの」

「女性一人での経営は大変でしょう、何か力になれることがあったら、手伝いますから」

三笠は社交辞令なのか何なのか、親切そうな雰囲気だ。

「あ、ありがとうございます」

店主はお絞りで拭いたイカくさい手を差し出してきた。志帆梨は彼の手を両手でしっかりと握り締めた。

「お料理にお出しする魚は、ここで買い付けさせていただきます、よろしく」

「おおっ。そいつはありがたい！ 親父も喜びます」

志帆梨はこの青年のいる隣の店で、新たなる人生のスタートをきることができることを嬉しく感じた。志帆梨がこの青年に感じる感情がなんというのか、彼女は知らなかった。だが、気さくでよい人そうであつたな、彼女の理解できた感情はそれだけだった。

＊

IEIIIO（国際知的生命研究機関）日本支部の早瀬主任は、今日もいつものようにモニターを見ていた。早瀬のチームは、全員で10人。エリアごとに担当が分かれている。早川と井村は関東エリアだ。人間と天使との吸光度の差を利用した測定装置から、異常値を示すログが表示されてくる。それを直接目視で確認して、天使が人間社会に紛れ込んでいないかをチェックするのが早瀬たちのグループの仕事だ。ログは大抵、妙な素材の服を着ている人間であることが多い。今日も目薬が手放せない。

「もっと地方に行かないと、天使は発見できないんじゃないか？

こんな都会ばかり調べても……」

「うおっ！」

井村がぼやいたのと九州エリア担当の野々村が悲鳴を上げたのは、ほぼ同時のことだった。井村の独り言以外にはほとんど私語もなく、思い思いの格好でだらだらとモニターを見ていた研究員たちは立ち上がり、野々村のデスクに駆けつけた。この研究所では、まだ一体も天使を発見していなかったのだ。日本にはいないとして半ば諦め

ている、そんな感じだった。

ここ日本は、ここ何十年も戦争がない。戦地に現われる車輪型紋章を持つ使徒は、今では中東でよく捕獲されている。どんなタイプの天使が見つかったのか、誰もが気になった。それより、日本で初めて発見された天使がどんなタイプでどんな姿をしているのか、それを確かめたい一心で彼らは飛んできた。

「な……なんだこれは？」

そこに映っていたのは、一人の日本人の女の子だった。姉のような女性に手を引かれて、博多市内を嬉しそうに歩いている。だが吸光測定器という目を持つ彼等には見えていた。この子は、人間ではないと。

「主任、これは何ですか？」

「どけっ！」

早瀬は後輩の野々村を突き飛ばすと、かじり付くようにモニターに飛びついた。吸光度は明らかに隣の人間と異なっている。そして吸光度スペクトルは一樣で、少女の背部はのっぺりとしている。早瀬は驚嘆した。

「間違いない……天使だ。しかも、翼がまだ生えてない、子供だ」

「隣は人間ですね。かあわいいなあ……この子が天使なら萌えられる！」

早瀬はモニターをスクロールして解像度を上げる。

「この子は紋章を身につけてないぞ、珍しいタイプだ。服装も、普通の日本人の女の子が着るような服だし、間違いない。この子は人間社会に溶け込んでいる」

「むむ……これは貴重なサンプルだぞ！ 遂に我が研究所から天使が見つかったか！ 次のコードは何だ？ ラジエル、ラジエルだ！」

「主任、確保の指令を出しますよね」

「いや、だめだ！」

早瀬は両手を大きくクロスして振りかざしながら、モニターだけは目を離さなかった。捕獲の指令を出そうとしていた今中は、前につんのめってこけそうになる。

「確保はだめだ、捕獲班に追跡させろ！ 捕獲班がうるさい事を言うようなら買収してもいい。どうせ奴らは元傭兵だからな。どれだけ研究費を使ってもいい、追跡装置をつけてもいい！ 天使がどこに住んでいるのかを突き止めるんだ！ これから我がグループは世界に先駆けて、天使を捕獲せず行動学的なスタディを行う、捕獲はいつでもできるだろう？ 彼女の行動、食習慣、そして主の存在、それらが全て解ってから確保するんだ。そうすれば彼女を殺す事なく飼育ができるだろう！」

天使がどこに住んでいて、どんな暮らしをしているのか。

それは研究者の本能が疼く内容だった。天使を見つけたら即捕獲、それが研究所の決まりであって、これに違反する事は服務既定に違反しているということになる。だが業績を突きつけて見返してやる、捕獲してもどうせ1ヶ月ともたずに殺してしまうことになるのだ。どうやら家族もいるらしい、愛くるしい少女を捕らえて殺す事は避けたかった。

彼等は研究員であるとともに、人の子供の親である。早瀬の提案に反対する者はなかった。早瀬は研究員達の顔を見回すと、すっと手を差し出した。白衣を着た彼等はそれぞれ手を差し出し、野球部のように円陣を組んだ。

「やるぞ。我々は世界で初めて、天使の生活と文化、そして”主”の存在を調査するんだ」

研究員たちは思い思いに声をあげた。

それは先ほどのように死にかけた鮎のような顔ではなく、彼等の頬は高潮し瞳を輝かせ、興奮していた。

＊

石沢 朱音は従姉妹の姉に例の野外コンサートに連れて行ってもらって満足だった。限定Tシャツも買ったし、ポスターも買った。それに前の方の席で、好きなバンドがぶちまけた水が頭にかかった。天気もよかったし、大満足だ。野外コンサートから帰った後は温泉に入り、そして約束していた有名なラーメン屋に連れて行ってもらって替え玉までした。恒やクラスの皆、村の遊び仲間にも、お土産の限定キーホルダーも買った。勿論バレエの先生にもだ。

彼女が従兄弟の姉とともに博多市内の横断歩道を横断していると、向こう側から来たスーツを着た中年男とぶつかった。

「った!」

「ああ、ごめんなさい」

振り返ったが、あっという間に雑踏の中に消えてゆく。

男は軽く謝罪をしてそのまま通り過ぎていった。帽子を深く被っていて顔は見えなかったが。朱音は従姉妹の姉に大丈夫、と言われて大丈夫、と笑顔を向けた。彼女の小さなバッグの裏には、先ほどぶつかった男によって小型発信機が取り付けられた。朱音はたった今より、コードネーム ラジエル（神秘の天使）と名づけられ、EIIIOの監視下に置かれた事など、知るよしもなかった。

＊

その頃、恒は荻号の部屋で根を詰めて猛特訓中だ。

荻号のベッドは寝心地がよく、こんなふかふかのベッドでどうして荻号が寝ないのかさっぱりわからない。二岐の作る手料理もおいしかった。暇でもないのに相変わらず織図は傍にいて、暇そうにネットをしていた。

荻号がこれをやってみると本物の神具で見本を見せ、その通りにおもちゃを使って恒が組み替える。数時間も練習をすれば、もう思いのままにルービックキューブを組み替えられるようになってきた。荻号は大体恒が操作できるようになってきたのをみとめると、今度はおもちゃのルービックキューブを貸せといってきた。

「恒、ここまでは人間でもできる。ルービックキューブの世界記録は1分を切ってるしな。だが、ここから先は神にしかできない、よく見ていな」

荻号は全面の色が揃った恒のキューブを手にとった。彼は宙にそれを放って、両手をかざしてその間に浮かせた。瞬きもせずに見張っている。荻号はくるっと両手を半回転捻る。キューブには触れていない。しかしどうだろう、まるでキューブの目は荻号に組みかえられているように崩れ始め、ばらばらと一つずつのブロックに分解された。

恒はあっと叫びたいのを我慢してさらに見ていた。荻号は恒をちらりと見やると、くると指先を回転させた。キューブの色が、変わってゆく……全面が赤になってしまった。

色を塗ったわけではないのに、おもちゃのルービックキューブの色が異なる色に変わってしまった。

「これが存在確率の変化、この世に存在するものを存在しないものとして扱う、逆に、存在しないものを存在するものとして扱う。今はルービックキューブの面が赤であるという確率を発生させてい

る。1／6の確率を、6／6にしているんだ。これは特別なコマンドでな、形而立方体という意味がわかっただろう」

恒がぼかんとしているのを見て、荻号は理解できているかと不安な顔をした。

「ところでお前、形而上学はADAMで勉強してるんだろうな？」

存在は存在する、しかし存在を証明できるものはない。わかるか？

これができれば特殊コマンドの入力ができる……お前の親父と同格ぐらいにはなれるだろうぜ」

「すごい……俺にできますか？」

「お前が奴をどう思っているかは想像がつくが、血は争えないもんだぜ？」

荻号はぽいっとそれを恒に投げ返す。恒はくるくると全面を廻してみた。だがそこにあったのは、恒が荻号に渡した時と同じ状態、全面の色がちがうただのおもちゃだ。

「存在を疑え。それは果たして、”ある”のか、と」

荻号はここに哲学的概念を、事実として証明していた。

＊

カオティック・フロア
解階の中核、母星アビス（ABYSS）。

……生物学的な強さのみが追求されてきたこの世界において、長きに渡り大カーストの頂点にある女皇アルシエルの住まう帝都の一面に、伯爵家メファイストフェレスの住まいはあった。

メファイストフェレスは恒に呼び出されて急いで生物階に入階し、家への連絡は事後報告だったので、父親にこっぴどく叱られるだろ

うなと覚悟している。アルシエルの庇護を受けた大豪邸は瀟洒なつくりの洋館だ。

よく手入れされ花が咲き乱れる美しい花壇の脇を通って玄関までの長い小路を魔女は歩く。我が家に入るなり、メファイストフェレスが生まれた時から使っている老執事が恭しく出迎える。父に挨拶をしてからアルシエルのもとに馳せ参じようと思ったのだが、どうやら父親は先に女皇のもとへと行ってしまったのだそうだ。メファイストフェレスはひとりで心細いながらに、屋敷に戻って身支度を整えると、ただちに解階の皇の皇居を訪ねた。

メファイストフェレスは失礼のないよう盛装をし、生物階でコレクションをした心ばかりの貢物を持って厳重な警備によって護られた皇居の門をくぐる。

謁見手続きをし、贅沢な調度品や高価な宝玉が惜し気もなく使われている広い廻廊へと入った。地中の財宝は悪魔のものの伝承があるほど、解階には石ころのごと歩けば足につまづくほどの財宝が溢れている。

アルシエルの宮闕は築五万年を越えて当然老朽化した部分もあるもの、解階の建築技術の粋を集めて作らせた城は今も頑として揺るぎなく、手入れも行き届いており並みの建造物のように崩落の心配はないそうだ。皇居兼総務府に勤務している家臣はざっと一万名を越え、解階の中核としての機能を兼ね備えていた。

家臣、とはいっても全てはアルシエルに対しての雇用契約という形態がとられているので正確には家臣ではないが、解階での有識者や実力者が多かったようである。父と供に、久しぶりの参内だ。

案内係に通された控え室で、うろうろと室内を歩き回っている父親と合流した。父はタキシードを着て正装して、いつも家の中で

も被っているトレードマークの赤い羽根帽子を脱いでいた。緊張した面持ちで、ガチガチになっている。

「パパ！」

「おお、Mary、心配したぞ」

彼女の父親、メファイストフェレスⅡセルマーはもう緊張してしまっ、生物階に行ってしまった彼女の勝手な行動を咎めるのも忘れてい。解階の皇に親子揃って呼ばれた理由は、彼にもとんと見当がつかないのだという。悪い用件でなければよい、というふたりの意見は一致した。

父親には叱られるような事をしてしまったメファイストフェレスⅡだが、とりあえず今回は社会的には違法な行為ではない。生物階への解階の門の定員は空いていたから入階したのだし、滞在も合法的だった。何故呼ばれるようなことがあるのだろう、気が休まらないので早くお召しをいただきたい、と思ったが、待ち時間が長かった。

2時間ほど控え室で待たされた後、やっこのことで謁見が許されたが、最強者アルシエルと謁見するため玉座の間にたどり着くまでには、更に時間がかかった。

メファイストフェレス親子は頭を冷たい床にこすり付けるように身を投げ出して平伏し、顔を上げる事を許可されて遙か遠くを見やると、彼女、アルシエルⅡジャンセン（Alsiel Janse n）は気味の悪いゴシックな彫刻がびっしりと彫り込まれた、吹き抜けの天井にも届かんばかりの巨大な玉座に腰掛けてい。

黒のレースのあしらわれたロングドレスで腰は浅めに玉座に座し、エナメル赤いピンヒールを履いた細い足を置き台の上に無造作に投げ出している。彼女の尊顔は、胸元まで下ろされた黒く薄い御簾

によって隠されており、父も娘も一度も拝顔したことはない。御簾の下から見える、艶やかな長い漆黒の髪の毛を細い指先で弄んでいた。彼女は人払いをしていた。

「只今、陛下の御前に参内いたしました」

セルマーが彼女に挨拶をした。穏やかで、なおかつ厳かな声が聞こえてくる。

「その方たちも大儀であった」

「滅相もございません」

父親は声が震えている。メファイストフェレスに至っては、恐縮してしまって声も出せない。

メファイストフェレスにとってアルシエルは雲の上の存在、憧れと畏敬の対象だった。アルシエルは長きにわたり最強であり続けたばかりでなく、美貌を兼ね備え、その賢たるや信仰にも価する。

彼女はほんの戯れに全て違う解階の貴族たちとの間に98子もの皇女、皇太子をもうけ、最強の血族を成していた。力、富、地位、そして女性としても、彼女は全てを得ている。その彼女の直々のお召しだというのだから、親子ともども縮み上がってしまう。いつもはずらりと控えている侍従たちがいいことを考えても、深刻かつ重要な話をしたいのだということは二人とも察知していた。

「余が汝らを召喚したのは、他でもない。さる重大な任務についてもらいたいのだ」

「陛下の勅令とあらば、何なりと慶んで」

「さて、メファイストの娘よ。汝の肩にはさる神に従属した証たる御璽ぞあらん」

軍神下使徒を示す御璽を見咎められないよう、露出の少ない服を

選んできたのだが、どうやらそんなみみっちい努力は無駄だったようだ。この馬鹿娘はまたしても、怒りでわなわなと震える父親の隣で、メファイストフェレスは顔を青く変えて平伏した。解階の住民がアルシエル以外に忠誠を誓ってしまうというのは言語道断だ。

これを理由にアルシエルに殺されても文句は言えない。

「汝は人間のみならず、神にも並々ならぬ興味のあることと見ゆる」
「寡臣の不始末につきましては、申し訳の言葉もございません」

アルシエルは暫く沈黙を守っていたが、ふっ、と御簾の奥で息を漏らす音が聞こえた。アルシエルに弱みを握られてしまった、メファイストフェレスはこれからどんな処罰が下るのだろうかとなやかな身体を硬直させた。

「その神を余の前に連れてくるのだ、それが出来れば汝の信頼は回復されるであろう。汝の忠誠を余に示すまたとない機会を与えてやる」

メファイストフェレスは固唾をのんでアルシエルを仰いだ。彼女の真っ黒な瞳には、絶望と、そして懇願の色が見えた。

いやだ、——できない。

「かの神を、如何になさるおつもりですか」

「それは汝の関知すべき事に非ず。余の指令を完遂するまで汝の父には、此処で手厚くもてなしをさせよう」

ユージーンを連れてくればユージーンを殺す。できなければ見せしめに父を殺すのだということぐらい、賢明なメファイストフェレスには理解できる。しかもこの指令は解階の女皇の玉音にて発せられた勅令、固辞することすらできない。

父を裏切るか、ユージーンを裏切るか……よくよく考えずとも、

答えは出ていた。しかしアルシエルに遵う事しかできない彼女自身が、たまらなく情けなく無力だった。

メファイストフェレスは追い立てられるように皇居から出され、父親は皇居に監禁された。アルシエルは何故、ユージーンを殺そうとするのだろう。アルシエルが神に興味を持った事など、初めてにも均しい。神々は生殖行為そのものがない、解階の住民より劣った存在だと思っている。

神を潰したいのなら7位のユージーンなどにちよっかいを出すより、それこそ極陽や荻号を潰した方がよほど早いし効率的だと思うのだ。神階を実質動かしている神というなら、むしろ荻号かもしれない。それなのに何故彼等には目もくれず、ユージーンを殺そうとするのか。

アルシエルはユージーンを狙い、それをいうなら神々は恒にそれこそ異常なまでの関心があるらしい。恒と、ユージーン……。このふたりの関係、一見何の関係もないように見える神々。彼等は何者なのだろう。彼女はユージーンの第0位使徒として仕えながら、何一つ彼の事など理解できていなかったのかもしれないと思った。

*

恒は荻号の後について、嚴重に封鎖された明かりのない研究室へと入っていった。

暗闇に慣れた荻号とは違い、恒は暗闇の中ではまったく何も見えはしなかったから、彼の灯した真空斑の御璽のあるライターの火だけを頼りに、奥へ奥へと入って行く。途中、腕に様々な器具類が触れ、饅えた試薬の臭いと消毒薬のにおいが鼻について、じめじめと薄暗く床の上から水音がしていた。

おいおい、もっと爽やかな実験室にしてくれよ、研究もこんなじゃ煮詰まってしまうだろうに、と恒はリフォームを提案したかった。荻号はどれだけの時間を何の研究のために、この洞窟のような暗黒の研究室の中で過ごしたのだろう。鬱屈した中世の怪しい錬金術師のような研究室で、どんな実験をしていたのかは暗くて窺い知る事すらできなかったが、ひたすらに不気味だった。

恒はあまりに中が静か過ぎるからか、得体の知れない生き物が闇の中に潜んでいるかのように心細くなって、先を歩く荻号の腰のあたりに捲かれている長い羽衣を両手でしっかりと掴み、はぐれないように気をつけた。前をよく見ておらず暗かったのと、あとは荻号が急に止まったので、ドン、と彼の背中にぶつかった。激しくぶつかってしまったから、フィジカルギャップで木っ端微塵だ……と思いきや。

荻号は恒と共にいるときにはフィジカル・ギャップを解除して、恒の頭は彼の丁度肩甲骨のあたりにめりこんだ。

ふたりきりになって大丈夫なのだろうか、織図にもついてきてもらえばよかったと考えたが遅かった。ここは基空間に荻号が創り出し、荻号の部屋の書斎と繋げた亜空間だ。絶対に漏れてはならない機密がぎっしりとこの研究室には詰まっているのだろう。荻号が決めた手順を守ってドアを開かない場合、つまり侵入でもしよう者があればこの亜空間は自動的に消滅するように設計されている。ちなみに、彼と最も親しい織図 継嗣もこの中には入れてもらったことがないそうだ。

恒は地上に帰る前に、そんな秘密の場所に連れてきてもらったというわけだった。ユージーンはこの陰惨とした研究室の奥にいるのだという。いくら半死半生とはいえ、こんな真っ暗な場所に実験動

物のように監禁されているのかと思うと恒は胸がいたむ。荻号は研究室の最奥の扉を開き、スイッチを入れて明かりをともした。

暗闇に慣れ始めた瞳孔に差し込んだまばゆい光が、恒の目を射るようだ。カモフラージュをするように前室は古びた機器や怪しい装置ばかりが置いてあったが、奥の間は恐らく最先端の装置がひしめいている。さきほどの埃っぽいじめじめした環境とは違って、中はクリーンルームとなっていてらしく白く清潔で、50畳はあって広く感じられた。荻号の指が示した先には、ひと一人入れられるほどの巨大な円柱の水槽が聳え立っている。

赤い液体の培養液の中にいるのは、……多分ユージンだろうが、自信がない。頭がないから解らないのだ。恒はそのグロテスクな姿を見てがっくりきて、研究室の床にへたりこんだ。荻号は毎日治療にあたっているらしく、水槽の周りを廻って何か異変がないかをチェックしていた。

「やっぱり、あの時のままですか」

「いや、少しずつ生えてきてるぞ。ほら、一昨日は頸なんてなかっただろ、今は頸と、顎も少し生えてる……この調子だとそうだな、1ヶ月というところか」

「とても信じられません……この状態で、生きているなんて。ユージンさんは、特別なんですね」

「そういうことだ」

恒はできるだけ彼の頭部を見ないようにしながら、漠然とユージンの入れられている水槽を見つめていた。死なない、特別な神……恒はそれがとても彼にとって幸福だとは思えなかった。あれほど止めようとした彼の自殺が失敗して嬉しいか、という今今は複雑な心境だ。既に神体からは致死毒は抜けきって、徐々に回復へと向か

っているのだという。

蘇った彼は、恒の事を覚えているのだろうか。いや、恒のことばかりではない。脳が一度すっかりなくなってしまった状態から彼が誰で、どう生きてきたのかという記憶まで取り戻す事ができるものだろうか。ゾンビのように生き返っても何の意味もない、彼の心は失われてしまっていないか……。

特別な徴は他にもあった、気のせいかと思って目を擦ったが、どうやら気のせいではなかったようだ。彼の背中には、びっしりと奇妙な幾何学的な金色の紋様が描かれており、しかもそれは生き物のように蠢いていた。胎動している、そんな表現がぴったりだ。背中を這う寄生虫のようにおぞましく蠢く紋様……恒は荻号の袖をつかんだ。

「……これ、何ですか？　すごく気味が悪いんですけど……」

「それは存在確率の鍵、ステイグマ（聖痕）だよ」

「ステイグマ？　何の？　もしかしてユージーンさんは、それに気付いて……死にたくなっちゃったんですか？　これがあるから特別なんですか？」

「……恒、よく見ておけよ……。お前は自身と、そしてユージーンの運命を変えることができる」

「……？」

荻号が何を言っているのかはわからなかったが、恒はもう、それ以上聞く必要はないと思った。教師として、ひとりの神として尊敬した彼と、このグロテスクな怪物が同一人物だとはとても思えない。恒は目の前の現象を受け止めるだけで精一杯だ。

” あなたは……誰なんですか、ユージーンさん。俺はどうすればい

いのでしょう”

その答えは、彼ですらも知らないのかもしれない。

＊

皐月は、これ以上はできないというほどの節約生活をいられていた。夏場だし、どこかの芸人よろしく海に行って食材を捜してくべきなのかしら、とも思ったがまだ行っていない。死神、織図、継嗣に渡鬼DVDボックス全巻を謹呈して今月の給料は吹き飛んだ。

橋田先生はどうして渡鬼をこんなに長寿番組にしまったのか、と嘆いてみても仕方ない話だ。しかも肝心のユージーンは顔だけ見せに戻ってすぐに逃げるし……。大出費の理由はまだあった。この夏、皐月は現金で新車を買っていたから、公務員の預貯金がどうこういう以前に実は殆ど貯金がからっぽだ。貯めた金は定期や投資信託にしまって塩漬でおろせないし……。

貯金に手を付けたくはなかったから、繰り越していた食費で何とか間に合わせようと思っている。ともあれ、あさってからには儉約儉約の夏休みだ。

皐月は新車でドライブがてら、少しでも食費を浮かそうと隣村にある安い野菜市場に向かっていった。よく考えたらガソリン代の方が高くついてしまったかもしれないな、と途中で気付いたが、時既に遅しだ。

隣村との境目の、離合しなければ通れないくねくねと細い一本道を対向車の大きなワゴンがやってきた。後続車があるので皐月がバックをしなければならず、おっかなびっくりバックをして車幅の広い場所まで下がると、恨めしげに対向車を見送った。白いワゴンの

中にはひしめき合うように男たちが乗っていて、最初は土木や配管業の車かと思ったが、乗っている男の顔触れはなまっ白くて妙だ。

一番窓際の席に、眠りこけた髭づら男が乗っている。皐月はその男に見覚えがあった。社会行動学者、井村^{いむら}博道^{ひろみち}、大学時代のテニスサークルの先輩だった。彼の特徴的な髭づらを見て、皐月の頭は真っ白になった。

彼は確か某研究所に就職したとは言わなかったか！ OB会で一緒に飲んだ時に聞いた話だ。社会行動学分野の研究職はあまり募集がなく、やっとこさ決まったのだと喜んでいた。まさか……恒の言っていた、天使を捜しているという研究機関とやらが、朱音を見つけたのではないだろうか。

胸の動悸はおさまらない。皐月は特価野菜を諦めると、すぐに車を切りかえして先輩のワゴン車を追った。

第1節 第26話 女皇アルシエルⅡジャンセンの無茶振り（後書き）

挿絵（筆者絵注意） アルシエルⅡジャンセン

<http://lizreel.web.fc2.com/gallery/physics/als.html>

第1節 第27話 大坂大学大学院理学研究科錯体化学・相模原研への小包

大坂大学 理学研究科 錯体化学研究室 相模原 紀夫先生御机下。

そう書かれたクール宅急便が助教の松林によって受け取られ、相模原のもとにやってきたのは、彼がまさに国際学会に出かけようとしたときであった。

飛行機の間までにはまだ少し余裕があったので、宛名書きを見る。懐かしい学友の名がそこにはあった。内容をよくあらためないまま相模原はまたデスクに座り直し、松林にっこりとほほえんだ。白髪の混じり、髭をたくわえた上品な紳士、細身のスーツが伊達な名物教授だ。この春から助教に迎えた同研究室出身の松林は渡すものを渡すと、ぺこりとお辞儀をして出て行こうとした。

「ありがとう、松林君」

「先生、論文の校正についてですが……」

「ああ、見ておくからメールを送ってくれたまえ。学会場はオンラインだそうだ」

「ありがとうございます、お帰りは来週の火曜日ですね？」

「ベルギーのお土産を、研究室にも買って帰るから楽しみにしておいてくれ」

ベージュ色のワンピースのよく似合う女性助教、松林 智絵は微笑んで出て行った。クール宅急便を開封すると、中には赤い液体パックがひとつと、手紙が、冷蔵されて入っていた。

相模原はデスクのライトをつけ、手紙も読まずにまずプラスチックグローブを手に装着すると、その赤い液体を光にすかしてみた。透き通るような透明な赤色だ。この液体は何だろう？ この色だと血じゃあ、なさそうだしな……。

相模原は時計をちらりと見やると、推測するのを諦めて大人しく手紙を読みにかかった。

上島医院 院長。上島 じょうしま はじめ 肇とは、同じ大学のラグビー部の同期だ。

二人ともよく飲み、よく練習した。三年前に一度飲んだきり、最近はお互いにメールすることもなく年賀状だけが行き交いして消息を確認しあっているかのようだった。その彼が、いきなりサンプルを送りつけてきて、何があったのだろう。上島の送り状には、詳細は書いていなかった。概要はこうだ。この液体が患者のありとあらゆる病気を次々と治している。この液体の組成が知りたい。この液体はさる人物から譲ってもらったもので、もうこれ以上は存在しないのだという。もしこの組成を全て明らかにして組成が再現できれば、万能薬を創りだした偉大なる業績は君のものだ、と。

万能薬、だと？

相模原はいぶかしんだ。堅実かつ現実的な医師である上島が怪しい事は言わないとは思うが、万能薬などあってたまるか、というのが正直な感想だ。一体どれだけ多くの化学物質が溶け込んでいるのか、そんなものを分析できるのだろうか？ 一体どれだけの種類の化合物が検出されるのだろうか、考えるだけで目まいがする。相模原はその組成を分析する前に、効果が疑わしくないのかを確認するのが先だと感じた。それよりもまず、上島に電話で入手経路の詳細を聞く必要だってあるだろう。相模原の飛行機の時間が迫ってきたので、電話は国際電話でかけるとして、宛名書きの上島の電話番号を控えると、助手の松林の部屋へとクールバッグを持っていた。松

林は丁度コーヒーを入れて一服しようとしていたところだった。

「松林君。ちょっと頼まれて欲しいんだが、この中に入っている液体を10mlずつ分注して、半分は4℃、半分は-20℃に保存しておいてくれ。そしてそのうち10mlを、横津先生にお渡しして、先生の余った癌モデルマウスに適量静注投与して欲しいと頼んでくれ、悪いね、時間がないんだ」

「新薬ですか？」

「どうやら、そうらしい。ベルギーから帰ってきたらこの薬の組成を調べなきゃならん、私が帰国してから、モデルマウスの生死判定により、それを分析するかを決めよう」

「癌モデルマウスなら、先生がお帰りになられるまでには判定できませんが」

「うーむ、そうだな。何の病気でもいいんだが、手ごろなマウスがいないかね」

「私が糖尿病モデルマウスを持っています。それに投与すれば、先生のお帰りまでには結果が出るかと」

「じゃあ、それがいい。頼むよ、松林君」

教授はあわただしく書類を持って、バタバタと出て行った。余った糖尿病モデルマウスに静脈注射で投与するだけなら、それほど手間がかかることではない。教授は”何の病気でもいい”と言っていたが、それはどういう意味なのだろう？ 裏を返せば”何の病気でも効く”か、”何の病気に効くかわからない”だ。松林は的を得ないままコーヒーを飲み干し、白衣を軽く羽織ると、滅菌された清潔なピペットを取りにいった。

＊

井村のワゴン車の後をつけた皐月は、例の研究員一行が村に一軒

しかない旅館に入っていたのを目撃した。

何やらバケツリレー方式で大量の機材を運び込んでいる。ここに腰を据えて調査を行うつもりなのだろう。その大掛かりで本格的な様子から、仮に井村を説得できたとしてもプロジェクトは止まらないのだろうなと悟った。ユージーンもメファイストフレスもいない中、皐月にできる事は何だろう、先輩後輩のよしみで井村に探りを入れてもあまり意味がない。朱音はまだ彼女が使徒であることすら知らない普通の子供だ。朱音を捕らえるつもりはないのだろうか、そう思いたかった。

すぐに朱音の家に突入して捕獲したりせず、行動学的なスタディを行うつもりなのだろう。朱音の家に盗聴機や小型ビデオカメラを仕掛けても普通の核家族の日常があるだけだ。彼女は自らが使徒だ、などとは夢にも思っていないし、家族も知らないのだから。行動学的なスタディはすぐに行き詰る。彼女がまったく普通の少女の生活をしているとわかったら、あとは捕獲されるだけだろう。

だが捕獲されるとしたらどうするのだろうか、彼女にはまだ翼が生えていないため、見た目は正常な人間にしか見えないとしたら、彼女を連れ去ってしまう事は立派な犯罪であり誘拐だ。警察だって動いてくれるだろう、しかし研究機関の背後に国家的なものがあれば、公務員である警察官など像の前の蟻にも劣る。

皐月はどうしていいのかわからないまま、新車に乗ってこっそりとその場を離れていった。明後日から、夏休みだ。朱音の行動範囲は広がり、普段ならしないようなこともするだろう……何か不吉な事が、起こらなければいいが……。

朱音が使徒だということを、この時期に彼女に告げるのは愚かだ。

彼女の赤い新車は、ふらふらと田んぼ道を走っていた。その時だ。

車の上に大きな影が差し、ゴン、と車の屋根の上に何かが落ちてきた音がして、皐月は急ブレーキを踏んだ。慌てて外に出ると、上には恒が乗っていた。恒は荻号の光獣、巨大な白フクロウの無音の背に特別に載せてもらい、生物階まで送ってもらって皐月の車が丁度眼下に見えたのでその上に落としてもらったのだ。ちなみに、生物階降下とは、実際に生物階の土を踏むまでは降下したとは見なされない。風岳村への降下禁止という戒厳令が布かれてはいるが、荻号は無音の背を借りて大きく弧を描き、風岳村を見渡していた。

彼は上空からグラウンド・ゼロ（首刈峠）を念入りにチェックして、異常がないことを確かめてから神階に戻ると言って先に恒を降ろしてくれた。

「藤堂くん！」

「皐月先生の車が見えたから。ごめんなさい、金曜日は、学校を勝手に抜けたりして」

「帰ってきてくれてよかったわ。って、あーっつ！　これ、新車なのよ、もう……屋根、へこんだ？」

「だっ、大丈夫、へこんでませんよ！」

そういえば新車だった、悪い事をしてしまったな、と思って靴型のついた車の屋根をこすって磨いた。皐月は恒のそんな様子にほっとしたようだった。

「そんなのはいいわ、藤堂君、聞いて！　あなたが心配していた通りのことが起こったの、石沢さんたちを狙う研究所の人達が、この村に大挙してやってきたのよ！！」

恒はそれを聞いて即座に皐月のマインドブレイクをかけた。皐月

の見たありのままの光景が恒の脳の中に投影される。皐月も、もう教え子からの看破をおそれたりはしない。恒の集中しやすいように口を閉ざしていたが、恒はすぐに目をつかっと見開いた。

「大変だ、皐月先生！」

「どうしたらいいのか、私にはわからなくて」

「……俺がこれを、マスターするしかありません」

恒はポケットの中から、FC2—メタフィジカル・キューブ（形而立方体）を取り出して皐月に示す。皐月にはただのルービックキューブにしか見えない。皐月が触ろうとしたので、慌ててさっと取り上げた。数学の得意な皐月も、パズルは得意だ。なかでもルービックキューブにはとりわけ自信がある。

「触れちゃダメです、火傷します。これは俺の神具で、荻号さんからいただいたものです。これにはマインドコントロールをかけられる機能があります。それをマスターして、研究者たちに施しましょう。ユージンさんはこの村の全村民にマインドコントロールをかけたそうで、そのおかげで今までこの村から外に神の存在が明らかにならなかったのだそうです、俺もやってみせます。朱音を、守らなきゃ……」

「何？ 神具って」

「神の持つ特別な道具だそうです、様々な機能を持っています。織図さんも持っていたでしょう、あの大きな鎌みたいなもの」

「藤堂君が、神様として力を振るうための道具ってこと？」

「簡単にいうと、そうです」

皐月は神となった恒の将来が楽しみだった。恒の父親は2000年近くを生きた、名実共に神々の長だということは既に知っている。創造神のひとり息子は父親に複雑な思いを抱きながらも神々の社会に順応し、凄まじい成長を見せている。

「ところであなたは何の神様なの？」

「それはわかりません、でも……神として、人として生まれた以上、俺はこの村と大切な皆を守ります！ 習得するまでには1週間ほどはかかりそうですが、間に合うか……」

恒は皐月に固く誓った。1週間以内に、マインドコントロール・ファイルド MCFを形成できるようにしてみせる、そうすれば朱音のことを研究員たちが諦めてくれるように暗示をかけられる、と言って。

「大丈夫よ、藤堂君。彼等は、しばらくは動けないわ。行動学的なスタディは数日で結論を出せはしないもの。少なくとも1週間は動かないでしょう。その間に、……お願いね」

皐月は恒を車に乗せて、恒の家に送っていった。帰りがけ、恒は皐月から、調査中はくれぐれも朱音には近づかないようにと念押しされた。朱音と接触しようとする者には容赦ない監視の目が入るだろう、恒がまともな人間ではなく、しかも朱音とは異なるタイプの生き物だと、そんなことからばれてしまいかねない。朱音ひとりが監視されるのなら、普通の少女として生活している彼女に何も奇妙な点はないのだ。だが恒も付けねられることとなれば、神の存在が人間社会に明らかになってしまえば……恒も朱音も、命はない。

人類はまだ”神”の存在を知ってはならない。

皐月もはじめにユージーンという存在を見たとき、到底受け入れられはしなかった。神々の人間社会への干渉が太古から行われてきて、それにより歴史が歪められてきたと知ったとき、人類は何を思うだろう。核兵器やあらゆる手段を講じての神の根絶を狙うだろう。その時、神々と人々の間の最終戦争、ハルマゲドンが実際に起こってしまうのかもしれない。神々と人々、ともに全面戦争が

起これば人類は滅亡する。遅れてやってきたノストラダムスの予言が、成就してしまうかもしれないのだ。この真実を、知られてはならない。神が実在する、それは人々にとって、使徒が実在することよりはるかに危険な真実だからだ――。

しかし、皐月にはひとつの不安があった。

恒がマインドコントロールをマスターする前に、朱音の方から恒に会いたいといったら、どうしよう、と――。

朱音は恒に片思いをしていた、というのは放課後の雑談で朱音自身から聞いたことだ。でも、なかなか告白ができないし、告白をしてしまったら二人の関係が微妙になってしまうのではないかと相談された事があった。彼女は毎年、バレンタインデーにチョコを用意しておきながら渡せなかったタイプだ。この夏休み、少しでも大人になった朱音が恒を二人きりで誘ってきたらどうしよう。夏休みは告白のできそうなイベントが満載だ。

まさか、ね。と思いながら、皐月はアクセルをふかした。

＊

陽階 第4位 音楽神 ケイルディシャー||ムジカは練習室で、今日もなんとなく気分が晴れなかった。

アコースティックギター用の曲を作曲しているのだが、コード進行がいつの間にかマイナーになってしまっている。いつも安定していなければならぬ音楽神の精神性が乱れてしまうという事は、死活問題だ。彼の第一使徒、索さく 数喜かずきに叱られないよう、気付かれなようにしながらムジカはため息をついた。彼の悩みというのは、明日より始まる極陽と比企、第一位と第二位の、神階を二分する大

決戦についてのことだ。誤まって20年間も極陽の第一使徒として扱われてしまったムジカは、極陽の実力をよく心得ている。

彼はAXを名乗っているだけのことはあり、武術はAAの神と遜色ない。体力もあり、アトモスフィアの量も膨大だ、スタミナ切れもないだろう、陽階最強というのとは間違いではない。XXの分野にも長けていて比類ない。狡猾で、慎重、そして危なげがない確かな実力を持つ、それが極陽という神だ。

だが、位神戦を仕掛けてきた比企は極陽より若い。300年前はその若さが仇となり、経験が足りなかったがためか文型の試合項目で判定負した。今回は、比企と極陽に以前はなかったものが勝敗を分かť事となる。

比企にとっては時間という経験。
極陽にとっては、時間というハンデだ。

比企と極陽が同じ年齢で戦えば、恐らく勝つのは十中八九は極陽だ。だが、彼等は年齢差がありすぎる。比企はこの300年で経験と実力を兼ね備え、逆にこの300年で極陽の体力は落ちた。極陽は比企に敗れるのではないか——ムジカはそんな予感がしていた。

ともあれ、明日から文字通り頂上決戦がはじまる。

＊

恒は皐月の愛車で送ってもらって家に帰って、志帆梨を捜した。

家の隅々まで呼んで回ったが、まだ帰っていないようだ。恒は少しだけ寂しく感じたが、自分が親離れしなければならぬように

親だって子離れしなくてはいけないのだから、と思い直した。恒は将来的には神になるつもりだが、母親を見捨てて地上を去るつもりはさらさらない。だから母親が自立をするために店を出したりあれこれ準備しているのを見ると、何故か寂しくなってしまうのだ。

" 母さんにだって、母さんの人生があるんだから "

息子にかまけっきりになってしまうのはよくないことで、もっと自由になるべきだとは思っていた。それでも、いざいなくなってしまうと、つい捜してしまうのだった。冷蔵庫の中の麦茶を取ろうと、取っ手に指をかけた。触れた瞬間に僅かな痛みが走り、ふと手を見つめると、神具を扱う指先は荒れ放題で、あかぎれのように切れて血が出ている、その事に今更のように気付いた。神階にいたときには気が張っていて気付かなかった。

その時、母、志帆梨の声が玄関口から聞こえてきた。

「あらー、おかえりー、恒」

「母さんも、おかえり」

ちやうど帰ってきた母親は疲労困憊で玄関にどっこいしょと腰掛ける。

両手にはパンパンに膨らんだレジ袋をにぎりしめている。恒が荷物を台所に運ぼうとして中身を覗き込むと、馬が食うほど、という表現が少しも過剰ではないほど大量の魚介類ばかりが入っていた。イカにタコに、マグロの切り身、鯛などの切り身、アサリとシジミがたぷんたぷんとビニール袋の中で揺れている。

「どうしたの、こんなに魚ばっかり」

母親は恒にそう言われてはじめてビニール袋の中を覗いてみて、買い過ぎたということに気付いたらしかった。恒は母親が恒の話を

あまり聞いておらずのぼせているのに気付いて、マインドブレイクをかけた。熱射病にでもかかっているのだろうか、と思ったのだ。最近では学校でも家でも相手から話を聞き出すのが難しい時には、ついつい看破をかけてしまう。彼は母親の思いをほぼ瞬間的に看破してしまつて、啞然とした。

" 母さんに、好きな人ができてる "

恒はまだ10歳で幼いから、というばかりでなく、完全な人間ではないために人間的な恋愛感情が理解できない。

まさか母親が魚屋の若い店長に熱をあけているとは……嫉妬というより、ひとりの女としての母親の姿を目の当たりにして困惑した。そうか、母さんはちゃんとした人間の女性なんだ。父さんなんて顔も見ることがないのだし、まともに恋愛なんてしたことなかったんだ。そして彼女の病が治って好きな人ができるということは彼女の人生において当然の権利なんだ、さらに魚屋の主人と両想いとなり、結婚などということになったとしてもそれをどうこう思つてはいけないんだ……と恒は自分に言い聞かせながら、しかし途方もない不安を感じた。

母親をこぶ付きのシングルマザーという立場でいつまでもいさせてはいけない、ということも解っていた。それでも恒にとつての母親は志帆梨しかいない。志帆梨の心をマインドブレイクで更に鮮明に解析できるようになっていて、彼女の脳裏に浮かぶ爽やかで優しい青年の姿も垣間見る事ができた。この人が自分の新しいお義父さんとなるかもしれないけれども、母親の選んだ人だもの、受け入れなければならぬと決意した。母親は恒の呆然とした顔を見て、どうしたのよ、と頬をぷにゅとつねり、上機嫌で大量の魚を運んでいった。

鼻歌まじりの母親と共に台所に立ち、夕飯は手巻き寿司にしようと息子は提案した。

今日は夕方から織図も来るが、この魚の量を考えるとどうも彼と藤堂親子だけでは平らげられない。皐月先生も呼んであげなさい、と言われたので恒は電話をかけた。皐月はちょうど貧乏生活中だったそうで、野菜も買いそびれたようだし喜んで来ると言う。

恒は差し支えない範囲で、神階での出来事をできるだけ母親に話して聞かせた。神具をもらったこと、荻号をはじめ神々は親切にしてくれたこと。ユージーンがありえない状況になっているとは言えなかった。母親は織図には恒の先生という印象を持ち、ユージーンはまた印象が違って、彼女自身がいつも崇拜しているようだったからだ。恒は志帆梨が、事あるごとにユージーンに対して小さく手を合わせ、お祈りを欠かさなかったのを知っている。

一方、志帆梨は恒の教わっていることについてあれこれ突っ込まなかったし、危険だからもうやめて欲しいとも言わなかった。志帆梨はもう、恒を彼女だけの息子とは思っていなかったようだ。恒は世のため人のために、強く正しい神となるため様々な事を学ばせてもらっているのだ、それを母親が邪魔をしてはならないと思っているらしかった。恒はポケットに入っている神具を、肘で触れてたしかめた。これを失くしてしまったら大変だ。夕方から織図がやってくるが、全神具適合性を持たない織図からこの神具の扱い方を学ぶ事はできなかった。そして織図の神具にはMCF機能は装備されていない。人の生死を掌る神の任務には生きた人間の心をどうこう操る事は必要ないからだ。したがって織図にMCFを頼む事はできず、やはり恒の神具を用いて研究員たちにマインドコントロールを施さなければならぬようだ。

藤堂親子は手巻き寿司の準備をあらかた終え、赤だし汁を作った

ところで織図を迎えた。

織図とは今朝神階で会ったばかりだ。神階にいた間、織図がずっとついていてくれて随分安心した。ユージーンの言っていたように、荻号は確かに謎の多い人物だ。荻号とふたりきりだとしても萎縮してしまうのを織図は分かっている、恒が怯えないよう緩衝地帯のようになっけてくれていたのに気付いている。荻号は遠慮もなくずけずけと真実ばかりを言うので、恒は怖ろしくなったり困惑したら織図の後ろに逃げ込んだ。

織図はある種、恒に逃げ場のようなものを作ってくれる大きな傘のようだった、荻号が恒に怪しい事をさせないよう、忙しい中、志帆梨の代わりに（盲目の）目を光らせていてくれた。織図は今日も死者を導くための重要な仕事を終え、疲れたのか這うようにしてテレビを付けた。家に来たら挨拶をして、テレビをつけ、食事の前に志帆梨からキンキンに冷えたビールをもらって、カーッと一杯やる。これが織図の日課となっていた。織図のせいで藤堂家のエンゲル係数が高くなってしまったのを悪びれたのか、こないだは織図は食費、と言って100万円もの小切手を志帆梨に渡してくれた。そんなことをしてもらわなくても、極陽の振り込んでくれた金で生活に不自由はしなかったのだが……。

皐月の到着までしばらく時間があり、皐月が来るまでの間に荻号にもらったノートパソコンをセットアップしてやると織図が言ったので、恒はパソコンケースに入ったパソコンを持ってきた。藤堂家にこんなハイテク電気機器がやってきたのは初めてだ。この家にはテレビゲームもなければ、パソコンも、DVDやビデオもなかった。10年もの入院生活を送っていた志帆梨は、パソコンそのものを見たのも初めてという有様だ。

「まあ、これがパソコンというものですか？」

「ただのパソコンじゃないぜ、奥さん。こいつは神の持ち物でな……これでやっとこさ、ここで渡鬼DVDが見れるってわけさ」

「渡鬼より織図さん、GLネットワークに繋げてください」

「えー、先に渡鬼見ねーの？ あ、そういえば奥さん、明日の話は恒から聞いた？ 俺、観戦グッズに酒とつまみ買ってこようかと思うんだけど」

恒は後ろめたくなって顔を背けた。

明日の夜から、極陽と比企の頂上決戦、数十年ぶりに行われる位申戦が始まり、GLネットワーク・オンラインにて中継が繋がる。しかし恒は、先ほどのマインドブレイクにより、それを志帆梨に告げる事をためらっていた。志帆梨には今、気になる男性がいて、ひよっとすると（一目ぼれに近いが）恋をしているのかもしれない。そんな中、お世辞にも志帆梨を幸せになどしてくれそうにはない、レイプ犯にも近い父親の姿など見せては、志帆梨は傷つくのではないか。志帆梨を傷つけるだけなら、いっそ父親の姿など知らないほうがいいのではないか。そして志帆梨は極陽に一度でも会ってみたいとは言わなかった……彼女は極陽を夫として認めてはいないのだから。

「明日の話って、何の事ですか？」

「そうか、恒、言わなかったんだな」

「教えてください」

志帆梨は恒を振り返ったが、恒が何も答えてくれないので、今度は織図の黒衣の裾を引っ張りながら詰問した。織図は酔いもしないのにビールが好きで、彼の鼻の下に申し訳程度にある髭にビールの泡をひつつけている。どこぞの晩酌中の親父のようだ。

「明日の夜から極陽と第二位神の試合があるんだ、極陽のチャンプ防衛戦ってところだよ。このパソコンを通じて、極陽の姿が見える。

だが、その姿を見る見ないは奥さんが決めればいい。極陽は奥さんにとって、決して”よき神”ではなかったしな……」

インターホンが鳴ったので、恒は臯月を迎えに玄関に出て行った。織図は戸惑い、涙の滲んだ志帆梨の頭をぼんぼんと軽く撫でてやって、んー、よしよし、とやってそのまま軽く抱きしめている。織図はどこか包容力があって温かい。人が死に際に会い見える死の権化であるのに、彼の懷は暖かで深く、志帆梨はこの家にやってきたのが織図でよかったと思った。多少は、荻号も人懐こい神を……と配慮したのかもしれないが。

「私、……拝見させていただきたいと思います。ありがとうございます。まず、こんなただの人間にも神様たちのお姿を見せてくださって」「あんたも、思えば大変な人生だっただろう。何か、あんたに償いができればいいんだが……せめてこれからは、思うような人生を手にしてほしい。あんたの寿命は特別に、100歳まで延長しておくよ」

志帆梨は涙を拭くと、臯月を出迎えに行った。

織図はパソコンを起動し、荻号から渡されていたセキュリティの甘く設定されたIDカードを挿入し、認識させた。インターネットの設定をいじり、最寄の局へハッキングをすると、インターネットに繋がった。織図はブックマークにG L ーネットワークのアドレスを追加し、ヘッドラインニュースを見た。

位申戦は日本時間にして明日の夜20時34分から。ワールドカップの決勝戦を見逃すより見逃してはならないものだ。

織図は陽階の頂上決戦の前夜に、どうオッズをつけるかを決めかねていた。多分、今回の勝負は極陽の勝ちだな。そんな無責任な事を考えながら……。

＊

その頃、早瀬ら研究チームは、巖^{いわお}の湯という旅館自慢の温泉に入った後、会席料理を平らげ、浴衣姿で今後の調査の方針についての会議をはじめていた。

調査にあたって、まずは石沢家に盗聴器とビデオカメラを仕掛けなければならない。

石沢家の家族構成のプリントが配布され、父はサラリーマン、母はアルバイトに華道教室、弟妹は小学生だと書いてあり、家を留守にする時間が曜日単位で書き込まれてあった。それによると、家族全員が家を留守にする時間帯は、午前中10時～午後3時まで。この間に調査団は石沢家に侵入し、彼等に決して気付かれないようありとあらゆる場所に調査のための盗聴器やカメラを仕掛けなければならないなかった。吸光光度計も数台導入し、まず行わなければならないのは父母や家族にも天使がいるかという調査だ。プリントには両親や家族の血液型が載っていた。

父B型、母O型、朱音がO型、弟と妹がB型だ。これによると、O型である母親が天使である可能性がある。早瀬らのチームは、標的を母親と石沢朱音に絞って調査することに決めた。調査の成功を願って、まるで江戸時代の一揆の前の一味神水のように一杯の杯に注がれた日本酒を回し飲みして、調査への士気を高めた後、ビールを手手に握った。こんな飲み方をしてしまったら、明日は二日酔いで研究にならないんじゃないかな、とは誰も言わなかった。誰もがただ、もう飲んで鬱屈した気分を吹き飛ばしてしまいたかった。

「皆、我々に失敗は許されない」

酒で頬の赤くなった早瀬は、温泉でのぼせてしまって更にヒートアップしていた。井村も大きく頷いた。

「我々のしようとしていることは、間違いました、では許されない立派な犯罪行為だ。泥棒の片棒を担いでいるものだと思い、ラジェルが天使だという証拠と、彼女の謎に満ちた生活を石沢に、いや石にかじりついてでも暴くんだ。彼女が何を糧とし、どうやって生きているのか。そして天使を生かすための糧、”主”とは何なのか、それを何としても暴くぞ。それでは……」

「乾杯ー！」

早瀬が乾杯の音頭をとる前に、上機嫌の井村がういーっとやりながら乾杯の音頭をとってしまった。旅館の窓をいっぱい開けて月見酒をしつつ藪蚊に刺されつつ、夜風を入れながら彼等は杯を酌み交わした宴もたけなわ、早瀬は酒もいくらか進んで研究員たちとこれからの研究について暑苦しく語っているうち、次第に彼らの子供の話になっていった。かわいいい盛りの子供を実家に残しての単身赴任である、家族を恋しく思わない日はなかった。

「で、母乳を飲まないんでしょう？　ダーメダメ、先にミルクの味を覚えさせたら」

「でも俺んとこの息子は逆でしたよ、ミルクを全然飲んでくれなくて」

「本物志向っての？　赤ん坊のくせに無添加じゃないと嫌だってか」
ハハハ、と豪快に笑って、井村はふと石沢朱音のことを思い出した。鹿児島出身の井村は持ち込んだ芋焼酎をロックにしてマドラーがわりの箸でかき混ぜながら、ぽつりとつぶやいた。

「俺、本当は、石沢　朱音が天使じゃなかったらいいなって思うんです」

「ん？　何でだ？」

「だって……可哀想じゃないですか」

井村は芋焼酎を作ったまま、手をつけようとしないう。この男は飲みすぎて、何かのスイッチが入ってしまったようだ。

「世界初、子供の天使のデータが手に入るんだぞ？」

子供、翼が生えていない天使。それがどれほど貴重な検体かというのは、井村も理解している。だが、天使を初めてモニターごしに目にした井村は、彼女が何の変哲もない少女だということに戸惑っていた。心の奥底にヘドロのように溜まったモヤモヤが、酒の力を借りて出てきた。自分達はひっそりと暮らしている天使をどうして、ありのまま放っておいてやれないのだろう。

「でも、……調査が済んだら捕獲しますよね。自分の子供がもし、天使だったら……なんて考えてしまって。いくら天使といえど、家族と引き裂かれてしまうなんて……しかも今までは、監禁されて1ヶ月以上生き延びた天使はいません。俺っ、人の親として最悪です」

井村は泣き上戸なのか、おいおいとそのまま泣きながら布団に行ってしまった。宴席に残された研究員達の間、なんともいえない空気が流れていた。目に入れても痛くない最愛の我が子が、ある日突然、人間ではなく天使だったと知らされ、捕獲されてどこかへ連れて行かれて監禁されてしまったら……。とても耐えられない。

「……確かに。人の親としては最悪だ、だがそれでも……やらないければならないことがある。殺してしまわないように、まず調べるんじゃないか。彼女は絶対に、死なせやしない」

早瀬は井村の残していった焼酎を、代わりにぐいっと飲み干してあまりのアルコールの強さに目を白黒させ、うえっと吐きそうになってもちこたえた。

研究員たちはすっかりしらけて酒がすまなくなつて、各々烏龍茶をコップに注いで、もう打ち止めにしたらしかった。

第1節 第27話 大坂大学大学院理学研究科錯体化学・相模原研への小包（後

挿絵（筆者絵注意） 相模原研究室

<http://lizard.web.fc2.com/gallery/physics/saku.htm>

第1節 第28話 救世主は二度死ぬ（前書き）

敬虔なキリスト教徒の方はタイトルの通りですので、くれぐれもご注意ください。

第1節 第28話 救世主は二度死ぬ

軍神下第一使徒、響 以御は執務室の椅子に座し、受話器を肩に挟んで通話をしながらユージーンに残した書類をめくっていた。

ユージーンはわずか1日で3年分の指令を書いていたので、3年間次期軍神が現れなくとも差支えがないようになっていた。まったく……本格的に死んでくれやがって、と以御は舌打ちする。ぴりぴりした雰囲気を感じ切れないままに話す、電話の相手は荻号だ。どうも、荻号にいいように操られているようで、以御は気に食わない。以御はユージーンが死んでしまっただけというものの、しつこく荻号に電話をかけて、復活までの時間を聞き出そうとせっついていった。

「では、あと3週間とみてよろしいでしょうか」

『ああ、もちこたえられそうか』

「3週間ならば、居留守を使えば崩御したとは見なされないでしょうが……。やはり、事実をお話して、止めておくべきでした」

ユージーンはもともと死なないのだから死んでも無駄だと、以御は伝えておくべきだと思ったのだ。

以御はユージーンが絶対不及者となるであろうことを誰よりも早期の段階で知っていた。数十年も一緒に暮らしてきたのだから、背中を見る機会ぐらいある。彼の背中に見え隠れしていたもの、それは創世者から選ばれた徴であるとされる”存在確率の鍵”だ。以御が最初にそれを目にしたとき、妙な病気を患っているのではないかと心配したもののだが、文献を調べてやっとこさ知り得たことだ。

告げてもどうしようもないことだから、とユージーンにはひと言も言わなかった。

『話して止めたとしても、奴はやったと思うぜ』

荻号の言うとおりでと思った。ユージーンはやってみなければ気がすまない性格だ。まさか、本当に死ぬとは思わなかったからなのだが……。

「それで、一つ気になるのですが……頭がない状態で、記憶はどうなるのです？」

『記憶はすっかりなくなるだろうな、脳が、一度消えたんだから』

以御は荻号のどこか突き放したような口調に憤慨して、電話口で黙り込んだ。これでは軍神として使い物にならないではないか。

軍神の頭脳の中には、どれだけの知識と経験が詰め込まれていたと思っている……一朝一夕で181年分の知識を得たわけではないのだ。荻号が死なせてやれと言っておきながら、後は知らない、では無責任にも程がある。

以御は先代軍神と比してユージーンに格別の思いがあったわけではない。だが、それなりに彼の性格は好きだったしよいパートナーだと思っていた。そうであればこそ彼のことは諦めて崩御を発表し、忠誠を貫いた方がよい。記憶のない彼はもはや以御の仕えたユージーンⅡマズローとは異なる存在、例えるならクローンのようなものだ。いくらそのクローンにユージーンとの思い出を語っても、それはもう歪なものとなっている。

「ではやはり、崩御を発表するしかありませんね」

『待て。記憶は俺がバックアップをとっている。再インストールをすれば、元通りになるだろう』

再インストールだなんて、パソコンではあるまいし……。荻号はどこか事務的で冷淡だ。それにしても荻号はどうやって記憶のバッ

クアップをとっていたのだろう。それは紛れもなくユージーンのものなのだろうか？ 彼の神格、仕草、記憶、経験、それらを余すところなく再現し、そのままの彼として蘇らせる事ができるのだろうか？

「記憶のバックアップを、ですか？」

『ああ。俺の脳領域を使って、奴の全ての記憶をマインドブレイクで全て保管している。こういう死に方をするだろうと、想定していたのでね。蘇った脳に相転星を介して再刷り込みをしてやれば、記憶はそっくりそのまま蘇るだろう』

荻号の言っている事が本当だとしたら、もうメチャクチャだ。

蘇ったユージーンは一体、誰なのだろう。

もうユージーンだとは言えない、以御はそれだけは肝に銘じなければならぬと覚悟を決めた。

＊

相模原は学会の合間に日本への国際電話をかけ、上島の家につけた。

長いコールの後、上島の妻が電話口に出る。彼女は夜食を食べていたのか、口の中の物が片付いておらずもごもご口ごもっていた。

『はひ、上島です』

「もしもし、夜分すみません。大坂大学の相模原と申しますが、上島先生にお繋ぎいただけますでしょうか」

旧帝大、大坂大学は麻酔科医である上島の妻 基子（いいてま）の出身校でもあるが、相模原と基子は面識がない。

＊

基子は、上島が大学にユージーンの血を送ると言っていたので、それに絡む事だろうと察した。

彼女は夜食を食べていたのを飲み込みながら上島医院の住居部分に移動し、書斎にいるはずの上島を呼びに行くと、夫はだらしなく俯せにデスクに寝ている。

もう、またこんなところで寝て。と、肩を叩いても起きる気配がなく、不審に思いながら上島の顔を覗いてみた。目を開けたまま寝ている！！これは……医師である基子は慌ててライトを取り出し、バイタルサインを確認する。

瞳孔の反応が左右で違う！

これは……脳出血、あるいは脳梗塞その他脳に関する症状！

基子はこの病院では脳外科の治療が出来ないと、嫌というほど知っていた。自分の病院なのだから。だとすると、隣村の総合病院に可及的速やかに搬送するしかない。倒れてから発見されるまでにどれほどの時間が建っていたのかわからない、出勤してくる救急車を待っている間は間に合わないかもしれない。

基子は夜勤の看護師とともに、自力で上島を隣村の病院に運ぶ事を決めた。それにあたって、まず総合病院に脳外科医がいるかを確認しようとする。基子はスリッパを投げちらかして走りながら電話口に戻った。

「相模原先生、たった今、主人が倒れましたの！脳疾患だと思われます。このままではステってしまいます！電話をお切りします

ね！」

＊

「奥さん、あれ！ あの赤い液体はそちらにはないんですか！？
どんな病気も癒すという」

相模原は驚いて治療の邪魔にならないよう電話を切ろうとしたが、ふと咄嗟にこんな事を口走った。ステルって何？ と彼は思ったが、まさか死ぬ（sterben…ドイツ語）という医学系の業界用語だとは知らない。

『赤い液体……神様の血の事ですか？ さっ、搜してみますっ』
今度こそガチャンと通話は切れたが、相模原は彼女の口走った言葉に呆然としてしまった。

——神の、血だと？ あの赤い液体のことか？

＊

恒の家の居間でジャンガジャンガと騒々しい着信音が鳴って、織図の携帯にメールが入ったのは、恒がちょうど、神具の練習をしようとテーブルの上を片付けていたところであった。

手巻き寿司を平らげて、皐月は志帆梨とともに食器洗いを手伝っていた。織図は仕方なく渡鬼DVDを一時停止にして、さも面倒くさそうに携帯を取った。主演俳優の演技について恒とどうこう批評していたところだ。織図はメールを見て、盲目の瞳を見開きうえつと短く呟いた。

次に大きな瞳を上目づかいにして何かを思い出しているようだ。

恒は彼の見慣れない様子に台拭きを掴んだ手を止め、彼を見守った。

「恒、今からおよそ一時間後、この村で一人の人間が死ぬ」

志帆梨は食器を取り落とし、皐月は皿がつるつと滑って慌てて取りとめた。恒も織図の前に正座した。彼の死の宣告は脅しやほったりではなく必ず当たる。

「え！　嘘！　だっ、誰が！　どうしてわかるんですか！」

「嘘じゃねえよ。バイタルレベルが尽きている、何をやっても助からん。個別コードはA J G M W K 1 5 4 8 6 3 7 1。これを変換すると、名前は上島　肇だ」

「上島先生が！　どうして！！」

「俗にいう、寿命ってやつだ。俺は死神だからよ、やろうと思えば寿命の延長も勿論できる。だが理由もなくそれはできない。いくら理不尽でも、人には運命ってのがあるだろ？　空から隕石が降ってきて当たって死ぬってなら、考えてやったかもしれんが、そういった理不尽さもないしな。俺は一時間後、事切れたこの男の記憶を迎えに行くだろう」

「待って下さい！」

「そっ、そんな……」

皐月も口を挟みかけたが、うまく後が続かない。織図に媚びへつらってもあまり意味はなく、彼は死の延期をしてはくれないだろう。

寿命の尽きてしまった人間を、個神的な感情だけで延命していたらきりが無い。死ぬべき人間は死ぬ、これが彼の仕事だ。彼は交渉には応じない……。皐月が俯きかけた時、織図はため息をつきながらこう付け加えた。

「だが……もしだ、万が一にだよ？　何らかの奇跡が起こってしま

って一命を取り留めてしまったらだ。俺は寿命がきたからといって無理に命を奪ったりはしない」

「織図さん……!!」

「さあ、行け……お前が奇跡を起こすんだ。できるさ。一時間後、俺の仕事を奪って悔しがらせてくれ」

織図はそう言って恒の両肩を強く叩き、微笑んだ。志帆梨と皐月は心配そうに見つめている。これがチャンスとなるのか、チャンスを生かせないのか、それは恒次第だ。この村にいる神は、織図以外には恒しかない。そして恒はユージーンのごとくバイタルを分け与えるだけの力はない。バイタルの尽きた人間は、どんな名医を呼んで医療行為をしても、どんな治療を施しても何をやっても助からない。それが寿命を迎えるということ。

寿命を延長する、それは神のみが行う事ができる。

恒にそれができるものか、どだい無理な話だった。それでも恒は諦めたくはない。上島には何度となくお世話になってきたのだ、母子家庭だった恒を憐れんで、無償で治療してくれたこともある。

「藤堂君。私も、行きましようか。何か力に……」

皐月がおせっかいをしたがっているが、ついてこないでほしかった。

「いえ、ひとりで行きます。瞬間移動を使いますし」

「そう……落ちついてね、あらゆる事を考えてみて」

織図は渡鬼を再生してボリュームを上げながら、こう言ってよこした。

「……危ぶむなかれ。危ぶめば道はなし、だ」

「それ、猪木ですか？」

「そうだ、恒。猪木はあれでいい事言ってるぞ。迷わず行けよ、行けばわかる」

織図がふざけて少し気を軽くしてくれたのがわかったので、恒は自信なさそうに頷くと、危なげのない瞬間移動で上島医院に正確に転移した。

馴染みのある場所ということで上島医院の診察室に出てしまったが、上島がどこにいるのかは看護師が慌しく走ってゆく方向を見ればわかった。彼女らの後について上島医院の住居部分に走ってゆくと、数人の看護師と上島の妻が、冷凍庫の中の物をねこそぎひっくり返している最中だ。恒はその人垣の中を掻き分けて基子に近づいた。基子はさすがに医師だけあって、必死に正気を保とうとしていた。それでも、額にじっとり滲む汗、乱れた髪の毛から、彼女が半ばパニック状態寸前だということを見抜く。

「基子先生、落ちついて下さい！ 上島先生はどこです」

「と、藤堂君。落ち着いているわよ！ あれを、あれを捜さなきゃ！ 神様の血をっ！ 主人が隠して、見つからないの！」

何の秘策もないまま上島のもとに駆けつけてもどうしたものか、と考えていた恒は一気に解決の糸口を発見した。

彼が上島におすそわけとして分け与えた、ユージーンの血を捜せばいい。彼の血液は神階髓一の治癒血でもあり、上島の枯渴したバイタルを裕に補うことができるだろう。自分の出番は何もなくなっってしまったようだが、上島が助かるなら四の五の言っではいられない。問題はどややってそれを捜すか、だ。

血液である以上、冷蔵庫か冷凍庫に保管してあるのかもしれない。上島の記憶をマインドブレイクして血のありかを探り出す事はもうできない、彼の脳は活動していないのだから。だとしたらどうする、自分にできることは何だ？ FC2—メタフィジカル・キューブを使っても彼の脳を元通りにする方法はわからないし、それを試している時間もない。やはりこんなとき頼りになるのはユージーンの治療血だ。

「ちょっと、少しだけ静かにしてください！ お願いします！」

恒は上へ下へと騒ぎ立てる看護師たちを制して、一度静粛にしてもらう。

こちらが呼んでも呼び寄せる事ができないものだから、彼の血から呼んでもらうしかない。

彼の血が発しているもの、それは彼のアトモスフィアだ。

消えてしまいそうに微量ではあるが、適切に保存してある限り、なくなっただけではないだろう。恒は極限まで集中力を高めると、陽炎のように立ち込める彼のアトモスフィアの気配を感じ取った。恒は目を閉じ息を止めたまま、ふらふらと歩き始める。基子もそのただならぬ様子につられて、恒の後ろに追従した。恒がたどり着いたのは今は使われていない給湯室の物置だ。懐中電灯で照らすと、忘れられたその冷蔵庫は暗闇の中、無造作に置かれていた。

「藤堂君……どうやって……？」

「ここです」

「ありがとう！ よくやったわ！」

恒は冷凍庫を開くと、血液パックに紛れて、彼の血液が奥からどっさり出てきた。基子はそのうち一つを奪い取るようにして、輸

血の準備に取りかかった。恒はこれで助かったと、薄く微笑んだ。本当は血液を体温にまで温めなければならないが、そんな時間は許されない。この治癒血は、血栓溶解剤のように治療薬として投与するほかない。

” ユージンさん、あなたはいつも、どんな時でも助けてくれる。俺もいつか、あなたのようになれたら――”

処置室に行ってみると基子の適切な処置により輸血が行われ、上島の瞳孔反応は元に戻っていた。基子は恒に、” もうなんと言ってお礼をしていいのかわからない”、と言い、恒は少しだけ照れくさく感じた。頬に赤みの差した上島の顔を見て安心すると、死神として織図が降臨する前に、約束の１時間までに２０分を残して藤堂家に戻った。胸を張っての帰還とはならなかったが、精一杯の事はやった。

「どうだ、恒、行けばわかったか？」

「俺の力では、なかったけれど……ユージンさんが、助けてくれました」

「自分にできる事をする、それで十分さ。神は全能じゃないからな。お前のお手柄だよ」

恒にとっては、自力で解決したものではなかったので後ろめたく思っているようだが、皐月と志帆梨には十分彼の成長が眩く感じられた。

＊

相模原は電話を切って２時間後、居ても立ってもいられず、自分の発表演題が終わるとすぐに国際電話で上島医院に電話をかけた。

ステるという意味を、学会場に來ていた他の研究者に教わったからだ。つまり今、上島は生死の境にあるということなのだ。先ほどは悠長にしていたが、氣になって仕方がない。

残った看護師にでも警備員にでも誰でもいいから、上島の安否と現在の状況を確認せずにはいられない。相模原の受話器を持つ手が震え、コールの時間がやけに長く感じられた。ガチャツ、受話器の向こうから待ちわびた音がして、落ち着いて誰かが電話を受ける。

「もしもし、上島です」

相模原は、幽霊にでも出くわしているかのように膝が震えた。

「じよ、上島君……かね？」

「その声は、相模原か。久しぶりだね」

「上島君は、倒れたと……命の危険が、と」

上島の声は落ち着いて、三年前に話したとおりの口ぶりだ。おかしい、自分は時差ぼけで白昼夢を見ていたのだろうか、相模原はそんなことも考えたが、まだ耄碌もうろくはしていない年だ。これは一体どういうことだ……？ 何故先ほど倒れた筈の上島が、電話口で話している？ ……ひょつとすると……。

「上島君、まさか、まさか”神の血で”？」

「”神の血”？——はて、家内が寝ぼけて、なんぞ言いましたかな？」

上島はすつとぼけたが、相模原は確信した。上島が送りつけてきた液体、それは謎の液体、”神の血”。あらゆる疾患を癒す、奇跡の液体だ。

相模原はたった今、ここで奇跡を目撃したのだ。もはや検証は不

要だ、松林は検証をする必要はない。それより、上島が送ってきたサンプルを一滴でも無駄にすることなく解析をしなければ。

研究者人生を賭け、大学の総力を挙げてでも。

神の秘跡を暴きつくす！

＊

荻号のもとをジーザスⅡクライストが訪ねてきたのは、彼がちょうど以御の電話を切った時だった。

まったく以御といいジーザスといい……陽階の奴らは勘がいいな、そんな事を考えながら煙草の火を消した。

居留守を使おうかとも思ったが、二岐がすでに応接間に通してしまっていたので、出迎えない訳にもいかない。生物階には頻繁に通っても、陰階にはとんと立ち寄らないジーザスが陰階にわざわざ白鳩の盟めいという光獣でやってきた事など初めてだ。あまりにもジーザスからのお召しがないので、盟はもう少しで飛び方を忘れてしまうところだっただろう。

陰階参謀である荻号の周囲は破格の警備体制が敷かれていて、面会をするには数日前からのアポイントを要する。

この警備の嚴重さは陽階参謀のリジーⅡノーチェスにもいえることだ。荻号は面会の約束など知らなかったが、正式な面会要請だということだから数日前から予約していたということだ。

二岐は荻号に間違いなく報告をしたと言っているが、どうやらユ

ージーンや恒にかまけつきりですっかり忘れていた。正式なアポイントで逃げ道を潰されて、荻号は吸いそびれた煙草の火を名残惜しそうに見つめつつ腰をあげ、仕方なくクライストの待つ応接室に入る。

中に入ると、ジーザスは30分ほど待たされていた。

彼はいつも居住まいを正して、何事にも厳格な性格だ。それでいくと待たされるのは我慢がならない筈だが、今日はそれを気にしてはいないという表情。

応接机の上を見ると、二岐が茶を出してもてなしをしている。荻号は陽階の重鎮を待たせていた事を悪びれもせず、だらしない座り方で席についた。

「わざわざ足労させたな」

「なに。私が訪ねたかったのだからよい。雑然とした部屋で埃っぽいが、少し片付けをしようとは思わないのかね。だから書類をよくなくすのだ」

もう30分待たせていたら、ジーザスは断りもなく部屋を片付けてしまったかもしれない。

荻号は意識して覚えたことは全てを記憶できるので、メモを一切取らない。別に整理されてもかまわないしそんなところから陰階の機密が漏れる事もないが、出来れば勘弁してもらいたいところだ。ジーザスには散らかっているように見えるかもしれないが、これはこれなりに意味がある配置であって、荻号の使いやすいうように必要なものをよい按配に広げている。

自己管理の徹底しているジーザスの部屋は整理整頓が行き届いて塵一つ落ちては居ないが、だからといってとやかく言われたくはない。陰階神は陽階神と違って見てくれは気にしないのだから、陰階神に陽階の作法を強いるのは無粋だ。

「書類をなくすのは、部屋が汚いからというわけではない。それで？ わざわざ何だ」

「ユージーンの遺体を陽階に引き渡してもらおう」

「それを俺に言うのか」

何の根拠があつて、荻号がユージーンを匿っていると断定しているのだろうか。ジーザスは確信もなしにそう言っている、という雰囲気ではなかった。彼は本気で返せと言っているのだから、誤魔化しは通用しないようだ。

「汝がユージーンを焚きつけ、死に至らしめたのだろう。ユージーンの遺体は間違いなく汝が持つておる」

「そうか。ユージーンが自己血をバンクから引き出したことで、勘づいたか。他神の血を輸血できない神にとって自己血のストックは必須のものだ、手放す理由がない……か。見事だ、その器は先代極位だけはある」

荻号は淡々と分析をしながら、煙草の火をつけた。ジーザスは荻号がユージーンの死について特に何を感じてもいないのだと、見せ付けられて声を荒らげた。

「その言い草は何だ、ユージーンは汝の手駒ではないのだぞ！」

「俺がそう仕向けた、と言うのか？ そうすることで俺に何のメリットがある、陰階神が陽階神を暗殺する事は法によって……」

「いい加減にしろ。汝はいつまで神を騙るのだ」

陰階神としてどうこう、そんな白々しい言葉はもう訊き飽きた。
ジーザスは荻号という神階最大にして最強の敵と対峙してきて、
彼と問答を繰り返す事の馬鹿らしさを、長い月日の間にうんざりする
ほど思い知らされた。

いくら滅ぼしたと思っても、彼は滅びはしなかった。名を変え、
姿を変え、悠久の歴史の闇を生きてきたこの怪物を、ジーザスは見
失っていない。ジーザスが極陽として在位していた頃には、彼には
守るべきものがあり、また神階の混乱を恐れて荻号に深入りはでき
なかったのだが、今となってはもう何も失うものもなければ、立場
とて気にする必要もない。ジーザスはたとえ今日が彼の命日になろ
うとも、ユージーンを荻号の意のままに操られた末に殺されて、黙
ってはいられなかったのだ。

救世主イエスキリストは旧き友に語りかけるような口調で、穏や
かにこう言った。

「汝は我々をどこへ導こうとしておるのか。汝はこの二千年という
もの、ついぞ覚^{さと}らせはしなかった。のう……荻号、いや、名もなき
超越者よ。いい加減神々を苦しめ、甚振っただろう。そろそろ真意
を、垣間見せてはくれないのか」

「また、えらく弱音をはいたな。極陽だった頃の勢いはどうしたね」
「いかにも私は汝をこそ神階の敵として、汝の全てを見てきた。二
千年間の間、片時も目を離さず監視し続けてきた。私のみならず、
古今東西、あらゆる神々が汝という謎に挑み続けた。それでも何び
とたりとも、汝の真意には近づく事ができなかった。私はいつしか、
こう考えるようになっていた……INVISIBLEに抗し、彼奴
の支配より三階を解放せんとして最前線にいる筈の汝がだ」

彼は一度そこで言葉を区切り、きっぱりと言い放つ。

「――あるいは汝こそが、INVISIBLEなのではないかと」

荻号は無言で空色の瞳を細め、その言葉に耳を傾けた。彼の瞳に映っているものはなんだろう……積年の疲労と、失望の色だけだ。煙草の煙が重く彼の周囲を取り巻き、荻号の姿をおぼろげにさせている。

「……あんたが延々と問いかけてきた答えは、あんたの中ではたった一つだ。だが”水槽の脳”を持つあらゆる生命は、無数の宇宙の中に生きている。あんたが俺を創世者だと思うのなら、あんたの世界ではそうなのだろう」

水槽の中の脳というモデルは、1982年哲学者ヒラリー・パトナムによって定式化された仮定だ。

ある科学者が人から脳を取り出し、脳が死なないよう培養液で満たした水槽に入れる。脳の神経細胞を電極を介して操作できる非常に高性能なコンピューターにつなぐ。意識は脳の活動によって生じるから水槽の脳はコンピューターの操作で通常の人と同じような意識が生じよう。現実には存在すると思っっている世界はこのような水槽の中の脳が見ている、仮想現実なのではないかと。

またか、またこの繰り返しなのか。

……とジーザスは切なくなってきた。荻号はこうやって本題をはぐらかす。この間は荘子の胡蝶の夢の喩えを持ち出してきて、延々と2時間も説明されたものだ。ジーザスが欲しいのはそういった哲学的な考察ではない。

「荻号。私が欲するは、かような形而上学的な答えではない。厳然たる事実のみだ」

ああ、ああ、わかっているとも。ジーザスがもうその手のはぐらかしにはうんざりきいているという事を、荻号も分かっている訳ではなかった。彼をからかっているのではないし、信用していないのでもない。だが、それだけは教えてはならなかった、何より彼の為にだ。

「ジーザス、俺は教え渋っている訳ではなく、あんたを無駄死にさせたくないだけだ。俺が誰であって世界がどのように創造され、そしてINVISIBLEがどういう存在なのか、俺は全てを知っている。世界の姿を明かす事に何の躊躇も抵抗もない。だがINVISIBLEが、それを望まない。創世の秘蹟を自分だけのものにしておくためにだ。俺が全てを語れば、あんたがそのドアを出てゆくまでにあんたの命は断たれる。それを無駄死にだとは言わないかね？ 解ったら、この謎には近付くな」

「それは、汝がINVISIBLEだからであろう？ 三大禁忌に触れんとするあらゆる者を、汝が消してきたのだ。夥しい屍の上に汝は謎のまま、過去も現在も未来も、永劫に不滅の存在として生きながらえておる」

「違う、俺が殺しているのではない。これだけ教えてやる……あんたは充分苦しんだからな。俺の中に”この世界の創世者”、INVISIBLEは収束してはいない。これは真実だ」

ジーザスは二千年という長き時間の果てに、閉ざされ、拒まれ続けた彼の口から聞くことのできた誠意ある答えに、感慨深そうに聴き入っていた。彼は創世者ではなかった、その事が訊けただけでも満足すべきだった。だが一つの真実を知れば、より深い謎が姿を現

す。

ジーザスは禁断の領域の、一線を越えようとしていた。

「ではINVISIBLEは、何故汝を生かし続けるのだ？ 汝はいつから生きている？ 何万年前からだ？ この世に初めて絶対不及者が現われた時、それ以前から汝は存在してきたのだろうか」

「……何万年ってか、何百億年前からだな。何故INVISIBLEが俺を殺さないか？ 殺せなかったからだろう。あらゆる手段を尽くして自殺を試みてきたがこの有様さ。今は陰階神、荻号要として生きているがね……もっとも俺は、既に死んでいるのかもしれない。さあ、もうこのぐらいにしておけ。これ以上の話は、命取りになるぞ。俺はあんたが命を賭けて追求するような大した存在じゃない。あんたという救世主を失うのは惜しい。それから俺は、ユージーンを苦しめるつもりはない、話せるのはそこまでだ」

「……そうか……ありがとう。ようやく私は、汝を信じていることができそうだ。もう思い残す事はない。ユージーンを頼むぞ」

「まるで、今から死ぬような口ぶりだな」

荻号はジーザスの言葉が気になった。お喋りが過ぎたが、まだ決定的な真実を明かしてはいない。

ぎりぎりの線で危ういが、命を絶たれるようなことはないはず。何故このタイミングで遺言のように、不吉な言葉を？ 彼は高齢だが、荻号の視る限りバイタルはまだしばらくは尽きないというのに……。

「私はいささか、汝への質問が過ぎた。無が私を、迎えに来る――。のう、父よ……」

その言葉を受けて、ぎくり……と、荻号の表情がゆがんだ。

「汝は無より神々を創り出し、世界を護っておられるのだろうか？
神々は全て汝の創造物に過ぎんだ、そうだろう？」

「いかん！ 言うな！！」

荻号は目を見開いて席を立ち、直後。

まるで生命線を切られて人形のように崩れ落ちたジーザスを抱きとめた。

曇りない茶色の瞳を見開いたまま彼は既に、事切れていた。彼のバイタルは、何者かによって瞬時に断たれたのだ。ジーザスⅡクライストは賢明であつたが為に、気付いてはならないことに気付いてしまった。

荻号は不用意に彼と問答を交わしてしまったことを悔いた。荻号は殺しはしなかった……禁忌の事実を知ったものはすべて、この世から抹消される。こればかりは、荻号には止められなかった。荻号にできたことは、せめてその謎に触れることがないように、予め自らの存在を疑わせないように神を創り上げたことだけだ。長い生涯の中で彼の魂に触れたものは、こうして存在を根こそぎ絶たれて、荻号は幾百億年もの間、永遠とも思われる孤独を過ごした。

彼は誰も失わないために、自らの真実に近づこうとする者を遠ざけてきた。それでもジーザスのように荻号に近づこうとする者はいて、彼らを失わなければならない。彼は気も狂いそうな永劫の孤独の中、真の友を作ることすら許されなかったのだ。

「……またか……。汝は生を、何だと思っている……。ジーザスは汝

に不当に奪われてよい者ではなかった。かの者は人々の光であり希望であった……吾の我慢も、限度があるのだぞ」

荻号は彼が荻号であることを忘れ、このような事を口走った。彼は怒りのあまり、荻号でいることを、ほんの一瞬だけ忘れていたようだ。荻号は苛立ったように舌打ちをすると、彼の頸に縫いこまれた制紐を自らの手で切った。白い制紐を皮膚から引き抜くと、彼は静かに深呼吸をした。

「吾はこの死を、看過する事はできん。禁視（F o r b i d d e n — v i s i b i l i t y）を啓く」

荻号は空色だったその瞳を、かっと一氣に見開いた。

彼の瞳の虹彩の部分が金色に変色して、風貌がみるみるうちに変わってゆく。

そこには最早荻号とは言い難い、太陽のような瞳を持つ、金色の光に満たされた眩い者がある。彼は断たれたバイタルの断片を捜し、命脈に自らの圧倒的な生命力を捻じ込もうと試みる。彼はこれまで幾度となく禁断の力で、神の死をも捻じ伏せてきた。

……だが、如何に最も全能に近い彼がジーザスを救いたいと願ったところで、彼をも支配する存在がジーザスの命を奪うと決めたのだ、……強大なる創世者の力には及ばなかった。姿は見えない創世者は確かにこの光景を観察していて、あらゆる試行を許さなかった。それは無情なまでに。

「吾が力も、今は及ばぬのか……」

相当な時間を費やした果てに、禁視の力も及ばない事を見せ付け

られ、諦めざるをえなかった。

彼は彼の無力をひたすらに呪いながら、ジーザスが磔刑に処された際に穿ちこまれてできた手首の古傷に触れ、憐れむように優しく擦る。彼が蘇生を断念した事によりたった今、ジーザス クライストは苦難に満ちた生涯を終えたのだ。あらゆる人々を導いてきた彼に、平安はあっただろうか……。震える手でその亡骸をソファアに横たえると、手を胸元で組ませ、そっと目を閉じさせた。神々の創造主である彼は、死の果てには虚無の他に何もない事を悪びれた。父親らしいことなど、何一つとしてできなかった。

穏やかな祈りの果てに。冥福など、ある筈もなかった。

どこか満ち足りたような微笑を浮かべるジーザス クライストの瞳にはうつすらと、涙が滲んで伝った。

＊

荻号はジーザスの亡骸を陽階に引き渡し、数時間に渡る検屍の結果自然死であることが確認されると、陽階はジーザス クライストの崩御を発表した。

かくて人類の救世主として人々に光明を授けた、偉神 イエス・キリストは二度死んだのだ。しかし彼が最期に面会をした人物が荻号であった事から、荻号に殺されたのではないかと誰もが疑わざるをえなかった。荻号は疑われ、罵られる事を当然のごとく受け止めた。ただ彼はひどく疲れていた。生きること、そして死をただ延々と見守り続ける事に――。

空色の瞳を取り戻した荻号は世界の果てのような実験室の片隅で、ユージーンの浸る赤い培養液を見つめていた。彼自身の自然治癒力で、順調に回復はしているように思われる。荻号の力を使えば、彼

は一瞬で回復できるだろう。だが、それではユージーンの死を冒瀆しているようなものだ。彼の記憶は余すところなく荻号の頭の中にあつて、一かけらも失われてはいない。

「ユージーン……お前は決して、俺達の道具ではない」

荻号は彼と契るように、寂しげにぼつりと呟いた。

＊

陰陽階の全神が彼の死を悼む葬送の義は位申戦の日程を延期させて、何事にも先駆けて執り行われる事となった。

比企は荻号がジーザスを殺したのだと信じて疑わなかった。比企にとってジーザスは敬愛すべき偉神だった。彼のような陽階神となるべく比企は学び鍛えてきたのだし、彼の厳格さと公正さはそのまま比企が受け継いだ。

”やはりあの怪物は、己が手でくぶり殺さねばならん……どんな手を用いてもだ”

比企の荻号に対する怒りはジーザスの死を契機に、いま頂点に達しようとしていた。

第1節 第28話 救世主は二度死ぬ（後書き）

第28話挿絵アドレス（絵師様の）／荻号 要・ジーザスⅡクライ
スト

[http://lizreel.web.fc2.com/3to
bira/3tobira-narou.html](http://lizreel.web.fc2.com/3to
bira/3tobira-narou.html)

第1節 第29話 ジーザス崩御とその余波

藤堂家の織図と恒は、揃って口をぽかんと開けたままパソコンの画面を見つめていた。

志帆梨はもう深夜になったので床についた。黙々とFC2—メタフィジカル・キューブを用いたMCFの練習をしていた恒は、いつものようにネットサーフィンをしていた織図の表情が硬直してしまっているのを見て近寄ってきた。

陽階枢軸 10位、ジーザスIIクライスト、置換名 師崎^{しき} 灯陽^{とうよう}、崩御。

死亡推定時刻は7月21日 午後11時2分。

報じられたのは救世主 イエス・キリストの死である。恒は直接ジーザスと見たことはないが、彼は聖書や人々の信仰の中で姿を見ているかのような気になっていた。

どれほどの人間が彼を敬愛し、彼の教えをこそ心の支えとして、信仰をしているというのだろう。まるで世界中に灯されていた信仰の光が消されてしまったようで、恒は何ともいえない寂寞とした気持ちになった。織図は常日頃、唯一敬服すべき陽階神としてジーザスの名を何度となく挙げていたし、彼の思想をよく引用していた。

陰階神の織図にとってもジーザスは大きな支えだったようだ。彼の盲目の黒い大きな瞳に、涙を浮かべていたように見えたのは、恒の思いすごしではない。

「どうして……お亡くなりになられたのでしょうか」

「一つには、ジーザスさんは高齢だった。だが……違う、そうじゃない」

織図は落ち着かないからか煙草が吸いたくなったらしく、煙管を取り出そうとして、ここが民家であることに気付き引っ込めた。

死神は”生物階にある者の死”を秒単位で予知できるが、”神階にある者の死”は把握できない。だが、織図は誰よりも死という現象を識る神だ。少しぐらいの勘というやつはある。

神が死ぬ前触れがある時は、何となく嫌な予感がするものだ。それはほんの少しの悪い予感としてでしか認識できないが、織図はその日一日嫌な気分で過ごしている場合が多い。ところがどうだ、今日は渡鬼DVDを見て恒が初めて人助けをし、機嫌はよかったように思う。何度考えてみても、ジーザスが死ぬ気配を感じ取ることができなかったのだ。

そして織図は、長年培われた経験と勘によって、ジーザスが何者かに殺されたのだという事を見通していた。発表された死因は自然死ということになるのだが、彼は老いていたとはいえ老衰で崩御するほど衰えてはいなかった。しかもジーザスの年齢を人間の年齢に換算しても、たかだか60歳やそこらであるとする、自然死とするには明らかに不自然だ。

織図は神語を読めない恒に構わず、自分だけ記事を読んでいる。どこだ、ジーザスはどこで崩御した……。恒も負けじと読めもしないのに画面を見つめる。いくら粘っても、単語ぐらいなら読めるが、読めないものは読めない。マウスを動かしてイングリッシュ変換ボタンを押そうとして織図に止められた。織図は神語で記される微妙なニュアンスを読み取りたいのだ。恒は仕方なく待ちぼうけだ。ただ待っているのは時間が勿体無いので、神具の取り扱いに集中する。

恒は僅かな間にM C Fらしきものを展開できるまでになっていた。今度は人体実験になってしまうので志帆梨を付き合わせる訳にはいかず実験台はいないのだが、M C Fが形成されているかどうかは織図が判断してくれる。M C Fはつまるところ、微弱な電磁波のプログラムのようなものだそうだ。恒が研究員にかけようとしているマインドコントロールは、それほど複雑なプログラムではない。

その内容はこの村に何の調査に来ていたのかを忘れて、可及的速やかにこの村を去りたくなるという、ただそれだけだ。難しいものではない。

——だが失敗は許されない。

一人でも失敗して逃がしてしまえば意味がないのだ。恒は何度も同じ練習を繰り返し、織図の大きな背に自分の背をもたせかけて、M C Fの手順を身体に叩き込んだ。

織図は情報を集めるうちに、ジーザスが最期に面会した神が荻号であることを知り愕然とした。またか。荻号の周囲には、不審な死が付きまとう。荻号がジーザスを殺したのだろうか……33層のマインドギャップを備える荻号の真意には近づけない。それどころか彼に近づく者は全て不自然な死を遂げてきた。

織図は彼と表向き親友として接しながら、その実は彼の事など何一つ理解しようとしなかった。荻号は織図が一線を越えて彼の内面に踏み込んでくる事を頑なに拒んできたし、織図がそれに興味がないというそぶりをして織図の目が盲目であったため、信頼関係を築くことが出来たのだと分かっている。

”荻号さん……あんたが、殺ったのか？ 俺にはジーザスさんを殺

すべき理由が見当たらない”

織図は恒に画面を譲り、煙草を吸いに屋外に出て行った。

織図が窓を開くと、じつとりと湿気を含んだ嫌な夜風が家の中に吹き込んできた。

＊

翌日、吉川 皐月と子供達にとって長い長い一学期が終わろうとしている。

長かったと感じたのは、皐月だけではなかっただろう。なかでも恒は一学期の初めに辛うじて目撃した憔悴しきった姿とは見違えるようだ。

講堂での終業式を終えて一人ずつに通知表を渡し声をかける。既に見せあいが行われていて、子供達は他の子供と自分の成績を比べては一喜一憂していた。恒は皐月から受け取って中身をちらりと覗いただけで、興味も持たず閉ざしてしまった。

今学期はテストを全て受けた上それらは全て満点で、出席も足りていたので全学年一位の成績だった。もつとも、恒にとっては成績などどうでもよかったのだが、クラスメートはそうはいかない。クラスメート達は初めてまともに評価されたであろう恒の成績に興味津々だった。

中でもこれまで学年一位だった朱音の成績より恒が上なのか下なのかが気になるのだ。

恒が通知表を受け取るなり、誰もかれも席を立て黒山の人だかりでもみくちやになる。恒は迂闊にも、通知表を奪い取られてしま

った。

「えー！ 恒、全教科満点だ！ オール5だぜ」

「うっわ、恒ってテスト100点しか取ったことねーの？ 親友だ
と思ってたのに」

巧が何とも形容しがたい切なげで、物ほしそうな顔で大親友を見
つめる。

朱音はますます恒のことが気になっていた。彼が天才だから、と
いうのではない。朱音は恒が人知れず努力をしているのだと信じて
いた。どんな人間だって努力もせずに天才という言葉だけで何事も
できるようにならない。恒は努力の痕跡を、決して他人には見せな
い。彼が万能の天才なのは彼がそうあろうと努力を重ねた賜物なの
だ、と。

「ずっりーよなー、お前、何もしてねーのに何でもできて！」

他のクラスメートがそんなことを言って嫉妬心を隠そうとしない。
成績の良し悪しにお小遣いの増減がかかっていたりする児童もいる。

それを聞いて朱音は、どうして恒はいつも誤解されてしまうのだ
ろう、ともどかしく感じた。皆は恒に憧れているけれど、恒の隠さ
れた本心は誰も知らないもの――。

” 恒君はずるいんじゃないよ……皆より努力してるんだよ ”

それはそうと、朱音はこの夏休みに思い切って恒を海か山に誘っ
てみようと思った。

二人きりでは恥ずかしいので皆と一緒にでもいい。皐月にもついて
きてもらってもいい。

そう思ったのは、恒が最近、村の子供達と遊んでくれなくなっていたからだ。彼は遊びには殆ど興味を示さず、このところ何かにずっと没頭している。

恒を夢中にさせるものが何かは分からないが、恒はこの一学期の間に、よいものも悪いものも、朱音の知り得ない数々の体験を積み上げたようだ。目を離せばふらりとどこかへ飛んでいってしまいそうな恒を、朱音は繋ぎとめておきたいと思う。

彼の心は、今は朱音に向いていない事は百も承知だったのだが……。それでも、臆病になってばかりでは、何も踏み出せない。朱音は後ろの席の女友達と話をしながらも、ずっと耳だけは恒の方へ向けていた。

「みんなー、成績は見せあうもんじゃないの！ それから勝手に席を立たない！」

皐月はざわついてきた教室を見かねて大声をあげて注意するが、すっかり夏休み気分の彼等は馬耳東風。收拾がつかなくなってきたので、皐月はここぞとばかりにどっさりと夏休みの宿題を配る。読書感想文に各種ドリル、自由研究に、観察日記。書道や絵画の課題。ゆとり教育世代とは思えないほどの宿題どっさり作戦が効を奏して、彼等はしゅん、と口を一斉につぐんだ。

その量を見た巧が口を尖らせながら机をバンバン叩いて抵抗した。

「おいおい、皐月ちゃん！ おーいーいーよー！ 宿題おーいーいー」

「あのねー、豊迫君。おいしいなんて日本語ないのよ、多い、でしょ

？ 国語の宿題、追加しましょうかね」

「ぎゃー！ 鬼ー！」

鬼婆と呼ばれないだけまだましかと苦笑しながら、皐月は彼らを見渡す。

巧はというとこの夏休みにソフトボールの県大会にエースとして出場する。巧はユージーンに繋ぎ止められた命を、精一杯大切にしているように思えた。確かに宿題をしている時間などないのかもしれない。

生徒達ばかりでなく、この一学期間というものの公私ともに多忙な日々が続いた。皐月も子供たちもひとまわり成長したような気がする。ユージーンとメファイストフェレスが去った5年2組の教壇に、終業式には皐月ひとりで立っている。

彼らはさよならを言わなかった。

彼等はいつの日かまた帰ってきてくれるだろう、この教室に。

皐月は彼等についてのしんみりとした言及は避ける事にした。

「では皆、思い出いっぱいの夏休みを過ごすのよ。登校日に、また会いましょう」

こうして、彼等にとっては五度目の夏休み、不登校だった恒にとっては初めての夏休みが始まった。

*

第10位 倫理神下第5層公獣番役、糯愈^{もちゆ} 定^{てい}は、彼の主の崩御の訃報に触れ、喪に服するというより何も手につかなくなった。

ジーザスはその長い生涯の終わりに、苦難の十字架を背負ったのだろう。彼の主がどのようにして最期の時を迎えたのか。糯愈には想像もつかない。

彼の死に思いをめぐらせても、込み上げてくるのは遣る瀬のない空しさだけだ。

”求めなさい、さすれば与えられるだろう

探しなさい、さすれば見つかるだろう

たたきなさい、さすれば開かれるだろう

全て求める者は受け、探す者は見つけ出し、たたく者には開れるからである”

Matthew^{マタイ} 7-7-8

彼の説いた言葉は何よりも替えがたい宝物だ。

彼の言葉には魂が宿っており、いつも糯愈を勇気付け、励まし、導いたものだ。

それにしても、使徒階の草原の牧草を撫でる風が今日はやけに強いと感じた。

慈愛に満ちたジーザスの息吹が、草原を駆け抜けているのだろうか。馬場の柵の上に顎を乗せてがっくりと肩を落としていた糯愈は、柔らかな風に悲しみが運ばれたように感じて、聖書の言葉を思い出しふらふらと立ち上がる。

キイン、どこからともなく耳鳴りがした。この感覚は何だろうか？

それが何故見えたのかはわからない。

彼は怯えて周囲の馬番たちの反応を覗おうとしたが、他の馬番役

たちは訃報を聞いて死んだように呆然として牧草地に伸びていて、誰一人その存在に気付いていない。聖書の言葉を思い出し、何かを求めて視線を草原に泳がせていた糯愈には目の前を通り過ぎる、金色の光を纏った青年が確かに見えた。風を孕ませて、白衣ではない透明な衣を纏い、その腕には赤子を抱えている。

青年の太陽のような金色の髪の毛が黄昏の草原のように長くたなびいて揺れて、少しでも気を抜けば消えてしまいそうなほど。

彼は透き通っていた。糯愈は声はおろか金縛りになり、ただ青年の通過するのを見守ることしか出来なかった。青年は薄い金色の髪の毛とグリーンの瞳をした美しい赤子を、金色の瞳を細めて慈しむように優しく抱いている。赤子はむずがりもせず泣きもせず、すやすやと青年の腕の中で眠っている。彼は誰にもその姿を顕すことなく糯愈の前を通り過ぎ、馬舎の中に入っていた。彼が通り過ぎると、傷を癒すような風は止んでしまった。糯愈は金縛りが解かれ、無我夢中で馬舎の中へ駆け込んで行った。恐怖心はもはやなかった。

「ああ……このお方は……神様？」

馬舎のつきあたり、もう長らく使っていない古びた飼葉桶にたっぷりと新しい藁が敷きこまれ。

たった今、この世に授けられた神の赤子が眠っていた。

糯愈は安らかな寝息を立てるバラ色の頬を持つ赤子を抱き上げ、至高者からの贈りものを受け取った。飼葉桶の中から発見された女神の赤子はジーザスの生まれ変わった姿だ、根拠はないのにそんな気がした。糯愈は求め、そして与えられたのだろうか。

「……ありがとうございます……」

糯愈はふと光が差し込んだような気がして、赤子を抱えたままゆっくりと後ろを振り返った。今にも消えてしまいそうに儚い光を注ぎかけながら、正体も知れぬ先ほどの青年がじつと糯愈を見下ろしていた。彼が間違いなく赤子を受け取ったと、確認しているようにも見える。

糯愈はその黄金の瞳の異質さに再び怯えあどずさって、今更のようには腰を抜かした。彼は逡巡するも勇気を振り絞って訊ねる。

「あなたは……誰ですか」

「……何者にもあらざる者だ。ひとつの死を昇華し新たな生を授く」

穏やかな声が糯愈の胸中に満ちて刹那、強い風が放たれ、不覚にも目を閉ざした。

赤子は驚いて泣き声を上げ、産声をあげたかに思えた。慌てて瞼を開いた時には青年の幻はかき消えている。

後には吹き抜ける風とプリズムのような鮮やかな光が、馬舎の中を虹色に輝かせていた。

神が一柱崩御するとその前後に必ず、一柱の神が誕生する。

自ら誕生する事のできない神々は、厳密に個体数が管理されている。ジーザスの死と引き換えに生まれた赤子、それが彼女という女神だ。

糯愈はたった今、誰も知らなかった神の誕生の秘蹟を目の当たりにしたのである。

＊

鏑かぶら 二岐にぎはいつの間にか書斎に戻っていた荻号に気付いた。

二岐は今日は会議に出掛けるはずだったので、荻号は二岐が隣に
いるとは思っていないのだろう。

陽階の巨星が堕ちた事により、運営部会の会議どころではなかつた。鍵がかかっているのは知っていたので、合鍵で部屋に押し入る。

荻号は疲れ切っていたのか、ベッドに身体を横たえて布団をすっぽりかぶっていた。彼女の主がベッドを使っているところなど、ほぼ一度も見たことがなかった。何百年ぶりの睡眠をとっているのだろう……不眠不休でいつも何やら動き回っていた彼が、珍しい姿を見せている。

明日はきつと、大雪だわ。

そんな事を思いながら物音をたてずに中に入ると、腰の白い羽衣を解いて、ベッドの下に放り投げているのが覗える。

薄墨色の聖衣も脱いでベッドに放り投げて寝ている。二岐が女使徒だからかもしれないが、荻号が聖衣を脱いで裸になっている状態を、二岐は目撃したことがなかった。

毎日沐浴をしている割には着替えている場面を見たことがないし、彼はいつも同じ聖衣を着ていた。汚れたりほつれたりしない聖衣は洗濯などしないで何百年と同じものを着る事ができるので、彼は着たきりすずめのようにこれしか着ない。上半身を脱いでいると思われるので起こすのが躊躇われるが、しかし寝かせている場合ではない、ジーザスの死に関する事情聴取を行うための法務局からの出頭要請が出ているのだ。拒めば断固とした法的措置がとられるだろう。

やましい事がないのなら直ちに出頭させなければならない。

他には衣類が落ちていないかベッドの周囲をよく見て、下を穿いているであろうことをだけ確認すると、二岐はそつと布団をめくった。

ところが！

二岐の予想した荻号の寝顔は、そこにはなかった。

悲鳴を上げそうになった口を押さえて、必死にこらえた。そこには別神が横たわって、光を紡いでできた糸のような金色の長い髪の毛を腰まで延ばし、眩しい光に包まれた熱を持たない太陽がそこにあるかのように強い存在感を放っている。これが形容過多ではなくて実際に見たままなのだから困る。

俯せに寝ていたので、長い毛の間からより一層輝きを強めている背部を見ることができた。

彼の背中には、二岐が教養によって知っていた……ステイグマ（聖痕）が見えた――。

これはまさか、ひょっとして、いや間違いなく……伝説に聞く絶対不及者ではないのか？

INVISIBLEが神の中に収束した姿……二岐は思いがけないタイミングで、思いがけない場所に出現した絶対者を目の前にして戦慄した。

二岐の接近に気付いていない様子なので、ひやひやしながら顔を覗きこんでも、荻号ではない。まるで仮面を脱いだように別神だ、

いやこれはもはや神などではない。

断言してもいい、絶対不及者だ。

絶対不及者がこんなに身近に……にしては、少し違和感がある。

絶対不及者は創世を成すほどのエネルギーの固まりであり、直視することはおろか側に近づくだけでも殺されてしまうという話なのに。

そして彼に触れるあらゆるものは焼灼されてしまう。布団にくるまってベッドで寝ることすらできない。途方もない熱量に触れ、ベッドごと炎上してしまう。まるで封印されているか偽物のように覇気とパワー不足の絶対不及者……。大体絶対不及者なら疲れて寝込むような事はない。

落ち着け、違うのだと二岐は止めていた息を静かに吐きだす。それにしても奇跡的な対面だ。その姿は不安定で体軀の下の子が透けて見える。二岐はつぶさに観察していて、彼の指に枢環がはめられている事に気付いた。世界にたったひとつしかないステータスシンボル、その御璽は閻神の印、真空斑だ。偽物などあるはずがないし偽物を作る意味もないとくれば……。

どんなに姿が変わっても、これは荻号なのだ。見せ付けられた思いがした。その証拠に下半身はいつも荻号が穿いているものだ。

ジーザスはこの姿を見てしまったが為に、荻号の正体を知ってしまったが為に殺されたのではないか。察しのよい二岐は震え上がる。

殺される！ 今すぐ出て行って、すっかりこの事を忘れてしまわなければ殺される！！ だがどんなに頭を振りかぶっても記憶を消すことはできない。取り繕っても看破されてしまう。二岐は荻号の

第一使徒となったことを、悲惨なまでに後悔した。荻号は二岐がまだ子供だった頃から有名で怖ろしくいわくのついた神だった。二岐は噂を信じはしなかったし、先代の第一使徒が不審な死を遂げた時もそれほど不自然には思わなかった。

むしろ荻号という不思議な存在に、卑近で伺候して真実に近づいてみたいと思ったのが祟った。もう駄目だ。全ては終わってしまう。どうして今日に限って部屋の中に入ってしまったのだろう。決して覗き見てはならないものを、見てしまったのだ。ここにとどまる限り殺されてしまう。

どこか遠くへ、今すぐ逃げなければ。だがどこまで逃げればよいのか？

二岐はそつと布団を整えようとしたが、彼はわずかな布団の重みの変化にはっと気付いて瞳を見開いた。絶対不及者の証とされる禁視が開眼されている。彼はひどく悲しげな顔をして、緩慢な動作で二岐に手を差し伸べてきた。その手で殺されるのだ。たった今から！ 二岐はもはやこれまでと覚悟を決め、目をきつく閉ざして両手で頭を抱える。へたりこんだ。

「二岐」

「……！」

彼女の頭上から、聞き慣れたハスキーがかった低い声がした。二岐は殺されるとばかり思っていたので、現実を受け止められない。先ほどの姿とは異なり、荻号自身の姿がそこにはあった。黒い聖衣を纏い、銅色の髪の毛を腰まで伸ばしたいものだらしないでたち、のんびりとした口調。陰階神 荻号 要だ。間違いなかった。夢を見ていたのだろうか。

いやに明晰な夢だった。

「……主よ、あなたは……」

「用があったのだろうか、合鍵を使って立ち入るのは感心しない。お前のためにもな……なんにしる無事でよかった」

「お伺いしてもよろしいでしょうか……」

二岐はくいさがるが、声は震えて歯の音もあわない。

「折角助かった命を無駄にするな。これに懲りたら、命は大切にしろ」

「お見逃し……下さるのですか」

二岐は確信した。これは絶対不及者ではない。それに似た違う何かだ。

何故なら絶対不及者は感情を持たない。長年仕えた者だからといって容赦はしないだろう、二岐は今、明らかに彼にとって不安分子、邪魔者を生かす理由が見当たらない。彼の代名詞は虐殺者だ、感情を持つ優しい絶対不及者など聞いた事がない。感情があるという事だけでも非常に不完全な存在だ。もの思わない純粋なエネルギーであるINVISIBLEとは比べるべくもない、彼の中にはINVISIBLEは収束していない。

荻号がどんなに疲労していても睡眠をとらなかったのは眠ると正体が暴かれる、という裏があったのか。と、二岐は今更のように思い起こす。荻号が眠った時にだけ異なる姿に変身する、というよりは正体を、眠った時にだけ隠せないでいると言う方が正しいのだろう。

＊

一方、二岐が一命を取り留めたことに、荻号は複雑な息をついた。

彼は渾身の力と バイタルを込めて無から一柱の神を生み出した

直後、極度の疲労により睡眠を必要としていて、迂闊にも二岐にその姿を見られてしまった。

太古の昔はそのような失態はなかったのだが、彼の身を削り神を生み出し続けるうち彼の力はしだいに衰えてきて、遂に睡眠を必要とするまでになってしまったのだ。神々を生み出すたび、彼の力は衰えてゆく。彼の子らは、母体である彼の力をくいものにして生まれてくるからだ。

昔は1000倍の総個体数を創出できたのだが、今はおよそ4000という総個体数を維持するだけでも精一杯。彼が睡眠をとる間意識が落ちてしまうので荻号要を演じることができなかった。睡眠中に力の制御がままならなくなってより幾百年、彼は睡眠を取ることを自らに禁じたのだ。そのことがさらに彼の力を衰えさせ、彼は襲い来る睡魔を覚せい剤入りの煙草により紛らわせてきた。

二岐の行動を予測できなかったのは致命的だったが、その姿が何を意味するのかを知らなければ、INVISIBLEは見逃すようだ。アルティメイト・オブ・ノーボディ(Ultimate of Nobody・UN／名も姿もなきもの)。荻号という神を演じる彼は、ふたりもは犠牲者を出さず安堵した。

「法務局が出頭要請をしてきたのだな」
「御意」

荻号は殆どの場合、二岐の顔を見ただけで用事を当ててしまう。この何百年も、二岐は荻号にまともに報告をしたためしがない。そんな事はもう慣れていた筈なのに、荻号がいつもどおりの会話をしてくれたのをどう受け止めてよいのか分からず、二岐は頭を床にこすりつけるようにして平伏した。

荻号はそんな二岐を首を傾けながら見下ろしたかと思うと、ゆっくりと二岐の頭を撫でてやって、最後に何かを引き抜くような仕草をする。

「念のため、さきほどの記憶は消しておく。すまないな、二岐」
荻号のアトモスフィアによって記憶を書き換えられ、二岐は記憶を奪われた。

崩れた二岐を、空色の眼差しで憐れむように見つめながら、神氣遮蔽布を兼ねた羽衣を手にとっていつものように腰に巻きつけた。
二岐からの返事はない。

＊

一夜明け、早瀬たちの研究チームは石沢の母親が花屋のアルバイトに行つて家を空けた事を確認すると、3人ばかりが電気工事屋を巧妙に装つて家の勝手口から侵入した。

勝手口の鍵がサムターン廻して簡単に開くというのは織り込み済みだ。井村は行動学的に最も効果的に観察のできそうな場所を探して、次々と室内にカメラを設置していった。先日は飲みすぎた井村だが、さすがに九州男児は回復力も早く、二日酔いの色など微塵もなかった。石沢家は雑然とはしておらず家具も少なくいつも掃除が行き届いており、カメラを隠すのに一苦労だ。

観葉植物の間に盗聴器を滑り込ませ、テレビの裏を開けてカメラを隠す。

ジャスト10分で撤収だ。この家は近所づきあいがいよいので、隣人から怪しまれてしまわないとも限らない。予め取り寄せておいた見取り図をもとに、入念に仕掛けられたカメラは50余り。彼女が

もしも天使であるなら、万全の監視体制の前に逃げられはしない。重要なミッションを終えて駆け込むようにワゴンに戻ってきた精鋭部隊を、研究員たちはまるでホームランを売ったバッターのように頭を叩きながらねぎらった。

「ただいまから調査開始だ、各自グループ内で交代しつつ、24時間体勢で受け持ちのカメラをモニターし続けるように」

研究員達のモチベーションは、冷房の効かないワゴンの中を更に熱くさせていた。

「さあ……正体を見せるんだ、ラジエル。お前の生活を丸裸にしてやる」

＊

当の本人、つまり石沢 朱音は放課後の教室で博多土産を配っていた。

「博多通りもん」をばらして女子に配り、仲のよい友達には趣味の悪いキーホルダーを配った。皐月に恒、巧、天野などにもキーホルダーを配る。恒は博多みやげをもらって、だから研究員を引っ掛けて連れてきたのだな、と疲れた顔をしてため息をついた。その様子を見て朱音は肩をすくめた。

何か気分を損ねたのだろうか？ 恒の考えている事がさっぱりわからない、前はあんなに仲良くしていたつもりなのに。

「あ、恒君、ごめんね。気に入らなかった？」

「いや、ありがとう！ すごいねこれ。九州新幹線ツバメのキーホルダーだなんて、九州って新幹線あったんだな。俺んちの玄関の鍵につけるよ」

恒はそんなことない、と手を振ってまくしたてるようにフォローしたが、一瞬見せた失望の表情は朱音の小さな心を傷つけた。巧君にあげた885系かもめキーホルダーの方がよかったのかな、などと思いながら。

「じゃ、ありがとう、また登校日にな」

朱音はその言葉を聞いて哑然とした。登校日まで会えないというのだろうか？

あれほど毎日一緒に遊んでいたのに……。ランドセルに、食べ残しのパン、たまったプリント、マーガリン等、置き去りにした一学期分の荷物を詰め込んでいる恒に、たまらず声をかけた。

「恒君！」

「ん？」

「休み中に海とか、行かない？ 今週行きたいなって思ってるんだけど……一緒に。あ、大丈夫、お母さんもついてきてくれるから、保護者は大丈夫よ」

教室には5、6人が残っていて、巧はソフトボールの練習に行っていた。恒は巧が居ない事だけを確認したが、唐突にそのような言葉をかけられて困惑した。

恒は恋愛感情が理解できない。おそらく朱音はそういう感情を自分に向けてくれているのだろうが、こればかりはどうしようもないのだ。恒は完全な男ですらないのだから。

「俺、泳げないんだ。巧でも誘ってやってくれ」

「恒君って、泳げなかったの!？」

あからさまな嘘をついてしまったが、朱音のためだ。

今週は海には行けない。恐らく今日あたりから、研究者の監視の目がガラガラと光っていると思われる。盗聴器、監視カメラ、それらを含めて朱音は監視下にあると思ってい。神である恒と朱音の接触……彼らにしてみれば、カモが葱をしょってやってくるようなものだ。朱音だけに目がいつてくれているれば、恒の目論見には狂いはない。だが自分と朱音がどんな形であれ、彼らの監視中に接触してしまったなら……計画は台無しだ。

即座に研究所本部に報告が入るだろう。ネットの普及している時代なので、報告書は世界規模で読まれてしまうかもしれない。そうになったら恒の付け焼刃のMCFではもう、どうしようもない。

天使以外の、知的生命体が見つかった。

そしてそれは天使より遥かに危険な存在だ、と――。

「恒君が泳げないんなら、私がちゃんと責任持って教えるから！ 恒君が泳げないって、誰にも言わないし。泳げない事は、恥ずかしい事じゃないよ。それよりずっと泳げない方が、よくないんじゃない？ ね？ 今週の日曜日」

朱音は粘り強く誘ってくる。恒はこのところ多忙のため、朱音や子供達と一緒に遊ぶ機会がなかったことを反省した。

いつも遊んでいたというのに自分の都合で突然遊ばなくなつて、彼等には寂しい思いをさせているのかもしれない。という傲慢だが、付き合いが悪かったのは事実だ。

「お前んちの海水浴なのに、迷惑だろ？ 車とかも出してもらつて」「違ふの、母さんはついてきてくれて、風岳から朝に1本だけ出る、海水浴場往復バスで行くのよ。遠慮なんてないわ」

「わかった！ じゃあ、今週の日曜に、よろしく。巧も誘っている？ 皆も呼ぼうぜ、お前の友達とか皐月先生とかもさ、バスなんだ

ろ？」

「え？ うん、いいよ、勿論！」

朱音は少し残念そうに、しかし喜んで教室を出て行った。恒はその姿を渋い表情で見送る。

M C Fは今週までに完成させ、そして研究員達にはすぐに帰ってもらうほかない。

第1節 第30話 無音のレクイエム

「妾には帰る場所なんて、ないわ……」

メファイストフェレスはアルシエルに父を人質に取られ、再び風岳村に戻ってきた。

恨めしいほど何も変わらない、この村。

太陽は僅かに高度と光度を増して、彼女の黒いドレスをじりじりと焦がしつけている。

次に解階に戻るのは、ユージーンを伴って……。メファイストフェレスが本気でユージーンを連れて戻ろうと思えば、それは造作もないだろう。しかしそれがどう影響するのか。

神階に、そして生物階に。父の命とユージーンの命、どちらが大切かと言われても困る。

だが忠誠よりも勝ったのは、親子の情だ。

解階の魔女が神を女皇、アルシエルの元に引き渡すことで神階と解階の全面戦争に発展してしまう。神階も体裁が悪い、貴重な枢軸神を殺されても黙っているのは、神の名が廃るというものだ。

仮に神階と解階の全面戦争に発展した場合、どちらが勝つかというとな難しい。個々の戦闘能力は解階の住民の方が断然高い。だが……神階にはたった一柱だけ、背比べをしているどんぐりたちから抜きん出て、最強者アルシエルを遥かに凌ぐ力の持ち主がいるとされてきた。その者は姿も名もなく、姿と名を変え、延々と神々と生物階を守り続けてきたのだそう。好戦的な解階の住民がこれほどまでに生物階と神階に干渉してこなかったのは、たった一柱の脅威があるからだそう。

メファイストフェレスの予想によると、現在は荻号だ。

荻号の逆鱗に触れれば解階が消し飛ぶ。そうなれば、もはやユー
ジーンをアルシエルに差し出し父が助かったところで、それは意味
を成さなくなってしまうに違いない。慎重なメファイストフェレス
は一時の感情に翻弄されはしなかった。因があって果があるのだから、
彼女が起こした結果がどのような結末を導くのかを考えなければ。
危うい選択は自らの双肩に懸かっている。

”主を差し出さずに父も助ける方法を、考えるほかないわ……”

約束の期限は半年。アルシエルにしては随分長い猶予を与えてく
れたものだが、それだけ確実に結果を得たいのだろう。数日以内に
と言わないところが、かえって拘束力を発揮する。アルシエルはあ
まり気の長い方ではないが、これほど長く待つと言うのは相当にユ
ージーンが欲しいからとう。それが殺す為なのか、何かをさせたい
のかは及び知るところではない。メファイストフェレスはさしあた
り恒と合流して、ユージーンの近況を聞くことにした。

＊

コチ、コココツ、カチツ、カチカチツ……

見た目にはランドセルを背負い、ルービックキューブで遊んでい
る学校帰りの小学生にしか見えない。

恒の手の中で、組み替えられてゆく神具が軽快な音を立てる。

FC2—メタフィジカル・キューブは音声コマンドのない個性的
な神具だ。そのプログラムの入力は組み替え配列が影響する手入力
であり、だからこそ組み合わせ、組み立てられるプログラムはまさ

に無限だ。極陽の持つ神具は更に改良が加えられて、その実体はなく彼の脳内に存在する。彼の脳内で念ずるだけで組み替えを起こすことができるそうだ。だがそうかといってこの神具が極陽のそれに劣るという事はないらしい、要するに使い方次第。

頭の中でイメージする場合と現実が存在するものを手を動かして組み替える場合、どちらがハイスループットであるかというと、当然心の中で組み替えができる方に軍配が上がる。現実が存在する神具を扱う事により発生する組み換えのタイムロスは、形而上学的思考により解決する事ができるので、荻号は言う。その証拠に恒は今、殆ど手を動かしていない。頭の中でイメージを繰り返し、その存在を疑っているだけだ。

神具は恒の思考を受け、勝手に組み換えを起こしてプログラムを完成させてゆく。

できた、あとは発動するだけだ。

恒は両手でしっかりとそれを握り締めると、バケツをひっくり返すような仕草でそれを前に突き出した。

” Operating Mind Control Field,
expansion !!! ”

(マインドコントロールフィールド展開)

見えない電磁波となって田んぼ道を駆け抜けていった恒のMCFを、恒は清々しそうに見送った。

今のは、半径20mはあったはずだ。だが必要なのは到達距離ではない。

内容と確実性だ。そろそろ人体実験をしても安全なまでに完成してきたと思うが、あいにく村内にはこれといって人の集まる場所というものがない。

「恒！」

後ろから声をかけられて振り向くと、背の高いロングドレスの女が手を振っていた。

失踪していたメファイストフェレスだ。たった数日留守にしたらだけなのに、随分懐かしく感じられる。

「メファイストさん！ よかった、もう帰ってこないんじゃないかと」

「帰ってきたわよ、おあいにくさま。今のは何？ もの凄い危険な電磁波が駆け抜けていったけど……」

「MCFができるようになったんです。これは俺の神具で、荻号さんからいただいたんです」

「神具が扱えるようになったの！？ たった数日で！？」

「でも勿論、俺のアトモスフィアでは足りない、っつか無いに等しいから、そこは荻号さんがうまく充電してくれているようですけど」

「お前は、頑張るのね……」

メファイストフェレスは先ほどまでユージーンをアルシエルに差し出そうとしていた事を恥じた。

こんな小さな子供が神具を手にしてそれを使いこなそうと努力している傍らで、何ということを考えていたのだろう、と。

メファイストフェレスはマクシミニマのインジケータによって気付く。恒の脳は鎧をまとったようにマインドギャップが張り巡らされていた。その数……6層、ユージーンや織図より優れた精神性を持っているということになる、こんなことがありえるか？ たった10歳の子供が、陽階枢軸神並の精神力を数日の間に身につけたのだ。

” どうしてこの子は、こんなに心の成長ができるの……？ ”

マインドギャップは一朝一夕でできるものではない。

身を引き裂かれそうな経験をいくつも繰り返し、心は成長してゆく。

のうのと平和に暮らしている者では、マインドギャップを備える事すらできない。この子はそれほどまでに辛い思いをしてきたのだろうか。

恒は啞然とする彼女に微笑んで、こう言った。

「何か言いにくいことがあるようですね。当ててみましょうか」

その言葉に、メファイストフレスは心底ぞつとした。彼の口調は” できるが、やらない ” といったニュアンスを多分に含んでいたからだ。

何なのこの子、いっちょ前に妾を脅しているの？

メファイストフレスはひとまず引き下がることにした。幼子とはいえ神だ、逆ギレするのも大人げない。

「この数日の事は、口頭でお話しますよ」

恒は主神の息子の名の恥じぬように、確かに抜きん出て成長が早い神だ。いくら枢軸神の最高の教育を受けたといっても、こうはならない。

その証拠に神々の教育期間は100年間もあるのだが、恒のペー
スだとあと5年か10年以内には、全ての事を吸収し終えてしまう
だろう。

もっとも、アトモスフィアの量は彼の精神性に追いついてきては
いないようだが……。極陽や、神々は恒をどうしようとしているの

だろう。

恒の情報はメファイストフェレスにとってとりわけ価値のあるものだった。

ユージーンは自殺を図り、考えうる限りの完全な死を遂げたが死ななかったのだという。彼は遅くとも1ヶ月以内には再生して蘇る。

メファイストフェレスはこの事を先に、聞いておくべきだった。なるほど、彼はアルシエルの欲しがるように特別な神なのだろう。そしてアルシエルに差し出したとしても殺される心配はなかった。アルシエルがこの事を知らずにメファイストフェレスに彼を連れてくるよう命じていたとは思えなかった。

死はない、という事を除けば彼はアルシエルにとってそれほど魅力のある神ではない。

アルシエルは永遠の命に興味があった、その秘訣を聞きたいといったものだったのなら……単なる会談だ。

メファイストフェレスは一気に気が楽になった。ユージーンに率直に話して、解階に来てもらえばいい。

彼は死なないのだから、身の危険などありえない。監禁されてしまふことが心配だが、そうなれば神階も黙ってはいないだろうから、アルシエルも無事に帰すだろう。

なんだ、他愛もない事だったのだ、とメファイストフェレスは力が抜けてしまった。解階の皇が、不死者と話をしたがつている、それだけのことだ。

「でもどうして主は、不死なのかしら……? そこに何の意味があるの?」

「さあ……それが……わからなくて」

「妾は不死と聞いて、その存在をひとつしか思い浮かべる事ができないわ。長い歴史上、どんな存在も不死であったためにはないもの……絶対不及者という存在を除いては……でも結局、絶対不及者もINVISIBLEに殺されるの、不死という存在はありえないわねえ、主は怖ろしく回復力に長けたただの……」

メファイストフェレスが何気なくつぶやいたひと言に、恒は目からうろこが落ちた思いだ。

「そうか、ユージンさんは！ 絶対不及者になるんだっ！」

「ええっ!？」

どうしてそうなる！ 恒の発想の飛躍ぶりに、メファイストはついてゆけない。

「だから死にたくなっちゃったんだ！ 絶対不及者になって全てを破壊しつくすぐらいだったら死んだ方がましとか思ってた」

「でも、まだ憑依されていないでしょう？ 絶対不及者の器になる神って、元々不死なの？」

「そんなん、自殺してみようと思わなければ解らなかったじゃないですか、まだ絶対不及者はたった二柱しか現れていないんでしょう……ユージンさんは気付いてしまったんだ……INVISIBLEはあと3000年以内に収束する、そして場所は……」

「3000年以内に、この村に？」

恒の頭は冴え渡って、様々な思考が繰り出されている。この子は壮絶なまでの考察力を持っている。大人顔負け。いや、大人といえども彼には及ばない。

「神の寿命が尽きるまでは3000年だからそう言ってみたんですけど。……例えばもうすぐ間近に迫っていたのならこうしちゃいけない。でも、どうすればいいんだろう？」

恒は荻号がユージーンの亡骸を見せて、お前には運命が変えられると言ったことを鮮烈に思い出した。恒はユージーンに何か、してあげることがあるというのだろうか。

自分がユージーンにしてあげられること……死ねない、絶対不及者に収束される運命をただ待つ事しかできない、絶望の淵に佇む彼に何をしてあげられるというのか。

”荻号さんは、全てを知ってるに違いない”

恒は再度、荻号に会う必要があると感じた。

＊

故イエス・キリストの葬送の儀は、陽階最上階の大広間で執り行われる事となった。

葬儀には陽階全神の参列が求められる。各地に赴いていた枢軸神や生物階降下中の神々、使徒たちが続々と帰還をしてきて陽階の玄関である関所を通り、共同大沐浴場に大挙して押しかけている。

ここでは陽階神が陽階を離れていて帰還した際に、穢れを清めるための禊をすることになっている。男神、女神ともに混浴だ。この沐浴場は平日は水風呂だが、忌日には湯船になる。

彼らは、ジーザスの死について様々な憶測をめぐらせていた。

彼等にとってのジーザスは陽階の巨星というばかりではなく、全ての陽階神の忠誠を集めた誇るべき師だった。極陽在位時の支持率は陰陽ともに100%、この数字は過去にも未来にも二度とお目にかかることはないだろう。明るい採光の取られた広い浴場に湯気か

立ちこめ、幻想的な空間を演出している。

陽階 準中枢 第11位、熱力学を司る女神、ナターシャⅡサンドラ(Natasha Sandra)、置換名 楓かえで 沙織さおりはそんな彼等の会話を聞いていた。彼女はボブより少し長めにカットしたグレーの髪の毛によく似合う、グレーの大きな瞳の、少女のように小柄で色白の女神だ。ジーザスが崩御したがために、葬送の儀の直後11位であるナターシャの位階が繰り上がり、入枢となる見通しだ。

大浴場では、ジーザス殺害の嫌疑がかけられた荻号への批判のみならず、常日頃から何度も位申戦を挑み枢軸入りを狙っていたナターシャにも矛先が向けられていた。ナターシャがジーザスの死を願っていたに違いない、そんな心ない批判も聞こえてくる。

ジーザスの崩御を願ったことなど一度たりともない、実力での入枢を目指してただけだ。

位申戦で三度挑んで敗れたAA神のユージーンは強かった。彼より上位のAA(武型)神であるレディラムⅡアンリニア(Redirum Unlinear)はなおさらのことだ。彼女は毎日鍛錬を積み、ユージーンに打ち勝ち7位を手に入れるための努力はしてきたが、文型神であるジーザスと競い合おうとしたことはない。

陰口を聞き流しながら、ナターシャは彼等とは少し離れて露天沐浴場に入っていた。

「ご一緒しても?」

「は、はい」

思いがけず湯船に入ってきたのは、陽階枢軸、第8位 ヴィシュヌⅡクリユナ、置換名 浅葱あやの 示曼しまん。自我を司る女神である。彼女

は生物階ではヒンドゥー教の祭神、ヴィシュヌ神として知られている由緒正しい女神だ。ヴィシュヌ神は男神であるとされているが、無性別である神々にとっては見かけこそ重要で、実際の性別などあまり意味がない。彫りの深いアジア風のエキゾチックな顔立ちに、美しくきめの細かい浅黒い肌が官能的。長く細い足に、くびれた腰がナターシャの羨望の眼差しに晒される。ムスクのような香りを纏って、彼女は美しい肢体を湯に差し入れた。

「色々、言う者がいるかもしれないけれど、見当違いの批判です。気にしないでよいと思いますよ」

「……恐れ入ります」

「神階は伏魔殿のような場所です、様々な陰謀が渦巻いています。一つ一つ気にしていたら、身が持ちませんよ」

「ジーザス様は、本当に自然死を召されたのでしょうか」

「荻号殿が、って仰るの？」

「いえ、決してそのようなことは……」

ヴィシュヌは湯船の上を、手を滑らせるようにして撫でた。細くしなやかな指先が鏡面のような湯船に波紋を立てる。その波紋は、隠し切れない神階の動揺を示しているような気がした。何かが水面下で、動き始めている。それは恐らく、三階を巻き込んで、その存亡に関わる重大な事だ。

一柱の神が崩御した、そんなことでは済まされない程の多大なる犠牲が、これから払われてゆくのだろう。

「荻号殿は神階の脅威であるとともに、神階を守ってくださいともいるわ。そうね。我々神にとって彼こそは真の意味での、神という存在に近い者なのかもしれない。彼の謎に迫る事は、INVISIBLEの謎に迫る事でもあるの……」

「もしも、もしも荻号殿がジーザス様を弑逆なさったとしたら……」
「それでも我々は、荻号殿を失うことはできないの。彼はINVI
SIBLEに対する唯一の、刃やいばなのよ。折られてはならないわ」
湯気はいっそう立ち込めて、明るい採光の下で虹を作っていた。
神階は今、揺れ動いている。

底知れぬ謎と実力を兼ね備える荻号に対する評価は、神階を二分
している。

そのうち彼の、要不要論にまで発展することは、避けられないで
あろう。

＊

短気な響　以御は執務室の机の上で、いつにもまして苛だってい
た。

彼が些細な事で苛立っているのは今に始まった事ではないのだが、
今日はその度合いもことさらだ。

ジーザス・クライストが崩御し、葬送の儀が執り行われるのは今
日の夕刻7時から2時間だ。

葬送の儀には全陰陽階神の参列が義務付けられている。わけでも
陽階枢軸であるユージーンが参列しないという事は断じてあり得な
い、

神は風邪をひいたりはないし、急病だといっても不自然。以御
はユージーンが仮死状態にあるという事実をもはや隠し切れないと
感じていた。頼みの綱である荻号は法務局への出頭要請に応じてい
るらしく、連絡がつかないのだと彼の第一使徒である二岐は淡々と
した事務的対応で説明する。夕方までにユージーンが復活する見込
みがないとしたら……どうする。

逃げられない、と以御は思った。

ユージーンは不死者であり絶対不及者の器となるべき存在だと陰陽階に知れてしまえば、彼はどうなるというのだろう。彼はおそらくもう、ユージーンとしては見なされはしない。次に神階が考えるのは、かの器を、どのようにして破壊するかという事に尽きる。

不死者を殺す事ができないとすれば、恐らく最初の発想は分割と凍結だ。彼の神体をばらばらに切断し、一つずつを厳封して個々に絶対零度で凍結するのが妥当だろう。それが物理科学的現象であるかぎり、分子運動の捕捉から逃れられはしない。以御はユージーンを破壊することが悪いことだとは思わない、むしろ完全に破壊される事は自殺を図ったユージーンにとっては本望でもあろう。

だが……それをやってしまえば、もう後には引き返せない。

器を失ったINVISIBLEがどう動くのか予測もつかない。

むしろ、INVISIBLEの機嫌を損ねる方が危険ではないのかと思うだけだ。

「どうすべきなんだ、荻号殿……」

＊

当の荻号は法務局での取調べを終えて大門を出ると、針の12本ある錆びついた懐中時計をつまむようにして目の前にぶらさげて見た。結局、ジーザスの遺体が荻号の部屋で発見されておきながら、法務局は荻号の殺害証拠を挙げる事ができなかった。

葬儀は7時から執り行われる。

陰階神である荻号も必ず参列しなければならなかった。彼は周囲に目がない事を確認すると、執務室に戻らず、陽階のユージーンの執務室へ瞬間移動を行った。

荻号を罵りながら頬杖をついていたところ突如現れた荻号に、以御は驚いて立ち上がった。陰口を聞き付けてやってきたのだとしたら、相当な地獄耳だ。以御が口を開きかけたところを軽く手をあげて制された。

「何も言うな、言いたいことは解っている」

「何も言わずにはいられますか！ 主が葬儀に参列しなければ、もはや隠し切れません！」

「軍神の儀式用の聖衣をよこせ」

荻号は手をずいっと以御に突き出す。

「は！？」

「何とかしてみせる」

荻号は儀式用の聖衣を以御から受け取ると、部屋の隣にある更衣室に勝手に入ってしまった。以御はうっかり渡してしまったが、よく考えると世界に一着しかない軍神固有の儀式用の聖衣を簡単に他神の手に渡してしまった事になる。

とはいえユージーンではないのだから悪用などできる筈もないが、相手は荻号だ。何を考えているのか解らない。汚されたり、破られたりされれば困る。中に押し入って取りかえそうかと考えていると更衣室の扉が開いて、中から儀式用白衣を纏ったユージーンが涼しい顔をして出てきた。以御は狐につままれて、とんでもなく間拔けな声を浴びせてしまった。

「は？ ユージーン？」

「んなわけあるか、俺だ」

目の前にいるユージーンから、彼より少し低い荻号の声が聞こえてきた。腹話術でもしているかのようだ。しかし見た目には何一つユージーンと変わらないのに、彼は先ほどまで荻号の着ていた聖衣を手をしている。どうやって化けたのかは解らないが、これほどそっくりなら神々を騙せるかもしれない。

「しかし、主を演じきれるものでしょうか」

「以御、心配には及ばない」

今度はおっとりとしたユージーンの声がした。

そうか、荻号はユージーンの記憶をバックアップしているとは言わなかっただろうか。荻号の口を借りて話しているのは、ユージーンの意識そのものなのかもしれない。だとしたら、彼自身が彼を騙るのは難しい事ではないだろう。

「一体、どっちなんですか！」

「なんてな。俺の中にはユージーンの記憶もあるからな。うまくいくさ」

「しかし、そうするとあなたは葬儀に参列できませんよね」

以御は重要な事に気付いていた。

「構うものか。荻号ってのは昔からそういう奴だろ。参列しなかったとしてもいつもの身勝手だと思われるだろうさ。まあ非難は轟々だろうがな。一方のユージーンは義理堅く忠義に厚い神だ、どちらが参列すべきかは言うまでもない」

荻号は彼の脳の中にユージーンの意識を再形成しているようだ。彼は自らの立場より、ユージーンの立場を第一に考えて行動している。

以御は昔から荻号という神の本質がつかめない、しかし一見ぶっ

きらぼうで突き放したように接しながらも、彼は誰よりも慈悲深いのだと感じた。彼の中には確固とした信念があつて、それを貫くためには少々の誹謗中傷や体裁など気にしない。純白の白衣を丁寧に調えながら、荻号は部屋を出てゆこうとした。

以御は注意深く表情を見て、ああ、彼はそうは見せないが疲労困憊でボロボロなんだな、と見抜き氣遣う。二岐は氣付いていないのだろうか。彼を休ませなければ……いかに完全と思われる彼でも、決して完全な存在ではないのだろうか。

荻号は以御の心配をよそに、へらりと手を振っておっとり微笑むと、ドアを出て軍神のフロアをゆっくりと通り過ぎ、ユージーンの使徒たちに取り囲まれながら歩いていった。

荻号は回廊を歩きながら、彼の意識の中で語りかけてくるユージーンの言葉を聞いた。

”ありがとうございます……”

”寝ている、ユージーン。まだ起きずともよい”

ユージーンの意識はノーボディの意識の中、ゆりかごに守られるように漂っていた。彼の意識と混ざり合う中でユージーンの意識が感じたこと、それはユージーンの背負うものとは比較にならないほどの懊悩だった。

彼の意識の中は混沌として鬱積した森のように、灼けつき乾ききっていた。それは肉体的な苦痛もさることながら、精神的なものは壮絶なものだ。

一時の安息もなく幾百億年もの苦痛を味わった者はこうなるのかと思うほど、無尽の絶望と虚無がそこにはあった。自殺を図ったユージーンの心はノーボディ (Ultimate of No bo

dy)の意識の中で彼の意識と触れ合ううち、徐々に癒される。

広大無辺の砂漠の中に、オアシスのごとくユージーンのための快適な居場所を作ってくれていたからだ。ユージーンの意識は絶望の淵から、いかにその絶望と戦うかを考え始めた。彼がそう導いてくれたからだ、ユージーンは闇の中から活路を見出してくれた彼に礼を言いたかった。思わず話しかけたのは、そんな気持ちからだ。

” 吾が力は、急速に衰えつつあるな……傷ついた汝をすら、眠らせておけぬとは”

” 何かできませんか。あなたの力になりたいのです”

” ……気持ちだけでよい”

荻号は強引にユージーンの意識を奥に引っ込めるとやや早足で歩き、葬儀開始直前に斎場に滑り込んだ。

壮麗な祭壇が一夜のうちに築かれ、神々の手向けた白い花輪が祭壇いっぱい飾られていた。

闇の中、夥しい数の燭台に点された炎が幻想的な光景を生み出している。

彼の功徳を偲ぶ声や啜り泣きが方々から聞こえ、荻号は沈痛な面持ちでユージーンの座るべき陽階枢軸の席に腰掛けた。ちょうどその隣には第4位、音楽神 ケイルディシャーⅡムジカが着座している。儀式用の白衣を纏っているせいか、肌の色から髪の毛から、真っ白のいでたちになっている。

唯一アクセントがあるとすれば、若干毛の先が赤く変色している事ぐらい。上から見るとまるで朝顔の花弁のような繊細なグラデーションを成している。彼は荻号に気付くと、声をかけてきた。

「惜しい方を亡くしたな、ユージーン」

「ええ、かの御方は陽階の希望でした」

荻号はユージーンの口調をそっくり真似ながらも、実際にそう思っていた。

ジーザスを亡くしたのは痛い損失で、それは全てINVISIBLEを甘くみた自分の責任だ、と。

ムジカは陰階神の席を首をのばして荻号の出欠を確認する。全神が参集する中、一柱の席があいていた。ムジカはそれを見てルビー色の瞳を僅かに曇らせた。

「渦中の人物、荻号さんは欠席か……あるいはあの噂は、本当なのかもな。お前もそう思うだろう？」

「わたしには真相はわかりません、しかし先代極位の葬儀に参列しないとは……嫌疑をかけられても致し方ない非礼かと」

荻号は何の固執もなくユージーンの口を借りてしゃあしゃあと非難する。

ユージーンが憚らず誰かを非難することなどなかったので、ムジカは目を丸くしたが、それについてどうこうは言わなかった。こいつも言うようになったな、とその程度の事だ。

「そうだ……荻号さんは疚しい事がないなら今日の葬儀に参列すべきだった。様々な憶測を生むだろうに。それにしてもお前も大変な任務だったな、身体罰は相当な苦痛だった事だろう。何故人間を、助けたくなったんだい？」

「それは……よくわかりません」

「お前こそよくわからん奴だねえ」

荻号は何も答えずおつとりと微笑んで黙礼した。

ムジカはその様子を見て何かを言おうと口を開きかけたが、開式を告げる定時の鐘が鳴ったので口を閉ざした。使徒たちによる祈りの聖歌が重厚なオルガンの調べに乘せられて斎場に浸透する。

この葬送曲はムジカによる作曲で、多重編成による古典的声楽曲として見事に仕上がっていたが、ジーザスのために作られたものではなかった。極陽から順にジーザスの遺体に献花を行い、礼拝を済ませてゆく。普段聖印を切る事のない神々もこの時ばかりは哀悼の意を表し、最高敬意を示す聖印を死者に切り送る事が義務付けられている。

荻号はユージーンの聖印など見たこともなかったが、少しも動揺しなかった。

第5位 光神、レディラムアンリニア、第6位 史神、レヴィティクスIIディミトリ(Levitics Dimitori)の礼拝が終わり、ユージーンの姿をした荻号は起立し、生花を取って丁寧に作法に従って参列者に礼をする。次にJesusの遺体の前に歩み出て膝をつき、ユージーンの固有の聖印を切り送った。ユージーンの聖印は三つの動作を伴うものだったが、その所作は完璧で誰も不自然さを見抜く者はなかった。

陽階全100神の礼拝が終わると、次は陰階神の番だ。

極陰であり破壊を司る女神、すなわち陰階かねとお第1位ゾーナIIイクシメナ(Zona Iximena)、置換名めく鐘遠 恵の頬には僅かに涙の痕が残っていた。極陰はジーザスと長きに渡り懇意に交流しており、お互いによき理解者だった。

陽階神のみならず陰階神からも偲ばれるジーザスという神は、陰陽を繋ぐ銚かすがいだったに違いない。荻号を除く陰階神全神の礼拝を終え

ると、陽階を代表して極陽が弔辞を述べた。

極陽はジーザスの突然の死にも混乱することなく、冷静沈着で落ち着いており、特に感情をあらわにすることもなく彼の生前の略歴と功績を最大限に賛美し、彼の冥福を祈る言葉で締めくくった。

極陰も感情を押し殺し、冷静に務めようとした。

両極位ともに風岳村に端を発した一連の神階の混乱を、これ以上広げるわけにはいかないという共通の認識があったわけだ。

滞りなく式が終わる事かと思いきや、最後の閉式の宣言をする筈の比企が席を立ち、語気を荒げこんな事を切り出した。

「ご会葬の諸神、本日は公私ともに多用中にもかかわらず会葬を賜り、誠に感謝にたえぬ。我々は真の光を失った。爾後は我等一丸となって故神の御遺志を受け継ぎ、神階の発展のために一層の尽力を致さねばならん。神階は故神、ジーザスⅡクライストに哀悼の意を示さぬ者、そして故神を弑逆奉った者を……断固として容赦はしないだろう」

荻号はかつての弟子の決意みなぎる言葉に、表情ひとつ崩さずじっと耳を傾けていた。

比企は何としても、復讐を果たすつもりでいる。

その気迫が痛いほどに伝わってきて、彼はふと俯いた。

彼の愛した弟子の澄んだ瞳が憎悪に滾る様子は見るに耐えなかった。そしてそう信じ込ませ追い詰めてしまった彼自身にも、さすがに嫌気がさしていた。全てを打ち明けてしまう事ができたら、どんなにか楽になれるだろう。

だが荻号はそうするわけにはいかなかった。彼の子らを愛し、彼

等の生を尊く思っていたからだ。

葬儀が終わり、全神がジーザスの棺を見送ると、荻号は足早に斎場を後にした。

軍神の執務室に戻り以御に荻号の聖衣を返却してもらわなければならない。

ユージーンの極陽への義理立てのためにも、極陽に挨拶をせずに出てきてしまったのは悔いが残るが、下手に居残って正体を見破られてしまう方が尚悪い。

ひとまず、ユージーンとして葬儀に出席したことに意義がある。彼の健在をアピールできたのだから今はそれでよいと思う事にした。

ところが。

長い空中回廊を歩いていると、明らかに後ろをつけてくる足音がある。気配を巧妙に消していて、誰がつけているのかはわからない。荻号は歩調を緩めず一定のペースで歩いていたが、一本道に差し掛かり人目がなくなったので振り返った。

背後にはぴったりと、ムジカがつけてきていた。

あんなに早々に撤収したのに、よくもついてこれたものだ。感心してしまった。

「そんなに急いで、どこへ行く？」

「少し用を、思い出しまして」

荻号は焦らず堂々として、ユージーンの口調を真似て応じる。

しかしムジカはどうやら、とっくの昔に気付いていたようだ。軽く首を振るのが覗えた。ジーザスを殺害した者として警戒をしてい

るのか、杖状音域増幅神具 レクス・ノースター（Rex No s
ter）を取り出して戦闘モードにして握っている。

ムジカは以前、荻号と交流戦を行い唯一引き分けたことのある神だ。

たかが陽階神として侮ると火傷をする。ムジカの瞳が、血のように赤く輝いている。

「らしくないな、荻号さん。姑息だ」

「絶対音感（sense of absolute pitch）……か」

ムジカは荻号の演じるユージーンが、音声を出していないのを音楽神特有の能力”絶対音感”によって見抜いていた。ノーボディはいかなる者の姿を借りようと、その声を発する事はできない。

彼に出来るのは口を動かし、そして同時に相手の脳に伝える事だけだ。殆どの場合、その者の声と信じ込ませる事ができた。

だが音波解析のスペシャリストであるムジカにおいては、先ほど二、三会話をした時に見抜かれていたらしい。それを敢えてあの場で問いたださなかったのが流石に、手だれている。彼の子らを騙すのはどうも、一筋縄ではいかない。

「本物のユージーンはどこにやった……？ まさかユージーンまでも手にかけてってんじゃ、ないだろうな——」

ムジカの口調は、説明次第では死を覚悟でこれから一戦やりあうことも辞さない。

そんな意図を過分に含んでいた。

第1節 第30話 無音のレクイエム（後書き）

挿絵（筆者絵注意） ヴィッシュヌークリシュナ

<http://lizreel.web.fc2.com/gallery/physics/vishu.htm>

第1節 第31話 元素崩壊の発動と人生負け組 築地 正孝の拔擢

荻号はしばし待った。

が、ムジカは睨み合ったまま、けしかけてくる様子がないので、荻号は意外そうに首を傾げる。

「どうした。かかってこないのか？」

「神具を抜かない丸腰の相手と一戦交える事はできない。抜け！」

「抜けも何も持ってきていない、神法を気にしているのか？ やりたいならやれ」

「我は楽神 ケイルディシャー||ムジカ、逆臣某を成敗せんとす……。いざ尋常に勝負せよ！」

再戦、といった和やかなムードではなかった。

ムジカは天誅殺の意を律義に告げて名乗りをあげ、神速の第一撃を浴びせかける。

彼の攻撃が荻号に達する直前に、荻号は指先でちよいちよいと空間座標を操作し基空間に二者を転移させた。

ムジカは夜闇に視界を奪われる。

神階の回廊を壊すわけにもいかないし、騒ぎが目立つとまずい。宇宙空間に放りだされた神々は真空中でも窒息はしない、それを見越してのこと。

荻号は目前で掻き消された攻撃を軽く腕組みをしてやりすごし、ムジカの次の攻撃を見極めようとした。見た目にはユージーンが、

余裕酌々ですました顔をしているように見えるので胸がわるい。最悪なことに、空間法則を歪める勅声ちよくせいという特殊な周波数の音波の攻撃は、転移直後に失効させられてしまった。

音が伝播できない真空中では、地上では絶大なる効力を持つムジカの殆どの能力が封じられる。

ムジカは恐るべき大敵と対峙しているのだと、再認識せざるをえなかった。

丸腰の相手を前にしているというのに、勝てる気がしない。しかしそれを知って尚更のこと、荻号と同じAXを名乗るムジカは彼と刺し違えてでも撃ちあってみたいという戦闘本能が疼きはじめる。

ひどく危険で、破滅的な衝動だった。

過去千年分の位申戦の録画で研究してきた荻号の戦い方はまるで柳のごとくだ。

決して攻めはせず、柳の揺れるごと受け流して相手を自滅へと追い込む。その真価は一度として発揮されてはいない。

ムジカは潔く神具を手放し、彼にとっては圧倒的に不利となる肉弾戦の覚悟を決めた。荻号はユージーンの姿をしたまま元に戻ろうとしないのが腹立たしいが、細かいことを気にしている場合ではない。真空中なので不満を述べる口もない。

彼に牙を向けると決断した瞬間、ムジカは生死の決断をした事となる。

荻号はやれやれ、といった顔をユージーンの表情でしてみせて、正面を向き直った。

「気が済むまで撃ってこい。命までは取らんよ」

”何をっ!”

部下であるユージーンに見下されたように感じて、ムジカの白い顔に血が上った。

とはいえ、音波の届かない真空中では荻号に憎まれ口をたたく事もままならない。

地上では不自由な声を持つ荻号だが、真空中は彼のフィールドだ。彼はもともと宇宙空間で生じた、神とは異なる存在なのではないかとすら思われる。

ムジカは自ら内部に溜め込んだアトモスフィアを爆発的に放出する事により加速度をつけ、重く俊敏な正拳の一撃を繰り出し荻号の頭部の粉碎を狙う。

荻号はそれをのけ反ってかわしながら、すれ違いざまにムジカの腹部をそつと撫でていった。

荻号に触れられた腹部は大出血を起こし破壊され侵食されているのがわかるが、ムジカはそれを知りつつも攻撃の手を緩めない。近い間合いに飛び込んだと見るや、洗練された足技を荻号の背に重いハンマーのように叩き込む。真空中ではフィジカルギャップをうまく形成できないため、その層数は測定不能とされている荻号の重厚なギャップに粉碎されることもなく彼の神体に嘘のように攻撃が届く。声は使えないが、ハンデはお互い様だ。

荻号の背、いやユージーンの背は僅かにしなったが、少しもこたえてはいない。続いて頸椎。ムジカは渾身の力を込めた連撃を的確に急所に穿ちこむ、それは神の急所をとらえていた……筈だった。

やったか、と思いきや何事もなかったかのようにぱつちりと涼しげな瞳を合わせられ、次にムジカの天地は覆されて弾きとばされた。何に当てられて吹き飛ばされたかわからない。今度は荻号はムジカに触れることもなく。

基空間中は空気抵抗という障害物がないので、アトモスフィアを逆放出して止まらなければ慣性力で永遠に吹き飛ばされたまま戻れない。更に悪くすれば、逆方向からの慣性力を加速度にして荻号がより強い一撃を叩き込んでくる可能性がある。

ムジカはコンマ数秒後、何とかこらえて真空中に踏み止まった。

とん、と背後に弾性のある何かが当たる。荻号を見失ったと思ったら気配を完全に消したうえに回り込まれて、背後をとられていた。

ムジカの視界の端に、金糸の縫い込まれた純白の聖衣が見える。余裕を見せ付けるかのように、彼はユージーンの姿を借りたままだ。「まだやるかね。気が済んだのなら傷の手当をしてやるが……」

荻号の声は優しくムジカの頭の中に浸透してくる。まるで浸透圧の同じ液体が、脳内に注ぎかけられるように心地よい波長。

これほど至近距離でマインドコントロールでもかけられてしまえばひとたまりもない。ムジカはとにかく距離をとらなくてはともがいたが、荻号はムジカの手首を後ろ手にして捕えた。

軽く握られているだけなのに、びくとも動かない。これが……格の違いというものなのか……！

何故これほどまでの実力差があるのか、彼ははったりではなく三

階最強の存在だと。

今更のように見せ付けられている。荻号はムジカが恐怖心かられているのを、不憫だと思ったようだ。

「そう怯えるな。マインドコントロールなどかけはせんさ。ほんの少しだけ話を聞く耳があればな」

話を聞けというのだろうが、黙って負かされるのはムジカの気がおさまらない。

何か活路はないものかと、しきりに目を動かし周囲の景色に注意を払う。

ムジカの焦点が不意に一点に定まった。ムジカはそれを見るなり、一瞬出来た荻号の隙についてバックハンドブローを頸部に撃ち込み、彼の膝を踏み台にして蹴り付けその場から跳び下がった。それとほぼ同時に荻号に向かって光が炸裂し、辺りは閃光に包まれた。ムジカは千載一遇の好機を作った"彼"を振り返った。

「加勢するぞ、ムジカ」

彼の声は、荻号ほど心地よくはないが同じようにムジカの頭の中に浸透してきて、ムジカはその違和感に戦慄した。だがムジカにとってはこの上なく頼もしい助太刀、荻号の戦術を誰よりも知る彼の唯一の弟子が異変に気付き馳せ参じたのだ。

陽階神第2位、比企寛三郎が伝家の宝刀、懐柔扇かいじゅうせんを抜いている。

懐柔扇は神銀とよばれる硬い金属でできた鉄扇のような形状の神具だが、比企がこれを抜いた機会は、ほぼ一度もないといっている。

比企は自ら作り上げたこの神具の機能を明らかにさせないためだけにXX（文型）を名乗って武力での試合を避けてきたが、比企の性は真性の武闘派だ。

「同期性意思伝播に超空間追跡転移、これは貴様に学んだ技術だったな、荻号。因果なことだ」

「教えてやったつもりは、ないのだがね。強制転移の痕跡を見つけてきたか。お前の私恨に付き合ってやるつもりはない、ムジカには怪我をさせている。早く片を付けて手当をしなければ」

「何だと？」

ムジカは喋れないながらに、自分には構うなという仕種をしてみた。

比企は荻号の性格から意味もなく致命傷を与える事はしないと見抜いていたので、致命傷があるという脅しには屈しない。致命傷を与えたという弱みに付け込み、早期決着を狙う寸法だろう。昔から彼の好む手だった。比企は荻号から一瞬も目を離さないままムジカに労りの言葉をかけた。

「どれほど深いか知らんが、傷が痛むなら休んでおれ」

比企は荻号に殺意をむき出しにして睨みつけながら、和服を模した聖衣の袖をたくり上げた。

カチリ……と懐柔扇をスライドさせ振りかぶると、最外殻のリミッターを外し扇を全開にして射程を絞り込む。

比企はこのような衝動的な機会ではなく、じわじわと周囲を固めてから荻号を殺す腹積もりだったのだが、そう悠長にも構えていられなくなった。創世者の不穏な動きに呼応するかのように突如として陽階神を虐殺しはじめたのは荻号の方だ、ユージーンに毒手が

及んだと知り、我慢に我慢を重ねてきた比企の堪忍袋の緒が切れた。沸々と湧き上がる荻号への混濁した怒り。

”半減期攪乱演算中枢、2794式展開……元素崩壊促進！”

比企は問答無用に、最大出力で懐柔扇にコマンドを与えた。

懐柔扇は荻号の持つ最強の神具、相転星と同じく物理現象攪乱装置であり、 α 崩壊や β 崩壊により放射性同位体の元素が遷移する現象を安定化している全元素に誘導して放射性同位体化を促し、放射性壊変系列を攪乱するという禁断の能力を持つ。

つまり対象の元素組成を完全に他元素によって置換し生命活動の破綻を招くもので、即死は免れない。試合形式をとる位申戦では絶対に発揮できない影の性能だ。放射性壊変は不可逆性変化であるため治癒も根本的に不可能である。

比企の懐柔扇から放たれた壊変系列が瞬間的に荻号に収束し、荻号の神体は元素崩壊に襲われた。

荻号を構成する一つずつの元素が異なる元素に置換され、崩壊してゆく。

彼は驚いたように目を見開いたが時既に遅く、強い光に溶かされてゆくように音もなく破壊されていった。

真空中に彼であった元素が飛散し、後には基空間の暗黒と虚無だけが残る。ムジカは悪魔のような業と一瞬の出来事に我が目を疑った。

彼はわずか一瞬のうちに荻号を葬り去ったのだろうか。嘘ではないかと何度も周囲を見渡したが、荻号が死の間際に転移した痕跡もない。

遂に、仕留めたのか……？

比企は荻号がすっかり消滅したのを十分に時間をかけて確認すると、内部出血の止まらないムジカを助け起こし肩を貸した。

”仕留めましたか……?”

「そうだな……だと、いいが」

” ユージーンはやはり……殺されたのでしょうか”

「残念だが、もはやこの世にはいないだろう」

比企は警戒を怠らない。

元素崩壊を起こして塵も残らない程に徹底的に破壊をしたというのにだ。手負いのムジカを氣遣ってそれ以上は時間をかけず、比企は超空間転移で神階へと戻っていった。

そして――。

基空間の全てが暗黒へと帰そうとした時、虚無の静寂の中を元素がひとつ、またひとつと急速に会合していた。あたかも一つ一つが意志を持つかのように。無数の粒子の遡上への渴望は凄まじいものだった。

目には見えないそれらは次第に集塊を成し、放射性壊変と逆の現象を巻き戻すように分子を安定化させ、次々と結合しながらしだいに人型を生じ……

人型はアルティメイト・オブ・ノーボディ (Ultimate of Nobody) の影へと映じていった。

「比企よ……汝はやはり未熟だ。肝心なものを見逃した――時間軸

をな」

彼は蘇った禁視を気だるそうにまばたきさせた。

比企の神具、懐柔扇の性能を知らなかったが、比企がコマンドを唱えた瞬間に絶対時間を固定することによってやり過ぎた。何が起こってどんなダメージを被ってもその時点にフィードバックするように時間を操ったのだ。

彼はしばらく俯いていたが、思い出したように再形成したユーージンの意識を呼んだ。

「無事か」

”は、はい。なんとか……”

「吾を滅ぼす事も能わねば、創世者に挑むもおこがましい」

強すぎる……強いともう、そんなレベルではなくて。超越している。ユーージンは彼の中に入っていよいよ、彼の戦うものの途方もなさ気付かされたのだった。

この全能の彼をも支配下に置くINVISIBLEという創世者、勝てる筈のない不毛な戦いを彼は続けてきたのだろうか。

神々には最初からINVISIBLEに挑む資格などなかったのだ、今になって見せ付けられた。

「吾の内に在ってあらゆるものを観ておけ……。創世者に抗うは吾を滅ぼす事でもある」

”あなたの記憶に触れて感じました。……そしてわたしは、あなたのお力になりたいと”

「そうか……それは心強いことだ」

彼は荻号の姿に戻り、空色の瞳を閉ざした。ユージーンは彼にとってたったひとりの、理解者であるのかもしれない。

そういえば以御に返すべき聖衣は先ほどの戦闘ですっかり溶けてなくなってしまったが、どうしようもなかったな。と荻号は他人事のように思う。多少以御に文句を言われるだろうが、新たな聖衣は支給されるだろう。ユージーンが復活して、記憶を取り戻す頃には全てが元通りだ。

しかし荻号の方はもう、これほどまでに神々の混乱を招き嫌疑をかけられていては、荻号要として神階に留まる事は限界と感じていた。

神階を、去るべきか、否か――。

＊

織図はその日の夕刻、ジーザス・クライストの葬儀に出席するということで、恒の家には来なかった。

ジーザスの葬儀という言葉は、よくよく考えると不自然きわまりない。

殆どの人々と同じよう、恒もジーザスは既に死んでいるものと思っていたからだ。

今度はあと三日待てばイースター（復活祭）でお祝い！ という訳にもいかないのだろうか、などと思う事は不謹慎な事と知りつつ。

恒は志帆梨の作った一品であるゆで卵のサラダを食べていた。メファイストフェレスはまたしばらく風岳に滞在するということで、相変わらず社務所に泊まるのだそうだ。また今日も皐月と一緒に長話をしていることだろう。恒は家に母親がいてご飯を作っていたので社務所での外泊は遠慮した。

荻号に連絡を取ろうとしたが、葬儀があるとG L ネットワークの告知を見て知ったので彼の携帯電話を鳴らすことは自重した。しめやかに葬儀が営まれる中、荻号の携帯の着信音がどんなものかはわからないが、織図のようにふざけた着信音が鳴っては台無しだ。織図ときたら、あまりにも滑稽な着信音ばかり鳴らすので、深夜の静まり返った藤堂家に彼の携帯電話が喋りだした時には、神具の訓練で疲れ切っていた恒は初めて殺意を抱いたものだ。恐れ多くも、死神にである。

まさか荻号に限ってそんなことはないと思うが、あれでも万が一ということがあってはいけない。しめやかな空気がぶち壊した。

ジーザスの葬儀には第一種公務員である陰陽階の全神が出席しなければならぬということだが、ユージーンはどうするのだろうか……と恒は考えていた。

ユージーンが自殺を試みて死に損なったという事が神階に知られてしまったら、あまり彼にとってよくないのではないかと思ったが、荻号と織図がそのあたりのことはうまく言い訳してくれるだろう、とも思った。恒は将来陽階神になることが濃厚でありながら陰階神の知り合いしかいない。

このままじゃ陰階神になってしまうのかな、などと考えつつ志帆梨の作りすぎた鯛釜飯をせっせと口の中に詰め込むのは忘れない。

「どう、その釜飯？　ひつまぶしと、鯛めしと、それから牡蠣釜飯

にしたいの。三つ葉がたっぷりのつてるでしょ？ あとはね……」
恒の隣でぺらぺらと喋り続ける志帆梨は自分の店の、冬のオープンに向けてメニューを考えたり着々と開店準備を進めているようで、毎日明るい話題がたえない。

彼女はお喋りでひょうきんな織図が家にやってくるようになってからというもの、つられるようによく喋るようになった。

ついでに例の魚屋と分かりやすい恋に落ちているのも、明るくなった原因だ。それに彼女は化粧っ気がでてきて、もともと素の顔立ちでは古典的な美人だったのだが、メイクが上手になって現代的な美人になった。恋する女は何とやら、とは本当のようだ。

魚屋の若主人といい仲になるのも、時間の問題といったところだろう。彼女はこれといった用もないのに、相変わらず魚屋に行って魚介類ばかり買ってくる。も面白い加減、肉つけのあるものが食べたいな、と思ったが恒は言い出せなかった。

明日から夏休みという事で、恒は色々な心配事が落ち着いたら、母親と数泊のちょっとした旅行に行きたいなと考えた。朱音との海水浴とは別の話で、ちょっとした慰安旅行にだ。だがその前に、恒には避けて通れない大きな宿題が残されていた。

＊

相模原は楽しみにしていたベルギー観光を打ち切って予定より早く帰国をすると、下品なステッカーをたくさん張り付けたトランクを抱えたまま研究室に転がり込んできた。

ありったけの土産を並べてそれらを学生部屋に放り投げた頃には、松林は教授の帰国に気付いて徹夜明けの目を擦りながら、赤い歯ブ

ラシを口の中につっこみ出てきた。

松林は流しに吐き出して、口の中のものを片付ける。相模原は歯ブラシを置いた松林をそのまま目にも止まらぬ速さで教授室へと連れ込んだ。

松林が教授室の前を通りがかかるなりあっという間に部屋に飲み込まれていって、食虫植物も真っ青だな。と学生達は口々に言い合っていた。今日も研究の合間にパチンコに行こうとしていた彼らはがつくりだ。

「先生、予定より帰るの早いんじゃない？」

「えー、明日のセミナーあるんじゃない！俺データないねん」

「お前またか！夏の化学会までに間に合わんがな」

また教授室の向かいの学生部屋から聞こえてくる雑談を耳に入れながら、今週も築地はデータがないのかと相模原は眉間を押さえつつ、ごっそりと書類を移動させてできた猫の額ほどのスペースのデスクの前に、松林を座らせた。

「君の業績は、悪いようにはしない。だから私を信じてついてきてくれ」

相模原は前置きもなしに、いきなり本題に入る。口の中いっぱい歯磨き粉の味が広がっている松林は、教授が何を言っているのか理解できない。

さしあたり彼女は、教授が留守中にせっせと行った実験の結果を提出することにした。携帯電話に結び付けているUSBを携帯ストラップから外して目の前に置く。

「その前に、糖尿病モデルマウスのサンプル投与結果をお話しても？」

「ああ、まずそれを聞きたい」

「N（個体数）＝11のテストでは100 μ Lから1000 μ Lの
いづれの投与量でも、翌日には血糖値が正常範囲内に復帰しました、
何らかの薬剤なのでしょう。データはこのエクセルファイルに」

「つまり糖尿病も治ったのだね」

相模原はねぎらいのつもりなのか、甘すぎるジャムのたっぷりは
いった溶けかけのチョコレートを松林にしきりに勧めてくる。

今しがた歯磨きをしたばかりの彼女は小さく首を振って遠慮した。
相模原は勧めるのを諦め、朝食代わりに自分が二つも頬張った。ず
り落ちてきた赤い眼鏡をまたきりっと上げ直しながら、松林は教授
の意外な言葉に身を乗り出した。糖尿病の他に、何か治ったものが
あるのだろうか？

「も？　ですか？」

「私はこのサンプルの同定に全力を注ぐ、君も相乗りしてくれるな
ら歓迎だが……」

「お言葉ですが教授、私にも私のテーマがありますし」

「そうだな、確かに君は君の研究があるだろう。君のテーマに専念
してほしい」

あっさりと前言撤回をしてしまった教授に、肩透かしをくらって
しまつて、松林は取り敢えず話を聞いてみる事にした。松林は教授
のこの姿勢を見るまでは、さほど今回のサンプルに興味はなかった。
糖尿病に効く薬は存在しないわけではない、血糖値を上げ下げする
薬剤は既にいくつか開発されている。今回のサンプルの効果の持続
性は素晴らしいが、それほど驚くような結果ではない。

「あの液体は何のですか？　返事はそれによります」

「何かは知らない、だがそれが"神の血"と呼ばれているとしたら、
どうだね」

「教授、そんなこと」

徹夜明けの松林はこの冗談に笑えない。教授は最近、大事な業績を留学生に盗用されたばかりだ。

疑心暗鬼になってそんな事を言い出したのだとすれば、どうコメントしてよいのかわからない。

「この歳になるまで信じはしなかった、奇跡というやつを、目の当たりにしたのだよ……。君が興味を持たないのなら一向に構わない。だが築地君を借りるよ、彼のデータにしてやろう」

「築地君は私の受け持ちの学生ですよ。それに彼は化合物の精製の収量が20%を切る学生です。またとない貴重なサンプルだというなら彼に任せるとなくなってしまうますが、よろしいのですか？」

「だが質量分析とNMR等の機器分析の腕と化合物の構造決定の腕は確かだ、君は指導教官でありながら、それを知らなかったのかね？」

修士課程2年生の築地つぎじ まいたか 正孝は相模原や松林の目を盗んではパチンコやスロットに行つて、どういうわけかいつもボロ負けしてくる筋金入りのダメ学生だ。

大体、ギャンブルなど確率的にいつても数回に1回は勝つ事ができるものなのに、毎回負けてしまうという事にある意味脱帽。

学年でも下から数えた方が早い劣悪な成績に、化学者としてはどうしようもない腕の悪さ。

どうやったら普通の学生は90%以上の収量を得られる筈の実験を20%を切るのかが解らない。松林からすれば、彼は大事なサンプルをそのあたりにぶちまけて、こぼしていると思えなかった。だが機器分析にだけは長けていて、その構造決定の腕は的確で、間違いないのは教授の言うとおりだ。難解な化合物の合成を生業とする松林の受け持ちの学生だが、どうやら教授は彼のよい部分を見

抜いていたらしい。

「ではこうしましょう、出来る範囲で私も協力します、しかし築地君を海のものとも山のものともわからないテーマを押し付けて弄ばず、ちゃんと修了させてあげてください」

「誰が押し付けると言ったかね……私が解析をする、そのサポートをしてくれと、言いたかったのだがね」

多忙のためもう何年もまともに実験をしていなかった教授が、直々に組成決定をすると言ったのだ。松林はまさに旅立とうとしているこの船に、直感的に乗らなければならない、と思った。それは築地が毎日、勝つか負けるかとやきもきしながら、玉の出る当てのないパチンコ台の前に座って千円札を突っ込むことと、それほどかわりはなかった。

＊

比企の超空間転移により彼の執務室に搬送されたムジカは、そのまま床上に横たえられた。

極陽の第一使徒として20年間も極陽に伺候し、極陽派の枢軸神として敵対していたムジカは彼の執務室に入れてもらった事がなかった。

比企の第一使徒の響 寧々が心配して駆けつけてきたが、比企は治療を彼女に任せず直々に治療にあたる。

荻号からすれ違いざまに喰らった傷は荻号自身が後ほど治癒することを想定して傷つけているので、普通に創傷として治療したのでは治らない。

比企は懷柔扇を再び抜き放ち、正確に損傷の程度をスキャンしてプログラムを組み、腹部に与えられた傷に分子標的治療を試みた。

荻号の攻撃はなんというか、えげつなくて比企は嫌いだった。

例えるならそれは、電子レンジの原理で傷つけられているようなもの。皮膚表面に派手な傷はできないが、荻号のアトモスフィアで内部は細胞レベルで破壊されズタズタになり、内出血を起こさせている。そんなことをするぐらいなら斬られた方がかもしれませんが比企は思うのだが、どうも彼の師匠は陰湿な攻撃を仕掛けるのが好きだ。

比企は荻号の弟子であった時期に学んだ、荻号の能力ひとつひとつに抗するための相反する性能を懐柔扇に付加していた。懐柔扇は荻号を滅ぼすために比企が苦心して創り上げた神具だといっても過言ではない。

「少し、痛むやもしれんぞ」

ムジカは極陽の使徒であったという過去を持つためか我慢強く、痛みを訴えはしない。

比企はその姿に感服すると、分子結合力を操作しムジカの傷を手際よく癒してゆく。寧々は比企の処置を見極めて、取り乱すでもなく、簡易ベッドを運びベッドメイキングをして病床を作り、次に鎮痛剤の入った点滴を運び、すぐにムジカの腕に打った。ムジカはようやく生きた心地がして、比企の治療と寧々の看護に感謝した。

「比企殿、何と御礼申し上げてよいか……」

「無事で何よりだが、爾後、突発的かつ感情的な戦闘は控えられよ」寧々の用意したベッドにムジカを移すと、比企は気が抜けたようにため息をつき、ベッドの端に腰掛けた。比企は彼のライフワークでもある荻号の抹殺という大仕事を終えて、燃え尽き症候群になっているというか、どこか気落ちしているようにもうかがえる。比企

は役目を果たした懷柔扇を懷におさめ、やや速すぎる点滴の滴下速度を緩める。

ムジカは痛みも和らいできて、身体を起こしかけようとすると、比企と寧々に肩を抑えられて制された。

「暫くは動くな。奴の攻撃は、後からじわりと効いてくる……何もないとわかるまで気を抜かず、横になっておれ」

「……はい」

ムジカは寧々に熱いおしぼりをもらいながら、力なく頷くしかなかった。

「これから、どうされるのです？」

「そうだな……まだ機は熟しておらんのだ。荻号に傾倒する陰階の神々と全面戦争にならねばよいが……」

比企はそれだけが心配だった。

荻号は陽階からの酷評とは真逆に、陰階神からの絶大なる支持を得ている。陽階2位の比企が、荻号の嫌疑を十分に立証もできないうちに彼を断罪して殺してしまったとなれば、陰階神がどのような行動に出るかとはわからない。ましてや比企は立法を司る神だ、その比企が法の精神に叛くようなやり口で私刑により荻号を殺したとなれば、反感と報復は避けられまい。陰階の戦鬪的ポテンシャルが陽階を遥かに凌ぐものだということは、かつて陰階神であった比企が身をもって心得ていた。

「機が熟す、とは？」

「己は陰階と陽階との軋轢を生まぬよう、極位となってから荻号を殺すつもりでいたのだ」

「そのために、極位を？」

「そういうことだ……だが第二位神の身分で荻号を殺してしまった
今となつては致し方がない、極陽に戒嚴令の發布を乞う」

比企が寧々に顎で指図をすると、寧々は一礼して控え、手続きを
するために早足で退出していった。彼女は比企が何も言わずともそ
の意を汲み取り、彼の思うままに遵う優秀な第一使徒だ。あうんの
呼吸。ムジカはこの様子だと、位申戦ですらあるのかどうかかわから
ないな、と思う。

比企の目的は極位などにはなく荻号を仕留める事にこそあつたの
なら、それを達成してしまつた今は誰が戒嚴令を發布しても同じ事
なのだろう。

「極陽に、協力を請うのですか？ 生物階の直接統治を掲げ、極陽
とは相反する信念をお持ちのあなたが極陽に頭を下げるのですか！
？」

「それがどうかしたのか？ 頭の一つでも二つでも、下げればよか
ろう。減るわけでもなし」

比企は何の固執もなく、極陽に頭を下げるつもりの方だった。

事あるごとに極陽に噛み付いて、あれほど敵対していると見せか
けていたのは、何だったのだろうか？ どこを見渡しても、策士ばか
りだ……ムジカは信じられないといった面持ちで白い頭を僅かにふ
つた。

第1節 第32話 名も姿もなきものとユージーンの間答

早瀬ら研究グループは井村と交代で石沢家の見張りを続けていた。

二人一組で24時間の監視だ。夏休み第一目の今日、朱音はまだ寝坊している。肌布団をけつり飛ばして寝返りをうったところで、朝食を作って食卓が片付かない母親に起こされていた。今のところ彼女ら一家はつまらないほど人間らしい暮らしを送っている。

井村は早瀬に引き継ぎをした後、休憩の時間を持て余していた。二交替制のきついシフトなので仮眠をとるべきなのだろうが、宿の座敷に伏臥して窓際にいると盆地の夏の日差しは想像以上に眩く、とても仮眠をとる気にはなれなかった。彼は腕時計で次の交代の時間を確認すると、ぶらぶらと風岳村の村内観光に出かけた。彼女らに姿を見られるのはまずいが、彼女らの位置は携帯電話に転送されてくるGPSで把握できるので鉢合わせということにはならない。

風岳村は四方を山々に囲まれた盆地であり夏は比較的過ごしやすく、涼しい気候を利用して果樹園なども点在している。

村の人口はおよそ3500人ほどで、広大な農地を利用して農業と林業で主に生計を立てているようだ。

村民はほとんどが農民で、肥料の入ったりヤカーなどを押しながら徒歩でぶらぶら歩いている。

井村はなるべく人目につかないよう村のはずれを散歩していて、ふとうらぶれた神社にやってきた。

神社の裏の杜には下草が生い茂り、小さな赤い鳥居も苔むしている。祭神は知らないし由緒正しい神社ではないようだが、立派な社務所があった。中を覗き込むと電気はついていないが、つい先程ま

で人が中にいて茶を飲んでいたらしく、湯飲みが二つ置いてある。

井村は周囲を見回して誰もいないことを確認すると、かけ流しになっている涼しげな手水場の杓を取り、冷たく清らかな水で手をそそいだ。深い杜の中にあるだけあって、気持ちのよい空気があたりを満たしている。神社は元来、街なかではなくこういう清らかな空気のよい場所にこそあるべきだな、と彼は頷いた。

井村の実家は代々神主の家系で、兄は実家の奈良県でそこそこ大きな神社の神主をやっている。

敬虔などはいかないが、井村にもそれなりに信心はあった。今年の正月も神社らしきものに参拝をしていないのだから、せめてこの村の神社でいつもの罪滅ぼしをしておくか、といったところだ。

擦り切れそうなしめ縄の巻かれた神社に控えめに参拝をして日蔭のある境内に腰掛け、少しまどろもうとした井村は杜の奥からごそごそ物音がするのに気付いた。社務所で茶を飲んでいたと思われるふたりが近くにいるのだろうか？

井村が気を抜いていると、びゅっ、と足元を後ろから疾風が駆け抜け、次に爆風のような風圧が襲ってきた。

井村はよろめきつつ息を殺して杜の奥の気配を捜した。

社務所を離れて少し神社の奥に分け入ると、下草が刈ってある開けた場所に、ピンヒールを履いた背の高い女がいて腰に軽く手をあてがい樹冠を見ている。女は異様ないでたち、真っ黒のドレスにビロードの大きな帽子を目深にかぶり、緩いウェーブのかかった艶やかな髪の毛は腰まで伸ばしている。田舎の村に似つかわしくないドレス。女の視線の先を追って視線を上にとげると、白いTシャツに短パンをはいた小学生ほどの少年が木の枝の上に立っていた。

高い松の木頂上にまで上っていった降りられなくなったのだろうか？

井村は手を貸そうかと考え、思いとどまった。

少年はトーン、と軽く松の枝を足蹴にすると手を広げてくると宙返りをうち、空中に静止したのだ。

井村は出て行かなくてよかった、と胸を撫で下ろし冷や汗をかく。少年もまた空を飛べるところをみると、翼こそないが天使なのかもしれない。

そしてそれを何食わぬ顔で見ている女もだ。状況から察するに、空を飛ぶ訓練をしている子供の天使を親天使が見守っているのだろう。この村には数名の天使がひっそりと住んでいるのだ、何と表現してよいのかわからない、とても神秘的な光景だと思った。

少年は天使としては例に漏れず、子供ながらに小奇麗なはつきりとした顔立ちをしている。毛髪は少しダークグレーがかって、瞳の色も日本人ではないようだ。女も年齢不詳だが、エキゾチックで美しい顔立ちをしている。このふたりが同じ人種とは思えないが……。

井村は彼らのことを早瀬に報告すべきかどうか迷った。とくに早瀬に知らせれば小躍りして喜ぶだろう、いくら行動学的スタディだとはいえサンプル数が多いにこしたことはないのだから。だが、ただ暮らしているだけで何か悪いことをしている訳でもなし、なんとなく気の毒だった。天使はこうして家族単位で暮らしているようだ。いくら人間ではないとはいえ曲がりなりにも人間と同じ姿をして、考え、話し、感情すら持つ彼らを一方的に捕らえて研究のために犠牲にする事は井村にとって良心が痛む行為だった。彼らの事を、ど

うしようなか、井村はそんなことを考えながらひとまずその場を離れようとした。

”FC2—Metaphysical Cube area 192, Burst Sprinter!”

(FC2—メタフィジカル・キューブ エリア192、疾風爆)

少年の雄たけびのような絶叫で、井村は振り返った。

少年は流暢な英語を操り、先ほどまでは持っていなかったルービックキューブを両手の間に浮かせている。

ルービックキューブは煌々とした光を放ち、次にそこを起点にして爆風が起こった。

先ほど井村が足元に感じた爆風はこうして生み出されていたのだ。次に少年は空中からふっと消え、ふっと地上に現われた。

井村は一瞬の光景に背筋を凍らせた……目の当たりにしたのは、瞬間移動というやつではないのか？ 同時に、彼は天使ではないと、天使をよく研究してきた井村は直感的にそう思った。瞬間移動ができるのだとしたら、今までに捕獲した天使たちは皆脱走に成功していることだろう、脱走ができるのにわざわざ捕まっただけで衰弱死してしまうとは考えがたい。

……ともあれこれは、脅威だ。井村はその場を去ろうとしていた腰をまた彼らの方にむけ、高鳴る胸を押さえつけてじっと様子を窺っていた。少年は女と会話をしている。井村には気づいてはいないようで、何とか会話を聞き取ることができた。厳しい顔つきで彼を見守っていた女が、コメントを述べた。

「飛翔も上手だし、神具の扱いもなかなかだしマインドギャップについては脱帽だけど、肝心な事ができていないわね」

「肝心な事？」

「アトモスフィアが全然貧弱だわ。それではいつまでたっても朱音を養えないじゃない」

井村は朱音の名が思いがけず出てきて一気に興奮した。彼らの会話を漏らさず録音したいと思ったが、手持ちのない今は井村の耳だけが頼りだ。手の中がじつとりと汗ばみ、顎にかけて緊張のあまりに出てきた鼻水が滴り落ちた。

「今は織図が朱音を養ってくれているわ。でも織図もいつまでもは来てくれないのだし……お前が朱音を養うのよ。そうでなければ、彼女は餓死してしまう。朱音にとつての主は、お前しかないの。もっとアトモスフィアが増えるように努力なさい」

今ここに、あっけなく一つの事実が明らかとなった。

あまりに他愛もなくそれが明らかとなってしまった、井村はこれは夢ではないかとすら思ったのだった。天使が必要としているのは、この少年のアトモスフィアとやらだ。それが何を意味するのかはわからないが、英語で *Atmosphere*（雰囲気）という事から直訳で察するに、気体の何かだろう。

この少年はアトモスフィアなるものを持っている彼女の主なのだ。それが足りないから朱音を養えないじゃないかといって、女から怒られている。彼はどこにアトモスフィアを持っているのか、井村には見えない。だが特定の気体、たとえば二酸化炭素のようなものだとしたら、精製して天使に与えてやれる。アトモスフィアの組成さえわかれば……もう天使を訊もわからずに虐殺してしまうことはない。井村は本来ならばこの少年をこそ朱音とセットで捕らえるべ

きなのだろうかと思った。だが瞬間移動のできるこの子を、どうやって……？

井村が混乱していると、少年はまた話を続けた。

「アトモスフィアはどうやって増えるのか、織図さんも分からないそうです。でも今は、この村に朱音を調査するためにやってきている研究員達にMCFをかけるのが先です。そっちの方に専念させてください」

「まあ、そうね。それでMCFは展開できるようになったの？」

「完璧です。でも人体に悪影響がないよう、もう少し練習をしてから行きます。研究員達は村の旅館にいるそうです……だから、金曜日にも」

井村はぞっとした！

この子は早瀬達の動きを知っている！ 自分達が朱音を監視しているということも、とつくにバレてしまっている。

何故だ？ カメラを仕掛けたのは昨日で、どのカメラもまだ朱音たちには見つかっていない。そして金曜日にかけると少年が意気込んでいる、MCFとは何だ？ 井村はそこを聞いたかったが、彼らはもう会話を打ち切ってこちらに歩いてきた。

井村は一目散に逃げ出して、真夏の日差しの中を必死に走った。足が千切れても心臓と肺が破れても、彼らには見つかつてはならなかった。

天使の脅威など比にもならない。

あの少年……”主”こそが真の脅威だったのだ、子供の”主”ですらあれほどの能力を持つのだから、大人の”主”は人類にとって

一体どれほどの脅威となりうるのだろうか……そう思いながら……。

井村は先ほど見た光景を、どうせこちらの動きは彼らに筒抜けになっっているのだから決して早瀬には言うまいと思った。金曜日に彼らが計画をしているM C Fが何なのか、見届けてからにした方がいいと思った。そして井村は金曜日、その場から逃げるべきだと思った。彼らは研究員たちの命まではとらないようだ、”人体に悪影響がでないように”配慮してくれるようだし、殺されるような事はないのだろう。

だが、おめおめとその場に居合わせて井村までM C Fとやらやられてしまったら、先ほど聞いた情報が無駄になってしまう。

M C Fが行われるであろう金曜日、井村は何としてでもその場から離れていて旅館の中に監視カメラでもつけてモニターをしていなければならぬ。M C Fの後に、一体何が起きているのか……。それを確かめねばならない！

彼は彼らの手の内を知っても尚、震えがとまらなかった。

＊

築地 正孝は地獄のセミナーを命からがらに切り抜け、喫煙室に煙草を吸いに行こうと教授室を通り掛かるや否やそのまま部屋に連れ込まれていった。昨日見た光景とまったく同じ光景。ボタン、と閉まったドアを見てぎょっとした向かいの学生部屋の学生たちは、その食虫植物さながらの様子にウツボカズラ教授と不名誉なあだ名をつけておもしろがった。

築地はもはやこれまでと観念して、しゅんと俯いて説教を聞く体勢に入った。

築地は修士課程2年生であるにもかかわらず、就職活動が終わって真っ黒な頭の他の院生達とは違って就職を決めておらず、頭も金髪と茶髪の織り交じった染毛のままだった。なんでも、これほどボロ負けを喫しているというのに本気でパチプロになるつもりもいる。格好はおしゃれだがだらしなく、擦り切れたジーンズを穿いている。いつもとろんとした腫れぼったい瞼で、焦点はどこを見ているのかわからない。とても成人しているとは思えない落ち着きのなさで頭をしきりに動かし、常に貧乏ゆすりをしている。

「教授、俺、トイレに……」

「嘘をつけ、嘘を！ さっきも長い糞にいつていたばかりだろうが」

相模原は築地の最後の抵抗をばっさと切って捨てた。一番前の机に座っていた相模原は、こそそとセミナー室の後ろにいた築地の行動をしっかりと察知していたようだ。

「はい……」

「それで、最近のデータはどうなのかね？」

「データはない」ということを、先ほど発表しましたが」

築地は先ほどのセミナーで他の学生達の発表の時間を割いてでも30分ほど怒られたばかりだ。さらに説教が続くのかと思うとうんざりする。

「そうじゃない、これの方だよ」

相模原はくいつくいつと右手をドアノブを持つようなしぐさで捻って見せた。

パチンコの収支がどうなっているのかを聞かれていると分かって築地の憂鬱な顔がさらに沈み込む。

「それが……でも、今日は勝ちます！ 攻略法を買ったんです！ 負けをがつつり取り戻して！」

「攻略法？ いくら出したのかね？」

「10万です！」

相模原はあいたた、と胃が痛くなってきた。パチンコの攻略法が存在すると本当に信じている馬鹿が現代にいたとは。

そしてそれで今までこつこつと奨学金を費やして何十万円負けたりとも知れない負け分を取り返せると信じているとは……だが、悪くないな。

と相模原は思い直した。彼が”神の血”を信じてくれたなら、いくらでもそれに賭けて、自分についてきてくれるに違いない。そんな甘い見通しがあった。だが、築地は相模原の事を徹底的に苦手にしていて、実験パートナーとなる事は絶望的のように感じられたし、相模原もこの金髪の男が苦手だった。

とりあえずはこの、一癖も二癖もあるどうしようもないダメ男の心に触れなくてはならない。それは相模原がこれまでに手がけてきたどんな化合物を決定する事より手を焼きそうだった。

「実験データも、パチンコも出ないとなると、君には何が残るのかね」

「だから、今日こそは……」

「勝てるのだね？」

「え？ まあ、はい」

築地は歯切れが悪い。

「では、私と勝負をしてくれたまえ。君が”得意の”パチンコで私に勝てなかったら、罰ゲームだと思って私のいう事を何でも聞いてもらおうじゃないか」

「え？ 教授が、パチンコを？ 俺と勝負するんですか？」

ビギナーズラックを信じているのだとしたら、甘いにもほどがある。

教授は厳格な人物だ、パチンコのパの字も知らないに違いない。いくら連敗続きの築地でも、さすがに素人に負ける気はしなかった。高い金を払って攻略法を手にしたのだから、負ける事はない。「そりゃ、いいですけど、今日？」

「今すぐにだ！ 支度をしなさい、大学の前のパーラーに行くぞ！ 軍資金は私が出してやる、ついて来たまえ」

教授はやる気満々で鼻息も荒く、すぐに上着を脱いでバッグを持って足取り軽く出て行った。

築地は貧乏が貧乏を呼ぶ貧乏ゆすりも自然と止まってしまつて、哑然として彼を見送った。

独立法人化が適用されたとはいえ元国立大学の教授が、こんな勤務時間まつ昼間から学生とパチンコに行こうとしているのだろうか。

＊

響 以御は長い金髪を後ろで束ね、執務室で第五使徒 紫檀からの報告書を読んでいた。

一日一殺以内と嫁に定められている割にはまた何人も殺して、今度帰ってきたら説教ものだなと以御は顔をしかめた。紫檀が今日も元気に殺人ができるのは、ユージーンの指令が滞りなく出されて効力を持っているからだ。ユージーンは3年分の指令を出しているの、彼が復活するまでの間の平和維持活動業務に懸念はない。

以御が疲れた目を擦っていると、深夜だというのに、アナログな内線電話がけたたましく鳴り響いた。

ちらりと時計を見やって、こんな夜分だというのにえらく非常識な奴だな、と舌打ちをする。神階の時間は、生物階での日付変更線上での時間を基準としている。地球上に展開させている軍神下使徒

からの連絡ならば深夜でも仕方ないが、神階内部からの電話だとすると非常識だ。いつものように3コール目で電話に出ると、

「はい、軍神下執務室で……」

『以御！このろくでなし！！』

受話器越しに女の大声が聞こえてきた。ユージーンに内緒で付き合っていた以御の彼女……などではない。

あまりにうるさいので以御は受話器を少し遠ざけてから、痛む耳を押さえ、反対の耳に受話器を当てた。

「うるせえなあ……開口一番、それかよ」

『主を殺されておいて、よく暢気にしてられるわね！ 第一使徒として恥ずかしいと思わないの！？』

「は？ 殺された？」

電話の相手は響 寧々、20年も歳の離れた彼の実の姉である。

比企の忠実な第一使徒を務める彼女とは、もう数十年は会っていない。いくら姉弟の仲とはいえ、仕える神が異なればもはや商売敵のようなものだ。優秀な白翼の一族である彼等は、陰階に所属する以御の弟、覚さとしを含め、全てが枢軸神の第一使徒を務めている。姉弟のうちでも最も高い能力を持ち、冷静沈着な姉が、わざわざこんな時間に感情的な電話をかけてくるのだからたまったものではない。だが姉からの連絡を懐かしむより、以御は荻号が何かトラブルに見舞われて葬儀に出席できなかったか、見破られてしまったのかと気付いて唾を飲んだ。

『おめおめと主を殺されて第一使徒だけが生き恥を晒すなんて、ほんつとに信じられない！ 今すぐ死になさい！ 主を守りきれなか

った責任をとり、切腹をして忠義を通しなさい!』

「姉貴、まあ落ち着けよ……ユージーンは生きていただろ? その証拠にジーザス様の葬儀には出席しているはずだ。俺には姉貴が何を言っているのかさっぱり……」

荻号さんよ。これじゃ話が違うぞ、これは一体どういう事だよ、と荻号に愚痴を言ってやりたくなった。

任せろと言ったから任せた、そして彼の事だからいつものようにうまく切り抜けてくれると思っていた。以御は受話器を持ちながら、片手でパソコンを起動しG L ーネットワークのニュースを検索する。ジーザスの葬儀のネタでもちきりではあったが、軍神の崩御のニュースは出ていない。

公的なニュースを見てかけてきた電話ではないようだ。当然だ、荻号が代理出席していたのだろうから崩御もくそもない。

しかも彼女が以御に説教じみた電話をしてくるということは、比企が一枚噛んでいるという事を露呈している。姉が何を知っているのかが見えない以上、以御もわからない、という他になかった。

以御は混乱しながらもこちらの情報を何一つ姉には話さず、情報を漏らさないようにありがたいお説教を聞き流していた。

『とにかく! 今すぐに崩御を発表なさい!』

「姉貴は何を根拠に、ユージーンが崩御したと思ひ込んでいるんだ?」

『……』

「何だ、それは言えないんだな。何の勘違いか知らんが、そんな事を言われると胸くそ悪い。大体生きているユージーンを亡き者にしようだなんて、無礼にも程があるぞ。ユージーンはそこでくつろい

で本読んでゴロゴロしてるぜ、何なら代わってやろうか？」

以御ははったりをこいて姉の反応を覗った。

さすがに死んでいるという相手に寧々も代われとは言えず、疑いの言葉を二、三投げかけて捨て台詞を言ってから電話を切った。まったく、この姉貴はいつもギャーギャーと騒ぎ立てて、と以御は閉口してしまうが、実際のところ姉に構っている暇はなかった。

神階最強にして最賢の荻号に、何があったというのだ？

以御は荻号の恐ろしさをよく知っているのと引き換えに、彼が味方についてくれた時の頼もしさも知っている。彼の手助けはこの上ない力を持つし、彼がこうと決めた予定は狂う事がなかった。それなのに……。

＊

”名も姿もなきもの” (Ultimate of Nobody) は荻号の姿をしたまま、基空間に漂流していた。

ユージーンを意識を保護しつつ元素崩壊からの復帰する事はそれほど簡単な事ではなく、超空間転移ができるようになるまでにはあと数時間を要する。

ユージーンは彼の意識の内にあって、そうして静寂の時間を過ごす間に、彼が神階を去るべきかどうか思い悩んでいるのだと気付いた。

彼は闇神として陰階に所属しながら神階全体の安定を担ってきたようだが、彼の存在そのものが神階にとって以前ほどは必要なくなってきたいると考えたようだった。

極陽とほぼ同等の能力を持つ若き才能、比企はそれが今なのかいずれなのかは解らないが、強烈なリーダーシップを発揮し神々のよ

き指導者となるだろう。力ある主神となるべき比企に教えるべき事はまだまだあったのだが、勉強家の彼は彼で自ら成長してゆく、それができる神だと荻号は評価していた。そうなるともはや神々を守る事に意識を割かなくてもよく、いよいよ神階を去るべきなのだという結論に達する。

8万年もの長きに渡り神を演じ続けた事は、ノーボディの力を急速に衰えさせてきた。

陰階神の最後のけじめとして極陰に最後の挨拶をしたら、もう荻号であろうとするはやめよう、と決めた。

荻号が神階を去ったところで、織図以外は嘆いてもくれないだろう、などと彼は自嘲して固まりかけた決意に、ユージーンが水を差した。

”荻号様、消えてしまわれるのですか？”

彼の子でもあるこのユージーンという居候は、筋金入りのお節介やきだ。

早く彼の神体に意識を戻して身軽になりたい。ただでさえ融通がきかないところを、間借りしている意識の扉を叩いて一度決めてしまったことにあれこれ口を挟まれるのは氣に入らなかった。

「消えてしまうも何も、荻号という者は存在せぬ。吾の記憶に触れた汝は心得ておろう」

”しかし、あなたをお慕いする神々はたくさんいらっしゃいます。ジーザス様の件も、いつかきつと疑いは解けましょう”

ユージーンの姿は見えないが、彼は必死に説得を試みている。

神階は、荻号という陰階神を必要としているとユージーンは思っていた。たとえその正体が知れなくとも彼という旗印がいたからこ

そ神々はINVISIBLEに屈しはしなかった。

INVISIBLEを天帝として奉じる陽階神も、INVISIBLEに忠誠を誓ったのではない。いつかINVISIBLEの支配と脅威から逃れて自由になりたいという心は一つだ。ユージーンはその気持ちをどう伝えてよいのかわからない、ただ、神階はまだ親離れなどできないのだと。

「……そうではない。これ以上荻号であり続けて、力を失うわけにはいかんのだ」

”あなたであり続けると、力を失う？”

「……吾は名を持たぬ者ゆえに、名を与えられると力を失う」

ユージーンは暫く考え込んでいたようだったが、わからないようだった。

言葉遊びをしているような、印象的だが解せないフレーズだ。からかっているのかと思うほど単純で直裁な命題を前にして。

”ご説明いただいてもよいですか？”

「……わざわざ汝に説明をせねばならぬのか」

”どちらにしても今は時間はあるではないですか。あなたはまだ回復しきっていらっしやいませんか”

どうせお互い暇なのだから、教えるという。

荻号は今すぐユージーンの記憶を頭の中から追い出してやりたかったが、ここは基空間なのでそういうわけにもいかない。

荻号はユージーン思うよう決して暇ではなかったし、彼には懸案が山のようにあった。それがユージーンのような一介の神と問答をして、彼の好奇心を満足させるためだけにべらべらと真実を語らねばならないのかと思うとうんざりだ。

ユージーンならば全てを打ち明けたところで、彼の神体に戻ってもINVISIBLEに殺されはしない。INVISIBLEはユージーンの神体が欲しいのだから、わざわざユージーンを殺して他の器を見つけるような手間はかける必要もないのだ。

だからといってユージーンに話して彼に理解してもらう事は、荻号にとっては酷く不毛に感じられた。

彼は誰の理解も協力も必要としていなかったからである。

限りある生をひたむきに生きてゆく彼の子らを果て無きINVISIBLEとの抗争に巻き込む事を望まなかった。それでもとしつこくせがんでくるユージーンに、ノーボディはついに折れた。

「ユージーンよ、では名があるという事は何を意味する」

”わたしがわたしであるということでしょうか”

「汝の名を思い出せなくなったら、汝は誰だと説明するのか……汝は次にこう言うだろう。自らはいつ生まれて、容姿はどのようなであり、どのような性格で、どのような経歴を経て、今に至るものだと」

”そうですね、そう説明すると思います”

「ではそれも忘れてしまったならどうする？ 汝は誰だ？」

”！”

ユージーンは答えられなかった。

記憶を失い、姿を失ったもの……それはもう、生きているとはいえない。

誰も名と姿を持たなければ生きてはゆけないと気付いたのである。

そして生きるということは、その生涯において自らを定義づけてゆく事とかわらない。

「答えられまい。生きるという事は虚ろなる自己を、様々な枷で繋ぎとめて他者と区別をしてゆくという作業だからだ。名、容姿、経歴、性格、それらは全て汝自身の個性であり、枷なのだ。名を呼ばれ、ともすれば他者と紛れんとする虚ろなる自己を枷で繋ぎとめ、枠組みの中に閉じ込める事は、” 自らが存在しないのではないか ” という恐怖から汝らを救っておる。” 何者かであろうとする” ことは、完結を必要とする。つまり、死ぬるのが必然なのだよ……そうやって生は完結する。実に無常で、美しい営みだ」

荻号はさも羨ましそうにそう言った。

” 名も姿もなきもの ” である彼は、生を完結することも死者であることもできなかった。

無責任で退廃的な彼の「死にたい」という口癖には、生への渴望と死への誘惑が込められていたのだ。

ユージーンら陽階神は荻号を” 神に相応しくない者 ” としてしか見なさなかったが。

それは大きな間違いだった。彼は誰よりも生を知りながら、死を知らない。

” では、何者にもなろうとしない者は、死を超える事ができるのですか？ ”

ユージーンは考えがまとまらないままに尋ねてみた。

勢いをつけて全てを尋ねてしまっていないと、彼の気が変わってまた口を閉ざしてしまっただけは彼の心に触れたともいえるまたとない機会が台無しだ。

「吾やINVISIBLEは、かような存在なのだ。吾は虚無であり何者でもない、だがそれは逆を返せば”何者でもありうる”というもの。極小は極大であり、無は全だ。原始宇宙の始まりは無から確率的に生じた揺らぎのエネルギーだと、心得ておろう。吾らの正体はそのようなものだ」

何者でもないからこそ、全てでありうる。

自己がなく、ただ普遍である。つまりそれは、この世界の全てであるということだ。

”では、何者でもなくなってしまうえば、わたしもあなたのように全能の力が使えますか？ INVISIBLEから人々や神々を、守る事ができますか？”

傲慢なのか、不遜なのか、無謀なのか。

彼は荻号と均しい存在になろうとしているのだろうか。

一笑に付してしまうにはあまりにも笑えなくて、暗闇の中、荻号は困惑したように腕組みをしたただけだ。

「何者かであった者が、名を捨てるという事は不可能だ。自己は棄てられるものではない。汝はINVISIBLEに憑依され絶対不及者となるぐらいなら、自己を棄ててもINVISIBLEを滅ぼしたいと考えておるのだろうか……絶対不及者は完全なる者ではない。姿を持ち、名を与えられてしまったが故にだ。名を与えられた者は必ず、物語があって、完結を必要とする。INVISIBLEは全能の虚無を脱ぎ捨て絶対不及者の裡に収束した。それがどういう事かよくよく考えるがよい」

”では、絶対不及者は……ひょっとして、あなたが？”

そうだと、彼は無言で肯定した。

”……！”

INVISIBLEに殺されてきたとされる絶対不及者、彼等を殺してきたのは荻号だったのだ。

絶対不及者をも凌ぐ力を以って彼は絶対不及者の息の根を止め、INVISIBLEをまたINVISIBLE（姿なきもの）へと還元したのは、彼。

そうすると荻号は絶対不及者と同格……ユージーンがINVISIBLEに収束されたあかつきに、三代目の絶対不及者をしとめるのは彼だとしたら、ユージーンは荻号に殺される運命にある。それをもはや、辛いとは思えなかった。彼は絶対不及者となってしまった器たちに、生の完結という平安を用意してくれていた。

「吾らは空間の普遍であり母体なのだ……INVISIBLEはただ創世者であるばかりでなく、空間の実体そのもの。かの者を滅ぼす事は、現空間を滅ぼす事でもある」

”では、INVISIBLEの意思に叛く事は不可能、だと仰せですか？”

「……そう。吾はINVISIBLEと均しき者でありながら、著しく力を失っておる、他にINVISIBLEと同等の、抗すべき力はない」

”わたしも、あなたのようになれないでしょうか”

ユージーンは真面目にそんなことを言っている。

荻号はユージーンの意識を再形成する際、何か一つ重要な要素を構成し忘れたのかと思った。頭のネジが一本どこかに行ってしまったのではないかと心配になったのである。

だがユージーンはいたって本気だった。彼は荻号の裡にあって持ち前の勤勉さで彼の記憶から必要な知識を交換し、この世界のシステムを理解した。荻号の意識の中に全て格納されている世界を支配する法則の巨大なルールブックをこっそりと読み解き、ほぼいつだっていいほど自らのものとしたのである。荻号はそうすることを、期待していなかったわけではない。広大な知識の海へ至る扉には、鍵をかけていなかった。だがユージーンにそれを強いる事は荻号の信念に反した。

”あなたのお話をお聞きしていると、自己を棄て普遍と同化することができれば、不可能はないと仰っているように聞こえます。わたしがユージーンであることを棄て普遍となることができれば、あなたの衰えた力の助力となれるのではないかと。そう思ったのです……そしてユージーンであるわたしが普遍に触れる機会是唯一……わたしに、INVISIBLEが収束する瞬間です”

「……なるほどな、それは確かに”不可能ではない”。汝がINVISIBLEと同化し、入れ替わってしまう事ができれば……だが汝は永劫の孤独を、吾とともに歩まねばならぬ、この空間が減ぶその時まで、汝がこの空間の母体とならねばならん……それを覚悟の上か？」

ユージーンにも意地というものがあつたのかもしれない。自分は既に一度死んだものとして、彼の守るべき全てのもののために身を捧げようと思った。何者でもない者となることは、彼の大切な者た

ちから忘れられ、認識もできず認識もされない者となることだ。すなわちそこにあるのは、完全なる無と、果てのない時間のみ。

それでもユージーンは、全てを識った今なら後悔はしないと誓える。

INVISIBLEの脅威から世界を救い、世界の運命と、果て無き生の営みを見守り続ける事が、できるのならそれで満足だ。

” ええ ”

荻号は彼の返事を聞いて僅かに首を振ると、誰にともなく頷いた。ユージーンの力に加えてあるいは、恒の力を借りれば……。

荻号は生氣と、空色の瞳を取り戻す。

健やかなる時も病める時も常に襲われていた眠気はいつしか、嘘のように消えていた。

彼の思考は研ぎ澄まされて、冷ややかに冴え渡る。

ユージーンは最後にひと言だけ尋ねてきた。

” もうひとつだけ、お教えください。あなたは嘗て、創世者だった……そうですか？ ”

「ああ……そうだ」

短く答えると。荻号は意識を整え、納得をしたユージーンを眠りにつかせた。

遠く昔の事だ、そうであったことも忘れていた。だが” 名も姿もなきもの ” は確かに創世者であった一時期があって、本当は忘れることはできない。ユージーンという神は、彼の心の深い部分に光を投げかけた。

ユージーン、お前となら、できる気がするよ。
そう言った頃には、彼の姿は基空間から消え去っていた。

第1節 第33話 消失と降誕、そして世界の揺らぎと

荻号はその動作から集中から全てに無駄のない超空間転移をかけると、同時に極陰の座する締皇ていおうの間に現れた。

極陰は葬儀から戻り、まさに玉座に座したところだった。玉座の構造は基本的に陰階と陽階は変わらない。極陰 ゾーナ・イクシメナ (Zona Iximeña)、置換名 鐘遠 恵は年甲斐もなく抜群のボディラインをこれでもかと思わせるポップな聖衣に太ももの露になった超ミニスカートをはいて、今にも下着が見えそう。その挑発的な装束が、これまたよく似合う。

生物階と直接関与しない陰階神は陽階神のように見てくれなど気にしないから、自らのセンスで好みのデザインの聖衣を仕立て屋に作らせている。そんな彼女を下から見上げてしまうと陰階の女皇のパンツの有り難いご来光が見えてしまうのだが、さすがの荻号も今日は無礼構だと思ったのか凝視している。

「些か、無礼ではないのか？」

「どっちがだ？急に現れた事か？それとも、あんた自身が見せびらかしている下着をガン見していることか？」

それを聞いて、彼女はたつぷりと時間をかけて荻号に蔑んだ眼差しをくれる。

「下着は、好きなだけ見るがいい。だがアポイントもなくここに来たは無礼。それもジーザスの葬儀をバックれた後で！ 偉神へ哀悼の意をも表す事ができぬか。失望したぞ」

彼女はわざと足を組み替えて、流し目で荻号を見つめた。

股の中が丸見えだ。最後に言い残すとしたら、極陰の威厳という

やつをもう少し保って欲しいと言いたいものだ、と荻号はため息をついた。

荻号は男神でもない上に神でもないのだから、そんな事をして挑発されても少しも興奮などしない。

まったくもって無駄な誘惑だ。だがその誘惑に乗らなければ、彼女は機嫌が悪くなるということは解っている。彼女はプライドが高く、そしてちやほやともてはやされる事を望む。勿論それだけの實力はあった、智力においても実力においても、陰階神の長として最大限の敬意を以って謁見すべきだ。今回もまた荻号は誰に対するにもそうであるように膝を折る事もなく、すつくと背を伸ばして極陰を直視する。

「こっちにも諸事情ってやつがあってね」

「言い訳はよい。いかに奔放な行動にも、節度というものがある。以後はこのようなことがないようにな。陽階神は怒り心頭だ。おまえの嫌疑も晴れてはおらぬし」

「その件だが、俺は神を辞めようと思っているんだ」

「神を辞めるだと？ 元々神なのに神を辞めるとはおかしな話だ」
極陰はふうん、と、ねばつくような吐息を吐いた。

彼女の身に纏う甘い香りが辺りを満たしていた。

これは破壊神である彼女の持つ香水状神具、アンデッド・ライフラインズ(Undead Lifelines…不滅生命線)の残り香である。匂いというのは五感のうち感覚に訴えかける最たるものであり、神経を直接的に支配するものだ。ジーザスⅡクライストの持っていた聖杯(The Grail)と同様の原理を用いている。彼女は香水の組成を変え締皇の間に常時MCFを張っているのだが、五感のない荻号には何の意味も成さない。

「言い方は妙だが、神階を去るってことだ」

「神階を去って……どこへ行く？」

「さあなあ、俺にもよくわからん。陰階神には失踪したとでも言うておいてくれ」

「戻って、くるのだろうか？」

「いや、これでお別れだ。あんたには世話になった、挨拶をしてから行こうと思ってね。じゃあな」

荻号はへらっと手を振ると、後ろも振り向かず踵を返し、ツカツカと歩いて出て行こうとした。すると極陰はアンデッド・ライフラインズを取り出す。

青い小瓶の中に詰められた香水型神具だ。彼女はキュツと蓋を口で咥えて引き抜く。

蓋を開いた瞬間から、怪しげな蒸気が立ち込める。細い指をパチンと鳴らして組成を変え、紫色から青く変わったそれを空気中にぶちまけた。

周囲は蜃気楼に包まれ、締皇の間の入り口も消え去ってしまった。その扉を出てゆこうとしていた荻号は立ち止まらざるをえなかった。

「ありがとう、引き止めてくれるのか？」

「陰階の長として、勝手な真似は許さん！」

彼女は玉座を降りて異常事態を知らせるアラームが鳴り響く中、発光する液体に満たされた神具を掲げ持つて臨戦態勢に入っていた。彼女のフィジカルレベルは90046、神階全体でも荻号を除いては最強を誇るべき女神、鐘遠 恵が遂に本気を出した。可視化されるまでに強大なアトモスフィアが周囲を取り巻き、竜巻のように立ち上っている。ジーザスの死を受けて、感情が昂ぶっている事もまた影響しているようだった。

「気に入らない。お前を含め全ての陰階神はあたしのもの。勝手な理由で一柱として逃がしはしない！」

そう言うが否や、彼女は小瓶のキャップ側に入っていた液体数滴を蜃気楼の中に放ち、神具のリミッターを解除した。化学連鎖反応が起こり、蒸気は不可視化し匂いを失う。

そしてアンデッド・ライフラインズはもはや嗅覚を越え、直接脳に働きかける状態となった。

何者も脳を支配するその攻撃から、逃れるすべはない。

荻号は気のすむようにそこまでさせておいて、片手を腰にあてがったまま軽くもう一方の手をあげ、彼女の神具の効力圏吹き飛ばすほどの風圧をくれて彼女もろとも極陰の玉座にたたきつける。

ぐしゅっ、何か形容しがたい音が極陰の内臓のあたりから聞こえ、蜃気楼を生み出していた神具の影響を消し去り。アンデッド・ライフラインは霧消した。

彼女はわけもわからず玉座の支柱に叩きつけられ、うっと小さくうめき声を上げた。

たった一度の攻撃で内蔵が叩き潰されたのが解る。極陰は数々の歴戦を経てきたが、極位を望まなかった荻号と闘ったことがなかった。

まさかこれほどまでの差があったとは……！ 相手にもならず、戦意も喪失してしまった。

荻号は叩き潰され何度となく吐血する彼女を気の毒そうに見つめる。何とか意識があるのを確認し、シザーケースの中から黒いアンブルを取り出して彼女に放り投げた。

「飲んでおけ。すぐに癒されるだろう」

＊

比企は、極陽への戒嚴令の発布を直々に要請しに、天奥てんのうの間へと向かっていた。

虹を模した七色に輝く吹き抜けの空中通路を、一步一步確実な足取りで歩んでゆく。荻号の謀反の意はムジカが証明してくれるだろう。比企はムジカの供述書と自らの供述書をファイルに挟み、小脇に抱えていた。比企はかねてより目標としてきたことを成し遂げて、後は極陽からどのような処分を下されても構わなかった。

「さっきは、世話になったな」

有無を言わず脳内に侵入してくるその言葉と同時に、比企はもう二度と抜く事もないと思っていた懐柔扇を抜き放ち、最外殻のリミッターを外した。

起動間近の神具の切っ先を構えようとして、荻号の右手に押さえられているのが見える。

これほど近ければ巻き添えを食らってしまう、懐柔扇を起動できない。

彼の師、荻号は逃げる事も隠れる事も知らないかのように、懐柔扇の暴力にも怯まず比企の真正面に立っていた。元素崩壊をもろに食らったあとでも、ぴんしゃんして涼しい顔をしている。

彼の一原子として残らぬほどに消し飛ばしてやった筈だ。それを荻号は確かにまともにくらって破壊された、断じて間違いなどではない。どうやって……！？

「やめとけ。同じ手は二度も効かん。これは以前教えただろう」

「馬鹿な……元素崩壊をも……」

比企は何が起こってどうやって荻号がそれを免れたのか考えが及ばなかった。

ただ比企は絶望した、それだけだ。

元素崩壊にも動じないこの怪物を、どんな手段で殺せばよかったのだろう。

手段を間違えた。その叛意は一度きりしか許されなかった。荻号へ牙をむくのが許されるのは、たった一度だけだ。

一度しとめ損なったら、叛意を知った荻号を前にして比企の命はない。

ジーザスを、そしてユージーンを消してきた彼のことだ。半世紀も時間を共に過ごした直弟子だからといって慈悲をかけることも、ましてや躊躇などない。

「元素崩壊？ そんなもんは効かんよ」

「化け物めが……」

荻号はこの上ない侮辱を、甘んじて受け止めた。

正しい道を歩み続けてきた比企には、荻号をそうやって蔑む権利があったからだ。

「何とでも言え。時間軸を軽んじたお前の負けだ。だがお前はよく俺を追い詰めたよ……弟子の頼もしい姿を見て、目頭が熱くなったね。そういうわけでお前の望みどおり、俺は神階を去る。以後は神々に介入もせん、それで満足だろう」

そんな譲歩、信じられはしない。彼には何のメリットもないし、比企をここで殺さない理由もない。

わざわざ姿を変えてまた神階の中に溶け込まなくとも、彼は神階全体にM C Fをかけてリセットをすることだってできるというのに。

「また姿を変えて介入してくるのだろうか……己は貴様がどれほど姿を変えても、どこどこまでも追い詰めて殺してやる！」

「俺が長きに渡り神階に介入してきたのは、俺の力が必要とされていたからだ。だが、今の神階ではどうやら、出番はないようだ……お前もいるしな。だから去る。お前たちのひとりだちだ、神階を頼んだぞ、比企」

比企は耳を疑った。彼はどこへ行こうとしているのだろうか？

神階にはもう、戻ってこない？ 行くところなどないはずだ。神階を去った神は墮神として生物階を彷徨うしかない。そして墮神となった者は地上でそう長くは生きられない。

「もう二度と、戻らぬと？」

「ああ、ばっちりだろ？ お前の望みどおりだ。ユージーンは戻ってくるだろうがな」

「わざわざそれを言いに来のか」

「今生の別れぐらい、惜しませてくれよ。寂しいじゃねーか」

比企は次に用意していた台詞を忘れて、口をあんぐりと開けた。彼は本気だ。もう戻ってくるつもりはないのだ。長い付き合いだった、彼の本心は分からずとも嘘をついているのか、本当なのか、そのぐらいの事はわかる。

伊達に何十年も師弟関係にあったわけではない。

「貴様は結局、何だったのだ？ 神々を煙にまいて、そして通り過ぎてゆくだけの存在だったのか」

「……さあなあ、何なんだろうな。お前の思っているよりずっとつまらんもの。俺は”虚無”だよ」

荻号は比企の質問には答えず、手を伸ばし、比企の両肩を強く握った。

後は、頼んだぞとでも言うように。

荻号の、独特の声にならない声が比企の脳裏に優しく響いた。

ああ……と比企は思い出した。

荻号という存在はいつも比企や神々に無関心のようにでありながら、そっと見守っているのを、心のどこかでは知っていた。

どれだけ罵っても嫌忌しても全てを受け止める、その姿は彼の実の父親のようであり母親のようであった。

だからこそ子らは彼を恐れ、彼の存在を追及しようとして一線を越えて斃れた。

今になって思えば累々と積み重なってきた屍を増やさないために、彼は神々に無関心であり続けたのかもしれない。

数百年ぶりに間近で見た、比企が美しいと感じた彼の空色の瞳は彼が荻号と初めて出会った時そのままだった。

結局、徹頭徹尾、終始一貫して彼の考えている事はわからなかった。

一度とて看破できたこともなかったし、彼の口から打ち明けたことすらなかった。

「比企、お前はお前にできる事を少しずつ積み重ね、強堅で、聡明で、慈悲深き主神となれ。もうじき現代極陽の時代は終わる……歴史を引き継ぐんだ。連綿と続く神々の歴史と人々の歴史を、絶えさせてはならない」

「貴様に言われんでもそうする、我等は我等の歴史を次の世界に正しく受け渡す。何様かしらんが、随分と高慢な物言いだ」

「長きにわたる不実を許せよ。俺は消える、今度こそさよならだ。それから、ひとつ。俺もお前も、例え死んでも世界を守り続けたいと願うだろう」

荻号はいつまでも噛み付いてくる弟子の攻勢を軽く受け流し、名残惜しそうに少し高い目線から見下ろした。

比企は昔も今も、彼の信念を貫き通す正しい神であり続けた。

荻号はそんな比企を万感の思いで見つめていた。荻号の継承者である彼を残して神階を去ることは、寧ろ喜ぶべきことなのかもしれなかった。彼とは反目しながらも学んだ筈だ、荻号の力を、智を、そして……。比企は荻号の消えうせる瞬間を逃がさないように、鷹のような鋭い眼差しで睨みつけていた。

そんな弟子を残して、彼という存在はその場で荻号要であることをやめた。

荻号を守ってきた時間が撓み、ぐにゃりと捻じ曲げられると元のようにまっすぐ伸ばされ、ぱあっと砂が崩れるように彼の姿は失われていった。

ただの一片も、何も残らなかった。雲散霧消という言葉がぴったリだ。後に残ったのは金色の霧と、どこまでも続く金色をした虹の橋だけ。それも儚く滲むとただちに掻き消えてしまった。

比企は幻が消え去った後も無意識のうちに手を伸ばし、霧の余韻を掴もうとした。

こんなにあっけなく。荻号自身の意志で何の感傷もなく消えてしまふとは思わなかった。彼は比企のために、純粹に別れの挨拶をだけしにきたのだろうか。そして彼の長き生の終わりの死に場所を、ここにしようと、これほど彼を憎しんできた弟子のもとで、と定めたのだろうか。

だとしたら、言葉を違えてしまったのではないかと、比企は後悔した。

……ファイルは飛散して粉々になってしまったが、もう必要ない。

比企は構わず呆然と天空を見上げていた。

＊

荻号が真に消滅し、アルティメイト・オブ・ノーボディ（Ultimate of Nobody…名も姿もなきもの）へと昇華したその瞬間。

ユージーンの意識は凄まじい圧力により弾き飛ばされてどこかへ転送され、ドクン、と培養液中に沈むユージーンの神体の内に彼の意識が戻った。

ユージーンはもはや脳を彼の居場所とせずともよいということを、ノーボディより学んでいたのだ。

いわゆる脳ゴースト・イン・ザ・ブレインの中の幽霊は自我だ、脳のみならず全身に宿る。

彼は全身の細胞を脳に集め回復を急ぐ。

この世界のシステムを余すところなく理解したユージーンを以つてすれば、数時間以内に復活はできそうだ。

荻号が消滅した今、もはやこの世界に希望はない。自らが荻号の遺志を継ぎ荻号と均しい存在となるために、ユージーンは新たな力を呼び起こした。

” 実在は、どこにあるのか ”

それは脳ではない、そう思い込んでいるだけで、本当は違うのだ。存在を、自己とあらゆる環境を疑う事、自らが自らではなくなるということ。何者でもなきものへと、その身を変化させてゆく過程であった。

母胎の羊水の中で再び生まれるのを待つ赤子のように、彼は始まりというものはつきりと認識する事ができた。荻号はユージーンにのみ、” 生まれる ” という権利、そして苦痛を与えた。そして荻号の研究室という閉ざされた空間の水槽の中に置き去りにされた彼は、空間を超え、あたかも蛹が蝶へと羽化するように、まったく新たな存在となって世界の前に姿を顕さねばならなかった。

何もかも新しく生まれ変わる。

ユージーンは急速に再形成した彼の頭部を衰えた筋肉でもたげ、ゆっくりと培養液の中で目を覚まし、自らの生を確かめるようにひとつ呼吸をした。

ゴポツと大きな気泡が上がり、赤い水面を無神経に波立たせている。

” よし……もう大丈夫だ。行こう ”

彼は小さく頷き、ぐっと力を込めて瞳を開くと……新たな世界がそこにはあった。

培養液の中で赤く揺らめく両手を見つめ、指を一本ずつ折りたたみ、きつく握り締めた。それが自分のものかと確かめたかったのではない。

それが自分のものではなく以前の彼とはまるで異なる新たな存在だと、確かめたかったのだ。

彼は彼の意のままに、どのようにも在る事ができた。

それでも来るべき日が来るまでは自らがユージーン＝マズローであつたということを忘れてはならないと思つた。

最後に手放すべき彼のルーツは、まだ繋ぎとめておくべきだと思つたのだ。”何者でもない”事が力となりうるのならば、”自らが自らである”という力もまた、この上ない力となりうる。ユージーンは何者でもない者であることの自由と何者かであり続けようとすることの強さを知り、世界の姿を多面的に理解したのだ。存在と非存在の狭間、それが荻号や彼のような存在の境界という現象だ。

ユージーンはうつすらと黄金がかつた瞼を閉じる。

荻号から譲り受け、超越者を証する黄金の瞳、禁視（Forbidden—Visibility）は備えているが、今は必要ない。成すべき事はわかつていた。

そのままガラスをずるりと通り抜けて密閉された水槽の中から出る。ガラスはまるで彼を産み落とすように、羊膜を切り離すように溶けて軟らかくなり、妨げることなく通ずる。

存在と非存在の境界という位相を理解した彼は、認識の檻から解き放たれているのだろう。

ユージーンは自らが死に際に纏っていて荻号がすぐ傍にたたんで置いた軍神の聖衣を纏い、展戦輪をかたどったカフスボタンをパチンと袖口で留めた。

死の瞬間には鮮血に染まっていたであろう聖衣は洗濯などしなくても、血痕などついてはいなかった。彼は荻号の意識の中で相転星を譲渡するという旨を聞いていた。

彼の後継者である証……聖衣の置いてあった粗末なデスクに打ち棄てられたように無造作にある神具を取り上げた。全神具適合性など、もはや問題ではない。

相転星は彼のアトモスフィアに感服して屈し、簡単に所有者であることを認めて身ぜせりして喜んでいるようだった。

相転星を眠らせたまま自らも目を閉じ、細く糸を紡ぐように指先で糸をつうつと手繰り寄せるような仕草をすると、荻号の研究室という基空間に隔絶された空間から荻号の書斎へと簡単に脱出する。世界はこれほどまでに単純で、しかし完璧な法則に満たされていたとは。ユージーンは181年も縛られてきた絶対なる法則、命すらも奪われたその法則を、簡単に覆す事が出来るという事を知る。

ノーボディの導きにより、この世界のエニグマ（Enigma…暗号）を解くことができたのだと。漠然と思った。

”あなたはこの世界の大气になって姿は見えないけれど、わたしは確かにあなたの存在を感じます。力を貸してください、あなたの強さを、あなたの優しさを、わたしにも与えてください——”

彼は見えない気配を取り込むように大きく息を吸って、ふうっと長い呼吸を吐いた。

ユージーンは荻号の書斎の隣の部屋にいた二岐と出会い、荻号は失踪してしまってもう戻ってこないのだと告げた。

鶴の機織りの民話ではないが、荻号の正体を見て彼を畏れてしま

ったために消えてしまったのだと普段は冷静な彼女はひとめも憚らず嘆き悲しんだ。ユージーンは荻号のことづてで相転星を継承した旨を伝えたが、荻号しか扱えるもののなかった融通のきかない特別な神具を次期闇神が扱えるようになると思えなかったので、触れられるものなら好きに使ってよいし譲渡は法的に問題ないから、と言って帯出を許した。

相転星という常軌を逸した性能を持つこの神具は、ノーボディ自身が造り出し、彼の全能性をカモフラージュするのに役立っていたのだろう。神々の前で奇跡としか思えないような能力を揮っても、"まあ、相転星の性能あってこそだろう"ぐらいにしか思われないのだ。荻号が巧妙に培ってきたこの背景は是非とも活用すべきで、超越者が神階に自然に溶けこむためには必須のツールだった。

しかしユージーンには神階で神として過ごすということか如何なる事を理解していた。

荻号と均しき存在となるという事はまた彼の負ってきた十字架を、ユージーンも負わねばならないということでもある。

誰にも理解を求める事ができず、畏れられ、ある側面では必要とされる……全能の力と引き換えにだ。荻号のもうひとりの継承者である比企にも命を狙われる事だろう、自らの意識を鉄壁のマインドギャップで守りながら、孤独を貫き通すのだ。来たるべき日が来るまでは……。

望むところだ、やってやるさ、とユージーンは思った。

「ユージーン様」

悲嘆にくれていた二岐が思いがけずしゃんとした声で呼び止めた。

「あなたの使徒にしていただけじゃないでしょうか」

いつも不機嫌なのかと思うほど他者に媚びる事のない二岐がこん

な声を出すのかと思うほど、彼女は少女のような澄み切った声を振り絞って出した。荻号のために流した涙のあとが、まだ乾くまもなく輝いている。こんな簡単に、主を乗り換えるのだろうか？ 誇り高き彼女が、口にする台詞ではなかった。荻号の突然の消滅を受け止められずに口走っているうわごとなのだろうか。

「わたしに？ 次期闇神には、仕えないのかい？ 元第一使徒の転階手続きは厳しいだろう」

「寡臣は主に対する忠義を、貫くことができませんでした。誠心誠意お仕えたつもりが、最後の最後に寡臣は主に不忠をはたらいてしまった事が悔やまれます。あなたが主の生まれ変わりのような気がしてならないのです、今度は最後までお仕えさせて下さい」

二岐は長年連れ添った荻号に忠義を通す事ができなかったことを、相当に悔やんでいるようだった。ユージーンはこの哀れな女使徒を、ここに置き去りにすることができなかった。ユージーンに仕える事ができなければ、彼女は荻号の後を追って命を絶つと、強く心に決めていたからだ。

「そう……。うちにはうるさいのばかりいて大変だろうけれど、それでもよいならうちに来るといい」

＊

比企は何も考える事ができないまま、抜け殻のようにふらふらと執務室に戻って来た。

ムジカは体調も回復してきたらしく、寧々にたしなめられながらもベッドを立ち上がっていた。

荻号の消滅を目のあたりにしなかったムジカも、不穏な空気と違和感を感じていたようだ。神階から、荻号のアトモスフィアが消滅

した。彼のアトモスフィアは神階全体を覆い尽くすほどに満たされており、宇宙要塞のような神階の不安定性を安定化させるアンカーのような役割を果たしていた。それはずっと繋ぎ止められていた箍が取り除かれたようでもあり、一度は清々したようでありながら、しかしいざそれがなくなってみると途端に不安になった。ゆりかごからほうり出されたように、それがなくてはひどく落ちつかない。

いつの日にもずっと聞こえていた優しい小守歌が、突然鳴りやんでしまったように。ムジカは切なさすら感じた。そしてはじめて、荻号という存在の必要性を噛み締めたのである。寂漠とした悲しみが込み上げてきて、無償に荻号の名を呼びたくなった。

彼が今にも叫びそうになった時、稲妻のように新たなる気配がほとばしって、まるで柔らかい布を拡げてゆくように強大なアトモスフィアが神階を満たして包み込んだ。

ムジカはこの気配を知らない、記憶にもない。

荻号にも匹敵する絶対的かつ純粹な光明が降誕した瞬間だった。比企はちょうど、執務室の扉を開いて戻って来たところだったが、敏感にそれを感じ取って天井を見上げる。陰階に突如として現れた、何とは知れない何かがだ。比企は同じく視線のうつろなムジカと顔を見合わせた。二柱ともが即座に、この力に挑みかかる事は無謀だと認識できるほどに圧倒的な存在。

それが、虚空から忽然と生じたのだ。

「何が、生まれたというのだ……たった今……」
……あらゆるものに光を注ぐ朝陽のような、透明で広大な気配だった。

*

相模原と築地は大学前の小粋なデザインが目にはチカチカとまぶしいパーラーに着くと、雨天のため土木関係者が暇を潰しにきてなだれ込んできたのか、パチンコが満席だったためにスロットでの勝負とあいなつた。

教授の動体視力の衰えを考慮に入れ、当たりを引いたら築地が7を揃えてやるかホールの店員に頼むという特別ルールを確認した。勉強や実験にはめったに勤しまないのに、築地は張り切って台選びに勤しんでいる。築地は昨日よりそこと決めていた台にした。相模原はとことこ築地の後をついてきたかと思うと、小柄な教授はちよこんと隣に座ってきた。

" あーあ、そこはあかん！ 昨日出たばかりやで "

相模原はろくすっぽ台の案配を調べず、築地の隣の台に陣取っている。相模原はスロットターにとっては大切なインフォメーションである台の上についている大当たり回数や回転数などには目もくれない。まいったな、まさか本当に初心者だったんじゃないだろうな。築地は下手をすればスロットの打ち方から教えなければならぬのかと思ったが、どうやらそれくらいは知っていたようだ。学会のついでにラスベガスのカジノに行つてボロ勝ちしたことがあるそうだから大人の嗜み、といったもので知ってはいるのだそうで。

「先生、親切心で言うんですが、あいにくそこは出ませんよ。昨日大連チャンしていましたからね。出た場所は次は出ない。奢れる者も久しからず、盛者必衰の理ですよ」

「なかなか達観しているな。だがそれで何故勝てないのだね？ ん？」

そう言われると築地は返す言葉もない。

彼は嫌煙家の教授の隣でやりにくそうにこっそりと煙草を取り出し、火をつけて隣の空席にぷいーっと煙をはきかけた。教授と昼間っぱらからスロット勝負だなんて、何となく落ちつかない。

ホール内はもうもうと煙が充満しており、築地の煙草が一本加わったところで煙たくなつたとは言い難い。

相模原の顔を見て、ホール内をこそそと隠れるバックレ学生たちもいたが、よく考えると教授がこんなにおおぴらにパーラーに來ているのだから、と考え直して築地と相模原の勝負の行方を見届けにやってきて辺りをぐるりと囲んだ。両者勢いよく打ちはじめ。勝負は2時間ぱっきりだ。2時間の収支を競うこととなった。

別に望んでもいない勝負なのに、どうしてこんな事になってしまったのだろうか。築地は嘆く。今日はついていない、教授に勝つても嬉しくなどないし負ければ教授の言いなりだ。これも院生の悲しいさがで、修了証書を手渡してくれるのは教授なのだから、卒業するまでは教授の奴隷だといっても過言ではない。築地は左から順に慣れた手つきでスロットを打っている、この台の推定設定は3か4ぐらい、上々だ。

ビッグボーナスの出ないバケ連が続いて今日はスロットターから敬遠されているようだが、この台はこのような挙動を示すということは、彼の無駄に賢い頭脳で計算済みである。そんな事を考えながら打っていると、後ろからつんと肩を叩く奴がいる。同級生の長瀬くららが研究室を抜け出して、観戦にやって來ている。彼女の服は個性的で、極彩色のカラーと、どこで買って來たのかと思うような斬新なデザインの服装がまたいっそう人目を引いている。

相模原が真横ににいるというのにバレたらどうするんだ、と築地はしつ、しつとやってヘン顔をしたまま顎をしゃくった。天然系でも

ありゆるめのくらはは、築地のヘン顔を見てきゃっきやと面白がるばかりだ。長瀬に氣を取られていると、ポチ、ポチ、ポチ、ときこちない手つきでスロットのボタンを押す教授が声をかけてきた。ジヤンジャンバリバリという店内の爆音とマイクパフォーマンスで話が途切れ途切れになってしまつてよく聞こえない。

「研究も人生も、恋愛でさえも、こうやってギャンブルをしているのと、実は何もかわらない」

「はい？ え？」

「君はこの台が、出ないと思うかね？」

「思います」

築地は断言した。

こちらの台が出なかつたら、相模原の台が出るかというともう絶望的だ。

築地はこの世界を支配する確率というものは万能だと信じていた。築地はいつも計算している、何分の一の確率で大当たりの確率で、この演出が出たあとは何分の一の期待度でボーナスに発展してゆく。などと彼の考える事は殆どが下らない事ばかりだったが、確率という支配者は確かにいるのだと、築地は信じていた。

「私はこの台から、殆ど見込みのない確率を引きずり出す。ビギナーズラックの原理を知っているかね……それは上級者にはない、素人の持つ揺らぎだよ。世界は絶えず揺らいでいるんだぞ築地君！ ときに世界は、あまりに大きな揺らぎを見せることがある。それを見逃してはならんぞ」

教授は子供のように無垢でありながら、彼の信じる何かに賭けているようだった。ビギナーズラックの原理など知る由もないほどのビギナーだというのに、一体なんだ？ 築地は氣味が悪かった、彼

がおよそ体験した事もないし相容れないものが、教授によって証されようとしていた。

「時には無謀だと思われる事にも敢えて挑んでみなくては、人生つまらんだろう。我々は確率というものに、支配されてはいないのだから」

教授は少年のように、しわくちやの顔でいたずらっぽく微笑んでみせた。

第1節 第33話 消失と降誕、そして世界の揺らぎと（後書き）

挿絵（絵師様の）比企 寛三郎・ユージーン・マズロー

<http://lizeel.web.fc2.com/4to>

<http://4tobizairanarou.html>

挿絵（筆者絵注意）鐘遠 恵

<http://lizeel.web.fc2.com/grapha>

<http://zona.htm>

第1節 第34話 研究員、井村 博道と空山 葉子

それは……極陽が天奥の間に戻ってからしばらくしてのことだった。

神階を満たしていた荻号のアトモスフィアがかき消え、置き換わるように新たなるアトモスフィアが張り巡らされた事に、極位神が気が付かないはずがなかった。神階と生物階の安全を脅かす憂慮すべき事態が起こってしまった。極陽はそのおぞましい脅威の前に、全ての目算が覆され忌ま忌ましそうに舌打ちをする。

荻号のみが消えていれば有り難かったと嘆いても仕方のない話で、ともかくそれが何なのか極陽は陽階の長として調べなければならなかった。アトモスフィアの発信元ならどこに居てもわかる、荻号の書斎だ。

極陽ばかりではない。陰階神も陽階神も、およそ凡ての神という神、使徒という使徒がその動作を止め、忽然と現れたアトモスフィアの動向に神経を研ぎ澄ませた。荻号を引き止めることができず、彼から逆に手痛い返り討ちを喰らってしまった極陰は、荻号が去り際に投げて寄こした黒いアンプルを飲んでどうにか、被った損傷は全て癒されている。

キリストの聖水の組成を模したものだ、治らないはずがない。彼女はいつもだらしない荻号が珍しく真面目に別れを告げるのを聞いていたので、例えその気配が荻号の書斎から生じたものであっても、荻号のものだとはどうしても思えなかった。荻号の書斎が記憶にある彼女は、何が起こったのかを見届ける為にそこ行って確かめなければという衝動に支配された。

玉座から離れればアラムが鳴るので締皇の間から出る事は難し

い、極陰は空中に紫色のプログラムコンソールを呼び出し得意のプログラム書き換えでセキュリティシステムを一時的にダウンさせ、注意深く辺りを見回し、誰の目にも触れぬよう静かに瞬間移動をかけた。

転移後景色が変わって、彼女は書斎の隣の部屋に立つ男の後姿とその前に恭しく跪く女使徒をドアの隙間から目撃した。それよりむしろそのアトモスフィアの発信源が顔見知りであったということに戦慄する。何度もは見えたこともないし特に興味もなかったが、姿ぐらいいは覚えている。陽階枢軸7位 軍神ユーージンⅡマズローだ。先程の葬儀にも参列していたことと思う。個性も薄く印象も薄い。

だが……。姿は先ほどと同じように見えるが、その気配はまったくの別神だった。彼のアトモスフィアは神階全体を覆いつくすほど強大であるため、極陰といえどもアトモスフィアを放散しないように気配を消していれば気取られないだろうと思ったのだが甘かった。彼は後ろを見向いていたというのにすぐに気付いて首を向けこちらに視線をくれた。なんという敏感な。後ろに目がついているようだ。ドアの隙間から覗いていた極陰は降参して仕方なく出てくる。

陰階の長の突然の来訪に、まだ立場上は闇神下第一使徒である二岐は血相を変え畏まって平伏した。彼女はそんな二岐を蔑んだように見下ろし、再度ユーージンに視線を戻した。

「お前は誰だ？」

「わたしですか？ わたしは陽階軍神、ユー……」

「ではないだろう。お前の気配はいまや神階を揺るがし、同一人物とは信じがたい」

「それは困りました。わたしがわたしであるという証明はとても難

しいのです」

どこか落ち着きのある回答を、極陰はますます訝しく感じた。彼のマインドギャップは極陰にも看破できないほどの厚さを備えている。

マインドギャップは4層以上格下の相手なら看破可能だ。極陰はもともと10層のマインドギャップを備えているので、5層であった彼は看破できて当然なのだが。ユージーンの心層はまるで鉄壁の要塞のようで、どこから突き崩してよいものかわからない。ユージーンは疑われることを最初から予測していたように、シャツをたくり上げて左肩の展戦輪の御璽を示す。

金色の色素で彫られた刺青は緻密で、紙幣のように偽造することできない。さらにUVを当てると光るIDコードと共に彫り上げられている。他神が姿を変えてその神を騙ることができないよう開発された技術であり、世界にただ一つしかない御璽は指紋のようにその神が彼自身、彼女自身であるアイデンティティを示す。DNAを持たず、指紋を持たない神という生物種は、即位する際に刻印されるこの御璽とID、そしてアトモスフィアの組成のみが自己同一性を示すものであった。

身元確認をするにはこの御璽の確認が一番手っ取り早く確実だ。それを見せても、極陰は納得できない。

「お前がどうしてもユージーンだと言い張るなら……陰階の長として、神体検査を要請する。総務局に行ってきたな」

「不審に思われるのなら仕方ありません……了解しました」
ユージーンは観念したように頷いた。

神体検査とは全位神が叙階表に記録するために年始ごとに行う身

体測定のようなものである。

計測するのはアトモスフィアの絶対量であるフィジカルレベル、フィジカルギャップ（物理障壁）の層数、マインドギャップ（心層）の層数、偏差値の算定、アトモスフィアや血液の組成分析等である。神階に留まるためには神々の疑いの視線を晴らさねばならず、身元を明らかにしておくしかない。

頭部以外はユージーンの神体や血液は以前のままだったし、ユージーンがユージーンであるという証明はそれほど難しくはない。ただ、アトモスフィアの組成が劇的に変わってしまったという事は、彼自身も認識していた。更に厳密にいうとユージーンの意識はもう消えている。今ある意識は荻号の中にコピーされてバックアップされていたものだったのでアトモスフィアが変化し、マインドギャップやフィジカルギャップが荻号のそれと同程度にまで増強されてしまった。

荻号のコピーは完全であるために生前と比較しても記憶に関しては遜色ない。極陰は細身の身体をしならせ腰に手の甲を宛て、ぽりぽりとこめかみを搔いたり薄い茶色の髪の毛をもてあそんだ。今もなお疑われているということは明らかだ。

「聞いてもよいか？」

きた。ユージーンは身構える。

「ええ、何なりと」

「どうやって力を手に入れた？」

「わたしにもよく分からないのです」

二岐が心配そうにユージーンを見上げている。

話すつもりがない、そう決めたユージーンの口を開かせることは不可能だった。まるで荻号を相手にしているようにのらりくらりとしている。

陽階軍神 ユージーンⅡマズローは業績を認められて推薦により7位に叙階された神だ。彼が即位する際に、極陽が誇らしげに自慢をしていたが、まさかさしもの極陽も、彼がこれほどまでの怪物となるとは夢にも思っていなかっただろう。忌々しげにユージーンを睨む極陰は超ミニスカートの中身がひざまづく二岐に丸見えになってしまっているのも気付いていないようだ。

「全てが納得がいかない、何故お前はここにいる？　ここは荻号の部屋だ。まさかお前が荻号を殺して力を奪ったのか？」

「いえ……」

そうだな。状況からいってもそれが妥当な推理だとユージーンは分析する。

荻号は死んだというより、もともと存在しなかった神であり存在しなかった者があるべき場所へと還っていった。それだけの事だ、などとは口が裂けても語るわけにはいかない。口に出した瞬間に、INVISIBLEによって間接的に極陰を殺してしまうことになる。たとえばユージーンが荻号を殺したという事にされてしまっても、その方がずっとましだ。何か口を挟んで極陰にフォローをしようとした二岐を制して、ユージーンは固く口を結んだ。

二岐は最初からユージーンを疑う気にはなれなかった。どんな卑怯なやり口でも、荻号が誰かに不意をつかれて殺されるような事はないと信じていたからだ。むしろ荻号がユージーンを見込んで、その力を託してどこへともなく、いつもの気まぐれで消えてしまったのだと思いたかった。二岐の希望が過分に含まれた、妄想に過ぎないのかもしれないが……。ユージーンがどうしたものかと困惑していた時だった。

「違う。荻号を殺したのは己だ」

静寂を打ち破るように抑揚のない冷たい声が聞こえる。

比企が追跡転移を経てユージーンの背後に現れたのだった。比企もユージーンのアトモスフィアを感じてからというもの、陽階の執務室でじっとしている事などできず、ムジカを置いてたまらず駆けつけてきた。荻号に代わる力が何なのかをその目で確かめておかねばならなかったからだ。

比企はいつものように鉄面皮のまま、臆面もなく極陰とユージンとの前に立つ。ユージーンは比企の番狂わせの登場に、どう反応したものかと思案する。ユージーンは荻号の最期のその瞬間にまで荻号と共にあった。比企は荻号の消滅をユージンと共に目にしたので。

比企は一度は荻号を殺しかけたが、最終的に手を下して殺したのではない。比企は嘘をついている。だがそれが明らかな方便であっても、比企と極陰のMind Gapの層数は同格……両者看破できない。このまま荻号謀殺の罪で比企の失脚となるのか。ユージーンはそれは避けなければならないと感じた。荻号は神階の導き手として比企に全てを託したのだ。だが比企も同じことを考えているようだ、ユージーンをこそ荻号の継承者として、ここで失脚させてはならぬと。極陰の疑念、比企の真意、そして荻号の遺志、全てを見通しているユージーンはいたたまれなかった。どうやって真実を語らずに、この場を切り抜けるか……。

だがユージーンの心配は無用のものだった。比企は凜とした面持ちで切り出す。

「しかし同時に、陰階神 荻号要の陽階神ジーザスⅡクライスト謀

殺を立証するぞ。裁判に持ち込めば手前どもには好都合だ。証言者にはケイルディシャーⅡムジカも出廷できると申しておる。叛意ありとの確証があった上での天誅殺は合法だ。違ったか？　のう、極陰殿……ユージーンに嫌疑をかけ騒ぎ立てるものなら、己は何の躊躇もないのだぞ」

極陰は苦虫を噛み潰したような表情を見せた。

「比企よ、この状況を不自然だとは思わなかったのか。荻号が消えユージーンがここに、彼と同等の力を持って……何故？」

「さあ、特に思わんな。ユージーンⅡマズローが努力をして得た力なのだろう。彼が修練の末解脱したところで、何も不自然に思うところはない」

「ようも小癪な……」

「ほう。抜くのか？　ここで撃ち合いたいというなら一向に構わん。ここは陰階だし……のう？」

比企はしたたかな神だ。……ユージーンは彼を怖ろしくも感じた。極陰は細く美しい茶色の眉をきゅつと吊り上げて、忌々しそうに比企を睨んだまま時間を気にしているようだ。

陰階を自身のアトモスフィアのみで支える極陰は、いくらセキュリティーシステムを攪乱させているとはいえ玉座を離れて長時間留守にできないのだ。彼女の周囲を取り巻いている陰階の皇の証、二本のアトモスフィア吸収環が鮮やかな青い蛍光を放っている。

比企に極陰、両者ともが各々の神具に手をかけていたが、比企は荻号以外の相手には神具を抜かないつもりのようなだった。

極陰も先ほども虫の息だった身だ。よりによってここで玉座をあけたまま一戦やらかすことは賢明ではない。

一触即発の事態が比企の機転によって回避された。

極陰はそれ以上追及しても不利となることがわかったので、撤退せざるをえなかった。そして極陰は、荻号がどうやって死んだかというより、いかにしてユージーンが生じたかという事の方がずっと気にしていた。比企が殺気だっている今、性急に問いただす必要もない。

策士である彼女はそう考えて、その場を退いて玉座へと戻っていた。

あわや撃ち合いというところを回避してまだ生きた心地のしない二岐に、ユージーンは二、三言葉をかけて手をかして立たせる。比企は陽階には戻らずに荻号の書斎に立ち入り、まるで宇宙の真理をぶちまけたように散らかっている遺品を一つ一つあらためていた。何かメッセージを残してはいないかと思ったのだろう。

荻号は公文書でどうしても書類の提出がある際を除いて、私的なメモを取らないし残さない。どうやら彼の頭の中に全てを押し込んで逝ってしまったようだ。

二岐は久々に比企を見て、容貌が随分変わってしまったのだなと感じた。二岐の知る若き頃の比企は、まだ100歳を過ぎた頃からこの書斎に出入りをしては本を読んでいた。本の虫になってしまったのはその頃のことであって、荻号を慕って毎日のようにやってきては様々な事を彼から学び取り、生き生きと問答を交わしていた。そして幾歳月が過ぎ、比企が全てのことを荻号から学び終える前に、突然比企は荻号のもとを去った。ずっと理由を聞きたかったと思っていたのに、二岐はどうでもよくなった。

紆余曲折あったにしろ、比企は荻号を慕ってまた戻ってきたのだと、二岐は思いたかったのだ。

比企は一通り荻号の遺品をあらためると、ふとユージーンに向き直る。

「汝の身に何があった」

「比企殿……それは……申し上げられません」

「全てを識りながら、口を閉ざすか……」

比企の灰色の瞳が、寂しそうに閉ざされた。

諦めてしまったような、苦しそうな彼の横顔。荻号は失望し、裏切られた彼の子らの表情を飽きるほどに見てきたことだろう。彼に近づいた者は裏切られる事が必然だった。ジーザスが去り、彼がそれを望まなかったと知る者は、今はユージーンしかない。

「己はもう訊かない事にしよう。荻号が消滅してようやく解ったのだ……この世には不可侵の領分があるのだと」

「比企殿、荻号殿の名誉にかけてお伝えしておきます。ジーザス様は荻号殿に殺されたものではありません。はっきりとお伝えしておきます」

「それはもう解った。先ほどそう言ったのは、交渉カードだ……死者には口がないので利用させてもらった」

比企は自ら罪を被ってまでユージーンを庇った。何故彼がそうする気になったのかわからない、だが……荻号に対する心情が何らかの形で変化したのだろう。比企は荻号の最期に立ち会った唯一の神だ。この世界の大气へと還っていった彼を目の前で見届けて、最後の最後に彼の心に触れたのだろうか。

ユージーンは自然と口について、謝罪の言葉が出ていた。

「申し訳ありません」

「……ユージーン。それは言うな。汝はなお辛いはずだ。だが奴の遺志を継ぐものがお前でよかった、それが救いだ……」

「……」

ユージーンは比企に何か言葉を返さなければと思えど出てこない、比企もまた数多くのものを失い、それと引き換えに強さを得てきたのだ。

生まれついた時は黒かったという、若くして真っ白になった雪のような白髪が取り返しのない時間と煩悶の日々、計り知れない懊悩を物語っていた。

比企はまた連絡すると言い残して陽階に戻っていったので、後には二岐とユージーンのみが残った。二岐は闇神下第一使徒の最後の勤めとして、荻号の失踪を発表して法務局に届けねばならなかった。失踪という表現が一番よいじゃないか。と二岐は思った。

いつかひょっこり戻ってきてくれそうな、そんなニュアンスを含んでいる。実際はもう彼がこの書斎に戻ってきてきてけだるそうに煙草を吸いながら、考え事をする日が再び訪れることはない。分かっている。

ユージーンは比企と二岐の苦悩する姿を見て3年後、風岳村のはずれ、首刈峠でINVISIBLEを克したユージーンが消滅する時には、自らの貫くべき道ばかり考えるのではなく、遺された者達を思いやらなければと感じ、ふと風岳村のことを思い出した。恒や皐月、そしてクラスの子供達……。彼らはユージーンを心より慕っていたというのに、遺された者達の事を顧みず自殺を図り、恒を悲しませてしまった。

死なないでくれとすがり付いて、あんなに泣いて止めてくれたのに……。

破滅へと突き進む者、取り残される者。

残された者は、簡単には前に進めない。

アルティメイト・オブ・ノーボディの創造物ではない異端の神。

藤堂 恒は今、どうしているのだろうか？

彼は荻号よりFC2—メタフィジカル・キューブという神具を得て、その訓練に勤しんでいると聞く。恒はユージーンに何かを与えようとしているが、それは気持ちだけで充分で、それ以上にユージーンは恒に何かを残さなければ、と突き上げるように強く感じた。

ジーザス・クライストの死と引き換えに生まれた女神の赤子は、神階の歴史において最後の神となるだろう。

ノーボディの昇華によって、かの女神を最後に神階には神が誕生しなくなる。

力を得たユージーンとて、さすがに神を産み出すことはできない。どうやら神を創りだすというのは、の専売特許であつたらしい。神はノーボディの手を介しては誕生しなくなり、使徒はアトモスフィアの供給源を断たれて滅亡するだろう。

アルティメイト・オブ・ノーボディ（名も姿もなきもの）が神階を手放したことにより神階は滅亡する運命なのだ。

極陽が恒を創りだした方法は画期的だったが、それでは純血の神は創れない。そして更に恒がその方法を以って神を創りだそうとしても、 $1/2 : 1/4 : 1/16$ と、神の血はどんどん薄くなつてゆくばかりだ。劣化した神のコピーは、やがて生命みなぎる人の遺伝子に更改されてゆく。ノーボディが神々から離れたように、人

もまた神の手を離れ、自ら歩み始めることとなるだろう……そして彼らをそつと見守る事ができる神はどこにもいない。

ノーボディは、神々の滅亡をも予見していたのだろうか。たとえINVISIBLEの支配から解放されたとしても、”神亡き時代”は静かに。

しかし確実に到来しようとしていた。

＊

井村は息が切れてぜいぜい言いながら、宿泊中の旅館に戻って靴を脱ごうとして、玄関口でよろけて盛大に躓いてこけた。

金曜日までに何としてでもここを脱出しなければならない。モニター室兼宿泊部屋に入ると、スタッフが寝転がってスナック菓子やピーナッツをつまみながらモニターを見続けている。井村もその一つ一つのモニターに目を走らせる、どこだ、どのモニターが”主”なる少年に見破られている？

不自然な画面は一つもない。早瀬や他の研究員達がダメダメ、さっぱりと手を振る。朱音は特に目立った行動はとっていないようで、夏休みの宿題の書道に取り掛かっている。今時の子供だというのに几帳面な性格なのかきちんと墨を磨っていて、墨汁など使っていない。くるとくと墨が硯の中を移動している面白みのない画だけが映っている。その墨の動きを見ると、眠気に誘われる。

「さっぱりですか」

「ああ、まだ1日目だしな。そう簡単にシッポは出さんだろう」

「それを言うなら、羽でしょう」

入浴やトイレに至るまで津々浦々、朱音の私生活をのぞいていてもこちらが後ろめたくなってしまうほど、何の疚しい点も見出せなかった。

こんな小さな子供がきちんと自分が天使である、という自覚があつて人間ごっこをしているとは思えない。ひよつとするとこの子は、自分が天使である事を知らないのかもしれないな、と井村は考えを改める。彼女が天使だと知っているのはあの少年と背の高い女だけだとしたら、辻褄が合うように思える。とすれば朱音を調べていても何の進展もあるわけではなく、むしろあの二人の行動を追ったほうがよいように思える。

しかしあの二人は超能力めいた力が使えるので迂闊に近づくのは危険だ、……見つければ命の保障すらもないかもしれない。

井村は恐怖しつつも、彼等に近付き調べてみたくて仕方がなかった。彼等に見つかつても対等以上に話が出来する方法はないか……何か脅しをかけられるような材料は。

彼等と対等に話ができる方法があるとすれば、やはり脅迫だ。それもただの脅迫ではいけない。彼等と話し合いの場を作り、自分が無事に帰れなかつたら研究所本部に報告が行くようになって、いつでも言わなければ話を聞いてくれはしないだろう。そして自分のこのこと彼等の前に出て行く事は危険だ。

直接は接触できないように……例えばテレビ電話などが望ましい。

そうなると少し大掛かりになってくるので、井村一人でできる仕事ではない。やはり研究員を一人、ないし二人はこの計画に参加させなければ手に余る。主任である早瀬に話すのはやめておこうと思つた。朱音の調査が疎かになってしまつて逆に、こちらの動きを知るあの少年達に異変を勘づかれてしまつてはならない。

とすると……調査に指揮権を持たない下っ端がいい。

そらやま
ようじ

更に井村の信用のおける人物となると入所1年目の空山 葉子、彼女しかない。彼女は唯一の女性研究員であり、性格は変わっているが、なんというかとても度胸があるし物怖じしない。何度か個人的に飲みに行ったこともある。共に仕事をするとしたら彼女ほど心強い味方はない。

空山は非番なので男性研究員たちが雑魚寝している中に混じって、ごろごろとiPodを聴きながら仮眠をとっている。一応女性なので配慮されて別の部屋を取ろうかと早瀬が気を廻したのだが、結構です、と一蹴したつわものだ。井村は布団の中に手を差し入れ、ちよいちよいと足の裏をくすぐる。

「ううん、あっは！ やん、クロ」

小さく喘ぐような声が聞こえてきた。

どうやら愛犬に足の裏を舐められている夢を見ているようだ。他の研究員は寝ているかモニターを見ているかまだ気付いていないが、早く起きてくれないと井村が空山にちょっかいを出しているように見られてしまう。くすぐるのは中止にして、足首を持って揺さぶってみた。空山は地震が起きたのかと思ったらしく、短い悲鳴をあげて飛び起きた。

起きぬけの頭ぼさぼさの姿であるにも構わず、井村は彼女を外に連れ出した。一応、GパンにTシャツといたいでたち、パジャマではないので外に出しても大丈夫な格好はしている。ボブの頭で、猫っ毛の茶色の髪の毛、大きくくりくりとした猫のような瞳、身長は150cmとミニサイズな妙齡の女。

「何ですか、折角気持ちよく寝てたのにいうんうん、それで……へえへえ……あーあー」

「寝るなー！」

後頭部をスパーンと叩いてやる。吉本新喜劇の誰かかと思うような絶妙の寝ぼけ顔を見せている。

「三途の川やわあ……あつ、きれいなお花畑が」

「渡るなー！」

いい加減に起きてもらわなければ困る、と眠気覚ましに村の純喫茶でコーヒーを一杯おごってやるはめになった。

日に焼けた看板、レンガ造りの店構え。ガラランとドアに付いたベルがけたたましく鳴って、暇そうにカウンターで新聞を読んでいたマスターが久しぶりに来た客に驚いて立ち上がった。案外この方が外で話すより安全かもしれないと思って、店員に会話を聞かれないよう一番窓際の席を陣取る。店内は意外と広く、ジャズのBGMが控えめといった言葉を知らないのか耳触りだ。それでもしーんと静まり返って、会話が店員に漏れ聞こえてしまう心配はなさそうだ。優柔不断な空山にはメニューを選ばせないで、コーヒーのブラック二つ！と遠くから厨房に注文を飛ばした。

「チーズケーキもお！」

空山がすかさず追加で叫んだので仕方がない。

井村はこの女を信用してよいものか本気で考え直した方がよいのかと思ったが、もう連れてきてしまったので仕方がない。空山は口調や性格はこんなだが、意外としっかりしていたように思ったのだ……。空山はメニューを名残惜しそうに見ていて、煙草を出してライターに手をかけたが、井村はそれをぴしゃりと叩いて引っ込めさせた。

この女はヘビースモーカーで、ニコチン中毒になりかけていたほ

どだ。井村はこれからどうすべきか悩みながら、窓の外をぼんやりと眺めていた。商店街は人通りが少なく、殆どが高齢者ばかりだ。コーヒーが運ばれてきて、チーズケーキも揃ったら切り出そう。そう思ったところだった。まずはお冷やとおしぼりが運ばれてきて、井村がそれを口につけたときだった。外を、見慣れたシルエツトが通りがかった。先ほどの少年と、その隣にいるのは……どこか見慣れたシルエツトだ。すらりと背が高く、細身で、色白……ふつくと丁度よい肉付き。井村はもう少しで水を吹きそうになったのをあわやというところでどまった。

空山が面白そうに、ふぐのように膨らんだ井村の頬をぷにぷにとつついている。

”よ……吉川 皐月！ サツツン！？”

吉川といえば大学時代のテニスサークルの後輩だ。確か学生時代は優秀で、大学院に飛び級をし著名な雑誌に彗星のように現れた若き天才と物理学界に賛美されたものだ。研究者としての道を歩まぬ事を惜しまれながらも、小学校教師として中国地方のどこかにある山村の小学校に赴任したと聞いていた。

まさかそれがよりによって！ この村だったとは……。年の頃にして10かそこらの少年、そして皐月の連れ合い。……まさかサツツン、いや皐月の教え子なのか？ サツツン、気付いてくれ！ それは人間じゃない。”主”だぞ……！

”くそっ！ どうする、どうする俺！”

コーヒーが二つと、そしてチーズケーキが運ばれてきたが、井村は思考回路が止まっていた。

＊

恒と皐月は連れ立って商店街を歩いていた。

連れだっているのは偶然というか、Mephistophelesとの特訓の帰り、偶然ばったりと商店街で出会って、一緒に歩いてただけだ。恒は母の出す創作料理屋がどこに建つのが気になって、更に言うとその隣の魚屋の主人が気になって何気なく商店街に入ってみると、ばったり会った皐月は丁度その魚屋に買い物に行くそうだったので、同行させてもらった。

「藤堂君、MCFはもうできた？」

「はい、できました」

「それって、人体に悪影響があったりしない？」

「そうならないように、できる筈ですけど……」

恒は自信満々といった風ではないが、確実に100%の状態にまで仕上げてきた。そのために彼が何度も何度も、繰り返し練習をしていたのを皐月は知っている。恒を信じたい、しかし皐月の大切な人もまたMCFの対象となる事を、彼女は恒に打ち明けざるをえなかった。言ったところで何かが変わるとは思えないが、それでもより慎重にやってくれるのではないかと期待した。

「研究者の中にね、私の先輩がいるの……傷つけないであげてね、難しいと思うけど。研究者だって悪い人ばかりじゃないのよ。皆それぞれの立場があって状況があってこうならざるをえなかった、だからお願いね。藤堂君はわかってると思うけど」

皐月は恒にくれぐれも、と言って恒の手を握った。恒にも勿論わかってるし、そんな目で見ないでほしいと思う。人間以外の知的

生命体がこの地球上に闊歩して、その目的も知れないとしたら不安だし警戒心だって持つ。それらはどこからやってきて、そして何が目的なのか？ それだけは調べなければ気がすまない。恒がかつてユージーンを怯えて逃げ惑っていたばかりではなく、果敢にも立ち向かい解き明かそうという人間はいつだって現れるだろう。それを不本意な形で挫いてしまわねばならない、とても卑怯な行為だ。

「先生の、元彼とかですか？」

「違うと分かっている、恒はからかう。」

「え？ そんなんじゃないわ」

「そういえば先生って、彼氏作らないんです？ 今日だって、天気もいいのに一人でぶらぶらしてますけど……」

「うーん、今はねえ……」

そう言って皐月の頭をよぎったのは、ユージーンの面影だ。恒はそれを見て、あっと思った。そうだったのか……最初はあれほど噛み付いていたりして仲が悪そうだったのに。

人間の感情は複雑なものだ。例えば皐月とユージーンが付き合う事になってしまったらどうなるのかな、と恒は勝手に想像をめぐらせる。結婚して、子供は生めないから夫婦二人でずっと仲良く暮らすんだろうな。でも皐月は老いてゆくのに、ユージーンはずっと同じ姿のままだ。そんなのって、耐えられるだろうか？ いくら愛は不滅だとはいっても、さすがにそれは皐月が辛くなりそうだ。そして皐月の最期を看取らなければならないユージーンもまた、愛する者を先に失って気の毒だ。

やはり皐月先生のお相手にはちゃんとした人間の優しい男性がいな、と恒は勝手に妄想しておいて結論付けた。

「ユージーンさんとは無理ですよ。第一、人間じゃないし男でもな

いんですから対象外じゃないですか」

「こーらー、どうしてそんな事を言うの。大体どうして、私がユー
ジーン先生と……」

「だって先生、顔に書いてありますよ。ユージーンさんの事が好き
だって。好きになるのは仕方ないけど……人間は皆恋をしたり、好
きな人が出来たりするものなのかな」

恒にはよく分からない感覚だった。

皐月はユージーンに恋をしているようだし、母親は魚屋の主人に
恋をしている。朱音は恒に、巧は朱音に……。恋愛大いに結構。で
も人を愛するって、誰かを好きになるってどんな気持ちだろう。恋
愛の話になった時、恒は一人、取り残されたように感じるのだった。
こればかりは、皐月先生も教えてくれはしない。人を愛し、結婚
し、子供を作る。なんとという神秘的な人間の営みであり生命の環、
恒はその環の中に、生涯入る事ができない。

志帆梨の創作料理屋の建設予定地は割と広い間取りで、逆に広
ぎるんじゃないかと思うほどだった。囲炉裏を置いたりする予定だ
というから、できるだけ広いスペースを確保したいのだろう。

「ここが、お母さんのお店？」

「そうです」

「広いのねえ」

「広いですねえ……！」

ひとしきり店の間取りに感動したところで、恒は偵察に、皐月は
買い物のため、隣の魚屋に入ってみることにした。外はガラス張り
になっていて、中に陳列されている魚やらイカやらタコやらが外か
ら見える。落ち着け、恒の未来のお義父さんになるかもしれない人
が中にいるのだ、恒も流石に緊張し深呼吸をして息を整えた。皐月

がドアを開けて、恒がこそそこそと中に入ると、三代目店主、三笠^{みかさ}和成^{かずなり}が愛想のよい大声で挨拶をする。

「はい！ らっしやい！ お姉さんにぼく、今日の魚は新鮮だよ」
山村で”今日の魚は新鮮”もなにもないと思うのだが、彼があまりにも屈託のない爽やかな青年だったので、恒は逆に戸惑ってしまった。余計なお世話だが顔も十人並み以上、肌は真っ黒に健康的にやけて、きらきらと白い歯が光っている。恒は申し訳なく思いながらもマインドブレイクをかけさせてもらった。

32歳独身。女性経験2人、今は彼女もおらず。男の考えている事の中に、ひとつも疚しいものはない。

こんなに下心がなくてよいのかと思うほど、あっさりとしている。小さな村に、よく好青年がいたものだ。皐月はそんな恒の複雑な思いも知らず、魚を一つ、二つと注文している。

「こないだねー、藤堂さんちでこのお刺身ご馳走になって！ もうすっごく美味しくて！ 一度行ってみたいと思ってきたんです」

「藤堂さんとお知り合いで？」

「この子、藤堂さんちの息子なんですよ。ね、恒君」

「え？ あ、母がお世話になっていきます。母を覚えていますか？」

思いがけず話題を振られて、恒はしどろもどろだ。彼はヘンな意味ではなく、得意客として母親をよく覚えているようだった。

「藤堂さんとの奥さんは、いつもこーんなにたくさん、魚を買ってくださるんで。そろもう、覚えてるさ。でも子供さんは毎日魚料理なんて大丈夫かなあ、なんて考えていたんさ。知ってる？ 魚は頭がよくなるDNAってのが入ってってね？」

「DNAですよ」

少々間が抜けているが面白い青年だな、と恒は感心した。彼が未来のお義父さんとなっても、彼とならうまくやっていけそうだな、

と子供ながらに彼は複雑な心境で将来のことを考えていた。そして恒にとっては実の父親などより、彼の方がまだ親しめそうだった。

＊

その後ろで、井村と空山は壁にへばりつくようにして聞き耳を立てている。

途中、お巡りさんが不審な目をくれながら通り過ぎていった。喫茶店で出たコーヒーを一気飲みして、空山は何が何だかわからぬまま井村にチーズケーキをもごごと口の中に押し込まれて、とにかく奴らを尾けろと言われ外に出て後をつけていたのだ。彼等は商店街の中ほどにある魚屋に、吸い込まれるように入っていた。主人との会話から察するに、少年の名は藤堂、藤堂 恒！ 彼が”主”なる少年だ。この名前を忘れてはならない、と井村は持ち合わせていたマジックで腕に書き込んだ。名前がわかれば住所だって突き止められるし家族構成などもわかる。空山はまだ口の中のものが片付かず、もごごと口を動かしているだけだった。

＊

ユージーンは極陰の要請どおり、総務局に行って神体検査を受けていた。

あれから軍神下執務室に戻って以御と会ったが、どうやら彼はユージーンを荻号だとばかり思っているようだった。説明するのが面倒なのでひとまずそういう事にしておいたのだが、戻った後で以御によくよく説明して理解してもらわなければならなかった。そのために、自らが過去も現在もユージーンであり続けるというアイデンティティを証明する神体検査はデータを示す事ができるので都合だ。血液成分測定において以前と同じ組成が出て、御璽の認証も

パスした事で、ユーザはユーザであるという自己同一性が立証された。しかしその他はまるで別神の数値が出ていた。

フィジカルレベル測定装置、マインドギャップ計量装置はあまりの膨大なパワーに軒並みカウンターストップが出てしまっており得ない数字になってしまったが、ここは仕方がない。今のユーザは荻号のようにうまく力を加減する事ができない。Mind Gapが99層などあり得る数値ではないので公務員たちは驚いたり、呆れたりしているようだった。イカサマをしているのではないかと何度もボディチェックをされたが、彼等も気付いていた。彼の纏っているアトモスフィアが、それ相応の数値をたたき出すに相応しい暴力的な量だということぐらいは――。

「どうして、こんな事に？ 装置は壊れていないようですし」

「どうしてでしょう」

「荻号様の力というのは誰かに引きつぐものなんですか？」

「……あるいは、そのようなものなのかもしれませんね」

そう言って公務員達が不思議がるのをユーザは黙って聴いていた。Lv 99, フィジカルギャップ 999999, マインドギャップ 99, 何一つ実測値ではない値となってしまう。これがGL-ネットワークオンラインで一両日中に叙階表に掲載される。神階を震撼させるに十分な数値をたたき出した。

神々はどう思うだろうか……。どのように思われてもそれを受け止め、受け流すしかない。

荻号がかつて長き歳月をそうしてきたように。彼は小さく頷いて、決意を新たにした。

第1節 第35話 サンドイッチとケチャップとマヨネーズと主について

何度説明されても、以御には納得がいかなかった。

いかに最新のデータを示されても同一人物だと認めることができない。

以御はピカピカに磨き上げた軍神下執務室の机を譲らないまま、何度も目の前の男から提示されたデータを見直している。

揚げ足とりは以御の得意分野だが、口について出てくるのは唸り声ばかり。目の前の男。いや神だが、ユージーンⅡマズローが紛れもなくそのひとであるという自己同一性は99%、アトモスフィアの組成の変化を除いては疑う余地もない。

アトモスフィアの質がどうだの数値がどうだの、細かい事はこの際どうでもいい。

ただひたすらに……強すぎるのだ――。

ただ以御の眼前に立っているだけでも、かつて荻号がそうだったように、強者と力劣る者が接近した際に起こるスパークのような現象。

いわゆる”気圧の差”を感じるのだ。かといって彼が荻号なのかというところはどうしたことか違う。彼は一体誰だというのか。以御は書類の向こうに、疲れた顔で立たされている神をちらりと見遣り首を振って結論付けた。

「とにかく！ 俺にはあんたがユージーンのようには見えない。俺は俺の主たる軍神からいかなる者もこの椅子に座らせてはならないと言われている」

「職務に忠実なのは結構だがね以御。そしてその心意気に感心するが、そろそろ理解してくれないか」

以御はもう、何が何だかわからなくなっていた。ジーザスの葬儀にユージーンの聖衣を借りていった萩号は、とっくに終わっている筈の葬儀からまだ戻ってきていない。その代わりに現れたのがこの男、いや、この神だ。

順番が狂っている。物事を筋道立てて考えるなら、目の前の男はどう考えてもユージーンに成りすました萩号だ。だがそれならば、面倒な神体検査を半日がかりで受けてまで自己同一性を証明しようとしている意味がわからない。ひよっとすると萩号はこれからユージーンとして生きてゆくことにしたのだろうか？

この男が萩号だというなら非常に納得がいくのに、違うと言っているから困る。

「あんたがどうしてもご自分をユージーンだと思うなら、これができる筈だ」

以御はデスクの上に小さな錠前を置いた。

10cmほどの長さで細身の筒状、鈍い銅色をした金属製のものだ。爪先でやっと廻せるだけの小さなダイヤルが36桁もついている。

「これを開けるには36桁の番号が必要だ。12桁を俺が決めた番号、残りの12桁をあんたが決めた番号、残りの12桁は軍神の肩にある御璽の下に彫り込まれている識別番号の数字だ。36桁の番号が一致した場合にのみロックの開く錠前だ。覚えていたか？ この錠前の中には鍵が入っていて、その鍵で墓場まで持っていく機密書類のある金庫が開く。俺と軍神は互いの番号を知らない、俺にマインドブレイクをかけて軍神側の番号を知ろうとしても意味がないのさ。さあ、入力してみな？ 本物なら難無くできることだろう」

「迂遠なことだが、なるほどお前は正しい」

ユージーンは以御の忠実さと疑り深さに脱帽しながらも、以御が先に入力した番号に引き続き自らの番号を入力し、錠前はあっさりと開いてしまつて筒の中からぼろりと銀色の鍵が出てきた。以御は反射的にその鍵を筒の中に押し込め、また適当にダイヤルを廻して封をした。

「あんた、本物だったのか！」

「だから、そう言っただろう」

以御は首を傾げながらもようやく、デスクの椅子を譲った。入れ替わるようにユージーンが椅子に座り、以御がデスクの前に立たされる。ユージーンは自分の居場所に戻ってきてほつとしてたのか軽く肘について手を組んで顎をその上に乗せた。以御はまだ納得がいかないらしく、つつかかってくる。

「何があつたんだ。荻号さんは回復までにはまだ3週間はかかると……それどころかそのアトモスフィア。てんで別神じゃねーか」

「色々あつてね。急いで出てきたんだ」

「渦中の荻号さんはどこに消えた」

「それは、わからない」

歯切れの悪い返答だ、ユージーンはこのように歯に衣着せた物言いをする神ではなかった。彼は気持ちがいいほど明朗快活で、彼の第一使徒を信頼していた。隠し事など一切なかったというのに……。彼がこうまでして隠さなければならぬ真実、いや約束なのか？間違いなく彼は真相に近づいていた、以御はそう思った。

「知ってるんなら、言えよ」

「言えない」

しばし睨みあう。

「では後で吐かせる。だがあんたはご自分の立場をわかってるのか？俺でさえこんなに疑ったんだ。他の神々にどう説明する。極楊と比企さんの頂上決戦が終わったら、陽階枢軸・準中枢定例議会が始まる。追及は避けられんぞ」

「釈明などしない。自分でもどうしてこうなったのかわからないし、特に疚しい事もないのでね」

ユージーンは神階の現状の確認をするため、以御に貸していたデスクトップパソコンを起動する。

そういえばもう一台のノートパソコンは風岳村の社務所に置きっぱなしだ。アトモスフィアでの認証はアトモスフィアの構成がすっかり変わってしまってユージーンのものとは認識されずエラーが出たので直接コードを打ち込むと、オンライン接続が開始された。

GLーネットワークは1時間単位での神階の動向を報じている。メンバーズログインをすれば更に詳細なニュースをチェックできる。最新のニュースは常に把握しておかなければならない。

ヘッドラインには荻号の失踪が大きく報じられていた。失踪を報告したのは二岐、対外発表をしたのは極陰だ。

「荻号 要、失踪……か。極陰が最後に荻号殿自身から、彼が神階を去る意を聞いたそうだ。ところで公務に復帰させてくれ、以御。指揮権の返還を」

以御は肌身離さず持っていた軍神の正当性と指揮権の所在を示すもの、つまり身分証明のための神器を返却した。

軍神の証、展戦輪の刻印された公式の印鑑である御璽と宝玉、そして権威の象徴である軍神の杓杖である。

これを第一使徒と位神の間で受け渡しすることによって指揮権の所在を明らかにするものであった。

あれだけ死を覚悟しておきながら生き恥を晒しなんとも情けない話だが、死に切れなかったユージーンに遺された道は再び軍神として執務にあたる事しかなかった。一方、以御の方はユージーンが戻ってくる事は知っていたということになるが、まさかこのような形でとは夢にも思わなかった。

＊

「不自由な思いをさせておるの」

メファイストフェレスⅡセルマーは、突然入室してきた女皇に驚き鏡に額をぶつける。彼は鏡の前で、豊かにたくわえた顎髭の手入れをしていたところだった。アルシエルは供もつけず、応接間のよくなこの部屋のビロードのソファアにずかずかとやってきて、でんと座ってふんぞり返り、赤いピンヒールを履いた足を大胆に投げ出している。セルマーは普段は御簾により隠されてきたアルシエルの素顔を見てはならないと思い、条件反射的に平伏しようとした。

「これは、陛下」

「苦しくない。そこに掛けよ」

「ご尊顔を……光栄の至りにございます」

セルマーの娘、メファイストフェレスⅡメリーがアルシエルの勅命を受けてより数日。

父セルマーはアルシエルの皇居にて、実に手厚い待遇でもてなされていた。退屈をしないよう最新の学術雑誌が毎日運び込まれてくるし、パソコンもネットも使い放題、一流のシェフによる豪華な食事も胃がもたれるほど運ばれてくる。ストレスが溜まらない様、SPAなども堪能できるときた。

何不自由のない生活を保障されているのだが、セルマーはとても楽しむ余裕などない。娘は勅命によりユージーンⅡマズローなる軍

神をアルシエルのもとに連れてくる約束だ。

セルマーは人間にこそ興味は持てど、神になどと興味もなかった。

だがかの神を連れてこなければ自らの命がないとなると、自ずと興味も沸いてくる。セルマーは娘が第0位の使徒を務めているというユージーンという神について、ネットを駆使し情報収集にあけくられた。GLネットワーク（Gods-Linkage Network）の存在は知っていたので、メンバーズログインはできないまでも、表向きの神階の情報は集めることができた。ヘッドラインには先代極陽、ジーザスⅡクライストの崩御が大きく報じられており、セルマーは感慨深く思った。

生物階に浸透しつくした世界三大宗教がひとつ、キリスト教創始者の死をもって一つの時代が終わりを告げ、新たな時代の到来を感じたからだ。ある意味で神階の代名詞でもあったジーザスに哀悼の意を表しつつ、陽階7位 軍神 ユージーンⅡマズローのデータを漁った。

彼の主な業績は太平洋戦争、第二次世界大戦の戦局操作だそうだ。あれほど多大なる犠牲者を出しておいて何が業績なのか。

あの戦争をこそ起こすべきではなかったとセルマーは考えているのに、神々はいつの時代も勝手なものだ。その結果ユージーンは若くして出世したようだが、それ以外に特にいわくのついた神のようには見えない。写真を見てもそれほど興味深い容貌はしていない。至って普通。何か特徴を挙げろと言われると困ってしまうほど、神としては平凡。セルマーはどうとうアルシエルの気を引くものを、彼の中に見出すことができなかった。それが自らの生死を決するかどうかというのに！

「気もそぞろだな……さすがの汝も、死は怖いのか」

アルシエルはびくびくと怯えるセルマーに声をかける。

「お恥ずかしながら、陛下」

セルマーは正直に現在の心境を奏上した。

アルシエルは死を怖れると言っている割には卑屈になることもなく、物怖じをしないセルマーの紳士然とした振る舞いがいたく気に召したようだ。

「安心しろ、娘が任を果たせずとも汝の命など取らぬよ」

「え？　は？　で、では何故？」

「それでも言わねば、神が万障を繰り合わせて解階に出向こうとは思うまい。娘がユージーンという神に事情をよくよく打ち明け、父親が人質となっている旨を伝えれば、博愛、慈悲、正義を是とする神ならば断れまい。それが余の狙いだ」

アルシエルはメファイストフレス・メリーに危機感を持たせる事により、確実にユージーンを連れてこさせようという寸法だ。

解階の住民が神階の門を通して神階に入ったことがないように、神が解階の門を通して解階を訪れたという前例はない。

しかもアルシエルと面会を余儀なくされるとあらば、進んで来たいとは思えないだろう。そんな状況の中、否が応でもアルシエルに会いに来てもらうためには不本意ながらに脅迫をするしかなかった。ネタばらしをすると、そういうことなのだそうだ。

娘には気の毒なことだが、セルマーはほっと胸をなでおろす。

「さすがは、陛下。恐れ入りました。差し出がましいとは承知いたしておりますが、かの神をいかなさるおつもりか、いま一度お聞かせいただけないものでしょうか」

「……助けを請いたいのだよ」

アルシエルは遠くを見遣りため息混じりにひとつ、呟いた。

窓の外は夜闇に、絢爛豪華なシャンデリアの影が映じている。中庭の噴水の水音がさらさらと聞こえてくる。アルシエルが生涯口にしそうにない言葉、助けが欲しいという一言は、セルマーの耳を疑わせるに十分だった。冷たい静寂が暖かな部屋の中を満たしてゆく。

彼女に助けが必要？　セルマーは声を裏がえらせながら鸚鵡返しに尋ねる。

「は。助け、でございますか？」

ほどなく控えめなノックが聞こえ、執事がティーセットを持って入室してきた。アルシエルは運ばれてきたブルーハーブティーをセルマーにすすめ、上品な所作でカップに口をつけながら、マッチ棒が上に載るのではないかと思われるほど長い睫毛をしばたかせた。

色白の顔の輪郭はふっくらとして、あどけなさすら残る面立ち。

解階の至高者であり最強の名を欲しのままにしてきた彼女は、間近で拝見すると華奢な骨格であることに気付く。アルシエルの深慮がセルマーには理解できない。何が悲しくてまだ年端も行かない若き軍神ユージーンに助けを求めるのか、セルマーには想像もつかない。アルシエルはセルマーと彼の娘を巻き込んだ事に責任を感じているようで、重い口を開く。

「遅々としたものではあるが、確実に喰われておる……解階がだ。余の力では如何ともし難い」

「喰われている！？　な、何にですか？」

セルマーは思わず身を乗り出し、アルシエルに直に視線をぶつけて凝視していた。ぷい、と彼女は視線をそらす。どうやら簡単に、

手玉に取られている。

「それが解らぬのだ」

まるで満月が欠けてゆくように、偉大なる力によって解階は徐々に侵食されつつある。アルシエルがそれに気付いたのはつい最近だ。解階最強の女皇と謳い、暴力の何たるかを知る彼女は、解階を侵すその力が何ら暴力的なものではなくより本質的なもの、すなわち“世界の成り立ち”に関するものだと思いついていた。

「して、何故かの神に白羽の矢を？」

「太古、解階では政は占術により執り行われておる。代々の解階の皇たちは力に秀でた者であるとともに、優れた占術者としての資質も併せ持っておった。余も例にもれず占術をおさめておる。余は50年前に星の運行を読み解き凶徴を見出だしてより、星々が消滅しておると気付いた。はじめは気にならぬ程度であつたのだが、つい最近、状況が一変し急速に数十もの恒星が消滅をはじめたのだ。：静かに、しかし着実に解階は失われつつある」

彼女の口調には実感がこもっていた。満月が欠けるように侵食されているのか？あるいは解階という風船のような空間の袋状構成が収縮に転じているのか。アルシエルの含蓄だと前者だと言いたそうだ。三階は基空間という巨大な虚無の空間の中に独立に構成された空間郡だ。その最下層にあたる解階が侵食されるなら、すなわち基空間が穿孔したか、基空間もろとも何らかのトラブルに飲み込まれているということだ。

そうなった場合、事態は解階の消滅のみにとどまらない。

三階は例えるなら一艘の船のようなもの、どこかに綻びがあつた穴が開いたり喰われれば、水が入って船が沈むように三階も同じ運命を辿る。神と解階の民との長年にわたる確執などに捉われていてはならない。

軍神ユージーンなる神がその逼迫した状況を理解できる賢明な神

であることを祈るばかりだが――。

メリーには半年以内につれて来いと申しつけたが、悠長にしている時間など実はなかった。ある程度の時間を彼女に与えたのは、勅令の完遂を不可能と感じて、諦めたり投げ出してしまわれないようにとの配慮だ。時間に余裕がないからこそ敢えて、時間を与える。このあたりのアルシエルの戦略については、セルマーも脱帽だ。

「で、では何れ母星も……とお考えですか？」

「憂慮しておる。余は空前の脅威から解階を救いうる救い主を捜し……かの神を見出だした。かの神の背には、類い稀なる徴があるそうだが」

アルシエル得意の占術でユージーンを見出だした。学者であり物事を理論立ててしか考える事のできないセルマーはオカルト的な発想が気に入らなかったが、アルシエルが打つ手無しと匙を投げて諦めてしまったらもう手だてがない。アルシエルすらも無力であるというのに、彼女より力劣る存在である神に助けを求めるのも見当外れのように思えてくる。

そんなセルマーの考えを見越していたかのように、彼女は自嘲気味にのたまった。

「神ごときに借りを作るなど、我慢ならぬと？」

「滅相もございません。かかる危急の大事とあらば手段を選ばず迎え撃つが道理。陛下のご判断は正しうございましょう。して、かの神は”世界の根幹”を揺るがす力を持っているのですか」

「卜占の結果ではな。最初は神皇とも評される萩号　とやらを考えておったのだが……かの者は近日、消息を絶つとの結果だった」

神階の状況がいまいち把握できていないセルマーは彼女の言葉の

真偽を確かめることもできなかったが、なかなかどうして。

たかが卜占、されど卜占。彼女がそう言ったときまさに、神階では荻号が消滅した時間だった。

＊

織図はジーザスの葬儀より戻り、EVEへのダイヴを行っていた。ファティナの演算空間のようにEVEも仮想空間に構築されているものであるから、その中を窺い知るには肉体を脱ぎ捨て、記憶のみを演算空間の中に転送して監視を行う。死者の記憶と穏やかに交わることは彼の日課だ。今日もまた無数の死者たちが仮想空間に籍を与えられてやってくる。

死の化身である彼にとって死は身近なものだったが、死に慣れてしまったことは一度もない。人間は驚くほど脆く簡単に死んでしまう。彼等は儚く短い生を様々な色に彩って、花火のように散るのだ。天寿を全うし、神々でいうところの成神にあたる100歳まで生きながらえる者、生を受けた瞬間に死を与えられた幼き命もある。大抵の人間は、神々でいうところの子供のまま生涯を終える……。

彼は不当に奪われた命や不条理な死も盲目の瞳で数多く見てきた。死神が冥皇として管理運営を行うEVEは、そうして心ならずも不条理な死を遂げてしまった"正しく生きた者"に報いるため設立された。死者の記憶は彼らの夢みたオリンポスを、アスガルドを、極楽浄土を、千年王国を、彼岸を見出だしたことだろう。

織図の管理する死者の記憶は増える一方で、"死者の書"と呼ばれる死者の戸籍管理のためのスーパーコンピュータのメモリを、織図は着々と増設している。現在、世界平均での死亡率は人口1000人あたりに対して8〜9人の割合。有史以来最も低い値となっており、織図は一時期の忙しさからは解放されていた。その要因と

しては医療の進歩による平均寿命の伸長や伝染病などの消滅、軍神による戦局操作の結果大規模な戦争が起こっていない事も一因となっているようだ。

とはいえ、人は人である限り確実に死を迎え、織図の仕事がなくなる事はない。

しばらく溜まった死者の記憶をEVEの内部に転送し終えた織図は遥か高みから眼下に広がるEVE内部の光景を見下す。

彼等にとっての天国は、地上で彼等が夢見た天国の姿に近いように設計している。雲の上に住んでいるかのような澄み渡り光に満ちた風景。あるいは霞がかかる広大な花畑の上に、死者たちの終の住家が思い思いに建設されている。家の周りで趣味の農業に精を出しているものもいる、湖のほとりで水浴をしている者も、軒先にテラスを作ったのんびり読書をしている者もあった。代々の先祖とともに一族郎党がこぞって、一つの集落を成しているものもある。好きなように暮らせばよい、ここには彼らを縛るものなど、何もないのだから。

環境は春夏秋冬、世界中のありとあらゆる場所を用意されて、死者たちは好きな土地を選んで住まう事ができたし、ここをこうしてほしい、あれがほしいなどの要望があれば1kmおきに設置されている「要望ポスト」に投函すれば内容を読んだ織図がそれを可能な限りひとつひとつ叶えていた。

織図や彼の使徒たちの善処により居住に関しての不平不満はなく、飢えも貧困もなく、死者たちは誰にも脅かされず平等な平安と自由が与えられている。富を求める者、金にがめつい者もそれが無意味であるすぐに気付く。EVEには貨幣もないし、必要な物はよほど贅沢品ではない限り要望ポストに手紙を入れれば手に入るからだ。神には死後の世界が用意されていないぶん、織図は人間達には快

適な死後の世界を用意してやりたかった。よしよし、今日も楽しそうに暮らしてやがるな、と織図は満足げに彼等を上空から見下ろすと、織図のEVEへの降臨に気付いた数名の死者たちが下から手を振っている。彼等の姿は可視化されて、ほとんどの場合は彼等の生きた好みの世代の姿をとる事が許される。

わけても体力もあり血気さかなな二十代前半が人気だ。下で手を振っている一団は皆20歳代の若者達だが、その内訳は、子供、父母、祖父母、曾祖父母となっており、ややこしい関係になっている。

EVEには宗教も健在している。

唯一神とされる各宗教の祭神は実在した位神たちであり、全ての宗教は正しかったのだとわかった彼等の間で宗教的ないざこざはほぼないと言っている。したがって今は崩御した祭神を崇拝するイスラム教徒と元ユダヤ教徒が仲良く語らっている姿も珍しくはない。大抵の死者たちは彼らが生前信仰していた神が何位の位神だったのかが気になるようだ。信仰する神が枢軸神であった信者は喜んだり、さして高位になかった信者は落胆したりもした。

EVE内での改宗も積極的に行われていた。崩御した神を信仰しても報われないと考えた一部の者たちは、教儀が公開されている陽階神たちの中から気に入った神を見つけて信仰しはじめた。

どうやら、神も選ばれる時代になったようだ。

陽階神のうちでもとりわけ陽階枢軸神に改宗する事にはメリットがあった。陽階枢軸神たちは年に一度、死者たちの慰霊祭にEVEに降臨し姿を顕すのが恒例となっているからだ。人気歌手のコンサートではないのだが、各々が信仰する神が年に一度姿を見せるとあれば信仰にも精がでるし積極的に改宗が行われるのも頷ける話だ。勿論信仰する神が崩御していたからといって、簡単には改宗しない敬虔なる信者、あるいは無宗教論者もいたが……。

EVEの死者たちが崇拝する陽階枢軸の神々、もうこうなつては人気投票の様相を呈してきていると織図は思うのだが、陽階枢軸で現在最も人気を集めていたのは知名度も手伝つて、やはりジーザスⅡクライストだった。

そんな事情もありつつ、ここに立ち寄ったのはジーザスの死を彼の十二使徒や聖人たちに伝えるためだ。およそ2000年も前の死者の記憶であるとはいえ、彼らがジーザスの為に殉教した者たちである以上、彼らには知る権利があると考えたからだ。織図はジーザスに縁のある記憶達ひとりひとりに会いに行つて、彼の死を伝えた。彼らの信じた主はEVEに入ることとはできないのだと。

死後の世界にジーザスが待っていると信じた彼らを心ならずも裏切った形になったことを、ジーザスに代わつて心より詫びて回つた。彼らはジーザスが歩んだ道についてゆけない事をこそ残念に思つたようだが、ジーザスが最期まで彼の信念を通し、善き世界を守つたという聞いて誇りに思うと述べた。最期までジーザスにつき従つた彼らをのぞき、来年はジーザスの崩御を受けてまたキリスト教から大量の改宗者が出るのだらう。それを寂しいことだとは、おそらくはジーザスも思わない。

果たして無限に続く生と死の営み、そのシステムは誰が作り出したものなのか？

いつもの疑問を抱えたまま織図はジーザスの記憶を、この空間で穏やかに永遠の時間を過ごさせてやるできないものかと考えた。ジーザスは自らを千年王国に在るべき者として民衆に語りかけ人々に天国への道と愛を説きながらも、彼の死後には無があるだけだったということを知っていた。

神は生命の輪廻から逸脱している異端な存在だ。

誰よりも死という現象を知る織図はそう考える。恒に指摘されてはじめて気付いてより以来引っかかっていた、何故神は自ら生まれる事ができない生物なのだろう……。神は何者かに生み出されていて、神階に配達されている。確かに恒の言うとおりなのかもしれない。ジーザスの命と引き換えに生まれた女神の赤子は、ジーザスが輪廻転生した姿なのだろうか。——いや、違う。どうやら神々は、間違いなく誰かの手によって生み出され続けているようだ。

三階の生物のうち神だけが異端だった。解階の住民も、生物階の生物達も、自ら生まれ出る事ができる。その原点はたった一つの構想、核酸とタンパク質の構成要素、アミノ酸という種子だ。誰かが生命の種、つまり複雑系理論でいうところの初期値をまいた、種子は受け継がれて進化し、爆発的な勢いでそれぞれの階を被覆していった。そしてそれぞればらばらに蒔かれた種子は異なる環境において異なる発展を遂げたというのに、解階と生物階の二つの階の生物は、一つのある完成形をみることとなる。

それは——霊長類の登場である。

三階のそれぞれの”万物の霊長”(the lord of creation)はみな、たったひとつの型に集約された。二足歩行をし、立体的視野を持ち、発達した大脳、自由かつ独立に動かせる手足、高度な思考による文明と文化の創出。それらを可能とする生物は三階を見渡しても同じ姿をしている。織図はまた考える。

はたしてそんな確率ってありえるだろうか？

空の箱の中に時計ができるパーツをばらして入れて、その箱をただガチャガチャと振って完成した時計ができる確率——その確率に均しいほどの確率で、生物階における霊長類は誕生したのだ。さらに、それに解階側の霊長類の登場の確率を掛け合わせると、その確

率は天文学的な確率になる。

そう。不可能だ。

絶対的な不可能の壁を破り三階の住民はまったく異なる環境において同一の形におさまったのだ。何十億年もかけて進化を遂げた生物階、解階の住民とは異なり、神はその完成形がぼんと神階に現れるという奇妙な様式で生命が受け継がれてきた。

こうは考えられないだろうか？

三階はたった一つの形に生命を集約させるために用意された、巨大な実験場なのではないかと。まるで複雑系のシミュレーションのように、シャーレ上に撒かれた同一の細菌が異なる環境においても同じ形を作るかを冷徹に観察する研究者の眼が、どこから見下ろしているかのように思われる。空き箱の中に入れた膨大な数の時計のパーツからそれを振るだけで時計を創り上げる偉大なる者、ブラインド・ウォッチメイカー（盲目の時計職人）は確かに恒や荻号の言うよう、何らかの試行を行っている。

この悪意に満ちた壮大な実験を行っているのは、INVISIBLEなのか。あるいは――他の何者かなのか。荻号は必ずしもINVISIBLEとブラインド・ウォッチメイカーは存在ではないとも言っていた。織図はまたEVEを見下ろす。この仮想空間の世界にある全ての者達は、織図の意志により管理されている。ならば同じように三階を見下ろす巨大な眼があってもおかしくない。

ジーザスの死により織図の目から鱗が落ちた思いだ。神々、人々、そして解階の住民たちは巨大な意志に翻弄され続けている。誰がそれを断ち切るのか。新たな力が必要だ。

織図はそう考えてふと恒とユージーンの姿が脳裏によぎった。

「そうか、恒。そしてユージーン。お前たちはINVISIBLE

を断ち切る、新たな力となりうる」

――織図はEVEのメモリをまた拡張しようと思った。

毎日新たな死者がやってくるということはそれだけ人々の生きた歴史があるということだ。EVEに入ってくる死者が絶えないように、その快適なスペースの用意をしておこうと思った。いつしか、本当の意味で自由になった死者たちが、このEVEを満たす日が訪れるようお願いながら。

＊

結局、スロット2時間の収支対決は教授のボロ勝ちに終わったのだった。

たった2時間で教授は23万4000円のプラスになってしまった。築地は学費を振り込むためにATMから25万円ほどを引き出す以外には、見たこともない金額だ。対決開始の30回転目で、教授がビッグボーナスを引いて築地が777を揃えた瞬間、大連荘が始まった。

そんじょそこらの連荘ではボロ勝ちにはならない、築地もおよそ100回点目で初あたりを引いて4連荘したからだ。だが、教授の台は3連荘目に壊れたらしくメダルが怒涛の勢いで出てきて、いつまでたっても止まる気配がない。ボーナス消化中に1G連荘のランプが眩しく点灯し、台が狂ったように火を噴いていた。

話には聞いた事があるが、初めて見た。台が壊れるなんて！

顔面蒼白になった築地は仕切りなおしの要求と店員を呼びたかったのだが、教授はそれにも気づかず上機嫌だ。あろうことかバイトの店員も気づいていない。教授はボタンを押す手が疲れてきたように、肩をぼんぼんと叩きながら素人打ちで暢気に打っていた。周囲は黒山の人だかり。

教授は最初にお互いが決めた持ち時間であるきっかり2時間になると、千両箱いっぱいコインを詰めて、まだ連荘が止まらないのに、隣でよだれを垂らしながら見守っている人相の悪い若者に譲ってさっさと換金しに行ってしまった。

ああ勿体無い！

そこでどうして代わるかな、と築地は舌打ちをしたが、築地も軍資金が尽きて打ち止めとなる。

築地は13000円のマイナス、教授はボロ勝ちだ。

教授は築地のマイナス分をおごって、帰りに研究室のメンバーのために特上寿司を買って持ち帰った。築地と長瀬は教授のかばん持ちのように寿司を持って大学に戻ってきた。

「よかったじゃないツツチー！ 特上寿司にありつけて！」

棚ぼたの長瀬はほくほく顔だ。

「ありえへん……台が壊れやがった！」

「私は言ったはずだよ、築地君。あの台から、殆ど不可能な可能性を引きずり出す、と」

相模原は得意げに髭をいじっている。さきほどの大勝利の利益は、研究室のゼミ旅行費に充ててくれるようだ。

「あんなん偶然ちゃいますのん」

築地はまだ納得がいかない。だがブツブツ言いながらも、頭のどこかでは理解していた。教授は勝利するべくして勝利したのだと。その台から大当たりという確率を引くのも偶然なら、壊れた台を選んだのもまた偶然という確率の産物、総合的に運が足りない。築地の完敗だった。

急遽学生部屋で催された寿司パーティーの後、築地は実験の概要をあまり詳しく説明されないまま、教授からサンプルを受け取った。

透明水彩の絵の具を溶かしたような。澄み切った赤い液体。これの成分分析を手伝ってくれというのだ。サンプルを分析することができたなら、彼の修士課程の修了は保障されると教授は約束した。

そんな作業、研究でも実験でもない。分析するだけで、結果となるのだとするとこのサンプルは相当に価値のあるものなのだと知れる。

「で、教授。これは何のサンプルなんですか？」

「これか？ 聞いて驚くな。これは神様の血だよ」

「は？」

関西人に生まれついた築地はどうしても話のオチというものを求めてしまうのだが、教授はボケている様子はなかった。いつまで待っても、それ以上の言葉は続かない。相模原は冗談でも何でもなく、大真面目な顔をしている。

” ちょ、冗談きついで……さすがにそれはあかんやろ ”

築地はこんな事態になるのなら、他の大学院生と同じようにきちんと実験をして酷いわくのついたサンプルを解析させられる羽目にならないようにしておくべきだった。とため息をついたがもう遅い。

＊

そんなこんなで、井村と空山は物陰に隠れながら吉川 月と藤堂を見送ると、先ほどの喫茶店に戻り、今後の作戦会議を催していた。空山もようやく事情が飲み込めてきたようで、緊張感のない顔を気持ちほど引き締めると、サンドイッチと紅茶を頼んで、メガネをティッシュで丁寧に拭いている。彼女が何か集中して考え事をす

る時には、こうやってメガネを磨く癖がある。

「で、井村さんはあの男の子が主だという話を、聞いたんですね？」
「そうなんだ。彼は天使とは異なる力を持っている、男の子の姿をしているが、危険な存在だ。超能力のような力を使う」

「私、主ってあんな姿をしてるなんて思いませんでした。もっと、栄養剤みたいなものなのかと思ってましたから。まさか男の子だったとは」

研究員達の仮説では、主は特殊な栄養剤のようなものとされていた。

天使を生かす、主という謎の存在。まさか主なるものが生き物だとは想定外の範囲外だ。これを研究所本部に報告すれば、本部は主の捕獲の司令を出すだろう。

彼女もその”主”もまだ何も行動を起こしていないのに、捕獲となると胸が痛む。井村が独自に調査をしようとしているのは、幼い”主”に対する人道的な配慮もあった。

「俺だってびっくりだよ！ しかもサツツンと一緒に歩いているなんて……」

「サツツンさんに聞いてみたらどうなのでしょう。サツツンさんは井村さんの後輩なんですよ？」

「さあ、サツツンは俺とあの子、どちらを大切だと思うだろうな。親しげだったし、サツツンの生徒かなんかだ。俺達が主を研究対象としていると知れたら彼を守ろうとする。あいつはそういう奴だ」

いくら朱音と”主”が人間ではないと説明しても、教師と生徒という関係で深い信頼関係ができているのなら、皐月は藤堂恒を庇う可能性がある。そして恒に告げ口をされてしまえば、何のために皐月に近づくのかわからなくなる。

主、藤堂 はますます研究員達に警戒心を強め、いらないことを画策しようとするだろう。皐月を介して情報を得ようとしても、それが裏目に出てしまつては意味がない。

「主に近づく事はできないんでしょうか。井村さんが偶然を装つてサツツンさんに近づけば、いつかは主を紹介してもらえるんじゃないでしょうか。あの子、礼儀正しそうでしたし性格もよさそうでしたよ。ひとまず研究のことは忘れて、主と友達になるぐらいの心意気で、近づいてみるのはどうでしょう？ 私が遠くから監視してますし、井村さんに万が一の事があつたらきちんと骨は拾いますから」

「主と直接接触しろと？」

「そうです。そしたら、金曜日にやろうとしているMCFとやらの手がかりも掴めるかもしれませんよ？」

「地雷の埋まりまくっている地雷原に裸足で入って行けと？！ それに、向こうは研究員が村に入っているという事を知っているんだぞ。俺が研究員だとバレたら、殺されるかもしれない」

井村が皐月の後輩だとアピールをすれば、命まで取られることはないかもしれないが、何をされるかわかったものではない。賢明な作戦とはいいがたかった。空山は運ばれてきたサンドイッチにケチャップを塗りたくりながら、あれほど必死で拭いたメガネにケチャップをつけてしまった。

主がなまじ少年の姿をしているから空山が警戒しないのだろうが、彼の力は超能力を軽く超えている。と思うと傍に近づくのも怖ろしかった。

「えー、殺されたりしないですよ。ここ日本ですよ？ 警察に捕まるでしょ、主だってそんなヘマはしないと思います。もう、面倒くさいなあ。いっそこっちの手を明かしたらどうですか？ お互いバレているんだし……。で、ビジネスライクに交渉をするとか。主が

朱音ちゃんにとってどんな存在なのかを話してくれたら、朱音ちゃんを連れ去ったりしないし主にも危害を加えないとか」

「直接だなんてお前は馬鹿かと言いたいが……そうだな……俺ももう、色々と考えたりこそこそ調べるのも疲れた。突撃してみるか！見た目にはそれほど悪そうには見えなかった。頭もいい子だと、助かるんだが」

井村はもうやぶれかぶれで、突撃してみるのもよいかもしれないなと考えた。

案外、藤堂 は話のわかる主だったりして。俺お手柄！？ などという甘い見通しを立ててみた方がうまくいくのかもしれない。

「じゃあ行くかあ……」

井村は結局何も頼まずに出てきたお冷やを飲み干し、お絞りで顔を拭いてさっぱりする。せっせとサンドイッチにマヨネーズを追加していた空山は暫く考えて、ころっと意見を変えた。

「あ、待って。井村さんはやっぱり出て行かないで下さい。私が行きます、万が一井村さんに何かあったとき、主の脅威を伝えられるのが私しかないって、どうです？ それに女の私の方が主にも警戒されずに済むんじゃないかと」

井村に万が一のことが起こって、空山だけが残ってしまったら？いくら主の脅威を必死に説明しても、またいつもの空山の妄想なのではないかと早瀬は信じないかもしれない。それに彼女はうらぶれた神社の裏で起こっていた光景を目撃していない。それらの出来事を併せて報告できるのは井村しかない。女性である空山を危険に晒すのは気が咎めるが、彼女が敢えてそれを引き受けてくれると申し出た以上、井村も彼女に託すしかないと思った。

「接触するにあたって心配な事は、私が捕まってしまって監視役の

先輩の居場所を吐かされてしまう事です。そうなれば対等に情報交換ができません。ですから、先輩はこれから私とは一切会わずに離れた場所から監視をしていてください」

「なるほど、空山に危害を与えたり下手なことをすれば俺が主の存在を本部に報告すると言うわけか。だとすれば俺の居場所は誰にも知られてはならない」

「そうですよ、絶対に！ 私にも知られてはなりませんよ、私がつるつと喋ってしまうかもしれませんからね、そうなったら」

井村はその言葉を聞き逃さなかった。彼は無表情で尋ね返した、山彦のように、脳の中を彼女の言葉が浸透してゆくを感じた。待てよ、今、彼女はともないブレイクスルーをしなかっただろうか。そんな気がする！ 話を進めてはならない。

「待て、今何て？」

「つるつと喋ってしまったら、と」

「どうやって、拷問でか？ それとも催眠術のようなもので吐かせるのか」

井村は畳み掛けた。彼女の思考は水を得た魚のように冴え渡っている。

「催眠術？ ……催眠術ねえ……あーっ！ マインドコントロールですよ！ MCFのMCはMind Controlの略のMCですよ！ それこそ出来るもんなら真っ先にやりそうじゃないですか！ 人体に危害を加えず、研究の邪魔をする事ができるとしたら、記憶を消してえ、私達に大人しく帰ってもらうと！ これが一番ありえそうですよ」

井村は飲み干したコップを倒して立ち上がった。コップは転がって、ティブルの端まで行って、床に落ちて割れた。店員達が振り返ったが、井村はそんな事にはお構いなしだ。彼は立ち上がり、

空山の両肩をがしっと掴んだ。

やはりこの女はぶっ飛んでいる。人と違うのだ。藪をつついていて黄金を出してくれる才能を持っている。普段はとても、使えたものではないのだが……。

「それだっ!! そうかつ! それだよ……でもFって何だろ。MCFを展開するって……」

「Function? Format? Fold? Filter?」

彼女は井村が割ったコップのガラスくずを拾い集めながら、思いつく限りのFで始まる単語を並び立てた。井村はそこまで導かれて、船で対岸の見えるところまで渡してもらった旅人のように、あとはその岸に降り立つだけだった。

彼はすんなりと一つの単語に思い当たった。

「彼等の会話の文脈によると、展開する、できる（形成する）ようになるもの……ならばフィールドだ! Mind Control Field! これを展開できるんだよ、主は!」

「フィールドだとすると、対象は人ではなく範囲でしょうか」

「でかしたぞ空山! 主は爆風のような風を出していたぞ、あれがMCFんだ。これで対策が立てられる!」

ずっと曇っていた空から晴れ間が見えて陽が差し込んできた。井村はガラスくずを集めて思う存分手を切りながら、痛みなど感じなかった。一筋の光明、彼女がそれを、齎してくれたのだと思った。

「見てろ……あまり人間様を甘く見るなよ、藤堂 恒!」

井村の瞳は、爛々と輝いていた。

第1節 第36話 ヘルメット女と未知との遭遇

恒は家に戻って冷蔵庫でキンキンに冷えた麦茶に更に氷を追加して飲みながら、夏休みの算数の宿題ドリルを1時間ばかりで最後のページまでちゃっちゃと片付けてしまって、ノートパソコンを起動してインターネットをしていた。GLネットワークに接続し、織図がないので遠慮なくEnglishボタンを押してニュースを読んだのは何気なくというのではない。恒は夜間、相変わらず荻号のゲストカードを使ってADAMにログインしていたのだが、昨夜から突然ログイン不能になってしまったのだ。

理由を問い合わせると、カードが失効しているとのアナウンスだ。それを聞いて、荻号の身に何かがあったのだと思った。身に……とはいっても彼の命に関わる事などありえないだろうから、社会的身分においてということだ。

彼はここ百年のものだけでも、数え切れないほどの不祥事を起こしてきた。またいつものご法度破りなのかと、恒はそのぐらいにしか思えない。とはいえ荻号の神階に一枚しかない陰階参謀特権のついたブラックゲストカードはかなり重宝していた。機密調査執行嘱託権の付与されたカードは閲覧禁止書棚の閲覧権があったり、機密調査モードという機能がついていて、ログイン中に他の神々から恒の姿を見えないようにすることもできた。

恒はゲストカードをもう一枚持っている事を思い出さなかったわけではない。一般ログイン用の枢軸ゲストカード、つまりユージーンのものをだ。だが彼のカードは豊迫巧を蘇生させた違法行為の懲罰として効力が停止しているし、織図に頼もうにも参謀以外の陰階神にはゲストカードの配布が認められていないので、織図にカードをもらうこともできなかった。

口をとがらせながら荻号の携帯電話に電話しても繋がらない。しばらくADAMのログインはおあずけかと諦める前に、恒はGLーネットワークのニュースを確認してみようと思った。荻号ほど有名な神だとその一挙一投足が常に神階全体から注目されている。何か違法行為をしたのならニュースに速報として掲載されているだろう。ニュース欄の下の方の小さな記事から捜していた。ここ数日、ジーザスIIクライストの崩御を悼む記事ばかりで特集やコラムが組まれて一面は殆ど占領されており、通常のニュースはカットされていたからだ。ところが下のほうのちまちまとした記事に記述が見つからなかった恒はふと上の方を見上げてみると、一面に荻号の写真が出ているではないか。もっといい写真はなかったのかと思うような、横を向いて大あくびをしている写真がでかかと貼られている。遂に重大犯罪をやってしまったのか、と恒は青ざめながら画面にかじりついた。

陰階神第4位闇神 ウィズIIウォルター、置換名 荻号 要、失
踪――。

「はあ？」

恒は誰もいない自宅で一人で素っ頓狂な声を出した。
ちよつと！ そんなのってあんまりだろ！

荻号が誰かに殺されたなどという事はあるえないから、いなくなってしまうとすれば失踪か誘拐だ。誘拐という線も無理がありそうだが、誰に捕まっても平気な顔をして帰ってくるような神だ。こんな時期に失踪だなんて……！

つい数日前まで彼の書斎で神具の扱い方を教えてもらっていたというのに。恒が刑事なら……いや刑事でなくともこう思うだろう。

失踪したくなるような動機が何一つだってないじゃないか！ 第一使徒の二岐が報告したニュースである以上真贋は疑いない、極陰が駄目押しをするように公式発表をして、神階へ帰還する意思はないとの旨を直接聞いたというのだ。誰でもいいから、このニュースを詳しく解説して欲しかった。

地上にいる恒には天上世界の事情はわからない。

失踪とは口実で彼は極秘裏に神階を追放されでもしたのか？ そうでも考えないとやっていられない。これから神としての道を歩み始める決心をした恒は、荻号が何らかの導きないしアドバイスをくれるものだと思っていた。

何より彼はユージーンを見捨てて失踪したのだろうか。いや、さすがにそこまで無責任な事はないと信じたい。ユージーンの遺体はまだ荻号でなければ入れない実験室の水槽の培養液の中で眠っている。回復までは最低でも数週間はかかると聞いていた。水槽は回復を始めた彼が反射的に暴れてガラスを壊してしまわないよう、頑丈な素材で嚴重に密閉されて中から出られないようになっていとも。

恒が助けに行こうにも行けない場所にある。ユージーンを水槽の中に閉じ込めたままどこへ行った。

「どういうつもりなんだよ……荻号さん。どこに行ったんだ……。放浪が趣味みたいな格好してたけど、まさか消えてしまうなんて」

恒は暑さにうだった顎を突き出して組んだ両腕の上に載せ、卓袱台の上に平たくのびた。織図は荻号失踪の事情を知っているだろうか？

彼は荻号と親友だったそうだから失踪の真相ぐらいは聞かせてもらっているかもしれない。織図が神階での用事を済ませてひと段落

して生物階に戻ってきたら、彼が楽しみにしている志帆梨の手料理に箸を付ける前に、このニュースについて解説をいただこう。

そう思ったところで、パソコンの画面右下に” You Got Mail!” と、なにやらメールの到着を告げるインフォメーションが現れ、ピロリロと音が突然出て、恒は慌てた。このパソコンは貸してもらっただけで、もともと荻号のものだ。そのアドレスにメールがくるということは他神からの荻号への連絡ではないのだろうか。そう考えた恒はマウスのカーソルを移動させつつ、荻号宛に届いたメールを盗み読んでもよいものか自問した。

「でも……もう帰ってこないって言ってるなら……」

このアドレスは無効だとメールを宛てた神に返信をしなければならぬ。このアドレスに送っても、もう荻号と繋がることはないのだと発信者に送らなければならないからな、と都合よく言い聞かせつつ、クリックしてメールソフトを起動して内容を表示した。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

送信者… nobody

宛先… wizwalter4@first.negative-
states.ddmin.org

件名… 藤堂恒へ

内容… 誰が放浪が趣味みたいな格好だ？ 黙って聞いてりゃ失礼な奴だな。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

恒は内容を見てぎょっとして、パソコンの隅々に眼を配り、テレビ電話のカメラか何かがパソコンに仕込んであるのかとチェックし

たが、盗聴されている様子も盗撮されている様子もない。送信者のアドレスすら表示されていない。新手の迷惑メールのようだ。だがメールの内容からすると荻号は近くにいるか盗聴するかして、恒の様子をどこから観察しているということだけは間違いないようだ。

「荻号さん、ですよ？どこにいらっしゃるんですか？返事をしてください！出てきてください、俺はこれからどうすればいいんです」

恒はどこへともなく呼びかけたが、返事はない。返事の代わりにメールがまた届いた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

送信者… nobody

宛先… wizwalter4@first.negative-
states.ddmin.org

件名… さあ、どこだろうね

内容… それ以上荻号なんて名前を連呼するなよ。荻号という者はもういない。

ここにいるのはどこにでもいてどこにもいない者だ。

後ろを見ても。何も見えなかったらそれが俺だ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

恒は後ろを振り返ったが、何も見えない。

それが俺だと言われたって、後ろには畳の部屋に青い扇風機が廻っているだけだ。恒は念のため扇風機を中心にむかって「あー」と叫んでみてから、どこで盗み聞きしているかもしれない荻号を捜して、今度は八畳間をぐるぐると歩き回り、盗聴器を捜しにかかった。そうこうして時間だけが過ぎていくうちに、恒をあざ笑うかのよう

に、たしなめるかのように不気味な着信音がして三通目のメールが届いた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

送信者… nobody

宛先… wizwalter4@first.negative-
states.ddmin.org

件名… いつまでも捜すな

内容… 盗聴器なんていくら捜しても出てこねえよ。

一体何が聞きたい。

お前はユージーンのことを心配しているようだが
奴は回復して陽階にいる。

どうするかは自分で考えろ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ユージーンさん回復されたんですか！ よかった！ 心配してました。頭なかったから。その前に隠れてないで出てきてください！ お聞きしたい事がたくさんあるんです！ 荻号さん！ どこですか！」

いい加減にどこにいるのか教えてくれてもよいものを、どうしたことか彼は隠れてしまつて姿を見せない。ふざけている場合ではない、訊きたい事は山ほどある。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

送信者… nobody

宛先… wizwalter4@first.negative-
states.ddmin.org

件名… 名前をつけて連呼するな
内容… 俺に訊いて解るような事はユージーンが知っているから奴に訊け。

風岳村は戒厳令が布かれユージーンは村に降下することができんがね。

会いたいのなら神階には師弟制度があるから利用してはどうだ。

陽階枢軸の叙階表を見直してみるがいい。今のユージーンならば

師となるに相応しい力量を備えている。

無論彼がお前を弟子と認めればの話だ。師弟関係にある者は身分の貴賤に

拘わらず師と面会することができる。

継嗣からは十分学び、神として最低限の能力は備えた。

もう神階に入っても問題なからう。

同時に、神として陽階に所属するといい。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ユージーンさんの弟子に？ 俺が？」

戒厳令の中を特殊任務従事者という身分でかいくぐっては降下してきて多忙の中で毎晩熱心に指導をしてくれた、織図という師がいるつもりだった。

恒は荻号の言うとおりに叙階表を見直してみて、彼の言わんとすることがわかった。ユージーンという名前がついているから不自然なだけで、神体検査の測定値は全てかつての荻号のそれに匹敵し、あるいは上回っていたからだ。荻号が消えて、ユージーンが神階において荻号の代役を担う不可解。ユージーンに弟子入りすることを勧められている不可解。荻号の意図はわからなかったが、陽階神とし

て神階に入ることには賛成だった。

神階に入り神として経験を積んで、朱音を養えるようになり、風岳村を守る事ができるように力をつけるんだ。

恒はそんな抱負を述べる前に、神として神階に入るということは神階の教育機関である全寮制のアカデミーに入れられるということであり、生物階降下の機会が巡ってくるまで、二度と地上に降りる事ができないのだと織図が話していた事を思い出した。しかも一度寮に入れられてしまえば100歳となるまで出られないそうだ。石造りの部屋に監禁され、死にたくなるほど勉強漬けの毎日だという。100歳というタイムリミットまでにあらゆる事を修めなければならず、100歳を過ぎるともう成長はできず心身ともに頭打ちとなる。

教育が必要だということはわかっていた。このまま地上でだらだらと過ごせば何一つ身につかない。神々の社会に入るためには、しかるべき教育を受けなくては相手にされない。いやダメだ。母を置いて、友達を置いては行けない……。彼は彼自身を戒めるように首を振った。

アカデミーを卒業する頃には、母やクラスメイト達はこの世にはいない。そんな自分勝手ができるものか！ 恒は一人で生まれ育ってきたわけではない、母に多大なる迷惑をかけ、友人達に支えられてここまでやってきた。自分の勝手に一方的に彼等との縁を断ち切ってしまったてはいけない。地上で、自分にできることをこつこつと積み重ねてゆくべきだと彼は思った。恒が思い悩んでいると、タイミングを見計らって送ってきたかのようにまたメールが届く。

まるでリアルタイムで会話をしているようだった。

— — — — —

— — — — —

送信者… nobody

宛先… wizwalter4@first.negative-
states.ddmin.org

件名… 何を悩んでいる

内容… 師弟関係を結べば師である位神が弟子に

義務教育から高等教育までの教育を施す事が許され、

アカデミーには入らなくてよいのだがね。

地上と神階の往復もできる。

それにお前の本籍は風岳村であり、お前は人間でもある。

戒厳令は適用されんさ。

母親に迷惑をかけることもなからう。せいぜい親孝行しろ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

荻号ときたら、脱法の天才だ。しかも恒の母親への配慮もおまけのようにだが、付け足して述べてくれている。恒は感極まって後ろを振り返り、見えない彼に手を差し出して、今度は見えないなどと文句を言う事もなく握手をする振りをした。

「ありがとうございます、荻…いえ、ノーボディさん」

とりあえず恒は荻号が荻号と呼ばれる事を嫌がっているようなので、おそらくエラーメッセージだと思われる送信者欄のコメントをそのまま呼んでみた。ノーボディ、誰でもない、身体を持たないもの。荻号要、失踪とGLネットワークのニュースの見出しに出ているので、名前を呼ばれるのは色々都合が悪いのかもしれないな、と思いそう呼んだ。

ノーボディは恒の配慮に満足したのか、返信のメールはこなかった。

*

暗闇に満たされた無機質な広間の奥、透明な石材で組まれた階段を登りきったところに、目の前に聳える一本の硬質の樹木の幹の上、玉座の上から差し込む強い光に打たれながら、主神であり藤堂恒の父親でもある彼は今日も陰陽階統合の象徴として君臨し、その身に帯びたアトモスフィアのみで神階を支えていた。天奥の間に参内したユージーンは磨き上げられた床が影を映じて、鏡に映るように床の倒立像と額をつきあわせ、屈従の姿勢をもって陽階の長に敬意を表す。極陽は部下であるユージーンを明らかに以前とは異なるまなざしで冷ややかに見下ろしていた。

「改めまして帰還の報告をさせていただきます。風岳村に5年間滞在しつづけるという勅命を果たせず違法行為をしたうえこのような結果となりましたこと、深く謝罪申し上げます。また、身体罰に際し格別のご高配により嘆願を頂戴いたしまして、心より御礼申し上げます。詳細は報告書にて……」

「他に報告すべき事はないのか」

遜りつつも媚びへつらわず、ユージーンは額を床につけていたが、ゆっくりと極陽を仰いだ。極陽は彼の容貌が以前とはどこか異なっている事に気付いていた。以前の彼は青臭い少年のようだった。ユージーンの若さや暑苦しい正義感、真っ直ぐにしか伸びることを知らない檜木のように、未熟を絵にかいたような神だった。ところが目の前にいる彼は熟達した策士のように、巧妙に手のうちを隠して極陽の出方を覗っている。

「荻号様の御意向により、神具 相間転移星相装置（System of Correlative Mobile-Star・SCM—Star）を拝領しました。抛って、G—CAMに加え相転星を所有いたしますことを、お許しください」

「相転星を……荻号が手放したと？ お前に起動できるのか？ 猫に小判、では所有に価するとは見なされんぞ」

極陽は当然、わずか数時間前に発表された陽階枢軸叙階表の改訂版に目を通していた。何が起こったのか、ユージーンの潜在能力は既存の装置では測定不能となった。目にするまでは同一人物であるか疑わしい、そう考えた極陽が天奥の間にユージーンを召喚したのだ。極陽の疑いの言葉に動じる事もなくユージーンはスーツの内ポケットから、彼のアトモスフィアでよく馴染けられた神具を出して掲げ持る。

言わずと知れた形、だが目にする機会は殆どない。それは荻号の薄墨色の聖衣の中に隠されていて、定位置である彼の胸元にだらしなくぶら下がっていたからだ。荻号以外の他者が数秒以上手にしている場面を、目撃したこともない。手にしたものはひどい負傷を被り、それ以上所持し続ければあっさりと命を奪われた。そんないくのついた神具を、は恐れることもなく手にしている。

極陽は10秒以上ユージーンがそれを所持しているのを確認すると、彼を試すかのように顎をしゃくって起動してみると促した。ユージーンは軽く頷き深呼吸をして呼吸を止めた。外殻を覆う三つのリングを揃えて眠っていた相転星の核の部分を指先でさらっと撫でて起動のためのアトモスフィアを与え、まるで傘を静かに開くようにリングをスライドさせると、宇宙の真理を示す相転星の外郭がギリギリ金切り声を上げている。

相転星の不細工な月と星は否応なく叩き起こされて、鈍色の身体を小刻みに震わせながらぎよろりとユージーンを見上げた。犬が飼い主を見て忠義を尽くすか決めるというように浅ましくも尻尾を振って身ぜせりし、あっさりと新しい持ち主の手に馴染んでユージー

ンを傷つけようとしな。その様子を目の当たりにし極陽は目を見張った。起動が遅いことで有名な神具であるのに彼のアトモスフィアに触れただけで、相転星は何を焦っているのか重い腰を羽根のように浮かせて起動準備にかかっている。ユーザーを主と認めている証拠だ。彼は静かに数式コマンドを呟き始めた。

「条件 元素分布 $g(x) \parallel \int g(x) f(x) dx / \int f(x) dx$ のとき、最大確率速度においては $\int g(x) f(x) dx^4$
 $\sigma \exp(-mv^2/2kT) dw \parallel (4\sqrt{\pi}) (m/2kbT)^{3/2} (1/2) ? [\pi / (kvT)] \dots$ 不可逆変化においては、以上の項を規格化する」

相転星の放出エネルギーは起動前の数式詠唱における励起状態、つまり可視光度に依存する。

励起されている光が強ければ強いほど放出エネルギーはより大きくなるという概算だ……相転星の反応中心は眼も焼け付くかのような光を発しはじめている。少し離れていても肌が焼けるように感じる、産生されているのは身の危険を感じるほどの熱量だ。

それでいくと、以前荻号が起動していた際の可視光度の比ではない！

これでは頑強に作られた神階もひとたまりもない。ユーザーは恐怖に歪んだ極陽の顔を見据えながら、長き眠りから覚めた暴君のように、躊躇もなく相転星を極陽に向けた。止めていた息とともに、最後のコマンドを厳かに吐き出す。

「相間転移せ……」

「よせ！ もう十分だ」

極陽は怒鳴りつけて起動を阻止した。

ユージーンは極陽を脅すことこそが目的だったようで、得心したのか僅かに微笑むと固執もなく臨界前に達した相転星を両手で包み込み、エネルギーを彼自身の神体に還元した。あと1秒でも止めるのが遅ければ神階は吹き飛んでいただろう。ひとたび起動をすれば陽階のみならず陰階までもがきれいに消え失せる。極陽は至近距離で相転星起動の臨界前核連鎖反応を見て、陽階の内部に得体の知れない能力を持つユージーンという恐るべき爆弾を抱え込むはめとなってしまうことを怖れた。

彼は今日という日まで極陽にとってINVISIBLEの器という物に過ぎず、それ以上でもそれ以下でもなかった。

彼は来るべき日がやってきて運命に抗う事もできず、無様にINVISIBLEの刼代とされるために生まれ出でてきたのだと思っていた。そしてその役割を果たして尊き犠牲となることを切望していた。INVISIBLEを裡に秘めたまま藤堂 恒というAnt i-ABNT Anti bodyを利用して、彼には永眠してもらう予定だ。何の誤算だろう、極陽は最も単純に動かせる筈だった駒が不動の岩山になってしまったように感じた。

……そうはいかないと宣戦布告をしにきた、そうなのか？

ユージーンの表情はうかがい知れない。憚りもせず陽階の長を見上げていた。僅かに黄金がかった空色の瞳を、大きく見開きながら――。

＊

恒はメファイストフェレスに会いに社務所へ向かって畦道を歩いていた。

昨夜もまた、織図は生物階に降りてこなかった。しびれを切らした恒は織図に電話をかけ、どこからともなく荻号のメールが届いてユージーンの子になるようすすめられたのだと話した。織図は荻号の失踪について何も聞かされていなかったようだ。だが、織図は荻号の部屋で駄弁っていたある日"もしも自分がぶらりといなくなってしまうっても捜さないで欲しい"という話を聞いた事があり、彼はいつか消えてしまうだろうとは想像していたそうだ。

織図では師となる事はできないから、ユージーンを師と仰ぐかどうかよく考えて決めろという。ユージーンへの弟子入りの申請手続きは織図が引き受けると言ったが、ユージーンが弟子を取るかどうかはわからないぞとも念押しされた。

というのは師となる為には神階の定めた厳しい条件をクリアせねばならず、弟子の教育のために時間を割かねばならないことで、位神はかなりの負担を強いられるからだ。弟子の教育期間は何年かかっても構わない、弟子の能力に応じて皆伝までの教育期間が決まる。師が途中でさじを投げて教育を打ち切る事は許されないのだそうだ。

正規にアカデミーで100歳まで行われる教育を受けた者と同程度以上の能力を獲得させるまで、師匠は弟子を手放せない。皆伝の条件は神階の公務員のうちでも最難関である第一種公務員試験への一発合格を必須とする。それもただ合格するのではなく、70以上の偏差値の獲得が最低条件だ。

師弟制度は、正規の教育では十分に可能性を延ばしきれないと見込まれる優れた神を将来の神階の牽引者として育て上げる為に、アカデミーでの教育の代替として極位クラスの優れた指導者に師事して学ばせる制度である。後世に名を轟かせる素養のある逸材でなければ、師を引き受けたくないのが位神の本音だ。

荻号はかつて比企の師を引き受けたそうだが、まずアカデミーを

卒業することを条件としたそうだと。比企の実力は突出しており、歴代5位の成績で第一種公務員試験に合格していた。陰階神第16位の薬神として執務しながら50年ほど荻号に師事し、ある日突然袂を分かった。荻号がいつ師弟関係を破棄してもいいように比企のアカデミー卒業を師事の条件とした本当の理由は、弟子の方から破門を申し出る事を予期していたからだそうだと。

師弟制度は次第に廃れてきて荻号と比企の師弟関係を最後に、現在、陰陽階で師弟関係にある神々はない。

それはまた、負担を負ってでもこの神を是非とも自らの手で育て上げたいと思わせるようなダイヤの原石がなくなってきたという意味でもあった。だからよく考えろと織図は言うのだ。恒は完全なる神ではないというハンデを負っているため武術の試験に不利で、どんなに努力をしても偏差値70を上回る成績で第一種試験に一発合格する事は難しいだろう、と。

もしもそれが達成できなければ結局アカデミーに強制的に入れられ義務教育を100年間近くも受ける羽目になるのだ。最初からアカデミーに入れば100歳で卒業できるものを、なまじ師弟制度を利用したがためにいつまでたっても皆伝させてもらえず、何百年も時間を無駄にってしまったらどうする、という。人間でもあり寿命の短い恒の場合は最悪、皆伝を待たずして一生を終えてしまう可能性だってある。

参考までに、と織図には言われたが、たった二百柱しか即位できない第一種公務員試験に一度でパスした神はほとんどいないのだそうだと。

織図は25回も受験したらしいがそれは少しも恥ずかしいことではなく、何回受けても合格できず第二種公務員以下の公務員になる神々が大半だと。

ユージーンはたった一度で合格したそうだが、文字通り血を吐いて倒れるまで修業したそうだ。一種公務員該当者なしという年もざらで、日本で内閣総理大臣になる以上に難しいんだぞ！　と大げさに言う。

そこまで言われると恒は自信がなくなってしまいが、人間としては天才を自負しているものの、神としてとなるとひとなみ以下だ。

恒の周りにいる神々は気さくに接してくれているがいづれも枢軸神ばかり、選びに選び抜かれた神階のリーダー達であるということのを忘れていた。織図は一般的な見解を述べてくれるから助かる、と恒は思う。荻号やユージーンと接しているとあまりにも彼らが凄すぎてまるで自分が特別な存在であるかのように錯覚をしてしまうからだ。

恒はメファイストフェレスの言葉を思い出していた。

”ユージーンや荻号のようになろうと思ったらほんの1%でも可能性がない”と。

本当に、可能性などないのだろうか。ユージーンの最高位使徒でもある彼女にも相談してみようと思った。

さて。空山　葉子は前を歩く少年の後ろをひたひたとつけていた。相棒の井村はどこにいるか空山も知らない。最初に空山が提案した、ふたり一組で別行動をとり片一方が藤堂　恒との接触をはかって、もう一方が離れた場所から盗聴、盗撮しテープをコピーする、そのファイルをクリックひとつで研究所本部に届くようにスタンバイしておく、この方法を採用することにした。井村は先日より早瀬たちには父親の急逝と偽って忌引とし、研究グループから離れて行方をくらませた。空山の背負うリュックの中には、盗聴器とカメラ、

そしてGPSが入っている。問題の少年、藤堂 恒はぶらぶらと緩急をつけて歩きながらまっすぐにあぜ道を進んでいる、後ろからおっぴらにあとをつけているのだから気づきそうなものだが、彼は考え事をしているらしく気づいていなかった。空山はこれ以上進めば黒い女のいる社務所に行ってしまう事に気づいたので、コンタクトを図ることにした。

空山は立ち止まり、大声で呼び止めた。

「ちょっと待って！」

思いがけない背後の気配に、恒は身体ごと振り返った。

考えごとをしていて前にすっかり気をとられていた。恒は無意識にポケットの中のFC2ーメタフィジカル・キューブに手を伸ばしてまさぐる。起動のコマンドを与えようとしたところで見咎められた。

「ダメ！ ポケットから手を出して！ 両手ともよ」

恒は彼女の言葉が何ら強制力を伴わないため、命令を聞く必要はないと思った。それより、彼女が誰かわからない事の方がよほど問題だ。声や体型からは女だと思われるが、遮光のついたヘルメットをすっぽりかぶって顔も目も見えない。目が見えず頭も隠れている以上、マインドブレイクをかけることはできなかった。ヘルメットは電磁シールドが張り巡らされて脳内電位が読み取れない。嫌な予感がした。このヘルメットは何だろう？ 顔を隠しているだけなのか？ それともマインドブレイクができると知っていて対策を打っているのか？ 恒は牽制しあっても仕方がないと思ったので、尋ねてみることにした。

「どなたですか？」

「やっと会えたね、”主”、藤堂 恒君」

恒はその言葉に反応して今度こそポケットの中から神具を取り出そうとした。だが彼女は右手に持った小さな黒いもの高々と見せ付けている。それが何なのか、普段の恒ならばマインドブレイクをかけて彼女の記憶を読み解くことなどわけもない。だがそれが何か、ヘルメットに遮られて今は読み取れない。

「これ、何だと思う？ 盗聴器とカメラよ。この会話は盗聴されているの、私の声が途切れたらモニターしている別働隊があると研究所に、あなたが主であって石沢 朱音という子が天使であるという報告を送るわ。私を殺してもダメ。声が聞こえなくなれば同じように報告が行く……私が無事だったら会話を録音したテープは処分する。さあ、状況がわかったら話をしましょう。物騒なものはそこに捨てて」

恒は一步も動けなかった。

何だ、一体何が起こっている？ 彼女はどこまで知っている？

恒は片手を挙げたまま、見た目にはルービックキューブにしか見えないカラフルな神具を地面にそっと置いた。またゆっくりと手を上げてハングアップの格好をしてみせる。

「そのおもちやで、マインドコントロールをかけようとしても無駄よ。私が突然整合性のない事をしゃべり始めたら、やっぱり報告が行くわ。ほら、逃げられないのよ。そのおもちやを蹴とばして、早く」

神具は後で拾いに行けばいい、今は言う事を聞いておこう……そう思った。

何故、マインドコントロールがかけられるとバレているのだろう。電磁シールド付きのヘルメットはマインドブレイク対策ではなくマインドコントロール対策だとわかった。街なかで皐月とMCFにつ

いて雑談をしていたのを、盗聴されていたに違いない。それにしても決してマインドコントロールフィールドと正式名称を言った覚えはないのに、MCFという言葉だけでそれを連想するとは、当てずっぽうにしては恐れ入る。

恒はひとまず要求を聞いて、素性の全く知らない不気味なこの女の出方を窺ってみることにした。女が本部へ報告しろとの合図を送るためのボタンのようなものを見せびらかしているので、恒は仕方なくFC2—メタフィジカル・キューブを蹴って遠くの田んぼの中に捨てた。荻号からもらった大切な神具を蹴飛ばすとは罰当たりもいいところだ。荻号はもちろんこの光景を見ていて、何を思っているかは知れない。後でまたn o — b o d yからのメールが届いて、もつと大切に扱えとこっぴどく怒られることだろう。後手後手でうざいメールを送ってくるぐらいなら、今この状況を何とかしてもらいたい、と思うが生憎彼は助け舟を出してはくれないようだ。

恒の行動を封じたのは別働隊の存在と朱音という人質だ。

恒の頭の中は熱に浮かされたようになった。彼女はルービックキューブが田んぼの中に転がって泥の中に沈んでいたのを確認すると、ようやく語調を和らげた。大の大人が子供相手に脅迫という、傍目にはかなりみっともない事をしているというのは彼女も心得ていた。

「突然ごめんね。手荒なまねはしないと約束するから協力してちょうだいね。取引をしましょう。君たちがどういう存在で、何を目的として人間社会に溶け込んでいるのかを話すの。そうすればこちらも君達の事は本部に報告しない、朱音という子の事もこれ以上嗅ぎまわらない。そう、約束するから。人として約束するわ」

「何か誤解されているようですが、俺も人間です」

10年間も人として生きてきた恒は、まるで宇宙人扱いされるように感じて心外だった。

何故この女に人間代表のような事を言われなくてはならない。

「本当に人間なの？」

「そうです。そう見えませんか？」

恒は落ち着き払って答えた。

ここで変な事を言ってしまったては台無しだ。恒は神でもあるが人間でもある、ややこしい身の上だが人間であることに間違いない。志帆梨が母親だという事実にも間違いない。藤堂恒という名前まで突き止めているのだから、母親の素性ぐらい調べてきただろう。母親は真人間だ、恒の血液型も母親の血を受け継いでA型であり、それがとりもなおさず人間であるという証拠となっている。

「嘘つき。ネタは拳がつてるの、しらばくれないで」

女は恒をなじるように甘ったるい声を出した。もう数分話していればこの女のペースに持っていかれてしまいそうだ。こちらの方がマインドコントロールをかけられてしまいかねない。どうしよう。瞬間移動を使えばこの場から逃げ出すことはできる。だが――逃げ出してしまえば、自分が完全なる人間ではないと認めたこととなる。そうなれば何もかも、一卷の終わりだ。女は恒の動揺に付け込んで、更に畳み掛けるだろうと、恒は推測をめぐらせる。

「人間社会で何をしようとしているの？ ほら、お姉さんに白状してごらん」

「何も……」

「何もしゃべるつもりがないの？ なら残念だけど報告するしかないよね」

「……」

恒は言葉に詰まる。

下手なことを喋るぐらいなら何も答えない方がいいが、それに自分を追い詰める。何でもいいから、お茶を濁さなくては……。女はじれったそうに、もう、と呟いた。

「ほら、どうなの。……じゃあ、質問を変えましょうか。主って、何？ 天使をどうやって養っているの？ 何故この村で、暮らしているの？ どれでもいいから、答えて」

空山は質問を並べ立て、答えられそうなものから聞き出す作戦に出た。

今のところ空山のペースで話は進んでいる。少年の恐るべき能力は封じたままだ。少年は苦しそうに、呻くように少しずつ語り始めた。

「俺、この村で生まれたんです。この村で生まれ育ちました……何をしようとしているのかと聞かれても困ります。ここで生まれた事に、そして俺が少し他の人とは違っていた事に何の理由があると思いますか？ 俺の存在がたまたま朱音を生かしていた、理由なんてわかりません。植物が陽光を受けて生きるように、朱音は俺の傍でしか生きられない。あるのはただ事実のみです。朱音だって普通の人間だと思って暮らしています。それは罪なんですか？ 俺達はただ穏やかに暮らしたい、それだけが願いです。あなた方が朱音を研究対象としてモルモットのように調べあげたりしなければ、俺だってあなた方に何も危害を加えるつもりはありません」

「……一理あるね。じゃあ、君と朱音という子はただこの村に暮らしているだけなの？ ただ生きているだけ？」

「ではあなたは、どうして人として生まれてきたんですか？ 何のために」

空山は答えられなかった。藤堂 恒は自分が人間以外の者である事を知っている、だがそう生まれついてしまった以上、自分にもどうすることもできない。生きることには罪はない筈だ。人間ではない彼にも生きる権利はある。そしてそれを咎めることはできない、共存しなければならぬのだ。お互いに理解しあい手を携えて。

「……君は賢い子ね。君の先生、吉川 臯月先生は君が人間ではないという事を知っていて、それでも教師と生徒として共存しているのね。お互いに、信頼しあっているからかしら。マインドコントロールをかけられることもなく。……だったら……」

空山はくぐもった声でそういつてから、ヘルメットを脱いだ。

印象的ではっきりとした顔立ちに、真夏だというのに白い肌が現われた。恒は素顔を記憶し即座にマインドブレイクの体勢に入った。彼女はわざわざ顔を出したのだ、まるで読んでくれといわんばかりに――。

「私も君とそういう関係になれない？ 友達に、なってくれない？ もう君の事を研究したいなんて言わない、ただ、理解したい。読めるものなら心を読んでもかまわないわ、嘘じゃないから。でもお願い、洗脳だけはしないで」

函館のホテルでその様子をモニターしていた井村は、啞然として肩をこわばらせた。

通信はそれを最後に、途絶えてしまった。空山が自らの意志で盗聴器をの電源を落としたのだ、何という勝手な事を……これでは計画が台無しだ。函館までの飛行機代と宿泊費をどうしてくれる。それともこれが、マインドコントロールというものなのか……会話に破綻はみられなかった。

じわじわと人の心の隙に付け入り、心を支配する。

恐るべき相手だ、井村は一人、震え上がった。

＊

「これ、どう？」

「それも似合うけどどうしたの？ そんなに張り切っちゃって」

朱音は母親と共に街に出て、昼食を軽く食べ、セールの水着を選んでいるところだった。朱音の生活はこの週末に行く海水浴を中心に回っているようだった。ここにきて突然水着が欲しいと言いだした。スクール水着しか持っていなかったので、友達がかわいい水着を着ていたらスクール水着で泳ぐのは恥ずかしいという理由でだ。

そんなこと、去年は言わなかったのにどうしたというのだろう。

11歳というともう思春期なのかしら。好きな子でもできたのではないわよね。水着だって高いのに、すっかり女の子になっちゃって困ったものだわ、と母親は困惑しつつ一生懸命安い水着を勧めていた。

朱音の背中に出来た骨は上島が打つ謎の注射の効果も疑わしいなか、少しずつ成長をはじめていた。背中に手を伸ばすとはっきりと硬い一對の骨が手にあたるようになっていた。海水浴もいいが母親は心配だった。

いつか羽根が生えて、飛んでいってしまったらしないでしょうね、と――。

「もしかして好きな子、できたの？」

「そうよー、私にだって好きな人ぐらい、いるんだから。真っ白な砂浜でね、もし二人きりになればら」

「告白するの？ 誰に？」

「それは、秘密」

朱音は白い砂浜によく似合う、薄水色の水着を選んで手に取った。母親は名前も知らない、愛しい娘の初恋の相手とは、どんな子供だろう？

日曜日は快晴の晴れマーク、うまくいけば告白日となるだろう。

第1節 第37話 幹事はホットペッパーのクーポン使ってください

空山はヘルメットを地面に置き、両手を軽く挙げて恒に近づいてきた。

ありとあらゆる切り口から空山にマインドブレイクを行った恒はひとまず空山の真意を察して警戒を緩めた。マインドブレイクをマスターして以来心理戦などもうないと思っていたが、心理戦は消耗するので勘弁してほしい。

「さっきのおもちゃ、一緒にさがす？ 君の大事なものなんでしょ」

「え？ いいんですか？」

「悪いことしたからね。でも洗脳はしないでよ」

恒は先ほど蹴って見えなくなった方角に走り、田んぼの稲を踏まないように気をつけながら田の中に分け入った。

アイガモ農法で田の中で飼育されているアイガモ達が恒を興味深そうに取り巻いたところを、しっしつと追いやり泥の中をあさった。アイガモ達が泥を掻き回したので、水が濁って水中が見えない。恒は目を閉じて、満タンとなっている荻号のアトモスフィアを探ろうとしたが、アイガモが騒がしいからか、恒が焦っているからか彼の気配はぷつぷつりと途絶えて探知できない。そこはかとなく嫌な予感がした。

「あつたよー」

間延びした声にはっと振り返ると、コケたのか膝をついたのか泥まみれになった空山が、ルービックキューブを持ってハンカチで泥を拭っている。

「あーっ！ 捨ててっ！ 火傷します！」

恒は絶叫とともに瞬間移動で空山の前に来て、神具を奪った。

「なにーそれ、瞬間移動？」

「手を見せて！」

恒は神具をまともに握った空山の手を診る。適合しない者が手にしたときに神具の発生させる熱が、空山を傷つけたと思った。だが神具が濡れていたからか、火傷の跡は見当たらない。

「やっだー、何？　ちょっと君って強引！　まだ心の準備がー」

空山は何かを勘違いしているのかふざけているのか、そんな事をいう。恒は不思議だった、神具は誰かれ構わず拒絶反応を示す。神が守るべき人間の手だからといっても容赦はない筈だ。

神々は神具が自らの手に合うよう厳密な調整をして使う。全神具適合性という特異体質を持つ者のみが全ての神具に焼かれない。人間がそんな体質を持っているのは考えられなかった。空山は汚れたルービックキューブをちらちらと見ている。

空山は使い方が気になるとみえる。

「汚れちゃったね。その用水路のきれいな水で洗おっか？」

「洗う？」

何気ない言葉が気になった。洗っても大丈夫なのだろうか？　携帯電話は水で洗うと壊れるものだが神具はどうだ？　携

もしかして。

やらかしてしまったのかと思ったが、いやいやまさかそんな事で壊れまいと、動揺しつつも否定する。仮にも神具だ。簡単に壊れるようなやわな代物ではない、曲がりなりにも神々のツールだ。恒は空山に警戒されないよう気を使いながら起動のコマンドを与えようとしてキューブを振る。神具は石のように固まって頑として動かない。真夏の日差しの中、燦燦と降り注ぐ陽光の中。

恒の顔からざーっと血の気が引いてゆく。

「え？　ま、まさか壊れちゃったの……？」

空山も気まずそうに顔を近づけて恒の手元を覗き込む。

軽く振ったり、叩いたりしても反応はない。頭の中が真っ白になった。神具が壊れた、この場合はどうすればいいのだろう。直ちに連絡がとれるのは織図だが、織図は盲目だし他神の神具は修理できないだろう。家に帰ってパソコンの前に座りノーボディのメールを待ちたい。今もこの瞬間を観察していると思われる彼は、壊れた状況と、神具の修理ができるのかを判断してくれるだろう。その場合この女をどうしよう。はつきりいって邪魔だが、ここで帰してしまえば今後の足取りが知れなくなってしまう。家に一緒に連れて行けばよいのだろうか。

あれこれと思い悩んでいたときだ。

「電気屋に修理に出す？ 何だか悪いことしちゃったね。ちょっと見せて」

空山は呆然とする恒からひょいと神具を奪い、無理矢理赤い面のブロックをもちで中を覗いた。どうせオーバーホールされる運命なのなら、分解すればいいと思っているようだ。

「ちょっと！ な、何て事を」

あーあ間違いない。今ので完璧に壊れた。恒はもう、その状態からどうしていいものか分からない。しかも空山には悪気がないのだからなお悪い。マインドブレイクを試みても、修理するつもりはあるらしい。

いや、無理だから！ たとえ空山が電気屋でも元工学部出身でも、神々の科学技術の粋を集めて繊細に作られた神具は人間には直せないから！ そんな突っ込みをする元氣も出ない。

「全部あけてみる？ パカッと」

「もうやめて下さい！ あなたにはおもちゃのようにしか見えなく

とも大事なものなんです!」

「その通りだ、それを寄越しな」

低い声がしたかと思うと、突如太陽が翳り黒い霧が竜巻のように現れて、恒と空山は闇の中に閉じ込められた。

死神、織図 継嗣が降臨し、視覚郭清フィールド（Optical Dissection Field…ODF）を展開したのだ。神、特に陰階神が周囲の目から隠れて顕現し降臨する際に、用のある人間以外の人間にはその姿も言葉も聞こえないようにするため、ODFというフィールドを展開して当事者を巻き込む。

俗に言う天啓はこのフィールド内で与えられる事が多く、他者には神の姿は見えないし聞こえない。いわゆる結界のようなものだ。用心深い織図は、皐月や志帆梨以外の人間の前に決して姿を顕そうとはしない。そして人間の寿命や記憶を掌握する彼は、あらゆる人間に対して断固とした支配力を持つ。死神の権限を維持するため、多くの伝承でそう記述されているように、不本意ながら織図は人間に対し恐怖の対象とならなければならない。

「だ、誰？」

「世界に二つとない神具を壊しやがったな」

いつもは夕暮れとともにやってくるのだが、まだまっ昼間のうちに織図は追跡転移でやってきた。織図はノーボディから届いたというメールの内容が気になっていた。どのような状況で届くのか、そして荻号と連絡はとれるのか恒に直接聞きたかったのだ。神階では荻号の失踪を受けて達磨落とし式に陰階の叙階が繰り上がり、織図は9位死神から8位へと昇進した。昇進の各種手続後、ようやく手がすいて降下したのがちょうどこの時間だった。しかし追跡転移で現れるなりこの状況、仕方なく子供のケンカに親が登場という事態だ。

「これ以上恒を嗅ぎ回すな」

「また新しいのが出た……あなた誰？　言わないとこれ、返さないよ」

空山は危機感というものを感じないのだろうか。

恒はまだ子供だが、相手は見た目には身長190cm以上もある黒人の大男だ。普通の女性が黒人の大男に脅されたものなら、足が竦んで思考回路が停止する。暗闇にも等しい織図のODFの中に閉じ込められても空山は平常心で恐れる様子もなかった。

「死神さ……お前の寿命はあと56年と138日。その時間は俺に握られている。お前とお前に関わる全ての人間だ。俺は意図するだけで瞬時に複数の人間の命を奪う。さあ、下手な真似をせず今すぐそいつを超越せ、記憶を書き替えてやる」

織図は少し脅しをかけるためにアーカイブ中から神具、ルイ16世の鎌(XVI Von Louis)を抜く。

ずぶずぶと溶け出すように深淵から現れた神具の金具部分を空山の細い首に引っ掛け、織図は厳しい顔つきで彼女に迫った。

普段のちゃらけた織図の姿とは違い、黒衣を纏い視線をフードで隠したその姿は古来より描かれる死神そのものだ。その言動は威圧感を伴って空山は怯んだかに見える。首筋に当てられた冷たい鎌の感触が、ただの脅しではないと主張している。

「やめてください！　こちらも脅迫をしてしまったら、この人たちとやっている事が同じです！」

恒が膠着した空気を破り間に割って入った。しかし織図が空山の首に刃物を当てている以上恒も迂闊に手は出せない。織図はまだ神具の起動スイッチであるリミッターを外していないが、指先一本で門を弾けばギロチン状の刃物が一瞬のうちに落ちてきて空山の首をスパンと刎ねる。

織図は守るべき者とその他の区別を明瞭にしてい、敵対する者には容赦ない。彼は陰階でば唯一、理由もなしの殺人を許されている神だ。

「神が人間になめられている場合か！ 時にはこういう手も使わねばならん！」

「織図さんっ！ 口が滑りまくってます！」

「構うもんか！ この女の記憶を書き換えるからな」

空山は織図の気迫におされて、ようやく恒に神具を返却する。

それを見た織図は首筋に当てていたXVI von Louisをアーカイブに格納して消した。恒は空山に危害が及ばないよう庇いつつ、織図の前に立つ。

「織図さん。この村にいる研究員のことは、俺に任してくるって……」

「神具を失った今、お前にはもうMCFはかけられん。お前はマインドブレイクをかけてこの女が俺達の存在を他言しないと信じたが、それは大きな間違いだ」

「見くびらないでよ。喋らないんだから！」

空山は剥きになって反論する。

彼女はこの村で生まれ、そして何も知らずに朱音という天使の主となっていたと思われる恒と親交を持ちたいと、今はそう考えていた。いち研究者としてではなく人間同士の付き合いとしてだ。だがオリトと呼ばれるこの男は、先ほどから”神”がという言葉を連発している。彼らは彼等自身を神であると認めたのだ。神が”主”と呼ばれ、大勢の天使を養っている……少年の漠然とした説明よりも最もシンプルで納得のいく説明だった。

空山はシンプルな結果を好む。彼等が神でありこのような不思議

な能力を持って天使を養っているのだとすればもう疑う余地はない。

彼女は宗教家でもないので、唯一神が雲の上で人々を創造し見守っているという説明より、神々が人間社会の中に溶け込んでひっそりと人々を守っているという説明がすんなり理解できた。研究者は観測を以って世界を理解する。DNA二重螺旋モデルを提唱したワトソンとクリックもしかり、どんなに心情的には納得のいかないことでも、一度観測された事に対しては柔軟に対応し認識を改めるものだ。空山はすこぶる納得した。

少年、藤堂 恒は神と人のハーフだということなのだろう。神々と親しく交流したいとは思うが、その存在を明かして大騒ぎにするのは中止だ。だってそれはひとつとしてメリットがない。それなのに織図は空山の心情も打算も察することなく、勝手に決め付けてくれる。

織図は空山の心情を察していないわけではなかった。織図はマインドブレイクを行い彼女の思考回路を解析したからだ。信じる事さえできれば、神という存在をすんなりと受け入れてくれる性格であろうとも。

「空山 葉子。確かに今は、喋るつもりがないと見える。だが状況が変われば簡単に考えを変えるのが人間の心理だ。井村という上司を裏切ったようにな。人間の誓いほど信用ならんものはないぜ。神の存在を知った者は、この村から一人も逃がさんよ」

「織図さん、あなたが仰ったではないですか。神具を用いないマインドコントロールを人間にかけるのは危険だと、アトモスフィアによる急速な記憶の書き換えで、精神崩壊を起こす者も稀にいます。だから俺に任せてくれると仰ったじゃないですか！ この人にマインドコントロールをかけないで下さい！」

恒が必死に織図に懇願する。織図をはじめ、精神力に優れた神々は、神具を用いず生身のままマインドコントロールをかけることができる。ユージーンが自殺を図る直前に、G-CAMに頼らずマインドコントロールを恒にかけたようにだ。だが、神ならまだしもそれを人間に用いる場合、安全性は100%ではないと織図から教えられていた。人間はアトモスフィアという化学物質に曝露された経験がないため、たまにアトモスフィアを受け入れることができない者もいる。そんな人間に強制的にマインドコントロールをかけてしまったなら、稀にはあるが精神崩壊を起こしてしまう者もいるのだと。だから人間の心を操る職種にあたる神々は、より安全性の高いMCF機能を付加した神具を用いて人間に対して100%の安全性を保障しつつMCFをかける。

神具を失った恒は、織図の言うよう確かにひとりでは何もできない。そのうえ戒厳令が敷かれている以上、織図以外の神がこの村に降下する予定もない。ユージーンが降りてきてくれたら、G-CAMに標準装備されている広帯域MCFという機能を用いて、この問題は一発で解決する事ができるのだが。恒は彼の復活を受けて、ユージーンの広帯域MCFを何とか発動してもらえないものかを考え始めた。

例えば風岳村には介入禁止とされているのだから隣村に入ってMCFをまるごと広範囲にやってもらう。だがその場合、風岳村に介入禁止という条項は守られているのだろうか？ また法度破りをさせて実刑判決を受けることになる、申し訳なくてあわせる顔もない。

「じゃあ、誰がやる？ ん？ 俺以外の全神はこの村に介入禁止だ。助け舟など出てこんぞ。出来もしないくせに偉そうに言うな」

「ユージーンさんにG-CAMを貸していただいて俺がやります！」
「G-CAMが起動する際に、たった60kgの神具が何になる

かわかるか？ アトモスファイアも充分に腕力すらないお前に起動、展開できるか」

軍神もなめられたものだ。織図は嘆くが、そういえば恒はまだ神具を起動し、扱えるレベルには達していないのだ。

荻号が充電のできる特殊な機能のついた神具に、潤沢なアトモスファイアを満タンにして渡してくれたから神具が扱えるようになっていただけで、恒の実力は同年代の神々にも劣っている。口先だけ達者でも、織図はとりあってくれない。

「ちよっと！ 身内でケンカはじめてくれる？ ……話をまとめると、あなた達は神様達なのね？」

激しく口論していると、空山が外野から水をかけた。

空山は織図の会話を漏らさず聞いていて、軍神というキーワードもしっかりと覚えていた。そしてIEIIIOが最も多く捕獲し尚且つ戦地や紛争地に多く現れる、車輪型の紋章を持つ天使、それが軍神の所持する天使たちなのだろうとも推測した。

空山の中で、全てのキーワードが繋がった。

神々はそれぞれ役割を持っている。目の前の死神、軍神、探せば天使の装束に刺繍された紋章に対応する、それ以上もっと多くの種類の神々の職種があるのだろう。唯一神が全ての現象を管理するという事は効率的ではないから、神々の社会ではそうやって”の神”と役を決めて、分業化を図っているに違いない。恒は他人事のように会話に割り込んでくるこの女の口を、少しの間塞いでしまいたいと思った。

織図は調子を崩されて思わずフードを取った。盲目の瞳で、空山を睨みつける。

「ああそうだ。空気を読んで外野はすっこんでろ！」

「ねえ、どうして、人間が神様の味方じゃないって決め付けるわけ？ 私達はあなたたちを地球に侵略にきた宇宙人か何かだと思って

だから、調べてただけ。よくわかったから、国際知的生命研究機関（IEIIIO）は神様達に協力するよ」

まるでIEIIIOを代表しているかのような口ぶりが気になった。空山の身分は研究員でしかないというのに。はったりか？

「協力だと？ 一介の研究員に過ぎんお前に何ができる、そこに大人しく立っとな。お前は後でじっくり料理してやる」

「あれー、そんな口きいてもいいのかなあ。私、IEIIIO 日本支部所長 澄田^{すみだ} 咲江^{さきえ}の娘なの。両親は離婚してるから私の性は違うけど？ ママは何でも私のいう事を聞いてくれる。そしてママは現職の丸谷科学技術省長官と、付き合っているけど？」

恒は直感的に、これは利用できると閃いた。

この女を利用してIEIIIOの動きを封じたり、取り引きができるのでは。具体的な案はともかく、うまく立ち回ればかなり利用価値のある人物だ。ここでマインドコントロールをかけ記憶を奪い、全てを元通りにしてしまうよりずっと効果的だ。世界的な組織であるIEIIIOはこれから神階にとって厄介な相手となるだろう。INVISIBLEとの戦いにこそ全力を注がねばならない神々が、煩いごとに頭を悩まされ続けるのは少しも得策ではない。

「織図さん、この状況を、むしろ利用すべきなんじゃないでしょうか？」

「人間ごときに何ができる」

織図は空山を挑発するが、空山も負けてはいない。

「あなた達こそあまり人間を甘く見ない方がいいわ」

織図はうんざりしたように、空山を見下ろして腕組みをした。この女は本当に空気を読まない女だな、と。神が人と手を組むとしたら何が出来るだろう……それほど大きな事は出来そうにないと、織図は思うのだが。

＊

その頃、社務所で紅茶を飲みながら新聞を読んでいたメファイトフェレスIIは、立ち上げていたユージーンのパソコンにメールが届く音がして、口につけていたカップから紅茶をこぼしてしまった。彼女は時間と状況が許す限り、ティータイムを忘れない上流階級の貴女だ。

黒い装束は紅茶のシミを目立たせない。ほっとして水滴をビロードのスカートから払うと、よく手入れされた爪のついた指先でノートパソコンを手元に引き寄せる。送信者はユージンだ。

ようやく神階のことが落ち着いてこちらにも目を向けることができたのかと思うと、彼女は嬉しくて顔を綻ばせ、鳴らしっぱなしにしていたクラシック音楽のボリュームを下げる。

— — — — —
— — — — —

Sender.. eugene.mazrow@first.positive-states.ddmin.org

To.. subnote@first.positive-states.ddmin.org

Subject..生物階降下の件

このパソコンを見ているのはメファイトフェレスだと思うが、留守を守ってくれてありがとう。自殺未遂をしまして心配をかけてしまったが回復し、達者になっている。もう自殺はしないと約束する。しても無駄だとわかったからね。お前もだが、恒君や村人達は元気にしているだろうか。こちらも色々なあつて連絡が遅れてしまったのだが、風岳村には介入禁止の勅令が出ていて風岳村には入れなくなってしまうている。直接話がしたいのだが、風岳村以外の場所では会わなければならない。生物階降下の許可が出たから、明日

の正午、風岳村外の広岡市で適当な店で昼食を取りながら話でもないか。恒君を連れてきてくれると助かる。他の人は連れてこないで欲しい。どうしても予定の都合が付かなければ、明後日に延期してもいい。だが、降下の期間は3日しか与えられていないから、それ以降の面会は無理だ。恒君に連絡を取り面会の日時と場所を指定してくれ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

メファイストフェレスはG L — ネットワークでユージーンの復活を知った。

そして復活と共に、彼が飛躍的な能力の向上を果たしているということも。以前のユージーンの実力は彼女の實力より明らかに劣っており、だからこそユージーンはメファイストフェレスを最高位使徒として頼りにしてきた。過去の叙階表と照らし合わせて、ユージーンは荻号という神の力を継承したのだと推測させるようなデータだ。それはとりもなおさず三階最強の地位におさまったということでもある。

もはやユージーンはメファイストフェレスが庇護する存在ではなくなってしまった。彼はまだ自分を、使徒だと思ってくれるのだろうか、不安が膨らむ。メファイストフェレスは久々に彼と対面できる機会を与えられて嬉しく思うと同時に、父親がアルシエルの人質となっっていることをユージーンに相談すべきか否か迷った。彼はどうやら慌しいようで、私事を持ち出してよいものか分からない。慈悲深い彼の性格でメファイストフェレスの実父が殺されてしまうと聞けば、何とか助け出してくれようとするだろう。だが、アルシエルの目的が知れない以上、彼を危険な目に合わせることになってしまいかねない。父の代わりにユージーンが殺されてしまうということも想定内だ。

だが、以前とは一つだけ状況が変わっている事がある。ユージーンは復活と共に、何故とは知れないがとてつもない力を身につけた。神皇とも評された荻号と同格の能力を持っているというのなら、三階最強の地位は確実と思われるユージーンが解階の女皇、アルシエルⅡジャンセンに殺されてしまうという事はない。メファイストフェレスは社務所の固定電話をとり恒の実家に電話をかけた。

”主とお会いして、主のお力がいかほどのものを体感してから、お話しするかどうか決めればいいわ”

——そう思いながら。

その後メファイストフェレスは鼻歌をうたいながらインターネットでホットペッパーオンラインに入り、ユージーンと面会し、昼食を共にするための雰囲気の下さそうな店と、お得なクーポンを検索していた。恒の実家に電話をかけても誰も電話をとらなかった。専業主婦の志帆梨だって家にいないことぐらいある。恒は友達と遊びに行ったかどうかしたのだろう。不登校児であった恒にとっては生まれて初めての夏休みであるが、折角の休みなので昆虫採集のひとつ、出かけていてもおかしくない。明日は木曜日、恒に予定はなかったはずだ。急に予定ができて、ユージーンと会えないということはないだろうと思い、恒の返事もさておき店を選んでいる。

メファイストフェレスは雰囲気のない洒落た洋食屋がいいが、恒の好物は志帆梨の作るような薄味で上品な和食だという事がわかってきた。仕方ない、ここは我慢して料亭にするか……。それよりも何よりも優先させるべきは、個室席があるかないかだ。落ち着いて話が出来、人目の気にならない個室がよい。

店の雰囲気や座席、料理の評判を気にするあたり、飲み会の幹事

とそれほど変わらない。

メファイストフェレスは携帯レコーダーを持ってゆくつもりだった。神階のしがらみに縛られて風岳に入れないユージーンだが、皐月や生徒たちに一言でもメッセージを送ってくれるだろうと思ったからだ。何を考えていても、そわそわと落ち着かない。

”あれほどお会いしたいと思っていたのに、何だか主にお会いするのが怖い……”

ユージーンはまだ彼女を必要としてくれるだろうか？

そう思いながら料亭に電話をかけた。クーポンを忘れずに。

＊

「なーんーやーのーこれ、ありえへん構造してん。なー長瀬、これ見たってー」

「ホントにー、何なのこのサンプル」

築地がデータを何度も見直すかたわら、長瀬は今日もド派手な衣装で築地の周りをうろちよろしている。皆データが出ず実験に忙しく、誰も相手をしてくれないので築地をからかいに来ているのだ。

「俺の解析が間違ってるやろか」

「えーでもこのスペクトルはそう取るしかないー？」

暫く沈黙が続き、築地はこらあかん、とデータを文字通り投げた。すかさず長瀬はスクラップにしたデータの用紙で高性能紙飛行機を折って片っ端から飛ばす。神風16号が弧を描いてM1の後輩、香田^{うだ かずき}一樹の机の上で飼われているコップーのボトルの横まで飛んで行ってパタリと落ちた。後輩が紙飛行機を開くと、アタリ、あわ玉一個と書いてある。実験に行き詰まっていた後輩の香田はガツと席を立ち、長瀬にあわ玉をもらいに来て長瀬の四次元ポシェットからあわ玉を選んでコーラ味を持っていた。席について開けてみる

と更に当たりが出たらしく、すぐに売店に走ってゆく。でかい図体をしてかわいらしく、もう一個駄菓子をもらいに行くのだろう。

「あーもーあかん、うちの装置じゃ精度が出えへん。ピークがつぶれとる」

築地の大きな声が廊下まで聞こえたのか、松林がまた歯ブラシをくわえたまま学生部屋までやってきた。築地のパソコンに取り込まれたサンプルのスペクトルデータに目を通すと、実験用流しの水で口をすすぐ。この助教先生は綺麗好きなのかそうでないのかよくわからない。うちの研究室の女性陣はどうも変わっている。

「どうやらそのような、もっと性能のいい装置が必要だわ。このサンプルに含まれる化合物の殆どが普通はすぐに分解してしまう筈の構造が安定化している。だから見たこともない構造ができています：Spring-8 (Super Photon ring-8 GeV / スプリングエイト…大型放射光施設) に行って解析しましょう。君もついて来なさい」

「名古屋グランパスエイト？」

長瀬がくいついてきた。

知っているくせに、長瀬は面白くもないボケをかます。東京人はこれだから、おもろないねん。口に出す前にもっと一つ一つのボケを精査せんかい。築地はそうつぶやきかけたが気を取り直してツツコミを入れてしまうのは関西人の悲しいさがだ。

「あほう！ どこに名古屋ついとったんや。8だけしか合っとらんやんけ。スプリングエイトって、そない簡単に使わせてもらえるもんですのん？」

電子の最大加速エネルギーである8 GeVに因んでつけられた。世界最高性能の放射光を発生させることができる大型放射光施設だ。

蛍光X線分析装置として利用し超微量元素の同定を行う事ができる。サンプルの量が限られていて二度と入手できないとされている以上、精度の悪い装置で無駄にサンプルを費やすわけにはいかなかった。こんな有難い装置がひよいと足を伸ばせば行ける距離、兵庫県にある。

大坂大学蛋白質研究所ではスプリングエイトを用いてタンパク質結晶構造解析などを行っており、生体分子の探索とあらば本来は共同研究を申し入れたいところだが、今回のサンプルからは一つとしてタンパク質が検出されていない。蛋白研の出番ではなかった。サンプルがどのような分野の成分構成なのかがわかるまでは、錯体研独自の研究となるだろう。

「構わないわ。このサンプルの組成はまるで宝石箱を開けたように……」

「それを言うなら味の宝石箱やー、でしょー」

またこいつはしょーもないところでボケの無駄弾を撃つ。それいつのボケやねん。松林は築地には厳しいのにきちんと結果を出す長瀬に甘く、たしなめようとしめない。

「ちよ、お前は黙っとれ！ 俺の修了がかかっとなで！」

「とにかく、私たちがこれまで捕われていた見識が万能ではなかったと教えてくれているわ。このサンプルはどうやって作られたのかしら……おそらく地球とは異なる環境で合成されたのでしょうね」

松林は何の危機感もなくそんなことを言っている。

そういうのって、年末にたけしがやる番組で聞くような言葉だけ。と、築地は細く整えた眉をひそめた。長瀬が思いっきり息を吸って飛び上がる。長瀬のオーバーリアクションは、冬場はいいが夏場になると暑苦しい。

「うっそー！」

「無理無理、そんな無理やて！ ありえへんもん。必死こいて同

定してもありえん構造しとるんなら、それが正解なんか分からへんやん。せめて地球上の化合物にしてくれへん？ そんな宇宙人が作ったようなけつたいなもん、NASAに送り付けとけばええねん」

どうして大坂大学が引き受けなければならぬ代物なのかという事も問いただしたい。できればもっと頭のよい学者にお任せしたいところだ。

「あはは、もしくはニラサワさんとかにー？」

長瀬がまたしてもきやははっ、と他人事のように茶々をいれる。

この子は頭のネジが飛んでいるような言動をするのだが、威風堂々、学年一位の成績を誰にも譲らない。自分の実験もほとんど終わっているから暇で暇で茶々を入れにくるのだ。学生部屋があまりにうるさいので、向いの教授室にいたウツボカズラ教授がやってきた。

「情けない。君はもう弱音をはいとるのかね」

「教授ー。もう勘弁してくださいよー」

「だから神様の血だと言っただろう、そんなに簡単に組成が解ってしまったら神様だって面目まるつぶれだろうで」

冗談めかしてそんな事を言っているが、教授も解析を分担している。教授は築地の何倍ものスピードでいくつかの化合物を同定していた。そのどれもが有り得ない構造をした新規の化合物だとわかっている。

「これ絶対神様じゃなくて宇宙人ですよー」

愚痴を言う築地とは対照的に、ハブラシを白衣のポケットに挿した松林は真剣に教授に向き直った。

さりげなく扇風機を教授の方に向けてやる気遣いが、教授のお気に召したようだ。冷暖房完備で快適な教授室とは違って学生部屋のクーラーは壊れかけていて、湿気が高い。いや、窓際で栽培しているトマトや、長瀬が育て始めた実際のウツボカズラが湿気を放って

いるのかもしれないが。

「ようやく事の重大さを把握しました。築地君とS P r i n g－8のB L 1 9 B 2ビームラインで構造の決定と組成の同定をしてきます」

「ほう？ S P r i n g－8ねえ。あれは予約をとつとらんと使用できませんが？」

「予約は私の実験のために以前より取っておりました。粉末結晶サンプルにして持って行きます」

「いいのかね？ 3日しか解析の時間はないが、君のサンプルを解析する時間はどうするんだね」

「私のは後にします。昔から言うではないですか、宝船には乗っておけと」

「築地君は出る台は打てとも言ってます。高設定のスロット台は破産してでも打てとも！」

築地はぺらぺらと止まらない長瀬の口を慌てて塞いだ。

「そんな諺は断じてない！ まあいい、では二人とも、頼んだぞ。

私はこちらでできる解析をする。サンプルを好きなだけ分注し、結晶化するならしてS P r i n g－8に持っていきたまえ、くれぐれも紛失したり盗まれたりしないようにな」

教授は快くO Kを出した。教授もついていきたいところだろうが、会議などがあって予定があかないのだ。サンプルは1／3を使い切っていた。もうこれ以上の無駄は許されない。失敗も許されない。

「ありがとうございます。行ってきます」

「えー行くんですかー」

築地は面倒なばかりだ。チャキチャキの研究者である松林は苦手だというのもある。二人きりで過ごすとしたらもって2時間、それ以上一緒に二人でいるのは無理。大体彼女は嫌煙家だし……。

「じゃあ私も、ついてっちゃおっかなー」

「あなたも来る？ 来てもいいわよ、交通費は科研費から出してあ

げるから」

「築地君の今カノのつとめですから、ついていきます何処までも！」
アイスコーヒーを作っていたM2の千葉^{ちば みつる}満、データをステイツ
クのりでノートに貼り付けていた白浜^{しらはま じゅり}樹里、携帯をいじっていた
後輩の玉崎^{たまざき とも}灯が一斉に長瀬と築地を振り返った。築地は真っ赤に
なって立ち上がり否定する。

「嘘つけー！ お前、俺の今カノどころか、シゲルとラブラブだろ
ーが！」

「あは、ばれたあ。だってシゲ今忙しくって相手してくれないんだ
もん」

おいおい、彼氏が相手してくれないので暇つぶしかよ。

シゲルは築地の友達だが、どうしてもやってくれと言われて渋々
やった合コンで、シゲルが長瀬に一目ぼれしてお持ち帰りしたのだ。
その日のうちにベッドで一夜を明かし成り行きで付き合うことにな
ってしまったって、付き合い始めてもう3ヶ月になるのだが、まだラブ
ラブだという。シゲルも含め二人とも尻が軽くて築地は嫌になる。
もうしばらく彼女のいない築地は、パチンコ海物語のマリンちゃん
が恋人なのではないかと噂されている。何とも情けない有様だ。築
地は二次元の女の子が好みなのだばかり思っていた研究室のメン
バー達は、築地と長瀬が付き合っているとしたら大ニュースだと注
目していたのだ。長瀬のおふざけだとわかった三人の野次馬は、ま
た黙々と各々の作業に戻っていた。

「長瀬君、君は今年いくつだ？ もうちっとしゃきっとできんのか
ね」

「はーあい」

教授も呆れて、持っていた扇子の腹で長瀬のゆるふわウェーブの
かかった頭をぽーんと軽く叩いた。長瀬はえへとやって舌を出し
ていた。これが素なんだからなあ、しかも頭がいいという事は実証

済みだし、無駄に美人だ。天はどうしてこんな女に二物を与えてしまったんだ、と築地はがつくりだ。

「まったく：ホントお前いくつだよ」

「君もだぞ築地君！ 金髪頭！」

ウツボカズラ教授は、築地の頭は容赦なく扇子の角でカツンと殴った。

＊

「ユージーン、少し待て」

天奥の間から戻ってきたユージーンを、まるで待ち伏せをしていたかのように軍神の執務室の入り口に立っていた比企に呼び止められた。秘書室に居た以御が通したようだ。ユージーンはとりあえず執務室の中に招きいれようとしたが、比企は中に入ろうとしない。

「いや、ここでよい」

「何か御用でしょうか」

「お前の意思を先に聞いておこうと思ってな。己はこれから位申戦に臨む。位申戦が行われれば己は間違いなく主神に剋し、主神を襲名するだろう」

比企の自信は、決して自惚れからくるものではなかった。比企は充分な力を備えてきた。300年前の未熟であった彼とは違う。精神的にも肉体的にも今がピークの時といえよう、機は熟した。主神の格を備えた比企を遥かに凌ぐ力を持つユージーンは、冷静に比企の実力を評価した。

「そうですね。あなたの御力は現代の極陽に勝っていらっしゃいます」

「己が主神を襲名したあかつきには、生物階に対し神政復古の大号令を出す……それが汝の意にそぐわねば己は位申戦に故意に敗北し、意図に沿うように図る」

意図に沿うように故意に敗北をするとは、比企らしくもない言葉だった。比企は何者の進言も頑として受け付はしなかった、妥協、譲歩、打診……それらは比企とは生涯無縁と思われるような概念だ。比企は主神として即位した際に公約として掲げるであろう神政の復古の是非を、ユーザーに打診している。ユーザーは驚いて耳を疑った。

「神政復古とは生物階に対し主神の名を明かし、神による人間の直接統治を図るということですね。あなたが以前から掲げていらっしゃる政策です」

「左様。その意図は己が主神として奢りたかぶる為にはない。汝は風岳村を巻き込んで、住民達を如何にするつもりなのだ。汝は固い決意でINVISIBLEとの戦いに臨もうとしている、神階も全力で支えるだろう。だがINVISIBLEとの戦いに罪なき住民達を避難させもせず、多大な犠牲を出すつもりなのか？」

ユーザーはマインドブレイクをかけて、比企を看破した。何故比企がグラウンド・ゼロへのINVISIBLEの収束を知っているのだろう。比企はファティナのヘクス・カリキュレーションフィールドを借りて荻号の解析したデータを再構築し、片っ端から消去していたデータの痕跡をハードディスクから復帰させると共に、ユーザーが培養液の中にいた間にG-CAMに逆アクセスを試みていたようだ。

G-CAMは以前比企が所有していた神具だったようで、その遠隔リネージ機能の詳細も彼は知り尽くしていた。

G-CAMとヘクス・カリキュレーションフィールドのデータの

痕跡から知りえた事実を総合した結果、彼は荻号と同じシュミレーションの結果にたどり着く。3年後、最も高い確率で、INVISIBLEの最初の収束が起こる、と。かつて荻号の弟子を名乗った比企の推察力と、データの解析力は恐るべきものがある。荻号から認識を疑う事を徹底して教え込まれた比企は他の常識的な神々と比べ、非常に柔軟な思考ができる。しなやかな頭脳は比企の個性であり、最大の武器だ。比企は言葉を続けた。

「創世者の力は底知れぬ。生物階が地獄絵図と化しあるいは灰燼と化する事も考えねばならんだろう。生物階のあらゆる生命の生存権を守るのが、我々陽階神の務めだ。予測不能な事態に臨むとあらば、大災厄から人間や生物を避難させねばならん……破壊は一瞬でも、再生には長き時間を要する。一朝一夕では生命の進化は成り立たないので。己は次の世界に、正しく生の営みを受け渡すと荻号に誓った。したがって三年後、聖書にあるNoah's Ark（ノアの方舟）の記述のように、人々や生物を神階に匿い、戦渦から救いたいと考えておる。生物階不可侵の政策を標榜するヴィブレ・スミスには理解されなんだが……この方針が汝が意に沿うだろうか？」

比企は深慮をもって生物階のあらゆる生命の庇護を決意していた。確かにユージーンは三年後、一か八かの確率にかけている。

INVISIBLEに勝てる可能性は1%にも満たないかもしれない。ノーボディがユージーンを支えるだろうが、ノーボディは神を生み出し続ける事により力の殆どを使い果たしており、実際のところ勝算など立たない。

ユージーンが無責任な賭けに生物階の生物達を付き合わせるのかと比企は問いただしているように思えた。

比企は破滅に向かって突き進むユージーンを全力で支援すると言った、だがそれは”ユージーンの勝利を信じている”という意味ではない。

万が一の可能性に賭けて挑まれるのでは困るのだ。比企は賢明でよほど先見の明がある。三年後にいきなり比企が主神を名乗り、神政復古を叫んで人々を避難させるのは不可能だ。三年という期間を一日でも無駄にはできない、前もって備えなければならぬと彼は考えているのだろう。

時間は殆ど残されていなかった。ユージーンはうまくゆく事しか考えなかったから想像もしなかったが、比企は俯瞰的な視点からそう言っている。

比企は以前までは荻号がINVISIBLEだと信じていたため、荻号のみを見据え警戒し抹殺を企てていればよかった。

荻号は神階に居たため荻号がいつ絶対不及者となって神々の大虐殺を行ったとしても、生物階は安全だと思っていたのだ。だが荻号がINVISIBLEではなかったと知り、比企の計略は振り出しに戻されてしまった。備えるべきは三年後だ。そしてグラウンド・ゼロは生物階にあり、INVISIBLEは生物階に収束する。

まずは守るべきものを守らなければならない。比企はやはり生物階の直接統治を果たさねばならないと考えるに至り、一度はどうでもよいと思っていた主神の座に拘らなければならない理由ができてしまった。その計略の一部始終を、ユージーンには偽ることなく明かしておこうと思った。比企は不思議と、ユージーンを心から信じることができた。

何故かはわからない。

ユージーンは瞳を閉じ、心の裡でどこに居るとも知れないノーボディに呼びかけた。比企の計略を実行にうつしてもらってもよいかと。

ユージーン個神としては比企の考えに賛同できた、だが”彼”は何を思っているだろう。

比企は口を閉ざし瞑目したユージーンをじっと観察している。全ての事象を把握して聞いているであろう彼が、比企の話をどう考えるか訊いておきたかった。声が聞こえればよいのだが……。

”名もなき方よ、今もご覧じておられるでしょうか？”

そう何度もは呼びかけないうちに、耳鳴りのような僅かな予感がユージーンだけに天啓のように齎される。荻号と意識を共有していた彼にのみ齎される予感。それは音楽のような幽かな言葉。他の誰にもは聞こえない。やはり彼は傍で見守っている。

「子らよ。汝らの思うように行動することだ。汝らの選択した未来をいかようにも受け止める。吾が意を汲む事が必ずしも三階を救う事とはならん」

アルティメイト・オブ・ノーボディは、この世界を創出した創世者たちのうち唯一生命を慈しみ育もうとする存在であり、彼の意図には偽りがないとユージーンは確信していた。彼は神々の手に未来を委ねている。ユージーンは彼の言葉をよく咀嚼し、ユージーン自身の考えを比企に伝えた。

「あなたが主神となりわたしの去った後の世界を幸福に導いてください。神の存在を人に明かす事に賛同します。ただし可能な限り暴力による統治は望ましくありません。神と人は本来対等であるべきです」

「^{あい}相わかった。では己は己が役割を果たすのみだ」
比企は大きくひとつ、頷いた。ほどなく極陽に引導を渡しに行くのだろう。

恒の父親、主神にだ。

神の名を明かすことで生物階の混乱は避けられないだろうが、それを賢く統治するだけの手腕が比企にはあった。

「汝は真の意味で救世の主とならねばならんぞ。……勝てよ」

「ええ、負けません」

確信などなかった。勝算などなおさらだ。だがユージーンが勝てない、自信が持てないと言ってしまったえば三階に希望はない。

その責任をユージーン自身が痛切に感じている。

ユージーンは屈託なく微笑んで、執務室の前から比企を見送った。比企は安心したように踵を返し力強い足取りで去っていった。

その短い半生を軍神として生きたユージーンは、必ず勝たなければならぬ戦いというものに思いを巡らせる機会がなかった。より平和な世に導くと思われる軍勢に戦局を傾かせ歴史を影ながら操作をしてきたが、最終的にどちらかの軍勢が勝っても人の世が絶えず平和に続けばそれでよかった。

英雄になりたいなどと願ったこともない。

真直ぐに前を見ていなければ、立ち竦んで一步も動けなくなってしまうそうだ。

ユージーンは創世者として生まれついたのではなく、彼にとって自らが世界に責任を負う立場にあるという自覚と現実は、誇らしい事でも何でもなかった。

あるのは底知れない孤独感と、不断の恐怖だけ。しかも自らが世界を救うより破滅させてしまう可能性の方がはるかに大きいのだ。

逃げ出せるものなら逃げ出してしまいたい。荻号だって死ぬるものなら死にたかっただろう。退路はいつの間にか完全に断たれてい

た。

ユージーンにできるのはただ、その先に何があるとも現実に立ち向かう事だけだ。

ユージーンが唇をきつくかみ締めたとき、また穏やかな声が予感となって降り注いできた。

「苦しいか……ユージーン。汝に全てを負わせてしまったの」

“……自分で決めた事ですから。しかし最初からあなたは全てをご存知だったのですね”

何の変哲もない平凡な一神として生まれ付いたユージーンが、絶対不及者としてINVISIBLEに選ばれるであろうことも。

何もかも彼は見通していたのだろうか。今となってはもう、それを恨んだりはいらない……。

彼と共に永劫を生きなくてはならないのだから。暫く時間があいて、呻くようにこう呟いたのが聞こえた。

「其は誤りだ。子の破滅を願って殺さんが為に子を生む親などない……」

彼の言葉の後にユージーンの心に去来したものは。

経験したことのない温かな感情だった。

惜しみなく注がれる親の情愛とはかかるものをいうのだろうか……。

親のみが子に与える事の出来る一方的で、絶対的な愛情。いつも羨望の眼差しで見守っていた、人の子らの交わすそれらにも似ていた。

第1節 第38話 完全なる女神、レイアIIメーテール

織図は空山という女をどう料理すれば食えるようになるのかと提案する。

恒は煮たり焼いたり醬油をつければ食えると判断したのだろうか。彼はまだ10歳だというのに運命に翻弄されているように見えながらその実いつも冷静で、チャンスを見逃したりはしない。

空山は開き直った顔をしている。

「じゃあ、どう協力すればいいか聞かせて。君、小学校行ってるでしょう？ 小学生の作文形式で考えてみなよ、いつ、どこで、何が、どうしたから困ってるの？ 先生あのねとかで書かなかった？」

不登校児だった恒は先生あのねや作文など書いた事もない。だが恒は、空山の理路整然とした思考回路が気に入った。この女は根っからの理系人間だ。彼女の言動こそ奇妙に思ったが、多少恒と共通する部分がある。損得勘定は捨てて臨む。

「俺達は朱音が研究対象となっている事を危惧しています。朱音は自分が何者なのかを知りませんし俺たちも教えたくありません。今は普通の友達として接しています」

「そうだと思ったー。あの子自覚がなさそうなんだもんねえ」

空山は僅かな間だが朱音の行動を見て、彼女の性格を察知していたようだ。おちよくったような言葉に織図がまたカチンときた彼はODFを解除して水路の石垣の上に腰掛けている。長いローブのような黒衣についた黒い真珠を連ねた腰紐の端を、おもむろに空山がいじくりはじめた。直径2cm以上の本物の黒真珠が何百個もついているのに目がくらんで、彼女は端から一個ずつ外そうとしている、その手を織図がピシッと叩く。一個ぐらいいいじゃないの、ケチと言いながら押し合いへし合いしている。畏怖と権威の象徴でし

かない死神とこうやってふざけあっているのも、世界中を捜しても空山ぐらいしかいないだろう。

織図はたじたじ、といった様子だ。

「恒、この女はどうも信用ならん。不用意に話すな」

織図をまあまあ、となだめて恒は真剣に空山に向き直った。

「あなたに最初をお願いしたいのは、朱音の調査を研究員たちに止めさせる事です。それは秘密を知られたくないという前に、朱音を人間として普通に暮らさせてあげたいからです。朱音の家から全ての盗聴器とカメラを外してください、見返りに俺が研究に協力します。神だと自覚のある俺の方が、研究対象としては価値があるでしょう」

恒は突然、先ほどとまったく逆の要求を出した。これには空山も裏があるのだとは疑ってしまう。

今度は一体何を、企んでいるのかと。

恒がただで研究に協力をするとは思えない。とんでもない代償を押し付けてくるに違いない。

「えー、もう研究対象として見てないってばー」

「それでは困るんです。あなたはよくても、研究者達が朱音を付け回すのでは。あなたはこれまで通り組織の研究者として研究に加わっていて下さい。そして朱音ではなく俺に目を向けさせてください」

空山は恒の申し出に、目を丸くして驚く。空山はIEEEIO所長である母親の権限を利用して風岳から早瀬達の研究班を撤退させるつもりだった。恒はその作戦に同意しているものだと思っていた。恒の意図がわからない。

「どうしてそんな事を？ 意味不明なんだけど」

「おい、恒！ どっちかってとお前に目がいく方がまずいだろう！ ちょっと脅迫すりゃあなあ……」

「俺ならうまく立ち回れます。それと大切な事を思い出しました」
「なんだと？」

彼女は話を聞きながらも、織図をいじくり回す事に余念がない。織図の肩には金色の色素で彫り込まれた御璽、黒百合が輝いている。地球上にはない金色の刺青が珍しいらしく、ぐりぐりと指先でいじくりまわしていた。時々指を見て、金色の色素が指につかないので、彫り物であると驚いてまた擦っている。恒よりは完全な神である織図の方に興味があるようだ。ドレッドヘアの上に幽かに見える光環にも手を伸ばして、それを掴もうとしている。織図も彼女の行動を見て、ピンと勘付いた。

こいつは恒よりも、自分に興味があるらしい。まさにそうだ。

「ちょっとー？ 神様たちー？ それじゃ困るよ。協力するとは言ったけど何か悪だくみをしてるんなら人間代表として見逃せないしさあ？」

「お前が勝手に人間を代表するな。んで触るな！ ペタペタ触りやがって」

「空山さん。俺達は風岳村を守りたいだけなんです。先生あのねの形式で言うと、（いつ）3年後、（どこで）この村で、（何が）何が起こるかわかりません。大爆発が起きるかもしれません。起きないかもしれません、起こった場合には想像もつかないエネルギーが放出されます。それを食い止めたいです」

彼は3年後に予定されたINVISIBLEの収束を、爆発という表現で簡略化した。

どう説明していいのか分からなかったからだ。恒の話を聞いて、織図の顔色が変わる。こいつは何の話をおっぱじめやがったんだ、と。INVISIBLE収束の件、いやそもそもINVISIBLEの存在は決して生物階に漏れてはならない機密事項だ。

素性も怪しい信用のいけない女に、口軽く明かしていい事柄ではない。

創世者の存在。そんな事が明かされてしまったら、宗教、科学、哲学の枠組みを超えて生物階を大混乱に陥しめる。やはり織図は後ほど空山にマインドコントロールをかけることに決めた。INVISIBLEの話は、決して風岳村から持ち出してはならない。

「はあ？ 爆発？ 何の？」

「あなたの人脈を駆使してこの村に原子力発電所を作り、住民を立ち退きにしてくださいませんか？　そして世界中の科学技術力を振り絞り、そのエネルギーの拡散を押さえ込む。それは出来ますか？」

恒はINVISIBLE収束の話を空山に伝える代わりに、この村から始まる大災厄を物理的に防ぐことができなかと打診する。

3年後に起こる大災厄の荒唐無稽な話を裏付け、話を真剣に聞いてもらうため、恒が自身が人とは異なる存在である神なのだとし、国の中枢を動かし備えさせなければならぬと考えたからだ。

もはやこの大問題は、神々のみで対処できる問題ではない。空山の言葉によって恒は気付かされたのだ。人が神々に手を貸すというのなら……人間だって無力ではない筈だ。人間だって守られるばかりではない、必ず出来る事があると、恒は信じたかった。神々の科学技術力に、確かに人のそれは劣るだろう。だが技術協力をすれば不可能ではない。

INVISIBLEのエネルギーを吸収しうるような素材を共同開発だってできるのではないか。神々は霊的な存在ではなく同じ宇宙に住む、人とは異なる一つの生物である。その証明さえ出来れば、同じ脅威に立ち向かうため手を携えあう事だってできるだろう。

「おい、恒。無茶言うな！　それにINVISIBLEの齎す潜在エネルギーを原子力程度に考えるな！　それに、元素を創ったのも

INVISIBLEだ。どんな素材を開発して封じ込めようとしても、何の意味も成さん。豆腐のように分解されちまうだろう。ちつとはよく考えろ！ 勝手な事をすれば生物階不可侵の政策をとる主神の肅正を喰らうぞ」

「でも何も備えないよりましです。父は生物階に対して無責任過ぎます。そんな父に、付き合う必要はないと思います。こっちは命がかかってるんです、肅正でも何でも受けて立ちます」

「インビジブルってどんなもの？ 爆発するって爆弾かなんか？ そのINVISIBLEって、地震みたいに避けられない天災？ 何にしても3年後じゃ間に合わないよ、原発ってそんな簡単に作れるもんじゃないし。まず申請と認可がいるでしょー？ あれってたしか文部科学省じゃなくて経済産業省の管轄だし。やっとこさ着工しても完成して運転までは5年かかるよ？ それにこの辺りには島根原発があるでしょ？ 電力足りてるし認可下りないと思うな。まあまず住民も反対するだろうし」

空山は意外に常識的だ。

確かに恒もニュースを見てみると、原発を抱える地域の住民がいかに原発の存在に神経質になっているかわかる。

それに島根原発からいくらも離れていないこの村に二基目の原発を作ろうとするなど、住民感情の許すものではない。いくら空山が文部科学省に太いパイプを持っていたとしても、認可をさせるのは経済産業省なのだから殆ど実行は不可能だ。

「俺もユージーン先生もこれまでいかに他の人達を巻き込まずにINVISIBLEの脅威に抗するかを考えるべきなんだと思っていました。でもこの大災厄は、よく考えればこの村が被災地となるんです。それに備える段階に入らなければ。何もしなければ犠牲がどれだけ出るか考えると」

「お前こそよく考えろ。INVISIBLEは三階の創世者だ。どれだけ頑丈な原子炉に絶対不及者ごと閉じ込めたって、どうもならんのだよ。生物階を大混乱に落とし入れる方がよほど厄介だ」

織図の言葉は的を射ていた。

INVISIBLEのエネルギー放散は人間の科学力でどうにかなる問題ではない。生半可に備えても何の意味も成さないのだ。人間の科学力でそれがどうなるものなら20万年前、現在の神々よりよほど力を持っていた神々の総個体数がわずか1／1000に削り込まれるという大災厄を許しはしなかっただろう。極陽はINVISIBLEに対抗するため、恒に何かをさせようとしている。極陽が何をさせようとしているのか、それがINVISIBLEに対して決定的な措置となるものなのか。織図には想像もつかない。「ならどうすればいいですか？ 何か妙案でも？ 神階が何とかしてくれませんか？ 確かにその瞬間が3年後ではない可能性だってあります、INVISIBLEが収束するのかどうかだって分かりません。でも3年後に収束するという予知が外れるよう祈ったり、願ったりするだけしかできないなんて、神として恥ずかしいです。空山さん、俺はモルモットにされても構いません。ただ、必ず実現させて欲しいんです」

「気が早いんじゃない？ 何か大変な事になるってのはわかるけど……」

織図は恒の話を黙って聞いて、顎髭をいじくりまわす。

瞳を閉じて、何か考えているようだった。長い沈黙の末、織図は首をふった。

「無理だな、恒。お前じゃ無理だ」

「でも……！ やるしかないじゃないですか！」

「万が一やるとしたら、だ。お前は完全なる神じゃねえだろ。人間の前に神だと名乗り出て徹底的に追及をされるのは俺が引き受けよう。使徒の主であるという証拠は、”使徒を生かす事ができるか”

という事が必須となるだろう。アトモスフィアの殆どないお前が成体の使徒を生かし続けるのは不可能だ。お前が神だと誰が信用するものか。それにお前は人間でもある、お前には薬物が効くしな」

恒は人間であるという足枷が常に付きまとっている。それがよい場面も、悪い場面もある。

手術や病気になった際にはよい場面もあるのだが、恒には麻酔などのあらゆる薬物が効く。上島から熱さましや咳止めなどをもらって服用した時も、恒の神体にはきちんと作用したし、インフルエンザなどの各種予防接種も有効だった。だが研究機関に研究対象として身を投げ打つとしたら薬剤耐性を調査される際に大きなリスクでしかない。

「どういう事ですか？」

「たとえ薬漬けにされても俺なら平気だ、薬物など効かんしヤバくなったら転移で逃げる。だがお前にはあらゆる薬物が効いてしまう、薬物実験をされてラリったらひとたまりもねえぞ」

「ちょっとー、そんな事普通するー？　いくら研究のためだって、最近ではCTやMRIなんかの画像解析も発達してるしー、一昔前のマッドサイエンティストみたいなイメージで話進めないでくれるー？」

空山がまた人間を代表して猛抗議する。

確かに現在の科学技術では貴重な研究対象を傷つけずに内部構造や神体の組成を調べる事はできるだろう。解剖をして対象を死に至らしめて調べるような事はあり得ないと、空山は主張するのもわかる。それに神の正当性を証明する事よりはるか重要なのは、あるのだとしたら3年後の脅威に備えること。神々と技術協力をして、何よりも地球の庇護に全力を注がなければならない。

「いずれにしてもだ、完全なる神を差し出すというなら俺の役目だろう」

「織図さん、でも公務とか……あなたは枢軸ですし」

「俺は特殊任務従事者で、法務局の監査対象外なんだよ。何年もじやなければ、発覚することもあるまい。だが、正直御免被りたい役回りだな……」

織図は恒を少しでも危険な目にあわせたくはなかった。何故なら、荻号とこんな約束をしたからだ。

”恒は不完全でありながら、完全な存在なんだ。あの子の代わりは、三階にはどこにもいない。あの子は唯一の希望だ。だからどんな事があっても、恒を守ってやってくれ”

恒の不完全性は、議論するまでもなかった。神としても人としても半人前。

だがその可能性は未知数だと荻号は強調していた。彼は神と人のあいの子である。

事象の壁に隔てら物理学的に決して交わる事のなかった、そして生物学的にも生殖能力の全くない神と、精子を得なければ生殖能力を持たない人間の女性との間に結ばれた、神階と生物階の架け橋となるべく創られた子なのだと。この世界は創世者によって支配されている。創世者は神階と生物階を完全に異なる世界として隔てていた。だとしたら創世者は神と人が交わることを、予期すらしなかったに違いない。

それが希望なのだと荻号は熱っぽく言った。

創世者によって精巧に積み上げられた秩序を乱す存在。
複雑系理論において予測不能な振る舞いをする初期値。

たった一つの揺らぎを持つ初期値は、あらゆる結果を覆す。

北京でたった一羽の蝶々の羽ばたきが、まわりまわってシカゴでハリケーンを呼ぶという現象（バタフライ効果）が、恒によってもたらされるのだという。

荻号は煙草を紙に巻きながら、こう付け加えた。

”この世界には絶対、などという事はない。創世者に勝てないという結果は、予め提示されているものではない……俺はそう信じたいんだ”

万物を創り出した創世者に剋つなどと、考えてみたこともなかった。神々も含め、所詮自分達は創世者の創作物だ。勝てるはずがないうように、創られているに違いない。だが織図は荒唐無稽ともいえるその勝算を、少しだけ信じてみようかと思った。

彼らしくもない、一貫性のない考えだった。

＊

その頃神階では、生後一週間近くを経てジーザス・クライストの死と引き換えに誕生した女神、辻井^{つじい}芽羽^{めう}の、初の神体検査が実施されることとなった。薄い金色の産毛が、くるくるとかわいらしくつむじを作っている。育児係の使徒たちは、神階に久しぶりに誕生した女神にぞっこんだ。

色白で朗らかにきゃつきゃつと笑う人気者は、瞳の色は薄いグリーンで、もうぱっちりと開いてくつきり二重だ。

検査台の上にベルトで固定され、多くの使徒たちに手を振って見送られて、検査装置の中に入っていった。

総合生体解析装置、生物階でいうところのMRIのような装置の中に入れられて、30分も待てば全ての生体情報の解析結果が出る。アトモスフィアの色、質、血液組成や神体の内部構造検査などなど。アトモスフィアの質によっておおかた陰階神に相應しいか、陽階神に相應しいかが決定する。

解析装置の待合室では、陰階の使徒と陽階の使徒が頭をつき合わせるようにしてにらみ合っている。

結果が出しだい、各々の階につれて帰るためだ。ナーバスになっているのか、小競り合いも起こっている。

「今度こそ、陽階神だと思います！」

陽階使徒がそう言えば

「陽階神は陰階より多いんだから、今度も陰階神だと思う」

陰階使徒も譲らない。

「ジーザさまの代わりに生まれて陽階で発見された御子ですから！
陽階が連れて帰ります！」

「陰階がどれだけ大変だと思っているんですか！ 荻号様の失踪で、4000万名の使徒がリストラになったんですよ！ 陰階のものです！」

一触即発の気まずい空気が流れていた。

陰階は特に荻号の失踪とともに大量のリストラが確定していた。陽階神より人員の少ない陰階神に、4000万名ものリストラされた使徒を割り当てる事など無理に近かった。神一柱につける使徒の数はもうパンクしてしまうほどにギリギリの定員だ。

これ以上定員を割り当てると、位神のアトモスフィアが枯渇して公務に影響してしまう。この女神がどれほどの使徒を養う事ができ

るかはおかしいが、大切な給料を支払ってくれるであろう未来の女神を、両階の使徒とも一柱でも多く獲得しておきたかった。

そうこうしている間に、待ちに待った結果を持って技官の使徒がやってきた。

「どっちでしたか？」

「た、大変です……」

「陰階でしたか？！」

初老の技官使徒は、焼きあがったばかりの画像写真を震える手で提示した。

両階の使徒たちはそれを奪い合うように見ているが、実際のところ専門的な知識などないので詳細な結果がわからない。

技官の使徒は口がもつれて、なかなか結果が言い出せない。陰階の使徒も陽階の使徒も、技官の背をさすって結果を待った。

「陽階でした。ですがこの女神は、生殖能力を持っています。女性なんです、子宮があって、卵巣があって……完全なる女性なんですよ！」

陰階使徒も陽階使徒も、結果を受け止めきれず、一同は絶句した。神階に有史以来初めて、生殖能力を持つ完全なる女性が生まれたという結果が告げられたのだ。彼女は神階に、何を齎すのか……誰にもわからない。

アルティメイト・オブ・ノーボディはまた予測不可能な初期値を投げ込んできたのだ――。

＊

空山はそろそろ朱音の見張りのシフト交代の時間になるが、自分

は朱音の見張りに戻っていいのかと尋ねた。

織図は今急いで結論を出すべきではないと言って、空山といつても連絡が取れるよう携帯の番号を交換した。

織図は考える時間が欲しかったし、恒はどこからともなくメールを寄越す荻号の意見を聞きたいと言った。

二柱はメファイストフェレスに会う予定も忘れ、仲良く瞬間移動で藤堂家に戻った。

藤堂家の玄関にまず恒が瞬間移動をし、すぐ後に追跡転移で織図がやってくる。恒は最近できるようになったばかりの瞬間移動がまだそれほど上手ではなくて、玄関に瞬間移動をすると必ずひざを上がり口の段差にぶつけてしまうので青あざがたえない。

盲目の織図は必ず誰かの後からでなければ追跡転移が使えないので、膝をぶつけて痛がっているところに華麗に転移をしてきて恒の有様を笑うのだ。二柱が玄関に入ったなり、固定電話がけたたましく鳴った。恒は小学生にしては長い手を延ばして靴を履いたまま電話台からひよいと受話器を取る。織図は律義に靴を脱ぎ揃えて先に家の中にあがっていった。

「もしもし、恒？ 妾よ。明日予定って、ないでしょ？」

空山のおかげですっかりメファイストフェレスの事を忘れていたところに、丁度彼女から電話がかかってきた。暇だと決めつけていきなり用件を切り出す単刀直入っぷりは健在だ。彼女の断定するよう、確かに明日の予定はないが、腰を据えて考えるべき事はある。

答えに困っているとメファイストフェレスはじれったそうにもう、と言って話を進めた。

「主が、お前をお呼びなの。明日の昼、広岡市内でランチをしながらお話したい事があるそうよ」

「ユージーンさんが降下されるんですか！ お会いしたいです」

「ただし、妾とお前だけをお呼びなのよ。そこに誰かいる？」

「織図さんが……織図さんも一緒に行ってはいけませんか」

「織図って死神でしょ？ 昼間は通常業務があって忙しいんじゃないの？ それに織図は神階でいつでも主とお会いできるからわざわざ時間を取らせて呼びつけるのもどうかと思うけれど……まあ一応メールでお伺いしてみるわ。それまでは話さないでね」

恒は、ユージーンに会いに行くと言えてから一旦メファイストフエレスの電話を切った。戒厳令の布かれている風岳村の村民である恒が、陰陽階神法に行動を束縛されているユージーンと会える機会など、これを逃せば殆どないに等しい。

ユージーンには二つの用件がある。一つは、風岳村や生物階をINVISIBLEの脅威からどう守ればよいと思うか？ 何か他によい案があるか、恒の考えた案をどう思うか、それらをを訊くことだ。

いま一つはユージーンに弟子入りを乞う事だ。

恒はよきアドバイザーを欲していた。どうやってか神階最強神となったユージーンを含め、枢軸である織図や全ての鍵を握っているとも思われるノーボディも重要な意見番だ。茶の間に入ると、織図は勝手知ったる我が家のようにくつろいでパソコンを開いて麦茶を飲んでいた。

「荻号さんからのメール、また届いてるぞ。見てもいいか？」

別に読まれて困るものはない。

荻号と織図は何百年交流してきた親友だった、突然の失踪に戸惑っているのは一番近い関係にあった織図だったのかもしれない。織図は戸惑いを決して表に出さずにどっしりと構えて、恒を安心させてくれる。

見てはならないと言う権利などなかった。

— — — — —
— — — — —
送信者… nobody
宛先… wizwalter4@first.negative-
states.ddmin.org
件名…
内容… 三年後が楽しみだ
— — — — —
— — — — —
— — — — —

織図は枢環を中指にはめた片手で、ゆっくりと口元を覆った。
文面を見て何かを感じ取ったようだ。先に織図がメールを読んだ
のだが、異変を察した恒も横から追って読む。

内容はたった一言だけだ。

荻号らしい茶目っ気のある言葉も、必ずつけていた件名もない。
うっかり慌てて送信してしまったのだろうか。それとも織図がい
るので、様子が違うと思ったのだろうか。

「なあ、恒……違うぞ。こりゃ、荻号さんからのメールじゃねえぞ」
「……！」

「三年後って何だ！」
「嘘…じゃあ、このメールは何ですか！　ってまさか……」

INVISIBLEから送られたメールなのか……？　恒は無意
識に触れた織図の黒衣を握り締めた。送信時刻はほんの10分前だ。
……何という事だ！　Nobodyがどこでも見えていると言っ
たように、INVISIBLEがまさに今、このパソコンに干渉し
てきている！　荻号がそう言ったように、後ろを振り向いて、何も

見えなかったらそれがINVISIBLEなのだろうか……目には見えないが、いる！ この狭い部屋の中に、何かがいる！ 恒は後ろを振り向こうとして、織図に怒鳴られた。

「見るな!!」

織図は感覚を研ぎ澄まし、アトモスフィアをレーダーのように縦横に展開させた。

何もない。

背後には何もいない筈だ……だが見られている。確かに、どこから見られている！ 織図は恒を前面に庇うように抱きかかえたまま、先に届いたメールを立て続けに全て開いた。内容を見ただけでは判断できなかった。

どこからが荻号のメールで、どこからがINVISIBLEの送ってきたメールなのか？

身構えたまま数分が過ぎたが何も起こらず、メールもそれ以上は届かなかった。何も仕掛けてはこないのだろうか。

INVISIBLEはただ観察しているだけだ。織図は警戒を解き、腕の中で震える事しかできない恒の頭を、優しく撫でて安心させる。

「恒。これは奴からの警告だ。全てを見ているのだと。俺達の手のうちは余さず見ているのだと、……単なる警告だ。何もしてはこないから安心しろ。向こうにその気があれば、とっくにやっているだろう。いずれにしろ今後荻号さんとの連絡は封じられたな。このルートは信用ならん。例え本物がメールを送ってきても、どうやって証明する。悪質なオレオレ詐欺の一種だな」

織図は怖くないのだろうか。

たった今、こんなにもあっけなく創世者との邂逅を果たしたとい

うのに……。

創世者の衣擦れの音を、すぐ背後に聞いた筈なのに……。オレオレ詐欺で冗談めかして片付けてしまう……。これが常にINVISIBLEの襲来を想定して己を鍛え上げ、備えてきた陰階枢軸神の不動心だった。織図の鋼のような精神力を、恒の無力を見せ付けられた思いだ。一方の恒は情けないまでに体が硬直して何もできなかった。恐怖のあまり頭は真っ白になって思考停止していた！ 自分は何もできない口先だけの子供なのだと思い知らされる。

恒は己を深く恥じた。

「何も恥じ入ることはない」

織図は恒の不安を取り除くように父親のように抱きしめ、まだ震えの止まらない少年を慰める。

織図は極限の緊張が続いた数分間、怯むことなく身を挺して守り続けていた。

「ごめんなさい。あなたの仰るとおりです、俺は……」

「誰だって怖いさ。俺だってそうだ」

「でも……INVISIBLEって、こんな事もしてくるんですか？ INVISIBLEって物理学的エネルギーの集塊じゃなかったんですか？ これではまるで、人格でもあるかのようです。本当に、INVISIBLEなんですか？」

「さあな……」

敵はどこに、どれだけいるのか？

恒にはもうわからない。敵は一つではなかったのだろうか？ 名前を付けて他と区別する事すらできない敵があとどれだけいるのだろうか？

それらは独立の存在なのか、元を正せば一つの存在なのか、彼ら

と同等の能力を持つ荻号は敵なのか味方なのか。そもそも先ほどのメールは本当に荻号のものだったのか、そんな事を考えるうちに錯乱してしまいそうだ。

名も姿もないもの、それらは何にだって成りすます事ができる。例えばこうして話している織図がそれであつたとしても、何の不思議もないのだ。

全てを疑ううち何も信じられなくなる。たった一通のメールだけで恒の精神を崩壊させることも簡単だ。恒はともではないが戦えない。

「一体何が、敵なんですか?! 何が真実なんですか!」

何と戦うべきなのかすら見失ってしまいそうだった。

固定電話が思い出したように鳴っている。それは誰かなのか……そうではない何者かからなのか。コールはどこに繋がっている? 電話に出るのは誰なのか? 何かが、自分を見ている……見られている。

恒はおぞましさに耐えられず、遂に意識を失った。

＊

比企と別れ執務室でメファイストフレスと連絡を取り合つていたユージーンは、メールの返事を待つ間にG L－N e t w o r kに接続しニュースを読んでいた。ジーザスの死と引き換えに生まれた女神の赤子の神体検査の結果が出た……彼女は完全なる生殖能力を持つ女性だと知る。

神階は大混乱に陥っていた。なにしろ有史以来、神には見かけ上の性別はあれど、生殖能力を持ったものなどいなかったのだから……。

ユージーンもこのニュースには驚いた。ユージーンは荻号と意識を共有していたとはいえ、荻号の脳の中で覚醒し続けていたわけではなかった。ノーボディが彼女を創り出した場面で、ユージーンの意識は眠らされていたのだろう。

偶然にではなく故意にだ。

女神の赤子。

辻井 芽羽は最初の神体検査の結果を考慮して仮に陽階神として神籍が置かれ、レイア＝メーテル（Rhia Mater）と名づけられた。

「レイアってのはギリシャ神話に登場する地母神だろ？ で、メーテルというのは母ということだ。神々の母とは、またえらく格式の高い名前がついたものだ」

「……よい名前だな」

ユージーンは趣のある名を気にいった。

「そうか？ 古めかしいぞ？」

通常業務の書類を持って執務室に入ってきた以御もニュースを読んだらしく。

彼女の名前は、神階に所属する者なら誰が聞いても一風変わっていると思われたことだろう。現代の神には現代の神に相応しく現代の言語での通名がつくものだ。わざわざ古代ギリシャの神々になぞらえて名づけたというのだから、いかに神階にとつてかの赤子が異端であり、また敬意を以って迎えられたことか。レイア＝メーテルが神階最後の神の赤子となることを、彼等は知らないのだ。

ユージーンは彼女の出生の秘蹟を知らないし、立ち合わせてもらえなかった。

だがノーボディに教わった情報も少しはある。

彼女はユージーンと同じくプライマリーコピーから誕生した女神だ。

今となつてはもう過去の話だが、ノーボディは彼（彼女）の胎内に神化全能性幹細胞（G-E S細胞）という細胞のようなものを擁していた。

それが全ての神々のルーツだ。それら大切な細胞を分裂、増殖させて神を創り出していた。生物階でいうと、つい去年開発されたばかりの再生医療におけるiPS技術の高度な応用というと分かりやすい。

G-E S細胞はサプカルチャー継代用と、プライマリー保管用があるらしい。神々を誕生させる際には、継代用の細胞を使う。

神が一柱死ぬごとに継代用の細胞を2のn乗で分裂させ、分裂させた片方から神を創る。

それらは何百回、何千回と分裂を繰り返しコピーされた劣化コピーとなっている。継代用の細胞はただ、神という種を維持するためだけの用途に用いられている。継代を重ねエネルギーを分割してゆくことは、現代の神々の力が古の神々の力と比して著しく衰えてきた主な理由だ。だが保管用の細胞は、一度も分裂させずそのまま擁している。この保管用のG-E S細胞には数に限りがあつて、ノーボディの能力を分け与えた特別な細胞なのだそうだ。

そしてG-E S細胞から誕生したプライマリーコピー（第一代コピー）の神には、あたかも名工が自らの手がけた名作に銘を穿つように、他と紛れる事のないよう目印をつけている。プライマリーのG-E S細胞から分化させ創出した神は全て、金色の毛髪を持つのだそうだ。

あまりにもさり気ない目印であるために誰も気付かなかったようだが、赤、青、白、黒、茶、緑、銀、他にどんな色があろうとも、確かに神階にはユージーンを除いて金髪の神、女神は存在しなかった。

ノーボディはなかなかプライマリーの細胞から神を誕生させたがらなかった。それは彼の傑作が、二度も絶対不及者としてINVI

SIBBLEの器に選ばれてしまったからだ。INVISIBLEは、劣化コピーには目もくれない。本物志向でお目が高いというわけだ。自身も金色の毛髪を持ち、ノーボディの傑作であるプライマリーコピーとされるユージーンは、金髪翠眼であるレイアがどういう存在なのかすぐにわかった。

また、ノーボディはプライマリーの細胞から神を誕生させることよりなお、禁忌としている事があった。

それは、神々に生殖能力を持たせること。

これは、仮に生殖能力を持つ者がINVISIBLEに選ばれて絶対不及者とされてしまった場合、生殖能力を利用して絶対不及者を量産しようとするものだ、アルティメイト・オブ・ノーボディにはわかりきっていたからだ。どうしたことから、INVISIBLEはノーボディのように生命を生み出すことができない。

できないのか、やらないのか……とにかくINVISIBLEには”器”が必要だった。

そしてINVISIBLEは、生殖能力のある”器”を選ぶに違いない。

まるで癌細胞のように制限なく増殖を繰り返す絶対不及者……世界の終末は目に見えている。

そこでアルティメイト・オブ・ノーボディは厳密に神々の個体数を管理し、彼の子らに生殖能力を持たせないと決めて徹底していた。そのために彼自身が、神々を生み出す為に生命力ともいえる原始のエネルギーを削り続け、INVISIBLEに力劣る事になろうとも……。

プライマリーコピーであり、なおかつ生殖能力を持つ女神……。

彼女には二つの禁忌が揃っている。ノーボディは彼女を最後に神

を創らない。彼女が成体となって充分に成熟したら、INVISI BLEは生殖能力のないユーザーより彼女を器として選びたいに決まっている。ノーボディはみすみすそんなことを許しはしない。つまり3年後に全ての決着をつけるつもりなのだ。彼女は”器”としてではなく、INVISIBLEとの戦いに勝利した後新たな神と人の世を築き上げてゆくべき存在として残されるのだろう。ユーザーは以御が執務室を出ていったのを確認して、また瞑目をして彼に呼びかけてみた。

”彼女はわたしが去った後の世界を導く希望となるのでしょうか”

今も傍にいたはずのノーボディは、今度は何も答えてはくれなかった。それでよいと彼は思った。

＊

メファイストフェレスは電話口に出たのが恒ではなく織図だった事に少々驚いたようだったが、気を取り直す。

「何？ お前は遂に電話番号までしてるの？」

枢軸神である織図をお前呼ばわりするのも彼女ぐらいだ。しかも織図は7位であるユーザーよりたった1階位しか格下ではないというのに、メファイストフェレスは断固としてユーザーにしか敬意を表さない。彼女はユーザー個神に仕えているからだ。

「あいにくだが恒は寝ている」

「へえ、そう。恒は明日広岡市内で主とお会いする事になったの、主が恒にお話したい事があるんですって。妾は恒の付き添いなのだけれど。お前も来るかしら？ ランチぐらいなら、おごってやらないでもないわよ」

「何で俺が！ ユーザーごときにだ！」 お会い”しなきゃなんね

えんだよ！ 俺あ奴とは神階でいつでも会えるんだ、冗談じゃねえ」
織図は機嫌が悪くなった。

「そ、じゃあ来ないのね？ 別に構わないけれど。お昼の夏会席御膳、一人前の予約を取り消すだけよ」

しかし織図はわざわざユージーンが生物階に降りてまで恒に話したいという内容を、聞いておくべきなのかもしれないと思った。

それに恒は先ほどのメールで錯乱状態になっている。織図が持っていた鎮静剤のアンプルを打って、布団を敷いて寝かしつけてやったので起きたら少しは落ちついているとは思うが、ついて行っちゃった方が心強かろう。あのメールが届いた直後、先ほど恒とともに見た一連のメールは全て受信メールフォルダの中から消えていたのだ……気味の悪い現象だった。それとも自分達は、白昼夢を見せられていたのだろうか――。

「待て、やはり俺も行く」

「あきれた！ 会席料理に目がくらんだってわけ？」

「違っけーよ！」

受話器の向こうから、鼻で笑われている。

さすがの織図も、この女と空山にはかなわない。

織図は破顔しかけて、ふと思った。電話で話しているこいつ、確かにメファイストフェレスなんだろうな？

また荻号の言葉がリフレインのようにフィードバックする。

存在を疑え。

それらは果たして『在る』のか、と……。

第1節 第39話 暴かれた秘蹟と、なげうついのち

どこまで続くのかわからない果てなき新緑の草原に、長い金髪をたなびかせた人影が風に吹かれて立っていた。強く透明な日差しが背後から射し逆光となって彼（彼女？）の装束や髪の色を透明にしている。

恒は彼を知らない、男性なのか女性なのか……そのどちらにも見える。会った事もないのに懐かしく感じるのは何故だろう。

黄金の輝きを持つ太陽のような瞳は独特の色彩を持つ、その彼は草原の上に平たく伸びてしまった恒を見守っている。何かを待つように。

立たなければならないのだと思った。

どんなに恐ろしくとも立ち上がって前に進まなければ。後ろを見てもならない。振り返った途端に深淵に飲み込まれるのだと理解した。

彼は恒がようやく立ち上がったのを見届けると微笑む。言葉は発しないが、思い出したように手を伸ばして恒の手首を掴むと掌に、よく手になじむ立方体を載せる。握り込んだものを見ると、FC2ーメタフィジカル・キューブがコチコチッと軽快な音を立てて動いている。

観察されるばかりではなく、見守っている者もいるのだと夢の中にまで教えにきたのだろうか……。

姿は違うが、荻号なのだろうと思った。

荻号が恒の夢の中にやってきたのは確かに、これが初めてではなかった。それで懐かしく感じたのかもしれない。

”わかりました……もう大丈夫です……俺には皆もいるし”

恒は温かなアトモスフィアに満たされた神具を大切に握り締める
と、ポケットの中に詰め込んだ。それをまた心強く感じて、彼に追
従して歩きはじめる。柔らかな新緑の草原がぱあっと夕風のような
光の海原に変わった、ゆっくりと光の射すほうへ前をだけを見据え
て歩き始める。

踝を浸す虹色の水は恒のすぐ後ろに集まり深淵に落ち込んでゆく。
滝の轟音が聞こえ飛沫が飛び交う。波は寄せたまま、帰ってこな
い。

それでよいのだと思った。

＊

織図がテレビを見ながらくつろいでいると志帆梨が帰宅した。

恒を起こそうとする志帆梨を制して、志帆梨の作ったオムライス
で晩飯をいただき、夏の怪奇現象特番を見て、一番風呂をもらって
そのままぐうたらと一泊することにした。人の家でなんとも殿様な
生活だが、織図はそのかわり恒の傍を離れない。志帆梨は死んだよ
うに眠るわが子を時折覗き込んで、生きていると確認してほっと
ため息をつき、また家事に精を出すのだった。

「夏風邪でもひいたのでしょうか？」

「おたくの息子さんは人間でもあるもので、たまには風邪ぐらいひ
くでしょうな」

織図は志帆梨と晩酌をはじめた。アルコールでは酔いもしないく
せに、これも織図のオツな楽しみだ。

志帆梨は創作料理屋の開店の準備に向けて、カクテルを作る練習

をして、織図の気まぐれな気分にあったカクテルを手早く作りあげる。今日は色々大変だったというと、X—Y—Zというラムベースのカクテルを作って手渡す。このカクテルの由来は、もう後がないという意味だったな、そう思い出した織図はわざとたっぷり酒を含んだ大粒の（梅酒用の）梅を、ころんとグラスに入れて違うカクテルにした。今後、もう後がないとは考えたくなかったからだ。志帆梨は何故織図がせっかく作ったカクテルにわざと梅を入れたのかわからなかったが、彼がおいしそうに飲んでいるのでそれでいいと思うことにした。

「ただの夏風邪ならいいんですけど親ですから心配になります。この子はあなた様方のような立派な神様の中に混ぜていただいて何をしているのでしょうか。肝心な事はいつもはぐらかして、話してくれなくて……」

志帆梨は恒のしていることに、できるだけ口を差し挟まないようにしていた。だがこのところ恒が頻繁にどこかへ行ったり、志帆梨の目の届かないところで何をしているのか分からないという状況が続いたため、志帆梨はやはり心配だった。動き回りすぎて疲れたのか、風邪などひいて体調を崩している。志帆梨は自分の息子ながらその心が掴めず、困惑しているらしかった。志帆梨も酒を飲んでほろ酔いになって、本音もでてくるのだろう。いつもは白い頬をピンク色に染めている。

「この時期の子ってのは、どこの世界でも好奇心旺盛で、あれこれやってみようとするだろ？ 背伸びだってしてみたい、そんな年頃だ」

「危険な事はしていませんか？ しようとしたら、織図様が叱って下さいね」

「ああ、責任持ってそうしよう。明日は恒と共に広岡市内に行つて

くる……今度から恒の行き先はできるだけあんに報告するようにしよう」

織図は梅を種までかじりながら、口約束にするつもりはなかった。恒が危険に巻き込まれるのなら、それを止めなくてはならない。

恒には親身になって心配してくれている、たったひとりの肉親がいるからだ。最近はどうも志帆梨に餌付けされているな、と思いながら織図はつまみの枝豆に手を伸ばした。織図は酒代とつまみ代、と言いながら札束をまた志帆梨のエプロンのポケットに入れた。札束の厚さは1cmはあって、ポケットがいっぱいだ。この神様は、金銭感覚がどうかしているに違いない、きれいな金なのかもわからないし……志帆梨はそう思いながらいらなうと言って返そうとしたが、では恒の為に使えと言って無理やり戻された。カクテルと枝豆のお代が、何千倍にもなってかえってきた。

「あ、そうだ。じゃあ今の金で恒に携帯を買ってやってくれないか？ あんたも恒と連絡がとれないと心配だろ？ あんたの携帯も買うといい。俺もあんたと恒が携帯を持ってくれると何かと都合がいいしな」

志帆梨はそれには賛成だった。

＊

翌日。織図は一泊をして味噌汁と納豆、焼き鮭で遅い朝食をいただいていた。時刻はもう9時半だ。久しぶりに睡眠をとり、珍しく寝坊をしたのでこんな時間になった。起きると志帆梨が朝食を準備していたので食べないわけにはいかなかった。

「ごはんのおかわり、どうしますか？」

「あ、大盛りで……なあ、奥さん。俺食いすぎかな？ 昨日もここにたま食ったし」

織図は柄にもなく、食べ過ぎを気にしている。

「いいじゃないですか。神様はお太りになりませんか？」

「それが、デブるんだよ！　もう昔の話だが、ギリシャ神話にも出てくるディオニュソスって陽階神の酒神がいたんだ。バッカスと言うとわかるだろ？　ディオニュソスは昔はいいプロポーズしてたんだが、職業病で酒とつまみばっか食ってて、デブってクビになったんだよ」

嘘のような、本当の話だった。志帆梨はぷつと吹き出す。

有名なオリンポス十二神を笑うとは失礼だとわかっていたが、織図の話がおかしくて口を押さえて声を殺し笑った。神も食べ過ぎると太る。もともと食べなくてもいいようにできているのに、栄養を過剰摂取すると太ってしまうという、バッカスの例は有名だ。陽階神は容姿が優れてあることが必須の条件であり、スタイルの維持は仕事の一部だ。バッカスはたるんだ身体が神体検査の際に見咎められて、クビとなってしまった。陽階神からは随分笑われたものだ。そこで陽階では、食通の女神を中心にダイエットが一時期流行った。

陰階神は太りすぎてもクビなどという事にはならないが、死神といえど大鎌を持った骸骨のようなのでたちがイメージとして定着しているのに、おデブな死神などあってはならない、と織図は肝に銘じておかわりを遠慮した。藤堂家に来るようになってから栄養過多だ。文型神は武型神のように毎日はトレーニングをしなくてもよいが、久しぶりにジムにでも行かないとな、と、そんなことを暢気に出っかけていた。織図の妙な着うたの携帯電話が鳴ったので、電話に出るとメファリストフェレスの怒鳴り声が聞こえる。電話番号を知られていたのは、織図がメファリストフェレスとも携帯電話の番号を交換していたからだ。彼女は解階から携帯を持って帰ったらしい。解階の携帯電話は名刺一枚ほどの大きさで、名刺より薄い。解階の科学力もまた、神階と同等に張り合うほどに発達を見せており、解

階の住民はメファイストフェレスのマクシミニマのように科学技術の粋を集めた多機能装置を数多く開発している。新しいものの好きの織図も、今度極薄の携帯電話を入手したいと思っていた。

「お前たち！ まだ出ないの？！ もう上り電車が発車するわよ、お前が恒を連れてくるって言ったのに、支度が遅いつたら」

彼女がいるのは、風岳駅のホームに違いない。無人で、閑散とした風岳村の玄関だ。人目の少ない風岳村ならともかくマクシミニマで飛んで市内まで行くのは目立ちすぎる。光学迷彩を持っていない彼女は交通手段で行くのだろう。

「ユージーンが来たら行くさ、任せろ」

「はぁ？」

「お前の気配はアトモスファイアじゃねえから追跡転移できねんだよ、だがユージーンが来ればどこにいてもわかる」

「横着なんだから！」

織図はぎりぎりまで恒を寝かせておいてやりたかった。ユージーンが生物階に入って待ち合わせ場所に着いたら、彼のアトモスファイアを頼りに恒と追跡転移で行けばいい。恒はまだ起きる気配はない。約束は12時半だから、12時になったら起こして支度をさせるかな、そんな具合だった。

＊

ユージーンはもう二度と乗る事などないと決意したはずの白隼の凰の背に再び乗り、これまた生きては再び通ることなどないだろうと思っていたヘヴンズゲートを通して生物階にやってきた。

久々に訪れた中国地方の中核都市である広島市は、いつもどおりの喧騒に包まれていた。ユージーンは市内上空に入る前にODFを

展開し自らの姿が人目に触れないように配慮しながら、鳳の背から飛び降りて駅ビルに降り立ち、ふと広岡駅の方を見遣る。広岡駅から30分ほど市電に乗ってJR鹿又駅に乗り換え、1日に6本しか運行されない府川線で2時間ほど揺られて、終点にある風岳村は大変な田舎村だった。わざわざこんな遠くまで呼び出して、悪かったかなとユージーンは悪びれた。

そういえば約束の店に着くためには恒たちはもう電車に乗っていないなければならない時間である。

メファイストフェレスは電車に乗ってやってきているようだが、生物階にいればどこにいても探知できるといっても過言ではないほど強大な織図のアトモスファイアはまだ藤堂家の方角から動いていない。恒のアトモスファイアは探知できないほど弱いから、恒が織図と一緒にいる場合は遅刻だ。そう思いかけて、恒も追跡転移ができるようになったことだし追跡転移で来るのだろうか、と思いなおした。

待ち合わせにはやはり携帯があった方が便利だ。お互いのアトモスファイアを頼りながら待ち合わせをするのでは何かと不便だし…。ユージーンの持っていた携帯電話は壊れて使い物にならなかったもので、少し早く生物階に入ったついでにDoCaMoショップで再契約をして最新機種を購入した。電池パックと個人情報カードはどのみち入れ替えてGLネットワークに接続できるよう改造するつもりだ。最新のシルバーの携帯電話をポケットに無造作に入れて、待ち合わせ場所に向かった。

メファイストフェレスの名で予約を入れいてる夢粹むすいという日本料理屋は、広岡駅から10分ほどの裏手にあり、本格的な和食が堪能できる老舗だった。小京都を思わせるよく手入れの行き届いた日本庭園に面した個室で、季節の移ろいをふんだんに取り入れた、趣き深く贅沢な一品一品を味わえる。お見合いや結納の席にも使われる

そうだ。ユージーンは20分も前に店の前に到着すると、中に入らず植え込みの影の岩に腰掛けてアトモスフィアを維持・放散しながら彼らを待った。あとは恒と織図が自分のアトモスフィアを目印に追跡転移をかけてくるだろう。時計を見ていると、メファイストフェレスが徒歩でやってきて、出会うなり立ちすくんだ。顔や姿は変わっていないのに、彼女は別神を見ているかのように驚いた。彼女が胸がいっぱいで何も言えなくなってしまうているので、彼は先に手を振って声をかけた。

「やあ、久しぶり」

「主……ですか？」

メファイストフェレスは彼と再会して、もはやアルシエルとの謁見の件について話すのを遠慮する必要はないと感じた。口調はおつとりと以前の通りだが、彼は既に何らかの方法で超越者と呼ぶに相応しい存在になってしまっている。アルシエルとどちらが優れているかなどと、比べるのも無意味だ。抹殺されてしまう事はいえな

い。
助けてもらおう！　そして彼は助けてくれるだろう。メファイストフェレスは深々と敬意を表した。彼女の真っ白でフリルのついたノースリーブの肩口には、展戦輪の御璽が彫り込まれている。彼女自身が願って、ユージーンの使徒となるべく自らに刻み込んだ忠誠の証。彫り物のある女性は日本では白い目で見られるというのに、彼女は電車の中でも誇らしげにさらして、人目も気にせず隠そうともしないままやってきたのだろう。

ユージーンは彼女が今でもユージーンの最高位使徒であろうと、健気に、控えめに主張しているのだなと痛いほどに感じていた。解階の住民である彼女がユージーンに捧げるものは忠誠以外に何もなく、ユージーンから与えられるものは感謝しかなかった。無償で奉仕してくれていた彼女に報いる機会が、ようやく巡ってきたのだろ

うと、ユージーンは彼女の心情を察して余すところなく理解した。解階に、行かなければならない。それは彼女の忠誠に見合う対価となってくれるだろうか。

「ご無事で何よりです…」

「わたしが居ない間、留守を守ってくれてありがとう。そして案ずるな。解階にはすぐに出向く。お前の父親が心配だ」

「あっ！」

彼のマインドギャップの層数は計り知れない。簡単に看破され、彼は解階を訪れることを承諾した。嬉しいと思う前に、メファイトフェレスは寂しかった。彼にとってまだ自分は必要な存在なのだろうか。

「主よ。あなたに何が起こったのですか？」

「何も起こっていないよ。わたしはわたしだ。お前もまた、そうであるようにね」

「ですが……」

「織図様の気配が風岳村から消えた、いらっしやるぞ」

風岳村方面でその存在を主張していた織図の重厚たるアトモスフィアが消失したので、ユージーンは転移した二柱を迎えるために少し開けた場所に出て、メファイトフェレスの話は遮られる。あまり深く訊いてほしくないのだろうか、という彼の心中を察して彼女は口をつぐんだ。藤堂 恒が快晴の空に現れ、バランスを崩して落ちてきた。ユージーンの気配があまりに強大であるために、アトモスフィアが散乱してしまい正確な座標を把握できなかったのだろうかと思われる。ユージーンは追跡転移により現れてバランスをくずした恒を両腕で受け止めて支える。織図は転移後も光学迷彩を用いて人目に触れることのないよう配慮した後、黒い霧のように幻想的で美しい転移を見せてくれた、さすがにベテランの風格がある。

織図はまた白いジャケットとパンツの私服でやってきて、相変わらずのチャラけたいでたちだ。どこぞの黒人DJのようにしか見えない。赤いタイトスカートをはいたメファイストフェレスとペアで、紅白のめでたい色あわせとなった。シンプルなボーダーのTシャツとデニムをはいてやってきた恒は猶もスーツ姿のユージーンにしがみついたまま離れなかった。ようやくの思いで再会できた。もう離れたくない。一方のユージーンは自殺を図り、その現場に居合わせた恒を深く傷つけてしまった事を何と詫びてよいのかわからなかった。

「ユージーンさん」

「ごめんね、恒君」

恒はすっかり回復して恙無い様子のユージーン見て安心した。

恒は彼の出会った三柱の神々のうちユージーンを最も敬愛し、慕っていた。彼は恒が神ではなかった時から恒に目をかけて救ってくれた。母と恒と、そして大切な親友の命を。彼は誠実で恒を欺かない。そんなひたむきな彼の姿勢が、恒の心の拠り所となっていた。帰るべき大きな家、それがユージーンという存在だ。生きて再会できて、溢れ出しそうな感情は何と表現すればよいのかわからない。

「もう、あんな事はやめてください！ ご自分をもっと大切にしてください！ あなたはおひとりですべてを負ってあんな事をなさっても忘れないで下さい、あなたはひとりじゃないんです、一緒に立ち向かいましょう。問題はあなただけのものじゃありません、俺にもその荷を負わせてください」

「ありがとう、君はいつも現実と戦おうとする。すっかり頼もしくなって……。初めて電車で会った時とは別人のように見えるよ」

「よお、今日はご相伴にあずかるぜ」

やはり恒はユージーンの奴を頼りにしているのだな、と遠巻きに見ていた織図は鼻をならして声をかけた。織図が恒を守らなくとも、三階の最強者となったユージーンは恒を守り抜くことだろう。また、彼らは強い信頼関係によって結ばれている。だがこれから世界一過酷な運命にあるといっても過言ではないユージーンに傾倒することが、果たしてよいことなのかわからない。ユージーンの前途には間違っても希望はなさそうだ。彼自身も破滅を望んでいる。恒が彼を師と仰ごうとするのがよいことなのか、織図にはわからなかった。

「織図様、恒君を支えて下さってありがとうございます」

「そうだ、おめーがサボってる間に俺らがどんだけ……ってお前、妙だよな。お前の記憶って荻号さんのバックアップコピーなんだろう？　じゃあお前、ユージーンじゃねーじゃん？　お前誰よ？　もはや誰でもないじゃないか」

「そうですね、わたしは今はユージーンを名乗っていますが既に誰でもない者です。しかしそうであればこそ、わたしにしか出来ない事を二度目の生では完遂しなければならぬと思います」

「ふーん、まあ、お前がいいんならそれでいいんだ」

救世主は二度死ぬものだ。

そして図らずともそうなってしまった彼も、本当は死を心から望んでいた。織図は彼の中にある潜在的なタナトス（死への衝動）を感じ取っていた。しかし不滅の存在である彼には、死という選択肢は用意されていない。行き場を失ったフラストレーションはどこに向かうか……彼の願った安らかな死は、創世者との勝算なき戦いへと昇華されている。空色の瞳には強い意志を感じた。

ユージーンはおもむろに織図に歩み寄り、軽く両手をあげて彼の目の前に翳した。

何がしたいのだろう。

「ん？　なんだ？」

「その瞳。癒して差し上げます。今ならできると思います」

「なんだと……そんな力が?!」

「眼球に触れますよ」

ユージーンは織図の返事を待たないまま、光を映さない織図の真っ黒な双眸に指を入れ、虹彩からアトモスフィアを送り込んだ。ユージーンの両手が優しい光に満たされ、織図の視界に見たこともない光景が広がった。生まれて初めて光を受け入れ活性化された視神経、脳がその不可解な情報を処理しきれない。治療を終えた織図はその場に蹲り、顔を両手で覆って呻き声を上げた。苦痛に襲われているのではない、脳が情報を処理しきれず混乱しているのだ。

「織図、大丈夫なの？」

ユージーンの前だと借りてきた猫のようにおとなしくなるメファイストフェレスも、織図を心配そうに覗き込み、織図の背中を擦る。織図はややあって、心を落ち着かせまばたきをして、目の前にあったメファイストフェレスの顔を唐突に両手で掴んだ。

「お前、結構美女だったんだな」

彼女は頬を赤く染めた。

「何よ、当然じゃない……よかったわね」

「ユージーン、ありがとう。恩に着る」

織図は新たな世界を感じながら立ち上がる。

これまでは視覚に頼らない認識の仕方を心得ていたため盲目でも不自由はなかったが、織図の鍛え上げた認識能力に視覚情報が加われば、鬼に金棒、いや死神に金棒だった。

ユージーンはノーボディから織図の目を癒してやるようにと頼まれていた。荻号にも織図の目を癒してやる事はできた。だがノーボ

デイに近づいた織図が一線を越えて真実を知る事ができないよう、来るべき時がくるまでは、視覚を与えない方がよいと考えたのだそう。そうすることにより、織図は荻号と何百年も懇意にしながら命を奪われる事はなかった。彼は故意に織図の視力を奪っていたのだ。また、ユージーンにはもう一つノーボデイから頼まれていたことがある。恒の持つFC2ーメタフィジカル・キューブが壊れたから、直してユージーンのアトモスフィアで充電してやってほしいと。

「それから、恒君。君の神具は後でちゃんと修理してあげるからね」ユージーンが戻ってきた事で、全ての問題が解決するのではないかとすら思えた。恒は自分に言い聞かせるように胸に手をやった。

”大丈夫だ、俺達にはユージーンさんもいる。INVISIBLEに負けはしない”

絶対に負けはしない。と、恒は口の中で呟くように繰り返した。

＊

「まずはお前の話とやらを恒にしてやったらどうだ？ ん？」

織図は昼間っばらからジョッキでビールを飲みながら、真面目に切り出す。

食事の間、ユージーンは雑談をするばかりで何も重要なことは話そうとしなかった。深刻な話を食事中にすると、料理に手がつけられてなくなってしまうので彼なりの配慮なのだろうなと思いつながら、恒はデザートのみかんジュレをいただいていた。織図はベルトを緩めながら、今日はうまい豪華会席も食べたことだし、ダイエツトは明日からにしようかなと考えたようだ。

織図は視力を得て、円窓から見える中庭の風情ある日本庭園にせ

わしなく目を配った。美しい夏の彩りに見惚れているというのもあるが、彼にとっては全てが新しい世界だ、もし600年以上も盲目で暮らしてきて突然目が見えるようになったら恒は嬉しくて半狂乱になりそうだと思うが、多少キョロキョロするぐらいで平常心を保つ織図はさすがである。

隣を見るとメファイストフェレスがユージーンの一挙一動に目を奪われて、恋する少女のようになっていく。

解階の生命システムは生物階と似て核酸とタンパク質ワールドに支えられているらしく、遺伝子的には全て女性であり同性愛者の彼女らであるとはいえ、特定個体に対する愛情のようなものはあるようだ。解階では婚姻と出産というイベントもある。だがあまりに彼らの寿命が長い為に、同じ相手に添い遂げる事は珍しく離婚や再婚、再々婚は常態化しているのだそう。メファイストフェレスは人に換算すると25歳ほどの年齢で結婚適齢期だと織図から聞いた。

それでいくと未婚の彼女がユージーンに恋をしていても不思議ではないが、残念ながら男性ですらない彼女の主とメファイストフェレスが結ばれる事はいない。このままユージーンにうつつを抜かしているようだ。彼女は婚期を逃してしまうだろうということだ。だがそれでも、彼を慕うメファイストフェレスが彼の側にあり続ける為には、彼にもっとも近い使徒となるしかなかったのである。魔女が神に恋をするなど、聞く分にはロマンチックな話だが当事者たちは辛かろうな、と恒は思った。それほど彼女のユージーンに対する表情は普段と違っていた。千年以上を生きてきた彼女からすれば、ユージーンも織図も子供のようなものだというのに。

「それとも、俺らがいると話し辛いのか」

織図は雑談をしそうになる口にチャックをし、ひとまずユージーンに気をつかった。恒はいよいよ話が聞けるのかと、気持ちを落ち着かせるため緑茶を飲んで静かにユージーンに向き直った。

「いえ、お聞きいただいて結構です。ただし、特殊任務従事者である織図様は監査フリーですが、陽階神であるわたしは生物階降下に伴い法務局からの監査が入っている可能性があります。なので……」

法務局の偵察衛星はとても解像度がよく、何をしているかはもちろん読唇術により会話の内容まで把握する。法務局による偵察衛星での監査は陰階神、陽階神の別なく正規に生物階降下を果たした全ての神々を対象にして、神階へ帰還するまで24時間体制で行われる。特殊業務従事者は監査の対象外ではあるが、ユージーンには油断なく監査が入っていると思つてよい。そんな中で口をぱくぱくやって会話をする、結果的に盗聴器などしかけられていなくとも、その内容は法務局に駄々漏れた。ユージーンはその点をよく心得ていた。

『同期性意思伝播法という方法でお話します。これなら盗聴されていても大丈夫ですからね。話の内容を隠す必要はなくなったのですが、突然話が漏れてしまうと神階は大混乱をきたします。さて、皆さん聞こえますか？』

一同は聞こえると頷いた。この方法は啞者（耳は聞こえるが話せない者）であった荻号から学んだ手技だ。これができるのはユージーン以外には比企しかないということになる。自らのアトモスフィアを相手の脳に伝え、聴覚神経回路に合流させ、あたかも頭の中で聞こえているように錯覚させる。神経回路を同期させる人数が増えれば増えるほど、意思伝播の難易度は上がってゆく。この方法のメリットは会話を盗聴されずに済むということばかりではなく、真空中においてもコミュニケーションを取る事ができるという点だ。ユージーンは初めてだが、3名とも聞こえている。

『念のため、これからの会話は必要以上に繰り返したりしないで下さい。恒君。では本題を話すよ。君は先日、妙なメールを受け取ら

なかったかい？」

恒が織図とともに開封したメールだ。彼がどうして知っているのだろう。

どこかで見ていたとでもいうのだろうか？ 恒はそう思った一方、織図は警戒した。法務局の偵察衛星は神籍のない恒と、特殊任務従事者である織図を監査している筈もない。ユージーンが知りえる情報ではなかったからだ。

「あ、え？ はい。でもどうしてご存知なんですか？」

『メールの送信者が、教えてくれたからね。最後の一通は、雰囲気違っただろう？』

ユージーンは彼を荻号とは呼ばなかった。故意にだということがわかった。彼が荻号に対して払ってきた敬意を、あまり気にしていないか忘れてるように思えたからだ。彼は荻号の謎に近づいて荻号と通じ、そして荻号の失踪の原因も知っているのだろう。

「はい、違いました。最初のメールってのは、荻号さんのものですよね」

『彼は、荻号様と同一視される事を嫌がっていなかった？』

恒は姿の见えない荻号を捜して名前を連呼して、荻号と呼ぶなど怒られた。

だが状況から推察するに彼は荻号でしかありえないと思うのだが……。最初のメールと、最後のメールは明らかに雰囲気が違う。だが、最初のメールの信頼性も、敵の侵入を許した今となっては限りなく低いといえよう。ユージーンの弟子になれと教唆した最初のメールが荻号からのものだったのか、それすらも今となっては判別できない。何を信じればいいのか、恒は見失っていた。そんな時に夢枕に立った金色のメタファーを持つ人物……。

「ええ、名前を呼ばないでくれと」

『そう。彼は名前を呼ばれると力を失う。彼はわたしたちに味方を
して下さる”名も姿もなき者”（アルティメイト・オブ・ノーボデ
イ）だ。そして最後にきたメールの送信者こそが、わたしたちが戦
うべきものだ』

「それは、INVISIBLEなんですよね」

恒は一つずつ確認してゆきたかった。

自分がどこまで分かっている、何を知らないのか。何が間違っ
ているのか。そして彼は丁寧の一つ一つの疑問を解消してくれそう
だ。

『違うんだよ。何を言っているのかわからないと思うけれど』

「INVISIBLEが敵なんじゃないんですか!？」

監査を恐れて織図がぐさぐさ恒の口をふさいだ。そして織図は
やはり、というように確信を持って小さく頷いた。

「俺は薄々感づいていた。INVISIBLEとは異なる何か
が、INVISIBLEの威を借りて水面下で動いているんだ。荻号
さんはINVISIBLEに目を向けてはいなかったから、明後日
の方を向いて戦っているように見えた。表面上ではINVISI
BLEを見据えているように見えながらその実、そうではなかつた。
その謎に近づいた者は殺される。そうだなユージー、俺はまだ死
なないのが不思議だが」

黙って聞いていた織図が口を差し挟んだ。

メファリストフレスのもとより、そのメールを見ていないので
要領がわからないらしく会話に入ってこなかったが、織図は口にす
るだけで命を奪われるという神階の三大タブーを敢えて口にして確
認した。織図は本来ならその瞬間に命を断たれるはずだった。だが

そうはならなかった……ジーザスの時とは何かが違う、それは何故だ……？

恒は生きた心地がなかった、織図は何故そんなに迂闊に、生死を別つ問題を口にしようとしたのだろう。

死神であり死を知り尽くした織図とはいえ、創世者によって与えられる死を回避する術はない。恒は直前に失言をした自分の事も棚に上げ、隣にいた織図の腕を掴んでふるふると首を振った。慎重に、慎重になった方がいい。どこまで知れば命を落とすのか、彼は自らの命を弄んで実験をしているかのように思えたからだ。いたずらにチキンレースをしてよい場面ではない。

『はい。それは名も姿もなきお方が本来のお力を取り戻しつつあるからです、昨日の午後4時過ぎをもって神階と生物階の支配権を取り戻されました。この場所も彼の絶対的庇護下にあります』

「じゃあ謎に近づいても、殺される事はないのか」

ノーボディはもう誰も失わないために荻号という肉体を捨て、名もなき者へと昇華された。荻号という肉体に宿っていた際にはあれこれと能力に制限が生じていたが、名も姿も捨てたことにより先日午後4時すぎをもって、侵略され食い物にされていた生物階と神階の主権を取り戻したのである。最後のメールが届いた直後のことだった。敵は最後の足掻きとして、恒にメールを寄越して生物階から手を引いた。

『そうです。しかし解階はもともと彼のものではないのです。だからメファリストフェレス、お前はこの真実を知ったままINVISIBLE収束までの3年以内に解階に戻れば殺される。解階に戻る予定があるのなら少しでいいから席を外してくれ』

ユージーンは父親を人質にとられたメファリストフェレスを案じ

て、そう言う。だがメファイストフェレスはこの話をどうしても聴いておかなければ後悔すると思った。そして父は大丈夫だ、ユーージンに全てを任せようと決めた。

「ひとつお約束を。主が解階にお戻りになり、父を助けていただけますか」

『ああ、それは約束する』

「では解階には戻りません」

ユーージンは彼女の決断を尊重し了解した。恒はひよつとすると敵がメファイストフェレスの父親の命を狙ってくるかもしれないと思ったのだが、ユーージンを信じた彼女の決意は固いようだ。それでいいのだろうか？ 三年間の間に何があるとも知れない、ひよつとすると止むを得ず戻らなければならない事だってあるのかもしれないというのに、決断が早すぎるのではないか、と恒は思うのだが。『不死であるわたしは約束どおり解階に参りますが、恒君と織図様は解階を訪れる事もないでしょう。わたしが知り得た全ての謎を明かします。そして恒君、君を呼んだのは他でもない。全ての事実を知り、よく考えて、君の力を貸してほしいんだ』

もちろんだ、恒も力を貸すつもりだ。

だがINVISIBLEに挑む神々の一助になればよいとは思えど、あくまでも全体の中のひと柱として微力ながらに恒にできる事を協力する程度だと思っていた。例えば原発を誘致するよう空山を紹介して働きかけるといった類の、そのようなこと。それが、隣にいる織図ではなく恒ひとりに呼びかけているように思えて困惑した。

恒ひとりに出来るような重大な事があるのだろうか。

『この宇宙はINVISIBLEが創世した、膨張し続ける宇宙です。そして、周囲の宇宙を飲み込み続けるほど膨大なエネルギーを持っています。しかしINVISIBLEはただ膨張し他の空間を鈍食するだけで赤子のように無垢な、確固たる意思なき創世者です。

それは膨張し鈍食する過程で、無数の宇宙を飲み込みました。飲み込まれた無数の宇宙の創世者達はその力をINVISIBLEに奪われINVISIBLEの支配する一つの宇宙に統合されてゆきました。しかし、偶然にもINVISIBLEに消化されず、INVISIBLEの支配する宇宙の中でさらに一つの宇宙を創り出した創世者がいました。恒君に最初にメールを下さったお方です。彼、……とはいえそれは例えばプログラムのようなもので非常に無機的な存在なのですが、彼は他の創世者と異なり優れた知性と慈悲を持っている、もの思う創世者です。彼は神々を創り出し穏やかな時間の中で、不変の神々の営みを見守っていました』

それはアルティメイト・オブ・ノーボディにとって、あたかも人々がアクアリウムを作って観賞魚を飼育し、愛着を持ちあれこれと世話を焼くようなもの。INVISIBLEに飲み込まれ本来の力を発揮できず、暇を持て余し思索にも飽きた彼のささやかな趣味として始められたのかもしれない。神という不変の生命を生み出し繁殖をさせ、子々孫々の繁栄を優しく見守っていた。宇宙の化身である彼の体内にささやかな愉しみとして作られた命あふれる小さな箱庭、そこに住まう神々の生活は、彼の目にいみじく映ったことだろう。

『彼は大変な愛情をもって神々と神々の住まう世界を慈しんでいました。古の神々は男女の別があり生殖能力を持ち、恒常的環境で社会生活を営んでいました。しかしその箱庭を見ていた、またひとつのもの思う創世者がいました。それがブラインド・ウォッチメイカーと便宜的に名づけられた創世者です。彼は変化なく続く平和な営みを見守るだけでは満足できませんでした』

アルティメイト・オブ・ノーボディの創り出した箱庭を観察し続けていた別の創世者がいた。これが全ての悲劇の幕開けだった。

仲居さんがお茶のおかわりを持ってきたが、深刻な話をしている空気を讀んで、急須だけ置いて襖を閉めて出て行った。恒はまるでSF小説やファンタジーのそれを讀み聞かされているように、とても現実とは信じられない真実を、どう受け止めてよいのかわからなかった。創世者に感情があるなど……理解ができない。

恐らくそれは偶然に作り出されたシステムであり、ノーボディという創世者はそのシステムを箱庭の生命たちに押し売りをしただけなのだろう。愛、慈悲、仁義、それらはノーボディが美德として彼の作品に刷り込んだシステムに他ならないのかもしれない。だからまず感情ありきのシステムだったのだ。感情が高度な知性によって獲得された霊長類の個性などでは、断じてないということだろう。が神という生物に求めたシステムは、意識すると感情による安定化システム(Stabilization by Emotion System)といったものだ。これが彼の創造した生物達には刷り込まれていた。

「まさか横取りされてしまった、とかですか？」

『いや、横取りならまだよかったんだ。ブラインド・ウォッチメイカーはノーボディの手法を真似て、INVISIBLEの支配する宇宙の中に入れ子構造の小宇宙を創り出しました。しかし、ノーボディのように無から生命を生み出すことが、どうしてもできなかったのです。そこで絶えず変化し続ける環境の中に無機的な元素を種子として撒き、環境を変化させ続ける事で化合物は有機化合物となり、高分子を創り、核酸が生まれ、タンパク質を創り……ブラインド・ウォッチメイカーの導くままに生命は進化を遂げました。そして最終的に神に似た生物が文明を作り上げ、高度な科学力で環境を克服しそれ以上進化が進まなくなった時、ブラインド・ウォッチメイカーはせっかく創り上げた宇宙を破壊し、また初めから歴史を繰り返しはじめたのです。これが解階のはじまりでした。ブラインド・

ウォッチメイカーは生命が進化し続ける事を旨とし、長い長い年月をかけ破壊と創世を幾度となく繰り返してきました』

メファイストフェレスは、ブラインド・ウォッチメイカーに弄ばれていた解階の住民のひとりだったということになる。解階は確かに殺伐として、進化速度が三階のうちもっとも速く荒廃しきっている。絶えず変化する環境、絶えず進化する生命。それらはINVI SIBLE殲滅のために必要なことだと思っていた。だがその営みさえ、何の意義も目的もなかったのだとしたら……。メファイストフェレスは進化し生物としての強靱さを獲得し続けることを、よいことだと思っていた。だが解階で思想の主流となっているその価値観でさえ、ブラインド・ウォッチメイカーによって巧みに刷り込まれた、進化システム(Evolution System)のもたらしたものだとしたら……。

『何の目的があつてか、もしくは戯れにか……。生ある者が命をもてあそばれる荒廃した宇宙を前に……。ノーボディは嘆きました。生命は創世者の玩具ではないのだと。ノーボディは生物を物質とは区別し、命として見なし尊重していました。しかしブラインド・ウォッチメイカーにとっては観察対象であり、手頃な玩具、暇つぶしの対象でしかありませんでした。ノーボディはブラインド・ウォッチメイカーの大破壊の後、再生されたばかりの解階を侵し、その一部を分割して支配下に置きました。それが現在の生物階の始まりです。彼は生物階に穏やかな環境の変化をもたらし、ゆりかごのように緩やかな進化を与え、神階と同じようにわけへだてなく愛し見守ったのです。神々も生物階の生命たちが健やかに育つよう観察をはじめ、まるで兄姉が弟妹の面倒を見るように、あれこれと世話をやきはじめました。しかしブラインド・ウォッチメイカーは解階の一部を奪われた報復として、神階を滅ぼし神々の大虐殺を行いました。こうして性別を持つ殆どの神は絶滅し、住むべき楽園を失った神々を守

るためノーボディは一介の神に身をやつして宇宙に要塞を建設し、要塞の中に新たなる神階を創りあげたのです。その神が誰なのか、もうお分かりのはずです』

三階のうち神階だけが異質だった理由だ。

神々の楽園、神の住む星は存在した。そして言うまでもなく、彼とは荻号のことだと誰もがわかった。いや、何も荻号である必要はない。ノーボディは適宜姿を変えながら、延々と神々と生物階を守ってきたということだろう。

『三階は創世者たちの抗争に飲み込まれてきました。不滅の創世者達が互いを滅ぼすには、宿主であるINVISIBLEの強大な力を手にし、相手の創世者を体内で消化する事だと気付きました。何の気まぐれか、INVISIBLEの力は折りにふれ特定の神のうちに収束します。世界に絶対不及者が現れる時、互いの創世者たちはINVISIBLEの力を乗っ取り、INVISIBLEそのものとなるために壮絶な綱引きを行います。……これが真実なんです』

恒はユージーンの作り話であってほしいと願いたかった。

では何だったのだ？ 人類の歴史、神々の歴史は……。世界中で科学に携わる科学者は、一体何を見てきたというのか？

ノーボディが気まぐれに創りだした箱庭の中に敷かれたルール、箱庭を維持するためのプログラムを、真理だと考え日夜研究し続けてきたというのか。そこに真実があるのだと思っていた。だがこの世界そのものが、偽りと故意に満ちている。ノーボディに庇護され慈しまれる生命……。それは、何のために？

一緒ではないのか、と恒は思った。

小さな子供が寂しさを紛らわせるため、お気に入りの人形を抱えて離さないのと同じレベルなのではないか。ただそのスケールがあ

まりにも大きいだけだ。恒と神々がこれから全てをかけて敵と対峙し、挑み、取り戻すものは、ノーボディの自己満足、たったそれだけのものではないのか？　こうやって考え、ものを思い、苦悩し、悦ぶこの感情は、押し付けられたものでしかなかったのか……。しかし、恒はわかっていた。しかしそれでも、取り戻さなくてはならないのだと。

『解階はブラインド・ウォッチメイカーによりもうすぐリセットがかけられます。そしてかつて解階の一部であった生物階のリセットをも望んでいるでしょう。どちらに味方をすべきなのか、言うまでもない事です。そしてわたしは三年後、最大の創世者INVISIBBLEの器、絶対不及者としてマインドレス・オートメーション（無慈悲な装置）となります。恒君、そこでわたしを助けてほしい。わたしと彼は共にINVISIBBLEとなる、そのために本来のINVISIBBLEの力を押さえつけてほしい。君は特殊な能力とアトモスフィアを持って生まれてきた絶対不及者に対する抗体だ。君のアトモスフィアは絶対不及者をへべれけにして弱体化させる。絶対不及者は存在者であり、肉体に収束している限りINVISIBBLEといえど全能ではないからね。酩酊としているその隙に、わたしたちはINVISIBBLEと一体化し力を掌握する。ただし』

彼はそこで一度話を区切った。

『君の能力は、君の死後に発揮されるんだ。君のアトモスフィアは死と同時に、力尽きながら急速に構造が変化する』

恒は死んではじめて機能をする抗体として、遺伝子工学とバイオテクノロジーをもとに実の父親に生み出された。極陽ははなから彼の作品であり模造生命である恒を生命だなどと、ましてや息子だなどとは思ってもいない。ユージーンを予め恒の住む村に派遣したのは抗一絶対不及者抗体である恒に、ちょうどワクチンを接種して免

疫効果を高めるように、抗原であるユージーンと接触させ予備免疫を作らせるためでしかなかった。

あくまでも駒としての働きを期待してのことで、恒がどのように生まれ苦悩し、成長してゆこうともそれは全く興味をひかれるものでも何でもなかった。彼が恒に課した負担は全て恒の死後、彼のアトモスフィアに強い抗体効果を発揮させるためだ。極陽は永続的に絶対不及者を拘束し続けるため、恒のような使い捨ての生きた抗体を定期的に量産する予定だったのだ。

人の母胎を褥とし、生まれた赤子をA D A Mに監禁して精神力を鍛え上げる。

監禁に堪え生き残った子供を絶対不及者の抗体にする、生命工学でいうところのセレクションを経て、絶対不及者の器に接触させ抗体とするため育てる。

それは神階と生物階を救うために講じられた、主神としての対I N V I S I B L E対策だった……。

自分の子供は自分のモノでありその意思など関係もない駒だという冷徹な、全体のためのわずかな犠牲はやむを得ないという考え方は、ユージーンもノーボディも受け入れられない。だが極陽の選んだ手段はより確実に生命を守るための方法だといえる。人間が動物実験をして命を奪う事は日常化している、それを気にやまないのと同じだ。

……正しい事など、ないのだ。

「……俺は、死ななければならぬですか」

恒はまるで他人事のようにユージョンに尋ねた。

彼から死ねと言う言葉を与えられるのか、客観的な立場から受け止めようとしたのである。

『君が死ぬという選択肢もあるし、もともとそうなる予定だった。ただしそれは以前の君だったら、の話だ。君はほんの短期間に神として、人として目覚ましく成長している。強い精神力を持ち、アトモスフィアを自分自身で構造変化させる事ができれば死ぬ必要はないが、人間でもある君がアトモスフィアを一分子に至るまで制御するのは至難のわざだ。だが君は3年後、生きて抗体としての役目を負ってほしい。君は必ず生還するんだ』

気休めではないと、彼の瞳がそう言っていた。

だからこそユージョンはその日その瞬間に備えるための時間を、一日でも長く用意してやりたかった。恒を早急に呼び出さなければならなかった理由はそのためだ。……恒は全力で備えれば助かる、でも、彼は？ 恒は今にも泣き出しそうになった。

「でも、あなたは」

『わたしは消滅する。でもそれは終わりではなく、始まりだ。名もなき創世者として命の営みを永遠に守り続ける、それでいいんだ』
「あなたを滅ぼす事が、俺の役目……」

恒はうわごとのように呟く。嫌だ、信じたくない！ 誰がその役目に当たっても神々は受容し、成し遂げようとするのかもしれない。しかし恒は！ どうしてよりによってこのふたりが選ばれてしまったのだらうと、呪わずにはいられなかった。彼はよき教師であり、恒の憧れであり、目標とすべき神だった。

『君とわたしの役目は違う。しかし守るべきものは同じだ。わたしたちは犠牲になんてなるつもりはない、誰かを守る為に生まれてきた。そうだろう？』

「俺を……俺をつ！ あなたの弟子にしてください！」

恒はわけもわからず、気付けばそう叫んでいた。

焦り、不安、怒り、失望それらの感情がごたまぜになって、恒の中に押し寄せる。弟子にしてもらうことなど、本当はどうでもよかった。ただ彼と離れたくないという気持ちが抑えられなかった。

恒は、こんなの、あんまりだと泣きじゃくった。

彼が電車に乗ってやってきた日から、三年後のその日まで避けられない一方通行のベクトルが、今も進み続けている。

どんなに泣いても怒りをぶつけても、後戻りはできないのだ。彼を滅ぼすために、恒は彼に学ぶ。

『よろこんで。……ねえ、泣かないで恒君。まだ時間はあるんだから。戒厳令は9月には解かれるだろう、そうすればまた教師として教壇に立てるし、その時までわたしたちは一緒だ。出来る限りのことをして備えよう』

織図もメファイストフェレスも、かけるべき言葉が見つからなかった。彼は恒に滅ぼされる為に、恒の師となることを引き受けた。彼は恒に確実に引導を渡してもらうため、三年後に向けて恒を鍛え備えさせる事になる。ユージーンを刺し貫くために恒という鋭利な刃を、彼自身の手で育てて研ぎすますのだ……。

終末を覚悟した者は、精神科医エリザベス・キューブラー・ロスのいうところの、否認、怒り、取引、抑鬱、受容の感情的段階を辿

るという。

自分が感情を失い絶対不及者になる筈がない、嘘ではないのかという”拒絶”、何故自分が選ばれてしまったのかという”怒り”、何とか絶対不及者にならずに済む方法はないかと考える”交渉”、無気力になり何も考えられなくなる”抑鬱”、絶対不及者となる事を受け入れる”受容”、それらの感情的段階を経て最後の境地にユージーンはいるのかもしれないと思った。

満足のゆく最期を迎えるため、彼は全身全霊で成し遂げようとしていた。

そこには消滅する自己と引き換えに救われる命があったからだ。

第1節 第40話 神皇と魔皇のプロレス対決

メファイストフェレスはユージーンと恒の使命を知り、頭が真っ白になった。

しかし彼らが彼等の役目を果たさなければ確実に三階は消滅する。仮にブラインド・ウォッチメイカーがノーボディに勝ち、なおかつINVISIBLEに成り代わるという目論見が失敗した場合でも、神々と違って宇宙空間で生存する事もできず何ら戦うべき力を持たない生物階はINVISIBLEによって滅ぼされる。ユージーンは破滅を望んでも、希望のある一つのセオリーを成し遂げようとしている。彼は一度死んで、彼がユージーンであるという過去を棄てたのだ。これからの三年間は、彼が名もなき創世者へと自身を高め、昇華してゆく過程に過ぎない。彼を失いたくない、共にいたいと思えど、彼の望むままに動くことが、彼に真に忠義を尽くし報いるだろう。

死んでくれるな、などとは言えなかった。

そして彼女が心の内に秘めた、彼への思いも……。

「お前らのすべき事はよくわかった。俺らは首刈峠にお前達の檜舞台を用意すればいいのか？　だとしたらある程度は人間の協力を得ねばなるまい。それに人間をどっかに避難させなくていいのか？」

恒もメファイストフェレスも何もいえなくなってしまった中、織図はやっと沈痛な空気を破って話を進めた。

こうやってうだうだしていても、ユージーンや恒が救われるわけではない。三年後、それが何月なのかもわからないが、残された時間は有意義に使わなければならない。ユージーンは織図の配慮が嬉しかった。

『そうですね、前は神階での収束でしたので生物階は関係ありませんでしたが、今回は生物階の人々の協力が必要です。生物階に神の存在を明かす事となるでしょう。確かにイスラム教、ユダヤ教、仏教の宗主は崩御されていますし、世界的に高名なジーザス様も崩御されましたが、陽階にはまだヒンドウ教のヴィシュヌ様、道教の太上老君様、ゾロアスター教のアフラ・マズダー様ら、世界的大宗教の祭神がご存命です。宗教的な混乱はその方々を中心に解消しつつ、生物階の保護段階に入らなければなりません』

そしてそれは、極陽ではなく次期極陽となる比企の役目だ。

比企はかつて前任であり立法を司った日本由来の神道の神、天照大神の後任者ではあるが一度も生物階に姿を顕したこともなく知名度のない異端の神である。陽階神は多くの場合、生物階に降下して姿を顕した際に一つの宗教の宗主となる事が多いのだが……不空絹索観音としての異名を持つリジー||ノーチェスや各祭神の知名度を借りたとしても知名度のない比企は苦勞するだろう。だが、固有の宗教の神を名乗らない方が、かえって混乱がないのかもしれない。あらゆる宗教の祭神達の更に上に立つ存在だと名乗った方が、く教の祭神だと名乗るより効果的だったりする。生物階不可侵の政策をとってきたヴィブレ||スミスが現主神として即位して後に位神となったユージー||ンも、知名度がないのは同じだ。風岳村の神としての知名度がある程度だ。

「て事はだ、神は人と共存してゆくのか」

『神だけではなく解階の住民もです。わたしたちはINVISIBLEとなる事ができたら、三階を統合し、ひとつの宇宙にします。三階を独立に運営してゆくことは難しいと、ノーボディは仰っていました。ですから住む星が違ふ一つ屋根の下の生命ということになります。この計画もうまくいけばの話でしかありませんが……その為に比企殿が主神とされる必要がありますし』

「!! 今度の位申戦で、父が負けるとい事ですか？」

ユージーンは恒が父親に対して擁く感情に、憎しみ以外の何もないと知っていた。そんな親でも実の親なのだ。子供は親を選べない、誰も親の代わりはできない。だからこそいくら憎んでいても簡単に決別できるものではないと知っていた。

『もともと、比企殿は主神の格を持っておいでなんだ。……まともな試合となった場合、90%以上の確率で極陽は敗れるだろう』

「敗れた極位はどうなるんですか？」

恒は極悪非道な父親が荻号の唯一の弟子であった比企に敗れたとて、何も同情するものではないと思ったが、やはりあとあとのこと
が気になる。敗れた極位はまさか殺されたりはしないだろうか。先代極陽であったジーザスは讓位をしたのであり、正確には位申戦で負けたのではない。本気でやりあって負けた極位はどうなるのだろう。

『比企殿が極陽となり、二位に繰り下がるだけだよ』

「現代極陽ならまだしも、陰階での比企の支持率はヒデエもんだからなあ……陰階神が黙って話を飲むかどうか……」

100歳以上も年上の比企を呼び捨てにする織図は、生粋の陰階神であった比企がどれだけ陰階で裏切り者として評価を落としているかを知っていた。元陰階神が極陽になるとは、裏切りも甚だしい、陰階は決して彼の即位を快く思わないだろう。

『そうなった場合はわたしが極陰に話をつけます。それでもうまくいかなかった場合、わたしが至極位しきよくゐとして即位せざるをえません』

「至極位？」

「至極位？」

聞いた事もない言葉に、恒とメファイストフェレスが同時に尋ね返した。メファイストフェレスが知らないのは当然だが、恒は神々

の社会についてそれなりに勉強したつもりでいた。それでも、至極位という位階があったなどという記述は一回も目にしたことがない。口を開けたままのふたりに織図が説明する。

「極位の更に上の位階だ。これは常に空位としておくのが慣例なんだが、必要に応じて適用される神階の統治者としての位階でね。だが至極位として即位できるのは、極陽と極陰を實力で負かす事のでき、神体測定でカウンターストップを出す超越的な實力を持つ神のみだ。以前なら荻号さん、今ならたしかにユージーンが該当する。至極位は支持率に左右されず、議会をも超越する唯一の位階なんだ。極陰も極陽も、全ての陰階神、陽階神も至極位の勅令にはNOと言えない。それだけ絶対的な権限を持つのだ……だが俺としては、話がこじれないようにうまくやって欲しいところだな。お前が至極位になって権限を振るったとして、力による暴力では平和的ではないし神々にも使徒にも不満がくすぶる。暴力支配により生物階を動かそうとしたところで、上手くいくもんもいなくなるだろう」

織図の説明に、ユージーンはそこまで手の届かない存在になってしまったのか、と恒は寂しくなった。

彼はもう愛すべき山村の教師、社務所の神様ではいられないのだろうか。恒の表情がにわかに曇ったのを見て、恒の心情を察したユージーンは慌てて否定した。自分の覚悟ができているからといって、この子の気持ちを無視してはいけない。

『あくまでも最終手段です。そうならないよう比企殿にお任せします』

仲居さんが伝票を持ってきたので、ユージーンが受け取って一万円札を何枚か挟んで渡した。もう次の客の予約があるから、出て欲しいのだという。何時間も粘ってしまったのでさすがに出ないとまづい。場所を変えるか、今日はこれでお開きだ。

お会計はメファイストフェレスが払う予定だったのだが、彼らをわざわざ呼び出したユージーンは払わせなかった。

「ユージーンさん、ごちそうさまです」

「ごちそうさん、悪かったな」

「こんな所に呼び出したのはわたしですから」

「仕方ねーだろ。エリア8936（風岳村）には入れないんだから。気にすんなよ」

「エリア8936……ところで主は、正規の手続きで生物階に降下なされたのですか？」

座敷を出て、ハイヒールを履きながら、メファイストフェレスが眉をしかめて尋ねた。おかしい、どこか引つかかる。ユージーンはお釣りを仲居さんから受け取って、織図の持っている財布とは対照的な薄い皮の財布にしまいながら答えた。

「そうだよ、正規の手続きだ」

「以前主が風岳村にいらした時には戒厳令が布かれていましたよね？ その処罰はなかったのですか？」

「？ なかったよ？」

メファイストフェレスはいよいよ妙だと思った。生物階降下は神階の門を使用するため、定員がある筈で法務局を介して許可をとらなければならぬ。だとしたら前回、彼が自殺を図った際に彼の行動は全て法務局の監視下にあったといっても過言ではない。お咎めはなかったのか？ お咎めがなかったから生物階降下が許されたのだろうか、だとしたら……見逃しか、あるいは。

「法務局が偵察衛星を使って監視をしているのなら、見落としなどということはありません。エリア8936の範囲って、どこまでなんです？ 必ずしも風岳村全体を指すのでは、ないのではないですか」

「あっ！！」

「マジで！」

「やった！」

ユージーン、織図、恒、三者三様のリアクションが返ってきた。ということは、ユージーンが死に際に訪れた場所、上島医院、小学校、そして社務所はエリア8936ではないということになる。

これら三つの建物は、風岳村の中でもはずれの方に位置する。恐らく首刈峠を基点として禁じられたエリア8936に、それらはギリギリ入っていないのだろう。

風岳村に入れるのだ！

エリア8936の正確な範囲は、G L ーネットワークのメンバーズログインをすれば簡単に調べられる。メファイストフェレスは機密部までアクセスできなかったので、風岳村≠エリア8936だと気付かなかった。メファイストフェレスはくすり、と微笑んだ。やはり間が抜けているところは、昔から少しも変わっていない。

ユージーンは恥ずかしそうに頬を赤らめ、金髪の頭をかいた。

「では、わたしは今から解階に行ってくる。次は風岳村で会おう。携帯も以前の番号で使えるようになったから、用があったら連絡して」

「ユージーンさん……気を付けて」

「主よ、よろしくお願いいたします。解階の門を使う場合には……」
「解階の門の許可は必要ないよ、ここからアルシエルの追跡転移ができるからね。では、行っていく……と、そうだ。神具を修理してあげる約束だったね」

ユージーンは思い出したらしく、恒は喜んで神具を彼に渡した。ものの5分ほどで分解し修理をして再度組み立てる。神具の作者でもないのに、どこが故障しているのか的確に判断し特別な道具もな

しに修理を完了させた。神具を修理するには神具鍛冶の専門職に出して、最低でも数日はかかると思っていた織図は驚く。

「それから、充電だったね」

ユージーンは一同から少し離れると、FC2—メタフィジカル・キューブを両手でしっかりと握って彼のアトモスフィアを詰め込んだ。神具が電力を得てカタカタと共鳴をはじめた。アトモスフィアの適合が違いため彼の手はわずかに焼けどを負ったようだが、あまり重症ではなさそうだ。恒がハンカチを貸すと、大丈夫、いらないと云って微笑む。

頼もしいな、と恒は思う。彼と一緒にいたら、何とかかなりそうな気がする。その道は彼にとって、決して希望へとは続いていないにしても。

「ありがとうございます。風岳村に研究員が入って、朱音の事つけまわして監視しているんです。どうしましょう」

「そうか……。解階から戻ったら対処しよう、今は放っておいていい、監視をしているだけなんだろう？」

どちらにしても、生物階に神の存在を明かさなくてはならなくなる。

となると、徐々に科学者サイドから神の存在を明かしてもよいのかもしれない。だが、一つ気になることといえば、まだヴィブレⅡスミスの生物階不可侵の政策が生きている。むやみやたらに神の存在を明かすと罪だ。比企が極陽となってから動いた方がいいのか……。それを待っている時間はないのか……。

「お前も急がしいようだったら俺が話をつけに行くぞ。神の存在を明かしていいんだな？」

織図が申告した。典型的な神である織図が出て行けば、確かに研究者達は信じるだろう。ユージーンは少し考えて、ではお願いしますと織図に一任した。もしも混乱して話にならないようだったら恒が直った神具でマインドコントロールを使えばいいとのことだ。ユージーンはこの足で解階に行くと言って、超空間追跡転移で解階に飛んだ。メファイストフェレスも織図も、アルシエルの気配を探知などできないというのに、彼はアルシエルの気配を感じていたようだ。

残されたいつもの三人組は料亭を出て、街中をぶらぶらとしていた。

メファイストフェレスはせっかく街に出てきたのだから、買い物をして帰りたいそうだ。またどこで売っていたのかもわからないような奇抜なゴシック調のドレスを買ってくるつもりなのだろう。それと、食材だ。彼女は皐月と一緒に、まめに料理を作る。魔女の作るものだからどんなものかと思えば、料理の名前はよくわからないものの、これが意外といける。蝙蝠のスープやトカゲのから揚げみたいなグロテスクなものではない。恒と織図は特に用事もなかったので、さっさと帰る事にした。

「さ、じゃあ帰るか」

「では俺から瞬間移動をしますね、織図さんは後から追跡してきて下さい」

「ちよっと待て！ お前の気配は弱すぎて遠いとよくわからん」

「ひとりで電車で帰れば？」

織図は目が見えるようになって場所を記憶しての瞬間移動ができるようになったが、風岳村の風景は目が見えていない頃の風景しか思い出せない。一度回復した自分の目で風景を見なければ、瞬間移動はできないのだ。いっぱしの神ならば、瞬間移動の時に手を繋ぐなりして触れた対象を連れてゆく事ができるが、恒は自分より大きな織図を転移に巻き込むだけのパワーもない。別れ際にメファイス

トフェレスの残した言葉で、織図はそうするしかなかった。

「おいおい、電車かよ！ 死神が電車って！ これどうよ。ダサイ事この上ないな。せめてタクって帰ろうぜ。その大型で！」

「タクシー！？ しかも大型を選ばないで下さいよ！ 勿体無いですよ！ せめて小型でしょー！ 風岳村って田舎だからここから相当遠いですよ、1万は超えます。一緒に電車で帰りましょう。俺も付き合って電車で帰りますから」

織図は死神のくせにかなりの金を持っている。どのくらい持っているかというと、人間が一生では使いきれないほどだという。神は現金で給料の支払いなどないのだが、織図も極陽と同じようにどこぞの証券会社で株を転がしたり、何の特許かは知らないが特許料でガッポリ稼いでいるようだ。それらの大半は娯楽費に消えてゆくのだが、彼の浪費癖は、こんなところでも現れる。志帆梨に食費といって100万単位でぽーんと出してくれるのもそのためだ。

一方のユージーンは小学校教師としての給料分ぐらいしか持っていない。社務所暮らしでアパートも借りられないぐらいの貧乏さんだというのだから、神の中にも経済的格差があるのかもしれない。

「何で俺が、お前ごときにだ！ ”付き合って”一緒に帰っていただかなくちゃなんねんだよ！」

「初めて見る電車の風景も、なかなかいいものだと思いますよ」

「どうだかな」

悪態をつきながらも、織図は恒にタクシー乗り場ではなく駅方面に連れて行かれた。

街ゆく人々は、黒人と日本人少年のめずらしいコンビがふざけあっている様子をほほえましく見守っていた。少年が外国人に誘拐をされているのではないかと思っただけで疑っていた巡回中のお巡りさんも、ふたりが仲がよさそうなのでまた交番の中に引っ込んでいった。

恒は織図がわざとふざけて、恒の陰鬱な気分を吹き飛ばしてくれ

ようとしているのがわかって、彼の思いやりに感謝した。

＊

「いいから落ち着け」

「これが落ち着かずにはいられますか」

早瀬は席を外し、井村と空山の行動の一部始終を聞いて混乱していた。

父親が亡くなって忌引をしている筈の井村が、どことは言えないそうだが国内のホテルから早瀬に電話をかけてきた。空山とともに、主と疑われる藤堂 恒と接触したのだという。彼女は接触して話をしただけで藤堂に洗脳されてしまったのだそうだ。主は人の心を巧妙に操り、洗脳をする能力がある。しかも彼は子供ながらにかなり切れる、更に風岳村にいる主は藤堂 恒ひとりではないのだ、と。

井村の勝手な行動を咎める前に、早瀬は主に会ってみたいと思ったが、会ったなり洗脳をされるのではなかったものではない。

井村が警告をしたので助かった。早瀬は安全の為に井村に滞在所を転々と変えるようにと指示した。そして、もし風岳村にいる研究員達に主の毒手が伸びて全員洗脳されてしまったなら、その時に本部に全てを連絡するのは井村の役割だと言い聞かせた。そしてその移動費や宿泊費を工面するために、研究所の機密口座から研究費という名目で使っても構わないという経済的バックアップをする事も忘れなかった。

「主任、気をつけてください。彼等はかなり手ごわいです」

とすると、何だ。こうやって石沢朱音のモニターをし続けている空山 葉子も、主の手下と成り下がってしまったのだろうか。空山は何を目論んでいるのだろう、主からスパイとして送り込まれたのだとしたら……。朱音は丁度、バレエ教室に出かけていった。バレ

エ教室内までは監視カメラを回せないで、朱音の監視チームはしばし休憩となり、空山が欠伸をしながら旅館の自販機にいつものイチゴミルク飲料を買いに出かけていった。

こちらの動きは、空山に監視される。

下手に動けない。空山を研究員から外す必要があるのではないか、そうせざるをえない。だが空山を外したら主がこちらの動きに気付く。この場所は主に知れているのだから、攻め込んできて全員マインドコントロールをかけてしまうことなど造作もない。早瀬らは空山を介して監視されている。裏を読めば読むほど、身動きが取れなくなる。早瀬は相手の恐ろしさが身にしみてガタガタと歯の音が合わなかった。

一人ずつだ、慌てず一人ずつにしようと早瀬は思った。焦りは禁物だ。

空山が主の手に落ちたと、研究員一人ずつを呼び出してこの話を少しずつじわじわと浸透させる。そしてある日空山を残して、この旅館を去り本拠地を別の場所に移す。場所を移すとしたら、風岳村の外がいい。

空山はパック入りのイチゴミルク飲料を買って、それを飲みながら階段を上がってやってきたので、井村からの電話を切った。空山は早瀬と目が合うと、にこっと微笑んで見せた。

「主任、どこに電話、してたんですかあ？」

「いやあ、実家にね」

その笑顔も、今となっては怖ろしいだけだ。

一方、空山は通信を強制的に打ち切った井村から、何がしかの形で早瀬に連絡が入る事を見越していた。

早瀬は実家に電話をしていたのと言い張ったが、そうではないことは、彼の脂汗や、夏だというのに蒼白になった顔を見てわかった。空山はイチゴミルクを持って、女子トイレに入っていた。こ

こは女性である空山以外の研究者は入ってこれない聖域だ。空山は織図の携帯電話にメールを送った。

”こちらの動きに、主任が気付いたよ。どうすればいいか指示して

＊

ユージーンは超空間追跡転移により、解階の女皇、アルシエルⅡジャンセン（Alsie Jansen）の玉座の間に転移した。アポイントなしもへったくれない。

この場所はブラインド・ウォッチメイカーの支配領域となっているのでアルシエルと込み入った話はできない。アルシエルは何か思索に耽っていたようだが、御簾の奥で立ち上がって、おもむろのに姿をあらわした。ユージーンは御簾から彼女が顔を出す前に跪き、アルシエルを直視しないように平伏した。

どんな素材で出来ているのかわからない、硬質の床の冷たさが身にしみる。なにも彼女の部下でもないユージーンがこのように謙る必要はなかったのだが、アルシエルは解階の皇である。蔑ろにされたのでは、解階の住民達の反感を買う。そして誇り高き彼等の怒りをかうことは、隣接する生物階の安全をさえ保障できなくなるとの判断だ。また、言うまでもなく人質となっているメファイストフェレスⅡセルマーの待遇にも配慮していた。

「突然の来訪、無礼をお赦し下さい。わたしは陽階神第7位 軍神 ユージンⅡマズローと申す者にございます。メファイストフェレス伯の御公女のお話をお聞きし、馳せ参じた次第にございます。わたしは陛下の御前に参りました。何卒、メファイストフェレス伯には寛大なご処置をお願い致します」

「やはり、間違いではなかった……。面をあげられ、お立ちになられよ、汝は我を拝する理由などない筈だ」

ユージーンはその言葉に促され立ち上がる。煌びやかなドレスを身に纏い王冠を戴いたアルシエルと、簡素なスーツを着た何の変哲もない一柱の神。アルシエルだからこそ、ユージーンの力を余すことなく体感できた。そしてアルシエルの実力など足元にも及ばないとも察する。アルシエルは神皇とも呼べる存在と対峙し、自然と膝を折った。

解階の価値観は単純だ、より強く優れた者に敬意を表し尊ぶ。膝を折るという、アルシエルが生涯必要ないとすら思っていた行為。そして湧き上がってくるこの懐かしい感情は、敬意だ。

「我等をお救い下さい」

ユージーンは誇り高き解階の女皇すら、跪かせたのである。ユージーンが三階を掌握した瞬間だった。しかし彼女は、それだけでは終わらなかった。彼女は立ち上がり、ローブを脱ぎ、細い腕を露にし腰を落として身構える。鍛え上げられ精錬された紅いオーラが、彼女から爆発的に放散される。凄まじいオーラだ、軽く比企や極陽を凌いでいる。しかも彼女は道具を持っていない、生身でこれだけの威圧感を伴うのだから……ユージーンは力を尊ぶ女皇が、拳を交える事もなく黙って跪く筈がないと見越していた。正々堂々と拳を交えて、敗北を喫してから跪くのが解階の筋だ。筋を通さなければならぬと考えているのだろうか。

「しかし我とて解階の皇。至高者と会い見えましたならば、この血が疼きます」

「お互い、無駄な争いはやめませんか。本気で戦う場所などありませんしね」

アルシエルはDNAワールドの住民でもあるため、基空間では戦えない。

ここで一戦やり合おうと、解階は壊滅的なダメージを受ける。アルシエルは玉座の裏の隠し扉を開けると、そこは広大な武道場となっていた。一目見てそれが、アルシエルのプライベートな訓練場であることが分かった。解階の住民が自らを鍛えるため、あるいは戦う為に用意された武道場なのだろう。

その広さは果てが見えない。財にものをいわせて造らせたものだ。

「これでよろしかろう？ 手を抜こうなどと考えなさるな。手加減はいらん」

アルシエルは負けると見越して挑んでくるのだ、ユージーンも受けて立たないわけにはいかなかった。

彼はスーツの上着とベスト、シャツを脱いで黒いTシャツだけになると、アルシエルの待つ武道場へと入っていった。

＊

以御はこのところ深刻そうだった廿日に、陽階のカフェに呼び出された。

わざわざ呼び出すくらいだから込み入った話があるのだろう、ということは察していた。

しかもユージーンが不在のところ、執務室を長くあけるわけにはいかない。電話転送は以御の携帯にできてはいるが、誰かから連絡がないかと思うとどうしても落ち着かない。

「で、何だよ話って。紫檀との痴話喧嘩の相談なら勘弁しろよ」

すると彼女はじわっと涙を滲ませた。まさか凶星だったのだろうか。これは長そうだ、と長年彼女と仕事をしてきた以御は察知する。とにかく彼女は仕事ではキビキビとしているのに、プライベートだと話が長い。時々リピートも入ってくる、その話はさっきも聞いたと突っ込んでも覚えていない。若年性アルツハイマーではないかと

首を傾げたくなる。そんな彼女が、今度ばかりは深刻そのものだ。た。

「え、マジ離婚？」

何故結婚しているのかもわからないような、釣り合わない夫婦だった。

何名もの男使徒たちが求婚しては屍と散った高嶺の花の廿日と、文字通り馬の骨ではないが、元馬番役の紫檀。ようやく廿日の目が覚めたのならわかるが、紫檀に廿日を離縁する権利など断じてない。「許して下さい以御、そんなつもりじゃなかったのです」

ふたりはカウンター席だったので、廿日は以御の背中にしな垂れかかった。有名な軍神下第一使徒と第二使徒がふたりして何をしているのかと、周囲から自然と注目される。廿日は美女だし以御はとにかく派手だ。

「はあ？ ちょっ、皆見とるし！ 離れろっ」

これでは以御が廿日を泣かしているようにしか見えない。外見は派手で軽そうな以御だがこういう場面にはどうにも慣れなかった。

「私ね、出来てしまったの」

「！何が？」

「予定日は10月で……産休と育休をお願いします」

よよよ、と古風に泣く廿日を突き放し、以御は声を殺して怒鳴りつけた。

彼等は結婚をしてもう何十年かたつが、廿日もだが特に紫檀の任務が忙しかったため子供をもうけていなかった。平和な世の中になつてようやく紫檀の仕事が落ち着き、子供をもうけたところだろう。だがこの非常事態、以御の顔が途端に陰しくなった。

「お前らこの非常時に子作りしやがって」

「だって私達夫婦ですもの、どうしても愛しあってしまうわ。それに子作りをした時は、非常時にはありませんでしたし至って平和だったんですもの」

何がどうしても愛しあってしまう、だ。

もう出来てしまったものをおろせとも言えない。しかもさ来月で出産ならおろせる時期ではない。赤ん坊も生まれてくるしかないのだ。使徒は荻号の失踪を受け、闇神下使徒4000万名ものリストラを出し、大変な局面を迎えていた。4000万名の使徒達はそれぞれ陰階神たちに割り当てられたが、陰階神に対する使徒の割り当ては既に定員を上回って、陽階になだれ込んできていた。陽階神のうち使徒の募集をしていたところから就職難民である旧陰階使徒が転階し再就職しているようだが、ユージーンはまだまだ使徒を養えるだけのアトモスフィアを持っているにも関わらず定員を拡大していない。そしてユージーンにまだ余力があるという事は神体検査の結果バレバレだ。陽階でも就職難民が定員を上回り始めたら、軍神下使徒の定員を増やせと各方面からの圧力がかかる事だろう。

ユージーンが絶対不及者となる事を知っている以御は、ユージーンが定員を増やさない理由がよく解った。どちらにしろ子作りは自粛しなければならぬという風潮の中でこれだ。しかし廿日の言うよう、子作りをした時には荻号の失踪など予測もできなかったのだから致し方ないのだが……。

「廿日、気付いてないかもしれないが、お前は仕事が出来る奴だし主の信頼も厚い。第3使徒から第7使徒は生物階に入っている。お前の穴を誰に埋めさせると……」

「それなら、うってつけの人材がいらっしゃいましたよ。昨日」「うってつけ？」

「前闇神下第一使徒、鏑 二岐様です。先日、軍神下使徒としてご登録なされました。主のご許可もあるようですし」

以御は一瞬廿日が誰の事を言っているのかわからなかった。いや、頭が理解することを拒んでいるに違いなかった。鏑 二岐……荻号の腹心であり、鉄の女との異名も持つ完全無欠のキャリアウーマン。彼女がどういう風の吹き回しで軍神下使徒となったのか。ユージーンは以御に話を通さなかった。

鏑は亭主関白の以御がもっとも苦手とするタイプだ。そして明らかに、以御より格段に優秀な才女だ。

「おい、廿日。そりゃ仕事が出来る奴がって言ったがな……出来りゃいいってもんじゃないだろ」

「二岐様がお相手では、あなたの第一使徒の座も危ういかもしれませんね。以御」

それは冗談ではなく本当に危うかった。

彼女が第一使徒の座を望んだだけで、いつでもとって代わられてしまうほどの實力を持っている。ユージーンの奴、どうして……俺を信用していないのか、と以御は表情を曇らせる。

「妊婦はいい気なもんだよ、ったく。お前も早く帰ってこい、育休って何ヶ月とるつもりだ」

「3年ばかりいただきたいと」

「馬鹿か！ 長過ぎだろ！ 生まれたら保育園に入れとけ！」

基本的には専業主婦など許されない使徒の母親は、生まれた子供達を厚生局の運営する保育園に預けて仕事をしなければならなかった。

しかし彼女はかた時も休まず働いてきて貯めに貯めた有給休暇がある。これを育児休暇にあてるともりらしいのだ。廿日はすっかり

母親のつもりなのか、以御の配慮のなさに抗議した。

「長過ぎじゃないです！ 母として手をかけて育ててやりたいんです！ 林檎に謝って下さいっ」

「もう名前まで決めてんのかよ！ しかも林檎て！ 娘が生まれなかったらどうするつもりだ、息子だったらグレるぞ」

「息子だったら桃太郎です」

「名前ぐらいもつと真剣に考えてやれ！」

父親が葡萄なので、どうにかこうにか果物の名前にしたいのだから。

こう言い出した廿日は、どうあっても折れなかった。

それにしても鎬 二岐――。最強神荻号すらも尻に敷いてきたというあの鉄の女と共に、仕事をしろと！ 以御は廿日をよきビジネスパートナーだと思っていた。以御と廿日はツーカーの仲で、廿日はいつも以御をたて、仕事をしやすいように環境を作ってくれた。もう何百年も一緒にやってきたのだ、今更他の相手と一緒に仕事などしたくない。以御は廿日の事より自分の都合をばかり考えていた。

「その件については、ユージーンに産休と育休の許可をもらえよ」

「もういただきましたよ」

「何故俺に先に言わない！」

根回しの順番が間違っている。普通は以御の許可を得てからユージーンに話すものだ。会社のシステムでいうと、部長に話を通さずにいきなり社長に話を持っていったようなものだ。廿日は首をすくめた。その怯えた眼差しがまた癪に障った。そこまで信用されていないのか、廿日にも、ユージーンにも……。以御はもう何もかもが情けなくなった。いつ自分が信頼を損なうような事をしたのだろう、一連の騒動にしたって以御は留守を任されるばかりで蚊帳の外だ。

ユージーンは以御には何も話してくれない。そして、廿日まで……。

「だって、主より以御に許可をいただく方が怖いんですもの」

「ユージーンは何て？」

「おめでとう、ゆっくり休んで元気な赤ちゃんを産みなさい、と。私、一生、主についてゆきます。結婚と出産って男性が思うよりずっと、女性にとっては大切なものですよ、以御」

以御は大事な言葉を忘れていた。部下に慕われる上司とそうでない上司の差を見せ付けられた思いだ。だから彼女は以御より先にユージーンに報告し、彼は心より祝福を述べただけだった。以御などよりはるかに重い運命を背負っている彼は、後任がどうのこうの言いはしなかった。

以御は恥ずかしそうに、そして体裁悪そうに小声でこう付け加えた。

「忘れてた。妊娠おめでとう」

＊

恒は織図とともにくだりの電車で揺られていた。

織図は感慨深そうに車窓の景色を見ている。彼にとっては生まれて初めての風景なのだ。光を宿した茶色の目を細めて、彼は深呼吸をした。気づかない振りをしてばかりもいられない。織図と交わっていた雑談が、途中から恒の返事がなくなった。

「恒。また何か余計な事を考えていないか？」

「え、考えていませんよ」

不意打ちをくらったように、恒はしどろもどろになった。考えていた。恒が何かを考えなくてよい日など、実際のところなかった。

「下手な考え休むに似たり、だ」

その通りだと、恒も思う。

だが考えずにはいられなかった。ユージーンは助からないのだろうか、彼は三年後、恒に引導を渡されて消滅しなければならいのだろうか。彼は間が抜けているから、先ほどのように何か重要な事を見落としてはいないか、そうであってくれればいいのにと、いくつもの駅を通過しながら何度も願った。

織図からペットボトルのお茶をもらって、一本全部飲み干した。じつとラベルを見る……何も思いつかない。

「お前はお前の問題を考えるんだな。お前に与えられた選択肢は、生きるか死ぬるか、その二択だけだ。そしてその二つの選択のうちどちらも、ユージーンの消滅なくしては成り立たない。お前が死んでもユージーンは救われない。ならばお前は生きろ、それが奴の願いだ。いいか、これはどちらかが死ねばどちらかが助かるという類の問題ではないんだ。お前が生きても死んでも、ユージーンは死ぬんだよ。選択肢はお前の方にしかないんだ」

「わかってます、わかってます！ でも……そうは思いたくないんです。誰かの犠牲の上に成り立つ未来なんて……」

「誰かが犠牲になってはじめて、開ける未来もある。歴史はその繰り返しだ」

また一つの駅を通過し、車両は一両だけになり、列車は少しスピードを上げてタタン、タタンと軽快な音を立て始めた。

真夏の日差しを受けた山々の緑がまぶしい。眼下にはくねくねと、美しい溪流が涼しげに流れている。しばらくして、織図は橋の上で釣りをして遊ぶ子供達の姿を見た。誰にも邪魔されない、彼らの夏休みがそこにある。織図は車内に視線を戻した。お宮参りを済ませ

たばかりの、赤子が母親に抱かれて眠っている。恒の周囲で、こんなにも日常は精彩を放っている。恒はまたぼうっとして、何かを考え始めたようだった。織図は誰に話すともなく、話を続けた。

「この電車に乗っている人間達を見ろ、誰もが生きたいと願っている。あの座席を見ろ、生まれたばかりの子供もいる。そんな奴らが生きる権利も巻き込んで、それでもお前はユージーンをのみ生かすことを願うのか？ たとえ奴がそれを願っていなくとも、お前はそうしたいのか……お前は、生きろ。そしてこいつらを救え。こいつらこそがお前の守るべき者だ。ユージーンではない」

600年以上を生き、死神として人々の生と死を見守ってきた織図の言葉は重かった。

恒にとっては残酷な言葉を織図は次々と並べたてる、誰も間違っていないとわかっているからこそ、受け入れる事はできなかった。正論を振りかざして、ユージーンを犠牲にすることが耐えられなかった。

「でも、ユージーンさんは生きられないんですか？」

ついと顔を上げると見える、悲しいほど澄み渡った快晴の空。

彼の瞳の色にも似て、恒は油断するとまた泣けてくる。泣いても、喚いても、逃げられない現実があるといつも思い知っていた。それでも、今度ばかりは酷すぎる。

「恒、お前は生きるという事をわかっていない。ならばユージーンが三年後、死から逃げ仰せたとしよう。奴は不死の存在だ……死ぬ事もできず、永遠を生きる事となるだろう。それは果たして、生きていると言えるだろうか？ 生きる事には完結を必要とする、生まれ、育ち、何かを残し、そして死ぬ。そうやってはじめて、生きたと言えるんだ。奴は、生きたいんだよ……奴が奴であるために。不

死の怪物としてではなく。生きたいんだ」

「あなたの仰る事は何となくわかります。間違っていない事もわかります。でも今は……。そうですね、とは言えませんが」

織図はよしよし、と恒を慰めて膝を貸す。

織図の膝の上に転がって、白いジャケットをかけてもらって恒は天上を見上げていた。自分達は何のために、戦わなければならないのか。そうやってまで取り戻すものは、何なのだろう。風岳村に着くまでには、まだしばらく時間がある。

恒が目を閉ざしかけたとき、織図のジャケットに入っていた携帯電話のバイブが激しく鳴った。身体を起こそうとする恒の肩を抑えて、織図は携帯を取り上げた。空山からのメールが入っていた。

「何でもねえよ、少し眠れ」

織図はいつになく優しくそういうと、恒を寝かしつけた。

*

アルシエルとユージーンは風のわたる広大な武道場に、5mほどの距離をとって向かい合った。

アルシエルはドレスでは戦えないと思ったのか、長い裾のドレスを脱いで、細身の黒い皮のパンツと紅いキャミソールを着ている。常日頃からドレスの下に戦闘用の服を着ているということなのだろう。どれだけ解階では戦闘が日常化しているといっても、女皇に挑みかかってくるような輩などいないだろうに女皇までこの有様なのかと、平和第一主義者のユージーンは嘆かわしく思う。

「あなたのお気の済むようにしたいとは思いますが……無益な争いは望ましくありません」

「我等は力こそ全ての社会。戦わずして屈する事はできんだ。我

も全力で挑む、手加減は召されるな」

彼女は神でいうところの神具、ツール（Tool）を用いることなく、素手で挑んでくるようだった。

ユージーンも相転星、G-CAM何れの神具を抜くことなく、素手での勝負を心に決める。彼女は解階の女皇であり、その潤沢な財力で一流のメーカーに作らせ、荻号の専売特許である時空間歪曲能を備えた解階最凶のツール、不可侵の聖典（Inviolability Scripture）を持っているはずだった。それを用いる事もなく挑もうとしたのは、勝敗を道具のせいにしたくはないという思いからくるものだろうか。アルシエルは腰を低く落として構えた。彼女はさも嬉しそうに屈託なく微笑んでいるが、少女のようなあどけなさの中に残忍さが見え隠れする。敗北の見えた潰しあいにも、少しも怯む様子もない。それでこそ、強くある為にのみ存在する解階の皇だといわんばかりに、彼女は威風堂々とただそこに佇んでいた。

「下手な男になど目もくれぬ、メファイストフェレス伯のはねっかえり娘を、ただの女にしたそうだな」

「へ？」

立ち上る紅いオーラとなって殺気が痛いほど伝わってくるアルシエルから、現状に不釣合いな突飛な言葉が出てきて文字通り、ユージーンは目を丸くした。

何だその話は、まさかメファイストフェレスが自分で吹聴して回っているのではあるまいな。それともセルマー伯が……ユージーンが丸くなった目を白黒させているので、アルシエルはほくそえんだ。「ふふ、何でもない。……では参るぞ。我を鳴かせてくれよ」

彼女はそう言うと、爆発的な加速度をつけて踏み込んできて、ユ

ージーンの前で急停止をかけスピードを殺さないうちに軸足をねじり、彼の脇腹に深々と細い足首をめり込ませた。

最外殻から30層ほどのフィジカルギャップがアルシエルの蹴撃によって粉碎され、彼女の上段蹴りから生じた凄まじい風圧が、武道場に谷割れのようなつめ跡を残す。

ユージーンは左肘でそれを受け止めていた。正確にはフィジカルギャップに守られて、攻撃が神体に届いていない。彼女が望んでいるのは純粹な力比べだ。ちょこまかと逃げて攻撃をかわしたり小細工をすることではない。ユージーンは彼女を満足させるためにフィジカルギャップを解除した。これで思う存分打ってこれるはずだ。

彼女は受け止められた右足を見てユージーンの左腕が封じられたことを確認すると不敵な笑みを浮かべ、そのまま体軸を回転させて身を翻し左足を彼の首筋めがけてギロチンのように振り落としてきた。それをまともに受けたユージーンの足が武道場の石畳を割り、地面にめり込む。

なんとという怪力だ……。

ユージーンもあつけにとられているばかりではないだろう、その後、恐らくユージーンは今度は右手で上からの攻撃を受け止め、脚を逃さないよう掴んで彼女の腹部に膝で一撃を決めようとするだろう、相手の間合いに長居する事は致命的だと察したアルシエルは逆立ちをするように両手をつき、そこを基軸として背中を鞭のようにしならせ、彼女から向かって左側方にユージーンを薙ぎ倒す。

ユージーンは力学分散のために側宙をして横方向からの衝撃を受け流すが、側宙をしている間にアルシエルに逆サイドに回りこまれた。

彼は空中を二段蹴りの要領で蹴って、上空に舞い上がると、アルシエルも地を蹴って追ってきた。地面の強い反発力を利用して跳び上がったアルシエルはユージーンに追いつくと、彼の肩を足場にし

て、両足でユージーンの頸を挟みこみ、アルシエルの頭を大きくのけぞらせて振り子の鐘のように彼女は顔を地面に向け、彼の足首を担ぎ上げるようにして掴んだ。

まさか、これは……。

アルシエルは上空から回転エビ固めのような格好で、足でユージーンの頭をロックすると、数十メートルもの高さから地球の何十倍にもなる解階の重力加速度を利用してウラカン・ラナを決めようとする。まともに受けるのは危険だ、とユージーンは地面に接触する直前に、反動を利用して更に一回転をして上側になると、アルシエルの頭から地面に叩き付けた。だがアルシエルは受身が上手く、両手を付いてすぐに転がり衝撃を分散したため涼しい顔をしている、まるで猫のようだ。彼女は次の瞬間もただ平たく伸びているのではなかった。次にユージーンが狙われるのは恐らく鍛えても鍛えようのない、顔面か喉。

的中だった。アルシエルがユージーンの喉をめがけて放った蹴撃は、ユージーンの右足の靴裏でガツシリと止められた。傍から見れば足裏を合わせて、仲良くダンスをしているように見えることだろう。だがアルシエルの膝はあまりの負荷に耐えかねて軋んだ。次の攻撃を避けるために跳ね起きようとした女皇とは真逆に、ユージーンはそれより一瞬早く彼女の鎖骨を掌底で軽く押し倒し、地面に彼女を縫い付けた。ぽふ、と柔らかい武道場の外の土の上に軽い身体は簡単に横たえられた。

出来れば怪我をさせないように、短期決着をとの配慮が見え見えだ。

アルシエルとユージーン、魔王と神皇は至近距離で見詰め合った。お互い、引きつった笑顔を浮かべ、お世辞にもロマンチックなものではない。白々しい笑顔の裏で力と力の闘ぎあいが起こっている。

アルシエルとユージーンは互いの喉を捕らえていた。力のコントロールがきかないユージーンが少しでも力を入れれば、アルシエルの細い首が引きちぎれるため、彼女の喉をおさえているだけだ。アルシエルもユージーンの喉輪を捕らえている、信じられない握力だが、いくら締めても握りつぶされてもユージーンは死なない。

もとよりこの勝負は、フェアではないのだ。

「ふ……優しいな、これだから博愛に生きる神は好かん！ 殺す気で来ぬか！」

「殺してしまったら、何故呼ばれたのか、解らなくなってしまいうじやないですか。まさかわたしと戦いたいというだけで、呼んだのではないでしょう？ 皇帝陛下」

「そうだったな、先に用件を話そう」

アルシエルがはたと我にかえたようなので、ユージーンは身体をアルシエルの上からどかさそうとした。だが、彼女は蛇のように腕を首に巻きつかせ離れようとしなない。ユージーンが話を訊こうとうっかり手を離れたものだから、彼女は翻って体勢をたてなおし、一度スリーパーホールドのように腕を回してユージーンの頸を締めてきた。

いくら締めても、頸動脈などないので決め技にも何もならないのだが、彼女がユージーンを何としてでも捻じ伏せたいと思っているようなのでそのままにして話を聞くことにした。

「お話し、聞きますけど。この体勢のままです？」

「そうだ。我は男に上に乗られるのがたまらなく嫌いだな。事情を先に説明するが、終わったらすぐに続きを始めるぞ」

ユージーンは首を締められたまま呆れてしまった。

まったく、この戦闘至上主義民族は有史以来の非常時だというのに、これだ。

第1節 第41話 無間感染区と治癒血への期待

このところ吉川 皐月は、ユージーンとメファイストフェレスの指導のない陸上部を、彼らが戻るまでの間、元々の顧問であるESとあわせて面倒をみていた。陸上部はユージーンとメファイストフェレスの指導のかいあってか飛躍的に実力をつけていた。この分だと近々ある大会でもよい成績を残せるだろう。そういえば教員免許を持っていたユージーンは体育教師らしくまともに理論的に教えていたが、メファイストフェレスの教え方は一風変わっていた。

基本的には、解階の住民が本気で走る時は逃げる場面ではないので、足が遅いと命の危険があるわけだ。そこでメファイストフェレスは、怪物が追ってくる、捕まったら食べられると思って逃げなさいと言って彼らの走る後から彼女が彼等を追うようなスタイルで指導をはじめた。彼女の指導方法は実際間違っているに違いないし、陸上競技の指導者からすれば首を傾げたくなるような鬼ごっこじみたものだろう。しかも彼女に捕まるごとに校庭1周が加算されてゆく。命の危険はないが相当のプレッシャーがある。最初のうちはメファイストフェレス扮する怪物に捕まった"死亡者"は全員だったのだが、徐々に生還したままゴールできる選手が増えてきた。

命がけだと思いながら逃げる選手達と、個々の選手のベストタイム程度の速さで追うメファイストフェレスの鬼ごっこだ。彼女に捕まらないということは、その選手のベストタイムを大きく上回っているということだ。ベストタイムが更新されたら、次はそのタイムに見合った速さで彼女は追い掛ける。彼女は何度走っても疲れないようだった。とても練習風景とは思えない放課後の光景だったが、選手達は確実に彼らの限界を乗り越えていた。

彼女は明日から、部活に出て顧問に復帰するといってくれたので

助かる、と皐月はほっとした。運動音痴の皐月はどう指導していいかわからなかったからだ。皐月はグラウンド整備を終えて部活を解散させると、ソフトボールの県大会を間近に控えてグラウンドで練習に励む期待のエース、豊迫巧を見つけて手を振った。

「皐月ちゃん、夏休みなのにまだこっちにいたんですね。愛媛の実家に帰るって言ってたのに」

「豊迫君の県大会での勇姿を見てから、お盆に少し帰る事にしたの。県大会、来週だったよね？ 必ず応援に行くから頑張ってね」

「はい、頑張ります」

巧は気持ちがいいほど快活な少年だ。生来の性格からネガティブなことは考えられない。

平凡な家庭に生まれ育ち、両親からの惜しみない愛情を受け、大多数の子供と同じよう死生観や世界の在り方などとは縁もない生活を送っている。今はソフトボール大会で頭がいっぱいなのだ。

皐月はクラス一人一人の活躍の場には出来るだけ駆け付けるようにしていた。堤 隼人の剣道の試合も、石沢 朱音のバレエ発表会の時も、坂下 実の水泳記録会の時も、天野 凜の絵画コンクールの表彰式の時だって、保護者と同じかもしくはそれ以上に、とにかくハレという日には必ず皐月の姿があった。皐月の気遣いの細やかさはPTA達にも好評だったし、生徒達の信頼も厚かった。藤堂 恒を含めると、今となってはクラス全員から信頼されているよき教師だ。だからこそ巧は、何かにつけ皐月を頼りにしてきた。

「皐月ちゃんて俺らが6年になっても、持ち上がりだよな」

「そうよー、どうして？」

巧は皐月を信頼し、彼のバイザーの下の彼女のこげ茶色の瞳を見

据えて告げた。

「俺、来年私立中学受験したいんだ。だからこの大会が終わったらそろそろ受験勉強、教えてくれない？ 皆には内緒にして」

「わかったわ、……どこを受験したいの？」

皐月は即答した後で、あれ、と疑問に思った。確かに中学受験を希望する生徒は皐月のクラスにも何人かはいた。だがよりによって巧が受験を希望するとは思わなかった。彼の成績は体育以外は目を覆いたくなるようなものだ。体育以外オール1の通知表を、毎学期毎学期、皐月は少し悪びれながら彼に手渡してきた。恥じる事を知らない彼はその通知表をクラスメイトに公開してしまつて、運動バカのレッテルを貼られてもう久しい。巧の通知表はある意味で学期末の風物詩と化していた、そんな彼が受験する中学などあったのだろうか、そして何故受験をしてみようと思つたのだろう。親に通知表を見せていなかったのならば納得できるが、親に期待されてという訳でもなさそうだ。

「明海^{めいかい}附属、去年のソフトの全国大会優勝校」

「……それって、ソフトのために？ 明海附属は難関よー？」

「そ！ だから勉強すんの。俺ユージン先生に命助けてもらつて、またソフトやってるうちに、自分のしたい事がやつとわかつて。明海行きたいって決めたんだ。皆とは一緒に風岳中行けないけど後悔しないと思う」

もう入学できる氣になつて話しているのが何とも滑稽だ。

決意は立派だが果たしてその学力があるのかというと皐月の力治えだけでは心もとなく思つてしまう。それでも皐月は巧の期待に応えなくてはならなかった。無理だ、やめておきなさいだけなら誰でも言える。不可能な事を不可能だと言うだけでは、教師ではない。皐月は受けてたつしかないと思つた。

「わかったわ」

「俺みたいに馬鹿じゃ、無理だって言わないの？」

「いい？ 豊迫君。無理なことなんて、そうそうあるもんじゃないのよ。でも、宿題いいーなんて言っちゃダメだからね？」

「やっぱしー？ 明海にもスポーツ推薦があればいいのにないからなあ」

おどける巧に微笑みかけながら、人間社会の教師である事を忘れてはならないと、皐月は改めて思った。

恒の身にはあまりにも大きな事件が降りかかりすぎて、恒にばかり目がいつてしまっていた。しかし皐月の生徒達はそれぞれの事件の中を、それぞれの悩みをかかえて生きている。誰が重大で、誰の方が些細な事だと教師が決めてしまっただけではない。その子供その子供に合った視線から、教師は子供達と向かい合わなければならない。教師は生徒全体を見渡す中立的な立場にいないなければならない。教師にとって生徒は大勢の中の一人ではないのだが、生徒にとって教師は唯一の教師だ。皐月は全ての生徒に目を向けなければならない、一方生徒は皐月だけを見ている。

ユージーンが本来ではあり得ない経緯を経て、小学校の学級副担任として着任した背景は、皐月が掴み所のない不登校児である恒を持て余して自信を失くしていたのを、校長が配慮してくれたからだ。孤独と絶望の淵にあった恒と温和な軍神ユージーン、彼等は必然的な運命のうちに会おうべくして出会ったのかもしれない。およそ彼は恒ひとりのために天上から遣わされた恒にとって最高の教師だったことだろう。皐月はユージーンが恒を救ったように、皐月も生徒の人生に関わりどんな時でも誠心誠意向かい合いたい。そんな教師であり続けたいと思った。彼女はぎこちない動作でグローブをはめて、一人で投球練習をしていた巧の前に向かい合った。ばん、と右

手の拳をグローブの中に打ち込み、巧に投げて来いと合図をする。

練習相手になどならないとわかっている。それでも巧はにやりと微笑み臆月に向かって柔らかく、しかし真っ直ぐな球を放った。

＊

心地よい電車の振動に揺られながら、織図の膝の上でいつの間にか恒は夢を見ていた。

夢の中で再び、黄昏色の草原に立っていた。

恒が強く望んだのできつとノーボディが草原の夢を見せたのだろう。

夕暮れに染まったひと束の草が、ぼんやりと手に触れてざわざわと揺れている。

あの時と同じようにうつ伏せで、温かい土の上に横たわって夢の中で目覚めた。きつとそこにいると予感した彼はやはり黄金の草原の中、その草原と同じ色をして恒の目の前に居た。

彼が誰であり、何を守ろうとしているのかを知った恒は、見守る彼の手をおずおずと取って、思いが溢れて言葉にならなかった。

その手の温度も知れない、彼の心などなおさらだ。

数百億年も前、彼の尊い気まぐれから全ては始まった。色々言いたい事はあるが、やはり感謝と労いの言葉をおくりたい。生命を育み、守り続ける事…それがたとえほんのひとかけらの気まぐれであったとしても。

命を生み出し、そして大切に思い続けてくれて、守り続けてくれ

てありがとう。

ずっとひとりでお疲れ様、これからは少しだけかもしれないけど手伝うから。

そんな言葉を、彼はじっと聞いていたと思う。

何を語りかけても返事をしないので、肉体を持たない彼は肉体を離れると話せなくなるのだろうか、と恒は思った。

返事がなくとも、何となく彼の言いたい事が恒にはわかった。

それは言葉ではなく予感でしかなかったが、恒は声にならない彼の”言葉”を聞いたような気がした。

重い役目を負わせてしまった……不憫だ、と。

恒は自分を不幸だとか不憫だと思った事はない。

ただひたすらに、この世の中に必要のない存在なのだと思っていた。母を傷つけ、父親に利用され続けた恒のわずかばかりの人生と、それに対して不断に続いた彼の孤独と絶望を比べる。彼の苦痛を思えば、人生を脅かしてきたものとこれから待ち受ける未来について、彼から不憫だなどとは言われる筋合いはないと思った。恒には人生をやり直す機会と生きる権利が与えられたのに。一番不幸なのは、完結する事の出来ない者達だ。やがてユージーンもそうなる。

「……俺は俺の為すべき事を果たしたいと思います。でも、ユージーンさんはあなたと一緒に行ってしまおうんですね」

そう言うと、彼は寂しげな表情をして頷いた。わざわざ彼を苦しめるような確認をせずとも、何が大切で何を守らなければならぬのか。ユージーンの決意と織図の言葉を聞いて、恒にはもう充分に

わかっていた。彼はなおも無言を貫いたまま、ずっと手を伸ばして恒の背後を示した。以前は一面に開けた海原から波が深淵に落ち込んで、背後には何もないのだと思っていた。振り返った先に何があるというのだろうか？ 言い知れぬ胸騒ぎがして、彼に示されたように背後を振り返ってみた。

すぐ背後には、草原の中に切り抜かれるように突然断崖があった。その高さ何百メートルとも知れない絶壁の下面に見えるのは、黄昏色に染まった広大な街の風景。日本のそれではない、どこか遠い異国の街並み。赤いレンガ造りの建物が夕陽を照り返して、碁盤の目の路地に長い影を映じている。

穏やかで静的な光景。

しかしその果てからまるで卵に輝が入るように、あるいはパズルが崩れるように街に輝が入り、地平線を少しずつ侵食しているのが見える。

耳を澄ますと世界が崩れてゆく音が、はるか彼方から聞こえてきた。

恒は怯えてあとずさると、背後にいた彼の腹部に当たってしっかりと支えられる。逃げ出せるものなら、逃げ出したいと思った。

そう思った途端、彼は後ろから顔をのぞかせてじっと恒の目を見つめた。

名も姿もなきものとユージーンが言ったように、彼の顔は先ほど見た顔と少し違って……女性のように見えた。注意してみると、容姿が少しずつ変化してゆくのがわかる。一瞬一瞬の存在のあり方が違うのだ、身長だって先ほどはそれほど高くなかったように思えるのに、目を離れた一瞬の間で姿が変わってしまっている。暫く見ていたら、きっと年齢や性別だって変わるのだろう。トレードマー

クにしていると思われる金糸のような細く長い金髪と光を重ねたような透明な装束のおかげで、彼が彼であるという事がかろうじてわかる。ホログラムのように偏光する彼の瞳の色は明らかに模造的で生物のそれではなくぞつとしたので、恒は思わずのけぞった。

逃げ出すつもりなのかと尋ねているように思えたからだ。

やましい気持ちを落ち着け、脚を中空に投げ出して断崖絶壁のふちに腰掛けた。

恒の隣に彼（彼女？）も腰をおろし、恒の傍らで滅びゆく世界を見守っていた。

三年後、恒とユージーンがINVISIBLEに敗ればこうなってしまうと、彼は予め見せているのだろうか。

彼と話したいこと、訊きたい事はたくさんあるのに、頷くばかりで返事はない。

思いついて、ポケットに入っていた広告の切れ端とティッシュで包んだ赤いチョークを引っ張り出した。広告はたまたまポケットに入っていた。赤いチョークはナイフと同じく恒の必需品だった。不登校時代に人目を避けるように登山をしていて必要だったものだ。木や岩にこまめに目印をつけて、迷わないようにするために持っていた。とはいえ、最近は山に逃げ込む必要もなくなってチョークも持っていなかったのだが、夢の中なのでそういう事もあるのだろう。恒はその二つを思い切って彼に差し出してみた。このチョークのかけらとチラシの裏のわずかなスペースで、何か、何か語りかけてはくれないか。彼はチョークとチラシを受け取ってくれた。恒は侵食されゆく地平線を指差して彼に尋ねた。

「教えてください。これは未来の光景ですか？ 何を意味するので
すか？」

彼は返事の代わりにチョークのかけらをつまんで、チラシの裏に走らせた。

” そうではない、現実だ。既に始まっている ”

創世者である彼が恒に理解できるようわざわざ日本語でチラシの裏に丁寧に書いた楷書は懐かしい愛情のように尊く思えて、安っぽいチラシの裏の文字の美しい文字に魅入ってしまった。彼が荻号であって、軽口を叩きあったということなど、もうすっかり忘れていた。

「これが現実ですか、どこで始まっているのですか？」

” 真実は複数の現実の中から選ばれるものだ。汝らは選び続けている、現在。そしてやがて未来に繋がる現在も ”

「波動関数の……ウイグナーの友人が？」

恒はまた、彼が理論的に説明してくれる事を期待した。

現象を理解するには漠然とした概念よりも数式と理論で表してもらうほうが恒は有難かった。彼はそれではだめだと首を振った。

” 現象を定義づけてはならぬ。物理空間法則は吾らが創出し汝らが観測し利用しているに過ぎない。現象は感ずるもの、それでよい。未来も無限だ ”

「俺、絶対にやってみせます。でも」

” 怖い か ”

彼はそう書いて、恒の頭を撫でる。

不安も恐怖も、悲しみも彼の前では隠せなかった。

透明な装束の裾を借りて、恒はそれにくるまった。ほんのひとかけらでも彼（彼女？）の強い精神性が自分にも備わっていたら……

と恒は思う。プレッシャーと恐怖に、もっていかれてしまいそうだと自己であることを棄てようとしているユージーンと、自己が自己であろうとする恒。ふたりの役目はまったく違う。失敗をしてしまったら、ユージーンだって報われない。

「怖いです。とても……もしも、できなかったら……やっぱり死ななきゃいけないのかな」

極限状態に置かれれば躊躇することなく死ぬだろう。しかしそれではユージーンが恒を何としてでも助けようと奮闘する意味がなくなる。更に言えば志帆梨や周囲を悲しませる。本当に辛いのは、死に行く者よりも残された者達だということを理解していた。巧が死んだ時、胸が張り裂けそうだったことを忘れない。あんな思いをさせたくはない、誰にも。

彼は悶々とする恒の心情を察して、軽く抱きしめて恒の心が落ちて着くのを待った。侵食されゆく世界を見据えながら、恒は夢の中で震える。

”ひとつ、よいことを教えよう。死を体験するということは、生を見つめ直す事だ。汝自身と汝を取り巻く生を見つめ直すのだ。さすれば生きながらにして、死を乗り越えられるだろう”

「できるでしょうか」

”迷ったらまた来るといい。少しだが話相手ぐらいにはなる”

彼はチラシの裏に書き終わると立ち上がった。チラシのスペースが丁度埋まってしまってこれ以上は書けないのだ。頼もしいな、と恒は思う。彼は恒が迷った時には夢の中で助けてくれる。名も姿もないものだが、彼は確かに世界の根源であり恒は彼の子供だ。愛情深くいつも見守って、こうやって挫折そうになった心に手を差し伸べる。

恒は思い切って、彼に一番の疑問をぶつけてみた。

「あなたは どうして命を生み出したのですか？」

彼は答えをはぐらかすように視線を上げ、恒を見てはいない。

何を思ったか。彼の気紛れから全てははじまった。

そして創世者の気紛れはまだ続いている。その答えは、ただ寂しかったからではないかと恒は思った。名も姿もなく。普遍で永遠であり。全てであることはきつと感情を持つ彼という創世者にとっては苦痛だ。彼が彼であると認めてもらえない事が、孤独が辛かったから。

彼はいつかそんな答えを白状してくれるだろうか。

恒の感謝の気持ちは変わらない。

名もなき創世者に感謝をしつつ、眼下に広がる黄昏の街並みを脳裏に焼き付けていた。

＊

アルシエルは嬉しそうにユージーンの頸を絞めながら、恍惚とした表情をしている。

眠っていた彼女の嗜虐心を、ユージーンが呼び覚ましたのかもしれない。彼女は弱きものには興味も示さず、強く尊き者をこそ捻じ伏せて服従させたいと考えていたからだ。今日という日までは彼女の欲望を満たす理想の相手はとんと、現れなかった。その証拠に、彼女は生涯のうち全て異なる相手との間に98子をもうけながら、一度も婚姻をしたことがなかった。少し押せば折れてしまいそうな細い腕で万力のような力を込め、締め技で頸を絞めながらも、彼女はようやく話す気になったようだ。

「それでは、早く続きがしたいのでお話しよう。解階は今……」
「あ、待って。一部でいいので。全ては説明しないでいただきたい。」

あなたの話そうとなされている事の半分以下で構いません」

ブラインド・ウォッチメイカー の支配領域で核心に触れる話をすれば彼女の命に関わるからだ。

荻号がかつて世界の核心に触れる話を常にはぐらかさなければならなかったように、ユージーンもその全容を聞くわけにはいかなかった。だがアルシエルはそんな事情は少しも理解できない。

「折角ご来訪いただいたのだ。こちらでも誠意をもって全て申し上げる所存だ」

しこたま頸を絞めて。これが誠意のある対応なものかとユージーンは訴えてやりたかったが、彼女はようやく頸から腕を放したのでその言葉を喉の奥に飲み込んだ。

「あなたの命に関わるのです。少しずつ事情を教えてくださいませんか？」

「少しずつ？ 意味がよくわからんが、ここ数年で解階の星が消えておるのだ。いずれ母星も……」

「はい！ もうわかりました！ 結構です。何も言わないで下さい」ユージーンはまだいくらも聞かないうちにそこで話に割り込んでストップをかけた。

アルシエルがいきなり核心をついてきたからだ。

ユージーンはまだ荻号のように会話をコントロールしたり上手く立ち回れないので、どうしてもぎこちなくなってしまう。理想の形としては相手から会話を引き出し、なおかつ核心に触れる会話を阻むことだ。思うままに相手の心を操った荻号の手法は見事だった。ユージーンは一瞬にして、解階の見舞われている状況を把握した。既に始まっているのだ。

進化の飽和した世界を滅ぼし、最初から進化系統樹を立て直すためにブラインド・ウォッチメイカーの大粛清がひそやかに。それはすなわち、生物階にも言えること。ヒンドゥー教でいうところの破

壊の時代、カリ・ユガ期から創世の時代クリタ・ユガ期に移行するように、ブラインド・ウォッチメイカーのルールに縛られたあらゆる生命が滅ぼされる。それがもう、INVISIBLEの収束を待たずして始まっていたのだ。生命を無慈悲に根絶させるブラインド・ウォッチメイカーの大粛清、ノーボディが見るに耐えないと憤った許されざる行為だ。

「まだ何も話してはおらぬぞ」

彼女はユージーンが話を遮ったので、恨めしげだ。

これだけしか話させてもらえないのなら、それこそユージーンは何のために呼ばれたのかわからなくなる。それに彼女は、ユージーンがこれほど大事な話を遮ってしまって、早とちりをしていないか不安だった。ユージーンは彼女の口を押さえ、真剣な口調で諭した。

「その件につきましては、わたしが引き受けます」

「本当に理解しているのか？ 頼んだぞ？ 要請の受諾をいただき感謝する。まだ、お伝えすべき事はもう一件ある。これは極秘にしておる情報なのだがこの際だ。解階の辺境の星から順に伝染病が流行しはじめておる。感染した者は理性を失い、繰り返し幻覚を見るのだそうだ。更に感染者は必ず、生物階に行こうと試みる。感染すれば一週間ほどで死に至る。そんな死の恐怖から逃れるためには、生物階に入階しなければならぬという幻覚を見たようだ。我の監視する生物階に抜ける全てのゲートは遮断しかつ嚴重に封鎖しているが、我の把握せぬゲートからの生物階への侵入がないとは断言できません。理性を失ったまま生物階に入った感染者がどのような行動に出るか、想像もつかぬ。非力な生物階の人間に危害が加わるだろう。感染者は隔離したが、ウイルスのようなものではないらしく感染は拡がり続けている。星の消滅と奇病の拡大、これらはあなたに解決できる問題だろうか」

ユージーンはアルシエルの話で直感的にブラインド・ウォッチメイカーが生物階にまで干渉をはじめたのかもしれない。

恒星の消滅と奇病の意味するものは何か。

ブラインド・ウォッチメイカーは生命の根絶以外の何かを目的として、生物階で彼らに何かをさせたがっているのか？ アルシエルはユージーンが困惑しているように見えて、大きなため息をついた。彼女もユージーンを全能の存在だと信じているわけではない。対処のしようがないということはわかっていた。ただ、誰にも頼る事ができない立場であるからこそ、最後に彼に縋ってみたただけだ。彼女は解階の滅亡を半ば諦めて受け止めようとしていた。これらの問題がユージーンに解決できる問題ではないと、彼女もわかっていた。

「やはり、手に余るか……」

「感染者に会わせていただけませんか？ 治療法を探ってみます」

ユージーンはアルシエルを見捨てはしなかった。

ノーボディがありとあらゆる者たちを決して見捨てはしないように。それがどれほど不可能と思われる事でも簡単に不可能を口にしてしまつてはならない。ユージーンは真実を知るために感染者に会ってみる必要があると思った。ユージーンは他の神々とは違ってプライマリコピーの個体であり、格段に治癒能力の高い治癒血を持っている。更にノーボディの知識を得た今なら、必要に応じて血液の組成を変える事もできるだろう。解階の住民は人間に近い体の構造を持っているし、ユージーンの血液が人を癒すように、解階の住民にも効果があると信じたい。

治癒血で感染が治つてしまえばいいのだが……、そんな事を思った。しかし万が一それで治つてしまうとすれば、解階の感染者達のためにユージーンは干からびるまで血を絞り出さなければならぬ、そしていくら不死のユージーンとはいえ供給できる血液の量は有限

だ……全ての感染者を何とかして救いたいのだが、それは難しい問題だった。

「勿論会っていただきたいが、あなたまで感染してしまうぞ」

「わたしは不死です、感染しても構いません。それより、治療法を捜さない」と

早く何らかの手を打たなければ感染と母星の消滅の恐怖におののいた解階の住民達が生物階に大挙して押しかけてくるだろう。

そして暴徒と化した彼らに、人々はなすすべなく殺されることになるかもしれない。解階の上流貴族は神より戦闘能力に長けており、神は彼らの流入を阻む事ができない。解階の住民の人口の多さは生物階の比ではない。流入してきた者たちから生物階に感染が拡大してしまつたらもう終わりだ。大昔の預言者たちのいうよう、地上で神階と解階の、いわば神と悪魔の最終戦争が繰り広げられるというわけだ。そんなのはSF映画の中だけの話にしてもらいたい、とユージーンは思う。

「では感染者に会っていただけるか？　と……その前に、続きをしよう」

「やりませんよ！」

ユージーンはアルシエルの不謹慎な言葉に怒鳴り返した。死者も出ているという非常時に、よくも続きをはじめようと思うな、と呆れたのだ。もともと価値観が違うのだから仕方がない。彼女に隣人愛を説いても理解ができないし、それが正しいとも言えないのだ。

「やはり、先に話すべきではなかったな……」

アルシエルはひどく残念そうに項垂れたのだった。

＊

深夜のラスベガスの違法カジノで重く垂れ下がった煙草の煙と、怒号飛び交う喧騒の中、その一角だけが水を打ったように静まり返っていた。

背後に大勢のギャラリーに囲まれ、人々の注目の的となっているその若者は迷いなく頷いた。

フェイクなのだろうが、空色の髪の毛と瞳をしたその男は明らかに堅気のようなではなかった。

かといってただのチンピラという風体でもない。彼の落ち着きと狡猾そうな鋭い眼差しはまるで何十年も生きてきた老人のように、年月の積み重ねられたものだった。

ゲームはカジノゲームで最も有名なルーレット。

熟練のディーラーの手は震えていた。男が張ってくる額の大きさに驚いているのではない、裏社会では地方予算にも匹敵するような額が毎晩動いている。ディーラーが怯えているのは、36倍もの多額のベットをしてくるこの男が先ほどから同じ数字と色を賭け続けているからだ。

赤の1。

そして5回も連続で的を続けている。

ルーレットが無作為に回って赤の1に入り続けるその確率は、すぐに天文学的な確率となってゆくだろう。ボールは固唾をのんで見守るギャラリー達の中で、またしても赤の1に入った。ディーラーはコールしながらも、もう逃げ腰になっている。

このゲームでイカサマが出来るとしたらプレイヤーよりディーラー側だからだ。

カジノのオーナーがこの男と通じて稼がせていると疑えば、ディーラーに明日の命はなかった。そろそろかな、と青い髪の男は呟いた。案の定、背中には何丁かの拳銃が突きつけられている。カジノのオーナーが雇った屈強そうな従業員が背後にやってきた。また、これだ。こういった違法カジノで勝ち続けると命を狙われる。

彼はうんざりしたようにメントールの煙草の煙を吐いた。

「貴様、イカサマ師か。今ので最後にして、そろそろお引取り願おうか」

「確かにそろそろ、潮時だな」

彼は席を立ちこっそりと配当を持つと啞然とするギャラリーを押し分け、涼しい顔をして換金に行った。

換金を終え、こっそりとドル札を受け取ると、彼は眩いネオン街から少し外れた路地裏へと入っていった。

彼は何の目的もなくふらふらと歩いているように見えながら何かを目ざとく捜していた。

彼は薄汚い欲望にまみれたこの街の空気が、この上なく好きだった。一夜の夢につき込む者、全てを獲る者、全てを失うもの。

強い光に当てられて濃く落ちる影、そんな人間達の営みが好きだ。彼はメントールの煙草をふかしながら、薄く微笑んだ。夜商店街の裏地にうずくまる、母子の姿を見つけたからだ。

「よかった、まだ居たな。ほら」

彼は先ほど儲けたドル札のうち半分以上を、みすばらしい身なりをした母親に握らせた。

彼女は先ほど、違法カジノでなければなしの全財産を全部つぎ込んで、

一文無しになってしまった母親だ。一般客に混じって慎ましかでささやかなベットを続けていた彼はじっと全てを見ていた。彼女がどのような事情でありつたかの財産をつぎ込んで、そして負けなければならなかったのかを……。彼女は夫が残した多額の借金を抱えていて、身体が不自由で働けない。そして無知な彼女はアメリカンドリームに賭けて違法カジノにやってきたのだ。彼女が打ちひしがれて違法カジノを後にしたとき、素人であった彼女に分らないようイカサマをしたディーラーから、彼は逆に配当を搾り取ってやった。信じられない金額を受け取った母子は、夜の闇に溶け込むように消えて行った彼の背後に平伏して手を合わせた。彼の背後には僅かに後光が射して見えたからだ。

あまりにも彼がまぶしく見えて、目の錯覚なのかもしれないと彼女らは思ったようだが、錯覚などではなかった。

彼は陰階神第2位、およそ生物階全ての確率を司っているといっても過言ではない確率神、ガブリエル・タウンシェント（Gabriel Townshend）、置換名を梶^{かじ} 奎吾^{けいご}と言った。現在最も極位に近い神として知られている。生物階降下は半年も前から予定していた事だった。こうやって各地の賭場を巡り、歪曲された確率があればそれを補正する。ギャンブラーのような仕事だがこれも彼の仕事の一部だった。

彼はふらふらとおぼつかない足取りで路地裏を歩いていたが、携帯電話に届いた法務局からのメールを見て驚いた。何と、解階の住民が複数名不法に生物階に侵入し、破壊活動を行っているというのだ。解階の住民達は女皇 アルシエルに絶対的忠誠を誓って解階の門によって厳密に出入りを管理されており、生物階で勝手な行動はとらないものだ。面倒ごとを嫌うアルシエルは生物階の支配権を神階に譲渡しており、解階の住民が調査と研究以外の目的で生物階に

関わる事を禁じていた。

これは妙だな。と梶は思った。

最強の女皇として君臨し続けたアルシエルの支配が揺らいでいる
とでもいうのか？

解階の門から追討隊が出ているのだそうだが、神階も生物階降下
をしている神々は解階の追討隊と共に違反者を速やかに逮捕、もし
くは殺害しなければならない。現在生物階に降下している神々は四
柱。陽階7位軍神 ユージーンⅡマズロー、陽階5位光神 レデ
イラムⅡアンリニア、そして梶 奎吾、特殊任務従事者にして陰階
第8位死神 織図 継嗣だ。世界同時5箇所での解階の住民の侵入
が確認されている。梶の割り当ては南アメリカ、場所はよくわから
ないが、法務局から衛星写真で送られてきた座標が指定されている。
解階の住民達が密入階してくるゲートは不明、不法密入階者の数も
不明だということだ。

「こりやまた、どうしちゃったのかな。女皇様」

いくらオール枢軸神のドリームメンバーが降下しているとはいえ、
解階の貴族階級にある者達が出張ってきたというのなら苦戦を強い
られる。しかし神階―解階の協定で違反者は速やかに逮捕しなけれ
ばならないときている。情報によると、貴族階級の流入はまだない
ようだが……。梶はまるで宇宙空間の中を宇宙飛行士が軽く月面を
蹴って舞い上がるように重力を断ち切ると夜空に溶け込み、そのま
ま南米に飛んだ。

＊

織図と恒の乗った単両の列車は風岳村に着いて、織図は恒を揺さ

ぶり起こした。

恒はぐっすり眠っていたが、今度は目を覚ました。先日のように覚醒できなくなってしまったらどうしようかと心配した織図はほっとして、ふたりはホームに降り立つ。恒は一面に広がる風岳村の景色を見渡しながら、またここに、逃れられない運命の場所に戻ってきたのだと心に刻んだ。織図はその足で先ほど連絡があった空山のもとに行こうとしていたが、それを邪魔するようにメールでの連絡が入る。

ダースベイダーのテーマ曲が流れてきたので、織図はげっ、と唇を突き出した。

盲目だった織図は着信音だけで誰からの連絡かすぐに分かるように着信音を個別設定している。恒はまたしても妙な着信音が鳴って、つつこまずにはいられなかった。

「何ですか、ものものしい着信音ですね」

「これは、法務局からのなんだよ。恐怖の着信音だ」

「え？ さっきの会話、やっぱりアウトでしたかね。盗聴されてましたか？」

先ほどの料亭で交わした会話が、全て法務局に筒抜けだったのではないかと恒は慌てた。織図はよく見えるようになった茶色の双眸で、携帯を遠ざけたり近づけたりしながら唇をとがらせていた。老眼だというのではない。

「なー、恒。俺あ果てしなく行きたくないんだけどよ。解階の住民が、生物階で暴動起こしてるらしいんだ。それを処罰に行かなきゃなんねんだとよ。ったくよー、法務局も無茶言うよな。解階の住民って強えんだぞ、特に貴族階級の奴らは」

「解階の住民って、メファイストフェレスさんのような？」

「そうだよ。あいつはあんなガサツだが解階のお嬢様なんだよ。あいつにも手伝ってもらうかなあ」

織図はそれがいいと思って、街で買い物中のメファイストフェレスに電話をかける。こういった不可侵条約に触れる違反者は、神階と解階双方で協力して逮捕に当たらなければならないという取り決めがあったからだ。織図は彼女の実力を正當に評価していた。彼女は枢軸神と同等、いやそれ以上に戦える。

恒は電話をかける織図を見上げながら、そこはかたく嫌な予感がしてくる。神階と解階の不可侵条約は女皇アルシエルの絶対王政により一度とて破られることなく発効してきた。全ての解階の住民は生物階に不法に侵入してくる事もなかったし、暴動などもつてのほかだ。それがここにきて突然、暴動だと？ 恒はノーボディと共に夢に見た光景、音を立てて崩れゆく世界が現実のものとなっているのかもしれないと感じた。ブラインド・ウォッチメイカーが解階の住民をいように操って、侵入させているのではないか……。それは頭の隅を掠めていったほんの直感でしかなかったが、簡単に否定できそうなものでもない。ブラインド・ウォッチメイカーは三年後に向けて、次々と手を打ってきている。

「じゃあ、お嬢様も協力してくれるっていうし、俺はこっち先に行ってくるからよ。お前は家で待ってな。空山さんそこには、勝手に行くんじゃねえぞ」

織図は釘を刺した。恒は少しふざけたようにそう言う織図に、行かないで欲しいと言いたかった。彼がそこに行ったきり、二度と帰ってこれないような気がしたからだ。

「どこに行かれるんですか？」

「パキスタンだよ」

「気をつけて！」

恒が叫ぶと同時に、彼は黒い霧となって消えてしまった。織図もメファイストフェレスも無事に帰ってこれるのだろうか。恒は瞬間移動で家に戻る事もせず、ひとりで夕暮れの小道を歩き始めた。

水面下で表面上には見えない場所で、ブラインド・ウォッチメイカーの悪意が不気味に動き続けている。

恒の脳裏で、世界の崩れ行く音が確かに聞こえていた。

＊

アルシエルは地下に建設された母星から辺境の星々に繋がるゲートへユージーンを案内した。

アルシエルの皇居の地下にはそれぞれの星々へと繋がる私設ゲートがずらりと設置されていた。その数、数百基。

感染区域に繋がるゲートは赤い非常灯が点灯している。残念ながらこの先はアルシエルは案内できないのだという。アルシエルがお忍びで使う私的なインプットゲートはまだ封鎖されていなかったが、辺境の星々から母星へと繋がるアウトプットゲートは首都への感染者の流入を防ぐために閉鎖されていた。つまりユージーンは行ったきり帰ってこれないということになる。帰りはアルシエルの気配を頼りに追跡転移で帰ってくるという方法しかない。アルシエルは赤いランプのついたゲートの前に案内した。ユージーンはジャケットを脱いで気合を入れると、襖二枚分ほどの大きさのゲートの前に立った。この先は、未知の病原体に汚染されたバイオハザード地区が待っている。

「ところで、あなたは感染しても死なないと思うが、感染自体はしないのか？」

「それはわかりません」

「感染したまま戻ってこられたのでは、尚更感染が拡大するだけだ

ぞ。慎重になった方がいい」

辺境の星々の住民を救出に行って逆に病原体を首都に持ち込まれたのではたまらない。病原体の種類と感染経路が分からない以上、無謀な事をしてほしくはなかった。彼女は解階の統治者として冷静な判断を下した。

「会ってみなければ何も分かりません」

「早まるな。会って、どうしようというのだ」

「わたしの血を与えてみます……あるいは、治るかもしれません」

「治癒血を持っているのか。では感染地帯にまずそれだけ送ろう。それならば行く必要はない。あなたは三階の希望だ、よく自覚しておかれよ」

ユージーンはみすみす感染などしないという自信はあったのだが、アルシエルに強くそう言われて渋々思いとどまった。内科医でもある彼は採血用の注射針とシリンジをアルシエルの専属の御殿医から貸してもらうと、自分で自分の腕に針を立てて採血を行った。赤く透明な液体が、シリンジに充填されてゆく。アルシエルはその輝く赤い液体の美しさのため息をこぼした。

「面白い色をした液体だ、早速これを送らせよう」

ユージーンは2リットルほどシリンジをかえて充填していったが、とりあえず効果があるかだけを見たかったので、アルシエルにもうよいと止められた。血液はアルシエルの手配でパックに詰められ、それを更にカプセルに入れられて、赤いランプの点っているゲートから送られていった。すぐに送付先のゲート入り口との映像が繋がる。血液が送られていったのは、正気を失った感染者が押し寄せていたゲートのようだった。

ユージーンはモニターの解像度を上げて彼等を見たが、明らかに

意識はない。彼等は執拗にゲートの周囲に群がって、生物階に入ろうとしているのだ。ぞっとするような、悪夢のようなおぞましい光景だった。このゲートは首都には繋がっているが生物階には繋がっていないというのに、血眼になってゲートを動かそうとしているのだ。何が彼等をそうさせるのか、ユージーンにはもう分かった。ブラインド・ウォッチメイカーが病原体を介して彼等を操っている。彼等にはもはや人格や知性は認められず、這い回り、叫び、暴れる、昆虫のように機械的で異常な動きを続けていた。

アルシエルは彼女の臣民の変わり果てた姿を見るに耐えないといったように、唇をかみ締めている。感染者のひとりが、ゲートの向こう側からやってきたカプセルに気付いた。カプセルは直径50cmほどの大きさで、触れればすぐに開くようになっていて、感染者は理性と知性を失うそうなので、簡単に開くような容器で送ったのだ。ゾンビのような容貌と成り果てた誰かが力任せにそれを開き、中に赤い液体が入っているのに気付いた。彼等はパックを奪い合うように力任せに引きちぎり、中に入っていた液体を身体に塗りつけたり食ったりした。

ユージーンとアルシエルは目を離さずそれを観察していた。彼等のうち血を大量に飲んだ者だけが、正気に戻ったのだ。助かった彼女は地獄のような光景に呆然として、先ほどまで同類だった彼等を気味の悪いものでも見るかのように見渡し、耐えられなくなったらしく逃げ出して行った。血に口をつけた者は5名いたが、そのうちおよそ数百mlを飲んだ者だけが正気に戻った。ユージーンはほっとすると同時に、あまりの治癒率の低さに絶望的な気分になった。アルシエルは治療の手立てなしと思われた死病から臣民が生還して、当然喜んでいる。

「効いたぞ！」

「効きましたね……」

テンションの上がるアルシエルとは反対に、ユージーンの声のトーンは低い。

「どうした、喜ばしいことであろうに」

「感染者はどのくらいいるのです？」

「推定、30万名はいるな」

ユージーンは目を見開いた。

そうだった、解階の住民の人口の多さを忘れていた。ノーボディや神々が適切に人口を管理してきた生物階とは異なり、解階の生物は無制限に蔓延っている。辺境の星から感染しているとはいえ、その感染者数は既に30万名を越えているのだ。

「そりゃ、わたしは不死身ですからいくら絞り取ってもいいですけど、干からびてしまいますよ。血液も無限に出せるわけじゃないですし……今見ている限りでは、少し舐めた程度の者は治っています。大量に飲まないと治らないようです。供給が追いつきません。それに治癒血を持つ神って、そうそうはいないんですよ。いても、わたしほどの効果を持つものではありません。実質この病気を治せるのがわたししかないとなると、別の方法を考えないと」

「あなたの血の成分を分析し、組成を再現できはしないのか？　あなたが血を流す必要はない。合成さえできれば」

ユージーンは上島に自分の血を50Lほど預けていたことを思い出した。

上島が急患患者の治療に使ったとしても、それほど大量には使っていないだろう。あれを返してもらって、分析し、合成ができるだろうか。だが……有史以来、治癒血を合成できた者はいない。アトモスファイアの合成は禁じられていても、かつて薬神は何度か治癒血

の合成を試みた事があった。結果は何度やっても失敗、神階の環境では合成できないのだ。ノーボディは神の手では再現できないように、限られた神々に特別な治癒血を与えていた。それが仇になったということだ。

「できません、治癒血は合成できないんです。治癒血は現代の科学力では合成できない物質で出来ています」

ユージーンのみにはしか癒せない感染症、それがいずれ世界を覆いつくす。ユージーンは感染者達を癒したいと願う。合成の出来ない、治癒血を感染者達に分け与える。三年後、ブラインド・ウォッチメイカーは、血を絞り取られてユージーンを弱体化させることを狙っているのかもしれない。弱体化したユージーンがINVISIBLEの器として利用されれば、貧血で精神力を挫かれたユージーンとノーボディが、ブラインド・ウォッチメイカーに勝てるはずがない。ブラインド・ウォッチメイカーの手段は鬼畜の所業だが、これが創世者と戦うという事だと思ひ知らされた。いや、不可能でも何とかして合成をしなければ、ユージーンの身体ひとつではとても足りない。アルシエルとユージーンが事の深刻さにお互いの顔を見合わせ、言葉を見失っていたとき、伝令使が慌しく駆け込んできた。

「陛下、ご報告すべき事がございます」

「後にいたせ」

「待って、聞かせてください」

伝令使を追い返してしまいそうになっていたアルシエルを、ユージーンがたしなめた。

血相を変えて飛んでくるのだから、それなりに重大な事が起こったのだろう。今はどんな些細な情報も耳に入れておきたい。

「惑星ラグメントから、感染者が生物階に侵入いたしました」

「何という……言った先からこれだ。我は把握しておらんのだが、不法ゲートがあったのか」

「ご心配には及びません、直ちに精鋭の追討隊を派遣いたしました」

伝令使は狼狽しながらそう報告したが、あつてはならないことだった。解階の住民を追討隊に充てれば、感染が広がるだけだ。精鋭部隊を送り込んだとなると、もし彼等が二次感染を起こしてしまつたならその被害は甚大なものとなる。ユージーンはすぐに自分が生物階に戻るしかないと考えた。

「解階の住民が感染者に近づくのは危険です。神階からの援護は出ていますか」

「は。梶 奎吾（Gabriel Townshend）殿、レディラム・アンリニア（Redirum Unlinear）殿、織図 継嗣（Duglass Niever）殿らが応援して下さるようですが」

伝令使から三柱の神々の名を聞いて、ユージーンは充分だと頷いた。

三柱とも解階の住民と充分に渡り合える能力を持っている。極陰に最も近い神、確率を自在に操る梶 奎吾、知性と理性を失った解階の住民に遅れをとりはしないだろう。レディラムⅡアンリニア、神具オプティカル・アイを持ち、光と同化する事のできる彼の特殊能力はあらゆる攻撃を透過し、他の追隨を許さない。そして死神、織図 継嗣、試合では決して発揮されないが、彼こそは実戦においては最強とも噂される能力、バイタルレベルを瞬時に断つ”死の宣告（sentence of death）”を切り札に持つ。彼に死を宣告された者は、DNAワールドの住民ならばいかなる者も逃れる事はできない。いつもはちゃらけているが、怖ろしい死の権化だ。神々の個々の力は確かに解階の住民に劣る、だがそれをカバーするだけの能力とまさに神の科学力の粋を集めて創られた神具の

性能がある。神が神と呼ばれ、解階から一目置かれる所以だ。

「その三柱で大丈夫です。神々を信頼して下さい。解階からは追討隊は出さないで下さい」

「神には感染せんのか？」

「しないと思います」

神体はいかなる病原体にも感染しないようにノーボディが一柱一柱愛情を込めて創りだしている。ノーボディは神体の構造と脆弱性をブラインド・ウォッチメイカーから秘匿し続けてきたため、ブラインド・ウォッチメイカーが把握しているのは生物階と解階の生命のみだ。DNAワールドの住民に感染するものが、神にも感染するということは考えられない。

「わたしは、星の消えゆく現場に行きます」

生物階のことは三柱の神々に任せるとして、彼は彼にしか出来ない事をしようと思った。

＊

梶は法務局に指定された座標にある現場に着くと街に火の手が見え、人々の絶叫が聞こえる。

遅かったかと舌打ちをし、解階の住民の姿を上空から探す。

これ以上の被害を拡大しないためにも、一刻も早く掃討しなくてはならない。梶は聖衣のポケットから5つの小さな物体を取り出した。それは様々な形をした透明なDICEサイコロのように見える。梶の神具、バロック・ダイス（BALOQUE DICE）だ。100個100種類のダイスを持つ梶は、その組み合わせにより自在に確率を操る。4面、6面、8面、12面、20面の5つのダイスを取り出した梶は、それらに回転を与えながらコマンドを入力した。

” P s e u d o r a n d o m g e n e r a t o r ! t o n

o e f f e c t.”

（擬似乱数発生！ 現象無効化）

サイコロは擬似乱数発生と現象無効化のコマンドを受けて、高速回転をはじめた。赤、青、黄色、緑、紫……まるでキャンディのように鮮やかで透明な5色の光を放ち始めたサイコロを梶は指先で操ると、それらを上空から眼下の街並みに投げつけた。一陣の暴風が上空を吹き渡り、火災はまるで巨大なうちわに扇がれたように一瞬にして消火した。梶の神具の駆動に必要とされるコマンドは短く、神具の発動までの時間が短い。即戦力となる強力な神具だ。梶は挨拶代わりに暴風を浴びせると、新たな24色のサイコロを取り出し、次のコマンドを繰り返している。

” O n e i n a T r i l l i o n s h o t i s o c c u r . ”

（1兆分の1の確率の試行）

彼はまるで川面に小石を投げるように軽い手首のスナップでサイコロを投げる。

縦横無尽に24個のサイコロが駆け抜けた半径3メートルで、一兆分の一の確率が起こり続ける。すなわち街中の、人間だけが隣町を目指して全速力で避難を始めるという、一兆分の一の確率が起こる。こうやって梶は街中の人々を避難させ、解階の住民たちとの戦闘に一般人を巻き込まないように配慮したのだ。梶は一仕事を終えて戻ってきた29個のサイコロを受け止めた。

できれば街を傷つける事無く戦いたいところだが、時既に遅し、街は見るも無残に破壊されている。人命救助が第一だ。蜘蛛の子を散らしたように逃げてゆく人々を見送ると、梶は侵入していると思われる解階の住民を捜し始めた。梶がそれほど捜さなくとも、一体、

また一体と彼等は街角から出てきて梶を取り囲む。その数はすぐに数十となり、いや百はいるだろうか。梶は彼等を見て、いくら人外の姿をした解階の住民とはいえ、様子がおかしいという事に気付いた。首はねじれ、明後日の方を向いている。昔のB級ゾンビ映画さながらだ。何かに取りつかれたように、生ける屍か亡霊のように彷徨い梶を取り囲む解階の住民の姿。梶は笑顔を引きつらせて、念のため話しかけてみた。

「なあ、あんたらちよつと変だよな」

返事がないので、梶は逮捕をすることを諦め、8つの漆黒のサイコロを指の間に挟んで構えた。これらは死の確率を操るサイコロだ。飛び掛ってきた解階の住民は、梶に触れる前に粉々に吹き飛ばされる。梶は怪物と成り果てた彼等の間を疾風のように駆け抜けながら、塵と化してゆく解階の住民達の断末魔を複雑な思いでかみ締めていた。

悪い憑き物に憑かれている、そしてこれは伝染して拡がってゆくものだ。この街から一体も逃すことはできない。彼等に罪はないと思うが、梶の守るべきものは彼等ではない。罪なき人間達を守るためには、彼等を皆殺しにするしかない。彼等をどうやったら救ってやれるかなど、考えている時間も余裕もなかった。

梶は雄叫びを上げ、死を齎す黒いダイス、デス・プロバビリティ (Death Probability) を振りかざした。

＊

陽階5位 光神 レディラム・アンリニア (Redium Unlinear)、置換名 宮本 みやもと けいめい 系暝は法務局に指定された場所に辿り着くと、なんとも眠たげな目を擦った。彼は光神の任務の環境で生物階に放射光観測のために降下していた。見渡すかぎりの大

惨事に、彼は現実かと目を疑った。指定された場所はアフリカ、被害は一目瞭然だった。放牧をしていた家畜が惨殺されて死骸が飛散している。幸いにも人々は家畜が襲われたのを見て既に逃げ出していた。死者はまだ出ていない様子だ。これはひどい、と彼はいまひとつ緊張感に欠ける顔で呟く。統治者のいなかった大昔の話ならいざしらず、アルシエルによって統治されてきた解階の住民は概して紳士的で、誇り高い。

貧しい国の人々が生活の糧として大切に飼育してきた家畜を無意味に惨殺するという野蛮な事は、恥ずべき行為だと考えていただろうに。だとしたら……理性を失っているのか？ その可能性が高そうだった。高い知性を持つ彼らの所業だとはとても信じられないが、目で見たものをそのまま信じるならば、彼らはケダモノと化し、手当たり次第に破壊活動を行っている。何かポリシーがあって活動している過激派のクーデターというような類のものではなかった。

これは正気の沙汰ではない、そして彼にはどうすれば彼らを正気に戻せるものか解らなかった。

助けられないならば情けは無用のこと、とレディラムは腹に決めた。彼はポケットから、コンタクトレンズケースを取り出した。視力が悪くて見えないから、というのではない。ケースの中に入っているものは何の変哲もない赤いカラーコンタクトレンズのように見えるが、これでもオプティカル・アイと呼ばれる神階最小の生体神具だ。この神具は装用者の神体を励起して光に変換し、光と同化する事ができる。装用者は実体を失い、ありとあらゆる攻撃を無効化できるが、神具に不調があると実体に戻れなくなり、いとも簡単に命を落とす。それだけの代償に見合う能力を秘めた性能を持つ神具ではあったが……。そういう理由で彼は、容易に命の駆け引きを強いられるこの神具を、ここぞという場面でしか使いたがらない。

そうでなければいいと願いながらやってきたが、どうやらここぞという場面が来てしまったようだ。彼は今日という日にたまたま生物階に居合わせてしまった不運を嘆きながら、指を液体の中に差し入れてつまむと、右目に装着した。片目のレンズを無くしたのではなく、片目しかないのだ。赤いコンタクトレンズは彼の生身の眼球に根を張り、触手を伸ばして侵食してゆく。次第に励起され光と同化してゆく彼の神体を、異形と化した哀れな者達が見上げている。オプティカル・アイは真っ赤に侵された眼差しを彼らに向け、胸をいためた。それでも、彼は何ら躊躇などしてはいられない。

”γ Ray、DNA Double Strand Break
!”

（γ線によるDNA二重鎖切断）

彼はそう言い残すと、目に見えない放射光となって消えてしまった。後に残ったのは、細胞内のDNAというDNAをズタズタに切断され、見るも無残に全身に焼けどを負って息絶えた、彼らの変わり果てた姿だった。

第1節 第41話 無間感染区と治癒血への期待（後書き）

挿絵（筆者絵注意） 梶 奎吾

<http://lizreel.web.fc2.com/gallery/kajl.htm>

【作】 γ 線によるDNA二重鎖切断： 【現】ある閾値より強いガンマ線を人体、あるいは生体に照射すると γ 線波長によるDNAの二本鎖の切断が全細胞で起こり、DNA修復機構系が限界を超え、細胞はアポトーシスを選択するので死亡する。

第1節 第42話 死神の本領発揮と広がる感染

織図とメファイストフェレスは一路、パキスタンに飛んでいた。彼女は同胞が生物階で暴動を起こしていると聞き、ショックを受けているようだった。織図は、危なくなったら手伝って欲しいが、そうでなければ自分が手を下すので何もせずに見ているだけでいいからと付け加える。同胞を殺す現場に立ち会う事になるメファイストフェレスの、もとより蒼白な顔がなおのこと白く見えて、織図は彼女を連れ出した事を悪びれた。

「……アルシエル様の御世が揺らいでいるのかしら。信じられない」「そおかあ？　いつだって世の中つてのは下剋上だったろ？」

織図は緊張感に欠ける口調で欠伸をした。また先ほどから頻繁に鳴り響いている法務局からの着信音が鳴って、生物階降下をしている筈のユージーンと連絡が取れないからといって、ユージーンに割り当てる筈だった地区であるポーランドとトルコも追加となった。織図はその無茶な命令を渋々ながらに了承したが、付き合わされるメファイストフェレスは愚痴をたれずにはいられない。彼女はとにかく、何か他の事で気を紛らわせたい様子だ。

「どうしてお前に三地区も割り当てられるの！　お前は文型神でしよう、他に武型神がいるのに」

「そんなん、決まってるだろ」

織図は声を低く落として、彼女を睨みつけた。視力を得た織図の視線は、ピントがボケていた盲目であった頃とは違って彼女をすら黙らせてしまう。彼女は織図の表情に影が落ちたのを見て、帽子を押さえ、返す言葉もなく肩を落とした。法務局が他の神々より彼に殺戮を依頼しやすい理由、それは彼が死神だからだ。

「文型武型は関係ない、奴らと闘えって意味じゃないんだろ」

「どうやら法務局は、侵入者を皆殺しにしろと言っているようだ。」

そして法務局単独で殺害司令を出す事はできない、解階の門、ひいてはアルシエルの許可もとられた上でのことだ。戦うと殺すは違う。織図は戦わずして生命を搾取する。彼の能力の真髄は、決して試合では発揮されることはない。彼が敵を殺そうと思えば戦う必要すらないのだ。まさにDNAワールドの住民を殺害することにかけては極位やAA神などよりエキスパート、彼の右に出る者はない。法務局は本来、全ての侵入者の始末を織図に任せてもよいぐらいだった。

「やはり殺すの？」

「そうだな、投降を呼びかけてみるか？」

「……そうして」

黙り込んだ彼女に、織図は茶化したようにそんな事を言う。いつも威勢のよい女が急にしよげかえると織図も気抜けしてしまふ。雲間からの照り返しの強い雲海の上を飛びながら、ふたりは暫くの間沈黙を守っていた。

「大体、お前の敬愛する女皇様、アルシエルⅡジャンセンの肅正を恐れずに生物階に乗り込んで来るような輩が、大人しく説得に応じると思うか？」

「何か、理由があるのよ。やむをえない理由が」

「そんなもんかね」

メファイストフェレスは彼女自身に言い聞かせるようにそう呟いている。ひどく動揺している様子を見て、人間心理学を専門分野にしているためか、情に厚い魔女だなど織図は感じていた。彼女の直向なものの方に対してこちらが疚しく思えてくる。その温情が彼女を迷わせ隙を生む。彼女を戦いに仕向ければ彼女は怪我を負うだろう。彼女に同胞を殺害させてはならない。ついてきてもらったのはあくまでも、織図だけでは心もとなかったからだ。

「お前は死に慣れすぎているわ」

「そりゃ職業柄、そう見えるだけだ」

「じゃあお前の使徒達がお前を裏切ってクーデターを起こしたら、お前は躊躇もなく使徒達を殺せる？ 何か訳があったんじゃないかって、少しでも考えられないの？」

織図はやれやれといったように溜息をついた。彼女は納得がいかず、駄々をこねているだけだ。

「考えるさ。事情があったんだろう。考えて考えて、そして殺す。お前も少しは俺の仕事をわかれ。俺がこれまでどれだけの生かしてやりたかった死者を見送ってきたと思う。それに生物階で破壊活動や殺戮を行っているような奴らを、見逃しておけるのか」

織図がそうやって諭していると、第一目的地のパキスタン北部の村が迫ってきた。織図が経度と緯度を伝え、彼女がマクシミニマで正確な座標をナビゲートする。見えてきた。ふたりとも会話を中断し、体勢を整える。全速で高度2000メートルを飛びながら、織図はXVI von Louisを抜き放った。雲間に突然、巨大な鎌の影が出現する。その大鎌はぬらぬらと青黒い人魂のような光を宿し妖しく研ぎ澄まされている。

黒い聖衣に身を固めた織図と黒いドレスのメファイストフェレスのふたりは急降下しながら、暴動に参加している解階の住民を目視で確認した。村々から火の手が上がっている。山岳地帯の村に住んでいた人々は既に逃げ遅れて惨殺された後だった。死体が飛散して家畜もやられている。本当ならば死と同時に死者達の記憶を使徒に回収させなければならないが、解階の住民達に占拠されたこの状況では無理だ。織図は黒衣の下からPSPサイズの携帯端末を取り出すと、バイタルレベル観測データを神階のEVEからダウンロードした。被害者の人数を把握するためだ。EVEは続々と観測データを排出してくる。その人数のあまりの多さに、織図は沈痛な面持ち

でデータを睨みつけていた。

「メファイストフェレス、この一帯に住まっていた人間達のうち、生存者はゼロだ。家畜も含めてな」

彼女はわなわなと震える。恐怖なのか、怒りなのか、失望なのか、困惑なのか、それらの感情が一緒くたになって、暴徒と化した解階の住民達を見つめている。四つんばいになって燃え盛る民家の間を醜く蠢く、彼等は昆虫のような動きをしている。

狂っている……。

一方の織図は鎌を脇に挟むと折角視力を得た瞳を閉ざし、研ぎ澄まされたいつもの感覚で生命反応を検索した。その数、数百体。少しずつ、にじみ出るように彼等の数は増え続けている。この付近に解階の違法ゲートがあつて、そして彼等の浸出は続いている。一刻も早くゲートを封鎖、破壊し彼等を始末せねば被害は拡大する一方だ。更に今は群れを成している彼等が、もう少し掃討が遅れて各地に散っていったなら、それを一体一体見つけて始末する事はこの上なく困難だ。織図が鎌を振り上げようとして、投降を呼びかける約束だったと思い出してメファイストフェレスを振り返る。彼女の気持ち、無視できない。

「念のため、投降を呼びかけたいか？」

「必要ないわ……正気の沙汰じゃないもの」

「そうか、じゃあ、お前は見るな。目を閉ざしている」

織図はXVI Von Louisのリミッターを外した。まるで長く閉ざされていた重い扉が開くように、死神の大鎌がわななきながら起動する。織図は鎌の刃を指先でざらりと撫でる。死者の書と呼ばれる福音の古代文字が刃の表面を青く現れては消えてゆく。大鎌は人魂が纏わり付いているような青白い光を放ちコマンド待機状態に入った。

”Sentence of Death, initiation.
Area full coverage.”

（死の宣告始動、範囲全適用）

織図は彼女の気持ちの整理がついたようなので、メファイストフ
エレスの肩を抱き彼の身に添わせて彼女の視界を塞いだ。これから
見渡す限りの範囲の生という生が根絶やしにされる。織図が彼女を
抱き寄せたのは、彼に触れていなければメファイストフェレスの命
も奪ってしまうからだ。それほどまでに織図はバイタルの遮断とい
う方法で絶対的な死を齎す。ただし織図の神具は生物階の住民なの
か解階の住民なのかを、見分けてはくれない。人々が全滅していた
おかげで、織図は躊躇なく解階の住民に対してのみその能力を最大
限に行使用することができた。織図の神具、XVI Von Louisは彼のアトモスフィアを受けて厳かに共鳴を始めている。ヴウ
ン、と悪魔の羽音のような起動音が辺り一帯に響き渡り、それは鎮
魂の鐘を鳴らすように緩急をつけて降り注ぐ。死の祝福を受けた者
の額には、青黒い織図の御璽、黒百合紋が浮かび上がる。誰もその
祝福から逃れる事はできない。その共鳴音に身体の不自由を奪われ、
解階の住民達は天から断罪を下す死神の姿を見上げた。

”Count Down, 3, 2, 1……and pass
ed away”

（秒読 3, 2, 1……そして――）

カウントを終えた途端に、解階の住民達の断末魔の咆哮が消え、
物体となった彼等がバタバタと倒れた音が聞こえ、その後は一切聞
こえなくなった。何もかもがいつも簡単に終わってしまい、織図は
また元のように神具のリミッターを差込んだ。

” Rejoice
(安かれ)

織図は指先で二つの動作を伴う彼の聖印を切り、救われる事のない死者達に黙祷を捧げると、離れようとしなないメファイストフェレスを抱きかかえたまま、災厄の村に降り立った。火災はいずれ鎮火するだろう。メファイストフェレスは事切れた解階の住民に近づき、彼女は彼らの目をそっと閉ざしてやった。織図は織図で首にぶら下げていたメモリースティックのようなものを人々に向けて、集められるだけの死者の記憶を回収する。脳を割られて記憶が回収できない者は、残念ながらEVEに迎える事は出来ない。織図はあまりの死者の多さに閉口して、全員の記憶は諦め、残りを回収させるために彼の使徒を呼び付けた。彼女は人々も解階の住民達にも分け隔てなく、ひとりひとりの亡骸の前で手を合わせた。

織図は周囲の状況を調べながら、それ以上は解階の住民が侵入してこないのを確認した。ここにはもうアウトプットゲートはないようだ。法務局から詳細な続報が送られてくる。ゲートのタイプはアウトプット・ランダムゲートと呼ばれるものようだ。つまり入口は一つだがアウトプットゲートの場所がころころ変わって特定できないタイプのものだそうだ。解階の住民の現れる場所を虱潰しに捜してゆくしかない。

「次だ、トルコに急ぐぞ」

彼の呼び掛けに、メファイストフェレスもふらふらと立ち上がったが、足がくじけてすぐに崩れ落ちる。

織図は彼女の異変を察した。精神的にやられているのだろうか。織図より随分年上だが、やはりこういう部分は女だな、と彼は思った。

「妾はね、誰かを殺した事がないの。それだけが自慢だったのに」

「お前が殺ったんじゃないだろ。俺がやったんだ」

「でも、止めなかった」

「じゃあ殺さずにお前のお仲間が助かったと思うか？」

織図は苛立ったように問い質す。彼女は力なく首を振った。

「思わない」

「分かったら次に行くぞ、こうしている間にも、誰かが死んでるんだ。ほらしっかりしろ」

織図は彼女をここに置いて行くわけにはいけないので、肩を貸して負った。足手まといにはなりたくないと思いながらも、彼女は織図の肩に顎を載せて、そのまま動く事ができなかった。えらく落ち込んだものだな、と織図は思ったが、彼女をおぶったまま舞い上がった。メファイストフェレスは胸が裂けてしまいそうに苦しく、ズキズキと全身がひどく痛む。これは心の痛みなのか身体の痛みなのかもはやわからない。彼女は喘ぎながら、織図にしがみつく事しか出来ない。ビクン、と彼女の腕が脈うった。

「お、織図……か、身体が」

織図はああ？　と言いながら振り向いた。彼女の息はか細くゼイゼイと苦しそうだ。

「なんだ？　ひきつけか？」

「か、身体が動かない、の」

織図の携帯に、またあの忌ま忌ましい着信音が届けられた。今は一つでも情報が欲しい彼は急いでメールを開く。不法侵入者は、未知の病原体に感染している、神への感染はないようだが、留意せよ。文面はそれだけだった。

「まさか、メファイストフェレス！」

感染させてしまった……織図はガタガタと悪寒に苛まれる彼女を見て、解階の住民達に接触させて感染させてしまったのだと勘付い

た。法務局もそれ早く言ってくれよ、と恨み言を思う前に、織図はまた急降下をして先ほどの場所に降り立った。彼女は織図の腕の中で、遺言のような言葉を残した。狂った同胞達と同じ運命が、彼女を待っているのだとしたら……。

「織図……妾があんな風になって、何もかも忘れてしまったら……殺して。父の事も、主の事も、お前達の事も忘れてしまったら……さっきみたいに、殺し……」

織図は遺言を残すメファイストフェレスのこめかみに、メモリースティックを当てて記憶を回収した。彼女が正気を保っているうちに、正常な記憶を保管しておこうと思ったからだ。メファイストフェレスは解階の住民でありEVEに入る事はできないというのに……織図は迷わずそうした。次第に生彩を失ってゆく彼女の大きな黒い瞳……織図は彼女を柔らかな草地にそっと寝かせつけ、どうするべきか思案を巡らせた。発狂した彼女とともに戦おうものなら織図が殺されてしまう。檻の中に閉じ込めてしまえばよいのだろうか、そんなものもないし、彼女の腕力なら相当に頑強な檻が必要だ。何とか助けてやりたいが一度発狂すれば織図は彼女を殺すしかない。彼は目を背けながらXVI Von Louisの刃を彼女の首筋に宛てた。メファイストフェレスは安心したように首を伸ばして死を受け止めるが、織図はなかなか鎌を振り下ろす事が出来ないでいる。目が見えるようになるのも、いい事ばかりじゃないな、と彼は思った。なかなか殺せない織図に、メファイストフェレスは憎まれ口を叩く。

「ど……うしたの……さっきは偉そうな事言ってたのに。考えて、考えて……そして殺すって……言ったじゃない」

織図はXVI Von Louisの斬頭台の上にメファイストフェレスの首を載せ、青黒く輝く刃の部分を撫でた。蛍光色の古代文字が応答する。

”The endless moments of death
candidate”

（永続する瀕死者の瞬間）

織図はやや言葉につまっていたが、先ほどとは異なるコマンドを彼女に与え、その大鎌の刃を彼女の首めがけて落とした。その瞬間、刃は透明に透けて彼女の首をすり抜けてガツンとストップパーに当たって振り切れた。彼女の首には傷ひとつついていないが、大きな黒い瞳を見開き、苦しげに悶え始めた。織図は彼女を瀕死の状態にし、継続する苦痛を与えたのだ。このコマンドは体内時間を絶対不変のものとする代わりに、死の今際を不断に体験させ続ける。彼女は殺された方がましだと思われるような恐怖と苦痛の瞬間を体験し続けている。だが彼女の感染と侵食はそれ以上進まない。

「メファイストフェレス、お前には死の安息を与えない。苦しめ……だが、」

絶対に死なせないからな、と語りかけながら、織図は悶え苦しむ彼女を抱え起こした。彼女に感染した病原体が、同じDNAワールドの生物階の住民達にも感染しなければよいと願う。他の地区は梶に電話をかけ彼に任せようと思った。他の地区に飛んではメファイストフェレスが助からない上に彼女を苦しめてしまうからだ。

織図は一か八か、上島医院に保管してあるユージーンの治療血で、彼女の感染が癒されるかやってみようと思った。感染症の一種だとすれば、彼女を苦しめてでも試す価値はあった。ユージーンをおだてる訳ではないが、ユージーンの治療血は神々の持つ治療血のうちでも極上の逸品として知られており、歩く万能薬との異名を持つほど、ありとあらゆる病を癒してきた。それに彼女だって、織図よりユージーンに助けてもらいたいと願うだろう。携帯の届かないユー

ジーンを解階から呼び戻す事はできない以上、これで助からなければ残念ながら誰にも助けられない。

＊

死の確率を操る禁断の黒いダイス、8個のデス・プロパビリティを懐におさめた梶は、ゴーストタウンと化した街の一角で、携帯に法務局からのメールではない着信が入ったのに気付いた。梶は人間、解階の住民双方に生存者がいないか、街中を歩いて見て回っていたところだった。彼は逃げ遅れた人間の死体を跨ぎ、ヘリコプターの音を聞いた。どうやら住民達の話聞いて国軍か警察が派遣されてきたようだ。梶もずらからなければ面倒な事になる。一つの街が破壊されたこの惨禍を、さすがに人間社会に隠しきれないな、と梶は思った。神階に戻ったら、生物階の大異変に対するため陰陽階の全神の集う大議院が召集されるだろう。厄介なことになっている、梶はそう自らに言い聞かせながら携帯を取った。

「何だ？ 継嗣か。どうした」

『奎吾さん、そっちはもう片付いてるだろ』

「まあな」

梶の周囲を取り巻くように、同心円状に解階の住民達の死灰が取り巻いている。梶は無感傷にそれらを見渡した。梶の革靴の裏についた薄汚れた灰は風にさらわれてゆく。

『応援を頼みたいんだ、トルコとポーランドに行ってくれないか』

「おいおい、死神はものの3秒で始末できる筈だろ。殺戮にかけては俺よりよほど一流だぜ、なあ」

『用が出来たんだ、頼む』

生死の情報を的確に把握する織図が対処した方が、本当は効率がよいし早いのだが、梶に仕事を押し付けてくる。梶は織図に仕事を押し付けた事はあったが、織図が梶に仕事を押し付けてきた事など

なかった。織図には何か、考えがあるのかもしれないな、そう思いながら梶はにやりと微笑み、メントールの煙草に火をつけた。

「その野暮用ってのが、この現状を打開できるもんだと願いたいからね。長きを生きてきたが、こんな異常事態は初めてだ」

『やってみる価値はある』

「そうか、なら後は任せろ。構わんよ。早くしねーと、住民が全滅しちまうからなあ」

『いや、全滅した方がいいかもしれない』

「おいおい、物騒だな」

『解階の住民と生物階の生物の生体構造は似通っている、人間に感染しないという保障はないだろ、こっちの住民は全滅していたから、逆に助かった……そっちはどうだ』

織図の言葉に、梶は息を飲んだ。先ほど住民を隣町に避難させてやったばかりだ。感染した彼等が、隣町に感染を拡大しただけだというのなら……。

「へ、鋭いな継嗣。お前の言うとおりだ。他の二箇所はしくじらないようにするさ、だがこうなると、感染を防ぐための特效薬を期待するしかなさそうだな」

死灰の降りかかった青い頭の灰を払うように掻きながら、ヘリコプターから特殊部隊が着陸する頃には、灰の上に転々と残された梶の足跡は、どこへともなくぷつぷつりと途絶えていた。

＊

比企は彼の執務室から繋がる亜空間内に建設された、ガラス製の大温室の中にいた。

比企が薬神であった時期に建設された空中庭園ともいえる大温室の内部では、比企の手によって薬草やハーブ類が栽培されている。比企は薬神を廃した後も、このシークレットガーデンの入り口を比企の陽階の新たな執務室に繋げて、陽階には内密に維持していた。

天蓋から降り注ぐまぶしい擬似陽光を受けて、温室内部に立ち上げた有機化学実験室のデスクで、有用な植物から新たな薬剤を密かに創出しつつ、瞑想をするのが日課となっていた。

生ぬるい午後の日差しが木々の間から澱みながら比企の白髪を透明にしていた。比企は午前中の会議が中止になったので聖衣である和服を脱いで私服のデニムとシャツだけになって寛いでいたが、彼だけの秘密の空中庭園を侵し薬草の森を掻き分けて、誰かが侵入して来た事に気付いた。デスクの上に臥していた比企は振り返りもせず、侵入者の名を言い当てた。

「レディラムⅡアンリニアか」

「ご名答、邪魔しますぜ」

比企は振り返り、古びた白いベンチにかけるよう勧めた。レディラムは白いローブの裾を引きずりながら、白魔術師のような聖衣でやってきた。神具、オプティカル・アイは神体の構造を光子にまで励起するため、疲労が激しく装用した反動で睡魔が襲ってくる。普段はすぐに睡眠を必要とするのだが、彼は珍しく執務室に帰って爆睡することもなく、力を振り絞って比企の執務室にそのままやってきた。レディラムは見たこともない新種の薬草ばかりがずらりと植えられて、こまめに手をかけて育てられている様子に感心しながら眠たげな目を擦った。片目だけが充血しているので、比企は彼が珍しく神具を使用したのだとすぐに気付いた。たった一度の装用で、アトモスフィアも殆ど失っている。

「薬神を廃した後も、薬剤研究を？」

「あまり公になると困るんだがな、嗜む程度にだ。何か用が？」

「解階の住民が、生物階に侵略を始めとります。たまたま生物階に降下していた陰階の梶さん、織図さんと共に俺の担当の区域は掃討してきましたが……未知の病原体に侵され、発狂していました。可

哀相なことをしました」

レディラムはベンチの上に小さくしゃがんで、肩を小さくすぼめてぼそりとそう言った。こじんまりとなったレディラムを、比企は冷ややかに見遣る。レディラムは極陽派の神だった、それが派閥争いなど関係もなく比企を頼りにしてきたのだ。レディラムは比企を訪問する前に、現代の薬神にも会ってサンプルを渡してきた。だがそれだけでは不安だった、現代の薬神は忠実に任務をこなしてはいるが、比企の頭脳の冴えには及ばない。元薬神であった彼は、何か光明を見出してくれないか。身内で争っている場合ではなかった。これほどの事件を聞かされても比企が特にリアクションを示さないので、レディラムはコバルトブルーの瞳を僅かに丸くして口を突き出した。

比企は荻号に見せた激情とは対照的に、他神には殆ど感情を見せない、物静かで穏やかな神だ。比企の精神力は簡単に揺らぐものではない、だがこうしてはいられないと腰を浮かしていた。事態は動き始めた、静かに、だがゆっくりと確実に。

「比企さん、解階の門からの情報によると、ユージーンの治療血が解階の感染者をたったひとりだけ癒したそうです。しかし、数百m1もの処方が必要でした。特效薬とするにはユージーンの血だけではとても足りません」

比企はレディラムからひょいっと放り投げられたバイアルを、パシッと受け取った。

陽階神ならば誰でも持っているサンプル採取用のバイアルの中には肉片が詰め込まれている。感染していた解階の住民の指先だ。比企は肉片の入ったバイアルを、カラカラと振って中身を観察した。

「感染した肉片が入っています。神には感染しません……これは……DNAを持つ生物に感染を続けるそうです。つまり、解階の住民

のみならず、人間にも」

比企は中身をピンセットでつまみ出し、シャーレに載せてメスで小さく切り刻み薬剤をかけると、細胞は一個一個ばらばらにほぐれた。手馴れた動作で細胞を一つ一つ別のサンプルチューブに移し取ると、ディープフリーザーという超低温冷凍庫から研究用に治癒血のストックを分注した小さなチューブを、5本ほど解凍した。チューブの中には、全て異なる治癒血が一滴ずつ入っている。

比企はそれをピペットで取りわけ、細胞と反応させた。比企は一度に5本の試験管を振る。細胞を浮かべたピンク色の指示薬が、1本だけ青く変色した。ユージーンの血液と反応させた細胞の入った試験管である。この指示薬が青へ変色したということは、細胞が正常に戻ったという事を示している。5柱の神々の治癒血のうち、ユージーンのものだけが効果を持っていた。

彼は効果を確認するため、プレパラートに載せて温室の天上まで届くほどに巨大な、電子顕微鏡のステージにセットした。比企がパチンと指を鳴らすと、擬似陽光の光が落ちて、顕微鏡で観察できる暗黒の環境になった。レバーを操作し、倍率を変え、スリットを変えて観察を続けていた比企の傍らで、レディラムは暗闇に眠気を増幅されていた。

「癒されている」

「噂には聞いていましたが、ユージーンは凄い奴なんですね」

「治癒血を、合成しろというのか……不可能だ……」

比企は苦々しそうに吐き棄てた。比企は傍らにあったパソコンを起動し、ハードディスクの奥に眠っていた隠しフォルダを解凍した。荻号 要、ジーザスⅡクライストら治癒血を持つ神々、そして最高の治癒能力を持つユージーンⅡマズローの治癒血の成分の記録されたフォルダをクリックする。ファイルが解凍され、治癒血の組成一覧がずらりとリストアップされた。治癒血を構成している化合物の

立体構造が一つ一つ表示され、黒いバックグラウンドに360度の回転をしながら表示されている。

比企はキーボードでコマンドを入力し、ユージーンの治療血の組成と他の神々の持つ治療血との共通点を捜す。ユージーンの治療血の成分のうち、ピコン、ピコンと赤い明滅をはじめた化合物が、他の治療血にも共通して含まれている成分だ。治療血の組成は、他の神々の間でそれほど相違はない。ユージーンだけが持っていて他の神々の持たない成分こそが、ユージーンの治療血の治療能力の高さの秘密であり、特効成分だ。比企はまずそれを突き止めなくてはならないと思ったのだ。

検索にかけられた成分の共通点を示す赤い点滅が、徐々に増えてゆく。検索状況 85、86、87%……過去3000年分の治療血を持つ、54柱の成分が照会され解析されている。

検索完了とともにリストアップされた化合物は、たったの24種類にまで絞り込まれた。これを合成する事ができれば、あるいは……比企はそれらの構造式を瞼の裏に焼き付け、瞳を閉ざした。

「この化合物は、神階では永遠に合成できない」
遂に力尽きて眠りこけたレディラムを大温室の中に置き去りにして、比企は静かに去っていった。

＊

織図はメファイストフェレスを大切そうに抱えたまま、無人のJR風岳駅のホームに降り立った。織図が視力を回復して目にした風岳村の風景はホームから見える景色だけなので、気は逸るが直接上島医院へは瞬間移動ができなかったのだ。織図はそこに現れるなり、ホームの白線を蹴って疾風のように上島医院の方角へと跳んだ。腕の中のメファイストフェレスは死の今際の瞬間を体験し続けてもがき苦しんでいるが、気丈にも声を殺している。彼女は決して弱音を

吐かない強い女だ。楽にできるものなら、早く楽にしてやりたかった。

＊

世界同時5箇所で発生した暴動を、人間社会も無視する事はできなかった。第一報は各国政府により事実が隠匿され、世界同時多発テロと報じられていたが、民間のジャーナリスト達の突撃取材により情報統制が破れ、続報でそのテロが人間以外の者によって行われたのだと報じられた瞬間、民放各局は全ての番組を打ち切って特番を報道した。

新聞は号外が出、街行く人々は戦慄した。

宇宙人や未確認生物の襲来か、などとオカルトじみたテロップが踊る。もっともらしいコメントを垂れるコメンテーターや各界の専門家達。解階の住民達によって撒き散らされている、未知の病原体の恐怖も既に報じられている。しかし人類は未知の恐怖との邂逅を果たしたと同時に、人類に救いの手を差し伸べてくれたある存在をも知る事となった。

梶の勇姿は複数の人々に目撃され、カメラにも鮮明に撮影されていた。空色の髪の子は空を自在に駆け回り、小さなサイコロのような飛翔物体を駆り、暴徒と化した未確認生物を薙ぎ倒し、人々を守ってくれたのだと……。梶の活躍は誇張されて報道されたが、たった一人では世界を救うヒーローというには心もとなかった。暴徒と化した侵略者達よりなお怖ろしいのは、彼等の撒き散らした未知の病原体だった。それらは人間のみならず家畜やありとあらゆる生物に感染し、発狂させる。

集団ヒステリーの一種なのではという声も上がった。感染者の細胞からウイルス等やの病原体が検出できず、密室に隔離しても密室

外の人間に感染したからだ。まだ死亡者は出ていないが、発狂した人々の行く末は知れなかった。感染した人々は凶暴化し異常行動を取るばかりだが、摂食本能を忘れてしまっている以上餓死してしまう可能性が高かった。そしてどんなに物理的に防護しても周囲の人間に感染してしまうため、医療関係者も手の施しようがなく治療は極めて困難だそうだ。

恒はその様子を、ただニュースで見守るほかなかった。

日本政府は全国民に外出を差し控えるよう通達を出し、海外渡航禁止令が発令された。

そこで先ほど朱音から連絡があって、日曜日の海水浴はこの一件により両親が許してくれないので中止にしようと言った。彼女はがつかりしたようだが、恒はとても海水浴をするような気分ではなかった。狂った解階の住民が違法ゲートを使って、日本に来ないとも限らない。この地球上に安全な場所などどこにもないのだ。GLーネットワークで神階の動向も確認しながらGLーネットワークで見ているが、GLーネットワークは解階の住民の侵入を報じただけで、情報は解階の門任せになっている。現在生物階に降下している神々の情報はリアルタイムでサイトに掲示されている。ニュースでしきりに報じられているヒーロー、空色の髪の男が梶 奎吾だということぐらい、プロフィールを調べた恒にはすぐに分かった。ちなみにレディラムⅡアンリニアも梶も神階に戻ったらしく、現在生物階に降下している神は織図とユージーンのみとなっている。

神階は何ら対策を立てられずにいるのかと、恒は歯がゆい思いで頼杖をつく。アルティメイト・オブ・ノーボディの示した崩壊する世界が現実のものとなりつつあるというのに、恒には何もできない。頼みの綱のユージーンは何をやっているのだろう。彼は彼で修羅場なのだろうが、ここのとこりいつも留守をされていて肝心な時に傍にいてくれない。

ニュースに釘付けで画面にかじりついてた恒はガバツと起き上がり、背後を振り返った。背後には志帆梨がいて、夕食を準備し、お茶を煎れていた。志帆梨を振り返ったのではない、風岳村に織図の気配が現れたのを感じたのだ。メファイストフェレスの気配も一緒だが、彼女の気配は極端に乱れている。藤堂家や社務所を素通りして、上島医院に向かっているところをみるとメファイストフェレスが怪我をしたのだ、と恒は思った。しかもかなりの重症だと覗える、上島医院に向かった理由はひとつ、ユージーンの治療血をもらうためだろう。

そう思って恒はたと気付いた。感染地区の解階の住民の掃討を任されていた織図とメファイストフェレスは、解階の住民達の持つ感染源に触れただろう。そして解階の住民であるメファイストフェレスに感染したのではないか。織図は慌てて上島医院に彼女を搬送しユージーンの治療血を投与しようとしているのだろうか。

恒は駆けつけたかったが、人間にも感染するとニュースでは報じられていたので我慢をするしかなかった。恒は神であると同時に人間でもある。神と人の狭間にある彼の身はどちらの形質が強いのか、感染しない可能性はどれくらいかなどと考える以前に不用意に駆けつけるべきではないと考えた。恒が志帆梨に肩を叩かれて麦茶をもらった時、玄関のインターホンが鳴った。

こんばんはー、と聞き覚えのある声がする。空山が予め突き止めていた藤堂家に乗り込んできたのだ。恒と志帆梨は午後8時半の来客に顔を見合わせ、出迎えようとする志帆梨を制して仕方なく玄関を開けてやると、空山は腕を掴んで外に引っ張りだし、恒は裸足のまま玄関の外に連れ出される。

「ちょっとー、ニュース見てる？ あれ誰の仕業?! 変な病原体

ばらまくとか聞いてないしー、オリトって神様からはメールの返事こないし。神様達やることえげつくないしー？ 神様のくせしてさー」

どうやら空山はニュースを見て居ても立ってもいられず早瀬達を目を盗んで旅館から脱走し、藤堂家にやってきたようだ。恒はしがみ付く空山の腕を振り払って抗議した。

「俺達がやってるんじゃないですよ！」

空山は怪しいなーと頬をふくらませた。誰が来たのかと玄関先に出てきた志帆梨を居間に追い戻し、恒は軒先に腰を下ろした空山を見下ろした。空山は派手な赤いプラスチックのうちわを持ってふーふー言いながら煽いでいる、ここまで走ってやってきたようだ。

「それより空山さん、一人で来たんですか」

「そうだよ」

恒は家の鶏小屋と畑の茂みの向こうに目を凝らした。暗闇の向こうに見える人影、やはりだ。彼女はうまく旅館を抜け出したつもりのようにだが、ハーメルンの笛吹き女のようにごっそりと研究員を引き連れてきている。彼らは恒に見つかってごそごそと出てきた。

「もー！ 空山さん！ 何やってるんですか！ つけられるって分かってたでしょー！？」

「マジ！」

空山は予想だにしていなかったのか、目を丸くしている。早瀬らはニュースに集中していて、空山のことなど見ていないと思ったので出てきたのだが……。どうやら早瀬の方が一枚上手だったようだ。

「おい、空山。これはどういう事だ」

「もういいですよ。どちらにしても織図さんが本当の事を伝える予定だったんですから。俺はあなたがたが探していた主の一人です」

恒は若干開き直り気味に早瀬らの前にずいっと進み出た。

早瀬は言葉を失い、ただの少年のようにしか見えない彼を見下ろす。空山が後ろから恒の両肩を叩いて早瀬に紹介している。ヴィブレ・スミスの生物階不可侵政策が生きていて、神の存在を公に明らかにすることは禁じられているが、恒はまだ陽階神として登録されておらずそもそも神として見なされていない。加えて梶の姿が公になっているこの事態では、神の存在を隠しきれぬ段階ではない。恒はこの行為が法務局の処罰適用にならない事を祈りながら、早瀬に事実を告げた。

「こーんなちっちゃくても一応神様なんですって！　ねーっ！」

「俺、空山さんより背高いんですけど」

「とても信じられんが、天使が実在するんだ。神という名の生物という意味でいいのか？」

早瀬らは互いに顔を見合わせて怪訝そうな顔をしていた。恒は彼等がむしろ科学者であって話がわかる人物達でよかったと胸をなでおろす。恒もユージンとの出会い頭にそうしてしまった身で言えた事ではないが、騒ぎ立てられて怯えられるのは正直迷惑でしかない。

「そうです」

「今回の事件は、君らがやったのか？」

「そうなら話が早くていいんですが、違います」

「空色の髪の男は、神のひとりなんだな。空を飛んだ」

空山は恒も空を飛べるのだと、得意げに同僚達に言って回っていた。

リスのようにちょこまかと動き回る空山の首根っこを、早瀬はしっかりと捕まえながら恒の話に耳を傾ける。恒はひとまず織図もない中で、研究員達と全面対決にだけはならないようだと安堵していた。研究員達は恒に対して、そうは言っても子供だという安心感

が心の片隅にはあったようだ。織図が出ていたのではかえって警戒されてしまったかもしれない。

「ええ。しかし神々は今回の件に関して、どうすればよいのか方針を示せずにいるようです」

「いるようですって、君も仲間なんだろう？」

「俺はほんのはしくれでしかありませんので。今回のニュースに関して、何か分かることはありませんか？ 神々と対立し潰しあっても今は何のメリット也没有ありません。共に立ち向かいましょう。あなたがたの知恵を貸してください」

「ふむ……受け入れがたいが一理ある」

早瀬ら研究員達も、今は神々という名の地球外生命体と争っても仕方がないと考えたようだ。神々と人類の共生は長い時間をかけてゆつくりと話し合う事が重要だ、ひとまず議論すべきではない。どれだけ議論を尽くしても紛糾してしまうし答えなど出るはずがない。人々と神々の歴史は数千年も以前に遡る、人類の歴史を神々がコントロールしてきたと知れば、それがいかな反発を招くか想像も出来ない。今は同じ脅威に対して手を組み、立ち向かうべきだ。その後の議論は野となれ山となれだ、と恒は思った。三年後どころか今の瞬間ですらも、人類は滅亡の危機に瀕しているのだろうか。

「一緒に考える事といえば……。例えば感染源は何か、とかー？ ウイルスでも病原体でも電磁波とかの類でもないわけでしょ？」

空山が早瀬に首根っこを掴まれながらも、話の方向性を神々の問題からそらすために核心をつく問題を提示した。恒は空山の配慮に感謝した。

「そうです！ やはりウイルスのようなものではないのでしょうか、特定できないだけで……」

早瀬は薄暗い外灯に照らされた藤堂家の表札を見て、次にゆつくりと恒を見下ろした。自身も子供を持つ早瀬は、恒を人間らしく名

前で呼んでやりたいと思った。

「藤堂君と言うのかな、君は。私は早瀬だ」

「藤堂 恒と言います、よろしく、早瀬さん」

「ときに藤堂君はアポトーシス (Apoptosis) という現象を、知っているか？」

思いがけない用語が出てきて、恒は一瞬理解できず、顎を前に突き出して尋ね返した。アポトーシスとは多細胞生物の体を構成する細胞の死の様式で、個体をより良い状態に保つために積極的に引き起こされる、管理・調節されプログラムされた細胞の自殺のことだ。生体に必要ななくなった細胞は様々な死のシグナルを受け取り、積極的に自殺を引き起こす。思わず尋ね返したが、分子生物学をかじった事もある恒が知らないわけではない。

「え？ はい。生体の恒常性を維持するためにプログラムされた細胞の自殺ですけど、それが何か」

「私は今回の感染源は、ウイルスや病原体ではないと思うんだ。隔離患者からも感染するんだ、おかしいと思わないか？ この感染はプログラムされているんじゃないかな、私達のDNAに……そしてデスリガンド（死の供与体）を、デスレセプター（死の受容体）が受け取っている。こうは考えられないか？」

荒唐無稽な仮説とも取れる早瀬の言葉は、熱帯夜の空気の中で氷のような冷たさとそら怖ろしさを孕んでいた。この感染は、DNAを持つ生物の中に刷り込まれている。太古の昔から、連綿と受け継がれてきた遺伝情報の中に見えない爆弾がひっそりと仕掛けられていたのだとしたら――。

＊

織図は上島医院の住居部分の、上島の書齋に現れた。院長 上島肇は午後の回診を終えて、カルテを整理していたところだった。

基子は上島が死に掛けた一件以来また倒れないかと不安らしく、書齋の中にモニターをつけて常時監視しているが、そのモニターをさえるような角度から覗き込む、女を抱えた黒人の大男の突然の出現に、上島は口をあんどりと開けて鼈甲の眼鏡を上げた。

「上島 肇だな。お前には貸しがある、脳溢血で死ぬところを見逃してやったんだぜ、貸しをチャラにしてもらいに来た」

「私は確か、恒君とユージン様にお助けいただいたと記憶しておりますが」

上島は何も尋ねなかったが、彼が死神だろうという事は会話の内容といでたちを見ればすぐに分かった。彼はフードつきの黒いローブを着て、一風変わった形の大鎌を持っている。ユージンの仲間の神というところだろう。

「俺が恒を焚きつけて寄越したんだ。間接的に貸しがあるだろ」

「それはそれは、勿論です。その節はお世話になりました。して、急患ですか。その御仁は随分苦しんでおいでですが」

「この女に、ユージンの血を点滴してやってくれ。お前がお前の妻にしてもらったようにだ」

盲目であつた織図は、外科医である荻号や内科医であるユージンのように医師免許を取得していなかった。医師免許の取得は公務員試験でも必須ではないから、大半の神々は医師の資格がなく、神具による治療以外に医療行為が出来ない。織図が不用意にメファイストフェレスに針を打って、点滴を漏らすわけにはいかない。事態は一刻を争う、妻の基子にも誰にも頼めない、上島の助けが必要だ。

「何のご病気で？」

「何のご病気か解らないから奴の血を当てにしてるんだ」

「少々お待ちください、看護師を呼びましょう」

「いや、お前がやってくれ。この病は感染する、ユージーンの血を受けたお前には既に免疫がついている。他の人間に感染させるな」

「ひよっとして、ニュース報道されている病原体ですか？ 遂に日本にも感染者が」

上島は書斎で付けっぱなしにしていたラジオのボリュームを上げた。感染し続ける未知の病原体の脅威が報じられ、各地からニュースセンターに続々と情報が集まっている。まだ日本国内の感染は確認されていないと厚生省は発表しているが、感染した患者が国内に入るのは時間の問題だろうと上島は思っていたところだった。織図は事情を話す労力を惜しんで、適当に相槌をうつ。こうしている間にも、メファイストフェレスは織図の腕の中で声を殺して悶え苦しんでいるのだから。

「そういうことだ」

「やってみましょう、ところでこの御仁は生物学的な意味において人ですか？ それとも神様ですか？」

「人間じゃないが、身体の作りは人とそう変わらんだろう。ただ人より進化し発達しているだけだ」

彼女は書斎のソファに寝かせつけられ、妙な汗をかきながら顔を引き攣らせているが気丈にも耐えている。上島は彼女が何に感染しているのか分からない。感染症だというのに発熱もしていないし、これに似た症状が思いつかない。何だ、彼女は一体何に感染している？

「感染源は何なのでしょ」

「さあ、何だろうな。念のためこの病院にいる奴は全員、ユージーンの血で予防接種をした方がいいかもしれん」

上島は処置室にあった普通の輸血セットに例の秘密の冷蔵庫から出してきたユージーンの血液を書斎に運び込んで充填し、彼女の腕

の脈から少しずつ輸血をはじめた。彼女はもう今にも力尽きそうになっていたが、そのうち沈静して眠りについた。上島は眠った彼女の黒いドレスとコルセットを脱がせ、楽な服を着せ付けるついでに、デイスポーザブルの手袋をして彼女を診察する。医者である上島も息をのみ、触れるのに躊躇してしまふほど彼女の肢体はしなやかで美しかった。織図はメファイストフェレスに与えていたコマンドを解除して経過観察をしたが、彼女が再び発狂する事はなさそうだ。

「効いたのか？ さすが歩く万能薬と言われるだけある。何ミリリットルで効果が出ただろう？」

「300ccほどでしょうか。特効薬ですね」

「ユージーンの血は何リットルあるんだ？」

「48リットルです」

「全っ然足らんな。感染者は400人以上いるって話だ」

「……いえ、神様。どうやらその10倍です」

上島は焦点の定まらない視線を織図に向けたままふると首を振った。ラジオから繰り返し聞こえてくるニュース、その推定感染者数は4200人を上回るといふ。何という驚異的なスピードで感染しているのだろう。織図は忌々しそうに、古びたラジオをにらみつけた。

「パンドラの箱が、開きやがったな……」

＊

比企はユージーンの治療血の特効成分と思しき24種類の化合物の構造式と合成方法を詳細に記載した論文を僅かな時間で書き上げると、彼の使徒に封筒を託し、世界中の新聞社に送りつけるように命じた。論文形式をとるからには、しかるべき権威のある科学雑誌に

投稿すべきだが、掲載までに数ヶ月もの時間がかかる。

世界中の化学者達が手にとってじっくりと見る事ができる媒体といえば、テレビやネットなどより新聞が効果的だ。これらの特殊な化合物は、神階の環境では合成できない。生物階の変化に富んだ環境でこそ合成することができる。そして神階の比企や薬神だけでは、そもそも実験をするには手も施設も足りない。構造式だけを丸投げして無責任かもしれないが、人間の化学者の力を借りるほかないのだ。数ページの匿名著者の論文によって神の手から人間の手に、希望のバトンは手渡された。

生物階に赴任している比企の使徒達が論文を新聞社へ直接彼等の手で配達してから数時間後、号外の新聞にこんな見出しが最大のフオントで印刷されていた。

” 未曾有の感染症に対する特効成分が明らかに ”

世界中の化学者、薬学者が24の化合物の構造式を見て、驚愕した。こんなものが、合成できるものか……この構造は、地球上には存在しない。著者も知れぬ匿名のこの論文を、信じるか、否か――。

＊

築地は珍しく、朝一番で研究室のドアを開けた。

一番乗りだと思っていたのに、向いの教授室には明かりが点っている。こりゃ、徹夜組だな、と築地は感心する。松林の赤いハブラシが所定の場所にないので、彼女も教授と一緒にのだろう。築地は届いたばかりの朝刊を持って、教授室のドアをノックしようとして突然ドアが開き、いつものように中に引きずり込まれてしまった。相模原と松林は、松林の買った高級エスプレッソマシンで煎れたコーヒーを手に手に、新聞の一面を広げていた。やはり彼等は新聞

を読んでいたのだなど、築地は教授室のテーブルの空いた席に腰掛けた。

「教授、この化合物って俺達が今同定してるやつですよ！ 二つですけど、全く構造が同じものが」

「先を越されたな、築地君。上島君に確認したが、他の研究室には分与していないそうだよ。とすれば、その血を持つ神様本人がこの組成を発表したんじゃないか？」

松林は築地に今煎れたばかりのコーヒーを譲って、コーヒー豆をひき、もう一杯分のコーヒーのおかわりを作りはじめた。築地はコーヒーを飲んでから、教授に泣きついた。

「神様本人でも何でも、先にやられちゃったら、俺の修了がー！」

「築地君、でも新聞には今回の病原体に対する特効成分24種と書いてあるわ。これが全てじゃないのよ。でもどうして、同定しているのに合成しないのかしら。この記事を送りつけてきた人は、成分は教えるから頑張って合成して特効薬として役立ててくれみたいな事書いてるし」

真空パックに詰めていた豆をゴリゴリと挽きながら、松林は漂うコーヒーの香ばしい香りにうっとり鼻をひくひくさせている。

「投稿してきたのは分析屋で、合成はできないんじゃないか？ 大体、このめっちゃめっちゃな構造をどうやって合成する」

「本当は合成するより神様本人の造血細胞なんかがあればいいんじゃないけど」

松林の発想は多少倫理的に間違っているが、いつも目標に対して最短距離を走るように的確だった。一番早いのは海のものとも山のものともつかないような化合物を合成するより、神の造血細胞をクローン化して血液を大量生産するクローン技術だ。最低でも数週間にかかるかもしれないが、確実だった。

「上島君は神様の血だと認めていないんだから、本人に出て来てもらうも何もないだろう。いいか、この化合物が本当に薬効を持つているという事は、我が大坂大学錯体研究室しか知りえない事なんだ。それは何故だね、松林君」

「はい、この記事には、エビデンスがありません。効果を実証する結果が載せられていないからです。どうやって効果を確信したのか明らかにされていないので、世界中の研究者はこの記事を信用できません。この記事の著者はデタラメを書いているか、もしくは感染源をばらまいた張本人ではないかと普通は考えるでしょうね」

松林はパンパン、と新聞の一面を指先ではじいた。それを聞いた相模原は大げさに手を叩く、どうやら徹夜明けでナチュラルハイになってしまっているらしい。こんな時の教授は、築地などよりずっと精神年齢が若いに違いない。

「エークセレント！ さすが松林君」

「当然のことを言っただけです」

松林はつんとすまして眼鏡をかけなおすだけの、冷静でつれないリアクションだ。築地も教授の後に慌てて拍手をして松林をおだてた。

「じゃあ教授、俺達がこの化合物を合成するはめに？」

「そうだ、大坂大学が世界を救う、なーんて事になるんだぞ」

築地は感染者達には悪いが、自らの研究を役立てて世界を救いたいなどこれっぽちも考えた事がなかった。そもそも医療で社会に貢献したいなどと思うような殊勝な考えの人間は、はなから理学研究科になど来ないと築地は思うのだ。未知の病原体の克服よりも何よりも彼の関心事は大学院修了のみ、全ての話はそれからだった。面倒な話はお断りだ。

「俺らだけじゃ絶対無理ですよー。うちには純粋な合成屋って、松

林先生と長瀬しかないじゃないですか」

「まあこの記事を信じた世界中の学者の何人かは、合成しようと思うかもしれない。しかしそちらの線にはあまり期待をせず、もっと頼りになる奴らに手伝ってもらおう」

「頼りになる奴ら？ そんないませんよ」

「錯体研の、海外組を召集する」

ワールドカップサッカーじゃあるまいしそんな都合よく、海外で活躍する即戦力なんて居るわけないだろ、と築地は鼻で溜息をついた。

第1節 第42話 死神の本領発揮と広がる感染（後書き）

挿絵アドレス（絵師様の）／織図 継嗣

[http://lizreel.web.fc2.com/5to
bira/5tobirairanarrow.html](http://lizreel.web.fc2.com/5to
bira/5tobirairanarrow.html)

第1節 第43話 電撃入籍から陽階神 藤堂 恒へ

ユージーンは形而上学的転移という方法で、アルシエルが星の消える場所と示した解階の辺境の宇宙に向かうこととなった。

しかしそれは距離にして何千光年にもなり、いくら荻号の能力の一部を受け継いだユージーンであるとはいえそうそう辿り着けるものではなく、どんなに急いでも数日を要するだろうと思われる。そこで形而上学的転移という特殊な転移方法が必要だった。

荻号が何千光年もの距離にある宇宙空間を自由に移動できたのは、この転移方法を心得ていたからだ。それは「見なし転移」とも呼ばれ、視認できる範囲内ならどこでも転移できるというものだ。

何故見なし転移というかと、恒星を目標として転移をする場合、可視できるその恒星が実際に存在するのかしないのか分らないからだ。目標とする恒星が例え存在しなくともその場所にその物体が存在すると見なすこの転移方法は非常に形而上学的な性質を帯び、全能の創世者達の特異能力の真骨頂だった。

ユージーンはアルシエルの見守る中集中して瞳を閉ざし、心の中で彼自身に課した制御装置を外す。彼のブロンドの毛髪はいつそう鮮やかに色みを増し、唇や口内の粘膜や爪もうつすらと黄金で鍍金をされたようになった。薄い金色のアイシャドーのメイクをしたような瞼をもたげると、左眼には絶対不及者を証する禁視に近い色彩が宿り、虹彩が異常な色彩を放っている。

創世者の記憶を内に秘めた彼の神体は完全でこそないものの、多少なりとも絶対不及者の性質を帯びてはいる。絶対不及者の特徴的な容姿を知らないアルシエルは、しかめつらをして首をかしげただ

けだった。

「何だその地味でささやかな変身は。何か意味があるのか」

「そりゃ派手さこそありませんが」

ユージーンは空色のままの右眼を閉ざし、ウインクするように夜空の向こうを見上げた。禁視の宿った黄金の瞳を眇めて懲らすと、まるでワープをしているように視界はぐんぐん星々の間を抜けて宇宙の果てが見えた。ブラックホールに続いているかのように光を失った場所がある。

「見えないものが見えるようになります」

その先は彼女のいうよう、確かに黒い緞帳が下ろされたように宇宙の断端があった。ユージーンは正確な座標を見極めると、アルシエルを振り返り頷いて、金色の残像を残して消えてしまった。

「不思議な男だ」

ユージーンの気配を探ったがかなり遠くにまで転移してしまったようで、探知することができなかった。彼を見送って直後、アルシエルは呆けてはいない。生物階と解階内部での感染の拡大を防ぐべく、断固とした措置を取らなくてはならなかったからだ。彼女は傍らに控えていた侍史に毅然とした態度で命じた。

「ただいまより母星、衛星、植民地の別なく全星間連絡ゲートを即時封鎖せよ、感染者は見殺しにしても構わぬ。感染の拡大をこそ防ぐのだ。及び生物階への不法ゲートも摘発し、封鎖せよ。これ以上生物階に感染者を出してはならん。貴族に不服とする者があれば余が受けて立つ」

彼女が一見生物階に配慮を見せたように見えるのは、神々の感情を損なう事が得策ではないという打算があるからだ。ユージーン、

または治癒血を持つ希少な神にしか癒やせない病だと判明した以上、彼女は神々の機嫌をとる必要があると考えた。アルシエルはしたたかな政治家でもあった。

＊

『そうですか、よかった。織図さんもメファイストさんとずっと一緒ですか？』

上島医院の書斎で、メファイストフェレスはソファで寝息を立てていた。

上島とともに徹夜で彼女を見守っていた織図だが、呼び出しがあって神階に戻らなければならなかった。彼女の容態は落ち着いているし、鎮静剤を打ったのでしばらく安静にしているしかないだろう。だが彼女をこの書斎から出すわけにはいかない。ユージーンの血液は彼女を癒したが、免疫がついただけで病原性がなくなったというわけではない。

彼女を外に出せば風岳村の村民達に感染してしまいかねない。念のため、上島医院にいる看護師たちはユージーンの血で予防接種をしておいた。上島医院の外来はしばらく、二次感染の疑いがある上島は診察を自粛して基子だけで診察を行う事にした。

「いや、俺は一度神階に戻る。陰陽階合同の全体会議が行われるんだ。さすがに出なきゃならないからな。お前も感染するかもしれないから、上島医院に駆けつけるんじゃないぞ」

恒はいつも留守番だ。

あの後、早瀬達研究員達は朝までに村から引き揚げていった。病原体に関する疫学調査を始めると研究所本部からの達しがあったのだ。WHOの下部組織であるIEIIO（国際知的生命研究機関）

が、天使の研究に優先して未知の生物によって齎された病原体の感染経路の特定を義務付けられたのは当然だった。織図にその事を話すと、ざまあ見ろ、ようやく撤収だと言ってけらけらと笑っていた。恒と早瀬は念のため、いつでも連絡がとれるよう電話番号とメールアドレスを交換した。

『また何か分かったら、聞かせてください』

「なあ。お前そろそろ入籍しないか？ 電撃入籍」

織図は上島が持つて来てくれた朝食のサンドイッチを、ひよいと口の中に放り込む。

恒はいつも蚊帳の外だが、誰よりも世界に責任を負う立場なのだ。結局は恒の力に頼らなければならぬのに、神階はいつまでも蚊帳の外にしておいていいものかと織図は考えたようだ。神籍登録の手続きはそれほど時間がかかるものではない、うまくいけば今日中に神として認められることになるだろう。

『入籍?! 入籍って何ですか』

「神籍に入るんだよ。神として神階に認められる。名前は本名が日本名だしそのまんま藤堂 恒になるだろう」

『入籍したらどうなるんです』

「今日、位神の全体議会在開催される。当然議席には座れないが神籍があれば傍聴席で傍聴できるんだ。ユージーンの弟子だから登録と同時にアカデミーに連行される事もないだろうな。日本の国会だって傍聴できるだろ。お前も神々の動向を直接聞くといい。又聞けばっかじゃなくてな、どうだ、入籍するか？」

『します!』

恒は大声で申し出た。志帆梨が畑仕事をして外にいたので、家の中で大声を出しても会話を聞かれる心配はない。

「弟子は部屋がもらえないから普通は師匠のユージーンの部屋に同棲するもんだ。以御もいるだろうから三人でめくるめく夜を…」

『俺小学生なんでセクハラトークやめて下さい』

「冗談だよ、位神の部屋は20LDKはあるからな」

『夜は実家に帰ってもいいですか？ 母さん一人で心配だし、それって神の生物階降下にあたります？』

「実家に帰る件はノーカウントだし人間の戸籍もあるから帰っても構わんだろ。じゃあ行こうか少年」

『でも師匠いないのに、入籍しちゃってもいいんでしょうか』

「俺は陰階神だからユージーンの部屋には勝手に入っていけない。第一使徒の響 以御がいるだろ。あいつに神階の門まで迎えに来させよう、手続きは以御がやってくれるさ。派手な奴だぜ？ そうだなー、存在自体がひとり宝塚だ。そもそも顔が濃くて派手な上に髪もブロンドのウェーブ、それを腰まで伸ばして、しかもデカイと三拍子揃ってる。あいつの姉弟は全員デカイし派手だ」

織図のおちやらは年中無休のようだった。10分後、用意をして織図の追跡転移をしてこいと言われたので、志帆梨に外出の許可をもらって追跡転移をかけた。

織図は高度3000メートル、日本海上空にいた。

ここには入階管理課の入階衛星があるのだ。神階に入る時はまず入階衛星を見つけてボタンを押し、進入を申し込む。すると神階の門（Heaven's Gate）が転送されて開かれる。移動式の神階の門は一つしかなく、それが各入階衛星に転送されて連絡されている。恒が織図の前に現れた頃、織図は進入コードを既に入力していた。あとは神階の門が転送されて可視化されるのを待つだけだ。

『陰階神 第8位 DX X 39528A 織図 継嗣。入階許可を請う』

織図は神階の門が転送されてきた合図のランプが点灯したので、暗号とも思われるその言葉を空に向かって叫んだ。すると急に白い光のグリッドが青空に現れ、それが扉の形を形どって大きくしなつて開く。扉は一キロ四方ほどあるだろうか。神階の門はとてつもなく大きいのに、それを意に介することもなく傍をジェット機が飛んでいった。

人間には見えていないのだ、恒はそう思った。

人間ならば死ななければ通れない天国の門を恒は肉体を持ったままに通ることが赦されたのだ。聖書にもある神の国、いわゆる天国へ、恒は織図と共に正面玄関から入ることを赦されたのだ。一般の人間が持っている宗教的感情を改めて思い起こすと、いかに自分が大変な事になっているかが解る。気持ちを引き締めなくてはならない。

「神階へようこそ」

織図と恒が巨大な門をくぐると、すぐに大きな大門は閉ざされ、周囲の景色が歪み浮遊感がして事象の地平を抜けたのがわかった。神階の巨大要塞のポートに着いたらしく、ガラスのような床が現れる。地球を離れ異なる宇宙に入ったというのに、時間にするとアツという間だ。陰階神は許可なく陽階に立ち入る事は許されていないので案内は出来ないのだ、と予め伝えて大きなホールに恒を残し、すぐに来るだろうからここで以御を待っていると言って、織図は陰階に帰っていった。

恒は神階の門から出入りを繰り返す使徒たちを見送りながら、少

し待った。大勢の使徒達が往来していたが、それほど周囲を捜さなくとも誰が以御なのかすぐにわかる。

織図のいう通り、以御はベルバラのオスカルのように端正だが派手な使徒だった。睫毛ってそんなに長い必要があるのかと思うほど長いし、腰もそんなに高い必要があるのかと思う程高い位置にある。いかにも軍人らしく、むきだしの腕は筋肉に覆われ、展戦輪の御璽を黒い刺青で彫り上げている。神階の認めた軍神の最高位使徒の証だ。御璽の下には登録番号もついている。膝丈まであるコートを着ていて伊達な男だ。

彼は大股で軍靴をザクザクいわせながら近づいてきた。

「風岳村から来た藤堂 恒か。織図様の命で迎えに上がった。神籍登録の手続きをされるそうだな。ユージーンに代わってご案内する」

「はじめまして。藤堂 恒です。よろしく願います」

以御は隣に並んで、豪快に足音を立てながらザクザク歩き始めた。使徒なら誰もが知る白翼のエリート、響 以御と子供の組み合わせで、自然と注目されたり後ろ指を差されたりする。恒は恥ずかしくて小さくなって俯いた。

「ユージーンと師弟契約を結んだそうだから、執務室の空いた部屋を用意したが」

「でも夜は実家に帰りますし、泊まったりしないのでお構いなく」

恒は陽階の廊下を歩いているというだけでも感無量である。天井は見えないほど高く、そして廊下の幅も恒の学校の校庭ほど広い。恒はまず大浴場に案内され、襦を兼ねて沐浴をするようにと強制された。白づくめの服を着た使徒に案内され、服を脱ぐと、以御と一緒に巨大な浴場の扉を開く。中には誰もいなかった。

何もかもが無駄に広い。ローマ風のただっぴろく小奇麗な大理石に囲まれた風呂に、獅子の口から湯が注がれていた。僅かだが、独特なハーブの匂いがする。いつもユージーンの体から香るハーブの匂いだ。さてはユージーンはここに入っていたのだな、と恒は思う。

「陽階に入るとまず、ここで生物階で被った穢れを流し清める。陽階神は非常に穢れを嫌うからな。生物階にいた者はおいですぐわかるらしい」

恒は服を脱いで、シャワーで体を流しローマ風呂に飛び込む。

「うわっ！！ 何ですか、水風呂じゃないですか」

後からきた以御が、何事もなく水風呂の中に首まで浸る。以御が満足そうなので、恒は不満をいえなかった。

「どうかしたか？」

「いえ、何でもありません」

なるほど、ユージーンはシャワーを浴びるにも湯を使わない。神々は水で沐浴をするのだ。恒も冷たいのを我慢して首まで浸る。実家の五右衛門風呂のあの何ともいえない温かさが恋しい。以御は使徒用の浴槽に入っている。浴室は同じだが、入っていい浴槽が神と使徒によって分けられているのだそうだ。何故かはわからない。神の浴槽の方がはるかに小さい、生物階に降下するのは神より使徒の方が多いからだ。

「ところで何故下を隠すんだ？」

「え？ あなたも隠してるじゃないですか」

以御は突然、そんなことを言い出した。タオルを持って入って下を隠していたが、以御も同じようにしているのにそんな指摘をする。

浴槽にタオルはつけていないし、何故そんな指摘をされなければならないのだろう。

「俺は”ある”から隠すがね。神には”ない”だろう？ 男神も女神も、誰も隠さんぞ。何があるのか逆に気になる」

「俺、アレありますけど……」

「”ある”だと？ なるほど、人間の形質が強く出てるな。精通はあったのか？」

織図からも以御からもセクハラトークをされ、恒は真っ赤になってしまった。神はいないようだが、浴場には先ほど入ってきた使徒が数名いる。以御は周囲に耳がある中で、どうしてそんな事を口に出すのだろう。使徒は完全な男性と女性の別があるが、神には性別もなく性器もないものだ。それで性器を持つ恒を以御は珍しがっているのだろう。いきなり精通の話になってしまったが、恒はまだ経験していなかった。

「まだありません」

「10歳にしては大きな身体をしているのに、精通はまだなのか。生殖能力はないかもしれないな」

以御はさりげなくそう言ったが、恒はショックだった。

そういえば人間の女の子を好きになった事もない。不能だから女の子に興味がもてないのだろうか、だが自分が人と結婚をして子供をつくるようなイメージは想像できない。え、俺一生独身でこと？ そんな事を悩みながら恒は身体を洗おうとして石鹸を捜している。

「石鹸はないんですか」

「身体は洗わなくていい。この聖水に浸るだけで穢れは落ちるし、傷も癒してくれる」

たしかに普通の水とは違うような気もするが、風呂に入ればやは

り身体を洗いたくなるものだ。織図が、陽階神は儀礼に縛られていると言っていたがその通りだと思った。以御の背中を見て思ったのだが、以御は傷だらけだ。古傷で背中が多い尽くされている。戦争を司り戦地にも赴く軍神下使徒は激務なのだろうな、と恒は少しだけ以御を尊敬した。

以御は風呂から上がる前に、恒だけ最後にここに入ってから出るのだという。

「陽階神指定のハーブだ。この香りのする神は、すべて陽階神だと思っいいい」

その浴槽にはハーブのエキスを抽出した液体が入っており、いつもユージーンの身体からかおるよい芳香がした。当然以御はそれには入らなかった。沐浴を済ませ身体を拭きながら脱衣所に入ると、いつの間にか恒のロッカーの上に白い服がたたんでバスケットの中に置いてあった。

「それが常用する白衣だ。非位神は白衣の着用が義務付けられている」

いつもユージーンが眠る時やくつろいでいる時に着ている白衣がこれだ。肩には紋章も何もついていない、そして天衣無縫というべく縫い目のない白い装束だった。袖を通すと、薄い割には意外と保温性に優れており、沐浴で冷え切った体を温めてくれる。恒の着付けが間違っていたらしく、以御は律儀に直してくれた。

ロッカーに自分の着ていたものをしまっただけで鍵をかけると、フールドをつけて顔の見えない公務員に案内されて法務局に入った。法務局はひたすらだっ広く豪華なつくりをしていた。すべて大理石作りののだと言っているが、とりあえず廊下は先が見えない。一体どれほどの資源を使ってこの天宮を建設したのだろう、と恒は圧倒されてしまう。至る所にダイヤで出来た彫刻や金をふんだんに使った置

物、壁掛けなどが惜しげもなく飾られていた。

これだけあっさり和高価な調度品が並べられていると、泥棒だつて盗る気もうせてくるだろうに。

法務局は3課が特に混雑していて、その課は使徒の人事異動に関わる部署なのだと教えてくれた。確かに青衣を着た者たちが、手続きを踏む為にとこ狭しと並んでいる。その中には荻号の御璽である真空斑の紋が打ってある鞆を持っている者も不景気な顔をして数名が並んでいた。

4000万名の陰階使徒達がリストラになったそうだから、彼の使徒達も大変なのだろう。恒が登録を行うのは法務局の7課だったが、この部署はがら空きで、並んでいる者も誰もいなかった。窓口の係員も、相手がいないのを見越していたのか、3課にまわされて働いていた。

「これは長いぞ」

以御がぶつぶつ文句を言いながら呼び鈴を押すと、10分ほどしてようやくひとり、疲れた顔をしてやってきた。

公務員は疲れきった顔をした若い女であったが、以御の顔を見ると背筋を伸ばし途端に態度が一変した。以御は名の通った使徒であるらしい。

「はい、何の用件でしょう」

以御はよほど顔を利かせているのか、彼女は明らかに萎縮していた。

「生物階で見つかった少年神を連れてきた。早いところ神籍取得の手続きを始めてくれ」

「生物階で神が？ 本当ですか？ 神々は神階で誕生するものです、生物階で見つかるとは……それに出生数と死亡数が食い違います」

少年は10歳ほどに見えるが、もしも彼が神だとすると10年前に”神が一柱死んだが、代わりに誰も誕生しなかった”という事実がなければならぬ。だがそういったことは一度もなかった。一柱の神が崩御すると必ず一柱の赤子が見つかった。そのルールを破って生まれてきた赤子ということになる。不審そうに、彼女は尋ね返した。気の短い以御は舌打ちをして、カウンターを叩いた。

「実際に見つかったんだ、ゴタゴタ言わず早くしてくれ」

まず恒は130枚にも及ぶ書類を渡され、神語で書かれてある為すべては読めなかったが以御がいちいち内容を読んでくれたので、恒は納得してサインをした。それだけ終わると写真付きの認定証をもらい、医務室のような場所で何をするかも教えられずに、まず麻酔を打つかどうかだけを尋ねられた。

「何をするんですか？」

教えてくれそうになかったので、以御にたずねる。

「肩にIDを刻むんだ。それを麻酔なしで彫るか、麻酔をかけるかを決めろといってる」

「え、いきなり御璽とか彫るんですか？ 刺青は母さんに怒られます……」

「これは識別のために標識で、御璽ではない透明なインクで彫られるから母親にはばれんさ」

「そうですか」

恒がぐずついていたので、麻酔もなく彫られることとなってしまった。何と、IDをラベルする薬品がとんでもなく染みるのだ。痛いのはどちらかというと彫られる時ではなく、注入された薬品が身体になじむまでが痛いのだ。左肩がじんじんと熱を持ち、腫れてくるが、担当の若い医者はそれでも構わずにラベルを続けた。

「何しろ数千年も消えてはならないので、嚴重にラベルが施される

んですよ。あと5回同じところを彫りますね」

しまった、痛みに引き裂かれるようだ。ようやく標識が終わり恒は大理石のベンチに以御と腰掛けて片目を涙に目を潤ませながら消毒薬で傷口をよくもみ、次の呼び出しを待っていた。あれほど苦勞して彫ったのに、透明なので何となく彫りでがない。

以御がID用のブラックライトを貸してくれると、恒の肩には紫色のインクで、P32183HP05と彫られているのが見えた。次の呼び出しで行われたのは初の神体検査だ。見た目は少し大型のMRIのような装置に入れられて、トンネルの中で30分間測定をされる。トンネル内部は静かで、恒は測定をされている間にうとうとと寝てしまっていた。30分後、藤堂 恒の神体状況が初めて明らかとなった。

本名／置換名 藤堂 恒

経年… 10

マインドギャップ(MGP)… 7層

フィジカルギャップ(PGP)… 2層

標準偏差(STD)… 48

Physical Level… 139

体組成(CMP)… 異常(人体に酷似する)

血液組成(BCP)… 異常(人血A型RH-に酷似する)

アトモスフィア放散量(ATR)… 9mg/sec

アトモスフィア組成(ATC)… Positive

「……これでは神というより人に近いです」

技官が正直な感想を漏らした。

血液検査や体組成が引っかかった。半分は人間なのだから神として異常だと言われるのは仕方がないことだ。

「だって、DNAがあるんですよ？ 性別もありますし」

「だがこの子は確かに神だ。人間がアトモスフィアを持っているか？ マインドギャップにしてもそうだ」

人間でマインドギャップを7層も持っている10歳の少年は存在しない。

人間の形質も神の形質もどちらも強く出ている。最近神階で発見されたレイアIIメーテルは女性の女神で一風代わっていたが、技官はこれほどまでに変わった神を見たことがない。だが慢性的に神が不足している神階の現状では、使徒を養うためにも今は一柱でも神が増えることがたかったので、結局神籍登録をすることとなった。

「そうですね。では、神籍登録しておきます。陰階神となるでしょう」

「え？ 陰階神ですか？」

恒は思わず目をまるくした。織図も荻号もユージンも、恒は将来陽階神になるだろうと言っていたので、陽階神となるとばかり思っていたからだ。しかし技官はデータを見ながら事務的で客観的な言葉をかけてくる。

「そうですよ。陽階神となるには厳しい条件があります。外見上や性格、アトモスフィアは陽階神として相応しいようですが人間の血をひく神を陽階神として認定するわけにはまいりません。ただちにアカデミーに入学してください」

「何故だ？ アトモスフィアの組成にポジティブ（陽階神）と出ているだろ」

「ですが、陽階神として登録するわけにはまいりません」

それは困る。恒は正直言って陰階神でも陽階神でもどちらでもいい

い。だが、ユージーンは陽階神で、ユージーンの弟子にしてもらわなければ困るのだ。陰階神として登録してしまうと、ユージーンとの師弟契約は無効となり、アカデミーに即刻入学しなければならない。

「しかし、この子はもうユージーンと師弟契約を結んでいるんだ」

「師弟契約を？」

技官は仕方なく書類の陽階神の欄に○をつけた。ユージーンはいまや神階を動かす存在となっている。

いずれ至極位として即位する可能性もあることから、下手なことをしてユージーンの反感をいかたくないというのが正直なところだ。恒は最初の最初から神として異常だとされ、検査に引っかかったことを懸念した。この先もしも陽階神として認められなくなって陰階神に登録を切り替えられてしまったらユージーンの弟子にしてもらえず、アカデミーで100年の刑だ。

「これは仮登録みたいなものだからな。晴れて陽階神となった気分はどうだ」

心配そうに俯く恒を、以御は明るく元氣付けた。一柱の神と使徒は軍神の執務室に戻る。

「正直、あまり実感ないです。生物階は大変な事になっています、今は神としてどうこう考えられません。生物階を何とかしないと。だから神階がどう動いているのか、直接神々のお話を聞きたいと思ってここに来たんです。今日の全体会議、傍聴席で聴いていいですか」

以御はユージーンから、恒の話を聞いていた。子供ながらに彼は自己中心的な考えを捨て、世界のことを考えているのだと。極陽の息子として創られた薄幸の少年は三年後、抗一絶対不及者抗体としての役目を背負っている。以御は謙虚で慎ましい恒を、好ましく思

った。

「若いのにしっかりして感心だ。俺が受付係に事情を説明してやるから、傍聴は構わんだろう。直接会議場に行こう。あと30分で始まる」

＊

以御は議場の入り口に恒を案内すると、恒の首にネックレス状のプレートを与えた。子供の神が神階内部をうろつくことはないので、恒の姿はとにかく目立つ。ユージーン の正式に認めた弟子で、アカデミーから脱走してきた少年神ではないと証明できるものが必要なのだそうだ。プレートは金属のゲストカードのような形状だったが、Positive 7 APDと神語で刻印されていた。その下には小さなフォントで、ずらずらと神語の刻印がされていた。ユージーンが弟子として認めた者であると記述されているのだそう。以御はユージーンと恒が師弟契約を結んだと聞き、認証プレートを発行し持ってきた。

陰陽階位神臨時議会、全200柱の位神が一同に会する臨時議会が開催された。

欠員の出た闇神と倫理神の後任は決まっていないので正確には198柱が参会しなければならなかった。議場は陽階にある巨大なホールで、議席は同心円上に二重螺旋構造を取って空中に配置され、太極図を模したデザインだ。

陽階神はまっ暗闇の議場に入ると、空中に浮かぶ席に飛翔して跳び上がり、各々の議席に青いランプを点し、陰階神は緑のランプを点すことで緑と青の相補的二重螺旋が形成されてゆく。螺旋が途切れる場所が欠席というわけだ。天井の電光掲示板に続々と神々の出

席状況と生物階のニュースが赤い文字で表示されている。自然とユニージンの席に注目が集まるが定時になっても、Positive 7の議席にランプがつく事はなかった。

傍聴席に案内された恒は第二種公務員である他の神々に物珍しそうに見られながら、行儀よく座っていた。座っていると、神階では珍しい少年神の傍聴者にマインドブレイクをかけてくる神もいたが、7層もある恒のマインドギャップを不審に思ったのか恐れれたのか、話しかけてこようとはしなかった。すれ違う神々のうちほとんどが、マインドブレイクをかけてこようとした。

神々は言葉ではなくマインドブレイクによって腹の探り合いをするとは本当だった。

恒は何事にも先駆けてマインドギャップを作る訓練をしておいてよかったと、荻号と織図に感謝した。恒は極陽がようやく議場に入ったのを目ざとく見つけた。やがて定時になったので、議長である極陽が開会の宣言をする。恒はばかりもなく、開会を宣言する主神の姿を真っ直ぐに見上げた。

彼は青い光の輪にアトモスフィアを吸収され続けて神階を維持しているのだそうだ。主神の御璽の刻印された白衣を纏い、議長席を照らすライトに浮かび上がる圧倒的な姿は、まさに神階の長に相応しい堂々たるものだ。時代が時代なら、人々の信仰の対象となるべき者だ。恒は心を落ち着かせ、ゆっくりと深呼吸をした。極陽は遙か足元の暗い傍聴席を、振り返るそぶりもない。だが恒は遙か下から、心の中で実の父親に呼びかけた。心の声は届かないと、知ってはいても。

俺はここにいる。ここまで来たんだ――。

第1節 第43話 電撃入籍から陽階神 藤堂 恒へ（後書き）

挿絵（絵師様の）響 以御

http://lizeel.web.fc2.com/graphics/koion.html

第1節 第44話 神血の合成と白髪のV系学生

「レディラムⅡアンリニア、梶 奎吾、織図 継嗣の三柱の神々は生物階での任務、大儀であった」

主神の劳いの言葉に、三柱の神々は立ち上がった。こたえる。

恒はただ上を見上げて父親の言葉に耳を傾けた。織図は着席する際に下を見下ろして、恒が傍聴席に座っていることを確認する。恒が小さく手をふると、織図は遠くから茶化すように微笑んだ。恒の隣に座っていた清楚な身なりの二種公務員の女神が織図とのアイコンタクトに気付き、小声で話し掛けてきた。

「織図様とお知り合いで」

「親しくさせていただいてます」

彼女は枢軸神と懇意にしているという恒に一目おいたようで、感心して口をつぐんだ。

織図はこの会議で恒を神々に紹介するつもりはなかったし、ユー・ジーンが明かしてくれた真実を織図の口から告げるつもりもなかった。恒が極陽の息子だということは尚更だ。極陽と恒の関係を明らかに出したところで、恒には何ひとつメリットがないからだ。神体検査の結果と恒が陽階神として登録されたという事実、更にユー・ジーンと師弟契約を結んだという事はすぐにGL・ネットワークに掲載され、検査結果をもって間接的に自己紹介をすることになる。有史以来生物階から初めて発見された神として神々は驚きをもって迎えるだろうが、極陽の息子だという事は内密にしてユー・ジーンが風岳村から見つけてきた弟子として対外的に説明する方が恒にとってはよかった。そうでなければ彼は陽階神としての正当性を疑われてしまう。極陽の模造生命が果たして陽階神として認められるのかという微妙なところだ。極陽も恒との関係を取り沙汰されない方が有り難いだろう。

「……ということでありまして、目下、かの病原体の感染は指数関数的に拡大を続けております。現在の推定感染者数は399千人にも上っております。24時間後には更に……」

極陽から感染のシュミレーションを依頼されていた陽階10位数学神 ファティナIIマセマティカが、緊張で頬を赤く染めながら暗い議場内に立体的に浮かび上がるデータをレーザーポインタで示している。

3Dホログラムで開示されたシュミレーションデータを見て、神々は事の深刻さをまざまざと思い知った。このシュミレーションだと2週間後には世界中の人間が感染者となるだろうというのだ。陽階神の端くれの恒も末席で、ファティナの開示したデータにくまなく目を通す。これらの詳細なシュミレーションはGLーネットワークの公共ネットワークには決してアップロードされないデータだ。全体会議を生で傍聴して収穫は大きかった、と恒は思う。

議題は当然、生物階に侵入した解階の住民達のことにも及ぶ。その話題のなかで神々の同意もなく独自の判断で生物階に治癒血の組成を発表した比企の行為も問題となった。

比企の行為は法を違えてはいたが、緊急時においては間違いのない判断だ。律儀な比企は生物階に治癒血の組成を発表するに至った事情を説明をする。レディラムの持ち帰った解階の住民の感染した体細胞とユージーンの治癒血を反応させると顕著な効果があったこと。他の神々の治癒血とともに同じ試験を行ったが、ユージーンの治癒血のみが感染症を癒したこと。他の治癒血を持つ神々との組成を比較し、ユージーンだけの持ちえる特効成分をピックアップして新聞社に発表したのだということ。生物階に神の治癒血の成分を明らかにする事は立法神としての職務を逸脱しており、その行為は罪

深いことだと。

極陽派の神々や陰階神は比企を鋭く弾劾する姿勢を見せていたが、極陽は彼等の心無い野次をたしなめた。

極陽は次席に座る比企を見据えてきっぱり断言した。

「比企の為した行為は罪だ。だが誰も比企を非難することはできない」

「しかし、罪は罪でございましょう」

「この現状を見よ！ 比企を咎めておる場合か！」

ヴィブレⅡスミスは苛立たしげに声を荒げ、議場は水を打ったように静まり返る。

滅多に感情を露にすることのない主神のいらだった様子に、神妙に発言を控えていた比企は、思わず極陽を振り仰いだ。ヴィブレⅡスミスは比企を庇っているのではない、優先すべきもの、守るべきものを見失わずにあらうとしているだけだ。

「記事を拝読させていただいたが、あれでは誰も信じんだろう。著者の名も明かさずエビデンスもない」

こう言うのは緑の髪の毛と瞳を持つ遺伝子を司る神、陰階神 第9位 アマデュⅡパズトリー（岡崎 宿耀）だ。彼は比企を非難するつもりはないようだったが、生物学に明るく研究者肌なためか、記事に鋭い指摘を入れてくる。織図は岡崎の発言が終わると、高校生クイズの解答ボタンを連打するように発言ボタンを連打して発言を求める。

発言者が手元のボタンを押すと、電光掲示板に発言待機者が表示される。

天井の電光掲示板にネガティブー8 ダグラスⅡニーヴァーの表

示が現れ、極陽が手元のパネルで発言待機者の中から選択すると、マイクのスイッチが入り発言が許される。早押しクイズのように早くボタンを押さなければ、一度に10名の待機者しか表示されない電光掲示板に表示すらしてもらえないというわけだ。基本的に喋りたがりで目立ちたがりの陽階神は、一刻も早くボタンを押そうと思いい思いのフォームで発言ボタンにかじりついている。陽階神の発言待機者の中で唯一の陰階神として表示されていた織図が次の発言者として選ばれた。

「それが、たった一箇所だけ信じている組織がある。日本の大坂大学の錯体研だ。彼等は治癒血の成分を合成しようとしている」

上島は大坂大学の錯体研にユージーンの血液を譲渡していたこと、彼等は治癒血の効能を信じて解析を行っていたという事、そして今回の新聞記事を見て合成の段階に入ろうとしている事を、織図に話していたのだ。

「たった一つの機関で、何ができよう。合成に成功しても量産出来なければ意味がないというのに」

発言の権利を得られなかった陽階神が、陰階神である織図に野次を飛ばしたり揚げ足を取っている。外野の野次は文化のようなもので、基本的に陰階神が発言をしていると陽階神からの野次が飛ぶ。陽階神が発言するとまた然りで、陰階神の野次が飛ぶ。

「そもそもその治癒血を持つユージーンは何故会議に出席してこんのだ。枢軸神としての自覚に欠ける」

「では誰のおかげで特効薬のめどが立つと思っているんだ。非難するだけで、何も出来ぬではないか。無能な者ほどよく吠える」

「何を！」

陰階神は口が悪いし、陽階神は頑固で融通がきかない。全体会議が開催される事は滅多にないが、陰陽階で合同会議をするといつも

これだ。そんないがみ合いをしている場合ではないというのに、織図は神々の緊張感のなさとし勝手さにいい加減腹が立つ。

「静粛に！」

副議長が木槌を高らかに鳴らしてざわついてきた場内を諫めた。

次に極陽に発言を許されておずおずと立ち上がったのは、黒髪をタイトに巻き髪にしてまとめた小柄な女神、現代の薬神、陰階神第85位 清水しみず こすえ 梢だ。発言権は階級の高低に関わらず平等に与えられているが、清水は恐縮して枢軸神達にぺこぺこ頭を下げた。

「一つよろしいでしょうか。今朝、比企様の記事を拝読いたしましたし同じ手技を用いて先日誕生したレイアⅡメーテールの血液サンプルでも試行を行いました。その結果、レイアⅡメーテールは治癒血と思しき血液成分を有しており、それをユージーン様の治癒血と照らし合わせて比較したところ、13種類の化合物に絞り込む事ができました」

内気な彼女はくりくりとしたつぶらな黒い瞳を上目遣いにして、比企を見上げる。

比企は冷たい眼差しで遙か下方にいる彼女を見下ろす。神体検査では治癒血を持っているか否かは明らかにならない、神体検査の後に詳細な血液検査を行い、その含有成分を同定するのは薬神の仕事であり比企ではない。ともあれ、清水の機転で更に化合物の種類が絞り込まれ、合成までの時間が短縮できる。

「手柄だ。よくやった」

「お恥ずかしい。追試にございます」

鉄面皮の比企は眉ひとつ動かさず、清水の功績をたたえる。

清水は比企の後任の薬神として即位してこのかた、何かにつけ優秀だった彼と常に比較されて肩身の狭い思いをしてきた。かといって比企が何か大きな業績を出していたわけではない。彼女は昼夜を

問わず働いてコンスタントに業績を出している。それなのに位申戦となると相手を打ち負かす事が不得手で、いつまでも底辺をうろついたままで昇進ができずにいた。彼女はいつか比企に、薬神としての資質を認めてもらいたいと思っていたようだ。比企の言葉は社交辞令でしかないのだろうが、彼女は比企に初めて目につけられ嬉しそうな表情を隠し切れない。

「しかし比企様」

「わかっておる。己の書いたスキーム（化学合成経路）は理論上のものに過ぎない。生物階であるスキームと全く同様に合成を行ったとしても完成はすまい。中間体の合成状況を適宜観察しつつ改変を加えてゆかねばならん。そしてそれは人の手に余る」

比企の説明は、釈然とせず神々の間に疑問のしこりを残している。神階で合成できないものが、生物階で合成できるようになるものとは思えなかったからだ。

「何故神階で合成できぬものが生物階で合成できると考えておるのか。治癒血の合成は神階で一度も成功してはおらんのだろう」

極陽は信頼を込めた眼差しで最も高い位置から比企を見下ろす。それを、極陽の左隣に座する極陰は大げさに目を丸くして観察していた。比企と極陽は神階を二分するほどに大々的に反目していたからだ。しかし極陽はこのたびの比企の行動を支持しており、比企の支援をすべきだと考えていた。比企と極陽の間には深い軋轢があるが、生物階を守りたいという認識は共通している。今回に関しては利害関係が一致しているため、比企と極陽が今いがみ合う必要はない。極陽はもともと極位に固執をしているわけではないし、比企も極陽個神の性格に対して不満を持っているわけではない。ただ比企は極陽の生物階不可侵の政策に限界を感じて極位を獲得しようとしているだけだった。

「治癒血の全成分を再現しようとしているのではない。治癒血の中のたった13の成分を合成するだけでよいのだ。その13の化合物は治癒血の効能を持ちはしないがこの感染症を癒す特効成分であり、現時点では一刻も早くそれを合成する事が望まれている」

「神階の恒常的な環境は有機合成には適さないのです。生物階は神階に存在するより多くの物理学法則が存在します、より変化に富んだ環境で行った方が有利なのです」

清水が比企の説明に補足説明をつけた。

彼女は神階で何度も治癒血の合成を試みてきたが、一度も成功した事がなかった。神階の環境は化学実験には向かないと気付き、それを立証する論文を書いた事もまた清水の業績ではあった。

「己は生物階に降下し、織図が挙げた大坂大学の研究チームと合成の手がかりを探ろうと考えておる」

「私もお共いたします！」

現代の薬神としての立場を主張するかのように、清水も負けじと生物階降下を申し出る。極陽は二柱の生物階降下を認めてから、残りの神々の協力を求めた。

「他に有機合成に明るい者はないか。生物階の研究機関と共に分担し化合物を合成しろ。支援を惜しむな。合成経路を特定すれば、ただちに量産体制に入る準備はある」

「量産が可能なのか？ 神階にある薬神下使徒階の製薬工場では、合成できないのでは？」

位神とは違って自由な発言権を持つ極陰が、隣の極陽にもっともな疑問を投げかける。さすがの彼女も今日は露出を控えて儀式用の白衣を着て肌を隠していた。極陰は生物階での権限を持たず、生物階の問題に関する案件は極陽に主権を譲っている。

「私は生物階で製薬会社を経営している」

殆どの位神達は初耳だったが、織図と恒は知っていた。

極陽は株式会社REIMEIの代表取締役なのだ、会社の名義で志帆梨に2000万近くもの慰謝料を支払っていた。

代表取締役として株を転がして道楽をしているだけかと思えば、意外に役立つ場面もある。恒は父親が、恒や志帆梨を守るつもりは毛頭なくとも、生物階を全力で守ろうとしていたと見せ付けられた思いだ。今はそれを憂っている状況ではない、恒も陽階神の支柱として、暫定的に手を組んだ主神と比企の計画を支援しなければならなかった。

＊

昼を過ぎ、藤堂家に電話をかけた朱音は落ち着かなかった。

全国的に外出差し控え令が出ているというのに、恒が家を留守にしていると分かったからだ。夏休みの算数の宿題がわからない、という口実で電話をかけた。実際、最後のページの応用問題は難しい問題ではあったが恒ならば簡単に解いているだろうと思ったからだ。恒は留守だった。彼は親戚の家に泊まりに行ったのだと志帆梨はいうが、本当はそうではない事ぐらい彼女にも分かった。

彼は最近、何やら慌しい様子だ。

遊びの誘いの電話をかけても、忙しくて遊べないの一点張りだ。毎日のように遊んでいた村の子供達と遊ぶ機会も殆どなくなってしまった。親友の巧もとうとう、最近恒は何を考えているのかわからないと言いつ出した。巧は近々ソフトボールの県大会にピッチャーとして出場するが、恒は親友の晴れ舞台の応援に来るつもりがあるのだろうか。親友である恒が応援に来なければ、巧もさぞかし残念に思うだろう。恒を悩ませる新たな問題は何なのか……心配になってくる。

またひとりでつつ走っていなければいいのだが。

恒と一緒に遊んでいた時には気付かなかった、離れてはじめてかみ締める彼への気持ち。折角真新しい水着を買ってもらって、楽しみにしていた海水浴が予想外の病原体の流行によって台なしになってしまった。そして朱音は5回目の告白の機会を失った。彼女はバレンタインデーのたびに義理チョコじみたものを男子に配って、本命チョコはいつも渡せずに持って帰って自分で食べた。告白のきっかけばかり待っていて、結局勇気が出なかったのは自分だったな、と朱音は振り返る。

もう何かの力をあてにしたくはない、今度こそ意気地のない自分に負けずに伝えたい気持ちがある。

「恒君が家に戻って来たら外に呼び出して、もう言ってしまうおう」

彼女は遂にそう決意した。

恒と付き合いたいというのではなく、ただもやもやとした胸の内を恒に伝えたい、それだけだった。

何と返事してもそれで終わりにしようと、彼女は思う。そして答えは多分、NOだ。彼は何度親友と呼んでくれてもそれ以上には見えてくれなかった。同じく親友であり朱音に思いを寄せる巧に遠慮して、朱音との距離をわざと取っているのではないと、賢い彼女は分かっていた。彼女は俯いて、また毎日のように見ている写真立てを取りあげた。

恒を中心に十数名の村の子供達がふざけあいながら桜の木の下に並んで映っている。幼なじみの怜が転校していった時に、村を忘れないでねと怜にあげるために撮った写真だ。彼はまるでがき大将で子供達に慕われていたし、誰よりも仲間思いだった。しかしがき大将だった彼も自分も、大人になってゆくのだ。

いつまでもこの関係は続かない、あと五年もすれば高校のない風

岳村の子供達は村を離れなければならない。

恒は飛び抜けて優秀だし、中学受験をするかもしれないのだ。

「恒君は、私の事を好きだなんて言ってくれないんだろうな……」
彼女は頬杖をついて、写真立てのフレームを指の腹でなぞって、
静かに机の上に戻した。

＊

感染症対策の指針がまとまって会議が終わるなり、神々は蜘蛛の子を散らしたように退席していった。

極陽の退場までは神々は退席しないので、結果的にヴィブレイスミスが真っ先に議場から出てゆく。非位神である恒と極陽は別の階に隔てられていてどちらにしてもこの会場で直接会う事はないのだが、恒は極陽が一度も恒のいる傍聴席を振り返らなかった事を少しだけ残念に思った。面と向かって話をしたいという気持ちはどこかにはあった、だが同時に父親に対して込み上げてくる怒りの感情を、どう向けてよいのか分からない。

相手は主神だ、そこに如何な事情があろうとも、主神に拳を向ければ陰陽階神法の処罰適用となり神階を追放される。対面して感情を抑えていられる自信がない。今は会えない立場に居る事が、自分を救っている。恒は思う事にした。恒が極陽に抱く気持ちは複雑だ、命を与えてくれてありがたうという感謝の気持ちと、志帆梨と自分を苦しめ続けてきた事に対する憎しみが混ざり合って混沌としている。恒もようやく傍聴席から立ち上がって、外で待っていてくれる。以御と合流しようとした。そそくさと退席しようとしていた織図を、比企が呼びとめた。

「少し待て」

「何すか」

「看破させてもらった」

織図はあちゃー、と額を押さえた。比企のマインドギャップは10層で、織図は5層だ。精神力に5層も差があればマインドブレイクをかけられてしまう。あれだけ議論の中心にいたというのに、ちよつとした隙にマインドブレイクをかけて織図の知りえた知識の全てを看破してしまった。織図と比企の議席にはかなりの距離があったので織図は油断していたのだが、遠隔心層看破は比企の得意とするところだ。

「読んだのはあんただけですか。両極位は？」

「議席が遠すぎた。それに己には両極位のマインドブレイクの形跡は見えなんだ」

「抜目ねえなあ。さすがは荻号さんの弟子だ」

「……」

比企は灰色の眼差しを遠くに向けながらも、いつものように反論も否定もしなかった。

織図へのマインドブレイクによってアルティメイト・オブ・ノーボディの真意を知った彼は、創世者と交流を持った一時期があったという事実を受け入れ回顧せざるをえなかった。頑なに封印していた荻号と過ごした時間の記憶が、堰を切ったように取り戻されてくる。比企は鮮やかな光の滝に打たれるように尊い記憶が沸々と蘇ってくるのを感じていた。

遠い目をしてカタルシスに浸っているのかと思いきや、彼は傍聴席から立ち上がって退場しようとしていた恒を見ていた。

「あの子供は藤堂というのか」

「今日神階に入ったばかりなもんで。パワハラは勘弁してやってく

ださい」

「挨拶は今度にしよう。今は時間がないのでな、だが……不憫なことだ」

「あいつはあんたが思うほどには、弱くはないようだぜ。あと、味方も多い」

織図は自信を持ってそう断言する。

恒には彼を支える多くの味方がいる。ユージーンに、ノーボディ、彼の母親に、彼の担任、彼のかけがえのない親友達、そして勿論、織図もそうでありたいと思っている。

” あ、比企さんがこっち見てる！”

うわ、何かやばそうな第二位神と目があっちゃったよ。恒は少し離れた場所から恒に視線を投げかけてきた比企を見て、蛇に睨まれた蛙のように立ちすくんだ。

比企は7層のマインドギャップで鎧のように心を閉ざしている少年を驚きをもって見つめ、ややあつて無言で去っていった。

＊

全学休学となった大坂大学の構内は閑散として、どうしても実験のため研究室に入らなければならない学生や教官を除いては学生の姿は見当たらない。売店も臨時休業となっていて、相模原と松林、築地、長瀬の四人は近くのコンビニに行くための横断歩道をビートルズのアルバムのジャケットのような恰好で渡っている。合成の得意な長瀬も休日返上で呼び出された。長瀬が熱愛中の彼氏シゲルはカンガルーの生態研究のためオーストラリアに行っている時に、出入国禁止令が発令され日本に帰れなくなっているのだそうだ。病原体の特定が行われていないので検疫も全く機能していない、感染症

の流行が収まらない限り出入国禁止令は解除されないだろう。

長瀬は彼氏に会いたい一心で、出入国禁止令を解除してもらうべく新規化合物の合成を手伝う気になったらしい。午後になれば相模原研のほかの大学院生もやってきてもう少し人手が増えるそうだ。相模原は意味ありげに海外組を召集すると言っていたが、錯体研を出て現在では世界的に活躍している教え子数人に連絡を取って事情を説明し、24種類の化合物の合成を分担することにしたようだ。大坂大学錯体研に割り当てられた化合物は8つ。記事に記載された合成スキームを手がかりに、合成に取り掛かるしかない。

長瀬は燦燦と降り注ぐ陽光を背に、陽炎の立ち昇る横断歩道の向こう側から歩いてくる男に気がついて築地を小突いた。

「あれ、あれ見て。うちの学生だよねえ！ すっごいV系！」

「うわー、やってもうとる！ さすがに白はないな。グレーか何かのカラコン入れとるし」

男は真夏だというのにグレーのレザージャケットを汗ひとつかかず着こなして、ヴィンテージもののジーンズを履いている。

そして彼の髪の毛は雪のように白い。ビジュアル系バンドに勧誘されそうなほど派手な男は、涼しい顔をして大坂大学の敷地内に入っていた。

「あはは、さすがにツッチーも負けたあ」

「あいつ絶対ツラやで、あんなに真っ白に染まらへんもん。どこの学部やろあのアホは」

目立ちたがりの築地は若かりしころピンクの頭にした事があったが、さすがに白くしたことはない。

純白にするにはかなりのブリーチをかけなくてはならない。それでも染め上がりは黄ばんだりして色みが残る。築地は歳をとって禿げたらどうしようと、やってみたいとは思えど白にはできなかった。

長瀬は長瀬で、サイケデリックで派手な服を着ているが、築地のようにとにかく目立てばそれでいい、というスタンスではなく髪の毛は奇抜な色にしない。ビジュアル系学生のネタで盛り上がりつつ、コンビニで昼食の買い物を終えた四人はぶらぶらと研究室にもどってきた。すると暗い廊下の先に、先ほどのビジュアル系男子学生が教授室の前に立っているではないか。築地と長瀬はげっ、と顔を見合わせた。彼は美術科の学生かロック研に違いないという議論を、彼の姿を目撃する直前まで熱く戦わせていたところだった。彼の耳に入ってしまったのだろうか、と長瀬は口を押さえた。学生風の男に気付いた相模原は、少し離れた場所から彼に呼び掛けた。

「何か用かね」

「相模原教授か、待っていた」

彼は風貌通り教授にタメ口をきくようだ。学部の一、二年生がどんな色に髪をそめてどんな格好でやってきてもそれは教授の関知するところではないが、風貌だけではなく相模原は彼が妙な雰囲気を持っている事が気になった。

「いかにもそうだが」

「あなたの助力を仰ぎたい」

相模原教授はこの学生と面識がないし、ゼミなどで担当をした覚えもない。

教養の講義で教えた学生が髪を染めてやってきたのだろうか、ぐらいにしか思えない。相模原はコンビニで買ってきた冷やしそうめんを教授室の前の棚に無造作に置き、ゼミ室の鍵を開けた。学生風の男は微動だにせず、やや高い視線から教授を見下ろしている。カラーコンタクトをしているせいか、ひどく冷たい印象を受ける。松林はその感情のこもらない視線にぞっとした。

「ところで、君はどこの学生だね」

「学生ではない。先日新聞の一面記事の著者だ」

「それは面白い。だが記事には著者名がなかったぞ、ん？ まあ入りたまえ」

彼は冷房のきかない、むせ返ったゼミ室に通された。締め切っていたゼミ室の独特のにおいが、ゼミ室から廊下にあふれ出してくる。

「確かに記事には著者名がなかった。信じがたい、か」

彼は誰も要求していないのに、爪先で手の甲を傷つけて血を流した。

切り傷からは赤いインクのように透明な液体がじわりと染み出してくる。血の嫌いな長瀬が築地の影に隠れた。生ぬるい空気の立ち込めたゼミ室が、一気に凍りつきそうな緊張に包まれた。

「こんな色をした液体に見覚えはないか」

教授は老眼鏡を取り出し、思わず彼の手を取り上げて観察する。見間違いなどではないようだ。教授は未知との邂逅に鳥肌がたつ。しかしそれは同時に武者震いでもあるような気がした。

「比企という。己と共にこの病に立ち向かって欲しい」

「一つご確認を。つまりあなたは、人間ではないって事ですよね？」

松林の鋭い言葉を、彼は否定しない。比企は松林の問いかけに答えないままパソコンをケースから出して立ち上げ、データを見せると言った。相模原は比企がパソコンを立ち上げている間にちよつとトイレ、と言いながら退席して、向いの教授室の内線からこそこそと上島医院に電話をかけた。

3コール目で上島は電話口に出た。

「上島君！ 遂に例の血を持つ神様がこちらに出向いてくれたぞ」

『？ どういう意味だね』

「とぼけおって！ 若い白髪の様がいらしたぞ、上島君が派遣し

たのだろう？」

若い白髪の神だと？ ユージーンは確かに若そうに見えるが、金髪のはずだ……興奮した様子の相模原とは温度差のある上島は、一体誰が来たんだ？ と首をかしげた。

第1節 第45話 宇宙人のいる研究室

議場を出て少し辺りを見回ただけで、その姿を捜さなくとも以御は目立っていた。

使徒は概して神より平均身長が高いものらしく、退場してゆく第二種公務員の神々の中でも頭ひとつ飛び出している。迷子になど生まれてこのかた経験したこともない恒にとって、以御の身長の高さはよい目印になった。会議は全体で4時間ほどで終わった。

部門別委員会の24時間耐久レースのような会議の長さとは違い、生物階への一刻も早い対処が望まれ延々と会議をして感染の拡大を手をこまねいている訳にはいかないということらしい。

「会議は有意義だったか？」

「はい、傍聴させていただいてよかったです」

貴重なデータを見て話を聞けただけでも収穫はあったと恒は満足だ。それに極陽を遠目からでも見る事ができた。また、比企の自己を省みない姿勢には少々ぐつときた。

最後に比企と目が合ってしまったが、比企の目には力が漲っている、

彼ならば真剣に生物階を救ってくれるのではないかという気がした。ユージーンと荻号が主神に生物階と神階を牽引してゆくに相応しいと信頼した神だ、信頼しよう、と恒も思った。

「何か有効な方策が？」

「決定的ではありませんが、希望の持てる議案が採決されています」

「よう！ まだいたな」

織図が以御の姿を見つけて、いつもの軽さでへらりと手を振りながらやってきた。万年黒衣の織図が、儀式用の白衣を着ているのも珍しい姿だった。恒は他者ばかりの世界で気をつかう中、慣れ親しんだ織図の姿をようやく見つけてほっとする。織図はやはり神階ではそこそこ権力者らしく、第二種公務員達が織図に深く頭を下げながら脇を通り過ぎてゆく。

「手続きは以御にやってもらったか？ ん？」

「はい、陰階神に登録されそうになりましたけど」

「マジ！ で、陽階神なんだろう？」

「以御さんが係りの公務員に凄んでましたので」

以御が凄んでくれたからこそ陽階神として登録する事ができたというものだ。織図は恒が陽階神として登録されるものと信じて疑わなかったため、少し揉めていたと聞いて心配そうだった。

「さすが以御、怖えなあ。で、これからお前らどこ行くんだ？」

「執務室にお連れしようと思っておりますが」

「織図さんはどこに？」

「俺は下に降りてあのガサツなお嬢様の様子でも見に行つてやるかなあ。じゃ、後はいいようにしてやつてくれよ、以御。恒も夕方には家に帰れよ、志帆梨母ちゃんが心配するぞ」

「よろしく願います、俺はお見舞い、行けないので……」

行きたいが、感染する可能性があつて行けなかった。メファイストフェレスの容態を見舞うのができるのは織図だけだ。織図は解階の住民達の再度、再三の侵入に備えて、生物階に常駐するよう命じられているそうだ。他にも攻撃的神具を持つAAの神々数十柱が生物階に入る。アルシエルと極陽は連絡を取り合い、非常時なので20柱という神の生物階降下の定員を増やしてほしいと要請し、アルシエルもこれを快諾した。アルシエルは解階の全ゲートを封鎖し、違法ゲートを摘発している途中だという。アルシエルのもとに行つ

たユージーンがうまく交渉してくれたのかな、ということはユージーンはまだ元気なのだろうな、恒はそんなことを思う。メファイストフェレスもだが、いくら不死身とはいえユージーンの身も心配だった。彼はどこか間が抜けているからアルシエルに騙されてしまつてとっ捕まつて帰つてこれないなんて事がなければいいのだが……。彼の行動は危なかくて、とても見ていられなかった。

そんな事を考えているうちエレベーターが目的のフロアについて、恒は以御に連れられて枢軸位執務棟の11290階、軍神のフロアに入った。

ここには3万名の使徒が働いているそうだ。白衣を着た者は誰の目にもすぐに神だと分かるので、廊下をすれ違う使徒達は白衣を着た恒を見てひとまず畏まつてお辞儀をしたが、通り過ぎると誰だ、誰だと口々に言い合つていた。少年神が白衣を着て陽階を闊歩しているのは異様な姿なのだろうだ、恒が首にかけている認証プレートが一枚なければ、すぐにアカデミー送りにされてしまう。確かに恒はまだここにきてからというものの、使徒を含め子供とは一度もすれ違つていない。

子供がいない社会なのかと思いきや、子供は別の場所に隔離、監禁されているのだそうだ。現在アカデミーに入学している神々には悪いが、恒は特別にアカデミー入学を免除してもらつて幸せだった。

「珍しがられるだろうが、堂々としてりゃいい。あなたは合法的に陽階にいるんだ」

以御はそう言いながら、長い廊下の果てに見えた執務室の扉を開けた。恒は中に入つて、そのあまりの広さに目が飛び出そうになった。間取りが違うからか、荻号のアンティークな執務室より格段に広い豪華だ。陽階神と陰階神は待遇が違うのだろうか。いやいや、こんな広くて豪華な部屋見たことないから、そう思った恒は右手が

勝手に右隣にいる以御の腰のあたりにぺし、とツツコミを入れてしまっていた。

「あ、ごめんなさい。ツツコまずにはいられなかったのだ」

「何だ？ その動きは。ここ、軍神の執務室は40部屋……いくつだったか忘れたが、百ヘクタールはある。使徒の執務するオフィス部分とは別だ」

「ユージンさん、社務所では4畳一間で暮らしてたのに。それに荻号さんの部屋より広いです」

「いや、フロアの広さは陰階でも同じだぞ。部屋を違う目的に使っているんだろう」

慎重しやかにひっそりと神社の隣で暮らしていた彼は、天上に大豪邸を持っていたということだ。金欠気味の非常勤講師の姿はかりそめのものだったのだろう。

「会議室やホール、トレーニングルームなども含めて40部屋だ。使っていない部屋もある」

「全部ユージンさんの部屋ですか？」

「名義上はな。俺も二間借りてる」

恒は以御に案内されて、以御が用意してくれた部屋に通してくれた。部屋は100畳は軽くあって、大きなテーブルに、ソファ、書棚、広い展望浴室、ベッドはもちろん最新のパソコン、大画面超薄型テレビに冷蔵庫やオープンキッチン、庭付きな上に、25mプールも付いている。高級マンション、億ションのようだ。大きな窓からは擬似陽光を取り入れた明るい採光が部屋を光で満たしている。むろん、冷暖房は完備だそう。セレブや石油王も真っ青のあまりの豪華さに、豪邸リポーターのように室内をぐるぐる回ってしまった。

「すごい、広いお部屋！ スイートルームみたい！ いいんですか、

こんないい部屋に」

「つか、スイートルーム見たことないだろ。どうせ使っていないんだ、構わんさ。ほら、ここの鍵とトレーニングルームは出入り自由だから。その鍵もつけとく。それからユージーン執務室の鍵、資料室の鍵で全部だ」

恒は鍵束を受け取ると、嬉しさのあまり広いベッドにダイブしてみた。立派なスプリングが入っているようで、ぼよんぼよんとよく弾む。実家の煎餅布団とは寝心地が違う。だがいくらこちらのベッドが寝心地がいいといっても、恒は実家に帰ると心に決めていた。昼寝用のベッドとして使うべきだろう。

「家事はするのか？ 一応キッチンのある部屋にしたんだが……」
「家事できます。何か料理がしたくなっちゃいますね。母さん、このキッチン見たら羨ましがらるだろうな」

以御と恒は応接間に戻った。どうやらこの執務室専属のメイドがいるらしく、メイド服を着た若いメイドがコーヒールとケーキを持ってきて接待をしてくれた。ケーキのワゴンが出てきて、何個でも好きなものを選べという。ユージーンと以御は滅多に食事をしないので、専属シェフも暫く料理らしい料理を作る機会がなかったが、少年神がやってくると聞いたのでケーキぐらい食べるだろうと腕によりをかけて作ったのだそうだ。一流のパティシエが作ったような色とりどりのケーキに、見ているだけでよだれが出てくる。

「どうせあなたしか食わんのだから、今日の夜実家に帰るなら、土産に包んでもらうといい」

「以御さん食べないんですか？ こんなにおいしいそうなのに」
「無駄な食事は、贅肉のもとだ。あなたも陽階神なら太るとクビになるぞ。デブ神を誰が信仰してくれる？」

「陽階神って、シビアなんですな」
スタイルの維持と身だしなみは、陽階神の仕事の一部だという。

恒も太りすぎると神体検査で不合格となり、クビになってしまうか陰階神に転階しなければならいらしいので、ケーキはあまりたくさんいただくのは我慢して、3個だけにしておいた。

” ユーजीンさんたら、貧乏くじ引いてばかりだけど、実はいい生活してたんだ”

などと恒はイメージが変わってしまった。そりゃ、名誉もあるがこんな暮らしが生涯できるのなら第一種公務員を目指しもあるわなとも思う。そして自分も、すぐにではないがゆくゆくは第一種公務員になりたいくなる。

「その通り、陽階神として神階にとどまるのはとても厳しいことだ。少しずつ陽階神としての作法や、立ち居振る舞いを勉強していくといい」

「そうします」

まあ要するに、ユーजीンのようにしていればいいということだな、と恒は了解した。彼は物腰が柔らかく、言葉遣いが丁寧で、謙虚で温厚だ。あんな風にしていれば文句を言われないという事だろう。目移りしながらケーキを選んでいると、きつめのノックの音が出て、以御の許可も聞かず書類を持った女が入ってきた。

「以御、今までどこにいたの」

甘く聞き覚えのある声がして振り向くと、見覚えのある女が立っている。

「二岐さん！」

荻号の部屋でティーセットを出してくれ、身の回りの世話をしてくれた二岐が何故か軍神の執務室にいる。久々に見た二岐は、ベージュのジャケットスーツを着ていたがスーツの襟に軍神の御璽をあしらったピンバッジをつけている。いかなる私服を着ていようと、使徒に必ず表示が義務付けられる所屬神の御璽。それが紛れもなくユーजीンの使徒だと証していた。宗旨替えをしたという事なのだ

ろうか、それを見て恒は何となく切なくなってしまった。あれだけ
荻号と夫婦漫才のようなやり取りをしていたのに、失踪した途端に
ユージーンに乗り換えなのかな、と。そうは言っても使徒は神の元
でしか生きてゆけないのだ、主を失うと、新たな主を捜さなければ
ならない。二岐も二岐でユージーンに尻軽く乗り換えただけではな
いだろう。彼女も辛かったに違いないな、と恒は思いなおす。

「何だ？ 知り合いか？」

「あら、久しぶり。神階に上がってきたの？ よろしくね」

「今日、ユージーンさんの弟子として陽階神になりました。二岐さ
ん、どうして？」

「うちの新しい第二使徒だ。態度がでかいったら」

「何よ、文句はもつと仕事ができるようになってから言いなさい。
上司として認められないわ」

これは冗談ではなく実際のところそうだった。

以御より二岐の方が仕事ができるし業績もある。年齢も二岐の方
がずっと上だ。二岐は勿論軍神の第一使徒の座を狙ってもよかった、
だが神と第一使徒の関係は一朝一夕で築かれてきたものではないと
よく心得ている。人事権のあるユージーンが就任以来一度も解任せ
ずに手元に以御を置き続けてきたこと、これは以御に信頼を寄せて
いたという証拠だ。新参者がこの関係を崩してよい道理もない。二
岐は一步下がった場所から彼に伺候する事に決めた。しかし二岐が
一つ不満なのは、第一使徒のみが神のアトモスフィアを直接受ける
事ができるという点だった。第一使徒と第二使徒は決定的に待遇が
違う。第二使徒以下の使徒には神が直接アトモスフィアを与えられ
ることはなく、アトモスフィアの希釈液を注射する事によって基礎
代謝のためのアトモスフィアが補われる。希釈倍率は所属する神の
強さにより決まるものだが、軍神の場合、十大使徒に与えられる給
料は彼のアトモスフィアの2倍希釈と定められている。最下位の使
徒となると、数千倍希釈となってその差は歴然としている。

無限とも思われる荻号のアトモスフィアを直接その身に受けてきた二岐がそれっぽっちの給料でやっていけるかどうかという微妙なところだった。身体で味わわないと、物足りない和二岐は思う。あの愛情を貪るような快楽と、神に必要とされているという幸福感を二度と味わう事ができないのなら……。ところで以御とユージーンの関係は味も素っ気もない。ユージーンは公衆の面前で以御の手を軽く握手するようにアトモスフィアを与えているようだ。ダメだ、ダメだ、至福の時間はそんな一瞬で済まされない。もっとお互いが気持ちよくなるようなひと時を過ごせるよう、あの若い神には教育してやらなくては。そうやってお互いの必要性をかみ締めて初めて神と第一使徒は契約を更新するものだ。

今は第一使徒の座を以御に譲るが、いつまでも第二位の座に落ち着くつもりはなかった。ユージーンの信頼を得て彼の第一使徒として相応しいと認めてもらえるなら、その時は迷いなどない。見ていなさいよ、と二岐は以御をまじまじと見つめた。

「つたく、これだ。廿日が産休に入っとな。でなきゃ、誰がこの女と……」

「転階してここに來たの、心機一転、再スタートね」

以御はどこか敬遠しているようだったが、恒は彼女に親切にしてもらったと思う。料理もおいしかったし彼女の手料理は格別だった。気に入らない事があると時々荻号の好物の紅茶に塩とコシヨーで味付けをして嫌がらせをしていたものの、実は仲良しだったという話を織図から聞いていた。よくよく考えたら、畏れ多くも創世者に嫌がらせをして、それで創世者も文句も言わず耐えてたった事だよなあ、と恒は微笑ましく振り返る。

「で、何の用だ？」

「GL一ネットワークで発表されている、感染者の拡大状況を見た？」

わざわざ訊かれなくとも当然ニュースは数時間おきにチェックしている。恒でさえ1日一回はチェックしているのだから、以御が見ていないなどは考えられないのだが、二岐は敢えてそんなことを言う。二岐のもともとの髪の毛の色は荻号の色に似ている、瞳の色も彼女の以前の主と瓜二つだ。以御は二岐と話しているとどうしても荻号の影が見えてしまうので苦手だった。

「ああ、見たさ」

「何か気付かない？」

「感染は凄まじいスピードで拡大している」

「やっぱり、その程度」

以御はカチンとくるところだが、見抜けないものは仕方がない。以御はそれ以上なじられたくないのか、立ち上げていたパソコンでGLネットワークに入った。恒も一緒にそのデータを見せてもらう。1時間ごとの感染者の分布状況が世界地図の上に表示されている。赤い点が感染者を示すのだそうだが、ファティナのデータで更に詳細が表示されていたが、その時には気付かなかった。既に400千人が感染しているとのことだ。以御はしかめつらをしてデータを見ている。恒も以御の隣で同じような顔をして座っていたが、あつと叫んだ。

「あ！ 解りました！」

「さすが、頭の固い誰かさんとは違うわね」

「これ、時間別に見ると地域によって感染のスピードが違います」

恒はマウスを借りて、GLネットワークの統計課のページに入った。そこには生物階のある統計データが表示されていた。恒はそれを見て確信する。

「わかりました、やっぱりそうです。この病原体は、メディアを介しても感染するんです。先進国より後進国の方が感染が遅いんです、

それはテレビの普及度と顕著な相関関係があります。つまり感染媒体は、視覚、あるいは聴覚情報だ……」

「そう。この病原体は、感染者の映像を撮影してそれをテレビ局が報道すると、テレビを見た者にも遠隔感染するのよ」

恒は早瀬の言葉を思い出した。まるで細胞がアポトーシスという自殺を起こすように、たった一つのシグナルが、DNAを持つ生体を破壊する。そしてそれは遺伝子を持つ生物にプログラムされているものだ。感染者を見た者に、あるいは感染者の声を聞いた者に伝染するのか……。周到に遺伝子にプログラムされていた、死の受容体のスイッチが入った。恒はそんなイメージがぴたりと重なった。早瀬の意見を聞いておいてよかった、こんな事は恒単独ではとても思いつかない。

「目が見えない人、耳が聞こえない人、あるいは目も耳も聞こえない人には感染しないのでしょうか？ 感染源から遠隔地に住んでいる人、感染源に住んでいる人で感染した人達は皆健常者だったのでしょうか」

「それは簡単に調べられる」

以御はADAMにアクセスをし、生物階の全生体リストを開く。それらと照らし合わせながら、発表されている感染者のリストを洗った。その結果、感染源に住んでいた者は健常者も盲、聾者も全感染。一方、遠隔地での感染者は健常者ばかりだ。遠隔地では盲、聾の人々には感染していない。テレビメディアからの間接的な感染が立証された結果だった。感染地区に住んでいる者は感染者に近づいただけで健常者も障害者も全員が感染する。だがテレビを通じて感染者を見た者が感染者となる条件は視覚情報と聴覚情報、そのどちらかが揃わなければならない。ラジオで放送されるだけでは感染しない。無音の映像を見るだけでは感染しない。音声の入った映像を見ることによってのみ感染するという事になる。冷静に、少しずつ考えてゆけば感染経路を解き明かす糸口が見つかるかもしれない。

二岐の観察眼は素晴らしい、彼女が些細な事に気付かなければこの小さな発見は見出せなかった。恒は彼女に感謝したかった。

「これは大変です！ 世界中のテレビ局に、感染者を報道しないようにしてもらわないと！」

逆に言えば、感染者を見ないだけ、感染者の声を聞かないだけで感染の拡大を防ぐ事ができるのではないか。しかし世界中の人間が耳栓をして歩くとしても、耳栓をするだけでは音声の遮断は完全ではない。そして感染者を直接目撃した者は、100%感染するという謎がまだ残っている。

デスシグナルは、盲目の時計職人が遺伝子に仕掛けたプログラムは、何だ？

＊

その頃、大阪大学のとある研究室では比企により次々と化合物のスキームが提案されていた。比企によると現在地球上に入った比企の仲間（神々だと相模原は思っているのだが）は5名。彼等は相模原が連絡を取っていた海外組のいる研究室に出向いたのだそうだ。仲間達とは化合物の合成を分担しているとのことだ。大阪大学に割り当てられた化合物は8つから、一気に3つに減った。比企を含め、仲間達は業績には固執しないし後々の論文に名前を掲載する必要もないので、相模原達が均等に分割すればいいと、比企は断言した。相模原は比企が慈善事業で合成を手伝ってくれるという点に驚いたが、比企は業績を主張しないという誓約書を書いて相模原に渡したので信じないわけにはいかなかった。そして化合物の合成方法がわかり次第、その情報はとある製薬会社に送られただちに生産されるが、その特許料とパテントは大阪大学と各大学のものだという誓約書も書いてわだかまりがなくなった。

教授と松林を含めた三人で激論が交わされている傍ら、築地と長瀬はそれを遠巻きに見ているだけで高度すぎて話に加われない。大学院生達も一人また一人とやってきて、築地と長瀬にコソコソと事情を聞いてコーヒーや麦茶を作っていた。

「なーあの人、ホントはNASAに通報すべきなんちゃうのー」

「じゃあツッチー英語で通報できる？」

「でけへん」

「それより私、いいあだ名考えたんだけど。ヒッキーってどうかな？」

「何や、ありきたりやな」

比企さん、比企くん、あるいは呼び捨てのどれで呼べばいいのだろう。などとコーヒーを手に手に、考えている。そうこうしているうちに相模原教授と比企は松林の案も合わせて合意すると、早速研究室全体が動き始めた。相模原教授は勿論、合成屋の松林、長瀬をはじめ、学生達も久しぶりに白衣に袖を通す。

「じゃあ、大坂大学が世界に先駆けて、やってやろうじゃないの」

松林が呼びかけて、学生達は円陣を組んだ。仕方ないなあ、と学生達はそれぞれにばやきながらも、世界の窮地を救うほど大きな仕事が出来る機会など、一生に一度もあるものではないと自覚していた。そしてもしもそんな仕事をやり遂げたら……自分の知らない世界の中の誰かを救う事になる、それは一生の思い出になる筈だ。

慎重に合成を進める中、化学反応の待ち時間になって比企はゼミ室で資料を見たりして時間を持て余していた。院生達は人間ではないと解った比企に何となく話しかけ辛くて、やはり遠巻きに見ている。彼は自分に近づくなというオーラを出しまくっていて、なかなか馴染めない。それを見ていた長瀬が、誰も行かないなら自分と冷蔵庫からペットボトル入り午後の紅茶を持って、比企の目の前にそっと置く。ゼミ室の扉の外の隙間から、学生達が何人も覗いている。

「これ、どうぞー」

「ありがとう」

比企はにこりともせず飲み物を受け取った。ゼミ室のむせ返る空気の中でも汗一つかかず冷たい、彼の雰囲気は長瀬は負けない。白い喉を鳴らして、飲み物を喉に流し込んでいる。色白の長瀬より一回りも二回りも白い。恐らくつい先ほどまで太陽など見たこともなかったんじゃないか、長瀬はそんな気がした。

「比企君って結局、宇宙人なんでしょ？　どこの星から来たのかな？　コリン星よりずっと遠い？」

「宇宙人？　まあそんなものだな、怖いかな」

「ううん、ちょっと絡み辛いだけ。比企君っていくつなの？　私よりずっと年下だよねえ？」

「その30倍は生きている」

「わお！　さすが宇宙人！」

人間ではないと知った上でにこにこ話しかけてくる長瀬を見て、比企は彼女のような人間が居れば、神と人との共生を難しく考える必要も、生物階を力で支配する必要もないのかもしれない、と感じた。ゼミ室の外で長瀬と比企のやり取りを見ていた他の学生達も入ってきて、会話に加わりたいたのか、自己紹介をはじめた。

「お、俺、千葉 ちば みつる 満です」

「私、白浜 しらばま 樹里 じゅり です。M2の」

「私 玉崎です」

「俺は……」

自己紹介をしようとした築地の言葉をさえぎって、比企は冷たく彼の名を言い当てた。

「築地 正孝、ちなみに己の毛は地毛だ、カツラではない」

「あ、ツッチーの悪口聞こえてたの？」

あははは、とゼミ室が笑いに包まれる。それにしても擬似陽光と

は違い生物階の陽光は眩く温かい、この世界を心地よい、と初めて生物階に降りた比企は感じた。

これが、アルティメイト・オブ・ノーボデイの守ろうとした世界。その住民は短い生涯の間、日々を直向に生きている。データの上でしか知らなかった彼等と触れ合うことで、守らねばならないという義務感から守りたいという気持ちに変わった。身の上を隠さずありのままの姿を見せて、そして存在を認めてもらうという喜びを知った思いだ。

比企には生物階の全てが眩しく感じられた。

＊

解階の果てにまで転移したユージーンは禁視を以って宇宙の断端に目を凝らす。

その果ては見えず、少しでも気を抜けば吸い込まれそうなほど深い。ブラインド・ウォッチメイカーの投げかけた解階の終末を齎す底知れぬ闇。いくつもの星を飲み込んで全ての惨禍はここから……。侵食を止めなくてはならない。荻号がINVISIBLEの空間歪曲フィールドを消したように、荻号ほどは力もないユージーンも彼に倣って挑んでみるほかない。ユージーンは相転星を取り出し、掌の上で外環を捻りを加える。そうしようとして、彼はその手を止めた。いや……

” う……動かない ”

ユージーンは金縛りにかかったようにその場に縫い付けられて動けなくなってしまった。深淵から、何かがじつくりと彼を観察しているような、そんなおぞましい予感がする。

” 居るのか？ そこに？ ……時計職人 ”

どこに居るといふ事ははっきりとはいえない。解階そのものが彼、もしくは彼女の母胎だ。

ここではブラインド・ウォッチメイカーがどこにでも居て、どこにも居ない者なのだ。

絶対の宇宙の法則を支配している。たとえユージーンがここで永遠に金縛りにかかっているとしても、神階と生物階を支配するノーボディの助けはない。自力で脱出するほかないのだ。ブラインド・ウォッチメイカーに周到におびき寄せられ、嵌められたのだとユージーンは気付いたがどうする事も出来なかった。とにかく危険だ、ここから離れなくては。

『ダメだ……』

ここに長くは居られない。ユージーンは指一本動かせないながらに、少しでも空間矯正が出来るものかと考えはじめる。相転星の時間空間操作能力が封じられている以上、自らがその身ひとつで圧倒的な熱量を放散しなければならぬ。だが増幅装置もなく創世者の創り出したブラックホールを消し去る事ができるかというと、実際のところ不可能だとは思えない。ブラインド・ウォッチメイカーの力は、神を生み出し生物階に関与してくることで力を浪費していたノーボディより遥かに勝っている。そしてアルティメイト・オブ・ノーボディのほんの一部でしかないユージーンが勝てる相手ではないのだ。

『……出来ないのなら……逃げるしかない。ここは彼の母胎だ』

ユージーンはブラインド・ウォッチメイカーの脅威に曝された解階の住民達を見捨てるつもりはない。解階はやがて滅ぶ。ブラインド・ウォッチメイカーの無慈悲な滅亡に、その住民達を付き合えたくはない。

”……そうか、あの手がある”

ユージーンはとんでもない事を思いついて、アルシエルの待つ母

星に瞬間移動をした。指一本動かさなくとも瞬間移動をかけるぐらい、訳はない。何千光年もの距離をひとつとびにして転移先に居たアルシエルは執務机について、パソコンを相手に忙しそうに仕事をしている。ユージーンの帰還に、期待を込めた眼差しで見上げる。

「どうだった」

ユージーンは申し訳なさそうに、力なく首を振る。皆まで言わずとも、よい結果ではなかったのだと察した。

「そうか……」

アルシエルはひどく落胆したようだが、ユージーンを責めることはできなかった。神皇 ユージーンにも出来ない事はあるう、最強の実力者とされた解階の女皇たる彼女がまた、何も出来なかったように……。だがそうなるというよいよ、解階の滅亡を手をこまねいて見ている他なくなる。アルシエルは助かる手段がないのだと、改めて突きつけられた思いだ。

「無理です。あの場所はわたしの力も刃が立ちません。そこで陛下、あなたにご質問があります」

「おお、何だ」

ユージーンは数名の侍史がいたので人払いをしてもらってから、本題に入った。

「解階はまさに、滅びゆくこうとしています。あなたがたはこの宇宙と共に、滅んで行くことを望みますか？ それとも……生物階に入って、生き続けたいですか？」

「この星を捨てて地球に行けと？」

つまりそれは、生物階の侵略を意味する。アルシエルは力こそ全てという世界に生きてはきたが、異なる文化を持つ異なる宇宙にまでその価値観を押し付けるつもりはなかった。生物階で慎ましかに暮らす地球の生命達を略取し、虐殺して植民地化するという事は彼女をはじめ解階の貴族達の価値観にも反する事になるだろう。だ

がたとえ彼女の臣民達の同意を得てそうしようとしたとしても、生物階への侵略を、ユージン以外の神々が許すとは思えない。彼等は人間達をこよなく愛してきて、守り続けたいと考えている。

「いいえ、この星と共に生物階に入るので。わたしがこの星を生物階への超空間転移に巻き込みます。解階の臣民達はあなたに忠誠を誓っています。あなたの判断が全てです、ご決断下さい」

解階の星々を生物階に転移させる。同じ宇宙の異なる星々に住もう同胞となるだろう。三年後、ユージンとアルティメイト・オブ・ノーボディは最大の創世者 INVISIBLE と成り代わり、いずれ三階を統一する予定なのだ、同じ宇宙のもと三階の住民が肩を並べて生きてゆく、そんな時代の到来を実現させようとしている。

それが早いか遅いかというだけだ。感染者を生物階に持ち込む事になるが、地球からうんと離れた場所に転移をさせておけば、解階の違法ゲートから地球に入るという状況もむしろ改善され、宇宙の離れた場所でお互いに影響しあう事はないだろう。ユージンの力だけで、星一つずつを転移に巻き込まなければならないというのは骨のおれる仕事だが、不可能ではない。ブラインド・ウォッチメイカーの母胎の中で、身勝手な意思に振り回されるだけなら、全てアルティメイト・オブ・ノーボディの庇護下に置かれた方が安全だし安らぎもあるだろう。ノーボディは解階の住民を差別化してはいない。彼等は生物階とは異なる文化や容姿を持ち、生物階の住民達からは悪魔と呼ばれ恐れられてはいるが、実際に生物階の住民達に害をなし殺戮を行ってきた事はなかった。

メファイストフェレスのように情に厚く、アルシエルのように理知的な者もいる。

「それは決まっておる」

ふかふかの椅子に掛けていたアルシエルは立ち上がった。

「我は我が臣民を、不当な滅亡に巻き込む事を望まん。だが、生物階の人間どもに迷惑をかけとうもない。生物階に負担を強いることなく滅亡を避けられるものなら……返事は一つだ」

「では、解階の住民達の住む星を教えて下さい。わたしはそれらを全て生物階に転移させます。ほんの少しだけ、時間を下さい。わたしは生物階に一時戻り、さる御方の御意見を伺って参ります」

「さる御方？　神皇ともあろう者が伺いを立てるべき者がいるのか？」

「昔いまし、今いまし、永劫に我々の味方をして下さる御方です」
「そうか、それは頼もしい」

彼女ははっきりと頷いた。この件を神々に打診してはならない。神々は解階の住民を信賴しておらず、それどころか酷い誤解をしている。たとえ暴君と罵られようとも、ユーザーはアルシエルを代表とする解階の住民達の”生きたい”というささやかな願いを受けて、神々の同意を得ぬままでも解階の星々を生物階に移すべきだと考えた。ユーザーは神々全ての反感を買おうとも、たったひとりの同意があればそれでいい。

それは勿論、名も姿もなきもの（Ultimate of Nobody）だ。

第1節 第45話 宇宙人のいる研究室（後書き）

挿絵（絵師様の）／築地正孝・長瀬くらら・相模原教授
http://lizreel.web.fc2.com/6to
bira/6tobira-narou.html

第1節 第46話 担任と副担任が夜間飛行で

生物階に降下した32柱の陰陽階の武型神は、解階の住民の更なる侵入に備えると同時に感染した人間を隔離し、あるいは手にかけてねばならなかった。

感染者は解階の住民の場合僅か数分、人間の場合およそ半日の潜伏期間を経て唐突に自我と理性を失い、無意識的かつ発作的な破壊活動に転じる。周囲にいる人間は感染者に殺されるか、逃げおおせたとしても半日後には感染し、同じ行動を取るようになる。

感染者は摂食本能が阻害されているが、解階側から提供されたデータによると一週間は不眠不休で活動が続けるのだそうだ。そして遂には力尽き息たえる。生物階での人間の感染者が死亡したケースはまだ一例もない。しかし一週間後、死者数は膨大な数となってしまっているだろう。ちなみに死体から感染したケースはなく、生きた感染者からのみ感染するのだそうだ。そして感染は人間だけに留まらない。

わけでも野性の鳥獣への感染と鳥獣から人間への二次、三次感染は深刻だった。鳥は国境を知らないのだから――。

"Entropy Elevation! +20, +50, +100 area full coverage!! Operation!"

(エントロピー増大、+20, +50, +100、エリア全適用、開始)

鈴を振るような美しい声で高らかに、祝詞のように唱えられるコマンドが終わると共に、エントロピーの増大に耐えられず頭部を残して内臓を破壊され心肺停止となる感染者達。死体へと転じた彼らを片っ端から黒衣を着た死神の使徒達が記憶を回収してゆく。頭部

がなければ記憶が回収できずEVEに入れないので、女神は最期の慈悲としてわざと頭部を傷つけない。

「こんなに忙しいのは、第二次大戦以来でございました」

フードを目深に被った死神下の使徒達が愚痴を言う。いの一番に死者の傍らに駆け付ける彼らは感染者の殲滅を任務とする武型神について回って死者を捜す手間を省いている。

「神が率先して罪なき命を殺戮しているとは、恐ろしい事です」

陽階枢軸神 第10位、熱力学を司る武型の女神、ナターシャⅡ
サンドラは人の目にも触れぬ上空で、白く清らかなレースのような聖衣をたなびかせながら、起動すれば500kgにもなる鉄槌型神具 エントロピー・マキシマイゼーションを細腕で軽々と振り回し着々と仕事をこなしてゆく。清楚で可憐な彼女は寡黙で、動じる事なく淡々と任務をこなし、神の炎をもって穢された者達を洗い清め死の安息を与える。感染者を焼き払いながらも彼女の聖印を丁寧に切り送り、死者達に哀悼の意を示す事を忘れない礼儀正しく真摯な陽階神だ。

「せめて死後は、よい処に逝かせてあげて下さい」

「それはもちろんで」

しかし人の行き着く死後の世界、EVEもメモリが不足しはじめたとのこと。織図は毎年年度ごとの推定死者数を算出し、記憶を収容できるギリギリしかメモリを増設していない。このままのペースで死者が増えようものならEVEはパンクしてしまうだろう。犠牲者に死後の安息すら与えさせないのかとナターシャは嘆きつつも、惨禍のスパイラルに落ち込んでいつているような気がしてならなかった。

死と暴力の連鎖を、一体誰が止められる？

＊

夜も8時になって今日の作業を終え、16時間反応の待ち時間になった。

これまでのところ、期待どおりの中間体が合成されているように思える。比企は泊り込みで反応を見ているから研究室の皆は家に帰って休むといいと彼等を労わった。比企は実のところ、ひとりになりたかった。宿などっていなかったし、眠る必要もない体だ。この研究室で朝まで寝ずの番をしていて不都合は何もないし、誰もいない方がかえってGLネットワークに接続しやすい。それなのにこの空気を読まないメンバーはこんな時間から歓迎会をやるうとしているのだ。

「新しいメンバーも増えたし、歓迎会をやるぞ！ 比企さんもうせ反応見ているもこの段階では何も変わる訳じゃなし、飲みに行きましょう！」

教授が思いつきで、そんな事を言いはじめた。今日の今日、という話なのでバイトなどの予定がある学生は参加できないと言ったが、10人は参加できそうだ。相模原は大学の近くで、この非常時でも営業している飲み屋をホットペッパーで捜して電話をかけ、席の予約を取りコースまで注文してしまっていた。

「気持ちには有難いが、己は酒を飲めない。自粛させてほしい」

酒を飲めないなど、よくも言えたものだ。使徒は飲酒をすれば酔うが、神はアルコールや薬物は一切効かない神体を持っている。薬物や化学物質に干渉されないというメリットこそが神体の安定性を保ち、長寿を可能としているのだ。

「えー、比企君お酒弱いのか？」

長瀬は身を乗り出して比企をからかう。

「飲み会は酔う為にやるものではないです」

「では何のためにするんだ？」

「親睦を深めるためじゃないですか？」

アルコールにめっぽう弱い松林がもっともらしく言う。その必要はない。とは言えなかった。比企はわずらわしい係わり合いなど億劫だし苦手でもあるが、チームワークを欠いては研究室は動かない。比企への遠慮や疑いを取り除いておかなければ、仕事に影響してくる。

仕方なく比企は相模原らに連れられて近くの焼酎の美味いらしい飲み屋に徒歩で出かけた。

疲れていたからかメンバーはすぐにほろ酔い加減となり、酒が潤滑油となって話も弾んで普段クールな松林はすっかり酔っ払って学部生に絡み酒をしている。長瀬は既にベロンベロンになって、セクハラトークが思い思いの場所で始まっていた。騒々しい事この上ないな、と居心地の悪さを再認識しながら、比企は面倒なので教授の話の聞き役に徹していた。

しかしそれで許してはもらえない。

「そろそろ白状してもいいんじゃないかね？　あなたは誰なんだね。たまたま地球を通りかかった、通りすがりの宇宙人じゃないんだろう？」

相模原教授はかなりのペースで飲んでいるが、ほんの少し鼻の頭が赤くなっただけだ。

院生に適当なものを頼まれて、比企もわけのわからないラインナップで焼酎や泡盛を飲まされたが、顔色は青白いだけで変化がない。今日は教授のおごりだということで、学生達は容赦なく焼酎やビール、酎ハイを怒涛の勢いで頼んでいる。教授は手加減というものを知らない彼等の為に20万もおろしてきたが、4000円の食べ放題、飲み放題をつけておいてよかったと胸をなでおろす。

「相模原教授。一つ、主観的でかつ個人的な意見を訊かせてくれ。

……時間をかけて考えたが、答えが出せなかった問題がある」

「私いち個人の意見として、でよいのかね？」

「それでいい。何もあなたを人間代表だとは思っておらん」

相模原が頷いたので、比企は目を細めた。そして比企には答えが出せなかったあの命題を投げかける。何度も荻号に問いかけて結局答えなど出なかった問題。そして比企自身が悩みぬいて解決できなかった数少ない命題の一つ。

「人間はまだ、神を必要としているだろうか？」

相模原はやはり、彼は神だったのだと確信した。

ただ神という責任ある名を名乗ることが、彼自身にも正しい事なのか判断できていないのだろう。人が求めるから神は神として振舞う。神あつての人なのか人が神を生み出したのか、もはや比企には分からなくなっていた。相模原は彼を救うために、ほんの少し酒の力に頼った。

「……さあ、それは心の問題ですからな。神を信じるも信じないも我々はあなた方に感謝をしている。どういう事情か知らんが、神を演ずる必要などないんじゃないか？」

ひとりでしっぽりと日本酒をあおる教授のおちよこに、比企は熱燗の日本酒を注ぐと、教授がたこわさを彼に勧めた。

「なるほど。貴重な意見だ……」

比企は長く心の奥につかえていたしこりが、喉に引っかかって取れなかった小骨が取れたように清々しい気分になった。神が人間の評価を気にしているほどに、人は神の真贋を求めはしない。その答えを直接人間の口から聞く事ができただけでよかった、まだ神が存在する余地はあるのではないかと思った。

「あー、また比企君が難しい話してるー！ はい、席チェンジ！

席替えタイム！」

「バカ！ サンをつけろ！ もー、この酔っ払い外連れ出してくれー？」

長瀬は比企が気に入ってしまったらしい。

築地は海外でカンガルと暮らしつつ日本への帰還を夢見るシゲルが、長瀬に見捨てられてしまわないかと心配でならない。

「ではー、宴もたけなわですが！ 比企君には錯体研恒例のきき酒をやってもらいまーす！ はい！ この焼酎ロック飲んで！ 大ヒント！ 芋です！」

酔っ払った長瀬はどうしても比企に絡みたがる。酔っ払い長瀬を生真面目で冗談の通じなさそうな比企に近づけてはだめだと、院生達は長瀬を教授の隣の席に通さないようバリケードを張っている。比企は手にしていた焼酎のにおいを嗅いで、成分分析を始めた。

「ゲラニルゲラニオール、 α -テルピネオール、ネロール、こんな成分が旨いのか？」

「誰が成分分析をしろって言ったのー？ 産地と銘柄を当ててもらわなきゃ」

日本にきたばかりの宇宙人がきき酒できるわけないだろ、そう思った錯体研一同である。

ちなみに真面目に答えた比企は真面目に答えた罰として、もう一杯飲まされる羽目になった。

＊

吉川 皐月は、ようやく帰る支度をしてリュックを背負い、静まり返った校舎を歩いていった。

教室の鉢植えに水をやり、クラスで飼育しているメダカの世話をやく。外出差し控え令が発令され部活動は明るい午前中までに終わるようにと広島市教育委員会からの通達があり、校内は職員室に数人の教員がいるほかは実に閑散としていた。実は小心者の皐月は職員室からたった2階上の教室に行くだけでも怖くなってしまふほど、誰もいない校舎が苦手だ。足音がやけに響き渡るし、物陰を覗き込むのですら怖い。風岳小学校の教員は、休み中に海外旅行に出掛けた児童達の安否を確認するため夕方まで残って、時間外で働いていた。

教室のドアは先日と同じく固く閉ざされている。誰もいないようね。特にお化けとか。

ほっとして教室に入ると教壇の上に誰かが俯せになって寝ている。顔は伏せていて見えないが、小学校の教室に似合わぬ大きなシルエットから、皐月にはそれが誰なのかすぐにわかった。ユージーンはうたた寝をしているのか、皐月の接近に気付く様子もない。皐月はあっと小さく叫びそうになったが口を抑えて、起こすのを躊躇い、予定通りメダカの世話をはじめた。

目を醒ませば、きっと自分はまたあれこれ問い質そうとする。

彼は困惑して何も話してはくれないだろう。少し不器用な彼の事だから、嘘をついて皐月を傷つけないと口走りながら、また言葉に詰まって逃げてしまいかねない。ならば今はこうして同じ空気の中にいるだけでいい。机の上には、採点された算数と理科のプリントが載っていた。

皐月はメダカの水槽をいつもより丁寧に洗い、鉢植えにたっぷり水をやって、いらなくなった掲示物を剥がしたがそれ以上に時間は潰せず結局窓際の席に腰掛けて、すやすやと眠りこけているユージーンを見つめる。誰もいないとわかりきっている、黄昏の教室。人目を避けるように、何を思っただこに来たのか……。どこにも逃

げ場がないのだろうな、と皐月は思う。孤独になりたくて来たのか、あるいは教師だった頃を懐かしんだのか。じっと観察しているのも気の毒だと考え、彼女は立ち上がって教室の後ろの扉に手をかけた。

「吉川先生」

背後から声が聞こえた。ふたりきりの教室で呼び声はやけに大きく聞こえる。皐月は予想外の呼び掛けに驚き、小さく飛び上がった。起こすつもりは微塵もなかったからだ。

「もう！ 驚かさないで下さい！ 起きていらしたんですか」

皐月はそんな言葉とは裏腹に嬉しさを隠し切れない顔で振り返ったのだが、その瞬間に吹き出してしまった。

彼の額には俯せになっていてバッチリついたらしい、袖のカフスボタンの跡があった。

「何です、ひとの顔を見るなり」

「おでこに寝あとがついてますよ。それと寝癖、本当に寝てたんですね」

「お恥ずかしい」

彼は顔を赤らめつつ体裁が悪そうに額をさすっている。

「では、私はこれで」

「吉川先生、申し訳ありません。教師の仕事、あなたに押し付けて」ここに居残らずにさっさと帰らなきゃ、皐月はそう自らに言い聞かせる。

でないと、私はまたこの人を困らせる質問ばかりする。皐月は昂ぶりそうになる心を鎮めて愛想笑いをした。

「いいんですよ。帰ってきたら、しっかり働いていただきますからね」

皐月は冗談めかしてそう言うと、今度こそ逃げるように教室を出

て行こうと思った。

少し会わなかっただけなのに、何とぞこちなくよそよそしい態度だろう。しかし彼女にもどうすることもできない。振り返って直視すれば、彼は必ず心を読もうとする。決して読まれてはならない感情が、胸の中を定まらない潮目のようにたゆたっていた。

「で、では」

「吉川先生。よろしければ夕食と一緒にしませんか？」

どうしていつも他人行儀でつれない態度なのに、今日に限って誘うのだろうか。

皐月は彼との距離感が掴めずにいる。

「ご馳走します、ご迷惑をかけっぱなしでしたから」

彼がここにいた理由は、ただ時間を持て余していたからだ。ノーボディはユージーンの提案を飲んだ。滅亡を目前に、生きる権利を不当に剥奪される解階の住民を生物階に受け入れる事は、やはり彼の意思にならなっていた。しかし生物階の星々と解階の星々を同一空間にちりばめてしまえば、瞬間移動などによって地球と解階の星々が往来できてしまう。感染がひと段落し沈静化するまでの間、生物階と解階の星々を物理学的に隔離しておいた方がよいという考えで、地球と解階の星々の間に転移不可能な障害を作っておくべきだと彼は述べた。ノーボディが生物階に解階の星々が移転するためのスペースを確保し、地球を安全な障壁で保護するまでの数時間、ユージーンには少しだけ時間があつたが、時間が空いたからといったのこのこ神階に戻る訳にはいかなかった。

ユージーンの携帯には、彼が解階に行っている間にサーバーにゴッそりと溜まっていたメールが続々と送信されてきて、神階と生物階での出来事が詳細に把握できる。神階はユージーンの帰還を強く

要請していた、神階に戻ればおそらく直ちに拘束され血液を限界まで搾り取られ、その後は執務室に軟禁され毎日のように治癒血を搾られる事になるのだろう。あの生まれたばかりのレイアでさえ、一日300mlも搾られているそうなので、成神のユージーンがどうなるかは目に見えている。この非常事態に際し元葉神の比企が生物階に降下し治癒血の数種の成分を合成しているそうだが、レプリカが完成し承認されるまでの間に本物で合わせというわけだ。

生物階の要人に感染した際に備え、治癒血を蓄えておくためだ。例えば国家元首が感染をしてしまった場合、その国の中枢機能はまると麻痺してしまう。神階は生物階の混乱を避ける為にも直ちに治癒を図らねばならなかった。その為にユージーンとレイアの血液を備蓄するのだそう。その決定に関して文句はないが、それでは解階で助けを待つアルシエルとの約束を果たせない。先に解階に戻らなければ……。とにかくユージーンはただノーボディを待つだけの待ち時間を有意義に過ごす方法として、皐月への日ごろの罪ほろぼしをしておこうと考えたわけだ。職員達誰にも見つからないまま下足場を通り校庭に出て、ユージーンは皐月に何が食べたいのかを訊ねる。

それだけ見ればどこにでもある、仕事上がりの風景だ。

「何が食べたいですか？」

「ラーメン！ 絶対ラーメンです！ すごく食べたかったです」

「ラーメンでいいんですか？ どこかおいしい店をご存知ですか？」

ユージーンはどんなにオプシオンや餃子などのサイドメニューを付けても安く済んでしまうラーメン屋を提案されて、何となくご馳走し甲斐がなかった。もっと高いものを頼んでくれると助かるのだが……これではツケがチャラにならない。彼女には休職中、迷惑をかけてしまった。

「ラーメンがいいんです。出来れば、広岡駅前の麵葦堂の……でも、遠いので……」

「そのおいしいお店に行きましようか、折角ですし。荷物はありますね?」

皐月は帰り支度をして、小洒落たリュックを背負ったままだ。

「もう上りの電車、ありませんけど、どうやって行きます?」

「吉川先生って、たしか高いところ得意でしたよね」

彼は皐月の同意も聞かず、背を向けたまま右手で彼女の右手首を取って、左手で左手首を取り皐月をストールを纏うように柔らかに背負うと軽く地を蹴り、長くなって纏わり付いていた影と別れ、綿毛のように夜空に舞いあがった。皐月は彼の背中全体で支えられながら、いつか空を飛んでみたいと話したのを覚えてくれていたのかと感動を噛み締める。

ユージーンは学校では力を使わないと約束していたが、今は夏休みだし時間外だ。

まだ誰の目にも触れていない。

「力を抜いて、楽にしてて下さいね」

「広岡駅前まで行くんですか?」

ひよんなことから一気に近づいた彼との距離に、皐月は少々戸惑いを感じている。

見る見るうちに村が小さくなり、高度一千メートルの軌道に落ち着いた。高度が上がり気温が下がって、熱帯夜でも上空はひんやりとする。風速は15mほど、対地速度は40km/h。心地よい風と、浮遊感、そして彼の体温。

「あつという間ですよ」

「星が……きれいですね」

皐月は全天の宇宙を感じながら背にしっかりと載せられて、熱帯

夜の空を飛んでいる。最高の場所に、最高のひとと二人きりという夢のようなシチュエーションだが、好きになってしまったら勘違いだ、と彼女は羽根のように軽くなってしまいそうな心を戒める。このひとを好きになってはいけない、彼はたまたま時間ができて、私に駅前のラーメンをおごりたい気分になっただけ、他意はないんだわ。そう思うと切なくなる。

彼を想う心がどういう感情に分類されるものなのか、神を敬愛する気持ちなのか、ひとりの男性として好きなのか。皐月にも簡単に解けそうにない問題だった。そしてどれだけ片思いをしても、彼はそれに応えられないし、間違すらも起こす事ができない身体なのだ。憐れんではならないと思うが、彼は二百年近くも恋をしたことがない。博愛ではなく真実の愛情なるものは、神には永遠に理解できない感情だそうだ。

皐月が気持ちを伝えても困らせるだけなら、伝えないほうがいいに決まっている。

「先生、ありがとうございます」

「これは日頃からご迷惑をおかけしているお詫びです。お詫びその一にしましょう、これじゃいくらなんでも安すぎます」

皐月はたかがラーメンと悪びれる彼を微笑ましく思いながら、彼の背に身を寄せた。鼓動を知らない神体に、皐月の鼓動を伝えるかのように。

「夢みたいですよ……。今日の事、一生忘れません」

「そんな大袈裟な。ラーメンぐらいで」

皐月は、大袈裟なんかじゃない、と背中ごしに静かに首を振った。彼にとっては些細なことでも皐月にとっては大事件だ。そして彼女は悟った。やはり彼とこれから何年、何十年過ごしてもこの関係は変えられない。皐月は彼にとってかなり年下の同僚であり、友達ではない……。

「私は、忘れませんか……。あなたの背から見た満天の星空を。この特別な風を、そして神様の視線から見た地上の星を。あなたはとても長生きだから、一生覚えていてとは言えません。でもあと100年ぐらいは覚えていて欲しいです。私の事を。私がおばあちゃんになって、命を終える時まで」

それを聞いたユージーンは、皐月の言葉が身にしみて心苦しくなる。吉川先生。わたしは100年を待たずして、あなたより先に逝くでしょう。ユージーンは背中の中、届かない言葉を心の内で投げかけた。わたしはあなたより先に逝くけれどこの世界の気になって姿を失っても、あなたや人々の行く背をそっと押すぐらいならできるかもしれません。風を感じたその時は、ほんの少しだけあなたも思い出して下さい……。感傷というのだろうか、皐月にそんなことを想った。

優しく穏やかな時間が流れている。

様々なしがらみに雁字搦めになっていた彼は、皐月がたとえ一瞬だけでも平穏な日常を取り戻して、癒されたと感じた。ユージーンは彼女のおかげで幸福な気持ちになれた、こんな気持ちは初めてかもしれない。

「絶対に忘れません、吉川先生。あなたのこと……はっ!？」

ユージーンは上空から稲妻のような殺気を感じ、反射的に腕を背中にして皐月が落ちないよう庇いながらG-CAMを抜き、見えない敵を迎え撃った。

振り向きざまに上空から降り注いでくる攻撃を受け止め、G-CAMは金属音とともに火花を散らす。

敵の得物は金属製だ、今はそれだけの情報しかない。

「貴様。神だな……」

ユージーンは暗い夜空の奥から姿を現した、真っ黒なボディースーツを着た男を見て、特徴的な装いからすぐにそれが解階の住民である事に気付いた。

それも高い知性と身体能力を持つ、特権階級の貴族だとみえる。彼の顔はフルフェイスの黒いマスクを被っていて表情が窺えないが、感染している様子はなく彼は至って正気だ。その証拠に言語で通じあい、きちんとユージーンに殺気に向けて正確な攻撃を仕掛けてきている。先ほどの攻撃は、全て背中にいる皐月にとって致命傷となりうるものばかりだった。

「我はバフォメットⅡランセット。烏合の衆が大挙して生物階に押し寄せているようだが、貴様が一番歯ごたえがありそうなので来た。早速だが死んでいただく」

「……何故！ 公爵家は女皇に忠誠を誓っている筈……」

彼は解階の由緒正しい公爵家の嫡男であり、解階の男性型貴族のうちでもずば抜けた実力を持つ。

表向きはアルシエルに忠誠を誓っているが、ルシファーⅡカエサルと共に過去何度もアルシエルの地位を脅かしてきた実力者としてアルシエルに万が一の事があればルシファーに続いて二位の皇位継承権を持っている。遺伝子的には女性である筈の彼は、とても女性とは思えないほど筋骨隆々として怖ろしげで、皐月は殺戮者の姿に怯え、声を殺して背後で小さくなって震えている。その小刻みな身体の震えは、ユージーンにも敏感に伝わっている。

皐月はユージーンの力を知らない。殺されるのではないかとすら思っている。彼女にどれほど恐怖を与えているか。背中にいる皐月と眼下に広がる町村。何の縛りもない状態でバフォメットに遅れをとるとは考えられないが、今のユージーンには守るべきものが多すぎる。不利な状況での戦闘は避けたい、だがいくら瞬間移動を繰り返

返して逃げたとしても、バフォメットほどの実力者が相手では姑息な手段は意味をなさない、すぐに追いつかれてしまう。

「よいでしょうバフォメット。相手になります。しかしこの女性を安全な場所に避難させるまで待つて下さい。あなた方はフェアでない勝負は好まない、そうでしょう」

「神よ、貴様は暢気な奴だ。これは殺し合いだ。そして何れ人間にも消えてもらわねばならん……鴨が葱を背負った、それだけの話だろう？」

バフォメットは手にしていた巨大な銃剣、ツール「Burned Frog—Sticker（焼成された銃剣）」を掲げておどけるような仕草で一薙ぎすると、ツールは煉獄の炎を纏い熱風を村々に浴びせかけた、眼下に拡がる慎ましやかな家族団欒の灯が蠟燭の火を吹き消すように消えてゆく……。

皐月とユージーンは戦慄した。たった一薙ぎで何十人、何百人の人間が傷つき吹き飛ばされ、家を失い或いは息絶えた。

そしてユージーンが感じていた神々のアトモスフィア、生物階に入っていた神の気配が一つまた一つとリアルタイムで消えてゆく。彼等はユージーンと同じように解階の住民、それも貴族階級の者達に遭遇し惨殺されている！ バフォメットは悪びれるそぶりもない。

「100戸ぐらいは、消えたかなあ」

「な……何ということ……罪なき者を！ 誰がそんな事を強いている！」

ユージーンは強い語調で、誰がバフォメットを差し金にしたのかを問いただした。

しかしユージーンにはもう、問いかねながらも見当が付いている。あの悪意に満ちた創世者は、どこまでその毒手を伸ばしてくるのか。

「昔いまし、今いまし、永遠にして不滅の存在だ……。生物階を滅ぼし、傲慢なる神々を滅せよ。さすれば解階は元通りになる……。生物階や神階を支配する、無慈悲なる創世者が解階に破滅を齎そうとしている、ならば我は解階を守らねばならん」

ブラインド・ウォッチメイカーに騙されている。神々の言葉には耳を貸すなど吹き込まれているに違いない。いや、どっちだ？ どちらが騙されている？ 不意に脳裏に浮かんだ考えを、ユージーンは必死に否定した。ノーボディを信じるしかない。

西暦2007年 8月3日。聖書に黙示録として予言された神階と解階の最終戦争が、生物階50億人の人間、動植物を総人質としてここに始まったのだ――。

ユージーンはただ利用されているだけのバフォメットに強制マインドコントロールを施そうと試みた。しかしブラインド・ウォッチメイカーの天啓はよほど強いらしく、ユージーンの力では記憶を書き換える事ができない。更に頑としてマインドコントロールを受け付けないファクターが介在している。それは、ブラインド・ウォッチメイカーに対する信仰心だ。信仰心という要素は厄介だと、神であるユージーンは痛いほどに知っていた。

信仰心のみ支えられ、有史以来どれだけの殉教者が死の恐怖に耐えたというのだろう。信仰心は何をも超越する。バフォメットを救う事は出来ないのか、ユージーンは思いつめる。彼とて守るべき物の為に戦っている、ノーボディをこそ悪の創世者と信じて！

「さあ、神よ。もう時間はやらんぞ。運がわるかったな。少しは楽しませてくれ。ああ、それから……。一つ訊いておかなくてはな。コウという神を知らぬか？」

ブラインド・ウォッチメイカーは、藤堂恒を的にかけて解階の住民達に恒を捜させている。

抗一A B N T抗体である藤堂恒を絶対不及者が現れないうちに殺し無駄に抗体を消費しておけば、ノーボディの計略が丸崩れとなるからだ。ユージーンⅡマズロー、藤堂 恒、そしてノーボディ、この三者は三位一体の関係で結ばれている。どれ一つとして崩れてもブラインド・ウォッチメイカーに、あるいはI N V I S I B L Eに剋つ事はできない。

コウという名を聞いたユージーンの目の色が、文字通り変わった。

「残念だが運が悪かったのは、お前の方だ」

ユージーンは禁視を開眼し、にべもなく冷たくそう言い放った。

皐月は彼の背後で目を閉じて震えている事しかできなかったが、ユージーンは凄んで見たもののその場からぴくりとも動こうとはしない。なのに辺りはしんと不気味に静まり返ったままだ。どこからともなく、救急車や消防車、警察が被害現場に駆けつけるサイレンが聞こえた。皐月はどうなったのかと恐る恐る、目を開き肩ごしに目の前の光景を確認しようとする。”先生……”囁くように、縋るようにそっと呼びかける。G－C A Mはバフォメットの頸部の脆弱な筋肉の隙間を貫いて、喉を串刺しにしていた。

血が滴って、G－C A Mの先端から遥か地上へと赤黒い雫がこぼれ落ちていく。皐月は思わず悲鳴を上げてしまった。

「ひっ！……し、し、死んでる？！」

この冷徹さ……彼は本当にユージーンなのだろうか、皐月は驚愕して彼にかける言葉が見つからない。あの優しいだったユージーンが豹変して……いとも簡単に殺人を！ ユージーンは首筋にしがみつく皐月の腕に力が入ったことに気付く。彼女の心拍数は恐怖を感じてドキドキと高まってゆく。

「ごめんなさい吉川先生。わたしはもともと、こういう者です」

ブラインド・ウォッチメイカーに洗脳されたバフォメット ラン

セツトを殺した……これで解階の住民の反感を買い、全面戦争は避けられなくなっている。最悪の事態に陥らないよう、努めてきたつもりだったのに……軍神は悔しそうに唇をかみ締めた。

これはもう、ラーメンどころの騒ぎではない。

第1節 第47話 永田町・首相官邸に死神と魔女が乱入した件

ユージーンは右手で背後の皐月を支え、左手でバフォメットを串刺しにしたままのG-CAMを持ち、人気のない山中に着地した。

バフォメットの頸からG-CAMを抜き、亡骸をそつと夏の花々の咲く場所に横たえ手を合わせる。解階には墓を作る風習がなく、自然葬が礼儀だ。遺体を解階に引き渡す必要はなく、この場で弔ってやればそれでいい。だが、バフォメット公爵家には彼等の名誉の為にユージーンが殺したという事をきちんと報告しなくてはならない。この死体が警察に発見されれば殺人事件として大騒ぎになるだろうが、あいにく彼は生物階には存在しない者だ。人間ではないと分かなければ、身元不明の死体として事件は迷宮入りをするだけだろう。凶器も消せる、指紋も出さない、DNA鑑定もできないユージーンは完全犯罪を簡単に成立させる。

皐月は鎮痛な面持ちで手を合わせる彼に倣って手を合わせた。バフォメットはもう、ぴくりとも動かない。

「先生は、いつもこんなお仕事を？」

「いつもはここまで激しくないんですが……」

「正当防衛でした。あなたが勝ってくれなければ私、殺されてました」

「ごめんなさい、巻き込んでしまつて」

ユージーンは凶器であるG-CAMを空に放り投げて消した。

皐月はハンドタオルを取り出し、ユージーンの血まみれの左手を拭う。守ってくれた感謝の気持ちといつてはなんだが、皐月にはそのぐらいしか彼に返せるものがなかった。彼の手は今も昔もこんな風にずっと血まみれだったのだろうか、皐月は切ない気持ちになる。望んでこんな仕事をしてきたわけではないだろう。

教壇の上で生徒を優しく見下ろしていた彼とこの人物が同一だとは思いがたい。それでも怯えてはならないと思った。彼は皐月を守ってくれたのだから。ユージーンは左手を皐月の厚意に預けながら、右手で携帯を取り出し藤堂家に電話をかけていた。彼女は心細さと不安との入り混じった視線で彼を見上げる、彼はそれに気付いて携帯を左手に持ち替えると、皐月を安心させるように右手で彼女を擁いた。彼の胸元に皐月の顔がくる。彼女は鼓動もしない彼の胸に耳を当て、目を閉ざすと僅かばかり恐怖が薄らぐのを感じる。

彼がどこに電話をかけているか、皐月にはわかった。

どうか、無事でいて……藤堂君。

『もしもし。藤堂でございます』

「わたしです。恒君はおられますか」

『神様！ 恒は留守にしておりますが夜には戻ると』

留守……どこに？

ユージーンは胸騒ぎがするが、母親に動揺を気取られてはならない。家に一人きりの母親に心配をかけさせる、彼女は恒と違ってあまり身体が強くはない。だから恒はいつも彼女を庇って彼女を不安にさせるような事を出来るだけ言わないようにしてきた。事情を話してはならない。おたくの息子さんがピンポイントで、解階の住民達から命を狙われています、気をつけて下さい、などとは。

志帆梨も避難させた方がよいかもしれない、バフオメットは藤堂恒というフルネームは知らなかったようだが、知っている解階の住民がいなくても限らない。そうなった場合、家に居る志帆梨だって危険だ。ユージーンは名指しで恒が狙われているのではなく、神全体が襲われる危険性があると言葉をオブラートに包んで避難を促す。

「志帆梨さん。実は、神々が何者かから狙われています。恒君も神

ですから、藤堂家も危険かもしれません。少しの間、社務所に避難しておいて下さい。鍵は社務所の脇にある朝顔の鉢植えの中にあります。恒君はわたしが見つけて保護しますから」

『え！？ え、ええ。そうします、恒をお願いします』

ユージーンは携帯電話を切ると、次に山間から見える被災地を見下ろした。バフォメットに襲われた村の人々の救助を手伝いたいのが、ユージーンひとりの手ではとても足りない。彼は立て続けに電話をかける。皐月は邪魔をせずじつと彼の腕の中にいて息を潜めている。

『はい、軍神下統監部です』

「わたしだ。生物階に特命救命部隊を派遣してくれ。場所は……」

『主よ、総務局からのご依頼で？』

「個神の意思による。これは依頼ではなく命令だ、救える者は一人でも見捨ててはならない」

『御意！』

命を奪うばかりでなく、守る事も並行して行わなければならない。ユージーンは恒を捜すとともに惨殺されゆく神を、人々を守らねばならなくなった。アルシエルⅡジャンセンはこの事実を知っているのだろうか？ 恐らくアルシエルの意思とは無関係に、洗脳された貴族が私的ゲートを使って生物階に流入しているのだ。そしてアルシエルの目を逃れて不法に私的ゲートを維持してきた家柄となると相当の大貴族だろう、解階の貴族制度は武術に秀でた家系が高い階級を持つ事から、その腕前は解階屈指とみて間違いない。それに対し生物階に入った武型神は32柱。そのうち3柱が既に殺されている。有機合成を行っている非力な文型神もいる。この5柱の文型神のうち比企は文型神といえど元々は武闘派だ。

充分に戦えると考えられるが、残りの4柱が危ない。為すすべもなく殺されてしまう。プライドの高いバフォメットが弱き神々には目もくれず、生物階に入っている神々のうち最強の実力を持つユー

ジーンを最初に見つけてきてよかった、と彼は思う。バフォメットが他の神々のところに行ってしまったえば、被害はもっと甚大なものであったことだろう。

『ご命令は以上でございますか』

「また、ある人物の搜索を命ずる。名は藤堂 恒、日本国、広島県西伊辺郡風岳村在住、10歳の少年だ」

『本日陽階神として神籍登録なされた、藤堂恒様のことで？』
「？」

『主の御弟子として公認されたとの通達が、第一使徒殿よりございました』

でかした！ とユージーンは誰だか知らないが褒めちぎりたくなつた。恒は陽階神として神籍登録をし、神階にいる。恒を神階へ連れて行く事ができるとすれば織図のした事だろうな、と彼は推測した。以御が把握して神籍登録をしたのだとすれば、恐らく執務室の一室を割り当てられてそこに居るのだろう。恒を生物階に帰してはならない。

「以御に伝えろ。その少年を、生物階に帰してはならない」

ユージーンは恒の居所が分かったところで、比企に電話をかけた。手が少しでも空いていれば、文型神を救助に行つてほしいと。ブラインド・ウォッチメイカーの天啓を受けた解階の貴族達は、最終的には生物階の破壊を目論みながらも、真っ先に生物階の破壊を邪魔立てする神々を滅ぼそうと考えるだろう。となると、バフォメットはともかく、一般的な思考回路の持ち主なら弱いものから順に殺してゆくのが効率的だ。比企や強き神々の力を借りなければ。極位クラス的神々でなければ、解階の貴族達とは互角以上に戦えない。

「わたしです！ ユージーンです」

『何だ？ お前はどこに行っておった。この非常時に。少しは枢軸としての自覚を持て』

「お叱りは後でお受けします。解階の貴族達の侵入が始まりました、神々が惨殺されています」

『何と……』

合計38柱もの神々が生物階降下をしているのだから、アトモスフィアの分布は重なり合って、その気配の一つ一つが誰に帰属するかなど、ユージーンでなければ把握する事ができない。比企は気付いていなかった。どことは知れないが、比企はにぎやかな場所にいるようだ。実験室ではない。手が空いて食事でもしているのだろうか。ユージーンは受話器の向こう側の喧騒を聞いて、比企に頼もうと思った。

「比企殿、お手すきなら……」

『ああ、無論そのつもりだ。次の合成のステップまで残り14時間ある。その間に戦闘能力のない文型神の保護を最優先とする』

比企は電話を一方的に切ってしまった。ブラインド・ウォッチメイカーがどれほどの数の貴族を洗脳したのかは分からないが、全員だとすると解階の貴族の人口は数百万名規模だ。それに対し位神のうちでも武型（AA）神は63柱。文武型（AX）神を入れても92柱だ。そのうち、解階の住民と対等以上に渡り合える神となると、わずか20柱にも満たない。わずか20対数十万の戦い、総力戦の構えとなるだろう。ユージーンが一柱で全ての神々を守り抜くなどどだい無理だから、このままだと……神は滅ぶ。神々は勝算のない戦いの際しても最期の勤めを果たし、逃げたりはせず最期まで神として在ろうとするだろう。

ユージーンは携帯に転送されてきたリストを見る。殺されたのは神としての美学を貫いた、陽階神ばかり。無駄死にだ、ユージーンは思った。闘えない神は武型神でも撤収させなくてはならない。いくら美学を貫こうとしても、無駄に玉砕をする事は美しい身の処し

方だとはいえない。ユージーンはまだ存命中の4柱の文型の神々を保護し、神階に撤収させるべきだと考えた。

「吉川先生、恒君は無事です。本日をもって神となったそうで、神階に居ます」

「藤堂君が、神様に……」

皐月はふらついて、彼に支えられた。教師でありながら今日という日まで、とうとう恒に何ひとつも教えられるものがなかった。皐月は恒が手の届かないところに行ってしまったようで悔しい……彼は神々や人々に支えられ、様々な苦難を乗り越え、そして今日、神となったのだ。恒もまたユージーンのように何度も危険な目にあいながら、そしてその手を汚しながら、何千年もの時間を生きてゆくのだろうか……。

自分のか弱い、人の子だ。恒にとってもユージーンにとっても、それだけでしかない、彼女はまざまざとそれを思い知らされた。

「私は藤堂君がこれから長い道のりの中で何を得て、何を失うのかを知りません。藤堂君の歩む道を、支えてあげる事ができない。私は藤堂君の行った場所に、付いて行く事ができないから。でも、あなただけは彼の傍で、見守っていてあげてください。……私、被災現場の救助を手伝いに行きます。私はひとりで帰れます、ですからもう、あなたは行って下さい」

「しかし……こんな山中で」

「下の村の街灯の明かりは見えています、一人で帰れますし携帯もあります、お願いです。あなたの足手まといになりたくない、行ってください。あなたは一秒でも無駄にできない、あなたの助けを待っている人がいる。そうでしょう？ 神様」

ユージーンは皐月の声が遠くに聞こえたような気がする。彼女の瞳は澄みきっていて、一心にユージーンを見上げていた。何だろう、これは……彼女に対するこの感情は……。

ユージーンは沸き起こってくる未知の感情を戸惑いのうちに押さえつけながら、軽く首を振り、皐月の足元を見た。

現場までは100mほど山を下らなければならないが、彼女はよいスニーカーをはいて、丈夫なジーンズを穿いている。下まで歩けそう。ユージーンが皐月を家に送ってゆくのは一瞬だが、彼女は災害現場の救助を手伝いたがっている。彼女の気持ちを無碍にはできないと、彼は頷いた。彼は皐月をきつく抱きしめ別れを告げると、皐月の唇が彼の頬に触れる。

彼女はじわりと顔を赤らめてしまったが、彼はそれを見ないまますぐに強く地を蹴り、夜空に溶け込んで消えた。

＊

未知の感染症の拡大と共に解階の貴族達が侵入し、人々への無差別攻撃が突如として始まり、世界中では無差別テロのような攻撃に見舞われていた。世界各国では戒厳令が敷かれ、国連も感染者の隔離とテロ攻撃からの住民の保護に乗り出した。日本でも広岡県の山村が上空より攻撃されたとの一報があり、広岡県伊辺郡にはマスクミが殺到すると同時に自衛隊も緊急出動、列島に緊張が走った。首相官邸には各省庁の大臣、閣僚、各界の有識者達が続々と参集していた。国会の承認により、内閣は日本全土に武力攻撃事態による非常事態宣言を發布し、有事法制基本法に基づき国家非常事態特別対策室が設置され、非常事態対処会議が行われていた。首相官邸の外には数百人規模のマスコミが詰め掛けている。メファイストフェレスはその様子をニュースの中継で上島の書斎のテレビで見ていた。ニュースの合間合間に、襲われた西伊辺郡との中継が繋がる。被災地の村は風岳村から目と鼻の先だ。上島も肝を冷やしていた。

「遂に非常事態宣言が発令されましたな。しかし我々は、一体何に

襲われているんです？」

「この地形の決り方……爆発物じゃないわ。神具でなければツール（多機能装置）よ。神は理由なく人を傷つける事ができない、神じゃないわ。ただのテロでもない。どうしたっていうの？ 解階で一体何が起きているの。こうしてはいられない、妾も行かなくては」

メファイストフェレスにはただの解階の住民ではない、貴族階級の者達が生物階に侵入してきたのだと予測がついていた。神々が見境なく人々を殺す事はない。感染した人々がいれば殺すかもしれないが、日本にはまだ感染者はいない。その感染者がここに隔離されているのだから、目的もなく殺害されたと考えるのが妥当だ。だとすれば神具ではなくツールが使われたのだろう。ツールを持つのは解階の特権階級、それも豊かな財力を頼りに優れたツールを職人に作らせる事のできる上位貴族のみだ。上島は慌てて彼女を引きとめようとする、彼女をこの部屋から出さないでくれと織図に頼まれているのだ。

「安静にして下さい。あなたは感染者なんです、外に行かれては他の人間に伝染します」

「ではお願い。猫か犬か、何でもいいわ、ネズミでも鳥でも昆虫でも何でもいいの。何か動物を連れてきて頂戴」

上島はメファイストフェレスの懇願に負け、仕方なく病院の玄関口で飼っている金魚を一匹コップに入れて連れてきた。彼女はその間に病院着を脱いで、そしてタイトな黒いドレスに着替えていた。丁寧に仕立てられた高級ドレスを身に纏い、凜として窓の外の夜空を眺める彼女には、外に出たいという気迫がみなぎっている。上島は彼女に圧倒されつつ、愛着のあった赤い出目金のグラスをちよいちよいと指先でつつきながら、いとおしむような仕草をした。感染してしまえば、この金魚はこの場で殺さなくてはならない。

「許せよ、キン太。医学の進歩と人類の未来のためだ」

「この病は、DNAを持つ生物に感染する。ならばこの金魚が感染すれば、異常行動を起こすべきよね？」

メファイストフェレスの傍に近づけられても、金魚はちゃぽんと水音を立てながらすいすいとコップの中を泳ぎまわるだけだ。上島はマウスやラットを使って数限りないほどの動物実験をしてきたが、ペットを動物実験に使ったのは初めてだ。上島は鼈甲の老眼鏡を上げ下げしながら、キン太の無事を確認した。

「無事か、キン太！」

「ごらんなさい。妾は、治ってるの」

「！」

上島はガッツポーズをした。一度感染し、治癒血を摂取した感染者は感染能力を失い完治している。上島はすぐに相模原に携帯でメールを打った。君に渡した赤い液体のサンプルは感染者を癒した後、感染能力を完全に押さえ込む理想的な薬剤であった、と。

「こうしてはいられない、行くわ」

「どこにです？」

「ここよ！」

「いいっ!？」

メファイストフェレスが指差したのは、テレビのニュース画面だ。そこにはマスコミにぐるりと取り囲まれた内閣府が映っている。上島は素っ頓狂な声を上げる。この女はマスコミに大注目されている内閣府に堂々と乗り込むつもりなのかと。

「お世話になったわ。上島 肇……また会いましょう。運がよければ」

メファイストフェレスは窓を開けると、小さな杖を握り締め夜空に飛び出していった。上島が書斎の窓から手を振るのが見えた。

感じる……ユージーンのアトモスフィアが生物階に戻ってきてい

る、でも彼のところには行かない、最強神である彼は解階の住民の侵入に際して誰よりも忙しい筈だから。彼女は織図のアトモスフィアが生物階に現れたのをひしと感じていた。まっすぐ近づいてくる。見舞いにでも来たつもりだったのだろうか。織図はただメファイストフェレスを見舞いに来たのではないだろう、彼は実に計算高い神だ。メファイストフェレスがユージーンの血液を受けてきちんと回復し、その後感染能力を失ったのかをその目で確認するために来るのだ。彼女の頭上の遙か上空に、黒い影が見えた。

「織図ー!!」

彼は呼び声に気付いたらしく、急降下をしてきて彼女の前で止まった。

「いけねえお嬢様だなあ、勝手にベッドを抜け出してきちゃ」

メファイストフェレスは健在を主張するかのように、丁寧に赤いマニキュアを塗った長い爪を織図の鳩尾のあたりに突きつける。いつもの勝気でお転婆なお嬢様に戻ってやがるな、と織図は思った。

「妾が何の確信もなく、勝手にベッドを抜け出すと思って？」

「いや。お前は利口な女だ」

彼女はそこまで言って高飛車な態度を一転し、織図に礼を述べた。織図は感染者達を見境なく殺してしまった中で彼女だけを殺さなかった。織図は織図で彼女を無理やり連れて行って感染させてしまったという自責の念があったからなのだが、メファイストフェレスは素直に彼に礼が言いたくなったのだ。

「感謝しなくてはね。他の感染者達は躊躇なく殺してしまったのに……」

「なんだ？ しおらしいじゃねえの。死神ってのは生者を不平等に扱う事は禁じられていてな、世の為人のため、ちょっと実験台になってもらっただけだ」

感謝されることに慣れていない織図は照れくさいのか頭をかきな

がら、そんな言い訳を思いついたらしかった。織図はどうも憎まれ口を叩きたがる。死神が感謝されるような事をしてはならないなんて法律は、ないだろうに。

「お前は理屈っぽいわ。織図、素直に妾を殺したくなかったって言えばいいのに」

「どうだかな、色々とのっぴきならん事情があったんだよ」

「妾は日本国内閣府に行く。解階の住民がいかな者たちかを説明してくる、そして備えろと言いたい。何が起こっているのか分からないけど、無差別攻撃は激化するわ。お前も来てくれる？」

「お嬢様一人じゃ、マスコミに目だって仕方がないぞ」

メファイストフェレスが内閣府に乗り込んだところで、マスコミや警察に見つかり不審者として捕まってそれまでだ。一方、織図の持つ光学迷彩と、ODFを使えば誰にも見つからずに政府の中枢に忍び込める。織図をはじめ死神の姿は有史以来一般の人間には巧妙に隠されてきて目撃された事がない、彼の助けが必要だった。その時、空山 葉子から織図の携帯にメールの着信が入る。今日も奇妙な着信音を夜空に響き渡らせながら、彼は携帯を開く。藤堂 恒が、空山を通じて日本政府に感染者の映像を報道する事を控えるように要請していると。

IEIIIO（国際知的生命研究機関）日本支部所長にして空山の母親、澄田 咲江と早瀬 雄大は、このたびの異常事態に有識者として内閣府に召喚されているのだそう。澄田と早瀬を通じて日本政府に要請したいことは、それだけかと空山は訊いている。渡りに船だ。メファイストフェレスと織図は頷いた。恒は空山や早瀬をいいように利用し国政に関与しようとしている。織図はメファイストフェレスの腕を掴み、低い声でこういった。

「心を解放し、東京上空を思い浮かべろ」

織図は東京の街並みを肉眼で見たことがない。

だが彼女は何度も訪れた事がある。織図は彼女の脳裏に鮮明にイメージされた光景を読み取り、彼女を巻き込んで東京上空に転移をかける。あつという間の見事な連携だった。バタバタとマスコミのヘリコプターの音が夜空に響き渡っている、いつもより格段にその台数は多い。眠らない大都市の街、東京を見下ろしながら黒衣を着た魔女と死神は静かに内閣府の敷地内に降り立った。

織図は着地と同時にODFを展開し、蟻のように群がるマスコミを尻目に、誰にも姿を見られないままメファイストフェレスと共に首相官邸に押し入り、勝手知ったる我が家のように中を進んでゆく。途中何人かの警備員、議員や官僚らとすれ違ったが、彼らは隣をふたりが通り過ぎた事すら気づいていないようだった。織図は一人ずつの顔を見て歩いていった。彼の頭脳の中には全ての死者と生者の情報が入っている。顔を見ればその人間の名、年齢、経歴、そして残り推定寿命が見える。

澄田 咲江と早瀬 雄大はどこだ……。

非常事態対策会議が催されているだろうから、そこに乗り込めばいい。織図は嚴重に警備されている、ある会議室の入り口を見つけた。国家非常事態対策会議室との張り紙が張ってある。ここしかあり得んな、織図が振り返ると、手の早いメファイストフェレスは既に入り口の警備員を気絶させた後だった。

織図はゆっくりと扉を開き、即時に視覚郭清フィールド（Optical Dissection Field…ODF）を拡大する。会議室にいた全員が織図の創り出した不可視領域に閉じ込められ、外部との連絡を遮断されてしまった。後から誰かが気付いて駆けつけて来てこの扉を開いても、中の光景は見えないし声も聞こえない。首相をはじめ閣僚達、有識者達がずらりと対策会議室の机を

囲んで議論を白熱させていたが、織図とメファイストフェレスの姿を見るなり、あっけに取られた顔をした。織図は黒いローブを着ていたし、メファイストフェレスは黒いゴシック調のロングドレスだ。スーツに身を固めたお堅い議員達の中で、余りにも場にそぐわない二人組だ。

「な、何だね君達は……！」

「誰か！ 不審者だ！」

不審者の侵入に取り乱した議員や大臣達が慌てて出口に駆け出し、て行こうとしたが、ドアを見失い途方に暮れてしまった。ODFは真っ暗闇の視覚郭清フィールドであり、外部環境と完全に遮断されている。いくら叫んでも、声すら外には届かない。織図は助けを呼びながら真っ先に逃げ出そうとした男達をちらりと振り返り、間延びした声で忠告した。

「呼んでも、誰も来ねえぞ」

織図は机の上にどかりと腰掛け、喉が渴いていたのか、老大臣のために置かれていたペットボトル入りの茶を取り上げて飲み干した。メファイストフェレスも黒いドレスをたくり上げて机を飛び越え、テーブルの真ん中のスペースにピンヒールをコツンと鳴らして着地する。メファイストフェレスはマクシミニマを抜いて閣僚達に向けた、黒い小さな杖を見て、爆発物なのではないかと勘違いをした彼らは、怯えた眼差しを向けている。織図は丸腰のまま、机の上に腰掛けて脚をぶらぶらとしているだけだ。あんな、肝臓に気をつけるよ、あと5年で死ぬ事になってるぜと老大臣に健康指南をして聞かせている。

「携帯を出して電源を切り、机の上に置いて。手荒な真似はしないわ」

いくらODFで視聴覚を隔絶しているとはいえ、携帯電話で助けを呼ばれてはたまらない。穩便に事を済ませるつもりが、落ち着いて話も出来なくなってしまう。閣僚達は爆発物を持っていると思いき女の指示に従って、携帯電話を出して机の上に置いた。メファイストフェレスはマクシミニマを一人ずつ向けて、発信されている携帯の微弱電波を探る。官房長官の前で彼女は足を止め、優しく微笑みかけた。賢い演算髑髏は、発信されている微弱電波を見逃さない。

「もう一台も」

官房副長官が忌々しそうに机の上にあと二台の携帯を置いた。

自宅用と、不倫相手用だ。メファイストフェレスと織図には、全員丸腰だという事は分かっていた。日本は平和で結構だ、銃刀法バンザイと織図は思う。これが欧米なら銃を持っている議員が一人ぐらいいてハングアップを命じらるか発砲されてもおかしくないのだが……。

「さて、俺らは別にあんたらに危害を加えに来た訳でも要求を突きつけに来た訳でもない。話を聞いてもらおうか。逃げようなんて考えない方がいいぜ、逃げようたって出口はないんだからな。あんたらは無駄な事が嫌いだ、俺らも無駄は省略したい。分かったら、利口にしてろ」

「妾達は一連の非常事態に対して、提言をしに来ただけ。参考にしてももらえればそれでいいわ、強要もしないしすぐに帰るから」

「き、君達は誰なんだ?! こんな事をしてすむと……!」

メファイストフェレスは語調を和らげながらも、触れれば切れてしまいそうな冷酷さを孕んでいたが、若手の議員が勇気を振り絞り、声をひっくり返しながら問いただした。普通 of 状況 of 会議室で、ただ爆発物を持っているのか持っていないのか分からない二人組に脅されているのとは違う、この空間は外部と隔絶されていると認識できた。その証拠に、部屋は暗闇に閉ざされており、先ほどまであつ

た窓すらもなくなってしまっている。外のマスコミの騒音も聞こえない。

「そうだな、議員先生方に聊か不躰だったか？ 自己紹介が必要なら名乗るがね。俺は織図 継嗣、ただの好青年だ」

「妾はメファイストフェレス、警戒しなくていいわ」

末席に有識者として座っていた澄田と早瀬は、顔を見合わせて頷いた。彼らとは面識がないが、空山の言っていた藤堂恒の仲間なのだろう。すると彼らは十中八九、神だ。まさか国政のど真ん中に、大胆不敵にも直接乗り込んで来るとは思わなかったが、直接乗り込んで来てくれたのだから、彼らの指示に従うべきだ。そして彼ら、神々の現在の動向も探りたいところだった。

「ご丁寧に、どうも。しかしご所属はお聞かせいただけないようだ」
肝っ玉の据わった外務相が強がって皮肉る。

名前を名乗るだけでは、何も名乗っていないのと同じだ。今に始まった事ではないが、織図は陰階神なので神と名乗る事ができない。織図はさらりと挑発を流すと、涼しい顔をして厚生労働大臣に配布されていた資料を手にとってぺらぺらとめくっていた。彼らの作成していた有事対策の資料はてんでの外れの内容だ、外出を禁止するだけでは解階の住民の攻撃に対して何の意味もない。家ごと破壊されているのが、分らないのだろうか。安全な場所に避難させなくてはならない、それも公民館や学校ではダメだ。解階の住民達からはこれ幸いと、まるごと標的となり袋の鼠となるだけだ。敵が見えていないのだから対応が的外れになるのも仕方がないが、これではどれだけの国民が犠牲となる事か……。地震や火事対策とは訳が違うんだぞ、と織図は目を覆いたくなる。

「細かいことは聞きつこなした」

「では、現在世界で何が起きているのか、ご存知の上でしょう？」

「そんなの知らないわ。買いかぶらないでいただける？」

メファイストフェレスはそっけない。彼女が聞きたいぐらいだ、解階で何が起こっていてどんな経緯で貴族階級の者達が攻め入って来る事になったのか。ひよっとするとメファイストフェレスの知り合いや親友だって、侵略に関わっているかもしれない。ユーージンとアルシエルの交渉は失敗したのか、更には父親であるメファイストフェレスの安否はどうなったのか、誰かが答えてくれるのなら問いただしたい事ばかりだ。だが誰も疑問には答えてくれない、彼女は手持ち無沙汰も手伝って、彼女に出来ることをしなければと考えただけだ。創世者間の抗争に、生物階をいたずらに巻き込んでほならない。

「では君らは、失礼だが我々に何を提供しに来たのかね、ただの冷やかしならお帰りいただきたい、こちらは国民の生命に関わる大切な審議を行っているんだ」

「冷やかし？ 前言を撤回して欲しいわね。残念ながらこの席にはお招きいただけなかったようだけど、妾も有識者の一人よ。妾は先日まで感染者だったの。でももう感染能力はないわ、これがどういう事かわかって？」

場内からは確かに悲鳴が上がった。感染者が生還して正気を保っているところか、感染能力を失っているとは信じがたいが、もしも治ったという彼女の話が偽りであれば、ここにいる全員が半日後には感染者となってしまうという事だ。

「つまり、この感染症は治るのですか？」

女性財務相が、口元を押さえながら尋ねる。少しでも同じ空気を吸わないように努めて、感染しないように考えた末の態度なのだろうとメファイストフェレスは思うが、そんな程度では感染は防げない。やはり国家の頭脳である政治家達の認識は、根本的に間違っている。

「そういう事よ。助かりたくば、今朝の新聞で発表された化合物を合成なさい、24種の」

「いや、13種でいい。それから、予防策として報道統制も布いておけ。感染者の映像を見ただけで感染をするんだそうだ」

織図は老大臣に資料として配布されていた新聞の切り抜きに、×をつけて化合物の種類を減らしてやった。レイアとユージーンの治療血を比較する事によって絞り込んだ13種の化合物だ。生まれたばかりの赤子に針を突き立て、泣きじゃくる中を毎日300ccもの献血を強いて得た貴重な情報だ、同情してやってほしいもんだよ、と織図は思う。

「それは妙なお話だ。もう既製の薬剤があるのだろうか？ 貴方はどのようにして治療したんだ」

事態の把握に困惑して黙っていた引つ込み思案な総理が突然、もっともな事を指摘した。あまりに存在感がなくて、メファイストフェレスはつい最近就任したばかりの総理の名前を忘れていた。祇園寺総理ののたまう事は核心をついている。完成品があるからこそ、彼女は治療する事ができた。何故それを使わない？ 既製品の買い上げを法外な値段でふっかけてくるつもりなのか？ それが目的なのだとしたら、彼らはとんだ外道だ。どうせ、そんな事を考えているのだらうな、とメファイストフェレスは閉口する。むくれたお嬢様の代わりに、織図がこの質問に答えた。

「特効薬はある。だが全感染者に行き渡るだけの量はないんだよ。でだ、ここからは政治の話だが、まもなく生物階……、いや地球は大規模な無差別攻撃に見舞われるだろう。感じているはずだ、何かがおかしいと」

閣僚、官僚、議員や専門家達は顔を見合わせた。やはりそうなのかという確信と、一体何が？ という疑問が交錯する。再びしんと静まり返った場内で自然と総理に注目が集まる。

視線に耐えかねて、またしても総理がメファイストフェレスに尋

ねた。

「我々は何に襲われている？　それが一向に見えて来ない、見えない敵と戦えと仰るのか」

「見えない敵か、まさにその通りだな」

織図は言い得て妙だ、と自嘲気味に嗤った。

ブラインド・ウォッチメイカー……その存在を人類に明かすのは、時期尚早だし受け入れられもしないだろう。だが彼らが知らなくてはならない事もある、それは解階の住民の侵入という、現在まさに起こっている恐るべき事態だ。事が明るみに出て、隠し切れなくなってしまった以上、もう人々を蚊帳の外にしておくわけにはいかなかった。援護をしてくれとは言わないが、せめて自衛をしてもらわなければ。その能力があるなしに拘わらず……。

「敵が見えないなら差し当たり、見える者に立ち向かうしかないわ。人類と遜色ない姿をした、でも人類より何十億年も進化を重ねた者達にね。軍隊を出動して戦いたいなら戦えばいい、核を使って全てを焼き尽くすつもりなら、勝敗は分らないわ。でも武器を取る事ができない者もいるでしょう。そんな人々の生命と財産を守るために、国は何ができる？」

「つまり何かね、人間に酷似した、人外の者に攻撃されているだど？」

「馬鹿な！　信じられん」

場内は騒然として、暫くどよめきは収まらなかった。

現実と虚構の間に、いとも簡単に国の中枢を担う政治家達を監禁している二人組を前に、そんな事がある筈がないと一笑に付してしまいうことができなかったのだ。

「信じる、信じないも現に襲われているのよ、妾達にでさえこのざまなのに……」

「俺ら是有史以来幾度となく人類の危機を救ってきたが、今回ばかりは手に余る。護りきれん、現に護りきれないだろ？ 被害は世界規模で増加の一途を辿っている。国民を地下か頑強な施設かどこかに避難させるも、自衛隊を動かすも、とにかく何か対処をしてくれ。指を咥えてオロオロと傍観されては困る。俺らは忠告してやっただぜ？ 人類の、善き隣人（good neighbor）として……さ、立ち上がれよ。兄弟」

織図とメファイストフェレスはそう言い残すと、黒い霧を残して消えた。

会議室の外に倒れていたSP達を見つけて、場内の異変を察し警察が駆けつけてきたからだ。議員達は突然消えてしまった彼らを現実のものとは認識できず、白昼夢を見ていたのだと各々が考えた。

彼等は体裁が悪そうにそれぞれ取り繕って審議に集中しようとしたが、誰もが狐につままれたような顔をしていた。場内は水を打ったように静まり返っていたが、沈黙に耐えかねて消化しきれない疑問をうっかり口にした者がいた。

「おや、おかしいな。あの黒衣の連中は？」

「先生もですか？ てっきり夢かと」

「私も、見ました。先生も？」

「私です」

彼らは一人がそう言ったのを契機に、それぞれ夢ではなかったのだと確認しあった。老大臣は眼鏡をかけなおし、ペットボトル入りお茶が飲み干されているのを発見した。新聞の切り抜きには合成する必要のなくなった化合物に×印がつけられている。居たのだ、彼らはもうどこへともなく消えてしまっただけに見えるが、確かに彼らはここに居て全員が目撃していた。

「彼らは、何だったのだろうか？」

澄田と早瀬は今こそと席を立ち、途方に暮れる彼らの前に進み出て断言した。

「我々I E I I O（国際知的生命研究機関）は、彼らが古来より神と呼ばれてきた地球外知的生命体である事を確認しています。神々の連絡先と居場所を把握しており、いつでも連絡を取る準備があります」

「な……神だと？」

不思議な事に、妄言だという野次や嘲笑は聞こえてこなかった。彼等は何も言い返すことができなかった、神？ その真の意味を各々の心の内で掴み損ねている。澄田と早瀬は追い討ちをかけるように、彼等の理解を促す。

「あくまでも、一個の生物としての生物種名かと思われます」

「そんなものの存在を、認めろというのか――」

認める、認めないに拘わらず逼迫した現実がそこにあって、国民の安全を第一に保障しなくてはならないという責任がある。彼らはただ人類の親しき隣人として、警告をしに来ただけだ。遂に神の降臨か……。祇園寺首相は絶句し、頭を抱え込んだ。挙党一致の体制で、いや野党も国民も含め、協議を尽くさなければならない、しかし審議を尽くしている時間はない。内閣支持率など気にしている場合ではないのかもしれない、全ての国民の権利を停止してでも、国民の生命と財産を守らなければならないのかもしれない。これは有史以来の有事だ、彼は再認識した。

だが、平和の上に胡坐をかくことしか知らなかったこの国に何ができる？

第1節 第48話 創造神と少年神、親子みずいらずで

日も暮れたしそろそろ実家に帰らないと、言いながら恒は帰りの支度を始めた。

神階と生物階の現状を考えると後ろ髪を引かれる思いだが、志帆梨を一人にしてはおけない。神階に日は昇らないし日も暮れないので、腕時計を見ていとまごいをした。神階の時計は全てイギリスの世界標準時を指している。日本時間に合わせている腕時計を小まめに見ていないと時間の感覚がすっかり狂わされて時差ボケになってしまいそうだ。とにかく夜には実家に帰るという約束だし、志帆梨にも心配をかける。

恒が気付いた事は余さず空山に伝えておいた、空山は政府にコネがある。何らかの対応を期待したいところだ。以御は先ほどのケーキを詰めて志帆梨への手土産も気前よく用意しながら帰りの手続きをしていたのだが、事務局である軍神下幕僚統監部から緊急連絡が入るなり険しい顔付きとなった。

「ちょい待て！ 家には帰れない」

「どういう意味ですか？」

「ユージーンが、あなたを家に帰すなど言っているそうだ」

風岳村の方面で事故でもあったのだろうか？ 直接連絡をくれればいいのに、手が離せない事でも起こっているのか。

「何故ですか？」

「こっちで少し待ってろてんだろ、何か渡すものか話す事があるんじゃないか？」

「わかりました。お電話、貸していただいてよろしいですか？ 母に連絡をします」

恒は帰りが遅れると志帆梨に連絡して、自分の帰りを待たずに寝てほしいとの旨を伝えようと思った。志帆梨は特に恒が連絡をしなかった場合は、健気にいつまでも寝ず帰りを待っている。今日に限ってまだ寝てはいないだろうに、どれだけコールをしても志帆梨は電話口には出てこない。風呂なのかな、と思いながらも嫌な予感がある。まさか……志帆梨に何かあったのか？　それでユージーンは家に帰るなど引き止めているのか？

「母が、電話に出ません！」

「本当か？」

恒は思わず以御に訴えた。以御は何らかの事情を知っていると思われるユージーンに携帯で連絡を取ろうとした、しかしユージーンにも電話が繋がらない。不審に思った以御はG L ーネットワークでリアルタイムで送信されてくる神々の生物階降下の情報を確認した。何という事だ、神名が真っ赤なフォントになってしまっている者が5柱もいるではないか。健在を示す黒いフォントから赤い明滅に変わりかけている神も多い。赤字は死亡を示す表記だ、赤字名の明滅は瀕死の状態を示す。腕に覚えのある武型神ばかりが何者かに殺されている……。ユージーンは彼らの援護に向かって手が離せないのだろう。恒は祈るような気持ちで自宅に電話をかけ続ける、何度鳴らしても志帆梨は出ない。

あと一度だけ！　そう思って電話をかけると受話器を取る音がした。電話の志帆梨は無言だ。怪我でもしているのだろうか。

「俺だよ、恒だよ！　いるんだろそこに、無事なんだろ！？」

恒はまくし立てるように立て続けにそう叫んだ。一言でいい、志帆梨の無事を確認しなければ。やや沈黙があって電話の主が答えた。

「トウドウ・コウとは……子供なのか？」

すぐ耳もとから聞き覚えのない男の声がして恒は凍りついた。家の電話番号を間違っう訳がない。誰だ！　彼は自宅に押し入って何を

している？ 志帆梨は、母はどうなった？！ 恒の思考回路はすっかり活動を停止してしまいそうになった。男は恒の居場所を尋ねようと、低い声で訊ねてくる。この口調、独特のニュアンス……メフアイストフェレスの口調に似ている。人間ではない、と恒は直感的に悟った。

「どこだ？ トウドウ」

電話を取ったまま微動だにできなくなっている恒を以御が見つけて異変を察すると、受話器を奪い取った。以御はネゴシエーターとして戦局操作に介入してきた交渉のプロだ。各国の首脳を相手の交渉も日常茶飯事。冷静な判断ができなくなってしまうている恒は、彼のプロとしての仕事に頼るほかなかった。

「誰だ」

「トウドウはどこだ？」

「先に答えろ、そこにいる人間は無事なのか」

「返答によっては殺す」

以御は志帆梨が無事なのかを、恒のために確認してやらなければならなかった。志帆梨が家にいたとしたら、とっくに殺されているだろうとは思うが恒には言えない。だが志帆梨の無事を信じるという方が絶望的だった。この男が解階の住民であったならば、万が一にも志帆梨が生きている可能性はない。

「本当か？ 安否が心配だ。そこにいる父親の声を聞かせろ」

「先にトウドウの居場所だ。父親は無事だ」

緊迫したやり取りの中で、以御は交渉をさっさと打ち切り一方的に電話を切った。

恒は彼の強硬な姿勢に血の気が引いた、逆上させてしまったら志帆梨の命はどうなる！？ 何を考えているのだと怒鳴りつけたいが、以御はしたり顔だ。以御は恒に覆いかぶさるように電話を取ったが、

大柄な体を恒の上から起こした。

「以御さん！」

「母親はどうやら、家にはいないようだぞ。あなたは通話が繋がってすぐ母親の名を呼びかけなかったから、相手は誰が家にいるべきなのか知らなかった。だから”父親”は無事か？ と訊いたんだ。相手は”父親は無事だ”、と言いやがった。”女は無事だ”、もしくは”ここにいる人間は無事だ”、が正解だ。ほらな、いないだろ？」

以御は長い睫毛のついた瞼でバチツと恒にウインクをしてみせる。何て伊達男なんだと恒が思う余裕も出てきた。相手の語調、間の取りかた、声のトーン、そして会話の内容、以御のネゴシエーターとしての長年の経験に基づくと、志帆梨は留守をしているとの確証があったのだそうだ、それでカマをかけてみた。母親は間違いなく家に居ない。ユージーンは先に志帆梨に連絡をつけて避難をさせていると思われる、だから彼女は無事だと彼は言う。

「心配ない。母親は絶対に家にはいない。相手にするな」

「誰だったんでしょう？ 人間ではなさそうでした」

母は、家に戻っては来ないだろうか。

恒はふとそう心配する。ちよっと買い物に行っていただけかもしれないし……近所に出かけていたのかもしれない。恒は志帆梨の安否が心配で気が気ではない。

一方、以御は恒を安心させると同時に、恒が標的とされ狙われている事に気付いた。こんな幼い神の居所を、何故知りたがっている？ 彼を生物階に帰してはならないとユージーンが言ったのは、恒の命が何らかの目的で狙われているからだ。しかし母親と会いたがる10歳の子供を神階に引き離して帰さないというのは心苦しい。生涯家族を持つ事もない神とは違い使徒には両親がいて、伴侶がい

て子供をもうける事もできる。以御にも親を氣遣う子供の気持ちがよく分かる。以御は恒から目を離してはならないと思った、彼は何としてでも生物階に戻ろうとするだろう。母親の安否を彼自身の目で確認したいと願う、それが子供だ。

そしてそれは凶星だった。

” 母さん！ 母さん、どうか……”

恒にとって母親は恒という存在を肯定し、恒を生物階に繋ぎ止めた大切な人だった。彼女が傍にいてくれたから恒は造られたのではなく、生まれてきたのだと自覚することができた。彼女がいなければ彼女のいない世界など考えられない。恒は堪らなくなって、生物階に戻る方法を探った。ユージーンの気配を頼りに超空間追跡転移ができれば簡単だがあいにく恒の鈍いリーダーでは生物階にいるユージーンのアトモスフィアを感じられない。

ユージーンは生物階から解階のアルシエルの気配を頼りに転移をしたが、あんな芸当は無理だ。やはり神階の門から生物階に戻らねばならない。

「以御さん、ちょっとお手洗いで貸してもらってもいいですか？」

恒はそう言いながら、執務室のトイレに逃げ込んだ。ここは使徒達が用を足す、トイレは密室で鍵がかかる。恒はトイレに駆け込んで中から鍵をかけた。以御は早速やられたかと思ったが、ドアを壊さなければ中に入れない、そしてドアは頑丈だ。

以御の目をまんまと盗んで一瞬の隙に恒は神階の門の入口ロビーに瞬間移動をした。あとはひっきりなしに出入りを繰り返す使徒達に紛れて出ていけばいい、恒は生物階に運び出される荷物の影に身を隠し神階の門から生物階に抜けようと機をうかがっていた。後先など、考えている余裕もなかった。

*

異常事態に対応するため急遽設営された神階^{しんかいだいほんえい}大本営には、極陽以下枢軸、全位神、各部局長ら首脳陣が参集している。

第一種、二種、三種、非位神に至るまで全神の動向と安否を掌握するリーダーと、生物階と陽階の情報を司る智神、リジーⅡノーチエスの神具が、陰階神5位の情報を司る女神、ヴァレンティナⅡエンフォリオ、置換名 有為^{ういしお} 枝折の神具であるRez…情報階層オーバードライバという情報ネットワークに接続されている。リジーの神具で情報を集め、有為の神具でデータ化し分業して正解な情報を極陽に提供する。

いくら比企派で平時は極陽と反目しているリジーとはいえ、これほどの有事には極陽の勅令に従うものだ。彼女は文句も言わず指示に従い、真面目に仕事をしている。いつものように武士のような色気ゼロの口調で極陽に立て付くこともなく、黙っていれば目も覚めるような美しい女神だ。と、これは口にはできないが大本営に参集した神々の誰もが思っている。

有為 枝折はドレッドの黒髪にピンクや青のメッシュの入った派手な頭で、空色の瞳を持つ、文字通り毛色の違う女神だ。その表情はハリウッド女優のような大きな洒落たグラスをかけて隠している。着丈の短い黒いワンピース、腕にはごてごてと腕輪やブレスレット、首には純金で大振りなネックレスをいくつも重ねている。どこぞの10代のギャルのような聖衣で露出度も高いが、それでも仕事はよくできる。

ウエディングドレスのような清楚な聖衣を身に纏うフェミニンなリジーとは対照的な女神だ。有為の神具は神階、生物階に張り巡らされた情報ネットワークとサーバーであり、有形の神具ではない。だがリジーの神具と連携させることでより性能を発揮するし、GL

ーネットワークを管理、運営しているのも彼女だ。逐一正確な情報を神々に発信しながら、リジীর神具から送られてくる情報を整理し、極陽に配信する。陰陽の枠組みを超えての体制だが、状況は決して楽観的なものではない。

「既に5柱が殺害されたか……」

大本営のオペレーショナルームに参集した位神達から悲鳴に似たため息が漏れる。

大きなモニターには、各部局から集まってきた情報が有為の神具を介して次々と表示されている。有為の神具からだけではなく諜報課からも続々と連絡が入ってくる。サーバーはかなりの負担がかかっているため、ファティナも離れた場所から有為の演算は参加している。

「極陽、解階の貴族達の無差別テロに、アルシエルは一切関与していない模様です。追討隊を派遣したいが感染を懸念して身動きが取れぬと」

「アルシエル統治のもと一枚岩であった貴族階級に分派が台頭してきたのか？」

極陽は慎重に情報を整理していた。神階が取るべき行動は生物階の存亡に直結している。生物階は解階の住民に対抗する術を持たない。彼等を守りながら神々の損失を防ぎ、生物階で尚も拡大を続ける感染症に有効な唯一の特効薬の、有機合成を粛々と進めてゆかなければならない。白衣に身を包んだ極陰が、勅令を発する事ができずにいる極陽の隣で、彼女の見解を有為に述べている。

「それがー、アルシエルも大変みたいで。謀叛を起こした貴族にはあ、アルシエルの実子もいるしー？　メグちゃんこれってマズくないー？」

ちなみに、有為をはじめ織図や萩号など、陰階神は言葉も身なりも崩れているのは周知のことである。

アパレル店員のような可愛らしい接客用の声質でチャキチャキのギャル語を話す女神を、極陰も極陽も今更気にしない。彼女にしてみれば、極陽はスミちゃんに極陰は鐘遠”恵”のメグちゃんなのだ。陽階神なら法務局から切腹を申し付けられるような言葉遣いだが、彼女は陰階神なのでお咎めもなしだ。

アルシエルは不法ゲートの摘発を急がせていたが、それらは巧妙に隠されていて発見が難しい。故意に何百年、何千年も隠蔽してきた門なのだから今更摘発を急いでもまさにモグラ叩きのようなもので、不法ゲートは根絶しない。アルシエルの対応を待つより、神階が早急に対策を打たなければ生物階もろとも神階も潰滅的な被害を受ける。極陽は情報を整理し、ようやく勅令を発しはじめた。

「生物階降下中の全ての陰陽階神にソートをかけ、フィジカルレベルが3万を切る神は神階に撒収させよ、解階の貴族には勝てぬ。犬死にだ」

「極陽、我も生物階に降りるべきだろうか？」

事態を重く見た極陰が生物階降下を申し出る。名実ともに陰階最強である彼女が生物階降下をするなら心強いことだ。極陽も極陰も、普段は生物階降下が認められていない。彼と彼女は神階を自身のアトモスフィアで支え続けているので、不在にすると神階の安定性が揺らぐからだ。だがそんな悠長な事を言ってもいられない、アトモスフィア吸収環を極陽に4つ課してでも人手が足りないので応援に行かなくてはならない。寧ろこれ以上の神々の損失と人々の生命を守らなければ取り返しが付かないことになる。

有為が生物階降下をしている神々にソートをかけ、フィジカルレベル 3万以下の神々をコンマ数秒でピックアップをした。ずらりとリストアップされた彼等には撒収を命じなければならぬ。

「うむ、援護してくれ。フィジカルレベル 3万を超える、戦闘意欲のある者は文型武型の別なく降下し有機合成を行っている神々の守護をせよ。ただし無理はさせるな」

極陰はアトモスフィア吸収環を解除し極陽に渡す準備をした。極陽は4つの吸収環に拘束され陰陽階を一柱で支えなければならなくなったが、司令官として勅令を発するだけならそれほど不自由はない。大本営に集まっていたフィジカルレベル 3万を超える各文型神も、生物階降下の司令を受けて、一柱ずつ大本営を後にしていた。陰階神4位、電子を司る神 慈雨 尊、陽階神第8位 ヴィシュヌⅡクリシュナらだ。武型神より強い力を持つ文型神もいる、文型武型言っている場合ではない、戦える者は戦い人々の生命を守らなくては……。

「比企殿にも救援を派遣しますか」

リジーは極陽に伺いを立てる。比企は一応文型神（XX）だ。

「何言ってるの、リジィちゃん。ヒッキーなら助けなんていらないうって」

有為はうつかりとそう言ってしまったので、比企を信奉するリジーにきつい一瞥をもらうこととなった。極陽は勿論比企には援護を送るつもりはなかった。彼は極位をすら狙っている器だ。神々の長の地位を虎視眈々と狙っている。その彼が他の神々から援護されるという事は、屈辱意外のなものでもないだろう。有機合成を行いながら神々を援護し人々を守護する事は難しいだろうが、比企に割く人手が勿体無い。

「比企に援護はいらん、他に廻せ。全神と全使徒に告げよ、通常的全業務を停止し神階へ即時撤収、フィジカルレベルの満足ではない神には戦力外通告を出せ。独断での行動を控え大本営の決定に遵えと」

極陽は毅然とした態度で指示を飛ばす。

主神が戦意を喪失してしまえば生物階に降下した神々の士気が下がる。彼はどんな状況下でも強い主神を演じなければならなかった。

「それより……まだ見つからぬか」

極陽は別の事が気になっていた。

神々の損失も痛いだが、この件はそれ以上に重要だ。

「は、草の根をわけてでもと搜索させておりますが、殺害された5柱の神々に相当する神の赤子は一柱も発見されておりません」

「何故だ……何故神が誕生しない。葉が落ちれば蕾が膨らむは自然の摂理、神が崩ずれば新しき生命を授かるもの。天の理が破られているのか」

名も姿もなきものが陰階神 荻号 要を演ずる事をやめ、無へと昇華されてしまった時から、レイアIIメーターを最後に神階にはもう一柱も神が誕生しない。だがそれは、主神ですらも知らないことだ。創世者が荻号要という神を演じながらたった一柱で全ての神々を生み出していたとは夢にも思わなかっただろう。

神が崩御しても代わりの神の赤子が生まれない。由々しき事態だ。これでは神々という種は絶滅してしまう……。極陽もこの事態を受け、窮地に立たされていた。そんな極陽に迫い討ちをかけるかのように、有為がとんでもない報告を入れる。

「スミちゃん、不法に門を出てこうとする神がいるのー」

極陽をスミちゃん呼ばわりする有為が逐一報告する。

何度も言うが、これでいて彼女、仕事はできる。仕事ができるからこそ主神に対するこの横柄な態度も許されているようなものだ。

「勝手な真似を……誰だ」

「位神データベース照合、該当なし。第二種、第三種公務員データベース照合、該当なしでしょ、んー、どこにデータがあるのー？」

一度に複数の演算をこなす有為は、指が足りない。ファティナも検索を手伝っているそうだが、なかなか見つからない。生物階降下をしようとしていた極陰も、じれったそうにせかす。

「何をぐずぐずしておる、生物階降下をしてしまったではないか」

「あ、あったあ！ 陽階非位神 通名・置換名 藤堂 恒、本置一致の神なのー？ これって王子の弟子じゃないー？」

今日登録が上がったばかりで、有為のデータベースからなかなか検索に引っ掛けられなかった。

通名と置換名が一致する珍しい神、比企のように日本由来の神だと推測される。極陽は有為の報告を聞いて啞然とした。王子の弟子って何だ？ 彼女は全ての神々に彼女自身で考案したニックネームを付けてしまっているらしかった。

「王子とは誰だ。勝手にあだ名をつけて呼ぶな、紛らわしい」

「ユージーンちゃんよ。王子っぽいでしょー？」

人間でいえばまだ大学生ほどの若さで枢軸として執務している上品がよく腰が低いしハニカミ屋でおまけに金髪碧眼、聖衣もフォーマルと、絵に描いたようなテンプレなので、彼女は王子と呼んでいくらしかった。勿論多少なりとも蔑称のつもりだ。ユージーンの陽階神の模範のような正当性と佇まいは、彼女のカンに触るらしかった。

陰階神は美学に縛られた陽階神を軽蔑する。極陽は恒が神階を出て行ったのだと知り考え込んだ。以御は引き止めた事だろう。だが命令を無視して突然出て行ったとすれば……。何か相当の事情があったのかもしれない。

「捨て置け、ユージーンの不始末だ。弱すぎて神だと判りはせん、狙われもせんだろう、救助はいらん」

極陰は取りあおうとしない、命令を無視して勝手に出ていった子

供など面倒をみきれない。極陰が生物階へ降下しようとしたその時、極陽は彼女をとどめた。

「極陰、少し留守を頼まれてはくれぬか。私が生物階に降りてくる」

「あなたが神階を空けるのか？ やめときな、何をしに行く」

「1時間とは空けぬ、1時間以内に戻ると誓う」

大本営は混乱した。

全ての指揮権を持つ極陽が生物階降下をしてしまったら誰が指示を下す？ 極陰への指揮権の譲渡は法的に問題なく、極陰も極陽に次ぐ権限を持つてはいるが、神々の士気を下げる事になりかねない。極陽は指揮権を放棄してしまったのかと。極陰は1時間だけと聞き、彼の希望をかなえることにした。極陽と極陰は古い付き合いだ。極陽がこんな身勝手な我がままを言う事は一度としてなかった。生物階に降りたいという強い希望がある彼に降下を許さなければ、集中を欠いてしまった後々のリーダーシップが期待できない。

「分かった。行ってきた……だが早く戻れ。唯今より大本営は私の指揮下に入る。極陽は指揮権を我、鐘遠に譲渡せよ」

彼は彼女の気遣いに感謝し、深く頭を下げると、吸収環を彼女に押し付け、小走りに大本営から出て行った。

＊

ユージーンは薬神 清水 梢の援護にカリフォルニアの製薬会社の研究室に駆けつけて、彼女に群がりがかけていた解階の貴族達を皆殺しにすると、先ほどから鳴り止まない携帯を取った。こんなに執拗に電話をかけ続けてくるのだから、何かあったに違いない。

「何だ？ 何かあったのか？」

「恒の母親は！？ あんたが避難させただろ！？」

以御は脈絡のない言葉を浴びせかけるが、ユージーンには彼が何を言っているのか理解できた。しかし何故以御がそんな事を確認す

るためだけに、これほど電話を鳴らさなければならなかったのか。

「ああ。彼女には避難を促した」

「恒が生物階に戻った！ 母親の無事を確認する為に……！ 母親を避難させたって恒に言っとけよ！ だからこんな事になるんだ」
何だと！？ 以御はユージーンの言葉の足りなさを猛烈に非難しているが、彼の言うとおりだった。

ユージーンが一言、恒に声をかけなかったから恒は母親の身に何かがあったのではないかと思い、生物階へと舞い戻ったのだ。

解階の貴族達が血眼になって恒を捜しているという事など露知らず……。ユージーンは清水を見捨てては離れられない、しかし恒が殺されるのはなおさらあってはならない。捜さなければ……。ユージーンはヴィシユヌが清水の援護に駆けたのを見て、彼女にこの場を任せる事にした。

彼が殺されてしまったら、三階は滅んだも同然だ。

＊

使徒の運び出す荷物に紛れ、恒は生物階に戻ってきた。生物階では38柱の神々の気配が地球上を覆い存在感を放っている。当然最大のアトモスフィアを持つユージーンの気配は健在だった。だがアトモスフィアではない別の気配も点在している。これが解階の貴族達の存在感だ。メファイストフェレスの気配と似ているので分かった。

神々は戦闘中なのか、アトモスフィアが乱れている神も多くいる、だが恒の実力では彼等の救助になど駆けつけられない。慌てていたからか白衣でプレートをかけたまま戻って来てしまっていた、不自然な格好だが気にしてもいられない。恒の為すべき事は一つだ、母、

志帆梨の安否を確認せねばならない。そして事情を話し、彼女を安全な場所に避難させなければならなかった。

恒は安全な場所を選び瞬間移動を繰り返しながら、風岳村方面に強い気配がないことを確認しつつ村に近づいた。村にはもう解階の貴族は残っていないようだ。風岳村に神はいないと知って、諦めてくれたのか……。恒は安全を確認すると、藤堂家の玄関に移し、家中に電気をつけて回りながらドタバタと玄関を上がって探し回った。志帆梨はいない。電話台のメモを探すが、メモを残してもいない。

恒は途方にくれ、八畳の居間の襖を開けた。すると電気もつけぬままの暗闇の中に若い男が身を潜めていた。男の眼光だけが闇の中で不気味に輝く。待ち伏せをされていたのだと気付いた時には、もう遅かった。恒は風岳村には強い気配がなかったので安全だと思って帰ってきたのだが、彼はツールで気配を消していたようだ。

恒は足が竦んで、動けなくなった。

「まさか戻って来るとは、愚かな子供だ」

恒は瞬間移動で逃げなくてはと考えたが見透かされたく、次の瞬間には腕をめがけて黒い拳が飛んできた。アバラに一発、そして腕に一発。かつてない衝撃と、骨が碎ける音が聞こえる、胸部と左上腕を折られてしまった。悲鳴を上げられないよう彼に口を塞がれ、恒の絶叫はモゴモゴと口ごもるばかりで外には届かない。助けを呼んだところで、藤堂家は山の中腹に位置し、遠い隣所の兼橋には聞こえない。更に彼は立て続けに恒のどてっ腹に拳を穿ちこみ、アバラが何本か骨折したのが分かった。気絶しそうな痛みの中、意識を繋ぎとめようと必死だった。転移をしても無駄だと言いたいのだろう。内出血が始まったのか、口の中を内臓からの出血で滲んだ血が溢れてくる。鉄の味が、口の中いっばいに拡がって咽る。

「子供を殺すのは忍びないが、我が主がご所望なのだ、悪くは思わない」

「主とは、誰です……」

恒は激痛の中、正気を失わないよう脳の神経系をコントロールしながら、痛みを押さえつけた。荻号がかつてやっていたという神経ブロックの真似事だ、だが随分苦痛は和らぐ、痛覚神経を脳に到達する前に遮断するやり方だ。身体は正直で複雑骨折により内出血と貧血から悪寒がきているが、脳だけは守らなければならなかった。冷静な思考を奪われてしまったらその時が、恒の最期だ。できるだけ会話を長引かせ、一瞬の隙について逃げ出すつもりだった。

彼等の主というのは見当がつく。ブラインド・ウォッチメイカー（盲目の時計職人）だ。そして何故恒を殺すのか、ここに来てはじめて分かった。恒を殺して徒に抗体を消費しておけば、ノーボディとユージーンがINVISIBLEと成り代わる事はない。ノーボディはブラインド・ウォッチメイカーに力が劣る。ブラインド・ウォッチメイカーはわざわざ抗体を使わずとも、実力で絶対不及者の力を捻じ伏せINVISIBLEと成り代わるつもりなのだろう。利用価値がなく、むしろ邪魔だと判断されたのだ、ブラインド・ウォッチメイカーが邪魔者の恒を生かしておく訳がない、しかし彼は直接生物階に介入する力を持たない、解階の住民を洗脳した……か。

恒がここで死んでしまえば3年後、抗体は発動せずノーボディが負け、ブラインド・ウォッチメイカーが三階の支配者となる。

三階の再生を目論むブラインド・ウォッチメイカーの支配する世界では、三階の破滅は免れられない。極陽は間に合わせに、恒の代わりとなる抗体を作り出し、3年後に備えようとするかもしれない。だが物心のつかない子供の神が彼あるいは彼女の死と引き換えに絶対不及者抗体としての能力を発揮し、絶対不及者を封じる事ができるかは保障できない。Anti-ABNT 抗体となるには強い精

神力が必要なのだそうだ、だから極陽は複数のクローンの子供を作り出し、A D A Mに監禁して生き延びてゆけるのかという残酷な実験を行っていた。恒はA D A Mに監禁されながら10年を生き抜いた、最も精神力に優れた唯一の生き残りだ。

誰も恒の代わりはできない。生き残りはないのだ。

こんな場所で死ねない、志帆梨はユージーンが避難させたのだろうという、自称交渉のプロの以御の言う事を聞いていればよかった。考えが足りなすぎた……。これでは飛んで火に入る夏の虫、それ以下だ。肺に折れた骨が突き刺さり、呼吸もおぼつかない。

「我が主が何故お前を御所望なのかは分からぬが、あまりお喋りをしている時間もない。俺はグリゴリⅡデューバー、死後は良い所に連れていってもらえよ……」

恒はグリゴリを出し抜いて、隙を作る事が出来なかった。ユージーンのもとに瞬間移動をすれば助けてもらえる、しかし折れた左手を捕まれている、グリゴリが邪魔で転移ができない。恒にはグリゴリを転移に巻き込むだけの力はない。それでも、むぎむぎと殺されるのだけはごめんだ。やるしかない。恒は白衣の下ポケットの中からそつとF C 2ーメタフィジカル・キューブ（形而立方体）を取り出し起動した。

ルービックキューブ型の神具は組み替えを起こすだけで起動する、コマンドは無言で与える事ができる、グリゴリを洗脳する事が出来れば……彼はブラインド・ウォッチメイカーに洗脳されてやってきただけだ。それを忘れさせてやる事が出来れば……恒は助かる。グリゴリは少しは気の毒だと思ってくれているようだ、なかなか殺そうとしない。もう少しだけ、時間を稼ぐ事が出来れば！

「早く殺してやらなきゃ、お前の苦痛も長引くが、子供を手にかけるのは躊躇われてな」

子供を手にかけるのは、彼の心情としてもあまり望ましくないだろう。

彼は解解に14人の子供を残してきた親でもあった。恒と同じ年頃の子供もいた、息子を手にかけるようで、彼は気が咎めているらしかった。恒は解階の伯爵家にあたるメファイストフェレスが、言葉や所作はあんなにガサツだが、温和で思いやりのある女性だという事を知っている。グリゴリも根っからの悪人という訳ではない、解階に暮らす至って平凡な貴族なのだ。家庭があって、子供のいる……。

恒は激痛を神経ブロックによって紛らわせながら、コチコチ、と静かに神具にコマンドを与えていた。恒が満足に使いこなせるのはマインドコントロールフィールド(MCF)だけだ、この神具の他の機能はまだ使えない、それでもグリゴリを洗脳できるのだとしたら、たったこの一つの機能が発動すればいい。

間に合え、間に合ってくれ、そう思いながらもグリゴリが目を閉ざしながら恒にツールを向けているのが分かる。槍型のそれに突き刺されたらひとたまりもない。恒の祈りも空しく、恒は両手を掴まられて後ろに固定され、右手がFC2—メタフィジカル・キューブから手が外れた、神具は光を失い沈黙状態になってしまった。こうなったらもう起動は望めない。

ああ、もうダメだ——！

「最後にいい事を教えてやろう。俺はお前のパパを殺してはいない。パパを捜しに来たのが、仇となったな、怨むなら……」

まさに彼がツールを振りかぶろうとしたその瞬間、天井から鼓膜が破れるかのような爆発音が聞こえ、藤堂家の屋根に風穴が開いた。バラバラと屋根の残骸の木材や埃が降り注ぐ中、満月の月光を背に、白衣を纏った一柱の神が降りてくる。恒は意識が朦朧とする中でも

それが誰か、間違えよう筈もなかった。

陽階神第一位（極陽）、主神 ヴィブレイスミス。 齡2000年を生きる、神々の長、そして恒の実の父親である。主神が玉座を捨てて生物階に降りてきた。アトモスフィア吸収環を脱ぎ捨て、自由となった主神は本来の力を取り戻し、恒は生物階に唯一神として君臨する彼の壮絶なまでの存在感に身震いがする。空気が震え、風が啼いている。彼のアトモスフィアは風岳村を覆いつくしている、グリゴリは驚嘆し、口を大きく開けて、月光のスポットライトを受けた一柱の神を見上げた。

「怨むなら、誰を怨めと？」

さすがのグリゴリも、神階の長の名と顔ぐらいは知っていた。他の神々なら歯牙にもかけないところだが、何という運の悪さだろう、主神と鉢合わせをしてしまうとは。フィジカルレベル88946の文武型（AX）神だ、彼はわざわざ巻き添えになりに来たのではない。彼はグリゴリを殺しに来たのだ、グリゴリは恒を盾にしてあわずさる。

形成は劇的に逆転をした。たった今、この瞬間から。

「そこから動いてみる、こいつの命はない！」

「では私も警告しておく、その子供を殺してみろ。汝の命はない」

グリゴリは彼の絶望的なまでの強さを、その力の差というものを肌で感じていた。グリゴリはヴィブレイスミスの迫力に負けて恒を畳の上に横たえ、恒の傍からおもむろに離れると、畳を蹴って飛び出し、家の屋根にあいた風穴から一目散に逃げ出そうとした。だが主神はそれを許さなかった。彼はグリゴリの前に空中で立ちほだかる。湿気を含んだ熱帯夜の風がヴィブレイスミスのアトモスフィアで変性して冷気を運び、グリゴリの頬を愛撫する。グリゴリはその

風に中てられて、毛の一本一本が逆立つほどの怖気がした。

「どこへ行く？」

「な、約束は守ったじゃねえか！」

「私があの子供を放せば汝を逃がすと、いつ約束した？」

鳶色の瞳が、月光を吸収して残酷な色を持っている。この神は、慈悲という心を知らないらしい。グリゴリは死を覚悟するしかなかった。恒は口の中に溢れかえってくる血に咽びながら、絶対的存在としてグリゴリの前に対峙する父親の姿を見上げた。彼は寡黙で、冷酷で、そして執拗だ。一度逃がさないと決めた獲物は、どうやっても逃がしてはくれない。彼が恒にそうするように……。

”FC2—Mind Cube expansion! Formation 1—22—3,—240°—350°—353”
(FC2—マインドキューブを展開せよ。陣形1—22—3、240°—350°—353)

彼は生体神具として頸部に埋め込まれている神具にコマンドと回転角を与えている。恒の持つFC2—メタフィジカル・キューブ（形而立方体）の後継の神具、FC2—マインドキューブ（心層立方体）は、脳内で自由にコマンドを与える事ができ、わざわざ組み替えを起こさなくとも脳内で完成したキューブを思い描くだけでその能力を発動させる事ができ、起動までの時間は一瞬だ。そして一度起動を始めた神具は、極陽の神体と一体化しているために、神具を取り上げる事も奪う事もできない。極陽は腕組みをしたまま、微動だにしない。グリゴリも精神的拘束を受け、ツールを振りかざして抵抗する事ができない。

静寂の中でこの上なく残忍な、そして一方的な暴力がそこにはあ

った。

” The S I X C R O S S e d P s y c h o l o g i c a l
B r e a k u p ! ”

（六杆対精神分裂）

静かな決着だった。

極陽はグリゴリに手を触れることもなく、神具を構えて扱う事もなく、腕組みをし小首をかしげたまま彼を精神的に圧殺してしまった。グリゴリは精神分裂を強いられ、殺されたも同然だった。身体上の外傷はないが、精神的には壊滅的なダメージを与えた。取り返しの付かない致命的なものだ、まもなく彼の脳は右脳と左脳が分裂し、大脳と小脳の連結が切られ、延髄は情報を垂れ流し、個々に分裂をはじめ、身体制御能力を失い、そのうち心臓を鼓動させることも呼吸をする事も放棄し、彼はこの世のものとも思えぬほどのおぞましい幻覚を見せられながら、死体となって朽ち果てる。

グリゴリは家の裏の茂みに落ちていった。彼が目覚ます事は、二度とないだろう。

「ゴフツ、……ゲホツ、」

恒は自宅の畳の上で苦痛にのたうち回りながら、何度も吐血をしていた。

血が気管に入ってしまった、息が出来ない。極陽はそんな恒の傍らに無言で降り立ち、恒を両手で抱き上げる。恒は息苦しくて、ともに彼の顔を見ることが出来ない、視界が歪む。彼は恒の背中をぽんと叩くと、大量の血が気管から出て、ようやく呼吸ができるようになった。極陽は恒を抱きかかえ、瞬間移動を繰り返し神階の門まで戻る。

神階に連れ戻されるのだろう、恒は初めて父親に抱きかかえられ

ながらも、彼の腕からは父親の温かさというものが何一つ伝わってこないことを、当然のようにかみ締めていた。彼にとって恒は息子などではない。大切な創造物ではあるのだろうが……。必要とされる時までは壊されては困る、だから助けに来ただけだ。親心など、彼には理解できないし理解をする必要もない。恒は創造神である彼にとって、大切な模造生命なのだ。大切な息子ではなく。

” 父さん…… ”

彼が恒を息子だなどと思っていない、そんな事は百も承知だった。マインドギャップ10層の彼にはマインドギャップが7層もある恒の心が読めない、恒の思いは彼には届かない。それでも、恒は心の中でそっと呼びかけてみた。息子を心配して、助けに来てくれたのだと思ったかった。だが返事はなく、声をかけられる事もなく、極陽は神階の門をくぐって規則正しい歩調で神階の廊下を歩いて執務室に戻った。

＊

神階に連れ戻された恒はそのまま極陽の居室に運ばれていった。医神、紺上^{こんじょう} 壱見^{ひとみ}に任せず彼が直々に手当てをするつもりだ。極陽は恒の生体の設計図を持っている。彼は内科医で、外科医ではないが神と人の性質を併せ持つ恒の手当ては誰に任せるより、恒の全てを知り尽くす生みの親の処置が最良のものだった。恒は多臓器損傷に複雑骨折、出血もかなりのもので、重体だった。

極陽は人のA型Rh（－）の血液を恒に輸血しながら、開腹手術もせず、彼自身の手で臓器損傷を癒していた。恒の腹部には5cmほどの傷がつけられ、そこからドレインで腹膜に溢れた出血を排出している。恒には鎮静剤と麻酔が打たれ、ようやく苦痛から解放された。恒の意識ははっきりとしていたが、極陽は黙々と恒の手当て

をしながら、無言だった。

大丈夫か、傷は痛むか、など、一声もなく。恒は折角の対面を果たしたというのに、悲しくなって、そして苦しくてたまらなかった。神階の決定に従わず勝手な単独行動を取った事に腹を立てているのか、と思ったがそんな様子でもない。思うところがないのだ、恒に對して何も。

極陽は返り血のついた白衣を着たままでここらともなく、一本のブレスレットを取ってきて恒の右手首にはめた。茶金のブレスレットは恒の手首には大きくガバガバだったが、しばらくすると手首に吸い付くように細くなり隙もなく詰め込まれたのが分かった。恒は思い出した、これはユージーンが風岳村にやってきた初日に填めていたブレスレットだ。彼はこれを詰められている間、力を揮う事ができなかった。翌日、正午になってそのブレスレットが解け落ちるまでは、彼は無抵抗の青年だった。

瞬間移動での逃亡を防ぐ為に詰められたのだろう。

更に恒の左手首には手錠がかけられベッドと繋がれた。ああ……やはりそうだ。彼は自分をモノとしてしか見なしていないのだ。恒は耐えられなくなって顔を背け、ベッドに臥した。頬を涙が伝って、枕に落ちた。

傷が癒えるまでか、いつまでかは分からないが恒はここに監禁されるのだ。

極陽の執務室の一角に手錠につながれ、力を奪われて……。結局志帆梨の安否は分からなかったが、以御の言うとおりでと思った。彼女はどこかに避難をしている、もしくは以御が連絡をつけてくれるだろう。恒が出来る事はここには何もない、泣き寝入りをするしかなかった。

「恒」

思いがけない、声が聞こえた。彼が名を呼んだのだろうか？ 恒と呼んでくれたのだろうか。涙が目じりにぶら下がったまま、はっとして振り返ると、極陽は背を向けていた。

「辛い思いを、させておるの」

感情のこもらない、しわがれて抑揚に乏しい声だった。恒は極陽の心を理解しかねた、彼は何を考えている？

恒を息子だと、大切な一人息子だと思ってくれているのだろうか。彼の真意は知れぬまま、極陽は恒の血に塗れた白衣の上着を脱ぎ、振り返る事もなく大本営へと戻ろうとした。しかし極陽はその扉の前に立ちふさがった青年のために立ち止まる。

「極陽、これはどういう事ですか？」

ユージーンが極陽の執務室に超空間追跡転移でやってきた。グリゴリとの戦闘には一歩遅かったが、彼も恒を心配して捜していたのだ。ユージーンは手錠をかけられ、力を奪われてベッドにくくりつけられている恒を見て、厳しい口調で極陽に問いただした。

「患者は安静にさせたまでだ」

「連れて帰ります。藤堂 恒はわたしの許可なく、あなたが不当に拘束しないで下さい。あなたにはその権利がない。たとえ親子であっても」

ユージーンは何も言い返せず無言で出てゆく極陽を睨みつけながら見送ると、恒のもとに駆け寄ってきた。

恒はユージーンの顔を見てほっとした、実の父親よりよほどユー

ジーンの方が父親のようだ。彼は優しく思いやりがあり、温かい。だがどれだけ非情なる親であっても、極陽が助けに来てくれなければ、間に合わず恒は殺されていた。

どんな事情と腹づもりがあつたとしても、父は恒の命を助けてくれた。

その事実だけは、胸にとどめておこうと思った。

第1節 第49話 飲み込んだ銀の呪詛

ユージーンから避難を促された志帆梨が自転車に乗って風岳神社前に着いた頃には、社務所に大勢の村人が詰め掛けて人垣を作っていた。一連の事件に対する不安が高まり、ユージーンに会いに来た村人達だ。仮にも神を名乗っているのだから不安を紛らわせてくれるかもしれないという安易な気持ちからだった。

精神安定剤としての期待はあったが、会ったところで彼が何かをしてくれるという希望はこれっぽちもない。しかし一人暮しの老人などは、いつどこから、誰が襲撃してくるかも知れないという恐怖の中で夜も寝付けないほどのストレスに耐えかねてやって来たのだそうだ。ユージーンが留守をしていると知り、彼等はひとまず神社に参拝をした後、神社の石段に腰掛けて途方にくれているらしい。

「藤堂さん、あんたも来たか」

「え、ええ」

「一緒に神様の帰りを待つんじゃ。あれ、恒の奴は？」

思いがけず恒の話題を振られて、志帆梨はおたついた。

志帆梨だけ避難するのも変だ。それに志帆梨は大きなリュックを背負ってきている。家を捨てて逃げ出してきたか、あるいはこれから旅行にでも行くような荷物の多さだ。

「こ、恒は親戚の家に行っておりまして。神様は、すぐにはお戻りにならないと思います」

「どうしてそう思う」

「え、それは、その」

志帆梨はもごも口ごもりながら、皆で一緒に夜を明かすしかないか、とユージーンに言われた通り朝顔の鉢植えの下から社務所

の鍵を取り出し、社務所に入った。村人達もどやどやと、中に詰め掛けてくる。社務所のアルミサッシの入り口を締めようとしたその時、村の外れの方角から尋常ではないほどの轟音での爆発音がして、村人達から悲鳴が上がった。

賢い志帆梨はすぐに、我が家が襲撃されたのだと察する。夜空にあかあかと閃光が走り、やがて静かになった。爆弾でも落ちてきたのだろうか？ ユージーンに避難を促されてから僅か1時間後の事だった。志帆梨は肝を冷やした。ユージーンが電話をくれなかったら今頃はあの家ごと木っ端微塵だ。手足に冷感が走り、志帆梨は膝の力が抜けた。社務所の中に入っていた村人も、驚いて飛び出してくる。

「どこが爆発したんね？」

「行ってみるか？」

「ダメです！ 行っではいけません」

「でも、あんたんちの方角だったでしょう？ あんたんちじゃったらおおごとで。藤堂さん！」

志帆梨は土地の権利書や実印、通帳や現金など生活に必要な貴重品は全て持ち出していた。愛着のある我が家だったが、失って困るものは何もない。恒さえ無事でいてくれるならば……。志帆梨は神の子を産んだ母として、降り懸かる全ての受難に立ち向かうための覚悟はどうにできていた。家ぐらい何よ、私は平気、平気……。彼女は自身にそう言い聞かせていた。

「家はいいです！ 近付いてはだめです！」

志帆梨が強くそう言うので、村人たちは顔を見合わせて宙に浮かせていた腰を落ち着けた。

社務所のテレビでは、内閣府とニュース中継が繋がっていた。優

柔不断内閣とも揶揄され、昨今支持率の低迷に喘いでいた祇園寺総理大臣は、珍しくそのリーダーシップを発揮し、自衛隊の出動を要請、各都道府県の地下避難施設に住民を避難させる方針を打ち出した。まるでゼンマイ仕掛けの玩具のネジが巻かれたかのように、対策を打ち出せずもたついていた内閣府は次々と住民保護の緊急措置を講じはじめた。何が優柔不断内閣を動かしたのかはわからないが、国の素早い対応には勇気付けられる。

日本での被災地は、広岡県を含めわずか3県だけだ。

それでも被害はいずれにしろ拡大を見せるだろう。避難を希望する者は、各都道府県の地下避難施設に避難するようにとのことだ。ニュースは各地方自治体のローカル情報に切り替わり、核シェルターとしての機能も持つ地下避難施設の所在地が発表された。広岡県には6箇所の避難施設があり、避難施設には自衛隊が配備されるという。

「わしらに黙って、政府は核シェルター、用意しとったんかな！」

「半島からの迎撃ミサイルにも大した税金を使っていたそうですが、税金も無駄に使われていたばかりではないんですね」

各県に数箇所程度の核シェルターを、国民に秘密裏に政府は用意していたのだそうだ。大学の地下や、県庁の下、工場の地下などに建設されていたその存在は国民には巧妙に隠されてきたが、このたびの非常事態に際しその存在を明るみに出す事となった。

ところで避難に強制力を持たせなかったのは、国民全員が避難をしてしまえばこの国に経済活動は完全に停止してしまうからだろうな、と志帆梨は考える。そうなればネットワーク系、電気、ガス、水道も停止し、この国は死んだも同然となってしまう。小学校、中、高校の体育館を臨時避難場所とし、自衛隊で警備をするという方針も発表された。ここには地下シェルターにまでは入らずとも、不安で夜も眠れなくなってしまった住民が安心して寝れる場所として提

供するためだ。国が本格的に対応をし始めたという事は、この異常事態がしばらく継続する可能性を含んでいる。事態はどんどん深刻になってきているような気がする、悪い方へ、悪い方へと吸い寄せられている。

「まさか、そだら大変な事になっとなのはのう」

「わしらも避難するか？」

「行くで、行くで！」

風岳村から地下施設に避難するには、30kmも南の町に行かなければならなかった。

避難は強制ではないが近くの村が広範囲にわたって被災し、藤堂家の方向から異音がしたばかりである。彼等はこの村の安全ではないと考え、避難したいと思ったようだった。また、各都道府県庁には非常事態無料相談ダイヤルが設置され、不安を感じた住民が24時間電話相談できる窓口が開かれた。志帆梨は地下避難施設に避難をせず、この村に残ろうと決めた。神階にいる恒と連絡が取れなくなってしまうからだ。

「藤堂さんは？」

「私は、ここに残ります」

志帆梨は村人たちから避難するよう説得されたが、社務所に留まると言い張っただけだった。

しかし志帆梨は悩んでいた。藤堂家が襲撃をされたという事は、神である恒もまた何者かから狙われているということだ。そんな時、恒をいぶり出すために志帆梨が囹として使われるという事はないだろうか。

志帆梨の身に危険があったとすれば、恒はどこに隠れていても出て来ようとするだろう。彼は親思いの子供だ、たとえ彼の命と引き換えにでも……。恒の足かせとならなければいいが、と志帆梨は心

配していた。

そして彼女はこう決心する。もし何者かに捕まって、自分の命と引き換えに恒の命が狙われるような事があったら……迷わず命を絶とう、と。

志帆梨の、母親としての精一杯の決断だった。

＊

極陽の去った執務室の扉を丁寧に閉めて、ユージーンは中に入ってきた。すぐに出て行くからと言いつつ含めて、極陽の第二使徒を締め出したばかりだ。

「恒君、悪かった。志帆梨さんを避難させたと、君に伝えておくべきだったね。心配をすると解っていたのに」

「いえ、俺の方こそごめんなさい。勝手な行動を取って自業自得です」

てっきり怒られると思っていたのだが、ユージーンは謝るだけで、恒は気拔けした。恒は怒られて当然だと思っていた、生物階に戻るなどユージーンに止められていたのに、以御を騙してまで生物階に降りたからだ。結果この有様、殴られても当然だと思っていた。ユージーンは恒にからつき甘く、恒はユージーンからてんで子供扱いされているのだと実感せざるをえなかった。ユージーンは処置台の上からシリنجと注射針を取り、彼の腕にあてている。重体の恒を一瞬で癒す為には、やはり治癒血を与えるほかないと思ったようだ。プライマリコピーであるユージーンは彼の血液とその身が、他の治癒血を持つ神々と比べ人を癒す力が格段に高いと知っていた。人間の子供と体は殆ど変わらない恒は、苦痛に耐える訓練を叩き込まれた神と違って苦痛にも弱い、早く癒して楽にしてやりたかった。

「極陽は治癒血を君に投与しようとしたかい？」

「いいえ、父も治癒血を持っているのですか？」

恒は極陽も治癒血を持っていたとは知らなかった。今、極陽が輸血しているのは、A型の人の血液だ。極陽のものではない。ユージーンはそれを聞いてシリンジをまたワゴンの上に戻す。

「では治癒血を打たない方がいいな、効かないんだろう。治癒血は神には効かないんだ、それどころか下手に他神の血が神体に入るとショック症状が出てしまう。わたしたち神には血液型がなく、輸血がお互いにできないんだよ。だから血液バンクに自己血のストックを預けるわけだ。それに、君には人間のA型の血が輸血されて適切な処置がされている、極陽は君の身体の構造を誰より知っているだろうからね」

ユージーンはすらすらと説明したがそれを聞いて、恒は複雑な気分だった。Anti-ABNT 抗体の設計者として、父は恒の全てを知っている。恒の自我も、心ですらも彼にプログラムされたものに過ぎないのだろうか……恒はそんな恐怖に囚われた。ユージーンはあまりのんびりとここで雑談をしているわけにもいかなかった、混乱している恒は以御が何とかしてくれるだろう。早く恒をユージーンの執務室に戻して、また生物階に行かなければならない。

「さ、帰ろうか」

ユージーンは恒を連れ帰るために点滴の針を外し、ドレインのチューブを処理し、ワゴンの上の薬剤を調合して恒に痛み止めを調合し投与してくれた。薬ビンや薬剤を見て、これとこれ、と合わせて調合している。その手技は手馴れており、危なげがない。

「ユージーンさんて、そういうばお医者さんでしたよね」

「内科医だよ。外科も少し」

人と関わる機会が多く、人を傷つける可能性のある陽階の武型神は、必須ではないが何らかの医師であるケースが多い。軍医としての服務も求められる事から、外科分野にも明るい。極陽の冷淡な処置とは違い、彼の手には温かみがある。傷ついた恒は彼が傍にいて

くれるだけでも嬉しかった。

「俺も、このくらい自分でできるようにならなきゃ」

恒は何もかも自分でできるようにならなくては、と焦っているように思える。恒はひたすら彼の無力感に押しつぶされそうになっている、ユージーンは背伸びをしたがる恒をたしなめた。

「そんな必要ない」

「でも……これからも俺は狙われるんですよ。それに、神なのに自分の事もできないなんて……」

恒は、人間に出来る事は神である彼にも出来なければならないと思っっているらしかった。

これからも恒は危険な目に合い続けるだろう、ブラインド・ウォッチメイカーは手を尽くして恒を殺そうとする。そんな中で怪我をした時に自分の傷も癒せないようでは神の名が廃ると考えたようだ。

「恒くん、君の向上心は素晴らしい。だが自分に不可能な事も識るべきだ、それもまた陽階神としての正しい在り方だよ。君が実感している通り、これから君はブラインド・ウォッチメイカーに狙われるかもしれない。だからこそだ。何でもひとりで出来ると思うな、勇敢と無謀は違う。危険だと思う事はするな、そして近づくな……無謀な事を控え君の身を守る事こそが、君の為すべき事だ」

「はい……」

恒は穏やかな口調で諭され、渋々同意した。

恒が納得をしたので、ベッドの傍らにしゃがんでいたユージーンは恒の頭を撫でる。

ユージーンは今回の事態で、ひやひやしていた。極陽が助けに行ってくれたので間に合ったようなものの、一足遅ければ恒の命はな

かった。そして一度無駄に消費された抗体は二度と元には戻せない、ユージーンが息絶えた恒を迎えに行った瞬間、Anti-ABNT抗体は発動され、荻号から譲り受けた禁視を宿し、存在確率の鍵のステイグマ（聖痕）を持ち、絶対不及者の性質を多少は帯びているユージーンの力は封じられ、恒の身体は役目を果たして灰と化すところだった。結果、その瞬間に三階の命運は尽きる事となる。

三階の生命線ともいえる恒にはできれば3年後まで、安全な場所に居て欲しい。神階も生物階ももはや安全とは言いがたい、安全なのはユージーンの傍だ。本当は恒をずっと手元に置いておきたいが、今は恒を庇いながらこの事態に対処できる自信がない。感染者と接触感染をさせてしまうかもしれないし、何らかのアクシデントで殺されてしまうかもしれない。恒にとって安全だといえる場所は、ユージーンの執務室だ。そこには信頼できる右腕、響　以御がいる。

「君は利口だ。怖い思いをさせたね」

「ようやく自分の置かれている立場が分かりました。3年後まで、生き延びられるのでしょうか……?」

ぼそりと、恒は力なく呟く。ユージーンはそんな恒を見て、たまらなくなった。どうして普通の少年として、ごく当たり前の生活を送らせてやれなかったのだろう。

「恒君、わたしは何があっても君を守る……そしてノーボデイもそうだ。怖れる必要はない、君は心を落ち着けて」

守りきれ、とはいえなかった。

恒を必ず3年間無事で守りきれるか、ユージーンにも自信があるわけではない。解階の混乱に乗じて、生物階への解階の住民への流入が始まった。生物階を混乱に貶め、恒を殺すためだ。恒は妄信的に、ノーボデイの言う事だけ信じていればいいとは思えなかった。それにノーボデイが恒を守りきるだけの力を持っているかという事

も疑わしい。”彼”は神々、そして人類の味方ではあるのだろうか、どうも”彼”の対応は後手後手になってしまっているような気がする。彼は三階を平和的に維持すればそれでよいと考えている創世者なのだそうだが、だからその内容がどうなっても、あまり意に介さないのかもしれない。数十万人規模での生物階の死者数、そして解階での犠牲者数を、彼はどう考えているのだろうか。そしてそれを”たかがそれだけの犠牲者”などと考えていないことを願うばかりだ。

「ユージーンさん。ところで先ほど、父の心を読みましたか？」

「いや……読めなかった」

ユージーンは後ろめたいのか、恒と目を合わそうとしない。恒は嘘をついていると見抜く、荻号と神格を共有したユージーンは99層のマインドギャップを持っている。わざわざマインドブレイクをかけなくとも相手の心層を看破することができる、その彼がたった10層の極陽の思惑を読み取れなかったと言うのは無理がある。言いたくないのだとすれば、恒はいらない勘ぐりをしてしまう。

「読めたでしょう？」

恒には可哀相だが、極陽は恒を目的のための手段として、モノとして創りだした。トランスジェニックな実験動物として、抗体のキヤリアーとして、遺伝子改変実験動物を作成するのとそれほど変わらない手順と認識で……。抗体の発現のため人間の女性に身におぼえない妊娠させなければならなかった事は気が咎めたようだが、生まれてくる模造生物に対して気の毒などとは考えた事もなかったらしい。遺伝子改変動物には人間としてうまく社会に溶け込めるよう、必要最小限の社会性と人格はプログラムしておいた。しかし母親を愛する心、隣人を憐れむ心、それらは断じてプログラムされたものではない、とユージーンは思う。模造生命が人間として懸命に生きる中で獲得した感情、人間らしい心は彼自身のものだ。

後先考えず勝手に生物階に降下したのも母親を思うあまりの行動であって実に人間らしい。彼は解階の貴族に力及ばず命の危機に瀕していても神具を握り締め、生きる事を諦めはしなかった……。

そこで極陽はこう結論せざるをえなかったようだ、この子は生まれた時には心なき模造生物で自身の所有物であり、また世界の救済のために捧げられるべき生け贄の羊に過ぎなかったが、もはや10年を生き抜いた彼の身はただの自分の所有物でありモノではないのだと……。

2000年以上を生きた極陽にとっての10年はあまりにも短かく、矢のように過ぎ去る。しかし彼の手によって生み出された模造生命、藤堂 恒にとっての10年は自己存在と真正面から立ち向かい続けた、苦難の日々の積み重ねだった。極陽は10年を耐え忍びながら生き抜いた彼の生命をその手にとらえ腕に抱き、彼の体温、彼の鼓動、彼の呼吸を全身に感じ、命の重さを実感した。

その時、極陽の恒に対する認識が変わった。

恒は生きているのだ、逃れられない現実と立ち向かいながら――。生かされているのではない。

極陽は恒の生身の人格、あるいは神格を認めた、認めざるをえなかった。しかし恒にはどうしても来たるべき日に、確実に死んでもらわなければならなかった……彼はそのため生まれてきたのだから。彼には誰も肩代わりすることの出来ない、命の犠牲を強いる重い役目を負わせているからだ。

極陽は恒と対面を果たして彼の生命と心を軽視してしまった事を後悔していたが、どれほど後悔をしても、当初の計画通りに彼の子を崖から突き落とさねばならなかった。彼の代わりを用意してないのだ。3年後、自殺遺伝子の導入によって極陽には我が子を確実に抹殺する準備がある。極陽がスイッチを押しさえすれば、自殺遺伝子が発動するように設計されている。

恒はどちらにしる極陽に殺される運命なのだ。そうであるとしたら、極陽の心の内の葛藤や恒に対する罪悪感など、恒に伝えない方がいい。彼は極陽を憎んでいる。その方が彼にとっても、極陽にとっても幸せな事だろう。三年後、恒を必ず殺さなければならぬと決意している極陽を父親と呼ばせて慕わせてはならない、ユージーンはそう思った。ユージーンはベッドに手錠で繋がれた恒を見下ろし、手錠を切ろうとした。

「帰ろうか、恒君」

「ユージーンさん、この手錠の鎖切れませんか？　俺、もうちょっとここに残るしかないかな」
白々しい言い訳だった。

恒はここに残りたがっている。何故？　極陽は恒に何をしたものか分からない、極陽は精神攪乱生体神具FC2－マインドキューブを持っている。恒の心などいとも簡単に操ってしまうだろう、心理戦をするにしても不利だ。そして荻号から継承した恒の神具、FC2－メタフィジカル・キューブを自宅に置いてきてしまっている。つまり丸腰だ、丸腰で主神と対話をできると考えているとしたら、思いつき上がりにもほどがある。赤子の手をひねるよう、とはまさにこの事だ。恒は3年後まで殺される事はないと思っっているようだが、殺さないまでも精神的に恒を傀儡としてしまう方法などいくらでもある。相手は心理学や謀略に長けた老獪な神だ、引き合わせてはならない。ユージーンは淡々と否定した。

「手錠は切れる。極陽と話をしたい気持ちは分かるが、残っちゃだめだ。無理にでも連れて帰る。彼は君の親ではない、支配されたり、利用されたり、欺かれたり……親子ってそんなものじゃないだろう。わたしは親の愛情を知らない、でも君と極陽は違う。親子じゃない。

父親と認めてはいけない、君の親は志帆梨さんだけだ、それで充分じゃないか」

「残りたいんです……極陽と話がしたいんです。分かっています、愛情なんてないこと。俺の事なんて、子供だとも思っていない……それでも彼は俺の父親なんです、俺は彼の子なんです。その事実を受け止めたい、それがどんなに苦しくとも！ 彼がどうやって俺を殺そうとしているのかを、知りたいんです……」

どれだけ憎んでいても、恒は極陽と話をしたいと主張した。それは、親のいないユージーンには理解できない思いだった。しかし恒の言葉は、それだけでは終わらなかった。

「それに、彼は俺の設計図を持っています。それを見せてもらいたいんです……抗－A B N T抗体がどうやって発動するのか……この体に仕掛けられた時限爆弾を、知りたいんです。そして――」

恒はゆっくりと瞼を閉ざした。ユージーンははっとして、恒の手を握る。彼は今、存在の闇に魅入られてしまっただけではないだろうか。

「俺という存在が、どうして生み出されなければならなかったのかを」

どうやらユージーンが考えていたより遥かに、恒は大人だったようだ。

父親に愛情を求めたいがために残りたいと言った訳ではないと、この10歳の子供に教えられた気分だった。彼を殺そうとしている相手と、恒自身が向かい合いたいのだという。ユージーンはかける言葉を見失った。ユージーンは恒の力を奪っていたブレスレットを爪先でカチンと割り、手錠を切って自由にした。ユージーンは二台目の銀色の携帯を恒の手にしっかりと握らせ、その拳を包み込んだ。

「何かされそうになったら、どのボタンを押してもわたしに繋がる。

何があっても助けに来る。手錠もないし、力を奪うブレスレットも外した。わたしの執務室のベッドは覚えているね？ 瞬間移動もできるようにした、それで…」

恒はユージーンの目を見て真剣な面持ちで頷いた。

「……残るんだね？」

「ユージーンさん……」

「ではもう止めまい。気をつけて。じゃあ、わたしは行くよ」

ユージーンは恒を連れ帰る事を諦めると、まだ血がまわり付いているG-CAMを基空間から抜き、生物階に戻ろうとした。ここですべての雑談をして時間を費やすわけにはいかないのだ、彼は恒を心配させるような事は話さなかったが、恒は血に塗れたG-CAMを見て、殺しをしてきたのだろうと察した。それも一人、二人というレベルではない。そして彼は生物階を守るため、あるいは神々を守るため、これからまた修羅となって地上に降り立つのだろう。

「ユージーンさん、俺が最初に会ったのが、あなたでよかった……でも、これ以上殺さないで下さい。殺しても何も解決しません」

彼の姿はもうなかった。恒の思いも空しく、ユージーンには届かなかった。

”ユージーンさん、あなたは優しい方です。あなたの心を欺かないで下さい……解階の住民を殺さなくとも、答えはどこかにある筈だ。八方塞がりの状況に光明を見出すのが、神の本質じゃないでしょうか。どこかに穴がある、ブラインド・ウォッチメイカーの戦略には穴が……”

これは武力で解決すべき戦いではない。解階の住民を殺したら殺しただけ、神々は反感をかう。アルシエルと交わしたであろう共同戦力も意味を持たなくなってしまう。ブラインド・ウォッチメイカ

―は三階の内部対立と混乱を狙っている。三階の命運を賭した頭脳戦、そして心理戦は、とっくに始まっているんだ。

必要とされるのは力ではない、知力だけだ。

恒はそう確信していた。目先の事態の收拾に追われて、本質を見逃してはならない。三階はこちら側とあちら側の創世者同士の、頭脳戦に巻き込まれ、翻弄されている。ユージーンは今、目先の事態に捉われている。もっと根本的な打開策を打ち出さなければ……恒の戒めは解かれたが、先ほどと全く同じ体勢でベッドの上に寝ているしかない。

極陽は大本営に戻ったのだろう、神々の長として生物階降下中の神々の指揮をしなければならぬのだそうだ。恒は極陽が戻って来るまでの間に、傷ついた身体を休めながら夢の中の創世者、名も姿もなきもの（ノーボディ）に会いに行こうと決めた。彼はまだ、ブラインド・ウォッチメイカーの策略に対抗する術を持っているのだろうか？

＊

藤堂家の方面から爆発音を聞いた朱音は、たまらず自転車に乗って駆けつけた。恒が帰ってきたら長年の想いのたけをぶつけて、今日告白しよう。そう思っていた矢先のことだった。恒の身に、あるいは志帆梨の身に何かがあったのか、朱音はそう思うと居ても立ってもいられず、家を飛び出してやってきた。

黙って家を飛び出して、母には怒られるだろう。だが家でじっとしてなどいられなかった。藤堂家は見た目には何も変化が起きているようには思えない。家の玄関は鍵がかかっていなかったが、煌々と電気がついている。辺りにはきな臭いにおいがして、何となく

埃っぽい。鳥小屋の雄鶏がまだ爆発に興奮しているのか、コケー、コケコー、などとせわしなく鳴き声をあげていた。朱音は自転車を降り、玄関で律儀に靴を脱いで藤堂家に踏み込んだ。家の中は、もぬけの殻だった。志帆梨も恒も、誰もいない。

「恒君？ おばさん？ ……どこ？」

家にはいないのかな、そう思いながら和室に踏み込んだ朱音はうつと口を覆った。吐き気がするような光景が目の前に広がっていた、畳の上に血が飛び散っている。朱音は指先を血だまりに差し入れてみた。濡れている……やはり先ほどの爆発の時に……。そして天井を見上げると、風穴が開いて満月が顔を出している。ぞっとするよ
うな、不気味な空だった。

朱音は恒と志帆梨の姿を捜しまわった。これは恒の血ではないのか？ 志帆梨はどこに行った？ ……彼女はパニック状態になりそうになりながら、胸の鼓動を押さえつけてサッシを開け、縁側から庭に飛び出した。古い日本家屋は人の気配がないと不気味だ、それでも朱音は持ってきた懐中電灯の明かりを頼りに歩みを進める。耳を澄ますと家の裏の茂みから、男のうめき声が聞こえてきた。朱音は地を這うようなその低い声を聞いて、とてもこの世のものが発している声だとは思えなかった。彼は誰だ？ そして恒はどこに行っ
た……。朱音は男の声がいつこうにこちらに近づいてくる様子がな
いので、思い切って近づいてみることにした。

草地に横たわっていたのは、若い男のようだった。朱音は恐る恐る懐中電灯で男の姿を照らす。よく映画で見るような、タイトな真っ黒のボディースーツを着てマスクを被っている。マスクからは顔が半分出ている。外国人のような面立ちの若い男だ。白金の髪の毛、青い瞳……。

「ユージーン先生！？」

彼女はユージーンだと勘違いして反射的に駆け寄った。グリゴリⅡデューバーは極陽の神具FC2ーマインドキューブの六杆対精神分裂という非情な攻撃に打ちのめされ、精神系の破綻を招いている。まさに彼の命は燃え尽きようとしていた、その瞬間に朱音は居合わせってしまったのだ。

「ユージーン先生じゃ、ない！」

彼女がそう気付いた時にはもう遅かった。顔が半分隠れていたの
で識別できなかったのだ。

そして金髪で碧眼の外国人はこの村にユージーンしかいなかった。彼女はしまったと思ったが、グリゴリは藁にもすがるような思いで朱音の腕を捕らえて離さない。勿論正気での行動ではない。誰かが近づいてきたので、それにしがみ付いた。朱音が誰だ、などとは認識できない。彼の脳は破壊され、本能のみが残っている。しかしそれもやがて死に絶え……。

「キャー！！ 誰かー！ 誰かーッ！」

朱音は大声で叫んだが、誰も気付いてはくれないと分かりきっていた。

ここは山の中腹で、叫んでも誰も来ない。

朱音は強い力で手首を掴む男に怯えたが、彼が錯乱していると知るとそれほど怖くはなくなった。断末魔のような声をあげ、泣き喚き、そして呻く。理性があるとはとても思えない。精神病患者なのだろうか……？

「あ、あなた、大丈夫？」

朱音は子供のように泣きじゃくる彼の額に、そっと手を当てた。胸をかきむしるような仕草をしたり、足をばたつかせたりと落ち着きがない。朱音は子供心に、彼は今から死ぬのかもしれない、そう

思った。こんな状態でもう長く生きていられるとは思えない、狂い死にするのだ。マスクを脱がせてやると端正な外国人風の男の顔立ちが現れた。ただし、目は明後日の方を向いており白目を剥いているし、口から泡を吹いている。朱音はそれだけで気味が悪いと思っただが、兎にも角にも手首を掴まれているのだからどうしようもない。ここは説得して、病院に送るのが一番だ。

「あ、あなた、病院に行く？」

しかし119番に通報しようにも、この男から離れて恒の家の電話台に行かなくてはならない。彼は心細いのか本能からなのか、朱音の手首を離そうとはしない。両目の現れた彼は朱音の姿を認めると、どここの言語とも知れないような言葉で呻き始めた。朱音はふとこの男が気の毒になって、随分と大きな彼の身を両手を拡げて抱きしめてやった。

「大丈夫よ……落ち着いて」

朱音はそう言いながら、彼に怪我がないかと目を配った。先ほど畳の上で見た夥しい量の血は彼の血だと信じて疑わなかったのだが、彼に外傷はなかった。

「嘘、ではあれは誰の血？」

朱音は彼の頭を撫でてやりながら、彼に問いただそうとした。しかし正気を失って衰弱してゆく彼が、まともな返答をしてくれる筈もない。朱音は諦めて、彼を落ち着かせようと抱きしめてやっていった。彼が落ち着いて自分を放してくれたなら、119に通報しよう。そして彼を救急隊に任せて、恒を捜さなければ……彼女は順序だてて物事を整理しながら、しかし彼に触れているうち、だんだんと睡魔に襲われてきた。まるで催眠術にでもかかってしまったかのようだ。

朱音が夢の中で目が覚めると、夜の浜辺に立っていた。月もない、

暗い海原だ……まるでヘドロで出来たような、暗い海からは生暖かい風が吹いてくる。ヘドロのような、腐ったような臭気を含んでいた。向こうから、ヒタヒタと黒い影が歩いてくる。海原の上を、足を濡らす事もなく、水の上を渡ってくる。朱音は逃げ出したい気持ちにかられたが、足が竦んで砂浜にめり込んだように動かない。砂地が朱音の足を捕らえていた。黒い影は銀髪の幼い少女となり、ゆっくりと歩いてくる。青い瞳の人形のように美しい容貌の少女だった。海ホタルの光のごと緑色光を纏って、発光している。

彼女は折れそうに細い四肢に、黒い衣を纏っているが、ずぶ濡れだ。彼女の髪の毛も顔も衣服も黒い水に濡れている。彼女の上顎から、黒い水滴が滴り落ちる。

”お化け……この子お化けよ、絶対……”

朱音は彼女から目を離す事が出来なかった。

少女は一直線に朱音に近づいてきて、波打ち際から砂地に上がってきた。その頃にはもう、朱音は全身が金縛りのようになってしまった。逃げ出すことが出来なかった。少女はヒタヒタと足音を立てながら、朱音の傍を通り過ぎていった。通り過ぎた彼女の後ろには水滴が出来て、黒い水溜りができていった。砂地が、ズブズブと腐ってゆく。助かった、もう行ってしまったのか？ そう思った瞬間……。

《ころせ……とうとう　こうを……ころせ……》

少女の声が耳元で聞こえた。脳の髄に刺さるような、ぞっとするような冷たさを含んだ囁き声だった。

朱音がぎょっとして振り返ると、夢から醒めて藤堂家の裏庭にいた。じつとりと汗ばんだ腕を見ると、元のように男を擁いていた。男の息の根は止まっている。朱音はズキン、と妙な頭痛がするのを感じた。覚えていない、何故ここにいいのか？　この男は何だ？

しかし一つだけ覚えている事がある。あの銀髪の少女と、彼女の囁いた呪詛を。あの言葉は何だったか？ 思い出せない。

だがとてつもなく嫌な予感がする。

「イヤあアア！ アアッ！」

朱音は死んだ男の腕を振り払って、坂道を転がるように自転車をこいで家に逃げ帰った。しかしこの頭の重さはどうした事だろう、あの少女は何を言った？ どうしても思い出せない。彼女が朱音に囁いた言葉……覚えていないのに、忘れられない。朱音はとんでもない毒物を飲み込んでしまったかのように感じた。

家に戻ってふと、足先が濡れているのに気付いた。両足にはべっとりと、ヘドロのような黒い液体がまとわり付いている。少女の髪の毛を、全身を濡らしていたあの気味の悪い液体だ。どうすれば、一体この毒を吐き出すにはどうすればいい？ 朱音はそのまま風呂場に駆け込んだ。洗い流しても、洗い流しても取れていないような気がする。

彼女は自分に、何かをした！

そして彼は同じように彼女の夢を見たがために狂って死んだのではないかと……。恒はどこへ行った？ ひょっとして、自分が助かる為には何かをしなければならぬのか――？ 少女の囁いた呪詛は、朱音には思い出せない。だがまるきり覚えていないというわけでもない。きっと自分はその瞬間、時限爆弾のようなものを脳に埋め込まれた。何かをしなければならぬのか？

「……つきないよ。できないよ！ そんなこと！ 何をすればいいのか分からないけど、私にはできない……」

落ち着け、あれはただの夢だ。悪い夢なんだ。しかし狂い死にした男の姿がどうしてもフラッシュバックする。どうすればいい？

自分はどうすればいい！？ あんな風に死んでしまうのか？ それだけは御免だ。朱音は近所迷惑も省みず、大声を上げて絶叫した。

夢よ、あれはただの夢……。

しかしどうしてもそう思っ
て割り切れない。

第1節 第50話 起死回生の一擲

意識は深く眠りへと沈んでゆく。眠りにつく前に願ったからか、恒は夢の中で黄金の草原に出た。太陽はまさに沈もうとしていたが、まだ地球上に3つも残っていて、一つが沈んでもすぐ暗闇になるという事はなさそうだった。

恒は筆記用具、筆記用具と念じながら眠りについたので今日はスケッチブックとペンを持ってきた。前のようにチラシとチョークなどというものではなく、彼と会話をするには万全の態勢だ。求めていた相手はいつも分かりやすい場所にいてくれて助かる。

今日の彼は草原の上にガラスのテーブルを置いて、その上で何かをいじくり回していた。盤の上には色とりどりのビー玉のような石の欠片が散りばめられ、それらをひとつまたひとつ動かして一人遊びをしているようにも見える。恒は将棋を差している人を見学するように上から石の載っている盤を見下ろしたが、黒い盤に金色の幾何学模様が刻まれており、案の定盤上の文字は読めない。一人でボードゲームでもやっているのだろうか。こんな時に暢気なもんだよ、と皮肉ってやりたいが、彼はいつもどこか寂しそうなので言えなかった。

「こんにちは。恒です、また来ました」

恒はテーブルに腰掛けようとしてある事に気付き、目を丸くした。正面からまじまじと見て気付いたのだが、彼ではなかった。ノーボディは若い女性の姿をしていた。細く白い肢体に透明な装束を纏い、シルクのようなきめの細かな肌をあらわにして、思いがけぬ美女の登場に、恒は気が引ける。胸はそれほど大きくはないが、それがかえって品がある。必要なのか必要でないのか、その身には沢山の装身具を身につけていて、重そうな金属音を立てていた。

名も姿もなきものというだけあって姿は変幻自在のようだ。よくよく思い出せば、前回恒が彼と会った時も少しずつ姿が変化し、顔の印象が変わっていたのを思い出す。前回会ってから随分時間が経ったが、その間にも少しずつ姿が変わってしまい、とうとう女性になったということなのだろう。恒はこちらの方が好きだった。

トレードマークの金髪と透明な装束を着ているおかげで何とかノーボディだと判別がつくが、次は冗談ではなく犬や猫だったりしかねない。ペンを持った犬にスケッチブックを恭しく差し出し、ありがたい言葉を頂戴しなければならぬという珍妙な状況も、それほど非現実的ではなく起こりそうだ。ノーボディは名を呼ばれ姿を固定化されると力を失うらしいので、恒の中にノーボディのイメージが固定化されてはならないのだろう。

ツッコミどころは腐るほどあるが、とにかく細かい事はあとだ。ノーボディが現在の事態を想定していたのか、打つ手はあるのかを尋ねなくてはならない。

「お時間をいただいてもよろしいですか？」

彼女はおっとりと微笑んで着座をすすめた。肯定のつもりなのだろう。

愛想だけはいいのが憎たらしい。

「生物階の現状をご存知ですか？」

彼女は手を止めて意味もなく恒を見つめる、彼女にとっては何気ない視線でも恒にとっては息が止まりそうになる程美しく感じられた。

三階の父として、または母としての品格を見せ付けられている。彼女の唇は元々の色なのか口紅を塗っているのか金色をしているし、瞼にも金色のアイシャドーが入っている。そして口の中から見える

舌も金色という、人形じみた非現実的な姿だ。この対談は恒の緊張を誘い、フェアではない。

名も姿もなきものと判ってはいても、恒は多少なりとも相手の姿に翻弄されてしまう。例えば世にも怖ろしい怪物の姿をしていたとすれば、それだけで恒は面と向かって話ができない。そんな不満を心に押し込みながら、恒が差し出したスケッチブックを典雅な仕草で抱え込むと、彼女はペンを走らせはじめる。

”総て把握している”

「これは想定範囲内なのですか？」

”不本意ではあるがの”

「どれだけの犠牲者が出ていると……こんなところで遊んでいないで、少しは助けて下さい」

恒は彼女の美貌に気圧されしながらも、強気だった。忙しく働いているのなら彼女に任せていただろうが、彼女は先ほどからビー玉のような透明な石ころを転がして遊んでいるだけだ。

少なくとも遊んでいるようにしか見えなかった。テーブルの石盤の上には透明な赤い石と青い石がそれぞれ数十個ずつ無造作に置かれ、緑色の石も一箇所にまとめて置いてある。赤い石のうち黒く変色したものは勝手に動いて、緑色の石の一団を侵してゆく。青い石はどす黒い石に近づくといつの間にか消えてしまう。三階の現状をなぞらえているのではないか、と恒は感じた。そう、黒く変色した赤い石、これはブラインド・ウォッチメイカーに侵食された、感染させられた解階の住民達を示すものだ。緑の石、これは生物階にいる人々。青い石は惨殺されゆく神々だ。彼女はミニチュアを作って、戦況分析を行っているようだ。

” 短絡的な思考は大道を誤らせる。汝は何を嘆いているのか”

「嘆いてなんかいません、現状を打開する道を捜しているんです」
” ではこうしよう”

彼女は彼女が首にかけていたネックレスのトップを引きちぎり、ガラスの中に包埋されていたオパールのような宝石を指先で引き抜いた。

輝く宝石の暗示は、何の暗示だろう……。盤の上に出した宝石は、どす黒く変色していた赤いガラス片を元のように赤い色に戻してゆく。彼女が身に帯びていた大切な切り札を場に出したと解釈してもいいのだろうか。

「この宝石は何を意味するものですか？」

” 答えはじきにわかるだろう……。懐かしき者が、帰ってくる”

恒には解らなかった。

異彩を放っているところから、ユージーンを意味するものかと思ったが、その宝石は盤の上にもとらなかったのだ。それがユージーンを示すなら、予め盤上に出ているべきだ。新たな要素が介入してくるのだろうか？　それが彼女からの援軍である事を願うばかりだ。

「あなたは、ゲームをしている感覚なんですか？　退屈しのぎに、ブラインド・ウォッチメイカーとの駆け引きをして愉しんでいる。そうではない事を、あなたが俺達を駒にしているのではないと願いま……。」

彼女は無言で冷ややかに恒を睨んだ。

禁視を宿した黄金の瞳は恒の懐疑の言葉を遮る。気分を害したの

ではない。彼女には自己がないのだ、普遍でしかない。腹を立てることはできない、恒は見抜いていた。彼女はこの世界の普遍として受け止めているだけだ、恒の挑発になど乗らない。気分を害するなら、それは名も姿もなき者などではありえない。個という存在者だ。この圧倒的な包容力と完璧なまでの無感傷が、創世者の専売特許といってもいい。だが美女が凄むと余計に冷徹さが引き立ち、怖ろしく感じられる。彼女の身に纏っている淡い黄金の光も殺気と見間違えてしまうから不思議だ。

”恨み言があるなら聞こう、だがあまり生産的ではない”

「感染はどうすれば防げるのです？」

何か方法があるのなら教えてもらいたい。

ブラインド・ウォッチメイカーがどうやって感染を引き起こしているのかという事も、同じ創世者である彼女ならそのカラクリが解けるのではないか。そう信じて疑わなかった。ブラインド・ウォッチメイカーに出来る事は、ノーボディにも出来そうなものだ。恒はそう考えていたからである。

”対症療法しかなかろうな。汝らがこれに対する薬剤を合成するがよい。吾は実体を失った、直接介入はできんだ。かの者はそれを見越しておる”

「目的は俺を殺す事ですか？」

”そればかりではないが、それもある”

彼女はまるで他人事のようにすました顔だ。こっちは命を狙われているっていうのに……。恒が命を落とせば、彼女にとってもまずい事だろうに、彼女はどこか無関心を装っている。石ころ遊びに夢中になって、吾関せずといった具合だ。

「何か策があるんですか？」

”汝は大きな誤解をしておる、吾は全能者ではない。徒の創世者に

過ぎん、また先方も同じだ。力を失った吾が簡単に優位に立つことは出来ぬ。汝は常に安全な場所に留まるよう心がける事だ”

彼女にも勝敗は見えないのだ。

それに現時点での戦いが重要なのではない、本番は3年後だ。これは前哨戦に過ぎない、彼女はたかが前哨戦とでも考えているのか、特に重視している様子も慌てている様子もない。

「つまり現状を維持していると？」

”恒。よい事を教えてやろう……誰も、未来を予測する事はできません。未来は複雑系だ。初期値を投入したなら、その結果は激変するものだ”

確かに、初期値の投入はその後の劇的な展開の変化を呼び起こす。恒はその言葉を信じるしかなかった。ノーボディは実体を失ったがために、直接三階に介入する事ができなくなった。だから彼女が場に放った鮮やかな宝石は、彼女が荻号であった頃から用意していた手札であったのだろう。

荻号がこの事態を見越して、一体何を用意していたというのだ。待っていれば現れるものなのか。

＊

織図はメファイストフェレスと別れた後、大本営からの勅令にしたがってXVI von Louisの機能をフルに活用し、生物階、解階の住民問わず感染者を駆逐しているが、消しても群がってくる。さすがに織図も音を上げなくなった。罪なき者たちを惨殺するのは気持ちいいものではない、織図は隔離地区から飛び出そうとした感染者をのみ駆除している。

早く、特効薬はできないか……ブラインド・ウォッチメイカー共食いに似ている。互いの利益を賭けて、生き残りを賭けて、食い潰す。ブラインド・ウォッチメイカーのけしかけようとしている戦いには真の悪がない。家族のため、自身の命を守る為、あるいは感染者のように罪の意識すらなく殺し略奪をしている者もいる。

これは悪なき抗争なのだ、と織図は認識している。

だからこれほど平等に圧倒的な死を齎す、XVI von Louisを揮ってよいものかと気が咎めるのだ。

何か感染を食い止め、彼等を殺さずに済むよい方法はないかと考えてはみる。

しかし織図をはじめ、主神や神々も目先の危機の火消しに躍起になっていくという有様。神々は冷静さを失っていた。こんな対応では解決できないと、苛立ちを募らせる。思考停止したままがむしろお互いが潰しあって、我に返っても既に遅し。三階はブラインド・ウォッチメイカーが直接手を下さずして、三階の住民達の共食いにより破滅させられてしまう。

ブレイクスルーが必要だ。

逆風を追い風に換えるような、決定的な方針転換が！

「どいてな、お前は殺し過ぎだ」

突如追跡転移で現れた男が、織図の背後でそう言った。背後を易々と取られた織図は誰にそう言われたのか解らなかった。敵ではなさそうだが、誰だ？ 誰が応援に来たんだ？

織図は弾かれたように声の主を振り返ったが聞き覚えのない声で、その姿は月光で逆光となって見えない。男のシルエットは不気味で不吉な図柄をした数枚のカードを拡げ、見えない相手に配るように

奇妙な陣形に並べはじめた。

織図は彼が占い師のような仕種でカードを宙に投げ、並べる様子に目を見張った。これは誰だ？ 紫色の蛍光を持つカードのせいで逆光になり姿がよく見えない。短冊状のカードは呪符のように見える。感染者達は占いの結果を待つ客のように訝しげな顔をして、姿の见えない男を見上げていた。

不気味な紋様の描かれたカードは弧を描いて舞い上がり、一枚、また一枚と配座されてゆく。神と思しき男から音声コマンドは与えられない。カードの一枚一枚が意味を持つタイプの神具のようだ、コマンドレスで起動できる神具だろう。

織図はXVI von Louisを駆る手を休めて、彼の行動に魅入った。配座されたカードの放つ光がそれぞれのカードの色とりどりの光と連結され、六角形の格子を作り上げてゆく。六角形格子が数十個集まり、更なる格子を生み出す。まるで光のショーを見ているかのようだ。

視力を取り戻した織図には、花火と見まがう鮮やかなライトワーク。夏の夜空を彩る幻想的にかつ退廃的な光景。幻に魅入られた者は、どこに連れて行かれるのか？

”こりゃ、デイズニーのエレクトリカルパレードみてえだな”

それは冗談で、織図は発光する超高分子の模型のように感じられた。

六角形と五角形の組み合わせで巨大な球を為している、これはC60（フラーレン）というサッカーボール状の炭素骨格を持つ化合物の化学構造に似ている。

巨大フラーレンは球体となって感染者達を包み込むように巨大化をはじめ、格子の中に取り込まれた者から気絶してしまった。バタバタとドミノを倒すように気絶してゆく感染者達……。信じられない、しかし理想的な決着だった。ブラインド・ウォッチメイカーの洗脳は強固で、織図にはマインドコントロールの重ねがけが出来なかったのだが、この男はいとも簡単にやってのける。一人として命を奪わず感染者達の動きを封じた彼の腕前に関心しながらも、どうしても気になることがあった。

「少し、寝ている」

このアトモスフィアの質感といい、ハスキーがかった低い声といい、そして口調はまるで……萩号ではないか。

薄墨色の萩号の聖衣も長髪もそのままだ。細かい事を見れば制紐は巻いていないし帽子もかぶっていない。ほんの僅かずつの違和感。しかしこれはまだ違和感の範囲内だ。決定的な相違はある、呪符型神具は神階には現存しないのだ。見た事も聞いた事もない。

「殺さずに済んだろ」

「ああ、見事だ。脱帽だよ。ところであんたどちら様？　萩号さんによく似ているが……」

織図は警戒心を強めながらも、独特の安穩とした口調で謎の呪術師に訊ねた。呪術師は何とも気拔けた様子で織図を見遣ると、先ほど駆った呪符を集めて束ねていた。

「本物の萩号さんはどこだ」

「本物？　俺がいつオゴウだって名乗ったか？」

呪術師は呪符を繰りながら織図を軽く受け流す。彼の言う通りだ。彼は萩号を騙ってはいない、ただ織図がそう感じているだけだ、彼は萩号　要ではないのかと。何故なら別神というにはあまりにも酷

似している。双子の兄弟でも出くわしたかのように。この場から立ち去ろうとした男を、織図は逃がすつもりはなかった。

「ではあんたの名は？ 俺は織図 継嗣ってんだ」

「お前本当に神なのか？ 織図だと？ そもそも名前なんて発音でkindaro」

呪術師は気絶した感染者を見下ろして素っ気無くそう言う。

繋がりそうだ、彼と真実を結ぶ一つの答に。神語では名前が発音出来ないの、置換名や通名を用いる。人の文化が文字を持った時代、人間の言語を借りる形で定められたシステムだ。したがって一つの文明が滅ぶごとに神々や使徒の名は代わる。

移ろいつづける不確かな名……神階は今も昔も名前に無頓着だ。

現在では中国語をしのぎ世界で最も多くの姓名の組み合わせを持つ表意文字である日本語が置換名として採用されている。置換名を知らないとしたらそれは一つの可能性を示唆している……。

織図は萩号の本名を空で書いた。もう二度と目にするかもしれないと思われた、懐かしい名だ。

「でもだよ、あんたの神名はこう書くだろ？」

「いかにも」

彼は疑いの眼差しを向ける織図に御璽を見せた。彼の腕に刻まれている金色に輝く真空斑の御璽……彼は萩号であることを認めた。織図は彼が、幼少の頃より長きに渡り交流を持った萩号ではないと気付いていた。この時代の萩号ではない、彼は少なくとも通名と置換名が制定される六千年前より以前の時代から来た神なのだろう。

何故このタイミングでこの時代に来る必要があったのか？ 相転星には確かにタイムマシンのような機能がっており、時間と空間を超え未来には行ける。これは一つの事実を実証していた。彼は萩

号なのだろう、だが織図が長年に渡り交流を持った荻号ではないし面識もないのだ。過去から現在に來たのだとすれば、過去に戻る事はできない。

だが荻号は一万年以上にもわたって存在しつづけてきたという鉄壁のアリバイがある。彼は誰で、どこから來たのだ？ 彼の中に、ノーボディはいるのか？ 居ないような気がした。

呪術師は呪符をしまい終えると、軽く腕組みをして織図を怪訝そうに見上げていた。彼は明らかにこの場から立ち去りたいのだ。彼は織図には皆目興味がないといったような顔をする。面識がないのだから当然だ。彼が本当に荻号だとしたら、彼は怖ろしく他者に無関心だ。無関心、冷徹、なおかつほぼ全治にして全能の存在。それこそが荻号が他神と一線を画していた主な理由だ。

だから間違いなく、彼は織図に興味を示さない。

……皮肉な話だ。

「もう、行ってもいいかね」

「いや、ちょっと待て。俺あ一柱だけよく似た奴を知ってるんだがね」

「似た奴がいるのか。先に会った方が偽物だった場合には、一体どうやって証明するんだ？ くくく……神階はそいつに、何千年間騙されていたんだ？ 偉大なる詐欺師だな。大体神が一万年も生きる事ができるものか」

彼は偽物というにはまるきり荻号そのままだったが、本物だという動かぬ証拠があった。……彼は肉声で話している。荻号要が一万年にも渡ってできなかったたった一つのことであり、それは皮肉にも彼の自己同一性を証明する全てであった。

「んじゃあんたは、それだけの時間を”生きて”どこで何をしていたんだ？ 暇を潰すにも腐るほど時間はあるだろ、神階から逃れて一体何をしていた？」

「何もしなかったさ、生きてすらいなかった」

彼は無限にも近いマインドギャップを解放して、織図にマインドブレイクをしろと促す。織図は彼の過去にまつわる情報を受け取った。

どうやらこういう事情だった。荻号要はノーボディの創りだした架空の人物ではなく、実在した神だったのだそうだ。置換名が存在しなかった当時、当時の慣習に倣ってただの闇神と呼ばれていた彼はノーボディの演じたような特異な性格と類い稀なる才能を持った陰階神であり、万能の天才だった。だが世は平和で、彼の能力が必要とされる場面はなく。

彼は能力を無駄にして漫然と生きるぐらいなら死んだ方がましだという極論に至る。神もまた生き甲斐を捜し求める生き物だ、ノーボディは神階の牽引者として時折優れた神を創りだしてきたが、平和な時代に相応しからぬ圧倒的な能力を与えられ、力を使うなど強いられる天才達の懊悩は相当のものだった。

”闇神”だけではなく、天才と名を戴く神々は一度は自殺を図ったものだ。いくら傑出した力を持っていたも、時代が彼らを必要としなかった。平和で退屈な時代に生れついた彼も例に漏れずその無目的な生涯を悲観し、幾度もの自殺をはかった。

”闇神”がこのような行為を繰り返す様子を見るに耐えかね、ノーボディは自殺を図る度に止めてきたが、彼の自殺願望は凄まじくやがて手に余るようになり、ノーボディはどうとう”闇神”の望みを叶えることにした。

平和な世が崩れた日のため、その神体とその能力を無駄にする事なく来たるべき日にまで凍結する事にしたのだ。二度と目覚めないかもしれないにも関わらず、彼は喜んで神体をノーボディに預け、凍結保存された。この時より”闇神”、後に荻号 要と名づけられる彼の本体は物理的一万年もの長き眠りにつき時間を超える。

ノーボディは彼の神体を守りつつ、失踪した彼を演じ続けた……。新たな悲劇を生み出さない為に、その後はノーボディは二度と突出し過ぎた天才を生み出さず、彼自身が荻号（”闇神”）となって神階の牽引者としての役割を果たしていた。”闇神”のもともとの異色さと奔放な性格は、ノーボディにとって都合のよい隠れみものになった。

荻号の神体を守っていたノーボディが消えたので、凍結装置の口ツクが外れ緩やかに解凍されたのだ。神体を解凍され目覚めた”闇神”が目にしたこの時代は、まさに彼が切望し夢にまで見た、破滅に瀕した世界だった。

「なるほど……古の神が目覚めたのか……」

「細かい話はいいさ。要するに困ってるんだろ？」

織図はそりゃ、もう！　と言って大げさに相槌を打った。この感覚はどこからくるものか、懐かしい間の取り方だった。織図と荻号は長い年月の間に、様々な対話を繰り返した。荻号の会話の間や、言葉の選び方、それらは本物と何も遜色はない。

「困るも大困りさ。万事休すってな状態だったんだ」

「困っている、か。何しろ俺のいた時代には、誰も困っている奴なんかいなかったんだからな」

”闇神”のアトモスフィアには歓喜の色が漲っていた。

荻号（”闇神”）はどうやら、ノーボディの演じていたままの神格だったようだ。さすがに親は子をよく見ている。ノーボディからの援軍なのだろうと、織図は思いたかった。

「また会えたな、荻号さん」

「ん？ 何か言ったか？」

織図はお茶を濁して、長く吸っていなかった煙草をふと吸いたくなった。火をいれ、ぷかりと煙管の煙をふかす。闇神は煙草に興味を示さない。ノーボディが煙草を好んでいたのは闇神の癖をまねていたのではなく、覚せい剤を仕込んでいたからだろう。

愛煙家でなくとも、嫌煙家でなければどちらでもいい。鷹揚な性格の織図にとっては本物がどちらであつてもよかった。ノーボディの演じ続けた本物の荻号、また彼と一緒に無茶ができる。たとえ八方塞がりなこの状況も、彼が面白おかしく何とか解決してくれそうな気がした。ノーボディがもしありのままの彼を演じていてくれたというのなら、彼はこの上なく大きな助っ人となりうる。実質、荻号が帰ってきたという事実、何も変わりはない。何故って、モノマネよりは、本物とツルめる方があり難い。

「何でもねえよ、さ、行こうか。あんたの好きな、困った奴らがいる場所へよ。きっと満足できると思うぜ……」

明かりの切れかけた街灯の下で、懐かしい空色の瞳が微笑んだように見えた。

＊

石沢 朱音はその夜、なかなか寝付くことができず、布団の中で震えていた。グリゴリの遺体はまだ藤堂家の裏庭に放置したままだ。警察に通報すべきなのかもしれないが、殺人容疑が自分にかかるのではないかと思うと、なかなか通報にも気が進まなかった。

まさか殺人罪にはならないと思うが、無罪を立証できる自信がない。それに人が死ぬのが当たり前となったこの非常事態だ、警察が動くとも思えなかった。

それどころか、あの一連の事件が夢だったのではないかとすら思えてくる。朱音はもう藤堂家に電話をかけることはしなかった。受話器の向こうに、誰がいるのか分からなかったからだ。恒と志帆梨は忽然と消えてしまった。

先ほど死体となった男が電話口に出てきたりしたら……どうしよう、と。通報は明日にしよう、と朱音は思った。現場検証に連れて行かれるなら、明るくなってからの方がいい。何しろ例え立会いの警察官が居たとしても、あの場所が安全だと言い切れないからだ。

”ああ……全部夢だったらいいのに。さっきの事は全部、悪い夢だったら”

しかし彼女は眠る事もできなかった。あの銀髪をした少女が、夢の中にまで自分を迎えに来るような気がしたからだ。今も目を閉ざせばどこからともなく足音が聞こえて、また耳元で何かを囁きかける。

どこに行けば助かるのだろうか？ 彼女は決して吐き出せない毒を飲み込んでしまったようだった。石沢一家は結局、地下施設に避難しなかった。幼い弟妹を連れて避難するのは両親にとっても大変だ。村人たちのおよそ半数が学校の体育館や地下施設などに自主避難をはじめたが、学校との距離がそれほど遠くない朱音の家では、いつでも避難できる用意があった。とはいえ、母や父は家の貴重品などをまとめて、避難の準備に取り掛かっている。

この不安な状況がいつまで続くのだろう……。恒と志帆梨は、大

丈夫なのだろうか？ 思考は堂々巡りをして、また同じところに行き着く。あの少女は自分に何をしたのだろうか？ 彼女は夢の中に迎えに来るのではないだろうか、朱音が眠りにつく瞬間を待っているのだとしたら……。

できるだけ早くユージーンと連絡をとって、彼に洗いざらい相談しよう。

彼女はそう思うと少し気が楽になったが、なかなか寝付けなかった。

＊

ユージーンは恒と別れた後すぐに生物階に降り、恒に繋がる携帯を決して手放さないように気をつけながらG-CAMを揮って、化学合成を行っている神々のもとに群がる解階の住民達を虐殺していた。屋根の上から血飛沫の飛び交う中でも、平常心で合成を続けなくてはならないという状況は最悪だが、武型神は殺す以外に彼等を追い返す手だてを知らなかった。

ユージーンも嬉々として殺戮を楽しむというタイプではなかったから、まるきり殺戮を回避する方法を考えなかった訳ではなかった。例えば相転星を使ってこの空間を隔絶して解階の住民達の襲撃から化学者を守る……それはすぐに思いついた。

だが相転星を使えば、場の時間の流れが変わるのだ。それはとりも直さず、分子結合速度も変わってしまうという事になる。それではただでさえ困難な合成経路の特定を、なおさら攪乱してしまう事となりかねない。これではまずいのだ。場の化学的、物理学的環境を攪乱してしまう事は……。彼はG-CAMを凶器として揮いながらも、彼等に改心を呼びかけることをやめなかった。

「話を聞いて下さい、わたしたちは殺し合いをしたくはないんです。誰もが助かる方法があるんです」

必死で訴えかけたが、どんな言葉にも彼等は耳を貸そうとしない。彼等もまた家族や彼等自身を人質に取られている。いくらユージーンが彼らを凌ぐ圧倒的な力を持っていて、彼等の死が避けられないとしても、誇り高き彼等は投降を呼びかけたぐらいで従うような者達ではない。

それどころかブラインド・ウォッチメイカーが解階の貴族達にかけた催眠は絶対的なもののようで、マインドコントロールを受け付けない。彼の無駄な叫びは悲痛な響きを持っていた。

「もう彼等に語りかけるのはおやめ下さいませ。全くもって無駄な事です」

こう言うのは、陽階神 第10位、ナターシャⅡサンドラだ。彼女の背後を守る形はユージーンは戦っている。彼女は彼等を救う事を既に諦めてしまっていた。この場にいるのは二柱の陽階武型神、合成を行っているのは一柱の陰階の文型神だ。二柱は協力して研究所全域にシールドを張り巡らせ、入り口を完全に塞いだまま解階の住民を引きつけて応戦していた。

「しかしひとりでも、ひとりでも殺したくはないんです！ わたし達は憎しみあう必要などないというのに！」

ナターシャの檄が飛ぶ。

「理想論は無用です！ 我々が誰を守らねばならないのか、お分かりの筈でございましょう。長く彼等を苦しめたいのですか」

強い口調で非難され、ユージーンは息を呑んだ。

殺すことを避けた為、もしくは止めを刺せずにいた為、彼等のうち半数は致命傷を受けておらず、衰弱死や失血死をしている。瞬時に殺されなかった彼等は、ユージーンやナターシャの足元でもがき苦しみ、苦痛にのた打ち回っている。

彼女は先ほどからそんな不幸な生存者達にせつせと止めをくれて回っていた。

彼女の言うとおりの残酷な事をしてしまった、とユージーンは後悔する。

「分かりました。瞬殺します」

ユージーンは悔しそうに唇をかみ締め、G-CAMのリミッターを抜き、振りかざした。周期的な赤と青の基盤の明滅が淡々と不気味に繰り返される。ナターシャは鉄槌型神具 エントロピー・マキシマイゼーションで容赦なく彼等を薙ぎ払っている。彼女の神具に触れただけで、熱量に溶かされ彼等の肉体はまるで蒸気のように蒸発する。血なまぐさい嫌な蒸気が立ち込めている、地獄絵図が広がっていた。

「ここまでだ……」

ユージーンが危険な光を纏ったG-CAMを構え、そう言った瞬間だった。

「どーけどけどけー！ お前らも、殺しすぎだ！」

上空から突如織図が降って来て解階の住民を押しつけ、二柱の首根っこを掴んで瞬間移動をかけた。ユージーンとナターシャが維持していた場のシールドは消えうせ、研究所内にいる文系神は無防備になってしまう。ユージーンとナターシャは織図の瞬間移動に巻き込まれ、500mばかり離れた場所へと転移させられた。有無を言わせるような速さではなかった。

ナターシャは逆さまになって神具を手放しそうになったところで、ひょいと織図に支えられていた。女神のスカートの裾を直してやりながら、うっかりと太もものに触れてしまって、彼女に平手打ちをくらっていた。

「ちょっと！ 織図殿！ シールドが……！」

「織図殿、なんという事をなさるのですか」

スカートをめくった事も込みで、だ。

「見てな……おったまげるぜ」

織図はすつと指先を上空に向けた。そこには得体の知れないカラフルな光の結晶格子を創り上げる、細身の呪術師の姿があった。解階の貴族達はその場から動く事もできず、上空を見上げるばかりだ。織図はしつと指を口元にあてがって、彼に注目していると言っただけだった。

夜空に極彩色の閃光がほとぼしる、静かで美しく見事な業だった。その構造は、ユージーンがノーボディより得たある知識と一致した。

「あれは……フラレーン (Fullerene)？」

「C180フラレーントリマーのような形ですが？」

フラレーンと言われて物理化学者でもあるナターシャも気付いたようだった。その結晶構造はC180の炭素クラスターに似ている。そしてこのような結晶構造を持つ炭素クラスターはフラレーンと呼ばれている。だがユージーンは結晶構造の形について感想を述べたのではない、彼はその神具を知っていた。1万年以上に忽然と姿を消した神具、フラレーンは呪符型神具であり、炭素クラスターから名づけられたものである。

呪符と呪符を結ぶ結合の光、距離、そして呪符の紋様によってほぼ無限の組み合わせとクラスター数を持つ。クラスターの内部は呪符の効果によって物理化学法則が歪められている。どのように歪められているのかは、操作者しか知らないというわけだ。フラレーンの駆動エネルギーは、相転星とほぼ同等かそれ以上……今の神階には、フラレーンを扱える神など存在しない。

ユージーンはそのままの感想を口にしてしまった。

「超越的の神具を扱える神は、今の神階には存在しない筈……」

ユージーンをのぞけば、という前提でだ。

「だが、ちょっと前には居ただろ、なあ？」

「ちょっと前？」

「納涼、花火大会で幕を引こうぜ。パーツと、盛大によ」

織図が楽しそうにそう言った頃には、既に解階の住民達は気絶してしまつて、一人として立つて残つてはいなかった。二柱は気付いた、彼等はブラインド・ウォッチメイカーより更に強力なマインドコントロールを施された上で気絶しているのだと。つまり彼等は意識を取り戻してももう、神々や人々を襲う事はないだろう。彼等は何故生物階に来なければならなかったのかという目的を忘れ、首を傾げながら解階へ戻ってゆくしかない。アルシエルの制裁に心底怯えながらだ。

クレバーな決着。伶俐な刃物のような業のきれ。間違いなかった……間違えようもなかった。

誰も期待などしていなかった。最強神、荻号 要が帰ってきた――。

第1節 第50話 起死回生の一擲（後書き）

【挿絵】 荻号 正鵠（筆者絵注意）とフラーレンC60
<http://lizreel.web.fc2.com/graphics/seikoul.htm>

【作】 【現】 フラーレン C60：フラーレン（Fullerene）の結合様式を模した呪符状神具で、240枚のカナリア色の符アトモスフィアを受けて朱色に変化する。実際のフラーレンは炭素原始骨格により成る高分子クラスターの総称で、C60のみではない。C60（炭素原子60個）で五員環（五角形）と六員環（六角形）を組み合わせた切頂二十面体、つまりサッカーボール状の骨格になる。炭素数60個をこえるフラーレンは高次フラーレンと呼ばれる、オイラーの多面体定理を満たしながらC70、74、76、78：などの結合をつくる。フラーレンは工業利用として潤滑剤、医療利用としてHIVの特効薬、活性酸素やラジカル除去で老化を抑えるなど幅広い分野で利用される。神具としての機能は作中にて後述。

外伝？救世主と死神―パーフェクト・クリッパー（前書き）

ちよつと本編が長くなってきたので休憩に外伝を挿入してみました。本編とは違いますので気分転換に読んでいただければと思います。織図とジーザスの17世紀ごろの話です。月9ドラマも映画もなかった頃、いつになく真面目に働いていた織図と人間フェチのジーザスをご堪能ください。

外伝？救世主と死神―パーフェクト・クリッパー

「主よ！ なにとぞ執行をお急ぎ下さい！ 伝染が拡大します」

彼の使徒たちの悲鳴にも似た要請が死の街に飛び交う。

数百人という無視できない規模で苦しみ悶えながら人々のバイタルが尽きてゆくという奇病が横行し、死神 織図 継嗣が外務省の要請により生物階に降下したのは、西暦にして1695年の12月のことだった。

夜の帳を落とすように死が次々と村や町をのみ込んでゆく。

先代 極陽、倫理神 ジーザスⅡクライストは織図に先立ち自ら望んで生物階降下し、それまで備蓄していた自己血のすべてと彼の生身の神体を切り刻みながら衰弱した者たちに血液を分け与え、渾身の力を振り絞って一人一人を回復させてゆく。彼の手首に穿たれた杭の痕は、再び紅く染まっていた。

その間織図がしていたことといえば、死因を調べるついでにジーザスの救いの手に預かることができなかった感染者達の亡骸から漫然と生前の記憶を回収していただけだ。ジーザスⅡクライストは目に映る最後の一人まで救ってやりたいと願ったに違いない。しかし彼がそう気負えども、全盛期よりはるかに落ち込んだ彼の体力は限界を迎えていた。織図 継嗣は血染めになった白衣を着てうずくまる偉神を見かね、その老いた肩をそっと叩いた。

織図の黒衣と彼の白衣ははっきりとした対象を為している。人に与えるもの、人から奪うもののコントラストだ。

織図は口に出してこそ言えなかったが、内心ではジーザスの慈悲を疑っていた。だが今日のこの光景を見る限り、彼の行動は偽善な

どではない。それを確信してなおさらに、織図から見た救世主キリストは眩しすぎた。

「……もう、やめましょうや。外務局からの達しがきた。救世主が救い^{キャパシティ}きれる人数を超えてる」

「まだだ……。ひとりでも諦めたくはない」

彼は昔から殊こういうことに関しては強情っぱりだ。

織図が彼の言葉がまったくの強がりであるということを見透かすのは、職業柄それほど難しいことではなかった。

「限界だぞ。もう、血が枯れてるじゃないか」

ジーザスの治癒血は553を越える疾患を癒すことができるうえ、治癒血を持つ神々が概してそうであるように常神をはるかに凌ぐバイタルを秘めている。ジーザスは外傷からの出血が尽きたあとも神具 The Grail（聖杯）の“逆杯”という業によって、聖杯の中に彼の血液を転送し続けている。命の杯を惜しげもなく衰弱した人々に傾ける。彼が救世主を名乗らずとも、癒された人々は口々に神の栄光と慈悲を賛美しはじめていた。

一方、すぐ隣でその姿を見守る織図はODFに阻まれ人々の視界には入らない。

同じ神でありながら織図には決して与えられない感謝の声が聞こえてくる。それらを織図はまるで音楽のように聞き流しながら、じっと傍観を決め込んでいた。

「強力な造血剤を打ってきた、……もう少し待てば回復する」

ジーザスは織図の殺戮をけん制するように言い訳をしながら、諦めるそぶりを見せない。

彼がもういいと言った瞬間、織図は死神としての仕事を始める

だろう。逆にいえば織図はジーザスが諦める瞬間を待っていた。それは瀕死の獲物を見下すハイエナの姿にも似ていると、客観的に織図は自らを卑下する。

「教えてくれ、どうしてあんたは人の為にそこまでやれる？ 傷ついて、裏切られて、それでもあんたはその身を削って人に与えてきた。何があんたをそうさせるんだ」

人々には姿すら見えない織図からの問いかけは、群衆の熱気にかき消されそうだった。

しかしジーザスは一語逃さず聞き取って織図の潜む空間に視線をちらりとくれてから、無言のまま元のように群衆に向き直る。彼が見つめているものは今も昔も、常に神々ではなく人々であり続けた。

織図はジーザスが答える意思がないとみると指先で空に真一文字を書き、落ちてきた神具 Living Twibil（命の刈鎌）を手にとった。ジーザスは背中越しに感じるその禍々しい気配に僅かに肩を強張らせた。二神の間にいいしれぬ無言の緊張が漲る。

「俺はあんたのようになれない……あんたのお気持ちはよく分ったが、そろそろ俺の仕事させてくださいや。理性的に計算して、あんたの治癒能力が追いつかない。どのみち助からんのなら、せめて安楽死を……」

織図は Living Twibil と携帯端末、そのうえ彼の頸のジャックポットと端末を接続し、正確に死の宣告を行う対象者のリストをチェックしてゆく。法務局から転送されてきた赤いリストを射程圏内にいる進行性衰弱症者達のデータにオーバーラップさせる。白と赤の光がスライドして一致する、しっかりと認識された名前は赤い点滅となって織図の執行を待っている。そこから先はジーザスの顔を見ることがなく、躊躇すらなかった。

ジーザスはがっくりと項垂れた。

一度決断を下した織図をとめるすべは、彼にはなかった。織図は彼自身が殺戮機械そのものであるかのように、よどみなくコマンドを紡ぎだす。

” Sentence of Death, initiation.”

（死の宣告始動）

“ Refer to Death-EXE folder for more information on execution !”

（DEATH-EXE Folderを参照の上、執行せよ）

” Count Down, 3, 2, 1……and passed away”

（秒読 3, 2, 1……執行）

死の宣告はバイタルレベルを不可逆的に切断し、正常に臨終を迎えた場合とは異なり蘇生は不可能である。全ての衰弱者たちが救済されると信じていた生存者達からは悲鳴が上がり、天の非情を憎む声やジーザスを罵る涙混じりの叫び声があたり一面を地響きのようにつまでも揺らしていた。ジーザスに向かって礫を投げる心ないものもいた。織図は姿を隠さながらにさりげなくジーザスの前に立って、礫からの攻撃と非難の矢面に立った。この呪詛の声を受けるべきはジーザスではないと、織図はそう思ったからだ。

ジーザスはしかし今にも泣き出しそうな顔で首を横に振ると、両手をそろえて深々と頭を下げ黙して謝罪をした。彼はいつまでも頭

を上げようとはしなかった。ざわめきは落胆の息にかわっていった。一人、また一人と彼らは家路につく。救世主の再降臨などありうる話ではなかったのだと、口々に吐き棄てながら……。そんな彼らの中から、飛び出してきた者がいた。

「あのっ！　ありがとうございます」
若い女がジーザスに駆け寄ってきた。

「あなたが悪いんじゃないわ……あなたはとてもよくしてくれた。皆！　どうして石を投げたの……」

彼女はありったけの感謝を述べると、手押し車に父親の遺体を載せた母親とともに、帰っていった。

織図　継嗣の絶対的な決断を止めるすべはない。生物階の生命に対する権限は完全に織図が掌握していたことをジーザスはまざまざと思い知らされる。ジーザスは無力感に苛まれながら、誰も必要としなくなった血染めの杯をその手から取り落とした。カラン、カラン……と不用となった神具は姿を顕さない織図の足元に転がってくる。織図は触性免疫に焼かれないようハンカチで包みそれを拾うとジーザスの手に渡そうとしたが、ジーザスの視線は織図にも、神具にもそそがれてはいなかった。

「織図。見よ……」
「ああ？」

織図はいつこうに彼の持ち物を受け取ろうとしないジーザスの足元に、コトリと杯の形をした神具を置いた。

「助けを求めて並んでいた者たちの列……この者より後ろは、救われなかった」

「仕方ないでしょう、どこかで区切りをつけないと。あなたにそれ
が出来ないなら、俺がそうするまでだ」

ジーザスは手を差し伸べて、あわやというところで生還したが、
誰かにより縋って泣いている少女を抱き上げ祝福した。長い列を作
って並んでいた衰弱者のうち、彼女より以降の人間は織図の死の宣
告によって物質へと変貌していた。彼女の後ろは誰だったか？ そ
う、彼女の後ろは――

「後ろはこの子の、母親だったのだよ。汝がもう一刻猶予を与えた
なら……間に合った」

「……そうでしょうな」

織図は腕組みをし、悪びれもせず無感情に頷く。

「織図よ、死神とは人々の生死を司る重要な役目だ。覚えておくが
よい、汝は神階で唯一、人々や生物階の生命の選択が許されている。
命を、汝の心ひとつで選ぶことができるという恐るべき事実、これ
がどういう意味かわかるか？ この子は汝の選択により母親を失っ
た。だが、この子とその母親の順番が前後していれば、子を失った
母親がここに佇んでいるだろう。とてつもなく重い決断だ、……少
なくともわたしには選べない」

だから、命の軽重を決められないから。彼は全ての人々を救おう
とする。織図は間接的に、先ほどの問いの答えを訊くことができた。

夕陽の残照に朱く染まったジーザスの横顔には、拭い去れない絶
望と憂いの色がさしていた。ジーザスはそう言いながら、織図の決
断が正しかったと納得している。母親を救った後はどうすればよい
のか、次は父親が並んでいるかもしれない。結局、偶然や無作為と
いう力で引き裂く以外には、生命の尊賤を決することはできないの
だ。織図は無作為かつ無感傷に審判し、だからこそ公正である。

そして死神という存在は、それほどまでに厳然たる中立性を保ちながら人の死に臨む存在でなければならなかった。

これで、よいのだ。織図が正しい……ジーズスは自身に言い聞かせるしかなかった。

「あのまま苦しみながら息絶えるよりよっぽど、EVEは快適だと思いますがね」

飢えも貧困も病苦も死の恐怖すらもない理想郷。EVEにあって、人々の記憶は死後の時間を穏やかに暮らしている。たゆまぬ努力で、彼は人々が夢見た理想郷を維持し続けてきた。織図は自信をもってそのシステムのクオリティを誇ることができた。

「……どんなに環境が快適で整っていようと、EVEは人生の代わりにはならない」

人々に死後の平安を説いてきたジーズスは、そうやって死後の樂園の価値を切って捨てる。彼は人心を引きつけるために理想郷の存在を仄めかしたが、本当の個という価値はその一度きりの人生の中でこそ見出さねばならないのだと、1600年前、人々の前では説けなかった。

ジーズスのそんな言葉はどれほど多くの人間を落胆させるだろう、ジーズスが今も抱きよせている子供に、“母親は天国で待っている”と言うだけで彼女は救われるというのに……。天国の存在は死んだ者よりも残された者たちの心の拠所なる。人が死を迎えれば肉体は物質へと還る、その単純な仕組みが全てだと、彼らはどのみちせ受け入れることができないのだから。織図はそんなことを思った。

「その子は、どうするんです？」

「生物階に滞在するわたしの使徒に愛情深く育てさせよう。わたし

は日常的に生物階へは入れないのでな……それとも、汝が引き取るか？」

「俺に何が出来ましようか？ 俺にはこいつを脅えさせ、泣かせることしかできません。できることといえば……」

少女はなおもジーザスに抱きついたまま離れようとしなかった。硬直して離れられないといった方が正しかったのかもしれない。背後を振り返ると彼女の母の遺体が転がっている。その更に後ろには累々と死者の列が連なっている。その事実を再認識しないでいたがために、少女は無言の抵抗をしているのだと、それが人の心の正常な反応なのだと思図は察した。織図はODFを解除し彼女の前にその姿を顕すと、彼女の頭にはいささか大きすぎる褐色の手を優しくかぶせた。

「今回の事態の原因を突き止めることだけです」

＊

事態は一旦の終息をみた……しかし織図が真相追求の手を止める事はなかった。今回犠牲者となった全ての死者の記憶の中から情報を集めたのは言うまでもなく、実際にその足で生物階に踏み入り、聞きこみなどで手掛かりを集めた。

また、織図はその後数日というものの、大量失血から回復中のジーザスの見舞いがてらに彼の部屋に寄るのが日課のようになっていた。ジーザスが療養を行っている居室は彼の執務フロアの一角にある。吹き抜けの天井から注ぎこむ採光がセンスよく植えつけられた種々の観葉植物に降り注ぎ、ベッドも宙に浮いていて空中庭園のような幻想的な間取りになっている。織図はベッドに向けて伸べられた浮遊螺旋階段をつかうこともなく、直接跳び上がってジーザスの枕もとに立った。ジーザスは案の定、偵察衛星から配信されるデータを

膝の上に載せた水鏡式モニターに映し出し、生物階の各地の映像を頻繁に切り替え、心配そうに目をくばっていた。これでは先日と全く同じ状態だ。一睡もしていないように見える。ジーザスは織図に気づき、挨拶がわりにこんなことを言った。

「また来たのか。アポイントを取れば訪ねてよいというものでもないぞ」

しかし面会予約の許可を出すのもジーザスなのだ。

織図はそのあたりの掛け合いは適当に、見舞いの品として生物階で買ってきた書籍をジーザスの膝の上に置き、同じく西欧で仕入れてきた花束を彼の枕元の花瓶に生けはじめた。

「そりゃあいにくどうも。どうせ療養中で予定もないんだろ？ 毎日毎日、飽きもせず人間観察ですか。もう少し回復してからにすればいいのに」

彼は花束をひとしきり興味深そうに眺めてからまたうつろな視線で水鏡に目を落とした。とりつかれてやがる、と織図は眉を顰める。彼は美しい花より、珍しい書物より人を見ていたいのだ。人間観察は趣味だろうと、織図はいつかジーザスに冗談めかして尋ねたことがあるが、どうやらそれは本当だったようだ。ジーザスの御大は隠居してもご立派な救世主をやってるよ、織図は彼を熱心に信仰する人々に伝えたいものだ。

「汝と違ってわたしは生物階に頻繁に入れる立場にはないのでな……人々の様子が気にかかる。特にあのような事があった後では……」
「今回だけじゃないだろ。あんたの場合いつもだ。だいたい、人間なんざいつ見ても同じだぜ？」

「本当に、同じだと思っているのか」

ジーザスはようやく水鏡から視線を上げて織図に向き直り、織図がいましがた生けたばかりの花瓶をおもむろに手に取った。一本一本。彼はじつくりと時間をかけ鑑賞を……というより、どちらかというと観察をしている。

「汝が買ってきたこの花束はほとんどがもはや原種ではない。人為的に、高度な品種改良が行われている。大学では学者達が、次第に精度を上げてきた物理学的数式を捏ね繰り回している。それに先日、こうして生物階を見ている間に、さる実験を行ったフランス人が現われた」

「実験？」

「実験は成功したようだよ」

ジーザスは感動のあまり録画しておいた水鏡の映像を再生して、見てみると織図に寄越した。ガラスのボウルいっぱいには張られた青い水の中に記録されていたメモリーが映りこんでくる。石炭を炉にくべている男の後姿のように見えた。これだけでは何をしているのか分からない。

「……これは？」

「蒸気機関を発明したのだ」

織図はへえ、と感歎の息を漏らした。

蒸気機関といえば紀元1世紀代には既に存在したといわれているが、当時の人々にはそれをうまく利用するための頭脳がなかった。実に17世紀という時間を経て熱エネルギーを力学エネルギーに変換する者が出てきたのだ。これは人類にとっておそらく、革新的な発明であった。その技術を正しく利用する事ができるというのなら……。

「反射望遠鏡で夜空を見上げる学者も現れはじめた。彼らはいまに宇宙の姿を理解しはじめるだろう。彼らはやがてあらゆるものを従え、未知という闇を刈り取ってゆく。激動の時代がくるぞ、織図！」

……我々は彼らの歩みに、ついてゆけるのだろうか」

ジーザスは興奮気味にそう語りながら、人類の未来に思いを馳せて目を爛々と輝かせていた。

「何で俺らが人間様の歩みに、ついていかせていただかなきゃならないんですか。神階の科学力に、そのうち人間のそれが追いつくとも？」

へそで茶が沸くぜ、と織図は一笑に付した。いつか神々が、人々に劣り砂を噛むような思いをさせられる日がくるとでもいうのかと。「神々は、この何千万年という時間の中で、少しでも進化をしただろうか？ 愚かで怠惰な生物とは、我々のことかもしれぬ」

彼は自らを蔑むようにそんなことを言った。あのジーザスが人々に劣等感を押し付けられている、その意味を織図は、あまり深刻に考えたくはなかった。織図はジーザスを尊敬していた、だがその彼が尊敬してやまないものは、非力な人間だったというのだから。

織図を現実に取り戻すように彼の携帯が鳴ったのは、ジーザスとそれなりに有意義な雑談をし時間をつぶして、まさに部屋を出ていくとも歩かない頃だった。設定された着信音から、あまりよくない知らせだと勘付く。

「何だ？」

『主よ！ またです……！ 現場はG 2 2 1. 3 5. 2 6 6. 4 2 です。大至急降下願います！』

「ああ……すぐ行く」

織図は多忙のあまり手入れを忘れて少し伸びた顎鬚をざらりと撫でて覚悟を決めると、ジーザスに知らせることもなく、神階の門に直行した。

＊

使徒に指定された座標は北アフリカの砂漠地帯に面した部族の集落だった。

現場の周囲は竜巻を伴う砂嵐が激しく吹き荒んでいる。既に数千人規模での犠牲者がますます激しさを増す砂嵐に引きずり込まれるように熱砂の中に沈んでいった。織図はその砂嵐の中心に神経を研ぎ澄ませる。中にいるのは、何だ……？　すぐさま生命反応を確認する。織図は盲目の瞳を見開いた。当然あってしかるべきものが、どこにもみあたらなかったからだ。

” バイタルが……ないだと……？ ”

動いているのに、気配があるのに生命反応がない。視力のない織図はより正確に対象を認識するため頸のジャックポットにケーブルを繋ぎ、D A—インディケータのカメラを起動する。砂を噛んだケーブルはなかなか映像を結ばない。織図は強引にケーブルを神経の奥深くに差し込むと、耐え難い激痛と共にケーブルを介して飛び込んできた情報が織図の脳内に視覚再現されてきた。画像を認識して愕然とした。何の偏見もなしにそれが何かと尋ねられたとしたら、誰しもがそう言うだろうと織図は思う。

それは黒い光沢のある皮膚を持った、裸の子供だった。

織図は彼が信頼をおく掌サイズの生死判別装置、D A—インディケータを握り締める。画面上で解析対象者をロックオンすれば対象のバイタルレベル、予定寿命を瞬時にして割り出す高性能装置だ。

D A—インディケータは同じ値を表示し続けている。その値は—250000 p t s。見間違いでも故障でもない、少なくとも織図はD A—インディケータが—（マイナス）という記号をつけた対象を一度も見かけた事はなかった。何だというのか……。とてつもなく悪い予感がする。いかにジーザスが人類の科学の進歩を強調すれど、この時代にはまだ神階で一般的に用られているクローン技術は存在しない。人の形をして、人にあらざるもの……。

”……ホムンクルス？”

D A—インディケータと視界を一体化させた織図にはしっかりと見えていた、この異形は周囲のバイタルを奪いながら動き続けるバイタルのない非生命体だ。人、動植物、神や解階の住民の別もなくバイタルを搾取し、動き続ける。それが過ぎ去った後には、生命の気配は掠め取られている。

ぐん……と織図のバイタルまでもがホムンクルスに引き寄せられてぎょつとした。目も鼻もない黒い子供の口に似た窪みが、にやりと微笑んでいるかのように吊りあがった。L i v i n g T w i b i l の影響力を排除するために常時バイタルロック（生命力施錠）を行っている織図でなければ、傍に近づいただけでバイタルを吸収されてしまっただろう。

”こいつ……！　なんてことしやがる、死神のお家芸だぞ。こんなことができるのは！”

死神しかない。織図はやつのことでそう判断した。

死神のみが人間および動植物のバイタルを加減するすべを心得ている。それは他の神々には明かされておらず、解階の住民にも能わない。アトモスフィアとバイタルは全く別のものだ。アトモスフィアならば他神や使徒にも加減や吸収、放散はできるが、バイタルだけは誰にも動かせないものだ。このバイタルを奪うためだけに存在

するホムンクルスは、死神によって創られたのは間違いない。断定してもよかった。

「DAーインディケータ、検索しろ。Living Twibil（命の刈鎌）以外の過去死神が所有した神具の形状を出力しろ、全てだ！」

ところで後に織図が愛用するXVI Von Louisという神具は、フランスのルイ16世の処刑を見た織図がそれまで愛用していたLiving Twibilより切れ味のよく高性能な神具を創出したものであって、1695年時点ではまだ鑄造されていない。

そういうわけで織図はLiving Twibil以外の死神専用神具の存在を知らなかったし、はたまた興味すらなかった。

このホムンクルスは性能だけ見るとしたら、バイタルを奪うという点で死神の持つ神具に共通するものがある。過去に現存した神具が何らかの誤りで誤作動を起こし、稼動をはじめたのだとしたら……辻褄は合う。織図はそう自らに言い聞かせながらも、頭の隅でその可能性を疑っていた。何故なら、神具を起動できるのはその所有者のみだ。そして過去全ての死神は例外もなく殉職している……記録上では。

「なんてこった……誰の仕業だよ」

待ちかねていたDAーインディケータの検索結果が織図の意識上に上がってきて視界に反映する。織図は全ての神具を精査する。どれだけ見直しても、人形タイプの神具の該当は過去数十万年にまで溯って一つもなかった。織図はひどい悪夢を見ているような気分になった。バイタルを搾取するだけの存在……。この存在そのものを死神といわずして、何と言うだろう。そしてこの悪意ある存在はど

のようにして生まれてきたのだろうか。

「死神の真似事にしては、お前は少し殺しすぎだ」

判断材料に乏しかったが、とにかく織図はこれ以上の犠牲者が出るのを阻止する必要があった。

彼は嫌な予感を払拭するように、既に携えていたLiving Twibilを肩に担いでコマンド入力を行った。身長を裕に上回る巨大な黒い大鎌を軽々と担ぐ織図は、その扱いに慣れている。

“Break out the Fallen Clipper!”
(いでよ。墮者を裁つもの)

織図は筒状のリミッター芯から抜くと、セーフガードを外しLiving Twibilの大きな刃を剥き出しにする。

“Judgment of the Killer Queen,”
”s”

(殺戮の女王の審判)

コマンドと共にLiving Twibilの刃先が真っ二つに分かれ、鋏のような形状を取る。

Living Twibilは状況に応じて様々な可変能力がある。彼は大きく振りかぶって反動をつけ、鋏の形状を取った二本の刃をホムンクルスに繰り出した。攻撃対象の周囲を縦横無尽に暴れ狂う巨大鋏は対象を完全に裁断し一塊も残さない。このLiving Twibilは文型として登録されている織図の所有物でありながら、攻撃的神具として認知されている。

「いったか？」

ホムンクルスは確かに一瞬にして切り刻まれ、塵となって熱砂の上に散っていった。織図が基空間に Living T w i l e を戻そうとしたとき、今しがた粉碎した塵はどろりと溶け、タールのような質感の水たまりを作ってゆくのが見えた。砂漠の燃えるような太陽光線が、あるいは50℃を超える外気温がホムンクルスを溶かしたというのではない。それは明らかに物理衝撃を吸収したという意味を持った。どうやらこれは、液体と固体の中間の性質を帯びているようだ。ホムンクルスはこともなく同じ形を成し、もとの黒い子供に戻った。

「はい物理無効と」

織図はひとりでおどけたが、その一方では余裕を奪われていた。バイタルロックをかけている限りホムンクルスから織図に害が及ぶ事はなさそうだが、相手が不死身となると手の施しようがない。

「どうすつかね……」

織図が思案していると、その間にオアシスの水汲みから帰ってきた部族の少女が一人、運悪くぼったりとホムンクルスと鉢合わせになってしまった。水汲みに出ていた少女は村で起こった惨劇を知らないで、ホムンクルスを見て気持ち悪そうに後ずさるだけで逃げようとはしなかった。ホムンクルスは少女をみとめるとじりじりと彼女に近づいてゆく。

「ば、バカ離れろっ!! 早くっ!!」

織図が血相を変えて怒鳴りつけた時にはもう遅かった。少女は重い水甕をかかえたままうずくまり、あれよあれよという間にバイタルを奪われて息果てた。織図は即座に彼女から記憶を回収しながら、D A -インディケータにたった今再現された静かな殺戮を解析させた。彼女の死を利用するようでのびなかったが、織図は一刻も早くこの異形を葬り去る必要があった。この少女に遅れること数百メートル、何も知らない何人かの子供たちが砂丘の向こうからわいわ

いと雑談をしながら帰ってきているからだ。この村では水汲みは子供の仕事なのだ……水汲み当番だったことが結果的に、彼らの命を永らえさせる事になればよいのだが。それは織図にかかっている。

織図は更なる犠牲を出さない為にも、D Aーインディケータが映じた映像にいっしんに神経を研ぎ澄ませ、数秒もしないうちに違和感に気付いた。

「待て……あの子から奪ったバイタルはどこにいった？」

驚くべきことに、再生映像の中のホムンクルスは少女のバイタルを奪った後も、そのバイタルレベルは先ほどと同じように－250000ptsであり続けた。ホムンクルス自体がバイタルを必要とし吸収しているのではないと、確固とした証拠を突きつけられた。「なるほど、そういうことか」

織図は納得すると、淀みなくLiving Twibilに一連のコマンドを入力した。

“Vital Lock Unlocked”

(バイタル施錠解除)

“In 10 sec, Vitalize this object with holding 250000pts from my Vital”

(10 秒後、対象に250000pts のバイタル を供給せよ)

Living Twibilは忠実に織図から、彼の250000ptsのバイタルを差し引いてホムンクルスに与える状態に入った。Living Twibilは時限式コマンドを受け付けていて、準備が調えば他のコマンドと共に倍がけする事ができる。織図は、すぐに死の宣告のコマンドをかぶせにゆく。このたった11

ptsのバイタルが、生命を持たないホムンクルスにとって致命的なものとなるのだ。織図は発動までの時間を正確にカウントしていた。

“ 3, 2, 1, …: Vitalized ”

(バイタル供給)

“ 3, 2, 1, …: passed away ”

(死刑執行)

ホムンクルスとLiving Twibilの間を相互に落雷のような衝撃が行き交ったのち、それはどろり、と先ほどと全く同じように黒い液体を砂の上に染み込ませ、今度は完全に沈黙し起きあがる気配もなかった。この間に何が起こっていたか、知性のない下等なホムンクルスには理解ができなかったかもしれない。織図は250000ptsのバイタルを持つホムンクルスに+250000のバイタルを転送し、一度0という状態にした。

生きていないが死んでもいないという状態だ。

しかし許容限界よりたった+1pts上回ったバイタルによって、ホムンクルスはLiving Twibilにより“+1ptsのバイタルを持った生命である”と認識された。生命なきものを“殺せる”状態にすること、これこそが重要だった。この状態がいかに重要であるかということは、ホムンクルスの製作者にもよく理解できていたのだろう。その証拠に、織図が先ほど少女の死と引き換えにえた情報から推測するに、ホムンクルスは吸収したバイタルをコンマ1秒すらも備蓄しないよう、即座にどこかへ転送するよう造られているらしかった。

それは陰陽階それぞれの極位神がアトモスフィア吸収環を帯びることにより、アトモスフィアを一度吸収環に吸収されその後神階中

枢に自動転送される原理と、基本的には同じだ。何ら転送速度にこだわる必要のないアトモスフィア吸収環とは違い、ホムンクルスにとってはこのバイタル転送速度こそがきわめて迅速でなくてはならなかった。

ホムンクルスは織図に与えられたバイタルをいづこかへ転送して再び250000ptsという元の値に戻るより早く発動された死の宣告で、片をつけられ殺された。ホムンクルスの物性を理解した織図の勝利だった。

その代償として織図は彼の2500001pts……概算すれば480年分の寿命を確実に削ってしまった。残りいくらあるとも知れない寿命のうちの、確実に480年分をだ。その取り返しのつかなさに気付いたのが、少し遅かった。

「……やっちゃまった……480年が一瞬にして吹っ飛んだ……」

正直いって後先など、考えていなかった。ついやってしまっただけだから返してくれと言いたいが、失ったものが失ったものだけに戻ってくる道理もない。自分でやってしまったことだけに、誰に八つ当たりをすることもできない。

「それもこれもすべて――！　　までよ……？」

織図はわれに返ってそう呟くと、DAーインディケータを用いて更なる検索をかけた。

「DAーインディケータ、過去6000年以内に在位した死神のうち、火葬されなかった神を抽出しろ」

非生命型でありバイタルを吸い取るこの異形を創り出したのは、死神以外にはありえない。すべて崩御しているというのなら、その遺骸は一体残さず火葬されている筈だ。火葬されなかった死神が…

：墮天したままどこかで生きている。神々の寿命が3000年というなかで6000年という無茶な数字をインプットしたのは、“彼”が、人々のバイタルを何かに利用しているからだ。そうでなくて、バイタルだけを奪いつくし、それをどこかへ転送する奇妙な装置を開発する意味などない。ひょっとすると、彼は人間のバイタルを自身の寿命へと変換する仕組みを開発でもしたのかもしれない。

それは織図の強引で直接的な決め付けでしかなかったが、彼にもっともらしい説明を与えてくれた。そしてD A—インディケーターは織図の期待通りの結果をはじき出した。

“一致！ それみろ……”

どうぞ捜してくださいとばかりに、火葬されなかった死神の名はたった一柱だけ抽出されていた。

水くみの子供たちがもうすぐに帰ってくるという頃、織図はどことなく哀愁を漂わせるとす黒い液体を裸足の子供らが踏む事のないよう丁寧に砂の中に埋め込んで、真の敵を追うべく灼熱の空に舞った。

＊

彼の居場所は、どこだ……。

織図が推測するに、一度崩御したと発表された神が他の法務局の偵察衛星の監視の目をかいくぐり生物階で生きてゆく事は並大抵のことではない。しかし事実としてそれを可能としてきた相手もさるもの、アトモスフィアの放散を完全に絶っているらしく、生物階にはそれらしき気配すらも感じられない。

それもそうか、と織図は彼の見通しの甘さに呆れた。少しでも怪しい気配を感じようものなら、生物階降下中の他の神々やアトモスフィアに関しては高感度センサー並みに敏感な使徒が気付かずには

いられなかっただろうから。誰にも見つからずアトモスフィアの放散を隠し生存を可能とする場所があるというなら……それは地下だ。アトモスフィアが化学物質である限り、地下深くの、たとえば分厚い鉛の壁に囲まれたような部屋の中でなら見つからないということもありうるか――。

“彼”はまさに鉄壁の要塞に守られているのだろう、生に対する執着が強く、しかも臆病な性格だ。追跡転移を日常的に使う織図は、“彼”がどんな辺鄙な場所にしようとあまり関係がない。“彼”のアトモスフィアを感じることでさえできれば……。だがその至極簡単なことが、困難をきわめている。

織図は生物階の地形をもとに見当をつけながら、四日四晩というものの“彼”を捜してくまなく飛び回った。その甲斐あって織図はある不審な場所を突き止めることができた。織図はとうとう“彼”のアトモスフィアを感じることはできなかったが、アトモスフィアではなくあるものを目印にして捜していたからだ。それはほんの少しの、しかしよく着目していれば一目瞭然の変化だった。織図はD Aーインディケータを起動し、礫による圧死者の記憶を回収するために開発された技術を応用したコマンドを入力する。

“Analyze the strat organizational use of gravimetric prospecting procedure”

（重力探査法を用い、地層構造を解析せよ）

D Aーインディケータはピ・ピ・ピ……と規則正しく小気味よい電子音を鳴らしながら、上層から下層へかけて逐次解析像を結んでゆく。30秒ほど待つと、巨大な空洞が50mの深度に存在するという結果が現われた。詳細な鉱物構造解析によれば、金属質を多く

含む洞窟のようだ。織図は周囲をゆつくりと歩みながら、洞穴への入り口を捜す。入り口は必ずある、何故なら最初に入るための入り口がなければその後瞬間移動を用いる事もできなかっただろうから。D A—インディケータの画像をもとに、入り口とおぼしき洞穴を見つけた。だが同時に、その上には岩盤が崩落し、入り口は封鎖されているという一喜一憂の状況だ。

織図はさも面倒だというように一つため息をつく、何を思ったか、洞穴の近くの岩穴の巣で寝ていた子ツバメをみつけて一羽捕獲した。子ツバメは怯えることも暴れることもなく、きよとしたあどけない顔で織図の顔を見ている。

「お前、すまんが少し使われてくれるか？」

織図はツバメの脳が唯一理解できる磁気という言葉を用いて、彼女に洞穴の中を偵察してほしいと頼んだ。彼女を両手で洞穴の奥に差し入れて放つと、子ツバメは本意ながら織図に操られる形で、よたよたと暗い洞窟の隙間に入っていた。5分後、子ツバメはまたよたよたとほこりをかぶりながら、ぴよんと岩の隙間から出てきてピィと鳴いた。

「よし、よし……何が見えたか、説明してくれ」

織図はツバメが解する磁気という情報をD A—インディケータで画像変換する。しだいに、子ツバメが見た洞穴の中の風景が再現されてきた。織図は真剣な面持ちで頷きながら、その間に子ツバメをまたもとの巣穴に優しく戻してやった。子ツバメが見た光景を磁気に変換し、磁気をまた画像に再変換し、織図の脳に正確なイメージを映じる。“見たことのないものを見たことにできる”織図のポテンシャルは先天的な視覚障害があつてこそ獲得したもので、他神は持ちえない非常に個性的な能力だった。

“同調転移”

織図は曲芸的な試みで、洞窟の内側に潜入する。彼は足場の悪さを警戒して浮遊しながら、DAーインディケーターで位置情報をはかり安全を確認しつつ進んでゆく。さすが隠者の住まいらしい趣きで、硬い鉱石の鉱窟は地層の隆起により天然にできた空洞のようだ。なにげなくペンライトを向けると、何かしらの鉱石が反応して青い残光を湛えている。

織図は急な傾斜を下り地下水脈に潜って、正確無比のナビゲーションを頼りに何度も分かれ道を選びながら深奥へと分け入っていた。そうやって1時間ほども進むと突如、洞穴の天井が高くなり、頭上にこれまではなかった堅穴が出現した。構造解析を行うと、堅穴の奥は広いスペースが存在する。その頃にはもう織図は、ようやく漏れ出してきた“彼”のアトモスフィア感じ取っていた。織図はしぶ濡れの黒衣の裾を両手できゅっと絞って気合を入れなおすと、怯むことなく跳びあがり、暗闇の中に捜していた人物の姿をみとめた。

彼とは……紀元前34世紀、生物階において古代中国では伝説の王、伏羲が生き、シュメール文明が栄華を誇り、楔形文字が発明された時代に死神として在位し記録上では崩御したとされている神だ。50世紀もの悠久とも思われる時間を、彼は神階の目から逃れ続けてきた。

『エア（HyY）、だな』

織図は古代アッカド語で彼に話しかけた。より新しい言語であるエジプト語（コプト語）でも通じたのかもしれないが、彼はわずか紀元前3380年から3250年までの在位期間の後に崩御したということになっており、当時神階で置換言語として用いられたエジ

プト語を知らない可能性があった。織図がアカデミーの教養課程で学んだ古代語を使うのは初めてだが、彼が後世の言語を知らないのだから織図が合わせるほかない。彼は外見だけ見れば5000年以上も生きた老神のようでもなく、青年神と呼んでも差支えがなさそうだった。彼がどうやって生きながらえてきたのか、織図にはそのからくりにはぴんときた。皮衣からはみだした素肌は瑞々しく張りがあり髪の毛にも艶があるが、落ち窪んだ眼窩と光を失った瞳だけは間違いなく老神そのものだった。

“なるほど、義体ね……”

彼は全身の殆どを義体化し人々のバイタルをホムンクルスに奪わせて転送し自らのものに代え、僅かに残った肉体のバイタルを増強させて維持していた。その機巧を見た織図は醜い、生に対する彼の執念に心底ぞつとさせられた。

『死神か……何故ここに辿り着いた』

どこか機械じみた声というよりは音声に近い耳障りな音が、喉の辺りから振り絞るように聞こえてくる。織図はそのみすばらしく哀れな有様に、ひどく失望した。

『普通は大先輩に意見するのも憚られるもんだが、そうもいかねえ。雀の涙ほどもない人間のバイタルを奪ってまで生きながらえて、何が満足なんだ……？』

どんなに道を違えても、人々や神階の為に尽くす事がどんなに理不尽であろうとも、神はこう成り果ててはならない。神としての誇りにかけてなどという高尚な美学を掲げずとも、人にも動植物にも、そして神や使徒にも、踏み越えてはならない一線というものがある。

青々と生い茂った葉は、つぎの葉のために散って朽ちなくてはならない。その時がくれば譲らなければならない。次の世代の未来の為に生命活動の場を譲り、未来への希望を託す。たとえ一枚一枚の葉は散っていても、それらは幹を太らせ、美しい花を咲かせるために必要なことだ。それが死という過程の意義だと、織図は考えている。そして一枚一枚の葉は均しく生きたいという渴望に満ちている。

だからたった一枚の葉が全ての葉を枯らして犠牲にしてはならない。

『盗るなよ、ヒトのもんを……もう二度と、返ってこねえんだぞ。』

あんただけが、生きたい訳じゃないんだ……』

織図は突き放すように、冷静に言い放った。

すると、エアはギリギリと義体の軋む音を立てながら、織図を見下げたように小首を傾げてみせた。

『たかが、人間の命だ。何が悪い。100年もせぬうちに滅ぶもの、何の実りを結ぶ事もなく、本能に身を任せて雑草のように蔓延り、這い蹲う醜い虫けらだ。そんなものに何の価値がある？ わたしは生命の農夫だ。黙って刈らせろ……汝が腹を立てる道理もない』

しわがれた、生気に乏しい声だった。織図はぴくり、と片眉を吊り上げた。自らをけなされたわけでもない、何故不快に思わなければならないのかも釈然としないが、ただ聞き捨てならなかった。

『ああそうか、そんな道理はないよな。だがな。あんた神階を逃げ出してから人間の何を見ていた……俺はジーザスみたいな愛好家でも慈善家でも何でもないがな……飽きるほどさせこましくて、愚かで小さな営みも、バカやってるのも、ない知恵を振り絞ってるのも、毎日見続けてきたんだよ。あんたみたいな下衆に命を奪われ、死してなお侮辱される道理だってないんだ……!』

織図は胸元の黒衣を鷲掴みにしていた。抑えきれない怒りが、爆発しそうだった。

『奪った命は贖ってもらおう!』

織図の怒声が洞穴にこだました頃には、Living T w i b i l を抜いてエアにおどりがかかっていた。重力加速度と全体重を浴びせかける。重いハンマーのように振り落とされる彼の威圧感は：現役の死神が本気で懷いた殺意に触れては、H y y といえども逃れる事は不可能だった。

「天誅殺!」

エアはその義体を織図のLiving T w i b i l に雲母片のように薄く薄く粉碎されてゆきながら、彼の意識が消えはてるその瞬間まで、何故織図の怒りをかったのか、とうとう理解できなかった。

織図は無残な姿となって瓦礫の中に埋もれてゆく、エアを振り返る事もなく見殺しにして洞穴をあとにした。

＊

ひとしれずエアを葬った織図は静かに、地上の空気を吸いこんだ。ふわりと、花の香が肺の中に滑り込んでくる。見渡す限り一面の花畑の中で、彼は誰にともなく呟いた。

「何故俺がここを見つけたのかと、訊いたな。……神という存在は本来、奪うものではなく与えるものだ。それを忘れた奴だ、気付く筈もなかっただろう」

無数の人々の命を奪いながら、この土地に染み付いた彼のアトモスフィアは、不毛の大地に命を芽吹かせた。穴の中に引きこもっていたエアには見えなかったのだ。地上では草花が幾重にも咲き乱れ、

豊かな緑に覆われている。エアは知らなかったのだ、彼が長きにわたり育んでいたものを。彼が奪った命は大地に還元され、大いなる生物階の生命活動の一部となっていたということ。

「地上のどこを捜しても、春夏秋冬の花々が一度に、一茎も枯れず咲いている場所などないんだよ……」

ひとつの仕事を終えた織図はようやく、おあずけにしておいた煙管にたつぷりと刻み煙草を詰め込み火を入れようとしたが、凜として咲き誇る花々に煙を浴びせる無骨さを厭い、名残おしそうにもとの煙管ケースにおさめた。彼は岩肌に、黒衣に包まれた褐色の身体を横たえると、久しぶりに安心して睡眠をとった。

外伝？最強師弟の半世紀―擦過1（前書き）

外伝？です。比企と荻号の出会いと弟子時代の話です。

外伝？最強師弟の半世紀―擦過1

有機合成化合物を作りだすように、あらゆる現象は単純で精緻な法則の積み重ねで出来ている。

その法則を生み出して統べるは、INVISIBLE―。

神々はその根源的な束縛より逃れ自由を勝ち獲らなければならぬ。

卒業試験過去問題集を簡単に解いてしまった時だったか、第一種公務員試験過去問題集を満点で解いてしまった時だったか、それとも武術指導教官を手合わせて失神させてしまった時だったか……。

陰階非位神 比企 寛三郎がアカデミーで学ぶすべてを修めたと実感して10年が経った。彼の結論はいつも同じだ。寮を抜け出してしかるべき師につきたい。比企の拳に倒れたり失神せず受け止め比企の問いかけにたじたじにならない師のもとへ。比企を子供のようにあしらうことができ、尚且つ師として周囲から認められる神ならば誰でもよかったのだが、陰階には一柱しか存在しなかった。

わずか一柱。神階の構成要員がそれほどまでに無能な神々の寄せ集めだという現状は、憂慮すべき事態だ。INVISIBLEに肅正されて以来、いにしえの神々と比して現代の神々の力はみるみる衰えてきた。武術に秀でた陰階神でさえ、フィジカルレベルの衰えは目に見え、アトモスフィアの絶対量も減り続けるばかりだった。このまま力が衰え続ければ、神階、そして生物階はINVISIBLEに屈するしかなくなる。INVISIBLEをうち滅ぼし、有史以来最大の脅威から生命を解放する。それが陰階神の最終目標だ。比企はINVISIBLE殲滅を成し遂げるべく、自らを鍛えあげてきた。

師として相応しい位神が一柱しかないのだから、それ以外の神には目もいかない。弱冠30歳だった比企は師として該当した、一柱の枢軸神に手紙をしたためた。手紙で師事を申し入れるのは不躰だと心得ていたが、講義の時間とトレーニングの時間以外は寮の部屋に監禁されて外に出られないのだから、そうする他にない。

書簡を宛てた翌日。

粗末な郵便受けを見ると、秘書官である第一使徒の代筆で返信がきた。開封すると、荻号 要は今後一切弟子をとる予定はないから諦めろと言っている、とのことだ。

師弟制度は本来弟子が師に師事を申し込むのではなく、師が弟子を選んで育てるものだ。比企は荻号に弟子として選ばれるべく態度を改めて、成績証明書と単位取得証明、志望動機書や発表論文、全身写真、健康診断書、担当教官からの推薦状を添えて完璧に体裁を整え再度投函した。

その翌日、再び同じ書面の返信が第一使徒の代筆でやってきた。優秀なのは認めるが弟子をとる予定はないとの内容だ。比企は郵便受けの前で肩を落としたが、少しもめげず再三正式な手紙を書いた。

いつの間にか隔日の書簡を送り続けて三年の月日が過ぎようとしていた。

獄中から手紙を書き続ける囚人のように、まだ諦めずにしつこく書簡を送り続けている。何百回断られたかもしれない、第一使徒もいい加減迷惑していることだろう。そう思った比企は、荻号に宛てる手紙とは別に代筆を強いられる第一使徒の二岐へのねぎらいの書簡も同封していた。二岐と軽い雑談をしつつ、荻号の様子を少しずつ聞き出していた。

荻号は500年ごとに働くそうだ。

逆に言うと、その時以外は働かずに会議へ出席し書類を作成し、そうでなければ神具を開発したり麻薬や煙草を栽培したり、図書館の図書を読みあさったり、彼は二岐が腹が立つほど何もしないのだそう。閻神の執務はあまり知られていないが、宇宙に浮かぶ惑星や恒星の運行を管理する過酷な仕事だ、宇宙空間で無数の星の周回軌道を調節し、自転や公転の速度を決めてそれを計算通りに動かすよう干渉する。

具体的には引力や重力、斥力を利用するのだそう。

地球の恒常性を保ち生物階の生命活動を保障することが責務である以上、ほぼつきつきりで監視していなければすぐに誤差が生じるもので、ひとたび調律が崩されると地球の一日の長さにも影響してしまう。

更に最近では天文学の発達により人間も天体を監視しているため、調整を間違えたでは済まされない。毎日行わなければならない調節を500年ごとに行う面倒くさがりの荻号だが、生物階の天体を完璧に調整し一度も異常や誤差があったことはないのです、二岐も叱るに叱れないのだという。

荻号はまた、位神なら毎朝必ず第一使徒を相手に行っている体術トレーニングをサボり続けてきて、一度も誘ってきた事がないし自主トレをしている姿を見たことがないのだそう。それでもその實力は三階最強ときている。

何もししていないのだそうだが、荻号の力の秘密に迫りたい者たちはそれを信じていない。二岐は声を大にして言いたいという、”うちのぐうたら亭主は本当に何もしていません”と。比企は力を維持する為、一日も休まず厳しい鍛練を自らに課してきたというのに、ふざけた話だ。

陰階での支持率100%という謎の最強神に師事し比企の知名度

を上げておくことは、墮落した神階を建て直して構造改革をしてゆくためにも必須のことと思われた。若き彼が経験を積んだ神々と対等に話をするためには、”あの荻号の弟子”というステータスが必要でもある。

そんな比企の情熱も理念も、荻号には理解されない。比企の努力を認めた二岐は、荻号に何度も進言したようで、どうせ暇を持て余しているのに弟子がとれない理由はないでしょうと詰め寄ったそうだ。最強神荻号 要も、気に入らない事があれば好物の紅茶に塩と胡椒を入れて出してくる第一使徒の二岐が怖いらしく、しぶしぶいう事を聞いてくれる事が多いそうだ。

二岐はとうとう、比企の履歴書と各種書類に目を通させる事に成功した。だがそれでも、弟子をとるつもりはさらさらないと、ふてぶてしくもそう言うのだそうだ。

それから気になる事も呟いていたという。

”あいつは自分で、やっていける奴だ”

会った事もないのに知っているかのような口ぶりが妙だ。二岐が食い下がって毎日のようにぐちぐちと進言し続けるので、遂に荻号の重い腰が動いた。その日のことは、今でも鮮やかに焼きついて忘れられない。荻号は比企の監禁されている寮の部屋に瞬間移動をして直接会いにきた。いや、直接断りにきた、が正解だが……。

比企33歳の冬。

日中の厳しい体術訓練を難なくこなし、講義に退屈しつつアカデミーでの学業修練を終えて、その夜も荻号への手紙をしたため、二岐への手紙に取り掛かっていると、突如現れた強大な気配がはちきれんばかりに部屋を満たした。

狭い石造りの部屋に現れたこの上ない存在感に振り返ると、一柱の神が立っていた。独特の色彩を持つアトモスフィア。その色は無色透明だ。アトモスフィアの純度が高ければ高いほど色彩は明るくなってゆく、それでゆくと相当に精錬されたアトモスフィアだ。フイジカルギャップはおそらくこの部屋の面積では格納しきれなくて解除している。マインドギャップなどはなから看破しようなどという気も起こらない。比企は彼を凝視したまま、ゆっくりと椅子から立ち上がり、冷たい石の床に膝をついた。銅色の髪をだらしなく伸ばして、これでも聖衣なのかと思うような粗末な装束を身にまとい、皮のサンダルを履いて両手を軽く腰にあてがい、まるで興味もなさそうに高い視線から見下ろしている。尊大な態度だが権威をかさにきている様子もなく、身に帯びているものに高価なものは何一つなく浮浪者のようないでたちだった。

「陰階 第4位闇神、荻号要殿とお見受けします、己は陰階非位神比企 寛三郎と申す者にて……」

比企は疑問に思っていた。追跡転移という瞬間移動の形式はあって、比企の気配を追って荻号がやってきたのだとはわかっていた。だが、アカデミーは瞬間移動をも使いこなす学生の逃亡を防ぐために、亜空間に存在する。陰階にいる荻号が追跡転移で追ってこられる場所ではないのだ。一体、どうやってやってきたのか。そんな事を訊く前に、比企はまず礼儀を尽くして彼に認めてもらわねばならなかった。

「お前だな、比企。いい加減にしろよ。俺は弟子を取る予定はないって、3年前に言わなかったかね。それとも二岐に毎日送らせている断りの手紙が、まるごと着かなかったのか？」

荻号は迷惑そうな口調で比企の自己紹介をむげにしてそう言う、鼻をならした。お互いの第一印象は最悪だが、比企はここで折れてしまうつもりはなかった。弱冠33歳の少年神と、何歳とも知れないベテランの枢軸神。比企と同じ年の頃の少年神が枢軸神と初めて接見する歳には、恐縮して何もいえなくなってしまうものだが、その気迫におされることもなく比企ははきはきと答えた。

「ご無理を承知でお願い申し上げます、己はあなたに師事させていただく事を、決して諦めるつもりはありません」

「俺は師に値する人物ではない。今は決められたルールの上を、歩いておけ。位神になったら会う事もあるかもしれないさ」

「アカデミーにて学ぶべき事は全て学びました！もうここで学ぶべき事はありません、あなたに師事させていただきたいのです。己はあなたの弟子に相応しくないと？ご説明いただけませんか」

「俺がお前を弟子にしない理由を説明しようとすれば二文字で済む、面倒」だ。何か文句があるか」

比企はこの男をどれだけ殴りたかったか知れない。面倒という理由だけで拒否の理由になるものか。神は人々を、世界を幸福に恒常的に維持するという責務がある。それを脅かす者を排除しなければならぬ。だとしたらINVISIBLEに対抗すべき後継者を一柱でも多く育てておく事もまた、位神の責務だ。比企は謙虚な性格で、自分の能力を過大評価しない。過小評価もしない。等身大の自分を見ていて、他の神々より秀でているとの結論が出た。だとすれば優れた能力を持ち合わせてしまった以上、神々のリーダーとなるべく務めることもまた、比企の神としての使命だと思ったただけだ。この男に師事しなくて済むのならどれだけありがたいことか。この男の風体も、言動も厳格な比企の手本とすべきものではない。だがそれでも比企は、最強と呼ばれる神をこそ師と仰ぐ必要があった。

「無理を推してのお願いです。己は諦めません、何十年でも、何百年でもお願い申し上げます」

「毎日返事を書かされる二岐の苦労もわかってやれよ」

二岐は律儀な性格で、無視っておけというのにこまめに返事を書いてやる。そうやって返事が来る事でまた比企の手紙がやってくる。3年間の間でやりとりした手紙は、そろそろ私的書簡保存庫に入りきらず迷惑している。全部棄てておけとっておいたが、二岐がそれを嫌がる。二岐の苦労を見かねて荻号が直接乗り込んできたというわけだ。この馬鹿は、直接言って断らなければわからないのだろう、と思いつながら。

「それは察しております。しかし、INVISIBLEを倒すための力を一柱でも多く育てておくことが、最強神であるあなたの使命なのではないですか？」

比企は荻号を挑発する。

逆効果となってしまうてはならないが、このままでは梃子でも動いてはくれそうにない。陰階神はINVISIBLEを殲滅することを至上課題とする、陰階神としての大儀とINVISIBLEというキーワードを持ち出せば、その目的を持つ者が師事を乞うているのだから彼も無碍に断れまいとの計算だ。荻号は陰階神としての勤めを果たしていないように思える、最強の実力を持ちながら、極陰として即位しないのも納得がいかない。もっとも、極位としておさまることばかりがよいことではない。極位となってしまうとフットワークが重くなる。生物階降下も殆ど不可能となるし、行動は制限される。だからといって彼が何をしてきたかという、INVISIBLEに対しては何もしていないように見える。

「また大きな事を言ったもんだな。少しは出来るようだが、何千万

年修行をしたところでINVISIBLEに抗する力とはならん。その素養もない。INVISIBLEの名を出す事もおかしい」
「ではあなたが一体何をしました？ 神々のうち最も優れたお力を持ちながら、INVISIBLEに抗するために備えましたか？ あなたがそれをなさらないのなら、己がINVISIBLEに挑みます。面倒だからとのお言葉、些か腹に据えかねます」

荻号は足元にいる比企を、黙って見下ろした。荻号が弟子をとらないのは、面倒だからという理由ではない。INVISIBLEに挑もうとしている者にしかるべき力を与える事は、彼等を破滅に導く。破滅と引き換えにINVISIBLEに挑むのは自分ひとりでもいい、荻号はそう思っていた。彼の子らには、生物階のみを見据えて、そして彼等の信念を貫いて限られた生を生きて欲しいと思った。INVISIBLEの本質を語ることはできない。いつまでたっても彼等には、敵が見えないままだ。自らに近づくんとする者は、必ず一線を踏み越えて斃れた。彼等が優秀であればあるほど、無駄死にをして欲しくはない。

「INVI……に對し、俺……何もしていない……じゃない……だぜ」

聞き取れない答えを吐き出す荻号を、比企は首をかしげながら凝視する、艶やかな黒髪に灰色の瞳の若き青年神。まっすぐな眼差しと強い芯の通った居住まい。比企に切望されているという事実が荻号に突き刺さった。こいつを破滅に導いてはならない。荻号は軽く首を振って否定した。

「俺に近づくと命を落とす。近づくな」

「命を？ 構いません、後悔などしませんから」

長い沈黙の末、微動だにしない比企を見下ろしていた荻号は手を

貸して立たせようとした。しかし比企は認めてもらえるまでは立たないと決めて重い岩のように動こうとしない。

「弟子というのはどうも荷が重い。お前がアカデミーを卒業したら俺の部屋に來い。教育というのは面倒だが、雑談ぐらいならしてやる」

比企の熱意にうたれた、荻号の精一杯の譲歩がそれだった。比企はそれを受け入れるしかなく、70年近くもの歳月をアカデミーで無駄に費した。

＊

比企 寛三郎、99歳の冬。

牢獄としか思えないアカデミーの寮の冷え切ったベッドの上で、明日の卒業試験を前に静かに瞑想を行っていた。ようやくこの日がやってきた。他の学生は気になる箇所の見直しや最後の追い込み、一夜漬けや修業に余念がないことだろうが、最後の修練期間として与えられた1か月の時間のほとんど、比企は瞑想をして過ごした。必要な知識は既に身につけていたし、トレーニングをしようにも比企と張り合える相手がいなかった。卒業試験に合格すれば、長きに渡り閉じ込められていた牢獄から明日、晴れて解放される。

神階の組織形態はこのようになっている。まず神はアカデミーで100年間修練し、アカデミー卒業後、30年以内に三種いずれかの公務員試験を受験する。最初から第一種を諦めて第二種、三種を受験する神もいるにはいるが、30年以内にはいずれかの公務員とならなければならない。殆どの場合、第二種以下の公務員として執務しながら、第一種公務員を受験して目指すのが常となっている。

ただし、生物階と神階の舵取り役となり、人々の信仰の対象ともなりうる、世界の運営に携わる第一種公務員となるための関門は、狭いにもほどがある。

卒業の一日後、比企はAXを名乗り、第一種公務員試験を受験する予定であり、担当教官を通じて既に受験書類は提出している。第一種公務員として合格すれば、100年以内に職種を選ばなくてはならない。とはいえ、現時点での陰階の募集は1枠しかなかった。3年前、崩御して募集中なのは88位の薬学を司る神、薬神。薬学知識を必要とし、物理化学に長け医学を得意とする文型（XX）神が有利となるだろう。生来の性質としてAAである比企は、文型である薬神に応募するにはAXを名乗ることを余儀なくされる、向いていないとは思った。だがどのような職業となっても、比企はそれをこなしてゆける自信があった。職業はこの際どのようなものでもよい、登竜門でしかないのだから。目的さえ果たせば比企はそれで満足だ。

卒業試験に満点で合格をしてアカデミーの卒業式を終え、卒業して晴れて一人前の成神として認められた。アカデミーの外の世界は眩いばかりだ。陰階神として陰階に籍を移され、陰階神として寮が与えられた。三種まである公務員試験を受験して職業が決まるまで、浪人したり勉強する寮だ。何もない広い部屋は明るい採光で温かく住み心地もよさそうだったが、位神として即位する事を確信していた比企は、長く住まう必要はないと思った。

100歳となった比企はその足で、第一種公務員試験受験会場に向かった。今年の志願者は331名。第二種以下の公務員から324名、アカデミー卒業後30年以内就職浪人生から6名、アカデミー卒業後すぐに受験をしに来たのは比企一柱だけだ。

この中から複数の合格者が出てしまっても、薬神となれるのは一柱だけだ。

第一種公務員試験の合格発表から数日後、今度は位神登用試験という試験があり、募集のある位神に応募できる。受験者に様々なテストを課し、最も薬神に相応しいとされる神を”適職率”という数値で算出する。物理化学に長け、手先が器用で、発想力に長けた神が有利となり適職率が高くなる。適職率で算出した値が偏差値80を超えた者が薬神として即位する。第一種公務員に合格はしているものの、位神として即位できていない即位待機者は35名。2年連続で、登用試験で偏差値80を上回る神が現れず、2年間薬神の登用は見送りとなっていた。今年の受験者が全て合格をして、全ての待機者と併せて勝負をしても倍率は500倍にもはならない。余裕だな、と比企は思った。

荻号の部屋を訪ねるために条件は、アカデミーを卒業することだけだ。第一種公務員として合格し、さらに位神として即位する事など条件にはなかった。それでも受験を終えて合格通知を持って会いに行こうとしたのは、荻号への手土産のつもりだ。荻号が比企の実力を疑って弟子を取らないといっていたのではないという事はよくわかった。だが、具体的にどれだけの實力を持っているかを示すには第一種公務員試験はまたとないバロメーターだ。歴代10位以内の成績で、つまり満点で合格してやると決めていた。

受験会場で、緊張した面持ちで試験に臨む神々を見渡しながら、比企もペンを取って神語で本名を書き込んだ。第一時間目のテストは有機化学。テスト用紙には、複雑な化合物の合成方法を解かせる問題が、制限時間では書ききれないほど出題されている。”はじめ”の号令がかかると同時に、まるでせき止められていた水が瀑布から滑り落ちるようにすると、化合物の合成経路が柔軟な頭脳の中で組み立てられてゆく、10題先まで、答えが見える。100年

を経て成熟した思考は更に洗練されて、比企の力となっていた。

合格しなかったらどうしようなどと、一度でも考えはしなかった。

＊

陰階4位 荻号 要殿 御侍史。およそ70年ぶりに比企からの書簡を受けとった二岐は、以前はなかった比企の肩書に目を止めた。陰階16位薬神 比企 寛三郎と書いてある。枢軸に次ぐ身分である準中枢として即位を果たしているということだ。そういえば、二岐も荻号も会議が入っていてこの間の位申戦の中継を観戦していなかった。新神の位申戦デビューなどどうせたいした試合でもなからうと思っていたし、デビュー戦は100位からスタートする新神が顔を知ってもらうためのアピールに過ぎず、本気で昇進を狙うものではない。位神たちの洗礼を浴びて大怪我をさせられたり殺されてしまわないよう、せいぜい90位台に挑むのが関の山だ。

アカデミーでいくら優秀だった神でも、新神のデビュー戦の殆どが大敗を喫するものだ。そう思っていた、だが比企はデビュー戦から何を思ったか準中枢のAA神に挑み、しかも手堅く勝利した。比企に16位を奪われたAAの重力を司る神は老化のためフィジカルレベルが右肩下がりだったところだ。文型神は若いほど弱く、武型神は歳を経る程弱くなる事は常識だ、文武型を名乗る神が若くして出世しやすく高位をキープできるのは、攻めに強いからだ。

効率よく勝ち残ってゆくために、若いうちは老いた武型神に挑めばよく、老いたら若い文型神に挑めばよい。ただし文武型を名乗るからには、守りにも強くなければならない。文武型を名乗る神はどちらも中途半端と受け止められるため、位申戦を申し込まれる回数が純粋な文型（XX）、武型（AA）の神より多くなる。そん

な輩を返り討ちにするだけの実力がなければ、文武型（AX）を名乗る事はできない。比企の対戦相手の選り方は非常によく計算されていて、迷いがない。二岐は比企が若いながらに体裁というものを気にせず、陰階神としての自覚をしっかりと持っていることに感心した。

神はアカデミーに入学する時に、陽階神になるか陰階神になるかが判定員によって定められる。アトモスフィアの質や潜在能力もあるが、生来の気性や容姿により判断される事が多い。陽階神は人間の信仰の対象となるため、生来の性格として憐れみ深く、おっとりとして、正義を愛し、容姿も選れている事が条件だ。陽階神として選ばれた神は、強く賢明である事より、神として信仰を集めるに相応しい者として育てる事が優先され、そういう教育を受ける。口調や立ち居振る舞いから考え方、身なりに至るまで、崇められるに足る優れた神となるまで徹底的に矯正されるのだ。陽階神は押しなべて品行方正で、上品であり、身嗜みに気をつかい、その生涯において罪に手を染めることなく、人々の模範であろうとする。容姿の美しさも重要な条件の一つである事から、陽階には女神が多く在籍する。陰階神は学ばない、美学を徹底して学ばされるのも教育の特徴だ。解りやすく言ってしまうえば、強くあることより清く、正しく、美しくあることがモットーとされる。

陽階神は卑怯者を蔑むし、騎士道、あるいは武士道を貫き、粗暴な振る舞いを嫌う。だから陽階神ならば、比企のように老いて実力の衰えた武型神を敢えて叩く事はせず、正々堂々と若く実力のある武型神に勝負を挑む。逆に力不足や老化により身分不相応を感じた陽階神は、位階を下位神に譲位して引退するのが美しい身の処し方だとされた。しかしそうやって目上の者を敬い、尊厳を尊重する筋を通したシステムだと、年功序列化することは避けられず、どうしても個々神の実力は低下してしまうし、事実その現象は起こってい

た。

あまり知られていないが、もともと神々の実力主義を象徴する位階制は陰階において布かれていたものだ。陰階神は神々を切磋琢磨させるため、頻繁に試合を繰り返し優劣をつけあい、常に競いあっていた。試合に勝ち進み、智と力を兼ね備えた第一位の格を持つ神が極位として陰階を統括するという解りやすい形態をとることによって、年功序列化していたシステムを一新し、若き神も極位として即位できるとあってそれがモチベーションを高めることとなり、陰階神の実力は飛躍的に向上した。陽階はそんな陰階の抜本的な構造改革を脅威と感じ、根回しや年齢などを考慮して選出されていた陽階主神の実力が、陰階神の準中枢にも及ばなくなった頃、生物階と神階の主権を陰階神に奪われることを懸念した上、ようやく陰階に倣って位階制を導入し現在ののような形式となった。

そうは言っても、生物階で実際に神として崇められる陽階神は様々なしきたりや美学に捉われている。しきたりも美学も、INVISIBLEに対しては何ら力となってはくれない。これに対し陰階神はただ、INVISIBLEに抗するべく力や能力に長けていればそれでいい。陰階神として相応しいとされるのは勝利に貪欲であり、己に厳しく、闘争本能があり、目的の為に手段を選ばない神であるとされ、時には卑怯な手を使っても陰階神であれば批判の対象とはならない。比企は陰階神としては逸材だった。位申戦のVT Rを取り寄せて何度も撒き戻して観戦した二岐は、危なげのない戦術と身のこなしを見て、比企の生来の闘争本能と計算高さを高く評価した。

比企の書簡を受けて、秘書官であり荻号のスケジュールマネージャーである二岐はこっそりと荻号の予定をあけて、比企との接見の時間をとった。もともと殆ど埋まっていなかった予定を空けさせる事は

簡単だった。うちのぐうたら亭主にも、努力家の比企の爪の垢を煎じて飲ませたいものだわ、そう思ったとか思わなかったとか。

比企と会うことで荻号がすっかり忘れている、陰階神の精神というものを見習ってほしかったというのもある。毎日毎日、生きているとも死んでいるともつかぬ生氣のない顔をして、これ以上ないほど不健康な生活を送りながらぐうたらとするばかり。

何歳なのかもわからないほど長い年月を生きてきたというのに歳の割に見た目もだらしないし、達観している様子もない。陰階参謀という名を戴くのも図々しいと思うほど向上心のかけらもなく、真面目に仕事に打ち込んだ姿を見たことがない。二岐は最強神たる荻号が本気をさえ出せば、もっと偉大な事を成し遂げられる、そう信じていた。そんな彼が若さと情熱に滾る比企を見て、少しでも発奮してくれればいいと思った。

二岐にアポイントを取ってもらい荻号の執務室に招待された比企は、郵送されてきた接見許可証と、届いたばかりの薬神の辞令を持って約束の時間より少し早く、万感の思いで陰階上層部に繋がるエレベーターに乗り闇神のフロアにやってきた。ようやくこの日がやってきた。ただひたすらに長く待ち遠しかった。およそ70年ぶりに会う荻号は、部屋を訪問すれば雑談をすと言ったあの言葉を忘れてはいないだろうな、それだけが気掛かりだ。

許可証を大勢の警備の使徒に何度も見せ、期待に胸を膨らませてここが執務室だと案内された扉を開いた比企は、突如として差し込んできた陽光に驚いてその身をこわばらせた。目の前に広がったのは生物階の光景だと思われる地平線だ。地平線の上に夕陽がさして黄昏とともに、ガラス板一枚の足場の下には巨大な迷路が広がって、しかもそれが見渡す限り地平線まで続いている。ご丁寧に、斥力遮断シールドが張り巡らされ、塀の上は過電圧がかかっていて、飛翔

して迷路の上を飛び越える事も、塀の上を歩く事も禁じられている。

これを見るまですっかり忘れていたが、荻号は時間と空間を使う三階で唯一の存在だと聞く。彼は比企との接見をしたくないがためにこんなにも壮大な空間を創りだしてまで嫌がらせをしているのだろうか。何とも悪趣味だ、そして彼の能力を無駄に消費している、と比企は憤慨しつつ、階段状の足場を踏み締めながら巨大迷路に降りていった。どこを見渡しても同じようにそびえ立つ塀、塀、塀！

このまま奥に踏み入っていけば、確実に迷う。

磁場も攪乱されている以上、生きている間に出口にたどり着ける保障もない。比企ははやる心を落ち着かせ、深呼吸をした。

落ち着け、ここは陰階の闇神のフロアだ、忘れてはいけない。フロアは有限であり、目の前にある光景は無限だ。だとすればここは仮想空間か亜空間であると考えるのが常識、目の前の光景に惑わされずブレイクスルーをすることが必要だ。このパズルを真っ向から解けと、荻号に試されているわけではない。第一こんなふざけた状態では、比企はともかく誰も荻号を訪問できないではないか。

比企は何かを確認するように、革靴の底で石畳をカツカツと蹴ってみた。やはり、そうだ。石畳である筈なのに、靴音が反響している。そしてその反響は、目の前にある塀にぶつかって、跳ね返っては来ない。見えてはいるが、塀はないのだ。比企は視覚に騙されないように思い切って目を閉ざすと、大きな足音を立て、反響音を頼りに前へ前へと進んでいった。比企の神体は黄昏の塀の中へ吸い込まれるように消えていった。

比企は必ずたどり着けるという確信を持って目を閉ざして進みながら、反響音がブレて跳ね返ってくる場所を探していた。そこがきつと、今度こそ本当に荻号の執務室に繋がる扉だ。比企は5分ほど

探すと、カッーンと、硬い反響音がしたので、ここぞとばかりに手を伸ばし扉の取っ手を掴んだ。目を開くと比企の腕は扉の中に食い込んでいた。扉の中に手が刺さっていると視覚に騙されて認識させられてしまう前に、勢いよく二つ目の扉を開く。

今度こそ。そう思って開いた扉は、真っ暗闇の通路に繋がっていた。暗闇の中に心もとなく続く一本道の通路は、果てが見えない。しかもご丁寧に、またしても通路には斥力遮断シールドが張り巡らされていて、飛翔することも、果てが見えないために瞬間移動をかけることも許されていない。徒歩でこの薄気味悪い場所を抜けるしかないのだ。比企はとても荻号や二岐が億劫な通路を歩いて、執務室に戻っているとは思えなかった。どこかに抜け道があったはずだが、気付かなかった。比企には荻号が、お前には会うつもりがないからもう諦めろ、と言っているように思えた。とぼとぼと暗闇をひとり歩いていくと、突然耳を劈くようなサイレンが鳴って、比企は次の瞬間、先ほど扉の中で見つけた扉の前に押し戻されて突っ立っていた。

一体、何が起こったというのだろうか？ 通路を歩き始めてから数秒もたっではいなかった。道を間違えたのだろうか？ この凝った仕掛けのダンジョンは荻号の趣味なのだろうか、ゴールなどあるのか不安になってきた。そうは思っても、もう二岐とは荻号に内緒で接見を約束してしまったし、遅刻をすればそれでそれが比企の弟子入りを断る理由となってしまういかねない。一度迷宮に入ってしまった以上、引き返す事はできない。その証拠にもう、比企が入ってきた先ほどのガラス板の足場は見えなくなっている。引き返す出口は閉ざされてしまって、もうないのだ。

比企は再び扉を開こうとして先ほどは気付かなかった、神語で彫られた刻印に何気なく指が触れているのに気付いた。現代で使って

いる新しい神語ではなく、随分と古典的な文法で記述してある。要約すると、この扉を開いてから次の扉を開くまでに、サイレン（警鐘？）の音を聞いてはならない。と、こういうわけだ。飛んではならない、瞬間移動をしてはならない。果ての見えない通路の先にまで、数秒以内にたどり着かなければ強制的に振り出しに戻される。つまり単純に、走れと言っているのだろう。鈍足の神は荻号に接見することもままならないというのだろうか、いくら参謀という要職にある枢軸神でそうそうは会えないとはいっても、このセキュリティの厳しさはハラスメントだ。

もはやこれは、荻号が比企一柱を試すために作り上げた壮大なダンジョンだと思えなかった。”試されている”と思った時、比企の本気に火がついた。走れというなら、走ってやる。ただ……比企は第一種公務員試験の歴史に残るトップスプリンターだったということを、荻号はどうやら知らなかったらしい。比企はやや前傾体勢をとりながら扉を開けるなり、コンマ3秒後にトップスピードに達して、扉にぶつかりそうになりながら次の扉を開くまでに0.5秒ほどしかかからなかった。走った距離は80kmにも及ぶ。とてもない距離を一瞬で走り終えた比企は息もあげず次の扉を開き、恐る恐る中を確認した。

扉の向こうはアンティークな内装の凝った二岐の秘書室があり、荻号の執務室と書斎の前室だった。二岐は約束の時間を10分ほど遅れた比企を、微笑みながらよく来たと言って迎え入れる。この屈託のない笑顔から察するに、二岐はこの扉の向こう側がダンジョンと化していた事を知らなかっただろう。荻号は頭の上がらない二岐にはこっそりと比企にしかわからない方法で、比企を亜空間に放り込み、試していた。彼女に問いただすのは筋違いだと自らに言い聞かせ、腕時計を見て遅刻をしている事を知ると、素直に謝罪するこ

とにした。

「比企と申します。遅れました、何とお詫びしてよいか」
「よくいらっしゃったわね。遅れたっていいのよ、うちの亭主はあなたがいらっしゃる事など今も知らないんだもの」

比企は苦笑して、まさか、と否定した。

荻号は比企が来る事を知っていた、それであんな嫌がらせまがいの試練を課したのだと確信していたからだ。そして彼は比企が荻号の部屋にたどり着いたという結果を芳しく思っているか、忌々しく思っているかはわからない。

「いえいえ、ご冗談を。ご存知でしたでしょう。無事に辿りつきましたので改めまして、荻号殿と接見をさせていただきたく思います」
「あなたの位申戦、見事だったわ。類稀なる才能をお持ちね。それに引き換え、うちのダメ亭主ときたら……彼はこっちよ」

外伝？最強師弟の半世紀―擦過1（後書き）

擦過2に続きます。

外伝？最強師弟の半世紀―擦過2（前書き）

外伝、擦過1の続きです。

外伝？最強師弟の半世紀―擦過2

二岐は数回ノックし古い執務室の扉を開ける。

中には70年ぶりに見る陰階枢軸神 荻号がだらしなくソファ―に腰掛け、あの時とまったく同じいでたちで手製の煙草をよっていた。今日もまた、仕事をサボってぐうたら過ごしている彼を見て二岐はひどく落胆する。

徹夜で作成し提出した報告書も、目を通してきてはいない。二岐の目じりが上がるのを見て、荻号は体裁が悪いらしく、ひゅっと肩をすぼめた。天下に名を轟かせる荻号が第一使徒の二岐に怯えているのかと思えば、何とも滑稽だった。カカア天下というか、なんと言うか。

「70年前に主と接見を約束した、陰階第16位葉神 比企 寛三 郎様がお見えですよ」

「さて、誰だったかな……」

「もう。3年もお手紙を下さっていたのに薄情者！ アカデミーを卒業し、第一種公務員試験に合格し、位神として準中枢に即位されたですよ！」

荻号は二岐の小言を馬耳東風といった様子で聞き流し、人間が吸えば即死するほどの猛毒を含んだ麻薬をたぷりと詰め込んだ煙草を紙に巻きながら、本当に誰だったか忘れたというように怪訝な顔で若き青年神を見上げた。

しかし比企は見逃さなかった。

荻号が煙草を巻いている横で開いている分厚い本の挿絵には、先ほどまで比企がいた迷路が緻密に描かれており、堀の中には比企の

探り当てた扉とも見える部分も描かれている。そしてその隣のページには、果て無き暗い通路の挿絵もあった。にわかには信じ難い現実がそこにあった。

比企はたった今の今まで、本の中に閉じ込められて本を読むように荻号に観察されていた。その正体も能力の片鱗も知れない、敵とするにはこれほど恐るべき相手はいない。だがそれでこそ師と仰ぐに相応しい。比企は70年ぶりの再会に感無量だ。

「アカデミーを卒業したあかつきには、雑談をしていただくというお約束を」

「ああ。そうだったかな」

すつとぼけた顔をしてまた煙草を巻いているが、彼は比企を忘れてなどいない。

比企は荻号に着座を勧められ、ようやく彼と対面して座する事を許された。全てはこれから始まるのだ。比企は独特な色彩を持つ荻号の瞳を凝視しながらそう思った。

「さて、何の話をしようか」

荻号は二岐ティールセットを持ってくるよう命じると、頬杖をついて比企をじっくりと観察しながら、いたずらっぽくそう言った。荻号は既に、比企から立ち上る闘気ともいえるアトモスフィアを感じ取っていた。会話をなど二の次だということは、互いに察知している。比企は荻号に促されて、彼と拳を交えてみたいのだと正直に白状をした。

「失礼でなければ、手合わせをさせていただきたい。己の実力とあなたの実力がどれほどかけ離れているのか、自認しておきたいので

す」

「構わんよ。紅茶がくるまでの間でよければ、相手になろう」

荻号は神具も使わず指先で空間を操り、荻号の執務室から基空間内に二者を転移させた。

真空中のアーカイブから比企は神具、G-CAM（分析的宇宙依拠現象把握機構）を抜いた。一万年前にG-CAMを創りだした荻号は、まるで息子を見るように懐かしく神具を持つ比企を見つめた。

「その神具は俺が昔、作ったものなのだがね。何故薬神が攻撃的神具を使う？ 薬神に相応しい神具はたくさんあっただろう。それは攻撃性能を付加しすぎて防御能力が全くないものだ。無鉄砲もいいが、慎重ではないな」

荻号はそう言ったが、3代ぶりに陽の目を見た彼の創作物が達者に起動している様子を見て、どこか満足そうだった。比企は現存する神具の中から敢えて荻号の創りだしたG-CAMを選んで所有していた。対話を通じ、あるいは拳を通じて荻号から学ぶべき事は尽きないだろう。

彼は比企の問いかけに答えてくれ、比企の拳に倒れはしない。無限の可能性を持っていた原始の神々を髣髴とさせる彼に師事をし、十分に力を備えて、いつか彼と共にINVISIBLEを打ち滅ぼす。その長き道のりはたった今、始まったばかりだ。

比企は真空中でG-CAMを斜に構え、荻号に向けた。

おろしたての白いジャケットの袖をたくりあげる。G-CAMは特殊な神具で、もともと60kgもあるのだが、起動した際には数十倍の重さにもなる。比企には無視できる程度の重量だが、やはり重力の影響を受け重さが乗算されると不利だ。荻号に真空中に転移してもらったことにより神具の重さは勝負に関係がなくなった、ど

ちらかというと有利に働く。

リミッターを外し予め入力していたプログラムを選び、思う存分に攻撃力を上げて最大出力で臨む。音声コマンドは真空中により封じられているため、比企はG-CAMの基盤を指先で操り、プログラムナンバーを入力する。

”Grasp the context by analytic
algorithm (G-CAM) . Protocol
Start.”

(G-CAM、プロトコルスタート)

比企は音声コマンドを諳んじて思い出しながら、手動プログラムを選択する。

青い基盤がはじめは蛍の光のように明滅し、次第に脈打つように頼もしく激しく応答し、赤い信号が基盤のラインに交わる。プログラムアクセプト後のコマンド待機信号を意味する明滅だ。比企は手早く展開しながら、荻号を見逃さなかった。

荻号は比企が仕掛けるまで、仕掛けてくる様子はない。待ちくたびれた、といったように欠伸をしている。攻撃的神具の起動を前にだらけきった緊張感のない顔が癪に障るが、荻号を本気にさせるとしたら、初日にはない。比企が何をしているのか、神具の作者である荻号には筒抜けだ。

それでも敢えて真っ向勝負に出たのは、荻号に攻撃を避けてほしくないからだ。こちらの手の内を明かし逃げ道を塞ぐ。荻号は欠伸をしながらも悟っているだろう、この攻撃を受け止めるには、どのような動作をすべきかということ。

” System console , program
No , 8395 . Access . ”
（システムコンソール、オープン。プログラムNo , 8395に
アクセス）

G-CAMは地味な神具だが真空中でこそ真価を発揮する。比企は心得ていた。比企がこの神具を手にした理由はただ一つといってもいい、真空中での戦いにとりわけ有利に設計されているからだ。大多数の位神たちのように手当たり次第に神具を触ってみてアトモスフィアの適合がよく職種にも関係する神具を安易に選んだわけではない。彼等とは気概が違う。

宇宙空間に漂うであろうINVISIBLEとの戦いにまで持つてゆける神具を選んだ。アトモスフィアの適合が悪く手に馴染まなかったが、負傷しながらでもこれを選んだのには計算され尽くした理由があった。浮ついた気持ちで荻号の弟子を気取るためではない。相手にとって不足はなし。

場所を気にする必要もない。

比企は生まれてはじめて、手合わせにおいて手加減なしで対峙しようとした。荻号は薄墨色の聖衣の下の相転星に手を掛ける事もなく起動することもなく、大欠伸をした後は軽く腕組みをして比企の出方を見ている。

比企は荻号がG-CAMをのみ見つめて注意を払っている事に気付いた。ここまで起動をしたのだから、完全に起動しきって第一撃を仕掛けてくる事を想定している。比企は荻号の視線を見て、先ほどもでの作戦であった真っ向勝負を挑むことを撤回した。臨機応変に対応する、隙があるのなら裏をかくこともまた戦術の一つだ。

比企は荻号の背後に瞬間移動をかけて回りこみ、起動しかけてい

た神具を武器に転じて肩甲骨の下に槍として穿ちこんだ。真空中ではフィジカルギャップをうまく形成できない。攻撃は荻号に届く筈だ。だが荻号の神体がG-CAMに貫かれ苦悶の表情を浮かべる。

鳩尾から大量の出血をし、もんどりうって崩れる……。そんなまさか！ 嘘だろう！？ 比企は目を見張った。こんなに簡単に、一撃で荻号を貫く事が出来るだなんて！ ……助け起こそうと思わず彼の肩に手をかけると、比企と荻号の神体が丁度前後に重なった。

その瞬間比企の鳩尾に衝撃が走り、G-CAMに貫かれたままの荻号の真後ろに覆いかぶさるようにして、同じように荻号の背にうつ伏せに崩れた。荻号は負傷したと見せかけて比企をおびきよせ、自らの神体ごとG-CAMで背後に来た比企を貫いたのだ。

串刺しになった二柱のうち、前にいた荻号はするとG-CAMから自らの神体を抜き、比企を串刺しにしたまま鳩尾と背中から出た前後のG-CAMを両手で握り、動きを封じた。霞がかかる視界で荻号を睨むと、先ほどまでであった傷口もなく、出血も嘘のように止まっている。

「姑息な手を使うときは、気を付けることだ」

比企は自らの神具に串刺しにされたまま、この状態からどう起死回生を図るか必死に考えていた。しかし真空中での出血により急速に体液の蒸発が起こり、0気圧下で体温は低下してゆく一方だ。比企はしだいに力を失う。荻号は憐れみをこめた眼差しをむけ、比企を串刺しにしたまま試合を打ち切り執務室に連れ帰った。

比企をソファーに横たえ、慎重にG-CAMを抜く。途端にせき止められていた血液があふれ出し、神具が起動した際に発する熱に、傷口が内側から焼かれていった。ティーセットを持って入ってきた二岐が、たった数分の間に執務室の中で起こった大惨事に、身をこ

わばらせている。

「ぐ……うっ！」

まともに負傷や苦痛を経験したことのない比企は、内側から神具で焼かれる痛みに耐えられず声を上げた。荻号は麻薬を比企に嚙ませて鎮痛しながら、傷口を焼き切ること出血を止め手術道具をひっくり返してスーチャーとステイプルを取り出し傷口を縫ってゆく。不衛生な環境だが、神は感染症にかからない。そして彼は外科医としての肩書きも持っている。

「どうして少し目を離した隙に、大怪我をさせるの！」

二岐に怒鳴られて肩をすくめながらも、荻号はときどきと手当てをしてゆく。荻号は普段なら二岐にぶん殴られていたところだが、手元が狂うといけないので手は出していない。卑怯な手段を使って荻号を出し抜こうとして返り討ちにあった比企は、何も言えずただ黙っているほかなかった。手の出せない二岐は荻号を怒鳴りつけているが、この結果を招いたのは比企だ。

「己が悪かったのです、荻号様を咎めないでください」

比企はなおも説教をしようとする二岐から荻号を庇う。

薬神である比企は傷薬を持ってきていたので、荻号の手当てが済んだ後、自ら処置をした。比企は説教の止まらない二岐に、外してくれと頼んだ。

位神が位申戦以外で戦闘を行う事はご法度だったし、位神に怪我をさせてはならないという法律が条文化されているが法度破りをもちかけたのは比企だ。彼が楽しみにしていた荻号の分のティーセツトは罰として引っ込められてしまって、そんな二岐を名残惜しそうに見送りながら、荻号は悲しそうに煙草を巻き始めた。よほど切な

いのか、何度もため息をつく。

「申し訳ありませんでした、そして処置をありがとうございます」
見かねた比企は荻号に自分のティーセットを譲ると、深く謝罪した。

荻号は比企に譲ってもらって嬉しそうに紅茶に砂糖を加えた。比企にとってはたかが紅茶だと思うのに、それが飲めるか飲めないかに一喜一憂する。どうやら先ほどの比企の無礼は気にしてはいない様子だ。

「ん？ 何が？」

「姑息な手段を使ってしまいました」

「……構わないさ、正面からは闘わない。それでこそ陰階神だ。だがお前は他の陰階神とは違うと思っていた……正々堂々と闘えと言いたいのではない。お前が何故ここにきたか忘れたか？」

「最終的には、INVISIBLEに抗すべくお教えを乞いたいと」

忘れてはいないつもりだった。

だが忘れていると思われても仕方のないようなひどい戦術だった。やり直せるものならやり直したい、彼は比企を軽蔑したことだろう。荻号の戦闘は位申戦のVTRを見て数えるほどしか見たことがないが、決して自ら仕掛けようとはせず相手の好きなように攻撃をさせる。対戦相手の自滅を導き、何故その戦法がまずかったのかを彼等自身に気付かせるという、教育的な戦闘を目にしてきた。戦術の脆弱性は、何倍にもなって相手にはねかえってくる。同じ轍を踏んでしまった思いだ。

「今のような闘い方がINVISIBLEに通用するか？ 殴ったり、斬ったり、貫いたり出し抜いたり、そんな事でINVISIBLEを滅ぼせると思うか？ 目先の勝利に捉われて大局を見失った。

次は俺をINVISIBLEだと思って、どう闘えば滅せるのか……よく考えろ」

確かにその通りだ。比企は荻号に一撃を与えることにこだわりすぎて、彼の本質や理念を理解しようとしなかった事に恥じ入った。

「あなたが被った負傷はどうしたのですか？ 手ごたえは確かにありました、お怪我はどうされました」

「この部屋に来る前に、認識を疑うという事を学ばなかったのかね。理解ができなかったのならもう少し学んでもらおう。今日はたったの2ページだったからな、明日は10ページほど用意しておくか」

荻号は好物の紅茶を飲むと、膝の上に先ほどの迷宮の挿絵の入った分厚い本を載せ、ほうつとため息をついた。味に満足しているのか、比企をからかっているのかはわからない。また次に比企が来訪する際に、あのうんざりするほど億劫で嫌がらせじみたダンジョンを挿絵10ページ分用意しておくといっているのだろう。

比企は最初ぐらい、真っ向から挑むべきだったなと後悔した。自分のしたことは、相手からかえってくるものだ。今日はそれを身を持って学ばされた。

「あの一瞬の間に、己に幻覚を？」

「幻覚ではないさ、俺は確かにG-CAMにぶち抜かれた」

比企ははっとして荻号を見ると、荻号は煙草を巻きながら紅茶を飲んでいた。いや、煙草を巻く荻号と、紅茶を飲む荻号の二柱が同じソファーに腰掛けている。何だ、これは……分身なのか？ 比企は目を擦ったり頬を軽く叩いてみたが、幻覚ではない。

「こういうことだ」

「こういうことだ」

二柱の荻号はそれぞれ異なる動作をしながら、比企の混乱を見て満足そうに微笑むと、口調をあわせた。比企はもはや彼がただの神だとは思えなかった、いかに時間と空間を操る最強神とはいっても、さりげなく下らない、しかし誰にも真似の出来ない芸当だ……次元が違いすぎる。比企が返すべき言葉を失っているので、荻号は一柱に戻って足を組んだ。聖衣のパンツが擦り切れてほつれ、膝が出ている。なんともだらしない格好だが、超神的なスキルの持ち主だ。

「今のは分身ですか？」

「分身とはまた稚拙な発想だな。んなわけあるか、お前は認識に捉われすぎだ。共存在さ。俺が存在する確率をダブルにしていた。お前達位神はどうも鍛えれば鍛えただけ強く賢明になれると思っているようだが、大間違いだ。何もしなくても、誰より強くなれる。ルールを理解せずにチェスができないように、お前達はルールを知らないのさ……積み上げてきた思考回路を破壊し、世界のシステムを理解しろ」

比企は荻号が100年間の修練による自己や固執してきた戦法を一度白紙に戻させるために、最初から荻号に師事させなかったのだと理解した。彼は100年間の間に比企を認識という鎖で縛り、その鎖を比企自身に断ち切らせるために100年間を強いたのではないか。

荻号の言葉は単純で、しかし難解だ。彼は世界の根源に関わる力を手にしている。荻号はこのような言葉を、他神には授けなかっただろう。会議の予定がおしてきたので、荻号は比企との接見を打ち切った。比企は呆然として、ソファアールから立ち上がれなかった。

彼は比企を残し、執務室を出て行った。

「存在を疑え……果たしてそれは、在るのか、と」
最後にこんな言葉を遺して。

＊

その日以来荻号といつでも接見してよいという約束をとりつけ、薬神として執務する傍ら毎日のように荻号の部屋に通うようになっていた。薬神は新規薬剤を開発し、神階や生物階の医療に役立てたり、新規化合物の合成や毒薬も開発する。比企は理論だけで合成経路を考案するので、手を動かして実験をすることはない。

パソコンで薬剤モデリングを行い、合成経路を料理のレシピのように簡潔に化学合成スキームにして使徒に渡す。これで比企の仕事は終わりだ。あとは優れた技術者である彼の使徒たちが薬物の合成、精製を行い使徒階で飼育している実験動物に投与試験を行う。安全性が認められれば厚生局に認可を求め、認可がおりると新薬として使徒階の工場で生産体制に入り各界のニーズにこたえる。

首尾一貫して、鍛え上げた武系能力を発揮する場面はないのだ。だからこそ比企は、アカデミー卒業前、薬神が崩御した時から、自らが薬神となる事を見越して必要な論文を読んで知識を修めていたので、しばらくは文献研究に迫られる必要もなく毎日のように荻号のもとに通う事ができた。

比企の将来設計は計算され尽くしていた。

荻号のもとで100年ほどの修練を積んで皆伝したら200歳代で極位に挑む。極陰として即位した後は、陰階神の能力向上を義務化する。荻号のように日がな一日働かずぐうたらと過ごす神はクビだとの勅令を出す。

長きにわたり彼と同等の格を持つ神が現れなかった事によりいじけてしまったというか、腑抜けてしまった荻号の闘争本能を取り戻させ、長き眠りから目覚めた最強神に影響された陰階神たちに緊張感と危機感をもたらすのだ。陰階の更なる改革に刺激を受けるであろう陽階にも改革の余震を……、というのが比企の目論みだった。したがってまずは比企自身が荻号を越える、とまではいかなかったもよいが、荻号に自らを力づくでも弟子として認めさせ、皆伝をもぎとることが不可欠だった。

しかし先日荻号との接見で、比企は安易な将来設計の実行が不可能だという事を知った。荻号から皆伝をもらえるまでには、どれほどの時間を要するだろう？ 生涯かかって、皆伝などもらえないかもしれない。荻号はだらけたりぐうたらしていたわけではないのだ。

物質的に神体を鍛えるより、思考を鍛える方が何倍も価値あることだと気付いていたのだろう。それに気付かず陽階神たちは毎年行われる荻号の支持率調査を、あてつけかと思うほどのひどい支持率にしてくる。能力低下が指摘される陽階神たちはひたすら警戒するばかりで、荻号という神の本質に気付く様子もない。

比企はまた今日も荻号に会うために課せられた試練である迷宮を彷徨いながら、そんな事を思っていた。荻号の作り出す不思議なダンジョンは日に日に追加されて、いつそう複雑化して難易度も上がってくる。比企はクリアして二岐の秘書室にたどり着くまでに1時間以上を費やしていた。まだ荻号のもとを訪れはじめて10日目にもならないが、既に30ページ、40を超えるダンジョンが追加されている、とにかく億劫だ。

比企はようやく秘書室にたどり着き、扉の奥がどうなっているかを知らない二岐に愛想よく挨拶をすると、執務室のドアを蹴るよう

にして開けた。

「一体どれだけ追加すれば気が済むのですか?! 辿り着くのに関時間を費やして、接見の時間が短くなります! 自重してください!」

これでは日に日に接見時間が短くなってゆくばかりだ。認識にとらわれてはいけないということは、身を持って知った。だからいい加減にしてほしい、これ以上の試練から、一体何を学べばよいというのか。

「やれやれ。まだ気付かないんだな。俺があのダンジョンをクリアするとしたら一瞬だ。追跡転移は使わないのか? 心得はあるのだろうか?」

荻号は迷宮の挿絵のある本から、皮のしおりを二つ抜き取っていた。

しおりとしおりの間隔は、今日は30ページ分だったはずだ。荻号の持つ迷宮の本はまだ10cm以上の厚みが残っていて、背表紙には1巻と書いてある。ソファアに座った荻号の背後の本棚を見ると、同じ表紙を持つ本が20冊も並んでいるのだ。荻号は読書家であるが、読書をしながら何をしているかわかったものではない。

「確かに追跡転移はできますが、迷宮は亜空間にあります! できるわけないでしょう!」

「空間を超えられないと誰が決めたんだね。誰がそう言った? 俺にとってはどこに転移するも同じだが!」

「超空間、追跡転移……!」

「むやみやたらに名前を付けるのは、好きではないのだがね。気配があればどこにでも追いつけるものだよ!」

気配があればどこでも? 言われるまで考えてみたこともなかつ

た。迷宮をショートカットする方法を一度でも考えてみなかった自分がいけなかった。比企はこの時より迷宮には踏み込まず、荻号の気配のみを追うと決めた。

＊

比企が荻号のもとに通い始めてから、半世紀ほどが経過していた。彼は薬神としての執務の合間に、薬神の執務室から直接超空間追跡転移で荻号の書斎へとやってきて荻号と雑談をし、読書をして、武術の指導を乞うのだった。比企は荻号自身が100年以上前に口にした、“自分に近づくと命を落とす”という言葉を実証するかのように、回数でいえば数え切れないほど荻号に殺されかけた。

虫の息となったり、骨折も何百回したかわからない。

だが荻号はいつも外科医としての達者な腕前を錆び付くことなく発揮して、比企を癒す。比企はどれだけ傷つけられても荻号を慕っていたし、荻号もそんな彼の打たれ強さに感心したのか、ようやく彼を弟子として認めたようだった。

認めたなどとは一言も言わないのだが、他神に”荻号の弟子が”云々と言われても否定しなくなった。たったそれだけだが、これまで一柱として弟子を取ろうとはしなかった荻号の心を動かした、大事件だと二岐は思っていた。

比企が毎日のように彼の書斎に押しかけるようになってから、荻号が暇を持て余す事はほとんどなくなった。二岐は相変わらず彼女の主の心のうちを知る事はできなかったが、以前よりだいぶましになったと思う。荻号が長い時間を無為に費やし何も成し遂げるつもりがないのなら、せめて優れた後継者を残すべきだった。遂にその気になってくれたかと思うと、二岐は嬉しかった。

「もう十分足りているだろう。どけ、重いから」
「ん……。もっと。足りないの」

二岐は荻号に甘えるように抱きついてアトモスフィアをねだる。その日、比企は珍しく部屋に来なかった。比企が来ないので憚ることなく久々に彼女の主たる荻号を独占し彼の胸に顔をうずめた。アトモスフィアを受けるには荻号に触れるだけでよいのだが、敢えて抱きついて心ゆくまで貪る。

不毛だと判っていても、二岐は荻号という主に惚れてしまっていた。そのことに罪恶感を感じているものだから、つい普段は冷たくあたってしまう。本心はそうではないのだと、いつも擁っている思慕の情をこういう時ぐらい彼には分かって欲しくて、思う存分甘えるようにしていた。

彼は二岐の心を分かっているだろう、だがどれだけ至近距離にいても彼の心はわからない。荻号はあれこれと抵抗をするのを諦めて口をつぐむと、軽く腕を二岐の背にまわしてくれて気だるそうにアトモスフィアを奪われていた。いつもの、腕一本分の重さが心地よい。

二岐はそうやって荻号の生命力そのものを堪能しながらも、昔は痛いほどに感じていた気圧の差を殆ど感じなくなっている事に気付いていた。心を許して手加減をしているのではない、カウンセラーのトップをしているため僅かな衰えを装置では計測できないが、荻号のアトモスフィアの絶対量は年々減ってきている。

何故か神が崩御する度にぐくと、衰えが目立つのだった。葬儀には殆ど参列しないくせに神の崩御のニュースで精神的に追い詰められているのか？ いや。一時的なショックではない、彼は立ち直

れず、階段を降るように段階的に力を落としてきている。

二岐は荻号の腕に縫いこまれている制紐の一本を指の腹で弄んだ。太い針で皮膚を貫き破線を描くように紐が腕の中を往復している。胴や脚にも13本も縫いこんである、荻号のアトモスフィアを抑制するそれ。一本でも切れれば楽になれるだろうに。

「無理せずに制紐、一本ぐらい切ったら？　またアトモスフィアが衰えたでしょう」

「そうか？　いよいよ年かな」

荻号は気分を害する事もなく、気のない返事を返す。

確かに年齢というと、彼は1万年以上は生きているので年といえは年だ。何年生きているのか漠然としたことは解るが、1万年以上というそれ以上の事は知らない、生まれてもいないし確かめようもないからだ。

「それから最近、よく寝るでしょう？　前はそんな事なかったのに、体調が悪いんじゃない？」

「心配いらんよ」

「主の体調管理も私たち第一使徒の仕事なのよ、誤魔化さないで」「そうだったな……だがひもじい思いはさせていないだろう」

二岐は首を振る。はらりと艶やかな彼女の毛が荻号の胸元に散った。

「……そうじゃなくなつて」

「あまり喰い過ぎると、太るぞ」

皮肉じみた言葉も、低い声も二岐は好きだった。荻号は彼女の細い腰を持って突き放す。

二岐は駄目押しのようにぎゅっと最後に抱きしめると、仕事の顔に戻って神体から離れた。比企が来なかったのは、GLーネット

ワークのニュースで神の訃報が入ったためだ。

崩御したのは陰階第82位 死神。

生物階の死者の記憶を一手に預かる、EVEの管理者の訃報である。50位以下の神の崩御では、枢軸神の出席は義務ではなかった。荻号は参列せず律儀な比企は死神に哀悼の意を示して参列した。二岐はアトモスフィアをもらうついでに甘えながら荻号に強く参列をすすめたが、彼の腰は鉛が入っているのかと思うほど重かった。参列をせずに書斎に引き籠もって何をするのかと思えば、中から嚴重に鍵をかけた。

鍵のかかる音を聞いて、ああ、また寝るのだなと二岐は察した。睡眠を必要とするほどアトモスフィアを奪った覚えはないのだが……。最近、荻号は睡眠をとるときに鍵をかけるようになっていた。寝顔なんて見ないし、身に帯びているものを盗んだりしないのに。と二岐は呆れただけで、中に入ってやろうとは思わなかった。

秘書室で書類を読んでいると、耳を済ませていたわけでもないのに中から衣擦れの音が聞こえてくる。普段は絶対に脱ごうとしない聖衣を脱いでいる様子だ。就寝時には素っ裸でなければ寝られないのだろうか。二岐は特に気にも留めず荻号に代わって、故神である死神へ弔電を打った。

＊

比企は初めて陰階神の葬儀に参列して、心底空しく感じた。

死神は300歳弱の若さで自殺により崩御した。間接的な死因は心身の乖離。仮想空間であるEVEへ、そして現実へとダイヴを繰り返すうちに心身喪失状態になって自己を見失い、自殺をしたのだという。EVEへのダイヴは精神力がとりわけ強くなければ過剰な負担がかかり、長年繰り返す事により確実に心身は蝕まれてゆく。

死神は精神力を酷使する……完全なる過労死。

それによる殉職だといえなくもなかった。死神は代々、即位してから崩御するまでに100年も経ずして不可解な死を遂げる。長生きができないものと相場が決まっていた。そんな事情を知っている神々は、空きが出てても死神に応募したがない。

死神となった者は不自然な死を迎える、その様子からEVEの”死者達の呪い”とまで噂されていた。なかなかこれといった適材がないのに、先代の崩御に慌ててマインドギャップに乏しく、死神となる素養がなかった者を無理やり即位させた結果がこれだ。

狂気の死相をした死神の亡骸と対面したとき、神が何故死に至るまで身を削って人々や社会のために尽くさなければならぬのかをよく考えるべきだと、比企は思った。神は巨大な意思に、その意思の赴くがままに生かされている。この数十年間というものの、段々とそれがINVISIBLEの意思なのだとは思えなくなってきていた。

とてつもない悪意が、三階を覆い尽くしている……。あらゆる戦術を、哲学を、理念を教えてはくれたが、荻号は根本的な問題に何も答えてはくれない。すなわち、INVISIBLEとは何ものなのか。

比企は荻号が、その意思に直接的に縛られているという事に気付いていた。荻号は自らを縛りつけて、力を裡に押さえ込みながら生きていく。神気遮蔽布というアトモスフィアを吸収する布を腰に帯び、制紐を自らの神体に縫いこんでまで能力の殆どを殺している。

何のためにかはわからないが、彼はその真相を語る事すら許され

ていないようだ。荻号は絶対の孤独のうちであろうとして、誰にも理解を求めようとはしない。何が荻号を縛って自由にさせないでいるのか？ 比企には考えも及ばない。

葬儀が終わっても、まだ崩御した死神の代わりに生まれるべき、神の赤子は発見されていなかった。神階はいつもは葬儀が始まる頃に発見される神の赤子を草の根分けてでも捜すよう、表向きは喪に服して崩御した死神の葬儀に徹しつつ、新たな神の発見に全力を尽くすよう使徒たちに厳しく命じていた。

死んだら、次か。

神階にとっては神も使い捨てなのだ、と比企は寂しく思う。比企はこれ以上死神となった者の犠牲が出るのなら、代わりならいくらでもいると思われる薬神の位階を廃して、また登用試験を受験し、崩御した死神の代わりに自分が死神になってもよいという気になった。

INVISIBLEに抗するべく心を鍛えるのなら、よい修行となるだろう。

比企は荻号に、薬神を一度廃し死神となる旨を伝えようと思った。比企は彼の師と同じよう、身分や職種に興味がない。位神は原則で終身の職種固定が行われているのだが、職種を変えてはならないという法律はない。一度身分を廃すれば、再び位神の登用試験に勝ち上がらなければならない、不合格だと無職になったり第一種公務員を追われ格が下がる。

登用試験の規準となる適職率は純粋に優秀であるというバロメーターではないので、優れた力と知力を持つ神でも適職率が上がらず落第して第二種以下の公務員になってしまう可能性も高い。よほど魅力のある職種に空きが出たのでないかぎり、苦勞して手にしてい

た地位を手放したくない位神がほとんどで、終身固定化しているというわけだ。

比企は斎場を出ると、そのまま超空間追跡転移で荻号の書斎に入った。

室内には誰もいない。おかしい、確かに荻号の気配は存在しているのに……。室内を見渡すと書斎の奥の小さな扉、彼が倉庫だと言っていた扉の隙間が開いていた。比企は倉庫の中を何度か見たことがある。確か箒とちり取りが入っていて、読まなくなった本が無造作に積み上げられて押し込まれていた。その他には、価値があるとも知れないがらくたばかりだ。几帳面な比企は、開いている隙間が気に入らず扉を閉めようとして、倉庫の中から風と光が噴き出しているのに気付いた。

いよいよおかしい。

こんな場所から風が吹くものだろうか？ 不審に思った比企は小さな扉をそっと開いて中を窺い見た。中は広大な空間があり、扉の下は黄金色をした湖が見渡す限り広がっていた。透明度が高く、湖底の白い流砂まで透けて見える。眩しく反射する湖水の穏やかな水面を泡で揺らせて、その下に沈んでいる男が見えた。比企は目をこらしたが、男を知らない。彼は金色をした長い髪を水中でゆらめかせながら透明な装束を身に纏い、何かを抱きかかえて湖底の砂の上にじっと屈していた。男の身は光に満ち、あまりの眩さに凝視しているだけで目が潰れそうだ。

比企は男が気付いていないようなのでアトモスフィアの放散を断ち気配を消して、尚も覗き見ていた。金髪の隙間から見える男の背中には光で描かれたような複雑な紋様がうごめいており、強い後光が差している。

ひどく美しく、澄明な光景だった。

男が慈しむように抱えている小さな生き物は褐色の肌を持つ神の赤子だ。果てなき湖水の母胎の中で誕生をの時を待つ、神の赤子が男とともに沈んでいた。母親のように赤子を慈しむ様子から、彼が赤子を産んで取り上げたのだと確信する。そして生まれたばかりの赤子の親こそが、荻号の正体だという事も。

書齋側に散在する無造作に脱ぎ捨てられた聖衣と切られた制紐、そしてこの場所が荻号の書齋であること……証拠は充分だった。比企は驚愕し、絶望した。

神々はこの広い湖底で、彼の母胎から一柱ずつ生み出されていたというのか。一刻も早く逃げなくてはならないと思った。彼は比企がやがて討ち滅ぼさんとするINVISIBLEが神に収束した姿、絶対不及者に酷似している。これほどまでに近くに、INVISIBILEがいたのだとは……！

比企は半世紀間、憎き宿敵を師と仰ぎ慕っていたとは！ 顔面蒼白になって物音を立てないようそつと扉から離れ、瞬間移動で自室に戻った。

何故だと問い質す使徒達を説き伏せその日のうちに薬神を廃して、陽階に転階を申請した。

その日のうちに死神下使徒階から新たに発見された神の赤子はやはり褐色の肌をしており、命名法に従って"織図 継嗣"と名付けられた。

陽階神は荻号の戦術を知る比企の裏切りを歓迎した。陽階神となるため不足していた資格を取得して、立法を司る神として難無く登用試験に合格し、身も心も陽階神となって彼は再スタートをきった。比企は片時たりとも、あの黄金に満ちた太陽のような絶対不及者の

姿を忘れられない。

INVISIBLEは陰階神荻号要のうちに宿って一介の神を演じながら神階を影で牛耳っているのだということを、一秒の間でも忘れてはならなかったのである。

比企は荻号に師事して得た半世紀の記憶を棄てようと思った。INVISIBLEの思惑通りに操られてしまうぐらいなら、何も学ばなかった方がましだ。比企は荻号の言葉、雑談の中から得た教えや理念、その身で知った圧倒的能力の一切を喚起することを禁じた。

荻号の作り出した攻撃的神具であるG-CAMも執着なく手放した。敵に手の内を読まれていては、それに克することなど不可能からだ。この200年後、準中枢11位であった比企は2位の枢軸神を指名して位申戦に臨んだ。この結果比企はINVISIBLEの依代である荻号抹殺を至上目標としたまま、第二位の格を持つ陽階枢軸神にまで上り詰める事となる。

比企は陽階の頂点が見えたとき、ふとした瞬間に荻号に学んだ一時期を思い出しそうになる。古びた書物に囲まれた書齋の中で過ごした有意義な日々。とりとめのめない言葉を、振り払いながら喘ぐように一日一日を積み重ねている。長き時間を自己と向かい合って過ごすうち、いつしか艶やかな黒髪は、艶のない白髪へと置き換わっていた。

荻号とはあの日以来、まともに顔も見えていない。

唯一荻号の弟子という場面が窺えるのは、比企の執務室に一分の隙もなく並べられた書物だ。彼は物質的に神体を鍛えるより遥かに長い時間読書をし、思考を鍛える事を重視した。比企はまだあの半世紀を自らの心の中に封じて、荻号の秘密に近づくどの神にも、荻号を語ってはいなかった。結果としてそうする事が、彼の命を永ら

えさせていたという事には気づいていない。

＊

比企が去って20年後。荻号の部屋は、またいつものように深い静寂に満たされていた。二岐は今日も日がな一日、読書以外は何もしようとしない彼女の主に小言を言うのが仕事のようなものだ。荻号は聞いているのか聞いていないのか、わからない。だが声をかけていないと、消えてしまいそうで二岐は不安だった。

「比企様がここを去ってから、すっかり腑抜けてしまつて……ほら、カーテンと窓を開けて！ 部屋が埃っぽいわ。もう……比企様、また来て下さればいいのに……寂しいものね」

「……いいんだ」

「え？」

荻号はそう言ったのをごまかすように大きな欠伸をした。

口には出さないが寂しいのだろうな、何気なく伏せた視線を見て、二岐にはわかっていた。二岐が黙って見つめていると、荻号は真空斑のライターを放り投げて落ちてくるまでの間に煙草に火をつけた。麻薬を含んだ重い灰色の煙が立ち込める。

「ここにはもう、誰も来なくていい」

また、強がりばかり言つて。

二岐は今日の荻号のスケジュールの中に、こっそりとある人物の接見予定を入れておいた。織図 継嗣、比企が去った日に生を受けた褐色の肌を持つ少年神が、医師でもある荻号の診察を希望していた。医神でも治療のできなかった、先天的な盲目の少年神。二岐は指導教官に連れてこられた織図のみを、荻号の執務室に案内して付き添いの指導教官をアカデミーに返した。

緊張した面持ちでやってきた織図を見て、何も聞いてないぞと二岐に訴えたかったが、織図はアポイントを取って正式にやってきたと思っっているらしかったので渋々迎え入れた。

「この部屋には誰も連れてくるなど、言わなかったかね」

「仮にも医者を名乗っているのなら、患者を診察するのが義務です。診察だけでもしてあげて下さい」

二岐がそう言い返すと、反論できなくなったようだ。織図は二岐に手を貸してもらってソファアに腰掛ける。その動作のぎこちなさから、全盲と判る。

「何を悩んでいる。織図 継嗣」

織図は真っ黒な瞳を開きながら、その吸い込まれそうな瞳に光は映じていなかった。織図は漠然と萩号に視線を向けながら訴えた。

「目が見えないのです」

「残念だが俺にも治してやれん。医者も全能ではないのでね……」

織図は暫く言葉に詰まり、萩号の一言を受け止めると、悔しそうに拳を握り締めた。

「どうして俺は出来損なって生まれたのでしょうか。目が見えなくては何も出来ません！」

アカデミーの教官たちは目の見えない織図をどう育ててよいものか思案して持て余していた。全盲の神を育てるなど前例がなかったからだ。武型神としても使えないし、文型にしても書物が読めず学力が伴わない。無駄な努力をさせて報われず、神としての役目を果たせず辛い思いをさせるのならいっそ安楽死をという声もあった。

織図は生を渴望した。生きて、生きて、とにかく生きたかった。その一方、真実を見通すべき神が盲目では生きる価値がないと解っていた。だから目が見えるようにしたい、目さえ見えれば新たな可能性と世界が開けるのに。と縋るような思いで憚りながらも枢軸神の前に連れてきてもらって、あっけなく最後の望みが絶たれた。しかし荻号の言葉は終わっていないかった。

「それは違う。お前は望まれて生まれてきた完全な神だよ」
かえってきたのは、穏やかな言葉だった。

「望まれて生まれてきた？ ……誰にですか？」

「さあ、誰だろうな。きっと今もそいつはお前を見ていると思うぜ。……お前は他の神と同様に、何でもできる」

「そんな……無茶苦茶だ……」

織図は悲観して弱音を吐いた。

他人事だと思われて適当にあしらわれているに違いない。荻号は少年の目に涙が滲んできたのを見て、ため息をついた。また、図らずとも他者とかかわりあう羽目になってしまった。

「ではまた診察があるといって、アカデミーの寮から抜け出して来い。視覚に頼らない認識の仕方を教えてやる。なに、そう難しくはない」

織図は半信半疑のまま分かったと言うしかなかった。

荻号は静かに目を閉じ、部屋を出てゆく織図の背中に語り掛けた。
「子らよ、汝らは何故吾を見んとするのか……」

遙かなる深淵を見ようとすれば深淵に魅入られてしまう。
比企もそうだ。

知らなくてもよい事を、決して知ってはならない事を知ってしま

った。それが十年後か、百年後かはわからない。だが比企は確実に、荻号を殺しに来るだろう、全てをなげうって……それは不幸なだけだ。

荻号は再び鄙びた部屋にやってきた訪問者を、今度こそ不幸にさせはしないと固く誓ったのだった。

外伝？メファイストとユージーンの邂逅―門の向こうに1

人間社会においてどれほど御伽噺にしか思えない神話や伝説でも、元を正せばある部分は事実であることが多々あるものだ。

人々はそれを偶然に見出したとき、驚愕するとともに、畏怖し、あるいは開き直り、様々な反応を見せる。超自然的だと彼らが決め付けたものを空想の産物にしてしまいたいという自己防衛反応、人々にとって認めてはならない現実を必死に否定しようとする思考回路は、彼にとっては興味深い謎だった。

1790年代における生物階入階の際。

限られた時間で人間社会のありのままの姿を視るため、音楽、科学、文学、政治経済に関するあらゆる資料を集めていた。

詩人、劇作家、小説家、科学者であり哲学者でもあるゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）の著作を手にとったとき、解階の人類心理学者、メファイストフェレスⅡセルマーは非常に興味深く、彼の戯曲を研究した。

一人の紳士の姿でゲーテの前に現われたセルマーは、それから1年にわたりゲーテと交流を持った。彼は自らの広い見識を彼らの科学力に即した範疇で与え、また彼の内奥と問答をかわす。この間、解階の住民であることを名乗れなかったセルマーが、科学者であったゲーテにすら悪魔と混同されていたことは遺憾でもあったが、だからこそ興味深かった。

人はどれほど学識のある者でも、受け入れられない現実認めない。セルマーは悪魔というその呼称に甘んじて、静かに詩人を見守り続けた。彼が古代の伝説、ドクトル・ヨーハン・ファウストウスの物語を元に、セルマーを悪魔　メファイストフェレスとして登場

させ、老博士の使い魔として描き始めた時には、何という事をするのだろうと思ったものだ。

紳士的に接してきたと自負していたセルマーを悪魔として登場させるとは、何と無礼な。さすがのセルマーも不愉快に思ったが、腹が立ったのと引き換えに、セルマーは人という生物が未知の存在に出会った時、それを崇めるか貶めるかしかできないのだとまたひとつ人間を学んだ。

神階の神々は人間の本質をうまく利用し、創造主を名乗っているであろう。

そういう戦法で神々は生物階の住民から崇められ、逆に解階の住民が存在を正しく名乗らない為に、人々は悪魔として罵ったのである。

偽りを広める事と、欺かず沈黙を守る事のどちらが誠意ある対応だと思ふのかと、人間達に聞いてみたかった。しかし既にセルマーの滞在したヨーロッパの社会では、キリスト教が強固な宗教圏を形成していた。悪魔の存在を予言したジーザスⅡクライストはうまくやったものだ、とセルマーは思った。

生前に神を信じ、よき道を歩んだものは天国の門を通り神の国へと入ることができ、さもなければ悪魔の住まう地獄で審判の日まで永遠の責め苦を受けなくてはならないという陽階神が人々に提示した飴と鞭、天国と地獄、神と悪魔の概念が浸透している限り、解階の住民はどうあっても悪魔として扱われなくてはならないようだ。

ゲエテから得られた貴重な資料を生物階で何とか整理し終え、セルマーは娘の待つ解階へと帰っていた。どうやら彼の愛娘と過ごすより多くの時間を、人間達の研究に費やしてしまったようだ。研究者としては大成していた彼だが、親としてもそうであったかという、残念ながらそうではなかった。愛娘への手土産と土産話を古い

トランク一杯につめて、彼は解階の門を42年振りにくぐった。

解階の門（Heil's ゲート）は階の女皇、アルシエル・ジヤンセンの直轄機関であり、20名までの解階の住民の生物階への出入りを許していた。

有名な悪魔の名をファーストネームに持つアルシエルだが、5800年にも及ぶ彼女の治世が悪魔の名にそぐうものであったかというところではなかった。彼女は最強者でありながら自由であることを至上とし、一切の強制をせず、崇拜を求めず、解階の民は各々の力と肉体で物質的な昇華と発展を目指すがよいと説いただけだった。アルシエルが定めた神階とのいざこざを回避するための簡単な法律以外には、解階には法治制度が一切といっていいほどなかった。

解階が開放された階としての意味を持ちしばしば混沌の階と表記されるのは、アルシエルをはじめとする代々の皇たちが、ひたすらに住民の生命力の有無をのみ求めたからである。

生命の本質は生き抜くこと。生きるためには生物的な強さや生存競争に勝ち抜くための知恵が要る。

弱きはくじかれ、強きは助けられる。何百世代もの間に弱者や繁殖力に劣っていた者たちが、そして遂には衰えたY染色体を持つ男性という性までもが自然淘汰された頃には、解階の住民には弱者というものがいなくなっていた。

優れた者たちによる無駄のない世界を運営するにあたって、統治者アルシエルが学問の価値を見失うことはなく、非力ではあっても知能の優れた者たちは手厚く保護することも忘れなかった。力か、智か。解階屈指の人類学者であるセルマーは、どちらかというところよりは後者に当てはまった。そして幼い頃からそんな父親を見て育った娘も、父と同じように人に興味を抱き、父と同じ道を歩み始めていた。

セルマーはアルシエルの住まう首都の鄙びた路地を歩いていた。生物階では地獄を示すアビス（ABYSS）との名を持つこの惑星には死が蔓延し、殺戮も当然、死体片付け屋という商売も成り立っているぐらいだが、戯曲や聖書で怖ろしげに書かれている荒廃とされている焼け野原のような場所ではない。貨幣も企業も、公的機関もあり、大規模な経済社会が成り立っている。

生物階もなかなか退廃的でよいが、ここはここで住み慣れた都だ。アルシエルの定める簡単な約束事以外には法律も規則もないという気ままな暮し。要するに、愚か者と弱者が損をする社会ではあるのだが……。たった42年間留守にしていただけなのに、首都の街並みはずいぶん変わってしまったていた。

恐らく店主や家主が殺されて、新たな建物が建ったりひっきりなしに立ち退きが起こる。メファイストフェレスⅡセルマーの家の表札にはアルシエルの紋章があり、強盗の侵入、家族の殺害や誘拐などのあらゆる危険から保護されている。逆に言えばアルシエルが保護しているという徴がない建物は侵入したり、略奪、家主の殺害も許されるということだ。

アルシエルの保護のもとにあるからといって、我が家が安全であるとは思っていない。家などどうなっているでもいい。崩れかけていても、壁が落ちていても、高価な調度品が多少盗まれていてもいい。娘さえ無事であるならば。セルマーはつきあたりに我が家の見える路地の曲がり角から、ひよいと首をのぞかせた。広大な敷地を持つメファイストフェレス邸は、42年の年月を経ても朽ち果てずに堂々と佇んでいる。

黒いポストの前には、長く使ってきたメイドが箒を持ってきれいに門扉の前を掃き清めていた。

「留守をご苦労だった。リンドバーク、今帰ったぞ」

「だ、旦那様！ お帰りなさいませ」

主人の帰還に、黒髪の艶やかなメイドが応じる。メイド服のスカートの裾をたくりあげて恭しくお辞儀をする。

「メリーは？」

「お嬢様はヴィルナ様とご会食に」

セルマーは、1年前に娘から単身赴任先の生物階の宿屋に届いた手紙を忘れてはいなかった。メファイストフェレスⅡメリーはセルマーが暗殺された妻との間にもうけた子であり、メファイストフェレス家の跡取り娘である。1年ほど前、ヴィルナという男と付き合っていると言紙に書いてあった。ついこの間まで子供であったと娘もそんな年頃になったのか、と喜んだものである。娘の幸せを願う気持ちには生物階でも解階でも、どの世界の親でも同じだ。

「お嬢様に旦那様のお帰りを、お知らせいたしましょうか」

「いや、よいのだ。交際ぐらい、自由にさせてやれ」

メファイストフェレスはおもむろに頭に手をやると、埃ひとつない赤いビロードの羽根帽子を取り、リンドバーグに手渡した。ふわふわと大きな孔雀の羽根が従順なメイドの顎のあたりをくすぐる。

「生物階はいかがでした」

「あいもかわらず人間たちは、おもしろい行動をする」

「では成果を上げられたのですね」

メイドは主人の成功を喜んだ。

「学会からどう評価されるかはわからんがね」

よく手入れされた中庭には芝生が青々と生い茂り、噴水のある池は清んだ水をたたえている。セルマーは懐かしいわが家の土をしっかりと踏み締めながら歩く。石畳を踏むと、セルマーの真上に影が落ちてきた。

この惑星の周囲には恒星がないので、いつでも暗闇が地上を支配している。首都は公共設備として上空200メートルに等間隔で照

明台を設置しており、LEDとグラスファイバーネットワークで放射パネルが空に敷かれ、生物階の日付変更線の時間を基準として朝7時から夜7時までの間首都の空を太陽とほぼ同等の光度に保っていた。

夜7時になると発電のため消灯となり、夕焼け空もなく急に深夜の闇が訪れる。現在午後6時半、明るい照明台の光に逆光となった影はどんどんと大きくなってきたので上を振り仰ぐと、一振りの笊杖を持った女が落ちてくる。彼のたったひとりの愛娘の帰還だった。セルマーはトランクを投げ出し、大きく手を広げた。

「あら。お嬢様」

「メリー！」

「！　パパ？」

娘は懐かしい父親の姿をみとめると、父の胸に飛び込んだ。
ふたりはしばらく抱擁しあったまま離れなかった。

「お嬢様、お早いお帰りで」

「いいのよ、彼とはさっき別れたの」

父は少し落胆した半面、また少しほっとしてもいた。どんな理由があつて別れたのかなど、今は追求しない。娘にはよい縁談があれればいいと思う。彼女はたったひとりの後継ぎなのだが、そんな事にこだわらず、家の血筋も学者の血筋も滅ぼして嫁に行つてでもよいから、そのかわり幸福になつてほしいと思つていた。

「良縁でしたのに、お嬢様」

「妾が決めたことだもの、気にしていないわ。彼、やっぱり養子にはならないって」

「この家の事など、気にする必要はないのだぞ？　好きあつていた

のならそんなことで別れるな」

セルマーは娘の頭を撫でてやりながら心配そうにそう言った。

しかしメリーは父親の頬に軽くキスをして、それ以上何も言わせ
てはくれなかった。

「妾はパパのものだから」

「お前……」

「それよりパパの仕事の話を聞かせて頂戴。リンドバーグ、上等の
ケーキを買っておいてよかったわね。まさか今日パパが戻ってくる
とは思わなかったもの」

幼い頃に母親をなくしただけあって、メリーは筋金入りの父親っ
子だった。

生物階での単身赴任の仕事が多く留守がちな父親でも彼女は慕っ
て尊敬している。娘は父の留守の間、寂しさを紛らわすように父の
論文を読み漁っていた。生物階の風習、生活文化、宗教、それらは
全てメリーには新鮮だった。父の業績にふれるたび、生物階への憧
れが日々彼女の胸を焦がしていった。

「お前の話も聞かせてもらわないといけないな、土産をたくさん買
ってきたぞ。リンドバーグ、勿論お前にもだ」

「パパ、怒らないで聞いてね」

「怒るものか」

「妾も人類心理学者になったわ。もう学位も出たの」

父親には内緒でとった学位だった。メリーはアカデミー在籍中、
経済学を専攻して既に学位を取っていた筈だった。アカデミーは2
0年制でほんの数%の成績優秀者しか学位をもらえず、卒業ができ
ない。42年前にメリーが経済学の学位を取ったとき、父セルマー
は安心して生物階への単身赴任へ戻った。

留守にしていた間にもう一度アカデミーに行きなおい人類心理学

で学位を取ったのだとすれば、父は娘の空白の20年を知らなかったということだ。

セルマーはいかに彼が娘の内面を蔑ろにしてきたかを深く恥じた。娘の興味も知らず、親としてのつとめも果たさず、生物階での仕事に明け暮れていた。

「メリー……許しておくれ。わしは父としてお前の何を知っていただろう。お前のことを何も分かってはいなかった」

「いいのよ、パパ。言わなかったのは妾の勝手なもの」

「し、しかし、人類心理学者とは……」

「生物階に行ってみたいのよ、パパ。どうしても行きたいの。パパが解階に帰ってきたということは解階の門が公認する定員の枠も空いたわよね。妾も1年でも、いえ数ヶ月でいいから、生物階に行つて人間を見てみたい。研究者が調査の為に生物階に行くのならお咎めもないわよね」

セルマーはメリーが家の中に入る事も忘れてはしゃいでいるので、事実を告げることが躊躇われた。しかしこれ以上娘の期待を膨らませるのは残酷だ。

「残念だが、もうわしの後任の枠は決まっている。これはアルシエル様がお決めになったことだ、また機を待つのだ。待っている間に業績を作れば、少しは優先して次の枠に選ばれるかもしれない。まったく業績のない今のままでは機会は巡ってこないぞ」

「そんな……」

メリーは学者になれば調査のためといって、おおっぴらに生物階に入階できるものだと思っていなかった。

彼女はひどく落胆して俯いてしまった。

「残念だったな、だがまだいずれ機会はある。さあ、家に入って土

産をあけよう。お前好みの服も買ってきたからな、香水もだ」

「ねえ、パパ……。人間を見た事もないのに妾は人類学者を名乗れる？ 諦められないわ」

セルマーはなおもくいさがる娘の頭を二、三度撫でてやりながら、玄関のドアを開いて彼女を導き入れた。リンドバーグは恭しくトラंकと大きな帽子を持ってふたりのあとから追従しつつ、またお嬢様が突拍子もない事を考えなければいいと、いつものように気をもんでいたのだった。

” 諦められない、絶対に……。妾だってもう子供じゃないんだから ”

メリーの父親譲りの真っ黒な瞳が、まるで闇の中に置き忘れた真珠のような光を宿していた。

＊

光陰、矢の如しというか、月日の過ぎるのは早いもので、父親が生物階から戻ってより150年以上もの歳月が経過した。メフアイストフェレス親子はこの分野に飽きる事もなく人間達の行動を研究し続けてきた。メリーが生物階に入階したことは、まだ一度もない。彼女は諦めたわけではなかった。

生物階への入階が認められるとしたら、メリーより父親が優先されるだろう。それは親子ともども同じ学問分野に興味をもってしまった事の代償だった。何か他の分野に長けていたなら、これほどまでにチャンスが巡ってこないこともなかっただろう。アルシエルⅡジャンセンの任命する生物階の定員はいつも満員で少しの隙もないようだった。これまでは数名分の空きがあるのが常だったのだが、このたびアルシエルが任命した勅使は学者ではなかったため、一気に6名分の定員を占領していた。さらに不運なことに、任期が20年という長期にわたっている。大人しく順番を待っていてもなか

なか巡ってくるものではない。

既にいくつかの著名な論文を発表し、人間学者として父親と並ぶ名声を手に入れていたメリーは焦っていた。人間学分野の父親が赴任していたため、人間学分野に対する調査の指令はしばらく出ないだろうと思われたからだ。父親の往来した解階の門は、メリーには固く閉ざされていた。彼女のフラストレーションは英語教師が一度も海外に行ったことのない事へのコンプレックスにも似ていた。メリーは口に出しては不満を述べないが、セルマーは心の中に不満を溜め込む娘を不憫に思えど、なすすべもない。

「メリー、わしが買ってやったドレスを見てくれたかね」

「え？ ええ、パパ。気に入ったわ」

「次の舞踏会では、お前が主役だ」

「ありがとう。パパの期待に沿えればいいのだけど」

セルマーはこのところ、まだ結婚適齢期にさしかかったばかりの娘に、しきりに縁談や見合い写真を持ってきていた。

どの相手も選りすぐりの粒ぞろいだったのだが、メリーはあまり興味を示さない。解階は進化のつぼと喻えられるように、より強い子孫、より優れた知性を生み出すために結婚、出産は必然だった。未婚や独身、行かず後家など社会的に許されはしない。

結婚をして子供を生むか、さもなければ社会的に抹殺されるかのどちらかだ。行かずに娘を出す親は万死にも値するか、恥じ入って腹を切るしかなかった。それほどまでに”すぐれた子孫を残すこと”、に対して貪欲な気風があった。セルマーは早々に娘の婚約相手を決めてしまつて、精神的にも社会的にもひと段落したかつたし、恋愛をして美しくなろうとしたり相手に愛されようとすることで、娘にも心のゆとりや支えを取り戻してほしかった。毎月のように盛大に催される舞踏会は良家の子息、子女が集う場所だ。

今度こそ、いい相手を見つけて欲しい。

メリーも、父が彼女の気を紛らせてくれようとしているのは痛いほどに感じていた。メリーは恋愛より断然仕事、といった性格でもなかったのだが、一度でいいから生物階に行ってみたいという思いの方が、恋愛などよりずっと勝っていた。生物階への思いは日に日に強まるばかりで、高級な料理に舌鼓をうっている時も、論文を書いている時も、父親と庭の手入れをしている時も、一日でも忘れたりどうしてもよいと感じる日はなかったし、悪い病気に罹ってしまったのかと思うほど、彼女は生物階に執着してしまっていた。

生物階に恋をしている、そんな表現がぴったりだ。

父親の言葉をニ、三言聞き流して、彼女は2階の奥の書斎に入ってデスクの上に突っ伏した。唇を上等の生地の一部屋着につけてしまっ
て、口紅がついたわ、と慌てたが、今日は口紅すらつけていない。身だしなみにも気を配れないほど、彼女はただ漫然と一日を過ごしてただけだった。

”このままではだめになってしまう。パパにも心配をかけているし……大体、そんなに固執することなのかしら。妾は本当に人間に興味があるの？ 実は興味もないのに、パパの影響ではじめただけなのかもしれない。妾は人間を見たことがない、もう、人間が何なのかすら、わからなくなっている……百聞は一見にしかず、と思ったからだけど。叶わない事なら、いっそのこと願わない方がいいのかしら……”

メリーはいつになく憂鬱だった。ベッドに寝転がって読みかけの本を取る。

『我は学んだ、哲学を、法学も医学も。おまけに神学も究めんとし

た。徹底的な努力によってだ。だが我は未だに哀れな愚か者だ。少しも利口になどなってはいなかった。思えば修士だの博士だのと称して、もう十年来も学生たちの相手をしてきた。挙句の果てに僅かながらに理解できたのは、われわれは何を知り得ないのだということだけだったのだ』

ファウスト、第一部の”夜”の冒頭である。

メリーはもう本を読まずとも空んじることができた。まさに彼女はファウスト博士が自らの代弁をしてくれている、そして彼の言う通りだと思った。メリーは生物階、そして人間という不思議で愛らしい生物についての知識を、極めれば極めるほど、何も解らないのだと思うようになった。メリーがこの数百年で知った事といえば、無知の知だけだったのかもしれない。

「時よ、止まれ。汝は美しい……」

物語の結末で、ファウスト博士が悪魔メファイストフェレスから魂を奪われる筈だった言葉を紡いでみた。何の意味があつてのことかわからない。ただ口にしてみたただけだ。美しい黄昏が、老博士を包み込んだ。メリーは物語の中での父がファウスト博士の魂を奪って、ここに連れてきてくれればよかったのに、とひとりごちた。

手段はないものか。生物階の入り口は、一つしかないのか？
：いや、そうではない。アルシエルが神階との協定で、神階の門の設置と並行して生物階への入管の役割を果たす解階の門を設置したのは、それほど昔の話ではなかった。少なくとも人類が誕生するまではそんなものはなく、生物階への出入りもかなり自由だった。生物階へと繋がる私設のゲートは数多く建設され、それらは解階のヘルズゲート門への統合の過程で封鎖されていた。

”まだ、解階のどこかに何千万年か前の使えるゲートがあるかもしれない”

アルシエルにより管理されている解階の門の警備は鉄壁だが、生物階に入階する解階の住民のチェックは行われていない。どこから一度生物階に入ってしまったえば監視は行き届いていないのだから、絶対にアルシエルに発覚する事はないだろう。問題は数千万年前の遺跡であるゲートが使い物になるかどうか、そこにかかっている。あっても原型をとどめていなほどに壊れているか、奇跡的にあったとしてもそのまま機能するという可能性はない。完全なるゲートを見つけ、更にそれを修理し、起動させなければならぬことになる。しかも彼女がゲートを起動して生物階に入るまでの間、誰の目にも触れてはならなかった。

彼女は良心が疼きながらも驚くほどの手早さで、古い文献からゲートの存在していた場所を突き止めた。普段から文献を捜すのが日課となっていたおかげだ。首都には70の遺跡があり、郊外には31、母星ABYSSを出たところに2つの遺跡があった。こんなに数多くの私設ゲートができていたのは、旧家の貴族たちがステータスシンボルとして作らせていたからだそうだ。生物階への入階は、以前は人間たちのいう海外旅行のような感覚で頻繁に行われていた。生物階の自然や動植物は解階のそれと比べて独特で、美しく魅力的だ。貴族達はリゾート気分で出かけて行って、好き放題の振る舞いをして略奪だったことだろう。そしてその自由で奔放な振る舞い、神を恐れない様子から、彼等は生物階において悪魔として貶められることとなったという経緯がある。

新しい家柄であるメファイストフェレス家はメリーで二代目であり、当然のごとく私設ゲートなどもってはいなかった。新しい家ではだめだ。旧家で、取り潰しとなった貴族を捜す。今も現存する家

柄ならば遺跡とはいえ敷地内のゲートを利用する事は不法侵入となり、それだけ侵入のリスクも増えて何度かは生物階を行き来できないだろう。どちらかというところ荒れ放題で、誰の目にもつかないような薄気味の悪い廃墟のようになってくれば一番ありがたい。メリーはそんな条件に適合するような郊外の遺跡を3つに絞込み、最も条件のよいものに目星をつけた。理性では止めようとしても、彼女のあふれ出しそうな感情はとくに駆け出してしまっていた。

「パパ、ごめんなし。妾は悪いことをしようとしているわ……いいえ。悪いことを、するの」

彼女は翌日、父には古い文献を取りに行くと偽って、目星をつけておいた遺跡に足を運んだ。マクシミニマで座標を確認しながら向かったので間違いはないのだが、いくら捜してもそれらしきものはない。座標指定した場所はもはや貴族の大邸宅があったなどとは思えないほど殺風景で、荒涼たる草原となっていた。足元に転がる瓦礫が点在している。

ゲートはどこに……。メリーは寂寞とした風の吹く草原を見渡した。

この場所ならば、誰かに見つかる心配はないかもしれない。肝心の、モノがあればだが。メリーはつい、と強い風の吹きすさぶ空を見上げた。この風はどこから吹いているのか？ 解階には日照がないため地表と上空の温度差が殆ど起らず、照明装置は熱を発生しない。したがって解階本来の自然は穏やかな環境だ。風など殆ど吹かない。首都では熱を発生させているため風が吹くが、照明装置のみのあるこんな郊外の草原では、自然な環境ではのっぺりとした空気の間が広がっているだけだろう。レースを多用した黒いドレスを纏ったメリーは、黒い羽根帽子を飛ばされないようしっかりと抑えながら、風上へと歩いていった。

どれぐらい歩いただろう。まるで鉋脈を探すように、メリーはただただ歩き続けた。

「記録に残っている遺跡の場所は、違っているのかもしれないわ」

ヘルズゲートを建設するためにアルシエルが命じて調査させた私設ゲートは、アルシエルの勅使による取り壊しを待つばかりだった。ヘルズゲートは生物階への入階を厳しく制限するためのものだ。今まで何度も往来をしていた貴族が、急に生物階への入階を制限をされて納得するものだろうか？　メリーならばお断りだ。文献を調べ、取り潰しとなった大貴族がとりわけ生物階への入階を頻繁に繰り返していたということは解っていた。生物階フリークの彼等は、ヘルズゲートに統合された後も、自由に生物階への入階をしたいとは望まなかっただろうか？　メリーはそんな可能性を思いついた。だとしたら記録に残された場所の遺跡はダミーで、本当のゲートは今でも生物階へと繋ぐ風を発生させているのではないか？　それにしても一体何年前からだ？　少なくとも数千万年が経っている。

装置は何を動力として動き続けている？

メリーはマクシミニマでの飛翔が困難だとわかると、数時間も歩きに歩いて、草原の端の古い墳墓にやってきた。風はどうやらこの墓の入り口に繋がる谷間の穴の中から吹いているようだ。メリーは帽子を離さないよう握り締めると、マクシミニマの結界で暴風から身を守りながら、注意深く中に入っていた。墓を荒らすつもりはないし、侵入するつもりだってない。風はどこから吹いているのか、それを突き止めなければ帰れないような気がした。奥に進むにつれ段々と明るくなってくる墳墓の中……いくつの分岐点を曲がっただろう。

墳墓内は石造りであったが、しっかりとして風化もしていなかった。誰の墓なのだろう……解階では墓を建てるという習慣がない。

石室から一段と強くなった風がパンドラの箱を開けたように吹き出している。メリーが巨大な石室に入ると、風はぴたりと止んだ。メリーは思わず前につんのめって、がくつと膝をついた。

「何なの……ここ」

そこには青い照明に照らされた石の棺がひとつ、無造作に置いてあるだけだった。メリーは石柩の前の台座に書かれた古代文字をたどるように指で追った。こんな事もあるうかと、と思って学んだのではなかったが、古代文字を学んでいて役に立った。難しい文字を読み飛ばしながら読むと、どうやらここはアルシエル以前の解階の皇の王墓のようだ。

台座の最後には当時の皇の好んだ図柄なのか、見慣れない植物が描かれていた。解階にはこんな花卉の大きな植物などなく似ているとしたら生物階の植物、ユリ科のヤマユリだ。メリーは他に読める古代文字がないか、石室を見渡した。よく見ると無数の生物階の植物のレリーフが彫刻されていた。メリーは一つずつ図柄をあらためる。何か法則性がないものか。天井にまでみっちり彫り込まれたレリーフを、もうあと一つというところまで調べ上げた。それらのレリーフが暗号であるとは断定できない、だが、かつての解階の皇の墳墓の中にゲートがあったとしたら、これほど取り壊しにくく、そして発見されにくいことはないだろう。希望的な考えだが、何もしないで帰るよりは随分ましだ。墳墓を維持するための仕掛け、その動力はアルシエルの配慮により電力供給されているようだった。その電力を引いてゲートの動力として利用しているのだとしたら……。メリーは最後のレリーフが、チューリップであることを確認した。チューリップ……これは……ユリとは似ても似つかないような形だけ……

「チューリップは……ユリ科だわ。これらのレリーフの中で唯一！」

メリーは俄然嬉しくなってきた、そのレリーフを中に押し込んだ。天井のど真ん中に刻印されたそれはすなりと、壁が抜けてしまった。狭い入り口に、細いウエストをねじりこむ。

天井の裏には、フランスの凱旋門ほどもある巨大なゲートが潜んでいた――。

ゲートは凱旋門ほどの大きさで、朽ちたりほころびたりしている様子はなかった。侵入者や盗掘者を遠ざける、草原一帯に吹き荒れるほどの風を生み出す装置を駆動させるため電力供給がなされていたお陰で、当時の旧家、サマエル家が皇の墳墓の中に脱法的に移転して隠したアウトプットゲート（生物階への入り口）は、あるじなき後も完全な機能を遺していた。ゲートはシャボン玉の幕のようにその境界面は様々な色に偏光していて、駆動状態にある。メリーは口紅を中に放りゲートの反対側を確認した。

「ない……」

リップスティックはいくら探しても、どこにも落ちていなかった。このゲートは確かに生物階へと繋がっているようだ。メリーはすぐに飛び込みたい気持ちにかられたが、慎重な彼女は飛び込んだ後の事にも思いを巡らせた。帰って、これるのだろうか？　こちら側のゲートは駆動しているが、向こうからこちらへ戻るためのゲートはまだ動いているのか。動いているとしたら電力供給が行われているだろう。もともとあった電源は長い月日の間にさすがに尽きているだろうから、電力供給が行われているとしたら人間のしわざだ。だとしたら何故、一度も人間がこちらに入ってこないのか？　メリーは足元を捜したが、人間の足跡や死体、遺留品などはなかった。

ゲートで向こう側に行ってしまうと、一方通行で解階に帰って来れないのではないか？

そんな気がしたのだった。どうしても帰るには公的なヘルズゲートを使わなくてはならない。ヘルズゲートを使えば事は明るみ出る。そうなればいくら名家といえど、お家取り潰しになってしまうだろう。メリーは、ここは飛び込みたい気持ちでぐっと我慢して、生物階側の（おそらくバッテリー切れを起こしている）ゲートを充電するための電源と工具を取りに戻るべきだと考えた。生物階で調達できればいいのだが……生物階では西暦1940年、電気はある。だが、電気を手に入れる為の貨幣の持ち合わせがない。メリーはふと、彼女の首にかかった宝石のネックレスの存在を思い出した。これはセルマーが生物階から土産に買ってきてくれたかなり高価なもので、これを金にすれば電気を買うくらいの事はできるだろう。父親には悪いが、これを使わせてもらうことにしよう。

そうと決まればここには用はない。まだ見ぬ人間世界をこの目で見るのだ！ メリーは長いドレスの裾を両手でたくり上げると、物理学的境界、光すらも捕捉する巨大な穴の向こう、私設ゲートをくぐって生物階へと入っていった。メリーの身体は一度分子レベルにまで分解されてトンネル効果で空間を抜けると、ゲートにより分子転送され、生物階で分子再構成されてもとの姿に戻った。分子崩壊―再編成の形式をとる解階の門は、生体分子の転移がうまくいかなければ死んでしまうこともある。その点では神階のゲートは形而光学的転移といって、分子崩壊を起こさない転移形式をとっていてより安全だ。メリーは首をかしげたり、腕を鳴らしてみたり、駆け足をして、どうやら異常がないことを確かめた。足踏みをするコッシーン、コッシーンと音が反響して響いた。

”思ったより、あっけなかったわ”

メリーは周囲を見渡した。真っ暗闇だ。しかも音の反響からして、どこかの洞窟か地下道のような場所だ。ここは、どこなのかしら。サマエルという悪魔が登場するのは、確かイスラエルの方だったか

ら、その伝承を信じるとすればサマエル家の貴族はイスラエルの辺りにゲートを設置していたということになるが、そうばかりともいえない。たまたまイスラエルで姿を見せただけなのかもしれないし……。メリーは彼女の愛用するマクシミニマを取り出した。こいつも、壊れていないればいいのだけど……。これは一流のメーカーに作らせた特注の品なので、そう簡単に壊れてもらっては困る。父親もこれの類似装置を持って生物階へと入階していたから、大丈夫だとは思うけど。

「位置座標を特定しなさい。地球の経度、緯度で計算して」

生物階では解階のように通信衛星のない時代だが、マクシミニマの演算髑髏は生物階でもきちんと起動した。ほっとして胸をなでおろす。

”ここは、東経34度、北緯32度です”

「やっぱり、イスラエルだったわ。マクシミニマ、対応するインプットゲート（解階への入り口）はこの付近にあるのかしら？」

”対応するインプットゲートはこの付近にはありません”

マクシミニマの答えには落胆したが、正確なナビゲートに勇気付けられた。アウトプットゲート（生物階への入り口）と、インプットゲート（解階への入り口）は、転移先に作られる事が多い。つまり今回の場合は、生物階に出たこの場所、普通はここにゲートが設置されている筈だ。だが、セキュリティを万全にするためアウトプットとインプットをずらす貴族も稀に居て、サマエル家はどうやらそのタイプのようなのだ。とりあえず、外に出なければ話にならない。何日も外出をするとは言わなかったので、今日のところはインプットゲートの所在を突き止めてから、一旦家に帰らなくてはならない。そして父親に長期の旅行に行ってくると言って、もう一度

ここに来る。今日は下見ができればそれでよい。

メリーは通路のような場所を歩き続けた。解階の住民である彼女は暗闇には目が慣れていて、足をとられることはない。だが光を渴望せずにはいられない。この陰鬱な場所から外に繋がる、そして人間世界への扉を開いてくれるその光を。インプットゲートの所在は半径5000m圏内に近づけばわかる。何時間も飛び回れば必ず見つかるだろう。マクシミニマのバッテリーは満タンにしてきたから、飛んでいる間に力尽きる事もないだろうし。

それほど歩かなくとも、天井からはいくつもの光が筋となって差してくる場所があった。まだ見ぬイスラム社会のバザールのテントの下を歩いているような気分だった。上をよく見ると何やら小さな出口が見える。メリーはひょいっと飛んでハッチをあらためた。ハッチの裏側には、インプットゲートの正解な位置情報が古代文字で記載されていた。捜す手間が省けたというものだ。それによるとインプットゲートの場所はどうやらネパールにあるようだ。

ハッチを開けて出た所は、古びた倉庫だった。

倉庫の外に出ると、彼女の待ち望んだ人間社会が広がっていた。イスラエルにはパレスチナ人がイスラムの、独特の風景を作り出していた。メリーは彼女が女性だったことに気づき、すぐに持っていた黒いストールで顔を覆って目だけ出して、イスラム社会に順応する。エキゾチックな顔立ちのメリーは、イスラム女性の中でもそれほど目立ちはしなかった。初めて目にした市場の人間達のせわしく行きかう様子、声を張り上げる様子、物乞いの少年、親とはぐれて泣く少女。香辛料の香り、水煙草を飲む老人。決して豊かな国ではなかったが、メリーには魅力的だった。アラビア語は勉強していなかったもので、何を話しているのかわからない。メリーが勉強した言葉は英語やフランス語、ドイツ語などの欧米の言葉だ。ここで話し

かける事はできなかった。

インプットゲートの場所を世界中を飛び回って捜さなくともよくなったが、慎重なメリーは先にゲートの状態を確かめたくなくて、人目のつかない場所にまで行くと、マクシミニマを持ち飛び立った。メリーは途中のとあるイギリス植民地で身に着けていた指輪を売って金を獲ると、ネパールまでの国々をマクシミニマで飛ぶ間に、新聞をいくつか購入し、世界地図も入手した。家に帰って翻訳して、現在の世界情勢を知るためにだ。どうやら生物階では第二次世界大戦というものが勃発していて、随分と長い間戦争が起こっているということがわかった。平和な国を訪問するか、それとも激戦区に行ってみるか。どの国を何日の日程で訪問するののかも、綿密に計画をたてたかった。家に帰ってじっくり考えたいところだ。まずは家に帰るためにインプットゲートをまず捜さなければならない。

メリーが心配しなくとも、ネパールにあるゲートは壊れてなどいなかった。名家、サマエル家の私設ゲートはさすがに当時の技術の粋を集めて作らせたもので、ソーラー発電モードと電力セーブモードがフル装備されていた。人を寄せ付けない天然の立地条件と乾いた気候がゲートの腐食を妨げ、見通しのよい風吹く断崖絶壁の丘に設置されたゲートは太陽の光を燦燦と浴びて、バッテリーセーブを示す青い明滅を繰り返していた。

メリーはほっとして、その日の大冒険を終えた。

*

メリーがヨーロッパの様々な人々に触れながら、生物階への入階を繰り返して暫くが経った。

彼女はナチスドイツの台頭と虐げられるユダヤ人の姿に、とりわ

け興味を引かれた。ゲットーや強制収容所に送られるユダヤ人の子供達の列を見送れど、どうすることもできない。人々を助けようと思っても、解階の住民であるメリーには彼らを養うことはできないし、ひたすらに無力だった。たまたま生物階に来ることのできた時代が平和な時代ではなかったことを残念に思ったが、それでも、メリーはできるだけだけの事をしようと考えた。

ゴールド

金を解階から持ってきて生物階で貨幣交換する、この方法でだ。

解階では、金は石ころほどの価値しかなく、またそこいらに転がっているものだったから、金を大量に持ってくればかなりの額にはなるだろう。その莫大な資本で工場や事業主を買収し、ユダヤ人を雇う。市場での金の価値を下げるほどに金を持ち込まなければ、目立つようなことはないだろう。

なんのことはない、この発想はナチス党员でありながらその莫大な資本で千人以上のユダヤ人を救ったオスカー・シンドラーに影響をうけたものだが、それでも資本力というならシンドラーよりメリーの方が勝っている。彼女は終わりなき戦争の犠牲者たちのために、少しでも何か救いの手を差し伸べたいと思った。アジアで台頭する軍国主義国家である日本と、植民地化された人々も気になった。だが、困った事にメリーは日本語をはじめとする、極東アジアの言葉を学んでいなかったのもので、それは困難だった。それに、エスニックな顔立ちをしているメリーでは、アジア人社会に警戒されると思ったのだ。

残念だが、できる事をするしかない。

メリーは数回に分けて金を解階から持ち込み、ドイツの貨幣へと交換して財力を蓄えていった。生物階に入階した回数が20回を越える頃には、買収する先の企業も見つかった。あとは買収した企業主にナチスと交渉させて、ユダヤ人を大量に雇えばいい、手はずは

整ってきた。

＊

その頃、第二次世界大戦の戦局に介入するため生物階降下中だった軍神、ユージーンⅡマズローは法務局から勅旨を奉じた使者より、ある指令を受け取った。法務局局长 サドルⅡレクタムの法務局印、陽階極陽、主神、ヴィブレⅡスミスの御璽、そして解階の皇アルシエルⅡジャンセンの印もある、二階間で取り決められた条項に違反した公的な指令だ。

”違法に生物階に入階を繰り返す魔女、メファイストフェレスⅠⅠを神階Ⅰ解階 不可侵条約 第12条により抹殺せられたし”

武型神であるユージーンはこういった汚れ仕事をよく依頼される。軍神はどちらにしても手を汚すので、ついでに始末してくれといったものだろう。ユージーンだって好き好んで軍神になった訳ではなかったから、嬉々として殺しをするような性格ではなく、命を奪う事は躊躇する。

”魔女として生きる権利はあろうに、警告もなしに抹殺とは……”

彼女を殺害すべき場所も指定されていた。彼女はヘルズゲートではなく違法な私設ゲートを使うそうだ。陽階の偵察衛星によってインプットゲートの詳細な場所も特定されていて、待ち伏せをしていて抹殺しろというのだ。法務局の命令に逆らう事は出来ない。ユージーンは仕方なくネパールに向かった。

＊

メリーはその日、彼女の企てが思うような軌道に乗り始めている

事に対して嬉しくて、いつになく気分がよかった。

今日も一仕事終えて、夕方になる頃にはマクシミニマで時折飛行機とすれ違いながらネパールの山頂を目指す。生物階への入階は3日に1回の割合になってきた。父親にも気付かれていないし、全てが順調に思えた。

ネパールの秘境にあるいつもの山頂、人も動物も寄り付かないゲートがある場所に、彼女は鼻歌を歌いながら降り立った。するとどこからともなく、岩陰から黒いスーツを着た金髪の男がビリヤードのキューのようなものを持って現われた。メリーは特にそれが誰だと思わずに、登山用の杖を持った欧米系の探検家だろうとぐらいに思った。登山家にしてはスーツを着ているのが妙だが。メリーは何も言わず、彼と一定の距離をとって対峙した。

「ごきげんよう。登山家かしら？ スーツを着てご苦労さんね」

メリーは微笑みかけたが、彼は悲しそうな顔をしただけだった。登った方がいいが降りられなくなって、心細くなっているのだろうか。メリーは手助けするつもりで、男に語りかけた。

「ふもとまで、下ろしてあげましょうか？」

男は僅か数メートルの距離にまで近づいてきて、なにやら数枚の書類を掲げて見せ付けた。

「その必要はない。メファイストフェレスⅡメリー、お前を神階Ⅰ解階 不可侵条約 第12条違反により、委任執行官である陽階神第73位、ユージーンⅡマズローが処刑する。量刑は死刑だ、いかなる恩赦もない」

「か……神……？」

「抵抗しなければ楽に殺してやる。だが抵抗すれば、苦しむ事にな

るぞ」

彼は冷徹にそう断罪した。

彼の提示した勅旨には、アルシエルの名も入っていた。神階と解階の条項に違反するとはそういうことだ。アルシエルⅡジャンセンも味方をしてはくれないし、憐憫の情を向けてくれる事もない。罪の意識を忘れ、いささか調子に乗りすぎた。彼女は生涯で初めて神と対面して、恐ろしさのあまりメリーがあとずさった時には、ユージンという神はG-CAM(Grasp the Context by Analytical Microcosm)という攻撃的神具を戦闘モードで起動していた。

見たこともない凶暴なエネルギーが、彼を中心に収束している。ゲートまでの距離はあと20メートル。

死が、神の姿を借りて唐突に降り注いできた。

外伝？メファリストとユージーンの邂逅―門の向こうに1（後書き）

2に続きます。

外伝？メファイストとユージーンの邂逅―門の向こうに2（前書き）

外伝、 「門の向こうに」 1の続きです。

外伝？メファイストとユージーンの邂逅―門の向こうに2

メリーはマクシミニマを握り締めた。

戦闘用モードもついているが、扱った経験がない。解階よりはずっと安全だとされている生物階でまさか命の危険に見舞われるとは思ってもしなかった。

しかも、こんな形で待ち伏せをされていたとは……。

相手は軍神だと名乗った。体格はメリーより少し背が高いぐらいでそれほど大きくはないし、筋骨隆々といった風でもないが、余分な筋肉をすらそぎ落としたしやかな身体のラインは洗練され、戦闘のプロだと見てとれる。解階の住民と互角以上に戦える委任執行官という立場であるということから、かなり腕のたつ神だと予想される。

たとえ逃げても、必ず追いつかれる。下手に逃げて背後を見せるのは危険だ。

ユージーンと名乗った神は決して神らしき威光もプレッシャーもなかったが、疑わなくとも本物だとわかった。彼は本物の神で、そして彼女は今まさに殺されようとしているのだと。助けを呼んでも無駄だ、ゲートに駆け込みたくとも、彼はどうやらゲートを壊してしまっているらしかった。どうやら生きては解階の門をくぐれない。命乞いをするつもりはないが命は惜しい。メリーは近づいてくる冷酷な軍神に怯えて、足がすくんで動けなくなってしまった。

”考えなさい、何か、危機を脱する方法はないの”

メリーは必死に考えを巡らせる。ああ、どうしてこんな簡単な事を思いつかなかったのだろう。

これはまさに一時凌ぎに過ぎない……生物階に逃げ場などないと

いうのに。追跡転移などされてしまったらひとたまりもないというのに、それ以外に何も思いつかなかった。

メリーはマクシミニマを構えると、転移で消えてしまった。

追跡転移の心得のなかったユージーンは面食らった。まさか神でもない解階の住民が転移を使えるとは思わなかったからだ。だが：たしかメファイストフェレス家は人類学者の家系で、頻繁に生物階に出入りしている。セルマーが神の用いる転移方法を研究しツールに反映させることは、それほど難しくはなかっただろう。殺害を躊躇していたので隙を与えてしまった。彼女は明らかにユージーンを見て怯えていたし、武術の心得がなさそうだった。無力な彼女を殺害することは、ユージーンには痛ましく感じられたのだ。

遺言ぐらい聞いてやろうと思った甘さが、隙を生んでしまった。

「まあいい……どこへも逃げられはしない」

ユージーンの心情としては、できることならこのまま見逃してやりたかった。だが、そういう訳にもいかないのが陽階神の悲しいさだ。

主神の御璽の入った令状を出しておきながら違反者を神階がみすみす逃したとなれば、神階の面目は丸つぶれだ。ユージーンは危機管理マニュアルの通りに携帯電話で法務局に連絡をし、生物階へ入階中の解階の住民と法務局の使徒に捜索の協力を要請した。捜索には少々、人手がいる。世界中からたったひとりの魔女を見つけることは、ユージーンの手には余る仕事だ。神階、そして解階の両側面から魔女狩りをする。逃げられる筈がなかった。

一両日中には発見され、そして処刑されるだろう。たとえユージーンが手を下さなくとも。

解階からの刺客、同類に同類を殺させるより、ユージーンが早く彼女を見つけ出して殺してやる方が彼女のためだと思った。解階か

らの刺客が、彼女と顔見知りではないとも限らない。ユージーンはもう一度念入りにゲートを破壊すると、G-CAMに検索をさせた。彼女のやろうとしていることはわかっている。生物階に現存する太古のゲートを見つけ出し、解階へと逃げ込むことだ。ADAMからダウンロードしたG-CAMの検索結果によると生物階に現存するインプットゲートは3つ。そしていずれもが使用不可能だ、修理をして使えるようになるまでには1日はかかる。それだけを確認し安心すると、ユージーンはしらみつぶしにゲートの周辺を搜索する事に決めた。

メリーは瞬間移動でドイツの郊外の村に転移した。ここには、古のゲートがあるのだ。壊れているが修理をすれば使える可能性がある。メリーは必死だった。こんなところで殺されてなるものか。父を裏切ってしまうこととなり、メファイストフェレス家は断絶する。自分ほとんど親不孝娘だと何度となく悔いた。今日、どうして生物階へ来ることを思いとどまらなかったのだろう。生物階にもう来ないと思っていれば、こんな風に命を狙われる事もなかった。軍神は追いかけてくるだろうか？

今のところ追跡転移をされている感触はない。

まだ、大丈夫よね、と彼女が後ろを振り返った瞬間、彼女は凄まじい衝撃を受けて吹き飛ばされた。

背中からG-CAMでしたたかに殴られたのだ。メリーはもうその一撃だけで肋骨を何本か折られ、吐血をした。やぶれかぶれにマクシミニマを振りかざして電磁波を撃って抵抗したが、てんでデータラメに撃った攻撃は彼には一発も当たらない。スピード、パワー、そして身体能力、彼は神具の能力を一切使用していないのに、まるで相手にならなかった。彼女は下手に抵抗してしまったがために、まるで雑巾のように蹴られ、蹴りつけられ、そして全身を骨折させられ血だるまになった。全身をのた打ち回らせた程の苦痛に苛ま

れる。か細い息、あふれ出す血液、そして朦朧とする意識。

信じられない、こんな目に遭わなければならいなんて……。もう抵抗などできなくなってしまった時、彼は上から覆いかぶさって両手を塞ぎ、彼女を覗き込んだ。彼は息も上がっていない。悔しい……。強くあるために生きているような解階の住民が、神に負けるなんて。彼に押さえつけられた手首は熱く、体中が痛めつけられて熱でほてった。

折れたアバラが肺を貫通して苦しい。

「……もう抵抗はしないのか」

「……き……気が済んだわ。こ、殺しなさいよ、早く！ 早くしなさい！」

「最期に、お前が何故生物階に来たかったのかを知りたい」

彼はメリーの瞳の奥を覗き込むようにして、メリーはその空色の瞳を何故かしっかりと見つめていた。何をされているのかわからないが、ついと、彼女に覆いかぶさった軍神の後ろから見える空の色と重なる。ああ、妾は……この青い空のもとで、死んでゆくのか……。それなりに悪くない生涯だった。生物階の青い空の下で、死んでゆけるのだから。心残りは父親に恥をかかせ、悲しませてしまうことだけだ。だが、こんな親不孝な娘なら、居ない方がいいのかもしれない。

メリーは覚悟を決めて静かに目を閉じた。

いつまで待っても、最期の一撃はやってこなかった。軍神はメリーから身体をどかせ、傍らに座した。彼は呆然としているように見えた。

「早く……殺してよ。じらさないで、痛いんだから」

長く苦しませる事が目的なのか？

メリーはこの世のものとも思えない激痛の中、掠れた声で彼に死を乞うた。失血死か、衰弱死はごめんだ。解階の貴族の死に様として不名誉だ。潔く貫かれて死にたい。

「お前は魔女ではない。お前の心は……」

彼はポケットから小さな小瓶を取り出すと、彼女の傷口から出る血液を集めて蓋をした。小瓶の数は5本あり、5本分をいっぱい血で満たした。彼はそれを懷におさめると、今度は彼の手首を切つて、メリーの口に押し当てた。口の中に、彼の血液が滴ってくる。何だこの嫌がらせは。何たる屈辱と不名誉。メリーは恨めしそうに彼をにらみつけた。彼はメリーの髪の毛をそつと撫でていた。この神は一体、何をしようとしている？ そんなことを考えていたとき、メリーの身体から苦痛が消えた。そして徐々に、身体が楽になってくる。彼は手首を彼女に噛ませたまま、そつと彼女を抱き起こした。口の中が彼の血でいっぱいだ、気管に入り、むせそうになる。

「そのゲートを修理して解階に帰れ。お前を殺したしるしに、その血を法務局に提出しておく。わたしの血を飲めば傷はやがて癒されるだろう、その後は二度と生物階には出てくるな。戦争はじきに終わる、いや、終わらせてみせる――わたしが不甲斐ないばかりに、このような目にあわせてすまなかった」

「え……え？」

軍神はメリーに憐憫のまなざしを向けると、なんとも悲しげな顔をして立ち上がり、どこへともなく消えてしまった。彼の心に何がよぎって、殺すの思いとどまってくれたのだろう。

メリーは彼に言われたとおり傷が跡形もなく回復しているのがわかった。彼の血はメリーの薬になるようだ。おそらく治癒血という

やつだ。彼は血を与えて傷を癒し永遠の命を授ける、まるで古い伝説にある神のようだ。彼は何だったのだろうか？　メリーには理解ができなかった。彼女は漠然とすっかり回復した腕でインプットゲートを修理しながら彼は慈悲というやつをくれたのではないか、と思った。

もしかして、人間を助けようとしていたから助けてくれたのか？
彼はメリーの心を読んで殺さなかったのか？

神は何故メリーを殺さなかったのだろうと、反芻するようにメリーは問い掛け続け、あれこれと考えてしまつてゲートを修復する手がおぼつかなかった。口の中に残る神の血、そして自らの血。それらは混ざりあい、ひとつとなつてメリーのか細い身体の中に溶ける。あれほど冷酷そうだった神の一片の慈悲を受けて命をとりとめた。メリーは解階の住民であり、信仰などにはなから興味がない。だが彼女はひとつの命の駆け引きをし、圧倒的な力によって命を略取されかけ、次にそれを諦められた。学者で戦闘能力のないメリーとはいえ解階の住民をしのぐ生物学的スペック、存在感、致命的な怪我を癒しうるその神秘性。

どれをとつても敵わない、ただ強いだけではない、彼はまさに神の気品に満ちて、気高くすら感じられた。

彼にもう一度会う必要があると感じた。

軍神、ユージーン・マズロー。忌々しくもあり、感慨深いその名前だけは忘れていなかった。

命からがら自宅に戻るなり、玄関先で父親に頬を撲たれたのは当然だ。信じていたのに、と何度も男泣きに泣かれた。これからアルシエルのもとに謝罪に引きずって行って、許しが得られなければ父親の手でメリーを殺すと言われた。彼女は決死の覚悟でアルシエル

――――

陽階 軍神

ユージーンⅡマズロー様

拝眉の氣を得ておりませんが、書簡をあてさせていただく失礼をお許しください。わたくしめは解階の住民、メファイストフレスⅡメリーと申します。先日はあなた様の格別なご高配により、わたくしごとき者の命をお救い下さり、まことに有難うございました。あなた様の寛大な御心に触れまして、感謝の言葉もございません。解階に戻りましたその後は、わたくしめの犯した罪の重さを振り返り、自宅にて謹慎してございます。

爾後、わたくしめの生物階への入階は断固としてなきことを、固くお約束申し上げます。

命をお救い頂いたご恩にわずかばかりでも報いたく存じまして、書簡を宛てさせていただきました。まことに厚かましい事とは重々存じておりますが、謹んでお願い申し上げます。

わたくしめをあなた様の使徒として召抱えていただくことはできませんでしょうか。末席にても喜んで、わたくしの罪の懺悔といたしましても誠心誠意、身を粉にしてもご伺候申し上げたく存じます。甚だ勝手で、かつ厚顔なお願いで恐れ入ります。大変お手数ではございますが、ご返事いただきたくお願い申し上げます。

謹言

エレスⅡメリー 印

1942年 5月 9日 メファイストフ

――――

この短い書簡は、第二次世界大戦の戦局操作の真っ只中にいるユージーンの執務室に届いた。

長く続いた戦争により経済は疲弊し、農地や街は廃墟と化して人々は焼け出され、世界中では数百万人もの犠牲者を出していた。彼は連日連夜の作戦会議で心身ともに疲れ果てていた。そんな時に送られてきた空気を読まない文面、拍子抜けのする手紙を受け取って、彼はがっくりと肩を落とした。以御も立ち入らせずひとりで手紙を読みながら、最後まで読む頃には深い深いため息をついた。

「折角助かったのだから、おとなしく謹慎していればよいものを……」

彼にとってその一通の手紙は、ありがたいものでもなんでもなく、ただのおせっかいかそれ以下のこと。はつきり言ってしまうえばありがた迷惑でしかなかった。

あわやユージーンに殺されかけた解階の魔女が、凝りもせず書簡を宛ててきた。しかもよりによって、使徒にしてくれという。

折角法務局を欺いて命拾いをさせてやったというのに、彼女はユージーンの立場というものを少しも理解してはくれないようだ。遠慮がないあたりはさすが、解階の住民。ユージーンはこの申し出をしつかりと断っておかなければ後々面倒なことになるとわかっていた。きちんと拒否をせず下手に無視をして神階に押しかけて来たら最悪だ。そして解階の住民はそれを躊躇などしてくれない。

ユージーンはメファイストフェレス家の住所をADAMで調べて、正式な書簡を直通で宛てた。

内容も格式ばって、取り付くしまもないほど、解釈の相違など与えないように慇懃な言葉でこんな内容をしたためた。まず、メファ

イストフェレスが使徒になるなど不可能だ。何故なら神と使徒の関係は相利共生に基づく特別なものだ、したがって解階の住民であり何ら利害関係もないメファイストフェレスとは関係が成立しない。メファイストフェレスは自分が既に殺した事になっているので神階から隠れているべきだ。付け加えて使徒にするには実力不相応だ、と。これほど冷たい言葉を受け取って失望し、自分を憎んで、諦めてくれればよいとユージーンは思った。ユージーンは血も涙もないそんな内容の書簡を宛てて、返事が返ってこなかった事を多少は傷つけてしまったかと気の毒に思ったが、激務の中ですぐに彼女の事など忘れてしまった。

だが彼女は、少しも諦めてはいなかったのである。彼女はユージーンの手簡を読んで、彼はメファイストフェレスに努力をしろと言っているのだと考えた。今の彼女では、何もかも彼に劣っているにありあわない。努力をして、彼の使徒となるに相応しい強さを手に入れば振り向いてもらえるのだと感じた。メファイストフェレスは謹慎中に名門の武家であるバフォメット家の武術指導も行ったという一流の武術師範を雇って、イロハのイから武術を教わった。彼女はペンという剣で解階の実力社会を生き抜いてきたのだが、武術の才能が皆無だった為に学者になったのではない。

父子ともに学者としての道を歩んできたので意識をしたこともなかったが、メファイストフェレス家は解階の女皇、アルシエルの血を引いている。武術の素養は彼女にも備わっていた。ただそれを忘れていただけだ。彼女は研究を禁じられて自宅謹慎を余儀なくされていたがために、ひたすらに強く己を鍛え上げる事に集中すればよかった。多くの解階の貴族達が所有しているのと同様に、メファイストフェレス家も遅ればせながら、自宅の地下に巨大な武道場を造らせた。

セルマーはあれほどうつ病じみてため息ばかりついていた娘が、

ユージーンを超える事を目標にして少しずつと前向きになってきたことを最初は喜んでいたが、少しずつ深刻に考えるようになった。7年前は5分とまともに動けなかったというのに、師範と1時間も組み手を教わっている娘を、セルマーは怪我でもないかとはらはらと見守っていた。執事は観覧席のセルマーにティーセットを給仕しながら、こう言った。

「お嬢様は上達がお早いですな。すっかり逞しくおなりになって」「武芸を磨く事はよい事だとは思うがね。親としてはなんとも複雑だよ、娘がまさか神に熱をあげているとは……もう7年ものだ。飽きっぽい娘が……これはゆゆしき事態だぞ」

メリーはひゅっと思を吸い、練成していた気圧を師範にぶつけた。細い腕が硬直し、鋼のような筋肉がじつとりと汗ばんだ肌にしなやかに隆起する。巨大な泡が弾けたような音とともに衝撃が波となって伝播する。その凄まじさときたら、装甲の強化された武道場の床に爪あとが走るまでになっている。師範が飛び下がって避けるのを予測して、メリーは素早く移動し、上空から肘で狙いを定めて師範の背中を狙って叩き落とす。叩き落された師範がまた武道場の床を割る。セルマーはティーカップを置くと愛用の電卓を取り出し、今日の戦闘によって受けた損害を算出した。また今月も、バカにならない金額が飛んでゆく。地下武道場を、この7年で3回も増改築をした。メリーと師範の日々の戦闘によって、何度壊されたかわからない、とセルマーは振り返る。

マクシミニマというツールを用いずに生身の拳だけで、今はどんな硬質の物体も砕く事ができるようになった。さすがはアルシエル家の血筋というか、彼女の飲み込みの速さは異常でもあった。特注のバトルスーツを着て引き締まった身体をしならせ、長く艶やかな黒髪をたなびかせた彼女はまるで修羅のようだった。それでこそ解

階の上流貴族の品格だ。師範は迎撃しながら多様性を増す彼女の攻撃を見て、満足そうに頷いた。彼女は武道場に架かった大時計を見て訓練の時間が終わった事に気付くと、物足りなそうに着地をし、間合いを取って深呼吸をした。

「メリー嬢、卿はどこまで強くなるつもりなんだ？」

「あの軍神に、目にものを見せてやりたいのよ」

「それならもう充分だぞ。この7年の間に、枢軸神と対等に戦えるレベルにまで達している。神つてのは解階の貴族ほど強敵ではない」
メファイストフェレスも確かに、7年前までは足元も見えなかった軍神に対して、もう勝機は見えたと感じた。だが辛勝というのでは物足りない。あの軍神には何が何でも、圧倒的な力の差というものを感じさせてやりたい。かつて自分が砂をかむような思いをしたように。彼を捻じ伏せ、たつぷりと痛めつけて、そして遠慮もなく軍神の上に乗って勝利に酔いしれたいのだ。

解階の貴女に恥をかかせ、本気にさせてしまった罰を与えてやりたい。メリーは力を手にして、自信を取り戻しつつあった。

「ただ勝つだけではだめなの、たつぷりと痛めつけてやらなきゃ気がすまない。甚振られて、殺されなかったのよ。妾にとってこれ以上の屈辱はないわ。同じ屈辱を味わわせてやらなきゃ」

「はは、これは頼もしい。メファイストフェレス家は二代目から武家を名乗った方がよさそうですね」

文字通り百戦錬磨の武術師範も顔負けといったようだった。

セルマーは武道場の修理費に苦しめられつつ、それから更に3年もの間、彼女は打倒軍神をのみ目標に据えて、一日も休まず訓練に勤しんだ。

＊

1952年11月2日、126歳の軍神 ユージーン・マズローは、エニウェトク環礁上空にいた。

おととい、この場所で人類初の水爆実験、アイビー作戦（Operation Ivy）が行われた。十数年前、ユージーンが人類に齎した核の知識は、神の手を離れて人の手に渡り、一人歩きをはじめていた。彼は未熟であったがために、核での戦争終結方法しか思い至らず、その後の影響を考えなかった。結果としてこのような事態を招いてしまったのだと強く後悔した。技術は一過性のものではない、発展し、進化してゆく。この恐るべき兵器は、ユージーンが身を持って体感した人類初の原子爆弾の出力15キロトンをはるかに上回る10・4メガトンもの出力を発揮した。

人類は、神の手を離れてどこへゆくかとしているのだろう。

彼等は平和であることを、平和であろうとすることすらも望まないのでか。ユージーンは夕空のもと、切なくなって首をふった。突如、誰も居る筈のない背後から声がした。ここは上空一千メートル、人間ではない。

「戦争は終わっても、平和とは程遠いわね。軍神さん」

物思いにふけっていて、気配を察知することができなかった。ユージーンは振り向きざまにアーカイブからG-CAMを抜いた。背後には、黒いドレスを纏い、ビロードの帽子を目深に被った女が、長い黒髪を気持ちよさそうに風に遊ばせていた。魔女、メファイストフェレス IIとの再会である。

「ひとえにわたしの力量不足だ。お前とは約束したな、戦争を終結させ平和な世界を取り戻すと」

「おひとりでできないなら、やはり妾の力が必要なのではないかしら……ねえ?」

彼女は帽子の先を指先でちょいと上げて、不敵に微笑む。自信に満ちた顔だった。解階の女性は戦いに身を置き続けるよって美しくなるという。ばっちりと決まった濃いメイクが派手な印象を受けるが、彼女は以前より格段に美しくなっていた。自信と誇りが彼女を磨き上げたのだろうか。10年前、ユージーン目の前で怯えることしかできなかった彼女とは別人のようだ。ユージーンは彼女に興味を引かれる以前に、法務局の偵察衛星によってこのやりとりを監察されている事を気にした。彼は目をそらし、偵察衛星を捜した。高度3000メートルほどの、地上とごく近い距離に、光学迷彩を纏って周回している。

メファイストフェレスは自分以外のものに興味を引かれて目をそらしているのが気に入らなかった。

「こんなにいい女がいるっていうのに、何にうつつを抜かしているのかしら……。法務局の偵察衛星が気になっているのなら、妾が破壊しておいたわ」

ユージーンは胸をなでおろした。なかなか気がきいている。もしも偵察衛星にばっちり撮影されていたのなら、すぐに法務局監察課から執行官が逮捕状を持ってやってくるだろう。十年前に殺していると報告した筈の魔女が生きている。公文書虚偽記載および背任の罪だ。

「配慮に感謝する。わたしに何の用だ。生物階にはもう出て来るなと言ったはずだが」

「決まってるじゃない。あなたの使徒にして欲しいのよ」

「それは出来ないと返事をした。その後、お前から返事が来なかったのは、了承したからだろう？ 問題は十年も前に終わったはずだ」ユージーンは冗談ではなく、本当に終わったのだと思っていた。返事が来ないということは、彼女が納得したからだろうと思った。

そして気が移ろいやすい解階の住民が十年も自分に固執しているとはどうしても考えられなかったのである。

「あなたが提示した条件を、クリアするために修練を積んでいたからよ。あなたはこう宛てたわ。使徒となるには実力不足だ、と」

条件はそれだけではなかったとユージーンは思うのだが、彼女はそれだけしか印象になかったようだ。

彼女はようやく待ちに待ったこの時がやってきたかと思うと、嬉しくてたまらなかった。これから始まるめくるめく時間に、体中がほてってくる。

「さあ、訓練の成果を見せてあげるわ」

「……わたしは、無益な争いは嫌いだ。この間は勅令によりお前を討伐しなければならなかった。だが今は争う理由がない」

「馬鹿にしないで！ 妾は、あなたに殺されかけたのよ！？」 今更そんな事を言わないで！」

戦う理由がないだと？ メファイストフェレスはその言葉を聞いて、許せなかった。この十年間を何だと思っている。力不足だと言われたから血を吐くような訓練を積んできた。

戦闘などという野蛮な事から身を引いて、学問に全てを捧げ、貞淑に生きてきた貴女だったのに。

学者生命十年を棒に振ってだ。それを、争う理由がないだと？

「……許せない！ 思い知らせてやるんだから！」

メファイストフェレスはマクシミニマを戦闘モードにして構え、起動した。彼女は風を切って踏み込み、ユージーンの懷に飛び込む。速い！ ユージーンはG-CAMの起動が間に合わず、G-CAMのうちで最も固い部分、金属のエンブレムの部分でマクシミニマでの攻撃を受け止めた。ギリギリと押し付けられる彼女の攻撃を、

防ぎきれずに圧されている。腕力で、彼女に負けているのか……？
ユージーンは身の危険を察知し、マクシミニマの攻撃を力任せに弾き飛ばすとかかなりの距離をとって飛び下がった。G-CAMにコマンドを与える時間を用意しなければならなかったからだ。高度一千メートルの戦いが、突如として始まった。ユージーンは手加減は無用のことと、G-CAMを起動した。

彼は早口で立て続けにコマンドを与え、G-CAMの基盤が赤く青く脈打ち始める。

”Grasp the Context by Analytical Microcosm system consolidate
n!”

（分析的宇宙 依拠 現象把握機構、開戦）

彼は冷静にコマンドを与えながら、体勢を立て直し、G-CAMを斜に構えて突進した。

”Circle of War! 8 Th Tune Close Ring! Concentration!”

（展戦輪！ 第8閉環集積）

激しい8色の光と共に、G-CAMを中心に直径10メートルほどの光の円陣が展開された。現れた陣形は、軍神のシンボルである展戦輪。外部磁場を攪乱させ、相手の生体内リズムを破壊し気絶あるいは死に至らしめるものだ。ユージーンは短期決着を狙い、彼女を気絶させようと試みた。彼女の身体は色とりどりの8色の光の環に包まれ、光は彼女を基点に収束をはじめめる。

光に締め付けられながら、彼女はビロードの大きな帽子の下で薄くあざ笑った。

”El ohim—El ohim—Dictor—Enomas—El—Es—Olimuk……”
(エロヒム—エロヒム—ディクトル—エノマス—エル—エス—オリマク)

彼女は呪術じみたコマンドをマクシミニマに与える。彼女のツールの演算髑髏が、まるでカウントダウンをするように赤い明滅を始めた。暗号化されたコマンドは攻撃を類推させない。古来より魔女や悪魔が呪文を唱えるのは、ツールの性能を機密にするためだ。そう、それはピッチャーとキャッチャーの間で決められたサインのように、Toolによって異なるコマンドがあり、それを他者が類推する事は不可能だ。解りやすいコマンドを与える神具とは違い、相手を確実に出し抜く事ができる。

ユージーンは起動をして2tにもなった重い神具をしっかりと抱えて構えながら、その様子を不気味そうに遠巻きに見ていた。彼女は何のコマンドを与えたのだろう。彼女は光の環に包まれながら、ゆつくりと、ユージーンに向けて髑髏を掲げ持った。刹那、レーザー光のような赤い光がショットガンのように放出され、GCAMの絶対圏内を突き破って、更にユージーンの神体を覆っているフィジカルギャップを破壊し、彼を撃ち抜いた。10数箇所もの被弾をくらって赤い光が貫通し、それらによって直径5cmほどの風穴を開けられた。神はくぐもったうめき声を出すと、まっさかさまに海面に堕ちていった。ツールは使用者の精神力やオーラの潜在量を素直に反映する。そんな……体力ばかりでなく、精神力においても彼女に劣っているというのか。

墜落しながら、彼はそんな事を思った。

ユージーンが集中を殺いだことで、GCAMから放たれていた光の環はメファイストフェレスから解けて落ちていった。まだだ、

まだまだ……。メファイストフェレスは容赦なくユージーンを追った。ユージーンが海面との衝突し、大きな水柱が上がる。その水柱をまっすぐに追いながら、メファイストフェレスはマクシミニマを握り締めた。彼女はもう次のコマンドを与えている。

”Magi—OI—La—Vadra—Incu—De—Sel—
Or”

（マギークルーラーヴァドラーインキューデーセルーオール）

ユージーンはG—CAMの重みにもっていかれて、海底に沈んでいた。それでも彼は、激痛の中でも神具を手放そうとはしなかった。明るい海面から、魔女が自分を追って落ちてくる。ユージーンは傷口に潮が滲みて苦悶の表情を浮かべたが、意識は驚くほどはつきりとしていた。ひたすら苦痛に耐えるという訓練はアカデミー時代に受けている、ユージーンはこれしきの事で諦めたり意識を失ったりはしない。まだ戦えるはずだ、と彼は思った。

彼は降りかかってくる彼女の攻撃を受け止めるために、G—CAMを掲げる。彼女はマクシミニマの推進力をジェット噴射のように使いながら、凄まじいスピードを乗せて海水の中に突入してきた。ズシン、と禍々しい重粒子光を灯した髑髏の衝撃が、真っ向からそれを受け止めた彼を打ちのめした。彼の神体は海底に数十メートルもめり込み、そこを基点にかなりの震度の海底地震が発生したはずだ。被弾した創傷からは神血があふれ出し、神体中の骨という骨が骨折したのがわかった。彼は何とかその衝撃に耐えたが、攻撃に転じる事ができなかった。骨が碎けて、重いG—CAMを扱えない。彼女は髑髏を振り上げ、猶も攻撃を続けようとして思いとどまった。彼はG—CAMを手放し、戦闘を放棄したからである。よく見ると、もう動けないようだった。

このまま海底に放置していれば、間違いなく死んでしまう。

”つまらない……こんなにあっけないものなの？　神ともあろう者が、こんなに簡単に？”

彼女は十年もの間に、自らを鍛えすぎてしまったのだと思った。神を這い蹲らせて命乞いをさせて、それを哀れねと見下してやりたかったのに。こんなのつまらない。黙って死を悟って諦めてしまふなんて。武術師範から、神がある程度以上に強くなれない理由を聞いた事があった。解階の住民は、鍛えれば鍛えただけ強くなれる。それは戦い続けるうちに、小進化を遂げてゆくからだという。解階の歴史は淘汰、選択によって築かれた進化の歴史といっても過言ではない。より強く、より優秀な遺伝子が選択され、弱き者たちは淘汰され、強い遺伝子のみが受け継がれてきた。願えば、鍛えれば鍛えただけ身体が答えてくれる。

しかし神は違う。

神という生き物は不変だ。彼等は解階の住民とは違って成長も進化もできないのだという。生まれついた環境が全てなのだそう。そして100歳までに鍛えて強くなければ、それ以上成長することはできない。人間の子供が成長期を逃すと身長が伸びないように……。神は進化より安定を望む生き物なのだそう。強くあり続けようとする事は、訓練により成長することのできない彼等には大きな負担なのだという。神は全知全能だという先入観に、メファイストフェレスは支配されていた。だが等身大の彼は絶対的存在でもなんでもなく、ただの一個の生き物だった。期待していた命乞いの言葉もない。死を覚悟した彼を柔らかく抱えて、G-CAMも忘れずに拾うと、海面へと浮上していった。ダメだ、ダメだ、こんなの認められない。仕切り直しだ。

メファイストフェレスは周辺の孤島に彼を運ぶと、看病をしなければならぬ羽目になってしまった。

彼女には医学的知識などないし、ましてや神をどうやって手当てしてやればよいのかなどわからない。彼女はユージーンに勝つ事ができると確信していた、だが傷つけた彼をどう手当てしてやればよいのかまでは、考えていなかったのだ。彼女は彼の傷を癒せるような特別な血液を持っていない。何も考えていなかったのだから、当然の結果だった。

更に悪い事に、失血が止まらない。マクシミニマに簡単な介護ナビゲーションをつけておけばよかったと思った。こうやってじわじわと苦しめられて失血死をする事は、彼にとってこの上ない屈辱だろう。まだ意識は失っていないが、そのうち貧血で意識を落とす。彼は神階へはもう戻れない。メファイストフェレスが法務局の偵察衛星を破壊したからだ。

偵察衛星は神々の行動を監視すると同時に、神々の危機を察知してくれる。もしもこの様子が記録されていたなら、神階からの助けがくることだろう。だが助けは来ない。メファイストフェレスはドレスの裾を破いてきつく傷口を縛りながら、彼を励ました。

「……しっかりしなさいよ！ 神ともあろう者が、情けない。そんなんじゃ、信仰してもらえないわよ！」

彼女は狼狽しながら、十年も焦がれた相手が目の前にいるというのに、彼を失わなければならぬのかと思うと悔しかった。何がいけなかったのだろう、強くなりすぎた自分がいけなかったのか？ それとも争うつもりがないと言った彼の言葉を聞かなかったから？ 使徒になりたいなどと思ってしまったから？ 血を流させる攻撃を仕掛けてしまったから？ どれを思い起こしても納得がいかない。

「……強くなったなメファイストフェレス……」

彼は遺言のようにそう言った。

「そうよ！ 強くなったでしょう。この十年、あなたの事を考えな

い日はなかったんだから。あなたの為に強くなった。それに、まだ始まったばかりでいくらも戦ってないわ。つまらないじゃない。だから、死なないで……続きをさせてよ、ねえ！」

「わたしは……随分……お前を苦しめてしまったようだ。すまなかった……な」

「もう喋らないで」

折角嬉しい言葉を投げかけてくれたのに。

少しも嬉しくなどない。彼は血の気が引いてどんどん青ざめてゆく。出血が止まらない。こんなにも脆い神という生命。彼女はおろおろと困惑した。

「どうすればいいの」

神には輸血もできないので、失血をすれば死ぬしかない。

十年前、瀕死のメファイストフェレスを救った彼の血液。それを持つ彼自身が自分自身を救えないなどと、笑い話だ。彼は力尽きて静かに目を閉ざし動かなくなった。

殺してしまった……神を。メファイストフェレスは彼の隣に寄り添うように横たわった。

やっと手に入れたと、思ったのに……。

やがて夜が訪れ、海原から吹き込んでくる僅かに放射能を含んだ潮風がメファイストフェレスの頬を撫でていた。

海辺から穏やかな潮騒音が聞こえてくる。メファイストフェレスは彼の亡骸の隣に横たわって、彼に子守唄を聞かせるように古い童謡を口ずさんでいた。無人島に取り残されたふたり。

彼女は何かをしてなければ不安だった。生物階で古くから謡われている歌だ。死んだ筈の彼の神体は、まだ温かった。いや、もう

温かいのかもよくわからない。メファイストフェレスが触れている部分に体温を感じているだけなのかもしれない。だが彼女は温かさから、離れることができなかった。彼女は彼に覆いかぶさるようにして保温をしてやりながら長い夜が更けていった。

メファイストフェレスは翌朝、潮騒の音に紛れるようにして彼が息をしている事に気付いた。嬉しくて、つい揺さぶってしまった。

「生きて……いたの？」

「……ん……」

彼はうめき声のような一言を返した。先日までは息の根もなかったと思うのだが、彼は少しずつ回復をはじめている。

「よかった……生きていたの……」

彼女はその日も、彼とともに横たわって空を見上げていた。ユージーンは動けないながらに段々と意識が戻ってきて、簡単な会話ができるまでに回復した。メファイストフェレスは彼と寝物語をするように、彼女の長い生涯の間の知見を少しずつ話した。父親の代から人間に興味があったこと。人間の行動を間近で研究したいと思っていただけで、違法なゲートで生物階の秩序を乱そうと考えていたわけではなかったこと。彼はじっと聞いていた。

「あなたの話も、聞かせてほしいわ」

「……話すほどの内容もない。わたしは神となってまだ10年ほどしか経っていないんだ。今のところ、何も成し遂げていない」

「だから妾が手伝うって、言ってるじゃない」

「必要ない」

彼は冷たく言い切った。だが動けない今では子供じみた強がりのようにしか聞こえない。

彼はまだ成体になったばかり、一人前の神というよりまだ未熟な学生のような、と彼女は思った。

「強情なのね。あなたは何名の使徒を御しているの？」

「何故そんなことを聞く」

「聞きたいの」

「18万だ」

「あなたは大勢の使徒を従えているというのに、誰も助けに来てくれなかったわ。だって使徒たちはアトモスフィアを与えてくれる神に仕えているのであって、それはあなたでなくてもいいのよ。代わりはいくらでもいるの。ほら、だから純粹にあなたに仕えたいと思って、利害関係を超えてあなたでなくては嫌だと思う妾が必要でしょう……わかる？」

彼女は彼が使徒として召抱えてくれたなら、他のどの使徒たちよりも早く彼のもとに駆けつけようと思った。いつもは一緒でなくともいい。

彼が自分を信頼して、彼の必要な時に必要なだけ呼び出してくれればいいと思った。彼はそれを聞いているのか聞いていないのかわからない。

「あなたが好き。魔女はすぐにセックスをして子供を作りたがるから、警戒するのも当然だと思うけれど、あなたには性別がないって解ってる。男としてとかヘンな意味じゃなくて、あなたという存在が好きなの。……妾は強かったでしょう？ この力をあなたを傷つけるのではなく、守る力に代えるから」

彼女の言葉は、ユージーンの身にしみた。

確かに使徒達は雇用主と契約をしているのであって、神のアトモスフィアがなければ生きてゆけないからだ。使徒の生命に関わる究極のギブアンドテイクの関係で、神階は維持されている。薬神は現在でも、神のアトモスフィアの構造について研究したり、合成した

りしてはならないと定められていた。合成不可能な物質であるという建前のアトモスフィアがもし合成できてしまったなら、使徒は神を必要としなくなる。甲斐甲斐しく神に尽くす事も、忠誠を誓う事もないだろう。それほどまでに危うい、利害関係によってのみ成立する神と使徒の雇用関係。神にとって神階とは他者ばかりの冷たい社会だった。ユージーンはふと寂しくなってこんな事を言った。

「ありがとう。お前の気持ちはよくわかった。だがあいにく、お前を使徒にするにしてもポジションがないんだ」

「いいのよ、末席で」

彼女は押し付けがましい割には健気で謙虚だった。ユージーンは解階の住民に出会った事は、数えるほどしかない。

彼等は単純で自己中心的で、いつも力を頼んだ。だが彼女は少し違う。ただ自己中心的な他の魔女達とは違うようだ。人間心理学を研究し続けた彼女はいつの間にか、人の心に近づいた魔女となったのだろうか。ユージーンはほんの少しだけ、この人間くさい彼女に興味を沸いてきた。

「ではメファイストフェレス、お前を軍神下第0位使徒として任ずる。解階の住民であるお前には神の代行権は付託できない。だが、頼りにしている。それでいいだろうか、お前に与えられるものは何もないけれど」

「それだけでいいわ」

彼はそう言って、また目を閉ざして眠りについた。

メファイストフェレスは実力で最高位使徒の座を得て、満足そうに微笑んだ。本当は何位であっても構わない、彼が必要としてくれるならば。

彼女も今は彼に寄り添って嬉しそうに目を閉ざした。

第1節 第51話 最適解と、鬼母の謀反（前書き）

外伝がちよつと落ち着いたので本編に戻ります。

今後、外伝は10話おきに挟もうかと思ったり思ってたたりします。

それでは。本編、はーじまーるよー！

第1節 第51話 最適解と、鬼母の謀反

「あなたは……荻号殿!？」

「ん? お前らは何で雁首そろえて俺を荻号と呼ぶかな?」

ナターシャⅡサンドラが幽霊でも見るような目で、今しがた光のショーを終えたばかりの呪術師をそう呼んだのも無理はない。彼は誰の目から見ても旧陰階神第4位 闇神、荻号 要にしか見えなかった。

姿ばかりではなく仕草や佇まいもまるきり荻号そのもの。

一方のユージーンはそうではないと疑ってかかったので、大胆にも至近距離からのマインドブレイクを試みた。彼は敏感に看破の気配を察してユージーンを振り返り、彼より一瞬早くマインドギャップを展開すると同時にマインドブレイクを開始した。

電光石火の攻防によって心層看破力と心層防護力はほぼ拮抗し、結果何も見えないという状況に落ち着く。至高者達の沈黙のやり取りは一瞬のうちに、他の二柱には秘密裏のうちに決着し、お互いの出来のよさに口元を綻ばせる。彼はユージーンを咎める事も敵意を抱くこともなく受け流す。二柱のやり取りに気付かなかったナターシャが何か口を挟みたそうなのを制して、織図は彼に事情を説明する

「今から6000年ほど前にな、発音できない神名を生物階の言語に置換するって制度が始まったんだ。現在では日本語が採用されていてな、置換するとあんたは荻号 要って名前になるんだ。そして実際にあんたによく似た奴が居た」

「へえ。じゃあ別に荻号 要じゃなくてもいいだろ。俺は荻号 要ではないし別神だからな。彼と同じ役割を求められても困る」

不吉な光を脱ぎ捨てた超神具 フラーレンC60 (Fullerene carbon sixty) を指先で操って、彼は一枚ずつ呪符を回収しはじめた。呪符はよく仕込んでおいた飼い鳥のように、カナリア色をしたそれらは一枚ずつ整然と彼の手元に戻ってくる。一枚ずつ回収しパラパラとめくって数を数え、彼の気の済むように揃えて腰にぶら下げたシザーケースに収めた。実に満足げな表情でだ。

そもそもこの神具も、彼が生きていた太古の時代には実戦で使われるどころか、起動すらする機会はなかったのだから。誰も彼に挑みかかる殊勝な神すらいなかった、結果彼は退屈を持て余した。彼にとって現代という世界は巨大な遊技場のように映っている、誰にも咎められず思うままにこの神具の性能を発揮する事ができるのだから。

「あんたが荻号と呼ばれたくないのはよく分かった。じゃあ何て呼べばいいんだ？」

どうしても何か呼称が欲しい織図が荻号要に代わる彼の名を要求したので、日本語に堪能な彼はほんの僅かばかり考えると、すんなりと名前を決める。本名と置換名はそもそも自身で名づけられるものではない。命名法という法則に基づいて法務局の公務員によって名づけられるものだ。

だが彼は現代の神階の規則などお構いなしだ。

「荻号 おじょう 正鵠 せいこく」

「何だ、結局荻号さんでいいんだろ」

織図は荻号 要ではないと分かっている、再び荻号と呼べる存在が現れ、どこことなく嬉しさを隠し切れないようだった。それは嬉しくもなるだろうな、とユージーンも思う。放浪して二度と帰ってこない、二度とは会えないと諦めていた親友と瓜二つの存在が帰

ってきたのだから……。

「俺は荻号 要の”代わり”じゃないからな」

核心を突くという意味で”正鵠を射る”という言葉があるが、まさに彼の言うとおりだな、と織図は思った。彼に、荻号 正鵠に荻号 要の面影を重ね合わせてはならない。

この瞬間に自らを荻号 正鵠と名づけた彼が蘇った経緯はこうだ。ノーボディが去り緩やかに解凍された後、基空間内にある荻号要の研究室の地下で目覚めた。打ち棄てられた冷凍庫から這い出すと、長き眠りから覚醒した彼に与えられたのは雑然と並べられた膨大な量の書物や映像の山の贈りものだった……。ノーボディは彼の神体を凍結した研究室の一角に未来にタイムスリップを果たした彼が必要とするであろう知識を残して去った。

枯れ果てていた土壤に注ぎかけられた水のように、それらは覚醒した闇神に綿密で濃厚な1万年分の知識を与えた。無類の読書家で勤勉な性格のためか、古代の神々をしてこの世の全てを知り尽くしたと讃えらえた彼も、あまりにも長いブランクを経て知識に飢えていた。無知である事の羞恥は彼にとって懐かしい、しかし歓喜すべき感覚だった。

彼はノーボディがわが子に与えた書物を手にとって読み解き吸収し学び取ると、彼の生きた時代においては決して知りえる筈のない言語を意のままに操る事が出来るようになり、1日単位で彼が眠りについた日から現在までの歴史のあらましを鮮明に辿る事が出来た。

だがそれと同時にノーボディは彼に、さる陰階神としての役割を担わせようとしていたのだと、察しのよい正鵠は勘付いていた。このまま漫然と神階に戻っては望んでもいない役割を負わされる。彼

は陰階神として神階に戻り、ノーボディの巨大な計画のひとつの歯車として組み込まれる事を危惧していた。

荻号 正鵠は彼が願ってやまなかったように、彼の力を欲し、助けを求める窮者や弱者達の力になりたかったただけだ。誰かの身代りとなってノーボディの迷惑通りに動くなど真っ平御免だった。そして彼にはノーボディの善性すら疑わしいものと思われたのである。

ノーボディは研究室に放置したパソコンの端末を通じて正鵠にメッセージを送った。創世者の存在に驚きながらもノーボディと何度か対話を重ねるうち、正鵠は彼、あるいは彼女の利己心というものに気づきはじめた。ノーボディは神階の、そして生物階の遍く生命の足枷になっていると考えたのだ。

確かにノーボディが居たからこそブラインド・ウォッチメイカーの脅威から生物階と神階は庇護されてきた。だが彼、あるいは彼女の意思に随う事が三階の発展に繋がるかという疑問符が付く。正鵠の死生観のうちでは、世界の滅びと再生は自明の理だ。

滅びがあるからこそ、生命は生きる力を喚起される。死も滅亡も再生と成長、進化の母だ。危機に瀕するからこそ、生命はそれを回避しようと自ら進化する事を選択する。だがノーボディがデザインする平和な世界は、実に退屈で怠惰な世界となりやがて退化に転ずることだろう。

ノーボディはある一面では、慈悲深い創世者であるのかもしれない。だが創世者にはそもそも感情など必要のないものだ。三階の生命に支配者も保護者など必要ないと、彼は思うに至った。

ノーボディは三階の滅亡を回避しようとしているのだろう。
勿論意図的に三階の滅亡を目論むブラインド・ウォッチメイカー

の計略は断固として阻止する必要があった。だから荻号正鵠はこう考えたのである、滅ぼすべきはブラインド・ウォッチメイカーとノーボディであり、意思なき創世者INVISIBLEの管理に統括されるのが理想的だ。もの思わぬ創世者、INVISIBLEこそが三階を統合するに相応しいのだと。

彼は生命をいみじく思う事もなければ、神に特定の生物を支配、管理させる事もない。特定の神の裡に収束し、絶対不及者として世界を観察する事はあるが、彼は何を思う事もなくただ世界を内側から観察しているだけで刺激をしたり害を与えたり、誰かが挑みかかったりしなければ必ずしも破壊を齎す事はなく、実に無害な存在だと考えていた。

殆どの神々が怯えるように、闇雲に怯えられなければならない存在ではない。

生物は対等だ、創世者達によってその尊賤や聖俗が決められるべきではない。ありのままの世界とは創世者の意思が一片も介入しない世界であるべきなのだ。正鵠は三階の生物にとって本当に必要かつ理想的な創世者の立場はゆりかごや救いの手ではなく、無常なまでの中立性だと考えた。これは荻号要とは決定的に相容れない、彼自身の理念だ。

勿論、ノーボディの協力者であるユージーンにこの考えを看破されるわけにはいかない。表面上はノーボディに随うと見せかけなければならぬが……。

＊

「荻号殿。現状をご説明しますのでご協力をお願いいたします」
「いや、説明はいい。さっき織図に教えてもらったからな」

協力を求めるべくユージーンは荻号に状況報告をしようとしたが、あっさりと話のこしを折られてしまった。ユージーンはもう実際のところ、荻号の特異な能力と古文書にすら記されていない未知の機能を備えたフラーレンC60に縋るしかなかった。荻号は別に彼を槍玉にあげるつもりはないのだがユージーンをちらりと睨んで、彼の失態と対応のまずさを非難した。

「しかし俺が出てこずとも、こうなる前に対処できたらうに。特にお前は力の持ち腐れだ」

ユージーンは出会い頭にしかも初対面で教育的指導をくらってしまったが、彼の言う通りの失態だった。ナターシャは一生懸命やるべきことをやってきたユージーンを責めなくともいいのに、と彼を庇う。

「ユージーン様は真剣に対処に当たっておられました。そんな言い方をなさらなくとも」

「そうだな、真面目にやったんだろう。だが目先の事にとらわれて方策を見失っている。漫然と奪った命は、決して浮かばれはせん」
「返す言葉もありません」

耳の痛い話だった。正座をして話を聞かなければならない。

日本でいうと縄文時代に相当する太古からやってきた神に、至って常識的な見地から説教をされているのだから妙な気分だ。彼がユージーンの目を醒まして来てくれなければ、ナターシャもユージーンもまだ罪もなき者達を力尽きるまで際限なく虐殺するしかなかった。

「まあ何にせよ、あんたが神階に戻ってきてくれてよかった」

織図が持ち前の馴れ馴れしきで手を伸ばして、荻号の肩を組んだ。荻号はぎょつとしたような顔で華奢な肩の上に無遠慮に置かれた楮

色の手を見遣ったが、特に拒絶の意思は見せなかった。

「神階には戻らん。俺は一万年以上も前に消息を断った、今更復帰も何もあるまい」

「しかしあんたの力が今の神階には必要なんだ、そう言わずに戻って来てくれよ」

「何かをしてほしい時は、懇願する必要はない。ただ頼め。望まれれば力を貸す」

彼はそう言い残して織図の手をするりと擦り抜けると、どこへともなく立ち去ろうとした。いつも自由でありたいと願った彼は、拘束される事がたまらなく嫌いだ。神々が群れ集い、生物階に傲慢に振舞う神階という組織に辟易していたというのもある。

未来にまで来て神々の指図を受けたくないといったところだろう。

ノーボディが神々の結束を高めるためにプログラムし殆どの神々が持ち合わせている、組織に所属していたという欲求を、どうしたとか彼は持っていない。彼はとにかく十人並みの神々とは異なる、いわゆる変神だった。ナターシャはこの言葉を聞いて、彼が異常な価値観の持ち主なのだという事をはっきりと認識した。彼は望んで墮神（神階を追放された神）になろうとしているのだから、それは陽階神の立場からすれば切腹にも値する実に不名誉だ。

「どこへ行くのです？ 解階の貴族達がどこにいるのか、ご存知なのですか？」

彼女は彼の為にも荻号の神階からの離反を引き止めたかったが、耳を貸す気配もなく、彼は背を向けてしまった。誰も荻号を説き伏せる事の出来たものはなかった、今までも。そして今もそうだ。

「やりようはある。フラーレンは閉じた球体の作用フィールドを持っているんでね」

「へっ、相変わらず気楽なもんだぜ」

「相変わらずって、織図様は彼と面識ないじゃないですか」

ナターシャは口を尖らせた。織図はそうだった、と気まずそうに頭をかいて、こんな事を言ってその場を取り繕う。

「いーんだよ、タツちゃんでもカッちゃんでも甲子園目指せば！
奴なら何とかしてくれるだろう。少なくとも、悪いようにはしない
筈だ。お前らも南ちゃんぐらい心を広く持たないとだな」

「誰ですか、南ちゃんって」

漫画やアニメを見たことのないユージーン（ユージーンは石沢に強制的に見せられたが）とナターシャを相手に実に分かりにくい喻えを持ち出してきたが、要するに彼が言いたかったのは、荻号要でも荻号正鵠でもやる事はきちんとやってくれるだろうという事だった。だから荻号 正鵠に要の影を重ねてはならないのだ、と。

「わたしは未熟者でした……大変な失態でした」

ユージーンにとっては反省すべき点が多々あった。

荻号に頭を冷やされた。アルシエルをして神皇と呼ばしめ神階の牽引者としての期待と責任を負った身でありながら、プライマリ・コピーでもない大先輩に冷や水をかけられる始末だ。

「何を今更。周知の事実だろ。だがお前が全て背負い込む必要なんてねえんだ。お前にも出来ない事がある、それを認めろ」

「皆さん。希望が見えてきましたね。少しだけですけど」

ナターシャは前向きに物事を考えようとする。

「存在自体が追い風のようなヒトだからな」

ナターシャも頷き、織図の言葉に同意する。荻号は解階の貴族達を正気に戻すために、どこへ行ってしまったのだろう？ 地球上のどこに居るのか、さっぱりと分からないというのに……当てでもあ
るのだろうか。それは出来ない筈だ、とユージーンは首を振る。

フラールレンC60は放射状の”開いた”作動領域を持つ相転星とは異なり、領域が球状に閉鎖された、いわば”閉じた”神具だ。だからどこに居るとも知れない解階の貴族達を虱潰しに捜してゆき、フラールレンを発動させ領域内に閉じ込めて洗脳するにはかなりの時間がかかる。その間に解階の不法ゲートからまた流入が始まる。

対症療法はできてもそれはもぐら叩き式で、根本的な対応策などないと思うのだが、荻号は実に安穩とした顔をしていた。まるで勞せずしてこの事態を解決する方法がある、とでもいった具合に余裕綽々で……。物事を難しく考え過ぎるな、存在を疑えと、荻号 要（ノーボディ）が日ごろから口に使っていた言葉をユージーンは思い出す。

荻号正鵠はフラールレンC60の閉じた領域を利用して何を、見せてくれるというのか？

「それにしても荻号様は所在情報もなく、どうやって……」
ナターシャがその疑問を口にしたのと、夜空に一筋の閃光が走ったのはほぼ同時の事だった。そして夜空を二分するかのような真っ直ぐに迸った光の直線は、先ほど目の当たりにした光の一边に見紛う事もなく一致していた。夜空に煌く一筋の光は、まるで希望への道のように優しく力強い蛍光を放っている。

彼、荻号正鵠は地球を巨大なネットで包み込むように、フラールレンC60で囲んでしまったのだ。これは相転星には不可能な所業である。地球は球形をしているのだから球形の中に入るといふ発想。光の一边は数千キロはあるだろう、閉じた領域を持つ神具の特性を、最も鮮やかな方法で応用した結果だった。

実力者のなせるわざ、まさに最適解がこれだ。

「まったく……かなわんな」

織図はぷかりと煙管に火をつけて腕組みをした。”予想通り”、彼は織図の予想をあっさりと裏切る。まるで予測不可能、言動も奇妙天烈、だが彼は常に一手、二手、いや百手ほど先の遠慮深謀を持っているかのように感じられるのだとナターシャも思い知る。

ノーボディが実在した神として最初で最後の依代として彼を選んだ理由は疑う余地もない。それだけの器が彼にはあったからだ。荻号 要の超越者たる所以はノーボディを宿していたからではなく、ただノーボディが荻号 正鵠の真髓を余すところなく演じ切っていたためだった。

ノーボディありきの荻号要なのではなく、荻号正鵠ありきの荻号要だったのだと。織図とユージーンは、驚きをもって、信じがたい事実を受け止めるしかなかった。

*

「済まない、極陰。今戻った」

ヴィブレイスミスが大本営を去って55分後、1時間もは空けないうと約束した通りに再び恙無き姿を現した。集っていた神々も極位の健在を確認してほっと胸をなでおろす。ヴィブレイスミスの昨今の支持率の低さがいかに指摘されていたようとも、やはり主神としての度量は誰もが認めるところのものだった。

その彼が非常時に長く姿を消すと神階が混乱し、生物階に降下している神々の士気を下げる事となる。白衣に身を包み、珍しく緊張感のある顔をしていた極陰 鐘遠 恵も、彼の姿を見てほっとしたように煌びやかな装飾の付いた指揮権の所在を示す杓杖を放り投げ、

主神は神階の指揮権を返還された。

「野暮用は済んだか？」

「ああ」

彼は極陰の尋問を簡単に受け流して、執務にあたろうとした。だが彼女は彼の目の前に凜として立ちふさがって、主神の立ち位置であるコンソールを譲ろうとしない。どけと言う訳にもいかず、極陽は極陰の睥睨した視線を受け止めた。

「藤堂 恒を、助けに行っただろう？ あまり妙な行動を取ると疑われるぞ。藤堂 恒と汝の間に、何ぞ関係があるのかと……な」

「杞憂だ」

「ほう……そうか？」

彼女はモニターを見ながら、ほくそ笑んでいた。彼女はなかなか勘がいい、極陽はわざと気分を害したように見せかけながら席を空けていた間の情報の収集に努めた。

「しかし困った少年神だ。どこにも行かぬよう、どこかへ繋いでおけ。後でしかるべき処罰を与えるべきだ」

「処罰なら与えておる」

事実、極陽は実の息子を手錠でベッドに繋いできたところだった。ユージーンが恒を連れて帰ったかもしれないが、暫くは生物階降下は自粛するだろうし、少しは懲りただろう。軍神下第一使徒によって執務室に厳重に監禁されると推測される。安全な場所にいる恒の事に思案を巡らせている場合ではなかった。決して好転しないとは見越していたものの、事態はますます悪化する一方だ。

極陽がため息まじりの吐息をついた時、有為 枝折のナビゲートをしていたりジーノーチェスがはっと目を見開いた。何か驚愕に値する情報を引っ掛けたというのだろうか。

「スミちゃん！ 生物階に変な神が現れたのー！ これってえー、要ちゃんに激似なんだけどお。ちよっち違うみたいでえ。リジィちゃん映像送って」

「な！ インフィニティー・ストリングスが……切られておる……」

荻号かもしれない、とかつて荻号に幾度となく大切な神具の弦を切られ続けてきたリジィは妙に懐かしく感じた。リジィは指先と肘で弦を手繰って絡めとり解像度を上げると、薄紅色のカードを束ねて扇のように拡げ持つ細身の神の姿が映った。確かに容貌は荻号に瓜二つといっても嘘ではない。だが首を傾げたくなるような少しずつの違和感がある、荻号のようで、荻号ではない。

ヴィブレⅡスミスはリジィによって巨大モニターに転送された映像に目を凝らしたが、彼の顔には見覚えがないし荻号ではないと思うに至った。兄弟というひとひよつとするとそう言えるのかもしれないが、同一人物ではあり得ないと思ったのだ。

「まあよい。我々に害なす者ではないのだろう」

「それがあ！ その神が何か始めちゃったのー」

「大した事ではあるまい、構うな。映像を元に戻せ」

神々が彼の業に心を奪われて硬直してしまったのは、極陰がこう指示したわずか1秒後のことだった。

＊

比企はまだ起動した状態の懐柔扇の細い柄を握り締めたまま、三本の光の直線が120度の鈍角を為して会合する幻想的な夜空を見上げていた。群れを成して襲い掛かってきていた解階の貴族達がバタバタと倒れ始めたので、何事かと周囲を見渡して気付いたのだ。

オーロラを初めて見上げた、子供のような顔で比企はその見事な業に懐かしい者の存在を思い出し、膨らみかけた希望を否定するように首を振る。あんな別れ方をしてしまったのだ、例えば目の前で起こったあの消滅が夢だったとしても、もう二度と自分の前には顔を見せてはくれないだろう、と彼は諦めていた。

この業は、誰が行っているのか？

比企は足元に倒れたひとりの貴女がぴくりとも動かず、しかし呼吸だけはしていてよく眠っているのを確認すると、鄙びた懷中時計を取り出した。合成の次のステップまではまだ5時間ほどある。確かめに行って、そして戻るには不可能ではない残り時間だ。誰とも知らない、この業を成した者を突き止めに行かなければという一心だけで、比企はなぞるようにアトモスフィアを辿った。転移はいつものように一瞬だったが、比企はややあつて目を開いた。現実を受け入れる用意に、いささかの時間を要したからである。

「まさか……そんな……」

だがやはり、という思いはあった。

いつもの特徴的なシルエットが、月夜に影を落としている。彼の至近距離に転移をしていた比企は、彼を逃さないようにする為か、無意識のうちに手を伸ばして彼の腕を掴んでいた。そして比企は彼がまだ一言も発しないうちに、先手とばかりにひとまず謝罪の言葉を並べ立てたのだった。

「また再び会える機会があるとは思わなんだ。己はあなたに謝罪をしなくてはならない。あなたが神階を去ってよりこのかた、ずっと悔やんでいた。己が間違っていたのだ。無条件に己が間違っていた……すまなかった。己は傲慢で、一方的で、愚鈍で、稚拙過ぎた。あなたなしに、三階は立て直せん。あなたの神階への復帰を請いたい」

比企の暑苦しい言葉を右から左へと聞き流し、また例の人違いなのかと、これで三回目も人違いをされてしまった彼は古紙回収業者のようにせつせとフラーレンを片付けながら、うんざりしたように鼻息をついた。そっくりさん、荻号要はどんな人物だったのか。

正鵠も不安になってきた。

怨みをかうような人物だったのならあまり有り難くないのだが、出会い頭にこれほど立て続けに謝罪をされるというのは、一体どんな状況だ？ 話の脈絡から想像するに、荻号要はこの神によって神階を追放されたという事になる。神階を追放されようが、もう二度と神階に復帰をする意思のない正鵠には関係はない。だが不名誉な去り方、誰かに憎まれるような去り方をしたというのなら話は別だ。

「お前誰だ？」

それは荻号が消滅してより後悔の余り一睡たりともできなかった比企にとって、残酷過ぎるほどに冷淡な問いかけだった。彼は比企を知らないのだ。事実はいくらにも単純で明快だった。たったそれだけでしかなかった。

彼がかつて敬愛し、懷疑し、憎しみ、そして再び慕ったあの陰階神はやはりあの日、消えてしまったのだ。幻は幻でしかない、幻を追っているのではないのだと彼に教えられたような気がした。比企の目にはどうしても彼が荻号要としか映らなかったのだが、違うと否定された上は踏ん切りをつけるしかなかった。比企の失望に歪んだ顔が、またいつもの鉄面皮に戻った。

「これは失礼した。どうやら他人の空似だったようだ。お初にお目にかかる。己は比企 寛三郎と申す、陽階第二位に叙する者だ。興味深い業を拝見したので、見参に入った次第だ」

「荻号 正鵠だ。肩書きはない」

その頃にはようやく、荻号は比企にマインドブレイクをかけていて、ああ、彼は荻号要の弟子だったのだな、と事情を察した。この神は荻号要を師と仰ぎ反目し、何かの契機があつて再び彼を慕っているのだ。だが正鵠は、比企の師である必要など何一つもなかったし、彼に対する義理立てもない。彼等はただ初対面の者として互いに名乗り、握手をかわした。

荻号にとっては何の感傷もない、だが比企にとっては過去の清算を促された忘れがたい対面となった。

＊

恒が目を醒ますと、見覚えのある極陽の第二使徒が目の前にいて真上から覗き込んでいた。

先ほどユージーンが追い出したのだが、彼が帰ったのでまた入ってきたのだろう。恒は思いがけず傍らに誰かがいて驚き、警戒してしまった。

「これは失礼をいたしました。私めは第二使徒、八雲^{やくも} 青華^{せいか}にございます」

「はじめまして。藤堂 恒です」

恒は負傷した腹部をかばいながら頭を起こし、ちよいと目礼をした。彼女はナースのような青い制服を着ていて、専門職の使徒のようだった。色白で器量よしだが日本人やアジア人に近い外見をしていて髪の毛も黒く、恒は親近感がわいて何となくほっとした。

「処置をさせていただくのに、ご神体に触れてもよろしいですか」
「？ 構いません。よろしくお願いします」

極陽とユージーンがあらかたの手当てをしたが、点滴や包帯の取替えに來たのだろう。華奢な手で、麻酔の入った茶色の薬瓶を抱え持っていた。怪我の手当てをするのに触れてならないものもないと恒は思うのだが、第一使徒以外の使徒がアトモスフィアに満ちた神体に触れる事は許されない。

八雲はベッドの傍でひざまづき、感慨深そうに恒の腹部に触れ処置をはじめた。

彼女は心の底から畏れ多いといった様子でガーゼを替え、点滴を繋ぎかえている。恒には彼女のマインドブレイクなど朝飯前だったのだが、体力がない今は敢えて行わない。彼女は人間が神に対するのと同様以上の敬意を、恒に払っている。

響　以御が気さくで少々横柄だったので意識する事がなかった。つい半年前まで人間の子供でしかなかった自分など尊敬するに値しない、そう思っていたのは恒だけで、一般的な使徒が神に擁く畏敬の念というものののだろうか。彼女は緊張のあまり手が震えていて、ワゴンから包帯を取り落としてしまった。

「も、申し訳ありません。……畏れ多くて」

「俺、神ですけど半神ですし、あなたよりずっと年下の子供です。気をつかわないで下さい」

不思議だった。

彼女より明らかに年下で、そして知識も経験もない子供だということに。例え赤子であっても神だというだけで尊ばれる。神階はこういう社会なのだ。少なくとも軍神と軍神下使徒は雇用関係にあり自分分は社長のようなもので社員である使徒を格下だと思った事はない、とユージーンは言っていたが、それは民主主義と自由民権世代に生まれた比較的若い神の勝手な言い分であって、数百年を生きてきた大多数の使徒はまだ封建制度にどっぷりと身体が馴染んでいるらし

く、神を崇拝の対象として祀り上げている。

特に極位の使徒などその最たるものだった。

恒はこうやって敬われるより、ユージーンの使用徒達が恒に接する態度の方が好きだ、彼等は自由で伸び伸びと仕事をしているから。

「あなたはまだ神階にいらして間もないから、神様がいかなる存在かをご存知ないのでしょうが、使徒にとっては神聖で不可侵の存在なのです。どんな事情があろうと、気安く触れてその聖性を穢す事など出来ません」

恒は彼女の頑ななまでの態度によって神と使徒の間に隔てられた、埋められることのない距離があるのだと自覚させられた。また、神である事の責任の重さについてもひしひしと感じたのだ。短い彼の人生において蔑まれる事こそあれ、とんと尊ばれる事などなかった。恒は、神として神階で生きてゆく事の言い知れない孤独感と窮屈さを体感する。

神はこうやって長い長い年月を生きてゆくのだ、使徒と神とを分かち絶対不可侵の境界線の狭間の中に自らを規定し、人々や使徒の崇拝の対象となり理想となる事によって……。だが彼女の態度を見ていると、畏れ多いというだけではないようにも思えるのだが、いない勘ぐりなのだろうか。

「……何だか、そう言われると寂しくなります」

「も、申し訳ありません。差し出た事を申し上げます」

極陽の執務室の一室だと思われるこの病室は、打ちっぱなしのコンクリートがむき出しになっている。極位の執務室とは思えないほど殺風景で、伽藍としている。病室専用に使っているのだろうか？

50畳ほどの部屋の中にベッドが一つと、ビジネスライクなデスクが部屋の真ん中に居心地が悪そうにぽつんと置かれているだけだ。

それにこの部屋には、窓がない。

窓の代わりに大きな鏡が壁一面に備え付けてある。天井は間接照明によって薄明るい、不自然だった。マジックミラーなのかもしれないと、恒はようやくこの部屋の不自然さに気付いたが、例え隣の部屋から誰かが観察していたとしても、だからといってどうすることも出来ない。

恒は何も気付かない振りをして、さりげなく話題をかえた。

「そういえば、生物階の状況はどうになりましたか？」

「先ほど入りました情報によりますと、生物階に不法に侵入した解階の貴族達が解階に退散をはじめたそうです」

八雲はもう隠し事はしない。

先ほどユージーンが迎えに来たのをわざわざ断った時から、恒は自由意志でここに残っている事になっている。執務室に戻って以御から聞くであろう情報は、隠し立てせずに知らせておこうと思っていたからだ。

「突然、何があったんですか」

「何者とは存じませんが、見知らぬ神が現れて……強烈的なマインドコントロールをかけたのだそうです」

ノーボディの差し金だろう、彼女が盤上に出した宝石の暗示が現れたのだ。

彼女はただおはじきで遊んでいただけではなかったのだ。

彼女の援軍が間に合ったかとほっとして、ほっとすると同時にどっと疲れが出る。これから生物階にはどんな運命が待っているのだろう。彼女が場に出した宝石の暗示からいくと、解階の住民や生物階の人々も徐々に正気を取り戻してゆくのだろうか、あとは比企ら文型神が治癒血の成分を合成し、感染者に投与をすればいいとい

うシナリオになっている。

少なくとも彼女はそう暗示したと、恒は思う。

そうになると、生物階は元通りとはいかないが治安は改善するだろうから、恒自身は命を狙われているとはいえ、いつまでも神階で足止めをくらわなくていいのかもしれない。せわしく頭を働かせる恒を、彼女は隣でまじまじと見つめていた。

「神様、一つお尋ねしてもよろしいですか」

「？ はい、俺にわかる事なら」

恒は大きな鏡面の向こうを気にしながら頷いた。

彼女も恒の視線につられて振り返って、恒がマジックミラーの存在に気付いていながら、特に指摘をしなかったのだと気付く。

「あなたは勘が鋭いですね。隣の部屋の鍵は、私が持っております。つまり隣の部屋には今は誰も居りません」

「あなたは俺を監視しているんですね」

彼女はあっ、と口を開いて息を呑んだ。全てお見通しというわけだ。

「そうです。どうして先ほど、ユージン様とお帰りにならなかったのですか？」

「……それは」

何をされるか分かったものではないから残ってはいけないと、ユージンには引き止められた。

極陽の使徒である八雲に説明できるような理由はない。彼女は彼女の主に忠義を尽くす義務がある、うっかりと本心をぶちまけてはならない、極陽に筒抜けだ。

恒は口を閉ざした。八雲は踏み込んでくる。

「お父上と、お話しをしたいのではありませんか？ 真実をお知り

になりたいと」

「俺と極陽の関係をご存知で」

「存じ上げております」

「……そうかもしれません」

長年極陽に仕えてきた彼女は、彼の犯した罪の深さを知っていた。極陽の片腕であった彼女もどつぷりとその手を罪に染めた。Anti-ABNT抗体を創出するプロジェクトにおいて、八雲はプロジェクトリーダーとして中心的役割を担っていた。彼女は極陽の罪に加担し、不幸な模造生命達を創出する手助けをした。彼女は恒の誕生に関して、一枚も二枚も噛んでいるばかりか、プロジェクトの全容を知っている。

「我が主と私が、どれだけの業を背負っているか。長い間口を閉ざして参りました。ですが藤堂様、あなたには打ち明けておかねばなりません」

「背任罪を覚悟で俺に事実を明かそうとなされた事については感謝します。ですが俺は父の口から話を聞きたいと思います。父が俺を利用して殺そうとしているという事も知っています。それ以上、何がありますか。充分です、俺はもう覚悟は出来ています」

恒は八雲の告白を、八雲の口から聞いてはならないと考えた。そして彼女からいくら謝罪を受けたとしても、それは彼女の意思による行為ではなかった。彼女は実行犯ではあるかもしれないが、主犯ではないのだ。やはり極陽の口から真実を聞くべきだ。

「……」人間の”遺伝子はあなたの母親のものですが、あなたの”神の”遺伝子は、私が設計したのです、藤堂様。確かに設計図をお書きになられたのは我が主にございます。抗体の設計を行ったのも

我が主です。ですが、実際に”神の”遺伝子の合成を行った私には、設計図通りに作らない事も出来ました」

八雲は手の内に隠し持つようにして握っていたマイクロディスクを、恒が手に持っていたユージーンの携帯の中に差し込んで渡した。人目を避けるように携帯の中に隠した様子からすると、相当に重要なもののだろう。

「これは……？」

「あなたの御神体の設計図が入っています。神語ではなく英語で記してありますので、お読みになれますね。人間の遺伝子と神の遺伝子は発現ルールもCODE—（暗号）も違います、ですが基本的にはそう変わりません。賢明なあなた様なら理解できましよう」

恒は携帯に差し込まれたディスクをわざわざ取り出して、裏にしたり表にしたりした。盗聴器のようなものを差し込まれたのではないかと、不安になったからだ。繰り返すようだが、彼女は極陽に忠誠を誓っている彼の腹心だ。何をされるか分かったものではない。

恒は彼女に対する不信感が拭いきれずにいた。

「何故これを、俺に？」

「私はあなたの設計図の内に、我が主の御意思に従って自殺遺伝子を組み込みました。ですがこんな鬼女でも子の親です。丁度あなたほどの歳で亡くした子供がいました」

彼女は恒に一枚の写真を見せた。写真の中には、病室のベッドに腰掛ける少年の姿が撮影されている。

それは茶髪と茶の瞳の、どこことなく極陽によく似た顔立ちをした少年だった。

「遼生はるおといいます。私は……良心の呵責に苦しみました。主の命に叛く事は重罪です……ですが私は抵抗を試みました」

彼女は恒に膝をついて居住まいを正し、その凍えそうな程に青白かった頬を紅潮させたように見えた。彼女の真っ直ぐな眼差しが、恒に突き刺さる。彼女は極陽の命に叛いて恒に何をしたのだろう。

恒は不安になって、ゆっくりと上体を起こした。彼女は恒の遺伝子を組み上げたいわば第二の母親のようなものである。彼女を突き動かしているのは慈母の愛か、それとも……。

「抵抗？」

「遺伝子発現阻害酵素、Anti-ABNT 抗体阻害剤（Anti-ABNT Antibody inhibitor）および遺伝子組換え酵素を組み込んだのです。その酵素群が発現すれば、Anti-ABNT 抗体のコードされた遺伝子領域を特異的に認識して遺伝子組み換えを起こしたうえ、コーディングシーケンス（CDS）を不可逆的に切断します。つまり、Anti-ABNT 抗体及び関連酵素はその後何をして、二度と発現しなくなるのです」

八雲はマイクロディスクに貼り付けていたシールを剥がした。

シールの裏側には薄っぺらい錠剤が一錠、貼り付けてある。

「ここに一錠だけ、AAA―阻害剤を誘発する薬剤が入れてあります。藤堂様、よくお考えになって、これをお飲みになるかお決め下さい」

彼女によって示されたその一錠は、恒の命運を左右する一錠となるだろう。このたった一錠の錠剤によって恒の命は助かるというのだろうか。これを飲めば、恒は全てから解放される。だが三階はどうなる？

「八雲さん……どうしてここまで。俺の為に」

「あなたが不憫だ、と申し上げたら不快に思いでしょうか。私は、

歴代の主神に受け継がれてきた貴重な検体、先代絶対不及者の不死化した体細胞と体液を保有しております。増殖せず、損傷を被っても死なない細胞です。培養を任されていた私はある事に気付きました。絶対不及者の細胞は、傷害を受けた時にだけ活性化され攻撃性を帯びますが、環境が穏やかであれば増殖もせず他の細胞を侵すこともしないのです。そればかりか、絶対不及者の体液はあらゆる病と傷を癒す、完全無欠の万能薬^{エリクサー}です」

恒は身を乗り出す。

「それが……？」

「悪の側面ばかりが強調されていますが、絶対不及者は本当に破壊のみをもたらすのでしょうか。絶対不及者の二度目の降臨の折に、彼は数カ月の間ではありませんでしたが、天帝として神々や人々の営みを見守っていたそうです。彼は陰階神によって弑逆を企てられるまでは無害でした。私は損傷を被った絶対不及者の体細胞の攻撃性をよく知っています、Anti-ABNT 抗体を発動させ、彼を刺激しない方がよいのではないかと思うのです。そうすれば彼は穏やかに世界を見守っているだけなのではないかと……」

恒は傷が痛むのも忘れて、身を乗り出していた。絶対不及者は必ずしも破壊者ではないのか？

彼と共生できる道はあるのだろうか。

恒、ユージーン、そしてノーボディがINVISIBLEに対し企てようとしている一連の計画は、全く無意味な事だというのだろうか。ユージーンはこの計画で確実に命を落とす、だがもし彼が絶対不及者としてある程度INVISIBLEに意識を譲りながら、彼が彼として穏やかに生きる道があるのだとすれば……。

これで、誰もが助かるのだろうか？

INVISIBLEの意思に介入しない、ただ干渉でいるだけで全てが平和に……？ 恒はその誘惑に、勝てそうにない。

だがブラインド・ウォッチメイカーを滅ぼすにはどうすればいい
のだろう。

第1節 第52話 臨時ボーナスと敬虔なる魔女

メファイストフェレスは内閣府を出て織図と別れ、一度風岳村に戻ろうとしていた。

ただ冷蔵庫で眠らせておくには勿体無い、こうしている間にも感染は拡大の一途を辿っている。ユージーンの血液を上島から分与してもらい、被災地や感染者達に持っていこうと考えたのだ。

しかし風岳村に着くというところで思いがけず、夜空の上で懐かしき者との再会を果たしてしまった。

口元を黒い覆面で覆って漆黒のボディスーツに身を包んでも、彼女にはそれが誰なのかすぐに分かる。聖書にも登場する有名な悪魔の名をいただくベリスⅡヴィルナはメファイストフェレスの一代前に交際していた元彼だったからだ。状況と動線から察するに彼は風岳村へと向かおうとしていたようだ。このタイミングで生物階にいるという事は、いくら心を許した過去を持つ者といえど、その目的を思いとどまってくれるだろうという楽観的な見方はできなかった。

メファイストフェレスは気取って声をかけた。

「ここで会ったが百年目、とはこのことね」

「そうだ。お前とは百年も前に別れたきりだったな。ちょうどこんな、霧わたる明け方の事だったな」

ヴィルナは懐かしむように遠い目で暁の空を見遣った。太陽のない解階では見ることもない光景。風岳の空に朝陽が昇ろうとしている。ヴィルナは射られるような朝焼けの日差しに目を細めていたが、本当に眩しいのは彼女なのかもしれないと、彼には分かっていた。彼女は小首を傾けるようにして、挑発的な眼差しを送る。

「そうだったかしら、ねえ」

彼女の漆黒の長く柔らかな毛は風に揺れて、上空300mで雲海となった朝霧を無遠慮に切り裂いた。

あれほど愛し求めあった女が、何と素っ気のないものだろうな、とヴィルナは感傷的になる。

だが誰にもこびない野良猫のような素っ気無さもまた、彼女の魅力だ。

彼女のそんなところに浮気性のヴィルナがどっぷりとはまってしまっただけでなくなつた一時期があつた。彼は今でも、彼女以上の女に出会う事ができず、彼女への思いをいつまでも引きずつていた。その焦がれた彼女と思いがけず再会出来たのだから、ヴィルナは運命を感じる。生物階と人間達の営みに執心し、彼らに触れたいと願つていた彼女は遂に、生物階の地に立つ事ができたのだな、とヴィルナは思い出した。

あの頃はいつか彼女の願いを叶えてやりたいと思つていたが、彼女は何でも彼女自身の力でやり遂げなければ気が済まないらしい。

「生物階に来ていたんだな。念願がかなつたじゃないか」

「色々な偶然が重なつたのよ。それで貴方はどうしてここに？ この先に何の用があるのかしら？ 聞かせて欲しいわ」

彼女はさりげなく風岳村を背にして彼の前に立ち塞がつて譲らない。ヴィルナは財力にものをいわせて作らせた、高性能の散弾銃型ツールを右手に持っている。まともに喰らえばメファイストフェレスの腹に風穴があくところだが、彼は発砲しないだろうと見抜いていた。

だがどこかで使う予定はあるようだ、安全装置が抜き取られ、銃身についた小型コンピューターが起動状態になっている。ベリス家は代々と続く武家の家系であつて、ツールに投じる財力が半端では

ない。メファイストフェレスは見境がなくて品がない攻撃だと思うのだが、礼の目標を粉碎するまで負い続ける追尾型弾丸も装填してきている筈だ。

「藤堂という少年神を捜している、この辺りにいる筈なのだが、見かけなかったか？」

彼女は思いがけない人物から思いがけない名を聞いて、顔色を変えた。

この銃で恒を撃つつもりだとしたら、恒はどうやってでも助かる術がない。ヴィルナの弾丸は時空跳躍機能を備えており、瞬間移動をした先まで追ってゆく。

逃げ惑ったとしてもやがて恒は力尽き、弾丸に射抜かれる事となる。まさに百発百中の弾道だ。

「捜してどうするの？」

「声は殺せと言っている」

ヴィルナはメファイストフェレスの動揺を楽しむかのように、粘つくような声でそう言った。

何十年間も付き合った元彼女だ、その語調や視線などから何を考えているのかぐらい想像がつく。彼女は柄にもなく動揺している。交際していた間の数十年を振り返っても、珍しい。

「声って、何？」

「さあ。誰かがそう言うのかもしれないし、俺の気のせいなのかもしれない。だが気のせいにしては、同じ声を聞いたという者が他にも大勢いるんだがね。お前には届いていないのか」

彼は淡々とそんな事を言った。

メファイストフェレスは生物階に残ったのでブラインド・ウォッチメイカーの息がかからずに済んだが、もし解階に残っていたらと思うとぞっとする。ひょっとするとメファイストフェレス自身の手

で恒を殺してしまったかもしれないのだ。メファイストフェレスならば油断しきった恒を簡単に殺せるだろう。解階の貴族達全てが恒を的にかけているのだとすれば、このままでは彼はいづれ”誰かに”、確実に殺される事になる。そして対峙するヴィルナは、彼の持つツールを使用しなかったとしても、メファイストフェレスの実力より遥かに勝っている。

まともにやりあっても勝てはしない。ヴィルナはそんな力の優位を利用してメファイストフェレスに近づくと、彼女の腰にゆっくりと手を回しその手はいやらしくも下腹部へと下ってゆく。

「お前は本当に綺麗になった……誰の為にその美貌を磨いたのか知らないが、拒まれるほど欲しくなる。また俺の下で鳴かせてみたいものだ」

彼女は怖気がするほど、その行為が許せなかった。

何故なら神々からは魔女と同一視されるメファイストフェレスは神の使徒となるにあたり、そこまでする必要はないと洩るユージーにどうしても乞いて、彼から陽階の作法に則った正式な洗礼を受けた。それは身も心も彼の使徒となり誠心誠意伺候してゆく為の、彼女なりの決意だ。その日以来俗事から足を洗い父親の心配をよそに解階で許される程度の禁欲主義を貫き、まるで敬虔な修道女のような生活を送ってきた。

彼女は彼女自身を戒めながら日々人間研究に勤しみ、色欲を断ち鍛錬を重ねて己を磨いてきたのだ。ユージーの使徒として貞淑である事を誇りとしてきた彼女が、無遠慮に腰に手を回されて黙っていられる道理もない。彼女はヴィルナの指を払いのけ、毅然とした態度で全身で嫌悪感を現しながら拒絶した。

昔の男に簡単に身を許すほど、あの誓いは軽々しいものだったわけではない。

「その薄汚い手をどけて頂戴。妾はもう貴方のものじゃないの！」
「威勢がいいことだが、藤堂を知っているんだろう？ それもただ知っているだけではない。違うか？ 俺は是が非でも藤堂を殺りたい訳じゃない。その代わりにお前が……俺にどうしても抱かれないというならな」

それが一体どういう意味なのか、彼女はじわりと察した。下卑た嗤いを浮かべながらヴィルナは舌なめずりをする。解階の男性型個体はとにかく性欲が強くてメファイストフェレスは辟易したものだが、恒の命ががっている。抱かれるだけで、恒が助かるのなら……しかし彼女は決然として彼を突き放した。

「何とも見下げた男ね。三階がどうなっているか、理解できない訳じゃないでしょう？ そんな時に考える事はソレだけだっていうの？ 妾を抱くなら、貴方が死ぬほど嫌っていた軽蔑と憐れみをくれてやるわ」

閃光が暁の空に迸ったのは、彼女が怒りに震えながらそう言い放った時だった。

彼は雷鳴のような轟音を聞きその方角に走った空を二分する閃光を見上げると、何故か荒んでいた心が洗われたように感じた。彼の心に改悛の風が吹き抜けたのだった。荻号 正鵠がフラールンによって放った一陣の疾風、地球全体を覆いつくすマインドコントロール・フィールド、それがブラインド・ウォッチメイカーによって奪われていたヴィルナの正気を取り戻した。彼女は何故生物階で藤堂恒という少年神を捜さなければならなかったのか、その理由が理解できなかったし、それは取るに足らない事のように思われたのである。彼女は一瞬生じた隙を見逃さず、マクシミニマを彼のこめかみに当てた。

ひやりとした、髑髏の感触が彼の肌に触れている。

ヴィルナは微動だに出来ぬまま、たった今彼を死に追い詰めようとしている昔の女を見つめた。

「ヴィルナ、貴方はよい男だった。妾は素敵だった頃の貴方を忘れたりしないわ」

「ま、待ってくれ。俺は一体何を……メリー、俺は何を……」

「さようなら、愛しい貴方」

彼女がカチッとスイッチを押すと、従順な髑髏は迷わず彼の脳を打ち抜いた。彼が正気を取り戻していたと、彼女は知らなかった。檻褌布のように力を失って地上に落ちてゆく、彼に手を伸ばしたが、追おうとはしなかった。

「……主よ。妾を試みに引き給わざれ」

彼女は赤い火を吐いたマクシミニマのされこうべを愛撫し、腰に帯びると、両手を組み合わせて懺悔をした。

初めて自身の手を汚し心までも魔女になってしまったのだと、自覚せざるをえなかった。

＊

「あなた……！　どうなされたの？」

「ただいま。久しぶり」

川模　廿日の夫、紫檀　葡萄は玄関先で出迎えてくれた愛妻をお腹の子供に気を遣いながら優しく抱きしめた。

生物階で单身赴任をしていた彼にとって、およそ1ヶ月ぶりの帰宅だ。彼の着衣からはまだ硝煙のにおいがする。廿日は夫の懐ですん、と鼻を鳴らした。

戦術オペレーターとして執務を行い神階から生物階に降りる事の

なかった廿日には絶対に染み付かない硝煙の気配は、夫が任務を忠実に遂行した事を証するとともに、また彼の原罪をよりいっそう深めた事を意味している。もし死後に行く場所が用意されているというのなら、間違いなく夫は地獄に落とされる事だろうが、幸いにして使徒はA D A Mに入る事ができない。

「あなた、また大勢殺したの？」

この質問は夫婦の間で取り決められた符丁のようなもので、廿日は玄関先で必ず葡萄を問いただした。殺したといえば、廿日はユージーンに対する申し訳なさや、約束を守ってくれない夫への不満から必ずふてくされる事になっている。なっている、というと妙だが、殺した人数を嘘偽りなく告白する事は、この夫婦の間では儀式のようなものだった。

「今日はやってない」

久しぶりに世帯寮に帰ってきた夫を嬉しそうに出迎えた廿日は、今日はまだ一人も殺っていないという言葉が引かかった。生物階に居たというのに今日に限って一人も殺さなかっただなんて……明日は大雨か大雪が降るわ、廿日がそんな事を真剣に考えていた頃には、葡萄はもう靴を脱いでジャケットを放り出していた。

夫の予定外の帰宅を、どこの世界の妻も訝しむものだ。

まさか解雇リストラされたのではないかと不安になる。夫婦共働きだったので蓄えはあるけれども、万が一にもリストラをされてしまったら家計はやがて苦しくなる。子育てに専念したいと思っていた廿日も、すぐに復職をしなくてはならないだろう。そしてどこの世界の妻も、真昼間からの夫の帰宅の理由を尋ねたがるものだ。

「あなたまさか任を解かれたの？　だから殺害命令のない人間は殺してはいけないとあれほど言ったのに。あなたは殺しすぎだったのよ、殺すべき人間はあなたが決める事じゃないの、主がお決めにな

る事なのよ。ああ、何という事……眩暈がするわ。遂にリストラに遭ったなんて」

「眩暈がするのは、つわりのせいだろうさ」

廿日はてつきり、葡萄があまりにも殺害司令のない人間を殺しすぎた為に、とうとうユージーンに解任されたものと思い込んでいた。そしてそれはいつも廿日の懸念材料だった、うちの夫はいつか、いくら温和な上司といえど彼の逆鱗に触れてしまうだろう、と。

だが葡萄からすればいつもの不手際（殺害指定された人数より多く殺してしまう事）、は少しでも開戦の不安を減らしてユージーンや以御を楽にしたい、更には嫁の仕事を減らしたいという思いが先に走っての事だった。世界大戦規模の戦争を二度と起こすまいと、小さな火種をも許さず根こそぎ摘み取ってきた彼はいつの間にか、葡萄などという愛嬌のある名を持つ身でありながら、軍神下使徒のうちでも暗殺者としての不名誉な地位を不動のものとしていた。軍神下使徒達の間で第五使徒の紫檀 葡萄と言えど”必殺の紫檀”の異名をとるほどである。

そんな夫を持つ妻の苦労は並々ならぬものがあるが、紫檀が無類の愛妻家であるという事実は、意外に知られていない。

「リストラになど遭っていない。君は、ニュースを見ていないのか？」

「ネットが繋がらないの。昨日からよ」

出来た嫁によって塵一つなく片付けられた部屋を見回すと、胎教によさそうなクラシック音楽のDVDがずらりと並べてあった。

ピンクと青の端切れがテーブルの上に重ねてあり、裁縫セットを拡げている。日がな一日、産まれてくる子供の産着などを作って過ごしていたようだ。軍神下第五使徒、紫檀 葡萄の上司であり、軍神が最も信頼を寄せていたといえる第二使徒、川模 廿日はすつか

り引退して専業主婦となっている。まだそれほど腹は出ていないが、気分はもう一人前の妊婦だ。このたびの定期健診で、赤子は双子だという事が判明した。男の子と女の子の二卵性双生児だそうで、男の子も女の子も欲しかった廿日の喜びようといったらなかった。

夫婦合意の上で、息子は八朔^{はっさく}、娘は檸檬と、柑橘類で統一する予定だ。

白翼の赤子を産むか双子を産みでもない限り、神階に住まう使徒の夫婦にふたり目の出産は許されないため、双子だと分かった廿日は宝くじにでも当選した気分だったそうだ。生物階の厳しい現状と、神々の殉職のニュース、そして生物階で任に当たっていた使徒の殆どが神階に撤収させられてしまったという惨憺たる事実、解階と神階の全面戦争の様子は、出産を控えた妊婦に話して聞かせるような話ではなかった。

「何があったの……？ ……待って、言わないで。大変な事……？
先ずはあなたが無事に帰ってきてくれてよかったわ」

話を聞きたいが、初産の廿日はお腹の子供への影響が心配で、一度は訊ねたものの心の準備が出来ず挫けてしまった。

精神的には決して頑丈とはいえない彼女に献身的な愛をそそぎ、宥めたりすかしたりするのは、愛妻家の葡萄の大切な役割だった。

「大変さ。けど、君の出産も大変だ。適当な話題じゃなかったな」

「一つ教えて頂戴。主は、ご無事……？」

「お会いしてはいないが、ご無事だそうだ」

毎日のように傍に仕えてきた廿日と違って、任務のため生物階に降りていた葡萄はここ数ヶ月、ユージーンと会っていなかった。

帰還報告と挨拶をしようとして執務室に行ったが、彼は居なかった。その代わり憔悴しきった以御が任に当たっていた。一度として乱れる事のなかった、以御とユージーンを頂点とする軍神下指揮系

統が混乱している。それはとりもなおさず、神階全体の混乱を象徴していた。

使徒達には動揺が広がるが、神々より身体的にも能力的に劣る彼等では対処ができず、解階との戦争の役に立たないのだ。混乱に乗じて暴動が起こるのを防ぐ為、神階の下位使徒達には情報統制が布かれはじめていた。GLーネットワークにアクセス出来、真実を知る事ができるのはせいぜい枢軸神の上位使徒達ぐらいだ。使徒階の端末からのネットワークアクセスは有為枝折によってブロックされていた。そこで廿日は先日より、寮でのインターネットが出来なくなった。

子供の産着のデザインをネットで捜していたのだが、オフラインになって迷惑している。

葡萄は廿日の気を紛らわせるように、懷から大切そうに小さな黒いケースを取り出した。

「今月分の俺の給料、と、廿日の産休手当で、あとボーナス」

葡萄は廿日に、展戦輪の御璽入りアンプルを10本手渡した。十大使徒に支給される給料で、1／2の希釈率の軍神のアトモスフィアが充填されている。普段は第二使徒の廿日は4本、第五使徒の葡萄は3本もらっている。だがいつもより3本分多い。葡萄はシリンジを持ってきて、廿日の腕にせっせと注射する。廿日は嬉しそうに腕を差し出す。使徒達にとっては月に一度の至福の瞬間だ。

渴ききっていた身体に神のアトモスフィアを受けて、力がみなぎってくる。

「嬉しいわ、ボーナスだなんて」

「以御さんが、子供の分だって」

「まあ、以御たら気を遣って……」

アトモスフィアは使徒の生存にとって必要なものであるが、ある

一定量以上は必要ない。

フィジカルレベルの高い武型神であり、枢軸でもあるユージーンのアトモスフィアは他の神々のそれより濃く栄養価があるので、廿日も葡萄も本当はアンプル1本分で一ヶ月はやっていける。身体の代謝に必要な量以上を注射によって接種する必要はないので、残ったアンプルは嗜好品として利用できる。例えば料理の隠し味にしたり、飲み物に混ぜたり、風呂に入れて浴びたり、だとか。

使徒いわくアトモスフィアにも風味があって味わいも豊かで、それなりに依存性があるらしい。

上位使徒達は煙草や酒のような感覚で思い思いに楽しんでいるようだ。葡萄は早速とばかりに、廿日が作りかけていたスープの中にアトモスフィアを混ぜた。ちなみに、放射性物質であるアトモスフィアの溶媒は滅菌された生理食塩水だ。

給料日なのだから、贅沢に使ってもいいわよね。廿日はそういいながらオタマでスープをすくって隠し味の味見をした。

「おかげでおいしくなったわ」

「いいニュースもある。主がお弟子をとられたそうなんだ」

「御弟子を？　まあ、それは初耳だわ。よほど優秀な方なのね。神階では荻号様と比企様の師弟関係を最後に、師弟関係を結ぶに相応しい、飛びぬけて優秀な神様が現れなかったそうなのにな」

妻も隣に並んで配給の野菜を切っている。

使徒達の身の回りの品や食糧は一週間ごとの配給制だ。通販のように、前週までに注文用紙に欲しい品にチェックを入れて提出しておく、物品が配達されてくる。

廿日は計画的に料理の献立を考えていて、食卓に並ぶ一週間分のメニューが冷蔵庫にマグネットで貼り付けてあった。

「聞かせて、主のお弟子はどんなお方？」

「10歳の少年神だがマインドギャップが7層もあるそうだ。以御さんもよく出来た神様だと褒めていらしたよ。荻号様や織図様からも目をかけられていらっしゃるようだし」

「まあ！ では末が楽しみね。荻号様に目をかけられた神様は、大出世をなさるといいうジンクスがあるのよ」

将来有望な神を、ユージーンが育てたという事になれば使徒としても鼻が高い事だ。

「主は、以前とは違うご苦悩を抱えていらっしゃるそうだ。俺も主をお支え申し上げたいが……主が御弟子にとった少年神の警護を俺に任せたいと仰せだ」

「以御がそう言うの？」

「いや、主が直々に仰せなんだと、以御さんが」

「それは名誉な事だわ。でも警護だなんて……」

葡萄は軍神下使徒の中でも任務必達度が群を抜いている。出来ませんでした、無理でしたと口にしたことは一度もない。任務超過はあれど、任務不完遂はこれまでなかった。命じた事は、石にかじりついてでも達成してくる。その彼の根性を見込んでユージーンは葡萄を指名したのだろうが、廿日は万が一にも、葡萄の命と引き換えに少年神の生命を守れという意味ではない事を願うばかりだった。

葡萄は随一の武闘派だが、最強の使徒という訳ではない。警護に当てるのなら、本当は着任したばかりの鏑 二岐こそ相応しい。

彼女は文句なしに軍神下最強の使徒と言えるだろう。だが彼女ではなく、葡萄を指名した理由に特別な意図があるのだろうか。

葡萄は向こう見ずな性格で、任務の為なら簡単に彼の命を投げ出してしまおうであろう事は、ユージーンもよく知っている。ユージーンが葡萄を危険な戦地に派遣するたびに、廿日は彼の無事が心配だ

った。ユージーンが葡萄を信頼して派遣するのではなく、使い捨ての鉄砲玉として使っているのではないかと、口には出来ないがそう思った事もある。幸いにして葡萄は今日まで生きながらえている、だが、これから先はどうなるか分からない。

神は使徒達にとってまさに雲の上の絶対的存在で、その命令に叛く事はとても出来ないが、とりわけ使徒階最下層の住民から第五使徒にまでの昇進を許された葡萄が、彼を見出した彼に感じる恩は、並々ならぬものがある。葡萄は文字通りユージーンを神格化しているし、上司と部下というビジネスライクな関係ではられないのだ。

そんな熱烈な信者である葡萄を少年神の警護にあてるユージーンの真意を、廿日ははかりかねる。

待望の子供達の顔を見ることなく殉職なんて事にならないといけないのだけだ。

「その神様は、危険な状況に？」

「そういう事、なんだろうな……お若いのに不憫な事だ。とにかく以御さんと呼ばれたら藤堂様の警護と身の回りのお世話に入るよ。でも出産には立ち会えるよう、かけあってみるから」

「あなた、気をつけて」

フライパンにかけていたポークソテーの火を弱くして、ふたりは台所でも構わず熱いキスを交わした。

もう一刻でも、愛を確かめ合う事に我慢がでなかったからだ。

＊

比企は大坂大学の錯体化学研究室に、嫌がる萩号を無理やり連れて戻ってきた。

荻号 正鵠は地球という病んだ球体をまるごとフラーレンで浄化するという仕事を終えて、また暫くの間、彼が成すべき事を見失ってしまったのだ。比企が何をするのかと問えば、また深刻な事態が起こって力を必要とされる時まで、一万年後の世界を満喫しつつ日本で借家かアパートを借りて、三年後の有事までのんびりと気ままに暮らしたい、と言うのだ。荻号は三年後に風岳村で起こる、彼にいわせるところの大イベントを知っているので、日本で暮らしたいというのは風岳村の様子を観察できる距離に居たいという意味なのだろう。早速隠居暮らしをして暇にしている場合ではないから、と、早くもサボリたがる荻号を連れて研究室に帰ってきた。

正鵠に有機合成の心得があるとはとても思えないが、遊ばせるよりました。陰階神として生きる事、神としての責任と権利を放棄した彼を鞭打って、有無を言わず連れて戻ってきたのだった。比企はユージーンの話が入ってより宴会を中座してしまったが、相模原達は既に出来上がってしまったので、今日は徹夜で居残って実験をしている学生もいない。荻号は実験器具を手に取り、中に入っている液体のにおいを嗅いだり、学生の実験ノートパラパラとめくったりしていたが、何故こんな所に強引に連れてこられなければならないのかを抗議することも忘れなかった。

「お前はとも、根本的に勘違いをしている。俺は無償で働きたがっている便利屋じゃないんだ。何故お前ごときに指図されなきゃならん」

荻号は一刻も早くこの場からいなくなってしまうたい、と思っているのだろう。

早くよい不動産物件を捜して、のんびりと暮らしたいとみえる。比企は全く興味がなさそうに腕組みをしながら研究室を見渡している彼の力を借りるには、どうすればいいものかと思案をめぐらせた。どうやら彼の性格は荻号と根本的には変わらないらしいが、荻号

要に輪をかけて責任感が希薄だ。太古の時代にいた彼にとって、未来の出来事に対してはどこか他人事のように思っているのだろう。

現状を克服するだけでも骨が折れる仕事だというのに、荻号 正鵠の望むような未曾有の危機などそうそうはあつてたまるものか、と比企は思う。それに生物階に猛烈な勢いで広がりとつある感染症だって、一般的な神々の思考回路からしてみれば立派なエマージェンシーだと思うのだが……。

「日本ではアパートを捜すにも不動産屋は朝にならんと開かん事になっている。時間を余らせているなら有意義に使ってもらおう。どこに逃げて同じだ。逃がしはせん」

荻号 正鵠はどこに逃げようが、これほど強大なアトモスフィアを纏っていると、どこに居ても比企にはバレバレだ。そして超空間追跡転移を使いこなす比企をまいて逃げる事も、実際に難しい。比企はエバポレーターとナスフラスコを覗きながらてきぱきと次のステップの準備をしている。荻号はそんな比企に向かってあてつけかと思うほどの盛大なため息をつく、合成経路を示したメモを渡されて仕方なく流し読みした。

「まったく何でこんな事になるんだ……？ 理解に苦しむ」

「グチグチ言うな、往生際が悪いぞ」

荻号がこの期に及んで文句を言っている。だが彼は合成経路を検討させられる羽目になって、嘆いたのではなかった。

「バカ言え、俺は往生際はいい方だ」

自殺願望の強かった彼は命の危険を顧みず、望むところとばかりに神体を一万年も凍結保存されてしまったのだから、往生際が悪いとは確かにいえなかった。彼が言いたかったのはそんな事ではない。「何故こここの中間体をだ、まとめて反応させないのか理解に

苦しむと言いたかったんだ。普通そこは省くだろ、常識的に考えて」

荻号は比企のスキームに駄目出しをしていただけだった。彼は共有パソコンのデスクトップ上に立ち上がっていたHyperChem^{ハイパーケム}という3D創薬アシストソフトに興味を持ち、ヘルプを見ながらモデリングと分子設計を行う。黒いバックグラウンドの画面に、3D表示された化合物をスクロールでくるとまわしながら、パラメータをいじり、MolBuilder^{モルブラウザ}を同時起動して立体構造を確認、高分子をドッキングさせ分子軌道をはかり、そこから導き出された合成条件をさらさらと研究室のコピー用紙にメモした。

プリントアウト機能に気付いて結果をプリントアウトすると、彼は文句を言いながら研究室の長瀬のデスクに刺さっていたドラえもん^{ドラえもん}のついてある青ペンで青ペン先生のように比企の組み立てていたスキームをざっくりと添削し、比企につき返す。

比企がメモに気を取られている間に、逃げようとしているのだと気付いたので逃がしてなるものかと荻号の聖衣の裾を掴んでいた。

正鵠は”常識的に考えて”と言うが、なかなか彼の”常識”に至るのは難しい。

荻号が添削をした経路に変更すると、二つの化合物を同時に合成する事ができた。つまり2日は時間を短縮できるのだ。誰かがこの自由人（神）の首根っこをひっ捕まえて真面目に働かせる事が出来れば、三階は随分と助かることだろうにと比企は嘆かわしく思う。あるのに無駄に持て余す才能ほど、無駄なものはない。

荻号はいかにも”働きました”というように自分で自分の肩を揉むと、席から立ち上がった。

「ほら、もういいか。もう行くぞ」

「どこへ行く。不動産を捜すのはいいが戸籍がないだろう。一万年前ならいざ知らず、現代の日本では身元不明者が家を借りる事は出

来んぞ」

比企は荻号の足元を見るかのように底意地悪くそう言うと、案の定、彼は面食らったような表情をした。

そんな彼の困惑した様子を、比企は見逃さなかった。

「戸籍と経歴を用意させ、不動産屋に連れて行ってやる。その代わりこちらの化合物のスキームも検討しろ」

荻号はため息をつきながらも、好みの物件の条件を付け加えるのを忘れなかった。

神が神階を離れ借家で賃貸暮らしをするなど、聞いたこともないが荻号は人間のような暮らしを望んでいる。

どうやって賃貸を払うつもりなのか、など考えてもいないのだろう。

「庭付きの一戸建ての借家がいいな。南向きのだ」

「……」

荻号要は薬草畑を作って珍しい植物を育てたり交配させたりする、まるで中世の魔術師のような神だったが、やはりアルティメイト・オブ・ノーボディが荻号 正鵠の性格と行動様式を模して演じていただけなのだろう。薬神を廃した比企が薬草園を作って有用植物から天然化合物を抽出し創薬に応用するというスタイルを今でも維持しているのも、多少は荻号の影響を受けたといえる。荻号が植物を栽培できる庭付きを要求するのは、きっとそういう理由だ。まったく、緊張感に欠けるふざけた神だ、と比企は今更のようにそう思う。この無駄に持て余している才能を、宥めてすかして余すところなく搾り出して利用しなくては、と比企は決意したのだった。

荻号は器用にペンを指の間で回しながら、ふてぶてしく比企の書き付けた膨大な量の資料に目を通してている。

「なあ。お前の師だったらしい俺のそっくりさん。荻号要って奴は

どんな奴だったんだ？」

荻号は築地の机の上に足を投げ出しながらスキームに目を通し分子設計ソフト上に”新しいファイル”を作った。

座り方から話し方まで、まったく、荻号要にそっくりだ。彼はまともに椅子に座る事ができない、背骨がないのかと思うほど寝そべったようにだらしなく腰掛ける。荻号 要はすぐに煙草を啜えたがったものだが、喫煙の嗜好はないらしい。

「謎の多い神だった。いや、神ですらなかったのだ。何年生きていても知れなかった、覗けば戻ってくる事が出来ない底なしの沼のようだ。そして荻号の謎に近づいた事の代償からか、実際にこのような未曾有の事態を招いてしまったのだ。己は真の敵を知ったが、あまりの敵の途方もなさに竦む。荻号はそんな敵の脅威から、長きに渡り庇護してくれたのだろう。神階は親ばなれをしたのだ、子らは親を失って初めて親の存在の大きさに気付いた」

「そんなもんかね」

荻号はそう言って、比企のスキームを真っ青に添削して彼に投げて寄越した。

彼は泰然自若として、物事を難しく考えすぎない。比企の提示した堅実な合成経路は単純な発想に置き換えられて、しかし一見生成物の想像がつかない、目を見張るような中間体を経由するものだった。

「そうやった方がクラスターの電荷とポテンシャルエネルギーが釣り合うだろ。したがって生成物はこうなる」

理解が追いつかず、面食らっている比企に、わざわざ解説をしなければならぬのかと億劫そうに銅色の頭をかきながらも、一応説明をしてシミュレーション結果をプリントアウトする。比企は納得し、ただただ彼の非凡さというものに感心した。

「見事だ」

「荻号要がいなくなつて、お前ら自由になつたんだろ？ 過保護は時に足枷となる。神々は長きに渡り、彼の存在に甘えて思考停止していたらしいな。居心地のよいシステムの内に守られ、飼われて呆けていた。……安穩とした顔でな。錆びた檻から解き放たれたのに、何故嘆く必要がある」

比企は手を止め、彼の言葉に耳を傾けた。

彼の言葉は比企の頭の中に浸透するように、ゆっくりと流れ込み満ちたしてゆく。

「しかし、神々は生物階に責任を負っている。守らねばならない、何に代えてでも」

「何故、生物階だけに固執する？ 生物階には目をかけて、解階を見捨てるのか？ お前の使命感と責任感は本当に、お前自身のものか？ ……つまりそういう事だ。お前たちは、そういう風に教育されたんだ、神々は自己を棄てさせられ、システムに組み込まれてしまったんだ。お前の慕う、ママだかパパだかの意思にのみ従うように教育されてしまった」

比企が織図の記憶を看破した時から、考えてもみなかった訳ではない、あるいはアルティメイト・オブ・ノーボディの意思に従う事が本当に正しいのかという思いはあった。

「自己を取り戻せとは言わんよ。神々を啓蒙しに、過去からやって来た訳じゃないからな」

荻号はフラーレンをシザーケースに似た皮のポシェットから引き張り出し、また一枚一枚彼の気の済むように並べてタロット占いをしている呪術師のようだった。比企はしかし、少なからず啓蒙されずにはいられなかった。

正しい事はこうあるべきと創り上げてきた信念そのものにガイドラインが存在していたなど、受け入れがたい事だからだ。

だがガイドラインをなぞるようノーボディに巧妙に仕向けられているという事だけは、どうやら確実のようだ。

そしてノーボディを妄信するユージーンと、Anti-ABNT抗体の子供の存在。

荻号は三年後の風岳村で、どう動くつもりなのか――。

邪魔をしようなどと、思わなければならない。比企は不穏な陰が頭の片隅に落ちるのを感じていた。

第1節 第53話 敵襲、夜の研究室にて

恒は八雲からもらった錠剤と設計図の入ったマイクロディスクを携帯の中にしっかりとおさめたが、ふと気になることがあった。

八雲は洗いざらい恒に喋って、彼女の身は大丈夫なのだろうか。

極陽は10層のマインドギャップを持っている……恒ですら八雲を看破できるのだから、極陽の卑近に伺候する彼女の叛逆は容易に知れてしまうのではないだろうか。そして彼女がひとたび彼女の主を裏切ったと明らかになれば、彼女は極秘裏に処刑される。使徒として最も重い罪は主に対する叛逆であり、叛逆を行った使徒は例外なく死刑が言い渡されると陰陽階神法に明確に記載されているからだ。彼女は彼女の命も省みず、恒を助けようとしてくれたのだろうか。彼女は単純におひとよし、という訳ではなさそうだ。それは恒のわずかばかりの直感ではあったが――。

「八雲さん。あなたが俺に話してくださったこと、極陽に筒抜けなのでは」

「それは心配ありません。私どもは主の犯した罪が他の神々からのマインドブレイクによって明るみに出ないよう、これをつけております」

それは脳の微弱電波を攪乱する金属製のピアスだった。彼女はそれを身につけ続ける事で、結果的に極陽のマインドブレイクをも防いでいた。神階のうちでも機密部の要職にある使徒達は、こうやって位神達の心層看破から彼等自身の脳内にある機密を守っているのだそうだ。

彼女は断じて、ただのおひとよしではなかった。恒は彼女の用心深さに感心する。

「周到だなあ」

「私は周到でございます。しかし我が主は更に周到であらせられます」

そうだろうな、と恒も思った。彼女が今回のことに関してこれほど用意周到なのは、極陽がいかに油断のならない人物であるかと、彼女自身が思い知っているからに他ならないのだ。

「抗体を発動させるには、何が契機となるんですか」

「ご存知かと思いますが、あなたの死を認識します。逃れる術はありません、そして逃れられないよう設計いたしました」

八雲はきまりわるそうに目を叛けながらも、口から出てくる言葉は容赦ないものだ。

恒はふーん、と失望したような息をついた。彼女はどこかで、彼女の技術者としての腕を過信している。それが例えばアルティメイ・オブ・ノーボディのような完全なる創世者によって造られたものではなく、誰かによって造られたものであるかぎり必ず切り崩す手だてはある、恒はそう考える。

死を体験する事は生を見つめなおす事だとユージーンに教わった、その意味は死して知る事となるのか。それとも、生還して回顧する事となるのか……。

八雲のいうよう、Anti-ABNT 抗体阻害剤を飲めば恒は助かる。しかし不可逆的に、どんな手段を用いても助かる事のないユージーンを裏切る事となってしまう。奇麗事と言われるかもしれないが、それは殺されるより耐え難い事だと恒は思う。恒は、恒の運命の全てを終わらせる秘薬を、使うつもりはない。

それを使ったとしても、極陽は“念のため”恒を殺して抗体が発動しないかを確認するだろう。

「でも分子が死を認識する事など出来ないでしょう？ 具体的には何の分子がどの領域に結合するんですか？ 例えばプロテアーゼのようなものだというなら、結合部位を再現する強制発現ウイルスベ

クターを使えば、俺が死んだ状態を再現できると思いますし」

「それは不可能です。抗体をコードする遺伝子は神の遺伝子側に存在しています。あなたの神体は後からいかなる遺伝子治療も出来ないよう安定化されています。唯一の例外、私の仕込んだ阻害剤以外には影響する事ができません……」

「なるほど。父を周到だと、側近のあなたがおっしゃるわけです」
多少の皮肉がこもってしまった事に、恒はそう言ってしまったから気付いたが、八雲は恒の言葉に恥じるように口をつぐんだ。

恒は滴下する赤い液体をした点滴を見上げて、暫く考え込んでいたが、ぽつりとこう言った。

「俺はあなたの下さった薬剤を、多分使いません」

「……よくお考えになって下さい、まだ結論を出すのは早いかと」

「決めているんです、もう」

恒が八雲に伝えておこうとしたのは、自分を追い詰めるためだ。使わないと言っておけば、使いたい誘惑が襲ってきた時に少しは抑止力になるだろう。八雲は恒に助かって欲しいと思う心が通じずに落胆したが、心の片隅では恒がそう言しかないと知っていた。Anti-ABNT 抗体は逃げない、いや、逃げようとしなない。恒は正義感が強く、そして自身より他者を愛し、保身を考えず自己を投げ出す。

極陽と八雲が恒の人格をそう設計したからだ。

彼は根っからのお人よしで義理堅い。八雲は恒が、それが必要とされれば自らの命をも投げ出すであろう事を知り尽くしていた。恒をそう創り上げ、幼い彼にそう言わせてしまった事を、彼女は猛烈に後悔した。彼女のした行為は罪滅ぼしに過ぎなかったのだと、恒に指摘されたように感じたからである。八雲の表情がにわかに翳ったのに気付き、恒は彼女を罪悪感から解放したいと願った。悪いの

は八雲ではない、神の命令は使徒にとって絶対のものだ、その命令がどれほど彼女にとって心苦しいものだったとしても違える事は出来なかった。

八雲を責める事はできない。

「俺、もっと自分を鍛えます。心と身体を鍛えて、より強い抗体を自分の中に培い、自分の意思で発動できるようにします。だから、心配しないで下さい、自分でやってみせます」

恒はわざとに笑顔を作って、八雲を安心させる。八雲は恒の力強い言葉に少し考えて、そして重大な事を教えた。

「そうですか……では、一つよい事をお教えしましょう」
「？」

「ユージーン様の抗原を御身に刻み込むのです。あなたは抗体です、抗体が抗原に予め近づく。それがどういう効果を持つか分かりますか？」

恒は八雲の言葉に目を丸くした。実際の免疫システムのように、本当にそんな事ができるのだろうか、インフルエンザワクチンを接種しより強い抗体が強い免疫機構を発動させるような、そんな事がない。

「……予備免疫が、できる？」

「抗体は抗原と触れる事で学習し、予備免疫を造る事ができます……そう、学習する事で、より強い免疫を発動する事ができるのです。あなたはユージーン様の抗原を認識する事ができます。絶対不及者の器に触れ続けるのです。そうすればあるいは、あなたが死ななくとも抗体を発動できるのかもしれませんが」

八雲も、確信があつてそう言ったわけではなかった。だが恒の為に何かを助言せずにはいられなかった。

「抗原はどこにあるんです？ ユーजीンさんはまだ絶対不及者ではありません。抗原はまだ、現れていないのでは」

「確かにまだ現われていませんが、それらしきものはユーजीン様の背にあります。そこに絶対不及者の力の象徴、Key of Existence（存在確率の鍵）が……。INVISIBLEの選定した器である事を示すステイグマ（聖痕）に素手で触れる事は危険です、触れるとひどい火傷を負うかもしれません。ですが絶対不及者の聖体の一部に触れたショックによって、あなたの抗体は抗原の情報を記憶します。藤堂様、火傷の痛みは相当なものかもしれません。ですが命に勝る尊いものはありません」

彼女いわく、彼はまだ絶対不及者ではないが、ステイグマの部分だけは早くも絶対不及者の性質を帯びているのだという。

恒はユージーンを持つステイグマを見た事がある。

アルティメイト・オブ・ノーボディの背にもあったあれだ。金色をした刺青のようなもので、緻密な紋様が背中中に張り付いて不定形に蠢いていた。

あれが何なのか。恒にはさっぱり見当もつかない。それにアルティメイト・オブ・ノーボディの背を見たのは夢の中だったし、ユージーンのスティグマを見たのはユージーンが死んでいた時だった。熱そうには見えなかったが、生きている状態で聖痕に触れるのはどんな熱さなのだろう、想像がつかない。

しかも恒が酷い火傷を負うと分かっている、ユージーンが聖痕に触らせてくれるだろうか。

やらせてくれないような気がする。それに聖痕にどれほど焼かれ

るのかは、触れた者がいないので分からないのだそう。ひよっとすると全身火だるまになって即死してしまうかもしれないのだし……。八雲は繰り返し触れる事によって、恒の持つ抗体は実際に絶対不及者が現れた時に、より強く発現するかもしれないという。予備免疫を作る事で抗体をコントロールできるようにするのなら、何もできずに3年後に犬死にする事も避けられるかもしれないから、試してみろと八雲は言っている。

恒が死ななくとも済むよう精神力を鍛えるというのは漠然としているから、八雲の提案は具体的に分かりやすかった。

何か一つ、やれる事が見つかってほっとした。具体的に何をすべきなのか、恒は途方に暮れていたところだったのだから。

「貴重な情報を、ありがとうございます。ところで、極陽は俺を殺して抗一絶対不及者抗体を発動させた後、ユージーンさんをどうするつもりだったのですか？」

「抗体が発動すればINVISIBLEの力を絶対不及者の裡に閉じ込めて、絶対不及者を弱体化できます。絶対不及者を神々の意のままに従わせる事や拘束し封印する事も、不可能ではない筈です」

陽階は再び、天帝として絶対不及者を奉じるのだろうか。

弱体化させられ、拘束された絶対不及者を祀り、神階の力と栄光の象徴として君臨させる……。

絶対不及者は神々に囚われたまま、偶像として永遠を生きることとなる……。うまくゆけば、の話だが。

「その仕打ちを、ユージーンさんに対してするんですよね？」

「ユージーン様は絶対不及者となった瞬間に自我を失います。彼はINVISIBLEの体現者となるのです、情けは無用です」

どのような場合でも、ユージーンにとっては悲劇的な結末

しか用意されていないようだ。

何故彼だけ、救われないのだろう。誰も彼を救う事ができない、誰の口からも、ユージーンを何とか助けようという言葉は出てこない。恒の場合はまだ、周囲に恵まれている。アルティメイト・オブ・ノーボディも、八雲も、そしてユージーンも恒を何とか死という運命から遠ざけようとしてくれている。だがユージーンに関しては、滅んでもらう他ない、死んでもらう他ない、絶対不及者となって自我を奪われるのは当然だなどと誰もが諦めてしまっている。

そして、ユージーンもまた一度自殺を図ったうえ、一度死んだ身だと彼自身に言い訳をしながら、生きることを諦めている……。

恒は、彼を助ける道をどんな事があっても諦めたくはないと思った。

たといえそう考えている存在が、たったひとりでしかなくとも――。 ” どうして、あなたを助けられないんだろう……そんなのって ”

利用したり、拘束したり、破壊しようとするばかりで、誰もユージーンを助けようとはしない……彼が成神した分別のある神だから、世界の為に神としての務めを果たせというのだろうか。絶対不及者に関する事実を知る者達は心の片隅で、ユージーンの存在を疎ましく思っているのか。絶対不及者の器を持って彼が生まれてきた事そのものを、恨めしく思っているのだろうか。

彼がいなければ、自身が創られる事もなかった……恒はそう思う。

「……ユージーンさんが居たから、絶対不及者抗体としての俺が生まれたんです。彼が絶対不及者の器を持って生まれてこなかったら、俺の命ありませんでした。ユージーンさんを、そして世界を救いたい。ですがその力がありません。俺はあまりに未熟です」

「……藤堂様。あなたはやはり、神様ですよ。ご自分の身を顧みず

他者に無償の慈しみを与える、それが神様です。我が主もかつてはそのような御方だったのですが……。私が生まれ変わったら、貴方の様な御方にお仕え申し上げたいものです」

「八雲さん、生まれ変わったら、って……」

まるで今から死ぬような言い方だ。

冗談でも、何の意図がなくとも、ふとこんな事を言った時、恒はたまらなく不安になる。八雲はその真意を探り出そうとする恒にお茶を濁して逃げるように執務室を出て行った。まさか、八雲は死ぬ気なのだろうか？ 恒は嫌な考えを振り払うかのように、首を小さく振って枕に頭を沈めた。

＊

長瀬くらはは築地をカラオケにつき合わせた挙句、自宅の鍵を研究室に忘れたらしく、酔っ払って鍵を取りに研究室に戻ってきた。

酔っ払った我侭お姫様に付き合わされる築地は時計を見て、ため息をつく。大体、まだカラオケのフリータイムが4時間も残っていたのにこのお嬢様ときたら途中で帰るのだから、いち小市民、築地正孝としては残った時間が勿体無くて仕方がない。懐かしのヒットメドレーに入っていた築地は、まだストック曲がたくさんあったのにと不満だった。

それに長瀬ときたら、カラオケ屋で頼んだカクテルをスカートにこぼしてしまって、丁度股のあたりがびっしりと濡れていて乾いていない。築地は周囲の目を気にして隣を歩きたくなかったのだが、彼女は酔っ払って気にする筈もない。後輩は朝の2時ぐらいにそそくさと帰ってしまって、気が付けば長瀬と二人きりだった。早朝のカラオケルームから出てきた若い男女、そして女の子は酔っ払って、スカートがぐっしりと濡れている。一体二人でナニをしていたと、

店員に思われたのかと築地は会計を済ませながら赤面したというのに。

振り回されるこちらの身にもなってほしいと、築地はそう言っ
てやりたかった。

「もう朝やん、お前研究室泊まってまえ。何で俺が付き合わされな
あかんの。聞いてんの？　もしもし、長瀬さーん！」

「はーあー！　ツツチー、いいから実験室の鍵あけてえ」

ぐでんぐでんの長瀬は、築地に寄りかかる。

「もー、ほんまに」

こんなに男を振り回して憎まれないのは世界中でも長瀬ぐらいだ
と、築地は最近そう思う。だが彼女と本気で付き合っているらしい
彼の親友、シゲルの趣味というやつは未だもってよくわからない。
築地は濡れた若草色のミニスカートで飛び跳ねる長瀬を押しのけ、
実験室の内部に灯りが点っているのを見つけてドアノブに手をかけ
た。

実験室のドアには鍵がかかっている。酔っ払って研究室に寄った
誰かがつけっぱなしにして出たのだろうか？　彼はバイクやロッカ
ー、自宅の鍵などが無造作に束ねられ、ギャンブル運御守という世
にも珍しい胡散臭い御守りのついた鍵束で、実験室の扉を開いた。
すると、中には作業をしている比企と、学生共有のソファーベッド
に寝そべった長髪の男が、退屈そうにあくびをしているところだっ
た。

「シゲー！」

「シゲル!？」

長瀬と築地は荻号を見るなり、二人同時に同じ言葉を発していた。
荻号は誰の事を言っているのかと後ろを振り返るが、後ろには緩
衝液の入ったビーカーの中のマグネットスターラーバーがカラカラ

と小気味よい音を立てて、ピンク色の液体を攪拌している以外には、何か目を引くようなものもなかった。研究室で飼っているラットかマウスか何かのペットでもあるまい。

「シゲル！ 会いたかったー！」

長瀬は感極まってしまって相手をろくすっぽ確かめもせず、荻号に飛びついて荻号の腹の上にダイブをした。荻号は身に纏っていた99層のフィジカルギャップを解いて、飛び込んできた長瀬が粉碎されないよう気を遣って受け止める。用心深く計算高い神に自らフィジカルギャップを解かせ、無防備にするという事を一瞬のうちにやってしまう長瀬はある意味、神々にとっては天敵のようなものだ。

「何だ、お前らは？」

「おい、シゲル。帰ってこれたのかよ！」

「はあ？ 何のことだ」

築地は悪友に語りかけるかのようにそんな事を言って近づいてきたのだが、あまり目のよくない築地はシゲルだと思っていた人物からシゲルよりずっと低い声で返事が聞こえてきた事に驚いて目を凝らした。だが長瀬はよほど彼氏と再会できて嬉しいのか、荻号の顔を見ようとしなない。

「……って、ちょっと待て、長瀬よく見ろ。その人、似てるがシゲルじゃねーだろ」

「この男に似た奴が、人間に実在するとは。相当に奇抜な奴だぞ」

比企は呆れてしまったようだが、自称ファッションリーダーの築地からいわせれば、シゲルより比企の格好の方があり得ないと思うのだが……。

シゲルや荻号の格好はまだ、あるといえばあるしどこかにそんな趣味を持つ人間が居るといえる。だが比企の格好は断じて、”なし”だ。至極真面目な性格で言う事もまともだというのに、身に

つけているものはエキセントリック。

そんな比企がシゲル、いやもといてこの長髪の男をどうこう評価できる立場ではないと思うのだが。

「マジで滋^{シゲル}かと思った。あ、すみません、友人とよく似ていらっしやるので。比企さんの知り合いですか？」

「そんなところだな。その知り合いとでも間違えてんのか？ 神の腹の上をベッドがわりにしやがって、肝の座った女だ」

彼女の酒くささと、香水の匂いが交じり合って、何とも独特なおいが荻号には新鮮だった。そして若い人間の女性の柔らかさや、日本人の華奢な骨格というものも、初の体験ではあった。酔っ払って右も左も分らない若い女、そしてしらふの男、ソファがあつて……もつとも彼はその状況に預かる事を、少しも役得だとは思えなかったのではあるが……。築地は親友のシゲルのためにも、長瀬にはなるべく早くその男から離れて欲しいと思った。そうでなければ、性欲が決して弱い方とはいえない彼女は本能的に彼を欲してしまう。彼女はシゲルともう3週間も会っていないのだ、色々な意味で、色々なものが溜まっているに違いない。

そんな事にはらはらしながらも、築地の耳に一言がひっかかった。神の腹の上ってどういう意味だ？

「つか神？ 何言ってるんすか」

「そう見えるだろ」

「神って??」

「神は神だろ？ 昔から」

築地は彼のいうところのカミは神としか漢字変換できなかったし、そう変換したところで当然、何故彼がそう自称するのか意味がわからない。

酔った上での言葉だとは思えなかった。それで築地は悪気もな

くこう言ってしまったのだ。

「あのー、大丈夫ですか？ 酔っ払ってますよね？」

「……」

荻号は意味が通じなかったのかと口をすぼめ、空色の瞳を丸くする。

荻号 正鵠のいた一万年前の世界、神は生物階に居て人々に認知されて当然だった。そして神々はいついかなる時でも憚る事なく自らの正体を明かし、人類のよき隣人であった神々は人々の相談役として彼等に知識を授け、望まれれば力を貸していた。人々は神を慕い、神は自然体で人々と関わる事が出来た。文明の発展とともに時代はこうも変わったのだと荻号は感じたようだが、比企は神と自称してしまった荻号の失言をフォローしなければならなくなった。

どのみち築地も少なからず酔っている、ここでの出来事は家に戻って眠れば忘れるだろう。

「すまん。連れは先程一杯引っかけてきたらしく、そこに伸びていたところだ。寝言のようなものだから聞き流してくれ。彼女はここで寝かておけ、責任を持って面倒は見ておく」

比企が平然とそんな嘘をついたので、築地は納得したのかしてないのか、ふらふらと研究室から出ていった。

一方の長瀬は荻号の腹の上で遂に寝込んでしまったが、酔っ払い扱いを受けた荻号は心外だ。

神として人間から信仰心を持たれたり崇められたいわけではないが、意味が分からないという顔をされると淋しくなる。

「最近の人間は神を知らないのか？ 見りゃ一目で分かるだろ」

荻号が自信ありげにそういう根拠は、誰の目に見ても明らかかなほど、彼自身が余剰なアトモスフィアを後光として放っているからだ。アトモスフィアの強い武型神は特にだが、大過剰のアトモスフィア

がプリズムのように発光して頭上に見える事がある。陰階神であった荻号 要は現代社会でそれでは目立ちすぎると自粛してアトモスフィアを吸収する為に帽子を被ったり、神気遮蔽布（天羽衣）というかつて天帝をも封じていた装束の一部を腰に巻いてそれを隠し周囲に気を遣っていたが、神が人々と共生する事が一般的だった一万年前の感覚のままの荻号 正鵠はそんな事は気にしない。

研究室は薄暗く、荻号はあからさまに後光を放っているのが丸見えだというのに、二人とも気付かずじまいだ。

国籍を明かすような感覚で、彼は気軽に神だと名乗ったつもりなのだが。

「あなたが光冠（Sacred Coronal Halo）を持つていようといまいと、現代人は神と分からん。生物階不可侵と神階の秘匿が主神の政策でな。人々は神や使徒を見た事がないのだ」

長髪の彼をシゲルだと思い込んでいる長瀬は荻号の腰にしがみついて、どこにそんな力があるのかと思うほど聖衣を強く握り締め離さない。

長瀬の彼氏、築地の親友のシゲルは少し名の知れたセミプロのダンサーで、ファッションなのかただの自己主張なのか、ちょうど荻号のような風貌と背格好をして、染毛した髪の毛を長く伸ばしていた。長瀬と築地が二人揃って人違いをしてしまったのもありえない話ではなかった。

「シゲ、会…たかつ……」

荻号はなおも長瀬に甘えられ困惑する。

室内は冷房が効いていて涼しいが、この女は暑苦しくしがみついている。荻号 正鵠は昔から、誰かに接触されたり触れられる事がたまらなく嫌いだった性質だ。遠慮もなくベタベタしないでほしいとは思えど、相手は酔っ払いだ。荻号はその試葉棚から適当に調

合して、アルデヒドを分解する薬を強引に飲ませてやろうかとすら思ったが、実験室の試薬を人間に飲ませるなど、比企が許しはしないだろう。陽階神というやつは何故か世話にもなっていない人間に肩入れし、義理立てをする。比企も同じ係累だ。

「くそ、俺に似た奴は一体何人いるんだ。離しやしねえ。人間ってのはどうしてこう無駄にしがみ付いて、誰かに依存したがるのかね」
「人が人を愛する心は、我々には窺い知る事が出来ぬものだ。それは美しく、また退廃的ですらある」

「そんな高尚なものか！ 普通に絡んで寝てるだけだろ、こいつの場合」

比企は何を準備しているのか、手を動かす事をやめない。教授の思いつきで様々な化合物を合成、分析をやらされてきた錯体研には、何故こんなものまであるのかと首を傾げたくなるような、しかし比企の欲しい大抵の試薬が揃っていた。試薬棚にあるものは自由に使っていていいと相模原から言われていたので、比企は好き勝手、しかしきれいに整頓しながら引っぱり出している。比企は試薬や高価な機器を自由に使わせてもらう見返りに、研究室に500万円を即金で寄付しようとしたが、贈収賄容疑を怖れた相模原は拒否し、比企の自由にしてよいという話になった。相模原はまた、手が足りなければサポートに学生を使うよう申し出た。

薬神であった比企にとって、まさに至れり尽くせりの環境である。

「その娘の恋人は、例の感染症により異国で足止めを喰らって帰れないらしい。腹ぐらい貸してやれ」

「いやに詳しいな」

「共同研究者だからな、個人的な情報は役に立つ」

荻号の下世話な言葉に比企が被せてぴしゃりと否定した。

帰ったのかと思いきやトイレで用を足したのか、築地が戻ってき

た。築地は築地で、先ほどより少し顔色がよくなっていると思われる。トイレで胃の中のを吐いてアルコールを飛ばしてきたのだ。飲み会慣れしている築地は、自分の世話は自分でやけた。だからいつも酔いつぶれない彼に回ってくるのは、酔っ払いの介抱だ。

丁度今もその場面に遭遇している。

「やっぱ長瀬は連れて帰ります。危ないから」

「別に襲わんぞ」

「いや、あなたの方が襲われます、長瀬は猛獣なんですよ。もし間違いがあつたら俺がシゲルに殺されます。って離れやしねえ！」

築地も長瀬の足を引っ張って荻号から引き剥がそうとは試みるも、意識がないとは思えないほどの怪力で、到底無理だ。

「さつき確認したそうだ」

比企は苦笑して作業を終えたのか、ようやく手を止めてソファに腰を下ろした……その瞬間、何を察したのか、荻号と比企が弾かれるように身構えた。

ダン！　ダン！　ガアン！

銃声のような爆音がすぐ至近距離で聞こえたのはほぼ同時の事だった。

窓ガラスが割れ、ガラス片が雨のように降り注いでくる。比企は狙撃された方向を向き片手で三人を制すると、ジャケットの内ポケットから抜いた懐柔扇の扇を開き、打ち付けるように煽いだ一陣の風で迎え撃つ。窓側の一番近くに立っていた築地にガラス片が凶器となって突き刺さる前にガラス片は粉碎され、雪のように床に儼く降り積もった。比企は扇を閉じ、大きく振りかぶると、矢を放つように懐柔扇を窓の方向へ投げ付けた。骨組みに神銀という硬い金属を仕込んだ扇はただの重い棍棒と化し、轟音を立てて窓からの侵入者の額を殴打して窓の外へ弾き飛ばす。比企は手ごたえがあつたの

を感じると、瞬間的に跳んで窓の外へと侵入者を追った。攻撃は最大の防御だという事は、生粋の武闘派である比企の身体に染み付いている。そうでなければ、外に何名いるのかすら知れない侵入者は、大挙して研究室内に入ってくるかもしれない。比企は窓ガラスを割られて舌打ちをした、研究室内に空気の通り道が出来て室内の冷房が効かなくなると、安定した実験環境が維持できなくなる。

「いやー!!」

築地が比企の素早い身のこなしと、降って湧いたような生命の危険に触れて呆然としていると、酔っていた筈の長瀬の甲高い声が研究室にこだました。

「シゲ！ シゲエえ!!!」

荻号はその瞬間に身を翻して長瀬を庇い、長瀬を貫く筈だった三発の弾丸の盾となり、荻号の神体を貫通した弾を内側で握り締めた拳で三発とも防いだ。弾丸は強く握った荻号の拳を骨ごと貫通し、長瀬に届く直前で止まっていた。一つは腰骨を真っ二つに貫通し、彼は腰椎を骨折していた。そして彼の鮮血が長瀬の頬に絵の具を撒き散らしたように飛び散っている。血を見るのが死ぬほど苦手な長瀬の酔いは、そのショックで一気に醒めてしまったようだった。

荻号の心臓からだくどくと溢れ出る血液、三発の弾丸が貫通して直径2cmほどの巨大な弾丸が三つ、荻号の拳に骨を砕いて突き刺さっている。

荻号の口から次に漏れるのは当然苦悶の絶叫だと、築地は予想した。

だが彼は絶叫を上げなかった。

「大丈夫か？」

「そっちの心配ー!？」

築地は自分の心配を一向にせず長瀬の心配をしている、彼の能天

気さと鈍さに呆れつつツツコミを入れた。しかしツツこんでいる場合ではないほど重傷を負っている。

「シゲエ、死んじゃダメー!!!」

「こんなんで死ぬか。それより」

長瀬の頬についた傷は、荻号が長瀬を庇って押し倒した時に、実験台の上のビーカーが割れて彼女の頬を切ったものだ。

荻号は案外ざっくりと切れてしまった長瀬の頬の傷を、丁度よく流れていた彼の治癒血を摺りこんで癒す。長瀬は酔って痛覚が麻痺していたので、頬に傷があった事など気付かなかった。治癒血は人を癒すが、荻号自身の傷を癒さない、それどころか治癒血を持つ神は回復力に乏しい。だから彼等は強固なフィジカルギャップで身を守っている。

長瀬の接近によってフィジカルギャップを解いたのが仇となった。

「女の顔に傷がつく方が一大事だからな」

「格好つけとるばあいカー!!! 救急車、救急車呼ばな死んでまう

!!!」

「呼ぶな」

「……あんたの血、比企さんと同じ色してん……あんたも人間ちゃうんか？」

人間ではないと分かった以上、確かに救急車が呼べない。宇宙人を救急車に乗せて病院に搬送するなど、笑えない冗談だ。

「だから神だって、言っただろ。神がこのぐらいで死ぬか。いいからそのペーパータオル持ってきてくれ」

どこの実験室にもあるキムタオルというペーパータオルを要求するので、築地は仕方なくそれを取ってきた。これは普通のティッシュと違ってよく水分を吸い、紙くずを出さない研究室御用達のペーパータオルだ。彼はキムタオルに血液を吸わせてあらかたの出血

が取れると、腰に下げていたシザーケースから、裁縫セット感覚で入れているのか縫合糸と針を取り出した。出血が収まれば、縫うつもりなのだろう。出血がおさまるまでの間、手持ち無沙汰なのかソファーについた血をキムタオルで拭いて掃除などしている。

「だー！ そっちの心配ー！？ 何か調子狂うな」

「痛くないの？」

「ちっとだけな。それに俺はシゲじゃね……」

その先の言葉は、長瀬が唇で奪った。予想外の場面でキスをされた荻号は全身をこわばらせる。

長瀬は彼を恋人だと思っているのだから、傷ついた彼氏を慰めようとした彼女の行為は至極当然なのかもしれないが、彼には受け入れられるものではなかった。

「そんな怪我で喋っちゃ、だめでしょ」

築地は息を吞んだ。上目遣いでそう言う長瀬の、かわいいこと。

また何かを言いかけた荻号は、長瀬の大きな茶色の瞳が涙で潤んでいるのを見て、口を閉ざした。そして彼は柄にもなく、新しいキムタオルで彼女の涙を拭う。長瀬はそれを受け取り、華奢な肩を震わせ、声を殺して号泣していた。彼女は恋人が死ぬと思って、疑わないのだ。築地はともかく携帯を握り締めたまま、誰に連絡をすべきか考えていた。病院に搬送するのは無理だ、築地の知り合いが看護師をやっているが、彼女を呼ぶべきか……。

すると割れた窓ガラスの外から、比企が帰ってきた。

比企が外に出て行ってから戻ってくるまで3分もは経っていない。交戦はしなかったのだろう。

「済まぬ、逃がした。時空間操作能のついたツールを持っていたのでな、追跡を振り切られた。む？ フィジカルギャップを解いていたのか。迂闊だったな」

「比企さんも冷たいな。この人が盾にならなかったら、長瀬に当たってたんだ」

彼が庇わなければ、長瀬のいた場所に弾丸が向かっていった。直径2cmの弾丸が三発も彼女に喰らい込めば、彼女なら即死は免れない。

「力の過信と深追いは禁物だ。時間差で、まだまだ来るだろう」

「残党だろうか？」

「そうだろうな。俺が浄化したのは生物階に居た連中だけだ、まだ解階に残っている奴らはいらるだろう。狙いは人間ではないな、神を狙って来るのだろう」

「夜は未だ明けず、か」

比企は懷柔扇を顎のあたりに当てて、何かを考えているようだった。

その怜悯な佇まいは、まるで諸葛孔明のようだなと築地は思う。比企や長髪男はこれほどの有事にも動じないのだが、こちらは肝を冷やしただけだった。日常生活の中で、無防備な状態から発砲されるという事件など、大抵の人間は一生あり得ないに違いない。二人が何か危険な男達なのだと、築地は承知していた。比企も彼も人間ではないというのだから、彼等に会いにくるのもまた、人間ばかりとは限らない。人外の者達の中で、彼等がどれほどの力を持っているのか。比企の先ほどの身のこなしを見ると充分に応戦できそうだったが、比企と長髪男が恨みをかわれているのなら、正直ここから出て行って欲しい。

「また頃合に、先ほどの神具は使えんのか？」

「フラーレンは一度起動したら3日は使えん。俺は240枚を持っているが、一度に最大で4回しか使えん。C60だと4回撃てるが、C120だと2回しか撃てん。そしてさっきC60を2回で120枚、C120を1回使ってしまつて240枚を使い切った、もう3

日は無理だ、アトモスフィアを蓄える時間が必要だ」

荻号は1万年ぶりに娑婆に出たのが嬉しくて少しはしゃぎすぎて無駄遣いしてしまったか、と後悔していた。

だが一度で解決できると思ったからこそ、最後の呪府を使い果たしたのだ。この事態ははっきりいって想定の外だ。築地も長瀬もフラーレンという化合物を知っていたが、どうも話が違うようなので会話に参加することはなかった。

「……便利なようで不便だな」

「俺は今まで、こいつを240枚使い切った事態ってのには遭遇しなかった」

「それより傷を見せろ」

荻号は比企に促され、聖衣を脱いだ。フィジカルギャップを纏わなければ神体は恐ろしく脆いもので、人間並に脆弱なのだ。

荻号が傷つき比企が処置をするという場面は、逆のパターンなら厭というほど経験したが、これまでとはあべこべの展開だった。血を見るのが苦手な長瀬は目を背けていた。

「てかさ、救急車呼ばなくて大丈夫？ あ、病院は人間じゃないから行けないのか……。でもちゃんと医者に見せた方がよくないですか？」

「己は外科医だ、心配はいらんよ」

比企は薬神でありながら外科医の免許を持っている。

だがその腕を発揮する場面がなかった。一つには、比企は陽階で文系神として登録し、立法を司る神として奉職していた事。任務中に怪我人など出ないし、誰も傷つかない。もう一つは、比企が一度も生物階に降りた事がないという事情でだ。

「えー全然見えないんですけどお！ ロン毛で白髪の医者とかやっ
だー、なんか超ヤブっぽいしー！ 診てほしくないー！」

長瀬は言いすぎだ。

「……心外な言われようだな。ところで荻号、自分では手当てをせ
んつもりか」

「そのうち止まるだろ」

荻号 要は腕のよい外科医だったので自分の傷ぐらい自分で治し
たものだが、彼は出血で意識が朦朧としているらしい。

比企は仕方なく懐柔扇を閉じ、骨組みから金属の芯を抜いた。

”超一超音波凝固切開”

(Hyper-Harmonic Scalpel)

比企は懐柔扇の芯を荻号の創傷口に突っ込み、超音波で傷口を焼
灼して出血を止めた。

まだ目覚めたばかりで、なおかつ神階を離れた荻号 正鶴には、
自己血のストックがない。荻号 要の血液成分とは若干異なり、適
合しないとアルティメイト・オブ・ノーボディは正鶴に解説してく
れていた。だから怪我をするなど……それが早々にこのさまだ。多
量の出血は命取りとなる。最近では医療の進歩で、人間社会にも徐
々に超音波凝固切開器具が浸透しているようだが、比企は300年
ほど前から懐柔扇にこの機能を付加しているパイオニアだ。肉の焼
ける音と蒸気が出て長瀬は悲鳴を上げそうになったが、出血は瞬間
的に止まった。比企は荻号の出していた縫合糸で、傷口をきつく拮
結して処置が完了した。

「ところで今の奴は、長瀬を狙って撃ってきたんですか？」

「いや……俺と比企のうちどちらか、もしくはどちらもだろうな」

「じゃ、これからもあんな奴らがここに……？」

冗談ではない、そんな危険な日々がこれからも続くのかと思うとぞっとする。長瀬は先ほどの瞬間に、死に掛けたのだ。次の襲撃でも命があるものとは保障できない。

「お前らの安全は保証するし死んでも生き返らせてやるが、命の惜しい奴は比企と行動を共にせん方がいいだろう」

荻号は他人事のようにそう言った。長瀬は赤く腫れた目で比企の顔をまじまじと見つめた。彼女をこんな風に泣かせてしまったのは、比企がこの研究室に来てしまったからだ。比企が大坂大学を選び、居ついてしまったから解階の貴族の残党に狙われている。治安のよい日本では考えられないほどの危険な目に逢わせて、彼女を悲しませている。比企は後ろめたかった。

「そんな顔をするな。我々は出来るだけ早く、この研究室から出ていく」

「我々？ 俺は付き合わねーぞ」

「その怪我でどこへ行く。全治二日、いや治癒血を持つ身なら回復は速に遅かろう。まだ動く元氣があるなら動けぬようにしてやるがな。今すぐに」

「比企さん、言ってる事が恐すぎますし目がマジすぎです」

築地がオーバーアクションでドン引きしたので、眉毛が垂れ下がrippなしだった長瀬がつられて少し微笑んだ。

神は人を守らなければならない。

この強い強制力を持つ呪^{まじない}が、喻えアルティメイト・オブ・ノーボディや神階の構造的な体制によって比企に刷り込まれたものであったとしても、この感情は本物だろうと比企は思う。このか弱い生命達を、有限の生を持つ者達を守りたいと願う事は、アルティメイト・オブ・ノーボディの構築したシステムの一部として役割を果たす為だけに刷り込まれたのではないと願いたい。いかに創世者でも心ま

では支配できないと、思いたい。

もう誰も、苦しめたくはない。傷ついてほしくもない。

誰にも操られる事なく、生命は自身の足で歩みはじめなければならない。人々も、神々も、そして解階の住民も……。本当は敵など、どこにもいないのだ。世界を創世者達の手から生きとし生ける生命達の手に取り戻すと、比企は誓った。

それは創世者達の三つ巴の戦いの前には、空しく矮小な願いなのだろうか――。

第1節 第54話 熱力学神 ナターシャⅡサンドラと聖父子の肖像

藤堂 志帆梨は恒が心配でその夜は一睡もできなかった。結局、神階に居るとは聞いたものの、そわそわしてベッドシーツを洗濯してみたり、食器を漂白してみたり掃除をしたり、それでも朝までの時間を潰せずに社務所の机の上で頬杖をついていたところで丁度かかってきた電話だ。電話の相手はユージーンだった、というかこの番号を知っていて電話をかけてくるのは恒かユージーンしかない。彼の声は落ち着いていたが、こんな早朝にかけてくる電話だから、あまりよくない話題を話そうとしているのだろう。

『おはようございます志帆梨さん、そちらは無事ですか?』

「そちらは無事って……恒に、何かあったのですか?」

『……それが、』

「無事ですすよね?!」

志帆梨は早朝の社務所の黒電話をぎゅっと握り締めた。無事ではないというのだろうか?

こんな時、志帆梨は何事も悪い方に、悪い方へと想像を働かせてしまう癖がある。電話向こうのユージーンはどこにいるのだろうか、時折強い風の鳴る音が聞こえた。空中にいるのだろうか。

『恒君は神階を抜け出して地上に降りてしまつて、少し目を離れた隙に怪我をしました。治療の為にしばらく神階でお預かりします。神階の医療技術は進んでいます、命に別状はありません』

「こんな世の中ですから、どこならば安全という訳にはいかないことは分かっています。ですが、もしもあなたのお目の届く処に恒がおりましたら……必ず」

恒は他の誰の傍でもなく、ユージーンや織図の傍にいて欲しいと

志帆梨は思った。

彼らの傍でないと、恒はとんでもない事に巻き込まれそうな気がする。ユージーンだって忙しいのは分かっている、恒が傍にいると足手まといだという事は百も承知だ。それでも志帆梨は彼に願わずにはいられなかった、うちの息子から、目を離さないで下さいと。

『ええ、もうこれ以上の危険はない事をお約束します。このたびはわたしの不始末でご心配をおかけして、申し訳ありませんでした』

志帆梨は震える手で受話器を置くと、へたり込んだ。長年入院を繰り返してきた志帆梨に、恒は週末ごとに見舞いに来てくれたが、少し擦り傷や切り傷を作っていた以外は、大きな怪我也病氣もした事がない健康な子供だった。骨折なども経験がない、それが怪我をしたとはどの程度だろう、怪我というからには腕の一本や二本は折れていると見て間違いないような気がする。

志帆梨はユージーンに怪我の程度を聞かなくてよかったのか、と彼女自身を責めた。思い起こせば恒は志帆梨が辛いとき、どんな時も傍にいた。母親である自身が恒の一番苦しい時に傍にいられないとは何の因果か。志帆梨が無力感に項垂れた時、社務所のアルミサッシをノックする音が聞こえて、皐月が顔を覗かせていた。志帆梨は思いがけず化粧もしていない顔を見られて赤面してしまったが、なかなかどうして、皐月もこれまでどこにいたのか、メイクははげて足元のスニーカーには泥がかぶっていた。

農作業でもしてきたような格好だ。

皐月はユージーンと別れたあと、ふもとの村の救助を手伝った。市民ボランティアに衣装したユージーンの使徒達にも数十名ほど出会った。死傷者は出るには出たが、ユージーンの使徒達が神階から持ち出してきた薬を惜しげもなく処方して救助に当たったお陰で、犠牲者数は皐月が思ったほどの数にはならなかった。火事は消防隊の活動に加わって、使徒達が神階製の消火器と消火剤を散布し消火

活動を手伝ったお陰で、あの規模の火災としては信じられないほどの速さで、たちどころに鎮火した。

彼等は救助にひとまずのめどがつくと、どこへともなく方々に散って消えていった。そうやって名もなきボランティアとして人命救助に多大な貢献を果たした彼等軍神下使徒の存在は、決して人間社会に知れる事はないのだろう。ユージーンが決して歴史の表舞台に出る事無くここ80年間の戦果を世界規模で操作してきたように、彼等は黒子のように歴史の狭間で暗躍しながら、さりげなく人々に手を差し伸べ、そして礼を言われる事もなくどこへともなく消えゆく存在なのだ。

「さ、皐月先生」

そういうわけで、皐月は軍神下使徒達が引き揚げるのに紛れて朝一番の電車に乗って風岳村に戻ってきたところだった。一睡もせず皐月が向かった場所は、藤堂家だ。電車を降りた皐月が帰途についていると、藤堂家の方角から煙が立ち昇っているのを見つけたのだった。恒は神階にいる筈だったが胸騒ぎがして一体何があったのかと駆けつけると、そこで見たものはこれが日本で現実起こっている事かと目を疑うような光景だった。志帆梨が社務所のドアを開けてやると、皐月は倒れこむように中に入ってきた。どこから走ってここまでやってきたのか、息が上がっている。

「志帆梨さん！ ご無事でしたか！？ さっきお宅に行ってきたんですけど……」

「ど、どうなっていましたか？」

「何か爆弾でも落ちたかのように屋根に穴が開いていて……血痕が部屋に飛び散っていたので、大変な事があったのかと思ひまして。」

志帆梨さんのお顔をみてはっとしましたよ……」

志帆梨は家の事などどうでもよかったが、やはり避難をしろとユージーンに言われてここに避難していたのは、意味があった事なの

だと胸をすかせた。そして先日 of 爆発音は、やはり自宅からのものだったのだという事ははっきりとした。そして皐月の言う、部屋に飛び散った血痕というものは怪我をした恒の血なのだろう。だとしたら、爆発にでも巻き込まれたのかもしれない。

「でもあの血は、誰のだったんでしよう。志帆梨さんにはお怪我はないようですし」

「恒が怪我をしたそうなんです……。命に別状はないそうですが……血はたくさん、飛び散っていましたか？」

「怪我?! だとしたら大怪我じゃないでしようか」

神の端くれとはいえ何故子供の恒がこのタイミングで怪我をして、そして藤堂家があるそこまで破壊されなければならなかったのか、ユージーンは”神々全体が狙われている”とは言っていたが、これでは恒が狙われていると言っているようなものだ。皐月は、例えば誰と一緒にだったとしても、もはや志帆梨と恒がああ家に住み続ける事は危険だと感じた。どこかへ引越した方がいい、できるだけ遠くへ。

「お二人の安全の為に、引越した方がいいかもしれません」

「でも、吉川先生。どこならば安全なのでしょう。恒は何故狙われているのでしょうか、母親だというのにあの子の事、一つも理解していないんです。確かにたまたま我が家が襲われた、とは思えません。恒が神であるという事が知れ渡っていて、そして住所が判明しているのでしょうか。恒は何かよそ様の恨みをかうような事をしているのでしょうか……心配です」

志帆梨の青ざめた顔を見て肯定こそしなかったが、皐月は恒が標的にされているとしか考えられなかった。

皐月は解階の住民と交戦したユージーン of 背で、彼が恒を捜しているという話を聞いた。ユージーンは恒の名を口にした男を即座に抹殺したが、恒が怪我をしたとなると、更にまた別の手が伸びてい

たという事になる。大規模に狙われているのだ、何がどうなって、
どういう理由で狙われているのか……。そして藤堂 恒の名と住所
が割れている以上、志帆梨も無関係だとは言いがたい。恒を狙う為
に、間接的に志帆梨も格好の標的となるだろう。

「志帆梨さん、ここで一人にならない方がいいと思います。こんな
事があっては、安全とは言いい切れないですし。皆が避難している避
難所に行きましょう、私も一緒について行きますから」

志帆梨は皐月に強く勧められて頷くしかなかったが、一人だけ安
全な場所に逃げるようで恒に合わせる顔がないと、内心では後ろめ
たく感じていた。

＊

日本では早朝の時刻にあたるこんな時間、志帆梨にわざわざ恒が
怪我をしたと連絡をしたユーザーには、織図はどうしても感心で
きなかった。志帆梨はいつも気丈に振舞うが、あまり身体的に強く
はない女性だ。今のようないい悪いニュースを社務所でたった一人で聞
いて、体調を崩してしまったら、あるいは倒れてしまったらどうす
る。織図はそんな心配をした。

「志帆梨母ちゃん心配してただろ。怪我したなんて、わざわざ言う
か？」

「隠してもやがて分かります。それに、母親には報告する義務があ
ります」

「俺なら、言わんがな」

織図はふん、と煙草の煙の混じった鼻息を吐いた。

志帆梨には何でも報告すると織図は言ったが、バカ正直に何でも
言えればいいというものではない。時と場合というものがあるだろう

に。同行していたナターシャは二柱が誰について心配をかけるだのかけないだの話しているのか全く知らないで、きょんとしている。どうやら志帆梨というのは二柱の共通の知人のようで、彼女への配慮の仕方を巡って、二柱の意見が分かれているようだ。

だがナターシャには関係のない話で、彼女は早く神階に戻りたかった。不休で重い神具を起動し続け多くの罪なき者を屠った彼女は、ただひどく疲れていた。また、彼女と懇意にしていた神々がこのたびの戦闘により数多く犠牲となった。熱力学を司るという職務の性格上、これほど多くの死に触れた事のない彼女は少し休まなければ、どうかしてしまいそうだった。だが日常的に死と隣り合わせの軍神や死神は死に慣れすぎてしまって、その鈍った感受性では何も感じないのだろう。錆付いた心では、何も感じないのかと思いきや、死んでもいない一人の女性を巡って熱く議論をしている。下らない事にこだわるのはいい加減にしてほしい、どれほどの神々や人々が犠牲になったと思っている……。彼らは真っ当な感性を持つ陽階神のナターシャには理解のできない人種、いや神種だった。

「私は神階に戻りますが……ユージーン様と織図様はどんなされます？」

「俺も神階に戻るかな、死者が出すぎてEVEがパンクする頃だろ。いい加減、サーバーを拡張せんとらん」

織図の携帯はさきほどからひっきりなしに鳴っていて、不気味な着信音がやかましい事この上ないのに、織図は着信音で相手が分かるらしく、メールを読もうともしない。だが織図は内容を読まないまでも、彼の使徒からEVEがサーバードウンするから早く拡張を行ってくれという悲鳴にも似たメールが立て続けに届いているという事だけは把握していた。EVEがサーバードウンをするという事は、嚴重に保管されている死者の記憶が失われるという事を意味する。

連綿と続いてきたそれら死者の記憶は神階の大切な財産だ。失うわけにはいかない。志帆梨の事もいいが、EVEのサーバーを守る事はそれにもまして大切な織図の職務だ。いつまでも生物階でブラブラと道草をくっている場合ではない。

「わたしはもう少し、生物階に留まります」

「恒の様子を見に行かんでいいのか」

「彼は今、極陽と対面しています。わたしの出る幕ではないでしょう」

織図はあっけに取られた後、よほど驚いたのか、火のついた煙管を取り落としてしまった。ナターシャも取り落とした煙管を反射的に取り留めてやりながら、耳を疑っている。まだ登録があったばかりの少年神がもう極位と目通りを果たしたとあっては、ユージーンが弟子にとったという事もあってよほど優秀な神と見込まれる、彼女の場合はそういう意味で驚いているのだが。

「おいっ！ お前正気を疑うぜ！ 恒は今極陽んとこにいるのか？」

織図はユージーンにくってかかりそうになった。極陽と恒を対面させて、どうなるかは目に見えている。恒は極陽を言い知れぬほどに恨んでいるのだ、もし万が一にもその憎しみを極陽にぶつけるような事があれば……。いくら未熟な少年神のした事だといったところで、極位に対する謀反となればその罪はユージンごとき一介の枢軸神に、庇いきれるものではない。一方のナターシャは極位と対面する事は栄誉な事でこそあれ、何故一見藤堂とは無関係にも思える織図がもの凄い剣幕でユージーンにくってかかるのか、てんで理解できなかった。

「織図様、一体いかがなされたのです？」

「大丈夫です、彼は早まった真似はしません。彼の決意を見ました」

ユージーンは襟元を掴まれながらも、悪びれる様子はない。織図はその”われ関せず”的な態度に、ますますもって腹が立つ。

「お前な、相手は子供だぞ。そう決めていたとしてもだ、頭に血が上るかもしれない？ 理性で抑えられないもんもあるだろう！ そうなったらどう落とし前をつけるつもりだ、え！？」

「万が一の時は、首の一つでも二つでも差し出します」

「お前な……恒をみすみす破滅させる気か？」

織図は今すぐにでも極陽の執務室に乗り込んで行って、恒を奪い返すべきだとすら思ったほどだ。丁度今頃、二柱だけで対面を果たして何がおっ始まっているか分かったものではない。この馬鹿はもう放っておいて手遅れになる前に恒を連れて帰らねば、と織図が神階の門の前に瞬間移動をかけようとした時、ユージーンは行かせるものかと織図の腕を掴んで瞬間移動の体勢に入っていた織図の集中を妨げた。

「陽階神としての立場や将来……そんなものが彼にとって、何の価値があると思いますか……」

いつになく強い口調で、ユージーンは織図を押さえつけながらそう論じた。織図の恒に対する配慮は全て、恒の未来を、あるいはこれからの立場を見据えての発言だ。だがユージーンにはそれが、確かな未来を描く事のできない恒にとって、恒の感情を裏切ってまで守らなければならぬ事だとは思えなかったのだ。不確かな未来を思い描くより、恒は現在を彼自身の心に正直に生きてゆきたいと願っている――。

「彼は未来より現在を生きているんです、その彼が残りたいと彼自身の意思で決めたんです。これをどうして止められますか。わたしやあなたに、彼を止める権利は断じてありません」

ユージーンはギン、と強い眼差しで織図を見つめ返した。彼は織

凶の腕を掴んで、離そうとはせず、そして握力の強いユージーンに掴まれたその左腕はびくともしない。恒が極陽に何をしたとしても、恒にはそれをする権利があった。ユージーンには恒を止められなかった。

「一時の感情で取り返しの付かん事になるぞ！ お前の下らん価値観に恒を付き合わせるな！」

「ど！ どうなされたのですか、おふたりとも……」

ナターシャは睨みあった二柱の顔をおろおろと交互に見遣ったが、何か彼女の窺い知れない事を話しているようだった。陰陽階でもとりわけこの二柱は、他神と争う事などもってのほか、気性もとりわけ温和な神々として知られている。その二柱が恐らくは少年神 藤堂 恒のことで、これほど激しい言葉をぶつけ合うとは……異様な光景だった。

「それに……相手も脛に傷を持つ御身、恒君の振る舞いを咎めたてなさるようなら、主神としてあまりにも軽率です」

「お前は、ヴィブレⅡスミスの怖さをまだ知らん！ 恒は……」

「おふたりとも！ もういい加減になさい！」

ナターシャは尚も争う二柱に業を煮やしたのか、いつの間にか鉄槌型神具を起動して臨戦態勢に入っている。それも本気の口調だ。少し白熱して声を荒げてしまったが、織凶もユージーンも喧嘩をしている訳ではない。二柱はナターシャが何か勘違いをしてしまったのを見て、疎みあがった。陰陽階神法で定められている喧嘩両成敗を実行しようとしているのだとしたら、どちらという事もなく二柱ともその重い鉄槌で打たれる事になる。

ナターシャⅡサンドラの持つ鉄槌型神具は、北欧神話において主神オーディンの息子トールの持した神槌ミョルニールとして知られる、歴史と伝統ある逸品で、それだけ威力も破壊力も十分だ。起動

をすれば数トンの重さにもなるそれを、どこにそんな力があるのかと思う程線が細く小さな身体で軽々と扱う。彼女のわずか一ランク上に位置する武系神であるユージーンは、枢軸入りを目指す彼女に二度の位申戦を挑まれて、彼女の鉄槌を一度だけまともに喰らった事があったのだが、それはもう凄まじい威力で、フィジカルギャップを粉碎され大腿の骨を複雑骨折で折られた苦い経験がある。女神の神体に傷をつけてはならないと、ユージーンの方は出来るだけ損傷を与える攻撃を控えたつもりだったが、ナターシャはいかにも頑丈そうな男神相手とあっては遠慮などお構いなしに全力で撃つてきた。大腿を折られながらもユージーンは二度ともに7位防衛を果たしたが、できれば彼女とはもう戦いたくないと懲り懲りした次第だ。それが、織図との口論を鎮めようとしての行為なのか、もう二度と味わいたくもないとユージーンの恐れ入る神具をフル稼働してこちらに向けている。彼女は尚もコマンドの詠唱を続けている。

” Acceleration of free fall……to saturation point ”

（重力加速度……飽和値まで）

織図もさすがに危険を察したらしく、諸手を挙げて早々と降参した。

「げ、ちょ、ちょ待て！ ユージーンはともかく、俺みたいな文系神に武系神具を全力で向けるな」

” Titanomachy! ”
（ティタノマキア）

問答無用といわんばかり、ユージーンと織図の鼻先を掠るかの距離で、もしくは明らかにどちらかを狙ってナターシャが怒りの鉄槌を重力加速度最大値で振り下ろしたかに見えた。だが次の瞬間に女

神の鉄槌に撃たれ悲鳴を上げ、粉碎されたのはユージーンでも織図でもなく、見も知らぬ黒い影の残像だった。いつの間にかユージーンと織図の背後に、何者かが忍び寄っていたらしい。形容のしがたないほどこに打ち砕かれてそれが何だったのかは全く分からないが、解階の貴族階級の残党らしき者の肉片が、遙か足元のコンクリートの床に打ち付けられて赤いミンチのようになって潰れて飛び散っていた。

「口論の最中に敵に背後を赦すとは、愚の骨頂です！ 恥を知らないさい！」

細腕で何にもなる重い鉄槌を軽々と振りかぶったまま、女神は一瞬にして二柱を黙らせた。織図は肩をこわばらせたまま、隣で同じように固まっているユージーンを腕で小突いて耳打ちした。

「ユージーン君、チミの部下に陽階神の慈悲とかいうものを教えてやったらどうだ？ あの物体がもはや敵だったのかすら分からんぞ。あとついでに、女神の品格ってやつも教えてもらえると有り難い」
「え、遠慮しておきます」

それで殴られるのだけは勘弁して欲しい、と二柱は早々に降参をして白旗を上げた。

＊

「お前達はもう、家に帰って寝るといい。長瀬も酔いが醒めただろう、気をつけて帰るんだ」

比企は築地と長瀬を安心させるように、優しくそう言った。比企は不器用なので冷淡に見えるが、思いやりはある人柄だ。築地はもう早々に、この場所を離れたかった。

「帰ろうにも、私……この格好」

長瀬は客観的に自分の格好を見直してみると、荻号の返り血をもろに浴びて、白いキャミソールが真っ赤に染め上がってしまった。若草色のスカートも血まみれになっている。荻号の血の色は人の血のように不透明ではなく透き通るような透明で、血まみれとはいえ赤いインクを派手に服にこぼしたようにしか見えないが、これほど大量に浴びているのも変だ。

「白衣着て帰るか？」

築地が実験室の壁に架かっている実験用白衣を取りに行ったが、こんな時に限って黒い試薬が付いたりして汚れている。それに長瀬の家は少々遠い、汚れのついた白衣で帰っているとその間に警察に捕まって、職務質問を受けてしまうかもしれない。もっとも、警察もこのたびの混乱で、機能しているかどうかわからないのだ。

「ではこれを着るといい」

比企は脱いでいた荻号の聖衣をパンパンと埃を払うと、長瀬に渡した。荻号はああっ、と手を伸ばして何か言いかけたが、比企に強く睨まれて口を閉ざした。比企の灰色の瞳から繰り出される眼力はまるで蛇のように、相手の動きを縫いとめてしまうほどに冷ややかだ。長瀬は聖衣を受け取ったが、汚いものをつまむように指先でつまんでいた。血みどろだと思ったからだ。

「でも、これもっと血まみれ……じゃない？ あれ、どうして？」

穴も空いてないし、きれいになってる！」

「先ほどのような戦闘は日常茶飯事なので、我々は自己補修能力のついた衣服を纏っている。己は今は持ってきていないので、荻号のものを纏うといい」

聖衣は補修能力や自浄能力がついていて、少々穴が開いたり汚れたりしても、すぐに元通りきれいになる。全く汚れがつかないので、

神々は何百年も同じ聖衣を着ている。それでもいつも新品同様で、清潔でにおいもつかない。長瀬は比企から聖衣を受け取って、トイレで着替えてきた。不思議な事に、ぶかぶかだと思われた聖衣は、長瀬が袖を通すと長瀬にぴったりサイズのようになった。腕まわりも、長瀬の着丈にぴったりだ。そこで、短めの丈のワンピースのようになってる。長瀬はレギンスをはいているので、それほど不自然ではない格好だ。

「これ、洗って返すから。ありがとう、借りるね？」

「洗わなくていい。むしろ返さなくてもよいぞ」

比企は荻号 要にするはずだった嫌がらせを、荻号 正鵠に対して行っているかのような。それを実感している荻号は納得がいかない。

「おい、お前比企！ いいか長瀬、それ俺の一張羅だから返せよ、それ一着しか持っていないんだからな。それにそれが何か解ってるのか？ 人間に着せるもんじゃねーんだぞ」

「あなたは陰階神として生きる事をやめたと言った、義務を放棄したとあらば、その権利も当然剥奪されるべきだろう」

「……！」

正論だった。陰階神として生きる事をやめたと言ったのだから、神階のものである神具と聖衣を剥奪されても文句はいえないのだ。ただフラーレンは荻号以外には誰も扱える者がいないので、比企も没収はしないのだろう。それに全神具適合性を持つものでなければ超神具、フラーレン C60の触性免疫は、触れたものが燃え尽きるほどに強い。同じく超神具、相転星がそうであるようにだ。

「大丈夫、喧嘩しないで。ちゃんと返すから。じゃあ」

長瀬はどさくさに紛れて、荻号に二度目のキスをして彼を抱きしめた。一体何度説明すればシゲルではないと分かってくれるのかと

荻号はうんざりだが、拒絶する気力と体力はもうなかった。

「早くよくなつてね。私の事、守ってくれてありがとう」

「長瀬も、もう離れろ！　つか怪我人の上に乗るな。比企さん、では俺達帰ります。あなたも、えーと、お体をお大事に」

「ああ」

「何か、コンビニで買ってきましようか？　飲み物とか、包帯の代えとか……」

築地は衰弱をしている様子の彼に何か食べさせるか飲ませた方がいいのではないかと思った。大学の近くのコンビニは確か絆創膏も包帯も売っていた筈だ。比企が付いていながらこのまま放って帰って、まさか明日死体が一つソファアの上に転がっているような事にはならないと思うが、やせ我慢をしているだけではないのかと心配になる。荻号は無愛想に鼻を鳴らして築地の心配を無碍にした。

「何もいらんよ」

「そうですか」

これ以上ここに長居しても、怪我人を疲れさせるだけだ。築地は思い出して、せめて保温だけでもと、築地の研究室お泊りグッズの中からシュラフを引っ張り出してきて荻号に差し出した。彼が渋々受け取ってくれたので、なかなか離れようとしないうちに長瀬を荻号からようやくの事で引き剥がして連れて帰ろうとしたところで、比企に呼び止められた。

「築地、機器分析の心得があるな？」

「あ、割と得意ですけど」

「明日の午後に反応中間体の構造を解析したいので、装置の使い方を教えて欲しいのだが」

「じゃあ、装置の予約とおきますね。って、こんな時に誰も来ないか」

築地と長瀬は後ろ髪を引かれる思いで帰っていった。二人が研究室のドアを閉めるなり、荻号は険しい表情をして考え込んだ。比企はデータをまとめ、パソコンからヴィブレイスミスのアドレスにスキームを転送しはじめた。一度襲撃があった以上、この場所にデータをまとめて置いておく事は危険だと判断したのだ。比企や清水らのデータをもとに、製薬会社　レイメイはただちに化合物の合成に取り掛かるだろう。

「比企。それでも尚、この場所に留まるつもりか？　俺らの為に、更に人間を巻き込むのか？」

「……。心苦しいところだな、あなたもそう思うのか。まだ、神としての自覚が残っていると見える」

「俺は陰階神を辞めたと言った、だが無関係の人間に危害が及ぶのは胸が悪い。これではいかに神といえど、地球を侵略してきた宇宙人と何も変わらんぞ。そういう視線で見られるのは不本意だ」

彼は包帯に血が滲んできたのを指先で弄りながら、こんな提案をしてくれた。

「3日経ってフラーレンが撃てるようになったら、解階に行って撃つてきてやろうか？」

気は乗らないが、何度もこのような煩わしい事が起こっているのは、荻号の望むよう平和な日常が取り戻される日は来るとは思えない。しかもこの体調の悪さだ、万全の状態で撃たなければ完璧な業が期待できないが、このまま放置してはならないような気がする。

「なるほど……それは名案だ。だが、あなたはユージーンのように不死身ではない、解階に入った瞬間に向こうの創世者によって殺されるだろう。いつその事、ユージーンにやらせては……」

生物階の側から、ユージーン以外の誰が解階に入っても危険だ。
荻号　正鵠は荻号　要ほどではないとはいえ、神階にとって貴重な

戦力と頭脳になってくれるだろう。たった一度の事態で失うのは惜しい。彼が命を賭けてまでその業を行って、それで解決するという問題ではない。フラールレンが荻号以外の誰かに扱えるものなら、それが誰であってもいいだろうと荻号ですらそう思う。だがとてもこのフラールレンという神具を扱えるとは思えない。荻号は13万年間も主なき神具としてお蔵入りしていたという、初代至極位の所持神具、フラールレン C60に初めて出会った時、迂闊に触れて触性免疫に右腕をまるごと焼かれてしまったのを懐かしく思い出す。暇を持て余していた荻号がほぼ日がな一日それ以外は何もせず、何十年もフラールレンと格闘し続けて、それでようやく扱えるようになった代物だ。

「俺がこれを扱えるようになるまで、35年かかったぞ？ さっきユーージンって奴に会ったが、スペック的には俺と同じような奴だろ。大体、この神具に触れるのか？」

「ものはためしだ。やらせてみよう」

比企は善は急げとばかりに、ただちに電話でユーージンが呼び出した。織図とナターシャと別れたばかりだったユーージンは比企に呼ばれて追跡転移でやってきたが、何故か比企と共にいた荻号の痛ましい姿を見て表情を引き締めた。

「あなたともあろうお方が、負傷を」

「フィジカルギャップを外しててな、このざまだ」

荻号は240枚のフラールレンを取り出し、実験机の上に置いた。フラールレンは起動の為のアトモスフィアを枯渇させている事を示す、カナリア色をしている。荻号のアトモスフィアをたっぷりと吸い込めばやがて紅色に染まり、それが起動可能の目印となる。カナリア色から紅色に染まるまでの間、どんなに荻号が万全な状態でアトモスフィアに滾っていたとしても3日はかかるのだ。フラールレンがアトモスフィアを吸収する速度というものは決まっていて、それ以上

速く吸収出来ないからだ。

「これを、扱えるか？」

ユージーンは幻の古代神具を興味深そうに見下ろしたが、比企に促されても触れてみようとはしなかった。ユージーンは向こう見ずな性格で、惧れを知らない若者だ。怖気づいて触れられないというのではないだろう、彼は扱えないと高をくくっている。

「これはわたしとアトモスフィアの型が違うので無理です。触性免疫に焼かれ、半身もつていかれるでしょう。それにこれは非コマンド型の神具で非常に難解です、ただちには扱えないでしょう」

FC2ーマインドキューブやFC2ーメタフィジカル・キューブと同じく非コマンド型の神具であるフラーレンは、60枚の呪符の配座の角度が1度でも狂って正確なコントロールを失えば発動しない厄介な代物だ。発動者は60枚全ての呪符に神経を研ぎ澄まさないければならず、要求される精密度と難易度は、相転星の三環の角度どころの騒ぎではない。とてもではないが一朝一夕で扱えるものはなかった。

「お前がこれを扱えたら、お前にフラーレンで解階を浄化してもらおうと思ったのだが……不死身ではない荻号が解階に入る事はできないのだ」

比企は無理だったかと、ため息をついた。比企がそれに触れてみようとする思わなかったほど、相転星をいとも簡単に手なづけたユージーンでも躊躇するほどに確かにフラーレン C60は禍々しい存在感を放っている。厳密にアトモスフィアの型が一致しなければ無理なタイプの神具だ。相転星のように、ある程度の実力があればアトモスフィアの型など気にしないというタイプの神具ではない。

こういう超神具と名の付く代物は、至極位クラスの優れた神が”

専用”に創り出したものであり、かなり癖のある神具が殆どで、基本的に他の神々が手にする事は一切考えていない為、触性免疫も本来の持ち主の手にのみ馴染むように厳密に設計されている。相転星やG-CAM’、ヘクス・カリキュレーション・フィールドなど、アルティメイト・オブ・ノーボディは比較的誰でも扱える神具を多く作り出してくれたが、フラーレン C60はノーボディの創り出した神具ではないので機密性が強く汎用性が低い。アトモスファイアの型が違うとなれば容赦なく灼かれてしまうだろう。

「では、解階の母星をこちらに持ってきてみましょうか。それなら、生物階にいても撃てますよね」

「解階をこちらに、持ってくる？」

ユージーンの大胆な言葉に、比企は細い眉を潜め、荻号は豪快に笑った。こちらから出向けないなら、連れてくればいいのだ。ただしユージーンが連れてこようとしているもののスケールの大きさは、それこそ半端ではない。

＊

主神、ヴィブレⅡスミスは事態の一応の収束を見て、比企や現代の薬神、清水をはじめ生物階に降下中の神々より転送されてきた有機合成データを彼の経営する製薬会社、レイメイグループに転送するべく執務室に戻ってきた。執務室の椅子に座り解明された合成経路を添付して機密メールで社長室に転送する。まだ実際の化合物は一つも完成されておらず見切り発車の状態だが、神々の手腕を信じて早く合成に取り掛かなければ供給が追いつかない。

この株式会社 レイメイという企業だが、主神であるヴィブレⅡスミスは生物階への降下が極度に制限されているため、直接経営は

できない。そこで有能な第三使徒を生物階に社長として送り込み企業経営を一任し、ヴィブレイスミス自身は会長として企業を背後から牛耳っているのだった。

社長、御木^{みぎ} 良沢^{りょうたく}のパソコンに転送されたデータを受けて、本日には生産が始まるだろう。

そしてこの企業の正社員は人間ではなく、全員が使徒だ。一部のパート労働者は人間だが、彼等は正社員が人ならざる者達だという事実を知らない。また、正社員たる使徒達は数百年を生きていながら外見が二十歳前後と若く見える為、新進気鋭の若手ベンチャー企業という表向きの顔を持っている。労働基準法などという日本の法律より陰陽階神法を重んじる彼等を労働力とするこの企業は、24時間体制でフル稼働する事ができるし、給料にもアトモスフィアをのみ必要とする彼等使徒達の人件費のコストも極度に抑えられる。そこでこの会社は毎年の累積売り上げが他の製薬会社の十倍とも試算され、この業界としては近年稀に見る急成長を遂げており、一昨年一部上場を果たす事となった。テレビCMでもおなじみの大企業となったわけだ。

彼はメールを転送し終わると、執務室の上に八雲からの置手紙がある事に気付いた。

藤堂 恒は結局ユージーンと一緒に戻らずに残ったのだと。恒が主神に何か話があるという意味なのだろう。逃げ帰るものとはばかり思っていたが、どうやら彼はただの臆病者ではなかったらしい。そしてそう創り上げたのは他ならぬ自分だったのだと、彼は渴いた嗤いを浮かべた。2000年もの長きを生きたヴィブレイスミスの心は渴ききって、いつの間にか生命の価値や他者の痛みというものに鈍感になりすぎていた。久々に両手をまじまじと見つめると、乾いて皺の刻み込まれたそれが、我が物とにわかには信じがたかった。

”私は、歳をとりすぎたのかもしれない……”

彼は靴音一つ立てずに病室に入ってきた。

恒は熟睡しているようだったが、主神の強大な気配を察知してすぐに飛び起きた。彼は起き上がろうとした恒の腹部をそっと抑えて元のように寝かせつけた。彼の手には、温かさなど感じられずただひんやりとして冷たかった。実の親だというのに、触れられると身が竦む思いだ。恒は怯えた目でヴィブレⅡスミスを見上げる、ただか10歳の自分と、20世紀以上も生きた主神……。どう考えても、何もかもが違いすぎる。そして彼にはまだ、感情が残っているのだろうか？ 長い年月の間に色褪せてなくなってしまうているような、そんな気がした。恒は一概に彼を責める事ができないと、どこでは分かっていた。

ヴィブレⅡスミスは包帯のきつさを確かめて、ユージーンに抜かれた点滴のルートを元のように差し込んだ。

「傷が開く。じっとしていよ……それにむやみに手をついて起き上がるな」

「……分かりました。ご心配ありがとうございます」

恒は左手を骨折していたことを、彼に指摘された初めて思い出した。彼は左手を強くついて恒が起き上がってしまったので、異常がなかったかと腕を診た。恒は八雲がそう言ったようにどうしても、根っから悪い人物のように思いたくはない。昔は慈悲ある神だったと懐かしむように彼女の告げたそれが、恒にとっての拠り所となっていた。

神々の長であり生物階における唯一神としての立場を持つ主神の登用時の資格審査は厳しく、類稀なる人格者である事もまた必須の条件だ。長年に渡り極位を務め主神として崇められるうちに、彼は少しずつ変わっていったのかもしれない。掛け違えたボタンを辿る

ように、恒がその振れを正せると思うのは、傲慢な事なのだろうか。岩のように閉ざされた彼の心は未だ知れない。

「勇敢と言うべきか、無謀というべきか。何故ユージーンと帰らなかった」

「この機会を逃しては、主神と至近距離で見える機会などないと思っただけです」

恒は打算があつて残ったわけではない、ただ彼と話がしたかった。過去の事も聞きたいが、雑談でもいい。ぎこちないかもしれないが、ただ恒は彼という人物と向かい合いたかっただけだ。憎しみをぶつける為に、復讐をする為にではない。だが彼はそう捉えてはくれなかったようだ。

「よほど私が憎いと見える」

「……はい」

恒はそんなものの為に残った訳ではなかったのだが、ひとまず肯定した。ここで否定するのも文脈的に無理がある。

「確かに、憎まれて当然の事をしておる。憎みたいだけ憎むがよい、私は一向に構わぬよ」

いっそ気持ちのよい答えだった。違うと否定したとて、何とも白々しい。ヴィブレ＝スミスは恒の素直な感情を清々しく受け止めた。そして僅かに首を振って頷いたように見えた、それは”これでいいのだ”と彼自身に言い聞かせているように恒には覗えた。恒は間髪入れず、すぐに次の言葉を続けた。

「かつてはそうでした。でもそれは、もう忘れる事にしました」

「何故だ」

「憎しみからは、何もうまれないからです。俺はそれに拘っている

限り、きつと前に進めない。また一つの事実としてあなたが俺を創らなければ、俺という存在はそもそもありませんでした。こういう言葉が適当か分かりませんが、感謝しているんです。これでも」

恒はもう怖れずに、彼の前で八雲 青華の裏切りやアルティメイ・オブ・ノーボディとの間の事だけは隠して、マインドギャップの一部を解き放って恒の真意を見せた。ひょっとするとこの行為が、自殺的なものになるかもしれないと、恒は分かっていた。だが騙されたり、陥れたり、心理戦や腹の探り合いはもう終わりだという意思を明らかにしたかった。恒の行為は神としては無謀ともいうべき自滅的な行為であり、ヴィブレⅡスミスに余すところなく恒の手の内を読まれてしまうという危険を孕んでいる。

彼はそこまでして心を丸裸にして曝け出した恒の誠意を汲んで、彼自身のマインドギャップも氷解させた。恒は主神が心を開いたという行為が、信じられなかった。僅かに頭の隅を掠めていった猜疑心と彼の良心を信じたいたいという気持ちたちが交錯する、罨ではないかと疑うのはもうやめだ。恒は分け入るように、彼の心層の中に入っていった。ユージンや荻号以外には誰も覗き見た事のない、主神ヴィブレⅡスミスの胸のうちに初めて看破した恒は、揺ぎ無い彼の決意を見て取る事ができた。彼は世界の未来の為に悪役を演じているだけだ、いくつもの疑問を捻じ伏せ、他者の痛みに鈍感になりきり、彼自身を欺きながら……。

「あなたはやはり俺を……殺そうとしているんですね」

「ああ、殺すだろう。だが、罪を認めざるを得ん……汝は私の唯の創作物ではなく一己の生命であるという事を、余りにも軽視しすぎた。赦せとは言わん……汝には赦せぬ事をした」

主神は恒の頭を優しく撫でながら、そんな救われない言葉を投げかけた。恒は三年後、自らの息子を手にかけようとしている父親の

首に、無心になってしがみ付いた。ベッドの横に座っていたヴィブレⅡスミスは訳もわからぬまま恒を抱きしめてくれた。いつの間にか、恒の目には涙が滲んでいた。父親の懷に顔を埋めながら、その決意の固さと殺意の深さを思い知った。彼は間違いなく、恒の息の根を止めるだろう。

「一度だけ、チャンスをくれませんか？ 俺は自分の意思で抗体を発動してみせます。もしもそれが出来なかったら……予定通り殺してください。もしも俺が死することなく抗体を発動する事が出来れば、あなたと俺の利害関係は一致しますよね？ あなたは俺を殺す理由がない」

ヴィブレⅡスミスは計算高く、智慧をめぐらせているようだった。今更受け入れられる要求ではないだろうかと、恒は言った傍から諦めていた。

だがユージーンの持つステイグマと恒に内在する抗体を使って予備免疫を作っておくという恒の計画を看破した時、ヴィブレⅡスミスの中で恒とAnti-ABNT 抗体の発動方法に対する認識が少し変化したようだ。ヴィブレⅡスミスの中に、予備免疫という発想がなかったからだ。実際の抗原に触れる前に抗原に似たものに触れて免疫を高めておくという発想は、彼の目算を狂わせた。そうする事により、恒の意思によってより強固な免疫が培われ、発動されるとしたら……。それは恒を単純に殺して受動的に発動させるより効果があるのではないかと。

「妄言ではないようだな……では一度きり機会を与えたとしてもだ。私は私の性質をよく知っておる。汝に能わねば、汝を殺すという計略は揺らぎはせん」

その逆説的な言葉が一応の同意だと分かったとき、恒は耳を疑った。世界の危急という大事に一度だけ、恒を信じてくれると彼は言

ったも同然だったからだ。恒の可能性を信じるためのリスクは大きいだろう、確実に抗体を発動させる為には、殺したほうが手っ取り早いに決まっている。対処がコンマ1秒遅れるだけで、手遅れにだってなってしまうかねないというのにだ。

「あなたはあなた自身を赦せないのかもしれませんが。ですが、俺に對して悪役を演じる必要なんてないと思います。マインドブレイクを学んでおいてよかった……あなたは心を失ったものではありません、それが今はつきりと分かりました。俺の憎しみを受け止める為に、憎まれようとしなくてください。あなたが俺を三年後に殺す事になっても、俺はもう憎みません。だからせめて三年の間だけ、父親と呼ばせていただいてもよいでしょうか。勿論公的な場所ではそうお呼びしません、あなたとの関係を公に明かす事もしません。あくまでも個神的にです」

冥土の土産になるとしたら、彼に對する憎しみを持って逝きたくはない。せめて三年間だけは親子という関係でいてくれてもいいのではないかと、恒は切に願った。ヴィブレスミスは恥じ入るように顔を叛けながらも、その大きな腕で恒をきつく抱きしめた。やっと感じた彼の体温、彼の息遣い。彼はとうとう肯定はしなかったが、恒は生まれてはじめて彼に受け入れてもらえたような気がした。

「汝は私の言葉をもはや信じはしないだろう。だが可能であれば、生きて欲しい」

これもどうやら、彼の純粋な言葉だとはいえなかった。神階はこのたびの戦闘で多くの神々を失ったが、まだ崩御した彼等に代わる新たな神々が一柱として生まれていない。それが可能だというのは、恒は三年後にも生き残ってくれた方が有り難い。恒には人間の女性を妊娠させるには不完全とはいえ一応の生殖機能を持たせて

いるからだ。人間と交わっても妊娠をさせる事はできないだろうが、完全な女性であるレイア―メーテールと交配し彼女を妊娠させる事が出来れば、1／2の確率で純血の神を妊娠させるかもしれない。もはや神の生まれなくなった神階を維持してゆく為には、恒のような特別な存在が必要なのだ。恒には新たな役割が与えられる。

ヴィブレ―スミスの中に成り立った新たな公算に彼自身が気付かされた時、彼はそんな狡猾な彼自身の思考回路に辟易した。どうしても単純でもいい、愚直でもいい、たったひとりの息子を愛する事すら出来ないのだろう。何故彼の思考の全てにおいて、常に物事と利害を絡めてしまうのか、ヴィブレ―スミスにはもはや彼の心が分からなかった。彼はいつからか、そうやってでしか生きてゆく事が出来なくなってしまったのかもしれない。そうなった責任は誰のせいでも、年経たせいでない、紛れもなく彼自身の責任であった。

彼は、彼を父と慕う我が子をしつかりとその胸に擁きながらにしてそのような事が頭に浮かんだ彼自身を恥じたが、その考えは簡単には捨て去る事は出来そうにもなかった。歪んだ父親の腕の中で、ただ恒の真っ直ぐな生が空しく交わっていた。

第1節 第54話 熱力学神 ナターシャⅡサンドラと聖父子の肖像（後書き）

挿絵（筆者絵注意） ナターシャⅡサンドラ

<http://lizreel.web.fc2.com/gallery/natascha.htm>

第1節 第55話 深淵からの融触とエマージェンシー・マヌーバー

畏れずにはいられない、原始の闇が虚無を満たしていた。

氷点下の真空中でアトモスフィアという鎧を脱がされた肌は脆い。厳寒の宇宙に身を刻まれながら、184時間、2250回にも達する試行の末、ユージーンのアトモスフィアはとうとう枯渴した。無言で試みが続いていた彼が母星ABYSSに向けていっしんにかざしていたその手を、軽く握り締める。滅びの時を目前にしたABYSSの蒼い人工照明が寂しげに死の球体を彩っている。秒速数十キロメートルで時折通り過ぎるABYSSの宇宙デブリに背後から衝突され、集中力をそがれる。

解階の母星を生物階にまると転移させるという当初の安直な計画は、いとも簡単に狂ってしまった。質量が大きすぎる為に転移に巻き込めなかったというのではない、ブラインド・ウォッチメイカーが解階の座標を固定して移動できないようにしてしまったのだ。物理法則を揺るがす創世者の根源的な力と、INVISIBLEの選んだ器とはいえ今は唯の神でしかないユージーンとの力の綱引きで、どちらに軍配が上がるか勝負は目に見えていた事だ。ユージーンはブラインド・ウォッチメイカーのロックした物理学的座標を、相転星を使って揺るがそうとするが、生物階や神階とは異なる物理法則の支配する解階の内部、いわばブラインド・ウォッチメイカーの母胎で、時空間操作系神具などは無用の長物と成り果ててしまっている。

相転星を持つ両手は真空中に晒されてとうにかじかんで、感覚を失っていた。力を失ったユージーンは、敗北を認める前にとうとう、虚無に向かって語りかけた。

その語りかけが何か意味のあるものとは彼自身ですらも思っていなかったようだが……。

『邪魔をするな。あなたは解階を滅ぼし新たな世界を造ろうとしているのだらう。ならば解階は必要ないものだ。何故要らないものを手放さない』

ユージーンが虚空に呼び掛けても、彼の思念は敢え無く真空中に吸い込まれてゆくだけだ。ユージーンはたったひとり真空中の静寂の中にぼつねんと、静かに創世者との交渉を続けた。

誰の支えもない、不死身の肉体を持つ彼にしか出来ない孤独な戦いだった。

『わたしを疲弊させるな。まだ利用価値があるだらう、器を損ねる事はあなたの利とはならない。わたしは退かない。何千回でも、力を使い果たしても諦めはしない。わたしは不死身だが肉体は劣化してゆく、それでもやめない。だから妨害するな……あなたにとって不要となった解階と、まだ利用価値のあるこの身体。どちらを手放すべきか、賢明なあなたならわかるだらう』

それが当然のごとく、応^{いらへ}はなかった。ユージーンは肉体の劣化を承知の上で、神具起動の為に神体を崩壊させつつアトモスフィアを搾り出した。こうやって身体を打ち碎いてゆけば、アトモスフィアはまだ出せる。そしてブラインド・ウオッチメイカーの固定した座標も薄皮を剥くようにほんの少しずつ揺るがしてゆける、ここで退いてブラインド・ウオッチメイカーに時間を与えてしまえばまた途方もない作業を最初からやり直さなければならない。ここまでやって、退くわけにはいかない。

「哀れな……」

『！』

ユージーンは肌を擦るように触れた囁き声に、弾かれたように周

囲に目を配ったが、辺りには静寂と虚無が取り巻いているだけだ。姿は見えないまま、呪詛のようなその声は続けてユージーンの脳裏に反響してきた。あたかも押し寄せる波のように、緩急をつけて鳴り止まない、遠い空に鳴る鐘のように……。

「蓋^{けだ}し、汝は供犠である。其を理解できぬか。汝は創世者の器たる汝の存在を憎み死を願えど、死なぬ身故にかような贖罪を続ける。……誰が為に購っておるのか。汝の救わんと願う者が、汝に何を報いてくれよう」

これがブラインド・ウォッチメイカーの声だというのでなければ、とうとう幻聴が聞こえてきたのかもしれない。

相転星の発動回数は2000回を超えた、凡神なら10回もせず
に命が尽きている壮絶な負荷だ。だがそれがユージーンの心の中に響き渡る肉体の悲鳴なのか、ブラインド・ウォッチメイカーからの嘲りの言葉なのか、そのどちらとも取れた。無間の闇の中から聞こえてくるおぞましい声は確実に、精神を抉じ開けて深く根を張るように限界を超えたユージーンを精神を蝕んでいった。

「……汝は孤独だ」
『……違う、』

彼は意識が遠のきそうになりながら、震える手で尚も相転星を起動し続けている。肉体の疲弊は精神の強度を損ない、ブラインド・ウォッチメイカーにつけている隙を生んでしまったのだ。声はどこから聞こえてくるのか、誰のものなのか分からない。誰でもないような、誰かであるような、解階という空間そのものの思念がユージンに降り注ぎ、柔らかな雨のように精神力を打ちのめし、正気を奪ってゆく。気を確かに持とうとするが、肉体を疲弊しきった彼の精神は脆弱なものだった。

「汝は誰によって供犠とされたのだ、汝は何の為に生まれてきた」
『何の……た……め？』

「存在理由を認めよ。汝が父によって差し出された、生贄に過ぎぬのだと」

違うと否定する気力も体力もなく、ユージーンが遂に握力を失い相転星を手放してしまった時には、大宇宙に投げ出され忘れられた屍のようになって意識を手放すしかなかった。薄れゆく意識の中、彼は声にならない声でこう呟いていた。

父よ。あなたは何故わたしという怪物を、創りたもうたか。

瞼の裏にはとつくに涸れたと思っていた、涙の気配があった。アトモスファイアの干からびた身体は凍えているが、もう熱を獲ようとして震える力もない。

このまま死んで朽ち果て、宇宙の塵となってしまうといい、彼は切にそう願ったが、叶わぬ望みだと分かっていた。いくら力尽き息絶えても、それをINVISIBLEが許さない。

背に刻み込まれたステイグマから無尽蔵の生命力が供給され、彼は息を吹き返す。衰えた力はやがて蘇り、肉体は生きた屍となっても、彼は何度でも目覚める。

彼の身はINVISIBLEによって支えられ生かされ続け、死の安息を許されない。そう、永遠にだ。

わかっていた……生まれくるべきではなかったのだと。

*

気付けば、恒が怪我をして極陽と対面を果たしてからもう二週間が経っていた。

U・I・(Uncharacterized Infection…未同定感染症)と仮称された死に至る未曾有の感染症は尚も世界規模で猛威を奮っているが、ファティナの推計したよう対数関数的には犠牲者は増加しなかった。それは神々の齎した情報を人々が適切に利用し、神々と人々が極秘裏に協力を始めたからだ。有史以来この二週間ほど地球上の既存の宗教観や世界観、宇宙論や哲学が覆され、激動した一週間はないだろう。国際医学会やシンポジウムが急遽、非公式に行われ、世界中から参じた医師たちへU・I・への対応の指針が示された。

IEIO…国際知的生命研究機関の上位機関であるWHOは各所に感染者の隔離地区を設けて感染経路を遮断し、IEIOからの情報提供により的確な情報統制を布き辛くもメディアからの二次感染を食い止めるに至った。感染者はほどなく死に至る事から、感染者の総数はようやく減少に転じはじめていた。

感染源の特定の為、陰階枢軸の遺伝子を司る神、第9位 アマデユIIパズトリー、置換名 岡崎 宿耀が過去数百万年間の生物階遺伝子データベースをIEIOの研究者に開放し、IEIOとリソースを共有する事によって、実質神階と生物階が研究レベルで手を組んだ。それに伴い、IEIOは発足以来最大の事件でもあるのだが、神階より極秘裏に生物階における生物階の交渉相手として選ばれ、神階の体制や生物階の現状について情報を得るところとなった。IEIOの動向はWHO、果ては国連に通じている。

NASAや各国宇宙開発機構は、各国の人工衛星や神階の監視衛星、高感度レーザと連携し、地球への侵入者をいち早く発見するシステムや、ファーストアタックから世界中に緊急連絡を行う情報網を整備しはじめた。また、国際原子力機関(International

onal Atomic Energy Agency .. IAEA)は、ファーストアタック後に、原子力関連施設の稼働を瞬時に停止させ無能力化させるための国際的なネットワークを構築した。核弾頭の管理、搭載はより厳格化、徹底され、解階の住民が核関連施設を攻撃することによって世界が核兵器の暴発で滅亡するという最悪のシナリオ回避に必死だった。

各国首脳は極秘に神階の存在を明らかにされ、今後国連は神階と協力して地球全体の安全保障に全力をそそぐという方向で合意した。そうせざるをえなかった。イスラム教圏の国々はイスラム教宗主をも内包する神階の存在をとうとう認めはしなかったが、神階との協調路線を突っぱねる事はできなかった。人類と神という存在が、三階の安全保障という共通課題を前に、各々等身大の姿で向かい合う時がきたのだ。

現代の主神であり生物階不可侵政策を取っていた、ヴィブレリスミスが遂に彼の方針を曲げ生物階に降下して国連総会で神のありのままの姿を見せ、協力を求めたのも効果的だったかもしれない。その演説の際にヴィブレリスミスが賢明だったのは、神という存在を宗教的存在として扱わなかった事だ。彼は主神という立場をいわゆる首相や大統領と同格であり、暫定的な神階の代表だというニュアンスを前面に押し出した事によって、国連の反感をかわずに理解を得たといえる。

そして先代の主神が世界的大宗教の創始者、ジーザス・クライストであったと一言を添えた事によって、キリスト教圏の首相達に好い印象を与え、潜在的な畏敬の念を植え付けた。付け加えてヴィブレリスミスは神として生物階の人々に崇拜や信仰を求めに来たのではなく、三階の同居者として協力を要請しに来ただけだと明言した。

比企の目指した神階の生物階直接統治とまではいかずとも、結果的に主神が各国首脳レベルの生物階代表者の前に名乗り出ざるをえないような、今回の事件はそんな歴史的な大事件だったといえる。この模様は当然、メディアには非公開であったが……。

これに関連して、大坂大学をはじめとする各研究機関から得られた特効成分の合成経路のスキームは直ちに株式会社レイメイに集められ、未認可の状態で薬剤の生産が始まっていた。レイメイは薬剤合成経路を全世界に公開し、民間の製薬会社も薬剤生産に乗り出しはじめた。

未認可の薬剤が治験などの臨床試験もなく出回るとは言語道断だが、神々の厚意と生物階の危急を知ったWHOはろくすっぽ審査もせず、即座にレイメイに新薬の認可を与えた。予想される副作用への懸念など、U・I・の悪性度に比べたら何の躊躇材料となろう。レイメイは完全に営利追求を放棄し採算度外視で生産と供給をはじめていた。

こんな事情を知らないマスコミは一躍ヒーロー企業となったレイメイの出来過ぎたシナリオを叩く事に終始した。レイメイの人間が病原体を撒き散らし、新聞に匿名で薬効成分を発表、特効薬をいち早く合成、生産し世界の救世主となれば採算度外視でも今後のための売名としては大成功だろう、と。

このところ、恒がWHOのお偉方の顔と株式会社レイメイの社長の顔をテレビで見かけない日はない。聞くところによるとレイメイの社長は極陽の第三使徒らしいが、これほどマスコミに注目されてその生い立ちを調べられればいつか尻尾が出るのではないかと今日もテレビを見ながら、気が気でない。

そういう恒はこの二週間というものの、軍神下執務室の一室に缶詰

だ。恒は以前に増して、ユージーンの命令で使徒たちに嚴重に保護されるようになった。ユージーンの腹心らしい、第五使徒の紫檀という男が恒の身の回りの世話と警護を担当することになり、彼がいとも恒の部屋に付き添っている。だが紫檀は恒を何から護るべきなのか、知らされてはいないようだった。

また、肝心のユージーンは解階をこちらに連れてくると行って出て行ったきり、もう一週間も戻ってこない。ユージーンは簡単そうに言ったが、解階を超空間転移させる事は至難の業なのだろうという事ぐらい、恒には分かった。ブラインド・ウォッチメイカーからの妨害も入るだろうし、そもそもユージーンの質量をはるかに上回る母星ABYSSを転移に巻き込む事自体不可能ではないのかと思う程突拍子もない発想だ。しかしユージーンは出来ないからといってすぐに諦めて戻ってはこない、彼はそういう損な性格をした意地っ張りだ。

恒は日中、ベッドの上から動けない事もあって以御からパソコンを支給してもらい、八雲 青華から貰った恒の生体設計図のデータを精査していた。設計図は難解で高度に専門性を要するものだったが、恒は遺伝子解析ツールを利用し、少しずつ自力で読み解いていた。膨大な量の調べものをADAMのオンライン検索でこなしつつ、何か少しでも気づく事があれば、余さずメモを取っている。一つとして無駄には出来ない情報だ。

今日も恒は眉根を寄せて考え込んでいたので、暇を持て余したらしい紫檀が肩越しに恒を覗き込んだ。背後からにゅっと顔が出てきて、恒はビクッと肩をこわばらせた。紫檀はあの品行方正で使徒の鑑のような川模 廿日の夫であるというのに、奇怪な行動をとるから不気味だ。さらに恒が彼を不気味だと思うのは、ユージーンの言葉を思い出してしまふからだ。紫檀はこと暗殺に関して任務必達度

が群を抜いているが、いつも指定したより余計に人を殺してしまう癖があるので頭が痛い、と。

そんな癖を持っていてそれが難治性なのだとしたら、うっかり殺してしまったなどという事も、冗談ではなく本当にありそうだ。そういう訳で、恒はこの紫檀という使徒を怯えている。

「藤堂様、お勉強も結構ですが、少しはご休憩を取られませ。知恵熱が出ますよ」

紫檀は彼なりに気を遣っているつもりなのかそんな事を言ってくるが、生まれてこのかた脳をフル稼働してきた恒は、知恵熱など出たためしがない。知恵熱が出るのは紫檀だけだろう、とツツこむわけにもいかず、愛想笑いをして微笑んだ。恒が昼も夜もなく解析に打ち込むのは、正直言って手持ち無沙汰だったからだ。紫檀の不気味さについてもだが、いつまで神階にいないかならないのか分からず、二度と生物階に戻れないのではないかと悩んでいた。しかし一度襲撃され怪我をした立場では、何を言うにしても分が悪く、何も言えない代わりにこうやって解析に勤しんでいる。

「というか、俺はいつまでここにいればいいのでしょうか」

「まだご体調が万全でないよう窥えますが」

「え、もう元気ですよ！ ほら！」

強がって腕をブンブン振って動かす恒に紫檀は疑わしげに眉をひそめて、ちよいと腹部をつついた。恒は息が止まり、眼を見開いて声が出せず、身をすぼめた。やはり紫檀は強敵だ。まさかそのタイミングで断りもなくいきなり腹をつつかれるとは思わなかった、曲がりなりにも陽階の正当な使徒なら、神の神体にそうそう気安く触る事などないのだが、紫檀は本人曰く”育ちが悪い”らしく、そういうった礼儀を弁えていないそうだ。紫檀とふたりきりが、どれほど怖いことか…。

「カラ元氣はやめて、少し養生してください。それでも下に降りるというなら、私の特製のお薬を飲んでもらいますよ」

紫檀がそう言うと、冗談では済まされなくて怖い。紫檀は何十種類という毒薬を調合して常備しているそうだ、まさかとは思うが、一服盛られたらたまったものではない。

「そ、そ、それって、ぼっくりいくやつですよね！？ 結構です！」

「少し痺れて動けなくなりますけど、ぼっくりはいかないですよ。それに藤堂様。あなたは神様なのです。神様は神階におわすものではないでしょうか？ どこの世界に地上に降りたがる神様がいらっしゃいますか」

嘆かわしいと言わんばかり、紫檀は呆れている。そんな正論を言われたって、実家が下にあるんだから、と恒は恒でふてくされる。

そうはいっても志帆梨とは電話で連絡を取っていた。彼女は避難所暮らしをしているようだが、恒が怪我をしたと聞いてから眠れない日々が続いているのだそうだ。恒は一目だけでも志帆梨に会って、自分の口から無事を伝えたいところだ。それに、神の命の次に大事だという神具も下に置いてきたまま放置されている筈だ。藤堂家の天井には風穴が開いていたから、早く回収しないと雨ざらしになって壊れてしまう。神具が水に弱いという事は空山によって実証済みだ。

「というか、実家が生物階にあるんですけど……」

「生物階は物騒で、危険です。私は主からあなたの警護を任されているんですから、聞き分けて下さい。あなたの安全の為です」

紫檀はユージーンの忠臣、いや忠犬だと以御が言っていたが、確かにそうだなと恒はがっくりだ。どうやら紫檀はユージーンをのみ神格化していて、恒に対する態度とはかなりの温度差が感じられる。ユージーンはあんなに暢気で優しいが、彼の御する大勢の使徒達は

軍神下使徒という性質もあるからか、一癖も二癖もある人物ばかり。使徒達の毛並みは、奉職する職種によってがらりと違うそうだ。

例えば倫理神の使徒達など、押しなべて正直者で温厚な人格者ばかりだという。音楽神の使徒は陽気で樂觀的、史神の使徒は勤勉だが理屈っぽい、などなど……。軍神下使徒は人格もだが戦闘能力も高く評価されるため、濃いキャラクターが上位に食い込んでくる事がある。紫檀はその最たるものだった。

それに紫檀がどうしても神階から恒を出したくないのは、恒が生物階に降りるような事があっては警備の為に同行しなくてはならないからだ。彼は身重の愛妻を扶養に抱えているので、妻から少しでも離れたくないというのが本音だろう。そこで紫檀が恒をどこにも行かせまいとする気迫と執念たるや、凄まじいものがあつた。そんな紫檀の執念に圧されて、恒はどうとう降参した。

「もー、分かってますよー！ 俺はどこにも行きませんか、おとなしくしてます」

「そう仰っていただけると、こちらも、むろんあなたにとっても幸いです」

そういえば、ユージンから聞くとところによるとアルティメイト・オブ・ノーボディが蘇らせた古の神とは、どうやら荻号だったようだ。荻号といっても荻号 要ではなく、荻号 要が演じていた本物の方が蘇ったのだという。恒はさっぱり意味が分からなかったが、荻号 要こそが偽物であり、アルティメイト・オブ・ノーボディが実体を得る為に神を演じていたのだそうだ。

彼は荻号 正鵠と名乗っているそうだが、古の神、荻号 正鵠は共存在（co-existence）という特殊能力を身につけていた。共存在とは存在確率を変動させ、いわゆる分身のようなもの

を創り出すが、荻号はかなりの共存在の使い手だったものの、分身に意識を割いて長時間維持する事まではできなかった。つまり共存在を行って産み出した分身の意識は、数日後には”お留守”になる。

アルティメイト・オブ・ノーボディは彼の能力の脆弱性に目をつけ、利用価値を見出した。

意識を持った本体は言葉巧みに一万年前に凍結され、自我が抜けてしまった分身にアルティメイト・オブ・ノーボディが収束した。それから一万年ものあいだ、アルティメイト・オブ・ノーボディは彼の分身を肉体の依代として用いていた。

ユージーンはそんな事情を話していた。

かつて荻号 要の第一使徒であり、現在はユージーンの第二使徒として奉職する鐙 二岐も詳細はさておき荻号復活の話を聞いたようだったが、新しい荻号にはてんで興味を示さなかった。彼女は荻号 要そのひとを慕い、愛して仕えていたのであり、いくら似ているからといって別神を同一視は出来ないというのだろう。一方の大雑把な織図は荻号 要と荻号 正鵠を双子のようにある程度同一視できるそうだが、二岐はその点徹底して受け入れようとしていない。彼女の中では、荻号 要と荻号 正鵠は点と点の独立した存在でしかなく、二つの点は線分で結ばれていないのだ。だから受け入れられない。女心というものは複雑だなと恒は改めてそう思う。

それで、この荻号 正鵠だが神階には戻らず、神を引退したいらしい。彼はもともと神だというのに神を引退するとはまた奇妙な話だが、本人は大真面目だ。退屈が死ぬほど嫌いな彼は三年後の大イベントに向けて、風岳村に住む事にしたそうだ。しかもそれが、皐月のアパートの隣の借家だというから大変だ。皐月に何か迷惑や危険が降りかからなければいいが、とユージーンは心の底から心配そうだった。神々が狙われるという今の状況からすると彼の心配はも

つともな事だが、恒はそんなのは表面上の理由であって、ユージーンは荻号が皐月の隣に引越してきて、荻号と皐月が何かないかとやきもきしているのではないかと思った。ユージーンのマインドギヤップは破れないが、彼が皐月の事を話すとき、なんとなくはにかんだ表情になるのを目ざとい恒は見つけていた。

風岳村に赴任してきた当初にはなかった表情だ、彼には性別がない筈だが、ここにきて男女の心の機微が理解できるようになったのだとしたら、彼にとっては不幸だ。恒は表面ににじみ出る彼の内面の変化を生暖かく見守りつつ、恋愛にうつつを抜かしてよい立場ではないことに同情する。恒はそんな彼の様子を思い出しつつ、彼がまだ帰ってこない事に言及しようとしたが、紫檀の心を読んで敢えて口にするのはやめておいた。主の帰還が遅れて一番不安に思っているのは、恒ではなく彼ら側近の使徒たちなのかもしれない。

「……！」

恒がパソコンの電源を落として紫檀の要請するよう、食事を取って休憩をしようとしたとき、異様な空気を感じた。意識を引っ張られるような、そんな感覚が全身を覆いつくす。しなやかな布で包み込まれるように、猛烈な睡魔が恒を襲う、抗う事など出来なかった。紫檀に一服盛られてしまったのかと考える余裕もなく、恒は崖から突き落とされるように意識を奪われていった。

ほどなく目を覚ますと、夢に何度となく見たあの黄金の草原にいた。恒はそこがどこかわかっているのです、きよろきよろと草原の住民を捜す。恒の視線は思いがけず、ひよいと下を向いた。今日のアルティメイト・オブ・ノーボディは恒より小さな少女の姿になって恒を待っていた。恒はもう彼が、あるいは彼女がどんな姿をしているかが、いちいち気にはしないしつっこみもしない。

『もしかして、俺を呼びましたか？』

今日はスケッチブックとペンの持ち合わせがないので、彼女の意思を読み取る事が出来ない。恒が石ころを捜しはじめた頃、彼女は人差し指を空に向けると、光の文字で返答をはじめていた。どうやらユージーン以外には、アルティメイト・オブ・ノーボデイの意思を直接伝えられる存在というのは、恒しかないらしい。その恒も”名も姿もなき者”である彼女とは、夢の中でしか会話できない。恒の睡眠時間を待たず意識を強引に引きずり落としたということは、よほど急いで何かを伝えたいのだろう。恒はのんびりと彼が文字を書き終わるのを待っていたが、彼女は一瞬にして文章を書き上げた。黄金色のライトワークが、大気に揺れる。

”ユージーンが、ブラインド・ウォッチメイカーの手に落ちた”

夕暮れの草原には、書きなぐったような光の文字が浮かんでいた。恒は夢の中だというのに動悸がする、わざわざ日本語で書き付けられているというのに、文章の意味が理解できない。

『……な…っ！』

”ユージーンが精神が壊されておる……彼はもう戻れぬ”

少女らしからぬ口調が残念だ。

『も、もう戻れぬって！ そんな簡単に！ たっ、助けてあげてください！』

恒はたまらなくなって、気づけば少女の肩を掴んで揺さぶっていた。創世者に対して無礼を働いているのだから、恒は客観的に彼自身を見つめる事ができなくなった。夢で知らせる前に、何とか助けてやって欲しい。こうしている時間が惜しい。少女は毅然としていた。

”吾は肉体を失い、力を貸す事はできん。だから喚んだのだ”

『俺に何が出来るんです！？ 何でもします、俺に何かが出来るといふなら』

”「彼」に左様伝えよ”

『彼って！？』

アルティメイト・オブ・ノーボディは彼女の小さな掌の中で、輝く宝石を恒に見せつけた。ああ、覚えている。これは確か荻号 正鵠を示す隠喩だ。彼女は荻号 正鵠にこの事態を伝え、相談しろと言っている。荻号が何か切り札を持っているのか？ アルティメイト・オブ・ノーボディはそれだけを伝えると、早く戻れといわんばかり押し戻すように恒の意識を浮上させた。

頭の芯を抜かれるような浮遊感がして、恒ははっと目を覚ました。

恒が意識を奪われていたのは、ほんの3分ほどもない。紫檀が上から覗き込んでいたので、急に起き上がった恒は額を紫檀の顎にぶつけてしまった。紫檀は顎をさすりながら、ぶつかられたはずみで舌をかんだらしく、顔をしかめていた。

「どうなさいましたか？ うたた寝をしていらっしやいましたが」

「紫檀さん！ 荻号さんに、荻号 正鵠さんに会わせて下さい、今すぐです！！！」

「ですから、先ほども申し上げましたように」

「それどころじゃ、ないんですよ……！ ユージンさんが……」

恒はもう必死の形相をしていたらしく、紫檀はたじろいで恒に肩を貸し、部屋の外に連れて出した。ユージンの執務室に入ると、比企がソファアに腰掛けて以御と何か話し込んでいた。多忙を極める比企が何もなくてここに来るとは思えなかったから、ユージンが帰らない事を心配して以御に事情を聞きに来たのだろうと察した。恒はこんな事をしている場合ではないと思いつながらも、比企とは実際に初対面なので自己紹介をして挨拶をしなければならぬ。以御も粗相がないように挨拶をしろと、アイコンタクトで促している。

「あっ！ お、お初お目に見えます、私は……」

「挨拶はいいが何かあったのか？ 顔色が尋常ではないぞ」

病人のように青白い顔をした比企は、彼よりは幾分顔色がよい恒の心配をしている。

察しのいい比企の配慮が有難かった、おかげですぐに本題を切り出せる。比企は織図を看破してアルティメイト・オブ・ノーボディやブラインド・ウォッチメイカーの存在を知っているそうだから、今一番といってもいいほど頼りになるのは比企かもしれない。織図の記憶を余さず看破するとは、精神的には相当の器量だ。

「ユージーン様の精神が、ブラインド・ウォッチメイカーの手に墜ちました！ 助けに行かなくては！」

「墜ちた、だと？ 分かった。すぐに助けに行く。生物階から超空間追跡転移で解階に入る、お前はここで待っておれ」

比企は事情を聞くとすぐに席を立ち、助けに行くと言ってくれた。以御はまさに懸念した事だったのか、額を押さえている。以御はユージーンの性格や欠点を誰よりよく知っている。解階に行くといったユージーンを拙速だと諭して止めようとした、だがユージーンを止める事ができるのは、残念ながら以御では無理だった。まさに懸念した通りの事態に陥ったかと、以御は猛烈に彼自身を責めているのがマインドブレイクによって窺えた。比企は堅物のように見えるが、こういう時に頼りになる。お願いしますと言い掛けて、恒はある事を思い出した。

アルティメイト・オブ・ノーボディは、比企に助力を仰げとは言わなかった。彼は次期主神の器量を持つ優秀な神だが、分類上では一般神だ。

「あ、あ、駄目です、比企様。解階に入った瞬間に殺されてしまいます。荻号様にご連絡して……」

「誰が行ったとて同じだろう。一刻を争うなら、己が行った方が早い」

「駄目なんです、荻号様でなければ。こんな時には、ノーボディの

意思に遵いましょう」

「あの荻号が、ただで動くとは思えんが……」

比企は恒の手を取ると超空間追跡転移に恒を巻き込み、荻号の住処までの転移をかけた。神階の門をくぐって生物階に出れば、それなりに時間がかかる。比企やユーージン、荻号の持つこの超空間追跡転移という特殊能力はなかなか便利だ。

次に恒の視界に現われたのは、何の変哲もない民家だ。これが荻号の家だという。家の隣を見ると、確かに皐月の住んでいる新築のアパートが見える。荻号が住んでいるのは築6年ほどの新しい物件で、恒はこの物件を建てた新婚の夫婦が不幸にして交通事故で急逝した事件を知っている。隣に住む婿の両親が、新築のこの家をどうしても取り壊す気になれず借家にしたという事情も知っている。その物件に荻号はひとりで住んでいるのだそうだ。白い瀟洒なづくりの広い家に、荻号が好きそうな南向きの広い庭がついている。

家賃も良心的な価格だった。借家で暮らす神など聞いた事がないが、実際に住んでしまっているのだからどうしようもない。比企が化合物合成への協力の見返りに、苦勞して不動産屋で搜したのだろう。比企と恒がインターホンを押すまでもなく庭先に出て、薬草の種子を植えている荻号の姿が目に入った。

荻号は種子に肥料をやる手を止めずこちらを振り向きもしなかったが、誰が来たのかはきちんと把握しているようだった。

「またお前か。最近の枢軸神ってのは、頻繁に神階を抜け出しているものなのか？ ユージンなら連絡がないぞ」

荻号は比企の顔を見ずそういった。その様子だと比企はここに頻繁に通っているのだろう。荻号はユーージンが解階を移動させ次第フラールレンを撃つ事になっているから、フラールレンを充電させたまま待機している。深紅に染まったフラールレンが240枚耳をそろえて、荻号のシザーケースに入っているはずだ。超神具 フラールレン

C60 はシザーケースごと無造作に鉢植えの上に置かれている。ひどい扱いをされて、神具としても不本意な事だろう。

「連絡をしたくとも、出来ぬ状況になったからだ」

荻号はようやく手を止め、こちらを振り向いた。

＊

「それで、あなたに助力を仰げと」

「それは俺に、死ねって言うてるんだよな」

恒から話を聞いた荻号は淡々とそう言ったが、恒は凍りついた。

比企は眉を吊り上げたが、荻号は恒の動揺などお構いなしだ。

「お前とユージーンはこちらの創世者にとって大切な持ち駒だ。その点、俺はただの死にたがりのろくでなし。そんな俺の命なら、使い捨てていいよな」

「そんなつもりじゃ！」

「だが奴の意図に気付いてはいただろ、お前はそれほど鈍くはなさそうだ」

荻号は庭先で、だらしなく室外機の上に腰掛けたまま、間髪入れずこんな指摘をした。恒はかまとぶってそう言っているのではないと、彼はしっかりと見抜いていたのだ。しかし荻号にそう指摘されるまで、恒はアルティメイト・オブ・ノーボディの意図に気づかなかった。それは疚しいと思うことなく断言できる。

「違います！ 俺を解階に飛ばして下さい」

恒は捨て鉢になってそう申し出た。

比企はその申し出に心底あきれてしまったようだ、もし比企や荻号が自らの死を恐れるがあまり、わずか10歳の子供を敵地に送り込んだのだとしたら、それは万死に値する恥ずべき行為だ。そんな

事を子供に、断じてさせはしない。もし荻号が恒にそれをさせようものなら、比企は荻号を斬り捨てるだろう。比企は斯くも侮られているのかと嘆かずにはいられなかった。荻号はまるで恒の覚悟と反応を試しているかのようだ。

「行った瞬間に死ぬんだぞ？ それでも？」

「死にません！その代わり、お願いがあります。俺を、ユージーンさんの必ず至近に飛ばして下さい。ブラインド・ウォッチメイカーが俺を殺せないように」

「殺せないように？」

面白い、というように、荻号は鼻を鳴らした。恒はたった今思いついたばかりの持論を一気に並べ立てた。誰でもいい、誰かが助けに行かなければならないというのなら、勿論自分だっていい。恒は必死だったが、唯では殺されはしない。彼はどんな場面でも、必ずふと冷静になれる才能を持っていた。それはヴィブレⅡスミスが恒に与えた贈り物の一つでもあったのだが……。

「俺がユージーンさんの至近で死ねば、抗体が発動してしまいます。そうなればまだユージーンさんが絶対不及者ではないとはいえ、俺の抗体が器としての彼に何らかの影響を与えてしまう、あまりよくない影響でしょう。結論、ブラインド・ウォッチメイカーはそれを懸念して、俺を殺せません」

「成る程……」

「そうでしょう！」

恒は荻号を納得させたのが嬉しくて、比企にも同意を求めた。しかし比企は妙案だとは思えど、子供一人を危険な目に合わせるという案に渋い顔をしたまま、首を縦には振らない。そして荻号が成る程と言ったのは、納得をしたからではなかった。

「成る程お前は鈍くはないが、浅薄だ。やはりお前は殺される。殺されるのは何も、向こうの創世者からとは限らんぜ。ユージーンの

意識は落ちているんだろう？空間を超えてどうやってこちら側に戻ってくる。それにお前は完全な神ではないようだ、人体の性質を併せ持つ身でありながら、真空中でいくらかもつのか？」

「!.....」

「悔しいか。はっ！悔しかろうなあ。無力を思い知れよ」

荻号は何が目的でそんな底意地の悪い事を言うのだろうか？

比企はその様子を見て憤慨しながら、荻号に説得は無理だと見切りをつけたらしく、恒に向き直った。

「やはりこやつは一筋縄ではいかん、荻号に助力を求める事が創世者の意思とはいえ、こうなっては致し方なかろう？己が行く」

比企はたとえ解階に入った瞬間に殺されてしまったとしても、確実にユージーンを連れ戻す自信と覚悟があった。死の一撃を与えられてから神体が死体へと変容するまで、タイムラグは必ずある。その間に最期の力を振り絞り、ユージーンを転移に巻き込んで生物階に戻る事は不可能ではない。こちらへ戻ってきた頃には死体となっってしまったいても、ユージーンを連れ戻さなければ三階は滅んだのも同然だ。彼が正気を失えば、絶対不及者をコントロール出来なくなる。

「比企様、俺も連れて行って下さい！」

「お前はこちら側でユージーンを迎えてやるという、別の仕事があるろう」

比企は優しく恒に言い聞かせて説き伏せようとした。恒は恒の思いを、比企が余さず理解してくれているような温かな感覚に包まれた。ああ、彼は神の鑑のような存在だ、と恒は熱いものが込み上げてきた。彼が主神となる未来はきつと、優しく温かな世界となるだろうに……。荻号は恒にそんな言葉をかける比企の様子を見て、まるで穢いものでも見るかのように軽蔑の眼差しをくれていた。

「愚かな奴らだな。無駄な死体を出すほど、無駄な事はないぜ。アルティメイト・オブ・ノーボディだったか、お前らがそう呼ぶこちら側の創世者は、俺を指名したんだろう？ 俺にはその理由が分かる、お前らと俺との決定的な違いがな……」

「……！」

そうだ、アルティメイト・オブ・ノーボディは何故比企ではなく荻号を指名したのだろう？ 荻号は暗黙のうちに、アルティメイト・オブ・ノーボディからどんなメッセージを受け取ったのだろう。比企では、無理な何かがあるのだ。

「俺は他者の為に、一度きりの命を投げ出す奴らを多く見てきた。信頼や思いやり、愛情や友情、慈愛とやらの為にな。……まったくもってくだらん。そんなものは存在しないと、何故気づかんのだ。それらはアルティメイト・オブ・ノーボディにプログラムされたものだ。死ぬときは、自分の意思で自分の為に死ぬがいい。お前達がどうしてもなく愚かだから、今回だけは俺が身代わりになる」

「己も共に往こう」

「俺も……！」

比企がそう言うと、恒も先ほどの話の流れを忘れて、気づけば叫んでいた。背を向けていた荻号はくると振り返ると、しっかりと釘をさした。ついでに彼は言葉だけではなく、比企と恒に金縛りのようなものをかけた。恒の身体はその瞬間から、石のように固まって動けなくなった。それはどうやら比企も同じようだ。

「お前ら、間違っても追ってくるなよ。俺がする事が無駄になる。さて、……公平に決めなくてな。一体どちらが、死ぬべきなのかを……」

そんな謎めいた不吉な言葉を遺して不敵に嗤うと、荻号の姿は解

階へと掻き消えてしまった。持っていたようには見えなかったのに、彼のシザーケースは鉢植えの上から忽然と消えていた。彼はフラーレンを持って、確かに解階に往ったのだ。たった一度の命を他者の為に簡単に投げ出すなど言った萩号が、彼の発言とは全く逆の事をしようとしている……！

恒は自分の身代わりに萩号を死地へと追いやってしまった事に気づき、その恐ろしさに総毛立つ思いがした。

第1節 第56話 奇策家の一計と、舞い散った薄暮色の羽根

紫檀 葡萄は恒と比企が消えてからというものの、軍神下執務室のデスクの周りを犬のようにうろつきまわっていた。恒は何故かユージーンの危機を知っていて、比企と共に消えてしまった。紫檀は恒の警護をすることも出来ず、ユージーンの無事も心配で奇妙な行動をとっている。

「い、以御さん！ 藤堂様は……」

「比企殿と一緒に問題ないだろう。いい加減落ち着け」

二岐も以御も、紫檀を見ているだけで落ち着かなくなってしまふ。「そうではなくて、僕も追わなくては。藤堂様の警備を言いつけられてるんです」

「比企殿と一緒にいる方が、恒にとっては安全だと思うわ」

二岐がいうことももつともだ。紫檀も比企が傍についてさえいれば、恒にあらためて庇護は必要ないと分かっている。

「神階の門を開けて生物階降下を許可してください！ 藤堂様のもどに行かせて下さい」

紫檀の狼狽の仕方ときたら、ただごとではない。彼は命令を遵守することに生きがいを感じているような男で、少しでも命令を違える事は彼の中では許されないのだ。

「お前じゃ、クソの役にもたたんだらうに」

以御がそう言うが、聞き入れなかった。

「それでも、主の命令を違えることはできません。もし藤堂様の身に何かがあったら」

こうなった紫檀はもう手がつけられない。紫檀が余りにもわーわー喚くので、以御は生物階降下の許可書を与えざるをえなかった。

軍神の御璽印を押しながら、ふと以御は嫌な予感がする。彼は何かにとり憑かれたように、恒の許に行きたがっている。それも異常なほどの剣幕で。以御は長年の経験から、誰かが生涯においてある特別な時期にさしかかった時、常軌を逸した強い自己主張をしてきたと思い出した。特別な時期がいつなのかという、それは死地に赴くときだ。

以御の勘が外れて欲しいと思うのだが――。

「私が、行きましようか？」

二岐も以御が何を考えているのか想像が付いたので、彼女は白いスーツの上着を脱ぎながらそう申し出た。以御は二岐に行かせた方がよいのではないかと思ったが、何故行かせてくれないのだと紫檀に問いただされた時に、答える言葉も理由も見つからない。紫檀は確かにユージーンによって藤堂 恒の警護を任されている。それを止める権利は、以御にはない。

紫檀は二岐から見ても以御から見ても、死に急いでいるように見えた。勿論、生物階に行ってもただちに危険だとはいえない。恒の傍には比企がついているのだし、生物階全体が危険だというわけではない。だが以御も二岐も、紫檀の必死の形相を見て、口にこそ出さないが何か嫌な直感というものが働いた。それは第一使徒を経験し、神の代理者として部下を指揮ひとつで死地に送り出してきた以御と二岐のみが身につけた感覚なのかもしれない。彼を生物階に行かせてよいものか……。

「お願いします、これは僕の仕事です」

「お前、無茶するなよ。お前はこれから父親になるんだからな、忘れるなよ」

「もう一度聞いわ。どうしても恒の事が心配だというのなら、私が代わりに行ってもいいのよ？」

二岐は念押しをした。

嫌な予感がするからといって、止めるのも不自然だ。それが思い過ぎである可能性の方が高い。

「大丈夫です。気をつけます」

紫檀が歯切れよくそう言い切ったので、二岐と以御は顔を見合わせて見送るしかなかった。無事で帰ってくるだろうか、紫檀に限っていつもはそんな事など思ったためしがないのに、以御は妙に気がかった。

悪い予感が現実のものとならなければいいが。

＊

「とんだ貧乏くじを引いてしまったもんだ。だが……こちらもそう長くはもたんからな」

荻号は意味の分からない独り言をつぶやき嘆きながらユージーンの気配を頼りに解階に転移をしようとして首をかしげ、ぽりぽりと長髪の頭をかいたのは、追跡すべきユージーンの気配が無くなってしまっていたからだ。恒から聞いた話の通り、ユージーンは解階でアトモスフィアを使い果たしたのだろう。荻号は解階の母星の座標を記憶していたので、解階の宇宙空間に転移することはできたが、闇雲に捜すのは気が進まないし時間の無駄だ。しかしそうもいってられない、彼にはもう殆ど時間が残されていなかった。おそらく荻号の気になっているタイムリミットまで、もって1日、短ければ半日しかない。荻号は余命宣告をされたしまった患者のように、一秒でも時間を無駄にするわけにはいかなかった。

荻号は覚悟を決めて解階の真空中へ超空間転移すると、ブラインド・ウォッチメイカーから死の一撃を与えられていないと実感し、

ユージーンが超空間転移の際に残したと思われる空間の歪みを追跡しはじめた。時空間歪曲の痕跡を追跡してゆくことによって、それほど捜すこともなく暗黒の真空中に漂うユージーンを発見する。彼はA B Y S Sの重力圏に巻き込まれA B Y S Sに墜落しないように意識を失う寸前にそうしたのか、およそ20・5 k m / s e cでA B Y S Sの高度周回軌道上に衛星のように漂っていた。

ブラインド・ウォッチメイカーの手に落ちたという彼の神体は、アトモスフィアが枯渇しきって干からびている。

荻号はユージーンが手放して近くに漂っていた相転星に気付き、チェーン部分を掴んだ。一万年前の世界からタイムスリップをして現代に目覚めた荻号とはいえ、この有名すぎる神具には見覚えがある。当時から相転星には持ち主がおらず、いわくのついた代物ではあった。荻号は相転星を扱わず、それよりなお扱いの困難なフラーレン C 6 0を選んだ。全神具適合性という特異体質を持つてはいても、触れた者を即死させてきたという相転星を敢えて選ぶ必要もなかったからである。

その荻号はユージーンの手放した相転星を躊躇なく手にし、全神具適合性を発揮して触性免疫に焼灼されることもなく、展開してログデータを確認した。

最近起動回数は二千回を越えている。

相転星に残されたプログラムから、ユージーンが何をしようとしていたのか、何をしたのかを瞬時に把握する。彼は母星A B Y S Sの座標を動かそうとしていた。何故そんなことをしなければならなくなっただのかは深く考えない、考えごとをしている時間はない。今はユージーンがしようとしていた作業の続きをして、彼を生物階に連れ帰るのが先決だ。

『なんだ、あと一息のところで力尽きたんだな。しかも同じような

場所から撃ちやがって。場所を変えて撃たんと力学的な理にかなってないだろ、常識的に考えて』

荻号はブラインド・ウォッチメイカーから定められた死の一撃が与えられるまで、できる限りの事をしようと考えた。

荻号はユージーンの腕を引っつき、その次の瞬間には形而上学転移で可視できる範囲の目印を捜して場所を変え、母星に向けて相転星を構え、不自然な角度に相転星を振った。これは以下の暗号文を相転星に与えるコマンドだ。

" 数式入力マニュアルを直接入力に変更 "

急がなければ、ブラインド・ウォッチメイカーに殺されてしまうのだ。相転星は荻号 要が数式入力を自動入力オートマティックにしている、数式詠唱すれば三つの環を適宜組み替えなくとも発動するようになっていた。ユージーンは真空中でも発動できるよう音声コマンドを省略し更にカスタマイズしていたが、オートマティックで起動する事には変わらない。マニュアル入力は音声コマンドや予め設定されていたオートマティックコマンドを入力する代わりに、三つの環の角度を手動でひたすら入力するものだ。

荻号が何故手にした事もない神具を我が物のように扱えるかという、彼は神具を選ぶ際に、全ての超神具の取扱説明書に目を通した上で、最も簡単には扱えそうにない神具に決めたからだ。つまり彼は相転星の取扱説明書を読んでいた。彼はその時なんとなく流し読みをした説明書の記憶を思い出している。とりわけ音声入力の出来ない真空中では、直接入力が役に立つ。

荻号は相転星の内環の抵抗を解除し、ピーン、と指先で内環を弾いた。抵抗を解除された内環は真空中では止まることなく加速して回り続ける。相転星の反応中心の月が、新しい持ち主の顔を上目づ

かに見上げている。荻号は冷淡にそれを睨み付けると、ピーン、ピーンと更に回転を与え内環は高速回転を始めた。

これで内環には触れなくてもよくなった。あとは二つの外環を内環の回転に合わせて動かせば三つの環の角度が決まり、コマンド入力の速度が上がる。そしてユージーンの設定していた無音声オートマティックコマンドをすら用いない事の最大のメリットは、マニュアルコマンドだとそのエネルギー増幅効率は数十倍にも膨れ上がるという点だ。

車でいうと、マニュアル車がオートマ車より燃費がよい事と似たような現象が、マニュアル入力モードの相転星で起こるだろう。ただし、高速回転する内環の動きに角度を一度単位で合わせ続けられるなら、だが。

荻号は今日まで触れた事もなかった相転星の内環を最速にまで回転させると、外環を内環の回転に合わせて組み替えはじめた。一秒間に十回のペースでの角度入力を、彼は間違えることもなく淡々と正確に続けてゆく。真空中なので通常時の金きり音は聞こえないが、コマンドを受理したという独特の振動が荻号の手の内に伝わってくる。

それによって彼はコマンドが受け付けられ演算が始まったと確認しつつ、内環を更に弾いて入力を加速させてゆく。

一分後、相転星は千回のコマンドを与えられ、最大励起の飽和状態に達した。

荻号はそれを大切そうに両手でそっと包み込むと、母星に向けて相転星を掲げて標的を絞りこむ。

万力を締上げるように、彼の手の中で暴れ狂う相転星をしっかりとコントロールしている。

ψ {225, 214, 64}
{290, 127, 2}
θ

最後の三セットの角度入力が発動のキーワード”相間転移せよ”に相当するものだ。

目も眩むばかりの暴力的な熱量を帯びた相転星のエネルギーは発動の瞬間、一直線に母星に向けて放たれ、ユージーンが成し遂げられなかったこと―ブラインド・ウォッチメイカーにロックされた母星の座標を揺るがした。荻号はしてやったとばかりに微笑むと、宇宙空間に放り投げていたユージーンを乱暴に掴み、解階の母星とともに超空間転移に巻き込もうとした。

しかしその瞬間、意識を失っていたと思っていたユージーンが突如として目覚めたのだ。

荻号はほっとして何か呼びかけようとしたが、表情が以前の彼のものと違うのに気付き舌打ちをした。

『こいつ、ユージーンじゃねえぞ』

ユージーンの中にいる、恐らくそれはブラインド・ウォッチメイカーであろうが、倒れたふりをして荻号をおびき寄せていたのかとすら思われる。荻号は反射的にユージーンから逃れるようにして瞬間移動をかけ、ABYSSの地を踏んだ。彼は着地するとすぐさま地に両手をつき、咆哮を上げながらABYSSを転移に巻き込もうとした。

解階には辺境の星もあるのだろうが、それらを構っている余裕はない。

ABYSSだけでも……。

彼はそう考えて後ろめたく感じたが、荻号は計り知れないことと

はいえ、解階を生物階に転移させるというユージーンの提案でABYSにはアルシエルの勅令を受けた辺境の星の悲感染者達が集っていた。つまり辺境の星々に残されたのは、比企らの創り出した特効薬が完成するまでは見捨てるほかない感染者達のみが残っていたという事になる。

いつの間にか追跡転移をしてきたユージーンに背後に周りこまれており、危険を感じた時にはもう遅かった。

あと一歩というところで荻号は創世者の圧倒的な暴力を込め背後より殴りつけられ、死の一撃を与えられた。その空間に在る創世者のみが支配下にある生命に与える事のできる特殊かつ不可避の攻撃、バイタル切断をその身に受けては、逃れられる筈もなかった。彼は肉体が物質と化すまでの間に、崩れ落ちながらもユージーンの足を掴み、最後の力を振り絞って解階とユージーンを生物階に転移させた。

その後はただ、息絶えることとなるだろう。

大地が割れんばかりの轟音がして、最大出力のアトモスフィアを用いて、荻号の最期の力を賭けた超空間転移が完成した。基空間が歪み、ABYSの座標が彼の手に掌握される。

それが間違いでなければたった今この瞬間、アルティメイト・オブ・ノーボディの支配圏内に入った筈だ。生物階の近傍ならばノーボディの力が及ぶ。空間を超えた感触はある、ここは生物階だ、戻ってきたのだと荻号には分かった。どうやら間に合った……、彼は喜ぶ間もなく力尽きて瞳を閉ざした。

”……俺も遂に……ここまで、か——”

意識が途切れ、薄れてゆく。

彼はしだいに物質と化してゆきながら、それでも不敵に微笑んで

いた。

”あとは……任せたぞ。俺を殺した責任を取れよ”

彼は最期に、誰にとも知れずそんな言葉を誰かに語りかけた。不本意な死に様だが、やることはやった。

ユージーンのをしたブラインド・ウォッチメイカーは冷ややかに彼を見下ろし、荻号が息たえた事を確認するかのように俯せに倒れていた彼の遺体を足蹴にして裏返した。

ブラインド・ウォッチメイカーは確かに彼が逝ったと確かめると、生物階に転移した母星を元のように解階に戻そうとして気付いたようだった。

彼女はユージーンの器を隠れみのにしているとはいえアルティメイト・オブ・ノーボディの支配領域に入っており、ここでは彼女の思い通りにはいかない。ノーボディはユージーンに要請されて生物階にABYSSの納まるべき受け皿を造っていた。結局ABYSSの転移を行ったのは荻号だが、予定通りの座標に転移させたためにABYSSはノーボディの造った檻の中に閉じ込められるような形となりブラインド・ウォッチメイカーは生物階においてその座標から外に出られなくなった。この場所から他の場所に移動するためには、一度解階に転移して違う場所から生物階に入らねばならない。

荻号のした事は、無駄にはならなかった――。

彼は命を捨てて解階を生物階に転移させ、それはノーボディに固定されてもう戻せない。この場所での力関係を見ると、肉体に憑依し元々のブラインド・ウォッチメイカーの意識のほんの一部分でしかない彼女は、実体を持たず普遍と化したノーボディより遥かに劣っている。ABYSSが閉じ込められている檻から空間を超えて解階へ戻す事は不可能に近い。

彼女は無表情で事実だけを受け止めると、あれほど執着をしていたA B Y S Sを簡単に見捨てて解階へと去ってしまった。

＊

比企はそれほど時間をかけず、荻号の金縛りを破った。

恒の方はどこにどう力を加えても、びくとも動かない。比企は地層に埋め込まれた化石をそつと発掘する考古学者のように、荻号のアトモスフィアに固定された恒の周囲のアトモスフィアを削り取っていた。恒は、つくづく自分は誰にとっても足手まといだと思い知らされながら、不安げなまなざしで比企を見上げる。

比企はこの瞬間も、荻号を追ってゆきたいだろうに……恒が足を引っ張っている。

「姑息な事をしおって……」

「荻号様は、命を投げうつおつもりなのでしょうか？」

鉄面皮の彼はいつものように無表情を貫きながらも、口の端に苛立ちを隠せずにいるらしかった。比企は生まれながらにして冷気を纏っているのかと思うほど、冷たいアトモスフィアをしている。比企の傍にいと、夏だというのに鳥肌が立つ。それで恒は、ますます恐縮してしまう。

「己は荻号 正鵠の性質を知らぬ。だが荻号 要と酷似しているとすれば、彼は生に対する執着が極端に薄い」

荻号の犠牲と引き換えに、ユージーンを奪還する――。

ユージーンはきつと、こんな決着を望まないだろう……。ノーボディは恒に、荻号の生命を使えと教唆したのだろうか？

彼（彼女）が遍く生命への慈愛を説き与える一方で、あたかも荻号を捨て駒のように使うのだろうか。そして彼の意味を受けて荻号

にそう仕向けたのは、外ならぬ恒自身だった事を思い知られる。おそらくそう伝えた恒も、アルティメイト・オブ・ノーボディにいいように使われたのだろうか……。

「俺は何てことを。誰かの為に誰かが犠牲になるなんて……こんな
のばかりもうたくさんです」

比企は恒の金縛りを破ると、真夏だというのに宮司のような詰襟の和服姿で何を思ったか汗一つかかずに腕組みをした。

恒は強い日差しと次々とめまぐるしく変化してゆく状況にショックが重なって、眩暈がする。恒の動揺を見て、比企はまた淡々とこ
ういい捨てた。比企はそれでも恒を励ましているのだろうか、どこ
か突き放して聞こえるのが比企が損をしている部分だ。

「藤堂……。陽階に属する己がこう発言してはならぬのだろうか事
実、非常事態においては生命の軽重が存在する。お前の命は己や荻
号より、いや神階の何者より重く、己と荻号の二者間では荻号の命
が重い。荻号はユージーンとともに生物階と神階の安全保証にとつ
て切り札的な存在であった。だから必然的に、荻号ではなく己の生
命を使うべきだったのだ。切り札は一枚では心許ないのでな……。今
度の事がよい例だ。しかし荻号を失うよりなお、ユージーンを奪わ
れる事は致命的だった。荻号ならばユージーンを奪い返して来るだ
ろうが……。優先事項を勘案すれば悔やまれる」

誰かの命が、誰かより大切だなどということはあってはならない
と恒は思うのだが、比企はあくまでも三階の危機的状況下において
の軽重の話をしているようだ。恒は反論したかったが、ぐっと口を
閉ざして聞いておいた。一人前に反論をできるような立場ではない、
現に恒は荻号を間接的に殺す事になってしまった。

「ユージーンさんは……帰ってくる事が出来るでしょうか」
「？」

「ユージーンさんのままで帰ってくる事が出来るでしょうか――？
ノーボディは、彼がブラインド・ウォッチメイカーの手に堕ちた
と……！」

「……いかん！」

比企は恒の言葉の真意を知り、荻号の消えた快晴の空を仰いだ。
そうだ……荻号が命を捨てて連れて帰るのは、ユージーンではな
いかもしれない！

ユージーンはINVISIBLEが収束するための器としてIN
VISIBLEにツバをつけられているぐらいだから、もともと創
世者を受け入れるのに適した神体をしているか、よほど創世者にと
って魅力的な神体なのだろう。ユージーンが何らかの理由で力尽き
てしまったとすれば、ブラインド・ウォッチメイカーがその身体に
入り込む事など造作もないのかもしれない。だが、もし恒がブライ
ンド・ウォッチメイカーだったならという立場で考えると、IN
VISIBLEの気に入った神体にちよっかいを出す事は、必ずしも
賢明ではないだろうと思う。

INVISIBLEがへそを曲げてユージーンの裡に収束する気
をなくしてしまえば計画は丸つぶれだし、万が一ユージーンの背に
あるステイグマが消えてしまえば、次の器が見当たらない。またI
NVISIBLEもブラインド・ウォッチメイカーも最初から器を
捜さねばなくなる。ブラインド・ウォッチメイカーにとっても
有り難くないだろう。したがって、ユージーンに憑依するとしても
それは一時的なものだろうと推測される。だとしたら彼女は、ユー
ジーンの神体を使って何をするつもりなのか？

「超越的な強度を持つユージーンの神体が敵の手に墜ちたのか……
万一の事態も、想定せねばならん」

「万一、とは？」

問い返しながら、恒にも分かっていた。だが到底受け入れられなかった。ユージーンの神体を使う理由、それはただ一つだ。比企は視線を伏せながらも、はっきりと断言した。

「お前を殺しに来るやもしれん」

「俺がユージンさんに殺される?!」

恒はどこかその言葉を他人事のように感じたが、まさかこうなってしまうとは、ノーボディでも考えの及ばない事態だったのではないかと思う。

恒がユージンに命を狙われるなどとは。やむを得ない事情だというならユージンになら殺されても構わないと頭のどこかではそう思う一方で、恒を手には掛けるユージーンは何を思うだろう？ 何も思わないのか――。

「で、でも、俺を殺せば抗体が発動します。それを懸念して……」

「藤堂……お前に指一本触れず近づかず殺すなど、己にすら容易いことだ」

飛び道具ひとつで、恒の命は簡単に断たれる。

「……!」

比企はつい、と目を泳がせて天を仰いだ。隣の家の方が、和服姿の比企と恒が荻号の家の庭でなにやら話し込んでいるのを見て、窓からカーテンの陰から顔を出していたが、恒は愛想よく会釈をする余裕もなかった。

「頼るなら、ヴィブレⅡスミスだな。神階に戻るぞ、藤堂」

「父を!？」

でも……極陽は比企より力劣るのではなかったか？ ユージーンは比企をこそ次期極陽の器量と評価していたが。比企があっさりと彼自身の無力を認め極陽の助力を請うと決めてしまったのは意外だった。弱腰な比企を見ると、心許ない。

「ですが…」

「1のオールマイティ（万能者）を失ったとあらば、100のオールティ（権威）を差配せねばならん。そして創世者と争う為に、火力はいらぬだろう」

「父が……」

「何を言っているのかは、そのうちわかる」

誰もが口を揃えてそう言う、主神、ヴィブレⅡスミスは強いと。彼を畏れるからこそ比企を除いて彼に挑みかかる者はなく、およそ十世紀以上もの間極陽として在位し続けている。神具には、暗黙のうちに位申戦では使ってはならない、対象を確実に死に至らしめる禁忌の機能があるものがある。比企の元素崩壊しかり、ヴィブレⅡスミスのPSYCO-LOGI Case（サイコ・ロジカーゼ…精神分解酵素）もしかりだ。比企はPSYCO-LOGI Caseの有用性と危険性を知っていた。

対抗できるとしたら、PSYCO-LOGI Caseしかないと思企は判断した。

起こりうる最悪の事態まであまり時間がないと懸念していたが、比企は場所をイメージしての超空間転移は出来なかった。

比企は超空間追跡転移は出来たが、今の神階には生物階にまで届く強い気配を持った超越者が存在しない。先ほどは荻号がいたので生物階に来る事が出来たが、この状況では神階の門から神階に入る

ほかなかった。神階に行けば安全だとはいえない、だが神階はノーボディの創り出したいわば聖域。ブラインド・ウォッチメイカーの一度の侵攻を許しはしたが、生物階よりは守りが堅いだろう。それに、生物階が戦場となり無意味な犠牲を出す事は愚かしい。ただでさえ、生物階はさきの混乱により疲弊しきっている。

これ以上の被害を被れば、未知の生命体への恐怖は増し、国連でのヴィブレイスミスへの不信感へも繋がるだろう。

神は人を守らねばならない、この大原則を比企は忘れてはいなかった。

「時間がない、神階の門へゆくぞ」

「は、はい」

恒が頷く間もなく、比企は恒を転移に巻き込んだ。比企は最も近い入階衛星の場所まで転移すると、進入ボタンを押し、神階への帰還を申し込む。やがて神階の門（Heaven's Gate）が転送されて開かれる筈だが、赤いランプが点滅していて誰かが神階の門を利用中のようなうだ。利用者3名と表示されている。移動式の神階の門は一つしかなく、それが各入階衛星に転送されて連絡されているだけなので、誰かが使用していれば順番を待たなければならぬ。比企は先に入階コードを入力して待つしかなかった。4番目の順番という事になる。恒は比企の手を離して自分で飛翔するよう務めた。何もかも他者任せで、そんな彼自身がたまらなく恥ずかしく思えたからである。

「む。何か来る。危険な者ではない」

比企はそう呟いて雲間を見つめた。翼を持った男が、一直線にこちらをめがけて飛んでくるのが見える。

その紫色の翼と、シルエットから恒は誰がやってきたのかすぐに気付いた。

「藤堂様！ やつと見つけました！」

「紫檀さん」

紫檀は恒を捜すために、比企の気配を追跡していた。比企が長くこの場所に留まっていたので、紫檀にすら追跡を許されてしまったのだろう。

あまりよい事ではないな、と比企は思った。こうやって時間を無駄にしていれば、怖れている者がやってくる。神階の門の利用者は本当は18名いたが、優先コードを入力したので何とか4番目の順番になった。つまり優先コードを入力した、恐らく神と思しき者達があと3名もいるのだ。

比企はこれに引かなかった。優先コードを入力できるのは枢軸神だけだ。そして……ユージョンと比企を除いて、現在生物階に降下している枢軸神はいなかった。わずか1時間ばかりの間に、誰か神階を出た枢軸神がいるのか？ しかも3名も。不穏な気配がする。誰かが優先コードを、不法に利用しているのではないかと。

「よかった、藤堂様。ご無事で何よりです」

紫檀は心の底から恒の無事を喜んで、目じりには涙がぶら下がっている。神階の門が転送されてきた合図のランプが点灯したので、比企はほっとした。白い光のグリッドが曇天の空に現れ、それが扉の形を形どって大きく開いた。よかった、これで、安全だ。紫檀がそう思いかけた時、ふっと比企と恒の背後に、何者かの影が現れたのを見つけた。比企と恒の背後にいるものだから、彼等はその出現に気付いていない。その影から繰り出された一閃の攻撃を見切ったとき、紫檀は影が襲撃者である事をいち早く察知する。

「っー！」

紫檀は咄嗟に前に飛び出て比企と恒を庇い、すれ違いざま恒と比企の腹部を蹴って神階の門の中に押し込んだ。神階の門は二柱の神

の入階を受け付けて、その巨大な扉を軋ませて閉ざされる。

彼は両手を拡げて神階の門を守る弁慶のように立ちふさがり、何度も瞬きをして逆光を背負う相手を見定めようとした。

紫檀は目の前の存在を受け入れる事ができず、攻撃に対する反応が遅れた。カマイタチのような衝撃波で切り付けられ、紫檀は無防備に拡げていた右腕を肘の上で切り落とされた。切断された右腕は地上へと空しく落ちてゆく。鮮血が噴水のように噴出したが、不思議と痛みは感じなかった。この右腕で、これから生まれ来る愛すべき双子の子供達を擁く筈だった。その腕を、目の前の男がいつも簡単に奪い去った。何の感傷もない、どこか乾ききった表情を浮かべながら。

「……な、何故……」

応戦しなければ、左腕も翼も持っていられる。彼の頭脳は危険を察している。

しかし紫檀はどうしても、襲撃者に牙をむく事ができなかった。

何故なら、目の前にいる彼は……。

「し、主よ……何故貴方が、藤堂様をお護りしろと命じた貴方が、と、藤堂様を加害なされようと……」

そう。目の前の敵は見まがうことなくユージーンの姿をしている。

紫檀が永遠の忠誠を誓い、祈りを捧げ敬愛してやまない軍神がそこにはいた。

また凶器となった彼の神具が疾く風を斬るたび、紫檀は何度となく切り付けられた。無数の攻撃によって左の翼の先を切り落とされ、薄暮色で風情があるとユージーンに誉めてもらった自慢の風切り羽が空を舞う。左腕もいつの間にか、もっていかれていた。意識が朦朧としながら、それでも尚神階の門の前に立ちふさがったまま彼は

譲らない。

門が完全に他の場所に転送されてしまうまで、こじ開けられでもしたらたまらない。

あと10秒ほど持ちこたえられればいい、そうすれば跡形もなく神階の門は消えうせる。藤堂 恒を守ることができる。

「主よ、どうして、どうして――」

血だるまになった紫檀は飛翔することすら出来ず、遂に浮力を失って堕ちてゆこうとした。しかし絶望のままこの世を去ろうとした紫檀の身体を、抱きとめた者がいる。

薄墨色の聖衣、銅色の髪、そしてその手に束ね持ったのは、深紅の色をしたフラーレン C60だ。

紛れもなくそのひと、荻号 正鵜がブラインド・ウォッチメイカ―の憑依したユージーンの前に立ちはだかった。紫檀はまだ生きているが、虫の息だ。荻号はフラーレンを17枚放り投げ、紫檀のため空中に簡易ベッドを作った。フラーレンは優しく青い光で格子をつくり、紫檀が横たわるだけの強度を持っている。紫檀をその上にそっと寝かせ、持っていた薬草をシザーケースから取り出し、紫檀の口に含ませた。

「……こいつは、ユージーンの部下だった使徒だろう」

荻号は紫檀の息がまだあることを確認すると、敵の前に向き直った。

「お前、とんでもない事をしたな」

ブラインド・ウォッチメイカーと対峙しているのは、先ほど死亡を確認した荻号そのひとに他ならない。確かに荻号のバイタルレベルを切断し、葬り去った筈だった。

それを彼女自身が確認していた。

「幽霊でも見ている気分か？ 残念だったなあ、死んだのは貧乏くじを引いた俺の分身の方だ」

荻号は共存存在（co-existence）を使い異なる位相に彼の分身を生み出す事が出来る、分身は1日、短くて半日の間自由な意思を持ち、本物と同じように思考し活動する。

荻号が恒と比企に対し「どちらが死ぬべきか公平に」決めるといつていたのは、共存存在で分割した荻号という存在のどちらを生かすように力配分をするかを決めるという意味だったのだ。貧乏くじを引いた方の荻号は生き残るべきと定められた半身に力を奪われ、消滅する運命を待つほかなかった。アルティメイト・オブ・ノーボデイが荻号を捨て駒にしろと指名したのは、そういう理由だったのだ。

「早くこいつを助けないと死んでしまう。5分で片をつけてやる」

荻号は束ねていたフラールレン C60を崩して風にはためかせると、ユージーンに向けて掲げ持つ。

冷静な声の裏には、嘗てないほどの怒りが隠せずに滲み出ていた。

第1節 第57話 精神分解酵素、PSYCHO-LOGI Case

その頃、メファイストフェレスは太平洋沖にあるリゾート地のビーチに足を運んでいた。

この一帯は海水の透明度が高く、空気も澄み渡ってさんご礁がどこまでも続いている。

美しい白浜の上にはメファイストフェレスI セルマーの買ったプライベートコテージもあり、セルマーの手配した管理会社によっていつもきれいに管理されている。

彼女はこんな状況下でありながらも、生物階での日常を楽しむ事を忘れなかった。このちよつとしたバカンスに皐月も誘ったのだが、皐月は盆休みを少し遅く取って愛媛県の実家に里帰りをするというので彼女ひとりでやってきた。よい香りのするアロマティックフラワールの浮いたスパを堪能しながら、グラスから溢れんばかりにフルーツが盛り付けされ、小さな傘とオーキッドの花が飾られたトロピカルカクテルをいただいている。

「こんな時だからこそ、バカンスを楽しむべきだわ」

彼女の父親セルマーの無事も解階の状況も知れないが、どんなに心配しようともメファイストフェレスは解階に戻れない。

風岳村で彼女が出来ることもなかった。久々に陸上部の顧問に精を出そうかとも考えたが、外出差し控え令がまだ解除されておらず、学校からは部活動の禁止が通告されていた。子供達のいない校庭を整備することにも飽きたし、風岳神社内の社務所にはひっきりなしに村人達がおしかけてきて気が休まらない。

それに彼等はユージーンに会えないとなるとあからさまにがっかりとした顔つきをする。それも気に入らない。

そういえば、このところ村に居つかないユージーンに代わって、風岳村には最近荻号に似た怪しい神が住み着いた。

風貌は怪しく、信頼がおけるのかどうかも分らないが、どうやら実力だけはあるようだ。彼が風岳村にいる限り風岳村の治安は問題ないだろう、彼女はそう判断して誰にことわることもなく、勝手に夏期休暇をとることにしたという次第だ。

恒もユージーンもいない今、何が風岳村にメファイストフェレスを縛り付けているというわけでもない。

「臯月も来ればよかったのに」

彼女が久々に優雅で満ち足りた気持ちでグラスに手を伸ばした頃、コテージの外の白浜に赤い雫が降り注いだのが遠目に見えた。

この一角はメファイストフェレス家がプライベートビーチとして買い上げているので、見渡す限り人影はない。ただ赤いものが浜辺に降り注いできてメファイストフェレスのいるコテージに向けて橋のように敷き詰められたように見えた。メファイストフェレスは恭しくフルーツの盛り合わせを持ってきたボーイに微笑む。

メファイストフェレスはその赤い何が見て、薔薇の花びらをビーチからコテージまで敷き詰めるという気のきいた演出だろうと思ったからだ。

「あの花びらは、サービス？」

「へ、花びらですか？」

ボーイは怪訝な顔をして問い返した。

「え、でも……」

メファイストフェレスは強い日差しからの照り返しでよく見えなかった赤い何かに目を凝らして絶句した。

「ちょっと！ 何これ！」

彼女はボディトリートメントでつるつるに磨き上げた肌に薄手のバスタオルを巻くと、赤いサンダルを穿いて砂にヒールを取られながらビーチに出た。上空から降り注いできたのは花びらでもなんでもない、何者かの血液だったのだ。そして僅かな風切音と共に更に上空から何かが落下してくる気配を感じたメファイストフェレスが反射的に落下物を受け止めると、たった今切断されたばかりとも考えられる、鮮血の滴る腕だ。

メファイストフェレスは驚きも慌てもせず、腕を鷲掴みにしたままむくれて口を尖らせた。

せっかく今しがたエステをしたばかりの肌に血痕が付いてしまったのが気に入らなかった。

「何よ、せっかくリゾートしてるって時に。誰の手が落っこちてきたの？」

やや遅れて、ハラハラと羽毛が舞い落ちてきた。砂浜一面に、雪が降るように薄紫色の美しい羽毛が散りばめられてゆく。

こんな快晴の空の下、誰かの手が大きな紫色の羽毛と一緒に落ちてくるだなんて……不審に思ったメファイストフェレスは生腕に詰められていた頑丈な真鍮製の腕輪を見つけた。すると神語で軍神下 第五使徒と銘記されているではないか。

銘を読んでいると、ややあって二本目の腕もドサッと砂地の上に降ってきた。

メファイストフェレスはビーチからコテージに戻ると、立ち竦んでいたボーイに腕の二本を押し付けた。ボーイは驚いて悲鳴を上げ、腕を放り投げる。その反応は分からないでもない、血の滴り落ちる生腕をほいと手渡されて投げ出さない人間はごく稀だろうから。メファイストフェレスは仕方なくもう一度拾い上げ、ぐいと彼に押し付け、ついでにアメリカンエクスプレスのブラックカードも押し付

けて微笑んだ。

「これで今見た事は、黙っていてくれるでしょうね？　好きなだけ引き落としていいから。その代わり”ソレ”を冷蔵庫で、キンキンに冷やしておいて頂戴。持ち主が生きていれば、後でくつつける事になるかもしれないからね。妾は出かけてくるわ。夕食はいらないわ」

彼は生まれて初めて目にしたブラックカードに目を眩ませて、張り子の虎のように首を縦に振って頷いた。

それを見たメファイストフェレスは改めて、人間社会の通貨は人間の恐怖心や道徳心をも捻じ伏せるのだと再確認し、満足そうに微笑む。彼女は軽く嘲るように鼻を鳴らすと、天蓋のあるベッドルームの傍らで、はらりとバスタオルを解く。彼女はしなやかな肢体と豊かなバストをバスタオルで拭うと、いつもの黒いドレスを身に纏い、赤いビロードの帽子を目深に被った。

クローゼットからマクシミニマを取り出し、その華奢な手の内に握り締める。

軍神下第五使徒、紫檀　葡萄をメファイストフェレスは知らないが、軍神下使徒が攻撃されているとなれば、必然的に軍神に何か異変が起こったという事になる。ユージーンが狙われているか、ユージーンの身に何かあったか……。

「何と短かったこと。折角の夏休みだったのに」

休暇を取って充分に鋭気を養った彼女は少し残念そうに、しかし楽しそうににやついた。

＊

紫檀 葡萄に腹部を蹴り込まれ、神階の門をくぐった比企と恒は門が転送され事象の地平を超え間一髪のところであつた。

あと少し紫檀がトロツとしていたら、氣配を消して襲撃してきた敵の前に比企はいざしらず、少なくとも恒の命はなかつた。

「比企様、し、紫檀さんが」

「戻ってはならん！ 彼は我々に活路を与えたのだ、彼の心意氣を無にしてはならん」

「誰が襲ってきたか、分かりましたか？」

突然の会敵で背後に何が現れたのか解らなかつた、そればかりではない。比企が氣付かないくらいだから、敵には全くといっていい程氣配がなかつたのだ。

恒は当然、察知出来なかつた。あの一瞬で何が襲ってきたかなど、紫檀にも見えなかつただろう。

だが紫檀はその生来の直感力で即座にそれが敵であると判断し、彼の主たるユージーンだとは考えなかつた。紫檀の咄嗟の判断が、二柱の窮地を救うこととなつた。

彼の身を挺して恒と比企を救つてくれた紫檀に何も報いることができない、感謝すること以外には……。

「紫檀が蹴つたお陰で敵影は見えなんだが、間違ひなからう。ユージーンがお前を殺しに来たのだ……。急ごう、奴は己のように追跡に頼らぬ超空間転移も出来、神階の門からの正当な入階も出来る。神階に侵入してくるやもしれん」

これほどまでも早くユージーンが生物階に戻ってきたというのは即ち、突き詰めて考えると荻号の死を意味した。

あの荻号を簡単に殺してしまうような相手だ、恒を抱えたまま下手に居残って戦わなくて賢明だった、と比企は肝を冷やした。

たまたまやってきた紫檀が一瞬の隙を作ってくれた、彼の命と引き換えに……。

比企はヴィブレⅡスミスのアトモスフィアを探り当てると、不安そうな恒を抱きかかえるようにして転移に巻き込んだ。

ヴィブレⅡスミスは今日も強い逆光の差し込む天皇の間の玉座にじっと座っていたが、至高の王座の上でただ漫然と胡座をかいている訳ではなかった。彼は神階の統治者としてその存在を生物階に明らかにした事により、国連と緊密に連絡を取って対応に追われていた。また、比企らの開発した新薬の生産と普及にも尽力していた。

たった今も書類を用意していたところである。ヴィブレⅡスミスは突如現れた比企の出現に手を止め、話を聞く態勢をとった。

礼を重んじる比企が手続きを無視してやってくるのだから、余程の大事が起こったのだろう。比企はこんな非常時でも素早く片膝をつき、敬意を表して頭を垂れた。

「然るべき手順を踏まず、失礼を仕る」
つかまつ

「危急の事であろうな」

「ユージーンⅡマズローの精神が敵の手に落ちた。神階への侵入も時間の問題だ」

極陽はユージーンが今何をしてどこにいるのか知らされていなかったたので、敵の手に落ちたとはいっても話が見えてくるものではない。

それに極陽にとっては敵と表現する者が何者なのかすら、曖昧で漠然としている。陰階神であった比企にとって敵というとINVISIBLEただ一つである。

だがINVISIBLEが生物階や神階に直接介入をして、それ

ばかりかユージーンにまで干渉してくるとは考えがたい。INVI SIBLEはユージーンにステイグマを刻み込んで予約済みであることを主張している。これ以上あれこれと執拗に干渉する必要がない。ユージーンは彼がどれだけ否定しても足掻いても、元々INVISIBLEの手に落ちている。

それを敵の手に落ちたと改めて表現するほど、比企は愚鈍ではない。

ヴィブレースミスは目を細めて、比企のいわんとするところのものを汲み取った。

「敵とは、このたびの災禍を引き起こした者か」

「左様」

「して、貴奴の目的は何だ」

事情を飲み込んだヴィブレースミスが玉座から動いた。

比企は何ものからも彼を庇えるよう、藤堂 恒を卑近ともいえるほど傍らに置いている。恒の身に何か危険が及ぶのだろうか、と敏感な主神はにわかに表情を曇らせる。不死身の神体を持つユージーンが敵の手に落ち、恒を狙っているのだとしたらもう打つ手がない。三階は絶対不及者の降臨を待たずして破滅を迎えることとなる。

「詳細は知れぬが、藤堂を狙っておるのだろう」

比企が恒の秘密をどこまで知っているのかあるいは知らないのか、議論する余地もなかった。

比企はユージーンが絶対不及者となり、恒が創世者に対しての叛逆者ともいえる特殊な役割を与えられていると知っている、それを気取ったヴィブレースミスは手元のコントロールパネルを開き、神階のセキュリティシステムに異常がなかったか検索を行った。

走査結果が1秒間に15箇所の結果を弾いてくる。

極陽は余すところなく、コマ送りの映画のように流れゆく情報を目に留めながら検索を行ったがセキュリティシステムはオールグリーン、不審者情報すらなかった。神階の不審者情報は不審な者が侵入したという報告もだが、不審ではない者が不審な行動をとった場合にも報告が入る。ユージーンの姿をした何者かが違法な行動をとったり、誰かを加害した場合にも即座に極陽に情報が集まるシステムになっている。更に神階では、入階時に神のアトモスフィアの自動照合が行われている。全く異なる組成のアトモスフィアを発し始めた神はやはり不審者として認識される。

二度確認したが、報告はまだ来ていない。

そこで彼は二柱を安心させるように断定した。

「神階にはまだ侵入してはおらぬようだ」

「ではまだ紫檀が足止めを？ 59番入階衛星の映像が入るか」

ブラインド・ウォッチメイカーを相手に紫檀がいくらもち堪えられるとは思えなかった。

比企と恒は、もはや紫檀の命はないものと諦めていたので、ブラインド・ウォッチメイカーが神階に侵入していないという方が逆に不自然で不気味だ。

だとしたら彼女は今、どこにいるというのか？

ヴィブレイスミスは比企の要請で59番の入階衛星の映像を3Dコンソールに繋ぐ。天奥の間の暗闇の中に、巨大なホログラムが浮かび上がる。映像はノイズが含まれ乱れているが、極陽が映像を拡大しているのでそこに誰がいるのか分かるほどの解像度はある。比企と恒は驚愕をもって映像を見守った、そこには比企と恒が最も”そこに居る筈がない”と認識していた者がしっかりと映り込んでいるからだ。

ヴィブレⅡスミスは僅かばかりの期待を込めた感嘆の息を漏らした。

「またしてもこの者か」

ヴィブレⅡスミスは二週間前、超神具フラーレン C60を扱ったこの異端の神を諜報局に調べさせていた。荻号に似ているが荻号ではない、だがまるで双子の兄弟のように荻号のような能力を使う不審な神は比企の計らいにより風岳村に借家を借りて人間社会に紛れて住んでいる。ヴィブレⅡスミスはINVISIBLE以外の創世者の存在や、荻号 要がアルティメイト・オブ・ノーボディであったこと、ブラインド・ウォッチメイカーという宿敵の存在も荻号正鵠の正体も知らないのか、かなり混乱をきたしていることだろう。だが比企も恒も、荻号のプロフィールをヴィブレⅡスミスに打ち明ける時間も余裕もなかった。恒はそんな事より、解階に消えた筈の荻号が何故生物階で応戦しているかという事の方が疑問だった。

比企の顔を見ると、心当たりがあるのか、渋い顔をして頷いた。

比企は荻号が解階に行ったのを確かに察知したので、荻号が荻号のまま生還したとはどうしても考える事が出来なかった。ブラインド・ウォッチメイカーが利用価値のない荻号を生かしておく理由がない、そう思ったからだ。

「共存在（co-existence）を使ったのやもしれぬ」

「共存在？」

「存在確率を操り、現象を二重に発生させるものだ。いにしえの神には、神具に頼らず確率を操作するものがいた」

比企は何千回となく何万回となく荻号 要に挑みかかったが、比企の攻撃がともに荻号に届いたことは稀だった。

というのは、荻号は比企の攻撃を受け流すために分身のようなも

のを瞬間的に創り出すからだ。それは共存在という存在確率歪曲技術で、荻号の分身はただの目くらましではなく独立に思考し、本体と同じ能力を持って行動することができた。比企は60年余りも荻号に師事しながら、とうとう喉から手が出るほど欲しかった共存在を習得することができなかった。

共存在は修行によって習得するものではないらしく、ある程度生まれながらに持った素養が必要なのだという。いにしえの神ならいざ知らず、スペックの落ちた現代神には不可能だから習得は諦めろ、と荻号要はそんな無責任な事を言っていた。その言葉を裏返せば、いにしえの神である荻号 正鵠はこの共存在を習得していたのだろう。ヴィブレイスミスは主神としての教養の範疇から、共存在という能力を熟知していた。荻号 要の一連の失踪事件からこの謎の神の出現に至るまでの奇妙ないきさつは、全てこの共存在という能力を駆使した結果だったのだなと合点がいった。荻号 要の共存在がこの男だ、というヴィブレイスミスの認識は当たらずとも遠からずといったところだ。

「成る程な……では比企よ、私はこの者に加勢をする。この場合は任せたぞ。形勢が如何ともしがたいものとなったら梶と極陰を応援に呼べ。そしてくれぐれも、藤堂から目を離してはならぬぞ」

「承知した。武運を祈っている」

ヴィブレイスミス玉座を離れるためアトモスフィア吸収環を比企に託した。

比企は極位ではないが、極位獲りを目論んでいるぐらいだから代理は充分に務まる。神階の混乱を避けるため、極陽は極秘裏に玉座を離れる。アトモスフィア吸収環に拘束され極陽の代わりに玉座に座した比企にはもう次期極位たる貫禄があった。

恒は共存在、共存在と頭の中で繰り返していて、ある事を思い出

した。

荻号自身は確かに共存存在を使った、だがそれだけではなく、共存存在を可能たらしめるものがこの現代においても一つだけある。

「極陽！」

それまで黙って二柱の遣り取りを聞いていた恒が、瞬間移動をかけようとしていた実の父親を呼び止めた。

極陽としての立場を崩すことの出来ない彼は、極位に口をきいた少年神を咎めるように冷たく見下ろす。

「何だ、藤堂」

「お氣をつけて。風岳村にある私の実家に、荻号様より拝領したFC2ーメタフィジカル・キューブがあります。それを……お役立ていただければ」

「心配はいらぬよ、藤堂。モニターをよく見るがいい。かの者がすでに、汝の神具を拝借しているようだ」

恒がモニターに目を凝らすと、ヴィブレイスミスは映像を部分拡大する。

荻号はマジシャンのように、小さな立方体を左手の掌に潜ませ隠し持っている。荻号 正鵠はきつと、恒と同じアイデアを閃いてFC2ーメタフィジカル・キューブを手にしたことだろう。そうであるくて超神具フラーレンを持つ荻号がわざわざ一般の神具に興味を示すとは思えない。荻号は風岳村に住んでいるので、拾得物として藤堂家の神具を手にしたのだろう。

何にしろ、雨ざらしになって悪くすれば壊れてしまっていたかもしれない神具を彼が拾ってくれていて幸いだったし、今の状態で恒が持っていたとしても宝の持ち腐れでしかなかった。彼はただではやられないだろう、恒は根拠もないのに荻号ならば必ず何とかして

くれると信じ切っている自分がいることに、つくづく嫌気がさす。
いつもそうだ、自分は誰かに守られてばかりだ。

恒は比企に気付かれないよう、そつと拳を握り締めた。

＊

ブラインド・ウォッチメイカーと対峙する荻号は、ユージーンを相手に手加減など気にする必要はなかった。

ここは上空4000m、下は海上だ。

相手にとって不足なし、不死身の神体を持つユージーンに対して遠慮など無用。

逆に言うと不死身の彼とやりあう事は永遠に倒せない相手と戦うという事になるのだが、それでも荻号が5分と言いつつ切ったのは、紫檀の容態を気にしてというのもあるが、ハツタリでも何でも無い。紫檀は荻号の与えた痛み止めが効いて気絶して、荻号にとっては戦闘に集中できて逆に都合がよかった。荻号は本気でユージーンの手を破壊し粉砕するつもりでいたし、それは不可能ではないとすら思っていた。

彼は死なないが回復が常神と比べて極端に遅れるという性質を逆手に取れば、いかに不死身の敵が相手とはいえ攻略法はある。

ユージーンの手を破壊し回復までの時間を稼ぐ事が出来れば、アルティメイト・オブ・ノーボディの支配する生物階においてブラインド・ウォッチメイカーの居場所はなくなる。もっとも、そうやってブラインド・ウォッチメイカーを駆逐しようとも、ユージーンを支配しているのはそのほんの一部分でしかないのだろうが……。荻号は無表情を貫くブラインド・ウォッチメイカーに皮肉を込めてこう語りかけた。

「しかしお前がユージーンを選んだのは幸いだった」

創世者が何を考えてこの生物階に侵入してきたのか、あるいはユージーンの裡に潜むものがブラインド・ウォッチメイカーでずらないのか、荻号には想像もつかない。

ユージーンに憑依した者は表情というものを持たず語りかけもせず、表に出てくるものが何一つとしてないからだ。ユージーンの裡がどのような構成になっているのか、マインドギャップによる隔たりによって読めないのではない。抜けるような快晴の空のごとく青かった彼の瞳は、銀色を帯びた残酷な輝きを持って、彼の裡には虚無が支配している。分かるのはそこまでだ。何を考えているのかは知れないが、今後の生物階における懸念材料をなくしておくためどうしてもここで荻号を殺しておくべきだと、ユージーンの中の者がそう考えてくれると荻号にとっては都合がよい。

荻号にとって一番迷惑なのはブラインド・ウォッチメイカーが荻号を歯牙にもかけず、ユージーンの神体を持ち逃げすることだ。

「他の奴と違って、思いきりぶちのめせる」

荻号はそう言って挑発すると、フラールレンを繰って空中にぶちまけた。

呪符状神具は荻号の意思に従って晴天の空に規則正しくクラスターを作り出す。彼は恒の期待してやまないあるものを取り出していた。

「そう、フラールレンは一日に四発しか撃てん。だがな——」

荻号は左手に隠し持っていたFC2—メタフィジカルキューブを

今ぞとばかりに抜き放ち、リミッターを解除した。

彼はこの二週間の間、園芸や家事に現を抜かしていた訳ではなかったのだ。散歩がてら藤堂家の付近を通り掛かった時、強いアトモスフィアが一箇所に凝縮しているのを発見した。気配を辿ってゆくと天井に大きな穴の空いた廃屋の中に神具が無造作に投げ捨てられているではないか、彼は当然拾った。

近くには持ち主らしき神もいなかったからだ。それを持ち帰ってじっくり回しているうち、共存在に似た機能に気付いた。

荻号自身の持つ共存在能力と、神具の持つ共存在の機能の何が同じで、何が異なっているのか。

荻号は荻号自身にしか共存在を適用できない。神具の共存在は物質にも生体にも適用できる。その相違に気付いた時、このわずかな違いをどのように利用すべきか、荻号はいとも簡単に閃いてしまった。

彼はつい先ほど彼の分身が相転星をそうしたように、FC2メタフィジカル・キューブを超速で組替えはじめた。色とりどりのブロックをキューブの枠組みの中から解放し、ちょうど積み木遊びをするように、三次元的にブロックをくみ上げてゆく。見方によってはただブロックで遊んでいるように見えないこともない、だがその裏ではブラインド・ウォッチメイカーとの壮絶な力の駆け引きが行われている。荻号は二つの神具を同時に起動してFC2メタフィジカル・キューブの発動までの時間を稼いでいるが、それと同時にフラーレンでユーザーの神体を締め付ける事も忘れていない。ユーザーに本来の仕事させず、発動までの時間を稼ぐ。

荻号は一度にいくつもの事をこなしながら存在確率を捻じ曲げ、全ての面を漆黒の色に変えた。3つの三角錐を作りだし、それを三次元的に統合する。

ようやくその本領を発揮し始めたFC2ーメタフィジカル・キューブがヒィィ……と悲鳴のような共鳴音を出し始め大気を振動させた。空間歪曲の為の熱量を爆発的に生じているのだ。

「ゆくぜ」

荻号はまるでホームラン予告をするバッターのように、すつと腕を伸ばし天空に向けてFC2ーメタフィジカルキューブを一回転させた。神具にフラーレンの全座標を記憶させたのだ。準備を整え、彼は渾身の力を込めて最後のコマンドを与える。

” Fundamental Control Double Metaphysical cube……Coexistence”

（根元事象二重制御ー形而立方体ー共存在）

” Fundamental Control Double Mind cube.Coexistence at square value.”

（根元事象二重制御ー心層立方体ー自乗共存在）

荻号が共存在を発動しようとした時、同じコマンドを繰り返す更なる声が重なった。

気をとられて上空を見上げると、巨大な白い直線のグリッドが宙を迸って転送されてきた神階の門が開き、荻号のFC2ーメタフィジカル・キューブに向けて両手をかざした主神が参戦したのが伺えた。彼は神階の門から生物階降下をしたのと同時に、紫檀を門の内側に放り込んで門を閉ざす。門は紫檀を飲み込むと、すぐに跡形もなく消えてしまった。荻号は紫檀を庇いながら戦う必要がなくなつてせいせいした。隙あらばブラインド・ウォッチメイカーの盾にさ

れるしかない紫檀を抱えながら戦うという状況は、荻号にとって大きな負担となっていたからだ。

ヴィブレⅡスミスの有するFC2ーマインドキューブは生体神具で、彼自身が神具を持つて戦闘に臨むわけではない。今、ヴィブレⅡスミスの手の内には立体映像化されたキューブが縦横無尽に組み替えられ、ヴィブレⅡスミスは指一本すら動かしていない。延髄に埋め込まれた生体神具は駆動者の意思を直接スキャンして、彼の意に沿うように立体映像化し自動的に組み換えを起こす。

その組み換えの速さは、実物のキューブをガチャガチャと動かして組み替えるスピードの比ではない。勿論超速組み換えを可能とする荻号の組み換えスピードをも遥かに凌駕している。彼は瞬間的に完成形のキューブを獲得し、そして次の瞬間には発動することが出来た。

荻号にとって大抵の助太刀は大して役に立たないものであったが、ヴィブレⅡスミスの助太刀は、戦況を劇的に有利にした。

空間がメキメキと音を立てて歪み、荻号の放った60枚のフラレンは荻号がFC2ーメタフィジカル・キューブで発動した共存存在によってまるで細胞が分裂するように分裂して120枚となった。更にヴィブレⅡスミスが自乗共存存在を発動したので、120枚の自乗で14400枚になったのだ。嬉しい誤算となった筈の荻号はあまりの呪符の多さに多少面食らった顔をしたが、すぐに気を取り直して14400枚のフラレンを繰って配座しはじめた。荻号が膨大な枚数のフラレンをどう操るのか、ヴィブレⅡスミスに高見の見物をしている余裕などない。

ヴィブレⅡスミスは主神の面目を保つかのように荻号に彼が望んでいた以上の絶好の勝機を与えると、PSYCHOーLOGICA

se合成の準備に入った。

比企が主神を戦地に送り込んだ真意は、暗にPSYCHO-LO G I C a s eの発動を要請するものであったことだろう。比企は戦わずして背を見せるような神ではない。実戦において比企が持ちえずヴィブレイスミスのみが持つ強みがあるとすれば、それ以外に考えられなかった。

ヴィブレイスミスは、1cm四方のスケールでコントロールしていたホログラムのFC2-マインドキューブを崩し、1mmスケールにまで分解して解像度を上げた。

色とりどりの蛍光色の光跡が虹色をした魚のようにビチビチと掌の下で暴れ狂っている。ヴィブレイスミスがこれから何をしようとしているのか、後の時代に開発された生体神具という概念を持たない荻号が想像を巡らせる事は困難だったが、何か決め技のようなものを発動させようとしているとは勘付いていた。

14400枚のフラレンを若干持て余しながら、荻号はユージーンを完全包囲するように犇めきあいながら超高分子化合物を組み上げてゆく。

紅い呪符は毒々しく発光しながら、蝶の大群のように一分の隙もなくユージーンを密封するように包み込んでゆく。内部から切り崩す以外には、逃れる手立てはないだろう。

フラレン C14400は発動の瞬間ユージーンの神体を粉碎する、しかしその前にヴィブレイスミスが何かすることがあるのならば、そちらを優先した方がいい、荻号はそう思った。

この間、ブラインド・ウォッチメイカーも手をこまねいて荻号とヴィブレイスミスの企みを成功させようとしている訳ではなかった。彼女は分身として息絶えた荻号から奪った相転星を手にしていたの

である。ブラインド・ウォッチメイカーはフラールレンによって荻号とヴィブレッサミスから視界が遮られたのをいいことに、ユージーンの知識を盗み見て相転星を密かに起動している。超神具フラールレンと、創世者の操る超神具 相間転移星相装置（SCM-STAR）の世紀の対決の勝敗の行方は知れない。

五分と五分、あるいは少々ブラインド・ウォッチメイカーにとって不利な戦いとなる。

創世者たるブラインド・ウォッチメイカーが、アルティメイト・オブ・ノーボディの能力を模した劣化コピーである相転星など扱う必要はそもそもないのだ。だが彼女は戯れに、神々を更なる絶望の淵に追い落とす為、あるいは弄ぶ為に敢えて相転星を選んで扱っている。創世者との戦いの際しても神具の力を頼むしかない神々の無力を、彼女はわざわざ暴こうとしているように思われた。紅い繭が溶け出したようにフラールレンが何百枚か弾け飛び、ヴィブレッサミスの奥義より一瞬早く相転星が発動した。

時空間歪曲の波動を含んだ凄まじい熱量が荻号とヴィブレッサミスに襲い掛かる。

「ちいっ！」

荻号は一瞬早くシザーケースの中から一束のフラールレンを放り投げ、無防備でPSYCHO-LOGI Caseの合成を行うヴィブレッサミスを庇うように障壁を作った。防御の遅れた荻号の脇腹を切り刻んだ相転星の波動はヴィブレッサミスに到達する前に無効化され、ヴィブレッサミスは事なきを得て最後のコマンドを入力した。

”Synthesize six precursor subunits and formational charges”

（6前駆体サブユニット合成とコンフォメーション変化）

PSYCHO-LOGICaseを構成する6つの前駆体のサブユニットにコンフォメーション変化を起こし、活性中心を形成する。マクロレベルで正確にデザインされ成熟した酵素に素早く縮小をかけ、大量合成を指令すると、ただのグラフイックに過ぎなかったPSYCHO-LOGICaseは攻撃対象の精神系を完全分解するいかなる回避も不可能なナノマシンへと変貌する。これまでヴィブレミスは冤罪を疑う余地のない死刑囚を相手に修練を重ねてはきたが、一度たりともこの奥義を実戦で発動したことはない。

そう、ただの一度もだ。

”PSYCHO-LOGICase overexpression
!”

（精神分解酵素過剰発現）

ヴィブレミスはかつての部下に向け、躊躇なく禁忌の奥義を発動した。

この冷徹さと容赦のない決断力が、そして有無を言わせぬ実力がヴィブレミスが10世紀以上もの間極位足らしめてきた。

ユージーンの精神系がどうなってしまうのかなどの配慮など、欠片もない。

【作】 共存在：共存在という言葉は造語。現代科学では【現】 量子コヒーレンス（量子重ね合わせ状態）という、量子力学において、確率的に得られる二つの状態がいまだに決定されていない状態に近い。術者は量子コヒーレンスによって共存在を行いユニタリ性（状態の重ね合わせ）を保つが、熱的デコヒーレンス（量子系干渉消失）を用いて共存在を行ったまま独立に行動する。

第1節 第58話 戦闘機乗りたちの見た、とある神の最期

「これは……何が起きている状況なのかしら」

上空で、神々と何者かによる激戦が繰り広げられているのだろうとは想定していた。

それが解階の住民であれ何であれ、普通の相手が普通の敵と戦っているのではない。ちょうど第五使徒の腕が落ちてきたあたりに、マクシミニマの全速力をもって駆け付けた。しかし異変を察して駆けつけてきたのは、メファイストフェレスだけではなかったようだ。

メファイストフェレスが気になったのは先ほどから集結しつつある数多の戦闘機が存在だ、各国の国旗のついた迷彩色の多種多様な機体の中には、音速の速度で巡航している最新鋭ステルス戦闘機の姿もある。マクシミニマの性能によって音速飛行を可能とし、音速で飛んでいるメファイストフェレスを不審に思ったのか、先ほどからずつとつけられているような気がする。戦闘機の一群の中には超音速戦闘機特有のソニックブームの超振動を発生させ、低空で飛行しているものにはプラントル・グロワート・シンギュラリティ（*Plranttler Glaupert Singularity*）に達して尾翼のあたりに円錐形の雲をスカートのように纏っているものもみられた。

リーダーに異常が映って飛び出してきたのか、多国籍軍の新型や主力戦闘機が続々と集まってきている。ロシアの制空戦闘機Su-33、日本の支援戦闘機F-15J、中国の主力戦闘機J-10も顔を出している。現場はせめぎあう神々のアトモスフィアによって暴風域と化し、異常な空気の通り道が周囲に分厚い雲を呼び込んできた。

爆発的に生じた上昇気流によって低気圧が拡大し台風が出来はじめているのか、低空では雷雨が発生している。

雲の下では大嵐に見舞われているだろう。集まってきた戦闘機が次々と嵐に飲まれて、いや、戦闘機は嵐に飲まれないかもしれないが、神々の大規模な戦闘に巻き込まれて最悪墜落などということになってしまったなら……。

生物階、つまり地球の危機が人々に周知されることによって、国連軍が有事の際に戦闘に積極的に参戦してくれることは、よいことばかりではないかとメファイストフェレスは感じた。

神々が神具を駆動して本気の戦闘を繰り広げる時、戦闘機による爆撃や射撃の援護などむしろ邪魔になるだけだ。それどころか、神々の戦闘行為を援護する事を想定した訓練を一切とってしていない彼らが下手に周囲にいわゆるものなら吹き飛ばされてしまう。地球を侵略にきたUFOを撃墜しにきたのならこのような兵装でもよいのかもしれないが、UFOよりずっと的小さい、肉弾戦にミサイルなど無用の長物だ。

「あれは、ロッキードのF/A-22ラプターにF-35ライトニングII……よね？ 早くやめさせないと戦闘機が集まってきて被害が拡大する。それにしてもこんな派手に、一体誰が闘っているの？」

メファイストフェレスはグンとマクシミニマを掲げて急浮揚し、紅い紙束が嵐となって飛び交うその修羅場に目を懲らした。

台風の間からは強い風が吹き付け、雲が霧となって視界をふさぐ。戦闘状態にあるのは神々の長にして恒の実の父親と、銅色の髪を長くたなびかせただらしない男、彼女には荻号のように見える。

どうやら二柱は共闘状態にあるようだった。

道理で、これだけ派手で大規模なフィールドを展開して戦うのはこの二柱であればこそだ。普通の神々が普通に戦って、こんなに目立ちほしくない。しかしこの二柱が共闘し総力を尽くして戦わなければならぬ相手とは何なのだろう？

何と闘っているのかしら、彼女は冷静に嵐の中心を見極めようとした。

＊

警備についていた多国籍軍と最寄の基地の管制塔の間では無線が飛び交っていた。

この二週間でヴィブレⅡスミスが国連安保理に安全保証活動協力を要請していたため、各国の基地では国連軍が警戒体制に入っていた。厳戒体制の中、米軍の軍事衛星によってに熱量収束が確認され、激しい上昇気流を観測、この地域の気象が一変した。衛星写真にも異変が生じていたので、ただの台風ではないと知った多国籍軍の戦闘機が、件の国際的に整備された非常時警戒情報ネットワークより出動要請を受け、疑惑のポイントに集結してきたのだ。

各国の戦闘機パイロット達は機体の前を音速を超えて飛翔していた。女の存在に面食らっていたが、女がまっすぐめがけて飛んでいった方向に宙を自在に飛び交いながら台風の目の中心に向けて攻撃を仕掛けている人影を視認した。ドッグファイトや爆撃において百戦錬磨である彼ら熟練パイロットも今回ばかりは、どのような敵と戦うべきなのか想像もつかない。UFOとドッグファイトをしろというのだと思って駆けつけてきたが、台風の目が見えるばかりで敵性体が見当たらないのだ。攻撃目標の定まらないまま、映像をすぐ

さま管制塔に繋ぐ。

『対象を解析中。対象を主神、ロードヴィブレⅡスミスと確認』
ヴィブレⅡスミスおよび神々のIDは国連各組織とすでに共有されていた。

「敵性を解除します。もう一名は照合できません」

ヴィブレⅡスミスは国連に全位神の顔写真をデータとして開示していたが、開示したデータのうちに神階を離脱した荻号のデータは含まれていなかった。パイロット達はデータと照合の出来ない荻号の敵性を判断しかねたが、主神ヴィブレⅡスミスと共闘している様子は明らかだったので同様に敵性を解除した。鳥のように自在に空を舞い、この海域全体に影響する台風を作り出すほどの、有無を言わさぬ超越性。

これが、現代に生きる神の姿、そして主神の姿なのか――。

彼らの姿を目の当たりにしたパイロットの誰も、その真贋を疑いはしなかった。

「……J e s u s ・ C h r i s t ……」
ジーザス クライスト

米軍のパイロットが驚嘆した際の口癖なのか口の中で小さくそう呟いていたが、彼はジーザスの次の世代を担う神だと司令部からは聞かされている。半信半疑だった彼らは新たな神の験を見た。あまりに壮大な光景に目を奪われ茫然としてしていると、現実に戻すかのように管制塔から指示が飛んできた。

『敵性体を撃墜準備。A I M－9 X（空対空ミサイル）の発射準備をし待機せよ』

管制塔からは、撃墜準備の命令が飛ばされてくる。

撃墜をしようにも、搭載しているミサイルは空対空ミサイル、赤外線誘導のため敵機の存在がなければ発射できないのだが……何を

攻撃目標にすればよいというのだろう。攻撃目標もないのに攻撃をしるだの、こんな作戦はマニュアルにはない。

「しかし敵機が見当たりませんが。視界も不良でミサイルを発射するには不適當かと」

『心配は無用だ、敵性体の光源は雨雲に影響されるような強度ではない。ミサイルはヴィブレリスミスを避け、まっすぐ飛んでゆく。危険を感じ次第、各自の判断で攻撃せよ』

AIM-9Xサイドワインダーは赤外線追尾能が装備されている。嵐の中心からは強い放射線が発生しており、測定装置によると赤外線もかなりの光度で発生しているとのことだ。AIM-9Xによる追尾型の攻撃が可能だというのだ。しかし……この状況で撃てば、誤爆は必至ではないのか？ 熟練パイロット達はそう思ったが、口には出せなかった。

「Gentlemen, lock and load.」

（諸君、攻撃準備）

『こちらはF-35。第一弾発射準備完了』

パイロット達は台風の目の中にロックオンをした。ミサイルが当たるのか当たらないのか、あるいはなまじ追尾能がついているばかりに周囲を飛行している味方の機体に誤爆してしまうのではないかと、誰もがそんな不安を抱いたが、だからといって各自が命令に叛いて冷静な判断を下せるような状況ではなかった。

＊

ヴィブレリスミスは精神分解酵素、PSYCO-LOGICAS

eをブラインド・ウォッチメイカーの憑依したユーゾーンに向けた。ユーゾーンに向けたといっても、フラーレンの強力な作用場によって発生しはじめた嵐が視界をふさぎ、ユーゾーンの姿はもう見えない。ただその、ユーゾーンのものととても思えない創世者特有の強大なアトモスフィアだけは決して逃さずに感じている。

彼は6つの前駆体を合成し、成熟した酵素を完成した。大量複製系システムも問題なく動き始めている。PSYCO-LOGICaseを発動しようとした瞬間、それを妨げるかのように傍流演算していた相転星の第二撃が繰り出された。やはりブラインド・ウォッチメイカーの操る相転星は起動までの時間が驚異的に速い、荻号がフラーレンで牽制しているとはいえ、スペック以上の性能を発揮している。

ヴィブレルスミスがPSYCO-LOGICaseを一度作り上げる時間の間に、ブラインド・ウォッチメイカーは二度も相転星の時空間歪曲の衝撃波を繰り出している。

首刈峠の上空で荻号が発動した時空間矯正の衝撃波の初動を知っていたメファイストフェレスは、嵐の中心部から繰り出された相転星の特徴的な波動に息をのみ、マクシミニマを縦に構えて受け身の体勢をとった。戦闘機とメファイストフェレスが背後にいる事に気付いていた荻号は再びフラーレンを309枚投げつけ、メファイストフェレスの前に障壁を作ったが、今度の波動は先ほどのものより数段増幅されていて、障壁は事もなく弾き飛ばされた。メファイストフェレスはマクシミニマで受け止めたが、フラーレンにより緩衝されているとはいえ、相転星の衝撃波は彼女の細腕では耐えがたいほど”重い”。

彼女は受け身に徹しながらも混乱していた。

荻号がこちら側にいて、内側から相転星の波動が繰り出されてく

るということは、台風の目の中にいるのは誰だ？ 神具を扱えるのは神だけだ、そして相転星を扱える神は二柱とは存在しない。

” Elohim—Elohim—Dictor—Enomas—E
l—Es—Olimuk—Victor—Nanopass—…!”
（偉大なる者、偉大なる者、永遠の燈に落つる解、真実と虚構の交
わる時に…）

メファイストフェレスは何が起こっているのかを理解できず混乱
しつつも口は正確に呪文^{コマンド}を唱え、青い亀甲のような衝撃緩衝シール
ドを展開する。

相転星の衝撃波は同心円状に、数十キロ規模で波紋を描くように
直線的に拡大している。第一波によって周囲の雲が穴を開けられた
ように吹き飛び、次々と波状攻撃を仕掛けてくる。

荻号とメファイストフェレスの障壁によって衝撃波からはある程
度守られていた筈だが、巡航していた数機の戦闘機が爆風の煽りを
くらって、数百メートルほど吹き飛ばされて落下していった。

メファイストフェレスは大丈夫かと思わず正面から目をそらし下
を覗き込んだが、訓練を積んだ戦闘機乗り達はすぐに機首を起こし、
態勢を立て直している。

「あんた達、これに懲りたらもう戻ってくるんじゃないわ……よっ
！？ って、何！？」

メファイストフェレスが成すすべもなく哀れな小鳥ようにきりも
みしながら落下していったそれらに捨て台詞を投げかけていた時、
機体を翻し腹を見せた戦闘機から放たれキラリと光るものが猛烈な
勢いで上昇し迫ってきた。ロックオンしていた3機の戦闘機から同
時にAIM-9Xが3発も発射され、一直線に未確認敵性体である
嵐の中心を指している。

「いかん！」

ミサイルの飛来する風切音を聞き分けた荻号が振り返って絶叫した。

このタイミングでミサイルを撃ち込んでくるとは思わなかったが、爆風に驚いて思わず発射してしまったというところだろう。しかしミサイルの速度は音速に迫るほどで、フラールを操りながら咄嗟に迎撃し撃墜できるものではない、荻号は一発を撃ち落としたが、他の2発の通過を許してしまった。

ヴィブレースミスは荻号より更に最前線でPSYCO-LOGI Caseを操りブラインド・ウォッチメイカーと対峙しているが、そのヴィブレースミスの真後ろからAIM-6Xが2発もぶち込まれてきた。荻号の防御も間に合わず、ヴィブレースミスは背後からろに被弾をして吹き飛ばされ、彼の纏っていた44層のフィジカルギャップのうち18層を破壊され、神体に攻撃が届き左わき腹を負傷した。

彼の体躯から鮮やかな血液が染み出したが、彼の神体にミサイルが届いた瞬間に大爆発が生じ、血液は蒸発した。しかし彼は背中から被弾し体軸を崩し、爆炎に包まれ激痛に顔を歪めながらも、PSYCO-LOGI Caseを操る手を止めなかった。ここで集中を削いでしまったら、最初から酵素を合成しなければならなくなる。それは何分もではないが、勝敗を分ける貴重な時間をロスする事となってしまう。ヴィブレースミスは激痛の中、荻号に目くばせすると、準備完了の合図と知った荻号はPSYCO-LOGI Caseの攻撃をユージーンに到達させる為にフラールの装甲を剥がした。

仕掛けるなら、今しかない。

”The State of Mental Stability
Breakdown!”
(精神平衡崩壊！)

ヴィブレllスミスはPSYCO-LOGICaseを発動し、嵐の中心から相転星による攻撃を繰り出すユージーンに精神系に侵入させた。

PSYCO-LOGICaseによりユージーンに神格が崩壊してしまうかもしれないが、ブラインド・ウォッチメイカーに絶対不及者の器を支配されてしまうぐらいなら、どちらも破壊してしまった方がましだ。そして神格を失い抜け殻となった神体を再生し、三年後まで神階の総力を挙げてブラインド・ウォッチメイカーから守り抜き、三年後にINVISIBLEの依代とすると同時にAnti ABNT-抗体を発動する。これがうまくいけば、ヴィブレllスミスの当初の計画は何一つ狂わない。彼にとってはユージーンに神格が破壊されていようといまいと、どちらでも構わないとすら考えていた。

フラールンによる装甲を剥がした事によって、ベールを脱いだユージーンに姿が次第に浮かび上がってきた。

PSYCO-LOGICaseは攻撃目標を逃がさずどこからでも生体内に侵入し、酸で鉄を溶かすように精神系を不可逆的に崩壊させてゆく。一度発動されればヴィブレllスミスにも止めることはできず、このまま瞬間移動でどこに逃れたとしてもナノマシンが精神系を喰らい尽くす。もはや手遅れだ。ユージーンに精神もろとも、ブラインド・ウォッチメイカーの支配を崩すにはこの方法しかない。ヴィブレllスミス左手の内の緑のホログラフは、激しく明滅しながらカウントダウンを始めていた。ブラインド・ウォッチメイカーは瞬間移動でユージーンごと逃げることもしなかった。ユージーンの

苦悶の表情が次第に抜けて、魂の抜け切ったような無表情に変化してゆく。

精神完全消化まであと5秒、4秒、3秒、2秒……それは静かで一方的な決着だった。

「完全消化したようだ」

ヴィブレⅡスミスがカウントダウンの振り切れたホログラフを見てそう判断したので、荻号は抜け殻となって浮力を失ったユージーンの神体を労わる様に柔らかに抱きとめた。

荻号はユージーンにマインドブレイクを試みたが精神反応を感じない、この神体の中にはもう”誰もいない”、それは明白だった。

荻号はまるで死体のようになってしまったユージーンの生体反応を確認した。生きている、まだ、辛うじて息はある。

「終わったな……これでよかったのか？」

奥義を撃ち遂げたヴィブレⅡスミスはアトモスファイアをすり減らし、肩で息をしていた。

彼に誤爆をして心配そうに寄ってきた戦闘機にヴィブレⅡスミス自ら無事を伝えて、戦闘の参加に形ばかりの謝意を表し、基地に帰還するよう促した。

勇み足で出動してきた各国の空軍は、結果的に神々の足を引っ張っただけだった。パイロット達は肩を落とした。台風は温帯低気圧に変わり、日が差し込んで快晴の空が取り戻される。

しかし、彼らは気づくべきだったのだ。応援に駆けつけてきたいまひとりの、メファイストフェレスの姿がそこになかった。

攻撃に巻き込まれてもいないというのに、いつの間にか忽然と姿

を消していたということに……！

＊

「ヴィブレⅡスミスは左半身に被弾したな。フィジカルギャップがあるので大事はないだろうが、多臓器損傷は免れん」

天奥の間で、極陽の座に座る比企は冷静に分析する。ヴィブレⅡスミスを援護した筈のAIM-9Xミサイルが、あろうことかヴィブレⅡスミスに命中してしまった。

PSYCO-LOGICaseの発動の瞬間に発生する放射線の他に、赤外線も多量に含まれていたからだ。3発のうちの2発がヴィブレⅡスミスに命中した。

比企は人々との戦闘協力の方法を、改めて協議すべきだと痛感した。

各国軍が独自の判断で攻撃していたのでは、神々の戦闘の邪魔をしているだけだ。比企はモニターに、少し距離を取って滞空していたメファイストフェレスの存在を映しておらず、彼女が現場に駆けつけてきたという事を知らなかった。それで恒もメファイストフェレスを見ていない。比企は迅速に救護班を手配し、負傷した紫檀とヴィブレⅡスミスをICUに受け入れるよう要請した。紫檀は既に収容されているとのことだ。命には別状なく、神階には義足や義手の技術が発達しているので生活や仕事に困窮する事はないそうだ。

紫檀は助かった、だがただひとり、助からなかった者がいる！

「ユージーンさんは……極陽は何をしたのですか」

「あれはPSYCO-LOGICase……神経系を崩壊させる彼の奥義だ」

何という残忍かつ無慈悲な奥義だろう、博愛を旨とする神階の長の持つ奥義とは思えない。

恒は父親がユージーンにした事を受け入れられなかったし、比企の嘘であって欲しいとすら思った。あの一瞬の判断で、それほど重大な決断を下す神々の思考回路が信じられなかった。何故彼らは、仲間の神をいとも簡単に切り捨てる事ができるのか。

「大変な損失を被った。ユージーンの神格は敵もろとも崩壊し、再生はしない」

比企は遺憾だというように俯いたが、恒は茫然自失となって比企を見上げた。

「比企様……あなたはこうなることを、ご存じでしたね」

「ああ、そうだ」

比企ははっきりと頷いた。弁解もせず、そうしなければならなかった理由を説明するつもりもない。

だが恒は問いたださずにはいられない、何故ユージーンを、切り捨てなければならなかったのかと。

恒は怒りと、遣る瀬無さと恐怖でガタガタと震えていた。

「あなたは……！」

大変なことを、取り返しのつかない事をユージーンにしてしまった。

比企はそんな事をする神ではないと、信じていたのに……。勿論恒には、比企の判断がなければ生物階はユージーンの姿をしたブラインド・ウォッチメイカーによって壊滅的な被害を被ることも分かっていた。それでも、それだけはして欲しくなかった。ユージーン

は何度神々に裏切られればよいのだろう、最後の最後まで、彼は神々に裏切られて果てた。

絶対不及者の器として生まれてきたために、彼のすべてを滅茶苦茶に壊した、彼の生涯すらも、彼の自己同一性すらも奪った。彼は彼が守ろうとした神々の手により殺され、二度までも死ななければならなかった……。極陽の代理として陽階の権威の座にある比企は、恒の受けた衝撃を慮りながらも、とどめを刺すかのように残酷な言葉を投稿かけた。

「藤堂、己はこう言った筈だ。生命には軽重が存在すると。不死身の神体を敵に奪われ、また罪なき人々の大殺戮を許すか。ユージーンを精神を敵もろとも葬り去り、神体を誰の手にも渡さぬまま回収するか……。道義的な思考は非常時には足かせとなる。理性で判断が下せなければ、それは神ではない」

自らの命ですらも駒のように扱い、惜しもうとしない比企は、常に神階と生物階の人々を庇護する事をのみ考えている。

これが比企の望んだ最善の結果ではない、彼にとっても苦渋の決断だったが、彼は迷わずそうした。

「じゃあ俺は、神じゃなくていいです！俺はこんなことをするぐらいなら……！！」

「ではお前ならどうしたというのだ」

どうすることも出来なかった。代案もなければその能力もない。比企や紫檀が命がけで助けられなければ、逃げる事すらままならなかった。安全な場所で、吠えているだけだ。

「今は守られる他に能がないのなら、口を閉ざしていることだ」

恒は言い返す言葉もなく、天奥の間の硬い床の上に膝から崩れ落ち、這いつくばって肩を震わせていた。

比企はひとつの偉大な光を失って闇の底に突き落とされた少年神を憐れむように見下ろしながら、これは決して”正しい”結末ではなかったと、彼の無力を再認識していた。

＊

風が、彼の消滅を悼むようにいつまでも啼きやまなかった。

荻号は共存在の解けたフラーレンを回収し終わった後、先ほど咄嗟に抱き止めたユージーンの体温がかなり低下してきている事に気付いた。ここは上空4000mで気温はかなり低いのだろうが、神の体温が外気温につられて低下するとは考えられない。

「ん？」

荻号は何とはなしに嫌な予感がして、ユージーンが纏っていた聖衣のスーツのジャケットとシャツをむしる様に脱がせては放り投げ、背をあらわにした。その目でしっかりと異変を確認した荻号は舌打ちをし、大げさに溜息をついて、戦闘機を基地に返し近くに滞空していたヴィブレⅡスミスをフルネームで呼んだ。

「ヴィブレⅡスミス！」

「何だ」

振り向くと、荻号がユージーンの聖衣を脱がせて背中をめくっている。彼は変態なのかと眉をひそめた。

意識を失っている者を勝手に脱がせて、背中をむきだしにするなど、あまりよい趣味とはいえない。そういう奇怪な行動を取るのも荻号ならではの、彼は荻号 要ではないのだから余計に薄気味が

悪い。ヴィブレースミスは彼とあまり関わり合いになりたくはなかったし、ユージーンを早くこちらに寄越してほしかった。

「ステイグマ（存在確率の鍵）が消えたぞ」

「何と……！ 何ということだ……」

最悪の誤算だった。INVISIBLEはブラインド・ウォッチメイカーによって穢されユージーンの去った神体に興味を示さなくなったのだ。

ヴィブレースミスは自らの傷の痛みも忘れて、ユージーンのを確認した。ない、どこにも……創世者の選んだ器であるという、呪縛が消えている。

「では……三年後、INVISIBLEの収束はなくなるというのか……」

それが真理ならば、理想的な決着かもしれない。だが荻号は疑問を呈する。

「どうだろうな？ 神階にはもう、金髪の神は残ってないのか？」

「どういう意味だ？」

「いるのか、いないのか？」

ヴィブレースミスは神階に最後に誕生した女神の赤子、レイア＝メーテールが金髪だったと思い出したが、何故それが今話題に登らなければならないのか、関連性が分からない。

「一柱いるが、何の関係がある」

「ならそいつで決まりだ。次の絶対不及者はそいつがなる」

「金髪の神が……絶対不及者になる、だと？」

何の寝言を言っているのか、当てずっぽうだとしても酷い推論だ。たったそれだけの肉体的特徴で、INVISIBLEのお気に入りになるとは到底思えない。とはいえ、神階に在籍する全神の容姿を記憶しているヴィブレスミスが、ユージョンとレイア以外に金髪のを神を思い浮かべる事ができない。つまりそれほど珍しい容姿なのだ、何故一度でも考えてみなかったのだろうか。背を検査したり、100年おきに適性検査をする必要などなかった。

先代絶対不及者も、その先代も記録に残るところによると確かに金髪だった。

こんな簡単でさりげない特徴に、いつまでも気づかなかった。

「ああ。こいつらは俺らとは違うんだ、限定生産品なんだよ。INVISIBLEのお気に入りの器だ。同じ由来の細胞だから、同じ容貌になる。金髪碧眼、それに近い容貌を持っている筈だ」

「だが、まだ生まれたばかりの赤子だ」

「そんなもん、関係あるか。そいつで決定だ。戻って確認してみな、そいつの背中をな」

ヴィブレスミスは逸る胸を押さえられず、瞬間移動をかけようとして荻号に腕を掴まれた。

「待て。こいつを置いていくのか？」

精神系を破壊され、抜けがらとなってしまって荻号に担がれているユージョンの神体を、荻号は指差した。もうヴィブレスミスは彼の事をすっかり忘れてしまっている。

「こいつはINVISIBLEの器ではなくなった。つまり不死身ではなくなったんだ。このままにしておけば死ぬんだぞ。それとも

何か？ こいつはもう用なしか？」

「どのみち、助からん」

不死身ではなくなり、脳死状態となった神体はいづれ朽ち始める。その神体が死を迎えるタイムリミットまで、恐らく数日もないだろう。脳死となった者を助ける事はできない、それがどんな名医であつたとしても……。処置をしたとしても助からないと、ヴィブレ
Ⅱスミスの言うことは確かに間違いではなかった。

彼がINVISIBLEの器であつた頃の、彼に対する執着たるや凄まじいものがあつたが、もはや器として使えないと分るとこの態度の変化だ。

「こいつはいづれ死ぬだろう。敵の手に落ちたとはいえ神階の為に心血を注いだ殉職者だ。連れ帰って、手厚く葬る事もせんのか？」
「一度敵の手に渡つたものを、神階に持ち込む事はできん」

荻号は掴んでいた腕をゆっくりと手放しながら、首を傾げた。

「妙な事を言うんだな。さっきまで連れて帰るつもりだっただろ？」

荻号は何と薄情な奴だと思ひながら、彼に罪を認識させるために鋭く指摘した。

ヴィブレⅡスミスの言葉は根本的に矛盾している。答えられずに、あるいは答える義務などないとも思っているのか、無言になった主神を蔑むように睨みつけて、荻号は鼻を鳴らした。

「まあいい。お前や神階がこいつを捨てたのなら、俺が引き取る」
「そうしてくれ」

荻号は急ぐように瞬間移動で消えてしまった主神に、それ以上何

も言わない事にした。

「これだから、神階の奴らは。お前、死んだらささやかだが俺の家の裏庭にでも葬ってやるよ」

他者ばかりの世界に生まれ、誰かに必要とされるべく命をすり減らしながら生きてきたというのに、なれの果てがゴミのような扱いだ。

荻号 正鵠の生きた1万年前から、神々の思考回路は少しも変わっていない。正論を振りかざしながら、彼らは何一つ正しいことなどできない。

様々な矛盾に目をつぶりながら神々の正義を生物階に押し付ける。

偽善者であることを認めようとしない、そんな神々がたまらなく嫌いだった。

だから荻号は尚更、このままユージーンを死なせるつもりはなかった。

＊

「今日はレイア様はよくお眠りになっているわ。いつ見ても、かわいらしい寝顔でいらっしゃること」

「こんなに手のかからない女神様は初めてだな。我々育児係は、ずいぶん楽をさせてもらっている」

「本当に、全っ然お泣きにもならないしねえ。将来は穏やかで気品ある女神様にご成長されるでしょう」

育児係の使徒達がきゃっき言いながら、今日も甲斐甲斐しく世話を焼くなか、神階最後の女神、レイア＝メーテール（Rhia

Mater)は天蓋のついた小さなピンクのベッドですやすやと寝息を立てていた。彼女は赤子ながらに朗らかで、夜泣きもせず人見知りもせず、愛嬌があって使徒たちの間でも人気者だった。彼女は既に神々にも人気があり、こっそりとおもちゃを持ってお忍びで会いにくる陽階神も多かった。

「新しいおもちゃが、お気に入りなのね。手放さないわ」

5名の育児係達が取り囲むようにベッドを覗き込んでいた時である。すやすやと眠りについていたレイアの顔がみるみるうちにしかめつっらになり、ふえーん、と大きな泣き声を上げ始めた。人の子ならばオムツが濡れたか、ミルクが飲みたくなったかという類の、むずがるような泣き声なのだが、糞尿の排泄をしない神の赤子にオムツの心配はない。ミルクも何も与えなくても、神は分子補足という食餌方法で呼吸をしているだけで成長するため、腹が減る筈はない。ギャーギャーと声を上げて噎び泣く女神に、彼女のこれほど激しい泣き声を聞いたことのない使徒達は混乱して、上へ下への大騒動だ。抱き上げてあやそうとした育児係が、背を支えようとしてレイアIIメーテールより一段と高い絶叫を上げた。

「あつっ！ 熱いっ！」

慌てて手を引っ込めると、手のひら一面が真赤に焼けただれてしまっている。レイア自身も背が熱いのか、火がついたように泣き続けている。彼女の背中が、誰も何もしていないのに突然熱くなった。使徒たちは細心の注意を払いながら、何があったのかと肌着を脱がせた。ありえないことだが、背中を虫にでも刺されたのかと思ったのだ。背をめくって迂闊に顔を近づけてしまった使徒はあまりの眩さに目がつぶれそうになった。何かが、目を射るような光の紋章が彼女の背に呪詛のように刻まれた瞬間を、彼らは目撃したのだ。

「何だ、これは?!」

「おお、おいたわしや……レイア様」

荻号の予言した通りの事が起こった。

INVISIBLEはあまりにも疲弊したユージーンを絶対不及者の候補から外し、純真にして無垢な赤子に呪縛を刻み込んだ。

そして創世者INVISIBLEはユージーンを捨て、レイアⅡメーテールに収束すると宣言した。

第1節 第59話 ポスト・ヒューマニティー神話を科学するとき

「きゃーツツチーカッコいい。さまになってたよー！ 超イケメン！
でも質問にはいっつも答えられてなかったけどねー」

「アホか、もーボロボロやー。もう色んな意味で終わってもーてー
……観光行くで、打ち上げせなな！」

「あ、店の地図はgoogleマップで調べといたよー」

築地 正孝、一世一代の国際学会の大舞台の舞台裏では、長瀬が
そんなねぎらいの言葉をかけていた。

異国情緒ただよう街を、二人で歩く。彼はこのたびの未曾有の感
染症、U・Iの特効薬となった化合物に関する演題の招待講演に、
スイス・ジュネーブに招かれていた。

教授が事もあるうに学会をダブルブッキングしてしまっていて、
仕方なく共同演者となっていた築地が国際学会で発表することとな
ったのだ。発表用の原稿とパワーポイントは教授が用意していたも
のの、英語に堪能な長瀬はこの大役をわざわざ英語の死ぬほど苦手
な築地に押し付けてしまつて、ガイドマップを見ながら気楽なもの
だ。

講演が終わると各国の研究者たちから質問が殺到したが、一言も
答えられない築地は研究室の連絡先をパワーポイントの最後のスラ
イドに差しはさんで、何か質問があればこちらまでと言って命から
がら逃げ切った。ゼミの時間にはいつも身を削るような思いをして
いた築地だが、今日ほど冷汗をかいたことはなかった。築地は生ま
れて初めて、ぶっつけ本番で立たされた世界の大舞台で、大恥をか
いた。

もつと流暢に英語が話せたなら、もつと勉強していたなら。

今よりましな発表ができたのではないかと思うと情けなかった。
……仮定ばかりの逃げ道が頭をよぎってゆく、そんな思考回路が
情けない。

思えば言い訳や逃げ道ばかり考えていた。せつかくの奨学金がパ
チンコ代に消えた事もあった、毎日スロットの攻略本ばかり読んで
暮らしている。夜通しネットや麻雀をして、昼過ぎに大学に顔を出
す。目が覚めなければそれでもよいと思っていた。襟を正せという
人間もいなかったし、荒みきった生活を正す良識ある友達も彼女も
いなかった。

親は弁護士の良い兄貴達に過度の期待をかけた分、末っ子
の放蕩ぶりなど知る由もなく、知る必要もなかったようだ。築地の
時間、そして頭脳はいつの頃からか錆付いてしまっていた。

「でー、ここが地ビールがおいしい店でしょー。こっちがチーズの
卸問屋でー、ほらー。この写真とかすごくない？」

長瀬が隣で一生懸命、観光プランについて話している間も、築地
は放心したようにどこか上の空だった。彼は国際学会場を逃げるよ
うに足早に歩み去っていたが、ふと足を止めた。

「なあ長瀬」

「？」

長瀬は急に真面目な口調で話しかけてきた築地に、あるいは告白
でもされるのかと顔を赤らめた。

彼がこんな風に真面目な顔で長瀬を呼ぶことなど、これまでなか
ったものだから……。長瀬がぐくりと唾を飲んだ時、築地はもう長
瀬を見ておらず、学会場を振り返っていた。

「俺、もっと勉強するわ。決めた、俺、研究者になる。折角世界に

通用する結果が出とんのに、あないな発表をしてもうて……比企さんに悪いことしたわ」

長瀬は告白ではなかったのかと少しだけ残念に、しかしほっと胸をなでおろしながら、半ば勘違いじみた強気な言葉を馬鹿にする様子もなく、晴れやかに微笑んだ。だが築地の目にほんの少しだけ映った、彼女の瞳の奥に浮かんだ彼女の寂しげな色を見逃してはいなかった。

「長、瀬……？」

「そっか！　じゃあ頑張ってるね。応援してるから、うんうん、ツッチーもやっとなる気になったんだ！」

「何や、今何か言いかけたやろ。それに笑わへんの」

長瀬がそれ以上何も言わないので、築地は拍子抜けした。

はちきれんばかりの笑顔で、ありとあらゆる側面から築地をこき下ろすのが長瀬だ、ただ、応援しているという言葉を返すだけの長瀬など長瀬ではない。調子に乗るなの一言ぐらい、言いそうなものだったのに。彼女はすたすたと先に歩いてゆきながら、早口でこんな言葉を吐いた。

「だってツッチー、M2なのにまだ就職決まってないじゃん。研究者にならなかったら何するの？　ツッチーはパチンコじゃ絶対食べられないしー。サラ金で借金まみれになって破産して、それまでじゃん。だったら大学で頑張った方がいいじゃん？　それにね……」

「それに、って何やの」

長瀬は一度は飲み込みかけた言葉を振り絞って、はっきりと築地に伝えた。

「今回の業績で、ツッチーを論文博士にするって教授が言ってたよ。」

教授はね、ツッチーだけをそうするって言ったんだよ。……だからね、ツッチーがその気になってくれないと、悔しいじゃん。私も、皆も頑張ったのにさ……ファーストオーサー第一著者になって業績をもらえるのはね、たった一人だけなんだよ？　そして第一著者をツッチーにしろって教授に推したのは、比企さんなの。皆知ってるんだよ、ツッチーだけ知らないの。比企さんがツッチーに業績をやれって、そう言ったんだって。私、ちょっと嫉妬しちゃった。信じられない、ツッチーにだよ？」

長瀬は、えへっ、と不器用に笑った。ひきつったような、ぎこちない笑顔だった。築地は長瀬のこんな表情を一度も見ることがない。そう、彼に向けられたはじめての嫉妬を。

あれから研究室を去った比企と荻号の行方は知れない。

長瀬と築地は、彼らが研究室を去った日に比企から、ポストイットに書かれた紙切れ一枚の餞別をもらった。

そこに記されたものは、とあるネットワークに入るためのゲストナンバーだった。誰にも見られないようにアクセスをしろと念を押されたので、長瀬はシゲルとのデートもそこそこに、比企に言われるがままネットカフェでアドレスを入力した。g t t p : / / からの始まるアドレスは存在しない筈だが、紙切れに書いてあった通りg t t p : / / G L - N e t w o r k . p o s i t i v e . o r g というアドレスを入力すると、サイトに接続された。

カフェラッテを飲みながら配布されたIDでログインをすると、長瀬くらの専用ページが出来ていて、付属のメールソフトに比企からのメールが届いていた。

比企　寛三郎はメールで改めて、案の定あらたまった自己紹介をした。

彼は長瀬の推測した通り紛れもなく宇宙人であって、神階という組織に所属し人々の歴史の中で神と呼ばれて認められてきた地球外生物であること。

神階は地球のいかなる危機においても、その総力を尽くして地球とそこに息づく生命を庇護する責任と覚悟、そして用意があるのだということ。

これからどんな困難や災厄が降りかかっても、決して絶望しないでほしいということ。

全てが終わって真の平和が訪れた日には、神階と地球はその垣根を越えて、人々と神々との交流を進めてゆきたいということ。

神階が地球を直接支配するという当初の急進的な思想は棄てたということ。

再び地上に降りる際には、必ず会いにゆくと……。

六法全書に書かれた文言のように言い回しが独特な、比企からのメールを何とか口語的に要約すると、そんな感じだった。

追伸に、築地と長瀬には神々のネットワークにアクセスする権利を彼の裁量により付与したと添えられていた。長瀬が最後に比企と結んだ、”必ずまた会おう”という約束を、彼は守るつもりがあるようだ。G L ーネットワークで公開されている比企のスケジュールを、長瀬はいつも見ることができる。それは築地も同じだった。比企は公務ブログと、使徒たちに向けた神階版ツイッター（G T ー T i m e L i n e）の公式アカウントを持っていたので、築地と長瀬はこっそりとフォローしている。

築地が長瀬と違うのは、比企は築地の将来性と才能をにかけている、ということだ。落ちこぼれだった学生に神々の知識を授け、高度な教育を施したいと比企は考えている。このG L ーネットワークから

は、神々の叡智を集めたA D A Mという図書館にアクセスし資料照会が出来るのだ。世界中のあらゆる研究者が日夜追及して解明できない現象の、世界の謎の解答集をカンニングする権利を有している。

そして長瀬にはこの素行不良な学生が比企に認められるほどの将来性を持っているとはどうしても信じられないのだが……長瀬は築地のおまけだと、彼女は気づいていた。

そういえば、A D A Mというオンライン図書館を利用するうち、この比企という人物は神階において大変な権力者であったという事が判明した。比企は立法と正義を司る神であり、智力でも武力でも名実ともに神々のN O , 2だそうだ。

現在では第一位神の座をかけて昇格試合に挑んでいて、その結果次第では神々の長となる可能性も充分あるのだそうだ。生物階降下中の比企は少しもそんな背景を明かさず、尊大な態度をとることも人々を見下した様子もなかった。外見は不思議系のV系学生。彼の経歴を知った長瀬が青ざめて、本人に面と向かってヒッキーなどと呼んでタメ口をきいてしまった無礼をいまさらのように後悔したの言うまでもない。

「あ、それからね。比企さん今度また下に来るって。店とかどこにするー？ 比企さんのお口に合うものって、何だろうねー」

「お前、比企さんが超お偉いさんやて分かった瞬間からコロツと態度変えて……。ヒッキーと呼んでみ？ ほれ、ほれ呼んでみ！ コリン星人と言葉が通じるんかとか言ってみ？」

「えーそんな、もう言えないよー」

築地と長瀬は顔を見合せて笑ったが、長瀬は一言付け加えた。

「観光のついでにさ、ツツチー。ちょっと付き合ってほしいところ

があるんだけど。ある施設の見学に行きたいんだ」

彼女が立ち寄りたいと言ったのは、CERN（欧州原子核研究機構）によって建設された大型ハドロン衝突型加速器（Large Hadron Collider・LHC）だ。ジュネーブの郊外にある、全周27kmの超大型加速器。

この施設では陽子ビームが強力な磁場によって曲げられ、ループ状の装置で加速されて陽子と陽子が正面衝突する際に、高エネルギー領域が生成される。まだ稼動をしていないが稼動に向けての最終段階に入っており、もうすぐ稼動が開始する。そのとき人類は、14テラボルトのエネルギー、極小ブラックホールを生成するまでのエネルギーを観測する。

LHCの観測結果は高次元の存在を実証する可能性がある。長瀬は神階を知れば知るほど、人類が神階と対抗できるだけの科学力を手にすることが重要だと認識しはじめていた。これまで神階は生物階に手を差し伸べてきたが、そうでない場合はどうなる？ また、神階は空間と時間を神具によって自在に扱う。人類はそれらの高度技術に、何を以って対抗するのか。人類が到達できる最大エネルギーはどこまでで、人はどこまで神に近づけるのか。

そして宇宙の真の姿（標準理論）はどのようなものであるのか。LHCはその疑問に答えうるのかもしれない。

「LHCは宇宙を視る為の扉を開く。私たち人類が手に出来る地上最大のエネルギーを以って、極小の宇宙を観測する。神階は現代科学の言葉で宇宙の何を明かしてくれるのか、この目で確かめておきたいんだ」

彼女の横顔にはもう、笑顔はなかった。

築地はそんな長瀬を、はじめて美しいと感じたのである。だが

「えーっと……つかLHCってなんやの？ DHCとかの仲間？」
悲しいことに、築地はこのレベルだ。長瀬は築地が相変わらずの調子なので、安心したようにくすりと微笑んだ。

「ねえツッチー、私たちはちっぽけな人間だけど、だからといって神様の存在をまだ信じているわけじゃない。私は比企さんが、全知全能の神様ではないと知ってる。人間と神様の間にある隔たりとはなんだろう」

築地の肌にはいつの間にか鳥肌がたっていた。彼女は遠く澄み渡った空を見上げる。宇宙に繋がる、紺碧の空を。比企は第一著者を長瀬に推薦すべきだった、だがそれをしなかったのは……至極真つ当な理由があったのではないか。築地は長瀬の精神性をうかがい知ることができない。長瀬は人類が絶対に気付いてはいけないことに、気付いているのではないか。

「面白いと思わない？ 私たち人類はようやく、神話を科学する段階にきたんだから」

比企を妄信しているように見えて、長瀬はそうではなかった。比企は長瀬くららという人間を、本当は恐れていたのではないか。

築地はそう思った。

＊

荻号はヴィブレイスミスを見送った後、脳死状態となったユージーンを荻号の自宅に連れ帰ってきた。家の前にはちょうど小柄な大家がドアを塞いでインターホンを連打している。彼女は荻号に担がれたユージーンを見るなり悲鳴を上げた。

肩に担がれてうつ伏せになっても、一見ただけで分るほど、片田舎では金髪の彼の後姿は特徴的だ。勿論、銅色の髪を伸ばしっぱなしで、空色というよりは硫酸銅色の瞳を持つ荻号もこの近所では謎の外国人として少々話題になっていた。言動や風体は怪しいが荻号の飾らない人柄や気さくな様子に、村人達も概して好意的だった。

「……荻号さん、その方はユージーン様じゃないの？」

「そうだよ」

ユージーンと少なからず面識のある大家は、彼が倒れたのではないかと動転している。

ユージーンは（彼の尽力のたまものでもあるが）、村の神様としての地位を不動のものとし、大家も例に漏れず彼を慕っていた。それが、荻号が担いで連れて帰るものだから、何があったのかと不安になる。そして荻号とユージーンとの因縁浅からぬ関係についても詮索をしていた。

「お倒れになられたの?! 何があったの、荻号さん。すぐに上島先生のところに……! 車を出すわ!」

大家はリウマチを患い体が不自由なので、車を足代わりに村中どこへでも出かけ、フットワークが軽い。彼女はすぐ送ってゆくつもりのように、ポケットの鍵束から車のキーを捜している。

「心配ない、眠ってるだけだよ」

荻号は彼を気遣う大家の心配そうな顔を見るのが心苦しくなって嘘をついた。何故眠っているユージーンを担いで荻号が自宅に連れ込まなければいけないのかは疑問に思うだろうが、あまり勘も頭もよくない大家は彼に大事ないと分って安心したらしい。

「あんた、こいつを知っているのか？」

大家は何を思い出したのか突然涙ぐんで目頭を押さえ、訊いてもいないエピソードを語りはじめた。

「お世話になったのよ……あれは初夏の頃だったわ。私が畑仕事してた時にね。用水路に母の形見の指輪を落としてしまったの、でも用水路は水がいっぱいで深くて、とても捜せそうになかった。それで、途方にくれていたところにユージーン様が通りかかって……この方はまだ村にいらしたばかりだったわ。その頃、私はあまりこの方を信用してなかった」

ユージーンが風岳村にやって来てしばらくの間、彼は今の人気からすれば考えられないほど人望がなかった。村長の玉屋から彼を紹介する宴席があるまでは、ユージーンを虚言癖のある不審な外国人としてなるべく関わり合いになりたくないと大家は思っていた。

そんな大家が、丁度間の悪い時にばったりと、ユージーンに遭ってしまったというわけだった。ユージーンは初対面の大家の顔を見るなり、事情も話していないのに用水路の小さな橋の上から覗いて大切な指輪だったのかと彼女に訊ねた。彼が何を言ったのか理解しかねて困惑していると、彼は靴を脱いでザバザバと用水路の中に入って指輪を浚いはじめた。

「もう夕方で薄暗かったというのに、捜してくださいさったの。胸まで泥水の中に入ってくださいさって、まだ水が冷たかったわ。私も一緒に入って捜そうとしたけど、この通り足が悪いでしょ。だからいいから、入らなくていいからって笑顔で仰って。見つかった時には、泥だらけになっていらしたの。涙が出てきたわ。それでも、よかったですねって、屈託なく微笑んで下さって。私、この方が大好きなんです。ずっとこの村にいていただきたいと思います。もし何かあつ

たら……」

それ以来、大家はユージーンに並みならぬ恩を感じている。

何の躊躇もなく冷たい泥水の中に入っていた彼の姿に、彼女は若夫婦を失って忘れかけていた大切な何か、温かな感情を思い出した。感謝されるためにではなく、自己満足の為にでもなく、誰かの為に役立つことをしたいと、彼女は強くそう思った。空家となった若夫婦の家を格安で貸し出したのも、単身日本に來た荻号を氣遣って毎日あれこれ親切をするのもそんな思いからくるものだ。

荻号はやはり”神”という役割を生きようとするのなら、神階という異空間から人々を見下すのではなく人のうちにさり氣無く溶け込んで、人々に必要とされるべきなのだとしみじみ思った。ユージーンという神は、人々にとって真の神なのかもしれない。権威や畏怖の象徴としてではなく、人々はユージーンのような土地に根付く心優しき神を欲している。

それは神階と生物階が共存する未来の姿であるような氣がした。どうやら荻号の氣まぐれでだけではなく、この村の人々の為にも、彼をこのまま死なせてはならないようだ。大家の話が身にしてみた。

松波夫人は眼の端にたまってきた涙をちよいちよい、と愛嬌のあるしぐさで拭いながら、野菜の入ったビニール袋を荻号の家の玄関先に置く。彼女からは毎日のように差し入れを受けている、荻号にとってはよき隣人だ。

比企が荻号に用意した偽の経歴では、日本にやってきたフィンランドの薬剤師ということになっている。毎日のように薬草をいじる行動が不自然ではない職業ということで、比企が勝手にでっち上げた。薬剤師資格も身分証も偽造している。実際に荻号には薬剤師としての知識もあったわけだが、大家もその経歴を信じており、そう

いう経緯でこの大家は彼が庭で得体の知れない植物を栽培する事にも寛容だった。親切にも肥料を分けてくれたり、彼らが丹精込めて育てた野菜も快くおすそ分けといってくれるのだ。

このおすそ分けという、日本独特の心遣いの文化を荻号は気に入っていた。

「荻号さん、これいつもの差し入れ」

「ああ、ありがとう。今日は何も返すものがないんだ」

荻号は大家が開いて見せたレジ袋の中身を覗き込みながら悪びれた。

これではもらいすぎだ。

「いいのよ、そんな。一昨日荻号さんからいただいた咳止めのお薬、よく効いて。すっかりよくなったの。これはほんのお返しのみ」

病弱な大家の為に、荻号は僅かながらに手に入る薬草で彼女に合った咳止めの薬やリウマチの薬を調合して分け与えていた。彼女には随分有難がられている。リウマチの特効薬を調合して、荻号は数回に分けて彼女に処方している。あと数回も飲めば、完治するだろう。

「ユージーン様は、やっと風岳村に戻っていらしたのね。明日からは社務所にいらっしゃるのかしら、村の皆も喜ぶわ。もうどこにも行かないでいただきたいけれど、そうもいかないのね」

「ユージーンは明日からまた、しばらく仕事なんだ」

「そう……お忙しいのね。今は色々大変な時期ですものね。ところで、どうしてユージーン様を荻号さんの家に運び込んでいるの？
というかそもそもどこで寝こけていらしたの？」

大家はようやくユージーンを自宅に運び込もうとしている荻号の

不自然さに気付いたらしく、色つきの眼鏡を上げ下げして上目遣いで彼を見つめる。こんな事をしている場合ではない、一刻も早く何か対処を打たなければならぬのに、慌てて家の中に駆け込めばユージーンの大事が大家にばれてしまう。

「あー、そうだな。その道端だ。疲れてるらしく起きなくてな。起きるまで少し寝かせておいてやるよ」

荻号は柄にもなく苦しい言い訳で何とか取り繕って大家を返し、鍵をかけぬままにして出てきた自宅に戻ってきた。ドアを蹴飛ばしながらユージーンを適当な和室に横たえ、容態を見守る。呼吸はしているようだが、このまま放置しておけば二度と目覚めない。やがて呼吸も止まり、軍神は静かに崩御する。彼の神体には一切外傷がなく死因は単純に脳死という、陽階神としては最も惨めで不名誉な死にざまが用意されている。

「お前、もうこのまま休みたいか」

荻号は独り言のようになりながらユージーンにそう語りかけた。

……当然のように、返事はない。荻号が彼の死を見過ごせば、物思わぬ彼は苦痛なきまま永遠の安息を与えられるだろう。荻号はそれが不幸な事だとも思わない、寧ろ強く死を望んできた彼にとっては理想的な結末だろう。

このような状態となってしまった彼は、極陽にとってもINVI SIBLEにとっても、そしてノーボディにとっても利用価値はない。絶対不及者となる可能性を失った、死に損ないのユージーンは神階にとってもただの木偶の棒にすぎない。

神階では何らかの事情で脳死となった神に、延命を認めていないからだ。

脳死判定が下され次第、安楽死という処分が下される。執務能力のない位神は排除され、代わりの位神が選出されて即位する。ただそれだけのことだ。

誰にも必要とされず脳死状態の惨めな姿を晒さなければならぬのなら、介錯して楽にしてやった方が彼の為なのかもしれない。しかし大家の言葉が荻号の耳に残っている。彼の無様な死を、何も知らない大家に伝えたくはなかった……柄にもない考えだと荻号は思う。

「……おい、こいつはもう、用無しなのか」

彼は誰もいない部屋に、見えない存在を暴きだすかのように目を凝らした。

家の中は昨春交通事故で亡くなった夫婦の遺品が整理されずにそのまま。家具は一式揃っていて、大家も片付けるつもりがないというので荻号はそのまま使わせてもらっている。声はしんと響き渡って、すぐに室内は静けさを取り戻した。

アルティメイト・オブ・ノーボディが荻号の挑発に、乗ってこない――。

こうやって呼んでも、彼が姿を現すつもりがなければ徒労だ。そうして荻号が彼の時間を浪費している間にも、ユージーンに限られた時間は奪われてゆく。現れるとも知れない”名も姿もなきもの”を喚んでいるのは愚かだ。

荻号がアルティメイト・オブ・ノーボディとの交信を諦めかけた時、ヴン、と寝室のテレビの電源が入った。ノイズが去ったテレビの向こうには、限り果てなき黄金の草原が映りこんでいる。

画面の右上に、チャンネル表示はない。

即ちこの番組は、存在しない。

アルティメイト・オブ・ノーボディとのアポイントを取り付けた。
荻号の思惑通りだ、思ったより時間はかからなかった、ここまで
は――。

「やはり見ていやがったな……。こいつを、ユージーンを失っているのか？ INVISIBLEの次の器は、まだほんの赤子だそうじゃないか。あんたが最後に残したプライマリの赤子とあっては、思い入れも一入、^{ひとしお}神階最後の牽引者だとうかがえる。ユージーンの代わりにするには惜しかろう」

そんな言葉を投げかけても、黄昏の草原には返事を返す者は誰もいなかった。荻号は音量を上げたが、無声映画を見ているかのよう
に、ノイズの僅かな音が聞こえてくるだけだ。コンセントの抜かれたテレビが突然ついて、チャンネル表示されない画面に切り替わったということは、ノーボディからの干渉が入っていると考えるのが自然だ。カメラワークは何かをフォロートラックするように草原の左の方へと水平に流れてゆくが、何か目を引くようなものは何もない。

「何だ？ 何かいるのか？」

ノーボディの表現の迂遠さに辟易しながら、わざわざテレビ画面に近づいて目を懲らした時、荻号はようやくある事に気付いた。一見してはさっぱり解らなかったが、何万分の一秒以下の間隔で異なる映像が挟みこまれている。

荻号でなければ捕らえられなかったであろう断片的な光景を、彼

は一つ一つジグソーパズルのピースを繋ぎ合わせるように個別に記憶して統合した……透明なドレスを着た、長い金髪の少女が風に吹かれ、夕焼けに向かって手を広げたまま立ちつくしているように見えた。禁視の玲瓏なる輝きを真つすぐにこちらに向け、もの言わぬまま悲しげに見つめる亡霊のような少女が荻号の意識の裡にはつきりと映じた時、彼は再三、世界の根源に触れたのである。かくして創世者との対話が始まる。

ノーボディは荻号の知る限り、その意思を言語のように直接的な方法で伝えたがらない。ある時は水面に浮かぶ水紋の規則性で啓示を与えたり、またある時は不規則に生えそろうた葉の暗示であったりした。この世界の創世者の与える啓示はいつも抽象的なイメージの連鎖であり、^{メタファー}隠喩だ。

少女の姿は、いわゆるひとつの暗示であり可能性だ。ヴィブレ^{II}スミスのマインドギャップを看破した際にユージーンの次に指名される絶対不及者の器は女神の赤子だと知ったが、もし完全なる女性の女神に INVISIBLE が収束する事になれば、画面の中のこのような姿が現実のものとなるのだろう。

絶対不及者の容姿を体現した幼き少女の暗示。まだ生まれて間もない女神がこのような姿となる事は、荻号ではなくとも気の毒に思うだろう。物心がついていないうちに自我を奪われる方が彼女にとってはいいのかもしれないが、強い意志を持って絶対不及者となることを受け入れたユージーンとは異なり、幼児の絶対不及者では INVISIBLE の思うがまま傀儡となる。

荻号は INVISIBLE の純粹な意思に賭けたいと考えていたが、ユージーンが絶対不及者となる場合と状況が違うのは、女神が生殖能力を持っているという事だ。生殖能力を持った絶対不及者の

存在は脅威だ。そしてその脅威は彼女が子供を産む可能性を前提として増幅される可能性がある……。

「まったく。どこにでも、どんな姿でもいやがるんだよなあ、あんたは昔から……」

『吾は左様に在った。過去も、そして現在もそうだ』

映像には一瞬だけ神語で字幕のようなカットが入って、またすぐに消えていった。彼女とは長い付き合いになるが、こうやって対等に意思疎通が出来たことははじめてだった。閻神、荻号、正鵠は長い神階の歴史のうちでほぼ唯一、INVISIBLEの名を騙ってその存在をひた隠しにしてきたノーボディの存在をつき止め、暴き出した神だった。

荻号がEVEのシステムをクラックしている時に奇跡的に気付いた、EVEのシステムの一部が不正に抜き取られてコピーされアクセスされている上位データを発見した時に証拠を突き止めた。EVEの一角にある、”最果ての谷”というディレクトリを通じてアルティメイト・オブ・ノーボディとデータを共有している唯一のネットワークだという情報は、荻号しか知らない。

「あんた、リアルタイムでモニターしていたユージーンの詳細の、バックアップを持っているだろう。絶対不及者になるであろうユージーンを制御する為にあんたが保管している予備の記憶だ」

『持っていたら』

「あれを再インストールしろ、この状態ではどうやっても絶対不及者にはなれんのだ。せっかく保管していたバックアップも用無しだろう、破棄するぐらいなら寄越せ」

荻号は年甲斐もなく見た目にはどう見ても少女にしか見えないノーボディを恐喝した。彼女は瞳を睨めるようにして受け流し、荻号

を歯牙にもかけない。

『それは出来ぬ』

「いらぬものなら渡せ、どうせ使い道がないんだろ」

少女は話を聞くつもりがないのか、荻号から目をそらし、長いドレスの裾を捌いて草原に座り込んだ。荻号は攻め立てるように言葉を続ける。

『再度同じ事が繰り返されよう。不毛だ』

プライマリの細胞を使ってINVISIBLEの器となる特別な神を生み出すことは、アルティメイト・オブ・ノーボディ自身が何万年もタブーとしていたことだ。だがここにきてユージーンという生贄を差し出してまでもINVISIBLEの目を眩ませ、彼女にとっては秘宝ともいえる存在、生殖能力を持ったプライマリの個体にツバをつけられないよう身代わりとした。使い捨てにする筈の生贄に利用価値がなくなり、秘蔵っ子をINVISIBLEに奪われ、面白くないことだろう。

「記憶を戻せ。INVISIBLEは再びこいつに呪縛を刻む、必ずだ。こいつがここで死ねば、女神の赤子も助からん。だがこいつに記憶を戻せば、女神の赤子は助かる可能性が出てくる。至極単純な計算だろう、助かる方を救え」

ノーボディは荻号の挑発には乗らなかった。彼女は荻号の相手をしてしなければならぬ義務などないのだ。交信に応じたのは、荻号の話を聞く為というのではない。

「あんたは神にはEVEを与えなかった。いや、神々には神々の記憶を管理させなかったといった方が正しいな。生命というシステムの最適化を目指すあんたは自身の手で、凡ての神々、使徒の記憶を

広大な墓地の墓標に保管している。あんたにとって神はシステムだ、システムダウンを起こしてもいつでも再起動できるよう、特に位神の記憶はリアルタイムでバックアップを続けている。ユージーンが解階に入る直前に記録したバックアップがあるな」

つまり死神は、知らず知らずのうちにアルティメイト・オブ・ノーボディの記憶収集の下請けを手伝っているという構図だ。ノーボディは自ら神階の記憶を保管し、生物階の記憶収集は死神に一任している。ユージーンだけが特別なのではない、アルティメイト・オブ・ノーボディがその気になれば過去に崩御したどの神も、何年何月何日時点の記憶といったように1日単位の正確さで、完全な記憶を持ったまま再生する事が出来た。

つまり理論的には、最近崩御したジーザスクライストを、崩御する前日の記憶を持ったまま蘇生させるという芸当すら可能だった。山中で頭部を吹き飛ばして仮死状態となったユージーンが、アルティメイト・オブ・ノーボディの所持していたデータをダウンロードし何一つ不満足でない完全な記憶を持った状態で復活を果たしたのもそういう理由だ。

ノーボディはいつでも死者を、思いのままの状態で蘇らせることが出来る。今更ユージーンに記憶を戻すなど造作もないことだ。荻号はEVEが隠し続けてきたデータをクラックすることによって、1万年前に、そこまでの事を調べ上げていた。創世者の秘密に近づいてきた荻号を危険視したノーボディは荻号を凍結しある意味彼の口を封じてきた。

在位中にアルティメイト・オブ・ノーボディの存在と生命管理システムに気付いた死神は、ノーボディ、あるいはブラインド・ウォッチメイカーになのかもしれないが、どちらかの創世者によりことごとく抹殺されていた。死にたがりの荻号は1万年前、EVEの謎

に近づこうとした当時の死神に依頼されてEVEのシステムを攻撃した。

荻号はアルティメイト・オブ・ノーボディの尻尾を出させ、彼女（彼女）と交渉し、ノーボディの思惑通りに協力するという代わりに生かされている唯一の存在だ。荻号にはアルティメイト・オブ・ノーボディにとって利用価値があった。そして荻号はまだ利用価値を失わずに生かされている。

『汝が預かり知る領分にはないことを、随分と知ってしまったものだ。感心はできぬが、まあよい。その者の死は、留めておけ』

「それは、記憶を戻す用意があるということか？」

『まだ明言できる段階にはない』

簡単に言ってくれるが、神の死を保留するなど荻号には出来る筈がない。死神が保留出来るのは生物階や解階の住民の死のみで、神の生殺与奪権は独占的にアルティメイト・オブ・ノーボディのみが掌握している。神が神の寿命を引き延ばすなど越権行為だ。

神の寿命の延長をしようと思えば時空間歪曲神具で生体時間を止める方法もないわけではないが、アトモスフィアの消費が激しく、神具を起動し続ける事は難しい。たった一つだけ死を回避させる方法があるとすれば、荻号が一万年もの時を超えたように、ユーザーを凍結する事だけだ。仮死状態になった肉体は死体と同じ：：死体はそれ以上死なない。

基空間に残してきた闇神の部屋に凍結装置はまだある、装置が使えるかは解らないが、それを使う以外にはない。

＊

荻号が発動した共存存在によって超空間転移を終えた解階、母星A BYSSでは、大きな混乱が起こっていた。女皇アルシエルⅡジャンセンはU・I・の感染者を隔離地区に隔離させ、非感染者を広大な敷地を持つ皇居に集めていた。

U・I・に講ずるべき手段は少ないが、あった。

神々と人々により特効薬の合成法が発表され、解階にも神階から資料が転送されていた。アルシエルは解階の優れた御殿医や調合師達に命じて薬を作らせ、完成した薬剤は僅かながらに供給が始まっている。非感染地区と感染地区の境界線から薬を投与し、今は徐々にその領域を拡げつつある。

それでも供給が間に合わない為、ごく初期感染の感染者から順番に薬を回し、末期の感染者にまでは薬がいきわたらない。重臣達がひっきりなしにABYSの各都市の惨状の報告を入れてくる、アルシエルはもう10日も不眠不休で働いていた。

「陛下、このたびの感染症により首都の25の大貴族の家柄が途絶えたとのことです」

「電気、水道、ライフラインはまだ回復のめどがたちません。水道は感染源に汚染されている可能性が高く……」

「原子力発電施設、129基稼働再開、電力供給再開しました」

「救援物資が不足しております」

「スリープモードにしていた通信衛星、蓄電衛星を深宇宙輸送機で打ち上げましたが、周回軌道に入りました。電力供給モードに切り替えます。生物階転移後の宇宙座標を特定しています」

アルシエルは壊滅的ともいえる解階の惨状の報告を受けていたが、打ちひしがれている余裕などなかった。彼女は女皇として最善の処

置をしたと、誰の目にもそう見えた。差し当たり必要なのは感染地区への救援物資と、あとは電力システムの構築だ。転移後間もなくは差し当たり原子力発電で対応しているが、解階の電力を恒星光発電で賄い、食糧生産体制を維持するには少なくとも生物階でいうところのアルトウルス（太陽の24倍の大きさ）レベルの恒星が必要だ。

「皇居の外には無人の給水車と食糧を出せ、食糧物資は地下倉庫35区画に5000万レム（約300トン）の蓄えがある」

「は、お言葉ですが陛下。35区画の食糧庫を解放するのはいかなものかと」

「この非常時に出し渋りをして、無駄に蓄えた食糧をいつ使うつもりだ。家畜の飼料も出せ、今は貴重な食糧だ、口に合わぬとほざく者は餓死すればよい。また、非常偵察衛星を高軌道に投入し、ABYSS全土の被害状況を連絡させろ」

アルシエルが厳しくそう言うのと、年老いた大臣は畏まって下がっていった。メファイストフェレス I セルマーは皇居から出られなくなってしまうたという事情もあってアルシエルの傍近くに控えていた。

「かような国家の危急に際しましても、陛下のご勅令が滞りなく発布されておりますこと、臣民は心強く思うておると聞いております」
アルシエルの疲れた様子をねぎらうかのように、セルマーは彼女の働きを賛じた。

こういう非常時において、絶対君主制では君主に全ての判断が委ねられており、議会民主制と比較して君主に過度の負担がかかる。だが議会を通さない分、議会民主主義よりはるかに早く、色々な勅令が驚異的な速さで下される。だからこそ彼女は一睡もするわけにはいかなかった。

休むまもなく臣民の為に働くアルシエルを気遣いながら、文官であるセルマーは他の有識者達と共に執政補佐を手伝っていた。アルシエルは気丈に振舞っているが、疲労を隠し切れない。解階最強の女皇であり優れた為政者であるが、彼女は完全ではない、疲れもするし、不安にもなるだろう。

報告書と被害状況を記したデータを凄まじい情報処理能力で浚いながら、アルシエルはセルマーの言葉に顔を向けることもなく立体パソコンのモニターを凝視していた。女皇が一服入れようとして葉巻を取り出したので、セルマーは傳いてライターで葉巻に火を灯す。

「今は世辞を聞く余裕もない」

「は、いらぬ事を申し上げました。陛下のご心労、お察し申し上げます」

アルシエルは紫煙を吐き出しながら、ゴシックなデザインの執務室のシャンデリアを見上げていた。髑髏をモチーフとした漆黒のインテリアは、まるで樹海の木々のように複雑に折り重なっている。解階の住民は闇を好む。だがこのたびばかりは渴望せずにはいられない。

光を、そして救いというものを――。

「……メファイスト伯。あのユージンという神がそうしたのであるが、解階は生物階に移したようだ。それはABYS周囲の星座が一変したことで明らかだ。生物階に入り、解階とは異なる創世者の支配下に入った、解階の創世を行った者は、当然ながら之を快くは思わない。如何なる逆襲に出るものか」

アルシエルの悩みは、更なる未来をも見据えていた。アルシエルは秘密裏に解階の創世者、ユージーンの言うところの”盲目の時計職人”を裏切った。その報復は、必ず――。

「しかし、神階、および生物階を支配する創世者の庇護下に入ったとあらば、安全は保障されているのでは？」

ユージーンから提示された話はそういう話だった。解階を生物階に移転させたなら、A B Y S Sは生物階の創世者の庇護の下に入るのも何も心配はいらないのだと。だが神であるユージーンは支配者と呼ばれる存在の本性を知らない。彼等は強欲だ、勿論、アルシエルも含めて。

「卿^{けい}は皇の驕慢^{さうまん}を知らぬ。興じておった戯れを下賤の者に奪われた皇の、醜惡^{さう}な性は、怖るべきものがある。余は其を慮しておるのだ」
自身も皇であるアルシエルⅡジャンセンは、帝王と呼ばれる者の業の深さを知っていた。その時に、創世者を前にしてアルシエルがどこまで彼女の臣民を守る事ができるか。神々の極位をも凌駕する、彼女の圧倒的な力は決して衰えてはいないが、創世者とやりあうとなった時の勝算は0だ。

「陛下！」

下級仕官がほぼ他の衛士に取り押さえられるような形で駆け込んできた。

下級仕官が直接アルシエルに報告を上げるとは許されていないのだが、彼の逼迫した表情を見たアルシエルは人払いをした。

「よい、通せ。深刻な話であろう」

下級仕官はアルシエルに平伏したまま大臣や官房達の退出を待っているようだったが、特にメファイストフェレスⅡセルマーが退出

したのをしっかりと見届けた。アルシエルはその僅かな視線移動を見逃さなかった。彼は何か、セルマーに対して疾しい報告をしなければならないようだ。下級仕官はドアが閉ざされると同時に報告を始めた。彼は狼狽し、声が上ずっていた。

「皇家の嫡子、ルシファールⅡカエサル殿より勅使がございました。本日付でエイヒマン公国と辺境の5つの御料地を統一し、新国家ゲヘナを建立すると……」

やはり、きたか。

アルシエルは黒い瞳を眇めた。”盲目の時計職人”は何らかの報復をかけてくる、アルシエルと反目していたルシファールを洗脳するか脅迫するかで焚きつけたのだとしたら、これほど簡単に堕ちる事はないだろう。傀儡国家ゲヘナ（G E H E N N A）の建立、しかしエイヒマン公国はアルシエルの直轄地とも言える国家でアルシエルへの絶対忠誠を誓っている。また、原子力発電施設が数多く存在する、エネルギー基点でもある。

たとえ脅されたとしても、エイヒマンの人々はルシファールのもとに集いはしないだろうに……。

「皇は、ルシファールではなからう。彼奴は大帝国を築けるほどの人望はない」

「いえ、メファイストフェレス女皇、と申す者にございます。恐らくはメファイストフェレス家の……新女皇は、U・I・の感染者を一瞬にして癒す能力を持っているそうです」

メファイストフェレスⅡⅠ メリーはアルシエルの忠臣であり、彼女は父親思いのよい娘だ。父親が人質となっているという状況を忘れて愚考を働かせたりはしない、傀儡となっているのはルシファ

ーではなくメファイストフェレスだと考えられる。そして人望を集める為に、アルシエルが供給が行き届かない地域の民の感染症を癒す事で忠誠を誓わせた。民は民を守ってくれる為政者を望む、簡単な話だ。

「なるほど……余にはU・I・を癒す力などない、臣民の命を救うものが真の為政者となろう」

突如として建立されたその国家は、ABYSSのおよそ半分を支配する大勢力を築き上げていた。メファイストフェレスは恐らく、感染者達を自在に操る能力がある。恐怖や死の恐れを知らない、”盲目の時計職人”の力をして無敵の兵を持つ帝国を建立することは、それほど難しい事ではなかっただろう。非感染者達はアルシエルの皇居に籠城しているが、いつ感染が起くるか分からないという窮状だ。下級仕官の話は、終わってはいなかった。

「ならびにルシファア殿が、陛下に決闘を申し込んでいらっしゃる。あ、明日の、正……午……テグメルの丘の上で」

女皇は長いドレスの裾をさばいて立ち上がった。じつと、しかし強い眼差しで空を見つめていた。

「……余も随分と、見下されたものだ」

女皇から滾る気迫にシャンデリアが砕け散る。

シャンデリアのガラスくずをしこたま被りながら、下級仕官は息絶えた。彼の背には、背後から攻撃をうけて流された血で真っ赤に染まっていた。シャンデリアのガラスくずにやられたのではない。彼はそれ以前に、もっと致命的な損傷を受けていた。彼女は流された彼女の臣下の血を見下ろしながら、彼女の傍らに生けてあった深紅の花束を放って、彼の上に投げる。

花卉が花吹雪のように、儂く散って血だまりの上にひやりと落ち

ていった。

「ルシファー。汝は短い時間の間に、余が誰であったかを忘れてしまったようだ」

怒りのうちに玉座を降りたアルシエルは解階最凶のツール、不可侵の聖典（Inviolability Scripture）を携えていた。分厚い皮の表紙に金の刻印が美しい、開いてはならぬ禁書を開くときがきた。

真の解階の皇はどちらなのか……アルシエルはその答えを、ルシファーの身に刻み込まねばならない。

第1節 第60話 抗体と抗原、神と使徒、各一對

響 以御は比企から非常連絡を受け、緊急に紫檀を陽階中央集中治療室に収容する手配を整えた。

神の寵臣として知られる川模 廿日、その夫である紫檀に、神からの一方的な暴行が加えられたと軍神下幕僚統監部が速報で報じたために、軍神下使徒階には激震が走った。

無抵抗の紫檀に致死寸前の暴行を加えた神を公然と非難する声は大きかった。

以御は脳裏に過った一抹の不安を無視し紫檀に生物階降下の許可を与えた彼自身を激しく責めたが、全ては遅きに失した。

使徒達はユージーンを神であり軍神下使徒達の代表取締役ではあると認識していたが、決して独裁者であり暴君ではないと信じていたし、かねてよりユージーンもそう説いていた。だからこそ、軍神下使徒達は職種上陽階で最多の犠牲者数を出す位神に仕える使徒となったといえる。ユージーンを信じていたからこそ彼のもとに集ったというのに、信頼を予期せぬ形で裏切られた。

使徒は神の為に身を削り、時には命すら投げ出すが、彼らの心意気がどうであれ、神階ではヴィブレⅡスミスの代より神を頂点とする絶対君主制は廃止されている。陰陽階神法、”第四種公務員（使徒）の待遇に関する細則”改訂に基づき、位神は使徒階で定期的に行われる支持率調査が30%を下回ると罷免されるようになった。使徒も神を選ぶ時代になったというわけだ。社員である使徒達からも愛想を尽かされるような無能な神は廃除するという狙いもある。

目下、無実の使徒を傷害したユージーンに対する大反発から、ユ

ージーンが位神を追われるというケースも考えられる。だが、もはやユージーンの罷免などを懸念している余裕は以御にはなかった。藤堂 恒がユージーンが敵の手に落ちたと言った矢先の事件だ。紫檀、そしてユージーンに何が起こったのか、最悪の事態を想定した以御はそのニュースに深く失望した。

比企はまた電話で、以御にこうも告げていた。

” 当今（現代）軍神は脳死状態になり再起不能だ、代がわりを想定し備えている” と――。

以御は比企の通達を受けて、冷静かつ迅速な対応を執った。まず彼が行ったのは、ユージーンに渡っていた軍神の指揮権をユージーから以御に取り戻すことだ。こうしていなければ、指揮権の不在が起こり、軍神下使徒全体が動けなくなる。ユージーンが自殺を試みる前に、軍神が崩御しても任務が滞らないよう、ユージーン自身の手で3年分の司令と以御への職権譲渡が確約されていたが、それが再び役に立つ時が来ようとは思わなかった。結果的に彼が残した遺言書により、ユージーンがいつ崩御しても軍神下幕僚統監部という組織の存続は問題ないように整えられていた。体制の磐石さとは裏腹に、以御は執務机の上で手を組み、深い息をつく。

「ユージーン……遂に逝くのか……」

以御が想定していたより少し早い別れだった。

彼はユージーンを、完璧ではないがそれなりによいパートナーだと思っていた。ユージーンのたった181年ばかりの生涯は、思えば不憫な一生だった。

それでも以御は喪失を乗り越えてゆかなければならない。誰を失い、どんな犠牲を払ってでも――。

それが神々に仕える第一使徒という責任ある仕事だ。以御が主を

失ったのは実に三度目だった。三度も耐え難い喪失を経験すれば慣れるかという、それはある意味正解だ。以御は二度の喪失の経験から、神に献身的に尽くしてはならないと学んでいた。

しかし、入階衛星からの映像を取り寄せ、VTRの検証をしながら以御の目の前のソファに座っている二岐は、どこか割り切った様子の以御とは全く逆の心境だった。二岐は極陽の発動した奥義が紛れもなく精神を破壊し、ユージーンにとって致命的な損傷を与えた事を彼女自身の双眸でしかと確認した。二岐は不死身と呼ばれる存在に二度も仕え、二度の崩御を経験するのだろう。神に深く依存する彼女は、その事実を俄かには受け入れられなかった。

「残念ね……。比企様の仰るよう、絶望的かもしれないわ。もつとも、絶望的にしたのは誰かしら……」

彼女は鎮痛な面持ちでそう述べた。

「どういう意味だ？」

二岐は比企が主神たる極陽を言葉巧みに戦場に送り、ユージーンを抹殺するよう仕組んだと見抜いていた。極陽は比企の期待通りの働きをしたまでのこと。比企は彼の正義を貫く為には、怖ろしく残忍だ。彼とは恋人より頻繁に手紙の遣り取りをした頃だったか、あるいは荻号との対話の中で垣間見えたものだったのか、二岐は長年の交流を通じて比企の性分をよく知っていた。彼女は振り絞るように、一言だけこう述べた。

「あの方はいつも、正しすぎるのよ」

「同感だな」

以御の姉、響 寧々は比企の持つ、どんな事があっても折れない、櫓のように真っ直ぐな正義感に惚れたのだそうだ。

比企は器用に生まれつき、不器用でドジなユージーンとは対極に位置する神だといえる。以御は比企のそういう部分に馴染めず、ユ

ージーンのように青臭くても真摯な神が好きだった。姉弟でも趣味の違いは顕著なものだと、姉と冗談を交わしたもののだが、まさかよりによって比企にやられるとは思わなかった。以御は何度目かになるため息をついた、今更グチグチ恨み言を言っても仕方ない。ユージーンは死んだ、その事実は恐らく変わらない。以御は黙って執務机の隅にあったユージーンの名札を伏せた、軍神 ユージーンのは今日は以って終焉を迎える。

以御は悲嘆に暮れてもいられなかった、妊婦の廿日に夫の容態を伝えるべきかどうか判断する必要がある。死んだ者を悼むより、生きている者の為に最善を尽くす方が有意義で生産性がある。勿論、気を紛らわせる為にも。以御は紫檀の容態を把握するために、陽階中央集中治療室に連絡をつける必要がある。

「そっちへの連絡もいいけど、紫檀の事、妻には伝えないの？」

「廿日はもうすぐ臨月だ。だから迷っている……下手すりゃ、ショックで流産させちゃう」

「でも、紫檀はまだ生きているのよ。いつまでも隠しきれるものではないわ。それに、容態が悪化したら！？ 今生の別れになるかもしれないのに！」

攻め立てるような二岐の声に、以御は彼自身を落ち着かせるように深呼吸をした。

「比企殿のはからいにより、医神 紺上 壱見殿が処置をして下さると仰っている。紫檀が数日以内に命を落とす可能性は低い」

比企はかなり無茶をしたようで、普段は使徒の治療などしない紺上に、極陽の名で処置を命じている。紺上の腕の良さは折り紙付きだった。紫檀は使徒の大動脈ともいえる翼を失っているので大量失血をしているが、それ以外の致命傷はないのだそうだ。一度預かった患者は絶対に死なせない事をモットーとする彼女の医神の名誉に

かけても、みすみす紫檀を死なせはしないだろう。比企は紺上のプライドの高さを逆手に取った。

二岐は執務机ごしに背伸びをし、どこか後ろめたそうな以御の瞳を覗き込んだ。以御は思いがけず急接近をされて後ろにのけぞる。

「何事も、絶対というものはないわ。以御」

「……そうだな。俺はここを動けん、指揮権を持っているからな。テスラとリプラを使って紫檀を見舞いに行け。廿日はテスラに乗せてやれ。馬はエアポートにつけてある」

以御は公獣の天馬、自らの騎乗する牝馬リプラを二岐に貸し出すと言った。リプラは軍神下十大使徒の騎乗する馬としては最速を誇る、競走馬のように引き締まった栗毛の伝馬だ。数百年にもわたり廿日が騎乗していたテスラは、今は名義上、二岐の馬になっている。まだ赴任して間もない二岐は騎乗したことがない。二岐が以御の馬に乗り、廿日は慣れ親しんだ馬に乗らせろという、以御の配慮だった。テスラは廿日によく懐いている、妊婦の彼女を乗せられるのはテスラだけだ。妊婦が馬に乗るなど生物階では考えられないが、翼を持つ伝馬は殆ど振動をさせずに疾走、滑空でき、瞬間移動の出来ない使徒にとって、最上位の交通手段といえば公獣しかない。

陽階中央集中治療室には公獣エアポートから公獣で駆けつけるのが事実一番速い。

「私ではなくてあなたが行かなくて、いいの？ 指揮権が気になっているのなら、心配はいらないのよ。神階を離れなければ、指揮権を放棄したとは見なされないわ」

神階の法制については、二岐の方が以御よりよほど熟知していた。二岐は荻号の第一使徒だった頃、放蕩を繰り返す荻号に何度も指

揮権を押し付けられたが、その間に四六時中執務室に缶詰では仕事
がはかどらない。彼女は指揮権を持ったまま様々な公的機関を出入
りしていた。それでも法務局からのお咎めは一度たりともなした。

「二岐、お前はここにいてくれるか？」

「ええ。早く行ってあげて。長い付き合いの部下なんでしょう？」

「後を頼む。廿日を迎えに行く」

以御は頷き、ソファアの上に無造作に投げ出していた彼の白いコ
ートを引っ掴むと、執務室を飛び出していった。

＊

聖域であり開かずの階層である至聖階を除いては神階の最上部に
位置する天奥の間は、深い静寂に包まれていた。

比企は以御に連絡を取ると先ほどからコンソールを操り何かを走
査しているようだが、恒は周囲で刻々と変化し続ける環境に適応す
ることも出来ず、傍観者でしかいらなかった。

「藤堂」

「……」

比企は手を止め、ユグドラシルの黒い硬質の大樹の下で腑抜けた
ように這い蹲っている恒を見下ろした。700年の長きを生きた比
企は、彼にとってはあまりにも幼すぎる恒に、こんな時にまで不動
の精神力を強いる事はしなかったし、期待をすらししていなかった。
比企が何かを恒に語りかけようとした時、それを遮るかのように恒
のすぐ隣に蜃気楼が現われ、ヴィブレリスミスが天奥階に戻ってき
た。恒は振り仰がずとも誰が戻ってきたのか分かっていたが、直視
できなかった。

天奥の間の主は黙って肩を震わせ、冷たい床の上で涙を落とす少年神に視線を向けた。

憐れむように、しかし人の心に囚われた彼に蔑みを込めて……。

「私はつくづく……、お前の厭がる事をしてしまいうらしいな……」

極陽は恒に弁解をする様子もなく、手を伸ばして彼の首根を軽く掴んで吊り上げた。恒は力が入らず、頑として立ち上がろうとはしない。

「私を憎むなら、心行くまで憎しむがよい。だが立て。腑抜け者は神階にはいらぬ」

極陽はそう言い捨てると、恒を立たせる事を諦めて、比企が代理を務めていた玉座に戻った。

「極陽、レイアⅡメーテールの背を確認してきたのか」

「ああ」

その結果を皆まで聞かずとも、比企は最悪の知らせと受け取った。

ヴィブレⅡスミスは玉座に戻る前に赤子の背を確認してきた。その幼い背に刻まれた呪縛が彼女の自我を奪うその日まで、彼女は生贄として創世者に捧げられる定めにある。ユージーンが逃れたなら、誰かが泥を被らなければならない。

彼女が赤子といえど許してはもらえない、INVISIBLEは容赦など知らない無慈悲な存在だ。

ユージーンに見切りを付けたのは、レイアという代わりがいたからだ。……そして彼女はただプライマリだけであるユージーンより更に、魅力的な特性を持っていた。

「まだ幼い身には、荷が重かったようだ。苦痛に耐えかね、狂った

ように泣き叫んでおった」

「左様か……」

極陽に玉座を譲った比企はユグドラシルの樹下に飛び降り、恒に肩を貸そうとしたが、恒は無言で拒絶した。

今は誰にも触れられたくはなかった。比企は宥めるように声を落として、恒の肩を掴む。

「藤堂、聞き分けのない事を申すな」

その手を振り払われた比企は、今度は恒の腕を掴んで強引に立ち上がらせた。今度は有無を言わせる様子ではなかった。

「この者は暫く己が預かる。構わぬな。師弟契約は師の崩御により無効となった、もはや彼はユージーンのものではない」

「だが、お前のものでもなからう、比企よ」

「では問うが、汝が庇護者足りうるのか？」

比企がそう言ったのは、極陽が奥義PSYCHO-LOGICAseを発動し、アトモスフィアを使い果たしたからだ。極陽は今やアトモスフィアを極限まですり減らし、回復までには早くても数日はかかる。生体神具使用の”反動”は、非生体型のそのの比ではない。極陽は今、身を起こしているだけでもやっただ。アトモスフィア吸収環もアトモスフィアを殆ど吸収出来ていない枯渇状態を示す、赤色に変色している。彼は今、神階を支えるだけでも限界だった。

「……好きにしろ」

結局極陽は、そう言わざるをえなかった。荻号を失いユージーンを失ったとなると、彼らに次ぐ実力を持つのは極陰か比企だ。比企のところに預ければ万全かという答えはNOだが、致し方がない。神階の長、極陽はもともと全神の所有権を有している。よって極陽

が許可して比企が恒を所有する事は、何ら違法性はなかった。

恒の意思など何一つ尊重されない、当事者を無視した遣り取りが交わされた。

＊

それから暫くの間、恒は放心状態にあった。

陽階神にとって恒は、どこまででも道具でしかないとはっきりした。それを恨みに思ったりはしないが、もう前には進めそうにない、そう思った。

ユージーンがいたから、恒は彼と共に進んでゆけた。どこまでも続くと思っていた道が突然、途切れてしまった。

いつか恒も彼のように、いとも簡単に殺されてしまうのではないか……彼の死によって、そんな悪夢が現実味を帯びてきた。

どこか遠いところに霧のように漠然とした忌まわしい未来が、突然姿を現し迫ってきたような感覚だった。

「…様……藤堂様」

恒のすぐ耳元で、聞き慣れない女性の声に気付く。

呼びかけに答えなければと思うが、胸がつかえたように言葉が出てこない。

「藤堂様！」

もう一度肩を叩かれ、彼は正気に戻る。恒は先ほど比企の転移に巻き込まれて、広い書斎の応接椅子に腰掛けていた。恒の肩を叩いたのは同じソファに並んで座る美しい白髪の女だ。

神階では絶対にといったいいほど神が身に纏わない、青という特徴的な色を用いたワンピースを着ているので、使徒だと分かる。折れそうなほど細く華奢な身体は、儂げな印象を与える。更にむき出

しになった白い右肩には、切り絵のようなコントラストの黒い御璽、
藤玉璽とうぎよくじが彫り込まれて、比企の第一使徒だとも気付いた。

白く長い睫毛が印象的だ。

恒は枢軸全神の名を暗記しているが、使徒の名までは覚えていない。誰だろう、彼女とは初対面の気がしない。

「ご気分はいかがですか？ お顔が真っ青になって、お呼びしても、少しもお気づきにならないものですから」

「……ごめんなさい。え……と」

「私は、響 寧々（ひびき ねね）と申す者です。先ほど自己紹介をいたしましたがお耳に入らなかったようですね。何があったか、私はお伺いしておりません。こんな時は何もお考えにならず、温かいものでもお召し上がり下さい」

寧々は両手で抱えていたカップを恒に手渡す。

恒の腕に鳥肌が立っているのに気付き、寧々が真夏だというのにホットレモンを差し出した理由が分かった。執務室に連れてこられてどのくらいの時間、茫然としていたのだろう。腕時計を見ると、比企にここに連れて来られてから5時間は経過していた。

彼女はの間ずっと、寄り添っていてくれたようだ。視界に入っていないかった。

「響さんって……」

「はい。以御の姉にあたります」

よくよく見ると、似ているような気がしないでもない。

長い睫毛に、整った顔立ちとパーツの派手さ。確かに以御の姉なのだろう。白色個体特有の印象的な紅い瞳が、まるで白ウサギのような彼女のルックスを際立たせた。

「比企様は……」

「あら、まあ。主はずっとそこにおいででしたのに……」

アトモスフィアを感じていた筈だが、存在にすら気付かなかった。比企は正面の書棚の梯子に腰掛けて、調べものをしていたようだった。

比企の書齋は荻号の書齋に勝るとも劣らぬ蔵書量を誇っており、怪しげな書物がインデックスをつけて整頓され秩序正しく並べられている。

「われにかえったか、藤堂。暫くは己と行動を共にしてもらうぞ。

汝の安全の為だ」

「では、俺はここに……」

「行動の制限はせん。どこへでも、行きたければ行くがいい。だが随時同行させてもらう」

比企はこちらを見向きもせず、辞書のような分厚い書物を書棚に戻した。

恒は空気を読んで、この話題を口にすべきではないと思ったが、そう思った頃には口をついて言葉が出てきてしまった。

「あの、ユージーンさんは……」

比企はどうしてもユージーンから離れられない恒につくづく呆れたように、もう非難はしなかった。

軍神がこれほどまでに慕われるという事は、あまり前例がない。だがそれは、恒の本能のようなものだ。

彼はユージーンに依存している、抗体が抗原を求めるかのように。

「ユージーン、か……。汝にとってユージーンは、肉親やそれ以上の存在だったようだな」

「俺はあのヒトに、何もしてあげられなかった」

比企はゆっくりと梯子を降りて、恒の向いに腰を下ろした。

寧々は比企が降りてきたので控えて、比企に何か耳打ちをしようと席を外す。漏れ聞こえた内緒話は、恒にあまりきつい事を言わないようにと比企に釘を刺すものだった。恒は比企とふたり、片付きすぎた明るく殺風景な部屋に取り残された。比企は寧々の忠告を意識したのか、先ほどの張り詰めたような声とは違い、穏やかな口調で彼の信念を切り出した。

「藤堂、我々は人間ではない。神はひとり何処から出でて、ひとり逝く者だ。それを悼んで泣いてはならぬ」

恒は答える事もできないまま、ただただ首を振る。

「汝は人の心に支配され過ぎている。神として在ろうとするならば、挫かれてはならぬ。前に進めぬなら、置いてゆく」

比企はまだ肩を震わせている恒の頭の上に、筋張った手を載せた。

「過去を振り返らず未来をのみ見据えていよ、汝が救えなかった者を、今度はその手で救う為に……。他者の為にこそ、真に強くなれ」

ユージーンだけが神ではない、様々な思想を持つ神々の寄り合い所帯、それが神階という組織であり、比企もまた神の支柱だ。

一理あり、正論だった。しかしそれが正論だと思えば思うほど、彼の過去を、更には彼の生そのものを否定されているように感じるのだった。

「比企様。ユージーンさんの代わりに、絶対不及者の器として選ばれてしまった赤ちゃんがいます、先ほどお話でしたね。そして、苦しんでいると……」

比企は恒を無理やり、彼女の元へ連れてゆこうとはしなかった。だが本心では彼女を何とか救いたいと考えているのだろう。

「創世者の爪痕は宿主を蝕む。ユージーンは充分にアトモスフィアを備えておったが故に、苦しまずに済んだ。だがアトモスフィアなど皆無に等しい赤子には、過重な負荷となるのだろう」

「俺……その子に会いたいです。俺は創世者の力を封じる抗体を備えていると聞きました。今の俺に何が出来るか、どうすればいいのか、あるいは何もできないのかもしれない。でも、その子の苦しみが少しでも和らぐのなら、できる限りやってみたいんです」

恒は八雲の言葉を思い出していた。ステイグマに触れることでAnti ABNT―抗体を活性化させ予備免疫を作るのだ。

どれほど熱くても、身を焦がされそうになっても、創世者の力から逃げずに触れ続ける。

そうすれば、まさにその為に生み出された恒の身体は記憶する。創世者の力という抗原に立ち向かう為に、どのような抗体を作るべきなのかを――。

恒は、荻号や比企によって恒が守られ、生かされた意味をかみ締めていた。

尽くさなくてはならない、今の恒にできる最善を。前に進むために、また歩み始めなければ。

「そうか、では行くか。己も見届けたいものだ、汝に何が出来るのかを」

比企はどこかほっとしたように、恒の決意を受け止めた。

「お願いします」

恒はがむしゃらに動き続けるしかなかった。

恐怖など考えてはいられない。油断をすると、またユージーン的面影を思い出す。彼の優しさ、恒に与えてくれた数々の救いを――。

恒は比企に手を取られて、執務室の景色が消える。

転移先の室内には絶叫とも泣き声ともつかない、赤子の悲痛な声が響き渡っていた。育児室は清潔感のある、南国のリゾートのように風通しのよい明るい部屋だ。激しい泣き声に、育児係の使徒たちはどうする事も出来ず右往左往するばかり。ベビーベッドの周囲は、神々や貢物と思しきおもちゃで埋め尽くされている。強い照明を避けるように吊られたレースの天蓋をたくりあげて、恒は一柱の幼き女神と対面した。

神々の母と名付けられた彼女は、その名に違わぬほどに美しく気品のある女神だった。

ユージーンと似ている艶やかな金髪に、翡翠色の瞳が間違いなく彼女の正当性を明らかにしていた。恒はG L ネットワークのニュースを欠かさず読んでいたから、彼女がどれほど神階に注目されている赤子か、知っている。彼女は女性なのだ、神だというのに完全なる生殖器を持った女性の女神。

史上類を見ない稀少な特徴を備え、この上なく貴重な。だが彼女は彼女の価値を、今は理解できない。

その頬には涙が伝い、眉間には不快感を示す深い皺が刻み込まれている。小さな手は何かに救いを求めるかのように宙をかき、足をじたばたとバタつかせてベッドを揺らしている。恒は不可避の苦痛を押し付けられてしまった彼女の姿を目にし、何故か無償に抱きし

めたい気持ちを抑えられなかった。

恒には当然赤子だった時分の記憶などないが、志帆梨は恒の為に病気の身体に鞭を打ち、彼女なりに精一杯の育児をしてくれたと、親戚からはそう聞いている。

アルバムの写真と書き付けられた彼女のメモを見るたび、志帆梨が恒に惜しみなく与え続けてきた深い愛情を受け止める。だが泣きじゃくるレイアには、血の繋がった存在がひとりとしていない。これが神の幼少期の姿なのかと思えば、ぞっとするほどに他人的な関係だった。

乳母がわりとされている使徒達はいるし、周囲にもたくさん控えているが、彼らは仕事として三交替制で勤務している。助けを求めるとレイア＝メーテールに手を差し延べてくれる者は、残念ながら誰もいなかった。

「苦しいのであろうな。この苦痛がこれから三年間、片時も休まずに続くのだ。それでも彼女は死ぬ事が出来ぬ。実に残酷だ」

比企はそう述べるに留まった。

アルティメイト・オブ・ノーボディは生贄にするために彼女を生み出したのではなかっただろう。だからこそノーボディはユージーンに、彼の合意の上で囃としての役目を担わせていた。

恒は彼女に手を伸べる。

レイアは差し伸べられたその手を、強い力で掴んでくる。やはり何かに縋っていたいのだ、それが喻え、母親ですらない10歳の子供にであつても……。恒は意を決して、彼女の白い産着の紐を解き、無理なく抱き上げうつぶせに寝かせた。白布が解けてその肌があらわになったとき、恒は彼女の背から飛び出してきた強烈な光に、目

を焼き付けそうになった。

彼女は激しく声を上げている。恒がステイグマを直視しているの
で、使徒が慌てて、持っていたサングラスを恒に差し出した。閃光
を発するステイグマを直視した者は、失明すると言われている。彼
等は失明を恐れて、サングラスを用意していたようだった。

「不用意にステイグマを直視するのは危険にございます。これを」
「必要ありません」

他の誰が目を背けても、恒だけは立ち向かわなければと思い、目
を見開いていた。

しばらく直視していると、光に目が馴染んできたように感じられ
る。思い起こすに、これは荻号の研究室でユージーンの背にあった
ものと同じものだ。大丈夫、恒はユージーンのステイグマを直視し
た経験がある。まだ失明はしていない。

鍵と鍵穴を暗示すると言われる、幾何学的な光の紋様だ。

複雑に刻み込まれた、ホログラムのような金色の刻印が、幼い肌
の上を這うように蠢いている。一瞬一瞬、刻々と変化する紋様。ユ
ージーンのときにはまじまじと見なかったが、ファンタジー的なも
のではなく、意外とデザインのなものであることに驚く。複数のル
ープと直線の組み合わせによって成る、あるいはレールを組み合わ
せたシンボルのようにも見えた。

創世者の体現者の証、これが彼女に激痛を齎し、彼女を囚縛する
呪縛だ。

恒は自らの掌を確認するようにつめ、歯を食いしばると、光に
侵食された素肌に右手を重ねた。ジュツと生々しい肉が焦げる音と
煙が上がり、攻撃的なまでに熱を帯びたステイグマが異常免疫とし
て、不浄のものとして烙印を押した恒の手を焼き切ろうとする。熱
した鉄板に触れているかのようなようだ。必死に堪えながらも、彼は決し

て逃げず、彼女を見捨てようとはしなかった。身体に電流を流されたような激痛が走る、熱いのか、痛いのか、それすらも感覚が麻痺してよく分らない。

恒は恒を支配する、遺伝子の住処を知らない。

藤堂 恒という神体を構成する何十億個もの細胞の内の遺伝子一つ一つに、A B N Tの抗原の情報を刻み込もうとする。アルティメイト・オブ・ノーボディの言葉を反芻する。

死を体験する事はすなわち、生を見つめなおす事である――。

比企は恒の行動に口を差し挟まず、役目を果たそうとする恒の成長に、目を見張っていた。

たとえば皮膚が炭化して使い物にならなくなってしまったとしても、肉体の半分が人の遺伝子に支えられている恒の遺伝情報を利用すれば、再生医療を駆使し皮膚を再生することは不可能ではなかった。外科医である彼は最悪の事態を想定しながら、恒の身を案じるがあまりにその手を払いのけてはならないと考える。

炭化しはじめた恒の皮膚が、焼け付きながら俄かに紫色の光を帯び始めた。懦弱だった恒のアトモスフィアが、はっきりと可視化され始めているのだ。

細胞が死を悟った時、Anti-A B N T抗体は各々の細胞の中で目を醒ます。炭化してゆく恒の掌の一つ一つの細胞から、夜光虫のように紫色のアトモスフィアが溢れ出す。

まるで夜光虫が波間に漂うときに見せる、一瞬の発光のように儚い光を、幻のように散りばめる。そうやって光る胞子のように放たれた光の屑は、彼女の素肌に降り積もり、降り積もる事で地表を覆いつくす雪のように、ステイグマを穏やかに鎮めてゆく……。

恒の肉体が破壊されてゆくと同時に生まれ出づる儚い力――。

これが、Anti-ABNT 抗体の正体だ。

” ああ……これが……”

レイア＝メーテルの背のステイグマの発光がすっかりと鎮まり、彼女の涙が頬の上で乾いてしまった頃には、恒は焼け焦げた掌もそのままだに、恒は彼女を抱き上げて思い切り抱きしめた。

「ごめん……ごめん。もう、苦しい思いはさせない」

恒は重傷を被りながらも、およそ三階の歴史上、有史以来唯一とあってよい快挙を成し遂げた。

彼は創世者の力に抗う、抗体と成りうる。それを実証したのだ。

INVISIBLEの呪縛から、彼女を一時的にとはいえ解き放った。彼は様々な思いを喉の奥に押し流しながら、小さな赤子を抱きかかえたまま座り込み、いつまでも離そうとはしなかった。恒が身に纏った白衣には、彼の流した血が伝って落ちていった。

「俺が、守るから。……守れなかった、この手で……」

熱に浮かされたうわ言のように彼は繰り返す。

その右手にはもはや、感覚など通っていないかった。

＊

その日の午前中、石沢 朱音は母に連れられ、広岡市内の総合病院の診療内科を訪ねていた。

U・I が世界中に蔓延しはじめたその頃から、朱音の不眠は日ましに酷くなり、時折錯乱して発作的に泣きたくなることもあった。母親は、朱音が背中に異常な骨を抱えているというので神経質にな

り、精神的に不安定になっているのかとも思ったようだが、医師の診察によると、どうもそのような病的なものではなかった。

何か不吉な陰が、朱音に忍び寄っているのではないか。

母はそんな嫌な予感とともに、我が子の身を案じていた。朱音は絵にかいたような優良児、真面目で明るく、賢明で母親思いのよい子だった。母親は朱音を誇りに思っていた、その事を誰よりも、朱音がよく知っていた。母親は軽自動車で田舎道の帰途をひた走らせながら、日差しの強い照り返しを受ける彼女の頬を守るように、サンバイザーを下ろす。彼女は沈黙を続ける朱音に、こう切り出した。

「ねえ。もしかして朱音ちゃん、今までずっと悩んでた事、お母さんに言えなかったことがあった？　ずっと無理してきた事があったんじゃない？　お母さんね、朱音ちゃんがずっとずっといい子だと思ってた、でも私は知らない間に、あなたによい子である事を強いてたのかしら」

母の買った缶ジュースを開ける事もなく、ぼんやりとそれを額に宛がい冷やしていた朱音は、母親の憂いを帯びた横顔を見た。

母親は唇をかみ締め、激しく彼女自身を責めているようだったからだ。

「母さん……、私、いい子なんかじゃないよ。そうならうとしてもしていなかった。これまで本当に楽しかったし、母さんの子供でよかったとずっと思ってる。でも今の私はどこか、私じゃないみたい。怖い、私の意思とかそんなの無関係に、どこかへ押し流されてしまいうそで……」

これが朱音の本心だった。夜になると、朱音が寝付こうとすると朱音の精神に何かが忍び込んでくる。こういう現象が起こり始めた

夜から、朱音は睡眠をとることに、極端に恐怖を感じるようになっていた。ユージーンと出会う前の恒が一度だけ口にした、”眠ってしまうと、自分が消えてしまいうさだ”という言葉が、今は他人事とは思えない。

朱音はただ、一人になることが怖かった。

母が先ほど薬局から、何の薬を受け取ったのかは分かる。睡眠導入剤だ、精神安定剤も処方されているかもしれない。自分は、石沢朱音という人間は異常なのだというレッテルを貼られたような気がした。銀色の少女と出会って以来、いつも気分が優れない。ふと気を抜くと眩暈がする。

闇が怖い、しかし光は眩しすぎる。

「私、ずっと私だよ？ 私でいられるよね、母さん。また昔の私に戻れるでしょ？ ねえ」

母はハンドルを大きく切り、黙して頷くのが精一杯だった。

「次の診察は、火曜日よ。大丈夫、偉い先生にかかっているんだもの。必ずよくなるわ」

「私、病気じゃないよ……母さん。私を見てよ、私は何も変わっていない、途切れる事無く、ひとつながりの私なんだよ。何かがそれを、私が私でいる事を許さないの」

朱音は母親が、正常な頃の朱音と現在の朱音に明らかな線引きをしている事に、疎外感と孤独感に苛まれた。

病気ではない、私は狂ってはいない……朱音の引き裂かれそうな心の声は、母親には届かなかったのかもしれない。そう、たとえそれが実の母親であろうと。

「先生に、会いたい……」

「？ 高橋先生のこと？」

高橋とは、朱音の担当の精神科医だ。彼女は違う、と首を振った。
「違うの。ユージーン先生。会いたいよ……」

毎日のように辛い思いをし続けてきた、壮絶な日々を生きてきた
恒を救った彼は、忽然と姿を消している。

彼ならばこの状態を、何と言ってくれるだろう。そして彼は、ど
のように朱音を救ってくれるのだろうか。

「そうね……。ユージーン先生は、どこへ行かれたのかしら」

車が家のガレージに滑り込むと、弟が外に遊びに出て行った。母
親は部屋に入り、すぐに壁掛けの受話器を取って電話をかけはじめ
た。留守番電話に、九州の母親の実家から用件が録音されていたの
で、折り返し電話をかけはじめたのだ。彼女の長電話は小一時間、
延々と続くことだろう。

朱音は電話にすっかり気を取られた母親の目を盗んで、ポケット
にチョコを詰め込むと家を出ていった。

土曜の2時からピアノのレッスンの予定があったものだが、習
い事はこの二週間、母親が断りの電話を入れて休ませていた。彼女
の足は自然と社務所に向かっていたが、ユージーンが不在だという
ことは、改めて確認するまでもない。彼女はただ徘徊するようにぶ
らぶらと歩きながら、目的地を見失っていた。

ようやくたどり着いた社務所はやはり、もぬけの殻だ。朱音は仕
方なく社務所を通りすぎ、用水路の欄干に腰掛けて呆然としている
と、農具を肩に担いだ松波夫人とばったり会った。

「こんにちは。今日も暑いねえ」

「……」

朱音は松波夫人の言葉を完全に聞き逃していた。松波夫人はいつ
も欠かさず元気に挨拶をする朱音が何故か、別人のように無視を決
め込むので驚いて、彼女を心配した。

「アカネちゃん！」

「あ、ごめんなさいおばちゃん。ぼっとしてて」

朱音は我にかえり、取り繕おうとしたが、朱音の無駄な努力は無駄に終わってしまった。

「どうしたの？ らしくないわ」

風岳村の村民は田舎気質で人懐っこく、お節介だ。

松波夫人も例に漏れずそんなおばちゃん気質で、何か異変があったのかを聞きたがった。

「おばちゃん、ユージーン先生をさがしているの」

「あら、何か用事？ ついさっきいたわよ」

朱音は興奮なあまり、目を見開いて欄干から飛び降りた。

「おばちゃん、どこに」

「おばちゃんの隣の家にね。オゴウさんっていう外国人が住んでるの、荻号さんがついさっき神様を介抱していたわ。倒れていたんですって」

「わ、わ、わかった。行ってみる」

松波夫人は、あっという間に姿が見えなくなってしまった彼女を見送り、ほっとしたように微笑んだ。

女子ではクラス一の俊足を持つ、朱音の走りは驚異的な速さだ。希望が見えてきた、ユージーンにさえ会えれば、何とかなるような気がした。

彼なら何とかしてくれる。息せき切って、彼女は松波家の隣の、つい先月まで空き家だった家に駆け込み、迷惑もかえりみずインターホンを連打した。暫くしてガラス張りのドアが開くと、中からは赤茶けた長髪をした、怪しい細身の外国人が出てきた。その風変わりな様子に朱音は面食らったが、あれだけインターホンを押してしまっただけで、逃げ帰るわけにもいかない。

どうしよう、松波と一緒に来ればよかった、そう思っても仕方ない話だった。

「は、Hello……My name is Akane Ishizawa:」

彼は朱音を嘗め回すように、頭から爪先をじろじろ値踏みするようにつめた。

彼女は空色のワンピースを着て、どこにでもいる普通の少女の姿だと朱音は思うのだが、彼は子供があまり好きではないのか、怪訝な顔をして朱音を見下ろしている。

その表情が朱音には気になった、彼を訝しがらせるような、変な格好をしているのだろうか。彼が片手をドアに掛けて覆いかぶさるような体勢でいるので威圧感を感じ、彼女は身の危険を感じて一歩後ずさった。

「英語でいいのか？」

「あ、日本語で！ 日本語でお願いします！」

男の発言に朱音は違和感を感じつつも、彼があまりに流暢な日本語を話すので、日本語での会話を要求した。

「お前、誰の使徒だ？ 上に上がり損ねたのか」

「何の事ですか？ 私は、ユージーン先生に……」

「そうか、ちょうど上に上がるんでな、連れて行ってやるよ」

彼はぶつぶつとそう呟いて、玄関扉を全開にして朱音を招き入れた。松波夫人はどうしてこんな男に家を貸し出す事を決めたのだろう。何もかもが奇怪だ。

「……あの、何のお話をしているんですか？ 私にはさっぱり分かりません」

「まあいい、中に入れ。ユージーンは中にいる」

朱音が中に入ると、こざっぱりとした居間にごろりと無造作に寝かされているユージーンがいる。一体これはどういう状況なのだろう。

その寝顔は穏やかだが、朱音が駆け寄って揺さぶっても彼は微動だにしない。まるで死んでしまったかのように。

「ユージーン先生は、どうしたんですか?!」

「今から神階に連れて行く。お前も戻るだろ、つかお前、誰の使徒なんだ?」

荻号は朱音の腕を掴み、ユージーンを肩に担ぎ上げた。

朱音は荻号の言葉に一抹の不安を感じたが、何かを言い返す余裕もなく浮遊感がして、次の瞬間には薄暗い部屋へと景色が変わっていた。

朱音は肌寒さを感じる。そこは中世の魔術師の実験室のような部屋であり、怪しげな実験器具や、対照的に近未来的な機械が処狭しと並べられていた。

床に散乱する書物の山。一寸先は闇になっていて、部屋の全貌が見えない。足音が響き渡り、どこからともなく水音や機械の駆動音が聞こえてくる。

朱音は辺りを見渡し、大変な場所に来てしまったのではないかと怖くなった。荻号は部屋に電気を灯しもせず、ユージーンを担ぎ上げたまま巨大な棺桶のような装置の中に、スーツのまま放り入れ、毒々しい青い液体の中に沈めてしまった。ゆらゆらと、無抵抗のユージーンは水底に沈んでゆく。

大きな水しぶきが上がったのに気付いた朱音は、柩にしがみつこうにして中を覗き込んだ。不思議なことに、彼は水に浮かないのだ。朱音は水の中に手を差し入れて伸ばしたが、棺の底が深く届か

ない。荻号は柩の隣にケーブルで接続されていた端末を起動した。真っ暗な部屋に、3Dで表示されるモニターの青い光が折り重なるように、極小フォントで表示され、煙のようにパラパラと消えてゆく。

彼がプログラムを入力し、空中に浮かんだエンターキーを叩くと、蓋が自動で閉ざされた。

彼は何をしようとしているのだろう。朱音は荻号の腕にしがみつき、必死に訴えた。

「やめて、先生が窒息して死んじゃう！」

「ユージーンは脳死したんだよ。肉体の死を避けるためにこれから三時間をかけて、こいつを凍結させる」

「脳死……ですか」

朱音は頭が真っ白になってしまった。

「ユージーン先生……」

朱音は柩の側で泣き崩れた。朱音が触れている柩は荻号のコマンドを受けて、徐々に冷気を帯びてくる。

柩の側面にはめ込まれている窓から中を覗き見ると、青い溶液が少しずつ凍りはじめていた。荻号は泣きじゃくる彼女を助け起こすと、朱音は見ず知らずの男にしがみつき、彼の腹の辺りに顔を埋めてわんわん泣いた。

「も……う、終わりだよ……」

「何が」

荻号は冷静に問い返す。

長瀬といい、この少女といい……どうも、女に泣きつかれる性分

なのだなとそろそろ彼も理解してきた。

逆に言うと、荻号はその奔放な言動から様々な女性を泣かせてきたという事だ。彼女らは人であり、神であり、使徒であった。

「ユージーン先生がいなくなったなんて……」

「ユージーンばかりが神じゃねえだろ。神階に戻れ、神は腐るほどいるんだから」

「何で私が……天国に行かなきゃいけないの」

彼女は不意に彼が繰り返し使う、神階という言葉が気になった。神階に戻れという言葉は、まるで朱音がもともといるべき場所だという風に聞こえる。しかし彼女は気付いていなかった、一瞬のうちに転移したこの部屋が既に神階の一角であるという事に――。

天国に至る道程は、荻号に限ってはコンマ数秒だ。

「お前、人間みたいな事言うなよ」

荻号は朱音を宥めようとせず、ズケズケとそう言う。荻号は彼女にマインドブレイクをかけていなかった。かける必要すらなかったからだ。

「私、人間ですよ？ 何を言ってるの」

「お前人間じゃねえぞ、何だ？ まさか知らなかったのか？ こりゃ傑作だ。お前今までどうやって命を長らえてたと思うんだ、神に縋って生きてたんだろ？」

朱音はあまりに衝撃的な言葉に、さきほどまでぶらさがっていた涙が自然と引っ込んだ。

彼女はそう、ただ彼女の耳を疑う事しかできなかった。

「……何？」

「使徒だよ、俗っぽい言葉で言えば天使ってやつだ」

彼の言葉が、朱音の心に突き刺さった。どこかで彼の言葉を全否定したいと願う一方で、朱音の中で、すべてが一瞬にして繋がったような気がした。

すると……背中の一對の異常な骨、あれがまさか……。

「私の背中……羽根が生えようとしてたの?! お、お願いします、嘘だと言って下さい」

「冗談で言うかよ、何が悲しいんだ? 神階に戻って新たな神んとこに就職して、そこそこ幸せに暮らせればいいだろ。今から神階に連れてってやるから、他の神につけ。ユージーンはもうアトモスフィアを出せん。そうするしかないんだ」

朱音はこれまでの短い人生を振り返る。

普通の家庭に生まれ、何不自由ない生活を送ってきた。村のみんなと普通に楽しく遊んで、勉強もほどほど、両親や家族も普通で、平凡な少女時代を過ごして……。

「私、人間として生まれました、風岳村に家があって、家族がいて……幸せに暮らしてました。天国に連れていかないで下さい、人間として生きていきたいんです」

「そりゃ無茶苦茶だ、いいか。使徒は神のアトモスフィアを喰って生きてるんだ。誰でもいいから神にアトモスフィアを分けてもらわなければ餓死するしかないんだ、ユージーンは風岳村を去った」

彼女は再び涙が込み上げてきて、いっそう彼にきつく抱きつく、荻号を真っ直ぐに見つめてぼろぼろと涙を零しながら彼に訴えかけた。

彼は分からない言葉ばかり浴びせかけて、朱音の心をメチャクチャに引っ掻きまわす。

「アトモスフィアって何ですか? そんなものがなくても、私は飢

え死になんてしません。毎日、お母さんのご飯をたくさん食べてます。野菜も残さずしっかり食べてるんです。大好きなオムライスも。私は神様に縋って生きて来たつもりはありません、私の家族や、友達や、先生達や……大事な人達に……」

言いながら、彼女はまたボロボロ泣いていた。おいしかった……母の手料理、いつも、お腹をすかせて家に帰った。食事をすれば満腹になったし、アトモスフィアなんてものを食べたことは一度もない。

荻号は肯定も否定もせず彼女の話をじっと聞いていた。

どんなに高栄養の食物を食べても、どんなに野菜を取ってビタミンを補おうとしても、使徒は神の傍を離れると1ヶ月もたずに餓死する。彼女の身体からはほのかなユージーンのアトモスフィアの気配がした、それ以前には織図の、うっすらと恒のアトモスフィアも感じる。ごくごく希釈されている様子から、注射によって接種されたものであろう。

彼女の肉体は、複数の神々のアトモスフィアによって支えられていた。だが、アトモスフィアは放射性物質であるがために、いつまでも体内に留まってはくれない。放射性壊変を起こし、減衰してゆく。だから常に新たなアトモスフィアを補わなければならない。それは使徒の生存にとって必須の要件だった。

「だから、私を天国に連れていかないで下さい。家族から引き離さないで下さい」

「会ってみると分かんが、恐らく義理の家族だぞ」

「関係ありません!」

「お前は、神の傍らにいないでは生きてゆけない。事実から逃げる事は出来ん、死ぬんだ。脅しではなく事実餓死するんだよ、それでも地上に残りたいのか」

彼女はガタガタと肩を震わせながら、鼻水を啜り上げ、震える声で搾り出すようにこう言い切った。

「残ります」

荻号はそう言って決意を固めた彼女を、まるで父親のようにきつく抱きしめた。

「それだけの決意があるなら、俺の使徒になれ。救ってやるよ、石沢 朱音」

朱音はきつく抱きしめられたまま、放心したまま息をのんだ。

胸のうちが満たされるように感じたのは、心理的なものではない。もっと本質的な充足を感じる。こみ上げてくるこの思いは何だろう。

「感じるか？ 熱い力を」

荻号は彼女に、彼女が許容できるだけの最小限のアトモスフィアを与えながら、安心させるように穏やかに囁く。柔らかで小さな体を、その震える肩を、彼はなんら疾しい思いを抱くこともなく抱擁する。

「……胸が……」

感じる。高鳴る鼓動を。

「それがアトモスフィアだ」

信じられない。これは朱音が知らない感覚だ。至近距離から浴びせられた強いアトモスフィアは、彼女の使徒としての本能を揺さぶった。これが必要な全てのだと、否定する間もなく押し寄せ、インプリントされる。ああ、勝てそうにない、この力には抗えない。胸が熱い……。

「俺は神だ。お前を地上で生かすことのできる、唯一のな」

闇の中で天からそそぎかけられた一縷の希望。思いがけない人物から与えられた優しい言葉を、朱音は夢心地で聞いていた。

外伝？闇医者、萩号 要とニューヨークの夜―千夜一夜1（前書き）

10話ごとに外伝はさみます。時期的には、1990年代ぐらいです。

ジーザス涙目・・・。

外伝？闇医者、荻号 要とニューヨークの夜―千夜一夜1

「てことは、そっちは10時か」

「ああ、ここでは夜だ」

闇神、荻号 要は満足そうに誰よりも一番高い、神の視点で罪に染め上げられたかりそめの街を見下ろし、それに対してもなお死神は念をおす。

「マン・ハッタン（人工島）に、夜や闇なんてあるかよ。あんたも、あと百年で廃業かもな」

織図 継嗣は受話器ごしに親友を皮肉って言ったのだろう。

この100年で真の闇夜が、驚くほど侵食されてしまったのと引き換えに、ニューヨークのマンハッタン、夜の底の人工銀河が何の危機感もなく人間の手を離れてその栄華を誇っていた。このピッチでの開発や再開発が続けば、百年どころか、次のディケードで一般にいう海と夜がなくなってしまうだろうというのも、あながち冗談でもないらしい、織図はそう断言していた。

荻号のこの地区での仕事が激減してゆくに反比例して、織図のそれはこの地区では有史以来というピークに達していた。

「何、東京も似たようなもんだろ。俺はしばらく廃業はなさそうだ、と思うが」

織図からしてみれば丁度東京都庁上空からの着信である。

鳴り止まないヘリコプターの騒音が不穏な曇り空を掻き乱すのに一瞥をくれた、強がりかとも思える発言の真意を、もう数百年の付き合いになるこの親友は、十分に踏まえていたのだった。

「そりゃまた……救えねえ」

どうやら人間というものは、手当たり次第に闇を潰して行く換わりに、心の闇を深くしてゆくだけの生き物らしい。

一方的に着信し、一方的に受話器を切る織図 継嗣から連絡があった事など、何年ぶりだろう。彼はこのところ生物階での仕事に忙殺され、連絡もメールでしかよこしてこなかったのに、生物階に降下したとたん、絶妙のタイミングでの連絡だ。荻号はこの街にすっかり緩和されゆく携帯の、不通を告げる電子音の鳴る携帯を切ることもせずに、眠らない街を見下ろした。

夜の喧騒の中にその姿を調和させ、最後の麻薬入り煙草を苦々しそうに喫するのだった。

「夜は……更けゆく一方だと思うんだがなあ」

＊

とくに任務があつて生物階に降下したのではなかった。

彼は今からおよそ500年前に、1000年分の仕事、つまり西暦2500年までの仕事のノルマを片付けてしまつて、日がな一日何をすることもなく煙草を吸い、本を読み、まるでニートのようになぶらとしていた。また500年後に仕事をすればよいだけだ、彼がまだ生きていようと思えば、だが。

13柱分の定員を奪うのかといつて神階の門から厭味を散々言われながらも降下して、何をするでもなく地上を見つめていた。

「上から見ているだけじゃ、面白くもないな」

煙草を吸い終えると、荻号はそれを律儀に携帯灰皿におさめ、マンハッタンから少し離れた場所にある、セントラルパークへと足を運ぶ。

巨大な森のような公園は、ひっそりと静まり返っていた。

荻号は露店で買ったマルボロのメントールの煙草をふかして、セントラルパークのベンチでだらしく寝そべっていた。人の煙草は様々な味があって嗜好品としては面白い分、軽すぎて吸った気にはならないのだが、人間社会で麻薬入り煙草は違法だ。このあたりはよく訓練された麻薬犬が、私服警官とともにうろついたりする。公園を通り掛かる多くの歩行者から見れば、彼は浮浪者のようにしか見えなかっただろう。犬には吠えられるし、子供には指をさされた。

荻号は小一時間の間、通り掛かる人々を漫然と見ていた。夜空を見上げると、ひっきりなしに飛行機のランプが往来している。

"なんだ、ここは星が見えねえんだな"

人間は宇宙に浸ることを、とつくに忘れてしまっていた。

それで彼等は宇宙の中のいち生命体にすぎないという分というものを忘れ、これほど傲慢に振る舞う。

だらんと足を伸ばしていた荻号は、すぐ後ろの低木の繁みから、男が勢いよく飛び出してくるのを見た。彼は息をぜいぜい切らせながら、もつれる脚を懸命に動かし、全速力で走り抜けていった。男はヒスパニック系の顔立ちで、まるでマフィアのような派手でセンスの悪いスーツを着ていたが、何かに怯えきっていた。男の思考回路があまりにも混乱していたために、マインドブレイクすらできなかった。荻号は異様な光景にベンチからようやく起き上がり、男が走ってきた先を見た。

赤いレーザー光が、ちらちらと繁みの影からのぞいて、どこまでも男の背に向けられている。レーザーサイトの光が足を止めた男の背中に停まった。

「いかん……」

荻号がそう呟いたのと、銃声がしたのは同時だった。銃声が聞こえた瞬間、男は頭をかかえてうずくまった。だがいつまでも男に苦痛は訪れない。荻号が男の背を守るように背後に立ったからだ。

ガアン！

ガアン！

銃声はすぐさまたて続けに2発も続いて、さらに5、6発は発射されている。弾丸は荻号のフィジカルギャップに一つ残らず粉碎され、彼等から随分離れたところに碎け散っていた。

「おい、銃を寄越せ！」

男は振り向き、自分を庇うように立っている浮浪者のように髪をのぼした個性的な男を見上げた。どうやら無事のようにだ、狙いが外れたのか、あるいは彼が防弾チョッキでも着ているのだろうか。

「聞こえなかったのか、まだ狙われているぞ。俺の額に、赤いのが止まってやがる。銃を寄越せ、お前が懷に忍ばせているやつをだ」
「な！ どこから狙われているのかもわからねーのに」

「見えている。あのビルの屋上に二人。アサルトライフル SR15だ」

「う、撃ったって届くものかつ！」

「いいから貸せ。逃げている間に撃たれるぞ！」

男は荻号に拳銃とマガジン（弾倉）を渡した。米軍で広く使われているベレッタM92SB—fだ。なるほど、盗品というわけか……。

荻号は盗品であることを見抜いたが、それ以上に何も思うところはなかった。マガジンをリロードしてゆっくりとスライドを引き、はるか上空に向けてぴったりと銃身の照準を合わせた。彼が目標としている距離は数百メートルはある、ハンドガンの射程距離である数十メートルをはるかに超えている。しかし彼はそんなことも構いなしに、片手で銃を構えると、フロントサイトとリアサイトで照準を合わせることもなく、カツンとトリガーを軽く引いた。

ダーン！

荻号は天にたった一発の弾丸を放った。

荻号の額に蛍のように止まっていた赤いレーザー光はその瞬間、ぷつつと途切れてなくなり、辺りは硝煙の煙がまだ漂っていた。ようやく静かになったので、ハンドガンを彼に返してやった。拳銃は一度だけではなく必ず二度撃つものだ。荻号は一発しか撃たなかったが狙いを外さなかったらしく、木の上で眠っていたらしい鳩が何羽か飛び立った羽音がした以外は静かになった。

「や、殺ったのか！？」

「殺っちゃいねえよ。銃口に弾をぶち込んでやっただけだ。手ぐらいは怪我したかもな」

「射程が、届く筈がねえ！」

男は恐れおののいている。

「届いたよ。もう撃ってこないだろ？ さ、早く行け。ぼやぼやしてると警察が来るぜ」

荻号は銅色の長い髪の毛を雑に撫で付けると、また煙草に火をつけた。

男は信じられないといった顔をして、そして這いつくばって荻号の脚にしがみついた。

「あ、兄貴！ 助けてくれえ！」

彼はだだをこねる子供のような声を上げ、がっしりと掴んで離さない。荻号は迷惑そうに帽子に隠された眉をひそめた。

「断る。俺はお前の兄貴でもなんでもねえし。赤の他人だ」

「じゃあ、何故助けてくれたんだ」

「スナイパーが下手糞だったからな、あんなに無駄に撃ってたら民間人が怯えるだろ？」

彼は引っ張っても踏み付けても離れようとはしなかった。力ずくで引きはがす事はできるが、荻号の握力では骨折させてしまう。銃声を聞いた市民が通報したのか、パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「おい、勘弁しろよ。俺まで警察に世話になりたくはない」

荻号は兄貴、こっちですと呼ばれながらイエローキャブに寄せられ、暫く郊外に走った後、古いアパートの一室に連れて行かれた。これ以上拘わり合いになりたくはなかったが、腕を握って離さないで仕方がない。ガタガタと揺れるエレベーターで案内されたのは、廃屋のような汚い部屋だった。狭い間取りには、テーブルとベッドしかなく、貧しさが見てとれる。壊れかけたベッドには、頭まで布団をかぶって誰かが寝ていた。布団の膨らみは大人ほどのものではなく、小さな子供であろうという事がうかがえた。

「こんな所に連れてこられても困る。お前は見るからに堅気ではないからな、早々に暇を乞いたいところだ」

「堅気でないのは、お互い様だろ兄貴。俺に雇われてくれないか？ 金ならある！」

「雇う？ 俺をか？」

男はキッチンのオープンの中に隠してあった金庫の中から、大量のドル札を取り出してきて荻号の前に積み上げた。

全て新札ばかりで、帯がついていた。荻号はそのうちの一つを取りあげ、本物かを確かめるようにピンピンと指ではじく。男は荻号の顔をうかがっていた。偽札ではないようだが、荻号にとっては人間社会の紙幣など紙切れのようなものだ、まったくもって金というものに興味がないのだから、報酬として成立しない。

「これはきれいな金じゃないだろ。壁のはがれ掛けた寒々しい部屋には似つかわしくない、過ぎた額だ。強盗でもやってきたんじゃないのか」

「さ、さすが兄貴。当たらずとも、遠からずといったところだ。これは俺のいるグループのヤクをバラして売りつけてきた金だが、本物だ。兄貴頼む、これでボディーパーガードをしてくれ。あんたは腕の立つスナイパーだ、あんたの力が欲しい」

「ほう、それでお前は狙われていたのか。俺はスナイパーではないし、金だとか地位だとか名誉、さっぱり興味がなくてね、他を当たってくれ……それからお節介かもしれないが、裏稼業なんてやめちまいな。息子を泣かせるか死なせることになるぞ」

荻号はこんな話をしている時間がばからしい、と思って席を立った。何を急いているわけでもないが、何の義理があつて裏稼業の手伝いをせねばならないのか。下手に助けてしまったものだから、面倒なことになった。いつもそうだ、と荻号は思う。彼が何かをするたびに、周囲は過剰に反応する。

先ほどだってたった一発、銃を撃っただけだ。それ以外の事は何もしていない。フィジカルギャップに弾丸が当たって砕けてしまっただけで、荻号自身がした事は人差し指を2cmほど手前に引いただけだ、それなのに……。

やはり生物階は億劫だな、と彼はまたため息をついた。

「その子のためなんだ！ 俺達は命を狙われている！」

席を立った荻号は男にがっしりと肩を掴まれて、強引に席に戻されてしまった。どこからくるのかと思うほど強い力で、男の剣幕には鬼気迫るものがあつた。荻号はちらりとベッドの上の息子を見遣つた。彼は先ほどとまったく同じ形の小さくこんもりとした山を作つていた。

「自業自得、という言葉を知っているか？ お前はどこでも撃たれて勝手に死ぬがいい、だが、息子には生きる権利がある。遠く離れた、施設に入れるんだな。親はいなくとも子は育つ、お前のような親なら居ない方がいい」

「兄貴、話だけ、話だけでも聞いてくれないか」

その男、ダニエル・ストーンはやはり、とあるマフィアの下部構成員で、これまでは悪行の限りを尽くしていた。

殺しもしたし、麻薬も強盗もやった。しかし血も涙も知らなかった彼が、抗争中のある組織の男を殺した事により大きく運命を狂わされてしまった……。バスルームで彼の頭を撃ち抜いて殺した時、たったひとりの彼の息子がバスルームの隣の寝室にいた。ダニエルは息子の隣で父親を、殺してしまつたのだ。

息子は父を殺した殺害者に怯え、泣きじゃくっていた。その声があまりに大きいので、銃殺を試みるも弾切れ。仕方なく彼は泣き止ませる為と口封じにシーツを頭からかぶせ、その場から連れ去つてかえってしまった。少年は生きるために、父親の敵と共に暮らし始めた。ダニエルは結局、少年を殺せなかった。

少年はダニエルに憎しみの眼差しを向けることもなく、徐々になつていった。幼すぎた少年には、父親の死が理解できなかったの

だ。4歳になった少年は、ダニエルの事を実の父親だと思っている。そんな無垢な少年にすっかり汚れてしまっていた心を洗われたような気になったダニエルは、下らない因縁で彼の父親を殺してしまった事を、いつか彼が物心がついた折に打ち明け誠意をもって謝罪し、父の敵を討つかを選ばせなければならぬと思っていた。

少年が頭痛を訴え嘔吐を繰り返し、やがて足が麻痺し遂にはベッドから立てなくなってしまったのは、そんな事をダニエルが考え始めた矢先の事だった。病院に行かなければならない、しかし、裏世界に生きるマフィアである彼が、病院などという場所に彼を連れてゆくなど、できる筈もなかった。無知なダニエルでも、その麻痺が脳や神経からくるもので、手術を必要とするという事ぐらいはわかった。

身寄りのない少年の人生を、ずっとベッドの上で過ごさせたくない……そう考えたダニエルは彼の所属していた組織の金に手をつけ、高額な報酬を要求する闇医者に手術を依頼したのだそうだと。

「だから、俺はどうなってもいいんだ！ この子を助けたい！ 手術が終わるまでの間、この子を守ってくれ、兄貴！」

荻号は無言で席を立つと、軽く腰に手をあてたまま少年の熟睡しているベッドの傍に歩み寄り、彼が目覚まさないよう配慮しながら布団を少しだけめくり、大きな手を少年の小さな頭にそっと置いた。

「Medulloblastoma（髄芽腫）、ステージ？。小児に多く発生する脳腫瘍だ、播種もある、運動野に影響しているんだろうな。水頭症状も出ているようだし……」

「なっ……何で分かるんだ！」

「まあ、心得があってね」

荻号はそう言ったが、彼は頭に手をやっただけだ。占い師や霊能

者の類ならお断りだが……彼は至って医学的な知見を述べている。
ダニエルが依頼した闇医者 of 診断と同じ見立てだった。

「俺が、俺が病院に連れて行かなかったから——！ 手術は1週間後だ、それまでもちこたえてくれれば……」

「無理だな……手術をしたとしても、もってあと数ヶ月だ。手遅れだよ」

荻号は腕組みをし、歪んだ愛情と親心が芽生えた、この哀れな人間を無感傷に見つめていた。

「その闇医者ってのは、この状態を診てオペをやると言ったんだな？」

荻号は何かを確認するように、それだけを尋ねた。

＊

荻号はダニエルの1時間にもわたる説得の末、しかたなく警備を引き受けることにした。生物階に降下していられる期間はわずか10日だけだ。特に何かをしようと思って降りたわけではなかったが、他の国もぶらりと寄ってみるつもりだった。悩みを抱えた人間は世界にごまんという。

神がこの人間だけに慈悲をかけ、彼を救おうとすることは自己満足以外のなにものでもない。誰を選び、誰を救うか。それは陰階神ではなく陽階神の仕事だ。そういうわけで、たった一件の面倒ごとに7日も時間を割かれるのは心外だ。

「ひとつ言っておくが、一週間後の開頭を伴う大手術は、成功の見込みはないだろうぜ。闇医者は脳外科なんてやらないだろうし、正

規の医者でも無理だ。播種が多すぎる。命を狙われながらも汚い金を積み、安静にしていればまだPSパフォーマンステータスのあるこの子のQOLを著しく下げてまで、殆ど望みのない可能性に賭けたいのか？」

「そうだ……兄貴にはわからんだろうさ」

ダニエルは荻号をその風体から、浮浪者でなければミュージシャンかクラブだと思っていた。まだ20歳代に見えなくもない荻号に、子供を思う男親の気持ちなど分かる筈がないと考えていた。もっとも、ベッドですやすやと眠っているこの小さな布団の塊は、彼の息子でもなんでもない、赤の他人だ。ダニエルにとってこの小さな塊が、はじめて彼を必要とした唯一の存在だった。

幼い少年は、ダニエルの保護と愛情を求めていた。たかだか二人の人間のために……とは思えど、荻号は子供の命に免じて引き受けることにした。そうなると、先ほどは金などいらないと言ったものの、やはりただ働きはごめんだ。荻号は彼から何か対価を得るべきだと考えたが、よい事を思いついた。

「俺は慈善事業というものが、死ぬほど苦手だね、報酬はきっちりいただく」

「これで、足りないのか？」

ダニエルは机の上に積み上げたドル札をぽんぽんと叩いた。ざっと見ただけでも数万ドルはある。

「金はいい。お前の持っているLSDで手を打とうか。ブローカーまがいの事をしていたんだろ？」

「ヤクはもう売っちゃまって、持ってねえ！」

「自分で使う為に別にとっておいたのがあるだろう」

この男は、何故そんなことを知っているのだろうか？　ダニエルは彼に心のうちを読まれているかのような薄気味悪さを感じた。

「あれはもう使わねえ。俺の分じゃない、この子が俺の手を離れるまでの金にしようとして……」

「じゃあ尚更、いらないだろ。ヤクは俺が引き受けてやる。手術が終わったら子供は施設に預け、お前は刑務所に行って更正するんだ。その後はヤクなんか売らずに真面目に働き、子供を養うんだな」
「くっ！」

荻号はダニエルの持っていた麻薬を要求した。それを最近味が薄くなってきていた自分の煙草に新たにブレンドして味を変えてみようと思ったのだ。荻号の持つ麻薬はを人間が吸うと、5秒も経たないうちに死んでしまう猛毒だ。人間の使うLSDなど、荻号にとってはほんのスパイス程度にしかならない。パスタにチーズをかけるかかけないか、ステーキに胡椒を振るか否か、その程度のことだ。LSDがあってもなくても、手に入っても入らなくてもよい、彼にとってはそれだけのことでしかなかった。

だが荻号はダニエルの為にも、これを機に裏稼業から足を洗った方がよいと考えた。麻薬があれば、必ず犯罪に巻き込まれるか自分から起こしにゆく。違法性のあるものは没収だ。できれば拳銃も没収してやりたいが、護身用の銃なのだろう、命を狙われている今取り上げるわけにもいかない。

「兄貴、これを使ってくれ」

先ほど荻号がダニエルから借りてスナイパーを撃ったベレッタM92Sを渡された。

陰階神 4位 闇神、荻号要には玩具のような道具は必要ないのだが、イミテーションとしてなら使える。これを相手に向けて構えたり突きつけたりするだけで、相手より優位に立てる。荻号はマガジンを受け取り、だらしなく着た黒い聖衣をめくって背中にぐいっ

と差し込み、腰に巻いた白いひらひらとした神気遮蔽布できつく縛った。荻号はその強大なアトモスフィアを自制するため、神気遮蔽布を常に身に帯びている。ハンドガンの中には、荻号の所有する第二の神具、慎刀しんとうが差し込まれていた。荻号はこれで三つもの武器を身に帯びたが、どれ一つとして彼に必要なものではなく、彼自身の持つ戦闘能力に及ぶものはなかった。荻号はカーテンもなく寒々しい窓の外をしきりに気にしながら尋ねた。

「それで、ここに1週間いるつもりか？」

「この場所は一味の誰にも知られていない。ここで一週間耐え切ればいいんだ！ 頼んだぜ、兄貴！」

「兄貴じゃないと言ってるだろ」

「じゃあ……」

「ウォルターだ。細かい事は訊きつこなしだ、お前だって、だろ？」

荻号は置換名でなく、通名を名乗った。生物階に関与する機会が少ない陰階神がこの名を名乗るケースは殆どないが、ここは日本ではないのだから日本名のような置換名を名乗ると不自然だ。ダニエルは荻号の手をとって硬く握手をした。

このチンピラは誰の右手を握っていると思っているのだろう、と荻号は眉をしかめた。

「よろしくな、ウォルターの兄貴」

「……まあいい。いくつか訊きたい。お前は一味の誰かに、この子の話をしたことがあるか、次に、麻薬をバラして売ってから、何日目だ？」

「話した事？ ああ、そりゃ子持ちの舎弟には話した事がある。麻薬を売ったのは2日目だ」

「お前……もうちょっとその頭、何とかならないのか？ 闇医者に

金を払うためにヤクをバラすなら、できるだけ直前、最悪手術中にバラせ！ 何故そんな早くにやったんだ！ 一週間も逃げ惑わなくてはならないんだぞ。しかも現金を家に置いておく神経が信じられん、殺しに来てくれと言っているようなものだろう！」

「ここは俺のセカンドハウスだ、家にしては殺風景だろ？ この場所には誰にも知られていない。この子の病室用にレンタルしたんだ。その辺の事は、一応は考えた」

荻号はともこの男が”一応考えた”とは思えなかった。

人間とは何と愚かな生き物なのか、荻号がもし大金を調達するのなら、こんな馬鹿な方法は取らない。至って合法的に、しかし脱法的に調達するだろう。

「もう一つ質問がある。その闇医者ってのは、ニューヨークに何人いる？」

「そのドクターだけだ」

荻号はふん、と鼻を鳴らした。じゃあ、そこじゃないか。逆に言えばそこしかない。子供が病気を患っている事が知られていて、ここには追っ手がこない。マフィアである彼、病気の子供、そして盗まれた麻薬、闇医者はNYにひとりだけ……追っ手は一週間後の、手術の日を狙って金を取り返しにくる！

わざわざダニエルを追跡をして金の隠し場所を調べたり吐かせたりするより、耳をそろえて金を持ってきたところを奪う方が手っ取り早い。確実にだ。恐らく一週間後、手術室の扉を開けると、数十人の銃を構えたマフィアの一団が中に居て闇医者を殺すか縛るかして黙らせておいて、次の瞬間にはダニエル自身も子供も蜂の巣にされる。彼等が持ち帰るのはトランクに入った札束だけだ。

「ダニエル。今頃奴らは闇医者と通じるか脅すかして、お前をおび

き寄せる算段を整えているだろうぜ……手術室の中に入った時が、お前とその子供の最期だ」

「何だと！」

「そうだろう、外でお前を殺したって何のメリットもない。金の在りかも吐かないだろうし、金を捜すのも面倒だ。さっき撃って来た奴らは頭に血が上った馬鹿な連中で、少し考えのある奴なら、お前が闇医者に金を渡す時に金ごとお前を殺す方が賢明だと気付く筈だ。俺の言う事が正しければ、明日以降、まったく追っ手はつかなくなるだろう」

「……そんな……！！ それじゃ、手術だってやってもらえねえ！」

この子は、ジョンはどうなるっていうんだ！」

「万事休す、だよ」

荻号はダニエルの顔を一瞥し、非情にもそう言って捨てた。ダニエルは少年、ジョンの枕元に据え付けた小さなロザリオをにらみつけていた。主なる神は、何の罪もないたったひとりの幼子までも、手にかけることをお望みなのか。彼が思いついたのはそんな恨みごとだ。

「くっ……だから嫌いなんだ。ジーザスとその偉大なるパパは。俺が生まれてからこのかた、ずっと奴ら親子は俺を見放してきた。俺だって好き好んで堕ちる所まで堕ちてきたわけじゃない。奴らは偽善者だ、悔い改めよと仰せの割りに、悔い改めても何も褒美をくれようとはしない。あまつさえ俺の一番大切な者を、奴らの家に奪って行きやがるのか……！！！！」

幼くして母親に棄てられた時も、父親の再婚相手に虐待された時も、初めて万引きをした時も、初めて人を殺した時も、神はダニエルを救ってはくれなかった。ダニエルは絶望し、ロザリオを壁から引き剥がし、打ちっばなしのコンクリートの床にがっくりと膝をつ

き、そしてロザリオを床に投げつけて壊した。礫になったジーザス
Ⅱクライストがダニエルを虚ろに見上げていた。

” So why do you call me, Lord, ‘
when you won’t obey me?’ ”

（なぜ汝はわたしのいう事をきかないのに、わたしを主と呼ぶのか）

どこからともなく、頭に響き渡るような低い声が聞こえてきた。

一瞬、床の上にダニエル自身がうち棄てたジーザスからの天の言葉なのかと思ったが、すぐにダニエルはそれが背後の男から発せられた言葉だとわかった。

「それは……何だ？」

「L u k e 6… 46（ルカによる福音書46節）だ。聖書を読んだ事がないのか？」

知らなかった。

ダニエルはまともに聖書も読んだ事もない。孤児院で洗礼だけは受けていたが……。聖書も知らないのに、神に救いを求めているのかと自分が浅ましく、愚かしく感じられた。

「ジーザスは、お前のこれまでの行いを棚に上げて救いばかりを求めるなど言ったんだ。そしてこうも言った筈だぜ」

” And remember, I am with you always, with you.”

（見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる M
a t t h e w 28…20）

この、信仰心などはかけらもなさそうな浮浪者じみた男から、救いの言葉が紡がれる。

ダニエルは背後にいる彼が、まるでダニエルの罪をずっと見つめてきた偉大な何者かのように感じられた。不思議だ。この男にこう諭されると、八方塞がりだ絶望的になっていた心に光が差したように落ち着く。

心臓の動悸が、おさまったような気がした。

「そうなんだろうか……」

「神ってのは想像もつかないような場所で、ひょっこりお前さんの事を見ているのかもしれないぜ。今の瞬間だってな……」

ダニエルにとってこの、得体の知れない男が言った一言が、生涯忘れられない言葉となった。

荻号は少しだけ待っていると言い残して、アパートから出て行った。ダニエルは不安だった。一体何を待てばいいというのだろうか。とにかく、彼の話を信じるとすれば、一週間後まで命を狙われる事はない代わりに、闇医者のもとには行けなくなってしまった。ダニエルは何も知らずに眠る、ジョンを布団の上から優しく撫でつける手術の予約は一週間後までいっぱいだと、闇医者は言っていた。どうにか早くしてもらえないものだろうか、そうすれば息子の命は助かるのかもしれない。だが、そんな事を気にするような医者ではないということ、黒い噂で厭というほどわかりきっていた。

どうして日陰者の自分のために、ジョンまでが日陰の道を歩まねばならなくなったのだろう。

彼が生まれてこのかた知らなかった改悛という行為は、このことなのかもしれない。

荻号はそれから1時間後、大きなバッグを抱えてアパートに戻ってきた。中をあけてみると、ドリルや鋏、妙なチューブ、見慣れない道具ばかりだ。その中にメスと輸血パックを見つけた時、ダニエルは彼の正気を疑った。

「あ、兄貴……もしかして……！」

「そうだ、ここで手術をする。道具はそこいらの総合病院から拝借してきた。深夜だったので、オペ室ががらがらでな。後でまたこっそり返しておく」

「兄貴！ 俺はあんたにジョンを殺さなければならぬのか！ 正規の医者ですら助かる見込みは殆どないって、あんたがさっき言っただろ！」

この男はやはり、頭が相当イカレてしまっているに違いない。

これからダニエルが目撃しなければならぬのは手術などとは程遠い行為、殺人だ。そうはさせない、この気違いの思いつきに、ジョンをつき合わせてたまるものか！ ダニエルはジョンの前に立ちふさがり、もう一丁持っていた拳銃を荻号の額に当てた。彼はそれをちらりと一瞥し、全く気にする様子もなくつぶやいた。

” There is no doctor can save him , …… without me ……”

（こいつを救える医者はいない……俺を除いてはな）

「さて。本物の闇医者ってのがどんなのか、教えてやるよ」

陰階第4位、闇神にして外科医、荻号 要は不敵に笑い、手術着を身に纏った。

外伝？闇医者、萩号 要とニューヨークの夜―千夜一夜1（後書き）

外伝？闇医者、萩号 要とニューヨークの夜―千夜一夜2に続きます

外伝？闇医者、荻号 要とニューヨークの夜―千夜一夜2

所見。髄芽腫、ステージIII。

頭蓋内圧亢進（ICP）。水頭症状。眼球の外転により6脳神経の麻痺をみとめる。

この場所はなんとも不衛生な環境だが、病院の手術室に不法侵入して手術をすることはできない。

陰階には手術ができる環境が整っているが、人間を陰階に連れてゆく事はなおさらできない。放射性物質である荻号のアトモスフィアで雑菌を選択的に破壊し、無菌状態を保ちながら執刀する。術式は肉眼的全摘術（gross total resection, GTR）、この一択だ。

彼の執刀した症例数は、今回で1万2453例になるだろうか。荻号はデイスポーズブルの手袋をはめながら、自身の手首をちらりと見やった。

これで癒せたら、楽なものにな。そんな事を思っていた。

荻号が気にしたのは、自らの血液である。

位神は即位する際に身体検査が行われ、血液成分測定も詳細に行われる。神は稀にだが、その血液成分が生物階の特定の疾患を癒すケースがある。血液といっても、究極のことをいえば化学物質の水溶液だ。例えば癌を癒す血液を持っている神は、たまたま血液成分に抗癌剤の成分が入っていたというだけだ。逆にまったく治癒成分を含んでおらず病を癒せない神もいて、こちらの方が大多数だ。

マイノリティである、病を癒す血液――治癒血を持った神がどの疾患を癒す事ができるのかを、神階は即位する際に正確に把握して

いなくてはならない。治癒血を持つ神は稀にしか現れないからだ。陽階だとヴィブレⅡスミス（疾患数301）、ユージンⅡマズロー（疾患数11294）、ジーザスⅡクライスト（疾患数553）、陰階だと紺上 壱見（疾患数644）、そして荻号の治癒血で癒す事のできる疾患数は569だ。陰陽階で治癒血を持つ神々は現在6柱しかなく、その中ではユージンが最も治癒能力に長けている。治癒血を持つ神は自らの傷の回復力に乏しい。

桁外れの治癒能力を持つユージンの血は殆ど薬で出来ているようなものだ。それと引き換えに彼自身の傷の治癒速度は神階でも最も遅い。

荻号の治癒血では、たまたまこの病を癒せない。歩く万能薬、ユージンⅡマズローがこの近くをうろついていたれば彼の治癒血をくれと頼んだだろうが、あいにく彼は戦争の起こっている地区にしか現れない。他にもやりようはいくらでもあるが、監視衛星が入っている。目立つことはできない。現実的に、荻号に出来るのは外科的手術しかなかった。そして荻号にはこの手術を成功させ、回復させられるという確固たる自信があった。

「あとは俺に任せて、向こうの椅子にでもかけて見ていな。そこいらで動かれると雑菌が入るからな」

正規の医者ではないから闇医者というのだろうか、ダニエルは自分でも馬鹿な質問をしてしまったと思った。彼はマスクをして、表情が消え彼の青い瞳だけがのぞく。この男は地毛と思われる銅色の髪の毛に、空色の瞳をしている。一体どこの人種なんだ？

「あんた、……本当に医者なのか？ 手ぐらい洗えよ」

「俺の手につく雑菌がいるなら、お目にかかりたい」

人体には無害な、だが強烈な放射線を纏う荻号の手に付着して生存する細菌は、存在しない。神の手が穢れないと言われる所以だ。

「俺が医者かそうでないか、信じる信じないはお前の自由だ」

「成功するのか？」

「さあな、信じる者はなんとやら、だ」

ダニエルは思考回路が止まってしまっ、もう何も言えなかった。何だかひどく疲れた気分だ。彼に任せるほかに、手立てはない。彼の医者としての経歴がどんなものだったのかは知らないし、闇医者だというのだから免許など持っていないのだろう。だが彼はどうすれば手術ができるかという事を知っているようだったし、準備してきた（というか盗んできた）ものも、一応は専門的な道具のようだ。

彼はもう反論する気もうせて、荻号の言うとおり、部屋の隅の小さな椅子に腰掛けた。

荻号は眠っているジョンに痛みのないよう注射を打って予備麻酔をかけ、バリカンで頭をつるつるに剃って消毒をした。次に、全身麻酔の準備をする。さて、鼻からいくか。開頭するか。

「ま、開頭だな」

麻酔医と装置がないので、術中正確な意識レベルの管理はできないが、荻号のアトモスフィアで患者の意識レベルをコントロールできる。手術は単独で行わなければならないのだ。更に言うなら、ナビゲーション役の医師も機材もない。

CTもMRIも撮っていないし、腫瘍の正確な位置をどうやって探るか……荻号には秘策があった。荻号は腰に挿していた第二の神具、慎刀を抜いた。慎刀とは慎ましやかな刀という意味で、刃がない柄だけのカッターだ。刃はないが、あらゆる種類の刃をコマンド

により生成することができ。金属刃から、至るに、放射線なども放出する優れものだ。

” Doppler Echo Mode (DEM) open ”
(ドップラーエコーモード)

” Measure the depth from top to neoplasms. ”

(表面から腫瘍までの深度を測定せよ)

荻号は慎刀にそう命じると、ジョンの頭の表面を髭剃りで撫で回すように綿密に柄をあてて中の腫瘍の大きさや、深度を計測した。計測を終えると、彼はマジックを取り出し、ジョンのつるつるの頭にどうメスを入れるかを書き込みはじめた。大体のメスの位置が決まって、彼は神妙な顔つきでジョンの頭を見つめていた。

「おいダニエル。運動神経野や言語野にも腫瘍がある。覚醒下開頭術をしなければならぬが、いいか？」

「覚醒下……？」

「大事な脳領域を傷つけるわけだからな、障害が出ない事を確認しながら行うために、ジョンの意識を覚ましたまま手術をする。心配するな、腫瘍を取ったらまた麻酔をかける。そういうことだ、開頭をしたらジョンを起こすぞ。声が聞こえても、取り乱すなよ」

あっさりと言うが、この上なく残酷に聞こえた。

ジョンは眠りについたまま、手術をするということすら知らされていなかったのだ。ダニエルは頭を抱え込んだ。だがもう荻号の言うようにするしかない。ちなみに、開頭は一般的な脳外科手術の術式だとも説明する。インフォームド Consent というにはあまりにいい加減だが、一応はする。

知らないから酷いと思うが、荻号には医学的知見があるようだった。ダニエルはしぶしぶ同意する。ジョンの親でもないのだが、一応保護者ではある。

皮膚を切開。素早く筋膜、腱膜を剥離。ドリルと電気のごぎりによって頭蓋を開き、続いて硬膜を露出させ、鉗子で切開。クモ膜を視とめ、脳へと切り込む。

”内減圧を開始”

荻号は開頭後、腫瘍によって上げられたジョンの脳圧を減圧する。

ダニエルの耳には時折ドリルの音が聞こえ、様々な器具類の音が聞こえたが、まともにそちらを見ることができなかった。

「ジョン、聞こえるか？ 目を覚ませ」

荻号は開頭されたままのジョンに呼びかけるが反応がない。聴力損失……腫瘍は小脳へ浸潤ありと見立てる。

”ジョン、起きてくれ”

荻号は声をかけず、解離性意思伝播法で直接ジョンの意識を呼び醒ます。

「……………う、うう」

どれくらい時間がたっただろう、荻号が突然喋りはじめたかと思えば、次にジョンの声が聞こえてきた。ダニエルは思わず椅子から立ち上がったが、荻号は電気メスを持った手でダニエルを制した。ダニエルは立ち上がることもできず中腰となったまま、また席にいた。

”痛みがあるか？”

「……痛くないよ、どうして？　ここは、どこ？」

”ここは夢の中だ。少し俺に協力してくれ”

「誰？」

”目を覚ましたら覚えていやしないさ。さあジョン、俺のいう事を聞いてもらおう。まず、右手を動かしてくれるか？　ずっと動かしていき”

さてと、病変はどこだ。

小さな手がぴくぴくと動く。荻号は自らのアトモスフィアでジョンの苦痛を押さえつけながら、メスを入れていった。手が動かなくなったら、神経を切っているということだ。ジョンの手はいつまでも動き続けた。

”よし、では左足を動かしていき”

荻号は大事な神経を切らないように気をつけながら次々と腫瘍を摘出していった。3つの腫瘍を摘出すると、荻号は麻酔をコントロールして意識レベルを下げ、ジョンの意識を落とした。

「ダニエル、今のところはうまくいっている」

荻号は心配しているであろうダニエルを振り返ったが、彼の座っていた椅子はからっぽだった。集中していたので、出て行ったことにも気付かなかった。

荻号はあんぐり開いた口をまた元のようにきゅっと閉める。いたたまれなくなつて出て行ったのだと思われる。荻号が苦痛を管理して痛みなど微塵も与えていないのだが、女性と違ってやはり男性はこういう場面に弱いものだ。仕方なく荻号はまた向き直り、黙々と手術を続けた。

荻号はひとりで順々に腫瘍を摘出していった。出血を防ぐため、時折傷口を電気メスでジュツと焼く。熟練した腕を持つ彼の手技は

見事で、今のところ殆ど出血もない。順調に行けば、後数時間で予定より早く手術を終えることができるだろう。そう思っていた。ダニエルが出て行ってから20分が経過。

あいつ、どこに行ったんだ？ などと手を動かしながら心配したが、彼がどこにいるのかは、部屋に居ながらにして把握できた。

ガン！

ダウン！

パパン！

窓の外から、しかもすぐ近くから複数の銃声がしたからだ。

外では銃撃戦が始まった。荻号は予定を狂わされて舌打ちしたが、メスを握る手先は狂わない。ダニエルがジョンの手術に立ち会うことがいたたまれなくなって外に出たところを、待ち伏せされていたのだ。

鍵がなければアパートの入り口には入れないから、待ち伏せするならアパートの入り口しかない。今ダニエルはそこで銃撃戦をしているということだ。相手は誰か、荻号は慎重に耳をそばだてる。ダニエルの銃声、そして残りは2人が発砲している。

先ほどダニエルを狙った二人組だろう、荻号に撃たれて、血の上っていた頭に更に血が上って追いかけてきたのかもしれない。

「これだから、バカどもは」

荻号は彼等の頭の足りなさを嘆いた。何事ももう少しスマートにこなそうとは思わなかったのか、と。ボスの命令を聞きわけて、一週間後の闇医者の手術室で待っていればよかったものを。人間の感情というものは単純であるが故に複雑だ、考えられないような行動に出る場合がある。

それにしても、このまま銃撃戦を繰り広げていたら数の利でダニエルが射殺されてしまうことは確実だ。いや、射殺せずにダニエルを脅して金の在りかを吐かせるためには、この場所に踏み込んでくる可能性すら否めない。

カビ臭く古びた部屋は、今はささやかだが手術室だ。何人たりとも、医療行為を妨げるのは許さない。術中の荻号は、患者の安全を確保するため、彼等を強制排除するしかなかった。

「さて、どうしたものか……」

荻号はメスを置き、ディスプレイザブル手袋を外し、手術着の下からベレッタM92Fを抜いた。ベッドから一番遠い窓を開けて、ひよいと顔を出す。窓のすぐ前は隣のアパートの壁だった。表通りにいるダニエルと追っ手の姿はここからは壁に挟まれて見えないし、ここから撃ったとしても壁に当たって届かない。

荻号は壁に隔てられた表通りに意識を集中し、ダニエルの足音を聞き分けた。こうしている間にもひっきりなしに銃撃音が聞こえてくる。ダニエルの持つ拳銃スプリングフィールドアーモリー・オメガからの発砲音と、二丁の拳銃の発砲音、一つはパラ・オーディナンスP12だが後のもう一丁はわからない、とにかく3人の人間が銃撃をしている音がする。荻号は人差し指と親指で壁を測るようなしぐさをし、マスクの下ではぶつぶつと計算をしていた。

荻号は計算を終え、空色の瞳を見開く。

コンクリートの向かいの壁に銃口を向けた。拳銃を握った手術着姿の外科医は、躊躇なく夜闇の中の一点を見つめている。荻号はダニエルの足音に耳をそばだて、音が止まったところで狙いをつけていた壁に向けて一発だけ発砲した。

ダーン！（ダーン！）（……ーン！）

銃声はビルとビルの間を山彦のように反響して凄まじい銃声を上げる。硝煙の煙が部屋の中に入らないよう直ちに窓を閉め、どこに着弾したかを確かめる事もなく、あとは落ち着き払ってまた先ほどの手袋をはめ、手術の続きに取り掛かった。

＊

「おい、お前が撃ったのか？」

「い、いや、俺じゃねえよ……誰かいる、誰かがどっかから撃ってきやがった！」

目出し帽をかぶった皮ジャケットの追っ手の二人組は、呆然としてお互いの顔を見合っていた。

彼らは確かに、セントラルパークでダニエルを仕留め損なってから、予め突き止めていたセカンドハウスの前をうろついていたダニエルと、銃撃戦をしていた筈だった。ダニエルはダストボックスや店の看板に隠れたりしてうまく弾をしのいでいたが、突如鳴り響いた銃声によってもんどりうって倒れたのだ。

二人組のうち一人が、先ほどライフルの銃口を荻号に撃たれて暴発し、手に傷を負い包帯をぐるぐる巻いた手で、倒れたダニエルを揺さぶり生死を確認した。おそろおそろ胸のボタンを開くと、心臓のど真ん中に銃創ができ、穴が開いて、どくどくと血が溢れていた。

「死んでる……」

「どこから、誰が撃ってきやがったんだ？ 上から銃声がしたぞ！」

「おい……あいつじゃないか、さっきの変な男。お前の手をそんな

にした奴だ」

「じゃあ、どこから！　ここは壁ばっかで、窓もねえ！　撃ってこれるような場所なんてないんだぞ！　見ろ！」

男のひとりが上を見上げた。確かにここはビルばかりだが、射撃してくることできるような窓など一つもない。そして銃声は上からしたのだ。しかもこの界隈のアパートは屋上には登れないようになっていいる。屋上から撃ってきたわけでもない。

「跳弾……じゃないのか？　こんだけ壁がありや……」

黒人の男は、震える唇でやっとそれだけつぶやいた。跳弾とは、銃弾がコンクリートなどの堅い壁や床などに跳ね返って飛ぶ現象であり、間接射撃のテクニクだ。だが、跳弾を利用して的確に心臓を射抜くスナイパーがこの業界にどれだけいることだろう……殆ど居ない。

跳弾を起こすためにはほんの一度のミスも許されない角度計算が必要だし、それを利用して見えない場所から相手の心臓をぶち抜くなど、文字通り神業だ。

つまり相手は殺しのプロだ、かなう筈がない。今だってきつと、どこかから狙われているに違いない。男達はすぐさま乗り付けてきた車に乗り込み、全速力で逃げ出した。男たちはガタガタと震え上がった。

「殺されるっ！　今度は俺たちの番だ！」

＊

男達が逃げ出した車の発車音を聞いてから数時間。長い時間が経過していた。荻号はできるだけ出血を抑えながらジョンに輸血をもせず、いくつもの腫瘍を摘出した。

「しかし腫瘍が多すぎるな……マメに取りすぎて術後緊張性気脳症

(ension pneumocephalus) なんだになった
ら笑える。それに機能不全が過ぎるな……ちよいと、再生かけとく
かね」

摘出した腫瘍が多すぎる場合、腫瘍を切除した際に脳内に残った
僅かな空気が膨張して脳圧を上げてしまうという合併症を起こす場
合がある。彼は陽階の監視衛星から不正行為を捕捉されないよう、
こそこそとアトモスフィアを込めて指先で細胞を弾きジョンの脳細
胞に分裂シグナルを与え、急速な脳細胞再生を行い脱気する。

「よし。一応、シャント(shunt)留置しとくか」

彼は水頭症だったジョンの脳圧が上がらないよう脳室腹腔シャ
ントを構築し体内に留置する。術後のケアもこれで大丈夫だろう。最
後に綿密に硬膜を縫い合わせる作業に取り掛かっていた。ステープ
ラというホッチキスのような縫合機を借りてくれば楽だったが、拝
借できなかったので代わりにチクチクと原始的に縫合糸を走らせる。
縫合が終わると、骨窓に頭蓋骨を併せチタン製の金具をはめ込む。
この手順を以って手術は終わるが、荻号はここにきて再び慎刀を抜
いた。

”γ knives dose 30 Gy, 8000 J irr
adiation settle”

(γナイフ30グレイ、8000ジュール照射準備)

荻号は刃のない刀の柄をジョンのこめかみに宛てがった。

”Irradiation”

(照射)

パン、パン、と軽快な音と光が室内に溢れる。荻号は腫瘍のあつ

た場所にYナイフ、ガンマ線を局所的に照射する技術でジョンの脳の腫瘍があった場所に次々と照射し、腫瘍の再発を防ぐ。

” Boost, 15 Gy

(追加線量、15 Gy)

手術には万全を期したが、細胞レベルでの全摘は難しい。再発させれば患者の負担は重くなる。荻号は絶対に再発をさせないため、念入りにガンマ線を照射してゆく。執刀する機会がなく腕を錆付かせていたが、久々の手術を彼は愉しんでいた。

「よし……終わった」

荻号は満足そうにそう呟くと、慎刀を持っていない方の手でジョンの頭をくりくりと撫で回した。武士のようにチン、と金属音を鳴らして慎刀を鞘におさめ、手術着を脱ぐ。荻号はそのまま窓を開け放ち、4階の高さから階下へと飛び降りた。

音もなく着地をし、ビルとビルの間を通って表通りに出ると、血まみれになったダニエルが誰の目に触れる事もなく横たわっていた。荻号は彼を抱き起こすと、追っ手によって開けられたシャツから覗く胸元の傷口をあらため、荻号の放った弾丸がきちんと胸の裏から貫通している事を確かめた。荻号はそれを見ると、満足そうに微笑み、トントンと傷口を指先でノックした。

「狙い通り、ここに当たったな」

彼は持って降りた縫合糸でダニエルの胸と背中中の傷口を手早く縫うと、彼の頬をパンと平手で打った。わずかに呼吸の音が聞こえ、ダニエルは凄まじい胸の痛みに耐えながら唸り声を上げた。

「よう、気分はどうだ」

「兄貴……俺を撃ちやがったな？ 殺されるかと思ったぜ……」

「心臓と肺の隙間を狙って撃ったからな、死ぬ筈がない。だが追っ手には、お前が死んだように見えただろうぜ。もう追っ手も来ないだろう、これからはデッドマンウォーキングにならないようにひっそりと暮らすんだな」

ダニエルは今日からマフィアたちの間では死んだ男として扱われるだろう。これからは日陰の道を歩んでゆかなければならない、もうここは引越すしかない。ダニエルは皮肉っぽい笑いを浮かべたが、不意に何かを思い出したように目を覚ました。

「兄貴、ジョンは……」

「ああ、成功したよ。お前が外で追っ手をひきつけてくれたお陰でな」

「俺あ……何もしちゃいねえ。煙草を買いに行こうとしていただけだ……」

ダニエルはそれだけを言うと、ぐったりと力尽きた。荻号はダニエルを軽々抱え上げると、彼を部屋に連れ戻り、ジョンの傍に横たえた。ダニエルもジョンも、大きな血管を傷つけたわけではないから、傷口は明日になれば癒えるだろう。

「ついでに化学療法も併用しとくか」

骨転移に備え、念のためジョンに強力な抗癌剤を処方する。また、開頭し腫瘍をいくつも摘出したジョンの傷の痛みは相当なものだろうから、と彼はシザーケースに入っていた黒いアンプルを一本、ポキッと折ると、中の液体を注射器で吸って投与した。

アンプルの中に残った薬は、指につけて、ダニエルの表と裏の傷口に塗る。

神階で広く使われている鎮痛剤だ。神経ブロックをしている荻号は痛みなど感じない体になっていて必要ないが、この鎮痛剤は生物階でやたらと出会う、怪我人のために持ってきたものだ。荻号の訪問する場所は平和な場所ばかりではないから、降下中にはとにかくよく怪我人と出会った。

特に苦痛に泣き叫ぶ子供は嫌いだ、いたたまれなくなる。この鎮痛剤は優秀で、人間ならば、例え心臓を抉られていても痛みなど微塵も感じないほどの効果だ。これで、ジョンは傷が癒えるまでの間、一切苦痛を訴えはすまい。一仕事を終えた荻号は手術道具を手早く片付けると、彼等を残し、そのまま部屋から出て行った。

翌朝、ダニエルとジョンは目を覚ました。何故だろう、痛みはないし、身体が嘘のように軽く、気分も爽やかだ。長い夜が終わったような気がした。窓からは朝日がいっぱいに注ぎ込み、ジョンの頬を赤らめさせている。一枚の紙切れがダニエルの尻のあたりに無造作に置かれていた。

”Claim if you want to knock the gate.”

(門を叩きたくば叫ぶがよい)

その下には、ありえない桁数の携帯電話番号が記されていて、LSDはちゃんともらったからなと書かれていた。

＊

「ジョン、今日は日曜だからミサに行くぞ」
「うん、パパ」

健康的に日に焼けた黒人の10歳ほどの少年は、パパと呼んだヒスパニックの男の手を取り、教会への長い坂道を嬉しそうに登っていた。ここはフロリダのとある街。太陽をいっぱいに浴びて、少年の首にかかったロザリオが揺れていた。

神は俺達とともにある。

ダニエルは最近、そう信じる事ができるようになった。ダニエルの出会った青年が誰だったのか、それは結局わからなかった。だが彼は神がダニエルに遣わしてくれた最高のご褒美に違いない。彼に繋がる携帯電話の番号は、一度もダイヤルをしたことがない。

彼が実在したのかしなかったのか、それは今となってはどうでもよかった。ただ確かに言えることは、彼と出会うことがなければこうやって今日という日をジョンと共に迎える事もなかっただろう。

「僕はパパとともに」

「また、俺達は主とともに……エイメン」

彼らは晴れ渡って天上に届きそうな空を仰いだ。

外伝？闇医者、萩号 要とニューヨークの夜―千夜一夜2（後書き）

ドクターオゴ、頼まれば一応仕事します。

外伝？ 紫檀と神と第二使徒と——灰かぶりの使徒1

軍神下第8層、公獣番役。653歳の紫檀に与えられていた役職は、正確にはそういった。でんま伝馬と呼ばれる、十大使徒が用いる天馬を広大な牧場で飼育するのが主な仕事だ。

神階には神と使徒と以外に、厳密な意味での生物は存在しない。だが創造神や遺伝子を司る神々によって創出された模擬生物は数多く存在した。岡崎 宿耀らが生物階の生物をベースにDNAを設計して模擬生物をクローン化し、植物や動物など、多種多様な生物種が育まれた。長きにわたり生物階を観察するうち、神々や使徒が窓辺には花を飾り、アトモスフィア以外の食物。つまり穀物や野菜などを食してみたいと、そう考えるようになりニーズが出てきたからだ。彼等の気紛れによって育まれたこれら生物は、使徒たちによって厳密に管理されていた。

神階に住まう使徒はどの神に所属する使徒も階層に分かれて暮しており、小さな空間に隔てられ、丁度ひとつの街レベルの規模で暮している。いくつかの階層に分かれているかは、従属する位神が何名の使徒を擁しているかによる。上位使徒から順に1階層から8階層まで、ひと階層に3万名までの使徒が住まう。紫檀が従属する軍神は22万名の使徒を擁しており、階層は8階層までである。紫檀がいるのは最下層にして最底辺の8階層だ。

生まれてこのかた、神の姿など見たこともない。

紫檀たち馬番役が預かる伝馬は全部で15頭で、10頭が十大使徒たちの馬で、残りはスペアだ。紫檀はその半分の世話をやいていた。

毎日毎日擬似陽光も昇らないうち、彼は先輩衆の誰より早く出勤する。自分の担当の馬ばかりか先輩の馬にも飼料を与え、丁寧にブラッシングをして馬小屋を掃きホースで水を打つ。先輩方が出勤する頃には一仕事終えて息を切らせ、エプロンで両手を拭いながら先輩を出迎える。

彼は物心ついた頃からこの牧場で働いている。退屈な仕事だが、愚痴をこぼしたことはないし馬番役に不満がある訳ではない。しかしちらりと隣のケージを見遣ると、思わず溜息が出るほど魅力を備えた、軍神だけが搭乗する光獣が控えている。光獣の佇まいを目に焼き付け神の気配だけを感じながら、彼は日々を過ごしていた。

オフイシャルバード

光獣は枢軸神と呼ばれる高位の神々に与えられる神獣であり、光速飛翔を可能とする、枢軸神の乗り物だ。飛ぶためだけに設計された巨大な模造生物。神々は瞬間移動を使うが、アトモスフィアを削る上に、イメージできる場所、つまり記憶がある場所にしか移動できない。多忙な枢軸神が未知の場所に消耗することなく移動できるので、何かと便利なのだろう。

光獣は見たこともない生涯関係することもないであろう軍神、ユージンⅡマズローだかい神の所有物だ。白いハヤブサのようなシルエットの巨大な鳥で、凜とした大きな黄色い瞳に、長く逞しい風きりの双翼。斑紋も美しく整っていて、鋭い爪先と丈夫な両脚を誰かが羨望のまなざしで見つめる。300年以上を生きるこの白隼の名は、鳳ほうと聞いた。

この鳳に強い憧れを抱いていた紫檀は、いつか光獣の世話係になりたいと、常々希望していた。

努力次第では光獣番役も不可能ではないと聞き、毎日毎日熱心に自分の仕事をこなしてきた。

それでも先輩に叱られてばかりで、紫檀のやることなすこと全てが気に入らないとみえる。完璧でこまやかな仕事ぶりに賛辞を送る事もなく、隔日の休暇を嫌がって馬舎の掃除を押し付ける先輩方の為に、紫檀が春休暇を返上して今年で5年目になる。

牧場から異動になった同期の朋友が、春休暇にはベルギーに行っただって、写真をみやげ物の入った封筒一杯に送ってきた。新緑の萌える馬場の柵に腰掛けながら、大麦のクッキーを頬張り手紙を読む紫檀は、例年になくもの寂しさを覚えた。牝馬のアーデンが隣で慰めてくれるが、少しも気が晴れない。

生物階。人間の住む世界など見たこともなく、神階から一步も外に出たことはない。人は努力次第で自由に職業を変えられる、手紙にはそう書いてある。羨ましい。紫檀は正直にそう思った。職業を自らの意思で選択できるなど……。

しかし使徒は神々のアトモスフィアという物質を得るがために、身分を生涯違えることなく、彼等に死ぬまで尽くさなければならぬのだ。紫檀も半期に一度、軍神のアトモスフィアを何百倍も何千倍も希釈しに希釈した透明な溶液の注射をされるが、とても注射だけで基礎代謝を賄っていると考えられなかった。

”神様。あなたは本当に存在しているのだろうか。この身に受けたアトモスフィアは、本当にあなたのものなのだろうか”

たった一本の、薄めに薄められたちっぽけなアンプル。それが紫檀にとっての”神”だ。

いつも考える。本当にアトモスフィアは必要なのだろうか？使徒はそれなくしては生きてすらゆけないか弱い生命なのか。信じられなかった。高位の使徒ほど能力が高いのは、アトモスフィアの希釈率が低いからだとも言われる。第一使徒に至っては希釈もなしに

直接与えられ、それだけの理由で彼は神に準ずる地位を手に入れているのだろうか。全ての使徒は神の為に尽くし、そして神のために死ぬのが道理とされる。このアンプルの代償は、それほどまでに重いか。

神様、憚らず申し上げる。あなたは傲慢で、無能だ。

その言葉を直接伝えるために、鳳の檻を徹夜で見たいといつかは神が現れるのではないかと思い、紫檀は数ヶ月の間、睡眠も惜しみ鳳の檻を見守っていた。

ある夜。紫檀がいつものように見張りをし、うたた寝をして起きた直後。

鳳の檻は静かに開かれていた。はっとして夜空を見上げると、疾風と風切音が降り注いで、アトモスフィアを含んだ風を感じた。どれだけ目を凝らしても神の姿は見えなかったが、神は確かに紫檀の頭上にいて、鳳に跨り夜空を飛翔していた。その他にも紫檀が神の存在を感じた瞬間は多々あれど、その存在を直接的に感じたのはあの夜が最後で、その後1年を経ずして先輩使徒に見つかり、こっぴどく怒られたおかげで二度と光獣の檻の傍をうろつけなくなった。

紫檀は鳳を諦めることにして、馬番に精を出すしかなかった。そうは言っても、馬も好きだ。彼等は賢いし素直で、瞳にはどこか温もりがある。他のどの使徒も馬に乗る事が禁じられていながら、馬番だけはそれらの調教のためと、運動をさせるために騎乗することが赦されていたので、馬に乗って草原を駆けると鬱々とした気分もいくらか晴れる。

馬番役の誰より巧みな馬術によって気を紛らわせてきたものの、ふとした瞬間に鳳のことが頭をよぎる。

そして未だ見ぬ、神のことも……。

「紫檀！　どこで油をうつとるか！」

思索に耽っていると、先輩の声が聞こえる。

紫檀は慌てて柵から飛び降り、クッキーを口に放り込んだまま馬舎に駆けて行った。困ったものだ、いつも怒られている。紫檀は馬番役としては下積みになるのだが、他の馬番役の誰より馬に懷かれ、当然ながら紫檀自身の馬術も先輩使徒のそれを凌駕していた。それで紫檀は何かと辛く当たられる。

「はい、ただいま参りました」

馬舎には先輩使徒の棧利さんりりようど　糧道りようどがいて、憤慨している。失態をした覚えはないのだが……。

「テスラの毛並みが悪い！　きちんとブラッシングをしているのか？　サボっていないで今すぐブラッシングをしろ！」

「は、はい」

テスラとは第二使徒、川模　廿日の駿馬である。グレーの上品な毛並みを持ち、利口で大人しい優秀な馬だ。紫檀からすればテスラのブラッシングは今朝一番に丁寧に仕上げたつもりで、平日と比べても手抜きをした覚えはないし、テスラの毛並みは普段通り。

だいたい、テスラの担当は棧利だ。それを紫檀が代わりにやらされている。サボっているものだから、普段の馬の状態も掴めていない。さては今日、川模　廿日が乗るというのだな。それで不手際がないかと焦っているのか、紫檀はピンときた。恥かしげもなく横暴ができるものだな、と彼は正直腹立たしいが、齒向かうのはもつと不毛と感じて、すみません、と頭を下げながらブラシを取ってきた。

棧利はしきりにテスラの鞍に汚れがないかと気にしている。それが許されるなら、川模に先輩の怠慢ぶりを密告してやりたかった。だが、紫檀はおろか棧利すら、川模 廿日に会うことはかなわない。十大使徒は神と同じく尊く清らかなものであって、低位の使徒が会い見えたり話しかけて穢してはならないとされていた。川模に会えるのはこいつ、テスラだけだ。テスラの大きな瞳が、全部見ているからと紫檀に語りかけているような、そんな気がした。

身体全体を使って尻尾の先に至るまで、つやつやに仕上げる。ブラッシングが終わる頃には、すっかり汗だくになって作業服を脱ぎ、腰に捲きつけた。結局これで、二度目の手入れである。

「終わりました」

紫檀がタオルで顔を拭いながら報告のために詰所に駆け戻つてくると、棧利は馬番役詰所でコーヒーを飲んでいたので、これには失望する。彼が生涯仕える上司がいるとすれば、間違っても棧利ではない。紫檀は地道に仕事をし、早く認められて出世をしたかった。少なくとも尊敬のできる上司と出会いたかった。

あっけに取られていると、万年欠勤がちな棧利以外の先輩衆が、珍しくぞろぞろと出勤してきている。

「紫檀、今日は第二使徒様がテスラにご騎乗されるのだそうだ。今日の午後二時に、馬をお届けせねばならん。お前は7層の入り口にまでテスラをお届けしろ、いいな」

最下層から第7層に馬を届けるのは、いつもは棧利が率先してやる。手柄だけは一人占めにしたからだ。しかし今日はどういうことか、届けたがらない。テスラの毛並みがいつもより悪いのを、気にしているのだと紫檀は勘付いた。馬は最下層から第1層にまで順

にリレー形式で届けられる。馬の管理が悪いと当然、上層階使徒から大目玉をくらう。監視の目が多い分お叱りも倍に、倍になって届けた者に還ってくる。テスラは1ヶ月前から皮膚病をわずらい、痒いので馬体を柵に擦り付け毛が擦り切れてしまい、生え揃っていないので毛並みが悪く見える。報告書に何度も書いたのに、一度も報告書に目を通していないことは明らかだ。

紫檀は危機感を感じた。川模 廿日は憤慨して、馬の管理をしていた紫檀を罰するだろうか。正直に話せば解ってくれるだろう。テスラの管理者は紫檀ではないし、皮膚病も完治して騎乗には差し支えない、と。しかし正直に話す機会などあるものだろうか？ そこで先手を打つべく、川模にひっそりと手紙をしたためた。

『第二使徒、川模 廿日殿……』

皮膚病に至った経緯と、最近のテスラの気分の良し悪し、馬体の様子、脚力などについて細かに記述し、よってテスラの騎乗に何ら差し支えはありませんと締めくくった。小さな手紙を鞍と馬体の間に滑り込ませた。鞍に手紙を挟だとき、テスラが紫檀に目配せしたような気がした。

「頼むよ、誰にも見つからないでくれ」

午後になって、紫檀は身を清め、クリーニングされた馬番役の制服を着用した。あとは畏まって第7層の係の者に馬を届けられただけだ。川模 廿日に会える幸運は勿論ないし、川模が彼か彼女なのかもわからない。彼等とは隔絶された世界に生きるしかない、下位使徒の悲しいさだ。

午後2時の15分前。

門の前にテスラの手綱を取って直立をしていると、約束通りの時間に係の使徒が引き渡しに応じた。係の者は愛想もなく無言で馬を

受け取り、ボタンと早々に第8層と第7層の境界である大きな門扉を閉ざした。ありがとう、ご苦労だったの一言ぐらい、言ってくれてもいいものを。

引渡しの直前、手紙はまだ鞍に入っていた。あとは川模 廿日が読んでくれるといい。そう考えて紫檀は、妙な感覚に陥った。誰も会い見える事ができず、神に最も近い存在に、彼（彼女）にしか解らない方法で手紙を送っているのだ。考えてみれば、これは紫檀にとって単調で退屈な生活を打開する契機となるものかもしれない。何かが変わればいい、川模 廿日は返事をくれはしないだろうか？

期待に胸膨らませながら門に背を向けたとき、門は僅かに開いて、中から紙きれが飛び出してきて、ゆらりゆらりと空中を漂ったあと、地上に舞い散った。確認するまでもなく、紫檀のしたためた手紙だった。

この世界にはきつと、神なんていないに違いない。

紫檀は絶望する。引渡し係は紫檀の顔を覚え、不正があったことも発覚した。不具合があれば真っ先に引っ立てられ、お縄を頂戴するのは棧利ではなく紫檀だ。加えて川模に手紙を出そうとした罪も上乘せされる。紫檀は悲嘆にくれながら馬舎に帰り、愛馬の様子を見て回ったがそれでも落ち着かない。棧利はそんな紫檀を物陰から見ている面白がって、同期の者たちと馬鹿にして笑いあうのである。

「どうしていつも、こうなるんだ」

手柄は奪われ、他者の不始末は自分に回ってくる。7層の使徒がその夜血相を変えて紫檀を召喚しにきたのは、予想ができていたことだった。先輩衆は笑いをこらえながら、まるで葬送の列を作るか

のように沈痛な面持ちでずらりと居並び、紫檀が引き出されて直立しているさまを上目遣いに見ては、目配せしあうのであった。

「お前が第二使徒の御馬、テスラの馬番役だな」

7層の使徒は白髪の方で皺が深く刻まれており、瞳も白目がちで衰えが目立つ。

先輩衆は口裏を合わせていたらしく、紫檀に罪をなすりつけた。

「そうです、この者にございます」

「いえ、わ、私めは……」

どうか全てを打ち明けてしまいたい。

紛れもなく潔白だ。しかし矢のような視線が背後から突き刺さり、否定すれば命の保障すらない。先輩衆は大声で、口々にこいつがやりましたと申し立てる。嵌められた、とは思えど、多勢に無勢。どうすることもできない。

「第二使徒がじきじきにお前をお呼びだというのだ。心して第1層にまで参内せよ」

一瞬その場は静まり返り、馬場の松明の炎だけがそ知らぬ振りで湿気た木炭を爆ぜ、パチパチと揺れていた。

「川模 廿日殿が直々にお前をお呼びだというのだ。聞こえぬのか！」

「御、御意！」

思考は停止し、理解が及ばず。川模 廿日に会う。それが何を意味するのか、その意味すらも知らされないまま。7層の使者は、泥濘に膝をついた紫檀を高い視線から見下ろして顔をしかめた。夜が更けるまで働いていた、汗のにおいがする。

「三度禊をし、身なりを整えて参内せよ」

使者は言い捨てると、足早に帰っていった。今夜8時、馬を引き渡したあの7層と8層の境界の門の前に来い。そう言い残して。

「第二使徒様は、相当のお怒りに違いないぞ。直々にお呼びになつてまで処罰をしたいんだからな。それもこれも、第二使徒様の御馬を皮膚病にしたお前が悪いんだ」

棧利の声が、遠くに聞こえた気がした。

＊

紫檀はその後、宿舎に戻り、自室のバスルームで作法に則った禊を三度もすると皮膚が剥げて擦れ、その痛みは大変なものだ。ほてった皮膚を清潔なタオルで拭う。自室の西側に位置する寂しい窓辺に彩を添えるため、飾っていた野辺の花の花卉を、なにとはなしに一片とってみた。花卉は頼りなげで、儂く息に吹かれて飛んでゆく。配給制のランプの油が足りないので、灯りもなく薄暗がりの中、紫檀はひどく心細かった。

このまま、なす術なく殺されてしまうのだろうか……。

どこか遠くへ逃げたい。だが、どこへ――？

神の卑近で伺候する、十大使徒。その第二位にある川模 廿日という存在。神と会話をし、その姿をいつも見ては守っているもの。彼、あるいは彼女は、神をどう語るのだろうか、神の言葉を、神の祝福をどう語るのだろうか。

第8層という下賤の者にも、神は祝福を与えるか。そうは思えなかった。見えるものならば神と見えたと思ったし、神々が完全無欠の存在だというのなら、彼らの無力を暴いてやりたかった。彼

らは誰も救わない。地の底で蠢くものを、少しでも憐れんでくれた
だろうか。違うはずだ。

「行こう」

例え断罪され屍とされても、紫檀は神の代理者に会う価値がある
のではないか、そう思いなおした。そして問いただしてみたい。神
は自分たちを一度でも、憐れんでくれたか、と。紫檀は末期の水だ
と思って、よく冷やした泉水を口に含んだが、緊張でからからに干
上がった喉が渴いた音を立てるように軋んで、湿気た風の吹き抜け
る窓辺からは、先輩衆の妙に弾んだ声が聞こえていた。

紫檀は決心して、午後8時に指定された門の前に呆然と立ってい
たが、その足が竦まないのが不思議だ。考えれば、今日というたっ
た一日の生き方を間違えてしまったが為に生死の問題を突きつけら
れることが不満で、紫檀の感情を写し取るかのように、移ろいやす
い第8層の天候は、いつしか小雨の降り敷く陰惨な空へと姿を変え
ていた。

ランプの薄明かりとともに顔を出した生氣のない使者は、紫檀を
一瞥する。紫檀は檻樓の黒いフード付きコートを脱ぎ、それを片手
に携えていたが、濡れ滴るコートが廊下を汚すのでその場に捨てろ
と命じられる。クリーニングをしてアイロンをかけてきたそれを、
彼は渋々手放した。

雷鳴が轟き、紫檀の前面に鮮烈な陰を落とす。襖はしてきたかと、
使者は紫檀の周りを回りながら、まるで生ごみでも前にするような
顔で嗅ぎまわる。三度も作法に則った襖をさせておいて、この扱い
なのかと紫檀は落胆する。

「宜しい、ついてきなさい」

これから紫檀は、現在の第8層から川模の居住する第1層までの門を8つも通らなければならぬ。隔絶されている各層をつなぐのは、門と呼ばれる転移装置だ。紫檀と上位使徒ははなから住む場所も違って、門がなければどう足掻いても彼らに会うことはできない。使者は年経た、何の特徴もない能面のような顔をした男。深く刻み込まれた顔の皺から、軽く千年は生きていると見える。紫檀は漠然と、彼の過ごした千年という年月に思いを巡らせた。だが逆に千年を経ても最下層に近い第7層の使者でしかいられないという事実、陽階の完全実力制を裏付けているようでそら恐ろしかった。

実力のない者はいつまでたってもよい思いはできないのだと、彼の背中が語っているような気がした。第7層から第6層への引渡しが行われる部屋で、6層からの迎えの使者を待っている際に、紫檀はこの男に何故自分が第1層に召喚されたのか聞いてみたが、彼は何も知らされていないようだった。この世界の上意下達は、情報を細分化する事によって全体的な組織力を高めているように思われる。

全体として機能するが、各々はどの部分を担っているのか知らされない。おそらく彼は紫檀を第7層から第6層へと引き渡せといわれただけで、それ以上知らず、知る必要もないのだ。だから彼は永久に出世できない。役割を果たしたからといって、彼の仕事は極度の細分化のため、仕事としては認められないのだ。複数の仕事を与えられ、仕事の成功という喜びを得ることができるのは、ごく一部の上位使徒のみだ。認められもするし、昇進もありうる。陽階のシステムは秩序に守られているので、簡単には揺るがない。人間社会の治世の危うさとは違って、陽階の為政者たちの頭脳が格段に違う。

さて、各層を隔てる”門”は、所謂大きな扉のような形状だ。金属製の大きな扉をくぐると、突然場の空気のまったく違う同じような廊下が出現する。門は厳重に開閉を管理されているらしく、厳しい門番と守衛が10名以上も不寝番をしていた。第6層も、第5層も、使者の雰囲気にはさほど変わり映えはない。制服こそ明度が段々と明るくなってゆくようだが、誰もお仕着せのデザインの服を着て、一様に不機嫌で、そしてそこそこの高齢であった。

第1層に近づくにつれ、紫檀は息苦しさを覚える。それは接触する使者のアトモスフィア濃度の上昇に対する、気圧の差なのだと、第3層の男から教わった。この3層ほどから、紫檀はあまり使者の近くに寄りたくないと感じた。撥ね付けられるような圧力を感じる。各層が亜空間として隔てられている事実、その理由に”気圧の差”があるという。下層に行くにしたがって、使徒に与えられる神のアトモスフィアの量が減ってくる。3層の男は1／30の希釈量がなければ、基礎代謝を賄えないが、紫檀はたった1／1000でも十分に基礎代謝を賄っている。そういうわけで、非力な紫檀が第二使徒である川模と会うなら、まさに命がけなのだそうだ。3層の男は、紫檀を見て、

「生きたまま1層に入れるかどうか……」

と懸念していた。既に時間は午後10時を回っており、川模と面会するのは午後11時になる。

最も巨大で最も壮麗な第1層の門をくぐった時、紫檀は足を踏み入れた途端、意識を失いかけてよろめいた。20名を超える守衛の一人が脇を支えた。紫檀は遂に1層の地を踏んだのだ。隣にいる守衛の発する気圧が紫檀の全身を軋ませ、猛烈な苦痛が襲う。彼は紫檀を助け起こし、肩を貸しながら、控え室に案内した。

「ここで、身体を慣らすといい。第8層から来たのだから、暫くは辛いだろう」

使者は部屋に紫檀を残し、消えていった。

息苦しい。動悸がする。

四方八方から気圧の壁に押しつぶされそうだ。控え室を見渡すと、清潔だが広く殺風景な部屋だ。白い内装に床は大理石、クリスタル製の大きな応接机とソファがあり、天井には豪華な白い唐草模様のレリーフが広がっている。控え室の壁には涼しげな水時計があり、いつの間にか11時を指していた。紫檀はソファには座ってはいけないものと弁え、壁に備え付けられた大きな鏡で、ひたすら制服に乱れがないかをチェックすることに腐心した。

「はあ……」

息苦しさはとれないが、少しすると身体が第1層に馴染んできた。紫檀はこの控え室に通されたであろう者たちの末期について思いを馳せる。

川模は、紫檀を裁くためだけにこんな世界の果てとも思えるような場所に呼びつけたのだろうか。それほど、大きな過ちを犯したとは思えない。川模が些細な事によほど不寛容であるか、もしくはテスラが川模にとって相当な愛馬だった場合には仕方ないかもしれないが。川模は紫檀に対し、これっぽちも良心をいためる必要がなく、彼が彼女かからすれば紫檀は居てもいなくてもよい虫けら同然の存在であり、殺害したとて何の躊躇も感じないのだろうか。

静かに、扉が開いた。彼女は自ら扉をあけて、しずしずと入ってきた。川模が入ってくるとしたら、てっきり轟々とした気圧の渦巻

く中を従者を引き連れてやってくるものだとはかり思っていたので、大人しい女性使徒が川模だと気づくまでに暫し時間を要した。紫檀は彼女が川模 廿日だと思っていなかったのだが、そのあまりに完全な容姿にため息が出た。

彼女は紫檀ではなくとも、美しく映っただろう。高位使徒のみに着用の許される青衣を清楚なワンピースのように仕立て、華奢な白い手で花束をかかえていた。彼女は花束を控え室の花瓶に生け、丁寧に整えた。

「そこに、おかけなさい。ずぶ濡れですね……8層は雨でしたか」
彼女は紫檀と目を合わせ、ソファを指差した。紫檀は促されて席につこうとしたが、差し向かいという状況が恐れ多く腰が萎えたので、床に跪き思い余って自己紹介し、謝罪もはじめた。

「私は第8層の卑しき馬番役、紫檀 葡萄めにございます。このたびの私の失態を、さぞやお怒りでしよう。管理を怠っていたと仰られれば返答のしようもございません。御馬を預かっておきながら皮膚病を患わせてしまいましたのは私の責任でございます。謹んで謝罪申し上げます」

「一体、何のことです」

川模は見栄えの悪い葉を指先で摘んでいた。細やかに神経を使い、彼女は美しく花瓶を飾る。

「は？」

「もう一度申し付けます。そこにおかけなさい」

彼女は再び穏やかに、同じ言葉を繰り返した。紫檀はもはや、何故呼びつけられたのか分からなくなった。

「馬を手入れしていたのは、あなたですね？」

「はい、今日手入れさせていただきましたのは私めにございます」

紫檀は項垂れた。もはや運命は決定しつつある。やはり馬の件で呼び出されたのだ。少し勘違いしただけで、川模が馬の事で腹を立てたのは確実だ。もう、いつそ早く楽にしてほしい。

「とはいえ、間違いないようです。私にはわかります。紫檀と申しましたね。私は川模 廿日、第二位の使徒です。馬番役の仕事は如何ですか」

「は、はい。責任ある仕事と身が引き締まります。高位使徒のご騎乗なさる御馬をお預かりいたしておりますので」

ようやく花瓶を整えた川模もソファにかけて、肘掛にゆったりと身体をもたせ掛ける。光沢のある青いワンピースが、優雅なひだをつくって官能的に見えた。川模の腰の柔らかな曲線美は、男性使徒ばかりの牧場で暮らしていた紫檀に刺激的だ。彼女の肢体からほのかに花の香がする。

それにしても、紫檀は第二使徒の気圧にやられない。

彼女が手加減でもしているのか、紫檀はそう思い込んだ。

「満足しているのなら無理にとは申しませんが、他の仕事をするつもりはありませんか」

川模はいたずらっぽく目配せをする。

その笑顔には裏がないのか、紫檀はその微笑を素直に信じていいのか迷った。

「他の仕事、でございますか」

落ち着け、不用意な発言で首が飛ぶ。答えたくない。紫檀は返答

を洩りたかった。川模の目的が分からない。すると、彼女は花束と一緒に持ってきた大きな手提げ袋から、ごっそりと書類の数々をテーブルの上に乗せた。そのうちの一冊には、意外な文字が見えた。

「あなたさえよければ、第1層、第16位使徒へと推薦しようと思うのです。既に第一使徒にも了解をとりました」

推薦者の名前だけ空欄となった、川模 廿日の認証による高位使徒推薦状。よく見ると、第一使徒、響 以御のサインも入っている。紫檀は彼女が冗談を言っているとしたか考えられない。第1層の居住者となるばかりか、16位という高位を与えられるとは、一体自分に何の権利があつて？

夢物語も甚だしい。

「何故だと思えますか？」

川模は混乱する紫檀に、優しく穏やかに尋ねる。彼は小さく首を振るばかりで、今にも気絶しそうだ。

「馬にああなたの気配が染み付いていたのです。驚きました。気配が生き物に染み付くということは、珍しいですよ。あなたがそれなりの力を持っているからでしょう。潜在能力を見込んで16位に推薦します。但し、資格試験を受験してください。推薦状を書きますので、受験に有利にはなると思えます。あなたならできると信じています」

彼女は紫檀の荒れた手を厭いもせず取り上げ、両手で包み込み、いたわるように彼を正面から見据えた。その瞳の透き通っていたこと。

川模はまさに天使のように微笑みかける。紫檀は……正当な努力を、正当に認められた。心を込めてテスラに二度もブラッシングをし、馬に思いを込め、幾度となく触れてきた。その努力を川模はそっと見出し、彼女は分け隔てなく最下層身分の紫檀に手を差し伸べた。

いま全ての歯車がかみ合った。

棧利が紫檀にテスラの世話を押しつけず、テスラが棧利の杜撰な管理によって皮膚病を患わず、テスラの毛並みが悪いと見咎めず、紫檀がテスラを再度念入りに手入れせず、棧利が紫檀を庇わず使用者の前に突き出していなければ。この瞬間はなかった。

何一つ無駄な要素はなかった。

底辺にあった紫檀の前に、天上から思いもかけない光が注がれたのだ。

「上位使徒資格試験は1ヶ月後です。私の部屋の一室を与えますから、そこで勉強をするとういでしょう。16位を空けて待っていますまよ。……とはいっても、あなたの意思を聞いていませんでしたね。いかがですか？」

川模 廿日は書類を広げながら、紫檀 葡萄に説明する。千載一遇の機会とはまさにこのこと。第二使徒からの申し出など、奇跡が起こつてもありえない。返事は決まっていた。いかがですか、と問いかけた川模の瞳が、穏やかに笑っている。このひとを、絶対に失望させてはならない。紫檀は強く胸に誓った。

「光栄の至りでございます。ご期待に添えるよう、精一杯つとめさせていただきます」

「それはよかった。ではその制服を脱いでこれをお召し下さい。そ

れと、あなたのＩＤカードです。写真は後で入れさせましょう」

廿日は小さなプラチナのカードを手渡す。写真と名前の欄は空欄になっている。そして廿日の与えられたのは第１層の中でも高位使徒にのみ着用の許される青衣と、各階層フリーパスのＩＤであった。これでどこでも好きな階層にいけるらしい。夢のような権限が与えられた。紫檀はまだ、意識がふわふわとしている。

「これから私の居室に案内しますが、第８層に取りに戻りたいものがありますか？」

ありません、と言いかけてその言葉を飲み込んだ。宿舎に残っているもので執着するものはないが、馬だ。伝馬たちに別れを告げなくてはならない。馬達との別れは辛い、川模の恩に報いなくてはならないと思った。紫檀がいない方が、先輩たちも働くかもしれない。

絶望の日々から救い出した天上の使徒、川模が彼を憐れんだのなら、彼女は真実の神の代理者だといえる。第１層に召されたからには、十分に身を整えていつか神と見えなければならない。例えば神が、傲慢な暴君だったとしても。

「では、８層から戻ってきたらまた私をたずねて下さい。お待ちしていますよ、何か質問が？」

「あの……ひとつ伺いしたいのです。貴重な機会を頂き、平に感謝しております。身に余る栄誉です。ですが、神様がお許しになるでしょうか。神様は馬番役の出の卑しい私など、穢らわしく思われるのではと……」

紫檀にとって神とは、効果があるともないとも知らない、ただのアンブルに過ぎなかった。神と聞いた川模の表情が引き締まり僅かに空気が変化したことに、紫檀は敏感に気付く。物言わぬ馬たちの

面倒をみてきた彼は、相手の感情を慮ることに長けていた。川模にとって神は、それほどに大切な存在なのだろうか。安易に神の名を出してしまったことを悔いながら、紫檀はうつむく。

「いいえ。軍神下使徒間に貴賤はありません。神様の名のもとに平等です」

彼女の瞳には、怒りの色すらも滲んで見えた。

「私はあなたの能力を認めましたが、性質を知りません。もしあなたが自らを卑しいと言いたいのなら、それはあなたの怠慢です。公式掲示板を一度も見なかったのですか。神様は使徒に均しく就労の機会を下します。各層の居住者となるための試験が、定期的に行われています。600年間にわたり最下層身分のあなたは、一度も試験を受けなかったということです。法制すら学ばなかったのですか」

反論の余地もないほどに、第二使徒、川模 廿日は紫檀を打ちのめした。

「誰のせいでもありません。600年もの間8層に留まり続けたのはあなたの固き意思であり、希望であり、責任です。なのに、馬番役を二度も卑しいと言いましたね」

「……も、申し訳ありません」

紫檀は恥ずかしくて、ただ彼女の顔を見ることができないほど恥ずかしくて川模の足元に平伏した。悔しくて、涙がぼろぼろあふれた。彼なりの努力をしたと、その見返りだと思っていた。実際は何もしていなかったのに……。馬場の柵の上で、まだ見ぬ生物階を羨み、神階に生まれついたことを呪った。

同じだったのに。生物階と同じく、軍神下使徒は平等だったというのに。

「やり直したいと思うのなら、これから死に物狂いで励むことです。私にここまで言われて踏ん張らなければ、その時こそはあなたを軽蔑します」

権利を進んで放棄していたのは、紫檀自身の責任だったのだ。神階の公式掲示板は詰所のすぐ横に設置されていた。確かに、定期的な昇進試験が行われていた。それをはなから受けようとしなかったのは彼自身だ。応募条件を読もうとしなかった。告知を見ようとしなかった。何百年も。

それで神を傲慢と言っていたかと思うと、何と愚かだったのかと胸が痛い。救いを求める権利すらも、最初からなかったのだと。

「恥をしのんでもう一つ、ご質問を。神様とは、どんなお方なのですか？」

「神様は弱冠152歳ですが、信念のおありになる方です」

152歳だと？ 紫檀よりどれだけ若いというのだろう。先代の軍神が崩御したというのは分かっていた。だが、代わって軍神を襲名した神が、これほど若かったとは……枢軸神というからには少なくとも500年は生きて、経験も十分に積んだものだと考えていた。しかも彼はうる覚えだが陽階枢軸第7位に叙階されている、位神となるには少なくとも100歳までは受験できない筈なので、わずかな半世紀未満の間で7位まで上り詰めたことになる。

とんでもない業績だ。彼より何倍も年上の紫檀が一体、何を残してきたというのだろう。そう思うと紫檀は怠慢により失った年月の長さをひたすら悔いた。

神を見るために毎晩毎晩、鳳の檻を見張っていたあの頃、神は努力もせず怠惰であった紫檀を見て、姿を顕さなかったのかとさえ思われる。物心ついた時から馬番役でいて、勉学はおろか、武芸のたしなみもない。途端に膨らみすぎた希望は風船のしぼむように萎えて、川模の期待に沿える自信がなくなった。学もない、力もない、何ができる、と再び弱気な心が頭をもたげてくる。

川模は次の予定があるといって、部屋から出て行った。そうだが、彼女だって多忙だ。とにかく自信があってもなくとも猛勉強をし、そして猛特訓をして必ず合格しなくてはならない。

誰もいなくなって室内で川模の置いていった書類を捲る。手続きの書類は上の一枚だけで、試験予想問題集が大半をしめていた。陽階高等使徒認定試験の概要はこうである。

論文を3つ、基礎学力を問う問題、性格適性、法学、そして軍神下使徒の専門分野である兵法学が主なところだ。実技試験は基礎体術、応用体術、武器操術、そして現代兵器使用法などであった。基礎的な実力もない彼には膨大な量だ。

早速勉強をしなければ、1ヶ月後に間に合わない。紫檀は支給されたばかりの青衣を纏うと、頬をパンと平手打ちにして気合を入れた。

パスカードを使って7つのゲートをくぐり抜け、8層に戻ってきた。第8層の天候はますます荒れて、到着した頃には空を龍が駆け巡るような落雷を伴う大豪雨のような様相を呈してきた。だが先輩衆、特に棧利には二度と会いたくなかった彼にとって、足音を消してくれるよい雨夜だった。彼は数時間前に脱ぎ捨てたコートを見つけて纏った。

雨風をしのげれば、何だっていい。彼は雨に打たれながら徒歩で宿舎に戻った。遠くに自分の小さな宿舎が見えると立ち止まった。おかしい、何故か煌々と明かりが点っている。彼は確かに戸締りをし、明かりを消して出てきた筈である。

胸騒ぎがして我が家へ走り、部屋のドアを蹴飛ばすようにして開けると、棧利をはじめ数名の先輩使徒たちが部屋に土足で踏み込み、物色され、様々なものが略奪され、そして事もあるうに陽階使徒に禁じられた酒を持ち出して、酒盛りをしているではないか。

「こいつ、帰ってきやがったぞ」

棧利は悪びれもせず、ただ紫檀の帰還について面白くなさそうな表情を浮かべていた。

「処刑の日取りは、決まったのか？」

棧利の言葉に、今度という今度は紫檀の怒りも頂点に達し、棧利の胸倉めがけて飛び掛った。そうやって頭に血が上っていくら彼が暴れたといっても、数の利で先輩使徒たちに捻じ伏せられ、リンチに処されるにそう時間はかからなかった。長靴を履き、拍車をつけたまま蹴られた紫檀の顔は切り刻まれ、腫れ、そして目の周りは充血して真っ赤になった。

「俺らにたてつくとは、一体どういう神経をしてるんだ？」

繰り返される彼らの行為の卑劣さや醜さが逆に紫檀の目を覚ました。

世界の極みともいえる場所に足を踏み入れ、神の代理者である川模に声をかけられ、叱咤され、道を正された。急速に、まるで外の

落雷のように鮮烈に開けた新しい道の前に立ち彼らの行為に触れ、彼らに怒りを向ける動機を失ってしまった。やはり居場所はない。彼らに再認識させられるにとどまった。もう後には引けないという覚悟が沸々と沸き起こってくる。

そんな紫檀の決意も察することのできない棧利は、這いつくばった彼のブラウンの後頭部を踏みつけると、彼が身に纏っているコートを引き剥いだ。たった今足蹴にし、蹴りものにしたこの男が身に纏っているものが、第1層の中でも特に高位の者にのみ着用の許される青衣であると棧利が気づいた時には遅かった。

紫檀は次の瞬間の彼らの掌を返したような対応も、居直りや疑いも、予測されるどの行動を見るのも虫唾が走るほどに拒絶したかった。彼は跳ね起き、馬鞭と、泥に汚れた親友たちからの手紙を握り締めると、コートもかなぐり棄てて、割られた窓から土砂降りの雨夜の草原へと飛び出していった。

「第1層に、召されたのか……何であいつが」

酔いのすっかりさめた棧利がつぶやいたが、誰もそれに応じるものはなかった。彼らは凍りついた死体のようにその場で立ちすくむ。これから本当に処刑の日取りが決められ罰せられるのは、彼らかもしれない。

外伝？ 紫檀と神と第二使徒と——灰かぶりの使徒1（後書き）

外伝？ 紫檀と神と第二使徒と——灰かぶりの使徒2に続きます。

外伝？ 紫檀と神と第二使徒と——灰かぶりの使徒2

帰る場所を失った紫檀にとって、進むべき道は一つであった。

現在時刻1時45分、各層を繋ぐ全ての門が閉ざされるまでに残された時間は僅かに15分。寒さと雨が身にしみる。青衣一枚で疾風のようにがむしゃらに走った。

紫檀はひた走りながら、馬舎に寄って馬達に最後の別れを告げなかったと悔いたが、後悔はすぐに雨が洗い流す。いつか十大使徒にまで上り詰めて会いに戻ればいいのだ。

可能性を閉ざさない、これ以上、自らの手で不可能にしない。

門限の2時までに関に合うかが鍵だった。2時に間に合わなければパスカードを持っても門は開かないと、門番に念押しをされていた。

雨の中の野宿を強いられることとなり、打撲や切り傷で満身創痍のなか、体力を消耗する。棧利も追っ手を差し向けているかもしれない。彼は紫檀が青衣を纏っているのを目撃し、紫檀が第1層に召されたと知っている。暴行を加えた証拠が上司に審らかにされることを恐れ、紫檀を足止めしようとするかもしれない。

息を切らせ、顔を打ち付ける大粒の雨が傷口に染みたが、先を急ぎ走る彼にはさほど痛みを与えなかった。

草原を一直線に流れる川の橋を渡る。雨で濁流に飲まれる川に架かる橋を駆け抜けようとした時、彼の視界の端に白い布にくるまれた何かが映った。

気付かなければ通り過ぎたものを……紫檀は見てしまったのだ。

離れ小島となった中州に横たわる白い人影。顔までは見えないが、白いローブを頭からすっぽりと纏った使徒が倒れているように見え

る。足を止めて遠目にそれを見つめ狼狽した。反射的に腕時計を睨み付ける。聞こえる筈もないのに、秒針が時を刻む音ばかりが脳裏に響く。救助し介抱しては、どうやっても門限に間に合わない。

紫檀はもう第8層とは関わりがなくなるのだ。門の中には天上の生活が待っていた。放っておいても死にはしないだろうし、明日になれば誰か救助がくる。もしくは第一層に戻ってから、8層に誰か倒れていたと報告しても遅くない。万が一死んでしまったとしても、それは仕方がない……紫檀は都合のいいように解釈しようとしたが、白い物体は沈黙したまま依然として倒れている。助けを求めているのは、よほど具合が悪いということだ。川の中州。孤立無援の場所に、雨晒しになった重病人だか怪我人がひとり……。心なしか雨音が強く紫檀の耳に鳴った。

急いで門に戻るんだ。

いや、助けるんだ。

紫檀の良心と暗い心が交互に交錯する。彼は首を振って川の中州から目を背け、歩みを進めようとした。しかし彼の足は鉛が入ったように重く、一步とて動かない。彼は暗闇の中雨に打たれながら、再び川の中州に目を向けた。病人の足が、川の水に浸っている。雨足が強まり、水位が上がってきているのだ……。それほど広くはない中州が川の水位上昇によって川底に沈むまで、いくばくもなからう。駄目だ、明日まで放置しては溺死する。救出しなければ。

「うわああ——！」

分けもわからず咆哮をあげながら濁流渦巻く川に飛び込み、彼は激流に流されそうになりながら必死に腕をかいてようやくのことで中州に泳ぎ着いた。普段の運動不足がたたり、肩が外れてしまったような気がする。そういえば使徒は翼を持っているが、自由に拡げ

ることが許されていない。下位の使徒は翼を拘束する制御装置で制御され、飛翔能力を奪われていたからだ。ぬかるんだ中州から周囲を見渡すと、川の流れは激しくなる一方だった。重病人と思しき人物を裏返して顔を隠していたフードを取ると、若い男のようである。しかし紫檀はその男を見た瞬間、体中を稲妻に打たれたように衝撃が走って、思わず顔をそむけたくなった。うまくいえないが、圧倒的な触れがたさがあった。そんな感覚は、はじめてだった。しいて似ているものをあげるとすれば、つい先ほど一層で体験した”気圧の差”なのかもしれない。それはアトモスフィアの希釈率に依存するものであって、高位の使徒ほどアトモスフィアを多く与えられている。

彼はどこに所属している、誰なのか……。

悠長に考えている時間もない。紫檀はふらつく足を踏ん張って彼を背中に負い、首まで濁流に浸りながら川を渡りきり、嵐の草原へ引き上げてへたり込んだ。縋るように腕時計を見る。門限まで残り1分、どう走ってもタイムオーバーだ。紫檀は彼を負ったまま再び立ち上がった。とにかく、今日はどこか雨風が凌げる場所を見つけて野宿だ。しかも怪我人だか病人だかがいる。

紫檀は彼を負ってとぼとぼと歩き回り、橋の傍にあった檻樓の廃屋にたどり着いた。

軋んだ扉をあけ廃屋の中を見ると、古い農具などが置いてある。湿った藁もあった。

ここで嵐の一夜を明かせそうだ。紫檀は自分のことをさておき、まずそのあたりにあった檻樓布でずぶ濡れの男の身体を拭う。ついでに首筋をまさぐった。使徒はプラチナのIDプレートを首からかけていて、それを見れば何階層のどこのエリアの所属の誰なのか分

かる。しかし彼の首にかかっていたものは規定のIDプレートではなくただのネックレスのようにしか見えず、名前が入っていない。ID不携行は軽犯罪だが……紫檀は何も見なかったことにして、ネックレスをローブの下に戻した。

それにしても……と、紫檀は彼の身元を詮索する。彼は何故、川の中州などに倒れていたのだろうか。あれこれと思いを巡らせながら濡れた上着を脱がせた。額に触れると熱い。熱病にでもかかったのだろうか？ 彼は撥水性のある上等の素材を纏っていたようで、濡れていたのは白いローブと、そして中の一枚だけだ。何枚も着込んでいたので、真っ裸にはさせず済んだ。濡れたローブを絞って納屋に干し、紫檀はようやく身体を拭くと、古いランプを見つけて油を注ぎ点した。

寒がっているようなので、藁をかけてやる。紫檀の分はないが、傷だらけで体がほてって寒さは感じない。それより彼の方が紫檀よりも深刻な状況だった。傷があれば手当てできるが、ない場合には紫檀ができる処置がない。紫檀は思い出して脈をとったが、脈拍を感じない。既に死んでいたのだろうか？ だが彼は呼吸をしているし、生きている。気のせいかもしれないが、ランプで照らさなくとも僅かに光を纏っているように見えた。夜勤担当か何かで、光を発する素材を着ているのだろうか？ 疑問は募るばかりだ。

紫檀は改めて、光を纏った男に得体の知れない恐怖が沸き起こってくるのを感じた。

こんな気味の悪い男と、夜を明かすのか……。

そういえば思い出したように、傷ついた頬の傷口がずきずきと痛みだす。雨水と泥が入って、傷口が膿みはじめているからだ。手当てをした方がよいのだろうが、命には別状がないので今は捨て置く。

早く夜が明けないものだろうか……心細くなりながら、紫檀は頬を押さえた。

その時、がさごそと物音がしたので振り向くと、男は意識が戻ったらしく天井を見上げていた。紫檀がランプを持ってきて照らすと、わずらわしそうに顔を向ける。ランプの光のもとので、青い瞳はひどく澄んで見えた。一瞬、紫檀は息を止めた。この男は何だ？ 彼は何か違う、普通の使徒とは違う。しかも決定的にだ。紫檀は恐る恐るにじり寄って、気まずいので彼にまた暖かな藁を追加した。医療知識のない紫檀が彼にできることといえばこれぐらいだ。

「だ……大丈夫ですか？」

「ここは……」

「第8層の廃屋です。僕は紫檀と申します。あなたは意識を失って、川の中州に倒れていらっしまったのです。大丈夫ですか？」

「……ありがとう。大丈夫だ」

感謝の言葉を述べ、彼は手をついて身をもたげる。衰弱はしているようだが、瀕死というわけではなさそうだ。紫檀は一気に安心して、安堵のため息をつく。彼はふと気付いて紫檀の顔をまじまじと見つめた。紫檀の頬が腫れあがっているのを見つけたのだ。

「それはわたしを助けてくれようとして負った傷なの？」

申し訳なさそうに、紫檀に手を差し伸べる。気持ちだけで十分だと紫檀はのけぞる。この廃屋には腐った水はあるだろうが、清潔なガーゼも消毒薬もない。明日になればきれいな水で手当ができる。それまでの辛抱。

この傷は栈利たちに殴られてできたものであって、彼を助けようとして負ったものではない。

「いえ、これは別件で」

「ちょっと診せて……殴られたみたいだ、喧嘩でもしたのか」

彼はかざした右手を紫檀の頬に宛がい、傷口をなぞるように撫でた。

気休めはいいが、傷口に触れると雑菌も入るし余計に痛くなる、と思いかけて紫檀ははっと目を見開く。痛みを感じない。それどころか彼の手は撫でられていると嘘のように腫れが引き、痛みも和らいでゆくのだった。薬も用いず、ただ触れるだけで……？ 信じられない気持ちで頬に触れると、既に傷跡はなかった。

「今、どうやって……何も持っていないのに」

「消毒だけでも思ってる」

消毒って、消毒薬も持っていないのにどうやって。紫檀が驚いていると、彼は更に紫檀のこまごまとした負傷に気付いた。

「肩、外れているね。あと、翼の小さな骨がいくつか骨折してる」

彼は紫檀の外れていた肩も、打撲や骨折も手早く見事に癒す。紫檀が何度注視しても、彼は何も器具を持っておらず素手だった。素手でどうやって治療ができる。医者だったにしても、信じられない。

「お医者さまですか？ 所属はどこに……それに、何故倒れていらしたのですか」

紫檀はそう言いながら、彼は本当に医者なのだろうかと首をかしげる。医者が中州に倒れて身動きとれない状態になっていたなど……笑い話にもならない。

「雷に当たったようなんだ。おかげで神経が切れてしまった、手術道具がないと治せない」

第8層で誰かが雷に当たったなんて話、聞いたことがない。珍しいこともあるものだ、8層には高い建物などいくらでもある。彼はその後も一切事情を話さないまま、夜が明けたらある場所に送って

ほしいという。彼を背負って何キロも歩くのか……億劫だが仕方ない。足が立たないのだから、どうにか送り届けるほかない。

「本当にすまないね、恩にきるよ」

とにかく夜があげれば門は開く。

紫檀は些細な頼みを聞きとどけることにした。傷を癒してもらった恩もあるし、どのみちこの8階層に来ることはない。戻ってくるなら、それは十大使徒として昇進したときだ。8階層への恩返しだと思って、最後の奉公をしておくことにした。

翌日は昨日の雷雨が嘘のようによく晴れた。

紫檀はすがすがしい気持ちで第1層に戻る前に、彼を指定の場所に送ってゆく仕事が残っていた。足が動かないというので負うと、殆ど重さはない。昨日はそれなりの重さがあった筈だが、紫檀の体力が回復したせいだろうか。振り落としていないかと何度も振り返った。彼はその度に、すまなそうな顔を向けた。

「それ、8階層の所属ではない青衣だね。第1層の使徒が何故ここにいるの」

「もともと第8層の馬番役だったのですが、昨日第二使徒の方からお召しを受け、青衣はその時にいただいたもので、正式な第1層の使徒ではありません。でも、来月の試験を受験してみるつもりです」

「そう……廿日が」

彼は紫檀の背中であつあつ言っていた。そして彼はやはり、一向に自ら名乗ろうとはしない。普通は第二使徒の名を呼び捨てになどしない。陰口だとしても憚られる。それなのに、彼らに対する敬意というものもなさそうだ。

彼はよほど高位の使徒なのだろうか、それにしても第二使徒より高位である筈がなかりうに。一体誰なのだろうと、ますます気にかかった。昨日はただひたすら体調が心配だったが、今度は身元が気になる。

「ところであなたは何層の所属なんです？」

「後で教えるよ」

彼は適当にごまかして返答をさけた。

「まさか犯罪とか、してませんよね？」

身分を名乗れないところをみると、犯罪者で、逃走中なのでは？ふとそんな可能性が脳裏に過ぎったので率直に訊いてみた。彼は笑って「それは心配ないよ」と返した。

草原をわたり数時間、彼を負って歩きながら、沈黙は気まずいとおって紫檀はひとり、身の上話をはじめた。馬たちとの思い出のことや、牧場での生活のこと。第8層から第1層への抜擢によって一変する生活への不安、川模 廿日の期待を裏切らないようにしなければならぬという意気込みを、紫檀より随分若いと思われる青年に、隠さず語った。彼はいちいち相槌を打って、興味深そうに紫檀の話聞いていた。紫檀は8層で初めて誰かに理解してもらったような気がする。思えば紫檀の話をこうやって水を差さず、最後まで聞いてくれたのは彼だけだ。会話といえど一方通行の命令ばかり、それが第8層の原則だ。真摯に耳をかたむける。相手と対等に通じ合うことのできる喜びを、紫檀は久しぶりに噛み締めたのである。

しかし彼に理解されていると感じれば感じるほど、紫檀も彼を理解したくなってきた。彼とは本当の意味でよい関係が築けそうだ。それは第二使徒の廿日に抱く感謝と敬愛の気持ちとは違う、友達になりたいという純粋な気持ちだった。彼は相変わらず、一向に名乗ろうとはしなかった。紫檀の背中に乗っかって歩いて徒歩で何時間も歩

かせているのに、名も名乗らないのは聊か無礼だ。紫檀は何度も名を尋ねる機会を失った。紫檀が聞き出そうとするたびに、彼は違う話題を振ってきた。まるで紫檀の心を読まれているように。

「なんかごめんなさい、自分のことばかり」

しかし、彼が身の上話をしないからこちらの話ばかりになってしまふのは仕方がない。

「いや、そういった話を聞いたことがなかったから、興味深いよ」

「あなたの話も聞かせてくださいよ！ 今のが話したくないなら、小さい頃の話でも何でもいいから。ご両親とかの話でも何でも」

「両親もいないし、子供の頃からずっとひとりだ」

なるほど、孤児なのか……。幼少期の暗い思い出が、彼を寡黙な性格にしてしまったのだろうか。紫檀は気の毒に思った。

「こんな風に話しかけられたの、初めてだよ。凄く新鮮だ、あそこに倒れていてよかった」

「友達とかは？ 同僚とか」

「友達か……考えてみれば一人もいないな」

「ひとりも？」

紫檀は驚いて立ち止まる。

「多分、これからもいないんだろうね」

何と寂しいことを言うのか……紫檀は遣る瀬無い気持ちになった。紫檀は所属が離れているが何名か気のおけない友達はいるし、ここ最近では会えなくとも手紙で遣り取りなどしている。この青年とは話をしやすいし、彼は聞き上手だ。友達ができない、などとは思えない。紫檀は彼をはげました。

「友達なんて一人できたら、二人目もすぐできますよ！ でも、それにはあなたが変わらないと。もっと心を開いて明るくならないと！」

「そうだね、……変わりたいよ。でもそれは、来世での話になりそうだ」

「来世？」

「もし生まれ変われるとしたらね」

急に来世の話になって紫檀が困惑していると、彼はこう言った。

「生まれ変わったら、人間になりたいんだ。そのときには、たくさん友達を作りたいな」

憧れるような眼差しを、漠然と空に向けている。

何でよりによって人間になってまで？ と、紫檀はツツコミをいれそうになった。友達を作るのが、彼にとってはそんなに難しいことなのか……。

「ていうかそれ、人間じゃなくても今すぐできますから。それに、そんな調子だと一生独身ですよ」

紫檀は独身の自分をさておき、彼の行く末を心配した。使徒は友達どころか婚姻を禁じられていないし、恋愛も自由だ。友達作りも、彼が諦めなければ絶対に不可能などではない。それを”来世で”と言ってしまうあたり、よほど彼が自身の性格を変えられない頑固者なのか、何か深い理由があつてのことか。寂しい生涯を送り、寂しい老後を送る。そんな将来が見えるような気がしてならない。

「では手始めに、折角なので僕でよければ友達一号になります」

紫檀は軽い気持ちでそう言ったが、彼はやんわり拒絶した。

「ありがとう。気持ちだけ、もらっておくよ」

「ほら……そうやって壁を作ってるから、友達いないんですよ」

「そういう君の夢はなに？」

「僕にも夢ができたんです、つい昨日の話ですけど」

「いいね、それは？」

彼は楽しそうに紫檀に尋ねる。

「神様にお会いすることです。あなたも使徒ならそう思いませんか？ 一度だけ、僕は神様の存在を感じたことがあるんですが……。光獣に乗って、夜空を風のように駆けてゆくのを地上から見上げていました。本当の神様はどんなお方なのだろうと思って……。一目だけでも、お会いしてみたいんです。僕、昨日まで神様のこと半信半疑で、恥ずかしいことに神様の御力を疑ったりもしました、でも第二使徒様にお会いして、目からうろこが落ちました。僕は今まで不信感を懷いていたことが恥ずかしい、神様は全てをご覧じて、僕たちを救ってくださっていたのに」

「……」

「あれ、何で絶句ですか？ そんな変な夢でしょうか」

無言になった気まずい空気を読んで、紫檀は、何かまずいことを言ってしまったかと体をこわばらせた。もしかして、神と会うという発想そのものが不敬の極みなのだろうか。もしくは、羨やんでいるのだろうか。彼が下層の使徒ならば、複雑に思うに違いない。彼は一生、神と会うことはできないのだから。彼は考え込んで、ぽつりと述べた。

「恥じる必要なんてない、恥じるべきはこちらの方だ」

「え？」

彼の表情がどこことなく沈んで見えたのは、紫檀の気のせいではない。何か、神に個人的な恨みでもあるか、神が嫌いなのだろうか。彼の言葉の意味を解せないまま、指示通りに進んでいると、見覚えのある建物が見えてきた。つい昨日そこを飛び出した、馬舎に戻ってきていたのだ。紫檀は身の危険を感じ思わず物陰に身を潜めた。棧利がどこを歩いているか知れない。今度見つかったら、殴られる程度ではすまない気がする。口封じに殺されて、ひっそりとどこかに埋められるに違いない。勿論彼も巻き添えになる。

「ここに御用ですか？　ここはまずい、危険です」

「いや、その隣」

彼は馬舎を左に見て、猶も進んで欲しいと言う。この先にはシロハヤブサ、鳳の檻しかない。紫檀が何度も憧れながら、決して踏み入ることの許されなかった神の領域だ。踏み入った時点で重罪は確定する。

「ここ、立ち入り禁止ですよ」

小声で彼にそう教える。これ以上は絶対に進めない。紫檀は足を止め背を振り返った。彼は檻を見つめている。ひよつとして、光獣番役だったのだろうか？　確かに紫檀は光獣番役とは面識もない。彼が何百年も光獣番役として務めていたとしても、話したことすらなかった。いわれてみれば光獣番役の制服は白く、目がかぶるほどの深いフードを被っている。少し違うような気もするが、彼のローブが似てないこともない。

「あ、もしかして光獣番役だったんですか？」

紫檀は心得て、光獣番役の彼と一緒にならと檻の前にやってきた。鳳は檻の中で相変わらず凜として、すくくと首を伸ばして前を見つめ、白く巨大な翼を折りたたんでいる。いつもよりすましているように見えた。

「立派ですよね……こんなに近くに來たのは久しぶりです。あの背中、一度でいいから触れてみたくて。でもあなたなら、羽を整える時なんかに触れたりする機会もあるのでしょうかね」

「触れる機会は確かにね。このまま中に入ってくれないか？」

いくら第1層に召された紫檀でも、これ以上は進めない。

「でも、僕はこれ以上は……。それにあなたも、光獣の世話よりま

ず医務室に」

「責任はとるし、君に害は及ばない。それにここで降ろされても困るんだ」

どうしてもそう言うので彼を負ったまま檻の入り口に近づくと、彼は認証番号を知っているようで、慣れた手つきでナンバーを押す。檻の扉はこともなく開いた。紫檀は白隼の檻の中に入り、巨大な雄姿を見上げる。我も忘れ、その至近からの姿を目におさめる。彼は、ふらふらと足をもつれさせながら入り口の操作パネルに触れる。紫檀は彼の腕を支えながら、シロハヤブサに魅入っていた。ふと電動音がして、檻の天井が開く。真っ青な8層の空が、紫檀の視界いっぱい広がった。

彼の要求はエスカレーターして、タラップまで連れて行ってくれと紫檀に頼む。

「まさか、鳳に乗る気ですか」

いかに光獣番役とはいえ彼のしやうとしていることは大罪だ。紫檀は急に怖ろしくなってきた、必死に首を振った。

「い、いけません。たとえ光獣番役でも、光獣を侵してはいけません！」

紫檀はこの男をどうしても止めなくてはならなかった。シロハヤブサは大きな黄色い眼球を向け、彼を見つめている。その鋭いクチバシでつつかれるのではないか、紫檀はもう既に及び腰になって、ひたすら檻から出ようともがくが扉が閉ざされている。光獣は首環を取らなければ、飛び立たない。青天井の下、タラップは鳳の背中に伸びていた。

「どうしても、行かなければならないんだ」

紫檀は彼が梃子でも言う事を聞きそうにないので、やけくそにな

ってタラップに連れて上がると、何も見なかったことにして逃げ出そうとした。

彼は紫檀の腕を握って離さない。紫檀の血の気が引いた。この場に留まれば共犯だ、一刻も早く逃げなくては。しかし紫檀がその手を振りほどこうとしても彼の力は強く、もがけばもがくほど腕に食い込む。彼は既に鳳の背に腕力でよじ登った。よく懐いているのか、鳳は危害を加えることもなくツンとすまして彼を背に乘せている。紫檀は小声で、しかし強い口調で彼を叱った。

「いいですか。これは！ 犯罪！ なんですよ！ 鳳は神様の乗り物です！ ふざけてないで気が済んだなら今すぐそこから降りて下さい！ まだ間に合いますから」

「これ、何かわかる？」

彼はふと、袖をたくり上げて左肩をあらわにしてみせた。軍神の御璽、展戦輪の金色の御璽が繊細な光を編んで輝いている。しかし紫檀は今はそれどころではない。

「展戦輪の刺青？ そんなどうでもいい自慢は後にして、早く降りてください、見張りが来てしまいます！」

紫檀たちは軍神下使徒なのだから、展戦輪をモチーフとしたものなど、そこかしこにある。というか、軍神下使徒は全ての持ち物に展戦輪の刻印の入ったものを持つ。それを肩に刻んだからといって、別に褒められたものではない。何か意味があるとすれば、一生を軍神に仕えるという意思表示だというぐらい。……紫檀はそう思っていた。

「へえ……」

それを知らないことに、彼は驚いているようだった。

「へー、じゃないです。早くそこから降りてください！」

「紫檀。本当はもう少し、名乗らないで君と友達のままでいたかった。でももう時間がない」

「先ほど君が言っていた夢、実は今かなっているんだ。わたしの名はユージーンⅡマズロー……君の会いたがっていた、神だよ」

寂しそうにそう言う彼の言葉を理解できず、紫檀は急に体が脱力するのを感じた。背筋を氷でぞわりと撫でられた気分だ。意識が体から抜けそうになった。

「え……？」

彼はいつの間にかその手に、真っ直ぐな杖を持っていた。分析的宇宙依拠現象把握機構（G-CAM）、軍神の神具を携えシロハヤブサの背から真実を告白する。

「介抱してくれて、ここまで連れてきてくれてありがとう。斥力中枢がやられていて飛翔できなかったんだ。そして半日間だったけど対等に話せて、友達でいてくれて嬉しかった」

紫檀は血の気が引いて、今にも卒倒しそうだ。くずおれそうになる紫檀の手を強く引いて彼は鳳の背に紫檀を乗せ、間髪いれず光獣に命ずる。

「さあ翔べ、鳳。生物階へ連れて行ってくれ」

鳳の首に取り付けられたフライトレコーダに繋がるマイクに、彼はすらすらとこう述べた。

「テイクオフ時間、GTC（神階標準時）1422。進入コードは1088、座標は生物階・北緯38度、西経77度。現場空域3kmで滞空、ODF（視覚郭清フィールド）を展開後、高度800mで広帯域MCFを展開する。テイクオフは座標2241にて。ゲートは第一ゲート利用を申請」

神の手によって鳳の首輪が解き放たれ、光獣が一柱の神と混乱する使徒を乗せ飛び立った。第8層の空に舞い、やがて使徒階の青い気圏を突破し光獣専用ゲートへと向かう。宇宙空間にエントリする。

鳳の展開する防護シールドが真空の寒さからふたりを守ってくれる。鳳は使徒階層間と陰陽間を繋ぐ光獣用ゲートウェイを飛んでいた。光獣はもともと宇宙空間をも飛翔できるように設計されている。宇宙空間飛行中は真空を飛ぶことになるが、真空中では羽を羽ばたかせてもあまり意味がないので、足輪についた電磁石の電圧を搭乗者がコントロールしつつゲートウェイのレール上を飛ぶ。

呼吸以外は二酸化炭素も吐かないこの素晴らしい乗り物の燃料は、鶏のササミとトウモロコシつぶだけ。ジェット燃料もロケット燃料もいらないが、それほど速度が出る。ゲートウェイの分岐点を何度か曲がったあと、陽階の広大な公獣エアポートに到着した。エアポートは広大な面積で何千ヘクタールもある。手前が伝馬、奥が光獣の発着場所だ。陽階の玄関口ともいえるエアポートは、全ての陽階神とその使徒が利用している。

ユージーンはエアポートに鳳を乗り入れ喉もとをさすると、鳳はピーツと汽笛のようなさえずり声を上げた。光獣がゲートを使用するという合図を送ったのだ。枢軸神のテイクオフを告げるサイレンが鳴り響き、他の公獣たちがユージーンに空路を譲るために慌てふためいて着陸し、空港スタッフが鳳を見上げ、光獣がゲートを通過するまで全ての公獣の発着を控える。枢軸神の乗り入れに空港官制があわてふためき、空港内に離発着禁止の放送が流れる。エアポートの上空にぽっかり、進入コードを受け付けた出階ゲートが空を穿つ窓のように開いている。公獣の離発着を制限し空をあけておかないと、鳳は巨鳥であるため翼で他の公獣を引っ掛けてしまい、空中で衝突事故が起こるのだった。

指示がいきわたると官制官が管制塔に青いランプを点し、空港から数百メートル上空に転々と数十メートル間隔で電磁加速ガイドの青い光が浮かび上がった。鳳は電磁加速のアシストによって準光速

飛翔速度に達し、生物階への転移速度に達したままゲートをくぐる。光速オーバードライブによるダイナミックな空間転移。鳳が光獣と呼ばれる所以である。

「紫檀、見て。生物階に降下するよ」

彼はぐったりと意識を失った紫檀に呼びかけたが、返事はなかった。仕方なく彼は進行方向を向くと、ガイドにそって鳳の足環の電磁加速が行われ、凄まじい加重を体感しつつ光の速度となってゲートを駆け抜ける。ゲートを抜けたとき、光獣は空間を跳躍し下には青い海がいつぱいに広がる。まだ意識を取り戻さない紫檀を見やる。

「まだ友達でいてくれるなら嬉しいけれど、きっとそっちからお断りだろうね」

どれだけ意識を失っていたか、覚えていない。一枚一枚美しく手入れされた巨大な羽毛に包まれて、紫檀は意識を取り戻した。

ふわふわとして、とても温かい。これほど柔らかな感触が、他にあったらどうか。紫檀がこれまで寝泊まりをしていた宿舍の、壊れそうな硬いベッドと一枚きりの肌布団ではこうはいかなかった。あと他に思いあたる柔らかいものといえば、馬だ。だが馬の毛も短いし、尻尾はざらざらとして少し違う。

他には紫檀の背中にも薄紫色の翼があったのだが、不可視化装置により目には触れないまま、触れる事もできず長い年月が経ち、もう彼自身に翼があったことも思い出せずにいた。陽階では逃亡を防ぐため、使徒が翼を使って飛翔できないようになっていた。彼らは翼を奪われ、神々の僕として使役されていた。

そうして考えてみると空を飛んだのは、初めてかもしれない。見たこともない、壮大で美しい景色が矢のように飛んでゆく……。

「意識が戻ったら自分でつかまって。片手での操縦は難しいんだ」
紫檀は必死で鳳の背にぶらさがっていたロープを掴んだ。しかしその手を離して、飛び降りたほうがよいのではないか。そうも思った。よりによって軍神に、数々の無礼をはたらいてしまった……一つ一つ思い返すと、取り返しのないことをしてしまったと分かる。説教じみたことや、立ち入った話もしてしまった。

「か、神様……僕はあなたをそうと知らず、大変なご無礼を。ここから飛び降りて死んでお詫びしたい気持ちです」

彼はその言葉を聞いていたが、まっすぐ前を向いたままこんな言葉を返してきた。

「薄暮色の、風情ある翼色だね。もう、飛び降りても死なないと思うよ」

そう言われて気付いた。紫檀の背の、不可視化装置と拘束具が解かれていた。いまはつきりと、紫檀の背には翼が見えた。彼がその権限において、拘束を解いたのだ。

「制御装置が、外れて……」

たしか拘束装置の制御を解かれるのは、十大使徒だけだ。仕事のために飛翔が必要だからだといわれている。

「少し羽根を伸ばして、見ているといいよ。操縦をよろしく、馬の騎乗と同じだからできるだろう」

ユージーンが鳳から手を離したので、紫檀は慌てて鳳の手綱を取る。憧れの光獣を紫檀が飛ばせているのだとしたら、信じられない。ユージーンは手を離して鳳の上に腰をおろし、両手をG-CAMに添えて起動した。丁寧な杖にアトモスフィアを通じ、杖は黄金色の光の層を纏う。神のなす業を至近距離から目撃する。紫檀の目に焼き付けた。忘れがたい神秘的な光景を。

” Grasp the Context by Analytical Microcosm (G-CAM)・Open.”

(分析的宇宙 依拠 現象把握機構 G-CAM、展開)

” System console open, access to program No, 121.”

(システムコンソール展開、プログラムNo, 121へ接続)

” Apply the Mind-Control Program, Electric Range 20 miles square, Speed 1.5 km/sec, Specific Absorption Rate 0.8 W/kg

(マインドコントロールプログラムを適用、作用範囲20マイル平方、速度 1.5キロメートル毎秒、人体頭部吸収比 0.8 ワット毎キログラム)

よどみなく紡ぎだされるコマンドワード。計算しつくされたプログラム構成。紫檀はその見事な業に見とれて息を呑む。

「すごい。これが神通力……ですか」

「残念ながら、わたしは神通力なんて使えないよ」

神具のできる大抵のことは、大電力さえあれば誰にでも出来ることが殆どだと、彼は自嘲する。例えば、マインドコントロールは神具を基点に厳密にコントロールされた電界を立ち上げ、人の思考回路を電気刺激とシーケンスにしたがって書き換えるテクニックなのだ。マインドブレイクもしかり、マインドギャップもしかり。それを奇跡のように受け止められ過大な反応をされると、居心地が悪いのだと彼は率直にそう述べた。

「がっかりしただろ。だから”神様”として崇められたり祈られたりすると、無力感を覚えるんだ。信仰にたえるほどの力をもっていればよかったのにと、時々思うよ」

ユージーンはずっと杖を撫でてコマンドを確定しG-CAMを最後に一振りすると、半径500mを基点に展戦輪のライトワークが雲間に投影される。緩やかに重なった光環は波を立ててベトナムの大地に拡大して浸透する。人々の心を束ね、鎮め、憎しみの連鎖を断ち切るために。神の名は明かされず、ひっそりとその地に記された奇跡を目撃し、紫檀は知らず、涙がこみ上げてきた。

「平和への祈りにこたえるのが、軍神の仕事だ。だが、まだわたしには荷が重い」

人の思いは神や使徒のそれより強い。そして助けを求める人々の祈りはとりわけ、彼には、大きな叫びとなって聞こえるのだという。戦場にはそんな人々の、神への祈りが渦巻いている。亡くなった犠牲者を、泣き叫ぶ子供達を上空から見下ろすたび、彼は地上に姿を顕して直接停戦を呼びかけたい衝動にかられるという。だが、生物階への神の存在を秘匿することが、主神ヴィブレッサミスの方針だ。人々を神の支配に怯えさせるのは、生物階のあり方として望ましくない。

「されど一日でも早く彼らに笑顔が戻るように、全力を尽くすことはできる」

時は西暦にして1962年。

第二次世界大戦が終結し、ベトナム（仏領インドシナ）から日本軍が撤退すると、コミンテルンの構成員であったホー・チ・ミンは

ハノイに首都を置いてベトナム民主共和国（北ベトナム）を成立させ共産主義による国造りを目指していた。これを阻止しようとする旧宗主国のフランスが背後に絡む南ベトナムと、北ベトナムの対立は続いていた。

1960年にはベトナム戦争が始まり、アメリカ軍は南ベトナム軍事援助司令部（MACV）を設置し、資本主義国と共産主義国の代理戦争は本格化しようとしていた。ユージーンはベトナムの独立を手助けするため、腹心の精鋭部隊を介入させていた。しかしマスコミの発達した現代社会において、姿を隠しながら軍事介入をするという手段での介入は難しくなってきた。ODF（視覚郭清フイールド）を展開できない、使徒はカメラに映る。一方、ODFを纏った神の姿は、誰にも見えない。ユージーンが足の神経が切れた状態でなお生物階降下を急いだのは、一刻も早く戦争を終結させるためだった。そのために取った最終手段は、マインドコントロールフイールドによる穏便な解決。

「ごめんなさい。神様。あなたがこんな……」

紫檀は泣いて泣いて、とにかく悔しくて腹立たしくて泣いた。神の姿を目にして、そして同時に孤独な、等身大の青年の姿を見たから。神としての名と責任に苦しみ、それに懸命にこたえようともがく。あの夜、8層の空から飛び去った幻影は、決して使徒たちが羨望の眼差しで見上げてはならなかった。興味本位に神の姿を訊ねたとき川模の表情がこわばった理由が、今更のように身にしみて分かった。川模は彼が、全能の神ではないと知っている。18万名の軍神下使徒たちにとって、たった一柱の絶対的な存在。空を覆いつくすばかりに強大なものと考えていた神の威光。だが実際に会ったその存在の、何と心細く頼りないことか。だからこそ、彼は尊い。

生涯を8層で潰え、ただ漫然と日々の不満を神になすりつける。そんな日々が、ずっと続いていたかもしれないと思うとぞっとする。まだ、遅くないだろうか。これからでも、取り戻せるだろうか。生

きる意義を見つけた。

卑近にいる、彼の為に、そして廿日のために何ができるだろう。彼らに全てを奉げようと思った。紫檀は彼と川模の為にこそ仕えたいと、先日とは違う決意を懷いたのだった。

「……一層に戻ろうか。ちょっと疲れたよ」

G—CAMを夕焼けの空に放り投げ、神はそう言った。紫檀の頬を打つ風がやけに、冷たく感じた。

＊

その頃、響　以御ら十大使徒と各軍事部門の代表者たちが、オペレーションルームにおいて今後の軍事介入のための戦局会議を行っていた。先に作戦会議を行い練った案を神に提出し、棄却されれば再審議を繰り返す。連日10時間にも及ぶ会議が行われていた。響は忽然と姿を消したユージーンが心配だった。こんな非常時に、とんずらされては困る。数十あった作戦案から、工作部隊が生物階への介入を図るという案に一本化され閉会となった。

「まだ、見つからないのか？　あの野郎、どこをほつき歩いてる。決済すべき書類が山のようにたまってるんだぞ。書類山、標高3メートルだ。これ以上積み上げてはなだれが起きる」

「以御、口に氣をつけてください。主には深いお考えがある筈です」

長い廊下を、廿日とふたりで歩く以御は苛立っていた。以御は背の高い使徒で、ウェーブのかかったブロンドの髪を肩まで伸ばし、袖のないロングコートを着ている。廿日のハイヒールの音と、以御の軍靴の音が廊下に染み入ってゆく。軍神下第一使徒を示す黒い御璽が、彼のむきだしの右肩に入っていた。

「あいつがいないと、戦局が動かない。どれだけの人間が犠牲になると思っているんだ」

「主はきつと今ごろ何かをお考えなのだと思います。主はお若いのに、よく頑張っているんじゃないですか」

「若い若くないは関係ない。軍神は軍神だ、若いというだけで奔放にされてはたまらん。書類の山もあるし」

「作戦書類も、今度からペーパーレスにするべきですね」

廿日は決してユージーンをけなしたりはしないが、彼女も同感だった。戦時中には軍神は常に執務室にいてももらないと困る。彼がいないと介入もできないし、戦局だって動かせない。せめて以御に職権を付与するという言葉をもらえないと、以御は彼の代理として指令を出す事もできないのだ。以御は神の代理者としての地位を得ているが、彼の言葉がなければその権限を発揮できない。勝手に指令を出す背任の罪で以御は殺されてしまう。

するとそんな頃合をみはからったかのように、伝達員が廊下を叫びながら走ってきた。

よほど慌てているのだろう。彼は以御と廿日の前に膝まづくと報告する。

「響様！ 主がご帰還です。落雷に遭って、足の神経が切れたと…」

「神経が切れた！？ 神体はどうでもいい、脳に異常は！？」

以御は大声を上げた。

以御の言葉を聞いて、廿日は眉をつりあげた。まるで、仕事さえできればそれでいいという冷酷な態度。以御は仕事にストイックであるあまり、知らず知らず神を追い詰めているような気がしてならなかった。

「精神系に問題はなしとのことです。斥力中枢に麻痺がありますが、回復する見込みとのことですよ」

「以御。あなたがそんな調子だから、主はあなたに黙って行動されるようになったのよ。主はおひとりで生物階に降下されたのかもしれない。光獣に乗って」

「はい、生物階でM C Fの発動が観測されました」

以御の記憶が正しければ、神階の門の定員はきちぎちの筈だ。それは主にベトナム戦争開戦を受けて、各陽階神が介入しているからなのだが、軍神は戦時中は執務室にいて、全ての指揮をとらなくてはならない。もし落雷を受けて神経が切れているのなら、その苦痛は相当なものだ。それでも彼は根性で生物階降下を強行し、M C Fをかけて戻った。

ユージーンの乗る光獣は陽階最速を誇るので鳳を利用して、直接戦局操作に乗り出したのだとしたら……。一日でも早く、戦争を短縮させたいとの思いが先走ってのことか。だが、局所的M C Fをかけてもその効果は限定的だ。今回の戦争は、アメリカとソビエト連邦の代理戦争のようなもので、ベトナム本土が単独で戦争を行っているわけではないのだ。戦争は終わらない。必ず、更なる火種が起る。

「勝手な行動を……。医療チームからの引渡しが終わったらいっつを確保し、ベッドにくくりつけとけ。説教だ」

「川模様、主から書簡にございます」

伝令使は、廿日にユージーンから廿日宛ての書簡を手渡した。廿日は手紙を受け取りながら、それが以御宛てでないことに、これはあまりよい兆候ではないかと懸念した。第一使徒と神の信頼関係が、少しずつ壊れつつある。近日中に、以御の解任もあるかもしれない。もしくはユージーンの性格からすると、解任もできず以御に相談もせず単独行動が増えそうだ。単独行動はユージーンの身を危険に晒し、軍神下使徒の統制を欠く。軍神は以前にもまして、寡黙に、そ

して孤独になった。アジア情勢が不安定になってからというもの、仕事一色の毎日だ。少しガス抜きもしないと……廿日は軍神と直接話したいが、第一使徒を差し置いて神から打ち明け話を聞くなど、許されていない。書簡を読むと、ユージーンは紫檀に助けられ、彼とともに戻ったようだ。

廿日は紫檀が通されているという控え室にその足で向かった。

今日はこげ茶色の髪の毛を小奇麗にまとめてコサージュでアップにして止め、空色のワンピースを纏っている。高位使徒が正式に着用する青衣は、いつもは着用しなくてもよい。だが廿日は神の守護者であるという自負を忘れないでいるために、いつも青を基調とした服を選ぶ。控え室のドアを開けると、達者な様子の紫檀は廿日を見つけて立ち上がり、一礼をする。

「あなたの運のよさには驚きました。8層で、主にお会いしたそうですね」

廿日はおっとり紫檀に微笑みかける。

「まだ、現実のこととは思えません。ですが、呆けている場合ではないと思いました」

「その気になってくれて何よりです。辞令です。本日より、あなたを第五使徒に任じます。任命権者になりかわって、あなたを徴用します」

潜在能力十分、性質もすぐれて良し、頭脳明晰、状況把握能力も鍛えれば身につく、だがその才能を今は無駄に潰しているとのこと。少し鍛えて錆びを落としてやってくれ、と廿日への手紙には添えられていた。

書簡の二枚目には軍神の裁可による御璽印をついた辞令。それを廿日にどんと見せ付けられ、紫檀は絶句した。

「！…………え？」

「もはや試験の受験は必要ありません。ですがあなたの教育係は私に、しっかりしごいてくれとのこと。異例中の異例、大拔擢です。よほど神様の御心になうことをされたのでしょうか。介抱して差し上げたのはさておき、他に何か思い当たるふしはありませんか？」

「恥ずかしながら、これといって、思い当たるふしはありません。僕は神様には失礼なことばかりしてしまっ、処刑されてもおかしくないと覚悟をしていたんです」

「また、”ざつくばらん”に話をしてほしい”と仰っていますよ。何のことはわかりませんが」

もしかして……ひとつ心当たりがあるとすれば……彼は”対等に話せて、嬉しかった”と言わなかったか。紫檀は複雑な気持ちになった。

こういうのを何というのだったか。生物階の寓話を思い出しながら、廿日は紫檀をますますよく知りたくなった。神はマインドブレイクを、ほぼ日常的に用いている。神の前では全てを審らかにされ、下心は通用しない。神をして紫檀を第五位の卑近に召したいと思わせた理由を、廿日は無償に知りたくなった。馬に彼の気配がつくほど愛情を込めているような男だ。裏表のない、誠実な使徒なのだろうか。そうに違いないと、廿日は信じていた。

「よろしくお願いします」

「ええ、こちらこそよろしく」

外伝？ 紫檀と神と第二使徒と——灰かぶりの使徒2（後書き）

サイトと同じものを載せるのは恥！という意気込みで、サイトに掲載していたときの内容から、大幅に改編してみました。ごめんなさい改稿するのに時間がかかりすぎます、次からある程度サイトのままでいきます。

ユージーン、友達いない暦200年弱。紫檀・・・現在は軍神への忠誠心が重すぎます。

第1節 第61話 幼馴染のおわりと、秘密のはじまり

女神の赤子、レイア＝メーテールは泣きやんで、きよとんとした顔で恒にしがみついていた。

彼女は生後何ヶ月も経っていないというのにもう目鼻立ちがはっきりとしており、柔和な表情は早くも女神の品格を備えている。壊れてしまいうるに小さく軽い彼女の神体こそが、INVISIBLEの定めた無垢な器だ。擬似陽光を受けて彼女の特徴的な金色の毛は透明になり、既に黄金にも似たアトモスフィアを纏っているようにも見え、神々ささえ感じる。それはプライマリというG-E細胞より誕生した、真正銘の神の聖性というもののだろう。ステイグマを持つ彼女の存在が陽階に明らかとなれば、彼女は監禁されて自由を奪われ、信仰の対象となるかもしれない。彼女が将来、それが3年後ではないにしろ”天帝”として君臨する可能性も排除されない。

恒の纏う白衣に、半透明の金色の布が触れている。ステイグマの熱に灼かれ焼け焦げた産着の代わりに、彼女には極陽から”けんえ権衣”という装束の一部が与えられた。それは絶対不及者が召していたと伝えられるもので、ある程度ステイグマの熱を遮断できるのだという。勿論、ステイグマから彼女へ及ぼされる影響力も多少は取り除かれる。その手触りは化学繊維のそれにも似て冷感があり、着心地が悪そうなので、恒は彼女を気の毒に思ったがどうしようもない。深い翡翠色の、ガラスのように曇りなく透き通る瞳が、悲しみに染まらずそのままに在って欲しいと恒は願った。

彼女の物心がつく前に……彼女を苦しめる全てから彼女を解き放ちたい。

創世者 INVISIBLE の無慈悲な人形に、させてはならない。しかし……間に合わないのだ。

彼女は三年後、周囲が急かし騒ぎ立てようとも3歳の幼女にしかならない。彼女が負う荷を彼女に論理だてて説き聞かせ、理解と覚悟を期待するのは困難だし、何より酷だ。

「何で、この子なんだ。まだこんな、赤ちゃんじゃないか……」

自我すら持たぬ彼女を器として選んだ INVISIBLE が憎い。恒は無慈悲な創世者の残忍な所業に、憎しみを募らせる。

穢されない、もの思わぬ心と軀、完全なまでに空であり無力であること……それらは INVISIBLE の収束によって初めて聖性を帯び天帝と畏られる。

絶対不及者の無垢故の残虐性は無上の暴力となり、垣間見えるのは破滅への願望でもあるのだそうだ。

絶対不及者との邂逅は、絶対的無力感と、根源なるものの同一性を否応なく惹起させられる。無知であり無垢であること、何よりプライマリ（原始の神）であること。 INVISIBLE の求めたその資格は、かつてのユージーンにも備わっていたものだった。だが彼はそれを失っていた。ユージーンはノーボディと共に、運命に抗いすぎた。更にいえば、ブラインド・ウォッチメイカーがユージーンにのぼした食指があらさま過ぎたのかもしれない。ともあれ INVISIBLE は、ユージーンに興味を失い、代わりの器に狙いを定めたようだ。

悶々としながら、レイアIIメーターを連れて、恒と比企は陽階にある比企の書斎に戻ってきた。

比企の書斎の書棚の裏には、亜空間に繋がる秘密のドアがある。それは比企がたまたま見つけた空間の間隙で、そこを私的スペースとして利用している。東京ドームに行ったことはないが、東京ド

ム4つぶんぐらい、なのではないかと恒は見積もる。それほど広大な部屋ではないが、その手頃な広さが丁度よい。

秘密の入り口から全天の宇宙がガラス越しに見える大温室に案内され、恒はそのベンチに腰掛け比企から火傷を負った手の治療を受ける。

「これを嚙んでいろ。麻醉草だ」

ゼンマイのような見知らぬ葉草を比企に与えられ、嚙むと口いっぱいに苦みが広がる。焼け焦げて炭化した恒の皮膚は、比企が麻醉をかけてメスで削り新たな創傷面を出し、人工皮膚シートによって修復、補完される。生物階の医療では太腿などから移植するのが常だが、神階の再生医療技術はiPS細胞やMes細胞などの原理を用いてずっと進歩していた。人工皮膚はたちまちのうちに恒の皮膚になじみ、みるみる再生をはじめ。指紋は再生されないが、それは仕方がない。一瞬にして癒された新たな手を裏表にかざして、恒は神階の迅速な再生医療に目をみはる。

「すごい！ 一瞬ですね」

「何をたわけたことを。首から上を断たれぬ限り、神階外科医に癒せぬ傷はない」

比企がそう豪語するだけのことはある。

「そうですか、そんなこと言っちゃったら上島先生驚くだろうな」
暖かで生ぬるい、模造太陽によって齎される午後の日差しにまどろみ、何もかも忘れて眠ってしまいたくなる。

神階では見慣れない植物と柔らかな土の香りが懐かしかった。

比企は手当てを終えると温室の内部に設置された端末を立ち上げ、恒が八雲から受け取った恒の遺伝情報を簡単に解析していた。

ここは比企が基本的に誰の立ち入りも許していないようで、いつも比企の傍近くに仕える響 寧々も給仕に來ない。彼は遺伝情報を

もとに巨大な装置に接続された端末から複雑なプログラムを組み、核酸合成装置で恒の遺伝情報の復元を始めたようだった。

恒はたとえば比企の適切な処置で右手を包帯でぐるぐる巻きにされたまま、左手でしっかりとレイアⅡメーテルを抱えている。

レイアⅡメーテルの育児はしばらく恒が引き受けることになった。あれから彼女は泣き出しもせず、恒にしがみ付いて離そうとはしない。恒は彼女のその手の小ささに、胸が詰まった。

「3歳で絶対不及者になるなんて……」

「では3歳ではなかったら少しはましかな？」

恒が独り言のように呟いた言葉に、比企は唐突にそんな言葉をかぶせた。こんな時に皮肉を言わなくてもいいのにと恒は口を尖らせる。不可能な仮定をふっかけてくるなど、比企らしくもない。しかし比企は皮肉を言ったのではなかった。

「神々は真空中でも死なぬが、真空条件下に曝露されると寿命を縮め、成長速度や老化も倍加する。過去の記述によると、4〜5倍の速さで成長、老化すると推測される」

その記述が見つかったのは、神階に実際に存在した刑罰を記した書物からだった。真空中での受刑者が、他の神々より早く歳を取って死に至ったという事実が明らかとなり、それ以来神々はむやみに真空中に曝露されてはならないと定められた。この常識から、真空中で長時間の執務を余儀なくされる神々は防護服を着用するのが一般的となった。

プロジェリア

「人で言うところの早老症のような状態ですか？」

「知っている病名を片っ端から口にするのは感心せんな。その現象がラミンA一塩基置換変異に由来するものと思うのか？」

知ったかぶりを比企に怒られた。早老症は成長が加速するわけではない、動脈硬化など、核膜形成不全によって生まれながらにして

老化が加速されている。それにそもそも、DNAをすら持たない神の赤子にプロジェクトの概念が適用されるわけがない。恒は早々に降参した。

「ごめんなさい」

「この場合、遺伝的素因とは別に成長、老化それら全てが加速されるのだ。仮に彼女を真空条件下で生育させたなら、彼女は3歳児とは余りにも異なる姿となるだろう。外見だけではなく、精神力や知能指数も伴う」

「彼女をこれから3年間、真空中で育てるということですか？」

恒の腕の中で、彼女の小さな呼吸が聞こえる。

彼女は確かに空気が必要としているというのに……全ての権利を奪われつくした彼女から、空気さえも奪うというのか。

「一日も空気に晒す事無く生育させれば、12歳程度にはなるだろう」

「真空中に閉じ込めて……真空って苦しくないですか？ あなた達は訓練しているから平気なんでしょうけど、この子は人の子と同じように呼吸してます。窒息しないんですか？」

恒は完全な神ではないので、息が出来なければ苦しい。

泳げば息継ぎをしなければならぬし、息を長く止めていられない。空気を奪われてどうなるものか、想像だにつかない。

「多少は苦しかろうが、真空への耐性は訓練によって身につく。幼き故に慣れるのも早い」

神々が宇宙空間に在っても平気なのは、大体アカデミーに入って50歳ごろに行われる、環境適応訓練というトレーニングで獲得するものだ。それまでは真空中でも死にこそしないが、いきなり真空中に放り出されれば窒息状態となり危険だった。

「そんなの虐待じゃないですか！ 真空中に閉じ込めて、苦しみ続けて、寿命を削るなんて！」

日本なら狭い場所に子供を監禁するだけでも逮捕される犯罪だというのに、比企には心がないのか。

「何を勘違いしておるのやら知らぬが、彼女に”人権”などない。それに寿命が不死身の彼女と何の関係がある」

ただ成長を早めるだけだといえそうだが、そんなことが問題なのではない。問題なのは彼女の待遇だ。

「そんなこととして12歳になって……でも心はきつと3歳のままだ……」

恒はレイアIIメーターを庇うように抱きしめた。

彼女は恒を不思議そうに見つめ、無邪気であどけない表情を向けている。彼女には恒と比企の遣り取りが分からないのだ。彼女を比企に渡したくなかった。

「ユージンさんもこの子も……好きでINVISIBLEの器になったのではありません。どうして彼等を憎むんです……。こんなにくさんの神々や使徒達の中で、この子はひとりぼっちです。彼女をひとりにはさせません、どうしてもやるなら、俺にも同じようにしてください」

恒とレイアが一对の抗体と抗原であるというのなら、その日まで同じ境遇に処してほしいと思う。意思もおぼつかず、拒絶もできず神々の決定に従うがままでしかいられない彼女に寄り添い守り続けることこそが、恒の成すべきことだと、そう思ったのだ。抗体と抗原は対極のものであるかもしれない、だが恒は彼女を憎むことはできなかった。

「人の身で真空中では生きられん。これだけの情報を持っていて分らんのか」

比企は僅かな間に、恒の遺伝情報を流し読みで紐解いていた。恒

が真空に放り出されたなら、10分と経たず死んでしまう。

恒は比企に、身体の隅々を透視されているように感じた。事実、薬神だった比企は分子遺伝学にも精通しており、たった4文字の記号の羅列から生体組織の機能を推測するだけの読解ポテンシャルがある。

「分かってます！ でもステイグマがこの子を苦しめたら、誰が彼女の背に触れられるんですか」

比企はくっつかかる恒に一瞥をくれ、冷や水をかけるかのように先ほどから片手間に触っている端末の画面を恒に向けた。遺伝子解析画面には第11番目染色体上にある遺伝子図が黒地に白く浮かび上がり、比企のドラッグによってほつれた糸のように立体的に引っぱり出され緑色の蛍光色で注釈がつけられた。

一度は解析を行った恒が気にも留めなかった部分だが、比企はこの部分に大いに着目しているようだった。

「……興味深い。ヴィブレissミスは汝に絶対不及者に執着するよう遺伝子を組んだ。この余剰遺伝子は神格形成を司る部分で、精巧な技術的介入がある。汝がユージーンやレイアに向ける異常なまでの思慕は、当該遺伝子に支配されたものだ。彼等を救いたいと願い、彼等と共に在ろうとする……。先ず感情に任せた発言を控えよ。汝には分かっておろう、INVISIBLEの器として選ばれた者が、過去に何を齎してきたのかを」

「……だからって」

恒がみえるINVISIBLEの器達への執着はヴィブレissミスによって誘導されたものと、比企は断定している。

そんな定義づけをされる覚えはなく、恒は不本意だ。INVISIBLEの器達への虐待に抗議するのは遺伝子云々の作用ではなく、

人道的に当然のことだ。比企は間違っている、だが主張しても人権を持たず、アカデミーで100年もの囚獄生活を経て根性の座った彼等には子供の屁理屈程度にしか聞こえないのだろう。恒の感性は明らかに神階に在籍する神々とはズレ過ぎていた。恒は権利を主張するばかりでは相手にしてもらえない。義務と権利は相当の対価で結ばれていない。神々は常に、与える者であり享受するものではないと教え込まれている。それが恒と比企との間にある、根本的な価値観の違いだった。

「それがどれほど非人道的であろうと、何ら躊躇するものではない」

頭の片隅で、恒にも分かっている。彼女をこのまま手厚く保護して育て、物心つかぬうちに絶対不及者となったとしても彼女は都合よく利用されるだけだ。確固たる意思を持って創世者に抗う。そのための最低限の自我を育てようと、比企は提案しているのだ。しかし12歳となって論理的な思考能力を身につけ心を持ってしまった少女が彼女を待ちうける運命を理解したとき、恐怖に押しつぶされてしまわないだろうか。強い心を持っていられるだろうか……アルティメイト・オブ・ノーボディと一体となり、INVISIBLEを捻じ伏せ世界そのものとなる、それが可能か否か。

幸福な生涯は、彼女にはどのみち用意されていないのに――。

「俺は間違っていると思います。でも力づくでそうされるなら、その瞬間まで彼女と共にいます」

「それは彼女にとって頼もしいことだろう」

彼女のステイグマ。彼女の持つ創世者の力、抗原を恒の身に刻み続けることによって恒の持つ抗体は学習してゆくだろう。より迅速に、そして強く発動するようになる。

抗一絶対不及者抗体 (Anti-ABNT Antibody)
の正体は、人間の免疫機構を応用した恒のアトモスフィア分子によ

るハイブリッドグロブリンで、軽鎖（LC）と重鎖（HC）4つのヘテロテトラマー（四量体）として機能するらしい。人間のポリペプチド抗体と同じく、Y字型をしている。Y字の上の部分は超可変領域（ハイパーバリアブルリジョン；Hyper variable region）として機能し、絶対不及者のアトモスフィアを6箇所のエピトープ（結合認識部位）で認識して強力に結合し、アトモスフィアを相殺し絶対不及者の力を殺ぐ。その結合能は抗体が抗原に晒される機会が多いほど高くなり、抗体のアビリティ（結合力の総和）は指数関数的に高まってゆく。恒が抗体を鍛えれば鍛えるほど絶対不及者からINVISIBLEの影響力を殺ぐことができるのだ。

抗体の作用が強ければ、恒は命を落とさずに済むだろう。そして必ずレイアが助かる方法も見つけてみせる……。

悶々と考えていて、恒はあることに気付いた。霧を掴むかのように頼りない発想ではあったが、彼は突破口を見出した。

「比企様。もし彼女が成長し、神として成熟したら共存存在（co-existence）も出来るようになりますか？」

「共存存在は今や、いにしえの神である荻号にしか出来ぬ荒業だ。不可能ではないが困難を極める。共存存在の原理は、バイタルを分割してゆく事にある。バイタルの分割を繰り返すたび神体は劣化してゆく。一度発動するごとに命の半分を棄て、死に至らしめる荒業だ。命を惜しんで力を削る事が出来なければ、分身を成さん。だが削った命はもう二度と、還ってはこぬ。荻号 正鵠が過去に何度共存存在を発動したのか知らんが、一度や二度ではあるまい。奴の寿命はあと200年もない筈だ」

比企は結局のところ、訓練ごときで命を削るのを惜しんだが為に、共存存在を習得出来なかった。それを荻号 要は当然だと言い、命を惜しんでいいのだと言った。

見下されているような、さも自分が特別であるかのような荻号
要の言い草が、比企は氣に入らなかったものだ。荻号 要は惜しげもなく彼の寿命を削り続けたが、今にして思えばノーボディであった彼の寿命が減ることはなかった。ところで荻号 正鵠はノーボディのように無限の生命を持ってはいない、彼は何度か共存在を発動した上で更に、今回は解階を超空間転移に巻き込むほど強力な分身を創り出し、相当の生命力と力、アトモスフィアを不可逆的に切り捨てた。その代償は彼の神体から差し引かれている。

荻号 正鵠は荻号 要のように不死身の存在ではないというのに、彼の奇妙で理解しがたい信念に沿うものの為なら、彼自身の命をいくらかでも粗末にする。惜しくもない命を削る荻号 要よりよほど根性がすわった神だ、と、比企は彼を評価せざるをえなかった。そしてレイアは要するに、共存在を習得するための縛りが無い。彼女は命を惜しまずに訓練ができる。

「もし……もしです。彼女がステイグマのあるレイアと、ステイグマを持たないレイアに存在を二分することが出来たなら……。ステイグマのないレイアは助かるのでしょうか。彼女がふたりになって、きつとステイグマは1つだけです。そうでなければ彼女が生まれた瞬間に、INVISIBLEはユージンさんに加えて、レイアにもステイグマを刻んだでしょう。それに、普通の神々には出来ないかもしれないですけど、彼女には見込みがありそうです。比企様はプライマリという概念をご存知ですか？」

恒はユージンの言葉を思い出す。彼の身にもしものことがあるとは思えないが、念のため話しておきたい事があると言われて、ノーボディと一体となった際に得た記憶を片的に恒に話して聞かせていた。プライマリという概念と、GES細胞（神化全能性幹細胞）
（しんかせんのうせいかんさいぼう）

についても詳細に教えてくれていた。現在神階に在籍する神々は、サブカルチャー（継代用）の細胞から誕生したコピーであり、プライマリ（初代）という一回も分裂させていない細胞から誕生した神がユージーンと、そしてレイア＝メーテルなのだと。

ユージーンから話を聞いた時は、その情報がさして有用だと思えなかったものだ。プライマリが他の劣化した細胞と比べて、どう優れているのか分からなかった。ただ新しいものと使い古し、それだけだ。つまりユージーンがノーボディの能力を受け継いだ最強神となった理由を、単純に説明するものでしかなかった。劣化コピーである神々がどう努力をしても、ユージーンのようにはなれないのだと言われている気がして落ち込んだものだ。だが彼はただ情報を誰かと共有していたかっただけで、他意はなかったのだろう。結果的に彼が恒に与えた一見何の価値もないような情報を、恒は適切に活用できそうだった。

「プライマリとは、ノーボディが直接生み出した、クローンではないにしろの神々のことです。彼らは特徴的な容姿を持っていて、金髪なんです。人間でも白人は色素が薄くて劣性遺伝的な金髪ですけど、そんな原理ではなく、この金髪はノーボディのアトモスフィアが沈着した色なんだそうです。この子、すごく金髪でしょう、しかもユージーンさんよりよほど濃い色をしています。ノーボディの力を強く受け継いだこの子は、ユージーンさんより圧倒的に優れたプライマリになるだろう。彼はそう仰ってました。彼女は一度も分裂せず劣化していない細胞から生まれた原始の力を持つ神です。彼女はもともと素質があって、俺達がどれだけ修行して出来ない共存在も、案外簡単に出来るんじゃないでしょうか」

「お前はどうか……頑張れるか？」
比企は恒ではなく、レイアに語りかけた。

彼女は何も知らないまま、比企の感情の起伏がない灰色の瞳を、不安そうに見つめるだけだ。世界はこの幼き女神、レイアⅡメーテルに全てを委ねようとしていた。

「もうひとつ、我俣を聞いて下さいますか？」

恒が何を要求するものか、比企には聞かずとも分かっていた。

「紫檀さんとユージーンさんに会わせて下さい。紫檀さんは身を挺して俺を守ってくださいました。どうしても直接お会いして、お礼が言いたいです。ユージーンさんは脳死状態になってしまったけど、まだ身体は生きています。生きているうちに、お会いしておきたいんです。分かっています、抗体の俺が抗原の彼と会うと危険だって。ブラインド・ウォッチメイカーが彼の身体の中にまだ残っているかもしれない、殺されそうになるかもしれない。でも……このまま会うことも出来ずお別れをしなければならいなんて、俺は絶対に嫌です！」

恒の剣幕に、比企の心は激しく揺さぶられた。悲痛な願いの中に垣間見える、彼への思慕と敬愛の念。それらを押し殺して、今生の別れを耐え忍べとは言えなかった。

「紫檀は命に別状はない、今ではなくとも意識が回復した頃に会いに行けばよからう」

比企は呆れたような表情を装いながら、しかし優しく微笑んだ。

「ユージーンの神体は荻号が持ち帰った。すぐに追えばまだ最期は看取れよう」

「無理をお願い申し上げました。ご高配をありがとうございます」

恒はレイアを抱いたまま、深く頭を下げた。

＊

冷え切った真っ暗闇のなか、不気味な機械音が鳴り響いている。
室内は明かり一つなく、辛うじて荻号の発するアトモスフィアで
半径2メートルほどの視界があるぐらいだ。

これから3時間をかけてユージーンを凍結するのだと、荻号は言う。医学的知識に明るくはない朱音でも、脳死が精神の死、そしてやがて肉体の死に繋がると理解している。荻号は肉体の死を遮断するが、それが再起に繋がるかというところではない。単純に、死を保留するだけ。凍結を解いた瞬間に彼の肉体はゆっくりと朽ちはじめ、完全に物質へと還る。

荻号の処置はその場しのぎであって、もはや彼は死んだも同然の抜け殻でしかなかった。

ユージーンが、死んだ――。

朱音は彼の教師としての一面的な姿しか見ていないし、見せてもくれなかった。

ユージーンが朱音に向けた表情は優しい教師、それだけでしかなかった。死の兆候すらもない状態から脳死に至るまでの間、恐らくは学校に來なくなってしまう間に、神として何をしてきたのかを、どうしても知りたかった。だが、彼が脳死を起こした直接の原因ですらも分からない……。

朱音には二つの、拒絶すべき現実が突如として迫っている。一つはユージーンの死であり、いま一つは彼女自身のことだ。

物わかりのよい朱音だが、彼女の正体が人ならざる者であって、共に暮らしてきた家族達とは何の血のつながりもなかったという事実を、感情的に理解するのは困難だ。しかし朱音がたった一つだけ救われたのは、荻号という、地上に暮らす神の存在だ。朱音はこれ

までと同じように生活をしてゆける。これは異例のことだといえた。何しろ地球上に住居をもって留まり続ける神など、荻号ぐらいのものだというのだから……。朱音は荻号を紹介した松波夫人に感謝しつつ、それでも将来の不安を拭えない。

「……神様。羽根ってどうしても生えてくるもんなんですか？」

朱音は暗くて心細いので荻号の傍に座りながら、彼に寄り添っていた。こんな怪しい男がユージーンと同じ神だというので信じられないが、彼は瞬間移動で風岳村からこの得体の知れない部屋へと瞬間移動を行ったのだから、信じられないと言ってはいられない。

「ああ」

「生えてほしくない場合は？」

「手術で取るか、生えてこないようにするかだな。後者は骨芽細胞に脱分化薬を投与して羽根にならんようにするのかな」

「コツが細胞？ 奪文化薬？」

朱音は専門用語を連発されて、脳内変換が出来ずにいる。小学生として育った朱音では恒のように理解が追いつかない。的外れな発言に荻号は気拔けた顔をしたが、彼女に理解を期待するのも野暮だと思い直す。

「脱分化薬だよ。羽なしになるわけだがそれでもいいのか？ 不恰好だろ」

「不恰好でもいいです！ 私、人間に戻りたいんです」

朱音は必死だ。

「戻りたいつつても、お前が人間だった事など一度もないんだよ」
荻号は茶化すようにそう言うってから、朱音が涙目になってきたので滑ってしまった口を押さえた。

「そうやって見かけだけ何とかしても、意味がないと思うがね。ところで、長生きはしたいか？」

「80歳ぐらいまでは」

せめて、平均寿命までは人生を満喫したいと思っていた。

「人生って100年だと思うだろ？　だが使徒の場合、3000年は生きるんだぜ？　お前は80歳になっても老いないし、見た目だって二十歳そこそこ。人間社会で暮らし続けるには、限界がくるんじゃないか？」

「神様が、私を人間に出来ないんですか？」

朱音は根本的な要求にうってでる。仮にも神様だと名乗っているのだから、そのぐらい出来てもらわなければ困ると考えたものの、荻号は素っ気無いものだ。

「残念だが、そんな力はない」

朱音はしゅんとして、何も言い返せず口をつぐんだ。荻号が朱音の相手にも飽きて、頭の後ろで腕を組んでうたたねをしようとした時、荻号の真上から突然、天井すれすれの高度で何か二つの物体が降ってきた。比企と恒が、荻号のアトモスフィアを追ってやってきたのだ。衣擦れの音に弾かれたように天井を見上げた朱音を、荻号が庇うように片手を翳して、もう片方の手で反射的に抜き取ったフラレンをひと束取って放つ。

それを迎え撃つように、比企は逆手に持った懐柔扇から衝撃波を浴びせかけた。

挨拶代わりに投げつけられた120枚のフラレンは比企によって見切られ、呪符はぴたりと空中で動きを止めた。

比企は大きく息を吸い込むと、荻号を怒鳴りつける。

「殺す気か！」

比企は何とか応戦が間に合って肩で息をしている。

「……へえ。なかなか機転が利くな」

比企は懐柔扇から繰り出した衝撃波によって、フラーレンC120の構造を変え、荻号の攻撃を無効化していたのだ。

「フラーレンC60の結合様式が炭素クラスターのそれと同一ならば、ストラテジーは自ずと定まる」

比企は外部よりエネルギーを与え、フラーレンC120の構造を変え、フラーレンの機能を崩したのだ。

サッカーボール型のフラーレンのクラスターの周囲を、あたかも土星のリングのように呪符の鎖が環構造を成して取り囲み、錯体となってフラーレンとしての機能を押さえ込んでいた。

「フラーレンC60を封ずる、二重カーボンナノリング・フラーレン錯体へ立体構造を変えたのか」

転移直後に不意打ちの状態で超神具フラーレンC60の攻撃をまともに喰らったら、ただごとではすまない。だが、比企にはフラーレンの攻撃を弾き返すだけのパワーはなかった。そこで比企がどうしたか。フラーレンどうしの結合力に干渉し、構造を変えてやる。フラーレンの業の一つ一つはその構造に対応しているので、少し構造を変えるだけで用を成さなくなるはずだ。比企の洞察は正しかった。構造を変えた途端、フラーレンは攻撃性を失った。

攻撃性を持ったその呪符がたった一枚でも恒に張り付いてしまったなら……。比企はまだしも、恒の命はなかった。炭素クラスターの性質を知る比企が、咄嗟の判断で敢えて荻号の業に干渉して攻撃を妨害したのだ。葉神であった彼が昔とった杵柄、というべきなのか。

「突然降って来たのが悪い。来る前にせめて連絡ぐらいしろ」
荻号は荻号で言い分がある。追跡転移をかけられたのだから、敵ではないかと疑いもする。

「携帯も持たぬ者と、どうやって連絡を取るといふのだ」

荻号と白髪男が互いを罵り合っている間に、一瞬の間に何が起ったのかわからない朱音は、和服を着た白髪の男の後ろで困惑したような表情を浮かべている一人の少年を見つけた。

「こ……恒くん？」

朱音は暗闇の中でも、見間違えない。彼はいつも学校や村で見る様子とは違っていた。恒が恒ではないようだ。

まるで神話の中の神のように、ゆったりとした純白の衣を身に巻きつけ、金色の眩い赤子を抱えている。別人と見まがう変貌ぶりに驚愕はしたが、人違いでは有り得ない。彼は紛れもなく藤堂 恒だ。その証拠に、彼は名前を呼ばれた瞬間、悪戯の見つかった子供のように肩をびくつとこわばらせた。

「朱音……何でここに？」

「恒くんこそどうしてここにいの？ それに、その格好なに……？」

恒は恒で、朱音が荻号とともにいるのだから全くの想定外の状況だ。

「へー。お前ら、知り合いだったのか？」

まだ怒りのおさまらない比企をやり過ぎしながら、荻号が楽しそうに口を挟んだ。

「荻号さんが、朱音を……？」

「ああ、神階に上げようと思ってな。何かまずいことをしたか？」

恒の態度から、恒が朱音に全てを告げて欲しくなかったという意思を読み取っている筈の荻号は、白々しくもそんなことを言う。

荻号が風岳村に住み着いたと知った時から、いつかは朱音の存在に気付いてしまうだろうとは思っていた。だが荻号に口止めはきかなかった、仮に口止めをしたとしても彼は朱音に真実をぶちまけるだろう。彼は無駄な隠しごと、戦術的に意味のないその場しのぎの嘘を嫌う性質だ、それは荻号 要とのやり取りの間に恒が学ぶべきだった。

「まさか！」

「ああ。ご明察」

荻号ときたら、この直後の痴話げんかを期待しているようだ。恒の反応を楽しむようににやけた顔に、恒は憤りを禁じえない。荻号の表情から、朱音にまつわる全ての秘密を朱音に打ち明けてしまったと察する。ああ、このヒトは何てことをしてくれたんだ。ユージンが、織図が、そして恒やメファイストフェレスがみな一丸となって協力して、彼女のためにずっと隠し通してきたのに。

「恒くんは……知ってたの？ 私……」

恒は大切に抱えていたレイアを比企に預けると、こわばった朱音の腕を無理なく引いて、荻号と比企の視線を避けるように部屋の奥に連れて行った。恒は比企と荻号から死角にあたる場所にランプを見つけて灯すと、暗闇の中にほのかな明かりがともる。彼は上着を脱ぎ、冷たい床の上にそれを敷いて、無言で朱音をその上に座らせる。

世界の果てのような場所で、朱音はこれが夢であって欲しいと何度となく願った。

「朱音^{あかね}！」

「……」

彼女は膝を抱えて座り込み、顔を膝に埋めながら、恒の呼びかけに答えてはくれない。こんなのあんまりだ、酷すぎる。彼女の気持

ちが、すぐ耳もとに聞こえてくるようだ。そのつもりはなかった、だが確かに恒は朱音の気持ちを裏切っていた。

「おばさんには、連絡をして出てきた？」

朱音はふるふると、力なく首を横に振る。

やるせなさから家を飛び出すようにして出てきて、かれこれ4時間経っている。恒はユージンから借りていた携帯をおもむろに取り出すと、諳んじていた電話番号を思い出し、朱音の家に電話をかけはじめた。朱音に携帯を渡して直接言わせようとしたが、話せる状態ではない。恒は朱音の母親に、帰りが遅くなるが一緒にいるので気にしないでくれと朗らかに告げた。

彼のいつもと変わらない口調が、朱音には余計に怖ろしかった。

恒はどれほど朱音や周囲の仲間達を欺いてきたのだろう。彼は昔から、仲間を庇ってよく嘘をつく子だった。それが必要なことだと踏めばどんな嘘でも表情ひとつ変えず平気でつけるのだ……。携帯を切ると、また嫌な沈黙が続く。お互いがお互いの探り合いをしているようで、恒は先に切り出した。

「言えなかったんだ……。変わらないでいて欲しかったから。聞いちゃったら辛いだろうと思っただし……」

「私、人間じゃなかったんだよ。それを知ってて、恒くんはずっと黙って、知らない振りをして友達のようにしてたの？　そうやっていつも笑顔で、何を考えていたの！？　怖いとか気持ち悪いとか、絶対そう思ってたんでしょ……？　もう恒くんのこと、信じられないよ」

よりによって恒に知られた……。朱音が人間でないと言うのなら、恒にだけは絶対に知られたくなかった。気持ち悪いものを見る目を向けられたくない。何も知らない朱音に同情して真実を告げなかったのか。そうやって表面上では友達のふりをしていながら、内心ど

う思われていたかなど分らない。

しかし恒の言葉は、そんな朱音の疑念と疎外感を払拭させた。

「人間じゃないのは俺も同じだ」

朱音の息が止まった。

「俺は自分が人間じゃないって聞いたとき、仕方ないって思ったんだ。でも朱音が俺と同じように仕方ないって諦められるか、そうは思えなかった。俺、朱音のことよく知ってるからさ……」

「恒くんも、天使なの？」

恒は朱音の顔を、まともに見ることができないまま、ぽそりと呟く。

「俺は神だ」

「恒くんが……神様？」

涙を目じりにぶらさげたまま、朱音は啞然とした。

「同じぐらい深刻だろ？」

恒は朱音の気を紛らわせるために、わざと明るい口調でそう言う。現実には普通の神よりもっと深刻な立場にあるのだとは、朱音には言えなかった。

「じゃ、今は天国にいるの？　ずっとここにいるの？」

「ここ二週間ぐらいはね。今後はどうなるかわかんないな」

少し気を抜くと、すぐに沈黙が訪れてしまう。

まだ荻号と比企の罵り合いが遠くに聞こえるが、どちらかが声を出していないと、闇に包まれて消えてしまいそうだった。

「恒くんはもう、風岳村とか、恒くんのおばさんのこととかどうでもよくなったの？　私は村で暮らしたい。ここにいちやダメだよ。戻ろうよ……昔みたいになまた、一緒に遊んだりしようよ」

「朱音は村にいていい、でも俺はもう無理だ」

「どうして、そんなこと言うの？ ひどいよ恒くん。何だか別のヒトみたい」

朱音は啜り泣きながら、精一杯真剣な眼差しで恒を睨む。しかし彼はいつもの彼と違った表情を見せている、それは10歳のそれではなかった。もっと長くを生きたような、穏やかな表情を。

白衣を纏っているからなのか、彼自身が光を湛えているような気にすらなる。ああ、彼は確かに神になったのだ。朱音は気付かずにはいられなかった。よく見ると右手には包帯を巻いて、顔やむき出しの肩には赤く生傷が残っている。彼は神となるまでに、あるいは神となってからどれほど傷ついたのだろう。藤堂家に残っていたおびただしい血痕を、朱音は昨日のこのように思い出す。あれは恒のものだったのだ。

今日真実を知った朱音の何倍も苦しんで、数々の困難を乗り越えて今の彼がある。朱音は彼の肩にあった大きな古傷に触れて、撫でた。

「恒くん、傷だらけだ……」

心無い言葉を投げかけてしまったと、朱音は後悔した。

恒は彼が神であることを知らなければ、怪我をする機会もなかったかもしれない。だから、同じ思いをして欲しくないと思って朱音に打ち明けなかったのだ。

恒は朱音に撫でられるがままに任せながら、彼女の辛そうな表情が胸に突き刺さる。彼女の沈鬱で思いつめたような表情を、恒は一度たりとも見たことがない。記憶に残る彼女はいつも周囲を照らす光そのもののように、透き通った笑顔を振りまいていた。いたたまれない。

「……知りたくなかったよな。記憶がなくなればいいと思う？」

「うん……」

恒は彼女の返事を耳にして、彼女の記憶を消すべきだと思った。恒が強引にマインドコントロールをかけるのは危険だから、荻号にFC2—マインドキューブを返してもらって適切に行うべきだ。知りたくなかったという朱音の気持ちは聞いた、ならば彼女の望みをかなえるまで。神として、そして彼女の親友として最善の状態に戻す……。

「今まで通り朱音は人間として、俺は朱音の友達として全て元通りになれるとしたら、その方がいいよな……」

誘導するような口調だったので、朱音は恒の意図に気付いた。そうだった、彼は半人前であるだろうが神だ。神様ってたしか、人の心を読んだり操ったりできるんだっけ。ユーザーに何ができたかを思い出し、迂闊なことを言ってはならないと朱音は警戒心を強める。

「そしたらまた、恒くんは嘘つくの？　こんなに傷ついて神様になって苦しい思いをしてるのに、学校や村では明るく振舞うの？　私は恒くんが神様だってことも、私が天使だってのも忘れて……何事もなかったかのように暮らすの？」

朱音はいっそう近くに寄ってきて、視線を外そうとする恒の顔を覗き込む。彼は自身が傷つくよりずっと、他人を気遣う。朱音は恒のぶっきらぼうな振る舞いや、気ままな行動の裏に他者を思いやる優しさが垣間見えるのを知っていた。そんな恒がいつから、神になっていたのだろう。朱音達が宿題や習い事をしている間に、彼は神となる為に言い知れぬ苦勞をしていたのだろうか。神となった恒を見ていると、ユーザーの死がオーバーラップする。

ふと恐怖心が身をもたげる。今も朱音のすぐ後ろで無機的な動作を続けている棺の底に、いつか恒が沈んでゆかないだろうか――。

「私はもう、恒くんに嘘をついて欲しくないよ……ありのままの恒くんを見せて。私は恒くんが分からない、前からよく分からなかったけど。神様なんてやめちゃえばいいじゃない。あの茶髪の神様みたいに地上に住んで、そういう事も出来るんでしょ？」

恒は申し訳なさそうに俯いて、首を横に振った。

「俺んち、襲われてぶっ壊れてただろ？」

「う、うん」

恒は朱音にマインドブレイクをかけ、朱音が見たもの、聞いた事を徐々に読み取っていた。朱音はブラインド・ウォッチメイカーの思念と邂逅している。そして一度は恒を殺すようにも洗脳された。

ブラインド・ウォッチメイカーの影響力は荻号の撃ったフラーレンによりある程度取り除かれたようだが、まだ完全に排除されたとはいえない。

何かの拍子にその記憶が蘇ったなら、朱音はブラインド・ウォッチメイカーの思念に引き摺られて恒を殺そうと企てるだろうか。

しかし恒は、殺されるかもしれないと分かっている、朱音と距離を取ったり逃げたくはなかった。

逃げてはならない、彼女からも、そしてブラインド・ウォッチメイカーからも。

恒はもう充分に逃げた、

恒が逃げる度に誰かが傷つく。ユージーン之死を機に、逃げてはならないのだと、恒は固く彼の心に決めた。

「俺が地上にいと村の皆に迷惑がかかる。でも朱音は人として生

きるんだ。お前は使徒であって人間じゃないのかもしれない、でも心までそうじゃないだろ？ 俺みたいになっちゃだめだ……でない
と、引き返せなくなる。そして……」

朱音は俯いたまま、返す言葉もなかった。

「朱音。一緒にユージーン先生にお別れしよう。クラスのみんなや村の人たち、皐月先生のかわりに。皆の思いも引き受けて」

恒は立ち上がり、朱音に手を差し伸べた。

「ユージーン先生には、家族がない。たくさん使徒に囲まれていても、ひとりぼっちなんだ。彼の死を本当の意味で悲しんで、手を合わせるができるのは。さよならが言えるのは、ここにいる俺たちだけ。だから……辛くても先生にお別れをしよう」

差し出された恒の、その手は小刻みに震えていた。

第1節 第61話 幼馴染のおわりと、秘密のはじまり（後書き）

【現】 ナノリング・フラレン錯体：サッカーボール様骨格のC6Oフラレンをシクロヘキサン環とベンゼン環のリングが帯のようにとりまく構造です。美しい構造をしています。

第1節 第62話 テトラサイクル・リバイバル

ルシファアからの決闘の申し込みを許諾したアルシエルは約束の時間である正午、供もつけずひとり帝都の郊外にあるテグメル（TEGMEL）の丘の上に赴いた。この一画は、今は没落した有力貴族が経営していた廃鉱山のうらぶれた場所であり、解階総督府が発表したU・I・の指定感染区に該当する。

彼女はこの特別な日に、あろうことかヴェルベットのホルタードレスという軽装でやってきて、防具などは一切身につけていない。だが彼女は軽装であっても、考えなしに虎穴に入った訳ではなかった。

対策は唯一、打ってきた。

解階最強を誇る女帝の感染が即ABYSSの体制崩壊を引き起こすことを懸念したユージンから、U・I・感染予防策として治癒血を与えられ、U・I・を含めいかなる感染源に曝露されても感染しない、免疫学的に強靱な肉体を手に入れていたのだ。

アルシエルを感染地区におびき寄せアルシエルをU・I・に感染させるという目算がルシファアにあったとしても、感染地区での決闘は彼女にとって聊かも不利とならなかった。となると、ルシファア感染者であっても非感染者であってもアルシエルにとっては取るに足らない相手だ。実力もアルシエルが格段に上ときている。

それほどの実力差があつてなおルシファアを決闘へとつき動かしたのは、解階の創世者の庇護下にあるという仮初の優越感と驕慢だろうか。あるいは彼もまた、大切な存在を人質に取られ、創世者に従わざるをえないのか……。女皇に挑みかかる愚行をルシファアは忘れた訳ではあるまいが。と、アルシエルは彼の正気を疑う。

しかしそこにどのような事情があろうとも、アルシエルにとってこの決闘は絶対に負けられない決戦だった。アルシエルが約束の時間より随分早く、たったひとりでこの場所にやってきたのは、予め戦場の地形を調べておくためだ。彼女にとって戦場の下見は、言うまでもなく戦術の基本だった。彼女は下調べを兼ねて周囲をぶらりと散策していたが、その間も一瞬たりとも油断をすることはなかった。

ブラインド・ウォッチメイカーは生物階に入りアルティメイト・オブ・ノーボディの庇護下に入ったABYSSを支配して、何を望んでいるのだろう。

時計職人にとってこの抗争が何か意味のあるものと、アルシエルには考えられなかった。あるいはこの混乱を何がしかの契機にして生物階の支配権を取り戻そうとでもしているのだろうかという勘繰りが働いてしまうのは、彼女が解階の皇としての在位中に幾度となく謀反や下克上を経験してきたからだ。

解階の創世者はABYSS及び生物階の安定と平和を疎んじている。アルシエルは改めて思い知った。”彼女”は安定を嫌う。おそらくはこれも、大災厄の序章に過ぎないのかもしれないが――。

文字通り盾も後ろ盾もない孤高の女帝と、解階の創世者を後ろ盾に持つ叛逆者ルシファアの決闘。仮にアルシエルがルシファアを破ったとしても、結果がその逆であっても、それがブラインド・ウォッチメイカーにとって何の利益を齎すのか。アルシエルの理解を超えている。アルシエルは死を畏れはしないが、思惑の見えない敵の前に、得体の知れない薄気味悪さだけは感じてはいた。

彼女は物思いに耽り、散策して時間をつぶしていた。

定時きっかりにセットしておいた腕時計のアラームが鳴る。それを合図に、彼女の上に人工照明から逆光となった大きな影が落ちた。彼女は上空から現れた大男を見上げ、旧友を見るようにひとなつくく会釈をする。彼は解階にたった二つしかない皇家の嫡子、ルシファーⅡカエサルだ。

ルシファーはアルシエルの軽装とは対照的に重装備で防護能力の高い戦闘服という鎧を身に纏い、戦闘準備は万端。彼は鉄塊が降ってきたかのように重い着地音を響き渡らせて降り立つと、口元を覆っていた硬質のマスクを外した。このマスクは酸素を凝縮し呼吸効率を飛躍的に高めるもので、解階の特権階級にある貴族が戦闘時に必ずといっていいほど装備する。

もともとずば抜けて身体能力の高いルシファーのことだ、筋力増強スーツもあくまでも彼の能力の補助的な役割を担うものでしかないが、その身を人工筋肉の鎧で固めた姿はいかめしい鋼の彫像のように見えなくもない。2mを超える長身の大男が完全装備で、触れれば折れてしまいそうに華奢な身体をした女皇と対峙しているという構図を傍から見れば、誰が見てもルシファーの勝利を自明のものと思うだろう。

「久しいな、ルシファー」

「これは、陛下。いや、先帝とお呼びすべきか」

ルシファーの土気色をした顔は生気を失い、その瞳は血走っている。彼は戦闘能力を限界以上にまで引き出すべく、筋力増強剤や麻薬類を大量に服用しドラッグジャンキーとなって久しい。薬物には一切頼らず厳しい自己管理のみによって戦闘能力を高めてきたアルシエルは、もう数年も公の場で見かけなかったルシファーの体調を心配していたところだった。薬物濫用の副作用により、顔色が以前より随分とどす黒くなっているのを気にしなければ、彼はアルシエルが想像していたより達者そうだ。

アルシエルは鼻息の荒い巨漢の挑発を受け流しつつ、履いていたヒールの高い豪華なブーツを脱ぎ、放り投げて動きやすいよう素足になった。靴一足の重量にすら、彼女は神経を行き届かせる。だがこれらのコンディション作りは、長きにわたり解階最強の名を戴いてきたアルシエルにとって怠ることのできないものだ。

「先帝か。気が早いな。……余も汝も生来の口下手だ、汝の置かれた立場もしがらみも、余にはとんと解せぬ。やはり拳を交えねば、思いう言葉も伝わるまい」

「そうでしょうな。もつとも、あなたに戦闘の意思がないのなら、決着は一方的となりましょう」

ルシファアは吐き捨てるように茶化すと、形ばかり女皇に敬意を示して外していたマスクを再び装着した。伸びをするように高々と右手を突き上げると、鉦山の岩壁や坑道になりを潜めていたルシファア直属の私有軍が、蟻塚から出てきた無数の蟻のように黒々と沸いて出てきた。その数たるや相当のもので、兵力は岩肌を覆いつくし、数千は下らない。巨万の富を投じて育成した私有軍は、ルシファアから直々に選り抜かれた精鋭部隊だ。そして間違いなく、彼等はルシファアから高額な報償と引き換えに度重なる肉体改造を受けている。

進化を続けること、それは解階では正義であると、確かにアルシエルは主張したことがある。だがこれは、変化であって進化ではない。

「汝は余に、”決闘”を申し込んだものと心得ておったが？」

「……左様、申し上げましたが？」

ルシファアの物言いは道化じみていてアルシエルは苛立ちを募らせる。

彼女はまるで悪さをした子供を前に呆れた母親のような眼差しで、彼女の信頼を裏切ったルシファーを見据えた。ルシファーは彼女にいつそう下卑た薄汚い嘲笑を、心行くまで垂れ流している。アルシエルは生来より礼儀作法を気にしない性質で、その程度の愚弄で憤慨しない。格下の相手からの蔑みにも別段腹を立てはしなかったし、ルシファーに雇われた私有軍の兵士達に罪はないとすら考えていた。彼女はルシファーを相手にせず、声を張り上げ、ルシファーにはなく彼が引き連れてきた精鋭部隊に声を張り上げて投降を呼びかけた。

「いま一度、最後の慈悲として選択の機会を与える。自らの意に反して、あるいは軽々と此処に参った者もあろう。余が20を数え終える間に、命惜しき者は隊を離れよ。動かぬ者は死をもって償うがよい」

解階の住民達にとっては玉音ともいえる彼女の肉声での呼びかけに動揺しているのか、女皇への叛逆に後ろめたさを感じているのか、私兵たちは互いの顔を見合わせている。アルシエルは解階の皇として、あるいは解階の慈母として兵士達に与えた執行猶予の20秒から、ゆっくりと死へのカウントダウンをはじめめる。

「……18、17」

兵士達は危険を覚りつつもルシファーの制裁を畏れているのか、微動だにしない。彼らの身は物理的、あるいは精神的に束縛されている。

アルシエルは彼らを不憫と感じたが、ぽってりとしたあどけなさの残る唇はカウントを刻み続ける。

「5、4、3……」

アルシエルは残り時間もあと僅かとなったところで、すらりと伸

びた細い右腕を彼等に向け、たおやかに差し延べた。

しかし彼女が投降を拒否した彼等に優しく差し向けたその手は、もはや救いと慈悲のそれではない。

彼女の動作に呼応し虚空に紅い陰がさし、折り重なる昏き波紋の中から、ドロドロとした正方形の赤黒い固まりが溶け出してくるように見えた。それは誰の目にも一目瞭然、金属質の書物の形に映じてゆく。基空間からの転写による現出だ。

遂に解階最凶と長らく噂されるツール、不可侵の聖典（Invincibility Scripture）が彼女の手の上に現出した時、アルシエルは運命のカウントダウンを終えた。差し伸べていた人差し指をたぐりよせ掬い上げる仕草をすると、触れてもいないのに聖典の1ページが開かれる。その業のあまりの残忍さ故に生物階にも聞こえ一部がヨハネの黙示録として記されるに至った、忌まわしき地獄の聖典が啓かれた。

虚空からツールを呼ぶ、彼女の業はさながら魔術のように見えるがそうではない。不可侵の聖典の本質は物体出力装置であり、立体映像出力装置ではない。

原理からいえば3Dプリンタのそれと同一、だが質量を伴い十分なエネルギーをアルシエルの生体エネルギーより抽出、増幅、変換、転送する高性能の具現化装置だ。

一ページごとにひとつの業が対応しデータ出力は極端に多様化している。そのシンプルな機巧こそが畏しいのだ。また、当該ツールは駆動のためのセキュリティキーとしてアルシエルのコマンド（呪文）を必要とする。皇家に伝わる古代言語を、格調高く独特の韻をもたせ紡ぎだす。

”Allo-sa-hu-cam”

(見よ……地獄の底がひらく)

彼女は壮大な悲劇の幕開きを宣言し、もう何百年も口にする事になかった符丁を唱える。

それを聞くルシファアの兵士達はあまりの禍禍しさに、総毛立っている。どれだけ後悔してももう、猶予のための時間は過ぎた。

この期に及んでは、逃れられない。

”Wquna—Wagna! Darn—Skj Java—Call
f w—Rscan”

(時は満ちた。ここには額に印を受けた者はいない)

アルシエルはただひとりの救済もなく、搾取し刈り尽くすと宣告した。

アルシエルの言う“額に印を受けたもの”という単語は、ヨハネの黙示録においてもある種の免罪符として記載されている。彼女は座標入力のためにエリアの天地と四方を指し示しながら、浪々とコマンドを続ける。その禍禍しく文語的なコマンドが、太古より魔王の呪文スベルと呼ばれる理由は釈然としている。私有軍も各々、ツールを構えているが女皇にそれをまともに向けることはできない。何もかもが、他を圧倒している。

”Elm—Est—Il—Inv, Nilamn, Vnina,
Saddam, Cytromnam”

(白き馬、黒き馬、紅き馬、青ざめた馬よ)

アルシエルが次々とコマンドを与えると、黙示録の七つの封印が解かれた。

“Victim!”

(来たれ)

アルシエルを基点として、地を這うように、放射状に幾重もの真空の刃が綾となって放たれる。彼女がその手に御していた災厄の凝塊を、今日のこの日の為に固く繋いでいた暴れ馬を解き放ったかのように……それはまさに煉獄の光景だった。天から螺旋状の衝撃波を伴う、巨大な真空の槌が振り落とされる。不可侵の聖典によって青黒く具象化された断罪の刃が半径数キロ以上にもわたって、ありとあらゆるもの、生きとし生ける者を終末の洪水の中に飲み込んで打ち砕いてゆく。

そこにどんな地形があろうとも半径数キロを、そこに立つ者ごと更地にしてしまう、このツールが解階で最凶と恐れられる所以だ。

絶望的な天災に見舞われているかのごと、あるいは終末の光景を目にしているかのように。

犠牲者達は精神霍乱電磁波によって、死の今際に、死と黄泉を暗示する馬に乗った四体の騎士の幻影を見るという。アルシエルから見放された彼らは須らく断罪され、阿鼻叫喚の地獄絵図が、今ここに現実のものとなった。あたかも周囲に凹凸などなかったかのごとまっ平らに均された岩肌には、犠牲者の肉片すら残ってはいない。そこに在った死者の影だけが、名残おしそうに岩肌にこびり付いている。

そして全てが灼き尽くされたかにみえた。

しかしアルシエルの表情は晴れない。

不毛の大地の上にたった一つだけ残って屹立した人影は、やはりルシファアのものだった。土煙が去るとそのシルエットははっきりと映じるが、五体満足。

ウォーミングアップは終わったのかと、彼は口にこそしないがそう言いたげだ。

アルシエルは何事もなかったかのように腕組みをして突っ立っているだけのルシファーに、やや失望したように眉根を寄せる。

「かような憂き目に遭うならば、部下を逃してやればよかったものを」

「気に召されるな。我が主が御為の玉碎とあらば、本望にこそありましょう」

ルシファーは遂に永き眠りから醒めた暴君の復活を愉しむ為に、慇懃な言葉で彼女を挑発する。

もとは彼女の臣民であった罪なき兵士を自身の手で虐殺しなければならなかったアルシエルは、ルシファーを断じて許せない。

「汝の申す主、メファイストフェレスが余の直系の曾孫にあたるとは周知であろう。余を討ち取らんと勇みおった二大皇家の嫡男が、臣籍に降った余の曾孫に擦り寄り、あまつさえ膝を折るとは見下げ果てたものだ」

アルシエルは溜息混じりに皮肉を述べつつ、不可侵の聖典の内部に手を差し入れている。彼女は不気味にさざめく白紙ページの沼に腕を沈めると、白い被膜を破りながら黒々とした金棒を引き出した。深い沼の底に鎮められていたのは、全長五メートルは超えるであろう赤黒い巨槍だ。その存在は幾度となく神話に登場し、生物階でもよく知られている。

”Gungnir……”

（グングニル）

彼女は古い恋人の名を呼ぶように、ルシファーの耳には入れない

よう巨槍に囁きかけた。

鋭く研ぎ澄まされた槍の切っ先を真っ直ぐルシファーに向ける。解階の深層に眠るレアメタルで鍛え上げられた合金の切れ味は絶望的だ。ルシファーはそこまで彼女を憤慨させた後によりやく、遅ればせながら彼のツールを装着した。

ルシファーのツールである彼専用のナックルダスターには、人工知能が搭載されている。彼の脳に接続されたケーブルから体内に埋め込まれたリストバンドへの回路が神経と連動し、驚異的な瞬発力と筋力を増幅させる。ルシファーは重戦車のごと破壊力を重視した立ち回りをするし、一方のアルシエルは言うまでもなく軽量を生かしたスピードと鞭のような柔軟性を武器としている。グングニルは軽量の彼女に安定を与えるバランスーとして携えているだけで、主戦力ではない。

両者は静物のモデルのように動かないまま、しばし睨み合った。アルシエルは細い脚を礫土の上ににじらせ、猫のような動作でグングニルを構えている。

均衡を破り先制を仕掛けたのはルシファーだ。

彼はアルシエルの腰より太い下腿を弓のようにしならせて地を蹴りつけ、轟音を立ててアルシエルに突進してくる。ただ猪突猛進してくるだけではない、彼は巨軀でアルシエルの逃げ道をつぶしつつ、彼女のどんな初動も見逃さない。アルシエルは槍の切っ先で彼の攻撃をさばき槍を彼の拳に突き立てると、巨槍と堅固なナックルダスターが摺れ激しく火花が飛び散った。

接触したとみるや、彼女は槍の柄を内側に握りこみ、不可侵の聖典に挟まれていた羽根形をした金属のしおりをルシファーに投げつける。長い紐のついたしおりはルシファーに命中せず脇をすり抜け、彼の背後に回り込み空中で静止した。彼女が握力を加えた瞬間グングニルの感圧回路が俊敏に応答し、わずか1／1000秒で刃先全体よりしおりめがけて大電力アーチ放電が行われる、グングニルの

刃と金属のしおりとの間に形成されたエレクトリック・アーク（電弧）の温度は12000度にも達し、プラズマの刃がルシファーに襲いかかる。青白色を呈する恐るべき熱源を全身にもろに喰らい態勢を崩すが、彼はなおも踏みとどまる。断熱・絶縁仕様のナックルダスターに沿ってプラズマが絶縁放電し受け流されている。

「ん……」

彼の繰り出す一撃は衝撃波となり瓦礫を飛び散らせ、礫すら凶器と変える。かくなるうへはルシファーの露出している皮膚に貫通させ内部より加熱するほかない。グングニルは飛翔性能を持ち、重戦車のようなルシファーの戦術とは対極をなすものだ。アルシエルは、すぐ脇にぽっかりと口をあけた坑道のエレベーター跡と思われる堅穴の入り口に跳び込みルシファーをおびき入れ、錆びた配管の伝う堅穴を真っ逆さまに落下してゆく。ルシファーに自由落下をさせながら追わせ単調な軌跡を描かせる。一直線に坑道を跳び降りていた彼女はふと身を翻し、大きくグングニルを振りかぶって壁面に刃をあててスピードを殺し、真上にいた彼の首裏に下から狙いすまし槍を突き上げた。

自由落下中は体勢を変えることが難しく、ルシファーの頭は自ずと下を向く。

そう、その首筋はむき出しになって、下からの攻撃を防ごうにもでかい図体が邪魔をする。

そして真下から突き上げられるほとんど”点”となるその攻撃を、避けることは至難のわざだ。

「んっ！」

真上に槍を放ったアルシエルの唇から息が漏れる。
手ごたえは十分。巨槍の一突きが鋼のように隆起した筋肉を割く。

彼女はグングニルの長い切っ先を彼の首筋にめり込ませ、そのまま柄を握りしめる。絶縁仕様の装備ならば頸部を内側から超音波で焼き切り、その巨体を首から正中線に沿って縦に貫き上げるまで。

しかし、ルシファアはそれより一瞬速く、首に突き立てられた刃を筋肉ごと引きちぎり驚愕みにすると、脚を配管にかけ蝙蝠のように逆さになったまま、アルシエルの腕に手を伸ばし壁面に叩きつけんとばかり、勢いよく彼女を壁面に打ちつけた。彼女の肢体が堅穴の坑道の壁面に触れる直前、彼女は鍛えた足技で鋼鉄の壁を蹴り抜く。廃エレベーターのすぐ脇を走っていた堅穴の側道へ、空洞があく。側道に投げだされ再び自由落下をしようとする女皇を、逃すまじとルシファアが追う。

彼女は空中で体勢を立て直し、突進してくるルシファアの拳をかわし、カウンターで頬をしたたかに殴りつけた。絡み合いながら暗闇に沈み込んでゆく二人、だがなおも攻撃の手を休めない。暗闇の中に時折火花を散らしながら、垂直に流れ落ちる星くずのように、激しい攻防が続いている。そのパワーはほぼ、互角。スピードは遥かにアルシエルが凌駕している。撃ち合いの残響から、塔の底が近づいてくるのが分かる。どちらが最後まで、攻撃を仕掛け続けるか。そのチキンレースを、ルシファアが制した。アルシエルが着地の態勢に入ろうとした一瞬の隙について、彼女の腹部に空中で拳を宛がい、そのまま下に固定した。

底部に激突するまでわずか、数メートル。

ルシファアは肩口から筋肉を大きく脈打たせながら彼女のどてっ腹を殴りつけ、その衝撃は彼女の自由を奪う。驚愕し、そして苦悶の表情を飲み込む彼女を置き去りにしたまま、ルシファアは大量の瓦礫を碎き散らし、大鷲の翼を地に縫い付け、彼女の柔らかな肌が硬い谷底に深く沈められた。

そして時速190kmで落下していた彼女は、背部から底面に衝突し計2800トンもの衝撃に見舞われる。

それは、ルシファールカエサルが女皇アルシエルを玉座から引き摺り下ろした、まさにその瞬間だったのかもしれない。

しかしアルシエルは意識を飛ばしそうになりながらも、彼女の携えたグングニルはルシファールの下腹にめり込んでいた。人工筋肉の装甲を突き破り的確にルシファールの腹部を貫通している。覆いかぶさるようにアルシエルの上になっていたルシファールの表情が固まる。女皇が肉を切らせたならば、必ず骨を断たなければならなかった。

彼女は腹部を刺し貫いたグングニルを、ジッパを上げるように彼の喉元まで一直線に突き上げた。彼の下に突き倒されていた彼女は直後、上から降り注いでくる血液の濁流を厭うかのように片目をつぶったが、直線的に裁断された黒い肉塊は血液を吐き出すことはなかった。そして裁断口はジッパを上げるようにすうと塞がっていた。

「まさか、不死化……」

「今の私は全身が癌化しておりますね……傷ついても、傷ついても、壊れても、壊れてもね、細胞が増殖衝動を抑え切れんですよ」

彼はアルシエルを憐れむように、血走った目を細めていた。

地面への激突を回避しようと、しなかったわけか――。

全身細胞の癌化……ブラインド・ウオッチメイカーはルシファールの忠誠を得るため、恐るべきことをした。

「さて、続きをしましょうか。長く愉しませてください……ねえ」

勝てる筈がない、彼はもうかつてのルシファールではない。スタミナもきれず不死身の相手に、どこまで戦えるか。

今度ばかりは敗北を覚った。

＊

黄昏の草原の中に広がる寂寞とした墓地の墓標の上に、うつ伏せになって白衣を纏った青年が倒れている。

「汝を喚ぶのは、二度目になるな」

彼は幽かな呼び声を聞き、震えながら瞼をもたげた。

アルティメイト・オブ・ノーボディは透明な装束を纏った少女の姿でありながら、少女らしからぬ尊大な態度ですぐ背後から彼を見下ろしている。彼女は珍しく、清楚でシンプルな白衣といういでたちだった。

「汝の名を、覚えているか？」

青年は意識を朦朧とさせながら、頬を墓石にぴったりとつけたまま、分からないと首を振った。

彼女は彼の理解を促すように、墓標を示す。

「そこを見よ」

墓標には当然、墓標の下に眠るものの名が刻み込まれている。

彼は頭をもたげることも出来ないまま、震える指先で刻印をなぞった。刻印は何の譲歩もなく死者の名を刻んでいる。墓標にはA・C・1826と彫り込まれ、没年はまだ刻まれていない。ふと白衣をたくりあげて見たその左肩には、展戦輪の御璽が螺鈿細工のように鮮やかに輝いていた。これは……見覚えがない。

彼は視線を墓標に戻すと、それを他者のもののように無感傷に読み上げる。

”……ユージーンⅡマズロー?”

墓標の名の下、青い点滅を続けるクリスタルに掌を置くと墓石全体が青白い回路のように発光し、黒い墓石に青い幾何学的紋様が浮かび上がる。

同時に、彼の掌からはクリスタルを介して石碑に蓄えられていた膨大な情報が流れ込んでくる。彼の墓標に、途切れる事無く刻々と記録され続けてきた記憶だ。アルティメイト・オブ・ノーボディは神々の記憶をEVEと同じ原理で、墓標に似たハードディスクの内部にリアルタイムで保管し続けていた。そのIDキーとパーソナルが、青い記憶素子におさめられている。ユージーンの記憶と自我を再起動させたのは、実はこれで二度目だ。

なにものでもなかった彼はユージーンの記憶をインストールされ、記憶が取り戻されてくると同時に、埋められない喪失感と絶望感で満たされていた。

彼は這いつくばったまま、拳を硬く握り締めた。

『わたしは……』

彼は嘆いた。ブラインド・ウォッチメイカーに操られた上のこととはいえ、藤堂 恒を手にかけてようとし、身重の妻を持つ紫檀 葡萄を躊躇なく傷つけ、惨殺しようとしたのか……すべてを思い出した。長年身を粉にして彼に仕えてきた紫檀は何を思っただろう、そう思うと胸が張り裂けそうだった。荻号や極陽がユージーンを精神を破壊した為に犠牲者は幸いにして最小限に食い止められたが、荻号が止めなければその犠牲者数は取り返しの付かない規模となっていた。

『また、戻るのですね』

こんな状態でまだ”ユージーンⅡマズロー”として現世に蘇るか……。

彼は思い悩んでいる。二度も記憶を再生され、身体から離れた心を再びインストールして生きながらえることは、もはや生きているとはいえない。

背後で彼を苛むように見下ろす少女の姿をした、彼の父、あるいは母の非情を、非難する権利などなかった。彼が断ったとしても、ユージーンの代わりなど、いくらでも創りだされる。またひとつの精神体を作り出し、この墓石に刺さった青い記憶素子から”ユージーンⅡマズローの記憶”をダウンロードするだけで、代わりなど無限に複製できるのだから――。”ユージーンの記憶”は何度でも蘇り、何度でもINVISIBLEに捧げられる。

女神レイアⅡメイテールの身代り、INVISIBLEの目を欺く為の囹としての役割を負わされ続けて。創世者アルティメイト・オブ・ノーボディの意思を頑なに拒絶したとて、それが一体何になる。何も変わらず、アルティメイト・オブ・ノーボディのシナリオは進行してゆく。

では一体、”ユージーンⅡマズロー”とは、あるいは同じように管理される神々とは何者だったのだろうか？ 神々が古来より名に無頓着であったのは、ある意味自明の理だ。彼はもう二度とユージーンⅡマズローを名乗ってはならないのではないかとすら思う。ユージーンを名乗り藤堂 恒の前に、神々や人々の前に現れることは彼等を欺く事に他ならない。彼等が会いたいと望んでいるのは決して複製ではない、他ならぬオリジナルのユージーンなのだろうから。だが……三階を裏切った今はもう、畏れられ憎しまれこそすれ、”会いたい”と思われる存在でもないか。

アルティメイト・オブ・ノーボディは葛藤を抱えた彼をただ残酷

に、あるいは優しく見守っていた。

あたかも人形に魂を込めることを忘れた人形職人が、魂を求めて彷徨う壊れかけた人形を見つめるように。

「……心の挫かれた今の汝を浮世に戻したとて何になろう。……汝の荷はいま暫く、レイアⅡメーターに負わせておる」

レイアと面識はないが、彼女が誰であり神階にとってどういう存在なのか、”ユージーン”の記憶”が彼に囁きかける。

『レイアⅡメーター……？ 彼女はまだ生まれたばかりの赤子ではないですか。……その荷は、わたしが』

ユージーンの身代りとしてしか生きてゆくことが出来ないのなら、それをさえ放棄してしまえば誰であることも許されないというなら、少しでも誰かの苦しみを負いたいと彼は望んだ。

彼は意を決して起き上がり、墓石の前に膝まづいたままアルティメイト・オブ・ノーボディを真っ直ぐに見上げる。

透き通る美しさ、穢されぬ清澄さを兼ね備えた全能の少女は禁視の宿った瞳で、哀れな彼女の傀儡を射るように見下ろしている。彼女の背後の黄昏の草原は、強い風が吹きすすさんでいた。

「心配には及ばぬ。恒が彼女を癒しておるのだ……」

『恒くんが？』

不思議だ。”知っている”という記憶を刷り込まれているだけなのに、恒の名を聞くと懐かしく感じた。

「恒は絶対不及者抗体（Anti-ABNT Antibody）として覚醒したといえよう。彼は強靱な精神力を備えつつある」

『……』

にわかには信じ難い情報だった。まだアトモスフィアを操ることもままならなかった10歳の子供が、ステイグマに苛まれた赤子を救っているというのだから。子供が、子供を救おうとしている……という状況なのだ。彼の成長が眩しかった。それに引き換え……と、彼はその身の不甲斐なさを恥じる。

少女はユージーンの傍らにかがみ込むと、彼の背をなぞるように触れた。彼女の触れた背にはもう、ユージーンを苦しめ続けたステイグマはない。ユージーンが解放された代償に、どこかへ下ろしておくことすらできない重い荷はレイアにのしかかっている。

「汝の苦痛は去ったか」

確かに苦しみからは解放されても、ユージーンは晴れやかな気分になどなれなかった。

『ええ……。ですが、わたしは自由になってはならなかった』

「INVISIBLEは汝を解放した。汝を現世に戻したとて、聖痕が汝の背に戻るかは分からぬ。このままINVISIBLEがレイア・メーテルを手放さねば彼女が絶対不及者となる……それもまた、運命だったのやもしれぬ」

アルティメイト・オブ・ノーボディは彼の子らをブラインド・ウオッチメイカーやINVISIBLEに搾取され続けてきた。

それらはレプリカには興味を示さないというのに、アルティメイト・オブ・ノーボディが丹精込めて創り上げた貴重な作品ほど、掠奪者の目に留まった。ユージーンはINVISIBLEの支配から逃れ、今ようやくアルティメイト・オブ・ノーボディの手に還ってきた。だがそのツケを、レイアが負っている。

『例えば、レイアが三年後にグラウンド・ゼロに赴かなければ、INVISIBLEが収束しないのでしょうか』

「……汝はいたく誤解をしておる。INVISIBLEの収束を回避できると?」

『そう理解していましたが、違うのですか?』

「INVISIBLEは存在確率を操り、波動関数の収束を操作する。もしINVISIBLEにその気があらば、レイアIIメーテールは必ずや、グラウンド・ゼロに向かうよう仕向けられる。その場合、いかなる抵抗も不可能だ」

ユージーンは大きな勘違いをしていた。グラウンド・ゼロに行くか行かないかを選ぶのは、INVISIBLEの器の自由だと思っていたからだ。だが、そうではないのだ。彼、彼女の意味にかかわらず行かなければならないよう仕組まれる、それをINVISIBLEの定めた運命という言葉で表現されても違和感はない。

『INVISIBLEが3年後、収束を望まなければ?』

「何も起こらん。吾やブラインド・ウォッチメイカーが如何に介入をしようとな。だがその予定がないのだとすれば、ステイグマを汝からレイアに付け替えはすまい」

それは宿泊予定もないのに、旅行者がホテルの予約を取っておくようなものだ。普通は宿泊の予定を立てているからこそ、予め部屋を取っておく。INVISIBLEならば気に入った器に、ステイグマという予約をつけておくのだろう。やはりINVISIBLEはその心積もりがあるとみるべきだった。それにしても、ステイグマとは何なのだろう。鍵と鍵穴のモチーフ。その形状があまりにも人工的、デザインの、どうしてもそこに何か得体のしれぬものと浅からぬ因縁があるように、ユージーンは思えてならない。見たこ

ともないのに、どこかで見覚えがあるような気がする。それも、大昔の話ではない。つい数十年前のことだ。

「ただ絶対不及者となるだけならまだよい。だが、汝と違い、彼女が絶対不及者となると手の施しようがない」

アルティメイト・オブ・ノーボディは詳しく言及しなかったが、万が一絶対不及者が現れるようなことが起れば、彼は絶対不及者と真っ向から撃ちあって絶対不及者を破壊し、INVISIBLEから器を取り上げるだろう。ユージーンにはよく分かっていた。過去二柱の絶対不及者は現にアルティメイト・オブ・ノーボディによって葬られてきたからだ。

『では彼女が絶対不及者となった場合を想定しましょう、わたしがそうなるのと何が違うのですか？』

「現況から述べるとINVISIBLEの傀儡となり、絶対不及者となる可能性は限りなく高い。彼女には汝と違い生殖能力がある、それが脅威なのだ」

『彼女は完全なる女性でしたね。ですが生殖能力を持つ彼女が絶対不及者となっても、単為生殖は出来ないのではないですか？　そして神階に男性の神はいません』

「どうやら身近な者を忘れておるようだな……」

アルティメイト・オブ・ノーボディは思い出せと顎をしゃくって促した。

『?』

「藤堂　恒は男神だ」

INVISIBLEが、恒とレイアを媒介として生殖を図るというのか。INVISIBLEが生殖を図り子孫をもうけ、器となりうる神体が分散されるということは、INVISIBLEに逃げ道を与える。

アルティメイト・オブ・ノーボディの力は以前よりよほど衰えている。一体ならまだしも、複数体の絶対不及者を葬り去るだけの余力は持っていない。すると、絶対不及者を倒せる者がいなくなる。これは呆けている場合ではない、とユージーンは危機感を募らせた。レイアがINVISIBLEの器となるケースだけではどうしても、回避しなければならなかった。彼は一度ユージーンの神体に戻り、出来るだけの善処を行おうとした。そしてあわよくば、レイア＝メーテールの背からユージーンの背にステイグマを戻したい。

『戻ります。こうしてはいられません。肉体はどこにありますか』
「その必要はない。今後、“ユージーンⅡマズロー”の神体の再起動は行わない」

アルティメイト・オブ・ノーボディは見下ろしながら、そう断言した。

しんと、水を打ったように風がとまり、草原が不気味に静まり返った。

ノーボディは神々の記憶を常時、墓地の記憶素子にアップロードし続けることによって記憶のバックアップを取り続け、いつでも肉体さえあれば故神と全く同一の神を再生できる。ユージーンⅡマズローの記憶が再生されたのは、肉体に戻す為だろうと彼は当然そう考える。それを否定され、ユージーンはアルティメイト・オブ・ノーボディの真意を疑った。

『……今、何と?』

ユージーンは少女の考えを理解できない。

「再起動を行ったとて、ブラインド・ウォッチメイカーの受け皿と

されるだけだ」

『……では、何故わたしの“記憶”のみが再生されているのですか？
わたしに一体、何をしろと仰るのですか？』

肉体に戻らない、記憶のみが何がしかの目的で再生された。

「3年後、INVISIBLE収束の直前、レイアの神体にユージー
ンマズローの記憶を移植する」

倫理的なことを一切無視しレイアメーターの未熟な神体に成熟したユージーンの記憶をインストールすれば、INVISIBLEに抗い、恒の抗体を利用してINVISIBLEと成り代わることは不可能ではない。そして三階の現状を考えれば、彼女の提案を鵜呑みにしなければならないのかもしれない。しかし……これまで何度も疑いながらも、ユージーンは遂に、彼の父であり母である創世者に対して拭い去ることの出来ない違和感と抵抗を、覚えてしまった。

レイアメーターが彼女として生きる権利をも剥奪するつもりなのか――。

アルティメイト・オブ・ノーボディがそれを彼女に強いていると分かった時、ユージーンは冷たい刃物で胸を貫かれたように感じた。

「ユージーンマズローの記憶は保守の為、稼働させておいた方がよからう。そこで汝を呼んだ」

『……………分かりました』

彼が答えを返すまでに、いささかの時間を要した。だが彼は納得してなどいない。

この間、アルティメイト・オブ・ノーボディは沈黙のうちにユージーンの同意を待っていただけで、譲歩をするつもりも、説明をする様子もない。

『ただし、1つだけ条件を付けさせてください』

ユージーンはそれと引き換えにたった一つだけ、ノーボディに願った。

再び強まった風に押し流されてしまいそうな、切ない願いだった。蜃気楼の奥で少女は寂しそうな表情を見せ、そして遂に頷いた。

彼女はユージーンを残して、ふとかき消えた。

『――！』

ひとり取り残されたユージーンはどこまでも透き通った琥珀色の空を見上げ、模造の太陽に向かって声にならない声を絶叫した。

どれだけ叫んでも、その声はどこにも届いていない。

閉鎖された広大な檻の中で、彼という囚人はアルティメイト・オブ・ノーボディに表向き服従しながら、彼の内なる信念に問いかけていた。

レイア||メーターらを犠牲として守りノーボディの意のままに操られる世界、ノーボディの意思に妄信的に従い続けることが、三階の遍く生命にとっての正しい導きとなるのかどうか――。

誰もが幸福に、そして力強く生きてゆくことの出来る世界が実現できるのかどうか。

この一本道を進んではならない。

彼の本心が声を潜めながら、自信なさげにそう言っていた。

アルティメイト・オブ・ノーボディに対する不信感が心の片隅に沸き起こってきた。その反逆心を確かめるように、まがい物の瞳を閉じる。

ノーボディは今も昔も、彼女の慈しんできた箱庭の中の生命を穏やかに維持したいのだ。そのため、何かトラブルが起こればいつでも最善の状態に戻せるようバックアップを欠かさなかった。彼女は恐らく、ある個体の“記憶”をコピーしインストールした個体は、同一の個体だと考えている。失われれば、補完すればよいという発想だ。

ユージーンは生命に、魂が宿っているとは思わない。

だが、心は必ずその個体の裡にあって、それはたった一つであり、肉体から離れてはいけないと、今でも信じている。

心は肉体と引き剥がされて補完されたり、複製など出来ないし、それを行って踏み躪ってはならないのだと。

“記憶”は“心”とイコールで結ばれない。

心がたったひとつ、かけがえのないものであるからこそ生命は力強く、価値がある。

たった一つしかない生を生きたその死は尊い。その生と死はなにものによっても贖うことが出来ない。

リバイバル
復古すべきなのだ。生命の、その価値を――。

地平線まで続く墓地の寂漠とした風景のほとりには、シャンパンゴールドのさざ波が照り輝く広大な湖があった。

規則正しい潮騒音が、昇華しきれない、じくちたる思いを清める。その波打ち際に腰を下ろし、彼は密やかなる決意を固めつつあった。

穏やかな箱庭を守り続けるアルティメイト・オブ・ノーボディ（名も姿もなきもの）、

進化し続ける生命系の構築を目標とするブラインド・ウォッチメイカー（盲目の時計職人）、

真意の見えない無垢で残忍な創世者INVISIBLE（不可視

の創世者)

……だめだ。彼らの支配に屈しては。

本当に必要な世界は、生命が真に唯一であり、その生が消費されることなく尊ばれる世界だ。名も姿も失った彼はそのとき、こう思ったのだ。

三者のいづれにも与しないテトラ（第四極）の創世者に、自身がいなくてはならないのかもしれない、と――。

そしてそのポテンシャルエネルギーは、皮肉なことに彼の中に、十分に秘められていた。

第1節 第62話 テトラサイクル・リバイバル（後書き）

■挿絵（絵師様の）アドレス／アルシエルⅡジャンセン，ルシフ
アーⅡカエサル

http://lizreel.web.fc2.com/7to
bira/7tobirarnarou.html

第1節 第63話 主観的喪失と、誰も知らない旅立ち

かつてユージーンⅡマズローの記憶素子の一片だった名もなき存在は、アルティメイト・オブ・ノーボディと交わした彼の願いをかなえようとしていた。

憎らしいぐらい澄み渡った模造の空の下で、吹きすさぶ風に触れながらユージーンⅡマズローと彫り込まれた墓石の前に膝をつく。感慨深げに墓標を眺め幾度となく躊躇しかけていたが、その決意はもう揺るがなかった。

『さようなら、みんな……』

彼は届かない遺言を残すと、掌底で墓石を磨くように緩慢な動作で墓碑銘を拭う。深く刻み込まれた黒い墓碑銘が剥落してゆくにつれ、墓標というユージーンⅡマズローの記憶の蓄積回路は破壊され、起動状態を示す青い光を失っていた。最後の一字まで名を消し、墓碑銘の下に紋章の中に手を差し入れて硬質の黒い筒を抜き取り、脆く繊細な材質のそれをガラスを砕くようにパキンと真つ二つに折った。ハードディスクの核を破壊されたあとには、沈黙状態となった名前のない墓石だけが残っている。

アルティメイト・オブ・ノーボディに願ったユージーン最後の希望、それは彼という存在を“いなかったことにする”というものであった。

何者でもない者となる為に必要な手続きは、アルティメイト・オブ・ノーボディの記憶に触れたユージーンの場合それほど多くはなかった。

現にたった今この瞬間、ユージーンⅡマズローという存在はアル

ティメイト・オブ・ノーボディの運営する生命系の記憶のコミュニケーションから排除された。

アルティメイト・オブ・ノーボディが結ぶ記憶は、現実の生物階や神階の事象にも影響している。

ここは恐らく、EVEの一角だ。織図の領域を侵して、ノーボディは彼特有の敷地を保有している。仮想空間であるこの場所で起こった出来事が、自我を持ち、独立思考を持ち、記憶に頼る生命によって現実のものとなって反映する。

生物階はEVEに、そして神々はノーボディに管理されている。なるほど、仮想型シミュレーテッドリアリティ（Simulated reality）、演算された生命、か——。

そこに存在するものが、真の意味で現実を認識できない。

それはまさに“水槽の脳” モデル、あるいはブレインマシン・インターフェイスそのものであった。

記憶素子を折ったことで、ユーザー＝マズローという記憶の集合体を記載したデータは失われ、その存在の痕跡は現実の空間に反映されありとあらゆる場所から存在の痕跡が抹消された筈だ。記憶とは自己を繋ぎ止める拠り所となる頼りがいのある媒体である代わり、自己は他者の記憶の集合体によって他者の中に埋め込まれるように複合的に形成されている、不自由なものである。あらゆる記憶と繋がった情報ネットワークを、全て切断して他者の中から解放されればどうなるものか、ユーザーには分かっていた。

これはアルティメイト・オブ・ノーボディから学んだことで、アルティメイト・オブ・ノーボディは記憶の集合体という生命系から独立していた。彼はアルティメイト・オブ・ノーボディの存在する

位相と同じ状態を再現しようとしたのだ。そして今、普遍となった彼は仮想空間の中ですらユーザンとして存在する事が許されず、姿を失って見えなくなってしまった。彼が消滅したあとに残ったものの、それは——どこまでも透き通るたった一つの眩い光塊だ。

世界の記述からその名を削除し、三階には誰一人、一柱として、ただのひとつとして彼を覚えていたものはなくなった。

たったそれだけでユーザンIIマズローを記載したあらゆるログは失われ、彼は真に“誰でもないもの”となったのである。

かくして第四の創世者は誕生した。^{テトラ}

彼は認識の枷でつなぎとめていたデータベースコミュニティというネットワークから解放された。

アルティメイト・オブ・ノーボディの知識と力を得た彼はアルティメイト・オブ・ノーボディの片割れと呼ぶにも相応しいだけのエネルギーを擁し、このときより創世者としての道を歩み始める。彼が自己を棄て全能性を得たことと引き換えに、彼が生きた記憶の収まる場所にはやない。

彼はまず父、アルティメイト・オブ・ノーボディに察知されないうちに、この快適で生ぬるい箱庭から巣立たなければならなかった。光子となって彼の視界でも不可視化されたその腕を高くかかげ、頭上に巨大な円を描いた。プランク温度(T_p)を以て、空間を不安定化させすっぱりと抜く。創世者の存在の擦過は空間の綻びを生む。彼は空間を缶を切るように正円状に穿孔すると、その残像は正円の向こうに消えた。

アルティメイト・オブ・ノーボディの空間を音もなく抜け出し、INVISIBLEの支配の及ぶ直下、一つ上の階層に昇りアルティメイト・オブ・ノーボディと対等な位相で新たな空間を拓こうと

企てた。

虚無の空間へと脱出すると、運び込んだ種火を大切そうに抱える。それは、プランクサイズ（ 10^{-35}m ）にまで超圧縮された、不安定な自身のエネルギーだ。原始宇宙といっても差し支えない。彼はエネルギー不足で無からの創世を果たすことができないが、この目に見えない小さな塊が、空間の端くれであることに間違いはない。

彼のほんの小さな空間の欠片は、INVISIBLEの飲み込んだ周囲の空間の切れ端と接合させ、次元を統合してゆくことで、空間の矮小性問題を解決することができた。彼が思惟するに、INVISIBLEが膨脹（貪食）型の空間運営を行っているのは、INVISIBLEがもともと力なき創世者であり、インフレーションにより充分な体積を持った空間を自力で生み出せなかったが故のことだろう。

彼もまたINVISIBLEに倣い、膨脹型の空間運営を試みようとしたが、アルベルト・アインシュタインの破棄した宇宙定数ラムダ（ Λ ）を敢えて導入した。INVISIBLEの創世方法と異なるのは、膨脹しても決して重なり合う他の宇宙を貪食しないという点だ。空間を噛み砕き、他に触れるたびに内容物を破壊するのがINVISIBLEのやり方であり、空間は触れ合うたびフォーマットされ続けるのだが、第四の創世者^{テトラ}は空間を融合しても、内容を極力変化させない。小さな液滴が隣り合う水滴と融合して大きな水溜りを成すように、3年という限られた時間のうちに少しずつINVISIBLEの食い散らかした空間の残骸を集めて融合することができれば、力なき創世者である彼がそれなりに体積を持つ空間を創り上げ、更には三階とも融合を果たし、その内容を一切変えずにINVISIBLEに成り代わる創世者となりうることもあるのかもしれない。

ゴールはわずか3年後、瞬発力を必要とする方法だ。

——彼は闇夜を手さぐりで駆け出した、誰にも看取られることなく。

＊

何か張り詰めていたものが断ち切られたような、そんな嫌な音が恒の頭の芯から聞こえた。心奥に深く張っていた根を千切られ、引き抜かれたような不快な感触がしたのだ。

胸が痛い。それは朱音も同じようで、彼女は肩を震わせて驚いたように周囲を見回している。

だが辺りには用途不明の怪しい器具が置かれている以外には何もない。

“俺、何をしてたんだっけ……”

恒はいくら考えても、思い出せない。何のためにか荻号を追ってこの暗く鬱々とした部屋に比企と共にやってきて、そして何故か朱音と鉢合わせになり会話をしていたような気がする。

荻号に会うよりもっと大事な予定があったと思うのだが、恒は遂にその大切な用事にたどり着くことができなかった。

恒は違和感を覚えつつ朱音を助け起こして立たせ、先ほどから部屋の中央に重く横たわっている巨大な棺の傍に戻ってきた。彼は棺の傍を素通りして中を覗き込みもせず、完全に恒の視界と意識から外れていた。恒の興味を引きつけない、それは朱音、そして比企も同じで、誰もその棺の中身に興味を持つものはなかった。

だが荻号だけは違和感の正体が“何か”が何であるか、よほど引っかかるらしく乱暴に首を振ると、不揃いな赤茶けた長髪が神経質そうに肩の上に散った。

「いかん、どうかしてる」

「どうした？」

端末の前に腰を下ろしていた荻号は、ぞんざいな態度で比企を睨むように見上げる。

「俺は何をしようとした？」

「己が知ったことか」

荻号の理不尽な問いかけに、比企は何を言っているのだと苦笑する。

恒は荻号が恒と同じ感覚に見舞われたのだと察して、彼からそれを聞き出そうとする。朱音は比企から預かって、金色の光跡を漂わせながらうつらうつらと眠りかけたレイアⅡメーテルを抱いている。女神だからというのもあるだろうが、長い金色の睫毛、柔らかなうぶ毛と、よく通った鼻筋、真っ白な指先、薔薇色の唇の愛らしさは朱音を虜にしている。何と綺麗な子なのだろう。朱音は素直に感動していた。

生まれ持った完璧な容姿は、まさに人間離れしている。恒はこの赤子を抱いてやってきたが、何か恒と関係があるのだろうか、彼女は詮索したくなる。

恒はそんな朱音の心配をよそに、荻号に彼の疑問をぶつけているところだった。

「ところで……荻号様はここで何をしていたのですか？」

「さあ。何をしていたんだろうな？ 走らせているタスクから察するに、これは冷凍プログラムだ。俺はこの馬鹿でかい棺をついさつき、凍結しようとしていた。何故だ？ 俺は無駄な労力が死ぬほど嫌いだ、辻褄が合わんこともな」

彼は途中から、彼のストイックなまでの合理性至上主義をさらけ出していた。

荻号がこれほど感情を露にすることなど珍しい、と恒は思えど、彼の記憶は荻号 要に対するイメージと混同されつつある。恒は荻号 正鵠の本性を知らない。半ば八つ当たりされそうになった恒を庇うように、比企は口を挟んだ。

「とうとう耄碌もうろくしたのだろう」

そう言いながらも、比企も僅かばかりの違和感を否定できなかった。荻号に用があったからこそ追跡転移で荻号を追った、だが何の用があったものか彼もまた思い出せない。耄碌したのは荻号ばかりではない、と比企は軽く危機感を募らせながらひとまず荻号を皮肉った。

「俺はお前より断然若いんだ。耄碌するならお前の方が先だろ」

荻号は比企の皮肉を冷たい切り口で鮮やかに切り返し、首を傾げながら誰もいない筈の背後を振り返った。彼はその場にいた誰もが気にも留めなかった巨大な旧型の生体凍結装置、通称ARKアーケに目を凝らした。ついこの間まで、一万年間も荻号が入っていたものだ。快適とはいえないが、彼にとっては住み慣れたカプセル。荻号は吸い寄せられるように腰を上げると、柩の側面についていたのぞき窓の霜を指の腹で払い落とし、凍りついた内部を覗く。

分厚く蒼い氷の中には、プログラムが示したのとは矛盾して、何も入っていないかった。だが凍結中との表示が出てプログラムは動き続けている。

荻号はいよいよ不気味だと呟いて端末に戻ると、棺の内部モニタの録画映像を逆再生しはじめた。実際の時間にして3分も戻さないうちに、突然無人のARKの内部に人影が現われた。それは水漬けになって死んだように眠る青年だ。

「……誰だ、こいつは。神か？ 突然現われたってことは、突然消えたんだな。時系列的に考えて……」

「え？ このヒト何ですか？ この中には何もいないじゃないですか」

恒も朱音と視界を分け合いながら小さなモニタのウィンドウを覗き込んだ。中で眠っていたのは、どう見ても黒いスーツを着た金髪の青年だった。モニタの解像度が悪くてよくは見えないが、恒は彼と面識がない。朱音も同じく全く面識はないと感じた。彼の頭脳という生体ハードディスクに絶対の自信を持つ荻号は、この不可解な青年に関する記憶が剥落したことが許せず、恐らく彼自身が数時間前に実行したと信じているプログラムを、歯がゆそうに目を通している。

荻号が敗北したのだ、記憶に齟齬があると認めざるをえなかった。

比企も見覚えがないと横に首を振った。彼は神階に在籍するほぼ全神の容貌を把握しているが、一度も見かけない顔だと結論付けた。荻号の眠った一万年前以後に凍結されたいにしえの神ではという推理が当てはまらないでもないが、どう少なく見積もってもここ100年以内にデザインされたと思しき現代風のスーツを着ている。彼はつい現代まで存在していた神であるが、神階所属者ではない――。辻褄があわなかった、3分前まで中にいたこの青年が、凍結されたまま消えてしまう事についても、説明がつかない。

「藤堂。先ほどお前は、金髪の神はプライマリという、絶対不及者の器となりうると言わなかったか？ この男が神なら、彼もプライマリなのではないか？」

比企はプライマリという存在に注目していたが、恒は青年の持つ容姿的な特徴はこの際いっそ気にもならなかった。

恒は彼を見た瞬間、初めて会った筈だというのに、心の奥がじんと温かくなったように感じる。

「ええ、そうだと思います。何故でしょう、俺はこのヒトを知っているような気がしてならないんです。ですが……思い出せません、とてももどかしいんです」

「こいつ、神だ。生きてやがったが、脳波がなかった。何だ……？消えられる訳がない、瞬間移動も脳死状態じゃできんな」

荻号は謎の男の生体構造を暴き出した。ブラインド・ウォッチメイカーに記憶をいじられたのではないか、恒はそんな嫌な予感がする。誰ひとり何も思い出せないのは、そのためではないかと。恒は彼の存在を忘れてしまったが、決して忘れてはならない、恒に縁の深い人物だったような気がする。

「アルティメイト・オブ・ノーボディに訊いてみましょうか」

「……それはまた、ぞつとせん。あの野郎は都合の悪い事は何一つ吐かんからな。奴には出来るだけ関らん方がいい」

恒は、アルティメイト・オブ・ノーボディをこき下ろさない方が得策なのに、と反論した。

「そんな、機嫌を悪くするような事言わないでくださいよ。もしかしたら教えて下さるかもしれないじゃないですか。知っていらっしゃるのは確実なんですから」

「恒くん」

朱音はすやすやと眠りについたレイアIIメーテールを抱いたまま、突然興奮して恒に耳打ちした。

「私も恒くんにそう言われたら、このヒト知ってる気がするの。誰なのか全然思い出せないけど。私、忘れっぽくなっちゃったのかな」

毎日会ってたような気がするの」

朱音の率直な言葉が、恒には頼もしかった。

だが疑問があるとすれば、氷漬けになっている人物は恐らく神であるのに、今日の今日荻号と出会ったという朱音が恒と同じ感覚を持っているということだ。恒と朱音、そして比企の共通の知り合いがいるとすれば、風岳村内に限定される。恒は力強く頷いた。

「その感覚を大事にしてくれ。他者の中に“その人が生きた”という記憶がなくなれば、その存在は歴史上“いなかった”ことになる。きっとそういう状態なんだ」

「それって、誰にも会わず後世に誰にも発見されずに一生を終えた人は“いなかったと同じ”ってこと？」

「お前らはまた随分と、哲学的で文学的な奴らなんだな。気が合いそうじゃないか」

荻号は彼の使徒である朱音と恒とのやりとりを興味深げに聞いていたが、ふとそんな指摘をすれば、朱音はおたおたと弁解にはしる。

「こ、恒くんとは、幼馴染でクラスメートなんです。ね!？」

「なるほど。じゃ、幼馴染のよしみで俺なんかよりそいつの使徒になればいいんじゃないか？ 年齢も近そうだし。使徒にすると聞いたが、別に強制でもなんでもないんだからな」

荻号は珍しく恒に気を遣って、あるいは面白がってそんなことを言った。

朱音が恒を好いているのは荻号からすれば一目瞭然だったし、恒も彼女の庇護は、自分の責任だと考えているふしがあった。性別のない神とは違い、使徒は人間と同様に豊かな恋愛感情を持つ。友達以上の関係であったふたりを、ぽっと出の荻号が引き剥がすのもどうかと彼なりに考えたようだ。彼女が人間であろうと使徒であろうと、いわゆる恋仲には変わらない。そしてこの手の純情可憐な少女

は、どんな時代でも一概に傷つきやすいものだ。

政略結婚ではないのだから、使徒が主を選ぶ権利ぐらい充分に保障されなければならないと荻号は考えていた。

「え?! 朱音が、荻号さんの使徒になったの?」

恒は不意の告白に必要以上に驚いたが、すぐに表情を取り繕う。

「う、うん……なんかそうなっちゃったみたい。あ、でも」

でも、本当は恒くんのほうがいい……朱音は勿論、口には出せなかった。

「そっか。そうだよな」

無限ともいえるアトモスフィアを持ち、いつも危なげなく朱音を守るであろう荻号の使徒となった方が朱音にとってよいのだと、恒は彼自身を無理に納得させた。それに荻号は神籍を除籍されている。多くの位神が使徒にそうするような、厳しい主従関係を強要しない。恒が朱音を使徒とするにあたって唯一のメリットは、他の神々とは違って彼女と対等でいられるということだ。その点なら神籍離脱した荻号と朱音は対等であり、風岳村でなんのわだかまりもなく神階とは無縁に暮らしてゆけるだろう。

これからどんな運命を辿るとも知れない、3年後の未来ですら不安定な恒の使徒になってほしいという方が間違っていると、彼はよく分かっていた。

恒はどうとう朱音を守れなかったと、心から懺悔している。

「なに?」

「な、何でもないよ。俺、全然アトモスフィアも力もないから、そっちの方がいいよな。安全だし」

そんなことを言われたら、何も言えないじゃない……と、朱音は胸が痛くなった。

ましてや本当は恒の傍にいたいなど、言えなくなる。朱音は彼女自身で何ら意思決定が出来ない立場にあることを実感する。長女として育ったからということもあるのかもしれないが、彼女は活発に見えて、わりと遠慮したり気を回すタイプだった。比企は彼女の恒に対する想いも見抜いていたが、恒が使徒を取ったら困ると、駄目押しするように話をぶった切った。

「藤堂、お前はアトモスフィアもないくせに暢気に使徒を取っている場合ではなからう。余力のある荻号に任せておけ」

「え、ええ、そうします。荻号さん、朱音が使徒だってこと、村の誰にも言わないであげてください」

「さあな。隠し事はどうにも苦手でね……」
にたり、と荻号は不穏に微笑む。

恒はそれを少し歪んだ肯定の意だととらえることにした。

「そんな問題よりだ。俺は少し、こいつの痕跡を洗ってみる。どうもコイツは、一連の事件のキーマンのような気がしてならんからな」
忽然と消えた、この棺の中の人物が誰なのか……荻号は録画映像というたった一つの手がかりから何を得るものか。そんな映像じや分かりっこない、恒はそう思った。アルティメイト・オブ・ノーボディに訊いた方が手っ取り早いと思うのだ。

恒は出来るだけ早い時期に、アルティメイト・オブ・ノーボディを訪ねてみようと思った。

＊

「キミはとてもついでるよ」

多くの医療スタッフを顎でつかい、血まみれのデイスポーズブル手袋を外しながらそう言うのは、医神、陰階神第3位、クラディウ

スⅡオウパ、置換名 紺上^{こんじょう} 沓見^{くつみ}だ。不ぞろいに梳き切られたコシの細い黒髪と、薄い唇、コバルトブルーの瞳が少年のような残忍さを醸し出している。身長は150cmと小柄でありながら、その存在は他の使徒たちに恐怖心を植え付けている。紫檀 葡萄は比企の迅速な手配で、普段はよほど珍しい症例でなければ執刀しない紺上の直々の執刀により緊急手術を受け、一命をとりとめたところだった。

誰もいないのかと思われるほどに静まり返った集中治療室には、実際には30名を超える使徒が働いている。物音や私語が一切ないのは、医神下使徒達が彼女の存在に気圧されしてピリピリとした雰囲気包まれているからだ。紫檀 葡萄は麻酔により意識がなかったが、彼が聞いていようと聞いていまいと構わず彼女は耳もとで紫檀に語りかける。

「極陽の命令でなければ、ボクは救命なんて引き受けたりしなかったんだよ」

彼女は女神だが男神のような言葉遣いをする、いわゆる僕女だ。彼女は比企が天奥の間から極陽の名で下した勅令を、極陽からの要請だと信じ込んでいたので執刀をしたが、そうでなければ言うまでもなく彼はあの世行きだったことだろう。

「そのとこ……分かってるだろうね？」

彼女は言葉遣いのみならず1927歳という歳のわりに、いつまでも少年のような格好をして落ち着きがない。

だが彼女がこれまでに執刀した症例数は軽く20万例を超えている。感心なのは、彼女が救った命もほぼ20万名だということだ。手がけた症例数と完治率が一致するという点において、神格的な

欠損には目がつぶられてきた。彼女いわく、“壊れたものを治すのが好き”だというのだから医療倫理もへったくれないのだが、700年以上もの在位期間中一度も、彼女は医神を追われたことはない。使徒達も定期的に行われる所属位神の信任投票で不信任を投じることなく、したがって罷免もされなかった。残念なことに、腕だけは確かだったからだ。

彼女は珍しい症例を好むため、患者がいくら彼女の診察を希望しても彼女の興味を引かない症例だとあっさりと断ってしまう。

そんな難病の患者難民が、かつては外科医であり闇医者であった荻号 要のもとに流入していた。彼は紺上とは対照的に、症例が珍しかろうとそうでなかろうと、患者を選ばなかった。したがって、荻号が失踪してより荻号にかかっていた患者がどつと紺上のもとに駆け込んできた。そんな多忙な中での、紫檀の受け持ちである。

彼女は面倒だという態度を、隠しもしなかった。

「キミたち、このコの腕が生物階のどこかに転がっているだろうから、捜してきておくれ。まだ使えるかもしれない」

彼女がそう言うのは、紫檀の手首に埋められていた制御装置の微弱電波を、入階衛星が受信し続けているという情報があったからだ。紺上は再生医療で紫檀の腕を再生させるのは可能だ、だが時間と手間がかかる。彼女にとっては面白くもない負傷者の為に、これ以上手間を取りたくないという本音は、そこにいた使徒達の誰もが感じ取っていた。

「バトルフィールドは海上だったって話だけど……海に落ちて魚に食べられてなければいいよね、キミの腕」

屈託のない微笑みで、彼女は少しも笑えない言葉を投げかけた。

彼女の使徒達が数名、紫檀の腕の搜索の為に集中治療室から出てゆこうとした時、長身の男と妊婦らしき女が彼等を押しのけるようにして駆け込んできた。男は紺上を目ざとく見つけると、彼女の正面に滑り込んで片膝をつく。女はふらふらとよろめきながら、彼に続く。

「お初お見えます、私は軍神下第一使徒、響　以御にございます。このたびは私の部下に、格別のご高配を賜りまして……」

「死ねばよかったのに……」

ボソツと漏らした本音は、静まり返った部屋ではっきりと、廿日の耳に届いていた。

だがどこか茫然自失として現実逃避をしていた彼女はそれを受け流す心のゆとりがない。廿日の代わりに苦言を呈したのは以御の方だ。

「不出来な部下とはいえ、畏れながら、お言葉が過ぎるか」と

「……なんて、言えないからね。極陽には。そっち、このコのお嫁さん？」

冗談だったのか本気だったのか考えたくもないと以御は不快感をあらわにしたが、命の恩神に感謝以外の感情を向けるのは許されない。ともあれ紫檀は一命を取り留めたと聞いている、以御は憤慨しながらもそれで充分だと思うことにした。

「じゃあ一応、説明をしとくかな。重体もいいところだったよ、キミの旦那。ボクじゃなきゃ、助けられなかっただろうね。そりゃ、荻号　要クンなら出来たかもしれないけど？　あいにくどっか行っちゃったみたいだし」

「主よ、夫の容態はいかがで……」

廿日は緊張で激しく胸を打ち鳴らしながら、肩で息をしている。
「今ボクの部下に腕を捜させてるけどあればそれを繋げるし、なければ義手を造らせる。翼は失ったよ、両方ともね。可哀想に、キレイな紫の翼だったのにね。そうそう、臓器からの出血も止まってるよ。命に別状ないだけでも感謝してもらわないと。それに翼がなくなっても、働けないわけじゃないだろ？　働き盛りなんだから、働いてもらわないとキミも困るだろうし」

妻の前でこの口の利き方……殴ってやりたい、と以御ははらわたが煮えくり返る思いだ。女神は以御が腹を立てる様子をマインドブレイクで看破して、くすくすと笑って面白がっていた。

しかし廿日は以御と違って、安易に腹を立てはしない。彼女はいかなる侮辱を受けたときにも、使徒として神に礼を尽くす。使徒の鑑のような女使徒だ。

「主よ、感謝いたします。私は夫が何を失っても、命さえあれば他には何もいりません。主には何と御礼申し上げてよいか。もしご存知ならお教え下さい。夫の身に、何が起こったのですか」

「さあ？　極陽からは何かと会敵したって聞いているけど？　目が覚めたら旦那に直接訊いてみれば？　それからキミの旦那に、中途半端な実力で戦闘に関わるから、こんな事になるんだって叱った方がいいよ。きつくね」

紺上は語尾に、ちくりと嫌味を付け加えるのを忘れなかった。

紺上がいつからひねくれた性格になってしまったものか誰も知らないが、過重労働を何百年とこなしてきた彼女のストレスは、とうに限界に達してしまっているらしかった。廿日は紺上に促されたので、恐る恐る立ち上がりベッドを覗き込んだ。紫檀の肩から下は布団がかけられているためその惨状はよく分からないが、意識のない

夫と対面を果たし、彼女は胸がいっぱいになった。

せめて手でも握っていてあげたいと思えど、両腕を切り落とされて握る手がないのだと気付く。

「……あなたは立派よ」

甘日は涙ぐみながら、そう言うだけで精一杯だった。

「まだ意識はない。でも、聞こえてるかもね」

紺上はそう言い残すと、仮眠を取るため集中治療室を出て行った。甘日は任務に忠実であろうとした夫を誇りに思うと同時に、心の片隅ではやはり妻として、任務に背き交戦せず逃げ帰ってもよいから無事に帰ってきてほしかったという思いが交錯していた。しかし彼女の夫はいつだって、甘日や子供達より彼を地の底から引き上げてくれた主である軍神の方が大切なのだ。

先に紫檀と出会って彼を認めたのは甘日だったが、彼は軍神に格別の思いを持っている。

二言目には軍神の話をはじめるので、甘日はいつも夫を軍神に取られたような気分になったものだ。

神の最も至近に仕える十大使徒の一角が、彼の命令に従ってこうして生死を彷徨うほどの重体となっているのだから、軍神にも見舞いに来て欲しいのにと思ったところで、甘日はたと気付いた。

“待って……主って、軍神って誰？”

甘日は信じられなかった。何十年も仕えた筈の軍神の顔も名前も思い浮かばないなど、一線を退いたとはいえ、記憶がないでは済まされない由々しき問題だ。しかし考えても、考えても、一向に思い出せない。甘日は夫の忠誠心とひきかえ、何という醜態だろうと激

しく自責したが、それでも思い出せない。

「紫檀、俺はあのとき、お前を行かせるんじゃない。……。本当に後悔してるんだ」

一方の以御も紫檀にそう呼びかけて、おもむろに口元を押さえた。

“あの時って……何だ？”

あの時、比企と恒は何か用事があってどこかへ行った。紫檀は恒を追いかけた……よくよく考えてみると、辻褄が合わない。紫檀は誰かの命令で恒の警備を任されていたために、恒を追った。恐らくそうだ、紫檀に指示を下した人物、それは紫檀の上司に他ならない。以御は彼の上司だが、以御は指示を出していない。言うまでもなく、彼に恒の守護を命じたのは軍神でなくてはならない。以御や紫檀は軍神下使徒であつたのだから……。

“当代軍神は……誰だ？ 先代は分かる、先代はミネルヴァ様だ。でも、当代は？”

思い出せなかった。

何十年も生活を共にし、誠心誠意仕えてきた筈の彼の上司、軍神の名も、そして姿も思い出せない。主の名を忘れるなど――。

これはもう、記憶喪失になつたのでなければ命をもって購つても足りない、と以御は恥じ入った。以御は記憶の手がかりを辿るように彼のむき出しの肩を見つめる、第一使徒は神と全く同じ御璽を色違いで刺青し、主の名を刻み込んでいたはずだ。

しかし……以御の肩には、刺青などどこにもなかったのだ。

*

「……」

アルティメイト・オブ・ノーボディは名前を失ったユージーンの記憶が彼女の胎を飛び出したことを知った。しかし知ったところでそれが何になろう。一度飛び出して彼女の手を逃れたものを、連れ戻す事はできなかった。何故なら、空間そのものである彼女は絶対に空間外に出ることができない。空間（袋）は裏返しにならないからだ。この空間を出るときは、この空間の創世者を辞める時だ。その際は、すべてを手放さなければならない。ノーボディが抜けた瞬間、宇宙の中心へと宇宙構造物を引き寄せるノーボディの引力が働かなくなり、宇宙は急激な加速膨張に見舞われビックリップ（Big Rip）が起こり、物質は素粒子レベルにまで引き裂かれ、世界は終焉する。人も、神も、動物も植物も、天体も……彼女の慈しみ、守ろうとしたそれらすべてを一瞬にして失う。

しかもユージーンの記憶を回収しようと試みたところで、彼は既に名も姿も失っている。

どこにいるかわからないのだ。

「よもやユージーンに、欺かれようとは――」

ユージーンがアルティメイト・オブ・ノーボディに”ユージーンⅡマズローに関する記憶を世界の記述から抹消したい”と願ったとき、それが生物階や神階に残してきた者たちへ奉げるユージーンの慈悲だと、彼の母は理解して諾した。また、ユージーンを信頼し見くびっていたために、記憶を削除するという過程は、彼を名もなきものへと昇華させ原始の存在たらしめる、最後の枷であるという危機感がアルティメイト・オブ・ノーボディには欠けていた。

その結果がこの裏切りだ。

ユージーンはアルティメイト・オブ・ノーボディの支配より逃れて創世者になろうとしたのだらう。3年後、新米創世者がINVI

SILE収束に際しどんな手を打ってくるつもりなのか、アルテイメイト・オブ・ノーボディには想像もつかなかった。そして全く目的の知れない第四の創世者^{テトラ}の誕生は、純粹に同じ創世者である彼女にとっても相当の脅威であった。

「……汝は愚かだ。その道は誤っている」

アルテイメイト・オブ・ノーボディは群からはぐれた羊である彼を氣遣いつつ、夕陽のすっかり落ちた夜の草原に立ち尽くす。

結局、アルテイメイト・オブ・ノーボディの孤独は、誰にも理解されなかった。

第四の創世者という新たななるファクターが加わり、ユージーンⅡマズローという最初にして最後の協力者を失ったにすぎなかった。

第1節 第63話 主観的喪失と、誰も知らない旅立ち（後書き）

【現】 プランク温度 (T_P) : 物理的に知られる最高温度。1プランク温度は、ビッグバン後1プランク時間経過したときの宇宙温度。

【現】 宇宙定数ラムダ (Λ) : アインシュタインの重力方程式中のスカラー量であり、万有斥力をあらわす宇宙項。現在ではハッブルらの宇宙膨張の発見によって否定されている。

第1節 第64話 楽園（EDEN）と、陽だまりの天使

錯体研の大学院生、築地 正孝と長瀬 くららは、国際学会のち遠方まで足を運んで、スイス・ジュネーブ郊外のある施設を訪れていた。稼働直前の、CERN（欧州原子核研究機構）の一大研究施設、世界最大のLHC（大型ハドロン衝突型加速器）の見学のためにだ。長瀬の持っていたパンフレットを見れば、のどかな田畑の中に横たわるように敷設されている。あまりに巨大なため、それはフランス国境にまたがっていた。

大人気のLHC見学ツアーに参加していた二人は、野外でひとしきり写真を撮ったあと、その壮大さにため息を漏らした。

「大きすぎてもはや外周がわかんない、山手線の全周に匹敵する長さだって。向こうはフランスなんだよ」

LHCは巨大なループを成しているのだが、外周27kmもあるのでその全体像は地上から眺めてもよくわからない。鳥瞰してのみ、その実体が明らかとなるが。

「微妙にカーブしとるんやな」

カーブしているといっても、築地の目にはほぼ直線のように見える。

「地中にあるんだよ。だから外から見えるのは本体じゃないの」

「で、見どころは？」

ループ状の施設は、言ってしまうばただのパイプであり直線。何時間もかけてやってきた割に、見所がないとなるとあまりに地味だ。世界最大の大型ハドロン衝突加速器。ループ内を加速させた7テラボルトの陽子ビーム同士を正面衝突させることにより、そのとき人類は14テラボルトという地球最大のエネルギーを、この場所で観測するだろう。その科学的重要性は長瀬の説明でうすうすわかってはいても。わざわざ足を運ぶほどのものなのかと。

「まあ個人的な興味もあるんだけど、それは口実」

二人は係員らによって10名程度のグループに振り分けられ、案内係の指示にしたがってヘルメットをかぶり、見学ツアーへと地下へと降りてゆく。夏場だが、地下はいやにひんやりと感じられた。排熱のために冷却されているのだろう。

「貴重な見学チケット、もらえてよかったねえ。ウツボカズラ先生に感謝しなきゃ」

相模原教授の名が知れていたことで、見学チケットは教授のコネで簡単に入手できた。LHCの稼働が始まれば、放射能汚染などのため地下施設内へは原則立ち入りできなくなる。そして今後10年は、一般公開されないだろうと言われていた。そう思えばまたとい見学の機会だな、と築地は長瀬についてきてよかったと思い直す。「しかし錯体研がまさかCERNにコネがあるとは」

「比企さんの一件以来、教授はすぐにCERNとNASAをはじめ、各研究機関に書簡を送ったからね」

また、各国研究機関から相模原教授に対しての問い合わせもひっきりなしだった。相模原研は欧米やアジアからのみならず国内からの9名の留学生、および客員研究員を受け入れたし、人数も一気に増えてうらぶれていた錯体研が今や、世界的な興味が注がれている研究室となった。また、学部3年生の間では、第一志望に相模原研の希望を出す学生が圧倒的だったという。

このぶんどと、来年からの学生の確保も安泰だということ、そういうえば相模原教授もほくほく顔だった。それにしても……築地はある言葉がひっかかる。

「なんやのそれ、教授が比企さんのこと内通してはんの？」

「してるよ。ただ、比企さんの詳細は明かしてないみたいだけど。」

比企さんは一応、彼にその気がなくても人類の脅威だから」

比企に悪気や野心がなかったとしても、彼が危険な存在であると

いうことには変わりない。相模原教授は、宇宙人が現れたとメディアに触れ回ることにはなかったが、世界の脅威と判断した以上、比企の存在を各国機関に黙っておくつもりはさらさらなかった。という話を、長瀬は教授から聞いている。

「しかし教授、勇気あるなー。内通しとるゆーて、マインドブレイクで筒抜けやん」

顔を合わせた瞬間に、教授は比企に看破される。そして教授の裏切りを知った比企は、教授をどうするだろうか。教授を殺して……とはいかないだろうが、少なくともマインドイレース（記憶削除術）という業があるらしいので、記憶をすっかり消されてしまうような気がする。そして比企は二度と、教授を信頼しない。

しかし長瀬によると、そこは大丈夫のようで。

あれ以降、教授は忙しいだの何だの言いながら、直接比企とは会っていないのだそう。比企も神階の掟で、そうそう地上には降られないという話だった。だからマインドブレイクはされてない筈だと。教授は電話やメールで用事を済ますようにしている。それに万一内通してるのがバレて、例えば殺されたとしてもそれは本望だと、彼は覚悟を決めていたのだそう。

男気あふれる相模原教授を、築地は人として誇らしく思う。しかし長瀬はそんな裏事情まで知っていたのか……。

「はー。どえらい人やで！ ウツボカズラ教授は！ 絶対ノーベル賞とらはるで」

「ノーベル賞って、評価されるのは数十年先だからね。まあ将来、楽しみにしておこうよ。そして相模原教授の意向を受けて、CERNの水面下では……とあるプロジェクトが加速してるよ」

「とあるプロジェクト？」

相模原教授の情報を受け、世界中の科学者たちが水面下で活発な動きを見せている。

「2000年代前半からCERNが取り組んでいたのは、グリッド・コンピューティングというプロジェクトだよ。それを更に、急ピッチで強化してるんだ」

「わからへん」

降参するのが早い築地である。長瀬の説明によると、グリッドコンピューティングシステムによって、世界中のコンピュータは並列に連結されるのだそうだ。以前はごく限られた科学者やボランティアの間で行われていたプロジェクトであり、その計算能力を以てビッグバンの謎を解明するという話だった。

もともと科学的ストレージやネットワークのために構築されていたそのグリッド・コンピューティングを急遽神階対策に活用する。グリッドのためのソフト”EDEN”^{エデン}は、インターネットにアクセスする民間人の全コンピュータに、ウィンドウズやマッキントッシュなどのOSソフトウェアアップデートの更新プログラムを装って自動インストールされるようになっていた。

個人の同意もなく、ほぼ強制的にだ。

オフライン環境でなければ、ほとんど全台のコンピュータにインストールされ、世界中のコンピュータの一台一台が、並列化されたスーパーコンピュータの一端を担っている。それを、人々は知らない。情報処理に明るい人間の中には勘付いた者もいたが、それを公表しようとして悉く握りつぶされた。

ひっそりと、だが確実に。

長瀬のパソコンにも、築地のパソコンにも、至るにインターネットカフェのそれにまで、知らぬうちにEDENはインストールされているとのことだ。そして、並列化された大規模計算がバックグラウンドで行われている。その情報処理量は……有史以来最大、約600エクサバイト(EB)／年となっている。既にだ。

それだけの計算能力を以って神へと高々と突きつける、楽園(EDEN)という名の、人類からの挑戦状。

アダムとイブの子を。人類を見くびるにはまだ、早いと。
プロパガンダを天へ突きあげるための。

世界は確実に、半デジタル世界へと移行しつつあった。

「それ、完璧にプライバシーの侵害やん。国際法に抵触しとらへんのん？　そうまでして……そのバカでかいコンピュータに何の計算、させよん」

「それこそ私たちには教えられないでしょ。特に、比企さんと接触できる私たちはね。でもそれがLHCに関係あるっていうから、見に来たんだ。……私はね、ツツチー。楽しみなんだよ」

「何がよ？」

「神々に一矢報いようと、グリッドによってできる超巨大コンピュータインテグレーション。その中を駆け巡る膨大な量の情報はミクロからマクロになる。そのとき、コンピュータに何が起ころと思う？」

きらきらと輝く長瀬の目が、マッドサイエンティスト以外の何物でもない。だが高名な科学者たちはいつも……少し先の未来を見据えてはいなかっただろうか。そんな狂気と紙一重の雰囲気^{スタンダード}を、長瀬は持っていた。科学者がときに優れた哲学者であるように。あるいは現実の科学がSFを超える瞬間を、彼女は切望している。

「私たちは自我を持っているでしょ。でも、それは突き詰めるところ0と1に還元される、単純なシグナルのネットワークなんだ。でも超越的な計算能力を持っている」

「せやな」

加速器のパイプがゆるりと弧を描き繋がる施設の奥へと歩みを進め、頷きながら、築地は凍りついてゆくのを感じていた。それはLHC施設内の冷氣だけではない、総毛立つ。

「たとえばだよ、ツツチー。もっとももっとも、もーっと高性能

なコンピュータができたとして。そのときって……コンピュータに、
自我は芽生えるのかな？」

ぴたりと、長瀬の足が止まる。彼女の瞳は、もはや笑ってなどい
ない。

「……わからへん。長瀬、でもそれ……そんなコンピュータの化け
物が暴走したらえらいこっちゃで」

一つだけ、それはあまりにテンプレすぎる懸念だった。

＊

アルシエルⅡジャンセンは夢うつつで、水滴が規則正しく滴る音
を聞いていた。

体中に鉛が穿ちこまれたように重い、瞼を開きかけては閉ざす。

彼女の睫毛の上に何かが覆っている。

目隠しをされているのだろうか、目を開けていても無駄だと気付
いた。彼女が意識を失ってからこうなるまで。

彼女の身に何が起こったのか、思い出したくもなかった。アル
シエルはじわじわと、両手の感触を確かめる。

手首は金属質の環のようなもので束ねられ戒められ、高く吊られ
ているようだ。金属を千切ることはいわけないが、どうやらアルシ
エルの怪力に耐える特殊鋼で出来ているようだ。もがこうとしても、
びくともしない。

苛立ちは綿のように募るなか、次第に全身の感覚が戻ってくる。
腹部にも特殊鋼が一本、ご丁寧に詰められてぴくりとも動かせな
い。ふと、彼女は身近に息遣いを感じた。彼女の意識が戻るまで、
誰が傍で待っていたのだろうか。彼女にはわからない、いずれにし
る視界はゼロだ。

「いかがですか、陛下。お気に召していただけたでしょうか」
「……さすがに時と場合による」

声質からルシファーⅡカエサル存在を覚りつつ、そんな冗談を言っていてよいものか、彼女は苦笑した。楽観思考はしないが、悲観的にはならない性格だ。

「それは結構。いやはや何よりですな」

アルシエルは彼の声を聞いて脳が何かの刺激を強めたのか、急速に正気と忌まわしい戦闘時の記憶を取り戻してくる。

そうだ。

あれから、アルシエルが放った攻撃は彼の身体に届いていたのだが、彼の体細胞は癌化しており致死的なものとならずすぐに回復し、スタミナも切れなかった。そんな不毛な戦いを何時間も続けているうち、遂にアルシエルは致命的な隙を生んでしまった……たしかそうだったと彼女は思い起こす。記憶は定かではない。

彼女はルシファーが拳を振り下ろす光景を見て以来の意識がない。当然殺されたのだろうと思っていた、だがという訳か、再び目覚めることとなった。状況より察するにここはルシファーの城で、アルシエルは俘囚とされたのだろう。戦闘で被った傷はまだ癒えていないが、傷口はすべて適切に処置をされているのが分かる。殺さず辱められ生かされ、晒し者にされているのだと察しがつく。彼女にとって許しがたい屈辱。

アルシエルは目隠しをされたまま頬をほてらせながら、単刀直入に尋ねる。

「何故余を殺さぬのか」

「貴方を殺すのは惜しいからですよ。それにABYSSの民は女皇

アルシエルⅡジャンセンの死より、誇り高き女皇が命を惜しんで生き恥を晒し続ける方がよほど幻滅するでしょう？ 女皇は私に縋って命乞いをしたと、吹聴されれば。民意は貴方から離れてゆく、そう、急速にねえ……」

何という見下げ果てた奴だ、とアルシエルは怒りのあまり齒軋りをする。

それはメファイストフレスの指示なのか、ブラインド・ウォッチメイカーの命令なのか、はたまたルシファアの趣味なのかは分からない。

ただルシファアはアルシエルに対して、生殺与奪の権限を持たされていること変わりはないさそうだった。アルシエルが囚われた様子を楽しんでいるのか、真っ暗な視界の外から彼が愉快そうに晒うのが聞こえた。屈辱を甘んじて受けるほど、アルシエルは落ちぶれても老いさらばえてもいない。

「何を勝ち誇っておるか。汝が手を下さぬなら、余が自害するまでだ」

彼女はまるで他人事たにじのように淡々と言い放つ。

「お心がけは立派だが、自害なんて出来ないようにしておきましたからね。貴方は囚われたまま充分な食事を与えられ、健康的に、天寿を全うされるまで飼育されるのです。愛玩動物として、私が最期まで看取って差し上げます。みじめな最期をねえ……」

自殺が出来ないようなにというのがどのようにしてなのか分からないが、少なくとも彼の見ている前で自殺は出来そうにもなかった。心肺モニターも取り付けられているのかもしれない。アルシエルが舌を噛み切ろうとしようものなら、彼は遠慮もなく彼女の口の中に手を突っ込んでくるだけだ。それに、彼女自身、今更舌を噛んだぐらいで死ぬるような気はしない。それほどまでに解階の医術は発達

しているからだ。解階の住民の肉体は総じて遺伝的に強化されており、生物階の常識で考えてはならない。そう、多少のことでは死なないのだ。

「汝は……狂っておる」

アルシエルは身の毛もよだつような言葉から彼女の身を守るように、彼の狂気を唾棄した。

「つれないですな。すぐに私なしでは生きられないようにして差し上げます」

「薬物に溺れおったのだの……」

どうやら薬物濫用に加え、ブラインド・ウォッチメイカーに身も心も操られているといった方が正しそうだ。

「千の男の身体を知ったという貴方を、心ゆくまで貪らせていただきますよ。そのふくよかな唇、艶やかな毛、細い腕と脚の曲線など、堪えられない」

その鬼畜じみた異常な言動全てがルシファアの本心からの言葉ではないと、アルシエルは気付いていた。たった今も何本か薬物を打ってきたのだろう。彼と拳を交えた時より強い興奮状態にあるような気がする。理性をどこかに置き去りにしたまま狂気に侵食された彼はアルシエルにとって蔑むべき、あるいは憐れむべき者でしかなかった。

そしてアルシエルが千の男の身体を知ったというのは誇張でも何でもなかった。現にアルシエルは全て違う相手との間に98名の子孫を残しているし、彼女の長い生涯の中で性交渉を持った人数など敢えて覚えてもない。

最強の遺伝子を持つ彼女と交わり子孫に優れた血筋を残そうとする男など、掃いて捨てるほどいた。彼らはある時は解階の名だたる貴族の貴公子であったり、商人や男妾であったりもした。いつも彼らは女皇そのひとはなく、女皇の血筋を欲しがった。そんな彼ら

とは対照的に、彼女は一度たりとも、愛のない性交はしたことはなかった。

解階最強の女皇に対して誰がレイプなどできよう。アルシエルは全ての子供達を認知していたが、ただのひとりにも王位継承権を与えた事はなかった。皇位は血ではなく力で奪えと、彼女の子供達には常々言い聞かせていた。

欲深いルシファーは女皇アルシエルをこそ振じ伏せて、喘ぎ声を上げさせたいと思っていたのだろうか。だがどうやら、彼の目的は性交そのものではなかったようだ。

「私はね、あなたの遺伝子が欲しいのではありませんよ……私はもう、生殖能力を失っていますからね。安心なさい、あなたは妊娠しない」

「全身の癌化が進んでいるようでは、快楽をすら忘れたのではないか？」

「ええ、確かに私は快楽を感じません。何も問題ありません。それはただの行為だ」

「では、何故？」

「あなたを絶望させておきたいと、思いましたので」

アルシエルが男性型個体に対して、性交渉を迫られる恐怖を感じたのは初めてだった。

彼はどうやらもう、完全に畜生以下の怪物と成り果ててしまっているようだ。既にこの男は屍となっているのではないか、とアルシエルは感じた。そして彼が主と仰ぐ、メファイストフェレスは……彼女はまだ彼女として、生きているのだろうか？ 既に生ける屍となってしまうのではないか……アルシエルは彼女の子らの崩壊に、身を引き裂かれるような苦痛を感じた。

「もうよい……十分だ。汝はもはや、生きてはいない。その脳まで薬物と癌に侵されておるようだ。余は汝を憐れむ……そして今ようやく理解した……解階を、そして汝等を守れなかったのだと。我等解階の民は幾千年の時を超えて生きながらえる、だからこそ我等には長きを生きる権利と、神々をも凌ぐ力を持つてしまった事に対する重い責任があつた」

「そうですな」

もはや、アルシエルのうったえはルシファーの心には届いていない。

ないのだ、心が。響くはずもない。

「我等は創世者を滅ぼすためにその肉体を日々高め、汝もそう努めてきた。汝の過ごした幾千年もの歳月の果てに、辿り着いたのが今の姿なのか。それで誰に顔向けできよう？」

最高を目指して、辿りついた結果がこれなのか？ かつて、生きと訓練に励んでいた逞しい青年の姿を、アルシエルは瞼の裏に覚えている。目隠しの外にいるこの男は、あの日アルシエルが拳を交えた彼ではない。

いつから彼は、薬物に頼るようになった。それは彼の意味によるものだったか、何故と慮るにも空虚感を覚える。ブラインド・ウォッチメイカーが彼をこうしたのか。解階はいつから蝕まれていたのか。

忍び寄る不穏な足音に、アルシエルは気づくことができなかった。彼女の愛し子らを、守ることができなかった。

「もう、言葉も届かぬのか……」

希望は費えたのか……。救いはないのか。彼女はそう思いたくなかった。

アルシエルはここで朽ちるかもしれない。
解階の守り主、その幹は切り倒され、葉を落とそうとも。

新しい種は捲いておいた。

若芽は育っているだろうか。

＊

あれから紫檀はまだ意識が戻らないようで、恒は紫檀本人を見舞うより先に、以御と紫檀の妻である廿日に声をかけた。

恒のせいで紫檀が怪我をしたのだと説明して、彼らに誠心誠意謝罪したが、廿日は恒が謝る必要はないと言った。ただ彼女の夫の軍神に対する忠誠心が強すぎたからだ、悲しげに言った。

恒と一緒に集中治療室を訪れた朱音は初めて使徒と出会い、以御らと話をして、使徒がどういう存在なのかをありありと理解した。彼等は神の所有物ではないが、それは相利共生であると荻号が説明したように、実際に強く神に依存している。精神的にも肉体的にもだ。

そしてそんな彼ら、使徒の生き方は、現代の小学生として生きてきた朱音の価値観を根本から否定するものだった。やはり神階ではやっていけない。神階で生きてゆきたくはない、と朱音は強く反発心を抱き、彼等と会ってみてその決意が固まってよかったと思った。そうでなければ、神階についていつまで恒の傍にいたいと、願ってしまったかもしれないから……。荻号のように使徒に従属を強要しない神のもとにすることが、一番幸せなのだ。彼女は思うことにした。そうだ。彼のもとにいる限り、朱音の生活は何一つ変わらずにいられたのだから。彼女が石沢 朱音でいられる場所は、どう考えても生物階以外にない。

荻号は例の部屋に残ってしばらくデータを洗うと言ったので、朱音はひとまず比企に預けられた。

紫檀への見舞いを終えると、恒は比企に連れられ、朱音、レイアと共に比企の執務室に戻ってきた。荻号が用を済ませたら朱音を迎えに来るそうだ。朱音は落ち着かない様子で、きよろきよろと比企の広大な執務室を見渡している。博物館のような間取りに、夥しい書物がところせましと、だが整然と並べられている。恒と一緒にいるので彼女は安心してはいるが、そうでなければ彼女は萎縮して一歩も動けなかっただろう。比企に呼び出された寧々は執務室の戻ってきた人数を数えると、手際良くティーセットを出した。ふたりはソファに座って一段落させてもらって、ありがたくいただく。

朱音は恒の隣にぴったりと寄り添うと、ひそひそと耳打ちをした。比企の容貌がとっつきにくいので、彼女は普通の音量で会話ができなかったのだ。

「ここ、どこ？」

「神階……まあぶっちゃけ、天国だな」

他に何と表現すればよいのか、言葉に困る。神階は生物階では天国だという説明に落ち着いている。実際は雲の上にあるわけでもないのだが……。恒とは初対面だった荻号 要とADAMでばったりと出くわしたとき、彼が神階を天国だと説明した気持ち恒にはよく分かった。イメージとは違うだろうが、そうとしか言いようがなかった。

「天国には連れて行かないでって、言ったのに」

朱音は眉を吊り上げて頬をふくらませ、恒を睨みつける。それをフグのようだなと思った恒は、使徒がマインドブレイクを習得できないことにほっとする。もし朱音に看破されていたら、張り手のひとつぐらいもらっていたかもしれない。彼女はあまり不機嫌にはならないが、そのかわり一度へそを曲げると宥めるのも昔から一苦勞

だった。

「だから後で荻号さんが迎えにきてくれるって言っただろ？ 大丈夫だって」

幼稚園児ではないのだから、朱音には保護者なんて必要ない。そんな、荻号がいらないとダメだみたいな言い方をしないでほしい、と朱音は切なくなった。しかし神階とはどうやら、こういう世界なのだ。使徒は単独行動を取ることが出来ず、必ず神に従属していなくてはならない。同学年のほかの子供達より抜きん出て自主性が育っていた朱音のプライドは、深く傷ついた。

生まれつき定められた身分差であって、朱音の努力ではどうにもならない事だった。まさか平成の世に生まれた朱音が、身分差別を受けなければならぬとは、つい昨日には夢にも思わなかったものだが。

「恒くんはここにいるの？」

「今はね。いつまでここににいるのかは、わかんないけど」

「お前達、一服したら庭で遊んでいろ。恒はいいが、誰かが突然来るとお前は見咎められる。使徒の子供は特にな」

レイアをあやしていた比企がまたしても雑談に割り込んできた。

どうも彼は、恒と朱音の会話に割り込むくせがある。

使徒の子供が第一層を歩いてはいけけないというのだ。比企は建前上は立法神であって、立法神が先頭を切って法律違反をしていては彼の使徒たちにも顔が立たない。比企はそういう意味で言ったのだが、しかしそんな事情を知らない朱音は比企の前ではハイと従順な返事をしながらも、内心はこんな事を思っていた。

“やな感じ。威張っちゃって”

朱音が何か失言をする予定がないかと密かにマインドブレイクをしていた恒は、比企から朱音を庇うように慌てて朱音の前に飛び出

した。

当然マインドブレイクをかけていた比企は冷ややかな眼差しで朱音を見下ろしたが、それについて彼女に直接指摘をすることはなかった。恒は比企が冷静な対応をみせてくれてよかった、と心から感謝する。比企が本気で気分を害すれば、一介の少女使徒にすぎない朱音の身などどうとでもなってしまう。基本的に比企は、恒たちに善処してくれているような気がする。

「じゃ、じゃあ、俺達は空中庭園に行っています」

恒は彼女がまだ飲みかけていたカップを無理やり下ろさせると、手を引いて執務室の裏の大温室に連れ出した。朱音が恒に手を取られてリードされ、どこかへ連れて行かれるのは今日で二回目だ。

恒はいつからこんなに積極的になったのだろう、と朱音は、足場の悪い温室の中をつまづきそうになりながら恒に繋がれた手を見つめる。戸惑うばかりで、嬉しいとは思わなかった。恒はずんずんと茂みの中を分け入ったところで見えてきた白く古いベンチに朱音を座らせ、彼もへなへなと力が抜けたようにその隣に腰を落とした。朱音が天井を見上げるとどうやらここは大温室の中心で、白い梁が幾重にも天空に集まって、ガラス張りの天蓋の奥には全面に宇宙の星々が見える。最高のプラネタリウムだ。天井近くまで生い茂る未知の草花や木々、それらが覆いかぶさって、優しい木漏れ日をつくっている。

朱音はその夢のような美しい光景をひととおり堪能してから、ふとここに朱音を強引に連れてきた恒に向き直った。

「どうしたの？ あわてて。私まだ紅茶飲んだのに」

「さっき、心の中で比企さんの悪口言ってただろ。神の前で悪口を考えるのは、やめたほうがいいよ。特に比企さん、偉い神様なんだから……」

「どうして？ 何で恒くんがそんな事わかるの？」

朱音は比企への不満を、口に出して言わなかった自信がある。恒は朱音の何を聞いていたのか？

「神は相手の心が読めるから。口に出してもアウトだけど、口に出さなくてもアウトなんだ。つまり、考えちゃいけないってこと」

「じゃあ、恒くんも読めるわけ？」

「少しね」

恒は白状するしかなかった。彼女の今後のためだ。彼女は今後荻号と行動を共にする事になる、これを知らないと致命的だ。荻号は面倒だからといって格下の相手には看破をかけないこともあるようだが、神がマインドブレイクを使うという事を知っているのと知らないのでは心構えと対処方法が違う。朱音にも真っ向から悪口を思う事は控え、視線を外すぐらいの対策は取って欲しい。

案の定、朱音の表情はこわばり、恒の言葉を聞いて鳥肌が立ったようだった。

彼女はぱっと両手で顔を覆うようにして、ベンチの上でダンゴ虫のように丸くなった。

「やだぁ……。どうやって読まれないようになる？」

その姿が滑稽だったので、恒は、思わずふき出してしまった。

「もう！ 笑い事じゃないのに」

どうやら恒の爆笑が、彼女の心を傷つけてしまったようだ。

「ごめん。対処法ちゃんと教えるって。ヘルメットみたいなものを、頭にかぶってるのが一番なんだけだな。そんな風に顔を覆ってもしいけど、手軽に出来るのは目をそらすことだよ。ほら、俺こっちむいてるから、そんな笑える格好すんなよ」

恒は朱音を気遣ってそっぽを向いたが、朱音はそんなのは嫌だと思った。これからずっと、恒と面と向かって話すことが出来ないな

ど……こんなに苦しい思いをするぐらいなら――。

「心を読むのって、練習したら私にもできる？ 私も出来るようになりたい」

恒は織図に学んでマインドギャップを作ることができるようになったが、使徒である朱音はいつまでたっても神の看破からは無防備で、可哀想なものだ。朱音が神として生まれついたら、と考えると彼女の潜在能力は相当のものだ。知力も抜群、身体能力も他の子供達の追隨を許さない。だが残念な事に、彼女は使徒だ。神の前では人間も使徒の心も丸裸になる。それで神々は、自らの卑近に仕える部下らにマインドブレイクをかけることによって叛意なきことを確認し、信頼をおくことができた。

使徒は神階において社会的弱者だ、恒は朱音のいなく真っ当な疑問に答えようとして改めて彼らの立場の弱さを認識せざるをえない。

「どうしてか、神にしかできないんだよ」

もしそれが朱音に習得できうるものなら、朱音は恒の心を読みたいて願っただろう。恒の心の中にいるのは誰なのか、それをすっかり見破ってしまいたいと朱音は願ったが、すぐにそれは出来ないこと否定されてしまった。

「恒くんが私の心を読めるんなら……、やっぱり、はっきり伝えておいた方がいいよね」

「……!？」

恒は瓢箪からコマで、思いがけない展開になってしまって笑顔を引っ込め身構えた。

いつかは来るかもしれないと思っていたが、こんな妙な間合いから遂に、来ることになるとは。あらゆる手を打ってきたが、今度ばかりはもう避けられない。恒は緊張のあまり生唾をのんだ。背中越しに、朱音の緊張が高まってゆく様子がわかる。

「だって、そんな大切な気持ちを読まれるのなんて嫌だもん。恒くん、こっち向いて」

朱音はゆっくりと、視線をはぐらかせていた恒の顔に手を添えて、彼女の方に向かせた。やはり言うつもりなのか、と恒は静かに覚悟を決める。朱音は恒が何か余計な事を言い出さないうちに、ベンチに腰掛けた恒の前に立って、少し躊躇いながら咳払いをする。彼女は頬を真っ赤に赤らめながら、緊張からか、瞳が自然に潤んでいる。澄んでよく通る声で切り出した。恒の呼吸が止まる。

「私ね、恒くんが好き。……ずっとね、ずっと前から」

「朱音……」

春夏秋冬の様々な植物が色鮮かに生い茂るこの楽園のような場所で、夢のような最高のロケーションで、彼女は遂に長年の想いを打ち明けた。

俺も好きだ、と言えたら恒はどんなにか楽だっただろう。だがそう言えないのが、恒は悔しかった。恒は朱音の向けてくれる恋愛感情が分からない、分からないというか根本的に理解できない。だが、大切にはしたいと思っている。そしてもし正常な人間の心を持っていたなら、恒が好きだと思える異性、それは朱音以外にはいないだろうとも思う。

だが神である恒は残念なことに、彼女に対して友達以上の感情にいきつかない。朱音は恥ずかしそうに目を閉じて、どちらかというと怯えた様子で口を真一文字に結んで恒の返事を待っている。恒は彼女のありったけの思いに、全く気のきかない言葉しか返せなかった。

「ありがとう」

そう言いながら、恒は彼自身、男として欠陥品なのだとつくづく

思った。彼女が告白したのが巧だったら、巧はもつと心に残る言葉をかけて彼女の気持ちを受け止めてやれただろう。あるいはクラスメートの坂下だったら、坂下は朱音に最高の返事を送ってやれたに違いない。そして必ずふたりは幸せになれた。

朱音が好きになってしまった相手が間違っていたのだと、恒は申し訳ないながらにそう思う。そしてひょっとすると彼女が恒に対して抱く気持ちは、使徒が神を必要とする感覚と微妙にシンクロしているのではないかとすら思う。いっそ嫌いだと言ってしまった方がよいのかとも考えたが、恒自身の気持ちも欺いてはならないと思った。彼女の事は嫌いではない、どちらかというと好きなのだろうと思うが、その恋愛感情を理解できない。これが恒の正直な気持ちだった。

「ありがとうって？　それだけ？」

朱音は失望したような、そんな口調で問い詰める。

「うん……。何て言ってあげたらいいのか、よく分からない。でも俺は、多分誰かを好きになるってことが出来ないんだと思う。俺がお前を思う好きと、お前が俺に対して思ってくれる好きは違っていて、いつまでたっても俺は、お前の気持ちに追いつけない」

朱音は寂しそうに口元を手で覆うと、声を落とした。

「じゃあ恒くんはこれからずっと、誰かを好きになることはないの？」

「……分からない。けど、そうだと思う」

朱音は恒の歯切れの悪い返事を聞いて、じわりと目に涙をためた。分からないのは、恒の方だ……。傷つけまいとして曖昧な態度を取られるぐらいなら、いっそはっきりと言って欲しいと彼女は思う。そうでなければ、朱音はいつまでも立ち止まっていて、前に進めないだろうから。

「ひどいよ、恒くん。好きじゃないって、はっきり言ってくれたらいいのに」

「……」

恒は何かを言おうと口を開くが、答えられない。それを見限った朱音は、突き放すようにこう言った。

「もう、いいよ」

朱音は決まらない棄て台詞を残すと、大温室の敷地の奥に駆け出していつてしまった。温室の中は有限の空間ではなく、比企が幾重にもセキュリティを強化して迷路のようになっていた。恒はビンタを食らったヘタレ男のように唾然としていたが、嫌な予感がしてベッチを立つと、すぐに彼女を追った。しかし本気で逃げようとしている朱音の逃げ足もなかなかどうして、速いのだ。更に悪い事に植物が視界を塞ぐように折り重なり、かなり見通しが悪い。確実に迷う。

「待てよ！ そっち行くな！」

「来ないで！」

恒は朱音を見逃すまいとするが、目の前を走る彼女はいくらも走らないうちに突如足を取られて、体勢を崩してコケてしまった。恒は朱音が迷子にならないうちに転んでくれてよかったとほっとしたが、彼女の身体は思いがけずそのままがくと傾いて、真っ逆さまに落ちてゆく、それとほぼ同時に下の方から水音が聞こえた。恒が駆け寄ると、崖下には泉が滾々と湧き出している。朱音は足を躓かせた拍子に、突如前方に現れたコバルトブルーの泉の中に落ちていったのだ。

比企が造った泉だから、毒が混入していないとも限らない。普段なら頼まれても絶対に飛び込みたくないが、躊躇している場合ではなかった。現に彼女は沈んでしまったのか、泡は見えるがまだ頭を

出さない。恒は彼女を追って仕方なく飛び込む。透明度の高い水の中で目を見開いて朱音を捜すが、水底は見えない、そして彼女の姿も。恒はぐいぐいと泉の底に吸い込まれてゆく。泉の底は抜けていて、水は滝となって恒を空中に放り出し、そのまま地下水路の洞窟のような場所に滑りついた。辺りを見渡すと、やや離れた場所に朱音が蹲っている姿が見えた。

苔むした岩に不時着した朱音はどうやら無事だったようだが、落ちた時に足をすりむき、少し血が出たようだ。恒は黙って動けない朱音の傍に腰を下ろし、白衣を裂いて彼女の膝に宛てがい、少し意地悪にきつく結んだ。

「痛っ！ 痛いよ、恒くん」

「痛くしたんだよ。お前、走るとすぐコケるよな。お前の場合は土地勘のない場所でもやみに走るなって、昔、言っただろ？ だからすぐ迷子になんじゃん。で、見つかったと思ったら泣いてんの。どうしてそうなるんだよ」

「泣いて……ないもん」

朱音はぼつが悪そうに弁解しながら、目じりにぶら下がった涙をさっと拭って恒に小さく舌を出す。そうしていると、彼女の脳裏にいつか見た夕焼け空の下懐かしい光景がフラッシュバックする。

いつもそうだった、朱音がお決まりのようにかくれんぼの途中で迷子になったとき、恒は誰よりも早く朱音を見つけた。どんな場所にいても、恒は朱音を見逃さなかった。そんな時、恒はいつも「泣きべそかくなよ」と言い、朱音は「泣いてないもん」と言って口を尖らせた。それはふたりの間のちょっとした決まりごとのようになっていた。それが恒にとって何の気もない行動であったとしても、朱音はそれを事あるごとに思い出しては彼への想いをあたためていた。

迷子にさえなれば、恒とふたりきりになれる、そんな馬鹿な事を

考えたこともあった。いつからか恒と朱音は少しずつ成長して、そうやって一日中かくれんぼをする事もなくなってきた。ふたりが忘れていた、懐かしい時間が流れていた。

「やっぱりお前、村にいた方がいい。お前、方向音痴だから……。ここにいと、心まで迷子になるよ」

恒は幻滅しただろうか、と朱音はまた泣きたくなる。かくれんぼをしていると無意識のうちにすぐに転んでしまうのはきつと、恒に追いついてほしいからだ。鈍くさい訳ではない、彼の起こす奇跡を、ほんの少し助けてあげただけだけ――。

彼は神様になってしまったけれど。

「……」

恒は彼女を立たせようとして、足をくじいている事に気付く。気恥ずかしさを押し隠して、彼女を丁度お姫様抱っこのような体勢で抱えた。彼女の身体は羽根が生えたように軽く、重さは感じなかった。彼女はもともと、特別体重が軽いというわけではない。神階は地球ほどの重力はないのだ、彼女の体重も実際に軽くなっている。ただそれだけだったが、彼女が翼を持つ使徒であるということ、恒は妙に実感した。暗い洞穴の中に、一筋の光と共に透明な水柱が落ち込んで、鏡面のような水面をを騒がせていた。

恒は光差す方角を真っ直ぐ見つめて、彼女がこれほど軽ければ二人でも充分飛べると見積もる。恒は誰かを連れて飛んだことはまだなかったが、まるで羽根の生えたように軽い彼女と一緒になら出来るような気がしていた。

恒の視線につられて、朱音も上を見上げる。出口はあそこだと朱音にも分かっているが、光が差し込んでいる場所までどう少なく見積もっても10mはある。そして他に光が差し込んでくる場所は一箇所もない、這い上がれなければ真っ暗闇の中に恒とふたりきりだ。

それが場合によれば嬉しく感じたかもしれないが、朱音はあの銀髪の少女を見た時以来トラウマがあつて暗闇に長時間いると怖くなる。出来るだけ早く、光のある場所に戻りたいと彼女は願ったが、そんな中でも恒に謝る事を忘れなかった。

「……ごめんね。私が落ちちゃったから、恒くんまで巻き込んで……しばらくここで待たなきゃいけないね。ごめんね、こんな大変な事になって」

残念ながら、比企以外の助けはなさそうだった。比企がいつか気付いてふたりを見つけてくれるだろうが、少なくとも数時間は待たなくてはならないだろうな、と彼女は心細い。しかし恒は頼もしく笑つて首を横に振った。

「そんな、へこむなよ。全然大したことじゃない」

恒は彼女をずれ落ちないようしっかりと抱えると、トーン、と岩肌を軽く蹴った。朱音は次の瞬間、確かに恒とともに浮遊感を味う。

それがあまりにも怖くて、きゅつと恒の首にしがみ付く。

閉ざしていた目を開いた頃には、朱音の足は宙をかいていた。水底から放たれる、光のシャワーに打たれ、滝から零れる細かな水の飛沫がプリズムのように舞い散っている。彼の放つ仄かな光と朱音に注ぎかかる天井からの光が溶け合い、彼と一つになったような高揚感。そして感じる、恒の温かさ。

「恒くん……飛べるの？」

恒は何も答えないまま照れくさそうに、しかし優しく微笑んだだけだった。

「ねえ」

彼女は恒の耳元で甘えた声を出す。それは子猫のように、恒の耳をくすぐる。

「ん……」

「私ね、今やっとわかったよ……。恒くんと私の線路はずっと平行でね、繋がってなんかいなかったんだって……。恒くんは私なんかよりもっとふさわしいヒトが待ってるよ。だから誰かを好きになることが出来ないなんて、そんな寂しいこと言わないで——」

何だろう。恒は朱音の言葉ですっと息苦しさが消え、楽になった。恒は神としても、そしてヒトとしても欠陥品なのだと思い込んでいた。恒の全てを受け止めて、恒の全てを肯定しそっと背を押してくれる、そんな存在が朱音なのだと分かったような気がする。それが彼女に対する恋愛感情にまで昇華される事がなくとも、朱音の言葉は春の日差しのように恒を温かく包み込んでくれる。一言一言に込められた、彼女の飾らない言葉が恒に染み渡る。

いつかどこかで、恒と朱音を結ぶ長い線路は緩やかな弧を描いて、交わるときがくるのかもしれないと思った。

たえそれが今でなくとも。

第1節 第64話 楽園（EDEN）と、陽だまりの天使（後書き）

【現】グリッド・コンピューティング：CERNなどによってすでに実用化されています。

【作】EDEN・・・フィクションです。

2010年現在、世界中の総情報量は900エクサバイトに達すると見積もられています。

第1節 第65話 モディフィケーション・トゥー・ザ・ファクト

「本当に、やるんですの？ まだ赤ちゃんではないですか、きつとすごく苦します」

「ひとりで苦しませはしない。できるだけゆっくりやってくれ」

執務室に残った比企は、響 寧々に言いつけ、直ちに真空訓練装置を取り寄せた。

それは神々が学生時代に真空耐性を身につけるためにアカデミーでカリキュラムとして訓練が義務化されているもので、3mの立方の強化ガラスのケースのような形状をしている。比企はレイアームテールを抱えたまま装置の中に入ると、寧々に向かって合図をした。寧々がバキュームのスイッチを入れるなり、不穏な音を立てて装置の内部の空気が排出される。その音もさることながら、吸引力も凄まじく、ぐいぐいと空気が排出されてゆく。

すやすやと眠っていたレイアームテールは異変を察したのか、ひきつけを起こしたように身体を硬直させ、翠色の瞳をぱちりと見開いてじたばたと暴れ出した。寧々が装置の外からガラス越しに、圧力計を示している。現在の空気の濃度は90%、まだ吸引するのかと訊いている。今日はこのくらいにしましょう、とスケッチブックに書いても。彼女らしくもないコミカルな動きでちよこちよこと動き回って、中止しろと進言する。

だが比企はそんな寧々の努力を一蹴し、首を振った。

空気の濃度はみるみる下がってもう80%だ。言うまでもなく酸素濃度は更に低く、もう15%を下回っている。79、78と針は滑らかに下降し円弧を描く。

レイアームテールはもう我慢できなくなったらしく、先ほども

で機嫌のよかった顔を真っ赤にして歪めた。

小さな身体のあちこちに負担がかかり、どこからともなく痛むのだろう。遂に泣き出してしまったが、その泣き声すら息苦しさのあまりか細くなり、聞こえなくなる。比企は何の計画もなくこの虐待を行っているわけではなかった。外部から、寧々にレイアIIメーテールの生体反応をモニターさせている。モニター画面は比企が中から見やすいように内側に向けられていた。比企はリアルタイムで弾き出されている神体データをチェックし、鋭く彼女の全身状態に目を配る。確かに、血液中の酸素濃度が痛々しいほどの減少を見せる。手指の先が青ざめているようにも思われる。いや、酸素濃度は減って当然なのだが、酸素の枯渇と共に立ち上がる生体システム、無酸素呼吸が未熟な発達段階では身につかない。

この環境に適応するまで幾許かかかるかもしれない、やはり突然は無理だろうと、比企は中止を決めた。不死身の神体を持つプライマリの女神だからといって、負荷をかけすぎては苦しみを与えるだけだ。

比企は寧々に減圧を止めるよう指示を出すと、彼女は待つてましたとばかりレバーに飛びついて減圧停止した。子供好きの寧々はこの虐待に加担しなければならぬ事に、胸を痛めている。また、彼女が子供をかわいがる理由は別にあった。

比企はモニターのみを信用せず念のため、彼の手で念入りに彼女の神体の診察を行う。神体機能に異常はない、衰弱はしているようだが。今日は70%まで減圧して、身体を慣らすだけで上出来だ。明日から彼女の身体を騙し騙し、徐々に酸素濃度を下げてゆく。彼女の肉体的な負担もだが精神的負担がよほど大きければ、比企は執務以外、彼女と共にこのガラスケースの中に入っている構わないと思った。比企の老化も加速するが、たかだか12年ばかり歳を取るだけだ、何の事はない、と彼は思う。

それより赤子である彼女が心細く思わないようにする方がよほど大切だった。恒はこの中に入れないが、ガラス越しにはなく誰かが彼女と同じ環境に在って、傍にいてやらなければならないと彼は考えた。彼女を苦しめる張本人である彼はまだ目にいっぱい涙をためてむずがっているレイア＝メーテールの頭を優しく撫でると、壁に背をもたせかけて座り込み、彼女を片時も放さず抱きしめていた。

「……幼子をこんな目に遭わせる、恥を知らぬ己を憎め」

法と正義を司る“立法神”とはよくいったものだ、と比企は自嘲する。この幼子をどん底にまで突き落とさなければ現実的に、三階に未来はない。今更心を鬼にして、などという表現はおこがましいと彼は思う。比企の心は既に修羅となって久しかった。

無邪気で無垢な女神に全ての重荷を負わせ、運命を託さなければならぬとどかしさ。比企の力ではどうにもならならず、三年後、いたいけな少女を戦場に出さなければならないという恥辱。INVISIBLEは、そしてノーボディは何故比企を選んでくれなかったのだろうと思うと恨めしい。いかなる苦痛にも耐える覚悟は出来ていたし、比企は陰階神であった時も、陽階に入ってからINVISIBLEの収束に備え彼の身体を苛め抜いてきた。その副産物として地位も権力も手にしたが、INVISIBLE殲滅以外の些事には目にもくれなかった。

INVISIBLEを打ち滅ぼす為に生まれてきたようなものだ、その目的以外に彼という存在は生きる価値などない、と比企は思っていた。今更その身がどうなって引き裂かれて殺されても、どんな苦難を押し付けられようとも構わない。だからこそ何も知らず、何の覚悟も、まだ自己すらも持たない彼女の身代りになることができたなら。

だがどうやら比企は、INVISIBLEと対峙する為の舞台に上がることを許されなかった。それでもINVISIBLEや他の創世者と戦わなければならない。それがどれほど屈辱的であろうと、INVISIBLEと同じ土俵に立つことの出来る彼女を送り込むしかない。そして準備を整える為の時間と彼女に覚悟を促す為の時間は、あまりに短すぎる。

そのほんの僅かな時間を最大限に有効に使い、比企が彼女に与えてやれるありったけの武器、強靱な肉体と強靱な精神を持たせてやらなくては、勝算などない――。

＊

『何か変わったことはないか？』

織図 継嗣は集まった桃源郷の住民たちの顔をぐるりと見渡し、声をかける。

ようやくサーバーの拡張を終え、死者の記憶を蓄積するEVEの運営にバグやエラーがないかを丁寧にチェックして回っている。織図はこのところ3日間、飲まず食わずの睡眠もとらずでEVEのサイバースペースで過ごし、現実世界に戻っていなかった。織図は不真面目な陰階神達の中では、とりわけ仕事熱心な神だ。死者たちの集落をひとつひとつ回ると、彼らは彼らの暮らしに満足していると言い、織図の計らいに感謝していると声をそろえた。

しかし織図が最後に訪問した、EVEのはずれに位置するこの集落では、誰も沈鬱な表情をしている。いつもは織図の降臨を歓迎する彼らが、誰ひとり目を合わせようとしない。何か疾しい事があるのか、お前が言え、いやお前が、と隣の者の肩を小突きあっている。織図に報告しなくてはならない事があるようだが、誰も切り出せな

いでいる。織図もこんな態度を取られるのは稀なので、何があったのかと訝しがる。もうかれこれ10分ほど彼等は口を割らないでいるが、織図も長々と待てないので報告を促す。

『誰でもいいから、言いたい事があるなら言えよ』

するとまだ20歳ばかりの、鮮やかな民族衣装を着た若い女が、織図の前に飛び出してきた。平身低頭の姿勢である。この世界で冥王として君臨する織図に対等にもが言える人間など、EVEにはいなかった。

「冥皇さま、怒らないで聞いてください。実を申しますと、ゾラが……」

ゾラというのは、彼女の孫娘だ。20歳の娘が孫娘を持つというのも、EVEのシステムならではの面白い現象だった。

『おいおい、怒られるような事をしたのか』

「来なさい、ゾラ！」

祖母の言葉に引っ張り出されるように、集団の中から左半身に酷い火傷を負った4〜5歳ほどの少女が前に進み出た。広範囲にわたる火傷は赤黒くただれて、彼女は痛みに耐えられないといった様子だった。成人とならないままに亡くなった死者の記憶は死亡時の年齢のまま再生されるので、たまに少女や少年の姿の死者もいる。進み出た彼女が誰なのか、織図は調べなくてもお見通しだ。織図の脳にはEVE内に在籍する全死者の死亡時の記憶があり、EVEと一体化しているからだ。ゾラという少女は幼い頃に流行病に感染して亡くなった、たしかあれは1872年10月1日だった。

織図は彼女の痛々しい姿にきゅつと眉根を寄せた。EVEは仮想空間だ、怪我をしたり火傷を負ったり、病気になどならない。彼女の負傷は、EVEの住民達と冥皇、死神との間に交わされた禁忌を破った事を意味した。織図は膝を折り、怯える少女の視線に彼の視

線を合わせると、ゾラにのみ聞こえるほどの小声で穏やかに問います。

『“最果ての谷“へ行ったのか?』

それは、EVEのサーバー群の一角であり聖域として知られるブラックボックスだ。EVEの住民からは、世界の果てのようなイメージで理解されている。

織図にとっても不可侵の領域で、代々の死神すら手出しもできなかった。神々が人々の記憶を保管するために創り出したEVEという仮想空間に、いつの間にかブラックボックスが出来ていたと分かったのは今を遡ること三万年前、不具合が起こってEVEのハードディスクを全フォーマットしたときのことだ。当時の死神は、何度ディスクフォーマット試みても全体の10%を超える記憶領域がまると、初期化できない事に戦慄したという。その時からどうやっても介入できないこのブラックボックスは、EVEの管理者である死神にも触れる事のできない聖域、あるいは禁足地として、不可侵の状態で代々の死神達に引き継がれてきた。

仮想空間中のEVEの住民達の目には、その領域は底なしの谷のように見えるそうだ。

住民達はそこを、“最果ての谷“と呼ぶようになった。織図は何があっても、“最果ての谷“にだけは近づくなど常々彼らに言い聞かせてきた。そこに行けば何が起こるか、歴代最長在位期間を記録している織図にも、想定できなかったからだ。

織図は最近、そのブラックボックスにはノーボディが介入しているのではないかと考えるようになった。ノーボディがEVEに介入して何を行っているのか……それは織図が知る必要のない事なのかもしれないが――。

『何故、近づいた? 戻ってこられただけで奇跡だぞ』

そうやって問いただしている時間にも彼女は苦しんでいるようなので、織図は身に纏っていた黒衣の下から金属の光沢を持つグローブを取り出すと、両手に装着する。その手で彼女の両肩をさする。こうする事で、恐らく“最果ての谷”で蝕まれたゾラのプログラムを修正し、正常な状態に戻してやる。20歳の祖母は織図の傍で必死に孫の弁護をしている。

「“最果ての谷”の上の空から、何かが降ってきたんだそうです。この子はそれを近くで見たくて……私たちが目を離れた隙に」

ゾラの見た目は子供でもEVEで100年以上も過ごしているのに危険だとされる地区に近づいてはならない、そのぐらいの分別はあってしかるべきだ、という理論は通用しなかった。幼くして亡くなった死者の精神年齢は、年月を経てもそれほど高くはならない。心の成長は身体の成長と連動している、それはEVEでの死者たちの観測によって明らかとなっていた。ゾラは100年以上もEVEの中で過ごしているにもかかわらず、まだ心はせいぜい10歳ほどの少女だ。知能も発達していないが、善悪の判断がまだついていない。織図はそのあたりの事情を慮って、ゾラに処分は課さないことにした。

『何かが、降ってきた？』

織図はノーボディが何か介入を図ったのかと疑った。

九重ものファイアーウォールによって阻まれているEVEに何者かが介入できるとすれば、それは創世者レベルの存在以外に思いつかない。死者の記憶になど、何の用があるものか……あるいは何かを、参照していたのだろうか。荻号 要は、確かにEVEに侵入した経験を持つ。だが、ノーボディとしての侵入には経験がなく対処方法が分からない。

『わかった、俺が調べておく。だから今後は何人たりともあの谷に近づいてはならん、いいな』

きつくそう言い渡して、その集落の死者達を解散させた。住民達が三々五々、家々に帰る中、また別の死者が走って織図に近づいてきた。隣の集落の、日本人の女死者だ。

『何だ?』

「ところで、今年の慰霊祭の開催地はもう決まりましたか?　ここ、Z3エリアはどうでしたか?」

彼女が胸を高鳴らせながら訊ねているのは、年に一度行われている死者達の祭典の開催地の選定結果だ。

慰霊祭には、陽階枢軸神たちがEVEに降臨して死者達と交流する。その開催地は毎年変わり、オリンピックの開催地候補を選ぶように各エリア対抗で激しい誘致合戦が繰り広げられていた。Z3エリアでも誘致には力を入れてきたが、何しろEVEの敷地は膨大なので当たる確率というのは絶望的だった。

『ああ、ここは外れちまってな。A8エリアでやることになった。お前らは今は誰を信仰してるんだ?　陽階枢軸も今年は少し顔ぶれが変わったからな……』

「今年は全ての枢軸神様が集われるのでしょうか」

『どうだろうな……今年はEVEに大量の死者が来たと思うが、生物階も色々と大変だな。軍神は多忙で降臨できんかもしれん。軍神はEVE住民には人気ないから別に来んでもいいんだろ』

日本人の死者達には、日本由来の神であり天照大神の継承者であるとされる比企の人氣がダントツだった。

そして日本人死者に最も人気のない神が、日本に二発もの原子爆弾を落とし、日本を敗戦へと導いたユージンだ。

「……そうですか。私、今年はユージン様を信仰しようと思っただんです」

年によって信仰する神が違うという淡泊さが、日本人らしい。

『へ……お前、被爆者だっただろ?』

ユージーンがEVEで疎まれるのも無理はない、織図はそう思っていた。特に戦争犠牲者達はユージーンに並々ならぬ憎悪をいっていた。ユージーンは基本的に憎まれ役だ、彼は罵倒され、磔などを投げつけられても、死者たちの怒りを何も言わず受け止めてきた。それは戦争犠牲者に対する彼なりの償いだと考えているようだ。彼にとっては一年に一度の受難の日であり、EVEの戦争犠牲者にとっては年に一度の憂さ晴らしの日でもあった。だがどんなにEVEで憂き目に遭っても、ユージーンは毎年EVEの慰霊祭に参加したし、枢軸を外れさえすればEVEに来る必要もないのだが枢軸を降りる事もしなかった。

「あの日」からもう、長い月日が経ちました。私はそろそろ私の中の混濁したものを、昇華しなければならぬと思うのです。昨年、ユージーン様と直接お話する機会がありました。あの方は私の怒りと悲しみを、正面から受け止めてくださいました。あの方だけが、私の声に耳を傾けて下さいました。本当の救いというものは、全てを奪った相手からによってのみ与えられるのだと分かったのです」『なんというか、達観したんだな。あいつを擁護するわけじゃないが、あいつは誰も争い傷つくことのない平和な世界を望んでいるんだ。その思いは、なかなかEVEの住民には理解されんのだがな』「ええ……では、来年のお越しをお待ちすることにします」

陰階神である織図は人々の信仰の対象となることはないが、陽階神たちは信仰されることが仕事の一部だ。織図は陽階神が人々に負う責任の重さを、毎年のように見ていた。ジーザスクライストのように敬愛と信仰を集める陽階神、ユージーンのように人々の憎しみを受け止める陽階神。だがEVE住民の中には、彼女のようにその神の演じる役目だけではなく、その神の本来の性格を見抜いてくれる者も少なからずいるようだ。

織図は久々に晴れやかな気分で、EVEの空に飛翔した。

＊

現実空間にして3日ぶりに、すっかりEVEに溶け込んでいた意識をサイバースペースから現実空間に浮上させる。

ぴくり、と腕の感覚が戻ってくる。EVEと現実空間を出入りするときに起こる偏頭痛をこらえながら、ヘッドギアの中で織図は目を醒ます。目の前にデジタル表示されている室温は4℃を示している。身が凍えるようだ。床を走る無数の基盤の上に、無機質で重厚な黒い玉座がひとつ、大樹のようなコードに侵食されながらそびえている。

“ 体温…正常、酸素濃度…正常、脳波…正常、脊髄反射…正常、血中DLT…適性値、Atmosphere…枯渇 ”

織図の顔の上や手足に無神経に、青いレーザーが走ってゆく。加工音が淡々と彼の神体をチェックしてゆく。EVEのマザーコンピュータに、全身状態をスキャンされているのだ。死神は現実空間と仮想空間を往復する為、こういったバイタルチェックが常に行われている。意識が仮想空間から浮上しきれないという接続事故で命を落とす事も多い。

“ 誤差適正範囲内です ”

「オッケー」

織図はコンピュータに拘束を解かれて自由になった右手を後ろに回し、首筋のあたりをまさぐる。織図の頸部には精神インタラクティブケーブルを差し込むためのジャックポットがつけられている。脊髄から神経系を、EVEと接続する為に必要なものだ。織図が死神となる際にあけたもので、その時から冷血なサイボーグになったような気がして、彼はこのジャックポットを人目に触れないようフードで隠してきた。神経にまで深く差し込まれた太いケーブルを抜く。

「ぐ……っ」

プラグを抜き差しするときは、相当な痛みを伴う。織図がようやく全ての接続を解いて一息ついたとき、主の覚醒を知った第一使徒、棟永 雷鳥がコンピュータールームに駆け込んできた。棟永は1300歳ほどのベテラン使徒で、織図以前の何代もの死神に仕えてきた。背も高くラテン系の派手な顔立ちで、大きな黒い瞳と彫りの深さが特徴的だ。開口一番、織図に投げかけたのはねぎらいの言葉ではなく叱責だった。

「おい！ 大丈夫か？ 3日もぶっ通しでD I V Eしてんじゃねーよ！ 死にてーのか！」

「大丈夫だよ」

立ち上がろうとして、織図は足元がふらつく。棟永は織図が倒れる前に、踏み込んでその神体を支えた。これでいて棟永は、誰よりも織図を心配している。業務上過失致死で10柱以上もの死神を在位100年以内に失ってきた棟永にとって、450年以上も死神として執務している織図 継嗣はまさに死神となるために生まれてきたような神であり、陰階の至宝だった。避けられる過失で、その命を失うわけにはいかなかった。それに、盲目だった両目がやっと見えるようになったばかりだ。織図は光を取り戻してから飛躍的に能力が高まり、これまでは盲目であるため文系（X X）神としてしか生きてゆけなかったが、A Xを名乗ることも不可能ではないレベルにまで身体能力も高まった。これから成長してゆく可能性があるというときに、無理をしてほしくはなかった。

「大丈夫じゃねーじゃねーか。俺の給料をどうしてくれる！ もう1ヶ月ももらってねえぞ」

「ああ、ヤニが切れたからな。一服したらやるよ、コーヒーでも煎れてくれ」

織図は棟永にコーヒーを一杯注文しながら執務室に戻ると、パソコンを起動しここ3日間の動向を確認する為GLーネットワークに入る。織図の目はヘッドラインニュースを縦に追っているが、最後までページをスクロールさせると、左手で額を押さえ、深刻な顔で肘をつく。あれだけ楽しみにしていた煙草に火をつけないままコトリと煙管を執務机に置いたのは、GLーネットワークの記述を読み、この3日間に起こった変化に勘付いたからだ。

とびきり上等の豆を挽いてコーヒーを煎れて出した棟永に、織図はこんな質問を投げかける。

「最近どうも、忘れっぽくていけねえ。ちょっと聞きたいんだが：陽階の7位には誰が就いている？」

棟永は怪訝な顔をし、織図から視線を外さないまま白い陶磁のコーヒーカップを置いた。

遂にボケたかと思われるのだろうか、織図は重々承知の上で尋ねている。織図は早速それをいただいて、冷え切った身体を温めた。凍りついていた思考回路に血液が巡る音が聞こえた。

「しっかりしろよ。ずっと空位だったじゃねーか」

織図は、浦島太郎なっていただろうか。この棟永という第一使徒は、口こそ悪いが優秀なプログラマであるとともに、織図にとっては何物足りないほど冗談を言わない堅物だ。だからこそ信頼がおけた。彼が空位だったといえ、事実空位だったのだ。それを織図がどれほど否定しよう。

「いねー訳ねーだろ、空位なんてあるか。空位が許されるのは至極位だけだ。何で繰り上がらない」

織図は反論する。空位など意味がないので神法で認められていない。その位階が不在となれば必ずすぐ下の位階が繰り上がる、これは大原則だ。したがって、棟永の説明そのものが間違っているというか、織図の記憶とかなり矛盾している。棟永は恐ろしさのあまり、わなわなと震えて、織図の黒衣にしがみ付く。

「おい……！ まさかイカレちまったんじゃねーだろーな。先代も死ぬ前にはそんな事を言い出したぜ、しっかりしてくれ！ あんたがやらなきゃ、誰に死神が務まるんだ！」

棟永が顔を蒼白にしながら織図の正気を疑うのも無理はなかった。

“おいおい、マジかよ。遂に出やがったぜ……モディファイケーション（事実の修飾）が……”

織図は苦笑する。神はアルツハイマーなどの脳の疾患にはかからない。幻覚や妄想など精神疾患などを患う者も実は稀だ。織図の記憶があやふやになっているというより、織図が現実世界にいない間に何か異変が起こったという方が、確率的には高い。ひとまず棟永を落ち着かせるために彼は思い出した振りをすることにした。

「……あー、思い出した、思い出した。ちょっとEVEの中に長く居すぎたようだ」

「コーヒーもう一杯いるか？ 頼むから気分転換してくれ。しばらくEVEには入るな、長くいると頭がヤラれるんだ」

「ああ」

ああだこうだ言いたがる棟永を無理やり退出させて、織図は煙管に火を入れる。

妙な言動があったということで、今日中に精神科医を呼ばれるだろう。だが織図は狂ってなどいない。

織図以前の歴代の死神達に思いを馳せれば、代がわりして100年もたたないうちに、次々と命を落としてきた。EVEの内部にダイヴしている機会が多い死神は現実空間と非現実空間の境界を見失い、事実と異なる、あるいは錯誤した言動を行うようになるのだという。それらは彼らの狂気の始まりで、一度その症状をみとめた死神はみるみるうちに心神耗弱状態となり、精神崩壊して亡くなった。

死神の一柱である織図も、死神となる際に全てを捨てる覚悟、特に死を覚悟しなかったわけではない。

だから彼は、彼の記憶、そして正気をEVEにとどめようとした。彼は定期的に、彼が人間の死の直後にそうするようにメモリスティックをこめかみに宛がい記憶を回収してEVEのフォルダにバックアップを作っておいた。バックアップがあるからといって、人間のように神体に再インストールはできない。あくまでもそれはバックアップだ。織図がどのような変化を経て発狂し、死が避けられない場合はどんな死に様となるのかを次代の死神にありありと見せなくてはならないと思ったからだ。

出来れば助かりたいという気持ちもあった。

在位から100年を経ずして死ぬなどごめんだ、当時はそう思った。だが幼少の時分より荻号 要から教育を受けていた織図はこれまで命を落とさずに何とかやっている。思うにノーボディは死神達の死の連鎖を止めるべく、彼の教育をみっちり叩き込んだ織図を死神として育てたのだろうと今にしてそう思う。しかし織図は今でも、まじないのような気持ちで織図の記憶のバックアップを定期的に取り続けている。

正常な記憶のバックアップを取り続けるこの試みは何も織図の代からのものではなく、織図の先代の死神の遺産からも発見されている。先代死神、満井^{みつい}宵は、織図とは違うやり方で記録を残そうとした。EVEという絶対不可侵のサーバーに、彼の生きた記録を日記形式でおさめていたのだ。満井は彼の死の1ヶ月前、身の毛もよだつ体験をしたと記している。それは彼がたった2日、EVEに潜っていた間に起こったのだという。彼はEVEのサーバーに、こう記していた。

“ この私の記憶と、現実がほんの僅かな間にすっかり乖離してしま

っている”

それを彼は、“事実への修飾”という言葉で表現した。現実が偉大なる筆者による加筆修正によって書き換えられたようだと、彼はそう表現していた。満井の記憶と、彼の前にあった現実……どちらも信用に足る。だからこそどちらが正しいのかを判断する事ができなくなり、満井は心身喪失状態になり発狂して、EVEから戻る事ができず亡くなった。発狂した状態でEVEに潜るとどうやら、現実空間に戻れなくなるらしい。満井は、恐らく“正しかった”彼の記憶を疑ってしまったのだ。

だから織図は、自分自身を信用する事ができなくなるという事は死を招き寄せることだと肝に銘じていた。織図は先ほどEVE住民がこう言わなければ、あるいは彼が間違っていると思ってしまうたかもしれない。しかしEVEの住民は確かにユーージンを知っていた。

織図はEVE住民の記憶に絶対的な信頼を置いている。何故なら、生体ハードディスクである脳よりずっと、EVEのハードディスクは壊れないからだ。たとえ現実空間の神々、人々の生体ハードディスクが全て、何者かによって書き換えられてしまっていたとしても――！

“やべえ、やべえ……これは黙っていないと、こっち側の記憶も消されるな”

いまやユーージンの記憶が残っているのは、織図と同じく仮想空間と現実空間を出入りするファティナ・マセマティカ。彼女が忘れているならば織図だけだ。しかし敢えて、もうファティナにも訊かない方がよい。そしてこれは誰にも話さないほうが身の為だ。荻号要から秘密を持ちたいときに使えと言われ、双繫系そうけいしという、看破遮断のためのアイテムを、実は織図は持っている。だが双繫系を身

に帯びれば、全神からあらぬ疑いをかけられる。

実質的に彼は今後、織図のマインドギャップを5層以上上回る、堅固なマインドギャップを持つ者……つまり荻号、比企、極陽らとは接触できないと判断した。

＊

恒は飛翔して水天井を抜けると、難なく朱音を抱えたまま大温室に降り立った。地に足が着いても、朱音は恒にしがみついて離れなかった。朱音の腕に鳥肌が立っているのに気付いた恒は、彼女の気が紛れ落ち着くように腰に手を回していた。長い時間が流れ、彼女はようやく恒から離れた。

「……ありがとう、恒くん。本当に、神様みたいだね……」

「そんな、おだても何も出ないよ。ずぶ濡れだな……服乾かして帰らないと、おばさんびっくりするぞ」

恒は彼女が風邪をひいてはいけないと、比企の執務室に戻ろうとしたが、先ほど空中庭園に入ってきた周辺には出口が見当たらない。恒が出口を見失う筈がないので、執務室側の出口が消えたのだ。これでは比企と連絡の取りようがない、あまり朱音を濡れたままにしておくと風邪をひかせてしまう。

「……どうしょ」

「おい、朱音。帰るぞ」

計ったようなタイミングで温室の上空から現れたのは荻号だった。セキュリティの厳しい比企の隠れ家的スペースにあっさりと侵入してくる荻号はやはり油断がならない。どうやら彼は、殆ど何も発していないかに思える朱音の気配を、いや正確に言えば彼女に染み付いた荻号自身のアトモスフィアを追ってきたようだった。断じて恒のそれを追ってきたのではない。

「何だこの庭は。なかなか珍しいもん植えてやがるな」

荻号は興味深く温室を見渡している。元葉神である比企と、自宅の庭でいわゆる趣味の園芸をやっている荻号とはセンスが似ている。荻号は着地するなり珍しい植物から手当たり次第、種を取りはじめた。

「それで何するんですか？」

恒は嫌な予感がする、持って帰って種を食べるのなら構わないが、こんな妙な植物を庭に植えるのはまずい。

「持って帰って植えるに決まってるだろ」

「決まってるだろ、じゃないです！ 日本では遺伝子組み換え作物とか、外来種の植物にうるさいんですから！ 逮捕されて村に住めなくなっちゃいますよ。まさか、ケシとか育ててないでしょうね」

荻号はそれを聞いて渋い顔をする、パラパラと名残惜しそうに種を捨てた。折角借家暮らしで気ままにやっているのだから、警察の厄介にはなりたくない。荻号は日本の法律に疎いので、恒も彼の行動に気をつけてやらなければならないと思う。

「それで、さっきの謎の神について何か分かりましたか？」

「いいや……やられたな。記憶を書き換えられとるな。俺等の方だ。創世者レベルの介入があったんだろう。どの創世者がやらかったのかは分らん。とっとと帰るぞ、朱音。俺は帰って寝る！ お前も家に帰れ」

彼はどうやら自宅に戻り、ふて寝をするようだった。恒はその様子を見て、荻号はさっぱり何も掴めなかったと言っているが、何か気付くところがあったのだろうかと思う。

そうでなくて荻号があっさりと調べるのを諦めて、家に帰るとは言わないだろう。恒はすぐに詮索をしてしまう疑り深い性格がつくづく嫌になるが、保身の為に幼いころから身につけた癖だった。朱音は濡れたスカートを、雑巾を絞るように絞っている。

「ずぶ濡れなので、服を何とかしたいんです……」

「んなもん、俺の家でやれ。風呂も服も貸してやる」

恒はその、“風呂と服を貸してやる”という卑猥な響きにぎよつとしたが、相手が荻号であるため警戒には値しなかった。彼はそこからへんの日本人男性よりよほど安全だった。荻号の奔放な行動に付き合わされる朱音は大変だろうが、何とかうまくやって欲しいと恒は思う。風岳村に残った神はもう、荻号しかないのだから。本当は恒が彼女を養ってあげられるほどの甲斐性があればよいのだが……。

荻号は強引に、恒に何か言葉をかけようとしていた朱音の手を取ると、超空間転移で消えてしまった。

恒は相変わず、出口のない大温室にひとり残された。濡れた白衣の上着を脱ぎ、小枝にかけて乾かす。腹部にはまだ包帯を巻いていたが、びしょぬれになったのでそれも外してしまった。ひとりになったのは、久しぶりだ。比企は自分を監視していなくてよいのだろうか、と思うが比企も比企で忙しいのだろう。恒は遠慮なく例の白いベンチにごろりと寝そべり、うたた寝をはじめた。

ノーボディに会いたいと願いながら寝たのですぐに黄昏の草原に繋がると思っていたが、いつもの草原は月もない真っ暗闇の夜だった。ゴツと、風が強く草原の上を吹き渡っている。あの美しく絵画のように印象深い黄金の場所が、途端にその様相を変えて怖ろしくすら感じられた。

『何か、いつもと違う……』

「……来たのか」

突如黄金の光が差し、恒の背後から現れたのは、ノーボディだった。改めて述べる必要もないが、今日は白衣にサンタクロースのよな髭の長い老人の姿をしている。まるで仙人そのものだ。

どうやらノーボディの姿は循環しているようだ。子供からおとなへ、そして老いてまた子供へと還る。輪廻転生を繰り返すかのうちに、彼は何度も生を経験し、常に諸行無常を体現している。恒はスケッチブックを忘れたが、彼の言葉は光の文字となって字幕のように恒の前を走る。それは暗闇の中で、イルミネーションのように幻想的に見えた。

『教えて下さい、俺は何かとんでもない事を忘れてしまったような気がするんです。脳死状態になっていた、金髪の青年神は誰なんですか？』

「彼はもはや“誰でもない者”となった、汝らの記憶からも消えておる」

『何故！ あなたがそうしたんですか？ 記憶を戻してください！』

「そうではないのだ。それは何より、彼が望んだ。彼は汝と縁の深い神だった、だが……汝等に忘れて欲しいと願ったのは彼だ」

恒は頭を殴られたように感じた。

そんなことを願う者がいるのだろうか？ 死ぬより尚辛いのは、自分が生きたという証を残された者達に否定される、あるいは忘れられてしまうことだ。

それなのに……忘れられる事を望んだ、だと――？

『記憶を、消した？ 忘れられたかったってことですか？』

「悪くは思わないよ、彼がそう望んだ以上もう吾には記憶を戻す事はできないのだ」

『俺は彼が誰なのか知りません、でも、絶対に忘れてはいけなかったような気がするんです。何とかありませんか、何とか！』

ノーボディは知っている、ならば昔話のようにでもいいから、彼が何だったのかを語って欲しいと思う。しかしその一方で恒にも分かっていた。

昔語りに植えつけられる記憶に意味があるのかと。

何の意味もないのだと。恒自身が思い出さなければ、その記憶には意味がないのだと。

「彼を忘れることだけが、彼への弔いとなる」

それは——どんな心境なのだろうか？ すっかりその存在を、生きていたという事実そのものを、消去してしまいたかったという彼の心境は……。想像を絶する壮絶な覚悟のもとに、決して後戻りの出来ない決断をしてしまった彼の心境は——。

何という悲しい選択をしてしまったのだろう。恒が名も知らぬ彼は、誰だったのだろうか——。

＊

解階の女皇、アルシエルⅡジャンセンがルシファーⅡカエサルとの決闘に敗れ、生きながらにして捕囚となって辱めを受けているというニュースは、伝令使やルシファーの使者たちにより瞬く間にABYSS全土に広がった。解階の母とも呼ばれてきた最強の女皇を、武力での敗北によって失ったことにより、ABYSSの民は抵抗する気力を根こそぎ奪われた。

皇居に立てこもっていた帝都の民は貴族も庶民も、女皇の事実上の失脚により、新帝国ゲヘナ軍への無血開城を迫られることとなった。兵糧攻めと、U・Iへの感染のリスクを負わされているのは長期間の抵抗など不可能だった。開城とともにアルシエルの98名の息子や娘達の中には、彼等の誇りと母への忠誠のために自害した者達もいた。アルシエルの側近達は彼女の名を賛美しながら、互いに銃を互いの額に撃ち合って果てた。

惨劇のわずか1週間後、GEHENNAはメファイストフェレスという謎の新女皇のもとにアルシエルの9つの御料地を侵し一大帝国を築き上げるに至る。

GEHENNAに降らない国家は全て、U・I・により老若男女、赤子に至るまで全滅することとなった。これとは反対に、新女皇に忠誠を誓った者はU・I・の感染から免れることが出来た。不思議なものである。

その頃にはABYSSの住民たちは薄々、新女皇こそがU・I・の感染を操っている、あるいは感染源に違いないと勘付いていたが、アルシエルの直系の子孫が惨殺されてより、誰も女皇に逆らう者はなくなった。いや、正確に述べると、いなかった訳ではない。たったひとりだけ、女皇の暴走を止める為果敢にも立ち上がった者がいた。

それは彼女の唯一の肉親、メファイストフェレスⅡセルマーだ。GEHENNAの恐怖政治を止めさせる為、そしてアルシエルの忠臣として、あるいは狂気に堕ちた娘を救うため彼は単身GEHENNAの中核の城に乗り込み新女皇の説得に赴いたが、その翌日には城の門扉にセルマーの首がむなしくはりつけられて晒し者にされた。こうして、ABYSSにはメファイストフェレスⅡマリーを止めることができる者はいなくなった。民には決して姿を見せないこのGEHENNAの謎めいた女皇が、帝都をエーリューズニルと定めた事から、疫病と死の国を支配する女神ヘルになぞらえたのか、いつからか彼女と彼女の帝国を示す隠語としてヘルと呼ばれるようになっていた。

この政変を神階は知るすべなく、ひっそりと解階はブラインド・ウォッチメイカーの支配の前に陥落していた。

そして、彼らの暗黒のうちに2年の月日が経った。

第1節 第65話 モディフィケーション・トゥー・ザ・ファクト（後書き）

第一節終了です。物語の時系列では2007－2008年ごろです。

第2節 第1話 宿命の決着と離別（前書き）

第二節 開始いたします。前話から二年半が経過し、西暦は2009年冬、藤堂 恒は12歳になっております。

第2節 第1話 宿命の決着と離別

陽階主神を決するその極位位申戦も、いよいよ大詰めを迎えていた。

” The Induction of Obsessive-Compulsive Disorder Spectra ”

（強迫障害喚起スペクトル誘導）

彼の両手の間に幾重にも迸る、ヴィヴィッドな色彩を孕む電磁圏は虹色の精神干渉波を形成する。

励起された状態からさらにコマンドを乗せる。

” Fundamental Control Double, Mind Cube. Co-existence ”

（根元事象二重制御一心層立方体―共存在）

共存在との倍がけにより、ヴィブレ―スミスの精神波攻撃は突如倍加した。

触れれば精神を圧殺される真空の巨爪、そして精神干渉波が、360度の全方位から比企をめがけて襲い掛かってくる。懐柔扇を持つ比企でなければ、絶体絶命を悟っただろう。しかし比企は慌てず騒がず左手を一切使わないまま、懐柔扇でコンパスを回すように大きく円弧を描いて、錐形の紫電の緩衝壁を三層展開する。

“ 1128式丙種、積層装甲 ”

魔方陣にも似た薄紫色の板状障壁が、積層化され明確な領域をなして可視化している。大電力を要する電磁シールドを、彼は出し惜

しむことなく何度形成しているだろうか。比企のアトモスフィアは
無尽蔵とも見受けられる。彼はヴィブレⅡスミスの共存在に怯まず、
歯牙にもかけなかった。

彼は二年半前、極陽が荻号とともに一度だけ発動した共存在を録
画で見て、拔かりなく対策を打ってこの場に臨んでいたからだ。神
具を用いて行う共存在は本来の共存在と異なり、完全なる分身を生
じない。どちらが共存在でどちらが本体なのかを見破ることさえ出
来たなら本体を徹底的に叩きのめせばよいので、畏るるには及ばな
い。ヴィブレⅡスミスの付け焼刃の共存在は要するに、共存在の本
来の持ち味を殺していた。

荻号 要や荻号 正鵠らがバイタルと寿命を半分に削り込んで発
動する本家の共存在の最大の強みといえ、本体と全く同等の能力
を持った個体を複製するという点だ。このたった一点において後れ
をとり、比企は荻号 要の弟子として過ごした50年間、彼に一度
も勝つことができなかったのだ。目くらましに過ぎないまやかしの
共存在など、相手にする必要はない。

一大決戦の闘技場は球状の亜空間で、地球の4分の1の体積を持
つ。重力、時間等の環境は生物階のそれとほぼ同一。球体の中央に
はおよそ2000ヘクタールの舞台があり、基本的にはその舞台の
中で試合が行われている。中継のカメラは異例の1600台が入っ
て、GLネットワークでライブ放映されている。比企とヴィブレ
Ⅱスミスはたった二柱だけで戦っているのではなく、その勝負の行
方を神階全体が固唾をのんで見守っていた。主神の交代は神階の抜
本改革を意味する。比企は何度共存在を繰り返されても間違はなく
本体を選び、隙を見ながら精密機械のように正確に淡々と効果的な
戦術を穿ちこむ。

” 213式乙種亜展開。素粒子数、色荷奪換”

” 559式丁種、空間座標軸変換、二重解無効化 ”

日本由来の神である比企は、流暢な日本語でコマンドを刻む。彼は扇の要を外し、骨の部分を両手に持って放てば、折り目正しくならされていた扇面が帯のように数十メートルも伸展し同心円状の軌跡を描いてヴィブレⅡスミスを一週取り囲み、また比企の手元に戻ってきた。

空間法則を歪める比企の一連の攻撃は、ヴィブレⅡスミスには目視にてとらえることができなかった。彼の攻撃は観戦するには非常に地味だが、他のどんな派手な攻撃よりモノをいわせ、しまいには比企そのものが視界から消えている。巧妙に仕組まれたコマンドによって比企にしかわからないようになっていたが、比企は普通の熱波撃の間に変則的に、熱によって時間と空間の同時性の崩れた座標を創り出し、ヴィブレⅡスミスと比企との間の時間の流れをシフトさせていた。時空間座標をいわゆるローレンツ変換によって傾け、ヴィブレⅡスミスの体感時間を一瞬遅くすることにより、その瞬間に起こった事象を比企は一瞬だけ早く体験することができると。

” 先天八爻・戯”

八卦になぞらえた彼のコマンドを、解説するのは困難だった。までも空間軸の座標曲率が変わったが、その名の通り八卦図に対応していない。

同じ時間の同じ出来事が、ヴィブレⅡスミスには少し遅く訪れるのだ。言い換えれば、比企はヴィブレⅡスミスより少し速い時間の流れの中にいる。

比企は荻号との遣りとりで学び、この二年間で懐柔扇の局所時間軸介入性能を重点的に改良していた。

比企と極陽との間の実力的な力の差もさることながら、局所的とはいえ素粒子運動を司り局所時空軸をすら操る比企に、精神攻撃を得意とするヴィブレⅡスミスが勝てる道理がなかった。また、比企は事前に、神体に精神攻撃無効化プログラムを処して臨んでいる。

比企は悠々とヴィブレⅡスミスの間合いに入り込み、限りなく時間の進み方が0に近づいた状態で急所に拳を打つ。その衝撃の一部は無防備な脳を襲い脳震盪を引き起こすが、そこはさすが主神というものの、易々と気絶などしない。時間の拘束を解かれ、跳び下がったヴィブレⅡスミスとの間合いを詰めながら、やはりどれほどボディーブローを効かせようと急所を攻めようと主神をノックアウトさせることは不可能だと比企は悟る。ヴィブレⅡスミスの運動能力は、生体神具FC2ーマインドキューブにより限界まで高められている。それはもう、病的なほどにだ。FC2ーマインドキューブは延髄に移植された生体神具であって、彼の神経系に深く根を下ろしており、衝撃に強く量子計算系疑似脳としての役割を果たし、ヴィブレⅡスミスの両手で顕現される。

神経を切られるか殺しでもない限り、意識を落とす事はない。そう簡単には倒れないということとは明白だった。比企は決着のつけ方に拘らない事を決め、戦闘の終結を宣言した。K・Oは無理だが、判定でなら確実に決着がついていた。

「ヴィブレⅡスミス。もうよい。雌雄は決しておる、これ以上は詮無きことだ」

比企は口腔に溜まった血液を手頃な場所に棄きながら、数時間ぶりにコマンドではなく言葉を発した。純白の球体試技状に、赤い色

彩が飛ぶ。

パチンと懷柔扇を閉じ、戦闘を放棄する。一方的な決着だった。極陽が老い衰えたのではない、300年の間に比企があまりにも力をつけすぎたのだ。試合開始の合図が出されてから、既に41時間が過ぎようとしていた。神階の長を決する極位の位申戦に時間制限などない、どちらかが降参するか死傷者が出るまでエンドレスで行われる。何故これほどまでに長期決戦となったのかというと、極陽も比企も双方の実力が伯仲しており、なおかつ双方が腕のよい外科医だったからだ。

負傷を被ればその場でたちどころに癒し、スタミナが切れれば神具の機能を駆使して補充してしまう。特に比企は懷柔扇にアトモスフィア充填機能を付加しており、無尽蔵のアトモスフィアを操ることができた。極陽は常に生体内でのアトモスフィア合成のシグナルカスケードをオンにして戦っていた。一般的な決着であるアトモスフィア切れもなく、極陽の場合ダウンもない。致命傷を与えない限り、勝負などつかなかった。K・Oを厭うなら、勝敗の判定を判定員に依頼することだ。先ほどから極陽はもう、手が出ておらず防戦一方の構えとなっている。比企は全神の見守る中でヴィブレⅡスミスに醜態を晒させる前に、試合を打ち切った方がよいと考えた。極陽は明日から第二位神となる屈辱を味わうだろう。そして比企はこれから、INVISIBLEとの戦いに向けて貴重な戦力とブレインとして極陽の力を借りなければならない。片方に無様な負け方をさせると、双方にとって利益がない。

比企が判定員の見守るカメラに目を向けて声をかけようとしたとき、ヴィブレⅡスミスはそれを妨げた。

「比企よ……私は余力を残した戦いというものは嫌いだ。汝なら命果てるまでやり合う価値がある。禁則を解除してやりあわぬか」

比企は果たし合いの申し込みを、老獺なヴィブレ＝スミスから聞くことになるとは想定していなかった。だが彼も、名誉と誇りを尊ぶ陽階神だ、このまま黙って負ける事はできなかったというのだろう。禁則とはすなわち、極陽ならばFC2－マインドキューブの奥義PSYCHO－LOGI Case（精神分解酵素）の合成、比企ならば懷柔扇の奥義、元素崩壊の発動を解除することを意味した。

どちらかが必ず命を落とす事になる戦い、極陽はその勝負の末の破滅を望んでいたのかもしれない。一か八かの大きな賭け、先に奥義を発動した方が必ず勝つ。勝算は五分ではなく、時間軸を操る比企が圧倒的に有利だ。その結果で確実にK・Oを狙える、そして確実にヴィブレ＝スミスの命を奪う。極位の位申戦では、判定勝ちなどではなく完膚なきまでに打ちのめした方が印象がよいものだ。そういう意味では比企の実力を内外に知らしめ、反対勢力を押さえ込む絶好のチャンスだったのだが、比企は憐みを込めたまなざしをかつての主神に向けただけで、その申し出に応じなかった。

「勝てぬと察したなら玉砕を潔い身の処し方だとは、己は思わぬ。潮時と知れ。長い間ご苦勞だったのう」

位申戦において命の駆け引きをすること……つまり神具に課せられた禁則を破ることは、両者の同意がなければ行われてはならなかった。原則、優れた神を登用する為にはじめられた位申戦は殺し合いが目的ではない。死者なき戦いでなければならなかったからだ。それでも殊に極位にある陽階神は、いかな耻辱を被っても強くあり続けようとする陰階神とは異なり、彼等のプライドに賭けて果たし合いを望むことがある。位申戦での果し合いは合法であったが、必ず両者の合意を必要とした。比企は極陽の提案を断り、命尽き果てるまで撃ち合う事を拒絶した。

それは何より、比企が命を惜しんだというより、極陽の命を無駄に散らせたくはなかったからだ。藤堂 恒の実の父親を、その手にかけてくなかったという理由が大きい。目の前で父親を葬り去る、もつと言えば元素崩壊で遺体も残らぬまでに粉碎する光景を、恒に見せたくはなかった。比企は激闘の末にボロボロとなった着衣を脱ぎ捨て、極陽に背を向けて一方的に試合を打ち切る。

「汝は強かったぞ、ヴィブレスミス。もう決着としよう」

比企は片手を上げ、モニター越しに極位決定戦を観戦していた20名の判定員に勝敗判定を委ねた。XX（文型）の試合では比企がヴィブレスミスを論破し、AA（武型）の試合では15項目の能力において比企が極陽を上回っていた。そして41時間もの最終決戦を制したのは挑戦者の比企だった。

『20対0、全判定員の一致をみて、立法神 比企 寛三郎の極位叙階を認めるものとする！』

比企が傷ついた右手を高らかにかざして勝利宣言をしたその瞬間、陰陽階の中央部に位置するスタジアムの大型モニターで観覧していた神々や使徒達の間から、どっと歓声と悲鳴が上がった。

ときは西暦2009年、史上最年少にして主神となった775歳の比企を頂点とする神階の新たな時代がここに、幕をあけたのだ。

＊

「……ひとつの時代が終わったな」

織図 継嗣は比企が位申戦を終えて新主神として華々しく大観衆

に迎えられる様子を、同じスタジアムのはるか高みから見下ろしていた。

閉塞した神階の体制に風穴を開ける、急進的な比企の完全勝利はいつそ清々しくすらあった。以後、比企は立法神を廃し、伝統的に神階の長、極陽の司職と定められてきた創造神としてその手腕を振るうだろう。この位申戦は事実、単純に神階の長を決するというより、比企とヴィブレースミスのどちらが三階を率いてINVISIBL Eと戦う事になるのかを神々が見極める、そんな意味合いを持っていると織図はレビューする。

戦場に赴くことが出来るのは恒とレイア＝メーテルだけだと分かった上でのこの時期の極位獲りは、比企の自己満足のためではなかっただろう。比企が体制を支配した状態で恒とレイア＝メーテルを擁することにより、ヴィブレースミスの彼らへの影響力を最小限にとどめ、排除することができた。比企は利己のために極位を目指したのではなく、権威の盾で少年少女を守ろうとしたのかもしれない。比企は主神となり、恒とレイア＝メーテルはその庇護のもとに置かれたこととなる。

「創世者との戦いに神階が出る幕はないかもしれないのに、それでも立ち向かおうとするあんたは立派だ。特務省に任せとけばいいってのに」

織図はそう呟いて、到底真似できないなど、彼の一途さに脱帽した。自身も、対INVISIBL E対策機関、特務省職員である織図は、これといった手段も力もなくINVISIBL Eに挑みかろうとする比企を真に勇敢だと認める。

この戦いは、比企やヴィブレースミスとはおよそ関係のない場所
で、もう既に始まっている……。

そういえばこの二年あまりの間で、織図も位申戦を一度経験した。

その結果、死神、織図 継嗣は前3位だった紺上 壱見を大差で破り、陰階3位の文武系（AX）神として即位して、それを機に大数の枢軸神の推薦により、荻号 要が前任者であった陰階の参謀職に就いている。織図は僅かな間にマインドギャップを8層に、フイジカルギャップは46層にまで増やした。陰階きつての武闘派、梶 奎吾のポテンシャルに伯仲する数値を叩き出して梶をやきもきさせているが、織図は別段、これといった努力をしたり厳しい修行を積んだわけではない。

視力の獲得とともに肉体の反射速度が高まっただけ、といえば味気ないものだが事実そうだった。マインドギャップは身体能力の成長に準ずるものだが、神々の成長は100歳で頭打ちとなると言われ、神々は100歳までに個々の神体感覚を身に付けて能力が固定化されてしまう。盲目であった織図は視力を補うように他の機能が発達していたが、ここにきて視力を得たことにより空間認識の在り方が劇的に変わった。予め高められていた他の能力に視覚的情報が加わる事で相乗効果を及ぼし、織図は二回目の成長期を経験したこととなり、他の神々より抜きん出て成長する機会を与えられた。つまりそれほど、盲目の状態で枢軸を務めていた織図の潜在能力がそもそも高かったということだ。織図はようやく、アルティメイト・オブ・ノーボディが織図と最初に出会った日に説き聞かされた、“望まれて生まれてきた完全な神だ”という、当時は気休めとも受け止められた言葉を今更のように思い出したものだ。

ノーボディは何らかの意図あって織図を盲目にしていたのだと。

織図はこの二年半、比企や荻号、それどころか恒にすら一度も会っていないかった。織図があらさまに接触を避けていたことに、比企も荻号も気付いていたかもしれない。だが荻号は来るもの拒まず去るものも追わずの性格で、また、陽階第二位神であった比企も陰陽階のしほりを超えて特務省特殊任務従事者であり参謀である織図

を呼びつける権限などなかった。今後比企が極陽として即位すると、織図は比企となにかと遭遇する機会を増やすこととなる。極陽は特殊任務従事者の任命権者であるからだ。

今となってはマインドギャップに5層以上の差のない、つまり看破不能な比企と会うのはまったく構わなかった。ただ、いくら織図のマインドギャップが増えたとはいっても、マインドギャップを何層持つとも知れない萩号と接触することは避けなくてはならなかった。

織図はまだ、もしかするとこの世界で唯一の存在かもしれないが、ユーージーンⅡマズローを覚えている。

織図がそれをここまで一切他言しなかったのも、何とか記憶を失わずにやっている。織図の思考を看破できる者達と接触したとき、記憶が失われてしまうような気がして、織図は萩号や比企と接触を避けてきた。二年半前、織図がEVEにダイブしていた間に脳死状態となりそのまま失踪してしまったユーージーンはまだ帰らないが、織図は今でも、いつかユーージーンがひょっこりと風岳村に帰ってきて力を貸してくれそうな気がする。脳死となったままどうやって帰ってくるのか、細かいことは言いっこなしだ。ただ、織図が彼を忘れさえしなければ、いつか必ず帰ってくると信じたかった。

恒から何度か、織図と会いたいという旨の手紙が執務室に送られてきた。

手紙には簡単な近況とともに、織図の昇進の祝い、そして恒のマインドギャップは10層にまで達していると書かれていた。だが織図は可哀想だと思いつつも、恒とは直接は会わず会話も電話だけで済ませた。恒がマインドギャップを10層だと言っているのは、あくまでも自己申告だ。一年に一度以上身体検査を行う必要はないため、自己申告より多くマインドギャップを身につけていてもおかしくなかった。そして恒は昔から、なかなか本音を見せない。半人半

神の恒に、いい年をこいた枢軸神がマインドギャップを看破される危険を危惧しなければならぬとは以前には考えてもみなかったことだが、恒はある意味人間不信などころがあり、生来駆け引きを得意とする子供で、心理戦が巧みだという性格は変わらない。かつてはマインドブレイクのイロハを教えた織図に対しても、今では油断のならない神へと成長しているだろう。

どうやってか極位級のマインドギャップを備えた恒に対し、たかが子供と侮る事はできなかった。

ところで恒はどういう立場に置かれているかというところ、比企がその身柄を所有しているアカデミーの特待生として在籍している。恒は以前、ユージーンと合法的に師弟関係を結んでいたものだが、ユージーンの記憶がありとあらゆる者たちの中から消え去っているの、比企にその役割が継承されたようだ。ところが比企は極位を獲得するだけの実力がありながら、いかんせん人望がないというか、支持率の面で師となるための条件を満たしておらず、恒を弟子とすることができなかった。

いわば比企の所有物として神階に留まることが許されている恒が、この二年半、どのような生活を送ってきたのか、織図は詳細を知らない。恒からしてみれば、親しくしていた織図が突然疎遠になってしまったように寂しく感じたことだろうが……。その理由を話してやることすらできず。

織図はこれまでの態度を疚しく思っていたので、連絡を取るいい機会だと思い久しぶりに恒に電話をかけはじめた。恒は比企の部屋で極位戦の中継をくいいるように見ていたことだろう。比企の勝利を見届け、ヴィブレⅡスミスの敗北を受け入れるしかない状況で息子の恒が何を思うか……。彼の傍にいてはやれないが、せめて話し相手にはなってやりたかった。電話はすぐに繋がった。恒はいつも、依存症のように携帯を肌身離さず持っている。

そう、ユージーンの携帯をだ。だが彼は、その持ち主が誰であつたかという記憶を失っている。

「よう、久しぶりだな恒。見てたか」

観戦していないとは思えないが、軽い口調で織図は話しかける。ややあつて、言葉に詰まるように、声が返ってきた。

『はい、見ていました』

恒は12歳となり、神としては少し早く、人としては十人並みに声変わりをはじめている。血は争えないもので、ヴィブレスミスの声とすっかり似てきた。そのせいか織図は、電話越しに恒の声を聞くとヴィブレスミスと話しているように錯覚することがある。

「お前、段々オヤジに声が似てきたよな。頼もしくなったもんだ」
『そうでしょうか』

受話器越しに声を聞くだけでは、何もわからない、分かってやれない。抗一絶対不及者抗体の恒を襲う不断の恐怖、そして孤独を癒してやることなどできない。いつか全てを話して恒に謝らなくてはならないと、織図は恒に電話をかけるたび心が痛む。

「どうだ、元気にやってるか？ たまには母ちゃんところ、帰ってやれよ」

織図はINVISIBLEの収束などというニュアンスを含まないような、あたりさわりのない話題を選ぶようになって久しかった。恒は織図と世間話をしたい訳ではないだろう、そんなことは織図にも分かっていた。また織図と以前ののような信頼関係を結びたいと、恒はそう思っているだろうが、恒と会うわけにはいかないのだ。

『織図さん。そこに行ってもいいですか？』

織図はその痛切な願いを聞き、じつとりと手の中に汗をかいた。

情に流されて、頷いてしまいそうだった。

「……残念だが俺がいるところは神階じゃねんだ」

陰陽階の中央に位置するこのスタジアムは、恒のいる空間とは異なる亜空間にあったので、織図はそれを理由に断る。異なる空間へは、超空間追跡転移をマスターしていないかぎり追いつけない。比企の部屋から、恒が織図のアトモスフィアがどこにあるという詳細を察しているとも思えなかった。

『わかっていきます。行ってもいいですか？』

「いや、無理だろ。どうしたんだ？ 切羽詰って。話してみろよ」
振り返ると、恒はそこにいた。

織図の気配の所在を異なる空間から特定し、超空間追跡転移を、難なく使いこなして――。恒はいつでも織図と会える状況にあった、織図が拒絶さえしなければいつだって飛んできただろうに。そう思うと、織図は彼にしたことの惨さを思い知った。恒のアトモスフィアは以前のようにあるかないか分らない程度のものではない、今やはっきりと可視化されるまでになった。測定すればフィジカルレベルは2万は超えているかもしれない。位神として即位するにも十分なポテンシャルだ。織図はその存在感をひしひしと感じている。彼は確かな成長をみせていた。

「恒！」

「……父の遺書が届きました、たった今……」

恒は織図の様々なしがらみなど知らない。織図の懐かしい顔を見るなり今にも、飛びついて泣き出しそうだった。鳥肌が立って小刻みに震える腕を、差し出して織図に見せた。逞しく成長した腕に神語で、みみず腫れのような赤いメッセージが浮かび上がっている。恒は今や完全に神語を識字できるようになっていた。ヴィブレイスミスが最期に恒に送ったメッセージはちんぷんかんぷんではなく、

確かに恒の心に届いていた。

“私は舞台をしりぞく。苦しめてすまなかった”

ヴィブレⅡスミスは位申戦のさなかに敗北を悟ったとき、生涯の幕引きをする覚悟を決めていたのだろう。恒にしか分からない方法で密かに届けられたこの遺言を、彼は比企や比企の使徒に打ち明ける事ができなかった。恒はひとり比企の部屋にあって、どうしてよいのか分からなかったに違いない。そしてどうしようもなかった。マインドギャップが10層あるからといって、鋼のような心を獲たわけではない。

織図は何も言わず抱き寄せ、恒を黒衣の中にしずめた。

「なあ、恒。親父は比企に引導を渡される事を、どこかで望んでいたのかもしれないぜ……？ お前にとって、いい親父じゃなかっただろうが、最後は水に流してわだかまりなく、送り出してやれよ」

「はい……。俺、憎んでいたのに……」

しかしどんなに憎んでも、ヴィブレⅡスミスから縁を断ち切ることはできない。彼は恒をモノとして創造し、利用し、最後に彼の罪の深さを識った。

「ああ、分かっている。でもお前はきっと、悲しいんだ……」

恒のマインドギャップは恒が申告した通り、10層だった。織図は恒を疑ったことを死にたくなるほど恥じながら、2年半も彼に手を差し伸べなかった事を猛烈に後悔した。万雷の拍手の中、噎せ返るような熱気の中で、12歳の少年は今はまだ、声を殺し嗚咽していた。

＊

空間の断片をのみ糧とし、自己を極限へ解放し肥大化させてゆくこと。

終わりのなき極大のベクトルに向かって、突き進み続けること。

空間の中に、溺れてゆくということ。

彼が呑み込んだ空間の総和は、生物階のそれとほぼ同じ体積にまで達しようとしていた。彼はこの頃から、ひとつひとつの空間と融合する度に、耐え難い苦痛を感じるようになっていた。苦痛とはいっても、実体を失い痛みを感じる神経などないのだから何も感じる筈はないのだが、空間の断片と融合を続けた代償は確実に支払っていた。

彼は INVISIBLE のように空間を咀嚼せず内容物を変えない、つまり融合方式での空間拡大を狙ったため、その胎内に同時に複数の物理的法則を抱え込むこととなった。複数の物理学的法則は一度には成立できない。背反する法則の矛盾をいくつも内包すれば、胎を食い破られ引き裂かれそうな感覚に陥る。彼が空間融合を繰り返す行為は妄執にも似て、巨大なマクロファージのように見えない手を延ばし周囲の空間を盲目的に手繰り込む。それはもはや、彼の意味とは連動しないものとなりつつあった。彼はただ暗闇の中で何万回、何千万回と単純な動作を繰り返すだけだ……。孤独な虚無の空間は、雨粒がやがて巨大な湖となるように次第に膨れ上がっていた。

極大は極小へと転じる。

有限の肉体を持つ者にはその意味を、思い知る機会などない。しかし彼は感じていた。体液の中にたゆたう細胞のたった一つが決してその全体と、その意思を知ることがないように、あるいはそれぞれ

れの創世者たちの営むこれらの空間も、何か巨大な“全体”の中の一部に過ぎないのではないかと。だとしたら、もし巨大な全体の中の一つだとしたら、この空間は一体何に喩えられるだろう？ 全体の調和を乱す、一つの個。もっと大きく、もっと強く、もっと永遠に……そう願う機械的な一つの個があるとしたら、何と喩えるだろう。強烈な一つのイメージが喚起され、思考系統に連結する。

そうか。これは、癌だ――。

彼の意識は空間の体積に応じて、次第に希釈され、無機的に、機械的になってゆく。どこまでも広がる水の中では、一粒の水滴が一滴の水滴ではいられないように、そう、彼が彼である部分はいつの間にか端の方から溶けて蝕まれ、薄く薄くなっていた。感情や思考能力も殆ど残されていない、薄皮を剥ぐように失われてゆく自我。そしてやがては消滅するものなのだろう。彼の表層を滑り落ち、意識と自我が壊れてゆく静かな音楽だけが聞こえていた。彼は時折思い出したように再生される、レコードのように壊れかけた記憶の中にかろうじてしがみ付いていた。

彼は空間開闢の方法をINVISIBLEではなく彼の父、アルティメイト・オブ・ノーボディに倣うべきだったのかもしれない。アルティメイト・オブ・ノーボディは幾度他の創世者から侵略の危機に見舞われても、拡散型の空間運営をせず彼が作り上げた箱庭の中にのみ留まる閉鎖型の空間運営を行っていた。今となっては、何故アルティメイト・オブ・ノーボディがそのような手段を取ったのか理解できた。拡散型の空間運営を行う事は、創世者の意思、自我をも希釈してゆく事だと分かっていれば。ノーボディはそれを畏れ、敢えて手ごろな大きさの空間を創り出し閉鎖型の空間運営を続けていたのだろうか――。

そろそろ限界かもしれない。あとどれほど……正気を保っている

れるだろうか……。

彼の恐怖を置き去りにしたまま、彼の空間の断端は機械的に蠕動し、突起状の触手を伸ばし、周囲の顆粒状の空間の残渣を取り込んでゆく。手当たり次第に接合し、接着面から融合してゆく。彼の一部分の身勝手な行動を、彼は完全には自律できない。消えかけた自我にとって、徐々に自律が取れなってきたということとは完全なる誤算だった。意識が尽ならなければ、INVISIBLEの収束を阻止し、三階に新たな導きを示すことができなくなる。

そして臃げな意識の中で思惟する。

彼と同じように貪食型の空間運営を行うINVISIBLEの自我は、どうなったのだろう。INVISIBLEは最初、はつきりとした独立自我を持っていたのではないかと思われる。同じ道を辿るのではないか、そう思った。いつか自我が消え、意思なき創世者INVISIBLEと同じ道を……歩む事になるのではないか。それは、彼にとっておぞましい恐怖だった。

このままでは……

いや……止められない

意識が分割され、思考回路が支離滅裂になっている。彼は断片的に思惟する傍らで、そう危ぶんでいるたった今の瞬間も自らの空間の端が彼の知らないうちに、異物ともいえる断片を飲み込みはじめている事に気がついた。空間の内容物が彼の内側に侵入してきた瞬間、彼はいつにない異変と危険を察した。

これは、受け入れてはならないものだ。

そうは思えど、自律がままならずどうすることも出来ない。彼にまだ肉体があったなら、猛毒を飲んでしまったらのた打ち回ってもがき苦しんだらう。そしてただちに吐き出そうとしたに違いない。だが、ただの空間（胞）となった身体では、どれだけ拒絶したくても、異物を吐き出す事もできず受け入れることしかできない。

その残骸は……彼の体積と比してあまりにも大きな質量を持っていた。INVISIBLEが何故この塊を噛み砕かずにカプセルのように未消化のまま食べ遺していたのかを、この空間に触れる前に訝ることも、躊躇するだけの理性も残っていなかった彼には判断することなどできなかった。彼の体腔の中で、毒物のような残渣と混じりあい浸透してゆく地獄の感触を味わううちに朦朧としてきて、昏い底へと墜ちてゆく。彼が異物として認識したその空間は時間の流れが著しく異なっており、均一ではない。熱いものが冷たいものの中に流し込まれるように、やがて時間は彼の体腔で均一となってゆき、それらはもとのように熱いものと冷たいものに別かれる事はない。

数年と思っていた時間は、本当に数年なのだろうか。

どれほどの時間が、経ったのだろうか――。彼の意識が再び表層に浮かび上がったとき、彼は先ほどとは全く異なった時間の流れの中にいた。

ここは……どこだ？ 自分は誰だ？

希釈されゆく自己を集めて、何か小さい、入れ物の中に入って固まりたい。

小さな自己に還りたい。止まり木が欲しい、そう思った。

そうでなければ、生命をありのままの姿で守りたいという願いまでも失くして、

エンプティ（虚ろ）となってしまうそうだった。

そして彼は、彼がもともと何者であったのかを思い出した。

西暦、2007年。あの時代に生きた自らこそが、偽りのレコード（記憶）だったのだと。

還るべきなのだろうか。

彼らがまだ、——であったあの時代へ。

第2節 第2話 真空の檻から見上げる世界

「また……こんなところで」

夕飯の材料の入った大きなレジ袋を提げて、合い鍵を使って勝手知ったる他人の家に入ってきた朱音はいつものように呆れ、もう……と微笑みながら溜息をつく。息が白くなるような厳寒の浴室で、彼は薄い聖衣一枚で干物のようにバスタブに引っ掛かったまま寝ていた。

荻号の家に寄って、彼に夕飯を作り世話をやいて家に帰ること。それは荻号が望んでもいないのに、学校帰りのちよっとした朱音の日課のようになっていた。朱音は食材を冷蔵庫に整理して入れると、眠りこけた荻号の肩にそっと触れる。

以前には肩を覆いつくしていた銅色の長髪がすっきりと切り落とされて小ぎれいになっているのは、外見など気にしない荻号のために、彼が寝ている隙を狙って伸びた髪を時々カットしているからだ。朱音は雑誌を見ながら、人気の芸能人やモデルの髪型を見よう見真似で再現して自己満足していた。

奇妙奇天烈な彼の性格とは正反対の秀麗な顔立ちに、どんな髪型もよく似合った。髪型について文句を言われたことは一度もない。彼はほとんど鏡を見ていないからだ。朱音は鋏を持ちだし、少し不揃いになった毛束に鋏を入れ、ちよきちよきと切って整える。一通り好きにして満足すると、ゆさゆさ揺さぶり起こす。

「起きて下さい、荻号さん。こんなところで寝てると風邪ひきますよ」

「何で俺がお前に寝る場所まで指図されるんだ……？ 疲れてるんだ、放つといってくれ」

荻号はうだうだ言いながら朱音の手を払いのけた。大陸側から急に降りてきた今年一番の寒気で浴室のタイルには、薄氷が張っている。冷え切った浴室で気持ちよさそうに寝られる根性は大したものだが、見ているこちらが寒くなるので場所を移動してほしい。

「それから……実は私、ちょっとおなかすいてて」

彼女が気恥ずかしそうに言う、“おなかがすいた”とは、アトモスフィアに飢えたという意味だ。まだ成長期の使徒である朱音は体内にアトモスフィアを蓄積する能力に乏しく、荻号のアトモスフィアを頻繁に受け取らなければ空腹を抑えられなかった。彼女はもう、アトモスフィアに飢えたという状態がどういふものか自覚できるようにになっていた。飢えた日には、顔を真っ赤にして荻号にアトモスフィアをねだらなければならなかった。

荻号はそうだったのかと理解すると眠たい目をこすりこすり、冬眠を妨げられた熊のようにのっしと立ち上がる。

朱音を片手で悠々と担ぎ上げ寝室のベッドにぼんと彼女を横たえると、彼女ごと布団の中にもぞもぞ入った。彼はベッドの中で毛布にくるまり、朱音を無意識にきつく抱きしめながら深い眠りにつく。室内は冷たいのに、荻号という毛布の中はうそのように暖かい。

高エネルギーを持つ神の体温の温かさは驚異的だ。荻号は県内有数の豪雪地帯の風岳村の深雪で冷え切った、朱音の体を温めてくれる。朱音は荻号に触れているだけで、特に何をしなくともアトモスフィアを吸収できるのだと聞かされている。

使徒が神を必要としている証、朱音が荻号によって生かされている証。神との契約を更新するこの瞬間……彼女は心まで満たされる

ような気がする。彼は朱音の魂の糧だと、今ではよく分かっている。彼の生命力を食らうという、この行為は甘美で背德的だ。まじまじと見つめていると、彼は視線を感じたのか目を覚ましたので、朱音は慌てて取り繕う。

「荻号さん、今日は寒いからシチュー作って帰ります。温まりますよ」

朱音が通い妻のような事をはじめたことを、荻号がどう見ているか分からない。だが荻号はいつも、朱音が作ったものを残さず食べて味を誉めた。神は食物を食べなくても生きてゆけるのだと何度も聞いたが、朱音なりの感謝の気持ちを表したかった。アトモスフィアを奪うことは彼の力の源を朱音が奪うということで、朱音が荻号から奪ったのと同じだけ彼に返してあげたかった。

それに最近家を訪ねるたびに朱音の心臓が止まりそうになるのだが、荻号はよく怪我をしている。血まみれで冷水に浸ったままバスタブの中にいたという事も珍しくなかった。ある意味、この家に来るのはホラーだ。

怪我したままで水に浸かっていたら出血多量で死ぬし！ そんな朱音の説教もどこふく風だ。朱音が風岳中学校に登校している時間に荻号がこの家で何をしているのか、普通に生活していて怪我はすまい。彼は家から一步も外に出ないまま、どこかで何かをしている。

誰かと戦っている様子はなかったので、苦行をしているだけなのかもしれない。それにしても……行者ではあるまいし、一体何の為にそんな自虐まがいの荒行を続けるのかと、朱音は訊けなかった。彼の生き方は危ない橋を歩み続けているようなものだ。荻号は朱音と随分うちとけた今でも本心を見せないし、もともとあまり多くを語らない性格のようだ。怪我をするのが日常だというならせめて体力だけでもつけて欲しくて、朱音は栄養たっぷりの料理を作る。荻

号はそんな朱音の思いを汲み取ったのか、今日に限ってこんな事を言う。

「お前……いいんだぞ。俺に構うな。お前はアトモスファイアが欲しくなった時だけここに来ればいい」

「来たら、め、迷惑ですか？」

「迷惑じゃねえよ……ただ、お前が俺に気を遣ってそうしているなら必要ない。使徒が神に返礼をしようと思うな。それよりもっと人間らしく生きろ、お前は人として生きたいんだろ？ 外が天気で明るいうちはここに来るより友達と遊んでこい」

「でも、外は雪ですし……」

使徒として生まれながら、人として人生を全うすること。それが朱音の選んだ人生だった。朱音が100歳になったら、荻号の手で朱音の命を閉じてほしいと願った。人間らしく生き、人間として寿命を終える頃に人間らしく死にたいのだ。荻号は朱音の切なる願いを適当に受け流して、100歳になったらまた考えればいいじゃないかと暢気に言った。

朱音は二年半前、母親に朱音の真実を打ち明けている。

自分が人間ではなく、使徒という存在であること。背中に来た骨から翼が生えるのだということ、そして生涯にわたって神という存在を必要とし、神は偶然にも風岳村に住んでいるということ――。母親はそこで荻号の存在の重さを認識したらしく、意を決して荻号に現金持参で挨拶に行ったそうだ。

分かっていたことだが、荻号は現金を受け取らなかった。それでも娘を一生涯よろしくお願いしますと、涙ながらに頼む母親の姿に胸をうたれたと彼は言っていたが、彼が何か心を動かされることがあるのかどうか疑問だ。ともあれ、それ以来、荻号の家に行くのは

母親も公認の日課となっていた。母親は手料理を朱音に仕込んだり土産を持たせたりと、色々と気をつかっていたようだ。

そう、それほどに荻号は朱音にとって、いわば彼女の命を繋いでいるかけがえのない存在だった。最初は“面倒をみてもらっている”お礼を返さなければという義務感から半ば渋々荻号の家に通っていたのだが、そのうち自発的に会いに行くようになっていた。朱音がどんなに忙しくても、毎日彼の家に通い続けるうち、これは好きなのかもしれない、と感じるようになっていった。

朱音が彼を必要とするように、彼にもいつか朱音を必要とされたいと思ったが、残念ながら彼はひとりで生きてゆけたし、いつもひとりで生きてきたのだと言った。気ままな生活を送っていた彼が、13歳の少女に毎日のように纏わりつかれて、疎ましく思わなければいいと朱音は心配だ。今日の訪問は“おなかかへったから”、という理由がある。これが彼と会うには一番気兼ねしない理由だった。

「あ、そうそう！ 昨日、羽根の先っちょがガビガビになってるって母に言われたんですけど、何か病気になっちゃったんでしょうか」
「見せてみ」

朱音の背にはもう小さな翼が生えている。朱音の翼は淡いクリーム色をしていて、付け根の部分に紅茶色の斑紋がチャームポイントのようにあり、朱音はそのシンプルなデザインが気に入っている。まだ立派な羽ではなく、幼鳥のような柔らかな羽毛が多い。そのうち立派な風切羽へと生え変わってゆくのだそうだ。荻号の不可視化装置により巧妙に隠されて見えないし触れられないので、日常生活に支障はなく学校でもバレていない。脱分化薬を使わず翼を残すことは、荻号と相談して決めたことだ。“いららないと思った時にもげばいい、そしてそのための手術は責任をもってやる”と丸め込まれた。荻号は朱音がいつか神階に上がることを望むものだと思ってい

る。朱音は現段階では、神階に行きたいとは考えていない。

彼女はエアコンをつけて部屋を暖めると、腕時計型の不可視化装置を外し、頬を赤らめながら服を脱いで荻号に背を向ける。荻号には何度も、全裸を含めて裸の姿を見られているが、今更のように恥ずかしくなる。だが彼はあくまでも医師として診察をするだけで、成長期の彼女の身体には興味を示さなかった。彼は朱音にとって、どんな男性よりも安全で無害だった。

それで彼女は荻号に全幅の信頼を寄せている。荻号は無言で翼に触れ、一本ずつ丁寧に羽づくろいをする。使徒の羽根はどんなに傷んでいても、アトモスフィアを持つ神に触れられると艶やかにうまれかわる。傷んだ翼が彼の指によって補修されているのが背中越しによくわかった。それは心地よくて、全身が弛緩する。使徒の翼には多くの神経や血管が集まっているのだというから、揉み解されてはたまらない。朱音の翼は荻号の膝の上にぺろりと乗るかった。

「しかし、傷んでるな。お前、翼を界面活性剤なんかで念入りに洗っただろ」

「界面活性剤って？」

「洗剤だ」

「はい、シャンプーしてトリートメントもしました」

朱音が真面目にそう言うと、ぽん、と背後から軽く頭をたたかれた。手加減されているので、叩かれても痛くはない。朱音はこんな他愛もない遣り取りが好きだ。荻号はぶっきらぼうだが、肉体的にも精神的にも朱音を傷つけたことはなかった。彼は優しい。もろ手を挙げて優しいとは言えないが、優しい部類に入と思う。あくまでも、同じクラスの男子や朱音の周囲の人間と比べて、の話だ。

「髪の毛じゃねーんだぞ、常識的に考えろ」

“常識的に考えて……”、というのは自称常識神の荻号の口癖のようだが、朱音はネットスラングを偶然にも荻号が口にするのを密かに面白がって、彼がそう言うたびにくすり、ときてしまう。そして彼がその言葉を添える時には大抵、常識的ではない事の方が多い。彼は朱音に何故笑われているのかわからないまま、懽然としている。

「常識的っても……鳥が体洗ってるの、見たことないですし。何で洗ってよいかわからなくて、でもやっぱり洗いたいし」

原油流出事故で油まみれになった海鳥が食器用洗剤でガシガシ洗われているのは見たことがあるが。

「シャンプー剤にかぶれたんだよ。神階には羽根専用のトリートメントがあるんだ。明日にでも恒に持って帰ってもらえ」

「恒くんは、忙しいんですよ。最近、学校は来てるけど授業終わったら速攻で神階に上がってしまうんです……超空間転移とかいうので」

「そうなのか。お前ら、幼馴染なんだろう？ もっとコミュニケーションとれよ」

余計なお世話だった。

恋人どころか、友達など一人もない荻号にそれを言われると、朱音はげんなりだ。

恒と疎遠になったのではなく、恒が忙しすぎるのだ。恒は朱音とともに風岳中学校に進学し、感心な事に学校もほとんど休まず授業もちゃんと出ているようだ。体操部にレギュラーとして在籍している割にはクラブ活動もほとんどしない幽霊部員で、放課後になると本物の幽霊のように煙となって消えてしまっていた。それでも彼は、

たまに行われる大会には体操部員として顧問から呼ばれて、練習もしないのにちゃっかり県大会個人の部で1位を取って全校集会で表彰されて周囲を驚かせている。

彼が器用で何でもそつなくこなせるのは神だからだと分っている。朱音は少しぐらい部活動をして学校に残ってほしいと思う。そうでなければ、1組の朱音が4組の恒に話しかける時間は殆どないといつてよかった。ちなみに朱音はジャズダンス部に入り、毎日朝に夕方にと部活動に明け暮れるかたわら、習い事のバレエも続けている。運動をするとアトモスフィアを頻繁に摂取しないといけないとなると聞いたが、毎日通っているぶんには何も問題はなかった。

「みんな、色々忙しいみたいです。荻号さんもそうですし……。これから何か、起こるんですか？」

「何も起こらねーよ」

あからさまな嘘をつかれて、朱音はかわいらしく頬をふくらませる。荻号の怪我は日増しにひどくなっている。彼はそうやって彼自身を痛めつけて、何かに備えているのだろうと朱音は確信している。「何か悪いことが起こるんですか？ 国連もどんどん武装化して、日本政府もほとんど国政をやっていません」

日本の国政はまさに、開店休業状態だった。通常国会の予算案がなかなか通らないのとは対照的に、有事法案はコンスタントに通過していた。予算案に優先して有事関連法案が通されるのが祇園首相の責任だというなら、野党の容赦ない追及がある筈だが、それもない。それどころか与野党超党派でこれらの有事法案に臨んでいた。政府ぐるみで何か来るべき災厄に備えているようだ。

「まあな……。そんな顔すんな、何が起こっても守ってやるよ」

彼の言葉は朱音をドキッとさせる。荻号は時々こういう意味深な

言葉が無神経に発する。朱音からしてみれば告白ともとれる言葉だが、彼はそのニュアンスの罪深さに気付いていない。いや、鈍感なふりをしているだけなのだろうが、彼はこうやって朱音をからかって遊ぶ。そして荻号はいつも、朱音を護ってやると自信を持って宣言した。

朱音は荻号の実力や社会的立場を知らないし、なぜ神でありながら神階を追放されて隠居生活を送っているのか、何か悪いことをしたから憂き目をみているのか、訊ねたこともない。だが、どうやらそうではないと分かったのは、比企が荻号の助言を求めて訪ねてきたときだ。比企といえば執務室の裏に空中庭園を持っていた白髪の神だが、彼はこのたび、神々の長である極陽として即位したそうだ。つまり荻号は主神が伺いをたてにくるほどの実力者だということだろう。そ

そんな彼の唯一の使徒であることを朱音は少しだけ誇らしく思うと同時に、緊張感も常にある。心理学的な単純接触仮説に基づく、ほとんど会えない恒のことより、年中無休で朱音の会いたい時にいつでも会える荻号の方に親しみを感じ、好意を持つのは合理的だった。ただ荻号に寄せる朱音の想いはまたしても一方的で、進展などありそうにもない。そこで彼女は毎日、同じ幸せを少しずつ繰り返し返すしかなかった。

荻号は翼の手入れを終えると、また朱音を抱いてうとうとはじめる。

彼女の翼を彼の体温に預けながら、朱音の生ぬるい幸福は今日も満たされてゆく。

*

彼女は水底から水上を見上げる魚のように、無音の世界で生きている。

……音も空気もない小さな函の中で、24時間、365日……かたときも休まず監視されながら。彼女を取り巻く環境はいつも同じだ。同じ室温、同じ湿度、同じ気圧、同じ重力、そして、同じ景色……それが少しでも変わってはならない。

彼女はいつものようにアトモスフィアを相殺する権衣けんえという、美麗な装飾を施された薄い装束を身に纏い、アトモスフィア抑制具を兼ねた金色のあでやかな装身具によって神体はいつも美しく飾られ、聖性をたたえている。また足首は瞬間移動などで逃亡を防ぐためと足枷で函の底にしっかりと繋がれている。ショウケースに入れられた見世物のようだ。一見虐待ともとれる待遇を2年以上も受け続けた彼女だが、彼女はよく研磨された宝石のように眩かった。

ガラスの中に閉じ込められた彼女と見えた神々はそのあまりの美しさに彼女の虜となり、比企はその美貌を独占したいが為に彼女を監禁して飼育しているのだという不名誉な噂も立っているほどだ。勿論比企は、そんな下らない理由で彼女を狭い函の中に閉じ込めているわけではない。

身も心も成長を遂げた彼女は、確固たるアイデンティティと共に多くの理を解していた。彼女自身が三階にとってどういう存在で、何故このような待遇に処されているのか。彼女の背中にあって、これから彼女を、そして三階を苦しめるものが何なのか……。INVISIBLEに憑依されれば、無差別に人々と神々を殺してしまうかもしれない。そうなるぐらいなら死んでしまいたいと、わずか2歳半の彼女はそう考えている。

だがINVISIBLEによって不死身とされてしまった身体をどうやって殺せばよいのか分からなかった。彼女ができる事はただ、

INVISIBLEに負けないほど、精神的にも肉体的にも強く逞しく成長する事だけだ。彼女は精神力を鍛えるため、膨大な量の書物を読み、恒がほぼ8年をかけて得た知識を2年半の間に吸収した。世界を知り、己を識ること、それが彼女に与えられた唯一の仕事のようなものだ。

しかしそうやって備えながらも、彼女は決して強くはない。レイアは独りになるたび、INVISIBLEに身体を奪われるという恐怖心に押しつぶされそうになる。今日は部屋に誰もいないので、誰かと話して気を紛らわせることもできない。いつも様子を見に来る寧々は比企の極陽就任の手続きで大わらわだし、比企も寧々とともに法務局を訪れている。恒はまだこの時間は学校にいる。彼女は身震いをし、何も考えないようにして読書に集中した。

彼女がぼとりと書籍に視線を落とすと、コンコンと僅かな振動がガラス越しに伝わった。

はっとして顔を上げると、恒が学校から戻ってきて、中学校の制服のブレザーを脱いで白衣に着替えている。彼女は尻尾こそ振らないが、飼い主が戻った飼い犬のように嬉しさを隠し切れない。

『いらっしゃい、恒さん』

四方がガラス張りのショウケースの隅に、彼女は今日も細い金色の身体をすばめて、小さくなって読書をしていた。こうやって隅のほうで小動物のように小さくなっているのは、今すぐにも消えてなくなりたいという悲しい願望の現われだと、恒は知っていた。金色に覆われた身体を外からまじまじと一方的に観察されるその様子は、水槽の中の金魚のようだ。恒は早く彼女をこの閉鎖空間の中から解放してやりたいと思う。あと半年の辛抱で彼女は自由になれる。それがどのような結果を齎そうとも……。

彼女の名は陽階神レイア＝メーテール（R h i a M a t e r）、まだ2歳半の女神だ。だがその外見と精神力は、人間でいう9歳程度に相当する、驚くべき成長をみせている。真空環境で育った神は成長を早めるという比企の仮説は正しかった。彼女は真空中で育つことにより成長と老化を著しく早め、推測通りに常神の4倍の速さで成長している。

成長を促進する事と引き換えに、犠牲にしたものもある。それは彼女の肉声だ。音波が伝播しない真空中では声が届かないので、彼女はすぐに声を忘れ、声の代替として解離性意思伝播法を身につけた。彼女はもう、正常環境では肉声で話すことができなくなっているだろう。恒は、彼女がまだ赤子だった頃の泣き声しか記憶にない。彼女がこの世界に生まれて残した声が、言葉でも何でもない泣き声だけだったとは――。そう思うとやりきれない。

彼女がガラスの中から見た世界は、恒にとってもそうであったように辛く苦しいものだった。彼女は恒と同じ道を……いや、恒よりなお酷い道を歩んでいるだろう。恒はどんなに辛くとも自然に囲まれた環境で自由に育ったし、3m四方の箱の中に閉じ込められた事はなかったのだから。

恒はまず、箱入り娘が恒の心の中にくれた言葉を訂正しなければならなかった。

『いらっしやいじゃなくて、おかえりだろ』

『ごめんなさい』

恒も彼女と会話するために、真空中でも対話できる方法を身につけていた。

恒が戻ってきた時に彼女は必ず、“おかえりなさい”ではなく、“いらっしやい”と云う。実際にはいらっしやいというよりははるかに長い時間を、恒は彼女と共に過ごしている。それでも彼女がいらっしやいと云い続けるのは、彼女が恒を拘束したくないと思っ

いるからだ。恒は実際のところレイア＝メーテールにかかりきりになって、彼女はそれを偲びないと思っていた。彼女はこのような酷烈な環境の中でも他者に遠慮をし、他者の心を汲む事のできる少女に育った。他者から監視される生活が続いたため、少しばかり内気になってしまったのだが……彼女は素直でよい子だ。

『恒さん……やっぱり、最近何だか悲しそうです』

恒はいつもと同じ表情を彼女に向けたつもりでいたが、彼女はそんな事を云う。

『気のせいだよ』

『あなたは三日前、あるものをなくしたと仰いました。それを失ってから悲しそうです』

恒がレイアの変化を見逃さないように、レイアも恒の感情の変化をつぶさに見ている。彼女はここ数日、恒が目に見えて力を落とす様子を気にしていた。何か悲しい事があったのだろうかと彼女は思いを巡らせるが、情操面の発育に乏しい彼女は、恒が何故悲しんでいるかが分からないのだ。恒は三日前確かに、父を亡くしたと言っていた。だが彼のいう父が恒にとってどんなものであるのか、それを失うと何故悲しくなるのか、彼女には理解できない。彼女に分かるのは、恒のマインドギャップが精神面での脆弱性を隠しきれなくなっているという表面上のことだけだ。

『あなたがなくした、父、とは何ですか？ わたしも持っているものですか？ もしもわたしのものでよければ、あなたに差し上げます』

レイア＝メーテールに与えられた知識は不完全であり、偏っている。数学、自然科学など、世界の姿を知るための教育が優先され、家族、友達、愛情……彼女にとって必要のない知識や、彼女を不安にさせるような知識は与えられていない。彼女は愛されることを知

らないし、肉親もない天涯孤独の身だ。彼女は父親を持ったり、なくすこともできない……。

『ごめんな……』

恒にはつい三日前までヴィブレⅡスミスという父親がいた。母親の藤堂 志帆梨はまだ生物階で元気に暮らしている。彼女があどけなく恒に尋ねた、彼女が決して知ることのない言葉の意味を、恒は知っている。恒は純粋に恒を元気づけてくれようとする彼女の優しさに罪悪感を感じ、さりげなく話題をすり変えた。

『体調はどう？ ステイグマは？ 朝にはおさまっていたけど』
『……』

今度はレイアが言葉に詰まった。いくら辛抱強く待っても彼女から返事がないので、恒は10cmほどのスティック型の酸素ボンベを口に咥え、瞬間移動をかけて函の中に入ると、隅に小さくなってちょこんと蹲っている彼女の隣によいしょと腰を下ろす。レイアは恒の存在と彼のアトモスフィアを直ぐ傍に感じて、切なげに首をすくめた。恒はレイアにとってかけがえのない、彼女に最も身近な唯一の存在だった。それは比企でも、他の誰でもなく、恒でなくてはならなかった。彼女には恒が必要だったが、外界を自由に往来する恒を彼女が独占する事はできないと分かっていた。

恒はびつたりと壁に背をつけてそこから動こうとしないレイアを少し強引に起こして、ステイグマの発現を確認するため、彼女の背に躊躇なく触れる。

『熱くなってる……』

恒が心配した通り、ステイグマは恒が学校に行っていたほんの少しの間に活性化していた。INVISIBLEの収束まであと残すところあとわずか……ここにきて、ステイグマが発熱する頻度が高くなってきていることは明らかだった。INVISIBLEはやはり半年後に、必ず来る――！

恒はこの二年半、たえず彼女の傍に寄り添い続け、ABNT抗体の発動までの閾値を極限にまで下げて、ステイグマに少し触れるだけで抗体が強く発現できるように鍛えてきた。しかし、活性増強された抗体でステイグマを封じても半日も押さえておけなくなっている。INVISIBLE収束を前に、抗体の活性が追いつかなくなってきた。それは比企にも指摘されていたことだ。

彼女は恒がステイグマに触れるたび、恒がいかにも鍛えたといっても今だにステイグマの熱に灼かれていることを知っていた。恒に痛い思いをさせたくない、彼女はそんな思いから彼の手を拒絶する。

『わたし、まだ我慢できます』

『我慢するなよ……、熱いだろ』

恒は遠慮するレイアⅡメートルの背に権衣の下から右手を当て、意図的に掌にステイグマの熱を感じさせながら、抗一絶対不及者抗体(Anti-ABNT Antibody)を合成してゆく。彼の掌からはアトモスフィアが紫煙となって立ち上る。面の皮とともに手の皮も厚くなってしまったのか、今ではステイグマに触れても、熱さを感じるが殆ど火傷をしない。心頭滅却すれば火もまた涼しという諺もあるが、要するに、こういうものは慣れなのだと恒は思っている。ステイグマは恒の抗体に活性を阻害され、一時的におとなしく馴けられる。彼女は瞳を閉じて恒の手の感触を感じながら、そっと彼に寄り添う。

『どうして、ステイグマが熱くなっていたのに俺を呼ばなかった？』

授業中でも何でも熱くなったら構わず呼べと、レイアには言い聞かせているが、彼女はなかなか約束を守ってくれない。恒が“学校”に行つて“授業”を受けている間は、邪魔をしてはいけないものだと思っているのだ。恒は彼女が遠慮しているのだと考えたが、彼女の答えは意外なものだった。

『それは……とてもステイグマが熱くなって、本当に痛くて疼く時、頭の中に“声”が聞こえるのです』

『……なんだって？』

それは、唐突な話だった。

『わたし……声を最後まで聞いてみてもよいですか』

レイアIIメーテールは飼い主の許可を乞う甘えた子犬のように、翡翠色の大きな瞳で恒の顔をいっしんに見つめて反応を窺っている。彼女は何をするにも、恒の同意を求めなければ不安だった。恒はそんな彼女に驚いた。彼女が自発的に何かをしたいと自己主張したことなく、一度もなかったものだから。

『いけませんか』

『いけないも何も……それはノーボディの声じゃないの？』

恒は慎重に確認する。脳内に直接語りかけを行ってくる声……それはアルティメイト・オブ・ノーボディとの対話方式だ。恒は睡眠を媒介としなければ彼と会話することはできないが、プライマリであり、よりアルティメイト・オブ・ノーボディに対する感受性の強い彼女なら、直接声を聞くことができても不思議ではなかった。

『違います』

彼女は艶やかな金糸のような髪の毛をふわりと散らせながら、きつぱりと、首を横に振る。ノーボディは恒のみならず彼女とも接触を図ることができると云っていた。彼女がノーボディからの語りかけではない声を聞いているというのは、初耳だった。そしてその声というのは、あまり好ましくない者からの語りかけであろう。恒は真剣に彼女に向き直って、彼女の真正面から彼女を真剣に諭す。

『聞いちゃだめだ。それはきつとINVISIBLEかブラインド・ウォッチメイカーからの声だから。絶対に耳を貸すな。お前の身体を器にして乗っ取ろうとしているんだぞ』

『でも……声を聞いてはならないのでしょうか』

もし声が“あんな事”を云わなかったら、レイアだって恐ろしくて、聞く耳を持たなかったに違いない。

レイアⅡメーテールの背の黄金のスティグマが最も熱くなつて彼女の身体がバラバラに引き裂かれそうになる時、彼女の中にどこからともなく幻聴のような声が侵入して彼女に語りかける。彼女は声の語りかけに最後まで耳を傾けることはできなかった。彼女が苦痛を覚えるとすぐに、異変を察したレイアⅡメーテールの監視係の使徒が恒を呼び、恒が瞬間移動で駆けつけてすぐにスティグマを癒してくれたからだ。それはレイアにとって心強く、大きな救いであった。だが彼女がその声を最後まで聞かなければならないと思つたのは、いつも微かに聞こえるそれが、地獄の苦痛に悶絶するレイアにこう云っていると分かったからだ。

助けてくれと。

声は、途切れ途切れに、聞こえなくなるほどか細く、そう云っているような気がした。恒が彼女を癒すたびにレイアはその声は恒の抗体に封じられて消えてしまった。それがINVISIBLEやブラインド・ウオッチメイカーからの語りかけかもしれないと恒に諭されると、恒に随わなければと彼女は思う。しかし……こんな身の上にあるレイアを選んで何故助けを求めなくてはならなかったのだろうか？ そう思つた彼女は、声が聞こえた時、激痛に意識を飛ばしそうになりながらも声に尋ねてみたことがある。

“あ、あなたが……INVISIBLEなの？ あなたがわたしをわたしでなくさせるの？”

声は何かを云いかけたが、まだ何も言葉を成さないうちに遮られた。駆けつけた恒が抗体を発動し、スティグマを押さえ付けて苦痛から解放してくれたからだ。レイアは助けてくれた恒に感謝をしているが、恒が声の呼びかけをかき消してしまっていた。

『声は何かを望んでいるようでした……私に何か話しかけようとして』

『そりゃ、望むとしたら俺を殺すことだろ。俺はINVISIBLEにとって邪魔だろうから』

彼女は力が抜けて、膝の上に重い書物を取り落とした。嫌だ、嫌だ、と彼女は恒の白衣にしがみついてかぶりを振る。恒を失えば彼女は どうしてよいのか分からない、恒がいなければ何もできない。世界の法則に関わるあらゆる事象を解しながら、彼女の心はまだ飛び立つ事のできない雛鳥のようなものだ。

『……もう“声”に何を云われても耳を貸しません』

レイアはそう云って俯く。恒だけがレイアを助けてくれた……彼女の味方は恒しかないのだ。彼女にとって恒は世界そのものである、彼女が失った大気だった。恒は自由な世界から、まだ見ぬ太陽や、空の気配を、木々や花、土の香りを、彼女の知らない歓びを運んできてくれた。恒が全てを教えてくれた。恒を失ってしまったら、何に縋って生きてゆけばよいのか分からない。

『あなたを失いたくないのです』

恒が止めなければ、悪魔からの囁き声に心を奪われてしまうところだった。彼女はただ恒に縋りついたまま、背中一面覆われた黄金のスティグマを恒の前でだけはあらわにしたまま、頼りなげな細い身体を震わせていた。

第2節 第3話 極戒嚴綬縛、久遠柩

彼女もまた二年半もの間、暗い独房に監禁されていた。

細く華奢な両手首は、ルシファアが特別にあつらえられた頑強な枷で戒められ、長らく動かせない。

ルシファアの宣言通り、彼女は毎日十分な栄養を点滴で与えられ身の回りの世話をやかれ、植物のように生かされていた。

ただ一つ彼女にとって救いだった事といえば、全身を癌化させていたルシファアは遺伝子に変異が蓄積し、既に生殖能力を失っていたのだ。

それでも彼は、既に溶けてしまった脳が本能的にそう強いるのか、アルシエルに病的なまでに執着していた。ルシファアの狂気は日を追うごとに深まり、日々、彼ではない怪物となり果ててゆくのが分かった。長きにわたりABYSSに君臨した解階の女皇がその座を追われたばかりでなく、もはや解階の民ですらない怪物に奴隷として飼育される日々は醒めない悪夢のよう……。

彼女の誇りにかけて何度となく自殺を図れども、皮下に埋め込まれた自殺防止用のチップにより24時間体制で監視され、それらの試みは一度も成功したことはなく今日に至っている。解階の住民の寿命は気が遠くなるほど長い、狂人に生かされている限り、殺されなくとも死ぬことはないだろう。

“この世界にもし救いと善意があるなら、今こそ命を閉じてほしい”

アルシエルは、毎夜のようにただ祈ることしかできなかった。

この独房には、外の景色がフレームに入る大きな窓がある。ルシファアがアルシエルの無力と絶望を増幅させるため。

あるいは彼女に籠の中の鳥だと認識させるため、敢えて外界と繋がる窓を開けさせた。

冷えた外の気配と夜風を目と鼻の先に感じながら、アルシエルはひとり鎖に繋がれている。

死を願い、流星に祈りを捧げて幾つの夜を過ごしたか。

「いつまで余をいたぶるのだ……」

アルシエルの呟きを嘲笑うかのように遠くで、星が瞬いている。快晴の夜空が澄み切ってこんなに星が美しく輝く夜には、どこへか祈りが届くような気がした。彼女には祈る者などない。だがそうせずにはいられなかった。

そのときである。幽き光の屑が落ちてきたように、干からびた彼女の右腕に、ぽつんと小さな明りが宿った。

解階には生物階でいうところのホタルや夜光虫のように、黄金に発光するVITAビタという小さな蟲がいる。

彼女は彼女の腕に止まった思いがけない深夜の来訪者に驚き、ほっと口元をほころばせた。

VITAはABYSSの春の到来を告げ、吉兆を運ぶ蟲として知られているのだ。

「こんなところに来たのか。……あいにく相手はできぬが、ゆるり翅を休めてゆけ」

彼女は彼女の小指の先ほどしかない、小さなVITAに束の間の癒しを与えられたように感じた。

異変に気づいたのは、VITAと思しき蟲に注目したその時だ。

その小さな虫は、アルシエルが思っていたVITAではなかった。豆粒のような黄金の光の塊がふわりと、アルシエルの右腕に降りている。その光を基点として、つう……と蜘蛛の糸が張られるように、あるいは触手が伸びるようにアルシエルの右腕の、皮膚の下を光の細糸が侵食してゆく。彼女は啞然とするばかり。

何が起こっているのか見当もつかない。

この上なく不気味な現象が自分の身に降りかかっているというのに……彼女は不思議と恐怖を感じなかった。

彼女の中に柔らかく浸透して根を張る、心地よく懐かしい。この温かさは、いつか生物階で感慨深く目にした夕陽のそれに似ていまいか。

もう何千年も昔の話だ。でも覚えてはいる。

彼女の皮膚の下を縦横無尽に走る光の輝線から、アルシエルの失われた力が漲ってくる。その光の造形が完成に近づいた時……首は固定されて殆ど動かせないが、それがどんな形をしているかは視界に捉えている。彼女驚きに目を見開いた。アルシエルの目にはその複雑な紋様が、装飾された黄金の同心円状のリングのように見えたからだ。

「此は……」

アルシエルはその形に心当たりがある……これは“存在確率の鍵”、ジーザスは確かそう言っていたと思う。

絶対不及者が背中に宿す聖痕と同じ形状ではなからうか。

間違いない。

アルシエルはまだジーザスが極陽であった頃に、対INVISIBLE対策協議会の席で“存在確率の鍵”と呼ばれるステイグマの模写画を見た。模写画は何万年も前のものなのでボロボロになって絵の具も剥落し、色彩も定かではなかったが、どう見ても酷似している。

だが、全てそうだとは信じられなかった。存在確率の鍵は、“鍵”と“鍵穴”と呼ばれるシンメトリカルで抽象的な紋様から成っている。それを思い返すとアルシエルの腕に宿ったのは“鍵”の部分だけだということになる。鍵と鍵穴は対を成していて、この二つが揃わないとINVISIBLEは収束せず、通常それが現れるのは背であって腕ではない。そして何よりも不自然なのは、絶対不及者の器は男神のみとされているが、アルシエルは神でも何でもないのだ……。そうはいっても、絶対不及者の器となった神は過去にたった二柱しかない。

初代は時空神 セト

いま一柱は智神 セウル。

たった二柱……少ない先例ではあるのだが――。

ドクン……、

アルシエルの疑問を置き去りにしたまま、ステイグマが強く脈打つ。創世者INVISIBLEがステイグマをポートとしてアルシエルに力を与えている。

創世者の天啓は感じられない。

ただ、形の定まらない根源的な原始の力を授けられる。アルシエルは信じられなかったが、アルシエルの内奥に一個の生物が擁すことの出来る許容量を上回るエネルギーが沸きあがり蓄積されつつある、

それも無尽蔵に……。

うまく喩えられないが、無限の溶炉から惜しみなく噴き上がる熱い力……それがこれ。

「INVISIBLEか……？」

INVISIBLEは、何をして欲しいのだろう。

アルシエルに天啓は与えられていない。与えられた力で何をするか、漲る暴力をどう使うかはアルシエルが決めてよいのか？

「信じ難い……しかし……」

INVISIBLEの意図は知らないが、千載一遇のチャンスではある。

意思なき創世者の、気まぐれ。

そもそも語りかけなどないのかもしれない。アルシエルは聖痕の力の宿った右腕で、堅く戒められていた枷を難無く引きちぎった。今なら、出来るかもしれない……彼女は確信する。この力を得た今ならツールを用いずとも、ルシファーとメファイストフェレスを滅ぼせるかもしれない。何故ならINVISIBLEは最上格にして最大の創世者であり、所有するエネルギーも質量も情報量も最大だ。INVISIBLEの加護を受けた今なら、実体に収束し力を失っている時計職人に遅れをとりはしないだろう。

アルシエルは外界、現在のABYSSがどうなっているのかを知らない。

メファイストフェレスの君臨する傀儡帝国が如何な為政を行っているのかも。だが……時計職人に自我を奪われ屍となったメファイ

ストの心は泣いていよう。

アルシエルには叫び声が聞こえるような気がする。アルシエルと血の繋がった彼女の魂を、彼女の手でブラインド・ウォッチメイカーから解放してやらなければ。そしてABYSSをブラインド・ウォッチメイカーから開放し自由を取り戻す、それがINVISIBLEの意味に反しようと、INVISIBLEの意味に遵う事になるうと……。

これが偶然だというのなら、大した偶然だ。INVISIBLEがブラインド・ウォッチメイカーの掃討をアルシエルに託したのだとしか解釈できない。

「恩に、きるぞ……」

アルシエルは歯を食いしばり、やつれた表情を引き締める。

独房の鉄格子に触れると、彼女の熱に触れずりと格子が溶け落ちる。彼女はいとも簡単に牢を破ると、先ずはルシファアの気配を追って一歩ずつ、石造りの螺旋階段を踏みしめながら城の最上階を目指す。

時は深夜、ルシファアの気配は一点に止まり動かない。就寝中のようにだ。アルシエルはドアの取っ手に手をかけると、音もなく静かに扉を開く。

ルシファアは二人の妾を侍らせて熟睡中だ。取り巻きの妾達がアルシエルの侵入に気付き悲鳴を上げかけたところを、アルシエルに口を驚掴みに押さえられた。

「黙っているのがよいか、それとも」

「永遠に黙るのがよいか」

彼女が脅すと女達は首を振り、失禁して濡れた下半身も隠さず裸のまま走って逃げ去ってゆく。アルシエルは強く拳を握り、取り残されひとり熟睡するルシファアの頸をそっと掴んで羽根のように柔らかに触れ、爪を立てて握り潰す。

肉が碎かれ形容しがたい鈍い音がした。

ルシファアは機械的に覚醒し、アルシエルが全身で乗り掛かっているのを認めるや、無駄だといわんばかりに嘲笑う。

そう……ルシファアには急所がない、それはアルシエルが二年半前に身をもって知っていた。頸を握り潰したところで、心臓や脳を穿ったところで、癌化した彼の肉体は基本的には死ぬことはない。だが、ルシファアは大きな誤算をした。彼女が掴んだ部分から聖痕が溶鉄となってルシファアの内部に流れ込み、彼の身体を溶かしてゆく……。

逃れる事は出来なかった。

ガアッ！……グキヤア！

この世のものとは思えない穢らわしい断末魔を残し、それらは次第に機械的な音声となって、ルシファアはINVISIBLEの熱源に触れ破壊され残さず消滅した。

彼女は虚しくベッドの上にぶちまけられた死灰をザラリと踏み潰す。

「汝はもう、死んでいたのだ」

燃え上がるベッドを背に、光り輝く聖痕が闇夜の中でぎらぎらと燃えている。彼女は壁に掛けてあった巨大なサーベルで、捕囚となった時から一度も鋏を入れず長く伸び放題だった髪を切り落とし、

唇をきつく結んだ。

そう、次はメファイストフェレスの番だ。

＊

時間凝結の礫を受け流し、少年神は俊足で球形闘技場を縦横無尽に駆け抜ける。

神速で印を組み、メタフィジカルキューブのブロックを崩し、4つの円環を一柱の神に掲げる。

崩されたキューブのブロックで構成された4つの環の測距儀によってギリギリと座標を絞り、夜刈にオートロックオン。

藤堂 恒が狙いをすませているのは陰階神第7位、時間を司る神ウーラックロニクラ（U h r a C h r o n i c l e r）、置換名

よかり

つとむ

夜刈 伝、生来の武型神（A A）だ。恒は新主神である比企のお抱えのアカデミー特待生として陰陽階に広く認知される傍ら、こういう試合という名を借りた非公式の手合わせを申し込まれることが多くなった。他者と関わることを極度に嫌う比企が気に入って手放さない、鳴り物入りの少年の真価を知りたいのだろう。恒はどんな手ごわい相手が申し込んできても、断らないように比企に教育されていた為に、必然的に恒の実力を見極めようと挑んでくる物好きな位神との手合せも増えた。

夜刈と恒の間ではかなり実力に開きがあるので、神具の奥義を使用せず致命傷を与える攻撃を与えないという縛りのもとで対戦している。

こちらから申し込んでおいて恒に怪我をさせようものなら、比企から大目玉をくらう。

夜刈は手加減して適当に様子を見る……つもりだった。しかし大

人げなくも、全く手加減というわけにいかなくなってしまった。

「The sacrament machinery data no match……searching, searching!」

夜刈の眼鏡に仕込まれたバトルアナライザーが、緑の蛍光色で神具のデータ不一致を告げている。少年神の扱う神具を、AA神、いわば戦闘のプロである夜刈が特定できない。

ここ数千年間、他神の手に渡ったり出回っていないレアな神具のようだ。

“The boundaries of the Ptolemaic system break down……!”

(天動界崩落……!)

恒は仏法印でいうところの智拳印にも似た印を組み、するりと日輪印に転じた。アトモスフィアによって練成された暁色の波動を纏った両手を夜刈に向けて真っすぐに突き出す。ヒイイ、と恒の掌に精錬されたアトモスフィアの純度が高まり純白となって、音を立てて凝縮されてゆく。日本由来の神の証である和装、作務衣のような装束を纏っているせいか、恒はブロックを粘土のように変幻自在に操る陶芸家さながら。

恒は相手の戦術に応じて距離をとり、接近戦を避けるべき相手には決して近寄らない。つまり、夜刈のことだ。さらに、夜刈からの絞らせないように瞬間移動を繰り返して一瞬も同じ場所に留まらず、感情を昂ぶらせず移動の際のアトモスフィアを完全に消している。

誰に似たのだかね……比企と荻号の性質を兼ね備えた挙動だとも評価できる。

無駄のない身のこなしと柔軟な戦術は、とても12歳の少年神のそれだとは信じがたい。夜刈は少年の見た予想外のポテンシャルに興奮のあまり、ぞくぞくと鳥肌を立てた。

“Meteor shower of celestial gl
obes!”

（全天球流星群！）

恒は更に瞬間移動を繰り返し、夜刈の視界から消えたかと思うと、夜刈の背後から神具発動のコマンドを完成させた。

紫電の閃光が流星となって全方位から夜刈を襲う。恒の持つ神具には、誰の力を借りたのか無限のアトモスフィアが充填されている。したがって恒の繰り出す攻撃は尽きず、恒のアトモスフィアも尽きない。いかに夜刈といえど、放たれた光の矢は撃ち落せるだけの数ではない。そして驚くべきは、矢に追尾機能が搭載されており、どう逃げてでも必ず夜刈に当たるように設定されている。

夜刈は目を見張り、先ほどもでのんきに吸っていた煙草をかなぐり捨て、防御を余儀なくされた。彼は懷中時計型神具ORACLEの5つの針を指先で操って回し、12時と4分に合わせて恒に向ける。

ギン、と金属音が響きわたり、文字盤が碧く発光する。

“ORACLE XII… Perfect Guardian
No, 4—The Emperor”

（託宣者XII…完全なる守護者No, 4—皇帝）

時計型神具、オラクルはそれを基点に青いゼリーのような被膜を創り出し、膜に触れたものの時間を止める。オラクルの文字盤の1

2時台は、秒針がタロットの大アルカナのカードになぞらえてある。皇帝を示すカードは堅固さ・防御を示しているものだ。恒は知っていたが、構わずそのまま予定していた攻撃を加えた。恒が腕を振ると満天の星空から降り注ぐ純白の流星群が光の弾幕となって降り注ぐ、しかしそれらはすぐにオラクルの防護壁に吸収されてゆく。渾身の攻撃を無効化され、啞然としている……夜刈がそう思った瞬間、少年の口角がきゅっと僅かに上がった。

「な……?!……」

空中で応戦していた夜刈が体勢を立て直すために地に足をついた瞬間、舞台に敷かれていた黄金の方陣が可視化されてホウツと浮かび上がり、夜刈の足を亜空間に捕捉する。恒は派手な攻撃で目を眩ませ陰にひそませて、見えないように舞台にトラップを打っていたのだ。夜刈のすぐ傍で、跳躍して真逆さまになった恒の透き通った声が聞こえた。

“The Venom of the Burned Phoenix
ix”

（焼灼された鳳凰の怨淵）

「うそだろ……」

トブン、と舞台から怪音が聞こえた。

底なし沼に囚われ、夜刈の足がずるずると亜空間に沈んでゆく。恒は夜刈の肩を蹴って踏み台にし、方陣の外に降り立った。舞台の縁で踊るように踏まれた恒のステップによって、方陣の回路を遮断して堰の役割を果たしていたブロックが外され、方陣の直流回路が繋がり完成へと近づいてゆく。夜刈は飛び上がろうとしても、方陣の光が夜刈の足に絡みついて離れない。恒は準備を整えると、大き

く跳躍して闘技場の天頂を蹴り、上空からメタフィジカルキューブを驚掴みにしたまま身動きの取れない夜刈の上に降りかかってくる。鉄壁の守護壁ガーディアンを持つ夜刈だが、恒に擁くこの得体の知れない感覚は何だろう……夜刈が枢軸となってより長い間忘れていたこれは、戦慄だ。

“Destruction of seals! Area 22
3pir, Countdown 3, 2, 1……”

(封印破棄、領域223pir、カウント3、2、1)

恒は硬質の粉碎音とともに右手を捻って更にキューブを崩し、3mm角にまでキューブの解像度を上げる。バラバラとブロックが恒の指の隙間から零れおち、砂時計の砂となって夜刈を封じた領域を被覆してゆく。恒は身をひるがえして闘技場の壁を蹴り渡り、右手で3、2、1と指でカウントを取りながら夜刈の動きを封じ、左手でブロックを流砂のようにサラサラと弄び、更なるコマンドを命ずる。

“The Death of Physics”
(物理学の永逝)

キイン、と方陣をかたどる様に円柱の閃光が噴き上がる。それと共に夜刈のパーフェクトガーディアン(守護壁)が無効化され、青いゼリー状の絶対防護壁が恒の結界に焼き尽くされ、砂となって蒸発してゆく。物理学が相対性に基づく限り、形而上学は物理学に勝る。夜刈はこの少年から、そんな事を教えられているような気がした。それは夜刈が荻号に勝てない理由として、常々荻号に指摘されていたこと。

彼は荻号の影を備え、比企のように冷静沈着に次々と戦術を編み出す。藤堂 恒の実力はあらかた分かった、これ以上続けてしまえ

ば、夜刈は本気を出してしまいかねない。

夜刈は困惑したように両手を挙げ、降参の意図を示した。神々の試合にはルールがあり、どちらか一方が神具から手を放して手を挙げた場合は降参とみなし、試合は即座に打ち切らなければならない。

「降参だ。ここまでにしよう」

「まだ、時間となっておりますが」

恒は夜刈が実力で負かされたのではなく、もとより恒の様子見が目的だったと分かっている。もう少し付き合ってくれてもいいだろうに……と、恒は不満だ。

夜刈にはまだ充分に余力があると分かりきっている。恒に危害を加える攻撃を控え、明らかに生ぬるい攻撃ばかりだった。夜刈は相手に手加減をしてくれていた。夜刈がもう少し戦闘を続けてくれたら、胸を借りるつもりで存分に連携業を打ち込んでゆけたのに。そしてその連携も既に考えていた。

本来は位神でも陰階枢軸のAA神など、なかなか相手にしてもらえないものではない。

恒は少し残念そうな顔を隠しながら試合終了を受けて手印を組んで業を解除すると、枢軸に敬意を表して深々と礼をした。

「比企……いや、極陽が君を手元に置きたがる理由がよく分かった。こんなに変幻自在の攻撃を受けた試合は久しぶりだよ」

「おそれいます」

時間を操る賢神、夜刈は聡明で物静かな陰階神だ。茶色の短髪に、個性的なデザインの革のジャンパーを羽織り、アクセサリーをじゃらじゃら、大きなグラスをかけているので最初は取っ付きにくかつ

だが、見た目に反して穏やかな好青年で言葉遣いも陰階神にしてはそれほど崩れていないので、恒は親しみやすい。恒に興味を持って何度か面会に来たが、対戦したのは初めてだ。

彼はヘビースモーカーらしくライターを放り投げ、さっそく一服はじめる。全階禁煙の陽階とは異なり、禁煙を強いられない陰階神には概してヘビースモーカーが多い。夜刈しかり、織図しかり、医神である紺上もしかりだ。神々は喫煙をしても病氣などしないが、人間でもある恒は煙がやはり苦手だ。とはいえ、煙たい顔をすることも出来ない。

「ところで何故、無茶な試合の申し出を受け続けるんだ？ 何のために若いうちから武者修行をしている。怪我のリスクもあるぞ。見たところ傷だらけだ。怪我をすると容姿を損ねる、位神となるなら不利だろうに」

人々の信仰の対象となる陽階神はスタイルとともに、容姿を美しく維持する事も仕事の一部だった。

そんな事は恒も知っている。が、恒の腕には反省の色もなく生傷がたえない。恒はあと半年後を無事にやり過ごした後に待っているであろう、陽階神としての未来など考えられない。

恒は傷だらけの拳を握りしめた。

「……まず、これを修行だとは思っていません。もっと強くなりたいのです」

恒が戦闘の中で食欲に身につけなければならぬものは、実際には強さではない。

身の危険が迫った時に繰り出す瞬間の閃きであり、アイデアの蓄積だ。引き出しにアイデアを入れる。千手を読み、対処方法を瞬時に組み立てるセンスは戦闘の中でこそ培われるもの。バトルマスタ

ーになる事が目的ではない。したがって、恒は一度も腕力で戦った事はなかった。

「向上心があるんだな。昨今の陽階神の中では好感が持てる。ところで君の持つその神具は何だ？」

「FC2—Metaphysical Cubeです」

バトルマニアである夜刈はひと一倍、神具に興味がある。

恒の持つ神具は原型が崩されていて判別がつかなかった。無論恒が神具の性能を悟らせないため意図的にそうしていた。情報を相手に与えない、それが些細な情報であったとしても……これは戦術の基本だ。

「なるほど、あれか。見るのは初めてだが、先代極陽のお持ちだった神具のプロトタイプか改造型ということかな」

夜刈は手帳を見ながら、合点がいったと頷いた。

「プロトタイプです。数年前に、荻号様から拝領しました」

夜刈はそれを聞き、ひどく驚いたようだった。よりにもよって荻号 要が誰かに、何かを与える事があるとは。まして、少年神には扱いの難しい神具を与えるなど前例がない。アカデミーに所属するトップエリート少年、少女神でも神具は持たせてもらえない。位神のみが持つからこそ、神具を所持する事はステータスシンボルとなる。だが、非位神が神具を持つてはならないという法律はない。

ただ、それらがあまりに貴重であるが故に位神から非位神への譲渡がなされないだけだ。相転星を持っていた荻号に他の神具が必要とも思えないが、徒に子供に持たせてはいけない。

やはり比企のみならず荻号から見ても、藤堂 恒には何か光るものがあったのだろう……。

「藤堂」

夜刈が恒に呼びかけようとした時、幕が落ちるように恒と夜刈のいた闘技場が消え失せ、エコーがかった声で何者かが恒を呼んだ。闘技場として使用していた亜空間の構成プログラムを解除されたので外部の声が聞こえるのだ。抑揚のない、平坦で落ち着いた声が恒を呼んでいる。聞きなれた声。

視覚解除された現実空間に姿を現したのは和装の聖衣を纏い、二本の蒼いアトモスフィア吸収環に戒められた青年神……彼こそが極陽（主神）、創造神 比企 寛三郎である。三柱の神々が同じ場所に集うと、場を最も強大な比企のアトモスフィアで均される。

恒は初めて見る主神としての彼の荘厳な姿に息を止める。隆々と筋肉の添えられた腕には三つの職を経験した証拠である三つの御璽がある。位神がその職を廃し職を変える場合、以前の御璽に廃印を穿ち、新たな御璽をその下に記す。御璽が一本の腕に収まらなければ一本の腕に移る。今、比企の腕にあるのは葉神の御璽、葉師反やくしたん、立法神の御璽、籐玉璽とうのぎよくじ、最も新しいものが創造神の白金色の御璽、至宙儀しちゆうぎだ。

比企の腕は黄金の刺青、特にひときわ明るいプラチナ色の至宙儀によって輝いて見える。また、比企は極陽となって白を基調とした装飾性の高い聖衣を纏うようになったが、その装束は天照大神の形見を仕立て直したものだ。頭の前からつま先まで全身純白の装束である為か、以前にも増して恒は彼に威厳を感じる。

「これはこれは、極陽」

比企より年上の夜刈といえど、極位には礼を尽くさなければならなかった。夜刈は玉座を離れた極位神を見慣れないものだが、したたかな比企はヴィブレースミスが極陽であった頃から、極位となっ

ても玉座に拘束されないよう法制を変えていた。有職故実は神々の権威を守るため必要だと考えているようだが、意味のない慣習は徹底的に崩す、それが保守的であり急進的とも言われる比企の考え方だ。先代の代に、極位神の玉座離れを議会に諮って可決させたのは比企だった。よって、比企が主神の玉座に在るのは午前中だけで、午後からは玉座を離れてもよい。比企は執務室に戻るついでに、枢軸神と試合った恒を心配して迎えに来たのだった。

「藤堂君はなよい腕を持っている。あなたが直々にお鍛えに？」

「いや、己は一度も鍛えた事はない。帰るぞ、藤堂」

「は、はい。では、夜刈様、有難うございました」

比企は、夜刈には全く興味が無いといった様子で、ずんずん踵を返して去っていった。

夜刈は比企がまだ陰階神だった頃から、比企の才能を認め比企に注目していた。というのは、夜刈も何度も萩号に弟子入りを申し込んだが、萩号は夜刈の申し出を断り続けた。その萩号が唯一、直弟子として認めた若き天才……それが比企だ。萩号と比企が師弟関係を結んで以来、比企が師弟関係を一方的に破棄しても尚、夜刈は比企に対して、鬱々とした嫉妬心のようなものを擁き続けている。何故比企だけが、特別だったのかと――。二度目の位申戦にして難なく極位を勝ち取った比企に元々才能があったのか、それとも萩号の教育を受けてこそその結果なのか。夜刈は後者であった場合の可能性に執着している。萩号の教育さえ受けていればあるいは、極位となるべきは夜刈だったのではないかと。

しかし萩号のみならず比企も、夜刈に見向きもしないようだ。

恒だけは比企の無愛想な態度と真逆で礼儀正しく、手合わせの礼を述べて低く頭を下げて去った。比企の息がかかっている少年神ながら、夜刈は好感が持てた。

「藤堂を責任を持って育ててやれよ、……比企、このクソ野郎が」

＊

「怪我をせなんだかの」

比企が気にするのはそれだ。申し込まれた手合わせを断るなど命じるからには、比企は恒の負傷を責任もって癒してきた。それでも恒の生傷が絶えないのは、恒の身体に人間の性質が色濃く出ているからだ。恒は他の神々と比べ、治癒血を持つ神ほど遅くはないが、回復力に乏しい。今日は枢軸神との試合だったので負傷もしていうと心配し、比企は迎えに来たのだ。だが恒は比企の予想に反して、ぴんしゃんしていた。

「今日は大丈夫です」

比企はツカツカと歩いて執務室に戻りながら、ふと夜刈を氣遣った。

「では夜刈は？」

比企が戦闘後、恒ではなく相手の負傷の程度を尋ねたのは初めてだ。

以前は他神のダメージを氣遣っている余裕などないほど、恒がダメージを被っていたし戦果はいつもきまっていたから。

「……俺の真空刃で太腿と腰部に負傷をされました。裂傷です」

夜刈には専属の御殿医の使徒がいる。

怪我は気にするなど、恒には言ってくれたが……。比企はそれを耳に入れ、悩ましげに眉間の間を指で押さえた。

「あまり激しく撃ち合うな。お前は手加減なしで他神と手合わせをしてよいレベルではなくなった」

恒があまり手加減なくやり合うと、相手の本気に火をつけてしまう。そうなつては恒に命の危険が及ぶと、比企は懸念していた。たとえば、今日は穏やかな夜刈だったからまだよい。その相手が喧嘩っ早い梶だったら、逆上が得意な極陰だったら？ 一度奥義を受けただけで木端微塵だ。

「……はい」

恒は厳命され、しゅんとして頷く。

比企は恒に対して決して怒鳴ったり感情を露にしないが、物静かに語る言葉は厳しい。

「手合わせからは戦術を学ぶだけでよい。どうしても本気が出しないならば己が相手となる。他神を相手に本気を出すな」

恒はその言葉を聞いて耳を疑った。

「主神は、戦つてはいけないのでは」

「神法のどこに、それと規定する項目がある。……父親の仇も討ちたかろうて」

比企は心なしに後ろめたそうに、視線を伏せたように覗えた。

「そんな、仇だなんて……。あなたは父を生かそうとして下さいました。あの結末は、父が決めたことです」

「だが、己が位申せねばヴィブレイスミスが自害する事はなかった」
恒は何も言い返せなかった。比企はきつと、ヴィブレイスミスに死に追いつめた事実を正面から受け止めたいと思っている。恒は比

企に憎しみを擁いた事はない。比企は全力で恒を、そしてレイアを創世者から守り続けてくれた。

恒を連れて創造神の執務室に戻った比企に、寧々が待っていたかのように梅こぶ茶を出す。寧々は恒の分も煎れたので、恒もありがたくいただいた。比企と恒、使徒たちは創造神の執務室に引越をしたばかりだ。寧々はもうすっかりきれいに部屋を片づけ、立法神だった時と同じ間取りにして違和感を軽減している。観葉植物や鑑賞魚をセンスよく配置して、いつも清掃は行き届いている、快適な部屋だ。

「健闘の後だというのに、浮かない顔をしておるの」

「レイアのステイグマが、彼女に語りかけをはじめたそうなんです」

恒はレイアの状態を比企に隠していようと決めていたが、思い切って打ち明ける。比企はふむ、と重い溜息をつき、額を指で押さえた。

「さようか……。森羅万象、一事が万事、物事には兆しはある。因があつて果が成るように、前兆なくしてINVISIBLE収束は成らぬ」

「……！」

「きよくかいげんじゅばく極戒厳綬縛、くおんきゆう“久遠枢”を発動し、INVISIBLEのレイアへの干渉を遮断する」

比企はかつて絶対不及者を封じた極戒厳綬縛を発動すると言っているのだ。

極戒厳綬縛は、強いアトモスフィアを持つ12柱の神々によって執り行われる神階の秘奥義……。恒もその項目についてADAMで調

べた事があるが、口伝によって伝えられるものらしく、A D A Mの書籍には記載されていなかった。神階の技術力の粹を集めて発案され、絶対不及者を一年間にわたり拘束せしめた。……それを不死身とはいえただの女神の子供と変わらないレイアに施そうとしている。創世者の力を諫める為だけに開発された術であり、もとより被術者の負担など考えられてもいない。ましてや、その苦痛や副作用など想定されてもいない。

彼女の身はどうなるのだろうか？

「そんな……彼女はまだ絶対不及者ではありません。それは」
「前兆を封ずれば、彼女を助く事ができるやもしれん」

比企は苦々しく呟く。

比企の発想はつまりこうだ、地震でいうところの初期振動を抑え、本震そのものを食い止める。絶対不及者を一時的に拘束する術はある、それを収束前のレイアに対してかけてしまう。発想としては同意できるが、生身の少女神に対して施術するとなると同意できない。

「“久遠枢”の準備には暫くかかる。月が一度満ち欠ける間、レイアに自由を与えよう」

比企はテーブル越しに、小さな鍵を放り投げた。

彼女を戒めている足枷の鍵だ。彼女を真空の箱から自由にする……比企が彼女に一度も許さなかった自由を与える……！

彼女にとってはまたとない朗報だ。彼女が極戒厳綬縛に封じられるという未来さえ訪れなければ。恒は鍵を受取りながらも、話を飲み込めないでいる。

「自由に、とは？」

「どこへでも連れて行くが良からう。“久遠枢”は絶対不及者の器

となる者に極限の苦しみを強いる、苦痛に耐えうる精神力は修行によってのみ身につくものではない。彼女に思い出を作ってやるがいい。幸福な、よい思い出をな」

極戒嚴綬縛を発動する前に、無愛想な比企が彼女に少しでもよい思い出を残してやりたいと配慮しなければならぬほどの……：……：それほどの苦痛が、彼女を待っているのだろうか。恒は鍵を握りしめながら、やりきれなくなった。彼女の自由は、ほんの束の間のものでしかないのだろうか。

「必ずレイアを連れて戻って来い。戻って来なくても同じだ、連れ戻す」

比企はレイアを逃すつもりはなさそうだった。

第2節 第4話 神階・特務省への初登省

年の暮れも押し迫る、凍てつくような土曜日の朝。

吉川 皐月は霜を踏みしめながら、雪の舞いはじめた明海大附属中学校のグラウンドを訪れた。

そこには、ランニングを終えて仲間たちとベンチに腰を下ろしている豊迫 巧の姿がある。巧は皐月の懸命な受験指導によって難関、明海大附属中学校に見事合格を果たし、現在は念願であったソフトボール部に入部し、既にレギュラーとして活躍している。ソフトボール部伝統の、いがぐり頭になっていた。

何もかもよいこと尽くし、という訳ではなかった。

転勤族の巧の父親は大阪に転勤が決まってしまう、巧はひとりで下宿生活を送ることとなって寂しい思いをしている。皐月は一人暮らしの巧が心配で、時々様子を見に行っている。中学生になって皐月の受け持ちではなくなってしまったとはいえ、彼は今でも皐月の大切な教え子だ。今日も彼女はソフトボール部の全員にホットミルクティーとクッキーの差し入れを持ってきた。部員たちの息が朝のグラウンドに白く立ち上っている。

「皐月ちゃん、いつもありがと。あれ、髪切ってパーマかけたー？」

皐月はふわりと緩やかなウェーブを散らせた。彼女はカーキ色のセーターを着こんで白いマフラーを巻いている。行きつけの市内の美容院に行って、ロングにしていた髪の毛をセミロングにして大きなロットのパーマをかけた。それを巧に指摘され、照れくさそうだ。

「うん、昨日ね。雪が降るのに頑張ってるのね。元気そうじゃない」「頑張ってるんよー、来年も明海は全国行くかんね」

「まだ、来年なのに……」

気が早いな、と皐月は苦笑する。

「来年焦ってたんじゃ、間に合わないかんね」

巧は雪空の灰色に負けないほど、明るく朗らかに笑う。明海はソフトボールの名門校で、毎年のように全国大会に出場している、そして来年も出場する予定だ。彼は一人暮らしであることを除けば、好きなソフトボールに打ち込める環境にあって、最高に充実していた。

「風岳の皆、どうしてる？」

「相変わらずよー」

「そういえば先生、恒と会った？」

彼は恒を気遣う事を忘れていなかった。

巧は無二の親友と自覚する恒と、携帯メールで連絡を取り合ってた近況を報告しあっていた。恒は返事を返したが、彼の話題はいつも淡泊だった。特に何もないといつも彼が言う割に、巧が大した出来事だと思ったのは今年の夏に体操の大会で県一位になった事だ。

彼とメールをやり取りしていても何の出来事もないらしく、部活に打ち込んでいる様子もなく、母親の話題もなく、友達と遊んでいる様子もなく、とにかく生活感がなかった。小学生のときにあれほど仲の良かった友達の話なども、ほとんど話題にのぼらなくなってしまった。最近は遊んでいないのだろうな、と巧は寂しく思う。

恒はまた、以前そうだったように大切な何かを隠している。巧はそう確信している。

「うーん、しばらく会ってないわ。石沢さんはよく遊びにきてくれるんだけどね」

それは皐月も同じで、寂しいものだった。

恒が殆どの彼の生活を犠牲にして、何をしているのかは知っていた。恒は神としての修行を優先するあまり、人々と接する機会が極端に少なくなった。石沢は荻号の家に寄るそのついでに、近所の皐月の家に寄ってくれることもあった。だが恒はすぐに神階に戻ってしまつて、あまりゆっくり話をしている時間はないようだ。

「そっか……恒は大丈夫かな」

「……大丈夫、って？」

「この前、風岳村にしばらくぶりに行つて、皆には会えたんだけど恒だけいなくて。で、恒のカアチャンの店に行ったら森にいるかもしれないって言われて、森を捜してたんだ」

「森？」

「そう、風岳神社の裏のね。そしたら真冬なのに森の泉の中に恒がいて……。お祈りするみたいに手を組んでじっとしてんだ。俺、何かちょっとひいちゃって……。でも、声をかけようとしたらもういなかったんだ。何してたんだろ？ あいつ変な奴だったけど、何てかあそこまで変じゃなかったし。どんどん変になつてるような……」

恒は風岳村の深い森の奥で、ひとり瞑想をしていることがある。

それも修行の一環なのだろうが、真冬の雪の中で修練をする恒の姿を初めて見た巧は驚いたのだろう。確かに、修行僧ではあるまいし、まだ中学生がそんな事をしていたら驚きもする。巧の心配ももっともだった。恒は何か怪しい宗教に入ってしまったのではないかと。

しかしそうやって修行を積むからには、皐月の目にも分かるほど彼の能力は高まっているようにも見えた。三か月前の夜、偶然に志帆梨の店の前で恒に会ったとき、彼の周囲にはうっすらと紫色の後光が見えてはっとした。彼と言葉を交わすと、その物言いも語調も、何というか同じ年ごろの少年とは違って落ち着いて優しかった。

彼は少しずつしかし着実に、少年神から青年神へと成長しつつある。

彼が大人となる頃には、彼に向って自然と手を合わせたい気持ちになるかもしれない。皐月には変わらず親しく話しかけてくれたが、その時、彼はもう人間ではなく神なのだと、はっきりと分った。そして皐月を感じるその思いは、恒が成長してゆくにつれ強まってゆくだろう。恒が神だと知らない巧は、恒の変化に気付かず、恒との距離に取り残されて戸惑っている。

「何か悩んでるんなら、言ってくれたらいいのに。あいつ、いつも隠すんだもんな」

巧は心底、彼を気遣っているようだった。

「大丈夫よ……藤堂君は、帰ってきてくれるわ。もうすぐ……」

「え？　今はどこに行ってるの？」

「近くて遠いところかな」

ロケットを月や木星まで飛ばせる人類が手を伸ばせば届きそうで、人類には決して届かない場所。

神階、神々の世界。

恒ははるか高みと地上の世界を往来しながら、人々の未来を守りたいと願っている。

恒の優しさに応えられない。

小さな人間として生きるしかない皐月。だから少しでも、彼の力になりたい、辛い事は吐き出して欲しいと思う。しかし、もう皐月では役不足なのかもしれない。

「皐月っちゃん、何いっちゃってんの？」

恒は計り知れない重みを小さな背に負って、半年後の大災厄に向けて着々と自身を鍛え備えつつあるのだと思う。

皐月はそんな時だからこそ、恒に会いたかった。皐月は二年半前に、何か大切なものを失ってしまったように感じている、それ以来心にぽっかりと穴が空いて、空しくて、苦しいのだ。

恒もまた、埋められない同じ穴を持っているのではないか。

それが何か分からないまま、満たされない心を何かで埋めるために、彼はがむしゃらに修行を続けているのではないだろうか。

皐月はそんな気がしてならなかった。

＊

恒はしばらく旅に出るので学校を休むと、志帆梨に連絡しておいた。

彼女の為に一ヶ月間欠席するつもりで、既に中学校の担任には事情を話していた。

家庭の事情ではない都合で休むというので、教科書を自分で予習し、100ページのレポートを提出するという条件で許可を得ている。彼は中学生になってから一日も学校を休んだことがなく、出席は足りている。

一か月ばかり休んだところでどうということもない。どうということもない、わけではないが、即留年という出席日数ではない。内申点は既に上限に達して不動のものとなっているし中間、期末テストも100点以外取ったことがない。よい成績を取ることにこだわりなどないが、恒の身を案じる志帆梨を安心させる為に必要だった。せめて義務教育期間ぐらいはまともな成績で、まともに卒業をした

いと考えていた。

もっとも、卒業まで命があるかどうかからないという時に、卒業できるかなど分ったものではないが……。

恒はレイアの為に生物階における全ての段取りを整えて、レイアの元に戻った。

『頑張ってたんだな……』

恒は頑強なガラス函の中に転移し、くたびれて眠っていた彼女を見下ろした。繊細な彼女は恒の気配に気付き、ぼんやりと目を覚ます。身体を起こそうとして恒に押さえられる。彼女の神体はいつも柔らかく、温かい。そのわずかな体温と肌ざわりで、恒は彼女の体調を知る。白金色の長い睫毛のついた、とろんとした目をこすり、彼女は寝言のようになりながらもいつもの挨拶を忘れない。

『い、いらっしやい……恒さん』

『おかえりだろ。今日はいいニュースがあるんだ』

彼女がぐったりとガラスにもたれ掛かって眠っていたのは察するに、共存在の練習を行ったからだ。

彼女は比企の指導のもと、数週間前に共存在を完成させていた。遂にここまでになったか、という思いがある。

恒は共存在発動後の彼女の消耗を分かってやれないが、想像を絶するほどのエネルギーがアトモスフィアから奪われるそうだ。覚醒すれば無尽蔵ともいわれるプライマリの彼女のアトモスフィアも、まだ精神力の伴わない少女であるため覚醒しておらず、決して満足とはいえない。

ともあれ、彼女は比企が半世紀を費やして習得できなかった業をあっさりとモノにし、結果的に彼女の血統のよさを証明した形となった。やはり彼女、プライマリの個体はアルティメイト・オブ・ノーボディの予言したように、一般の神々と比較して潜在能力がそもそも違った。しかも不死身の神体を持つので、共存在を発動しても寿命を削られる事に怯える必要もない。彼女は有限の寿命を持つ比企や荻号とは違い、失敗を恐れずに何度も練習ができるというのが強みだ。彼女が共存在を習得したのは潜在能力に頼るところも大きい。毎日のように繰り返し返された練習の賜物だ。習得した後も身体を術に慣らし、隔日での練習を欠かさない。

さて、共存在を発動させて二柱となったレイアのステイグマがどうなっていたかという、そのうち一柱の背からステイグマは消えていた。レイアの血のにじむような努力と修練の末、INVISIBLE収束の予言書ともいえるステイグマ、“存在確率の鍵”は同時に彼女の身体に二つもは刻まれる事はないのだと分った。ここまでは恒の目論見通りだ。

したがって、レイアの自我の大半をステイグマのない方のレイアに配分する事ができれば……彼女は助かり、INVISIBLEを煙に巻くことが出来る。残ったもう一柱に収束するであろうINVISIBLEは恒とアルティメイト・オブ・ノーボディに任せる。チャンスは一度きりしかない。どうあっても失敗するわけにはいかないという、その思いが彼女を焦らせている。彼女は彼女の役割をよく理解しているからこそ、疲れ果てて動けなくなるまで何度も共存在を練習して、へとへとになっては恒に心配されている。

彼女はそんなとき、赤子の頃からそうだったように、ただ優しく頭を撫でてもらうのが好きだった。

恒は彼女が喜ぶ事は、出来るだけ彼女にしてあげたいと思ってい

る。恒はくたびれて彼に寄りかかる彼女の頭を撫でてやりながら、比企が函の外に出ることを許可してくれたと説明した。彼女は驚いたように目を丸くしていただけた。恒は何故比企がレイアに自由をくれるのか、とうとう説明できなかった。

極戒厳綬縛、“久遠枢”の話を切り出せば、彼女は不安にとりつかれ、比企がせっかく気分転換にと与えた束の間の自由を満喫できない。比企もレイアにその話を伝えろとは言っていないわけだし……。だからといって、隠せとも言われていないが……。ひとまずその話は保留にしておくことにした。

彼女の練習の賜物であるのだが、レイアの共存在は安定している。

これから半年をかけて反復練習を繰り返せばほぼ間違いなく、とは言えないが本番でもミスはないだろう。

だが予想より早くINVISIBLEからの語り掛けが始まってしまった以上、比企は何重にも保険をかけておかなければ不安なのだろう。

例えば彼女がINVISIBLEにそそのかされて共存在を発動できなかったら？

収束が予定されている時期より以前にブラインド・ウォッチメイカーやINVISIBLEからの邪魔が入ってしまったら？

いくら精神力を鍛えたとはいえ、彼女は精密機械ではない、生身の女神であり子供だ。練習でうまくいっているので絶対に安心、などということはない。比企は予め極戒厳綬縛、“久遠枢”で拘束する事で、それらの不安を取り除いておきたいのかもしれない。恒は比企の思考回路もよくわかる。

『と、いう訳なんだ。ここを出て、自由にしていって仰って』

『あの……恒さん』

レイアは恒の笑顔につられて嬉しそうにはしてみるものの、よく分らないといった顔で首を傾けておずおずと尋ねる。

『“自由に”って、何ですか？　どんなものですか？　楽しいもの？　怖いもの？　大きいもの？　それとも……』

『ちょ……』

恒の顔色を窺うように首を窄めながら、レイアは思いつく限りの形容詞を並べて立っている。恒はそれを聞いてもう少しで、ふざけているのかと尋ねてしまうところだった。恒が彼女にかける言葉が見つからず啞然としているので、彼女はもう耳まで真っ赤にして恥じ入り、何ら悪いことをしている訳でもないのにぺこぺこと謝った。

『は、はい……ごめんなさい。お、お勉強が足りないみたいです。もっとお勉強します』

そう言いながら、脇にあった分厚い本を取って恥ずかしそうに顔を隠す。

自由という言葉を知らない無知を、咎められていると思っているのだ。

そんな本を読んでも、自由という本当の意味など分らないのに……恒はその様子を見て、胸が痛くなった。彼女の置かれている惨い境遇を改めて思い知らされたからだ。恒には彼女に呆れた顔を向ける権利など、ひとかけらもない。

『いや、違うんだ。びっくりしたから。そっか……誰もお前にそんな言葉を教えなかったからな……本を置けよ、そんなところには書いてないから』

まだ赤子だった頃から囚われの身であるレイアはこの函の外に出た事がなく、自由という概念を知らない。確かに数学的な、物理学的な自由という意味ならば知っているがニュアンスは違う。だからその言葉は彼女にとって全く身近ではないものであり、理解できないもの。

そんな彼女に、一瞬でも呆れた表情を見せてしまった恒は彼女への配慮の足りなさを恥じた。

彼女にとって、恒がすべてだ。

彼女の世話は恒だけでなく、勿論多くの使徒がやいている。彼女が一番のファンと公言して憚らない寧々も毎日彼女の傍にいます。だが肉声で言葉を話せない彼女と直接的に乖離性意思伝播法で会話が出来るのは恒と比企だけ。彼女にとってかけがえのないたった二柱の身近な神々、そのうち比企は非道にも意図的に、レイアに優しく接しはしなかった。比企はレイアを短期間で成熟した少女神へと育て上げるため、恒とよく話し合って恒と厳密な役割分担を図っていた。

それは父性と母性の徹底した差異化である。

比企は彼女に厳しく接し、甘えを許さない父親的な役割を演じ、彼女の逃げを許さなかった。しかしいつもそれでは彼女の逃げ場がない。そこで恒は決して彼女を叱らず、いつも彼女の味方であるようにと比企に言われていた。彼女が挫折そうになった時、恒はいつも彼女の傍にいて励まし、慰めた。

比企が父性を担い、恒が母性を担う。

子供などひとりも育てたこともない比企の計算が正しかったのか、彼女の生来の性格なのか、彼女は誰もが認める、素直で聞き分けの

よい子となった。そんな状況の中で、母性を担う恒は今後ますます不安定化してゆくと考えられる彼女の心に、少しでも不信感を与えてはならなかった。

『よ、よろしければ、どのようなものか、教えていただけますか？』
『教えるっても、ここにいたらどうやっても分からないもんだよ。まずは外に出ようか。空気を吸って……』

『そ、外に出るのですか？ わたし、ちゃんと息できるでしょうか』
彼女は驚いた時の癖で、きゅっと小さく身を窄める。この小さな函の外、酸素のある環境はもう、彼女にとって未知の恐ろしい場所となってしまうていた。

『出来るよ。前は出来ていたんだから、身体が思い出す。音も聴こえるだろうし。声は……どうかな、出せたらいいけど』

恒は比企からもらった鍵で、レイアの細い足首に填められた金色の足枷を解く。彼女は解放された足をゆっくりと曲げ伸ばし、パタパタと静かにバタ足をして微笑んでいる。恒がその足首をよく見ると、足枷に拘束されていた事によって赤く痛々しい痕がついてしまっていた。

恒があまりまじまじと足を見ているので、彼女は恥ずかしそうにペタンと正座をして隠す。彼女の動作のひとつひとつに、彼女の自信のなさが滲み出ている。彼女が本当の意味で自信を得るのは、いつのことか……。彼女には様々な経験と、書物に頼らない見識が必要だ。

『折角だから、好きなところに行こう。どこ行きたい？』
『その、』

『遠慮するなよ』

そうは言っても、外の世界を見たことのない彼女にどこに行きたいものにもない。何も知らないのだから。恒は無茶な振りをしていることに気づいてすぐに謝った。

『ごめん、行きたいとこなんて分らないよな』

『あなたの生まれた、生物階に行ってみたいのです……。そらや、うみや、もりを見たい。そして、ひとびとも会ってみたい。あなたは、生物階はきれいな場所だと教えてくれました。あなたが楽しそうにお話して下さるたび、いつもどんな場所だろうと想像して……。でもわたしには想像できません。だから恒さんいいなあ、行ってみたいなあ、って』

彼女が羨ましそうにそんな事を言うのを宥めながら、恒は彼女の鬱積した思いを汲み取った。

外の世界など少しも関心がないように振舞いながら、彼女は外の世界を渴望していた。

『そっか。じゃ、生物階に行こう。許可は極陽から下りてる』

『本当に？』

『海も、山も森も、人々や動物たち、街や村、太陽に月、俺が見せられるものは全部見せてあげられる』

『わあ……』

彼女は恍惚として、よだれがたれそうだ。

彼女は素直に信じ切って、恒や比企を少しも疑わないのだろうか。何故あれほどレイアに厳しく接してきた比企が突然性格が変わったように自由をくれると言ったのか、その意味を詮索しないのだろうか。彼女に全てを話してしまうことができない事を後ろめたく思うが、彼女がこんなに嬉しそうな顔をしたのを一度も見ることがない。恒はやはり、告げることができなかった。

しかしそれでよいのだろうか。

結局、彼女を騙して裏切ってしまうことになるかもしれない。彼女に嫌われたくないのではない、彼女を騙す事が一番、彼女を傷つけるのではないか。やはり、話しておかなければならないのではないか、恒はそう思い直した。

『あのな、レイア。やっぱり、話しておかなきゃいけないと思うんだ』

『はい？』

『1ヶ月後、お前が神階に戻ってきたら……』

『何ですか？』

振り返った彼女の大きな翡翠色の瞳に、涙が浮かんでいてはつとした。憧れの生物階に行くことができると思うと、彼女は喜びを隠しきれないようだ。恒は完璧にその瞳にノックアウトされてしまった。

『あ……、ん、何でもない』

教えないのは卑怯だ、そう思いながらも恒は遂に言えなかった。彼女のマインドギャップはたった2層しかなく、恒のマインドギャップを看破できないのだ。彼女はいつも恒から心の中を観察されるだけで、彼女は恒の本心を窺い知ることはできない。

彼女の心の中は、恒がこれまで目にした事のない明るい色彩で満ち溢れている。これは幸福を意味する色彩だ。こんな彼女の内面を目の当たりにして、恒の心は揺らいでしまった。教えるのは、なにも今ではなくてもいいかもしれない。そんな言い訳も脳裏に浮かぶ。やはり恒もいっぱしの男だ、女の子の涙にめっぽう弱い。

『じゃ、早速、ここを出ようか。権衣じゃ捕まるから、これに着替

えて』

比企の話があつてから、恒は彼女がいつでも生物階に降りられるように、街で予め彼女の服を買ってきていた。彼女がこの格好のまま生物階に降りる事ができないのは、彼女の身に纏っている権衣が半透明の素材だからだ。こんな格好で街中を歩こうものなら日本をはじめほとんどの国で捕まってしまうか、保護されてしまう。また、彼女が権衣の他に身につけている封印具は装飾性が高く、ほとんどの人々の目には官能的ですらある。権衣や封印具にはそれなりにステイグマや絶対不及者の力を抑制する効果があるのだが、それらと同じ役割を果たす恒が片時も離れずに付いておく分には、権衣も封印具もいらぬ。

『何に捕まるんですか？』

『まずは警察。あと、変態とか』

こんな格好で生物階に降りたら、変態やロリコンの恰好の餌食だ。ただでさえ彼女は神階に何百、何千という女神の中でも傾世の美貌と称賛されるほど美しく、生物階ではそれは目立つ容姿をしているのだから、少しでも肌を露出させてはならない。

『権衣以外の服を着るの、はじめてです。わあ、素敵な服……温かいから』

『いつも権衣で寒そうだな。あつたかくしてろよ、生物階は寒いから』

彼女ははにかんだように微笑んで、恒の選んだ服に袖を通してゐる。生物階の北半球では冬なので、長そでの白いニットと、どこにいてもはぐれず目立つように赤いコート、動きやすいジーンズを買ってきた。なんなら、彼女を連れて服を買いに行ってもよいかもしれない。彼女の精神年齢がもし外見通り9歳かそこの少女であるというのなら、オシャレもしたいことだろう。

外の世界を見ることで、少しは彼女の個性も育ってくれればよいのだが……。何にしても比企が折角くれたチャンスだ。井の中の蛙である彼女に世界を、見せなければ……。彼女にとってあまりにも、世界は狭すぎた。

彼女は狭い鳥かごの中から、羽ばたく時が来たのだ。

＊

「で？ 特務省は話に応じてくれたわけ？」

陰陽階と中枢階を結ぶエレベーターに乗り、比企 寛三郎と梶 奎吾は揃って特務省に向く。

主神が、特務省の特務従事者を呼び付けられなかった。

仕方なく比企はアトモスフィア吸収環を極陰に押し付けて陽階を離れ、極陰の代理として遣わされた梶と共に特務省を訪問する事となった。

「先方はひとまず詳細を聞きたいそうだ。現段階では応じられないと」

「ダセッ！ たいした主神の権限だな。恐れ入るぜ。こんなに時間を費やしてだ、特務省にお伺いを立てなきゃならんとはね」

梶は比企を皮肉るが、比企は梶お得意の挑発には乗らない。ただ静かに、比企と梶の乗る、宙に浮遊する一枚のガラス板の傍を、壁際に刻まれた階数表示の数字とボーダーラインが下へ下へと通り過ぎ、3 1 4 4 5階、3 1 4 4 6階、3 1 4 4 7階……。彼らの顔の上にそれらの青い蛍光が、無神経に映りこむ。

もう一時間はこのエレベーターに乗っている。

かといって、一度も行ったことのない場所には瞬間移動をかけられない。

「特務省は我らの配下にはない。たとえ極位神として彼等に命ずる権限は持たぬ」

比企の負け惜しみではなく、事実そうだった。

特務省とは、常に空位とされる至極位直轄の省であり、陰陽階より更に上層機関である。

つまり生物階においては極陽が最高の権限を持つが、神階においては極陽より発言権を持っているというわけだ。至極位が空位である限り、実質の神階の最上位組織だといえる。

そこには特殊任務従事者と呼ばれる特殊能力を持った神々が召集されているが、何名より成るどの程度の規模の組織なのかすら、陰陽階には明らかにされていない。ほとんどの特務従事者はアカデミー卒業後ではなくアカデミー在籍中に特務省から引き抜かれるため、特務省の構成員の名も顔もいまだ明かされていない。

彼らは神階の最上位組織でありながら神階と交わらず、言うまでもなく生物階とも交わらない。織図のような特例を除いて、使徒も持たず、神としての一切の義務もなく、だからといって権利すらない。彼らは特務省から生涯外に出る事はできないし、特務省を辞職して位神となる事も出来ない。

神々の隠者とも言える者たちの集うそこは神階において、一度入った者は二度と出られない修道院のような場所だった。彼らは彼ら自身が神であるという自覚にすら欠けており、他者と力比べをする必要はなく、彼らにとって必要のない無駄な知識を詰め込むこともなく、だからこそ封術に関して他の追随を許さない、極度の専門性

を誇っている。

1000の能力を犠牲にして、1の専門性に賭けた神々だ。

アカデミー在籍当時、特務省に目をつけられることも、引き抜かれることもなかった比企はある意味彼らに畏怖の念すら覚える。彼らは比企を特務省の構成員として使えない、と切り捨てたのであるから。

勿論、必ずしも“神として優れた”者ばかりが選抜される訳ではない。

ある一点に関して、飛び抜けて才能があれば引き抜かれると言われるのだが……比企は極位となった今でも、彼らに劣等感を押し付けられたままだ。しかし梶はそんな比企の鬱屈した思いも知らず、大して多忙でもなかった時間を割かれた事への腹いせなのか、彼らを思う存分罵倒している。

「俺は特務省の奴らの顔など知らんがな。素性も知れん陰気で薄気味悪い奴らだ、寝暗すぎて巢穴から出て来れんのだろ」

「それは違う。唯一の目的のために選ばれ、隠者となった神々だ。そして特務従事者として選抜される事は、我等には与えられなんだ。栄誉でもある、尊敬に値すると思うがの……。それにそのうち一柱は汝の部下でもあろう。無論、我等の上司でもあるが」

彼らを挑発する梶の言葉を聞き逃すことなく、比企は珍しく反論した。梶と織図は懇意にしているそうだが、梶は織図が特務従事者であることをすっかり忘れていたようだ。織図の名を暗に示唆されて陰気だと罵ってしまっていた梶は急に語勢を失ったが、空色の瞳だけは涼やかだ。

「継嗣のことか？」

「汝の言う、“陰気で薄気味悪い”奴のことだ」

「そりゃ他の奴らの事だ。俺らが知る特務従事者は継嗣だけだが、あいつはまともだ。陰階一まともかもしれん、他の奴らは知ったこっちゃねえよ」

「だが特務省、特務従事者としての織図 継嗣には誰も干渉することとはできん。彼は陰階神、織図 継嗣とはまた違う顔を見せるだろう」

織図はアカデミー在籍中には引き抜かれなかったが、特務省特殊任務従事者に欠員が出たため、死神となってから引き抜かれた。織図は特務省に移籍することを拒否したのだが、死神との兼任を認めるといふ条件を出されて渋々飲んだそうだ。本来、特務省からの命令は、断ることのできない命令でもあった。そういう事情で神階では唯一、特殊任務従事者として織図の顔だけは知られているが、依然として彼らは神秘のベールに包まれている。

彼らが神階において特別視され神階の干渉を受けないでいられるのは、極秘裏にINVISIBLEへの対抗策を開発してきたにしえの神々の技術を継承し続ける者たちだとされているからだ。詳細は分からないが、特務従事者のうち封術に特に長けた12柱が極厳禁の技術を継承し続けていると聞く。織図がその12柱のスペシャリストの中に名を連ねているのかは分らない、欠員が出てわざわざ呼ばれるぐらいだからメンバーに入っているとみて妥当だが、比企はそれすらも把握していなかった。

そういえば織図はここ二年半というものの、比企をあからさまに避け続けていた。何か個神的に疾しいことがあってのことなのか、比企と接触するなというその行動そのものが特務省の一員としての行動なのか、比企はまず織図に探りを入れておけばよかったと悔やむ。

彼らは時に極陽の権限すら停止する事ができる、彼らが不穏な動きをしていると推察される時は、織図の動向を見ておかなければならなかった。

上昇を続けていたエレベーターはようやく薄暗い無人のポートに着いて、彼らの前には厚い壁に覆われた巨大な宇宙要塞が聳え立つ。堅固な大門の前に立つと、ゴウン、と大きな音を立てて自動扉が左右に開く。到着だ。

比企と梶は躊躇しつつも、慎重に中に踏み込んだ。カッーン、カッーンと二柱の靴音が不気味に響き渡り、奥ゆきは果ても見えない無人のホールの広さを際立たせている。真っ暗な石造りのホールにはぽつんとライトが一つ灯っているだけで、飾り気も何もない。この組織には使徒がひとりもないと言われているので受付に割く人員などいないのだろうが、ここまでひと気がないとさすがに気味が悪い。

比企はライトの下の方の台座の上に刻まれた案内板を見て、特務省中枢部への通路を確認した。ともかく、中枢部に行かなければ話を聞いてもらえない。出迎えないのだから、あまり歓迎はされていないようだ。

「まずは案内役の神を捜すことから始めなければな」

比企は小さくため息を付くと、奥に続く非常口のような小さな扉を開いた。中に足を踏み入れようとしたところで、二柱の背後から低い声が聞こえてきた。

「あーあ、おふたりさん。そっちは出口のない巨大迷路だぜ」
振り返ると、先ほどのライトの点った台座の上にあぐらをかいて

座る大柄な神がいる。その特徴的なシルエットは織図 継嗣。特務省特務従事者の制服、銀の刻印の入った白いローブを着て、今は陰階神ではない事を明示するように右肩の黒百合紋の御璽は隠されている。織図は顔を覆うようにかぶっていたフードをするりと取った。

「それは残念だ。迷路は嫌いではないんだがな」

出口のない巨大迷路だなど……聞いただけで懐かしく、比企はぞくぞくする。

かつてのように、荻号の部屋に向かう為の試練を受けている気分になせられたからだ。荻号と会う為だけに毎回何十ものトラップに迷路を抜けて疲労困憊にさせられていた日々も、今は懐かしい記憶だ。そんな経験があったためか、比企は難解なパズルを解くこともそれほど苦ではなくなっていた。

「上層部からは迎えには行くなって言われたんだけどよ、おたくら絶対迷うと思ってね？ そしたら案の定だろ？ 極陽と陰階第二位神が何やってんだ。ここはよそ者にはすこぶる冷たくてな、正しい案内なんざ書いてねえんだ。まんまと騙される奴があるか」

梶はその物言いに、腹を据えかねたようだ。梶は水色の髪でホストのような落ち着きのない格好をしているが、これでいて織図より二倍近くも年上だ、後輩になめられた口をきかれては気分を害しもある。特に梶はギャングブラーらしく、喧嘩っ早い事で有名な神でもある。そんな梶に駄目押しをするように、織図は挑発的な言葉をぶつけた。

「帰んな、進むだけ無駄だ」

「おいおい、黙って聞いてりゃ随分と調子いいじゃないの……」

苛立たしげに舌打ちをした梶の前に比企が手を差し込み、織図との間に立って彼を制した。織図はその様子を冷ややかに見下している。スポットライトの当たる台座の上に座っているからか、その静かな佇まいは愚者に審判を下す彫像のようだ。彼らをじつと値踏みする織図のこの表情は、陰階では目にした事のないものだ。梶はまたそれが気に入らない。

「よせ、梶。特務省の刻印のある聖衣を着た彼は我々の上司だという事を忘れるな」

「こんな安い挑発にいちいち乗ってるようじゃ、ここにいる奴らとは話にならないぞ」

織図は煙管に火を入れ、それをふかしながら溜息をついでに煙を吐きだす。

特務省の連中は曲者ばかりだ、交渉中に頭に血が上って逆上してしまっってはならないと思い、織図は二柱を試していた。彼らを特務省の中枢に連れてゆくことに不安を感じたからだ。何しろ特務省を外部の神が訪問するのは実に1万3千年ぶりだと言われている。神階と隔絶して久しい彼らがまともに話を聞いてくれるのかどうか、織図には保障できない。だが、織図はまた神階の一員として、彼らとこの二柱を引き合わせなければならないと思っていた。

「ついてきな、おたくらじゃ中枢部には着かん」

「いくら顔なじみだからといって手引きをするとは感心できんな、織図よ」

織図が軽やかに台座から飛び降りた時、低い声と共に、更に二柱の白いローブを纏った神々が彼の背後に霧のように現れた。細身のシルエットの二柱と、いま一柱は大柄な男神のようだ。どうやら、

織図が比企と梶を案内しようとした事が気に入らなかったようだ。特務省は伝統的に、たとえ極位神といえど実力で中枢部にたどり着いた神々の話しか聞いてはならないという決まり事がある。

織図はその伝統を破ろうとした為、黙っていられなくなった彼らが、織図と訪問者に制裁を加えに来たのだろう。フードで顔が隠されているせいにかひどく無機的な印象を受ける二柱の出現に、彼らと面識のある織図はまずいことになったなと額を押さえた。

「ここを訪れる者にはすべて、平等なる試練を課さねばならん。だが、正しい案内は織図が教えてしまったようだ」

「まだ教えてねーぞ」

織図は反論する。鉄のように冷たい声の主の一寸は男神で、もう一寸は女神のようだが姿が見えないのでよく分らない。得度は知れずとも一見して分るのは、彼らが比企と梶に向けるものが、紛う事なき純粋な敵意だという事だ。それも、無視できないほどの深刻な……。

「では……我等が直々に試練を課すほかあるまいな」

彼は基空間中から黒い六角柱の杖状の神具を抜く。その性能も形状も未知のもので、おそらくはいにしへの神々の創作物であり神階に明らかとなっていない危険なもの。性能の分らない神具とやり合うことほど無謀なものはない。

「何だそりゃ、俺らとやるってのか？」

売り言葉に買い言葉というもので梶も身構え、バロックダイスを握るが、あくまでも争うつもりはない比企は梶の手の上からダイスを押さえ付ける。こんなところで戦っていては時間と労力の無駄だ、それに会談前にわざわざ悪い印象を与えることになってしまう。そして……

『よせ、梶！ 気づけ。我らが束になってかかっても、彼らには敵わん』

比企は梶だけに分るよう乖離性意思伝播法で語りかける。

梶は驚いて、いつになく弱腰の比企に目を丸くした。比企は過大評価も過小評価もしない神だ。冷静に彼我との力の差をはかって、敵わないと言っている。梶の目には、彼らがそれほどの実力の持ち主のように見えない。

というより、比企は即位したばかりで経験不足とはいえ仮にも極陽だ、そして梶もまた極位に最も近いとされる陰階神……その二柱が束になっても敵わないという相手、そんな実力者がまだ神階に存在するともいえるのか……？ 梶は信じられない。

『無理だ、梶。我等は生物階、神階における実質の二極だ、だが……彼らは三階に責任を負う者たちだ。器が違う』

「何だと?!」

「我々は争いに来た訳ではない、会談をしに来ただけだ……礼を失したとあらば謝罪する」

比企は早々に折れた。

「いやにもの分かりのよい極陽だな……失望したよ」

彼女は泣きを入れた比企を心底侮蔑するように、小首を傾げる。

それと共に彼女の方は落胆して、比企と梶に対して急速に興味を失ってしまったようだった。

「つまらない奴らだな」

「何と言われようと結構だ、中枢に通してくれ」

「局長は失望したそうだ。織図、ではそっちの青い頭の方はお前が始末をつける。こちらは俺がやる」

興醒めした女神とは対照的に、もう一柱の連れの男神はまだ気が

おさまらないようだ。突然、織図を梶の相手に指名した。

「何で俺が……奎吾さんと俺がダチだって、知ってるだろ？」

織図は上役と思われる男の命令にぐちぐち言っている。特務省職員としての立場と、陰階神としての立場に板挟みになっている。それを見かねた女神が織図にせつつくように大剣型の神具を抜いた。三者の遣り取りから、どうやらこの三者の中で立場、実力共に格上なのは彼女のようだ。

「お前がやらないなら、私がやるが？　神具も錆付いていたところだ」

「……そりゃマズい」

ぐだぐだ言っていた織図もさすがに強ばった顔をして煙管の火を消した。織図のわかりやすいオーバーアクションによって彼女が抜いた神具はどうやらかなり危険なのだという情報を比企と梶は受け取る。織図は指をローブに隠すようにして彼女の死角から彼女を指し、局長と呼ばれた彼女が一番危険だとヒントを与えてくれる。織図は敵でありながら、比企と梶の味方もしてくるようだ。

「継嗣、どういうつもりだ？」

「俺でよかったな……奎吾さん、あのヒトと当たってたら……」

そう言いかけた織図の姿が忽然と消える。

次の瞬間、梶の背後からとてつもない衝撃が後頭部に叩き込まれる。梶は頭から床の上に深々とめり込んで一瞬で意識を飛ばした。延髄への上段蹴り一発で梶を地に沈めた織図は、油断せず気をつけろといわんばかり、比企に小声で囁いた。

「今頃、火葬場行きだぜ」

成程、手柄だ。と比企は軽く頷く。

織図はこうする事によって、殺されても不思議ではなかった状況にあった梶を”救った”のだと合点したからだ。陰階には隠され続けていた織図の実力を目の当たりにし、比企は一瞬にして彼らの実力を測る事が出来た。織図は比企と梶を中枢部に行かせてやりたいと思っているのだろう、ところが最悪のタイミングで予期せぬ邪魔立てが入った。

そこで織図は仕方なく二柱とも潰されないために比企に彼らの実力を知らしめ、会談に欠席してはならない比企、ではなく梶のみを倒した。油断をしていて二柱とも倒されてしまったら、いや、下手をすれば殺されてしまいかねない状況だ、そうなったら何の為に来たのか分らなくなる。織図は咄嗟の判断で梶を犠牲にし、比企に間接的にヒントをくれたのだ。比企は親友の梶をすらダシに使った彼の配慮に、素直に感謝をしておくことにした。

『織図、揉め事には巻き込まれたくないのだが、こやつらは何を望んでいる？ 己の実力を測りたいだけか』

織図は彼らに気付かれないよう目で頷く。

たったそれだけの目的だとしたら随分とご挨拶なものだが、彼ら、いや少なくとも彼は本気だ。やり過ぎ事はできそうにもない。比企は仕方なく、今回ばかりは全く用無しと思って、それでも一応持ってきていた懷柔扇に手をかけリミッターを外しておく。

『マインドギャップの層数はかなりあるな』

織図は彼の死角から人差し指と中指の指先でクロスを作っている。クロスはギリシャ数字でも漢字でも十を示すものだろう。織図は比企が小さく頷いたのを見ると、次にピースサインを示した。

”12層か……”

マインドギャップの層数は単純に強さには比例しない。だが、力

を得ずしてマインドギャップを増やした神は遺伝子改変操作を受けた藤堂 恒以外には存在しない。

となると、フィジカルレベルもフィジカルギャップも極位格以上と見て間違いない……。さてどうしたものか、と思案しながらも比企の無表情な顔に不覚にも笑みが漏れたのは、今更のように重大な事に気付かされたからだ。

比企が極陽となり、神階の頂は制したつもりでいた。だが未だ、世界の高みには触れてすらいなかった。

彼らこそが真にINVISIBLEに牙をむく者たちであり、裸の王である比企には、その資格すらなかったのかもしれない――と。

第2節 第5話 レイアのはじめてのトモダチ

彼女の大きな翡翠色の双眸は、飽くことなくいつまでも雲の群れを追いかけている。

しんしんと冷えきった冬空の下、赤いコートの少女は静かに、深まりゆく冬の音を聴いていた。

視界に入る公園は、解放感に満ちてる。

ふかふかの茶色い芝生の上で子供達の歓声が聞こえる、東京都心の少しはずれにある広い公園のベンチに、二柱の神々は人々を眺めてひっそりと腰を下ろしていた。白昼堂々神が普通に人々の生活の中に紛れていたが、違和感を覚えた人間は誰一人いない。

ほんの僅かな違いを見抜くことができる、ある意味特殊な感性を持った人間は。

ごく稀にアトモスフィアを察知できる特異体質を持つ人がいるが、神々が傍らを通り過ぎると大抵の場合「寒気がする」、「風邪をひいた」、そんな具合に感じるようだ。たまに「霊がいる」と騒ぎ立てる自称霊能者もいるにはいるが、神々や使徒は殆どの場合誰にも気付かれないままこっそりと人々の中に紛れ込み、人々に手を差し伸べてきた。陽階神である恒とレイアは、陰階神のようにODFを使わずとも生物階に滞在する事が許される。

偵察衛星を介して監査されているが、今のところ神法に抵触する行動は取っていないし、禁止されている場所にも行っていない。全てが合法のうちの生物階滞在だ。

『恒さん、たくさんの人々がいます』

レイアは先ほどから人々を観察していつまでも飽きない。

なかでも彼女は彼女との共通点を感じるのか、同じ背格好の女の

子というものに夢中だった。無性別の他の神々とは異なり完全な女性であるレイアは神々よりも、どちらかというと人間と交流を持った方がよいのだろうと、恒は彼女の様子を見てそう思う。たとえ種族が違って、彼女が親近感を覚えるのは何百年も生きた性別のない神々より、小さな人間の子供なのだろうから。

だが、彼女の持つ膨大な知識と感性とは対照的に、人の子はあまりにも幼すぎる――。

「まあね。正体なんてバレっこないから、一緒に遊んできたらかきつと仲良くしてくれるよ」

『遊ぶって、何ですか？ 難しそうです』

恒は真面目にそんなことを言っている彼女に苦笑する。

確かに他の子供たちとコミュニケーションを図り、仲よく一緒に遊ぶことは彼女にとって難しいことなのかもしれない。声の出せない彼女はまず、他の子供と意思疎通をすることができないからだ。

『恒さん、何かが来ましたよ』

レイアがそう言うので指さす方を見遣ると、芝生の向こうから、気のよさそうな父親と小さな娘に連れられた、散歩途中の黒いラブラドールレトリバーがフンフン、スンスンと鼻を鳴らし地面を嗅ぎまわりながら、恒とレイアの座るベンチに近づいてきた。黄色と白のボーダーのニットの温かそうな腹巻きを腹に巻かれた犬だ。さも不審そうに恒とレイアの匂いを嗅いでいるのは、人間との違いを匂いで嗅ぎ分けているからだ。

ラブラドールは恒とレイアの顔を見ていよいよ何かを察したのか、こいつらは不審者だと飼い主に知らせるために歯を剥いて唸ろうとしている。それに気付いた恒は一瞬早く犬の傍らに寄り沿い、犬の頭を撫でるふりをしながらマインドコントロールをかけた。犬に吼えられるのはいっこうに構わないが、レイアが怯える。

それに噛みつかれてもして血を流せば容易に、彼女が人間ではないと明るみに出てしまうからだ。

……犬にかけるマインドコントロールは人や神々にかけるそれより簡単だ。敵意をむき出しにしていたラブラドルもすぐにとろんと眠たくなったようで、けだるそうにベンチの下に伏せ大人しくなった。

「やあこんにちは」

父親は恒が犬に触れたので、恒に声をかけてきた。

彼の娘は丁度レイアと同じ背格好の少女。つややかな長い黒髪がピンクのマフラーでくるりとまとめられ、細身の身体を暖かそうな白いダウンジャケットでもこもこさせている。二人の人間の急接近に、レイアの緊張が背後から恒に伝わってきた。そう、彼女は面識のない人間と接して緊張している。

初対面の相手との遣り取りは、彼女にとってはよい刺激となるだろう。

「こんにちは、かわいい犬ですね。名前なんていうんですか？」

「ありがとう、君達もお似合いのカップルだよ」

どうやら父親は恒とレイアをカップルだと思っているようだ。恒が愛想笑いをしていると、犬を褒められたのが嬉しいらしい少女が、父親を押しつけてしゃしゃり出てきた。

「あのねー、シェリーちゃんっていうの。みきが名前つけたんだよ。かーいーでしょー」

どうやらこの犬の飼い主らしい、みきという娘が自慢げに教えてくれる。恒は思いついて、腰が引けているレイアを振り返り目配せ

すると、彼女は一生懸命首を横に振っていた。神と使徒以外の生物の存在しない神階で育った彼女にとって、初めて見る人型以外の生物は怖いのだ。

「犬だよ、大丈夫噛まないから。触らせてもらってごらん」

恒は折角だからと、彼女の手を無理やり取ってレトリバーの背の辺りを一緒に撫でさせてもらった。彼女は怖気づいていたが、ふわとした縫いぐるみのようなその感触が気に入って、おずおずと犬に寄り添い、犬の鼓動を感じるように頬を寄せている。恒のマインドコントロールで深い催眠に落とされているのだから、暴れたりかみついたりしない。

そんなレイアの顔をじっと見守っていた少女は、驚いて目を丸くした。

「わー！ 目、みどり色！ かーいーねー。お人形さんみたいー！ お肌も真っ白！」

「おや、外国のお嬢ちゃんだね。こんにちは！ ハローの方がいいかな？」

レイアはびくっと肩をこわばらせた。レイアは彼女と父親にそう言われて初めて、彼女の姿の異色さに気付かされたからだ。彼女は普段鏡を見る機会がないし、神階には様々な髪と瞳を持つ神々や使徒がいたので気にならなかったが、この公園にいるのは皆、同じ外見的特徴を持った人々だ。日本由来の神である恒もすっかり彼らの中に同化して、余計にレイアの特徴を際立たせている。恒はずるいと、彼女は思った。

「みき、英語少しできるよー。マイネーミズ、ミキ・アイダ、ホワット、イズユア、ネーム？」

人懐っこい少女が、どこかで習ったらしい英語で話しかけてくれる。でもレイアは何も答えられないまま助けを求めるように、恒の後ろに引っ込んでしまう。むろん、英語が分からないのではない。みきは必要以上におどおどとしたレイアの態度に、不思議そうな視線を向けている。レイアが欧米人の子供だと思われているのであれば、一般的にコミュニケーション能力が高いと思われる欧米人でありながら引っ込み思案な少女は珍しく映るだろう。

「ああ、この子ちょっと言葉が不自由なので。名前はレイアというんです」

緊張のあまりフリーズしそうになったレイアを見かねて、恒はよい頃合いで助け舟を出した。

父親はしまった、とぼつが悪そうな顔をした。

「そうか、お嬢ちゃん、喋れないのか」

レイアは事情を説明することも乖離性意思伝達法を用いることも出来ず、ただ顔を真っ赤にして恥ずかしそうに、こくりと頷くしかなかった。

恒と普段の会話をするように、この二人に対して乖離性意思伝達法を使ってはだめだ。

彼らを怯えさせてしまうと、それほど社会性のない彼女にも推測できたからだ。

「そう……」

みきはそれを聞いて気の毒そうに俯いていたが、やがて何かを思いつて、彼女が無意識にずっと手に握りしめていたものをレイアに向けて優しく差し出した。

「れいあちゃん、みきと一緒に遊ぶ？　公園でバドミントンしよう

と思って持ってきたんだけど、一緒にどうかな。お父さんはいつもやる気ないから」

みきはかわいらしい両えくぼを作りながら微笑んで、ラケットをレイアの手握らせ同意を求めて首を傾げた。

レイアは見慣れないものを握らされ、きよんとして長い金色のまつげをしばたかせている。

「それはいい、遊んでおいで」

父親もみきの機転に乗っかるかたちで、そう言ってちろりと手を振った。

『恒さん、わたし、どうすれば……』

レイアはどうしてよいものか困惑して恒に尋ねる。恒は二人に悟られないよう、視線を泳がせないように気をつけながら、レイアにのみ通じるようアドバイスを送る。無経験であってもバドミントンのラリーは簡単だ、レイアもすぐに出来るようになる、出来ないものではないと恒はそう思った。

『その子が羽根を持つてるだろ？ それをそのラケットでシャトルを落とさずに打ち返せばいいんだ。難しくはないよ、ただそれだけ。他に何かルールがあれば、その子が何か言うだろう。頷いていればいい』

レイアは理解できているのか理解できないのか、ラケットを呆然と見つめるだけだ。

「行こっ！ れいあちゃん」

みきは困惑しているレイアの手を引いて、嬉しそうに跳ねながら、寒々しい噴水近くの芝生の向こうに行ってしまった。あつという間のことだった。

「未来が友達を勝手に連れて行って、ごめんね。君はシェリーとフリスビーでもするかい？」

間が悪くなった父親は寝ている犬を起こそうとしたので、恒は結構ですと首を振った。

「いえ、シェリー君も疲れているようですし、ここから彼女達を見えています」

「おや、シェリーが男の子だって分ったんだね」

父親は犬の雄雌の区別がつけられる恒に、少しばかり驚いているようだ。

「ええ、何となく顔つきで。レイアを誘ってもらってありがとうございます。とても内気な子なので」

「こっちこそ、付き合わせて悪いね。未来は、最近親友が転校してしまったんだ。その子とはよくバドミントンをしていたんだが……もう相手がいなくて、寂しがってね。レイアちゃんにその子を重ねてるんだろう」

やがて恒と父親の見守るなかで、ふたりの間をぼーん、ぼーんとシャトルが往復し、ラリーが始まった。

運動神経のよいレイアはすぐに要領を掴んで、一度も落とすことなく、未来の打ちやすいよう優しく打ち返す。レイアは嬉しそうに笑顔を見せた。遠目に彼女の姿を見守る恒は、レイアのこんな楽しい表情を目にしたことがない。

たった今の今までは……。恒がいかに関心を持って理解しているつもりではあったも、恒では担えない繊細な部分もある。

生物階で女の子として普通の暮らし、させてあげたいな――。

恒は痛切にそう思った。

＊

「わー、れいあちゃん上手だねー。みきの方が落としてばかりで

全然下手くそだあ。楽しいねえ、れいあちゃんも楽しい？」

レイアはそう訊ねられて慌てて、楽しいという意味も分らないままにこくこくと首を縦に振る。未来に気を遣っているのではなく、言葉も知らないのに“楽しい”ような気がしたからだ。

「れいあちゃん、明日も遊べる？」

未来は、何気なくレイアを誘う。レイアは恒に許可を求める為に後ろを振り向いたが、恒が父親と話し込んでいるのを見ると、彼の同意を待たずこっそりと頷いた。恒が何か明日の予定を決めてしまっているかもしれないし、レイアに見せたいものがたくさんあると言って日本のみならず海外のガイドマップも見ているようだったが、一日ぐらいいは融通してくれるだろう。そう思ったからだ。

「明日は、スケート行かない？ お父さんがスケート連れて行ってくれるんだー。そっちのお兄ちゃんも一緒に」

彼女はスケートが何なのかも分らないまま、ついでにしっかりと頷いた。勉強以外のことであろうから、なおさら大歓迎だ。

未来はレイアには分からない言葉を連発しているが、レイアはその一つ一つを興味深く思う。もう少し未来と一緒にいたいと、彼女は自然にそう感じた。明日という約束でいつまでも心の奥の方を握られて、彼女に繋ぎ止められたかった。生まれて初めて、それが必然ではなく必要でもない、大切な他者との繋がり。

断ち切りたくなかった。

「れいあちゃん、みきの友達になってくれる？ 今あったばかりじゃちょっと、友達は早いかな」

レイアには友達という言葉の意味が分らない。それでも、恒は“友達”を持っていると言っていたのを思い出す。未来の口から紡がれたそれを、温かい言葉だと思った。

誰もが持っているものならば欲しいと思う、それを持つことが許

されて、未来がそれをくれるというなら。彼女は未来に差し出された宙ぶらりんの手を、大切そうに下から支えて握り返してみた。凍てつくような寒さの中、未来のほんのりとした体温だけが温かく特別なもののように感じる。

トモダチ……。

それはレイアの心の中に、どこまでも深く深く浸透する不思議な魔力を持った言葉。レイアの凍えそうな指先が、彼女の温かな掌で温もりを取り戻すように、未来はそんな魔法をかけてくれた。

未来はレイアと共に恒と父親の待つベンチに戻ると、寝起きのシエリーのハーネスを取って、父親に、明日もレイアと遊ぶ約束をしたがよいだろうかと尋ねていた。父親は快諾した。

「じゃ、また明日ね。明日の朝10時にここね」

レイアは恒の隣で、はにかみながら愛想よくふたりに手を振る。レイアは未来と父親の姿を、いつまでも見送っていた。彼女らが視界から見えなくなってしまうと、レイアは恒に平謝りだ。

『ご、ごめんなさい。わたし勝手に、明日も“遊ぶ”約束をしてしまいました』

「いいじゃないか。初めてできた友達だ、大切にしなきゃ」

どちらにしても、恒は明日の予定を決めていなかった。レイアに生物階のあらゆる場所を見せてやりたいとは思えど、受動的にはなく能動的に彼女がしたいことをし、行きたい場所に行くのが一番だった。

彼女が自ら意思決定をしたり望むなら、それはとても尊いこと。

公園の隅に石焼きイモ屋が店を出していたので、恒はレイアにイモをおごってあげた。はふはふと白い息を立てながら猫舌の小さな口で、彼女は少しずつイモをかじっている。

生物階に降りた彼女は、何でもおいしいといってよく食べた。

恒は志帆梨の店に連れて行って彼女を母親に紹介したが、そこで志帆梨が作った和食も、刺身や寿司も含め、レイアは器用に箸をつかってぺろりと食べた。

神階では殆どといっていいほど食事をしなかった彼女にとって、食事という行為そのものが楽しくてたまらない様子だ。自宅に何泊かしたが、特に共存在の練習を行った後はよく食べた。気持ちいいほどの食欲に、恒はつつい彼女を甘やかして、色々なものを食べさせてしまう。こんな時だからこそ何でも、彼女に好きなことをさせてあげたかった。

『友達って、何ですか？ とても優しい言葉だと思いました。みきさんは、わたしと友達になろうって言うてくれて……嬉しくなりました、でも、何故だか分かりません』

彼女は興奮気味に息を弾ませながら、恒に一生懸命報告する。そういう恒は最近、親友と呼べる者達との距離を自ら遠ざけていた。ちくり、と後ろめたさが背中奥から針となって突き刺さる。唯一無二の親友であった豊迫 巧や石沢 朱音、村の遊び仲間達と、最近まともに話をしていない。

それでも、私立の名門中学校に進学した巧からは頻繁にメールをもらうし、朱音も学校で手紙を渡してくれる。恒は不運な人生を生きてきたが、友達には恵まれていたと改めて実感する。だが、彼らが恒を心配して恒に与えてくれたものと同じだけ、恒が彼らに何かをしてあげられたかという、何もしてあげられていないと思う。

いつか全てが終わったら、いつもどりの日常を取り戻したい。
友達とふざけあって、何気ない話に花をさかせて。
それは恒のささやかな願いだ。

「彼女について、楽しかっただろ？ 友達ってのは一緒に楽しさや辛いことを分かち合う存在だよ」

『恒さん……お願いです。声の出しかた、教えて下さい。わたしも本当は頷いているばかりではなくて、恒さんみたいに、みんなと上手におはなしたいんです……』

恒は半分驚いて、そして半分は嬉しくなって目を見開いた。

「そっか。それはいいことだ」

『み、みきさんとも、たくさんおはなしたいです……ですから』
彼女は神語のみならず、日本語や英語、数ヶ国語を解している。

未来が話す日本語は理解できるのに、声が出せず答えられないのもどかしい様子だ。語学を学ぶ上では動機づけ、つまり通じ合いたいと思う気持ちは何より大切だ。

レイアをその気にさせてくれた未来に、恒は密かに感謝をした。

「声の出しかた、もう忘れちゃったか。あーっ、と言ってごらんよ、思い出すから」

「—————あ……、っ」

彼女が一生懸命絞り出した息は白く広がって、それから僅かな音となった。彼女の願いは、失われた彼女の身体機能を取り戻させるだろう。

すぐにではないかもしれない、すぐにである必要はない。だが、いつか必ず出来る日はやってくる。彼女が未来と心を通わせたいと願い続け、諦めないで努力し続ける限り——。

「おっ、少し音が出たな」

恒は甘く見た判定で、自信のない彼女を勇気づけた。

「――っ、！」

彼女は声を振り絞ろうとして、すぐにコホコホと咳こんでしまう。発声法を間違えると、喉をいためてしまうので恒はそのあたりでやめさせたが、彼女はまだ続けたという顔をしていた。彼女のこういう顔を見ることができるのなら、ずっと生物階にいさせてやりたいと思う。INVISIBLEからの語りかけがなくなり、彼女が安定した状態が続くというのなら……。

「すぐには無理かもな。でも、それが出来る日も、それほど遠くなさそうだ」

『……こうしていると、忘れていられます。INVISIBLEのことも、怖い事も、痛くて苦しいことも……。わたしは今、自由でしょうか』

「……きつとね」

恒は割舌悪く、そんな相槌を打った。彼女は自由だったが、今は恒が監視をしているようなものだ。

超空間転移を身につけた恒は、レイアを連れていつでも神階に戻る。レイアの傍からかたときも離れないという事を条件で、比企は生物階でふたりきりで行動してよいという約束だ。そして生物階に滞在する間の費用は、全て比企が生物階に持つ銀行口座から自由に引き出すことができた。束の間の休息。

「神は神階にいる限り、利害関係や主従関係で結ばれている。本当は友達なんてできないんだ……。レイアに必要なのは、何の利害関係もないさっきのあの子みたいな存在だよ。一緒にお前と遊びたいと思って、それを楽しいことだと思ってくれる……。それはとても純粋な気持ちなんだ」

レイアはそれを聞いて、ベンチに腰かけると、そっと恒に寄り添う。両手をおわん形にして口元にもってゆき、ホウツと息を吐いて手を温めている。

『わたしには恒さんも必要です。わたしはあなたと友達ではないかもしれない、でもあなたが必要です。……わたしは、よくばりでしょうか』

恒は複雑な気持ちで何も答えず微笑むと、彼女の頭の上にいつものように手を添える。妹のように、あるいは恋人のように……恒は目を閉じて、彼女をいとおしく思った。だが、こうして彼女に必要な存在だとされている間も、恒は彼女を裏切っている。

久遠枢の話を、レイアに切り出せない。レイアは焼きイモをおいしいおいしいとたいらげて、差し出された熱いお茶を飲みほし、恒にこう云った。

『恒さん、近いうちにINVISIBLE収束前のグラウンドゼロに連れて行ってください。その場所を、目におさめておきたいのです。わたしは逃げません、いいえ、逃げたくありません!』

レイアは唐突に、きっぱりとそう云った。首刈峠、すなわちグラウンド 0 立ち入りの違法性は、極陽 比企 寛三郎の名により解除されている。INVISIBLE収束予測地点は念入りに、神階と生物階双方の調査団により立ち入り調査が行われていた。レイアは今なら勇気を振り絞って、ずっと逃げたかったその場所、災厄の開始点に行けるような気がした。

『みきさん、シェリーちゃんを、そしてみきさんのお父さんも、そしてこの世界にいるみんなも! 絶対に守りたいんです』

——恒にたくさんの守るべきものがあるように、自分にも少しの守るべきものができそうだと、彼女はそう思った。

＊

この刻印が消える前に……INVISIBLEの加護がなくなる前に、やらなくてはならない事がある。

アルシエルは右腕を押さえ付ける。ステイグマが彼女の右腕全体に根を張り黄金の光の浸食は強くなっているが、まだ自我は奪われていない。変わり果てた解階を往けども往けども、あるのは瓦礫の山ばかりだ。アルシエルにとって、目を覆いたくなるような惨状を彼女は気丈にも踏み越えてゆく。心血を注いで築き上げた帝都の街なみ、雑然として活気のあった街はただの瓦礫と化して久しいようだ。ルシファアの超兵器の熱線に灼かれた死体が、雨ざらしになってそこかしこに転がっている。

「ABYSSはもう、終わりがもしれん……」

彼女がふと視線を上げると、遠くの空にゼリー状の境界を示す赤黒いドームが屹立していた。

啞然としてしばらく立ちつくしていると、ドームは定期的に収縮を繰り返し、胎動しているようにも見える。ドームを覆う赤黒い支脈状の血管のような造形。禍々しき物体が鎮座するは、かつてアルシエルの皇居があった場所。

そして首都全体を半円状に覆いつくしている。昏い、死の気配が帝都の空を覆い尽くしていた。

まだ……生存者はいるのだろうか。彼女が問いかけることも愚か

しく感じる。

彼女はなおも一縷の望みを棄てられないまま、”不可侵の聖典”を脇に携え、ABYSSの暗い空を駆け上る。

空に光の気配がないのは、アルシエルにより整備されていた地下、空中送電線が切られ、帝都を照らす人工照明の補助バッテリーすら切れているからだ。恒星光―ABYSS周回軌道上衛星で発電された高エネルギーレーザー伝送システムは遮断、そして沈黙。ライフラインである電気が通っていないということは、臣民の生活は崩壊しているともて間違いない。

これ以上の絶望があるというなら教えてほしいくらいだ。

アルシエルはその巨大な物体にあと数百メートルというところまで近づいたところで、巨大な胎児を見下ろすように滞空している青年を見つけた。解階の住民ではない。解階の住民ではないと断言できるのは、彼が手ぶらだから。解階の者はどんな例外もなく自翔出来ない、つまり必ずツールを持つか背負っていないければ飛べないものだが、彼はツールを身に帯びる事無く悠々と自翔している。

何者だろう、とアルシエルは訝しむ。

斥力中枢を持つ、神か――？

解階から生物階へと移転し物理的なゲートの封鎖されたABYSSをわざわざ訪問するとはご苦労なことだし有り得ないことだが、それ以外に考えられない。

現在のABYSSに転移できる神がいるとすれば、それは以前にABYSSを訪問した経験のある神だ。だが、アルシエルの記憶する限り、ABYSSを自ら訪れた神は存在しない。彼女が不審者に口を開きかけたとき、アルシエルに気付いた彼の方から尋ねてきた。

「……お前、誰だ？ 生存者か？」

「名乗るべくもない者だ」

彼女が名を名乗らなかったのは、アルシエルの誇りは虜囚となつたときにもう、とつくに消えうせていたからだ。彼女は名乗るべき名を失った。今や彼女は解階の皇でもなんでもない、妄執に駆られたひとりの女。

アルシエルは視線を自らに落とし、彼女の身なりを客観的に見つめてみる。

ルシファーに与えられた、囚人服ともいえる簡素な白いワンピースを纏っていたが、ここに辿りつくまでに泥がついて薄汚れていたし、さきほどサーベルで切ったばかりのショートヘアも、切りっぱなしで整えられていない哀れでみすばらしい姿。

彼にどう説明しても彼女がかつて解階の女皇だったなど信じられないだろうし、その貫禄も覇気もなければ、見る影もない。

だが彼も、アルシエルに負けないほど浮浪者然としているのだが……。彼はさも彼女には興味がないという雰囲気だったが、その反面、アルシエルの右腕は穴があくほど見つめていた。視線が纏わりつくというか、興味深く観察されている。

「……奇遇だなあ、俺もそうだ。ところで珍しいものをつけているな、それは何だ？」

彼は予想通りアルシエルの細い右腕を指差すが、アルシエルは答えられなかった。

そこには炎のように眩い金色の光を放つ、幾何学的聖痕の片鱗がある。これを何だと言えよいのだろう。

正直なところ、アルシエルにもよく分からないのだ。

「見ての通りのものだ」

「見ての通りと言われれば、”存在確率の鍵”か？　だが鍵穴の部

分がないな」

彼が断定したので、アルシエルも彼の正体の手がかりを得る。神階の住民が知らない、存在確率の鍵という言葉を知っている……それだけでもう、彼が神であるという証拠になった。彼女はプロファイリングを開始する。

彼は、鍵と鍵穴が対のモチーフであることを知っている。存在確率の鍵そのものの存在が神階の機密だ。それを知る彼は神のうちでも必要なポストにある者か。そして何よりアルシエルの察するに、彼は神階主神であるヴィブレⅡスミスより裕に何十倍〱何百倍オーダーのアトモスフィアを所持している。神階の神々を馬鹿にするわけではないが、主神といえどアルシエルの実力に遠く及ばない無能者の集まりの中で、彼は突出した実力を持っている。

そして彼はそれ相応の年齢に見えるが、これほどの実力があれば神階がいくら遠い場所であろうと、その気配を察していてもおかしくはないだろうが、アルシエルは彼を全く知らなかったし彼の気配を感じたこともなかった。アルシエルが結論づけるに、彼は神階が秘匿してきた切り札的な存在なのだろう。

「神階では存在確率の鍵と呼ぶが……汝は神か？」

「そうさ。そう見えるだろ？」

彼はアピールするように軽く腕を広げたが、アルシエルは眉をひそめたただけだ。

「いまひとつ神々しさに欠ける。ところでこのデカブツは何だ、知っていると有難い」

「これは創世者の依代だ……厄介なのはこの塊がABYSSの内部にもぐり込みながら成長し、その一部が生物階、つまり地球の内部にワームホールかなんかで繋がっていて内側から地球を食い破ろう

としてやがることだ。このままだと、A B Y S Sも地球も同時に滅ぶだろう」

彼はそれほど危機感もなくさらっと、恐ろしいことを口にした。アルシエルは話が呑み込めない。彼……荻号 正鵠は、アルティメイト・オブ・ノーボディの知らせによりいちはやくA B Y S Sの異変を知り、生物階から転移してA B Y S Sに介入していた。だが、彼一柱ではブラインド・ウォッチメイカーの思念の宿ったそれを始末できなかった。正確に言えば、始末できなかった理由があった。

「滅ぶ、だと？」

A B Y S Sは滅んだかもしれないと想像しておきながら、いざ滅ぶと言われるとアルシエルも動揺する。彼はアルシエルの動揺をおいていきぼりにして、駄目押しのようにこう言う。

「このバケモノの中は気体に近い構造をしているんだよ。そしてこいつの殻は柔らかいが、とんでもなく頑強だ」

「気体……？ ではまさか」

彼は腕組みをして淡々と解説する。アルシエルの身体を不穏な予感が、稲妻となって走った。彼は彼女の理解が追いついたことを確認しながら、真正面から見据えて断言する。

「そう、重力崩壊が起こる」

重力崩壊とは星の内部密度が低下する事により、星が重力を維持出来なくなることによって生じる。簡単にいえばA B Y S Sという惑星の中枢部が空洞化し自身の重力によって形を維持できなくなつて潰れ、大爆発を起こすということだ。

アルシエルは表情を陰しくした。

「何だと！」

「今のうちに潰しとかなないとABYSSも地球も取りかえしのつかん事になる」

……かつてはアルシエルもよく知る一人の女性であり、今はおぞましい異形の物体と化したそれ――。

風船のように肥大化したメファイストフェレスの身体はもはや、原型をとどめてすらいなかった。その巨大な物体がメファイストフェレスであろうと推測できるのは、解階の貴族が必ず脚に穿つ血筋の正当性、メファイストフェレス家の紋様がかろうじて体軀にこびりついているのが見えたからだ。アルシエルの目にはしかしその由緒正しいレリーフが、受肉した悪魔の烙印にすら見える。

アルシエルが幽囚の身にあったとはいえ、これほどの惨い姿となるまで彼女を救ってやれなかった事を、アルシエルは心の中でメファイストフェレスに詫びた。

彼女の心は既に、死にたえて久しいのか。アルシエルは怒りにまかせて、我を忘れそうになった。

「余が二年前にルシファアに敗れたばかりに……すぐに楽にしてやる！」

「よく考えてから攻撃した方がいいぞ。何しろこいつに与えたダメージは須らく、自分自身に返ってきやがるからな……全力でやればやるほど、ズタズタだよ」

憤怒の修羅と化そうとした彼女に、彼は水を差す。与えた全ての攻撃が、そのままの力で反射され攻撃を仕掛けた対象に跳ね返ってくるのだ。荻号はそのたびに負傷し自宅に帰っては浴室で傷を洗い流す、干物のようになっていつも石沢 朱音に発見され、彼女を心配させていた。

それでも懲りずに荻号はたった一柱でこの怪物に立ち向かい続けている。

「そうか……」

アルシエルは彼の忠告を聞いても怯むことなく対峙する。代償などくれてやる、構っていられるものではない。一刻の猶予もないのだということは、胎動する巨大な赤黒い体軀を見れば一目瞭然だった。

「ではもう、余力は残さん。一発で決めねば後はなさそうだからな」
「まあ早まるな。共闘とイカンイカ？ どうやらINVISIBLEEにも、そうしろと言われているようだしな」

彼は、長そでを手繰り上げて、その下に隠されていた左腕を見せた。

彼の腕にもまた、存在確率の鍵のみが刻まれている。アルシエルと全く同じものだ。INVISIBLEは一体どれほどの者たちに、力を与えたのだろう。何のために？

「存在確率の鍵ってのは、INVISIBLEが加護を与えた証らしい。INVISIBLEの力の一部が使えるようになる。授かったものをわざわざ分散させるより、戦略を練ってお互いの力を生かした方がいいだろう？」

「確かに、合理的だ。かような考え方は好ましい」

アルシエルは、同等の能力を持つ彼の存在を心強く感じた。どうやらこの神と目的を一にし、協力できそうだった。

そして INVISIBLEが暗に、ブラインド・ウォッチメイカーの討伐を指示しているという予測が、にわかに現実味を帯びてきた。アルシエルにはそうとしか思えなかった。INVISIBLEが間接的に、時計職人を潰しにかかっている。

意思なき創世者とされる不可視の創世者、INVISIBLE…

：今アルシエルは、その認識を根底から覆されているのだ。

歴史はこの場所で、劇的に変わりつつあった。おそらくアルシエルは、三階の再編成、更新ともいえる過程を目の当たりにしている。

まさにその現場に立ち会っている。

歴史が覆されてゆくその瞬間に。

第2節 第6話 壊れた、レコードのような雑音

小雨のそぼ降る中、十重二十重にも閉ざされ

悠久の歴史の狭間に隠され続けてきた、真理の扉が開かれていた。

そこは彼女の為に聖別された領域であり、招かれざる者にとって
は生と死の境界でもある。枯れ果てた叢の上に、動物の死骸が思い
思いの場所にまちまちの方向を向いて、横たわっていた。日本の自
衛官の制服を着た遺体も白骨化して、雨ざらしになりながら、その
中のひとつに加わっている。

グラウンド・ゼロ。

そして生と死を分かť場所。

渦巻く狂気の風が、彼女以外の生の存在を阻んでいる。目に映る
のは高いフェンスに周囲を囲まれた何の変哲もないただの野原であ
り空き地だが、漂うのは牢獄のような異様な雰囲気。この上なく残
酷な彼女の為の舞台、そこは供犠の祭壇であるのかもしれない。

やがて雨の上がった冬空の雲間から、スポットライトのように彼
女を照らす光が差し込み、彼女の柔らかな毛を透明にする。風はま
すます唸り上げて、吹き荒ぶ。ひりつくような、渴いた空気が肌に
刺さる。傍に近づくだけで耳鳴りがする。

彼女を置いては他に、頑として何も語りかけてこない場所――。

そこに恒とレイア、一対の抗体と抗原。

恒は彼女を包む異様な空気に吞まれそうだ。彼女のマインドギャ
ップは極度の緊張からか、消えうせている。

「……何か、感じるか？」

レイアは軽く両手を広げ、グラウンド・ゼロに向けて神経を研

ぎ澄ませた。恒は彼女を繋ぎ止める為にその手を握りしめている、ステイグマが昂った時に彼女が帯びる独特の熱にふれた。

“呼んでいます……”

彼女は吸いつけられ、駆られるように高いフェンスの内側を見つめている。魅入られた彼女の小さな足がまさに歩みを進めようとした時、恒はその手を強く引き戻した。ぐん、と柔らかな肢体がバネのようにしなって恒のもとに戻ってくる。

「行くな！ だめだ」

“でも……”

彼女はそれきり言葉に詰まった。そこに行ってはならないと、理性では分っている、それでも、彼女はその誘惑に勝てそうにない。溺れる者に手を差し伸べずにはいられないのが神の本能であるように、INVISIBLEの途切れ途切れの呼び声に耳を傾けずにはいられなかった。創世者INVISIBLEからの、遥かな、そしてこの世界の一切の法則を支配するその呼び声には、それが偽りのものであると、彼女は勝てそうになかった。

恒は背後から彼女をきつく抱きしめ、彼女を行かせまいと身に添わせた。

「遠くから見ただけって約束だ」

恒と目を合わせず真っ直ぐフェンスの向こうを見据えたまま、重い沈黙が続く。レイアはどこかうわのそらだ。いつもは素直で聞き分けのよい彼女が、今日に限って意固地になって首を縦に振らない。この因縁深い場所が、ステイグマを通して彼女の肉体や精神に強く作用していた。それはどんな時にも逃れる事のできない、INVISIBLEからの誘いかけだ――。

「レイア！ 聞こえてるのか！」

ノーボディが懸念していた通りの事態が起こってしまいそうだと。
レイアに呼びかけが届かなくなってしまったのだとノーボディが
恒にぼやいたのは、つい数時間前のことだ。スティグマから働きか
けられる強烈な作用によってノーボディからの精神的な干渉が阻ま
れ、生物階・神階を掌握する彼をもつてしてもレイアの意識と通じ
る事ができなくなってしまったのだという。

アルティメイト・オブ・ノーボディがレイアを庇護することがで
きなくなり、代わりにINVISIBLEがレイアを包み込むよう
に強く影響を及ぼしているということは、ここ数日の彼女の様子を
見れば明らかだった。そのうえアルティメイト・オブ・ノーボディ
は夢の中で恒と通じることすらも、これが最後となるかもしれない
と云っていた。INVISIBLEの生物階における支配力はそれ
ほどに強まって、アルティメイト・オブ・ノーボディの力を徐々に
殺いできているのだそうだと。恒はそれを聞いて、彼からの援護は最
悪の場合完全に、なくなってしまいかもしれないと予測した。

レイアが正気を失うようなことになれば必然的に、他の誰に頼る
ことなく恒が止めなくてはならないというわけだ。それは、孤立無
援の戦い――逃げ出したくなるような恐怖だった。彼女をINVI
SIBLEから直接的に守ることができる存在が事実上、恒しかい
なくなってしまったのだとしたら、遅かれ早かれ、INVISI
BLEは邪魔な恒を殺しにかかる。見通しと対策が甘すぎたと悔い
る時間すら、恒には与えられていない。

INVISIBLE収束は遺すところあと半年にまで迫っている。
INVISIBLEは直前まで手の内を見せなかったことで一度恒
や一部の神々に“幾分の勝機はある”という何ら根拠のない自信を
つけさせ、すんでになって奈落へと突き落とした。それこそがIN
VISIBLEの思惑だったのだとしたら……策はとうに尽きてい
る。

不可視の創世者、INVISIBLEの含むエネルギーは不可逆的に増大する一方だとノーボディは云う。他の創世者のように時間の経過による劣化や弱体化を期待することができない。力を殺がれ、所持エネルギーを目減りさせ続けているアルティメイト・オブ・ノーボディ、そして未だ抗体を満足に制御できない藤堂 恒、わずか2歳と半月しか生きていない絶対不及者の体現者、レイア……INVISIBLEにとってこの三者は、取るに足らない塵芥のようなものだろう。

恒は手のうちにじつとりと嫌な汗をかきながらも、彼女の前で少しでも弱音を吐くわけにはいかなかった。そんな恒より誰より不安を感じているのは、いつもINVISIBLEと無関係ではいられない彼女自身なのだから……。

「しっかりしろ、目をさませ！」

恒は魅入られた彼女にことわりもなくそのコートの下に手を差し入れてその背に触れ、早くも彼の唯一の武器である抗体を発動させた。ステイグマは激しく、恒の手を焼き付ける。いつもは恒の手によってすぐに躡けられるはずの、ステイグマの熱がおさまらない。恒は焦燥のあまり、顔を蒼白にする。

“……フェンスの外側からでも……これじゃ、”

強すぎる。これでは、こんな有様ではINVISIBLEに勝てるわけがない！　すぐ間近に差し迫っていた危険を察した恒は彼女を瞬間移動に巻き込み、恒がよく利用する入階衛星を目標に転移をかけた。

恒の腕時計と一体化しているGPSで座標を確認すると、南米アルゼンチン上空8000mと表示されている。INVISIBLEが逃がしてくれないかかもしれないと思ったが、ひとまずの転移は成功したようだ。恒の腕は彼女をきちんと連れてきている。ほぼ地球

の裏側のこの場所ならグラウンド・ゼロの影響力を排除することができる。

恒は深呼吸をしてレイアを放し、彼女を自翔させて対流圏の一五〇度を下回る厳寒の風に当たらせた。人の身でもある恒にはかなり肌寒く感じるが、プライマリの女神である彼女にはなんということもない気温だ。ふわりと、女神の神体が闇の色がいつそう濃くなった大気中に浮かび上がる。支えがなくなると落下しない、彼女はさほど訓練せずとも自翔できた。彼女の放つ淡いカナリア色のアトモスフィアが、恒の樗色のアトモスフィアと混和され、白藍色となって溶け合う。

「頭を冷やそう」

“……はい”

「いや、俺もだ」

本当に頭を冷やさなくてはならないのは、こちらの方だと恒は猛省した。迂闊で、無計画、無防備すぎた。INVISIBLEがステイグマを介して、ここまで彼女を蝕んでくるとは……敵の強さは恒の想像を凌駕していた。彼女の希望を叶えるために、いささか彼女に自由を与えすぎた。グラウンド・ゼロになど行かせてはならなかった。

恒はかつてない危機を感じていた。その日、その時のためにヴィブレミスが用意し恒が鍛えてきたABNT抗体はもはや、役など立たないかもしれない。そもそもヴィブレミスは、恒に仕込まれた抗体の能力がINVISIBLEの浸食を完全に抑え込めるという公算など、どうやって立てたものか……。

仮に計算が正しかったとしてもVisible Smithは先代絶対不及者の所持エネルギー量をもとに算出している筈で、それでは相手を過小評価しすぎている。この十万年間にINVISIBLEがどれだけ強化しているか、どのような手段で神々に推し量る事

ができるだろう。ましてや恒は自身の抗体の活性を高めるだけで、その命を代償とせずに INVISIBLE を押さえ込もうとしている。そんな生ぬるい対価では、INVISIBLE を制御できるわけがない……恒はようやく気付かされた。

“……ご、ごめんなさい”

レイアは恒がレイアの事についてあれこれと悩んでいるようなので謝罪をする。恒は力なく首を振った。

「いや、お前が INVISIBLE に引きずられたのは……止められなかったのは、お前のせいじゃない。俺のせいだ」

“こ、恒さん……”

「……止められない、のかな……俺には」

恒が全力を以てして、それでも足りないというなら、ヴィブレⅡスミスの当初の予定通り命をもって購うほかない。全身全霊で、恒の命と引き換えに INVISIBLE を抑え込む、迷っている時間などない。レイアを助けるために、そして世界を破滅から救うためにそれだけしか方法がないというのなら……命を燃やし、レイアに灼かれその身を溶かし尽さなければならない――。

恒は少し、小賢しすぎたかもしれないと振り返る。INVISIBLE には理屈など通用しない、姑息な手段が通用するような相手ではないのだ。思惑通りになってくれるような相手なら、神々が太古の昔より現代に至るまで徹頭徹尾、INVISIBLE に翻弄されることも、神階が幾度となく破滅に瀕することもなかった。狡猾なブラインド・ウォッチメイカーが簡単に INVISIBLE に吸収されはしなかった、成熟した深慮ある創世者であるアルティメイ・オブ・ノーボディが INVISIBLE に完全敗北し白旗を上げることもなかっただろう。

至極単純なこの事実を受け入れなければ、その瞬間に敗北を喫す

ることとなってしまふ。

過去幾十億、幾百億年の間に、たった一度でもINVISIBLEを止められた者は誰もいない――。

そう、誰ひとりだって――。

“恒さん……何を考えているの”

レイアは不安そうに彼の名を呼ぶ。レイアの目から見た恒はどこか、思いつめているように見える。恒がどうしなければならないと感じているのか、レイアには何となく予想がついた。レイアは表情を硬くこわばらせた恒をただじっと見つめて、ぷるつと肩を震わせる。彼女の心には、小さな決意の灯火が揺れていた。

それは彼女にとって一か八かの、捨て身の賭けでもあった。

＊

「手柔らかにの」

「今上（当代）主神の名に恥じぬ實力を持っているなら、そう及び腰になることもあるまいて？」

神階の最果てともいえる場所、特務省の最下階で対峙する二柱の神々は、先ほどから微動だにしない。大柄の特務省特務従事者は比企を小馬鹿にして、慇懃無礼に挑発する。

「あの梶が一撃で沈められたのでな……」

くどいようだが、梶はここ二百年にわたり積極的に極陰に位申戦を仕掛け、極位神の玉座を脅かしていた神だ。その梶が、バロックダイス（BAROQUE DICE）の性能も発揮できずまるでいいところなしに叩きのめされ、今もまだ意識を飛ばしている。

そして恐るべきことに、比企と梶との間の實力差は雲泥の差というものではなかった。油断でもしようものなら、比企もすぐに梶と

同じ目を見る。比企は戦闘行為を望んでいない、一つの諍いが、更なる争いの火種となる。神階と特務省が協力関係を結ばねばならないという時に、何という失態だろうと彼は困惑していた。

「なに、そちらの青髪を伸したのは儂^{わし}ではない、織図だよ。儂を警戒する必要はなからう」

割舌の悪い、低い濁声で話す男神だ。すっぱりと頭から純白のフードをかぶっていてその容貌は見えないが、すじばった手や頬のこけた様子から、比企より随分年上、数千年を経た壮年神と窺える。不満そうに弁解する織図の声が、広いホールに反響した。

「よく言うぜ……こっちはあんたらが焚き付けるから止むを得ず、だったんだがね。おい極陽、分かっていると思うが、局長代理は俺なんかよりずっとタチ悪いぞ」

男神の手に携えられた古い木製の杖は、その性能も詳細も未知のものだ。比企は未知のものながら、彼の攻撃パターンを物理打撃メインの中距離型と見切った。というのは、彼にとってこの場所がアウェーではなく、特務省内部^{ホーム}だからだ。

彼がよほどの上役でない限り彼の独断で施設を破壊することはできないし、それは誰も得をしない愚行とみる。しかしひるがえってみるとその状況は比企にとって何らかわりはなかった。彼が幅広い戦略の選択ができないのと同じく、比企も懐柔扇の得意とする物理学的攻撃の殆どを封じ込められている。

比企は刃物のように冴えた頭脳で、芸術的なまでに緻密なセオリを瞬時にして組み立てる神だが、戦術の構築にこれといった決め手を欠いたまま、腰を低く落として攻防一体の構えをとった。懐柔扇の柄をいつもとは違う取り方で逆手に握る。懐柔扇を脇差しのように使い、未知の得物とのリーチの差を利用して切り込んでゆくのだ。

それにしても、比企は久遠枢発動の要請をする為に訪問したので、戦闘行為を想定しておらず、機動性という点ではお世辞にも合理的とはいえない装束で訪問してしまったものだ。襷の一本でも持つてくればよかったと悔いる。長い袖をたくり上げ、仕方なく腰紐を解いて襷がけをするように袖口を縛ると、日頃から苛め抜いてきた強靱な筋肉が現れる。いかに不意をつかれようと、予想外の事態に直面しようと、鍛えてきたその肉体は裏切らない。

いつになく戸惑いの表情を見せる比企を、織図は更に落ち着きのない様子で見下ろしている。位神が極位の身の危険を、本気で案じなければならぬという異常事態。单身挑む比企は、臆してはいない。

しばし睨み合った両者、張り詰めた緊張と静寂に呑みこまれることなく、先に仕掛けたのは比企の方だった。音もなく敵の間合いに踏み込み、変則的な脚さばきと超越的移動スピードでアトモスフィアの分布に流動性を持たせ、爆発的に拡散させる。

ある一定以上の強さを持つ神どうしの戦闘の場面では、気配を完全に断つより気配を分散して撒き散らす方が座標を絞り込まれないものだ。いわゆる木を隠すなら森、気配を断つならアトモスフィアの海に、というものである。比企がアトモスフィアを放散したとみると、織図が局長代理と呼んだ男神はふっと気配を立ち、それと共に比企の視界から消えた。見失ったのではなく、彼はその場から消えてしまった。

彼は比企の出方を見極めた上で気配を断つという、比企とは真逆の戦術を採った。比企は少しも慌てず、懐柔扇の要の部分を指先でつまんで投扇興のような構えで翻した。

「抜かったの……」

比企が呟いてわずかに口角を上げたのは、彼がこの状況を勝機とみたからだ。たとえ彼の姿は見えずとも、この場は比企のアトモスフィアの領域中にある、局長代理の存在が比企のアトモスフィアの布陣にぽっかりと穴を開けた。それは均一に絵の具で塗られたキヤンバスの中に塗り忘れた手付かずの白紙部分が、そこに何もないにもかかわらず強く存在を主張しているさまに似ている。

つまり、いくら姿を隠そうと頭隠して尻隠さずというもので、隠れても意味がない。少し考えれば子供でも分かることだ、藤堂 恒でもこのような無謀な戦法は取らないだろう。神体はアトモスフィアを遮るため、その一柱の体積ぶんのスペースを浮き彫りにしている。この場合、気配を断つのは愚の骨頂。比企が優位と勝機を確信したとき、ふっと背後から予期せぬ気配が現れた。

歪んだ幻聴と風圧に、比企の長い白髪がほんの僅かに触れて気付いた。背後から繰り出されてきた一撃に、いまにも腰骨をへし折られそうになっている！

間一髪のところでは比企は左脚を跳ね上げて体躯をねじり、ちょうど背面高跳びをするような形で攻撃をかわし、跳び下がると共に手の内にあつた懐柔扇を繰り、数万度を超える熱波の爆風で迎撃する。耐熱、耐衝撃性の石畳が熱によって変形し、剥落するほどの攻撃を浴びせかけてもなお、特務省 公務統監局長代理、グイードⅡバルケロは比企の前に姿を見せない。

「気配が……」

比企は背後を中心に全方位に集中したが、彼の気配を察する事ができなかった、逆にいうと比企は比企自身のアトモスフィアを遮られることなく感じ続けていたということだ。先ほど比企がアトモス

ファイアを遮られていたと感じたのは、あからさまな罠だった。仕掛けられていた釣り針を見破れずに、あやうく命を落とすところだったかもしれない。

先刻の攻撃から判断するに、バルケロの所持する神具の性能は、荻号 要の所持していた第二の神具、“慎刀”^{しんとう}と性能が酷似している。その射程距離は、無限大。その攻撃形態は如意――。

一撃も喰らわずあらゆる場所から繰り出される攻撃を、避け続けることは不可能だ。

「そなた……なかなかの手練れ^{てだ}と見受ける」

比企は他人事のようにそんなコメントを述べた。戦闘中は絶対に己を客観視していなければならぬ。

「だからそう言ってるだろ！ 油断してんじゃねえぞ、死にてーのか！」

織図が離れた外野で口角泡を飛ばしながら叫ぶのは、織図がバルケロの手強さをよく知っているからだろう。ふざけたキャラクターの織図が必死の形相で警告するところを見ると、主神をすら殺しかねないという意味なのかもしれない。バルケロにとってこれは余興でも、ただの手合わせや試練でもない、明確な殺意を持った殺戮行動だ。

そして比企にとって不利なことに、神階からは独立した省庁である特務省には捜査当局である神階法務局の手が及ばず殺戮に対する抑止力がない。たとえバルケロが比企を殺害してしまったところで、避けられない事故だった、あるいは正当防衛だったと主張されれば、治外法権を持つ彼がそれ以上追及されることも、ましてや逮捕されることもなかった。

「織図、判官びいきも分るが、少し口を慎んでおれ」

比企に肩入れをする態度を局長に注意され、織図はもどかしそうに口をつぐむ。判官びいきと蔑まれるほど、比企の実力は劣っていないと代弁したかったのだが、彼は局長に口ごたえしなかった。

「力の出し惜しみなどせぬ方がいい、当方も手を抜いてやるつもりはない。ここで起こった事は全て事故として処理される、くだらぬ打算などせぬように」

挑発ともとれるバルケロの言葉を聞いた、比企の灰色の瞳が鋭く輝く。

「全て事故か……。その言葉に、二言はなかるうの」

姿なきままだここからともなく聞こえてきたバルケロの忠告に従ったのか、比企はパチンと大きな音を立てて懐柔扇を閉ざした。手遊びをするように、柄の端についていた長い金属繊維の飾り紐を、扇の骨の部分に幾重にも巻きつけてゆく。

一見戦闘を放棄したかに思われる行動だが、白旗を揚げたのではない。折りたたまれ飾り紐を糸巻きのように巻きつけた懐柔扇は、やがてあるものを髣髴とさせる。そう、その形状はまさしく。

電磁石コイルに似ていた。

“零式 超ちようりんかいじぎたんきよくし臨界磁気単極子”

比企はアトモスフィアを電磁石様の回路に通じ、最大出力を乗せた強大な磁場様の作用フィールドを立ち上げた。超伝導体物性を持つ神銀で作られた懐柔扇の骨から轟々と、彼のアトモスフィアを増幅してゆく禍禍しい共鳴音が聞こえる。暴れ狂う強い磁気を帯び重みを増した懐柔扇をぐっと頭上に押し上げ掲げると、紫電の磁気嵐がスパークを起こし竜巻を生じる。

”筐内振動を寄与”
きょうないしんどう

元素崩壊と同じく、これだけは使うことがあってはならないと比企が自重していた禁断の機能……アトモスフィアによって増幅された単極子力をもって、対象の脳内で磁気振動を起こす“筐内振動”。

悪趣味なことに筐というのは、脳の隠喩である。

それは、ヴィブレイスミスの奥義P S Y C O — L O G I C a s e（精神分解酵素）よりなおおぞましい業だといえた。なにしろ筐内振動は、対象の神経ネットワークを溶かしてゆく P S Y C O — L O G I C a s eより圧倒的に速い時間で神経回路を物理的に破壊し、対処や反撃行動のための猶予を与えない。

神々の模範となるべき極位神が敢えて下劣な手段を選ぶのは、それだけ余裕のなさを感じているからだ。隠し玉を隠しておけない、特務省職員グイードⅡバルケロは比企をそんな切迫した状況に追い詰めた。彼は厳霊いかづちを落とすように単極子振動をグイード度の脳に転移させる。

パシッとショートを起こし、無味乾燥な破裂音がして、脳内に落雷を受けた哀れな犠牲者は不可視化状態から姿を露にした。何が起こったか把握できず、比企に指一本触れられないまま、冷えきった床上に落下してゆく。比企は瞬殺した彼の亡骸の傍にひざまづくと、哀悼の意を示し、聖印を切り送った。

結局、比企はフードに隠された彼の素顔を見ることもなかった。「事故”ではいささか、しのびないがの。其を望んだとあらば、応えるは道理」

もう、彼からの返事はない。

パチ、パチ、パチと大袈裟な拍手が聞こえてくる。

傍観を決め込んでいた局長が、比企を勝者と認めたのだ。織図は初めて間近で見た比企の手段を選ばぬ鬼畜ぶりについて喉元まで出かけた、こいつはとんだ二重神格野郎だという言葉をやつとのこと。で心の中にしまっておいた。正義を重んじ悪を憎む、そんな馬鹿正直で愚直な思考回路では極位など獲得できなかっただろう。

織図はグイードⅡバルケロに世話になったし、彼はよい上司だった。実力も人望もあった。その彼を一撃で葬り去った比企のポテンシャルは、いかほどのものか。局長はバルケロのフードを取り、見開かれた瞳のまぶたを優しく撫でて閉ざす。

「極陽という立場からは想像できぬ戦術だな。汝の性根はまだ、陰階神のようだ」

「左様だな、否定はせぬ」

殺さなければ、確実に比企が殺されていた。だが一柱の神の命を奪った以上、弁明はできない。

「ともあれ、彼が事故と遺言を残した以上、事故は事故だ。中枢部へ案内しよう。ついてこられよ」

部下を殺された怒りも悲しみも、彼女からは微塵も感じられなかった。比企は織図のすぐ隣で台座に寄りかかるように寝ていた梶を揺さぶり起こして立たせ、重い足どりで彼女の後に続いた。

＊

「レイア……？」

恒は薄暗がりの中で、繋いでいたはずの彼女の手をまさぐる。彼女を離さないよう互いの手に手錠をかけていたのだが、ある筈の手に触れられない。はっとして目を覚ますと、恒の身長にはいささか

広すぎる、ダブルベッドの上には誰もいなかった。手錠の鍵は間違
いなく恒が持っていた。

やられた……共存在で逃げられたか、あるいはさらわれたか。後
者の可能性はほぼ0だ。さらわれたというのなら、哨戒モードにし
ておいたFC2ーメタフィジカルキューブのアラームが必ず反応す
る。そう考えると、彼女は共存在を使って逃げた。か。

いつだ？ 彼女はいつからいなくなった？

反射的に壁掛けの時計を見ると、現地時間にして午前2時、ここ
はカリフォルニアのビーチ近くのホテルだ。恒はレイアと生物階で
の滞在場所を、毎日転々と変えていた。万が一にも彼女や恒に追っ
手がついては大変だ。できるだけ居場所を特定されたくないので、
比企に適当な身元を用意してもらい、偽名を使って宿泊していた。

恒は防寒のため白衣を羽織ると、思考停止した頭のまま窓を開け
放ち、裸足のまま海風の吹きこむテラスに出る。よく磨かれたガラ
ス窓のサッシには確かに内側から、嚴重に鍵がかかっていた。

恒は穏やかな潮騒音を聞きながら、重要なことを失念していたな
と額を押さえた。彼女はつい今朝がた、グラウンド・ゼロの場所を
覚えてしまった、一度でもグラウンド・ゼロに行ったということは
彼女がいつでも、彼女が望む時に瞬間移動をかけられるということ
だ。恒は三度、彼の計画性のなさを悔いた。

柄の悪い男達が車でたむろするこの危険なホテルの周囲を暢気に
散歩しているとも思えないし、先ほど浜辺で存分に遊んだ彼女の興
味を引き付けるものがあるとは思えないから、彼女は瞬間移動をか
けてグラウンド・ゼロに行ったと推測しても無理な話ではない。そ
して、いや十中八九だが、そこに行ったレイアがただフェンスの外
側から指をくわえてグラウンド・ゼロのあたりに見とれているとも
考えられないから、フェンスの内側に入ってしまっただろう。

となるとう、有限の命を持つ恒はフェンスの内側に入れず、彼女を助けられない。なお、改めて確認するまでもなく、恒の持つ神具FC2—メタフィジカルキューブには遠隔から対象を救うことができるような機能はついていなかった。

いや、待てよ。

彼は深呼吸をして狼狽しそうになる心を落ち着ける。恒にはできなくとも……比企ならば懐柔扇を持っている。懐柔扇を使えば彼女がグラウンド・ゼロに降り立っていても、彼女をフェンスの外から凄まじい風圧で吹き飛ばしてグラウンド・ゼロの圏外に出すことができる。先にレイアを助けに行くか、比企を呼ぶか……。

比企を呼ぶ方が先だ、恒はそう判断した。たとえ極位神である比企が玉座から動けなくとも、全神具適合性を持つ恒なら、最大出力ではなくとも懐柔扇の最低限の機能は扱える、何らかの対処はできる。恒は両手を併せ、超空間転移を行うためにアトモスフィアを収斂し、集中力を研ぎ澄ませてゆく。まだ未熟な恒が超空間転移を行うまでには、調子のよいときでも3分ほどの時間を要した。このわずかな時間が、命取りにならなければよいが……。

彼はできる限りそちらに集中しながらも、頭の片隅では別のことを憂慮していた。……恒が“眠っていた”、つまりいつでも彼と通じ合える状況だったのにアルティメイト・オブ・ノーボディは、恒にレイアが行方不明になったと、彼女が危機に陥っているとは教えてくれなかった。

教えてくれなかったのか、それとも、教えることができない状況になったのか。

難しくあれこれと捻って考えずとも、後者だということは明白だった。

「アルティメイト・オブ・ノーボディ、まさか……INVISIBLEに……？」

恒にとって、四面楚歌の苦境は加速している。アルティメイト・オブ・ノーボディが恒を、そしてレイアを助けられない状況に陥っているとは思えない。あるいはもう、アルティメイト・オブ・ノーボディも消されてしまったのか？

INVISIBLEがさらに恒を消すようなことになれば、レイアはたった一柱でINVISIBLEに立ち向かわなければならぬ。が、立ち向かうといっても籠絡されるのがオチだ。今後の戦況は不利を極める、恒がどこまで彼女を守ることができるものか――。アトモスフィアの熱量が励起状態にまで高められると、恒は迷わず神階最上層の天奥の間に超空間転移をかけた。

＊

日本時間にして19時をまわった頃。

日が落ちて急速に明度を失ってゆく山間の片隅で、虚空に捧げられた幼い生贄は誰に導かれることもなく彼女の意志で、ただ彼女の勇気だけを支えにひらりとフェンスを乗り越えた。裸足で柔らかな土を一步ずつ踏み固めながら、ゆっくりと災厄の起点に近づく。

竦んで固まる足を前に押し出し、萎える心を奮い立たせ、創世者INVISIBLEと契った聖域に踏み込んでゆく。舞台には、誰も上がる事ができない。命あるもの、命に限りあるものは近づくことすら出来ない場所。

グラウンド・ゼロに近づくにつれ、真っ暗な視界のなかで彼女の
瞼の奥に強い光が射しこみ、しだいに全身が熱くなってきて、IN
VISIBLEの手の中に包み込まれるのを感じていた。五感は痺
れて薄れ、足を運ぶたび頭痛がひどくなる。

彼女は耐えられなくなって痛む頭を抱えながらよろよろとへたり
座り込み、スティグマから湧き上がってくる熱に全てを委ねるしか
なかった。彼女は溶かされそうな熱の中で、喘ぎながら、悲壮な決
意のもとに創世者と通じようとした。

“INVISIBLE……望みどおり、話を聞きました。あな
たはわたしから、たくさんものを奪ってゆく。もうやめてくださ
い、誰も連れて行かないで。あなたがわたしを必要とするように、
みんな、みんな……わたしには必要なのです”

レイアは小さなお守り、未来みきからもらった桜色と白のボーダーの
手袋をきつく握りしめていた。彼女は彼女にとって大切な者達の顔
を思い浮かべる。幸福なひとときを過ごした、生まれてはじめてで
きた友達、未来の笑顔が鮮やかに浮かぶ。彼女の存在はレイアに勇
気をくれた。二年半の間、親がわりをしてくれた恒の優しさと温か
さを忘れない。彼は、レイアの不安と恐怖を振り払ってくれる。そ
して彼女が出会った人々、神々、動物達……この先どんな事があつ
ても決してひとりではないのだと、レイアはそう信じたかった。

身をこわばらせて変化を待っていた彼女に、予感唐突に降り注
いできた。よく耳を澄ませていなければかき消えてしまいそうな、
錆付いたドアを開くような、ほんの僅かな雑音でしかなかったが、
無音と静寂に慣れた彼女の鋭敏な聴覚によって、しっかりと捕捉す
ることができた。

《……つと あえ た……》

声は確か、そう云ったと彼女は思う。だがそうだという自信がないのは、声というにはあまりにも機械じみて、無機質すぎたからだ。声ではない、これは予感だ。

”そこに、いるの？”

ゴッ、と声押し流すように上空から強い風が吹いて木々をざわめかせる。レイアの目には見えないが、INVISIBLEはその存在を控えめに、だが強烈に主張していた。その存在に気付いてくれと云っている、レイアはそんな気がした。彼女は頭痛と背中熱さをこらえながら周囲を見渡す、祭壇には先ほどと変わりなく誰もいない。だが、どことはいえないがすぐ間近に煙のように定まらない気配を感じる。それはレイアを見おろしている、どこか、遥かな高みから。

“……あなたが、INVISIBLE？”

レイアは勇気を振り絞って、どこへともなく問いかける。レイアは肉声を出せないが、INVISIBLEにはきつと届いているのだろう。

《……ま、だ……トおい》

アルティメイト・オブ・ノーボディと直接通じたことのあるレイアだが、アルティメイト・オブ・ノーボディのようにはつきりとした意思を感じられなかった。意識が朦朧として、うわごとを吐き出している……あるいは、使われなくなって棄てられた古いレコードのスイッチが何かの拍子に入って、いつまでも無機的で耳障りな音を絞り出しているかのような、感情や意思の籠らない雑音でしかなかったが、それを仮に機械ではなく誰かの声だと捉えるなら、苦しそうだ、とレイアは感じた。

《せカ イガ、で キル マエ……ズツト、あなタ ト、カレ
ヲ……》

”彼？ 彼って……？”

《ジかんが…ナ…ィ》

やはり聞こえてきたのは機械的な、抑揚のない呼びかけだった。
こんな雑音が最大にして最強の創世者の、崇高なる意思なのだろうか？

それともレイア は、創世者との因縁深い場所で自己暗示にかかって、幻聴を聞いているにすぎないのだろうか。これがINVISIBLEの声だというならまさに息も絶え絶え、なんと頼りなく、稚拙で、そして貧弱なものなのだろう。レイアは恒や神々、アルティメイト・オブ・ノーボディが彼の残忍さを恐れているほどには、彼は何も考えていないのではないかと思った。

いや、こうは考えられないか。INVISIBLEは意思なき創世者ではなくかつてはアルティメイト・オブ・ノーボディやブラインド・ウォッチメイカーと同じように意思を持っていたが、何らかの事情で思考能力を失ったのではないか。そう考えると不思議と辻褃が合うような気がする。この状態がINVISIBLEにとって正常だとは、とても考えられない。

例えば、“病氣”、だとか……彼は創世者として健康ではない、どこかが、致命的に壊れている。レイアは彼女の直感に導かれるように、彼が“病氣”なのだろうと推定した。

”彼って……もしかして恒さんのことですか？ 恒さんはあなたにとって必要ではないのでしょうか？ どうして？ 分かりません“

INVISIBLEが何か、レイアと恒に頼らなければならないことがあるのだろうか？ 無限のエネルギーを持し、アルティメイト・オブ・ノーボディやブラインド・ウォッチメイカーのみならず数多くの創世者達を造作なく吸収しては肥大化し、その身の肥やしとしてきた恐るべき創世者INVISIBLEが……。これでは、いくら何でもお粗末すぎる。分別のない赤子かそれ以下だ。

《……それ：は……》

” INVISIBLE、苦しそうですね。病気なのですか？ ”

レイアは彼をいたわるように手を伸べた。彼女の手にはむろん、山間部の冷え切った大気が触れているだけだ。彼を憐れんでも、大きすぎるその存在に触れる事も、撫でてやることもできなかった。

《……もう――》

それを聞いたレイアは差し伸べていた手を緩慢な動作で下ろし、彼の意図を理解するまでに、かなりの時間を要した。彼が何を云っているのか、その言語は聞き取りにくいながらに全て理解できる。だが、到底受け入れられない。これは、受け入れてはならない事実だ。長い時間の果てに、レイアの脳は情報を処理することができず、ただ受け取った情報を反復した。

目が醒めた、そんな表現が適当か分からないが、彼女を苦しめていた頭痛は更なる衝撃に書き換えられて、いつの間にか嘘のように消えていた。

” …… INVISIBLEのあなたが――するって……まさか…… ”

《……メをカ シテ：ナイ：か》

彼女の返事を聞かないまま、強引に彼女の両の瞳にほうっと禁視の光が宿る。レイアは抵抗するすべもない。彼女が望んでここに来

てしまった以上、INVISIBLEにされるがままだ。レイアはこうなることを少しも予測せずに、生贄の祭壇にのこのこと出向いて来たわけではない。

だが恒や比企に守られていて本当の意味では生命の危機など感じたことのない彼女が、彼女の不死の生命をすら掌中におさめるINVISIBLEと対等に駆け引きをするなど、どだい無理な話だった。彼女は悔恨に押しつぶされそうになりながら、INVISIBLEに縋るように尋ねた。

”わたしの身体を、乗っ取るの？”

彼女は命乞いなどしないと決めていたが、身体の震えはひどくなるばかりだ。

《ちが……う》

怯えて歯の音の合わないレイアにどこか困惑したように、雑音は否定する。

《モ、ウ……こトバ……ハなせ ナイ》

途切れ途切れに聞こえる雑音は彼のいうよう、もはや声としての最低限の構成を満たしてすらいなかった。雑音はやがて吹きすさぶ風にさらわれて、かき消えてしまうものなのだろう。INVISIBLEがレイアに語りかけることができる時間は、もうさほど長くはなさそうだ。

INVISIBLEがレイアに訴えかける、彼の声を、彼の願いを聞きださなければ彼はまた無慈悲な創世者として三階にのつての最大の脅威と成り果ててしまう。これまでと何も変わらない、INVISIBLEの意思を知らなければ、絶対不及者となったレイアがまた同じ悲劇を繰り返すだけだ。そして今度は――それだけでは済まない。

何かを変えなくてはならない、それをINVISIBLE自身が、

願っているのだとしたら――。

《……………、スベテ ヲ…………》

レイアが恐怖のあまり目を閉ざした直後、彼女の瞼は石のように固く重くなって持ち上がらなくなった。彼女の意識はその瞬間から拡散し、じわじわと彼女の身体から溶け出して、INVISIBLEの意思と交わり同化してゆく。自己が薄く薄く異物と混ざり溶かされてゆく、自らが失われてゆく絶望的な感覚だった。

INVISIBLEと意識を共有し抜け殻となったレイアを取り巻く環境は、刻一刻と変化し続けている。やがて月が東へと傾き、満天の夜空の下の木々が草地に影を落としている。昏く深い、いつまでも明けない夜のようなのっぺりとした深淵が、色を失った木々が、無感傷にレイアを見下ろしている。冷え切った大地に熱を奪われてゆく。身体の内芯まで、骨の髄まで凍えている……レイアにとっては懐かしい筈の、無音の静寂にすら身を切り刻まれてゆくようだ。全ての意図を受け止めた彼女に、どこからくるとも知れない激痛が襲う。彼女が感じた痛みは、身体的なものではない。

”…………それが本当なら、わたしは一体どうすればよいのでしょうか……”

独り舞台上で独白しながら、彼女は夜露に濡れた金色の頭をかかえて蹲った。彼の云うことが本当なら、レイアは共存在を使ってはならない。運命のいかなる回避も逃亡も許されず、レイアはレイアのままINVISIBLEをその身に受け入れ、絶対不及者とならなくてはならない。

しかしINVISIBLEが方便を云っているのなら、それはすなわち、彼女と三階の破滅を意味した。深慮ある恒はきつと、INVISIBLEの妄言など信じるなと云うだろう。恒の行動を予測

しているからこそ、アルティメイト・オブ・ノーボディとの連絡を遮断し、彼女に外野の声が入らない状態にして、INVISIBLEはレイアだけをここに呼んだのかもしれない。INVISIBLEに洗脳されたと恒に言われても、レイアは反論できない有様だ。”皆を傷つけて、恒さんをずっと苦しめて……わたしにもいっぱい、酷いことをして……どうして、助けて欲しいだなんて云うの？ 大嫌いです、あなたから自由になりたい。でも”

彼女の頬を一筋の涙が伝っていった。やり場のない悲しみが、レイアの心の奥のほうを掻き混ぜて滅茶苦茶にする。

“あなたを助けなくては……。INVISIBLE……あなたはどうして、自分を失ってしまったの”

声が遠く去り、レイアが気が付くと、柔らかな土の上にうつ伏せに倒れこんでいた。流星のように舞い降りてきてレイアを打ちのめした INVISIBLEからの天啓はもう、聞こえなくなっていた。

彼女はかじかむ両手に力を入れ、やっとのことで細い身体を起こす。それまで INVISIBLEによってシャットダウンされていた現実が津波となって、彼女の五感に襲いかかってきた。

「レイアア———！」

背後から、レイアを引き戻そうとする恒の絶叫が聞こえる。心細さのあまり聞こえた空耳ではない、恒は生と死を別つグラウンド・ゼロを仕切ったフェンスの瀬戸際まで迎えにきていた。

ああ、そこに恒がいたのだ。

何度レイアを呼んだものか、恒の声はひどく掠れていたが、INVISIBLEが彼女に押し付けるノイズのような儚いものではない、力強い肉声。彼女の耳にはなんと頼もしく聞こえることだろう、レイアは子犬のように震えながら、じわっと涙がこみ上げてきたのを感じていた。

彼女の大好きな声の呼ぶ方に駆け出して、どれほど恒に飛びつきたいと思ったか分からない。だが、彼女はそうすることができなかった。恒の胸に飛び込めば、恒は二度とレイアを離さないだろう。彼はどんな手段を使っても、レイアをそこにある脅威から守ってくれようとする。

「戻って来い！ 早く！」

レイアは涙まじりの茫然とした顔で恒を振り返り、地を蹴って透き通った厳寒の空に舞った。黄金の女神と、銀色の月がコントラストを成している。恒には触れる事もできない、荘厳で不可侵の光景だった。彼女の純然とした美しさを、冷たい月が引き立たせている。

“ごめんなさい。わたしは……INVISIBLEを助けます”

間に合わなかった。恒が夜空にいくら彼女を呼ぼうとも、彼女は戻らない。

恒が彼女の姿を見たのは、それきりだった。

第2節 第7話 あなたの、止まり木になる

夜の森はいつになくざわめいて、木々の残響に浴す。見上げた月がやけに明るくみえる。

彼女のアトモスフィアによって浄化された透明な空気。

レイアを失い、グラウンド・ゼロへと取り残された恒はアトモスフィアを探知するため集中力を研ぎ澄ませる。

レイアのアトモスフィアの気配は感じられない。絶対に許されない場面で、判断を誤った……。

恒は懐柔扇を求めて神階に寄り道をしていたが、最悪なことに比企には会えなかった。

ロスをした時間は往復でおよそ七分弱、だが彼女が例のホテルからグラウンド・ゼロに向かってから、既にどれほど時間が経っていたのかは分からない。振り返れば彼女はここどころ、INVISIBLEと思しき呼び声から強い影響を受けているようだった。

それを踏まえて不測の事態に万全を期していた筈が、レイアから目を離してしまったことが悔やまれる。彼は悔恨のあまり握りしめた拳を強く地に叩き付けた。しかしフィジカルギャップを備える彼の拳は傷つかない。人間ならば痛みで気を鎮めることもできるが、彼の場合そうもいかない。

彼女はどこへ消えた。生物階の地理にも詳しくなければ、彼女が行きたいという場所すら分からない彼女のことである。共存存在を使いこなす彼女のアトモスフィアであるが、まだほんの幼い少女神であるため、吹けば吹き飛ばされてしまいそうに脆弱で、少し遠くに逃げられれば探知などできそうになかった。INVISIBLEは恒の手の及ばない場所から、レイアの逃亡の手引きをした。

大胆不敵、そのやり口は堂々としたものだった。

瞳を閉じ、手がかりを求めてアルティメイト・オブ・ノーボディに呼びかけるが、もはや彼からの反応はない。ノーボディの沈黙は、恒を絶望させるに十分だった。

もう、誰も頼れないと悟った。恒が頼りにしたものは悉く失われてゆくものだ。

そろそろ気づかなければならなかった。

レイアがINVISIBLEに連れていかれたとばかり考えるのは都合がよすぎる、と恒は考え直す。彼女は“逃げたくない、INVISIBLEと立ち向かいたい”との決意を口にし、彼女のマインドブレイクの結果からはその後ろ向きな気持ちの片鱗は見えなかったが、もし僅かばかりにでもその恐怖から逃れる術があるとしたら、彼女は逃げたいと思うだろう。

彼女が逃げ出したいと願うこと、臆病になる心を、誰も諍ることはできない。

命を惜しんではならないと、誰がいえようか。

ひるがえってみれば、監禁を解かれて生物階降下中の状況は、彼女にとって辛い現実から逃れるための唯一のチャンスでもあった。彼女は逃げる権利も隙もあったのに、恒が共に戦おうという言葉で彼女を縛りつけ、図らずとも彼女の逃げ場を奪っていた。優しい言葉で励ましながら、彼女を雁字搦めにしてしまっていた。

だから、彼女が自由になることができるのなら、これでよいのかもしれない。

恒は闇の深くなった夜空を仰ぐ。風が頬に冷たく当たる。

しかし、彼女が自由になることができるなら、だ――。

恒の抗体は、まだ収束すらしていないINVISIBLEを一時的にでも抑えておけなかった。それは彼女を不安にさせたのだろうか。もっと抗体が強ければ……彼女に信頼してもらうことが、彼女を安心させることができただろうか……。

どうしようもなかったと分かっているにしても、悔恨の念は尽きない。

彼女の身体という居場所を失ったINVISIBLEは半年後、どうするのだろうか。

収束を諦めてくれるわけでもあるまい。

今頃、彼女の行方を追っているのだろうか？

彼女は帰ってくるのだろうか？

そしてそれまでの間に恒ができることといえば、ただ抗体の活性を高めることだけ。しかしそれはレイアを失った途端に最も困難な課題となった。彼女と恒の関係は、片依存している。恒という制御を失ったレイアは、ますますINVISIBLEからの影響が強くなるのだろう。

恒はレイアがいたからこそ、抗体の活性を高め続けることができた。

鍛えなければ、抗体は弱体化し、恒は普通の神に戻る。レイアがいなければ、恒の抗体もそのうち使い物にならなくなるかもしれない。

抗体を強くしてくれる、抗原がないからだ……。

岡崎 宿耀の助力を請わねばなるまい。比企に状況を報告しなければならぬが、今は連絡が取れない。ならば今すぐ岡崎に連絡を取るべきだ、そう思ったが早いか、彼は迷わず岡崎の第一使徒に電話をかけ、予定がいっぱいだというのにごりを押して当日中の面会の予約を入れた。

何もせずにはいられなかった。

＊

特務省中枢へと続く細く長い通路。

局長を先頭に、比企、織図、梶と四柱の神々が歩みを進める。特務省中枢への通路は通風口に偽装しており、一見して通路とは判別できない。彼らが歩むたび、ベコン、ベコンと足元が軋む。トタン板で造られているのかと思われるほどちやちな足音がして、足場の素材の安っぽさを強調していた。本当にこの道でいいのかと比企は織図に訊いたが、織図はひとつ、しっかりと頷いただけだった。比企は織図を信用することにする。

二度も騙すメリットはない。

「おい継嗣、さっきはよくもやらしてくれたな。今度の位申戦で後悔させてやる」

梶は怨みがましく、多少は冗談めかして織図に絡んでいた。

陰階2位の梶が下位の織図に敗北したという事実。上位の神が、彼の専門分野、つまりA Aの分野で下位神に敗れるなどということ
は――。

しかしどうやら、これまで神階にその実力を隠し続けてきたらしい織図のポテンシャルは、一度も正當に評価された事がなく、そして誰も本当の意味での織図 継嗣という神を知らなかった。今後どうしても、それが位申戦であってもなくとも、織図を倒さなければならぬ、梶はそう思う。そうでなければ、梶は自信を取り戻せそうになかった。

「何いってんすか。位申戦で降格試合ができるかって」

「何いってんすかじゃねーよ、再戦を申し込まざるをえんぞ。こっちにも一応、枢軸のメンツってもんがある」

「そんなもんすかね」

織図はつかかってくる梶を適当に受け流し、ぷかぷかと煙管をふかして、まるで聞く耳持たずだ。織図はこの期に及んで枢軸がどうだとか、てんで興味はなかった。

世界の終末。

INVISIBLE収束はもう目前に迫っている。

そして三階を縦横無尽に駆け、創世者の力の一部を受け継ぎ、最後の救世主ともいえた存在を失い、三階は彼の記憶を失った。その結果わずか2歳と半年のプライマリの少女神に縋らなければならぬ。

この惨憺たる状況。

神階は現状に気付いていないのだから……。位神だの特務省だの、神階の些事に構っている場合ではないのだ。彼が戻ってきてくれれば、何かが変わるような気がする。織図はいまだに、彼の名を口にすることが出来ない。

彼、ユージーンの名を――。

織図はそんな事を考えながら、うっかりとこんな事を口走ってしまった。

「それを言っちゃ、特務省の特務従事者が枢軸に負けたらメンツ丸潰れだ」

「あ」

そこで梶と織図の二柱は青ざめて、顔を見合わせた。彼らが気にしたのは、局長の顔色だ。

「いや、何でも」

織図は口が滑ってそんな事を言ってしまったが、事実として、比

企は特務従事者であるグイードを最悪の戦闘内容で、つまり殺害することにより破った。織図と梶は失言だったと局長の顔色を伺ったが、局長は耳をぴくりと欹そはだてることも振り向くこともしなかった。彼女にとっての部下は、どうやらその程度のものでしかなかったらしい。

彼女の後に続いて無言で通路を歩いていた比企は、罪悪感にかられてのことか他に思うところあつてか、部下を失った彼女よりほど深刻な面持ちだ。さらに、彼の携帯からアラームが聞こえはじめた頃には、その表情はいつそう険しさを増した。比企は赤いボディの携帯を取り出して、神経質そうに軽く額を押さえると、アラーム音を切った。

「織図」

比企は凍りついていた二柱を振り向いて足を止め、織図に呼びかける。

「なんだ？ その赤いシャア専用携帯は」

織図のマニアックな冗談は、比企には全く通用しない。

「レイアが、行方不明になったようだ」

比企はレイアの足首に取り外しのきかないアンクレットを付けて、恒の場合は愛用の時計に仕込んで、そこに強力な発信機を埋め込んでいた。いつでも彼らの居場所を把握しておけるようにだ。神階、生物階を問わず彼らの居場所はわかる。比企は携帯に仕込んでいるリーダーで彼女の辿った軌跡を洗い出す。レイアの足どりはグラウンド・ゼロのあたりでぱったりと跡絶えていた。

携帯のアラームが鳴ったのは、彼女のアンクレットからの通信不着シグナルだ。

「藤堂がレイアから目を離すとも、思えんのだが」

比企は恒の臨機応変な対応と判断力を信用していた。

位神と比べても遜色のない高い状況分析能力と、優れた頭脳、そして超空間転移を習得していること、更に彼は子供でありながら特に用心深い。そんな彼の虚を突いて、レイアが行方不明になっているのだとしたら……何か、彼らに大事が起こったのだ。

「レイアⅡメーターが行方不明だと?!」

織図が比企に食ってかかる。

恒のことを織図が比企に任せたのは、彼の融通のきかなさや頑固さが、大きな守りの力となると踏んでいたからだ。比企は一度も不手際を犯したことがない、その性格はあまり好きにはなれないが、悔しいことに信用がおけた。

ミスをしないうという取り柄すらなければ、織図は全面的に比企が嫌いだ。

「レイアⅡメーターと恒はあんたの権限と責任において、嚴重に保護されていた筈だろう」

「おいおい。そりゃねーよ。レイアっていやあ、神階最後の女神だろうがよ。何でそんな簡単に行方不明にするわけよ」

梶もぎらぎらとした非難の眼差しを向けた。

「転移先ぐらい、把握してるんだろ?」

「特定できん」

彼女は超空間転移が出来ないので、彼女が単独行動をしているのなら必ず生物階のどこかということになる。一方、恒の居場所はグラウンド・ゼロに留まっているが、そのことは恒が肌身離さず身につけている腕時計に仕込まれた発信機によって裏付けられている。微動だにしないレーダー上の点は、恒が途方にくれている様子を示している。

誘拐でもされたのだろうか? 恒の目を盗んで? 考え難かった。

「窮したな。梶、先に行ってくれ、すぐに戻る」

「ちょ……比企！」

比企は梶を残し、超空間転移で生物階へと消えてしまった。

遠くで懸念しているよりは直接確認。比企が中枢へ行かなければ特務省の連中とは話し合いにならないのだが、特務省に久遠枢の発動を請う比企にとっては、肝心のレイアがいなければ話し合い以前の問題となる。

比企が去った後、気まずい空気が流れる中、織図だけは腕組みをして何かを真剣に考えているようだった。

「局長。俺も少し用事を思い出しましたわ。なに、すぐに戻りますよ」

織図は取ってつけたように言うと、比企と同じく、局長の許可を待たずに消えてしまった。彼が向かったのは生物階ではなく、自身の執務室だ。

彼はEVEにダイヴし、EVEの聖域にしてブラックボックス、“最果ての谷”に進入しようと考えたのだ。そこに何があり、レイアの失踪とどう関係があるのかは織図しか知らないことだ。

” 見てるんだろ……なら少しは、力を貸せよ ”

織図は懐かしい者へと語りかけた。

＊

ゴウン、ゴウンと様々な実験機器から奏でられるモーターの駆動音が部屋中に響き渡る。無造作に投げ散らかされたマイクロチューブやマイクロペット、毒々しい色をした液体に、干からびた何がしかの残渣、ゼリー状の破片。異空間を思わせる研究室の一角に、

超高度ゲノム解析フィールドがある。

ホログラム表示のゲノムデータが翠色の光の柱となって天井まで駆け上がっている。解析フィールドの境界を示しつつ高速回転する無数の翠色の環状のグリッドは、複雑な魔方陣のようにも見えた。

ノイズに纏わりつかれながら、電子の海に浸る青年は光の円柱の中に胎児のように身体を縮めて浮揚している。文字列化された光のデータを指先で引っ掛けドラッグすると、巻物を開くように遺伝子地図が表示され、薄暗い研究室のライトの下に、忙しくデータを駆る青年神の姿が浮かび上がる。彼の脳には情報処理のためのインタラクティブポートが埋め込まれており、脳領域の一部が電腦化を果たしている。

彼のこめかみに穿たれたポートをネットワークケーブルと接続すると、彼の脳内の神経回路に直接、遺伝子情報がオーバーラップし利用できる。これは織図やファティナのように、神経系をクローズドな仮想空間内で再構築する仮想空間ダイヴとは異なり、現実空間において生身の頭脳に情報をたたき込むという方法であり、オープンデータベースと脳の間でリアルタイムに遣り取りする、まさに遺伝子解析の為の電腦ネットワーク技術だ。

その為、彼は解析中だというのにデータを目視する事もなくずっと目を閉じているが、意識は深層ではなく表層にあって、データを操る指先は忙しく動いている。すべて彼の脳内で行われている情報処理なので、恒はその情報を共有する事ができないが、彼が糸紡ぎのようにデータの糸を繰り、投げては束ね、驚異的なスピードでデータが解析されてゆくその様子だけは窺えた。

「レイア||メータールが行方不明、ねえ……」

機械のように正確無比な解析作業を行いながらも、傍にいた恒の存在を忘れていなかったらしい。作業フィールドの中で瞳を閉じたまま、うわごとのように呟いた。思いがけず話しかけられた恒は小声で話す彼の言葉を聞こうと前につんのめるが、一步でも足を前に進めようとする前に、釘をさされた。

「そっから一步でも動くと、光に切り刻まれるんだよ」

「は、はい」

碧色の草木のような毛髪と同じ色の瞳を持つ、一風変わった風貌のこの神は、陰階神第8位、遺伝子を司る神、通名 アマデユ^{おかげ}II^{しゅくよう}パズトリー(Amadow Paztorii)、置換名を岡崎 宿耀^{しゅくよう}といった。彼は310歳と比較的若手の部類に入る神で、遺伝子解析や遺伝子工学のエキスパートだ。恒は彼とは初対面ではないが、その独特の雰囲気^{おかげ}に吞まれるというか、会うたびに新たな発見があって緊張する。

「レイアの失踪のことは……俺の責任です」

「どっちかっていうと比企、じゃなかった……極陽の責任じゃないのかな？」

責任の所在をどうこう言っている場合ではないと、彼は口にしながら気付いたようだ。それきり、だんまりを決め込む。岡崎は、言葉遣いは比較的丁寧ではあるが、機嫌が悪いのか体調がすぐれないのか、などと恒がいらぬ気を回さなければならぬほど、むっつりと寡黙な神だ。

ぱっちり二重がデフォルトの大多数をしめる神々の中では珍しく一重で三白眼なせいか、目つきも悪く見える。そんな風貌で黙り込むと、恒は背筋をのばさずにはいらなかった。こうしている間にも、裕に一分は間があいている。

「当然、彼女を捜すだろう？」

岡崎は思い出したように、ぽつりと尋ねた。会話が途絶するのは、情報処理中だからだ。彼は全てのデータを解析し終わり、必要な遺伝子のみの情報を集めたファイルを作っていた。岡崎の手の中に、オレンジ色の細かな光の粒子と細やかな光線が集まってゆくのが見える。それら一つ一つが階層化され、丁寧に折りたたまれて本のような形状になる。集められた情報は全て、藤堂 恒の遺伝子情報だ。岡崎がこのデータに最初に触れて紐解いてから、既に3年近くが過ぎようとしていた。

「彼女のアトモスフィアは弱いんです、一度行方不明になってしまえば……もう……」

「それよりも、比企、じゃなかった極陽には連絡をしたのかい？」

彼の指摘はもつともだった。

恒は形式上アカデミーの特待生であり、もっと平たく言うると比企の所有物だ。未成年であるから比企の許可もなく勝手な行動を取ってはならない。恒のすべての行動は比企の監視下にあつて、比企は神階に藤堂 恒という少年神が成神と同等の権利を以て神階で神として行動する事を、ある意味保証している必要があった。だから本来、恒が枢軸神に自発的にコンタクトを取ってはいけないのだ。しかし恒にも正当な言い分があった。

「連絡が取れないんです。携帯にも出て下さいませんし、遠くへお出かけなのか、気配も感じられないので転移もかけられません」

「確かに神階には気配がないな。どこに行っているんだろうね、こんな時に」

彼の口調の端々には、比企への反発心が見え隠れする。荻号の弟子という立場を棄てて陽階に寝返った元陰階神である比企は、陰階

ではすこぶる評判が悪い。その思想の危険性と、急進的かつ強引なやり方に、憚らず批判を唱える者も多かった。そして陰階神はあまりよくない意味で、荻号という巨きな存在から親離れできていなかった。

「でも、捜さないといけないだろう？　待っていて戻ってくるわけでもなし。極陽が動かないなら、私が部下を出すよ」

岡崎が部屋の隅に目配せすると、脇に控えていた柊島^{ましま}という若い第一使徒が上品なしぐさで、恒に会釈をした。岡崎が少し顎をしゃくれば、彼女は風岳村に部下を遣わせ、搜索に全力を尽くしてくれるだろう。だが、恒は生物階のどこを捜しても見つかりはしないと、既に確信していた。

「捜して見つかるところには、いないと思います。ですが……いつか戻ってくるのではないかと、思います。彼女はどこに逃げても、INVISIBLEの呪縛から逃れられない。必ずグラウンド・ゼロに戻ります」

「そうだろうか？　ところでそんな時に君は何故ここにきた」
次に恒の口から飛び出した言葉は、岡崎の想像の斜め上を飛び越していた。

「岡崎様、あなたが保管していらっしゃる先代絶対不及者の体液を、分与していただきたいのです」

岡崎はその言葉を聞いた瞬間、噎せかえるような吐気とともに、嫌な記憶が遡上してくるのを感じた。この少年は何故、そんな事をしようと思いついたのだろうか？　これでは、あの時と同じではないのか、あの、忌々しいプロジェクトで、先代極陽、ヴィブレIIスミスが彼らに対して行った残虐無比なあの実験と――。

集中力を殺がれたことにより岡崎の演算が狂ったことを、恒は目ざとく見つけていた。岡崎がその事項に関して、何か重大な事を秘めているという証拠を。岡崎は何か、絶対不及者の体液と聞いただけでは動揺するような、そんな疾しい事を隠しているのだろうか？

絶対不及者の体液を分けてくれという恒の申請は別段、岡崎を動揺させるものではない筈だ。岡崎が、その使い方について、何か心当たりがあるというのなら、別だが。

「何に使いたいの？」

「投与したいのです」

「ばかな！ 投与したいって……君の神体にか？」

岡崎は戦慄し、ただちに電腦を停止させた。

バックアップを取り、それまで恒には目もくれずに店をひろげていた解析フィールドをたたむと、ようやく閉ざしていた瞳を見開く。その瞳もやはり、彼の毛髪と同じ奇抜な色をしていた。その瞳は恒の言葉を聞いて明らかに狼狽しているらしく、ふらふらと、焦点が落ち着かない。

「そうです」

岡崎は一段高くなっていた解析フィールドから降りてくる。彼の聖衣は革素材の灰色のフード付きジャンパーで、フードには一体何の動物のものなのか、翠色の毛皮が付いている。パンツもタイトな黒の革素材で、そのまま生物階に降下しても違和感のないものだった。彼は恒にゆっくりと歩み寄り、中指を恒の鎖骨のあたりに強く当てて脅迫する。

「何が起るのか、分っているのか？ 抗体が内側から君を灼くってことだよ」

自殺行為だ。死ぬんだぞ！

岡崎の言葉から、恒の耳にはそんな副音声が聞こえてきた。それでも、恒は頷いた。

「ええ」

恒は必死で止めようとする岡崎に、どこか覚束ない眼差しを向けている。そして岡崎は恒に、岡崎の犯した過去の罪を暴かれているように感じた。

「感心できないな。比企が許さない。君は大切な切り札だ、無茶をするな」

「やってみる価値はあるのではないでしょうか」

「自惚れない方がいい。君だけが特別だと思っているのかい？ 同じ失敗を繰り返したくない」

「どういう意味ですか？」

岡崎は解析室の薄暗い室内に置かれた華奢な作りのガラス細工でできたような透明な椅子を引きずってきて、浮遊する透明なガラステーブルの前に置き、恒を座らせた。冷蔵庫から出した青い、ジュースのような飲み物をグラスに注ぎ、すすめる。岡崎は暗い机の端に、そっぽを向いて腰かけている。彼のバックでは、巨大なプロペラの羽根を持つ何がしかの装置が、ゆっくりと回転している。潤滑油を欠いた、重機が軋む音がした。

その隣では赤い液体培地の入ったフラスコが数百本以上、整然と陳列され、振とう培養されている。岡崎は一柱で実験室に引きこもるタイプの研究者らしく、実験室には部屋の片隅に控える第一使徒以外に、気配はなかった。

「抗A B N T抗体をコードされた模造生命は君だけではないと、知っているだろう」

恒が飲み物を飲んで一息つくと、唐突に岡崎は話を進める。

岡崎の声は緊張をしているからか動揺をしているからか、先ほどより乾いて聞こえる。

「はい、俺が唯一の生き残りだ」と

「では、他の者はどれぐらいいて何をされ、どうなったと思う？」

恒は息をのんだ。

考えてもみなかったからだ。抗体を備える個体は正常な発生により誕生する前に、遺伝的不安定性により、全て死産となったものばかり思っていた、いや、恒が勝手にそう決めつけていた。

抗A B N T抗体を持つ子供が、恒の他に誕生していたというのか――。岡崎の一言により、またひとつの事実が明らかとなった。

岡崎 宿耀は平素より各方面からの要請での様々なプロジェクトに
関与しており、クライアントの依頼内容を決して表には出さない。
ヴィブレissミスから岡崎に協力を要請し、遺伝子技術に長けた岡
崎が、抗A B N T抗体をコードした模造生命を創り出すそのプロジ
ェクト（I V A A A ^{イヴァー} In Vivo A A A p r o j e c t）
の一部に加担した。

恒はこれまでも岡崎にI V A A Aについての探りを入れるため、
定期的にコンタクトを取っていた。岡崎の技術協力なしには成り立
たなかったプロジェクトだったと踏んでいたからだ。岡崎はI V A
A Aプロジェクトへの関与を認めたが、ヴィブレissミスへの忠義
立てと守秘義務を全うしているのか、なかなか口を割ろうとはしな
かった。

だが、今日は話す用意があるらしい。

「君は25番目の検体だよ、藤堂君。残りの24の検体はどうなっ

たと思う？」

「……！」

「抗体のキャリアの子供は極陽と使徒との遺伝子融合により創られ、すべて正常に発生し、誕生した。その答えの一つは、八雲君のもとにあるよ」

「八雲 青華さんのことですか？」

「そう、彼女には君とそっくりな、君より少し年上の息子がいた……いや、いる、だな。あれを生きているというのなら」

八雲はヴィブレⅡスミスの死を区切りに、第二使徒を引退したと聞いた。

比企が極陽の位階である創造神へと昇格したことによりヴィブレⅡスミスの位階は自動的に立法神へと降格、ヴィブレⅡスミスの死によって今や空位となった立法神の位階には新たな位神が即位するであろうが、八雲は次代の立法神には第二使徒として仕えないそうだ。八雲は、“生まれかわったら”恒のような神に仕えたいと言っていたが、現世ではもう引退を決意したとのこと。

八雲は今も、拭い去れない罪の意識と戦っている。

あのととき……恒が奇妙に感じた彼女の瞳。彼女は恒を見ていなかったのだろうか。

あるべき彼女の息子の姿を、恒に重ねていたのだろうか――？

「察しの通り、彼女は先代極陽に、彼女の息子たちの命を捧げたのさ」

「たち？」

岡崎は話を勢いで打ち明ける為に、恒にもすすめた怪しい青い飲み物をボトルごと持ってラッパ飲みで飲み干した。

「そう、24体すべての模造生命を受胎し出産したのは、八雲君た

だひとりなんだよ。私もプロジェクトには立ち会ったが、それは悲惨で、見ていられなかったよ。彼女が産んだ抗体キャリアの子供たちに、ABNT抗原を投与し続けた……まさに君が今、自らの神体にしようとしていることを——どうなったか、私は見届けたよ」

そんな残忍な母親が……いるのだろうか。

ただ殺されるためだけに、大切なわが子を産む母親が——。

そして何度殺されても、それでも産み続ける母親が……。

恒は信じられない、総毛立つ。母親とは無償の愛を与え続けてくれる、温かい存在だと思っていた。志帆梨は望まない妊娠により授かった恒をいつも愛してくれた、少なくとも愛そうとしていたし、一度も裏切られた事などなかった。不義の子供として後ろ指を指されながら……彼女の身に覚えにない子供を、愛せる筈などなかったのに……。

恒も志帆梨が与えてくれたものと同じだけ、それ以上に志帆梨を大切に思っている。

だから彼は言葉を失ってしまう、八雲の心境を理解できないからだ。志帆梨と八雲は同じ母親でも、根本的に違っている。何かが、決定的に間違っている。

「……」

「抗原は血流に乗り、脳を襲う。やがて彼らの脳機能は停止し、ゆっくりと朽ち果てていったよ。八雲君は彼女の息子たちを、そうやって徒に失^{いたずら}ってゆかなくてはならなかった。全ては、彼女にとっての絶対者、極陽の命令だったからね……八雲君の息子のうちひとり

は幸か不幸か死を免れて、それでも重篤な植物状態になっている」

生き残りが、いる——！？

同じ境遇の肉親がいる、というのか。

「彼女は懺悔をしながらずっと、たったひとりになった寝たきりの息子を育て続けているって話だよ。だから間違っても、君には同じ道を歩んでほしくはない。八雲君にとって、元気な君の姿というのは、彼女が息子達に与えられなかった希望なんだよ……」

岡崎は医療者、科学者であるが、医療倫理を忘れたわけではなかった。クライアントの依頼とはいえ、IVAAプロジェクトに加担してしまったことを後悔していた。

断罪の刃が、少年の姿を借りてやってきたような、そんな思いがした。

恒はヴィブレースミスが24もの罪なき命を奪い尽くしたことに強く憤りを覚えた。あるいは少し時期を間違えば、恒もそのひとりになってしまっていたのかもしれない。

ヴィブレースミスは彼女の忠誠心に付け込み、道義的に許されないことを彼女に強いた。八雲は何を思ったのだろう。何も感じなかった訳ではあるまい、恒はそう信じたい。

「そうだったのですか……。その後……先代極陽は八雲さんの代わりに、母を選んだのでしょうか」

極陽の考えは分っていた。

抗原を投与することにより抗体を増強し、予め備えることができないならば、抗体の性能を最大限に発揮する為には、絶対不及者とともに生命を以て玉碎させ、全ての抗体を発動させればよいと考えたのだろう。ただ殺されることが役目の抗体キャリアの子供が頑強な肉体を持っている必要はなくなった。むしろ、強靱な肉体を持っていたはならなかった。

そこで、今度は八雲の代わりに脆弱な肉体を持つ人間である志帆梨が選ばれ、恒が造られたのだ。

ヴィブレイスミスの悪魔のような計略が明るみとなった。

「そうなんだろうね。私は、八雲君がもう子供を産めない身体になってしまった時、プロジェクトは失敗に終わったのだと思っていた。そしてもう、この鬼畜の所業は繰り返される事はないのだろうと。だから人間と神との間に生まれたという君の存在を素直に信じることができなかったし、君という存在が現われるまで、あのプロジェクトを思い出すこともしなかったよ。だから彼らを目の当たりにした私は君に問いたいんだ、君は実の父母の手によって無残に殺されていった彼らと、何が違って、何が特別だと思う？　むしろ君の肉体のスペックは、彼らより遙かに劣る」

思い出したくもない、といったように両手で顔を覆っていた。岡崎の言う通りだと思った、だが、恒はただモルモットのように扱われて抹殺された彼らとは違う、少なくとも恒は12年間、人生を生きた。自分の意思で、人生を歩んできた。それだけは誰にも否定できはしない。

しかしそのような根性論や精神論は、岡崎には通用しない。岡崎を納得させる為には、遺伝的に自らがどう優位性があるのかを、説得力ある方法で説明しなければならぬ。

「俺は……神と使徒の混血ではなく、神と人の混血です」

「人の身体は使徒の体躯より脆弱だよ？」

「人の身体は確かに使徒のそれと較べて格段に脆弱です、ですが血管系に支えられています。人間は使徒と違い、血液脳関門けつえきのうかんもん（blood brain barrier）を持っています。血漿成分は直接脳へは到達しません……人間の脳は、異物の侵襲しんしゅうから守られています。八雲さんの息子さんたちのようにはならない、灼かれるなら脳ではなく、それ以外の部分です。俺は無計画に、抗原を打ちた

いと申し上げているではありません」

岡崎はまた、少し黙っていた。恒は合否判定をもらう受験生のように、一言も聞き逃すまいと、ただ彼の言葉に耳を傾けていた。岡崎はひとつ溜息をつく、恒の提案をすげなく却下した。

「妄説は自重した方がいい。君はそう力説しながらも気づいているだろう？ 血液脳関門は脳内への異物侵入を阻止はできない。一度侵入を許した後に、異物を汲みだすトランスポーターが存在すると思うだけだ」

人間の遺伝子をはじめありとあらゆる遺伝子とその生成物の構造を知り尽くした岡崎の学識を甘く見てはならない、と恒は思い知らされた。口先で騙せる相手ではないのだ。

「諦めるんだね。私は絶対不及者の体液の在りかを教えるつもりはないよ。それは私が、まだ科学者であり、それ以前に一柱の神であるためにもね」

しかし、岡崎が教えるつもりがなくとも……恒はしっかりと彼自身から教えてもらっていた。岡崎 宿耀のマインドギャップは4層、これに対し藤堂 恒のそれは10層だ。5層以上の隔たりがあれば看破は可能。先代絶対不及者の体液がどこに保管されているのか、恒は岡崎の心に何度も問いかけた。何度尋ねても、同じ答えが返ってくる。岡崎は恒のマインドギャップの層数を知らなかったらしい。位神と違って非位神のデータは、目の届く場所に掲載されていないので、よほど調べようと思って調べなければ、岡崎が知りえない情報なのだ。岡崎に侮られていたことが、恒にとっては好機となった。

「わかりました……極陽のもとに戻ります。貴重なお時間を頂戴し、申し訳ありませんでした」

「極陽に相談をしてみた方がいいんじゃないかな。私も彼女を捜させよう」

岡崎はそう言うと、第一使徒に命じて恒を実験室の外に送らせた。BIOHAZARD（生物汚染地区）マークのついた三重ドアが重く閉ざされると同時に、岡崎からの助力は途絶えた。

” よし。場所はわかった ”

恒は一度引き下がったふりをしながら、決して諦めてはいなかった。

＊

” 恒さん……恒さん……っ ”

” わたしはやっぱり、あなたがいないと……っ ”

だめだ。ひとりでは何もできない。彼女は何度考えてもそう思った。何も考えず、ただただ飛び出した。自らの名を呼ぶ恒の悲鳴を、もう聴きたくなかったから。

そこは光さえ届かない宇宙の闇の中、彼女の前を、何も通り過ぎない。

何もないということは、こういうことだ。
わずかな塵でさえも、漂うことは珍しい。

心細さ。そして罪悪感のあまりレイアはひとり涙ぐむ。

彼女の流した涙は真空の身を切るような冷氣にあてられて氷滴と

なり、無重力の空に浮かんでいた。彼女はもう、彼のもとには戻れないと解っていた。彼女の一番大切だった存在を、藤堂 恒を裏切った。どれだけ本意ではなかったと否定しても、赦してくれと泣いてもこの事実からは逃げられない。

”大好きです……恒さん”

彼女は許しを請うように、遥か遠い場所から恒にそんな想いを打ち明けた。

もっとも、レイアにも彼女がどこにいるのか。ということなど分らない。地球から、神階からも遠く遠く離れたどこかの銀河系だろうか。レイアは積極的にINVISIBLEの側についてたのではない。ただ、そうする他に手立てがなかった。

INVISIBLEの真意をいくら恒や神々に説明しようと、彼らはINVISIBLEと通じ合うことが出来ない。そしてこれまで三階に甚大な犠牲を強いたINVISIBLEの狂気は、既に感情抜きに説明できるものではなくなっていた。三階を内包する存在であるINVISIBLEは三階に対し、それが本意ではなかったといえ、あまりにも不寛容すぎた。

レイアは力を抜き、真っ暗な周囲を見渡す。何かを目印にしていなければ、方向感覚を失ってしまいそうだ。どこまで目を凝らしても、果ては見えない。

レイアは漠然と、INVISIBLEが過ごした時間の長さに思いを馳せる。少しでも同情する気にはなれないが、彼女は彼のことを考えると胸を裂かれるように悲しくなった。

”あなたが孤独のうちに過ごした時間は、どんなものだったのでしょうか”

レイアはいづくともなく語りかけた。レイアは数分だってここに
いることが耐えられない。

幾百億年もの歳月……わずか二歳と半年を生きる彼女には、想像
もつかない時間の長さだ。

……彼女の目の前に、光が現れた。

バスケットボールほどの大きさの、温かな星屑がレイアの周囲を
ふわふわと漂っていた。手を延ばして星を捕まえる、これはIN
V
I
S
I
B
L
Eからの差し入れだろうか。

”無限の苦しみの果てにあなたが守りたいと願った世界。あなたは
傷つけたり壊したかったわけではない”

レイアは身をかがめて神体を小さく折りたたみ、星屑を抱え込
んで暖を取る。IN
V
I
S
I
B
L
Eから与えられたイメージがフラ
ッシュバックする。自分が自分であること、誰にでもできることが、
それは彼女にとって、とても難しい。何度試みても失敗してきた、こ
れが最後の試みとなるだろう。最後のプライマリの個体である彼女
にできなければもう、これを残してあとはなかった。そしてその瞬
間に、三階の歴史は終わる。

”千切れた心を小さないれものの中で繋ぎあわせて、あなたの心が
戻り“

”その力を未来へとつなぐことができるのなら”

彼女は恐ろしさと寒さのあまり小鳥のように震えながら。

心は揺るがなかった。

”私はあなたの止まり木になるわ”

第2節 第8話 インフィルトレーション・サバイバルゲーム

「急な話で悪いな……」

どうみてもギャル系女神、有為^{うゐ} 枝折^{しおり}、そして模範的陽階神を絵に描いたような完全無欠の女神、ファティナⅡマセマティカ……全くタイプの異なる二柱の女神を前にして、織図は申し訳なさそうに煙管の火を消す。彼女らも暇を持て余してはおらず、生物階と神階の混乱に関連した業務で多忙を極めていた。そんな折の呼び出しに彼女たちもさぞや迷惑をしているだろうと、EVEの巨大サーバーの安置された前室で織図は彼女らの事情を慮った。

「私は結構ですよ。織図様が頼みごとをするなど、滅多にございませんもの」

ファティナは屈託なく微笑み、織図を氣遣う。織図が特務省職員としての制服のまま二柱を呼ぶなど、異例のこと……。上司として彼女らを呼んだということを意味した。

そもそも互いに干渉しあわない氣質の陰階にあって、織図 継嗣は比較的付き合いのよい陽気な陰階神だ。死神として即位した当初は偏見の目に晒される事も多かったとのことだが、在位し続けるだけでも困難な位階に驚異的な期間を在位し続けているという事実と、特務省特務従事者であるというミステリアスな肩書、また彼の生来のひとなつこい性格もあって神と使徒の別なく彼を慕うものが多く、陰階でも陽階でも一目おかれている。

織図と歳の近い彼女たち二柱も例外なく彼を慕って執務室を訪ねるし、逆に織図の権限を利用して彼女たちの生物階降下の便宜を図ったことも一度や二度ではなかった。二柱にとって織図は兄貴分の

ような存在だ。

そういうわけでこの二柱は、普段から仲の良い織図の頼みとあれば二つ返事で応じるところだが、今回は事情が違う。勘のよい有為が渋い顔をしているのは、話がEVE絡みだと気付いたからだ。一般的常識を持っている神ならば、よほどのことがない限りEVEには関与したからない。

EVEの管理は織図にしかできない特殊任務に従事しており、そのシステムに精通しているのも織図のみだ。特に彼女らはその職業柄、EVEの危険性を熟知している。EVEに精通することが織図以外の他神に能わないからこそ、織図の代以前の死神は代々夭逝するものと相場が決まっていた。

有為はファティナの素直な態度とは逆に珍しくサングラスを外し、ボディライン丸出しの黒いミニスカートに包まれた細い腰を無造作に見せ付けながら、徹底抗戦の構えだ。

「で？ 何でその格好で呼ぶのかな？ いつもの喪服で来なよ断れないじゃん。EVEがらみのことはムリだってば、絶対やらないからね」

ちなみに織図が普段着る聖衣である黒衣は、陽階神の間では喪服と呼ばれていた。ご機嫌ななめの有為に、織図はそれでもと言って無理強いをしようとはしない。EVEにDIVEすると意識はプログラムへと変換され、精神の揺らぎはプログラムの脆弱性を生む。少しでも迷いや不安を持ったままEVEにDIVEをすれば二度と現実空間には戻れない。二柱ともに辞退をするようなら、織図一柱ででも往く覚悟だった。

「そう言うな、俺だけじゃとても手におえなくてな。お前の意思是分った、ファティナはどうだ」

「オリちゃんに手におえないものを一体どーしろっての。ティナちゃんだって無理よねー?」

有為はファティナが返答する前に、ティナと勝手にあだ名をつけた彼女に水を向ける。ファティナはいつも、沈みかけた船から逃げ遅れてしまう損なタイプだ。

「有為様が固辞なされるなら、僭越ながら私が……。あなたと仕事をするのは初めてですが、どうぞよろしくお願いします」

「さすがファティナは話がわかる」

「ティナちゃんってば断ればいいのにバカ正直なんだから」

有為が彼女を馬鹿正直だと揶揄するのは間違いではなかった。ファティナに限っていえばどんな無茶な依頼でも断ったためしがない。彼女は働いていなければ生きていく価値がないと考えているふしのある石頭な陽階神だ。あまりに無茶な依頼を受け、身を粉にして働きたため身体を壊し、入院した経験も一度や二度ではない。ムジカより手ほどきをうけたという趣味のピアノをたまに弾くのが息抜きで、肩の力を抜いて気楽に……といった類のことは一切知らない。

「私は貴方ほどの処理速度は出せませんが、何かお力になれますでしょうか」

「速度はいらんさ。難しいことは頼まないよ」

「あなたにとっての難しい、と私にとっての難しいはレベルが違います」

謙遜しながらも、彼女にはどこことなく自信があるようだ。

「ティナちゃんてば、それでいいのー? 下手すりゃ死んじゃうのよ? E V E っていったらオリちゃんにしか扱えないシロモノっしょ、そのオリちゃんが四苦八苦してるのに一般神がどうすんの?」

ファティナの危険を心配した有為が説得にまわる。歴代死神のうち最長在位期間を誇る織図はたった一柱で彼の庭でもあるEVEを縦横無尽に駆け、EVEのどこに行くにも誰の助けもいらない。それどころか織図以外のファクターの介入は、芸術的なまでに完璧に統御されたEVEの調律にとってあまり好ましくないものだといえた。

それを承知のうえで織図が二柱の助力を請うとあれば、この仕事は相当なヤマなのだ。ことさらEVEへのアクセスは厳密で、EVEが自衛のために実装された攻撃的セキュリティによって神経系を侵食され、命を落とした死神も一柱や二柱ではなかった。

うっかり織図の手伝いのために、EVEの露と消える可能性も否定できない。だが……

「私はそれがどんな依頼でも、クライアントの依頼を断ったことはありませんもの。力量不足は実感しますが、粛々と任務にあたるだけです」

ファティナは強がって健気に微笑んだが、少し手元を見れば織図は彼女の指先が震えていることに気付く。ファティナはGLネットワークにスケジュールを公開しており、目下のところ多忙ではあるが大きな依頼がないのを織図は知っていた。原則として極陽クラスの依頼がなければスケジュールは前後されないのだが、織図が特務省の制服を着て依頼をした為、織図からの依頼は最上位ランクに付される。結果的に無理強いをさせてしまったのだろうか、と織図は柄にもなく悪びれた。

「EVEの鬼畜仕様なプログラムに耐えられると思う？ 自分の身体が大事でしょー？」

有為がファティナを思いとどまらせようとする前に、織図は話を

打ち切った。

「悪いがよろしく頼む。有為はEVEのシステムの維持を頼んだ。俺の意識がEVEから離れる間、バグが頻発するだろうからな。EVEに潜りたくないなら外部監視で構わんよ、だがバグ取りはこまめにやっといてくれな」

EVEに入らない限り、エンジニアは安全だ。有為は不貞腐れながらもようやく首を縦に振った。

「ところで、面倒くさがりのオリちゃんがそうまでして調べたいものって一体全体何？」

「何だろうな。俺にもよくわからないんだ、2時間ほどで戻る、頼んだ」

「もー！」

織図は具体的な事は何一つ明かさなまま、有為を外部監視用オペレーションルームに残し、ファティナを連れ端末のある部屋に入っていた。織図を信用しきっているようだが、有為は一瞬垣間見せた織図の横顔が気になった、彼が真剣に悩む姿など見たことがなかったものだから……。有為が思わず彼らを呼び止めようとした頃には、端末室に繋がる重く黒いドアは固く閉ざされていた。

＊

薄暗く陰気な研究室で黙々と研究に取り組む岡崎は、またしても災難続きた。

岡崎の実験ベンチの上から比企が降ってきたのだ。インキュベーターに細胞の入ったシャーレを収納しようとしていた岡崎は集中を殺がれ、シャーレの中の赤い液体培地を床の上にぶちまけた。彼は比企に聞かれないような口の中で舌打ちをして、今日まで72日もか

けて育ててきた大切なサンプルを無言で破棄する。

無菌環境を破られたサンプルは、惜しげもなく棄てられる。彼はどんな些細なことにも妥協を許さない。サンプルを失った苦情を述べる代わりに、訪問の不当を追及する事にした。

「これは、極陽。面会の予約は入っておりませんでしたが無用でしょうか？」

極位に就任したとはいえ、他神の部屋に断りもなく侵入とは比企も随分と偉くなったものだ。岡崎の不満はくすぶる。とはいえ、岡崎より随分先輩にもあたる比企を見下すこともできない。

「すまない、想定外の事故が起こったの。ここに藤堂が来た筈だ、どこにいる？」

「事故とは？」

「それはまだ明らかにできん」

”レイアイメーテールが行方不明になったことを、比企は隠匿したな”と、岡崎と比企との間に緊張が走った。比企が岡崎のマインドギャップを看破できることは岡崎も知っていることだ、恒からレイアイメーテールが行方不明になったと聞いたと比企は看破して知っている。その事実を隠すからには、この事実を神階に明らかにするなという牽制と受け止められる。騒ぎ立てるなという比企からの警告だ。岡崎は事を荒立てるつもりはなかったので、レイアイメーテールの件は探らない方が賢明だと悟った。

「私は守秘義務に基づいて、それを開示することはできません。もしここを誰が訪れてどんな会話がなされたかを神階の長に報告する義務があるときは、命じてください」

岡崎は形ばかり会釈する。

「ああ、命令だ」

「藤堂君はここに来ました。先ほど帰りましたよ」

「いや、帰っておらん」

岡崎の報告を否定した比企は研究室の隅々に目を配りはじめた。岡崎は丁度山場を迎えていた実験を断腸の思いで中断し、比企が何か捜しているようなので仕方なく彼が捜しやすいよう明かりを灯す。比企は探し物の合間に携帯の画面を見つめている。

岡崎自身が恒を研究室の外に見送ったのだから、ここには絶対にいないと断言できる。だが比企は信じようとしない。不法侵入のうえ濡れ衣をかけられ長居されても、岡崎としてはいい迷惑でしかない。

「藤堂君は帰りましたよ」

結果的に岡崎は二度目の報告をした。比企が梃子でも信じようとしないので、岡崎は仕方なく根拠を問いたです。

「何故ここにいると？」

「藤堂の腕時計の中に発信機が仕込まれている。そして発信源はここだ」

「……はあ」

秘蔵っ子の行動を信用せず発信機を持たせるあたり、いかにも比企らしい。岡崎はとにかくこのやり取りが億劫だった。何か帰ってもらうためのいい方法はないものか……そう考えつつベンチの上に放り出していた指先に硬いものが触れた。

「腕時計ですか？ それなら、忘れていきましたよ。預かっています」

岡崎は恒の忘れ物に気付いて預かっていた。次に会ったときにも渡せばよいとそんな程度に考えていた。わざわざ恒に時計を届けるために研究室の外に出るのは彼にはとんでもなく億劫だ。比企は腕時計を手に取り、してやられたのかと目を見張った。

「故意にだな」

恒は意図的に比企の監視を振り切った。彼が完全にアトモスフィアの放散を絶てば、恒の追跡はどうやっても不可能だ、そしてアトモスフィアの放散を断つ方法を教えたのも比企だ。小賢しい恒にはとことん裏をかかれる。恒は何を企んでいるのかと、比企は考え込む。

一方、比企に長居されても困ると考えた岡崎は、比企が興味を持ちそうな話題をさっさと話してしまう事にした。腹の探り合いなど面倒なだけ。

「ああ……そういえば彼は絶対不及者の体液を欲しがっていました。取り合わず、追い返しましたよ」

「何……？ 彼は引き下がったか」

「ええ、分かりましたと。聞き分けはよかったですよ」

比企は岡崎の告白によって恒の計略を知った。比企は心理戦において岡崎をすら凌いだ恒の駆け引きの巧さに感服し、苦笑した。

「さようか……ブラフだ。彼は汝のマインドギャップを看破して体液の在りかを知ったのだろう、納得した風を装いながら目的を達成する。それが藤堂という少年だ」

岡崎は何を言い出すのかと苦笑する。5層の心層を持つ岡崎を看破するなど……不可能だ、成神した枢軸神でなければ。恒の年齢だとマインドギャップは持ちえないか、あって1層がいいところ。

「12歳の少年が、私の心層を看破したと仰せですか？ それはいささか無理が……」

「無理などない。彼には10層のマインドギャップが備わっている」
冗談を言わない比企が真面目くさってそう言うのだから、岡崎は半信半疑ながら引き下がる。

「悔りました、体液の保管場所を変えます」

「彼はまた汝を訪ね、何度でも在りかを看破するだろう。己が預か

る。彼と同じ層数を持つ己ならば藤堂に看破されることはない」

「なるほど恐ろしい少年ですね……」

「IVAAAプロジェクトに関わった汝ならば、彼のポテンシャルを知っていただろうに」

岡崎は一本だけでも手もとに保管しておきたかったが、仕方なくポットに液体窒素を充填し、中に例のストックチューブを5本放り投げて蓋を閉め、比企につきだした。岡崎が保管しているものは、これですべてだ。

「私は10歳をこえてまともに成長した検体を、見たことがありませんから」

岡崎はぼつが悪そうに、そんな言葉を申し添えた。

藤堂 恒をたかが子供と侮っていると、裏をかかれる。

＊

「怯えるな、EVEはいわば俺の半身だ。死なせやせんよ」

冷たい端末室に入って背筋を伸ばすファティナに、織図は一語一語をかみ締めるようにそう言った。

「ええ、あなたを信頼しておりますから」

信頼にこたえられればいいがねと、そう言いながら織図は端末に接続可能な二台のコンソールシートに彼女を座らせDIVE用のグローブとゴーグルを装着させる。彼の場合はゴーグルと頸のジャックポッドを介してケーブルとコネクタを固く接続し、ヘッドギアの中に茶色のドレッド頭を沈める。

EVEとのシンクロ率は織図の方がファティナより高く、逆にEVEから浸食があった場合はその浸食度は深い。ファティナの接続はローリスク、ローリターン（低シンクロ）、織図はハイリスク、ハイリターン（高シンクロ）の接続法だ。

マザーコンピューターの前に並列に横たわったファティナと織図の神体の上を全く同じ動きで神体スキャン用の青いレーザーが走り、加工音声が彼らのダイヴ前の定常状態を調べ上げる。わずかな痛覚とともに採血用の針がファティナと織図の指先に刺し込まれ血液採取された。六方魔方陣演算空間に潜入するより格段に入念なチェック体制だ。結果を吐きだす合成音声が狭い室内に反響する。端末の部屋は、肌寒いを通り越して凍えるほどにキンと冷却されていた。ファティナと織図。双方にとって、普段通りの気温。

“No, 1 Fatina Mathematica, 体温…正

常、酸素濃度…正常、脳波…正常、脊髄反射…正常、血中DLT…適性値、Atmosphere…潤沢”

“No, 2 Douglas ^{ダグラス} ^{ニーヴアー}Never, 体温…正常、酸素

濃度…正常、脳波…正常、脊髄反射…正常、血中DLT…適性値、Atmosphere…潤沢”

ほどなく、マザーコンピューターは二柱のEVEへのダイヴ許可を下した。ケーブルを介し二柱の意識が神体から引き抜かれ、小さな窓に押し込まれるような圧迫感とともにファティナと織図はEVEの空に放り出された。

仮想空間で瞳を見開いた織図は頼りなげに漂っているファティナのデータを見つけると、彼女の周囲にシールドを作りグラフィックを安定化させる。そして立体再現されて間もなく体勢の定まらない彼女の手を取ってEVEの空を飛翔するという感覚に慣れさせる。立体再現されたファティナの神体は織図よりずっと透けている、シンクロ率が低いのだ。ファティナは彼女の意識の半分を神体に残してきた、織図が彼女の安全を優先してEVEに押し込む意識比率を上げなかった。

『さすが、業種が同じだけあってダイヴに問題はなかったみたいだな。ちなみに俺が初めてここに入った時には盛大に吐いた』

『ここが……仮想死後世界EVEですか……！　美しい世界ですね、まさに人々の夢見た天国や極楽浄土のイメージそのままです』

『死者の注文通りにしてやってたら、いつの間にかメルヘンな世界になってね』

幾重にも連なる虹の橋をくぐり空に浮かぶ滝を見下しながら、ファティナは織図にガイドされるままに目標の地点を目指している。湖畔には花々が咲き乱れ、豊かな土壌に作物が実っていた。広大なEVEの敷地の上を飛ぶ二柱を、住民たちが見上げて手を振っている。一年に一度の慰霊祭に3D画像転送でEVEに降臨する陽階枢軸神の石柱である、ファティナを知る者も多いようだ。ファティナの名を呼んでいる者も見受けられる。

彼女は愛相よく微笑んで手を振りながら、ふと真面目な顔つきに戻り前を翔ぶ織図を呼びとめた。

『織図様』

『ん？　さすがに酔ったか？』

織図はぴたりと減速する。

『いいえ。少しお尋ねしたいこともありました。ここならば、会話は外部から聞こえませんか。あなたにしか知りえないことです』

今こそ織図に問いただすべきだと、そのタイミングは今しかないのだと彼女は感じていた。二年半分の思いに急かされる、あの時から腹の内に燻り続けた火種。消せない違和感。誰にも明かす事の出来なかったたった一つの疑問を。

『奇遇だな、そう言われると俺もあんたに訊きたい事がある』

織図はファティナの間合いの取り方から質問の内容を確信し、や

はりそうだったのかと感動すら覚えている。もし生身の神体でこの話を耳にしていれば、手の内は興奮のあまりじっとりと汗ばんでくる頃だろう。

『ええ……それは、恐らく同じことではないでしょうか』

立体再現されたファティナの薄い桃色の唇は震えていた。織図も2年前より一つの事実を何度ファティナに確認しようかと迷ったが、その衝動を今日まで抑え込んできた。ここならば誰の目も耳も気にする必要はない。EVE内部での会話は複雑に暗号化され、有為には届かないようになっていた。

『……一昨年まで、陽階7位の位階は本当に空位だったのでしょうか？』

織図は期待通りの質問に、拳を固く握りしめた。

『いや、違うね。7位はちゃんと健在だったぜ』

二柱は互いの顔を見合わせて絶句し、次にファティナは身震いした。符丁を合せる前に一致したようなものだ。

『では……やはりあなたも。そうではないかと思いました！』

『よかった。奴を覚えている可能性があるとしたら俺と同じく仮想空間に入っていたであろう、あんただけだからな』

『ユージン様に……何が起こったのでしょうか』

織図には心当たりがある。あの時、EVEの少女ゾラが魅入られた光……最果ての谷に降り注いだ黄金の稲妻。すべての謎は、そこへ繋がっている。

『2年前……奴が消えたとき、誰もアクセスできない筈のEVEのブラックボックスにアクセスが入った』

『EVEへのトラフィックは制限されています。EVEのファイアウォールを破ってですか？』

彼女は交茶色の瞳を丸くし、両手で口元を覆った。彼女はクラッ

カーではないが、まかり間違ってEVEにクラッキングをかけるといふ命令が来たら、流石の彼女も熨斗をつけて返したいほど厄介なのだ。

生物階の死者の記憶は神階の共有財産であり、1バイトでも書き換えられてはならない。その記憶は代々の死神によりセキュリティ強化が繰り返され、嚴重に保管されてきた歴史と伝統のあるものだ。その情報に触れたものは、須く焼き尽くされる。その機密を誰にも破る事はできない。神階に在籍する誰もが、EVEを破ることは無謀だと知っている。

『セキュリティは破られてないんだ。むしろ逆……EVEはその不審なアクセスをすんなり受け入れたんだよ。履歴からの追跡は不可能だった。どこからきたんだろうな……“最果ての谷”に、何かを投げ込んだ奴がいる』

『ユージーン様が消えたと同時に……？』

ファティナは腹部に焼け火箸をねじ込まれるような、ぎりぎりとした不安と恐怖を感じる。

『恒が言うにはな、神々の記憶もここEVEと同じように、上層のサーバーにリアルタイムで保管されているらしいんだ。誰かが上層のユージーンの記憶のバックアップを消したんだろうよ。それで、奴の記憶が現実空間から消えた』

『ど、どういう意味ですか？』

理解が追いつかない。織図の説明はとても“文系”的だ。

理数的ではない。いつ、誰が何の為に……神々の記憶を保管しているというのか？ それにファティナは一度だって、死神の持つ記憶メモリスティックのような記憶回収ツールをこめかみに突きつけられた覚えもない。リアルタイムで回収しているとなるとおさら不可能だ、どうやってデータを採取しているというのか――。

『このこととの前後関係を考えると、上層の管理者はユージーンの記憶の消されたハードディスクのジャンクをEVEに投げ込んだ……』

『上層からのジャンクデータが廃棄される場所……それが、最果ての谷？ あなたは、まさか……ユージーン様の記憶を復元しよう？！』

『データってのはそう簡単に修復不能になるもんじゃないさ。よっぽどの壊れ方をしてなきゃな。そしてあわよくば、他のジャンクデータも回収したいと思ってる。真実を見せてくれるぜ……ゴミ箱ってのは、棄てた奴の本性を暴くにはいい場所だ』

織図はすっと指を伸ばして下を差す。クレバスの間に、ぽっかりと底なしの暗黒が潜んでいた。

『……そら、ここが“最果ての谷”だよ』

＊

崖に囲まれた深い谷に闇がぽっかりと口をあけていた。縦に吹き抜けた洞窟の底には、光が届かない。谷底からは何ものもの進入を拒むように強い風が吹きあげている。織図はファティナの手を取り、足場を見つけてゆっくりと降り立った。足場は直径3mほど。吹き上げる風に今にも吹き飛ばされそうだ。

彼女はポケットからピンク色の手帳型ナビゲーターを取り出し、しおりを挟んでいたページを開き、プロトコル階層の解析をはじめた。二本の自動筆記ペンが手帳の上を縦横無尽に駆け巡って情報を書きだし、正確な情報を教えてくれる。彼女はノートのページを次々に繰りながら最果ての谷の構成を把握していった。

織図はといえば彼女の行動を見ながら、彼女がこの場所から何を感じ取るかを興味深く見守っていた。

結論としては、侵入を躊躇するような大した場所ではないということだ。この場にかけられたセキュリティを破って侵入するにも困難ではない……少なくともフアティナにはそのように感じられた。

『この場所が本当にタブー視されてきたのですか？ プログラムの構成を見ると持て余すほど難解というわけでもないかと。ましてやあなたほどのアーキテクトが……』

『ああ、たっぷり時間をかけてやればなんてことない。だがそれができないんだ……制限時間を超えるとファイアウォールに圧殺される。だから鉄壁なんだ』

フアティナはノートから視線を戻る。

織図が侵入するのを躊躇した、その本当の理由を知ったからだ。

『時間とは、どのくらいです？』

『俺だと5分、あんただと30秒ってところだな。だが、これは予測であって実際にはどのくらい残り時間があるか分らんのだよ……そう、誰にも分らんことだ』

『お待ち下さい。何故、私とあなたの間に時間差があるのですか？』
織図のアーキテクトとしての能力は驚異的だが、彼と同じように、いやそれ以上の時間を電腦空間で過ごすフアティナが、生物階での業務もなくましてや演算に特化した彼女が織図にそれほど劣っているとは思わない。織図とフアティナの間の6倍もの時間のひらきが何を意味するのか、このときの 彼女にはまだ理解できなかった。

『これは俺にしかできんことだな……あんたについてきてもらったのは、演算を手伝ってもらうためじゃない。一度完全に俺の意識をEVEから完全に引き抜いてメモリを全部こっちに集中したいからだ。5分間、あんたにEVEのシステムを維持してもらいたい』

死神の抜けたEVEは、鉄骨の抜けた高層ビルと同じだ。

そよ風が吹いただけでも倒壊する、それだけ脆くなる。だから死神が崩御するごとに、EVEはシステムダウンせざるをえなかった。そしてシステムダウンを起こしている間人々の記憶はEVEに入れなくなる。天国の門を閉ざされる……それはあってはならないことだがここでおいていきぼりは無体だ。

『何故、私も共に行けないのですか？ 演算は分担すればそれだけ速く……』

ここまできて足手まといとはあんまりだ。

手伝うつもりで来たのだから、彼女は少しでも役に立ちたい。織図はその気持ちを、気持ちだけ受取っておくことにして優しく諭す。『俺にしかできんってのは、あんたの演算能力が俺に勝つてるとか劣つてるとかそういう類の話じゃないんだ』

『死神にしかできない、理由があるということですか』

確かに、EVEの主は織図でありファティナではない。相当な山場だというのなら猫の手も借りただろうに、織図は助けを欲しない。何か理由があるのだ、織図でなくてはならない理由が。それを感じたファティナは織図に縋りつくように絡めていた腕をほどいた。

『ご明察。サポートを頼むぜ』

織図は爪先で大きな正方形を描くと、EVEの内部モニターが起動して青いパネル状となって織図の前に浮かんだ。これで頼むと言いながらファティナによこす。

『織図様……お気をつけて』

織図は薄く笑うと、真っ暗な谷の中に跳び込んでいった。

ファティナはパネルの操作法を理解し、EVE全体のシステム構成を把握する。バグ取りは有為が行ってくれているというが、DI

V Eをしていない有為は表面的なバグしか発見する事ができない。根本的な異常は内部からでなければ……E V Eは気持ち悪いぐらい安定して、風ぎの状態にいる。ずるり……織図によって確保されていた演算領域が返還され、E V Eのメモリが一時的に増加する。

織図の意識が完全にE V Eから離れた。

ファティナは完全に死神の手を離れたE V Eを静かに監視し続けていた。パネルを練りながら、E V Eが異常な動きをしていないか目を光らせている。ベタ風ぎのE V Eのプログラムの中で彼女が変動する数値に気付いたのは、織図が最果ての谷に飛び降りてから1分後のことだった。

— 4 0 6 1 2 p t s

— 5 1 2 0 1 p t s

— 5 8 9 9 4 p t s

みるみる減ってゆく数字に、ファティナは慌てた。これは秒数のカウントではない。赤字でモニターに表示されているその数字に目を奪われる……なんだろう、とてつもなく悪い予感がする。

『待つて……このカウントは何……？ 減っているわ、これは何？』

疑問に答えてくれるものもない。ファティナは織図によって暗号化されたカウントダウンのパスワードを解読する。

『織図様……いけない、このカウントはまさか……！ あなたのバイタルです……5分ということは、1秒に7・8年のバイタルが……』

彼女は即座に計算する。常神ならば1秒につき82年分のバイタルが吹き飛んでゆく。織図とファティナの違い、それは死神の秘儀である バイタルロック（生命力施錠）をかけられるか、かけられないかという違いだったのだ。バイタルロックをかけている織図は常神よりずっとバイタルの奪われる速度が緩やかだが、それでも削

られてゆくことには変わりがない。そして織図のバイタルが尽き果てた時……織図の自我はEVEのファイアウォールの藻屑となる。織図の神体は現実空間で二度と目覚めない。

『何です、このプログラムは』

改めてファティナは谷底を覗き込んだ。仮想空間EVEにおいて現実空間の神体からバイタルを略取する悪魔のようなプログラム。このプログラムの作者はこの世のものではない。彼女は総毛立った。

『急いで下さい、織図様。あなたにどれだけのバイタルが残っているかは誰にも。死神のあなたにすらも分らないのです』

織図はDAーインディケータにより人や生物階の生命の寿命を一月単位で正確に弾きだせるが、神のバイタルは“揺らぎ”が大きいため残り寿命が計算できない。寿命を正確に計算する事ができたのは、荻号 要だけだ。

織図は最大5分と見積もっているが、織図にすらも彼の寿命があと何年あるかなど把握できてはいない。一秒一秒はまさに織図の命の重みを持っている。

『180秒が経過……』

ファティナは恐ろしさのあまり、岩場にへたり込む。彼女のトレードマークのボーダーのマフラーが風にさらわれて谷底に落ちて行った。

＊

あるいは死体のように穏やかに、その少年は機材の山に取り囲まれたベッドの上に横たわっていた。死のイメージを厭うかのようにやけに明るく、そして無機的な室内光の下で規則正しく滴下する種々の点滴に繋がれた、彼とよく似た顔立ちの鳶色の髪を持つ少年の

枕元の前で恒は膝を折る。

恒より5歳ばかり年上のこの少年は、腹違いの義兄ということになる。まるで恒自身が眠っているかのようにその容姿は恒と酷似しているが、よく見ると義兄の方が極陽の性質が濃く出ているのか、恒よりずっと色素が薄く髪の毛も紅茶色をしている。それでも恒には何となくわかる、彼と血がつながっているのだということ。

口について出たのは、恒が今まで一度も口にした事のない言葉だった。

「兄さん……？」

恒を少年のもとに案内した八雲 青華は恒の呼びかけを聞き、ほろりと涙ぐんだ。彼が健在ならば兄弟同士の付き合いもできただろう。彼らは互いに何を語るのか？ それを聞いて微笑むことも、今となってはかなわない。

「私の勝手かもしれませんが。長生きをしてほしくて……はるお遼生と名づけたのです。生きてくれているのは嬉しいけれど……酷い親です、私は」

遣る瀬の無い悲しみと自己嫌悪を押し殺した八雲には答えず、恒は痩せ衰えた遼生の手に触れた。10歳の時にA B N T抗体を打たれ、もう7年間も寝たきりなのだという。脳死ではないが重篤な植物状態。

八雲は先代極陽の第二使徒であった彼女の社会的な立場を利用して、全力で意識すら戻らない遼生の生命維持を行っていた。

「彼の中にはまだ……」

「ええ……A B N Tの体液がいまだ体内に蓄積して体外に出てきません。細胞の一つ一つに浸透し、彼の細胞を今も焼き続けているのです」

それはまさに、遼生が生きている限り続く地獄の業火というもの

なのかもしれない。

彼女は生命維持を行いながらも、どこかで息子の死を切実に望んでいる。夢の中でまで続く苦しみから彼を解き放ってやりたかったのだ。研究者の常識から考えれば、実験を終えた実験動物は苦痛のないようすみやかに安楽死されるべきだ。だが、彼女にはそれが出来ない。彼女の親心という躊躇が、遼生に7年間もの間生き地獄をみせることになった。

「あの日……私は遼生を欺きました。ワクチンの予防接種だといってABNTの体液を……」

「八雲さん……」

「この子は私を疑いませんでした。……苦しみ悶えながら瞳を閉ざす、その最後の瞬間まで」

「……いいです、八雲さんやめてください……もういいんです」話を遮って八雲を諫める。どんな過去も、思い出も聞きたくなかった。彼がどのようにして実の母親に裏切られなければならないかったのかということなど。

「投与が失敗に終わったとき……この子は、世を去るべきでした」

「生きていてはいけない命なんて、あるのでしょうか」

恒はぽつねんと呟きながら、八雲に気付かれないようポケットからあるものをとり出した。

「生きていても可哀想だとか、それは彼が決めてゆくことです。あなたが決めてはいけないと思うんです」

恒がポケットの中に忍ばせてきたのは輸液セットだ。恒は遼生に寄り添う風を装いながら八雲の目を盗み、輸液用の翼状針をカテーテルに繋ぎ、遼生の動脈に手早く突き立てた。もう一方の先端にも付けられた針は、恒の静脈に刺し込む。

その瞬間、カテーテルの中で血液が溢れて、中央に取り付けられた逆流防止弁とポンプにより遼生の血圧が恒の血圧に勝り、恒の神体に遼生の血液が流れ込んでくる。恒は更に恒の動脈に針を穿ち、遼生の静脈に同じカテーテルを逆方向に注射した。恒の動脈血が、遼生の静脈に流出してゆく。二本のカテーテルの間で血流が繋がり、恒と遼生の二神の間で血液の交換が行われている。

異なる神々の間で血液を交わすとショック症状が出るのは神々の間での常識だが、兄弟間での遣り取りは理論的に問題ない。恒は緊張感と平常心を保ちながら、遼生の血液をゆっくりと受け入れていた。

しかし観察眼に優れた八雲が恒の不審な行動に気付かないわけもない。八雲は二神の間に繋がられたルートを見てすぐに状況を把握し、パニックに陥った。

「と、藤堂様！ おやめ下さい！ あ、ああ、あなたの中にABNTの抗原が……っ！」

恒に飛びついて針を抜こうとした八雲を、金縛りでその場に縫いとめた。これは荻号 正鵠に学んだ技術で、対象の運動神経のコントロールを恒のアトモスフィアで書きかえて麻痺させ、八雲の自由を奪う。特に神がアトモスフィアによる支配に無力な使徒に施術する場合、その効果は顕著だった。

八雲はその場から一步も動けず指一本すらも動かさなくなった。

「黙って見ていて下さい。あなたが俺に二年半前に提示していた、その答えを」

恒の血液が、活性増強された抗体が遼生を癒す……癒してゆく。それと同時に恒にのしかかる、壮絶なABNT抗原の負荷。遼生の中で封じられていた悪魔が牙を剥き、恒の体内に押し寄せて駆け巡る。体内で爆弾が破裂し続けるような、そんな絶え間ない衝撃と経

験したこともない苦痛が恒を襲う。

抗A B N T抗体の担体として何も特別ではないと言った、むしろはるかに脆弱なのだと言った岡崎の言葉が遠くに聞こえた気がした。恒は顔を歪め、身を焼き尽くされるかのような鈍痛に喘ぐ。異物の侵入に四肢が痙攣を起こして拒絶する。生命の危険を感じた恒のアトモスフィアが俄かに紫電となってそこかしこでスパークする。

一度体内に入ったA B N T抗原はすみやかに体液を通じて浸透してゆく。たとえ針を抜いたとしても後には引けない。恒の体内に棲みついた魔物は、もう二度と外に出て行ってはくれない。

恒は岡崎の口から真相を聞いたとき、原液のままの抗原を打つことは危険だと容易に想像がついた。しかし岡崎が不用意に口を割った、遼生の存在によって急性障害への対処の突破口が見えた。A B N T抗原を投与された遼生の神体というひとつのクッションを経て抗原を受け入れるならば、生死を賭すまでのリスクを乗り越えることも出来るはずだ。

恒の神体は急激な変容を拒絶する、だが段階的にならば適応して抗体活性を上げてゆける。完全な神ではなく不完全な人間の身体を持つ恒にこそできる、成長し続けるということ、肉体を変化させ適応してゆくということ、それが神と使徒との間に生まれた完全な神体を持つ遼生には出来なかった。

遼生を癒す事は恒の中の抗体の活性を飛躍的に上げることにも繋がる。リスクとリターンは釣り合った。二の足を踏む理由はなかった。そしてそんな打算よりも何よりも遼生を助けたいと恒は願う。遼生に一方的に負わされた重い荷を、ふたりで背負うことができるならば――。

恒はみるみる消耗して、力が抜けて床の上に這い蹲る。

崩れ落ちる恒と引き換えに、八雲は信じられない光景を見たのだ。ベッドの上に横たわった、ただ横たわっていることしかできなかった彼の瞼が動いた。動かない遼生に見慣れていた八雲が、断じて見間違えはしない。

「遼……生……？」

焦点の定まらない瞳で、機械的な動作で瞼をもたげた遼生は呆然と天井を見つめていた。

地獄の果てから誰も救う事のできなかった八雲　遼生を、
義弟　藤堂　恒が蘇らせた――。

第2節 第9話 パラレル・コンカレント・デザイン

「遼生……？」
はるお

金縛りを解かれた八雲は、おそるおそる彼女の息子の顔を覗き込んだ。
んだ。

彼は眩しそうに目を細めているように見えるが、それは光に対する単なる反射で意識はないようだ。逸る気持ちをおさえつけ、彼女自身を諫めるように深呼吸した。そして

「藤堂様！」

そして彼女は床に蹲った恒に視線を戻す。正氣に戻った八雲は、恒を氣遣い助け起こした。陽階使徒として遼生より先に恒に氣を回さなければならなかった。と重々反省した。優先順位を間違えずに遵守しなければ……それが非常時であっても。

「なんと無茶を！ お体に異変は」

恒は八雲に心配をさせまいと平然とした顔をしているが、呼吸の粗さは隠せない。彼の体内で起こったことは、本当の意味で恒にしか分からないことだ。八雲は彼の脈にふれ、額を合わせる。脈がはやい、それに微熱もある。そんな状態であっても、八雲 青華に凜とした眼差しを向けている、その瞳の強さに彼女はたじろぐ。

何と強い子供だろうか、いや、彼がそうあるうとしているだけだ。
八雲は痛々しく思った。

「何とかになりました、彼のおかげです」

八雲は頬の筋肉が緊張し唇が震えて、言葉が出てこなかった。何故か彼が彼女の息子のようにみえたからだ。八雲は恒の両手を取り、膝をついた。

「遼生のために、ご無理を」

「違います、多少は彼のためですが、完全に彼のためというわけではありません。段階的に抗体活性を上げていけばいつかは抗原に勝ります。俺は彼の神体をその一つのステップに使わせてもらいました」

彼は素直ではないが気遣いができ、思いやりのある少年だと八雲は思い知った。八雲の罪悪感を取り除くために、自身を貶す。彼は決して“よい神”でも“よい人間”でもあろうとはしない、だが彼のアトモスフィアは誰よりも優しく、そして決意を秘めた人間は強い。

「それと同じことが、遼生にはできませんでした」

八雲は遼生が恒に劣っているとは思わない。ヴィブレイスミスと八雲の発想は、恒がしたことと同じだ。だが、遼生には恒がやってのけたことができなかった。

恒は彼女を責めないように慮りながら、浅く首を振って頷いた。

「では兄は抗原を打たれることを望みましたか？ Anti-AA抗体を含め……免疫とはそういうものでしょう。本人がそれを望んでこそ、免疫力は高まるもの」

精神力は自己免疫力を高め、免疫力がABNT抗原に勝る。一つ一つの分子運動を緻密に計算していた八雲は、最後の最後に単純かつ絶対的なバイアスを理解していなかった。ひとつの生体装置として創られた遼生も恒も、完全な機械にはなれないのだから。

言葉を詰まらせた八雲から視線を外し、恒は無抵抗の遼生に看破を試みる。もともと遼生が何層の心層を持っていたのか。定かではないにしろ、意識が落ちている間にはどんな神でもマインドギャップは生じないものだ。それは避けられない脆弱性であり、どんな神でも他神に睡眠時の姿を見られるのを避ける。恒はこの好機を利用

して、彼の脆弱な活動電位をはらはらと読み解いてゆく。彼の意識が戻れば、マインドブレイクは途端に難しくなる。恒と同じ肉体の設計図を持つ神体だ、マインドギャップの層も厚いだろう。

「彼は知っていたそうです、あなたが彼に絶対不及者抗原を打ったことを。それでも彼はあなたを疑いたくなかったのです」

神であった遼生は使徒である母親をいとも簡単に看破し、彼は母親の裏切りを知っていた。看破の方法など教えなくても、遼生は自然に看破法を身につけていた。

「兄さん。もう一度、こっちに帰ってきてくれないか」

むなしく見開かれた遼生の瞳に影をつくるように恒が手を翳すと、睫毛の先を湿らせていた彼の涙にふれた。脳の障害も徐々に回復しつつある、引き裂かれ千切れた脳細胞は手を伸ばし、芽吹く若枝のように互いに繋がりが合って一つの精神系を再構築してゆく。恒には遼生の精一杯の努力が、生への渴望がはっきりと見える。生きたい、そう願う意思を――だから

「大丈夫……彼の意識は戻ります」

八雲は恒を仰ぎ、しかし直視することができなかった。

「私はこの子に会わせる顔がありません」

「彼は七年間この場から動くことができませんでした。でも耳は聞こえていたようですよ。あなたが毎日彼に寄り添い、声をかけていたこと、彼は忘れず覚えています。記憶の深い場所にあなたの思い出は大切にしまわれています」

八雲の記憶は鍵をかけられて、遼生の記憶の中にしまい込まれている。使徒階の研究施設の一室に幽閉されていた彼にとって、母親の存在は彼の全てだった。愛情深く接してくれた八雲との思い出だ

けを選びとって、辛い生体実験の記憶は薄められている。彼は母親らの手によって数々の生体実験の犠牲者となった、だが八雲は彼を愛していた。冷酷な技術者としての彼女の表情の影に隠された彼女の本心を、彼は忘れていない。

「それから……」

恒は踵を返そうとしたが足を止め、付け加えた。

「彼が起きても、俺の事は話さないでください。彼もまた、抗-A BNT抗体を持っています。彼を俺の身代わりにするために、俺は彼を起こしたではありません。すべてが終わったら……また会いに来ます。それだけは約束してください、八雲さん」

遼生はいつでも恒の身代わりになることができただろう。だからこそこの約束だけ。それだけは譲れなかった。八雲は二度と息子を裏切らないこと、遼生が二度と八雲に裏切られない為に誓ってほしかった。八雲は首を縦に振ることも、横に振ることもできずにうろたえている。

「実験体としての彼は一度死にました。今度は彼自身の生を、穏やかに歩ませてあげてほしいんです」

「藤堂様……しかしあなたは……」

「俺は死にません。また笑顔で再会できます、そうできるようにしますから」

柄にもないカラ元気で微笑む恒の姿が、八雲には痛々しい。恒は遼生を助けようとするのか。決着がついた後。恒の命があるのか、世界は存続し続けることができるのかすら、恒には分からないというのに。

ヴィブレイスミスは大きなトラウマを至る所に残してきた。

こんな歪な親子関係は、もうたくさんだ。

恒はそんな言葉を胸の内に押し込め、遼生と八雲の手を片方ずつ

とり握手をして別れを告げると、彼らを残して消えた。

＊

織図が最果ての谷に飛び降りてから、早くも180秒が経過しようとしていた。ファティナの手元にある平面のモニターの明滅だけが、彼の危機を告げている。

彼を助けようにも、手を貸そうにもファティナには手も足も出ない。EVEについての知識はないが、手を貸せない理由もあった。織図は頸部にDIVE用のジャックポッドをあけ、そこにコードを接続してDIVEしているためよりEVEとのシンクロ率が高く、感覚的に、そして自在に行動することができる。

その一方でファティナはヘクス・カリキュレーションフィールド（Hex Calculation Field）で、暗闇に緑のグリッドと流れる数字、関数、コマンド、グラフ群というようなシンプルな階層の中で感覚的に情報を操っていた。数列を指先で弾き、ループ状に束ね弧を描き、踊るようにデータを操る神具なのだ。しかしEVEは勝手が違い、その操作の殆どを視覚認識に頼らざるをえず、神体とデータの一体感が存在しない。これでは何をするにも不利だ。

そんな言い訳をしている間にも時間が過ぎてゆく。

織図の意識が落ち、EVEのファイアウォールが作動して織図が崩御するまであと100秒……、それ以前に織図が戻らなければ破滅だ。バイタルのカウントはみるみる減ってゆく。織図があとどれだけのバイタルを残しているのか、織図にも分らない。100秒もたないかもしれない。何か手伝えることはないのだろうか、彼女はパネル全体を見渡して細心の注意を払ったが、どの情報を見ても手伝えそうな部分が残念ながらなさそうだった。

最果ての谷は、侵入する者の勇気や度量をはかるための一種の試験だ。彼女が手を貸す事はできない。

そろそろプロテクトは解いたはずだ、彼が欲しがっていたデータも手にした頃だろう。ファティナは織図が今何をしているのかというイメージを膨らませる。

信じたい、そうでなければ復路が間に合わないのだから。

『ファティナ！』

それはファティナのイメージ通りのタイミングで、彼女を呼ぶ声とともに織図が地底から飛び上がってきた。織図は纏わりつく死の影を振りきるように全速飛翔で戻ったようだ、彼はファティナのいる崖上に着地するとようやく安心したのか、バランスを失ってまた最果ての谷に落ち込みそうになった。

ファティナは彼の神体が傾いて奈落に放り出される前に、しっかりと両手で彼の腰のあたりを受け止める。……間に合った！

『織図様！ ご無事で』

『ああ……なんとかな』

成功したとは信じがたい、実際に実現できるかどうかという点で、有言実行の難しさというものがある。彼は冷静沈着ではないが、ここぞという場面に強い。それも、特務省職員となってから積み重ねた精神鍛練の賜物なのだろうか。彼はファティナのトレードマークのボーダーのマフラーも拾って、持ち帰っていた。ファティナは嬉しそうにマフラーを受け取って、シマシマ柄のそれを愛蛇のように首にまきつけた。

やはり彼女は、立体映像であろうともこれがないと落ち着かないのだ。

『しかし……、あなたは相当なバイトルを削られました。既に総計2220年以上のバイトルを消費……』

織図は彼女の言葉に上乘せして遮った。

『それと+480年だ。昔、480年削っちまったことがある』

織図は昔、エア(Hy)という死神に引導を渡す為、彼が当時所持していたリビング・クリッパー(生命の刈鎌)という神具に480年をくれてやったことがある。

あの時の480年が、ボディブローのように効いている。

『……！ 2700年に……』

単純計算すると織図に残された時間はもう、300年ほどしかないということだ。

『気にするようなことか。寿命3000年ってのは平均寿命であつて、なにも3000年ぴったりに寿命が尽きるってものでもないだろ。それ以上生きる奴もいる。俺は信じてやりたいね、自分の運つてやつをよ……』

即死の位階と呼ばれた死神でここまで生きながらえてきたのだから、運はよいのだろうと自負している。そして今回も生還できた。まったく、ついていると彼は運の強さを誇る。彼は持ち帰った黒い小箱の中身をちらりと確認して、その蓋をファティナにも見せず大切そうにパタンと閉じた。

『ひとまず現実空間に戻ろう。このデータをEVEから出して別の端末に入れて、EVEから切り離さないと』

『ええ、その方がよさそうです』

ここにいる限りいつまたデータが奪われるとも、紛失するとも限らない。ファティナもそれには賛成だった。

『近道で戻ろうか』

織図はオーロラ色のメタリックグローブをはめ、彼の周囲に大きな正円を描いた。往路はそれなりに体力があったので長距離の飛翔

が出来たが、復路は体力がもたない。織図が範囲指定した空間は切り取られ、ぽっかりと黒い穴が空に開いた。織図はやくもその中に頭をつっこんでいる。織図がEVEに自在に穿つこのワープゾーンを介して、EVEのエントランスにワープできる。

転送後、ファティナと織図は切り立った高い崖の上に無造作に置かれたリング状の巨大モニュメントの前に放り出された。リングの内部はシャボン液のような色をした膜が張ってゆらめいている。EVEの疑似陽光にその鏡面がキラキラと反射して虹色に輝き、幻想的だ。

『よし、EVEを出るぞ。送還ゲートをくぐって意識を神体に戻せ』

織図とファティナは手を取り、シャボン玉のような光沢を持つゲート表面に立体再現された自身のホログラムをねじ込み、通過させようとした。このゲートを通ることによって、デジタル化した精神回路はアナログな神経回路に返還される。ファティナは足を差し入れたが、織図がふいに彼女の手を強く握った。現実空間に戻るのに何か躊躇することがあるのかと、ファティナは織図を振り向く。

『どうされました？』

『ダメか……俺は通れねえ』

織図の足はファティナのようにゲートを通ることができず、シャボン色のバリアに弾かれる。ゴム膜につつまれるように、織図の足は膜を通り抜けることができない。EVEの主である織図が、システムに拒絶されている。

そう、織図だけが！

『ど、どうしたのですか？』

彼は顎鬚に手をやり暫く考え込んだのち、どこかすがすがしそうにきっぱりとこう言った。

『神体が死んだんだろう、それもたった今だ』

『え!?!』

あまりにも明るくはつきりとそう言うので、ファティナは声を裏返してしまった。

『死んだんだ、最果ての谷から戻るには戻ったが、現実空間でたった今バイタルが尽きた。少し時間を残して戻ったと思ったが……タイムアップだったんだ』

楽観的な織図をあざ笑うかのように、今度という今度は見過してもらえなかったようだ。

運と、そしてバイタルはもう、尽きていたのか……。

『ちくしょう!』

織図は憎らしそうに叫び、EVEの空を仰いだ。手にしたデータを修復することなく、この世を去らなければならないのだから。ほんの少しの助平心が、織図の命を無駄にした。こんなことの為に、死ぬことになるとは彼は思わなかった。だが結果は結果として受け止める、それが彼の性分だ。

『ファティナ……頼みがある。これを持って現実空間に戻れ。俺が崩れたらEVEは30分以内にシステムダウンする。閉じ込められて出られなくなる、行け、早く!』

織図は懐に入れていた黒い小箱をファティナに手渡した。彼女が中を見ると、ハードディスクのジャンクのようなものが詰め込まれている。この中に、ユージーンのデータの破片やアルティメイト・オブ・ノーボディの真意がある。織図はデータの持ち帰りに成功し、彼は期待を裏切らなかった、だが代償はあまりにも大きすぎた。

死神 織図 継嗣 死す――。

『織図様も戻りましょう! 戻るんです!』

彼女は感情的になって織図の手をぐいぐいと引っ張った。どんなに引っ張っても彼の手はやはり、送還ゲートをくぐれない。EVEの審査は無情で厳密だ、彼はもはや生者ではないと判断され、彼の精神はEVEに閉じ込められている。EVEのマザーコンピュータは何人たりとも、死者の逃亡を許さない。

『通れねえって言うてるだろ。この世界は単純なルールで成り立っている。バイタルが尽きたら、死ぬ。誰も逃れられん……どこに逃げてもな。そして、死んだ神体に精神は戻れん。分ったら、行けよ』

『でも……っ!』

『でもじゃねえ! 行け!!!』

織図は怒鳴りつけると、最後にゲートの内に彼女を押し出すようにして、崖の上にはったりと倒れて動かなくなった。

精神的にはかなり強靱だと知られている織図もこうなると脆いものだ、バイタルという生命の通貨を失った者は死ぬ。それが神でも、人でも、動植物でも……。バイタルがなくなっても織図だけは大丈夫だと、ファティナには妙な安心感があつた。だがそれもどうやら勘違いだったようだ。根本的な問題だが、神々の記憶は本当の意味ではEVEには入れない。あくまでもDIVEは異物を受け入れているという状態であって、その記憶は完全にEVEの言語に変換できず、システマティックなプログラムに変換できないのだ。神の記憶を完全にデジタル変換出来るのはノーボディだけ。つまり織図は、人々の記憶がEVEで永遠を生きるように、仮想現実の中で生きてゆくことはできない。

現実空間で崩御すれば仮想空間でも死ぬ。逆もしかり……皮肉なものだ。

『織図様が……崩御なされた』

何かの間違いではないのかとファティナが開いていた手帳の自動

筆記ペンは駄目押しをするように、織図の死を告げている。すぐさま退避行動をとらなければ、まだ生きているファティナも織図の意識とともにEVEの中に閉じ込められて出られなくなる。次代の死神が再びEVEを立ち上げるまでどれほどの時間を要するのか知れない。いくら神体が生きているとはいえ、システムダウンしたEVEの中で、EVEの環境に適応し特化した死神でもないファティナが生き延びる確率など皆無にも等しい。どうあっても30分以内に織図を残し、戻らなければならなかった。

だが、彼女は彼を見捨ててゲートをくぐることができない。一柱の陽階神として、それより彼女の慕った愛すべき先輩としての彼を見捨てることができないでいる。そして、彼の復活の可能性を捨てきれない。彼女が窮していると、先ほどからずっと落ち着いた女の声彼女を呼んでいた。

「何をやっているの？」

EVEの住民のひとりが織図の異変に気付いたのだろうか、どこからともなく現れ、近づいてきた。

「倒れているのは死神と見受けるけど……？」

EVE住民のことを構っている間など、彼女には悪いがファティナにはなかった。一刻も早く戻らなければ、取り返しのつかないことになる。織図と一緒に戻るのだ。

『ええ、そうです。連れて帰らなくては、現実には！ EVEでは助からなくても紺上様ならまだ……』

ファティナは織図に肩を貸し、担ぎあげた。仮想空間で織図の質量は感じない、既に魂が抜けてしまった抜け殻のようでそれがまたファティナの焦燥感を掻き立てた。

医神 紺上 沓見ならば24時間以内の神の蘇生の実績がある。だが、それはまだ神体にバイタルが残っていた場合のみだ。完全にバイタルが尽きた神を誰も蘇生できはしない。いかに彼女が名医であろうとも。分っている、分りきっている。それでも、ファティナ

は紺上のもとに連れてゆこうと思った。そうでなければ納得などい
かない。

くすり、とファティナの努力を嘲うかのように女が微笑んだ。

「バイタルが尽きているんでしょう？ 助からないわ」

女の冷静な指摘は、ファティナの胸を引き裂くように。核心をつ
いてくる。そう言うからには、女はEVEのシステムに精通してい
るとみえる。そういえば、彼女はもうやってここまで来たのか？
この崖の上は、地上から500mはある。周囲は断崖絶壁で孤立し
ており、飛翔能力がなければ辿り着けるような場所ではない、そし
てEVEの住民にそんな能力はない。移動手段は徒歩か自家用車、
自転車、EVE内の公共交通機関だけ、あとは趣味で飛行機やハン
グライダーなんかをやっている者もいるが、とてもランディング
できるような平地ではない。だいたい、テール状になっているこ
の崖上は、20平方メートルほどしかないのだから。

『……でも』

「だから、助けたければバイタルを与えればいいの」
悪魔の誘惑を平然と持ちかける。

「それもまだ、生きている者からね」

振り向くと、蠱惑的なまなざしで女はファティナを見下している。
あたかも彼女の本心を引きだすかのように、その口元は綻んでいた。
しかしファティナは彼女の誘惑に打ち勝つ自信はある。それだけ
はできない、やってはならないことだ。神の名のもとに誰かの生命
を奪う事は出来ない。誰も織図の身代わりにしてはならない。一寸
の虫にも五分の魂、軽んじられる生命などない。ファティナは試さ
れている。

『生きている者から……？』

生きている者から無理やり命を削るこ

と、それは神階の倫理に反します。それが人であっても、小動物や昆虫であっても、許すわけにまいりません。彼らだって生きたいと切望しています』

「そうね、お前の言い分は分っているつもりよ。では死を望んでいる生者がいるとしたら？ そうね」

彼女はすつと自らの胸に手を当てた。

「たとえばここに」

死を望んでいる生者、その単語はファティナの思考回路に張り付いただけで、思考領域に浸透してゆかなかった。その言葉は彼女の脳裏をただ滑っただけだ。右から左に抜けそうになったその言葉を、彼女は引きとめて咀嚼する。彼女の理解を待つように、女は口を閉ざしていた。

『死を望んで……ということとは、生きている？ あなたが？ E V

Eの住民だというのにですか？』

「……おめでとう。織図を助けられるわ」

不敵にもファティナにそう言い放った女はレースをあしらった黒いドレスを纏い、ビロードの帽子を目深にかぶっていた。その悪魔崇拝者のないでたちと彼女のものの言いの違和感が、ファティナには強く印象に残った。

神は二度、断崖のふちで悪魔に試されていた。

＊

恒はまた、この場所に、グラウンド・ゼロに舞い戻ってきた。そこにレイア・メーテールが戻った気配はない。フェンスに指をかけ、握りしめた。

「お前、どこにいるんだ……」

手がかじかむ。彼女をどこまでも捜しに行きたい。彼女は今どこにいて、そして無事なのだろうか。悲惨な想像に及ばないように、思考にブレーキをかける。恒は昔から彼の本心を誤魔化して蔑ろにすることが得意だ。

「俺はそんなに頼りないのか！」

恒はレイアの消えたグラウンド・ゼロの中心に叫ぶ。声の掠れた問い掛けはむなしく反響して消えた。

山際を掠める朝陽に当てられ、闇に紛れていたフェンスの輪郭が消えてゆく。恒のその手に強く落ちる影に焼き付けられそうだ。レイアの存在したその名残は急速に、朝の気配に書き換えられて蒸発しつつあった。

「INVISIBLEに何を云われた！」

何故INVISIBLEがレイアに執心するのか。

INVISIBLEにとって絶対不及者とは何なのか、大切なINVISIBLEの器、それ以上に絶対不及者であることに何の意味があるのか。彼女はそれを知ってしまったのだ。彼女をINVISIBLEから取り戻す為に恒が何をしなければならぬのか。恒にはわからなかった。

彼女がそれまでどんな些細なことでも恒を頼りにしていたように、肝心なことをこそ打ち明けてほしかった。彼女はひとりでは何も出来ないと思っていた、そして彼女は恒なしでは事実何もできなかった。そんな臆病で繊細な彼女を動かしたINVISIBLEの言葉だ。何か致命的なことを言われたのかもしれない、たとえば彼女の弱みに付け込むような、そんなことを――。そして恒と彼女の信頼関係はINVISIBLEからの語りかけで揺らぐほどの、それほどのものでしかなかったと思いたくない。彼は悔しさのあまり、いまにも胸が張り裂けそうだ。

「……こんなじゃ、だめだ……」

恒は魂を失った亡霊のように立ち上がった。立ち上がるしかなかった。

どんな苦難に見舞われようと、レイアだけは見失わないつもりだった。彼女となら一緒に乗り越えて行けると思っていたから。レイアは戻ってくる、きつとまた、この始まりの場所へと。その時彼女はまだ、彼女を守りきれなかった恒を信頼してくれるのだろうか。

足を半歩ほど引いたとき、ぐしょ、とスニーカーに何かが触れた。山中では違和感のある感触に、反射的に目を落とす。足元には湿気をたっぷりと含んだ、4つ折りのメモが落ちていた。ゴミではなく、便せんのようにみえた。

『恒さんへ』

表書にはレイアの字。彼女は筆圧が弱く細い線の、小さな字を書く。普段の勉強には英語を使うが、恒に手紙を書く場合は気を遣って日本語で、そんなときには特に小さくなる。フェンスの内側にではなく外側に残されたメモ、恒に読ませるために残したものだ。必ず恒がここに追ってくると思じて。遺書じみていて嫌な予感がした。恒は一字一句読み飛ばさずに、速読術を使わずしっかりと読んだ。一行読むごとに、体力と気力を奪われてゆく。わずか20行ほどのメモを読み切ったとき、力が抜けてフェンスに縋りながら、疲れ果てた顔をくしゃくしゃにしながら無言で首を振った。

——もう、何が正しいのか、わからない。

＊

「ティナちゃんとオリちゃんてば、遅いのー」

有為はバグ取りをしながらも、彼らの身を案じていた。有為の隣には棟永が張りついている。棟永はもう半泣きだ。彼は織図の計画を聞いていなかったし、虎視眈々とその機会を狙っていたわけでもないだろう。ただ今日突然思いついて彼は行動に出た。何事にも興味の無い素振りを見せておいて行動力だけはあるのに腹が立つ。

「2時間って言ってたけどー、もう2時間過ぎてるしー？　ちょっとー、ムネちゃん気がきかないのー？　コーヒー出してくれるー？　カフェラテがいいなー」

有為が棟永にコーヒーを要求した時、オペレーションルームの照明がガタン、と落ちて真っ暗になった。もともと窓のないオペレーションルームは、明かりが落ちると視界はゼロだ。停電か？　予備用のバッテリーに切り替わるまで慌てず待てばよいと棟永が煙草のライターを取り出して火をつけようとした次の瞬間、耳を劈くようなブザーが鳴り響き、真赤なパネルが有為の手元に浮かび上がった。それに目を通す間もなく次々と、赤いパネルが目の前に整然と積層化して並んでゆく。棟永は前に身を乗り出し、ライターを床に落とした。

「そんな……馬鹿な……！」

「なーにー、またエラー？」

“No, 2 DIVER, Douglas Never. Disconnected. Error code 001”

(第二ダイバー、ダグラス・ニーヴァー、アクセス切断。エラーコード001)

“001Error is beyond restoration: We cannot recover from 001 Error”

(001エラーは 修復不能です。001エラーから回復できません)

ん

“We put Emergency Escape Protocol into motion”

(緊急プロトコルを適用します)

“Shutting down the EVE System: counting down”

(EVEをシャットダウンしています: カウントダウンします)

“There are 1800sec remaining”

(残り時間はあと1800秒です)

「なーに、このエラー? 1800秒以内に帰ってことでしょ?」

赤地に黒字の情報は、1800秒後のEVEの強制終了を告げている!

何度もこの画面を目にした事のある棟永だけは知っていた。冥王。死神が、織図が崩御したという意味だ。彼は有為に背を向け、顔を覆い、声を殺し男泣きに泣いた。しかし彼は泣いている場合ではなかった、ファティナを現実世界に戻さなければ、織図もろともEVEの中に閉じ込められてしまう。泣いている場合ではない、非常事態行動を取らなければならなかった。

「ティナちゃん……何をしているの?」

有為の言葉で、棟永はわれにかえた。シャットダウン目前のEVEの内部から、ファティナはEVEのマザーコンピューターに接触している。カウントダウンが続く中、連鎖反应的にEVEが機能を閉ざしてゆくそのさなかで、一部のエリアはまだ抜け道的に非常用演算を受け付けている。ファティナはその隙について、内部からできるだけの事をしようとしているのだろうか。棟永はリアルタイ

ムで送られてくるログに目を走らせた。ファティナは内部モニタとナビゲーションを使って、次々とコマンドを打ち込んでいる。さすがは仮想空間に常駐する数学神……その処理情報は膨大だ、棟永の目も追いつかない。ログは風のように流れてゆく。

「このアクセスはバイタル転送だ……ファティナ様、一体何を！ 違法だ、こんなの、認められない！ やめてくれ、ファティナ様！ こっちに戻ってくれ！！」

織図を蘇らせようとしているのは分る、そうしたい気持ちも分る、だがそれだけはやってはならない！ 外部から棟永が叫べど、どうしようもない。有為も驚いて、手こずっている棟永を押しつけてログを追う。棟永にはできなくとも、有為のスピードならファティナの速さについてゆける。有為は一時停止コマンドを打ち込もうとするも、ファティナにロックをかけられている。

「バイタル転送って生身の生物から、命を奪うってやつでしょ？ ティナちゃんてば、何やってんのー！」

「人間のバイタルを奪ったところでたかだかしれている。無駄です！ 戻ってくれ！ ファティナ様……あなたも、戻れなくなるんだぞ！」

崩れゆくEVEの中で、何が起こっている……。ファティナはどこからバイタル転送をかけている？ 織図の死に際し、血迷ったのだろうか。

「え……でも何からバイタルを奪ってるのー？ 十350年……十360年……まだ？ こんなにバイタルを持つ生物、生物階にはいらないー？」

有為はしっかりと捉えていた。ファティナは織図に、どこからか数百年以上のバイタルを引っ張ってきた。バイタル神に数百年単位のバイタルを供給できる者……それはもはや、人間ではない。ファティナは一体何からバイタルを奪っているのか？ 見当もつかない。

「もーティナちゃんてばー！ 一体何をやってるのー！！！」

赤と黒のコントラストに閉ざされたオペレーションルームに、有為の絶叫が響き渡った。

＊

半ば期待していなかったことだが、やはり家主はいなかった。

朱音はいつものように決まったコースで荻号の家の中を搜索して回り、水炊き鍋の夕食の下ごしらえをしながら夕方のアニメを見て時間を潰し、宿題も一問だけ残してあとは手早く終わらせる。いつも宿題を一問だけ解かずに残しておくのは、解らないのではなく、彼に教えてもらうことにしているからだ。彼は恒と並び学年一位の成績をおさめる朱音が未だに宿題の質問をすることを、渋々といった顔をしながらも、今のところ許してくれていた。

彼女は彼の帰りを楽しみにしていたのだが、それでも彼は帰ってこなかった。そもそも、彼は朱音が待っている事を知っているので心配をかけないよう早く帰ってくるのが常だったが、今日はいやに遅い。このまま大切な存在が帰ってこないのではないかという不安を、いつも朱音は経験している。荻号は朱音にアトモスフィアという不思議で大切な糧をくれる、だが荻号からもらっているのはそればかりではない。それは未来に対する揺るぎない安心感だ。安心感というと妙かもしれない、彼は家にこそ住んでいるが根無し草のようだし、世界中のあらゆる場所に一瞬にして行ける。ある日突然帰ってこなくなる可能性も限りなく高いのだが、彼は朱音を簡単には見捨てないような、そんな気がした。

「遅いなあ？ ……どこに行ってるんだろ」

朱音は風呂場に湯を沸かしに行った。押し戸になっているガラス扉を開けようとして、何かがつかえている。荻号が戻ってきたのだ。そしてドアを一枚隔てた向こうにいるのはどうやら、彼だけではなかった。荻号の上に乗るかかるとして、誰かが倒れている。

「荻号さん、と誰？」

「ここ、開けて！　そこに倒れてたらドアが開かないじゃないのー！」

すりガラスの向こうに、嫌な赤い色彩が見えた。血だ。怪我をしている……ふたりともだ。

朱音は勝手知ったる工具箱の中から取ってきたドライバーを使ってレールからガラス扉を外し、浴室内に踏み込んだ。中には血まみれのふたりが倒れている。荻号もそうだが、荻号の連れ……不揃いなショートカットの白いドレスの女の方が重傷のようだ。

「ど、ど、どうすればいいの？」

朱音は携帯電話で119番通報しようとしたところ、荻号に携帯を持つ手を押さえられた。その荻号の腕を見て、朱音は今までの彼になかったものを発見した。彼の腕一面が、マグマに覆われたように金色に眩く輝いていた。

「荻号さん……何があったの？」

「いいんだ、通報するな」

「でも！　ふたりとも大けがじゃない！　ふたりとも死んじゃう！」

朱音が大きな声を出したので浴室に思いがけず声が大きく反響して、女が気付いた。

「何が起こっていた」

うつ伏せに倒れたままの女が、誰にともなく呟いた。朱音には彼女の細く美しい肢体が印象的だったが、その白いワンピースを深紅に染め上げるように腹部から大量の血を流してその血液はただ排水

溝に注ぎ込まれている。荻号の赤透明な神血と、女の少し黒ずんだ血液が混じり合って流れてゆく。この血の色……彼女は人間なのだと、朱音は察した。その手掛かりによってどちらを先に手当すべきなのか分った。

緋牡丹の咲いたドレスを身に纏っているよう、喘ぐ息が白く立ち上って艶っぽく見える。きれいな女性だな……。朱音は瀕死のようにも見える彼女に素直にそう感じた。

朱音はバスタオルを持ってきて、女を助け起こし、それで寒々しい肩をくるんでやった。新しいハンドタオルで、傷口をそっと抑える。きついまなざしをしていた女は表情を和らげ、朱音に微笑みかけたようだ。この顔立ち、どこかで見たことがあるような気がする……。女の腕にもやはり、荻号と同じ黄金の徴があった。

「バイタル転送だ。それができるのは織図だけだ、だが、何が起こった」

荻号は仰向けに倒れ込んで目を閉ざしたまま、寝言のようにそう呟いていた。

第2節 第10話 八雲 遼生の第二の目覚めとその生

EVEの空が燃え上がるような深紅の色に染まっている。システム内の色情報が劣化してきたのか、立体再現されたすべての風景の解像度が荒くなり、時間を経るごとに色褪せてゆく。全域を空襲警報のようなサイレンが鳴り響き、危険を悟ったEVEの住民たちは歩むたびに立体画像の解像度を落としながら、思い思いの場所に避難をはじめた。生物階では天国として知られる仮想空間EVEのシステムダウンまで、残すところ15分をきった。

そんな彼らを遙か眼下に、仮想空間の中の女神はたった一柱で現実には敢然と立ち向かっている。長く黒いローブを身に纏ったその細身のシルエットは、高潔な女賢者だ。

“ バイタル転送プログラム・発動 ”

“ 転送元 # 2 s % E % g E D 5 5 g 9 ”

“ 転送先 # 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 ”

ファティナが手元の操作パネルにコマンドを入力すると、パネルはすぐさま天空に可視化されたプログラムの赤い矢を射た。放たれたそれは、起死回生の一矢となるのか。彼女の正確な狙いに射抜かれた監視用センサーは鈍い反応をみせ、情報を解析している。主を失ってまさに役目を終えようとしているのか、今にも機能を停止してしまいそうだ。EVEの空を覆い尽くしている機巧の、魚眼レンズのような巨大なセンサーが怪訝そうに赤い明滅を繰り返しながら ファティナを捕捉し凝視している。

トレードマークの桃色のボーダーのマフラーをたなびかせながら、彼女はその時を待っていた。そして欲してもいた。崩れ落ちようと

するEVEが最後の最後まで、織図に忠実であったという証拠を。

「言う事を聞いてね……。お願いだから」

異様な静寂ののち、雲霞の奥に見えた空のレンズの装甲が解かれてゆく。

彼女の遙か頭上に、幾重にもその花卉を重ねた白い機巧の花が咲く。EVEの外部センサーがバイタル受信モードに入ったのだと、彼女の前に浮かぶ操作パネルが静かに報告をした。

彼女は両手を組み、祈るような姿勢をとる。EVEがファティナの命令を受け付け、どんな反応を見せるのか……従順な神の僕であるのか、それとも無機質で無感傷な機械そのものでしかないのか。それはファティナには決められない事だ。

白い金属で覆われた花卉の中心が白く発光し、バイタル転送されたエネルギーが中枢部に集められている。ぼんやりと定まらなかった光源がはっきりとした光塊を映じたとき、彼女の視界はホワイトアウトした。耳を劈く爆音に、視覚と聴覚を失う。気付いたときには、彼女は人工衛星のように巨大かつ機械的な浮遊花卉の光源より織図めがけて撃ち落とされた白い光に吹き飛ばされていた。引き続き地を割るような轟音があたりに響き渡る。EVEの住民達は恐れおののき、落雷を受けた高い断崖を見上げているが、その頂上を見る事は能わなかった。

レーザー砲のような光条から爆風に煽られたファティナは空中で体勢を立て直し、一緒に飛ばされていた女の手を取って軽快にとんぼ返りを打つと、足場を確かめつつ元の場所に着地する。おそらく逃げることもかなわず直撃を受けたであろう織図の身は無傷なのか……ファティナの白い顔に焦りの色が滲む。

土煙が去り、光線に射抜かれた織図は息を吹き返していた。特務省職員の栄誉ある白い制服こそひどく泥をかぶっていたが、無事の

ようだ。転送装置から放たれたバイタルが織図に注ぎ込まれた。むしろそれはEVE内部においてはグラフィック的な情報でしかないのだが、現実空間において彼の神体にはEVEのマザーコンピューターから転送されたバイタルが注ぎ込まれたという一つの指標になる。ファティナは綻びかけた顔を、隣で腕組みをして佇む黒い女に気付いて引っ込める。

「うまくいったようね」

どこか寂しげな女の声に、ファティナはどんな言葉を返してよいのか分からなかった。

「ええ……」

蟻の子のように逃げ惑う住民を鳥瞰する送還ゲートの建設された断崖の上で、数学神は一人の魔女と対峙していた。

世界の果てのような寂寞としたその場所にはただ、砂を孕んだ乾いた風が吹いていた。

「メファイストフェレスⅡメリー、それがあなたの名ですね」

ファティナの手帳には、彼女についての情報が呼び出されてくる。

魔女は黒い帽子を取り、長い髪をかきあげて風に散らした。

「そのつもりだったけれど」

「……？」

「もう違うわ。ブラインド・ウォッチメイカーの依代になってしまっ
つてね」

父を手につけ、大切な繋がりを忘れ、望まない姿になったから……
生きていても仕方ないでしょ。ねえ？

いいの、もうたくさん生きたのよ。

彼女はさっぱりとした口調で呟いた。

A B Y S Sでの出来事を知らないファティナには、彼女の話の半分以上把握できない。だがメファイストフェレスを襲った悲劇は、ファティナの手帳が自動的に打ち出して記録している。二年半前、生物階が大規模な解階の住民からの侵略を受けたとき、解階の特権階級の貴女　メファイストフェレスと知り合いだった織図は、彼女の記憶を記憶回収ツールで回収した。

死神が丁重にバックアップを取って迎えたその記憶は審査も経ずE V Eに入り、織図の専用のフォルダに保管されていた。それ以来メファイストフェレスの記憶の一部はE V Eにあったが、織図のロックにより動作していなかった。織図が崩れたことによりE V Eのセキュリティが脆弱化し、メファイストフェレスの記憶はE V Eのサーバーに自動的にアップロードされてしまった。

彼女の意識がE V Eで再構築されたという偶然は、すべては織図の気まぐれによる。

ファイルが解凍され彼女の意識がE V Eの地を踏んだとき、神の気配と存在感を知るメファイストフェレスが織図とファティナの所在を感じ追跡するのは簡単だった。ファティナを見つけ、織図の死を目の当たりにし、A B Y S Sに残してきた自身の肉体に何が起きているかを知っていた彼女は、ファティナに生前の状態でのバイタル転送を提案した。

ファティナは断固拒否した、いや、そうしなかった。

しかし……現実世界に残してきた彼女の肉体が彼女の意に反し現在どんな有様であるか。それを彼女の口から聞いてしまったのは、ファティナも彼女の命を奪う事を妥当だと判断せざるをえなかった。彼女の肉体はもはや彼女のものではなく醜悪な怪物へと化していたのだ。彼女の証言が真実であると確認したファティナは、E V Eの非常演算用領域を用い、一度E V Eにバイタル転送を行い、ストックされたバイタルを織図に再転送したという経緯だ。

追い詰められ遂に底力を出し切ったファティナが、EVEのシステムチュートリアルに従ってバイタル転送をかけることは、それほど難しいことではなかった。

ファティナを束縛していたのは陽階神としての倫理観に他ならない。

「あなたのおかげで、バイタル転送は成功したようです」

「さて、目にも物を見せてやれたかしら。少しは吠え面をかいてくれればいいのだけれど」

メファイストフェレスはどこか晴れやかな表情で、仮想の空に清々しそうに深呼吸する。そして息を吹き返したばかりの織図を支え助け起こした。

彼らの間にはどんな間柄があったのか。彼女のすべての時間を織図に託してもよいと思えるような、強い信頼関係を結んでいたのだろうか。彼女の行為はとてつもなく重く取り返しのつかないものだが、彼女があまりに淡々としているのでファティナはどんな顔をすればよいのかと困惑する。

「ですが、よかったのですか？」

「いいのよ、せめて最期ぐらいはね」

それで本当によいのかと、生きたかったのではないかなどと、ファティナは重ねては訊けなかった。

そしてここにまたひとりの犠牲者が、静かにその生を費えた。

「バ、バイタル転送なんかやりやがって」

メファイストフェレスとファティナの間に流れていた微妙な空気を、覚醒した織図が破った。

「織図様！」

「おはよう、織図。何を寝呆けていたのかしら」

すぐ目の前で悪態をつくメファイストフェレスに、織図は複雑な表情を向けた。バイタル転送によって織図が目覚めたとすれば、メファイストフェレスが死んだことを意味する。織図が何か言葉をかける前に、遮られる。

「それよりも、のんびりとしている時間はないのでしょうか？」

「ああ、すまねえ。EVEのシステムダウンを防がねえと」

織図はふらつく脚で立ち上がり、制服についていた泥を簡単にはらうと、メタリックグロブをはめ、EVEの空に高々と両手をかざす。吹きすさぶ、風の音を聞き流しながら。

システムダウンまでの残り時間5分。

逼迫した状況を織図も心得ている。織図は思い出して、ファティナに声をかけた。

「ファティナ、お前は先に戻れ！」

「ですが……」

「戻れ、それと……世話になったな」

ここから先は、織図の独壇場だ。彼以外のアーキテクトの存在はかえって邪魔になる。ファティナは暗に足手まといだと言われているのだと察し、織図とメファイストフェレスに手を振ると、自ら送還ゲートに消えていった。

「残り時間はあと僅か……間に合うものかしら」

メファイストフェレスは細い腰に手をあてがい、楽しそうに悪態をつく。普段通りの口調で、彼を挑発するように。

織図は立体再現された彼女の姿をしみじみと見つめた後、ひとつ、大きく頷いた。

お前はここで会うなんて、柄じゃないだろ？ そんな事を思いながら――。

隠されていた透明な幕を織図の指先が引っ張る。彼が空を引っ搔くとそれまで巧妙に大気に偽装されていた配線盤が透明色を纏って出現した。

彼はその中に手を差し入れると、的確に線を抜いて配線を組み替え、緊急停止のコマンドを直接入力する。その織図を急かすかのように地を揺るがす轟音がして、天空から六つの巨塔が降りてくる。システムダウンの前のEVEはこの巨塔から放射される雷によって一度徹底的に破壊される。それらは織図を中心に数キロ間隔で並び、天から差し込まれていた。ほとぼしかった緋色の雷で塔の頂上が六角形に結ばれ、まさにその時を待っている。あの雷がEVEの地表に落下をはじめると、それはもう手遅れだという事だ。こうなってしまうと織図でももうEVEのシステムダウンを止められない。

「間に合わせるさ」

そんな織図を、メファイストフェレスは信頼していた。

仮想世界の終末の光景をまのあたりにしながら、彼らは怖気づく様子もなかった。

＊

「バイタル転送だ。それができるのは織図だけだ、だが、何が起った」

仰向けにひっくり返った荻号の言葉にアルシエルは興味深そうに耳を傾けながら、しかし彼女の全身状態はますます悪化してゆくばかり。朱音は代えのタオルを用意して次々と取り替えるが、彼女の腹部からの出血はいつこうにおさまる気配はない。あまりの痛々しさに、朱音はざっくりと切り込まれた彼女の傷口を直視することが

できなかった。しかし何という我慢強い女だ、呻き声のひとつすら上げようもしない。重傷に放心しているというよりは、怪我をすることに慣れている、そんな印象。少女のような容貌でありながら、落ち着いた雰囲気醸していて魅惑的だ。

「荻号さん！　それどころじゃ……それにこの方は！　出血が止まりません」

「ああ。俺はいいが、こいつはまずいだろな」

「上島先生を呼びますよ！？」

ふたりともが怪我をしているのだから、絶対に上島の応援がいる。荻号が彼女の処置をしている間に荻号が倒れてしまったては、彼女も助からない。そう考える朱音は何故彼が無意味に119番通報をやめさせたがるのか、理解できなかった。彼はプライドが高いのか偏屈なのか、何でも自分でできると思い込んでいる。それは少しも立派なことではないと、それがいつか命取りになると朱音は言ってみたくらいだ。

朱音が眉を吊り上げて口を開きかけたところで、彼の言葉が遮ってくる。荻号はヒトの出鼻をくじくのが得意だ。

「血が出たぐらいで大騒ぎするな。たいしたことじゃない」

「大したことです！」

荻号の薄墨色の聖衣は、荻号の血をたっぷりと吸い赤黒くなっている。見るたびに心臓が口から飛び出しそうになるのだから、そんな姿を性懲りもなく見せないでほしい……朱音のささやかな希望はきつと届かない。

「そうか？　じゃ、大したことないから見てろ」

荻号は重い腰をあげると、彼の腹部から溢れ出している血液を指先で拭い、そのまま彼女の胸腹部に差し入れる。荻号の手を彼女の

腹部に差し込んだその瞬間から、瞬間接着剤のように彼女の体内組織は会合をはじめた。体奥から徐々にふさがってゆく再生面に、荻号の手が挟み込まれそうだ。

このように荻号の治癒血は、人体とほぼ同じ性質を持つアルシエルの身体の怪我をいとも簡単に癒すことができる。だが荻号自身の怪我はそう簡単には癒せない、何とも皮肉なものだった。彼は自身と、そして他者のために常備している道具箱の中から体内でやがて溶けてなくなる吸収系縫合糸を取り出し、手早く彼女の筋膜を縫い込む。今度は非吸収系の針を取り、表皮に針を走らせる。あつという間の処置で、彼女の傷は朱音の目には見えなくなった。傷口が塞がったので改めて縫う必要はないが、何かの拍子に傷が開いてはならないので仮止めの意味で縫っているのだという。彼の主張するよう、確かに彼女の治癒は彼にとって大したことはなかった。

「すごい。こんなことができたなんて」

彼の“神らしい”一面を久しぶりに見る朱音は、彼に素直にほれ込んでしまう。

彼は格好もそれらしくなければそれらしい言動もしないのだから、アトモスフィアを給されるまでは毎月のように、彼が神であるという事を忘れていた。

「俺の為には何の役にも立たん能力だがね」

荻号はようやく自らの処置をはじめたが、おぼつかない手で薬草を調査して傷薬をこしらえている様子など、先ほどの治療法とは1世紀ほど遅れた治療をしている。朱音はそんな様子を見るとはがゆくなる。

「どうして荻号さんの血は、自分を治さないのですか？」

「さあね、俺が聞きたいよ」

彼は覗きにくそうに身体を折り曲げて腹部を縫いながら、心底呆

れたようにそう述べた。

「治癒血……というやつか」

荻号の治療により回復し意識の戻ったアルシエルが興味深そうに口を開く。荻号は彼女にちらりと目をくれ、また黙々と自らの処置にあげくれていた。

「喋らん方がいいぞ」

「支障ない」

「あなたは人、ですよ？ あなたは荻号さんと同じにはいきませんから、動かないで下さい！ 人は体液の1／3を失うと死ぬんですって……もう、それに近いほど外に出ています」

身をもたげようとする女の腹部にしがみついて傷口を抑えながら、朱音は無茶をしようとする怪我人をなだめる。

彼女が人間であるなら大量の失血をしたこととなり、輸血もせず動くのは命取りだ。さきほどから取り換えているタオルはぐっしよりと重くなり、彼女の血液を存分に吸っている。そして彼女の体重はかなり軽そうだ、それほど多くの失血は許されない。荻号が傷口を閉じているが、これまでに失った量がいくらともしれないのだから微動だにさせてはならない。人間は多量の失血をすると血圧を維持できなくなり循環系が働かなくなるものだ、朱音にもそのぐらの知識はあった。

「人体に近い構造をしているのには違いないが、分類上は地球外生命体になるぞ」

「え……！！！！ でもどうみても人間ですし、それに普通に日本語で……？ どこにそんな日本語を話す星が」

朱音は荻号の言葉に耳を疑ってしまう。まさか人間と同じ姿をした宇宙人がいるとは、姿だけではなく、言語まで同じだとは……朱音の理解を超えていた。しかしそれに言及すればきりが無い、神々

や使徒も立派な地球外生命体だそうだ。だが荻号と朱音は人間と殆ど変らない姿をして、今のところうまく人間社会の中に溶け込んでいる。

「広い宇宙には共通語として日本語を話す星が、1000年前ぐらいからあってだな……」

そんな、馬鹿な！ 朱音は開いた口が塞がらなかったが、これは事実でありまったくの偶然だった。

神語の置換言語方式が執られるようになってからおよそ1000年間隔で、神階は生物階の言語をその文化の中に取り入れてきた。現在神階の置換言語として選ばれているのは偶然にも日本語で、神々はよほどの老神でない限り置換言語を用いるか、あるいは近代になって国際語として認知されてきた英語で会話をしている。何故か置換言語に日本語が選ばれてしまったのは、日本語が表音、表意文字を有するうえに、日本という島国そのものが他国の侵略を受けにくい地形であり、次代の置換言語の選定までの1000年の長きに耐えうるであろうという見込みがあったからだ。ちなみに、置換言語は置換言語に選ばれた国家および文化が滅んだ時点で新たな言語にシフトする。神々や使徒の利便性の面を考慮し人々の生活に根付かない言語を用いても、それは生物階の文化を反映しない精彩を欠く言語でしかない。

神階が言語文化そのものを生物階に依存するという妙な構造は、女皇として即位したばかりのアルシエルの興味を引いた。多民族国家であるABYSには共通語というものが存在せず、好戦的で誇り高い解階の住民はABYSのいずれか一つの言語に支配される事を屈辱と感じる気質だ。そこで、完全に第三者的な由来を持ち、言語として成り立つ構造を持つ共通語が必要となった。アルシエルが解階における共通語の選定方式を神階に倣ったのは、そんな事情があったのである。数奇な偶然が重なって、朱音にはアルシエ

ルの会話が日本語のように聞こえるのだった。

「生物階……か」

ABYSSを棄て、どこまで生き恥を晒せばよいのか……。

臣民の為にと走り続けてきたが、もうABYSSには彼女の帰還を待つ者はない。曾孫　メファイストフェレスを葬り、ABYSSの地が消え果てても、INVISIBLEに刻まれた呪詛はまだ消えてはくれない。もっと早くにこの腕と力を獲ていれば、全てを失わずに済んだかもしれないというのに。力なきことは罪だ、アルシエルが彼女の臣民達に幾度となく述べた言葉を、自らに突き返された気分だ。何もかもが、全てが遅きに失した。ABYSSは滅んだのだ、この事実はまだ受け入れられそうにもない。

“もう、如何様にでもなれ”

亡国の女皇は虚脱感のために死んでしまいそうだった。

何を守ろうとして戦おうとしたのか。全てがどうでもよくなった。民を見捨てひとり生き残ったところでそれが何になるだろう。民を失った国家の王に存在価値などない。アルシエルは、彼女を心配そうに見下している少女のあどけなく優しいまなざしから逃れることができたなら、その命を閉じるべきだと痛切に感じていた。

「人間にしか見えないのに……宇宙人なんですか？」

朱音は興味深そうに、いつまでもアルシエルから目を離そうとしない。彼女の立場を知らない朱音には遠慮というものが無いように、上からのしかかるような体勢でじろじろと見つめている。

「あんたが何を考えているのか、俺には手に取る様に分るんだがね。あんたがそうするのは勝手だ。だが、時期を見誤らん方がいいぞ」

ようやく自らの処置を終えた荻号は、自殺を決意しかけていた廃

女皇の決意を踏みにじった。何を考えているかなど推測すらできない朱音は、きつい事を言わなければいいのにと、眉根を寄せて荻号を振り返っただけだ。

「やっと役者が揃ったってのに、劇の途中で退場するもんじゃない。結末を見届けたいとは思わんかね？ 金を払ったわけでもなし、見るだけは無料だろうぜ」

荻号はアルシエルにいたずらっぽく微笑んだ。

ハッピーエンドなど想像も出来ないという酷いシナリオを、まだ最後まで見届けるというのだから、彼の決意も並大抵のものではない。その暢気で気負わない一言に、負けた。

「……………それもそうだな」

死期はもう少しだけ、保留されることになった。ABYSSが滅び世界がどうなっただけなのか、その先に希望があるのか、あるいはないのか。ABYSSの民に代わってそれを見届けるという大切な仕事をアルシエルは忘れていた。

「ABYSSはやはり、滅びたのか？ メファイストフェレスは……」

「ABYSSが生物階に入っていることをうまく利用して、時計職人にバイタル転送をかけた奴がいる。生殺与奪を可能とするEVEの秘技だ」

ABYSSの内部を覆い尽くすように膨張を続けていたメファイストフェレスは、バイタル転送と思われる何者かの介入によって自滅し、なおもゾンビのように蘇ろうとしていたところを荻号とアルシエルの多重攻撃によって木端微塵に破壊され、急速に収縮を始めた。メファイストフェレスの肉体を見捨て、時計職人の憑依が解けたのだ。したがって内部構造を欠いたABYSSは空洞化し、表層は重力に耐えられず星そのものごと大爆発を起こしてしまった。荻号はアルシエルと共に形而上学的転移を繰り返し、爆発の直前に生

物階に戻ってきた。それはまさに間一髪のことだった。

「バイタル転送とやらが、奴に効いたというのか？」

時計職人に対して、正攻法ではなく裏をかくような戦術が有効であるとは信じがたい。

「効くさ、理論的にはな。少しでも考えのある創世者なら、見境なく依代を選ぶような愚かしいことはしない。だからINVISIBLEやノーボディは不死身の器を選ぶわけだが、ノーボディが早々に実体を捨てたことで、時計職人は神階側が時計職人のバイタルに干渉してくる事はないと完全に侮っていたんだろう」

「では何故、汝はそれをしなかった」

バイタル転送がブラインド・ウォッチメイカーに対して有効なら、荻号は何度もバカの一つ覚えのように正面から戦いを仕掛ける必要はなかったというのに……何を迂遠な事をしていたのだろうか。アルシエルの鋭い指摘に、荻号は釈明。

「一度ぐらいは考えたさ。だが、バイタル転送をするにはその個体がEVEに管理されている必要がある。つまり生物階住民にしかきかんのが常識だった。転送コードが判明せんからな、転送コードを割るなんざ死神の織図にそんな芸当ができるとは考えられんし、俺にも無理だ。だが……もしそのバイタル転送コードを何らかの方法で織図が割り出したなら、理論的にはABYSSの個体でもEVEの支配下に入りうる。時計職人も言ってみれば解階の女の依代に憑依したバイタルの塊だろ？　なら女のバイタルを削れば、あのデカブツを仕留める事ができるのさ。そして織図が実際にそれをやりやがった。時計職人の依代を奪って、鼻をあかしたってわけだ」

荻号が早口で一気に説明というか推測をしてしまったので、朱音はどうして彼は難しい事ほど早口でしゃべるのだらうと憎たらしい。結果荻号の言う事は、朱音には1／10も理解できない。アルシエルには分かるのだが。

「生物階の全住民のバイタルコードは割られている。ABYSS居住者もうあんた以外にはおらん。神々や使徒のバイタルコードもEVEは記録している、今後時計職人がどの依代を選んだとしても、今と全く同じ方法で依代を奪う事ができる」

「神階には、不死身の神はおらんのか」

賢明な彼女は不死身の神体を持つ神々の存在を真っ先に疑う。荻号は彼女のカンの鋭さに脱帽だ。

「レイア||メーテールという少女神がいるがね。こいつはINVISIBLEが聖痕を刻んでしっかりと囲っている、こいつに収束するのは無理だ」

「逆に言うと、INVISIBLEは必ずその女神に収束するということか。絶対不及者へと変容し、三階を滅ぼすやもしれんと」

朱音は彼女の名前を聞いて、古い心の傷がいたんだ。レイア||メーテール、恒がINVISIBLEから守ろうとしている女神のことだ。

二年半前、朱音の両腕の中にいた、手を伸ばしても届かないほどの美貌と神々しさを秘めたあの金色の女神。恒が毎日のように神階に上がるのも、今週ずっと学校を欠席しているのも彼女のためだ。神々にとって不死身の彼女がどれほどの価値を持っているのか知らない、そして恒が彼女にとって、あるいは彼女が恒にとってどれほど必要な存在であるかを知らない。

だがいつからか恒にとって彼女は、恒の全てになっていた。恒は彼女の事を朱音の前では一言も口にしないが、彼女を好きなのかもしれないと朱音には漠然と分る。生来の器用な性格で全てをそつなくこなし、あらゆることを上手に手を抜いてきた恒が、彼女の為に

は何一つ手を抜いたり怠ったりしない。

その彼女に危機が迫っているのだとしたら、恒はどんな手段を以てしても、彼女を守ろうとするだろう。

ああ、これだったのか……。朱音はようやく気付いた。

荻号が慌ただしく動き回る訳、恒がここ最近、忙しい様子であること、そして危機に瀕しているレイアが三階の命運を一身に負っている、かけがえのないただひとりということ。朱音はもう、恒への想いはとくに断ち切ったと思っていた。学校で彼を見かけても、以前のように好きだという気持ちで前面に出てくる事もない。だが古傷のように今でも、時折恒の夢を見ることがある。平凡な人生でいい、世界を変えるほどの力を持った特別なひとりでありたいと思ったことなどない。だがほんの少しだけ朱音は彼女を羨ましい、と思ってしまった。そう、ほんの少しだけだ。

今はいつも隣にいてくれる青年神が、朱音の心身の拠所になっていることは間違いない。

それは恒に対する朱音の気持ちを、裏切っているだろうか？

そうではないと、今はこのひとが好きなんだと、朱音は彼女自身に言い聞かせるように唇をかみしめた。

「レイア＝メーテールへと収束し、破壊の限りを尽くすこと。INVISIBLE自身がそれを望んでいるかね……。少なくとも俺は、そうは思わんよ」

荻号はINVISIBLEを擁護するような立場に立った。荻号の腕のステイグマに、荻号の精神が影響されているのだろうか？

それとも、今もおそらく アルシエルと荻号の命運を掌握するINVISIBLEに媚いるのだとしたら。

「この期に及んで、INVISIBLEに媚をうるのか」

荻号はあまりの言われように青銅色の瞳を丸くして口をつぐむと、朱音に、バスルームの外に出ていろと促した。ついでに隣のアパートに住む吉川 皐月に服を借りてくるよう言いつける。吉川 皐月と荻号は朱音の仲介もあって、それなりに交流がある。植物好きの皐月に、荻号は苗を分けたり、そのお返しにと皐月は生活に役立つ日用品などを無償でくれたりもした。服の一着ぐらい、貸してくれそうなものだ。アルシエルの大柄な体格だと皐月の服でも窮屈かもしれないがなにしろ荻号の家には他人に貸し出せる服が一着もない。聖衣一枚を着たきりでいるからだ。

朱音が玄関を出ていった物音を確認すると、彼はアルシエルの上に覆いかぶさり、纏っていた血染めの檻褌のワンピースを指で縦に裂き彼女を全裸にさせる。彼女が口を開けて無礼者、と言う前にその、口を塞ぐかのように温水シャワーを顔面に浴びせた。解階の女皇アルシエルを全裸にひん剥いたとあらば、本来なら荻号の命はなにもものだが、あつという間の芸当に彼女は抵抗する気力も体力も殺がれて、ただその完璧な肢体を荻号の前に晒すばかり。荻号もドアの隙間から脱衣所に聖衣を脱ぎすて、全裸になってアルシエルを洗うついでに自らも身を清める。

「神とはやらぬぞ」

とりあえず荻号の股間を見てげんなりすると、ぽつりと呟いた。すっかり短くなった髪の毛をシャンプーで犬のようにわしゃわしゃと洗われながら、彼女は神の手にその肌を許すとは何と惨めなものだと心底なさけなくなった。彼女は荻号の肩に刻まれた金色の御璽に気付き、その御璽の形状から推測して、彼が解階の住民をして神皇と呼ばしめた陰階神 荻号 要だったのだと知ったが、それを特に彼に確認する事もしなかった。

「何の話だ」

荻号は彼女のはちきれそうに豊かな白いバストも邪念なく泡で洗い流しながら、何の感傷ももらない口調でそう言って捨てた。荻号は性欲を持たないが、いまだに性欲のあるアルシエルでもどうも荻号には欲情できない。普通は全裸の男女がバスルームでふたりきり、となると何かは起こるものだが、この場合は何も起こらなかったし、永遠にこのままふたりきりここに閉じ込めていても、恐らく何も起こらないだろう。荻号は彼女のヒップに手を伸ばしながら、間の悪さもあって、先ほどの話の続きをはじめた。

「INVISIBLEが何を望んでいるか、何も望んでいないのか。俺はずっと、そんな事を考えていたんだ。するとどうしても、INVISIBLEに自我はあるのかという点に帰結する。さて、自我ってやつはどこにあるものだと思う？」

「脳だろう」

彼女は迷わず答えた。こんな禅問答のような戯事に付き合わされるのも、体力を奪われあられない格好にされた彼女は億劫だ。

「本当にそうかね」

自己とはどこから始まり、どこで終わるのか。肉体が母体で鼓動を始めた瞬間からなのか、そして肉体が呼吸を止めた瞬間なのか。荻号の問いは、不毛な循環論法へと入ってゆくだろう。彼女は長い睫のついたまっ黒な瞳で、ぐっと荻号を覗き込んだ。不意に間合いを詰められ、荻号はのけぞる。

「何故、そんな事を訊く……」

「俺はどうも数学や物理学で物事に説明をつけたがるタチでね……。意識や自我は個体間を移動しないものだと思います。その思い込みこそが、認識的に閉鎖されているんだ。俺たちは、創世者の造った認識の檻の中に閉じ込められているんだよ。内側にいる俺たちに特異点を突破することは、不可能なんだ」

それは猿が決して宇宙の成り立ちを考えたりはしないように、あるいは物理学の解法を求めたりなどしないように、人間も神々も INVISIBLE の姿を理解できないように、認識が創世者によって閉鎖されている。どれだけ考えても、考え尽くしても、あるいは INVISIBLE 収束を妨げようとしても無駄だと、荻号は言っているのだ。

だとしたらもう、創世者に対して神々が出来る事は皆無だということになってくる。それは戦わずして敗北しているのと同じだ、それだけは認めてはならない。

「たとえばもっと単純な現象だとしたら……。波動関数が収縮するときに自我が生じるとしたら、俺とあんたの間のボーダーラインは限りなく曖昧だ。INVISIBLE とはそんな奴だ。認識の檻を抜けた、自我の亡霊だよ」

シャワーの蛇口を止めた荻号は脱衣所から二枚バスタオルを取ると、アルシエルに差し出す。彼女の身体は久しぶりにすっかりと清められ、ボディソープの香りが心地よい。しかしこの、はらわたを掻き乱されるように不快な荻号の言葉は何だ。

「つまりあんたは、あんたが思っているよりずっと……」

彼女はバスタオルを受け取りながら、今温かなシャワーを浴びたばかりのほかほかと湯気の立つ肌の全面に、いつの間にか鳥肌が立ってゆくのを感じた。

「ずっと昔から始まっていたんだ。それも連続的に」

＊

使徒階第1層の研究施設、立ち入り禁止区域内の照明すら灯らない長い廊下を歩んできた八雲は、一番奥の重い扉に手をかける。

嚴重に施錠された中には、彼女の最愛の息子が眠っている……その筈だった。

「遼生？」

ベッドの上は、もぬけの殻だ。点滴はすべて抜かれ、コードがベッドの上に散乱している。ベッドに結わえつけられた拘束具も引きちぎられ、鎖が床に投げ捨てられていた。閑散とした明るい病室はやけに無機的だ。八雲はいましたがた盆に盛ってやってきたおしぼりと体温計を盆から落として、体温計を割ってしまった。

「遼生！！ どこにいるの？」

7年間の間遼生を幽閉してきたこの部屋は、神の転移術（瞬間移動）を不可能とせしめる特殊な壁に囲まれている。仮に目が覚めたとして、逃亡など出来ようはずもない。それにそれだけの体力があるとも思えない。さらに、藤堂 恒と並ぶもう一柱の抗体、八雲 遼生の存在は岡崎以外には恒しか知らない。文脈から考えるに、岡崎か恒が強引に連れてゆくとも考え難い。遼生は目が覚めたのだ、確かに彼の力で。想像をはるかに上回る回復力だった。いや、恒の抗体の効果が凄まじかったというべきなのだろうか……。

顔を蒼白にしながら部屋の隅々まで彼の姿を捜していた八雲の背後でガタン、と物音がした。今しがた八雲が空けたばかりの扉が、わずかに揺れている。不可視を可能とする連続的瞬間移動……遼生が得意とした業が八雲の脳裏に浮かんた。

まさか……もう、それだけの体力が？

転移を連続でかけ続ける限り、遼生の姿はどのモニターにも映らない。そしてこの業はただ姿が見えないだけの業ではなく、完全に気配を断ちながら行われる。

一度これをやられると、母親ですらそう簡単に見つける事はでき

ないのだ。臆病な性格の遼生が、自己防衛の為にいつの間にか身につけていた悲しい業だ。

「遼生……どこへ行くの……！」

八雲は誰もいない暗い廊下に向かって、声を引き攣らせ叫んでいた。

「だめよ……！ 行かないで！」

今度こそは、手放さないつもりだったのに。

ずっとふたりで、穏やかな日常を取り戻す筈だったのに……。

八雲の思いはまたしても、彼女の息子には届かなかった。

第2節 第10話 八雲 遼生の第二の目覚めとその生（後書き）

えーと、ここまで読んでくださっている方いらっしゃるのでしょうか。ちよつと投稿しながら不安になってきました。感想、評価等いただければ幸いです。

第2節 第11話 紫檀夫妻のひろいもの

「ここにいたのか」

抑揚のない落ち着いた声とともに、周囲がいちだんと眩く照らされる。振り返るまでもなく、恒は聞き慣れた声の主を知っている。比企が玉座を離れ神階から恒を追ってきたのだ。比企がグラウンド・ゼロの地を踏むのは何度目になるものか、彼のフットワークは歴代主神のなかでも最も軽い。

極位神の強大なアトモスフィアはよい意味でも悪い意味でも生物階を騒がせる。寝静まっていた鳥を驚かせ、小動物を怯えさせ、木々は啼いている。比企の代となって主神の降下は珍しい事ではなくなっていたが、比企は生物階への影響を懸念して、生物階降下の直後アトモスフィアの放散を絶った。

恒は比企の目を避けるように、レイアの手紙をポケットにおさめる。何故と問われればなんとなく見せたくない、としか形容できない。

比企はいつも正しすぎる、比企の中では善と悪の間には何もないのだ……レイアの手紙は善と悪の中間にある揺らぎに引き摺られた、非常に曖昧な内容。比企には理解できまい、いや、彼は理解しようとはしてくれないだろう。恒はある意味、比企にすら頼る事ができなかった。

「レイアを見失ったか」

絶対領域たるフェンスの外側から、彼らという観客たちはからっぽの劇場を見つめている。

滑稽なものだと比企は感じたが、恒を責める気は毛頭なかった。

荷が重すぎるのだ。

「申し訳ありません」

恒は項垂れるように比企に頭を下げ、フェンスに背をもたせたまま、そのついでにずりりと座り込んだ。

先手を打って謝罪をされてしまうと、比企もかける言葉が見つからない。

「汝の責任ではない」

「……彼女を目の前で失いました。どうすることもできませんでした」

懐柔扇を持つ比企ならばレイアを救う事ができたのかもしれない。だが比企が傍にいたらどうだった、など考えるだけ無駄だった。比企は偶然にか必然にか、そこにいなかった。そしてレイアを救えなかった。結果であり、全てだ。その因果は既にINVISIBLEによって導き出されていた。どうすれば万全だったかなど……考えでも無駄だ。

「まだ自暴自棄にはなるな」

「自暴自棄？」

恒は不満そうな表情で比企の言葉を反芻する。そして勘の鋭い恒は、比企の意図を察しつつあった。しかしまた、比企も恒が『何の話をしているのか理解している』、という事に気付いている。その結果、比企は断定した。

「絶対不及者の体液は己の手のうちにある。汝の思うようにはさせん」

「……」

「死ぬるのだぞ。確実に」

無表情のまま沈黙する恒に、比企は畳み掛ける。両者の間に痛いほどの緊張が高まったとき、恒はその糸を故意に断ったのだった。

「極陽……何のお話ですか？ お話を理解しかねます」

恒はさも失望したように比企を見上げた。

その乾ききった視線に比企は背筋に薄寒いものを感じながら、恒の言葉を繰り返す。

「理解しかねる、のう」

比企は目を細めながら、次の決め手を用意している。岡崎から比企に返された腕時計を恒に押し付けるように渡す。それを見た恒は一瞬にして岡崎と比企との間に交わされたであろう遣り取りを想像することができたが、彼の表情には疾しさなど億尾にも出さなかった。比企は厳しく問い質す。

「これを岡崎のもとに忘れたな。肌身離さず持ち歩けと申しつけた筈だ」

「失念しておりました……何しろ気が動転しておりました。どこで落としたものか」

「気が動転して岡崎に何の用がある」

比企の追及は容赦ないが、彼と二年半を過ごした恒も彼との遣り取りは慣れたものだ。

「気の迷いです。何故岡崎様のもとを訪ねたのかも記憶にありません」

辛辣な言葉と感情を殺しつつも刺々しさを剥き出しにしたまま、両者は表面上の言葉の応酬を続ける。比企と恒のマインドギャップはまったくの互角、そして心理戦は恒の得意とするところだ。恒が知らないと言えば、話はもうそれで終わりだった。比企はそれ以上追及できない、それは両者の信頼関係を損ねるだけで、疑心暗鬼になるのは互いの利とはならない。比企は一旦、話題を打ち切った。

「さようか、どうやら詮索が過ぎたようだ。汝を信じねば何もはじ

まらぬ」

「いいえ、非は俺にあります」

恒はあたかも無力で愚かな少年神を演じるかのように覇気のない声でそう言うと、力なく首を振った。そんな弱気な様子ですらも演技なのだと、比企は見破っている。

誰の助けも必要としない孤独な少年を見守りながらふと、比企は彼に訊ねたくなった。

「藤堂、ひとつ訊いてもよいか」

「はい」

傍目には感情が存在しないのかと受け取れるほど、恒は完全に感情をコントロールする。看破という技術がお互いに通用しない以上、表情やしぐさ、口調から感情や思考を読み取るしかない。恒の精神力は鉄壁だ。その隙のなさが、比企には恐ろしくすら感じられた。

「……いや、何でもない。とにかく、拙速なことを致すな」

淡々と演技を続ける少年に、比企は訊けなかった。比企を、そして神々を——それほどまでに信用できないのか、とは。ひたすらに情けなかった。少年ひとりすら救えないのだと、自らはそれだけの価値しかない主神なのだと比企は深く失望した。彼を勇気付けられるのは、今は彼だけだ。彼自身の行動だけが彼の不安をぬぐってゆく。彼はそうして生きてきたのだ。誰にも頼らずひとりだけで傷ついて……。

比企の葛藤に気付いたのだろうか、恒は少しだけ比企に水をむけた。

「焦ってはいません。自暴自棄になってもいません。ですが、彼女の身を案じています。INVISIBLEはレイアをただ攫ったばかりでなく、感覚遮断に近い状態を作り出しているでしょうから」

比企は嫌悪感のする言葉を聞いて眉をひそめた。心理学実験にお

いて現代は禁忌とされる実験……それは感覚遮断の実験だ。つまり人間は外界との接触が遮断されたとき……目も見えず、何も触れられず、会話もできず、何も聞こえなくなったとき……必ず発狂するというものだ。恒はとても子供とは思えないほど冷静で落ち着いた口調で続ける。

「最初は耐えられます、彼女は強い。そういう訓練もしていますから。ですが……五感の刺激を断たれてそれが長期間になると、マインドコントロールにかからなくともやがてINVISIBLEの語りかけが全てであるかのように思われてきます。絶対的依存関係が成立するのです。その頃にはもう、俺のこともあなたの事も、彼女自身が誰であるのかすらも全てを忘れてしまっている。そうになっては遅い」

彼女は人間ではない、だがわずか二歳半の女神の精神力が人間と比べてどれだけ頑強であるものか。比企は恒に重大な問題突きつけられていた。そして恒が、絶対不及者抗体として最悪の選択を躊躇しないまでに焦る理由も同時にだ――。

「俺は彼女との信頼関係を築いてきました。そしてそれは不変のものとして信じてきました。ですが彼女が俺を忘れてしまったら、もう意味がないのです」

彼女は帰ってくる、必ず、その日、その刻、その場所へと。

だがその時の彼女はもう、恒や比企の知るレイア＝メーテールではない。

そういうことだ。

＊

比企に“あとを任された”梶 奎吾は局長の案内で特務省中枢の審議室に通されていた。

伽藍としただっ広い法廷のようなつくりの審議室のど真ん中に、椅子も用意されず茶も出されずただ立たされる羽目になっている。静まり返った室内は廊下と同じように明かりひとつ灯されず、暗闇だ。ただ、等間隔に配座された席に座する神々の放つ　アトモスフィアが薄暗い室内でほどよい照明の代わりとなっている。もともとそういう部屋なのだといえど設計者を持ち上げすぎかもしれない。周囲は一樣に白い特務省の制服を着、フードを深くかぶった18名の局長クラスの神々が観察するように梶を見下ろしていた。梶が仰角45度の角度で見上げざるをえない、中央の最上段の席に座し袖口と襟元に金色のラインが入っている制服を着ているのが特務大臣と見受けられる。梶は彼の名前すらも知らないが、特務省は神階唯一の省庁であり、したがって彼は神階唯一の大臣だ。この化物じみた特務省職員の長を務める神――。

化物のリーダーといったところだろうなと梶は心中で皮肉ってやるが、あまり効果もない。

梶が報告や要請などしくとも、梶の心層は看破されているに違いない。それなのに用件は何だ、などと訊きやがる。なんて待遇だよ、と梶が不満を訴えるよりは早々に用事を済ませて帰った方がよさそうだ。ここにいる輩は何を考えているのかわからないどころか、下手に長居してしまうと何をされるかわかったものではない。梶は不満を覚えつつ、INVISIBLEの器となるべき少女神レイアに対して特務省に伝わる秘儀である極戒嚴綬縛“久遠枢”の発動を比企が求めていると、かいつまんで話したところだ。

「――そういうわけで久遠枢の発動を請いに来たはいいが……レイア……メーテールが消えちまって何の為に来たかわかんねえ。つまり現状報告になっちゃったわけだ」

本当に、何のために来たのかわからなかった。失踪したレイアに対し久遠枢を発動してくれと頼んだところで、それが何の意味を持

つというのか。わざわざお偉い方に集合してもらって申し訳ないところだが、梶もこんな間拔けな報告をしなければならぬとは夢にも思わなかったのだから勘弁してもらいたい。帰れと言われれば憎まれ口のひとつでも叩いて、回れ右をして帰るだけだ。

しかし局長衆の矛先は当然といえば当然だが、あらぬ方向に向かった。特務大臣に面会を申し入れたのはあくまでも比企なのだ。その当事者が顔を出さず、代理の者がヒトを小ばかにしたような態度と身なりでそんな話をしているのだから、彼らも我慢がならなかったのかもしれない。

「それより主神が顔を出さぬとはどういう事だ？ 腑抜けにもほどがある」

「部下を遣わせて自らは逃亡とは、神階の長も落ちぶれたものよ。上司がかような者で恥ずかしくはないのか」

「つくづく、昨今の神階は墮落しきっておるの。同じ神とは信じがたい」

一柱が声をあげれば、次々と比企の主神としての資質を問う声が上がった。要するに、比企ですらも見下しているのだから、第二位神である梶では話にならないという意味だ。彼らの自信は実力からくるものだろうが、ことさら自尊心と自己主張の強い奴らは苦手だ、と梶は額を押さえた。織図はいい、謙虚で力をひけらかさない。先ほどの一件を見る限り、織図は圧倒的に梶より実力がある。しかし梶に気を遣っているのか、彼は位申戦を挑んで梶を第二位神の座から引き摺り下ろさない。そんな氣遣いをされて不甲斐ないといえば不甲斐ないが、梶は織図のそういうさりげない部分を好ましく思う。

「別にあの野郎は腑抜けて逃げ出した訳じゃないし、欠席裁判で貶されるのは腹が立つな」

梶は比企の名誉の為に言い返した。何故彼を庇ったのか梶にもよ

くわからない。いけすかない神だと思っていたのに、そんな言葉が咄嗟に口から出たのが不思議だ。梶はどこかで比企を格上だと認めていたのかもしれないと、今更のように気付かされたところだ。

「久遠枢か、よかろう」

それまで沈黙を貫いていた特務大臣は軽く手を上げて外野の雑音を制止した。

彼の挙動に注意が注がれ、室内がしんと静まりかえる。

「？ 聞いてなかったのか？ そのレイアが蒸発したって話だ」

梶は敬語を知らないし彼に敬意を払わなければならぬということにとすら知らないが、そのあたりの粗相は見過ごしてもらえようだ。

「蒸発した。それが？」

しわがれた声の特務大臣と思われる老神は梶の言葉を繰り返した。

「だから、できねえだろ」

まさか、ボケてるんじゃないだろうな、これだから、爺さん神は……と、梶がうんざりしたところで老神はもったいぶって答えた。

「これは異な事を云う。神体がいかにして蒸発するのだ、物性的に有り得ん」

カラカラと、老神は乾いた嘲笑を浴びせた。この野郎、と喧嘩っ早い彼は眉を吊り上げながら声を荒げる。血の気の多い梶を、彼はどこか侮蔑したようにすまして見下ろしている。

「ああ？」

「レイア＝メーテルは逃げられぬよ」

確信を持って彼はそう言い放つ。その意味を知らない梶を馬鹿にしたような局長達の含み笑いがまた、癪に障る。

腰巾着どもが、いい加減にしろよと怒鳴りたい気持ちをもぐつと抑

え、梶は尋ね返した。短気な梶といえど、少しは保身を考えもした。

「そりゃまた、どういう意味だ？」

「わが省には転移術に特化した者達がおってな」

「で？」

梶はわざと目を剥き、挑発するように唇を突き出す。そんな梶の態度が、局長衆たちにはコミカルに映るらしい。相変わらず彼らは互いに梶の陰口を叩いていた。

「わが省は高精度望遠鏡、空間探査機を用い、超空間転移に形而上学的転移、考えうる限りの転移術を駆使しH i - N E T (超広域転移網)を形成しておる。転移可能領域の開拓は何十万年も以前から行われていたが、その内容は神階には明かされておらん。H i - N E TはI N V I S I B L Eの胎内を網羅していると断言して差し支えない。各ステーション(転移中継地)にはエネルギー集積自動観測装置が備え付けられている。I N V I S I B L Eが彼女をいかな場所に隠したとて、速やかに発見されるだろう、という意味だ」

「あ？ I N V I S I B L Eの胎内ならばどこにでも行けるって事かよ」

なんとあっさりとしたものだった。こいつらは一体、何なんだと梶は呆然としていた。そして絶望してもいた。こいつらはあっさりと、神の限界を超えている。しかも気が遠くなるほど昔から、神階など及びもつかないような技術力であらゆることを可能としてきたのだ。

「左様。……久遠枢発動の時期は、神階に指図される覚えはない」

「ああ、そう。じゃ、口出しせんからとっとと仕事してくれ」

そんなことが可能なのか？ にわかには信じがたいが、認めざるを得なかった。神階は特務省の動向にあまりにも無関心すぎたということ。生物階にばかりかまけてきた神階と異なり、何十万年も昔からそれだけの年月をかけてその全組織力をI N V I S I B L Eを

破壊することだけに捧げてきた謎の組織だ。

I N V I S I B L E

収束の前に無力であってよい筈がなかった。

「で？」

今度は老神が仕返しとばかりに顎を突き出した。

「まだ何か用があるのか」

肩透かしをくらって、梶はふてくされた。

「ねえよ」

「それでは引き取り願おう。目ざわりなのでな」

梶は審議室を出るとそのまま確率神の執務室へと瞬間移動をかけ、腹立たしげに椅子にどっかりと腰を下ろす。その手で固定電話を取り、比企に報告のため電話をかける。十コールを過ぎても、比企は電話を取らなかった。まだ腹のおさまらない梶は舌打ちをし、誰もいない電話口に呟いた。

「どうすんだ、比企。用事が済んじまったぞ」

特務省にいったい喰わされたのは、どうやら比企も同じだ。“滅多なことでもない限り特務省になんぞ助けを求めない方がいい”と織図は以前、冗談めかして梶にそう言ったが。“ヤバイ奴等が多くてね”と、彼は付け加えて煙管をふかした。その時の言葉の意味を、ようやく梶は理解したのだ。

特務省特務従事者。

彼らはその気になれば何だってする――。

＊

草原の中に開かれた一直線の道を一騎の駿馬が風のように駆けてゆく。

馬上には仲むつまじく同じ馬に騎乗する夫婦の姿があった。彼ら

の名は紫檀 葡萄と川模 廿日。軍神下第五使徒と旧第二使徒である。彼らは二歳になる双子の子供たちを保育園に預け、使徒階居住区から神階へ入る第一層ゲートを目指していた。

このとき軍神は空位であり、彼らは神不在のため一度解雇されていたが、武型神の女神が今年中に軍神として即位するということで、使徒の登用試験を受けに神階へ入階せねばならなかったからだ。軍神即位前の人事の刷新は当然のように行われた。以前十大使徒を務めていた彼らであっても、実力不足と見極められればすぐに降格されてしまう厳しい社会だ。紫檀と廿日は三日以内に、十大使徒登用試験を受けなければならなかった。

二年前、何者かの襲撃により生死の挟間を彷徨った紫檀は、一時は両腕を失ったかに思えたが、切りおとされていた腕も無事生物階から発見され、紺上の迅速かつ的確な処置により五体満足に戻り、翼を失ったこと以外は以前と何一つ不自由のない生活を取り戻すことができた。難を言えば腕の感覚が時々麻痺することがある、というぐらいだ。

「ねえ、あなた。神階へのゲートが開くまで、まだだいぶあるわ。少し早く着き過ぎてしまうわね」

出産を経てもまったくプロポーションの変化しない美女妻の廿日は、水筒に入れてきたハーブティーを夫に勧めながらさえずるように呟いた。彼女は馬に乗ると、つい癖で歌を歌う。その透き通るような美声はいつも紫檀の心を癒していた。また鳥のように歌い始めた妻の腰に、紫檀はそっと腕を絡めつける。

「早いぶんにはいくら早くてもいいさ。君が歌ってくれるだろうからね」

「私は今回十大使徒として復職できる自信がないわ。ブランクの間にすっかり身体が鈍ってしまって、出産して体の調子も変わってしまった気がするの」

川模は育児休暇に三年をもらっていたが、新たな軍神が即位するということで復職を早める決意を固めた。というのは十大使徒が再編成された直後に復職しようとしても、以後は20年ごとに催される使徒再編成の機を逃せば位階への復帰は難しい。この時期を逃すわけにはいかなかった。子供たちの事ならば託児所や保育園などの設備は整っていて使徒の母親は安心して子供を預けることができる、使徒の母親の専業主婦が許されない以上、廿日ものんびりと子育てをしているわけにはいかなかった。次代軍神に“使えない”と見切られれば、とても紫檀ひとりに家族を養うことはできない。

「たった二年がなんだったというんだ、君は第二使徒だったんだぞ。自信を持つんだ」

紫檀は弱気になる妻を励ましつつ、馬を走らせていた。かつて最下層の馬番役であった経歴を持つ紫檀は馬術に長け、予定より随分と馬を速く走らせてしまった。早く着いたら、妻をカフェに連れて行ってやろう、そんな事を考えつつもう数キロも走れば神階へ入るゲートが見えるというときに、またしても紫檀は見ってしまった。紫檀たちの行く手をさえぎるように何やら赤い布で覆われた塊が転がっているのが見えたのだ。何だろう、そう思いながら紫檀は馬のスピードを緩め、馬に乗ったまま妙な物体に近づいた。よく見ると泥濘の中に、赤い衣を纏った少年が泥だらけになって横たわっていた。意識はないとみえる。

またこのパターンか、と紫檀は一人ごちる。

その次にどこかで見た光景だな、と紫檀は思った。あれはいつのことだったか、使徒階8層で見つけた白衣を着た青年も同じように倒れていて、紫檀が捨て身で介抱したものだ。あれは誰だったか……とても重要な人物だったような気がするのに、霞がかかったように思い出せない。

ありえない既視感に疑問を抱きつつ、紫檀は用心深く彼の周囲に目を配った。不自然だ……そう、不自然だった。少年の周囲の泥濘には足跡がひとつもない。彼は歩いてきたのではない、飛んできたのだ。どこかから。紫檀は空を見上げる。いやいや、有り得ない。使徒階での飛翔は禁じられている。使徒の飛翔が許されるのは生物階だけだった。

「これは……」

「見て、あなた。怪我をしているわ」

紫檀があまりの不自然さに訝しがっている間に、廿日は馬を飛び降りて少年を揺さぶっていた。案の定の展開だ、と紫檀は額を押さえた。世話好きでおひとよし、正義感の強い彼女が彼をほうっておく筈がない。

「そりゃそうだ……この服、囚人服じゃないか。しかもこの赤色の服、かなり罪が重いぞ。この様子だと警邏隊けいらたいに追われてたんだろう」

「身長はあるけれど顔はまだ子供よ？ どうして？ 子供の使徒は社会的に罪を犯さないわ。どうして捕囚者の服を着て追われてるの。連れて帰りましょう、放っておけないわ」

使徒の平均身長は高く、彼も170cmを超えているように見えるが顔つきはまだあどけなさを残している。20年も生きていない子供の使徒なのだろう。そうだとすればなおさら放っておけないというのが、廿日の正直な気持ちだった。廿日は昔から戦場でも人々の救命を最優先に考え、ひとりだけ撤退が遅れる損なタイプだ。

妻の気持ちを尊重する為にも彼を救ってやりたいと紫檀も思う、だが彼の身に纏っている服がそれを躊躇させる。だめだ。彼を助けることは極端な話、神階を敵に回すことになるのだ。紫檀は廿日をなだめるように首を振った。

「だから、それは囚人服だろう。助けたら共犯になるんだぞ」

「警邏隊に見つかったら殺されるのよ！？」 この子は何か悪い事を

したのかもしれない、でも未成年を犯罪者として処罰するなんて変よ。何か事情があるの、きっとそう」

しばしふたりの間を沈黙が流れた。紫檀はここで立ち止まって無駄に時間を費やすわけにもいかなかった、何故なら神階のゲートは目と鼻の先だ。ゲートの周囲には監視用の塔が建てられていて、容赦ない監視が入っている。立ち止まって不審な行動を取れば監視の目を釘づけにする。そうなれば一巻の終わり、彼を警邏隊に突き出せば紫檀たちは済むものの、彼は絶体絶命だ。それならばまだ、ここに彼を放置して何くわぬ顔をしてゲートに向かう方が賢明だと紫檀は思う。夜になれば監視も甘くなる、それまで彼はここで倒れていて夜になって動いた方がよい。ここで下手にちょっかいを出すと、彼にとってもよくない。

しかし、廿日は彼にしがみついたまま梃子でも動かない。紫檀は彼女の根性に根負けした。

「……まったく、仕方がないな。君はそう言いだしたら聞かないんだから。いつまでもは匿わないぞ」

紫檀は妻の主張を受け入れて、泥に汚れるのも厭わず手早く彼を抱き上げ、馬上に積み上げると廿日とともに栗毛色の愛馬、ラプタに跨った。生物階の馬ならば重い荷物に悲鳴を上げるかもしれないが、神階の模造生物である天馬は三人分の体重ぐらいではびくともしない。ちなみに廿日の愛馬だったテスラは鎗 二岐が騎乗しているが、二岐は今回の登用試験を受ける意思がないということなのでまた新たな神に仕えるのかもしれない。そういう噂も聞こえていた。二岐はその神の職種に仕えるというより、個神に仕えるタイプの使徒だということだ。

その意味では、紫檀と廿日は職種に仕える使徒なのかもしれない。

軍神下使徒として生涯をささげようと考えていたし、実際それ以外の選択肢を知らなかった。何度主を代えても、彼らは軍神に忠誠をささげる覚悟だった。人間社会でいうと二岐は信頼する社長に仕える部下であり、紫檀と廿日は会社で忠誠を捧げる部下ということになる。

新たな軍神が任命されるという頃に、違法行為を働くということとは彼らにとって何のメリットもない、むしろこの時期だからこそ違法行為は避けねばならなかった。だが彼らは主に従順であるのと同じように、いつも彼らの本心にも従順であろうとした。

「馬場の管理室に連れて行こう。寮に連れて帰ると目立つ」

「そうしましょう」

＊

「そこに寝かせて」

馬場の管理室にはベッドがあった。外から見えないようカーテンを閉め切り、嚴重に鍵をかける。廿日は紫檀がそうしている間も、どこに銃創があるのかくまなく調べている。彼の腕を調べていた廿日は驚きのあまり目を見開いた。細い腕をゆっくりとさする。そこには無数の針の痕があった。

「見て……この痕。薬物投与の痕跡だわ……違法薬物で捕まったのかしら」

「悲しくなるな。まだ若いのに薬物に溺れるなんて」

二児の父親でもある紫檀は、彼の腕を見てやるせなくなった。必殺の紫檀との異名を持つ彼も、息子の八朔が非行に走ってしまったらどうしようなどと考えてしまうところが、すっかり所帯じみてしまっている。

「とにかく手当が先」

廿日は管理室の救急箱から救急セットを取り出し、彼の脇腹や脚を貫通している銃創を丁寧に閉じていった。軍医の免許こそ持っていないが軍神下使徒としてそれと同等の能力を求められてきた廿日は、こういう創傷の手当に長けている。被弾した銃創は4箇所、致命傷はなかった。

「服を脱がせて！ 背中に貫通してるわ」

廿日がそう言うので、紫檀は重罪人を意味する赤い囚人服を脱がせて彼を自らにもたせかけ、廿日に背面を見せる。背を見た途端に廿日が息をのんだ。

「えっ……」

「何？」

紫檀の側からは彼の背中は見えない。彼女は先ほど確認したばかりの彼の腕にまた目を落とした。彼は使徒ならば誰でもつけている、腕輪型の不可視化装置をつけていない。

「翼がないわ……不可視化装置もつけてない。でも翼の痕跡はあるの」

「ない？」

紫檀も首を伸ばして彼の背を見て絶句した。惨たらしい古い傷跡が、ざっくりと背に大きく入っている。彼の翼は根元からもがれていた。廿日は彼の背をいたわるように、ひたりと手を重ねた。

「翼をもがれたみたい。なんて酷い事！」

廿日は涙ぐみながらも、まずは銃創を丁寧に閉じてやった。

いつもは不可視化装置で見えないとはいえ使徒が翼をもがれることは四肢をもがれること以上に辛く、精神的にも肉体的にもかなりの後遺症をのこすものだ。根元からではないが両翼を切断された紫檀は、今も激しい疼痛に苦しんでいる。神経発達の著しい成長期の一番大切な時期に、若くして翼をもがれた彼の苦痛はどれほどのものだっただろう。紫檀はどこか彼と共通するものを感じ深い同情を

よせつつ、どこか違和感を感じていた。彼に対する処遇への怒りからくるのだろうか、この胸の昂ぶりは何だ？ 彼に触れていると、力が体の奥底から溢れて滾ってくる。この体のほてりは何だ？ それは決して錯覚ではない。

「甘日？」

「何？」

「さっきから身体の中を電気みたいなのが走って、変だ。君はどうだ？」

「まさか、またあの時の疼痛がぶり返したんですの？」

「電気を消して真っ暗にしてくれないか。そこの左のスイッチを消して」

甘日はとんちんかんな事を言いだした夫に首をかしげたが、彼の納得するようにしてやった。パチンと電気を落とすと、カーテンを閉めた部屋は昼間でも真っ暗だ。

「見ろ！！！」

手探りで夫のもとに戻ろうとした甘日は、突然叫んだ紫檀の聲に驚いて飛び上がった。

甘日は目を疑った。少年の身体の周りを、うつすらと碧い光が取り巻いている。甘日は懐かしい波動を知っていた。感動のあまり、涙が止まらない。

「……なんてこと。これはアトモスフィアだわ」

「ああ、この御方は神様だ」

紫檀は彼をベッドの上に丁寧に横たえ、夫婦は膝を折り、発掘された宝石の原石を見つめるように少年を見つめた。暗闇に目が慣れてくると、彼の頭上にははっきりと光冠が見える。その神秘的な姿に、夫妻はうっとり魅入った。神を間近で見るのはいつ以来だろう、もう久しく見ていないような気がする。レイアを最後に一柱も神が誕生しなくなった神階において神は、これまで以上に貴重で尊い存在になりつつあった。生身の神の姿は、彼らを純然たる

信仰心に立ち返らせる。

「だが、どういうことだ？ 翼を持つ神様だなんて。それに、神様に銃弾が当たるか。フィジカルギャップに銃弾が弾かれるだろうに」
よほど弱っているか、間抜けな神でない限り神体の周囲には無意識的に強固なフィジカルギャップが張り巡らされている。速度と質量を持ったあらゆる攻撃を粉碎し、それはどんな銃弾といえど例外ではない。いかなるものにも穢されず、冒されないといわれる神の絶対圏内、フィジカルギャップを形成できない理由でもあるのか。

そういう事もひっくるめて、彼は先天性の奇形なのかもしれない、夫妻はそう思った。神階で奇形は滅多に発生しないだけに、奇形の神は忌まれる。だがそのことが虐待の正当な理由にはならない、夫妻はなおさらのこと彼の境遇に疑問を持つ。

「何か事情がありなのよ。私たちで、ここに匿って差し上げましょう」

「登用試験は？」

紫檀はそちらのことも心配だ。三日以内に登用試験を受けなければ、十大使徒として働く意思なしと見做されてしまう。彼に構うのもいいが、そのために失職してしまえば元も子もない。

「ひとりずつ受験すればいいでしょう、まだあと二日もあるんですもの」

「檸檬れもんと八朔はっさくを保育園に迎えに行くのは？」

保育園は泊まり保育もできるが、2歳という甘えたいざかりの子供たちを保育園に置いておくことは、親の心情的にできないものだ。子供たちのことに触れられて、少年神にばかりかまけていた廿日もさすがに冷静になった。

「そうね……夜になったらこの神様を連れて一度寮に戻りましょう。大丈夫、裏口から入れば見つからないわ」

「……藤堂様以外にこのぐらいの年齢の神様がいただろうか」

神が誕生したという報告は使徒階にも届いている。生物階から藤堂 恒が見つかった時には驚いたものだが、基本的に神は神階で生まれるものだ。最近20年のうちに誕生した神といえば、レイア以前は2、3柱しかない。ちょうどこの年頃になる神がいないのだ。紫檀が断言してもいいが、神階はこの少年神の誕生を隠している。その証拠に、彼の肩には神籍登録を済ませたという根拠であるIDが刻まれていない。彼は神階に、神として認められていないのだ。奇形だから神として認められないのか、奇形だから殺されなければならぬのか――こんなにも美しく清らかなアトモスフィアを持っているというのに。夫妻は彼を心底憐れに思った。

「誕生されて、神階は発表していないんでしょう」

「何故？ やましいことでもあるのか？ アカデミーにも入らず？ 神様に薬物は効かない、だから薬物濫用で捕まったという事はありえない。では、この無数の針の跡は？」

「ご自分で打ったのでなければ、虐待にあたるわ。ねえ、あなた。私たちにあって神様はやはり神様でしょう。陽階神でなくとも位神でなくとも、お守りしなければならぬお方よ。たとえ神階の決定で虐待を受けていたとしても、追われていたとしても、神階に突き出すことはできない。あなたもそう思うでしょう？ あなたの正義に正直に答えて」

「ああ……そう思うよ」

長い時間をかけて悩み、紫檀が答えたそのとき、ベッドの上から忽然と彼が消えた。たった今意識が戻り、おそらく紫檀と甘日を見て反射的に敵と認識し瞬間移動をかけたのだ。

「!？」

紫檀は彼が消える瞬間に、右手で彼の囚人服をつかんでいた。紫檀はこういうことにかけては、天才的に反応が速い。紫檀の質量を転移に巻き込むことができず、瞬間移動に失敗した彼をそのまま亜

空間から引きずり出す。空間が歪んで、透明な皮膜のようなものに覆われて出てくる。紫檀は彼を受け止めると、今度は手首を掴んだままベッドに横たえた。

「あなたっ！」

「どこに行かれるんです。瞬間移動は消耗しますし傷が開きます。外は警邏隊が貴方を捜しています、ここにいらしてください。ここは安全です」

紫檀は早口にそう言うと、彼はやはり怯えたようなまなざしを向けた。紫檀は彼の顔を正面から見て感じたのだが、彼はどこことなく面立ちが藤堂 恒に似ている。だが兄弟という係累そのものが神階に存在しない以上、紫檀の感覚はただの気のせい、でしかない。

一方の廿日は紫檀が彼を見下ろすような態度になってしまっ怯えさせていることに気づくと、もう、と呟き彼の前に跪き礼を尽くした。

「手荒な事を致しまして申し訳ありません、神様。私は川模 廿日で、彼は私の夫で紫檀と申します。貴方の敵ではありません。御名をお聞かせいただけますか」

彼は見ず知らずの夫妻に名を教えることを躊躇したが、廿日と紫檀の言葉が嘘ではないとマインドブレイクで確信していた。嘘をつけない性格だった彼は、素直に本名を名乗った。

「八雲 遼生やくも はるおです」

遼生が置換名を名乗ったことから、陰階神だと推測した廿日はさらに核心に踏み込んだ。

「貴方は陰階神でいらっしゃいますか？ 何故アカデミーにいらっしゃらないのです」

「僕は……神ではありません」

これはまた露骨な嘘をついたものだな、と紫檀は彼の言葉に猜疑

心を抱く。

「そう仰られましても、使徒には瞬間移動はできませんよ。それに貴方の周囲にはつきりと見える、アトモスフィアも持ちません」

「神として生まれついたのかもしれませんが、もう違います」

そう主張したまま、彼は口を一直線に結んだ。何かがあったのだ、彼が自らを神ではないと卑下しなければならぬような出来事が。トラウマめいたものを感じた紫檀は質問を摩り替えた。

「では質問を変えましょう。何故あそこに倒れていらしたのです？倒れていた方向からして、ゲートを使おうとしていたのではないですか？」

これでは質問というより尋問だなと紫檀は申し訳なく思った。彼は紫檀の言葉に、何かを思い出したようにベッドから起き上がった。それを夫妻ふたりがかりで寝かせつける。彼は観念して、ベッドの上に平たく伸びた。無理に腹筋を使うと傷が開く。それでも彼は痛いの一言も漏らさない我慢強い少年だ。廿日の手に触れている彼の腹部はぺたんこだ。ガリガリに痩せている訳ではないが、もう何年も、何も食べていないのだとわかった。神は食物摂取をする必要はないが、絶食状態のまま何年も過ごすという事は有り得ない。ましてや成長期にある少年神が、これほどの扱いを受ける事は絶対にないと言ってもいい。不遇の少年神は白状した。

「弟を捜していたのです」

「弟？ そんな、神様に弟なんているわけありませんよ」

紫檀のもっともな答えに、彼は自信なさげにしゅんとなって肩をすくめた。廿日はそんな夫をたしなめる。

「あなた……そんな言い方をなさらなくても。それで、弟君の御名前は何？ 私たちにお手伝いできればよいのですが」

「……名前、思い出せません。夢の中で聞いたのですが」

「もしかして、藤堂 恒様のことですか？」

彼より年下の少年神など一柱しかない。廿日はなんとなくそう返事すると、きらり、と彼の瞳が輝いた。聞き覚えのある名前だったのだろう。

「そうです。彼はどこにいますか？」

恒に何の用だろう、廿日は彼と恒との間の奇妙な関係に疑問を覚えつつも、傷が癒えたら恒のもとに案内すると約束してしまった。恒は極陽、比企のもとにいる。それは紫檀夫妻にとって、決して届かない至聖所を意味していた。彼は夫妻の言葉を信じきって、ほっとしたように眠りについた。いつもマインドブレイクをかけながら会話をしているのではないらしい。恒ならば油断なく看破をかけつづけるだろうに……。どうやら遼生は一度信用した相手を疑わない性格のようだった。

「本当に藤堂様のお兄様なのだろうか？」

「うーん、どうなのかしら」

廿日も悩ましげに唸っている。

「ちよっと、正直すぎやしないか？ 藤堂様ならもっと慎重だぞ」

同感だった。

第2節 第12話 示された契約の地と、ノアの方舟へ

紫檀と廿日のふたりに案内され、八雲 遼生が使徒階第一層にある上位使徒のための家族寮に辿り着いた頃には、使徒階はとつぷりと暮れて暗くなっていた。

挙動不審にならないよう足音を忍ばせて紫檀の伝馬のラプタを馬小屋に繋ぎ、寮の裏口から闇に紛れ通路に入る間、幸いにして誰にも会わなかった。そうでなければ赤い囚人服を見たその瞬間、ここ最近相次ぐ不審者情報に過敏になっている寮の住民によって、彼は神階に通報されてしまっていただろう。

寮に戻り自宅の扉を閉めると、廿日と紫檀は顔を見合わせ安堵の息を吐く。手にはじつとりと嫌な汗をかいていた。そして休む間もなく遼生のことを紫檀に任せ、廿日は保育園に預けていた子供達を迎えに行く。重犯罪者を匿うと決めた以上、普段と何一つ変わったことをして周囲から疑いのまなざしを向けられてはならない。

紫檀が彼の傷口のガーゼをかえると、遼生の傷は早くも回復をはじめていた。紫檀が苦戦しながら遼生の包帯を巻き終えたころ、廿日に連れられた子供達がくたびれて戻ってきた。案の定、迎えが遅かったことに腹を立てているらしく、ふたりとも不機嫌そうに眉毛を吊り上げている。子供達はいつものように帰宅して、いつもと違う人物が父親とともにソファに座っているので驚いて立ち止まった。すかさず廿日が間に入り、子供たちを遼生に紹介する。

「私たちの子供で、双子の檸檬と八朔です。ほーら、こちらが神様よ。こんばんは、は？」

「かみさまって？」

檸檬は不審そうに廿日の陰に隠れながら尋ねた。

「アトモスフィアを下さる方だよ」

遼生が気をつかって彼らに頭を下げかけたところで、少女が唐突にべーっ、と遼生に舌を出した。まさに神をも恐れぬ無礼とはこのことで、ざあっと、夫妻の血の気がひいてゆく。

「えーやだ、きらい。お注射するんでしょ！」

そう言った瞬間にパソコン、と檸檬は後ろから母親に頭をはたかれた。

「こら、なんてこと！ 私たちは神様から直接アトモスフィアをいただくことができないから、お注射するんでしょう。それに私たちには神様がいなければ生きていけないの、失礼なことをしないで」

「もう何百年も、下手したら一生お会いできないかもしれない有難いお方なんだから、よくおがんでお祈りしておきなさい。もう二度とお会いできないかもしれないんだぞ！」

今度は紫檀が言い聞かせた。

「おいのりって？」

「もう、この子ったら……す、すみません。お見苦しいところを」

廿日は恥ずかしそうに息子の八朔はっさくの口を押さえた。神という存在が使徒にとってどれほど貴重な存在であるか、両親は子供達に一切の説明を怠っていたからだ。……多少の言い訳をするとすれば説明を怠っていたのではなく、神が何たるかということなど知っていても神に見える機会など皆無なのだから、説明する必要すらない……その程度に考えていた。まさか自室に神を招き入れる機会があらうとは、夢にも思わなかったわけである。

「はは、注射が嫌いなんですね」

遼生がお茶を濁してばつの悪そうな顔をしているので、彼の腕の無数の注射針の痕を思い出した廿日は慌てて謝罪だ。

彼が毎日のように経験したであろう不快な痛みを、ぶり返すような真似をした。

「申し訳ありません、八朔は平気なのですが檸檬の方がアトモスフィアアレルギーで。バンクのアトモスフィアは合わないものがあるので、合うものを捜して何度も注射をしているうちに注射が怖くなつたみたいなんです」

軍神のいない軍神下使徒階の使徒は、アトモスフィアバンクからのアトモスフィア供給に頼っていた。それまで先代軍神のアトモスフィアで何も不都合のなかった檸檬は、他神のアトモスフィアのロットになって全身に蕁麻疹が出してしまったのだ。あれでもないこれでもないロットを変えて試すうち、どうやら彼女は老神のアトモスフィアを受け付けないようだと言明したが、それがはっきりとするまでに随分とテスト用の注射を打たなければならず、ひどくトラウマにして泣かせることになった。

遼生はそんな事情を聞いて、おずおずと申し出た。

「では今月はもう、注射しなくていいようにしてあげるよ。僕のが合えばいいけど」

遼生は手を差し伸べると、“気圧の差”を感じさせないようアトモスフィアの放散を抑えて手加減をしつつ、なにごとかとのけぞる檸檬を抱き上げ、まるごと抱きしめてやった。彼女はそれと分からなくとも使徒の本能として、潤沢なアトモスフィアをスポンジのように吸収する。アトモスフィアを受け取った彼女の表情はとろんとして、心地よさそうに遼生にしがみついていた。彼女が腕の中で眠ってしまいそうになったので、彼は今まで座していたソファアーにそっと座らせた。

「どう、嫌じゃなかった？」

「……う、うん」

ぱちくりと、目を見開いたまま彼女は瞬きも忘れている。

「うんじゃなくて、はい、は？」

紫檀に言葉遣いを直されつつもうわのそらで、檸檬は不思議そうにいつまでも遼生を見つめていた。双子の姉を見て何が羨ましいのかも分かっていないくせに羨ましくてたまらないのが、弟の八朔である。

「僕も抱っこー！ 姉ちゃんだけずるいー！」

何でも同じでないと気がすまないのが双子というもの。

遼生は手間を惜しまず、手を伸ばしてくる弟を担ぎ上げた。彼は抱き上げられると借りてきた猫のように硬直して、途端におとなしくなった。

「ありがとうございます、なんと畏れ多いことを」

「これくらいさせてください、僕もあなた方に助けていただいたのですから」

遼生が分けへだてなく姉弟にアトモスフィアを与えている様子を見て、廿日は感動すら覚えていた。神階は何故彼のような温厚で細やかな気配りのできる神の存在をひた隠しにし、あまつさえ虐待を加えなくてはならなかったのかと思うと怒りがこみ上げてくる。彼はよい神だ、廿日は心からそう思う。たとえば彼がどんな秘密を隠しているとも。

「すみません、まだ本調子ではないのに」

「いいえ、これしきのこと」

「パパー、れもんねー、お兄ちゃんに抱っこしてもらって元気が出たの」

檸檬は一生懸命、彼女が経験した奇跡的な体験を紫檀に報告をしている。廿日はパスタを茹でて簡単に夕食の準備をしながら、キッチンに向こうから盆に茶を載せて出した。紫檀は席を立てて妻の代わりに遼生に茶をすすめ、やかましい双子の子供たちにはジュースを握らせたので、彼らはようやくジュースに夢中になって口をつぐんだ。子供たちがいつもにもまして騒いで隣近所が異変に気付いて

もいけないという、廿日の配慮だ。

「本当は神様に触れていただけるのは第一使徒だけなんだよ、とても特別な事をしていただいたんだ。よく御礼を言いなさい、ありがとうございます、は？」

「ありがとうございます」

ふたりともジュースに夢中になって礼がおざなりなので、紫檀は渋い顔をしつつ改めて檸檬と八朔の頭をおさえてぺこりとやらせた。

「じゃ、だいいちちとにならなかったらずっと注射？」

「そうだ」

「やだー！ お兄ちゃんずっとここにいてー！」

檸檬と八朔はジュースを放り出し遼生の両隣に陣取ると、赤い囚人服の裾を握って離さない。

檸檬などは遼生のひざの上に乗って動かない作戦のようだった。

「……そうだね」

遼生はゆるゆると檸檬の頭を撫でながら、曖昧な返事を返した。
家族、か……。

遼生は彼らのやりとりを微笑ましく見守りながら、彼らを少しだけ羨ましい、と思うのだった。

父親にはモノとして扱われ、母親には裏切られ……家族の温もりなど知らなかった。彼らは最初から家族ではなく、彼らにとって遼生は実験動物以外のなにものでもなかっただろうから……期待するのもばかっている。両親が自分を造ったその意味を考えると、遼生の表情に暗い影が差す。神に親という係累は存在しない。家族という関係そのものが成立する筈はないのだと分かっている。どれだけ自らに言い聞かせて自らを欺いても、それが運命なのだと受け入れ

てさっぱりと飲み干せるほどには、彼は強くない。

実験体にも思う権利などない。

まして心などあつてはならない。

ならばいつそ思考回路も自我も破壊して抗体を生み出すだけの完璧な生体部品にしてくれと、青華に懇願したこともあった。だが母親は遼生に心を残した。それが彼女の慈悲だったのか残忍さだったのか、遼生には未だに分からない。ただ、彼はもう青華のもとに居てはならないと、それだけは腹の奥から突き上げるように感じて、着の身着のまま、彼女のもとを飛び出した。後先など考えてもいなかった。

「神様？」

表情を曇らせた彼の顔を、テーブルの上に出したパスタを盛り付けていた甘日が覗き込むと、誤魔化すように愛想笑いを浮かべた。辛い過去を乗り越えてきたのだろうか、と甘日は彼の短い生涯を慮る。壮絶な過去を乗り越え、彼は優しくなれたのかもしれない。痛みを知っているからか、優しくされたことなどなかったのか。相手に優しく出来るのは傷つきたくないという防衛本能の裏返しだ。

「私の私服で申し訳ないのですが、よろしければこれをお召しください。その服は神階では目立ちます」

紫檀は甘日が食事の用意をしている間に、手頃な私服を遼生に持ってきた。彼は申し訳なさそうに礼を述べ、ポンチヨのような囚人服を脱ぎ袖を通す。さきほどのみすばらしい姿とは違い、年相応の少年のようなでたちになって立派に見える。紫檀は囚人服を受け取り、片っ端から鍬を入れて長方形に切り刻んでいった。雑巾を作って家事に活用した後、一枚ずつゴミの日に出して証拠を隠滅するのだ。

「しかし何故、このようなものをお召しになっていたのですか？
重罪を犯されたのでしょうか？」

「僕は実験体として拘束されていたので……逃亡を防ぐ為です。重
犯罪者の囚人服では逃げられませんから」

遼生は詳細を伏せたまま、白状した。

重犯罪者だと誤解されたまま釈明ができなければ、紫檀と廿日は
いかに好意的に接してくれるとはいえ、警戒心を強める。ましてや
彼らは子連れだ、子供を危険な目に晒してまで犯罪者と行動をとも
にできる道理もなかった。

「じ、実験体？ あなたが？ なんてことを……い、違法行為で
はないですか！ 神体実験は法で禁止されています！ 誰にそんな
ことをされたのですか！ その者の名を明かしてください、これは
告発せざるをえません！！ 法のもとにその者の悪事を……！」

廿日が予想通りの反応をみせたので、遼生は視線をますます伏せ
た。

「自ら望んでそうなったのです。同意のうえでのことならば、法に
は触れません」

「同意……あなたは……正気ですか！ どんな実験をされたのです」
廿日は喉の奥から、苦いものが上がってきた。せつかく作ったパ
スタを前にしても食欲がそがれる、それどころか吐き気がする。何
の故あって虐待に耐えられる？ 望んで実験体になったというのか
？ 彼にとって何かメリットがあるというのか？ 自ら望んでそう
ならざるをえなかった……彼は何を代償にとられていたのか。その
代わりに彼は何を得たのか。廿日がそれ以上踏み込んで真相に迫る
のを、彼は無言で拒んだ。優しく穏やかな表情でいて、彼ははつき
りと拒絶の意思を示している。

「思い出せません。ですが覚えていることもあります。もう駄目だと諦めて、遠い死までの時間を待っていたとき——暗闇の中に弟の気配を感じました。——彼は僕を救ってくれました」

恒が遼生に看破をかけたときには恒のマインドギャップは解放されており、遼生は朦朧とする意識に侵入してくる恒の精神波に晒されつつ、彼の混濁した思いを読み取った。恒が死地に赴く前に遼生を癒そうとしたのは、もうこれで最期だと悟っていたからだ。せめて最期に、何か出来る事をしよう。助からないものなら、助かるもののために……そう考えた末の行動だった。彼はもはや生還しないと、覚悟を決めていた。

地平線の向こうからやってくる死をただ待つより、全力で死に往こうとする行為。

そっちの方がずっと怖いだろう、辛いだろう？ 遼生の問いかけに、恒は答えなかった。

彼を止めなくては。

遼生はその思いに引き摺られ、顔も姿も知らぬ彼のために身をもたげ立ち上がったのだ。遼生にとって守らなければならない存在がいるとしたら、父親でも母親でもなく、今は間違いなく恒だと思う。まだ間に合うかもしれない、どうか、彼の鼓動が続くうちに——。

「そうだったのですか。申し訳ありませんが、私たちの身分では極陽の庇護下にある藤堂様へアポイントを取る事は難しいのです。今すぐ申請しても審査まで少なくとも数日を要します、よろしいですね」

それでは駄目なのだと、遼生は首を横に振る。

紫檀夫妻が恒のもとに案内する意思がなければ、すぐにでもここを出てゆくつもりだった。

「急ぎます。あなた方に無理は申し上げられません。自力で会いに行きます」

腰を上げた途端に紫檀が彼の腕を引っ張り、また着座を強制された。遼生は強いまなざしで紫檀を見つめる。邪魔をするというのなら、紫檀を振り払ってでも恒を追う。

「危険です！ 極陽の周囲は破格の警備体制が敷かれています。不審者と認識されれば、たとえ神様でもお命はありません」

遼生もめげずに、しっかりとした口調でなおかつ穏やかに反論する。

「連続転移術で目くらましぐらいはできると思っています」

今度は廿日が彼の前に膝まずいて彼をひきとめた。

「確かに連続的瞬間移動を繰り返せばモニターには映りません。並の使徒なら欺けるでしょう。ですが、天奥階てんのうの警備を甘くみてはなりません。見つかったら最期です！ 失礼ですが、武芸の心得はありますか？ その華奢な御体、とても訓練を受けたようには覗えません。天奥階ではフィジカルレベル 5000を超える第二種公務員の神々が、極陽を守っておいでなのです。私達はあなたに無駄死にをしていただきたくない、正規の手続きを取れば時間はかかりませんが確実に藤堂様にお会いできます。そうしてください、後生ですから」

そう言えば怖気づいて、思いとどまってくれと廿日は思った。少年神からみた成神は強大なアトモスフィアを備える、威圧感の塊。ましていざ戦闘となると足が竦んで動けるものではない。泣いて土下座をするのがせいぜいのところだ。ひよっとすると釈明も聞いてもらえず瞬殺されてしまうかもしれないし、そうであっても文句一つ言える雰囲気ではない。

天奥階への侵入者はテロリストと同義と定義づけられ、ただちに抹殺されるべきだった。

遼生は廿日の必死の説得を聞いても少しも怯まず、控えめにこう述べた。

「何も問題はありません。フィジカルレベルなら7年前に6万を出しています。多少衰えているとしても5万は確実にあります。行かせてください」

6万……？　あまりに突飛な数字を出されて、夫妻は啞然となつてあやうく思考停止をしかけた。桁が一つ二つ多いんじゃないか？　そんな事も考えた。第二種公務員のフィジカルレベルとは一つ桁が違う、枢軸武型神の出すそれと同等の――。

紫檀はそこまで言われて、彼の言葉を信じないではなかった。彼に触れて感じたあの感覚……電流を喰らったように手足が痺れる、それでいて力が漲るような……あれは極端に強い神と極端に弱い者が接触した時に感じる”気圧の差”、だったのかもしれないと気づいたからだ。少年神が枢軸並みの強さを備えているとはどうしても信じられなかったために身体が素直に反応できず、それだけの判断もつかなかったただけであって……。

フィジカルレベル6万といえば、2万を備える藤堂　恒の純粋に3倍ということになる。

アカデミーの中でも傑出している学生であるという、アカデミー特待生として優遇されている恒を軽く上回る実力だ。彼が第二種公務員を危ぶまず、単身で天奥階に侵入できると言い張るのにも説得力がある。

紫檀は以御に連絡して、彼の為に恒との面会のアポイントを取っ

てもらおうかとすら考えた。旧第一使徒の以御の名義ならば面会まで一日は確実に短縮できるし、一番確実な線ではある。何しろ彼の姉は比企の第一使徒そのひとなのだから、事情を話せば必ず会わせてくれるだろう。ひよっとすると明日にも面会が叶うかもしれない。だが遼生は一刻の猶予もないといわんばかりに浮き足立っている。恒に会って何をするのか分からないが、彼はもう待てないのだ。彼を危険な目に合わせたくはない、そういう安易な気遣いは彼にとって、迷惑なものでしかないのだろう。紫檀は苦しうに諾した。

「分かりました。私はあなたを藤堂様の御前にまでは、ご案内することはできません。私も命は惜しい、守るべき妻子もいます。私達にできるのは神階のゲートの外までお連れし、その後の順路を説明することぐらいです。くれぐれもお気をつけて。確かにあなたは第二種公務員の神々より格上かもしれませんが、ですが万が一にも比企様、今上極陽に見つかったら……お分かりですね」

遼生はなかなか返事をせず、表情をこわばらせた。

「7年前には第二位神であらせられた、比企様が今上極陽きんじょうですか？」
遼生は記憶の隅で溺れそうになっていたうろおぼえの記憶を引っ張ってきた、覚える必要すらもないと思っていた神々の世界の序列。記憶はかなり曖昧なものだが、比企の名ぐらいは知っている。

紫檀はあまりに遼生が的を射ない顔をしているので補足した。

「え？ ええ。ヴィブレⅡスミス殿が崩御されて……」

「……！ ……そ、そうですか」

父はもう、崩じていたのだな。

遼生は肉親の死を、客観的な事実として認識するにとどまった。父親に指一本でも触れられたことのない遼生には、彼に対して何の感情も、込み上げてきてはくれなかった。

弟は彼の死を、悼んだのだろうか？ 少しでも悲しいと思ったのだろうか？ むしろそんな事が気になった。

「まさか、ご存知なかったのですか」

紫檀は申し訳なさそうに口元を押さえた。紫檀は何も知らないのだ。

「ええ」

遼生は返事のかわりに小さく頷いてみせ、今度こそソファから立ち上がった。

＊

ファティナⅡマセマティカと織図 継嗣が崩壊寸前のEVEから生還して、それから早くも数日が経とうとしていた。二柱はあの日以来一睡もすることなくデータを修復し続けて、コンピュータールームに缶詰になっている。演算処理能力から考えても本当はヘクス・カリキュレーション・フィールド内で行いたい作業だが、電脳空間での作業では精神が無防備になることを懸念して避けるしかなかった。特に今回のデータを扱うにあたって、精神的に侵食されないよう細心の注意を払わねばならないからだ。静かな室内にこだまする、二柱の弾くキーの音だけが無機質な印象を強調している。

織図から見たファティナの指先は疲れを知らない精密機械のようだ。一方の彼は現実空間での端末操作はそれほど得意ではない。データは二柱×数日分の作業量でようやく30%ほどが回収されている。そのうち殆どが、ユージーンの過去の記憶を占めていた。織図とファティナが必要としているのは彼が INVISIBLEに抹殺されるほんの寸前、極論を言ってしまうばたった数日の記憶でよいというのに、その周辺のピースがごっそりと見つからない。破壊された彼の記憶を繋ぎ合わせ、順を追って垣間見てゆくのは決して心地のよい作業ではなかった。心情的には、安らかに眠ってい

た死者の墓を暴くのとあまり大差ないからだ。

彼の記憶は一言で言う、乾いていた。

何故、よりによって彼が？ ファティナは信じたくない。温和な微笑みの仮面の裏に虚無感を抱えて生きていたなどという、そんなことは。知りたくもなかった、気が滅入ってくる。

静かな室内には似つかわしくないけたたましい雑音がどこからともなく聞こえてきたかと思うと、それを合図にふらふらと織図が立ち上がった。徹夜続きでふらふらになるのは珍しいことでもなんでもないが、さすがに彼も扱うデータの種類が種類だけに、まいつていた。コンピュータールームの隅に無造作に置かれ充電中だった携帯からコードを抜きながら、彼はため息ついでに舌打ちも添える。肩まで伸びたドレッドヘアを後ろ手で束ね、深く被った黒いルーズワッチの中に突っ込みターバン風に整えると、息を吸って深呼吸までして、改めて携帯を握りなおした。着信音の種類から、特務省からの連絡だとわかっていたからだ。

「やべえ、マジか！」

彼はメールを確認し、うるさい着信音のうえにもうひとつ騒ぎ立てた。

「どうされました？」

携帯の画面を見て織図の表情が硬直する様子はおのずと伝わってくるので、顔だけ遣して熱心にキーボードを叩いていた彼女もようやくその手を止めた。

「特務省に呼ばれた。レイアが見つかったんだ……。もっともつかと思ってたが、見つかるの早すぎだろ。INVISIBLEの野郎も、もっと時間稼げよ」

最後の一言はさすがに不謹慎だったか、と彼は口をつぐむ。織図はレイઆમેーテールが失踪したという情報が入ってから、じきに特務省から召集がかかることを予測していたが、まさかこれほど早いとは。それだからこそ最果ての谷に向かい、ジャンクデータを回収して解析を急いでいたというのに……あと少しのところまで間に合わなかった。ここで打ち切りだ、続きは帰ってやるしかない。織図は入念にバックアップを取りながら特務省の制服に袖を通し、特務省に向かう支度を始めた。

「お出かけになるのですか」

「ボイコットしたいのはやまやまだが、そういう選択肢が許されないんでな……サンキュ、もうここまででいい。後は自分で何とかするさ」

織図は手を伸ばしてファティナが解析したデータをハードディスク内に統合しようとしたが、その手を彼女にしっかりと押さえられた。

「データ、くれよ。できたところまででいいから」

「すぐにお戻りになられるのでしょうか？」

「いや、暫くは戻れん。久遠枢を発動させるとすれば、俺も封術の支柱になるからな」

織図はファティナに特務省の動向を隠す気もなかったが、ただ単に説明を省略した。そしてファティナも特に興味を示さなかった。そもそも位神が上位組織である特務省の動向や用務を職員にしつこく尋ねるという行為自体、許されていない。

「クオンキュウ、とは何ですか？ 暫くとは、どのくらいでしょう？ では織図様が不在の間も進めておきます、お任せください。あなたがお戻りになれる頃には、データを修復してみせます」

彼女は愛想よくそう言ったが、織図は頑なに秘匿した。

「ファティナ。手伝ってくれる好意に甘えちゃったが、これ以上は正直手をひいてほしい。ここらへんが潮時だ、ご苦労だった」

「そんな……ここまできて部外者扱いだなんて、あんまりですよ！」

彼女は哑然としたのち、恨めしそうに織図を睨みつけた。どうして睨まれているのか、織図にも分かっている。これは織図一柱で取ってきたデータではない。ファティナの好奇心を掻き立てるだけ掻き立てておいて生きるか死ぬるかの瀬戸際まで追い詰めておきながら、ここまできて蚊帳の外は酷い、そんな論駁には一理も二理もある。だがわかってくれ、と織図は言い訳に思案を巡らせつつよく馴染んだデスクの上に腰をかけた。

「悪く思うな。ユージーンがINVISIBLEに消された時、俺は奴が何かINVISIBLEの気に障るような事をしたんだろうと思った。そうでなくて、存在そのものをなかったことにされた奴が他にいたか？ いや、実際にそういう方法で消されちゃった奴はいたのかもしれないが、とにかく俺らが知る限り奴しかいないんだ。ユージーンは何かを知ってしまったか、何かをしてしまったんだ。

それもINVISIBLEに相当に都合の悪い事をな……だからファティナ。そいつを暴き出せばきつと、INVISIBLEの真実が見える。あわよくば弱点もな……だが、知識を得る事が何を意味するか分かるだろう？ 俺のバイタルロックもINVISIBLEの前には効かんかもしれん、だがそれさえできないあんたよりましだ。ここから先は俺ひとりでやらせてくれ」

織図は口にこそしなかったが、真実に辿り着いた織図の身がどうなっているか、ファティナにも察する事ができた。

彼女は両手で顔を覆って暫く考え込んでいたが、諦められなかったようだ。

「ずるいですよ……織図様。そんなのずるいです。私も真相を知り

たいのです」

「スケベだな、お前も」

織図は呆れたように、多少の苛立ちを抑えながらばりばりと頭をかく。

「ええ、おかげさまで」

女神はあまり豊かとはいえない胸を、精一杯に張ってみせた。賢者のローブの下に隠された華奢な神体は頼りないが、彼女の意気は頼もしい。織図は実直で誠実な彼女を巻き込んでしまったことに、謝罪をしたい気持ちでいっぱいになった。

「よいのですよ、気に病まないでください。織図様。INVISI BLEの謎に近づくことができるというのなら、何を怖じる事がありましょう。全てを知りたいのです。復旧、進めておきます。いいえ、進めさせてください。私たちの命運すらINVISI BLEの掌中に握られているというときに優等生を気取って保身を図っていても」

彼女は景気をつけるように作業を再開し、パン、と軽快にキーボードを弾いて微笑んだ。

「そんなの、つまらないでしょう？」

織図は強がってみせたファティナを、それ以上引きとどめることができなかった。困惑した表情を不器用に隠しながら鼻を鳴らす。ずっと無難で安全な道を歩み続けてきた彼女が、敢えて道を踏み外すと言っているのだから、織図が面食らったのも無理はない。かける言葉が見つからず、口をついて出たのはこんな一言だ。

「ハッ……こりゃ驚いた。まさか数学神ファティナIIマセマティカが“つまらん”なんて言葉を知っているとは思わなかったからな」

「まあ、失礼しますわ」

女神はころころと、上品に笑う。無骨な織図とは正反対の、陽階神らしい美声で。

「好奇心に命を持って行かれなければいいがね。せめてバイタルロックでもかけてやればいいんだろうが、生憎自分以外への適用を知らなくてね……あんたも覚えるか？」

織図が禁を犯して秘儀を明かせば、ファティナにもバイタルロック（生命力施錠）の習得ができない理由はない。織図は別に死神として生まれついたわけでもないし、バイタルロックもEVEの職務上必要な技術として即位してから習得したものだ。織図だけにしかできないとはいえ、言い換えれば死神として即位をすれば誰でも習得をすることができた。ただし、どんな物事にも向き不向きというものはある。織図はたまたま向いていたようで、簡単に習得したものだ。

「そんな大変な秘術を、おいそれと一般神に明かしてもよいのですか？ あなたにしか出来ないからこそ価値があるのです。必要ありませんよ。もしも真実の探求に命を捧げることができるなら、それは数学神としての本懐です」

こういう融通のきかないところは、いかにもファティナらしい。彼はすっかり白衣に着替えて特務省職員の顔つきになると、茶目つけたっぷりにこう言い残した。

「そっか。だったら、俺が戻るまで袋とじを切るなよ」

「袋とじ、とは？」

ファティナに言っても通じない冗談だったな、と織図は多少反省する。

「パズルの最後のピースは、とっておいてくれということだ」

織図は薄く微笑んで、コンピュータールームから出て行った。

＊

室内で栽培する薬草の一株一株に、荻号はたっぷり水を与えている。アルシエルはその光景を半ば呆れながら眺めていた。IN VISIBLEの収束を目前にして、グラウンド・ゼロからいくらも離れないこの土地に居座ってこの落ち着きようだ。生物階に迫る危機を感じていないのか、それとも知っていて敢えて何も対処をしないのか、アルシエルには分かりかねる。

「暢気なものだな。汝に悩みはないのか」

荻号は他人事のように面倒くさそうにカラ返事をした。

「悩んでどうにかなるものなら、いくらでも悩むがね」

「生物階もABYSSと同じ道を辿ると分かっている、か？」

窓を開けてすぐ外の薬草を何枚か摘み、無造作にすり鉢に入れるとゴリゴリと薬を調合しはじめた。小瓶に入った青く怪しい液体を加え、それらはしだいに青緑色となって粘度を増す。これが何の気休めになるものか、アルシエルにはますますもって理解できない。

リビングにいる朱音のちょうど真後ろの椅子に腰掛けて荻号と話しているアルシエルは、皐月から白いミニ丈のカットソーワンピースを借りて、ざっくりと着こなしている。朱音の趣味に任せて髪型をエアリーボブにカットされ、ラフに椅子に腰掛けている様子など、まるで雑誌モデルのような存在感を醸し出していてクールだ。ふたりとも迂闊な事を喋らなければ、映画の主役を張ってもおかしくない美男美女なのにと、朱音が彼らを見るたび残念に思うのは今のところ内緒だ。

「まあ……比企がそろそろ行動を起こすだろうな」

「行動？」

アルシエルが荻号の言葉を反芻したとき、テレビから聞き慣れない電子音が鳴って、荻号は手を休めて口角を引き締めた。

「……言った端からきやがったな。朱音、少し音量を上げてくれ」
ゴールデンタイムのお笑い番組が中断され、ニュース速報でなにやら海外の中継映像が映し出される。朱音のお気に入り芸人のネタがすっかり潰されてしまったが、荻号が真剣に見入っているので不満を訴えるわけにもいかない。振り向いてあやうくアルシエルと目が合いそうになったところで、朱音は逃げるようについと視線を逸らした。困ったことに、朱音はいまだに彼女と正面から目を合わせられないのだ。

アルシエルはあまりにも美しく魅惑的すぎて隙がなく、胸も大きくて目のやり場に困る。むろん、彼女の女皇や貴族のような物言いに威圧されてもいた。そして一方のアルシエルは、朱音に避けられているのだらうと誤解をしていた。つまり彼女らは互いに遠慮をしながらあつていたというわけだ、いがみ合っているのではないのだが……
荻号はそんな彼女たちの関係をとってもつこともしなかった。

「あ、はい。あ、どの局も臨時ニュースですね」

朱音が慌ててボリュームを上げると、近頃はすっかり見慣れた国連事務総長が、各国メディアの記者団に囲まれて会見を開くところだった。事務総長は蒼白な顔で言葉を詰まらせながら演説をし、たどたどしい同時通訳と共に放映されている。その概要は、地球の周回軌道内に巨大隕石群が突如として観測されたので、全人類的に緊急避難を行わなければならないという、不自然きわまりない説明だった。こんな内容の映画、いくらでもタイトルを挙げられる。

映画のワンシーン、にしてもそれほどよい映画ではない。要するにSF的なエンターテインメントに食傷ぎみの現代人にとって、がっかりくるほどお決まりでステレオタイプな異常事態だった。まだエ

イリアンが攻めてきたと言わないだけましか、などと辟易しながら、何気なく宇宙人だらけの部屋を見渡して閉口する。そうだった。すっかり忘れていたが、朱音も含めこの部屋にいる全員が全員、人間ではないんだっけ。

「……生物階の首脳陣は有能だな。国際宇宙ステーションを極秘裏に建設しておったか」

アルシエルは国連の対応に驚嘆している。人類は有事の際にいつでも地球を見捨てる事ができるよう、そのような大規模かつ効果的な対策を講じていたというのだから。

宇宙ステーションがあればA B Y S Sの滅亡を防ぐことができたかというそれは全く別の話であり、不可能だったであろうといわざるをえない。ブラインド・ウォッチメイカーの襲撃は突発的なものだった、避難が間に合ったとも思えない。だが、どうすれば彼女の臣民を救えたのか、いまだに答えを求めている。A B Y S Sは本当に、滅びなければならなかったのか。

荻号はテレビを鵜呑みにするアルシエルをからかうように、事務総長の説明を真っ向から否定した。

「スペースシャトルで物資の打ち上げをちまちまやって、しかも打ち上げた端から人工衛星が落ちてくるようなお粗末な科学力で、生物階の人間全員を避難させられるほどの巨大宇宙ステーションが建設できるもんかね」

朱音もそれは荻号に同意だ。

アルシエルは生物階の実情と科学技術水準を知らないので実現可能だと思っているのかもしれないが、人工衛星の打ち上げが成功しただけ失敗しただと新聞をにぎわしているようなレベルで、いつ巨大宇宙ステーションが完成する余地があったのか、甚だ疑問だ。宇宙ステーションと曖昧にばかされた謎の宇宙建造物は、つまり神階のことなのだろう。

「では、神階の関与か」

「どうせ、比企が裏で指図してるんだろ。生物階の首脳部は比企と通じている。それに、どの生物種が減んでも復元が可能なよう、比企は生物階の全ての生物の遺伝的バックアップを、長い時間をかけて執拗に取ってきたからな。あとはINVISIBLEの収束の前に生物階に住む人々をどうするかってことだ。ここからは人道的な話になっちまう。比企は人々を見捨てはせん、その決意の表れがこの三文芝居なんだろうさ」

荻号は水面下で繰り広げられているであろう事の顛末を、とても推理とは思えないほど確信を持った歯切れのよい切り口で解き明かしてゆく。

「生物階の総人口と神階の面積の関係を考えると、人類を一人残らず神階に上げる事も不可能ではない。だが全ての動植物を神階に上げる事は不可能だ。ノアの箱舟も、そうは大きくないんでな。さて、そこで何を切り捨てればいい？ 人間を救って動植物を見殺しにすることが公平か？ 違うはずだ。比企は動植物を一定数保護するだろう。そして、奴は人々にこう呼びかける」

荻号は一人語りのようにすらすると今後のシナリオを予想しながら、結論付けた。

「助かりたい者は乗れと。ただし、こうも言い添える。神階に入っただけは富める者も貧しき者も全て公平に扱われ、一切の財産の持ち込みは許されん」

テレビ画面の中では、避難をする意思のある者はいつまでにどこに集合しろとアナウンスをしたその直後、世紀の大ニュースの報道という大役を任せられ興奮が頂点に達していた同時通訳は、あろうことか荻号と全く同じ意を繰り返した。

『宇宙ステーションはその収容定員が既に限界に達しているため、荷物を持ち込む事ができません。また、ステーションへ避難後は如何なる指示にも従っていただきます。なお、避難は強制ではありません』

「でも、みんな避難しますよね？」

そんなの、誰だって助かりたいに決まっている。何を馬鹿なことを、と朱音が口にしたとき、荻号はさも愉快そうに机に頬杖をついて、怪しい菓を練っていた。青緑色だったそれはしだいに黒っぽい艶を帯び始めた。

「そんなもんじゃないぜ。人間てのは複雑でな。様々な理由で、様々な人間が残るだろう。住み慣れた土地を離れるぐらいならその土地で死にたいっていう殊勝な奴、家畜やペットを見捨ててはいけんという奴、財産に執着して地上を離れん奴もいるだろう。それに神階に入る人間はどんな人間でも平等になる、たったそれだけのことに我慢できん奴もいるのさ。比企はそいつらを切り捨てる」

「でも、そんな線引きのしかたって……」

不公平だ、朱音はそんな言葉を喉の奥に飲み込んだ。助けてもらえるだけでも、有難いというべきだった。同族でもない異星人を彼らの社会に迎え入れてくれるというのだから。

朱音は比企と言われてすぐさま、その顔を思い浮かべることができさる。

荻号の家を定期的に訪ねる彼と何度か会ったことがある、頭の先から足先まで純白の装いをした、美しい青年神だ。神々の長という割には、随分若く見えた。荻号が外出をして家をあけていてたとえ朱音とふたりきりになったとしても、比企が挨拶以外に朱音とまと

もに口をきいてくれたことはなかった。荻号いわく、彼はただ真面目で無愛想なだけだということだが、どうもとっつきがたくて馴染めない。偉い神様だから気軽に声をかけてはならないと思い、こちらから率先して話しかけなかったのがいけないのか、何度会っても氷のように冷たい印象が拭えない神だった。

あまりに色白な肌から血の気すらもないように見えた比企が、人類救済の為に随分と血の通った決断をしてくれたものだ、と朱音は思う。

「火事になっても逃げない者、逃げ遅れた者は死ぬんだよ。自然淘汰するのは無情なもんだ。それにジーザスって奴がはっきり言ってただろ？ “子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入る事はできない”（マルコ福音書 10章 13—16）、ってな」

「あるいは、“富める者が神の国に入るより駱駝が針の穴を通る方が易しい”、か。いずれにせよ」

彼女は気まぐれにもうひとつ聖句を引用すると、ちょうど体育座りのような格好で椅子の上に丸まって、いじけたように顔を膝の間に埋めた。

彼女は猫のようでかわいらしい、うっかりと口に上りそうになった朱音の感想は心の中にとどめておく。

「恵まれておる、生物階は」

アルシエルはABYSには齎されなかった救いというものを、目の当たりにしていた。

荻号は何の効能があるとも知れない怪しい薬を完成させ、誰に飲ませるのかと思えば、自ら服用していた。その黒い粘液を見るだけで、朱音は荻号の胃腸が心配になってくる。あんな得体の知れない液体を飲んで、果たして大丈夫なものだろうか。彼は黒い液体を

飲み干したが、まだけろりとしている。

「それだけ人間が長い間、神を信仰してきたって経緯もあるからな。あれだけ神の国が来るっていつておきながら、いざって時に来ませんでしたってのも、それはそれで一種の詐欺だろ？」

ABYSまでは救えなかったが、神階は人々を見捨てない。

比企は報われないかとも思われていたであろう、人々の信仰に応えたのだ。

それは長い歴史の中で培われてきた神々と人々との絆。

そして何度も交わした契約の証が、現代において結実したものなのかもしれない。

第2節 第13話 ゴッド・オブ・トランスジェニックス

特務省管下のハイネット中継基地の最前線では、久遠枢の支柱となる特務従事者の神々にブリーフィングが行われていた。

「レイアIIメーターはGM14エリアに在り、コンタクトと共に封術を展開する。術式は久遠枢、反時計周りに術径250で各時方向に配置。カウントは80days。各自アシスタントとよく打ち合わせをしておくように」

ブリーフィングモニターに表示された術式図を入念に確認する神々に混じって、召集を受けた織図 継嗣もその一団にいる。

「俺は8時か」

久遠枢の発動自体が初めてのことで、術が成立するのかどうか、誰にも想像がつかない。なんなら成立しない方がよいと願うのは私的な感情であって、特務従事者としての立場からいえば失敗などそもそもあってはならなかった。久遠枢成立のチャンスはたった一度きり、レイアとのコンタクトの瞬間だけだ。

織図の持ち場は8時方向のようだ。久遠枢のベースラインはレイアIIメーターの頭部方向を12時と定めるので、レイアから見て右斜め下というポジションになる。

が、表向きは特務省の方針に従うそぶりを見せながら、彼は密やかな叛逆を企てていた。

織図はポケットの中に、そうけいし双繫糸という直径1μmの準神具を用意している。

双繫糸は荻号 要の開発した準神具で、その知名度は皆無。だがそれが逆によいのだ。双繫糸には二者間を細い糸で結んだ状態で解離性意思伝播法を行うと、糸で繋がれた者のみが通じ合う事ができ、

外部からの傍聴がかなわないという便利な特性がある。レイアの神体のどこかに双繫糸を引っ掛けるだけで、その糸の端を持つ彼は独占的に意思疎通を図ることができた。逆にレイアに干渉しているINVISIBLEからの精神的攻撃を受ける可能性も危ぶまれるが、対策は一つだけ講じている。ジャックポットから精神隔壁用プログラムをインストールしたのだ。それもどこまで信頼できるかわからないが、急場のファイアーウォールぐらいにはなるだろう。そもそもINVISIBLEがその気にさえなれば、久遠枢など成立しない術ではあった。怖気づいていても無駄だ、なら思い切った方がいい。

久遠枢の術形は72本のラインによって12柱の術者とレイアの間を結ばれ、レイアはその中央に蜘蛛の巣のようにトラップされる。つまり織図がレイアと結ぶラインの下に双繫糸を潜り込ませれば、ラインが目くらましとなって、そうそう見破られる事はない。

織図は彼女に訊ねたい。

INVISIBLEはレイアに何を伝えたのか。そしてレイアは何故、INVISIBLEに与したのか。さらに、INVISIBLEと通じた彼女ならばユージンがINVISIBLEに何をしたのか、それすらも知っているような気がした。80日間という長い時間の間に彼女を説き伏せ、真相を探りだせるという自信はある。ただし、その間に一度も邪魔が入らなければ、の話だ。

最前線の中継地には副大臣が待機するのだという。術を邪魔する者が現れようものならただちに、そして秘密裏に抹殺されるだろう。副大臣に匹敵する神といえば神階にはまず存在しない。荻号 正鶴をぶつけてようやくか、そのレベルだ。その意味では頼もしい守りだ。が、何事にも万全というものはない。

「織図様、準備はよろしうございますか」

ところで久遠枢の支柱となる神々には、一柱ずつ特務省職員のアシスタントが宛がわれる。織図の担当のアシスタントの若い女神が、何か必要なものはないかと尋ねてきた。何しろ以後80日間、織図は不眠不休で支柱となつて久遠枢を維持しなければならぬのだ。織図は彼のアシスタントに、まだ経験の浅く若い新米女神を指名した。双繫糸を久遠枢の下に潜り込ませるといふ細工を見破られるとすれば、織図を背後から監視し続ける彼女からだ。彼女は特務省内では中堅の織図から指名を受けて、舞い上がっているようだった。油断をしてくれればいい、それは有難いことだ。

「ご指名をいただきまして恐縮でございます。至らないかとは存じますが、精一杯つとめさせていただきます。何か事前に用意すべきものがありますか？」

「いや、何もいらんよ。80日間の断食とくれば、ダイエットには丁度いいやね。ああ、ポータブルDVDプレーヤーを持ってくればよかったよ」

織図はそんな冗談でお茶を濁して彼女の緊張をときほぐしつつ、彼女には何一つ怪しいそぶりを見せなかった。レイアから真相を探り出すために、DVDを見ている時間などないということは勿論、織図はわかっていた。マインドギャップが5層の彼女を選んだのも織図の計算だ。彼女は初々しい笑顔で爽やかに微笑むと、織図に深々とお辞儀をした。

「1030を以って決行とのことです。それでは、お気をつけて」
「ああ、まあ、ちゃちゃっと片付けてやんよ。サポートたのむわ」

織図は最大の被害者、レイア・メーテールに多分に同情を寄せつつ、腰をあげ他の特務従事者と共にハッチの開いた中継基地を後にした。レイアへの同情心をアシスタントの女神に知られる事は危険だった。織図はあくまでも上層部の決定に従う、しがない職員とし

ての立場に基づいた振る舞いを貫徹した。

それが吉と出るか凶と出るかはまだ、わからない。

＊

レイアームーター発見の一報が神階上層部に伝えられた頃、生物階はアメリカ合衆国、ニューヨーク・マンハッタンの国際連合本部ビルでは、国連総会が開催されていた。

各国有識者と要人は国連本部に張り付きっぱなしのマスコミをシヤットアウトし、厳戒態勢のなか連日連夜の対策会議に明け暮れている。さすがにテロリストも空気を讀んだのか、総会を狙った自爆テロの一つも起こらなかった。生物階における最高意思決定機関である国連安全保障理事会の無能化により、その意思決定権を事実上放棄し国連総会が緊急特別会期という区分で開かれたのは既に28回を数え、今年に入っては実に12回にのぼる。国際社会で強引なまでにリーダーシップを発揮してきた合衆国も、神階の存在が明らかとなったその日から完全に萎縮し、沈黙していた。核という牙を抜かれ、ドルという交渉の為の言語を奪われた合衆国は、小さくなって怯える鼠と何ら変わらない。

この席には神階の代表として、一柱の女神が招かれていた。陽階神第二位 智神 リジーノーチェス（彌月 天鵬）である。彼女はもう8時間もの間、加盟各国代表者や有識者達に質問攻めにされていた。斎場のように重く悲観的な空気の総会場の中でウエディングドレスのようなドレスを纏って、彼女のドレスアップされた華やかな姿はある意味で場違いだ。

リジーノーチェスは当座の生物階への広報役であり、比企に任

じられた。

比企が生物階にとらわれていては、神階全体の統率が取れなくなるからだ。生物階への説明も怠ってはならないが、何よりも適材を適所に配置するべきだった。比企の頼みとあらば誠心誠意対応したいところだが、数百名を相手に打ち切られることもなく続くこの一方的な質問に多少辟易してはいる。そんな彼女の心境をよそに、質疑と応答はエンドレスで続いていた。

『各国の大天文台からの問い合わせに、どう答えればよいでしょうか。それ以前に神階とはどこにあるのでしょうか。彼らは巨大宇宙ステーションなどかげかたちも観測できないと主張しています。太陽系にもどこにも、見当たらないと。あると言い張るなら場所を示せと言っています』

こう切り出したのはロシアの代表で、その指摘はもったもなかった。独裁国家内部でのことか、科学技術を国家が独占していた時代ならいざ知らず、今や大学レベルで高度な天体観測が可能だ。地球の総人口を収容可能なほど巨大宇宙ステーションが地球の周囲を周回しているというだけでも無理な話だった。各方面から合理的かつ理性的な反論が起こってくる。

『こちらもです。NASAに問い合わせが殺到しています、一部では暴動も……。しかしNASAは宇宙ステーションを造った覚えなどないですし、NASAのマイクロ波観測衛星WMAPを用いてもそのようなものは観測できません。たった3名が月に行くのでさえ難しいのです、現代の科学力では……。そのようなものは、絵に描いた餅です』

続いたのは合衆国の有識者だ。

『つつみ隠さず説明をすべきなのではないでしょうか？』

畳み掛けられた質問に答えるべく、リジーは長いドレスの裾をつまみながら壇上に進み出た。ミルクティー色の長く艶やかな髪の毛のひと束が、はらりと演台に落ちる。彼女の白い肩のなだらかな曲線と、恥らうこともなく見せ付けられる豊かなバストの谷間は、それと意識せずとも多くの男性の目をひいた。彼女の左肩に緻密に掘り込まれた金色の刺青が、全体的に醸し出す甘い印象を打ち消していた。壇上に上がる彼女が二十歳そこらにしか見えないのだから、スーツも着ない白髪の比企よりいささか常識的ではあるというもの、胡散臭さは比企と互角だ。彼女は好奇の目に晒されながらも、流麗なブリティッシュ英語でマイクを通し、いっそう淡々と応答する。

『神階は地球とは約15800 M^{メガパーセク}p^c離れた距離に存在するのだ。場所を示せと言われても困難だな』

しんと、場内は静まり返った。リジーは親切にも生物階の距離に換算してそう述べたのだが、その単位が示す実際の距離を理解した者はそれほど多くはなかった。ちなみに、1Mpcは326万光年なのだが、各国の代表者たちは具体的な数字にも困惑して顔を見合わせるばかりだ。いや、メガパーセクは分かるにしても、15800という何と比較すればいいのか。途方もない距離の隔たりがあるということだけは、その場にいた誰もが理解していた。

『少しお待ち下さい。それではどのようにして、あなたはそこからやって来られたのですか？』

『そうか。まず、座標の転移という概念と技術を説明せねばならんか』

彼女はひとつひとつに適当な理由をつけて誤魔化すのも段々と億劫になって、根本的な原理から説明をはじめた。ここを理解できていないから、無意味な質問が延々とループしている。

『転移？』

もともとざわついていた場内はさらにざわめいた。そんな彼らに

片手を軽く挙げて注意をむけさせると、女神は壇上から忽然と消え、次の瞬間には10mほど離れた下の通路にいた。神出鬼没を自在とする彼女は亡霊さながらだ。

『え……？』

『なんだ……これは』

『見えていたか？ 先に言っておくが、私は高速で移動したわけではない』

彼女は最前列の席の面々に説明した。

『ではどうやって！』

それは瞬間移動なのか、量子テレポーテーションなのかと言い掛けて老科学者は口をつぐんだ。あまりにもこの場にそぐわない表現だ。いかに発達した科学力を以てしても、装置がなければ、転移などできるわけがない。リジーはホワイトボードマーカーを取り、傍らに用意されたホワイトボード上に簡潔な数式をしたためはじめた。『物体がある一定以上の特殊なエネルギーを有しているとき、時間とエネルギー間の不確定性原理に基づいて通り抜ける事ができないものの向こう側へ超えることができる、トンネル効果という概念は既にあるだろう。たとえばこれもそう』

リジーは真正面に座っていた老研究者の胸ポケットにあったフラッシュメモリに手を伸ばすと拝借し、細く白い指先で摘み上げて掲げた。彼は緊張のあまり顔を真っ赤にして汗をかき、ハンカチを取り出してしきりに汗をぬぐいながら返答した。

『ええ、トンネル効果理論は工業や医学など、地球上でも様々な技術分野に応用されています』

『我々の用いる転移術はトンネル効果の究極の応用だ。今の瞬間も我々の周囲にある基空間、高次元的空間はあらゆる場所と隣接している。したがって、トンネル効果を用いて基空間に脱出し、転移先の座標さえはつきりと記憶していれば既知の場所に通じることがで

きる。奇術でもいかさまでも何でもない。単純なスキルだよ。原理をよく理解し装置を作り出せばどんな場所にも一瞬のうちにに行けるようになるだろう。神階と地球の間には15800Mpcの距離があるが、私は転送装置を介して次の瞬間には神階に戻る事ができる。転移術はあまり得意ではないが、短距離ならば私自身のエネルギーで転移可能だ』

文型神のリジーでも、短距離での転移は易々とできる。

が、空間を歪める程のエネルギーを、生体が所持できるものなのか。その荒唐無稽ともとれるデタラメなポテンシャルを前に、各国首脳、専門家らは押し黙った。

『人間にも応用できる技術、ということですか？』

『そう。内部に一定量のポテンシャルエネルギーを発生する密閉型の装置と、転移先の座標を結ぶ機器が必要となるだろうがな。神階が天体望遠鏡では決して観測できないという説明にはなったか？』

今はテクノロジー云々を論じている時間はない。一刻も早く生物階住民に避難を促さなければ。ようやく、彼らは彼女に地球上の常識で質問を重ねることを無意味と心得た。従うしかないのだ、神階の決定と彼らが与える未来へのシナリオに。異論を唱えるものは、自滅するだけだ。

『さて、諸君にはこう説明するが、一般の人々への説明としては適当ではない。神階の存在を明らかにするか否か。それは重要な問題だ。だが可能な限り、我らの存在とそのテクノロジーを生物階に明かしたくはない。混乱と、不安を増長させるだけだ。我等は神であり、有史以来幾度となく崇められながらも、実質的には宗教とは無縁の存在である。そのことは最初にはっきりと言っておく』

これは、比企の最終的な決断を反映していた。ヴィブレイスミス

の執った生物階不可侵政策は、最後の最後に継承された。

＊

「で、奴は誰だ？」

陽階最上部、極陽の執務階である天奥階の第一堰の警備を取り仕切る第二種公務員の武型神パトリック・ルースターは天奥階の通路を歩いてくる少年を視認し、詰所の使徒に尋ねていた。単身乗り込んできた少年の無謀さには感心しつつも、詰所に配備されていた十柱の第二種公務員達は彼の外見から彼の実力を侮っていた。彼は見た目にも華奢で非力そうだし、いかにも気の弱そうな雰囲気だ。だが、いくら失笑ものの貧弱な体格だといっても侵入者であることには変わらない。仕方なくパトリックは拡声器のマイクを握ると、マニュアルにしたがって第一レベルの警告を行った。

「止まれ。ここは立ち入り禁止だ」

少年はパトリックの警告を無視してゆっくりと近づいてくる。拡声器での警告は、少年の耳に届いている筈だ。

「おい、奴は誰なんだ？」

彼は念のため、詰所の使徒に再度訊ねてみた。

「分かりません。データ照合不能です。信じがたいことですが、神階在籍者ではありません」

「神かどうか分からないのか？」

侵入者の顔をカメラで撮影すれば神階在籍者認証システムに転送され、ただちに照合されて割り出される。その検索網に引っかかるかからないということは、極端な整形を行ったか出生届を出さなかったかの二択しかない。だがこの可能性はきわめて低く、普通に考えれば神階在籍者ではないとの結論に至る。しかし、それであればなおさ

ら不自然だった。神階在籍者ではない者がどうやって神階上層部まで上ってきたというのか。侵入者の身元を特定できないのは初めてのことなので、ナビゲーターの使徒も顔にじっとりと汗を浮かべている。

「いえ、それも不明です」

「仕方ない。ならず者を捕らえれば、武勲のひとつにでもなるだろう。まだ子供のようだし、命までは取らん」

彼は腰に帯びていた銃型神具を抜き、実弾ではなく麻酔弾をマガジンに詰めて少年に照準を合わせた。フィジカルギャップ貫通型の弾丸だ、鉛の弾丸とは違ってフィジカルギャップの守りなど期待はできない。彼はマニュアルに則って第二レベルの警告を発した。少年との距離は、およそ50m。

「止まれ。さもなければ発砲する」

銃口が向けられ狙われていることに気付いた少年は立ち止まると、パトリックがトリガーを引くより早く両手の親指と人差し指を直角にあわせ、カメラマンがフレームを作るようなしぐさを向けた。

「何だ？」

この動作を不審に感じたパトリックは、あまり猶予を与えない方がいいと察し迷わずトリガーを引いた。静かな発射音がして、二発の麻酔弾は一直線に放たれた。麻酔弾の狙いは寸部もたがわず少年の胸部と頭部に放たれたが、少年の体に着弾することはなかった。

雑談をしながら傍観していた詰所の神々は目を見張った。

パトリックが放った弾は二発とも、少年が指で作った空のフレームにトラップされて指と指の間で宙に浮いて静止していたからだ。彼は指一本触れることなく銃弾を止めていた。この少年を侮ってはならないと気付いた神々が各々の神具に手をかけたとき、少年がすみやかに反撃に出た。直角に組んで閉じていた指先の角度を維持し

たまま、それをゆっくりと開放していった。彼が指先で作った「」でフレームを切り取る事によって、まるでソフトウェア上での選択範囲を拡大しているように……彼らにはそんな風に見えた。

何が起こるものかと彼らが訝っていると、ピン、とワイヤーが張り巡らされたような振動がそれぞれの神々の四肢に響き、少年のフレームの中に映りこんだ彼ら10柱は一度に一切の行動を封じられてしまった。彼が指先で指定する領域に映りこんだものは、トラップされる……！ 神々はようやく彼の特異な能力に気付いたが、身動きも取れなくなった状態ではもはやどうすることもできなかった。二名の使徒たちも同じように動きを封じられ、詰所は無人状態も同然だ。

「なっ……！ これは、何だ！」

「う、動かん」

罠にかかった神々はもがこうとするが、見えないワイヤーで固定されてしまったかのように身体の自由がきかない。威勢よく吼えようがわめこうが、彼らが動けないという状況に変わりはなかった。

「何故だ、素手で！？ 奴は何も持っていないぞ」

そう、彼の手には何もなかった。

＊

少年、八雲 遼生は構えていた両手を下ろした。

彼らに危害を加えるつもりはなかったが、天奥階に侵入した瞬間から神階への反逆者として掃討されるべき存在であるとは心得ている。言い訳などできないし、聞き届けてもらえない。とうに覚悟のうえだ。遼生は神々と使徒をその場に縫いとめたまま、彼らを尻

目にとぼとぼと歩みを進めた。

天奥階のエントランスまでの空間は擬似空間の青空の中に、通称^{スカイライン}SKYLINEと呼ばれるハイウェイのような道路が一本、どこまでものびている構造だ。途中、SKYLINEには堰と呼ばれる警備員詰め所が何箇所から設置されている。天奥階上層に近くなるほど警備員も高位階級の神々が配備され、警備は厳重だ。しかも侵入者に備えてこの一帯は、陽階にありがちな飛翔不能領域となっており、遼生も歩いて進むしかない。

進むべき道はたった一本、前後から挟み撃ちにされればそのまま御用だ。が、正面突破しかできない状況ではあった。連続的瞬間移動は体力を使う。警備員との遭遇に備えて少しでも体力を温存しておきたかった。

第一堰を突破して五分ほど歩むと、さきほどは快晴だった天奥階の空に霧が立ち込めてきた。霧深く見通しが悪くなることは、天奥階の詳しい構造を知らない遼生にとってあまり有難いことではない。そのうえ、アトモスフィアは霧と混ざりあうと水分子と融合して遼生が感知しにくくなり、警備員の接近を把握しづらくなってくる。方向感覚も狂ってきて、SKYLINEから足を踏み外して真逆さまに転落してしまいかねない。神々の長、主神は十重二十重の守りの中にいた。そして彼に庇護されている恒と会うためには、どうしても比企のもとに近づいてゆく必要がある。比企に近づけば近づくほど、最大のリスクを負い、疑いの目を向けさせる。比企には用もないというのに、皮肉なものだ。

遼生は紫檀夫妻から天奥階の内部構造と、警備が2時間ごとに配置交代となる旨を聞いていた。残り1時間あまりの間に、エントランスである大門まで辿り着けなければもう破滅だ。彼は紫檀から賤

別にともらった時計に目を配りながら歩調を早めていた。

そのときだ。

ふっと冷たいものが真横から遼生の首すじに触れ、振り払おうとした瞬間、そのまま遼生は喉を握られた。遼生は驚いて身をよじったが、見えない握力から逃れる事はできなかった。それは誰かの手だということは分かったが、咄嗟に手首を掴んでもがいてもびくともしない。ここまで接近されてもいまだ気配すら感じさせないまま、霧の間から静かに白髪の男が現れた。それも遼生の真正面から、隠れることもなく堂々と。

不覚だった。霧がカモフラージュとなって彼の接近を察する事ができなかったのだ。遼生が目を見開いたのは、天奥階の主、極陽比企 寛三郎がすぐ目前にいたからだ。思考回路が強大なアトモスファイアに焼かれてショートした。

「侵入者にしては、大胆不敵よの。見たところ丸腰のようだが？」
機械のように冷たい、感情のこもらない声だ。無愛想な神だったとは記憶にあるが、こんな場面での感情的の欠陥は恐怖以外のなものでもない。

「比企……さま」

何故、比企がここに？ 考えても分からない、何も失敗はしていない。堰にいた神々はまだ誰も通報していない、誰が比企に通じた？ それとも偶然、比企がここを通りかかったのか。……偶然にしては出来すぎている。比企は天奥階の最上階に居て、各施設間での移動方法はおそらく転移術で行っている。移動のためだけにこの通路を通ることはない、つまり通りすがりという線はない。ここは一般使徒や神々が通る通路なのだから。状況が飲み込めず口をばくば

くしている遼生に同情を寄せたのか、比企はあっさりと種明かしをした。

「SKYLINEの快晴を維持するためには、警備の者が十分毎にスイッチを押さねばなんのだよ」

そこまで言われて、遼生はようやく気づいた。遼生が先ほど警備員の動きを止めたために、警備員は詰所のスイッチを押せなかった。異変がなければ十分ごとに押され続ける断線警報スイッチなのだろう、それで天奥階の天気が変わった。霧という天気こそが侵入者ありという暗号だ。比企に連絡が入り、監視カメラか何かで遼生の業を見た比企が不審に思っただけで出てきた。そんなところだ。アラームが鳴らなかったので遼生もすっかり油断していた。裏をかいたつもりが、裏をかかれた。

「先刻の業は、何によるものか？ 道具はどこに隠し持っておる」

比企が出張ってきたのは、一秒も争うことなく十柱ものの神々の動きを瞬時に止めた遼生の存在を脅威と感じたからだ。警戒態勢の神階で、明らかに不審者と分かる者を見逃すわけにはいかなかったのだろう。戦闘行為は目立つので避けたいと思ったが、余計に目立つことをしてしまったようだな、と遼生は後悔した。妙な行動をとらなければ比企も他の警備の神々に任せて直々に出てくるようなことはなかっただろうに。無血進入に拘りすぎたのが裏目に出た。

改めて言うまでもないが、遼生はヴィブレⅡスミスによって生み出された遺伝子改変体だ。ヴィブレⅡスミスは遼生の遺伝子にALMという遺伝子領域を余剰に挿入し、生体神具と類似したコードを埋め込んだ。その結果遼生は、生体神具の原理を応用して遺伝子制御だけで様々な能力を発現する。彼は素手で一般的な神具から超神

具と呼ばれる神具の能力も模す事もできる。彼に神具の所持など必要ない。彼の存在そのものが生体神具のようなものだったのだから。

当然比企は事情を知らないだろうし、遼生も口軽く話したくない。あらゆる神具の能力を生身で操る遼生の存在を、比企は脅威と感じるだろう。釈明が上手くいかなければ、命まで奪われかねない。それに、遼生の喉を握っていないほうの比企の手には、鉄扇のようなものが握られている。現物を見たこともないが、比企の所持神具は懐柔扇しかないのだからそれなのだろう。この体勢から A L M 遺伝子を発現させ、空間操作系の能力を用い至近距離で撃ち合うこともできるが、懐柔扇を相手にするほど遼生も愚かではない。

ここは素直に投降する方が賢明だ。遼生はそこまで見通して、真実を省略して述べた。

「……何も、持っていないせん」

神具を持っていないのは本当だ、嘘ではない。遼生は口がカラカラに渴いてゆくのを感じていた。いや、比企の刺すような冷たいアトモスフィアにあてられて声が出ないのだ。足は宙に浮かされている。比企がその片手に少し力を入れるだけで、簡単に殺されてしまうという絶望的な立場。蛇に睨まれた蛙も同じだ。じつとりと汗ばんだ遼生の喉の感触は、比企の手に伝わっているだろう。比企は腑に落ちないのか、首をかしげた。

「汝からはアトモスフィアを感じるが、汝なる神は神階所属者として記憶しておらぬ。天奥階に何の用がある？ 己に会いに来たのであれば、話はじっくりと聞いてやろう」

遼生は無言を貫きたかったのではないが、声が出なかった。

「さようか……」

十分な猶予を与えたのち、比企は彼の頸を支えていたその人差し

指に力を込めた。くきり、と彼の頸が鳴って関節が外れた。

＊

比企によって囚われた遼生は駆けつけた第二堰の第二種公務員の神々の手によって、天奥階下層のだった広い多目的ホールに運ばれ、懲戒台とよばれる アトモスフィアを失効させ神の体力を奪う特殊な石の台座の上に仰向けに拘束された。身動きの取れない状態で、周囲を監視の六柱の第二種公務員の神々に取り囲まれている。主神も何かと多忙なのだろう、比企はすぐに尋問に来なかったので遼生はしばしの間放置された。

見張りの神々は時折、彼が呼吸をしていることを確認するために近づいてきたが、比企に的確に頸椎を脱臼させられ全身不随となった状態で、怪しい動きができよう筈もなかった。

遼生が拘束されて何事もなく30分が経過しようとした頃だった。動けるはずがない、見張りの神々にとってのそんな安心感と油断は、一瞬にして吹き飛んだ。バタバタと五柱の第二種公務員の神々がドミノのように床の上に倒れはじめたのだ。最後に取り残された一柱はようやく、少年が彼らに何をしたのか気付いた。

「ま、マインドイレース(Mind Erase)！？」

マインドイレース(意識消失術)は、アトモスフィアを対象の脳にぶつける事によって意識ノックダウンさせるマインドコントロールの高等術だ。体の自由もままならない子供がたった30分という短い時間に、成熟した神々のマインドギャップを赤裸にし、それも一柱のみならず五柱同時に手玉にとったのだ。

彼は恐怖のあまり足をもつらせながら戸口に設置されている非常

用無線に手をかけようとしたが、その手が決して受話器に触れる事はなかった。彼は誰に引っ張られているでもないのに、凄まじい力で少年のもとにたぐり寄せられていた、……違う、足を向けているのは他ならぬ彼自身なのだ。彼は強烈なマインドコントロールをかけられて鍵束を取ると、手錠を外し、脱臼した遼生の関節を順々にはめ込んでいった。無論、彼の意思とはなんら関係のない力によってだ。“治療”をしてもらって自由を取りもどした遼生は、頸部の感触を確かめると、懲戒台から難なく起き上がった。

「ありがとうございます。もうひとつお願いがあります。藤堂 恒という神の居場所に案内をしてください」

「……」

恐怖に顔を歪めた第二種公務員は顔面蒼白になって全身が震え、返事どころではない。遼生は口頭で訊きだすことを諦め、マインドブレイクをかけて恒の居場所を探り当てると、マインドイレースで彼の意識をとばし、ベージュの制服を剥ぎ取って纏った。その行動に迷いも躊躇いもなかった。

天奥階の廊下に行く途中、遼生は誰にも声をかけられず、怪しまれる事もなかった。何故なら彼は鉢合わせになった職員全員に出会いがしらにFC2ーマインドキューブの能力を相乗させたマインドコントロールをかけ、彼らが見る遼生の顔とは違う顔を彼らの脳内にインプリントしていったからだ。遼生の顔を見たものは本当の意味で誰もいない。彼はいくつもの廊下の角を曲がり、迷わず恒のいる部屋に近づくと室内のアトモスフィアの配置を探り、恒しかいないことを確認して慎重に扉を開いた。

＊

遼生が重い扉を開くと、恒とおぼしき少年が書斎のような薄暗い

部屋の中央の黒いデスクに座り、立体パソコンを開いてなにやら緑色光のベルトを捏ね繰り回していた。一見して遺伝子解析の為の専用パソコンと分かる。立体パソコンは遼生もヴィブレイスミスが起動していたのを見たことがある、たしか緑色のグリッドに映りこんでいるのはゲノム走査モードと、ボーダーラインと呼ばれる解析網だ。

遼生は静かにドアを閉めて後手に鍵をかけると、おもむろに第二種公務員のベージュのローブを脱いだ。何を解析していたのだろうな、と遼生がタスクを覗き込もうとした時、恒とおぼしき少年はぴたりと手を止め、データが遼生の目に触れるのを避けるようにボーダーラインを圧縮してたため、タスクを終了した。こういう解析作業には一にも二にも保存だ、恒は反射的にそれができてしまう。

「……」

タスクに集中していた恒は振り返ってはじめて、入室してきた人物を遼生と認識した。あまりに作業に集中していたので、普段とは違うアトモスフィアの接近にも気付かなかった。

遼生はもう、回復していたのか――。

遼生の驚異的な回復は、恒にとって完全に誤算だった。やや動揺しつつもマインドギャップを張り巡らせ、遼生との駆け引きに備える。遼生のマインドギャップは7層、恒は10層で両者ともに看破不能な層数だ。マインドギャップの厚い恒がやや有利に事を運べるが、双方のマインドギャップが互角だった場合には心理戦の様相を呈する。恒は顔色ひとつ変えず見当外れの話題から切り出した。

「はじめまして。どなたとは存じ上げませんが第二種公務員の方です。私に何か御用ですか」

そう、遼生は恒と直接的に面識がないのだ。本当の意味で遼生が恒の容姿を知らないということを、恒は忘れていなかった。遼生は肩透かしをくらって、ばねが外れたようにおもちゃのように、口を丸くぽかんと開けた。

「八雲 遼生だ。知っているだろう？」

恒はさも初耳だというような顔で席を立つと、社交辞令とばかりに作法に則ったお辞儀をし、尋ねられてもいないのに堂々と偽名を名乗った。

「存じ上げず、失礼をいたしました。本置一致の方ですね。かくいう私も本置一致で、赤坂 晴義と申します」

遼生の入室に最初に驚いたのは恒だが、この切り返しに、逆に動揺したのは遼生の方だ。

「え……君は、藤堂 恒ではないのか」

「どなたか別の方とお間違えのようですね」

彼がそう断言した途端に、遼生は目の前の少年が藤堂 恒であるという証明をしなければならなくなった。彼の面影はどことなくヴィブレ・スミスに似ている。アトモスフィアの質感も、夢の中で感じたものと全く同じだ。遼生と多くの外見上の共通点もある。明確であるのに、証拠は不十分だ。それらが抽象的であるがために彼に認めさせることができない。

遼生は堂々と嘘をつく義弟を前に、次第に胸が苦しくなってきた。分かっているのに……、彼が藤堂 恒であること。死を待つばかりだった遼生を救った大切な、かけがえのない存在であること。こんな……空々しい騙し合いをする為に、遼生はここに辿り着いたのではない。遼生は拳に力を込めて、呻くように呟いた。

「すごいな……兄弟なのに。僕はそんな上手に嘘をつけない」

それがどんなに辛くとも正直であろうとした遼生の言葉は、嘘ばかりつきながら生きてきた恒にはひどく重かった。それでも恒は眉ひとつ動かさない。情にほだされて、認めてはならなかった。恒は無感傷にいとまごいをした。

「私はアカデミーの日課がありますので、失礼いたします」

遼生は背を向けようとした彼の腕を必死に掴んだ。握り締めていなければ、もう二度と彼には会えない、遼生は確信していた。諦められなかった。

「やめてくれ……。やっと会えたんだ」

真意は、伝わらないのだろうか。遼生は引き止めの言葉の代わりに恒の腕を握る手にただ力を込めた。恒は痛いのだろう、顔をしかめる。遼生の握力はかなり強いのだ。この痛みで真実を認めてくれればいいと願えど、相手はどうも一筋縄ではないようだ。もっと本音でぶつかって、腹を割って話があった。同じ境遇に生まれたもの同士、彼と苦痛を分かち合うに、そして過去を未来へ繋ぐためにここまでやってきたのに。

「痛いです。手を離していただけませんか？ 私は藤堂なる人物ではありませんし、急いでおります」

「どうして……」

「頸椎脱臼の状態から懲戒台を抜け出すとは見事なものだ。だが、二度はない」

遼生が恒の瞳の奥を覗きこんでいたとき、義弟との再会の時間は最悪の人物の登場によって阻まれた。比企だ。遼生は比企の出現を認めると間髪いれず恒の背後から腕を回し、恒の首を絞めるような体勢をとった。じりじりと恒を人質にとったまま、少しずつ後ずさる。その反応のよさに、比企は感心した。

「何の真似だ」

遼生は恒の頸を左腕できつく締めたまま、比企と睨み合った。

「これから尋ねる質問に答えていただければこの子を殺します」

「申せ」

比企は一見して彼が本気で恒を殺すと言っているのではないと気付いたが、ひとまず彼の話を聞いてやってもよいかと思いついた。少し話せば天奥階への侵入の目的を探り出す手間が省けるというものだ。

「この子は誰ですか？」

遼生は恒を盾に、比企に問いたです。比企は、天奥階に侵入した彼の目的が比企ではなく恒だったのだと知り、下手に恒の名を明かす事は危険だと判断して回答を拒んだ。

「己の庇護下にあるアカデミーの特待生だが、誰かも知らずに人質としたのか」

「彼は藤堂 恒とはいいいませ……」

最後まで言い終えぬうちに、遼生はガクンと脱力して床に伸びてしまった。恒がマインドイレースをかけたからだ。

遼生に余計な事を喋らせるわけにはならなかった。どうしても比企には知られてはならないことだ。恒以外に抗A B N T抗体が存在するということは。比企は彼を利用するかもしれない、そうしないかもしれない。どちらでもよい。だが、恒と遼生との関係を知られることは、遼生の為にはならない。恒はそう判断してマインドイレースの施術を急いだ。

比企は恒がマインドイレースをかけたタイミングを不審に感じた。恒の本来の戦略は肉を切らせて骨を断つ、といったもので、口を割ろうとしている者の口を自ら閉ざさせるような真似はしないものだ。

が……さしもの抗A B N T抗体の藤堂 恒も所詮は子供か、と比企は恒に対する過大評価を自戒した。

「マインドイレースか。上出来と言いたいが、発動がいま少し早かったの。大事ないか？」

「ええ、大丈夫です」

「これは処分しておく」

比企は遼生の手首を取り、ずるずると引きずっていかうとした。マインドイレースをかけられて一度意識を落とした状態から目覚めるまでには、一般的には少なくとも数時間を要すると言われている。その間、いかなるショックにも反応することができず、神経麻痺のような状態に陥っている。完全に意識が落ちている、先ほどのように遼生からの小細工は無用だ。彼は完全に無抵抗の状態、遼生が自力でこの危機を切り抜ける事はできない。

「彼をどうなさるのですか」

恒は表面上できるだけ無関心を装いながら、さり気なく尋ねた。当然のことを改めて訊くな、比企はそんな雰囲気だ。

「生かしておくわけにもいかぬだろう」

比企は本気だ。そもそも冗談なだろくすっぽ言っただけだしがないのだから、やると言ったら必ずやる。そして手心を加えることもない。遼生は必ず殺される。比企に疑われずに遼生を助けるにはどうすればよいものかと、恒は思案をめぐらせた。

「……殺さないで下さい」

「憐れみか。それはかような場面には相応しくない。汝の命を狙っておったのだぞ。この者はそもそも神階には存在せぬ、断じてよきものではない。恐らくは時計職人の……」

「そうかもしれません。ですが、ただ依代とされているだけで彼は無実です」

恒はミスリード（誤誘導）によって、遼生の正体をあやふやにしてゆく。比企は遼生をブラインド・ウォッチメイカーの尖兵だと勘違いしている、その誤解を逆手に取る。

「彼が無実であるならば、一柱でも多く後世に神を残すべきではないでしょうか。神階に神が誕生しなくなったのであればなおさらです。彼は貴重な存在のはずです」

「神であれば節操なく受け入れるものではない。神かどうかも疑わしい者を、神階に受け入れるわけにはいかん。汝の目の届かぬところで屠る。なに、苦しませません」

これは……大変だ。恒は血の気が引いてしまった。どうやら、恒のミスリードは比企の疑いを深めただけのようだ。口先で誤魔化せる相手ではなかった。比企を止めなければ、万事休すだ。何とかならないものか、恒はわざと口ごもって時間を稼ぎながら、何か手立てはないかと悩んだ。

「……いけません。彼は」

「？」

「正直に申し上げます。彼は抗A B N T抗体の……ヘテロ個体で、俺の義理の兄です。殺さないでください」

ようやく思いついた方便はこれだった。ヘテロ個体であれば染色体上の抗A B N T抗体の遺伝子数は半分であり、ホモ個体は完全だ。だから比企が諦めてくれそうなネタはそれだった。嘘も半分、真実も半分であるがあまり歯切れのよいものではない。

「ヘテロ、だと？」

「俺がホモで、彼がアリル（対立遺伝子）に抗A B N T抗体の一方

にのみ断片をもつヘテロ個体です。彼の抗体は不完全で、俺のように抗体活性は出せません。ですが……俺を訪ねてきたのです。俺は先ほど、彼に別神だと嘘をつきました。だから彼はあのような行動をとってあなたから俺の名を聞きだそうとしたのでしょう。どうかお見逃しください」

あの創造神ヴィブレissミスが、失敗作と分かっているコードを埋め込むだろうか？ 比企の脳裏にはそんな真つ当な疑問がよぎったに違いない。しかしそこは誤魔化し通すほかなかった。

「……さようか」

比企は疑いの目を向けながらも、用件が終わったら遼生をすぐ帰らせるという条件でそれ以上は追及せず部屋を出て行った。比企は不完全な抗体であると知った遼生に興味を示さなかった。

助かった、と恒はため息をついた。彼らしくもない、かなり見苦しい必死の足掻きだった。

「ヘテロ個体、ね。僕がホモ個体だということは、君もよく知っているじゃないか」

物音が聞こえて恒が振り返ると、遼生はとっくに覚醒して恒を睨んでいた。マインドイレースは深く入ったという手ごたえはあったが、遼生の意識修復が圧倒的に早かった。7年間の植物状態からたった1日で回復したタフな少年神だ、マインドイレースからの回復速度も然りというわけだ。

遼生は正真正銘のホモ個体で、抗ABNT抗体も完全だ。ヘテロではない。しかも、恒よりよほど生理機能が強化されているようだ。肉体も頑強で、アトモスフィアも潤沢、精神力もある。精神力と知力に特化した恒と違い、バランスのよい構成だといえる。

「もう起きたんですか」

恒はつきまとわれるのが迷惑だというように、遼生には冷たいトーンの声を投げかける。

「君ひとりで何とかしようと思うな。僕も完全な抗体を持ってるんだ。僕のを合わせれば二倍になるだろう？」

「では、 $1+1 \parallel 2$ であることを証明してください」

恒は素っ気無い。そして遼生も知っていた、 $1+1 \parallel 2$ であるという事を数学的に証明するには、 $1+1$ という概念を定義づけなければ成立しないということを。つまり、この世界には1の次の数、という概念が存在するということと $1+1 \parallel 2$ である、という前提が必要なのだ。恒が何を言わんとしているのか、それほど勘の良いといえない遼生にも痛いほどに分かった。恒は遼生を全くあてにしていけない、ということだ。

それも無理はないな、と遼生も思う。だって、どうして7年間もの間、ABNT抗原に耐えられずただ植物状態となっていたような間抜けをあてにできる。逆の立場なら、遼生も到底戦力にはできないと思うだろう。何ができるものか、と言いたくもなる。今更登場されても目障りだ、という彼の気持ちも理解できる。

「はつきりと言いましょか。 $1+1 \parallel 2$ ではありません。あなたが1足り得ないからです。あなたの抗体の活性は俺の10分の1にも及びません」

恒はわざと遼生を落として、彼のプライドを粉砕した。

いくら温和な性格の遼生だといっても、いくら恒の心境を理解しようと努めても、そこまで虚仮にされては黙ってもいられない。遼生の紅茶色のおとなしい瞳が眇められた。

「随分はつきり言ってくれるね」

「手助けなど必要ありません。あなたに妙な事をされると台無しです。折角極陽に見逃していただいたのですから、極陽のお気が変わられないうちに早々にお引取り下さい」

自分は、本当に嫌な奴だ……恒は客観的に、至って冷静に恒自身の姿を見つめていた。神階ではこのうえなく会うことが困難な場所に危険を冒してわざわざ訪ねてきた義兄に、こんな口の利き方しかできないだなんて最低だ。遼生の気持ちは勿論嬉しい、手を貸して欲しいとも心のどこかでは思っている。しかし遼生の為を思えば、それはできなかった。嫌味な奴だと嫌ってくればよい、母親 八雲 青華とともに静かに暮らしてくればなおさらよい。義務感に突き動かされて破滅への一本道に、戻ってくる必要はもうない。彼の抗体の活性は絶望的に足りない、そして活性を鍛えるための時間、抗体の活性を高めてくれる抗原であるレイアIIメーテルもない。いくら遼生が力になろうと思ってくれようとも、彼の抗体では戦力にならないのだ。

そんなのだったら、遼生の助けはいっそいらない。力不足を目の当たりにしたとき、何も出来ない遼生が辛くなるだけだ。恒はそう思っていた。

「では何故、比企さまは僕を見逃したと思う？」

話を一切聞くんつもりがない義弟に、遼生は切り口を180度変えてきた。

「？」

「ヘテロだホモだの、比企さまは君の虚言を見破っていたよ。追求しなかったのは何故だと思う？ 見逃したんだ。僕のことなんかより、もっと気になる事があったから。……あるものが発動されたと、比企様の精神系は応答したよ」

恒はまずその前提を否定しにかかった。比企を看破するなど、不

可能だ。恒も何度か密かに比企へのマインドブレイクを試みたことがあるが、やはり無理なものは無理だった。先ほどのわずかな時間比企のマインドギャップに乱れも亀裂もなかった。比企のマインドギャップは完全だった。看破できる特殊な状況も揃ってはいない。

「10層のマインドギャップを、どうやって看破を!？」

「さあ、どうやってだろうね。これでもまだ悔るかい」

恒は遼生があゝの比企を看破したのだと信じられない。比企を看破するには最低でも15層のマインドギャップが必要で、それは遼生のおよそ二倍に相当する。はったりだと思えない。踊らされてはならないと、恒は釣られてざわつく心を落ち着かせる。

「……それは詭弁ですね」

「神階時間の午前10時30分に、久遠樞が発動されたそうだよ」

その言葉で決着がついた。はったりではなく、遼生の比企への看破は本当だったようだ。遼生は久遠樞の存在そのものを知っていて、さらに比企のマインドギャップを看破して発動を知った。遼生はあの一瞬の間に、誰にも気付かれずに比企を出し抜いていたのだ。更にその情報が、恒との対話のカードになるということも知っていた。「どこで発動されたか、知りたくはないの?」

遼生はにこりと、少しだけ得意げな笑顔を向けた。

第2節 第14話 スピンドル

朝昼晩の三食とおやつ付き。

棟永 雷鳥の心づくしの差し入れを受けながらも、織図の執務室の一角にあるコンピュータールームから一步たりとも外に出てはいないファティナは、ディスプレイ画面と睨めっこを続けたため眼精疲労で乾ききった瞳に愛用の目薬を差す。殆ど瞬きもせず解析にいそしんでいたためか、瞼が目には張り付いて不快。アウトプットが仮想空間ではなく現実空間のディスプレイ上での解析は苦手だ。

やはりダイヴした状態で解析ができるヘクス・カリキュレーションフィールドにデータを持ち帰りたいとは思えど、いつもは慎重に事を運ぶというのに肝心な時にヘマをしてしまったのは悔しいし、今回ばかりは、データの紛失やコピーなど許されない。

結局、データがデータであるだけに軽率な行動は慎むことにする。

織図を見送ってからファティナ一柱で成果を上げたかというところ、そうだといえる。

ファティナは織図の帰りを待たずうっかりと、織図のいうところの“袋とじ”を切っていたのだ。織図に申し訳ないが一言言い訳を付け加えるとすれば、織図の帰りを待っている場合ではなかった。断片化されていたユージーンの記憶を最後のひとピースまで、彼女が想像していたよりずっと早く、順繰りに繋ぐ事ができた。

だが、遂にその正体を見せた最後のピースがファティナをひどく悩ませている。紅茶色のボブの頭を抱えたまま動けない。

彼の最後の記憶は、広大無辺な墓地の中に佇む墓標に収められた

ユージーンのメモリを折るところで途切れていた。彼自身の手によって、彼の存在そのものを“無に”返したのだ。創世者となるためには完全なる匿名性を得なければならない、よって“ユージーン”という個神である”ことが許されなかったからだ。

ユージーンは新たな創世者になろうと決意を決めていた。願いが叶ったのかどうかを確かめるすべはなく、以降の足跡は消えている。ともあれ彼は肉体を失い自己を棄てた、そこまでは記録にある。ユージーンがアルティメイト・オブ・ノーボディの力を受け継ぎ、しかし確固たる相違を認識しながら分岐し、創世者になれたのだとしたら……？

ユージーンはINVISIBLEの齎す三階の終末を回避すべく、自らが予測不能な変数となってINVISIBLE収束の必然性を狂わせようとしたに違いない。その手段は驚異的だが、それは他の誰でもではなく、彼にしかできなかった。第四の創世者というファクターを知らなかった神階は、この要素を全く想定していない。再計算やシュミレーションは不可能だ。彼からの連絡が途絶えた今となっては、彼がどう行動するのも依然として不明だ。

ユージーンはどこにいて、まさにINVISIBLEが収束しようとしているこの瞬間に、何をしている？

ファティナの悩みはそれだけに尽きなかった。織図がEVEの最果ての谷から拾ってきたデータの中から、身の毛もよだつほどおぞましいデータを発掘したのだ。それはアルティメイト・オブ・ノーボディの記憶のバックアップコピーだ。生物階と神階の守護者にして神々の父であり母である、名も姿もなきものと称される創世者にまつわるデータ。誰の目にも触れることの許されない禁断の記録であると知ってはいても、宝箱を紐解かないでいられるほどには理性

的でも、老いさらばえてもいなかった。

アルティメイト・オブ・ノーボディはEVEが創設された当初から、日記のように彼が体験した出来事の記録をつけていたようだ。それはノーボディの意識とは無関係にEVEの片隅に自動的に記録されるようで、自動筆記に似たプログラムだ。EVEの一部は彼の日記帳として機能していたのだろう。それが、ある日を境にぱったりと記録が止まっている。つい最近のことだ。

アルティメイト・オブ・ノーボディはもういない。

アルティメイト・オブ・ノーボディは誰に消されたのだろうか？ 犯人は誰だ？ その謎の解明は、何よりも優先されるべき問題だと、彼女はユージーンの記憶の復元を中断してデータを参照した。こちらは壊れていたユージーンの記憶とは違い、順番に並べさえすれば最後のページを見るのは容易かった。

ノーボディの最後の日、何者かの来訪を受けていた。彼は来訪者に、こう呼びかけたと言録がある。

『随分と、変わり果てたものだ』

一言だけだ。そこで記録は途切れ、ノーボディが次の言葉を投げかける事はなかった。この来訪者に、彼は消されてしまったようだ。アルティメイト・オブ・ノーボディの前に何がいて、随分と変わり果てていたのか。来訪者はINVISIBLEではないと、ファティナは確信している。INVISIBLEは意思なき創世者だ、変わり果てることはない。また、ブラインド・ウォッチメイカーはもともとこれといった姿を持たないと、アルティメイト・オブ・ノーボディの記憶の一部を覗いたファティナは知っていた。変わり果てていても、わざわざそう言及するのは妙だ。とすると、そこにい

たのは ユージンなのではないか、そんな直感がファティナの絶望を加速させる。

彼が生みの親を、何がしかの目的のために破壊したのだとしたら？

現実とは時々刻々と変化している。持てる情報を更新し続けなければ、三階の存亡に関わる。

一刻も早く知る必要がある、創世者となったユージンが何をしようとしているのかを。

そうでなければ神階は永遠に、彼の意に沿う行動をとることはない。また、彼がまだ三階の守護者でいてくれるのか、それを確かめるすべもない。三階の庇護者であったアルティメイト・オブ・ノーボディを、ユージンが葬ったのだとしたら……もう、彼が何を目指しているのか、アルティメイト・オブ・ノーボディの何が間違っているのか、あるいはユージンが間違っているのか、想像もつかないのだ。やはり、頼みの綱はレイアだけだ。創世者と通じることのできる彼女だけは、ユージンの声を聞くことができるのではない。期待し、縋らざるを得ない。たった二歳半の少女神の双肩に、三階の命運が重くのしかかっている。

創世者の声をきく巫女、か。まるで神がかりだな……。まったくもってこれは、非科学的だ。

ファティナはそう思えど、正直、それ以外の手立ては見つかりそうにも無かった。

＊

十二柱の特務省 特務従事者と十二柱のアシスタントがナビゲートされた地点に到着すると、コンタクトの瞬間、彼らは綿密に重ね

られてきたシュミレーション通りに彼女を包囲した。赤いコートを着た少女は、星くずにもたれかかるようにして眠っている。心なしか穏やかな表情と見受けられた。神々の接近にすらも気付かない様子だ。

薄手のローブのような制服を纏ってはいるもののそれ以外は全くといって無防備な職員達は、素肌のままで真空に曝されている。だからこそ感じるのだ、氷点下の宇宙に在る彼女の周囲がほんのりと熱を持っているということ。これは決して彼女の纏うアトモスフィアの熱量ではない。彼女が身を寄せている星屑は、明らかに熱量を持っている。

どんなぬくもりもすみやかに冷却されるこの環境下にあって、周囲に熱を放散させるだけのポテンシャルを生み出すこの塊は、この世のものではないだろう。INVISIBLEが防寒のために、彼女に与えたのだろうか。彼らは薄気味悪そうに彼女を遠目に見ていた。

12時方向に配備した指揮官も僅かな違和感を訝って、GOサインを出さない。彼がカウントを取って右手を振り上げたなら、それが術式展開の合図だ。彼はINVISIBLEがレイアを起こさないことを、不審に思ったかしない。INVISIBLEは神々の接近を知らながら、彼女を逃がそうともしないのだろうか、と。

罨、なのか？ 指揮官はその可能性を疑っているのだらうと、織図は推察した。

『眠っているな』

指揮官は解離性意思伝播法でつぶやく。乖離され放散された彼の意志はその場の23名の特務従事者に聞こえている。無論、意識があるというのなら彼女にもだ。解離性意思伝播法は伝播させる相手

を選べない。しかし……彼女は目覚めない。死んでいるのではなくて。論拠は彼女のアトモスフィアが健在だということだ。

『いかがします？』

支柱となる神々もこの状況に困惑気味だ。こうやって時間を無駄にしているのは惜しい、だが一度展開してしまえば80日間もやめられないとなると、いくらかは事を慎重に運ぶ必要がある。指揮官が迷っているのなら、尚更だ。

『実行せんわけにもいかんだろう。だがどうも、引っかかる』

指揮官の躊躇をチャンスと見た織図がある提案をした。

『このまま神階につれて帰って、仕切りなおしてはどうです？ こ

こはINVISIBLEの胎だ。術が成立した瞬間に一網打尽にされるかもしれません。普通に考えれば、これは罠です』

彼の指摘は的を射ていた。

『確かに神階の方が我々に地の利がある』

織図の提案に同意する声も多かった。ここは敵地だ。80日間を耐えうるかと言われれば、不安要素は一つでも排除したい。

『……』

指揮官は織図の意見にある部分では同意をしているようだが、まだ判断を迷っている。織図は決定的かつ合理的な理由を添えてダメ押しをした。

『無重力下での久遠枢は出力が落ちますぜ。シュミレーションも不十分でしょう』

『それもそうだ……。副大臣に伝達しろ』

指揮官が指先で指示すると、彼の背後に控えていた指揮官のアシスタントが瞬間移動で副大臣に伺いをたてに行った。ここから先の判断は、誰に委ねるにも心もとない。だからこそ、彼は確かな人物

の指示を仰ぎたいと考えたのだろう。INVISIBLEの手に落ちたレイア＝メーテルを前に極度の緊張が続く中、ほどなく、彼は戻ってきた。

『副大臣からのご許可を賜りました』

『して……誰が彼女を運ぶのか』

『では、僭越ながら俺が』

幸か不幸か、誰もその役回りを引き受けたがる者はなく、織図はしぶしぶといった風を装いつつ手をあげた。彼は躊躇なく暗闇に漂流するレイアに手を伸ばし彼女に触れ、星くずから引き剥がしそのまま優しく抱き寄せる。初めて触れる少女神の神体は小さく華奢で、柔らかい。迷子の娘を見つけた親の気分ってのは、こんなものかなと織図は思う。凍えてはいない様子で、頬は薔薇色に染まっている。不死身の体と知っていても、丁寧に扱わなければ壊れてしまいそうだと思った。彼女に触れても、懸念されていたINVISIBLEの干渉は入らないようだ。

こんな世界の果てのような場所まで逃げて……さぞ心細かっただろうに。織図はたまらなくなって彼女にそう呼びかけたが、返事はない。接触しても彼女はまだ目覚めない。やはり、直接呼びかけなければだめだ。織図は抱きなおす振りをして至近距離から手早く彼女の足首に、直径1μmの双繫糸を巻きつけた。幸いにして彼女はまだ意識を取り戻さない。

『帰投するぞ』

指揮官からの号令が飛んだ。

織図は腕時計に目を落とす。織図が彼女と話すことができる時間は、それほど長くはない。HINET（超広域転移網）の最寄り

の転移中継地から、14回の転移で神階に戻れてしまうからだ。

というのは、副大臣をはじめ数名の特務省職員は超空間転移術を使えるが、三階の外部領域でかなりの距離があるこの場所からでは、あまりにも遠すぎて直接神階には戻れない。転移術が失敗すれば基空間との狭間で迷子になってしまうだけだ。距離が遠ければ遠いほど、その危険性も増す。そこで、安全に神階と各中継地を結べるように、H i - N E T は網羅的に構築されている。

H i - N E T のステーションにはフロンティア・ナビゲーターと呼ばれる転移術に特化した特務省職員が配備されている。

宇宙空間では地形を覚えることができないので、ステーションの周囲の星位を完璧に覚えて通常の瞬間移動を可能とするフロンティア・ナビゲーターがまず各々の担当のステーションの配置につき、H i - N E T を移動する際は彼らのアトモスフィアを辿って追跡転移を行うという方法を採用。

そして他の特務省内の任務を兼任するナビゲーターが召集され、全てのステーションに配備されるまで、急いでも30分は要するのだ。織図は他の職員らとともに、最前線のステーションに最初の転移をかけてフロンティア・ナビゲーターのスタンバイを待つことになった。織図以外の職員は別室で待機し、転移中継基地の一室にレイアをかかえた織図と副大臣が差し向かいで座っている。彼女には当然のように、副大臣からの容赦なく厳しい視線が注がれることになった。

副大臣バンダルⅡワラカⅡガリーブ（B a n d a r W a r a q a h G h a l i b）は彫の深いアラブ系の顔立ちをした大柄な男神で、1340歳の大先輩だ。

口数も少なく無愛想な男だが、その実直な性格と他の追隨を許さ

ない圧倒的な実力ゆえか、人望は厚い。もし織図がマッチメイカーだったとしたら、このバンドルと荻号 正鵠あるいはアルシエルⅡ ジャンセンとのドリームマッチを組みたいと思うほどに、彼の力は傑出している。バンドルのマインドギャップが特務大臣に勝ってさえいれば、とつくに大臣の椅子に座っていたであろうとされる器量だ。

織図はレイアを抱き上げるときに意図的に、彼女の顔が織図の側を向いてバンドルに見えないような体勢を取らせた。織図はそっと彼女を揺さぶり起こす。彼女が目を開ける様子は、どの角度からでもバンドルの目に触れてはいないが、双繫糸を通して彼女に語りかける言葉は彼女の脳髓に優先的に響いている。糸電話のように彼女の精神にのみ伝達されてゆくはずだ。

バンドルのマインドギャップは金鋸で肉を削ぎ落とすように鈍い切り口で対象のマインドギャップをこじ開け侵入してくる。たった今もそうだ。レイアを看破すると同時に、織図も彼から看破されマインドギャップが赤裸にされているのを感じていた。マインドギャップを破られていても、まだバンドルが織図の小細工に気付いている様子はない。

『レイアⅡメーテール。おい起きろ。そのまま聞いていてくれ』

レイアは意識の侵入に驚き、ぼんやりと目を開いた。彼女からすれば、睡眠中に冷や水を浴びせられたように感じるだろう。断じて心地よい感覚ではない。織図は彼女の頭を腕で固定して動かさないようにする。レイアはすぐに先ほどとは違う状態、それも誰かに抱かれているのだと気付く。緊張したのか、織図の制服をぎゅっと握り締めた。彼女がこう尋ねるのはもつともだ。

“誰ですか？　ここはどこ？”

『死神の織図 継嗣だ』

困惑したように沈黙したかと思えば。

“……あなたのお名前、聞いたことがあります”

織図はレイアと一度も面識がないのだが、彼女は確かにそう言うのだ。

『なるほど、恒から聞いたか。ここは特務省管区の基地だ』

好都合だった。彼女が相手を信用できる、できないの基準はそのまま恒の価値観に基づいている。彼女は恒の意見に忠実だ。しかしそうであればこそ、織図は疑問に思う。そんな彼女が何故恒を裏切らねばならなかったのかと。

“はい、恒さんが”

従順にそう答える彼女は夢うつつだ。のぼせたように上気した顔を見て、織図は疑わざるをえない。彼女はまだ、正気なのだろうか。一抹の不安が過ぎる。双繫糸から感じる精神的な手ごたえは正常だ。正気でいてくれればよいが、それを確かめるすべは残念ながら存在しない。

『お利口さんだ。あまり時間もないもんで単刀直入に訊くが、何でこんな遠くまで逃げたんだ』

“……”

彼女の沈黙は、織図の焦燥を掻き立てた。

『だよなあ、話せねーよなあ。INVISIBLEに何か云われたんだろ？ 例えば脅迫まがいの事をだ』

“いいえ”

彼女は少し身を乗り出すようにして、間髪いれず否定した。その

反応が反射的であればあるほど、織図は疑いを持つ。

『ああ、分ってるよ。恒を裏切ってまで逃げたんだ。言える訳ねーよな。答えたくない事は答えなくていい。お前からみて、INVISIBLEは敵じゃないのか?』

“……違うと思います”

洗脳か。織図はバンドルに気取られぬよう軽く口の裏をかみ締めた。手遅れだったのかもしれない。しかし次にレイアが紡いだのは、にわかには信じがたい言葉だった。

“いいえ。もう、彼はいません”

『!? どういうことだ』

彼女は呻くように、あるいは魘されるように織図に伝えた。

“INVISIBLEとは、本当はどこにもいなかったのです”

『お前……なんつった。じゃ、お前は誰の声を聞いたんだ!』

もしバンドルからの監視の目がなければ織図は瞳を見開き、呆然として首をふっただろう。織図は動揺を押し隠すのに苦心した。興奮のあまり昂ぶった頭を押さえつけ、彼女の言葉をもう一度反芻する。

INVISIBLEが、もともと存在しなかったと。

では、ユージーンとレイアにステイグマの呪縛を刻んだのは、有史以来二度も神階を滅ぼしかけたのは。彼女を攫ったのは……誰だ。レイアの言葉はまだ続いていた。

“……でも、誰かがINVISIBLEにならなくては”

もはや、彼女の話は織図の理解を超えている。このままバンドルの目を盗んで会話を続けることは無理だ。精神的動揺はバンドルからのマインドブレイクを無効化しているといっても隠し通せるもの

ではない。呼吸、体温、血色など、それらの微妙な変化でバンダルは織図の動揺を覚るだろう。心なしか、制服のフードを直すバンダルの眼光が鋭くなったようにも思う。それが根拠のないもので、思いつきであってくれればありがたい。

“だから……はじまりは、たったひとりです”

織図は息を止め、導かれるように尋ねた。

『お前、ユージーンⅡマズローを知っているか？』

あと1秒もすれば彼に届いていたであろう彼女からの返事は、彼が最も警戒していた目の前の人物によって無情にも遮られた。

「織図！」

バンダルは厳しく織図の名を呼ぶ。織図は一呼吸おいて、精一杯の平静を装ってから応える。水面下での遣り取りが、バンダルに全て筒抜けではなかったということを示すだけだ。

「はい」

「何を腑抜けておるか！ 気が抜けておる」

最悪の事態は免れたものの、迂闊だった、と織図は固唾を呑む。バンダルのマインドギャップは26層。対して織図のマインドギャップは8層。双繫系でレイアと通じている間は、織図とレイアの精神系は双繫系の効力によって外部には見えないため、バンダルから見ると織図は何も考えていないように見える。織図はもともと雑念の多い神だと、バンダルから認識されている。5分以上も無我の境地にいるという状況は普段の彼からすれば起こりえない。その点を鋭く指摘された。

部下と何度も顔を合わせている彼ならば、各職員の平常の状態というものをよく知っている。

「は、無心の境地で臨んでおりました」

苦し紛れの言い訳は、ばつさりと切って捨てられる。

「緊張感を持て。INVISIBLEに干渉されておるのではと疑ったぞ」

疑いを晴らすというならば、織図はただちにレイアと織図自身から双繫糸を手放し、バンドルのマインドブレイクの前に晒されねばならなかった。だが、ダメだ。その内容をバンドルに看破されてはならない……！

「代われ。それとも続けるか？」

「申し訳ございません、代わっていただけますか」

「たるんでおる」

窮した織図はレイアを敢えてバンドルに引き渡すことに決めた。

とにかくこの場から、離れなくては！

彼女をバンドルに引き渡すその瞬間に、織図は双繫糸を切り、一本は彼女の足首にきつく結わえつけた。これで、双繫糸から外部に繋がることのないレイアの思考回路は彼女の頭の中に閉じ込められ、誰からも看破されずに済む。バンドルは双繫糸の存在を知らないの
で、レイアがまだ目覚めていないと考えるだけだ。そして、残りの
双繫糸を織図の手にしっかりと握っている限り、バンドルは織図を
看破できない。織図は危ういところで絶体絶命の窮地を切り抜けた。
そして糸を切る直前、織図はレイアにこう言い残すことを忘れな
かった。

『俺が次に合図をしたら、共存在で逃げろ。その為の隙は必ず作ってやる』

＊

「どこで発動されたか、知りたくはないの？」

遼生はにこりと、屈託の無い得意げな笑顔を向けている。その情報で恒の足を止めるだけの価値を持つと分かっているからだ。不遇を絵に描いたような身の上でありながら、何故彼はこうも純粋に笑えるものかな、と恒は思う。

知りたくないと答えると恒はまた嘘をつくことになる。

遼生の生命を無駄にしないために、遼生と関わりを持ってはならない。嘘をつくことにはもう慣れた、それで彼を傷つけたとは思わない。真実を貫き通して彼が傷つくというなら、恒は何度でも彼を騙す。巻き添えにしたくない、自分だけでいい、そんな思いは彼にとって迷惑なのだろう。

「気になりますが、知ったところでレイアの拘束は神階の決定です。俺の一存でどうにかなる問題ではありません」

釣られてしまいたい気持ちはやまやまだが、こんな餌に釣られてはならない。

恒が後ろ髪を引かれる思いを押し殺して遼生の前を通り過ぎようとしたとき、視界の端に褐色のきらめきが見えた。恒は弾かれたように振り返り、それが遼生の手の中に納まっていることに驚く。そう、彼が所在なさげに持っていたものは、恒が欲していながら、決して手に入れることができなかった代物だった。

「それは!？」

「ああ、これ？ 比企さまが大切そうに持っていたから失敬したけれどこれ、何だろうね」

遼生は手ごたえあったなといわんばかりの表情で微笑みながら、

恒に一本のアンプル瓶をかざして見せた。

恒は目を見張った、わざわざ手にとって確認しなくとも知っている。比企が隠していたA B N Tの体液のアンプルだ。何だろうね、と遼生は白々しいが、彼はその内容を比企のマインドギャップを看破し把握したうえで掠めたのだ。あの比企の虚をついてごく短時間に泥棒のような真似ができるのだから、彼を侮ってはならない事を痛切に感じる。恒が感じるこの感覚は何だろう、焦燥感と……そう、危機感だ。

全く体を動かすことすらも許されなかった7年間のブランクをものもしない、八雲 遼生の機転と適応力。とても同年代の神とは思えない。彼は出来すぎている。高をくくっていた相手に鼻をあかされた気分だ。そして、驚愕はある疑問へと収斂されてゆく。彼が持つそのアンプルを当初の予定通りに恒に打っていたら、どうなったものか。7年の植物状態へと暗転した彼と全く同じ状態になってしまったのではないかと。

それは恐怖だった。

恒のA n t i A B N T A n t i b o d yを絶対だと、恒は信じてはいなかった、だが、レイア||メーターに接し続けることをやめなかった、目の前の敵に立ち向かい続けた日々は無駄ではないと心の片隅で信じていたかった。遼生に負けるはずはないとだけは思っていたのかもしれない。それは驕慢、だったのだろうか。忘れてはいけない。ヴィブレイ||スミスをしてA B N T抗原の投与に耐えうると判断された優秀な検体なのだ、遼生は。その彼を以ってしても不可能だったこと、彼をどうして、侮ってよかっただろうか。

「それを、どうするつもりですか」

恒が喉から手がでるほどに、欲しがっているものだと言生は知っ

ている。茶色のアンブルはじらすように、恒の目の前を悠々と横切っていた。アンブルの動きを、自然と恒の目は追っている。

「余程思いつめているんだね。これを直接打とうとしたんだろ？」

「……」

「これにすがってはいては駄目だ。これを僕に打ったのは父の愚だ。同じ過ちを繰り返してはならない」

「そうですね、諦めます」

恒はもつともらしい顔をしているが、それはから返事だと遼生は見破っていた。遼生はマインドブレイク（心層看破法）を用いない代わりに、マインドレスポンス・イメージング（心層応答結像法）という方法で相手の精神系を看破する。マインドブレイクからの防御法として一般的に神々が心得ているマインドギャップを透視しない、特殊な方法だ。

常神には習得不可能な看破法であり、ヴィブレissミスによって開発され彼に付与された。特殊な単一波長パルス波のアトモスフィアを相手に浴びせたとき、活動電位が起こっている部位とそうでない神経回路では振動の速度が異なっている。その応答の差分をイメージングし、精神系の活動領域を特定するというものだ。

また、このパルス波はごく微弱でも充分に、マインドギャップを貫通する。遼生の本来のアトモスフィアと区別がつかず、相手は看破されているという自覚がない。どれだけマインドギャップで脳を固めていようと遼生の看破法の前には何も意味をなさない、という事にすら気づかない。彼だけが持つこの特殊な能力は、恒には授けられなかった。来るべき時までの時間を生物階で過ごす予定だった恒には、高度な看破能力を授ける必要なかったからだ。

「いや、君はまだ諦めてないな」

「何故、そう思うのですか？」

恒は嫌な予感がした。遼生は看破をかけてこないが、確実に感じる。彼は恒をどんな方法を以ってか、看破していると。10層という極位クラスのマインドギャップを備えたがために、久しく看破されるという感覚を味わう事のなかった恒にとって、ごく至近距離からの看破に、身の危険をすら感じている。この緊迫感……たまらない。遼生の物腰は威圧感を全く感じさせないのに、空気や水のように浸透しながら、いつの間にか恒の精神系へと確実に浸入している。

「見えるからだよ」

余裕綽々で、爽やかな笑顔も忘れずにそうのたまう義兄が憎たらしい。彼のペースに持っていかれていく、恒は重々承知していた。だが、問いたださずにはいられなかった。

「どうやって！」

「そも、君はマインドギャップに頼りすぎだ」

遼生は恒に憐れむような視線を向けると、彼の7層のマインドギャップを解放した。恒は不審に思いつつも、反射的に看破を試みる。その直後、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。……マインドギャップがないのに、遼生の心が読めない。そう、そこには何もなかった。彼はマインドギャップとは異なる方法で彼の脳と思考回路を保護している。そんな情報、彼が寝ていた時には読み取れなかったのに。

「読めませんね……でしたら何故、マインドギャップを形成するんです」

「僕のマインドギャップはフェイクさ。なんていうかな、別になくてもいいけど、あった方が安心するだろ？ 特に君のように……マインドギャップが万能だと信じているような相手には、ね？」

恒はぞくぞくと、彼に対する混濁した気持ちが沸き起こってくるのを感じた。

これは何というのだろう、彼に対する強いライバル意識というものののだろうか。彼のトリックスターのような振る舞いに、恒は翻弄されている。恒とは全く違うタイプのAnti ABNT Antibodyの個体。彼の存在感を、思い知らされている。

「それで……このアンプルに固執するところを見ると、君はAnti ABNT Antibodyがどうやって成熟するかを知らないようだね」

「成熟？」

恒は遼生の言葉を、反芻するしかできないでいる。

「やっぱり知らないか。抗体は体内にある時は不活性化されているんだ、アトモスフィアになって外に出なければ機能しないんだよ」

「え？」

「まさか知らなかったの？」

誰も教えてはくれなかったし、調べようもなかった。

Anti ABNT Antibodyが成熟したものであるかそうでないかは、遺伝情報だけではわからない。とすると、八雲青華すらも知りえない情報だったのかもしれない。青華は、抗体を鍛えろとしか言わなかった。ヴィブレッサミスのみが知りえた情報だとしたら……彼が恒に真実を教えなかった理由は容易に推測できる。

「父は俺を殺そうとしていたから……。教える必要もなかったんでしょう」

「殺すことによって、抗体を身体の“外に”出して活性化させるためだろうね」

遼生は考察を述べつつ、ふっとアンブルを空中に放り、両手の間に浮かせてかざした。彼の両手の間には見えない線が張られているかのように、ゆっくりと回転しながらアンブルは宙に浮いている。その機巧は恒には分らない。少なくとも恒は、神具FC2―メタフィジカルキューブ以外の物質を手に触れていない状態で浮かせるのは困難だ。

彼は檻の中の救世主となるために、ヴィブレⅡスミスからどれほどの贈り物を授けられたのだろうか？ 創造者からうち棄てられ、見捨てられた実験体は、まだ挫かれてはいない。恒がつい数日前にベツドの上から哀れみを込めて見下ろした、光を映さず濁っていたその瞳は、今はきらきらと透き通っている。

「いくら体内の抗体を鍛えても、発現させる術を知らなければそれは無駄にすぎない。どれだけ強い電流を流しても、その通り道を絶縁体で遮っているようにね」

恒はざわざわと鳥肌が立つのを感じていた。恒の抗体はまだ、その持てる力を発揮できていない。遼生に指摘されなければ、全く意味を為さない結果を齎す、捨て身の行動に出ていた。

「活性強化されている君の抗体を全てアトモスフィアとして放散できれば、それはこのアンブルを打つことに匹敵するだろうよ。そして君と血液を交換した僕は君の抗体の活性を継承しながら、それを最大限放散するすべを知っている。僕たちが互いの特性を生かしあえば、君ひとりが尊い命を投げ出すよりよほど強い活性を発揮する、ここまでは僕の意見と今後の見通しだが」

そのときの遼生は、恒を逃さず真正面から見つめていた。

「それで、君はどう思う？」

すがすがしいほどに完敗だった。

遼生の提案は、恒に一切の反駁の余地を与えなかったからだ。

第2節 第15話 自己非組織化と、カオスの淵

バンダルらとともに特務省に戻った織図は、同行を求める新米アシスタントの女神の干渉を転移術で振り切り、開かずの物置のような小部屋に内側から立てこもっていた。

これからレイアの簡単な健康診断が行われ、久遠枢を発動するのはその後だ。織図に小一時間の休憩時間ができた。定時に顔を出せば、その間にどこで何をしていようと、上役から咎められることはない。全館禁煙の特務省において、ここは喫煙嗜好のある織図の秘密の喫煙所だった。一服したい気はあれど、今日はあいにく煙草の持ち合わせがない。

織図は決してニコチン中毒はないのだが、こころなしか口寂しく感じる。

はじまりはたったひとり、か。

なぞかけのような言葉は織図の意識の裏側に、へばりついていった。ひとり、という言葉は必ず“実体”を持っている何者かである、という意味だ。レイアは創世者をひとり、と数えるだろうか。実体のないものをひとりと数えるものか。そのあたりを、言葉尻から推測することはできないが……恒と比企が彼女に施した教育が常識的である保障などないが、少なくとも織図がレイアと逆の立場なら、数えない。

実体のないものは数えられないからだ。

レイアは創世者の姿を見たのだろうか？ 子供が寝言のように呟いたうわごとを基にあれこれと考察するのは不毛だ、だが、不毛なことでもつかなければならない。彼は繰り返す。

「ひとりって、何のことだ」

彼が腰を下ろす目の前には特務省の壁面、つまり鏡面のように無愛想な黒い壁がある。返事はなく、声は壁に染み入ってゆく。

呆然として時間を無駄にしたくもないので、手持ち無沙汰にファティナに電話をかける。こんな時でも携帯だけは手放していない。特務省職員の持つ携帯電話は機密維持のため盗聴不能電波を発する。会話を傍聴されるという心配はなかったので、遠慮なくコールだ。

2コール目で、ファティナは部屋に備え付けてあった内線電話を取った。

デスクと電話まではそれなりに距離があるから、少しは走ったに違いない。棟永が出ないところをみると、部屋にいるのはファティナ一柱か。

『レイア||メーテールは無事でしたか?』

彼女の声が弾んでいたのは、決して走って息があがったからではない。連絡がつかないと思っていた織図からのコールに、驚いて興奮している。そういう調子でもなかった。

彼女は何か新情報を得たのだ。それも、彼女の気を昂ぶらせるほど重要な何か。織図は小さな覚悟を決めつつ、素っ気無く尋ねた。

「何とかな。そっちはどうだった」

『大変なのです!』

間髪入れずに答えたファティナに織図は息を止め、ファティナには聞かれないように静かに息を吐いた。やはりそうか、そうだろうな。少し伸びた、文字通りの無精髭をゆっくりとさする。

「大変なのもお互いさまだな。で、何がどう大変なんだ?」

『名も姿もなきものが、ユージーン様に消されました』

電話越しのファティナは凜として、背筋をぴんと伸ばし、少し声

を震わせながらそう報告したのだろう。頬を紅潮させ、いつものように逆手で受話器を握っているだろう。彼女の様子が手に取るようにわかる。

「待てよ、落ち着け。全っ然意味がわからん。ユージーンはもう、死んでるだろ」

冷たい気配が、織図の項のあたりを通り過ぎた気がする。

この狭い無人部屋の中で視線を感じるのだ。

ちょうど恒の家で、ブラインド・ウォッチメイカーからメールで挑発を受けたあの日の、あの粘つくような視線。同じものを感じる。死者が死者を消す、だと？

死を司る織図は誰よりも、死という現象を知っているつもりでいた。ありきたりなイメージで申し訳ないと悪びれてすらいるのだが、生命という現象はまさに生まれた瞬間から限られた長さの蠟燭バイタルを炎で燃やして使い切ってゆくことに他ならない。何も間違っていない、単純なことだと、織図は思う。

燃え尽きたはずの炎が、蠟燭を離れて鬼火となって漂っている……そんな怪談じみた、あまり有意義ではないイメージが喚起されてきた。

胸騒ぎを抑えるため、ファティナに直接会って話したいと思ったが、時間が気になる。特務省内のホールを借り切ってレイアに久遠柩をかけるまで、つまり職員召集まであと48分しかない。だが48分でもできることはあろう。

織図は背任覚悟で特務省から陰階の自室に転移をかけた。特務省内から出るなど言われてはいないが、この危急の折に単独で身勝手

な行動を取った事が明るみに出れば、それなりの処分が下されるだろう。特務省の処分といえば、厳しい体罰が課せられる。

神階の神体罰なんて痒いぐらいだぞ。……不満をぶつくさと垂らしながら、彼は既に転移をかけていた。

「織図様！」

開口一番、織図の名を呼んだファティナは見るからに嬉しそうだ。心細かったのだな、と織図は彼女の胸中を慮る。透き通るような白い肌の上に、打算のない感情を素直に表現する彼女は可憐だった。

織図はことあるごとに、彼が盲目であった頃から、彼女の女神としての正当な美しさに敬意を払い、襟を正す。織図自身は彼女とは対極をなす泥臭く不精な神だと、どこかで引け目に思っているからだ。死神が死の穢れを引き受ける限り、死を呼び寄せるのは真理だ。

ときに死の災禍が彼の命を奪うこともある。潜在的な死への恐怖から未だに織図を避ける者は多く、織図も最小限の交友関係を築くようにしていた。織図に近づくだけで寿命を縮めると、根拠のない偏見を持つ者も神や使徒にかかわらず、神階には数多くいる。だがこの女神からは過去から現在に至るまで一度も、差別の視線を向けられたことは無い。彼は昔から、彼女を厚く信頼している。

「ご苦労さん。で、何がわかった」

「……ユージーン様は二年前、創世者となったかもしれません」
「!？」

彼は絶句した。

数学神 ファティナ マセマティカは常に確証を求め、見つけなければきっぱりと否定する。彼女の考察は竹を割ったような正しさで、矛盾する物言いを嫌った。彼女が断定するときには、必ず証

拠を掴んでいるという証明だった。だから織図は、彼女の報告にこんな言葉で茶々を入れることしかできなかった。

「冗談だろ！」

「名も姿もなきものと意識を共有していた彼は、創世者となるにはどうすればよいかを知っていました」

ストーリーテラーのように迷いのない口調で、ファティナは淀むことなく語る。

「ノーボディと喧嘩でもしたのか」

茶化しながらちくりと、織図の胸は痛んだ。それは言い換えれば、ユージーンが荻号 要を殺したという話にもなるからだ。特に、荻号 要とは長い時間を共にした織図にとって、何とも生々しい話だった。荻号は織図に育てられたと言って間違いない。父親のような存在であると同時に無二の親友だった。

盲目であるが故に一度は神階より切り捨てられ安楽死を宣告された織図を救い、心身ともに自立を促したのは間違はなく荻号だ。感謝してもし尽くせない。一方で、ユージーンは昨今では珍しい、清しいほどの好青年だった。誰に尋ねても、彼を悪く言う者などいない。それは彼の生前の支持率によく現れている。

だからどちらの肩をもって話を聞いてよいものか、わからなくなる。ファティナも同じだ。彼女は荻号を尊敬し、ユージーンを好ましく思っていた。世話好きのファティナは彼女よりずっと年下のユージーンを、弟のように思っていたふしがある。

「わかりません。ですが、決定的に相入れない部分があったのです。彼は何を意図してか、名もなきものを滅ぼしました。ですから必然的に現在神階と生物階を支配しているのはアルティメイト・オブ・ノーボディではなくユージーン様ということになります。レイアは

それについて何か言っていましたか？」

彼は創世者となることによって彼の生涯を否定した。

それも全否定だ。

彼には壮絶なまでの覚悟と、永遠の孤独に耐える勇気があった。

暮れない夕暮れに支配された幻想的な湖のほとりで、声とも悲鳴ともつかない絶叫を発していたユージーンのを、彼女はありとと睨の裏に蘇らせる。彼があれほど悲惨な様子で決心したことなのだから、全ての行動に意味があると思いたい。彼は今もどこかで、彼の信念を貫いているのだと、信じてやりたかった。

その信念に基づいた結果が、親殺しともいえる裏切り行為だったのだろうか。ファティナは理解に苦しむ。

「レイアはこう言ったよ。INVISIBLEはもういない……最初から、いなかったんだと」

「え、」

ファティナはさも面食らった、という表情だ。当然の反応だった。同様に織図も、レイアにそんな顔を向けていただろうと思う。何かを言いかけては言葉を吞む、ファティナは混乱している。それは聞きよければ、単なるレイアの現実逃避のようにも聞こえるからだ。

レイアを苦しめるINVISIBLEがもとも存在しなかったと信じていることによって、彼女は絶え間なく襲い来る恐怖からある意味逃れている。そんな解釈も考えられないではなかった。単純に、ストレスに対する心身の適応だ。ファティナは織図がレイアの言葉を真に受けていることに、否定こそしないが困惑しているのかもしれない。

「意味、わかんねーだろ」

「最初から、ですか？　いいえ、INVISIBLEは存在します。INVISIBLEの存在を、神階は何度も観測しています。あなたもご存知のとおりです。それらはブラインド・ウォッチメイカーやアルティメイト・オブ・ノーボディとは違います。INVISIBLEは格が違うのです、エネルギーの質も桁も違うというべきでしょうか。この二者が束になっても、INVISIBLEに成り代わることはできません」

彼女は冷静に、場合によっては冷酷に分析を行う。彼女の言葉は客観的な事実の総合だ。憶測を口にするのではない。

「またレイアはこうも言った。“でも、誰かがINVISIBLEにならないければ”、と」

「INVISIBLEが存在せず、誰かがINVISIBLEにならねばならず、アルティメイト・オブ・ノーボディは消滅し、つまり、創世者はブラインド・ウォッチメイカーとユージーン様しかないということですか？　ユージーン様はわずか二年前に創世者となり、ブラインド・ウォッチメイカーとアルティメイト・オブ・ノーボディは絶対不及者にはなれません。質量不足です。つまり、絶対不及者であった創世者はINVISIBLE以外にはないのです」

落ち着いた声色で、一つ一つの要素を指を折って数え、彼女は状況を整理してゆく。

「じゃ、絶対不及者の中には何が収束していたんだ？」

「……絶対不及者の中には何がいて、何をしようとしたのでしょうか。ファティナの推理は早くも頓挫した。」

この謎を解いたものはいないのだ、有史以来、だれひとりとして。無茶振りをしてしまったものだと、織図は反省した。そもそも、彼

女が推理を繰り広げたとしても正解など誰にもわかりはしない。見えざるもの、創世者たちは遥か高みからこの様子を呆れながら見下ろしているのだろうか。つくづく不毛だ、彼はそう思った。

報われない議論を積み重ねるのは、見つかるはずのないパズルのピースを捜し続ける行為にも似ている。絶対不及者が何をしたがっていたのかなど、絶対不及者に訊かなければ分からない。それが可能であるならば、だ。

「そういや、“はじまりはたったひとり”なんだそうだ」

織図は思い出し、竹に木を接いだように唐突に、レイアの言葉をそのまま反芻した。忘れないうちに、ファティナに伝えておくべきだ。彼女は断片的に、アルティメイト・オブ・ノーボディの記憶に触れている。彼女のイメージから、何かが繋がらないか。一つ一つのアルファベットが寄り集まって単語を作るように、何か、少しでも手がかりを得れば。

ファティナは気を引き締めるようにぎりっと、唇を結んだ。不自然に赤みをおびた唇には、わずかに血が混じっている。織図のパズルのピースは形を成さないが、腸を掻き回されるように不安を呼ぶ。

「織図様、嫌な予感がします。私たちはとんでもない思い違いをしているのかもしれませんが。INVISIBLEに関する我々の知識を、リアルタイムで覆されています。やはりこれをあなたにお預けしておきましょう。今ここです」

ファティナは織図にメモリスティックを握らせる。織図が彼女に握られた手を開こうとすると、彼女は両手で織図の大きな褐色の手を包み込み、また同じようにきつく握らせた。早く安全な場所に移せというのだ。

「何だ？」

「アルティメイト・オブ・ノーボディの記憶から、神階に在籍する全神のバイタルコードを割り出しました」

「そりゃ、すげえ！ 神のコードなんざ割れるもんじゃないからな」
彼女は少しも誇らしげではなかったが、その手柄は絶賛に値した。このぐらいで驚いてもらっては困る、とファティナは更にまくしたてる。こんなものを誰かに見られていたら破滅だというのに、彼女は生き生きとしている。彼女の本来の頭脳の冴えが、こんな時にこそ生かされる。

「その中にはユージーン様とレイアのコードも入っています。とても特殊なコードで、変数です。1日おきにある数列に基づいて変化します。数列の解を出すのに苦心しましたが、解は 120日後まで解いてファイルに添付しています。つまり、彼らは根本的な意味で不死身ではなかったのです。肉体的には不死身でも、バイタル切断という方法を用いればアルティメイト・オブ・ノーボディのみが彼らの生命を奪う事ができました。ノーボディは切り札を持っていた。前回、前々回と絶対不及者を葬った時にはその方法を用いたでしょう。逆に考えますとアルティメイト・オブ・ノーボディは奥の手を持っていたからこそ、彼らを世に生み出すことを断念しなかったのです」

安全装置がなければどんな兵器も造られることはないように、アルティメイト・オブ・ノーボディはいつでもINVISIBLEの目的を挫くことができた。そうでなければINVISIBLEに利用されることが明確でありながら、彼らを生み出すことはなかっただろう。

「不死身のレイアを殺すカード、ってどこか」

織図はファティナがせかすので、早々にDAーインディケータに

メモリスティックを突き刺しデータをコピーした。同時に織図の脳にもしっかりと刻み込む。これまで……生物階の全てのコードを掌握してきた織図は、人々と会うだけで彼らのコードを見破ることができた。

彼が瞬時に人々の概算寿命を言い当てるのはそのためだ。全く同じことが、神にも適用される。彼はファティナのバイタルコードを直接的に覗き見ていた。彼女の余命とバイタルコードが視覚的に見える。たとえば織図が死を宣告するだけでファティナのバイタルを断つことも可能だ。

「使っていただきたくはないのですが……バイタル切断権を有しているのはあなただけです」

「何か勘違いしてるようだが、俺がアルティメイト・オブ・ノーボディから預かってるのは人を殺す権利だけだ。それにそんな切り札を俺が持ってたんじゃ」

織図はこのデータを保管するための、安全な場所というものを知らない。彼女が絶対不及者となってわれを失ったとき、レイアの死を以ってその暴走を止めるための切り札。絶対不及者抗体よりもっと単純で合理的で、最悪に卑劣で、そして最も確実な切り札だ。恒は織図を許さないだろう。だが、それでも持っていなければならぬものだ。こんな時だからこそ、私情は一切挟めない。

「彼女のコードはレイアに教えるのが安全ですが……」

「そりゃねえだろ」

そこまで織図は、堕ちてはいないつもりだった。ファティナも同じ意見だ。

「あなたはそう仰ると、信じていましたよ」

織図を試していたファティナが嬉しそうにそう言う。

「ですから、あの方にもコードをお教えしてはいかがでしょう」

「は？」

尋ねながらも、織図はファティナが誰に期待をしているのか知っている。

「なかったのです」

「何が」

ファティナは茶目っ気たっぷりにそう言って、もったいぶる。彼女はまた興奮している様子だった。彼女の感情の変化は手に取るように分かる。

「荻号 正鵠様にはもともとバイタルコードがありません。驚きましたよ」

「何でまた！」

「彼は“アルティメイト・オブ・ノーボディの依代”として創られています。ノーボディはそのくらいの用心はしていたでしょう。彼は有限の寿命を持ちますが、彼のバイタルには何者も干渉できないようになっています」

つまり、彼は“バイタル切断では殺せない”、ファティナはまた断言した。ただし、彼が致死的な外傷を受ければ別だ。彼は肉体的に不死身というわけではない、彼のバイタルに干渉できないというだけだ。

「例外なく、誰にも殺せないのか？ それは創世者にも太刀打ちできるレベルで？」

「そうです、アルティメイト・オブ・ノーボディにも彼のバイタル切断はできません」

「荻号さんはそれ、知ってるのか？」

「いいえ。荻号様をご存知であれば、ノーボディにとって不都合なこともありましょう」

それを彼に教えていれば、ノーボディにすら荻号を服従させることができなかった。荻号を殺す方法は二つだ。ひとつは、致命傷を負わせること。これは困難を極める。何故なら彼は、共存在を使うからだ。致命的ダメージを被った瞬間に、分身に肩代わりさせることができる。彼が死を悟ったとしても、その直前に共存在を発動すれば無傷でやり過ごせる。

もう一つは、共存在を連発せざるをえない状況に荻号を追い込むことだ。荻号は過去に四度共存在を使い、残り寿命は200年を切っているそうだ。単純計算すると彼は、あと七度共存在を使えば半年以内に死ぬ。もっとも、荻号は馬鹿のひとつ覚えのように不用意に共存在を使わない。彼の戦術は柔軟だ、共存在だけが能ではない。

言い換えれば、彼はあと七度死ぬ。レイアのバイタルコードの最適な保管場所があるとしたら、それは荻号の脳だ。

かくして絶対不及者を葬る手段は当事者の苦痛をよそに、着々と準備を整えつつあった。

ひとつは、抗-A B N T抗体。

ひとつは、久遠枢。

そしてレイアのバイタルコード。

久遠枢は絶対不及者を一時的に拘束したという実績がある。抗-A B N T抗体は未知数だ。そして、最後の手段は決定的で、最も革命的であった。しかしこれは、あくまで最後の手段だ。

「ファティナ。ひとつ頼んでもいいか？」

「何なりと」

「今から31分でバイタルロックを覚えろ。意味は分かるだろ」

ファティナはきよんとした。そう、まさに屈託の無い顔をして、きよんとした。

「誰に消されるのですか？ INVISIBLEが存在せず、ブラインド・ウォッチメイカーの支配領域でもないのなら、私は誰にも消されません」

「お前が言ったんだろがよ、アルティメイト・オブ・ノーボディがユージーンに消されたって。もうユージーンは俺らの事を何とも思っ
てねーんだろ」

「そ、そんな！ そんなことは、ないと思います」

威勢よく反論してすぐに、彼女の語気はしぼんだ。彼女はまだ、ユージーンに対する情を引きずっている。ファティナはユージーンに対する警戒心を持っていない。ここでユージーンを少しでも悪く言えば、彼女は剥きになって反論する。とにかく、言い合う時間が惜しかった。

「まずバイタルロックを覚えろ。全てはそれからだ」

織図はわずか30分で、ファティナにバイタルロックの術式を教え尽くした。ものになるかならないかは彼女の努力とセンス次第だが、早く習得しなければならい何度か念を押す。できなければ、命に関わるんだぞと怒鳴るたび、彼女は悲しげな顔になった。つまりそれは、ユージーンを信じないという明確な意思表示になるからだ。

バイタルロックは神具を用いて行えばなお容易だが、神具がなければできないというものでもない。原理的には死神でなくても、神具を持っていないともできる。自らのバイタルというものを、つまり生命そのものを掌中に捉え完全に理解し、消滅させるということだ。一言で言うと、バイタルを消す。織図は、バイタル という蠟

燭に灯された生命の炎を、吹き消してしまうことだと形容した。

蝋燭から敢えて火を消し、火は種火にして隠し持っておくのだと。種火はいくら吹き消そうとしても消せないが、種火は長時間燃やし続ける事はできない。炭もいつかは燃え尽きる。バイタルロックをかけられるのは、せいぜい2日が限度だということだ。期限が切れたらバイタルロックをかけなおす、つまり新しい炭火をつくるしかない。織図はバイタルロックも完全ではないと釘をさした。

盾の継ぎ目を矛で一突きされるようなもので、バイタルロックをかけなおす間にやられたら、防ぎようがないだろ？　そう言つて。ファティナはただちに織図の言葉を完璧に理解するに至ったが、織図が彼女の習得を見届ける事はできなかった。約束の時間がきたのだ。織図は名残惜しそうにファティナをしみじみ見つめた。

「なあ、ファティナ」

荻号にレイアのバイタルコードを伝えるという用事を、ファティナに託すほかなかった。織図の電話で連絡という手もなきにしもあらずだが、荻号はあいにく電話を持っておらず、そしてその内容の機密性を重視するなら直接伝える必要がある。織図は風岳村に幾度となく降下したことがあるので、神階の門を出たらわずか一回の転移で荻号の家までたどり着くだろうが、ファティナはそうはいかない。荻号との距離がとてつもなく遠いような気がする。

彼の家を捜している間に何者かにやられてしまわないだろうか？　文型神の彼女は見ての通りだが、非力だ。そしてバイタルロックも付け焼刃とっていい。彼女を生物階に送るのは無謀だと彼も思わないではなかった。それでも、織図は定刻に特務省に戻らなくてはならない。隙を見てレイアを逃がす。その必要性を、織図はひしひしと感じていた。レイアを解放し真相を語らせなくては、いまに

取り返しのつかないことになる。

「俺ら、一体何と戦っているんだろうな」

彼はファティナに、答えを求める気はなさそうだった。

ただ、うんざりとしていた。

＊

荻号 正鵠の借家には、ひとり暮らしの彼が持て余している部屋はひとつもなかった。ある部屋は封鎖されていたり、またある部屋のドアを開けると荷崩れが起こって結局開けることができなかったり、葉びんが無数に保管されていたり、ある部屋のドアを開くと部屋の中が迷宮や砂漠だったりする。

家の外見は何の変哲もない家なのに、とにかくそんな異次元な調子だ。こんなにやらかしてしまつて敷金と礼金はどうなるんだろうか、などと思いつながら朱音は迂闊に彼の部屋に入れない。何百平方メートルもある大豪邸で遭難というのではなく、民家で遭難だなんていくらなんでも不名誉だ。朱音にとって安全な部屋はリビングとダイニング、そしてバスとキッチンだけだ。

そこがジャングルの中のベースキャンプのように思えてくるから不思議だ。リビングに面した小部屋にも、荻号の作業スペースがある。彼はそこで暖房もつけず薬草を調合して何やら怪しい薬を作ったり、ペットを飼って熱心に世話をしている。

そう！ 荻号はペットを飼っている。

だからといって散歩をさせることもトリミングをすることも、ペットショップにフードを買いに行くこともないのだが、彼は毎日手

をかけてよく観察し、何か変わったことがないかをこまめに確認しているようだ。彼なりにかわいがっているつもりなのだろう。とにかく、葉草栽培と同じくらい、ペットの世話にも時間をかけた。逆に言うと、それ以外殆ど何もしなかった。

朱音は動物全般が好きなので犬や猫なら朱音も一緒に可愛がりたい、金魚や熱帯魚でも大丈夫だ、インコでもコミュニケーションはとれるし、爬虫類系も苦手だがまあいける。どんな名前をつけたのか、まだ名づけていないのなら一緒に考えてかわいい名前をつけよう。そう思って、彼の自慢のペットを見せてもらった……そこまではよかった。

彼女は荻号のペットを見た途端に、ひどく落胆したものだ。名前をつけようとしたことすら、無謀だったのかと気付く。何というか、小動物といえば小動物の分類になるのかもしれない。彼は今日も、彼のペットのハウスを……いや、シャーレを引っ張り出している。そう、彼が飼っているペットは、細菌だ。

いや、それはペットといわない事ぐらい、朱音にも分かっている。だが、ペットの定義が愛玩を目的として日常生活で飼育している動物、というものであるかぎり、それは家畜ではなくペットの定義にあてはまった。彼は飼っているだけだ。食べるでもなく、研究するでも殺すでもなく、飼っているだけ。

世にも珍しい菌なのかと訊いたこともあるが、どこにでもいる普通の菌、とのこと。じゃ、どうして飼うのかと尋ねると、こいつらは成長が早いから、という。すぐ育つし、小さすぎて見えないのにどこがかわいいのかと皮肉を込めて問い詰めると、別に愛玩用じゃないよと困惑したように微笑んだ。

いっそ、理由があったほうが有難かった。今まで見つかった事の

ない細菌が見つかった、とか、この細菌のエキスが病氣の特効薬なんだ、とか……そんな具合に。彼が“細菌の神様”なら多少は納得しただろうが、そうでもないとなると、朱音からすればその趣味は、理解したくない部類に入る。そこで朱音は、彼の全てを理解しようとしてはならないという結論にいたったわけだ。

この点を母親に言わせると、“どんな人とも、完璧には合わないわ。だから、合うなあと思う部分で付き合っていけばうまくいくの。いくら荻号さんが変だっていっても、全部が全部変、じゃないでしょ？”、だそうだ。彼女が言うのは夫婦円満の秘訣なのだそうだが、彼は変な部分で成り立っているような神なので、それもなかなか難しい。しかも朱音が、好きだと思ってしまっているのではなおさらだ。

細菌のシャーレを手取る荻号の顔つきが、いつになく険しい。真性粘菌という細菌らしいのだが、様子がおかしいのか。たとえば全滅していたからといって、彼がペットの死を悼むとも思えない。朱音もつられて、険しい顔をした。

「どうしましたか？」

どのみち理解できないけれども、そう思いながらも朱音は念のため、訊いてみることにした。

「いかん……」

「死んじゃったんですか？」

マジックペンで英語とも記号ともつかない文字の書かれたシャーレを机の上に六枚並べ、彼は腕組みをして眺めていた。次に、手にしていたマジックペンを床にわざと落とした。彼はまた拾い、落とした。何度も、繰り返し……拾い、落とす。

細菌の死が、荻号を狂わせたのだろうか。あまりにもくだらない。

それは、新たな玩具を手にした赤ん坊がその未熟な好奇心を満足させるために何度も同じ動作を繰り返す様子に似ていた。荻号は狂ったのかもしれない。朱音の目にはそうとしか思えなかった。

「下がってろ」

気がつくと、荻号はまさに神速でシザーケースから相転星を取り出していた。

「や、やめてください！ それ、家の中がぐちゃぐちゃになります。お願いですから外でやってください！」

朱音は相転星の威力を知っている。起動するだけで家じゅうの家具が吹き飛ぶ。それを片付けるのは……朱音と荻号だ。荻号はわかったよ、と舌打ちをつけて同意すると、裸足で庭に出ていった。朱音は荻号が外に出た瞬間に、まるで彼を締め出したかったかのように雨戸まで締め切った。すぐに独特の波動というか振動が伝わってくる。ドスン、と人か何かが墜落したような生々しい音がした。

「なにごとだ」

地響きがするので、ソファでうたた寝をしていたアルシエルがとび起きてきた。

「荻号さん、どうしちゃったんでしょう。荻号さんのペットの細菌を見て、それからペンを落としたり拾ったり、様子がおかしいんです」

「細菌？」

アルシエルはあからさまに、当てが外れたという顔をする。端正な顔だが、どこか困惑しているようにも見える。それはそうだろうかと、朱音も思う。だって、いくら居候といえど、精神を病んだ神に厄介になりたくない。疫病神だった場合にはなおさらだ。

「これです……真性粘菌って言って、荻号さんのペットなんです」

説明しながら、朱音は情けなくなった。恥をさらけだすような、たとえば他人の目の前で、洗いたての自分のパンツを干さなければならぬような心境だ。彼女は首をすくめた。

「なるほどな」

アルシエルはシャーレを遠ざけたり近づけたりして、荻号と同じ類の表情をした。このヒトは、この細菌のシャーレの意味が分かっているのだろうか。確信もないのに、朱音が感じたのは劣等感と疎外感だ。苦笑されるものと思っただけに、納得されると肩透かしをくらってしまう。

「どうしてなるほど、ですか？」

「汝にはまだ難しかろう」

アルシエルが理解の追いつかない朱音に向けた表情は、蔑みではなかった。むしろ分からなくて当然だ、と優しく諭すような、悪意のあるものではなかった。口をつぐんだ朱音を気の毒に思ったのか、アルシエルは囁みくだいて解説をはじめた。

「細菌はな、単純な法則にしたがって分裂してゆくものだ。したがって単純かつ、複雑なコロニーパターンをつくる。この細菌は全て種類こそ違うが、互いに情報を交換しあいながら増殖するものだろう。したがって、シャーレ上にフラクタル次元ができる。荻号はそのパターンを分析しているのだ。細菌が、荻号の予想したパターンを作ることができなかったとき……それが何を意味するかわかるか？」

質問されても、全くわからない。訊きたいのはこっちのほうだ。

「というか……フラクタル次元ってなんですか？」

まずはそのレベルだ。アルシエルは彼女に理解させることを、諦めはしなかった。子供の理解を育む母親のようだ、と朱音は彼女の心遣いをありがたく感じた。

「そうだな……生物階の例を引っ張ってくるとすれば、樹木だ。あれは幹が一定の長さになったときに、決まった角度 θ で枝分かれる。至極単純な法則に支配されておる。だが、木が木の形をとることができなくなったら？ 遺伝子に何も欠陥がなかった場合だ」

「環境が、変化した？」

アルシエルはよくできたじゃないか、といわんばかりに朱音の頭を撫でまわした。言葉遣いが古典的で勇ましく聞こえるだけで、このヒトは基本的に面倒見がよいのだらうなと気付く。まるきり子供としてあしらわれていることには、違いのないのだが。

「そうだ。細菌はきわめて増殖がはやく、荻号はほぼリアルタイムに環境の変化を把握している。この六枚のシャーレは、どの物理学的法則が変化したかを示しているようだ。荻号はペンを落としていたのか？」

「そうです」

「重力か。三階における重力にまつわる法則が変化したというべきだな。荻号は詳細を調べている。すべて理にかなった行動だ」

賛辞を送る様子はないが、アルシエルは荻号を認めているようだった。そして荻号もアルシエルに一目置いている。実力も伯仲、互いに頭脳もさえて、アルシエルは荻号の話についていける。ひょっとして、似合いのふたりじゃないか？ うっかりすると朱音は負けを認めそうになる。荻号はアルシエルを必要としているだろう、だが朱音は一度でも、荻号に必要とされただろうか？

……神と使徒は特別な相利共生の関係にあり、アルシエルと荻号はそんな関係を結べない。朱音は4000年以上も年上の女に、少しだけ張り合っている自分を見つけた。

ともあれようやく荻号の行動に意味があったのだと分かって、彼が正気だったことに朱音が安堵したのは言うまでもない。

「しかしこれではまるで……」

アルシエルは順繰りにシャーレを掲げていたが、意味深げに最後のシャーレを取り、散らかった机の上に置いた。

“カオス（クラスIII）”がない」

「あ、この3番目のシャーレ、アルシエルさんと荻号さんの腕にある模様と同じですよ」

朱音はやや興奮気味にアルシエルに報告した。

「カオスの淵（クラスIV）が揺らいでいる」

彼女はぶつぶつと呟いている。独り言が得意なところと、周囲を置いてけぼりにする点では、アルシエルもどこか荻号と共通するものがあるのかもしれない。アルシエルが腕にひっつけている模様と、真性粘菌がシャーレ上に描き出した模様……これらは何をどうすれば、一致するのだろうか。荻号は腕の模様と同じ模様を、シャーレ上に描いたのだろうか。

そうとしか思えないほど、二つは見事に一致していた。そうなる確率って……計算できないが、「計算できない」が正しい答えだと朱音は思う。ありえない。アルシエルは神妙な顔つきをして、付け加えた。

「自己組織化ができなくなるということだ」

その何が悪いのか、朱音には分からなかった。しかし彼女の腕にへばりつく黄金の模様が何かを暗示する暗号らしいという事だけは、アルシエルにわざわざ確認するまでもなかった。

「つまりどういう意味ですか？」

アルシエルは憔悴しきった、そんな顔をしていた。年齢など感じたこともないのに、心なしかこのときの彼女は普段より老いてみえた。

「世界は、より単純になってゆく」

その手に相転星を携えて、荻号が庭から戻ってきた。鄙びた三つのリングが、無造作に束ねられている。演算中枢の月と星は無残にもばらばらになり、荻号の手の上にただの金平糖のような格好で横たわっていた。壊れていた。

荻号は壊したくて壊したのではなく、一つの事実として時空間操作系神具 相間転移星相装置が、その機能を失った。無敵の神具の末期は実に、あつけないものだった。荻号の命じたたった一つのコマンドも受け付けられなかった。

何故か。

相転星の原動力ともいえる物理法則が狂っていたからだ。物理学は相対性に基づくが、前提から覆されてしまっただろうもない。荻号はそれを見せ付けられた。この調子だと、Fullerene C60（フラーレン・カーボンナノチューブ）も起動した瞬間に壊れる。荻号は同じ過ちを繰り返さなかった。

神具ばかりではない。人が、神が、そしてあらゆるものが生きていられるのも、今のうちだ――。朱音を不安にさせないために彼が言葉を口に出す事を自重しても、現実是不変ではない。やがて全ての有形事象が、形を成さなくなってしまう。断じて絵空事ではない。

「これはもう、絶対不及者云々の話ではない。INVISIBLEは、創世者としての最低限の仕事を放棄したのだ」

アルシエルはゆっくりと、首を横に振りながら述べた。荻号が開

けたサッシから、冬の木枯らしが吹き込んでくる。朱音が猛烈な悪寒を感じるのは、木枯らしのせいだけではない。

「奴《INVISIBLE》は……いかれてやがる」

荻号は短く言い切り、その瞳を死体のように閉ざした。もうすぐだ。荻号は世界の終わりの始まりというものを、ひしひしと感じていた。何か手はないか、できる事はないのか。

ちょうどあの日も、こんな凍てつくような冬の朝だった。1万年前、アルティメイト・オブ・ノーボディが荻号を凍結した日だ。その頃の彼は命を脅かされる危機感に飢えていた。

不可能というものを知らなかったし、望めばそれほど努力を重ねずとも、無尽蔵に力が湧いてきた。勝てないものがあるなど、想像したこともなかったし、一度も敗北を喫したことがなかった。ノーボディが残した言葉を、今更のように一語一語噛み締める。

《汝に真に勝るものは、あとにも先にも存在しない。わたくしが汝以上のものを、生み出すつもりがないからだ》

『そりゃ、どうも。おかげさまで糞みたいに退屈な日々だった』

当時、文字通り天賦の才を与えられた闇神に、挑むものはなかった。平穏な時代に生まれつき、彼は真の実力を一度として発揮できぬまま、ノーボディに飼い殺しにされていた。全てを悲観して、彼が自殺を試みたのは一度や二度ではない。彼の力を必要とし、彼の助けを必要とする者たちのために、持てる力の全てを捧げたい。

——そんな願いは、叶えられることも無かった。廃神のように荒んだ闇神を見かねて、アルティメイト・オブ・ノーボディは彼を未来に送ることを決め、彼を哀れんだ。

《わたくしは汝の願いを、ひとつの意味で叶えることになる。が、次に目覚めるとき、汝にできる事は何もないのかもしれない》

そう云った。

荻号は裏の裏までを考え、ありとあらゆる可能性を信じたかった。アルティメイト・オブ・ノーボディの予言どおりに、一万年の時を越え、彼の無能を証明することになる。何のために、ここに来たのか？ 指をくわえて見ていることしかできないのか。

こう結論付けた。

「お手上げだ」

第2節 第16話 フォーリング・マセマティクス

結局、久遠柩の発動時間は予定より大幅に遅れ、神階時間にして14時と決まった。

特務省内の広いホールに嚴重立ち入り禁止区域が設けられ、織図を含めた全ての関係職員が黙々と術式の準備をしている。レイアは対神の鎮静効果のある薬剤を投与された。苦痛を大幅に軽減されたうえ祭壇上に拘束される。久遠柩が彼女に与える苦痛は誰も経験できないが、筆舌に尽くしがたいものだという。無慈悲を得意とする特務省といえど、少女神にそのような虐待を加えるのは気が咎めたのかもしれない。

鎮静剤で意識の朦朧とした彼女を中央の祭壇に縛り付けてゆくのは、織図だ。

無抵抗の彼女は、織図にその無防備な肢体を預けている。柔らかな腹部を冷えきった金色の鎖できつく戒め、幾何学紋様の彫り込まれた祭壇に結わえ付ける織図の手を、彼女は物憂げな表情で眺めていた。恨み言のひとつも言いたいだろう、と織図は慮る。彼女をここから逃がすと言いながら、真逆の仕打ちを彼自身の手で施しているのだから。

彼が加害者側に属していることは明白だ。それをレイアは見せ付けられている。

「裏切られたと思うか？ それはすまなかったな」

“……”

彼は他の職員に聞えよがしに呟く。翠色の瞳に失望と困惑がない

まぜになった、寂しげな色が浮かんだのを彼は見逃さなかった。周囲から趣味の悪い奴だと顰蹙をかっても構わない。悪役は悪役に徹すべし、と織図は更に彼女を言葉で甚振る。

「恨み言ぐらい言えよ。そんなにできた子だと馬鹿をみるぜ」

「織図」

配慮に欠いた言葉責めを、そこそこ良識的な他の職員にたしなめられた。彼女は織図を誹るでもなく依然として、少し視線を逸らすように沈黙を貫いている。沈黙は金で雄弁は銀か、と織図は溜息をついた。些細な振舞いのなかにも、彼女が生まれながらに持つ聖性を見せ付けられる。他者を憎むことを知らない、無垢な心を持った彼女は創世者の完璧な器だ。そして、ユージーンとレイアには多くの性格上の共通点がある。織図はそつと彼女の手に双繫糸を繋いだ。

『いい顔だ、その表情でいい。そのまま話を聞け。俺はお前を逃がすから。今しかないぞ、久遠枢が発動される前に逃げろ』

逃げろと云いながら、織図の手はさらに彼女を鎖で戒め、微動だにできないほどに縛りあげている。彼の言動は明らかに矛盾していた。彼がそれを引き絞るたび、権衣を着せつけられた彼女の肌に食い込む。鎖が軋む無機質な音が続いている。現実は残酷だ。

“わたしを逃がしてくださいさるのですか？”

おどおどと、レイアは織図の言葉にこたえた。どうやって、という言葉も言い添えたかったに違いない。

『共存存在を発動すると同時に生物階に転移をかける。ひとまず、恒の家を目印に転移すればいい』

“それは……できません”

瞳を閉じたまま、彼女は悲しげに拒絶している。

理由はすぐに思い当たった。恒にあわせる顔がない。彼女がそんなことで悩んでいるのなら、さほどの問題ではなかった。織図は彼女の反応を意に介さず説明を続ける。

『で、恒の家を中継してな。そこから感じる強大なアトモスフィアを辿れ。荻号 正鵠という神に会うだろう。少し遅れて、ファティナって女神が来る。そいつらに、全てを打ち明ける。大丈夫、そいつらは味方になってくれる。……多分な』

話は聞こえているようだが、彼女から返事はない。荻号にしてもファティナにしても、面識がないのだ。

レイアと”面識がある”程度の仲でしかない織図に“彼らは味方だ”と言われたところで、本音を言えるわけがない。そのうえ荻号はファティナによってレイアのバイタルコードを知らされる。彼女を殺すことのできる人物に、包み隠さず話せと強いることは、実際脅迫以外のなにものでもなかった。

荻号は彼女に“話せ、さもなければ殺す”と脅すことだってできるのだ。彼女が口を割らない場合、あるいは彼女のマインドギャップが何らかの事情で看破できなかった場合、荻号なら躊躇なくその手段を執るだろう。彼は策士だ。大の青年神が2歳の幼女神を脅迫するという体裁の悪さも一向に気にせず、その程度のことはやってのける。

『何を考えてる。お前も逃げたいだろ？ 80日も我慢するのか？』

”これから、何がはじまるのですか？”

『痛くて辛いことだ。泣き叫んだって、誰も助けてはくれんぞ』

”……そうですか”

その様子から転移を拒絶し、ここで80日間を耐え抜くつもりがあるのだと織図は察した。

“逃がしていただけるのなら、逃げたいです。けれど、共存在はもう使えません”

『!？ できなくなったってことか』

“そうではないのですが……”

彼女は先ほどから、共存在の発動を避けたがる。何が彼女を束縛しているのだろうか。確かに共存在は難易度も高くハイリスクな技術だが、それは有限の寿命を持つものへのリスクであって、不死身の彼女には危険な業ではない。様々なしがらみに縛られてのことか。彼女が本当の意味で自由になれる日は、まだまだ先になりそうだ。

“共存在を使うと、あのひとが止まれません”

『止まる？ 誰がだ？ INVISIBLEはもういないんだろ？』

止まるという意味が、曖昧模糊として分からない。ストップさせるという意味なのか、他に意味があるのか。織図には通じない。歯に衣を着せず、真実を述べてほしい、時間もないのだ。

“INVISIBLEではありません。わたしが最後なのです、だから……”

歯切れが悪い返答だ。彼女は何か重大なことを隠している。

『それだ。お前のいうそれこそがまさかユージーンなのか？』

織図は真意を確かめるようにレイアの瞳の奥を覗き込んだ。彼女は逡巡したが、唇を軽くかみ締めて誤魔化す。織図からすれば核心をついたつもりでいたのに、レイアは肯定も否定もしない。

“誰ですか？”

『ノーボディを殺した奴だよ』

煮え切らない思いを押し殺すように、織図はそう云った。どちらの肩を持ってよいのか分からないが、少なくとも織図にとって両者とも敵ではないのだ。彼女は困惑したような表情を浮かべる。彼女が答えるまでには、しばし時間を要した。

“わたしはその方を存じません。姿も見えませんし。聞こえるのは声だけです”

織図のもどかしさは、腹の辺りに走る痒みにも似ている。彼女に呼びかけているのはINVISIBLEではなくユージンだということ、織図は確信を得つつあった。そう確信したところで、いくつもの疑問は何一つ解消されない。

第一に、彼に何故そんなことができる。

また、どうやって彼はINVISIBLEと同等の力を手に入れたのか？

何故彼が彼女にステイグマを刻んで、レイアと通じなければならぬのか。

それ以前に、ユージンにステイグマを刻んでいたのは誰だ、自分自身なのか？

何故彼はINVISIBLEの真似事をしているのか、あるいはそうせざるをえないのか。

ようやく見えはじめた答えを、更なる謎が暗雲となって覆い尽くしてゆく。肝心なパズルのピースが、繋がらない。彼女の記憶に首を突っ込んで事実を確認したいが、それは無理だ。どの瞬間もバンドルに厳しく監視されている。その視線を織図のすぐ背後から感じている。

『くそっ、詳しい話は後だ。まずいな。お前を早く逃がさにやらん。共存在以外に逃げる方法はないんだぞ。転移で逃げるのは無理だ』

レイアの神体には織図の手によって無数の鎖が巻きつけられて、しっかりと固定されていた。転移防止のためだ。鎖ごと転移を強行すれば、彼女が結えつけられている床も転移に巻き込む。つまり特務省全体と共に転移をせざるをえない。

ユージーンや荻号、バンダルになら難なくできそうなものだが、彼女にはそれだけの技量はない。よって、共存在を使わなければならぬ。織図は愛娘に言っけさせるように、辛抱強く説得する。

『例えその鎖を引きちぎって転移で逃げたとしても、あるいは俺が今すぐ解いてやったとしてもだ。特務省は宇宙の果てまでお前を追う。そうならないために、お前が共存在で意識のない身代わりを置き、目を眩ませて逃げるしかない』

実際、特務省は宇宙の果てまで追ってきたのだから説得力には申し分ない。

今なら大柄な織図が彼女に覆いかぶさるような体勢で、いくらでも死角は作れる。一時的にレイアが共存在で二柱になったとしても、バレないように上手くやれる。それに、久遠枢の柱となる職員達はまだ配置についておらず、フロアは騒然としていた。さらに、織図の動きを監視しているのはバンダルだけ。逃走のための条件は揃っている、あとは織図がバンダルの視界を遮っている隙に彼女が共存在を発動すればいい。

“でも、共存在を使ったら……”
彼女はまだ躊躇していた。

『レイア、お前はこれまで訓練で何度共存在を使ったってんだ』
“……”

その回数が今更一度増えたところで、それが何になるだろう。レイアも渋々と諦めた。今は“その時”、ではないと言い聞かせて。

『冷静になれ、今は奴と約束した“その時”じゃないだろ？』

“わかりました。ステイグマはわたしが持っていてゆきます”

彼女は最低限の譲歩をみせ、遂には同意した。織図はいたたまれない。レイアの肉体に INVISIBLE を収束させることは、神階の誰ひとり望んでいない。避けられるならそれが一番よいに決まっている。

INVISIBLE を受け入れることを義務と感ずる必要はないというのに、彼女は“彼”と約束をしてしまっている。敵とも味方とも、素性の知れない存在と約束してしまったのだ。

『ステイグマはこっちに棄てちまえよ。お前は助かるんだぞ』

“できません。約束したのです。この目印はいつも、わたしが持っている”

後生大事に持っていたいものではないだろうに。彼女の頑ななまでの主張は、洗脳をされた結果なのだろうか。はたまた彼女の強い意志によるものなのだろうか。真相は闇の中。

『それは、誰と約束したんだよ。……まあいい、その件は後ほどだ。ここは任せて早く行け。できるな？』

”ええ”

自信を持って頷いただけあって、彼女の共存在は完璧だった。幽体離脱をするように存在確率を歪曲し、共存在による分身を生

じると、織図の体内に吸い込まれるように超空間転移で消滅する。自我を引き抜かれ抜け殻となったレイアは先ほどと同じ体勢で台の上に横たわっていた。

織図は落ち着いて半身を起こすだけでよく、平然とレイアの拘束を終えて持ち場に戻る。彼の去ったあとには深い眠りに落ちた少女が、祭壇の上に保定されているだけだった。バンダルは徹頭徹尾、油断なく彼女を注視していたようだ。

「織図」

不意なタイミングで、バンダルが織図を呼んだ。平静を装って彼はゆったりと振り向く。いつもと何一つ変わらない所作でだ。じわり、と織図の首筋に汗が滲んだ。バンダルはホールの一段高い場所から黒々しい瞳を眇めて、見透かすように腕組みをしている。

織図は緊張感のない声色で呼びかけに応じた。

「はい」

彼はまだ固く双繫糸を握っていた。

バンダルからの看破は不可能だ、ただ“何も考えていない”ということが看破されているだけだ。とはいえこの不自然な状態が継続するのはあまり芳しい状況ではない。

「彼女の様子はどうか」

真綿で首を締めるように、粘つくような語調で彼の上司は尋問する。

「よく、眠ってますよ。御覧のとおりです」

その言葉には何も、相違なかった。

「そうか。ならばよい」

バンダルの注意がようやくレイアから逸れ、無言でホールを去ってゆく。

織図は深く安堵の息をついた。

＊

「何を、仰ってるんですか……」

朱音は耳を疑った。

荻号は自信家ではないが、だからといって謙遜もしなかった。彼の言葉はいつも正しかったし、有言を実行するだけの力を持っていた。その彼がお手上げだと言ったのだ。

荻号は台所に向かうと、やかんに水を入れ、好物の紅茶を淹れるために湯を沸かそうとして舌打ちをした。コンロの火が、点火しなくなっていたのだ。火が点かなくなったと言ってしまうと味も素っ気もないものだが、点火に至る過程を阻む複雑な事象に変化が起ったと言い換えると、事態は深刻だった。

ガスの着火装置、つまり圧電素子が着火に至る電圧を生じなくなった、または着火点が変化したのだ。燃焼温度が変わる、これだけでも現代文明を麻痺させるに十分なインパクトとなりうる。生物階住民は可及的速やかに、避難をはじめなくてはならなかったことだろう。

彼は何気なく電源の入ったままのテレビを見遣った。先ほどまでニュースを映じていたその画面にはノイズどころか、もはや映像を結んでいない。

全てを白日のもとに晒しながら、日常は確実に侵食されていた。

変化に気付かない朱音は荻号の周りをまわりついている。

「お手上げって？ 覆水を盆にかえしたり海を干上がらせたり、天地を覆したり、そんな感じのお手上げなんですか？ それ以前に神様って、神具がないと何もできないものなの？」

彼には神具が壊れたぐらいで弱音を吐いてほしくない。修理をするなり何なり、できないことはないだろうに。現実が見えていない彼女には、彼が何故早々にさじを投げるのか理解できなかった。彼は降伏しろと言われてもいないのに自ら進み出て白旗を振る、臆病な兵士のようなのだ。

「……その程度のことなら神具があろうがなかろうができる」
軽く受け流して、荻号はぽんと朱音の手に空のカップを乗せた。

「言っただろう。世界はより単純になってゆくと。有形事象に対しては対処のしようがある。だが無形事象には神といえど介入できないのだ。殊、局所的ではない物理法則に関してはな」

アルシエルは冷蔵庫を開けて賞味期限の切れた牛乳に手を伸ばしながら、淡々と補足した。彼女は荻号とは対照的に、まだ音をあげてはいないようだ。火事場に女が強いというのは本当だな、と朱音は頼もしく思う。

彼女はコップに牛乳を注ぎ、電子レンジの中に放り込んだ。要するに荻号もアルシエルも、何か温まるものを飲んで気分を落ち着かせたいのだろう。彼女がパチンとスイッチを押しても、電子レンジは沈黙していた。彼女はこれを見ろと、荻号に目配せをする。分かっている、と彼もため息混じりに頷く。

電子レンジが、マイクロウェーブを生じない。

コンセントに電流が流れていない、レンジそのものが所定の電圧に達しない……電源が入らない原因なら、荻号にはざっと1ダースほど思いつく。

荻号はコンロの上に乗っていたヤカンの側面に手をあて、彼が両手の中で発熱させた熱量で瞬時に湯を沸かすと、予定どおり紅茶のポットに湯を注いだ。まだ、湯は100度で沸く。熱力学法則は部分的に生きている。彼は些細なことから、現象を確かめているようだった。アルシエルのミルクも、ついでに彼の手の中で温めてホットミルクになった。

「世も末とは、このことだ」

朱音がまた、理解できず置いていけぼりをくらっている。

「どういう意味なんですか？」

「つまりお前がせっせと解いてたこの問題は、今日から全部不正解だってことだよ」

朱音がリビングテーブルに広げていたノートを見下ろしながら、彼はそう言った。そこにあったのは、学校が一斉休校となった後、出されてもいない数学や物理学の難問を解き続けた彼女の努力の跡だ。

彼女は使徒であるという事実を知らされた時から、それまでにもしっかり勉強に励むようになった。頭脳だけでも神々に近づきたいという願望によるものなのかもしれない。朱音はまさにこの世の終わりだというような表情になった。とりわけ数学を得意とする彼女は全問不正解になどされたためしがないのだから、そのショックは相当なものだ。折角の努力が水の泡、とはまさにこのことだった。

「今日から間違いないんですか？　せっかく勉強したのに」
「多分な」

「そんな、数学は不変のものですし。ありえません！」

彼女がそう抗議するのもっともだ。ある日を境に答えが変わってしまふような、そんな不安定な学問だったのかとうったえたくなる。数学の神様とやらに文句を言えればいいのだろうかと彼女は責任の転嫁先を考えたが、釈然としない。

「どうする、荻号。侵食は進むぞ」

「もう、俺にできることもなさそうだ」

彼は無責任にも、そんな事を言っている。

「見損ないました。そんな簡単に放り投げるなんて。できない事はないって言ってたじゃないですか！ 荻号さんの甲斐性なし！」

あの言葉は口先だけだったのかと、彼女は言ってやりたくもなる。彼女は荻号を全知全能の存在だと思い込んでいたし、彼も言葉の端々にそれを匂わせていた。

「俺は大抵のことはできると言ったが、できない事はないなんて言うてねーぞ。おまけに、今は神具も使えねえしな」

「ほらあ、神具がないとやっぱり何もできないー！」

痴話げんかのようになってしまったどこかコミカルなやり取りを、アルシエルは賞味期限の切れたホットミルク片手に、大して面白くもなさそうに眺めている。騒々しいな、彼女はそんな淡泊な感想を述べるにとどまった。

「たとえそうでも……言わないでください。できないとか、無理だなんて。だって、あなたが諦めたらもう、終わりだって意味なんでしょう？」

朱音は紅茶に砂糖を入れながら真剣に涙ぐんでいた。彼女は荻号

ができればもう、誰にもできないものだと思っている。彼に弱音を吐かれては困るのだ。ただ実質的なところ、朱音の思い込みはそれほど見当外れというわけでもなかった。

「悪かったよ」

荻号は、適当なところで詫びをいれておくことにしたようだ。朱音を泣かせると厄介だ。

水入らずのふたりに、アルシエルが空気など読まず水をさす。空気を読んでいる場合ではなかった。

「終わるか否かを決めるのは荻号ではなからう。試みるほかあるまい、INVISIBLEとの直接対話を」

「INVISIBLEそのものがイカレてんのか？ 侵食のスピードが尋常じゃない。何をしようと、くびり殺されるだけだ」

荻号の反応はつれない。彼女は白いニットに包まれた袖をたくり細い腕を見せ付けながら、すかさず反論した。結局彼女と荻号の腕にある光の刺青、それは何なのだろうと、朱音は目じりに涙をぶらさげながら彼女の腕を見つめている。

「それは違う。我々の腕に聖痕はまだある。まだINVISIBLEは正気だ。そうでなければステイグマのパターンが依然として、カオスの淵にぶら下がっていることはない。まだINVISIBLEは、門戸を開いている。そうは考えられんか」

彼女は理性的で、なおかつ建設的だった。そんな前向きな彼女に、後ろ向きになりつつあった荻号も救われる。

「レイアIIメーターだったか。一度ぐらい、会ってみるか」

そういえば、神階と距離を置いていた荻号は一度もレイアに会ったことがなかった。彼女の様子は比企より事細かに聞いている。比

企があまりにも非人道的な手段で、彼女の成長を促したということも知っている。ただ、会ったからといって何か得るものがあるとは思わなかった。彼女と会うことはむしろ、荻号にとってリスクが多かったというだけだ。

「そうだ、お前も一緒に来るか？　ここに居ても退屈だろ」

「え、私？」

アルシエルに呼びかけているのかと思いきや、彼は朱音に話しかけていた。思いがけない誘いに、朱音はしどろもどろになった。

「来いよ」

何気なく誘っているようであり強要こそしないが、その言葉は重い。そもそも伝統的に、使徒は神の意思に叛いてはならないことになっている。もし神の言葉に随う事ができないときには自害などしなくてもよいが、その神に仕えることをやめなければならなかった。主をかえなければならぬ、ということだ。

朱音はそんな歴史的背景を知らないが、いつも彼女の意思を尊重して自由にさせてきた彼が命令口調で誘ったことなどなかったものだから当惑する。あまり面倒なことには巻き込まれたくない、そう考えたがよい言い訳も思いつかない。

「わ？　私、でも、学校がありますから」

「退避勧告が出てるのに？」

その指摘は的確だ。このまま風岳村に居残るという選択肢は、どちらにしてもありえない。

「……」

「お、お母さんに訊いてきます」

彼女の判断は妥当だった。荻号は朱音の保護者でもなければ、後

見人でもない。母親という言葉を出されては、荻号に出る幕もなかった。

朱音が帰宅するなり、アルシエルは口火をきった。

「いやに強引だな」

「仕方ないさ。あいつは俺から離れては生きられん、それにこんな時だ」

「それだけか？　こんな時だからこそ、合理的ではない。足手まといになるだけだ、彼女を危険に晒すことにもなるう。それでいて、何故連れてゆくのだ？　彼女の安全を思うなら彼女の家族とともに、国連とやらの誘導に従って神階に避難させるべきだ」

アルシエルは荻号の弁解を台無しにする。国連は生物階の具体的な救済措置を発表している。明日より、国連に加盟している192の国と地域に神階の分門が転送される。非加盟国は加盟国へ移動してゲートに入るよう指示されている。実質的には比企の指揮下にある国連の誘導にしたがって、順次避難をしてゆく段取りだ。

今日を境にテレビもつかなくなったが、先日、荻号の家のポストには回覧板が入っており、避難方法についての説明が詳細に記載されていた。朱音を彼女の家族から引き離して、無理にでも荻号と同行させなければならぬ理由はない。ましてや未曾有の非常事態だ。一度離れ離れになってしまったら、何十億という避難民の中から再び家族と巡り合える可能性もきわめて低くなるだろう。

使徒が生理現象として神のアトモスフィアを欲するというのなら、彼女にアトモスフィアを濃縮したアンブルなり錠剤なり、当座ぶんを渡しておけばよいだけだ。荻号の気紛れというにしては、度を過ぎている。

「何か言いたそうだな。はっきり言えればいい」

「次に汝は彼女に課する疑いと同じ疑いを以って、我に同行を強いるだろう」

彼女の言葉はいつにもまして文語的で、どこか予言じみている。

「ああ。心外か？」

にやりと、彼は意味ありげにほくそえんだ。やはりそうかと、アルシエルはだらしないうつろいで頼杖について彼を眺める。その遣り取りは疲弊しきった倦怠期の夫婦のようだ。一見奔放に見えながら、打算あってこそその言動だ。彼は意味もなく、無意味なことを言わない。彼と数日ともに過ごしたアルシエルはしだいに、荻号の性格というものを掴みはじめていた。

何故彼が必要なこと以外をしないのか。それは合理的ではないからだ。彼の生き様そのものが省エネであり、無駄な労力を見事に使おうとしない。性格に裏表などない、直球を体現して生きているような彼女がもっとも苦手とするタイプだった。

「いや、汝は正しい」

「あるいは、俺も同じ嫌疑をかけられるべきだ。粘菌がシャーレ上に作り出したパターンは、あんたのとは同じだが、俺のとは違っていた」

「どちらかが偽物か。では、我が汝を監視する必要があるというわけだ？」

少しだけ勝ち誇ったように彼女は顎を上に向けた。

「そう。俺らは行動を共にする必要がある」

この先どれだけの時間行動を共にしようと、彼らが仲間とはなることは決して無い。常に互いに警戒し、信頼とは無縁の関係で結ばれている。その関係を深めてゆくことはあるだろうか……。

「互いに監視し、殺しあう為にか……レイアと会うのは、彼女を危険に晒さぬだろうか」

そう、もし荻号とアルシエルのステイグマのどちらか片方が偽物だったとしたら……。レイアと会う事は、“ステイグマを刻んだ者”にとって好都合なのではないか。アルシエルは最悪の事態をも想定している。もし荻号とアルシエルのステイグマのどちらかが、“INVISIBLEと敵対する者”から贈られたものであったなら、意思とは無関係に、レイアを加害してしまうのではないか。そう思えてならない。

アルシエルはINVISIBLEの肩を持っているのではない。ただ、レイアと会うという行為自体が創世者との衝突の火種となりうることを認識している。

「INVISIBLEが彼女を庇護しているのならば、そんな心配はいらんよ」

こちらが危害を及ぼすどころか下手をすれば、荻号かアルシエルのどちらかが即死だ。荻号は言葉には出さないまでもそう思った。レイアと会う前に共存在でリスクを分散する必要があるのかもしれない、周到な彼はそう考えることも忘れなかった。

彼は朱音を待つ間にと、サンダルを履いて庭に出て最後になるかもしれない葉草の手入れをはじめた。手塩にかけて育てた彼の怪しげな植物たちも、もういくばくもない命なのだろう。彼はサッシを開けっ放しにして外に出て行ったので室内には木枯らしが吹き込んでくるが、ストーブも焚けないというなら室内も室外も大して変わらない。

「これなんて、咲かせるのに随分苦労したんだぜ」

どんな愛着があるのか、名残惜しそうにけばけばしい紫色の花弁を取り、苦笑している。どうも鼻屑目に見ても、毒を含む植物に

しか見えなかったのだが。

「ほう……これは珍しい」

アルシエルは荻号の話を右から左に聞き流し、空を振り仰いで一点を凝視し、目を眇めた。荻号は薬草に気をとられて視線を伏せており、彼女の視線の先に気付かなかった。

「だろ？」

荻号は勘違いをしたが、彼女は相槌を打ったのではない。

「いや、上だ荻号」

「？」

「こちらを目掛けて一直線に落ちてくるな。あれは何だ？ 人か？」

彼女の視力は猛禽類なみだ。荻号は促されて振り向き、彼女の捉えていた人影の詳細を判別した。荻号はアルシエルに環をかけて視力がよい。落下物がはつきりと、金髪をした少女と見破った。そして周囲にほんのりと黄金色のアトモスフィアを持つ彼女が、プライマリの神であるということも。

「何でそっちから出向いてくる。レイアだ」

彼は恐怖の大王でも落ちてきたような、絶望的な顔で見上げる。これほど急な来訪だと共存存在を使う暇も、あったものではない。彼女は意識を失っているようではあったが、荻号は救助を躊躇した。助けるつもりでこちらが即死なんて事になったら、貧乏くじもいいところだ。それこそ、死んでも死に切れない。彼女と会わねばならないとは思えど、先手を打たれるとたじろぐ。死の一撃を与えられた瞬間に共存存在を発動することはできるが、分身にも同様にインパクトを与えられたら終了だ。彼女が荻号を認識しているなら、とっくに射程に入っている。もはやこの距離では手遅れだ。

「そら、何をしておる。受け止めぬか。崖下に落ちるぞ」

アルシエルは外に出てこようともしずリビングのソファァーに居座って茶化すが、腰を上げるつもりはないらしい。

「落ちたって死にやしねーよ、レイア||メーテールなら」

「違ったらどうするのだ？ 少女がひとり、高所より落ちて死ぬ。大事件ではないのか。我はいっこうに構わんが、神が人を見殺しにしてよいのか」

解階の女皇に、神としての心構えを説かれるのだから耳が痛い。

「じゃああんたが助けてやれよ」

「助けるもなにも、自翔できん」

「自翔性能のついたツールがあるだろ？」

荻号は反論を試みたが、一蹴されてしまった。アルシエル自身は自翔できないが、ツールの力を借りれば容易にレイアを助けることができるというのに。

「それとあいにく、ツールを屋根でムシボシしておってな」

彼女は余裕綽々で、人差し指を上にくいと向けた。彼女のツール、不可侵の聖典は湿度をきらう。久しくメンテナンスをしていなかったのも、天気の良い今日を見はからって屋根のソーラーパネルの横に干していたのだ。

「何で都合よく虫干しなんかしてる！」

「書籍型だ、黴が生えぬようムシボシぐらいする」

さえずるように答える彼女は、立っている者をこき使うことが生まれながらにして得意だ。

「くそっ！」

荻号はアルシエルに救助を押し付けられて文句をたれながらも、

諦めたのか庭を蹴って飛翔した。

「いかん、重い！」

荻号は飛び上がるなり、そんなことを口走った。重いのだ、そう、体が“いつもより重いために”、うまく飛翔できない。

斥力中枢が、地上との反作用を生じなくなっている。

もしくは、荻号の神体を構成している質量数が変化した、だ。荻号は不自由を覚えながらも手を伸ばしかろうじて、崖下に転落する前に空中で少女を受け止めた。ひとまず彼女が即死、ではなく荻号が即死を免れた事に安堵しながら、彼女がレイアであることを改めて確認する。正統なプライマリの特徴を持つ女神は、神階にはたった一柱しか存在しない。転移で生物階にやってきたものの、うまく飛べずに力つきたか……。

どう見てもそれだけとはいえない彼女の消耗ぶりから、荻号は共存在と超空間転移の重ねがけをしたのだと推測する。どちらも修得している彼であればこそ気付いたことだ。そして彼女の状態は荻号にとって絶好のチャンスでもあった。やることといえばひとつ、マインドブレイクだ。彼の青銅色の瞳が、勝利を確信して鋭く輝いた。

「恨むなよ、意識を飛ばしたお前が悪い。洗いざらい犯^やらせてもらう」

1秒もしないうちに、彼女は荻号に看破され尽くされ丸裸にされる……筈だった。しかし、何度看破を試みても彼女の心層は空っぽだ。何も見えない。そう、彼女はまだ双繫糸を手首に巻きつけており、このとき荻号は双繫糸の存在を知らなかった。

「何だと？」

こちらが、共存在の抜け殻のほうなのか？　そうも疑ったが、そ

の可能性が低いことは彼女に残されたバイタル量から簡単に判別がつく。それに、より確実な証拠として彼女の背のスティグマがあり、したがって彼女は抜け殻ではない。外堀を埋められた気分だ。年端もいかぬ小娘のマインドギャップも破れないとは。或いは、マインドブレイクというスキルを荻号が失ってしまったのかもしれないとすら考えた。

「どうだ？ レイア||メーテールだったか」

彼女を抱えて着地した荻号は縁側に腰掛けると、ひざの上に向かって伏せに寝かせた。まずは分かることから明らかにしてゆかなければと、気をとりなおす。レイアは創世者からの干渉を阻む権衣を着せられて、背のスティグマは透けて見える。そのモチーフは存在確率の鍵と鍵穴の一对だ。

荻号とアルシエルは彼女の背にある鍵のモチーフを、各々の腕にあるものと比較しようとして目を見張った。一瞬にして彼らの腕にあるスティグマの真贋が明らかとなる、そのつもりだった。

「これは、何を意味している……」

ふたりは息を止めた。答えあわせをしようとしたのに、回答がついていなかった問題集を見るかのようなのだ。アルシエルの腕が泡立つ。

存在確率の鍵がない。

彼女の背にあったのは、鍵穴のモチーフだけだった。

鍵が、鍵穴からすっぽりと抜けていた。

「不完全なスティグマが三つ……何が、起こってやがるんだ！」
彼の疑問に、答えるものはなかった。

＊

陽階に戻らずそのまま陰階のゲートから極秘裏に生物階に入ったファティナ マセマティカはさきほどから自由落下フリーフォールを続けている。彼女の意味で落ちているのではない。入階衛星で生物階に出て、衛星を蹴って飛翔体勢をとろうとした瞬間から、大きく体勢を崩し地上に吸い寄せられている。

「な、何故？」

重力速度を計算しようと手帳型の準神具、 $P \neq NP$ is not N (P ≠ NP) を起動しようにも、風圧にもっていかれてページが空しくたなびくばかり。神が落下死するなど考えたこともないが、俄かに現実味を帯びてきた。生物階で飛翔できなくなっている。物理法則が狂い始めているのだ。

ユージーンは彼女を死に至らしめるためにこの罠を仕掛け、その様子をどこかで観察しているのだろうか。

”随分と不名誉な死を賜りますのね。ユージーン様。信頼しておりましたのに”

彼がどのようなつもりであれ、これが三階に下した彼の答えなのだ、ファティナは彼女に襲い来る死の危機とともに突きつけられた。彼女は聞こえるはずも無い彼からの返事を待つて更に10秒という、地表激突までの貴重な時間を費やした。

「あなたの御心はよく存じました」

彼女は下から吹き上げる激しい風に打たれながら、穏やかに地上という天を仰いでその瞳を見開いた。

「しかし！」

「こんなことでは殺せませんよ。バイタルロックもありますしそれに……」

彼女の聖衣のポケットから、キャッシュカードサイズの黒いカードを取り出した。それはヘクス・カリキュレーションフィールドとリンクさせた携帯端末だ。そもそも六方魔方陣演算空間はノーボデイが開発した巨大な計算機だ。限られたフィールドではあるがその計算結果を、限定された空間に反映させることもできた。これまではただ、必要がなかったただけだ。

ファティナの計算結果は周囲の、彼女が規定した空間の物理法則を取り戻す。迫り来る地上に激突するまでに、計算が間に合えば、だが。彼女は落ち着いて、端末を見ることがもなく爪先で数式の入力をはじめた。

「私を誰だかお忘れですか？ この数学神ファティナ・マセマティカが何度でも」

そう。変化をしただけ、再計算をして修正すればよいのだ。それは実に数学神らしい、単純な発想だった。

「再計算して差し上げますよ」

彼女が地上に落下するまで残すところ、18秒もあった。

第2節 第17話 リンゴの木の下で

比企が特務省に登省しバンドルとの接見を申し入れ、バンドルのもとに案内されたのは、久遠枢が発動されて2時間後のことだった。バンドルの部下数名に、付き添われている。

付き添いというよりは、囚人連行に近い。バンドルはバルコニーで鋭い視線で腕組みをして階下を見下ろしていた。突っ立っているのではなく、久遠枢の展開が始まった楕円形のホールを見渡せる高い場所から全体の統制を行っている。彼は比企が足労したからといって興味を示すこともなく、僅かに首を向けて寄越したただけだった。その横柄な態度は、特務省と陰陽階の実質的な立場を端的に象徴している。特務省は陰陽階に小指の先ほども敬意を払ってはいない。至極位不在の今、神階の最上位機関は間違いなく特務省なのだということを比企は直接的に思い知らされる。

「誰だ」

「比企 寛三郎と申す。陽階主神の名ぐらい覚えておいて損はないと思うがの」

生物階の大統領や総理大臣ほど頻繁には代替わりをしない権威ある位階であるというのに、バンドルは主神の名も覚ええない。

比企には心底興味がなさそうにまた、階下を見下ろす。下らない、といった表情だ。

「位神風情が。ここに立ち入る事を誰に許可され、何の用がある」
バンドルには横柄に接するだけの實力がある。比企はその点を争わない。

「生憎だが、レイアールメーテールは己が所有しておる。庇護者とし

て見届ける権利はあろう。久遠枢が適切に施術されておるかを監視できねば、即刻陽階への引き渡しを求める」

比企は淀みなく言い放った。

陰陽階神法はまだ生きているからだ。立法神であった比企は法制を熟知していた。治外法権を持つ特務省管下にあるレイアも陽階神で比企の支配下にあって、彼女の処遇は比企の意思に基づき、彼がレイアを連れて帰ると圧せば引き留めることはバンドルにはできない。バンドルは忌々しそうに欠伸をすると、バルコニーに比企を通した。

「まあよい。見よ、久遠枢発動から2時間が経過した。術式は安定しておる」

比企が視線を向けると、中央の大きな石造りの祭壇に少女が拘束されている。

彼女を同心円状に取り囲むように白い制服を着た十二柱の神々が起立したまま、無数の黄金色の稲妻らしき光条を彼女に向けて伸ばしていた。蜘蛛の巣にかかった小さな黄色い蝶のよう。彼女は微動だにせず、ホール内を静寂が満ちたしている。

「レイアの状態は」

「事前に鎮静剤を投与し、現在は昏睡状態にある。意識は混濁しておる」

人道的見地からの処置というより、レイアに暴れられるとバンドルにとっても不都合だったからだ。比企は彼女が目を開かないように願った。もしバンドルの隣にいる比企と目が合おうものなら、彼女は失意のあまり泣き出してしまうに違いない。彼女は比企を怯えこそすれ、彼を庇護者だと信じていたというのだ。

「何故だ」

バンドルは唐突に比企に質問をぶつけた。

前後の脈絡もない問いかけに、比企は眉を顰める。

「何のことだ」

「何故、“思考が停止しておる”」

「己を看破できぬと？」

比企はバンドルを憐れみ蔑むような視線を向けた。厭味を含み勝利者然とした視線が、バンドルの癩に障ったのは言うまでもない。

「……」

「“看破されうる”状態で、愚かしくも特務省に顔を出すと？」

何を当然のこと、と比企は薄笑いを浮かべた。

彼の實力はともかく隙のなさに、只の小僧ではないなとバンドルは一目置く。昔、荻号 要と師弟関係を結んだ神が一柱だけいたそうだが、確か比企という名だったか。荻号の弟子ともなれば、それなりの立ち回りをする。特務省に丸腰で登省などするものか。看破されることが火を見るより明らかな状況で、顔を見せに来るようなことも。成程、とバンドルは得心した。

「汝も少しは機転がきくようだ。だが感心はせん」

比企はそう言ったバンドルの言葉尻が引っかかった。比企“も”、とはどういうことだ？ 比企の他に何をした、誰がいるというのだ。つまり バンドルは双繫系によるマインドブレイク無効作用を言っているのか。新調した比企の聖衣に双繫系が縫いこまれているのは、比企しか知りえないことだ。

双繫系——それは荻号 要が開発した意識攪乱性準神具。かの存在は神階には一切公表されておらず、比企が荻号から与えられたものでもない。比企は双繫系を荻号の書斎から発見し、その材質を分析して真似て作ったただけだ。双繫系を所持している者が比企の他に

いるとバンドルが暴露しているも同然だ。何度も特務省からの徴用命令を受けながら、徴用を拒否しつづけた荻号は特務省と接点はなかった。荻号が双繫糸を特務省に伝えたという仮説は成り立たない。

比企はバルコニーから見下ろせる12柱の特務省職員表情を注意深く観察する。比企が看破できる職員がこの場にいるのかどうか。比企の心層は10層に対して、久遠枢の要となっている職員全員が5層以上のギャップを備えていた。ここで簡単に看破できる程度だと、そも特務省への抜擢はないか、と比企は考えを改める。

だが、何らかの役割を担って彼らの背後に控えている神々のギャップは、全員が全員5層以上ではない。比企はそのうちの一柱に目を留めた。マインドギャップ 5層の若い女神が緊張して、大柄な職員の背後に屹立している。比企はすぐさま遠隔心層看破術（RMB）をかけ、糸を手繰り寄せるように彼女の過去の記憶を暴く。そう、久遠枢発動の前後にバンドルに訝しまれた者が、たった一柱でも存在しなかったのかどうかを。

“ 織図か！ ”

比企は彼女の記憶から洗い出した。

そういえば荻号と織図は師弟関係こそ結んではないが、荻号の唯一の親友ともいえる間柄だった。双繫糸を知っていて不思議はない。まして盲目という障害を生まれながらにして負い神階の社会的弱者であった織図には、双繫糸はより重宝するだろう。荻号 要は比企に双繫糸を与えなかったが、織図には双繫糸を与えたようだ。双繫糸ひとつにとどまらず一事が万事、彼の技術を比企には盗ませ、織図には与えた。ともあれ、織図は双繫糸を帯びている。何故織図が双繫糸を帯びたか、それはバンドルに看破されてはまずい事を隠しているからだ。織図が一体何を隠すだろうか。

比企はかなり離れた距離からレイアを凝視した。
発信装置は、まだ彼女の足首にある。

「レイアはずっと、昏睡状態にあるのか？」

「鎮静剤は強力だ、暫く意識は戻るまい」

比企はバンドルの答に灰色の瞳を眇め、何か確信したように軽く頷いた。

つまり彼女は眠りについて久しいということだ。

「安堵した。少女の態をしておるが中身は赤子だ。貴公の配慮に感謝する。邪魔だてを致した」

「早い帰りだな。監視させろと言いながら？」

バンドルは引き止めこそしないが、比企の言動を明らかに不可解と感じたようだ。彼女を心配して様子を見にきたのではないのか。五分も経たず立ち去るものだろうか。特務省の中枢に来るまでの手間と暇を考えれば、もう暫し滞在しそうなものだが。

「こう見えて多忙での。生物階住民の神階への受け入れも迫っているのだ」

比企は時計を気にする素振りだ。

バンドルがそれ以上追及しなかったので、比企は会釈をして踵を返した。

“随分と大胆なことをしてくれたな、織図”

比企はバンドルに背を向けながら、心中で織図に呼びかけた。
織図はバンドルの目を盗んでレイアIIメーテールを逃がした。遠目には分からずとも、階下に見える彼女は共存在の抜け殻だ。

“何故だ”

その手間と労力にほとほと嫌気がさしつつも、彼はレイアを探索しなければならなくなった。

「織図」

比企は無意識に足を止めた。背後でバンダルがよく通る声で織図の名を呼んだからだ。

階下では織図に視線が集まっている。比企から見た織図は動揺している様子はなかった。大した奴だ。

「術を維持しつつ抜ける。三上、代われ」

織図はバンダルの一声によって久遠枢の柱の任を降ろされ、補欠の三上という神との交代を迫られた。

バンダルは比企とのやり取りで、織図への疑いを強めたのだ。不安要素を久遠枢の柱にしておくことは危険だと看做されたうえのこと。

“悪くは思ふな。自業自得だ”

比企との遣り取りによってバンダルの嫌疑をかけられた織図はこれから厳しく尋問されるだろう。しかし、比企にはそれを止めることもできなかった。また、何らかの法的措置を講じて彼を救おうともしなかった。

＊

「やはり、まだいたな」

特務省から陽階の執務室に戻った比企は恒には目もくれず、冷ややかに遼生を一瞥した。

悪意のある視線ではないが、決して許容はしていない。

「つもる話もありまして。足止めをしたのは俺です」

恒は遼生を庇う。遼生は潮時とみて比企に深々と頭を下げると、すぐすごと出てゆこうとした。

恒とはまだ話したいことがあるが、叩けば埃の出る身だ。比企と衝突する危険を冒してまで長居をする理由もない。

「長々と、失礼いたしました。早々に退出いたします。さようなら。少しだったけど、君に会えてよかったよ」

「こちらこそ」

恒は別れの握手をしながら、薄型携帯をそっと遼生の手握らせた。

「これ、饞別に。ミュージックプレイヤーです、俺がいつも聴いている曲が入っています」

「ありがとう、大切にするよ」

遼生との連絡手段を確保しておくことは重要だった。

遼生は恒の目を覗き込むと、軽く頷きそれをポケットにおさめた。恒の瞳を見た瞬間に、これがミュージックプレイヤーではなく携帯だと気付く。いつでも連絡が取れるようにとの意図だ。

「汝は」

ドアに手をかけ、遼生がいよいよ出て行こうとしたとき、タイミングを見計らったかのように比企が声をかけた。何を言われるものと遼生も身構える。この部屋で、これだけの至近状態から仕掛けてくることは考えにくいが、呼び止められるだけの用事があるとも思えない。恒が携帯を渡したことを、比企に見破られていたのか？ 遼生は低頭姿勢のまま、高まる鼓動を悟らせず平然と向き直る。

「はい」

「調べたところ神籍がないが。一体、どこに戻るつもりなのだ」

「私はもともと先代極陽に実験体として生み出され、使徒階に収容されていた身です。使徒階に戻ります」

「それでよいのか」

遼生は返事に窮し口をつぐんだ。

母親のもとに戻るつもりはない。しかし戻る居場所もなかった。使徒階では八雲 青華の指示で遼生の大規模な捜索が行われている。戻るなり重犯罪者として捕えられ、再び監獄に押し込められるのは目に見えていた。逃げようにも、出生記録がないため神階から外には生涯出られない身だ。戸籍のない私生児の境遇は厳しい。閉鎖された神階では居場所も、逃げ場もなかった。

「己は汝が何者なのかは知らぬ。汝が神か否かということすらも疑わしい。だが、まことに汝が先代極陽によって創出された実験体であり、その歳を経るまで家畜以下の扱いを受けていたのだとすれば、汝を保護する責任がある。名は何という」

比企は心なしか、遼生に目配せをしたようにうかがえた。

「八雲 遼生と申します」

「本置一致の神か。日本由来でもなさそうだが」

「いえ、通名はアイザック・スミス（Isaac Smith）と申しますが……」

遺伝子を調べるまでもなかった。彼は欧州由来の神であり、日本由来ではないことは外見的にも一目瞭然。

通名を拒む理由はただひとつ、父親と同じ姓を名乗りたくないからだ。比企は彼の複雑な心情を汲み取ってやる。

「藤堂も新末 恒とは名乗っておらん。如何様にでも名乗れ」

「日本由来でなければ、置換名を名乗れないのでは？」

日本由来でない神は、置換名を通名として名乗ってはならないという慣例があり、わざわざ破る者もなかった。

比企は執務机につき、羽ペンを取り上げ数枚の書類をしたためると、極陽の御璽印を捺印した。

「慣習は所詮、慣習だ」

「ありがとうございます。ではこれからも、八雲 遼生と名乗ります」

「響」

「ここに」

静かに控えていた寧々が、絶妙のタイミングで返事をする。

比企は書きあげたばかりの書類をぺらぺらと振ってインクを乾かすと、封筒に入れ厳封し寧々に手渡す。

「令状だ。この者、八雲 遼生に神籍を与え、藤堂と同じく陽階アカデミーの特待生として己のもとに所属させよ」

温情をかけたようでありながら、手元に置き行動を監視する。

遼生はMind Response Imaging（心層応答結像法）で比企の本音を看破し、その抜け目のなさに感服した。

勝手な行動を取らせないよう事実上の軟禁と変わらない。

「ご高配を賜りまして、光栄の至りです。以後、宜しくお願いいたします」

遼生は困惑したような顔をしかけたが、空気を読み愛想よく礼を述べた。もつともこのような折に、極陽に召抱えられたとて何になるう。

それでも、身元を確かにしておくことは、謂れなき疑いや追われ続ける不安定な立場を解消してくれる。

また、恒も比企の思惑に勘付いたが口を挟まなかった。遼生に本

当に居場所がないというのなら、使徒階で放浪しながら暮らすより遙かにここは居心地がいいだろう。比企の庇護があるというだけで、少年神ながら成神と同等に扱われる。大抵の知識はここで得られるし、設備や情報も整っている。

遼生はすぐさま寧々に連れられて、神籍登録の手続きに向かった。二年前に恒が体験した登録の続きと同じ手順で、彼の登録が行われるのだろう。フィジカルレベル 7万を超える実力を持つ彼は神体検査で位神達を驚愕させるに価する、衝撃的な数値を叩き出す。彼の神体情報が暴かれる事は彼にとって有難くないことではあるだろうが……。

遼生が去ったあとに残された恒は、パソコンを立ち上げ、書類に目を通していた比企に核心をつく質問をぶつけた。

「今しがた、どこにお出かけに？」

恒はレイアの様子を聞こうと畳み掛けた。

遼生の言うように久遠枢が発動されてレイアの拘束があったとすれば、いくら何でも比企が戻ってくるのが早すぎる。予定通りに事が運ばなかったのだろうかと思っただのだ。

「取るに足らぬ雑事だ。藤堂、己は数日ここを空ける。兄に適当な部屋をやり、水入らずで過ごすといい。何か用があれば連絡を」

比企は恒の追及を避けた。恒は深追いをしない、何事も頃合が大切で、比企は一度喋らないと決めたら強情だ。ここは一度罪悪感を押し付け、彼から譲歩を勝ち取るほうが賢明だ。恒はここぞとばかりに切り出した。

「その間に生物階に降下してもよろしいでしょうか」

「何の用がある」

比企の眼光が鋭い。

不在の間にレイアを捜しに行くものと疑っているのだ。一度出たら最後、脱兎のごとく逃走すると踏んでいる。

「生物階にひとり残してきた母の様子が気になります。半日だけでも」

肉親と会いたいという願いをむげに却下することはできない。

「塚本と望月を連れてゆけ」

「……」

比企はその場で塚本と望月という人物にメールを打とうとした。

第二使徒 塚本^{つかもと} 祀^{まつり}と第三使徒 望月^{もちづき} 沙苗^{さなえ}というと比企の腹心中の腹心だ。恒は単独行動を許されていない。

「あの、塚本さんと望月さんはとても有能な方ですが、使徒の方です。今の生物階へ同行いただくのは不安です」

「だからといって共もつけずに降下することは許さん」

「その代わり、兄についてきてもらってもいいですか？ 彼はきつと頼りになります。もし兄に断られたら、その時は塚本さんと望月さんにお願ひしますので」

比企の最初の提案をたてるために、一言添えておいた。

「……まあよい。戻らなったら、己が連れ戻るからそのつもりでおれ」

「わかりました」

恒はおとなしく聞き分けた。

＊

遼生が部屋を出て二時間後、G L—ネットワークの新規登録者の欄に八雲 遼生の名が掲載され、詳細な神体情報が明らかにされた。恒は今や遅しと待っていたので、更新直後の情報が目に飛び込ん

でくる。

興味がないように振る舞いながら、血をわけた兄弟の真価はいかほどのものか。食い入るように画面を見つめる姿がデスクトップに映ってふと冷静になり、深呼吸してのけぞる。遼生をかなり意識していることに気付かされて、それを不本意と感じたからだ。

本名／置換名 八雲 遼生

経年… 17

マインドギャップ… 7層

フィジカルギャップ… 49層

標準偏差… 72

フィジカルレベル… 60015

体組成… 使徒に酷似する

血液組成… 正常

アトモスフィア放散量… 2400mg/sec

アトモスフィア組成… 中間体

使徒に酷似するなど、余計な事を書かなければいいのにな、と恒は総務省の表記方法の配慮のなさに不満を唱えつつ、別のことで目を見張り、感心して思わず唸った。枢軸に忌憚なく解説するとすれば、遼生の実力は彼らを軽く上回っている。植物状態だったという7年間のブランクが嘘のようだ。

鍛えれば鍛えただけ、彼は要領を得て伸びるタイプだろう。しかも彼は、たった今もかなりの余力を残している。目ざとい恒はフィジカルギャップの層数が示す意味をよく理解していた。

当の本人、遼生は寧々とともに予想外に早く戻ってきた。

恒は神籍登録に半日を要したものだが、極陽の第一使徒が同伴とあって手続きはかなりスムーズに進められたのだろう。結局、遼生

は比企の令状が功を奏したのか、何のお咎めもなく本置一致の陽階神として認められ、そのまま八雲 遼生と名乗る事が許された。アトモスフィアの組成は神階でも珍しく、中間体^{ニュートラル}。陰階神とも陽階神ともつかない不安定な組成だったが、陽階に入れられたのは総務局の事務方の配慮だという。

「ただいま、戻りました。案外早く終わりましたよ。令状がありましたからね」

寧々はそう言いながら両手にどっさりとかかえていた書類をどっこいしょと執務机に載せると、くたびれた顔をしてみせた。白兎のように艶やで清楚な印象の自慢の髪の毛も手続きの間に乱れたらしく、ブラシで撫で付けてピンで束ねていた。

「どうもお世話になりました。今後ともよろしくお願いします。居候ですが自分のことは自分でやりますし、何かお役に立てることがあればいつでもお手伝いします」

「まあ、何とできた方なのでしょう。こちらこそ飲んでお仕えさせていただきます」

遼生は寧々に礼など述べている。

年のわりに礼儀正しい少年だ。寧々はひとりで三柱の神々の身の回りの世話をしなければならなくなって重荷に感じていたところを優しくねぎらわれて、遼生にかなり好感を持ったようだ。兄の振る舞いに感心しつつ、

「おかえりなさい、お疲れ様でした」

晴れて戸籍を得て、野良猫が飼い猫になった気分だよ、と遼生は笑う。少し居心地が悪いね、と照れ笑いをする彼に、猫なんて見たこともないだろうと恒は内心つつこんでおいた。遼生の知識のほとんどは、書物と他者の記憶に基づいている。彼に足りないものは現

実の体験だ。夢の中で生きているような覚束なさが、彼の儚げな雰囲気を出しているのだろう。

「測定の際、故意にフィジカルレベルを低くしましたね」

「買いかぶりすぎだよ」

遼生は屈託の無い笑顔を？ける。その表情の裏に隠された素顔を、恒は見ることができない。ただひとつ、彼は嘘をつかないということだけは知っている。嘘をつかないと固定観念を植え付けておいて敢えて裏をかくという手もあるが、そこまで打算を打っているとは思えなかった。しかし、不自然な現象が起こっている。

「フィジカルレベルとフィジカルギャップがつりあっていませんよ」
フィジカルギャップの層数は、フィジカルレベルにほぼ正比例する。フィジカルギャップだけ極位並みに突出していてフィジカルレベルが枢軸中堅程度というのは無理のある話だ。

遼生が故意にフィジカルレベルを抑えたのは、明白な戦略的な意図あつてのこと。彼は笑って誤魔化すと、懷に手をつっこんだ。彼は恒が神籍登録をした日と同じく、丈の長い清潔な白衣を着ている。勿論、彼の神体からは陽階神として身を清めたことを示す、陽階指定のハーブの香りがふわりとした。

「よろしく。成り行きでここにお世話になるみたいだ。これは、どうしようかな？」

遼生は懷から取り出したさきほどのiPodを恒に返そうとした。ひとつ処に居住するというのなら、携帯電話など必要のないものだ。恒は手を出さず、それと全く同じものをポケットから取り出した。

「差し上げますよ。ここにもうひとつありますし」

「そう。ありがとう！　これ、いい曲ばかりだね。センスがいいよ」

「俺が集めたものではありません」

iPhoneの中身は主に、ムジカのチョイスだ。彼は幅広い趣向を持っており、音楽ショップの店員のように音楽愛好家の神々や使徒たちに洗練されたプレイリストを配信していた。恒自身は音楽に造詣が深いということもなく、レンタルCDショップのカードも持っていなければ、自分でCDを買ったことすらもない。

「んー。そんなに他人行儀にしないでくれ。兄弟なのに冷たいな」
遼生はさも遺憾だ、という声を出す。

「正確には、義兄弟です」

恒は丁寧語を保ちつつも、ぴしゃりと遼生を疎外した。その素っ気のなさに遼生は閉口し、何か機嫌を損ねるような事をしたかと思いを巡らす。そして彼はたった一つだけ、恒に釈明をしなければならぬ事に気付いた。つまり、レイアの居場所についてだ。

恒は遼生に不信感を抱いていて、それが恒の言葉の端々にあからさまに出てくる。感情の起伏に乏しいようなので一見しては分かりにくい、恒は怒っているのだ。

「どうも信用がないみたいだね。けれど嘘は言っていない。久遠枢が発動されたのは本当だ」

まったくもって言い訳が、言い訳がましい。遼生も多少は言葉を選べばよかったと反省している。恒は嘘と見透かしたような、そんな敵意をたっぷりと含んだ視線を隠そうともしない。

「では何故、比企様がこれほど早々に戻られたんですか」

「久遠枢が発動したけれど、レイアという少女はそこにいなかったそう」

「レイアがいないのに久遠枢が発動する筈もないでしょう」

恒はすぐに切り返すが、遼生は慌てない。取り繕う必要もなかった。

た。冷静な遣り取りの応酬は、黒を貴重として落ち着いたデザインの無機質な室内の温度をぐっと下げるかのようだ。

寧々は恒が苛立つ様子を見て何か口を開きかけたが、結局首をすくめて出て行った。あとで、暖かい茶を淹れて茶菓子とともに持つてくるつもりだ。大抵の場合、それでまるくおさまった。

「比企様が戻ったとき、君は僕と比企様を同時に疑った。何か不都合が起こって、久遠樞が予定通りに発動しなかったのではないかね。君の思考回路はどうも、性悪説に基づいている。誰かを疑い続けなければ、生きづらい人生だったのかな？」

愛想よく微笑みながら、鋭く抉ってくる。

恒は不快感を露にすることはなかったが、眉根を寄せた。

「余計なお世話です」

「別に非難している訳じゃない。そのせいかとても勘がいい。だから君には、MRIは必要ないんだ」

「あなたは、特殊な看破法を身につけていますね。マインドブレイクより鮮明に物事を見通している。そのあなたが何故整合性のない事を言うんです。そのことに気付いていますか？」

恒も表面上は穏やかな物言いだが、苛立ちが言葉の端々に出てしまっている。挑発は逆効果だったか、と遼生はまた反省をした。どうも遼生が恒に何かを言うたびに、恒の神経を逆撫でしてしまっているようだ。

「物事がクリアに見えすぎるというのも困ったものだけだね。君のほしい情報は何だろう。そうそう、織図様を知っている？」

「ええ」

神階で織図といえば、わざわざ名前を尋ねなくともあの織図 継嗣しかない。以前、渡鬼DVDを制覇して暇を持て余した織図が、Google検索で暇つぶしに“織図”という姓を検索して、織図姓がないと残念がっていたから、生物階には存在しないか、かなり希少な名前だ。

余談だが、“比企”という苗字は5000位台にランクされていて、そのことが織図には余計に悔しかったようだ。ちなみに“藤堂”姓は2000位台だったが、当然だ。神々の当て字のような姓とは違って、真っ当な日本人姓なのだから。そんなくだらないことはともかく、織図と言われれば織図 継嗣しかないなかった。

「レイアという少女を逃がしたのは織図様だ。彼女には影武者のようなものがあるのかい？ 身代わりをおいて逃げたと、比企様は推測している」

彼は曖昧な表現を用いたが、どう考えても共存在を示している。

「……共存在！ 織図さんが、彼女に共存在を使わせたということですか」

「事實は知らないよ。共存在が何かということもね。ただ、比企様がそう応答しただけだ。彼女はどこへ逃げたのかな。君の推理を聞かせてくれ」

遼生は今回は断定を控えた。またあやふやなことを言って、恒に不信感を植え付けたくはなかったからだ。

「その前に教えてください。彼女は特務省に、どこで保護されたところ？」

「宇宙の果てともいえる場所だそうだよ」

比企の情報に基づいているため、具体的なことは分からない。実際に保護したのは比企だった、というわけでもないし、それがど

こかということは特務省からは明らかにされていない。恒は両手ですっぱりと顔を覆い、暫く考え込んでいるようだった。遼生はせかさず、じつと義弟の様子を見守っている。傍目から見ると食堂のお絞りで顔を拭いている、ただの少年のようだ。

「わかりました。レイアは今、生物階にいます」

長い沈黙ののち、恒はきっぱりと断定した。その推理力が確かなものかどうかは分からないがとにかく、彼はそれ以外の可能性を疑ってすらいらないようだった。

「あなたもついてきてくれませんか、生物階に」
「どうしようかな」

拒絶はしないが、誘いに乗りもしない。遼生の受け答えは柳のようで、依存されることを望んでいるようでもあった。

「もし彼女が荻号さんのもとにいるのなら、俺ひとりでは立ち打ちできません」

織図が手引きをして共存在で彼女を逃がすとしたら、神階の織図の執務室か、生物階しかない。織図は用心深い神なので、自室に逃がすことはしないだろう。彼女が途方にくれるだけだ。

彼は荻号のもとに身を寄せろと言った筈だ。荻号は神階と距離を置き、中立を保っている。特務省が追っ手を差し向けたとしても、彼女に危険が及ぶことがあれば、止むを得ずか、否応なしにしてもレイアを守ってくれよう。生物階は危険だが、荻号のもとであれば多少は安全だ。

「少し落ち着いて。疑問なのだけれど、君は彼女をどうしたいの。だって……彼女は逃げたのだろう、君から。その意志は尊重しないのかい」

追いつがっては彼女に迷惑なのではないか。恒が彼女を追うことで、彼女は息苦しさや閉塞感を味わうのではないか。遼生はそこまではないが、行間には充分に読んでとれる。

「もう、俺の声は届かないのかもしれない。彼女を苦しめるだけなのかもしれない。それでも」

恒はそこで言葉を区切り、何かを確かめるように瞳を閉ざした。

「会って、彼女に何が起こったのかを直接聞きたいんです。最後の時まで、俺は彼女の味方でいたいから」

彼女を失ってはじめて、一番の理解者であり味方でありたいと思っていた恒が彼女の逃げ道を塞いだり無言の重圧を強いていたのかもしれないと思い知らされている。彼女に訊ねたい。まだレイアにとって恒は必要な存在であるのか否か。

はつきりさせたい一方で、それは躊躇われる。結論を押し付けられるのが怖い。そう、恒が彼女にとって、必要のないものだとはつきり告げられる事を、できることならば回避し続けていたかった。恒が逃げれば逃げるほど、彼女の心もまた遠ざかってゆく。訊かなくてはならない、そしてどんな答えでも受け止めるという覚悟を、心に決めなくてはならなかった。

「彼女のこと、そんなに好きなんだ?!」

「守りたいと思うだけです」

遼生は感歎のため、目を丸くして叫んだ。からかわれているのかと恒は感じたが、他意もなさそうだ。

「好きだとか、そんなこと思ったりできるんだ」

そう言った遼生の声に少しだけ羨望の色が混じっていたように聞こえたので、恒は反応に困った。あたかも彼が持たなかったものを、

羨むかのようだ。

「……」

「ごめん、困らせるつもりはなかった。ところで君のいう萩号という神は陰階4位の、あの萩号 要様のことだね？ 生物階にいらっしやるって、墮天されたわけ？」

看破能力に長けているとはいえ、遼生の知識は7年前のままだ。7年前の萩号といえば萩号 要を指し、萩号 正鵠ではない。ヴィブレ＝スミスの訃報ほどではないが、彼は驚いていた。

萩号の失脚は、当時ならばトップニュースもいいところだ。

そして、萩号を墮天させるほどの出来事とは相当のものだ。謀略か、追放かの二択が濃厚だった。

「大雑把に言うのと、間違いではありません」

恒は細かい訂正をしなかった。もともと彼らは同一人物ではないが、萩号 要の神体は確かに共存で別たれた萩号 正鵠のものであったからだ。萩号 正鵠はINVISIBLEに対する絶対不及者と同じような目的でノーボディによって創出された、いわばノーボディの依代だ。萩号 要という神が萩号 正鵠が憑き物に憑かれた状態だったといえ、同一人物といっても差し支えはない。

厳密に細かいことをいえば、少し違うようではあった。何と云うか、萩号 正鵠は変神であることにはかわりはなかったとはいえ、萩号 要より随分と親しみやすい雰囲気を持っている。そこで朱音が彼の家に入り浸ってしまった、うまくやっているのだ。萩号 要であれば、それが朱音でなくとも、意思疎通すらもままならなかったことだろう。

「よく分からないけれど、君は彼女が萩号様のもとに身を寄せたと仮定している。彼女が君に会いたくないと言った場合、その萩号様

と争ってでも彼女に会うつもりがあるのかい」

「最悪の事態ですね。勝算はまず0です」

恒は即答した。荻号に何が起こっている、彼を出し抜いたり、負かす手段があるとは考えられなかった。彼がレイアを庇おうとするかどうかもよく分からないものだ。彼が誰かの肩を持ったり、誰かとつるむなどとは考えられない。基本的に荻号は孤高の神であり、誰とも迎合しようとはしなかった。朱音の言うには、何でもひとりでできてしまうところが彼の魅力なのだというが……悪く言ってしまうえば悉く協調性に欠ける人物だ。

知り合いだからといって便宜を図ってもらえるのは甚だ甘く、彼の場合手が滑っただけで致命的な一撃を与えうる。くしゃみをして目をつぶっただけでうっかり殺してしまったなどという不幸な話が、彼に限ってはあり得るのだ。荻号 要はあの偉神ジーザスを、それがうっかりかどうかはともかく、現に殺してしまったている。

「レイアという子に会う事に拘らなければ、僕がMRIで彼女を看破してもいいけど」

「会わずに看破を？ 相手の顔も見ずにですか？」

あたかもそれが最も困難なことだといわんばかりに、恒は耳を疑っている。遼生は恒が表情を崩したのでニヤニヤと、愉快そうだ。親に相手にされなかったものを必死で気を引いてようやく構ってもらえた、幼児のようでもある。

「Mind Response Imaging（心層応答結像法）とは、アトモスフィアを範囲内の対象にぶつけて、跳ね返ってくる心理反応を見ている。対象の顔を見る必要などないんだ」

「範囲……ということはレイアのみならず、荻号さんの看破も？ まさか！」

「範囲を限局するけども、彼女と荻号様が密着していた場合には仕方ないだろうね。たとえばいかに荻号様を看破したとしても、勘付かれることはない。マインドブレイクの体感侵襲度を100とする
とMRIの侵襲度は」

彼はそつと人差し指をこめかみに突き当てた。衣擦れの音ひとつさせない、静かな動作でだ。水面から静かに魚を狙い済ます、穏やかな水鳥のような雰囲気を持っている。水中の魚からは見えない死角から、電光石火の速さで狩られてしまいそうだった。

「たった1だ。この1に気付く神ははっきり言って存在しない」

恒は荻号 正鵠という人物をよく知らない。彼にまつわるデータはタブーとして、神階には存在しないからだ。ここ二年間の実戦データもなければ、過去のデータも存在しない。が、彼を出し抜けるなどとは夢にも思わなかった。まず彼と敵対するという発想にすら至らない。恒が荻号の前に立つときは、ひたすら看破されないよう防戦一方になるだけだ。

攻撃は最大の防御だと、常々身に刻み込んでいるセオリーが彼の前でだけは通用しない。別格なのだ、彼は。

「それでももし、荻号様が仕掛けてきたら……」

彼は詩を朗読するように声色を落とし、恒の反応を観察している。

「応戦してもいいんだね？」

恒は自分とよく似た遼生の顔を驚愕をもって見つめ返したものの、即座に反論も否定もできなかった。大人しく清潔感のある彼の瞳の奥に滾る、彼の生来の闘争心というものが垣間見えたからかもしれない。それは恒が持ち得なかったものであり、ヴィブレルスミスが

彼に与えたものだった。

そう。

鋭い牙を持ちながら決して噛まない事を飼い主と約束した飼い犬が、例外的に相手を噛んでもよいかと伺うような……そんな雰囲気です、遼生は恒に念押しをしていた。彼は自らに危害が及んでも牙を剥かないが、飼い主に危険が及ぶ場合にのみ躊躇いなく相手を噛む忠犬なのだ。

彼はどんな存在なのか。ヴィブレースミスは如何なる理念を持って、彼という神を創り上げたのか。

彼は恒と似ているようでありながら、恒とは真逆のコンセプトに基づいて設計された検体なのだ。恒が静ならば彼は動。恒が陽であれば、恒の真上から更なる影を落とす。恒が浄であれば、不浄の烙印を突きつけるものだ。彼の全てが、恒の持ちうるあらゆる武器に勝っていた。そしてその刃を研いだのは他の誰でもない、彼の父親だ。

「どんなに強く賢明でも、だからといって完璧ではない」

駄目押しをするようにそう言った、遼生の表情に恒は竦んだ。何故なら、彼は荻号 正鵠ではなく、荻号 要を想定しているからだ。あの荻号 要と何の用意もなく戦える自信が、遼生にはあるのだ。少しでも保身を考えるなら、冗談でもはったりでも、そんな事は億尾にも出さない。つまり彼は、本気なのだ。

「荻号さんと、戦闘行為を！？ まさか……無謀です」

「無謀？ そうかな」

心外だ、と付け加えたかったに違いない。

＊

別室に連行された織図は、差し向かいでバンドルの前に立たされている。

20平方メートルほどの、内装にも気遣いのない、打ちっぱなしのコンクリート質の素材がむき出しとなった殺風景な部屋だ。

壁は厚く、足音は硬質に反響するが外部の音は一切といって聞けない。織図はこの部屋を覆いつくす、鬱屈した空気を感じ取る。

足元には、石畳に赤褐色の血染みがこびり付いている。織図の前には石碑のようなものがあって、金属環があった。この部屋が過去どんな目的で使われたものか、それほど考え込む必要はなかった。

特務省の意図に叛いた者を私刑にかける拷問室。

バンドルだけがここで私刑を執り行っているとは思わないが、彼に断罪された者も一柱や二柱ではないだろう。彼らがその後どうなったのかは知らない。織図は身の危険を感じたが、もはやどうすることもできない。直立不動の織図にバンドルが尋問する。

「何故、この状況下で“無心でいられる”」

「……」

織図は弁明できない。

「服を脱いで、手をそこにつけ」

織図はその命令に従うべきか悩んだが、観念して制服の上着を脱ぎ、上半身をあらわにした。

「全部だ」

バンドルの語調は容赦する雰囲気ではない。織図は抵抗するのも無意味と心得て、潔白を示すように一糸纏わぬ、いや実際は一糸だ

け纏った褐色の肌をバンドルの前に晒す。双繫糸は織図の腕の皮下に縫いこんできた、バンドルからは絶対に見えはしない。

織図が黒い石碑の上に手をつくると、バンドルは織図の手首を金属環で戒めた。不快な冷感が、彼の背筋にぞわりと走る。バンドルは織図の鍛え上げられた神体の隅々に、たっぷりと屈辱を押しつけつつ、何の感想を述べることもなく目を配った。怪しいものは持っていない。バンドルは直接的な意味で織図の全てを見ているというのに、依然として織図を看破できない。

「比企と同じ手口だな。何を、どこに隠している」

彼は立ち上がり、吐き棄てるように呟いた。身長193cmの織図に対しても195cmのバンドルの視線は威圧的だが、身長差はさして問題ではない。バンドルの纏うアトモスフィアに織図のそれが消され、場がすっかり均されてしまっている。この状態は神々の間で“埋没”といって、極度の實力差が発生した場合にのみ起こりうる。そして二神間が“埋没”の状態にあるとき、マインドイレースやマインドコントロール、フィジカルギャップの形成など、アトモスフィアを介して行使する一切のスキルが、相手に通用しなくなる。事実、抵抗は不可能だった。

「何のこと……」

言い終えないうちに、織図はしたたかに脇腹を蹴られ、床に叩きつけられた。“埋没”状態にあることでフィジカルギャップを無効化されたうえバンドルの鉄鎚を容易に穿ちこまれ、織図の脇腹に鈍痛が走る。ここ数百年も味わうことのなかった彼の血の味が、苦い屈辱とともに口の中に広がってゆく。手首を拘束されているので、のけぞることも避けることもできない。バンドルの攻撃は必ず織図に命中し、急所をずらすこともかなわなかった。

「喋る気がないのならその気にさせるまでだ。そこに直れ」

織図がわけもわからぬまま立ち上がるとまた、ハンマーのような重い蹴撃をくらう。残念ながらバンドルは手加減をしたり飽きる、ということを知らない。織図が立ち上がれなくなり骨を一本残らず折られるまで、この一方的かつ残虐な暴行は続くのだろう。

レイアの様子を監視していればいいものを……織図がそう願っても仕方がない。バンドルが久遠枢発動中のレイアの監視を怠って直々に手を下しにくるのだから、織図を危険因子と見なしてのこと。その疑いは、簡単には晴らせそうにない。特に織図がこのまま黙秘を続ける場合には。

しかし織図にも意地というものがある。

苦痛に耐えかねて口を割るということは、彼に限ってはあり得なかった。彼は無言で立ち上がり、幾度となく攻撃を受けた。どうせ殴られるのならと、ガードもせず無防備の状態になる。無駄な体力を使うだけ損だ。好きなだけ殴ればよい、それで彼の気が済むのならば。保険はたったひとつだけかかっている。バイタルロックをかけている限り、織図を殺すことはバンドルにも出来ない。

たとえ致命傷を被ったとしても織図の死は保留される。ゾンビのよう、というよりはまさにゾンビそのものだ。織図はバンドルのバイタルコードをも掌握しているが、身の危険を感じたぐらいで軽々しくバイタル切断は使わない。たとえその判断ミスによって、かなりの重症を被ったとしても。

「なかなかしぶとい奴だ。だが、感心はせん」

感心をしないというのはバンドルの口癖だ。機嫌の悪いときに、この口癖をよく聞いたような気がした。彼は極度の二面性を持っている。人望の厚い信の置ける人物である一方で、一度彼の逆鱗に触

れると手のつけようがない。

「これしきのことであなたに潔白が証せるのであれば」

織図は口から溢れた血をその場に吐き捨てた。

「甘んじて受けますよ」

その言葉に二言はない。織図はそう言いながら、身体罰に黙して耐えたユージーンを思い出していた。彼は、バイタルを残しながら死亡した豊迫 巧という少年の死を見咎め、織図の許可もなく蘇生させた罪で身体罰を受けた。あの数週間もの間に彼が受けた苦痛は、織図の苦痛の比にもならない。

この責め苦が理不尽ではあるがこれしきのこと。彼はそう彼自身に言い聞かせた。バンドルは精密な機械のように、あたかもそれが彼の仕事だというように黙々と無抵抗の青年神に暴行を続けている。この暴行を生きて切り抜けたとしても、最悪で特務省を解雇されるだろうな。彼はそう覚悟した。肉体的な刑罰より、社会的処罰の方がこたえる。バンドルは疑わしきものはすべからく罰するタイプだ。容赦などしないだろう。

打ちのめされた回数を数えながら時間をつぶしているうちに、暴行が始められてからおよそ2時間が経過しようとしていた。さすがの織図も意識が朦朧として、立ち上がる足取りもおぼつかない。織図の腕に縫いこんでいる双繫糸は、まだ思考回路をバンドルから遮断している。幾筋もの神血が執拗に刻まれた傷口から溢れだし、彼の身体を真っ赤に被覆していたが、バンドルは手加減する様子もない。バンドルの制服も織図の返り血をたっぷりと吸って重くなっていた。織図はまた立ち上がり、歯を食いしばった。

「きりがない……。織図。私は寛容だがあまり、気の長いほうではない。述べよ。さもなくば私刑ではなく極刑に処す」

「!……極刑、ですか」

織図はまるで他人事のように反芻した。織図にとって他者から与えられる死というものは、もっとも縁遠いものだった。

「遺憾です。が、上官に死を命じられれば従うのが筋かもしれません」

打ちひしがれながら織図は危うく……苦笑してしまうところだった。何故ならバンダルには織図を殺せない。殺されたふりをして特務省から逃れ生物階でレイアと落ち合うほうが、よほど自由がきいて好都合だ。しかし、バンダルの言葉は終わっていないかった。

「死神を殺す事は、能わぬとでも?」

バンダルは織図の安堵を、見透かしていたのかもしれない。

「……!」

「汝の首を刎ねた後3日は、首と胴を繋げることはせん。汝の遺体は3日目に火葬し、骨は手元においておく。されこうべとなつては、死神の秘術も及ぶまい」

バイタルロックは2日おきにかけなければならぬ事を、すっかり看破されていた。今朝バイタルロックをかけなおし、2日後、その効力は切れる。以後2日間は不死身だが、3日目にはどう足掻いても死ぬのだ。

織図がこれに抵抗するすべは唯一つ、バンダルのバイタルを切断することだけだった。バンダルは織図がファティナの知識により神階全神のバイタルコードを掌握していることを知らないし、つけいる隙はいくらでもある。最悪、織図の首が飛んでからでもバイタル切断は実行できる。織図は刎ね飛ばされた首を落ち着いて繋げればいいだけだ。

だが、これをしてしまうと犯人は容易に断定できる。織図がバンドルに別室に連れて行かれたのは周知のことだ。その直後、バンドルが失踪したとなれば……おのずと織図に嫌疑はかかる。バンドルは部下である織図を殺す権限を持っているが、織図にはバンドルを殺す権限はない。織図は逮捕され、社会的制裁が待っている。

「10分待つ。よく考えるのだな。全てを明かせば、元通りの信用を取り戻すことにもなる」

バンドルを殺すか、織図が殺されるか。

肉体的な死と、社会的な死のどちらを選択するか。

その肉体を完膚なきまでに血染めにされたまま、正真正銘、彼は究極の選択を迫られていた。

＊

比企が手頃な部屋を与えろといったので、恒に宛がわれている二部屋のうち一室を遼生の部屋として通した。一室でも高級マンションなみのかなり広い間取りだったので、いつもだぶつかせていたところだ。恒は薄いTシャツをクローゼットに押し込めて着替えると、黒い厚手の上着を着込んだ。

風岳村の寒さは尋常ではないから着込んだ方がいいとアドバイスをすると、遼生も備え付けのクローゼットから適当な服を選んだ。小洒落た細身のレザージャケットを着て、帽子などかぶっている。彼のセンスは田舎の少年といたってでたちの、垢抜けない恒とはどうやら違う。

「生物階に入って、結局レイアという子に会うの？ 用事はそれだ

け？」

「あとは、母親にも」

恒は忘れていない。

比企から生物階降下の許可を得たときには、こちらの用事がメインだった。

「そこは、僕は付き合わないほうがいいのかな？」

恒の母親はどんな人物なのだろうという興味はあったが、遼生は気を遣った。

「構いません。生物階は午前中です。朝食か、昼食でもいいですけど、うちでご飯食べますか」

「朝食と昼食って、生物階ではそんなに頻繁に食事をするもの？」
遼生は興味深そうに訊ねてくる。

「朝、昼、晩と三回食べますね」

「そんなに食べなきゃならないんだ。人間って大変だね。といっても、君も半分は人間なんだっけ。お母さんとはうまくいってる？」

遼生が靴紐を結ぶ間恒は母親に、今から帰省する旨のメールを送った。連絡もせず突然帰宅しても、外出しては張り合いがない。もしどこか外出先にいるのなら、そこに転移をかければよい。レイアと会うのは後にしようと思った。先にレイアに会おうとすれば荻号と衝突して面倒なことになり、母親と会う時間がなくなってしまうのは困る。

「そうですね、うまくやってます」

「いいね。友達はたくさんいる？」

「ええ、最近は遊べませんが、大切な友達です」

恒からしてみれば何気ない返事だった。

「そうか……うらやましいな。君にはたくさん繋がりがあるみた

いだ。でも僕はそうじゃない。君が誰かを大切に思うように、僕も君をそう思いたいんだ。大切にしたい。だからわざと距離を置こうとしたり、心にもない事を言わないでくれ。そうされると……どうしていいのか分からなくなる」

寂しげに顔を上げた遼生の声は澄みわたっていて、恒の心に重く訴えかけるものがあつた。友達と遊ぶこともできず、孤独感を募らせていた恒以上に遼生は孤独なのだ。身近な者たちの誰ひとりも信用できなかった彼の環境にあつて、恒は彼が初めて獲た支えであり生きがいだった。

「……」

「ね」

「……ごめんなさい」

「俺が、間違っていました。ごめんなさい」

恒は真摯に謝罪をした。恒が彼に無事であつてほしいと彼を遠ざけようとすることは、彼をなおさら孤独にすると気付いたからだ。

「ありがとう。君が助けてくれるまで、僕は生きていなかったんだ。今ようやく、生きていえると思える」

遼生は恒の手を取り、顔を綻ばせて喜んだ。

「兄さん……俺」

そう言い掛けて、恒の背筋に悪寒が走った。

擦りガラスの向こうに、朧げに映し出されたインスピレーション。大切な記憶だったような気がする。だが、イメージが回帰しない。籬がかけられているのだ、恒の記憶に重い籬がかかって、取り除かれる気配はない。

「どうしたの」

「俺も、そんなヒトがいた気がするんだ。なにかもうダメだったって思っ、全部終わりにしたくなって。でも生きていくしかなかったときに、そのヒトは助けてくれて。ずっと灰色に見えてた空が、初めて青く見えたんだ」

何故そんなことがつらつらと口をついて出てきたのか。口が勝手に喋っている、何かにとりつかれたかのように。恒の意思とは無関係にだ。しかし、全く無関係というものでもなかったような気がする。この体験は誰のものか、他人のものではない。紛れもなく恒自身のものだ。どこかできちんと、理解できている。

「俺、何かそのひとに悪いこととして……思い出せないけど」

「今はきつと、もういない」

一語一語、途切れ途切れに、搾り出すように恒は遼生に打ち明けた。遼生が何かを、失われた何かを思い出させてくれたのかもしれない。吐き出すうちに確信する、これは恒の記憶だ。

「君の空はまだ青く見えるの？」

遼生は暗示にかけるカウンセラーのように、穏やかに恒の深層心理を引き出す。

「今はすごく遠い。でも、厚い雲を吹き飛ばして光を取り戻すあのひとみたいに……そうならないと。今度は俺が、そうなるんだ」

「そう。でもね……」

遼生は紅茶色の瞳を細め、首を傾けて優しくこう言った。

「思い出せないといってもそのユージンってひとは、まだ君の記憶のなかにいるじゃない。いいな、そんな風に僕も誰かの救いになりたいよ」

恒は反射的に遼生の肩を強く掴んで大きく目を見開いた。

手加減などする余裕もない。その衝撃の大きさに全身の震えが、音を立てているかのような。悪寒は耳鳴りへと変わってゆく。恒の指先が、彼の肩へ食い込んでゆく。彼はその指を拒むことはしなかった。

「今……」

遼生は。何と言った。

いや、断じて聞き逃してなどいない。彼の発した言葉をしっかりとつなぎとめていなければ、また煙のように失ってしまいそうだった。イメージは押し流されて、また灰色の日常の中へ溶けてゆくだけだ。

彼がその籐を外したのだ。恒の胸の底のほうから、焼けつく胃酸のような、あるいは混濁した思いが逆流するように熱いものが漲ってきた。

「ああ……うああああああ……！！！！」

恒は彼の両肩を握り締めたまま、呻くように絶叫した。彼の口から漏れ出す音は言葉にすらもならずただ室内に反響して消える。自らの絶叫を冷やかに遠くに聞きながら、嗚咽する。遼生の言葉は、恒の記憶の全てのスイッチを撫でて揺さぶった。どうして彼を忘れることができたのだろう。この二年半の間、彼がいない事に気が付きすらもなかったのだろう。

レイアIIメーター、彼女に抱く既視感はずいぶんからきたものだったと、何故気付かなかったのだろう。恒に青空を見せたあの青年がどこに消えてしまったのか。かき消えた幻影に、恒はしがみ

つくことすらしなかった。恒は彼の恩に報いる事もせず、あまりにも自分にかまけて薄情すぎた。

存在を忘れられる事ほど惨いことはない。恒の心の根源というものに、知らぬ間に深く差し込まれて彼にまつわる記憶を燻し続けていた焼け火箸。そのあまりに静たることに、脅えすらする。何故、気づかなかったのか。後悔は身を引き裂くばかりの自責へと沸騰する。

彼にまつわるありとあらゆる記憶がその色彩を強めて、鮮明にフラッシュバックする。

夏草の緑が眩しい、あの日の電車の音が聞こえた。閉ざされていた運命の踏み切りが上がる。

イメージの向こうに、彼の姿を見た気がする。

大きな林檎の木（Giving Tree）の下で、彼はものも言わず佇んでいる。そして彼の傍らにいるのは少女だ。ユージーンの手に、レイアが繋がれている。彼は彼女を、どこへ連れてゆこうとしている。恒が離れた二つの手。彼らは誰の罪を贖っている。遅すぎた、しかし再び手を伸ばすことを諦めてはならない。

「ユージーンさん……」

長い時間の末、恒はようやく一言だけ彼の名を呼んだ。

第2節 第18話 サイレント

存在確率の鍵を失ったレイアのステイグマを目のあたりにし、荻号はその膝の上にレイアを乗せ、借家の縁側で考え込んでいた。

彼女がステイグマの一部を失い、その剥落した部分が荻号とアルシエルの腕に深く刻まれている意味。そして、荻号の心層看破能力をもってして彼女の心の片鱗も浮かび上がってこない不自然を。

その様子を傍から見れば真冬の空の下、その様子はあたかも膝の上で眠ってしまった娘を前に、途方にくれる年若い父親のようでもある。

「とにかく、叩き起こすか」

アルシエルは彼女の肩を揺さぶろうとした荻号の手首を掴んだ。

「そう急くな。少し休ませてやれ」

彼女は荻号からレイアを奪い抱え上げると、彼女のお気に入りソファアを譲り、毛布を肩にかけ寝かしつける。レイアは誰の手とも知らず夢心地でアルシエルの腕に縋りつくように甘え、毛布にくるまってくるりと小さく身体を折りたたんだ。その愛らしくもいじらしい様子に、険しい顔つきをしていたアルシエルから微笑がこぼれる。

「赤子のようだ」

「赤子なんだよ、実際。比企が無理矢理こんな姿にした」

アルシエルは所在なさげに、だが愛おしそうに彼女の頭を撫でてやる。アルシエルはこれまでに98子もの子孫をもうけたが、3歳になるまでは乳母にも任せず自らの手元に置いて愛情深く育てたものだ。親に愛されなかった子供の愛情への渴望は、成長しても簡単に埋められるものではない。アルシエルに対して何か感じるものがあったのだろうか、怯える小動物が僅かなぬくもりを求めるように、

レイアはアルシエルの温かな腕を放そうとはしなかった。レイアの幼児然とした行動は、忘れかけていたアルシエルの母性本能を呼び覚ます。

「確かに、並み居る神とは毛色が違う」

毛布の下のレイアⅡメーテールの肌は瑞々しく、生氣に満ち満ちている。静謐な佇まいでいて、彼女がそこにあるだけで周囲の空気を浄される。息を呑むほどの秀丽さの中に、柔らかな曲線の甘さと触れがたさがある。また、彼女の神体を戒めるとも装飾するとも知れない無数の純金の装身具が、彼女の生まれながらの無垢を彩っていた。

「救世者であり、恐るべき怪物のどちらにもなりうる。こいつは存在だ」

彼女は神階最後の児としてノーボディに愛され、しかし同時にINVISIBLEにも欲された。

彼女が必要としたものは創世者たちからの寵愛よりも純粹で血の通った周囲との繋がりであり、打算の無い愛情だったというのに。

「彼女はどうなるのだろう」

「二年間も狭い檻の中に監禁され、触れたことも無い世界の為にだと言われ……果たして誰かを守りたいと思うだろうか」

荻号は縁側の先ほどとまったく同じ場所で胡坐をかいたまま、遠い視線で呟いた。

アルシエルは彼が何を言いはじめたものか、無言で耳を傾ける。

「……」

「俺なら思えんよ、不出来なものでね。だが、こいつは決してそう思わない。どんな境遇に育っても道を違えないのがプライマリだ。奴らは自らを犠牲にして、名も知らぬ者のために飲んで傷つこうと

する。何を購^{あがな}っているんだろうな」

荻号の語調には妙に力が入っていて、次第に熱を帯びる彼の言葉にアルシエルは無言で応じた。ノーボディに愛された者は悲運の宿命を辿ることになる。荻号は彼女に同情を寄せている、というより、自身では何一つままならない身の上に強い憤りを覚えるのだろう。創世者たちの張り巡らせた糸になすすべなく手繰り寄せられている、感情をあらわにすることのない彼が、珍しく憤慨しているようだった。

「生まれてこなければよかったんだ、こいつら、そして俺のような奴は」

彼は一方的に結論を述べた。

「俺たちは、あまりに世界の根源に干渉しすぎたんだ」

呪うように呟いた言葉は、自身にかけられた呪縛でもある。彼はノーボディが世界の導き手にと選んだであろうプライマリや荻号という存在は、三階のそこにある生命の平等と主体性を奪うものだと考えていた。たったひとりの行動が、世界の命運を握ってよい筈がない。こうやってレイアが彼女の独断で、彼女の価値基準に基づいて神階を離脱しその意思を明らかにすることもないことは、三階の総意を踏みにじるものだ。

正しいまではないかなくとも、少なくとも彼女の選ぶ道はあらゆる観点から“公平”でなければならぬ。その公平性を、荻号は取り戻したかった。

聞くに堪えかねアルシエルがふと視線を落とすと、レイアは細く目を開き身を竦めていた。

“生まれてこなければよかった”、荻号の心無い言葉は彼女の耳に入っていた。彼女は俯いたまま冷たい雨をやり過ぎすかのように身をこわばらせ、息を止め硬直している。よく見ると先ほど以上に、

小刻みに震えていた。涙の気配はないが、泣いているのだとアルシエルには分かる。どこにも預けることのできない遣る瀬無い思いを受け止める。彼女は幾度、こんな思いをしてきたのだろう。

“ピンポーン”

膠着しそうな空気を破って絶妙のタイミングで、室内にインターホンの音が鳴り響いた。この家には大家が月に何度か訪ねてくる以外に、インターホンを鳴らす客は滅多に来ない。

「誰だ？　こんなときに」

荻号が来客に応じて玄関に出て行ったので、レイアは僅かながらの与えられた。

「なに、気にするな。あれは偏屈だ」

アルシエルは妙な切り口で荻号を貶して囁き、取り残されたレイアを慰めた。彼女はぎゅっと目をつぶると、思い余ったように身をもたげ、母親に助けを求めるようにアルシエルに擦り寄った。言葉を喋らないながらに、数多くの子供達を育て上げたアルシエルには彼女の不安と孤独がよく理解できる。アルシエルはレイアを抱き寄せ彼女の頭を撫でた。暫く胸を貸してやってもいい、彼女はいつになく大らかな心境になった。

＊

渋りながらも玄関扉を開けると、玄関先には大きなスーツケースを持った吉川 皐月が旅支度をして佇んでいる。ダッフルコートを着込んで帽子を被り、皮手袋をつけ、いつもの薄着の彼女らしくもなく、もこもここと着膨れている。これからの避難生活に備えてなのか、縁厚の赤い眼鏡などかけていた。

「ああ、あんたか。吉川さん」

「お世話になりました、私はこれから避難します。あなたはまだ避

難されないんですか？」

皐月は、ひよっとするとこれが最後となるかもしれない別れの挨拶に來たようだった。

「避難はともかく、移動はするよ」

生物階は、もう風前の灯火といったところ。だからといって生物階と隣接する神階もどこまで持ち堪えられるか分からない。生物階からの避難民を受け入れるといっても、神階は決して安全なシェルターではなかった。はつきり言ってどこに逃げてでも無駄なのだが、荻号はそうは言わない。

「風岳村の人々は今日、大半の世帯が避難をするそうです。この便を逃せば、次はいつになるかわかりませんからね」

「残る奴もいるのか？」

率先して避難をしようとしなくせに、他人の心配などしている。皐月は視線を伏せ、言い淀む。

「ええ、やはりお年を召した方は、環境が変わる事に抵抗があるようで。田や畑、家畜もいます。それに宇宙ステーションでの避難生活だなんて私たちにも想像つきませんし、お年寄りには過酷ですから」

「なるほどね……残る奴が出るとは想像していたよ」

荻号の想定したとおりだった。いくら比企が生物階の具体的な救済策を発表しても、様々な事情で神階に入れない者はいる。富にしがみつく者、捨てられない荷物がある者、そしてやむを得ぬ事情で残らざるをえない者。避難したくてもできない、寝たきりの病人だっているだろう。比企はある意味、神階への門へ招かれざる者を、予めふるいにかけているのだ。

「まあ、同郷のよしみだ。この村のやつらは全員助けてやるよ」

「助ける？ どうやって全員を！」

皐月は思わず表情を輝かせた。また、彼のいつもの大口を叩いた

からだ。彼は今回に限らず時々大風呂敷を広げる。彼がふとした拍子に何気なく口にする、とてつもなく衝撃的な、それでいて彼の身の丈にあった一言が好きだった。荻号は出来そうもない事を言うが、必ず口先だけには終わらせなかった。

「避難したい気にさせてやるのさ」

「？」

荻号はやおら人差し指を上に向けて天井を指すと、そのまま頭上できると円を描いた。皐月には何のジェスチャーなのかさっぱりだが、皐月が口を開けている間に彼が仕掛けたのは、広帯域の強制MCFだ。まだ、荻号のアトモスフィアは生きており、マインドコントロールは有効だった。むしろ今展開しておかなければ、この先どこまで荻号のアトモスフィアが維持できるか分からない。彼のアトモスフィアは風岳村全域を被覆し、強烈なマインドコントロールの作用場が立ち上がった。神具を介して行うMCFとは異なりかなり強制的ではあるが、リスク云々を論じている場合ではない。これで風岳村の全村民は避難に向かうだろう。幸いなことに、荻号が把握している限り村に寝たきりの病人はいなかったはずだ。

「この村には誰も残らんと思うぜ」

「え？ ……？」

彼女は愛想笑いを浮かべつつ、別段変わった様子がないので首を傾げた。

「外に出てみな」

村を離れる皐月の荷物は少ない。神階への入階者は30kg以上の荷物の持ち込みを禁じられていたからだ。銀行の預金通帳や証券印鑑や権利書関連は持って出たが、それは紙屑同然となる心配もあった。風岳小学校の同僚の職員たちは大慌てで、混乱後も資産として使えるであろう金（Gold）を買いあさろうとしたが、需要過剰で購入できなかったという。証券取引市場は全世界同時休場、取

引再開のめどもたっていない。日本政府は混乱の收拾後も銀行預金と土地権利は全額保護すると発表した。が、避難生活が終わった頃には全世界的な社会主義化は避けられない様相を呈してきた。嵐のあとの濁流に押し流されるように、人々は主権を失ってゆくのだろう。

日本政府は米政府に続き政府機能の移動を発表し、暫定的にすべての権限を国連執行部に委譲するとした。世界は今、唐突に訪れた民主主義の終わりを目の当たりにしている。避難中の食糧供給も円滑に行われるかどうか疑問だった。国連は当面、十分な食糧を備蓄しているとしているが、いつ生物階に戻ってくることができるのかわからない以上、食糧が底を尽きることは明らかだ。そんな思いから、皐月のスーツケースの中身のほとんどは食糧が詰まっていた。先行きは見えない、だが命は惜しい。

「あんたも早く逃げたほうがいい」

避難生活に気持ち少しも乗ってこないというのに、彼は早くここから出て行けというのだろう。突き放したような物言いをする。皐月は、どうしても荻号の血液型をA B型だと信じているのだが、彼は極端な二面性を持っており、どうやら愛想よくすることということはないらしい。O型とA B型はどうにも合わないのよね。と彼女は内心ぼやいてから、鬱陶しそうに皐月を見下ろしている彼に、率直な疑問をぶつけた。

「また……ここに戻ってくるのでしょいか。何か納得ができないうちに、どんどん話が進んでしまつて。大きな隕石が落ちてくるなんて、やっぱり嘘だと思ふんです。それほど危険な隕石なら、たった今からでも核弾頭で撃ち落としませんか？ 半世紀前ならともかく、突然現れるなんて現在の科学力では考えられませんし……でも誰も、怖くて訊けないんです。これは全世界規模の選民政策なのではないですか。人々から土地や限られた資源を取り上げて、政府の管理下に置くための。そして、」

「吉川さん」

彼女はあたかも泳ぎ続けなければ死んでしまう回遊魚のように、せわしなく頭を働かせているようだ。荻号はもどかしさを吐露する、皐月の言葉を遮った。吐き出せばつきりするのもかもしれないが、こんな時には彼女の不安をに増長させるだけだ。皐月はあまり樂觀的な性格ではない。繊細で感受性が強い。ひとたび思い悩めば、いつも煮詰まっている。荻号は彼女の性分をよく知っていた。

「あんま深く考えん方がいい。先のことは先のことだ、ぐずぐずせずに早く逃げなよ」

皐月はしぶしぶ、といったように口を閉ざした。

「では、そろそろ行きますね。本当に、お世話になりました」

「荻号さん！」

けたたましく叫びながら、玄関に駆け込んできたのは石沢 朱音だった。朱音は外開きの玄関扉を勢いよく開け放ったものだから、扉に背をもたせかけていた皐月は反動でしりもちをついた。彼女は絶妙なタイミングで小学校時代の恩師を転倒させてしまって、慌てふためきながら助け起こす。

「あ！ さ、皐月先生、何で？ ご、ごめんなさい！」

「い、石沢さん？」

「あー……そうか」

荻号は間拔けな顔をして額を押さえた。そうか、たった今荻号が仕掛けたMCFに、朱音もそして彼女の母親も引っ掛かってしまったのだった。どうも見通しが足りなかったと荻号は反省したが、他でもない荻号のかけたマインドコントロールの威力は絶大だ。今更、消しゴムで取り除くように取り消せるものではない。その感覚は、筆圧の強い者がノートに何かを書き付けると、消しゴムで消しても跡がのこってしまうようなものだ。Mind Controlを重ねがけすることもできるが、それでは記憶を混乱させてしまう。

ともあれ朱音もまた、この村には残りたくないという気持ちを強くした筈だ。こうなっては荻号も、彼女を手放さざるをえなかった。

「石沢さん、あなたもそろそろ避難するでしょう？」

「……はい、避難します。荻号さん。お母さんがやっぱり、残っちゃ駄目だって。危ないし……だから」

「それは仕方がないな。親のいう事は聞き分けるもんだ」

「え？　で、でも！」

まさか、嘘だろうと朱音は食い下がる。朱音と荻号の関係は簡単に引き裂かれるようなものではない。朱音は荻号なしには生きてゆけないのだ。朱音の母親は、朱音が荻号とともに村に残るのではなく、荻号が朱音と一緒に避難するよう何とか説得してこいと言った。彼と別れる事は間接的に、朱音の死を意味している。彼は朱音に死ねと宣告したも同然だった。

「一緒に逃げましょう。離れ離れになるなんて……考えられません！　それに私にはあなたがいないと」

朱音には荻号が必要なのだ、どうしても。皐月は彼らのやり取りを聞いて、直ぐにぴんときた。朱音が絶対的に依存しなければならぬ、彼女の生死を決する存在といえ……それは、神だ。

「石沢さん？」

「私、あなたがいないと生きていけないのに」

朱音は荻号の手を取ると、彼女は祈るように両手を重ねて、力強く握り締めていた。その姿は彼に祈っているようでもあった。皐月はすぐにぴんときた。

「え？　石沢さん？　それどういうこと？　ひょっとして荻号さんが……神様ってこと？」

皐月はいよいよ別れ際になって明かされた事実、また腰が抜けそうになった。

「ああ、そういえばあんたには言ってなかったんだ」

木で鼻をくくったように冷淡な態度で、荻号は今更のように大事な情報を出す。近所づきあいをしている隣人が唐突に神だと明かされて畏れ多い気持ちになるかというところ、それほどではなかった。恒が神だったと知ったときのショックほどではない。こうやって彼らという宇宙人は、人々の間にひっそりと息づいてきたのだと改めて実証されただけだ。そして荻号が神であると信じるということと、手を合わせたい気持ちになることは別だった。皐月はさして彼を敬う気持ちにもなれず、ひとまずは苦情を述べることにした。

「もう、どうして教えてくれなかったんです！ 水くさいじゃないですか。結構、親しくしていたと思っていたのに」

「別に、宣伝して回ることでもないしな」

だろ？ などと言って朱音と顔を見合わせているのが憎らしい。

しかも彼が本当にそうなのだとすると、当然彼はマインドブレイクも心得ているだろうし、皐月が神と使徒いう存在を、恒を通じて知っているという事も見透かしているのだ。

神の存在を知る皐月に、ここまで彼の正体を隠し通してきた意味が分からない。

しかし荻号は荻号で言い分があった。長瀬と築地との一連の遣り取りから、あまり目立つ事をしないほうが日本では暮しやすいと気付いたのだ。現にこの二年半という間、彼はフィンランド人の薬剤師という偽の肩書きに見合った程度の干渉はされたが、村人達から必要以上に詮索される事も付き合いを求められる事もなかった。そうやって気ままにやってきたのに、皐月に正体を知られたものなら下らない事から重大なことまで、思う存分当てにされるに決まっている。それは面倒だ。

「それにしても……」

皐月は荻号の事情はそこそこに、今度は朱音の心境を気にかける。神。すなわち、朱音の魂を繋ぎ止める彼女にとっての無二の存在。

それは恒ではなかったのか。荻号でなく恒であってほしかった。恒というものが身近にありながら、何故敢えて荻号を選んだのか。皐月は朱音の本心を疑った。ただショックだった。

頬を緩めて嬉しそうに、密やかな恒への思いを恥らいながら語っていたあの頃の少女は、変わってしまったのか。朱音は恒への思いを断ち切るものだろうか。違うはずだ。

朱音の心変わりは、皐月にとって煮えきらないものだった。恒と朱音の関係は決して両想いではなかったという事は知っている。そう、恒は誰かを好きになるという感情を生まれつき持てないのだ。だが、彼らの間に絆というものはあっただろう。荻号の使徒となった朱音を、恒はどんな思いで見つめていたのか。そう思うと辛かった。

「あなたと離れたら私、1ヶ月と生きられないですよ!？」

「お前なあ……誰のアトモスフィアを貰ったと思うんだ。確かにアトモスフィアは減衰するが、1年は死にやしねえよ」

荻号は中指から枢環を抜き取ると、握り締めて力を込め、彼女の指を一本ずつ剥がして代わりに指輪を握らせる。その指輪は朱音の手の中でずっしりと重く、リングに埋め込まれた黒い石には精細な図柄の紋章が刻んである。

「肌身離すな。向こうで何か困ったら、荻号 正鵠の眷属だと言え。それで大抵、何とかなるだろ。あとはアンプルだ。これで1、2、3と……4年はもつ。大切に使い、飢えたら無理すんな。万が一使い切ったら……神階には腐るほど神がいるから、誰かに分けてもらえ」

彼は念のためにと彼のアトモスフィアをアンプルに充填しておいたものを3本、朱音のポケットの中に突っ込んだ。彼女は大切そうに受け取り、顔を熱らせてせつなげに彼を見上げた。朱音の命を繋ぐ大切な液体は、彼女のポケットの中でじんわりと温かかった。

「……4年だなんて、嘘ですよ。私が最初のアンプルを使う前に

また、会えますよね？」

「ああ」

彼は珍しく空返事ではなく、少し視線を落とし、彼女と固く約束をした。

「私、これ。使いませんから。それに他の神様にアトモスフィアをもらうなんて、考えられません。待っていますから、あなたが迎えに来てくれるのを」

それは、愛情なのだろうか。恋人というのも違った。もっと根源的かつ一方的な依存と、一方的な寄与。皐月はこれほど根底から結ばれた他者との関係というものを、見たことがない。

それほどまでに信頼できる他者が、皐月には現れるだろうかと考えた。彼女は恥じ入りながら首を小さく振った。誰と結ばれたとしても、彼らより深い関係にはなれないだろうと。

＊

皐月と朱音、かつての担任と教え子は久々に、霜枯れの畦道の中を連れ立って歩いていた。村を去るという時になって、どこを見渡しても込み上げて来る思い出が交錯する。彼らは不思議と無言のまま、通学路に面した駄菓子屋のある四つ角を曲がる。この駄菓子屋を女手ひとつできりもりしてきた88歳の女主人が首をかしげながら、荷物を詰め込んだ風呂敷を背負って店のシャッターを締めていたところだ。

「あれ、ミネばあちゃん。結局避難することにしたの？」

「朱音ちゃんに、吉川先生ね。そう思ったんじゃないか急に、気が変わったの」

背の低い痩せた老婆はごつごつと皺の刻まれた手に息を吹きかけ、摺り合わせた。白い息が湯気となって立ち上る。

「その方がいいと思うよ、よかったあ。じゃ、またバスで会おうね

おばあちゃん」

朱音は嬉しそうに老婆の肩をぽんぽんと叩いた。

ミネが店に残ると言い張って今朝まで避難を頑なに拒んでいた事を、皐月は知っていた。急に気が変わったというのは、荻号のかけたマインドコントロールのおかげだ。よかった、これで彼女は助かる。皐月はほっと胸をなでおろした。奥の集落を見ると、村に残ると主張していた村人がばらばらと、荷物をまとめて赤煉瓦の家をそれぞれ出て、指定されたバス停に向かっているのが見えた。その顔ぶれは高齢者ばかりだ。彼らもすんでのところで、命を取りとめる。「あ、もうこんな時間」

朱音は腕時計を気にして、唐突に駆け出すと皐月に手を振った。風岳村を離れるバスは12時に発車する。荻号に挨拶をしてくるからと言って家族を待たせているのだ。早くバスに向かわなければ、村を出る最後の便に間に合わなくなる。

「じゃ、そろそろ時間ないですし。一緒のバスに乗りますよね？
またあとで」

「待って」

皐月は、マツが向こうに歩いていったのを見届けてから朱音を引き止めた。

傍を流れる小川の音が妙にやかましく聞こえていたが、辺りは静かだ。不気味なくらいに。

「？」

「ねえ。どういうこと？」

皐月は真剣に朱音の顔を見つめて尋ねた。急ぎなのは分かっている、だが、どうしても訊いておきたかった。

「何の事ですか？」

「どうして、藤堂君じゃないの？ あなたの命を預ける大切なヒトでしょう。どうして荻号さんを選んで、藤堂君を選ばなかったの。私が口を挟むことではないかもしれないけど、藤堂君のこと好きだ

ったあなたが、どうして？」

「臯月先生」

朱音は胸を締め付けられるように感じた。恒という名を聞きたび、塞がりかけていた古傷が熱をもって疼く。臯月の言葉に瘡蓋を剥がされるようだった。時間がないこんなときだから、臯月も前置きなしに単刀直入に踏み込んでくるのだ。

「ごめんなさい……どうしても私には、納得いかなくて」

臯月は少なからず悪びれたが、答えを容赦しようとは思わない。

朱音はぽかんと開いていた口をぎゅっと結んだあと、無理な笑顔をつくって微笑んだ。

「先生はもしかして、私が恒君を選ばなかったと思ってるんですね。……違いますよ、全然違います。どうしてそんな事を聞くな。意地悪ですよ、先生」

朱音は一段高くなっている用水路の淵に上り、両手をぴんと広げて平均台の上を歩くようにバランスを取りながら打ち明けた。

「選ばれなかったのは恒くんじゃなくて、私の方なんですよ」

独り言のようにつぶやいたあと、彼女はもう一度はつきりと繰り返し返した。

「恒君は私を、選んでくれなかったんですよ」

朱音は微笑みながら顔を崩し、臯月にその顔を見せないよう刈り取られた田んぼに体をむけ、臯月には背を見せた。

彼女の肩から白いニットのマフラーが二本、ぶら下がっていた。目を細めるとまるで白い翼を持った天使のように見える。使徒って、立場が弱いんですね。と、彼女は寂しそうに付け加えた。

「使徒にしてくれと言えば、もしかしてそうだったのかもしれない。でも恒君そゆとこ正直だから。分かっちゃうんですよね」

幼馴染だから、分かっちゃうんです。

彼女はかみ締めるように、その言葉を慈しむように幼馴染と発した。彼女は言葉を濁したが、皐月はいたたまれなくなった。彼女の失恋は、失恋以上の意味を持っていることだろう。

「……荻号さんのことはもしかすると、恒君の代償だったかもしれない。でも、荻号さんと向かい合って過ごしているうちに、今は何度生まれ変わっても荻号さんと一緒にいたいと思うようになりました。だからこうやって別れられるんです。あのヒトは本当に強い神様なんですよ。誰にも負けないと信じています。今の私には荻号さんが必要です。恒くんではなくて」

「そう、だったの……」

皐月はかける言葉が見つからなかった。どうフォローしても、不適切なように思えた。

「私は荻号さんのこと、大切なただ一人だと思っています。……そう信じたんです。でも、いつもそれとは真逆の疑いと戦っています。もしかしたらそんなのは全部間違いで……使徒は神様なら誰でも、好きになるようにできてるのになって。だとしたら私、動物と同じなんです。本能に支配されて恒君や荻号さんのこと好きなんだって思い込んでしっば振って。それを荻号さんは絶対、馬鹿な子だなんて思ってる。恥ずかしくて泣きたくなるんです。いつも」

皐月は思い悩む朱音を見て、本音を打ち明けはじめた。

「あのね、あなたは怒るかもしれないけど……さっき、少しだけ羨ましかったの」

「うらやましい？」

思いがけない言葉に、朱音は赤らめた顔をあげた。

「神様と使徒の関係ってね。お互いを思う心ってきつと、恋愛よりもっと深くて。そう感じたのよ、あなた達を見てね……ああ、無理だなんて。私はあなたが彼を思う気持ちの百分の一も、人を愛した

ことはなかったんだな、ってね」

自嘲しているのではなく、皐月は深く恥じていた。自らの愛ばかりか命をも預ける事のできる相手が、皐月の生涯のうちにひとりで現れるのだろうかと考えを巡らせたとき、自信を持ってそうは言えないと思ったからだ。これからまさに夫婦になろうとする男女が、いくら教会の祭壇の前で永遠の愛を誓ったとしても、その愛が不変のものであると断言できるなら。だが現実には伴侶に対する背徳行為も、それほど罪の意識を感じることなく日常的に行われている。悲しいまでに、人間は弱い。

そして、その裏切りが白日のもとに暴かれぬ限り、彼らは裏切り続けることだってできる。使徒は人間とは違う。神に対する誓いは真に永遠のものであって、その裏切りは神に見透かされる。また神は肉体的に潔白であって、使徒を裏切ることができない。使徒が神に寄せる愛情や思慕は人々のそれよりずっと純粹で、丁寧にこし取られた上澄みのようだった。

そんな彼女の立場を皐月は、不遜にも羨ましいと感じてしまったのである。

たったひとりだけを見失わずに、永遠に愛すると誓えたなら……。

「皐月先生、そういえば彼氏は？」

感傷に浸っていると、朱音に話題をはぐらかされた。どう返事をしてよいものか、困った挙句のことだ。

「んー、そうね。そのうちね」

皐月はそう述べるにとどまる。確認するまでもない空返事だ。

「ね、皐月先生。私たち今から神階に行くんですよ、世界中の人々が避難するんです。もしかしたら、いい出会いがあるかもしれないね。合コンみたいになっちゃって」

避難生活が楽しい筈がないのに、朱音はわざと明るい話題をふっ

てみせた。少しでも後ろ向きになってしまえば気分が滅入ってしまいそうだったからだ。

「そうなの!？」

皐月は目を丸くしてぐっと身を乗り出す。予想以上の反応の大きさに、朱音も若干引いてしまう。皐月は村に青年会のファンクラブがあるほど異性にモテる魅力的な女性なので、それほど男性に飢えているとは思えなかったのだが、実際のところはこれほどの世界危機に瀕しても合コンという言葉に反応するほど異性に困っていたのだろうか。

「合コン、楽しみですか？」

朱音はまじめにそんな事を尋ねている。合コンという言葉に喰いついたみたいで、恥ずかしいじゃないと皐月が頬を赤らめたのはいうまでもなかった。

「そうじゃなくて! 私たちはこれから、神階に避難するの? それって恒君のいる場所でしょう?」

「そうです。だって、ニュースみたいに国際宇宙ステーションが本当にあると思わないでしょ? あれ、神階のことなんですよ」

「そうだったの……!!」

これからの先行きは五里霧中だったが、ようやく皐月はほっとした。神階の科学力は進んでいて、地球まるごと1つ分ほどもある巨大要塞が建造され宇宙に浮かんでいる、恒がそう言っていたからだ。そこは空気も地球と同じ濃度、重力も地上の1/4あるし、水も植物もあり農業や牧畜も営まれている。彼は人間ではないので分からないが、人が暮らすことも充分にできそうだと。

「私も荻号さんと神階に行ったことあるけど、地球とそれほど環境は変わりませんでしたよ」

朱音の見た神階の比企の空中庭園では、植物が豊かに生い茂っていた。息苦しくもなかったし、地球と何も変わらない様子だった。

「よかったあ」

皐月は朱音の手を取った。

「でも、私達は神様たちからどういう待遇を受けるんでしょう。神様が皆、荻号さんや恒くんみたいに親切なわけじゃないと思いますし」

朱音は荻号の家を訪れた比企の、刃物のような触れがたさと威圧感を思い出す。

神々にとって人々、そして使徒は対等な立場ではないだろう。人々にとって畏怖と信仰の対象だった神を前にして凄んだり反論のできる人間が存在するとは思えない。人々は神々の奴隷のようになってしまふのだろうか、そして使徒としての待遇は？ 彼女は嫌な予感を振り払うように、用水路の淵から軽やかに飛び降りた。

「不安ですけど、頑張りましょうね。何もかもうまくいけばいいと思います。皐月先生。じゃ、またあとで」

朱音は走って去っていった。

皐月も腕時計を確認した。あと20分少々でバスが発車する。

“ところで藤堂君のお母さんは、もうバスに乗ったのかしら”

皐月はふと、志帆梨のことが気になった。荻号のマインドコントロールにより村に残ることはありえないと分かっている、村を出る前に藤堂 志帆梨が避難をしたかを確認しようと決めた。

時間はもうぎりぎりだが、彼女の行方が分からなければ恒が心配する。

その程度のことはしなければならなかった。荷物が邪魔になるのでバス停で既に待っている、ミネにスーツケースを見ておいてもらうことにした。

皐月は何気なく杜の奥を見つめていた。バス停の奥は砂利道で、神社への参道になっている。風岳神社前停留所、風岳神社の前にあ

るこのバス停を利用するたび、皐月は奇妙な感覚を覚える。

“またここ……いつも神社。どうして？”

この場所を通るたび、皐月の胸は締め付けられるようだ。

彼女は通勤途中にいつもこの場所、風岳神社前のバス停で無意識的に立ち止まり、鬱蒼と木々の生い茂る杜を習慣的に見渡す。いつもそうなのだが、普段と比べて何も変わったところはない。だが決まって、胸苦しさを覚えるのだ。冬枯れの杜の景色は虚しさを加速させる。これは何の郷愁なのだろうか。理由も知らないまま、皐月は今日この村を去る。

風岳神社の隣には、無人のプレハブ社務所がある。社務所のガラス戸から中を覗き込んでも誰もいない。しかし皐月はこう思ってやまない。

見えない誰かがいるような気がする――。

＊

「目が覚めたのか。生物階は寒いだろ、何か温かいものでも飲むか？」

皐月と朱音を送り出した荻号はリビングに戻り、すっかり目を覚ましてしまったレイアにさりげなく声をかけた。

彼を怯えているのからか、あるいは萎縮しているのか、それとも薄着のためにこごえているのか、レイアは肩をすばめながら頷く。アルシエルの娘のように彼女に寄り添っていた。

「玄関先で朱音の声がしたが。手放してよかったのか？」
アルシエルは地獄耳だ。

「親が反対したんだ。引き止められんよ」

「彼女には一度、時計職人が降りたと言ったが……」

レイアはその時、弾かれたようにアルシエルを見た。ブラインド・ウォッチメイカーという言葉……恒とノーボディの双方から聞いたことのある響き。とくにアルティメイト・オブ・ノーボディとは対極にある、解階を支配する創世者だと理解している。生物階は一度、ブラインド・ウォッチメイカーの差し向けた解階の感染者から襲来を受けたと、恒は言っていた。レイアが生まれた直後の話だ。その時に感染し奇跡的に死を免れた人々の中には、ブラインド・ウォッチメイカーの息のかかった人々がいると聞いた。だからレイアが恒と廻った生物階の各地は、感染者の襲撃を受けておらず恒が安全だと判断した場所を選んでいた。

荻号の身近に、ブラインド・ウォッチメイカーと接触した人物がいたのか……その人物は玄関先まで迫っていた。

レイアは途端に恐ろしくなった。鉢合わせをしていたら、どうなったものか。

「なにも朱音だけじゃない。解階の奴らは全員解階に返したし、生物階でブラインド・ウォッチメイカーの足がかりにされた人間は俺が定期的にフラーレンを介したMCFで感染時の記憶を抑え込んできた」

「汝にとって朱音はその他大勢、ではない。ブラインド・ウォッチメイカーの幻影を見た朱音を依代とされぬよう監視し手元に置いていたのは……彼女が使徒だからか」

荻号はアルシエルの勘のよさに、思わず口を緩めた。利口者は好きだよ、彼は口の中でそう呟いた。

「ノーボディの創造物である使徒にブラインド・ウォッチメイカーが干渉したことを、汝は脅威と考えておるのだろう。だから手元に置いておかねば安心できなかった」

アルシエルは荻号を攻め立てるように追及を続ける。

「鋭いな。そう……俺は朱音の体が受け入れられる上限のアトモス

ファイアを常に含ませてきた。ブラインド・ウォッチメイカーの幻影はまだ、朱音の中にあるんだ。潜伏感染中とでも言うべきか。俺のアトモスファイアが朱音の身体から枯れた時、どうなるかは分かん

「分かっている、手放したのだな？」

監視を打ち切って支障はないものか。またブラインド・ウォッチメイカーの思惑通りに事を運ばれてしまっただけはもう取り返しがない。しかも、ブラインド・ウォッチメイカーとやり合うつもりはないのだろーうと、アルシエルは覇気をなくした荻号を失望したように見つめた。

「臆病者。何故、挑む前から負けを認める」

「そう言うな。どうしようもなかった」

彼はアルシエルの視線から逃れるように庭先に出て行った。暫くすると薬草畑から薬草を摘んできてそれらをすり潰し、素手で湯を沸かして緑色の塊をポットに突っ込んだ。透明な耐熱ガラスポットの中の液体は、じわじわと怪しい紫色の発色をしている。

「たしか庭に生えているものは、毒草ばかりだが」

アルシエルは、ポットに毒を盛っているのではないだろうかと穿っておいた。

「失敬な。これは正真正銘の薬草だ、体が温まる」

荻号は苦笑してレモンを絞り、淹れたてのハーブティーをレイアに渡すと、両手で受け取った彼女は目を丸くしてそれを真上から覗き込んだ。先ほどまで紫だったハーブティーが、もうシアン化物のように青くなっている。これは本当に飲めるものかしらと躊躇したが、意を決して口をつけると、見た目からは想像のできないほど芳しく深い味わいがした。

「ほら。旨いだろ」

彼女はほうっと白い息を吐き出しながら、異論もなかったので素直に頷いた。

響 寧々が午後三時きっちり作ってくれるホットレモンティーが大好きだったが、あの懐かしい味、そして寧々の優しい笑顔を思い出す。今頃は寧々が心配しているかしらと、後ろめたさが込み上げてくる。

それに……寧々もだが、より鮮明に思い出すのは恒の顔だ。数日前、レイアが恒とともに彼の実家を訪れた時、レイアは恒の実家からかなりの近距離に、忘れもしない荻号のアトモスフィアを感じていた。恒はその時、近所に強大なアトモスフィアを持つ神が住んでいるからと説明していたが、ひるがえって考えるとこの場所が恒の実家に近いことを裏付けていた。そしてきわめつけに、織図も恒の家と荻号の住まいが近距離にあると言っていた。

恒に会いたい、だが彼との再会はひどく怖かった。恒とはもうこれまでと同じ関係ではいられないような気がする。合わせる顔もなければ、彼を深く失望させたという自覚と後悔がある。恒から向けられる視線は間違いなく変容する。責めないでくれとは言わないが、とても耐えられるものではない。

思い悩む彼女のひざの上にぽんと何か軽いものが不意に乘せられて、レイアは現実に取り戻された。金色の頭の上に、くしゃっと大きな手を置かれた。

「で、そろそろ質問をしていいか？ 手話の心得もないんだろうし、返事はそこに書いて。神語でも何語でも構わんから」

膝の上の軽いものは、荻号が雑記帳とボールペンを彼女の膝の上

に載せたのだった。真空中で育った彼女が喋れないということは織り込み済みだ。比企は彼女に手話も教えていないと聞いている。

彼女はペンを取るべきか迷った。織図は荻号に全てを話せと言ったが、どうもこの人物は信用がおけそうにない。そんなレイアの気も知らず、荻号はもうあけすけな質問を投げかけている。

「まずは、何でここにきた？」

レイアはペンを取ったが、黙して俯いた。

「どうした。俺に用があるんだろ？」

ペンは動かなかった。彼女は返事を拒んでいる。というより、荻号に萎縮しているのか、その微動だにしないさまはフランス人形のようなものだ。

「ふん、嫌われたな。口もききたくないそうだ」

生まれてこなければよかったなどと暴言を吐く相手と、どうして会話をしたいと思うだろう。彼女の反応は至極当然でその権利もあると、アルシエルはレイアに同情を寄せた。

「こいつは口がきけないんだ」

「おし、か。生まれつきの障害が？」

現在は使用禁止用語の筆頭にリストアップされる差別用語を、アルシエルは憚りもせず用いる。

「いいや。困った事に障害ではない。誰でも無音の世界で育つところなる」

「……なるほど」

「そういうことだ。おい、不貞腐れるのもいいが、お前とINVI SIBLEとの間のことは、もはやお前だけの問題じゃないんだぞ。答えやすい質問に変えようか、ここに来る前……直前だ。誰と会った」

彼女はようやくペンをとり、織図と会ったと雑記帳に神語で白状した。

「いい子だ。織図がここにお前を寄こしたということでもいいんだな。次。ここに来る前、誰かに見慣れないものを貰わなかったか？ 特に織図からだ」

彼女の手が止まった。織図と物品の授受は行っていないし、心当たりもなかった。問い詰められても困る。本当に貰っていない場合はどうすればいいのかしらと、彼女は思い悩んだ。彼は無回答を許してくれそうにない。

「なんでもいい、思い出せ。何か貰った筈だ。ゴミみたいなものでもいい」

だが、そういえば彼女は右手の指先で、左手の手首をちょいちょいと搔いて、何かをつまみあげる仕草をした。つまんだものを掲げ、自信がなさそうに荻号の手に乗せた。これが荻号の求めているものだとは到底思えなかったからだ。

「？ どこに、何がある」

荻号は何もない掌に目を凝らすと、ごく細い透明な糸に辛うじて焦点が合った。一方人間と同程度の視力を持つ、アルシエルの目には見えなかった。

「織図から貰ったものか？」

頷く彼女を見遣った荻号は、すぐさま彼女に起こった変化に気付いた。さきほどまで何も見えなかった彼女の薄い心層が浮かび上がり、マインドギャップが彼女の脳の中で鮮明にその存在を主張していた。その糸が、彼女の思考を外部の脅威から守っていたのだ。もはや彼女の盾は取り除かれていた。

「もういい」

彼は彼女の深奥に目を見張りながら、優しく労った。

「ペンを置いてもう、何も言わなくていい」

第2節 第19話 追跡

「こんにちは、かわいい使徒さん。こんなところで何をしているの？」

ひたすら帰途を急いでいた朱音にとってまさに、寝耳に水だった。朱音はあまりの衝撃にがくと、膝がぐだけた。背後から突然、朱音を使徒と呼んでくる女性の声。朱音は凍りつき、すぐさま振り返った。

いつだ、いつから尾行されていた？ それより……彼女は誰だ？

「な!？」

すぐ背後にいたのは、ピンクの不規則なボーダーのマフラーが印象的な、ロシア系の白人美女だった。日本語を流暢に話すので日本人だと思ったのだが、紅茶色の髪の毛と瞳。背丈はそれほど高くはない、笑顔の柔らかさから、優しい印象を受けた。悪い人物ではなさそう……だというのが。

「って、ああっ！」

朱音は声をかけてきた女が左肩にざっくりと大きな切り傷を作っているのを目ざとく見つけた。彼女の纏う裁判官然とした灰色のコートも、左袖が真っ赤に染まっている。重傷の負傷者だったようだ。「お、お、お怪我を!？」

「私のことは心配しないで。それよりもあなたは早く神階に戻ったほうがよいでしょう。ここは危ないですよ」

彼女は心から、朱音の心配をしているようだった。彼女の怪我をどうしよう。上島も出て行ったし、処置をしてくれそうなのは荻号しかない。重傷の彼女に付き添っていきたいが、荻号の家に戻っ

ては村を出るバスに間に合わない。

「あの、ひょっとしてあなたは女神様ですか？」

「私はファティナⅡマセマティカ、陽階枢軸7位に叙する数学神です。では、気をつけて戻るのですよ」

彼女は奢っているようではないが、使徒なら神々の序列と名ぐらい知っていて当然だろう？　といわんばかりだ。使徒としては常識なのかもしれないが、朱音は神階の事情を知らないし、荻号も教えはくれなかった。ひとまず枢軸と聞けばすごい！、とは思うけれども、それ以上の情報を持ち合わせてはいない。比企の威圧感に比べたら、枢軸のプレッシャーなど何という事もない、というのが本音だ。

朱音は愛想笑いをしてから彼女の行き先を尋ねた。

「あなたはどこに？」

「荻号さまのところにね。情けないことに、転移が使えなくなってしまったの。歩いて参ります、大丈夫ですよ」

彼女は恥ずかしそうに微笑むと、朱音に背を見せて歩き始めた。そのときだ。ぞわり、と朱音の腹の中で何かが動いたような気がする。朱音の右腕は機械的にずっと前に押し出され、気付くとファティナの方を指していた。朱音は彼女の腕を、まるで彼女のものではないおぞましいもののように見遣った。間違いなかった、彼女の腕には神経が通っていない。なのに腕は動く。

“何……何で手が、勝手に”

朱音は感覚が痺れたまま、何が起きているか理解もできないうちに右手の親指と人差し指を合わせて小さく輪っかをつくると、ファティナめがけて指先をはじいた。そう、おはじきをするように。

朱音の中に蓄えられていた何がしかの力が継がれ、弾かれた。彼女が弾いたものは、実質は微量の空気だったに違いない。それも、5mも離れたファティナの髪の毛も揺らすことのできないほどのだ。流体力学的に微風を生じはしただろうが、それがファティナの歩みを妨げるものでは断じてなかった。

だが……彼女は背を銃で射抜かれたようにあっけなく倒れた。ふあさつ、と柔らかい身体が土に落ちる、軽いファティナは畦の上に崩れた。朱音にはその様子を、ストロボ写真のように断片的に、しかし鮮明に見ていた。

“あ……！ えっ……！？”

まだ自分が自分であると確認するために、すぐにでもファティナに駆け寄りたかった。ちょうどよいタイミングで、小石が何かに躓いただけだろうと思ったから。朱音が数秒前に行った他愛もない動作のせいで、まさか女神が倒れたとは考えられなかったからだ。しかし朱音の身体は動かなかった。本格的に金縛りにかかってしまったようだ。

“助けて……荻号さん。か……体が動かない”

朱音は彼と一瞬でも離れてしまったことを後悔し、彼の名を呼んだ。彼にもらった指輪は大切なもので、財布の中に入れてポケットに入っている。肌身離すなど言われた言いつけを破った、その報いをただちに受けているような気がした。

地に墮とされ土をつけられたファティナはこの瞬間のうちに、何が起こったのか理解できなかった。この感触、完璧にやられている。今のはひよっとして……バイタル切断なのか？ そのインパクトはあったが、ファティナのバイタルはまだ奪われていない。バイタル

ロック（生命力施錠）をかけているからだ。だが、その鉄壁の守りがなければ即死だった。

たった今、背後からファティナは射抜かれた。何に？ その回答を得るのは難しい。背後には使徒の少女しかいなかった。使徒の少女に偽装した、何者かなのか？

息を殺し、やりすごすことすら危険だった。すぐに応戦しなければ、今度こそ殺される――。

それも今すぐに。

＊

遼生は、恒の心の中が激しく波立つのを見つめていた。さきほどまで鏡面のように静かだったというのにユージーンという言葉によって、恒の脳細胞は励起状態に入ったように動き始めた。恒の変化を、遼生は少しだけ寂しく感じなかったかという嘘になる。そしてあらゆる意味で、彼の中の多くを占める人物に会ってみたいとも思った。

「大きかったんだね、そのヒトは。それで、彼はどこにいるの？ 神階にはいないようだけど、生物階にもいないね。それらしきアトモスフィアを感じない」

遼生はさっぱりした顔で腰に手をあて、天井を見渡したが、恒は改めてそれを口にするのも嫌だった。

「もう、どこにもいないんだ」
という厳然たる事実を。

「どういう意味？」

遼生はかまとどぶっているのか何なのか、きょとんとした。改めでもう一度繰り返さなければならぬのかと、恒は口をつぐむ。は

つきり口にしなければならぬのか。彼は死んだと。認めたくない、だが認めざるを得ない。しかし遼生の問いかけは繰り返された。

「そんなこといっても。では、亡きがらはどこにあるの。遺骨も、君はその場所を知らないみたいだけど」

「亡骸？」

そうだ。遼生は鋭く抉ってくる。恒は具体的に指摘されて、はたとわれにかえった。彼は死んだ、恒は死んだと思い込んでいる。だがどうやって死んだ。恒ははつきりとは覚えていない。全てがあやふやなのだ。

「よく見せて、君の心を」

遼生は両手で恒のこめかみを押さえ、焦点を恒の頭の中に合わせて目を凝らした。この驚異的な遼生のMRIはまさに医療用MRIのようにアタック（入り）とアウェイ（抜き）を対象に体感させない。そのテクニクは精密機械そのものだ。遼生は恒の頭の中で密やかに抹消されつつあった記憶を、糸を絡め取るように復元しはじめた。かなり消耗する脳の使いかたをするのだろう、彼の手はじつとりと汗ばんでいる。

「彼がいなくなったから、レイアという子が身代わりになった。彼は……そう、彼は脳死状態にはあったけれどもまだ死んではいなかったみたいだね。ああ……なるほど。消えたんだ、忽然と。脳死状態にあったヒトが、そんなに簡単に消えられるかな」

恒は遼生の透視に誘導され、完璧ではないまでもおぼろげに記憶を取り戻してくる。

「記憶を失っていたのは……なにも俺だけじゃない。誰も思い出することはなかった。不在だったんだ。陽階7位は」

「そうなの？ 皆忘れてたってこと？ それって有り得ることなのかな？ ないよね」

恒の答えを聞くまでもなく、遼生は自己完結している。もっと早く……恒が遼生の存在を知っていれば、そう思うと悔やまれる。彼は記憶の地層を読み解き、誤った記憶に惑わされず真実を見抜くことのできる、他の追隨を許さない個性的な看破能力を持っている。彼とともに現実から目を背けないでいれば、簡単に創世者からの介入と明後日の方向へのミスリードを許すこともなかったかもしれない。

そう、この二年半はまさに失われた時間だった。恒は完全に、ある特定の創世者からのミスリードに乗せられていた。そしてもうひとつの敗因は、アルティメイト・オブ・ノーボディすらもそれに気付かなかったことだ。

「ノーボディ以外の創世者からの介入が入ったんだ……ノーボディも消されてしまったし。俺は何をやっていたんだ……」

この二年半、恒は行動を封じられていたも同然だったのかもしれない。鼻のきかなくなった犬のように手当たりしだいに、漫然と見当はずれな事を繰り返してきただけ。抗体を鍛えさえすればよいものと思っていた。まだ、間に合うだろうか。土壇場での軌道修正は手遅れになっていなければいい。

「そのあたりを含めて、織図様はご存じだったのかもしれないね。だからレイアって子を逃がした」

「そういえば……織図さん、何か変だったな」

ここ二年半の織図を振り返ると、彼はあからさまに恒と接触しようとしなかった。織図は恒に会うことを明らかに避けていた。何故あれほど親しい間柄だったのに避けられるようになったのか、今でこそ打ち解けたが、避けられるようなことを無意識のうちにしてし

まったのか、ずっと釈然としなかった。

恒はおもむろに携帯を取ると、織図の番号を探る。あのとときどうすればよかったなど、後悔は無用だ。弱気になるのは最善を尽くした後でいい。

「どこにかけるの？」

「織図さんに」

しばらくコールすると、プツツと電話が繋がった音がした。

「もしもし！ お仕事すみません。もしもし？」

織図は返事をしない。こちらの声は聞こえているのだろうか、電話口は水を打ったように静かだ。恒は何度も呼びかけたが梨のつぶてで、返事はかえってこなかった。

「つながらないの？」

「電波が悪いみたいだ、電話は取ってる。織図さん、聞こえますか？ お話したいことがあるんです。ユージンさんのことです。あなたはご存知だったんですね。俺、今から生物階に行きますからまた電波のいいところに出たら掛けなおしてください。たぶん、レイアも生物階にいます」

恒は電話を切り、電池パックを裏返して挿入すると、地球上のどこでも繋がる神階連絡衛星電話モードに切り替えた。これで生物階でも電波が届くはずだ。織図に真相を訊きたいが、あまりここでぐずぐずしていると生物階に行く時間がなくなってしまう。比企と約束したのは、本日中の降下だ。今日を逃せば生物階降下の令状も失効する。

「では、生物階に行こう」

「んーと、どうやって神階の門から出るのかな？ 確か手続きがいるんじゃないかったっけ」

「そういえば兄さんって、神体の量子化を利用した超空間転移はできないの？ 俺一人でも精一杯だから、ふたりは転移に巻き込めないんだけど」

恒は突出した潜在能力を持つ遼生ならば、超空間転移も朝飯前だと考えていた。恒ができる程度のことは、遼生にも簡単に出来る。決して過大評価をしているわけではない。

「なんだって？」

遼生は何の話か要領を得ないようで、悪びれもせずにこにこしている。そうか、そうだな。と恒は馬鹿な質問をしたと悪びれた。使徒階に幽閉されていた彼に、超空間転移の習得など必要もなかっただろうし、その概念も知る必要はなかった。教えれば要領よく習得するのだろうが、今は教える時間も惜しい。こうやってうだうだ言っている間に正規のルートで生物階に入るしかない。

「じゃ、門を使って行こう。令状はあるんだ。……あれ？」

恒は途端に焦りを感じた。何故なら先ほど携帯から志帆梨に送ったメールが、送信エラーになって届かなかったという通知が今、携帯に届けられたからだ。生物階に何か異変でもあったのだろうか？と心が逸る。志帆梨の顔を見るまで気が気ではない。

「生物階はどんな場所なんだろうね。楽しみだ」

遼生は楽しみにしているようだが、観光をする時間もないとんぼ返りだ。いつか彼もゆっくりと落ち着いて、平和な暮らしができるようになるといい。恒は義兄の穏やかな将来を祈りつつも、遼生を連れて神階の門の事務カウンターに行き、てきぱきと段取りよく比企の許可証と降下申請を行う正規の手続きを踏んだ。

「こんなときに、降下なされるのですか？」

「生物階は危険です。お考えなおしいただきませんか」

「極陽の許可は得ています。通してください」

「しかし……」

受付の使徒が五名ほど、恒を心配して集まってきて、口々に手続きをしながら何度も打診した。恒は比企の所有する有望な特待生として神階に広く認知されている。大切な人材、もとい神材を失うわけにはいかないと考えたのだろう。恒は彼らをなだめつつ、手続きを進めてもらった。

「あれ、おかしいですね」

門番の使徒が固く閉ざされた巨大な鋼鉄のハッチを開け、ハッチは轟音を立てて上下に開くと、強い風が吹き込んできた。恒と遼生は生物階入階のための差圧調整室に入る。ここで、神階から生物階へ入る者は生物階の気圧と重力に身体を慣らすのだ。

ハッチの奥は、神階の贅を尽くした内装が剥がれた宇宙ステーションそのままの景観がある。床は漆黒のカーボン素材で覆われ、青い基盤が壁面を走っている。横幅280m、高さおよそ130mの差圧調整室の奥には、三つの扉が穿たれていた。

神階にたった三基しかない神階の正門の一基に赤いランプがついて、それだけが神階に戻ってきてはいなかった。リジー・ノーチェスがたった一柱だけ降下しているが、彼女を転送したあとゲートは神階に戻っていたというのに……不審だった。

「誰か出たのでしょうか」

「いいえ、陰階でも降下記録はありません」

門番は慌てて、モニタで降下記録をチェックしている。門の出入りは厳しく制限されていて、記録簿で管理されている。紙面の記録簿を見ても、デジタルログを辿っても直前に使用した者はいなかった。

「変ですね。生物階降下はこのところずっと、規制されています

が」

制服を着た壮年使徒の門番が神経質そうに腕組みをした。

「制御エラーでしょうか、すぐに呼び戻しておきます」

彼の相棒の若い門番は首をかしげながら、戻ってこなかった一基を操作して所定の場所に戻すコマンドを打ち込んだ。

「門を使ったのはレイアって子じゃないの？」

遼生が恒に耳打ちをする。

「レイアはゲートを使わなくても転移で生物階に出入りするよ」

彼女はほとんどの事をすんなりこなしてしまう、万能の女神だ。

恒はレイアが門を使ったとはどうしても思えなかった。それに、彼女はグラウンド 0で……恒の目の前で失踪したのだ。神階で失踪したのではない。だからといって神階に戻ったとも思えなかった。

「生物階から神階への交通は、現在は一方通行に規制されています。極陽の許可がなければ、あなた方も例外ではありません。では、第一ゲートから生物階降下してください、生物階に出たら……」

「すみません」

恒はブリーフィングをはじめた門番の言葉を遮った。

「その、戻ってこない第三ゲートを使わせてください」

「え？ ですが……少々お時間が」

すぐに使えるゲートがあるというのに、恒はわざわざ戻ってこないゲートを使いたいと言っている。

「大丈夫です、待ちます」

「そうだね、それがいい」

遼生もすぐに恒の意図に気付いて同意した。

「神が立ち去っても暫くアトモスフィアはその場に残る、今なら誰がゲートを使ったか分かるだろう。君の判断は正しい」

第三ゲートの到着を待つ間、恒は生物階の状況を門番に訊いていた。神階にはまた、正門のほかに非常用分門という生物階と神階を結ぶ180基のゲートがある。これは生物階に降下している神々と使徒たちを迅速に帰還させるための設備で、3基の正門で対応しきれないほどの稼働率が見込まれる時に使われる。

正門のあるフロアのひとつ下の階にある分門から、生物階の人々の受け入れが始まっていた。受け入れた人々はひとまず使徒階の第4～8層に、それぞれの国と地域ごとに収容されるそうだった。先ほど確認してもらったところによると、日本人の受け入れは使徒階5層エリア17～18だそうだった。広岡県の人々はエリア17q となっている。そこまで分かっていたら、志帆梨を捜し出せる。ただしそれは志帆梨が神階に避難してくれていなければ、の話だ。

彼女はまだ生物階に残って恒を待っているような、そんな不吉な予感がした。

「ゲートが到着しましたよ」

「ありがとうございます」

恒は遼生を残して着いたばかりの第三ゲートの中に踏み込み、感覚を研ぎ澄ませる。自らのアトモスフィアの放散を断ち両手を広げ、残留アトモスフィアのプロファイリングをはじめた。感じるのは明るく軽やかな、これは陽階神のものだ。恒はこの気配を知っている。いつ感じたものか、記憶を慎重に、順に辿ってゆく。

天奥の玉座に座る比企にデータファイルを納入するために参内した数学神ファティナ、恒は彼女とすれ違っている。その記憶とすぐに合致した。

「わかりました。誰がゲートを使って生物階に出たのか」

遼生は頼もしそうに義弟を見つめると、無言で第三ゲートに入っていた。

＊

執拗に繰り返された暴行により遂に意識を落としかけた織図を蹴りつけながら、バンダルⅡワラカは再三マインドブレイクをかけたが、頑として彼の思考回路は看破不能だった。血だまりに浸ったサンドルを床になすりつけ、優位な視線から織図を見下ろしていたが、彼は決して優位な立場に立っていたわけではない。

織図は黙秘を貫き、一つの意味でバンダルとの駆け引きに勝ったといえる。その代償はあまりにも彼に痛み、それどころか生命の危険を強いた。

「……何が起きている」

バンダルはどう考えても、勿体をつけず織図を殺しておくべきだという判断に至った。織図は特務省に対して背任ともいえる行為を行ったが、どのようなトリックを用いたのか、その思惑を知ることができない。それであれば不安要素は消しておくのが定石だ。

織図は荻号 要の動向を探るために重宝していたが、荻号 要を失った今となっては他の職員と比して処刑を強く躊躇する理由もなかった。

少しの手がかりの見逃さないために織図の所持品をあらためていううち、静かな室内に不意にバイブ音が鳴り響いた。織図の白衣の下に、蠕動する物体がある。バンダルは無言で手を伸ばし、他人の携帯をわがもののように取り上げた。携帯を耳にあてがうと、聞こえてきたのは少年の声だ。

『織図さん、聞こえてますか？ お話したいことがあるんです……』
少年が電話を切るまでバンダルは無言で彼の話を聞いた。少年に

あれこれ尋問する必要などなかった、彼はこちらが話しかけずともぺらぺらと喋ってくれたからだ。その結果彼は織図がレイアを極秘裏に逃していたことを、それほど労せずして知ることになった。

通話が終わったあとの着信履歴を見ると、電話の相手は藤堂 恒というようだ。名前が暗号化されていなかったのが仇となった。思わぬ情報を得たバンダルは、忌々しそうに舌打ちをした。織図が彼の全てを賭して守り抜こうとしたものは何ら悪意もない少年の、タイミングの悪い一本の電話によって簡単に崩れ去った。

バンダルは織図に謀られていたと知り苦々しそうに床に唾を吐き捨てはしたが、織図に気を遣うこともなく彼を残して部屋を出ると、扉の外に直立不動で待機していた専属の秘書官に命じた。

「藤堂 恒という者を洗い。使徒か神かは知らん」

「織図様の処遇はいかがなさいます」

扉の奥の暗闇の中、血だまりの中に沈んで動けなくなっている織図を気にしながら、彼は恐る恐る尋ねた。密室の中では長時間にわたり、織図への粛清が行われていた。それを邪魔立てすることなど、誰にできただろう。

「まだ使えそうだ。今は生かしておけ」

バンダルは織図を振り返ることもせず命じた。秘書官は黙礼し、部下に指示を飛ばしていた。有能な彼の秘書官は五分としないうち、藤堂 恒に関わるデータを収集し整理してきた。比企がその権限においてひた隠しにしてきた藤堂 恒のデータは、特務省の独自のネットワークによって少しずつ採集されていたのだ。

彼の神体は人体に酷似している。神体検査の際に正式発表された、珍しい特徴を持っている。藤堂の正体が割られることはなかったが、さすがに極陽が擁する少年神だ。使えないただの鼻たれ小僧ではな

いと、目のきく彼はすぐに見抜いた。彼のデータに執拗なまでに目を通し証拠固めをしながら、レイアと藤堂 恒がかなり親密な関係にあったことを裏付けていった。

そして藤堂が生物階に向かうとしたら、真っ先にどこに行くべきかということも。

「必ず、燻り出す」

彼は虚仮と知った階下のレイアを見下ろしながら、彼女に対する妄執とも取れる言葉を浴びせかけた。

＊

「へえ！ 広いな、生物階の空は。使徒階の空よりずっと青いし、雲もある！」

ゲートから入階衛星に降り立った遼生は、初めて見る生物階の空に触れはしゃいでいる。そう、使徒階には雲がない。遼生は雲をはじめて目にして浮かれているのだ。このひとはどうしてそんなに暢気でいられるのだろうと、彼よりは多少慎重なものの考え方をする恒は理解できない。これからまさに三階が本格的な危機に見舞われるというときにいい気なものだ。入階衛星の形状は生物階でいうところの、海の上に浮かぶ灯^{ファイ}浮標に似ている。

衛星の下部にはジャイロがついていて常に下を向くようになっていたので、宇宙に向かって伸びる塔のような姿勢をいつも維持している。神階の第三ゲートから入階衛星のタラップに転送されたふたりは下を見下ろしているところだった。

恒は義兄の楽観的な性格に救われながら遼生の腕を握った。

「いくよ」

「転移かい？　まずは君の家だったね」

恒は実家にイメージを繋いだ。彼にとっては何ということもない三つの動作だ。場所を思い浮かべトンネル効果を利用して基空間に出て、座標を捜しその場所に降り立つ。たったそれだけの、幾度となく繰り返した動作だ。しかしこのとき、恒の直感が告げていた。基空間への抜け道を見失っている、転移は不可能だと。

「え!？」

「どうした？」

「転移が使えない。待って」

恒はその場でジャンプして、血相を変えた。瞬時に感じた違和感、神階の何倍かの重力を有する地球上ではあるが、それは直接の原因ではない、体が異常に重い。鉄でできているかのような。これではまるで……。

「何か変だ、俺だけ？」

飛翔態勢に入ろうとして失敗をする恒を見て、遼生は含み笑いをしていた。恒はしゃくにさわるので、遼生にも振ってみた。

「笑ってるけど、兄さんはできるの？」

「別に君を馬鹿にしてたわけじゃない。だって、ははは、こりゃいい。高いところから降りられなくなるなんて、一度も考えたことなかったからさ」

「何がおかしいんだよ……」

こんな時に笑っていられるほど、恒は頭が足りないわけではない。「君と一緒にいると、何でも楽しく感じるんだ。申し訳ない」

「いくら何でも、この高さから落ちたら死ぬんだぞ。フィジカルギヤップだって足りない、下は海だ。海って、落下物にとってはコンクリート以上に硬くなる。ここから落ちた場合の落下衝撃力なんて、簡単に計算できるだろ？」

少しは真剣に事の重大さを論じてほしい。頭のきれる彼の事だから、まったく楽観視しているわけではないとは分かっている。

「そんなの、分からないね。君のいうコンクリートってのが、どの程度の弾性を持つかわからないから立式できない」

「転移が使えなくて、飛び降りたら死ぬとしたら？」

「飛び降りるよ、僕は」

遼生はさらりとそう言った。

「死ぬって！」

ひとの話を聞いていたのかと怒鳴りつけたい。義兄だからといって構うものかと恒が口を開きかけたところで、遼生も彼の持論をぶつけてきた。

「死なないよ。どうして死ぬの？ 斥力中枢での飛翔の原理において考えてみなよ。なら、反発力を生じる現象を利用すればいい。幸い下は海だし、アトモスフィアは磁気を帯びる。もっと説明しないと分からないのかな？」

その先を言わせるほど恒は愚鈍ではないが、それにしてもひどい発想だ。いくら計算上では当たっていても現実味がないのなら、それは妄想と変わらない。

「まさか……アトモスフィアで海面を磁性化するとか？」

海水は純水と違って、磁気を帯びやすい。確かにそうだが……海面を磁性化し、同じ極性を持たせたアトモスフィアを反発力として用いれば、衝撃を和らげられる。遼生はそう言いたいのだろうか、そうは言わないでほしいと思った。頼むから。

「ほらね、できそうだ。君は後から来るといい。でもあまり遅れないようにね」

遼生は言い残すと怖じることなく、真剣な面持ちで頭から空に飛び込んでいった。ひゅうつ、と遼生の落下音が聞こえてきて、恒は肝を冷やした。彼は何をしている、冗談じゃない！

「兄さん！ 馬鹿すぎる！！」

勇敢と無謀は違うのだと、言ってやりたい。しかし、恒も続いて遼生を追うはめになった。彼ひとりをみすみす死なせるわけにはいかない。恒はFC2ーメタフィジカルキューブを手にし、ロツクを外しながら入階衛星の淵を蹴った。神具の中に反発力を生じるコマンドはいくつかある、それを相乗させれば……少なくとも遼生の発想よりは現実的だ。

それに、海水を磁性化させるために必要な量のエネルギーをほぼ瞬間的に海水に叩きつける、それは海面衝突ぎりぎりでなければ不可能だ。彼の鼻先が水面についてからでは遅い。彼が海の藻屑となる前に遼生に追いつかなければ！

奈落へと落ちて行くかとも思われるような風切音が、恒の耳を吹き飛ばすかのようだ。遮ることもできない風圧は、時折下から打ち付けてくる埃をとまって角膜の水分を蒸発させひりつかせる。それでも目を閉じる事はできなかった。

数十秒後、ちょうどエクマン境界層から落下を続けていた恒は、接地層に滞空して上を見上げている少年をみとめた。遼生は恒が想定したよりずっと上空で、海面の磁性化を行って反発力を生じ浮遊していた。遼生は大きく手を振ると、恒が上空からすれ違う瞬間、示し合わせていたように恒の手を鷲掴みにした。

「すごい！ 信じられない」

「うん、馬鹿じゃないからね」

恒は神具も持たず生身でのりきった遼生の適応力に素直に感動したが、遼生はおざなりな返事をする、恒の手を掴んだまま海面に降り立ち上空を見上げた。そういえば僅かに、日が翳ったような気がした。

「見て、恒。あれは何だろう」

遼生は逆光に手をかざし目を細めながら、一点を注視している。彼の顔はもう笑ってなどいない。あの自信家の遼生が、凍り付いている。

「あれは!!」

恒は遼生が指をさしたものを見て、ひとまず叫んでみた。が、見当もつかない。

「何なの？」

「何？」

遼生が恒に訊ねているのに、恒も遼生に自信なさげに訊ね返す。それが紛れも無く人工的に造られたものだということとはわかる、だが恒はこれほどの大きさと質量を持った建造物が重力に引かれて地面に衝突せずに宙に浮く動力源に思い至らない。飛行船を馬鹿でかくしたような、ラグビーボール状でありながら、硬質の外壁を持つ要塞のようでもあった。

その全長は見渡す限り何kmあるのだろう。要塞の側面には窓ひとつないばかりか、ライトも灯っていない。飛行するための翼もエンジンもない、ただの巨大な飛行物体。その得体の知れない不穏な姿に、恒は恐々とした。あたかも海中に巨大な魚でも潜んでいるかのように海上に大きな影を映じていた。

「知らない。でも」

あまり、よいものではない。空中要塞の腹の部分には紋章が刻まれている。遼生はじっと目を凝らす。

「特務省かもしれない」

遼生は僅かな濃淡によって見分けることのできた絶対不及者への“聖櫃”を暗示する、特務省の紋章をみとめた。

「特務省って？ 織図さんがいる特務省？」

「そうだよ。特務省は確か、移動要塞なんだ。普段は神階に係留されてあたかも動かない施設のように振るまっているけれど、戦艦として機動性を持っている。INVISIBLEが来るかって時だから、特務省も動くよ。それも神階とは独立した独自の判断でね。ほら、よく見ると周囲に四隻の小さな衛星が周回しているだろう。あれがおそらく、転移層を生じる膜を張り簡易ゲートを発生させる高エネルギー相転移装置だ。特務省はそれを通して生物階に来たんだよ」

「すごい……何でそんな事まで知っているの？」

恒は尊敬をこめたまなざしを向けているが、遼生にとってそれは決して誇りに思うようなことではなかった。

「父のおかげだよ」

そこにはヴィブレリスミスからの多大なる影響があった。口述で教わったのではない。むしろ、無理矢理刷り込まれたというべきだった。人格の認められなかった遼生は現実の世界に触れることが許されず、拘束されたまま一方的かつ膨大な知識が与えられた。神経に接続端子を刺し込まれ、情報の取捨選択はおろかその流入を拒む事すらできなかった苦痛に満ちた辛い日々を振り返る。

彼の脳をあたかも生体ハードディスクのように見做したがゆえに、父は遼生の感情や自我を司る脳領域は必要のないものとして容赦なく削り込んだ。父は実験体が心を持つことを、許さなかったのだ。しかし、八雲 青華は親心として遼生の心を完全に消すことはできず、一部を残したため遼生は生殺しにされ、自我を持って苦しみ続けた。

心なんてなければ楽になれるのにと、遼生が何度思ったか、彼女に乞いたか知れない。そして母親が遼生に絶対不及者の体液を投与したあの日から七年という長い長い時間をかけ、遼生は少しずつ記

憶を整理し自我と感情を取り戻してきた。それは壊されかけた心を再び取り戻すための長い旅路だったのだ。

刷り込まれた知識はまだ彼の記憶から削除されてはいない。それが今となつては肥やしとなり、彼の武器となっている。

「特務省は、グラウンド 0 を目指しているのかな」

そう言った恒はこのとき、一つの事実に思い当たる。

「そうだね。君の推測は、正しいのかもしれないよ。特務省はレイアって子を追ってきたんだ」

「織図さん、どうして!？」

恒は織図に事実を確認しようと、携帯電話を取ろうとした。先ほどの返事もまだかかつてはこない。電話口には出ていたはずなのに何か変だ。

「ダメだ!」

遼生は素早く携帯を持つ恒の手を押さえた。

「!？」

「逆探知される!」

「何で俺が特務省にマークされるんだよ」

「君はレイアの居場所を、直感的に推測したにすぎないかもしれない。でも、特務省はレイアの居場所を掴みあぐねていて……」

「俺がさっきかけた電話がってこと?! 織図さんはリークなんてしない」

「とかさっき君、電波がわるいって、言ってなかったっけ?」

遼生は盗聴されたと言いたいのだろう。レイアに近い恒からの情報、彼らにとって信憑性のあるものだ。行き先を見失っていたというのなら、手持ち無沙汰にかどうかは知らないが、生物階を目指しもする。

「急ごう。特務省より早くレイアって子を見つけないと。とりあえず、陸地まで走るよ」

「……ここ、沖縄本島あたりだよ。転移も使えない、まわりは死ぬほど海だ！　ずっと走って行くの！？　特務省の艦はそんなに速くはなさそうだけど、とても追い付けないよ」

遼生と恒は海上を走りながら、怒鳴るように会話している。大声を出さなければ海風にもついていかれて、声がかき消えてしまうのだ。遼生が先導して海面を磁性化し、磁力が消えないうちに恒も遼生の拓いた海上の道を駆け抜けるという連携で、彼らは海上を疾走していた。幸い、船の一隻にもお目にかかっていない。漁師も避難するので精一杯なのだろう。

「その沖縄本島てのは、死ぬほど海に囲まれているのかい」
地理を知らない遼生でなければ、真面目に答えるのもバカバカしい質問だが、恒は律儀に答えてやった。

「そうだよ」
「死ぬほど海に囲まれてるなら飛行機があるだろうね。小さいのでいい、使わせてもらおう。贅沢はいわないけど、戦闘機があればいいな」

遼生はぶつぶつとつぶやいている。

「米軍の戦闘機を使うってこと！？　フェンスをまたいだだけで空軍に射殺されるよ」

射殺されるまでは言いすぎだが、即身柄を確保されることは分かっている。そして一度拘束されたら、事情聴取などに時間がかってなかなか釈放してもらえそうにもない。遼生はわざわざ後ろを振り向いて、薄く笑いながら恒に尋ねた。

「さっき門番が、生物階から殆どの人間は避難するって言ってなか

った？ 空港に残ってるのは誰？」

「無茶苦茶だ……兄さん、あなたは過激すぎる！！」

彼の思考回路は容赦ないまでに合理的だ。だから理論的にそれが正解であれば、現実ではどうかなど考慮もしない。恒ならば飛行機をジャックするなど思い至りもしないような犯罪まがいのことを、何の罪悪感を感じることもなく、平気でするのだ。遼生はまだ、夢の中で生きているような心地でいるのではないか。恒はそんな錯覚を覚えた。

やっとのことで沖縄本島に上陸した頃には、特務省の艦の尾部が過ぎ去ってゆくところだった。そういえば、何故特務省は広岡県に転移をせず、入階衛星のある沖縄のあたりに現れたのだろうかという事かと思っただ、恒が第一ゲートを使ったという事がリークされているのかもしれない。特務省は海上を走っていた恒と遼生を視認しているのだろうか、いないのだろうか。

どちらにしても、彼らより先に村に着かなければならなかった。

恒と遼生は看板を頼りに沖縄自動車道を北上し、嘉手納基地をさがし、ひらりとフェンスを乗り越え滑走路に侵入する。遼生の予想通り、滑走路はおろか格納庫にも誰もいなかった。ぴかぴかに磨き上げられた戦闘機が、機首を一様の方向に向けてスタンバイしている。遼生は一番手前に準備されていた戦闘機の操縦席のドアを無理矢理こじ開け、操縦桿を握った。恒が記憶する限り、これは沖縄にはほんの数基しか配備されていない、最新鋭ステルス戦闘機のF-22Aラプターだ……と思う。

恒は機体に入り込みながら、やっぱりこれだけは聞いておいたほうがよいと思い、恐る恐る尋ねた。

「ところで兄さん、戦闘機操縦できるの？ これってステルス戦闘機だと思うんだけど」

「任せて、知識はあるよ」

恒はぎよっとしながら、しかしそれ以上尋ねるのも不毛だった。

第2節 第20話 ドッグファイトF22A、アゲインスト9G

「ペンを置いて、もう何も言わなくていい」

レイアにとって一番身近な存在であった恒にすらも口を閉ざした心境が、荻号にはよく理解できた。言葉にした瞬間にニュアンスを違えてしまいそうであり、非常に繊細な問題でもあり、どのような判断を下したとしても正解に結びつかない解のない問題だ。

彼女が聞いた天啓は……遠い海をゆく一羽の鳥が、死病におかされ力尽きようとしていたとき、海原の小舟の上からそれを見上げる者は手を差し伸べて羽を休める事を許すのだろうか。そんな問いかけにも似ている。

死病におかされた瀕死の鳥は、舟人を死に至らしめるだろうか。舟人は病鳥に手を差し伸べないこともできる。彼女が手を差し伸べなければどうなるのか……死ぬのだ、鳥は力尽きて溺れ死ぬ。

「……何故、“止まり木”を求めるのか。ずっと、その意図がわからなかった」

荻号は彼女に今しがた手渡されたばかりの細糸を、彼女の手首にきつく結わえつけた。荻号が彼女の記憶を看破したことが後ろめたくなるほど、彼女の マインドギャップは破られてはならないものだ。この糸を彼女に与えた織図の判断は正しかった。彼女の記憶には、鍵をかけておかねばならない。

「今、ようやくわかった」

荻号が全てを見通したかのようにそう告げた。

「随分と抽象的な話だな。一体何が言いたい」

アルシエルが水をさしたが、荻号が補足をしないので間に割って入ることをやめた。暫し沈黙を保っていた彼女は、やがて遠くの空

に視線を戻す。荻号は彼が看破したものによるショックのため気付いていないようだ、西の方角に神が現れたのだ。それだけなら何も思うことはないが、見逃してはならないのはアトモスフィアが散乱状態にあるということ。つまりこれは、彼なり彼女なりが、窮地にあるということを示しているのだ。そこに行つて、何が起こっているのか確かめる必要があると考えた。しかし彼女にとって、不本意ではある。

”何の義理があつて、神を助けに行かねばならぬのだろう“

不満を述べかけて、苦笑した。そういえば荻号へのいくつかの、それほど軽視できない大きな借りがあつたことを忘れてはいなかったからだ。おそらくはレイアを通じて世界の根源に触れようとしている荻号を、一緒に助けに行かないのかと誘わなかった。ふたりで連れ立ってゆくまでもない。レイアが世界の命運を握る女神だというのなら、危険な場所には連れて行くべきではない。

荻号かアルシエルが単独行動を取つて、どちらかがレイアを安全な場所にとどめておくほうが得策だ。彼女はそつと席を立ち、玄関で靴を履いて外に出ると、しなやかな肢体をばねのようにしならせて蹴上がり、持ち前のジャンプ力で音もなく軽快に屋根に飛び移る。

屋根上に立てかけてあつたグングニルを足先で弾き、蹴上げて空中で取りあげ、今しがた虫干しをしていた不可侵の聖典の真上に突き立てた。沼地に沈む櫂のようにグングニルを書物型ツールの中に格納してゆく。そつと介添えをされ沈みゆく鈍色の輝きを持ったツールを見送りながら、黒く長い睫毛のついた瞳を瞑った。

「しかし、かの者は何故窮しておるのか」

アルシエルは両手で最凶の書籍型ツールを拾い上げると、その感触を確かめるようにやや冷気を帯びた表紙ぎゅつと握りしめ、洋

館の屋根瓦を軽やかに蹴って空高く舞い上がった。

＊

灰色の空とグレーのコンクリートの敷き詰められた無機質な風景の中に、三角と四角の単純な図形の組み合わせで出来たような、無駄のないフォルムをした F-22A ラプターのボディの上に立ってその鈍い輝きを見下ろす、八雲 遼生と藤堂 恒。ふたりの少年はこそそと中に乗り込んでいた。市民開放の日でたくさんの子供達があふれる特別なイベントがあればともかく、無人の基地に子供ふたりだけという状況はあまりにこの場所にはそぐわない。

避難しろとの軍の命令があつたのか、基地内にはとうとう、一人の人影も見当たらなかった。また、神階には 30kg 以上の荷物の持ち込みが禁じられているので、10トンを超える戦闘機などお荷物どころか、最初から乗り入れという発想にも至らなかったようだ。ともあれ、最新鋭ステルス戦闘機は出撃準備がなされたまま、格納庫におさめられもせず屋外に残されていた。普段ならありえようもないことである。

「だめだよ、そこに入ったら危険だ。そこは乗るためのスペースじゃないよ」

「え？ ならどうするの、シートにふたりで座るってこと？」

訓練用の二人乗りの F-22B は開発が中止となり F-22 は一人乗りが普通だが、一人用の機体にふたりで乗ろうとしているのだから矮小なのは当然だった。結局ひとつのシートに、操縦する遼生が前、恒が後ろに掛けた。シートに座っている恒の膝に遼生が座っているという構図だ。

計器類のアナログメーターなどひとつもない、デジタル化された

グラスコックピットを指差しで適当に確認すると、暗算で沖縄から風岳村までの燃料の計算をしている。彼らしいといえれば彼らしいのだが、復路のことは考えていない。どうもこういう、社会常識を飛び越えることには躊躇してしまうのが恒なのだが、彼の行動力をどう評してよいものかわからない。お世辞にも賞賛には値しないということだけはいえる。

「シートベルトって、しないんだ？」

飛行機ひとつ乗ったこともない遼生が戦闘機を操縦できるのかどうか、恒は心配だった。彼は自信過剰なのか事実できるのか……恒の疑いをよそに、遼生は今にも飛び立ってしまいそうだ。

「安全嗜好だね。君が使うといい」

彼は日本円で180億円もする戦闘機エンジンに、車に乗るような気軽さで点火していたところだ。轟音が耳から突き上げるように脳を揺さぶる。気がつくともスムーズな動きで、機体は離陸のための滑走に入っていた。

動いている……遼生の一見適当ともとれる操縦によって、米軍が最強と誇るステルス戦闘機が。空母艦からのテイクオフをも想定しているこの機体はまともに加速すれば離陸までの距離は短く、あとわずか1kmで離陸してしまう。

恒は今更のように後悔した、こんな手段を用いるならもっとましな方法が他にあったのではないかと。たとえば、沖縄にも配備されているであろう神階の分門を使って一度神階に戻り、比企のOfficial Bird、火鳥「貫^{かん}」を借りるほうがいい……。

「貫」は火の鳥という名をいただくだけあって、その翼で切り裂いた空気はあまりのスピードのため生じた摩擦熱で、燃え上がるよ

うに熱くなるのだという。「貫」は神階最速を誇る光獣なのはいうまでもなく、空気抵抗を完全に排除できる領域を形成しながら飛ぶので戦闘機よりも断然速い。一度戻ってタイムロスをしてでも、それでも特務省よりは早く風岳村に着くと考えられる。

「じゃ、いくよ。離陸のためのGは9Gぐらい。最高速でマッハ1.8だ、多分」

「9Gで！ 血管切れるよ！ パイロットは耐えられないから耐Gスーツを着ると思うんだけど。今からでも間に合うから、極陽に光獣を借りた方がよくない？」

光獣ならば重力緩和機能のついた足輪をしているため、騎乗者に重力負荷はかからない。いくらF-22Aが高機動性を可能にしているとはいえ、それはパイロットにとって快適だという意味ではない。一方、飛ぶためだけに存在する、光獣の飛翔は合理的で無理がない。重力に反してチタン製の重いボディをエンジンで力任せに飛ぶのとは違う。

「耐Gスーツがないとか、文句が多いなあ。まさか耐G訓練もしていなかったわけじゃないだろう？」

挑発して煽られてもそこは折れてはならない部分だ。臆病者の烙印を押されても構わない。

「別にロケットや戦闘機に乗る予定もなかったからね。それに、怪しい操縦で墜落して死ぬなんて間抜けすぎるよ、やめよう」

遼生につられて自ら乗り込んだ身でんだが、恒は弱腰だった。遼生のしていることは、まさに車を運転したこともない少年が戦闘機を操縦しようとしているようなもの、これが比喻などではなくて事実なのだからもうどうしようもない。

無理なものは無理だ。命知らずの遼生に付き合っただけで死ぬほど、恒はこの世に未練がないわけでもない。それに、INVISIBLE収束を目前にして自滅してしまっただけは、これまでの日々は何だったのかということになる。

レイアと違って、こちらは不死身ではないのだ。神は全能ではなく不死身でもないこと。その単純な事実を認めなければ、命がいくつあっても足りやしない。

「こういうものはよっぽど変な事をして、それを補正してくれるフライ・バイ・ワイヤ性能がついてるから大丈夫だ」

「ちょ……」

彼はそう言うと、恒の同意も待たず加速をはじめた。恒は慌ててシートベルトを締めると、体感したこともないほどのプラス方向への重力がかかり、急激にシートに吸いつけられる。恒は唇を引きつらせながら何かを言いかけたが、あまりの加重で舌を噛みかけたので一旦口を閉ざすことにした。

神々の用いる飛翔術は、新幹線より多少速いかもしれないが、超音速を超えるスピードを出すことはできない。体力を消耗するうえ、よほど急いでいるときは長距離を飛翔術で移動するより、転移術を使った方が効率的だからだ。そんな理由で、戦闘機のスปีドとその加速が生み出す加重を体感するにあたっての恒の心境は、戦闘機に無理やり乗せられて怯む民間人とあまり大差なかった。

平時の環境下にあつて万全な状態では少しも怖くなどない、だが、墜落すれば100%確実にとはいわないがほぼ確実に死んで、そして転移術も使えないとなると怖くもなる。

恒が肩を竦め目と口を閉ざしてから、どれほど経っただろう。ゆ

つくりと機体が傾く浮遊感がして、テイクオフから安定飛行状態に入ったことを知った。恐る恐る目を開けると、遼生はいっしんに前方を見つめ、時計計器を見ながら操縦を行っている。高度はかなり出ているかと思いきや、彼は低速を飛んでいる。そしてコックピットの外からすぐそこに見える白いものは……

「ちょ！ 兄さん……翼から煙出てるし！！ もっと上空を飛ばないと！」

「ベイパートレイルだよ、ただの水蒸気さ。怖がりだな恒は。それに高高度を飛ぶと特務省を見失う。これでいいんだ」

恒が煙かと見間違えるほどに、圧縮された空気が戦闘機の周囲を取り巻いている。遼生は計器を上手に使いこなしながら器用にステルス戦闘機を巡航させていたが、意図的にスーパークルーズ（超音速巡航状態）には入らなかった。超音速のスピードで低空飛行を行えば、民家の窓ガラスやプレハブ住宅などをその衝撃波で片っ端から吹き飛ばしてしまうからだ。

彼の冷静な判断と落ち着いた表情を見て、恒も次第に落ち着きを取り戻してきた。

「なんか変なんだよね……どうして操縦できるの？ もしかして、あてずっぽでやってる？」

恒は疑わしげに遼生に尋ねたところ、遼生は答える事もせず質問に質問を重ねてきた。

「乖離電位の残留って現象、知ってる？」

造語なのだろうか、捏造なのだろうか。恒は知らなかった。これだけで、勉強にはそれなりに勤しんできたつもりではあるが、失念したおぼえもない。初耳だ。また彼のトンデモ学説を唱えはじめるのではないかと、恒は身構える。彼は嘘をつかないことをモットー

にしているらしいが、相手を煙にまくことが得意だ。

「なにそれ」

「人間は神と違ってね、強い思いをそこに残すんだよ。人の乖離電位はとても強い、だからマインドギャップを形成できないし、人は一つの脳で異なる事を同時には考えられない。人間の思いは強いんだ。神や使徒よりずっとね。その気になれば何年前に死んだ人間の電位だって、場合によっては残っていることがあるんだよ」

彼はもつともらしく力説する。恒を安心させる為だけに、口から出まかせを言っているのではないようだ。そうだ、人間の想いは強く情は深い。恒は知っている。そして、思いを残すという言葉も古来より多く存在する。人間に対するマインドブレイクは簡単だ、それは彼らが強い思いと信念を持っているから。人間のみがEVEに入るができるという事実も、強い思いを記憶として残しているからだ。織図は人の執心というものに、敬意すら覚えると言っていた。結局どこまでいっても、人々の感情の多様性に、神階の住人は追いつかない。

「残留思念ってこと？」

「簡単に言うそうだね」

遼生は機内に残された電位から、この場所に座って何百回と繰り返されたフライト記録と操縦士たちの思いを垣間見ていると言った。パイロット達の強い思い。彼はそれを再構築しなぞっている。これも遼生のMRIの看破能力の一部なのだろう。

そんなことまで出来るのか……恒はつくづく、遼生と比べて自分は何が勝っているのだろう、劣っていることばかりなのではないかと思った。彼とほとんど変わらない遺伝子構造を持っていながら、何故これほどまでに差がついたのだろう。生まれ持ったセンスが違

うと言いつてはできない。その理由はひとえに、恒が自発的に組んだ鍛錬は、遼生が強制的に受けた訓練より決定的に甘かったということを実証していた。

遼生はその後も何事もなく平常心で、F-22Aを操縦している。彼の表情に余裕があるように見えたので、恒は先ほどから言い出せなかったことを切り出した。

「兄さん。そのMRIっていう看破法、今度俺にも教えてほしいんだ」

「だめだ」

たった一言で却下されてしまって、恒は面食らった。そんなにあつさりと、一言で片付けられてしまうとは思わなかったからだ。遼生にしかできないことだというのなら、きっぱりと諦めろというのだろう。恒は不満に思いながらも、口をつぐんだ。

「そう……」

「あ、ごめん何て言ったの？ ちょっと今それどころじゃないんだ」
彼は恒の話を聞き流していたようだ。確かに、操縦中に話すことはなかったかもしれない。彼は宣言しただけあって知識はあるようだが操縦に関しては素人同然なのだから、集中力を削るような行為は慎むべきだった。後ほど改めてMRIを教えてもらおうと考え直した。

「黙っとく」

「いや、黙らずに一緒に考えてくれ。燃料が足りないんだ」

「燃料が足りない!？」

MRIの話などどうでもよくなってしまうほどの、衝撃的な一言だった。

「でも、離陸する前にちゃんとそのあたりも織り込んでたでしょ。もう一回計算しようか」

遼生は出発前に、燃料計算をしていた筈だ。再計算しなければならぬというのなら、条件さえ口述してくれば恒でも暗算ではじき出せる。彼は操縦で精一杯だろう、そのぐらいのサポートは進んで引き受ける。

「“重い”んだ、この戦闘機は。重力異常が起こってるんだろ、ね、本来の重量よりかなり重くなってる。あと、低高度を飛んでたからな」

よく知られていることだが、飛行機は低高度を飛ぶほど空気抵抗があつて燃料の燃費が悪くなる。遼生は低高度を飛ぶ特務省を追跡しようと低速で、それほど高くない高度を飛んでいたために、燃料を無駄に消費させていたのだ。特に、重力異常条件下にあつての低速低空飛行による燃費の悪さは、遼生の計算を狂わせた。恒はまさか遼生がそんな単純なミスをすると思わなかったものだから、気拔けて上ずった声を出した。

「え!?! 冗談じゃなく本当に風岳村まで届かないってこと?」

「そういうことだね。ここらで降りないといけないけれど、折角だから乗り換えようか。あれに」

重大なミスをしでかしたというのに、遼生には反省のいろもなしだ。あれというのは、わずか1km前方を悠々と航行している特務省の艦船に他ならない。

「特務省に?! これはどうすんの。乗り捨てていくの?」

「そのつもりだ」

1億ドルもしかたという戦闘機を落として、乗り捨ててゆこうとしている。恒はつくづく遼生の配慮の足りなさど過激すぎる発想を嘆かわしく思う。

「何を言ってるんだ！ 下は街だぞ、こんな重いものを落とせないうえに、この中にはミサイルを山ほど積んでる。これが街中に落ちたら、逃げのびていない多くの人が犠牲になるんだぞ！」

「そうか、忘れていたね。じゃ、二手に分かれよう。僕は特務省の真上につけて、君をおろす。僕はこの戦闘機を無事にランディングさせてから、何とかして君を追う。どうだ、平和的だろ？」

遼生は清々しく提案する。何とかして、という曖昧なところが不穏で怖いのが、戦闘機を落とさずに特務省を追う方法はそれしかなさそうだった。

遼生はそういえばと、思い出したように付け加えた。

「んー、あとひとつ疑問なんだけど」

「何？ そういうのは早く言って!!」

恒はまくし立てる。遼生が気付く素朴なことは恒にとっても重要である可能性が高いのだが、どうも遼生は話を一呼吸おいて、相手の反応をみる癖がある。こんな非常時に勿体をつけて時間を無駄にしないでほしい、お願いだから。焦燥感に駆られる恒とは対照的に、彼はどんな危機的状况においても危機感が希薄だ。

「特務省のリーダーはこっちを捉えてないのかな。そりゃ、ステルス戦闘機ってそういうものなのかもしれないけど。さっきから全然攻撃を仕掛けてこないんだよね」、

ステルス戦闘機といえば、リーダーに映りにくいことがうりの戦闘機だ。攻撃されないことは有難いことだが、これだけおっぴらに真後ろから尾行しておいて何もしてこないのは確かに、引っ掛かる。恒は身を乗り出して、辺りの景色を見渡した。

「それってさ……下が街だからじゃない？」

恒はそう言いながら、今もなお危機的な状況にあるのだと気付いた。特務省は不審なステルス戦闘機の追跡に気付いている、そして乗っている者が軍人ではないということもだ。気付いてはいるが、

攻撃しない。ここは撃墜できない場所……つまり地上に街があつて人がいるからだ、そう考えると辻褃があう。

「ということは、街並みが途切れたら！」

「山間部に差し掛かったら、高度を上げて隠れた方がいいかもね」
「え!？」

何と運の悪いことだろう、熊本市から突然街並みが途切れ、山地が下に見えてきた。正面に見えるのは酒吞童子山をはじめとする、有名な阿蘇山の北西にあたる山地だ。高度を上げようとしたが、いつの間にか谷底を航行していた。F-22Aは特務省に先導され、直進以外の進路を潰されていた。

「まずい!! 特務省の上につけて!!」

この時を見計らっていたかのように、先ほどまで閉ざされていた特務省の気球状の艦体の背面のハッチが開き、遠くからでも見分けのつく砲台のようなものが二門出現して、こちらに向けられている。

「早く! 何で逃げないの!」

「撃ってくるまで待つんだよ」

遼生は耳元で叫ぶ恒を振り払うように、短くそう言い切った。

「どうして! 逃げないと向こうの思う壺だ!」

砲門がぎらりと光った瞬間、遼生は右側面ウェポンベイからAIM-9Xを二発射出すると機体を急激に上に傾けてアフターバーナーを点火し超加速した。ほぼ垂直の角度で急上昇し、超音速状態に入る機体をソニックブームが水蒸気のドーナツのように覆っていることだろう。歯を食いしばって機体をコントロールし、遼生は機体を裏がえしに翻しながら二発のAIM-9Xが確かに二門の砲に命中したことを確認した。

砲門が完全に破壊されたかどうかまでは確認できなかったが、面食らうか、あるいは修理に手間取ってしばらくそこから撃ってくることはないだろう。

「あそこから熱が放出されるのを、待っていたってこと?!」

戦闘機が発する轟音にかき消されそうになりながら、恒が遼生に問いかける。

「そうだよ。アフターバーナーで燃料をかなり消費したけど、砲台二門潰せたから悪くないよね」

「今使っちゃったのって、AIM-9X?!」

「多分そうだよ」

遼生は兵装を示すグラスコックピットを指差して確認して頷く。

恒は遼生の思い切った行動と判断に賞賛をおくりはしなかった。むしろ彼が述べたのは苦情だ。

「何で全方位から攻撃できる赤外線誘導ミサイルを、早々と後方から使ったりしたの! 他のポジションから使えばよかったのに!」

「え? 最近のミサイルって、赤外線誘導なの? そんな事、誰も言わなかったけど」

遼生は真面目な顔をしてそんな事を言っている。赤外線誘導ミサイルといえば、去年や一昨年開発されたものではない。もう何十年もそうなのだ。遼生はパイロット達が残した記憶を再構成して情報を引き出し操縦を行っているので、その判断には間違いはないはずだった……が、情報は歯抜けになっている。

「マジで! この機体に乗ってたパイロットって、実戦訓練に乏しい?」

「ああ、訓練は少なかったのかもね、残留電位が弱い」
実戦訓練をしていないというのは乱暴な言い方だが、恒はパイロ

ット達の戦闘訓練の記憶が、この機体に強い思いとして染み付かなかった理由に思い当たった。近年の日米関係を考えれば、何も不思議ではないことだ。

「そうか……沖縄だからだ」

そう、この機体の実戦配備されていたのはアメリカ本土ではない、日本の沖縄県だ。アメリカ本土の基地での訓練とは違い、住民感情に配慮して大規模な戦闘訓練は避けてきた、もしくは最小限にとどめてきたことだろう。パイロット達は緊迫感のない日々にも物足りないさすら覚えていたのかもしれない、そのマンネリ化とフラストレーションが、彼らの実戦経験の記憶を機体に焼き付ける事を妨げた。

残る兵装にミサイルはまだ何発もあるが、遼生が頼りにしていたパイロットの実戦経験が浅いとなると、一発も無駄撃ちするわけにはいかなかった。

そんなときに、今度はちょうど真下のハッチが開き、大型トレーラーのタイヤほどもある砲門が顔をのぞかせた。F-22Aの下腹部に撃ち込むつもりなのだろうか。先ほど遼生が仕掛けてきた攻撃から、まだ30秒も経っていない、迅速な応戦だ。

「また出てきた！ ……この大きさ、主砲じゃないの」

「ん！？」

遼生はびくつと肩をこわばらせた。場に漂う空気に、ほんの少しの違和感を感じたのだ。恒は不安げに遼生を見守る。

「今度は何！？」

「感じない？ ジャミング（電波欺瞞）だ。もうミサイルは使えないね」

戦闘機からのミサイルの被弾を防ぐために、交戦中は妨害電波を出してミサイルを誤誘導することがある。遼生は強い妨害電波が発

信されたことに気付いた。ミサイル妨害電波が発信されたということとは、砲門から撃ち込まれるであろう攻撃の種類がミサイルのような飛び道具ではないということだ。

バーナーのような熱波、あるいはレーザー状の光攻撃を仕掛けられると予測がつく。飛び道具ならば、フレア（熱源欺瞞）を放って攻撃を逸らすこともできたかもしれない。だが、真下の砲門の射程にすっかり入ってしまったている。

「恒。この戦闘機を特務省にぶつけて、乗り移ろう。特務省はフィジカルギャップと同原理のバリアを持って、速度と質量を持って衝突してくる物体を木っ端微塵に粉碎する。そうすれば、下の被害は最小限で済むだろう?」

何とタイミングの悪いことか、山々の間に再び街並みが見えてきた。ひらけた谷あいの集落だ。この街の上で衝突事故を起こせというのか。砲門はF-22A にロックオンされている、妙な行動を取れば砲が火を噴き、真下から火柱が上がる。それほど時間はなさそうだった。遼生は機首を下に傾けて特務省に突っ込む体勢にもつてくると、覚悟を決め表情を引き締めた。

「さあ、いくよ……軌道は整えた。このまま特務省に突っ込む瞬間に脱出する」

「待って! 兄さんは!? ちゃんと座ってないと危険だ!」

「君は適切な姿勢をとらず20G以上の加重がかかれば腰骨が折れて死ぬ。しかも、重力異常も起こっているみたいだね。僕は君より頑丈だ。加重では死なない。これでいいんだ」

彼は返事もきかないまま強引に射出座席点火のスイッチを勢いよく押した。恒の座っていた座席は遼生を乗せ、ロケットエンジンに

よって機体から勢いよく射出され、空中に放り出されると同時にパラシュートが開く音が聞こえた。高度0、速度0でもパイロットをパラシュートが開く高度まで打ち上げるほどのロケットエンジンに突き上げられ、不適切な姿勢で打ち上げられた遼生は、恒に覆いかぶさるように射出座席の上に載っていたが、顔を歪めていた。

直後、閃光と衝撃音が真下から放たれた爆風がふたりを煽り飛ばし、更に上空に吹き上げる。特務省のバリアにF-22Aが粉碎されたその衝撃で第二段階的に弾き飛ばされたのだ。飛翔術を封じられた神は、風の吹くまま錐揉み状態になっている枯葉とそれほどかわらない。

恒は開かれたパラシュートによって衝撃を緩衝し、右手のブレークコードを全力で引いて左足を組み右側に重心を傾けると、グライダーをスパイラルダイヴというテクニクで螺旋状に360度旋回をさせながら高度を落とし、真逆さまになって次第に小さくなってゆく遼生を追った。だが、いくら沈下速度を高めても翼抵抗もなく自由落下をはじめた遼生に追いつく事はできなかった。

「兄さん——！！ 兄さん！！！」

恒が絶叫するなか、遼生の姿は小さくなって見えなくなっていた。グライダーを操る恒もスパイラルダイヴの強い遠心力で頭がどろかしてしまいそうだが、気を失っている場合はなかった。このままの軌道では恒も真上から特務省に激突する。質量とスピードをもって激突すればグライダーごと粉碎されてしまうだろう。

恒は遼生を追うことを一旦意識の片隅に追いやり、特務省の天井にソフトランディングをしなければならなかった。

たんぽぽの綿毛のように甲板に着地すると同時に、恒はポケットの中からよく手に馴染んだ愛用の古いナイフを取り出し、シートベルトとグライダーのラインを身体から切り離した。ただちにグライダーを切り離さなければ、正面から吹き付けられる風圧にグライダーごと引き摺られて吹き飛ばされてしまうのだ。

「……兄さんは機転がきくから、死んだりしないとは思うけど」
ずり落ちそうになりながらも下を覗き込み彼は大丈夫だと自らに言い聞かせたところで、ほんの気休めにもならなかった。

＊

「助けて……荻号さ……ん」

自分が、自分ではなくなってしまふ。朱音は蝕まれてゆく記憶を失わないように、必死に荻号の名を呼んでいた。彼女の声はどこに届くだろう、誰も聞き届けてはくれない。荻号のマインドブレイクは対象が彼の視界に入っていなければ基本的にはかけられない。彼の眼の届かないところでどれだけ助けを求めたとしても、助けにきてはくれないのだ。

だからといって、ファティナに助けを求めるのも筋違いのような気がする。ファティナを背後から不意打ちで襲ったのは、信じたくはないが朱音自身なのだ。しかも、朱音が指先をはじいてファティナの背にあてたものは、実際には何でもなかったような気がする。少なくとも朱音の目には何も見えなかった。体が他人のもののようにいうことをきかないという中で、何が起きているのか理解できない。

今すぐにも駆け寄ってファティナを助け起こして気遣いたい、

それが本心なのに、足は地に吸いつけられたように自律すらできないでいるのだ。金縛り、そうまさにその状態だった。

急速に世界が閉ざされているような錯覚に陥る。この広い世界に、たったひとりきりで立ち尽くしているような気がした。生まれるときと死ぬときはひとりだ。母親がいつかの折に朱音に教えてくれた言葉が、妙に思い出された。誰も助けてなどくれない、それが幕引きというものだ。

終わりというものを現実のものとして体感することは、死に近づくということでもあった。彼女のなかのものはまさに、彼女を滅ぼそうとしているのだと。

自分と他者の境界はどこにあるのだろう。ひよつとすると、朱音が思っているよりずっと曖昧なものだ。今更知っても遅い。自分が自分であるという現象は奇跡と呼べる偶然によって成り立っていたのだと、悟っても遅すぎた。

“私の中に、何がいるの”

混ざり合おうとする何者かの侵食を拒むこともできず、突如朱音の中で覚醒し牙を剥いたそれに、立ち向かうすべもなかった。

第2節 第21話 スーパーフィーマル

「あなた……今」

ファティナには聞えていた。少女の、心の声――。心の中の悲痛な叫びを。

少女の意識は明瞭でありながら体の自由を奪われている。少女は自らの意に反して、ファティナのバイタルを奪おうとした。

ファティナは地にはいつくばったまま、たった今攻撃を仕掛けてきたばかりの朱音に顔を向け、彼女の瞳の奥を見通し心層構造を分析する。ファティナは文型神でマインドブレイクに長けてはいない。彼女が枢軸の地位にまで上り詰めたのは、心理的な駆け引きよりも高度に論理的だったためだ。

だから日常的に、最低限のマインドギャップは作るけれども、相手にはマインドブレイクを仕掛けていないし、特に警戒もしない。マインドブレイクの得意な神は油断していたとしても感覚的にマインドブレイクを行っているというが、ファティナは違う。彼女は性善説論者であり相手を疑う事は極力避けるというのが性分だ。神と対面するのだから、マインドギャップですらも展開することをやめていた。

だから先ほどは気付かなかったのだ。

彼女の心層に根を張るように、黒い黴かびのようなもやが覆い尽くしていたと。

冴えてゆく思考の中で、ファティナが理解しつつあったのは。少

女が何者であるのか。それは黒い黴が、ファティナのマインドギャップを看破したからだと考えれば説明がつく。つまり朱音の中にいるものは、ファティナがEVEから得た情報の重要性に気付いている。織図が常々、断言していたものだ。この世で一番安全な情報の保管場所は、データ化され暗号化されたEVEだ、と。

ファティナの脳は、機密情報を運ぶ媒体たりえなかった。三階の命運を分ける情報は信じられない経路で漏出し、ありえない方法で略取されたことになる。

だが、敗北というにはまだ早すぎる。ファティナⅡマセマティカはある一点において慎重だった。織図がEVEのジャンクから拾ってきた重大な知見は今の間に根こそぎもっていかれたのかもしれないが、レイアⅡメーテールのバイタルコードはまだ相手には看破されていない。

鉄壁なのだ。理由は明快、“ファティナの頭の中にレイアⅡメーテールのバイタルコード情報はないから”。

ファティナは荻号にコードを伝えるまでの道中、彼女の身に何かがあつてはいけないと用心し、レイアⅡメーテールのバイタルコードの情報だけは敢えて記憶していなかったのだが、この配慮が功を奏した。コードとその変数解が保管されているのはヘクスカリキュレーションフィールドのハードディスクだ、ファティナが開封しなければ誰にも、ブラインド・ウォッチメイカーにすらも閲覧不可能な場所にある。切り札はまだ、こちらが隠し持っている。

「あなたは……時計職人ですね」

返事はなく、朱音はまた指先をファティナの方に向けている。彼女の意思とは無関係の行動だ。ファティナは反応がないのが返事と

受け取ると、ヘクスカリキュレーションフィールドの端末カード、 $\Delta\delta\Delta$ （デルタスリー）を取り出し、静かにアクセスを試みた。

冷静沈着にデータをダウンロードし、ある重要な番号を掴み取る、それは石沢 朱音のバイタル コードだ。手負いの女神は頼りない足取りで、よろよると立ち上がった。彼女の腕の傷から溢れた血液が、乾ききった土の上に散りばめられる。その透明水彩の濃淡の美から血痕が成す色彩は、あるいは前衛的でもあった。

「私がバイタルロックをかけ続ける限り、私を殺すのはきわめて困難です。が、私は使徒 石沢 朱音のコードをたった今把握しました。あなたの出方次第では死神よりお預かりしている権限を用いて、バイタル切断を合法的に執行いたしますよ」

ファティナは一步も退かず、震える声で宣告を試みる。

朱音は青ざめて怯えた顔をしているが、右手を下ろそうとしない。朱音は何が起こっているか理解できていないが、朱音の行動が女神を刺激したことは気付いていた。天地神明に誓って言う、ファティナに対して敬意こそあれ、悪意は無い、害意も敵意もない。

むしろ助けてほしいのはこちらの方なのに、ファティナは険しい顔をしている。指先をはじいた罪で、彼女からどんな報復を受けるだろう。

“……どう、して……私じゃない。私の体が勝手に……”

彼女の心が凍りついてゆく様子が、ファティナの目にはありありと見える。そうだ、朱音は悪くない。彼女の意識に根を下ろした、時計職人の傀儡となっている彼女に罪はないのだと。しかしもう、助からないのだとは告げられない。

「石沢 朱音から離れなさい。彼女はまだ子供ですよ！」

しかし要求は退けられた。ファティナは瞑目し、朱音にマインドイレースを仕掛ける。朱音がただ操られているというのなら、意識を落とす方が人道的だ。朱音は子供、存在を脅かす極度のストレスを受け入れることはできない。

よって、ファティナはマインドイレースを仕掛けた。

抵抗値ゼロ（マインドギャップ 0 層）の状態でマインドイレースを受けた朱音は眠るように目を閉じ、彼女の意識は完全に落ちたようだが直立の姿勢のまま倒れない。それはブラインド・ウォッチメイカーが今も朱音の内に存在するという証拠だ。

ブラインド・ウォッチメイカーはノーボディと違ってどうやら同時多発的に依代を操ることができる様子だ。それを踏まえると、石沢 朱音だけにブラインド・ウォッチメイカーが憑依している可能性は低い。

ブラインド・ウォッチメイカーの目的は何なのか。ノーボディが、「何者でもないもの」であるとするれば、ブラインド・ウォッチメイカーは「何者でもありうるもの」なのだ。ブラインド・ウォッチメイカーの意図は、解階や生物階の生物の遺伝子の中に刻み込まれ、なりを潜めていると推測できる。

だがファティナが最も疑問に感ずるのは、何故神階の生命体たる使徒である朱音にブラインド・ウォッチメイカーが憑依しうるのか、という点だ。神もそうだが、使徒はブラインド・ウォッチメイカーの憑依を許す身体構造を持っていない。だからブラインド・ウォッチメイカーは有史以来、神や使徒には収束できないとされてきた。

それは荻号 要が織図に伝えた「ブラインド・ウォッチメイカーは直接的に神階には影響できない」という言葉で保証されている。ファティナの状況把握を待たないまま、時計職人は差し伸べていた右手の人差し指から小指を軽く握り親指で全ての指の爪先を押さえ、しならせている。

「いけない！」

朱音は手の甲を下に返し、小指から順に一本ずつ指を弾いた。

ファティナは身構えながら恐々とした。今度はバイタル切断の波動ではない。圧縮された空気が、渦を巻いて空間に孔を穿つようにファティナめがけて今にも襲い来る様子を、はつきりと捉えていた。朱音が指を弾くたび、攻撃が繰り出されている。

身軽なファティナは反射的に横っ飛びで身を翻し、両手について宙返りを打ったが、聖衣の一部を抉り取られた。飛翔できない環境下であってジャンプ力だけで空中に蹴上がったファティナを、追い詰めるかのように更なる攻撃が襲う。彼女は宙返りをうち気弾を引き付け、あわや衝突となったとき、アトモスフィアを凝縮し抵抗として踏み台にする。

傍にあったケヤキの大木の枝の上に踏み上がって第二弾、第三弾をかわした。数秒遅れて地響きとともに炸裂音したので振り返ると、山の中腹を抉るように数十メートル径の風穴があき、穴の向こうも垣間見える。

ぞっと、鳥肌が立った。山の自重に耐えかね、山崩れが起こっている。ファティナはようやく事の重大さを認識した。目の前にいるのはただの少女ではない、INVISIBLEの影響が強まった今でこそ凋落の兆しあれど、生物階、解階の生命系を生み出し、その

進化の道筋すら意のままに支配し続けた創世者なのだと。

バイタルロックをかけていても、あれを一撃でも受けてしまおうものなら、存在そのものを無に帰されてしまう。そんな時にバイタルロックが何の守りになるだろう。

ブラインド・ウォッチメイカーはファティナから、レイア　メーテールのバイタル　コードを割り出そうとしているのだろうか。或いは、ファティナを殺害せしめんとするのか。

一息つくのも許されない。彼女の人差し指はまだ弾かれていないからだ。第四弾は、すぐに到来する！

「戦闘行為は得意ではないのですが、斯くなるうえは仕方ありません。私も枢軸のはしくれです」

ファティナは手にしていた $\Delta\delta\Delta$ を口に入れて咥え、ぎりつと真剣な面持ちで奥歯に仕込んでいたアダプターと $\Delta\delta\Delta$ の回路を重ね合わせ、直接出力の形態を取った。ファティナのピンク色のマフラーの下、詰襟の金具に、ネックレスとともに束ねられていた10本のリングを抜き取り、全ての指に装着する。

するとリングから10本の青い光が空に放たれ、やがて1000mほど上空に透明なグリッドの平面が現れた。彼女は樹上ですつくと立ち上がり、両手を交差して高く空にかざした。

”　いきますよ”

彼女は気持ちだけ宣告すると、差し伸べていた両手を拳にして握り締め、交差を振りほどいて一気に大腿部まで振り抜いた。弛んでいたラインはぴんと緊張し、ファティナからのシグナルを上空のグ

リッドに伝える。神経細胞を連絡するかのように縦横無尽に、だが規則正しく光のシグナルがグリッド上を駆け巡る。

ファティナの指先から繰り出されるほんの僅かな動きが、コマンドとなって緊密にグリッドとリンクしているのだ。

彼女の命令に応えるかのように、天空のグリッドを突き破って25mプール一枚分の容積ほどもある長方形の柱が降ってくるのが見えた。格子をくぐるときには透明だったそれは、地上に近づくにつれて次第に灰色を濃くし、質量を伴って具現化してゆくのがわかる。

そう、数学神ファティナⅡマセマティカはノーボディの与えたヘクスカリキュレーションフィールドを通し、仮想現実の世界から仮想物体を具象化させることができるのだ。ヘクスカリキュレーションフィールドの本質を理解し、仮想空間を現実化させるまでに完全に使いこなす、これこそがマセマティカ（数学神）という職名を通名に冠する、榮譽ある名を持つ女神の真価だ。

石柱は朱音の目と鼻の先を目掛けて落下し、地響きを立てて突き刺さった。土煙があたりを覆い尽くし、視界を遮る。ファティナは更に手を休めず、同時に二枚の石柱を呼び出して彼女の背側に墜落させた。朱音は無傷ではあれど、三枚の石柱の中に閉じ込められて逃げ場を失い袋のネズミとなった。

この隙を利用して、ファティナは朱音にバイタル切断を行うかを決断しなければならなかった。バイタル切断権は織図から一時的に与えられている。権利は完全に譲渡されるものではないが、死神の許可が下りれば問題はない。陰陽階神法のこととはもう気にしている場合ではないのだが、ファティナの性分として、朱音を殺すために合理的で合法的な、もうひとつの決定的な理由を探してしまう。

ああ、分かっている、朱音は無実だということ。
命を断ちたくない。

「何をぼやぼやしている」

下にばかり集中していた彼女は不意に上空からかけられた女声に驚いて、弾かれたように振り仰いだ。彼女は目を疑った。ファティナは滞空するその女を知っているからだ。上空から尊大な態度で見下ろしている白いニットワンピースを着た女が、解階の女皇アルシエルⅡジャンセンであるということ。

彼女が両手に抱え込むように携えているものが、解階最凶のツール、不可侵の聖典（Inviolably Scripture）であり、その中にひっそりと仕舞い込まれているものこそ全てを貫通する凶器グングニルだということ。

ブラインド・ウォッチメイカーの差し金で、ファティナを襲いに来たのだろうか。ブラインド・ウォッチメイカーにとりつかれた解階の女皇が玉座をあけて生物階に襲撃を開始した。そうとしか考えられなかった。ファティナの攻撃が大掛かりで悪目立ちしたために、近くにいたアルシエルを呼び寄せてしまったのだ。

ブラインド・ウォッチメイカーとなら何とか渡り合えると見積もっていた戦況は逆転した、どうしようもないほどに悪化したのだ。ファティナはそのとき、運の無さと考えの足りなさをつくづくと恨み、 $\Delta\delta\Delta$ を口から引き抜いて呟いた。

「アルシエル……何故あなたまで」

アルシエルとブラインド・ウォッチメイカーを同時に敵に回すことは、ファティナにとってどう足掻いても勝てない戦いを意味して

いた。

アルシエルはファティナに畏怖を植え付けたこととまだ女皇の名が生きていることに満足そうに微笑んで、彼女に問いかけた。

「敵はどやつだ」

「？」

この物言い……。手を貸してくれるとでもいうのだろうか。アルシエルはファティナに襲い掛かつてはこない。それどころか、まくりあげられた彼女の腕をよく見るとスティグマらしきものが見える。

僅かな間もブラインド・ウォッチメイカーに隙を見せている場合ではないと思いつつも、ファティナはアルシエルに看破をかけた。そうでなければ、目的の知れない彼女に背を見せたままブラインド・ウォッチメイカーと戦うことはできないからだ。

創世者 ブラインド・ウォッチメイカーと、ともに戦えば勝ち目などない女皇 アルシエルⅡジャンセン。どちらが危険な存在なのか、ファティナは把握しておかねばならなかった。

女皇は彼女の経歴からは俄かには信じ難い体験を経ていた。彼女はブラインド・ウォッチメイカーの手によって囚われ、二年間俘虜となつて恥辱に耐えた。

幽囚の身であつた彼女を解放したのは彼女の腕に宿つたスティグマであり、そして解階と生物階を往来していた荻号 正鵠だった。彼女は滅亡した解階から荻号に伴われ、生物階に入り現在は荻号の家に居候している。アルシエルはファティナを襲撃するためにここに來たのではない、加勢に來たのだ。

「ABYSSは、滅びたのですか……」
知らなかった。

解階が滅びていたなど。神々は把握していない情報だったし、荻号 正鵠も神階に伝えなかったのだろう。解階の民もまた、ブラインド・ウォッチメイカーのために滅亡してしまったようだ。ともあれ彼女は味方だ。味方であると分かった以上、これほど頼もしい助っ人はいない。

アルシエルはステイグマに覆われた腕に触れた。呼応するように、淡い光が明滅している。

「私の勘が外れていればよい。だが……此奴めが、よからぬものだと告げている。単刀直入に訊こう、その者は時計職人なのか」

「ええ。おそらく」

ファティナは真っ直ぐアルシエルの瞳を見据えて頷いた。アルシエルは親友を懐かしむように、石柱の下に顔を向けて目を細めた。

「ここは任せて先に往け、荻号に用があるのだろう。それも軽視できん用だ」

「荻号様がそうおっしゃったのですか？ 何故私がここに来ると？」

「同居人なのでな」

彼女は羞恥する様子もなかったが、顔を赤らめたのはファティナの方だ。いつから荻号とアルシエルが仲良く同居などという事態になっていたのだろうか、未曾有の事態というか、いよいよ世も末だ。

「ですがアルシエル！ さすがのあなたでも……！！」

ルシファール・カエサルに憑依したブラインド・ウォッチメイカーとアルシエルは直接対決を行い、一度敗北を喫している。彼女は負ける、彼女では勝てない。時計職人には勝てないと、あの時学んだのではないのか。

「時計職人には借しがある。千載一遇の機会だ、汝の助けなどいら

んよ。往け」

「共闘しましょう、無理です。あの時、あなたは一度負けているではないですか！　せめてバイタルロックがなければ、太刀打ちできる相手ではありません！」

織図の言った通りだ。やはりバイタルロックがなければ創世者を相手にすることなど不可能だと、今のファティナには理解できる。

「ふん……確かめてくれるさ」

そう言うが早いか、アルシエルはInviolably Sureのページを繰り、白紙のページを開いて中に手を差し入れた。

さざめく紙面の海から隆起してきたものは、彼女の愛用する巨槍グングニル。

彼女は重量のある巨槍グングニルをバトンのように軽々と振り回すと、石柱に閉ざされたブラインド・ウォッチメイカー目掛けて飛び込んでゆく。

「アルシエル！　中にいるのは少女です。彼女を殺さないでください！」

ファティナはそう叫んだが、聞こえたのかどうかは分からない。どちらかというと心配なのはアルシエルの身だ。先ほどのように朱音が、いやブラインド・ウォッチメイカーが放つ攻撃を一撃でも食らえば……バイタルロックの掛けられないアルシエルはどう応戦するのだろうか。ファティナはアルシエルの逃げ場をつくるためにリングの人差し指と中指を引いて三本の石柱を再仮想化すると、それまでの存在感が嘘のように透明となって雲散霧消する。

土煙の中から現れたのはファティナが恐れていた光景ではなかった。アルシエルはまだ、朱音に攻撃を加えてはいない。アルシエルの端正な美しい横顔は動揺しているように見えた、彼女は朱音と知

り合いなのだ。

「依代は汝だったか。結果論になるが、荻号から離れるべきではなかったな……」

荻号だけが、朱音に潜むブラインド・ウォッチメイカーの危険性を知っていた。アルシエルは悔やんだがどうにもならない。荻号を伴って来ればよかったのかもしれないが、レイア　メーテールを抱えたままでは思うように戦えまい。ここはアルシエルが決着をつけるほかない、どんな手段を用いても。

断じて、レイア　メーテールのもとへ行かせてはならない。

ブラインド・ウォッチメイカーは腰を低く落とし、瞳を閉じたままアルシエルの鳩尾に中指を当て、親指を人差し指で差し金のように止めて一撃の準備をしている。グングニルを持ったアルシエルは朱音よりずっとリーチが長いのだ、極度の接近戦に持ち込まれれば大槍を振り回すことができない。

「で？　どうする」

アルシエルが強がってそう言った途端、ブラインド・ウォッチメイカーは軽くスナップを利かせて、親指を弾いた。ファティナは悲鳴を上げそうになったが、アルシエルは倒れない。ニットスカートの真ん中に穴はあいたが、彼女の細いウエストに、先ほど山肌を削ったような風穴も開けられてはいない。毛糸の下に見えたアルシエルの皮膚はまったくの無傷だった。INVISIBLEに刻まれたステイグマの根が、彼女の腹部にまで手を伸ばして彼女を護っていたからだ。

彼女は間髪入れず朱音の右手首を掴むと、彼女を押し倒して地に縫いつけ、グングニルの切っ先を手首に突き通し、左手首をアルシエルの右足で踏みつけ、左足で朱音の恥骨のあたりを踏みつけた。

礫にされた右手首からは、鮮血がどくどくと流れて彩度の低い乾いた地に染みてゆくが、ブラインド・ウォッチメイカーは目を覚ましもしない。痛みすら感じていないかのようだった。

「アルシエル……！」

非情なまでに的確な拘束、打ち抜かれた手首から溢れる赤い色彩を見て、ファティナは竦みあがった。使徒は人間と違って回復力に長けている。

アルシエルが槍を抜いたとしても、人間のように手首の脈から失血死などはしない。あくまでも仮に縫いとめているだけ、ということだ。しかし次の一言で、ファティナはアルシエルがブラインド・ウォッチメイカーを朱音もろとも葬り去ろうとしていると勘付いた。

「朱音、悪く思うな。汝は助からん」

アルシエルは険しい顔つきで朱音の喉を素手でわし掴みにし、彼女に最後の声をかける。

「苦しませません……一瞬で逝かせてやる」

まさにアルシエルが彼女の喉を握りつぶそうとしたとき……ファティナは信じられない光景を目の当たりにした。

アルシエルはどうとう……朱音を殺さなかった。慈悲をかけたのではない。アルシエルはグングニルを主音の手首から抜き、瞳を閉ざし、淡い太陽光に打たれるようにゆっくりと空を仰いだ。まるで何かを飲み干すように、頭のとっぺんから何かを、下してゆくように。その立ち姿は酩酊として、彼女を取り巻く雰囲気は異様であった。

まさか……ファティナは凍りついた。

今、彼女は素手で触れなかったか。ブラインド・ウォッチメイカ

ーの憑依した朱音に、素手で！ アルシエルは解階の住民だ、その身はDNAにより支配されており、DNAを持つ生物にブラインド・ウォッチメイカーが憑依するには容易なのだと、感染症U・Iという形を借りたブラインド・ウォッチメイカーからの逆襲は爆発的な広がりをもせたことから、苦い教訓として得ていた。

文字通り眼光が変わったアルシエルが、ファティナに流し目を向けた。その虚ろな瞳、光を映さない黒い瞳の中には、かつての女皇アルシエルはみるかげもない。

「何故……ブラインド・ウォッチメイカーは……石沢 朱音からアルシエルⅡジャンセンに」

ファティナは絶望している場合ではなかった。

彼女はΔδΔの検索モードを使い、ADAMにアクセスを試み、

石沢 朱音の項目を精査せぬままに取り寄せる。

極陽 創造神下第197使徒……それが朱音の母親の身分だった。母親使徒が生物階降下中に犯した重罪により母親は断罪され死罪となったが、彼女は身ごもっていた。子供に、生まれる前に殺されるほどの罪はないと憐れんだ極陽により、母親の母胎から人間の母胎に逃がされた使徒の子、それが石沢 朱音だ。だから、朱音は紛れもなく、そして疑いようもなく使徒だ。しかし何故、使徒である彼女にブラインド・ウォッチメイカーが憑依できる。朱音の身体に何が起こっていた？ ファティナは尚も膨大な情報を取り寄せ、頭の中で検閲してゆく。全てを説明する事実があった。それは母親使徒の罪は何だったか、ということだ。

母親使徒が死をもって贖わなければならなかった罪は、人間の男性と交わったうえに、遺伝子治療技術を用いて妊娠を可能とせしめたことだ。

母親使徒は人間の男性に溺れ、執念で愛を実現した。信じ難いことだが、朱音は完全な使徒ではない。父親の、つまり人間の遺伝子を受け継いでいる。この事実を、朱音が知っているかどうか分らない。更に朱音は女性使徒だ。

女性使徒、遺伝子を持つ、父親が人間、これらの共通点を解階の住民、あるいは生物階の住民たちに当てはめる。

如何なる条件が揃えば、ブラインド・ウォッチメイカーが憑依するのかということ。

“これは性染色体依存性の……感染症のかたちで憑依する”

暗い部屋にランプがともったように、ファティナはひらめいた。

そういえば、解階の住民は全員が女性だ。一見男性個体に見えるものも、X染色体上にY染色体の機能が集約し対合している。そして生物階でU・Iに感染した人々は男女の別なく感染したが、より早く重篤化し死亡したのは男性(XY)より、男性の二倍の性染色体を持つ女性(XX)だった。そのときは、体力のない女性が先に死ぬものだと比喩が合理的に考察していたが……理屈が合わない部分を説明できる。ブラインド・ウォッチメイカーはX染色体を支配する。ブラインド・ウォッチメイカーの憑依に適した器となりうるものは、生物階におよそ30億!! 30億人のテロリスト候補がいるとすると、それは気の遠くなりそうな数字だった。ブラインド・ウォッチメイカーにとって最適の依代……その強さ、その経験、その精神力において、30億人の人間よりはるかに価値を持つその対象といえ——!

“そういえばアルシエルは……スーパーフィーマルでしたか”

神階でもよく知られたことだが、アルシエルⅡジャンセンは複雑に染色体異常を起こした個体で、その突然変異の積み重ねが彼女の不老化と他の追隨を許さない強さを可能としている。遺伝子型はXでもXYでもなくXXXXだ、Xが男性の4倍もある。

ブラインド・ウォッチメイカーからの影響力は最大限となるだろう。

朱音の2倍……男性の4倍も重篤に憑依される。

“危険を伴えど、神体の仮想化を行わなければ逃げられない！”

どうやってでも、ここから逃げなければならない。

ファティナにとってそれだけは最も困難で、最重要課題となった。ブラインド・ウォッチメイカーから逃げるためには、ファティナがああ天空のグリッドを介して仮想体（Ideal Body）となるほかに方法はなかった。仮想体となって10分以内に現実空間に戻ることはできなければ、ファティナは非現実の世界に取り込まれ、自動的に死を迎えてしまう。

ファティナは確認する余裕もなかったが、アルシエルの肉体にはもうひとつの重大な変化が起こっていた。

アルシエルⅡジャンセンの腕から、INVISIBLEの与えたステイグマは消えていた。

＊

F-22Aが特務省と衝突した衝撃で吹き飛ばされた遼生は、特務省のすぐ傍を擦り抜けるように一直線に地表へと落下してゆく。特務省を通り過ぎ、その真下に回りこんだとき、遼生は何を思ったかジャケットのジッパーを下ろして手早く上着を空中で脱ぎ捨てた。

黒いセーターを一枚着ているが、外気温は氷点下だ。彼はなお落下を続けながら瞳を閉じると、一語一語を確かめるように明瞭な発音で独り言を呟いていた。

「ALM-24, On」

「miR-201, On」

「miR-115, Off」

「snR-221, Off」

「SWAD-93 Down regulation」

一連の単語を言い終えたとき、彼の神体は落下することをやめ、両足はブレーキをかけたように宙に浮いた。

彼はジャケットを脱ぎ捨てたうえ更に、たった今の間にボロボロに朽ち果てた黒いセーターを下に放り投げた。古傷に覆われた素肌の上半身を厳寒の空に晒しながら、特務省の周囲を周回する転移装置の一つに片手をかけて飛び乗る。

立ち上がった少年の背には櫛染色をした、一對のしなやかな翼が逞しく生え揃っていた。ヴィブレ||スミスによって一度は挟り取られたその双翼は、高度な遺伝子発現制御により彼自身の力で再生された。一度に数千もの遺伝子制御を行うncRNA（ノンコーディングRNA）の発現を切り替え、瞬間的に皮下細胞を脱分化させ、呼び起こされた遺伝子群が細胞の翼への分化を促したのだった。彼はいつでもどんなタイミングでも、遺伝子制御によって肉体に劇的な変化を引き起こす事ができる。

“高いところから降りられなくなるなど、一度も考えたことがなかった”と遼生が笑いながら言ったのは、彼の特異な体質を踏まえ、このことだった。

「恒、僕が落ちたと思ったかな」

耳を澄ますと、甲板の上の方から、遼生の名を呼ぶ声がかすかに聞こえた。

何度も、何度も自分を呼ぶ声に、遼生の胸はじんと熱くなった。誰かに心配されることなど、数えるほどもなかったものだから。

「心配をさせてごめん、そしてありがとう。でもこの姿では君に会えないんだ」

彼は言い訳をするように呟いて、ぴんと整った翼の先端を引っ張り、ざらりと撫でた。

使徒としての特徴を色濃く残した彼の姿を、恒に見せられない。

それは羞恥や劣等感などからくるものではなかった。

使徒の翼は使徒の生命線であり、多くの神経が集中して最も感覚に優れた部分だ。

神のアトモスフィアをエネルギー源として蓄えておく部分だとも言われている。翼を失った使徒が長く生きられないといわれるのは、アトモスフィアの貯留ができなくなるからだ。しかし使徒と神体の性質を併せ持つ遼生の翼はアトモスフィアを共鳴させ、増幅させる。フィジカルレベルは二桁は軽く跳ね上がり、爆発的に能力を高めることができた。

ヴィブレイスミスが遼生の翼を抉り取ったのは原因はここにあった。極陽は気圧だけで遼生に殺されかけた経験があった。

実験体に極位が殺されるなどということは、あってはならない事態だったからだ。

共鳴され高度に圧縮されたアトモスフィアは羽ばたくたびにその振動数から周囲の生体の細胞を傷つける。とりわけ人間の細胞はアトモスフィアを伴った共鳴に弱く、恒の細胞をも例外なく傷つける。具体的にいえば、血管壁を損傷し出血させる。

誰かと会うためにはただちに翼の不可視化装置を装着しなければならぬ。不可視化装置は翼を不可視化すると同時に、飛翔のための筋肉の動きをぴたりとめてしまう。使徒は羽ばたくどころかぴくりとも翼を動かすことができなくなる。そうなるまで恒にはもう会えない。

「大丈夫だよね、君は無事に追いつく」

特務省は風岳村に向かうだろう、恒はただその背に乗っているだけだ。

遼生は恒を信じて、特務省の周囲を周回する転移装置の一基の制御部をこっそりと操作し、遼生だけを機械的に転送させて風岳村へと先回りした。

＊

レイア　メーテールと荻号　正鵠はたがいの目を見つめて向かい合って動かなかった。だからといって恋愛関係にあるわけでも、親子関係にあるわけでもない。情をかわすこともなく、ただ見詰め合うだけのふたり。性に目覚め始めたばかりの思春期の中学生カップルでもそんなことはしない、異様な光景がそこにあった。

レイアの体験を看破したことによって、いつもレイアに語りか

けていたあの声をも、彼は聞いたのだろう。

レイアは彼の次の言葉から、荻号がレイアの得た経験にほぼ一致するイメージを得たのだと知った。

「飛ぶためだな、もつと遠くへ」

それはあまりにも一言でよく言い得ていて、真剣な面持ちで問いかけてきた荻号の腕を、レイアは思わず両手で握り締めた。それは彼女の何気ない咄嗟の行動だったのかもしれないが、レイアの心が荻号の意識とリンクされたという感触を得た。双繫糸を身に帯びていても対象と接触すれば意思を伝える事ができると、織図が言っていたのを思い出す。

“あなたは……全てを視たのですね”

彼女の思念はどこか観念したようでもあり、安堵したようでもあった。

「理解できないことの方が多いがね。それで、お前はもうしたい」
“迷っています。声を信じるのか、それとも……”

「ノーボディを信じるか、か？ ノーボディはINVISIBLEよりずっと狭い視野でしか物事を考えていなかった。況や時計職人をや、だな。INVISIBLEが正しいとは言わんが、最も俯瞰的な立場にいたのはINVISIBLEだ」

INVISIBLEだけが、真実を見通せる立場にあった。大は小を兼ねている。これだけは認めなければならなかった、INVISIBLEは信じられていたほど、完全無欠にして最強の創世者ではないということ。

ノーボディの視点からINVISIBLEを理解しようとすることは、最初から不可能。だが、あまりにもINVISIBLEを無能と決め付けてかかりすぎた。INVISIBLEは最初から知性と意思を持たなかったのではない。意志と知性を持ったものが、

あまりに複雑な事情を経てINVISIBLEになった……正確に言えば、そうならざるをえなかった。

“INVISIBLEはどこにもいませんでした。あのヒトがそれを知ったとき、全てが……そして気の遠くなるような、長い時間が始まりました。彼は待ちました、ずっと待ち続けて。もう力尽きようとしている最後の力を振り絞って、助けを求めてわたしの中にきます”

「INVISIBLEは結局、何がしたい」

“休みたいと云っているのです、小さな自己の中で”

レイアはそう言って、肩をすんと落として深いため息をついた。彼女は誰かと情報を共有することが怖かった、また誰かを失わなければならなかったから。

だが、荻号は全てを識っても殺されなかったし、その看破能力で隅々まで理解をしてくれた。心の隅々にまで懐中電灯で照らされたかのように、あるいはずっと日陰にいた彼女の心に不意に暖かな陽が差ししてきたように、嫌な感覚ではなかった。彼は理解者として頼りにはなるかは分からないが、彼の前だったからこそ気負っていたものを吐き出せた。

「その“何者か”がINVISIBLEとなったとすれば、時系列があべこべだ。時間は一方向に進む、その法則を奴は覆してしまった。未来に進んだものが、過去から来た、ということだ」

荻号もむろん、彼がどれだけ非科学的な言葉を述べているか、理解できていないわけではない。

「何が起こってそうなったのか、そこまでは見通せない。だが一つ言えるのは、過去に二度現れた絶対不及者、その裡に収束していたINVISIBLEは破壊を望んでいたわけではない。依代がINVISIBLEの収束を拒絶した。受け入れられなかったんだ。あまりにも突然で、恐怖のためにパニックを起こして」

依代としての適格を欠いた器に、割れた器にそそがれた溶鉄さながら……熱量は器を破壊し、周囲を巻き込んだ。創世者の圧倒的な力の前に累々と重なる屍を、神々は許さなかった。神々は深くINVISIBLEを怨み、その意図を知ることなかった。それは肅清などではなく、事故であったということ。INVISIBLEはただ静かに……小さいれものの中で休みたかった。薄く失われてゆく自我、ばらばらになったそれらを繋ぎ合わせて、ひとつの自己に戻りたかっただけだ。

「俺たちにはわからなかったんだ、その意図が……分かつともしなかった。INVISIBLEが何をしたかったのかを。だから今度は収束する前に、INVISIBLEは手を打った」

“……わたしにステイグマを刻んで、先に報しせたかったと云いました。どうか、怯えないように。苦しめないから……少し休んだら自由にするから。だからわたしの身体を少し、借りたいのだと”

収束をする前にあらかじめ依代にステイグマによって知らしめ、直接語り掛けて覚悟を求め、器を安定させる……これが、二度の失敗を踏まえたINVISIBLEの今回の戦略だったというわけだ。だが、レイアに刻まれたステイグマを見た神々は狼狽し、ノーボディにも扇動され、あまりにも過剰に反応をはじめた。それほど重視すべき問題ではなかったAnti-ABNT Antibody Projectが現実味を帯び、ノーボディが抗体活性の増強された抗体、藤堂 恒を使ってINVISIBLEの目的を阻もうとしたとき……INVISIBLEはどうとうノーボディを滅ぼした。

彼の中に理性が残っているならば、生命を奪いはしない。

彼は生命という現象を慈しんでいたし、少なくともそうあろうと

した。だが今の彼は、かつての彼ではない。

狂っているのだ、自分を見失って……狂気に支配された創世者 I
N V I S I B L E は彼の目的を邪魔をするものを、排除しようとする
のだろうか ― レイアは考えたくもない。どこまで？ 見境な
く？ それは恒ですらも？

恒がレイアを救おうとする限り、いつか恒も消されてしまうのか
もしれない……レイアは恒から離れ、誰の目も届かない場所に逃れ
たが、特務省からは逃れることができなかった。

「I N V I S I B L E は二度の収束の失敗によって、バランスを崩
し意思を失いつつある……ということか」

もう、彼は自分が何をやっているのかわからなくなっている。
時々、どうしようもなくなるときがあると、そう云っていた。

どこまでが自己で、どこまでそうでないのか判らなくなるのだと。
そんな時、名も姿もない彼は泣くようだった。
ただ苦しげだった。心を取り戻してやりたい、もう、間違ふこと
のないように。彼を正気に戻したい、彼がまたずっと永遠を生きて、
命の営みを守ってゆけるように。

「I N V I S I B L E は瀕死なのだろう……ステイグマという目印
も正確につけておけなくなったらしい。そうだ、これはエラーだ。
不死身に近い肉体を持つ、つまりレイアに似た肉体の構造を持つ俺
とアルシエルを間違えてマークした。アルシエルは老化をしない特
異体質だし、俺はノーボデイの器だからだ」

天啓ではなく、ただのエラー。その理由をあれこれとこじつけよ

うとした時間が無駄だった。

実にくだらない。そう思って、荻号はふと腕のステイグマに目を落とした。まてよ……荻号の腕には両腕にそれがある。つい先ほどまで、右腕にしかなかったものだ。レイアと対話をしている間に、気付かないうちに新たに増えていた。これは……想像していたより、INVISIBLEは衰弱している。

彼は、レイアという止まり木まで羽ばたいてくることができるのだろうか。

それともレイアの目の前で、溺れ死んでしまう病鳥なのだろうか。

「ステイグマが増えたな……」

“もう、わたしとあなたを見分けられなくなっているのでしょうか”

「まずいぞ……INVISIBLEがもし、器としての格を欠いている俺かアルシエルの中に入ってきたら。また以前と同じことが起こる、そしてもう“今度”はない」

“わたしが共存在を使ったから……おかしくなったのです”

共存在を使うことにより、ステイグマの一部を落としてしまった。彼女はもう二度と共存在を使うつもりはないという。

「共存在を使うと、ステイグマが落ちる？」

荻号は眉をぴくりと動かした。

“そうだと思います。次、INVISIBLEが収束できなければどうなるのでしょうか”

「INVISIBLEは自我を失い、薄くなってゆく。それはINVISIBLEのエネルギーの求心力を失うということだ……ひとつの宇宙が終わる。無限に拡散されゆく宇宙……凍りついてゆくのか。元素も、時間も、光も熱も密度も失って」

“冷たくなってゆくと、そう云っていました”

創世者は秩序を持って、エネルギーをとどめて置くための求心力だ。その意思が損なわれれば、肉体が屍となり土に還るように……そういうことだ。INVISIBLEを助けるほかに、生き延びる道はないということになる。冷えてゆく世界、やがて訪れる、熱的死。全てが凍りつく。

荻号はひとつの提言として、とんでもないことをさらりと言っただけのけた。

「俺に出来ることは何もないと思っていた。だがひとつ、出来ることが見つかりそうだ。俺が死ねば、さすがにお前がスティグマが戻るだろう。お前は完全な絶対不及者となる」

“そ、そんな……！ や、やめてください”

「俺もこの状態じゃ、そう簡単には死ねないだろうな。やるとしたら俺のバイタルが0になるまで共存在を発動し続けることだ。やるたびにスティグマも削れて一石二鳥じゃないか」

レイアは突拍子もない話になってしまって、動揺している。荻号は自暴自棄ともとれる発言をしたあと、急にのけぞってソファに腰をおろした。

「だが、この話はそんな単純なものではないんだ。判ってるだろ」

“ええ……とても怖くて。おっしゃるとおりです。わたしはINVISIBLEの味方をしなければなりません、あらゆる現状から、そうしようと思います。でも……怖いのです。ひょっとすると、全部嘘だったとしたら……わたしは取り返しつかないことをしてしまう”

「俺がINVISIBLEの話を丸呑みして自殺して……INVISIBLEが単純に、気まぐれのために破壊を齎しにきただけと分

かったら」

荻号のいない世界……その時、INVISIBLEに突きつけるべき刃を失うのだろう。恒は、INVISIBLEに立ち向かうことが出来るだろうか。覚醒すれば、消し炭にされてしまう超存在の前にして、INVISIBLEを唯一鎮める可能性のあるAntia-ABNT抗体、藤堂 恒は戦えるのだろうか。彼に期待し全てを任せきってしまうことは、あまりに無責任にすぎた。そして、ほぼ望みのない勝算を放棄するということでもあった。

レイア メーテールは世界を知らない、だが、守りたい存在もあった。彼女の選んだ選択が彼女にとって大切なものを裏切って、大変な間違いを犯していたら——そう思うと、彼女は動けなくなってしまうそうだった。彼女が誰を信じるのか、彼女の選択の責任は、三階が負うことになる。

それにしても……荻号は腑に落ちない顔をしていた。

「INVISIBLEは、いつ生まれたんだ」

荻号に解けない謎は、まだまだ暗い深淵に潜んでいた。

第2節 第22話 永久機関

「よかった……そうよね。避難してるよね」

吉川 皐月は頬を林檎のように赤く染めつつ、上気した顔で冬の
大気にほうっと白い息を溢す。

彼女は村の中心部で朱音と別れ、その足で村を発つ前に志帆梨の
安否を確認しようと、山の中腹にある藤堂家を訪ねた。藤堂家には
母屋と離れがあるが、母屋は二年前に突然の襲撃で破壊され、志帆
梨は納屋を改築した離れで暮らしていた。離れの扉はかたく閉ざさ
れ、インターホンを押しても志帆梨は出てこない。トタン屋根でで
きた鶏小屋の鍵は開けられ、五羽の地鶏がそこかしこで休作中の畑
の土を啄ばんでいた。人の気配はなかった。

畑は手入れが整ってよく耕されており、つい今しがたまで志帆梨
がそこにいたかのような足跡がついてはいたが。

「ねえ、ニワトリ君。志帆梨さんは、もう家を出たのよね？」

「コケ」

立派なとさかをした雄鶏の一羽が皐月に近寄ってきたので、皐月
は雄鶏に女主人の居場所を尋ねる。鶏から答えが返ってくるはずも
なく、雄鶏は首を下に向けて虫を探すのに夢中になっていた。鶏が
放されて志帆梨の姿がなければ、志帆梨はいち早く避難しているの
だろう。

村を発ったバスは、すでに何台か。志帆梨はこの村を去ったのか
もしれない。そう考えるのが妥当だった。恒が彼女に避難を促した
のかもしれないし。

安堵しながら藤堂家から足早に立ち去っていった皐月は、離れの
倉庫の横にそっと置かれた茶色の古いスーツケースを見落としてい

た。

＊

特務省の小型衛星を用いて密かに機械転送された遼生は、誰に目撃されることもなく、風岳村のはずれの裏山に投げ出されていた。特務省の転送装置はそれほど座標指定の精度が高くなかったので、荻号の自宅にピンポイントで到着することはできなかった。

こんなときは……と思い出して、携帯のGPSで現在位置を確認すると、確かに広岡県の風岳村という場所に降りている。まず、村の第一印象は、その寒さ。翼を発現したために増幅されたアトモスフィアに灼かれ、朽ち果てた衣服を脱ぎ捨てたことで上半身を寒風に晒すはめになり、身を切るほどの寒冷地獄を味わっている。体感気温はマイナスに達していた。

「おかしいな、ここって西日本だよな？ 何でこんなに寒い」

それにしても、面倒な場所に出たものだ。

遼生はぼりぼりと紅茶色の毛髪を掻いた。聡明なのか間が抜けているのか……分かりにくい二面性を持つ彼の頭脳を悩ませたのは、翼があつて人目が気になるだとか目立つだとか、そういう次元の懸念ではなかった。いかに危険な翼といえど、羽ばたかない限り飾りものだ。人を傷つける危険性もない。ただし、彼がただの一度でも羽ばたこうものなら、ただちに全村民の命にもかかわる……。

村民が全員避難していれば遠慮をする必要もないのに、移動中の人間を含めて村内にはまだちらほらと人の気配があるようだった。結果、遼生は飛べない鳥も同然だ。

「とにかく、急いで村に出ないと」

いくら特務省より先回りしても、山中で油を売ってはいては意味がないのに、見渡す限り木、林、山だ！　そういえば使徒階にいた遼生は起伏のある林、つまり山というものは初見だったが、高低差のある景色に感激している場合でもない。正確なGPSを以てしても、麓まで辿り着くのかと疑われるほど鬱蒼とした視界の悪い山中だった。

「ん!？」

樹冠のあたりを見上げてみると、背後の茂みの合間からガサガサと物音が聞こえる。敵性もなく取るに足らない気配だが、意外に大きく、小動物の物音ではない。耳を澄ますとその息遣いと鼓動が聞こえ、異常な緊張状態、半ば混乱状態にあると把握する。遼生の知らない、これは特徴的な気配と匂い。

間違いない。人間、それも女性。

遼生はどことなく申し訳なさそうに項垂れた。

人の気配は、ほんのすぐそこにある。木立の間に、かがみ込むようにして人が隠れている。翼を持つ遼生の姿を目撃して怯え、隠れているのだ。普段の彼ならば気を遣って、気付かない振りをしつつそっと立ち去っただろう。

わざわざ声をかけて、余計に怯えさせるのも気の毒だ。彼女の記憶に遼生の姿が残らないよう、去り際にマインドイレースをかけてやることも忘れないだろう。しかしこのときの遼生はそんな配慮も忘れ、彼女を振り返り、射抜かんばかりに直視してしまった。

「あ……!」

彼が冷静でいらなかったのは、彼の背後に身を潜めていたのが

……藤堂 志帆梨だと分かったからだ。後先考えず振り向いて志帆梨の姿を見てしまつて、遼生は彼女に大変な事をしてしまったと狼狽した。

彼女は隠れたのではない。吹き飛ばされていたのだ。

転送の直後、山中に落とされた遼生が体勢を立て直したとき、若干翼で風を切った。運悪く直ぐ傍にいた藤堂 志帆梨に、翼から発せられた振動が至近距離から襲いかかった。志帆梨は遼生が発した振動に耐えられず吹き飛ばされ、おそらくはしたたかに腰を打ちつけて、焦点の定まらない視線で遼生を見上げている。遼生はたまらず駆け寄った。

「ご、ごめんなさい……！ 診せていただけますか」

声も出せずにしりもちをついている志帆梨の反応を半ば当然のものとして、MRIを駆使しつつ素早く志帆梨の体に目を配る。診たところ、吹き飛ばされて頭と腰を岩肌に強く打ちつけ、混乱しているようだ。最も心配した脳への外傷、脳出血いずれも起こっていない。暫く休ませると、志帆梨は落ち着きを取り戻してきた。

志帆梨の持ち物は濡れた新聞紙と、線香、マッチのセット。生物階を離れる前に、歩いて家の裏手の山に分け入り、藤堂家の墓参りに行っていたらしい。先祖を大切にする日本人は住み慣れた地を離れる前に旅の安全を祈り、そしてこの地を離れると先祖への報告も兼ねて墓参りを欠かさない。バッグから飛び出したそれらのグッズを集めて志帆梨に渡すと、彼女は氣まずそうだった。

彼女は背中から羽根を生やした正体不明の何者かと向かい合っているのだから、怖ろしいに決まっている。

遼生は彼女に悪いことをしたと心底詫びながら、一定期間の記憶を跡形もなく消去しうる記憶欠失術をかけようとしたところ、志帆

梨が思いがけず声をかけてきた。

「ど……ごめんなさい。びっくりして」

「いえ、謝罪しなければならぬのはこちらの方です。不注意で、酷いことをしました」

「それ、背中のも……」

志帆梨は遼生の背中を人差し指で遠慮がちに指してすぐにひっこめ、悪いことをした子供のように肩をすくめた。遼生の翼について、何か尋ねたいことがあるのだろう。彼女の小さなしぐさの一つ一つには、自信のなさが滲み出ている。

「ああ、はは、これですか」

遼生は気まずい。

「天国からいらしたのですね。天国にはあなたのような方がたくさんいると、息子が」

彼女は使徒の存在を知っている。彼女は恒が神だと知っているそうなので恒から聞いたのだろうか、彼女の物分りがよくて助かった。

「藤堂 恒くんがあなたの身を心配していました。逃げ遅れずに、神階に避難をしてください」

「まあ、恒をご存知で。お世話になっています」

「恒くんとは、先ほどまで一緒にいました」

嬉しそうに恒の話をする志帆梨に惹かれて、遼生はしばし時間を忘れて雑談をした。志帆梨は恒を愛おしみ、しかし志帆梨の病のために引き裂かれながら暮らしてきたのだと知った。彼女が身に覚えのない妊娠によって授かった、神の息子にかける情というものは愛情と絆に近い。

恒の人格形成、あるいは神格形成のルーツは間違いなく、この母親に由来しているようだ。恒と志帆梨は互いに寄り添うように、過

酷な人生を歩んできた。彼女は柔らかく、脆い生きもの。恒は病弱だった母親を守ろうと強く在ろうとして、欺き続けた。ときにはそれは彼自身にも及んだ。

志帆梨を後遺症の残るかたちで傷つけたと知ったら、恒はどれほどの怒りを遼生に向けるだろう。冷静な彼の激情を見てみたい……そんな危険な衝動にも駆られたが、それはほんの一片の興味であって、遼生の本心ではない。目的の為に息子の生涯を簡単に踏みにじった……父親とは違うのだと、自負をしていたから。

とにかく、彼女が無傷でなによりだ。

身体の線も細く、触れれば折れそうな彼女の身体を暴力で壊してはならない。彼女は子どものように純粹で、彼女を傷つけた遼生にも笑顔を見せてくれる。彼女の息子が年齢のわりに冷静で大人びているのは、頼りない母親を守ろうとして備わった性格なのかもしれない。

遼生はひとしきり志帆梨の話を聞くと、話が途切れたところで彼女に背を向けて腰を落とす。その背に、不意に暖かい布がふわりとかけられる。驚いて振り向くと、彼女の肩にかけていた広幅の白い毛糸のストールを遼生の背に、かじかむ手で一生懸命巻きつけていた。背から突き出した大きな翼が邪魔でうまく巻けないので、襷のように廻して苦戦している。そんなことをしてもらう為に、背を見せたわけではない。遼生が何か言おうとすると、彼女は首を振った。「天人様でも、何もお召しにならないと寒いでしょう。恒も、とても寒がりなんです」

「僕のことはいいいんですよ。平気ですから」

どのみち、一度でも羽ばたけば強大なアトモスフィアに焼かれ生物階の布は朽ちる。しかし志帆梨の思いやりと優しげな笑顔に負け

て、遼生は受け入れた。

そして何故か無償に、泣きたくなった。

「こんなところに、この人を一人にするなよ……」

遼生は俯いて、志帆梨に聞こえぬよう一人ごつ。恒に言っておきたい。彼女を、絶対に一人にしては駄目だと。もし恒が彼女の傍にいられないなら、代わりに彼女を守りたいとすら思う。彼女が遼生の母親だったなら、一度だって自らを生体機械だと呼び捨てることもなかったろう。

彼女は遼生を、一己の存在として見做してくれる。

彼女は遼生の存在を許容してくれる。

生きていても、よいのだ——と。許された気がした。

「どうぞ負ぶさってください。山の麓までお連れします」

「私、歩けますよ。山歩き、得意なんです」

志帆梨は両手を小刻みに振って、遠慮している。動作のひとつに至るまで、遼生は彼女に魅入られてしまう。

「遠慮しないで下さい。すぐ着きますよ、飛びますから」

志帆梨はおずおずとお辞儀をすると、遼生に気兼ねをしながら背に負ぶさる。あまりに軽い彼女の身体を受け止める。彼女が幸せであるように、そう願った。彼女の幸せとは何だろう。地上で恒と、穏やかに暮らすことだ。しかし彼女の息子は迫り来る災厄を迎え撃つ為に、彼女を顧みてはいないように思える。

彼女をほったらかしにして自分の命を粗末にして。何を考えているんだ。

遼生は今後恒に危険が及ぶなら、いつでも恒の身代わりにならな

ければならないと心に誓った。

「重くないですか？」

「いいえ、あなたの身体はとても軽いです」

身体は軽い。だが本当に重いのは、彼女という存在だ。

さて、これから地図的には五ヶ岳山の中腹からは下山する為には鋭角32度の急斜面で381mを下らなければならない。駆け下りることもできないが、志帆梨を伴って木々を避けながら下山するとそれなりに時間がかかる。翼を一切使わずに志帆梨を連れて一瞬にして山のふもとに下山する方法は、至ってシンプルかつ大胆だった。

斜面を走らずX軸方向に水平に初速度140km/hで跳ぶと、標高は167mの放物線落下、滞空時間8.81、着地速度341.2km/h、着地角度65.7°との計算になる。麓には休耕田があるので着地場所の安全性は確保できる。ただ……重力加速度に異状が起きているというのが、大きな問題ではあった。

「飛ぶことには、慣れていますか？」

「一度だけ、恒に負ぶってもらって」

「では安心ですね」

遼生は穏やかな声で述べると、志帆梨が何か言い掛ける前に強く地を蹴りつけ、次の瞬間には跳びあがっていた。……志帆梨は悲鳴を口に出し掛けそうになったが、絶句したまま遼生の背にしがみ付く。

彼女は1年前の満月の夜、恒の背に負ぶさって広岡市の夜景を見たことがある。その時は飛ぶというより、浮かんでいて……信頼できる息子の背中だったからか、怖くはなかった。

しかし遼生は脚力だけで跳んでいるのであって、飛んですらない。ただ規模の大きなジャンプをしているだけのようで、そのスピ

ードに志帆梨は恐怖心を掻き立てられる。

1秒後―志帆梨が必死に彼の肩にしがみつく。

1・5秒後―遼生は正対する向かい風が一瞬、異様な唸りをあげたのを聴いた。

「!？」

2秒後―すぐ足元から尋常ではない音量の地鳴りがする。

3秒後―遼生は山肌を見下ろして、危うく体勢を崩しそうになった。

つい3秒前まで遼生と志帆梨のいた場所にあけられた巨大な穴は……トンネルのように山を貫通している。目には見えない大きな筒で山を打ち抜かれたかのようなだった。あるいはクツキーの型取りをするかのように、たった1秒間の間に、だ。それは風岳村が、何者かから襲撃を受けているのだという意味を知る。鋭利な切り口は、人為的な何がしかの作用を思わせた。

5秒後―志帆梨は無事かと振り向くと、彼女は顔を遼生の背に埋めるようにして、硬直したままだ。

6秒後―遼生は動揺を抑え、休耕田の中に着地場所を見定めている。

9秒後―空から駆け下りるようにして衝撃を和らげ、着地を成功させた。

着地と同時に、志帆梨を庇いながら音のした方角を振り向いた。

襲撃者の姿は見当たらない。

「今、どこから何が起こって……」

「んー……何でしょうね」

何を目標に襲われたのだろう。生物階の事情を知らない遼生ではあるが、自然現象ではないことは明らかだ。

「ひ、や……あ」

彼女の背後で起こった事件を知らない背中の客人は、着地の成功に安堵したのか、緊張の糸が切れたかのように小動物のような細かい声を出している。緊張したのだろうが、心拍数が跳ね上がり動悸がひどい。遼生は柔らかな枯れ草の生えわたった、田んぼの上に志帆梨をおろした。足が挫けているので、支え起こす。

「す、スピードが速すぎて……。飛ぶというより、落ちている感じで」

怖かったと、言いたいのだろう。

志帆梨の感想はもつともで、結果的には故意に志帆梨を怖がらせてしまったようだ。遼生は危険を察知して跳んだわけではなかったが、その判断は偶然にも正しかったといえる。山中でぐずぐずしていれば、今頃は山もろとも消滅してしまっていたかもしれない。遼生は志帆梨の両肩に両手を置き、言い聞かせた。

「あなたは一刻も早くこの村を出て、この村の人々とともに神階に避難してください。ここはこの通りで危険です」

筒状に穿ち抜かれた山肌を志帆梨に見せないよう、遼生は立ち位置を取って志帆梨を落ち着かせていたところ、少し上空に、青い光のグリッドが出現したのを目撃した。グリッドを介して仮想世界から三本の石柱が地上に落下する。彼はその光景には言及せず表情だけを引き締めた。

「いいですか……後ろを見ずに、振り返らず前だけを見て逃げてください」

背後で不審な音がしているので恐ろしくなって、志帆梨は余計に

振り向けなくなってしまった。

「あの、荷物が家にまだ……大事な荷物があるんです」

墓参りをしてから家を出ようとしていた志帆梨は、自宅の倉庫前に荷物を置きっぱなしにしてきていた。遼生は戻っては駄目だと首を振る。

「神階に入る為に必要な荷物など、ひとつもありません。あなたの命だけが大切です」

志帆梨は強く諭され、唇を震わせていた。大きな瞳に、血管の透けるような白く薄い肌。ナチュラルグレーで引かれた形のよい眉と、狭い額。肩まで伸ばした細くつややかな黒髪。彼女の視線が遼生のちょうど顎のあたりにある。自然体で飾らない、可憐な女性だな……遼生は彼女の姿を何度も記憶に刻み込む。ただ、彼女の面影をよく覚えておきたいと思った。

「お、お世話になりました。また、会えますか」

「ええ。必ず」

遼生が志帆梨の無事を祈りながら優しく背を押すと、彼女は慌ててお辞儀をして、小走りに駆け出していった。また、必ず無事で会えるように。遼生は祈りながらいつまでも彼女の背を見つめていたかった。が……そういうわけにもいかない。彼は志帆梨にかけてもらったストールをぎゅっと強く握り締めると、彼女に対する淡い思慕を振り切り、現実立ちかえる。

異変は起こっていた。風岳村の空の、それほど高くはない層に人工的なレーザー光が格子を作って浮かんでいる。断じて生物階の造形ではない、不自然だ。遼生は紅茶色の瞳を大きく見開いたまま、口元に手を宛がった。

「あのグリッドはたしか数学神 ファティナ様のヘクス・カリキュレーション・フィールド？　なんて業だ……何があった」

遼生は戦闘に加わるためにこの村を訪ねてきたわけではないが……行かざるまい。文型神のファティナが戦闘に巻き込まれている、彼女は大変な窮地にあるということだ。場合によれば、忌むべき姿を見せなければならぬ場合もある。

忌まわしき翼で風を切るその前に、志帆梨は無事に逃げ延びてほしい。巻き添えにしたくない。

村の小さな通りに向かって志帆梨の去った方向と真反対に駆け出しながら、彼はそう願うのだった。

＊

バンダルⅡワラカの暴行を受けて織図　継嗣が気絶していたのは、実質数時間にすぎなかった。

彼は暴行による痛みではなく四肢に猛烈な圧迫感を感じて意識を取り戻し、目覚めたのは水中だった。全身を押し潰さんとのしかかる水圧に、吐気すら催す。

体軀を見遣ると頼んでもいないのに怪我の処置がしており、折れた骨も接がれているようだった。先ほどは全裸だったものだが黒いウェットスーツのようなものを着せられている。素材は薄いが繊維には微細な回路が仕込まれており、織図の生体情報を別室でモニタ

ーされていることだろう。

にしても、溶液中に鎮静剤や筋弛緩剤が溶け込んでいるからか、脱力感と眠気に襲われる。途切れそうになる意識を繋ぎとめながら、軋む神体に鞭打って身をもたげ周囲を見渡す。

“くそ……水牢かよ。バンダルさん相変わらず、えげつないな”

水中から見える景色から判断するに、織図は特務省によって開発され、神の転移不能領域を形成する水溶液の張られた水槽に密閉されているようだ。窒息の心配はない、問題はその苛酷な環境だ。

そこは直径1.5mほどの円筒状の水槽で、見上げると出口は数十メートルほど上にある。水槽の底に電子錠つきの足枷で足首を繋がれて、重石をつけられている。力任せに枷を断ち切って浮上することもできない。水槽のガラスは耐久性も充分、頑強だ。特務省の拘束技術は侮れない。それにしても、と織図は苦しげに顔をしかめる。

“何だこの水圧、尋常じゃねえ。神階ではないのか”

神階では考えられないほどの水圧が織図を圧迫している。海難事故に見舞われ海溝の底に沈んだ死者から記憶を回収しようと洩々生物階の深海に潜った以来のことだが、織図は生物階の水圧の凄まじさというものを思い知った経験がある。特務省内部で水圧を感じること……可能性はひとつだ。

”特務省が、けいりゅう繋留を解いたんだろうな”

……幽囚の身にあっても分かるものは分かる。特務省は戦艦としての本性を顕し、転移装置を使って生物階にエントリした。水圧の凄まじさが、その場所を明かしているようなもの。

ついていない、とは思ったが少しばかりツキが残っていると感じたのは、室内が暗く、周囲は無人でモニタ以外の監視がなかったことだ。それは彼にとって不運ではなくチャンスだった。彼は打ちひしがれてなどいなかった。織図はウェットスーツの内部に走る青い回路を見つめ、いかなる不利な状況にあっても彼がそうであったように、陽気に悪態をつく。

“詰めが甘かったな。何でもかんでもIT化すりゃいいってもんじゃないやねえ！ 突破口見えたり、だ”

彼はウェットスーツの袖口を歯で噛み切って繊維をほつれさせると、織り込まれた回路を指でつまんで引っ張り出した。

“セキュリティを考えるならアナログが最強だ！ つっーんだよ”

特務省の後学のためにと暢気に提言しながら、袖口から数本の回路を引っ張り出し、こよりのように縋って頸部のジャックポットに差し込む。その直後から織図がセキュリティシステムを占領するまでに、数秒とかならなかった。端末と繋がる回路を織図に一本でも与えた時点で、特務省は大きな失敗を犯していたといえる。

彼は侵入した経路からセキュリティシステムを書き換え、水牢の傍に設置されているモニターに一斉に映像リピートをかけると、手際よく彼の足首を拘束している電子錠のロックを外した。自由を獲得て、円筒の水槽を悠然と浮上する。上部のハッチの電子錠も難なく外してひょっこりと顔を出し、ハッチから身を乗り出す。

おそらくは発信装置も組み込まれているであろうウェットスーツを脱ぐべきかどうか迷ったが、特務省の端末と繋がる回路は何かと便利がよさそうなので着用しておくことにした。それに、たとえ誰とも顔を合わせなくとも、全裸でうろつく趣味もない。

”特務省が生物階に来てるってことは、レイアの居場所を特定されたってことなんだろうな”

物音もたてず、彼は丁寧ハッチを閉ざす。よくできた彫像のように筋骨隆々とした神体を小さく折り曲げ、立て膝の上に頬杖をついて思案する。

“特務省を風岳村に行かせてはマズい。動力を切ってやろうか……？　しかし落ちる”

特務省の巡航を力づくで止める方法。それは、バンダルを倒して指揮系統を占領するか、もしくは動力を強制的に切って特務省を墜落させるか、というのが適当だが、前者を選ぶような愚かしいことはしない。何万年もの間封印された立ち入り制限区域の一画、特務省の動力エリアは特務省の浮力と推進力とを生み出している。動力を断ち、特務省を墜落させる。そんなことを企みながら、水牢の頂上から下に飛び降りるためにハッチの縁を蹴ったときのことだ。

“うおっ！？　なんじゃい！？”

飛んでから気付いても今更だが、飛翔できない。織図は咄嗟に体勢を整え、空中で背を水槽に押し当てて滑り落ちるようにしてスピードを殺し、危うい体勢で着地。着地した足裏に鈍い痛みを感じる。ことが間接的に生物階にいるという証拠、とはいえ神は飛翔術に長けているために、重力の存在を蔑ろにしていることに気付かされる。

“何で飛べない。斥力中枢でもやられたんかな。くっそ、飛べないとお話にならない”

暴行で斥力中枢を損傷したとは考えられないため、気絶をした間に脳をいじられたのか。……ありうる。バンダルが特務省の機密を知った者を拘束し、脳手術をしたという噂も聞いたことがある。脳に違和感を感じないが……とにかく、脳に細工をされた可能性があるなら、織図の脱獄は周知されているのかもしれない。ここに長居

してもいられなかった。

彼は周囲を見渡し気配がないのを入念に確認すると、部屋の壁面に大きな通風孔を見つけた。通風孔の金網を外して身体を捻じ込み、中の配管を煙突掃除夫のように垂直によじ登りはじめる。よじ登りながら、織図はくだらないことを思い出した。

“ そういや、今年はS A S U K Eを見なかったな ”

年に二度ほど放送されるサバイバルアタック番組を毎年楽しみにしていたが、今年はうっかり見逃していた。挑戦者が賞金を懸けて難攻不落のアスレチックに挑むTV番組だ。彼は今に始まったことではないが、どんな苦境にあっても楽しむべきことを見つけ出し樂觀的に物事を考えようとした。億劫なことも動力室まで続くアスレチックに挑んでいるのだと思えばそれなりに悪い気はしない。

特務省内部の部屋の構造は複雑に入り組んでいるため、隠し部屋なども多い。各部屋を連絡する通風孔は矮小だが隠し部屋にも通じていて、単純かつ動力室までの最短距離の通路だといえる。織図は普段はだぶついた聖衣に隠されて一見細身に見えるものの、実は隆々とした筋肉を維持している。彼がいつも太るだの食べ過ぎだのとダイエットを気にしているのは、美容のためではなく主に筋肉太りを気にしていることであり、彼の筋肉量は若い武型神と比しても格段に上回っている。飛翔を封じられているからといっても、それを補って余りあるほどの身体能力の高さとスタミナがある。

彼は特務省内部の構造を図面まるごと記憶していたので、各部屋を結ぶ通風孔がどこに繋がっているのか分かっている。動力室に直接繋がる通風孔はないが、動力室の隣の空き部屋に繋がるラインは存在した。特務省には防火遮断壁がいくつも存在し、各区画に空き部屋が存在する。

また、特務省の機密のひとつなのだが、特務省の動力源はたとえば生物階でいうところの原子炉のようなもので、高エネルギー燃料が封じ込められてあるのだそう。そういう理由で、事故や被爆に備えて動力室への立ち入りは禁じられているばかりか、周囲の空き部屋に立ち入る者もない。好都合だった。

織図は壁面に走るコードにラインを繋ぎ、動力室の監視システム内に意識を同調させた。

“……OK。制圧☆完了”

動力室の全ての監視システムをダウンさせ、先ほどと同じ手口でシステムに異常なしとのシグナルを操縦室に送った。メンテナンスの入り口のオートロックを内部から外し、神妙な顔つきで立ち入る。

“特務省のセキュリティちよろすぎだろ、こんなんで大丈夫か？
まあ、いっても所詮は中古船だしな”

織図は注意深く動力室に突入。室内はいかにも頑強そうな炭素系素材の壁面に被いつくされて、ホールのように奥行きもあり、天井も高い。部屋の中央には、直径10mほどもある巨大タンクのような外観をしたエネルギー炉が、ツタのように球体の上を這い回るケールに安定を支えられるようにして鎮座し、耳の奥を掻き回すような不快な轟音を上げながら稼動していた。エネルギー炉から肌を焼きつけんばかりの熱を感じながら、球体の前に浮遊するガラステーブル状のコンソールを通り過ぎて、一直線に炉に近づく。

耐熱ガラスをはめ込まれた丸く小さな窓がひとつだけ、球体の壁面にあいていた。鮮烈な窓と色彩と光の襲い来る窓にたじろぎながらも顔を近づけて覗きこみ、炉の中心部に目を凝らす。エネルギー炉の状態を確認しておこうとしたのだ。内部が危険な状態となって

いるなら、動力炉の停止そのものを回避しなければならない。

織図が思い描いていたエネルギー炉の内部は、原子炉本体のイメージと遜色ないものだった。冷却された水の中に、炉心燃料が沈められ、何がしかの融合反応によって熱量が取り出される。そんな構造を思い浮かべていた。しかし……織図がそこで見たものはある意味、正解であり、またもうひとつの意味で想像だにしていなかったものだ。

“……馬鹿な……これが、こんなものが燃料なのか！”

球体のエネルギー炉内部に張られた、煮えたぎる透明な液体の中に拘束器具で嚴重に縛られ、釜茹でにされているのは……青年だ。

織図は息を止めた。それがただの青年だというなら、不審ではあろうが特に問題はない。しかし……沸騰する液面の下に見える彼は、金髪をしている。つまり彼は金髪の使徒でなければプライマリの神だということだ。炉の近くにあるインジゲーターを見ると、炉の中の温度は数百万度もある。この温度に耐えられるのは言うまでもなく、使徒ではなさそうだ。生きているのか死んでいるのか。彼の身体は半透明で、彼の身体越しにエネルギー炉の底面が透けて見えた。織図はその異様な姿にひき込まれた。

“亡霊、なの、か？”

織図は焦燥感を覚えながら炉を見渡せるコンソールのパネルに駆け寄って操作し、セキュリティロックを解除。彼は自身の体内に埋め込んでいるケーブルを引き出してパネルに接続し、なおもシステムに侵入し、炉の中で何が起きているか調べ上げた。沸騰する液体の中で茹でられている青年から搾取されているのは、熱エネルギーだ。

乾ききった口もとを押さえ、織図は黒く大きな瞳を見開いた。

“……先代絶対不及者の遺体……だと？”

パネルが示す情報に偽りがなければ、釜茹でになっているのは絶対不及者の死体だという。

彼は二代目 絶対不及者として神階に知られている。

古代神階の慣習に基づいて、その青年には通名も置換名もない。ただ、当時は智神^{セウル}と呼ばれていた。長い神階の歴史を振り返って、ターニングポイントが二点あったとすれば、確実にその一点を担った存在だ。伝承上の存在と思いがけず遭遇したということに感慨深さもあるが、織図はその真贋を疑わざるを得ない。

“本物が10万年以上も……こんなところにいたのか！？”

本当に？ 絶対不及者の遺体から溢れ出すエネルギーの封じ込めを行いつつ、原子力発電のような方法で特務省は有効活用しているようだった。炉は安定稼働しており、死体は厳密に密封されている。入念に捜しまわっても炉の中へと繋がる出入り口は見当たらない。

“究極の永久機関とは考えたもんだぜ……胸くそ悪い”

もとは生きて神格を持っていた青年をただのエネルギー抽出のための燃料として扱い、動力装置の一部として組み込んでしまう。いかにも特務省らしい合理性に基づいた着想だ。装置があれば重い特務省を浮遊させるためのエネルギーなど改めて必要ないもので、何の利用価値もなく死体をどこかに飾って、エネルギーを定期的に打ち消したり持て余しておくよりもはるかに合理的に、適度に熱量を

逃がすことによって安定的な保管を可能とする。特務省は利口だといえど利口だが、賞賛する気にはなれない。

絶対不及者の死体は特務省の心臓部、エネルギー炉の中に密閉されたまま10万年間もの歳月を過ごした。特務省の合理主義や狡猾さには、毎度のことながら感心させられる。多少なりとも、死神であるがゆえに典型的な特務省職員とは異なる思考回路を持つ織図は、先人の冷徹さにぞっとするものだが……。

この秘密を、誰が知っているだろう。場合によってはバンダルすら知らないのではないか。もの思わぬ死体が特務省の心臓の役目を果たしていたとは、何とも皮肉な話ではないか。織図は炉についた小窓から、青年の死体を見つめる。怒りなのか、絶望なのか、深い悲しみなのか、瞳をぎっと力強く見開いたまま息絶えている。智神は意識を持ったままINVISIBLEの収束を受けたとされている。死体は正面を向いているので、まだ背にスティグマがあるのかどうかは分からない。

織図は前人未到の古代遺跡に、偶然迷い込んだような……あるいは墳墓の入り口を見つけたような、何とも言えない鬱々とした気分になった。手持ち無沙汰にこの動力室の入室ログをあさってみると前8500年間、誰かが立ち入った様子はない。特務省は長きにわたって神階に繋留されていたので、“動力炉”のメンテナンスをする必要もなかったのだろう。

智神の墓は語り継がれることもなく、特務省の永久機関としての役目を果たしてきた。花の一本をも手向けられることもなく、あらゆる者から忌まれ憎まれ続け、これからもまた必然的にそうである哀れな依代が、彼だ。

“無念だったろうな。聞こえているか、智神^{セウル}”

数えきれないほどの死に顔を見てきた織図も思わず目を背けたくなるほど、智神の最期の表情は苦悶に満ちている。絶対不及者となった智神の意識は絶え絶えに、殺してくれと訴えたと伝えられている。智神はINVISIBLEを拒絶した。……彼は抵抗したのだろう。それでもINVISIBLEの暴走を止められなかった。そしてまたINVISIBLEはレイアで同じことを繰り返そうとしている。

いま、レイアはINVISIBLEの収束時期に呼応するかのように虜となりつつある。レイアとINVISIBLEが近づくのを阻む事も、援護することも、織図には正しいとは思えない。

“教えてくれセウル。INVISIBLEは何をしようとしてんだ。知っている筈だ……INVISIBLEという存在を体現し、正面から向き合ったあんたなら！ なあ！”

彼の視点から見える範囲では、いずれの創世者にも正義はない。だからといって完全なる過ちというものも、織図には見抜けない。

彼の願いにこたえるかのように……ノーボディは絶対不及者を殺したと、EVEの記録ではそう記されている。正確には、智神のバイタルを切断したのだ。意識と自我という依代を欠いたINVISIBLEは、智神の神体から出てゆかざるをえなかった。

——そして虚ろとなった不滅の遺体だけが残された。それは密やかに葬られた、一つの悲劇であった。

残された智神の抜け殻は、まだ特務省にエネルギーを供給し続けて余りあるほどだ。永遠とも思える時間の中で、遺体は忘れ去られ

た。その無残な姿に織図は無意識のうち、ユージーンの姿、レイアの未来を重ねていた。彼らのこのような顔を、見たくななどない。

“ 天帝の成れの果てか ”

織図は彼を吊うように、厳かに聖印を切り手を合わせた。

しかしこれで、動力を切ることもできなくなった。動力の供給源を断とうとしていた織図の前に現れた智神の棺。ひと知れず葬られようやく安住の場所を見つけた彼の墓を暴くようで、織図は気が進まなかった。死してなお永遠を生きる彼の肉体から滾々と溢れ出す、朽ちた生命力。

智神を内包したまま特務省を墜落させては、炉の中のエネルギーがどのように地上に溢れ出すのかも分からない。そして、嘗て破壊の限りを尽くした絶対不及者が垂れ流すエネルギーは決して、地上に益を齎すものである筈がない。

永遠の苦しみから解き放たれた死体は沈黙して悠々と、沸き立つ液体の中で海草のように揺らめいている。

“ 何も語らないのか、もう。何か話せ、お前の無念を…… ”

死者に強いて、何かを語らせようとするのは不毛だった。それでも……織図は彼の遺体から離れる気にもなれず、無償に遺体をあらためたい衝動にかられていた。

＊

うらぶれた山村を川沿いに走る畦道を、枯草や落ち葉を竜巻のように巻き上げながら一対の閃光が駆け抜けている。寂しげな曇天とセピア色に枯れ果てた景色のもと、ファティナⅡマセマティカとアルシエルⅡジャンセン、ふたりの女たちによって酷烈な空中戦が繰

り広げられていた。

ファティナは△δ△を介して上空に現れたグリッドと神体を連結することで、あたかも天空から操られるマリオネットと化したかのようなのだ。とても生身の文型神とは思えないほどの超反射と俊足を可能とし、重力異常環境下、斥力無効条件下においても何らハンデを持たず飛翔術を駆使している。

激戦の目撃者は幸いにしていなかったが、もし下から彼女らを見上げる人間がいるとすれば、肉眼で彼女らの姿を捉えることはできなかっただろう。彼はそこかしこでスパークを起こす、猛烈な竜巻を見上げることしかできない。

渦中のファティナはラインを引いて空を縦横無尽に舞い跳び、アルシエルの攻撃を一撃も喰らわずにやり過ぐすが、飛行性能のついたグングニルを携えるアルシエルもその身体能力はファティナを遥かに凌ぎ、逃げ惑う小鳥を狩る大鷹のような威圧感を伴って女神を圧している。

生け捕りにして口を割らせるためなのだろうか。

目下アルシエルに殺意は感じられず、ひたすら彼女を追いつみ続けることでファティナのスタミナ切れを待っているかのようなのだ。そうはいっても、ファティナが隠し持っているレイアIIメーテールのバイタルコードを割り出す為なら手段を選ばない筈だ。女神を生かさず殺さず脳からデータを得る方法など、いくらでも存在した。

要はファティナの脳だけが無事であればいいのだ。身体は無事である必要ない。

必然的なデッドオアアライブ。決着は生死問わず、で構わない。一瞬で死線に踏み込まれる。この難敵に手心を加えて挑む、など不可能だ。

逃げに徹しては幾許もたない。何らかの措置を講じるべきであり、彼女はさきほど窮地を切り抜ける唯一の方法は神体の仮想化だという答えを導き出している。かなりの危険を伴うが、躊躇っている時間はなかった。

常日頃戦闘訓練をしているわけではない肉体に鞭打ち、可動限界に負荷を設定したツケは二の腕やふくらはぎの疲労の蓄積によって実感する。指に絡む十本のラインを引き絞り極限にまで集中を高めたファティナは、自らの神体をIdeal Body(仮想体)とするためのプログラム構築を急いでいた。

その間も容赦なく浴びせかけられる刺突攻撃を避けつつ防御に徹し、仮想空間から実体化した灰色の防御壁で迎え撃つ。コンマ数秒の貴重な時間の合間合間に一語ずつ神語を入力し、プログラムを組む彼女を、堅実に $\Delta\delta\Delta$ （デルタスリー）がサポートしている。

普段はPCとの互換性を優先し生物階で一般的に用いられているプログラム言語を使うが、表意文字である神語での入力、少ない文字数で莫大な情報量を有しているうえ、ヘクス・カリキュレーション・フィールドとの相性もよくエラーを起こしにくいという最大の強みがある。

書き上げたプログラムは上空のグリッド上に、強力な一枚の護符のように碧い光跡をもって大きく浮かび上がっている。彼女は逸る心を鎮めつつその記述に間違いがないことを再度、再三確認するとプログラムの実行をかけようと試みる。次のコマンドを発音すれば彼女の神体は仮想化を果たし肉体は電子と一体化、プログラムに変換され如何なる攻撃をも無効とする、算段は整えられた。

ファティナの身に降りかかる代償までの執行猶予はわずかに10分。一線を越えれば、発動者の命をすら奪う禁断の秘術。短い時間

にファティナはブラインド・ウォッチメイカーに決定的にして致命的な一撃を浴びせるか、逃げおおせなければならぬ。ひとまず手を打つための時間を作る、最優先事項だ。

” Enter……!”

成功を確信しつつ実行 (Enter) をかけようと魚網のようにラインを捌き、ラインを綾に繰ったときだった。翼を持ったひとりの少年使徒が真横から猛烈な勢いで目の前に飛び出し、女神を抱きかかえて地上へと反転させ、彼女もろとも下敷きとなって背から墜落して休耕田に激突した。

少年の妨害によりファティナのプログラムは実行を受け付けず、再び待機状態に入る。抗議しようとしたファティナは、すぐに口を噤まざるをえなくなった。つい一瞬前までファティナのいた場所で鈍く紅い光と轟音とともに大爆発が起こったのだ。座標はマグマだまりほどの熱量がそこにあることを示唆する、赤褐色の炎に包まれている。

座標 (5026, 225, 9010) は1秒前まで彼女が留まっていたポイントだ。彼女がプログラムを確認するため上空を見上げていたとき、その神体は“不可侵の聖典”のページから展開された円法陣に、すっぽりと囚われていたということに気付かされる。ファティナは九死に一生を獲て少年に抱きかかえられながら呆然と見上げて首を振った。円法陣からの起爆前に、仮想化が間に合っただろうか？ 応えはNOだ。

彼はファティナを、半ば地上に押し付けるようにうつ伏せに横たえると、片手で彼女の動きを制し、逃げろと示唆する。すぐ上ではグングニルを片手に構えたアルシエルが、その鋭い切っ先を少年にぴたりと向けていた。

彼女はウサギのように跳ね起きて彼を押しつけようとしたが、細い身体のどこに力があるのか、頑として動かない。そもそも使徒は彼らの主にこそ忠誠を尽くすものだが、たとえ他神であっても危険に見舞われていると判断すれば、とりわけ若い男性使徒は神を庇おうとする。それにしても、少年使徒がこの期に及んで危険な生物階に居残っているなどハプニングか事件以外のなにものでもない。

特殊任務で生物階に残っていた使徒なのだろうが、どこの部隊に少年使徒を作戰に使う愚か者の上司がいるのか。糾弾ものだ。少年の決死の行動に心をうたれ、また彼の判断に感謝することも忘れなかったが、残念ながら彼は足手まといになるだけだ。

ファティナだけなら攻防に集中できるというのに、のこのこと登場して犬死にをして欲しくない。奇跡的に一度だけ回避をしたが、使徒の身では絶望的に戦力とならないのだ。

「なっ……！ 何をしているのです、あなた誰の使徒ですか。どきなさい！」

「ここは引き受けました。お逃げ下さい」
少年はそんなことを言っている。確かにアルシエルの隙について今なら逃げられるし、彼を見殺しにすればファティナは逃げ延びて逃げたからといって裁かれることもない。

しかし……それがたったひとりの使徒であっても。
だからといって、「はいそうですか」と身代わりにできる筈がないだろう！ 見くびらないでほしい、そう叫びたかった。

使徒たちの間に伝わる古い教えに、神の血の一滴は十万の使徒の血より貴いものであって、自らの命に先んじて神を守護しなければならぬというものがある。それは行き過ぎた信仰心に由来するイ

デオロギーであり、あるいは旧態依然とした使徒社会の澱みであり、そこにどんな理由があっても命を粗末にしてはならないと常々使徒には説いてきたが、いまだに狂信的で過激な教育を施されている使徒はいる。

神は大樹であり、使徒は樹に寄り添うべきものだ。使徒の命は神の命よりも軽んじられて当然だという悪しき教えを覆し、使徒は神の奴隷などではないと、これから身をもって証明する。何が起ころうと少年を盾にしない、絶対に！

予定通り神体の仮想化は実行する。彼には傷ひとつ入れさせない。

「情けないものですね……そんなに頼りなく見えますか」

ファティナは彼女の不甲斐なさを恥じ、顔を赤らめて視線を落とす。人差し指のラインを少年の腰に引っかけ、ぐんと大きく手前に手繰った。

アトモスフィアの通った糸に強く体を後ろに引き寄せられ、よたよたとバランスを崩して後ずさる。小柄な女神は、背伸びをして少年を背後から抱きとめた。頭に血が上っている使徒を落ちつかせるには、アトモスフィアの通った手で弱点でもある翼を押さえるのが効果的だ。ファティナは少年を優しく抑え込んだ。

「誰の使徒とは存じませんが、あなたは勇敢です。ですが、その気持ちだけで十分ですよ」

「お言葉ですが」

少年……いや、陽階神 八雲 遼生は大先輩にすかさず口ごたえした。

文型神のファティナがこんな場所で見境なく、白昼堂々と戦闘行為をおっぱじめる。それも女帝アルシエルと戦わざるをえない状況

が何を意味しているか、遼生はMRIで簡単に暴きだしている。

アルシエルを鎮めようにもファティナが傍にいと動きが制限され、本気で渡り合えない。彼女は遼生を邪魔者と見なしているようだが、邪魔なのはファティナの方だ。……ということを、面と向かって言えはしないし、察してもらえそうにもない。

不本意だが、客観的にどこから見ても使徒であると前面に主張した姿を彼女に晒している。彼女がこの場を譲ろうとしないのも無理はない。論より証拠、ほんの僅かながらにも実力を示さざるをえなくなった遼生は指先で「」状のフレームを作りアルシエルに向け絞り込むと、叩きつけるように両手で空気を押し付け、アルシエルを空中に縫いとめた。空気圧にも似た波動が少年の指先から発せられ、アルシエルは透明なアクリルボードに貼り付けられたかのように、ぴたりと動きを止めた。

「?!」

ファティナが驚いたのは、彼が使徒として疑わしい行動を取ったからだ。彼はそれほど労することなくブラインド・ウォッチメイカーの憑依したアルシエルを封じ込めてみせた。アルシエルを仕留めることがいかに容易いことであるかを見せ付けるためだけに。彼が行ったのは単なるデモンストレーションに過ぎなかっただろう。身動きを封じられたアルシエルは眉ひとつ動かすこともなく、焦点の定まらない真っ黒な瞳でこちらを凝視している。

「暫定措置です。長くはもちませんので早々にお逃げ下さい。狙われているのはあなたです」

淡々と、しかし口早に述べた少年に、ファティナは釘付けになった。繊細で、無駄なくあまりに洗練された彼の業は目に快くすらあり、不覚にも見とれてしまう。断じて思い過ごしではないと思うの

だが……彼のスタイルはかつて神体に仕込まれた生体神具によって素手で相手を意のままに操ったヴィブレルスミスのそれに似ている。あるいはヴィブレルスミスの戦術を継承しているのではないかと疑うほど、彼のカラーが色濃く見える。彼は少年使徒なのだろうが、生体神具を帯びているかのような立ち振る舞いだった。

「あなた、誰の使徒です？ どうして……こ、こんなことが！」

……何かの間違いだ、さもなければ夢でも見ているのではないだろうか。少年は振り向きもせず、ファティナが腰に絡めたラインを解いてさもつまらないものであるかのように彼女に放り投げた。

「あなたは大変貴重なあるものをお持ちのようだ。だから狙われていらっしやる」

少年は全てを見透かしている。まさかマインドブレイクを？ ……いや違う、そんな芸当が使徒にできるものか。あれこれと詮索しすぎて混乱する。

「ある、もの……？」

「そうですね、例えば暗号です」

彼女はその一言を聞いて警戒を強めた。また、釈然としなかった。彼は何を隠して、短い生涯を歩んできたのか。哀れなほど肉の削げ落ちた、痛々しいまでに傷ついた上半身を観察する。彼の両腕には異常な注射痕や手術痕が散見される。

使徒は神のアトモスフィアを獲るために注射を行うが、注射針は極細のものを使うために注射痕は残らない。生々しく連なる注射痕は腕の裏側にまで及んでいる。その痕跡が血管を追っていないところから、……何がしかの治療目的に打たれたのではないことも分かる。

間違いない。彼は薬物投与による虐待を受けてきた。

彼はファティナの知る、いわゆる少年使徒ではない。しかし彼の穏やかな物言いと立ち振る舞いは、陰惨な過去を感じさせない。これほどの特徴と存在感を持ちながら、彼の印象は冷水のごと清く澄み切って、朝霧のように淡い。

「ご心配なく。多少ですが、戦力にはなります」

第2節 第23話 天上り官僚と独立行政法人職員

神階 使徒階第5層 エリア17k。

空は快晴。擬似陽光が燦燦と降り注ぎ、雲一つなく、からっと晴れ渡っていた。使徒階の日常の光景だ。安定な気象、緑豊かな草原。しかし使徒階には大異変が起こっていた。

黒山の人だかりが使徒階5層の草原の一面を被い尽くし、異様な熱気に包まれている。

『はい、こちらです』

『私語は謹んで、列からはみださずに。気分の悪い方は遠慮なく申し出て下さい』

陽階第五層の使徒たちはそこかしこで、生物階からの避難者の対応に追われていた。

彼らは拡声器を手に長い行列を作る人々の列を、草原の上に白いロープで分けされたブロックからはみださないように誘導している。

神階の歴史始まって以来初めて、人類が生物階を離れ神階に入る。

居住の為のコロニーに案内された数千人を超える人々は、草原の広がるのどかな平地に生物階での経緯度ごとに集められ、落ち着かない様子で世話役の使徒のブリーフィングを受けていた。彼らにはもれなく寮や仮設住宅が給されることとなっており、十分な食料と暖かい寝床、公衆浴場も用意されている。恵まれた環境ではあるが、先行きの見えない避難生活にストレスを募らせることになりそうだ。

彼らは神階に入ってから通された長い通路を歩き使徒階に到着するまでの間、随所に見られた圧倒的なテクノロジーを目撃し、ただ

驚嘆するばかりだった。また、通路に設置された小窓の外が宇宙空間であることに絶望した。国連が緊急避難用巨大宇宙ステーションだと説明したこの建造物が、どう考えても人間の手によって造られたものではないと彼らは思い知らされる。

「あの……私たち日本に帰りたいです。お願いします」

不安にかられたよぼの老夫婦が必死に、列の近くにいた背の高い青年使徒に帰りたいと訴えているが聞き届けられず宥められた。『地球は危険に見舞われています。ほんの暫らくの間ですから、我慢してください。あなた方が充足できるよう、誠心誠意お世話します。』

人々は使徒階に入った後、彼らが神々の社会に招かれたことを告げられた。

人間と遜色ない容姿をした神や使徒と名乗る者たちが、遙か遠く離れた宇宙の知的生命体であるとの暴露も、神階と連携した国連職員、あるいは各国政府によって行われた。神と名乗る彼らが、宗教上の造物主ではないということも重ねて説明されたが、人々が納得できるはずもない。神々と国連の決定に従う他にはないとはいえ、人々の間には急速に不信感が拡大している。説明を理解できずパニックを起こす者も現れたが、集団で抵抗したり暴動を起こす気力もない。そう、不満は心の中に燻っていても既に地球を離れ、地上に戻することもできず宇宙船という収容所の中に軟禁されているこの状況では、どうしようもないのだ。

さて、このエリア17kに割り振られたのは日本国 大阪府の一部の区域となっている。

避難者は次々と放送で名前を読み上げられ、仮設受付の前にずらりと並んでそれぞれ手続きを行っていた。受付では大阪府庁職員をはじめ、各市町村の自治体が避難者の安否確認に追われていた。電

波塔がなく携帯電話が使えないので、使徒も電話回線を引いて窓口を作ったり名前を呼んだり、離れ離れになった家族の再会を手伝っていた。

そんな中でいち早く独身寮への入居手続きを終えた築地 正孝は、年配使徒が放送で長瀬 くららの名を読み上げたのを聞き、思わず受付に駆けつけた。“くらら”という名前は変わっているから、名前を読み上げられた長瀬 くらさんが築地の知る長瀬 くららだという自信はある。久しぶりに見た長瀬は少し大人びていたが、目もさめるような青いリブニットワンピースに白いロングブーツを履いている。

避難生活をするというのに少しもラフな格好にしようという気はないらしい、その独特のセンスは彼女を最後に見たときと変わらない。少し前にはFacebookなどで遣り取りもしていたが、最近築地が忙しくてログインしていない。久しぶりに顔を見てほっとしたというか、相変わらずの長瀬の落ち着きのなさに、懐かしさが込み上げてくる。およそ1年ぶりに長瀬 くららと再会した築地 正孝は、長瀬の顔を見て照れくさそうに指を差した。

「なんや、やっぱ長瀬か」

「あー！ ツッチーじゃん！ よかったー久しぶりー！」

長瀬は手続きを終えて駆け寄ってきて、築地の頭をぐりぐりと触った。

この遠慮のなさと同延びした物言い、学生時代の自由奔放だった彼女を思い出す。

「髪黒くなってる！ そっかー、助教先生なんでもんねー、パツキンじゃまずいよねー。あはは」

築地は2年半の間に、数多くの業績を積んで学位を取り、相模原教授率いる錯体研の助教となっていた。

松林助教と強力なタッグを組み、世界を飛び回り研究活動が続け

ていたところだ。彼は大阪大学の近くの官舎で独身生活を続けている。

「まーな……。しっかし、相変わらずやな。家族も一緒？ 今多治見に住んでんねやろ？ 何でまたこのエリアにおるん？ 旅行でもしよったん？」

長瀬はたしか大学院卒業後、大手製薬会社の研究開発職として多治見に住んでいるという話だった。大学在学中から語学に長けた彼女は、外国人研究者たちと対等に渡り合うやり手らしい……。この情報は一年前のものだ。

「家族は別エリアにいるよー。大阪には住んでないんだけど、出張でこっちきてたのー。東京に戻ろうにも新幹線も飛行機も動かなくてー。よかったー、ツッチーがいて。ここ携帯使えないから、知り合いいなくて一人で困ってたんだー」

「何で？ 長瀬って多治見に住んどるんちゃうん」

「えへへ、前の仕事はやめたっていうか会社潰れちゃってー。資金繰りが悪化しちゃってさ。うちの会社倒産って、ニュースにも出たじゃん？」

長瀬が入社したのは業界一位、二位を争っていた外資系の製薬会社。

あの大手が簡単に倒産するものなのか……と築地は疑問に思ったが、あの世界規模での感染事件以来、破格の安さで医薬品を販売しているREIMEIが、世界中のシェアを独占し、国内の製薬会社の凌ぎも削っているという話は聞いたことがある。なるほど、同業のREIMEIに潰されたというわけだ。REIMEIで発生した利益は神階によって運用され、ある目的の為に貯蓄されていると聞いたが……。

「あーそのニュース見とらんわ。倒産て……じゃ、まさかニート？」
「へっへっへっ……ニートじゃないよお」

長瀬は得意げだ。彼女が朗報を話す時の癖で、口の先を尖らせる。これは結婚でもしたのかもな、と築地は勘ぐるが、彼女はまだ“長瀬”と名乗っているようなのでそれも違う。

「なんや、気持ち悪いな！」

「官僚になったんだよ。ちなみに文科省だから、独立行政法人 大坂大学も管轄下にあるからね。ほらほらほら、そんな口いきちゃつていいのー？ ツッチー先生出世しないよー？」

あの長瀬が国家公務員？種を受験し、合格していたとは……恐れ入る。しかし旧帝大 大坂大学にさしたる受験勉強もせずストレートで合格し、在学中常に主席の成績を搔っ攫い続けた長瀬が国家公務員試験を難関と感じるかという……そうではなかっただろう。憂うべきは頭のネジの緩んだような性格であって、彼女は残念なことに優秀だった。

「マジ！ 官僚かよ！ ちゃっかりしとるわ。シゲルは福岡に置いてきたんな」

「シゲ、今はオーストラリアにいるよ。向こうでカンガルーの研究やってる。だからエリアも違うのー、シゲのエリアは10aだつて！ また遠恋になっちゃった。ねえツッチー。エリアの割り振りで、地域ごとなんだよね？」

「収容の段階では、な。あとで行き来自由になろうが、しばらくこのエリアやろ」

移り気な長瀬のことだからもうとっくに別れているかと思ったが、シゲルとうまくやっているようだ。使徒階エリアは収容される時はひとまず地球上の在住地域ごとに収容されたが、後日、肉親が他エ

リアにいる場合はエリアの移動も考慮してもらえようだった。だが、現段階では婚約していないカップルのエリア移動の申請は認められていない。エリア間の電話はできるというが、電話口には人が殺到するだろうから、遠距離電話もできないどころか、長瀬とシゲルはしばらく会えそうにもなかった。

「まさか神階に来ることになるとはねー……。神階ってヒッキー、じゃなかった……。比企さんが仕切ってるんだよね。比企さんの名前出したらちよつとは優遇してもらえるよね？ 食料いっぱいもらえるとか！」

何しろ神階には30kgしか荷物の持込みが許されていないのだから、食料の確保は最優先課題となりそうだ。そんな時、比企の名前を出せば何とかなると考えているあたり、いかにもトップダウン方式の官僚らしい発想といえる。

長瀬はこの非常時では仕方がないかと諦めているようだが……。築地には腑に落ちないことがある。

「長瀬さー……。暢気すぎやろ？」

「どゆこと？ いいじゃん！ 天国なんて滅多に来れるものじゃないんだし。死ぬ前に一回ぐらい来てもいいと思わないー？」

長瀬は何の疑いも持っていないのだろうか。彼女に“もっと慎重になれ”と今更言ったところで、無駄なのかもしれないが。

「じゃあ、もし帰られへん。ってなったら？ ほんまに避難は一時的や思ってるの」

「すぐ帰れるって言ってたよー。仕方ないじゃん、小惑星が落ちてくるんだからー。比企さん嘘つかないよー」

あたかもそれが確かな筋からの情報であるかのように、彼女は神階の説明を疑ってすらいなかった。学生時代にパチンコやパチスロなどのギャンブル漬けで廃人になって身についた性格からか、一時が万事懷疑になる築地とは対照的な、長瀬の楽観的で人懐こ

い性格は誰にも好い印象を与えてきた。

そんな長瀬と話していると築地はいつも、自分が他者を信用しない人間の屑であるかのような劣等感を突きつけられる。長瀬のようになりたいと思う一方で、今回ばかりは事情が違うと反論もしたい。比企の一存にこちらの人生がかかっている。ついでに人類の未来もだ。

「比企さん、俺らに何か隠しとらんか。何が楽しくて地球に惑星が衝突せなあかんねん。しかも一時的に神階に避難せーとか、シナリオに無理ありすぎやで？ 小惑星が衝突するとか、SFでも今時噴飯ものやろ……ありえへん！ ありえへん確率や。口にするだけであほらしすぎて切なくなってくるわ」

「うーん？」

長瀬はまた築地を馬鹿にしたような声を出す。他人を信じられない可哀想な奴だと、見下したいなら見下せばいい。

「ほな、もうはつきり言うわ。俺ら、比企さんに監禁されとるんっちゃう？」

築地はいつになく真剣な顔つきになった。

「えー。人間が地球から避難した隙に地球を征服するとかってこと？ ツッチーの説もどうかと思うけどー？」

「なあ長瀬。俺らふたりで比企さんに、直接聞きにいかへん？ 何の為にこないなことをするんかて」

長瀬は周囲を見渡して築地の口をふさいだ。

「主神に会いに行くっての？ 取り合ってもらえないよー。私たちがなんて超一般人だし。捕まりたくないよー」

「比企さんにガチで地球征服されてもええん？」

「あーりーえーないって！ 比企さんは悪い神様じゃないよ。ツッチーも分かってるじゃん。比企さんに、よくしてもらったじゃん」

特に築地は、比企に業績をもらったようなものだった。それ以外の面でも、長瀬は比企と……そして荻号にもだが、深夜の研究室で何者かに襲撃された夜、命を救われたことだってある。彼と過ごした数週間が偽りのものだったと、思いたくない。

「俺かて、比企さんのこと信じたいわ……。せやけど。納得いかへん！ こないなことするなんて信じられへんのや。比企さんなら俺らに納得のいく理由を話してくれる筈や……」

稚拙な説明では納得できない。

人類の神階への避難は人類にとって一度も経験したこともない重大事件だ。激変する事態に臨んでは、比企の聡明で理知的な言葉がほしかった。三流作家が考えたような酷いシナリオで人類を動かすなど、比企のすることではない。

これでは、人類は神々に軽んじられているようにしか思えない。互いに支えあって手を携えて共に歩んでゆきたいと……人々と神々の未来へのビジョンを語っていた、冷静で鉄面皮な比企の熱っぽい言葉を、築地は忘れない。人間と神は対等であるべきだと力説していた、あの言葉は嘘だったのだと思いたくない。これでは……比企は地球に征服にきた下劣な宇宙人に成り果ててしまう。そうあってほしくない。

「ツッチー、比企さんのことリスペクトしてるもんね。でもさー。使徒階って、1階層まで行かないと神様のいるエリアには行けないんだよね。ここって5階層じゃん？ ゲートっていう国境みたいなのを通過しないと、1階層には行けないらしいんだあー。ゲートには国境警備隊みたいなのがたくさんいてさー」

長瀬は生物階から持ち込んだらしい小型パソコンを開き、なにやらPDFを展開してスクロールしていた。築地もパソコンを持って

はきたが、インターネットができないのだから資料調べも仕事も進まない。できるのは紙資料を見ながらせこせこ英語論文を書くぐらいだ。長瀬のパソコン画面に映っていたものは…… 何らかの見取り図だ。

「ちょ……ちょ、何それ、何みとんねん」

築地は長瀬を押しつけて、手帳サイズの小さな画面に目を見張る。

「これ？ 超小さいでしょー！ 4万5000円で買ったんだー」。

世界最薄！ 200 gしかないんだよー」

彼女は超薄型、極小パソコンを自慢する。パソコンが小さすぎて、キーボードがおもちゃのようだ。築地も愛用している出張に便利な小型パソコンだが、築地はパソコンそのものにツツコミを入れているのではない。

「パソコンはどうでもええて。何やその図は」

「え、これ神階の見取り図だよおー。見てわかんないー？ 現在地

はここでー」

「何っつで！ そないなもん持つとるの！」

長瀬は驚いた築地を思いっきり小馬鹿にしたように、眉根を寄せて目を見開いてみせた。学生時代にこの顔を幾度となく見せられた築地が、何度彼女を殴りたいと思ったか知れない。やっぱ、腹立つ顔やわ！ と感想は腹の中にとどめておいて、ここはおとなしく解説を待つ。彼女は思った以上にできる女だ。

「ツツチー何いってんの？ 私らってADAMの閲覧許可あるじゃん。何？ ひょっとしてツツチー全然活用してなかったの？ うっわー意味わかんない。折角神階来るんらと思っさー、色々観光とかしたいじゃん。だからDLしといたんだ。ほらー、こことか楽しそうじゃないー？ 天国にもカフェがあるんだってー。あと、すごく広い空中庭園もあるらしくってー、見たことない花も咲いてるらしいしー、カメラもばっちり持ってきてるしー、メモリもねー、30ギガの3枚持つてるんだー」

比企からA D A Mへのアクセス権を得た当初から神階について興味を持っていた長瀬のことだ。神階への避難が決まってからA D A Mの資料を片っ端からダウンロードして、神階の資料を根こそぎ持って来たそうだ。彼女はダウンロード用のパスも使いこなしていて、A D A Mの制限区域内の資料も持っていると自慢している。彼女が神階の秘密を暴き出していた間、築地は研究に関する文献の検索でしかA D A Mを利用してこなかった。神階に遠慮して行儀よく最小限の利用をしていた築地と比べて、長瀬はかなり大胆かつ有効に活用していたとみえる。

「長瀬、……お前最悪やな！」

「えー、そうかなあ」

「天才やで！ この天上り官僚が！」

感心はしたが素直には長瀬を褒めたくなかったので、センスの悪いシャレになってしまった。

「えへへー、ツツチーに褒められちゃった。でもツツチーだからあんまり嬉しくないかなー」

「何、ほな神階に出るならゲート通らなあかんの？ 捕まるやろ」

二人で画面の前に頭をつき合わせて、貴重な設計図の隅々に目を配る。金庫破りを企てる二人の強盗のようだな、と築地は客観視する。いかんせんパソコンの画面が小さいので、目が痛くなる。こんなときには大きな画面が見やすいものだが、大きな画面で見ている使徒に気付かれても困る。

地図が読めないと一般的に言われている女性のくせに、というのは失礼だが、方向感覚抜群の長瀬は、C A Dファイルに変換して三次元的に神階内部の構造を把握しつつあるようだった。昔から、3 Dモデル上で分子立体構造を再現するR a s M o lというソフトウェアの使い方を誰よりも早くマスターしたのもそういえば長瀬だ。

彼女の空間把握力ならば迷子にもならず済む。築地は先導する長瀬のあとをついて行けばよいだけ、という男としては情けない構図になりそうだ。

長瀬は何かを見つけたらしく画面上にカーソルを合わせ、築地に見えるよう画面を譲って指差した。

「んー、脱出用の非常用通路があるみたいなんだけどー。あーでもロックかかってんのー、どうしようっかなー」

「ロック？ 非常用通路やのにロック？ “非常”通路にならんやん」

ロックのかかっている非常用通路の怪に気付いた築地が素直に感想を述べると、長瀬はへらりと微笑んだ。

「じゃあ、非常時には開くってこと？ ……へー、“非常時に押してください”ってボタンがありそうだよねえ。非常時ってどんな時かなあ？ 火事とか、かなあ……へっへー？」

長瀬は、先ほどから手持ち無沙汰だった築地が手に持っていたライターに視線を奪われている。長瀬の目が据わって……パチンコの景品でもらったジッポのライターが狙われている。築地は慌ててポケットにライターを隠した。陽階の使徒階はそもそも全館禁煙なのだが、人々の嗜好に配慮するというかたちで特別に喫煙は許可されている。

ただ、使徒階は草原で火があったという間に草原にまわってしまうということで、所定の場所でのみ喫煙が許されていた。

「ちょ……やるなよ！ 絶対やるなよ！ 神階からつまみ出されんぞ！！」

築地は今にも飛び掛ってきそうな長瀬を落ち着かせようとしたが、彼女はいつまでもポケットを見つめていて、諦めてくれそうにない。

“絶対やるなよ!”と言うのは、どこかの芸人よろしく、やれというネタ振りではない。

「でもー、ボヤぐらいならよくない? 迷惑かけずにちよちよっと火つけて、通路開いたらすぐ消火すればいいんだしー。通路は神階の中層階ってところに続いてるんだよー、行ってみたくない? 非常時の避難経路になってて……、大会議場とかあるんだって」

話を聞いていると、彼女はただ比企に会って話をするというよりむしろ、神階内部を冒険したいという好奇心のほうが先にたっているようだった。

「比企さんはどこにおるんや?」

「うーん、普段は上層階の天奥の間ってどこにいるらしいんだけど。そこって玉座なんだってー。あと警備も半端ないし、ここに行くのは物理的に無理かなあ」

「でも、そこにおるんやろ?」

そこに比企がいるというのなら、天奥の間とやらを目指すまでだ。ただし、第5層の門番に事情を話して、比企とのつながりをきちんと証明して、比企に目通りを願う。正面突破で臨む。長瀬の方法では犯罪だ。しかし、築地にも分かつてはいた。国連職員でも一国の宰相でも何でもないただの人間が比企に対面を申し出たところで、実現する確率は絶望的なほど低いであろうと。不審者として牢屋にぶち込まれるか、入念に取り調べを受けた上で監視されるのが関の山だ。

「違うと思うんだよねえ。ねえツツチー、首長は異常事態が起こったとき、どうすると思う?」

神階には公務員しかいないとされている。全員が全員、公務員体質ならこんな非常事態にどんな行動を取るか。同じ公務員である長瀬はそちらの線から比企の居場所を推理していた。

「首長は会議してると思うんだー。大会議室にいるよー、きつと」

築地は罪悪感を感じながら、ポケットからジッポのライターを取り出した。

勇者にでも愚者にでも、どうとでもなれ。ただ、比企との面識がありながら、何も行動しないでここに留まることが一番愚かだ。なんだか妙に、そんな気がしてきた。

*

少年使徒はファティナの疑いをよそに、先ほどと全く同じ状態で仰向けに気絶している朱音に注意深く歩み寄り、アルシエルに貫かれて今もなお出血している細く白い手首を取った。無残に突き抜かれた傷口から失血とともに地表で体温を失って、冷たくかじかんでいる。

遼生は傷口に指を押し当てて意識を集中すると、アトモスファイアの共鳴で朱音の修復関連遺伝子を励起させ、過剰に細胞再生を促して傷口をあつという間に治癒してゆく。更に彼は……ブラインド・ウォッチメイカーを封じるため、彼にしか打てない策を講じていた。朱音の傷口から、抗A B N T抗体の含まれたアトモスファイアを少しずつ織り交ぜて送り込む。朱音の体内に入った抗体は彼女の裡に潜む時計職人を蝕み抑制するのだ。

そう。抗A B N T抗体はI N V I S I B L Eのみに適合しているのではない。遼生の抗体はI N V I S I B L Eに特化したモノクローナル（単一抗原認識）タイプの恒と違ってポリクローナル（複数抗原認識）タイプの抗体だ、創世者を抗原と認識すれば遼生の抗体はその本質の如何を問わず喰らいついて結合し、そのあらゆる影響を最小限に押さえ込む。つまり遼生の抗体はI N V I S I B

LEばかりでなくブラインド・ウォッチメイカーをも認識しうるということだ。適用の広さ、非特異性のデメリットと引き換えに、曖昧さを許している。

彼はさらに朱音が近くに放り投げているリュックサックのポケットから鈍い銅色のリングを取り出し、親指にはめて両手で固く握り込ませた。彼女が意識を失う直前までの間に、その小さな指に填めることを強く望んでいた特別な指輪だ。一見して枢環と分かるそれには荻号が強烈に捻じ込んだアトモスフィアとともに朱音の神経系に特化した精神抑制がかけてある。これをおあつらえ向きだということで、利用させてもらう。指輪を填めている限り、朱音が再びブラインド・ウォッチメイカーに支配されることもないだろう。二重の籐をかけた朱音を抱え上げ、少し離れた安全な木陰に横たえる。

この一部始終を見ていたファティナは、その状況と彼の能力からようやく少年を神と認識するに至る。それも、かなりの知識と技量を持つ少年神だ、と。

今日に至るまで彼を誰が保護し、あるいは匿っていたものか。何故神階は彼を表舞台に出してこなかったのだろう。

二つの謎の理由は単純かつ明白だった。神でありながら翼を持つ者……彼の容姿は秀麗だが、神階では忌み子としてけがらいされる奇形児だ。ノーボデイの残した駄作か。あるいは彼の遺した寵児なのか。ファティナには後者であると信じたかった。

「あなたはレイアIIメーテールのバイタルコードをお持ちですね。入手経路はさておき、何故ブラインド・ウォッチメイカーが欲しがるのか、心当たりがありますか」

少年は先ほどから遠慮がちに、同じ内容の質問をファティナに問

い続けている。ファティナは動揺が激しく、まだ彼の疑問にこたえていなかった。

「それは……」

ファティナは言い淀む。心のうちを見透かされているのは充分すぎるほどに分かるが、彼女は素性も知れない少年神を完全に信用したわけではない。

「使い方次第でINVISIBLEに揺さぶりをかけられるものですね」

怖い。心奥から突き上げてくる根源的な感情を必死に否定したくなる。彼女の本能が少年を危険と認識し、怯えてすらいることを。女神の怯えを感じ取った遼生はついと顔を逸らし、まだ先ほどとまったく同じ座標に滞空しているアルシエルを意識して見上げた。

ファティナがその一瞬を見逃すことはなかった。彼女は即座に $\Delta\delta\Delta$ を介して、この少年神のフィジカルレベルの見積もりをはじめた。彼女の視界にオーバーラップするインジケーターのグラフは予想に反してインフレーションを起こし聳り立つ。何故だ。

20k、40k、60k……続伸に次ぐ続伸。

嘘だろう、疑っている間にもまだ伸びている。ファティナは耐え難い恐怖心を感じて後ずさった。やがてインジケーターは100kを超え……いっこうに上限を迎える気配もない。そして彼のポテンシャルが1000kを超えたとき、ファティナはそれ以上を計測するのはナンセンスだと解した。

彼のフィジカルギャップは揺らぎが大きく安定しないが、そのポテンシャルは数百万の余地を残している。何故少年が女神を庇って前に立つのか、アルシエルと立ち向かうとするのか。そうだ。実

力を持つものだけが説得力を伴う。

少年の姿をした化け物……彼はノーボディの遺した解決策のひとつであり、核弾頭そのものだ と断定する。

「あ、あなたは……誰です。その力は一体」

ファティナは硬直したまま、掠れ声で訊ねた。

「ひとつ頼んでもよいですか。ここに閉塞空間を創出し、アルシエルと共に中に入れて閉じてください。……シャットダウンをしていただいて構いません」

「!？」

唐突にファティナが要求されたのは、いわゆるイマジナリーワールド仮想結界と呼ばれる領域の構築だ。地上を座標0として立方体状に仮想空間を再現し、現実でありながら異空間を創出する。術式は単純だが、はいそうですかと簡単にできるようなものではない。仮想結界の中に閉じ込められるということは、テレビの中にいる人間が決して外に出てはこないように、仮想空間から出られなくなることを意味する。

「な、何を言っているのです!？ 出られなくなるのですよ!」

「だからこそです。周囲を気にしないでよいですからね」

瞳を閉ざした彼の真意をファティナはまだ、推し量ることができずにいる。彼が“その気”になろうものなら日本ひとつ、いや星ひとつ吹き飛ばす規模の戦闘行為が繰り広げられるのではないかと予測するのは、決してファティナの誇大妄想ではなさそうだ。しかし……!

「正気ですか! 出られなくなると言っているのですよ?!」

「正気です、急いでください! あと4秒でアルシエルの拘束が解けます」

わずか4秒の間に何ができるというのだろう。少年の宣言通り、タイムアップは正確に告げられる。グングニルで一閃、アルシエルは遼生のフレイムトラップを破り白い弾丸となって急降下で飛び込んできた。アルシエルの表情は蒼白で能面のようにもあり、血の気が通っておらず唇は青ざめている。ファティナはシッ、と息を漏らすといち早く反応し、遼生を庇おうと次々と幾重にもグリッドで防護壁を作るが、アルシエルの怪力とそれに耐えうる巨槍の硬度が防護壁の強度を遥かに凌駕している。

グングニルは豪快なクラッシュ音とともに5層もの防護壁を一直線に貫き、最内殻から突き出した凶器の先端は、僅かに数ミリの余地を残して遼生の喉を捉えていた。

フレイムトラップは至近距離からは撃てない。

「ファティナ様！ ご決断を」

遼生はもどかしそうに、半ば怒鳴りつけるように叫ぶ。彼が求めたのは、女神の一時凌ぎの防御などではない。二度と這い上がれない谷底に突き落とされることを望んでいるようだった。

ファティナから見た少年は防御の為に不自然な体勢をとりながら跳び下がってアルシエルと一定の距離を保つばかりで、攻撃を受けても積極的に反撃しようとしていない。本格的な戦闘を避けているかのようだ。確かに、100万を超えるフィジカルレベルを有した神がまともに戦闘行為を繰り広げようものならその被害は甚大だが、この状況をいつまでも長引かせるわけにはいかない。すぐに何らかの策を講じなければ。

彼は再度繰り出されたグングニルを手の甲で弾きアルシエルの足を払って突き倒したが、アルシエルも脊髄反射で跳び起き、死角から指先を軽く弾いて、さきほど山肌に風穴をあけた凶弾を散弾のよ

うに容赦なく撃ち込み続ける。驚くべきことに、彼は背後にいるファティナへの被弾を防ぐためか、気圧弾を避けようとせずフィガルギャップのみで受け止めている。

遼生のフィジカルギャップは執拗に一点をのみ狙い続ける攻撃に数十層も剥落させられて、今にも神体にダメージが届きそうになっていた。この厄介な攻撃は、アルシエルの裡に必ずブラインド・ウオッチメイカーが存在して、そして遼生の背後に守られているファティナに尚も照準を合わせているという意図が明らかにされている。何もしなければあと1分も経ないうちに、遼生の胴体は消滅してしまう。

彼は再び叫んだ。

「お願いします！ 早く！ 僕には構わず！」

「……なんということですよ！！！」

ファティナは腹をくくり両手を高く掲げ静止すると、天を揺さぶり落とすように地面に一気に両掌をたたきつける。XY軸方向に展開されていた巨大なグリッドに加えてZ軸を出現させ、アルシエル、遼生、そしてファティナをも巨大な檻に捉え、地軸を座標0とする仮想結界（Imaginary Field）を構築した。

檻の中に閉ざされた三者の視界から見えていた田舎の風景が忽然として消え、足元から異空間に引き擦り込まれる。冷たい闇の中に沈んで広い空間に抜けると、暗黒を切り裂くようにボツ、と仄かな青いグリッドと随所に照明が灯る。

少し遅れてマラカイトグリーンに輝く電子屑を纏い、指先からラインを引いたままのファティナの姿が煌々と浮かび上がった。

不意をつかれて体勢を崩したアルシエルを再び、彼女と距離を測った遼生がフレームトラップで縫いとめる。アルシエルはほどなく、

遼生のアトモスフィアの糸を引き千切るだろう。それでも、一時凌ぎにはなる。遼生は戦闘行為に及ぶ前に、ファティナに確認しておきたいことがあった。

「よいのですか、ついてきて」

遼生は低い声色で女神に尋ねる。仮想結界を作ってくれとは言ったが、決着を見届けてほしいとは思わない。彼女を熾烈きわまる戦闘の場に巻き込むことになるからだ。仮想結界は外部からでも維持可能だった筈だが……遼生はヴィブレⅡスミスによって脳というハードディスクに詰め込まれた、ファティナにまつわる情報を古い記憶から引っ張り出しながら彼女を案じた。

「私が拓いた空間ですよ。何を言うのです」

ファティナは気丈にも強がってみせたが、遼生が視線を伏せたほんの一瞬の隙に、困惑した表情を垣間見せた。この場に居合わせってしまった不運を、嘆いているに違いない。文型神の戦闘の回避は賢明であり、逃走は臆病ではない。彼女の判断を軽蔑されるいわれはないというのに、ファティナの誇りと美学にかけて、遼生を敵前に放り出そうとはしなかった。

彼女のような上司を持つ部下はさぞ幸せだろうが、意地を張って中に留まってももらわなくても構わない、強がらなくてもよいのに。遼生は彼女の罪悪感を払拭して、今からでも遅くないと宥めて外に出してやりたかった。彼はもう一度この場から立ち去る事を勧告しようかと考えたが、危険が及ぶようなら、力づくで締め出してしまえばよい。

「そうでしたね」

「一つだけ心得ておいてください。仮想結界内でのあなたの肉体は

“現実”です」

肝に銘じておかねければならないのは、ここが完全なる仮想空間ではないということだ。空間は仮想的な構造を持っているのだが、内部に転送された遼生の肉体も、ファティナの肉体も、そしてアルシエルの肉体も体温を有し、血潮を巡らせ鼓動する生身の身体である。彼らが被る全ての損傷は、現実空間と同じ強度で肉体に反映される。つまり、仮想空間内で現実的に死亡する、ということが起こりうる。

「でしたらなおさら、逃げてください。ブラインド・ウォッチメイカーへの引導は、確実に渡します」

仮想結界は外部から隔絶され、空間的に閉ざされている。まだブラインド・ウォッチメイカーが充分に力を蓄えて創世の能力を有しているというのなら話は違うが、その構造はノーボディによって設計されたもの。創世者といえど易々とこの異空間から逃げられはしない。

「そう言うと思いました。引導は渡せませんよ。終わらせることはできません。彼女はブラインド・ウォッチメイカーの体現者であるというより、4倍重篤に憑依された依代に過ぎません。ブラインド・ウォッチメイカーX染色体に憑依する、朧な意思の複合体だと推察します。ですから実体がないばかりか、“全体”もないのです」

必ず決着をつけるとの決意を述べた遼生に、ファティナはざくりと深く釘を刺した。アルシエルといえどブラインド・ウォッチメイカーの自我の末端なのであって、その本体ではない。ファティナはそう強調している。遼生は彼女が何を言いたいのか理解しかねる。MRIで看破した彼女の思考回路には、一本の大河のようにたくさんの情報という水滴が重なって続べられてゆくさまが見えた。ファティナは遼生に説明することによって、不確定性を帯びていた彼女

の仮説の足場を固めていつているようだ。

「どういう意味ですか」

「ブラインド・ウォッチメイカーの自己と他者のボーダーラインは曖昧で、自己という概念を持ちません。徒にダイナミックな進化を求めてX染色体の中に宿りながら、唯一の理想形を求めゆく創世者です。そもそも時計職人には100%という状態がないのです。アルシエルを滅ぼしたとて、絶え果てることもありません」

ファティナはかなりの手ごたえを持って、彼女独自の仮説を唱えている。その論拠はどこにあるかというと、EVEから彼女と織図が命がけで拾ってきた情報の中にあるようだった。

「X染色体が存在する限りということですか。肉体は遺伝子の乗り物であり、遺伝子はブラインド・ウォッチメイカーの乗り物ということですか。……ブラインド・ウォッチメイカーは一体、何がしたいのでしょうか」

三階の破壊なのか、支配なのか。あるいはまったく別の目的があるのか。ブラインド・ウォッチメイカーがファティナの持つレイアのバイタルコードを手に入れようとするのは、INVISIBLEそのものを支配下に置きたいからだ。INVISIBLEを手に入れたら、ブラインド・ウォッチメイカーは何を狙っている。ブラインド・ウォッチメイカーは利己の集塊によって成り立つ創世者だ。時計職人の野望は、必ず利己へとつながっている。今こそ突き止めるのだ。遺伝子の利己は、何の為に繰り返されているのかを。彼女が進化を促し続けるのは、何故だ。

彼女が莫大な労力を投じて行う途方もない規模での試行。幾度となく繰り返された進化の実験場としての歴史。それらは断じて、彼女の悪趣味な愉しみのため、あるいは自慰のためなどではない。で

は何のためか。

利己のためだ。

「究極の生命体の創造、その一点に尽きると思います」

ファティナがEVEの最果ての谷から見出した膨大な情報に、結論を見出す段階にきた。

ようやく辿り着いたゴールを、もう踏んでもよいような気がした。足が震えて、くだけてしまいそうだ。

「でしたら…… “絶対不及者《ABNT》” とは時計職人の目標に、最も近いものではないでしょうか」

遼生はファティナの推論に理解を示し、乗りかかる。導き出された解はきわめて自然なものであるように思えたからだ。究極の生命体というものが存在するというのなら、老いず、死なず、高度な思考力と知性を有しそして実体がありながら全能に近い状態を保ち続けるという、実現不可能な条件がつく。それらの条件を簡単にクリアしてしまう存在が、たった一つだけある。

「そうですね、あなたは鋭い。ですが、“絶対不及者”を手に入れ意のままに操ることが、彼女の最終目標ではない。そうでしょうか」

ファティナは剥製のように凍りついたアルシエルに語りかける。そうだ。目標が絶対不及者ではならないという理由がある。アルシエルは蒼白な顔をこちらに向けたまま、答えない。裡にあるブラインド・ウォッチメイカーは……彼女はファティナの問いかけを聞いているのだろうか。

ファティナと遼生は、正解に近づいているのだろうか。それとも、彼女の真意とは程遠いのだろうか。

「どうしてもDNAをベースとした生命体に固執するのは、ブライ

ンド・ウォッチメイカーが……DNAにしか憑依できないからですか？」

遼生が重要な“縛り”に気がついた。勘のよい子だ。

「すべての試みは人類を“絶対不及者”に近づけるために、行われているのでしょうか」

人を神に近づけ、やがては絶対不及者へと近づけることが、彼女の野望だとしたら――。

全てが憶測にすぎないというのに、遼生とファティナは泥濘の中に沈んでいた最適解こたえに触れたような気がした。泥は固まり、やがて形となりはじめていた。時計職人は彼女の理想とする究極の生命体の中に宿って、生を体験することを目指している。解階は高度に進化を遂げた生命を創出しながら、時計職人の理想には近付かなかった。解階の住民は彼女の望んだ、“神”となることができなかった。

「彼女は、生きたいのでしょうか」

ふと、遼生は意味不明な事を言った。時計職人は生き続けること、あるいは命を潰えて死ぬこと。どちらを望んでいるのだろうか。生きたいと願うことは罪ではなかった筈だ。

ただし他者を貪り尽くして生き続けたいと願うことは、罪だ。終わりのない生命はもはや、生きてなどいない。

「永遠なんて、つまらないでしょうね」

吐き捨てるようにそう呟いた彼の神体からは、そのアトモスフィアが深みを増して碧く迸っていた。

第2節 第24話 真昼の月のように

「ゆーても、騒ぎにならずにボヤにするて……」

さきほどから築地はジッポのライターを握り締めたまま、草原の中を落ち着きなく右往左往している。

「何ぶつぶつ言ってるのー？ 見て見てーツツチー。これすごく燃えそうじゃない？ 早く火つけてよー」

長瀬は辺り一面の枯れ草をむしりあげて、築地に向かって振り回している。あんなにはしゃいで火をつけろと言う。官僚のすることじゃないだろうに、と築地は彼女の能天気さに頭が痛いのが、そういう天然な長瀬を親友のシゲルが射止めるまでの間、どれほど多くの校友が彼女に一本釣りされてしまったか、思い出すのも懐かしい話だ。

長瀬に一度も言い寄らなかった築地はある意味で変わり者だった。築地はしっかり者で気の強い、長瀬とは真反対の性格の女性が好きだ。だか、なかなか彼の好みに合う女性がおらず今に至る。

「なあ、長瀬。燃やせる草集めはもうええて。それよりボヤごときでこの扉が開くか、考えてくれへんかな？」

使徒階第5層区画に集められていた人々の一団からさりげなく離れ、使徒たちの警戒線をかいくぐって非常用通路まで辿り着いた築地と長瀬は、非常用通路の入り口の頑強なつくりに圧倒されていたところだ。扉から少し距離を置いて眺めてみると、異空間へ繋がるそのように、あたかも草原の端に突然扉が浮かび上がったかのよ

うに見える。だが近づいてよくよく見ると、巨大な壁が天空にまでそそり立ち、下層の方は半透明、上層はグラデーシヨンのように上へ行くにしたがって次第に透明となって透過色となって錯覚を見せられている。

扉はかろうじて実在し、両手で押すとひやりとした質感が伝わる。半透明の壁に穿たれている件の扉は 2.5 m x 1.5 m ほどの大きさ。形状は金庫のようで、ハンドルがついており黒く硬質だ。鍵穴もなければ、認証のための入力ボードもない。ただ、分厚い硬質の扉に金属のハンドルがついているだけ。力づくで開けようにも、標準的な若者程度はあると彼が自負している築地の腕力でもハンドルはびくともしない。

使徒階間を繋ぐゲートを回避する抜け道となるルートなので、そう簡単には開かないのではないか。簡単に開いてしまえば第5層の使徒の脱走を許してしまう。築地がそう考えるのは理にかなっているように思えるが、長瀬は異論を唱えた。

「えー、開くでしょ。開かなかったらどうすんのー、もしもって時にここににいる使徒のヒト皆焼け焦げちゃうよー。防火シャッターもないんだしー」

「五層って防火シャッターないねんな。自分今そう言うてんな」「ないよー」

使徒階の防災設備については、先ほど長瀬がひととおり築地に説明したところだ。彼女の説明によると、異常感知センサーが張り巡らされていて、1区画でも火災が起ころうものなら消火班が駆けつけてきてただちに消火をするのだという。長瀬は少し火をつけて直ちに消火すれば問題ないと言うものの、築地はリスクを最小限に抑えたい。

「ほな、これ避難経路つーより防火シャッターやないの。開かんやろ、それどころか消火班来てもうたらどないすんの。煙感知センサー働いてまうやん」

「そんなの知らないよー。でも避難経路って書いてあるよー。じゃあライターでセンサーを直接炙ればいいじゃん。ライターなら煙出ないでしょー。熱感知システムだから動くよきつとー。そしたら他のセンサーに引っ掛からなくて済むじゃん。ほらー、この扉にセンサーあるし。ここ炙ってみてー」

彼女はまくしたてるようにそう言うと、ハンドルの下にセンサーらしき黒い突起物を見つけて指差した。

「しゃーないなー、ドア壊れてもしらんで。長瀬お前炙れ。その間に俺がハンドル捻ったるわ」

長瀬はセンサーと思しき突起物のなかでも、魚眼レンズのような部分を重点的にライターの炎で炙ったが、長瀬の指が焼けどを負いそうになるほど長時間炙っても、築地の捻るハンドルは頑として動くこともなかった。彼女は不満そうにちらちらと築地を見やる。いざというときに頼れない男、築地 正孝の面目躍如とはならなかったようだ。

「もー、ツツチーちよつと非力なんじゃないのー？」

彼氏のシゲルには寛大なくせに、築地には手厳しい。身内に甘く、他人に厳しいタチで困る。

「ちよ、非力で！ 開く気配もないて！ 他に方法考えなあかな」
「あれ？ ちよつと見てツツチー、何かハンドルの横にうっすらボタンが出たっぽいよ見てみて！」

扉に額が触れるほどに顔を大接近させて、長瀬はボタンの存在を

みとめた。長瀬がライターで炙ったことによって異常事態を感知したセンサーが、見えるか見えないの弱弱い緑色光のラインで縁取られたボタンを浮き上がらせたのだ。彼女が示しても、視力の悪い築地には視認できない淡いライン。

「俺、目悪いから見えへんけど……つーことは認証式!?!? どのいしよ、神階の暗号なんて解けるわけ……」

「これ入力できるのって、1、2、3、4……13桁の番号っぽいんだよね。神階で13桁の番号といえ……」

長瀬に促され築地も気付いた。御璽と並んで神々の指紋とされる、個神の持つ13桁のID番号だ。

「神さんだけ逃げられる避難経路か。使徒はこの階層で何かあったら全員死ねっちゅーことやんな」

神の右腕に刻まれている13桁のIDは機密にあたるので、たとえ第一使徒にでも、使徒には明かされていない。それらは決して他者に明かされることもなく、個神の腕にのみ刻まれている。築地は狡猾なシステムを見せ付けられた気分だ。神にとって使徒は奴隷と同義なのだろうか。そして人々もやがてそうなるのだろうか……それが主神たる比企の意思なのだと、築地は比企に疑いを向けたくなかった。

彼らは使徒階だけには飽きたらず何の為に地上にやってきて、さして利用価値があるとも思えない人々を支配しようとしているのだろうか。神階の不穏な動きは、その長たる比企との間に築かれた信頼関係を裏切るものだった。

「ツッチー勘ぐりすぎだよー、性格悪いよー」

長瀬は築地の深読みを非難する。ただの勘ぐりすぎ、なのだろうか? そうであってほしいと長瀬は願っているが、築地にはできな

かった。彼女は比企を擁護するように、ここにきて重要な情報を出してきた。

「私知ってるよー、比企さんの個神番号。何か困ったことがあったら使えって、こっそり教えてくれたんだー」

「なんやのそれ！ 機密の大流出やで！」

築地が若干とはいえ不貞腐れたような声になったのは、彼にはその番号を教えられていなかったからだ。第一使徒すらも知ることのない個神番号を長瀬に預けてしまう無用心さは、神階の情報管理の甘さを露呈するとともに、比企への信頼回復に繋がる。

「ツッチーはすぐになくしちゃいそうだからだってー。当たってるでしょー？ だから比企さんが裏切るなんて、ありえないよー。このIDって、不正に使われたら大変なんだよー。陽階のあらゆる鍵が全部開くマスターナンバーで」

長瀬は正当な理由をつけ抗議しつつ、超薄型PCのメールフォルダを見て、1字ずつ的確にインプット。打ち終えると、何度も指さし確認して軽く頷く。これで開かなかったらと、不安を隠せない、それを払拭するための入念な儀式だ。長瀬は心ゆくまで確認すると、上目遣いに築地を見上げた。

「やってみて。開くよ」

カタン、と乾いた音を立て、重い扉は開いた。先ほどの融通のきかなさが嘘のように。

「信じられるよ、きっと」

長瀬は彼女自身を勇気付けるように、自身に繰り返し言い聞かせている様子でもあった。

*

彼ら二人はこの、のっぺりとした冷たい壁面をどれほど登ったのだろう。

先ほどの扉を開き広い避難用通路へ出た先に、彼らの前に垂直に立ち憚っていた壁を登りはじめてもう随分たつ。彼らがしがみ付いている縦穴は僅かな角度に傾いていて、真っ直ぐにそりたっているのではない。

また、意地悪なことに時折その角度を変える。だから、どこまで続いているのか見通す事ができないのだ。長い円柱状の縦穴の壁面を段違いに走る細い鉄パイプの梯子の上で、築地がここに来てから一切必要ないだろうと高をくくっていたデジタル時計を見ると、彼らはおよそ二時間もの間、この薄暗い縦穴に挑んでいたと分った。

命綱もない状況で梯子を登り続けている、誤って両手を滑らせようものなら数百メートル下へ落下。当然、命はない。冷や汗とも、暑さのための汗ともつかないじっとりとした湿気が、金属の饅えた臭いとともに彼らの手の中に握りこまれていた。

この縦穴を果たして神が汗水垂らしながら登ったものかと考えて、すぐにそれは誤りだと気付く。神は飛翔できるので壁をよじ登る必要などないのだ。梯子がついているだけましかと、築地は苦情を言いそうになった口をつぐみ、少し下からついてくる長瀬を氣遣った。

「大丈夫か、長瀬」

「もーだめー！ 私体力ないんだからー！ それに怖いしー」

長瀬のことを思うなら、大丈夫かなどと余計な事を訊ねてはならなかった。長瀬の意識から薄らいでいた恐怖を、築地は蘇らせてしまっただけだ。

「もうちょいやで」

築地は体力のない長瀬を引き上げることもできず、声援だけを送る。坂道だったら背中を押すこともできただろうが、梯子を上っている人間に手を差し伸べるのは間違っている。この後も、長瀬は何度となく弱音を吐いた。彼女が喉が渴いたと言え、築地が水筒からミネラルウォーターを出して飲ませた。

泣きごとを言えば、他愛もない話で紛らせてやる。

そんな遣り取りを何度繰り返しただろうか、長い夜が明けるように穴の上から徐々に光が届いた。太陽光ではなく人工的な灯りだったが、彼らにとっては灯りの種類などどうでもよかった。携帯電話の灯りだけを頼りにここまで進んできた彼らはとにかく、光を待ち望んでいたからだ。

足元が見えると思議なもので俄然、足取りも軽くなる。ようやくのことで最上段に辿り着くと、新しい横穴の通路が視界に開けた。長瀬は神階中階層の点検用通路だと把握している。長瀬が見積もった中階層への到着時間をかなりオーバーしていたし、かなり難航したが、ここまでは予定通り。

彼女いわく、神々が会議を行う時間帯は決まっていて、必ず神階時間の午前中に行われるのだそうだ。午後になると別の委員会などが入っていて、大会議の開催はありえないという。つまりそれだけ、比企と会える確率が低下するのだと。神階時間に換算して既に午前10時半を回っていた。

彼らは点検用通路の中ほどにある小さな扉を内側からロックを外し、半開きほどにして顔を出し外を覗う。そんな彼らの目に、この世のものならぬ光景が飛び込んでくる。彼らは瞳をあらん限りに見開いた。そこから見えた景色は、長い登山道を踏み越えて山頂に辿

り着いた者だけが手にする絶景だ。彼らは歎声を上げた。

「はー……！」

「わー……」

彼らが出たのは長瀬の事前調査通り、神階中階層、中広場のエリアだ。広い敷地に白亜の石畳を敷き詰められた広場が広がって、広大な広場の周囲には、壮麗な白い高層建造物がぐるりと取り囲んでいる。それらの建物の屋上は彼らのいる場所からは見えないので、相当な高さで天を突き刺すように伸びていた。

視線を下に戻すと、広場の中央には透き通った水が様々なパターンを織り成す精緻な構造をした大噴水が見える。先ほどとは違った色の、主に白を基調としたローブの制服を着た使徒たちが忙しなく往来していた。広場の上に浮遊して段々に織り重なっている空中庭園には緑と木々に溢れ、白い花が咲き極彩色の羽根を持つ小鳥たちが聞いたこともないさえずりで鳴きながら飛び去ってゆく。

空中庭園に架かる橋の一部はガラスのタイル敷きで時計盤を兼ねており、巨大な針が目盛りを示している。それらの建造物の全てが複雑で手の込んだ、緻密な一点一点の芸術作品のように配座されていた。

石畳を掃き清める清掃係の者、長椅子で寝そべって読書をする者、噴水の前で語る者……時間が地上よりゆっくりと流れている。二人はそんな錯覚に陥った。

ここにいると、桃源郷伝説のように、その美しさに惑わされて地上のことなどどうでもよくなってしまいそうだ。悩みも疑問も全て忘れてひたすらに、この世ならぬ世界に魅入られてしまいそうだった。早く比企に会って腹に溜まっているものを余さずぶつけたい。

比企はきつと、納得のいく答えを用意している。

一方の長瀬は、扉の隙間から見ていただけでは辛抱もたまらなくなったらしく、ひよこつと飛び出して行って、バシャバシャとデジカメのシャッターを心行くまで押している。先ほどの弱気はどこへやら。まったく、彼女は自由気ままな女だった。

「あーあかん！ 戻ってこい！ 見つかってまう！」

「大丈夫だよー、人間と使徒って外見上はそれほど違わないから見分けつかないって」

彼女はすっかり中階層の庭園に夢中になってしまつて、都合のよい言い訳を並べながら、もうこちらを振り向こうともしない。

「ほんまかー？ 服も違うし」

往来する使徒たちは全員制服と思しき堅苦しい服に身を包んでいるので、築地と長瀬の私服はひどく目立つ。

「ほんまだよ！ オフの日は使徒のヒトだつて私服着るし。大騒ぎしなければ大丈夫だよ」

私服を着ている使徒などいなかったし、長瀬の口実のように聞こえなくもなかったが、幸運にも彼女に注目している使徒はいなかった。彼らは彼らそれぞれの日常を過ごしていただけだ。

この分だと案外、警備が甘いのか？ それとも、人間が紛れ込んでいるなど想定もしていないからかと勘ぐったが、築地がほつとしたのは事実だ。彼もミーアキャットのように扉から半分首を出してきよろきよろと辺りに気を配り、安全を確認すると中広場に出てきた。

「なあ……天国って、ずっとこんなやつてんやろうか」

築地はふとそんな事を言ってみた。長瀬はカササギのような色彩をした大柄の鳥をデジカメ片手に、熱心に追いかけているところだ。

「ここ何万年かはずっと内部構造は変わらないみたいだよー」

築地は信じられなかったのだ。

この美しい世界が有史以来、太古の昔から存在して、人々の歴史や文化と関わってきたという事実が。これほどの圧倒的な文明を築き上げて、人々にある時は手を差し伸べ、そしてある時は支配してきた、人々と同じ姿をした異星人がいたのかと。比企の生まれ育った世界がこれほどのリアルを伴って存在していたのだということを。

天国は、雲の上から神様がなんとなく地上を見守っていてくれる世界、などという臆げなものではなかった。築地は今なら断言できる。この場所がどこにあるのか知らない、だが実在すると。

「人類の長い歴史と文明、神階の模倣やってんかもしれへんな」

「そうかなー。お互いに影響受けてると思うんだけど。だって神階って日本語が共通語なんだよ、英語ならまだしも日本語って信じられる?! 神階って、発音できる共通言語がないんだってさー!」

長瀬は得々と、それこそ止められなければ延々と神階言語の変遷について語っていた。彼女は人々の歴史以上に神階の歴史をかなり勉強しているようだ。興味本位でこれだけ詳細に調べられるのだから、築地は感心する。

「もし仮に……神階と全面戦争になったら、人類勝てるんやろか」

「もー何でそんなこと言うのー」

彼女は拗ねたような声を出し、築地を非難するようにしかめつらをしている。

「いやいや。仮にやで。真面目に考えてみ、神階に入った時点で国連は軍事力を放棄しとんやで?」

「どんな戦車持ってたって、核があったって神様にはかなわないよ

「比企さんひとりだけで、神具なくても地球1個ぐらいどうってことないんだよ？　神様って、アトモスフィアっていうダークエネルギーを持っててね。それが凄いエネルギーを発生させるらしいんだ。“4つの力”を、神具を介して力学変換するのー」

長瀬は今にも泣きそうな声を出しながらも、何やら如何わしい新情報を述べた。

「今、なんて？」

築地はさも分らない、という顔になっている。ウツボカズラ教授こと相模原教授に捕まったときによく彼が見せた、長瀬にとっては馴染みのある表情だ。

「アトモスフィアっていうダークマターから発せられるエネルギーは、“4つの力”の性質を全部持つてるんだよー」

長瀬は築地の理解力の程度を知っているの、どこから説明をすればいいのかわかっている。自然界にはそもそも、物理学的には大まかにわけて以下のような4つの力があるとされている。

強い力（クォーク同士に働く力）。

電磁力（電荷に働く力）。

弱い力（ニュートリノなどに関与する力）。

重力（全てのエネルギーを持つ物質に働く力）。

アトモスフィアはこれらの全ての性質を併せ持っているのだそう。つまりそれは、自然界に存在して人類が観測している力の全てだ。

その化学構造式は、記述不能。相模原教授以下松林助教、院生ら、築地と長瀬に至るまで、かつて錯体研が比企と研究協力を行いアトモスフィアの構造物決定と合成を行うことができたのは、ほんの一部の構造であり、きわめて安定状態の重粒子のみに限られていた。だが、実際のアトモスフィアは複雑な相互作用を起こし、その結合や反発力によって4つの力の全ての性質を担うのだという。

そもそも、アトモスフィアの成分のほとんどは、現代の科学技術では同定できないものだ。このような性質を持つ物質は、人間の目にも人の造り上げた測定装置を駆使してもまだ観測されていないダークマターから成ることが明らかになっている。人類にとっては未知の、暗黒物質を神は生まれながらにして持っているというのだ。神体でのみ合成されるこの暗黒物質は、使徒の生命をすら支えている高エネルギー物質だった。

「?.....?」

「ダークマターを持ってるから生身で凄い力が使えるのー。かなうわけないじゃん、国連も知ってるんだよ。大人しすぎたと思わない? きっと、力を見せ付けられてさ……怖くて、心細くて……どうしようもなくて。武力放棄するしかなかったんだよ。守ってもらう立場で、戦争なんてできっこないじゃん」

人類はまだ、この世に存在する4%の物質しか観測していないといわれている。神は確実にその4%の外にいて、96%を操る存在なのだ。この事実を知ったとき、彼ら人類に何ができただろう。白旗を揚げて降参する以外に生き延びる道はなかった。人類は神階に對して、いかなる兵器を向けることもできなかったのである。

今回の危機に對してあまりにも国連がおとなしすぎたことが、右翼団体のみならず、築地には不満だった。ありとあらゆる国家と地域に強硬な姿勢をとり続けてきた、喧嘩っ早い合衆国ですら、牙を抜かれたけもののように萎縮するものかと。正面から挑んで敗れたわけでもないのに……軍事力の差を思い知る機会すらなかった筈だ。嘗て猛犬であった合衆国が飼い犬のように牙を剥かなかった、できなかった理由がこれだ。

長瀬は、彼女の胸の奥に淀んでいたものを吐露するように言葉を続ける。

「比企さんはいつでも、たったひとりでも人々をどうにでもできるの。アトモスフィアって、傍に近づくだけでも凄く危ないんだよ？でも、傷つけてないじゃん。私が酔っ払って比企さんに絡んだときも、ツツチーがふざけてツツコミ入れたときも。比企さんにとつて何の価値もない私たちに、よくしてくれたじゃん！ だから、信じたいよ……比企さんのこと」

長瀬は楽観的な視点からではなく、全てを飲み干してなお、比企を信じたいと思っている。長瀬のことを、お気楽で楽観的でミーハーな女だと決め付けていた。築地は考えの足りなさ、比企のシンパを気取っていた彼自身に恥じ入った。

彼女は比企の真の姿と能力を充分に知っているからこそ、彼が地上に滞在したわずかな時間を振り返り、強い信頼を寄せているのだ。自分のほうがよほどミーハーだ、築地は長瀬の、何かを磨り減らしたような悲しげな視線を見つめ返すことができなかった。

そして……彼らの意識が完全に周囲から離れてしまったときのことである。

「何だお前達は！」

二人の真後ろから槍のように両手が突き出し、長瀬は唐突に両腕を背後から掴まれた。

「！！」

彼女の視界はいつの間にかふさがれていた。

何が起こったのだろうと確認する間もなく背後から三名の男たちが襲い掛かってきて、築地は羽交い絞めに、長瀬は手首を後ろに取られて押さえつけられた。腕つぶしの強い男たちだ、築地の腕力で

は逃れられない。長瀬は目隠しをされた手の指に思い切り噛み付いたが、ぎりぎりど噛みしだいても、さしたる効果もなかった様子で、むしろ彼らの機嫌を損ねただけに終わった。

「貴様ら何者だ！ 神階の者ではないな！」

築地は二人がかかりで、顎下に青い光沢のあるハンドガンのようなものを突きつけられている。実弾が入っていないことを期待できそうな雰囲気でもなかった。

「な、なんや、こいつら!!」

「あーあ……どうしようねえ。黄色い腕章してるから警備の使徒だと思うよー。何で見分けついたらどうねー。あー!! そっかー、ツッチーの大阪弁だよー！ 使徒って方言話さないもん。神様はクセある話し方するけどー、神様だったらすぐバレるからさー。だから怪しまれちゃったのかもー」

「俺ー!? 違うて！ 俺らが比企さんのことペラペラ喋ったからやで！」

「比企さんのせいにしないでよー」

ここまできて見つかってしまうとは不本意にもきわまりない。長話などせず立ち去ればよかった、などと彼らが思っても詮のない話だ。

「こいつら……人間ではないですか!? 何故人間が中階層へ！」

警備の使徒たちは比企と連呼する二人の会話を聞いて、ますますもって警戒心を強めたようだ。

「使徒階から脱走してきたのかもしれないな」

「そ、そうなんですー。5階層からきました。……と、トイレはどこかなと思ってー」

長瀬があまり効果的ではない言い訳を思いついたらしい。その口を閉ざして黙っていてくれと築地は願ったが、案の定、こっぴどく

どやしつけられた。

「とぼけるな！ どうやってここに侵入してきたんだ！」

「ゲートは鉄壁の筈だ。人間風情が5階層から五回も関所破りをしてきたんだ、侮れんぞ」

確かに五階層から五回も、蟻一匹通さないと言われているゲートを破ってきたら侮れないだろうが、築地と長瀬はゲートを通っていない。そこを否定してよいものか、もはや判断できる精神状態にはなかった。何しろ彼らは大柄だ、とにかく大柄だ。誰もかれも2mは超えている。

凄まれるだけでも竦みあがるのに、あんな太い腕で殴られでもしたら命の保障もない。また、更に運の悪いことに騒ぎを見つけた野次馬もわらわらとやってきた。平和な陽階にあつては、小競り合いも揉め事も珍しいのだろう。彼らもまた、屈強そうな者ばかりだ。女性使徒といえど、築地の身長を悠に超えている。ここは絶対に下手な真似をしてはならない。彼らは全員が全員、武術訓練を積んでいる。格好の実戦訓練の場になってしまっただけだ。こぞって参加したがるに決まっている。

「怪しい奴らだな。連行しろ」

「連行ー！？ あのー、私たちちつとも怪しくないっていうか、大したことないっていうかー。ここに来たのもショートカットで……正面突破なんかしてないしー」

長瀬は最後まで言い訳を述べて頑張っていたが、結局は背後からどつかれて口を閉ざした。

「ぐだぐだ言わず歩け！」

長瀬と築地はがちりと後ろ手に手錠をかけられ、野次馬達の見守る中を、周囲を警備の使徒たちに囲まれて連行されていった。

＊

全位神を一堂に集めた緊急招集会議の行われる大会議室へ入ろうとする比企を、遺伝子神 岡崎 宿耀が所定の席にもつかず、分厚い二重扉の前で待ち伏せをしていた。岡崎は比企の前に立ちふさがり、進路を譲るつもりはないようだ。

今にはじまったことではなく彼を見かけるたびに、だが……岡崎はまたやつれていた。昼も夜もなく、食事も取らず根をつめて研究に明け暮れているのだろうが、何の研究をしているのか報告義務もないので比企には分らない。

無論マインドブレイクを使えば明らかにするが、既に彼の頭脳の中は抽象的になり過ぎて看破してもあまり意味がない。彼の頭脳の中の言語は複雑な翻訳を必要とするから、彼の口から聞くのが一番手取り早かった。時折会議で実験室の外に呼ばれなければ、岡崎は今後研究室から一度だって外に出ることはないつもりで、いつでも誰かしらが気を回して岡崎を会議に呼ぶ。とにかく、これまでの経緯があつて、引きこもりの岡崎の方から比企に近づいてくるのは、何か重要な案件を持っているに違いない。

何か裏もありそうだ、比企はそう思った。

「極陽、緊急に奏上すべきお話がございます」

「開会15分前ゆえに、手短にの」

比企はどんな会議にも10分前には会場に入っておきたいたちだ。極陽になったからといって重役出勤などもってのほか、というスタンスなので、下っ端は余計に気を遣う。岡崎はそんな比企の性格を見越して、20分も前から会議場前で待ち伏せをしていたのだろう。

一方の比企は彼がよほど話したいことがあるのだろうと考え、あまり邪険にせず耳を貸すことにした。

「どうしてもお聞きしておきたかったのです。GLの神籍登録者に八雲 遼生の名がありましたか……どういふことですか？」

「八雲のことか。素性は知らんが、藤堂の義兄にあたるようだ。同じくAnti-ABNT Antibodyだと聞いて……」

比企が言い終わらないうちに、岡崎はものすごい剣幕で比企の言葉を遮った。

「彼を叙すること、私は賛同致しかねます。また、八雲 遼生への生物階降下許可をただちにご撤回ください。事は一刻を争います」

一刻を争うとからといって、会議が終わるのを待って苦情を述べることぐらいできなかったのかと比企は口にはのぼりそうになった。

「……汝は狭量だの。一介の少年神が汝に如何な不利益を与えんというのだ」

いかに神経質な岡崎だとは言ってもこの期に及んで、たかだか少年神の進退について何を固執する必要がある。しかも岡崎は藤堂恒の行動については一言も触れず、八雲だけを見咎めている。少年神を極位神が手元に置かないのは確かに通例ではあるが、この危急の折に何が問題になるというのか。

しかし遼生はいずれの分野においても同年代の少年神の神体測定基準を大きく上回る数値をマークしている。非の打ちどころがあるというのなら、具体的に述べてほしいものだ。ただ単純に優秀な少年神を比企が囲うことに異論があると感じたものだから、比企はつい率直に狭量だと言ってしまった。利権争いをしている場合でもないし、彼を所有したからといって比企の手に入る権益も皆無に等し

かった。

岡崎は比企の蔑みを甘んじて受けながす。

「狭量か広量かの問題ではありません。 “ あれ ” だけは禁忌だと申し上げておるのです！」

比企から軽蔑の眼差しを向けられたのは、比企が八雲 遼生の存在を理解していないからということに尽きた。恒に義兄がいると教えたのは、他ならぬ岡崎自身だ。恒の性格だから、義兄に同情して必ず見舞いに行く。恒は八雲 青華と通じてサンプルNO，18と感動の対面を果たしただろう、そこまで岡崎は予測していた。しかし恒が脳死状態も同然となったNO，18を蘇らせるということとは、完全に想定外の出来事だった。また、藤堂の能力を侮っていてもいい。岡崎は苛立ちを隠し切れず舌打ちをする。

IVAAAプロジェクトの恐るべき産物がNO，18というものであり、先代極陽なきあとその真価を知っているのは岡崎と八雲 青華だけだ。IVAAAプロジェクトの語り部は少しずつ失われている。

先代極陽の最大の罪は何かとつきつめたら、“ それ ” に生命と自我を与えてしまったことだと岡崎は答えるだろう。抗体が生きている必要はどこにもなかった。サンプルNO，18が神の姿をして言葉を話すから、神格や生存権が発生し話もややこしくなる。兵器であれば誰にもそう扱われてよかった。そうであれば、廃棄する事は何ら罪として成立しえなかったというのに、ヴィブレイスミスは神階の最終兵器を機械ではなく肉体で創ってしまったのだ。

彼のしたことは岡崎からすればもう、悪趣味にすぎるとしか言いようがない。廃棄するのは不経済という発想から、抗－ABNT抗

体として利用されていたものだ。

「サンプル No, 18……確かにあれはある意味別格です、ですが先代が決して世に出さなかった理由をお察しいただきたい。GL—Networkによると彼は生物階に降下しましたね。ただちに呼び戻してあなた自身の手で監禁するか私に預からせてください。倫理的な事を論じている場合ではありません、ただちに屠殺すべきです」

「No, 18と申されても己は理解しがたいのだがな」

INVISIBLEに最も近いと論じられた荻号 要への、神階の根拠のない期待を牽制してきた岡崎をして、あまりに危険と言わしめる。八雲 遼生とは何者だ。ある意味において、という限定的な用法が引っ掛かる。比企は彩度の低い灰色の瞳を眇め、翠色のそれを持つ岡崎の真意をさぐろうとした。

「要約しますと、八雲 遼生は恐るべき生体兵器だということです」
「もう議会の開始時刻が迫っておるのでな。汝の見解は興味深いので後ほどじっくり聞こう」

岡崎が何を言いたいのか、比企にはさっぱり分からなかった。また、大切な会議の開始時間5分前となっているのに、岡崎の話に真面目にとり合っている余裕もない。

「比企、耳をかしてください！ 彼が生物階に在ること……グラウンド・ゼロに近づくということは、INVISIBLEを墜落させる可能性がある！」

「……的確な表現を求めたいものなの」

岡崎の話は、彼の脳がまたそうであるように、あまりに抽象的すぎる。

また、だからといって岡崎も比企に全てを理解させるために核心を話すつもりもなさそうだった。ただ、岡崎は遼生が危険だと必死に訴えているが、それはあたかも水槽の中にいる鑑賞魚が決して、外で観察する飼育者に作用することができないようなものだった。

INVISIBLEにとって不都合なことが、比企に必ずしも好都合であるとは限らない。岡崎がINVISIBLEへ与しているのか、180度真逆の立場にいるのか……陰階神の立場としては後者であるべきなのだが、とにかく比企にとって八雲 遼生が、この最悪の現況にあって何かしらの不都合を齎すとも思えなかったのである。

岡崎は、比企が辟易するのも意に介さず、更に真剣なまなざしでたたみかける。彼は再三にわたって警告を発していた。

「No, 18の拘束をお急ぎ下さい。彼はあまりに危険です」
適当に受け流すべく口を開きかけた比企は、とある一団が視界の隅を横切るのを見逃さなかった。すぐ目の前の空中回廊を、警備員の使徒たちに連行されてゆく若い男女を。

「む……」

目を凝らさなくとも特徴的な服装と容姿をした男女が、長瀬くららと築地 正孝だということは判別できる。会議開始までの時間が押し迫っている中で、ことごとく邪魔が入るものだ。

岡崎は気もそぞろな様子の比企に、苛立ちをあらわにした。

「比企、聞いておられるのですか！」

「汝の話の詳細は議会終了後に改めて自室で聞こう。第一使徒 響にさよう申しつけ、訪ねよ。また、汝の申すよう八雲 遼生の即時

帰還を命じておく」

比企は岡崎を一旦黙らせるために、傍近くに控えていた高官に遼生を即時神階に連れ戻したうえでの禁足令を発した。『面倒をかける』、口の中で呟いた割舌の悪い比企のコメントは、八雲に対してでも、岡崎に向けて述べられたものでもない。比企は、話が噛み合わずもどかしそうに見つめる岡崎に、取り繕うように向き直った。

「それでよいだろう」

「気もそぞろのようですね。いいですか？ 懸案があるようですから、会議終了後がよいでしょう。後ほど、必ずお伺いします」

まだ何か言い足りないような岡崎を尻目に、比企は転移で消えてしまった。

彼は築地、長瀬と3名の警備の使徒たちの前に割り込むようにして出現する。比企は使徒達より随分小柄だが、極陽の存在感はやはり圧倒的で、警備の使徒は腰を抜かす。極陽が直々にお出ましになるなど一体何の手落ちがあったものかと彼らは顔面蒼白になって、せわしなく顔を見合わせていたが、ついには平伏するしかなかった。目隠しをされた築地と長瀬は、何が現われて彼らが急に慌てているのか、辺りの様子が分からない。しかし彼らは目隠しをされていて、この一声が誰から発せられたものか、決して間違えることはなかった。

「どこに連れてゆくのだ」

「は、はいっ……！ さきほど中階層で拘束しました不審者を、これより厳しく取り調べる予定でございますが」

不審者を連行することを堂々と報告してもよいだろうに、極陽に見咎められるものだとは思わなかった彼らの声はおのずと小さくな

る。

「彼らは己が預かりおく。その方らは大儀であつた」

比企は築地と長瀬の手錠を握りつぶし、目隠しを取ってやった。

「きゃー比企さん！！ 会いたかったー！！」

「！……き、貴様！ 極陽になんという口のきき方を！」

責任者と思しき警備の使徒が、極位神を愚弄したような口ぶりを聞き反射的に怒鳴りつけた。同時に彼らは、比企の逆鱗に触れたであろうこの二人の人間どもの首が切断されることを疑わなかった。だが、比企は二人ではなく彼らに冷たい一瞥をくれるので、彼らは混乱しつつ頭を床にこすりつけた。

「汝らは、疾く持ち場に戻れ」

「だってさ！ バイバーイ！」

長瀬が虎の威を借り極陽の背後に隠れつつ、わざとらしくぴらぴらと手を振った。

「大虚け者どもが！」

警備の使徒たちが去るのをみはかい、比企は二人に一喝した。声を荒げたことのない比企が、珍しく二人を叱責している。威光を持つ者が声に宿す、言霊というのだろうか。ぐさりと腹を突き刺されたように、築地は肩をすくめ目をつぶった。

「神階では無責任な行動を取るなど、使徒階でようよう説明があったはずだ。ゲートを破り神階に侵入すれば命の保障もなかったのだぞ。己に会いたければ然るべき手順を踏め」

彼が厳しく言うのには、比企は神階を侵す不審者の殺害許可も下していたからだ。たまたま長瀬と築地が彼らに抵抗をせず丸腰だっ

たから射殺されなかったただけであって、即時に射殺されていて何らおかしくなかった状況だ。

「ごめんなさ〜い。でも然るべき手順踏んだって、絶対取り合ってくれなかったでしょ？」

つい先ほどは梯子を登るだけで弱音を吐いていたというのに、主神に凄まれて少しも怯まない長瀬の神経が、築地には信じられない。築地は先ほどから比企に口をきくことすらできないというのに。比企は青いフラフープのような二本の環状環の中心にいて、純白の装束を纏い後光すら差している。地上ではビジュアル系だと揶揄したもののだが、真の姿を顕現した主神を前にしては畏れ多い。

こんなの卑怯だ。これでは威圧されて何も言えないではないかと、築地は不満だ。ここは完全に比企の自陣になっている。

「ツッチーがどうしても、比企さんに訊きたいことがあるっていうからきたのー」

「な、長瀬……っ！」

長瀬はここにきて築地に絶妙なパス回しをしてくれた。切り出せなかったので話題を振ってくれるのは有難いが、非常に迷惑だ。

「築地か。命を賭しても、訊ねるべきことのようなだが」

彼と会わないうちにすっかり忘れていたが、マインドブレイクで既に築地が何を問いたいのか、比企には見えている。築地は比企の言葉を二重の意味に捉えることができた。命を賭して問うべきこと……すなわち、下手な口を利けば命の保障はないという脅迫。もしくは、命を落とすほど危険な道程をわざわざ訊ねにくるほどのものなのかという、純粹な労わり。

二者は正反対の意味を持つが、前者であった場合は破滅だ。

「……あなたは」

築地のこめかみから、一筋の汗がじつとりと顎にかけて滴り落ちた。

「ああ」

時間を気にしつつ、比企は築地を辛抱強く待った。彼はすぐに齧齧に気づき、補足してやった。

「安心しろ。意図は後者だ」

築地は彼の配慮に感謝しつつ、それを皮切りに、疑問を洗いざらいぶつけることに決めた。どうとでもなれだ。築地の中で何かが吹っ切れた音がした。

「強引にここに来てしまったことについては、ほんまにすみません。でも、あなたは避難させるとか都合のいい事を言って人々を神階に上げて、何をしようとしてるんですか？ あなたがやりたかった事は、こんなことだったんですか!？」

「生物階に迫る危険から人々を避難させたまでだ」

「危険て何です？ 地球に小惑星が落ちてくるとか、本気で言えます？ そんなんで俺らが納得するとしても？ あんた、人類をどないするつもりや!!」

言ってやった！ 後のことはともかく、築地は勇気を振り絞って訊いてやった！

……という思いが半分と、取り返しがつかないことを言ってしまった、という後悔が半々だ。

人類をどうするつもりなのか、などという滑稽な質問は最高に皮肉が効いていた。あの生真面目な比企に対して、こんな耳が痒くなるような恥ずかしい言葉を大声で投げかけたくはなかった。

こんな質問をさせないでほしい、お願いだから――。築地は苛立ちもあって歯を食いしばった。

比企は築地の辛辣な言葉を聞き、また長瀬の同調するような表情を見てひとつ、ため息をついた。そして彼らに説明を怠った彼の責任を振り返るに至った。これは自業自得なのだ、厳しく受け止めなくてはならない。慕われていた者から疑いのまなざしを向けられることは痛みをとまなうものだ……彼は素直にそう感じた。

些か説明が不誠実ではあったようだが、神々は生物階に迫る真の危機を明かす義務はない。だが……人々を神階に受け入れたことは、太古より人々と神々の間で交わしてきた契約に遵ったことであり、疚しいものではない。それを明かすことができないのが悔やまれる。比企は静かにこう呟いた。

「神は人を見捨てはせん……それは義務だ。だが今は、そうありたいとしか言えん」

「ねえ……比企さん、信じてもいいんだよね？」

長瀬が、大きな瞳で彼を見上げながら口をはさんだ。それがいくらか効果的だということを、彼女は心得ている。

「……」

彼の沈黙は後ろめたさを代弁しているような気がする。長瀬はそれまで安全だと思っていた場所から急に梯子を外されたような、あるいは崖から突き落とされたような最悪の気分になった。彼にさえ会えば、彼の善意と慈悲を証明できると思っていたのに。こんなことなら、どうしても比企に会おうとした築地を止めていればよかった。そうすれば、比企を信じて最後までついてゆけたのに……長瀬はうなだれながらも、強く叫んだ。

「そうだって言ってよ！　ねえっ！！」

長瀬は遣る瀬のなさをあらん限りにぶつけて比企の肩に手をかけ揺さぶったが、どれだけ揺さぶっても、その心を揺さぶることはできない気がする。長瀬が比企に触れることができるのは、比企が長瀬を受け入れているからだ。その優しさに似た残酷さが、まだ一縷の望みを捨てさせない。凍りつきそうに冷え切った空気のなか、比企はようやく答えた。

「この行為が救済であつたか否か。気休めかもしれん、それでもなお……」

「……比企さん、もう。いいよ」

長瀬の両手を滑らせるように緩慢な動作で振り払って、彼は背を向け歩きはじめた。彼に届くはずのほんの数歩が、今はとてつもなく遠い。二人が彼に裏切られたのだと悟るには十分すぎるほどの距離感が生じたとき、比企はその足をとめた。

「最善を尽くす用意はある」

「何……最善って？」

「何でや！ あかんやろ比企さん！ 一体何が起こっとなや、一切合財教えてくれや！！ 俺らなんて、本来なら比企さんに絶対声をかけることもできへんちっぽけな人間や。教えたかて何もメリットなんてないねん。それかて、フェアちゃうやろ！」

築地は思い余って、激しい口調で言葉を礫のように浴びせかけた。築地の放った支離滅裂な言葉は、決して比企の琴線に触れたとは思えない、それでも、掠めることはできたのだろうか。ふと、比企は彼らに顔を向けた。

「ついできたければ、そうするがよい」

前へ進もうとする築地の手を握り、引きとめようとするかのよう
に彼女は強く後ろに引く。彼女の手はすっかり体温を失っていた。
彼女らしくもない、か細い声をだして拒絶した。

「やめよう、ツッチー。駄目だよ……引き返そう」

議長の到着を待ちかねた、大会議場の扉が開いていた。中にある
のは真理か絶望の辺縁か。

築地は嫌がる長瀬の手を握り返して、とうとう比企に追従した。

＊

智神の沈められたエネルギー炉の前で思案する織図は、死体を検
めるべきだと感じていた。今、ここにある証拠を確実に掴んでおか
なければ、証拠は織図の気付かないうちに消え失せてしまうような
気がしたからだ。そう、ユージーンが神隠しに遭ってしまったあの
ときのように。そこに在るからといって、いつまでもあるものとは
限らない。

「織図さん！ やっぱり織図さんでした！」

真横ともいえるほど至近距離で声が出たものだから、肩をこわば
らせぎよつとしたように振り向いた。織図は智神のアトモスフィア
に翻弄され彼の気配を感じていなかったもので、声をかけておきなが
ら織図のリアクションに目を見開いた藤堂 恒がすぐ真横にいたこ
とに二度驚いた。

「！ ん？！ つか何でお前がここにいるんだ！」

「あなたこそ！ 何をしていらっしゃるんです」

どちらかというと、恒がここにいる方がいくらか不審だった。

「いやいやお前こそ何してるんだ。俺はこの職員なんだし！ つ

か、お前はいつからここに？」

もともと仲のよい二柱が顔を合わせると、途端にその遣り取りはコントのようになる。正確には織図と絡んだものなら誰でも、即興のコント形式で会話が進行するはめになってしまう。が、織図はふざけているわけではなく、至って真面目にふざけている。

恒のジャケットは埃っぽく、ズボンも擦り切れていた。頬や手にも細かな擦り傷がある。彼の周囲に、いつも存在感を放っていたアトモスフィアが見えない。フィジカルギャップを失効しているように見えた。恒は何も言わないが、ここに辿りつくまでに何か大きな立ち回りをして切り抜けてきたのだろうかと、織図は慮る。

そして織図が恒を氣遣ったように、恒も相変わらず、織図への配慮を忘れない。

「ついさっきです。心配しましたよ！ 織図さんに電話かけても全然つながらないから。どうしたんですかその格好、傷だらけじゃないですか」

恒は織図が、よく見慣れた聖衣を纏っておらず、ウェットスーツを着込んでいることを訝っているようだ。織図はパン、と両手を合掌するように打ち合わせた。

「あー。えー、っと……はいはい……俺の携帯に電話しちゃったわけね。なるほど、それでか。あちやちや」

道理で、バンドルが特務省を生物階に降ろしてきたわけだ。

恒が織図にかけた電話をバンドルが盗聴し、織図に話すべきだった重要な情報は織図ではなくバンドルがまんまと獲たところだろう。さもなくば、特務省がこれほど性急に生物階にまでやってくる必要性は皆無だ。

盗聴技術の発達している特務省に携帯を持ち込んではならなかったという、至って初歩的な失敗を棚に上げて、恒を責めたてることもできない。

「で、もう今更かもしれないが、何が訊きたかったんだ」

「レイアがどこにいるのか、教えていただきたかったんです。あなたが存知だと思ったので。でももう分かりました」

「分かったのかよ。レイアが俺の言うとおりにしてれば、荻号さんのところに行ったはずだ。もしかしてレイアを追ってきたのか」

「そうです。重力異常が起こっていたので飛翔できず、戦闘機で特務省に乗りつけました」

さらりと言つてのける。利発すぎるというのも困ったもので、織図が彼と出会った頃からずっとそうであったように、つくづく可愛げのない少年だった。彼の生き方はあまりにも無駄なものが削ぎ落とされてきて、最後に芯の強さと使命感だけが残っている。ぴんと張り詰めた弦のような佇まいでいて、隙など最初からなかったような気がする。

彼と向かい合うときは、織図といえど気を抜くことはできなかった。彼はいつも、時に彼自身をも欺いてきた。

「それからもうひとつ。織図さん。俺、本当にユージンさんのこと二年も忘れてたんですよね？」

それがさも、“もののついで”であるかのように、恒はさり気なく訊いてきた。

「……！」

「あなたはずっと覚えていらしたんですね」

織図の一瞬の表情の変化を見て、恒はすかさず断定した。またお決まりのパターンかよ、と織図は降参する。恒が巧妙に仕掛けた罠

に、織図はどれほど頻繁に足を引っ掛けていただろう。決してわざと、引っかかってやったわけではない。

「まあ俺とファティナもな。丁度仮想空間にいたんで見逃してもらえたようだ」

「どうして教えてくれなかったんです」
穏やかな口調だが、恒は恨めしそうだった。ユージーンにのみ言及するこの様子だと、彼はメファイストフェレスもまたユージーンと同じように失踪していたことに、恐らくは気付いてはいない。何かの拍子に、整合性もなくユージーンのことだけをひょこっと思いつ出した。織図が何かを知っているに違いないと勘付いて、連絡を取ろうとしたり特務省にまで追いかけてきたのだ。

なかなかの執念だった。織図には恐ろしくすら感じられる。

彼が“藤堂 恒”であった部分は今、抗体としての部分に押しつぶされてはいないのだろうか。彼はいま、“藤堂 恒”の抜け殻のようになってはいないだろうか。確かめることもできなかった。

「そりゃ悪かったけど、こっちも危うかったんだよ」

「危うい……それは時計職人の介入があってノーボディも消されたからですか？」

恒は見当違いの自論を述べている。本気でそう思い込んでいるのだろうか。

「ちと違うね。同格のブラインド・ウォッチメイカーにノーボディは消されはせんよ。ノーボディが最期に会った奴に消されたんだ。問題はそれが誰かということだよ」

「わかりません。ではINVISIBLEですか」

「……だよな」

恒はそう考えるだろう。しかしどうしてもその発想に至ってしま

う彼には、迂闊な事を話さないほうがいい。織図はそう思った。

「……？ 織図さん。心層に何か細工をしましたか？ 読めませんね」

腹の探りあいをしている場合ではないと考えたのか、恒は単刀直入に尋ねてきた。織図も同感だ、身内で詮索し合っている場合ではない。だが、恒の立ち位置が以前とは違う。

「しとるよ、看てのとおりだ」

織図は堂々と白状する。

「俺には話せないという意味ですか」

「そうっつかかるなよ。お前さ、もう一度ユージーンに会いたいか？」

「はい」

織図が悲しくなるほど、応えには淀みがなかった。

どんな姿になっても、お前はユージーンがいいんだろう。お前は何があっても彼を疑えない。織図にはもう分かっている。恒はこれほど懐疑的な少年であるのにユージーンにだけは妄信的であり、レイアには無条件に過保護だ。一体どこからもとを正せばいいのだろう。因果はどこから始まっているのか。

恒をそうさせたのは誰だったのか。最果ての谷から獲られた答えと、誰が得をするのかを検めてゆくと、ずっと燻っていた答えの端に行き着く。ユージーンが恒を含め彼にかかわるあらゆる者たちの記憶を消したのは……記憶を消さなければならぬようなことをしたからだ。

彼が創世者となり、ノーボディを消すためにそうしたのだとし

たら。どちらが先だ。

そもそも彼は誰だったのか。事実、ノーボディの創造物だったのか。

もし、ユージーンが……“彼”だとしてたら。喉もとを破って突き上げてくる恐怖を押さえつけて仮定した途端に、……それは可能となった。創世者であるINVISIBLEが過去に介入して因果を狂わせるのは、それほど難しいことではなかった。

「変ですね、そんな訊き方をするなんて」

「いや、ユージーンの奴もどつかで生きてるのかと思ってな。先代絶対不及者がここにいるからな」

本音でもないのだが、織図は恒の注意をほかに向けた。恒は織図に促されるままに、エネルギー炉の中を覗き込む。恒は驚愕の表情を見せる前に、竦んで絶句した。

「織図さん……これは……」

「セウルって名の智神だ」

恒は。織図の正気を疑ったのかもしれない。そうでなければ、そっくりそのまま同じ言葉を返されるべきだ。織図は智神と言うが、恒にはそうは見えなかったからだ。緊張のために脈が速くなる。どちらだ、どちらが正しくて、どちらが誤っている。

「あなたは彼を、智神だと言いましたね。本当にそう思っているんですよね」

「ああ、信じられんだろ。記録にもばっちり残ってるんだ」

恒は智神の姿を知らない。だが、彼は智神ではないと否定することだけはできる。何故なら、彼が誰であるかを恒は知っているから

だ。織図の示す古い記録を目に通しながら、恒は違うと言い出すことができなかった。

そこには紛れもなく、エネルギー炉の中に沈んでいるのが智神であり、彼はこの炉から少なくとも数万年もの間引き揚げられてはいないと記されている。彼を溶炉から引き揚げようものなら、特務省の機能が止まる。できないのだ、彼はずっとここにいて、ほんの僅かな間たりともここから出た事はなかったという鉄壁のアリバイがある。

そこで恒の中で急浮上したのは、恐るべき二つの可能性だ。他人の空似という現象を、恒は否定しない。だが、どうしても否定しなくてはならないことがある。それは織図と恒が同じ人物を見て、違う人物と認識する現象だ。

織図が正しいならば、恒の記憶は絶望的なまでに破壊されている。

恒が正しいならば、織図も正しいと立証できて丸くおさまりそうだが、こちらの方がなお不都合だ。

だがこの場合、それまで“いた”と信じていた者が、最初から存在していなかったということになる。

では、恒は何を見て、誰に触れ、誰と話したのか。アルティメイ・オブ・ノーボディの姿を目撃した恒は、彼が彼たる、あるいは彼女たる特徴的な容姿を記憶していた。特徴は、記憶などではないという一点に尽きた。

恒が目を伏せるたびに、彼、彼女の容姿は変化して、ほとんど“点”の状態でしか真実を捉えられないからだ。

これらの事柄を肯定した瞬間に、全ての試行がふりだしに戻る。実像を見ていながらにして、虚像を見ていた。

彼という現象は、そして藤堂 恒という現象はいつから始まっていたのか。真摯に、向かい合うときはすぐそこまできていた。

「不可視の創世者《INVISIBLE》は、ずっと視えていたんですね……」

しかし、本当の姿など分からなかった。誰も、INVISIBLEの真の姿を見てはいないからだ。視えているのに、真実の姿を現さない。恒の見た人物、織図の視た人物、皐月や、朱音、巧に、志帆梨に……彼ら全員が全員、異なる人物を視ていた。

恒は、エネルギー炉の中の智神について述べているのではない。不可視の創世者は誰の目にも見えていた、だが、決してその姿を正しく視ることはできなかった。

「何故……あんなことを云ったのでしょうか」

——生きるということは、満足に死ぬ事でもある。

ありきたりで陳腐な自殺志願者の言い訳にしか聞こえなかったあのフレーズに、どれほどの意味を込めていたのかを無償に知りたくなった。その真意を、今となっては二度と確かめることができなかったことが、たまらなく無念だった。

何を迷っていたのだろうか、彼は。

彼はどんな視線で、何を思い感じながら恒を見つめていたのだろうか——。

彼の一つ一つの言葉は、全てが偽りだったのだろうか。

よくも、これだけ大勢の人物に関わって騙し通せたものだ。不思議と、腹はたたなかった。ひとりひとりの心の中に、確かに彼は

た。

「生も死も、彼は知らなかったんですね」

それが幾度目になる、呪縛を解き放った。

第2節 第24話 真昼の月のように（後書き）

果てしなく今更ですが、ネイティブな大阪弁スピーカーの方、ツツチーの方言がおかしかったら指摘していただければと思います。

多分変なことになってるんですが、筆者には何がどうなのか見分けがつきませぬorz

今回の投稿で記念すべき100話目だそうです。イエーイ！

第2節 第25話 透明な幽霊

ファティナが開闢し支配する半仮想空間の中で、翼を持つ少年神とアルシエルの戦闘が繰り返されている。

両者は一瞬も同じ場所に留まってはいない。

戦略的にポジショニングを行いながら、多種多様な攻防を見せてくれる。

”不可侵の聖典”は時計職人の傀儡となったかにも見える彼女に盲従しているが、コマンドを必要としないオートスペルというモードに切り替えられているらしく、自動的に業を生成しては遼生めがけてアウトプットを繰り返し、機械的で緻密な動作を繰り返していた。

アルシエルの執拗な波状攻撃に少年は真っ向から挑み、一步も引けをとらない。遼生は受身に徹するだけで、積極的な攻撃を仕掛けもしない。

その防御は見事だ。

後世に語り継ぎたい一戦、ファティナがそう感じたのは、鐘遠恵が荻号に挑んだ時以来のことか。

少年神は圧倒的だったし、解階の戦闘民族の中で終身女皇であったアルシエルは呼吸をするより慣れた様子でしなやかな身体を道具として使いながら、その卓越した身体能力で少年を追い詰めようとする。

仮想空間に意識を張り巡らせたファティナをしても視認することすら難しい、超音速の攻防だった。

冷たいまでに無表情のアルシエルは”不可侵の聖典”のページの

二箇所到人差し指と中指を挟み、表紙と背表紙を片手の親指と小指で併せて垂れ下がったページを重力に任せ下に向ける。こうして見開き4ページ分が開かれ、2P分の業を繰り出すことが可能となる。通常は1Pずつしかコマンドの読み込みができないのだが、変則的な呼び出し方だ。この戦術は、身にしみついているのだろう。マラカイトグリーングリッド以外の一切が闇という空間に、開かれたページに浮かぶ紅い蛍光はファティナと遼生の瞳を禍々しく射る。

ファティナはアルシエルの業を目前にして、双眸を見開き、その真髄を見極めようとした。

「……！」 不可侵の聖典”の無詠唱による同刻喚起！」

素晴らしい！これが録画映像であってファティナが安全な場所にいるなら思わずそう言ってしまったことだろうが、この場に居合わせるのでそんな悠長なことも言っていられない。

ファティナの側から見えるその禁断の聖典の一ページの挿絵には、見るも不気味な、竜に酷似した怪物のシンボルが大きく描かれている。そうだ……不可侵の聖典はアルシエルの生命力に呼応し、暴力を具現化するツールである。彼女の生体エネルギーを抽出変換し、高度に組織化された業へと進化させる。アトモスフィアを媒介とする神具と同じ原理でツールは駆動する。

神具と異なり誰でも手にすることはできるが、誰にでも扱えるというものではない。このツールで何ができるかというと、そのどっしりと分厚いページ数分だけ、戦術が用意されている。神具に引けをとらない、どころか圧倒的に勢力で勝っている。

ページから具象化された怪物がアルシエルの影にオーバーラップ

するように重なり、彼女が腕を振ってけしかけると、遼生を襲う。怪物は遼生の神体を通り抜けて、煙のように消えてしまった。肩透かしを喰らったようだが、油断は禁物だ。

「何か仕込まれましたね、いま一度来ますよ！」

遼生は次に繰り出される業を警戒し、アルシエルに保険としてフレイムトラップをかけようとしたが、もはや彼女には通用しなくなっていた。耐性がつくということはないので、さきほどの衝撃波によってフレイムトラップが封じ込められたに違いない。彼女にとって厄介だったそれを真っ先に封じ、アルシエルは遼生に拘束されず自在に動けるようになる。

次に、彼は目を疑った。何とアルシエルが、遼生のフレイムトラップと同じように指先を互い違いに組み合わせ、気圧を放ったからだ。

重い衝撃とともに遼生の身はこわばり、深層筋が硬直した。遼生のそれとまったく同じパターンだ、これでは……。

何が起こったのか考える猶予も与えられず、アルシエルの顔はすぐ目前に迫っている。フィジカルギャップをも簡単に粉碎する彼女の拳は、動けない遼生には脅威だった。アルシエルの拳は、遼生のフィジカルギャップを無効化して神体に届く。遼生は身を翻すこともできず、腰骨にまともに打撃を喰らっていた。

鈍痛とともに、腹部に刻み付けられるように鉄拳を叩き込まれる。一撃。また一撃と熱くすら感じるそれが、極限にまで狙い済まされ洗練されていた。

彼は吹き飛ばさずじっと耐えている。足腰の頑強さが彼の持ち味だ。辛くももちこたえる少年を見てファティナが息をついたのも束の間、今度はアルシエルがグングニルを遠隔から呼び寄せ手に

握り込み、遼生の首を突きにくる。

ファティナが遼生の異変に気づいたのはこの時点でのことだ。

急所を目掛けて飛んでくる巨槍の前に、遼生は顔を歪めながらも苦笑した。

“これはしまったな”

後悔した。一度見せた戦術を重ねて使うことは言語道断、これは戦術の初歩中の初歩だ。

劇的かつ相手にとって致命的な隙を創り出すフレームトラップは窮地に陥るまで、特にアルシエルの前では打つべきではなかった。

便利なものを持っていると先んじて使いたくなってしまうものだ。慢心と依存は戦術の選択肢を狭めるだけで、現に、窮地に陥っている。グングニルは刺突の為の槍で、断首はできないであろうというのは希望的観測にすぎない。

喉が潰れるだろうが、この状況下では防ぐ手がなかった。傷の修復には少し手間がかかる。その間に、決定打を浴びなければよいのだが。

“先ほどのはスキャンコマンドでしたか！”

攻撃が目前に迫っていながら避ける気配すらない遼生に気付いたファティナが、大慌てで $\Delta\delta\Delta$ を口に咥えて噛み締め、ラインを操る10本のリングに指を通し、叩きつけるように緑色光のライン束を放った。綾となった光のラインは明確な意思のもと縦横に乱れ飛ぶ。

間に合うか！ 彼女は無心で繰った。

業を返されて動けないのなら、早めにそう言ってくれないと！

遼生が目を見開いたまま、無抵抗に等しい状態で喉を刺し貫かれる覚悟を決めたときには、彼の意味と反して彼の体は弾かれ飛び下がっていた。彼は急速に遠ざかるアルシエルがグングニルの軌道を逸らしたことをしっかりと見届けていた。

“やはりか”

彼は紅茶色の瞳を眇めると、アルシエルとの間に十分な間合いが生じたことを安堵とともに把握した。だが感覚的に分かる、このポイントに着地する前に、先ほどアルシエルに仕掛けられた業による全身の硬直は解けていなかった。まだ痺れている。一瞬の間に何が起こったのか？ 視線を自らの身体の上に配ると、ファティナの△δ△のラインが遼生の四肢に幾重にも絡み付いて弱い蛍光を放っている。ファティナがラインを介し、マリオネットのように遼生を操って回避させていたのだ。彼女の判断によって遼生は辛くも危機を脱した。

「いやあ……、助かりました」

彼は体裁が悪そうに、なんとも気の抜けた声を出した。これでいて、深く感謝はしている。謝意はすぐに彼女の剣幕に弾き返されて消えた。

「あなたのお得意の緊縛術をコピーコマンドで使われて、身動きがとれなかったじゃないですか！」

助けに入らなければ、今頃どうなっていたことか！ ……そう言いかけて、彼女はそんなことを言えたものではないと自戒した。いい年をした枢軸神が子供を盾にしておいて、彼を責め立てるべき理由もない。ファティナの緊張した面持ちとは対照的に、彼の表情にはまだ余裕がある。どうするつもりだったのだ、あの状態から……。少なくともファティナならば死を覚る。彼は目を見開いて、自らが

刺し貫かれる事を待っていたかのように見えた。

「ご心配なく。アルシエルがフレイムトラップをコピーしたならば、効果は一時的なものでしかありませんから。それに……いえ……」

遼生はまだ減らず口を叩いている。ファティナが回避させなければ重傷となることも踏まえたうえで、耐えるつもりがあったのだ。根性があるのか、ただの強がりの自信家なのか。あまりにも未知数な少年の能力。ファティナはもう、彼の戦術について口をさしはさむのをやめた。危険があればサポートするだけにしよう。

そして、ついそこまで遼生の口にのぼりそうになっていたことは、アルシエルの意識がブラインド・ウォッチメイカーに完全には操られていないという推論だ。先ほどより、遼生はあれほど激しい攻撃の中でアルシエルから一撃も致命傷を喰らっていない。それは遼生の身のこなしが優れているというばかりではなく、アルシエルが遼生を子供とみて無意識のうちに手心を加えているからだ。ブラインド・ウォッチメイカーの憑依した石沢 朱音には容赦なかったが、特に殺すべき理由もない、もっといえばアルシエルの闘争本能を刺激しないとなると、無益な殺生を嫌うのがアルシエルのもともとの性格のようだ。時計職人に浸され沈みゆく意識の中で、彼女はいま、溺れながら懸命にもがいているのだろうか。そのように思えた。

彼女に報いるためにも、殺してはならない。そのため手段は必ずある。遼生は自身の本音を確かめて頷いた。

この間に、アルシエルは彼女の意思と反して先ほど発動しなかった一つのコマンドを実装している。ファティナが仮想空間に張り巡らせたセンサーに解析させページを拡大すると、大槌の図柄が出現した。ヘクスカリキュレーション・フィールドによると、強化コマンドだと予測されている。

「もう1Pは強化コマンドかもしれません！」

彼女が大声でそう述べたときには、アルシエルは既に遼生のフィジカルギャップを破り、彼の腹部に襲撃を喰らわせようとしていた。ファティナがラインを介して遼生を回避させようとしても、アルシエルのスピードにファティナの反応が間に合わない。あわや、というところで遼生は金縛りが解けたらしく、彼はファティナの手助けなしに彼自身の手の甲でアルシエルの攻撃を受け止め、すれ違いざまに彼女の頸部に右手を宛がい、かすり傷をつけてそこをそつと親指でなぞった。

遼生の奇怪な行動の意味に気づいた者は、この時点では誰一人としていなかった。

遼生はアルシエルの定まらない視線に注意を引き付けられていたが、左手に従えた不可侵の聖典が煮え立つマグマだまりのような色に変わっていたことに気付く。アルシエルは先ほどと同じページを呼び出し、もう一度同一のパターンで拘束術を仕掛けてきたが、今度は遼生も引かからない。怒号とも悲鳴ともつかないファティナの声が耳に届いたのは、そのすぐ後だ。

「気をつけて！」

「かかりませんよ。身体で覚えた事は二度と、忘れないのでね」

彼はグングニルの先端を取りあげて左脚の膝窩ではさみ、左手でアルシエルの右手首を取った。細い腕に備わった奇跡的な腕力は、同じく怪力を備えるアルシエルのありとあらゆる可動域を奪っている。形勢逆転だ。

今だ！

右腕を取って捻じ伏せればグングニルを手から離させ、決着をつ

けられる！

ファティナがそう思ったが、彼は何故かそのままの体勢でいて決着を避けたがる。

「何故です！」

じれったくなって、口出しをしないと決めたばかりのファティナが思わず口を挟んでいる。

何故とどめをささない、この期に及んで情けというやつなのか。どのみち普通の状態の4倍も重篤にブラインド・ウォッチメイカーに憑依されているアルシエルは助からないのだから、早く決着をつけた方がいいのではないか。

ファティナはそう思っても、だからといって直截的に殺害しろとも言い難いものではある。

これではデジャヴだ。アルシエルが石沢 朱音の立場となったという以外には、先ほどとまるきり同じ状況だと気付いている。そして尚更にとどめをさせとは言えない事を。

「時間を稼ぎましょう」

ファティナの罪悪感を救うように、少年は余裕綽々で言い放った。それは釣り上げた大魚を、みすみす放流するようなものだ。

「何のための時間です！」

ファティナが感じたのは苛立ちというより、焦りだ。

ああ、アルシエルに少しでもそんな隙を与えては！ 彼女を前にして、一瞬でも油断したことが命取りになりうるというのに！ 若さゆえの驕りは身を滅ぼす、それをこの、向こう見ずな少年に教える時間すらない！ もどかしくはあれ、仮想空間の維持に神経を削り取られて、とてもではないが戦闘に参加できない。

「彼女に”サイレンシング”を行っていますから、10分程度稼げばアルシエルを時計職人から解放できます」

「サイレンシング？」

遺伝子サイレンシングは遺伝子発現を破壊する遺伝子工学技術だ。

そんなギミックを、アルシエルにいつ仕掛けたというのだろうか、交戦している間を縫って仕込んでいたのだろうか？ 死角をついたか、思い返しても、ファティナにはどこも不審には見えなかったが……と思いかけて、遼生の親指にまだ血がこびりついているのが見えた。指に纏わりつく鮮血は、負傷だろうか？ アルシエルの血ではない、彼のものだ。

そしてようやく、一瞬だけ不自然であった場面に思い当たる。遼生がアルシエルの頸に細工をしていたと思えば、それらしき場面はあった。血流のあるアルシエルの大静脈へ向けて、彼は親指で自らの血液を押し込んでいたとしたら！ 巡っている、彼の業はたった今の間も彼女の内奥を侵している。彼に余裕があるのは、一手先を進んでいるからだ。彼はアルシエルの時間を掌中におさめていた！

まるで事が終わったかのように、彼は訥々と語る。

犯人を逮捕する前に、ネタばらしをしてしまう愚かな刑事のよう

に。
「時計職人がX染色体上に憑依するという事実に着目しました。時計職人がX染色体から彼女の肉体を支配しているのであれば、X染色体の主だった遺伝子を沈黙させればよいのです」

沈黙を表すかのように、つ、と遼生は赤い色彩の絡んだ人差し指

を唇に当てた。

ファティナに視線を向けつつ、不意をつくように真横から飛んできたグングニルを拳で殴りつけて弾き返す。彼が何をしたのか、ファティナには分かる。彼の言うとおりで、ただの時間稼ぎだ。反撃をせず力尽きる瞬間を待っただけ。巢に獲物を捕らえた蜘蛛がじつと、力尽きるのを待つかのように！

「RNA干渉（RNAi）ということですか」

遺伝子配列はある面で数学的で、数学神としての経験に加えてそのスキルに応用が利きそうな分野ではあった。それでもなお、岡崎と組んで仕事をしてこなかったのは、ファティナにとってそこは、まさに不干渉の領域だと弁えていたからに他ならない。彼女が一度たりとも手を出そうとしなかった分野だ。彼はすば抜けた素養を以って、岡崎のテリトリーに切り込んでいる。

遼生は一切合財を肯定するかのようにならぬにファティナに淡い笑顔を見た。が、その瞳は少しも笑ってなどいない。

「あなたは……」

神具もベクター（遺伝子の運び屋）もなしに、直接的にSIRN Aを合成し、生物階のみならず解階の女皇の遺伝子を支配するのか。生命を創造し、生体情報に介入し支配する……それは、神が神たる由縁の、根源的な能力でもあった。

遺伝子発現を支配することは、生命を支配することだ。

この子は将来、創造神となるのがいい。向いている。ファティナはそう思った。

指先から生命を創出し無限の可能性を引き出してゆく。そんなこ

とのできる創造神は、神話の中だけだと思っていた。創造神という位階が主神の位階の箔付けするためだけに定められたものではないことを、彼は証明しはじめたろう。

「幸い、僕もあなたもX染色体を持ちません。外にはX染色体で溢れているけれど。仮想空間から外に出さなければ、逃げ場を失った時計職人はアルシエルの裡で力尽きるだけだと思います」

彼は手話を模しているのか、両手で丸いものを包み込むようなしぐさでペタンと握り潰した。だからといって、握りこんでいるわけではない。彼の一つ一つの動作は落ち着いて優雅で、伊達だった。

「大丈夫。彼女の意識を連れ戻します」

「子供らしくない、込んだ手を使いますね。何故存分に撃ち合わないのかと思っていました」

「それも悪くはないですが、あなたの空間がもちませんよ」

彼の発現の意図はファティナの仮想空間の強度を、彼が軽んじているということに他ならない。剥きになっている場合ではないと分かっている、ここでファティナの持ち前の負けん気が顔を覗かせた。ファティナの顔がいつもの柔和でひとあたりのいい表情を脱ぎ捨て、凜として引き締まる。

「そこまで言われると、試したくなりますね」

いい表情をしますね、とてもお綺麗ですよ。と遼生は素直に心の中で数学神を賛美した。小ばかにしているのではなく、素直にそう思ったのだ。ストイックな彼女は、中途半端に褒められることを喜ばない、だから本音は心の中にとどめて、彼はこう返した。

「やめましょう。何の得にもなりませんし、僕は“重い”のです。」

そうは見えないかもしれませんが」

ことごとく、小生意気な少年だ。が、彼のいわんとすることは、ファティナはより真に迫って思い知らされている。^{エネルギー}E、c（光速）、p（運動量）とおいたとき、質量が？m減るならば、

$$E^2 = m^2 c^2 + p^2 c^2$$

p=0、つまり運動量がゼロのときは、

$$E = mc^2$$

特殊相対性理論で有名な質量とエネルギーの等価性の関係式だ。この村に高校があれば、田舎村の高校生でも知っている。

？mの質量が消えるとき、光速の二乗も強いエネルギーに転化する。ほんの数グラムという量のウランから原子爆弾の大爆発が起こったように、つまり、彼はそれだけのポテンシャルを持っているというのだ。少年がおよそ50kgの体重を、自身の“見た目”と形容したとすると、ずっと重いという彼が持つエネルギーポテンシャルはどれほどだ？ ファティナは、ある個体がエネルギーの強弱を質量と関連付けて形容する領分に未だ踏み込んだことはない。くどいようだが、見た目より、彼はずっと“重い”と言っただけだ、彼は自身の実力を強いと形容していない。エネルギー容量にすらも言及しない。ただ、重いと形容しただけだ。その真意を知った時、ファティナはようやく彼の恐ろしさを味わった。

もし、彼が限りなく理想的に……たとえばINVISIBLEに迫るまではいかずとも、ノーボディやブラインド・ウォッチメイカーほど“重い”としたら……同じように“重い”であろうINVISIBLEが少しでも引き寄せられるのではないか？ それは、

INVISIBLEの収束点をずらすことに他ならないのではないか。

果たして特異点は、ずらせるのか？

一瞬、そんな危険で途方もない直感が、ファティナの脳裏に電流のように走った。

ただし一つ疑問がある。彼の肉体が限りなく重いとすると、エントロピーが低すぎる。外見と釣り合っていない。

馬鹿げている。

ファティナは、今のこの瞬間もアルシエルと渡り合う少年に期待を寄せかけた自身を諫めた。

＊

「生も死も、彼は知らなかったんですね」
「は？」

こんなもったいぶった切り出し方をするときには、恒の話は長くなりそうだ。織図はもう分かっている。ユージン……、つまりINVISIBLEのことについて語るとき、ことさら彼の話は長い。
「いや、ますますわからん。まず落ち着け」

織図は半ば疑っているという状況だが、よりいっそう恒は確信的なものの言い方をする。

それは彼の中で、何かがきれいに繋がったからに他ならない。物を事を断定して決め付けるのは恒の悪い癖だ。織図が暴走しそうにな

る彼の思考回路に一旦、歯止めをかける。

「あなたが“智神”だという人物は、俺にはユーザーさんにしか見えないからですよ。でも、見てください。御璽が違う」

「だから、それは“智神”だから当然だって。リジー・ノーチェスの御璽と同じだろ？ お前がこいつをユーザーンだと思うなら、残念だがお前の記憶違いだよ」

御璽は幾代を経ようと伝統的に受け継がれ、昔から変わらないものだ。軍神の御璽も智神のそれもずっと変わらない。展戦輪が変化することはないのだ。何を当然のことを、と織図は呆れた。しかし恒のまなざしはまだ力強さを残している。彼を論破できていない証拠だ。

「どちらが記憶違いでも構いません。俺もあなたも、どちらも正解なんです。ノーボディのように時間依存的な在りようではなく、観察者の数だけ異なる姿で現れる。そんなことができるのは彼が創世者だからです。俺たちは彼をINVISIBLEの器だと思っていました。でも、INVISIBLEだったんでしょう」

織図は逆に恒が心配になる。何か吹っ切れたようだが、吹っ切れすぎだ。INVISIBLEは意思なき創世者という代名詞もあるほどで、そもそもリアルに、喜怒哀楽などを表現しつつ高度な知性を持って、神を演じるということが不可能だということは誰にもわかる。

織図はユーザーンが血迷い、いくつかの複雑な過程を経てINVISIBLEと成り代わった——正確には、不本意ながら何らかの事情のもとに、INVISIBLEの役割を果たしているのだと考えている。恒の発想は、彼を誰より慕った生徒としての立場から考

えても無感傷かつ、過激にすぎる。

彼は何度も味わった苦い反省のもとに、当事者でありながら客観的な視点を維持しようとする。

「よく考えろよ、INVISIBLEのエネルギーはあんなもんじやないだろ……姿を維持できる創世者なんて存在せんぞ」

恒は首を縦に振らなかった。

「わかってます、エントロピーが小さすぎますからね。ですがなにもユージーンさんがINVISIBLEの全てである必要はありません」

INVISIBLEの自我が必ずしも統一されているという論拠はどこにもない。彼が最初からINVISIBLEの自我の一部だったとしたらと、恒は主張している。INVISIBLEのほんの一部がユージーンとして生きていた。

そういう切り口でなければ、エントロピーが小さすぎて定常状態を維持してはいられなかっただろう。ユージーンは42程度の体温で、200年近くも定常状態を維持し続けた事実を忘れてはならない。小さな肉体の中に入っているとINVISIBLEに強いとしても、とてつもなく窮屈だったことだろうから。

織図は恒の言い分を聞くと、一旦口を閉じて、真正面から直視した。恒はこの瞬間、レイアをも疑いの中に巻き込んでいる。

「じゃあ、レイアもそうだ、って言うのか」

「可能性はあると思いますね」

レイアは恒と織図の間で異なる姿をしているのかもしれないし同

じなのかもしれないが、答え合わせができない。恒も神階も、絶対不及者や器という言葉に踊らされていたのは、実は彼らの隠れ蓑になっていた。固有名詞は固定概念を刷り込んでくる。

「……そこまで言うかよ。全部嘘だったってことか。ノーボディのように、奴らは神を演じていただけだったってことか」

あくまでも恒の仮説をすべて認めれば、の話だが。

「演じていたのではなく、知らなかったと思いたいですね」

というのは、たった一度だけ恒はユージーンを看破したことがあったが、その時確かに彼の意識があり、断じて創世者のそれではなかったといえるからだ。そして、レイアは恒が望めばいつでも、常に看破することができた。それも含めて偽りだったというのならもう救いようがないが、その可能性を棄てたくない。

「赤子であり少女でしたよ、彼女は」

彼女が怯えて泣いた日の小さな手の温かさも、彼が教壇に立って児童を見つめたあの日々の眼差しも、偽りだったとは思いたくない。

皐月や生徒たちと交わした何気ない言葉もだ。

彼らは、彼らがINVISIBLEの自我の一部であるということを知らなかったのではないか。

「INVISIBLEが多重人格にでもなってるのか？」

創世者に健やかな状態というのがあるのか分らないが。

「無理筋なんだよなあ……」

織図は率直な感想を述べるにとどまった。これまで何度も覆され

てきた経緯から、慎重になりもする。

「首刈峠……グラウンド・ゼロにINVISIBLEから最初の介入が入りましたよね。ユージーンさんがグラウンド・ゼロに向かったのは巧の為だと思ってましたが」

あのとときノーボデイが時空間歪曲を妨げたが、ノーボデイが来なければどうなっていたのだろうか。あの先に起こったであろう出来事を、見届けるべきだったのか否か。恒はノーボデイに一本の電話をかけたことによって疑いようもなく、グラウンド・ゼロにいたINVISIBLEを妨害していたのかもしれない。

底は底なしだ。

疑えば疑うほど、真実だったのかすら分からなくなる。ユージーンはあの場所で何をしていたのだろうか。……目を閉ざすと、森の中で亡霊のように立ち上がり、こちらをちらりと一瞥して、歩み去ってゆく幻影が見えた気がした。

そのときだ。

「！」

「な、何ですか！？」

急に、織図と恒の体が前につんのめってよろけた。

地震のように激しい床からの縦揺れ振動を感じたのだ。智神のエネルギー炉を制御するコンソールが閉じたことに応じて、特務省の巡航速度が落ちてきた。この部屋に窓はついていないが、特務省が地上に着地する準備を始めたのだろうかというかがえる。織図が閉じたコンソールを再起動させて座標を確認すると、風岳村まであと600m。高度は1800mほどだ。

このあたりで恒が特務省を脱出して地上に飛び降りれば、特務省より先に風岳村に着くことができるのだが、恒は急にレイアに、そしてグラウンド・ゼロへ近づくことが怖くなってきた。だからといって、逃げるつもりもない。恒ひとりの力では、村に戻ってくることはすらできなかった。遼生の捨て身の行動に助けられて、ここまで辿り着いたのだ。今は安否もしれない義兄のためにも、レイアと会って真相を突き止めるしかない。それに、必ず、母親をはじめ村の人々が間違いなく避難していることを確かめなければ。

なんとしても特務省より先に、村に降りなくては！

「やっべーな。村に着くぞ」

恒が特務省に先んじてレイアを捜す時間はわずかだが、あった。

特務省内部と風岳村では気圧が違うので、5分程度を費やして気圧調整を行ってから扉を開くことになるだろうと、織図は見積もっていた。

「織図さん。俺、もうこの辺りで飛び降りようと思うんですが」

先ほど入ってきた通路の逆を通って戻れば、特務省の甲板には出られる。

「甲板から来たんだな？ 上から出たら目立つって。先に降りるなら下っ腹からの脱出口を教えてやる。俺は後で行くから、そこから出るといい」

織図は操作パネルをいじって避難経路を表示させた。彼は智神の死体を検めてから、ここを去りたいようだ。

特務省が完全に停止しなければ炉の中に踏み込むことはできないので、どのみち着陸するまで織図は動かないつもりらしい。証拠を押さえておきたいという織図の気持ちも分かるのだが、恒は智神の

死体に構っている場合ではないと思う。ユーゾーンとうり二つの姿をしているからといって、朽ちたエネルギーを垂れ流し続けるだけの抜け殻だ。死体は恒に、軽視できない重要な手がかりを与えてはくれたけれども。

「智神を調べるのはまたの機会にしたらどうですか？ 特務省が着地する前に、一緒にここを出しましょう」

そう言っても結局、織図はどうしても残ると言って残ってしまった。

織図に示された排水溝に沿った古い配管設備の内部を恒はひとり進みながら、レイアとの些細なエピソードを思い起こした。

“ときどき、わたしは幽霊なのかなと思うことがあります”

いつだったか、彼女がそんなことを言った。何故だと訊ねると、よくわからないと困った笑顔を向けた。それは一度きりだったが、恒には引っ掛かった。抽象的な心象の中にレイアは何かを隠しているようだったからだ。それとも、それは彼女から恒に与えられた分りにくい暗示だったのだろうか。何度レイアの心層に触れても、彼女にすらも漠然としか把握できていないその言葉の意味だけは読み取る事はできなかったが、すぐに忘れて特に気にしなかった。誰でも一度ぐらい笑えない冗談をいう事もあるだろうと、胸騒ぎを押さえつけて。

ずっと一緒にいたつもりが……無力なものだな、と恒は思う。

悲しむことにすらも、恒は疲れてしまった。踏み固めてきた足場を失うことにも、だ。いつからか、見えない敵と戦っていた。

姿のない幽霊を追いかけているうちに、最初から敵などいないか

のように思えてくる。INVISIBLEはいとも簡単に大切な過去を奪い去ってゆく。

黄昏のように光で満ちて、あらゆるものから色彩を奪ってゆく。最後は自分自身すら奪う存在なのだと、恒は知っている。何度も修正していくうちに、ボーダーラインが、どんどん削れてなくなっていくような気がする。虚像の輪郭を取っ払ってなくしたとき、ようやくそこに浮かび上がるのが真実なのだろう。

まらば消そう、徹底的に霞を取り去ってゆこう。

底が抜ければ抜けるほど、それはつまり、最適解こたえに近づいているのだろうか。

そうだいいが……。

＊

遼生が予告した時間より早く、アルシエルは昏倒した。

彼は戦略的によくアルシエルを動き回らせたので、さすがのアルシエルも心拍数が上がって血流量が増えたのだろう。ファティナが、大の字になった彼女の様子をうかがいながら近づいて背に両手を差し込み抱き上げ、揺さぶると、アルシエルの瞳に黒い輝きが戻ってきた。

アルシエル自身の意識が覚醒しつつあることを示している。彼女の意識が完全に醒めきってしまう前にぜひとも確認しておきたい疑問が、ファティナにはひとつだけある。

「ところで……SIRNAというからには」

「すみません、一過性です」

彼は心底申し訳なさそうに小声で説明した。この発現は一過性だ

と、彼は言ったのだ。

「……でしょうね。私の仮想空間もいつまでもは維持できませんが」
どれだけの時間、抑制していられるのか分からないとなると、のんびりとしていられない。期待をしていただけにファティナは、多少がっかりするとともに困惑した。

彼女の眉が上がったり下がったりするので、遼生はすかさずフォーローに入る。

「大丈夫です、何とかしますから」

取り繕うように彼は一言付け加えたが、その“何とか”を当てにすべきではないというのがファティナの正直な感想だ。本当に何とかなると当てにする方が無責任だ。アルシエルを泳がさずに、ここぞとどめをさしておいた方がよくないか？ 相手は曲がりなりにもあの、アルシエルだ、まだ意識があるにしてもないにしても、彼女のプライドから同じ相手に二度も敗北を喫するとは思えない。

彼女が悩んでいたときだ。

「まったく。後先も考えない、めでたい奴らだよ」

嘲るような軽い口調で、ファティナの空間内にいつの間にか荻号が侵入して遼生とファティナの間に割り込んでいた。神出鬼没とはいつものことで、彼は計ったように絶妙のタイミングで姿を現す神だ。多少は外から様子をうかがっていたのかもしれないが、とにかく彼はこのタイミングで来た。必要なときに、必要なことだけをやる。実に合理的な登場だった。

「荻号様！？ 何故ここに」

ファティナがぎょつとしたように荻号の名を呼んだので、遼生も振り向く。ただし、彼はその荻号が荻号 正鵠だとは知らなかったため、荻号 要とそれほど変わらない容姿を持つ彼を見て、遼生の

瞳の中に、ほんの僅かな敵愾心が見え隠れしていたことはいうまでもない。

天才の名を欲しいままにし、陰陽を問わず一目置かれ敬われる最強神と、不世出の少年神。どんな場所にも、使徒階の底部にさえも、いつも荻号の名声が聞こえていた。だが、彼の噂を聞けば聞くほど、遼生は自身が荻号に劣ると思えなかった。不遜だというなら、どこが具体的に不遜なのか教えて欲しいぐらいだ。

遼生は周囲からの賞賛が欲しいとも思わないし、むしろ注目されることを厭い、したがって認められたいという意欲も志もなかった。だが、荻号がまさに神階の牽引者たる人物であるというのなら、せめて遼生の実力ぐらいいは見抜いてしかるべきだ、という屈折した思いはある。目下のところ、荻号は遼生に興味を示してもいない。

期待はずれ。いや、彼に対する期待が大きすぎたのか。

「どうしてもこうしても、お前はファティナだっけか？ 呼んだんじゃないか。ヘクスカリキュレーション・フィールドから救難シグナルが出てただろ」

ファティナはわざわざ荻号の口から事情を説明されるまですっかり忘れていたが、 $\Delta\delta\Delta$ を戦闘モードに切り替えたとき、その異常事態行動をヘクスカリキュレーション・フィールドの知性が把握し、ファティナに最寄の神々から順に周囲に救援要請を発するようなプログラムを組み込んでいた。

ファティナが忘れていた間に、最も近くにあった神具、荻号 正鵠の所持する相転星に連絡がきたというわけだった。相転星は故障して殆どの機能を損失していたが、律儀にも最優先事項である救援

要請だけは受け取った。要請を無視することもできたが、彼は気が向いて足を運んできた。どうやって仮想空間の中まで入ってくることでできたのかは理解できない。ただ、彼はフラーレンを片手に束ねて握ってはいるが……。

「かしてみな、そいつを」

荻号は遼生を押しつけ、アルシエルの額を鷲掴みにして押さえつけた。

眩い光がファティナと遼生の目と鼻の先を過ぎ去っていったので、二柱が何事かと目をこらすと、彼の腕には、ステイグマらしき緻密な光の紋様が浮かび上がっている。直視に耐えるまで目が慣れるには、結構な時間を要した。暗闇の中では、目がくらむほどの光だ。

荻号がアルシエルを殺すものだと思った遼生は、早まった行動を取らせないために彼の腕に触れてとどめると、触れたばかりのステイグマの一部が指型に沿って消光した。ステイグマが虫食い穴に喰われてしまったかのようだ。

「……へーえ」

荻号は青銅色の瞳を眇め、一見しては少年使徒のようにしか見えない遼生に、ここにきてようやく興味を持ったようだった。遅すぎるな、と遼生は荻号の評価を下げた。

「ここは任せていただけませんか」

意思表示をして、退きはしない。そして、たとえば荻号といえど、彼女を横取りすることは許さない。

「抗体でも使うのか。別に、殺すつもりはないのだがね」
「！」

荻号の一言が、遼生が行間に含んだ全てを物語っていた。まず、遼生は看破しているつもりだったが、同時に看破されていたということ。抗体の存在を知って、抗体がたった一つきりではないということすらも知っていた。空気が読めないように読める神、それが荻号 正鵠だ。

「そうですね、今回は僭越ながら。僕が」

遼生は荻号の目の前でほどよい緊張を覚えながら、手の内にアトモスフィアを凝縮させ、恥らうこともなくアルシエルの白くふわりとしたニットワンピースの胸元にざくりと手を差し入れ、乳房の付け根に触れて胸部から抗体を心臓に透過させて撃ち込み、血圧を跳ね上げた。ビクン、とアルシエルの上半体が弓なりになって強くはぜる。

力強く脈打ち血流に乗って、彼女の隅々を抗体が駆け巡っていた証拠だ。

「それと……あなたのソレも抑えておいた方がよいですか？ あなたほどの御方がINVISIBLEに支配されるなど、あなたにも僕にも不本意ですので」

遼生は、先ほどスティグマを喰った方の荻号の腕を指差した。

温和な語調だが、敵対心を隠していない。他の誰の前でも見せない面を、荻号の前だからこそさらけ出しているというべきだ。遼生はそう言うなり荻号の答えを待たずフレームトラップを仕掛け、動作を凍結させた。手ごたえを感じても、得意顔はしない。荻号は驚愕したように瞳を見開いたなり、口を含め身体が自由がきかない。遼生は荻号の右腕のStigmaを、碧いアトモスフィアの宿った両手で鎮めてゆく。黄金と青銀の鬩ぎあいには、視覚的にも斬新だっ

た。

その場の空気が緊張に凍りついた。

「もう少し、我慢を」

彼の抗体を潤沢に含んだアトモスフィアは腕のスティグマを食い干切ってゆくようで、実際にバリバリと食いちぎっていた。彼の手が触れたあとには、芝刈り機のように荻号の右腕のそれは跡形もなく消えてしまっている。つかの間の出来事だった。手品でもイリュージョンでもなんでもない。スティグマは、剥がれるものなのだとこのときファティナは初めて知った。

「そちらにもありますね」

遼生はもう、冷ややかなまなざしで荻号の左腕のスティグマに目をつけている。中途半端では意味がない。どうせなら、根こそぎだ。

「やめとけ、無駄なことだ」

荻号は諭すようにスティグマを消す事の愚かしさを強調したが、遼生は頑張る。

「でも消えました」

「どうかね」

荻号が顎をしゃくると、アルシエルの腕には、先ほどまでなかったスティグマがそっくりそのまま貼り付いていた。これでは、右から左に移動したただけだ。

「同時に処理するまでです」

「レイアの背に戻るぜ、それもそれでまずいだろ？」

もぐら叩きだと言いたげだ。あるいは、もぐら叩きより悪い事が起こるのだと、荻号は諭していた。そこまで危ぶむのは何故なのかと、遼生が荻号の心層に目を凝らしたとき、彼はある重大な違和感に気付いた。

ん？ ……違うぞ。

“それ”はレイア・メーテールではない。遼生はレイアの顔を知らないが、MRIで鮮明に看破した恒の記憶と、彼のそれが一致しない。MRIでなく、マインドブレイクであれば気付かなかった、ほんの些細な、しかし決定的な事柄だ。

荻号の記憶力が悪いのか、それとも恒が微妙に彼女を美化しているのか。どちらとも言いがたいが、誤差などでは済まされないほど、荻号がレイアだと言いながら思い浮かべている少女の顔が違う。まさかレイアに会った事がないのか？ という推論も成り立たず、つい10分まで一緒にいたときている。ちよつと失念したというレベルではない。

「ん……その子がレイアですか？ そうではないと思うのですが」
遼生はついでに、手がかりを求めて、ついでにファティナにも目を凝らしてみた。彼女はレイア・メーテールに2ヶ月前に会っている……。彼女はレイアに、熱心に数学を教えていたのだそうだ。これもまた違った。恒の記憶とも、荻号の記憶とも、ファティナが覚えているレイアの顔が違う。これまたまったくの別神としか言えないほどに、何もかもすっかり違う。一体彼らは、レイアの何を見ていたんだ？ この記憶違いが、ただの偶然とは思えない。

「は？」

遼生の反応に、もっと納得がいけないのが荻号だ。

「そ、そういえば、荻号様はレイア・メーテールと一緒にだったのではないのですか」

なにやら揉めそうな空気に、ファティナが体ごと割り込んだ。ア

ルシエル、荻号、遼生……この顔合わせは危険すぎる。仮想空間の中だからいいようなものの、ちょっとした小競り合いだけで地域一帯が吹き飛ぶ。核爆弾が一所に大集合しているようなものだ。むろん、まだ避難していない村民もいる。ファティナが仮想空間を拓く直前、村に近づくバスの音が聞こえていた。村を追われる憐れな村民たちが、ひとりでも犠牲になるようなことがあってはならない。

「レイアは置いてきたよ、連れてくるわけにもいかんだろう」

「一柱で置いてきたのですか？」

荻号は、子供の件に関して姑に責め咎められた嫁のように肩をすくめた。ひとりで置いてきて、何がまずいのかからないという態度だ。

「おいおい、留守番ぐらいできるだろ」

「特務省が彼女を追って生物階に入ったのです。ひとりでは危険です……！」

遼生は彼らの知らない情報を提供した。彼の計算だと、あと30分以内に特務省はこの村に到着してしまう。恒も一緒にやってくるだろうが、恒が特務省と渡り合って何か劇的に状況を変えているとも、巡航速度を落としているとも思えない。

「ええっ！ まさか特務省が生物階に……！」

ファティナは慌てた。織図から預かったレイア・メーテールのバイタルコードを持っているので、彼女を拘束しようとする特務省と同じ穴のなんとかだと心得てはいるが、何も特務省に彼女を好き勝手されるのを、ただ指をくわえて見ているわけにもいかない。彼女を特務省に奪われてしまったら、大切なことが何も分からなくなる。

彼女の知りうる事を、彼女の口から聞き出さなければ。特務省職

員だからといって、織図が何とかしてくれるだろうと期待するわけにもいかない。……というか、荻号は彼女と一緒にいたであろう間に、少しでも彼女の話を聞いてやったのだろうか？ 彼はうまく、訊き出せただろうか。

「何で特務省のやつらがわざわざ。ま、でも心配はいらん」
荻号がそう言うのは、はったりではなかった。

「へえ……。面白い“読み物”ですね」

遼生はそう言って、また何気ない指摘で荻号を挑発した。
「だろ」

荻号は遼生の挑発を受け流しただけだ。子供の相手はもうたくさんだ。話についていけないファティナが口を挟んだ。

「“読み物”とは、何のことです？」

「ときどき、よく描けた挿絵がある」

「？」

「…………ぐ。……がつ」

三柱に見守られながら、その場に丸くなって蹲っていたアルシエルが目を覚ましたらしく、苦しげに呻いた。荻号と遼生は注意深く彼女を見守りブラインド・ウォッチメイカーの影響を見極めようとしたが、意識はブラインド・ウォッチメイカーからアルシエル自身の手に戻されたようだった。

「おはよう。気分はどうだ」

荻号が医者らしく簡単に診察をするが、素人でも見るからに、気分はすぐれないのだろうか。顔面は相変わらず蒼白で、今にもえずきそうさ。

4つもあるX染色体の発現を最低限の機能に抑え込んで破壊して

いるのだ、痛みがないとはいっても、副作用がないわけもないか。と遼生はアルシエルに悪びれた。強烈な諸症状が、彼女の体にまるごと降りかかっている。アルシエルが豹変する様子がないので、ファティナは彼女の為だけに維持していた仮想空間を解除した。ファティナは首すじを廻し、もみしだいて安堵のため息をつく。仮想空間の開闢と維持は疲労する、特に首筋にくるものだ。人工的なラインの刻まれた漆黒の景色が、風岳村のそれにずっと置き換わってゆく。

石沢 朱音は先ほどと同じ体勢で、無事に木陰で眠っていた。荻号が朱音を見つけて背に負い、そのまま背を向け、アルシエル、ファティナ、遼生を置いて村の中央に続く道なりに歩き去ろうとする。

「待ってください、どこに?!」

「バス停にな。もうすぐ発車時刻だ、急がんと」

そうだ、朱音の母親はまだ村を出ずに彼女を待っているはずだった。そして最終バスはもうすぐ発車する。荻号は朱音の母親に、朱音を返すつもりだった。もうこうなった以上、彼女を巻き込むことはできない。一度ブラインド・ウォッチメイカーに乗り捨てられた彼女を神階に送ること、つまりブラインド・ウォッチメイカーが神階に侵入するリスクはあるが、封術もあるし万一のときは比企が何とかするだろう。アルシエルとRhiaの両方を同時に傍に置く事だけでも、手に余りそうなことだ。

「荻号様、預かっていただきたいものが」

「預かりものはもうたくさんだよ」

「大事な情報です」

「情報ってのは、漏れてしまったあとでは価値がないんじゃないか？」

朱音を負ったまま、彼はちらりと遼生を見遣った。これほど侵襲度の低いMRIをもつてしても、荻号は遼生の看破の痕跡に勘付いていた。ファティナは遼生と荻号の顔を交互に見遣って、バイタルコードが遼生に漏れたということに気づいた。もつとも、知ったところで遼生がバイタルコードを使うこともできないのだが。

「何て入りの軽い看破をしやがるんだ。共鳴法でもやってるのか？」

荻号はMRIを知っているようだった。その風体からは博識であるのが信じられないが、知識量はさすがに恐れ入る。彼がそう言うということは、MRIの Attacks を知りながら気付かぬ振りをしていたということだ。

「ええ」

遼生は彼が荻号 要ではないと見通したが、それと同時に、荻号も遼生の素性を看破している。

「八雲 遼生か。つい何日か前まで、半死半生だっただろうに」

怪物なみの回復力だな。と、まさに怪物そのものである荻号は付け加えた。

「よい弟に恵まれたもので」

「張り切ってますぐ、眠ってしまわんようにな。義弟も悲しむだろう」
皮肉がきいていた。遼生も負けていない。

「少なくとも、あなたより先に寝るつもりはありません」

「へえ……いい心がけだ」

荻号は愉しそうに息を漏らして、朱音を送り届けたら一旦戻ると言い残し去っていった。

「そういえば、一つお尋ねしてもよろしいですか」

去りゆく荻号の背と、彼の背で揺れる朱音を見送りながら、遼生

はファティナに疑問を投げかけた。

「ええ」

「レイア・メーテールという名の女神は、まさか三柱もいないですよね？」

何気ない言葉の後で、ファティナは総毛だった。彼女は同時に、ファティナの目の前にするりと降りてきた、空飛ぶ直径30cmほどの小さな銀の円盤を見つけたからだ。これは、監視衛星の子機で、生物階降下した陽階神を追尾して監視している小型カメラだ。光学迷彩に塗装されているので、空を見上げても普段は見えないものだが、はっきりと姿を見せるときには神階が何がしかの連絡を取りたがっている。

「……陽階の追尾ディスクが！ いつから！」

神階の門の許可を得ずに来たので追尾されていないと油断していたが、見つかってぴったり尾行されていたようだ。ファティナは腹を決め、身体罰で落とし前をつける覚悟だ。

「いえ、どうやら電報みたいですよ」

遼生がそういうので、彼女は肩の力を少し抜いて、追尾ディスクの側面の緑色のランプが点滅していることに気付いた。手を伸ばしてディスクを取り、円盤の蓋を開けて液晶画面に表示される電報をチェックした。彼女は読み終わると、きつ、と口を真一文字に結んだ。

「陰陽階緊急招集会議が開会されるのだそうです。……あなたにも令状が届いていますよ」

「僕に？」

何だろう。彼は胸騒ぎがした。メッセージを開封して見ると、直ちに神階に戻れという比企の予想外の令状に加えて、他神からの追伸が添えられていた。かなり差し迫った様子の殴り書きで、陰階岡崎 宿耀……遺伝子神の名が記されている。遼生はその名を見て、メッセージの液晶画面をファティナから見えない死角に傾けた。岡崎と遼生の間には、あまりにも多くの秘密がある。

（ただちに神階に戻り、わたしのもとに来なさい 岡崎 宿耀）

岡崎からの短い脅迫文だった。

岡崎のもとに行くとうなるか……。岡崎はやる。廃棄されるべき実験体として、遼生を扱うだろう。岡崎は遼生の全てを知っている、抵抗は不可能だ。遼生の全身の筋肉を遠隔から一瞬にして破壊する手段、安全弁を手に行っている。

のこの顔を出して妙な真似をすれば、出会いがしらに殺されることは目に見えていた。だからといって、遼生の遺伝情報を掌握する岡崎から逃れ続けることも、間違って岡崎を傷つけることもできない。

「わかりました、可及的すみやかに戻りますと伝えてください」

ディスクは遼生のメッセージを録音して、どこへともなく飛んでいった。死ぬことは怖くない。だが、岡崎に殺されるのだけは別だ。

「アルシエル、立てますか？」

ファティナはアルシエルに手を差し出したが、アルシエルはその手を握ろうとしない。

「夢をみていたのか……」

アルシエルはうわ言のように吐き出した。彼女は頭を左右にふら

つかせながら、いつもの鋭気もなく夢うつつのようだ。

「きつと、それは夢ではないと思いますよ」

アルシエルのために散々な目に逢ったファティナだが、敢えてアルシエルの身に何が起こっていたかを説明する気力もなかった。恨み言を言ったとしても、覚えていないとアルシエルは言うだろう。

「この夢を整理したら、時計職人が何をしているのか分かった」
ファティナの疲労が吹き飛んだ。

＊

アルシエルはいつの間にか姿を消して、なかなか戻ってこなかった。トイレかな……？　とも思ったが、トイレの小窓の電気は消灯していた。

それを確認した荻号いわく、風岳村のど真ん中で、複数の神々が激しく争っているのかもしれないという。そこにアルシエルも乱入していったのかもしれない。わざわざ言われなくても、レイアもそうだろうなと思った。争っているという一柱は面識があつてアトモスフィアの質感も知っているのでファティナだろうと思う。

荻号に、少なくとも一柱はファティナだと教えると、そんなのは分かっていると、それほど厳しくはないが素気無く一蹴された。文型神のファティナが、たとえばそれが小競り合いであっても戦闘に参加することの裏には深い事情がありそうだと荻号もよく心得ていたようだ。アルシエルにあまり暴れられても困るので少し様子を見に行くといって、家主は来訪者に留守番という仕事を残して消えてしまった。ここで好きにくつろいでいるといいし、部屋にあるものは何をつかってでも構わない。ただし……

“この部屋の外には出るな”

それが荻号のたった一つの言いつけだった。

“もっとも、出られるものなら？”

レイアは怖気づいて、一気に脱走する気力をそがれた。荻号と会ったのは今回が初めてだが、彼の話は常々恒から聞いている。恒は荻号を頼りにしているようだった……が、荻号が敵に回ったときの脅威は想像を絶するものがあるという。逃げるつもりもそのあてもないが、ここでおとなしくしていたほうがいい。小心な彼女はそうすることにした。

この家の二階は空間的に独立しているということだ。にわかには信じられないが、特にキッチンとダイニングを兼ねる20畳ほどのこの部屋はかなり完璧な作りになっているシエルターだというのだ。荻号に連れてこられたのはこの、3・5次元ともいえる不思議な場所だ。

……そんな空間をわざわざ創ったのは、地上に住まうと決めた荻号が神階や解階からの干渉に備えたのかもしれないし、単純に趣味によるものなのかもしれない。だが、どこからくる自信なのか、地上のどこが壊れてもここだけは安全だと荻号は言い切っていた。追跡転移対策もしてあると……そのわりには、自称シエルターとそれ以外の部屋はガラス戸によってすらも仕切られていない。

頑丈な壁もなく、開放されている。レイアは暇つぶしと調査を兼ねて、机の上にあるティースプーンをとなりの和室に軽く放つてみた。

彼女の放ったスプーンは緩やかな放物線を描いて敷居の上を越えると、突然消失した。いつまで待っても、スプーンは落下音を立てないどころか、どこに目を配っても投げ入れたはずのスプーンが隣の部屋に見当たらない。完全なる消失。手品を見ているようだった。スプーンがどこに行ったのかすらわからないということは、下手に

ここから出ようとする spoon と同じ目を見る。彼女は実験によって賢く学んだが、荻号が戻ってこなければ、どうしたものだろうかとも考えた。ここに監禁されているのと相違ない状況になってしまった。

いつもいつも、監禁されてばかり。少しでも自由を獲たと思ったら、すぐに檻の中だ。

自由にしていい身の上ではないと理解しているが、たまには自分の意思でここにいるのだと実感したい。どこまで逃げてでも柵が遠くに霞んで見える牧場の中をさまよっている、そんな羊の気分だ。

外の様子はどうなっているのかしらと、気分転換を兼ねてテレビをつける。公共放送だけが辛うじて放送されていたが、録画映像で避難方法と避難経路を説明する災害用になっている。民放各局のチャンネルは砂嵐だ。

特に情報もなかったので彼女はテレビを消し、冷蔵庫の中を覗いてみると、何本かの缶ジュースが入っていた。それと、きちんと整頓されたタッパーの中には食べ物ともなんとなく茶色い何が入っている。その葉のような葉草のような強烈なおいから手をつけようという気にはなれなかった。冷凍庫には冷凍食品や食材が少しだけ入っている。R h i a や神々に限っては何も食べなくても飢えをしのげるので、水さえあれば生きていける。これらの食材には手をつけなくてもいい。最低限水さえ出れば、だが。

水、水……。

ところで水は出るのだろうか？ レイアは不安になって、おそるおそるキッチンのレバー式水栓を倒してみた。不思議なことに、水は出る。手の込んだことをしているもので、荻号は水道だけは確保しているようだ。水栓を左に倒すとお湯が出た。顔を洗って、さっ

ぱりしよう。

濡れた顔をハンカチで拭い、正面に向き直る。目の前には置き鏡があった。

いつも……どうしてだろうと思うことがある。

鏡を指の腹で拭う。同じ疑問。鏡に顔を映して、思わぬタイムイングでまた疑問に突き合わせられる。彼女は結局、そっと鏡を伏せた。

“皆はわたしのどんな顔を見ているのでしょうか”

顔を洗うたびに顔の感触を確かめる。髪の毛がはらりと手に触れる。わたしにはきつと、目も、鼻も、口もついている。手も、肩も、脚も見える。なのに見えない。レイアが存在の一切が、鏡を通すとレイアには見えない。顔がない。

この世界から認められていないのだ。それに気づいたのは、最近のことではない。幸か不幸か、比企に監禁されていた檻の中では鏡を見なくて済んだ。しかし、ガラスに映りこむはずのレイアの姿がどの角度からも見えないことを、疑問には思っていた。レイアの背にステイグマが宿ったときから……彼女は世界に住んでいない。

現存在（*dessein*）ではないのだ。彼女がいつも感じる疎外感の正体は、皆と同じように生きているという大前提の反覆だ。生きてすらいけないという不安、他者との関わりの中でのみ生きていられるという心細さと、常に戦ってきた。

だから……透明な幽霊とは、わたしのことだ。

不思議なほど今は心穏やかだった。気持ちとはとくに整理がついて、落ち着いている。それは、INVISIBLEの声を聞いたからだろうか。INVISIBLEを喚ぶには悔いが残る。

“……グラウンド・ゼロでなければだめなの？ あなたにとってのグラウンド・ゼロとは、ただの座標なのでしょう？ 地上を意味してはいないのでしょう？”

皆が、振り回されている。もうたくさんだ。そしていつものように、答えはない。レイアの尋ねたい肝心な事に、彼は応えない。

“みんな、逃れたら……いえ、逃れていなくても”

願わくば地上から誰もいなくなっていることが望ましい……でも、やろう。レイアは固く心に決めた。

難しい。でも不可能ではない。後先を考えて出し惜しみをしなければ、わたしにだってそれぐらいの力はある。わたしは死なない、疲れも力尽きることも知らない、無尽蔵の力を持っている。だって、生きていないから。

“ごめんなさい、荻号さま”

試してみる価値はあると思った。彼女がだめでも、荻号なら元に戻してくれるだけの余力がある。

INVISIBLEがありとあらゆる手段を用いてRhiaに収束までの残り時間を知らしめたのは、手を尽くして備える為だと信じている。人々を避難させレイアの心を鎮め、そして恒の手助けを借りるべく。INVISIBLEは破壊を望んでいるわけではない。妨害などされはしない。

INVISIBLEの推定収束日まで、あと185日。

彼は、世界と隔てられた……とてつもなく遠く、そしてこのう
えなく近い場所から、こちら側を見ているはずだ。

第2節 第26話 ブレーンワールドから11次元へ

風岳村を出る、オレンジ色のラインのついた最終バスの行き先表示は回送だった。

風岳神社前バス停に集まった人々は各々に許されたわずかばかりの荷物を手に、次々とバスに乗り込んでゆく。

今後の不穏な未来を予見しているのか、バスの乗客らはみな一様に暗い表情を浮かべている。窓からは冬枯れの灰色の風景が広がっていた。家の方角を眺めては嘆息をつく老人、事情を飲み込めず旅行気分ではしゃぐ幼い子供に困惑する父親。自分の荷物は殆ど持たず犬のみを連れてきた少年、忘れ物がないかしきりにバッグの中身を確認している母親、バスに乗る前に金魚を川に放流して浮かない顔をした少女、数十頭もの牛を残してしまった肉牛生産者、避難生活を送る患者の容態を心配する医師。それぞれの表情はあれど、村を離れたくない気持ちは皆同じだ。

またこの場所に、我々は戻ってくることができるのだろうか。村人の誰もがそう思っても、口を開けば収拾がつかなくなってしまうことを恐れてか、敢えてその疑問を口にする者はいない。

この村での最後の仕事をすべく、私服の地元出身のバス運転手はしきりに時計を気にしている。広岡市内の町村を発したバスは、広岡市中心部の集合場所に到着する。その後は国の指示と誘導に従って随時、宇宙ステーションに避難をするという段取りだが、どの飛行場からどうやって避難するのかすら、詳細も明かされていない。スペースシャトルで避難するのではとても間に合わないから、何か輸送のための手段を講じているのだろうか？

「広島市に着いて、その後はどうやって神階に避難をするんでしょう。飛行船でも迎えに来るんでしょうか」

吉川 皐月は志帆梨の隣の席に座っていた。恒を通じて神階の存在を知る二人の女性だ。

「恒は最初の頃、瞬間移動がままならなかったので、神階を出入りする際にゲートという転移装置を使っていたと思います、私達もそれを使うのではないのでしょうか」

今でこそ恒はゲートを使わずに神階と地上を往来するが、最初はそうもいかなかった。

超空間転移というものを使うと言っていたが、どういった仕組みで転移をしているのかは知らない。

転移術は恒にとっても、そして志帆梨にとっても便利なものだった。志帆梨が創作料理店を営んでいるが、何度恒に急な買い物を頼んだか知れない。そのたびに恒は嫌な顔ひとつせず、数分以内に買い物を済ませてくる。あるときなど、急いでパスタを買ってきてくれと言ったら、イタリアまで行ってパスタをごっそり買って戻ってきて面食らった。彼なりに、背伸びをしてみせたのだろう。

品揃えに定評のある「スーパーふがく」での買い物でよいからというのに、行く手間はどちらも同じだからと、本場の食材を仕入れてくるので、そのつもりもないのに食材にこだわり抜いた志帆梨の店が繁盛したのは言うまでもない。最近は客が増えすぎて人手が足りないので、バイトの女の子も雇ったぐらいだ。そんな志帆梨も今回は店を閉め、冷蔵庫の中のを全て片付けてきた。

またあの場所に戻って、大好きな店が切り盛りできるといいのだ

が……。

「転移装置……!? なら、輸送機はいらないんですね」

「いらなと思います」

皐月は驚いて、目を白黒させていた。これから転移が体験できるとあって喜んでいる。ちなみに彼女はルシファー関連の戦闘でユージーンに転移を経験させてもらったのだが、記憶していない。

こんな状況でこんなことを思うのは不謹慎かもしれないとわかっていても、志帆梨は神階行きをほんの少しだけ楽しみにしていた。恒が神階で神としてどのように働いているのか。常々気になっていたが、生きているうちにはどうやっても入れない遠い場所だと言われ諦めていた。今回の非常事態は、人が神階に入ることのできる唯一の、そして願ってもいない機会だった。

喜ばしいのは避難が一時的であって、地上が今後さしたる被害を受けられない場合に限り、だが。

発車時間を待つ車内に、一人の外国人がズカズカと乗り込んできたのはそんなときだ。冬だというのに薄着のいでたちと染毛ではない自然な銅色の毛髪、その長身から彼は目立つ。背に中学生ほどの少女を背負っているので尚更だ。

「朱音ちゃん!」

「朱音ちゃん間に合うたんね! よかった」

朱音を知る村人達からは口々にそんな声が聞こえる。一方で、彼と面識がある村人も何人かいる。彼は村の中心部にあるバザーにハーブや野菜を売りに来ていた青年だ。いつもフィドル（ヴァイオリン）を持ってきて、客が作物を買うたびにプロ顔負けの演奏をして

みせて、バザーよりそちらを目当てに買いに来る客も多かった。

彼の作物は他の農家より少々高値でも売れ残ったためしがなく、ライバル農家たちにとっては手ごわい商売敵だった。だが、彼の演奏で客寄せとしてバザー全体に利益がまわっていたという面も否定できない。バザーが土日開催されるようだと、たいてい朱音がついてきて、甲斐甲斐しくバザーを手伝う姿もみられた。それで彼はお代を受け取るために演奏の手を止める必要もなく、もっぱらフィドルを弾いていればよかった。そんな経緯で、この二人の組み合わせはとりわけ珍しいものではない。

「オゴーさん遅いよ！　また畑いじりしよったんじゃろうに！　ええけ、はよ座りんさい」

村人たちの口調もどことなく、親しみを込めたものである。

「フィドルもってこんかったんね！　向こう着いたら暇じゃけ弾いてもらおう思うたのに！」

「だめだめ、この人は野菜買わんと弾かんのじゃけ、タダじゃ弾いてくれんのよ」

ライバル農家たちは遅れてやってきた荻号に笑いながらそんな事を言っているが、心配そうに後部座席から飛び上がった女性がいる。少女の母親だった。

「荻号さま……」

彼は村人たちへの対応もそこそこに、朱音を母親がバスのシートにそっと横たえた。彼女の弟妹たちも朱音の帰りを待ちわびていたところで、どうしたと騒ぎ立てていた。生真面目で礼儀正しく、快活な朱音のことは村の誰もが知っている。少し前はバレエダンサー

になりたいと言っていたが……。

朱音はだらりと脱力して、シートからずり落ちてゆく。気絶しているのか眠っているのか。母親は彼女の身に何が起こったのか分からず混乱して、心配のあまり言葉が出てこない。それを宥めるように、彼は立ちあがった母親の肩を押さえ席につかせる。

「寝とるだけだ。心配させてすまなかったな、もっと早く返すべきだった」

「オゴーさん、朱音ちゃんに何をしようたんね！」

「悪いことしとらんじやろうね？」

事情も知らず外野はうるさいものだが、確かに言われる通りだと萩号は反省していた。

注意深く監視をしていたつもりが、あろうことか朱音とアルシエルにブラインド・ウォッチメイカーの支配を許してしまったのだから。やはり朱音を手元に置いておかねばならないのではないかという葛藤も、確かにあった。しかし、遼生の遺伝子抑制がかけられているのであれば、かえって手放して安全な場所にいた方がよいのかもしれない。むやみに怪我をさせることもない。万が一のことがあれば、比企に対応を任せることもできる。

母親は事情を聞いて安堵しても複雑な心境だった。朱音が無事に戻ってきたことに関しては嬉しいが、彼女は萩号と共にでなければ生きてゆけないと分かっている。彼から離れて神階に行くも地獄、かといって残るも地獄だと。なのに、彼は荷物を持ってきていない。

「この子はどうやって生きてゆけばよいのでしょうか。あなたから離れて飢え死にをしたりしないでしょるか」

母親は力なく横たわるわが子を見て、やりきれないといった顔で萩号に耳打ちをする。彼は朱音のリュックの中にこそごと手を突

っ込むと、数本のアンプルを手にとって母親に見せた。

「まず、神が腐るほどいる神階で使徒が飢え死ぬのは難しい。次に、俺のアトモスフィアのアンプルを渡して、数年は飢えんようにしとる。心配いらんよ」

そう言つて、彼は朱音の頭を優しく撫でつけた。

「じゃ、上島先生、あとはよろしく」

「ちょ、待ちなさい荻号君！　またそのいかがわしい薬物はなんだね！」

朱音のすぐ後ろに座っていた上島が、荻号に薬剤の組成を聞いたのだそうとしている。そういえば荻号は非常勤医として上島医院でバイトをしたり、忙しい上島に代わって村人に往診をして生活費を稼いでいたものだ。上島医院から支払われた金は、借家住まいで毎月家賃を払わなければならない荻号の、主な収入源になっていた。老齢のため困難な手術の執刀にはもう自信のない上島が、ここ最近上島医院で何件かの手術を安全に手がける事ができたのも、言つてしまえば荻号の腕がよかったからだ。

荻号の医師としての腕はよくても、本業の薬剤師としての腕はなんというかも、良い悪い以前に任せられなかった。何しろ荻号ときたら、少しも経過の予断を許さない重症の患者に限って、何を思ふのか病院に置いてある薬剤で調剤しないかわりに、手製の怪しい薬を渡す。漢方でもないらしく、自宅の庭で栽培した薬草で作った自作の薬だという。その薬を処方された患者は誰もかれも、どうしたとか二度と上島医院に来たためしがない。酷い薬を渡されてもうこりごりだといって来ないのだろう、まだ彼ら重症患者の葬式は出ていないが、上島は二度と荻号に調剤させたくないと思つている。実のところは、その怪しい薬によって病気が完治してしまつて

いたからだが……。

「特製の栄養剤だ。0.25ml/kgの静注でいいからな、先生」
敬語など知らないのではないかと思われるような男だが、上島には一応、形ばかりの敬意を払うようだった。

「毎度思うんだが、荻号君の作った薬なんて怪しくて患者に打てんぞ！」

上島はとんでもないと本気で言うが、荻号は冗談めかして軽く笑い飛ばした。

「俺の薬はどうも信用がないね。よく効くんだがな？」

彼はそんなことを冗談めかして言いながら、彼らを残し通路沿いに昇降口へと歩いてゆく。朱音の目が覚めないうちにフェードアウトしたかったのだ。目が覚めればまた厄介な事になる。そそくさと出ていこうとしたところで、中央の座席に乗っていた吉川 皐月が荻号の服の裾を引っ張った。隣には藤堂 志帆梨もいる。

「やれ、またあんたか」

荻号はあからさまに相手にしたくなさそうな顔をしたが、皐月はお構いなしだ。

「またって酷いですね。荻号さん、藤堂くんを見ませんでしたか？」
「藤堂？ 神階にいるんじゃないのか。少なくともこの村に藤堂のアトモスフィアはないようだぞ」

皐月の隣に座っていた志帆梨はほっとしたような顔を向けた後、予め質問を用意していたかのように、矢継ぎ早に訊ねた。

「それから、天使の子がいませんでしたか？」

もし荻号がどこかで彼を見かけたら、せめて避難を促して欲しい。志帆梨が無事にこの最終バスに乗ることができたのも、ひよっとす

ると彼のおかげかもしれないなかったから。荷物は全て置いてきたが、神階に入るのに必要なものは何一つないと言った少年の言葉に心を動かされた。彼女は財布すらないが、バスを降りて家に取りに戻るうとはしなかった。そういう気分にしたのは少年のおかげだ。

「朱音以外にか？ 八雲ならどこにしようが、あいつは心配いらんよ」

「どういう意味です」

バスのエンジン音が聞こえたので、荻号は車内を見渡してバスに乗るべき人物が間違いないと確認し、その全員の顔と残りの村民の差を計算してこの村に残っている人間は誰もいないということだけを確認すると、昇降口を降りて外に出てしまった。

「何で降りるんです、あなたも避難してください！ この村に残ってはいけません！ このバスが最後なんですよ！」

いかにもベテランといった初老のバスの運転手がバスを降りようとする荻号を引きとめようとしたが、彼の意に反して何故か昇降口は彼を締め出して勝手に閉じ、運転手の足はいつのまにかアクセルを踏んでいた。運転手のあまりにも冷淡で割り切った対応に、乗客たちの間からざわめきが起こる。いくら満席で彼が乗車の意志がないとはいえ、乗せないのは人道にもとると。タラップにでも座らせていればいいのに！

「あの人は！？ 乗せてやらんと！」

「え？！ 荻号さんは！？」

村人たちが激しく騒ぎ立てられても、運転手はブレーキを踏もうとしない。バス停を過ぎて30mは走り始め、バスはみるみる加速する！

「う、運転手さん、何で待ってやらのじゃ！」

「ブレーキが踏めないんです！」

「ブレーキが壊れたんか！　どうするんじゃ！」

運転手は顔を真っ赤にして、だらだらと脂汗をかいている。サイドブレーキを引こうにも彼の手は、張り付いたようにハンドルから離れない。脑梗塞か狭心症を疑った上島が、妻の基子とともに揺れる車内を後部座席から運転席に走り込んでくる。上島は運転手の意識があることを確認し、荻号の催眠術にやられたのだろうと、苦虫を噛み潰したような顔をした。荻号は時々、暴れて点滴を抜くような問題を持つ入院患者に催眠術のようなものをかけた。彼の催眠術はてきめんに効いて、上島も看護師たちも助かったものだが……。こんなときにやられるとは思わなかった。

「あー……荻号君にきつついのをやられとるのー」

上島の一言で、荻号がマインドコントロールをかけたのだろうか、と皐月と志帆梨も顔を見合わせた。何ぴとたりとも神の支配からは逃れる事はできない。鋼鉄のヘルメットでもかぶってアトモスフィアから脳を守っていない限り例外なく。荻号はやはり、残るのか。窓際に座っていた志帆梨が振り向くと、取り残された荻号の姿が小さくなってゆくのをみた。

このときをもって、グラウンド・ゼロは確かに人間社会から隔絶された。

＊

築地と長瀬の座った傍聴席から天井の高い議場全体を見渡そうと思えば、まるでプラネタリウムを見渡すように上を見上げなければならなかった。議場の照明は落とされ、二重螺旋状に配座されて宙を漂う神々の席に灯る明かりだけが星のように青く煌いている。神

々はもう何と言うか、一部の壮年神をのぞいて築地の目からはほとんど年下にしか見えなかった。陽階神も陰階神もかなり奇抜な装束を身に纏って、しかも似合っているのが驚かされる。ゆったりと年をとる彼らは見た目には築地よりかなり若く見えるが、誰もかれも年齢数百年、下手をすれば数千年を超えているのが信じられない。若作りという言葉が適切かどうか分からないが、若作りもいいところだ。

近年崩御したというジーザス・クライストがこの席上にいたなら感動も一入だろうが、現在即位している位神のなかで宗教的認知度があるのはヒンズー教、道教、ゾロアスター教の祭神ぐらいだ。築地は宗教に疎いので、名前を聞いてもぴんとこない。

出席者を見渡すと、これほど大事な会議だというのに、緊張感にかける欠席者もいた。

「陰の3位と陽の7位が、おらへんな」

築地は上座から順に数えて陰階の3番目と、陽階の7番目の席にランプが灯っていない事に気付いた。規則的に点っている光のランプが途切れているので、欠席者は数えてみればすぐ分かる。

「3位は死神で、7位は数学神だよー。死神の織図さんは特務省に所属してるからそっちに出てるんじゃないのー？」

先ほどからはしゃいで落ち着かない長瀬は事情通だ。こっそりと写真を撮ろうとしては、築地にたしなめられる。彼女は片手にスケッチブックを握り締めているので、後で神々にサインを催促しかねないなど、頭が痛いものだ。

「死神！？ そんなんおるんや……目が合うだけでどつかれるか殺されるかしそうやな」

築地が顔面白塗りのデスメタルな外見の死神をイメージしている

のは言うまでもなく、実物は横になって渡鬼を見ては冗談ばかり言う、ダイエツトを気にする陽気な青年神だとは夢にも思わない。

「私も私もー！ 死神見てみたかったんだよねー、なんか凄そうだし！ やっぱ死ぬときに会えるのかなー、嫌だよー死んだらわからないから生きてるうちに見たいよー」

長瀬のイメージも間違っている。

「あれ、そーいや荻号さんもおらへん。ほら、お前が酔っ払って絡んでもーたヒト。お偉いさんやってんな」

長瀬が荻号にどういう具合に絡んだのかは、思い出させないほうがいいと築地は思った。比企とともに深夜の研究室にやってきて酔っ払った長瀬に絡まれていたが、この席上にはいないようだ。荻号という芳名がついているからには陰階神なのだろうが、何度見渡しても顔が見えない。

「荻号さんは位神じゃなくてご隠居さんだからここにはいないよー」
「隠居て！ 外見サギやろ……シゲの方が断然老けとんで！」

築地は何故か、長瀬の彼氏のシゲルと荻号を比較したがる。

築地と長瀬がああだこうだ言いながら、会議は比企の遅刻で定刻より10分遅れて開会した。比企の開会宣言とともに各方面から報告が入り、集計された情報をもとに人類の避難状況と避難区画が3Dホログラフで大きく空中に示されている。会議場のアナウンスは珍しく英語で行われていたが、これは通常の神階の会議ではありえないことだ。

「あれ、UNって国連やろ？ ……国連おるやん。会議も英語やし」
「来てるのは安保理と、えーと、G8の首脳みたいだねー。あれって、山之内総理じゃない？」

頂上近くに浮かぶボックスのゲスト席に座る二十名ほどの一団は高所恐怖症なのだろうが、おっかなびっくりといった様子で手すりにしがみついているので、人間の一大団だと分かる。国連に加盟する全ての国と地域の代表をこの場に呼ぶことはできなかったのだろうか、先進国と大国の代表のみが列席していた。仏頂面をした山之内総理がフランス大統領の隣で、寝ているとも起きているともつかない顔をして腕組みをして座っている。英語に堪能でない総理は日本語でスピーチを、フランス大統領もフランス語でスピーチをしたが、教養として世界中の殆どの国と地域の言葉を解する神々ほどの国の言葉も何ら問題なく聞き取っているようだ。

どこで何をしていても相変わらず胡散臭い比企は議場の最も高い位置に浮かぶ席に座し、悠然と全体を見下ろしている。長瀬の話によると、比企は遠隔心層看破というテクニクリモート・マインドブレイクを持っており、議場はすっぽりとその射程に入るようだ。にこりともせず上から見下ろされると、築地と長瀬はなんとなく監視されているように感じて萎縮する。そして、その毅然として威圧的な姿から、比企は彼を見上げる人々に多くの誤解を与えていると築地は思う。

「やっぱ比企さん偉そやな」

築地の隣に座っていた第二種公務員らしき制服を着た女神が、築地の問題発言に驚いて目を見開いている。比企の看破が行き届いているのを恐れもせず、公然と悪口を言うのが信じられないようだ。長瀬は周囲の空気を察して、たしなめるように築地の膝を叩いた。

「もーやめてよー！ つまみだされるよー！ 偉そうじゃなくて実際、偉いんだからー」

普段は古めかしい武士口調で話す比企も、今日は流暢な英語で答弁をしているので違和感がある。

「なんや、イギリス英語で言うところがよーわからんな。比企さんも日本語でええのに」

「イギリス英語とか以前に、ツッチー英語ダメじゃん」

築地はぐうの音も出ない。日本人に限っては、いつものように日本語で会議をしてくれたほうが有難いが、英語を国際語とする人間がいる以上、そういうわけにもいかないのだ。ところで、長瀬が英語に堪能なのは帰国子女だからだ。しかも、彼女は帰国子女だからといって日本語にも不自由はしていない。

その 長瀬の有難い同時通訳によると、神階の分門から神階に入った避難民は、地球人口の1/3にのぼったのだそうだ。避難予定者は地上の総人口の4/5になるという。使徒階での受け入れ態勢は整っていた。避難区画には区域自治体が国と地方の枠組みを越えて発足し、避難生活は目立った混乱もなく円滑に行われる見込みだ。避難生活がいつまで続くか、地球がどれほどの規模のいかなる被害を受けるのかということも含め、今後の見通しはきわめて不透明だ。各国首脳からは、見込まれる被害規模と被害想定地区を明らかにしてほしいとの要求が相次いだ。あらゆる経済的、文化的、物質的、人的損失を甘受して世界規模で人々を避難させたのだから、それを神階が主導したからには説明責任を果たせというのは当然の要求だ。しかし神階の説明は奥歯に物が挟まったように曖昧で釈然としない。地上に墜落するという“オブジェクト”という、未定義の言葉が、気色悪いぐらいに頻繁に飛び交った。

「避難させたんは、“オブジェクト”が来るからやいうてんやろ。何でよりによってまた日本やねん。それに、何でオブジェクトの軌道ずらすいう話にならへんの。これだけの科学力持つとる神階がやで？」

「何回聞いても、オブジェクトが、日本の中国地方の山の中に落下

しますっていう話だよねー。それに対して神階がどんな対策やっているのがよくわからないしー。日本終わっちゃうってこと？」

話によると、特務省という特殊機関にオブジェクトの対応を一任しているということだ。比企は人間を避難させることに精一杯で、現地対策には直接かわっていかないのかもしれない。特務省職員であるといわれる織図が議場に顔を見せないところを見ると、特務省が活発に動いているのだろうと推測される。長瀬はこの特務省という機関について、比企から与えられたA D A MのI Dのあらゆる権限を使い尽くしても、詳しく調べることができなかった。さすがは神階の上位にある特殊機関、そう簡単に全貌が明らかになるべくもない。

「比企さんには被害予想ついとるんやろか」

比企は生物階の被害状況を既に計算して、想定しているのではあるまいか。正確に予測されていて……口には出さないが、地球規模で避難をしなければならないほどの被害を想定しているのだとしたら。恐ろしくて、口になど出せない。

「だよねー。でないと、世界中の人々を避難させるまでにならないと思うんだよねー。でも、はっきりと言わないんだー。聞き取れなかったのかなあ………しかして地球ごとイっちゃうのかなあ。もうなんか、地球なんてこの際どうでもいいって感じの発言もちらほらあるし。肝心な部分、聞き取れなかったと思いたいんだよねー」

失望から段々と通訳の歯切れがわるくなってきた長瀬は話の内容を理解しているだけに、かえって意気消沈している。比企が神階の存在を明らかにしてまで避難させなければならなかった本当の理由。それは、地球の何%が被災するというレベルの話では済まないからではないか。もし、問題のオブジェクトの軌道と質量などが神階に正確に把握されていたなら、そのオブジェクトがいつどこに衝突し

て人的、経済的、文化的被害予想がどれほどだと、別に神々にやってももらわなくても人間の科学者にだってシミュレーションができるはずだと築地、長瀬は思う。したがって、安全だと予想される地区に人々を集めて一時的に避難させることだってできる。地上のどこにいても被害は免れないのか。神階に避難する以外に方法はなかったのか。そう勘ぐってしまいたくもなる。

「公転周期遅らせたりしたら、ぶつからないのにね。さすがに神様もそこまではできないかー」

「地球ぶっ飛んでもーたらどないなるん……俺ら神階に住むん？」
築地が捨てられた猫のような声を出した。

「うーん、住まわせてくれるのかなあ……どう考えてもお邪魔だよねえ。つか、何手伝えばいいの？ 奴隷としても利用価値なさそうだし、ご飯食べるし子供産むしー、住むところもあるしー」

人が神階において、何か価値のある労働力を提供できる場面があるとは思えなかった。なにしろ、数十億単位の人口まるごとが避難して来ているのだから。大量の食糧が必要で、神階の限られた土地を侵すだけだ。それに人類はあらゆる能力面において神々にも使徒にも遥かに劣る。何か神階に対して貢献できることがあればよいが、避難が長期化すれば神階のお荷物になることは明々白々だ。使徒階の土地不足とアトモスフィアの枯渇のために制限され抑圧された生活を送っている使徒たちからも、不満の声が上がるに違いない。中国よろしく、一人っ子政策も一般的に施行されている。そこに役立たずの入植者、ときたものだ。快く思うはずがない。

「あれ、待って！？　なんかオブジェクトがそこに落ちることが問題じゃないみたいな事言ったよあのヒト、ヒトじゃなくてえーと……」

しかめつらをしていた長瀬が、急にアナウンスに聞き入った。長

瀬が同時通訳を頑張っているおかげで、恥ずかしい話だが、築地もどうにか話についてゆける。築地は学術会議での学術英語は難なく聞き取れるが、CNNニュースなど、学術用語以外の日常語はさっぱり門外漢だ。

議会の様子を見てみると、神階の議員は挙手をしないようだ。神々の各々の席についている発言要求ボタンを連打することによって発言者が発言を許される。ボタンが押された順に会議場の大パネルの発言待機者リストにリストアップされ、身分の高低によって多少ソートがかけられ、議長がトップランカーに発言許可を与える。一度発言をしたものは5分間、再発言ができない仕組みになっている。日本の国会のようにあらかじめ質問状が提出されているわけではなく、答弁もその場で考えなくてはならないシステムだ。まったく、どこかの早押しクイズ番組だ。

このようなシステムのなかでゲストである生物階の各国首脳にも公平にひとつずつボタンが与えられて、多少ボタンを押すのが遅れても優先的に発言できるよう配慮されていた。

「あの神さん、前テレビ映ったヒトちやうか？」

くだらないことには意外に記憶力の強い築地は芸能ネタといえど忘れない。未知の病原菌騒動の際に、彼は謎のヒーローとしてテレビに映っていた。そのインパクトのある頭髪と奇抜な服装、生身で空を自在に飛翔したという目撃証言から、“特撮ではないか”という沈着冷静で懐疑的な見解はさておき、巨大掲示板群でも検証スレッドがいくつも乱立し随分と祭りになったものだ。まさかあのときの青年が、身分のある神だったとは。

「思い出した、梶さんだ！ ツッチーの崇拜する確率神だよ」

青髪の神は梶 奎吾というのだそうだ。確率を司る神で、確率歪曲神具 バロックダイスを所有している。ふざけた頭の色はともか

く極陰に最も近いといわれる実力者で、発言も優先されていた。確率神と聞いたなり、築地のテンションは急上昇だ。

「確率神でホンマにおったんや！　うわ、ギャンブル負けなしやん！　俺梶さんとか弟子入りしたいわ！」

梶はありとあらゆる勝負事に負けないのだろう。パチスロに、競馬競輪競艇、宝くじに……！　と、築地は夢が膨らむ。梶が築地にとりあってくれるかはともかく。

実際には、築地の期待に反して梶はギャンブルにおける不正行為に灸を据えるため、あるいはギャンブルによって人生を棒に振った人々を更正させるために各地を飛びまわっているのであって、私利私欲のためにギャンブルで不当に金を稼ぐことはない。百歩譲って梶が築地の弟子入りを許したところで、梶から学ぶ事はなにもないのだが。

「え、比企さんを差し置いてもう梶さんの信者に？」

長瀬はそんな築地が色々な意味で信じられない。

「比企さんは別格やて」

「つか、そんなこと言ってる場合じゃないよ……梶さん、オブジェクトは場所じゃなくて女神の子の体に落ちてくるっていうんだよね。ほら、あの子の中にだよー」

築地が現実逃避をしている間に、少女の立体映像が映し出されてくるくると回っている。この、何もない空気中に三次元立体映像を映し出す映像技術は生物階でも、どこぞの会社によって近年ようやく開発されたばかりだが、神階のものは一段と技術が進んでいて解像度がよい。人物を映じれば本物と見まがえるほどだ。この少女が人間でいうなら誰がどうみても10歳以下の少女で、碧色の大きな瞳に、ウェーブのかかった柔らかなような金髪を肩まで伸ばしている。立体映像で見るだけだと内気そうだ。子どもらしさがない。幼くて

も女神らしく、凝った装飾のネックレスをして巻き布の儀式的な装束を着ていた。人形のように美しかった。

築地はオーバーリアクションで目を覆った。

「うわ！ あかん、金髪幼女やん。俺幼女ダメや、15歳以下はお断りやで」

誰も築地の好みなど聞いていないのに、目を覆いながらそんなことを言っている。何か妙な衝動と戦っているようでもあった。長瀬は冷ややかな眼差しでそんな築地を蔑した。

「別にツッチーのこと聞いてないよー。オブジェクトはグラウンド・ゼロでその子の中に落ちてくるんだって。意味わかんないよねー。てか、おかしくない？ だったら何でわざわざそこに行かせるのかな……？ その子も死んじゃうんだろうし、酷くないー？」

グラウンド・ゼロであることが大事なのか、女神の中で起こることが大事なのか。グラウンド・ゼロありきなのか、女神ありきなのか。

「そもそも幼女がそこに行く意味がなくなね？ 何しに行かせるの？」

「そう思うよー。かわいそうだよー！ 幼女虐待だよー」

「でも待てよ、一応女神やし……見た目はあれでもさすがに10歳いってないことはないか……？」

比企の外見が十代後半ぐらいで6世紀も生きているのだから、彼女も幼く見えても分別はあるのではないかと築地は信じたいが、外見的にあどけない幼女なので痛々しい。

「え、え、ちょっと！ リアちゃん？ あ、レイアちゃんて読むのか。レイアちゃん本当に幼女だよ、2歳ちょっとだって！ しかもイモータル（不死身）らしいよ。えー凄いや、不死身の神様っているんだ！ 普通の神様はちゃんと寿命あって死ぬのにねー、だから選ばれたのかなー、かわいいー！」

長瀬は2歳と聞いて一気に興奮したらしく、キヤーキヤー言っている。かわいいものには目がないらしい。築地も確かに人形のようなかわいらしさだと思うがそれ以前に、怒りがさきにくる。

「ちょ……比企さん。変態もええ加減にせーて！ ……いくら不死身でも、やっていいこととあかん事あるやろ。なんやの？ その子の中にオブジェクトが落ちてきたら、そうでない場合より多少被害食い止められるいう話やの？」

レイアなる幼女と、オブジェクトの関連性がさっぱり見えてこない。いくら不死身だからといって幼女をそこに行かせたところで戦力にするでもなし、できることも限られていそうだ。ただの噛ませ犬というわけでもなからうに。

「なんか、そういう意味でもなさそうなんだよねー……」

「あーもー！ 煮え切らんなー！ 落ちて何が起こるのか分からへんのなら、そら対策も打てへんわな。しかもその子、行方不明なんやろ」

神に人に入り混じって丁々発止の議論の繰り返される議場で、長瀬と築地は途方にくれていた。

「オブジェクトってどないなもんやろ」

「ツッチー、なんか気になるんだけど、ADAMで似たような記録を見つけたことがあるのー。昔ね、突然どっかの神様の身体に何かのりうつって暴走しだして神階が壊滅しそうになったことがあるらしいんだー。それも二回もだよ！ それで、まだそれは終わってないんだって。神様の体の中に落ちてくるとか、今回の話も何か似てる雰囲気だよねー」

長瀬は常日頃神階の歴史について調べるうちに、神階に漂う鬱々と差し迫った重い空気を感じていた。神々の社会にはいつも謎の閉塞感が漂っている。その閉塞感をもたらすものが何かを突き詰めた

とき、どの方向からアプローチしてもふたつの古い記述に辿り着く。「のりうつって暴走？ あー俺それやったわ、Xやろ。あ、まだやっとなかった？」

築地はどこかの有名なファンタジーRPGであったようなストーリーを言っているのだろうが、長瀬は大真面目だ。どれだけ荒唐無稽でフィクションじみて聞こえたとしても、それはファンタジーではなく史実だ。でなければ何より非科学的なことを嫌う神々が、長きにわたってその記述を真に受けることがそもそも困難だ。

「ゲームじゃないよー！ 神階ではINVISIBLEって呼ばれてるらしいんだけど、そのことかなー。もしINVISIBLEが地球にぶつかるんだったら、これやば過ぎるんだよね」

「それやったらどないなるの？」

「爆弾とか小惑星とか軌道ずらすとか、撃ち落せるってレベルじゃないよ！ 地球なんて消えてなくなっちゃうよ、どうしよう」

「マジ！？ そんなデカイもんやの？」

長瀬の説明では海のものとも山のものともつかない。百聞は一見にまさるのだが、INVISIBLEというからには見えないものなのだろう。

「でかいとか小さいとかじゃなくて、INVISIBLEは創世者なんだよー」

「はあ？ 何や創世者て」

築地は途端に呆れ顔になった。ファンタジーRPGにはのめりこめても、現実ではこのリアクションだ。

「最初に宇宙開闢を成した、原始のエネルギーだよー。でね、何も考えてないのー」

「アホらしなってきたわ」

築地はもう聞く耳を持たない。

「アホらしいよねえ！ ……でも、神階はずーっとそれに脅かされ

てきたっていうんだー」

「はあ……。つか創世者なんて、おるん？ ビッグバンにしても、インフレーションにしてもぶっちゃけ、物理現象やろ？ 何で擬人化せなならんの」

何でも擬人化する長瀬の昔からの悪癖に、築地はがっかりだ。

長瀬は学生時代、研究室にある器具を使ってよく寸劇をやったものだが、あのあたりにルーツがあるような気がする。研究室メンバーに下手にウケてしまっていたからなおさら悪かった。うろおぼえだが、確かメスフラスコとナスフラスコでコントをやっていた。メスフラスコとナスフラスコが付き合っているという設定だ。メスフラスコはバツイチらしく、メスピペットという娘を連れている。メスフラスコとナスフラスコは再婚を希望しているが、メスフラスコの父親のメスシリンダーに反対されている。メスシリンダーはコンニカルビーカーと不倫をしている。ナスフラスコは元カノの三角フラスコに言い寄られている……。というのが延々と続く。

正直、どうでもいい。

実験器具でなければ、電子軌道まで擬人化する始末だ。π電子が浮気者でファンデルワールス君が誰とくっついたかの、これもまったくもってどうでもいい。長瀬の頭の中では理屈が通っているのかもしれないが、擬人化されると話がややこしくなる。電子軌道すら擬人化する長瀬のことだから、ビッグバンも擬人化されていて不思議ではなかった。しかも彼女は家庭教師経験もある、教え子が志望校に合格できたのか、築地は当時、聞くのも怖かった。

「擬人化じゃなくて、意識とか自我を持った対象として見なしてるわけー。ねえ、ツッチー。クオリアって知ってる？」

そんな名前の家電ならあったような気がするが、違う気がする。

「なんやそれ」

長瀬のいうクオリアとは家電のことではなく感覚質のことで、意識体験における具体的内容であり、人間が外部から感覚器を経て情報を得たとき、脳に惹起されるイメージのことだ。どのようなものかというところ、怪我をしたときの“痛さ”、陽光の“明るさ”、氷に触れたときの“冷たさ”、食べ物“におい”、音楽を聴いたときのあの感じ……それらは人々が日常生活の中で感じるものでありながら、ひとつひとつの体験を決して詳しく咀嚼して説明することなどできない。そのようなものだ。

「じゃあさ、私たちの意識って、自我って一体どこにあるの？」

「哲学は単位落としてん」

築地はなんならいっそ、興味もなかった。長瀬は築地に失望したという顔をするが、諦めずに次の質問をこしらえている。

「じゃあツツチーはどうして一分子の運動に至るまで、スピンや電子まで科学で記述できるのに、意識の在り処を知らないの？」

「しらんがな」

責められるようにそんなことを言われても、築地の責任ではない。比較的築地のホームグラウンドである脳科学に言及しろというなら、人類はどれだけ脳を解剖しても、脳を構成する1分子の挙動を追うことができるまでに精度の高い分析技術を持ちながら、まだ脳科学は意識の所在を、心のありかを明らかにしていない。神経活動のネットワークによって意識が構築されるものだというのは自明のことであり、それ以上突っ込んだ議論をするのは不毛だ。未来のことならともかく、少なくとも、現時点では。

「波動関数が継続して収束するたびに意識の流れが生じると言っている人もいるし、原子や素粒子の組み合わせに意識が対応すると言っ

てる人もいる。だったら……創世者というか原始のエネルギーなんて、エントロピーの塊でしょ？」

長瀬が引用している学説はおそらく物理学者や数学者お得意のシミュレーション分野の話であり、生物学者ならばあまりにも複雑すぎる分子運動のパラメーターを簡単な数値に置き換えたりすることは不可能だと言うだろう、化学者ではあるが築地も同じ立場だ。このときまではそうだった。

「熱力学的な意味でのエントロピー？」

「そう。情報論的な意味でも、ね。……人間や神々に自我があるのと、創世者INVISIBLEに自我があるのはそんなに情報エントロピーの差に開きはないはず。つまり稀ではないってこと。だからINVISIBLEに自我があってもおかしくないんだよ」

長瀬はベースである生物学を離れ、より俯瞰的な立場に立ちはじめた。神経活動のネットワークが意識を生じるとするのなら、エネルギーが思考するということも、起こりうるのではないか。そう、自我が単なる物理現象の一環だというのなら。何故人間だけに、生命だけに自我があると断言するのか。

そうではないと、彼女は唱えている。違うとは思っても、築地は反論することができなかった。この柔軟な発想は、研究から離れた立場にあるからこそできるのだろうか。それが正解であるかはともかく、築地にとっては羨ましくもある。

しかし、長瀬はさらにもうひとつ、斜め上に飛躍していた。

「で、そのINVISIBLEが収束するっていうことは究極のところ……それがINVISIBLEの意思に基づいているにしてもいないにしても、11次元空間上の話で、二つの膜宇宙（Brane world）の衝突が起きるんじゃないかなあ。その女神っ子ちゃんの中で」

「あかん！ お前変な電波受信しとる！」

築地はそう言ったが、彼女は別に電波など受信していない。

ひよんなことから長瀬がINVISIBLEの謎に迫るべく、
超ひも理論の大統一理論となりうるポテンシャルを持つ、宇宙理論
の一つ。M理論を唐突に持ち出してきた。

第2節 第27話 わたし、というクオリア

織図のガイドに従って特務省の下側の通風孔から飛び降りた恒の真下に、見なれたオレンジのラインのバスが細い山道を走っているのが見える。村を出る峠道はかなりの高低差があり、バスは山の頂きにさしかかっているところだった。

そこへだ。

特務省が丁度峠道の上に沿って、それもバスからわずか数十メートル脇の近距離を飛行しているのが見える。特務省の周囲には揚力を維持するための強力なバリアが張り巡らされており、一定以上の速度と質量を持って侵入してくるありとあらゆるものを粉碎する仕様と見受けられる。特務省のバリアは飛翔中の野鳥を傷つけない、たとえば人間や野生動物が走ってぶつかってきても傷つけないだろう、だが走行するバスだった場合、艦体の外壁を傷つける危険物とみなし傷害する。

このままバスが速度をもって特務省のバリアに触れるとどうなるのか、目に見えていた。

民間人を巻き込むことを決して是としない特務省もその巨躯のため、死角となっているバスの存在を察していない様子だった。ここから特務省に怒鳴っても聞こえないから、バスを避難させる方が手っ取り早いに決まっている。真っ逆さまになって落下しながら瞬時にバスに降りかかる危険を把握したときから、まず恒自身が地表に激突することを防ぐと同時に、守るべきものが増えた。

「ダメだ！ 止まれ！！」

停止させて、特務省を先に通過させるんだ！ さもなければ……
特務省のバリアに触れた瞬間、木っ端微塵になるだろう！

恒は、地上へのソフトランディングの為に展開していたFC2—形而立方体の防御的構成を崩し、迫り来るバスのスピードを殺すために運転手にマインドコントロールをかけるべくMCFを展開した。慌てているからこそ慎重に比較的丁寧なコマンドで、きびきびとオーダーを下す。

” Start up the Fundamental Control Double Metaphysical cube, interfere the objects 30m in radius.”

（根元事象二重制御—形而立方体を起動、半径300メートルの事象に干渉せよ）

“ Rule the brain of the person of current coordinates (20119, 54022, 20401)”

（現座標20119, 54022, 20401上にある人間を支配下に置く）

運転手の脳をFC2—Metaphysical Cubeのブロックが捕捉し、ギリギリと狙いすました。神々は人の記憶を丁寧に扱わないが、恒は違う。恒は神具を介してでも人間の脳を支配することに、他の神々以上に細心の注意を払う。妙な部位に干渉して少しでも記憶に傷害を残してはいけないという思いからだ。

それに初老のバス運転手、浜本とは顔見知りでもある。

浜本はこの村に住む運転手で、彼の孫 ムサシは恒と同級生だった。まだ恒が不登校児だった頃、志帆梨の見舞いに行く恒を乗せて隣村までの長い道のりに、悪い事はいわんから学校へ行きなさいと何度も浜本に説得されたものだ。「学校に行かんとろくな人間にな

らん、母さんも悲しむぞ」と言われ続けて耳が痛かった記憶がある。有難いお説教に辟易して、浜本の声が聞こえないよう後部座席に乗りようものなら、今度は車内放送で説教をやられる。たまったものではなかった。

今思えば親身になってのアドバイスだったのだろう、しかし当時はそれが煩わしくて、恒は隣村への交通手段にJRを使うようになってしまった。

浜本には心配をかけたと思っている。だから、今度は恩返しをしなければ。恒は事象を確定する。

“Order him to stop bus!”
(バスを止める)

「……!？」

バスは減速する気配すらなかった。浜本に、よりによってマインドコントロールが効いていない! そんなことがあったまるか。恒が自力で強制的にかけたものではなく、神具による適切かつ強力なMCFだ、効果がみられないとなると……これも生物階で起こった数々の異変に関係しているのか。原因を追究している暇もなかった。

このとき、恒は知らないが直前に荻号が浜本にマインドコントロールをかけていたのだ。荻号の施したそれを、たとえば神具を用いたとしても恒が覆せるわけがない。

とにかく、バスが突進してくる状況は先ほどと何も変わらない。

「何なんだよ……」

愚痴りながらも、再度神具を啼かせた。

FC2—メタフィジカルキューブが行使できる限り、その機能を

最大限に活用する。

“Cubic crystal structure collapse”

（立方晶結晶構造崩壊）

“Catch it by a high resolution”

（対象物を高解像度で捕捉）

“Restraining this object by 4 times gravity, and stop moving.”

（4倍の重力で拘束し静止させよ）

浜本がブレーキを踏めないのなら、物理的に、それこそ力ずくで止めるまで。迷っている時間はなかった。彼は神具のグラフイックを1cm角にまで圧縮して崩し、百メートル上空からバスを追うように投射。一個一個に至るまでアトモスフィアを通じた従順なブロックは、恒の意思に従って磁石のようにバスの壁面に張り付いては局所的重力場を発生し、重石となってバスの運動エネルギーを殺ぐ。簡単に言ってしまうと、バスの下部を4倍重くしたのだ。

あまり重すぎるとタイヤがパンクするので加減した。速度が緩む。だが完全に停止はしない。

「げ！ 大丈夫かな……」

“Make it heavily up to twice”
（さらに2倍に）

タイヤのパンクを懸念しつつ、さらに2倍の重力を浴びせかけた。もともと生物階一帯が重力異常を起こしていたことも相乗してか、さすがにスピードが落ちてバスはタイヤ痕を残し停止した。浜本は

おそらくまだ、アクセルを踏んだままの状態だろう。人々を守ろうとした少年神の孤軍奮闘ぶりも知らない特務省が、バスのすぐ上空を悠々と通り過ぎていった。バスも鉄粉にされることなくやり過ぎたようだ。

バスを止めてほっとしたのも束の間、恒はといえばあと数秒で山中に墜落するところだ。彼は今もバスに影響を及ぼしている神具でのソフトランディングを諦めて、生還するため物理的な緩衝を行わなくてはならなくなった。腰から抜いた愛用のナイフにアトモスフィアを通わせ、できるだけ高木をめがけて落下する。

「……っ！」

高度が急激に下がり、まさに木と彼の身が並行となったとき、ナイフを逆手に持ったままそっと太い幹に触れる。ナイフが縦一文字に幹を引き傷を残すが、恒は徐々に力を込めてナイフを木肌に深く穿ちこんでゆく。ナイフが刺さるとともに重力加速度が殺げて減速し、その抵抗で身体は縦に引き伸ばされて強くしなる。だが落下は止まった。ぶらぶらと宙吊りになった状態で、深い深いため息をつく。

バスもだが、恒も何とか無事だった。

片手で宙吊りになったあと、アトモスフィアを断ちナイフを引き抜いて宙返りをうち着地した。水上には水上の、山林には山林の着地法があるのだろう。だから昔からナイフは一本、人間社会の銃刀法に触れない程度の刃渡りの短いものを携帯しておく。神具が使えなくなっても、飛翔できなくなっても、どんな時も冷静さを忘れない性格に命を救われている。ただ、ずっと幸運が続くとは思わない。

「いてっ……」

無理な事をして、腰がつった。

それはともかく、乗客の様子はどうか。急停車をさせて驚かせてしまったが皆無事なのか。年寄りばかりが乗っているだろうから、体をぶつけたりしなければいい。そんな思いで車道を見ると、バスの内側からガラスを叩く音が聞こえてきた。どの顔も、互いによく知った顔ばかり。ああ、兼橋のおばちゃんに朱音の母ちゃんもいる、魚屋の三笠さんに、旅館のおじちゃん、皆元気そうだ、と彼は胸をなでおろす。窓ガラスをあけて身を乗り出した女性が彼を呼んでいた、志帆梨だ。恒は拮抗させているFC2—メタフィジカルキューブの効果を絶やさないうよう集中を続けながら、何食わぬ顔で母親のもとに歩み寄る。アトモスフィアを喪失し壮絶な負荷がかかっている、志帆梨にだけは辛い顔を見せたくない。彼女はまた、そんな姿を見せるとすぐに泣いてしまうから。

「よかった。ちゃんとバスに乗ってて」

心からの気持ちだった。母親だからといって、恒は彼女を特別視してはならない。他の村人と対等に接するのが正しい。だから言葉には出さず、思いにだけ込めておく。

「急に驚かせたね、ごめん。みんなに怪我はない？」

優しく語り掛けても、志帆梨は半ば涙目になっていた。

「ここで何をしているの！」

恒は左手にナイフを、右手には神具を持っている。今も神としての仕事の最中だということは志帆梨からは容易に見て取れる。神具を握る手が筋張って、蒼い光を帯びていることを見逃さない。小さな生傷がまた増えている。それに気付かれることを、恒は嫌がる。

「お前は理由も話さず、いつも急に……！」

恒はナイフを収めたその手で志帆梨の手を取った。彼女は恒の手

を握り締め、頬に触れる。その温かさにあずかって彼はようやく生き心地がした。

泣き出しそうな志帆梨と視線が合うと同時に、彼女がこのバスに乗るまでに背筋も凍るような体験をしたということも窺い知ることができる。彼女はつい25分ほど前、思いがけない場所で遼生と遭遇した。彼女は遼生に助けられ、危うく山崩れから難を逃れたのだそう。

が、志帆梨は彼を巨大な翼を持った天使だと記憶している。どうしたことだ、遼生が使徒であるという事実はさておき、白衣を纏っていたときに見えた彼の背に翼などなかったし不可視化装置すらも帯びていなかった。何らかの方法で翼を不可視化していたのか？遼生の何を見たのか志帆梨に問いただしたかったが、バスの窓が次々に開けられて村人達が身を乗り出してくる。風岳村であり芳しくない変異が起きているということだけは分かった。

「恒ちゃん、なにしとるんね！ 早く乗りんさい！ 逃げ遅れるよ！」

兼橋がひときわ甲高い声をあげ、恒を呼ぶ。

「いいから、お前も乗りなさい、恒！」

志帆梨が強く言っても、恒は聞き入れず彼女の手をほどいて半歩下がる。息子はここに留まり、何がしかの任務を遂行するつもりなのだと分かる。それを止めることも、どうすることもできない立場の弱さが辛い。しかしどれだけ無駄な抵抗と分かっていても、彼を連れ戻したい。そんな思いで身を乗り出して窓から出ようとしたら、嚴重に金縛りをかけられていた。彼はその気になればいとも簡単に人心を操ることができる。

普段は決して、そんなことはしないけれども。

親子の間だけに流れる、静かな時間があつた。

「恒……金縛りをときなさい。お前を置いて、行ける訳ないでしょう」

「ごめん、母さん」

志帆梨が恒と過ごしたこの二年半の間を振り返ってみれば、彼はまだ志帆梨に恒を叱らせてくれていた。叱らせてくれたというところだが、恒は完璧ではなかった。

たとえば引き出しを閉め忘れたり、靴下を脱ぎっぱなしにしたり、好き嫌いがあって野菜を残したり、そこで志帆梨も母親らしく彼を叱ることも、場合によっては（軽くだが）手を上げることもできた。しかし志帆梨は知っている、彼がわざと志帆梨を怒らせるきっかけを作っていたということを。

本当は彼には食べ物の好き嫌いなどないし、辞書一冊をまるごと暗記することのできる頭脳で買い物をど忘れもして照れくさそうに戻ってくることもできないだろう。ものの数秒で解ける数学の宿題をせずに教師に注意される事も、本当は不可能だ。恒は志帆梨に、母親として無力感を感じさせないために、それらの小さな失敗を繰り返して彼女を安心させてきた。そのことに気づいたとき、志帆梨は親としての不甲斐なさに泣いた。

そしてどんなに恒を叱っても、志帆梨はひとつ、これだけは直せなかった彼の悪癖がある。

彼は嘘つきだ。しかも、相手を思いやるがゆえに嘘をつく。

「大丈夫、すぐ行くよ。心配いらないから」
これも嘘だ。大嘘だ。

“ああ、私はたった一度だって、お前を助けてやれたことなんてない。一体いつになったら、私はお前の母親になれるというの……”

志帆梨はわなわなと震え、悔しくて奥歯をかみ締めた。そんな志帆梨の後ろから皐月も顔を出した。

「藤堂くん！ 何を言ってるの！ あなたも早くバスに乗るのよ！」

身体をはみ出さんばかりに手を伸べた皐月からは紛れもない荻号の気配がした。それだけではない、少し集中力を高めればバス全体に荻号のアトモスフィアが浸透している。

ああ、なるほどね。と恒は得心した。荻号が先にMCFをかけていたので浜本はブレーキを踏めなかった。荻号のやり方は神具を用いない乱暴で強制的なものだから、後遺症が残っていないといいいけれど。何も手を打たなければむこう一週間、浜本には“アクセル全開！”と暗示がかかってしまっただろう。浜本は恒の姿をみとめて昇降口を開けようとしているのだろうが、荻号のマインドコントロールに逆らうことができない。身体が自由がままならない代わりに、彼はバスの中から叫んだ。アクセルを踏んだまま。

「ドアが開かん！ 乗れえ！ 何とかして乗れえええ！ 窓から乗れええ！」

恒はバスから少し離れ、運転席でわめき散らす浜本に狙いすまして片手をかざした。息を止め、瞳を閉ざして集中し、次の瞬間、あらん限りに見開き浜本に向けて掌底を繰り出す。圧縮されたアトモスフィアが弾丸となって窓ガラスを透過し浜本に繰り出され、その圧力で荻号のマインドコントロールを蒸発させ希釈する。荻号の業を覆すことはできなくとも、影響を弱めることはできる。というのは、荻号が浜本に与えた暗示に愚直に従うようだと、浜本の判断力を一切無視したものとなっていて危険だからだ。この様子だと浜本は村人数十人を乗せたままどこかしらに衝突し、悲惨な交通事故を起こしかねない。荻号は交通事情に疎いので、バスを電車のように一直線に走る乗り物だと考えている。

「安全運転でよろしく。浜本のおじちゃん」

彼は柄にもなく、にこやかにそう述べた。

「恒———！ 馬鹿やろう———！！ このクソがき！」

浜本は顔をくしゃくしゃにして、千切れんばかりに首を横に振った。かつて村一番の悪童といわれた恒が見せたぎこちない笑顔、不器用で取ってつけたような別れの言葉のように聞こえたからだ。村を脱出する交通手段はもう存在しない。恒は未成年だ、車も運転できない。たとえ自転車があったとしても、広岡市までは数十キロもあって追いつかない。政府は、地上に残る者の意思も尊重するという立場を明確にしている。彼は救われず、荻号とともに、村に残るのだろう。

“R e s t r u c t u r e t h e c u b i c a l c r y s t a l .”

（立方晶系を再構築せよ）

恒は固く握り込んでいた右手を開いて、バスの周囲に張り付かせていたF C 2－メタフィジカルキューブを一気に手の内に呼び寄せた。1 c m四方の黒い立法体のブロックが恒の手の内に集合し、黒単色の小さなルービックキューブを作り上げてゆく。

重石を取り除かれたバスがまた、タイヤを軋ませじりじりと加速をつけて走りはじめた。

「恒———！」

志帆梨のか細い声が、ちらつき始めた粉雪の峠道に寂しく響き渡った。

バスはまたしても、乗るべきものを置き去りにした。

＊

地球をグラウンド・ゼロのある座標からどこか安全な場所に移す。

もし決行するなら、いつにすべきか。レイアは悩んでいた。神階の分門はいつも神階を捕捉している。たとえどこにあっても生物階と神階を結ぶだろうが、実行しようものなら各方面への影響が大きすぎるので、できればX-dayの直前が望ましく、全ての人々が神階に避難を完了した後の方がなおよかった。理想はそうだ……だが、果たしてレイアはX-デイの直前まで、この場所に立てこもっていることができるのだろうかという見地からも考えなければならぬ。荻号に比肩する者はないと、恒からは聞いている、しかし……特務省で見えたバンダルⅡワラカの力量は相当のものだった。バンダルの器量は荻号より上なのか下なのか。

それらを総合して考えて得られた結論は、今は安全でもいつまでも安全であるとはいえないことだ。

それは……今、なのだろうか。

“生物階を動かしても、あなたは止めませんよね？”

彼女は虚空に語りかけ、耳を澄ませてじっと返事を待った。

瞑目して息を止め、心は決まった。そうと決まれば、ここから脱出する方法を探さなければならない。

“この部屋は、一体どんな仕掛けになっているのでしょうか”

まず部屋の構造から確かめようと、ソファアのうえに立ち背伸びをして慎重に壁に手を伸べ沿わせる。壁の中から紅い張り紙が突然現れ、小さな両手が紅い呪符の上に重なった。はっとして振り返ると、フローリングに、部屋の白壁に、キッチンに擬態しフラールンが潜んでいることに気づく。その一枚一枚には強烈な排除機構が働

いているのだろう、呪符の幾何学紋様がまるで意思を持っているかのように変形し蠢き、次から次へと万華鏡のように柄が変わる。えもいわれぬ不気味さに、怖気がさした。

さらに……

“！？”

不意に襲われた痛覚に驚いて手を引く。

レイアは全神具適合性を持っておらず、神具の触性抗体が彼女の手を痺れさせたのだ。フラーレンは部屋の隅々にまで張り巡らされている。もしも彼が一枚一枚、裏に糊付けして部屋に貼ったのだとしたら凄まじい労力だ。わずかスプーン一本すら脱出不能な3・5次元のこの部屋、荻号の家の二階。彼女がいるのはフラーレンによって隔てられた荻号の結界の中だ。

つまりは、フラーレンを1枚ずつ剥がせば外に出られそうだが……彼女がそういえばと思い出して、キッチンからコテを取り出して呪符を剥がそうと試みた。このコテは好み焼き用のコテなのだが、こびりついたものを剥がす場合にも具合がよい。ところがいくらコテで剥がそうとしても、コテが呪符の端に引っかからない。確かに呪符は薄い、薄さのせいだけではないようだ。そこは超神のアトモスフィアの通った攻防一体の超神具・フラーレン C60、呪符そのものも堅如磐石だ。

彼女は呪符に触れて痺れた片手をさすりさすりした後、おもむろに胸元に手を差し入れた。いつも身に帯びている、豪華な宝玉のネックレスを引き出す。ペンダントトップの直径2cmほどの金色の球体を抜き取り、ころりと掌に握り込んでいた。

彼女が手にするペンダントトップは比企が彼女に与えた護身のための神具で、“須弥仙種（しゅみせんじゅ）…Sumeru See

d)”といった。

フラーレン C60、相転星に並ぶいわゆる超神具と呼ばれる類のものだ。コマンドを与え手印を結ぶと所有者のアトモスフィアを吸収し多種多様な華を咲かせ、華に応じた験を顕す。特徴的なのが、超神具と呼ばれるフラーレンや相転星と違い、アトモスフィアの寡多如何にかかわらずアトモスフィアが適合すれば誰でも手にすることができるということだ。ただし黄泉花との異名も持ち、神具を軌道して咲かせるたび膨大な生命力を奪われるため、誰が手にしたとしても例外なく、たった2回の使用で所有者を死に至らしめる。

したがって、生涯に一度きりしか使用できない神具という大変ないわくのついた代物で、誰も所有したがらない。

が、不滅の彼女は際限なく使用できる。

『汝にも護身具のひとつは必要だ』

レイアが二歳になった日、比企はそんな言葉とともに彼女に須弥仙珠を贈った。比企が何の為にレイアにこれを持たせたのか、彼女は当初、比企の意図をはかりかねた。誕生日プレゼントのつもりだろうね、と後で恒に教わったが、比企はなにかとレイアに厳しかったので理解に苦しんだ。比企にも恒（正確には恒は一度だけなら触れられるが）にも触れられない神具で、レイアは神具のナビゲート機能を利用し、少しずつ独学で学ぶしかなかった。毎日の勉強と共存在の修行の合間に、この負担。触れられるからといって扱えるかというとなんかそうじゃない。比企から拝領したものだから早く習得せねばと気は逸っても、超神具はなかなか懐いてくれなかった。

うまくいかず悩むうちに果たして護身具なんて必要なのだろうか、レイアはそんなことを考えはじめた。何か危険なことがあったとして、護身具で身を護って無事であることが果たして比企や恒にとって、神階にとって、生物階にとって喜ばしいことなのだろうか。

本当は自分など、いなければよかったと、誰よりもレイアが思っていたのに。超神具を帯びて身を守る権利などないのではないか。

そう考えた途端に、神具の扱いに身が入らなくなった。

“比企さま、これはお返しします。わたしには身を守る権利などありません”

悩んだ末、比企に神具を返そうとした。いつもなにかとレイアに厳しくあたる比企が珍しく、頭ごなしに怒らなかった。もしかすると逆鱗に触れるかもしれないとびくついていたので、肩透かしをくらった気分だったのを覚えている。そのとき比企が彼女にかけた言葉が今も鮮明に蘇る。

『手放すならそれもよい、だが神具を放棄し傷つくことで一体何とする。それに……護るのはなにも己が身ばかりではなからう』

ああ、そうか……これはわたしの身を護る為にでなく、誰かのために使おう。こんなわたしにも、誰かを救うことができたなら……。誰かに迷惑をかけるばかりで、何もできないと思っていた。レイアは比企の言葉に救われて奮起し、ごく短期間で超神具を学び修めた。そして今、彼女の個有の神具として須弥仙珠を手に行っている。

“きたれ・胎蔵界・呈華・靈瑞華”
たいざうかい ていか れいずいげ

彼女が球体を振るたび、澄み切った鈴の音がする。それをおもむろに、フラーレンに向けて吹き放った。空中に放たれて美しく弧を描くうち、両手を交差させて小指を絡め降三世印を結ぶと球体がひび割れて、目を射るような眩い光とともに十二枚の小さな金色の芽

を吹き、蔓を伸ばしやがて花卉が折り重なり大きな白い花を咲かせる。仏教では三千年に一度咲くといわれる靈瑞華を中心に、周囲に幾重にも曼荼羅のような白い光の幾何学紋が環状に編みこまれて可視化されたまま保たれている。

“神力大光を演べ　普く無際の手を照らし　三世の恐懼を降し　三垢冥を消除して”

光彩陸離として輝きを放ちはじめた靈瑞華を左手に乗せ、右手で施無畏印を結ぶ。発声のできない彼女にうってつけというか、須弥仙珠は音声コマンドによってではなく所有者の意思を解読して応答するタイプの神具だ。彼女は発願し印を結ぶことによって神具に命じている。だからこそ当初は、コマンドを意思に乗せて正確に神具に伝えることに苦心したものだ。

“いま　一切の自在を得たり”

彼女の意思に呼応するかのようにフラレーンの毒花のような紅色が朽ちて色あせ、呪符の効果が失われてゆく。フラレーンは荻号のアトモスフィアを失って、カナリア色となってしまった。フラレーンで支持していた部屋の結界の一角が崩されたことによって、空間が歪む。

業を成すと、諸行無常を顕すように咲き誇った曼珠沙華の光は儚く失われ、花卉ははらりと散り、種子を実らせ須弥仙珠の姿へ戻る。レイアの手の中に再び小さくころりとおさまったとき、彼女は荻号の家の二階廊下に立っていた。足元には、先ほど放ったティースプーンが落ちている。束の間の夢から醒めたようだ。吹き抜けの階段の下に、寒々しく荻号の家の階下が見えた。

ほっとして階段を降りようとしたときだ。彼女の足元にふっと先

ほどの見慣れた呪符が浮かび上がり、廊下の壁面の複数箇所から呼応するように呪符が現れた。トラップを踏んでしまったようだ。織物を縫いあげるかのように、赤色光で呪符と呪符を瞬く間に結び、階段へ進路を嚴重に封じる。そればかりでなくレイアの神体は強く弾かれて階段と反対方向に推し戻される。

われに返ったときにはまた、さきほどのキッチンとダイニングのある部屋に閉じ込められて、室内は静まり返っていた。レイアの努力は徒労に終わり、ふりだしに戻った。

“さすが……”

フラーレンの結界は険しい連峰のように、幾重にも重なっていた。

＊

「この夢を整理したら、時計職人が何をしているのか分かった」

アルシエルは不可侵の聖典を開いて巨槍グングニルを格納し、本の表紙についた砂埃を払ってよろりと立ち上がる。うつろな記憶を辿っているようだった。体調はまだすぐれないが、記憶がたしかなうちに話しておきたいという本人の強い希望があるようだ。それが真実であるかどうかはさておき、これまでにブラインド・ウォッチメイカーの意図に迫った者がいただろうか。

「無理をせず、少し落ち着いてからでも」

ファティナはアルシエルを支えて背をさすり体調を気遣ったが、アルシエルは貴重な証言者であることを自覚しているからか、途切れ途切れに語り始める。彼女にはすぐに打ち明ける義務があると感じているようだ。

「INVISIBLEはあまりにも巨大になりすぎたために……創

世者としての死を迎え……消滅する。時計職人はINVISIBLEに代わる新たな創世者に成り代わろうとしているようだ」

何気なく聞いていた遼生と、身を乗り出していたファティナの間に衝撃が走った。

宇宙の膨張がとりわけ近年、加速しているということはかねてより観測され、また議論もされてはいたが、INVISIBLEがそう遠くない未来に死ぬものと、誰も提唱などしていない奇説だ。INVISIBLEの創世し所管する宇宙空間が膨張し巨大化するということは、必ずしも彼が強大化しているという意味ではないということだろうか。物質と物質の距離があまりにも離れ物質間に相互作用すら起こさなくなったとき、全ての時間は止まり、宇宙は冷え切って熱的死を迎える。

その部分について、ファティナも遼生も否定はしない、ただしそれは何億年単位後に起こるイベントだ。まだ、物質と物質の距離が離れすぎるまで深刻な事態には至っていない。その見解はあまりに悲観的すぎる。ファティナはINVISIBLEの滅亡そのものが不可能だといわんばかりだ。

「INVISIBLEはなお強大で、それに今すぐに死を迎えるとは思えません」

たとえ、衰えているとは仮定しても。

「我にもそう窺えた。INVISIBLEが現在かろうじて物質の求心力と定常状態を維持しているのは、その体腔に二つの創世者、ブラインド・ウォッチメイカーとノーボディを擁していてこそだというのだ。ノーボディが唐突に失われたいま、危うかったバランスは崩壊しINVISIBLEは世界を維持することができなくなった」

それが、生物階に次々と起こる重力異常、斥力異常などの物理法則崩壊の真相だというのか。創世者の大小で比較するならINVIDIEが最も巨大で、ブラインド・ウォッチメイカーはノーボディと同格で矮小だ。これはEVEのハードディスクから探り当てたノーボディの記録で裏付けがあるため、アルシエルの言葉には信憑性がある。その二つの小さな創世者が、巨大なINVIDIEを支持していたというのか！

アルシエルの告白はあまりに衝撃的で、理解はできてもファティナには飲み込めない。そしてノーボディを滅ぼしたのは時計職人ではないようだ、ではやはり……という思いがファティナに過ぎる。

「喻えれば、粗末なあばら家の二本柱のようなものだ。一本でも柱が崩れれば……わかるな。そこで時計職人は三階を統合し、宇宙を縮小しようとしているようだ。もはや彼女はINVIDIEをすら必要としていない」

アルシエルにしては分かりやすい喻えを持ち出してきた。大きければ支えられないにしても、家を小さくすれば一本柱でも支えられるだろうという発想だ。

二柱とひとりばぶらぶらと、どこへ向かうでもなく村の畦道を歩き始めた。遼生は川をひとつ隔てた遠くから、バスのエンジン音が聞こえた気がする。志帆梨はバスの発車に間に合っただろうか。そんなことを気にしながら、後ろを振り返ってみたりもした。

「時計職人は地上の生物をどうするつもりなんです？」

ファティナは重要な事を忘れていない。世界をコンパクト化する破壊と創世が行われることが何を意味するのか。振り返ってみれば解階の破壊はその、ほんの序章にすぎなかったのではないか。解階を壊し、生物階を侵した事は彼女の計画の本質ではなく、ほんの副次的なものでしかなかったのか。

「どうするつもりもないが、彼女が新たな宇宙を創造したときに全て更新される。しかるべき土壌を整備し一から創りなおし、新たな種子を撒こうとしている……意外なことに、ブラインド・ウォッチメイカーは現在の三階に執着にも似た愛着があるようだ」

アルシエルはあたかもブラインド・ウォッチメイカーと話してきたかのよう。アルシエルは夢を逐一もらさず記憶しているらしい。その記憶力のよさが、今はなにより頼りになる。何しろ、ブラインド・ウォッチメイカーの意図を知る事などできなかった。ブラインド・ウォッチメイカーがX染色体上に宿ることにより過剰発現された化合物が、宿主の体をじつくりと融蝕し神経に作用してしまっていたのだから、正気を保っている事は不可能だ。今回は憑依の初期段階での遼生の遺伝子治療と、スパーフィーマルであるアルシエルの肉体の強靱さがあってはじめて可能となった。

「愛着があるのに、破壊するのですか？」

ファティナが鋭く指摘したように、ブラインド・ウォッチメイカーが企てていることは大きな矛盾を抱えている。普通の感覚だと愛着があるものは保護したくなるのではないか。愛着があるがゆえに壊すとは一体どんな状態なのだろう、と咄然だ。相反している。

「愛着があるからこそ、凋落するINVISIBLEに代わって新たな世界を創り、生命活動を継続させることを望んでいる。INVISIBLEの手に委ねては破滅あるのみだと……というのが彼女の言い分だが、真相は分かん」

「不思議なものですね。……その話だけ聴けば、何だか時計職人に理があるような気がしてきましたよ」

ファティナが真面目に茶々を入れれば、遼生がさらに質問を重ねる。

「しかし“彼女”は解階を舞台に、創造と破壊をこれまでも繰り返してきたのでは？」

「INVISIBLEに背こうとしているのは今回だけだ。たとえば。もし重大かつ失敗の許されない試みを企図したとき……それが実現可能かどうかを、どうにかして試さないだろうか」

これまで彼女　ブラインド・ウォッチメイカーが無慈悲に繰り返した破壊と創造は、壮大で数え切れない試行の数々は……INVISIBLEに叛旗を翻す日のために備えた予行演習だったのだろうか？　たしかにブラインド・ウォッチメイカーは過去一度も、No-bodyはともかくINVISIBLEを侵したことはない。謀反決行のための準備を、着々と整えていたのだとしたら！

アルシエルは冷静に、つとめて客観的に述べながら、……ずっと解階はブラインド・ウォッチメイカーの予備実験に付き合い続けたのだなと憐んだ。時計職人はただ、神に似た生物を創りたかっただけだ。時計職人が何度解階を破壊してもずっとその有様をとどめたいと願ったのは解階ではなく神階だった。彼女は神を、そして究極の生命体ともいえる絶対不及者に限りなく近い生物を創り上げようとしていたのだろう。

時計職人はINVISIBLEの収束を望んでいる。巨大なINVISIBLEを矮小な時計職人が破壊するためのほとんど唯一とっていいチャンスは“その時”しかないように思われた。INVISIBLEが絶対不及者に収束する、すなわちエントロピーが低下し平時より弱体化しているとき――。

INVISIBLEに敵して収束を阻む者は、間接的に時計職人の敵でもあるということだ。だから真っ先に絶対不及者抗体である藤堂　恒に、あるいはノーボディに時計職人の矛先が向いた。

ともあれXーデイの後INVISIBLEが優ったとしてもブラインド・ウォッチメイカーが優ったとしてもどちらにしても、三階

の破滅は免れないようだ。破滅を甘受するのか。抗うのか。

愚問だ。

結局のところ、アルシエルのとるべき行動は変わらない。

「アルシエル……あなたのおかげで三体の創世者の立場が霞の中に見えてきたような。そんな気がします」

ファティナはそう言って、トレードマークのピンクのボーダーのマフラーをかたく巻きなおした。

遼生はいえ、外気に裸では寒いのだろうか、白いストールを気持ちほど肩に巻いて腕組みをして歩いている。ファティナは氣を利かせ、持ち合わせていた桃色の不可視化装置を彼の手首に填めた。直後、翼は不可視化されて消失する。翼を失うことで遼生は力の大半を殺がれるが、生物階を歩くにはおさまりがよい。不可視化装置を填めれば服を着ることができるが、上着の持ち合わせがないので、ファティナは息子に接する母親のように質素な聖衣を脱いで遼生に着せ掛けようとした。コンピュータールームで作業をすることを想定されたファティナの聖衣は重ね着が基本で、下にまだ3枚もの防寒着を着込んでいる。

「結構です。大切なお召し物なので」

袖を通さず、きれいに畳んでファティナに返す。

彼女に上着を渡しながら、遼生はぽつりと、一語一語を噛み締めるようにこう言った。

「何ができるのでしょうか。こんなちっぽけな、僕らに」

ファティナはほんの数秒の間言葉を失っていたが、遼生の背を優しく叩いた。

「嘆くのはもうやめましょう。私たちはそれがどんなに辛くとも、

未来に進まなければならないのです。幸いなのはまだ、I N V I S I B L Eが収束するまでに少しの時間があることです」

「……ファティナさま」

彼女の芯の強さに心をうたれる。彼女の強さは幾百年をかけて磨きぬかれてきたもののなのだろう。

「抗いましょう。もがいて、もがいて……最後の瞬間まで。あらゆる手段を尽くしてもがくのです」

その小柄な体に残った小さな勇気を、搾り尽くすような彼女の言葉はさらに熱を帯びていた。

「あなたがたも、しっかりしてくださいと！」
「そうだな」

村には粉雪がひそやかに降り始め、村の家々に純白の薄化粧が施されてゆく。

アルシエルが手を差し伸べてその一片を取ると、淡く溶けていった。気温の変化も繊細な四季の移ろいも降雪も、アルシエルにはなじみのないものだ。生物階の風土は人工的に管理された解階のそれとは異なる。解階唯一の生存者であるアルシエルは、ただ生物階の風情をその双眸にとどめようとしているらしかった。

この星に愛着の欠片もないが、時計職人がこの小さな星に解階と同じ災禍を齎すことを許さない。遂に護ることのできなかった彼女の臣民にかえて、アルシエルは生物階を守り抜こうとする漠然とした決意があった。それが彼女なりのひとつのけじめであり、罪滅ぼしだったのかもしれない。

銀の帳が落ちて雪曇りの中、正面から人影が近づいてくる。朱音をバス停まで送り、すぐに戻ってくる予定だった荻号が戻ってきた。

「へえ。そういう話になったのか」

出会いがしら、三名の顔を見るなり早速分かったような事をいう。先ほどの会話に参加しなかった彼も、彼らの記憶を垣間見たのだ。話がまとまっていて好都合だとも思っているのだろう。

マインドブレイクのできないアルシエルだけは、フラストレーションが溜まる。

「またもや看破か……喰えん奴だ」

そろいも揃って神々が、安易に他人の記憶を覗き見して気に入らない。アルシエルはそう言いたかったのだろうが、荻号も遼生もフアティナも、マインドギャップを持たない相手の記憶を覗くことについては、なにも意図的にやっているわけではない。たしかにギャップを持つ相手に対しては視ようとして視るが、そうでない相手は視まいとしても視えてしまう、という程度だ。素っ裸で歩いているのに、それを見るなという無理な要求にも似ている。服を着ろ、つまりマインドギャップをつくれと忠告できるのは神々に対してだけで、アルシエルに対してはもう、視られても気にするなと言いかない。

「そう言うな。別に悪気はないし、覗き見でもなんでもない」

荻号がアルシエルの不満をやりすごしていたそのときのことだ。パタン、と荻号のシザーケースの中で本が閉じたような、くぐもった異音がした。彼ははっとしたようにシザーケースを見遣り、しばし硬直する。

「いかん」

荻号はシザーケースの中に手をごそごと差し入れ、文庫サイズの本を取り出した。皮のしおりの挟まれたページをめくると、フルカラーの挿絵がある。挿絵の中の少女は部屋の中にいて、黄金の葉を持つ大きな白い花を手の中に納めていた。少女はレイアだ。

「? ……須弥仙珠か?」

彼は目をみはった。彼女にではなく、彼女の持ち物に対して驚愕している。

「須弥仙珠とは……穏やかではありませんね」

ファティナも遼生も、常識として須弥仙珠の名を知っている。ひとつ所持するだけでも三階を傾かせるといわれる超神具は五つも存在するが、そのうち二つは特務省にあり、これらの実体は知れない。神階は「相転星」、「フラール C60」、「須弥仙珠」の三つを所持しているとされてきた。キワモノ系の相転星は三階唯一の時空間歪曲神具、フラール C60は物理事象の根源に干渉する神具、そして、須弥仙珠は守りに徹した神具だ。

ただし、フラール C60は荻号が持っていたにしても、須弥仙珠はもう随分と前に行方知れずになっていた。聞きなれない神具の名が唐突に飛び出したことを、遼生もファティナもあまり好意的に解釈しない。不測の事態が起こったのだと察し、示し合わせたように頷く。

「実力行使に出やがった」

おとなしそうに見えて大胆な奴だ。閉所恐怖症で少しの間も留守番できないなら、前もってそう言えよと荻号は舌打ちをする。フラールと須弥仙珠は相性がすこぶる悪い。そして呈花によっては：フラールが破られることすらありえた。最悪、フラール自体が使い物にならなくなることも。相転星を失ったうえに、さらにフラールも挫かれたなら……。フラールは一枚でも失うと業が成り立たない神具だ、非常にまずいことになる。

彼女が荻号の言いつけを破って、何故外に出たがったのか。彼女にとってもメリットがないことだ。レイアがフラールを破ろうものならすぐに、特務省の連中が嗅ぎ付けるだろう。匿ってやっているつもりなのに、何が気に入らないのかわからない。

「須弥仙珠は厄介だが」

念のため、彼女が万が一出たいと思ってもそれが不可能に近いほどのギミックは、幾重にも張り巡らせてきた。しかしそれは外部からの侵入に対して重点的に備えたのであって、内部からの破壊は想定していない。モニターである彼の書籍が騒いだということは、荻号の結界が綻んだことを意味する。そのとき特務省は、レイアの気配を察知しなかっただろうか。そうでなければいい。

「運悪く、もっと厄介そうなのがきたな」

荻号につられてそこにいた全員が上空を眺めたのは、特務省の艦船が轟音を立てて飛来してきていたからだ。

黒々と巨大な艦体はあつという間に空を覆う。ファティナは無言でただちに、準神具 $P \neq NP$ に飛行物体の断面をくまなく調べさせている。すぐに、ファティナの手にする準神具 $P \neq NP$ に羽根ペンの自動書記が数ページにわたって見取り図を書きつけ、特務省の内部構造が暴かれてゆく。ファティナも初めて知る特務省の内部構造だ、これまで一度も明らかにされたことすらなかった。だが、 $P \neq NP$ に隠し事など無用だ。ありとあらゆる物体を輪切りに切り刻むかのように、とりわけ物性に関する情報を暴きつくす。

「特務省に間違いありません。砲門は26門、1門は被弾している模様です」

「あ、それ僕と恒がやったんですよ」

遼生が肩のあたりまでちょこっと手を上げて申告した。

「高エネルギーが2砲門に蓄積しています！ おそらく主砲級の砲門でしょう、動力源は……！」 駄目です、特定できません」

「さて、皆さんどうしますか？」

遼生が愉しげに、誰にともなく尋ねる。はらはらと舞っていた粉雪が、そして地上に降り積もった雪までもが特務省の揚力に絡めとられ空に還ってゆく。録画映像を逆再生しているかのようだ。その危機的な状況はともかく、非現実的かつ幻想的な光景ではあった。青い衛星のような何がしかの物体が、幻燈のように特務省の胴体を周回している。転移装置だ。

「狙いはレイアか？」

アルシエルはいつのまにかグングニルを肩に担ぎ、不可侵の聖典のページを繰っている。戦闘準備は万端のようだ、先ほどの失態を取り戻そうという気概すらうかがえる。

「まあさて、わざわざ特務省とはやらん」

根っからの戦闘民族で、彼女の生涯そのものが腕試しだというアルシエルとは正反対に、大勇は戦わずというか荻号は基本的に、理由もなく相手と戦うことを避ける。戦闘行為にメリットがない場合はなおさらだ。

しかし、そうも言っていられなくなった。

特務省の艦体の真下に突き出していた魚眼状の巨大な砲門が開き、目を潰すほどの眩さを持った高エネルギー体が砲身の中で集積しているのが見えたからだ。先ほどのファティナの解析は的中した。光はみるみるうちに輝きを増して、直視もできないほどだ。ファティナとアルシエルが閃光にたまらず目を閉ざしたとき、それは突然起こった。

音として認識するのも、形容するのも困難だ。ただ、この世の終わりと疑うほどの衝撃に襲われていた。落雷が何十本もひとつ処に放たれたような視聴覚を奪うほどの炸裂音と光条が、特務省によって撃ちこまれ、風岳村上空から直下に叩き落された。標的とされ

たのは、荻号の家もある方角だ。

しかし、この凄まじい熱量を持った光条が風岳村を火の海にすることは辛うじて避けられた。

光砲が発射される直前に荻号が神速で放った60枚のフラールレンが村の上空120 mでC60クラスターを編み、風岳村全体を六角柱に網羅する四重の紅い結界をなして、全エネルギーを吸収したからだ。彼は特務省とは好んでやり合いたくないと思っていたようで、面倒だといわんばかりだ。しかし、彼の自宅と作物も標的とされてしまっているのだから、そんなことも言っではいけない。

「撃ちやがったな。そっちがその気なら……歓迎するさ。大したもてなしはできんが」

荻号の表面上穏便な発言はむろん、言葉通りの意味ではない。

荻号が操るフラールレン C60の業の正確さと精密さは見事なもので、彼は60枚全てにアトモスフィアを通じて意識を集中し、個別のコマンドを与えている。平たく言うと脳を60分割して別々の指令を与えているということだ。一枚でも集中を欠くことのできない神階最難易度の神具。その真骨頂を、特務省も見せ付けられたのだろう。荻号の結界を警戒したのか、はたまたフラールレンそのものを警戒したのか、特務省はすぐに艦体の高度を上げ浮揚した。だが、その下腹部にはさきほどよりもっと大きな砲門が口をぽっかりと開けている。村ごと破壊し、レイアを燦りだすつもりのようなのだ。

両手を差し向け、60枚の呪符を厳密に繰り拡げ天を脅かしながら、荻号は遼生とファティナに束の間の猶予を与えた。ここにどどまって反体制派の、荻号と同一視されていいのかと。

「特務省に睨まれて困るなら、どこかへ隠れてろ」

「僕は別に、どうでもいいです。……それよりファティナ様は？」

遼生は枢軸神であるファティナの立場に配慮をしている。遼生はよいが、ファティナは枢軸神として社会的に重い責任を負う立場にある。特務省の下位組織にあたる神階は、特務省の管理下にある。比企との関係を損ねるばかりか、刑罰によっては神階を追放だってされかねない。神階に叛くよりなお罪が重いことだ。ファティナだけは特務省に彼女と特定されないうちに、そして罪をつくらぬうちに神階に戻って、それなりに有意義であろう会議に出席した方がいい、今からでも遅くはない。遼生は彼女が賢明かつ冷静な判断を下すことを願っていた。

「雉も鳴かずに撃たれまいに」

荻号はそう言う。しかし、ファティナは鳴く気まんまんだ。

「中枢議会のことでしょうか……そんなもの」

ファティナは何をさておき彼女にとって大事であるべき会議を、そんなものと言い捨ててしまった。彼女の頭は、とにかく何かしなければ、という焦燥感にかられて沸騰してしまっていたに違いない。

「欠席に決まっていますよ!!」

言ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8234j/>

INVISIBLE - インヴィジブル -

2011年12月24日02時53分発行